

継ぎ接ぎだらけの中立区

緋寺

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある鎮守府で建造された艦娘、若葉。

大怪我を負い流れ着いた場所で、新たな生を得ます。

・若葉の一人称となります。

・オリジナルな人間が出ます。

2020/07/19：完結

2020/07/27：番外編開始

2020/08/07：番外編完結

2021/05/08：支援絵掲載

目次

ある艦娘の一生	1
傷だらけの家族	10
継ぎ接ぎの若葉	18
嵐の夜	25
嵐の後	33
外の者	41
心身共に	49
悔いなきように	56
白黒の双子	63
特異な者	71
理解者	79
差し伸べられる手	87
2人の艤装	95
恵みの嵐	103
新たな捨て駒	110
2つの仕事	117
眠り姫	125
負の塊	133
同じ命	140
裸の付き合い	148
姉の強行	156
三日月の決断	164
姉妹の絆	172

戦場の匂い	372
実戦訓練	363
戦いへの備え	355
成長	347
鳳翔の分析	339
次への一歩	331
曙の選択	323
繋がった命	316
禁断の御業	307
2つの決意	300
命燃やして	292
しばしの別れ	283
明るく和やかに	275
予期せぬ出会い	266
繋がる情報	259
成れの果て	251
真夜中の来訪者	243
海底の遺産	235
背負う命	228
調査隊	221
海の底へ	212
三日月の前進	204
猛獣使い	196
夜の浜辺	188
不意の嵐	180

痛みある解放	569
決戦の日	560
休息の時	553
言葉にして	546
禁断症状	538
死を望む幻聴	530
初めての演習	521
改装	513
鎮守府へ	506
一晩明けて	499
溢れる怒り	491
口封じの夜襲	483
目覚める人形	476
探し当てた光	468
力を合わせて	460
悪魔の所業	452
神速の神風	444
薬の匂い	437
抑止力	429
大将の見解	421
恩師	413
捨て駒の結末	405
大荒れの戦い	397
初陣	388
飢えた狼	380

海中からの妨害	577
防衛の後	585
溢れ出す感情	592
崩壊した鎮守府	600
赤い花弁	608
霰と夕雲	616
新たな始まり	624
あり得ない声	632
崩壊した中立	640
雷の正体	648
一丸の治療	655
悪夢からの目覚め	662
犠牲者の怨念	670
妖精の研修	677
解放された姉	685
彼岸花の島へ	693
花の姫	701
大きな進展	709
愛された姫	717
利害の一致	724
得体の知れない者	732
圧倒的な力	740
逆境からの	749
狂犬	756
本来の居場所へ	764

黒い痣の若葉	772
心を鍛えて	779
大将再来	787
新たな姿	794
二つ目の駆逐隊	802
移動要塞	810
大本営の遣い	818
友好的な深海棲艦	826
根深い傷	834
想定外の漂流物	842
意思持たぬ獣	850
凄惨な仕打ち	858
大きな確執	866
心の奥底で	874
完成品	881
自ら限界を	889
2人目の覚醒	899
三日月の変貌	907
感情への侵食	915
仲間達の決意	922
良き影響	930
溢れ出す鬱憤	938
人を殺す力	946
面と向かって	954
改善に向けて	962

次への備え

雪辱を晴らすために

完成との再戦

秘策中の秘策

激戦の後

正気の沙汰

凝固された憎しみ

完成の末路

より強い力

卷雲と朝霜

明晰夢

事情聴取

防空の要

心の安定

謎の逃走者

念願の姉

夢からの忠告

暁の素性

より高みへ

そこにいたのは

矛と盾

恐怖の侵攻

砲撃の嵐の中で

吹っ切れた者達

かねてより

友達

鎮守府の危機

危惧していた事態

監視の目

夜の海

空を埋め尽くす力

姫の力

非情な鶴

生き残った空母

神医の進化

血塗られたその手を

鳥海の前進

失われた誇り

怨念の行末

彼女の見解

かつての仲間

穢された誇り

奇跡の具現化

赤城の本質

姉妹愛

協力者達

死を知る者

悪意の集合体

歪んだ姉妹

禁断の兵器

理性を捨てて

加賀の意地

憎悪の行方

鶴堕ちる海

憎しみの連鎖

激戦の傷痕

この施設の頂点

歪んだ鶴

重すぎる代償

重い後遺症

それぞれの道

医者 of 精神

空母の母

新たな医師

体組織の研究者

侵食の真相

駆逐の集い

研究は進む

夜の守護者

暗殺の夜

殺意を乗り越えて

紐解かれる技術

奇跡的一幕

続く治療

消える侵食

念願の邂逅

埋められない確執

母の説教

和解の道

手を取り合って

一致する意思

再び舞い上がる

海の底の瞳

集う潜水艦達

逃げの名手

名案

対潜掃討作戦

決死の漁

漁船の帰投

目覚める後任者

死者の悪夢

彼女の正体

完成された絶望

打ち砕かれた愛

反逆

弾丸の如く

同調した身体

支配を抜けて

さらに先へ

明るい世界

落ち込む姉妹

さらなる限界を超えて

指輪の重み

より深い絆を

義理の姉妹

変化した限界

友の仇

共同作業

旧友の帰投

成長する支配

夜の鎮守府へ

遠征の裏側

破滅への暗示

燃え盛る居場所

神の領域

再出発へ

蘇る仲間達

より強く

切磋琢磨

ついにその時が

答え合わせ

今この手で

悪意の覚醒

淑やかに乱暴に

尋常ならざる者

その一撃のために

怒りに燃えて

三位一体

喧嘩屋の意地

皆の怒りを背に

災厄の終焉

戦い終えて

強い心

真の敵

被害者からの叱咤

子供の強さ

不死の力

悩める鬼神

兆しの雲

戻らないもの

憧れの王子

加賀の決意

追い付いた淑女

新の切り札

別個体の悪業

最後の会議

誇りの瑞雲

最後の夜

いざ出陣

手の内を自らに

慢心を捨て

無意識の覚醒

余裕無き心

擬似的な不死

押すならば手数で

戦場での成長

最善の答えは

みんなの力

裏側の戦いへ

最後の敵

戦いの終わり

目覚めた被害者

最後の施術

解放された元凶

それぞれの選ぶ道

皆からの祝福を

帰投

ある艦娘のこれから

継ぎ接ぎだらけの番外編

取り戻した笑顔

癒しの場

欠陥との邂逅

女史の決意

恋の戦い

規格外の仲間達

227622692261225422462239

223122242216220922022195218821812173216621592152214421362129212221142107

歪んだ正義

提督の力

平行線の信念

王子と女帝

絆の証明

日常への帰投

232123142306229922912283

ある艦娘の一生

私は今、瀕死の状態で浜辺に打ち上げられ、短い人生に終止符を打とうとしていた。

血を流しすぎたか、もう痛みすら感じない。ただただ寒い。目も霞んできており、音もまともに聞こえなかった。寒くて寒くて、そして眠かった。死が間近に近付いてきている。私の終わりはもうすぐそこだった。

「……少し……嫌だな……」

言っても仕方のないことだと思う。だが、言わずにはいられなかった。それほどまでに、私の生き様は酷かった。

世界の危機を救うため、人の手により生み出された生体兵器である私は、救うことなど出来ず、救われることも無く、ここで終わる。

「……死にたくない」

未練が口から溢れ出た。

何も結果を残せず、私は朽ち果てる。そんなのは嫌だ。私は何のためにも生み出されたのだ。敵を殲滅し、戦果を挙げるためだろう。

真実に気付いてはいるが、それを振り払うように、私は忍び寄る死に抗い続ける。

「死にたくない……死にたくない……」

眠気を振り払い、来ることのない救援を待ち続けた。死んでたまるか。耐えれば事態は好転するはずだ。きっと私を助けてくれる何者かが来てくれるはずだ。

言葉に出来ている間は、私は終わらない。ずっとずっと呟き続ける。

「死にたく……ない……」

だが、眠気は確実に押し寄せる。意識を落としたら終わりだと思いい、必死に抗った。

その願いは届いた。

「……」

声をかけられたような気がした。まともに音が拾えない耳をすま

して聞いても、何を言っているかはわからない。だが、確実に誰かいる。霞んだ目でその方を見た。

薄ぼんやりと見えたそれは、おそらく人型。何者かはわからない。救援かどうかもわからない。私にトドメを刺す者かもしれない。だが、藁にも縋る思いで、声を振り絞る。

「助け……て……」

命乞いのように声が漏れた後、私の意識は闇に飲まれた。これが私の最後の言葉になるかもしれない。

そうだとしたら、あまりにも惨めな、捨て駒の最期だった。

私はとある鎮守府で建造された艦娘である。

人間の社会を脅かす海の底からの侵略者、深海棲艦を殲滅するために、抑止力として誕生した生体兵器、艦娘。最初は深海棲艦と共に海から来たとされているが、今では人間が自分達の意味で生み出すことが出来るようになっていた。

私もその内の1人。侵略者を殲滅するために生み出され、世界の平和に貢献するのだと思っていた。

だが、現実とは違った。

私は仲間達から攻撃を引き剥がすための囮デコイとして戦場に立つべく生み出されたのだ。建造されたばかりの艦娘など、誰がどう見ても恰好的。あまり知性のない雑多な深海棲艦、イロハ級だったとしても、私がかモであることは察することが出来る。

案の定、敵の攻撃は私に集中した。砲撃され、魚雷を放たれ、爆撃され、回避もままならずには私は大怪我を負った。見るも無残な姿にされても、一緒に出撃した仲間達は、私のことなど見向きもしなかった。救援を求めても無視され、私が傷を負っても無視され、立ち上がれなくなっても無視され……最終的には捨て置かれた。

不幸にもその戦いは荒天の中で行われた。降りしきる雨と吹き荒ぶ風のせいで私の声が届かず落伍してしまった……なんてことは有り得ない。他の者は声を掛け合っていた。私だけが完全にいないものとして扱われていた。

最初からこうなるように仕組まれていたとしか思えない。私は何も伝えられずに出撃し、真相は闇の中に葬られる。それだけは許せなかった。私がこうなっているのなら、他にも同じ目に遭った者がいてもおかしくないはずだ。

何故そんなことが出来るのだろうか。私達は確かに生体兵器。あの鎮守府では消耗品くらいにしかわれられていないのかもしれない。何せ、例え死んだとしても、また建造すれば新たな捨て駒が出来る。それでも、私だつて生きているのだ。喜び勇んで死に行くようなことはしない。戦うことは嫌いではないが、死ぬのは当然嫌である。人間への憎しみが生まれそうになっていた。

私は艦娘。人間を守る者。
だが、今は人間が――

目を覚ますとそこは、知らない部屋だった。白い天井と壁に、温かい布団。

浜辺に打ち上げられた後、最後に見たあの人影に助けられたのだろう。私は生きていた。死にたくない死にたくないと言いつつ、念願が叶った。

「つぎ……ぐ……」

身動きを取るだけで身体に激痛が走る。あの時とは違い、身体に感覚があった。それだけでも、生きていると実感出来る。痛みが悪くないと思えた。

激痛に耐えながら何とか身体を起こす。今まで着ていた制服ではなく、浴衣のような検査着を着せられていた。助けてくれた者が着せてくれたのだろうか。あとは身体中に付けられている機械やチューブの類。外れないようにした方がいいか。

「……………」

息を呑む声があった。その方を見ると、私と同じくらいの背格好の少女が驚いた表情で立っていた。手には水の入った洗面器とタオル。あとは包帯やら。私の介護をしてくれていたのだろうか。

「お、起きたーっ！ 目を覚ましたわよーっ！」

手荷物を素早く置き、バタバタと部屋を出て行った。何とも騒がしい。

だが、動いたことでわかった。あの子も艦娘だ。私と近い鉄の匂いを感じた。直感的に同族であると判断出来る。

「わかった、わかったからもう少し静かに頼む」

その少女に手を引つ張られやってきたのは白衣を着た若い男。人間である。姿を見て身構えたが、激痛で顔を顰めてしまった。

「まだ安静にしているんだ。完治したわけじゃない」

「そうよ！ 3週間も寝てたんだから！」

あの時からもうそんなに時間が経っていたのか。

「ひとまず教えてほしい。身体はちゃんと動くか？ 何か違和感はないか？ 気になることがあるなら何でもいいから言ってみてほしい」

この男が何を言っているかはわからないが、少なくとも今の私は激痛に苛まれているものの五体満足だと思う。腕の感覚も脚の感覚もあるし、五感は全て正常だ。

「……大丈夫……」

「ならよかった。手術はうまく行ったようだ」

「私達にも成功したんだもの。心配してなかったわ！」

本来なら、艦娘はドックに入ることで、どんな大怪我からも死んでさえいなければすぐに元に戻る。腕が千切れていようが、脚が挽げてもいようが関係ない。時間はかかるが五体満足、何事も無かったかのようには復帰可能。

だが、私の場合は少し違うのだと察した。少なくとも、今私がいるこの場所には、そういう気の利いたものは無いようである。

「身体中が痛いぞ……」

「定着までにはもう少し時間がかかる。だが、必ず治る。もう少しの辛抱だ」

手術といい、定着といい、私は一体何をされたのだろう。

「あとは頭の中だな。記憶の混濁が気になる。君、名乗れるか？」

「……駆逐艦、若葉だ」

若葉。初春型駆逐艦の3番艦、若葉。それが私の名。

人間にとっては囹のために使えるような、取るに足らない雑多な艦娘の1人なのだろう。生み出された直後から蔑ろにされて使い捨てられるほどには。

「僕は飛鳥アスカ、少し特殊な経緯はあるが、一応医者だ」

「雷いかずちよー。カミナリじゃないわー！」

若い男が飛鳥、騒がしい艦娘が雷。

浜辺に打ち上げられていた私を見つけてくれたのは、おそらくこの飛鳥医師だろう。殆ど聞こえない耳で聞いた声と、ぼんやりとしか映さない目で見えた姿に一致する。

「体調が悪くないのなら、手術の内容を知ってもらいたいんだが、どうする。辛いのなら後日にするが」

「……今お願いしたい」

私に何をされたのか、なるべくなら早く知りたかった。死の間際に私が懇願してしまったこととはいえ、私の意思が及ばぬところでどうされたのかは気になる。

「君はこの付近の浜辺に流れ着いていたので、僕が保護した。その時、君は酷い怪我を負っており、助けを求めてきた。ここまでは覚えているか？」

「……覚えてる。助けてほしいとも言った」

「ただ、ここには艦娘を元通りにする施設、入渠ドックが無い。なので、僕なりの方法で君を治療した。これだけは肝に銘じてほしい」

何か引つかかる言い方だが、命を救ってもらったのだ。文句を言う理由は無いだろう。人間に対して懐疑心を抱いていても、恩を仇で返すようなことはしてはいけない。それこそ、私が憎む人間と同じになっってしまう。

「まず、君の容態だ。両腕の酷い損傷と、両脚の骨が複雑骨折。首から下、全面に火傷。内臓にも一部損傷が見えた。死ななかつたのが奇跡だ」

「……つくづく頑丈だ」

「ホントよね。私もそうだったけど、死ななかつたのはいいことよね」
雷はやたらポジティブな様子。

「ここからは心して聞いてほしい。僕は君を生かすために全力を尽くした。だが、その手段は君が拒むことかもしれない。先に謝っておく。本当に申し訳ない」

「……別に何をされても構わない。あのままなら死んでいた。助けてくれたことは感謝している」

どれだけのことをやったのだ。謝罪されるような治療法なんて聞いたことがない。

身体の中に機械でも取り付けられたか。ここから離れられないようにされたとかか。それなら生きていくというよりは生かされているだけだ。私はそれなら拒むかもしれない。

だが、予想以上の言葉を聞くことになる。

「まず腕。あまりに損傷が激しく、機能の回復が見込めなかったため、切断させてもらった」

思考が停止する。

なら今私にある腕は一体何なのだ。ドックが無いのならどうやって治した。

「ならこの腕は」

「代わりに駆逐棲姫の腕を移植している。動いているのなら癒着はちゃんと出来ているのだろう」

深海棲艦の腕？

これが？

痛みを堪えながら腕を見ると、確かに知っている自分の腕よりも色素が薄く、左腕に閉しては知らない痣がある。さらに袖を捲ると、ガツチリと包帯が巻かれていた。この包帯の下には繋ぎ合わせた痕があるのかもしれない。

「脚の骨折は、こちらでも回復は見込めなかったため、砕けた骨を抜き取り雷巡千級の骨に差し替えた。艦娘の骨よりは頑丈で、こちらもうまく癒着しているようだ」

「もう少ししたら歩けるようになるわ！ 筋肉が縮こまっちゃうのは、私が毎日マッサージしてたから大丈夫のはずよ！」

言われてすぐさま脚を見る。こちらは色素は薄くなっていないも

の、ガチガチに包帯が巻かれている。こちらにも傷があるのだと思う。

「全身の火傷は、そのままだと皮膚が壊死してしまうため、皮膚移植を行った。特に重傷だった部分は腹全域。他にも酷い有様だった」

「移植した皮膚というのももしや……」

「こちらは重巡り級の物を使った。都合よく無傷のものがあつて本当によかった」

腹の辺りに熱くなるような痛みがあることはわかる。皮膚が定着していたとしても、まだ傷であることには変わらない。おそらく皮膚の接合面にも傷があるのだろう。検査着の隙間からサラシのように胴体全域が包帯に巻かれているのが見える。さながらミイラのようにだ。

「そして内臓だが、こちらは僅かに残っていた高速修復材のおかげでこれだけは元通りに治すことが出来た。これがもう少し残っていれば良かったんだが……」

「仕方ないわ。高速修復材は本当にレアなんだもの。ちよつとだけでもあつて良かったわよ」

身体の中にまで深海の何かが入っているわけでは無いようだ。

とはいえ、腕、骨、皮膚と、私の身体の半分近くは深海製のものに置き換わっていると飛鳥医師は言っている。まさかそんな治療の仕方とされるとは思わなかった。

「以上。あとは時間をかければ五体満足で動ける」

「動けない間は私がいろいろとしてあげるから頼ってね！ 包帯とかを替えるの得意なの！」

五体満足かもしれないが、私はおそらく艦娘とは言い難い存在になつてしまっている。それは少しシヨックだった。

「君を元の身体に戻せるように尽力する。今だけはこれで我慢してほしい。緊急性が高く、この手段しか君を生かすことが出来なかった。重ねて詫びさせてほしい。申し訳ない」

飛鳥医師に重ねて謝罪される。

だが、裏を返せばこれは私にとって転機なのではなからうか。今ま

での私はここにはもうおらず、今の私は新しい自分なので。短いながらも目も当てられない悲惨な人生をこの瞬間に終え、生まれ変わったとも言える。

「若葉は生まれ変わったということでもいいのだろうか」

「……そういう考え方も無くはないが」

「ならこの身体でもいい。……若葉は過去を忘れて新しく踏み出した」

明らかに困った顔をされたが、私としてはリセットを所望している。どのような身体であろうが、生を繋いでくれたことには感謝する。

だが、1つ気になることはあった。もし治療が完了し、元の艦娘の若葉へと戻れた場合、私の処遇はどうなるのだろうか。

「若葉は……完治したらどうされるんだ」

「本来なら元いた鎮守府に帰ってもらうことに」
「嫌だ」

食い気味に言葉が出た。

あの鎮守府に私の居場所はない。そもそも死ぬために作られた艦娘が戻ったところで、また捨て駒にされるに決まっている。もうあんな思いは嫌だ。

「若葉はもう死んだ扱いだ。所属していた痕跡も消えてる可能性がある。あの場所には戻る必要はないし、戻りたくない」

私がどういう理由で大怪我を負っていたかは説明していない。だが、飛鳥医師は何となく察しているようにも思えた。私が即座に反応したことで、確証を得たのだと思う。雷の方は何もわかっていないよ
うだが。

「話を最後まで聞いてほしい。僕が艦娘を保護したということにして、然るべき場所に行ってもらうということも考えたが、君はおそらくそういうところに行きたくはないだろう」

先程の発言から、私の思考は見透かされている。今の私にはそういう場所が辛い。飛鳥医師には申し訳ないが、あちら側の人間は信用出来ないと思ってしまうている。

「だから、ここに住めばいい。衣食住は提供しよう。とはいえ、動けるようになり次第、少し働いてもらうくらいはするが」

「それがいいわ！ 家族が増えるのね！」

考えるまでもない。行くあてがないのだから、飛鳥医師に頼らせてもらうのが一番だろう。助けてもらった、いや、新しい人生を始めさせてもらう恩を返すというのもいい。

少なくとも、私を治療してくれた飛鳥医師はまだ信用出来る。ここから改めて最初の1歩を踏み出すことにしよう。

「……そうさせてもらう。世話になる」

「やったわ！ 今日はおご馳走を作らなくちゃね！」

「ほどほどにしてくれ。僕らは兎も角、若葉は病み上がりだ。内臓は高速修復材が使えたからまだマシだが、3週間栄養剤で維持していたんだから、あまり多いと胃がおかしくなる」

「それと……」

盛り上がる雷を尻目にもう一つ、私の考えを聞いてもらう。

「身体はこのままでいい。元通りじゃない方がいい」

「……いいのか？ 治療した僕が言うのは何だが、決して綺麗な身体ではないぞ」

「構わない。これがいいんだ」

この傷は私が新たな人生を踏み出した証だ。こんな継ぎ接ぎの身体だが、私は傷と共に歩いていきたい。

捨て駒の若葉は死に、継ぎ接ぎの若葉が生まれた。私の本当の人生はここから始まる。

嫌な記憶は拭えないが、そんなもの気にならない程に楽しく生きてやるのだ。

傷だらけの家族

捨て駒として生み出され、鎮守府の思惑通りに戦場で惨めに散った私、若葉であったが、死の寸前で見知らぬ人間に救助された。

命を落とさずに済んだ代償は、身体の一部を深海のパーツに置き換えられること。私を助けてくれた人間、飛鳥医師は、必ず私を元の姿に戻してくれると言ってくれたが、私としては今の姿で充分であった。不幸しかなかった一度目の生を全て捨て、新しい私に生まれ変わった証としての姿と、自分で認識している。

今の私は継ぎ接ぎで出来ているが、これが私だ。継ぎ接ぎの若葉として、二度目の人生を改めて歩いて行こうと思う。

「そうだ！ 若葉、包帯を替えるわ。先生はお部屋から出てね」

「ああ。こういう時は雷がいてくれて本当に助かる」

「もーつと頼つてもいいのよ！」

私の身体の中ら中に巻かれている包帯は、定期的に雷が替えてくれているらしい。今までは私がずっと眠っていたためにかなりやりづらかったようだが、今後は私の意識があるので大分楽になると喜んでいる。

飛鳥医師が医務室から出て行ったことで、テキパキと準備を始めた。身体中に付けられている機械を正確に外していき、検査着を脱がしてくれる。

「やっぱり家族が増えるっていいわよね。若葉は私の妹みたいになるのかしら」

「……確かに少し見た目は似ているが」

「お姉ちゃんって呼んでくれてもいいのよ！」

「勘弁してくれ」

終始一貫、テンションが高い。私がおこに世話になることがそんなに嬉しいのか、それともこれが雷の普段なのか。

「私にも姉妹がいるらしいんだけど、見たことないのよね。というか、全然思いつけなくて。だから、若葉が妹になってくれると嬉しいのよ

ねー。ちらつちらつ」

「若葉には初春と子曰という姉がいるし、初霜という妹がいる。他をあたってくれ」

「ぎーんねん。でも頼ってくれていいんだからね！」

お喋りしながらも器用に包帯を解いていく。その下からは予想通りというか、痛々しい傷痕が露わになる。特に二の腕、本来の私のものとは別物を癒着させているため、クツキリと縫合痕が刻まれている。

3週間も経つためか、血が流れるようなことは無いものの、クツキリと刻まれたそれは、見ているだけでも顔を顰めてしまうほどのもの。だが、そんなこと関係ないと言わんばかりに、雷は手際よく私の身体を拭いていく。

「痛いぞ……だが……悪くない」

「綺麗になっていくのは悪くないでしょ。痛いのは我慢してね。なるべく優しくやるから」

清潔になっていくのは気持ちいいものだ。

だが痛い。とにかく痛い。治療痕はある程度塞がっているとはいえ、触れられるだけでも震えそうになる痛み。特に腕。皮膚移植の場所と比べても痛みが段違い。別の種族の腕が拒絶反応を起こしているのではと思える痛み。

「艦娘って自然治癒能力が人間よりも高い方なんだけど、ここまで重いと治るのもそれなりに時間がかかるみたい。先生の見立てだと、あと1週間くらいで痛みが少しは引いてくるって」

「そうか……」

「腕が動いてホント良かったわ。それが一番の大手術だったのよ」

それは私にもわかる。骨の差し替えや皮膚の移植と比べると、段違いの難易度だろう。それをやってのけたあの飛鳥医師は何者なのだろう。

「あの人は……一体何者なんだ」

「全然自分のこと話してくれないのよ！ お医者さんだとしか名乗らないし。でも腕は確かなのよね……私も若葉みたいに治療されてる

「ただけど、今はもう全然痛くないの」

雷も私と同様だと話す。何事もなっていないように見える辺り、私のように服で隠せそうな場所に傷を負っているのだろう。ただでさえ雷は長袖のセーラー服と膝上の靴下のために、傷が見えるほど肌を見せていないのでわからなかった。

私も今後はこうなるか。元々私の制服も肌を殆ど見せていない。強いて言うなら、手の色と痣が気になるかもしれない。いざという時は手袋でも着けようか。

「雷、若葉みたいに治療されてるとは」

「私も大怪我してここに流れ着いたらしくって。で、ここにあるもので治療されたの。ほら見て」

服の裾を捲り上げた。腹の部分が、私の腕と同じように色素が薄い。そしてその周囲にはクツキリと残る治療痕。私のものとは違い、処置されてから大分時間が経っているため、痛々しいもののしつかりと定着している。

「私はお腹を抉られてただけみたいなの。だから若葉よりは軽いかな？」

「いや……そちらの方が重いだろう……」

「でも、内臓とお腹のお肉を移植しただけだから、腕とか脚とかが動かなくなる不安は無かったのよ？ あ、でもご飯を食べられるようになるまでは時間がかかったかな」

あっけらかんと言いつつ、どう考えても私より重いじゃないか。見えない場所に深海のパーツが移植されているとか、突然身体がおかしくなってもおかしくないと思うのだが。

「あとは、ここに流れ着いたっていうのも先生に聞いただけで、このような前の記憶が1つも残ってないってくらいね。私の知識は全部先生の受け売りなの」

腹への重傷に加え、さらには記憶喪失。そもそも自分が艦娘であるということもすぐに理解出来なかったそうさ。

さっきの『姉妹がいるらしい』『全然思いつけない』という言葉。まだ生まれて間もない私ですら、会ったことがないどころか見たことも

無い姉妹のことを知識として理解しているのに、それすらもわかっていない。自分が艦娘という存在であることすら忘れていたというのは、あまりにも深刻なのでは。

「でもいいの。今、先生と一緒にこうやって暮らしてるのが楽しいし。きっと私の忘れちゃった記憶は必要のない記憶なのよ」

間違った割り切り方なのだと思う。だが、そうしないと壊れてしまうのだろう。だから、私は詮索しない。人には1つや2つ、思い出したくないような過去があるだろう。私だってそうだ。

そういう意味では、雷は真の意味で生まれ変わっているのかもしれない。ほんの少しだけ羨ましかったが、口に出すことは憚られた。

「はい、おしまいー」

気付けば包帯を巻き直されていた。身体を拭かれる前の状態に戻ったかのように綺麗な処置。

私が目を覚ましたことで、付けられていた機械は外したままにされた。身体を拭かれている間にチューブの類も全て抜かれ、晴れて自由の身というところ。

「身体は大丈夫？ 何かしてほしいことはない？ もっと頼ってもいいのよ？」

「……大丈夫。少し休む」

「まだまだ安静にしなくちゃダメなものね。でも、何か必要なら私を呼んでね！」

パタパタと医務室から出ていく雷。結局最初から最後まで騒がしかった。喋っていない時間が無かったかのように思えるほどである。

過去を失っているから明るく振る舞えるのかもしれない。恐ろしく危ういバランスの上に成り立っているようにも思えるが、それで成り立っているのなら私が触れるようなことではない。

「あ、お帰り！ あの子、目を覚ましたのよ！」

「マジか！ んなら、あたしも顔見せておかねえとな」

「ほどほどにね。起きたばかりだから安静にしなくちゃなの」

部屋の外で雷が誰かに向かって話している。今のところ私は飛鳥医師と雷しか知らないが、ここには他にも誰かいるらしい。もしかし

たら思ったより人がいるのでは。そんなところに突然私も居候になつて大丈夫だろうか。

雷の足音は遠のき、今度は別の足音がこちらに近付いてくる。雷とは違い、悠々とした足音。

「お、ホントに起きてんじやん。身体は大丈夫か？」

入ってきたのは雷よりは大人の女性。こちらも艦娘。雷とは打つて変わつて露出度がそれなりにあり、一目でこの人がここでの処置を受けた人であることがわかった。

太腿の辺りに私の腕と同じ縫合痕が刻まれており、そこから先は色素が薄い。ということは、この人の脚は本来のものとは違うということか。あとは、おそらく本来この人が着けていないだろう眼帯が目を引く。

「あたし、重巡の摩耶つてんだ。よろしくな」

「駆逐艦、若葉だ」

「割と元気みたいだな。よかつたぜ」

ベッドの隣に腰掛ける摩耶。

その時も、どうしても脚の傷に目が行ってしまった。その視線を感じた摩耶は途端にニヤニヤし始める。

「おいおい、初対面の女の脚を見つめるのは礼儀がなつてないんじゃないのか？」

「あ……すまない。若葉と同じ傷だったから気になった」

「ああ、お前は腕だったもんな」

私の処置のことは流石に知っているようだ。もしかしたら手術^{オペ}を手伝っていたのかも。

「まあ似たようなもんだ。あたしの脚は重巡ネ級のモノなんだとよ。おかげさんで五体満足で助かつてる。あとは見りやわかると思うが目が片方潰されちまった。こつちにもネ級の眼球が入つてんだ」

「……そうか」

同じ重巡洋艦の深海棲艦のモノを使ったおかげで定着は早かつたらしい。私の腕も同じ駆逐艦の深海棲艦のモノなので、うまく定着してくれているのかもしれない。

目もすっかり入ってはいえるものの眼帯を着けているようだ。飛鳥医師の治療により見えないわけではないそうだが、少し見栄えが良くないのだとか。

「あたしは所謂ドロップ艦ってヤツらしくてさ。よりによって大嵐の時にドロップしちまったもんだから、他の鎮守府に拾われる前に深海の奴らに襲われちまって、死ぬ寸前でここに流れ着いたんだ。あとはわかるだろう？」

「ああ……飛鳥医師に治療されたと」

「そういうことだ。こんな身体にしてすまないってめっちゃくちや謝られたけどな、あたしは結構気に入ってんだぜ」

私のような建造艦とは違い、抑止力として海そのものが生み出した艦娘がドロップ艦だ。鎮守府に保護されるまでは海を彷徨い続けることになるが、その間に死んでしまうものも少なくないらしい。摩耶もその類になりかけたようだ。

「お前もドロップ艦か？ ボロボロになってこの近くの浜に流れ着くって、それくらいしか無いと思うんだけどよ」

「……」

私の内情は人様に話せるほどのものではない。空気を悪くしてしまふ可能性が非常に高いため、どうしても口を噤んでしまふ。

だが、今後はここで一緒に暮らしていく家族となるのだから、隠し事は無しにしておきたい。飛鳥医師は何やら事情があるみたいだが、私は知ってもらっておいでもいいと思う。

「どうした？ 実は結構訳ありだったりすんのか」

「……若葉は捨て駒として建造された艦娘なんだ」

空気が凍り付くような感覚がした。言わなければよかったと後悔したものの、一度言ったのだから全部言うことにする。

「お、おい、捨て駒って」

「言葉通りだ。建造されて、何も教えられずに出撃させられた。そんな状態でまともに戦えるわけもなく、ボロボロにされて仲間にも見捨てられた後に、ここに流れ着いた」

自分で話していて心が締め付けられるような感覚。改めて鑑みて

も、私の第一の人生は酷いものだった。笑い話にも出来やしない。

私の話を聞いて、摩耶は拳を震わせていた。苦虫を噛み潰したような形相。

「すまない。空気を悪くするような経緯で」

「……何処のクソ野郎だよ、そんな采配出来る提督は！ あたしがぶっ飛ばしてきてやる！」

「いい、もういい。若葉のために怒ってくれたこと、感謝する」

私の不幸も自分のことのように怒ってくれる。それがすごく嬉しかった。そうか、これが仲間であり、家族か。一度鎮守府に属していたというのに、初めての感覚だ。

私が大丈夫と宥めると、摩耶も落ち着いてくれた。

「もうあの鎮守府とは関わりたくない。それに、今は場所もわからないんだ」

「そんなところがあるってだけでも胸糞悪い話だな……いや、すまねえ、思い出させちまって」

「構わない。話せて少しスッキリした」

飛鳥医師は私の発言から勘付いているだろうが、ハッキリと話せたことで少し気分が晴れたと思う。モヤモヤした気持ちを燻らせ続けるのは良くない。溜め込み続けていたら、ストレスで倒れてしまいうだ。

「んなら、ここで楽しい第二の人生を送ってくれよ。あたしも協力してやっからさ」

「ああ、感謝する」

「つつても、まずはその怪我治さねえとな」

まだこのベッドから1歩も動くことが出来ないのだから、まずはそこから。私の世界は、まだこの狭い空間しかない。早く治して、自分の脚でこの部屋から出て行こう。世界は広い。

「脚って結構キツイぜ。あたしもここまで回復するのに術後2ヶ月近くかかったんだ」

「若葉は骨だけだから問題ない」

「お、言ったな。最初は生まれたての子鹿みたいになるから覚悟しと

「けよ」

ニカツと笑う摩耶。雷よりも余程姉と呼びたくなるような男前な性格。姉というより姐か。

「んじや、安静にしとけよ。治るもんも治らねえからな」

「善処する。ありがとう」

「あたしも頼っていいからな！」

摩耶が医務室から出て行くと、途端に睡魔に襲われる。無理をしていたわけではないのだが、安心したらまた眠たくなってきた。身体が回復を求めている。

まだたった少しの時間であるが、この場所にいる人達がどういう人達かは何となくわかった。飛鳥医師も私を利用するために治療したわけではなさそうだ。雷や摩耶の言葉からそれは感じ取れた。

それなら、この場所でもやっていけるだろう。早くこの怪我を治して、一員として何かしらの力になりたいと思う。

だが、謎は深まる。

飛鳥医師は何者なのだろうか。それに、この場所は何なのだろう

継ぎ接ぎの若葉

私、若葉が飛鳥医師の下に身を寄せるようになり1週間が経過した。リハビリは目を覚ましてから欠かさず行い、痛みを感じつつも身体を本調子に戻そうと日々努力している。毎日の積み重ねで身体が動くようになっていくことを実感すると、この痛みも心地よさを感じる程であった。

回復さえすれば、私の記憶に残る最悪な人生を払拭するほどの輝かしい未来を掴める。私の身体は艦娘からは逸脱しているかもしれないが、私が満足出来る生き方が出来るはずだ。そう考えると、リハビリにも力が入るといふもの。

「もう大分動けるようになったな」

リハビリを見てくれるのは飛鳥医師。治療の経過観察をするのも医者のお務めとサポートしてくれている。日常生活は雷が見てくれるので、至れり尽くせりである。

「まだ脚が少し痛い。だが、歩くことは出来るようになった」

「痛みに関してはもう少し我慢してくれ」

初めて立ち上がった時は、摩耶に忠告された通り生まれたての子鹿のようになってしまうた。問題ないと大見得切つてこれは少し恥ずかしい。毎日痛みに耐えながらストレッチなどをしたおかげで、ここまで来ることが出来た。

「腕の方は完全に馴染んだみたいだな」

「二の腕の痛みももう無くなった。動かすことに違和感もない」

「摩耶の時にはもう少し時間がかかったんだ。脚と腕では回復の時間に差が出るのは当たり前だったか」

脚と腕は太さが違うのだからそうもなるだろう。そもそも摩耶と私では体型が違う。小柄な私の方が馴染むのが早かったようだ。

「他に何か違和感はないか。どんな些細なことでもいい」

「今のところは何も」

「それなら良かった。残りあと少しの痛みさえ無くなれば、怪我をする前の状態に戻るだろう。その痣はどうしたい」

駆逐棲姫の腕ということを表す左腕の痣。毎日見ることになるこれも、まだ目覚めて1週間しか経っていないが、今の私にはそれなりに愛着があるものだ。新しい人生の始まりを表す痣。これがあることで私は生まれ変わったのだと自覚出来る。

嫌な過去があるという証にもなってしまうっているが、それが気にならないくらい我的生活をしていけばいい。その意気込みにもなる。

「若葉は気にしてない。このままがいい」

「ならそのままにしておこう。流星にそれを消そうとすると、また違う腕を探してくるしかないからな」

「また左腕を切断されても困る」

なかなか怖いことを言う。

「何故こんな治療が出来るんだ？」

ずつと聞いていることをまた問うた。自己紹介されたときに、本人の口から『少し特殊な経緯がある』と出たが、その真相は闇の中。雷や摩耶ですら知らないことだから、頑なに言わないようにしている。

「秘密だ」

やはりはぐらかされた。得体の知れない治療法を秘密と言われるのは恐ろしいことではあるが、瀕死の状態をドック無しでここまで回復してもらえたのだから腕は確かなのだ。何をどうしたらそんな経験が積めるのやら。

リハビリが終わり、飛鳥医師の診察も終了。傷から血が滲むようなことはないたため、身体中に巻かれた包帯と検査着も今日限りで卒業でいいとのこと。

本来ならば、私には駆逐艦若葉としての制服がある。だが、ここに流れ着いた時に着ていたものは使い物にならないほどボロボロになっていったことだろう。なら何を貰えるのか。

「今日からは医務室ではなく、自分の部屋で過ごしてもらおう。そこにいろいろと用意しておいたから、行けるようなら今からでも見に行ってみてくれ」

自分の部屋が貰えると思うと少し胸が高鳴った。

当然だが、前の鎮守府ではそんなこともなく出撃させられている。

最初から私の居場所は与えられていなかったのだろう。それが、今回は自分の居場所を部屋という形で明確に与えられた。私はここにいていいのだ。

「改めて、若葉。君は僕達の仲間だ。よろしく頼む」

手を差し出される。私はこんなことすらしたことが無かったのかと改めて思った。その手をギュツと握る。

たったこれだけ、握手だけでも、飛鳥医師との繋がりが出来たように感じた。鎮守府に属するよりも緩い繋がりなのに、それが心地いい。

飛鳥医師に場所を聞き、今は私室としてあてがわれた部屋の前。隣には雷の部屋が、雷の部屋の正面には摩耶の部屋がある。それ以外にもいくつもあり、部屋自体は10個。これが全て埋まることは無いだろう。

「……が……若葉の部屋」

扉を開ける。中はベッドとクローゼット、あとは使うかわからない机があるくらいの簡素な部屋ではあるが、私1人で使うにはそれなりに広い。もう1人2人入っても余裕があるような私室。

おもむろにクローゼットを開けると、中にはしっかりと私の制服が入っていた。肌触りからして本物の艦娘の制服である。何処から手に入れてきたのだろうか。

「……着替えるか」

せっかくだしと、その制服を着ることにした。肌着まで全て揃っており驚く。この辺りは雷か摩耶が調達してくれたのだと信じよう。あの飛鳥医師がこの類まで取り揃えてくれるとは考えたくない。

「……」

検査着を脱ぎ、包帯を解いていくと、やはり傷だらけの私の身体が露わになり、クローゼットに備え付けられた全身鏡により私にまざまざと見せつけられる。

見る人が見れば、醜い、汚い身体だと思うのかもしれない。だが、私に取ってはそういう感情は1つも湧いてこなかった。むしろ誇らし

かった。生まれ変わった私には、これが当たり前。傷なんて関係ない。

「……隠れるものだな」

二の腕と脛、胴に大きな傷があるのだが、制服を着るとその全てが隠れた。摩耶のように大つぴらに見せるのも別に構わないのだが、駆逐艦若葉の制服は長袖のブレザーに黒タイツであるおかげで露出度は極端に少ない。この状態でわかるのは左腕……手にまでかかった痣くらいだ。これでようやく、駆逐艦娘としてのおおよその部分が戻ってきた。

あとは艀装なのだが、当然大破しているため、鎮守府の工廠でなければ修復出来ないだろう。結局私は艦娘としては復帰出来ない。せつかくこういう形で生を受けたのだから、自身の力を十全に使って、相応な戦場を駆け回って見たかったものだ。やる気だけはあったのだが、完全に出鼻を挫かれた気分。

「……私は艦娘なのだろうか」

艀装が無ければ、戦うどころか海の上に立つことも出来ない。そうなる。艦娘とは言い難い。楽しく生きると意気込んだものの、生まれた理由の半分は無くなってしまっている。私はどう生きていけばいいのだろう。戦いを失ってしまったら、私は何が出来るのだろうか。

「若葉、いるかー」

自分の境遇を省みて項垂れていると、部屋の外から摩耶の声。私が部屋を貰ったことはもう知っていたようだ。

扉を開けると、妙に油污れが目立つ摩耶が立っていた。いつも着ている艦娘の制服ではなく、ツナギを着ている。

「おう、制服に着替えたんだな。検査着より似合ってるぜ。っと、それより、あたしについてきてくれ。今日で医務室生活が終わるって聞いてたから急ピッチで仕上げたんだ」

何を言っているかはわからないが、私に急ぎの用という感じだったので、言われるがままについていく。

私がこの施設で知っているのは、医務室と自分の部屋だけ。その自分の部屋が割と医務室に近かったことで、施設の全容は全くわかって

いない状態。

摩耶が向かう方向は、今まで使わせてもらっていた医務室も通り過ぎた先の、海に近い方。なんと工廠がそこにあった。ただの医療施設ではないのか。

「ここは……工廠？ この施設は鎮守府なのか？」

「放棄された鎮守府を改装してるとよ。ドックとかだけは撤去されたみたいだけど、場所としては残ってんだ」

部屋の数が少ないのは、元々ここが簡易鎮守府程度でしか運用されていなかったかららしい。遠征部隊の宿泊施設程度だったのかも。それでも工廠があるくらいなのだから、そういう稼働はしていたのだろう。

放棄されるほどのだから、この辺りの海は完全な平和なのかもしれない。それは喜ばしいことである。

「で、だ。ここに来てもらったのは、こいつを見せたかったからだ」
摩耶がまっすぐ向かった先にあるもの。そこには私には見覚えのあるものが鎮座していた。

それは今の私が喉から手が出るほど欲しかった、私の存在理由の1つでもあるもの。壊れたと思っていたのに、新品同然の形でそこにある。

それは、私の艤装。

「なんで……」

「なんでって、あたしが修理したからだよ。ちよいちよいアレンジがあるけど、ちゃんと動くはずだぜ」

おそるおそる艤装を装着する。駆逐艦の艤装は、背負うだけだったり腰にはめ込むだけだったり簡単なものが多いが、私の艤装は一際特殊。身体と接続するのではなく、背中で浮く。

どれだけ動いても私の背中から付かず離れずの距離をキープし続けて、それでも私に艦娘としての力を与え続けてくれる。今の私は艤装のおかげで人間とは一線を画した力を持っている状態だ。

「すごいな。ちゃんと若葉の艤装だ」

「そりゃあな。軸の部分はちゃんと残っててくれたから、後は拾って

きた部品で使えそうなものを片っ端から試したんだ。だから、その艤装も、なんつーか……継ぎ接ぎだらけだな」

確かに、私が以前使っていたものと比べると、所々が違う。本来のものは差し替えられている部分が目に見えてわかる場所も多い。

だが充分すぎる。それに、継ぎ接ぎの私にはお似合いな継ぎ接ぎな艤装。私らしい、むしろ私にしか使えない艤装だ。とても気に入った。私はこれと共に海を駆けたい。

「摩耶、今すぐ海に出ていいだろうか」

「ちよつと待つてろ。あたしも行く。さすがに一人で行かせるわけにはいかねえよ」

工廠故に海には直結。行こうと思えばそのまま行ける。

艤装を手に入れたことで、今の私はハイになっているのかもしれない。まだ残っている身体の痛みも忘れ、早く海に出たかった。それが出来れば、本当に艦娘として私は完治したと言える。

「よし、いいぜ。行くかー」

「出る」

準備が出来た摩耶が言うが早いか、私は海に飛び出していた。艤装を着けているので、当然海の上に立つことが出来、そのまま駆けることも出来た。最悪の人生の時と同じように、最初から知っているかの如く動ける。身体がそのように出来ている。

私の後を摩耶もついてきていた。摩耶の艤装は私とは違い物凄く簡単に出来ており、腰や二の腕に巻いている程度である。武器が無いのなら装着も早いものだ。

「摩耶は工作艦なのか？」

「んなわけあるか。必要だったから覚えたんだよ。あたしの艤装も、雷の艤装も、全部あたしが独学で整備してんだ」

工作艦がない施設のために、誰かやれる者が艤装の整備をしなくてはいけないと思い、摩耶が立ち上がったらしい。そもそも雷は自分が艦娘であるとわかっていなかった時期もあるし、飛鳥医師は分野が違う上に他にやることも多い。消去法として摩耶しかいなかった。

「若葉も覚えた方がいいだろうか」

「あまりオススメは出来ねえな。ただ、自分の艤装が整備出来ると何かと便利かもしれねえ。覚える気があるなら、それくらいは教えてやるよ」

それは助かる。継ぎ接ぎになっていることでより一層愛着が湧いた艤装だ。自分の手で弄ることが出来るというだけでも楽しみである。

「それよか、どうよ。久しぶりに海に出た感想は」

摩耶に問われ、思いを巡らせる。

「最高だ。やはり若葉は、良くも悪くも艦娘なんだと感じた」

波と潮風を感じ、改めて実感した。私の在り方、こうして海を駆けることがとても楽しい。もっと海を感じていたい。これからは毎日こうやって海を駆けよう。

「これで完全復活だな」

「ああ。摩耶、感謝する」

「いいってことよ。やっぱり艦娘にや艤装そいつが無けりやな」

もう身体の痛みすら感じなかった。海に出たことで本当に完治したように思えた。

身体も艤装も継ぎ接ぎな艦娘、若葉の第二の人生は、たった今から始まることになる。平和にのんびんだらりと暮らすのか、戦火に巻き込まれて暮らすのかは、今はまだわからない。だが、第一の人生よりは確実に希望が満ちている。

楽しもう、世界を。

嵐の夜

長く使っていた医務室から出て、与えられた私室で生活が出来るようになった私、若葉。摩耶のおかげで艀装も修復され、艦娘としての機能は全て戻ってきたことにより、私は正式にこの施設の一員として迎え入れられることとなった。今までは患者だったが、これからは仲間として、皆が扱ってくれる。

艀装の確認として満足するほど海を駆け回った後は、早速艀装の整備。潮風と海水により濡れた艀装は、放っておくと錆び付いてしまう可能性がある。

本来ならば工廠に滞在する作業員、妖精さんが全てやってくれるのだが、この施設にいるはずもなく、全て自分で。

「隅から隅まで念入りにな。そういうところから錆びる可能性があるからよ」

「わかった」

普通の艦娘ではまず確実にやらない仕事。摩耶も付き合ってくれているので、艀装整備もなかなか楽しいものである。

「その調子だと、艀装の確認も終わったみたいだな」

整備をしていると、雷を引き連れた飛鳥医師が工廠にやってきた。

「お、センセどうしたよ。あんまりここには来ないだろ」

「摩耶、天気予報は確認したか」

「……やべ、忘れてた」

飛鳥医師と摩耶が話している内に、雷がパタパタと工廠内を駆け回り、外に出ているものを仕舞っていく。

「今日は夕方から嵐が来る。艀装は向こうの倉庫の中に仕舞ってくれ」

なるほど、だから少し急ぎ足だったのか。工廠に嵐が直撃したら、大波で全てずぶ濡れだ。ただでさえ今それを防ぐために拭いているというのに、それが台無しになってしまう。

整備はほぼ終了したため、飛鳥医師の指示通りに奥の倉庫へと持っていった。全て中に入れ終えたところで、シャッターまで閉められ

る。絶対に浸水させないという意志が見えた。

「これで良し。わかっていると思うが、今から海に出ることと工場への立ち入りを禁止する。ルールを破って怪我をされても困るからな」
「わあーっってるって。どうせここもシャッター閉めるんだから入れねえだろ」

私達が全員工場から出たところを見計らって、一切立ち入りが出れないようにシャッターが下ろされた。

「暇になっちまったな。どうすつか」

「君達はまずシャワーを浴びることだ。潮風で髪がベタベタだぞ」

「確かに。よし若葉、風呂行くぞ風呂」

「私も行くわー！ お掃除してたから埃が付いちちゃった！」

今まではずっと雷が身体を拭いてくれたため、風呂というのも初めてだ。今回は簡単にシャワーで終わらせることになりそうだが、それでも温かい湯を浴びるということ自体が初めて。そういうのも少し楽しみだった。

施設は摩耶から聞いていた通り、元々鎮守府だった場所を改装しているということ、それらしい場所が残っている。ここにいた艦娘達が使っていたであろう談話室や食堂はそのままの形で残されており、皆で使うらしい。

風呂も無くす理由が無いため、当然そのまま。艦隊運用をしている鎮守府の風呂は、大浴場とでも言うべき大きな空間だが、ここは鎮守府としても小さいからか、私達3人が入って余裕があるという程度であつた。

こんな真昼間から湯船があるわけではなく、風呂に備え付けられたシャワーで身体の汚れを落としていく。

「やっぱ、若葉が一番激しいな」

「ね。私達が軽く見えるわ」

そんな中、人の裸を見て騒ぎ立てる摩耶と雷。話題はどうしても身体の傷に。こういう裸の付き合いは初めてののため、まず私が弄られる羽目になる。

2人の傷は見せてもらっているが、確かに私は2人よりも広範囲。腹だけの雷や、脚だけの摩耶とは違い、胴にも四肢にも傷がある。

「若葉としては、2人も充分重傷だと思うが」

雷は外見がそれだけの代わりに見えない体内に置き換えがあり、摩耶は隠せない眼の置き換えがある。傷痕として残っていないくとも、私と同様に継ぎ接ぎの身体だ。

「摩耶さんは隠せないもんね。どうなの眼の調子」

「おう、おかげさんでバッチシ見えてるぜ。ただなあ、なんつーか、見え方が違うんだよ。だから眼帯してんだけどな」

私達以上に外見に影響している摩耶。本来の眼は綺麗な蒼い瞳だが、いつも眼帯をしている方は紅い眼。微かにだが光が漏れているようにも見えた。

あまり身体の特徴ばかりに触れるのも良くないので、話題を変えろ。私は新参としてここに入ったわけだが、2人は当然ここには長く滞在しているはずだ。摩耶に至っては本来重巡洋艦の艦娘には出来ない艦装整備という特技まで備わっている。それなりに長いことやらないと出来ることではないだろう。

「2人はここに来てどれくらい経つんだ」

「あたしは半年くらいだな」

「私は摩耶さんが流れ着く2ヶ月くらい前からだから、8ヶ月ね。だから一番の古株よ!」

ということとは、飛鳥医師はこの場所で1年近くこういうことをしているというわけか。

「半年はセンセも込みで3人だったが、今日からは4人だ。若葉、新人だからって遠慮すんなよ。言いたいことがあるならばバズバ言えばいいからな」

「そうよ! それに、私をいっぱい頼ってもいいんだからね!」

頼もしい仲間達だ。私も今日からその一員として活動することになる。2人に負けないように頑張っていこう。何をしていくかはまだわかっていないが。

「頼らせてもらう。雷、摩耶、よろしく」

「ええ！　よろしくね若葉！」

「おう、よろしく頼むぜ」

裸の付き合いで、一層仲間意識が芽生えた気がする。こういうのも悪くない。

そして、夜が来る。飛鳥医師が言っていた通り、外では轟々と雨と風の音が喧しいほどに鳴り響いていた。

正直な話、私は嵐が少し嫌いだ。最悪な第一の人生は、荒天の中で戦いだった。どうしてもそれを思い出してしまう。あの時は夜では無かったため暗いのは別に構わないのだが、この音は嫌だ。雨戸を閉めているので窓の外を見ることは無いのだが、それに叩きつけられる雨風が嫌悪感を駆り立ててくる。

「若葉、若葉、ちよつといい？」

と、音を気にしていると、部屋の外から雷の声。あまり見せられない顔かもしれないが、雷の声もいつもの元気が無いように思えたので、すぐに扉を開ける。枕を持った雷がそこに立っていた。

「あの、あのね。一緒に寝てもらえない……かな。全然覚えてないんだけど……この雨と風の音はすごく苦手なの……」

「若葉も嫌いなんだ……ちようどよかった」

私と同じ理由で雷も嵐が嫌いのようにだ。私がない時はどうしていたのだろうか。

「前まではね、摩耶さんの部屋にお邪魔させてもらってたの。でも、でもね、今日は若葉の部屋がいいかなって思ってた。何となくだけど、若葉も私も同じかもって思ってた……」

「そうか。なら2人で摩耶の部屋に押しかけよう。2人よりも3人の方がいいだろう」

私も枕を抱え、雷を連れて摩耶の部屋へ。子供2人で震えているよりは、摩耶も巻き込んで3人でいた方が落ち着けると思う。

「摩耶、いいか」

「んー、どうしたよ。って、理由わかるけどな。入ってこいよ」

前々から雷が嵐の日にお邪魔していたというのだから、今回も来る

と思っていたらしい。雷がそうなら私も来ると踏んでいたようだ。

ありがたいことに、部屋に置かれているベッドは大きめのサイズ。私と雷は駆逐艦の中でも小柄な方のため、摩耶と一緒に寝ても大丈夫なくらいである。今日は2人して添い寝させてもらおう。

「お前らの気持ちはわかるぜ。あたしもだけど、ここに流れ着いたのが嵐の後だろ。どうしてもあの時のことを思い出しちまうもんな。トラウマになってんだよ」

自分もそうだと摩耶も語る。摩耶は大人だからそれくらいの恐怖心でも気にせずいられるが、私達には辛い。

私は捨て駒にされた記憶が、摩耶はドロップ直後に襲われた記憶がある。雷には記憶こそ一切無いが、身体がその時のことを覚えているのだろう。

「じゃあ、この嵐の後に誰かがいるかもしれないのか?」

「かもしれないねえ。あたしらと似たような境遇の奴が増えるかもな」

嵐の後は必ず皆で浜辺を見に行くようにしているらしい。そのおかげで私が助けられたようだ。理由はそれだけではないようだ。

「流れ着くのは艦娘だけじゃないんだ」

「というと?」

「艦装とかが流れ着くんだよ。ここの浜辺」

なんでも、嵐が起こりやすい場所にあるこの施設は、海流の影響か、嵐の後の浜辺にいろいろなものが流れ着くらしい。生き物が流れ着くのは稀ではあるが、戦闘中に壊れたものや、ドロップ艦の所有物だった艦装が数多く流れ着くそうだ。私の艦装はそういうところから集めたパーツが組み込まれているのだとか。

さらにまずいことに、深海の艦装なども普通に流れ着くらしく、その辺りは研究機関に資料として買い取ってもらっているそうだ。

「まあ、一番の目当てはゴミ拾いだ。浜辺は清潔にしておきたいだろ」

「ああ、それはそうだな」

「たまたまそのゴミが一攫千金になるってだけなんだよ。それに……
こういうものも拾えるときがある」

摩耶が指差したのは、自分の脚。

ということとは、

「まさか、これも」

私の腕を指差す。摩耶は無言で首を縦に。

つまり、浜辺に打ち上げられた深海棲艦の死骸から、後々使えるかもしれないパーツを確保している。

私の場合は腕と骨と皮膚。雷には内臓と皮膚。摩耶には脚と片方の眼球。少なくともそれだけのパーツは流れ着いた死骸から確保していたということだ。おそらく今でも何処かにパーツが確保されている。

それを想像すると、飛鳥医師にも畏怖の念が湧いてきてしまう。私達のような戦うための存在でも、さすがに死体漁りはするつもりがなかった。

「何でそんなことを……」

「あたしも流石に聞いた。そしたらな、あたし達のような奴を治療するためつつつたんだ。ドックが無いこの場所で、治療の見込みのない怪我人を治療するためつてな」

ある意味予想通りというか、順当なはぐらかし方というか。だが、これに関しては疑いようがない。飛鳥医師は純粋に治療のためにパーツ集めをしている。

ここで活動する前からこの治療法は確立出来ていたということか。それに、似たようなことを他にもやってきた可能性も高い。これを本人に聞いてもきつと真意は教えてくれない。だから、これ以上の情報は期待できない。摩耶もここまでしか聞けていない。

「アイツにもいろいろあんだよ。深追いしない方がいい」

「……そうだな」

今は深く考えないでおこう。死骸のパーツを確保しておくなんて猟奇的なことに思えるが、私が助かったのは、飛鳥医師が治療の技術を持っており、ここで集めた深海のパーツを確保してくれていたからだ。

「辛気臭い話はやめやめ。ほら、雷がテンション下がっちゃってる」

私と摩耶の会話についてこれないためか、あまり聞きたくない内容

だったためか、浮かない顔で俯いている。ギョツと自分を抱きしめて、摩耶に身を寄せていた。

「若葉も摩耶さんも顔が怖かったわ……そういうの良くないと思うの」

「悪い悪い」

雷を抱き上げたかと思うと、自分の膝の上に乗せて頭を撫でる。雷の機嫌もそれですぐに直った。

何というか、雷は見た目以上に幼さを感じる。記憶を失っているからか、それとも別の要因があるのかは定かではない。

「せっかく3人で集まったんだし、ほら、なんつったっけか、女子会っつーのになるのか、それやろうぜ」

「夜だし、パジャマパーティーね！」

記憶は無くともそういった知識はある様子。嵐への苦手意識を忘れて楽しめるならそれでいい。私も嫌悪感を忘れて楽しみたいところだ。

「あたしはパジャマなんて大それたものじゃないけどな」

「いいじゃない。寝る前のお喋りの時間ってことだもの」

雷はパジャマだが、摩耶はTシャツとショートパンツ、そして私は着やすい浴衣を選んでる。こういうところも三者三様。

「今日は若葉がちゃんと仲間になった記念日だもの。いっぱいお喋りしましょ」

「だな。若葉、さっきも言ったが、改めてよろしくな」

雷と同様に私も抱き寄せられた。3人で固まれば、仲間意識もより高まる。

もうこの時には外の嵐のことは気にならなかった。轟々と音を立てていても、仲間達の存在が気を紛らわせてくれる。今だけは、嵐が嫌では無かった。これならグツスリ眠れるだろう。

明日は嵐の後のゴミ拾いがメインだ。今まで動いていなかった私には初めての重労働になるはず。しかも、今の話から鑑みると深海棲艦の死骸が打ち上げられたりしている可能性すらある。

それでも楽しみで仕方なかった。仲間達とする初めての仕事に、私

は少し高揚している。

嵐の後

嵐が過ぎ去った朝。私、若葉は摩耶の部屋で目を覚ました。最悪な第一の人生を思い出させる嵐に嫌悪感を覚えていた私だが、摩耶と雷と一緒に眠ることですれを払拭出来たと思う。おかげで嫌な夢を見るなんてこともなく、グッスリと眠ることが出来た。

起きたのは私が一番最初のようにだった。規則正しい生活のために目覚まし時計が用意されていたが、それが鳴る前に目を覚ましてしまったらしい。

昨晩は本当にたわいないお喋りをし続けた。生まれ落ちてまだ日が浅い私は専ら聞き専ではあったが、楽しい時間を過ごせたと思う。そのお喋りの中で、この世界がどういうものであるかを少しは理解できた。

この施設は人里離れた岬に造られているということがわかった。理由は実に簡単で、元々鎮守府という軍事施設だったのだから、民間を巻き込まないためにも離れた位置に造るのは至極当然のこと。それに加えて、嵐の日の後に浜辺に深海棲艦の死骸が流れ着いてくるのだから、普通は誰も寄り付かない。

何故そんなところに飛鳥医師が居を構えようと思ったかはわからないが、少なくとも私達のような、この浜辺に流れ着いた瀕死の艦娘の命を救うためであることは聞いている。深海棲艦の死骸が流れ着くのと、艦娘の死体が流れ着いてもおかしくない。少なくとも最古参である雷がこの施設に滞在を始めてからは一度も見ただことはないらしいが。

まだ飛鳥医師には謎が多い。そのうち自分から話してくれる時が来るだろうか。

「んん……ふあ、おはようさん」

「おはよう」

物思いに耽っている間に摩耶が目を覚ます。それと同時に目覚まし時計がけたたましい音で鳴り響いた。その音でビクンと震えた後に目を覚ます雷。

「若葉、目覚まし止めてくれ」

「わかった」

鳴り響く目覚まし時計を止めて、雨戸を開ける。スッキリとしたいい天気。昨晚の嵐が嘘のようだった。

「こりやあ何か流れ着いてそうだな。今日は大仕事になるぜ」

「若葉は初めての仕事だ。任せてくれ」

「おう、頼りにしてるぜ」

施設の一員となって初めての仕事だ。やる気も漲るといふものである。

雷手製の朝食を食べ終え、飛鳥医師も一緒に浜辺へ。ここからは汚れることも多いと、全員が作業着に着替えての集合となった。重いものを運ぶ可能性があるため、艦娘は艀装も装備する。

既に私の分の服まで用意されていたのは驚いたが、寝間着のこともあるので納得はした。サイズまでピッタリ。

「手分けして浜辺を確認していく。僕は人間故に非力だから、誰かサポートしてくれ」

「ならあたしが手伝う。雷、初めての若葉をサポートしてやんな」

「りよーかいよ！ 若葉、私をいっぱい頼ってね！」

ということ、私は雷と共に浜辺の散策をすることに。

私達の向かう方向は、私が流れ着いていた方の浜辺になるらしい。言われてみれば、微かにだが見覚えのある風景。あの時のぼやけた眼では詳細までは掴めなかったが、なるほどこうなっていたのか。

外を歩くのは治療後初めてのこと。ゴミ拾いという名目があり、しっかり艀装まで装備しているものの、普通に散歩するのも楽しいものだ。潮風が気持ちよく感じる。また暇があれば、ゴミ拾いとか関係なしに散歩をしよう。

「やっぱり何かしらあるわねー」

「みたいだな。鋼材や空葉莢まで……」

海の戦場で出たゴミが流れ着いているというのがよくわかる。使い物にならないものばかりのため、どんどんゴミ袋の中身が溜まって

いく。これは最終的にそういうものを取り扱う廃品業者に持って
いってもらうとのこと。

「すごく稀に高速修復材が流れ着いてたりするの。中身殆ど無いんだ
けどね」

「それで若葉の内臓を治してくれたのか」

「そういうこと！」

それが見つかれば御の字。もう私達には使うべき場所は無いが、今
後のためがあると助かる。

「……本当にあるんだな」

「ね。こういうの何処で落ちるのかしらね」

12. 7cm連装砲を見つけた。傷だらけではあるが、一部部品は
使うことが出来そう。

摩耶のようなドロップ艦が鎮守府に発見されることなく深海棲艦
にやられ、持っていた装備だけが流れ着いてしまったのかもしれない。
この漂流物一つにも、無念が込められているような気がしてなら
なかつた。ここから部品を使うのなら、大切に使用してもらおう。

中を確認すると、未使用の弾薬もいくつもある。こういうものは民
間の手が届くところに置いてはいけない。そういう意味でも浜
辺のゴミ拾いは必須な仕事なのだと思う。

「墜とされた艦載機……妖精さんは流石に乗っていないか」

今度は空母の使っている艦載機。操縦士である妖精さんはいない
ようなので、脱出後に艦載機だけがここに流れてきたようだ。

見た目だけならオモチャのように見えなくも無いが、これが普通に
殺傷能力があるため、当然回収。これも何かしらに使えるかもしれな
い。

「正直、驚いてる。思った以上に物がある」

「私もよくわからないけど、ここは昔からよく流れ着いてるんだって。
先生1人の時からそうだったみたいでね、私がやれるようになるまで
は、他の鎮守府の人達に応援を頼んでたそうよ」

今でこそ艦娘が3人もいるため、外から呼ぶことなく浜辺の掃除が
出来ているが、それまではさぞ大変だっただろう。今私が軽々持って

いる壊れた主砲も、飛鳥医師にしてみたら鉄の塊。易々と運べるものではない。

「あ、大物！ 若葉、まずはこれ持っていきましょ！」

雷が見つけたのは、深海棲艦の艦装。おそらく軽巡級の主機の部分。傷はあるものの壊れている様子もなく、研究材料として然るべき場所が欲しがるといふものだろう。

艦装のおかげで軽々とは行かないが持ち上げることが出来るため、一旦これを持って施設の方へと戻る。ついでにゴミ袋を替えるなりした方が良さそうだ。

「何処に置いておけばいい」

「海側から回って、工廠に置いておけばいいわ。私はゴミ袋をまとめしておくね」

「わかった」

雷の指示通りに、海に入って工廠へ。艦装を装備していたのはこういうのもあるからだろう。陸を歩くより楽に移動できる。

工廠に入り、手荷物を全て置いた後、雷と合流。これを何度か繰り返すことになるようだ。

私達側では、先程の深海棲艦の艦装が一番の大物。あとは艦娘の艦装がいくつか見つかった程度で、あとは本当にゴミだらけ。それらを全て回収して、廃棄する。

環境保全の一環としても有用なこの仕事、振り向くと成果が確認できる。私達の後ろには綺麗な浜辺が太陽の光で煌めいていた。時期が時期なら海水浴なんてことも出来そうな程だ。元々艦装やらゴミやらが散らばっていたようには見えない。

「大分綺麗になった」

「そうね！ やっぱり海は綺麗な方がいいわ！」

息を吐き、少し流れる額の汗を拭う雷。持っているゴミ袋はもうパンパン。もう何袋目かもわからない。

こういう少し艦娘からは外れた仕事も、やっていて楽しいものだ。楽しく生きると意気込んでいる私の第一歩としては、いい始まりになったのではなからうか。

私と雷は一旦施設に戻ることにした。時計などを持つていないわけではないので正確にはわからないが、日の高き的に大分長いこと浜辺の探索をしていたと思う。そろそろ昼食時。

と、ちようどこちらに飛鳥医師の組も戻ってくるどころだった。だが、少し様子がおかしい。摩耶が何か大きなものを持つているのがわかる。私達が見つけたような深海の艤装だろうか。

「無傷の部分を保存する。摩耶は工廠から回り込んでくれ」

「あいよ。……いつも思うが、好きにはなれない感覚だな」

「すまない。そういうことばかり押し付けるようで」

「いや、いい。あたし達もこういう形で生きてるって理解してる」

摩耶が持つていたのは、深海棲艦の死骸であった。半分ほど人型をしているため、おそらくイロハ級の何か。人の形をしていない部分が大きく破損しており、人の形をしている部分も傷だらけ。運んでいる摩耶の作業着は、その死骸の血に塗れて真っ赤に染まっていた。

戦場に身を置いている艦娘であり、深海棲艦を殲滅する役目を持つてはいるものの、深海棲艦の死骸を見ることは決して嬉しいものではない。その凄惨さから自然と目を逸らしてしまう。いつも天真爛漫な雷も、それを見てからは表情が消えている。

「若葉、雷、そちらの成果は」

「深海の艤装が見つかったから工廠に運んであるわ。あとは壊れた主砲とか、艦載機とか」

「そうか。ありがとう2人とも」

淡々とした業務報告。私からは何も言えず、雷に頼り切るようになってしまった。吐き気までは来なかったものの、気分は悪い。あの死骸が目には焼き付いてしまっている。

飛鳥医師はともかく、雷も摩耶も死骸を見慣れているのか、私のような反応は見せなかった。素直にすごいと感じてしまう。私はまだまだ弱い。

私が何も話せないことに気付いたか、飛鳥医師が私の方へ。空気を読んだのか、雷は摩耶を追って海側から工廠に入っていく。飛鳥医師

と2人で残されたことで、お互いに本音がぶつけられる。

「嫌なものを見せた。これから何度も見ることになると思う」

「……正直、見ていて気分のいいものじゃない」

素直な気持ち口から出た。

「だが、こうしているから海は綺麗になっっているし、何より若葉が生きている理由にもなっているんだ。これ以上は何も言わない」

私の身体にも、今のよう拾ってきた深海棲艦の死骸の一部が使われている。あの行いをしていなければ、今頃私は死んでいるか、ここまで五体満足に生活出来ていないのだ。

だから、私は飛鳥医師には何も言わない。いや、言えない。

「……さっきの子が生きていたのなら、君達と同じように、ここにあるものを使って命を繋いでいただろう」

相手が深海棲艦だったとしても、私達と同じように治療を施すと言っている。

「僕にとっては、艦娘も深海棲艦も関係ないんだ。命があるのなら必ず治療する。命を落としてしまったのなら……次の命を繋ぐために使わせてもらう」

物悲しそうな表情だったが、深くは聞かない。少しだけでも飛鳥医師の心情を伝えられて、素直に嬉しかった。何もかもがずっと謎のままで、ただ一緒に暮らすというのは、個人的にあまり好ましくない。出来ることなら心を通わせた信頼関係を築きたいものである。

「馬鹿な行為と罵るか？」

「……いや。そんなことはしない」

死骸からパーツを取るといふ死者を冒瀆するような行為も良しとしてまで、命ある者の生を繋ごうとする理由はまだわからない。だが、あくまでも中立的に、平等に、この世で手が届く範囲の命を救おうとしていることは理解できた。

それは決して生半可な覚悟では出来ないことだ。敵も味方も関係無しに治療するということは、一歩間違えれば世界への叛逆行為だ。それでもやるといふのなら、私は何も言わずにそれを応援しよう。肯定も否定もしてはいけないと思う。

「いつか、いろいろと話してほしい」

どういう信念の下にその考えに至ったのかが聞きたかったが、それに対しては無言であった。あくまでも素性は隠す方針の様子。こればかりは仕方ないと思うことにした。

浜辺の掃除は丸一日を使って行われた。その間に見つかった死骸は、昼食時近くに摩耶が運んだあの1体のみ。それ以外にはちよくちよく破損した武装などが見つかった。

飛鳥医師は途中から抜け、先程の死骸の処置に入ったため、午後からはずっと3人揃って行動をしていた。その時には私も気を取り直しており、普段と変わらぬ態度で事をこなせたと思う。

「よし、今日の作業はこれで終了だ。結構収穫あったな」

「やっぱり高速修復材は無いわよねー。あれ、ホントにレアよ」

摩耶は作業着をちゃんと着替えてきていた。血塗れのままで作業は良くない。

「若葉、初仕事どうだったよ」

「……いろいろあったから複雑な気分だ」

いろいろ、そう、いろいろあった。いいところも悪いところも見たように思え、初日からこの在り方を痛いほど感じた。

「まあ、最初は驚くよな。センセのやり方」

「でも、私達みたいに死にかけてここに来ちゃった子達が救われるんだもの、先生は凄いいことしてるのよ」

それなりに長く付き合いがある2人だから、もう割り切れているのかもしれない。

「あたしも最初は何やってんだコイツって思ったもんだぜ。でもな、アイツにはアイツの信念があるみたいなんだ。それはわかってやってくれよな」

勿論そのつもりだ。

今回の一件で、飛鳥医師の一部が垣間見えた。何よりも今ある命を尊び、立場など関係無しにどんなものでも救おうとする信念は、一体何処からやってきたのだろう。

それがわかるのは、まだまだ先のことになるのだと思う。いつか自分から話してくれる時が来ることを願って、今は共に過ごしていこう。

少なくとも、私はまだ飛鳥医師を知って日が浅い。もっと時間があれば、何かしら答えが見えてくるはずだ。

外の者

浜辺の清掃を行なって、数日の時が経った。

私、若葉はその間に飛鳥医師の仕事の手伝いをする事が多くなっていた。雷は基本的に家事を専門としており、摩耶は清掃で拾ってきた艀装の修理に勤しんでいるため、入りたてで手すきの私が助手として働くように。私はどちらかといえば戦闘がしたいのだが、この場所ですそれを望んでも仕方あるまい。機会があればその時に。

とはいえ、この施設で出来ることは限られている。この施設で使う日用品や食糧は配達で全て賄うため、そちらを整理することが基本的な仕事。所謂雑務というヤツである。艀娘のやることから離れているような気がするが、秘書艦というものであると思えば納得がいく。

「飛鳥医師、頼まれていた品の発注が終わった」

「ありがとう。助かる」

深海棲艦の死骸を回収した件以降、私と飛鳥医師との関係は何も変わっていない。こちらから何か聞くのはやめたし、あちらからは相変わらず何も説明してくれない。あの時、少しでも自分の信念を見せてくれたことが嬉しくあった。

より飛鳥医師のことを知りたいとは思っているが、無理強いをするわけにはいかない。そのため、いつの日かポロツと白状してくれるのを願いつつ、側で雑用をすることにしたのだ。

「次はすまないが、摩耶の手伝いをしてきてくれ。分解した艀装の鋼材を取りに来る部隊がいるんだ」

「そうなのか。確かに、あんなにあっても工廠を圧迫するだけだな」

ゴミ拾いで浜辺を綺麗にするのはいいのだが、そこで拾ったものは何処かに持っていけないと施設内に溜まり続けるだけ。燃えるゴミとかだけならまだしも、戦場で出た廃品が多数流れ着くため、処理すら一苦労する。

そこで、そういったものを他の鎮守府に持って行ってもらおう。あちらにとっては、遠征して鋼材を獲得するのと同じ。

私がこの施設を自由に動けるようになった後、工場にもたまに行っているが、摩耶が分解してただの鋼材に変えていたものが山積みになっていたのを覚えている。先日見つけた連装砲も、使えそうなパーツ以外はその山に積み上げられていた。

「その鎮守府というのは以前から付き合ひがあるのか？」

「ああ。雷がここに住み込むようになる前に、浜辺の清掃を手伝ってもらった鎮守府なんだ。その時はゴミをそのまま持っていつてもらっていたが、今は分解を摩耶がやってくれているから、あちらとしては手間もかからない」

医者という割には鎮守府とのコネがある辺り、相変わらず謎の経歴である。もう本当に医者なのかもわからない。

ここには頻繁に来ている遠征部隊ということで、雷も摩耶も面識があるらしい。私がこの施設にいる時に一度来ていたそうだが、その時はまだ目を覚ましておらず、医務室から出られない状況だったため、面識がない。

「君もこれを機に面識を持つておくといい。皆事情を知っているし、今後も度々顔を合わせることになるからな」

「わかった。その時にはその場に居合わせるようにしよう」

こういう形で外の鎮守府と関係を持つてるとは思っていなかった。今の私には、鎮守府というものの自体が嫌悪感の対象になりかねないが、艦娘に罪はない。出来ることなら、そういうところに友人を作っておくのも悪くないだろう。

午後、飛鳥医師の言う通り、外部の遠征部隊が施設にやってきた。こちらの鋼材を持っていくということで、輸送のための上陸艇、大発動艇を2隻運用し、そのまま工廠へと入ってくる。後ろからやってきた艦娘達も、各々がドラム缶を携えて工廠へと上がった。

「飛鳥せんせい、遠征部隊、来ましたあ〜」

「ああ、事前に連絡を貰っている。こちらとしても持つていつてくれると助かるからな」

間延びした声が聞こえてくる。初めて聞く別の艦娘の声。以前の

鎮守府の艦娘達は、私のことを無視し続けていたため、声すらも覚えていない。なので、この施設の艦娘以外の艦娘となると初めての声だ。

持っただけでもらう鋼材を運びながら、その遠征部隊を眺める。見たところ、駆逐艦娘4人。2人は黒のセーラー服だが、2人は白のセーラー服にパーカー。皆揃いの月の形をしたブローチを付けていた。おそらくは姉妹。

「雷ちゃん、摩耶さん、1ヶ月ぶりい〜」

「久しぶりね!」

「おう、よく来たなお前ら」

間延びした声の艦娘がこの部隊の旗艦リーダーなのだろうか。雷と摩耶とも仲よさそうに会話をしている。と、鋼材を運ぶ私と目が合った。途端に目を輝かせて私の方へと近付いてくる。

「新人さんだあ。あたし、文月っていうの。よろしくう〜」

遠征部隊の旗艦、文月。飛鳥医師が言うには、こちらの事情を知る艦娘。

この施設にいるのだから、私もワケ有りであることは察することが出来るだろう。だが、何の偏見もなく接してくれる。それだけで少し気が楽になった。

「若葉だ」

「若葉ちゃん、この前来た時はいなかったよね〜」

「その時は医務室で寝てた。今は回復してこの通りだ」

持っていた鋼材のうち、大物は大発動艇の方へと積み込んでいく。その間に他の3人も私に駆け寄ってきた。新人というのはやはり珍しいらしく、文月も合わせて一瞬で囲まれ、輪形陣で周囲を封じられる。逃げられない。

これだと鋼材の積み込みが出来ないのだが。仕事が出来ないので、手近なところに助けを求めろ。

「ま、摩耶、助けてくれ」

「鋼材の積み込みはあたしがやっというてやるよ。お前は初めての交流を楽しんどけ」

飛鳥医師や雷までそれを許可するように無言で首を縦に振る。雷に至っては満面の笑みでサムズアップまでしてきた。今回の遠征は、私の紹介も兼ねていたようだ。

「若葉ちゃん、紹介するね。あたし達は第二二駆逐隊だよ」

「臯月だよ。よろしくな！」

「長月だ」

「水無月だよ」

私が言えたことではないが、幼い4人の駆逐隊。白セーラーにパーカーが文月と臯月、黒セーラーが長月と水無月。

「ここで新人見るの半年振りくらいだよ。摩耶さん以来かな？」

「そんなに頻繁に増えても困るだろう。漂着した艦娘なんだからな」

「あの嵐はねえ。水無月達も遠征断念するレベルだからねえ」

そんなに前からこのこと関係があるのか。まさかこの4人が雷が来る前に浜辺の清掃を手伝っていたとかか。

嵐のことをそう言えるということは、それなりに近い位置にある鎮守府なのだろうか。まあこんな辺鄙なところにも遠征に来るくらいだし、浜辺の清掃を手伝ってくれたほどなのだから、そう遠くない場所からなのだろう。

「私達は嵐の度にここに来ることになると思う。よろしく、若葉」

「あ、ながながズルイ！ 水無月も握手する！」

長月に手を差し出され、水無月にも手を差し出される。今の私は作業着で、さらには手袋をしているため、せめて素手でと右手の手袋を外した瞬間に、奪われるように握手をされた。

握手した後には気付いた。私の手は深海棲艦の手だ。素手で触れて大丈夫だっただろうか。何か言われたりしないだろうか。そもそも普通と違う部分は無かっただろうか。

「どうした？」

「いや、何でもない」

何も言っていない辺り、私の手におかしなところは無いのと思う。少しだけ安心した。

「じゃあボクらはこっちの手で」

「だね。若葉ちゃん、こっちの手袋も取らせてね」

左手の手袋も外される。あつと声が出た時には遅かった。私の左手には駆逐棲姫の腕である証の痣がある。それが駆逐棲姫のモノとはわからないにしても、腕に痣がある艦娘などありはしない。たったこれだけでも異形として扱われかねない。

今までは全ての事情を知る施設の者しかいなかったために、痣が表に出ていようが全く気にすることはなかった。だが、今回の相手は完全なる部外者だ。摩耶の身体の傷を知っているのだから気にしないかもしれないが、気味悪がられる可能性は否めない。

「あ、こんなところに痣が」

臯月に見られた。その声に他の3人も反応し、私の左手をまじまじと見つめる。

どんな顔をされても、何を言われても、私は気にしないと心を決める。最初は成り行き上だったかもしれないが、今は私が選んだ道だ。覚悟を決めた。

「おお……なんかカツコいいな！」

「長月、こういうの好きだよね」

「菊月ちゃんと盛り上がってるもんね」

思っていた反応と違った。嫌悪感を持たれるでもなく、無関心を貫かれるわけでもなく、何を思ったかカツコいいとは。作業中の摩耶がニヤツと笑ったのが見えた。こうなることを最初から予測していたとでもいうのか。

「我々には傷など残らんからな。戦ってきた証が入渠で消えてしまうのは、惜しいと思うんだ」

「そんなこと言ってるの、ながながくらいだよ」

呆然としてしまった。あまりにも予想外過ぎて、思考が停止しかけた。

「はい、握手」

「よろしくー！」

この4人との握手で、私はさらに自分に自信が持てるようになった。こうやって言ってくれる人もいるのだ。気にしていたら、『楽し

く生きる』ことが出来ない。

「よろしく。文月、皐月、長月、水無月」

「よろしくね〜」

良き友になってくれそうだった。初めて会う部外者が、この4人で本当に良かった。私はまた一步前に踏み出せそうだ。

そこからは私も手伝って、大発動艇への鋼材の積み込み作業を進めた。嵐の後に発見した深海棲艦の艦装なども一緒に持っていったらうことになっていたらしい。このおかげで、工廠が随分とスッキリした。

この積み込みの間は、第二二駆逐隊の4人は休憩時間。雷がさりげなくお茶を出していたのが見えた。このやり取りも、初めてではなく手慣れているとわかる。

「積み込み終わったぜー」

「これで全部だ。2隻埋まらないくらいだったか」

「ドラム缶までは要らなかったな」

最後に箸にも棒にもかからないようなゴミを積み込んで作業終了。大発動艇1隻は鋼材で埋まったが、もう片方は半分程度埋まるくらい。これでも摩耶が分解して使える部分を抜いている状態だ。そのままの状態だったら、大発動艇2隻が全て埋まるくらいにはなっていたかもしれない。

実際、これの大半が先日の嵐の時に浜辺に打ち上げられていたゴミだと思うと恐ろしい。こんなに溜まるのだから、定期的に掃除しないとあの浜辺はゴミで溢れかえってしまう。

「ありがとうね〜」

「こちらもお助かる。また今度もお願いしたい」

あちらは資源が手に入り、こちらはゴミ処理が出来る、WIN-WINな関係。私と雷が見つけた、深海棲艦の艦装も持って行ってくれるようで、倉庫に貯まっていたものは綺麗さっぱり無くなった。

「それじゃあ、あたし達は帰りま〜す」

「名残惜しいけど、待ってる人がいるからね」

全ての作業が終了したため、4人が立ち上がった。短めではあるが休憩時間も終わり。雷のお茶で随分と癒されたようだ。

「もう少し若葉ちゃんとお喋りしたかったんだけどね」

「また時間があるときに頼む。そちらが忙しくないときにでも」

短時間ではあるが、今までとは違う体験が出来たのは私にも良かった。ここでの生活にストレスがあるわけではないのだが、たまに普段と違うことが出来る楽しい。

「若葉ちゃんがこっちに来てくれてもいいよ。うちのしれーかなら喜んでくれるよ」

「……それは覚悟がいるな」

私からこの施設の外に出ることは、まだ少し抵抗がある。艦娘はまだしも、人間である提督を見ることが難しい。

「次に来るのはまた嵐の後かな？」

「そうなるだろうな」

「なら、その時はもう少し時間をもらおうよ。わつきーともっとお話ししたいしね！」

わつきーとは私のことか。アダ名を付けられるのは当然初めて。不思議な感覚である。だが、愛称というだけあり、悪い気分ではない。より親密な仲になったようだ。

「みんな、戻りの時に食べてね！」

雷が4人に小さな袋を渡す。中にはお菓子が入っているらしく、4人も大喜びでそれを貰う。私達は艦娘、生体兵器とはいえ、外見通り女の子である。甘いものは好きだ。私も先日初めて食べたが、甘味はシンプルに好きになれる。

「わあ、雷ちゃんありがと」

「ずっちーのお菓子、美味しくて水無月大好き！ これのために遠征に来てるといっても過言ではないね！」

「こらこら、これは仕事だぞ」

などと言いながらも、長月の顔も少し緩んでいた。

「それでは、第二二駆逐隊、帰投しまーす」

「ああ、また頼む。それまでに鋼材を貯め込んでおこう」

「よろしくお願いしまゝす」

大発動艇が動き出し、4人が帰投。最後に文月が私の下にやってきて一言。

「ごつちに来てくれてもいいっていうのは、本当だからね。また会おうね若葉ちゃん」

私が汚れているにもかかわらず、軽くハグをされてから帰路についた。

あの4人と会えたのはいい経験になった。たまにしか会えないとはいえ、家族とは違う友人がいるというのは、生きていく活力となる。『楽しく生きる』の一環には相応しい。

「会えて良かったか？」

飛鳥医師からボソリと聞かれる。私は無言で首を縦に振った。またこういう経験をしたものだ。

心身共に

初めて施設外部の艦娘と出会った私、若葉。遠征部隊の第二二駆逐隊は、この施設のことに理解のある鎮守府出身の艦娘達であり、私達継ぎ接ぎの者を見ても何も言わなかった。それだけでも安心なのに、出会ったばかりの私相手でも友人のように付き合ってくれたし、水無月に至ってはアダ名まで付けてくれた。

鋼材を運び出す間といふかなり短い時間ではあったが、有意義な時間を過ごせた。また会いたいと思えるほどに。

「おーし、若葉、鋼材あったところ掃除しておくぞー」

「わかった」

鋼材を持っていつてもらったため、その場所は大分汚れた空間に。後からまたここに物が積まれることになるだろうが、場所が空いた時に掃除しておくのがいい。

「僕は向こうの鎮守府に連絡しておく」

「なら私がお手伝いするわね。まずコーヒーでも淹れるわ」

「ああ、頼む」

ほんの少しだけの非日常になったが、ここからはまた日常に戻る。特別なことは何も無いが、その分、たまにある特別なことが楽しく感じる。

そして、その特別なことはもう2度と来ないわけではない。確実にまたある。ならばその時を楽しみにしておこう。

その日の夜。今日は1人で寝る。私室を初めて使えるようになった日は嵐の日だったため、継ぎ接ぎの者3人で一緒に寝ることになったが、今は夜でもいい天気。風すら吹いていない。窓から見える月が綺麗だと思えるほどである。そんなときには、各自が自分の部屋で就寝するのが当然のこと。

「……今日は楽しかったな」

今日はいいい日だった。第二二駆逐隊と出会えたことが、いい意味で心に残っている。最後の文月のハグの温もりは今でも思い返すこと

が出来た。

「……また会いたいな」

ボソリと呟く。無意識に、心から出た言葉だ。

初めて出会った外部の艦娘。あの4人となら共に戦いたいと素直に思えた。遠征でもいい。戦場でもいい。仲間として、共に海を駆けることが出来たら、どれほど心強いだろう。継ぎ接ぎの仲間達とはまた違った信頼関係が持てそうだった。

特に文月は、あんな柔らかかそうな雰囲気なのに、実力者なのもわかった。握手したとき、手のひらの感覚が他の3人と違った。皆努力をしている雰囲気だったが、文月は特に別格だった。だから駆逐隊の中で旗艦を務めているのだと思う。

「戦場にも出て、遠征もして……努力家なんだな」

私よりも長く生きている分、いろいろなことがあったのだと思う。それを苦とも思っておらず、常に朗らかに笑っていた。まるで私が目指す道、『楽しく生きる』を実現出来ているようだった。私の理想にほぼ辿り着いているのが、あの文月だ。

ああ生きるためには努力が必要不可欠であることを実感した。今日までは飛鳥医師の指示通りの雑務をこなし、暇な時は何もせずポーツとしていたが、もつと前に進みたくなった。今までの私は、まだ世界に慣れていなかったが、もう違う。蛹でいる時間はもう終わりで。

「……よし」

艦娘としてはまだまだ半人前にも届いていないだろう。ゆっくりでもいい。確実に、文月に追いつけるように、成長していきたい。

私は1人決意した。誰にも言うタイミングも無いまま、ある意味独断で進めていく。『楽しく生きる』ために、自分のことは自分で決めていくのだ。

翌朝、意気込み過ぎたか、いつもよりも早く目が覚めた。外は少しだけ薄暗く、まだ日が昇っていないくらい時間。昨晚と同じでいい天気。努力を始めるにはいい朝だ。

目覚まし時計を止めて準備。寝間着の浴衣を脱ぎ、相変わらずサイズピッタリな運動着に着替える。元々こういうものが用意されている時点で、こういうことをやるべきと考えるべきだった。

衣食住は提供すると最初に言っていたが、ここまでとは。診察されているのだから私の身体のサイズは筒抜けだし、おそらく私の体格は雷とほぼほぼ同じだ。調達もしやすいのだと思う。

「……行くか」

まだ誰も起きていないであろう静かな施設から出て、外でストレッチ後、浜辺のランニングを始める。何は無くとも持久力からだ。スタミナが無ければ何も出来ない。戦闘も、遠征も、ここでの雑務だってそうだ。疲れるタイミングを遅れさせるだけでも大分変わる。

「ふっ……ふっ……」

走っているうちに朝日が昇ってくる。ここで日の出を見るのは初めてだ。私の門出を祝ってくれているかのよう。

砂浜を走るといっただけでも相当に負荷がかかる。ストレッチは入念に頻繁に行い、余計な怪我を事前に防止。こういうところは飛鳥医師が口を酸っぱくするほど言ってくるのでありがたい。肉体労働の前には摩耶も必ずやっているくらいだ。

ずっと走っていても、腕や脚に痛みはない。ようやく微かな痛みすらも消え去った。傷痕は一生残るものの、腕も、骨も、皮膚も、完全に私のものとなっている。元は深海の腕であっても、今は私の腕だ。

ここまで来るのに大分時間がかかった。だが、これで本当の五体満足である。そういう意味でも、今日は努力を始めるには都合のいい日だったかもしれない。

「っふ……く……まだまだだな……」

ゆっくりと流すくらいのもりで走っていたが、少し走っただけで息が上がってしまった。思った以上に砂浜の負荷が大きい。呼吸を整えるのも一苦労。汗も大分かいてしまっている。

割と走ったように思っても、清掃のときに雷と向かった最後の地点まで行けていない。歩くのと走るのとは全然違うし、あの時は臙装も装備していた。生身では見た目通りというわけだ。

今はここまでにしておいて、ここまで来ることが楽に出来るようになったら、より先へと走ることにした。こうしていけば、最終的には走り続けても余裕が出来るようななるはずだ。少しずつ、少しずつ鍛えていこう。

「キツイな……だが……悪くない」

自分が少しずつだけでも成長していくのが実感出来る疲れ。それを癒すためにその場でまたストレッチ。疲れが溜まった場所が解れていく。背中に至ってはバキバキ言っている。それが堪らなく気持ちいい。

それだけ身体を伸ばしても、もう胴と一体化した重巡り級の皮膚は最初から私の皮膚だったかのように伸縮する。肌の色素はやはり薄いままだが、最初からこれだったと錯覚出来てしまうほどじっくり来っていた。

「さあ、戻りだ」

ここまで自分の足で来たのだから、帰りもある。ストレッチをして休憩もしたのだから、ここからはまたランニングだ。もう朝日はしっかりと昇り、私を照らしてきている。皆も起き始めた頃か。

施設に戻ると、飛鳥医師が私を待ちかまえているかのようの外に立っていた。誰にも話をせず、許可を得ずに外に行ったことを咎められるかもしれない。せめて今日話して明日からにしておけばよかったか。いや、思い立ったが吉日という言葉もある。やりたいと思ったときにやらなくては。

「おはよう若葉。トレーニングか？」

「おはよう。ああ、昨日の夜にいろいろと思うところがあつて」

昨晚巡らせた思いを飛鳥医師に伝える。飛鳥医師が勧めてくれた第二二駆逐隊との交流で、私の決意したこと。文月に追いつくために、少しずつでも鍛えていきたいと。

飛鳥医師は、私の話に対して否定的な態度は一切出していなかった。相槌を打つくらいで、話を遮られることもない。まるで保護者なような眼で私を見てくる。実際保護者だが。

「そうか。やはり、彼女達に会ってもらったことは、君にはいい刺激になつたみたいだな」

「ああ、あの4人に会えて本当に良かった」

本心から言えることである。何度でも言える。第二二駆逐隊に会えて本当に良かった。あの出会いが今後の私の生き方を決めてくれたと言つても過言では無い。

「朝のトレーニングはいいことだと思う。健康にも繋がるからな。だが、過剰なのはダメだ。医者としてはどんなトレーニングをしたかを聞いておきたい」

「自分の身体のこととは考えている。無理はしていないつもりだ」

今度は先程までやっていたランニングとストレッチのことを話すことになつた。ということは、これから毎朝同じことをするつもりでいたが、これに関しては許可が貰えたと思つて問題はないということだろう。

出鼻を挫かれるようなことがなくてよかつた。これで却下されたら、私の今の気持ちを何処にぶつけなければいいのかわからず、不完全燃焼で悶々として生活を送ることになるだろう。それはそれで相談したら何かしらの案を出してもらえそうだが。

「ふむ、それなら問題は無いだろう。若葉自身が自分の今の限界を知っているはずだ。限界を超えて動いて倒れても、僕は面倒が見切れない」

「飛鳥医師の手を煩わせるつもりはない」

とはいえ、自分の身体を鍛えて痛めつけるのは楽しいと思つてしまふ。倒れたら意味がないのはわかつているものの、こういうトレーニングはずつとやっていきたい。むしろ早く成長するために倒れるまでやりたい。飛鳥医師は決して許してはくれないが。

「その調子だと、術後の身体の痛みももう無いみたいだな」

「ああ、腕も脚ももう大丈夫。これで24時間働ける」

「それはやめてくれ。過労で何かおかしなことが起きても困る」

私としては本気だったが、冗談として取られたか、飛鳥医師が薄く微笑んだのがわかつた。そういうえば、飛鳥医師はあまり表情を変えな

い。こういう小さな変化はあるものの、大笑いするようなことはまず無かった。そういうものも、今後見ることが出来るのだろうか。

「余裕があるときはやっていこうと思う」

「倒れなければ何をしてくれても構わない。僕も応援しよう」

そう言ってもらえるとありがたい。

と、ここで少しだけ疑問に思っていたことを聞こうと思う。自分のことを極端に語らない飛鳥医師が話してくれるかはわからないが、聞いてみないことには始まらない。ノーコメントと言われてしまえば、それ以上は追求しないつもりだ。

「……飛鳥医師、1つ聞かせてもらえないか」

「モノによるが、何だ？」

「文月達がいる鎮守府とはどういう関係があるんだ？」

一瞬固まる。一医者が鎮守府とコネがあるというのはやはり違和感を覚える。ただの医者ではないことはもう充分にわかっていることではあるが。

これは話したくない過去の経歴に繋がる部分だったか。が、今回は無言を貫くわけではなく、少し話してくれた。

「あっちの提督と、古い友人なんだ。来栖クルスっていうガタイのいいヤツでな。幼馴染ってヤツか」

気心が知れる相手だからこそ、今の飛鳥医師ともいい関係で居られるわけだ。昔から何も変わっていないかもしれない。

「あの子達を見ればわかっただろう。来栖はいい奴なんだ。この深海棲艦との戦いでも、死者は出したくないと躍起になっている。僕ほど極端ではないが、信念は僕と同じところにある。だから、僕のやり方にも文句は言ってこないし、こういうったことで手伝ってくれるんだ。法の隙間についている感じは否めないが」

飛鳥医師は、助けを求められれば深海棲艦だつて救うと言つてのけるほどだ。そこと同じところにあるということは、その来栖提督も慈悲深い性格なのかもしれない。

とはいえ、深海棲艦をそのままにしていたら侵略されてしまう。その来栖提督は、歯を食いしばって深海棲艦を殲滅しているのだと飛鳥

医師は語る。

「アイツは、僕の知る限りでは真の英雄だよ。良くも悪くも」

そこまで言われる来栖提督に、私も興味が出てきた。

「君には来栖にも会ってもらいたいのだな。いい影響が出そうだ」

「機会があれば頼む」

「割とすぐにその機会は来そうだけだな」

提督という立場の者にいい印象が無いのは、ここ数日で飛鳥医師にも話している。摩耶に話したことをそのまま話ただけなのだが、いろいろ察してくれた。それでも来栖提督の存在を話してくれたくらいなのだから、私の持つ提督という存在へのイメージを払拭出来るほどの人物なのだと思う。

会えるものなら会ってみたいものだ。その時にはまた第二二駆逐隊と会えるかもしれないし。

「少し話が長くなったな。若葉、汗が冷える前に一度シャワーを浴びてくるんだ。その間に雷が朝食を作ってくれるだろう」

「わかった」

また少しだけ飛鳥医師の心のうちが聞けたような気がする。おそらく今までと同じなのだが、今の飛鳥医師は表情が柔らかいように見えた。

私は自分の生き方を見つけることが出来た。ゆっくりとだが確実に、『楽しく生きる』ことに繋がっていると思う。身体を鍛え、明るく生活する。心身共に強くなれば、楽しく生きることも出来るだろう。

悔いなきように

第二二駆逐隊と出会ったことで、自分の生き方が定まった私、若葉。飛鳥医師の雑務をこなしつつ定期的に身体を鍛えることで、心身共に強くなり、『楽しく生きる』を実現していると思う。だからと言って無茶をすると飛鳥医師にこつ酷く叱られることになるだろうから程々に。

それからというものの、朝は早く起きてランニング、日中は飛鳥医師や雷と雑務をこなすか摩耶と一緒に艀装整備、そして夜は早めに就寝という、とても健康的なサイクルが確立された。早寝早起きは健康の基本。艦娘という身体でもそれは変わらない。おかげで私はとても健康的に日々を過ごすことが出来ている。

普通の艦娘がやるべきことは何一つやっていないような気がするが、それでもいい。本当に最悪なことを知っているからこそ、こんな平々凡々な1日が一番楽しいと実感する。他の鎮守府の艦娘からはどう見られるのだろう。艦娘なのにと嫌味を言われるか、逆に羨ましがられるか。

どちらにしろ、私はこれを変えることはない。せつかく艦娘として生まれたのだから、戦場に出てみたいという気持ちはまだ残っているが。

そんな日々が続いて、4日ほど経過したある日。

今日はいにくの雨模様。こういう時でも朝のランニングは行なっている。日課としていることを1日でもやめると翌日の調子が狂いそうだったからだ。ただし、運動量は少しだけ抑えめに。

雨合羽を着れば耐えられるほどのシトシト降る雨の中、私はいつも通り走る。雨の日の浜辺はそれはそれで違った景色になって楽しい。波が少し高いようだが、嵐の時とは比べ物にならない。

「ふっ……ふっ……」

速度も呼吸も一定のペースで。雨のせいでいつもより身体が重く感じるが、その負荷も心地いい。たった4日で劇的に変わるとい

とは無いが、少しずつ鍛えられているのは実感できる。

とはいえ、海水だけならず雨水も吸った砂浜は、思った以上に負荷が高い。いつも折り返す場所に到着する前にバテてしまいそうだった。

「雨の日は、なかなか、キツイな……だが……悪く、ない」

呼吸を整えながら、折り返そうと思った矢先、視界の端に何かがチラついた。

今のところ毎日この浜辺を走っているため、何か違うものがそこにあるのならすぐに気付ける。これはそのパターン。昨日まで無かったものだ。

雨で波も高いため、何か流れ着いてきてもおかしくはない。嵐の後ほどではないにしろ、

「……大きなゴミか？」

今は艀装を装備していないため、大物があつたとしても運ぶことは出来ない。だが、何があるかくらいは見ておいた方がいいだろう。以前の嵐の日みたいに、深海棲艦の死骸だったりしたら大惨事だ。すぐにでも運ばなくてはいけない。そうじゃなければゆつくり戻って後から運んでも問題ないだろう。

呼吸が整ったため、それへゆつくりと近づく。遠目に見て白い塊。その近くには黒い塊もある。抱き合っているように置かれているそれは、深海艀装か何かか。

「……んん？」

近付くと、それが生物であることがわかった。白いのも黒いのも似たようなものか。

「……は？」

確認できるところまで近付いて、ようやくそれが何かがわかった。

どちらの塊も、深海棲艦そのものだった。

完全に人型をした深海棲艦が2人。白い方と黒い方はどちらも似たような姿をしていた。深海棲艦にそういった関係のものがあることは知らないが、少なくともこの2人は姉妹に見える。

抱き合って倒れているが、お互いに腹に大怪我を負っている。おそ

らく砲撃を受けたことによるダメージ。だが、まだ息はある。まだ生きています。

「ど、どうする。どうする……」

深海棲艦は私達艦娘の殲滅対象だ。このままにしておけば間違いなく死ぬ。本来ならそうするべきだ。無駄な力を使わず、放置するだけで撃破完了となる。だが、飛鳥医師なら間違いなく救う。怪我人ならば種族関係無しに治療すると言っていた。

この状況が目の前にあると、どうしても迷いが出る。私が取るべき行動は何なのか。何が正解か。

「……悔いの残らない方を選ぶ!」

時間は無かったが、私なりに考えた結果。

今ここで見殺しにしたら、いくら相手が深海棲艦だったとしても後悔しそうだった。特に、目の前の深海棲艦2人は私と同じくらいの外見、つまり子供である。

腹を決め、2人を何とか担ぎ上げる。いくら最近トレーニングをしているとはいえ、艦装もなしに2人を運ぶのは厳しい。しかし、戻ってからまた運びに来るよりは早く施設に運べる自信はある。いろいろ自分を犠牲にすることになりそうだが、背に腹は代えられない。

「意識はあるか……!」

怪我をしている深海棲艦に問う。意識があるのなら、ほんの少しだけでいいから体重のかけ方で協力してほしいし、助けてほしいかどうかの意思を聞きたい。意識がなければ強制的に助ける。飛鳥医師のやり方を模倣するしか、今の私には無かった。

「イタイ……イタイ……」

「タスケテ……」

小さな小さな声。雨音で掻き消えそうなほどのか細い呟きだったが、担ぎ上げたことで耳元で聞こえた。助けを求めていた。それならば、助けないわけにはいかない。それが飛鳥医師のやり方だ。

「もう少し我慢しろ! 若葉が必ずお前達を助けてやるから!」

雨合羽が血塗れになっていくが、そんなこと気にもならなかった。なるべく揺らさないように、だが大急ぎで施設に戻る。今の私は、今

までで一番の力が出ていると思う。火事場の馬鹿力というヤツか。

私の身長のせいで足を引きずることになってしまったが、どうにか施設に到着した。ゼエゼエ言いながらも扉を叩き、起きているであろう誰かに気付いてもらおう。それが運良く飛鳥医師だった。

「っ!? 若葉、その2人は!?!」

「ランニング中に、見つけた……重傷を、負って、いる」

「すぐに手術を開始する! よく運んできてくれた!」

聞いたことが無いような飛鳥医師の大きな声。すぐに摩耶を呼び、2人で処置室に運んでいった。2人分の体重を支え続けていたため、それが取り除かれた瞬間に、脚から力が抜ける。立ち上がれないほどに疲労困憊。呼吸することが苦しく感じる。

「若葉! 大丈夫!?!」

「雷……ちよつと、動けそうに、ない……」

「すごいわ! 頑張ったのね!」

雷が血塗れの雨合羽を脱がしてくれた。今は冗談じゃなく全力で頼る。

「お風呂入れる? 身体が冷えちゃってるわ」

「もう、少し、疲れが取れたら、入る……」

まだ呼吸すら整わない。脚も震え、立ち上がることはおろか、今の状態から体勢を変えることすらままならない。本当に疲れ切っている。そのまま眠ってしまったくらいだった。

2人の深海棲艦の処置をしたことで、なんだかんだ朝食を食べそびれることになった。施設内はずつと慌ただしく、摩耶は私が2人を拾った地点の探索へ向かい、雷は疲れ切った私を面倒見てくれた。おかげで昼食時には私も回復し、歩けるくらいにはなっていた。それでもまだまだ疲れはあるため、今日はなるべく重労働は避けるようにする。

私の中では本来敵である深海棲艦を助けたということがわだかまりになっていた。ここまでやっておいて何だが、本当に助けてよかつたのか。それだけが頭の中で渦巻いていた。

手術を終え、処置室から飛鳥医師が出てくる。

「若葉、よくやってくれた。もう少し時間が経っていたら、取り返しのつかない状態になっていた」

飛鳥医師からは健闘を称えられるが、複雑な気分。今助けた2人の深海棲艦が、完治した途端に私達に襲いかかる可能性だって充分にあり得る。見た感じ、艦装は装備していなかったが、深海棲艦はどういう扱いかがわからない。

「あの2人が襲ってきたらどうすればいい」

「それはその時考えればいい。少なくとも助けを求めたんだろう。なら助けるに値する。若葉だってそう思ったんだからここまで運んでくれたんじゃないのか？」

「放置したら悔いが残りそうだったから運んだだけだ」

私はただ、このまま見殺しにするのはよくないと思っただけだ。だが、運んだことを後悔する可能性だって無いとは言えない。これである2人に襲われて誰かが傷付こうものなら、私は一生悔いを残すことになるだろう。

「充分だ。君はこの選択を必ず誇りに思う」

頭をポンポンと撫でられ、処置室から医務室に2人の深海棲艦を移動させた。ギリギリまで抱き合っていたみたいだが、今はさすがにベッド2つ。それなりに広い医務室で、横並びに並べられた。

改めて見ても、2人は同じ顔立ちをしていた。色が正反対なだけ。まったく同じ個体で色が違うだけなのか、姉妹として生まれた深海棲艦なのか。

「損傷は主に腹部。雷程では無かったが、2人揃って脇腹を抉られていた。おそらくは艦娘、重巡洋艦の主砲。艦娘と交戦中に腹部へ怪我を負ったと考えるのが妥当だな」

怪我の具合から、深海棲艦の状況を推理。

何かギツカケになり、艦娘と交戦していた2人の深海棲艦は、戦闘の末に重巡主砲で腹を抉るように撃ち抜かれたわけだ。雨のせいで流れが少し急になっていたため、浜辺に漂着したと考えられる。嵐でも何でもないときに漂着出来たのは、運がいいのか悪いのか。

「僕が治療している時も、うわごとで助けてほしいと訴えてきた。もしかしたらだが、艦娘と戦ったことが不本意だったのかもしれない」侵略者が、不本意に戦うとはどういうことだろう。まさか、今までの知識と逆なのでは。静かに暮らしていた深海棲艦に、艦娘達が攻め込んだのではないか。

そうだとしたら、本当の悪は艦娘なのか。いや、だが実際侵略者であることも間違いではない。ドロップ艦の摩耶が襲われている事実がある。

深海棲艦とは何なのだ。まったくわからない。

「内臓の損傷は雷と同じ方式で治療。接合面は自然治癒となってしまうが、深海棲艦の自己再生能力には驚いた。別の内臓を接続したところですぐに修復が始まったんだ。破損した自分の内臓は修復出来なかったところを鑑みると、健康的なものを自分のものとして取り込めるみたいだ」

艦娘と深海棲艦の身体の接続とは違い、深海棲艦同士の接続だったため、馴染むのが早かったようだ。

「抉られた肉は保管してあった軽巡ツ級の腹部があっただおかげでどうにかになった。左右対称だったことも功を奏している。筋繊維の修復も即座に始まった」

「……後遺症が残るようなことは」

「おそろくない。これが深海棲艦の恐ろしさかもしれないな」

やり遂げたという顔を見せる飛鳥医師。長くここで生活し、雷や摩耶に治療を施し、深海棲艦の死骸を分解保存していたが、実際に深海棲艦に治療を施したのはこれが初めてだそうだ。しかもよりによって今回は完全な人型、所謂『姫級』と呼ばれる最上位個体である。

人型だからこそ治療が出来たかもしれない。身体の構造は私達艦娘とまったく同じだったとか。艦娘が人間と同じ構造をしているのだから、姫級の深海棲艦はもう人間と言ってもいいだろう。

「目を覚ますまで時間はかかるだろう。それまではここで寝かせておく。その後のことは今考えても始まらない」

手術を終えたため、風呂に洗浄に向かう飛鳥医師。私は医務室から出

て行くことが出来なかった。

こうして見ていると深海棲艦には見えない。安らかに眠る2人の子供である。それでも、私なんかでは手も足も出ないほどの力を持つ姫。

「おうおう、悩んでるな若葉」

飛鳥医師と入れ違いになる形で摩耶が入ってくる。浜辺の探索が終わったらしい。

「こいつらの艤装っぽいものは1つも見つからなかった。本体だけが流れ着いたんだろう。だから、こいつらは非武装だ。襲いかかってくるとしても迎撃出来る」

それは安心出来ることだろうか。敵意があるというだけでも不安になる。

「今は考えるなってことだ。こいつらが起きてみないとわかんねえよ。なんなら、ここに来るときは艤装を装備して入った方がいいかな」

ケラケラ笑う摩耶。私のような不安が一切無いように見える。私の考えすぎなのだろうか。いや、そんなことは無い。侵略者を目の前にして不安にならない者などいない。

「あんま悩みすぎるなよ。禿げるぞ」

「禿げてたまるか」

一旦医務室から出ることにした。ここでただ見ているだけで変わるなどない。目を覚ますのはこの2人次第だ。

私は悔いが残らない選択をしたつもりだ。飛鳥医師も、この選択を誇りに思うと言ってくれている。少しだけは取り除かれたが、それでもまだ、私は少しの間、強い不安に苛まれることになる。

それを取り除いてくれるのは、今は眠るこの2人。

白黒の双子

早朝のランニングで2人の怪我をした深海棲艦を拾った私、若葉。相当な大怪我であったが、飛鳥医師の治療により一命を取り留め、今は医務室で眠っている。

今の私は、その2人を助けたことが本当に正しかったかどうかで悩んでいる。悔いの残らない道を選んだつもりだが、これがキツカケで誰かが傷付こうものなら、私は耐えられない。

「雷、すまない」

「いいのいいの！ 頼ってくれたのは嬉しいわ！」

不安に押し潰されそうになり、夜も寝ることが出来なそうだったため、雷と一緒に寝てもらおうことにした。人肌恋しいというわけでもないのだが、近くにいてももらえれば安心出来る。

「明日も朝早くに起きるんでしょ？ じゃあもう寝ましょ。私も眠いわ」

「ああ、そうしよう」

こんなことにはなっているが、日課のランニングを休むつもりはない。むしろ、より懸命に打ち込むことで、不安を取り除きたいと思った。走っている間だけは無心になれる。いつも以上に身体を酷使してしまいそうだ。

「大丈夫よ、大丈夫。きつといい方向に行くわ」

「……そうあつてくれると嬉しい」

私はきつと、誰でもいいからこの言葉を言ってもらいたかったんだと思う。根拠が無くても、大丈夫と、たった一言言ってもらえれば、私の不安は少しくらい消える。

飛鳥医師も摩耶も大人だから、そういった部分は少し濁す。だが雷は違う。記憶を失っているのも含めて、少し子供っぽいため、ズケズケと本心を言ってくれる。その雷に大丈夫と言ってもらえたのは救いだっただけだ。

「若葉が選んだことだもの。大丈夫」

「……ああ」

この時ばかりは、雷が姉のように思えた。

翌朝。雷が隣で眠っている中で目を覚ます。日課にしたことで、目覚ましが無くともこの時間には起きることが出来た。雨は止み、うつすら明るくなつた外。今日は何事も無いことを祈りながら、雷を起こさないようにベッドから抜け出た。

「……大丈夫。きつといい方向に行く」

自分に言い聞かせるように、雷の言葉を反芻する。自分で選択したことだ。後悔なんてしちゃいけない。助けを求めているものを救い、それが無事助かった。それでいいじゃないか。

あまり気持ちを沈めすぎると、上手く行くことも行かなくなる。今は目を覚ますのを待つことにしよう。

ランニングに行く前に、チラツと医務室を覗く。まだ飛鳥医師も目を覚ましていない早朝。部屋は少しだけ薄暗い。2人の深海棲艦に繋がれた機械が小さく音を立てているのみ。あの機械、私にも繋がれていたものだ。

なるべく静かに2人に近付く。今は安定しているのか、小さな寝息が聞こえた。私の時もこうだったのだろうか。

「……」

無言でその場から立ち去った。これ以上いても無意味だし、変に騒ぎ立てて無理矢理起こすのも可哀想。普段通りに過ごし、来たるべき時に備えることが私の今やるべきことだ。

「ン……」

心臓が飛び出るかと思った。

ただの寝言か、はたまた本当に目を覚ましたのか、私が部屋を出ようとした瞬間に、深海棲艦の片方、黒い方が息を漏らした。どちらにせよ、ほとんど人間や艦娘と同じ仕草であることは言うまでも無い。

思わず振り向く。と、そこには身体を起こした黒い方。ぼんやりした瞳でこちらを見ていた。身体に付けられた機械に関しては気にしていないようだった。

「……」

「……」

無言で見つめ合うこと数秒。

「アネキ、アネキ、ワタシたち、タスカツタミタイダヨ」

「……ンン……ナニ……イモウトチャン……」

私を無視して隣の白い方に声をかけた。黒い方に声をかけられ、白い方も起き上がってしまった。2人とも腹を抉られて、飛鳥医師が内臓の移植をしていたというのに、たった1日で痛みすら感じていないように思える。

身体を起こした後、徐ろに傷のある腹を押さえていた。撫で直し、時にはペチペチと叩き、抉られたはずの肉がしっかりとあることを確認している。

「スゴイスゴイ、オナカモトニモドツテル」

「……ソウ……ダネ」

やかましい黒い方が妹で、静かな白い方が姉。やはり姉妹のようだった。深海棲艦にも姉妹とかそういう関係性があるとは思わなかった。本当に人間や艦娘のような存在。

キヨロキヨロと周りを見回した後、身体中に付けられた機械を筆取り取ってしまった。身体が完治していたとしても、飛鳥医師の許可なくそれをやるのはよろしくない。

「おいおいおい、流石にそれはまずい」

「ジャマダツタンダモーン」

「……ウン……ジャマ」

一応私のことは認識してくれていたらしい。とはいえあまりに気まますぎる。やかましい方だけならともかく、静かな方まで同じ感覚とは。

機械が無くなったことでベッドから降りる2人。直立しても私も同じくらいの背格好。施術後であったため、今は以前私が着せられていた検査着の状態。

2人とも、私の姿をしつかりと見据えた後、黒い方がニンマリと笑って近寄ってきた。白い方も薄いながらも笑顔を携えて近付いてくる。

「タスケテクレタノ、キミデシヨ」

「オボエテル……タシカ……ワカバ」

「ソウ、ワカバ！　ワカバ、アリガトネ」

2人にハグされた。

正直、近付かれたときに一步も動けなかった。深海棲艦に対する恐怖心で、身体が竦んでいた。目の前の2人がいくら全く違う姿だとしても、私を死の寸前にまで追い込んだ深海棲艦の仲間であることは間違いないのだ。私の中では完全にトラウマになっている。

それが、友好的にこの態度。訳がわからない。いい方向には向かったように思えるが、何が起きているのか。

「ソレジャ、ソウイウコトデ」

「イモウトチャン……ギソウ……ドコ……？」

「……ナイジャンー！」

私のことなど気に留めずにここから去ろうとしたようだが、少なくとも今ここにこの2人の艤装は無い。私達は艤装が無ければ海上に立つことすら出来ないが、深海棲艦も同じな様子。

「ワカバ、ワタシタチノギソウ、シラナイ？」

「……お前達しか見てない。他に何も無かった」

「ジャア、カエレナイジャン！　ドウスンノアネキ!？」

大混乱の黒い方。それに対して白い方は茫然自失。正反対な事態の受け止め方。

「どうした、騒がしいが……」

さすがにこれだけ騒げば飛鳥医師が起きてくる。寝起きの飛鳥医師を見るのは初めてだが、少し寝ぼけ眼だった。

医務室の状況を見て一転、眠気が吹き飛んだかのように2人に接近し、首根っこを掴んだかと思ったら、ベッドまで引きずって寝かせる。

「患者が勝手に動き回るんじゃない！　傷口が開くかもしれないだろうが！」

「イヤ、モウイタクナイシ」

「そうだとしても、医者言うことは聞け！　君達が深海棲艦だろうが何だろが関係ない！　僕が許可を出すまでそこから動くな！」

すぐに診察してやるから大人しくしている！」

あまりの勢いに2人の深海棲艦も黙ってしまった。目が覚めたところにあの剣幕で言われたら嫌でも萎縮してしまう。それは種族なんて関係なかった。

「わかったら返事は！」

「ウ、ウツス」

「……ハイ」

ついには完全に飛鳥医師に屈してしまった。艦装があつたらまた違ったかもしれないが、今は抵抗する術がない。素直に従うしかない。2人とも察したらしい。2人で見合った後、小さく溜息を吐いていた。

そこからは少しバタバタする。私も朝のランニングが頓挫し、2人の深海棲艦の診察の手伝いをする事になってしまった。まだ雷も摩耶も起きてきていないし、飛鳥医師の剣幕に気圧されてしまい苦手意識を持つてしまったか、診察中に私が側にいることを望んだためである。

私が発見し、ここまで運んだという記憶は、2人共にすっかり刻まれているらしく、少なくとも私には一時の友人感覚くらいは持っているようだった。事が済んだらお別れ出来る程度の仲ではあるが。

「本当に傷が治っている……傷痕は残っているが、たった1日でここまで修復されるものか……？」

「若葉達と違って、深海同士だからでは？」

「かもしれないな」

艦娘の治療はしてきたが、深海棲艦の治療などしたことがないという。むしろ治療したことがあるというなら逆に怖い。今のところ、嵐の後の浜辺には深海棲艦の死骸しか流れってきていないらしく、生きた深海棲艦が流れ着いたのは本当に初めてだそうだ。

触診までしてほぼほぼ完治したことを確認した。私にもその傷が、私の身体の傷のように行動に問題が無いほどにまで回復しているように見える。触られても痛みが無いようだ。

「モウイイデショ。カエリタインダヨ」

「艀装も無しにどう帰るつもりだ」

「……ムリ」

白い方が俯く。帰る手段が無くなっているため、ここから動くことが出来ずに落ち込んでしまった。私の腕を握る手も少し震えている。深海棲艦にもそんな感情があるのか。

逆に黒い方は何とか帰ることが出来ないかと頭を捻っているが、全く案が浮かばないらしい。八方塞がり。

「何か思い浮かぶまでは、ここに住むか？」

「ソレデオネガイシマース！」

黒い方が食い気味に來た。人間や艦娘がいてこの施設に住み込むことに何の躊躇もない。逆に白い方は抵抗がある様子。

「……ダイジョウブ……？ マタオソワレナイ……？」

「ダイジョウブデショ。ワタシタチヲオシテクレタンダシ」

そういうところから信用してもらえらるなら良かった。少し考える仕草をした後、妹がいいなら姉も了承。別々に行動するという考えは最初から無いらしく、必ず2人1組。どちらかの意見に寄せるよ
うだ。

「一応聞きたいんだが、君達は何と呼べばいい。名前はるか？」

「ナマエ？ ワタシタチニソンナノナイヨ」

「……ソツチガカツテニヨンデルダケ……ダカラ」

イロハ級だとか姫級だとかは、人間が勝手に決めたルールである。深海に棲む艦だから深海棲艦と名付けたのも人間。私の腕に使われている駆逐棲姫は駆逐艦の姫だからそう名付けられ、イロハ級に至っては発見された順にイロハを振っていっただけ。本人達としては、名前を持つていないわけではないようだ。

飛鳥医師が詳細は後から調べておくから今の名目上の呼称が欲しいと言う。カルテを残しておくにしても、名前が無いのは後々大変だ。それに、私達もこの2人をどう呼べばいいか。

「タシカ……シンカイフタゴセイキ……ツテ、イッテタ」

「アー、ソンナコトイッテタネ。アレ、ワタシタチノコトダツタンダ」

深海双子棲姫。それが人間側が決めたこの2人の名前らしい。

後々わかることだが、この2人、本当に2人1組の深海棲艦らしく、
艦装も2人で1つを使う、おそろしくレアな個体だそう。今までの
言動と、色だけ違う似た外見から、『双子』と銘打たれたのだろう。

だが、その名前もカルテには書けない。飛鳥医師はあくまでも1人
1人の固有名称が欲しいと言っている。2人1組だろうが、同一個体
だろうが、患者としては2人いる。カルテは2枚なのだから、名前も
2つ必要だ。

「ナンデモイイヨ。ソツチデカツテニキメレバ」

「なら暫定で黒と白だ」

「単純すぎやしないか。ペットじゃあるまいし」

「イロハの順で番号振るよりはマシだろ」

「似たようなものだと思う」

ネーミングセンスは無いようだが、当の本人達は気に入ったよう
だ。

「アネキ、ワタシ、クロダツテ！」

「シロ……シロ……？」

ケラケラ笑う妹と、静かに名を噛み締めている姉。今までどうい
う生活を送ってきたかは知らないが、文化の違いか、こんなことでも楽
しそうに見える。そもそも深海棲艦に娯楽なんてあるのだろうか。
ただの侵略者だと思っていたために、些細なことでも興味が尽きな
い。

「少なくとも今日くらいは安静にしてもらおうぞ。今動き出して傷が開
いて酷いことになったと言われても困る。ずっと寝てるとは言わな
いが、この部屋から出るな」

「エー、モウイタクナイヨ」

「じつとしてろ。いいな？」

「ウツス」

ひと睨みでクロが言うことを聞くまでに。随分と深く苦手意識が
刷り込まれたようだ。

「大丈夫か？ 食費とか」

「その辺りは心配しなくていい。4人で生活していても赤字になっていない。2人増えたところでまだ余裕はある」

先日の深海艦装の件でまた臨時収入があったらしく、安定した収入の方でも私達を養っていくのに余裕なほどはあるらしい。突然貧乏生活というのも無いとのこと。まだ1人2人なら受け入れられるのだとか。本当に謎が多い。

「シロ、クロ、今日から少しの間、君達は僕の仲間だ。よろしく」

「カゾク……カゾク！ イイネ、イイネ！」

「ヨロシク……」

ひよんなことから、深海双子棲姫、シロとクロが施設の一員として仲間に加わることになった。手段を探して本来の居場所に帰るまでの一時的な仲間ではあるが、果たしてそんな時が来るのかどうか。

特異な者

重傷を負った深海棲艦、深海双子棲姫が目を覚ました。姉はシロ、妹はクロと名付けられ、一時的に施設に身を寄せることになる。失われた艦装が見つかる、もしくは代替品が手に入れば、施設から離れ、元いた場所に帰るとのこと。

深海棲艦は帰巢本能が強いのか、目が覚めた時から帰る帰ると言っていた。そもそも何処に棲んでいたかは知らないが、本能がそうさせるのなら、抑圧する理由もない。

飛鳥医師曰く、この施設は『来る者拒まず去る者追わず』が基本。そこに『ただし患者は完治するまで束縛』が加わるだけ。たった1日でほぼ完治した双子は後者から外れるわけだが、出ていく手段を無くしてしまったが故に仲間となった。

「ダイクツ、ワカバ、ダイクツダヨー」

「今日だけは安静にしろと飛鳥医師に言われているだろ」

「ソウダケドサー」

私、若葉は双子の監視役を任命された。相手が深海棲艦だからというわけではなく、目を離すとすぐに医務室から出て行こうとするからである。私である理由は、第一発見者だから。

一時的な仲間として施設にいることは快諾したものの、じっとしているのが嫌らしく、事あるごとに騒ぎ立てる。クロはとにかく落ち着きがない。

「ナンカヒマツブシナイ?」

「無い」

「ブー、ツマンナイ」

ベッドの上でジタバタしているクロを尻目に、シロの方を見る。何やら喉を押さえて、か細く何かを呟いている。喉でも痛いのだろうか。

「シロ、具合が悪いのか?」

「……アー……あー……ん、出来た」

声色が突然変化したため、目を見開くほど驚いてしまった。

深海棲艦が独特な声色をしているのは、先程までの会話でよくわかってる。反響しているというか、ブレて聞こえるというか。とにかく聞き取りづらい。早口でまくし立てられたら、まず私には理解できないだろう。

が、シロはこの瞬間に私達と同じ話し方が出来るようになった。どうやってだ。声帯を弄ったのか。訳がわからない。

「アネキ、ナンカコエガカワツタネ」

「こつちの人達に合わせた方がいいかなって……」

「ワタシモデキル？」

「多分……」

シロがクロの喉に触れ、押さえたり引っ張ったりしている。そして、

「あー、あー、おお！ 出来てる出来てる！」

クロの声色も変化した。聞き取りやすくなったのは良いことだが、何をどうしてそういうことが出来るのかは全く不明。これは飛鳥医師に丸投げすることになりそう。

今の私には理解が追いつかなかった。重傷が1日で治ったり、喉を弄って声が変わったり、常軌を逸している。少なくとも、深海棲艦は艦娘よりも上位の生命体なのだと感じた。だからこそ侵略者になり得るのかもしれない。

そう考えると、現状で戦いが拮抗状態なのは運がいいのか実があるのかわからないものである。

「これで……お話しやすくなった……ね」

「あ、ああ」

正直な話、今の私はシロに対して恐怖を感じている。元々深海棲艦に対してトラウマめいたものを抱いていたが、それがより一層強くなったしまった。

私の目の前にいる深海棲艦には、まず勝てないと、心が屈服してしまっている。だからといって、そんな態度はおくびにも出さず、平静を装う。

「……ワカバは……何故私達のこと……助けてくれたの？」

「あー、それは気になってたかな」

唐突に聞かれた。

2人にとつて、艦娘は忌むべき存在。どういう経緯があるかは知らないが、少なくとも居場所を奪われ、重傷を負わされた敵である。この姉妹が悪さをしていたというのなら、そうなっても仕方がないとは思うが、こう接しているとそんなことはないと思える。それすらも演技と言われればお終いだ、少なくとも私の知る鎮守様の連中よりは信用出来る。

「助けなければ後悔すると思ったからだ」

あの時思ったことをそのまま伝えた。見殺しにしたことを悔やむくらいなら、助けたことを悔やんだ方がいいと考えたと。

「……そう……私達の知ってる艦娘とは……違うね」

「ホントね。知ってるのよりも輝いてるっていうか。アレしか知らなかったら、多分私ら艦娘嫌いになってたよ。あ、大丈夫、ワカバは嫌いなんてならないから。助けてくれた恩人だからね」

少しだけ安心した。嫌いだという理由で攻撃されたら、なすすべも無くやられていただろう。おそらく抵抗すら出来ない。

何しろ私は実戦経験皆無の捨て駒。怪我が完治しても、武器を持つたことが無い。まともな戦いというものを知らないのだ。艦娘としては下の下だろう。

「向こうは私らのこと侵略者って言ってたけどさ、あいつらの方がよっぽど侵略者だよホント。たまたま無人島でお休みしてただけなのにさ、バカみたいな数で攻め込んできてさ。私らは攻撃するつもり無かったのに、問答無用ってバカス力撃ってきたんだよ」

「私達の種族が……全部侵略者だと思ったら……大間違い」

私を前にして次々と愚痴が出てくる。溜まりに溜まっていたのかもしれないので、監視者としてその話を聞いてあげることにした。もしかしたら私に聞いてもらうためにも声色をどうにかしたのかもしれない。

その中で、この2人がどういう存在かがわかってきた。

深海双子棲姫は、人間や艦娘に対して敵意むき出しな侵略者である

深海棲艦の中では特異な、非好戦的な深海棲艦である。私達にはそういう深海棲艦がいるとは教えられていない。深海棲艦は全て殲滅するべきと、生み出される時に教え込まれている。

2人は一応潜水艦の類らしく、いつもは海中で暮らしているそうだが、たまに誰にも干渉されないようなところで日を浴びるのだとか。本来の仲間である、他の侵略者達の行動に対しては、一切の無関心を貫き通してきた。

それなのに、とある艦娘達に見つかってから事態は一転。海中にいてもソナーで探知され、海上に上がっても追われの追いかっこ。いくらこちらから攻撃することはないと伝えても、容赦なく攻撃され続けた。

それだけされても一切の反撃をせず、ただただ逃げ回るだけだったというのに、あちらは一切攻撃を止めなかったらしい。

「ありゃあ私達を追い詰めるの楽しんでたね。間違いない」

「……ああいうのは……ちよつと嫌」

最終的には数の暴力でああなった。それでも脇腹を抉られただけで済んだのは運が良かったと言える。嵐とまでは行かないが、夜戦で且つ大雨が降ってきてくれたおかげなんだとか。

それよりも、クロが感じた『追い詰めることを楽しんでた』という方が気になる。深海棲艦との戦いを楽しんでたということか。誰が好き好んで命のやり取りをしたがるのだろうか。

「夜まで追うのは酷いと思うんだよ。ホントさ、ワカバ聞いている？」

「聞いている」

「ならいい。できあ、バッテバテの状態で浜辺に辿り着いたんだけど、そこで力尽きちゃって動けなくなっちゃってさ、そこをワカバが助けてくれたってわけ」

「あの艦娘達は……流石に撒いたと思うから……」

あの怪我は普通なら致命傷だ。そこで見失ったら普通追うのをやめる。余計な力を使いたくないだろうし、戦闘も終わったと思うだろう。それでも息があったのは、この2人の地力の強さであろう。

この愚痴を延々と言い続けるところを見ると、人間も艦娘も深

海棲艦も変わらないなと思えてしまった。考えていることは私達と似たようなもの。知恵があり人語を介する姫級の深海棲艦だからこそ、近しい思考を持つているのかも。

「苦労したんだな」

「ホントだよ。私らが何したってんのさ。ねえ姉貴」

「うん……」

愚痴は止まらない。しばらくは聞き続けることになりそうだった。

「配給く、配給くつと。飯持ってきたぞー」

延々と愚痴を聞き続けていると、摩耶が昼食を持って医務室にやってきた。朝からバタバタしていたが、いつの間にかそんな時間になっていたらしい。なんだかんだ朝食もしっかり食べることが出来ていないため、昼食を見たら途端に空腹感に襲われた。

「あたし、摩耶ってんだ。よろしくな」

「クロだよー」

「シロ……」

私とは違い、相手が深海棲艦だろうが関係なく接する摩耶。2人もそれに対して何の違和感を持たずに挨拶。その後ろからは雷も入ってくる。

「先生も後から来るわ。今日はみんなここで食べましょう！ あ、

雷よ！ カミナリじゃないわ！」

「せっかく仲間になったんだし、飯くらい一緒にな」

医務室でも食べやすいサンドイッチが沢山。全て雷の手製。

そういえば、深海棲艦はこういうものを食べることが出来るのだろうか。見た目も中身も同じ作りをしているが、食事に関しては話が別。

「姉貴、こういうの食べるの初めてだよね」

「うん……楽しみ」

「いっぱいあるからね！ 好きなだけ食べて！」

雷も警戒心一切無し。見せないようにはしているがビクビクしている私がおかしいのだろうか。

「ここに来る前は何か食ってたんだ？」

「えーつとね、魚とか」

「やっぱり海だとそういうものを食べるのね。なら、これは新しい体験になるわ！ 海では手に入らないものばかり入れてるもの！」

本当に無警戒。会話の内容は初めましての内容ばかりだが、話し方が友人のそれ。クロは人懐っこいためか、そんな状況もすぐに楽しんでいようだった。

少なくとも、今のクロは深海棲艦には見えない。声色もこちらに合わせてくれているし。シロはほんの少しだけ警戒しているようだが、クロに引つ張られてすぐに慣れるだろう。

「1つ……いい……？」

「ん、どうしたよ」

「みんな……継ぎ接ぎなの？」

私は自分の身体に深海棲艦のパーツが使われていることを伝えていない。それなのに、継ぎ接ぎと表現した。まるで私達の身体の状態が完全にわかっているように。

シロの質問に少し静まるが、即座に摩耶が返答。

「おう、あたしは見て分かる通り脚と眼な」

「よくわかったわね。私は2人と同じでお腹よ」

シロがこう言ったということは、私の状態もわかっているということ。今回は手袋などもしていないので、左手の痣も見せている状態ではあるものの、見ただけで簡単にはわからない方である。雷に至っては完全に隠れている。

ということは、見ただけでわかる理由が何かしらあるのだろう。私はまだ日が浅いが、雷と摩耶はもう半年以上この身体だ。

「やっぱり……3人とも私達と同じ匂いをするの……海の匂い……でも艦娘とは違う……それに……私達ほどでもない……混ぜってる」

「姉貴、たまに訳わかんないこと言うからなあ」

クロにはわからないらしい。だからこそ明るく振る舞えるのかもしれない。

「その身体……大切にしてくれ……」

慈しむように私の手を取った。痣のある左手を。

シロには私達には見えていないものが見えている。私達継ぎ接ぎの者がどう見えているのかはわからないが、クロよりも警戒していたのはそれが理由だろう。艦娘でも深海棲艦でもない、よくわからないものとして見えているのかもしれない。

「ああ、当然だろ。あたしらはこれの持ち主に生かしてもらってんだ。繋いでもらった命は簡単には手放さねえよ」

「ええー。先生のおかげで生きていられるんだしね！」

何処までも前向き。こんな身体だからこそ、深海棲艦を助けることも、深海棲艦とこうやって付き合うことも抵抗が無いのだ。艦娘でもあり深海棲艦でもあるような身体だからこそ、完全な中立の位置に立てる。

ならば私もそのように振る舞う方がいい。その方が『楽しく生きる』ことが出来そうだ。また私は1歩前に進めた気がする。

「ワカバ……?」

「若葉も大切にする。楽しく生きるために」

「そう……よかった」

薄く微笑む。この時には、私はシロへの恐怖心は無くなっていた。

「すまない、少し手間取った」

「大丈夫よ。まだ食べ始めてもいないから！」

飛鳥医師が医務室にやってきた。それを見てクロがビクツと震える。あの時の苦手意識が割と深く刻まれている。

「安静にしていたようだな。本当にピンピンしている」

「そう言ったじゃん。退屈なだけどー」

クロが声を発した途端、飛鳥医師が目を丸くする。雷と摩耶は知らないが、私と飛鳥医師は、シロが変える前の声色を知っている。

「おい、声が変わってるぞ。どういうことだ」

「……この方が……話しやすい……でしょ?」

「確かにそうだが……そういうことが出来るなら先に教えてほしかったな」

別に怪我や病の影響がでないならいいとそれ以上の追求をやめた。

実に飛鳥医師らしい判断である。

「そうだ、明日また来客がある。若葉が完治して施設の一員になったことを知って、どうしても会いたいと言ってな」

「お、じゃあ提督が来るのか」

「ああ。来栖が明日にここに来る」

第二二駆逐隊を率いる鎮守府の長、来栖提督がこの施設にやってくると。流石に1人でここに来るということは無さそうなので、また文月達と会えるかもしれない。それは楽しみだ。

とはいえ、私としては一番のトラウマである提督という存在と会うというのは、少々覚悟が必要だった。それが理解者であろうとも、信用出来るかは別。

「ついでに深海双子棲姫のことも紹介しよう。あいつなら理解してくれる」

「来栖司令官なら大丈夫！ 私達のやり方に賛成してくれてる人だもの！」

雷達は何度か会っているようだ。今の様子を見る限り、心配は要らないような人間なのだろう。

それでも、私は少し怖い。

理解者

深海双子棲姫、シロとクロが目を覚ました午後。今回の来客は明日の午前中から来るということで、その準備に勤しんだ。準備と言ってもある程度工賑なり談話室を片付ける程度。日頃の雷の家事のおかげで、皆で手分けしてちよつと入念に掃除をするくらいで済んだ。

私、若葉も当然その掃除に参加。朝のランニングが頓挫した分を取り戻すように、掃除で体力を使うことに。

シロとクロは丸一日は安静にするという話だったが、怪我の後遺症もなくあまりにも健康体だったため、医務室での軟禁期間を短縮し、掃除終了後にこちらも終了。今後は医務室ではなく、私達と同様に私室を与えられることになる。

2人は常に一緒にいたらしく、部屋は1つでいいと志願。飛鳥医師もそれを了承した。深海双子棲姫がそういう存在であることは今までの言動である程度わかる。それをわざわざ離す必要もない。

「あとは服だが……回復が早すぎて間に合っていないぞ。それに、深海棲艦の服だなんて手に入れようがない」

検査着のまままで生活してもらうのは流石にまずい。とはいえ、何も着ないわけにはいかない。ここに運び込んだ時に着ていたものは、処置の際に廃棄している。そもそも怪我のせいで破損しており、着れたものではなかったし。

「なんでもいいよ」

「……」

2人とも興味なさげ。だがそれだといろいろと面倒事が増える。ただでさえ明日には来客があるのに、この格好のまま客前に出てもらうわけにはいかない。

すぐに渡せそうなのは、私や雷の運動着だろう。体格的には私や雷が丁度いいくらいであり、これなら制服より替えが利く。枚数も多い。

ということに着替えてもらった。私と雷のものでもサイズが丁度いいくらい。心機一転といった感じで、興味なさげだった2人も初め

ての服には少し高揚していた。

「こう見ると、本当に深海棲艦には見えないわ」

「な。頭にフィンみたいなものが付いてるくらいで、あたしらと同じじゃねえか」

おそらく、頭に付いたフィンのようなものは、深海棲艦特有の『角』ではないかと飛鳥医師が予想している。処置中にいろいろと調査し、しっかりと頭に食い込んでいたのだとか。とはいえそんなところはもう気にならない。

そして翌日。朝食後に施設に到着するということで、ほんの少し慌ただしい朝。提督という役職を持つ人間がやってくるというのは、それだけでも緊張するのだが、ただでさえ苦手な人種なので余計に悪化している。

今から来る提督は、私の知っている唯一の提督とは別人。飛鳥医師以外にも、雷や摩耶の反応からして、私にしたようなことはしないような人間だ。それに、あの文月達を束ねる鎮守府の長なのだから、尚のこと信用できるはず。

「ワカバ、なんか震えてるねえ」

「……人間……嫌い？」

「武者震いだ。何でもない」

相変わらず見透かすようなシロの発言にドキリとするが、真意は隠して来客を待つ。

流石に深海棲艦を匿っているということはまだ伝わっていないため、今は部屋に行ってもらうことにした。穏便に事を済ませるために我慢してもらう。

少しすると、海の方こうに影が見えた。あれは以前にも見た大発動艇。今回は鋼材を持って帰るわけではないので、1隻だけがこちらに向かっている。あれに件の来栖提督が乗っているのだろうか。

大発動艇の横、艦娘が4人。以前にも会った第二二駆逐隊の4人だ。ここに来るのもうその4人と決まっているのかもしれない。遠目にも文月と皐月がこちらに手を振っているのがわかる。こちら

からも手を振り返した。

「若葉、来栖は少しアレな奴なんだ。それだけは気に留めておいてほしい」

「アレとは」

「アレだ」

意味がわからないが、忠告が必要な人間なようなので、肝に銘じておく。

「少しぶりい〜」

「ああ」

まず文月が工廠に到着。その後、皐月、水無月と工廠に上がる。最後に長月が大発動艇に乗り込み、中にいるものを引っ張り出した。まず私の知らない人間であることに安心した。

「ついたぞ司令官。まさかまた酔ったとか言わないだろうな」

「大丈夫！ 大丈夫だぞオ！ 飛鳥に酔い止めとか事前に貰ってるからなア！」

やたらめつたら大きな男の声が響いた。と同時に大発動艇から知らない男が工廠に下りる。この人が件の来栖提督なのだろうが、その姿を見たとき、飛鳥医師が言っていたアレの意味がわかった。

来栖提督は飛鳥医師よりも大きく、聞いていた通りガタイのいい男だった。それだけなら良かったのだが、浅黒い肌にスキンヘッド、そしてサングラス。殺し屋と言われても疑問を抱かない。本来着ているであろう軍服も肩からかけるだけと、正直提督という役職には全く見えない。

「来栖、お前相変わらずだな」

「そういうお前もな飛鳥ア。ちゃんと食ってんのかア？」

「当然だ。食は健康の土台だ」

旧友というだけあり、面と向かった瞬間から雰囲気が出る。軽く拳をぶつけ合った後、私の方にのっしのっしとやってくる。

「言ってた若葉だ」

「おおッ、この子がその若葉かア！」

シロの時よりも恐怖心が先立った。近くに来ると、その大きさが痛

いほどわかる。迫力が凄まじい。深海棲艦よりも恐ろしい。

「わ、若葉だ」

「俺ア知つての通り来栖ってモンだ。階級は大佐、こいつらの頭張らせてもらってる。よろしくなア！」

ガツチリ握手され、腕をブンブン振られる。サングラス越しだが、笑顔が眩しい。それが逆に怖い。

「しれーかーん、若葉ちゃん、驚いちゃってるよお」

「スマンスマン、新人にテンション上がっちゃまった。俺ア初対面の艦娘に泣かれることがよくあるんだ。文月にも初対面の時にワンワン泣かれてなア」

「しれーかーん！ 余計なこと言っちゃダメだよお！」

気さくな人間であることは理解した。この人は見た目で完全に損している人だ。せめてサングラスくらい外せばいいと思う。

「おーっす、来栖提督、元気そうで何よりだぜ」

「いつ見ても元気ね！」

「摩耶ア、雷イ、お前らも元気そうだなア！」

摩耶とはハイタッチするも、痛そうに手を押さえていた。男の力とかそういう問題ではなく、来栖提督は力加減があまり出来ない人なのかも。それを知ってか、雷はハイタッチじゃなく軽めの握手で挨拶。「ここの住人が増えたって聞いたからな、一応見に来させてもらった。何でも、今までで一番重傷だったんだってエ？」

「ああ、でもこの通りだ。命を救うことが出来た」

「流石だなア」

バンバン背中を叩かれ、飛鳥医師も痛そうに小突いている。あんな飛鳥医師を見るのは初めてだ。友人の前ではあんな一面も見せるのか。

今回のメインは私という存在である。来栖提督にジロジロ見られた挙句、ニツカリ笑ってサムズアップ。

「五体満足、何処も悪いところは無エな。いいことだ。ここに来ちゃった理由は聞かんが、死ぬより生きている方がいい」

「ああ、若葉もそう思う」

「拾った命は大事にしろよオ。又ハハハッ！」

豪快に笑い飛ばした。飛鳥医師と信念が同じところにある、と言っていたが、こういうところかもしれない。死より生、どういう状況であれ、生きていれば報われる。来栖提督もその信念の下、鎮守府運営をしているらしい。

「若葉ちゃん、元気だった〜？」

「ああ」

前回の最後と同じようにハグされた。また会おうと別れて、また会えたことが一番嬉しい。生死の境界を渡り歩く艦娘には、これだけでも大きな喜びになる。

第二二駆逐隊は誰も怪我することなく過ごしていたようだ。ここ最近では遠征もそこそこだったらしく、のんびりとした毎日らしい。

「あの後から、若葉もトレーニングを始めたんだ」

「ほほう、それはいいことだ。かく言う私もトレーニングは欠かしていない。鍛えるのは楽しいからな」

長月とは気が合いそうだ。鍛えて身体を痛めつけると、成長していることが実感できて悪くない。無理しすぎると飛鳥医師から叱責を受けそうなので程々にしているが。

「ところでよオ飛鳥。お前、なんか隠してるだろ」

「隠してるとは？」

「拾ったの、若葉だけじゃないんじゃないかア？」

他にも人が増えていると勘付いている。一度も姿を見せておらず、工廠からは真反対な私室にいてもらっているにもかかわらずに。洞察力とかそういうものではなく、直感だけでそれに勘付いたのか。

「お前本当に勘いいな」

「これくらいでないと提督なんて出来ねエよ。俺の前には出しづらないのか？」

「お前だけじゃない。誰に対しても出しづらいんだ。でも隠せそうにないな。雷、呼んできてくれ」

諦めたように雷に指示した。雷も苦笑しながら2人を呼びに向かう。

やってきた2人を見て、来栖提督も第二駆逐隊も目を見開いて驚いた。何せ、今まで戦ってきた深海棲艦が目の前にいるのだ。2人が非武装とはいえ警戒態勢に。

提督をここに連れてくるという任務のため、全員すっかり武装している。敵が非武装でも、いざという時は撃つということだろう。

「お前、マジか」

「大マジだ。漂着している2人を発見し、治療した。艦娘と同じ要領で治療出来ることを確認している」

緊張感が高まる中、2人をマジマジと見つめる。サングラスをしているためにどんな目で見つめているかはわからないが、敵か味方か吟味しているように見えた。

直感だけで2人の存在を言い当てた人だ。敵意の有無も直感で嗅ぎ分けそうである。2人は少なくとも、私達に対して敵対する仕草は一度も見せたことはない。来栖提督のお眼鏡に叶うといいのだが。

「……双子棲姫かい。そーいやア、最近近場で目撃情報が出たなア」「そうだったのか。で、それはどうなった?」

「俺んトコには別の鎮守府が討伐したつってたぜエ。まさか生きてるたア思わなかった」

シロとクロに近付く来栖提督。こんな状況でも敵対心を一切持っていないクロ。それに対して、警戒心が強いシロ。見知らぬ人間相手ではいつものぼんやりした雰囲気も何処かに行ってしまった。ただでさえ威圧的な外見なので、余計に警戒心を強めてしまった。

「飛鳥よオ、いつかやるんじゃないかと思ってたぜエ。前から言ってたもんなア。怪我人は深海棲艦でも救ってやるって」

「ああ。有言実行だ」

得意げな飛鳥医師。

「お前も、犠牲を出さないように戦えてるらしいじゃないか」

「当たり前だろオ。艦娘だって生体兵器かもしれねエが人間と同じだ。死んでいい奴なんていねエよ。深海棲艦だってそう。戦いたくねエなら死ぬ必要は無エ」

来栖提督が2人の前でしゃがみ込むと、クロの頭を撫でた。元々一

切警戒していなかったクロだが、笑顔を見せるように。第二二駆逐隊も警戒態勢を解いた。

飛鳥医師が来栖提督のことを『知る限りでは真の英雄』と言った意味がわかった気がする。この人は、豪快だが人一倍命の尊さを知っている。この勝てるかどうかもわからない戦いの中で、勝利より命を尊ぶ精神を持っていることが素晴らしい。

私の知る最低な提督に、爪の垢を煎じて飲ませてやりたいくらいである。

「俺ア、戦いたい奴だけが戦えばいいと思ってるんだ。お前さん達みたいなのは、深海棲艦でも保護すりやいいと思ってる。無駄な殺し合いなんてしてる場合じゃあ無エからな」

「オツチャン、話がわかる人だね！」

まさかのオツチャン呼ばわりである。飛鳥医師含めて、皆が一斉に吹き出した。

「黒いの、俺アこれでも結構若いんだ。飛鳥と同じ年なんだぜエ？」

「そうなの？ 見えないなあ。ねえ姉貴？」

「……………うん」

たっぷり間が空いた後に肯定してしまった。もう臯月や水無月に至ってはゲラゲラ笑ってしまっている。

「こればかりは諦めろ」

「いやなア、飛鳥は若く見えるから仕方ねェんだよ。で、俺ア老け顔なんだ。こいつと並ぶとどうもこういう損な役回りになっちまう」

などと飛鳥医師に言い返すも、全く嫌そうにはしていない。自分がどういう役回りかを察して、この空気を和ませるように努めている。

さすが提督だと素直に感じた。艦娘の感情の機微に敏感で、いち早く察知し、その場で最善な行動を取る。さらにそれは全てが本心。疑いようのないほどにいい人。本当に外見で損をしている。

「来栖、この施設に一番近い鎮守府はお前のところだろ。それなら、深海双子棲姫の艦装が流されているのを見たことがないか？」

「無エなア。ここに来るまでも何も見なかったぜエ」

その言葉に少し落ち込むクロ。

「何か見つけたら連絡する。潜水艦に周辺調査でもしてもらうさア」
「ああ、頼んだ」

察した来栖提督がすかさずフオロー。こういうところも流石としか言いようがない。

たったこれだけしか話せていないが、それでも来栖提督が良き理解者であることがよくわかった。

飛鳥医師と旧友だから見逃してくれているとかではない。この人は飛鳥医師が間違った事をしているのなら、それを正すために尽力してくれるような人だ。

この人なら信用出来る。これからもいい付き合いをしていきたい。

差し伸べられる手

私、若葉を確認するため、飛鳥医師の旧友であり理解者である来栖提督が、遠征部隊の第二駆逐隊を引き連れて施設にやってきた。

提督という存在にいい印象のない私だったが、来栖提督は信用するに値する人間であると思う。直感のみでシロとクロの存在を察知し、その姿を見ても臆せず、さらには友好的に接した。それだけでも人柄がわかる。

ただし、とにかく外見で損をしている。それだけは残念。

飛鳥医師と来栖提督は込み入った話があるということで、私達は自由な時間となった。前回の鋼材搬入とは違い、今は本当に何も無い時間。あの時は出来なかつた雑談も出来そうである。

そのため、艤装をその場に置いてもらい、鎮守府として運用されていたときから残してあるという談話室に場所を移した。元々この元鎮守府は10人ほどの人数を想定して作られていたため、今の人数でちよūdいくらいに。

「うちの司令官、強面だから勘違いされやすいんだよね」

「すんごい有能な司令官なだけどねえ」

皐月と水無月が揃って話す。あの提督の下で活動している艦娘がそういうくらいなのだから、本当に有能な人なのだろう。言動は荒っぽいのが、文月達第二駆逐隊はしっかりと信頼している。

「おかげで誰も死んでないしな」

「だよね。あたし達も、安心して出撃出来るもんね」

文月達は、来栖提督の部下となってそれなりに時間が経っているそう。雷が施設の一員になる前に浜辺の清掃を手伝っていたのだから、1年近くの付き合い。むしろそれ以上。

それだけ長く付き合っていれば、あの人の人柄なんて痛いほどわかるだろう。先程のほんの少しの時間で、私があの人を信用出来ると思えたくらいなのだ。特に文月は、鎮守府創立の最初期からの付き合いらしい。

「いい鎮守府なんだな」

「うん！ ボクらの最高の居場所だよ！」

力強く答える皐月。それだけ鎮守府に愛着があるのだろう。

「あたしら勧誘されたんだぜ。怪我が治ったら来栖提督のところに配属しないかって」

「そうそう。でも断っちゃった」

摩耶も雷も、来栖提督からの勧誘を受けていた。あの提督ならやりそうなことだ。

艦娘としての矜持を果たすのなら、この施設より鎮守府に所属した方がいい。戦う力を持ったのだから、それを使い侵略者を撃退する。それが私達の生きる意味だ。

だが、2人共それを突っ撥ねてしまった。雷はまだしも、摩耶まで。言つては悪いが、摩耶はその性格から戦いに身を置くのが好きそうに見えた。だが、鎮守府よりもここを選んでいる。

「だって、先生放っておけないんだもの。私が家事する前なんて酷かったのよ！ ご飯は三食冷凍食品で、お掃除も出来てないから埃まみれで！ お風呂が半分物置になってたんだから！」

「ここって一応改装したんだよな。それでそれか」

「ほとんど書類とかばっかりだったんだけど、片付けないで適当に置いてるからどんどん溜まっていつちやっただと思っわ。だから、私が全部片付けてあげなくちゃって思っただの」

雷はこの施設を片付けるために残ったという。そもそも世話好きな性格もあり、飛鳥医師の生活習慣改善に尽力したのとか。掃除洗濯から始め、料理も覚えて、結果が今に至る。艦娘としての仕事がつも出来ない代わりに、家事万能の戦力へと成長した。この施設の台所事情を一手に引き受ける、一番重要なポジションに立つ者。

「あたしも似たようなもんだな。ほら、こいつらに掃除頼んでたわけだろ。あたしらの場所なんだから、あたしらが何とか出来るようにしねえとつてよ。こいつらだつていつも来れるとは限らねえ」

「だから艀装の整備を覚えたのか」

「ああ。センセは人間だし、雷はそのままだと非力だろ。だから覚えただ。今後やっていくためには必要だと思つてな」

摩耶もどちらかと言えば面倒見のいい性格だ。片付けをサポートするために残り、それが大正解だったようだ。流れ着いた艀装を運ぶことも出来、覚えた技術で分解することで資金源にも出来た。それに、思っていたより楽しかったというのが一番大きかったのだとか。工作巡洋艦摩耶は、その時に生まれたと自分で話す。

「お前も多分勧誘されるぞ。どうすんだ？」

「若葉は……」

私はどうするべきなのだろう。

ここから離れ、来栖提督の下で働くのもいいかなと思っている。来栖提督なら、私が前に受けたような仕打ちなどしてこず、戦力として、艦娘として運用してくれるはずだ。私は持っている力を使って世界の平和に貢献したい。

だが、この施設にも愛着が湧いている。まだ短い時間ではあるが、雷と摩耶、そして飛鳥医師と生活を共にし、艦娘とは言いづらいが楽しく生きている。飛鳥医師との雑務や浜辺の清掃、それにトレーニングだって、私を毎日を輝かせてくれる。

どちらも私には魅力的な場所だった。だが、どちらも取るということとは出来ない。

考えて、考えて、考えて、今の自分に一番いい選択をしたい。

「ワカバ、すっごく悩んでるね」

「……うん……悩んでる」

シロとクロに言われ、現実に戻されるような感覚。考えていたら周りが全く見えなくなっていた。それだけ私には迷う選択肢である。

そして、答えを出した。

「……若葉もここに残る。どちらも魅力的だが、今はこちらの方が居心地がいい」

本心からの言葉だ。いくら信用出来る提督がいて、友人とも言える第二二駆逐隊が所属しているとしても、今の私にはまだ鎮守府という場所には僅かに抵抗があるというのもある。また、それ以上にこの施設での順風満帆な生活が手放せないくらいに大切になっていった。

戦場に出て戦いたい、この手で平和に貢献したいという気持ちは、

まだ当然残っている。それでも、居心地の良さはここの方が上な気がした。

「すまない。魅力的な提案を突っ撥ねてしまった」

「それでいいと思うよ。若葉ちゃんが決めたことだもんね」

「こつちに来たかったらいつでも来ていいしね」

後々でも大歓迎と言ってくれる。万が一のことがあれば頼らせてもらおう。何事も無いと思うが。

機会さえあれば、見学くらいはさせてもらいたいかもしれない。本来の鎮守府というものがどういう雰囲気なのかを知りたい。

「クロちゃんとシロちゃんは？」

「私はさすがに勧誘されませんよ。艦娘じゃないんだし」

「それに……されても行かないよ……まだ人間は信用出来ないし……」

シロは未だに来栖提督には警戒したままだ。

自分達が艦娘に酷い目に遭わされた裏側に、それを指揮する提督がいることくらいはわかっている。艦娘に対してもそうだが、提督という存在にはより強い警戒心を持ってしまっているようだ。それはおそらく私以上。

そういう事情もあるので、クロはともかくシロは私以上に鎮守府という場所に抵抗があるのだろう。もし勧誘されても、ついていくつもりは一切ないと断言した。そして、シロが行かないのならクロも行かないだろう。

「そつかく。でも仕方ないよね」

「ボクらに強制する権利は無いしね。気が向いたら遊びに来てよ！」

果たして遊びに行ける時が来るだろうか。いくら友好的とはいえず、2人は深海棲艦だ。万が一その姿を第三者に見られた場合、何を言われるかわからない。それに、心無い者がいることは私もシロも痛いほどわかってる。今は外に出ること自体がリスクだ。

「じゃあ、その分時間たっぷりまでお話ししようね！」

「だな。と、そうだった。さっきは武器を持っていたから出来なかった。シロ、クロ、よろしく」

また長月が最初に握手のために手を差し出す。一瞬戸惑ったものの、クロはすぐにその手を取った。

「よろしくー。姉貴、この子達いい子だよ。私達を攻撃してきた奴らとは違うね」

「……そう……だね」

シロもおそろおそろ手を取る。まだ警戒は解いていないが、非武装の艦娘と触れ合うくらいには心を開いたか。

飛鳥医師との話が終わった来栖提督が戻ってきたため、帰投準備が始まる。工廠に置いておいた艦装を装備し直すだけではあるが、私のように浮いているわけではないので、それだけでもそれなりに時間がかかるものだ。

その間に、来栖提督が私の方へ。もしか、このタイミングで勧誘だろうか。

「いつもここに新人が入ったら聞いてるんだ。お前さんにも聞いておくぜエ。若葉ア、お前さんさえ良ければ、うちの鎮守府に来ないか。艦娘としての戦力は多ければ多い方がいいからなア」

本当に勧誘された。捨て駒として扱われた私に、救いの手が差し伸べられたようなものだ。この手を取れば、私は戦場に身を置く本来の艦娘としての人生が改めて始められる。

だが、

「その申し出はありがたいんだが、若葉はここに残る」

その手を取るのをやめた。考えて考えて考えて、私は施設に残ることを選択した。談話室で皆の前で話したことを、来栖提督にもそのまま話す。事前に聞いていなかったら、ここまでスムーズに回答できなかった。

おそらく来栖提督は、飛鳥医師から私がここにいる理由も聞いていると思う。それでも私を勧誘してくれたのは、自分の鎮守府ならば私の苦手意識を払拭出来るという自信があるからだろう。

「まあたフラれちまったい」

「若葉が自分で決めたことだ。残念だったな」

来るもの拒まず去る者追わずを徹底しているらしい飛鳥医師も、私の選択は喜ばしいものだったようだ。微かにだが、口角が上がっているように見えた。

「ここにいる子達はみんな楽しそうだ。一応誘いはするが、死が身近にある分、こっちは不利だよな。飛鳥よオ、大切にしろよな」

「当たり前だ。彼女らは僕の仲間だからな」

仲間と言ってもらえることが嬉しい。最初は患者としてここに身を寄せていたが、今はもう仲間だ。私には、ここの雷や摩耶のように特化した技能は無いが、何かしら貢献していくことが出来るだろう。楽しく生きるために。

「深海双子棲姫もスカウトしたいんだが？」

「私達もここがいいかな」

「うん……でも……」つ教えて……」

予想外に勧誘されたシロとクロだが、前以て話していた通り、行かないと返答。だが、本当に勧誘されると思っていなかったシロは、それに対して逆に質問を返す。

「私達は……貴方の敵だと思っただけ……」

深海棲艦という種族である以上、鎮守府とは本来敵対しているものだ。敵対していないにしても、わざわざ身を寄せる必要はない。

そんな存在である深海棲艦でも御構い無しに勧誘。ただでさえ2人は艀装も持っていないが、そこすらも来栖提督には関係ないことだったようだ。

そういつたところも、飛鳥医師と同じ。同じ信念を持つもの同士、気が合うのは当然のことだったようだ。

「俺アな、侵略者と戦っているだけで、深海棲艦と戦うつもりは無エのさ。お前さんは深海棲艦だが、侵略者じゃあ無えんだろオ？」

「……うん」

「なら問題無えな。それをスカウトして何が悪いってんだ。お前さんも当然、俺らの仲間だぜエ」

すごい理論である。あまりの超理論のため、いつもはぼんやりしていたりで表情をほとんど変えないシロですら、大きな反応を見せた。

「……ふふ、そっか……そうなんだ……。凄い人だね……。貴方は」

「おう、それが俺なのさア。尊敬してくれてもいいんだぜエ」

「うん……充分尊敬した……私はここから離れるつもりはないけど……また会いたい……かな」

まだ出会って時間は少ないが、今までに見たことがないくらいのシロの笑顔。この短時間で、飛鳥医師よりも心を開いてしまった。

嬉しい対応は人それぞれ。シロには来栖提督の接し方が一番合っていたのかもしれない。

「それじゃアな！ 飛鳥ア、次に来るときも問題起こしてんじゃあ無エぞ！」

「起こしてたまるか。お前も……死ぬなよ」

「当たり前だ。俺達ア死なないために戦ってんだ。誰も死なねエ。俺も、こいつらもなア！ 又ハハハッ！」

最後まで豪快に、自信たっぷりに笑って帰っていった。文月達も、見えなくなる最後までこちらに手を振ってくれた。

少しだけ名残惜しくなったが、今の私の居場所はここだ。勧誘された時にこの施設に留まることを選択したのは紛れもなく私。ここにいる方が『楽しく生きる』ことが出来ると判断したからだ。

ならば、名残惜しんでいるのは皆に失礼だ。私はこれからも、ここで楽しく生きていく。

「センス、ほら、若葉にも言ってやれよ」

「そうよ。私達にも言ったんだから、ね！」

摩耶と雷が飛鳥医師の背中を押す。飛鳥医師がほんの少しだが恥ずかしげにしているのがわかった。珍しい表情。来栖提督が来てから、私の知らない飛鳥医師をいくつも見せられている。

「あー……若葉、この場所を選んでくれたのは、素直に嬉しい。これからもよろしく頼む」

まさかそんなことを言われるとは思わなかった。飛鳥医師は、私から離れるかと思っていたのかもしれない。

「……ああ、よろしく」

長月に倣って、飛鳥医師に手を差し出す。そういえば、まだこう

いったことは飛鳥医師としていなかった。お互いに信用していると示す証にもなる握手だ。

少し考えたようにも見えたが、飛鳥医師にその手を取ってもらえた。

また来栖提督に会うことはあるだろう。その時も、私はこの施設の一員だと胸を張って言えるように、楽しく暮らしていきたい。

2人の艀装

来栖提督からの申し出を断り、施設に残ることを決めた私、若葉。鎮守府に所属し、艦娘としての矜持を全うすることも考えたのだが、今の私には飛鳥医師の下で活動する方が居心地がいいと感じたからだ。私はこの施設で、楽しく生きる。たまに会うくらいが丁度いい。

シロとクロが施設の一員となり数日。その間にも浜辺を探し続け、深海双子棲姫の艀装が流れ着いていないかを確認していたが、嵐どころか雨も降らず、浜辺は綺麗なものであった。2人だけを行かせるのはさすがに難しいので、私が保護者のようについていている。念のため艀装も装備。

「やっぱり無いねえ」

「……うん」

私が普段ランニングで向かう方、2人を発見した浜辺とは逆方向に行ったのだが、やはり見つからない。流れ着かない場所に沈んでしまったのかもしれないが、私達は潜水艦では無いので海の中はさすがに探すことが出来ない。

2人は一応潜水艦ではあるものの、艀装が無いと潜ることが出来ないらしい。人間でいう酸素ボンベが艀装に備え付けられているらしく、それが無ければ息が続かないとのこと。代わりに、艀装さえあれば無限に潜れるのだとか。

「潜ることが出来ないから八方塞がりだよ。これだけ見て流れ着いてないなら、もうこれは沈んでるとしか思えないんだよなあ。見つけて施設に持って帰れたら、マヤが直してくれるんだよね?」

「おそろしく」

「ならマヤに任せたいなあ。そのためにはまず見つけなくちゃ。でも、見つけるには潜れなくちゃダメで、潜るためには艀装が無いとダメで、艀装は見つけなくちゃダメで、見つけるには……ああもう! ループし始めちゃった!」

頭を抱えてしまった。クロがそんなことを言っている間も、シロはポーツとした目で海の方を眺めている。浜辺だけではなく、海底の方

も視野に入れているみたいだが、やはりなかなか見つからないようだ。

「これはもうマヤに即席で作ってもらう？」

「……クロちゃん……私達は艦娘の艦装は使えないよ……？」

「そうなんだけどさあ」

ソナーがあれば多少なり探せるかもしれないが、摩耶に聞いたところそれは流れ着いていないとか。また、あつたものは全て来栖提督の鎮守府に持っていつてもらっているため、ここには残っていない。

ここにあるのは、あくまでも力仕事用に整備された、主機のみの艦装だけだ。武器と言えるものは1つも無い。あつたところで、先程の通り、全て来栖提督の鎮守府に渡っている。

こういう活動はしているし、私達のような艦娘が滞在している施設ではあるが、鎮守府ではないので当然非武装である。むしろ持っていたら罪に問われる可能性だってある。

「この前のオッチャンに頼るしかないのかあ」

「……そう……だね。潜水艦で探してくれるって……言ってたもんね……」

今の私達は、それに頼るしか無かった。それでも見つからなかったら、諦めて施設に永住を決めるとのこと。

何とも複雑な気分である。本人達のためには見つかつてもらいたいののだが、そうなる施設を出て行くため、少し寂しくなってしまう。だからといって見つからないことを望むのも違う。

「今日は帰ろっか」

「……うん。また明日……もう少し遠くに」

「だねえ。アレがないと落ち着かないしね」

艦装探しはまだまだ続く。もしかしたら、次の嵐の後に流れ着くかもしれないし、来栖提督の鎮守府が見つけてくれるかもしれない。

だが、他の鎮守府が見つけてしまっていたら……話はいろいろ変わってくるだろう。それは無いことを祈るしかない。

2人と共に施設に戻ると、飛鳥医師が私達の帰りを待っていた。少

し神妙な表情。嫌な予感がした。

「君達の艀装について、来栖から連絡が来た。あまりいい報せではないが」

「……見つからなかった？」

「それならまだ良かったんだがな。別の鎮守府に見つけられてしまっていたことがわかった。おそらく、君達を襲った鎮守府だ」

おそらく最も最悪な展開。まず確実に戻ってくることはなく、分解されている可能性すらある。その艀装がどういう状態だったかは知らされていないらしい。

深海棲艦の艀装は、戦いを終わらせるための貴重な資料だ。見つけたものはどういう状態でも回収して調査に回される。それが姫級だったら尚更。私達しか知らないことだが、シロはその中でもさらに特殊だろう。場所によつては殺してでも欲しがるようなものだ。

2人とも大きくショックを受けたようだった。シロは言わずもがな、いつも元気なクロですら俯いてしまった。

「はあく……もう最悪だよ。取り返すことは……」

「出来ないな。深海棲艦の艀装を欲しがるだなんて不審すぎる。申し訳ないが、諦めてもらうより他ない」

「だよねえ……」

目に見えて落ち込んでしまったクロ。シロはもう無言で肩を震わせている。見ているも気の毒である。

「その艀装が見つかったことで、深海双子棲姫の討伐が完了した証拠にされていたそうさ。君達の安全は一応保障されている。言い方は悪いが、君達は死んだ扱いなんだ」

「安全より艀装が欲しいかな……」

だが、こればかりは誰も何も出来ない。自分の身が可愛いとかそういう理由でなく、私達だけの問題では無くなってしまうから動けない。それが辛い。

「ふむ、そう言うと思ってな、摩耶にいろいろやってもらう予定だ。本来のものとはかけ離れたものになるかもしれないが」

先程シロが言っていた通り、2人が艦娘の艀装を使うことは出来ない

い。そして、今はこの施設に艤装のパーツやら何やらは1つも無い。なので、次以降の嵐の後から必要そうなパーツを集めて深海双子棲姫の艤装を組み立てていこうと計画していた。深海棲艦の艤装を集めるだけ集めて、適したものを総当たりで調べ、2人に合うものがあれば組み立てていくという算段だ。

それこそ私以上の継ぎ接ぎの艤装になるかもしれないが、少なくとも艦娘、いや、深海棲艦としての本来の機能が戻ってくる可能性はある。先程クロが望んだ即席の艤装が、もしかしたら手に入るかもしれない。

本当なら深海棲艦が本来の力を取り戻すことなど、止めなくてはいけない立場なのかもしれない。だが、私達は今は仲間だ。助け合わなくては。

「気に入らない形になるかもしれないが、それでいいならな」

「姉貴……姉貴はどう？」

「……私は……それでもいいよ。前と同じことが出来れば……」

私の艤装が継ぎ接ぎなのを見ている2人だ。別に本来の自分の艤装と全く同じでなくても抵抗が無いようだった。自分が今まで出来ていたことが出来れば、シロは妥協できるといいう。シロが妥協出来るのなら、クロも同じように妥協出来るようだ。

「じゃあ、私も大丈夫！ あ、でもマヤと一緒に私も艤装触っていい？」

「せっかくだし、自分の艤装は自分で触ってみたい！」

「摩耶が許可を出せば、僕は別に構わない」

「ならすぐにマヤに許可貰ってくるから！ あと作業着！ ツナギだっけ？ あれも欲しいから！」

クロだけ先行して走って行ってしまった。シロを置いて行ってしまふほどに気合が入っている。どうにかしてでも艤装を手に入れ、姉妹揃って本来の居場所に帰ろうと躍起になっていた。

シロもゆっくりとだがその背中を追う。先程までは俯いていたが、クロが元気になったからか少しだけ前向きに。

「若葉も手伝えるなら手伝うぞ」

「僕が手伝えないところだからな。頼んだ」

「任せてくれ。若葉は24時間働けるからな」

「医者としてそれは許さん」

残念である。

摩耶のところに向かうと、現場でなくてももう声が聞こえてくる。事を荒だてているとは思っていないが、何事もないことを知るために足早に近づく。

「マヤ！ 私も艀装触りたい！ 自分の艀装は自分でなんとかしたいんだよ！」

「わかった！ わーかったって！ 腕を掴むな！」

そこでは、クロが駄々をこねる子供のように腕に掴まり摩耶を揺さぶっていた。シロもそれをただ眺めているだけ。じつと見つめてクロの頼みを聞いてくれるのを待っている。

そこまでされてしまったら、摩耶もダメとは言えない。相手が深海艀艦であるとかそういうことは関係なく、普通に圧が凄かった。

「あたしもセンセにさつき聞いたばかりだからよ。先に言つとくけど、深海艀艦の艀装はバラしたことしかないからな。組み立てるのは初めてなんだ」

「でもワカバの艀装組み立てたんでしょ？ おんなじおんなじ！」

「簡単に言うなよな……近しいとはいえ構造が違えよ」

摩耶もタジタジである。

「摩耶、若葉も手伝うぞ」

「ああ……頼む。だけど、すぐにはやれないぞ。今は材料が無いからな。まずは何でもいから打ち上げられるのを待てよ」

「待つ待つ！ 艀装が戻ってくるならいくらでも待つ！」

先程の落ち込みは何処かに行ってしまったようだ。クロは元気な方がいい。シロも表情は変わらないが、クロが元気になったことで少しだけ雰囲気は柔らかくなったように見えた。

「まさか深海艀艦の艀装まで組むことになるとは思わなかったぜ……見た感じ艀娘のものと同じだから出来るとは思うけどな。ところで、お前らどういふ艀装なんだ？」

そういえば私も知らない。来栖提督は見ただけで双子棲姫と言っていたが、飛鳥医師はその辺りの言及もしていなかった。深海双子棲姫はどういうことが出来る深海棲艦なのだろうか。

「えーつとね、まず私達は潜水艦だから、口に着けるヤツがいるよ」「酸素ボンベか。見たことはあるな。確か、潜水力級だったか、あれが流用出来るな」

艦娘側も深海棲艦側も潜水艦がどんなものかは私は知らないが、少なくとも摩耶は知っている様子。もしかしたら、死骸からパーツを取る際に艤装を見たのかもしれない。

「あと……水上機が使える……結構多め……」

「魚雷も使ってたよ」

「水上機……瑞雲みたいなヤツか。それなら少しは触ったことあるぜ。大丈夫だ。魚雷なんてアホほど流れてくるから問題ない」

魚雷は不発弾が、水上機は撃ち漏らしがちよくちよく流れ着いてくるらしく、その分解をやるが多かつたらしい。それなら武装はほぼ修復出来る。

だが、ここで話が変わる。

「大きな主砲も持ってたよ。三連装砲が2つ！」

詰め込みすぎでは？

摩耶も頭を抱えている。大型の主砲が扱える潜水艦なんて艦娘ではあり得ない。普通なら航空戦艦という艦種になるはずだ。そちらだったとしてもそれでも魚雷は使えなかったはず。潜水できる航空戦艦と考えた方がいいか。

深海棲艦は例外が多過ぎる。本来の艦種を無視した動きが出来過ぎる。そのうち艦載機を飛ばす駆逐艦でも出てくるのでは無いだろうか。

「その艤装を、2人で使ってたんだよ」

「1つの艤装を2人でつてことか？」

「うん……そう」

これも知らないタイプである。普通、艤装は1人1つ。私だつてそうだし、摩耶と雷だつてそうだ。双子棲姫と呼ばれているだけあり、

全てが2人で1つである。そんなタイプの深海棲艦、現在発見されているものだと片手に入るほどしかないそうだ。

むしろこれが一番の難関だろう。1つの艦装を2人で使えるように調整するというのは前例が無いことだ。さらにいえば、小慣れているものですら首を傾げるものを、工作艦でもない摩耶が作り上げる必要がある。

「かぁーっ！ 聞いただけで難しいのがわかるぜ」

「でも、マヤならやれるよね？」

「煽んなクソ。でもやってやるよ。お前らがあたしを頼るつてんなら、ちゃんと応えてやらあな」

この施設に居座るに当たり、頻繁に艦装のメンテナンスをしてきた摩耶だが、それでも当然初めてのことに。しかも、ゼロから艦装を作るようなものだ。簡単に行くようなことではないことは誰しもわかっている。強請^{ねだ}っているクロだつてわかっているはずだ。

「何は無くとも、まずは流れ着いてくるのを待たなくちゃならねえ。こんないい天気の時にはよっぽどな事がない限りは流れてこないから、次の嵐の時から始めるぞ」

「あーい！ 私達もめっちゃくちや頑張るから！ ね、姉貴！」

「……うん、手伝うよ……私達のことだから……ね」

それでも、みんなで力を合わせて艦装を作っていこうと立ち上がった。2人がこの施設を離れることは寂しいが、本人がそれを望んでいるのだから応援しなくては。

心なしか、シロの表情も明るい。クロに至ってはずっとテンションが高い。

「若葉、あまり教えられなかった艦装の整備、ここで嫌ってほど教えてやるから覚悟しとけよ」

「問題ない。若葉も力を貸そう」

「うし、じゃあ嵐が来るまでまずは待機だ」

私達は新たな道を歩き始めた。今までは楽しいながらも目的がない生活だったが、今は違う。1つのことをみんなで達成する喜びを得るために、力を合わせていく。

楽しい毎日が、さらに楽しくなるだろう。

恵みの嵐

深海双子棲姫の艦装を有り合わせの材料で作っていく方向で一致団結した。私、若葉もこの機会に艦装の整備の方法を完全に覚え、摩耶と共に工廠での仕事が出来ようになりたい。

その一步目が深海棲艦の艦装というのはまた難儀なものではあるが、これはこれでやり甲斐がある仕事だ。楽しくなりそうである。

ただし、今は一切の材料がない。先日の鋼材搬入で全て持っけてもらっていつている。そのため、材料集めのためにはまず、次の嵐を待つしかなかった。こればかりは天災であるためどうにもならない。

前回の嵐は、おおよそ2週間前。嵐が起りやすい地域とはいえ周期は微妙にバラバラらしく、早いと2週間で来ることもあれば、1ヶ月以上空くこともある。

「早く嵐来ないかなあ」

「そんなにすぐには……来ないよ」

「そうだけどさあ。姉貴だつてすぐに直したいでしょ？」

「それは……そう……だけど……でも呼んで来るものでもないし……」

艦装が戻ってくる日が待ち切れず、事あるごとに外を眺めているクロ。外は雲ひとつない晴天。嵐は遠すぎるほどに思える。待つていても来るものじゃない。

シロがその辺りはどうにか言いくるめようとしているようだが、なかなか話を聞かないようである。楽しみなのは仕方ないだろう。とはいえ、私達は未だに嵐に対しての嫌悪感や苦手意識は残ったままだ。来ないのなら来ないでほしい。

この一件から、クロは摩耶に懐くようになった。早く直したいという気持ちの表れか、簡単な艦装整備すら手伝うようになった。クロが工廠にいるため、シロも近くにいる。艦装の整備は遠目に見ているだけだが、居心地は良さそうだった。

そこから嵐が来たのはちようど1週間後。

私がここに来て初めて知った嵐よりも大きな嵐。施設そのものが少し揺れるほどにまで強い風と、雨戸に叩きつけられる雨。そして雷すら鳴っていた。私は激しい嫌悪感を覚え、雷は怯えて私の部屋にやってくる。ここまで激しいものだど、摩耶も寝付きが悪くなるらしく、前回と変わらず3人で眠ることに。

「これはダメ……ダメね……すごく怖いわ……」

「ああ……これはダメだ……最悪な思い出が蘇る」

「まあ……こうときは頼ればいいぜ。あたしも正直助かるしな……」

私が酷い目に遭った荒天の戦いは、これくらいの酷い嵐だった。嫌悪感は激しくなる一方で、イライラが募る。

それをどうにかしてくれるのが摩耶だ。私と雷の頭を撫でながら、少なくとも私達が眠りにつくまでは起きていてくれる。それだけでも嫌悪感が和らいでいくように思えた。仲間に裏切られて見捨てられた私には、ちゃんとした仲間の温もりが必要なのだど改めて実感。

「クロは喜んでたぜ。明日が楽しみつつって早々に寝やがった。遠足前のガキかよつての」

「子供だろう。見た目からして」

「そりやそうか」

私達とは逆に、待ち望んでいた嵐がついに来たことに大喜びだったクロ。シロはその様子をぼんやりと眺めているだけだったが、妹が喜んでいるところを見て高揚しない姉はいない。ほんの少し微笑んでいた。シロ自身も嵐は待ち望んでいたのかも。

「クロのあの元気さは羨ましいわ……」

「ありやあな、元気つつーか、能天気つつーか」

私もあれは少し羨ましい。艦装を直すと決めてから、一度も落ち込んだ態度を見たことがないほどだ。浮き沈みが激しいかもしれないが、まず沈まないのなら関係ない。

「明日は前より忙しくなるな」

「……ああ。まずこれ乗り越えないといけないのが辛い」

「それはまあどうにかしてくれ」

前回と同じように、摩耶に引き寄せられる。これだけで快眠出来るのだからありがたい。雷も安心しきった様子で摩耶に抱きついている。なんだかんだ摩耶には頼りっぱなしだ。

翌朝、全員が作業着で集合。この1週間でシロとクロのための作業着も届き、準備万端。クロは人一倍元気であった。

2人は艀装が無いため、飛鳥医師と同様に非力。下手をしなくても飛鳥医師よりも物は運ばない。そういうものは私達艦娘組が運ぶため、前回と同じく二手に分かれての作業となる。

「私はマヤと行く!」

「……クロちゃんと一緒に……」

「わかったわかった。センス、あたしが2人を引き受ける。ちょうど3人ずつに分けられるだろ」

「ああ、2人は任せた」

クロが摩耶に懐いているため、深海双子棲姫の2人は摩耶と行動。今回も私は雷と共に行動する。以前と違うのは、そこに飛鳥医師が加わったこと。この中で一番の経験者が一緒なので心強い。

「昨日ほどの嵐だと、相当な量が流れ着いてきているだろう。2人に運搬は任せることになってしまうが、僕もなるべく手伝う」

「いいのよ! 私に頼ってちょうだい! たまの艀装だもの、いっばい運ぶわ!」

私も頷く。こういうものは適材適所。物運びは艀装装備の私達の仕事だ。飛鳥医師には万が一の時にいてもらう必要があるし、緊急時に適切な指示を出せるのは間違いなく飛鳥医師だ。私だと混乱してしまう可能性がある。

「早速ね。こんな近くに落ちてるのは久しぶりよ」

少し歩いただけで物が大量に落ちてている。何処かで戦闘があつたのではないかと思えるほどの量であり、この時点で1回施設に戻らなくてはいけないほどである。大物は無かったが、小物が固まっている。

この中から使えるものがあるかどうかは、今の私にはまだわからない。

いい。こういう小さなものでも後々で使えたりするのだから、綺麗にするのも込みで全部回収しなくては。

「深海棲艦の艦装もそれなりにあるな」

ここまで多いと深海棲艦の艦装も数多く流れ着いている。流石に無傷のものはないが。深海棲艦の死骸もあるかもしれないと思っていたが、今のところまだ見つかっていない。摩耶達の方では見つかっていないかもしれないが。

「今日は特に多いな……。近くで大きな戦闘でもあったか」

「来栖提督から何か聞いてないのか？」

「そういった連絡は来ていないな」

飛鳥医師の言う通り、私が一度体験した嵐の後の清掃よりも格段にゴミが多い。掃除のしがいがあるというものだが、こうも多いという勘繰ってしまう。

何でも、私を救出してくれた時もこれくらいだったらしい。そうすると、何処かで大きな戦いがあったと思うのもわかる。

私にとっては、未だに吹っ切れることのできない嫌な思い出。嵐のたびにあの最悪な体験を思い出し、嫌悪感に苛まれる。笑い話には絶対出来ない経験。

私の時と同じくらいの規模と言われると、もしかしたら、また私のように犠牲になった艦娘がいるのではないかと勘繰ってしまう。

「若葉、辛いのなら休むか？」

「後片付けは1日でやらなくちゃいけないわけじゃないんだもの！ 体調悪いならお休みしなくちゃ！」

飛鳥医師と雷にすぐにフォロワーされる。思ったより顔と態度に出やすいらしい。その辺りはもう少し何とかせねば。

「大丈夫だ。嫌なことを思い出しただけ」

「そっか……。若葉はちゃんと覚えてるんだもんね。だったら尚のこと私に頼っていいのよ！」

作業中で汚れてはいるものの、そんなこと関係なく雷が手を握ってくれた。摩耶と一緒に寝てもらった時のような安心感が得られる。黒く淀んだ頭の中に光が射すような温かさ。

「雷、頼らせてもらう」

「任せて！ これを機にお姉ちゃんって呼んでもらうからね！」

「それはない」

まだ諦めていなかったのか。思わず苦笑してしまった。飛鳥医師ですらほんのり微笑んでいるように見えた。

歩いてはゴミを見つけ、そのたびに施設に運び入れを繰り返す。最初に飛鳥医師が言っていた通り、相当な量が流れ着いている。それが宝の山になりかねないのだから、今回は意気込みが違う。

工場でちようど摩耶達と合流したタイミングがあったが、常にクロは満面の笑み。これが自分の艤装になるかとも思い、どんなものでも、それが例え使い物にならないゴミでも、全てがお宝に見えているようだ。子供がたわいないものを蒐集するかの如く、何でもかんでも拾っては工廠に運んでいる。

それを何度も繰り返し、小一時間ほど経過。浜辺はまだ半分も清掃出来ていないが、既に前回の清掃と同じほどには拾ったものが貯まっていた。たぐらいつきに、事件が起こる。

「あ、また大物がありそうね」

雷が指差す方、遠目でも大きいものとわかる。以前見つけた深海棲艦の艤装くらしいの大きさのものだ。主機の部分だったりしたら、クロが喜ぶだろう。

だが、それを見て飛鳥医師の表情が一気に変わる。

「嘘だろ……また流れ着いたのか!？」

すぐに駆け出した。つまりそういうことなのだろう。私達もすぐに追う。

「くそ、火傷が酷い！ 応急処置が難しいぞ！」

そこにあつたのは、どう見ても艦娘であつた。即座に飛鳥医師が寄り、意識があるか、息があるか、命があるかを調べる。このタイミで見つけたということは、下手をしたら一晩の間ここに放置されていた可能性がある。

見た感じ、死の寸前と思えるほどの重傷。特に酷いのは全身を焼いている大火傷。制服も意味がないほどになり、私は腹だけだったらし

いが、この艦娘は顔の半分が火傷を負っており、焼け爛れてしまっている。

「おい！… おい！… 意識はあるか！」

返事が無い。気絶しているのか、それとも……いや、考えないことにする。私が生きていたのだ。まだ死んでいない。

火傷になるべく触れないように脈を測りながら、今ここで出来る限りの応急処置を施す。火傷に対して出来ることは難しいため骨折などを探るが、そういった怪我は確認出来ない様子。挟られたような痕も無く、とにかく全身の火傷が厳しい。これだと後遺症が残るレベルである。

「脈はあるが小さい！… だが身体に熱も感じる！… すぐに運ぶぞ！」

「若葉！… 艀装持つて！」

「了解」

傷付いた艦娘は雷が抱え上げ、私はおそらくこの艦娘の物であろう艀装の残骸を持つ。この状態で大急ぎで運ぶこととなった。

飛鳥医師は雷に運ばれる艦娘に対してずっと声をかけ続けている。これで意識を取り戻してくれば御の字。

「……あ……あつ……い……い……」

意識を取り戻したというよりは、謔言のように呟いたのが聞こえた。少なくとも生きていることは確認出来た。言葉が話せないわけでもない。それだけは安心したが、予断を許さない状況であるのは変わらない。

「しに……たくない……こんなの……」

「必ず助ける！… もう少しの辛抱だ！… どうか、どうか耐えてくれ！」

悲痛な謔言を聞き、心が抉られるようだった。もしかしたら私もこういう感じだったのかもしれない。あの時は視界がぼやけていたし、おそらく飛鳥医師であろう人に駆け寄せられた時に意識を失ったため、自分では覚えていない。

とにかく、この艦娘は死んではいけない。今の謔言……『こんなの』という言葉に全てが込められていた。

おそらく、私と同じだ。

捨て駒、弾除け、囹。最悪な艦娘運用に巻き込まれたもの。いくら私達が生体兵器だとしても、こんなのは酷すぎる。

先程の危惧が当たってしまった。二度と現れてはいけない捨て駒の艦娘がまた流れ着いてしまった。

「この艦娘は死んじやいけない」

「当然だ！ 絶対に死なせない！」

施設が見えてきた。ここまでの道程がとてつもなく長く感じた。その間に、この艦娘が息絶えてしまいそうで不安だった。

私は運んだ艀装を工廠に運び、自分の艀装も適当に置いた後、そのまま処置室へ向かった。ちようど雷が慎重にベッドに寝かせるところだった。

「若葉にも手伝わせてくれ。この艦娘は、若葉と一緒にだと思う。だから、若葉の手でも救いたい。頼む」

「指示通りに動け！ この場で文句を言うな！ 言いたいことがあるのなら後でさんざん聞いてやる！ 今はこの子を助けることに集中するぞ！」

「了解だ」

この頃には手も震えていなかった。救いたいという気持ちでいっぱいだった。飛鳥医師の意志が、心の底から理解出来た瞬間だった。

素人が手伝ったところで、逆に足手纏いになるかもしれない。それでも、何かしてあげたかった。治療したことで恨まれるかもしれない。死を望まれるかもしれない。だとしても、どうにかしてあげたかった。

この世界はこんなに楽しいと知ってほしかった。私が今、こうやって生きているのだ。大丈夫、誰だってそう思えるはず。

新たな捨て駒

私、若葉にとっては2度目の嵐の後の浜辺清掃。深海双子棲姫の艦装を有り合わせで作成するためにも、使えるもの使えないもの関係なしに、浜辺に打ち上げられたものを片っ端から拾っている。浜辺の環境保全にも繋がる普段からやっている仕事だ。

そんな中発見したのは、私と同じように大怪我を負った状態で漂着した1人の艦娘。辛うじて息はあるが、全身大火傷を負い、予断を許さない状況。すぐにでも治療しないと死んでしまうため、飛鳥医師は清掃を中断して施術を開始した。

私はその手伝いを自ら志願した。この大怪我を負った艦娘は、おそらく私と同じ境遇。捨て駒として生み出され、囷に使われた結果、この状況になっている。言ってしまうえば私自身だ。

「いいな、若葉。僕の指示を確実に実現してくれ。難しいことは言わない。ただし、絶対に動きを止めるな」

「了解」

医師と患者という関係ではなく、家主と居候という関係でもない。今だけは上司と部下、提督と艦娘の関係になる。飛鳥医師の指示は絶対。否定も疑問もなく、言われた通りに身体を動かせばいい。

今の私は敵を殺すための生体兵器ではなく、人を生かすためのロボットだ。それでこの艦娘を助けられるのなら、私は幾らでも自分の意思を捨てよう。

「よし、長丁場になるから覚悟しろ」

「ああ、若葉は24時間働ける。大丈夫だ」

「その言葉、今回だけは頼りにさせてもらう」

事実、その施術はそれから十数時間にも及ぶ大手術となった。

後から知ったが、私の時はそれ以上だったらしく、歴代1位。今回はこれでも摩耶の時よりは時間がかかっていないそうだ。四肢が一部欠損しているよりはマシということなのかもしれない。

全てが終わった時、外はもう暗かった。昼食も摂らず、夕食の時間

も大きく越え、グツタリとした状態で処置室から出る。慣れていない私はともかく、飛鳥医師も疲労困憊。シロとクロを施設に運び込むときは違う、精神的な疲れで頭が痛くなりそうだった。

「先生、若葉、さっきの子は!？」

処置室の前でみんなが待っていた。特に雷は一緒に発見したため、その結果が早く知りたかったようだ。幸いみんな夕食後だったようで、初めて浜辺の清掃をしたクロは疲れでうつらうつらとしている。逆にシロは、処置室の中をジッと見つめていた。

「一命は取り留めた……ギリギリだがな」

「よかった……」

扉を開けたままにし、処置した艦娘をベッドごと運ぶ。このまま医務室で機械に繋ぎ、経過観察となる。これも私が受けた処置と同じ。むしろ、みんな同じことをしているので、誰もが疑問に思わない。

「全身包帯だ。顔や頭まで巻いてある」

「……この誰とも違うよ……匂いがそこまで強くない……でも……全身にある。……皮膚……かな」

さすがシロ、勘付くのが早い。

今回の処置は全て火傷により爛れた皮膚の治療が大半だった。骨や内臓に異常が無かったのは幸いだったが、とにかく火傷が酷かった。その影響範囲が、身体の6割。顔の半分、胴はほぼ全て、腕や脚も8割方が爛れ、髪も半分は焼け焦げ抜け落ちているという酷い状態。さらには眼。顔が半分焼かれたことで、片目がダメになってしまった。

シロのいう匂いがそこまで強くないというのは、眼球以外は表面上の施術だったからだろう。中身はしっかり艦娘のままである。

その施術の様子をずっと見るようになったのだが、飛鳥医師の手元が見えないほどに手早く、言われた通りに物を用意すると、即座に次の物を頼まれる。終わった時の疲労困憊もわかるというものだ。

「ほぼ全身の皮膚と髪の毛の半分、あとは左目を移植した。今までの経験があるから移植自体は成功しているとは思う。面積が大きかったから、保管していた皮膚の大部分を使うことになったがな。眼球も1つ

だけ残っていてよかった」

「目か……あたしと同じだな。なら眼帯も用意してやった方がいいか？」

「かもしれない。摩耶と同じように見え方が違くと訴える可能性はあり得る」

皮膚は摩耶以外の全員、目は摩耶で施術経験済みだったため、方法を模索しながらの施術にはならなかった。確証を既に得られているため、躊躇いもない。

それがあつたために比較的早く終われたのだとか。これだけの時間がかかっても早く終われたとはこれ如何に。下手をしたら日を跨ぐほどのことになっていたのかもしれない。

「あとはこの子が目を覚ますことだ。数値としては異常は無いが、時間がかかるかもしれない。若葉の時と同様、3週間コースを視野に入れておこう」

「なら私がちゃんとお世話するわね！でも、身体を拭くことは出来るのかしら……」

「少し難しいかもしれないが、包帯の交換は毎日頼む。全身だから消費も激しいな。すぐに注文しておこう」

医務室に到着し、すぐに機械を繋いでいく。ちゃんと脈があることが画面に現れるので安心。全身包帯で巻かれたミイラのような状態になってしまっているが、身体は安定しており、息をしているのも胸が上下していることで判断できる。

目を覚ますまではここで安静にしてもらおう。この艦娘の身の回りの世話は、相変わらず雷がするそうだ。これも私の時と同じ。

「ふう……さすがに疲れた。これで安定したはずだ。若葉、少し遅いが夕食にしよう」

「ああ。若葉も腹が減った」
「すぐに準備するわ。少しだけ待ってて」

処置自体はこれで完了。あとはこの艦娘次第である。息があるのならいつか目を覚ますだろう。私達はそれをゆっくり待つこととなる。

施術が終わるまで待ったことでクロの眠気が限界を迎え、シロと一緒に自室に戻っていった。雷が私達のための夕食を用意してくれる間、摩耶にも先程の艦娘のことを伝える。

「あの怪我人の艦娘は三日月。睦月型だ」

「睦月型……文月達の姉妹か」

「ああ、10番艦だからあの4人の妹だな」

駆逐艦三日月。おそらく私と同じ境遇で漂着した艦娘。火傷のせいで見るも無惨な姿にされてしまっていたが、その姿を知っていた飛鳥医師が、しっかりと怪我をする前の姿に戻している。使ったものは深海棲艦のパーツではあるが、私達と同じように五体満足の艦娘としての姿は取り戻せているだろう。

とはいえ、いくつかは本来の姿からかけ離れてしまう部分はあったという。そのうちの1つが、髪。

「残っていた髪が、戦艦夕級のものしか無かった。長さは同じにできなかったが、白髪になってしまったんだ。ル級の方なら同じ黒髪だから違和感が無かっただろうが……」

「それはキツイな……だけど、そうしないと酷かったんだろ？」
「頭皮が焼け爛れていたからな。二度と髪が生えないほどの火傷だ。男ならいつそ全て剃るとか出来るが、相手は女で、しかも子供だ。白髪よりも苦痛に思えるだろう。それに、髪ならいくらでも染められる」

頭の半分が完全に禿げ上がることになってしまう。こればかりは苦痛であろう。私はこの飛鳥医師の判断は正解だと思っている。

「眼球は何が残ってたんだっけか。あたしはネ級だったが」

「若葉の腕と同じ、駆逐棲姫だ。これで手持ちが無くなった。次に目に傷がついたものに来られると、治療が出来ない」

「次のことは今は考えないようにするとして、今回残っててよかったじゃねえかよ。見えないよりは全然マシだぜ」

確かに、片方だけでも失明してしまうと、今後の生活が途端に厳しくなる。距離感が掴めないというのは厄介だろう。摩耶は眼帯で片

目を使つてはいないものの、やはり両目が見えた方がいいという。

代償はオッドアイ化。そうでなければ義眼が入れられることになつただろう。私としては、見えている方がいいとは思ふ。

「結果的に、この中で一番、外見に影響が出てしまった。内面に怪我が無かつた分、外傷が激しすぎる。顔にも傷が出来てしまったのが本当に申し訳ない……」

「顔……か……」

その施術は私も見ていた。顔の左側半分、辛うじて右目にはかからず、唇を綺麗に避けた形での火傷の治療は、想像を絶するものだった。薄く、薄く、爛れてしまった肌を切除し、代わりとなる深海棲艦の皮膚を移植した。

そのせいで、今の三日月の顔には、斜めに走る大きな傷が出来てしまつている。最初は正面の皮膚を全て剥がすことも考えたらしいが、傷付いていない肌を傷付ける方が負担が大きくなるとして控えていた。

健康な部分はそのままで、が本人に負担がかかりづらい一番の手段のはずだ。

「治療する手段さえ手に入れば、最優先で三日月の顔を治そうと思う。構わないか？」

「おう、あたしは文句無え。若葉は？」

「答えるまでも無い」

腕が深海棲艦そのものである私や、脚が深海棲艦そのものである摩耶よりも継ぎ接ぎが目立つ身体の三日月は、いの一に治療される必要があるだろう。

「私も大賛成！ 女の子の顔に傷なんてダメよ！」

私達の夕食の準備を終えた雷が、料理を私達の前に並べながら会話に加わる。調理しながらもこちらの話は全て聞いていたようだ。

「でも、なんであんな大怪我で流れ着いたのかしら。摩耶さんみたいなドロップ艦？」

「可能性が高いのはそれだとは思ふが」

「……三日月はおそらく、若葉と同じ境遇だ」

雷と摩耶がビクンと震える。私の境遇は既に皆が知っていること。つまり、三日月も捨て駒にされた艦娘であると私は伝えた。

断言するにはまだ早いかもしれない。だが、どう考えても同じだった。真意は三日月が目を覚ましてから聞くことになるが、あの謔言で私は確信している。

「……捨て駒かよ」

「酷い……酷すぎるわ。若葉だってあんなだったのに、三日月まで……」

「このことは三日月が目覚め次第、話を聞き、来栖に伝える。若葉と三日月が同じ鎮守府で生み出されたかどうかはまだわからないが、同じである場合は常習犯だ」

そんな非人道的な行いを常習的に行なっているというのなら、どうかしてでも罰してもらわなくてはいけない。私と三日月は運が良かっただけで、他にはもつと犠牲者はいるのかもしれない。

「……艦娘の敵は深海棲艦だけだと思っていた」

「普通はそうだろうな。でも、大分揺らいじまってる」

「シロとクロみたいな深海棲艦もいるんだもの。一括りに敵って言いえないわよね。逆に、そんな鎮守府があるっていうし、よっほどその方が私達の敵よ」

生み出された時に、艦娘の敵は深海棲艦であり、人間を守るために殲滅するのだと身体に刻まれた。だが今はどうだ。その深海棲艦と共に生き、身体の一部も深海棲艦となり、人間のやり方に憎悪している。

本当の敵は何だ。私達は何と戦うべきなのだ。

深海棲艦か。それとも、人間か。

「今はその辺りは考えない方がいい。結論を出すには早計だ」

「……だな。今考えるのは2つ。三日月が起きてからのことと、シロとクロの機装だ」

悶々とするのはあるが、今は一旦切り替えていく。今後のことを考えていこう。摩耶のいう2つのことが、今の私達の優先課題である。

「雷、摩耶、僕と若葉が施術している間、何かあったか？」

「何かって言うと特別なことは無かったが、その間も浜辺の清掃は続けたぜ。工廠に拾ったモンは全部置いてある。大物もいくつか見つけてるから、明日からはそれを分解していくつもりだ」

「それでもやっぱりいっぱいあって、まだ掃除は終わってないの。明日も続けていくわ」

私達が抜けたことで終わらなかったというわけではない量のゴミが流れ着いていたようだ。それほどの大嵐であることは私も理解している。また、今回は特に多かったそうだ。

「三日月の件を聞いてたから一通りザツと浜辺を見て回ったが、深海棲艦の死骸は上がってなかったぜ。三日月が上がったのは、運が良かったのかもしれない」

「そうか、わかった。ありがとう。明日も引き続き頼む」

「おう、まずは最低限、主機の部分だけは作ってやりたいからな」
そうすれば掃除の戦力も増えると、摩耶が少しニヤつく。本人達が希望するのだから、今より一層働いてもらうのだと。クロはやる気満々だったので、最優先は主機になりそうだ。そうなれば、私達と同じように重いものを運べるようになる。

「さ、食べちゃって！ 今日早く寝た方がいいわ！」

「ああ、そうだな。早く片付けなくては」

今日はここまで。次のことは明日以降に考えることにしよう。

新たな捨て駒、三日月。私と同じ境遇の艦娘は、この世界をどう思うのだろう。少なくとも私は、この施設に拾われたおかげで『楽しく生きる』ことが出来ている。ならば、三日月も同じようになってほしい。

この世界は、楽しいことで満ち溢れているはずなのだ。

2つの仕事

浜辺に漂着した艦娘、三日月の治療が完了した。

身体の大部分が火傷を負っていたため、それを治療するために保管してあった深海棲艦の皮膚を大部分を消費。さらには焼けたために失明してしまった左目も移植したことにより、目が覚めれば五体満足という状態に。この施設に住まわせてもらっている他の艦娘と同様、継ぎ接ぎの者としての復活となる。本人がそれを良しとするかは、目を覚ましてから。

三日月が目を覚ますまで、見込みで3週間。それまでは私、若葉の時と同じように、雷が身の回りの世話をする。世話といっても、定期的に全身に巻かれた包帯を交換し、身体を清潔に保つことのみ。当然だが食事は出来ず、栄養は点滴で送られることになる。その辺りの管理も雷が行なうとのこと。

「雷、若葉も何かあれば手伝う」

「ありがとう。1人だと難しいこともあるから、手伝ってもらえるのは嬉しいわ」

私の見立てでは、三日月は私と同じように捨て駒として生み出されている。同じ境遇のためか、どうしても放っておけなかった。目が覚めた後も、いろいろな感情に振り回されることになるだろう。

私に通ってきた道を、同じように歩けるかは定かではない。私には私の、三日月には三日月のやり方、考え方がある。なるべくなら、今までのことを忘れて、ここで楽しく生きてもらいたい。

翌日からは、深海双子棲姫の艦装作成と、目覚めない三日月の介護の両立となった。とはいえ役割分担は出来ており、三日月の方は飛鳥医師と雷が、艦装の方は私と摩耶が担当する。

クロは自分のことに繋がっているため勿論艦装側。シロはクロから離れないので艦装側。人数に差が出来たため、余裕があるときは私
が三日月側も受け持つ。手伝うとも言ったわけだし。

基本的には艦装作成がメイン。三日月の介護で私の手が必要なと

きは、包帯を解いて身体を拭くときくらいだ。検査や点滴の交換などは2人いれば十分に賄えており、雷はこの仕事に加えて家事もこなしている。

「つーわけで、集まった艀装から使えそうなモン探すぞ。深海棲艦の艀装も結構あったから、まずは主機の部分だ」

昨日終わらなかった浜辺の清掃を完了させ、工廠に積まれた拾ったもの達を臨む。それなりに形が残ったものも多くあり、何かしらに使えそうな部分がありそうだった。これだけの量を見ると、艦娘何人か分の艀装には出来そう。

いの一番に作りたいのは、とにかく主機。深海棲艦の艀装が艦娘と同じ形で接続出来るかはわからないが、シロがいう限りでは艦娘の艀装は使えないとのこと。

「主機って、艀装動かすところのこと？」

「ああ。つっても、あたしらはお前らの艀装がどんなだったかも知らねえ。絵とか写真とかがありやいいんだが」

「……絵は……描けないね」

「そういうことやったことないからわからないね」

この辺りは文化の違いだろう。絵や写真などは深海棲艦には普及していないようで、自分の艀装をそういつた形で表現することが出来ない。何を装備していたかも、言葉では聞いたが具体的なことは何も聞いていない。

「今はとりあえず、さっき言った通り使えそうなモンを探すぞ。バラし方は教えてやるから、手分けしてやっていこうな」

何はともあれ、艀装としてはバラしていかなくてはいけない。壊れた部分はゴミとし、それ以外の部分は残す。その中から取捨選択をして、艀装としていく。

私の艀装もそのように作られたそうだ。元々主機の部分がある程度残っていてくれたおかげで、その周りにパーツを継ぎ足していく形で増設し、今の形となった。だから本来の駆逐艦若葉の艀装とは似ても似つかぬ形状になっているが、主機はそのままであるおかげで稼働は同じ。

早速廃材をバラしていく。私もほとんどやったことがないため、シロとクロと同様、摩耶からやり方を教わりながらの作業。

艦娘の艀装は接合面がわかりやすいが、深海棲艦の艀装はそういったところが見えづらくされている。ネジで接合されているわけでもなく、溶接されているわけでもなく、未知の金属が1枚で作られているような不思議な構造。

だが、構造がわかると外側が外せたりするらしい。少しコツはいるが、摩耶に言われた通りにやってみると、ガコンと音を立てて外装が剥がれた。同じことを逆再生するようにすれば、剥がれた外装は元通り。実は艦娘の艀装よりも分解しやすいのかもしれない。

「おう、そうそう。そんな感じだ。深海棲艦の艀装は大体そんな感じでいける」

「なるほど、了解した」

一度わかってしまえば何とかなるもので、初心者の中でも次々と分解することが出来た。それが何処のパーツからわからないが、似たようなパーツは多い。その辺りは摩耶に分別してもらおうことにする。

「こういうことだよね」

「ああ、器用だなクロ」

クロも一度聞いたら手際よく分解していく。深海棲艦の艀装だけではなく、艦娘の艀装も次々とバラしていった。主機はどうしても深海棲艦の艀装で無ければならないだろうが、その周囲に組み込むパーツは艦娘のものでも大丈夫だろう。私の艀装にも少しだけだが深海の物が組み込まれているらしいし。

「姉貴、こういうの苦手だよね」

「……グスン」

シロだけはなかなかうまく行かず、四苦八苦していた。どうもこういう作業は苦手な様子。

「シロ、作業を中断して、あたしらがバラしたパーツを分別してくれねえか。分け方はお前の感性に任せる」

「……いいの？」

「適材適所だ。お前は多分、こういうことの方が向いてる」

摩耶に言われた通り、3人がバラした艦装のパーツを、シロの感性のままに分類していった。私にはその法則性はわからないが、何かしら共通点がある分け方なのだろう。

2人で1つの深海棲艦である深海双子棲姫だが、個人個人では意外と違いがある。常に2人一緒に行動していても、出来ることはどちらかといえば真逆。クロは肉体労働が得意で、シロは頭脳労働が得意。だからこそ関係が成立しているのだろう。お互いの短所を補い、長所を伸ばしている。それで1つなのだから、ある意味隙がない。

それを察した摩耶が、適材適所と称して役割を分担した。そのおかげで効率は一層に上がり、またパーツの分別のおかげでこの後からやる事が手早く行なえる。

「多分だけど……これは主機のパーツ……これは武装との接続パーツ……これは武装のパーツ……」

そういったことが全くわからないシロが、直感的に分別したパーツ群。今言っていた通り、おそらくこういう用途で使われているという考えで分けたいらしい。

「共通点無さそうに見えるんだが」

「これは……この辺りが……それっぼい」

「姉貴のそういうの、結構当たるよ」

いつになくフワフワした言動ではあるが、これが後から効いてくる。おそらくこの直感、全て当たっている。

「若葉、艦娘の艦装の方も大丈夫か？」

「大丈夫。深海棲艦のものより簡単だ」

私は同時に三日月の艦装の修復もするつもりだった。今回のパーツ取りで、深海双子棲姫の艦装に使わないパーツがあったら、三日月の艦装に使いたいと思っている。

打ち上げられていた三日月の艦装は、主機の部分が半分近く破壊されていた。そのため、こちらも主機の部分からの修理が必要。私達と同じように継ぎ接ぎの艦装になるが、無いよりは全然マシだ。

最初は雑多に積み上げられ、ゴミのように無造作に置かれていた艦装群も、4人がかりで数時間作業し続けることで、全てがパーツ単位

にまで分解された。それはそれで場所を取っているが。

シロの直感で分類されているのは深海棲艦の艦装のみ。艦娘の艦装は摩耶が教えてくれた通りに分類し、今後に役立てられるようにした。

だが、おそらくこれだけでは深海双子棲姫の艦装を作ることは出来ないだろう。

「バラすのは早いんだ。組むのは数倍時間がかかる」

「ここからが長いってこと？」

「おう。まずはお前らに合うものがあるかを探さなくちやなんねえからな」

これだけパーツがあったとしても、それが2人に合うパーツかはわからない。何せ、今回は接続部分から作らなくてはいけない。そういえば、接続自体はどうしていたのだろう。

「艦装の接続、どうやってたんだ」

「あ、そういえば言っでなかった。私達は、背中にくつついてたんだよ。で、艦装自体は私達から離れてる感じ」

「遠隔操作……みたいなもの。若葉のみたいな……」

つまり、艦装が身体から離れている。私の場合には肌に接する部分すら存在しない、自分でもよくわからない仕様なために参考にはならなそうだが、2人はそれと似たようなものようだ。遠隔操作するためのパーツが背中側にあり、それでコントロールするため、本人はかなり身軽。

あとは海中で行動するためのマスク。これは海上で行動できる私達には謎の仕様。同じようなものを使う潜水力級よりもかなり小柄なものだったらしいが、それを着けているだけで呼吸が出来たらしい。

「潜水艦に関しては艦娘の方も大概だけだな。なんか背中に着けるだけで、口に何も着けなくても息が出来るんだよ。会話すら出来るって話だ」

「深海棲艦にもそういうのいるね。海の中普通に動いてんの」

私はまだ見たことがないが、潜水艦に関しては艦娘も深海棲艦も似

たようなものなのだろう。

艦娘の潜水艦の艦装のようなものを作ればひとまずはクリアなのでは。そこに遠隔操作の機能を後付けするような。

「そこまで再現出来るかはわからねえけど、最低限前と同じことが出来るようにはしていこうぜ」

「はいー」

本当の長丁場はここから。1日で出来るとは思っていないため、じっくり腰を据えて、確実に進んでいく。シロはともかく、クロもそれには賛成。急いては事を仕損じるともいう。急いでも悪いことしか起こらないだろう。

夕食後に三日月の身体を清潔にするということでも雷に呼ばれる。私もやつてもらったことだ。される側だったために、する側はよくわからないが、手伝えることは手伝いたい。

検査着を脱がせた後、包帯をゆっくり解いていく。拭くのは手慣れている雷に任せ、それ以外を私が受け持つことに。解いた包帯を預かるが、昨日の今日のため、真っ白だった包帯には血が滲んでいた。

「想像はしてたけど……やっぱり痛々しいわね」

「……ああ」

私は施術の現場にいたため、三日月がどういう状態かは知っているが、雷は当然初めて見る。それは痛々しい状態であった。

身体の8割は色素の薄い深海棲艦の色合い。艦娘としての色が残っているのは髪と顔の半分と、腕と脚の一部。あとは背中側が少し。真正面から爆炎を受けたのだろうと想像がつく。顔は左側が焼け爛れていたが、腕は左腕の方が損傷は少ない。おそらく艦装が守ってくれたのだろう。

「でも身体の中は無傷だったのよね？」

「ああ。飛鳥医師が確認している。内臓と骨は無事だったそうだ」

それでも生きていたのは奇跡だと、施術中に飛鳥医師が溢したのを私は聞き逃さなかった。治療を悔やみながらも、心底安心したような、そんな声だった。

「なら、まだ動けるようになるまでは早いわね。やっぱり若葉が一番重傷だったわ」

「自慢が出来ない一番だな……」

話しながらもテキパキと事を済ませていく。傷口を開かないように慎重に拭きながら、合間合間に腕や脚を動かしたりマツサージをしたりする。私の時にもやっていたそうだが、筋肉の硬直を抑えるために強制的に動かしているようだ。これは私も雷の指示の下、お手伝いをした。

これだけ触っても、目を覚ますどころか呻き声一つあげない。所謂昏睡状態。自分から目を覚ますのは当分先なのだろうとわかる。

「こんなに大きな皮膚が保管されていてよかったわ。継ぎ目が少なめで」

「皮膚同士でも継いであるが……正面には見えづらくすると、飛鳥医師が奮闘していた。軽巡ツ級の胴体だそうだ」

小さな皮膚を重ねて重ねてとやっていくと、本当にただのパッチワークになりかねない。見た目が私達以上に不恰好になるのは問題だと、飛鳥医師も大分頭を悩ませた。

その結果が今の状態。胴体の前部分は深海棲艦のモノそのままになっており、横っ腹のところに継ぎ目が来るようになっていた。それが今回の一番時間がかかったところ。私も手伝った場所である。どいう技術を使っているかは眼前で処置しても理解が出来なかった。「……ありがとうツ級さん。おかげで三日月の命が繋がりました」

死んだ命は次の命を繋ぐために使うと飛鳥医師は言っていた。雷もその信念を持っている。だからといって、誰も死んだ命を蔑ろになんてしない。だから御礼を言う。

施術中、飛鳥医師もブツブツと呟いていた。それは、謝罪だった。相手が深海棲艦でも関係ない。

「三日月は……この身体を受け入れてくれるだろうか」

不安はそこに尽きる。目が覚めたときに継ぎ接ぎの身体だったとき、三日月はどう思うだろう。

「大丈夫。きつといい方向に行くわ」

「……そうだな」

こういう時の雷のポジティブさが羨ましい。
私もそれを信じるしかない。いい方向に行くはずだ。

これからの毎日がこの調子になる。艤装完成が先か、三日月の目覚めが先か。

眠り姫

深海双子棲姫の艦装作成と、眠り続ける三日月の介護、2つの仕事を進めていく施設。私、若葉はそのどちらにも参加し、自分の技術力を高めつつも事を成していく。

そもそも、どちらのことにも私は関係していた。深海双子棲姫、シロとクロを拾ってきたのは私だし、三日月はおそらく私と同じ境遇。そのため、自分からどちらにも関わるようにしている。

こうやって働いていることで充足感が得られるため、私は当初より目標である『楽しく生きる』が実行出来ていると思う。この生活は楽しい。誰かのためにもなるし、自分のためにもなる。

このような生活を続けて早2週間。それだけの時間があれば進展がある。

深海双子棲姫の艦装は、どうにかこうにか主機が完成。みんなでバラし、分別した廃材から厳選し、それらしいものがようやく完成した。クロが言っていた通り背中に接続するタイプで、それを2人分。遠隔操作するための本体は受信する基部が出来ているだけなので、完成まではまだまだ遠い。

だが、主機ができたことによりクロとシロが力仕事が出来るようになった。シロはそれでも肉体労働が苦手なようで、その辺りはクロが一任。

「マヤ、ありがとう！ 私達も手伝いやすくなったよ！」

「だな。でも、本当にこんな感じでよかったか？」

「ちよつと大きいけど、動きにくいわけじゃないし大丈夫！」

本来は肩甲骨周辺に貼り付けられるほど薄いものだったらしいが、残念ながらそこまでのものが出来そうになかったため、前から見てもわかるくらいのサイズになってしまっている。それでも動きは阻害せず、むしろクロは気に入ったようだった。

「……クロちゃん……羽が生えたみたいに見えるよ」

「姉貴もね！」

その艤装はさながら、小さな天使の翼。これにより、遠隔操作に加え、海中で移動するための推進力を得る。2週間たつぷり使い、摩耶が頭を捻りながら搾り出した改造案である。

海中でのテストもいい具合に終わった。呼吸をするための艤装が無いため、ちよつと潜つてすぐ帰ってきたが、クロとしてはテンションが上がり切るほどの満足感だったようだ。シロも心なしか嬉しう。

「遠隔操作する方より、出来れば呼吸器を作っておきたいが……今回の件でパーツが落ちてなかったんだよな。こればかりは次の機会を待ってくれ」

「っあーい！」

「うん……ありがとう……マヤ……」

前々から懐いていたクロであったが、今回の件でより一層懐いていた。一步引いた位置から見ていたシロも、今ではクロと同じくらいにまで距離が近い。たまに夜一緒に眠っているほどだとか。その時に今回の艤装の形状も設計したようだ。

「ワカバもありがとね！」

「若葉は殆ど何もしていない」

「礼は素直に受け取つとけ。それに、お前も結構いろいろやってくれたろ」

私がやったのは選別後のパーツを洗浄したくらいだ。個数がかかりあったため、艤装作成の方には手が出せなかった。綺麗にしておかないと錆び付いたりして後々使えなくなったりするため、洗浄は大切な作業になる。

「っし、じゃあ今日はこの辺にしとくか。明日からは遠隔操作の艤装な」

「っあーい！」

「うん……よろしく……ね」

艤装作成は順調だ。

三日月の方は、2週間経過してもまだ目を覚ましていない。その間

も常に清潔にし続け、食事が取れなくても衰弱しないように栄養を投与し続けている。

これを欠かした場合、三日月の命に関わってしまうため、飛鳥医師と雷が毎日管理している。掃除や洗浄は雷が、医療的なことは全て飛鳥医師が執り行い、この2週間で悪いことは起きていない。

「今日も身体を拭かないとね」

「ああ、若葉も手馴れてきた」

縫合痕から血が滲むことも無くなり、痕は残っていても痛みが無くなっているくらいにまでは治っているだろう。だからといって乱暴にするわけではないが、最初の方は出来なかつた抱きかかえて起こすことも今なら出来る。

「よつ……と、これでいいか」

「ええ。じゃあ検査着を脱がせて、包帯を解きましょう」

この辺りも慣れたものだ。雷には濡れタオルや消毒を用意してもらい、その間に繋がれた機械を外しつつ手早く脱がしていく。この作業で私も少しくらいは筋力がついたか、支えるのも苦ではない。

「皮膚も定着したな」

「そうね。触った感じも普通の肌よね」

浮いているような感じもなく、シワや傷もない。最初からこういう皮膚だったようにも思える肌触り。

全裸にした状態で雷が細部までしっかりと拭いていく。清潔にしておかなくては、何か違う病気になりかねない。

艦娘も艤装を着けていなければ頑丈な人間だけのため、病気にならなければならない。この施設は飛鳥医師の徹底した管理があるために確率は少ないものの、海の真横という立地条件から何が起こるか分からない。やれることは全てやって、みんな健康に過ごすのがベスト。飛鳥医師もそれを強く推奨している。

「シロやクロとお風呂に入った時に思ったんだけど、深海棲艦の肌って凄いわよね……。潮風に晒されてもベタつかないし、何もしてなくてもスベスベツヤツヤなもの」

「そう……。だな。若葉の腕もそうだが、潮風の嫌な感覚はしない」

「私はお腹だから実感薄いよね。何だかそういうところは素直に羨ましいわ」

三日月に至っては髪も半分。手櫛で梳いても手触りが違う。身体的なことに関しては、深海棲艦は女子の理想を全て持っているのかもしれない。

「はい、おしまい！　じゃあ新しい包帯を……つと」

雷が包帯を取ろうとしたところ、突然固まる。

「どうした？」

「お、起きてる！　三日月起きてる！」

言われて顔を見ると、うつすら目が開いていた。移植された左目からは、摩耶と同じように微かに光が漏れている。

ここで治療を受けてから2週間、ついに目を覚ましてくれた。動揺するも、このまま手を離れたらベッドに思い切り倒れてしまうため、支えたまま面と向かう。

「三日月、意識は？」

「……貴女方は……一体……」

「貴女、近くの浜辺に漂着してたのよ。覚えてない？」

雷の言葉を聞いた後、見る見る内に表情が歪んでいく。

私の時のように走馬灯を見ていたかはわからないが、少なくとも目を覚ました直後には今までの記憶が無かったのだと思う。だが、少しのキツカケで全て思い出してしまった。

「雷、飛鳥医師を連れてきてくれ。若葉は三日月に服を着せておく」

「お願い！　すぐに連れてくるわ！」

血が滲むことは無くなったため、包帯を巻かなくても何とかなるだろう。雷が飛鳥医師を呼んでくるまでに、私が検査着を着せる。

漂着する前のことを思い出したことで、酷く混乱している。無理もない。死の寸前にまで追い込まれていたのだ。それがどういう状況であれ、その時に嫌な経験はしているはずだ。

「わたし、ひっ、私っ」

「大丈夫だ。生きている」

検査着を着せた後は手を握ってやった。この程度で何か変わると

は思えないが、多少は落ち着けるかもしれないと思いつくことは全てやる。

過呼吸気味だったものの、多少は混乱が治まったようだった。人の温もりがあると落ち着けるのは、私も体験済み。どういう形でもいいから、触れられれば安心できる。

「身体は痛くないか？」

「い、痛くは、ありません……え」

混乱して振り乱したせいで、色が変わった髪が視界を横切ったのだろう。本来の自分のものとは真反対の色になってしまった髪を見た途端、握っている手が今まで以上に震えだした。

「な、何これ、髪が……」

「……治療の結果だ」

今はそうとしか言えない。正確な情報を伝えるのは、私ではなく飛鳥医師だ。今はとにかく、落ち着いてもらわなくてはいけない。

「若葉！ 先生連れてきたわ！」

「目を覚ましたと聞いたぞ」

ここで雷が飛鳥医師を連れて医務室に駆け込んでくる。が、それも間違いだった。

「彼はこの施設の家主で」

「いや、いやあああ！ 来るな！ 来るなあ！」

今まで以上に錯乱し、握っているだけではどうにもならないほどに暴れ出してしまった。そのせいで繋がれた機械が千切れ飛ぶように外され、私も殴られるような形に。

だが、痛みは無くなったにしろ、まだ重傷明けの患者だ。これのせいで傷が開いても困る。抱きしめる形でどうにか動きを止めた。

「離して！ 離してえ！」

「飛鳥医師、若葉が話をする。今はすまないが」

「ああ、頼む。最善を尽くすなら、僕は今は必要ない」

物分かりよく医務室から出て行った。雷もそれについていく。

改めて私と三日月の2人きりに。ジタバタと暴れていたが、視界から飛鳥医師が目の前から消えたことで、少しだけ冷静さを取り戻し

た。それでも震えは止まらず、私が常に抱きしめている状態。

「大丈夫だ。ここにお前の敵はいない」

「……」

暴れなくなっただと思えば、今度はだんまり。虚ろな目で虚空を見つめている。情緒不安定になってしまっているようだった。

「お前に何があつたかは何となくだがわかる。多分、若葉と同じだ。だから、若葉の話を聞いてくれ」

話すことはそんなに得意では無いが、三日月には聞いてほしかった。おそらく同じ境遇ということで、仲間がいるとまた落ち着けるはずだ。

見捨てられたのは自分だけではないという、傷の舐め合いのような慰め方ではあるが、今の状態から前進することが出来るのなら何だつてやった方がいい。

「若葉は、とある鎮守府で建造された艦娘だ。今はその鎮守府が何処かもわからないが、とにかく、若葉の生まれは鎮守府だ。そこで若葉は……捨て駒にされた」

捨て駒という言葉に反応した。

「生まれてすぐに戦場に出されて、囿にされたんだ。そこで死にかける怪我を負ってここに流れ着いた」

「……私と……同じ……」

やはり、私と同じ境遇。

生み出されて、すぐに襲撃させられ、何もわからないまま深海棲艦に嬲られる。それを誰も助けてくれない。助けを請っても無視され、錯乱し、余計に傷がつき……そして倒れる。誰も自分に見向きもせず、ボロボロの自分を置いて先に進んでしまう。

過去を振り返ることは今の私には苦行だ。だが、三日月が自分を取り戻すために必要ならば、喜んで話そう。茨の道で傷付く痛みも、三日月の心に響くのなら悪くない痛みだ。

「……私も……同じです……。生み出されて……すぐに出撃させられて……敵からいっぱい攻撃されて……でも仲間は私のこと無視して……！」

「ああ」

「そんな采配が出来る人間は嫌いです。仲間を見捨てる事が出来る艦娘も嫌いです。みんな、みんな嫌い、嫌いです！」

生み出されてからずっと裏切られ続けてきたせいで、世界の全てに嫌悪している状態。こうしているが、私のことも気に入らないかもしれない。同じ境遇の仲間であるとしても、何もかもに憎悪と嫌悪を抱いているのなら。

だから、少しずつでも歩み寄れるように、ずっと手は握り続けた。あちらから振り払おうともしないため、それを維持し続ける。

「治療なんて言っつて、私を実験か何かに使うんです。捨て駒の次は実験動物ですか。人間様は私を都合のいいようにしか使わないんです」

「そんなことはない。彼は、飛鳥医師はお前を生かすために尽力したんだ」

「じゃあ何なんですかこの髪は！ 死にかけの私を良いように弄り回した結果じゃないんですか！」

「違う。この施設ではそういう形でしか治療が出来ないんだ」

錯乱は加速する。髪だけでこれなら、身体を知ったらどうなってしまう。

「ここは鎮守府ではない。だから入渠ドックも無い。艦娘を治療することが難しいんだ。それをどうにかしてくれただぞ」

「自分の都合のためでしょう！ 鎮守府でもないところが艦娘をどうにか出来るわけないんです……から……」

ここでおそらく、私が握っている自分の手に気付いたのだろう。大火傷を治療するために皮膚が移植された手。なるべく傷が残らないように尽力したが、ところどころにはどうしても継ぎ目が存在している。それが目に入ったようだった。

「わ、私の身体、何処まで弄られてるんですか。髪だけじゃ……ない……っ？」

「……見てみればいい」

一番わかりやすい顔を見るため、用意しておいた鏡を渡す。顔の真

ん中を斜めに走る傷を見て、怒り狂っていた三日月は今度は涙を流し始める。

「なんで……なんで私がこんな目に……」

「この施設にいるものはみんな同じだ。何処かしらに傷を持っている。当然、若葉もだ」

「嘘吐かないでください……何処にもないじゃないですか……」

確かに目に見える場所には無い。そんな状態で言っても説得力が無いだろう。

ならばと、私は三日月の前で服を脱ぐ。三日月には奇行に見えたかもしれないが、気にせずに全裸に。

「これでいいか？」

「……っ!?!」

私の身体を見て言葉を失ったようだった。

「私の腕は深海棲艦のものを移植してある。脚の骨も、腹の皮膚もだ。お前と同じようだ。お前ほど見た目に影響がないが」

ここからは飛鳥医師のことと施設のことを説明した。私がここで生活し始めてから、大体1ヶ月ちよつと。それまでに知ったことを全て、口下手ながらも頑張って伝える。同時に、三日月への治療が何なのかも。

三日月は何度も表情を変え、驚き、悲しみ、怒った。だが、少なくとも一度も生きていることに対しての喜びを顔に出すことは無かった。

「若葉はこういう形ででも生きていることに感謝している。ゴミみたいに扱われた過去は拭えないが、今はそれを忘れて楽しく生きることが出来ている」

「……私は若葉さんほど強くありません……うっ……うっ……」

泣きじやくつてしまい、話どころでは無くなってしまった。今はひとまず、落ち着くまで近くにいてあげることが良さそうである。

負の塊

三日月が目を覚ました。しかし、漂着前の経験から、飛鳥医師を拒絶し、全ての人間や艦娘に対して嫌悪感を抱いている。今の三日月は1人に出来ない。せつかく助かった命を棒に振り、自ら死を選んでしまいそうな危うさが感じ取れた。こんなに嫌な世界なら、生きていても意味がないとでも言いそうな、そんな雰囲気。

その三日月は、自分の現状を知り泣きじやくった後、泣き疲れて眠ってしまった。念のため今まで繋がれていた機械をもう一度繋ぎ、横にする。

今は小さく寝息を立てている。この状態なら安定しているように見えるが、また目を覚ましたら先程のように半狂乱で暴れ出すかもしれない。

「飛鳥医師、雷、三日月は寝た」

「……そうか。なら入って大丈夫か」

脱いだ服をしつかりと着込み、外に呼びかける。ずっと医務室の外で待機していた飛鳥医師が再び中へ。雷も浮かない顔で一緒に入ってきた。私と三日月の会話は、外にも聞こえていたはずだ。

「すまない。うまく説明できなかった」

「いや、充分だ。僕が説明したいことは全て話してくれている」

私が三日月に説明したのは私が今まで経験した全てのようなものだが、特に頑張つて伝えたのは、三日月に施された処置とそれを実施した飛鳥医師の意思だ。

命あるものは必ず救うという信念の下、死にたくないと讒言で漏らした三日月を助けるため、ここで出来る全てを使って三日月の命を繋いだ。今は不恰好な継ぎ接ぎだが、いつか必ず元の姿に戻すと言ってくれていることも、ちゃんと伝えている。

「……こんな治療しか出来ない僕の落ち度だ」

「そんなことないわ！ 三日月もいつかわかってくれるはずよ！」

「三日月の身体は必ず元に戻す。必ずだ」

これほどの治療が出来る飛鳥医師でも、材料と技術が無いために艦

娘を艦娘として治療することが出来ない。それをずっと悔やんでいる。

艦娘の身体は人間とは少し違う成分らしい。そのせいで、人工皮膚や人工臓器が作り出すことが出来ないそうさ。飛鳥医師の研究は、専らそれが全てを占めている。

ドックがあれば治療出来るのだから、そんなもの必要ないという者は少なからずいるだろう。だが、こういう緊急時でも治療出来るようになることに意味がある。例えば、何らかの事情によりドックが使えない状況に陥つても、最悪な可能性を回避出来るようになるはずだ。

ふと、私は疑問を抱いた。

「飛鳥医師、この浜辺には、艦娘の素材は流れ着いたりしないのか。深海棲艦の死骸は流れ着くが……」

私達の命を繋ぐための素材はいつも深海棲艦のものばかりだ。だからこうも歪な継ぎ接ぎになってしまう。それが艦娘のものだったらどうだ。縫合痕などは残るかもしれないが、言い方は悪いが色合いとかは正常に見えるだろう。

「……そうであれば苦労しない。艦娘は死体になると海底に沈むようになっているんだ。まず上がってこない。今まで見たことがない」

そういうところが艦娘を生体兵器たらしめる理由。死んだ場合、建造に使った素材の塊という扱いになるが故に、浮かかないのだそうさ。それはそうだろう。重たい鉄の塊を背負っているのだから、沈んでいくに決まっている。それが破壊されても浮かぶことはない。

よって、浜辺に流れ着いている艦娘は、まだ死んでいないか、漂着してから死んだかの2択。そして後者は未だに見つからない。死ぬほどの大怪我で流されてくるなんて、ドロップ艦でない限り本来あり得ないからだ。仲間が救助するのだから。

「……そうか。すまない、バカなことを聞いた」

「いや、疑問に思うのも仕方のないことだ。無理矢理サルベージすれば手元に置けるが、そうで無ければ……いや、これ以上はやめておく」

死んだドロップ艦が流れ着くことも無いらしい。だが、その理由は話してくれなかった。

「話を変えよう。三日月のことが」

「若葉が側にいる」

食い気味に意思を示した。

境遇が同じであり、少ない時間ながらも会話出来た私が最も適役だ
と思う。私は自分の傷も見せているくらいだ。まだ心を開くキツカ
ケになれるだろう。

「わかった。基本は若葉に任せる。雷、サポートしてやってくれ」

「勿論！ 頼ってくれていいんだからね！」

「ああ、頼りにしている」

私はしばらくの間、三日月の側に居続けることにした。艦装作成の
手伝いは少し休ませてもらう。三日月は飛鳥医師に対して最も敵対
心を持っているため、本来飛鳥医師がやるべき医療を私がやること
で、三日月の体調を管理する。明日からは、やろうと考えてもいな
かった看護師としての仕事を請け負うこととなった。

翌朝。日課のランニングから戻り、着替えた後に医務室へ。まだ三
日月は眠ったままだった。目が覚めた時に近くに人がいるとどう思
うかはわからないが、少なくとも私達が仲間であることを認識しても
らいたい。

三日月の他者嫌いは根深すぎるほどだ。だからせめて、私達で緩和
出来ればと思う。

ベッドの横に立つのもどうかと思うので隣に椅子を持ってきて腰
掛ける。無理に起こす必要もないのであるべく音を立てないように。
何をするでもなく隣で目を覚ますのを待つ。これを機に本でも読む
ようにしてみようか。後から飛鳥医師に借りてこよう。

「……………」

と、都合よく三日月が目を覚ます。昨日は泣き疲れて眠り、そのま
ま朝までグッスリである。疲れなどはもう無いだろうか。

身体を起こして目をこすり、周囲を見回すと私と目が合う。

「おはよう三日月」

「……………おはよう……………」

元凶である人間が視界に入ると錯乱するが、艦娘である私がいるくらいではあそこまではならないようだ。私には昨日抵抗が無かつたし、やはり適役。

飛鳥医師にはしばらくの間、医務室には立ち入らないようにしてもらうしかないだろう。なるべく声も聞かせないようにしなくては。

「……目が覚めたら元の身体……ということは無いんですね」
「さすがにな」

冗談で言っているのではなく、本気でそれを求めている。

「それについては時間をくれ。今、飛鳥医師が研究中なんだ」

「人間の研究なんて信用出来ませんよ。どうせ私を実験に使うだけ使って捨てるんです」

頑なに信用しない。起き抜けの昨日と違い、一晚眠ったことにより冷静になってくれてはいたが、しっかりとした口調で文句を言われるので少し心にク。

数々の絶望により情緒不安定になっている三日月。今の感情は怒りと憎しみが強め。昨日は悲しみが強めだった。負の感情にばかり気持ち偏り、心が摩耗している。

「ずっとそこにいるんですか?」

「ああ」

チラリと見られるが、明らかに敵意が垣間見えた。同じ境遇の私でも、今の三日月にとっては全員が敵。信用出来る者はこの世界に誰もいない。

「……監視のつもりですか」

「いや」

ぶっちゃけてしまうと、監視も少しだけある。1人にしたら何をしでかすかわからない。自殺するかもしれないという不安もある。だが、そんな心内はおくびにも出さない。

一緒にいる一番の理由は、単純に三日月と仲良くなりたいたいだけだ。何度も言うように、私と三日月は同じ境遇。傷を舐め合いたいわけではないのだが、私にも同じ愚痴がある。誰も信用出来ないかもしれないが、せめて同じ境遇の私にくらいは心を開いてくれたら嬉しい。

「昨日も言ったろう。若葉も三日月と同じ境遇だ」

「そうですね」

「本当に、生きていてくれてよかった。これを機に、仲良くしたい」
嫌そうな顔をしたのがすぐにわかる。昨日の今日で考えを変えるとは思っていない。だが、私の気持ちは知っておいてもらいたかった。

「今はいい。考える時間は必要だろう」

「いくら考えたって同じです。人間も、艦娘も、誰も信用できません。みんな私を裏切るんです。みんな嫌いです。大嫌いです」

完全に人間不信。これは根気よく接していかなくては。

三日月の気持ちはわかっているつもりだ。私だって、最初に出会った提督に騙されて死にかけている。仲間に見捨てられている。この世の全てを呪いそうだった。だが、今は違う。鎮守府という場所には抵抗があるが、この施設でなら楽しく生きることができている。

三日月にはそれを知ってもらいたい。限られた空間かもしれないが、この敵もない場所なら気を張らずに生きていけるということを。望んで繋いでもらった命を無駄にするのは良くない。

「嫌なことがあるば、若葉に言えばいい」

「ならこの部屋から出て行ってください」

「それは聞けない相談だな」

小さく舌打ちが聞こえたような気がしたが無視。

拒絶されているのはわかるが、それで見捨てたら尚の事人間不信が加速するだろう。構うなど言って本当に構わなかったらやつぱりこいつは、みたいな流れ。どちらを選択しても否定する口実を作れて好感度を下げることが出来るバッドエンドルート。

そうはいかない。三日月には、絶対に私達の事を好きになってもらう。

「朝ご飯を持ってきたわ」

雷が朝食を持って医務室に入ってくる。私だけでは出来ない部分を雷にサポートしてもらおうつもりだが、食事に関しては早速頼ることに。

「あ、ちゃんと自己紹介してなかったわよね。私は雷よ。カミナリじゃないわ。あと、私の傷はここね」

服を捲り上げて、腹の大きな傷を見せる。三日月と同じ、深海棲艦の皮膚。それを見て、三日月は少し息を呑む。

「ここにいる子はみんな、三日月と似たような境遇なのよ。大怪我をしてここに流されてきて、先生に命を繋いでもらったの。私は何にも覚えてないんだけどね」

「……」

「昨日まで点滴だったから、お腹空いてるでしょ。胃がびつくりしないように、少なめだけどお粥を作ってきたわ。さ、食べて食べて」
ベッドに机を設置して、そこに朝食を置いた。三日月は無言だったが、雷の押しが強いので、何も出来ずに準備だけされていく。私相手とはえらい違いである。

そういう意味では、私に対して悪態をつけるくらいは心を開いているのかもしれない。ならば先程の文句も悪くないものに思える。

「熱いから気をつけてね。自分で食べられる？ フーフーする？」

「……放っておいてください」

「それは出来ない相談ね」

ニツコリ笑いながら三日月の真正面を陣取る。これは食べ終わるまで戻らない姿勢。こうまでされたら、三日月も諦めざるを得なかった。小さく溜息をついて、心底嫌そうに雷を見る。そんな視線を気にも留めず、ニコニコしている雷。

最初は食べる気すら無かったのだろうが、ここまでされたら流石の三日月も折れた。

「……自分で食べますから……」

「それならよかったわ。若葉、私達も朝ご飯！」

「ありがとう」

おにぎりを渡される。それを頬張りながらも三日月の側を離れることはない。ただただ側にいるだけ。私達は見捨てないという意思を見せる。

三日月に足りないのは、とにかく仲間の温もりだ。全てが私と同じ

状況であったのなら、話しかけられることもなく、視線に入れられることもなく、ただそこにあるだけの物として扱われたはず。

私達は三日月のことをそんな風には思わない。三日月は仲間、継ぎの仲間だ。その関係自体が継ぎ接ぎのように取って付けたようなものでも、この施設の者は誰もが三日月のことを心配し、常に思っている。まだここに姿を現していない摩耶達だつて。

「……美味しい」

「よかつたわ！ ちょっと薄味かなーって思ったけど、病み上がりにはちようどいいかなつて。食べられそうならお昼からは普通のご飯にするわね。あ、パン派だったりするのかしら。何か食べたいものがあれば言つてね。出来る限りリクエストには応えることにしてるの」

「……好きにしてください……」

「ご飯を食べるといふ行為も初めてのことだろう。ゆつくりとだが確実に食を進め、お粥を完食。最初にこれだけ出来れば上等だ。内臓に傷が無かつたのはこういうところに効いてくる。」

「はい、じゃあ私は食器を片付けるわね。若葉、あとはお願いね」

「ああ」

「それじゃあね三日月。また来るからね。何かあつたら頼つてね！」

食べ終わつた食器を持つて、パタパタと出て行く雷。それを啞然としながら見送る三日月。これだけ嫌いという意思を見せつけても、全く折れることなく接してきた雷を見て、無言で考え始めている。

私はそれを邪魔せず、何もせずに側にいるだけ。何かあれば頼つてもらいたい。雷の気持ち少しわかつたかも。

キツカケは何だつていい。私でも雷でも。

少しだけでも、せめてこの施設の者相手だけでも、他人と仲良くなれるといい。

私はただ、三日月と仲間に、友達になりたいだけなのだ。

同じ命

仲間に裏切られた絶望により情緒不安定となった三日月の側にいることにした私、若葉。人間が視界に入らなければ錯乱することは無いことがわかったため、嫌な顔をされても医務室で待機する。私も口数が多い方では無いが、少しずつ話をして仲良くなっていきたい。

雷の持ってきた朝食を平らげることが出来たので体調は良好。内臓の動きも大丈夫な様子。身体の痛みも無いようなので、眠っていた2週間の間に身体は完治したと言えるだろう。今は念のため医務室にいますが、早いうちに自分の部屋を貰える可能性は高い。最低限、制服などが揃ってからになるだろうが。

何かを話すこともなく、私は隣に置いた椅子に腰掛けジツとしていて。暇といえば暇なのだが、まあこんな時間も悪くない。

対する三日月は私の存在を完全に無視。だがやることもないため、ベッドの上でジツとしている。時折自分の腕の傷を見ては大きく溜息をついたり、生まれてきてから今までの境遇を思い返しては泣きそうな顔になる。

それでも、考える時間は与えられている。今後どうしていくかは三日月自身が考えることだ。私達は強要出来ない。誘うことくらいはするが、決定権は三日月にある。

「ワカバー、ワカバー、ここだっけ?」

医務室の扉が開き、クロが頭をヒョコツと出してきた。私の顔を見て笑みを浮かべて中に入ってくる。

「この前の艀装接続のパーツって何処置いたっけ。あ、艦娘側の方」

「工廠裏に置けなくなったから、第2倉庫の棚で管理してある」

「あー、そっちだったか! ありがとね!」

私とクロの会話を見て、目を見開いていた三日月。この施設で目を覚ましてから今まで、飛鳥医師と私と雷しか顔を合わせていない。摩耶のことは存在を知っている程度であり、他にもいるというくらいの説明で止めていた。そんな状態で、仲良さそうに深海棲艦と話しているのだから、驚かない理由がなかった。

深海棲艦は艦娘の敵であるというのは、生まれた時点で刻まれている。建造で生まれた私もそうなのだから、同じ境遇の三日月もそういう知識を持つている。相容れない存在がここにいるというだけで、口をパクパクしながら驚いていた。

「な、な、なんで、深海棲艦が」

「あ、そっか。まだ挨拶してなかったね。クロだよ。あと扉のところに隠れてるのが姉貴のシロ」

「……クロちゃん……言わなくていいのに……」

隠れてやり過ぎそうとしていたシロも医務室に入ってくる。驚きは倍に。

「はい、握手」

「え、あ、え……」

気が動転して動けないでいた。

三日月を今の状況にした根本的な原因は人間にあり、そのために仲間でありながら裏切ったのは艦娘。そして、実際に三日月を傷付けたのは深海棲艦である。

物理的な原因である深海棲艦は、それがどんなものであっても受け付けない。いくら友好的に接してこようとも、三日月には恐怖の対象でしかなかった。

「ひっ、いやっ」

「三日月、落ち着け」

飛鳥医師と顔を合わせた時と同じくらいに錯乱している。今にも叫び出しそうな雰囲気、すぐに私の方が三日月の手を取った。それでも足りない可能性があるため、頭を抱きかかえて視界を塞ぐ。貧相な身体で申し訳ないが、少しは温もりも感じるだろう。

「ワカバ？」

「すまない。三日月にはまだ刺激が強かったようだ」

握手が出来ないことが残念そうなクロだが、後ろのシロは状況を察した様子。

「大丈夫、大丈夫だ。ここにはお前の味方しかいない。クロもお前を攻撃しようなんて思っていない」

「し、深海、棲艦が……深海棲艦があ……いやああつ!？」

「2人は深海棲艦だが仲間なんだ。若葉達と同じように、飛鳥医師に治療されてここにいる」

落ち着くまで抱きしめながら説明する。このことは昨日のうちに話しておくべきだった。刺激しないようにも変に端折ったのは失敗だった。

私に対しても嫌悪感を持っている三日月だが、状況が状況だけに、私に強くしがみついていた。震えは今まで以上。怒りと憎しみより恐怖が上回ってしまっている。

「怖がられるのは予想してなかったなあ」

「クロちゃん……今は離れよ……マヤも待つてるし……」

「いや、ここは押せ押せでしょー！ 私達は怖くないってことを今すぐに感じてもらわなくちゃ！」

艦装が完成したら出て行くと公言している割には、仲間意識がとても強いクロ。拒絶されていても気にすることなく突き進んでくる。満面の笑みで三日月に近寄ると、肩をトントンとつつく。

あまり良くないと思うが、少しだけ抱きしめているのを緩めて、クロと話が出来るようにする。チラリと見るが、あまりに近いために自ら私の胸に顔を押し付けてくるほどに怯えていた。

「ミカツキ、だよね。私と姉貴はね、ここの一員なんだ。だから、仲良くしてほしいな」

「し、深海棲艦と、どう仲良くしろというんですか!？」

「どうって、普通にだよ。握手して、友達になればそれでオツケー。ミカツキもここで暮らすなら、私は友達になりたいなあ」

恐怖と動揺で泣きじゃくる三日月だったが、クロは何も気にせず接する。後ろでシロはアワアワしているが、クロのやることに文句は言わない。

「三日月。クロは若葉達の知る提督クズよりも数倍人間が出来ているから安心していい。大丈夫だ。深海棲艦かもしれないが、若葉達を襲った深海棲艦とは違う」

提督という名称を出したのは間違っていたかと思ったが、クロの良

さを伝えるためには仕方ない。私からすれば、それくらい信用出来る相手だということを知ってほしい。そもそも私が救出したわけだし。

人間と艦娘に嫌悪感を持つているのなら、むしろ友好的な深海棲艦は一番最初に接することが出来るのではなからうか。私よりも慣れやすいと思うが。

「私達だって死にかけて救われたしね。ほら、これが証拠」

三日月に見えるように、腹の傷を見せた。雷と同じような腹を抉られた傷を見て、仲間意識が芽生える。と思ったのだが、三日月は私の身体から顔を離そうとはしない。見てもらえないで少し悲しそう。私が申し訳なく感じてしまう。

「三日月、大丈夫だ。ここに敵はいないと言ったろう。敵じゃない。落ち着くんだ」

背中を摩りながら、震えが止まるのを待つ。ここまでされるとクロは意地でも友達になろうと行動をし始めるだろう。一旦離れた方がいいと思うが、私には止められない。

とはいえ、こういう状況だと私を頼るのだと知ると、少しだけ嬉しく感じてしまう。不謹慎だとは思うのだが。

「死にたくない……死にたくない……」

「大丈夫だったの。作業着なんて着てる深海棲艦が何処にいるのさ。絶対手を出さないから！ それにほら、武器とか何も持ってないからさー！」

丸腰であることを見せるため、その場で脱ぎ出してしまった。こればかりはシロが引つ叩いてでも止めようとする。

昨日の自分を見ているようだった。継ぎ接ぎの仲間であることを示すため、傷を見せようと全裸になった。敵対していないと全てをさらけ出すために脱ぐのは、艦娘も深海棲艦も変わらない。

「三日月、一度寝た方がいい」

「……もう嫌だ……嫌だあ……」

相当参っているようなので、一度寝てもらおうことにした。何かあったときのために飛鳥医師が用意していた睡眠薬を投与し、三日月には身体を休めてもらう。あまり使いたくない手段ではあったが、こう

なってしまうっては仕方ない。

「すまない2人共。三日月はまだ……」

「大丈夫、私も姉貴もわかっているから。せんせーから聞いてるからね」
「……重症だね……予想以上」

少ししよんぼりしているクロと、それを見ていつになくテンションが低いシロ。昨日の今日で克服なんて出来るとは思っていないが、ここまで酷いとなると考え方を变える必要があるかもしれない。まずは私、もしくは雷あたりに慣れてもらい、そこから拡げていくのがいいかも。

三日月がまた目を覚ましたのはお昼、正午過ぎ。私は先に食べておき、三日月が起きるのをまた側で待ち続けた。

「……」

無言で目を開ける三日月。眠る前の状況を思い返し、最悪なテンションで身体を起こす。朝と同じく、隣に私が座っていることがわかれると、途端に嫌そうな顔になる。

「……深海棲艦が住んでいるなんて聞いてません」

「すまない。若葉が説明下手なせいで」

「本当です」

先程の一件がキツカケになったか、私に対してははずけずけとした物言いをしてくるようになった。ここにいる理由が同じというのもあり、他の者とは違う仲間意識が芽生え始めてくれたかもしれない。

それはそれで嬉しい。私に対する暴言は、私に心を開いてくれた証拠だと思える。悪くない。

「腹が減ったろう。雷が用意してくれている」

「そうですか」

素っ気ない態度ではあるものの、進展を感じた。少しでも目を合わせてくれるようになったからだ。嫌悪感は見え見えではあるが。

「詳細を」

「ん？」

「この施設の詳細を教えてください。まだ何か伝えきれてないことが

あるのでは？」

「かもしれないな。昼が終わったらまた話をしよう」

かもしれない。本来最初に知っておいてもらわなくてはいけない内容を、うまく伝えられていない可能性は高い。そのため、もう一度一から話すことにした。今度は慎重に、漏れのないように。おそらく雷も参戦してくれるので、より伝わりやすくなるはずだ。

「……それと」

「なんだ」

「さつきは……ありがとうございます……。錯乱しているところを……」

嫌そうではあるものの、恥ずかしそうに礼を言ってきた。

三日月は根っこが真面目なのだろう。それが捻くれてしまったせいで、この世の全てを嫌うようになったのだと思う。三日月は身体だけならず、心まで壊されてしまった。その事実気付いたことで、私も三日月と同じように、人間への嫌悪感が高まりそうだった。

飛鳥医師や来栖提督のようないい人間がいることもわかっているつもりだが、私を生み出した提督クズのような人間もいるわけで、正直何とも言えない。

「若葉は三日月に一番近い。辛かったら頼ってくれて構わない」

「……はい」

やけに素直である。ようやく私の思いが届いたか。目の前に深海棲艦がいる恐怖を和らげるために私の温もりで乗り越えたわけだが、その時にいろいろ思うところがあつたのだろうか。

「……人間も艦娘も深海棲艦も……全部嫌いです。この世からいなくなっただけいいくらいです。でも……貴女はまだマシです。ずっと私の側にいてくれましたから」

「当たり前だ。仲間だからな」

「……信頼はしません。ですが、信用はすることにしました」

充分だ。この短時間でそこまで考えてくれたのなら、私としては一番の出来。

「貴女の話なら本当のことと信じることにします。嘘なんてつきませ

んよね」

「ああ。嘘はダメだ。裏切りだからな」

私も裏切られて酷い目に遭っているので、嘘とかそういうのは嫌いだ。そういうところも三日月と似た者同士。境遇が同じであるが故に、思考傾向も近いところにあるのかもしれない。

「……なんで深海棲艦がいるんですか」

「飛鳥医師が治療したからだ。倒れているのを発見し、ここまで運んだのは若葉の独断だが」

「そうでなく……私達の敵である深海棲艦を何故治療し、一緒に暮らすという考えに行き着いたんですか」

そう思うのも無理無いか。世の中、来栖提督のような人は一握りもないだろう。あんなに簡単に理解してくれる人が身近にいるというこの環境は、私達にとっては最良の場所だ。

「シロとクロは侵略者ではないからだ」

「艦娘とは違う、深海棲艦ですよ？」

「若葉達と同じ、命だぞ」

こんなもの、普通なら納得してもらえない屁理屈だろう。だが、私達は死にかけているところを治療してもらっているため、命の重さは他の艦娘以上に理解しているはずだ。だから、三日月なら理解してくれるはず。

「……どんな理屈なんですか……」

「死ぬのが怖いのは深海棲艦も同じだってことだ」

そう考えれば、人間も艦娘も深海棲艦も全部同じだ。この世界を満喫するために生きている。その方法はさておき。

「仲良くしてやってくれ。特にクロはそういうことを気にする」

「……今は無理です。言ったでしょう。貴女はまだマシですが全部嫌いだと」

「時間をかけて慣れていけばいい。大丈夫だ。若葉が側にいる」

手を握る。やはり抵抗はない。私にだけは心を開いてくれたと考えていいだろう。

三日月は境遇により今以上に歪められてしまった私だ。歪みは酷くても、私が今を楽しく生きることが出来ているのだから、三日月だってきつと同じようになれる。

その道標になれるのなら、先達として導くことが出来るのなら、私は本望だ。

裸の付き合い

ほんの少しだけだが、私、若葉に心を開いてくれた三日月。世界の全てを嫌っているが、私のことはまだマシと言ってくれた。今はそれでいい。これを足掛かりにして、世界への嫌悪感を少しでも緩和してくれればと思う。

今のところ、飛鳥医師とシロクロが視界に入ると錯乱してしまう。嫌悪の象徴である人間と、恐怖の象徴である深海棲艦はまだ難しい。接することが出来るのは同種である艦娘でギリギリ。私達はそれに加えて、三日月と同じ身体に傷を持つ継ぎ接ぎの者であるために、三日月の中では許容範囲内に収まっているのだと思う。

そのため、引き続き私が側におり、雷にサポートしてもらおうという生活を続けて行くことになる。

「夕食も終わったし、そろそろ風呂だ」

今までは身体を拭くだけになっていたが、目を覚ました今、ある程度は自由が利く。今日は丸一日ベッドの上に居てもらったものの、2週間の眠りの間に身体はほぼ完治しているため、そろそろ部屋から出るのもいいだろうと判断した。

三日月には見えないところで飛鳥医師とも相談し、時間を考えてなら風呂も許可された。そしてそのままあてがわれた部屋に移動してもらおう。他の仲間に強要するものかどうかと思うので、全員が入った一番最後、もしくははまだ誰も入っていない一番最初を狙う。今ならまだ誰も入っていない。

「これで良さそうなら、医務室卒業だ。部屋も用意してある」「そうですか」

素っ気ない返事。これでも最初より進展しているのだから困ったものである。これは少しは気を許した私に対してのみの三日月。

雷が昼食や夕食を持ってきた時には殆ど喋らず目も合わさない。だが私にはそれなりに意見も言う。昼の間はずっと施設の説明や今までやってきたことを一から話し直したが、黙って聞いていたわけではなく、相槌や文句もあつた。

結果的に、三日月とまともに会話できるのは私だけという現状である。未だに笑顔は一度も見れてないが。

「若葉も一緒に入る。裸の付き合いというヤツだ」

「……別にお風呂くらい1人で」

「若葉が一緒に入りたから入るだけだ。それに、1人で入ってもいいが、何かあった時1人で対応出来るのか？ 例えば……クロと鉢合わせたり」

ビクンと震える。名前を聞いただけでコレ。まだまだこの施設に馴染めるのは遠そうだ。

「……一緒にお願いします」

「了解した」

観念したようだ。万が一のことを考えると、私も気がでない。

風呂ではどうしても自分の全身を見ることになる。私の身体は既に三日月には見せているし、三日月の身体は処置を手伝っている時に見ている。だが、三日月自身が自分の身体の全容を見るのはこれが初めて。今までは腕と顔くらいしか知らないが、全てを見ることでどういう反応をするか。

「これが……私の身体……」

改めて見ると私と同じ、いや、それ以上の重傷に見える。

三日月の継ぎ接ぎはなるべく見えないうところに置こうとした飛鳥医師の配慮がいくつもある。顔以外は、服を着れば全て隠れるようにはされているし、なるべく正面に縫合痕が見えないようにされている。代わりに、脇腹やふくらはぎなどにクツキリと傷痕が。

「……どうしても……顔が目立ちますね」

「ああ。それだけは隠せない」

「……」

やはり落ち込んでしまう。

私達と違うのは、どうしても隠せない位置に傷があることだ。摩耶の眼と同じことにはなっているが、眼だけなら眼帯がある。だが、顔に斜めに入った大きな傷は、仮面を着けるか何かしなくては隠せない

い。眼帯よりも不恰好。これは化粧でも隠しきれない。

極め付けは、半分だけ白い髪。これは染髪すればどうにかなると思うが、まだ試していない。深海棲艦の髪に染料が乗るかどうか。

「若葉にもな、これがある」

左腕の痣を見せる。本来艦娘にはあり得ないそれは、傷痕以上に私
が異形となつている証である。だが、長月にカツコいいと言われてか
らは、何も気にならなくなった。元々あまり気にはいかなかった
が。

痣をチラリと見られたが、無反応。隠せる腕と隠せない顔では雲泥
の差である。慰めにはならなかったか。

そのまま話していても風邪を引きかねないので、すぐに湯船に入
る。身体中にある傷痕に染みることはないようだ。これも雷の徹底
した衛生管理のなせる技。

初めての風呂に、気分も少しは落ち着いたようだった。美味しいご
飯、温かい風呂、気持ちのいい布団で心は穏やかになる。

「若葉！ すまねえ、あたしも入っていいか？」

風呂の外から摩耶の声、三日月が一緒にいることを考慮して事前に
声をかけてくれた。私としては断る理由がないのだが、三日月はどう
か。

「……いいです。摩耶さんは艦娘の人……ですよね」

「ああ。摩耶、入っていい」

「サンキュー！ ちょっとやらかしちまってよ」

許可を出したときには既に入ってきていた。質問した時にはもう
脱いでいたということだ。こちらが断ったらどうするつもりだった
のだろうか。

「話すのは初めてだよな。おっす三日月、あたし、摩耶ってんだ。よろ
しくな」

ずっと私の陰に隠れるようには動いた気がする。私には気を許し
ていることがまたわかり、少しだけ嬉しい。逆に摩耶は一步引かれた
ことを残念がる。

「んだよお、裸の付き合いしようぜ」

「先に洗え」

「わあーってる。洗いに来たんだからな」

摩耶が入った途端に油の匂いがした。今の今まで艤装整備をしていたのだろうか。夕食の後だし、風呂に入る前にちよつと触ろうとしたら何かやってしまったか。専用のシャンプーを使って髪を洗っている辺りで、何をやらかしたかは大体察する。

「クロの奴が、潤滑油変などに置いててよ。ぶちまけちまって掃除してたんだよ。ギットギトだから早く身体が洗いたくてな」

「そういうことなら仕方ないな」

クロの名前が出たことで、三日月が私の腕をギュツと握る。素肌で握られるので普通に痛いのが震えているのがわかるので我慢。湯船の中なので逃げ場がない。だから私にすぎるしかない。

「三日月、まだ一日しか経ってねえけど、少しは慣れたか？」

「……いえ」

「まあゆっくり慣れていきな。なんかあつたらあたしらに言えよ。出来ることは手伝ってやるからな」

油の匂いが消えたところで、摩耶も湯船に入ってくる。わざわざ狙ったかのように三日月の隣に。私がいるために回避も出来ず、嫌でも裸の付き合いに付き合わされることになる。

摩耶の押せ押せなテンションに三日月はタジタジ。クロに同じことをされたら怯えるだけだったが、摩耶にされると目を合わせないようにするだけのようだ。

「随分と若葉に懐いたじゃねえか。丸一日一緒にいたからか？」

「その認識で構わない」

「別に私は若葉さんに懐いたわけではないです。艦娘も人間と同じくらい大嫌いです。若葉さんはマシなだけです」

今まで話すつもりもなく目も合わせなかつた三日月が、それをやめて早口で弁解。あまり妙なことをすると、摩耶には弄られる隙を見せることになる。

今の発言は面と向かってお前が嫌いだと言っているようなものだが、摩耶は別段気にした様子もなく、むしろ今の言葉を聞いてニヤニ

ヤし始めた。

「摩耶、あまり」

「わかっているさ。若葉、しばらくはお前に任せるぜ」

軽めに止めておく。ようやく少しだけ心を開き始めたのに、あまり弄りすぎてまた心を閉ざしてしまったら元も子もない。

三日月も自分で気付いたようで、すぐに目を背けた。

「そうだ、三日月。お前の艀装だけだな、シロクロの艀装と並行して修理中だ。もう少ししたら、まともに動くようになるぜ」

「……はい？」

「さつき話したろう。摩耶は独学で工作艦の技術を身につけたと」

三日月の艀装は主機の部分と比較的残っていたため、修復が簡単だと摩耶は言うが、出来るのは当然継ぎ接ぎの艀装。それについても話しているので、理解はしているはず。

弄ったことがあるわけでは無いが、睦月型の艀装は第二駆逐隊のものを見ているおかげで、多少は知っている。摩耶は自分の記憶を頼りに近いものにしていくらしい。

「お前の選択は知らねえけど、ここに残るにしろ、ここから出てくにしる、艀装は必要だろ。だからちゃんと用意しておいてやる」

ここでの部屋は用意されるが、三日月が出て行きたいというのなら、ここに住むことを強要はしない。少し寂しくなるが、仕方のないことだ。意思は尊重する。

とはいえ、何もかもが嫌いと言っている者を野放しにするのは危険かもしれない。それこそ、武器を与えたら深海棲艦よりもまずいことをやりかねない。難しいところだ。

「今すぐ決めろとは言わねえよ。準備だけは進むってだけだ」

「……そうですか。ありがとうございます」

「おう。道だけは作っておいてやるよ」

これだけ話してもやはり摩耶と目を合わせようとはしなかった。礼こそ言うが、嫌悪感は拭えていない。

「……あたしはさ、ただ運の無えドロップ艦だから、お前らにどうこう言う筋合いは無いとは思うけどよ、辛いことがあったら頼れよな。少

なくとも、この連中は誰もお前を裏切らねえよ。あたしも含めてな」

頭をポンポンと叩くように撫でた。少し前までなら間違はなく敵対心剥き出しで強く払っていただろう。だが、今回は素直に受け入れていた。目も合わさないし無言ではあるが、少しずつ、少しずつ前進している。

風呂から上がって、そのまま三日月にあてがわれた部屋に連れていく。私の独断になってしまいが、風呂に入っても痛みなどを訴えなかったのも、もう医務室卒業でいいだろうと判断。

私の正面の部屋はシロクロが2人で使っているため、三日月の部屋は私の隣になるのだが、部屋の前に来ても私から離れない。

「ここが三日月の部屋なんだが」

「……方が」、この部屋にあの深海棲艦が突入してきたら、間違いなく私は暴れます。部屋もめちゃくちゃにしますし、騒音も立てるでしょう」

無いと言えないのが辛い。クロはそういうところで妙な積極性を見せそう。何となくだが、部屋からこちらに来るタイミングを見計らっているような気がする。

「なので、今日は若葉さんの部屋に泊まります」

変な声が出そうだった。まさか初日から自室を使わずに私の部屋に来るなんて、考えてもいなかった。

部屋に鍵が無いわけでもない。私達が使っていないだけで、いくらでも締めることが出来る。ある意味、三日月だけのためのシステムだ。

だが、それを知っていても私の部屋に来ると、そう言った。別に私としては大歓迎だが、どういう風の吹き回しなのか。摩耶の言い方ではないが、正直ここまで懐かれているなんて思っていなかった。

「若葉さんが一番マシですから。1人であるより、2人である方が、いざという時にいいでしょう」

「そのいざという事態を作るのがお前なんだが。ちゃんと説明してく

れ」

「……周りが敵ばかりで独り身が辛いんです！」

飛鳥医師やシロクロの事を敵として試してみようのはもう仕方がない。そんな状態で1人で部屋にいと、嫌悪感と恐怖で押し潰されてしまうかもしれないと危惧して、私の存在を隣に置いておこうとしているようだ。何かあったら私を盾にも出来る。

まあこれは要するに、人肌が恋しいということだ。可愛いところがあるじゃないか。私で良ければそれくらい。

雷と摩耶もまだ付き合いが短いのだから頼りづらい。私なら今日一日ずっと隣にいたのだから頼みやすい。

「わかった。だが、若葉でいいのか？」

「ここで頼れるのは若葉さんしかいないので。これでも大負けに負けて、100歩譲ってです」

なんだかんだ悪態はつかれたものの、結局その言い分を飲んで、今日は私の部屋で一晩を過ごすこととなった。

まだまだ世界への嫌悪は重いが、いい傾向は見え始めていると思う。

三日月は寝間着も私を真似て浴衣を使用。なんだかんだ言っただけ、一番身近である私に合わせている辺り、私には本当に懐いてくれているのだと思う。

今日はもう眠るだけだったので、部屋に入りそのままベッドに直行。三日月もそれについてきてすぐにベッドに入ってきた。触れ合うことは無いし、目を合わせることもない。ただただ並んで天井を見るだけ。それでも充分だった。

「……貴女の人柄は今日1日で理解したつもりです。本当に嘘はつかない。隠し事もしていない。自分のことは全て話してくれた。私の嫌な話題は極力避けてくれる。だから……前にも言った通り、信用はしています」

「何度も言うが、私はお前の敵じゃない。それだけは保障しよう。頼ってくれ」

出来ればこれを信用から信頼に変えていきたい。せめてこの施設、

閉じられた狭い世界の中では生き生きと過ごせるように。

姉の強行

三日月が目を覚まして3日の時が過ぎた。

私、若葉は自分で宣言したこともあり、三日月の側からほぼ離れずに生活している。本来やるべき仕事である艦装整備を摩耶達に任せ切っているのは少し気が引けるものの、三日月の社会復帰も優先事項ではあるので、今はこれが私の仕事だと考えて三日月に付きつきりになっっている。

その間に雷と摩耶とは会話が出来るようにはなっただが、未だに目は合わせられない。艦娘への嫌悪感が残っているが、仲間の艦娘への嫌悪感徐徐にはあるが緩和されてきている。私にはさらに懐いたと摩耶に冷やかされるほどに。

だが、飛鳥医師とシロクロはまだまだ難しい。合間合間に隙を見てクロが顔を見せるが、その度に私の後ろに隠れるようにして怯える。飛鳥医師とうっかり顔を合わせてしまった時に至っては、嫌悪感を一切隠さずに攻撃的になっってしまった。

過去のトラウマにより人間への嫌悪感が強すぎて、殺意まで抱いてしまっていた。これは流石に問題だ。飛鳥医師が命の恩人だといくら説明しても、人間だから信じられない、自分のことを実験台としか思っていないのだと聞く耳を持たない。

これが今の一番の課題。どうすれば飛鳥医師のことを信じてくれるか。

日課のランニングを終えて自室に戻ると、既に三日月は目を覚ましていた。なんだかんだこの3日間は私の部屋で寝泊まりし、着替えままで私の部屋に持ち込む始末。あてがわれた自室を使うつもりはもう無いのだろうか。

「お帰りなさい……若葉さん」

「……ああ」

1人にして戻つてくると、必ずベッドの隅で蹲っている。まだ皆が眠っているとはいえ、嫌悪感と恐怖に板挟みされている状態。こう

なってしまうのも仕方がないのかもしれない。

今回は早朝ということもあり、まだ着替えてもいなかった。私がこの部屋にいないとそういうこともしない。着替えという無防備な状態を、安全が確定していない状態で行うのはあり得ないとのこと。

「若葉は着替える。三日月も」

「はい」

安全が確保されたことで三日月も着替え始める。私のことを安全なもの判断するようになってくれたことは素直に喜べるが、ならば私と一緒に飛鳥医師と話せるようになってくらはなってもらいたいものである。

「……若葉さん、今日も借りれますか」

「構わない。好きに使えばいい」

そう言われて貸し出しているのは、私が愛用している黒のタイツである。

三日月の制服は、交流のある第二二駆逐隊の1人、長月と全く同じ黒の長袖セーラー服。だが、膝下丈の靴下であるために、脚にある傷が他人からモロに見える状態なのが、三日月的には辛いらしい。そのため、それを私のタイツで隠している。

誰かと会うわけでも無いが、見られるという可能性にトラウマを刺激されるのなら、そういう形で隠せばいい。どうしても隠せない場所に傷痕があるのだから、せめてそういうところは全て隠す。

「傷が見えなくなると……少し落ち着きます」

「そうか。なら好きだけ使えばいい」

そういった行いに、誰も否定的な意見は出さない。私達だって、嵐の音が苦手だったり嫌悪感を抱いたりするのだ。三日月はそれがちよつと過剰なだけ。飛鳥医師に言わせてみれば、潔癖症のようなものだから全然マシだと。何も問題は無い。

と、ここで扉がノックされる。こんな時間に呼ばれるのはなかなか無いこと。飛鳥医師はもう起きている時間ではあるが、状況がわかっているので私の部屋を訪ねてくることはまず無い。

「開いているが」

「……シロ。クロちゃんは……まだ寝てる」

声が聞こえた瞬間に、三日月が即座にベッドに飛び退き布団を被った。三日月が形成している膨らみが小刻みに震えているのがすぐわかる。

積極的に関係を持つとするクロとは違い、それをただ後ろから見ているだけのシロが、1人で行動すること自体が稀。余程逼迫しているのだろうか。

「……ミカツキ……いるよね」

「ああ」

「入りたい……ダメ？」

隠れているものの、首を横に振っていることはわかる。消極的なシロですら、その種族故に三日月には恐怖の対象となってしまうていた。

この3日間、一度も三日月に話しかけたことも無く、クロが妙なことをしようとした時に抑制する役に徹していたくらいだ。だが、その間にいろいろ考えていたのだと思う。

「すまない」

「……そう……でも入る」

「おいなら今何のために聞いた」

「誠意」

私がダメだと言っても強行してきた。そこそこ長く一緒に生活してきたが、こんな積極的なシロは見たことが無かった。

「お前……」

「クロちゃんがね……どうしても仲良くなりたいうの……だから……ちよつとお姉ちゃんが頑張る……」

部屋の中に入ってきたシロは全裸だった。以前にクロがやろうとしたことを引つ叩いて止めたというのに、クロがいないことをいいことにシロがやらかしてきた。正面の部屋だから出来る無茶。

クロと同様、自分に攻撃の意思がないことを示しつつ、腹に傷を持つ同類であることも示した。覚悟のいる行動である。

だが、見てもらわなくては意味がない、三日月は視界にも入れたく

ないと言わんばかりに布団を被ってしまったている状態。その塊がブルブルと震えているのも見てわかる。無理に引き剥がすわけにもいかず、私は何も出来ない。

「ミカツキ……私達は貴女と仲良くしたいだけ……決して嘘はつかない……決して裏切らない……だから……見て。私は非武装……絶対に攻撃しない」

この3日間ですつと話し続けた。シロもクロも深海棲艦かもしれないが私達の仲間だと。ゆっくりとでいいから、接してほしいと。少しずつ、少しずつ。

三日月自身は無理だ無理だと言って躲してきたが、今回はもう、そうは行かないところにまで来てしまっている。シロの強行ではあるが、三日月に決断を迫る時。

「……三日月。シロは本当に非武装だ。どうやってもお前を攻撃することは出来ない」

「で、でもっ」

「信じてくれ。シロも覚悟を持ってここにいる」

これはシロクロといい関係になれる最後の機会に思えた。シロの勇気と覚悟を汲み取って、私も三日月をお願いする。自分の立場を利用するようで申し訳なかったが、私がお願いすれば、少しだけは今のシロを見てくれるのではないかと思った。

「……わかりました。若葉さんを信用すると言ったのは私です。信じます」

ここで何かあったら、今までの数日間で築き上げたものが全て崩れ、むしろマイナスになってしまおうだろう。私達にも嫌悪感を向け、最悪の場合この施設を破壊しようとしてしまうかもしれない。そうでなくても、せつかく助かった命を投げ出してしまうかもしれない。

それでも私はシロなら大丈夫と踏んだ。今のシロの覚悟は、めっちゃくちゃかもしれないが、信用出来る。先程自分でも言っていた通り、嘘もつかないし裏切らない。三日月を相手にするためには必要な要素を全て持っている。

布団が少しめくられて、三日月の頭が出てきた。シロの姿を見て

ギョツとした。

「いや、あの、ホントに、なんて格好で来てるんです?」

「非武装……丸腰。これでも気になるなら……限なく調べてくれても構わない……」

そう言いながらも、一定の位置を保ち続ける。シロが判断した、三日月に近付けるギリギリの距離。おそらく、これも正解を拾っているのだと思う。

「そこまでして……私をどうしたいんですか」

「さつきも言った。私は……私達姉妹は、貴女とお友達になりたいだけ。それ以上でも……それ以下でもない」

三日月の視線は、シロの腹、治療痕に行っていた。自分と同じ、この施設で処置された証である。

実際これは、飛鳥医師の人間性を表すものでもある。艦娘でも深海棲艦でも関係なく治療している証拠。命は全て同列であり、救えるものは救うという考えの象徴。

「ワカバと同じように……私達ともお話をしてほしい。もし何か裏切るようなことをした場合……容赦なく罵倒してくれて構わない。

貴女の一存で……私を殺してくれてもいい」

あまりにも飛び過ぎな発言。これは流石に私が止める。

「シロ、そこまではダメだ」

「……私達は……それだけの覚悟がある。ミカヅキと敵対する意思が無いということを知ってほしい。私達は……三日月を攻撃した深海棲艦とは全く違う」

シロの目は真剣だ。嘘も無ければ裏切りもない。本気でそう思っ
てこの発言をしている。嘘偽りのない、透明な瞳で三日月を見つめて
いる。

流石の三日月も、ここで折れた。

「わかりました。わかりましたよ。そこまで言われて怖いから帰れと言ったら私の人間性を疑われますから」

「素直になれよ」

「素直な気持ちですよ。深海棲艦は怖いのです。私を死の淵まで追い込

んだ恐怖の対象ですから。ですが……確かにシロさんは少し違います。話してみないとわかりませんね」

クロ相手には聞く耳を持つとうもしなかつたくせによく言う。とはいえ、施設の一員としてはさらに一歩進めた。

あとは飛鳥医師を相手にすることだけ。人間に対しては最も深く恨みが刻まれているため、まだ顔を合わせることも出来ない。

「なら飛鳥医師ともしっかり話してみろ」

「……あの人はいい人だよ……私達を治療してくれたし……艦装を直すことも許してくれたし……」

「シロはとりあえず服を着てこい」

「……ん」

やることをやったので満足気なシロは、鼻歌交じりに部屋から出ていった。表情は薄いが足取りは軽い。あんなに明るいシロを見るのは初めてかもしれない。全裸だが。

三日月はというと、布団から抜け出し、改めてベッドに腰掛けている状態に。シロ相手にも多少なり気を許すことが出来たようだが、最後に飛鳥医師の話題を出したことで表情が曇ってしまったている。

「……人間は嫌いです。何よりも嫌いです。シロさんは意思を見せてくれましたが、人間は意思を見せたとしても許せません。話してわかるような連中じゃないんです」

これはまだまだかかりそうである。どうにかしてあげたい。

朝食は私の部屋で。皆で食べる場では飛鳥医師と顔を合わせるようになるため、それを避けるために。料理担当の雷には無理を言っていると思うが、二つ返事で了承してくれた。曰く、

「三日月ももう施設の仲間なもの。今は患者って形だけど、過ごしやすいうようにしてあげなくちゃー」

だそうだ。慈悲の化身なのではと思えてしまうほどである。

「(馳走様でした)」

「ああ。食器は片付けておく」

朝食を食べ終え、食器を片付けようと立ち上がったところで、何か

が近付いてくるような気がした。遠くからバタバタと足音がこちらに向かってくる。

嫌な予感がした時には遅かった。壊れるかと思えるほどの勢いで私の部屋の扉が開け放たれる。

「ミカヅキい！」

そして部屋に飛び込んでくるクロ。シロから朝食の最中に話を聞き、居ても立っても居られなくなった結果、即座に行動に移したというところか。

三日月は違う意味で恐怖を感じたようだった。シロと違う、行動力とコミュニケーション能力にステータスを全て振っているようなクロのハイテンションは、さながら暴走列車である。

「ひっ……!?!」

「クロ、止まれ」

緊急時に備えて、私が盾になる。勢い任せに突っ込まれたら、三日月がおかしなことになるかもしれない。そもそもここは私の部屋だ。荒らされても困る。

「ミカヅキが私達と話してくれるって姉貴から聞いたから！」

「そうだとっても止まれ。危ない」

遅れてシロが私の部屋へ。

「ご、ごめんなさい……クロちゃん……止められなかった……」

「いや、問題は今のところ無い。話したいのはわかったが、三日月のことも考えてほしい」

「はい。じゃあさ、午前中、午前中ちょうだい。私達がどんなのか教えるからさ」

三日月はというと、朝のシロ襲来の時と同じように布団に包まってベッドの端に蹲っていた。これではシロとは話せてもクロとは話せない、なんてこともあり得る。

「三日月、もう大丈夫だ。クロはちゃんと止まってる。シロが手綱を握った」

「……あの、勢い任せに来るのは本当にやめてください」

「ウツス」

何度言ってもやめることはなさそうである。シロも後ろで溜息をついた。

その後、午前いっぱいを使ってシロクロと会話をし、艦娘による侵略を受けるといふどつちが悪人かわからなくなる事件に巻き込まれたことを聞いて、三日月の考え方が変わった。

深海棲艦は怖いままだが、2人は初期の私と同様のまだマシに昇格。会話は出来るほどの仲には進展した。

嫌いな者の中にも、それとは違う者もいる、ということが納得出来たようだ。

ならば飛鳥医師のことも、そのうち納得出来る日が来るだろう。

三日月の決断

元は一方的な断絶だったが、シロの強行により、シロクロ姉妹との和解に成功した三日月。まだマシという段階ではあるものの、顔を合わせた瞬間から怯えて泣き出すようなことは無くなった。それだけでも十分な進展である。

クロの積極的過ぎる性格が三日月には苦痛にしかならなかったのだが、和解してしまえばその明るさに癒される。

「姉貴、ホントありがとね。私だけだとまっすぐ突っ込むしか出来なかったから」

「……いいの……私も……何もしてないのに嫌われるのは嫌だし」

それこそ、三日月の今までの行いは、シロクロのトラウマを刺激するようなことだったのかもしれない。

何もしてないのに深海棲艦だからというだけで侵略者と揶揄され、無抵抗であることを示しても攻撃を受けた。救われた先でも同じように扱われたら、いくら温厚なこの姉妹でも、本当に侵略者になっ
てしまいかねないくらいに激昂していたかもしれない。

「でも、どうやったの？」

全裸で押しかけたとは流石に説明していなかったようだ。私が説明しようとしたが、シロが人差し指を口に押し当て、薄く微笑む。なるほど、黙ってると。

あの強行を後々思い返して、シロは自分がやらかしたと思っているようだ。話題が出た途端に顔が赤く染まっていた。私が知る限りで一番の表情の変化である。

「……秘密」

「えー、ずっこいずっこい！ ワカバ、教えてよー！」

「すまん。口止めされている」

「ミカヅキ！」

「若葉さんが話せないのなら、私からも何も言えませぬ」

シロの奮闘は、私達の中だけに留めておく。クロは仲間外れにされたみたいで文句を言っていたが、その辺りは姉に一任。私達がどうこ

う言うべきではない。

シロクロ姉妹と和解してからさらに3日。三日月が目を覚ましてから約1週間の時が経過した。あとは飛鳥医師だけ、という状況になっても、三日月は未だ殺意に近い敵対心を持ったまま。これは仕方のないことだと飛鳥医師も話していたものの、やはり少しテンションが低いように思えた。相手の種族がどうであれ、患者からここまで嫌われるというのもなかなか無いらしい。

「三日月、ちよつといいか」

部屋に摩耶が訪ねてきた。艀装整備の際のツナギ姿であったために、一度経験のある私には察しがついた。三日月が漂着して3週間、シロクロの艀装と並行して修理していた三日月の艀装がついに完成したようだ。

私の時は丸1ヶ月かかったのだが、それは初春型艀装の浮くという特異性のせいであり、まだ単純な構造である上に何度も見たことがある睦月型艀装は、パーツさえ揃えば割と早く完成することのこと。

「工場集合」

「わかりました。艀装の件ですか」

「ああ。さつき完成した」

摩耶についていき工場へ。飛鳥医師を除く全員がそこで三日月を待っていた。

そこには、私の時と同じように真ん中に艀装が鎮座していた。いつも見る自分のものや、雷のものとも違う形状。言われてみれば、文月達のものと同じ形状をしている。

流れ着いた艀装のパーツを組み込んでいるために、当然ながら歪な継ぎ接ぎ艀装ではあるが、性能は私達が使っているものと同じである。重いものを持てるようになるし、海上を駆けることも可能。武装はないが、艦娘としての性能は全て戻ってきたといえる。

「テストだ。若葉、お前アシストしてやれ」

「了解」

お互いに艀装を装備し、私が先に海に立つ。いくら酷い戦場を経験

したといえど、海に立つことに抵抗は無かった。三日月も艤装を装備し、海に足を下ろす。

「立てます」

「よし、じゃあ適当に海に出てくれ」

私が手を引く形になり、海に出た。ここ最近も私も艤装を装備して海に出ることは無かったため、気持ちいい。こういう息抜きも必要だと思う。

三日月も久々の海に、少し雰囲気が違う。私達の中には一人もいない長い髪をたなびかせ、それなりのスピードで海を駆ける。ストレスを解消するのにも使えそうだ。

「気持ちいい……本来海はこういうものですよ」

「ああ。いい天気の時に出るのが一番だ」

お互いに知っているのは嵐の戦場。特に三日月は夜で且つ嵐の中での戦闘という、命を捨てるのに適した海しか知らない。

三日月はほぼ全身の皮膚が深海棲艦のものに置き換わっているためか、潮風が前より気持ちよく感じるそう。かくいう私も、腕に感じる風は顔に受ける風とは感覚が違う。

「……私は、もっとこの風を感じてみたいです。戦いの中に身を置くのではなく、穏やかなこの海で」

「そうか。若葉もそう思うぞ。艦娘なのにな」

戦闘するために生み出された生体兵器である私達が、戦闘から離れることを望み始めている。この施設で過ごすことで、穏やかな日常がどれほど幸せであるかを感じることが出来た。

三日月も私と同じように感じているようだった。最悪の戦闘が一番最初の経験だったというのもあると思う。戦いなんてしなくても生きていけるのがわかると、これが手放したくなるものだ。

工廠に戻り、艤装を下ろす。そのまま、また私の部屋に籠ることになるのだと思っていたが、それを出入り口の手前で摩耶と雷が止めた。相変わらず目を合わせようとはしないが、会話らしい会話は出来るようになってきている。突然歩みを止められ、何事かと驚いた。

「まだ何か……」

「ちよつとな。おい、もういいぜ」

出入り口から飛鳥医師が姿を現わす。その姿を見た瞬間に、三日月の身体が震えた。嫌悪感が爆発し、憎しみに顔が歪む。

「人間……」

「僕と顔を合わせたくないのもわかってはいるつもりだ。だが、君の意思がどうであれ、僕は君に話さなくてはいけないことがある」

咄嗟に私が三日月を羽交い締めにして、その場から逃げることも、飛鳥医師に攻撃することも出来ないようにする。初めて顔を合わせるときは近付かれたくない一心で暴れ、その後は殺意を押し隠すこともせずに飛びかかろうとした。三日月の持つ人間への憎悪が強すぎるのは誰だつて知っている。

それを知つていても飛鳥医師がこの場に現れたのは、もしかしたら話せるのが最後になってしまう可能性を考えてだ。三日月の選択次第では、これで施設を離れることになる。その前に、話をしたいと。「晴れて君は完全復帰となる。傷も痛みを無くし、艤装も取り戻した。艦娘として活動するには、一切の支障が無くなった」

私が羽交い締めしている状態でも、ジタバタと暴れている。今のところは三日月を押さえ付けることは出来ているが、手を離したら確実に殴りかかってしまうだろう。話もまともに聞いているかわからない。

「君は患者では無くなった。自由の身だ。この施設を離れることも出来る」

これは摩耶からも聞いていることだ。施設に残るか離れるか。それが出来るように艤装を修理しているのだと。最初に風呂で話した時から、選択するべき時が来ることを示唆されていた。そして、その時が今だ。

まず間違いなくここを離れるという選択をするだろう。だが、そうすると三日月がどうなってしまうのかはわからなくなる。出来ることならそれは避けたい。

「君の意思を尊重する。だが、これだけは伝えたい」

私が押さえつけている三日月の目線に合わせるように、その場で膝をつく。鬼のような形相で、憎悪に満ちた視線を受けても、一切怯むことはない。純粹な瞳で三日月を見据えた。

「僕は君をこの施設の一員として迎え入れたいと思っている」

三日月の動きが止まる。ここまでしているというのに、この施設に何故置いておこうと考えられるのかが疑問のようだった。

「皆が君に言っているであろうことを僕も言おう。僕は君に嘘をつかないし、裏切ることはない。君を利用することもしない。人間のそんな発言を信じることは出来ないかもしれないが、どうか信じてほしい」

言葉でしか伝えられない、信念の話だ。嘘をつかない証拠、裏切らない証拠は、この場に用意出来るものではない。ただただ真剣に、純粹な気持ちで訴えるしかない。

私達は飛鳥医師のこの意思には何の疑いを持っていない。私達には隠し事はしているが嘘をついたことがないし当然裏切るようなことはされたことがない。シロとクロを治療したことで、私も飛鳥医師を信じられると確信している。

「君をそんな身体にしたのは、本当に申し訳ない。だが、命を繋ぐためには仕方がなかった。必ず元の身体に戻してみせる。だから……今だけは信じてもらえないか」

手を差し出す。それと同時に、私にアイコンタクトされたため。私も羽交い締めを解いた。事前に打ち合わせがあったわけではない。こうした方がいいと、察することが出来た。

握手に応じれば一員としてここに残ってくれるということになるが、そのまま殴りかかる可能性だってある。

おそらく、飛鳥医師は殴られてもいいと思っている。自分がやったことではない、ゲスな人間の行いに対する怒りを受けても、おそらく何も文句を言わず、ただやりたいようにやらせるだけだろう。

三日月はその場から動かなかった。飛鳥医師が差し出してきた手を見て、震えている。

「強要はしない。やはりここにいたくないという気持ちもあるだろ

う。いざという時は、君の行けそうな場所を斡旋する。君に選んでもらいたい」

ここに残るか、ここから去るか。三日月に決断を迫る。誰も何も言わない。ここまで来たら、もう三日月だけの問題だ。

本当に嫌なら去ることを選ぶだろう。私達がここにいてほしい、仲間に、友達になりたいと言っても、三日月はそう思っていないかもしれないのだから、何も言えない。

「……私は、人間も艦娘も大嫌いです。深海棲艦はまだ怖いです」

やっと面と向かつて会話が出来た。少し涙目だが、表情から憎悪が薄れてきていた。嫌悪感はまだ残っているが。

「ですが……シロさんに教えられました。種族は同じでも……中身は人それぞれでした。怖い怖い深海棲艦でも……シロさんとクロさんは怖くないです。それに……みんな艦娘なのに……嫌いじゃないです」

話してみなくてはわからないと、三日月自身が言ったことだ。実際に今日までの3日間、クロとは話す機会が多かった。夜に押し掛けてくることもあった。それだけ話せば人間性がわかるものだ。

私は毎日常に側にいたが、雷と摩耶とも毎日少しは話す。雷は食事の時に、摩耶はあの後から何だかんだ風呂に付き合うように。そうやって毎日話すことで、自然と慣れていった。

それなら、飛鳥医師とも毎日少しずつでも接することが出来れば、慣れることも出来るし、人間性もわかるはずだ。嫌いな人間と毎日接するのは苦痛だとは思いますが、今後のためには必要な気はする。

「人間は特に嫌いです……信じられません。命を軽視し、ゴミのように私を使えるような輩をどう信じろと言うんですか」

「……何とも言えないな。そういう者がいることは否定出来ない」「だから……」

飛鳥医師から目を背けるが、おずおずと手を差し出し、飛鳥医師の手を取る。顔は真っ赤だった。

「私を信じさせてください。艦娘や深海棲艦が人によって違うのなら……人間もそうなんでしょう。貴方が信用に足る人物なのか、私に

……見せてください」

人間を否定しながらも、飛鳥医師を信用出来るかどうかをこの3日間ですっと考えていたのだろう。極力接することのないようにしていたために、直接話すことは今の今まで無かったが、このタイミングで実現した。

この考え方の変化は、シロクロと和解できて視野が広がったことにより促された。嫌いな者の中にも、それと違う者がいる。艦娘でも深海棲艦でもそうだったのだ。当然、人間でも。

「か、勘違いしないでください。私は貴方のことが大嫌いです。命を繋ぐためとはいえ、こんな身体にした元凶なんですから。絶対に元に戻してもらいますからね」

「ああ、約束する。必ず今の研究を完成させ、君の身体を元に戻す。それまで少し待っていてくれ」

飛鳥医師側から強く握手した。困ったような顔を見せるが、それを振り払うことはなかった。

同時に飛び込んでくるクロ。三日月に抱きつき、頬擦りする。

「よかったあ！ 出てくって言ったらどうしようかと思つたよ！」

「どうせ出て行っても嫌いなものばかりですから、少しはマシなココを選んだだけです」

「またまたあ、居心地よくなつてきてるんでしょ？ わかる、わかるなあ。私達は艀装が直つたらここを出て行くつもりだけど、その後もここに何回も来ると思うもん。マヤに整備してもらいたいしきー」

初耳と言わんばかりにシロを見る摩耶。一切目を合わせようとしてないシロ。とはいえ、整備を楽しんでいる節もあるので、摩耶は嫌がることなく喜んで整備をするだろう。

「三日月には私の家事を手伝ってもらおうかな？」

「家事……ですか」

「働かざるもの食うべからず！ 仲間になったのなら、何かしらやつてもらおうからね！」

「仕方なくここにいますだけですが、タダ飯食らいと言われるのも癪なので、家事をお手伝いさせていただきます」

私と摩耶が艤装整備側に入るため、雷と三日月で家事をしていくというスタンスで取り決められそう。ずつと1人でやってきた雷は、そういう意味でも仲間が出来たことが嬉しそうだった。

「定期的に身体を診断させてもらいたい。何事も無いはずだが、時間経過で何か起きてもらっては困るからな」

「人間に触られるのは嫌です。……なので、若葉さん経由でどうぞ」

生活自体は今までと殆ど変わらない。側に付きっ切りになることが無くなるくらいで、三日月の体調管理などは私達がやっていく。三日月の身体に触れることは、私が一番慣れている。それは今後とも続けていくことになるだろう。

長かった三日月の問題も一時的に解消された。飛鳥医師への一方的な嫌悪感を持ったままではあるが、この施設の一員として、私達と一緒に生きてくれるようだ。

ならば、私と同じように『楽しく生きる』ことが出来るように、全力でサポートしていこう。

姉妹の絆

三日月が正式に施設の一員となった。とはいえ、まだ飛鳥医師のことは嫌いと言言し、敵対心は払拭出来ておらず、事務的な会話以外では自分から話しかけることもなく、相変わらず目は一切合わせようとしない。

それでも、同じ空間にいても暴れるようなことはなくなった。そのため、ようやくみんな同じ部屋で食事をする事が出来るようになった。翌日の朝食からは食堂に三日月の席も作られ、皆で揃って食べることに。

とはいえ、まだ慣れていない部分もあるため、三日月は基本私、若葉の側にされている。三日月もそれを希望した。

「三日月、まだ若葉の部屋で寝るのか？」

「落ち着けるのは若葉さんの側だけです。何かあった時に頼れるよう、今後ともお願いします」

自室は与えられているものの、敵に囲まれているという感覚はまだそのままらしく、夜は私の側にいたいとのこと。ここで生活するということとは、私達で言うのなら常に嵐の夜という感覚なのだろう。心細いというか、温もりが欲しいというか。

「やっぱ若葉が一番懐いてるよな」

「境遇が同じだもの。一番わかかってあげられるのは若葉よね」

「そうです。私の仲間は若葉さんだけです」

私に対しての感情は、まだマシから少しランクアップして信頼に。1週間、朝から晩まで常に側に居続けて、会話をし続けたことでここまで辿り着いた。雷が言う通り、境遇が同じというのも大きい。

この施設の一員となっても、私の側にいることは変わらないだろう。私が機装整備をしている時は、さすがに離れていてもらいたいののだが。そういう時は雷の手伝いで家事に専念してもらおう。

「あ、そうだ。三日月、眼帯いるか？ あたしは見え方が違うから着けてるんだが、お前はどうかよ」

「今のところは違和感はありませんね。また何かあればお願いします」

す」

「あと、一応こんなものもあつただけけど使うか？ 顔の傷を隠すための……」

取り出したのは仮面。雷巡チ級の身につけている、左目と口元が露出される仮面である。三日月は左目に深海棲艦のものが移植されているため、それがモロに見える形になってしまう。

どう考えても傷なんかより違和感がすごい。仮面を着けている艦娘なんて、何処を探してもいないだろうに。

「……仮面なんて傷より目立つでしょう」

「隠れはするぜ？」

「それなら治療を待ちます」

口の割には飛鳥医師の治療には期待しているようだ。

三日月が一員となったことは、来栖提督の鎮守府にも伝えられた。ただし、精神的なダメージがあまりにも大きいことも同時に伝えられており、顔を合わせたらまず確実に暴走すると思われる。提督という役職には私以上に敏感なので、すぐに会わせるのは難しい。人相の問題で。

代わりではないが、第二二駆逐隊がまたこちらに遠征に来るという話が入った。三日月の姉でもある4人なら、艦娘嫌いだとしても多少は交流出来ると思う。

そろそろ到着するという報せを受け、私達は工廠で待機。今回は何かを隠すわけもなく、全員で出迎える。シロもクロも来客には抵抗が無い。

「姉さん……ですか」

「ああ。この施設に頻繁に遠征に来るんだ」

実の姉であっても艦娘は艦娘。嫌悪感が無いわけではないようだ。少し身体が強張るのがわかった。

大丈夫、私が保証する。あの4人は傷を見ても嘲笑うことなどしないし、気持ち悪がることもしない。私の痣を見ても何も言わなかったどころか、カッコいいと興奮したほどだ。何も心配は要らない。

「若葉さん……私は……」

「大丈夫だ」

震える手を握ってやる。こういう落ち着け方が出来るのは、この施設では私だけだ。一番気を許している私が、三日月の支えになっただけなくては。

「キツかったら、若葉を頼ればいい」

「……はい」

力強く握り返してきた。私と一緒になら、姉達の前にも勇気を持って踏み出せるだろう。

少しして、4人の艦娘の影が見えた。今回は運ぶゴミと鋼材は少ないので大発動艇は1隻。向かってくる影の1つがこちらに大きく手を振っていた。明るい金髪がこちらからもすぐにわかる。あれは皐月だ。

こちらからもしっかり振り返しておくが、三日月は私の陰に隠れるように移動した。遠目でも姉の姿が見えても、嫌悪感が無くならないようだ。

「……姉とか関係無かったです。やっぱり艦娘が嫌いなのはどうにもなりません……」

「大丈夫だ。話してみればわかる」

そもそもこの施設から出ていく選択肢が無かったのだと思う。100歩譲って来栖提督の鎮守府だろうが、鎮守府という存在自体に嫌悪感を抱いている節があるため、まずそれに慣れるためのカウンセリングがいったらだろう。それが上手くいくようならこの施設にも住めると思うが。

「飛鳥せんせい、遠征部隊、来ました」

相変わらずの間延びした声。旗艦の文月が工廠に上がり、他の3人もそれに続いて上がる。大発動艇は所定の位置に。

「ああ、ご苦労様。摩耶、持って行ってもらうものはあるか?」

「廃材がいくつもあるから、鋼材に使えると思って集めておいたぜ。量はそんなに多くないが、持っていつてもらうな」

摩耶だけでも積み込めるくらいの量らしく、作業着で準備していた

のは摩耶だけ。摩耶を除く私達は普通に制服。シロとクロは相変わらず私と雷の運動着を私服にしている。

「今日の本題なんだが……」

「妹がいるって聞いてまあす。でもいろいろと事情があるって」

チラリとこちらを見る。慌てるように私に隠れる三日月。顔も合わせたくないという気持ちがありありと伝わってくる。嫌悪感もあるし、羞恥心もある。恐怖だつてあるだろう。

私達は、文月達が三日月を傷付けるようなことを言わないことはわかってはいるが、三日月は初対面だ。1週間かけて私達にはようやく慣れたが、初対面の艦娘に対しては毎回こうなってしまうのだと思う。それをどうにかするのは、紛れもなく私の仕事だ。

「三日月、どうする。話せるか?」

「……辛いです。いくら姉でも、艦娘は艦娘ですから……」

すぐには難しそうなので、私が仲介役となる。

「すまない文月。理由は知ってるか?」

「うん、しれーかに聞いている。でも、ここまでとは思ってなかったかなあ」

たははと苦笑する文月。その間も三日月は私を壁にして三日月への視線を避け続ける。布団の次は私自身が三日月の身を守る盾にされているようだった。

だが、それを見逃し続ける4人では無い。文月は私の前から退こうとしないが、そろりそろりと皐月と水無月が三日月に近付いていた。長月はこちらを見ているようだが、摩耶の積み込みをサポートしているらしく、こちらには来ていない。

「みーかづきー! ボクらとお話しようよ!」

「水無月、妹とお話したいなあ!」

私の後ろに隠れたとしても、回り込まれてしまったら意味がない。抑えられるのは1人だけだ。2人がかりだとどうにも出来ない。

「ひっ……!?!」

「ぐえっ、み、三日月っ」

必死に私の身体を掴んで2人をガードしようとした。咄嗟のこと

過ぎて腰を痛めかけるが、三日月はそんなこと御構い無しに私を盾に使い続ける。

ここまでされると臯月と水無月も事の重大さがわかってくれたと思う。私の腰がおかしくなる前に諦めてくれた。錯乱して息も絶え絶えな三日月は、しな垂れかかるように私に抱きついてきた。

「三日月……若葉の腰がまずい」

「ご、ごめんなさい……でも、でも無理です……無理なんです……嫌なんです……」

「わかってる、わかってるから、腰を掴んで振り回すのはやめてくれ」
もう泣いてしまっている。実の姉に対してもこの態度。心の傷が深すぎる。

背中に隠れている三日月を正面から抱きしめ、背中を撫でながら落ち着かせる。その間に臯月と水無月に離れてもらった。バツが悪そうにしているのを見ると、私も申し訳ない気分。

「三日月、大丈夫だ。文月達は信じていい。臯月と水無月はお調子者なだけだ。ちゃんと三日月のことを考えてくれている」

「ひっ……嫌あ……嫌なのお……艦娘嫌い……」

「落ち着くんだ。ここには敵はいない」

初めてシロクロと顔を合わせた時のようになつていた。嫌悪感から暴れないだけマシかもしれないが、これでは姉妹の会話どころではない。

だが、ここであえて文月が前に進み出た。相変わらず柔らかく不思議な雰囲気の間月は、少しフワフワしたように見えるが、強い足取りで三日月のすぐ側に。

「三日月ちゃん」

「ご、来ないで……来ないでえ……」

「大丈夫。怖くないよ、あたし達は三日月ちゃんの味方。お姉ちゃんだもん」

やんわりと三日月の頭を撫でた。それを力一杯振り払おうとするが、その腕は私がロックしている。ジタバタと暴れるが、ずっと大丈夫だと呟いて落ち着かせる。

文月に撫でられる内に、少しずつだが落ち着いていくのがわかった。私が撫でるよりも、優しく、姉妹愛がこもった文月の手の温もりの方が効いているようだった。少し寂しいと思いつつも、落ち着いてくれればいいとそれを見守る。

「ね？ 三日月ちゃん、あたし達とお話し、してほしいな」

「わたし、私は……」

「三日月、文月は敵じゃない。若葉達の仲間だ。信じてくれ。ほら」

三日月を解放し、文月と向かい合わせる。顔の真ん中、斜めに走る大きな傷を見ても、文月は一切表情を変えない。にこやかに微笑み、正面から抱きしめた。

文月は所謂改二。第二改装をしたことにより私達よりも少しだけ身体が成長している。包容力も私より高いだろう。その証拠に、三日月はもう抵抗せず暴れていない。これは文月だからこそ受け入れられているのかもしれない。

「さすが文月だなあ……ボクラじゃ絶対こうならなかったよ」

「同じくらい大好きなのに、ふみちゃんの方が伝わるんだよねえ」

皐月と水無月の発言から、文月の特性であることがわかる。

「大丈夫、大丈夫だからね。あたし達はお姉ちゃんだもん。三日月ちゃんのこと、絶対に裏切らない。見捨てたりなんかしない。だから、落ち着いて、ね？」

「ね、姉さん、姉さん……うあああ！」

ついに陥落。三日月は文月の胸に顔を押し当てて大泣きし始めてしまった。

後から聞くことになるが、『天使』という異名まで持つ文月だからこそ、この短時間で三日月の信用を得ることが出来たのだと思う。姉妹であるというのもあると思うが、文月の人柄が大きい。

ずっと文月が撫でていたことで、三日月は落ち着き、泣き疲れて眠ってしまった。来客中に眠ってしまうということは、それほどまでに心が静かになったということだろう。いつも不安に押し潰され、嫌悪感と恐怖に囲まれて生きている三日月には、ちようどいい休息にな

るだろう。少しだけの間かもしれないが、ゆっくり眠ってほしい。

「若葉ちゃん」

「なんだ」

呼びかけられて文月の方を見ると、ゾクリと背筋に寒気がした。いつも朗らかで緩いイメージがあった文月の目が、冷たい怒りに満ちていた。今までの雰囲気が一転、冷たく、重く、地が揺れるようなプレッシャーを感じた。

一歩引いていた皐月と水無月からも、同じものを感じた。妹がここまで壊れている姿を見て、怒りに満ちていた。

「三日月ちゃんにこんなことしたの……だあれ？」

「……まだわからん。だが、おそらく若葉にも同じことをした鎮守府ではないかと思う」

私の知っているのはそれくらいだ。もう関わり合いは持ちたくなからと、私自身が詳細を調べることはなかった。そもそも、こんな辺鄙な場所にある小さな医療施設で、そんなことは出来ないし。

「ん、じゃあ、あたし達に任せて。しっかりきつちり、やつちやうからね」

柔らかい口調で言うが、今の一言にはいろいろな感情が込められているのを察する。こうしたことを後悔させてやると、普段の文月からは考えられないような感情が渦巻いている。

文月が歴戦の勇者であることは、これでよくわかった。

一度瞬きすると、その雰囲気掻き消え、いつもの文月に戻っていた。ピリピリした空気は無くなり、ここに来た直後のような柔らかい笑顔を浮かべる。

「皐月ちゃん、水無月ちゃん、アレはダメだよお」

「うん、まさかここまでとは思ってなかった。起きたら謝らなくちゃ」
「だね」

皐月と水無月も眠っている三日月の髪を撫でたり頬をつついたりしていた。

「積み込み、終わったぞ」

事を済ませた長月も合流。今の騒ぎは遠くで見ているため、既に三

日月の状況は把握している。先程の3人とまでは行かないが、長月も怒りを覚えているのはわかる。

「もう少しここにいよおね。三日月ちゃんが目を覚まして、お話ししてから戻ろお」

「ああ、それがいい。それに、旗艦がそうするって言ってるんだ、我々随伴艦はそれを聞くしかないからな」

言いながら、長月も三日月の頭を軽く撫でていた。

姉妹の力は偉大だった。同じ継ぎ接ぎの仲間だとしても、心を許すことは簡単には出来なかった。それを、ものの数分でここまで。

怒りを露わにした時のプレッシャーといい、まだ数ヶ月しか生きていない私と違い、年単位で生きているだけあって修羅場は何度も潜っているのだろう。そういう意味でも、私は文月には敵わないなど、改めて実感した。

不意の嵐

三日月が施設の一員になったことで、来栖提督の鎮守府から交流のために第二二駆逐隊が遠征にやってきた。

姉妹ということで三日月も多少は接触することが出来るかと思っていたが、艦娘であるというだけで嫌悪感が発露してしまい、暴走しかけることとなる。だが、第二二駆逐隊の旗艦、文月の包容力によりそれを退けることに成功、三日月の交友関係はこれでまた拡がることになった。

私、若葉は改めて、文月の、第二二駆逐隊の強さを知った。戦闘経験もない、艦娘と言えるかもわからない私ですら、怒りを露わにした文月には、絶対に敵わないと思えるほどのプレッシャーを感じた。歴戦の駆逐隊であることを実感。

泣き疲れて眠ってしまった三日月は、十数分程で目を覚ました。それまでは皆が周りを囲い、起きるのを待っていた。その間に雷がお茶を淹れている気の配りよう。

先程は文月には泣きついてしまったが、目を覚ますと同時に慌てて私の後ろに隠れる。姉妹の力も強いが、時間の力も強い。たった1週間程度でも、常に側にいた私の方が安全と認識しているのかもしれない。

「ごめんよ三日月。そこまで怖がるなんて」

「うん、ごめんねみかちゃん」

「……ああいうのは嫌いです。姉でもやっていいことと悪いことがあります。反省してください」

私の後ろから姉2人に悪態。例え相手が姉であろうが、艦娘嫌いはまだまだ治りそうにない。元々の性格は私は知らないが、言われた2人は大きく項垂れていた。元はこういうことを言わないような子なのだろう。

「ごめんね三日月ちゃん。2人にはちゃくんと言い聞かせておくから」

「……文月姉さんは……まだマシです」

文月には気を許したように見えたが、苦手意識が先行して目を合わせようとしない。それでも、まだ出会ってそこまで経っていないのにこれとは、文月はなかなかの好感度。さすがは包容力トップの天使。最初から呼べばよかったかと思っただけのもの、今の段階にまで他人慣れしている状態でなければ、文月にも暴力を振るっていたかもしれない。実際私が押さえ付けていかなかったらジタバタしていたし。そういう意味では、私達に慣れてもらっておいでよかったか。

「若葉、三日月はやっぱりコンプレックスがあるのか」

長月が小声で聞いてきた。三日月はかなり近い位置にいるが、ギリギリ聞こえないように。

「ああ。だから触れないでやってほしい」

「だよな。そうじゃなきゃタイツは穿いてない」

長月は私の痣をカッコいいと褒めてくれたが、同じことを三日月にやった場合、逆の方向に向かってしまうだろう。傷や髪のこととは言わないであげてほしいため、先に忠告しておいた。長月も察する能力は高い方のようだ。

「三日月、私達は度々ココに来る。今日は無理かもしれないが、次に来た時は仲良くしてほしい」

「……はいとは言い切れません」

「いいえじゃ無ければそれでいいさ。若葉、三日月を頼んだ」
「任された」

必要最低限の会話で終わらせる長月。三日月が外の者との対話が難しいことがよくわかっている。

「ボクらも来るから!」

「4人で第二二駆逐隊だからね!」

「……ああいうことをしないならいいです」

打って変わって明るくなつた皐月と水無月。姉という立ち位置から、三日月もそれなりに大目に見ているように思えた。

「三日月ちゃん、さっきも言ったけど、あたし達は絶対に裏切らないからね。信じてくれると嬉しいな」

「……時間を下さ」

「うん、大丈夫だよ。何度も会いに来るからね」

文月が触れることにはもう抵抗が無いようだ。差し出された手に対し少し考えるも、握手に応じた。これが今後、ノータイムで手が出せるようになればいい。それにはまだまだ時間が必要だろうが。

少し休憩後、第二駆逐隊が帰投する準備をしていると、何やら雲行きが怪しくなってきた。雨が降っているわけではないが、今にも降りそうという空。

この施設で過ごしていると天気予報を逐一チェックしているが、今日は嵐の予報ではなかったはずである。だが晴天というわけでも無かったため、こうなる可能性も無いとは言えなかった。降水確率も微妙だったはず。

「あくあ、なんか雨降りそうだね」

「急いで帰っちゃおう？ でも結構距離あるんだよね」

皐月と水無月が話していると、飛鳥医師が最新の天気予報を調べてきていた。

「急激に下り坂になったらしい。夜になるまでここから嵐になるそう
だ」

「ええー!? じゃあ帰れないよ!」

「前回の嵐からおおよそ3週間か。そろそろ時期だな」

今から今晚にかけて嵐が来るとのこと。本当にここは嵐が来やすい場所のようだ。厄介なことに、日中にやってきて夜頃に終わるとのこと。

別にこういうことが無いわけではないが、嫌なタイミングといえば嫌なタイミングだ。無理して帰投すると、雨に打たれながら帰る挙句に海上で嵐の直撃に遭う可能性が高く、嵐が終わってから帰ろうにも、暗がりの中の帰投になってしまう。どちらの状況でも危険。

安全を取るなら、1日この施設に滞在することがベスト。明朝に帰投が一番安全だ。

「来栖に連絡しておこうか。君達は今日はここで待機した方がいい」
「はーい。ありがとうございませう」

こういうことも初めてではないらしいが、片手で数えられるほどのレアな状況のようだ。まだ部屋は空いているため、4人なら充分泊まれる。

こうなつて表情が変わつたのはやはり三日月である。この1週間でようやく施設の住人に慣れてきたというのに、外からの者が近くにいる環境となると、ストレスが凄まじいことになりかねない。さらに、私達ですら嫌な嵐である。夜でなくても嵐の嫌悪感が出てしまう。

「では、大発動艇をどうにかしておいてくれ。せつかく鋼材を積み込んだが、一旦下ろそう」

「あいよ。また明日の朝に積み直せばいいな」

「あたしが大発を縛っておきまゝす」

摩耶が手早く鋼材を下ろし始める。大発動艇は文月のコントロール下のため、工廠の端に寄せて錨と鎖で固定。

「また私達の艤装のパーツが流れてくるかな?」

「そうだといいいね……潜水艦のマスクとか……欲しいね」

「だね! また艤装の完成が近付くよ!」

久々の嵐にクロはテンション急上昇。シロも心なしか嬉しそうである。嵐の度にパーツは増える。何かしらの発展に繋がるため、2人には恵みの嵐だ。

「嵐の規模はそこまで大きくないが、用心はするように。じゃあ、僕は来栖に話をつけてくる。部屋は好きに使ってくれ」

「お部屋の準備をしてくるわ! 三日月、手伝ってもらえる?」

「わ、私ですか。……家事を覚えるいいチャンスですし、お手伝いします」

しづしづという感じで三日月は雷についていく。家事手伝いもこれが初めてとなる。ここから施設の一員となつていくのだ。

雷の手伝いという形での初めての家事は上々だったそうだ。掃除くらいなら誰でもできると三日月は言うが、雷はベタ褒め。最高の相方が出来たと大喜びであった。

部屋の準備が出来た頃には、窓に叩きつけられる雨音が施設内に響き渡っていた。雨風は比較的強く、昼間だというのに外は少し暗い。

この音を聞いていると、どうしてもあのトラウマが蘇ってくる。それはこの施設のものなら誰でも思うことであり、いつもと同じように雷と肌を寄せ合う。今回はそこに三日月も加わった。

「この音を聞いていると……イライラしてきます」

「若葉も同じだ。風と雨の音が嫌いだ」

「そっか……同じ境遇だもんね……思うことも同じよね」

その嫌悪感を少しでも抑えるため、3人でひとところに固まってジツとしている。嵐の時だけは雷も浮かない表情になるので、施設内が少し暗くなってしまう。それを解消するためにみんなで寄り添うのだが。

夜になる前に全てが終わるらしいので、自室ではなく談話室に集まった。そのまま眠るわけではないが、温もりをより強く感じるために毛布持参。

精神的なものはいくら時が経ってもなかなか払拭されない。特にこれは、生死に関わるトラウマのキツカケだ。嫌でも反応してしまう。

「三日月、大丈夫？ お茶淹れようか？ 頼ってもいいのよ？」

「……雷さんは自分の心配をした方がいいです」

そんなことを言う雷は手が少し震えてしまっているため、ジツとしておいてくれた方がいい。

「あ、ここにいたんだ。お部屋、ありがとおね」

3人寄り添っていると、談話室に文月がやってくる。今日泊まるための部屋を用意され、その確認を終えたところのようだ。文月がここに来たことで、他の3人もやってくる。文月がここに姿を現した時点で、三日月は毛布を頭から被っていた。その姿に私も雷も苦笑するしかなかった。

談話室は大体10人入れる程度の広さ。4人が私達の対面に座っても、今はまだ余裕がある。

「ずっちー、水無月がお茶淹れるよ。勝手に使っちゃって大丈夫？」

「ええ、大丈夫。コップとかは適当でいいわ」

「はい」

水無月が談話室の給湯器を使い、手慣れた様子でお茶を淹れていった。正直意外。

「夜になるくらいで嵐は終わるんだよね。じゃあ、嵐が終わったらちよつとだけ浜辺見てこよつか」

「暗い中をか?」

「万が一のことがあったら困るでしょ。そこから一晩放置になるんだから」

皐月が言うのは、この嵐で万が一生物が漂着してしまった時のこと。夜に戦闘に駆り出されて流れ着いたとしてもそれなりに放置されてしまうのに、今の時間に流れ着いてさらに一晩となると、その時ギリギリだとしたら助けられる命も助けられなくなる可能性がある。

最悪なことを考えるのなら、雨風が止んだ時点で一回見るだけ見た方がいい。ゴミは放置して翌朝からでもいいが、命を放置するわけにはいかない。

「飛鳥医師には?」

「勿論伝えている。それに、先生から打診されるだろう。さつと見るだけ見ようとな」

「何も無いことを祈るけどね」

私達がこの施設の一員になる前は、ここの浜辺の清掃を手伝っていたという二二駆。そういった部分は私よりも把握しているほどだ。もしかしたら、私達よりも効率よく事を成していくかもしれない。

「私がここに入ってから、摩耶さんが入るまではずっと手伝ってくれたのよね。本当に助かるわ」

「いいのいいの。困った時はお互い様だよ」

「それに、ここで集まった鋼材でこっちの鎮守府も潤うからね。WIN—WINでしょ」

全員分のお茶を持って水無月も話に参加。一口飲んでみるが、普通に美味しい。

「そう思うと、ここも人が増えたな」

「私がここに来て、大体1年でこの人数ね。何だか、まだまだ増えそうで怖いわ」

仲間が増えることはあまり歓迎出来ない。健康体でこの施設の世話になるということはまずあり得ないからだ。

生死の境を彷徨い、飛鳥医師の手でそれを乗り越え、継ぎ接ぎの者となったものだけがこの施設の一員だ。そんな者は増えないに越したことはない。摩耶のような不運ならまだしも、私や三日月のような人為的なものは特に。

「ところでさ、その毛布の塊は」

「御察しの通りだ」

私の隣で少し震えている毛布の塊。未だに身近に居られるのは私だけではあるものの、この場から逃げ出そうとしないのは成長と言える。姿を現わすつもりはないし、目も合わせるつもりもない。会話に参加することもない。

「逃げられないだけマシかな」

「殴られないだけマシだ」

私の発言に反応して、毛布の塊に脇腹を小突かれた。飛鳥医師と初めて顔を合わせた時に、暴れるのを止めるために私は何発か殴られている。そういう意味では、三日月に手を上げられたのは私だけか。それはそれで特別感があって悪くない。

「三日月ちゃん、落ち着いたらお喋りしようね。今日は一晩泊まらせてもらうから、何かあったらお姉ちゃんに言ってね」

文月の言葉に、毛布の塊は無反応。まだまだ他人慣れは遠そうである。

「お姉ちゃん……いい響きよね！　ねえ若葉」

「何度も言っているが、雷のことを姉とは呼ばん」

「もう、いけずなんだから」

叩き付けられる雨風のせいでテンションが下がり切っていた雷も、文月達と話をする内にいつものテンションに戻ってきたようだ。そういう意味でも、4人がいてくれて良かったかもしれない。三日月には申し訳ないが、私も人が多ければ多い方が楽しめる。

結局、嵐が終わるまでずっと談話室でお喋りに興じていた。文月達は三日月のことも考えて話題を選んでくれた。おかげで、三日月は少しだけでも他人に慣れ始めたように見えた。

外の者でも姉は姉。本来は私よりも慣れるのが早いに決まっている。最終的には、文月相手には毛布の隙間から顔を見せるくらいには改善された。他の3人相手ではまだ難しいが。

この交流は頻繁に行いたいところである。三日月のために、みんなのために。私も4人とは何度でも会いたい。

夜の浜辺

飛鳥医師が調べた通り、昼間にやってきた嵐は夜になる頃には終わっていた。窓に叩きつける雨風は終わり、外は静かなものである。

工場のシャッターを開けると、綺麗な星空と静かな海が見える。が、それをゆつくりと見るのは後にして、大発動艇がちゃんと繋がれているかを確認。雨風に加え波にも巻き込まれてビショビショだったが、問題なく同じ位置にあつたことで安心する。

「やっぱり帰れないね〜」

「司令官に連絡してもらって正解だったね」

月明かりが眩しいほどではあるものの、今から鎮守府に帰るとなると、下手をしたら日を跨ぎかねない時間である。暗闇のせいで方向もわかりづらく、事前準備が無い状態で海に出るのは自殺行為だ。

「夜の浜辺の探索は危険だ。一通り見たらすぐに戻ってきてほしい」

「探照灯が無えからな。足下に気をつけて動けよ」

一応浜辺は街灯で照らされている場所はあるが、暗いことには変わらない。小さいものなどは落ちていても気付くことが出来なそう。

今回の夜の探索は万が一のことを考えたものであり、さらつと見て終了の予定である。そのため、浜辺付近を艀装を使つて駆け抜けるのみ。速さ重視である。

「じゃあ、あたし達がここから出て右に行くね〜」

「私達が左ね。そつちは任せたわ」

各班4人ですぐに終わらせようという判断。第二二駆逐隊に片面をお願いして、我々施設の者でもう片方を終わらせる。シロクロ姉妹は施設で待機。今は永続的に潜水することが出来ないため、夜に潜るのは海上より危険と判断された。

「よーし、ちゃちゃつと終わらせつぞー」

摩耶を先頭に、雷、三日月、そして私、若葉の順で施設を発つ。ちよつとした水雷戦隊のようだったが先頭が重巡洋艦だから少し違うか。

三日月が落伍しないように最後尾から見ているポジションになつ

だが、こういうのもなかなか悪くない。団体行動をしていると実感できる。この立ち位置は嫌なことも思い出させるが、度々摩耶がこちらを振り向き、何事もないかを確認してくれるのが心強い。

これが本来の仲間であり、部隊というものだろう。周りに気を配り、誰も欠けていないことを確認しながら進む。誰かを捨てていくだなんて以ての外。

「もし誰かが倒れてたとしたら、それが死骸だとしてもすぐに運ぶ。それ以外は明日の朝に運ぶ。いいな？」

「了解。そのための艀装だ」

夜の清掃は流石に初めて。今までにやったことがないことというのはやはり楽しい。だが、トラウマを刺激されるのは変わらず、少しだけ気分が悪い。

暗がりのためあまり表情は見えないが、三日月も私と同様の状況。夜に海に出るという行為自体がトラウマを抉る行為になっているが、ちゃんとした仲間がいることで、ギリギリ踏み止まれている様子。それを越えてしまうと錯乱してしまうだろう。

「でも、そんなに激しい嵐じゃなかったし、大物は少ないんじゃないかしら」

「まあな。前々回くらいか。だとしたら、死骸が1体上がってるくらいだな。艀装が流れ着くことは割とあるけどよ」

その言葉だけで三日月がビクついたのがわかった。私もアレに關してはあまり嬉しくない。というか誰も喜んではいない。摩耶も雷も、悲しいことに、ただただ慣れてしまっただけである。

「三日月、大丈夫？ 辛かったら私を頼ってくれてもいいんだからね？」

「大丈夫です。2人の会話に引いてただけなので」

「うん、それは仕方ないわね！」

相変わらずポジティブな雷。これくらいの愚痴ならさらりと流す。「デカイ戦いでもあったのか？ それなりに艀装が流れてきてるな」

最高速とは言わないが、それなりの速さを出しながら海岸線を駆け抜ける。ぎつと見た感じ、完品としては少ないが、艀装がちらほら見

えた。艦娘も深海棲艦もどちらもである。三日月が流れ着いた時ほどではないが、明日どうにかしなくてはいいかないゴミは大分あるようだった。クロが喜びそう。

「来栖司令官が戦ってるのかしら。でもそれなら文月達が何か言いそうだけど」

「来栖提督の管轄じゃねえところからでも流れ着くからな」

「そのおかげで施設の資材は潤沢だけだね。持って行ってもらうくらいには」

嬉しいのやら悲しいのやら。戦いが続くことで浜辺が汚されるのは堪ったものではない。この浜辺は私達が清掃しているために環境保全が出来ているが、他にも似たような場所もあるだろう。そういう意味でも、早く戦いが終わってもらいたいものだ。

「……何か……聞こえたような」

不意に三日月が呟く。私達には何も聞こえなかったが、三日月には何か音が聞こえたらしい。

「息遣い……荒い息遣いのようなものが聞こえました」

「この辺に生きている何かがいるってことか。ちよつと念入りに探さぞ」

スピードを落とし、暗がりの中浜辺を確認する。ちようどそこは街灯の途切れ目であり、何かあったとしても影にしか見えないだろう。だが、三日月と摩耶にはその様子がよく見えているようだった。

理由は、移植された深海棲艦の眼。深海棲艦は夜目が利くらしく、片目だけはこの夜の闇の中でもよく見えたそう。摩耶は眼帯も外しているほど。

「あの辺りです。あれは……い、犬?」

近付くと確かに荒い息遣いが聞こえてきた。犬というよりは、ゼエゼエという人間に近い呼吸に聞こえる。今にも息絶えそうな、か細い声。

「犬じゃねえ! あれは深海棲艦の艦装だ!」

摩耶が深海棲艦の艦装と言ったそれは、どう見ても異形の生物であつた。

私も一応見たことのある、イロハ級の深海棲艦。その駆逐艦のような頭を持つ、少し短めの四足歩行の獣のような何か。頭が全体の半分近くを占め、頭頂部から背中にかけて飛行甲板のようになっていた。ということは、これは空母の艦装か。

今は危険な状態のようで、やたら長い舌を出して横たわっている。摩耶が艦装というだけあり、血が流れているわけではないが、燃料のような液体を垂れ流しており、脚も1本は挽げてしまっている状態。アレではバランスも取れず動くことが出来ない。

「摩耶、コレは生き物扱いでいいのか？」

「息をしてんだから生き物でいい。治療というよりは修理になるだろうが、コイツもすぐに運んでやるぞ」

「艦装というのなら、持ち主が近くにいるのではないのか？」

「そうだ！ みんな、近くに深海棲艦がいないか探してくれ！ 生死問わずだ！」

そう言いながら摩耶は、獣のような艦装を念のため持っていた包帯やら何やらで介抱している。艦装の方は、私達が近付いても敵対の意思が無いように見えた。

これが艦装で、生き物のように動くのなら、そう動かしている本来の持ち主がいてもおかしくない。だが、どれだけ探してもそれらしいものは見当たらなかった。死骸すらも。手を抜いているわけでもなく、暗いながらも出来ることは全てやったが見つからない。

「摩耶さん、全然見当たらないわ」

「……こちらは何も見えていません」

「若葉もだ。そいつ以外は動くものも死骸も無い」

夜目が利く三日月が言うくらいなので、本当にいないのだろう。

となると、まったく違うところに流されているか、もう死骸すら上がらないくらいの状態になってしまっているか、もしくは生存した状態で逃げたか。逃げたというのなら、そのうち艦装を探して施設に現れるかもしれない。だが死んでいるとしたら、この艦装はどうやって動いているのだろう。深海棲艦驚異のメカニズムだろうか。

「しっかし、あたしも噂には聞いてたが初めて見るぞ。これが深海棲

艦の『生体艦装』ってヤツか」

ある程度介抱した状態で持ち上げた。摩耶が持ち上げてもそれなりのサイズがあり、小柄な駆逐艦である我々と比べると、8割程度の大きさ。舌を伸ばせば余裕で我々より大きい。

このまま運びながら、先程の摩耶の発言に対して質問する。

「生体艦装とは？」

「その名の通りだ。生きてんだよ、艦装が」

深海棲艦独特な艦装らしく、艦装そのものが生きているらしい。そのため、本来の持ち主がいなくても、それ自体が今のよう動く。とはいえこの獣のような生体艦装は、海上航行能力を持ち合わせているようには見えず、本来の持ち主が抱えるか何かして運用していたのではとのこと。

「だからコイツは、艦娘でも深海棲艦でも無え」

「珍しいものもあるのね」

今の言葉に大きく反応したのは三日月だ。三日月の嫌悪感や恐怖の対象から唯一抜けている存在。見た目は完全に深海棲艦ではあるものの、物としては違うという扱い。私達以上に『生体兵器』である。

だからといっていきなり接することも出来ず、遠目に摩耶が運ぶ艦装を見つめている。弱った獣の艦装は、摩耶に運ばれている間ずっと、舌を垂れて荒い呼吸をしていた。

「三日月？」

「……あの子は……怖くないし……嫌でもないです」

「そうか」

見た目から恐怖を感じてもおかしくはないのだが、そういう概念から外れているようだ。三日月には、あの艦装もただの犬に見えているのかもしれない。

大急ぎで施設に戻り、獣の艦装を工廠に寝かせる。それを見た飛鳥医師は、何とも複雑な表情をした。シロとクロも驚きを隠せなかった。

「それは……生体艦装か！」

「ああ。だから、どう治療すりゃいいかわかんねえ」
「処置室に運ぼう。艀装のことは僕はわからない。摩耶、サポートを頼む」

何かを聞くまでもなく、そのまま処置室へ。置いていかれた私達は、一旦休憩となった。獣の艀装を見つけた地点で、今回確認してきたかった地点はほぼ全て完了している。私達だけでもう一周ということも無かった。

「……あれ……珍しいね」

あの艀装はシロも知っているようだった。深海棲艦に名前の文化が無い、人間が付けた俗称が何かはわからないが、シロクロ達と同じ姫級の深海棲艦が持つ生体艀装であることは間違いないそうだ。

「面識は無いんだけど……そういうのがあるつてのは……知ってる」
「私達の遠隔操作とは違うんだよね。命令しなくても勝手に動くんだよ。飼い主の意思に関係なく」

だから、持ち主がいなくても普通に動いていられるらしい。定期的に燃料を補給してやれば、破壊されない限りずっと。

だが、生きているだけあり意思も持っている。持ち主の言うことを聞かない……なんてことも無くはないようだ。

「あの子の飼い主は……多分生きてる」

「だよね。もしかしたらファミツキ達が連れてきたりして」

そうであるといいのだが。ああいうものは本来の持ち主の下にいる方がいい。

「た、ただいま……」

話していると、今度は文月の声。だが、何故か齒切れが悪い。

「お帰りなさい！ どうかした？」

「そ、その……ね。ちよつと変なもの拾っちゃって」

困った顔の文月。他の3人はこの場に姿も現さない。3人がかりで運ぶようなものを見つけたのだろうか。だとしたら、とてつもなく大きいものになる。

が、そんなものでも無かった。

「擦り傷かもしれないけど治療受けてって！」

「ペットはボクらも探してあげるからさあ！」

騒がしい水無月と皐月の声。その言葉から察するに、生きているもの、自分で動けるもの、こちらの言葉がわかるものがそこにいる。

それに加えて、『ペット』という発言。それに該当するのは、先程処置室に入った生体艤装しか思い当たらない。それ以外のものがあるのなら話は別だが。

「ム、ムリムリムリーツ！ ニンゲントカカンムストカ、ゼツタイムリーツ！」

独特な声色の、深海棲艦の声。その声を聞き、シロとクロがすぐに動き出す。

「……貴女のペット……ここにいるよ」

「さっきのワンちゃん飼主？ ならここで保護されてるよ。でも結構大怪我だったから、今絶賛治療中なんだよね」

シロクロの言葉を聞き、ヌルツと工廠に入ってきたのは、当然ながら見たことのない深海棲艦。

その深海棲艦は全体的に白く、髪にメツシユのように黒が交ざっている程度。シロクロの持つフィンのような角みたいな、ぱつと見で深海棲艦とわかる要素が一つも無く、その白さと声色から判断したに過ぎない。あの生体艤装を持っていれば辛うじてそれっぽくなるというくらい。

「ナ、ナンデココニ、ドウホウガイルノサ！」

「何でって、この施設に保護されたから。私達、大怪我して流れ着いたところ助けてもらったんだよね」

「……はい、こつち来て……」

シロがその白い深海棲艦に接近を強要。物凄く警戒しているが、長月が後ろから押すことで工廠の中に入れられる。

全容がわかったことで、白い深海棲艦も多少なり怪我をしていることがわかった。腕や脚に擦り傷程度ではあるものの、血が出ている。

「ペットの治療が終わるまでここで待っててよ。大丈夫、せんせーなら艤装だって治しちゃうから。マヤもいるし、絶対上手くいくって！」

「エ？ エッ!？」

「お茶淹れてくるわねー」

マイペースに事が進んでいく。白い深海棲艦は混乱して目を回しているほどであった。

「三日月、大丈夫か？」

「……大丈夫です。深海棲艦にもあんな人がいるんですね……」

やたら人間味のある白い深海棲艦を見て、妙に落ち着いてしまった三日月。いつもなら私の後ろに隠れているだろうが、今は普通に私の隣。自分から近付くこともないだろうが、深海棲艦への恐怖も感じていないように見えた。

猛獣使い

嵐が終わり、念のためと夜の浜辺を散策した結果、深海棲艦特有の生体艦装を発見。巨大な頭部を持つ犬のようなそれは脚が挽げており、すぐに治療の必要があったため、施設に運び入れた。

その後やってくるその艦装の持ち主。言われても深海棲艦か判断が付きづらいほどに人間味のあるその人は、工廠に無理矢理入れられ、混乱しながらも小さな傷の治療を受けていた。

「いやあ、あれは攻撃出来ないよ」

「今はアレだけど、水無月達が見つけた時、涙目だったからね」

あの深海棲艦を発見した第二二駆逐隊は、最初は敵の接近と考えて臨戦態勢に入ったらしい。だが、ペットを失い、探しながら迷ってしまったと本人の口から聞いたことで戦意喪失。非武装だったためにここまで連れてきたそうだ。

「ウー……ナンナンダヨオ」

「私達は貴女を助けたいの。勿論、貴女のペットもね」

治療をしているのは雷。人間や艦娘と同じ治療法が深海棲艦にも効くことはシロクロで実証済みのため、何の躊躇もなく治療を施していく。

深海棲艦は傷を負った時は自然治癒しか回復手段が無いため、こういった処置には慣れていないようだ。代わりに人間や艦娘と違い、その能力がずば抜けて高いため、問題なかったりするようだが。

「ウチノコハ、イマ、ドウナツテルノサ」

「脚を一本失っていたわ……でも大丈夫！ 先生と摩耶さんなら、きっちり治してくれるわよ！」

「シンパイダナア……」

暴れても仕方ないと諦めたか、少しは気を取り直して素直に雷の前で大人しくしていた。余計なことをしたらやられると怯えているように見えなくもない。妙に挙動不審なところがある。

見た感じ、本人が武装しているようには思えない。もしかしたら、攻撃は全てあの獣の艦装に任せており、居なくなったら何も出来ない

というタイプなのかも。もしくは単独行動が出来る艦装ではあるが、持ち主が持てば更なる力を発揮するとか。逆も然り。

この深海棲艦は猛獣使いビーストテイマーか何かか。1人と1匹で1つの深海棲艦と考えればいいかもしれない。ちょうど目の前に2人で1つの深海棲艦がいることだし。

「……ちよつと……いいい？」

「ナ、ナニサ、シロイノ」

振り向いた瞬間にシロが白い深海棲艦の喉に触れた。悲鳴を上げかけるが、その前にサツとやりたいことだけやって手を離す。

「何しやがるっ！ ……って、あ、あれ？ 声が……」

「出ていくときに……元に戻したげるから」

相変わらず便利な能力である。何をどうやったら声色まで変えられるのか全くわからない。

飛鳥医師は一応わかつているようで、おそらく深海棲艦は、艦娘よりも兵器に近いのだろうという解釈になった。より人間に近いのが艦娘、より兵器に近いのが深海棲艦。だから、外部から触れるだけで何かしらの変化が機械的に促せるのではないかと。実際に死骸の解剖の結果でそれらしい答えに行き着いたのだとか。

「まあ……いいけど」

「ここにいる間は……その方がいいよ」

自分の喉を撫でながら首を傾げる白い深海棲艦。自分でも何をされたかわかっていないらしい。あんなことが出来るのはシロだけのようである。

「ここは……一体なんなのさ」

「うーん、なんて言えばいいのかしら。医療施設？」

「それでいいだろう。実際、若葉達はここで治療してもらっているんだからな」

私達の姿を見て、また首を傾げる。雷では違和感を持たなかったのだろうが、おそらく私の腕を見て何かに気付き、その後ろに立つ三日月を見て、さらに確信に至ったようだった。

「継ぎ接ぎ……？」

「ああ。若葉達はそうやって命を繋いでもらった。だから、艦娘だろうが深海棲艦だろうが関係ない。救えるものは救う」

「……ふーん……そう」

少し視線が痛い。深海棲艦でもこんな身体は見たことがないだろう。シロに言わせれば、匂いが混ざっているようなものは、誰から見てもおかしい身体だ。

「ここに迷い込んで、よかったとは思う」

「それは良かった」

私もこの深海棲艦なら問題ないと思った。何より、三日月が恐怖を感じていないというのが大きい。無言は貫いているが、私の後ろに隠れるようなことが無いというだけで安心できる。

何がキツカケかと言われれば、おそろく最初の慌てようだろう。人間も艦娘も無理というまるで三日月の鏡写しのような発言に親近感を覚えたか。

「よし、手術終了！ お疲れさん！」

「摩耶がいなかったらどうにもならなかったな。半分以上艦装だったから」

「おう、おかしい形だったけど何とかなるもんだ」

工廠で待機すること小一時間。摩耶と飛鳥医師が工廠へ戻ってくる。摩耶は先程の獣の艦装を抱えていた。

腕がいた脚は少し歪ながらしっかりと機能するように修復されているが、見ただけで義足であることが丸わかりだった。艦装が艦装を装備しているような不思議な状態ではあるが、舌を出して元氣そうである。

「よし、歩いてみな」

獣の艦装を地面にゆっくり下ろすと、怪我をしていたのが嘘のように走り回る。あの大きな頭でうまくバランスを取り、普通の四足歩行の獣のようだった。艦装故か、術後の痛みも感じていないように見えた。

犬のように吠えるわけではないのだが、ハツハツと息遣いが聞こえ

てくる。先程の弱々しい息遣いとは雲泥の差。短時間の手術でここまで治るとは、艦装相手だからなのか、飛鳥医師と摩耶の腕がいいのか。

「おお……！ よかったなあ、よかった」

獣の艦装はすぐに白い深海棲艦に駆け寄り、大きな舌で頬を舐める。本当に飼い主と飼い犬のような光景。

「君は……この子の飼い主か」

「あ、そ、そうだ。うちのペットを治してくれて……あ、ありがとう」「礼は摩耶に言ってやってくれ。僕だけじゃ治療が難しかった」

ニカツと笑いながら手を振る摩耶。その顔を見て若干後退りしたようだが、ペットの恩人ということですぐに感謝の意を表す。苦手意識は晴れないものの、この辺りは礼儀正しい。

「あ、ありがとう……」

「どういたしました。面白い艦装だったから楽しめたぜ！」

肩をバンバン叩く摩耶。

この深海棲艦、やはり人間と艦娘が苦手な様子。強気を見せる場面もあるが、基本的に目を合わせてこない。ただでさえ摩耶は豪快なキャラだ。おそらく最も苦手なタイプ。

「もう遅い時間だ。今日は休んで、明日改めてそのペットを診させてくれないか。脚は繋いだが、他に何も無いことを調べておきたい」

「……わかった。お世話になる」

「ああ。で、だ。ずっと気になっていたんだが……ソレは一体何なんだ」

飛鳥医師が指差す先。白い深海棲艦の腰。救命用の白い浮き輪のように見えるのだが、何故か口と四肢を持ち、ダバダバ蠢いている。艦装でも無いが、深海棲艦というわけでもない。これまた不思議な生物である。

「これは……浮き輪さん」

「浮き輪さん」

「私の部下……になるのかな。なんて言えばいいか……お手伝いさんが一番合ってるか」

指摘されたため、腰に繋いでいた浮き輪を地面に下ろす。全部で3体、二足歩行で整列し、飛鳥医師に敬礼。思ったより礼儀正しい。オスカメスカもわからず、何故生きているかもわからない、完全に謎な生物。だが、この浮き輪に反応したのは、またしても三日月だった。

こちらも嫌悪感と恐怖の対象から外れたもの。さらには艦装のようなグロテスクさも無く、どちらかといえば可愛い系統。

「……可愛い」

「んん？ 三日月？」

「ちよ、ちよつと、触らせてもらっていいですか」

浮き輪に向かって手招きをする三日月。こんなに積極的な三日月はなかなか見れない。

それに気付いた1体が、ダバダバと三日月に近付き、飛び付くように抱きついた。胸に抱えて、その存在を堪能する。表情を見るに、別に抱えていても苦になるような重さでは無いようだ。

「不思議な感触……柔らかいのか硬いのか……肌触りも初めてのものです。何なんでしょう……」

「平気か？」

「はい。この子達なら何も問題は無いです。どちらかといえば好きな方……かも」

トラウマを刺激されず、今までに無い表情を見せている。笑顔はまだ無いが、いつも何かしら暗めな雰囲気を出している三日月が、明るい雰囲気を醸し出していた。

それを察した飛鳥医師が、何か閃いた表情になる。おそらく私もそこに辿り着いている。

「なあ君、少しの間、この施設に滞在してくれないか」

「は？」

怪訝そうな顔をする。人間に突然そんなことを頼まれたって、素直にイエスとは言えないだろう。ただでさえ人間と艦娘に苦手意識を持っている深海棲艦だというのに。

「協力してほしいことがあるんだ。君にも悪いようにはしない」

「……まあ、ペット治してもらってるし、その分くらいはいてやってもいいけど」

「ありがとう。詳しいことは今から話す。雷、その間に部屋の用意を頼んでいいか」

「任せてー!」

第二二駆逐隊の4人は仕事が済んだため、先に風呂を終わらせてもらう。雷と三日月はこの白い深海棲艦の部屋を用意し、シロとクロはもう眠そうなので一足早く自室に戻るようだ。ここからは残ったメンバーで医務室で話すことに。

医務室に入り、適当に椅子に腰掛ける。ペットは白い深海棲艦の側に座った。浮き輪は3体全てが三日月についてしまったようだ。部下の割には上司についてくることはないらしい。だから腰に結んでいるのだろうか。

「すまない。まずは……暫定的に呼び名を決めさせてほしい。何か無いだろうか」

「名前とかよくわからないし……。ああ、でも私を襲ってきた艦娘は、私のこと『ごえーせーすいき』とか呼んでた気がする」

護衛棲水姫。それがこの白い深海棲艦に人間が付けた名前だそう。本人は軽空母であり、所謂護衛空母がモチーフとなった深海棲艦なのだそうだが、基本的にはペットがいないと戦力としてカウントされないほごらしい。代わりにペットと合わさると尋常ならざる能力になるらしいが。

というか、やはり護衛棲水姫も艦娘に襲われているのか。辛うじて逃げ果せたようだが、その時にペットと別れてしまったのだとか。そこから迷って迷ってここに辿り着いた結果、ペットとも再会出来て大団円と。

「なら、仮に……セスとしようか」

「シロとクロはあんなに適当だったのに」

「いや、あれもかなり適当だぞ。せいすいきだからセスだな。語呂合わせレベルだ」

呼びやすいからいいか。護衛棲水姫、改め、セス。暫定的に名前が決まったところで本題。

「セス、君に協力してほしいことというのが、先程浮き輪を抱いて喜んでいた艦娘、三日月のことだ」

「浮き輪を持つてった奴のこと？」

「ああ。あの子はトラウマにより、心に大きな傷を負っているんだ。そしてそれは、君の持つ浮き輪と、このペットで癒されると僕は考えられている」

私もそれは思った。俗に言うアニマルセラピーというもので、三日月の壊れてしまった心が多少なり治るのでは無いかと思ったのだ。

浮き輪を抱きかかえた時の雰囲気は、今までになく明るかった。あれが維持出来れば、嫌悪感や恐怖心が払拭出来るかはさておき、楽しい時間が過ごせるのでは無かろうか。少なくとも、笑顔を取り戻すことが出来るのでは。

「なるほどね。私がここにいる間はいいよ」

「助かる」

「私も匿ってもらいたいし」

自分を襲ってきた艦娘が、まだ自分を追っているかもしれないと思うと不安だと言う。この施設から出ていくとその艦娘達に見つかる可能性が増えるわけで、余計な戦闘がしたくないセスとしては、どんな手段を使ってもそれを回避したかった。

私達は三日月のアニマルセラピーのためにセスの艦装と浮き輪を提供してもらいたい。セスは艦娘の追っ手から逃げ切るためにこの施設から出たくない。WIN—WINである。

「なら、しばらくは仲間だ。よろしく頼む」

手を差し出すが、やはり苦手意識が先行して手を握ることは出来なかった。目も合わせられない。

「ふ、触れ合うのはまだ無理」

「ふむ……なら君も少しここでカウンセリングを受けるといい。嫌でも雷が君を構うだろうからな」

苦手意識を克服したら侵略者になってしまうなんてことも無いだ

ろう。セスはシロクロと同じでそもそもが非好戦的な深海棲艦だと思う。なら、仲良くしておきたい。

いずれ出て行ってしまおうとは思いますが、それまでは仲間として、一緒に暮らしていく。突然ふらりといなくなることも無さそうだ。

「そのペット、何を食べるんだ？」

「この子は、廃材を食べて自分の燃料にする。そんなに大食いでもないから」

「よし、そのペットの名前はエコだ」

確かに、本来捨てるべきもの、二二駆に持って行ってもらって廃棄する廃材を全て食べてもらえるのなら、非常にエコロジーだ。だからといって名前にまでするのはどうかと思うが。

嵐のたびに仲間が増えている。それが喜ぶべきことなのかはわからない。少なくとも、今はこの生活を楽しもう。『楽しく生きる』は、まだまだ実践出来ている。

三日月の前進

艦娘に襲撃され撤退し、失った獣の艦装を搜索していた深海棲艦、護衛棲水姫が一時的に施設の一員として加わった。暫定的にセスと名付けられた彼女の持つ獣型の艦装、エコと、部下である動く浮き輪が、三日月の壊れた心を癒してくれるのではと考えたからである。セスとしても、艦娘の追っ手から身を隠せる場所としてこの施設に滞在することは了承。お互いWIN-WINの関係となった。

翌朝、いつも通りランニングのために薄暗がりの中目を覚ます私、若葉。本来なら三日月を起こさないようにベッドから抜け出るのだが今日からは少し違う。

「おはようございます、若葉さん」

「……張り切ってるな」

既に三日月も起きて、運動着に着替えていた。運動着であろうと顔以外の皮膚は見せたくないようで、上下ジャージでしつかり隠している。運動した後だと暑くなりそう。

私のランニングに付き合うというわけではなく、エコの散歩に付き合いたいと自分から言ってきたからである。

セスが言うには、エコは毎日2回、朝と夕方に散歩をすることで運動させているらしい。艦装ではあるものの、定期的に動かしておくことで、いざという時に即座に対応出来ると共に、メンテナンスの有無を常に知っておけるようにするためだとか。思った以上に飼い主と飼い犬の関係性だった。

静かに外に出ると、浜辺には既にセスとエコの姿もあった。昨晚の内にある程度は見ていたが、改めて外を駆け回らせ、義足の調子も確認していた。

まだ清掃をしていない浜辺なので、所々にゴミが散らばっている。そのうちの確実にゴミになるような廃材は、朝食代わりに既に食べていた。アレがエコの燃料になるのだから恐ろしい。

「おはよう、セス」

「おはようございます」

やってきた私達を一瞥した後、軽く手を挙げる。深海棲艦であるセスが目の前にいても、三日月は恐怖に怯えるどころか私の後ろに隠れるようなこともしない。相手がセスとはいえ深海棲艦相手にこの態度が取れるようになったのは、私としても喜ばしい。三日月も日々進歩している。

「エコの調子は？」

「上々。すごいね、ここの整備士。義足完璧」

「摩耶は重巡洋艦なんだけどな」

そのエコは、三日月の姿を見て一目散に駆け寄り飛び付く。見た目の通りそれなりの質量があるため、体勢を崩して浜辺に尻餅をつくハメになってしまったが、嫌な顔一つしていない。

「エコがこんなにすぐに懐くのも珍しいよ。人間や艦娘と関わりたくないって思ってるのはエコも同じのはずなんだけど」

「……まあ、理由はわかるな」

獣であるがため、意思はあっても理性がないエコには、シロと同じように何か不思議な見分け方をしているのだと思う。艦娘と深海棲艦の匂いが混ざっているとシロは言っていたが、それがエコには好かれやすい匂いなのかもしれない。

特に三日月は、私達と違ってその範囲が全身だ。見せないようにはしているものの、それがあつためにエコがすぐに懐いたのだろう。三日月的には願ったり叶ったりか。

「す、すごく戯れてきます」

「身体を撫でてやって。エコはそうされるのが好きだから」

「こ、こうですか」

三日月が艦装部分ではない腹の部分を撫でると、エコは余計にはしゃぐように動いた後、その大きな舌で三日月の頬を舐めた。

「わひゃあ!?!」

「三日月から聞いたことのない声が出たな」

正直、これはいい傾向だ。今だけは施設にいる間も常に付きまとってくる嫌悪感と恐怖心を忘れられているように見える。飛鳥医師の狙い、アニマルセラピーが上手くいっている証拠だろう。

見た目は深海棲艦に襲われている艦娘というのが残念ではあるが、この場所ならそれを気にすることも無い。

「そろそろ散歩に行きたいんだけど」

「あ、はい。エコちゃん、散歩ですよ」

飛行甲板になっっている頭部を撫でて、何とか離れてもらっていた。既に着ている運動着が砂まみれになっていたが、そんなことを気にするようなこともなく、エコが駆け回るのを追いかけていった。

散歩と言いつつも、エコはそれなりに速く動き回る。短い四肢である速度が出ているのがそれなりに驚きだが、私としてはランニングの速度に近しいくらいなのでありがたい。

「は、速いです……」

「運動不足だな」

「初めてですよ……こういうことするのは……」

当然ではあるが、日々のランニングで慣れている私と、飼い主であり常にこういったブリーダー的なことをしていたセスはまだしも、今日から初めて参加する三日月がついてこれるわけもなく、私のコースの半分くらいのところまでゼゼエ息を切らしてしまった。

合間合間に休憩を入れつつ、セスが終わりを宣言するまではエコの散歩は続く。私もいいトレーニングになった。これは毎日相手しても良さそうだ。

「よ、よく、ついて、行けますね……」

「いつものランニングと距離は一緒だからな」

私もそれなりに長く続けている。やると決めてから、ほぼ毎朝だ。おかげで身体も少し引き締まってきた。その成果がしっかり出ているようだった。

一晚滞在した二二駆は、浜辺の清掃まで手伝ってくれることになった。せっかく大発動艇もあるわけだし、修復する必要のない大物はこの機会にさっさと持って行ってもらう。

今までゴミとしていた廃材は、セスがこの施設を離れるまでは全てエコの腹に収まることになるため、持って行ってもらうものも大分減

ることだろう。

「昨晚に生物がもういないことは確認済みだ。大きなものを優先的に持ってきてほしい」

「了解だ。一二駆の連中は作業着が無いから、あたしらが二手に分かれるか」

「そうしてくれ」

そうなるとサクツと決まる。摩耶に懐いているクロが同じ組に行き、シロは当然クロについていく。そうなると残りが3人、私、雷、三日月がチームに。セスは初めてのことなので、飛鳥医師と工廠で待機となった。

「あたしと長月ちゃんが、三日月ちゃんの方についていくね」

「なら水無月達が摩耶さんだね」

一二駆も二手に分かれて作業開始。私達の方には文月と長月がついてくる。三日月が比較的慣れている面々で揃えることが出来ている。

第一印象が悪かったために、実の姉だとしても臯月と水無月にはそこまで心が開けていない。セスの方が好かれているくらいである。それを鑑みての組分け。近いうちに和解してもらいたいものである。

「僕はその間に、エゴを再診しておく。セスも付き合ってくれ」

「ん。貴方はもう慣れたから無理じゃないよ」

「そいつは嬉しいことを言ってくれ」

代わりに浮き輪達3体が三日月の後ろについていた。確実に手助けにならないのはわかっているが、いるだけで三日月が癒されるので作業が捗るだろう。

というわけで、5人で浜辺を探索。今回は先にザツと見ているため、何処に何があるかはあたりがついている。私達の向かう方は事前に文月達が確認した方向。セスを発見した方であり、私のランニングコースとは逆側。

「若葉ちゃん若葉ちゃん」

作業中、文月が話しかけてくる。心なしか嬉しそう。

「三日月ちゃん、ちよつと元気になったね」

「ああ。朝もエコの散歩に付き合っていたんだ」

「お姉ちゃん嬉しいよ」

昨日の実際の姉すらも拒絶し大泣きした時とは打って変わって明るい。笑顔を見せるのはまだまだ先になりそうだが、今も作業しながら浮き輪達と戯れている。雷と長月が隣にいても気にしていない。

私達がどれだけ頑張っても、あの空気を引き出すことは出来なかった。何がキツカケになるかわからないものである。どうであれ、三日月が最初の頃より改善されているのは嬉しいものだ。

「やつぱりね、妹にあれだけ言われるとお姉ちゃんとしては辛いんだよお」

「……そうだな」

「だからさ、ちゃんと元の三日月ちゃんに戻れるように、あたし達も手伝うからね」

心強い味方だ。元々友好関係にあったところが、妹の危機が重なり、より深い仲になれた。素直に喜んでいいものかは何とも言えないが、文月とこういう仲になれたのは喜べる。

「アレで少しでも良くなればいいんだがな」

「大丈夫！ あたしの妹だもん」

力強くサムズアップ。文月が三日月の事を信じている。だからこそ、こんなに明るく振る舞える。

文月は強い。私には及びもつかないほどに。

「わ、すごい。これくらいなら待てるのね」

「謎の生物とはいえ、深海棲艦についてたものだから……」

「浮き輪さん、凄いです」

3人の声が聞こえ、そちらの方を向くと、例の浮き輪が浜辺に打ち上げられている。艦装のパーツを器用に運んでいた。流石に自分より大きなものを運ぶことは出来ないようだが、私達が両手で運ぶくらいのもものも、手足の短さ故に形状は選ぶが、割と簡単に持ち上げていた。本当に何なのはこの生物は。

「すごい！ 浮き輪さん、大活躍だね」

「あれは予想外だけどな」

荷物運びも出来て、三日月を癒せる。思った以上の戦力だ。

「ここなら、三日月ちゃんも、自分を取り戻せるね」

「ああ、みんなの協力あってこそだ」

三日月が少しだけでも楽しそうにしている姿を見て、文月も喜んで
いるようだった。私も嬉しいものだ。

清掃を終え、修復の必要のないものはそのまま大発動艇に積み込
む。それが終われば、これで文月達は任務完了となり、自分達の本来
の居場所へと戻ることになる。艦装の解体と修理は私達の仕事だ。
今回はゴミを持っていってもらう必要も無くなったため、仕事自体は
思いの外あっさり終わる。

今回は嵐が来てしまったので長居する羽目になってしまったが、た
まにはこういうのも楽しかった。いっぱい話すことが出来たし、三日
月にはまた違った経験が出来て良かったと思う。

「それじゃあ、帰投しま〜す」

「ああ。長居させてしまつてすまない」

「いえいえ〜。こっちも助かります〜」

相変わらず雷はいつ用意していたのかお菓子を手渡ししていた。
これはもうここへの遠征では定番なものらしい。皆が喜んで貰って
いた。

「三日月ちゃん」

改めて文月が三日月を呼ぶ。今は浮き輪を1体抱きかかえている
からか、少し安定している。最初は来るなどまで言っていたが、今は
近付かないものの話はちゃんと聞こうという姿勢。

「また来るからね。今度来た時は、毛布の塊じゃないと嬉しいな」

「……善処します」

「ん、今はそれでオツケー〜!」

最後に改めて握手のために手を差し出す。文月とは一度出来てい
るため、あまり考えずに手を握った。それに文月も満足気。それが
キツカケになり、臯月や水無月も握手を求め始めて収拾が付かなくな

りそうになってしまおうが、それも二二駆の良さだろう。

ほんの少しだけ、三日月がクスリと笑ったように見えた。

気付いていないフリをした。変に指摘してまた心を閉ざしてしまつたら意味がない。二二駆の面々もそれに気付いたようだが、臯月や水無月が何かを言い出す前に、文月と長月がそれを止めるように脇腹を振り上げていた。さすがにそこまでされれば察することができたようである。

「若葉ちゃん、妹をよろしくね〜」

「ああ。任せてくれ」

私も握手をした後、お互い手を振って別れた。また1ヶ月くらいすれば嵐が来るだろう。その時にまた会える。むしろその前にまた来る可能性だつてある。その時までには、またいろいろ進展していることを祈ろう。

4人の後ろ姿には、昨日も見せた怒りがまたチラリと見えた。帰投後、すぐに三日月をこんな風にした犯人を探し始めるのだろう。それはおそらく、私をこんな風にした犯人でもある。

私や三日月の因縁の提督かもしれないが、あちらとしてもそんな提督が存在していることが不和を呼びかねない。そのためにも犯人を探し出し、然るべき罰を与える。私達のため、あちらの鎮守府のためにも、その提督を探し出すのは必須事項となつていた。

それに対し、私達が出来ることはない。座して待つしかない。

今は私達が出来ること、やるべきことをやっていこう。まずは、双子棲姫の艦装作成だ。今回拾ってきたものの中には、潜水艦のパーツも紛れ込んでいたことを確認している。呼吸周りは今回で完成するかもしれない。

「じゃあ、まずはこれの片付けだな。分解は午後からだ」

「ああ」

「分解して組み立てて、そろそろ完成かな。楽しみ楽しみ！」

「潜水艦のパーツあつたし……もしかしたら出来るかもね……」

今回はそれ以上に数が多い。私も分解と洗浄の作業を手伝うことになっている。三日月が来てから少し離れていた仕事だったため、

久々にやるのが楽しみである。

「三日月はお部屋の片付け手伝って頂戴ね。さっきの4人に使ってもらった部屋、お掃除しなくちゃ」

「わかりました」

三日月は雷の下で家事手伝い。浮き輪のおかげで機嫌も良い。足取りも軽いように見えた。

また今この時から普通の日常が始まる。『楽しく生きる』ことは、まだ出来ている。

海の底へ

施設の新たな仲間、セスが加わり3日。特別なことは何も無い、平凡な日常を過ごしていた。

私、若葉は基本的には雑務担当。その時に必要な戦力としていろいろな仕事を請け負っている。艀装整備、家事手伝い、さらには飛鳥医師の仕事の手伝いと、やることはなかなか多い。私は働くのが好きなのでそんな生活はとても充実したものだ。

医師が管理しているだけあって、誰一人として体調不良を訴える者はおらず、誰もが有意義な生活をしている。

「食材、日用品の発注は完了した。言われていた書類の整理と、在庫の確認も終わっている。若葉は手すきになったぞ」

基本的に艀装の整備は摩耶主導の下、シロクロが協力して進めており、さらにはセスまでそこに加わっているため、私が入る必要がない。エコの整備が出来るのだから、他の艀装に対してもそれなりのが出来たというのが大きい。まさかの即戦力である。

家事の方も雷と三日月がいればある程度はどうにかなる。毎日掃除しているため、人員を増やす必要も無く、食事洗濯も2人いればどうとでもなった。

「助かる。一旦休憩してくれ。午後からは摩耶が手を欲しがってるから手伝ってやってほしい」

「今すぐじゃなくていいのか」

「ああ。午前中にな、双子棲姫の艀装がある程度完成するそうさ。遠隔操作の艀装はまだ先だが、あの2人に潜水艦の力が戻るらしい」

漂着した深海棲艦の艀装の中に潜水艦のパーツがあったのは覚えている。それを使うことで、永続的に潜航が出来るようになるらしい。これで半分は修復出来たようなものである。

シロクロがこの施設に滞在し始めて2ヶ月無いくらい。材料がようやく流れ着いてくれたおかげで、ここまで辿り着けた。ある意味目標達成に近い。

「午後からはそのテストをするそうさ。前回と違って、長時間の潜

航だから、念のため人数が欲しいらしい」

「了解した。なら午後は摩耶につく」

「頼んだ」

クロのハイテンションが目には浮かぶようだった。最低限必要な力が取り戻せるわけだから、喜ばない理由がないだろう。

午後、昼食後すぐにテストをすることになった。前回のテストはいろいろと用意していなかったため、まさかの全裸潜水だったらしい。今回はそれから時間も経っているため、しっかりと水着も用意されている。

なんと潜水艦娘が使用している正式な水着らしく、さらにはそれを用意してくれた来栖提督のご厚意で、より双子棲姫の元々の服に近くなるように改良されている。

「あのオツチャンが用意してくれたんだよね」

「らしいよ……すごいしつくりくる……ね」

私は実物を見たことないのだが、艦娘にも双子の潜水艦姉妹がいるらしく、その水着を改良したものを着ている。色までしっかりと染められていた。

そのため、実際着ていたものとはタイプが違うのだが、2人としてはとても着心地がいいようだ。

シロクロの艦装の主機部分は、私達と違い肌に直貼り。そのせいで前回は全裸潜水をする羽目になったのだが、今回は水着もその辺りを考慮して背中部分がバツクリと開いているデザイン。

主機を肩甲骨の辺りに貼り付け、さらには首回りに新たな艦装を装備した。これがシュノーケルと酸素ボンベを兼ねた艦装であり、装備しているだけで無限の呼吸が海中で出来るというシロモノ。

「すごいすごい、なんか上手く行く気がするー！」

マスクを着けているため、クロもくぐもった声。口許が見えないので無表情に見えるが、声色と目元でとても喜んでるのがわかる。

「若葉、先に海に出てくれ。あと浮き輪を1体。緊急時はコイツを海に投げ込めば救援出来る」

「……つくづく便利な浮き輪だな」

セスから借り受けた浮き輪の内の1体にロープを通し背負う。浮き輪はニヤツと笑ってサムズアップ。妙に表情豊かである。言われた通り先に海に出て、予定の位置で待機。

「セス、アンタも頼む」

「ん、わかった。私も浮き輪さんを持つてるから」

セスも同様に海に出た。セスの場合はいつも履いている膝上までのブーツが艀装と一体化しているらしく、それを履いている時点で海上での航行が可能。背負わないと同じことが出来ない私達には、なかなか羨ましいもの。

残り1体の浮き輪は、三日月の側から離れないらしい。癒しのために付かず離れずの距離をキープしつつ、何かあったら手伝っているとのこと。浮き輪と一緒にいるおかげで、三日月も側に私がいなくてはいけないわけでは無くなっているため、そういう意味でも重宝している。

姫級であるセスが浮き輪さんと敬意を表する理由も何となくわかるというものである。

「シロ、クロ、一応耐水性の通信機も積んである。何かあったらそこからこちらに報告してくれ。まあこちらからも随時話しかけるとは思いうけどな」

「っあーいー!」

「……わかった」

私達が位置についたことを見て、シロとクロが2人同時に潜水開始。以前まではマスクを着けていなかったため、ここから1分も経たずに浮上してきたらしいが、今回はそれ以上の潜水が出来ているようだ。

「シロ、クロ、聞こえるか」

『聞こえまーす!』

『……大丈夫』

念のために積んだ通信機で連絡を取る。それは私とセスにも全て聞こえている状態。

海中にいるのに、何の違和感もない、まるで地上にいるのと同じような澄んだ声。私からはもうわからないが、海中を自由気ままに泳いでるようだ。

「今のところ大丈夫そうだな」

『うん！ 海の中、すごく久しぶり！』

『だね……やっぱり……落ち着くね』

潜水艦の要素を持つ航空戦艦という性質上、海の上より海の中の方が落ち着くらしい。5分、10分と経過してもまったく浮上してくる感じがしない。今回は潜水耐久試験も兼ねているので、長く潜水してくれることが、艀装の性能を示してくれている。

「苦しくないか？」

『問題ない……もう少し沖に出るけど……いい？』

「ああ、事前に言ってくれるなら問題ないぜ」

今はまだ施設の近海のため、より深いところに潜るために一旦浮上した後、沖へと向かう。何処から潜ったかわからなければ、万が一の時に私達が救助することが出来ない。

浮上してきたシロとクロは、いつも以上に楽しそうにしていた。無表情のシロですら、マスクをしていても喜んでるのがわかるほどである。この艀装の修理は今のところ大成功だ。

「前とはちよつと違うけど、同じことは出来てるよ」

「……うん……ずっと息出来るし……泳ぐのにおかしなこともないね」

施設が見えないほどに沖に出たところでもう一度潜り始めた2人。ここなら今までいたところより水深も深く、耐久試験もより深い場所で出来る。艀装がおかしくなったら戻ってこれない可能性も高い危険な試験ではあるものの、限界は何処にあるかは知っておきたい。

当然、摩耶が耐えられるように修復しているし、その光景を2人も見ているのだから、絶対的な自信を持って送り込んでいる。試験だつて証拠を残すためのデータを作るためである。

『海底見えてきたよー』

『なら耐圧も完璧だな。その辺り、結構深いだろ』

『うん……大分暗い……太陽の光……届かなくなってきたよ』

工廠に残る摩耶の姿も見えなくなつたため、全て通信の声で状況を把握している。私が直接会話できるのはセスだけ。セスは海上からシロとクロがいそうな場所をジツと見ているだけ。

「セス、ここには慣れたか」

「……それなりに。ミカヅキとは仲良くさせてもらつてるよ」

「それは本当に感謝している」

この施設でセスが一番仲がいいのは間違いなく三日月だ。深海棲艦に恐怖心を持つている三日月と、艦娘に過剰な苦手意識を持つセスが、どんな化学反応をしたのか相性がいい。同族嫌悪を起こしてしまふかとヒヤヒヤしたが、一周回って友人感覚になつたようである。

「エコの世話も手伝つてくれてさ。イキイキしてる」

「そうか。それはいいことだ」

「私も艦娘は苦手だけど、このみんなは苦手じゃなくなつたよ」

セスへのカウンセリングも順調。雷が構うのと、三日月がエコの世話を手伝うことで、艦娘への苦手意識が薄れてきているようだ。だからといって侵略者になるようなこともなく、ここで暮らしていくのに苦を感じなくなつたくらいである。

シロクロと同じ非好戦的な深海棲艦であるセスは、ここから出て行つたとしても人目につかないところでひっそりのんびり過ごしやすい。エコと浮き輪がいれば、適当な無人島でもそれが実現出来そう
だ。

『あれ、なんか海の底に見えるよ』

『……ただの底じゃ……ない……』

シロとクロの様子がおかしくなる。聞こえてくる声からはまだ想像出来ないが、私達を知ることの出来ない海の底で何かが起きています
という感じ。

『えっ、な、何コレ……うわっ、あわああっ!?!』

突然クロの叫び声。シロの息を呑む声も聞こえる。

『おい、どうした! シロ、どうなってる! 艦装に不具合が出たのか
!?!』

『……艤装は大丈夫……ただ……少し……』

『すぐに浮上してくれ。何かあるんだろうから、理由を聞きたい』

シロの声も少し震えているように思えたため、摩耶が急速浮上を指示。艤装試験はここで一時的に中止とした。

海上に浮上してきたクロは青ざめた顔をしていた。シロもあまりいい顔をしておらず、私達とも目が合わせられないようだった。海の底で何を見た。

「どうかしたのか」

「……酷いものを見た。みんなに話すから……工廠に戻る。マヤ……先生も……お願い」

『何があったか知らねえけど、わかった。すぐに集める』

クロは航行にも支障が出るほどの動揺。ちようどいいところにつき輪もあるため、私が曳航していく。こんな形で救助用具を使うことになるとは。

シロに集められた一同。工廠に着く頃にはクロの顔色も元に戻っていたが、シロと同じように無言。本当に酷いものを見たようだった。

「全員を集めたくらいだ。余程の物を見たんだろう。何があったんだ」

飛鳥医師が問う。クロは最初の元気が霧散してしまったかのように俯いてしまっているため、シロが話し始める。

「……海の底に……艦娘の死体があった」

一気に静まり返る。

「1人じゃない……少なくとも……4人は見かけた……。ここに辿り着けずに……息絶えて……沈んだんだと思う……」

「そう……か」

以前に飛鳥医師から聞いたことを思い出す。

艦娘は死体になると素材の塊扱いとなり海底へと沈んでしまう。そうなってしまうともう浮かび上がらず、シロとクロが目にした通り、海底に放置されることになるわけだ。

施設の近海ではなく沖の方だったということ、この近場にまで流れ着いたタイミングで力尽きてしまったと考えられるだろう。もう少しだけ意識が保っていられたら、また話が変わったかもしれない。

「……その死体は、どうなっていた」

「艀装は……大分壊れた。壊れた状態で……水没してたから……多分使い物にならない……。錆びも見えたし……」

艀装は仕方ないだろう。どれだけの間、海底に放置されたかはわからない。だが、本来海上で使われるものが海中に入った時点で、故障してしまうのは当然のこと。もしかしたら摩耶が直せるかもしれないが、期待しない方がいいだろう。

「……死体自体は……その……説明しづらい」

「わかった。酷い状態なのは察しがついている。それ以上説明は求めない」

ここにいる艀娘のような状態だったとしたら、見るも無残な状態だったはずだ。雷のように腹が抉られていたかもしれない。摩耶のように脚を欠損していたかもしれない。三日月のように全身が焼け爛れていたかもしれない。

「……正直……辛い」

「すまない……少し考えればわかることだった。ここはそういう場所なんだと」

頭を抱える飛鳥医師。まるでそうなっているということを知っていたかのような言動である。

「……せんせー。私達、海の底でそういうの見たことなかった。潜水艀の力持つてるのに、今まであんなの見たことなかったよ。なんでここはこんなことになってるの」

振り絞るようにクロが疑問を言葉にした。海底に死体があるなんて、戦場ならばあり得ることだろう。摩耶のようなドロップ艀が鎮守府に発見される前に深海棲艀の手により沈められたとしたら、どんな海域の底にも死体があるはずだ。だが、クロは見たことがないという。

「沈んだ艀娘の末路は知っているか」

「わかんない。見たことないもん」

「……深海棲艦の工サだ」

皆が知らない事実。飛鳥医師の発言で絶句してしまった。

「君達は魚とかを食べていると言っていたな。だけどな、そういう輩もいるんだ。特に理性のないイロハ級はそういう傾向がある。生きている艦娘は喰わない。死んだ……沈んだ艦娘だけを喰う。そういうところは無駄に知能を使う」

説明する飛鳥医師も、苦虫を噛み潰したような表情だった。

「この施設の近海……沖の方もだな。ここは深海棲艦が現れず、艦娘のドロップも無い、どういうわけかわざわざ来ることも無い『中立区』と言われていた場所だ。だから、沈んだ艦娘がここの海底にあったとしたら、そのまま放置されることになる」

嫌な話だが、時間をかければその死体も消えていくらしいが、数日数週間では済まない時間が必要。少なくとも半年近くはいるそうだ。

以前私が艦娘の素材が無いか聞いた時、死んだドロップ艦が流れ着くことはないのかと質問したが、その辺りは濁された。そういう理由があったわけだ。死んだドロップ艦は、全員喰われている。

「来栖に連絡する。僕達がそれをどうこう出来る資格は無い。それに、どうこうする手段が……潜れるシロとクロをお願いするしか無いんだ。僕はそれを君達にお願いすることは出来ない」

話しているうちに、三日月が口を押さえて蹲る。元々深海棲艦への恐怖心を持っていた三日月が、そんな話を聞いて平静で居られるわけがなかった。すぐに雷が背中を摩りながら医務室に連れて行く。

三日月ほど明確に吐き気を催すことはなかったが、私も気分が悪かった。

「あたしは本当に運が良かったんだな」

「ああ……あんな重傷でも、生きて浜辺に辿り着いてくれたから命が繋がった。運だけじゃない、摩耶の強さもある」

私も運が良かった。死んでたまるかとずっと意識を持ち続けていたおかげでここまで流れ着くことが出来たのだから。むしろ、ここに居る者は全員、運が良かったと言えるだろう。

楽しい潜水試験が、最悪な形で幕を閉じた。クロは大きくショックを受けている。潜ることにトラウマを持たなければいいのだが。

調査隊

双子棲姫の艤装が半分ほど完成し、潜水試験を行なっていたときのこと。海の底まで潜航したシロとクロが、そこで何人もの艦娘の死体を発見した。それは私、若葉を含むこの施設に属する艦娘のように浜辺に漂着することが出来ず、流されている最中に息絶えてしまった者だった。

潜水試験はその時点で中止。その話を聞き体調を悪くしてしまつた三日月には雷と浮き輪の1体が付き添う。他もひとまず片付けて、自分の持ち場に戻るようになった。

だか、事が事だけに空気が重い。あのクロですら無言だった。

飛鳥医師はこの現状をすぐに来栖提督に連絡。中立区の海底に艦娘の死体が数多く眠っているという情報を聞くと、すぐに調査隊を結成して調査を始めると同時に供養してくれると話してくれたそうだ。

どういう経緯で海の底で眠ることになってしまったのかは調査次第だろうが、せつかく見つけることが出来たのだ。深海棲艦の工サにならなかつたのだから、ちゃんとした葬いをお願いしたい。

「明日、朝から来栖の鎮守府からの調査隊が近海を訪れる。来栖本人も直接指揮をとるらしくてね。こちらの鎮守府にも顔を出すかもしれないから、そのつもりでいてくれ」

体調が戻つた三日月も込みでの夕食時、明日からのことを少し話してくれた。事前に言っておけば、三日月とセスは方が一の心積もりが出来る。特に三日月は、提督という役職には敏感だ。相手がどんなに優しい人間でも、姿を見ただけで襲い掛かろうとしてしまうかもしれない。あの見た目に向かっていく勇気があれば、だが。

「……絶対顔は合わせません。部屋に引きこもります」

「外の人間や艦娘は無理……フミツキとかならまだいいけど」

先に話をされたおかげで、しっかり自衛をしてくれるようだ。あとは念のため、エコと浮き輪を部屋に匿っておいてもらえれば、何も問題は起きないだろう。来栖提督はそういうことも勘付いてしまいうで怖い。

翌日、早速調査隊が来ていた。工廠からは辛うじて見えるか見えな
いかの境目くらいに大発動艇がいくつか浮かんでいる。来栖提督は
あのどれかに乗り込んでいるのだろう。

遠目に見ても、大急ぎで調査しようとしているのが見て取れた。今
回の事件は、あちら側としても問題が大きすぎる。

「……今頃、引き揚げられてるのだろうか」

「さあな。あたし達には艦娘の供養つてのがわからねえ。来栖提督な
ら悪いようにはしないとと思うけどよ」

私と摩耶は工廠で艀装整備中。嵐の時に流れ着いたものの分解と
洗浄は全て終えているため、自分のものや他の艀装の洗浄をしつつ、
今あるパーツで組めるものは組み上げていく。どういう形であれ、今
私達の出来ることといえばこれくらいである。

三日月は宣言通り浮き輪達を連れて自室に引きこもり、雷はいつも
通りの家事。セスもエコと一緒に引きこもり、シロクロはそれに付き
合っている。実質、今働いているのは私がこの施設の一員になった直
後のフルメンバーという程度。

「ここで治してやればいいんだが」

「流石にそいつは無理な話だな」

わかってはいるが言わずにはいられなかった。私達のように、ここに
ある深海棲艦のパーツを繋ぎ合わせれば生き返る……とかなら、意地
でもサルベージに参加するというのに。

「いくらセンセでも死んだ奴を生き返らせるのは無理だ。あたしらは
命があつたから繋いでもらったわけだからな」

「……そうだな」

死者の蘇生など医療の域を超えて最早神の所業。いくら私達が人
間の手により生み出された生体兵器といえど、一度失われた命は戻つ
てくることは無い。まったく同じ艦娘を改めて生み出すことは出来
るが、それは同じ人物では無いのだ。

「こうなっちまったもんはもう仕方ねえ。あたしらはそいつらの分だ
け生きてやるや」

「ああ、そうだな。せっかく繋がった命なんだ。有意義に使おう」

「そうそう、だから気負うなよ」

ニカツと笑う摩耶。昨日から重かった施設の空気を軽くしてくれるような笑顔だった。私は誰にでもいいからこう言ってもらいたかったのかもしれない。私は笑顔を見せることが出来なかったが、随分と気が楽になった。

「ん？ あっちから誰か向かってきてないか？」

摩耶が工廠の外を指差す。言われてみれば、確かに遠くから小さい影がこちらに向かってきているのがわかった。見た感じ、文月達第二駆逐隊のメンバーではない。駆逐艦でもない初めて見る艦娘。

「ああ、ありや羽黒だな。おーい、羽黒ー！」

「摩耶さん、お久しぶりです」

こちらにやってくるのは、おっとりとした雰囲気、重巡洋艦、羽黒。今回の調査隊の隊長を務めている、見た目とは裏腹に百戦錬磨のベテランである。私達に実戦経験が無いとはいえ、ここの施設にいる全員が束になっても敵わないくらいの実力者。

摩耶は既に面識があるらしく、そのまま工廠に入ってきた羽黒に向けて手を振る。羽黒もそれに応えて、少し微笑みながら小さく手を振っていた。片手には書類やメモ帳を携えており、まさに秘書艦というイメージ。

「貴女が若葉ちゃんですね。司令官さんから聞いています。初めまして、羽黒です」

「若葉だ」

手を差し出されたので握手で応える。長月の時もそうだったが、こちらの艦娘はまず握手をすることで友好関係を築いてくれるようだった。継ぎ接ぎな私としても、そうしてもらえるのはなかなか嬉しい。

こちらに来たのは、昨日海底で死体を発見したときのことを聞きたいからとのこと。現場にいたのは私のため、摩耶よりも詳しく話せると思う。

「摩耶、包み隠さず全て話していいのだろうか」

「あー……構わねえよ。羽黒、この事情はわかってるんだよね？」
「はい。深海双子棲姫を匿っていることも、人間嫌いの三日月ちゃんのことでも聞いています。護衛棲水姫についても一応」

「そこまで把握しているのなら話は早い。この施設の内情は、来栖提督の鎮守府では共通認識と考えれば良さそう。」

今回の件、何故海の底を見ることが出来たかというのがあまりにも説明しづらかった。『深海双子棲姫の艀装を修理しており、その半分の完成したことで本人達に潜水試験をしてもらっている最中に発見した』などと言つても誰が信じるというのか。

「そう、ですか。自作の深海棲艦の艀装を試験していた時に……」

「ああ。海底の様子は若葉達はそう聞いている。実物を見たわけではないから何とも言えないが、あの2人が嘘をつくようには見えない。クロに至っては顔面蒼白だった」

「疑ってるわけじゃないんですよ。事前に聞いていますし。ただ、深海棲艦とそこまで仲良くしているのはやっぱり驚いてしまった」

普通ではないことは私も理解している。

気を取り直して、羽黒からの話。私達から話せるのはこの程度であり、詳細は別途調べてもらった方が早いだろう。そのため、今度は羽黒側からこちらに伝えたいこと。

「後に司令官さんから直に話があるかと思いますが、今判明している分は先に報告しておきますね。現在、調査隊の潜水艦隊により、海底の死体の引き揚げ作業が続いています。連絡では、今のところ8人発見されました。ここから増えないとは言いません」

シロが4人は見かけたと言っていたが、実際はその2倍見つかってしまっている。見たのは一角だけだったようだ。

その8人の死因は様々だったそうで、見た感じだけでの判断なら、一番古いのは4ヶ月くらい前から海底にあったのではないかとのこと。

「ドロップ艦か建造艦かは現在調査中ですが、見つかった8人分の死体全員に共通点がありました」

「やっぱり何かあんのか」

「建造をする際に必要な資源が、最低限で済む艦娘のみだったんです。それも、全員が駆逐艦でした」

嫌な汗が出ていることを自覚した。おそらく私と三日月もその中に含まれる。捨て駒にしても惜しくない駆逐艦。ローコストで生み出され、その命によってハイリターンを約束する者。

全員が全員、私や三日月と同じ境遇であるとは限らない。だが、可能性はあり得る。施設に来たばかりのときの嫌悪感が蘇ってくるようだった。

「羽黒よお、もしそれが全員建造艦だったとして、同じ鎮守府が建造したって証拠って掴めるのか？」

「……何とも言えないですね。どうか掴むつもりですけど」

悲しそうに話す羽黒。真相が闇の中に葬られる可能性まである。それをやった鎮守府は、そこまで計算してこんな非道な行為をしているのだろうか。

捨て駒は捨て駒らしく戦場で死に、死体は戦場で深海棲艦に喰われて消滅。証拠隠滅が完了するわけだ。あまりにもゲス。あまりにも外道。

「……何かあったら、若葉にも協力させてほしい。若葉は生きた証拠になれるかもしれない」

「はい、お願いします。もし若葉ちゃんをそうした鎮守府と同じだったとしたら、若葉ちゃんは大きな証拠になります」

その鎮守府は、私や三日月が生きていることなんて知らないだろう。万が一生きていたらということを考えていない。だからまだ何も気にせずに捨て駒を使い続ける。

ならば、その非道で命を落とさなかった私が協力し、死者の声を代弁しよう。面と向かってこいつがやったと言えるのは、実際にやられた私だけだ。

「三日月ちゃんのごことは文月ちゃんから聞いています。この件に関しては強要しません」

「ああ、そうしてやってくれ。あいつは傷が若葉より深いからな。今も外の人間と顔を合わせないために自分の部屋に引きこもってるく

らいだ」

「そうですね……死の恐怖から生まれるトラウマは、何よりも大きいです」

すつと目を伏せる。もしかしたら、この羽黒も何かを経験しているのかもしれない。だから、こんなにも調査に真剣に取り組んでくれているのかもしれない。

「事が事だから暗い雰囲気になっちゃう。1人2人でもクソ腹立つのに、もっと酷いのが見つかったわけだから……」

「すぐに犯人は見つけます。今までの行いを、必ず後悔させます」

怒りに満ちた文月を見たときに似た感覚。おっとりした雰囲気奥底に、強い怒りを感じる。文月のそれよりも遥かに強く、思わず手が震えるほどだった。

「それでは、私はあちらに戻ります。またこちらに来ると思いますので」

「ああ、調査はあたし達にや荷が重い。よろしく頼むわ」

「はい、任せてください」

そのプレッシャーはすぐに消え、羽黒は工場を出て行った。死体の引き揚げ作業と調査はまだまだ続く。それは私達には出来ないことだ。遠目から応援することしか出来ない。

羽黒の後ろ姿を見ながら、摩耶がポツリと呟く。

「……いやあ、あの羽黒があそこまで伸びるたあな」

「どういうことだ？」

「あいつ、ここの患者なんだよ。あたしがこの施設で脚の治療受ける時にいたんだ」

ということとは、今から半年以上前の話か。当然私は生まれていない。

私達のような浜辺に打ち上げられた状態で見つかったわけではなく、元々来栖提督の鎮守府で建造された艦娘だそうだが、入渠でも治らない心の傷をここで治療したということのようだ。

「あたし達みたいな深刻な怪我じゃないんだけどな。戦闘中に瀕死の怪我を負った時に、PTSDを患っちゃったんだ」

「……そうか、なら、ここでカウンセリングを」

「ああ、センセと雷がな。あたしは見てるだけだったが、かなり酷かった。ここに流れ着いた艦装を見ただけで吐くほどだった」

戦闘に関する全てのものに拒絶し、一刻も早くその場から離れたいと思えるほどの心的障害を受けてしまったと。

だが、今はその力ケラすら見えない。ここでのカウンセリングの結果、見事克服したということだ。それだけならまだしも、今では鎮守府随一の戦力として調査隊の隊長までやっている。劇的な進歩である。

「すげえよあいつは。初めて見た時は弱気でオドオドしてて、絶対自分から前に来ないような奴だったんだぜ？　今、そんなの微塵も感じさせねえもんな」

「……ああ」

「あたしもその時は動くことすら出来なかったけどさ、割と話すことは多かったんだ」

同じ重巡洋艦というのもあり、羽黒がここでカウンセリングを受けている時は仲良くしていたそうだ。ここから出て行った後はどうしても関係は疎遠になってしまいが、こういう機会で再会出来たのは喜ばしいこと。

「今後もまた頼りにするだろうし、頼りにされるだろうよ。そんな時は、若葉もいろいろとよろしくな」

「ああ、勿論だ。いくらでも協力しよう」

この施設の外にも飛鳥医師に助けられた者がいると知れたのは嬉しかった。私がここで活動しているうちに、またそういう患者が現れるかもしれない。その時には、私も出来る限り協力していこう。

背負う命

来栖提督の鎮守府からやってきた海底調査隊は、丸一日そこで作業を続けた。合間合間にこちらに話を聞きに来たり、逆にこちらから雷が差し入れに行ったりと、少しだけ交流はした。だが、事が事のため、どうしても空気が重くなる。

私、若葉もなるべくならその作業を手伝いたかったのだが、私に出来ることは何一つなかった。出来たとしても、雷のように差し入れをするくらい。結局、遠目に眺めることしかしていない。

夜、暗くなる前に調査隊は撤収することになった。最後に来栖提督と調査隊隊長である羽黒が改めて挨拶に来た。他の者は撤収準備で忙しいとのこと。来栖提督の乗る大発動艇は、羽黒が曳航する形で工廠まで運んできた。

「調査は一旦これで終わりにするぜエ。見つけた艦娘達は全部引き揚げたつもりだ。また見つけるようなことがあったら教えてくれや」

「そうか……ありがとう。何人だった」

「……全部で10人でした」

羽黒に一度言われた後からさらに増えている。8人発見後、さらに2人ということは、その2人は近海でも大分離れた位置だったのかもしれない。

「最も古かったものは4ヶ月前。最も新しいものは1ヶ月無いくらいです。細かい検死は鎮守府で行います」

1ヶ月くらい前といえば、ちょうどここに三日月が漂着したタイミングである。三日月以外にも、同じタイミングで捨て駒が作られているなんて思いもしなかった。

あの時の嵐はかなり激しかった。私が捨て駒にされた戦闘と同じほどに強い雨と激しい風だ。外を見ることなど出来ず、嫌悪感を払拭するために皆で固まって夜を過ごしたほどだ。

「……嵐の日に敢えて出撃させてるのか」

「やっぱりそう思うよなア」

ボソリと飛鳥医師が呟いた。来栖提督も同じように思っていたよ

うだ。

一番古い4ヶ月前というのも、おそらく嵐の日。私も三日月も、嵐の日の後に発見されている。こことは関係ないかもしれないが、ドロップ艦の摩耶も嵐の日に生まれ、記憶は無いが雷も嵐にトラウマを持ってている。

この犯人は、嵐の日を狙って捨て駒を使っている。そういう戦術を使っているところを誰にも見られないようにするためだろう。そこまで出来て、何故捨て駒が生きている可能性を考えないのか。

「来栖、危険なことはやめろよ」

「わあーっつてらい。俺も自分とこの艦娘が一番可愛いからよオ」

見透かしたように飛鳥医師が来栖提督に忠告し、その内容を理解しているかのように応える。意思の疎通が出来ているかのような会話。

次の嵐の時も、同じように捨て駒戦術を使う鎮守府が現れるかもしれないと予想したからだ。そうさせる前に、来栖提督はその現場を押しさえようとしている。だが、そうするためには嵐の中を出撃し、その部隊と鉢合わせしなくてはいけない。さらには、相手は邪魔をする同業者すらも殲滅しかねない。かなり危険な戦場だ。

「何処の鎮守府がこんなクソツタレな戦術使ってるのか、まずはあたりをつけてやらア。つっても、そいつらは多分この辺の連中じゃあ無エ」

「ああ、僕もそう思っていた。わざわざ戦果を稼ぐためにこの辺りまで出稼ぎに来てる」

「だよなア。だからよオ、ここ最近で急激に戦果を伸ばしてる奴を片っ端から調べてんだ」

海流の影響でいろいろなもの流れ着く浜辺ではあるが、その範囲はかなり広いとはいえ流石に限度がある。この視察の近海に入り、かつ、来栖提督の鎮守府の近海に入らない場所にわざわざ来れる鎮守府となると、それなりに数が絞れるようだ。

そこで1つ思い出したことがある。私の嫌な記憶の1つだ。これ以上関わりたくないという気持ちも強いが、この事件の解決に繋がるのなら話そう。私が死者の声を代弁する。

「……いいか」

「どうした若葉」

「若葉が捨て駒にされた時、長く航行した末に戦闘になったのを思い出した。ここに近い海での戦闘かはわからないが……鎮守府から遠く離れた場所に向かったことは覚えている」

私の初めての戦闘は、生み出された直後から長い移動の末に行われた。長距離航行なんて当然初めてのため、その時点でも疲労していた。さらには夜で嵐だ。余計にまともな戦闘なんて出来やしない。

そういう意味でも、私は捨て駒として戦場にいたのだと理解した。過酷な戦場とか、そういう問題ではない。

「つーことはだ、若葉を捨て駒なんぞにしたクソツタレは、割と離れたところになっていたってことだなア。若葉ア、いい情報だぜエ」

「若葉にはこれくらいしか出来ない」

「充分すぎるぜエ」

頭を激しく撫でられた。首が挽げるかと思った。

豪快で力加減が出来ていないように思ったが、奥底の優しさは手のひらから伝わってくる。

「羽黒、戻ったら総浚いするぞ」

「お任せください」

ふつと真剣な顔を見せる来栖提督。相変わらずのサングラス姿だが、その奥に真剣な瞳が薄っすら見えた。この事態を重く見て、本気で敵の鎮圧を考えている提督の瞳だった。

これが本当の提督という存在なのだと思えて知る。この人相手なら、三日月も心を開けるのではないかと考えてしまうほどだ。さすがに呼んでくることは出来ないが。

「飛鳥ア、俺ア鎮守府に戻る。あとは俺らに任せてくれ」

「ああ、頼んだ。僕にはそこまで手が出せないからな」

「帰ってこりゃいいだろうに」

意味深な言葉を来栖提督が口に出した瞬間、飛鳥医師がその頭を引っ叩いた。

「いつてエ!?!」

「余計なことを言うな」

余程聞かれたくないことなのか、次はグーだと言わんばかりに拳を握り締める。それを見て溜息をつく来栖提督。友人なだけあり、飛鳥医師の内情はよく知っているようである。

帰るとはどういう事だろう。今の話の流れからして、飛鳥医師も提督の類だったのだろうか。そうでなくては知らない知識もいくつか持っているようだが。

「ったくよオ……まあいい。羽黒、戻るぜエ」

「はい。それではまた」

来栖提督が大発動艇に乗り込むと、羽黒が一礼した後それを曳航していった。海上で待つ調査隊と合流し、そのまま鎮守府へと帰投していくのだろうか。ここから帰ると道中で夜になりそうだが、その辺りは対策もしているようだ。

「……聞かない方がいいんだよな」

「そうしてくれ」

来栖提督を見送りながら、飛鳥医師に問い掛ける。間髪を容れずに答えられた。まだ飛鳥医師が自分のことを話してくれる日は遠そうである。

調査隊が撤収したということで、ようやく部屋から三日月とセスが外に出てきた。セスは早速浜辺へエコの散歩へ。シロクロもそれについていった。三日月は調査隊の話聞くために私の側へ。

三日月は浮き輪3体を独占して抱えているわ背負っているわの重装備。最後の1体は頭に乗っかっているほど。近くに外の者がいるというだけでも大きなストレスになっていたようだ。

「知らない人間の声が聞こえました……」

「あの人はまだ信用出来る人間だ。そのうち顔を合わせてもいいと思う」

「……考えさせてください」

来栖提督は声が大きいの、工廠から私室まではそこそこ距離があるのだが、その時は施設内はそれなりに静かだったというのもあり、

自室にこもっていた三日月にも声が届いてしまったようだ。

人相は悪いが優しさもある来栖提督でも、今の三日月には人間であるというだけで嫌悪の対象。さらには提督という一番憎む役職の者である。この施設の者に対してはようやく慣れたが、まだまだ先は長い。せめて嫌悪感がセスのような苦手意識に変化してくれればいいのだが。

「若葉さんは何か話していたようですが……」

「自分の境遇を少し。それが犯人を制裁するヒントになると思って」

「……そうでしたか」

浮き輪をギョツと抱きしめる。私の言葉で自分の境遇を思い出してしまったか、一層暗い顔に。

それでも三日月自身が説明を求めてきたので、私が知り得る調査の結果を三日月に伝える。なるべく刺激を少なめにして三日月が動揺しないように。どれだけ被害者がいたかというのが話の中心になる。

「……そんなに」

「ああ。まったく酷い話だ」

私も話していて反吐が出そうだった。古くて4ヶ月、新しく1ヶ月前となると、そのたった3ヶ月の間に私と三日月含めて12人を捨て駒に使っているということ。死体がここに流れ着いたこと自体が幸運とも言え、実際はそれ以上の被害者がいるのだと思う。ここになり死体は、全て深海棲艦に喰われてしまっているが。

飛鳥医師はそれを『出稼ぎ』と称した。深海棲艦を倒すことで何かしらの褒賞があるのかもしれない。そのために、手近なところだけでは飽き足らず、わざわざ遠方まで出向いているというのなら、辻褄は合う。

「私達は……運が良かったんですね」

「そうだな。若葉達は運がいい。新しい人生が始められている」

そんな中でも私と三日月の2人だけは、幸運にも生きたままこの施設に拾われ、飛鳥医師のおかげで新たな人生をスタート出来た。

私達の今持つこの命は、とても重い命だ。私はもう1人分の命ではないと思っている。これだけの犠牲者が出ている中での、たった2人

の生き残り。無念の中に沈んでいった仲間達の方も、私は楽しく生きたい。

「……それについては、外の人間が解決してくれると、言ってくれているんですよね」

「ああ、来栖提督ならやってくれる。若葉達の手が届かないところにいる犯人も、必ず突き止めて制裁してくれるだろう」

今の私にはそれが一番の願いだった。被害者達の無念を晴らしてくれれば、それでいい。

被害者は自らの手で無念を晴らしたいと思うだろう。だが、私も三日月ももう、そのふざけた思想の鎮守府とは関わりを持ちたくなかった。来栖提督に任せて、私達はここで吉報を待つことにしよう。きつと上手く行く。雷のように、ポジティブに考えよう。

「調査は今日で終わったから、明日からはいつも通りだ」

「そうですか。なら、エコちゃんの散歩も出来ますね」

今日はいろいろあつて行かなかつたが、明日からはまた一緒に散歩をするそう。三日月も自分の体力の無さには気付いたようで、この施設では戦闘などは無いにしろ、少しくらいは鍛えた方がいいかもと自覚したらしい。

セスと一緒にエコの散歩をするのは程よい運動として丁度良かった。私には物足りないレベルではあるが、まだ活動を始めて間もない三日月には都合がいいだろう。

「本当に好きだな」

「はい。あの子と、この子達は嫌な感じがしないんです」

抱きしめている浮き輪を撫でる。浮き輪もサムズアップで応えた。

一応セスの部下という扱いだが、セスもこれで三日月が癒されるならと快く貸してくれている。それがこの施設に滞在する理由の一部でもあるわけだし。

「セスさんには感謝しています。この子達と一緒にいさせてもらえる」と、世界に対する嫌な感じが薄れていくようです」

「良かったな」

また薄く微笑んだ。これが本来の三日月なのだろう。すぐにじや

なくていい、ゆつくりと本来の三日月を取り戻してもらいたい。もつと満面の笑みが浮かべられるように。

「夜は相変わらず若葉の部屋のようだが」

「そ、それは……自分の安全を考えてのことです。この子達はいろんなことが出来ますけど、唯一護衛だけは出来ませんから。癒されますが安全では無いです」

三日月は何だかんだ人の温もりを欲しがっているのでは無いかと思う。何もかもが嫌でも、1人でいるのは苦しい。苦しさを薄れさせるために私を使っている。

私はそれで構わない。それで三日月が安心して過ごせるのなら、いくらでも使ってくれていい。添い寝くらい減るものではないし。

「それに、夜くらいは浮き輪さん達もセスさんにお返ししないと」

「ここ最近、独占しているもんな」

「セスさんがいいと言ってくれるから甘えてしまっていますね……」

何をするにも最低1体は三日月の側にいる。家事手伝い中も、こうしてただ話をするときにでも。浮き輪が三日月から離れるのは風呂と寝るときくらい。下手をしたら風呂にすら付いてくる。

「人肌恋しいなら、若葉を使ってくれて構わない」

「……そうさせてもらいます。やっぱり一番信用出来るのは若葉さんなので」

そう言ってもらえるのはなかなか嬉しいものだ。依存されているわけでもなく、ただただ信頼されている。三日月が新たな生を得てから一番近くにいた甲斐があるというものだ。

私だって出来ることなら誰とでも仲良くしたい。本来の私ならもっと戦いを求めていただろうが、この施設で生活を始めてからそういう思想も薄れている。だが、悪くない。

海底の遺産

施設近海の調査が終わり、海底に眠る艦娘達は全て来栖提督率いる調査隊により引き揚げられた。その数10人。それが約3ヶ月という短期間に沈んでいったことが判明。元凶となる鎮守府を探すべく動き出した。とはいえ、以降は全て来栖提督に任せることとなる。

調査隊の海底調査により、状況証拠となり得そうなものは全て撤去されたらしい。そのため、同じ場所で潜ったとしても、それらしいものは何も残っていないそうだ。

それを朝食の際に聞いたクロはすぐさま反応。

「センサー、じゃあまた潜っていい？」

「艦装の試験が途中だったな。摩耶、大丈夫か？」

「構わないぜ。長時間の耐圧試験が残ってるから、それやっちゃまおう」
出鼻を挫かれた艦装試験だったが、今ならそれを阻むものは何も無い。ならばと、朝食後にそれをやってしまおうとクロが提案。急ぎでやらなくてはいけないことではないが、クロがやりたいと言うのならやらせてあげてもいいだろう。

「……ついでに……海の底を見てくる」

「頼んだ。深海棲艦の目で見ても何も無いことを確認してほしい」

調査隊は当然艦娘しか属していない。艦娘の目で見たらもう安全となっても、深海棲艦の目で見たら危ないというものがあるかもしれない。それを確認するためにも、潜ってもらうのはいいことだ。

万が一それで何かあったとしたら、すぐに対処しなくてはいけない。私達だけで対処出来ることなど限られているため、いざという時はすぐに来栖提督に連絡をしなくては。

早速シロとクロが海に潜っていく。それを追うように私、若葉は海に出る。シロクロの艦装試験の際は、私は緊急時の救助役。潜っている場所の真上に陣取り、シロクロと摩耶の通信を聞きつつ、何事も無いことを祈る。私の仕事は一切ないことが、最もいい成果である。

私の後を追うようにセスも海に出た。一応あちらは2人なので、こ

ちらも2人準備。これも前から変わらず、お互いに浮き輪を1体抱えている。

「セス、海の上には何か無いか？」

「流石に無いよ。私にはそういうのわからないし。エコなら何かわかるかもしれないけど」

動物的直感というものか。シロのような不思議な見分け方をしていそうなエコなら、何かしらわかるかもしれない。

だがこの場にエコはいない。戦場でも無いのにわざわざ抱きかかえて運ぶ必要もなく、施設で三日月が面倒を見てくれるから置いてきたとのこと。エコを武器として使うのは緊急時と決めているらしく、何処までも非好戦的である。

「私だけでやれることなんてすごく少ないんだよ。代わりに、エコのスペックを最大限に引き出せるんだ」

「……そういうのもいるんだな」

「艦装が無かったら艦娘も同じだろ」

言われてみれば確かに。私の艦装は背負う形をしていて、セスは獣の形をしている。たったそれだけのことだ。私単体では何も出来ない。艦装が意思を持つように動いているので、もとい、意思を持っているので、そういう考えに至らなかった。

深海棲艦には他にもそういうものがあるらしい。機会があれば会ってみたいものである。友好的かはさておき。

前回と同じように潜っているシロクロの真上でセスと待機。浮き輪も常備して通信を聞いている。

『そろそろ底だよー』

『……死体は……見当たらないね』

『姉貴、それ言っちゃダメ』

施設が見えるか見えないかくらいの沖まで出て、そこから海底まで行っている。このままどれくらい居られるかが必要なので、シロクロの気が済むまで海底で遊んでもらう。

『マヤ、私達どれくらい潜ってるかとかってわかる？』

『さすがにわかんねえよ。でも周りは暗いんだろ？　じゃあ結構深い

んだらうな』

『……私達は……周りが見えてるけどね……』

こういうところはさすが潜水艦と言える。艦娘も深海棲艦も、潜水艦は海中から暗闇も関係なく視野が広い。

『海の底にとーちやくー！』

『足の踏み場は……あるね』

『ホントに全部持ってたんだね。あ、でもこっち側の艀装はちよいちよい落ちてる』

私達にはわからない海底の世界。暗闇に包まれた無音の地で2人は、声を聞く限り楽しそうに散策している。艀装にカメラでも付ければよかったかと摩耶がボヤいていた。

それほど深くまで潜ると、水圧やら何やらで身体に影響が出て然るべきだが、さも当然のように活動している辺り、やはり潜水艦。無限の呼吸を可能にするマスクも、元々が潜水艦から流用しているだけあり頑丈。このペースなら長時間耐圧試験も難なくクリアしそうである。

『何かおかしなものはあるか?』

『今のところ見当たらないよ。さつきも言った通り、こっち側の艀装が見えるくらいかな』

それも壊れたものらしく、それ単体では使い物にならない物ばかりのようだ。調査隊が持っていかなかったのも、ここまで全部持っていいたら大発動艇ですら足らなくなってしまうからだろう。それに、艦娘の死体とは直接関わりがないのは明白。

代わりに艦娘由来のものは何一つ残っていないそうだ。その全てが今回の事件の元凶に繋がる可能性がある重要なもの。せめてそこからドロップ艦なのか建造艦なのかを判定していきたい。おそらく全てが建造艦だろうが。

「海底に深海棲艦の艀装が落ちていてもいいものなのだろうか」

「うーん……出来れば回収した方がいいと思う」

セスがそう言っているためこちらから進言。通信に割り込む形でこちらから会話を持ちかける。こちらにあちらの会話は常に聞こえ

ているが、こちらから話しかけるにはちよつとした手順が必要。

「セスが海底の艤装は回収した方がいいと言っている」

『若葉か。あー、セス、理由は？』

「同族の私が言うのはなんだけど、不吉。艦娘の死体と一緒に長いこと沈んでた同族の艤装とか、そのまま置いといたら何かありそう」

本当に自分で言うことではない。だが言いたいことはわかる。シロクロやセスは違うが、深海棲艦はあまり良くない感情を素材に生まれていると聞く。その持ち物を海底に放置しておくというのは、確かに不吉である。海に何か悪影響を与えかねない。

だがそんなこと言ったら、施設の倉庫はどうなるというのだ。拾った深海棲艦の艤装のパーツを保管しているというのに。海の中になければそこまで害はないのか。

『……私も同意』

『姉貴も同じこと思ってるみたいだし、拾えるだけ拾っていくよ』

『了解だ。海底のモノはシロクロにしか頼めないからな。無理しない程度に回収してくれ』

ということ、海底に眠る深海棲艦の艤装も回収されることとなった。シロは少し大変そうだったが、頑張って引き揚げてくれる。それを真上に待機している私とセスが鎮守府に運ぶというのが今回の試験の流れになった。最初は長時間耐圧試験のつもりだったが、上へ下への行ったり来たりでの耐久性の試験となる。それはそれで性能チェックになるので良し。

物を持つての浮上と潜航の繰り返しでも、シロもクロも何も不調を訴えなかった。潜水艦の主機と無限の呼吸を可能とするマスクは、完璧なものとして認識できる。このスペックにはシロもクロも大満足なようだ。

海底からの艤装回収をしばらく続けている内に、全員が疲れを見せ始めたので休憩。私とセスは施設と沖を、シロクロは上と下を行ったり来たり。艤装のパワーアシストで物を持つことは苦では無いが、肉体労働ではある。特にシロがバテてきた。

「シロ、大丈夫か？」

「姉貴体力無いからねえ」

「こんな……働いたの……初めてかも……」

グツタリとしたシロを浮き輪で曳航して施設に戻る。時間的にもそろそろお昼だ。休憩はちょうど良いタイミングかもしれない。

「お疲れ様！ お昼用意出来てるわ！ あ、シロ、大分お疲れみたいね。マッサージする？ 私に頼っていいのよー」

雷が出迎えてくれた。工場でも食べやすいようにとお弁当スタイル。三日月や飛鳥医師も工場に集合している。マッサージはさすがに今はと拒否していた。

「結局、深海棲艦の艦装も回収することにしたんだな」

「セスが不吉つつつてな。シロもそれに同意したんだ。そういうのは本業の奴の勘に頼る方がいいだろ」

「ああ。後の危険に繋がる可能性は全て断つべきだ。不安があるのなら対処しよう。だが、午前中にこの量か……」

工場の端に積まれた艦装の山を見る。今までに溜まりに溜まった艦装なのだろう、思った以上に数があった。施設内で通信していた摩耶がある程度仕分けしていたようだが、それでも乱雑にならざるを得ない数がそこにある。見つかった死体よりも前から海底に眠っていた可能性もあった。

それでも、破損はあれど錆びが殆どないのは深海棲艦の艦装の特性なのだろう。艦娘の艦装と違い、海水や潮風を受けても劣化が極端に少ない。保管する時にはしっかりと洗浄するものの、こうまで綺麗だと流石に驚く。

「いくつかエコに貰っていいかな。たまにはいいもの食べさせてあげたい」

「いいぜ、良さそうなもの見繕ってやるよ」

それを聞きつけ、エコが摩耶に擦り寄り感謝を体現した。廃材も美味しく食べるエコにとって、廃棄の必要がないくらいの物は極上の食べ物なのかもしれない。

山積みの深海棲艦の艦装から、シロクロの艦装の修復に明らかに必

要のなさそうなものを抜き取り、エコに食べさせる。余程嬉しいのか、がつつかずにゆっくりと噛み締めているように見える。

「同族の艦装はご馳走だからね。エコも喜んでる」

「艦娘の艦装よりもか？」

「燃費効率が違うね。身体にあつてるみたい」

エコの身体にもいろいろあるようだ。意思を持つ艦装というのもの、なかなか奥が深い。

「……武装もありますね」

「ああ。若葉達でも使えそうなものがあるな」

三日月もしげしげと眺めていた。駆逐艦の使えそうな主砲や、重巡洋艦が取り回せる副砲、それにシロクロの艦装に最適な魚雷など、戦うためのものも数多く見つかっている。

ここは中立区。ドロップ艦も現れなければ、深海棲艦の発生も無く、外からやってくることもない、戦いとは無縁な場所だ。自衛の必要すら無いため、この武装を私達が使うことは無いだろう。そのため、シロクロの艦装のために修理する以外は、全て来栖提督の鎮守府に持って行ってもらうことになる。

「戦艦主砲はさすがに無いな。双子棲姫の艦装は完全に修復つてわけにはいかなそうだ」

「残念だなー。魚雷はあるからこれは貰おうかなー」

残念と言う割には、クロは全然残念そうでは無い。まるで、ここで活動できる時間が長引くことが嬉しそうだ。シロもそれは気付いているようで、クロが残念残念と言っているところを温かい目で見つめていた。

2人とも、ここでの生活が長くなってきた。私の後に加入して、もう2ヶ月以上。朝から晩まで一緒に暮らしていると、それだけで深い縁が出来る。今までにいろいろあったが、シロもクロも居心地がいいと感じているはずだ。

ただ、それは今は口には出さない。それに、こちらも引き留めるよくなことはしない。出て行くか残るか、決めるのは2人だ。艦装が完成したとしても、ここにいたいというのなら、飛鳥医師はきつとそれ

を喜んで受け入れるだろう。

「でも、久しぶりにどっぷり海の中だから楽しいよ。ね、姉貴」

「うん……楽しいね……。また潜っていいかな……。試験とか……。関係なく」

「ああ、僕としてはいくらでも潜ってくれて構わない。ただし、潜る時は摩耶に許可を貰うように」

「あたしかよ。まあ艀装の管理はあたしの仕事だけだよ」

潜った後の艀装整備は自分でやるということを条件に、軽く許可していた。それくらい自分でやるとクロは張り切り、シロもわかりづら
いが喜んでいた。

昼食も終え、ある程度休憩したところで摩耶が立ち上がった。

「よし、休憩終わり！ 午後からもがつりやつていこうぜ」

「っあーい！」

「……私は……程々にする……」

休憩したものの、シロはやはりクロよりも体力が無いようで、疲れ
が取れ切れていないようだ。

「姉貴は休んでもいいよ。私が頑張っちゃうからさ」

「そうだぜ。無理して身体壊しても意味無えしな。回収はクロに任せ
て、シロはこの艀装の仕分け手伝ってくれよ。あたしだけじゃわか
ねえや」

午後からは摩耶が適宜バラしながらの回収作業になる。シロには
摩耶がバラしたパーツの洗浄と分別を任せることにして、最も重労働
な浮上と潜航の艀装運びはクロに一任することに。

「別に今日中にやり切らなくちゃいけねえわけじゃねえ。あたし達の
ペースでやっていこうな」

「……うん。ありがとう……マヤ」

シロもクロ程ではないがすっかり摩耶に懐いているのが見て取れ
た。仲がいいのは素晴らしいことである。

「じゃあ、後片付けは私がやっておくから、摩耶さん達頑張つてね！」
「あいよ。雷、いつも悪いな」

「いいのいいの！ 私、家事好きだし、艤装とか見てもよくわからな
いし。ほら、適材適所でしょ」

「違いねえ」

三日月も引き続き、雷のサポートで家事に取り組む。雷に対しても
抵抗が無くなってきたのはいい傾向だ。三日月も日々進歩して
いる。

こんな日々がずっと続けばいいと、本心から思えた。私の目標、『楽
しく生きる』は、今のところ達成できている。

真夜中の来訪者

深海に眠る深海棲艦の艦装の回収作業は丸一日を費やすことで完遂した。午後からは摩耶とシロが施設内で分解、洗浄、仕分けを並行して行い、今日の作業終了という時間ギリギリに完了。何とか今日中に終わらせることが出来て良かった。

艦装が工廠の隅に積み上げられているのを見て、艦装の完成がまた近付いたと喜ぶクロと、豪華な食事の山に興奮するエコ。使わないものはエコの食事になるという方向性は、昼食の時に定まっていた。「すまないな、急がせてしまった」

「いや、これは仕方ねえよ。セスが言わなかったら放置してたぜ」「何もないに越したことは無いと思うんだけど、不吉は不吉だからさ」ただ深海棲艦の艦装が沈んでいるのならマシだった。戦いのある海の底ならそんなことは普通だからだ。深海棲艦のものだけでなく、艦娘のものだって沈んでいる場合だってよくある。

だが、この海底には、一緒に深海棲艦に喰われることなく放置されていた艦娘の死体があったのが問題だった。

「……あの死体は……恨みと憎しみが深かった……」

「そうなの姉貴？」

「……そんな感じがしただけ……クロちゃんは……すぐ上がったから見てないよね……」

そういう感情を媒介に深海棲艦は生まれることだってあるのだ。むしろ、今まで深海棲艦が生み出されなかったことが奇跡なのかもしれない。

「そんな艦装、エコに食わせて大丈夫だったのかよ」

「ここに来るまでは落ちてた艦装のいろんな破片食べてたんだから、これも似たようなものだよ。なあ、エコ？」

興奮気味にセスに駆け寄ってくる。あの艦装は余程美味しかったのだろうか。本当に危険なら今の段階で何かしら起きてもおかしくないだろう。遅効性と言われたらそれまでだが。

とはいえ、いつもは恨みと憎しみで満たされた深海棲艦の死骸か

ら、艀装部分だけを剥ぎ取って食べていたということなので、今回もそこまで問題は無いのではと考えているようだ。

「シロ、クロ、海の底に何か違和感はあるか？」

「無かった……と思うよ？ 足跡みたいなのはあったけど、昨日調査隊が付けたものにしか見えなかったし」

「多分あれば……潜水艦の艦娘の足跡……すごく新しかったし……死体が動き出すわけないし……」

シロクロが潜る前からあったものかはわからないらしい。だが、人間のような足跡であり、艀装を装備しているようにも見えなかったため、おそらく潜水艦娘の足跡だと判断したそうだ。

艀装を持ち上げるためにも海の底に足を着かなくてはいけないため、沈んだ艦娘を引き揚げるためなら尚のこと足跡が付くだろう。

「なら大丈夫か……いや、一応明日、念のためもう一度見てきてもらえるか」

「潜るのなら大歓迎だよ！」

「……クロちゃんが行くなら……私も行くよ……」

海底に沈んだものを全て撤去した後とはいえ、最後にもう一度確認しておくことになった。調査隊が何も言っていなかったくらいなので、おかしいことはないだろう。明日は安心を手に入れるために動く。

その日の夜、丑三つ時。物音が聞こえたことで目が覚めてしまった。今までここで暮らしてこんなことは無かった。まだ誰かが起きている……ということもない。飛鳥医師は医者だけに生活サイクルについて結構詳しい人だ。日が変わる前には全員寝るように言い聞かせられている。

なのに、物音は明らかに施設内から聞こえた。まるで、積み上げられた金属の類が崩れるような音。今この施設でその音が出そうなのは、工廠。今日引き揚げた深海棲艦の艀装の山が、風か何かで崩れたというのが妥当。

「……何か……音がしたか」

「しまったね」

隣で眠っている三日月も目を覚ましていた。

ようやく慣れてきたとはいえ、周囲の変化には未だに敏感な三日月。聞き慣れない音が聞こえたら、嫌でも目が覚めてしまうようだった。それが無いようにするために私が添い寝しているくらいである。今回は私も起きてしまったが故に、一緒に目を覚ましてしまったが。

「おそらく工廠です。風で崩れたか……誰かいるか……」

「……どうする。見に行くべきか」

今でこそ私達だけが気付いているのかもしれないが、起こしてでも摩耶やセスに任せただ方がいいとは思う。だが、気になってしまって目が冴えてしまった。三日月に至っては不安から震え始めている。

こんな夜中に見ず知らずの他人が近くにいるかもしれないという現状が厳しい。誰もいないにしても、それが確定しなければ不安はそのままだろう。

「……あの艀装が勝手に動き出す……なんてことはないよな」

「実は深海棲艦が生まれていたとかは……」

嫌なタイミングで、作業の時に話していたことを思い出してしまう。

艀装と艦娘の死体が同じ場所にあると不吉なことが起きそうだから、死体の恨みと憎しみが深いだとか。

もしや、海底にあった素材を使って、既に深海棲艦が生まれてしまっていたのではないか。調査隊による調査と、シロクロによる再調査を掻い潜り、今の今まで潜伏していたとか。

ネガティブなイメージは止まらず、私も確認しないと眠れなそうになってきた。

「行くか。三日月、今のままだと眠れないだろ」

「……はい。すみませんが……付き合ってください」

震える手を握り、2人で部屋から出る。

「2人も気付いた？」

ちようど部屋を出たところで雷と行きあった。雷もさっきの物音で目が覚めてしまったらしい。

「工廠に積んでる艤装の山が崩れた音よね。でも、風で崩れるようなものじゃないわ。そうやって摩耶さんも積んでたもの」

「なら侵入者がいると？　こんなところに？」

「しかも、海側からよ。艦娘か、深海棲艦か……」

小声で現状を確認。雷はあの物音を立てたのは侵入者であると断定している。

だが、今工廠に入るには海側しかない。となると、艤装を装備して海上を航行してきている、もしくは泳いできていることになる。前者なら、中立区には現れない艦娘か深海棲艦になってしまう。

「艤装は全員分が工廠にある。もし万が一深海棲艦だった場合、何も出来ないぞ」

「でも、行かないと何がいるかわからないわ」

静かに、だが力強い足取りで進んでいく雷。嵐には恐怖を感じるが、それ以外には何も感じないのではないかと思えるほどである。いつものポジティブシンキングが、勇気に全部振られていた。

もし突っ込むにしても、最低限大人の力があつた方がいい。艤装を持たない私達よりは確実に力がある飛鳥医師か、エコを扱えるセス、このどちらか。

「……エコちゃんがいれば、まだ立ち向かえるのでは」

「だな。だが、セスはあの音で目を覚ましていないようだが」

「最悪、エコちゃんだけでも……」

などと三日月と話している間にも、雷は工廠までノンストップで向かってしまう。

「お、おい、雷」

「私の艤装が一番入り口に近いわ。もしあちらが攻撃してきそうなら、すぐに艤装を装備してタイムマン張るわよ」

今、工廠に通じる通路はシャッターが閉まっている。これを開けたら大きな音が鳴ることになるだろう。嫌でも施設内の全員が何かしらに気付く。これでもし工廠に誰もいなかったら……それならそれで笑い話になるからいいか。

「それじゃあ……」

「待て、雷！」

「行くわよーっ！　そこにいるのは誰？」

思い切りシャツターを開けて、工場の中に飛び込んだ。私と三日月も後を追うように飛び込む。

そこにいたのは、1人の艦娘。

身体も艤装もボロボロだが、私達のような欠損は無い。疲労困憊でもう立ち上がることもさえも出来ず、海からこの施設に入り、工場に上がったところで力尽き、艤装の山に倒れ込んでしまったと考えられる。

見たところ、その艦娘は私達と同じ駆逐艦。制服は雷のものと少し似ている白のセーラー服。違うのは袖の長さくらい。

「ど、どうしたの!?　こんな夜中に!？」

「……お……」

雷の姿を見て目を見開いた後、同じ艦娘がここにいることに心底安心したような顔をして一言。

「おなか……すいた……」

大きな大きな腹の虫が工場に鳴り響いた。

雷がシャツターを開けた音で全員起きてしまい、夜中だというのに勢揃いしてしまった。念のため、刺激しないようにシロクロとセスは工場外に待機。三日月は相手が初めて見る艦娘ということで、私の後ろを定位置としていた。

空腹を訴えたため、雷がすぐに出せそうなおにぎりを手取り早く作りその艦娘に与えると、目の色を変えて貪った。余程腹が減っていたのだろう。恥も外聞もかなぐり捨てて、とにかく食べる食べる。

「そんなに急いだらダメよ。はい、お水」

「っはっ、んぐっ、んぐっ……あああ……生き返るわ……」

雷から差し出された水も奪い取るように引っ掴み、流し込んでいく。

食べる合間を見て、飛鳥医師が診察。不意に触るのは躊躇われるため、まずは見るだけの診察。

「駆逐艦、曙で間違いないか」

「ええ……」

私達とは違う方法、違う理由でこの施設にやってきた艦娘、曙。系列的にいうなら雷と同じ特型と呼ばれる駆逐艦らしい。当然雷はそのことを覚えていないが。

「酷使された跡が見える。それに栄養失調気味だ。空腹は抑えられても、このままだとまた今の二の舞になる。点滴をするから、落ち着いたら医務室に来てくれ」

「……ええ。ここは何……鎮守府じゃないの？」

空腹が満たされ、ようやく話す余裕が出来たのか、キョロキョロと周りを見回す曙。今はまだ一番わかりやすい摩耶の脚には気付いていない様子。

「ここは元々鎮守府だった場所を改装して作った医療研究施設だ。少しワケありな子がここに属している」

「そう……だから艦娘がいるのね。雷に、摩耶さんに、若葉に……三日月？」

名前を呼ばれたことでビクンと震え、より私の後ろに引つ込む。艦娘に対する嫌悪感を出さないように耐えつつも、やはり面と向かいたくないという気持ちが強いためにこうなってしまう。いきなり喧嘩腰になるよりは充分マシではある。

私が陰になっているおかげで、三日月の傷や色の違う髪に関しては見られなかったようだ。そこは安心。指摘されたら三日月が決壊しかねない。

「ワケありと言ったのはそういうことだ。三日月は少しこういうことが苦手なんだ」

「……本当にワケありなのね」

食べ終えて一息つくが、疲れからか立ち上がることはまだ出来ないようだった。

「点滴を終えたら、僕の友人が提督を務める鎮守府に引き渡させてもらう。そこから元いた鎮守府に戻るといい」

元いたという言葉で、明らかに曙の態度が変化する。顔が真っ青に

なり、ガタガタと震え出した。

「……戻れない。私は……そこから逃げてきたの」

鎮守府がどういうルールで運営しているかは私にはよくわからないが、艦娘が元いた鎮守府を捨ててまで逃げ出すという状況は、まずあり得ない。戦いの最中ではあるものの、ある程度安定した生活空間が与えられるのだから、それを手放す理由が無いのだ。それに、生体兵器であるが故に私達は余程のことがない限り鎮守府を離れるという思想には至らない。

ならば……その鎮守府が余程酷いか。所属している艦娘という立場を捨て、ドロップ艦と同じ扱いになっても逃げたいその場所は一切どういう場所なのか。

「……君は一体何を見てきたんだ」

「最悪なところよ」

それだけ言つて、フラフラながら立ち上がる。とにかく疲労が激しい。何処からここまで一人で来たかは知らないが、真夜中に辿り着いたくらいだ、かなりの長時間航行だったのだろう。

「なら医務室に連れて行く。今はゆっくり休んでくれ。明日に友人の提督を呼ぶ」

「……ちなみになんだけど……その提督のことを教えてもらつていいかしら」

「来栖という、むき苦しくてガタイのいい男なんだが」

それを聞いてホツと息を吐いたのがわかる。その友人というのが、自分が逃げてきた鎮守府ではないとわかったからだろう。

「……明日話すわ……」

雷が肩を貸し、飛鳥医師と共に曙を医務室へと連れて行った。その間に、曙が散らかしてしまった工廠を簡単にだが片付けておく。

曙がこの場にいなくなつたため、工廠の外に待機していた3人が工廠に入ってきた。特に浮き輪はすぐさま三日月に飛びつき、癒しを始めていた。

「……やっぱり他人はキツイです……」

浮き輪を抱きしめながら呟く。あの場には何とかいることが出来

たものの、また嫌な記憶を抉られるような感覚はあったようだ。この後眠るときは浮き輪を1体借りた方がいいかもしれない。

「私達はどうすればいいんだろ。ずっと隠れてた方がいいのかな」

「一過性のものだったら隠れてる方がいいだろうな。ややこしいことになりかねないしょ」

つまらないとクロがブーブー言うが、摩耶の言う通り、ややこしいことになってからでは遅い。それこそ、曙が突然暴れ出すことがあってもおかしくないのだから。

「まずは寝ようぜ。こんな時間に起こされちゃ、流石に眠てえよ」

「……そうだな。セス、浮き輪を1体貸してくれ。三日月の安定のため」

「いいよ。その子も行きたがってるみたいだし」

明日の朝はいつもよりも遅い立ち上がりになりそうである。曙が
どういふ艦娘なのかは、明日じっくり聞くとしよう。

成れの果て

何処かの鎮守府から逃げてきたという艦娘、曙を保護した翌朝。深夜に起きることになってしまったため、私、若葉は日課のランニングの時間を少しズラして開始。セスと三日月もエコの散歩で外に出ている。

日の出の後から始めることは今までにあまり無く、それはそれでいつもと違う感覚。相変わらず三日月は追い付くのがやつとという感じだが、最初のことを考えると、精神的な面は格段に成長していることがわかる。エコや浮き輪達と戯れているときは、ほんのりと笑顔をみせるようになった。

「今日からどうすればいいんだ。アケボノとかいうのは医務室から出ないのかな」

「体調不良をある程度どうにかした後に、来栖提督に引き渡すそうだから、その時だけ我慢してくれ」

「まあそれくらいならいいか。あまり長い間部屋にこもることになると、エコが運動不足になってしまう」

話題は専ら曙のことになる。今までにない形で施設に来てしまった者。昨日は食べるだけ食べて医務室に連れていかれたが、実際は普通に体調不良もあつたらしい。人間という過労による風邪。艦娘にはあまり縁の無い症状である。

そのせいか、あの時の曙は本来よりも若干しおらしくかったと飛鳥医師は語る。どういう経緯かはさておき、過労に空腹、体調不良まで重なり、さらには身体も臙装も傷だらけとくれば、しおらしくもなるだろう。それでも自分をちゃんと持っていたため、本来の曙はもっと勝負な激しい性格なのかもしれない。

「とりあえず、アケボノが医務室から出るときだけ引きこもることにする」

「私も……そうします。外の司令官も来るんですよね。顔を合わせられません」

三日月とセスは曙を引き渡す時のみ自室に引きこもることにして、

それまではいつも通りとした。その時はシロとクロも必然的に引きこもることになるだろう。何かしらキツカケがあれば、曙と対面させることになるかもしれないが。

来栖提督が来たら事情聴取ということになっているが、どういふことが聞けるのだろうか。もしかしたら、私や三日月を捨て駒に使った鎮守府と同じかもしれない。そうだとしたら、いろいろと繋がってくる。

朝に来栖提督に連絡を取り、そこから準備して施設に到着するのが午後。それまで曙は医務室から出ることは無い。薬と栄養を点滴し、消耗した体力も取り戻すことに専念する。

曙の面倒は基本的に雷が見ることになった。いつもの家事は三日月が浮き輪の力を借りながらこなし、雷は曙の看護に専念。私も三日月の時と同様、身体を拭くなどするときは手伝うことにしている。

「具合はまだ悪いわよね」

「最悪よ……お腹は膨れてるけど、頭がフラフラするわ」

昨日の内に検査着に着替えさせられていた曙は、ベッドの上でぐったりしていた。やはり体調が悪いようだ。昨晚に物が食べられただけでも良しだろう。一晚経って多少は回復したものの、まだまだ全回復とは言えない。

「今は何も聞かないわ。いたただけここにいてくれていいんだからね」

「……考えとく。今は身体がまともに動かせる気がしないわ」

「来栖司令官には来てもらうけど、話だけしてここに居残ってもらうのも考えておかなくちゃね。お部屋も用意した方がいいかしら」

仕事が増えることが楽しそうな雷。本当に家事が好きなのようだ。というか、誰かに頼られたいという気持ちが強すぎるくらい。これが本来の雷らしいので、記憶を失っていても本質は何も変わっていない。

私と雷で協力して、あまり力が入らない曙の身体を拭いていく。昨晩は食べるだけ食べた後、点滴をしてすぐに眠ってしまったため、身

体は汚れたままだった。不潔はさらなる病を呼ぶと、飛鳥医師が清潔も徹底している。

「……アンタ達は……ここに暮らしてるのよね？」

「そうよ。先生に怪我を治してもらって、ここで住まわせてもらってるの。だからちゃんとした艦娘じゃないんだけど、でも楽しく生きてるわ」

雷は楽しく生きることが出来ているという、私の目標とするべき者。いつも明るく、ポジティブに生活できていることがとても羨ましい。ここ最近は何も何かに悲観するようなことが無いため、楽しく生きることが出来ていると思う。

「変なところなのね……」

「普通じゃないのは認めるわ。私みたいなのも置いてくれてるしね」

「……何処もおかしなところ見えないけど」

雷はこの施設の中で最も外見的变化が無い者。代わりに記憶を失っているのだから、重症度合いは相当なもの。身体にも心にも大きな傷を負った三日月がいるので、軽めに見えてしまうが、雷だって死ぬほどの大怪我は負っている。

「私はお腹だからね。大きな傷だけど、服で隠れてるの」

「……そう……でも艦娘なんだからドックに入れば……」

「ここにドックは無い」

苦い顔をされた。

曙の怪我は全身の裂傷のため、適切な処置をすれば傷跡すら残らない。それでもドックに入ればすぐにでも治るものが、数日はかかる。そのため、念のために曙は全身に包帯が巻かれている状態だ。最初の私のようなイメージ。

「なら若葉も？」

「ああ」

何処まで話せばいいかわからず、端的に返事。だが、今身体を拭いているところで私の左腕の痣は丸わかり。それに、妙に色素が薄いために気になるだろう。質問されたらありのままに話すつもりだ。

「……その左腕……」

「若葉は両腕を失った。代わりのものを移植されている」

早速質問されたので、袖を大きく捲り、縫合痕が残る二の腕を見せた。

「え……な、何よそれ……」

「飛鳥医師がいなければ、若葉は今頃死んでいる。若葉だけじゃない、ここにいる全員だ」

セスを除いて、と言いそうになったが、まだ深海棲艦もここで暮らしているというのは秘密にしているため、どうにか言わずに呑み込む。この腕が何の腕かも今は言わない。曙なら察しそうではあるが、聞かれない限り、知る必要のないことだ。

「先生はね、ドック無しで艦娘が治療出来るのよ。だけど、当然こうやって傷跡は残っちゃう。曙は傷が軽くて良かったわ。これなら全部消えてくれるもの」

「……そうね……アンタ達には申し訳ない気分になるわ」

「いいのいいの。生きてるだけで儲け物よ。傷があっても無くても関係ないわ。私は毎日が楽しいもの」

本当に雷はポジティブだ。失った記憶を取り戻そうとすることもなく、毎日を楽しく過ごしている。私の目標を体現している張本人だ。

「……ホント、羨ましいわ」

「境遇はその内聞かせてもらう。今は休め」

「……そうさせてもらうわ……きつつ……」

まだこういった体調不良はなかったことがないため、曙の辛さは理解してあげられない。ただ、今は身体を休ませることが先決。点滴もまだ続いていることだし、まずは健康体になってもらおう。話はそれからだ。

午後、予定通り来栖提督が施設に到着。調査隊として来たのが一昨日のため、かなり早い再来となった。

来ることがわかってからは、三日月とセスはすぐに自室に引きこもる。今回は運んでくるのが第二二駆逐隊であることがわかっていた

ため、シロクロは工廠で作業続行。曙が医務室から出るとなったら、改めて自室に行つてもらうことに。

「ちよい前に来たばかりだぜエ」

「悪いな。今回は本当に急用だ」

工廠に大発動艇で乗り付けた来栖提督。今回も護衛艦はいつも通り第二二駆逐隊である。なんだかんだこの鎮守府に一番慣れているため、スムーズにここまで来ることが出来た。

「オツチャン久しぶり！ 水着ありがとう！」

「おう、気に入つてくれて何よりだぜエ」

クロが来栖提督とハイタッチ。余程気に入ったのか、普段着として使う始末である。工廠作業は汚れるため、その上から作業着を着ることになるのだが、何着も貰っているためそれも可能になっている。

シロも後ろから手を振っていた。来栖提督には何の抵抗も無く、文月達とは交流も出来る。

三日月とセスも、来栖提督にこれくらい慣れてもらいたいものだ。

「で、件の曙くだんつーのは」

「医務室だ。こちらに来てくれ。若葉、便乗してくれるか」

「了解」

今までの事件に関わる鎮守府の関係者である可能性があるため、私もその場に相席させてもらうことになった。別なら別で、来栖提督の仕事が増えるだけ。同じだった場合は、それだけ凶悪な提督が管理している鎮守府であることを再認識する。

「若葉が先に入る。少し待っていてくれ」

いきなりこの巨漢が入るのもどうかと思うので、私が先に医務室へ。今は雷は別の家事に専念しており、医務室は曙1人。点滴はまだ続いているが、比較的元気が戻ってきたようで、ベッドの上半身部分を起こした状態でボーツとしていた。

「曙、今朝言っていた来栖提督が来た。話せるか」

「……いいわ、怠さも今は比較的引いてるし」

許可が出たので飛鳥医師と来栖提督の中に入ってもらおう。飛鳥医師は面識があるからいいものの、来栖提督は初見では確実に驚く。案

の定、曙もギャアと言いかけて口を噤んだ。

「お前さんが自分の足でここに来たっつー曙か。俺ア提督やつてる来栖つてもんだ。よろしくなア」

「て、提督なんてナリしてないじゃないの！」

「よく言われるぜエ」

ベッドの横にドスンと腰掛ける。曙、正直引き気味。飛鳥医師はさらにその横でメモを取る準備。

「俺アお前さんがどういう艦娘かは知ってるつもりだ。俺アクソみてえな提督かもしれねえが、しつかりスジは通すからよ。話せること、話してくれねエか」

「……私だってあんなクソ鎮守府とは一刻も早く縁が切りたいし、今はアンタを頼ることにする。勘違いしないで。アンタを信用したわけじゃないから」

「構わねエよ」

怠さが引いてきたというだけあり、昨晚や今朝よりは元気だった。その分、口が悪くなっているように思える。これが飛鳥医師の言っていた『本来よりしおらしい』の本来の部分か。

本来従うべき提督という人間に対し、なんらかの良くない感情を持っているのが曙という艦娘のようだ。飛鳥医師は医者だからそこまで悪態をつかれなかったが、来栖提督に対しては明らかに態度が違う。

「で、何から話せばいいのよ」

「そんじゃあ、お前さん、何処の鎮守府出身だ。建造かドロップか」

「……建造よ。生まれたのはつい最近。大体1週間前」

それにしても酷使の跡が酷い。休みなく出撃をさせられているかのような、痛々しい傷ばかりだった。それに栄養失調ということは、その1週間でろくに食事も出来ていないということになる。

「1週間でそれは酷いな。食事はギリギリ、睡眠時間も足りなすぎる。遅かれ早かれ死んでいたぞ」

「だから逃げたのよ。あんなクソ鎮守府。なんでかみんな、そんなバカみたいな環境でも文句言わないし」

それはまるで洗脳されているようだったと曙は語る。どれだけ酷使されても、蔑ろにされても、何も文句を言わずにただ働くだけの機械。曙もそれに成りかけていたようだが、違和感に気付いたらしく、隙を見て脱走したとのこと。

「その隙つてのが今日だったわけかい」

「ええ。何回目か忘れたけど、逃がした護衛棲水姫搜索任務だったわ。あんな暗い夜に見つかるわけないっての。探照灯すら貰えなかったのに」

さすがにその名前が出ては反応してしまう。飛鳥医師も渋い顔をしていた。

護衛棲水姫といえば、当然セスだ。ということは、曙が属していた鎮守府が、エコの脚を腕いだ犯人だったということか。

「でもおかげでわざと落伍出来たから助かったわ」

「なるほどなア。艦娘の酷使と必要以上の遠征、あとは……」

私をチラリと見てくる。言いたいことを察したので、小さく頷く。

「捨て駒戦術を使っているかどうかだなア」

「は？ 捨て駒？」

「俺ア今、建造したての艦娘を捨て駒に使って戦果を稼いでいるクソツタレを探してんだ。曙オ、お前さんのところに思い当たる節はあるかア？」

予想外の言葉だったのか、訝しむような表情で来栖提督を見る。嘘を言っているわけがないと、その顔を見ればわかった。周りにいる私と飛鳥医師からも察することが出来るはずだ。

「捨て駒って……何よ。うちの鎮守府、そこまでやってんの!？」

「わからん。今は見当を付けている段階だ。だけどなア、お前さん、1週間前に生み出されたっつってたなア」

「え、ええ……」

「その時、嵐じゃなかったか？」

大体1週間くらい前。それは、第二二駆逐隊が三日月のことを見に来てくれた時だ。昼に突然嵐が来て立ち往生し、その日の夜に傷を負ったエコと、それを探して迷い込んだセスと出会った。

曙が生み出されたのは、護衛棲水姫が反撃してきた時に盾にするため。だが、護衛棲水姫が非好戦的な深海棲艦だったため、捨て駒を捨てることは出来ず、生きて帰ってきた。ならばと、捜索任務やらに出撃させ続けて、使い潰して捨てようとしていたのではないかと、来栖提督は想像している。

「……思い当たる節が……あり過ぎる。出撃の時、誰も私のことを見てなかった。装備も最初に持ってたのそのままだったし、鎮守府に帰投しても妙な空気だった。すぐに再出撃だったからそう感じたただけだけ」

「それを1週間繰り返していたのか。本来なら栄養失調で思考能力も奪われているところだぞ」

私でも何となく掴めてきた。海底に眠っていた艦娘達が、私が戦場で散った場合の成れの果てだったとすれば、この曙は、私が戦場で散らなかつた場合の成れの果て。

生きていてもこれでは意味がない。結局、捨て駒と同様、ゴミのように使い潰されて死ぬだけだ。

「……わかった。お前さんの証言は、クソツタレを追い詰める最高の素材になる」

「……そう……」

「何人も捨て駒で殺すだけじゃ飽き足らず、死ななかつたら使い潰そうだなんて性根の腐ったクソツタレは、俺が必ず捕まえてやる」

文月や羽黒に見た静かな怒りは、来栖提督由来のものなのだと実感した。曙の境遇を聞き、空気が震えるほどの怒りを示している。サングラスで目は見えないが、おそらくあの文月のような目をしているのだろう。冷静だが、奥底が煮え滾っている。

私も同じ気持ちだった。ただでさえ10人もの死体が海底で見つかったのに、生き証人まで見つかつてしまった。気分が悪い。そんなことを続けて得た戦果に何の意味がある。

繋がる情報

来栖提督から曙への事情聴取が続き、ある程度のところで一旦終了となった。曙の体調が本調子では無かったというのもあり、あまり話し続けるとせつかく良くなってきた体調が悪くなってしまうかねないからだ。

来栖提督は今日曙を連れて行くのは断念。だが、今絶賛調査中の内容は、曙の証言で大きく進展しそうだという。私達のようなその場で捨てられたものより、1週間でもその場に留まったものの言葉はかなり強い。

「まだ確定ではないが、若葉、三日月を捨て駒にし、そして曙を使い潰そうとした鎮守府は同一として見ていいだろう」

「手口が同じだからな。その線で調べるぜエ」

さらには戦いを拒む護衛棲水姫セスとエコを追い詰めて殲滅しようとしたのも同じ鎮守府。シロクロを殲滅しようとしたのは未だ何処かはわからないが、2人がここに流れ着いた時点で、同じ鎮守府の可能性はかなり高い。

「ちよつと待つて。若葉と三日月つて……アンタ……」

「捨て駒にされて死にかけていたところを、この施設に流れ着いて治療してもらったんだ」

苦い顔をする曙。私の両腕の傷も見せているので、全てが繋がったはずだ。自分もこうなっていた可能性に気付き、逃げたことが正しかったのだと悟る。

「……若葉、クソ提督の顔見たでしょ。どんな奴よ」

嫌だがあの時のことを思い出す。

生み出され、建造ドックから出た時、そこには若い男がいた。来栖提督はさておき、飛鳥医師よりも若かったはずだ。見た目は真面目そうな紳士に見えたが、何処か張り付いたような笑みだったことが目に焼き付いている。

今考えてみれば、それが一番胡散臭かった。名前すら教えてくれなかった。ただ提督という存在としてその場にいただけだ。

「……私と同じよ。胡散臭い笑顔で他の連中に指示を出してた。そういえば……私にも名前は言っただけじゃなかったわね」

これでほぼ確定だ。元凶は全て同じ提督。曙にも私と同じ待遇をしていたが、捨て駒として出撃させた戦場で死なずに帰ってきたことで、使い潰す方向に移行したようだ。

聞いてはいないが、後から三日月にも聞いておこう。おそらく、私や曙と同じ人間の顔を思い浮かべるはずだ。

「そういうところには頭回るくせに、死んだかどうかの確認はしてねエんだな」

「大怪我で海上に放置したら、普通は誰だって死ぬ。漂着出来たとしても、それを治療しなくては確実に死ぬ。息がある状態で鎮守府かここに流れ着くというのが絶対条件だ。余程運がない限り無理だな」

そう、余程運が良くない限りだ。私や三日月は、本当に運が良かった。ダメだった場合を見てしまったが故に、余計それを実感した。

別に私や三日月が幸運艦だというわけではない。捨て駒にされるほどには、艦娘の中では普通なのだと思う。特別強力な武器もなく、恵まれた才覚もない、一般的な駆逐艦である。それが、こんな数奇な運命を辿ることになるだなんて、生まれたばかりの私には想像も付かなかった。

「若葉と三日月は幸運だが、曙はそれを自分で掴み取ったわけだなア。

流石じゃねエか」

「褒めても何も出ないわよ」

「いやいや、その決断力は何処でも必要なもんだぜエ」

来栖提督に褒められ、顔が真っ赤ではあるが満更ではない表情である。

「先に聞いておくか。曙、お前さんさえ良けりや、完治した後、うちの鎮守府に来ないか。悪いようにはしねエよ」

「……考えとくわ。少なくともあのクソ鎮守府は滅ぼさないと気が済まないし、今の私の一番の望みはそれだもの。それを手伝ってくれませんか？」

「物騒な言い方だが、ケジメはつけさせるから安心しな」

現状は保留とした。私達のようにこの施設を選択したわけではなく、あくまでも保留。今は患者としてここに居るわけなので飛鳥医師が絶対に手放さないが、完治さえしてしまえば選択肢は曙のものだ。それまでにここに居残るか来栖提督の鎮守府に所属するかを決めてもらう。

「体調戻ったらまた教えてくれい。俺らはお前さんを迎え入れる準備をしておくからよ」

「……悔しいけど一人でどうこう出来る問題じゃないもの。アンタ達を利用してもらうわ。でもそつちに行くかどうかは話が別よ。考えておく」

「減らず口が叩けるなら充分だぜエ。しっかり身体を治せよ」

頭を撫でた後、医務室から出て行った。それに合わせて私達も外に出る。

少し長めに話したからか、曙にも疲れが見えていた。今は体調を戻すことに専念してもらう。全身に小さいながらも傷があるのだから、それを治すことも必要だ。今はゆっくり眠ってもらう。

来栖提督達はそのまま帰投。第二二駆逐隊も久しぶりに三日月と話のできたのは良かったと笑顔で帰っていった。

来栖提督が次に来るのは、今から3日後ということになった。飛鳥医師の見込みでは、曙の完治は今日込みで5日。動けるようになるまでは2日、傷が完治するまでが3日、合計5日という配分。

いくら艦娘でも、ドック無しで傷を治そうとするとそれくらいはかかると、飛鳥医師は自分の体験談から語った。裂傷に関しては、摩耶が頻繁に生傷を作るらしく、それでおおよそ理解したようだ。

来栖提督達が帰投したことで、三日月とセスが姿を現わす。医務室にさえ近付かなければ問題ない。

全員集まったため、一旦工廠で今後のことを話し合うことに。とはいえ、既に大体は方針が決まっている。

「曙自身は明後日には医務室から出られるようになるだろうが、最後まで医務室で過ごしてもらうことにする。その後、この施設に居残る

選択を取った場合、改めて部屋の準備をしてやってくれ」

「わかったわ。掃除は行き届いてるし、選んでくれればすぐに用意できるわ!」

すでに部屋を準備済み。曙がどういう選択をとっても問題ないように、全て最善の状態で準備されている。雷と三日月が常に掃除をしているためである。嫌悪感を抱く他人という存在相手でも、家事に關してはちゃんとやれるようになっていいる。そういう部分は雷を見習って慣れていつていいるようだ。

「準備するのはいいけどよ、曙にはこの施設がどんな施設かは教えてあるのか?」

「どういう意味でだ?」

「そういう意味でだよ」

摩耶が顎で示すのは、シロクロとシスである。

初見には一番驚く内容。深海棲艦が普通に住み込んでいる施設であることは、遅かれ早かれ知っておいてもらわなくてはいけないことだ。

「今は控えてある。ワケがあつてな」

「ワケつてのは?」

「曙から聞いた話が理由だ。皆にも伝えておく」

ここからは私以外に曙の話を伝える。私は一度聞いているが、復習のためにもう一度。

私と曙が元々属していた鎮守府は同じだったということ。セスを追い詰め、エコの脚を腕いだのも同じであることが私達に直接関係のあることだ。少なくとも3人が同じ鎮守府に被害を受けている。

来栖提督に一任しているとはいえ、気分が悪いものは悪い。セスも少し嫌な顔をした。曙にこの施設のことを話せないワケというのもこれで察しただろう。搜索対象がここにいるというのは、少し刺激が強い。

「そりゃ話しづらいわ。せめて体調戻ってからだな」

「そのつもりだ。動けるようになったら話す」

今の話を聞いて、何やら考え込んでいるシロとクロ。

「ねえ、セス。セスとエコを襲った艦娘ってき、どんな奴らだった？
なんかこつちを追い詰めるの楽しんでなかった？」

不意にクロがセスに聞く。追い詰めるのを楽しんでいたというのは、クロだけの証言だ。曙の証言と食い違ってる部分が少しだけある。

曙は、自分以外の艦娘が洗脳されているかのようにただ言うことを聞くだけの機械のようだったと話した。聞く限りだと、感情すら撤廃された機械、人形のようなものに思える。だが、シロクロを襲った艦娘達は、楽しんでいるといふ感情を持っている。もしかしたら、それは違う鎮守府なのかもしれない。

「あー……言われてみれば確かに。私がエコを庇おうとしたからかな、逆にエコを壊そうってしてた。妙に陰険な戦い方だったような……」

「その中に……緑の髪の艦娘……いた？」

「いた！ シロ、そいついたぞー！」

シロクロとセスも繋がってしまった。同じ部隊に襲われた結果、シロクロは瀕死の重傷を負い、セスは艤装を失いかけて未だに追われている状態。

となると、洗脳されているかのようなのだったというのは曙の周りだけで、意思と理性を持つて元凶の提督に付き従っている艦娘もいるということになる。いや、それすらも洗脳の一部なのかもしれない。末端は人形に、上に行けば行くほど意思を持たせ、全員忠実な下僕にしてしまっているなんて可能性も出てきた。

「……若葉さん……若葉さんの知っている司令官というのは……先生よりも若くて……貼り付いた笑みの男でしたか……？」

三日月からも振り絞るような声の質問が来た。辛そうに、抱きかかえた浮き輪をより強く抱き締めながら、より良い情報のために協力してくれている。

「ああ、その通りだ。名前は教えてくれなかったが」

三日月の知る提督像は、元凶となったクソ提督しかいない。そしてその特徴は、私と曙が知る提督と同じもの。これで私と三日月の繋が

りも確定した。

「私と若葉さんも……同じ鎮守府出身です」

今まで出てきた情報が、これで全て繋がる。

元凶は同じ鎮守府。何もかも、1つの鎮守府が事を起こしている。

「待て待て、1つ情報が増えたぞ。緑の髪の艦娘だつて？」

「私達を攻撃してきた部隊にいたんだよ！ その部隊では旗艦みたいだった」

「……他の艦娘も……ニヤニヤ笑ってた……でも、その緑髪の艦娘が……全部指示してたよ……」

「私の時もだ！ そいつがずっと指示出してた！」

ならばその緑髪の艦娘は、催眠を受けてそういう形にされているのか、最初からそういう性格なのかになる。どんだん話は拡がっていく。

「緑髪の艦娘……何人が該当者がいるな……。他に特徴は？」

「三つ編み……三つ編みをしてた」

「……夕雲か……あの子はそんな性格じゃないぞ。確実に性格を変えられている」

飛鳥医師には思い当たる艦娘がいたようだ。それが駆逐艦夕雲。

知る限り、そんな陰険な戦い方はせず、19人姉妹の長女としてリーダーシップと包容力を兼ね備えた強い少女だと、飛鳥医師は語る。リーダーシップを持つのなら、旗艦をやっているもおかしくないか。

「洗脳……洗脳か。どうやって……薬、それはないはずだ……飲むだけで性格を変える薬など……いや、出来なくはないだろうが……だとしたら……」

飛鳥医師がブツブツ言いながら考え事を始めてしまった。医者として、思考に直接影響のある何かは気になる様子。

「センス、脱線し始めてるぞ」

「あ、ああ、すまない。その夕雲のことは来栖にも伝えておく。充分すぎる情報だ」

所属艦娘が1人でもわかれば、絞り込むことが少しは簡単になる。

何もかもが値千金の情報となるのだ。来栖提督が帰投が終わるくらい
のタイミングで連絡をいれるとのこと。

これでまた事件解決に近付いた。ようやく見えた元凶の背中は、今
の会話でさらに近付いただろう。

「あたしはなんつーか縁の無え話だな。ドロップ艦だからピンと来
ねえ」

「私も何も覚えてないから、空想上のお話みたいに聞こえちゃうわ」

摩耶と雷は、この話の流れを聞いていても現実味が無いと言う。当
事者である私だって現実味が無い。こんな絵に描いたような悪人が
いるというだけでも驚きだ。

「だけども、そういうクソが世の中にいるってのは気に入らねえ。来
栖提督じゃ無えけど、しつかりケジメつけさせねえとな」

「ええ！ 私もそういうのは良くないと思うもの！ ちゃんどルール
を守れない人は、守れるようになるまでしつかり言い聞かせなくちゃ
！」

雷の明るさが本当に救い。自分とは無関係なことでも、仲間の危機
なのだから立ち上がってくれる。こんな暗い話でも、ポジティブなの
は変わらず、空気を和ませた。

「まずは曙の治療が最優先だ。これが終わらないことには始まらな
い」

「だな。それは雷を頼ればいいんだよな？」

「ええー！ いくらでも頼ってちょうだい！」

今までもそうだったが、これでまたみんなの心が1つになったよう
に思えた。私達は戦うことの出来ない艦娘ではあるものの、この事件
を解決しようと躍起になっている。

予期せぬ出会い

曙が患者として施設に流れ着いて2日。予定通り、曙は医務室内を歩き回れるくらいは出来るようになるほど回復した。足りていなかった栄養は補給され、空腹も満たされたことにより、出会った直後よりも肌艶が良くなっているように見える。

私、若葉は雷と共に医務室で曙の診断を手伝っている。診断後は雷による傷の確認があるため、そちらもお手伝い。

「熱もないなら、今日から点滴は無しでいいな。体調不良は完治だ。だが、とはいえ君は病み上がりで、傷も完全に塞がったわけじゃない。激しい運動はしないように」

変に動いてまた傷が開いてしまったら困ることは、曙もさすがに察しているようで、大人しくしている。体調がある程度良くなっても、大事を取って医務室からは極力出ない。

「来栖はまた明日この施設に来る。この施設に残るか、来栖の鎮守府に行くかは、それまでに考えておいてほしい」

「今は行く方向で考えてるわ。あのクソ鎮守府は、私の手で決着つきたいから」

体調不良も完治したことで、本調子となった曙。やる気だけは漲っている様子。提督という存在への感情より、復讐心の方が上回っているようだ。

「そうか。ならそのようにしておこう。気が変わったらいつでも言ってくれ」

「ええ」

「それじゃあ次は包帯交換の時間よ！ 先生は出てって出てって！」
診察が終わったため、今度は雷のターン。全身に巻かれた包帯を解き、消毒をしながら新しい包帯に変えていく。

この作業中もそうだが、曙と接している間に施設の内情や私達の事を話している。私の両腕が深海棲艦から移植されたものであることも説明済み。曙もここの施設がどういう場所であるかは理解してくれた。

だが、まだ施設内に深海棲艦がいるということは話していない。私の腕や雷の腹、違うタイミングで摩耶の脚を見せた時でも相当驚いていたが、それ以上の衝撃になる。当初の予定通り、体調が良くなった今の段階でようやく話せるか話せないかだ。

「悪いわね。やっぱり私、ここを出るわ」

「自分で決めたことだもの、それが正しいに決まってるわ。むしろ私は応援するわよ」

話しながらも簡単にだけではあるものの傷口を診て包帯が必要かを確認。血が出てくるような傷はもう無く、消毒だけして包帯も無しでいいという判断になった。これならあと2日もすれば身体の表面から痕跡も無くなると。艦娘の治癒力はなかなかのものである。

「若葉と三日月の仇を取ってきてくれ」

「仇って……まあ、そうね。アンタ達のこととはついでに解決しておくわ。私は私のために動くんだから」

小憎たらしいことを言うが、表情は明るい。

「結局、三日月とは面と向かって話すことは無かったわ」

三日月がどういう艦娘であるかも説明済み。大きな心の病と、激しい外見への影響で、人前に出ることに抵抗があると説明し、ここに辿り着いた夜に一度だけ顔を合わせたときの態度から、それは納得してもらえている。

「ここから出ていくときくらいは顔を出すと思う。いや、来栖提督のことが苦手だからなんとも言えないか」

「そう、じゃあその時に壁越しにお別れくらい言わせてもらおうわ」

「そうしてやってくれ」

それを嫌がることは無いだろう。返事はしないかもしれないが、わざわざ嫌悪感を露わにすることも無いはず。それなら心配もない。

医務室での作業の次は、作業着に着替えて工廠へ。ここでは今、摩耶を主体に曙の艦装の整備がメインに行われている。ここに残るにしても、ここから出ていくにしても、一旦バラして綺麗にしてから元に戻すことで、最高のパフォーマンスを発揮出来るようにしておこう

という気遣い。

出ていくのなら、来栖提督の鎮守府にいる工作艦明石が、正しい形に修復してくれるだろう。だが、その前にこちらで確認しておくべきこともある。

「若葉も手伝おう」

「おう、ちょうど曙の艦装を組み立てようとしてたところなんだ。手伝ってくれ」

曙の艦装は1週間酷使され続けていただけあり、いつ壊れてもおかしくないくらいのものだっらしい。この2日間でやったことなど、施設内に置いてある拾い物のパーツから代替出来るものを探すことだったようだ。

ある場所は錆び付き、ある場所はヒビが入り、酷いところでは壊れ落ちてパーツそのものが失われているものまであったのだとか。最悪の場合、ここに辿り着く前に、海上航行能力が失われて沈んでいたとか。艦娘が溺死なんて笑えないにも程がある、

「代替パーツは見繕ってる。一応艦娘の艦装で統一してるからな」
「了解」

私が受け持つのは主機。摩耶が主砲などの武装の組み立てをしているため、私がこちらを。本来なら摩耶が受け持つ部分だが、まだ素人に毛が生えた程度の私が武装をやるわけにはいかない。

「主機は緊張する」

「初めてだとな。間違えんなよ？」

「余計緊張させるな」

いつも工廠にいるシロクロが見当たらない。なんでも、シロクロは海底の奥深くに潜っているらしく、しばらくは浮上してこないのだとか。念願の艦装を手に入れてから、頻繁にやっているらしい。潜水艦ならではのリラックスの方法なようである。

「セスはエコのメンテか」

「まあね。義足のメンテはいつもやってるんだ。何処でも出来るけど、今日はここでやってるのさ」

その辺りは飛鳥医師と摩耶に接続方法を聞いており、元々そういう

ことが出来るセスなら一人でメンテも出来る。エコも今義足を外されて横になり、舌を出してまったりしていた。見た目に反して物凄く従順。

「外を走り回らせてるから、隙間に砂が入るんだよね。ついでに海水も拭いてんの」

「そればっかりはどうにもならねえからな。毎日ああやるしかねえな」

散歩と同じように日課になっているからか、セスの手際はとてもいい。バラして、洗浄して、組み立て直すという作業も、惚れ惚れするほどの精度と手早さ。見習いたいものである。

私も負けずに曙の艀装を組み上げていく。慎重に、確実に。

自分の艀装とはまるで違うことがよくわかる。摩耶からもさんざん言われたが、初春型の艀装は浮いているために整備難度が飛び抜けているらしい。そのため、私はそれ専門でやれるようにしている。自分の艀装くらい自分で整備出来なければ。

「よし、終わったぞエコ。歩けるか?」

整備を終えた義足を接続され、エコが起き上がった。いつものように義足をカチャカチャ鳴らしながら、元気に施設内に駆けていった。

「ああもう、多分あれは三日月のところだ。じゃ、私はこれで」

「ああ。また何かあったらヘルプ頼むぜ」

「はいはい」

セスもエコを追って工廠から出ていった。これで工廠は私と摩耶の2人だけに。こうなると黙々と作業が進んでいく。お互い目の前の作業に集中した。特に私は一番重要な部分を組み立てている。間違えたらどうなるかわかったものではない。

「おう、大丈夫か?」

「大丈夫だ。時間はまだあるから慎重にやっている」

「お前、息止まってたぞ」

「それだけ緊張しているんだ」

他人の主機なのだから、息も詰まるというものだ。落ち着くためにも大きく息を吐く。

「まあこつちもきつついんだがな」

「摩耶は主砲だったな……武器は正直怖くて弄れない」

「ああ、お前にやまだ早えよ」

摩耶が修理しているのは、曙の持っていた12.7cm連装砲。こちらもバラして、洗浄して、組み立て直すだけなのだが、主機とは違った方向で緊張感のあるもの。弾は入れていないにしろ、それは敵を殺すためのものだ。万が一何かあれば、使用者に被害が出る。主機と同じように失敗は許されない。

「だが……悪くない。楽しいな」

「だろ。この緊張感がな」

顔を見合わせて笑った。雑務担当として、この施設内で出来るであろう作業の全てに手を染めているが、艀装整備が一番楽しいかもしれない。1人で黙々とやれる作業は性に合っているようだ。

一息つけたことだと、また曙の艀装に向き直る。と、ここで想定外のことが起きる。

「あら、工作艦でもない艦娘が艀装を整備しているわ」

突然の第三者の声に驚き、2人してその声のする方へと振り向いた。

工場の中、まだ海の上だが、見慣れぬ艦娘が笑顔で立っていた。一番目に付いたのは、つい最近話にも上がった緑の髪。さらにはシロの証言にあった三つ編みである。

「あ、ごめんなさい。作業を止めるつもりは……いえ、ちよつとお聞きしたいことがあるんですけど」

一切の笑顔を崩さず、こちらに問いかけてきた。摩耶も感じている。目の前にいるのが夕雲。元凶の鎮守府所属かはわからないが、とにかく怪しき全開。

一番恐ろしかったのは、物音も立てず殺気もなくここにいたということ。工場で作業しているのに、ここまで近付かれるまでまったく気付けなかったということだ。

「えーつと、お前は夕雲でいいんだったか。悪いな、あまり艦娘と面識が無くてよ」

「はい、夕雲型駆逐艦1番艦、ネームシップの夕雲です」

「んじやあ夕雲、こんな辺鄙なところに何か用か。こんなところに艦娘が来るなんて滅多に無いからよ、流石に驚いちまった」

探りを入れるために平静を装って対応する。そもそも、摩耶は嘘を言っていない。私は極力言葉を発せず、摩耶を見守る。

だが、不安も大きい。今この場には私と摩耶しかいないが、この施設には曙もいるし、搜索しているであろう護衛棲水姫もいる。何かの間違いでこの場に現れてしまったら、全て終わる。

「夕雲達、実は人探しをしています。先日、部隊から落伍した仲間がいるのですが、姿を見ていませんか」

「ここ最近は知らねえぜ。なあ、若葉？」

「ああ」

人探し、落伍というキーワードから、この夕雲型が元凶の鎮守府所属であることは確定。この言い分で、曙を探していることがわかる。

そして今、夕雲達と言った。工廠の外を見ると、かなり遠いところにだが、艦娘が数人待機しているのが見えた。あれがおそらく、曙が話していた人形のような仲間かもしれない。

「本当に？」

「嘘吐く理由が何処にあんだよ」

「貴女方が整備している艦装、夕雲達が探している子の艦装にみえますから」

なかなか勘が鋭い。曙の艦装をちゃんと覚えているようだ。

「これか？ これは浜辺で拾ったんだよ。ここは浜辺にやたらいろんなもんが流れ着いてな。そいつをあたしらで整備して、売って生活費の足しにしてんだ」

「……そうですか」

「傷は付いてるけど、ここまで完品つてのは珍しいんだぜ。こういうのは高く売れるんでな、気い入れて整備してんだよ」

少しゲスな言い方になっているが、その方がリアリティがある。そ

れに、やはりここまでほぼ嘘はついていない。艦装を浜辺で拾ったと
いうのだけが嘘。

「これがお前の仲間の艦装かどうかは知らねえ。あ、なんならこの施
設のトップと話すか。若葉、センセを連れてきてくれ」

「了解」

いいタイミングで私を流してくれた。ここでやりたいことを全て
やっていこう。最優先はセスだ。

工廠を出て、すぐに自室方面へ。案の定、セスはエコと一緒に、掃
除している三日月の近くにいた。

「セス、少しの間、自室にこもってくれ。エコも一緒だ」

「何？ 何かあったの？」

「例の夕雲が工廠に来てしまった。今摩耶が対応している」

夕雲の名前が出た途端、セスはエコと三日月を自室に連れ込んで扉
を閉める。無言で手早く自衛。

「三日月、そこで我慢していてくれ」

『……若葉さんも……お気をつけて』

「ああ」

これで1つの不安が消える。次はその足で医務室へ。

医務室にはちようど飛鳥医師がおり、雷と共に医務室内の設備を片
付けていた。曙に不要になったため、場所を取るものは率先して端に
寄せて行っている。

私が急いで入ったことで視線を集める結果となったが、時間が無い
からすぐに端的に説明しよう。

「……件の夕雲が工廠くだんにいる。三日月とセスには先に話をしてきた。
飛鳥医師、ついてきてくれないか」

「今は摩耶が対応しているのか。すぐに向かおう。雷」

「大丈夫よ。曙は私がかどうかしておくわ」

ものの数秒で事態を把握してくれた。雷は曙に説明しがてら、うま
く工廠から引き離すようにしてくれるはずだ。そのうちに私は飛鳥
医師を工廠へ。それもわずか数秒の話だが、夕雲がここに来た目的だ
けは話しておいた。

「すまない。いると思っていた場所にいなくて、少し探してしまった」
工場では、整備していた艤装が自分の探す者のものであるかを夕雲が確認している。これが曙のものであるとわかった場合、どういう反応をするか。

摩耶も施設内を彷徨かれないように細心の注意を払いながら対応中。言葉を間違えたら即終了の可能性がある。

「あら、貴方がこの施設の管理人ですか」

「若葉から話は聞いた。落伍した仲間を探しているんだって？」

「はい。今確認したところ、この艤装はその仲間のものであると間違いなさそうなので、この辺りにいるとは思いますが、見たことはありませんか」

何をどう見てこの艤装を曙のものと判定したのかはわからないが、夕雲はこの施設にアタリをつけているように思えた。間違いないという言葉ももしかしたら吹っかけてきているのかもしれない。

だからか、飛鳥医師も少し強気に、かつ嘘と本当を入り交ぜながら、この施設がどういうものかを夕雲に説明していく。

まったく表情を変えないで説明するのが少し怖かった。元々表情変化が乏しいイメージがあったが、今は仮面と言えるほどの変化の無さ。それを邪魔しないように、私も摩耶も無言を貫いた。

「あらまあ、そうでしたか。2日前にここに」
「ああ。そっちを見てわかると思うが、ここには艤装が流れ着くんだよ」

山積みになされた深海棲艦の艤装を指差す。それがあから真実味がある。

「お前らの戦闘の跡だからな。後始末するこっちの身にもなつてくれ。こちらとしてはそれで金儲けさせてもらってるから言える立場にないかもしれないが」

「それは申し訳ございません。真摯に受け止めさせていただきますわ」

態度を見る限り、この夕雲が洗脳されているようには見えない。元々を知らないので何とも言えないが、あまりにも自然に会話してい

る。

だが、顔は笑っているのに目が一切笑っていないのがわかった。瞳の奥、泥沼のような濁り方をしているのもわかる。貼り付いた笑みと表現するのが正しい。

まるで、私のトラウマになっている提督のような表情だった。

「最悪な状況も考えて、一度鎮守府に戻りたいと思います。情報提供、感謝致しますわ」

「ああ。そうしてくれ」

「この艦装、譲っていただけませんか。万が一沈んでしまっている場合、これが形見となりますので……」

「買い手は付いている。そっちに掛け合ってください」

「では、その相手の連絡先を……」

飛鳥医師も先程の摩耶と同じように少しゲスな言い方になってしまっている。早く帰れという気持ちを叩きつけているようだった。買い手としての来栖提督の連絡先を教えて、夕雲には帰ってもらった。

まさか、あちらから接触してくるとは思っていなかった。考えてみれば、曙の行方を調べるのは当然のことではあるのだが。

だが、これで少なくとも来栖提督に援護が出来たと思う。夕雲と繋がりが出来たことで、元凶の鎮守府への繋がりにもなる。解決にまた一歩繋がった。

明るく和やかに

翌日に曙が施設を離れるであろうというときに、元凶の鎮守府に所属しているであろう夕雲が施設に来てしまった。本人は落伍した仲間を探していると言っていたが、事情を知っているために曙を探して始末しようとしているのはすぐにわかる。そのため、飛鳥医師も交えて嘘の証言で今は施設から出て行ってもらった。

「もう姿は見えない」

「おう。あたしのもう片方の目で見ても、あいつらの姿は見えねえ。随伴の連中共々、近海から姿を消したみたいだぜ」

摩耶は眼帯をめくり、深海棲艦の目で水平線の辺りを見ていたが、夕雲達の姿は完全に見えなくなったようだ。

見え方が違うと聞いていたが、何やらまず視力が普通より高いようで、そのせいで眼帯をしないと感覚がおかしくなるのだとか。三日月の目も同じことになっているため、少し心配。

「念のため、工廠内に何か仕掛けられていないか確認しておこう」

夕雲は気配なく工廠の海に立っていたため、気付かぬ間に何かさかれないとも限らない。飛鳥医師も加わり、何も無い事を確認した。流石に落伍した裏切り者を探すためとはいえ、随時盗撮盗聴の器具を持ち歩いていることは無かったか。

飛鳥医師は今のことを来栖提督に伝えるために工廠から出て行った。ついでにセスにもう大丈夫であることを伝えるとのこと。

今更ながら心臓がバクバク言っている。元凶を目の前にして、時間差で恐怖がぶり返してきた。毅然とした態度で無くては全滅まであり得たあの状況で、どうにか出来た自分を褒めてやりたい。

「……正直、驚いた」

「あたしもだよ。夕雲がどうのって話したの、つい最近だぞ。いきなりツラ見ることになるなんてな」

それにしてもよく口が回っていたと思う。私は余計な事を言わないように噤んでいたくらいなのに。悪びれもなく嘘を挟んでいく会話は、手練れにしか思えないほどだった。

「手が震えて作業が出来ない」

「落ち着くまで深呼吸でもしてな。ありや怖えよ」

摩耶に言われた通り、深呼吸をしながら震える手を握り、呼吸を整えていく。あの表情にトラウマも抉られており、簡単には治まりそうにない。

「ただいまー」

「……誰か……来てた……?」

全て大丈夫となったタイミングで、潜っていたシロクロが戻ってきた。海から首だけ出してこちらを見ている。

「……さつきまで、夕雲がここにいた」

「うえっ!? マジかあ……姉貴の言ってた通りだね」

「浮上は危ないと思った……すぐ遠目だけど……艦娘が何人か見えただから。……今は何処か行っただけ」

シロが見たのはおそらく、夕雲ではなく遠くで待機していた随伴艦達。今の状態で1人2人ならまだしも、何人かとなると確実に施設の者では無くなる。それを察したシロが浮上を躊躇してくれたのが功を奏したようだ。

また、シロのおかげで夕雲達が近海から完全にいなくなったことも判明。明日以降もまた来る可能性はあるが、艦装は手放すともう話しているし、売る先である来栖提督の連絡先も教えてある。ここからは来栖提督のターンになるはずだ。

午後、曙の艦装の組み立てが完了。動作試験だけは本人にしか出来ないなので、リハビリ代わりに工廠に来てもらう。試験の管理は当然摩耶が行い、私はそのアシストに。今回は病み上がりのため、飛鳥医師と雷も便乗している。念のため全員艦装装備。

医務室から出るのは初めてになるので、明るい工廠を見るのも初めて。さらにはあの時は大きく消耗していたので、ここがどういいうところかもわかっていなかったはずだ。

「雷に聞いていたけど、本当に深海棲艦の艦装とか拾ってきてるのね」
「ああ。そもそもは浜辺の掃除で貯まってしまうんだ。研究の材料と

して他の鎮守府に渡したりするんだが、今は他にも理由があつてな」
ここに辿り着いた時にもたれかかった艤装の山を見て、唾然としていた。曙の艤装を優先したために、まだ片付けきれしていない。

流石にもう検査着というわけには行かず、ちゃんと曙本来の制服姿で工廠に立っている。元々着ていたものは身体中の傷と同じようにボロボロだったため廃棄し、先日来栖提督が来てくれた時に新品を調達していた。

「他の理由って何よ」

「雷、そつちはまだ話していなかったのか」

「ごめんなさい、なんだかんだ話せなかったわ」

「そうか。なら後から話そう。試験を先に終わらせようか」

結局、深海棲艦も助けられているということは伝えることが出来ていなかった。最後まで知らなくても良かったかもしれないが、来栖提督の鎮守府に所属することになるのなら、少なからずこちらとも関係を持つことになるだろう。

ならば、出来る限り知っておく方がいい。あちらの鎮守府はこちらの事情を全員知っているわけだし。体調も戻った今なら大丈夫だ。この試験が終わり次第、伝えることとした。すぐに話されないことに訝しげな顔をするが、そこは素直に従った。

「外つ面は元のままだが、中身は全部修復した。ちゃんと動くとは思
うが、まずは装備してくれ」

「ええ」

摩耶が準備していた艤装を、曙が装備していく。主機の組み立てが私の仕事だったため、その一挙手一投足に注目してしまう。私が一番手に汗握っているだろう。

「……すごいわねコレ。私が使ってた時、どれだけポンコツだったの
よ」

「中身酷いもんだったぜ。錆びてるのと、ヒビ入ってるのと、砕けてる
のばかりでな。ここにあるモンで修復したんだ。じゃあ海に出てく
れ」

「ここに来るまで使っていた艤装とは雲泥の差だろう。」

海に立ち、軽く流すように航行を始める。それをアシストするため、私も海に降りた。万が一その場で艀装が異常をきたしても、私が側にいればどうともなる。

「上々よ。むしろ今までで一番綺麗に動くわ」

「そいつは良かった。若葉にも感謝しろよ。最後の組み立ては若葉だからな」

「主機の組み立ては初仕事だった。上手く行って良かった」

そのままある程度沖の方まで駆ける。三日月の時のように、潮風を受けながらイキイキとしていた。

私達艦娘に共通して言えることかもしれないが、やはり海の上に立つと気分がいい。陸上では味わえない良さを、ずっと感じられる。

「あんな目に遭っても、海の上の方が気分が落ち着くなんてね」

「ああ、わかる。若葉も酷い目に遭ったが、海に出たら気分が良くなった」

「ホント、不思議なもんね艦娘って」

医務室では見られなかった、心の底からの笑み。私達はただ、海が好きだからその平和を守ろうと躍起になれる。

「来栖提督のところを済ませたら、またこっちに来るわ。ここはいい海だもの。こうやってただ海の上に立つだけでも、癒される気分だわ」

「ああ、いつでも待ってる」

少し名残り惜しくなってしまったか。鎮守府でもない施設ではあるものの、居心地はいい場所だ。正式に施設の一員となってくれても良かったのだが、曙の意思は固い。ならば引き留めることも出来ないだろう。

何もかもがうまく行き、しがらみが無くなった時にまたここで再会したい。私達はここから応援することしか出来ないが、待っていれば必ずここに戻ってくるだろう。その時を待つだけだ。

「じゃあ、帰りましょ。今はこれで終わりにしとくわ」

「ああ、充分試験は出来たな」

「ええ。速度も前以上にでるし、これだけ駆け回っても変な臭いとか

もしないわ。最高の整備じゃない」

本当に余程の状態だったのがよくわかる。変な臭いがするとか、回路が焼き切れたり、滑りが悪くなつて最悪発火したりと考えられる。やはり、この鎮守府に辿り着けたことが奇跡だった。

「戻る前に少しだけ待ってくれ。夕雲達がいらないことを再確認する」

「……もしいたとしたら」

「一目散に逃げるしかないな。攻撃の手段を持っているのは、施設に1人だけいる」

それは当然、セスのこと。セスが軽空母たる所以であるエゴが元気いっぱいなのだ。いざという時は任せるしかない。

セスとエゴのコンビを除くと、私達に出来るのはそこにある廃材を武器に殴りかかることしかない。そんなことするくらいなら、逃げ惑った方が命を無駄にせずに済むだろう。

「安心は出来ないわね」

「だから前以て調べておくんだ」

今私達がいる位置は、施設が見えるギリギリくらいの場所。午前に夕雲が襲来したときに、その随伴艦達が屯していた辺りになる。そこから裸眼での周辺確認。

おかしなものは見当たらず、人影なんて以ての外。本当に一時帰投したかはさておき、すぐにこちらに来られるような場所で待機しているわけではなさそうだ。念のため空も見て、艦載機が飛んでいるようなことがないかも調べ、何事もないことを確認。

「安心していい。夕雲達は今はこの海域から離脱している」

「そう、よかったわ」

これで気分良く施設に戻れる。曙も、足取り軽やかに駆けていった。

工廠に踵を返すと、出てきた時より人影が多い。まさかと思ったが、遠目に見ても全員集合しているのがわかった。

対人関係最悪の三日月もそうだが、本来曙の前に姿を現わすことが難しい3人の深海棲艦でもある。三日月は浮き輪を抱きかかえ、セス

の隣には当然エゴもいる。

「わ、若葉、工廠に深海棲艦がいるわよ!？」

「ああ、さつき飛鳥医師が後から話そうと言っていたことだ。うちの施設は、怪我人を全て救う。深海棲艦でもだ」

「それが住み着いたってこと!?! 侵略者なの!?!」

わかりやすい反応。誰だっけという反応をするのが当然である。だが、私を知る限りを懇切丁寧に説明したら少しは理解してくれた。この思想は、来栖提督の鎮守府に行っても役に立つはずだ。

「おかしいとは思ってたのよ。医務室にこもってるとき、知らない声が聞こえたんだもの」

「ああ……多分クロだな。アイツは元気な奴だ。いつも騒がしい」

その内話すつもりがあつたとはいえ、既にそういうところで勘付かれていたとは。だから話が早かつたというのもあるようだが。

「ここに住み着くくらいだから、アレは侵略者じゃないんでしょ。……深海棲艦にもいろいろあるのね」

「物分りが良くて助かる」

工廠に到着。行って帰ってきたらモンスターハウスだったような感覚なのだろう。おっかなびつくり地上に上がった。

曙は深海棲艦にこっ酷くやられたわけではないので、私や三日月のような深い傷は無い。話を聞いても敵対心があつたらどうしようかと思つたが、今は武装を持たないので、目の前の深海棲艦に攻撃することも出来ない。

「若葉からある程度事情は聞いたか」

「本当に攻撃されないのよね。信用していいのよね」

「ああ。この3人も立派な協力者だ」

ここは立ち位置が逆転している。深海棲艦が味方で、鎮守府が敵。追われている曙的には、そこはすんなり納得が行つたようである。

「ご、護衛棲水姫!?! 私達が搜索してたあの!?!」

「ああ。セスから話を聞いて、君の鎮守府の特定を急いでいる状態だ。当然、来栖もそのことを知っている」

「探しても見つからないわけよ……こんなところで匿われてたなん

て」

「ここにはあり得ないことばかりだ。普通の常識で考えてはいけない。」

「セスだよ。で、こっちはエコ」

「護衛棲水姫の艤装ってこうなってたのね……」

艦娘を苦手にしているセスも、近い境遇となった曙には何処か仲間意識が芽生えているようで、あまり抵抗なく話す。エコは今は大人数しいが、待てがわからなくなったなら曙に飛びつきそうな勢い。

「ずーっと我慢してたんだから。私、クロだよ。よろしく！」

「……シロ。よろしく」

早速友好関係を築いていこうと握手を求めるクロと、それに引っ張られる形で握手を求めるシロ。来栖提督のところを做って、友好の証は握手。

曙も最初は躊躇っていたものの、艤装も持たない非武装な深海棲艦相手に敵対心を持つ必要がないと割り切ったのか、握手に応じた。

「深海棲艦とこんなことが出来る時が来るなんて、思いもしなかったわ。うちの鎮守府の方が余程侵略者よ」

「だよー。私達も追われて大怪我してここで拾われたんだよ。だからさ」

「……向こうに行ったら……私達の恨みも……晴らして」

力を持たない私達の思いは、力を持つ曙に全て託す。

「私、ただだけアンタ達の思い背負わされるのよ。重いつたらありやしないわ」

「悪いな。あたし達はここが性に合ってたんだ。もう長いしな」

「つたく、いい迷惑よ」

憎まれ口を叩くが、表情は明るい。みんなに頼られ、悪い気分では無いようだった。

「三日月、明るいところで顔を合わせるのは初めてね」

「……」

「アンタのことも雷から聞いてるわ。あのクソ提督はちゃんとぶちめめしてあげるから、ここで戦勝報告を待ってて」

三日月は目を合わせる事が出来ないが、小さく首を縦に振った。それだけでも充分だ。

「もうお別れみたいな空気になってるが、曙がここを発つのは明日だからな。その前に全員顔を合わせることが出来て良かったが」

「そうじゃない！ 何よこの今生の別れみたいな空気！」

これでいろいろと決壊した。エゴが曙に飛び付き、もうしつちやかめつちやかに。

ここから離れることに抵抗が出るほどの和やかな雰囲気。だが、曙の信念は揺るがない。自分の手で決着をつけるため、明日、この施設から離れる。

ならば最後の時まで、明るく和やかに暮らせるように。そして明日、みんな笑顔で送り出そう。またここに戻って来なくなるくらいに。

しばしの別れ

曙が施設に住まう最後の夜は、医務室から出て全員で夕食を食べた。ある意味お別れ会。だが今生の別れではない。必ず元凶である鎮守府に落とし前を付けさせ、笑顔で戦勝報告をしに帰って来てくれる。みんなそれを信じて疑わない。勿論この私、若葉でもある。

顔を合わせるかどが難しいと思われた三日月も、この時ばかりはしっかりと同席した。セスは一度心を開けば苦手意識は飛ぶらしい。そのため、全員揃った食事会も何事もなく終了。

「雷のご飯を食べるためにも、また絶対戻ってくるわ」

「うんとご馳走作ってあげるわ！」
「楽しみにしてる」

ヒトの身体を持って一番痛感したのが、その食事の文化だ。美味しい料理はモチベーションアップに大きく繋がる。雷の料理は格別に美味しいため、それを実感出来た。

「最後までいいはお風呂に入っていくわよね。ずっと拭くだけじゃダメなもの。新しい門出の前に、ちゃんと綺麗な身体にしくちやね」

「そうね。使わせてもらおうわ」

「なら私が背中流してあげるわ！ 頼って頼って！」

すっかり仲が良くなった雷と曙。医務室にいる間はずっとお世話をしていたというのもあるが、雷と曙は特型という駆逐艦の括りで姉妹的な関係もある。そういうところからも相性が良かったのかもしれない。

こうして曙がこの施設にいる最後の夜が更けていく。来栖提督の到着は明日の朝。つまり、曙の発発も明日の朝だ。たった3日間とはいえ、ここまで来るともう仲間のようなもの。別れるのは少し寂しい。

翌朝。朝食後には来栖提督が施設に到着。今回は護衛の艦娘もつき、曙を護送することになる。

昨日夕雲が突然訪れたことは、来栖提督の下にも連絡が行ってい

る。あの時は素直に帰投したように見えただ、また来る可能性は高い。今度は確認ではなく襲撃として。

正直なところ、あちらはまだこの施設を疑っているだろう。曙の艦装を整備していた時点で、目を付けるに越したことはない。そもそも帰投するという言葉すら信じられない。

「万が一のことを考え、曙にや大発動艇ダイハツの積荷つつー扱いになってもらうが、良かったか？」

「それが一番安全ってなら従うわよ。艦装と一緒に積み込まれるってことよね」

「ああ。ちよいと暑苦しいかもしれないねエが、我慢してくれい」

大発動艇にはブルーシートがあり、そこに艦装共々隠すような形で積載する。ここから来栖提督の鎮守府まではそれなりに時間があるため、周囲警戒しながらの帰投。また、曙以外にもいくつか艦装を持っていつてもらうことでカモフラージュすることも考えている。

護衛部隊は、おなじみ第二二駆逐隊の4人に加え、調査隊で隊長を務めていた羽黒と、もう1人。

「秘書艦まで出張らせて大丈夫だったか？」

「なアに、こういう時だからこそ必要なんだよ。周辺警戒は任せりやいい。なア、鳳翔？」

「はい、お任せください。現在も警戒中で、周囲に敵性の反応はありません」

あちらがどう来るかはわからないが、少なくとも、警戒しないに越したことはない。そこで採用されているのが、空母。

来栖提督の隣にいる秘書艦、軽空母鳳翔。常に艦載機を周囲に飛ばして警戒を厳としている。落ち着いた雰囲気の中にも、熱い何かを秘めているのが手に取るようにわかった。さすが来栖提督の秘書艦。

「なら、今のうちに行くかい。曙、今生の別れじゃ無エが、何か言つとくことは無エか？」

「昨日さんざん話をしたわ。ここには顔を出してないけど、三日月にも口を聞いてもらえたし、おおよそ満足よ」

「そいつア良かった。俺だけだぜ、三日月のツラ見てねエの」

三日月は相変わらず引きこもっている状態。どうしても提督という役職の人間には抵抗があるので仕方がない。セスは来ているもの、工廠のかなり後ろの方。苦手なものは苦手なのだから、無理強いは出来ない。

そうこうしている内に荷物の積み込みも終わる。私も手伝って、大発動艇一隻に載せられるだけ載せた。その中央に、来栖提督と曙が入れるだけの空間を用意している。

中を見せろと言われれば一発で終わりだろう。だが、来栖提督の鎮守府からここに来るまでに、そんな検問紛いなことをする場所は存在しない。そんなことをしてくるのは、元凶の鎮守府だけだろう。そうになったら戦いが始まる。

「それじゃ……ありがとね。ここに辿り着けたから、先が見えたわ」

「ああ。君のおかげで進んだことがある。来栖の下でも、元気で」

「この人がクソ提督じゃないことを祈るわ」

「待遇面は心配する必要は無いぜエ」

先に来栖提督が大発動艇に乗り込む。そこまで狭くはしていないので、2人分は余裕のはず。ただし、曙はブルーシートの下だ。最後の砦に来栖提督を使うというなかなか怖いことをするが、来栖提督自身の判断のため、そこは抵抗無し。

「っし。シートは拵げとくから、あとは曙が乗りや終わりだ」

「随分とゴタゴタした門出になっちゃったけど……まあ、楽しかったわ」

「それなら良かった。しばしの別れだが、向こうで息災にな」

最後はもう定番となりつつある握手で締めようと、飛鳥医師が手を差し出した。少しキョトンとしたが、シロクロなどに握手をされたことを思い出して、察したように手を伸ばした。

タアンという小気味いい音が、工廠内に鳴り響いた。

曙の左胸に、真っ赤な薔薇が咲いていた。

「え……」

握手出来ずにその場に倒れ臥す。

何が起きたのかわからなかった。だが、曙が撃たれたことはすぐに理解できた。誰に。何処から。どうやって。パニックを起こしそうな頭の中を、どうにか静める。

「クロちゃん！ 海の中！」

初めて聞くシロの叫び声。同時に2人が駆け出していた。念のため艤装の主機を装備していたため、手にしていたマスクを急いで着けて海に飛び込む。

曙を撃った犯人は海の中。つまり、潜水艦だった。鳳翔の艦載機による警戒は海上にしか効果がない。だからこそ第二二駆逐隊はソナーも積んでいた。その包囲網を掻い潜り、工廠の中にまで入り込んでいたのだ。

まるであの時の夕雲のようだった。物音も立てず、殺気もなく、既に接近していた。

「敵性反応接近！ 戦艦1、軽巡1、駆逐艦4！」

ここでもようやく鳳翔の警戒網に敵が引つかかる。潜水艦が事を済ませ、こちらが混乱したところにさらに追い討ちをかけようという算段のようだ。

「手前エー！ 落とし前をつけてやれエー！」

怒り狂った来栖提督が恐ろしく強引で雑な指揮を叫ぶ。だが、来栖提督のこの指示1つで、全員がスイッチが入ったかのように動き出す。

穏やかな表情だった鳳翔も、少し弱気そうな羽黒も、天然気質な文月も、やんちゃな皐月も、のんきな水無月も、真面目な長月も、この瞬間から全員に来栖提督が乗り移ったかのように怒りの形相を浮かべて戦場へ駆け出した。

「曙！ 曙お！」

「クソツ、当たりどころが悪い。心臓と肺を一撃で……！」

泣き叫ぶ雷と、どうにかして命を繋ごうとする飛鳥医師。2人とも曙の血で真っ赤に染まっただけでも御構い無しに、応急処置をしつつ状況を確認。

曙は何が起こったのかわからないという表情で、口からも血を垂らし倒れている。目からは涙があふれ出ていた。息はまだあるようだが、どう見ても致命傷だった。もう長くないとすぐにわかった。今にも潰えそうな命だった。

途端に、両腕が疼くような感覚に襲われた。移植された深海棲艦の腕が、私の怒りと憎しみに呼応し、脈動するようだった。

「ワカバ、マヤ、私も行くよ。アイツらを削り取ってやる」

一言言い残して、セスが海に飛び出した。エゴを抱きかかえたということは、戦いに行くということ。セスが動いたからか、両腕の疼きがより強くなった。艦娘の血を吸いたがっているような、そんな感覚。

私も我慢ならなかった。曙が何故こんな目に遭わなければならぬ。怒りが臨界点を超えていた。来栖提督の言っていた通り、落とし前を付けてもらわなければ気が済まない。この代償は、当然命だ。

「摩耶……若葉も行く」

「おう。これ持つてけ。あたしはここに残る」

錨のような鉄の塊を渡される。残ってあった艤装の一部のようで、これも艦娘が使う武器になるらしい。これで殴れば、いくら艦娘といえど致命傷は免れない。艤装のおかげか、腕のおかげか、鉄塊を持つても重さを感じなかった。

摩耶もわかって渡ってきている。これで、殺してこいと。

「……出るー」

セスの背中を追うように、私は海に飛び出した。曙のあの顔が頭に焼き付いて離れない。それを払拭するためにも、私はこの身体になって初めての戦いに出る。

私が戻る頃には、曙はもう息を引き取っているだろう。その終わりを見ることは、辛すぎて無理だった。初めて見る仲間の死に耐えきれず、私はこの怒りを、憎しみを、全て奴らにぶつけてやる。

施設が見えなくなるほど遠く離れた沖。既に来栖提督の部隊が交戦中だった。敵の部隊、わかるのは夕雲のみ。他は何処の誰かは知ら

ないが、駆逐艦らしき艦娘は全員夕雲とは違う制服だったというくらい。雑多な集まりか何か。

そんなことよりも気になったのは、夕雲以外は目が死んでいること。感情も何も見えない。曙から聞いていた人形という奴だろう。

「戦艦は私が止めます。皆さんは他を。ただし、殺さないこと。特に夕雲さんには聞きたいことが沢山ありますから。半殺しでいいですよ」

鳳翔が旗艦のようで、みんなに指示を出しながら弓から艦載機を放ち、敵全域に牽制を仕掛けています。その攻撃を掻い潜るように他のみんなが三者三様の攻撃を繰り返していた。

「削ってあげるよ……少しずつねえ！」

セスは鳳翔の隣に立ち、エゴを使い艦載機を発艦。鳳翔の半殺し発言を聞いたからか、致命傷を狙わずに四肢を抉るような攻撃を繰り返している。

そんな戦場に、私も迫り着く。錨を握りしめる手に、より力が入る。

「若葉ちゃん!? 武器持ってないよね!?!」

「マジかアイツ!」

私が戦場に現れたことに一番驚いていたのは文月だった。その声にみんなが私の方を向くが、それを無視して夕雲に突っ込む。

理由はわからないが、実戦経験が無いにもかかわらず身体が自由に動く。こうすれば敵を殺せると、誰かに指示されているかのようにだった。

「夕雲おー!」

「あら、若葉さん。昨日ぶりですね」

錨を叩きつけるように振るが、大振り過ぎたか簡単に避けられてしまう。通り過ぎる際にすかさず主砲を放たれるが、無意識でもそれを回避出来た。

深海棲艦は生まれた時点で完成しているらしいが、私に使われた四肢のおかげで、実戦経験がなくても完成した動きが出来ているのかもしれない。そういう意味では、私への処置を感謝する。

「お前の差し金か!」

「ええ、昨日から怪しかったんですもの。だから、昨日夕雲が帰投した後からずっと潜水艦の人に監視してもらっていたんです。そうしたら本当に曙さんが出てくるものですから、驚いてしまいました」

貼り付いた笑みは崩さず、ペラペラと話してくる。シロクロが工廠から施設に入った後から、ずっとこちらのことを監視していたようだ。だから私達が工廠内を隈なく探しても何も出てこないわけだ。

とはいえ、ソナーに引つかからないその能力は何なのだ。シロクロのように引つかからないところまで潜っていたのか。

夕雲が話す間も錨を振り続けるが、まったく当たる気配が無い。文月や長月も援護してくれているのだが、その全てが回避される。

夕雲の動きは異常だった。練度とかそういうものではない。自分への負荷を全く考えていない、危なげしかない動きだ。

「裏切り者には死を。それが提督ご主人様のご命令ですから。余計なことを言う前に、口を聞けなくしてやればいいと。死人に口なし、ですよ」

やはり笑顔を崩さない。提督の命令は絶対遵守。どれだけ非道な命令でも、喜んで忠実にこなす意思を持つ人形。他と違って感情があるのは、あちら側でどういう扱いなのだろうか。

だが、少なくとも今は知ったことではない。このいけすかない顔を歪ませなくては気が済まない。鳳翔が言っていた通り、半殺しにしてやる。

「まあでもあれだけの時間同じ場所にいたんですから、いろいろ曙さんから聞いているでしょう。なら、あの施設の人達には全員死んでもらわなくてはいけませんね。そちらの提督、来栖提督でしたか、勿論死んでもらいますよ」

どうしても大振りになってしまったために、私の攻撃は当たらない。あちらの砲撃も回避は出来ているが、これでは消耗戦だ。そしてそうになると、私は圧倒的に不利である。鉄塊を振り回す強引なスタンスでは、体力がいくらあっても足りない。

「若葉ちゃん、落ち着いて」

羽黒が乱入。私が振り回す錨と夕雲の放つ主砲を避け、半殺しのために脚を撃ち抜こうと主砲を撃つが、バックステップ1つで回避され

てしまった。

「落ち着けるか！ 曙が、曙がやられたんだぞ！」

「だからこそ落ち着いて。ここで確実に仕留めるの。冷静になりなさい」

先程までの少し弱気な表情は何処かに行ってしまったかのようだった。今の羽黒は凜とした力強い表情。怒りを耐え、冷静になろうと唇を噛んだ跡も見えた。

「みんな、怒り狂ってます。私だってそうです。目の前で仲間が殺されてるんですから。これは敵討ちです。死なない程度にやります。自分から死を選びたくなるようにします。絶対に死なせませんが」

あの提督の下にこの艦娘あり。その冷静さの中にも、煮えたぎる怒りが外に出てきてしまっている。口は悪くないにしろ、羽黒もなかなか言う。

「鳳翔さん、少し本気でいきます。ギリギリ殺さないようにするので」「わかりました。くれぐれも気をつけて」

今まで手を抜いていたような発言に、さすがの夕雲も眉を顰めた。「本気でやっていなかったと？」

「殺さないように戦うという時点で本気なんて出せませんよ。それに……本気でやってたらもう終わってます」

瞬間、夕雲が手に持つ主砲が撃ち砕かれた。それにより、持っていた方の手がズタズタに引き裂かれた。

羽黒の砲撃が夕雲の主砲をピンポイントで撃ち抜いていた。最初からそれをやらなかったのは、どうしても傷付けてしまうからだろう。

「なっ……!?!」

「鳳翔さんも大分手を抜いているんですよ。そうでなければ急降下爆撃で皆殺しですから」

鳳翔の艦載機はあくまでも牽制。戦艦相手にも足止めをする程度で、致命打は一切ない。今のところ怪我すらほとんどしていないほどだ。半殺しと言いつつも、一番加減しているのは鳳翔だ。

「覚悟してください。悪いのは貴女じゃないのはわかっています」

この戦いを見て、少しだけ心が冷えた。曙の敵討ちのために暴走していたが、やっと戦況を見ることが出来るくらいに。

来栖提督の部隊は全員無傷だ。敵の攻撃は全て回避している。セスも仲間がいるおかげで無傷をキープしている。数的優位もあり、戦況はこちらに傾いている状態。

だが、あちらは感情もなく殺しに来ているが、それに対して、こちららは生かして捕縛することを目的にしている。そのせいで互角といえれば互角であった。

「そう、そうですか。ならこちらにも貴女方を殺すために尽力しましょう。皆さん、リミッター解除」

夕雲のその言葉と同時に、随伴艦達がビクンと震えた。感情のない表情は変わらなかつたが、目が血走り、額に血管が浮かぶ。

見てわかつた。その言葉通り、身体の限界が取っ払われている。あんなことしたら、遅かれ早かれそいつは死ぬ。

「こちらにも本気では無かつたんですが、そうも言っていられなくなりましたね。では、第2ラウンドです」

錨を握る手が震える。目の前で行われた非道な行為に、より怒りが募る。ここで終わらせてやらなくては、被害者は増える一方だ。

命燃やして

曙が来栖提督の鎮守府へと旅立つ朝、突然の襲撃により曙が撃たれた。胸への一撃は確実に致命傷であり、素人目に見ても、もう長くないということがわかるほどであった。

曙を撃つたのは潜水艦であったため、シロとクロが即座に潜り、犯人を追っている。残った者は、追加でやってくる夕雲が指揮する部隊を迎え撃つため、施設から出撃した。私、若葉は摩耶から渡された錨のような鉄塊を手に、この身体になって初めての戦場に立っている。

あちらの部隊は、身体のリミッターが外され、限界以上の力を無理矢理引き出されてこちらに向かってくる。勝とうが負けようが確実に死ぬような戦い方。それをさせても、夕雲は貼り付いた笑みを浮かべたままである。

「貴女方には死んでもらわなくては困りますので」

主砲を破壊されても随分と余裕のある物言いである。周りに全てやらせて、自分だけは逃げ果せるつもりに見えるもないが。

突如、鳳翔が目にも留まらぬ速さで矢を放った。それは艦載機へと変化することなく真っ直ぐ飛び、限界を超えた力を引き出されている戦艦の、右肩の辺りに装備された主砲を貫き、一撃の下に爆発四散させる。その爆発により、腕や身体に被害が出るが、御構い無しにもう一射。左側にも装備された主砲が破壊され、同じように身体に被害が出た。

「どうやって私達を殺すつもりですかね」

さらにもう一射。今度は艀装ではなく脚を狙う。が、3度目ともなると回避されてしまった。戦艦とは思えない身のこなし。だが、身体への負担は酷そうだった。高火力の主砲を破壊されたことで、直接殴りかかってくるようだが、それすらも弓でいなしていく。

「もう、やっちゃおうよ」

「オツケー。駆逐艦3人はボク達がやろう」

鳳翔が敵に対して明確に傷を付ける攻撃を行なったことで、他の者達も枷が外れたかのように攻撃を始める。

「数はこちらが有利だ。包囲！」

「了解！ いっけー！」

第二駆逐隊は数的優位を背に、攻撃を回避しながら容赦なく敵駆逐艦に攻撃していく。それでも互角になってしまっているのは、敵のリミッター解除が異常だということだろう。

横目に見てもわかった。文月は三日月の件で見せた怒りに満ちた真顔。怒りにより海面が揺れているように思えるほどのプレッシャー。鳳翔に言われてなければ、相手を殺しているであろうほどの勢い。

「では私は敵軽巡を。肉薄します」

爆発するような加速で敵軽巡に突撃する羽黒。やはりもう弱気な表情は一切無く、調査隊隊長を担うに相応しい凛々しきで戦場を駆ける。あちらからの攻撃は紙一重で避け、返しに渾身の一撃を与える。

こちらも互角。リミッターが外され驚異的なスペックアップをしている。1対1で問題なく戦えている羽黒の実力がわかる。

これにより、私達の周囲から敵を引き剥がしてくれた。私とセスは2人で夕雲を相手取ることになる。素人と深海棲艦の二人一組^{ツーマンセル}。私が足を引つ張らないようにしなくては。

が、そんな心配が即座になくなった。

「戦艦はもう戦力になりませんよ」

瞬殺だった。

鳳翔は本当に容赦なかった。鳳翔が相手取っていた敵戦艦は、両肩、両脚に矢が刺さり、その場から全く動けない状態。まるで海面に磔にされているようにすら見えた。

それでも無表情を貫いている辺り、洗脳の効果は絶大なのだと思う。あれだけの怪我を負っても、泣き喚きもせず、未だに戦おうともがいている。

鳳翔の練度がとにかく桁違いだった。いくら敵が何かしらの手段で限界を超えてこようが関係ない。実験経験の差から、何もかもが上回っていた。他の5人も苦戦をしているようには見えなかったが、まだまだ敵はピンピンしているほどである。

「……思ったよりやりますね」

「余裕ぶるのはやめた方がいいですよ。貴女もこうなります」

すかさず速射。肩を撃ち抜く軌道の矢は、真っ直ぐ夕雲に向かって飛ぶが、ギリギリで躲される。ああ見えて、夕雲もあの時にリミッターが解除されているのかもしれない。他と違い、身体にあまり影響がないように改造されている可能性もある。

先程の羽黒の一撃は、本当に宣言無しだったために当たったようだが、今回は目の前からの射撃だ。それになら反応出来るということ。夕雲も相当な手練れ。捨て駒の指揮をしているくらいなのだから、あちらでは高い地位にいるのかもしれない。

「若葉さん、それと……護衛棲水姫」

「セスだ」

「あら、いい名前を貰いましたね。ではセスさん、3人で、彼女をひれ伏させましょうか。指示に従ってもらえますか」

ここは旗艦として経験が長い鳳翔に従う方がいいだろう。無言で頷く。セスも今までの戦闘を見ていたことで、鳳翔に従うことに戸惑いは無い。ここからは三人一組だ。スリーマンセル

「若葉さん、戦術なんて必要ありません。真ん中で突っ込んでください。ただし、魚雷だけは気をつけること」

「了解」

「セスさん、艦載機がある程度コントロール出来ますね。では、基本は背後から狙ってください。狙いは膝です」

「わかった」

私の持つ武器は鈍しかない。それを鑑みて、私は肉薄役。私の四肢の深海棲艦が、的確な攻撃と回避を導いてくれるのは、夕雲との交戦でわかっていることだ。

両腕がまた疼く。早く夕雲を殴りたいと訴えるように力が入る。頭は冷えても、怒りは冷めない。

「では……始め！」

鳳翔の号令と共に、私が真正面から突っ込む。同時にセスがエコーから艦載機を発艦。超加速をした後に夕雲の真後ろでUターン。そこ

から即座に射撃を繰り出す。

初めての連携、私に至っては初めての戦闘。

「3人がかりだなんて、恥ずかしくないですか？」

私の突撃は悠々と躲され、セスの艦載機による射撃も紙一重で避けられる。突撃を回避されたため、急ブレーキ。身体に大きく負荷がかかるが、脚はそれに耐えてくれる。深海棲艦の骨が、私を支えてくれている。

「いえ、まったく。闇討ち紛いの証拠隠滅の方が余程恥ずかしいですね」

そこへ、3つ目の攻撃。鳳翔の矢が左肩に向かって放たれていた。それすらも辛うじての回避をされたが、無理矢理方向転換した私がその回避方向にいる。

鳳翔の射撃は私にもセスにも有効になるように放たれている。回避方向を固定化し、戦況を確実にこちらに引き込む射撃。

「……………」

大きく振りかぶり、夕雲を横薙ぎに。だが、それすらも回避された。飛び上がり、新体操のように身体を捻らせ、スレスレを躲される。が、そこにセスの艦載機が爆撃を合わせる。

正直爆撃は私にも被害がありそうだが、錨を振った反動でその場から移動。爆撃を受けるのは夕雲だけに。

「即席のチームの割にはよく出来てるじゃないですか」

それに対しても、着地と同時に急加速し、爆撃地点から回避。さらには魚雷を広範囲に発射。こちらが緊急回避をさせられる羽目に。

腹が立つことに、夕雲は対艦娘の戦闘に慣れている。深海棲艦も人型ならばその範疇に入るようで、想定外のことを連続してやっているはずなのに攻撃が当たらない。

「避けて良かったんですか？」

魚雷の向かう方向には、鳳翔が行動不能にした敵戦艦が海面に倒れている。こちらが全員を生かそうとしていることを見越して、味方すらも殺そうとする戦い方。

「心配せずとも。貴女の考えそうなことはお見通しですから」

その魚雷は敵戦艦に当たる前に鳳翔の艦載機による射撃で爆破された。手の読み合い。私にはもう全く予想がつかない。指示された通り、何も考えず錨を振り回して暴れるしか出来ない。

「若葉さん、手を止めない」

「すまない」

注意され、身体への負荷を顧みず次の攻撃へ。まだ身体は持つてくれる。

「若葉さん、そろそろ鬱陶しいですよ」

「知ったことか！」

錨の扱いに大分慣れてきた。最初は闇雲に振り回していたが、今では腕の一部のように感じられる。それも全ては駆逐棲姫の腕のおかげか。

振り回せど振り回せど攻撃は当たらないが、防戦一方に出来ているのはわかる。私が近すぎて、魚雷を放ったところで爆発に巻き込まれるからだ。最初に羽黒が主砲を破壊してくれたのは相当大きい。

「あら……そうですか。いいタイミングです」

何か呟いたかと思うと夕雲が不意に後ろへ下がり、今まで放ってこなかった魚雷を突然発射。自分への被害も考えなくなったか。当然その射軸からズレるために横へ回避。

瞬間、私と夕雲の間に大きな水飛沫が上がる。放った魚雷全てが、回避しようとした瞬間に爆発した。あまりに突然のことだったため、動きを止めてしまった。

「後ろに下がりなさい！」

鳳翔に言われ、咄嗟にバックステップ。

その水飛沫の中から、爆雷が飛んできていた。

「なに……っ!?!」

錨を盾にして何とか身を守ろうとしたが、僅かに間に合わず、私の間際で大爆発を起こす。本来が海中の潜水艦を撃破するための武器であり、おそらく簡易の爆雷だったため、通常のものよりは火力は低かったのだと思う。だが、私に大きなダメージを与えるには十分だった。

爆雷の破片が腕や脚に突き刺さり、舞い上がった爆炎により顔を焼かれる。眼は何か守れたものの、熱にやられ目が開けられそうになり。

「くっそ……!」

「若葉さん!　そこからすぐに退きなさい!」

言われずとも、こんな状態では戦えないため、すぐに後退する。視力はすぐに戻らない。こんなもの、恰好の標的じゃないか。

ドクンと心臓が高鳴る。目を開けられないため強制的に暗闇の中に置かれ、戦場の真ん中で敵に狙われる状況が、トラウマに近い状況を作り出してしまっていた。雨風が無いとはいえ、今私が置かれている状況に、言いようのない恐怖を感じてしまう。

「っあ……あ……」

「セスさん、若葉さんについてあげてください!」

「りよ、了解。ワカバ、大丈夫!」

暗闇でわからないが、近くにセスが来てくれたらしい。震える手を握ってもらって、何とか落ち着こうと努力するが、心臓の鼓動は落ちていく。着いてくれない。

「あら、あらあら、若葉さんは何か傷をお持ちですか。そんな子が戦場に出てはいけませんね」

夕雲の声が遠退いていく。セスに曳航され、戦場から撤退しているようだった。

だが、何故あのタイミングで突然海が爆発したように水飛沫が上がった。私には当然海中を見ることは出来ないため、詳細が掴めない。

「今の爆発、どう考えてもおかしい!　魚雷が突然爆発したように見えた。何にも当たってないのに爆発するとか、あつちは自分の意思で爆発させられるの!」

セスも同じように疑問に思っているようだ。そんなはずはない。深海棲艦は知らないが、艦娘の持つ魚雷にそんな機能は無いはずだ。時限式ならわからなくはないが、あれはあまりに早すぎる。

「ごめん、追ってた潜水艦が合流しちゃった!」

私の真後ろ、クロの声が聞こえた。

一目散に逃げていたはずの敵潜水艦だが、シロクロのスピードに逃げ切れないと踏んだのか、こちらの戦場まで戻ってきたらしい。それも勿論、夕雲のサポートのため。

先程のやけに大きな水飛沫は、夕雲の魚雷だけでなく、敵潜水艦の魚雷も一緒になって爆発したことで発生した水飛沫だったようだ。ならば、魚雷に魚雷をぶつけるなんて芸当をやったのか。全員が動き回っているためか、直接ぶつけるのではなく牽制に使うとは。「……追い付かれたら……鎮守府がバレると思うんだと思う……わざわざここに戻ってきたくらいだし……私達もまとめて殺す気でいるんじゃないかな……」

シロも浮上してきたようだ。

武器も持たず、ただ速く潜航出来るだけの2人なら、鎮守府まで誘き寄せてから攻撃してもいいだろう。だが、あえてその場に戻ってきたということは、夕雲が主砲を失ったことをカバーするための戦力としても見られている。

私が戦力外になってしまったことで、鳳翔がその2人を相手取らなくてはいけなくなってしまった。ただでさえ片方は潜水艦、空母には荷が重い相手。

「形勢逆転ですね。ではここからしつかり皆殺しに……おや」

急に声が途切れる。何が起きたのかわからないが、こちらには都合のいいことが起きたように思える。

「タイムオーバー、ですか。捨て駒は脆いですね」

其処彼処から人が倒れるような音が聞こえた。戦いの音が無くなっていく。目が見えていないからか、妙にそういうところに敏感になった。

「ユウグモ以外の敵艦娘がバタバタ倒れてる。何が……」
「……リミッターを外された代償だろう。命を燃やして戦ってたなら、その燃料が切れたら……死ぬしかない」

無理矢理能力を引き上げられ、身体の負荷も考えずに立ち回り、痛みも疲れも無視し続けた代償は、死。命を削りに削った拳句、使い捨

てられてその場に沈んでいく。

「流石の夕雲も、この多勢に無勢は覆せません。出直してきますよ」

「逃すと思っっているんですか？」

「当たり前でしょう。また会いましょう」

即座に鳳翔が矢を放ったようだが、いくつかの爆発音の後に夕雲はいなくなっていた。私の視力を奪ったあの爆雷を目くらましにして撤退したようだ。

鳳翔が即座に偵察機を発進させたが、それすらも追い付けない逃げ足だったようだ。足がつかないようにするための行動は、やたら速い。

最後まで腹が立つ敵だった。そして、何も出来なかった自分自身に對して一番腹が立った。自分の弱さは自覚していたつもりだったが、改めて実感させられた。

私は、無力だ。

2つの決意

夕雲率いる敵鎮守府部隊との戦闘が終了した。

捨て駒のリミッターを解除し、命を燃やして戦わせた結果、その全てが自滅。戦闘中にバタバタと倒れては、沈んでいつてしまった。唯一海上で残った夕雲も、この数は不利と判断し撤退を選択。鳳翔の偵察機をもってしても、その逃げ足を捉えることが出来なかった。

結果的にこちらの勝利かもしれないが、あちらの部隊は夕雲と曙を撃ち殺した潜水艦以外は全滅。生かして捕らえようとしていたが、あちらのやり口により命を落とすことになってしまっていた。

こちらの怪我人は、夕雲の爆雷を真近で喰らってしまった私、若葉が一番の重傷。とはいえ、腕や脚に破片が刺さっているのと、爆炎により一時的に視力を奪われたのみ。数日すれば治るほどである。

そのため、今の私は周囲が確認出来ない。セスに手を引っ張つてもらい、項垂れながら施設に帰投することになった。

私の望まれない初陣は、最悪な幕引きで終わった。撤退させたのだから戦果としては勝利かもしれないが、後腐れしかない、胸糞悪い戦闘であった。

それに、まず戦闘に入る前に曙が命を落としている。それだけで大敗である。

工廠に到着し、手探りで陸に上がる。目が見えないことがこんなに不便だとは思わなかった。

「鳳翔、戦果は」

「敵部隊旗艦、および潜水艦に逃げられました。残り5人は……：戦闘中にその場で自沈しました」

「……そうか」

来栖提督の怒りと苦しみが入り混じった声。いくら洗脳されていても、相手は私達と同じ艦娘だ。命を落とさずに鹵獲し、その洗脳を解いてやりたかったと呟く。

戦況報告については鳳翔に任せ、私は応急処置をしてもらおう。今こ

の場には飛鳥医師と摩耶がいないようで、雷に身体の傷と焼かれた眼を診てもらった。

瞼を開けられたようだが、やはり視力が失われている。一過性ではありそうだが、失明している状態。

「傷は薬を塗って包帯を巻いておきましょう。多分3日くらいで治ると思う。眼は焼けたなら冷やした方がいいわね。丸一日そうしておいて、明日また診てみるわ」

いつもの調子に見えて、落ち込んでいるのが声色からわかる。目の前で曙が撃たれるところを見ているのだから仕方ない。

目が見えていない分、他の感覚が鋭敏になっていた。自分のも含めた血の匂いが工廠内に漂い、みんなの声色が沈んでいることがヒシヒシと伝わってくる。

「……飛鳥医師と摩耶は……」

私の眼を冷やしながら包帯を巻いてくれていた雷の動きが止まる。今聞くべきでは無かったかもしれない。

「……曙を処置室に運んで……今は処置中。若葉が戦いに行った後……すぐに息を引き取ったの」

「そうか……」

「最後まで……死にたくないって……言ってたの……」

私の手に水滴が落ちてくるのがわかった。私は戦場に出て行ってしまったが、曙の最期を看取ったのは雷だ。私が聞こえないところで、未練をずっと呟いていたと話してくれた。

あんな終わり方は無い。戦場で散ったわけでもなく、寿命を迎えたわけでもなく、仲間である艦娘に撃たれただなんて。しかも理由が、悪事をバラされたくないから口封じにである。誰もが納得出来ない。

「あんなの……あんなのって無いわよ……」

「ああ……」

「曙は何も悪くなかったわ……生まれた場所が悪くて、そこから逃げ出して、その悪事を全部暴こうとしたのよ……勇氣ある行動だわ。なのに、なんで……悪いことした奴らが勝つのよ……」

私を治療する手が震えていた。いろいろな感情が入り混じって

るのが、見えていなくても手に取るようにわかる。私も涙が溢れ出ていた。目に巻かれた包帯がぐしょ濡れになっているのがわかる。

たった3日とはいえ、一緒に過ごした仲間だった。これからは別々の道を歩くにしても、その門出をみんなが祝っていた。居なくなるのが寂しいと思えるほどだったのに。

『お、おい！ そんなこと出来るのかよ?!』

突然、施設の奥から摩耶の叫び声が聞こえた。処置室から工廠にまで聞こえる声だなんて、相当な大声である。余程驚いたのか。

その後、すぐに摩耶が工廠へ駆け込んできた。ゼエゼエ言いながらみんなの前へ。

「センセが……曙を蘇生するつつつてる……!」

工廠が静まり返った。

「摩耶、それ飛鳥が本当に言ったんだな？」

「あ、ああ」

すぐに反応したのは来栖提督だった。どんな顔をしているかはわからないが、いつもの豪快さは感じられなかった。先程の雷とはまた違った、いろいろな感情が入り混じった声だった。

「ちよつと話させろい」

ドスンドスンと足音を立てて処置室に向かう。流石に蘇生ということ聞いてしまったら、私達もじつとしていられない。雷も同じ気持ちだったのだろう。私の手を引いて処置室に連れて行ってくれた。

「飛鳥ア、お前エ、本当にいいんだな？」

処置室に向かって語りかけているであろう来栖提督。声は真剣そのもの。扉は固く閉ざされているようで、おそらく飛鳥医師も表に出てきていない。

『ああ。僕の力はここで使うべきだ』

「後悔しねエな？」

『ああ。僕も悩んださ。だけどな、曙は死にたくないと言ったんだ。それに、僕もこんな形で死んでもらいたくない。だから……僕のやれ

ることをやる』

飛鳥医師の力とは一体何なのだ。だが、蘇生するという信念は扉越しでも伝わってくる。何かを決意した、力強い声。

『ずっと秘密にしてきた僕の事情、お前の口から伝えてもらえないか。すぐにでも処置を始めたい』

「うるせエよ。自分の口で伝えろ。処置にどれだけかかる」

『見込み6時間。夜までには終わらせる。それなら曙に後遺症は残らない』

「じゃあその後自分で説明しろい。俺ア何も言わねエ。念のため終わるのを待って置いてやるから、鎮守府に連絡させてもらうぜエ」

訳がわからない。飛鳥医師と来栖提督の中でだけ話が進んでいく。

「先生！ どういうことなの!?!」

『雷か。話は後からする。今は待っていてくれ』

それ以降、処置室からは声が聞こえてこなかった。曙への処置が始まったのだろう。もう私達には待つ以外の選択肢が無かった。処置室に鍵までかけられ、一切の手出しが出来なくされてしまっている。

だが、蘇生すると言うのだから、そういうことなのだろう。雷は息を引き取ったところを見ている。そこからあの曙が戻ってくると、飛鳥医師は言っている。

以前に摩耶と、飛鳥医師でも死者を生き返らせること無理だと話をしたのを覚えている。死者の蘇生など医療の域を超えて最早神の所業だと思ったことも。

今からそれを、実現させようとしている。

その日は飛鳥医師の処置終了を待つため、来栖提督含めた外部の者が待機することになった。終わるのは夜よりも前ということ、事が済めば夜でも帰投するつもりだそう。

襲撃が朝だったため、昼食の時間が訪れる。飛鳥医師は処置室から出てくる気配もなく、こちらから話しかけても返事がない。飲まず食わずで処置中である。

三日月の処置をした時はあまりに長時間だったというのもあるが、

三日月自身の死を免れるタイミングが早かったため、軽食くらいは摂っていたが、今回は状況が状況。私達も容易に口出しが出来ない。「先生、余裕が出来たら食べてちょうだいね。扉の前に置いておくから！」

相変わらず返事はないが、雷が処置室の前におにぎりを置いた。今はみんな緊張感に食事が喉を通らないようなイメージだったが、今腹に貯めておかないと、後から倒れてしまいかねないと雷が奮起した。おにぎりを作ったのも雷と、来栖提督の秘書艦である鳳翔である。

「若葉、大丈夫？　目が見えないんだから、工廠から動かなくてもいいのよ？」

「いや、若葉も三日月の側にいたい」

そしてその足で三日月の部屋へ。

この騒動の間も、自室から一步も外に出てこなかった。そのおかげで最悪な現場に立ち会うこともなく、今以上のショックを受けずに済んでいると言える。

迷惑をかけてしまっているが、雷に手を引いてもらい、三日月の部屋の扉を叩いた。

「三日月、昼食の時間だ。開けてくれ」

少しして、扉が開く。顔は見えないが、三日月も意気消沈しているのが手に取るようにわかった。どんよりしている空気を肌で感じ取っているような感覚。

三日月の周りにはいつも通り3体の浮き輪がついているらしい。だが、この空気を感じ取り、あまり活発には動いていないようだった。「若葉さん……その目は……」

「戦闘でやられた。一時的に見えなくなっているが、じきに治る」手を引いてもらい、部屋に入らせてもらう。

「来栖提督はもう少しここにいるそうだ。だから、もう少しここに留まっていてくれ」

三日月が息を呑んだことがわかる。やはり、提督という役職に就く人間が近くにいることがストレスになっているか。

だが、三日月から出た言葉は、少し意外なものだった。

「若葉さん……若葉さんが目が見えない間、私が若葉さんの目になります」

つまり、来栖提督がいてもこの部屋から出てもいいということだ。あれだけ頑なに対面を拒んでいたというのに、どういう心変わりか。

私の手を握り、自分の気持ちをゆつくりと言葉にしていく。

「……外の状況は知っています。音も聞こえてきましたし……セスさんからも聞きました。若葉さんの目のことは話していませんでしたが……」

「……そうか」

「曙さんが……亡くなった、敵に殺されたということも……勿論聞いています……」

つらつらと話すその声は、嗚咽交じりで少し震えていた。私の手を握る三日月の手も、同じように震えている。

隣の雷は何も口に出さない。三日月の思いを静かに聞く。私もそれに倣ってなるべく無言で聞き続けた。

「そんな状況でも……私はここで引きこもり続けました。人間が……見ず知らずの者が外にいるからと、曙さんの死を見て見ぬ振りをするように、一歩も動けなかったんです……」

仲間がやられたのだから駆け寄りたかったが、トラウマに負けてここから動かなかったことを悔いていた。

それだけ心の傷が深かったというのは、みんな理解していることだ。人間はおろか、艦娘にまで嫌悪感を抱いているのだから仕方がない。戦闘という行為そのものに恐怖を抱いていてもおかしくないのだ。

「艦娘は嫌いですが……でも、曙さんは艦娘以前に……この施設の一員です。一緒にご飯も食べた仲なのに……私は全く動けなかった。人間よりも艦娘よりも、自分自身が嫌いになりました……」

私の手を握る手の力が、少しだけ強くなる。

「だから、だからせめて……自分くらいは好きになれるように……前を向きたいと思いました。だから、この部屋から出たいと……そう思ったんです。せめて仲間の危機を見て見ぬ振りをしない自分にな

りたくて……もつと強くなりたいです」

今まではトラウマと向き合うことが出来ず、エコや浮き輪に癒されつつも、どうしても壁があった。自分から前に出てくることはまずない。

だが、今回の一件により、その壁を壊そうと、三日月自身が奮起した。

いいことじゃないか。キツカケはつらい出来事だが、前を向けるのなら上等だ。これでさらに曙も飛鳥医師の尽力により帰ってくるかもしれないのだ。何もかも上手くいく。

「大丈夫……きつといい方向に行く」

シロクロを助けた時に雷に言われたこの言葉が、ずっと励みになっている。いい行動を起こしたのだから、悪いことにはなるはずがない。

「お前ならやれる……最初は若葉の側にいればいい。ゆっくり、ゆっくり踏み出そう」

「……はい……はい……」

周囲に対する嫌悪感が、それ以上に大きな自己嫌悪に塗り潰され、奇しくも三日月は大きく踏み出す決意を持った。まだ笑顔を見せることは難しいだろうが、これは大きな一歩だ。

「ご飯を食べ終えたら、また工場に行く。若葉の目になってくれるか」「はい……お任せください。そこにいるであろう提督にも……挨拶をしたいと思います」

今の三日月の顔が見られないのが、少し悔しかった。きつと決意に満ちた、いい顔をしているのだろう。ならば、頼らせてもらう。

これで曙が蘇生されれば、何もかも元通り。むしろ前よりいい方向に進んでくれるはずだ。

だが、何故飛鳥医師は死者の蘇生なんて出来るのか。その理由は、この後本人の口から直々に話してもらえる。今はそれを待つしかない。

禁断の御業

飛鳥医師の力により、曙の死が覆されることになった。蘇生すると簡単にいうが、飛鳥医師の中でもいくつもの葛藤があったようで、来栖提督に対しても決意したことを伝えている。これにより、処置終了後に長らく秘密にされていた飛鳥医師の事情が紐解かれることになるらしい。

何故死者の蘇生が出来るのか。それ以前に、施設の者達に対して深海棲艦のパーツを移植することで治療出来るその技術が何なのか、それが明らかになる。

こちらから聞いても秘密としか言わなかったし、ひたすらに隠し続けていたのは何か後ろめたい理由があるからに思えた。

その処置を待つ間にもう1つの進展。三日月は、曙の死を知っても動くことが出来なかった自分の弱さを痛感し、自己嫌悪の末、強くなるために前向きになった。嫌悪感しか抱かなかった人間と艦娘の前に、自分の脚で赴くことを決心したのである。

今は怪我をして一時的な失明状態の私、若葉の目となるためという名目ではあるが、それでも大きな前進だ。私が側にいて、且つ、浮き輪総動員の状況ではあるが。

「お前さんが三日月か。俺ア提督の来栖つてもんだ。もう、外に出てもいいのかア？」

「は、はい……はい……」

初めて見る他の提督がコレというのはハードルが高い気がしたが、ようやく対面。目が見えない私を盾にするのはどうかと思ったが、表に出ることが出来たことに二二姉二達駆も喜んでいた。これをキツカケに、心の傷がさらに癒えればいいと切に願う。違うところで傷を付けそうで怖い。

「しれーかん、三日月ちゃん怯えちゃってるからあ」

「もう少し人相良くしてよ」

「無茶言うんじゃねエよ。顔は流石に変えられねエ」

などと言いついているところでも、あくまでも私を盾にしつつ前進

している。

「そ、その……あの……来栖司令官は信用出来る人間でいいんでしようか」

「大丈夫大丈夫。水無月達が保証するから!」

「人相と口以外は本当に優秀なんだ。怖がらずに触ってみればいい」

「俺ア猛獣か何かかよ」

意を決して、握手を求めた。三日月が自分からするのは初めてのこと。来栖提督としっかり握手に応える。

「よろしくなア三日月。何かあれば俺らを頼ってくれい」

「は、はいっ……」

声が裏返ったようだが、大きな一歩だ。やはり私の陰から手を出しているのだが、充分であろう。

飛鳥医師が処置を始めて、見込みの6時間が経過。外は少しずつ暗くなり始め、夜が近付いてきている、らしい。まだ私の目は回復していないので、依然として真つ暗闇の中。

扉の前に置いておいた昼食は、結局手が付けられていなかったそうだ。それだけ逼迫した状況である。もしかしたら返事が無かったのはこちらの声が聞こえないほどに集中していたからかもしれない。

定期的に処置室の前に来させてもらっているが、いつも力チャカチャと何かしらの作業音が聞こえるだけ。以前に三日月の処置を手伝わせてもらった時に聞いた音もあれば、それとはまるで違う音もある。中の様子などわかるはずもない。

「まだ……処置中みたいですね」

「ああ、そうだな。そんな短時間で終わらせられるとは最初から思っていたいなかったが……」

手を引っ張ってくれる三日月と共に、処置室前で話していると、一際大きな音が聞こえた。ドンと、何かを叩くような音。何が行われているのかはわからないが、今までとは違う段階に入ったように思えた。

『カハッ!?!』

室内から、咳き込む声。飛鳥医師のものとは違う声。

「……三日月……！」

「はい、き、聞こえました！ 確かに聞こえました！ 曙さんの声です！」

聞きたかった声、曙の声。本当に息を吹き返した。

居ても立っても居られなくなったが、見えない目ではどうにもできない。私の手を握る三日月も興奮が抑えきれないように、今までとは違う震えをしていた。

それから少しして、処置室の扉の鍵が開けられた。ゆっくりと扉が開き、飛鳥医師が出てきた。三日月の時よりは短時間であったにもかかわらず、それ以上の疲労困憊っぷり。見えていなくてもフラついてるのがわかるほどである。

その姿を見た三日月がビクンと震えた。処置後すぐだから、おそらく身体は曙の血で塗れている。さすがにそれを見たらそうもなるだろう。

「ああ……君達か。曙の蘇生は完了した……30分だけ休む。誰でもいいから曙に検査着を着せてやってくれ」

「わ、わかりました……摩耶さんと雷さんをお願いします」

大きく息をついた。処置中は息も止まるほどの集中力だったのだろう。

「若葉……目はどうした」

「戦闘中に爆雷で焼かれました。雷に応急処置をしてもらってこれだ」

「そうか……明日僕が改めて診よう」

慌てなかったようなので、雷の応急処置が適切だったことがわかる。また、見た目から重傷ではないことも。そうでなければすぐに治療されていると思う。

「ひっ……!?!」

三日月の息を呑む声が聞こえた。処置室の中はとんでもないことになっているのだと思う。正直、今日が見えなくて良かった。

「三日月、2人を呼びに行こう。雷には掃除も手伝ってもらおうという

「ことでいいか」

「ああ……大分汚してしまったからな……」

服を脱ぐような音と共に、飛鳥医師の声が遠退いていった、置かれていた昼食も持っていたらしい。30分だけと言ったが、それ以上休んでくれても問題はない。隠し続けてきた秘密についてはいつでも聞けるのだから。

本当にきつかり30分。飛鳥医師は休憩してから私達の前に現れた。その間に曙は着替えさせ、今は医務室で眠っている。恐ろしいことに、明日には目を覚ますらしい。

「よオし、んじやあ白状しろよ。お前が一体どういう奴かってのをなア」

「わかつてる。ここまで来たら覚悟を決めた。全部話す」

全員工廠に集まり、飛鳥医師の話を聞くことになる。談話室や食堂には人が入りきらない。来栖提督の部隊は早々に帰ることも考えていたが、ここまで来たらもう一蓮托生と、話を聞いていくことになった。

少なくとも、来栖提督は飛鳥医師の素性を全て知っている。こんな辺鄙な施設で研究を続ける隠遁生活をする前からの友人であり、良き理解者であるからこそ、今まで来栖提督もそれを隠し続けていた。

だが、それももう終わり。死者を蘇生するなんてことをやってのけたのだ。話してもらわないと収まりがつかない。

「僕が元々あちら側の人間であることは察しているだろう。ここに来る前は来栖のいたところとは違う鎮守府に勤めていた、一端の医療研究者だった」

「こいつ、そんな時や割と名が知られてたんだぜエ」

医者ということ自体が少しだけ違うらしく、医師免許を持っている研究者という立ち位置になるらしい。かなり優秀だったらしく、生きている者の診察は勿論、沈んでしまった艦娘の解剖などまで行い、その性質を解明する研究を続けていたのだから。

そういう意味では、その当時から死んだ者から何かを得ようとする

ことはしていたようだ。その時はあくまでも情報を引き出すのみで
終え、残ったものは丁重に吊っていた。

「そんな時にだな……上から研究課題を与えられた。艦娘の身体に明
るい僕にだからこそ、研究してもらいたいというものだった」

「その研究課題の一つのは？」

「艦娘の蘇生だ」

元々張り詰めていた空気が、より一層張り詰めたような感覚。シロ
クロやセスですら静かに聞いているほどの内容だ。

「沈んだ艦娘は新たに建造することで穴を埋めることが出来る。だ
が、経験はリセットされる。穴が空いたままと同じだ。鍛え直すには
時間が惜しい。ならばどうするか」

「そのままの形で蘇らせる……」

「ああ。強敵と戦い、惜しくも沈んだ艦娘も、その知識を残したままに
再び戦場に戻れたとしたら、いつかはその強敵にも勝てるようにな
る。無限の練度と命を持った艦娘がいれば、この戦いは確実に有利に
なる。そういう思想の下に課題が与えられた」

そう聞くだけでも残酷な研究だった。優秀か兵士を使うだけ使っ
て、死んだら蘇らせてまた戦わせる。永遠に経験を積みませれば、最後
は必ず勝てるというものだ。

その当時は、飛鳥医師はその手段は必要だと感じて研究に没頭した
という。本来弔うはずの解剖後の艦娘なども改めて使い、それこそ道
具のように扱って調べ続けた。弔う気持ちすら忘れてしまっていた
らしい。

「結果的に、僕は艦娘を蘇生させる手段に辿り着いてしまった。良く
も悪くも兵器である艦娘は、人間とは違う治療法が使えたんだ。入渠
ドックや高速修復材を使えば、失われた臓器や四肢すらも治療が出来
る存在なのだから、知ってしまえば簡単だった。ただし、それには素
材が必要だった」

その素材というのが、私達継ぎ接ぎの者のような、『他者の身体の
パーツ』ということなのだろう。それこそ解剖した艦娘を弄り回した
結果、辿り着いた成果なのかもしれない。

今の飛鳥医師からは考えられない、死者を冒涇した行為。禁忌の研究だ。

「蘇生は、無事な艦娘のパーツ同士を組み合わせ、欠損がない状態にしてから適切な処置をすることにより達成される。最後はAEDなんだが、それ以前の処置は決して公表しない。僕しか知らない。僕が墓まで持っていく」

この残酷な研究成果は、飛鳥医師自身が鍵となることで世界から消し去った。自分が犯した過ちを償うために、自分一人で背負おうとしている。

言葉も無かった。今でこそ曙が助かるために使った蘇生の技術だが、あまりにも多くの命の上にある技術。

「つまりは、飛鳥医師がその研究をしていてくれたおかげで、若葉達は助かったと思えばいいのか？」

「……そうなるな。艦娘と深海棲艦のパーツの適合率は賭けではあったが」

これは他人事ではない。私達継ぎ接ぎの者も、その技術の転用により命を繋いでもらっている。死を乗り越える技術が無ければ、私達も今生きていない。

今まで以上に、多くの命を背負っている感覚がした。ただでさえ、この施設に辿り着けたこと自体が、多くの死者を乗り越えた結果のようなものだ。そこに追加で、技術の犠牲になった者の命まで乗る。

ならば、より強く生きなくては。犠牲となった者に恥じぬ生き方をせねば。

「だけどよ、そこまでのめり込んでたなら、よく自分がヤベエことやってるって気付けたな」

「確かに……」

「……間違いを正してくれた艦娘がいるんだ」

ギョツと拳を握る音が聞こえた。やはり視力を失ってから他の五感が鋭敏になっている。苦虫を噛み潰したような飛鳥医師の表情が、手に取るようにわかる。

「完全に感覚が麻痺していた時に、蘇生した艦娘から言われた言葉が

今でも忘れられない」

「何を言われたの……？」

「……『やっとな死ねたのに』と……な」

その艦娘は、功を焦るあまり艦娘の管理を怠り、無謀な出撃を繰り返すような愚かな提督が管理する鎮守府出身だったそうさ。

上の管理ミスにより、深海棲艦との戦いに大敗した際に、練度が最も高かったらしいその艦娘を蘇生した。他の死体のパーツを使っただ。そこで、蘇って早々に言い放った言葉がそれである。

死が解放だというものもいたということだ。静かな眠りを無理矢理起こし、再び戦場に戻すような行為は、非道以外の何者でもない、そこでようやく気付いたそうさ。

「愕然とした。僕は何て酷いことをしていたんだと、我に返ると同時に、立ち直れないほどにショックを受けた。だから……その艦娘の蘇生を最後に、僕はその研究を終了したんだ」

そこから少しの間は食事も喉を通らないほどに憔悴しきっていたらしい。

「当然上から文句を言われたが、どれだけ巫山戯たことをしてきたかを散々説いた。上の連中も、僕が必死に訴えたことでわかってくれた。だが、僕の知るこの技術、研究成果は決して外に出せるようなものではない。結果、この施設に軟禁されることになった」

打ち捨てられたこの元鎮守府。中立区故に仕事もなく、遠征の休憩場所程度であったがそれにも使われなくなり、何処かのタイミングで完全に崩される予定だった場所だそうさ。それを研究施設として改装してもらい、飛鳥医師のための施設として運用することとなった。

基本は艦娘を助けるための研究に勤しみ、嵐のたびにゴミが流れ着くのを掃除するだけのこの場所は、罪を償うにはうってつけだったと飛鳥医師は語る。

「俺が近くにいたってのもデケエな。何してんのか監視できるからな」

「来栖には支えてもらっている。感謝してもし足りない」

「気持ち悪いこと言うんじゃないよ」

だが、来栖提督が近くに居るのは大きいと思う。それだけで孤独感はある程度払拭されるはずだ。

「こんなところでいいだろうか。僕がここに居る意味、君達を治療出来る理由は全て話したと思うが」

要約すると、元々鎮守府勤めだった飛鳥医師は、上からの指示で沈んだ艦娘を蘇生する技術を研究して発見したが、とある艦娘の言葉により間違いに気づき、鎮守府をやめてこの場所で隠遁生活を送ることになったということか。そして、その技術を転用することで、私達も治療出来たし、曙を蘇生することが出来た、と。

「僕は許されてはいけない咎人だ。これだけ命を繋ぐと言っておきながら、元々は命を踏み躪り続けてきたんだからな」

「……だからこそ……今みんなを生かそうとしているんですよね」

三日月の言葉に対し、無言。さんざん命を弄んだからこそ、罪を償うためにどんな命でも救おうとしている。だが、そこには少しだけ違う部分があるみたいだ。

「1つだけ訂正させてほしい。僕は『助けを求める』命は必ず救う。もう死にたいと言うものを救うことは……とてもじゃないが出来そうにないんだ」

確かに私や三日月、シロクロは助けを求めた。だから治療してくれた。おそらく無言も助けるだろう。だが、死を望むものだけは助けられない。

「幻滅したろう。こんなことを秘密にし続けていただなんて」

「余計放っておけなくなったわ」

フンスと雷が立ち上がった。この施設で飛鳥医師と一番付き合いが長いのは雷だ。これだけの話を聞かされて、一番言いたいことがあるのは雷だろう。

「私達が見てないと何しでかすかわからないじゃないの。先生、実は一番カウンセリングが必要だったんじゃないかしら。なら私をもつと頼ってくれていいのよー」

「いや、そういうことでは……」

「あたし達は気にしてねえって言ってるんだよ」

呆れたような声の摩耶。

「反省してねえなら幻滅してたし、多分ぶん殴ってた。ここから全員連れて出て行ってただろうよ。だけどセンセはめちやくちや悔やんだんだろ？　ならまだ人の心は持つてるじゃねえか。充分だ」

「……若葉もそう思う。若葉達を捨て駒にしたクソより全然マシだ」

私の隣で三日月も首を縦に振る。私達はより下を知っているからこそ、飛鳥医師に対して嫌な感情は持たない。

「私達も治してもらってるからねえ」

「今……何もされてないなら別にいい……」

「エゴを治してもらった恩があるし、私も問題無いね」

施設の者からは満場一致で飛鳥医師は許されている。だから、今まで通りでいてほしい。この施設の者は、後ろ暗い過去があるというだけで充分だ。全部知ることが出来たのだから、もうこれ以上掘り返す必要もないだろう。

「……すまない皆。恩に着る」

「先生のこと教えてもらえたのはすごく嬉しいわ。もつと早く聞きたかったけど！」

「決心がつかなかったんだ……すまない」

飛鳥医師の声色が少し戻ったように思える。全てを話したことで、幾分か吹っ切れたのかもしれない。ずっとそんな罪を抱え、誰にも言えずに溜め込んでいたのなら、さぞかし辛かっただろう。

繋がった命

飛鳥医師の経緯を聞いた後、来栖提督とその護衛部隊は一旦鎮守府に戻ることとなった。あの夕雲は出直してくると言っていたため、遅からずまたやってくる。もしかしたら明日かもしれないし、もつと先かもしれない。下手をしたら今晚かもしれない。

だが、それを考え始めたらずっと鎮守府を空けることになってしまふ。それに、ここではみんなの休息しか出来ない。武器の補給も出来ないのだから、急ぐのなら一度鎮守府に戻る方がいいだろう。

「飛鳥ア、お前ちよいとスッキリした顔してんじゃねエか？」

「そう見えるか？」

「おう。やっぱさつきと話しときやよかつたんだ。お前、研究も一人でやってんだろ。溜め込み過ぎなんだよアホめ」

今の私には飛鳥医師の表情はわからないが、来栖提督がそういうのだからそうなのだろう。ここで一番長く暮らしている雷ですらわからない表情変化を理解できる辺り、長年の友人だからということもあるだろう。

こういう友人はとてもいい。それだけで、この世界にいる意味が出来る上がる気がする。

「俺アまた明日も来る。自沈したつっし艦娘を引き揚げさせてもらっぜエ」

「ああ、頼んだ」

「それに……遠からずまた奴らは来るだろうよ。お前らを守れるのは、今んとこ俺らだけだ」

これは来栖提督も警戒していることである。私達は武器を持たないため、来られてしまったら一方的に斃り殺しにあってしまう。

あの戦いでは錨を振り回して応戦したものの、私の攻撃はほぼ無意味なものだった。セスの攻撃ですら牽制になったかならないかである。この場であの夕雲とまともに戦えるのは、おそらく来栖提督の秘書艦、鳳翔だけ。

「今度はしつかり準備してくる。あちらも数出してくるだろうから

な」

「よろしく頼む。僕も思い付くことは全て伝える」

「おう、頼むぜエ。お前の頭は頼りにしてっからよオ」

飛鳥医師と来栖提督が話している時、私の下に誰かが近付いてくる気配。そのサイズからして、おそらく鳳翔。少しいい匂いがするし。

「若葉さん、明日も私がここに来ます。貴女はまず目を治すこと。いいですね?」

「ああ、言われずとも」

「よろしい。貴女の負けん気の強さ、私は好きですよ。雑な戦い方でしたが、初めての戦場で怒りに飲まれている状態とはいえ、よく出来ていました。機会があれば、私が鍛えてあげますね」

頭を撫でられた。鳳翔に鍛えられるというのは来栖提督の鎮守府では相当珍しく、且つ、名誉のあるものらしく、遠くの方で皐月と水無月が騒ぎ立てているのがわかった。

この施設にいたら本来やらないであろう戦闘をしたことで、私は興奮していた。いろいろあつてなりを潜めていた自分の本質が表に出てきてしまったようにも思える。また戦いたい、みんなを守るためにこの力を振るいたいと感じていた。

「鳳翔、出来ればだな」

「わかっていますよ。飛鳥先生はこの施設の者に傷付いてほしくないのですよね。ですが、自衛の手段は知っておくべきだと思います。事が大きくなってききましたので」

「ぐうの音も出ない正論だ」

そうだ、せめてここを守る事だけでも出来れば私は満足だ。そのためにも、鳳翔に鍛えてもらいたい。どんなことをするかはわからないが、とにかく、私は動きたい。大敗を喫し、こんな身体状況でも、私はやる気に満ち溢れていた。

「飛鳥医師、若葉はもつと強くなりたい。こんな怪我を負わないくらいに、せめてこの施設を、いや、自分と仲間くらいは守りたい」

「……わかった。だが、前にも言った通り、過剰なトレーニングは医者として許さない」

「理解している。程よくだ」

これで機会があれば鳳翔に鍛えてもらえるようになる。まずは私は目を治さなければ。

翌朝、真つ暗闇の中で目を覚ます。昨晩は結局襲撃などは無く、緊張感はあったもののゆっくり眠ることは出来た。初めての戦闘で疲れ果てていたというのもあるが、一時的な失明状態という暗闇のため、思った以上に熟睡出来たらしい。身体は疲れもなく健康そのものという感じだった。

「おはようございます若葉さん。すごくよく寝ていましたよ」

「……おはよう三日月、今は……」

「セスさんとエコちゃんの散歩が終わって帰ってきたところです」

ランニングが出来ないからと、いつも以上に長く眠ってしまったようだ。

「包帯を取ります。目の具合はどうでしょうか」

目に巻かれている包帯を解かれる。昨日のような何も見えないというわけではなく、薄ぼんやりと輪郭がわかるという感じだった。目の前にいるであろう三日月の顔を判別することすら出来ない。徐々に良くなっているが、まだ完治とは行かない模様。

爆雷の炎で焼かれるというのは本当に重傷なようだ。本来なら本当に失明してもおかしくはないが、咄嗟にガード出来たおかげでこれで済んでいる。

「まだ見えないな。輪郭がわかる程度だ」

「昨日よりは良くなっていますね。改めて飛鳥先生に診てもらいましょう」

「ああ。その前に……着替えを手伝ってもらえるか」

寝間着のままではいるのもどうかと思うため、いつも通りの制服に着替えたいわけだが、見えないためにいろいろと不都合が生じる。そのため、その辺りは三日月に手伝ってもらおうことにした。

いつもやっていることの焼き直しのため、大概のことは見えていなくても大体なんとかなるのだが、ネクタイとかシャツのボタンとかは

不恰好になってしまう。それはサポートしてもらった。

「不便だ……」

「もう少しの辛抱ですよ」

今日も三日月には私の目になってもらう。私は施設内を動くことが出来て、三日月は安寧のために私の側にいられる。WIN—WIN。

朝食前の少ない時間で飛鳥医師に眼を診察してもらった。雷の応急処置が適切だったおかげで、今日いっぱい我慢したら明日には見えるようになるだろうと言われ安心。

包帯は巻いておいた方がいいとも言われたため、昨日のスタンスからは変わらない。ご飯も食べさせてもらうことになる。少し気恥ずかしいが、これはこれで何だか楽しくもある。

「曙は今日目を覚ます予定と聞いているが」

「ああ。寝かせておいてあげたいんだが、脳機能が正常に稼働しているかどうかは、意識がないと判断が出来ないからな。蘇生の技術自体が、なるべく早く目が覚めるように出来ているんだ」

「傷はどうなんだ？」

「当然痛むだろう。本来なら意識が戻ったことさえわかれば、一度入渠させるんだ。そうなれば本当に元通りだからな。だが、ここではそんなことが出来ない」

昨晚の話以降、包み隠さず話してくれる。表情はわからないが、昨日来栖提督が言っていた通り、少しスッキリしているように思えた。声のトーンに明るさを感じる。

曙がやられたのは心臓と肺。今は常に特殊な鎮痛剤を投与し続けている状態らしい。そうでなくては息をするだけでも激痛が走る。むしろ、心臓が動いている限り痛むという地獄のような状態。それがある程度は軽減されているのだとか。痛くないとは言っていない。

「若葉は今日はあまり動けない。なら、医務室にいてもいいだろうか。こうなってしまうと、何処にいても同じだと思う」

「ああ、構わない。頼みたい雑務は終わっているし、その目では何の作業も出来ないだろう。なら、曙の側にいてあげてほしい。目が覚めた

ときに誰もいないというのは寂しいだろうしな」

私もなるべくなら動かない方がいいはずだ。なら、曙の側でブーツとしながら目を休ませることにしよう。

私が医務室に腰を落ち着けた時、曙はまだ目を覚ましていなかった。だが、安らかな寝息が聞こえてきたので生きていることがわかる。本当に生きている。

私は息を引き取った瞬間を知らないため、今の曙の寝息を聞いていると、一時的にでも命を落としたというのが信じられなかった。身体も見えないため、どのような傷がついてしまったのかもわからない。

「三日月、曙にはどういう傷が」

私の目になるといっているので、今も三日月が隣についてくれている。何かあった時に、すぐに飛鳥医師に知らせる役も兼ねている。

今日の家事は雷が1人でやることになってしまうわけだが、もっと頼ってといつも言葉と共に二つ返事で引き受けてくれた。雷には頭が上がらない。

「胸に大きな傷が。若葉さんのお腹の傷が、胸の真ん中……少し左側にあるイメージです」

「なるほどな……心臓の辺りということか」
「はい。埋まっています。ポツカリと穴が空いているような傷です。今は見えませんが、おそらく背中にも同じ傷があると思います」
貫通しているのだから、そういう傷にもなるだろう。あの時、飛鳥医師は『心臓と肺を一撃で』と言っていたはずだ。あの潜水艦、手慣れている。一切気付かれないように近付き、結局顔を見せることなく曙だけを撃ち抜いた。

「色が違う……おそらく、心臓も、肺も、ここを覆っている肉も、飛鳥先生は深海棲艦のものを代用に使っています」
「重要な臓器も揃ってたんだな」

触れるわけにもいかず、全て三日月に説明してもらった。どうせ治れば見れることなのだが、出来れば早く知りたい。想像と違っていれば、それはそれで。

「っ…………あ…………」

と、ここで曙の寝息が変化。これは起きたか。

「んう…………つぐ!？」

「曙、痛いのはわかるが、少し我慢してくれ」

目覚めた瞬間、心臓と肺の痛みに苛まれたのだろう。鎮痛剤が効いているとはいえ、痛みがないわけではないということのはこういうことか。私には吐息しか聞こえないが、相当辛そうなのがわかる。

「私…………は…………」

「飛鳥医師が曙を蘇生した」

「蘇生…………って…………あ、ああっ!？」

死ぬ寸前の記憶を思い出したか、悲鳴も混じったような叫び声を上げた。機械が接続されているものの、比較的自由に動く手で、撃ち抜かれたであろう胸に触れたようだ。

それも痛そうではあるが、鎮痛剤の力と驚きで、今だけは痛みをあまり感じていないように思える。

「塞がつてる…………わ、私…………つぐ…………確かにここを…………」

「ああ。みんなの前で撃たれた。一度死んでいる」

「…………喋るだけで痛いわ…………」

かなり辛そう。本来ならそのまま入渠というのもわかる。見た目は私達と同じように継ぎ接ぎで治療が完了しているが、中身はズタズタにされているようなものだ。

曙が目を覚ましたため、三日月に飛鳥医師を呼んできてもらう。すぐ眠り直すにしても、少しくらいは説明を聞いてもらわなくてはいけない。むしろ今の状態では、痛みで眠ることも出来ないだろう。

「…………アンタ…………目はどうしたのよ…………」

「お前が撃たれた後、戦闘になった。その時にやられてな。明日には治る」

「…………そう」

痛みもあるが、比較的体は動くようだ。治療後3週間眠ったまま、で、且つ、目を覚まして1週間はまともに動けなかった私とは治療のレベルが違う。

あくまでも身体の中身だけが酷い損傷を受け、四肢は無傷だったからだろうか。三日月も皮膚だけだったからか、目が覚めた直後から普通に動けたのを思い出す。

「目が覚めたと聞いた。……うん、蘇生は成功だな」

「……本当に……生き返ったのね私は……」

「ああ。辛いとは思うが、説明をさせてくれ」

飛鳥医師が医務室にやってきて、治療方法の説明。

曙の身体の中には、軽巡ホ級の心臓と肺が組み込まれているのと。この軽巡ホ級、私が初めてこの施設で浜辺の清掃を行なった時に見つけた深海棲艦の死骸である。あの時潰えていた命が、次の命を繋ぐために使われたと思うと、なかなか感慨深い。

「……私も……みんなと同じ継ぎ接ぎになったのね……」

「そうなる。……こんな形でしか治療出来なくてすまない」

「蘇生しておいて何言ってるのよ……命があるだけ……マシよ……」

声は苦しそうだが、死にたくないという最期の望みが叶ったことは不本意では無いようだった。

ここで曙が何故生き返らせたとも言おうものなら、飛鳥医師はおそらく立ち直れないくらいのショックを受けていただろう。それもあるから、死にたくないという者だけを治療するスタンスになっている。飛鳥医師も自己防衛をしているようである。

「……感謝するわ……先生」

「そうか。そう言ってもらえると、治療した甲斐があるというものだ」

顔はわからずとも、飛鳥医師が喜んでいるのは声からわかる。微妙な変化ではあるが。

やはり目が見えていないことでいろいろな部分に気が付けた。人に頼らなくては生活もままならない状態ではあるが、少し嬉しい。明日には終わるであろうこの生活を、今は楽しむことにしよう。

曙の選択

曙が無事目を覚まし、蘇生は成功したことがわかった。まだ痛みは大分残り、鎮痛剤を常に投与している状態ではあるが、飛鳥医師の施術がうまくいって何よりである。

私、若葉は今日いっぱい視力が失われている状態であり、施設内を動くことは難しい。そのため、基本的には曙の側にいることとなった。そして、その私の目になってもらうため三日月も一緒。

「……アンタ達も……こんな痛みを味わったわけ……？」

「さすがに曙には負ける。死ぬ寸前まで行っただけで、死んだわけではないからな」

「私は身体の中は無事なので……肌がほぼ焼けたただけです」

「充分過ぎるわ……」

意識を取り戻した曙は、ベッドから起きることは出来ないが話をすることは出来るようだ。

ただ寝ているだけでは暇だからと、3人でとりとめのない話をしてる。三日月がそういう会話が出来るようになっただけでも大きな成長。相変わらず浮き輪が1体は側にいるみたいだが。

「この前お風呂で……見せてもらったわね。もう私が言えた話じゃないけど……結構エグい傷じゃない……」

「本当にお前には言われたくないな。胸に貫通の傷痕があるのはお前だけだ」

「外見に影響が無いならいいですよ。曙さん、服を着ればおおよそ隠れますから」

首の辺りにまで傷が拡がってしまっているらしく、それだけは服を着ても少しだけ見えるかもしれないとか。だが、それは服の形でどうにかなることだ。三日月や摩耶のような顔にあるわけでは無いので、問題ないと言える。

痛みさえ消えれば、何も以前と変わらない状態だ。見た感じ、本当に後遺症が残っていない。既に包帯が要らないほどに傷が定着しているほどだし、死者の蘇生は私達に施された治療とは訳が違うようだ

ある。

「……早くこの痛みが取ればね……」

「それは我慢してくれ。私は1週間だった」

「息をするだけで痛いよ……それが一番辛いわ……」

三日月は皮膚だったからか痛みを訴えなかつたし、私は四肢だったので身体を動かそうとすると痛みがしたが、曙はよりによって肺だ。外の定着とはわけが違う。呼吸に影響が出してしまうのは仕方ないこと。せめてそこがどうにかなればいいのだが。

少しして、再び来栖提督率いる調査隊が到着する。今回は、先日の戦闘で自沈した5人の艦娘の引き揚げ作業。人数がわかっている分、作業は早めに終わるとのこと。

私ももしかしたらあぁなっていたのかもしれない。最初は普通にやらされていても、何らかの条件で洗脳を受け、夕雲の指示を聞くだけのただの人形になっていたかと思うと寒気がする。

あの夕雲も元凶の提督に洗脳されてあぁなってしまうという話だし、やはり一番どうにかしなくてはいけないのはあの貼り付いた笑みの提督だ。夕雲だって救える可能性がある。

「おう、ここにいてるって聞いたから、挨拶しにきたぜエ」

来栖提督が医務室に入ってくる。隣に人の気配がし、さらには嗅いだことのある匂いがしたので、あれはおそらく鳳翔。

相変わらず三日月は私の後ろへ。今は浮き輪が1体しかないため少し心許ないが、この距離感でも悲鳴をあげないなら上出来。

「……暑苦しいのが来たわね……」

「そんだけ言えるなら大したもんだ。結構結構。だけどよ、まだキツイだろ。いいもん差し入れに来たぜエ」

ガサガサと袋をまさぐるような音。何かを取り出しているようだ。ほんのりと甘い香りがする。ジュースか何かか。

「ようやく持ってこれるだけ貯まった。高速修復材だ。飛鳥に聞いてな、曙に飲ませてやれって言われてんだ」

雷が以前、本当にレアと言っていた。事実、私がここで過ごしてい

る間、一度たりとも見たことがないものだ。それを来栖提督は持つてきてくれた。

なんでも、鎮守府で管理されている高速修復材は譲渡など出来ず、持ち出しすら不可能。何せ、艦娘には治療薬として使えるが、人間には有毒。劇薬扱いで取り扱いが物凄く嚴重らしい。

それを使うたびに、僅かに容器の底に残る水滴を掻き集めて審査からすり抜けるという、割と滅茶苦茶な方法でこの施設用の高速修復材を貯めてくれていたようだ。

そもそも来栖提督の鎮守府は高速修復材をあまり使うようなことも無いらしく、こうやって貯めるだけでもかなり時間がかかったそうだ。見えていないからわからないが、どうやらお猪口一杯分くらいしか無いらしい。

「……………これって……………そうやって使うものなの？」

「入渠ドックってのはこれで満たされるんだぜエ？　今の曙にや塗るより飲む方が効果的だろうがよ」

「……………そうね……………ありがたく貰っておくわ……………」

本来なら塗り薬のように使ったりするのが一般的であり、大怪我の時はそのものに浸かることで身体が修復されるようだが、今の曙に高速修復材が必要な場所は体内。塗り込んでも多少は効くらしいが、飲んで方が早いと、飛鳥医師が言ったらしい。ならば指示は聞くべきだ。

「悪いな若葉、目薬にでも出来りゃ、若葉の眼も即治せたんだがな。量が少なかつたから曙の分で手一杯だった」

「明日治るらしいから、別に気にしていない」

塗り薬で治療出来るのだから、目薬にすれば私の眼も治ったらしい。だが、無いものは仕方ないし、無くても問題ない。長期間続くようなものでもなし、心に余裕を持って待てる。

「そうかい、鳳翔、シゴキは明日以降だつてよ」

「聞こえが悪いですよ提督。私は若葉さんを鍛えてあげるだけですから」

そういう意味では残念か。鳳翔の特訓、割と楽しみにしている。

強くなりたい。これは本心だ。そして、鳳翔に鍛えてもらえれば、それはおそらく最短時間で達成できる願いである。

「ちなみに……これって味は……？」

「明石さんをお願いして美味しくしてもらってきましたよ。確かメロン味とか」

「……また……ありがたいのか何なのか……」

痛みを堪えながら、渡された飲み物を飲んだ。そして僅か数秒で、

「嘘……本当に痛みが無くなったわ」

「なんとって『高速』だからな。大怪我負つてもすぐに治るんだぜエ？

量がありや腕が生えるくらいなんだからよオ、内臓の傷なんてあつ
つー間よオ」

あれだけ辛そうにしながら話していた曙が、今やそんなことを気に
ならないほどに活力のある声色になっていた。恐ろしいほどの即効
性。劇薬認定も領ける。

これで鎮痛剤なども要らなくなったため、三日月に飛鳥医師を呼ん
できてもらう。そもそも私は目が見えていようが医療系の手伝いは
殆ど出来ないのです、飛鳥医師に任せるしかない。

その間も、曙は完治したと言つても過言ではないほどに元気だつ
た。だが、話を聞いている限り、胸の傷はそのままのようだ。万が一
追加で高速修復材が入ったとしても、例えば三日月の顔の傷が治
せるかと言つたらそういうわけではないようだ。

「多分その傷は塗り込んでも治んねえな。定着しちまつてる」

「そういうものなのね。継ぎ接ぎは修復材じゃ治んないか……つて、
何処見てんのよ！ このクソ提督！」

おそらく枕が飛び、来栖提督の顔面にぶつけられた。それだけ出来
るのなら充分過ぎるほど回復している。少々元気過ぎるようにも思
えるが。

曙が回復したことにより、残すは私の眼だけとなった。明日には治
るため、今日はゆつくりさせてもらうが、医務室で曙の側にいる必要
は無くなったため、三日月に目になってもらいつつ適当に休むことに

なった。

「昨日の今日で出歩けるのはありがたいわ」

「羨ましい限りだ」

結局私は三日月と曙に手を引かれることに。

曙もまだこの施設のことをよくわかっていない。ずっと医務室で暮らし、最後の1日だけ少し外に出ただけであり、そもそもこの施設に残るつもりが無かったからまるで覚える気も無かったようだ。

だが、今は気が変わったようだった。曙自身も私達と同じ継ぎ接ぎとなったことで、ここに残ろうという考えが優っているらしい。

「定期的に診てもらわないといけないんでしょ。いちいち出向くの面倒じゃない」

「まあ、そうだな」

蘇生後は定期的に診察がしたいと飛鳥医師が言っていた。今までは蘇生したらすぐに入渠してまた戦場という状態だったようだが、曙は入渠もせず高速修復材を飲んだだけ。大丈夫だとは思いますが、何かしらの悪いことが起きたら困る。

「それに……同じ継ぎ接ぎがここにいるんだから、こっちの方が居心地いいわ。人の裸をジロジロ見るようなクソ提督のここに行くくらいなら、こっちの先生の方がマシってことよ」

なるほど、後からの言葉は気恥ずかしさを隠す言い訳として、傷を持ったことで仲間意識が芽生えたと。傷自体に羞恥心や劣等感を持っているかと若干ヒヤヒヤしたもの、これならそこまで気にしてなさそうである。

それもこれも、服で隠れるというのが大きい。三日月のようなコンプレックスに発展する可能性だってある。

「男が来たのに服を正さなかったお前が悪いだろ」

「それでも視線を多少は逸らさせての。マジあり得ない」

来栖提督にはご立腹の模様。やはり提督という存在に思うところがあるせいかな、本人がいなくても当たりが強い。駆逐艦娘曙の性質らしいので、この言動に対して来栖提督も半ば諦めていた。

それでも私には、なんだかんだ言っている、曙は来栖提督のこと

を本当に嫌っているようには聞こえなかった。先程の不慮の事故は別として、信用出来る人間であるという本質はしっかりと捉えられている様子。

「まあ、ちゃんと制服を用意してくれたことは感謝するわ。検査着でウロつくわけにはいかないし」

「どうしても……首の近くの傷は見えちやいますね」

「これくらいならいいわよ。気にならないわ。私からは見えないし」

医務室から出るにあたり、来栖提督が用意してくれた曙の制服が支給されている。そういった部分は用意がいい。

曙の制服は、雷のものに近いセーラー服。首元が鎖骨が見えるくらいには開いている。そのスペースから、胸から首にかけての傷がどうしても見えてしまうのだろう。

だが、本人が気にしていないのなら別にいい。何か言うのも野暮というものだ。

「晴れてこれで完全復活よ。艦装は無傷だったんだっけ」

「ああ、お前だけが狙われたからな。大発に積み込んであった艦装は無傷で、昨日のうちに工廠に戻してある」

「そ。なら安心だわ。私の手でクソ鎮守府に引導を渡せるんだからね」

今回の件で、元いた鎮守府に対する恨みがより一層強くなったようだ。殺されているのだから当然のこと。私も出来るならそれを応援してあげたい。殺すかどうかはさておき、元凶の鎮守府には滅んでもらわなくては困る。

三日月に手を引っ張ってもらい、工廠にやってきた。自室でこもっているより、こういう場所にいる方が落ち着く。摩耶とシロクロ、セスの作業の音と、油の匂いがよくわかる。

「あー！ アケボノー！」

「うわ、マジか。高速修復材飲ませたって聞いたが、あれがどうにかなるレベルかよ」

喜ぶクロと、驚く摩耶。声色だけで表情が読み取れるようだった。一時的に作業を止め、皆が曙の元へと集まってきた。死の淵から舞い

戻ってきたということ、一番積極的に近付いてきたのはシロ。

「……うん……みんなより少し濃いね……」

「濃いつて何がよ」

「私達と……同じ匂い。海の匂い……深い海の」

曙は息からもそういう匂いを感じるとシロは言う。私達よりも濃いつたのは、中身の重要な器官が置き換わったからだろうか。

いくら目が見えなくなり感覚が鋭敏になっても、シロの言う匂いだけは感じ取ることが出来ない。五感とは離れたところにあるのだろう。

「脈打ってる……同胞の匂いが。ここ……だよ」

「……、とはおそろく胸。」

「……大切にしてくれ」

「当然よ。こいつのおかげで私は生きてるんだから」

私達以上に大切にしなければ、曙はまた命を落とすことになる。結び付きが一番強い。シロもそれを感じ取ったのかもしれない。

「アケボノ、やっぱりオツチャンのどこ行っちゃうの？」

「あー……そのことなんだけど、やっぱりここに留まるわ。定期的に診てもらわないといけないもの。いちいち来るの面倒だし」

「じゃあ、お別れじゃないんだね！」

大喜びのクロ。仲間が増えるというのはやはり嬉しいものだ。そろそろこの施設のキャパシティも限界に近いようだが、まだギリギリ大丈夫らしい。

「今日の飯は豪華かもしれないねえな。雷が張り切ってたぜ。復活祝いだって。それが歓迎会になりそうだな」

「送別会してもらったばかりなんだけど？」

「楽しきやいいんだよ楽しきや」

そう、楽しく生きることが出来ればそれでいいのだ。今はそれを脅かすものもいるが、この束の間の休息を楽しまなければ。

曙はこれにて完全復活。後遺症もなく、今後は私達と同じ継ぎ接ぎの者として生きていくことになる。今のところ唯一の戦力となる曙

は、私達の期待を一身に背負った重要な役。自衛の要だ。

私も鳳翔に鍛えてもらい、早く曙に並び立てるようになりたい。この施設を、仲間を守るために。

次への一歩

来栖提督が持ってきてくれた高速修復材のおかげで、残っていた痛みも全て無くなった曙。これにより潰えていた命を完全に取り戻し、来栖鎮守府に発とうとした直前の状態に戻ったと言える。

代わりに大きな傷を負ったことで、定期的に飛鳥医師の診断を受ける必要が出た。そのため、決着をつけるために来栖鎮守府に行くのではなく、施設での滞在を選択。晴れて私達の仲間、施設の一員として登録されることとなる。

残るは私、若葉の眼だけ。これも明日には治る見込みのため、明日からはまた普段通りの生活に戻る。そこに加わるのは、施設を守るために自分を鍛えること。自衛の手段は持つに越したことはない。

幸い、私は来栖提督の秘書艦、鳳翔に見初められ、鍛えてもらえるという約束を取り付けている。いつ、何処でやるかはさておき、強くなる機会をみすみす逃すわけにはいかない。頃合いを見て話をしようと思う。

調査隊による自沈艦娘の引き揚げ作業は午前中のうちに終了。戦闘に参加していた鳳翔と羽黒がいたため、引き揚げられた艦娘がその時のものかはすぐにわかった。

その報告をするため、再び来栖提督と鳳翔、そして調査隊隊長の羽黒が工廠に來ている。

「引き揚げはこれで終わりだから、俺らは一旦帰投するぜエ。だが、奴らがここにまた来る可能性はあるんだよなア」

「はい。夕雲さんは出直してくると言っていましたし、あちらは規則違反を何度も繰り返している常習犯のようですので、何をしてくれるかわかりません」

その規則の1つが、中立区での戦闘行為の禁止。その規則があったからこそ、この施設は安全な医療研究施設として成り立っており、また、武装の類を置かないようにされていた。修理してもすぐに持って行ってもらったのはそのため。

そして、海底に艦娘が沈んでいることに延々と気付くことが出来なかったのも、その規則があつたからだ。敵も味方も現れない海域の海底の調査なんて、基本は後回しだろう。出現しない理由探しより、出現する理由探しが優先されてきた。

その規則を破って戦闘行為をしてきたあちらは、既に確信犯。中立区で殺せば発見もされないだろうと考えての計画的犯行。許されざる行為である。

「ここもそうだが、俺んトコも襲撃される可能性があるな。アイツら、俺の名前だけは知ってるからよオ」

「悪いな。夕雲に連絡先を教えてしまつて」

「いや、むしろ好都合だ。ここから狙いを逸らしたい。俺がクソツタレと同じ立場なら、ここより俺の鎮守府を先に潰す」

中立区にあり、まともに武装も持たない施設など、捨て置いておいても脅威にならないと考えるだろうと来栖提督は話す。しっかりと脅威を取り除いてから、ゆっくり掃除すると。

言われてみれば確かに。この施設の戦力らしい戦力は、エコを持つセスと、ここに来た時の武装がそのままある曙だけ。私が錨を振り回したところで、意味がないと言えるほど。

「裏をかいてくる可能性もあるけどな」

「言い出したらキリが無エよ」

「まあな。悪いが、しばらくは防衛頼んでいいか」

「おう、任せろい。毎日ここに誰か置けるようにするからよ。俺アここに來ることの方が少ないと思うがな」

それでも充分だ。私達だけではどうあがいても押し潰される。

私達はまだまだ経験不足だ。だが、訓練するような場所もなく、訓練するための道具もない。そもそも訓練していい場所でもない。

外部からの増援があるのなら、それだけでもありがたい。頼り切るつもりは無いのだが、どうしても頼らなくてはいけないのは痛いほどわかつている。

「提督、私は毎日来ようかと思いますが、よろしいですか？」

「お前、本当に若葉のこと気に入ったみたいだな」

鳳翔は常にここに来てくれるらしい。どれほど心強いことか。私の特訓もしたがっているようだし、私としては喜ばしい限りである。私以外にも鍛えるつもりがあるようだ。

「住み込みはどうだと言いたいところだが、減った弾が補給出来ないな。使わないのなら、泊まっていつてくれても構わない」

「あらあら、でもそれだとこの食糧を余計に使わせてしまいます」
「鳳翔、一回戻った後、ウチから持ってけ。それならいいだろ。連絡役も欲しいし、1人はここに置いておきたいとは思ってた」

それをわざわざ鳳翔にしてくれるとは、来栖提督も気前がいい。秘書艦を出張させるのに抵抗は無いのだろうか。などと思つたものの、そもそも鳳翔が率先して言い出したことだし、来栖提督も半ば諦めているのかもしれない。

「中立区に武器の持ち込みは問題になりそうだな……どうにかすり抜ける算段をつけっか。こちとら正当防衛だしな」

「上の連中には顔が利くだろ。僕の名前を使ってくれてもいい」

あちらが深い話を進める中、鳳翔が私の方へ。

「若葉さん、明日から本格的に鍛えましょうか」

「よろしく頼む」

「この施設を守るため、私も尽力します。常にここを守るのは貴女達です。少しスパルタになるかもしれませんが……即戦力に鍛え上げてあげましょう」

何処か声からもやる気が伝わってくる。

本来の軽空母鳳翔は、ここまで後人育成に躍起になるような人では無いらしい。こちらも羽黒や文月のように来栖提督から強い影響を受けているように思えた。勇ましく、それでいて優しく、何より強い。そして鳳翔は来栖提督が選んだ秘書艦だ。鎮守府では3本の指に入るほどの実力なんだとか。

実際は最古の空母であり、所謂旧式。さらには航空戦力としては本来は下位になるそうだが、この鳳翔はそういう問題を全て払拭している。研鑽に研鑽を重ねた結果、ここまでの実力者。艦種が違えど、私達も学ぶことは多いだろう。

「とはいえ、昨日も言いましたが、まずは眼です。万全の状態で挑んでください」

「了解した。今日はゆっくりするつもりだ」

「よろしい。ここにいるのならわかっているでしょう。何よりも健康が一番です」

また頭を撫でられる。とてもいい匂いがした。

「ほ、鳳翔さん……」

「どうしましたか三日月さん」

「わ、私、私も鍛えてもらえませんか！」

それとなく三日月にどうかと勧めてみようかと思っていたのだが、自分から言い出すとは思っても見なかった。ここで鳳翔が断ったら話は別だが。

「勿論。ここを守るのは貴女達と言いました。貴女達には自衛出来るだけの力を与えます」

「ありがとうございます」

「しつかり無理せずついてきなさいね」

私の横にふわりと匂いが移動する。三日月の頭を撫でているのがわかる。少し恥ずかしげに身をよじる三日月。以前までなら手を振り払っていただろう。だが、今は素直に受け入れている。本当に成長した。

「曙さん、貴女はまず適度な運動からです。明日からでもいいので、運動を始めてみなさい。心臓と肺が差し替えられているのは相当影響があると思いますから」

「なら三日月と一緒にセスの散歩に付き合おうといい。今日の夕方にやるはずだ」

「そうね、確かにそれは先に知っておきたいわ」

何だかんだ、この施設に所属している全員を鍛え上げるつもりだろうだ。その中でも私は、並んで戦ったことで特に気に入られているらしく、他の者よりも重点的に見てもらえるらしい。それはまたありがたいことだ。

調査隊が帰投し、こちらにも鳳翔を受け入れる準備を始める。とはいえ、日頃からの家事のお陰で何か特別にやらなくてはいけないようなことはない。午後からは改めて今後のことを話し合う時間となった。「ここまで事が大きくなるのは、この施設が始まって以来初めてのことでだ」

「そうよね……私がここに入ってもずっと平和だったものね」

雷がここに漂着したこと自体が大事なのだが、戦闘にまで発展したのは今回が初。良くも悪くも中立区なのだから、ここで起きる戦闘は故意に行なわれるものくらいである。それが起きてしまったので大惨事なのだが。

今の今まで、ここにいるものはまともな戦闘をした事がない。一番経験があるのであろう曙ですら、基本は護衛棲水姫搜索任務ばかりで戦闘自体はあまり無いときた。ここにいる艦娘はほぼ全員、練度が0に等しい。曙が少しある程度。

「来栖や鳳翔の言う通り、自衛の手段くらいは必要だと僕も思う。今までは必要無かったが、もうそんな事が言っていられない」

「んなら、今後は武装を優先して修理した方がいいか？」

「ああ。そうしてくれ」

海底から引き揚げた深海棲艦の艦装の中には、当然主機以外のものもある。私達が使えそうな主砲や、摩耶が得意らしい対空砲などもチラホラ。いくつかを組み合わせれば、1人分の武装になるだろう。全員分用意出来るかはわからないが、優先順位は上がった。

まさか、主機だけでは飽き足らず、主砲などの武装まで継ぎ接ぎになるとは思わなかった。それも私達らしいと言えばらしいか。摩耶も使った事が無いわけではないらしく、早速作り始めるとか。

「私達も手伝うよ！　ここに無くなるの嫌だからね！」

「……うん」

シロクロの潜水艦戦力も重要だ。見えない位置からの急襲は、どんな戦場でも有用である。今はまだ武装は無いが、艦装が完成してしまえば、この施設の最高戦力になることは間違いない。殺傷能力が高すぎるのは玉に瑕だが。

「エゴの事があるし、私も恩を返すよ」

現時点での最高戦力は、生まれた時点で完成しており、万全に整備された武装ユキを持つ、深海棲艦のセスであろう。前回の戦場でも、立ち回りは完璧だった。私がしつちやかめつちやかにするために近接戦闘を仕掛けていても、私に当たらないようにするための航空戦を繰り返してきていた。

協力してもらえぬのなら施設最強の戦力として、矢面に立つてもらうことになりそう。

「決して無理だけはしないでくれ。医者の仕事を増やすな。……死なないでくれ」

飛鳥医師の最後の言葉は、心の底から振り絞って出てきた言葉だった。今回は決意をして曙を蘇生したが、そもそもそれ自体が摂理を無視した例外中の例外。何度も使っていい手段ではない。

「あんな痛い思いするのは二度とゴメンよ。死ねって言われても死なないわ」

「曙が言うと言得力あるわね」

「実際死んでるんだもの。死にかけとは違うわ」

曙はこの中でも一番敵に恨みが深い。冗談のように言っているけど、闇を感じるような言葉である。

「私だって戦うわ。そりややらなきややらない方がいいと思うけど、この施設のためなもの」

雷もやる気満々。戦わなければ自分の居場所が失われるというのなら、嫌でも立ち上がるしかない。それに、私達には戦う力がある。「あ、でも訓練とか始めたら家事が……」

「自分の部屋とかくらいなら自分でやるぜ。それに、工場はあたしらが片付けてんだ。飯は頼るしかねえけど、他は分担制にすりゃいい」

「そ、そうね。先生、自分でお片付け出来る？ 散らかさない？」

「あのな、僕は子供か何かか」

雷はこの施設のムードメーカーだ。常にポジティブなのは、見ていて気持ちがいい。空気が暗くならない。

おかげで、この話し合いの場が明るく纏まって終わることが出来

た。沈んでいるより、笑っている方がいいだろう。

「曙が入ったことで駆逐艦4人になったな。駆逐隊結成だ」

摩耶が言うまで気付かなかった。駆逐艦4人で駆逐隊。

駆逐艦娘は小回りは利くもののどうしても非力だ。だから駆逐隊を組んで4人での行動で大物を狩る。各々が鍛えることも必要だが、連携の訓練も出来るならした方がいいだろう。

「駆逐隊？ 文月達が22番だったーみたいなヤツ？」

「そうか、雷はその辺りも忘れちゃってるんだよな。センス、雷っていくつだったか」

「雷は第六だ」

私も艦のときは姉妹達と第二一駆逐隊として行動していた。そういう意味では、ここの駆逐艦達は型も駆逐隊もバラバラ。こういうところでも継ぎ接ぎ。いろいろなところから摘んで集めて組み合わせた、有り合わせ感がすごい。

「じゃあ、何番目がいいかしら。数字がいるのよね！」

「別にそこまで拘る必要あるか……？」

「せっかくだもの！ 一致団結してる感じがしていいじゃない！」

雷の言いたいこともわかる。纏まっている名前がある方が、力と心が合わせやすいだろう。

「……くっつからないこと思い付いたわ。第五三駆逐隊で行きましょう」

「なんでその数字……ああ、そういうことか」

「五三ゴミって……」

「クソ鎮守府に向けての当てつけよ。ゴミみたいに捨てた私達にやられるのは屈辱的でしょ」

雷は無関係だとは思われるが、私と三日月、そして曙は境遇がほぼ同じ。それをあえて当てつけに使うとは、曙もなかなか性格が悪い。

「いいじゃない！ 私達はこれから、第五三駆逐隊よ！」

「ほら、雷も気に入ってたみたいだし、これでいいわね」

「まあ……名前には拘らない。それで纏まるのなら、それで行く」

「若葉さんがそういうのなら……」

こうして、私達は第五三駆逐隊として行動を共にすることになる。

今後は四人一組で戦うのだ。戦場で背中を預け合う仲間として、私はこの状況に高揚していた。

次に向かう一步は踏み出された。ただやられるだけでは終わらない。抗ってやる。楽しく生きるために。

鳳翔の分析

翌朝、巻かれた包帯を解き、目を開く。昨日は輪郭しか見えなかった三日月の顔が、顔の傷や色の違う瞳までハッキリ見えた。これで、私、若葉の一時的な失明は完治。身体にはまだ傷がいくつか残っているが、それもじきに治るだろう。動くことには支障がないので、もう問題ない。

「よし、よく見える」

「よかったです。今日から鳳翔さんの訓練ですから」

「ああ。楽しみにしていた」

1日半振りの景色は少しだけ違って見えた。久しぶりの日の光が眩しい。外がやたら明るく見える。少し目が痛く感じる程だった。

「おはよ。包帯取れたみたいね」

「ああ」

三日月と一緒に、エコの散歩に付き合っていた曙も着替えて私の部屋にやってきた。三日月の言っていた通り、首元の傷が少しだけ見えることが、ようやく確認出来た。

「風呂に入ったのか」

「そりゃあね。エコに飛び付かれて、浜辺で転げ回る羽目になったもの」

シャンプーの匂いが、以前より強く感じられた。三日月も同じように風呂上がりなのがわかる。三日月のようなジャージフル装備でも、汚れるものは汚れる。

エコの散歩は割とハードであり、付き合うと私もまともに帰れた試しがない。私も何度か押し倒され、砂まみれにされた。それに耐えられるくらいに下半身の安定感を高めたいところなのだが、なかなか難しい。

「でもまあ……楽しかったわ。こういう生き方もあるんだって実感出来た」

「それは良かった。ここで楽しく生きればいい」

「そうね……この方が生きやすいわね」

先日までとは打って変わって明るい曙。不安要素はまだ健在だが、それをどうにかする手段も手に入れることが出来る。その不安を払拭して、平凡な生活をのんびんだらりと過ごすことが、今の私達の目標だ。

そうするためにも、まずは鳳翔に教えを請い、私達自身でもこの施設を守り、決着をつけられるようにしたい。

朝食後、来栖鎮守府から施設防衛隊が到着。今日から少しの間、ここに住み込むことになる鳳翔以外には、毎度お馴染み第二二駆逐隊が便乗していた。何でも、鳳翔の教えの手伝いも出来て、且つ、この防衛も可能という万能戦力だからだとか。

私達としても、まずは慣れた相手の方がありがたい。特に三日月。自分から強くなりたいと人間や艦娘の前に出るようにはなつたが、嫌悪感が完全に払拭出来ていくわけではないのだ。姉が一番接しやすいだろう。

「こちらはお土産になります。住み込ませていただきますので、その分の食材を」

「すまない。大丈夫だとは思いますが助かるよ」

大発動艇に積み込まれた食材を下ろして倉庫に持っていく。さらには飛鳥医師が欲しがりそうな治療道具や、生活雑貨。

その中でも一際目立つのが、どう見ても接近戦用の武器達である。ナイフ、刀、槍などさまざま。一応刃が潰してあるため殺傷力は削られているようだが、そもそも艦娘が使うようなものには無い。中にはこういう武器を持つ者もいるらしいが、主砲で撃った方が確実であり安全である。

「……若葉さん、あれ……」

「そういうことだろう。若葉達は、あれを使えと」

中立区の規則をすり抜けられているかはわからないが、普段の艦娘の武器を使うよりは海は汚れないなどは思った。弾切れもなく、使い手が良ければ永劫に使える武器だ。手慣れておいて損はない。

「では、私の訓練を受けるのは、ここの駆逐艦4人ということでしょうし

いのですか?」

「摩耶はどうするんだ」

「あたしは先にやることがある。まずはお前らが鍛えてもらいな」

そう言う摩耶はいつものツナギ姿。艦装を弄る気満々。自分が鍛えられるよりも先に、敵への対抗策である武装の修理を優先してくれている。シロクロとセスもそちらを手伝うようだ。

ここで武装が修理出来たからといって、まともに使えるかはわからない。さらには弾数には普通以上に限りがある。そのための接近戦用の武器。それに、あくまでもここは中立区。武装を持つことは禁止されている。準備だけはして、むしろこちらが隠し球となり兼ねない。

「では、早速始めましょう。艦装は必要ありません。最初は貴女方の得意分野を切り分けます」

鳳翔に促され浜辺に移動。戦場を想定し、運動着ではなく普段の制服で。ここから私達、第五三駆逐隊の戦いが始まるのだ。

第二二駆逐隊の力も借り、私達はいくつかのテストを行なった。そこから鳳翔が分析し、私達に最も適した役割を割り振ってくれる。

「まず簡単に。若葉さん、曙さんは前衛、雷さん、三日月さんは後衛として戦えるようになってもらいます。よろしいですね?」

私は前衛。一度そのような戦い方をしたからだろうか。

「まず三日月さん」

「は、はい」

「貴女のごことは聞いています。貴女は深海棲艦への恐怖心が他より強い。代わりに、危機に対しての反応がズバ抜けて高いです。そこを伸ばします。恐怖を乗り越えるに越したことはありませんが、それを逆手に取りましょう」

鳳翔の育て方は、苦手を克服させるのではなく、得意をより伸ばす方針。駆逐隊は4人いるのだから、苦手な部分があったところで、他の仲間にサポートしてもらえるのだ。無理して克服するよりは、個性を伸ばした方がいい。

三日月は、恐怖心から来る危機回避能力を見出された。当初の頃、何かある毎に布団を被ったり私を盾にしたりするのが特別素早かったのを覚えている。それがさらに伸びれば、私達よりも早くに敵を感じし、即座に行動に移すことが出来るようになるだろう。戦場で盾にされたらたまったものではないが。

「次、雷さん」

「はいー！」

「貴女は非力ですが器用ですね。家事をずっとやってきたからでしょうか、要領がとてもいい。なので、貴女も後ろから皆をサポートする役目に合っています。三日月さんが後衛の守備役なら、貴女は後衛の攻撃役がいいでしょう」

雷は、家事で培った器用さを見出された。確かに私が稀に手伝いをするとき、私がいなくても仕事をどんどんこなしていった。自分の持ち場のものには一切失敗が無い感じだった。ということは、覚えてしまえば失敗は無いということ。

「曙さん」

「ん」

「貴女も少し非力ですが、持久力が強いですね。深海棲艦の心臓と肺の力ででしょうか。それは活かさない手が無いです。長期戦闘を見据えた、長柄物というのはどうでしょう。非力をカバーし、前衛で長期戦をしてもらいます」

曙は、やはり深海棲艦の心臓と肺を持つという大きな特徴を見出された。昨日の夕方から始めたセスとの散歩でも、初めてだというのに三日月よりも息が持ったのだとか。予期せぬところで出来たスペックアップを活かすための近接戦闘。

「そして若葉さん」

「ああ」

「以前にも言いましたが、貴女の負けん気の強さは評価できます。少し雑ではありますが、腕力と俊敏性はトップです。そのため、貴女は曙さんよりさらに近く。俊敏性により近付き、腕力により一撃必殺を狙いましょう」

私は、一度の戦闘経験から総合的な戦闘能力を見出された。常日頃のトレーニングも実を結んだようで、この中では最高戦力と言われたのはとても嬉しい。よって、私は一番敵に近付き攻撃する前衛、近接戦闘の要となる。

「4人の役割は決まりました。まずは基礎能力の向上です。何をすることにしても、全ての能力を底上げしなくてははいけません。なので、全身を鍛えてもらいます」

「あたし達もお手伝いするね」

ここからは文月達も加わり、基礎の部分からみっちり鍛えられることになる。第二駆逐隊の地力の強さも、鳳翔のこの訓練の賜物らしい。そういえば、先日の戦闘でも4人が4人、誰も疲れを見せていなかった。さらには無傷。相手がリミッターを解除していようが関係ない。

私達も早くそこに追い付きたかった。施設を守るためには、そこまで辿り着かなくてはいけない。

「まず走り込みから。一番持久力があるのは……皐月さんですね。では、皐月さんがやめると言うまで走ってください」

今、恐ろしく雑な指示が出たような気がしたが気のせいだろうか。距離も時間も無く、ただただ走れど。鍛え上げている皐月を追って。ただでさえ足場が悪い浜辺だ。消耗は激しい。毎日走っている私が一番わかっている。

「それでは始め」

「しっかり追いついてきてね」

皐月が走り始めたのを4人で追う形でランニングスタート。

最初は和やかな雰囲気だったものの、走り始めてすぐに、この訓練の厳しさが理解出来た。皐月がとにかく速い。ランニングとかそういう速さでは無い。

私と曙はまだ追い付いているが、雷はすぐに厳しくなってきた。三日月に至っては聞いたことのないような声をあげながらギリギリついてこれている状態。

「まだまだ走るよー」

「す、少しはっ、手を抜いてよ!」

「そしたらボクが鳳翔さんに怒られるんだからダメダメ」

皐月はまだまだ余裕そう。実力差が如実に出ている。

最初からこれ。この訓練は少しスパルタになると最初から言っていたが、飛ばし過ぎなのでは。少しどころではない。

皐月は30分近く走り続け、一旦終了。最終的には誰もそれについていくことが出来なかった。まず三日月が倒れ、雷が倒れ、私と曙が頑張つてついていったが、一度脚がもつれて止まってしまおうと、そこから脚が動かなくなってしまう。

持久力トップの曙ですら、今は浜辺で俯せになり、息も絶え絶えな状態。最初にドロップした三日月は、未だに立ち上がれない。それなのに皐月はまだ息を乱していなかった。

確かに私達は練度など0に等しいが、まさかここまで差があるとは。壁はまだまだ高い。高すぎる。

「では10分休憩してください。10分後、次の訓練を開始します。それまでに施設の近くまで移動してください」

スパルタを越えて地獄だった。初日からコレ。いきなりついていけないか怪しくなってしまう。

「キツイぞ……だが……悪くない……!」

だが、私はそれでも昂揚している。確実に強くなれるメニューなのはわかる。これに追いつくことが出来れば、少なくとも第二二駆逐隊の背中が見えるくらいには成長が出来る。

この成長が、みんなを守る力を入れることが、私には一番嬉しい。あとは、自分の身体をこういう形で痛めつけるのが楽しい。

「これくらいでへこたれてらんないわよ……アイツらをぶちのめすためにはね……!」

曙も自らを奮起させ立ち上がる。私とは考え方が違うようだが、強くなれることは大歓迎という感じ。

一方、雷と三日月は言葉もない。今までにないほどの消耗で、立ち上がることも出来ない。10分で回復出来るかどうか。

「雷ちゃん、三日月ちゃん、だいじょくぶく？」

文月が近付くが、2人は反応が無かった。三日月に至ってはビクンビクン痙攣が見えるレベル。

だが、文月は決して手を貸さなかった。自分の力で立ち上がるのを近くで待つだけ。ここで手を貸したら甘えてしまいかねない。それに、助け合うなら私達だ。

「だ、大丈夫、ちよつと立てなかったただけだから」

雷は返せるくらいには回復。震えてはいるものの、立ち上がる事が出来た。三日月は未だ俯せ。

「三日月……頑張ろう。強く……なりたいたらだろう……」

「強く、な、なりたい、大嫌いな、私自身を、少しでも、好きになりたいから……！」

どうにか奮起するが、話すこともままならず、立ち上がることも出来ない。そうこうしている間に10分経過してしまうため、私と曙がどうにか立ち上がらせる。脚がおぼつかないため、私達が支えてやることで何とか歩かせる。

「休憩時間、終了しました。では次、体幹を鍛えるための腹筋。二二駆の皆さん、彼女達の足を支えてあげてください」

走り込んだ後は筋トレ。浜辺から移動したのは、浜辺の砂で汚れないようにするためか。私達は既に砂まみれではあるが。

「若葉にはボクがつくよ」

「ああ。頼む」

私には皐月が担当に。同じように曙には水無月、三日月には文月、雷には長月が担当としてつく。

これは駆逐隊の中でも同じ役割を持つもの同士らしい。つまり、私はず皐月に追いつけというこのようだ。戦闘をしている姿はまともに見れていないが、私が目標とする俊敏性を活かした戦い方をするのだろうか。

「準備出来ましたね。では始めます」

こちららも地獄。間髪を容れずに回数がカウントされる。休んでいる暇がない。筋肉が悲鳴をあげているのがすぐにわかった。

「ほいほい、頑張れ頑張れ」

足を支えてくれている臯月に煽られ、必死に縋り付く。

腹筋に一番ついていけたのは雷。毎日の家事で全身が程よく鍛えられていたのか、前衛を任せられる私や曙よりも長く続いた。曙もその持久力の高さで2番手。私が追い続ける形で3番。三日月はやはり早々にダウン。

「腹筋、やめ。では次は腕立て伏せです」

今度は休憩無しと来た。心を折られそうだったが、折れてなんていられない。ここからはもう全員気合だけで動いていたと思う。

鳳翔の訓練は、初日からトップギアだった。役割ごとの個別訓練などはまだ入れず、とにかく基礎をみっちり詰め込まれる。

だが、誰も音をあげるものはいなかった。ついていけない三日月もそうだ。この施設を守るため、元凶の鎮守府を倒すため、そして自ら成長するため、弱音は吐かず、目も死んでいない。

強くなる。今はそれだけだ。

成長

早速始まった鳳翔直々のスパルタ訓練。基礎訓練の段階から全員が動かなくなるまで身体を酷使させられ、今までにないほどに疲労していた。

私、若葉は、日頃からランニングをしていたおかげでギリギリ動けるくらい。艤装整備も筋トレの一種になっていたのかもしれない。深海棲艦の心臓と肺を持つ曙ですら、息切れが無くなっても四肢がまともに動かせないほどの疲労に苛まれていた。

だが、悪くない。自分の成長を表す疲労だ。辛ければ辛いほど、私は成長していると実感できる。

「午前中はこれで終了です。身体を休めた後に昼食です。午後から再開しますからね」

言葉も無かった。死屍累々と言っても過言ではない。特に三日月は、4人の中で一番体力が無かったせいで起き上がることも出来なくなってしまうた。

「昼食の前にお風呂に入ってください。飛鳥先生に頼んで、特別な風呂を入れておきました」

「そ、それ何……？ 後からお風呂掃除しやすい……？」

「雷さんは家事一筋なんですね。その辺りは心配しないでください、ただの薬湯ですから」

妙なところに気を回す雷だが、薬湯なら大丈夫だろう。何かの効能があるだけで、普通の風呂と変わらない。入浴剤を入れたと思えばいいだけだ。

「はい、三日月、立ち上がるよー」

「みかちゃん少しだけ力入れてねー」

起き上がれない三日月は、皐月と水無月が肩を貸して立ち上がらせる。まるで脱け殻のようになってしまった三日月は、苦手な方の姉2人ですら何の抵抗もなく受け入れ、ヨタヨタと風呂の方へと向かっていった。

「最初はこんなものです。あの2人も同じ感じでしたよ」

「口から魂抜け出てた感じだったんだよお。あたしも最初死ぬかと思っただけ」

なかなか怖いことを言う。まだまだ続くこの訓練で生死まで問われるとなると話が変わってしまう。

「安心してください。絶対に死にませんし、必ず成長が実感出来ます。それに、命の危険があるような訓練を、飛鳥先生が許すと思いますか？」

「……まあ……そうだな」

「さあさあ、皆さんお風呂に入ってください。時間は有限ですからね」
急かされ、私達もフラフラになりながら風呂へ直行。自力で歩くことが出来ただけでも良しとしよう。

私が風呂に入ると、既に三日月は風呂に浸けられていた。運んでいった皐月と水無月が服を脱がして入れてくれたのだろう。先程すれ違ったので、やることやったらさっさと戻っていったようだ。

聞いていた通り、風呂は薬湯というだけあって不思議な色をしている。少し緑がかっており、フローラルな香りがする。ただの入浴剤か何かか。

「これすごいです。浸かっているだけで疲れが無くなります」

先程まで言葉も無かった三日月が、訓練した後とは思えないほどにピンピンしていた。

私達も湯船に脚を入れると、その温かさが全身に流れ込むような感覚がした。ただの気持ちいいとは何かが違う。と、考えているうちに、走り込んだことで疲れ切っていた脚から疲れが抜けたようだった。

この効能、思い当たる節がある。激痛に苛まれていても、それを体内に吸収させることで一切の痛みを消し飛ばしてしまう薬。私達には良薬でも、人間には劇薬となってしまうアレ。

「これは……まさか高速修復材……？」

「それを数倍薄めて作られた入浴剤みたいなものですよ。なので、これは人間にとっても劇薬ではありません。良いものとも言えません

が

気付いたら後ろに鳳翔が立っていた。4人揃って悲鳴をあげかける。

気配も無ければ匂いも無かった。本当に知らぬ内に真後ろにいた。あの時の夕雲のように。

「これは各鎮守府に配布されているものなんですよ。これで湯浴みすると、疲れがすぐに飛ぶ優れたものです。怪我を治すのには向いていないんですが、擦り傷程度ならそれで治りますよ」

「これ凄いわ！ さつきまで吐きそうなくらい疲れてたのに、もう無いもの！」

雷も大絶賛。湯船には駆逐艦なら4人入って少し余裕があるくらいなのでちょうどいい。

これからは鳳翔の訓練が終わるたびにこの薬湯に浸かることになるらしく、それにも理由があった。

「この訓練のために……持ってきてくれたんですか？」

三日月が問うと、鳳翔は勿論と頷く。鎮守府の浴場に常設しているものとはいえ、外部へと易々持ち出せる物でも無いだろう。来栖鎮守府は、これが無くてもいいくらいの実力者揃いの鎮守府と考えてもいいかもしれない。

「とある人に教えてもらったのですが、筋肉というのは傷付いた後に修復されることで成長するそうです。なので、本来は長く休息が必要なのですが、この湯船にはそれを省略することが出来ます。つまり」

「吐く程鍛えてお風呂に入れば、すぐに成長するってことかしら」

「そういうことです。艦娘ならではの急速成長ですね」

ここまでのスパルタ訓練ではなく、適度な訓練で成長を促すことが基本だそうだ。私達がやっているのは、有限の時間を有意義に使うための、急ピッチな訓練。それでも身になるのが艦娘の凄いところ。こういうところだけは、自分の兵器である部分に感謝した。

「ごめんなさいね。貴女達を即戦力になるように鍛えるために、あそこまで厳しい訓練にしてみました」

訓練中の雰囲気は夢だったかのように、おっとりとした母性的な態

度。これが本来の鳳翔なのだろう。家庭的で優しい、鎮守府の誰からも好かれる母のような人。なんでも、『全ての空母の母』という異名を持つているらしい。

「若葉は大丈夫だ。この風呂さえあればいくらでもやれる」

「私もよ。さつさと強くなりたいもの」

私も曙も、前衛担当というのもあってやる気は充分。私としては早く実戦訓練にも入りたい。そのためには、今の基礎訓練についていけるようにならなければ。

「私も大丈夫。この施設を守るためには、ここで頑張らなくちゃ！」

「……はい。私も……私も、もつと強くなりたいので」

雷と三日月も、気合いが入っている。まだ午前中しかやっていないのだから、尻古垂れるには早すぎる。

「よろしい。貴女達の気持ち、伝わってきました。昼食は私が作りますので、今はゆっくり休んで午後に備えてください」

「わあ、いいの?」

「住み込ませてもらうんですから、それくらいはやらせてもらいますよ。料理は得意なので」

事実、風呂上がりに出してもらった昼食は、今までに食べたことがないほど美味しかった。雷がレシピを教えてほしいと縋り付いたほどである。

強く、優しく、万能な鳳翔。弱点とかあるのだろうか。間違いなく、来栖鎮守府ではトップクラスの存在である。

昼食後も同じように訓練を続ける。シロクロの手伝いの下での長距離着衣遠泳から始まり、午前と同じようなランニングや筋トレによる基礎訓練が続けられていく。

そもそもこれについてこれなければ、役割の訓練には移ることが出来ないということなのだろう。まずはこれで練度を底上げし、初めて戦うことが出来る。

「三日月……大丈夫か……」

「ひっ……ひっ……」

虫の息の三日月。どうあっても手が緩められないため、三日月は訓練についていくのがやつとの状態。先程休憩中に吐いているのまで見かけた。薬湯の風呂にさえ入れればこれもすぐに治るのだが、まだその時ではない。

「継続が難しいようでしたら、三日月さんは体調が戻るまで見学でもいいですよ」

「いい、いいです……続けます……。ここで諦めたら……も、もっと、自分が……嫌いになります……」

本来の三日月は努力家気質がある負けず嫌いな性格らしい。トラウマでいろいろ捻じ曲がってしまったこの三日月にも、その気質はしっかり残っている。

さらには、今の三日月には何よりも『自分嫌いを克服したい』という願望がある。それに負けず嫌いが重なって、意地でも訓練についていこうと躍起になっている。

「私は……もう見ているだけは……嫌なんです！」

曙が死んだ時に動けなかったことが余程心に刻まれてしまったのだろう。死にかけたトラウマよりも深い心の傷となり、それを払拭することが行動理念となっていた。

それを汲み取った鳳翔は、三日月の手を引き立ち上がらせる。足は覚束ないが、しっかりと地を踏みしめた。目は死んでいない。

「いいでしょう。しっかりとついてきなさい」

「はいー」

人間嫌いと艦娘嫌いは何処かに行ってしまったかのように、心身共に鍛えられている。この短時間で一番成長したのは、間違いなく三日月だ。

私達も、午後になってからすぐに自分達の成長がわかるようになっていた。ランニングでの疲れ方が先程と違う。持久力はあまり変わっていないが、脚の疲れは先程よりも緩い。薬湯による急速な筋肉の修復の効果がもう出ている。

「はあ……はあ……つぐ、キツイな……」

「脚が……勝手に震えちゃう……」

それでも疲労困憊状態なのは変わらなかった。私と雷は揃って息も絶え絶え。あまり使つてこなかった筋肉を使っているせいで、痙攣まで起こしてしまっている。今はしっかりとストレッチをする時間だ。

「最初から全員気絶しないとは、大したものだな」

「ね。水無月達、初めてこれやった時全滅だったよ」

そんなことを言う長月と水無月だが、私達を手伝ってくれているにもかかわらず、やはり息は整ったまま。やっている最中は息を切らすこともあつたが、呼吸が元に戻るのがやたら早い。それだけ鍛えられているという証拠である。

「きつつ……息は整ったけど脚が少し痛いわね……」

ストレッチをする間に曙は脚の痛みを訴える。急激な疲労により筋肉が悲鳴をあげているのだろう。私も脚やら腕やらが痛い。筋肉をマッサージするように揉んでみると、鈍い痛みが走った。

だが、この痛みも疲労と同じく私達を強くしてくれることはわかっている。筋肉を傷付け、それを修復することで、私達は今よりもずつと成長するのだ。そうなるとこの痛みすらも喜ばしいものを感じる。

「時間です。ストレッチは終了。息は整いましたか？」

「ああ、行ける」

「この程度で止まらないわ。まだやれる！」

「では続けます」

少し痛む程度なら問題ない。戦場ではこれ以上の痛みの中で戦うことだつてあり得るのだ。まだまだやれる。

午後も日が暮れるまで延々と基礎訓練を続けることになった。それまでに全員が吐き、何度も倒れた。だが、気を失う者はおらず、弱音を吐く者もない。全員が疲労困憊でも前のめりだった。その姿に鳳翔も感心したらしく、明日からはもっと激しくしていきたいと話すほどだ。

文月達第二二駆逐隊は、日が暮れる前に帰投した。夜は別の者がこの辺りを巡回してくれるらしい。名残惜しいが、また近々来ると手を

振っていた。次に会うときは、より強くなった私達を見せたい。

訓練後、どうにか風呂まで辿り着き、4人同時に湯船へ。午前と同じように、浸かるだけで疲れが吹き飛ぶ。なんて便利なんだろう。

「このお風呂が無かったらぶっ倒れてたわね……」

「あるから飛鳥医師が許してるんじゃないか？」

「違うわい」

壊れていた筋肉が修復されていくのがわかるようだった。ジンジンと湯が染み渡る。午前中よりもよく効いている気がした。午後の方がハードだったからだろうか。

「三日月、大丈夫？ 何度も吐いてたみたいけど」

「……大丈夫……じゃないです。でも、これを乗り越えたら……自分のことを……好きになれるかなって……」

クスリと、小さく微笑んだ。なかなか見せない三日月の笑顔に雷もご満悦。同じ後衛担当として、より強い仲間意識を持っているようだ。

「基礎訓練、いつまで続くのかしらね」

「まだ続くと思う。若葉達は土台が無いからな」

「その間にあいつらが攻めて来なきやいいけど」

曙の不安はごもつとも。向こうだって待っててくれない。こちらの一番来てもらいたくないタイミングを狙っているのだと思う。

前回の失敗を繰り返さないように、今日はシロクロが近海を潜って敵潜水艦がいなかどうか確認していたらしいが、今のところ見つかっていない。流石に同じ手段が通用するとは思っていないか。

ならば、こちらが今こういうことをやっているということは向こうには伝わっていないだろう。鍛えるなら今だ。弱者をいたぶるように攻めてくるのなら、その弱者が返り討ちにしてやる。

「誰がどう来たって、私達がやることは変わらないわ！ この施設を守るの！」

「ああ、そうだな。ここは若葉達の居場所だ。他人に潰されるだなんて真っ平御免だ」

そのためにも、早く強くなりたい。焦りは禁物だが、時間が足りな

いのも確かだ。せめて対等に戦えるくらいにまでは成長し、外の手を借りずともこの施設の平和を守れるようになればいい。

「……頑張ります。私も」

「その調子よ！　頑張らましょー！」

みんな気合い充分。吐くほど辛い訓練だろうと関係ない。これを乗り越えれば欲しい力が入るのだから、倒れている暇はないのだ。

戦いへの備え

曙殺害の襲撃から丸5日、鳳翔の訓練を始めて丸3日が経過し、訓練開始から4日目の朝を迎えた。私、若葉は第五三駆逐隊の仲間達と共に、日々研鑽を積んでいる。

基礎訓練を徹底的に行い、薬湯での回復と、鳳翔手製の栄養面まで考えられた食事、そして飛鳥医師による完璧な健康管理で、私達は短時間で急成長を遂げることに成功している。現在進行形で成長中で、既に自分でもわかるほどに力が身についた。たった3日でこれかと、驚きが隠せない。

訓練が行われていても、日課となったランニングと、それに合わせて行なわれるセスとエコの散歩は当然参加。我ら第五三駆逐隊は、雷を除き、この散歩に同行している。私はトレーニングのため。三日月は癒しのため。曙は成り行きだったが、私と同じ理由になりつつある。

雷は今、鳳翔に教えを請い、朝食の準備をしている。家事全般、特に料理は戦闘技術よりも教えてもらいたいと話していた。

「よし、エコ、来い」

手をパンと叩くと、力一杯じゃれついてくるエコ。以前までなら、飛び付かれただけで、その質量で押し倒されてしまっていた。あれを普通に受け止められるのは、持ち主であるセスくらい。それが、立ったままで何とかなるくらいにまでは鍛えられていた。

「すごいな。3日間でそれ？」

「激しすぎるくらい基礎訓練が効いている」

私の後は三日月に飛び付いたが、その三日月も倒れることなく抱きしめていた。周りの浮き輪達もやんややんやと騒いでいる。

最も大きな成長を遂げたのは、やはり三日月だった。訓練を始めた時点で、4人の中では一番非力だったが、今ではみんな並んで同程度にまで鍛え上げられていた。伸び代も一番あったのだろう。

「吐くほど訓練をしてるんだから、結果に出て当然よ」

「だな。毎日身体がギシギシ言う」

薬湯の風呂に入ればどうにかなるとはいえ、それまでは油を注していない機械のように身体が動かなくなる。疲れと痛みでガタガタ。終わってから風呂までの道程が一番の地獄という。

「自分の成長がわかります……エコちゃんが抱きかかえられるなんて、思っても見ませんでした」

「アンタ、一番頑張ってるんじゃない。自信持ちなさいよ」

「そう……ですね。少しだけ、自分が好きになれたかもしれません」

それでもジャージはフル装備。いつか肌を見せるのが苦では無くなる時が来ればいい。

最初の襲撃から今日で6日目。仲間達が全員自沈した後、出直してくると言って帰った夕雲だったが、未だに再襲撃が来ない。突然の襲撃に備え、連日連夜、来栖鎮守府から警戒隊がやってきている。海中もシロクロ筆頭に常に監視は怠っていない。

朝食時、みんなが集まる場所で、情報共有を行う。まずは鳳翔が警戒隊とやり取りをした結果を話し始めた。

「我々が訓練中、1日に数度、彩雲が飛ぶのを見かけたと聞いています。私も訓練中に何度か見ました」

彩雲、所謂艦上偵察機が、中立区の近海を偵察していると。私達は訓練に必死だったため気付かなかった。

本来そんなことはあり得ない。警戒隊がいること自体がおかしいのだが、偵察機が飛ぶことだって無い場所だ。1度だけならともかく、何度もとなるとさらにおかしい。

どう考えても、夕雲の属する元凶の鎮守府が、こちらを偵察しているとは思えなかった。その結果、今の警戒態勢を見て襲撃のタイミングを探っているのだろう。

「ふむ……なら、こちらが襲撃に備えているのもバレていると考えた方がいいか」

「はい。タイミングを図っていると思われそうですね」

今は警戒隊からこちらの戦力を計っている状態なのだろうか。少なくとも実際に戦った鳳翔や羽黒、第二三駆逐隊の4人の実力は割れ

ているはずだ。そこから鑑みて、あちらも作戦を練っているのだろう。

ルール違反をする割には無駄に慎重。バレないようにやるプロか。ふざけたところに特化している鎮守府である。

「正直、来るなら夜だと思っっている。下手をしたら嵐を待っているな」
「嵐の夜に決まって出撃し、証拠隠滅を図るとのことでしたね」

「ああ。そのくせ、しっかり戦果だけは上げる。明らかに計画的なズル賢さだ」

夜に来る理由はいくつもあるが、そのうちの1つは鳳翔封じ。空母は夜に戦うことが出来ないため、こちらの戦力が大きく削がれることになる。嵐なら尚更だ。こちらの特性はおそらくわかっていないだろうが、嵐の夜だと、私達は確実に力が衰える。

「前の嵐……いつでしたか」

「エゴを治療して、セスが住み着いた時だから、約2週間前だ。早ければあと1週間もしない内に嵐が来るぞ」

定期的に嵐が来るこの地域だからこそ、戦場では不利になる。天気予報などで予測が出来てしまったなら尚更だ。あちらは気に入らないことに嵐の中の戦闘に慣れている。捨て駒を使い狙いを逸らし、その間に戦うという卑怯な戦術ではあるが。

「それまでに来栖には敵の鎮守府を見当つけておいてもらいたい」

「あちらもなかなか賢しらでして。足が付かないように行動しているようです。生きた証拠がいるので、軍事裁判の際にはありがたいですがね」

その証拠というのは勿論、私達のことである。いくらでも証言しよう。そして、はっきり言ってやる。お前のせいでこんな身体になったんだと。とはいえ、私達はこの身体を受け入れているため、表面上である。

「私のこともバレてんのかしらね。殺したのに生きてるって」

「おそらくは。若葉さんや三日月さんのことはどう思っているかは知りませんが、曙さんは重要な位置にいますから。また確実に狙われるでしょう」

「怖いこと言わないでくれる!?!」

わざわざ暗殺に来たくらいなのだから、口封じは確実に狙ってくるだろう。今のところ、この事件を知っているのは来栖提督とその鎮守府のみなのだから、それ以上拡がることは確実に阻止してくる。

来栖提督は来栖提督で、上にも多少は掛け合っているらしいが、中立区での戦闘な上に証拠が一切残っていないという状態。さらにはその戦闘に味方の深海棲艦というイレギュラーが絡んでいるというのが、説明をさらに難しくしている。最初からこちらは不利であった。

「理解のある上役はいる。僕がまだ鎮守府にいた時にお世話になった人がな」

「やめるつつつた時に理解してくれたつつ一人か」

「ああ。あの人は今でも話をする。立場が立場だからなかなか出来ないんだがね」

飛鳥医師がそう言うくらいなのだから、余程の人なのだろう。その人に頼れば、敵を追い詰めることも出来るかもしれない。

「あ、そうだ。いくつか武器の修理終わったぜ。シロクロにや使えない小型の主砲が2つと、三連装魚雷が2人分だ」

「訓練に使いたいところですが、武器なので難しいところですね。中立区であることがそういうところで足を引つ張ってきます」

摩耶の艦装整備も3日あれば大きく進み、私達が装備出来る武器をいくつか修理しておいてくれた。これも艦娘と深海棲艦の武器のハイブリッド。継ぎ接ぎな私達に相応しい、継ぎ接ぎな武器。

しかし、殺傷力のある主砲であるため、ここで訓練することは難しい。というか無理。規則を破ることになってしまう。

「それならば、中身弄って水鉄砲にするか? ほら、普通の鎮守府って訓練でダミーの弾使うって言うだろ。似たようなもんだ」

「確かに。ですがあれは専用の弾ですから、このために用意することとは出来ません。水鉄砲だと感覚が鈍るかもしれませんが……」

「私達の艦装なら、普通にそれくらい出来るよ」

ここでクロが予想外の発言。

「私達は弾とか自分で作らなくちゃいけないからね。海水からワーツで作るんだよ」

「……マヤ……その主砲……私達の同胞の主砲……?」

「ああ、ベースになつてんのはな。砲身とかは艦娘の艦装から拝借してるけどよ」

それなら出来るから、朝食を終えた後に実践してくれるとのこと。これを使えば、水鉄砲と言いつつも通常の砲撃訓練が出来る。深海棲艦の技術、恐るべし。

「今はそんなところか。鳳翔、4人の調子は」

「めきめき上達していますよ。スパルタになつてしまつて申し訳ありませんが、薬湯のおかげで後を引いていません」

「それなら良かった。怪我をしては元も子もないからな」

私達の訓練は、怪我もなく順調。今までの3日間と同じように今日も続けていく。

成長していることがすぐに実感出来るので、やる気はずっと漲つたままだ。戦闘で成果を出したいところではあるが、それはまだまだ先の話。こちらを攻めてくるであろう部隊を返り討ちにすることが、私達第五三駆逐隊の初仕事になるだろう。

朝食後、早速シロとクロが深海棲艦の艦装の使い方を実践してくれるというので、一同は工廠は移動。

摩耶が用意してくれたのは、曙の持つ艦娘の小口径主砲と近い形をした継ぎ接ぎの主砲。シロクロの主機に接続することは出来ないが、装填だけはシロが出来るそうだ。

「簡単だよ……海水を潜らせて……」

主砲を海中に沈める。そんなことをしたら艦娘の主砲なら壊れてしまいかねないが、深海製故に問題ないようである。使った後の整備は入念に行なつた方が良さそうではあるが。

「終わり」

「は? そんだけ?」

「これだけ……これで撃てるよ……」

艦装を装備した摩耶に手渡した。海水でビショビショだが、それが主砲に染み込んでいくように乾いていく。

艦娘の艦装は武器も込みで鋼材やら何やらで作られているが、深海棲艦の艦装は成分が謎な部分も多い。摩耶は深海棲艦の艦装もバラしたり組み合わせたりしているが、どうしてもわからないパーツがチラホラあったそう。今回はそれがこの効果を引き出しているらしい。

「それじゃあ試し撃ちするぜ。みんなちよつと離れててくれ」

工廠から外に向けて主砲を構える。弾の威力とかも知るために、仰角を少し下げ、海面に狙いを定めた。

「シロ、今からは水鉄砲なんだよな？」

「うん……水しか入ってないから……ね」

なら安心と、みんなが離れたことを確認してからトリガーを引いた。

刹那、この施設ではなかなか聞けない号砲と共に、海面が破裂したかのように水飛沫が上がった。思った以上の威力。これが水鉄砲だというのだから、実弾にしたらもつと危険だろう。

深海棲艦は駆逐艦でも並ではない火力を持つものがあるという。その原理がわかったような気がする。小口径主砲でこれなのだから、戦艦だとミンチになってしまいそう。

「やっべ……予想外だぜこれ。砲身がイカれてないか？」

「大丈夫……でも、もう少し穴は大きい方がいいかも……」

これを見た飛鳥医師が閃いたような表情に。

「摩耶、武器は全てこの方向で行こう。非殺傷兵器なら、敵を撃つても生かして倒せる」

「こんだけの威力ありや気絶させるのは余裕だろうな。ちよいと怪我させる可能性はあるが、死んでなけりややり直せるか」

確かに、この武器なら多少の怪我はするが死ぬことは無いだろう。当たりどころと言いつい出したらキリはないが、最初から命を取る気は無いいと言いつている。

とはいえ、先程も鳳翔が言った通り、水鉄砲とはいえ武器は武器だ。

中立区の規則に違反している。そこをどう切り抜けるかは、私達がどうこう出来る問題では無い。飛鳥医師に任せるしか無いだろう。

「認可が下りるまでは使うことは出来ないだろうが、準備だけはしておいてくれ。事が事だから、上の説得はしてみせる。これは僕達の正当防衛だからな」

「私が持参した近接戦闘用の武器も、認可が下りない可能性がありません。訓練はそれでやってもらいますが、本番では違うものを使うことになるかもしれません」

武器の問題はどうしても付いて回ることになる。あちらはこちらを殺すためにルール違反も関係無く挑んでくるが、こちらはルールを守って言い逃れの出来ないようにしていかなくてはいけない。

こちらは被害者だというアピールにもなるわけだが、単にこれはプライドの問題。ゲスで非道な夕雲のやり方も、洗脳により捻じ曲げられたというのなら更生の余地はあるはずだ。

「それじゃあ、同じもんを4人分用意しておく。魚雷は流石に同じようには出来ねえから、今度来栖提督が来た時に持っていつてもらおうか」

「そうしよう。あとは……摩耶、君は訓練を受けなくていいのか？」
飛鳥医師に言われ、何やら考える顔。

自衛の手段は全員が持ち合わせておいた方がいいに決まっている。摩耶は私達と違い重巡洋艦であるため、そもそもの地力が違う。それでも、手段を学んでいる私達と比べるとやはり素人になってしまうだろう。

「あー……今は準備に専念する。こいつらと同じ訓練は、準備が出来次第、後から追うぜ。それに……いや、いや。今はいい」

少しニヤツとしたのがわかった。隣に立つ鳳翔からも、何やら不思議な匂いがした。何か裏があるような、そんな感覚。

「まあ、これで武器の作り方はわかったからよ、すぐに全員分用意する。今日いっぱいありや4人分出来ると思う」

「助かる。この施設の存亡を賭けた戦いになってしまったからな」
戦いへの備えは順調に進んでいる。あちらが慎重になればなるほ

ど、こちらは不利を覆す事ができる。嘗められている内に、こちらは力を得るのだ。

実戦訓練

「さて、まずは皆さん、3日間よく頑張りました。基礎訓練は一旦終了します」

訓練の時間。いつもならまず限界までのランニングが始まるところだが、鳳翔が基礎訓練終了の宣言をした。今回からは艤装を装備した状態での訓練となる。そのため、浜辺ではなく海上。

朝の散歩で、エコの飛び付きを支えられるようになるまでは自分の成長を実感している。押し倒されず、安定して受け止めることが出来たので、下半身の安定力が段違いに上がっているのがわかる。

「今日からはより戦闘に特化した訓練を開始します。前衛は格闘訓練を、後衛は射撃訓練です。摩耶さんの水鉄砲が2つ出来ていて良かったですね」

本格的な戦闘訓練。私、若葉と曙は前衛ということのでついに格闘の訓練を行うことになる。

鳳翔に渡された武器は、私はナイフ、曙は槍。どちらも刃は潰されており、殺傷力は皆無。私のナイフはともかく、曙の槍は取り回し重視というイメージ。

「こういうの持つてる艦娘いたわよね」

「叢雲さんですね。あの子は緊急手段ですが、貴女は主武装ですよ」

「わかってるわ。ホント、艦娘から離れていくわね……」

槍を上げしげと見ながらぼやく曙。私も生まれた直後はこんなことになるだなんて予想だにしていなかった。

だが、ナイフを握ると両腕が少し疼くような感覚。戦闘中にも感じた、戦闘を求めている疼き。この腕の本来の持ち主の感情が残っているかのようだ。

「私達は……これですか……」

「さつき摩耶さんか使ってるの見てたけど、やっぱりちよつと怖いわよね」

三日月と雷は、出来上がったばかりの水鉄砲主砲を装備。

通常の雷は主砲を艤装側に取り付けるらしいが、この艤装は定期的

に海水に潜らせたいため、手で持つことで装備とした。三日月は元から手持ちのため問題なし。

「ここからの訓練ですが、私が両方見ることは少し難しいです。ですので、後衛組には助っ人を呼びました。私、弓は出来ませんが主砲は少々苦手です」

苦手なだけで、卒なくこなすのだろうかとみんな察した。

この3日間で、鳳翔がどんな人なのかは痛いほどわかっている。弱点の無い完璧超人。むしろ何が出来ないのか教えてもらいたいくらいである。空母故に魚雷が使えなかったりする程度か。充分すぎる。「と言っても、貴女達とは面識がある人なので安心してください。羽黒さんです」

なるほど、と私は納得。夕雲との戦いで、不意打ちで主砲を破壊するくらいの命中精度を誇り、リミッターが外された敵軽巡を相手取っても、まったく臆さず戦闘出来ていた。控えめな表情が嘘みたいに見える。勇ましくなるのは、同性の私から見ても惚れ惚れする。

「格闘戦術は私が教えます」

「ホント何でもやれるわね……」

「提督とガムシヤラに走ってきた結果ですよ。空母は接近されたら終わりですしね」

そう言つて鳳翔が手に持つのは、曙の持つ槍とは少し違う薙刀。刃が潰されているのではなく、そもそもゴム製のもの。これなら斬られてもそこまで痛くはない。傷が付くことも無いだろう。

「あ、羽黒さんが来ましたね。では各々、訓練を始めましょうか」

ここからが本番だ。鳳翔が武器を持っており、実戦訓練と言うのだから、私達はこの鳳翔相手に戦うことになるのだと思う。既に軽く恐怖を感じてしまっていたが、戦場では敗北が生死にかかわるのだ。今は訓練、負けたっていい。まずはやれることを。

射撃訓練の雷と三日月は、羽黒が施設を挟んで反対側へと連れていった。水鉄砲とはいえ、流れ弾が当たっても困るし、そもそも場所を大きく使うのが後衛組だ。私達と一緒にわちゃわちゃやるのはま

だ先。

「さて、若葉さん、曙さん。私から教えることはありません。この訓練の目標はただ1つ、私に1度でもいいので、その武器の刃を当ててください」

ナイフや槍の扱い方を教えてくれるというわけではない。私には私の、曙には曙のやり方というのがあろう。教わった通りに動くのではなく、自分の動きやすいように動くのが、戦闘では最善。型に囚われず、我流で戦い方を作れと、鳳翔は言っている。

そういう意味ではスパルタである。ただ武器を渡されて、やってみると言われただけ。おそらくこの訓練、鳳翔に当てるか、鳳翔がやめると言うまで延々と続く。ただ走るだけ、筋トレするだけとはレベルが違う。急に上がりすぎ。

「1つ質問がある」

「何ですか若葉さん」

「敵は主砲やら魚雷やらを使ってくる。そちらの回避訓練が先ではないのか」

これは普通に疑問。まず確実に、敵が近接戦闘を仕掛けてくることはない。私達が近付いても、手に持つ主砲で攻撃してくるはずだ。だが、鳳翔はそうではなく、自身も近接戦闘を行うことで、私達を鍛えようとしている。

意味が無いとは思っていない。だが、それよりも優先するものがあるのでは無いだろうか。

「近くが避けられるなら、遠くも避けられますよ。避けるだけなら遠くの方が簡単です。それに、主砲も魚雷も、放つ時に一拍置くでしょう。それを判断できる目を鍛えてもらう意味もあるんです」

つまり、敵の行動を見てから自分の行動を決めるまでの時間を縮める訓練。敵の一挙手一投足に注目し、即座に自分に反映させるための目を鍛えると。

「それと……当たらない避けられないにしろ攻撃することが出来るのと、避けられるとはいえ攻撃すら出来ず延々近付くことが出来ないの、どちらがフラストレーションが溜まりますか？」

「……後者だな」

「理解が早くて助かります」

同じうまくいかないでも、まだマシンな方を選んでくれたということか。

「つと、訓練は少し待ちましょう。今朝言っていたのはアレです」

視線を上へ。釣られてそちらを見ると、1機の航空機が猛スピードで空を駆けていた。あれが彩雲、艦上偵察機。

「わざわざ見せつけるように偵察しているようですね。脅しのつもりなのでしよう。こちらは取るに足らない存在なのだと言っているのでしょうか」

それに対し、微笑みながら手を振る鳳翔。別に見られても構わないという態度である。あちらの挑発に対し、こちらも挑発。いい性格をしている。

「嫌味か」

「勿論。あちらは私達のことを下の下くらいに見ているのでしよう。それでも嵐の夜を待っていきそうな慎重派ですがね」

証拠隠滅を兼ねているのはわかっているが、確実に倒せる状態で圧勝しようとしているのだろう。そうはいかない。そのための訓練だ。

「では、改めて」

彩雲を見送った後、こちらに向き直った。ここからは訓練だ。私と曙で力を合わせ、鳳翔に1撃入れられれば終わり。出来なければ延々と続く。

今後の戦闘では、私は曙とコンビだ。お互い駆逐隊の前衛だが、私はさらに前。ここで連携も覚えておきたいところである。

鳳翔は薄く微笑みながら、薙刀のゴムの刃先を『いつでもかかってこい』と言わんばかりにチラつかせる。

あちらは達人、こちらは素人。まず一筋縄ではいかない。ガムシヤラに立ち向かっても、適当にいなされるだけだろう。瞬時に考えなければ。

「曙、若葉が先に行く。後からそのリーチで頼む」

「了解。っても、初めて使うんだから、手探りよ？」

「若葉もだ。手足がある程度勝手に動いてくれるが……な！」

鳳翔は曙と同様にリーチが長い。ナイフ一本で立ち向かってでも返り討ちに遭うに決まっている。

「真正面からですか。それは自爆覚悟に見えますよ？」

「わかってる」

目測ではあるが、鳳翔のリーチを計算し、土壇場で真横に避ける。横薙ぎにされるなら、それをナイフで受けつつ曙に任せ、曙の迎撃に入るなら即座に切り返して突っ込む。

「いいですね、とてもいい。自分と仲間と相手のリーチがよく見えている。ですが、そんな簡単にいかせるわけにはいきませぬね」

鳳翔はそこで曙側を選択。避けた私を薙刀の柄で牽制しつつ、刃の方は曙の方へ。一瞬だけ柄が私の顔面に向けられたせいで怯んでしまい、足が止まる。直後、曙の持つ槍が強く打ち払われており、そのまま薙ぎ払われ刃が私の首筋に突き付けられていた。

「はい、2人とも1回ずつ死にました」

「ったあ!?! ゴムとはいえ脇腹払われたら痛いわ!」

「本物だったら腸をぶちまけていましたよ。よかったですね、偽物で」私は言葉も無かった。痛みがない代わりに、冷や汗がドツと流れた。ほんの少しの躊躇で、私の首が飛んでいる。戦場ではこれが常だと改めて思い知った。

「最初にしては悪くない作戦だとは思いましたが、それは単調ですね。では次」

先程と同じように構え、先程と同じように刃をチラつかせる。私達の最初の攻撃は無かったことにされた。

もっと早く判断をしなくてはいけない。もっと素早く動かなくてはいけない。ここで鳳翔に何度も殺されることで、それを学ぶ必要がある。最初は無茶でもいい。自分の戦い方を探すのだ。

鳳翔は私のことを、腕力と俊敏性がトップと言ってくれた。そして、曙は持久力がトップだと。ならば、私が掻き回して相手を消耗させるのはどうか。

「次は若葉がとにかく動く。曙は隙を見て攻撃してくれ」

「動き回るなら私の方がいいんじゃないの……？」

「まずは若葉の速さでやってみる」

素早く鳳翔の真横へ。薙刀の横をすり抜けるように突っ込み、薙ぎ払いもナイフでガードすることでカバー……出来るかと思いきや、勢いだけで私ごと飛ばされた。

だが諦めない。着地すると同時に同じように突っ込む。今は雑だが、これを繰り返して打開策を探す。

「猪突猛進なのは良いですよ。ですが、少し危ないですね」

顔面に向かっての突き。先程もやられたが、今度は怯まない。紙一重で避けつつ、薙刀を掴む。その隙さえあれば、曙に攻撃してもらおうチャンスが掴めるはずだ。

だが、ここで不意に妙な感覚を感じた。曙に流れるキナ臭い匂いというか、とにかく嫌な予感がした。

「退けー！」

「ちよっ!？」

掴んでいる薙刀に強烈な回転がかけられ、堪らず離してしまった。それをそのまま曙の方へ引き、柄がともに腹に入ってしまう。さらには曙を突いた反動で私も突かれ、ゴムの刃が胸に直撃。

グニヤリと曲がるため貫かれることは当然無いのだが、柄が打ち付けられたために肺の中の空気が抜かれるようなダメージ。いきなり呼吸を止められたように思えた。

「げっほ！ うえっへえっ!？」

「女の子がしちやいけない咳をしちやってますね」

「それを仕掛けたのはっ、アンタでしょうがっ！」

打たれた腹を押さえながら咳き込む曙。私は私で、必死に呼吸を整えながら、摩擦で熱を持ってしまった手を摩り、痛みを取っている。手首の返しだけで持っていられないほどの回転を生み出した鳳翔は、本当に何者なのだ。

「次は役割を変えよう。曙、頼む」

「アンタが前に出るための攻撃ってことかしらね。やれることやって

やるわよ」

曙は曙で、同じ長柄物を持つ鳳翔を少し真似て、刃をチラつかせるように前に構える。自分のスタンスを決めるため、取り入れられるものは全て取り入れていこうと考えているようだ。

「模倣もいいでしょう。試すことに価値があります」

「いろいろやらせてもらうわよ。これはそういう場なんですよ?」

「その通りです。そうやって感覚を研ぎ澄ましてください」

同じ構えでは当然、年季の入っている鳳翔に分がある。さらには鳳翔の評価で非力と言われただけあり、瞬時に構えが崩され、槍が打ち上げられた。

その隙に、曙が攻撃を喰らう前に私が鳳翔に一撃を入れる。これならどうだ。

「仲間を犠牲にするような戦い方は評価出来ませんね」

薙刀が不意に私の方に薙ぎ払われ、咄嗟にナイフでガードするが関係無しにまた吹っ飛ばされた。

が、飛ばされる寸前に足が出た。薙刀を蹴り上げ、隙を作る。曙を犠牲にしたように見せかけ、私自身が囿になる、というのをたった今思いついて実践。

「おや……いいじゃないですか」

曙も打ち上げられた槍をどうにか持ち直し、そのまま振り下ろしていたが、鳳翔が少し移動するだけでそれは回避された。その場から動かすことくらいは出来るが、本当に触れられない。

「何もかも足りない……力も、速さも、経験も」

「強過ぎなのよあの人! 本当に軽空母?!」

「艦種に嘘はつけませんよ」

また刃をチラつかせる。

と、また先程感じた妙な感覚。キナ臭い匂い。感じた直後に曙を突き飛ばし、私も逆方向に跳ぶ。

今いたところに鳳翔の薙刀が伸びていた。

「おや、避けましたね。なるべく気取られないように突いたつもりでしたが」

「嫌な予感がしたんだ」

「……ほほう？ その感覚、忘れないように」

そこから急に横薙ぎに。モロに脇腹に入るが、今度はしっかりと薙刀を抱きしめる形で固定することが出来た。咄嗟に前に出たお陰で、脇腹に入ったのは刃ではなく柄の部分。本物の刃だったとしても、腸をぶちまけるようなことにはならない場所だ。

「いい判断です」

褒めてはくれるものの、攻撃を入れさせてはくれない。曙の容赦ない突きも、ほんの少し横に払うだけで当たらない。

「っらあっ！」

だがそれを見越して、曙は槍を横に薙いだ。これもたった今やられた鳳翔の模倣だが、今はベストの一手だろう。薙刀は私が押さえ込んでいるため、鳳翔には素手、しかも片手は薙刀を掴んだままのため、もう片方の手しか無い。

「素晴らしい。貴女もいいですね」

そのもう片方の手で槍をしっかりと握り締められた。それだけで動かなくなってしまう。

「若葉さん、何も武器はナイフだけではありませんよ。もつとガムシヤラにどうぞ。その腕と脚は何のために付いているんです？」

指摘され、両腕の疼きが激しくなる。訓練だというのに、戦場にいた時のような感覚。さらには脚も疼くようだった。中に入れられた骨が、今の言葉に反応しているようにも思えた。

「っしっ！」

脇腹で押さええ込んでいる薙刀を軸に跳び、鳳翔に蹴り。攻撃と同時に薙刀に体重をかけ、離させようとする算段。これだけ至近距離だし、今の鳳翔は両手が封じられた状態。武器を離す以外に回避出来ない状態。何かしらの効果はあるはずだ。

「そう、それを咄嗟に判断出来るように。濡れたところで死にはしません」

「うえっ!？」

よりによって、曙の槍を使ってガードされた。突いている力をその

まま利用し、引き寄せる形で。結果的に曙は鳳翔に抱きついてしまい、私の渾身の蹴りは当たらず。体重をかけた薙刀も、手から離させるまでには至らず。

「若葉さんは俊敏性に長けていると言いましたが、判断力がまだまだですね。そこは伸ばしてください。長所を活かすためには、多少短所も克服しなければいけません」

曙を私の方に突き飛ばし、私と曙は共々海の上に倒れる羽目になった。

「曙さんも、次を考える時間が少し長い。若葉さんと同じです。もつとガムシヤラに。戦いにお作法などありませんよ」

未だ鳳翔は健在。濡れることなく、表情を笑顔から崩すこともなく、むしろ殆どその場から動いていない。攻撃を当てる以前の課題である。

「さ、休憩はありませんよ。すぐに立ち上がり、次の手段を考えてください」

この訓練はまだまだ続く。否が応でも身体に戦い方が叩き込まれ、私達は成長させられる。強くなっている実感はあるが、鳳翔があまりにもあまりなので、先が見えない。

だが、楽しかった。艦娘の本分を思い出すようだった。

戦場の匂い

鳳翔との実戦訓練が始まった。初日は丸一日を費やしても触れることはおろか、まともに攻撃すらさせてもらえなかった。結局昼食以外で休憩は一切無く、今までの基礎訓練とは比にならないほどに消耗していた。

「本日はここまでとしましょうか」

これだけやっても鳳翔は息も乱していなければ、汗すらかいていない。一方、私と曙は息も切らしていれば、汗だくだし海水まみれ。

私、若葉は曙より持久力が無い上に、より近接での戦闘を挑んだために、またもや立ち上がれないほどの疲労に襲われている。

「若葉、立ちなさいよね」

曙に引つ張られ、強引に立ち上がることになった。さすが深海棲艦の心臓と肺。お互い近しいくらいに動いて戦っていたのに、疲れはあっても私ほどの消耗が見えない。

と、思ったが、脚がプルプル震えていた。息が切れていないだけで痩せ我慢だ。これ以上曙に迷惑をかけるわけにもいかないの、自分の脚で立つ。同じように私も震える羽目に。

「基礎訓練でもここまでじゃなかったわよ……」

「頭を使うようになったからですね。その時その時でやることを変えなくてはいいけませんから」

私と曙の消耗を見かねてか、鳳翔が肩を貸してくれた。正直な話、今のままでは施設に辿り着くこともままならなかったと思う。いくら持久力があっても、疲労困憊で動かなければ意味はない。私は曙よりも深くその状態になってしまっている。

「曙さん、見込んだ通りの持久力です。私は立ち上がれないくらいにまでやったと思いましたが」

「立つくらいは出来るわ。……動けないけど」

「充分です。ですが、貴女はまだ動きに無駄が多い。槍を渡したのは私ですが、もう少し効率よく動けるように考えてみてください」

私のナイフと違い、曙は長柄物。どうしても攻撃は大振りになる

し、隙も大きくなる。そして、それを振り回すのだから消耗は私よりも激しくなる。

持ち前の持久力でその辺りはカバーしているが、無駄が多いと消耗も激しい。必要最低限の動きでその攻撃範囲を活かすことが出来れば、持久力も相まって強力な力になるだろう。こんな攻撃を延々と繰り返されては、たまったものではない。

「若葉さん、こちらも見込んだ通りです。俊敏性を活かしています。判断力もある。何度か危ない時ありましたよ」

「……卒なく躲された気がするが」

「いえいえ、なかなかやれていましたよ。ですが、曙さんと対照的です。持久力が無い。実戦訓練を利用してその辺りも鍛えていきましよう」

持久力に関しては私も課題だと思った。持久力がある曙よりも動き回ることが多い戦術を取っているせいで、消耗が異常に激しい。3日間の基礎訓練を一旦終了したというのにこのザマだ。

消耗の末の戦闘では、ガムシヤラというより無謀な突撃もあったと思う。それは自ら死に足を踏み入れるのと同じだ。よろしくない。

「今はゆっくり身体を休めてください。薬湯はまだまだあります。貴女達はしっかり成長していますよ」

鳳翔にそう言われると嬉しい。しっかりと一歩ずつ進めているのがわかる。

施設に到着すると、工廠でグツタリとしている雷と三日月に、苦笑している羽黒。こちらの格闘訓練も相当だったが、あちらの射撃訓練も相当だったようだ。

「……羽黒さん……スパルタとかそういうのじゃないわ……」

三日月は口も聞けない程に消耗している。

話を聞くと、私達が身体を全開で動かす訓練だったのに対し、あちらは延々と集中し続ける訓練だったそう。身体をそこまで動かさない代わりに、頭を使う。そのため、消耗が異常に激しい。

それに、摩耶謹製の水鉄砲を常に構え続けるというのもあった。当

然だが、艦装を装備していたって重さは感じる。腕を上げたままで見るというのは、それだけで持久戦になる。

「こちらはまだ同じくらいですね。初めての射撃で、その衝撃に慣れるところから始めました。的当てもやってみたんですが、さすがにすぐは難しいですね」

「格闘とは違いますからね。その進め方で大丈夫です」

止まってる的に当たらなければ、動いている的になんて当たるわけがない。だが、主砲にも慣れなくてはいけない。

そのため、午前も午後も、海上に用意された的に対してただ撃つだけという訓練を延々と繰り返すことになったという。ただし、一切の休憩無し。当たるまでやるとかでなく、当たった後もやる。とにかく撃つ。

幸い弾切れの心配がない深海仕様の主砲であるおかげで、休むことなく撃ち続けることが出来たわけだ。戦場では嬉しいが、訓練では嬉しくないシステムであった。

「さ、お風呂へどうぞ。今日からの訓練は、確実に貴女達の力になります。この施設を守る力は、確実に付いていますよ」

その間に羽黒は一旦帰投するようだ。

鳳翔は食生活の補助や薬湯などの準備。それに来栖提督との通信に、飛鳥医師とのこれからの相談まで一手に引き受けているため住み込みとしているが、羽黒は鎮守府での仕事もあるそうなので、頻繁には来れないとのこと。

「明日は私の姉が来ますので、よろしくお願いしますね」

鳳翔曰く、羽黒の姉は羽黒よりもキツイそうで、雷と三日月はさらに項垂れることになった。ポジティブな雷がそんな表情を見せるのは初めてのこのため、そこまでかと驚いた。

「若葉さん、少しいいですか」

夕食後、風呂も入り直し、後は寝るだけというタイミングで鳳翔に呼び止められる。施設にいる時、訓練とは無関係の時は、あの時の厳しさが鳴りを潜め、微笑み絶やさぬ母のような雰囲気になっている。

「今までもそうでしたが、今回初めて戦闘訓練をして気になったことがあります。少しだけお話しさせてください」

「ああ、わかった」

お互い風呂にも入った後。三日月に鳳翔に呼ばれた旨だけ伝えて、私は今だけ使われている鳳翔の部屋へ入れてもらった。

ここにいつまでいるかはまだわからないが、ずっといるわけでもない、部屋は基本的には空き部屋と殆ど変わらない状態。とはいえ私達も特別飾っているわけではないため、似たようなものだった。

「何か問題でもあったのだろうか」

「いえいえ、そんなに畏まらなくても大丈夫です」

鳳翔の部屋は、私達の部屋と違い、少し甘い匂いを感じる。普段近づいてきた時に感じる鳳翔の匂いそのものだ。この部屋の匂いが染み付いているということか。

「甘い匂いがする。香でも焚いているのか?」

「それです。私が聞きたいのはそれなんです」

少しだけ真剣な表情に。私も少し緊張する。

「戦闘訓練中、嫌な予感がしたから曙さんを突き飛ばしたときがありましたね」

「ああ」

「嫌な予感と言っていました、貴女、戦場で匂いを嗅いでいますか?」

そんなつもりは無いのだが、言われてみればそうかもしれない。

一時的に失明させられ、一切光の届かない闇の中で三日月や曙に頼って施設内を移動していた時、その場所を匂いで判断していたことがあった。工場や食堂はわかりやすい。それに、鳳翔はこの誰からも感じられない甘い匂いがするから近づいてくるのがすぐにわかったものだ。

「先に言っておきます。私は香水の類は使っていませんし、お香を焚くようなこともしていません。お風呂もお洗濯も皆さんと同じです。調理をしているくらいですが、それは雷さんも同じこと」

「そうなのか。なら貴女の天然の匂いなんだろう。落ち着く、安心で

きる匂いで若葉は好きだ」

「あ、ありがとうございます。そんなこと言われるのは初めてですね」
照れ臭そうにする鳳翔は、何処か色っぽい。

「話を戻します。この部屋の匂いはさておき、戦場でどうい匂いを
感じたんです？」

「そうだな……キナ臭いというか」

「なるほど。共感覚の亜種か何かでしょうか。戦場に蔓延る嫌な雰囲気
というものを、匂いとして感じられるようになったのかもしれない」

私には少し難しい話だったが、敵から感じる視線や武器の動き、つ
まりは嫌な雰囲気、私は匂いとして知覚出来るようになったのかも
しれないと、鳳翔は言っている。

この感覚は、一時的な失明から始まったものだ。その時は、今を乗
り越えるために使えるものはすべて使っていたというのが本音。匂
いも自分の意思で感じていたわけではない。気付けば感じ取って
いた。

「若葉さん、その感覚は大事にしてください。それは、戦場で絶対に必
要になります」

「わかった」

大事にしろと言われても、今日の訓練でキナ臭さを感じたのは数
回。それ以外はボツボツ。結果的には鳳翔相手に成すすべなくや
られたに過ぎない。明日はもっと良くなりたいと願う。

戦場だけではなく、こういう普段の匂いも強く感じるようになった
のは、最初がそういう場から始まったからだろう。本当の匂いと、感
覚的な匂い、どちらも感じられるようになってしまった。

「嗅覚の拡張……今までに聞いたことのないものです。一時的な失明
というのは、割と見られるものなのですけど、入渠してしまえば終わ
りですし、状況次第では薬湯で洗眼するだけでも変わります」

「それをやらなかったからじゃないのか？」

「その可能性は否定できませんね。艦娘が自然治癒に頼るといふこと
がそもそもありませんから。人間とは違い、それすらも早いのですけ

どね」

どこまでもこの施設に属する艦娘は何かおかしい。本来とは違うことを続けていることで、独自路線に入ってしまったている。それは喜ぶべきことなのかどうかはわからない。

「でも、いいことですよ。それがあるからこそ、貴女達は私達とは違う方向に強くなってきます。それは決して異質ではないです」

失明していた時のように頭を撫でられる。匂いも相まって、とても落ち着く。このまま眠ってしまいそうだったが、それだけは我慢。三日月が部屋で待っている。

「明日からも頑張ってください。私も、貴女達を強くすることに専念します」

「ああ、こちらからもよろしくお願いする」

いつも通り、握手で締めた。鳳翔は頼りになる人だ。それに信用出来る。私達を騙くらかしているような人から、こんな匂いは感じられないだろう。

この人と出会えてよかった。仲間であり、師匠であり、時に母のような人。訓練が絡むと途端に恐ろしくもなるが、こういう場面があるから、あのハード過ぎる訓練も嫌では無くなる。

部屋に戻ると三日月がベッドの上で待機していた。

強くなると決めて、ここの施設の者以外にも顔を見せることくらいは出来るようになった三日月だが、夜一緒に眠るのは変わらない。寝ている間無防備になるのが怖く、やはりまだ一番安心出来るらしい私の側が一番よく眠れるとのこと。

嵐の夜ならともかく、普通の日でもこれなのは、今までの慣れというのものもあるのかもしれない。最初は悪態をつきながらだったが、今はそういうものもないので、ただただ甘えられているようにも見える。それを言うとは全力で否定されたが。

「鳳翔さんとの話は終わったんですか？」

「ああ、少し戦闘訓練の時のことだな」

今までは意識していなかったが、嗅覚のことを指摘されたからか、

自然と三日月の匂いを嗅いでいた。

鳳翔とは違う、甘酸っぱい匂い。だが、その中に深い海のような匂いを感じた。これがシロの言う深海の匂いなのだろうか。前者が三日月本来の匂いで、後者は継ぎ接ぎであるが故の匂い。そんな感じがした。

「何やら若葉は人より鼻がいいらしい」

「鼻……ですか」

今までの感覚を搔い摘んで三日月に話す。今嗅いだことは伏せて。

「シロさんみたいですね……海の匂いがどうか言う」と

「ああ、若葉もそう思う」

私の中では特に変化が如実な左腕の匂いを嗅いでみるが、別に何の感覚もない。戦場の匂い、他人の匂いと違って、一番身近なものには私の嗅覚は反応しないようだ。自分の異常がいち早くわかればいいと思ったのだが。

「あ、あの、若葉さんから見て、私はどんな匂いが……」

「別に言うほどじゃ」

「気になるんです。一緒に寝ている人に臭いと思われていたら嫌でしょう」

いつになく強く出てくる。女としてのプライドか、匂いというものには少々敏感なのかもしれない。勿論私だって、他人に臭いと言われれば傷付くし気分が悪い。

だから、素直に感じたままを話す。おそらくその表現はシロのようなどとても曖昧で、わけのわからないものになるだろうが。

「お前は甘酸っぱい匂いだ。鳳翔とは違う」

「嫌な匂いじゃないですか？」

「別に……」

食いつきがすごい。これ、話さない方が良かったかもしれない。

とはいえ、三日月は私達よりも自分の身体へのコンプレックスが強いのは確かだ。外見が一番大きく変わってしまったっているわけだし。そこに匂いなんて要素まで加えられたら、過敏にもなるか。

「ならよかったです。寝ましよう」

「切り替え早いな……」

相変わらず表情は無かったが、上機嫌なのはわかった。

鳳翔にこれを言われたことで、私の戦い方は一段階進化する。戦場の匂いを嗅ぎ別け、最善の道を選択するという、艦娘らしからぬ戦い方へ。

飢えた狼

戦闘訓練2日目。昨日と同様、私、若葉は曙と組んで鳳翔を相手取っていた。昨日の今日ですぐにどうにかできるとは思っていないなかつたが、訓練からの薬湯という組み合わせにより、私達は確実に成長の道を進んでいる。

特に私は、鳳翔から伝えられた『匂い』についても少し意識していた。今の私には『嫌な予感』を匂いとして感知出来るようなので、少しだけ嗅覚にも意識を置く。そのせいで戦闘自体が疎かになってしまったのはご愛嬌。これを自然と出来るようになっていなければならないのだろう。

「午前中はここまで」

「はあ……はあ……まだまだ……だな……」

昨日よりは持久力も上がっているが、やはり立ち上がることも辛い。引き上げられるほどではないものの、脚の震えは今回もあった。立っているだけでも辛い。

「ほら若葉、さっさと戻るわよ」

「わかってる……はあ……結構……キツイ……」

曙は私より疲れていないようだ。汗だくではあるものの、脚の震えが殆ど無いし息ももう整っている。深海棲艦の心臓と肺を有効活用し、即座に回復している。

この曙はその方向に特化していた。長時間戦闘に長け、常に槍を振るい続ける。私より数倍の持久力を獲得しているため、その戦いが曙のベスト。あとは判断力さえ培えば完璧。

「2人とも、昨日よりは格段に良くなっています。曙さん、自分の長所をちゃんと理解出来ている。深追いせず、持久戦に持ち込もうとする姿勢は大変よろしい。後は」

「判断力でしょ？ どうするか考えた時に攻撃されたし」

「わかっているのならいいでしょう。持久戦は速攻より当然考えることが多いですから、判断は即出来るようにしましょうね」

連携には少し向いていないが、持久戦に持ち込むことが出来れば、曙の独壇場だ。疲れ知らずとは言わないが、息が整うのが早いのは非

常に有利。おそらく私は曙に勝てない。

「若葉さん、匂いの件はしつかり意識しているようですね。まだ慣れていないのはわかりますが、危険の感知が昨日より多くなっています。その調子で頑張ってください」

「ああ……後は持久力だ」

「その通り。毎朝のランニングは続けましょう。貴女は持久力がつけば、より良い戦いが出来るはずです」

今回の訓練では、キナ臭い匂いを感じる事が昨日より多かった。その都度、鳳翔からの強烈な攻撃が来たので、この感覚は常に使っていきたい。

それに、曙との連携にも匂いを使うのは有効だった。曙特有の少し尖った海の匂いは判別しやすく、何処に居るかが大まかにわかる。一応匂いの嗅ぎ分けが出来ることもわかったため、これにも早く慣れていきたい。

施設に戻ると、昨日以上にグツタリしている雷と三日月がそこにいた。昨日は主砲の取り扱いに慣れるためにただひたすらに撃ち続けるという、それはそれで過酷な訓練をしていたが、今回もおそらくそれ。

「命中精度、大分上がったわね。これでまた勝利に一步近付いたわ！」

ケラケラ笑いながら話す羽黒の姉、足柄。

訓練の内容は昨日の羽黒の時とほぼほぼ同じだったらしいが、とにかく口出しが多かったそう。1発撃つごとに指摘と修正。時には手取り足取り教えられ、時には実演を交えての訓練。身にはなりそうだが、ストレスも溜まりそうである。

少しでも勝利に近付くために、口出しが多くなってしまいうらしい。それほどまでに勝利に飢えている。ついた二つ名が『飢えた狼』。流石である。

「足柄さん、感覚型なの……。説明に効果音がすつごく多くて……」

「さっぱりわからないんです……。説明が……」

ドーンとかバーンとか言われてもよくわからないだろう。フリー

スタイルでひたすらに戦うだけの私達とはわけが違う。まず狙いを定めて撃つという行為に、定められた手順が必要なのだから、感覚で話されても理解がしづらい。

だからこそ身振り手振り、かつ手取り足取りでの説明になるのだと思う。実際にやって見せるというのが手っ取り早い。

「羽黒さんよりキツイってそういうことだったのね……」

昨日より雷が項垂れていた。とはいえ、先程の言葉を聞いた感じ、雷と三日月も昨日より成長出来ているようだ。

後衛ということでは今は射撃精度を上げることが優先しているようで、今日の射撃は半分以上、的に当たったそう。主砲の取り回し方も昨日1日で大分慣れたらしい。

「足柄さん、彩雲は見ましたか？」

「ええ、2回くらい見たわね。中指立てておいたわ」

「それに乗ってくれるなら苦労はしないのですけどね」

嫌味のように笑顔で手を振る鳳翔とは違い、堂々と敵意を丸出しにした足柄。早く攻めてこいと挑発した。

こちらの準備はまだ終わっていないものの、今でも外には警戒隊が張ってくれている。それと力を合わせれば、襲撃にも対応できるだろう。出来ることなら、警戒隊がいるタイミングで襲撃してもらいたい。

「さあさあ、皆さんお風呂にどうぞ。その間に昼食を準備しておきますから」

「今日は勝利の験担ぎ、カツカレーよ！」

「足柄さんのカツカレーは鎮守府でも好評ですから、楽しみにしてくださいね」

そういえば、験担ぎ、願掛けというのは今までやったことが無かった。たまにはそういうのもいいだろう。

実際、食べてみたら本当に美味しかった。あちらの鎮守府では好評というのもわかる。こちらでも雷がレシピを聞いていたほどだ。その説明も若干感覚型が入っており、少し苦戦していたようだが。

昼食後は午後の訓練まで一旦休憩。小一時間ほどだが、英気を養う。食べてすぐ活動するのは良くないと、その辺りの時間配分は飛鳥医師が全て決めていた。

工場仕事で忙しい摩耶ですら、こういう時はうたた寝しているほどである。今はそこにシロクロも交え、ほんの少しのお昼寝タイムとなっていた。

私はこの時間で、次の戦い方をシミュレートしている。訓練で使うナイフを握りしめ、目を瞑り、どう動くかを何度も何度も考える。

今までは鳳翔に簡単にいなされてきた。2人がかりの攻撃も、薙刀1本であしらわれ、2人同時にのされることだつて多かつた。いくら達人の鳳翔だとしても、何処かに隙があるはず。無いのなら作らなくてはいけない。

「……」

イメージトレーニングでどうすればいいかを想像するが、簡単にいなされるイメージしか湧かない。困ったものである。鳳翔の圧倒的な強さに、勝てるイメージが出来なかつた。

「あら、イメトレ？ それはとてもいいことね！」

気付けば目の前に足柄が立っていた。集中し過ぎて近くにいたことも気付けなかつた。匂いも今更になつてわかる。

「……ああ。鳳翔に1回触れるためのシミュレートだ」

「なるほどね。で、難航してるみたいだけど」

見透かされている。

隣に腰掛けられて、話を聞いてもらう。自分がこういう力を持ち、こうやって戦つてきたと、ありのままに話す。

足柄は何故かそういうことが話しやすい相手だつた。鳳翔が母なら、足柄は姉。悩みを打ち明けられることに躊躇いが無くなるような、そんな匂い。

「勝てるビジョンが見えない」

「それは勝ちを知らないだけよ」

簡単に言われてしまった。

「駆逐艦若葉は、私と同類だつたと思つたけど」

「同類？」

「ええ。諦めずに戦いに向かう姿勢がね」

足柄は一言で表すと戦闘狂。ひたすらに戦いを求め、ひたすらに勝利を求める。験担ぎのカツもここから来ているのだろう。実力もさる事ながら、徹頭徹尾勝利のことしか考えていない。勝利に飢えている、まるで狼のような人。

「勝つためには、まず負けるというイメージを排除するの。私は鳳翔さん相手でも常に勝ち続けてるわ。頭の中では」

「実際は」

「貴女達とは違う訓練だけどフルボッコね。でも次は勝てるもの。昨日の私より今の私の方が強いに決まってるんだから」

自信満々な物言い。一切の負の感情が無い。本心からこの言葉が出ている。後ろどころか横すら向きそうに無い、前向きすぎる性格。

だからこそ容赦が無いのだろう。訓練にも全力。私の見習うべき人かもしれない。せめて横は向きたいものだが。

「訓練なんだから負けたって死ぬことはないわ。なら、勝てるイメージしか無いわね。最後は必ず届く。相手がどんな人でも」

「……そうか」

「要は心持ちよ。全部身になってるわ。貴女は強くなってる」

頭をポンポンと撫でられる。鳳翔とはまた違った安心感。私に尻尾が生えていたら、なんの躊躇いもなく横に振っていたと思う。

「そうだ、まだ時間あるわよね。ちよつと模擬戦を見せたげる。私も久し振りに鳳翔さんとやりたいし。鳳翔さーん！」

あれよあれよと鳳翔と足柄の模擬戦を見せてもらえる段取りになっていく。足柄は、私と曙に近接戦闘がどうかを客観的に見てもらう機会を作った方がいいと説明していた。確かにと鳳翔も納得。

いきなり自分でやれと言われて探り探りの訓練を続けていたが、他人が戦っている姿は見たことがない。曙のように鳳翔が模倣できる相手でもない上に、私には嗅覚という普通とは違う武器もあるため、模倣できる相手もない。

この模擬戦は、私に得られるものが多くある可能性が高い。是非と

も見せてもらいたかった。

休憩中の一幕として、工場内の海上スペースで戦うこととなった。ある意味、リングの上に掲げられたようなもの。限られた空間での戦い。場所が場所なので、施設内の全員がその模擬戦の観客となっている。飛鳥医師ですら遠目に見ていた。

足柄は私に見せるためにナイフを選択。鳳翔は当然薙刀。私と曙が戦った場合、こういう見た目になるのだと思う。事が済んだ後はそういう事もあると思うので、そういう意味でも参考になる絵面。

「今日は勝つわ！ カツも食べたし！」

「まだまだ後れは取りませんよ」

薙刀の刃をチラつかせる、いつもの構え。それに対し足柄は、ナイフを握り締め、軽く前傾姿勢に構える。先程私の相談に乗っていた時とはまるで違う、まるで獲物を捉えた狼のような獰猛な表情。

それでいて、お互いに微笑みを浮かべていた。鳳翔はいつもの通りだが、足柄のそれは純粹に戦いを楽しむ顔。

「っはあ！」

咆哮から地を一蹴り。速い。即座に鳳翔の懐に潜り込むような素早さ。

鳳翔と足柄だと、足柄の方が身長は高い。それでも前傾姿勢のおかげで低いところからの攻撃を可能としている。薙刀の間合いより内側に入ろうとしているのはわかった。

「流石、よく学んでいる」

「当然じゃない！ 勝つためだもの！ 努力は惜しまないわ！」

激しい打ち合い。全て薙刀にいなされているとはいえ、足柄も負けずに常に前に進む。

私と曙の時とは違い、鳳翔はその場から大きく移動させられていた。自分に攻撃が当たりそうでも、回避方向が常に前。下がるうともしない。そして、近付かれ過ぎれば足柄の間合い。鳳翔が退いていくのも仕方のないことだ。

「ですが、まだまだです」

薙刀の使い方を変えた。受けて払う線の防御だけでなく、突きを含めた点の攻撃を同時に繰り出し、足柄の進行を防ごうとした。

が、止まらない。

「まだまだだ？ それは昨日までの私よー！」

突きを空いている手で強引に掴む。ここまでは私もやったことだ。その時は急激な回転で持つていられなくなったが、足柄は逆に自分から回転を加えた。鳳翔が薙刀を放してしまいさえすれば、勝利にさらに繋がる。

「つつ……」

「放しなさいな！」

さらにはナイフによる斬り上げ。狙いは薙刀を握る手。私達はどうしても身体に当てようとしていたが、訓練ではどこに当てても問題ない。あれですら私達の勝ちとなる。

「簡単には行かせませんよ」

当然、一筋縄では行かないことはわかっている。薙刀への回転は逆方向に回転をかけることで回避し、手への攻撃は急激な掬い上げで回避。さらにはそれが足柄への攻撃になっているため、退かざるを得ない状況を作り出した。

が、足柄は退かない。常に前のめり、常に前進。掬い上げに対して、縦方向の攻撃故に、斜め前に突つ込むことで回避。掴んでいた薙刀を放すことにはなったが、そのおかげでついに懐に潜り込むことが出来た。

「つらあつー！」

そのまま胴に向けて一閃。紙一重で避けられたが、鳳翔の服にはナイフによる線がクツキリと浮かんでいた。

「当たったから、私の勝ちでいいのよね？」

「はい、足柄さんの勝利です」

本来なら戦いはまだ終わらない。本当に倒すというところまでいこうとすれば、今まで通り、鳳翔が勝っているかもしれない。事実、あちらの鎮守府ではそうだったのだろう。

だが、この訓練のルールは私達の訓練と同じルール。時間までに一

度でも触れられれば勝利。足柄はそれを私達に見せてくれた。

「勝利よ！ 若葉、ちゃんと見てた!？」

「ああ、見させてもらった」

「これでイメージ出来たでしょ。勝ちのイメージ！」

今までは負けしかなかったために勝ちのイメージが出来なかったのかもしれない。どれだけシミュレートしても、一度も勝つことが無いのだから、勝ちに辿り着けなかった。

だが、足柄のおかげで勝ちに向かうビジョンが私の中に出てきた。心持ちが変わる。勝てない相手じゃないと。

「ありがとう足柄。若葉はこれでまた前に進める」

「役に立ったみたいね！ 勝利が貴女を呼んでるわ！」

これだけで簡単に勝てれば言うことはないだろう。だが、ビジョンが見えただけでも大きく変わる。負ける気しかなかったものが180度変わった。

「私からの忠告ね。鳳翔さんはシュツとしてくることが多いから、そこは斜めにダツと行って、バーンよ！」

「わからんわからん」

感覚型の説明は本当にわからない。心意気には感謝する。

初陣

足柄から勝利のイメージを教えてもらってさらに3日、曙殺害からちょうど10日目。

私、若葉は今でも曙と共に鳳翔による実戦訓練を続けている。訓練を始めて1週間ともなると、私達は全員、戦術というものが出来上がってきていた。短所を補い、長所をより伸ばし、より勝利を掴むために、自分の持てる全てを戦術に込める。

その結果が、この10日目の午後の訓練で花開いた。

「終了。2人とも、よく頑張りました」

鳳翔の袴に私が付けた斬撃跡。ようやく届いた。

ここまで来るのに何度も何度も返り討ちに遭い、本来ならば3桁近くの死を迎え、ついに鳳翔の身体に触れることが出来た。その跡は小さいものでも、達成感が凄まじい。

「ようやく1歩か……」

「長かったわね……」

曙と拳を打ち合わせてお互いの健闘を称えあった。私だけでは無理。曙だけでも無理。2人で力を合わせた結果得られた1歩目だ。これだけやれば連携もうまく行くと、嫌というほど戦場の匂いも感じた。

次はダメージをしっかりと与えられるくらいに鳳翔に当てなくてはいけない。ここからはさらに難しくなる。先日の足柄の模擬戦ですら、胴に掠めた程度。それではこれからは勝ちにならない。

「時間はまだありそうですね。では続けましょうか」

鳳翔も私達の成長を喜んでくれていた。だからこそ、さらに深いところまで鍛えてくれる。

が、それは今は出来なくなりそうだ。

「……鳳翔、訓練は終わりにしていいだろうか」

「何か匂いましたか？」

鼻が動いたのだろうか、私が言いたいことがすぐに理解される。

「嵐が来るぞ」

本日の訓練はこれにて終了。午後の訓練の中頃に雨の匂いを感じたため、急いで施設に戻り嵐に向けた準備を始めた。天気予報よりも先に察知出来たらしく、日に日に私の嗅覚は強まっている気がした。いつものように工廠のものをしまい込み、高波の被害に遭わないように片付け。だが、今回はそれだけでは終わらない。来栖提督に連絡をし、夜間の警備を取りやめてもらう。また、今いる警備隊には施設の方に来てもらった。

都合のいいことに、本日の昼警備は第二二駆逐隊。射撃訓練についていたのは足柄。ある意味万全の態勢である。

「部屋が2つしか空いていない。相部屋で頼む」

「私は談話室でいいわ。すぐに戦えるように準備しておかなくちゃね！」

流星は足柄である。部屋で眠るより、即座に動ける場所を選択した。

というのも、前々から予想している通り、この嵐の夜に襲撃があるのではないかと考えているからだ。敵の数はわからない。少なくとも、前回よりは確実に押し潰すつもりで来るはず。

前회가夕雲旗艦で、随伴に戦艦1軽巡1駆逐3。それで均衡し、リミッター解除された敵艦娘はタイムリミットを迎えて自沈してしまった。今回のこちらの戦力はおそらくバレているため、それ以上の規模の部隊で攻め込んでくるだろう。

「嵐の夜に外に出すなんて考えたくもないんだが」

「そうしねえとここがぶっ壊されるぞ。どうせあれだろ、基地を攻撃するようなモン持つてくるんじゃないのか」

摩耶の不安は正しい。対地攻撃はまず確実にしてくる。外に出ないのなら、施設ごと私達を破壊しにくるだろう。まずはそれを食い止めなくてはいけない。

「夜ですので、私は艦載機を出すことは出来ません」

「私は出来るけど期待しないでほしいかな」

鳳翔は自ら戦力外と言い切った。空母の一番不利なタイミングで

あるため、出撃すること自体が足手纏いになると。セスは深海棲艦であるが故に夜でも難なく艦載機を飛ばせるらしいが、嵐となると話が変わる。

「私達は海の中だから気にしないけど」

「武器が……無いね……」

シロクロは嵐が関係ない位置にいるものの、攻撃手段がない。海中からの徒手空拳となるが、それはかなり危険なもの。

つまり、現状戦力と言えるのが駆逐隊2つ分8人と重巡洋艦2人。そのうちの摩耶に関しては、戦闘訓練を始めてもない素人である。

「お、若葉、今あたしのこと素人だとか思ってたろ」

「訓練をしていない。流石に厳しいと思うんだが」

「任せろ。あたしはお前から隠れているいろやってんだよ」

何をしていたかはわからないが、戦力が増えることはいいことだ。負担が減り、勝利へ近づく。

「武装に関しては、来栖が認可を取ってくれた。僕達の正当防衛と出来る」

「っし、なら何の気兼ねも無えな。好きなだけぶつ放してやるぜ」

水鉄砲と刃を潰した近接武器ということで、ギリギリ認可が下りたそうだ。第二二駆逐隊の武器も、相手に何も言わせないために、弾を威嚇射撃用のダミーに替えている。こちらは殺す気が無いのに向こうだけは殺意を持っているとなれば、こちらの正当防衛として成立させられる。

全ては以前に聞いた、飛鳥医師の名前を出せば上に顔が良くというヤツだろう。深くは聞かず、ありがたく有利な状況を使わせてもらう。

「最後の問題は、だ。嵐の夜というのを忘れちゃいけない」

私も含め、嵐の夜にトラウマを持つ者が数人。

「ダメだと思ったら退がるわ」

「はい……でも……やれると思います」

私も三日月と同様、やれると思う。雷は恐怖心を煽られ、私と三日月は嫌悪感が湧き上がる。イライラは戦闘にぶつけられるのだから、

まだマシだ。そのための非殺傷武器。

「よし、なら準備は完了だ。来なければ来ない方がいい。来たのなら撃退だ。……最後に」

改まって私達へ。

「絶対に死なないでくれ。蘇生は奥の手中の奥の手だ。二度とやりたくない」

死んでも蘇ることが出来るのだから捨て身で行こうだなんて、誰も思っていない。死にかけてるほどに痛い思いをしているのだから、二度とゴメンである。特に曙は、実際一度死んでいるのだ。その辛さは文字通り身にしみて理解している。

「誰が死ぬかよ」

「これ以上……継ぎ接ぎを増やしたくないのです」

「ああ、今くらいで充分だ」

みんなの気持ちは1つになっている。

これは最初の反撃。最初はいいようにやられてしまったが、今回はそうはいかない。そのために訓練をし、この日のために備えてきたのだ。確実に返り討ちにしてやる。

夜。轟々と風が吹き、雨が叩き付けられる。私や三日月が流れ着いた時の嵐と比べると控えめ。だが、嵐は嵐である。少し手が震えるように思えたが、鳳翔が握ってくれた。

私達が嵐にトラウマがあることは伝えられている。死にかけた経験が心に刻まれてしまっているため、この時間は正直苦痛だ。

「大丈夫。貴女達の成長は私が一番わかっています。私に一撃入れられたんですから」

「……ああ、大丈夫だ」

震えが治まる。鳳翔にそう言ってもらえると落ち着くものだ。同じように三日月にも力添えをしてくれた。

「嵐に対するイライラは、今日は奴等にぶつける」

「そうしましょ。私を殺した恨み、晴らしてやるんだから」

第五三駆逐隊の前衛担当である私と曙のコンビが一番先頭になる

だろう。その次が、第二二駆逐隊の前衛担当である皐月と水無月。

私達の狙いは、おそらく来るであろう夕雲一本。周りの敵艦娘は仲間に任せたい。私達では殺してしまいかねない。

「シロクロから通信だ。音を回すぞ」

シロクロは先に海中から近海を警備している。嵐のせいで海流は激しいものになっているが、あの2人ならそういうところも難なく泳ぎ、敵に気付かれることなく接近する。

攻撃をする必要なんて無い。敵が来たことだけわかれば、私達が迎撃する。

『こちらクロだよ。ちよつと遠出してまーす。前に沈んでた艦娘見つけたところより遠いかな』

『シロ……だよ。まだ敵影は無し……』

大分遠くまで向かったようだが、まだ姿は確認出来ていない。来ないなら来ないで別にいい。

「こっちの艦載機も異常無し。風が相当強いみたい」

セスも深海の艦載機を飛ばしてくれている。上から下からの包囲網で、接近をいち早く確認したい。攻撃する前には撤収させるようだが、これだけでも大助かりだ。

「滾ってきたわね！ 早く来ないかしら！」

「足柄さん、張り切ってるわね。私も嵐が怖くなくなってきたわ」

「戦いに勝るものはないわ。それに勝つことが一番楽しいもの！」

飢えた狼は、敵の出現を今か今かと待ち構えている。足柄は純粹に戦いたいがために。私達とは少し心境が違うが、今は頼もしい仲間だ。

『発見……本当に来たよ……』

「こっちも発見。連合艦隊かな」

「シロクロは撤退してくれ。セスも艦載機を引っ込めてくれ」

しばらくして、シロの通信により敵が来たことが確認された。その数12人、連合艦隊である。この悪天候の中、さすがに空母はいないようで、戦力としては戦艦4、重巡2、駆逐6。駆逐の中に夕雲が含まれている。完全に押し潰しに来ている。

「出撃よ！ 戦場が、勝利が私を呼んでいるわ！」

「足並み揃えてー！」

足柄がいの一番に突っ込もうとしたため、文月達がどうにか抑え込んでいた。嵐の中で1人で向かうとか、いくら手練れでも自殺行為である。ここは流石と一緒に出撃してもらわなくては困る。

「よし、シャツター開けるぞ。僕はここからしか応援できない。後は頼んだ」

「おう、任せろ。施設はあたしらが守るさ」

嵐の中、工廠へのシャツターが開けられる。吹き荒ぶ風が強烈に吹き込んできた。前までなら、ここで立つことも辛いと思っただかもしれないが、今はそんなことはない。訓練の賜物である。

ここからは豪雨の中の戦い。まずは艀装を装備し、即座に海へ。シャツターが開いた瞬間に足柄はダッシュ。先陣を切ろうと躍りになっている。摩耶は私達を見送った後、ついてきてくれるようだ。

「第五三駆逐隊、出撃する」

「第二三駆逐隊、出撃です！ 本領発揮するよー！」

震えはもう止まった。並び立つ仲間も、背中を押してくれる仲間も、待っていてくれる仲間もいる。負けるイメージはもう浮かばない。

さあ、いざ出陣だ。

雨風が酷く、波も高い近海。着ている制服はあつという間にびしょ濡れになるものの、基礎訓練の際の着衣遠泳のおかげで気にならない。この状態でも十全の力を発揮できるはずだ。

「視界が悪いわね……」

「匂いも少し薄まるな……だが、大丈夫だ」

雨のせいで少し匂いが嗅ぎづらくなるが、感じないわけではない。戦闘に支障は無い。

「近い。雨の中に混ざっている。風でこちらに流れてきているようだ」

ナイフを握る手が強くなる。グリップを滑らないゴム製にしてあ

るため、この雨の中でも戦える。訓練の時の戦い方が出来る。

「射程です。私からは見えませす」

「あたしにも見えるぜ。向こうからはまだ見えてないみたいだけだな」

深海の眼を持つ三日月と摩耶にはもう見えているようだ。夜でも雨でも関係なく、視界はバツチりらしい。

だからだろう、三日月が早速構えた。狙えるタイミングで即座に数を減らしに行こうという算段。私以上に恨みが根深い三日月は、嫌悪感から攻撃に躊躇がない。

「撃ちます」

強烈な威力の水鉄砲が放たれた。私には見えないが、匂いが1つ遠のいたように思えた。

深海の眼は持つていないが、拡張された嗅覚のおかげで、この暗さでも私は少しだけでも戦況が理解出来る。鳳翔に言われてからの数日、嗅覚に意識を置いて生活もしていた。嗅覚に頼った行動も多少は可能。

足柄が狼なら、私は犬か。

「1人撃破。おそらく駆逐艦、死んではいません。殺したいほどに憎たらしいですが」

「気持ちわかるけど、抑えてよね」

久々に毒が出てきている三日月。嫌悪感を隠そうともせず、心底嫌そうな顔で次の敵艦娘に狙いを定める。三日月には同じ後衛担当の雷がついているため、私は曙と前へ。

「あら、あらあら、曙さんが生きているわ」

「おかげさまで、死の淵から戻ってきたわよ。クソ雲……!」

「相変わらず口が汚いですね。小物に見えますよ?」

夕雲と会敵。相変わらず貼り付いた笑みでこちらを見てくるが、目は一切笑っていない。雨に濡れながらも、常に余裕の立ち振る舞い。

「文月、周りを頼んでいいか」

「うん、了解。三日月ちゃんは雷ちゃんにお願いしておけばいいんだよね?」

「ああ、それでいい。余裕が出来れば援護してくれるはずだ」

第二二駆逐隊には文月經由で援護を頼む。夕雲とやり合うのは私と曙の仕事だ。他には邪魔させない。

「勝利が！ 私を！ 呼んでいるわあ！」

「勝手に動き回るんじゃないやねえよ足柄あ！」

それを察してか、足柄も周囲の戦艦から片付けてくれている。

摩耶はその援護。その射撃の性能から、確かに素人ではない。夜や、私達が見ていないところで特訓していたらしい。艦装の整備をしているのだから、それを使いこなせない理由が無い。

「騒がしい人達ですね」

「意思を持つてるのはお前だけか。他は全員捨て駒か」

「はい、貴女達を確実に消すために連れてきました。さあ皆さん、リミッター解除ですよ」

以前見たのと同じように、周りの艦娘達は目が血走り血管が浮き上がる。身体に大きく負荷がかかり、命を燃料に驚異的な力を発揮する。勝つても負けても沈むことになる最悪の手段。

「WG42部隊、施設へ一斉射。三式弾もどうぞ」

やはり対地攻撃から始めてきた。目の前にいる私達ではなく、ここからは見えない施設へ向けての攻撃。駆逐艦4人と重巡洋艦2人、さらには戦艦までが攻撃を放とうとする。

だが、それは私達には想定内。夕雲以外を優先して撃破する方針は変わらず、仲間達にそれを任せる。

「ボクらが食い止めるよ！」

「わっさー、ぼのたん、そっちは任せたからね！」

「誰がぼのたんか！」

先陣を切るのは皐月と水無月。周りの駆逐艦を邪魔するため、夕雲を無視して突っ込んだ。施設への攻撃をメインにしているおかげか、正面からでも不意打ちのように機能し、その攻撃は食い止められる。

「三日月、私達は重巡よ」

「了解。すぐくイライラするので、全部倒します」

雷と三日月の援護射撃も的確。羽黒と足柄の教えがすっかりと身になっていく。三式弾の発射前に顔面に水鉄砲を直撃させ、狙いを定めさせない。この嵐の中でも正確無比な射撃は、今までの訓練の賜物と言えよう。

「戦艦を倒せるのは楽しいわ！ 大物食いは最高ね！」

「くっそ！ この狼は理性焼き切れてんのかよ!？」

足柄は未だに止まらず。主砲と格闘を駆使して、戦艦を黙らせる。摩耶は援護に専念しており、雑な足柄の撃ち漏らしを処理していた。

だが、それは全て非殺傷武器による行動。リミッターが解除されているあちらの艦娘は、怯むくらいで止まらない。そのため、何度も何度も繰り返し攻撃を加え、何もさせない状態を維持する。

「周りばかりですが……まさか貴女達がこの夕雲と戦うつもりで？」

「ああ。2人がかりで悪いな」

「そのニヤケ顔をぶち壊してやるわよ」

敵随伴艦をうまく引き剥がしてくれている。私達の戦場には、夕雲しか残っていない。高い波に煽られるが、足を取られることもない。それはあちらにも言えることではあるが。

「そうですか。では、夕雲が直々に、引導を渡してあげましょう。曙さんは念入りに殺さなくてはいけませんしね」

「やれるものならやってみなさいよクソ雲！」

「再起不能にはなってもらおう」

これは訓練でも演習ではない、実戦だ。命のやり取りを感じ、両腕が途端に疼き出す。夕雲の血を啜りたがっている。

「覚悟しろよ。若葉達の居場所はお前らなんぞに壊させない」

「こちらのセリフですよ。提督ご主人様の邪魔をするのなら、容赦しませんからね」

第五三駆逐艦の初陣は、嵐の中で始まった。前回のようにはいかない。今回は仲間もいる。負ける気がしない。

大荒れの戦い

予想通り、嵐の夜に襲撃してきた夕雲一派。前以て予測していたおかげで、こちらにも準備がすっかり出来ていた。嵐に左右されないシロクロと、嵐の夜でも艦載機を飛ばすことくらいは出来るセスにより近海を監視し、施設に近付かれる前に会敵した。

夕雲の随伴艦は仲間達に任せ、私、若葉と曙は、本丸となる夕雲本人と相對していた。相変わらず随伴艦に施設への攻撃、対地攻撃を任せ切り、自分は高みの見物と洒落込もうとしていたみたいだが、そうはいかない。

「確か、錨を振り回していましたよね。アレ、どうしたんです?」

「あんな使いづらい武器は置いてきた」

「曙さんも槍なんて持っちゃって、もう艦娘には見えませんねえ」

「そいつはどうも。私達は艦娘でも何でもないわ」

各々、武器を構えた。私達は訓練の中、その辺りも自分に定着させている。

曙は鳳翔の模倣により、槍の先端をチラつかせるあのスタイルに。そして私は、足柄を模倣した前傾姿勢。自分なりのスタイルを作ろうと思ったものの、最終的にこの構えが一番戦いやすいことに気付き、これを貫いている。

「あらあら、若葉さんは獣ケダモノのよう」

「ああ。お前の匂いがよくわかるぞ」

「ワンちゃんでしたか。なるほど、負け犬ということですね。ご自分をよくわかっていらっしやる」

こちらを怒らせて最善の力を発揮させないようにする魂胆かもしれないが、何を言われようと全く気にならなかった。基礎訓練、実戦訓練の中で鍛えられたのは、身体だけではない。心も鍛えられている。

負け犬で結構。これに勝てればそれでいい。さんざん鳳翔に敗北を喫してきたのだから、痛くも痒くも無い。

「薬漬けの実験材料の匂いがするな。捨て駒達と同じだ」

「へえ、なら夕雲も捨て駒なのね。ここで負けて、ご主人様に捨てられるのよ。そしたらアンタも負け犬、人のこと言えないわね」

煽りには煽り返す。曙の口の悪さも、こういう時には本当に役に立つというものだ。

夕雲の表情は変わらないが、キナ臭い匂いが一気に強くなった。元々私達を殺すことに躊躇が無いようだったが、曙の言葉でより殺意が高まったのだと思う。

わかりやすい、実にわかりやすい心。匂いにまで出るのだから、あんなことを言いながらも、夕雲は単純だ。

「左」

「了解」

言うと同時に散開。刹那、曙の立っていた場所が撃ち抜かれた。

嵐の夜というトラウマを常に刺激し続ける環境下で落ち着こうとしたことで、変に集中力が増していた。匂いも雨のせいで薄れている筈なのに、妙に強く感じる。

今のも、ここに来るだろうという予測を、匂いから導き出したもの。匂いから動きが読めるとは自分でも思っていなかった。

ひとえに、鳳翔との実戦訓練の賜物。殺意無しの達人との訓練を延々と繰り返し、ようやく傷を一つ付けるところまで来たのだ。汚く臭う殺意があれば、こちらには簡単に対処が出来る。

「なんだ、主砲って遅いのね」

「鳳翔の薙刀の方が余程避けられないな」

曙は左へ、私は右へ。夕雲は主砲を片手にしか持っていないため、左右に散らばれば片方はフリーになる。艦装に魚雷が接続されているが、それが当たる前に避けることはできる。

普通の艦娘は、接近戦なんて考えない。前回は無闇矢鱈に錨を振り回してただけなので、まるで当てることは出来なかった。何もかもを回避され、傷一つ付けられなかった。

だが、今は戦況が見えている。いくら雨風が強かろうが、波が高かろうが関係ない。

「余程鍛えたんでしよう。この短時間で、付け焼き刃でもなかなか

じゃないですか」

主砲は曙に向いた。一度殺したのに蘇っているために、優先的に殺さなくてはいけないと判断したか。

「ですが、まだ夕雲には及びもしないでしょう」

曙に向かう火薬の匂い。狙いは再び胸。前回と同様、心臓を一撃で終わらせる砲撃。

そんなこと、曙だって読んでいる。自分が先に狙われることだって、最初からお見通し。照準を合わせて、引鉄を引くまでの時間があれば、前に回避することだって出来る。

「何が及ばないって？」

砲声がするも、曙は無傷。身体を回転させ、砲撃を避けつつの前進。その回転を使い槍を薙ぎ払うが、さすがに遠すぎたか簡単に避けられる。

その回避方向に私が先んじて移動。懐に入るように肉薄。

「当たらないじゃないですか」

「お前もな」

曙はまだしも、私は前回の戦いで夕雲の回避を見ている。移動速度が異常に速くなっており、踊るように避けては急加速して間合いを取ってくるはずだ。

それも加味して、私はナイフを振るった。だが、その瞬間に突風。雨粒が顔面に当たり、一瞬目を瞑ることになってしまう。

「この天候は、夕雲の独壇場です。今まで何度も嵐の中で戦ってきました。何処が有利かなんて、手に取るようにわかりますよ」

その間に匂いが遠退いた。私達の射程外に出て、主砲と魚雷の被害を受けないほどにまで間合いを取られる。

基本、風上から動かない。必ず私達の方へ雨が向かうような位置取りを徹底している。波もこちらに向けて来るため、進むのにも力がある。この立ち位置の時点で若干不利ではあった。

「大人しく死んでください」

「お断りだ」

取られた間合いを詰めるため、即座に行動。それなりに大きな間合

いのために魚雷が放たれたが、そんなこと関係なくすぐに回避。本当は跳び越えたいところだったが、跳んでいる間に主砲で迎撃されても困るため、少し大回りになっても海上を駆ける。また雨が顔を直撃するが、匂いも頼りに突撃。

魚雷はこちらだったので、今度は曙がフリー。波に足を取られながらも確実に前へ。私よりも持久力があるおかげで、この酷い天候の中でも息一つ切らさず、着実に攻撃を狙う。

「元捨て駒の割にはよく動きます。逃げずに使い潰されておけば、もう少しいい暮らしが出来ましたよ」

「何がいい暮らしよ。奴隷風情が語るんじゃないわ」

砲撃を掻い潜り、高波を潜り抜け、槍の間合いへ。

「あんなクソ提督に従うくらいなら、独り身の方が余程気が楽よ」

一点の曇りもない突き。主砲を狙ったそれは、やはり踊るように回避される。同時に私も回り込んで接近。私の射程に入り、腕を斬り付ける。が、やはり異常な速度でその場から退避。

あれはおそらく、艦装におかしな改造が施されている。頭の中や身体だけじゃない、全身が違法の塊。身体を考えない艦装の出力。それに耐えられるほどの身体の改造。それを疑問に思わない洗脳。3つ合わせてあの夕雲が完成している。

「貴女もこうなれていたかもしれないのに。ああ、そういえば貴女には改二すら実装されていない雑多な駆逐艦娘でしたね。ごめんなさい、夢を見せるようなことを言ってしまった」

おちよくるような話し方をしながらこちらへ砲撃。こちらはそれと雨を掻い潜りながら接近を試みるが、相変わらずの回避性能に四苦八苦。

なんとなくはわかっていたが、あちらの提督の考え方は至極簡単だった。

強力な力を持つ艦娘、または手に入れることが難しい艦娘以外は、全て捨て駒。随伴に連れてきた艦娘はそういうもの、もしくはダブリか何かか。どうであれ、私や曙、三日月は、文月や皐月のような第二改装が存在しないがために、不要と見なしているのだろう。

「夕雲は改二、そのおかげで意思も取り戻しました。提督ご主人様は夕雲の有用性に気付いてくれたんです。愛されていますから。貴女方のような三流の艦娘とは違うんですよ」

両腕に続き、両脚も疼き始めた。埋め込まれたチ級の骨が、駆逐棲姫の腕と同じように、夕雲の血を求めて力を増し始めている。

「ふうう……っはあ……」

曙も息遣いに変化している。私と同じように、心臓と肺が反応しているのだろう。呼気から深海の匂いが漂ってきた。

私達の怒りに呼応して、疼きは強くなる。一方、頭は妙に冷静だった。頭に上る血は、全て深海の四肢の力に変わっているかのようだった。なかなか近付けないでいるが、あちらの攻撃も当たらない。

「曙さんは第一改装に届きそうだったのに残念ですね。そうすれば、意思なき人形として大活躍出来たかもしれないのに」

「煩い」

苛立ちが頂点に達した。海面を一蹴りすると、今までに無い力が発揮された。チ級の骨が手を貸してくれているかのよう、瞬時に間合いを詰めることが出来た。

「気分良く」高説垂れている最中に悪いが、その減らず口を止めろ」

ナイフで腹を一閃。本来なら腸がブチまけられるほど強く食い込ませるつもりだったが、紙一重のところまで避けられた。しかし、空を切ったその斬撃で、夕雲の制服が切れる。この威力は、駆逐棲姫の腕が力を貸してくれているように思える。

真正面から不意打ちしたようなもので、貼り付いた笑みがようやくやく無くなった。

「この……」

「余裕、無くなってるじゃない」

私に視線を向けた時には、曙が跳んでいた。身体を捻り、槍をしならせ、主砲が自分の方に向く間も与えずに叩きつける。いくら刃が潰れていようとも、先端についているのは鉄の塊だ。直撃すればタダでは済まない。

私のナイフよりも危険だと判断したのだろう。即座にバックス

テップで射程から逃れるが、海面に叩きつけられた瞬間に、爆雷が爆発したかのような水飛沫が上がった。曙も通常より威力が上がっている。

「右だ」

「了解」

火薬とキナ臭い匂いが水飛沫越しにも感じた。目隠し状態になっていたが、夕雲は確実に曙を狙っている。そのままなら何処かしらに命中していただろうがそうはいかない。

夕雲の砲撃は曙には当たらず、水飛沫が晴れる。同時にまた海面を一蹴り。まだ先程の出力は出るようで、瞬時に夕雲の眼前へ。今度は避けられない。

「なっ!?!」

「三流で悪かったな」

勢いを殺さず、もう逃がさないように夕雲の首を掴もうとするが、咄嗟に上体を逸らして回避。これすらも避けるか。

だが、この不安定な体勢ならもう回避出来ないだろう。曙の匂いを感じ、夕雲が体勢を整える前にその場から跳び退く。

「アンタはその三流に負けんのよ」

槍による強烈な足払い。膝から叩き折るのではないかという勢いで両脚を薙ぎ払い、回避する暇も与えずにその場に横転させた。

「その、程度でえ……!?!」

即座に曙に主砲を向けるが、私を視界から外すとはいい度胸だ。砲撃と同時に跳び退いた分を帳消しにするように前へ跳び、夕雲の首を掴む。放たれた弾は、曙に当たることなく後方へ着水。

「つくあっ!?!」

「若葉もな、お前の鎮守府に捨て駒にされたんだ。辛うじて生きてるけどな」

ギリギリと握りしめる。どうにか抜け出ようと私に主砲を向けようとしたようだが、撃つ前に曙が弾き飛ばした。これで後は魚雷だけだが、私が近すぎて、放ったところで当たらない。自爆されては困るが、こいつは他の連中と違って自分の命は大事なようだ。これだけ捨

て駒を扱ってきたのに。

武器もなくなり、私の腕を掴んできたが、気にせずには締め続けた。最初の笑みは何処へ行ったか、必死の形相でもがき苦しむ。

「若葉も三日月も捨て駒にされ、曙は一度殺されている。やり返されても当然だよな」

よりキツく締め上げる。このまま殺してやりたいくらいだった。だが、それを決めるのは私ではない。

「曙、どうしたい。若葉はもういい。殺された曙が決めてくれ」

海面に叩きつけるように投げ捨てた。同時に艀装の隙間にナイフを挿し入れ、分解する。ここ最近はやれていなかったが、日頃の艀装の整備のおかげで、何処をどうすれば艀装が破壊できるかが見ただけで理解できた。

これで魚雷は放てない。海上に立つことすら出来ない。今の夕雲はただの人間に近しい存在だ。

「げほっ、つかっ、はあっ」

ようやく呼吸が出来て大きく咳き込むが、艀装が破壊されたことで艀娘としての全ての機能は失われている。辛うじて浮かんでいるが、いつでも沈めて溺死させることが出来る状態だ。

放っておいてもこの嵐。まず間違はなく溺れて死ぬ。その水死体が浜辺に流れ着いても困るが。

「はっ、こんな惨めな奴に私の手を汚したくもないわ。それに、私利私欲で人を殺すなんてこいつらと一緒にじゃない。同類に思われたくないわね」

「なら捕虜でいいな。どうせ艀装も無い」

「ええ。明日にでも来栖提督に引き渡せばいいんじゃない？ でもその前に腕の1本や2本折っておいてもいいかもしれないけど」

夕雲の長い三つ編みを掴み、引き摺るように運ぶ。もうこの時には抵抗もなかった。艀装のパワーアシストも失い、戦闘できないとわかるや否や、すぐに諦めた。

いや、だがここから逃げるチャンスは探っていそうだ。注意だけは念入りにしておく必要があるだろう。

「こんなことをして……後悔するといいいですよ……」

「この状況でよくもまあそんなことが言えるわ。クソの部下はクソつてことね。逃げてよかったわそんなところ」

減らず口が鬱陶しかったため、腹を蹴って気絶させた。これなら自殺も考えないだろう。そんな根性無さそうだが。

「ちよつと、こつちの連中勝手にバタバタ倒れたんだけど！」

こちらの戦闘が終わったところで、戦艦を食い止めていてくれた足柄が不完全燃焼な表情で合流。疲れた顔の摩耶も後ろからついてきた。

リミッター解除の代償のことをちゃんと聞いていなかったらしく、目の前で勝手に沈まれて気分を悪くしている。

「こつちも沈んじゃった……リミッター外された子は助けられないのかな……」

文月達第二二駆逐隊も項垂れながら合流。案の定、戦闘に参加していた艦娘は全員自沈。

「最初に撃ち抜いた人、まだ生きてました」

「戦闘の前に気絶してたから、リミッター外れてなかったの！」

戦闘開始前に三日月が倒した1人の駆逐艦は、夕雲の指示を聞いていなかったため、他の連中と違い沈まなかったらしい。それを雷と三日月が両腕を持って引きずってきた。

この艦娘も捕虜とするのがいいだろう。洗脳され、人形にされてしまっているが、飛鳥医師ならどうにかしてくれるはずだ。

第五三駆逐隊としての初陣は勝利で幕を閉じた。だが、後味の悪い、胸糞悪い結果になった。勝ったのに勝った気になれない。勝利を追い求めている足柄の不完全燃焼もわかる。

これからの戦い、ずっとこういう終わり方をするのかもしれない。そう思うと、ただただ気分が悪くなる一方だった。

捨て駒の結末

嵐の中の戦闘が終了。私、若葉は曙と共に夕雲を撃破し、それを工廠にまで運び込んだ。その場で殺しても別に良かったのだが、ここで殺してはこいつらと同じになってしまう。それに、捕虜として何か出来れば、これからのことに繋がるだろう。

他も無事に戦闘を終えていた。今回は全員無傷での終了。ドツクのない施設なので、何事もなくて何よりである。

工廠に戻るや否や、夕雲を海上に投げ捨てる曙。気絶させているのでピクリともしないが、やや乱暴。殺さないにしろ、殺したいほどに憎しみが溜まっている。曙ならあれくらいやっても誰も咎めない。

「先生！ 一人だけ沈まなかつたの！ この子、どうにか出来ないかしら!？」

そしてもう一人。リミッターを外される前に三日月が射撃により倒した艦娘。こちらは雷と三日月に丁寧に降ろされた。夕雲とは扱いの差がすごい。

「その子は医務室に運んでくれ。というか君達、まずは中に入るんだ。そこまで濡れては意味が無いかもしれないが、まだ嵐は終わっていないんだからな」

嵐は未だ止むことなく、戦闘中には見られなかったが浜辺にいろいろなもの漂着しているのも確認した。工廠も雨風でぐっちゃぐちゃである。先に戻っていたシロクロは既に風呂に入った後に中で待機しているほどである。

夕雲は雨晒しの工廠に捨て置かれていたが、人形にされた艦娘は臙装を無理矢理剥がされ、医務室へと運ばれていく。が、嫌な予感がしたので待ったをかけた。

「ちよつと待ってくれ」

「若葉、どうしたの?」

艦娘を抱きかかえていた雷に問われるが、返事をせずその艦娘の匂いを嗅ぐ。最初は夕雲と同じような薬の匂いだったが、近付いたら違う匂いもした。予想通りだった。

「艤装とは違う火薬の匂いがする」

「えっ……じゃあ」

「こいつは爆弾そのものだ」

私の言葉に反応してみんなが雷から離れた。雷はどうすればいいかわからずその場で硬直してしまった。戦闘に参加していたのだから激しい振動で爆発するようなことは無いだろうが、爆弾と言われたら動けなくなってしまうても仕方のないことである。

「来栖からの情報にそんなもの無かったぞ!？」

「だが匂いは確実にする」

先に引き揚げられている前回の人形からは爆弾は見つかっていないらしい。ならば今回からの新戦力か何かか。

「くそ……なら夕雲も危ないな」

話している内に、捨て置かれた夕雲の匂いも嗅いでおく。薬のような匂いに混じって、人形と同じ火薬の匂いもした。近くで嗅がないとわからないくらいの微妙な匂い。おそらく他の者が嗅いでもわからなかっただろう。気絶させずに捕虜としてここに連れてきたら、施設を巻き込んで自爆していた可能性は高い。

ついでに夕雲だけは服を脱がしてでも他に何か持っていないかを探った。鎮守府との通信をするのであろう小型の通信機を隠し持っていたくらいで、他は普通の装備。全裸にまで剥いたが何も出てこなかった。

「曙……お前本当に容赦無いな」

「こいつにかける情なんて無いわよ」

ひん剥いたのは曙である。一切の容赦なく、制服を雀り取っていた。人前だろうが関係ない。強姦されたような姿になってしまったが、知ったことではない。私達の安全のために剥く。

「それだけ匂いが薄いのなら、規模はそこまで大きくないだろう。だが、それでも自爆されたらこの施設が破壊される可能性はある。それだけは避けなくてはいけない」

身体そのものが爆弾ということはない。体内の何処かに隠されているはずだ。だが、それがすぐにわかれば苦労はしない。

ここで私の力を発揮する時だ。一番強く匂いがするところを探し出し、そこを飛鳥医師に開いてもらう。機械として入っていれば切除。完全に結合しているなら、ここにあるもので代用。つまり、継ぎ接ぎになってもらうしかない。

「こんな奴助けなくてもいいわ。自爆しそうなら、する前に私が息の根を止めてやるわよ」

「死んでいたところで外部から爆破出来るとしたら意味が無いだろう。どうであれ手術は必要だ」

「最後まで面倒臭いわねこのクソ雲……!」

ここからは大急ぎの手術だ。あちら側の鎮守府がこちらの状況に気付く前に、体内にあるであろう爆弾、最悪火薬だけでも抜き取る必要がある。せめて夜明け前までには全てを片付けなければならない。

「若葉、手伝ってもらえるか」

「任せてくれ。若葉は24時間働くぞ」

「ああ、手術の後にゆっくり休んでくれ。君に頼むしかない」

拡張された嗅覚がこんなところで役に立つとは思わなかった。手術に立ち会い、常に嗅覚を最大限に利用して、爆弾の隠し場所を探し当てる。

本当に犬になったようにも思えてしまったが、施設を守るための最も重要な仕事。それならば犬にでも何にでもなろう。

手術は滞りなく進んだ。先に人形にされた艦娘から開始し、常に匂いを嗅ぎ続け、胃と肝臓の隙間辺りに火薬が仕込まれていることを発見。さらにそれを起爆させるであろう装置は、腸の中に紛れ込んでいる手の込みようであった。どちらもぼつと見ではわかりづらくされている辺り、この改造を施した者の腐った性根がわかるというもの。

そこからは飛鳥医師の腕の見せ所だった。三日月の手術の時にも見た、迅速かつ丁寧な仕事により、恐ろしいほどの速さで処置されていく。必要最低限の傷と、生活に一切の難が無い摘出。臓器にも傷一つ付いていない。

「若葉のおかげだ。胸と腹を少し開くだけで済んだ」

「若葉は探すことしか出来ないから」

「充分だ」

結果、2人とも軽めに傷が付くだけで終了。継ぎ接ぎになることもなく、この傷も時間経過で消えるもの。私達とは違う。

「もう火薬の匂いはしない。元々の薬のような匂いと、今の血の匂いだけだ」

「そうか。そこまで鼻が利くとはな。大したものだ」

私自身も正直驚いている。一時的な失明という経験が、私をここまですべて変えてくれた。この嗅覚は今後も使っていこう。より高めてもいいかもしれない。

気付けば窓に叩きつけられる雨は止み、風も無くなっていった。外が明るい。手術は夜明けまで続いていったようだ。時間も忘れて手術に付き合っていたからか、眠気すら無かった。

「この装置と火薬はどうする」

「機能は停止されている。それに、外部から何かあったとしても、火薬を分断しているんだから爆発することは無いだろう」

それなら安心だ。施設に危険が及ぶことは回避された。

「さて……あとは」

残った問題は、夕雲が隠し持っていた通信機。ここでの戦いを終わらせた後に、鎮守府に報告するためのものだと思われる。連絡が来ないとなると、あちらは不審に思うだろう。難航しているか、失敗したかになる。

と、突然通信機から音が鳴り響いた。夕雲から連絡が無いため、あちらが痺れを切らしたか。

これを取るか取らないかで今後が変わる可能性はある。少なくとも、夕雲がこれを取ることが出来ない状況であることは伝わっているだろう。

「どうする」

「……声を聞けば、一元凶の見当をつけられるかもしれない」

意を決して、飛鳥医師がその通信を受け取った。携帯電話のようなもののため、その会話は私には聞こえない。飛鳥医師1人で、全てを

対処してもらおうことになる。私に出来る事なんて何一つ無いが。

「君がこの夕雲をけしかけた鎮守府の提督か」

飛鳥医師がその通信に出た瞬間、近くにあった自爆装置がカチカチと音を立てた。夕雲では無い声が聞こえた時点で即座に自爆させようとしたようだ。なるほど、予想通り遠隔操作も可能と。

気に入らないが、これでは沈んでしまった10人の艦娘達は、海の底で自爆させられたのだと思う。引き揚げ作業が必要無くなってしまった。

「夕雲からは撤去させてもらった。君の思惑通りにはいかない」

飛鳥医師の拳がギリギリと音を立てるほどに力が入っているのがわかる。ちゃんと話が出来ているようには見えないが、話をするだけでイラついているようだ。

私だって腹が立つ。外道に堕ち、あそこまでの戦闘を繰り広げた夕雲ですら、失敗とわかった瞬間自爆させるだなんて。艦娘を何だと思っている。

「中立区に攻撃をしてきたんだ。然るべき処置を取らせてもらおう。覚悟しておけ」

それだけ言って通信を切った。さすがにこの通信機まで爆発するようなことは無くて良かった。夕雲ごとこれも破壊される算段だったか。まさか手術で体内の自爆装置が摘出されるとは思わないだろう。

この通信機も物的証拠。しっかりと残しておき、来栖提督に提出する。怒りのあまり破壊してしまいそうだったが、何とか抑え込んでいた。

「まずは休もう。話は来栖が来てからだ」

「………わかった」

お互いに気が抜けたか、大きく息を吐く。今までの緊張感が無くなり、疲れにどつと襲われた。私は戦闘後に休むことなく手術に挑んでいる。濡れた服を着替えた程度だ。戦闘の疲れも上乘せされ、倒れそうなほどになってしまった。

こればかりは体力がどうかそういう問題ではない。むしろ不

健康の温床である。寝不足は良くない。

「本当に24時間働かせてしまったな。すまない」
「構わない。若葉が役に立っているようで何よりだ」

眠気を堪えて医務室から出て、フラフラと自室へ。この時間なら三日月ももう起きてセスとエコの散歩に付き合っている頃だ。

自室に入るや否や、飛び込むようにベッドに倒れ、そのまま眠りについた。24時間で限界に来たようだ。もう少し頑張れるようになりたい。

私が目を覚ました時には、既に昼も過ぎてしまっていた。飛鳥医師も同じくらい眠ってしまったらしく、その間に鳳翔含めた警戒隊は一時撤収。先に連絡しておいた来栖提督も、既に引き揚げ作業を終えて撤収済みであった。

引き揚げ作業は、何も引き揚げる事が出来ず終了したらしい。詳しいことは伏せていたようだが、私と飛鳥医師にはどういう状況かはわかる。人形に爆弾が埋め込まれていたことを知っているため、おそらくみんなが察しているだろう。

飛鳥医師不在の間は、全て雷が取り次いでいたとのこと。さすがこの施設の最古参。ある意味、飛鳥医師の次に権限を持っている。

「すまない、完全に寝ていた」
「大丈夫！ 若葉と朝まで手術してたのよね。そういうときははいっぱい頼っていいのよ！」

久々にガッツリ家事をやって逆にテンションが高い雷。鳳翔が一時帰宅することと、深夜の戦闘だったこともあり、今日は訓練自体をやらなかつたそうだ。各々やりたいことをやって過ごしたとか。

「お腹空いてるわよね。お昼、ちゃんと残してるから食べて食べて！」
いつになく献身の圧が凄い。溜まっていた欲が溢れ出したかのよう。今まで溜め込んでいた部屋の掃除などで、戦闘後の鬱屈した感情をリフレッシュしたようである。

三日月も雷の手伝いをしていたようで、あの時のイライラは払拭できた様子。随分とスッキリした顔をしていた。

「工廠と浜辺の掃除も終わらせといたぜ」

「今回は流れ着いたの少なかつたんだよね。まーた戦艦の主砲無かつたよ。残念残念」

「……そうだね……もう少し……ここにいさせてね……」

相変わらず、言葉とは裏腹に2人とも残念さのカケラも無い。

私も参加すべき浜辺の清掃も既に終了とのこと。至れり尽くせりである。使えそうな艀装の運び込みも終わっており、今は分別中らしい。これは私も参加しよう。

「人形とクソ雲はどうなったのよ。治療したわけ？」

「ああ。体内の爆弾は摘出した」

「あっそ」

曙はまだまだ不機嫌である。人形の艦娘はさておき、夕雲に対しては負の感情しか無い。今は治療後で眠ったままだが、目を覚ましたら何をしでかすかはわからない。

「艀装も持たない上に、胸と腹を開いているからすぐには動けない。それでも無理に動く可能性も鑑みて、しっかりとベッドに拘束している。心配しなくていい」

「同じ空間にいることが気に入らないわ」

「我慢してくれ。搬送できるようになり次第、来栖に持っていつてもらう」

夕雲は当然、来栖提督に引き渡し、然るべき処遇を受けてもらおう。洗脳されているのはわかっているけど、犯した罪は大きい。更生出来ればいいが、正直期待も出来ない。

ただ、引き渡した後はもう、私達は夕雲とは関わらない。関わり合いたくない。こっちにはまだ襲撃してきそうだというのに、あんなヤツに時間を割くわけにはいかないのだ。

「問題は人形の方だ。目を覚ましたところで無反応だろう」

「治してあげられないかしら……」

意思もなく、ただただ捨て駒にされていたただけだ。夕雲と同じ洗脳かもしれないが、重さが違う。

「洗脳を解く手段を調べてみようと思う。こういうのは僕がやるべき

仕事だ」

飛鳥医師は元々艦娘のことを研究していた医療研究者だ。これも一種の艦娘の身体のことの調査。今までの知識とも併せて、少しの間は洗脳解除に尽力する。

勿論私達はそれに賛成だ。早期に決着が付きそうなら、同じ処置を夕雲にも施すことも検討中。

「そういうえば、あの子は何処の誰なのかしら」

「ああ、そういうえば言っただけな。あの子は朝潮型駆逐艦の霰だ」
私達と同じように、低コストで建造出来る駆逐艦の1人、霰。私達とは似たような力を持つ雑多な艦娘なのだろう。

「先生、その霰には改二ってある？」

「確かあったはずだ。僕が鎮守府にいた頃に見たことは無かったが」

「クソ雲が言っただけ。改二になって意思を取り戻したって」

「……そういうことか」

「ここで寝ている霰は改二待ちをしていたか、もしくはダブリかのこと
ちらか。」

「つくづく胸糞悪い連中だ。徹底的に追い詰めてやる」

来栖提督は明日もまた来るそうだ。ここ最近、施設と鎮守府の往復を何度もさせてしまっているのだから申し訳ない。今度埋め合わせすると飛鳥医師も話す。

事は次の段階へ。夕雲撃破によって、より深く、面倒な方向へ加速する。

恩師

翌日。鳳翔がいないため、訓練などはなく平凡な1日が開始。私、若葉も久し振りの艤装整備に勤しんでいた。嵐の中の戦いで雨風にさらされ、それはもう汚れていた。昨日のうちにもある程度は洗浄していたが、分解してまでの総ざらいはまだだったため、今日はそれから。

工廠では摩耶とシロクロが深海棲艦の艤装をいろいろと組み立てており、セスはエコのメンテナンス中。1週間近く訓練をしていたため、こんな日常も久し振り。ほんの少しだが懐かしい気分になってしまった。

「久々に弄ると楽しいだろ」

「ああ」

分解し、パーツの1つ1つを洗浄していく。私の戦いに一番身近についてきてくれる艤装なのだから、自分の手で丹念に磨き上げたい。先日の戦闘でも、調子が悪くなることもなく最初から最後までフル回転してくれている。

戦いを経験したからこそ、艤装に一層の愛着が湧いた。洗浄し、磨く手もいつもより軽く動く気がする。素直に楽しいと思える時間だ。

「無茶な戦いをしたが、何処も壊れていないな」

「そりゃよかった。イカれたら代替のパーツ勝手に持っていったいいからな」

「助かる」

幸い、何処も壊れていなかった。ヒビや劣化も今のところ見えず、磨くだけで新品のような輝きを取り戻す。これを使ってまた戦場に出られるかと思うと、気分が高揚するというものだ。

「そろそろ来栖提督が来るか?」

「そうだな。午前中に来るとは聞いてるぜ。お前らもそろそろ片付けろよー!」

「はーい!」

ずつとこういう毎日を過ごしていきたいものだが、そうはいかない

のが現状である。早く終わらせて、この日常に戻ってきたいものだ。

少しして、遠くにいつもの大発動艇が見え始めた。工廠の片付けも丁度終わったところなので都合がいい。相変わらず大発動艇を使うときは第二二駆逐隊がここに来る。もうご近所様感覚で頻繁に来ているものだから、見ないことの方が珍しく感じるほどである。

もう何度も来ている来栖提督なので、シロクロやセスも隠れるようなことはない。他人が苦手なセスですら、来栖提督には慣れたものである。

が、今回は少し違った。

「昨日ぶりだなア。お、若葉、ちゃんと起きてんなア」

「ああ、昨日は挨拶出来ずにすまない」

「構わねエよ。戦闘後に飛鳥の手術手伝ったんだろオ？ 疲れ果てて当然だぜエ」

いつものように大発動艇から飛び降りて工廠に着地。が、そのあとにさらに別の人間が降りてきた。奥には見慣れぬ艦娘もいる。

「大将、飛鳥が使い始めてからここに来るの初めてじゃないですかい。驚かないですねエ」

「驚いてますよ。当たり前のように深海棲艦が生活し、共存しているんですから」

物腰穏やかな男性。着ている服と来栖提督の呼び方から、同業者であることはすぐにわかる。少なくとも、私や三日月が知るいけすかない男では無い。

来栖提督だけと考えていたせいで、その姿を見たセスが一気に萎縮して部屋の隅に。シロも早速警戒していた。

唯一クロだけは無警戒。信用できる来栖提督が、あえてこの場に連れてきたのだから、当然信用できると判断したようである。

「オツチャン、この兄ちゃんは何者？」

「来栖、君はオツチャンなんて呼ばれてるんですか」

「いや、まア、いろいろあつたんですよ」

あの来栖提督が、その男性相手だとすごく小さく見える。逆らえな

いというか、弱みを握られているというか。

大将と呼んでいたということは、相当格上の人間。それでいて、畏まった雰囲気もそこまで強くないため、飛鳥医師と来栖提督の関係性と似たようなものなのかもしれない。

「クロ、この人はなア、俺の上司だ。恩師つつつてもいい」

「下呂ゲロと言います。少し聞こえが悪いので、大将と、階級で呼んでもらえると助かります」

「タイショー！」

「はい、ありがとうございます」

確かに少し音が悪い。どうしても汚いものを思い浮かべてしまう。だが、おそらくこの人もそれを気にしているだろう。口にも出さないし思い浮かべることもしない。

下呂大将は来栖提督の上司であり、所謂上の人間というヤツ。飛鳥医師が言っていた、顔が利く上の連中というのの1人と考えればいいのか。そんな大物が直々にこの施設にやってくるとは、恐れ多いものである。

だから、私も警戒していた。三日月ほど過剰ではないが、提督という役職の人間には未だ嫌な思いしか無い。来栖提督は慣れたが、他人となると話が変わる。

そのため、無意識でもあつたが下呂大将の匂いを嗅いでいた。嫌な匂いがするようなら要警戒。信用せずにやり過ぎす。

「お茶と畳の匂いだ」

「おや、よく気付きましたね。身なりは整えているつもりでしたが「妙に鼻が利くんだ。いろいろあって」

薬の匂いとかのキナ臭さは無かったが胡散臭さはあるため、なかなか信用がしづらい。話し方、匂い、立場と、その全てを見た感じ、大丈夫そうではあるが。

チラリとシロを見ると、今まで吟味した結果、信用することにしたようだ。私の物理的な嗅覚ではなく、シロの感覚的な嗅覚は、下呂大将は問題ないと判断していた。

「うちの秘書艦の趣味です。私の鎮守府は和風に出来ていまして」

「そうか。落ち着く匂いだ。嫌いじゃない」

「それは良かった。嫌われるよりは好かれた方がいいですから」

その秘書艦というのが、後ろを陣取っていた緋袴の艦娘。見るからに和風。お茶と畳の匂いもわからなくはない。

下呂大将に呼ばれ、私達の前へ。凜とした佇まい。少し小柄ではあるが、秘めたものを感じる。そして、下呂大将と同じ匂いを持っているた。

何より脇差に目を引かれたが、今は触れないことにしよう。普通じゃないのはわかる。

「秘書艦、神風よ。飛鳥先生とは一応面識があるけど、貴女達とは初めてよね。よろしく」

緋袴の艦娘、神風。大将の秘書艦というだけあり、こちらも相当の実力者。旧式であるにもかかわらず、何を間違ったか鳳翔と同等ほどの力を持っているらしく、それを聞いただけで私達には勝ち目が無い上の上の存在であることが理解できた。

「護衛艦は神風だけなのか？」

「ええ。私だけで充分なもの。それに、この人こうやって動き回るからついていけるのは私くらいなの」

ケラケラ笑っているが、1人で充分という程に自信もあるのだろう。敵でなくて本当に良かった。

「来栖が来たのか。なら呼んでくれればいい……の……に……」

私達が話している内に、奥から飛鳥医師がやってくる。そして、下呂大将と目が合った瞬間に動きが止まった。想定外の客に、思考が停止している。

「おや飛鳥、久し振りの再会に言葉もありませんか」

「来るなら来ると言っておいてもらえますか先生……」

来栖提督も同様、飛鳥医師も物凄く小さくなってしまった。やはり逆らうことが出来ない何かを持っているのだろうか。

「もう上としても他人事じゃなくなって来たんですよ。中立区での戦闘行為は由々しき事態です。そんな簡単な規則を守ることも出来ない者に、鎮守府を任せるわけにはいかない。だから私が直接動くこと

にしたんです」

「は、はあ、なるほど、先生ならそうお考えになるでしょうね」
「ということ、まずはその洗脳されているという艦娘を見せてもらえませんか？」

ニコニコしながら飛鳥医師と話す下呂大将。項垂れる飛鳥医師と来栖提督。今までに見たことがない光景だった。

「1つ教えてほしい。どういう関係なんだ」

素直に疑問を口にした。3人が3人知り合い同士のような雰囲気だが、関係性が見えづらい。

「僕は最初の頃、先生の鎮守府で働いていたんだ。やらかしたのは、そこから別の鎮守府に異動してからだね」

「俺ア新人時代に大将から提督のなんたるかを教えてもらったんだ。俺がこういう活動が出来てるのは大将のおかげってわけだな」

なるほど、納得した。下呂大将はどちらにも直属の上司になるわけだ。特に来栖提督にとっては、提督としての全てを教えてもらった師匠とも言える人になる。

私達にとつての鳳翔みたいなものだ。とてもじゃないが敵わない。「少し準備させてください。ここには少し精神的にナイーブな子もいます。突然先生が現れたら錯乱する可能性だってある」

「おっと、そうでした。私としたことが配慮に欠けていましたね。申し訳ない」

どうにか踏み止まってくれた。思い立ったら即行動が下呂大将のやり方のような。だからこそこの地位まで上ることができたのかもしれない。そうでなければ直にここに来ることなんて無いだろう。凄まじい行動力だ。

雷や三日月にも説明し、曙は医務室で監視中。状況が良くなったので、人間3人と神風、そして私は医務室へ。医務室にそう何人も入れるわけでもないの、他のものは工廠で待つことに。毎度お馴染み第二二駆逐隊も、三日月との交流に忙しいようである。

「今朝の段階でまだ2人も目を覚ましていません。僕がそのように

したというのもありますが」

「来栖が来るのを待つていたわけですね。いい判断です。私が来ることは想定外だったようですが」

「当たり前でしょうよ。誰が大将が来ると思うんです」

仲のいい人間3人である。上下関係は激しいが、お互いがお互いを信じているのがわかる。下呂大将は正直胡散臭いと思つていたが、思い違いか。

「さて、と。目を覚ますのはどちらが早いですか？」

「予定では夕雲が。おそらく霰は目を覚ましたところで自分の意思を持つていない人形なので……」

「ふむ、そうですか。では、飛鳥はその治療法を探してくださいね」

「勿論。必ず復帰させます」

「いい返事です」

医務室に入る。完全に拘束されている夕雲が、既に目を覚ましており、心底嫌そうに曙が待つていた。

「ちよつと、こいつ起きたんだけど」

「うーっ、うあつ、ううーっ」

余計なことをしないように猿轡まで噛まされ、ジタバタともがいていた。手術痕がまだ痛むだろうに、元気なものである。

「飛鳥、口を利けるようにしてあげなさい。私が尋問しますので」

「わかりました」

下呂大将に言われ、飛鳥医師が夕雲の猿轡を外した。

「女の子になんてことするんですか」

第一声がこれとは。相変わらずのクソ雲つぶりである。自分がしたことを罪と思つていないような言い分だ。

中立区での戦闘行為は重罪。私達は許可を得て正当防衛に出たが、向こうは当然無許可。さらには理由が自分達の悪事の口封じである。アウトもアウト。

「まだまだ軽すぎるほどの罰だと思えますがね。さて、君と話がしたくて私はここに来ました。下呂と言います。階級は大将」

「何も話すことはございません。提督ご主人様の迷惑になるようなことは一

切しませんよ」

まあそう言うだろうと最初から思っていた。曙は舌打ちし、私も気分が悪くなる。私達は自衛のために夕雲を助けたが、そのまま命を奪っておいてもよかったのではないかと思えてしまう。

だが、この夕雲も洗脳されているのだから難しいところである。

「そう言うとは思っていません。なので、別に鎮守府のことを話せとは言いません。何処にあるか、誰が統治しているか、何のためにこんなことを……いや、それはいいです。見当がついているので」

夕雲のベッドの隣に腰掛ける。長丁場も辞さないという姿勢。夕雲は拘束されているため、嫌でも聞かざるを得ない。耳を塞ぐことも出来なければ、そっぽを向くことも出来ない。

「何から話しましょうかね」

「先生、少し待ってください。霰も目を覚ましました」

ほぼ時間差のようなものであろう。霰も目を開けていた。が、意思を持たないため、目を開いているだけ。泥沼のように濁った夕雲の瞳とは違う、光の無い虚空のような瞳だった。

「霰さん、リミッター」

「させないわよ」

それを確認した夕雲が霰のリミッターを外そうとしたが、即座に神風が対応。喉に一撃入れ、それ以上喋れなくした。

動きがまるで見えなかった。攻撃をすると思わせる匂いすらしなかった。その名の通り、まさに神風。

「かはっ!？」

「来栖には聞いていましたが、なるほど、人形のリミッターを外すのは、君の声が必要なんですネ」

下呂大將は穏やかな姿勢を崩さない。だが、少し匂いが変わった。ほんの少しだけ刺々しい匂いが、落ち着くお茶と畳の匂いの中に混じったような気がする。

神風がかなり強引な手段で霰のリミッター解除を食い止めたが、それを見ても態度を一切変えなかった。肝が据わっているというか、容赦が無いというか。

「今のは君が悪い。霰をどうにかしよう」と即座に判断したのは及第点ですが、この状況でそれをやったらこうなることくらい子供でもわかるでしょう。本来の夕雲はそこまで愚かではありませんよ」

神風も冷たい眼差しで夕雲を見下ろしている。次に喋ったら喉を潰すぞと言わんばかり。

「ですが、この子が近くにいたら私との会話に集中出来ないでしょう。若葉、曙、霰を別室に運んでももらえませんか」

「まだ部屋が空いているだろう。今はそこに頼む。片付けが必要なら雷と三日月に頼んでくれ」

鳳翔が戻ってきたとしても、私室として使える部屋は2つある。その内の1つを霰に使ってもらおうという算段だ。夕雲がいる以上、近くに置いておくわけにはいかない。簡単な処置なら医務室でなくても可能だ。

「霰、立てるか」

霰に対して問い掛けてみるが、やはり反応なし。目は開いていても、これだけの騒動があっても虚空の一点を見つめているだけ。意思を奪われ、人形にされているのが痛いほどわかる。

「霰、立て」

試しに夕雲のように命令を試してみるが、これもダメ。おそらく夕雲の声にしか反応しないようになっていた。

「諦めましょ。車椅子持ってきたわ」

「すまない」

医療施設だけあり、車椅子も1つはあった。2人がかりで霰を車椅子に乗せ、医務室から運び出した。

下呂大将と神風は、去り際の私達に手を振ってくれた。私達に対しては柔らかい態度だった。そのギャップが恐ろしかった。

正直、夕雲に関しては全部任せてしまうのがいいと思う。飛鳥医師はともかく、私達のような艦娘には手が付けられない大きなこと。

ならば私達は、仲間である霰の復帰に尽力しよう。この状態は可哀想過ぎる。せめて自分の意思を取り戻すまでは面倒が見たい。

大将の見解

体内の爆弾を摘出されたことで命を得た捕虜2人。その内の1人、人形にされ自我を失ってしまった霰は、もう片方、提督の奴隷である夕雲と一緒にしておくわけにはいなくなり、私、若葉と曙で、医務室から外に出すことになった。

夕雲の方は、来栖提督が連れてきた上司、下呂大将が尋問をするとのこと。そちらは私達がいたところで何も変わらないため、任せ切ることにした。人間社会に関わるこのため、そちらは人間にどうにかしてもらおう。

霰が座る車椅子に点滴台もセット。一応術後であり、胸と腹には傷がついているため、鎮痛剤は常に流している状態。それでも動けば痛みを感じるはずだが、霰は完全に無反応。

今の霰は、夕雲の命令だけを忠実に実行する自我のない人形。故に、命令のない今は何もせず、ただ車椅子に座るのみ。光のない瞳は、ただただ宙空を映すのみである。

「部屋は片付いてるわ。そこに寝かせればいいのね」

「ああ。夕雲の側に置くわけにはいかなかった」

雷が常に片付けてくれていておかげで、早急に霰を運び込むことが出来た。このまま復帰して、この施設に居着くことになった場合、ここがこのまま霰の部屋になるだろう。

曙と2人がかりで霰をゆっくり車椅子から降ろし、そのままベッドに寝かせた。点滴にも注意し、少し豪華な医務室のような形に。

その間も当然無反応。目は開いているが、何も映していない。呼吸もゆっくりと一定間隔。

「たまに車椅子で散歩させるのもいいかもしれないな」

「いい考えね！ 浜辺で潮風にあたれば何か変わるかも！」

なるべくならこれ以上の負担をかけずに治療してあげたいものである。ただでさえリミッター解除が出来るシステムまで組み込まれ、身体がめちゃくちゃにされているのだから。

「……私達もこうなってたかもしれないってことよね」

神妙な面持ちで曙が呟く。

夕雲の発言から察するに、私達が捨て駒として散らず、第一改装が出来る練度まで漕ぎ着けた場合、この霰のように自我を奪われ人形にされていたのだと思う。私は散ったので少し別だが、曙の場合は逃げ出さなければこうされていたわけだ。

私達の心を完全に無視した、ただの道具としての艦娘運用法。兵器としては間違っていないかもしれないが、命に対してやるべきことではない。

「ますます腹が立つわ」

「ああ。制裁は受けてもらわなくちゃいけないな」

とはいえ、その制裁は下呂大将と来栖提督に任せることにしよう。なるべくなら私達が自分の手で決着をつけたいとは思うが。

霰はベッドに寝かしたら自然と眠りについた。どういう理屈で睡眠と覚醒を繰り返すかはわからないが、眠り続けるのならその方がいい。その間に治療法を探し出す。

霰は定期的に家事担当の雷と三日月、それと今は雑務担当の曙がチェックするそうだ。突然暴れ出すという心配だつて払拭出来ないのだから、過剰くらいが丁度いい。特に曙なら、割と容赦なく押さえ込むくらいしそうである。

霰を寝かせたことを報告するために、私はまた医務室に向かった。まだ夕雲に対しての尋問は続いているだろう。何をどうしているかは気になるところ。

「飛鳥医師、霰を部屋に寝かせておいた」

「ああ、ありがとう」

医務室に入ると、思ったより静か。だが、飛鳥医師も来栖提督も少し疲れた顔をしている。上司が間近にいるという緊張感で、気疲れしているように見えた。

「お帰りなさい、若葉。霰はどうでしたか？」

「何事もなく眠りについた。今は曙が監視している」

「それは結構」

私に対しては、やはり笑顔を見せてくれる下呂大将。神風も手を振ってくれた。脇差に片手がかかっているのが怖くて仕方ないが。

夕雲は疲れた顔でダンマリを決め込んでいるようだ。何も話すことはないとは言っていたが、私達が霰を連れて行った後からは本当に口を割らないらしい。

「黙秘を続けるみたいですね。でも、拷問やら何やらで聞き出すのは性分ではないんですよ。私は悪を以て悪を制するようなことはしたくないので」

喉に一撃入れておいてよく言う、と思ったが口には出さず。ああしなければ霰はリミッターを外され、暴走していただろう。動けないまままだとしても、外したことで死の危険まである。

「とまあ、ここまで普通に尋問を続けては来ましたが、実は私、元凶の目星はついてるんです」

医務室が静まり返った。そして、

「だったら最初から言ってくださいよ大将オ！」

「今までのは何だったんですか！ 時間の無駄だ！」

「本人の口から聞ければいいなと思って泳がせていたのですが、いやはや、思った以上に強情だ」

まくし立てる部下達。それに対してニコニコしながら返す。神風も頭を抱えていた。この人はそういう人というのがよくわかった。

夕雲はあくまでも無言。だが、今の発言で小さな動揺が見て取れた。匂いにもほんの少し現れる。微かに冷や汗の匂い。

「これだけ時間を与えられたら見当くらいつきますとも。来栖からも各種情報は貰っていますしね。最後は風潰しでしたが」

「あー……まあ、そうですねエ。俺んトコは自分の鎮守府もこの施設守るために力使ってたんで、調査は大将にも手伝ってもらってましたが」

「来栖は適材適所というのをよくわかっています。こういうズル賢い輩は、調査と牽制、両立しなければいけませんからね。来栖は牽制に専念した。ただそれだけです」

実際、こちらに対しての攻撃は夕雲の1回だけだったが、あちらの

鎮守府にも攻撃こそされなかったが探りは入れられていたらしい。来栖提督が留守にしていたときだけだそうだが。

この施設は嘗められていたが、来栖提督は普通に鎮守府だ。動かれ
ては困る相手だろう。無駄に慎重である。私達には知識がないため、
顔を出しても足が付かないし。

「では早速ですが、私が目星を付けている者の名を。家村イエムラですね。階
級は大佐」

夕雲は無言を貫く。だが、私にはわかる。

「冷や汗の匂いが強くなった」

「素晴らしい。若葉、便利な能力を手に入れましたね」

つまりは凶星。下呂大將が言う家村という提督が今回の元凶であ
り首謀者。

「僕は知らない名前ですね」

「君がここに定住するようになってから役職を持ったものですから。
勿論、来栖も面識は無いと思いますよ」

「調査中に名前を見たくらいですねエ。まだそこまで絞り切れてな
かった」

ここ一年で提督という役職を持った、比較的新人らしい。上の人間
の中では、将来有望とも言われている新進気鋭の提督だったそうだ。
それなのにもう来栖提督と同じ階級なのだから、余程のやり手なのだ
ろう。裏が無ければ。

短期間で戦果を出し、めきめき頭角を現し始めていたのだから。的確
な采配をする切れ者として見られてもおかしくない。

「実際、家村を育てたのは私ですね。来栖の弟子ですね」

「大將に教わったときながら、この体たらくたア……」

「本当ですよ。一層、私が動かざるを得なくなりましたから」

大きな溜息をつく下呂大將。自分の教え子が外道に墮ちていたと
思うと、遣る瀬無い気持ちでいっぱいなようである。何処で道を間違
えたのだろうか。

「ともあれ、いつから始めていたかは知りませんが、半年以上はこの戦
術を使い続けてきたのでしょうか。隠してこれたことだけは評価して

あげます。それ以外は全て落第ですが」

「人間として落第ですよ」

「ええ。確かに艦娘は兵器として登用されています。扱いとしては人間ではなく物品というのが正しい。ですが、そうだとしても間違っていますよ。だから、私は彼に説教をしなくてはいけない」

出会った直後からあまり信用していなかったのが、少し申し訳ない気持ちに。下呂大将は大将という階級を持つべき人間だ。私達艦娘の存在も真剣に考え、道具ではなく仲間として運用してくれている。

だからこそ、こんな力を持った神風がいるのだろう。親身になって育て上げたからこそ、強くなった。ただただそれだけのこと。

「家村はよく考えていたと思いますよ。足が付かないように、出撃のタイミングや出撃させる場所もしっかり考えていました。捨て駒の証拠隠滅まできっちりです。ですが、穴はあるんですよ。そういう戦術には」

その穴というのが、この施設の存在を知らなかったこと。

飛鳥医師はそれなりに名の知れた医療研究者であったことは私も本人の口から聞いていた。が、例の件で鎮守府を辞め、この施設で研究をするようになってからは、皆の記憶から薄れていき、飛鳥医師のことをよく知るものというのは古参の者程度。ここにいるという事実を知るもの自体が極端に少ないらしい。そもそも、放棄された鎮守府を気にかけるものなどいやしない。

「そこから辿れば、割とすぐです。私はこの近海の海流も全て把握していますから、何処を戦場にしたかは大方見当がつきます」

「さすが大将、俺にや無理だ」

「君の努力は認めますよ」

今さらりともんでもないことを言った気がする。

確かにこの浜辺には、海流の影響でいろんなところから物が流れ着く。ただし、その海流は複雑であり、規模が恐ろしく広いため、全て把握するのは不可能だ。それが全て頭に入っていると。

来栖提督も調査をしていたが、海流の影響を全て考慮した戦場の特定は流石に無理だったらしい。それをやってのけたのが下呂大将。

「当然その近海の鎮守府は全て視野に入れ、資源の増減や活動報告、戦闘詳報から割り出しました。虚偽があればすぐに気付けます。私は本来そういう役目では無いですから、少し時間がかかってしまいました」

「少しって……それ全部でどれだけあるんですか」

「ざっと半年分遡りましたね。3日でいくつか穴を見つけましたよ。書いた方がいいであろうことが書かれていなかったりしましたね。彼はそういうところの詰めが甘い」

半年分の資料を僅か3日で調べ上げた。仕事量がおかしい。もはや人間業を超えている。だからこそその大将なのか。

「それに、嫌でも証拠は残るんですよ。捨て駒がここに生き残ってるんですから。悪事というのは、隠しきれないように世界が出来ているんです」

私をチラリと見て微笑む。そう、私と三日月が生きた証拠だ。そこで戦い、そして散ったはずの動かぬ証拠である。私達が証言できる。顔を見れば提督の顔も当てられる。

「とはいえ、私が出向くのが遅くなってしまったせいで数多くの被害者を出してしまいました。既に沈んでしまった艦娘には申し訳ない気持ちでいっぱいです。最初から私がその辺りの担当をしていればよかったです」

以前引き揚げた艦娘は、最も古いもので4ヶ月前と聞いた。その時に既に下呂大將が気付いていれば、それ以上の被害者は出なかったし、私達もこんな目に遭わなかったかもしれない。そもそも生まれていなかったかもしれないが。

だが、その時は下呂大將は前線で指揮をしているのだ。担当違いの仕事に気付くことが出来ないのは、仕方のない部分もある。

「さて、簡単にですが、私の調査報告はここまでです。夕雲、答え合わせをお願いします。君の提督は、ご主人様家村である。正解ですか？」

冷や汗の匂いは一層強くなっていった。私達との戦闘中に見せた余裕の笑みや、ここで目を覚ました後の冷徹な真顔も消え失せ、焦りと動揺に支配されている。

ここに来たばかりの人間にここまで踏み込まれるだなんて思っても見なかったのだろう。どうせこの夕雲のことだ、飛鳥医師にも来栖提督にも調べ切られる前に次の部隊がここに攻め込むと腹を括っていたか。

「ここまで来たら、口封じなんて出来ませんよ。何か言うことは？」

私はデイベートが大好きですから、どうぞ反論を。全て返しますよ。懇切丁寧に、全てを説明します」

完全に心を折りに来た。今にも泣きそうな表情の夕雲に少し同情してしまうほどだった。

今の下呂大将には恐怖しか感じなかった。武力を一切使わず、口だけで屈服させてしまうその力に。

「夕雲、私の質問に答えてください。無言は正解とみなします」

「……違います。夕雲の提督は……そんな名前では……」
「ほう」

よくもまあこの状況で言えたものである。ここにいる誰もが、夕雲の言葉は虚言であるとわかる。今までに聞いたことのない、震えた声。喉がカラカラなのだろう、少しガサついた声をしていった。

主人に仕える忠実な奴隷。こんな時まで絶対に主人を売ることはない。自爆だって受け入れていた。何があっても主人に害のないように選択している。

「この期に及んでそんなことが言えるとは、君もなかなかですね」

「……それはどうも」

再びだんまりに戻る。精神的に疲弊しており、苦痛しか感じていないようだった。自業自得なのだが、下呂大将も人が悪い。

「飛鳥、この子の洗脳も解くつもりですよね？」

「勿論。霰と同じように解放しますよ」

「君の腕は確かです。数日もあれば出来るでしょう」

「先生、あの、本当に無茶振りは勘弁してもらえませんか」

だが、私も飛鳥医師ならばそれくらいやってのけるのではないかと期待している。どうせなら夕雲の洗脳も解き、奴隷ではなく艦娘として戦線復帰してもらいたいと願う。

尋問という名の、一方的な口撃はこれで終了。下呂大將は元凶について、そもそも目星がついていたというが、夕雲の今回の反応により確信に至ったという。

これからは敵が確定した状態での戦いに移行。私達に出る幕はあるかはわからないが、自衛はずっと必要だ。これまで以上に強くならなければ。

抑止力

下呂大将のおかげで、元凶である提督の存在が明らかになった。

家村というその提督は、来栖提督の弟弟子にあたる下呂大将の教え子。新進気鋭の提督として上の人間の中では有名な者。その裏側さえなければ英雄の素質もあつただろうが、これでは反英雄である。

結局夕雲は下呂大将の尋問により消耗してしまい、これ以上話が出来ないというところにまで追いやられた。過剰な緊張感の中でも、自身の主人を売らなかつたところだけは評価に値すると、下呂大将は絶賛していたが、逆に恐ろしくなってしまう。

「この人、いつもこういうの。追い詰めるときは徹底的に追い詰めるから、相手がこうなつちやうのよね」

困った顔で神風が呟く。こういう状況は一度や二度ではないらしい。査問官か何かなのだろうか。

「まあ、主人は売らなかつたけど心はバツキバキに折れてるわ。あとは飛鳥先生にお任せね」

「神風まで、僕への無茶振りはよしてくれ」

「謙遜は時に嫌味よ先生。私が知っている頃から貴方はすぐ出来る人だつたと思うけど」

実際、数日で洗脳を解くことも出来るだろう。ならば、私達はそれを全力でサポートするだけだ。ここ最近はその嗅覚も役に立ってきている。何かあればそれを使いたい。

「さて、これで全て確定ですね。とはいえ、提督が提督を詰問するためには、腹立たしいことにいろいろ手順が必要なんですよ。私までルール違反をしてしまったら、彼のことを何も言えなくなってしまう」

キリがいいと、下呂大将が立ち上がった。ボロボロに打ちひしがれている夕雲は尻目に、今後のことを語り出す。

家村を訴えるためには、いろいろな決まり事があるそうだ。下呂大将は高い地位にいるとはいえ、その辺りはどうしても付いて回る。正式に、確実に罪を突きつけることが出来るようになるまで、早くても

数日はかかるらしい。

「少し時間はかかるかもしれませんが、私は家村を大本营に出頭するように手配します」

「ありがとうございます先生」

「なに、これくらい。君達のためでもあるし、今後の我々のためにもなる。似たようなことが二度と起こらないように考える機会が与えられましたからね」

今回の凄惨な事件も今後の糧にして、よりよい組織にしていこうという気概を感じる。最初の胡散臭さは何処かに行ったかのように、信頼に足る人物に見えた。

「では、私はお暇させていただきます。夕雲は連れて行った方がいいでしょうか」

「ここに置いておくと霰に悪影響を与える可能性もありますが、治療が出来るようになり次第、すぐに治療したいと思いますので、薬を使つて寝かせておこうかと思えます」

「そうですね、確かにその方がいいでしょう。眠つたままに出来るのなら、その方が管理がしやすい。君はそういうことが出来ますしね」

普通ならそういうことは難しいらしいが、艦娘の身体構造を熟知している飛鳥医師だからこそ、そういったことが出来るらしい。私達は自然に3週間とか眠り続けたが、夕雲はここから治療法が確立されるまでの間、強制的に眠り続けることになった。

ちようど今は消耗しているところなのでもがくことも無い。そのまま薬による処置で昏睡状態にした。

「あまり好きでは無いんですけどね。これこそ艦娘を道具として扱っているような気がして」

処置中もあまりいい顔をしていなかった。艦娘を昏睡させるといふのは、実際使わなくなつた道具を次に使うときまで保管しておくような行為と思つているようだ。

そう言われると、夕雲は可哀想に思えてくる。だが仕方のないことと心を鬼にして、処置を完了させた。

「すぐにも治療法を探します。まずは霰を復帰させますよ」

「ええ、よろしくお願いしますよ。期待しています」

「こればかりは自分でもすぐにやらなければと思います。少し無理をするかもしれませんが、早急に対処します」

「少しどころではない無理をしそうである。ここは雷などにも言つて、絶対に無理をしないように管理しなくては。」

昏睡させた夕雲にはもう監視の目は要らないと判断され、全員が医務室から離れた。霰はまだ曙がついてくれているため、帰投する下呂大将と来栖提督を見送るために工廠へ。

工廠には大体みんなが集まっている状態だった。話自体がそこまで長々と続いたわけではないため、第二二駆逐隊はここですつと三日月と話をしていたようだ。

ようやく姉達とは普通に話が出来るようになったようで安心した。苦手だった皐月と水無月相手でも、臆さずにいられるのは成長の証拠である。

「おーし、手前エら、帰投するぜエ」

「あ、はあい。三日月ちゃん、またね」

「はい、姉さん達もお元気で」

笑顔はまだ素直に見せることが出来ないようだが充分だ。目と目を合わせて会話出来ているのも素晴らしい。三日月はもう少しすれば、トラウマを克服出来るかもしれない。

「神風、君は霰と夕雲が治療されるまで、ここに残ってください」

「そう言うと思つてたわ。飛鳥先生、いかしら」

「あー……部屋がギリギリだな。来栖、また鳳翔はこつちに来る予定はあるか?」

「ん? ああ、来たがつてるぞ。事が済むまでは若葉と曙を鍛えたいと言つていた」

今は鎮守府に戻っている鳳翔がここに戻ってきたとして、神風も居座るとなると、10個ある部屋が全て埋まることになる。三日月は夜だけは私の部屋にいるとはいえ。

万が一これ以上増えるとなると、ついに部屋が無くなってしまう事

態に陥った。喜んでいいものなのか悪いものなのか。少なくとも神風は客人のため、この住人になるわけではない一時的なもの。時間が経てば出て行く、その間にまた増えるようなことが無ければいいのだが。

「まさかこの施設の部屋が全て埋まるときが来るとは……」

「拡張する必要は無いと思いますが、いざという時は以前のように職人妖精を派遣しますよ。君はそれだけの功績を残しているし、この施設は我々にも必要なものです。せめて快適な暮らしをしてください」
この施設を鎮守府から今の状態に改装したのは、下呂大將が派遣した特殊な妖精の力らしい。

妖精とは本来、工廠に住み着いて私達の艦装や武器の整備を手伝ってくれる小型の職員のこと。名前の通り、妖精のように小柄で、大きなくても私達の手のひらサイズなのだとか。そういえば、私が生み出された時に、視界の隅にいたような気がする。

工作艦の補助の他、鳳翔が扱う艦載機の操縦や、給仕をする者など、多種多様な種類がいるらしい。その中でも、今下呂大將が言った職人妖精は、建築をメインとする妖精。室内の模様替えくらいなら小一時間ほどで終わらせ、施設そのものの改築すら、人数がいれば数日で終わらせてしまうような存在なんだとか。

私達も生体兵器という謎な存在だが、妖精は輪をかけて謎な存在である。好物が甘いものであるということ以外が全て謎。増える方法すらわからない。

「本当にいざという時はお願いします」

「ええ。これ以上増えないことを祈りましょう」

ここの住人が増えるのは基本、家村の鎮守府で犠牲者が出て、且つ、ここに流れ着いた場合だ。下呂大將が食い止めてくれれば、これ以上増えることも無くなるはずだ。

摩耶のような不運なドロップ艦は仕方のないことではあるが、継ぎ接ぎはこれ以上増えちゃいけない。

「お礼に、神風も師としてお使いなさい」

「ああ、それくらいならいくらでもー」

鳳翔に続き、神風も私達を鍛えてくれるらしい。それは願ってもないことだ。

いくら下呂大将が家村に対して攻めの姿勢に出たとしても、この施設への攻撃はまだ止まらないだろう。むしろより一層激しくなる可能性だってある。

もう口封じなど意味が無いところまで来ているとは思うが、生きた証拠である曙や、捕虜となっている霰と夕雲の存在が明るみになることを恐れているかもしれない。それに、逆恨みだって考えられる。

「今回の件はともレアケースですが、やはりこの施設を守る力は持っておいた方がいい。中立区を中立区として守る者の存在は必要です。貴女達には、そうなってもらいたいのです」

「本来あってはいけないことだと思うが」

「だからですよ。こうやって規律を破る者が現れてしまった。抑止力は必要なんです。これも、私から大本営に掛け合ってみます」

一切の戦闘行為が禁止されている、つまり、誰からも攻撃を受けることが無いのだから、好き勝手に振る舞う愚か者が今回の元凶だ。正当防衛がこちらには出来るといふ準備をしておけば、この中立性は保たれる。

ここでそういう振る舞いしたら討たれるという事実を作っておけば、誰も中立区での戦闘行為という規則違反はしない。

中立を守るための抑止力になれば、下呂大将は言っているのだろう。

「飛鳥、本当にいざという時は、直接私に連絡を。私からも君に連絡させてもらいますよ」

「ありがとうございます。助かります」

何かの番号をメモして飛鳥医師に手渡した。おそらく鎮守府など関係なしに直接繋がるホットラインか何かだ。

おそらくこれも規則ギリギリの行為。いくら元鎮守府関係者だとしても、今回の件は内情に踏み込み過ぎている。

「では来栖、行きますか」

「はいよ。飛鳥、警備隊は続けるぜエ」

「ああ、頼む。僕達の施設の者が戦うことはやはりあまりよろしくない。本来戦力を持つ者が守ってくれることが一番だ」

来栖提督の警備隊も、下呂大将の手回しで正当防衛扱いにしてもらえているらしい。中立区での戦闘の証拠は、来栖提督が自沈した艦娘を持ち帰ったことで証明されているのだ。警備隊は必要であると突きつけることが出来た。

それが一番心強い。ここだけじゃないところにも仲間がいるというのが安心感に繋がる。

「神風、少しの間離れますが」

「問題ないわ。秘書艦は朝風に引き継がせてちょうだい。あの子ならしっかりやれるから」

「ええ、そのつもりです。では、頼みましたよ」

ポンと頭を撫でて、大発動艇に乗り込んだ。やることをやったからか、妙に身体が軽く見える。神風曰く、好きなことやったからテンションが高い、とのこと。

「じゃあな飛鳥、また来るぜエ」

「最近やたら来てる気がするけどな」

こうして、ほんの少しの間ではあるが、下呂大将の来航は終了。午前中いっぱいすら使わない短時間であったが、大きく印象に残る人だった。心強いバックアップが出来たと思える。

海の向こうに姿が見えなくなったところで、飛鳥医師が大きく息を吐いた。心底疲れたような顔。

「あの人がいると緊張するな……」

「やっぱ嫌な思い出でも蘇ったりすんのか？」

冷やかすように摩耶が問う。飛鳥医師の新人時代というのも気になるものだ。何処からどうやって今の知識を手に入れたのだろうか。下呂大将の教育の賜物なのだろうか。

「あー……秘密だ」

「おいおい、この期に及んで」

「秘密と言ったら秘密だ」

面識があるという神風も黙秘。聞かないであげてと苦笑していた

くらいなので、下呂大将とは余程のことがあつたと見える。それこそ、私達が鳳翔に鍛え上げられている時のように、恥も外聞も捨てて吐きまくっていたような時のような何か。

禁忌の御業を扱えることよりも秘密にしたいことって何なのだろう。逆に気になるが、あまりに必死なのでこれ以上深追いするのはやめにした。

「じゃあ、神風のお部屋を用意するわね！」

「ありがとう。私も手伝うわ」

「お客さんなんだもの！ もっと私を頼ってくれていいのよ！」

雷はすぐさま部屋の用意へ。自分の部屋になるのだからと、神風もそれについていった。脇差は常に持ったままらしい。物騒ではなからうか。

「では、残った僕達はいつものように作業開始だ。僕は霰の精密検査から始めるとしよう」

「あたしは全員分の艤装の整備やっておくか。若葉はどうすんだ？」

「飛鳥医師が不要なら、若葉も整備を手伝おう。鼻はいるか？」

「必要になったら呼ばせてくれ。まずはレントゲンや血液検査からにする」

この施設で出来る精密検査、診断は一通り行うようである。そのための手伝いは、今も絶賛監視中の曙が手伝ってくれるだろうという想定。

提督という存在には嫌味タラタラではあるが、飛鳥医師には比較的素直で、口は悪い時もあるが文句はそんなに無かった。頼めば手伝ってくれるはずだ。

「よし、では作業開始」

言うだけ言つて、飛鳥医師も奥に引つ込んで行った。

「んじゃあ、あたしと若葉で、雷と三日月と曙の艤装の整備だな。あたしら自身が出撃してたせいで、他の艤装の整備が止まっちゃまってる」
「それはまずいな。早く綺麗にしないと、パーツが劣化する」

他人の艤装を分解して整備するのはなかなか緊張感があるものだが、曙の艤装を組み上げた実績のおかげで、私は自信も持っていた。

今なら大丈夫、摩耶までとは行かないが、整備は出来る。

「よし、んじやあやるか」

「ああ」

まだ根本的な解決までは遠いかもしれない。だが、先が見えたのは大きな前進だ。

葉の匂い

来栖提督と下呂大将が鎮守府へ帰投し、一時的にだが日常が戻ってきた。下呂大将の秘書艦である神風は施設に残り、人形となっている霰と昏睡状態にさせられている夕雲の治療が完了するまで下呂大将と連絡を取るといふ。昏睡している夕雲はともかくとして、目が覚めていても何もすることがない霰の監視をしてくれるとのことなので、私達の中から人手を割かなくて良くなった。

今は平和に見えるが、下呂大将が元凶の提督、家村を追い詰めるまでに、この施設が襲われる可能性はまだまだある。そのためにも、私達は訓練を続け、中立区が中立区として成立するための抑止力として成長していこうと思う。

午後からは全員分の艤装の整備に勤しむこととなった。摩耶と手分けをして、丁寧に磨き上げていく。私はなんだかんだこの地道な作業が一番好きかもしれない。

私が担当しているのは、嵐の中の戦闘で霰のリミッター解除を防ぐことが出来た三日月の艤装。私のものと同じように継ぎ接ぎに出来ているため、一筋縄ではいかないのだが、自分の物が整備出来ているおかげでこちらも失敗なく整備出来ている。

「三日月のも、なかなか汚れているな」

「羽黒と足柄の射撃訓練に、嵐の中の戦闘だったからな。そりやあドロドロだろうよ。外っ面は洗い流せるけど、中はヤベェだろ」

「ああ。これは念入りにやらないとな」

話している摩耶は雷の艤装。こちらも三日月のものと同じようにドロドロである。これが終わり次第、曙の艤装を仕上げる。たった今から戦闘が始まる可能性だってある現状、全員が万全の状態でなくてはいけない。

一度戦いを経験したことで、その大事さを一層実感した。これが万全だったから、私達は夕雲に勝てたとも思える。

「三日月はよくやってくれた」

「ああ、少しは緩和されてきたみたいだな。戦闘中はずっとイライラ

してみたみたいだけどよ」

戦えたのならそれでいい。今後も頼りにしている。

「五三駆、頼むぜ」

「ああ、任せてくれ。この施設は絶対守りきる」

「あたしも全力でサポートするからよ」

摩耶も知らないうちに訓練を積んでいた辺り抜かり無い。この施設は、ここにいる全員で守るのだ。

夕方、艦装の整備は粗方完了。明日から戦闘訓練も出来るだろうという状況になった。いろいろと一安心。あまり訓練しすぎると、それはそれで整備が行き届かなくなるため、急ピッチな訓練は一旦終了。今後は程よく、確実に力を上げていくのが目的となる。

それを手伝ってくれるのが神風。鳳翔レベルの使い手であるために、確実に私達の力を上げてくれる第二の師となってくれそうだと。

摩耶と食堂に入ると、既に神風はそこにいた。この午後の間は飛鳥医師のサポートをしつつ、鎮守府に帰投した下呂大将と連絡を取っていたそうだと。まだ今日の今日であるため事態は進展していないが、進み出すことは確定しているため、まずは無事に帰投出来たことを喜ぶ。

「艦装の整備は終わった。明日からまた訓練が出来る」

「私が教えられるのよね」

「ああ、頼む」

医務室での夕雲への攻撃を見てわかった。神風はスピードタイプ。つまり、私と同じ戦術の人だ。鳳翔も良かったが、より踏み込んだ訓練が出来そうである。

曙のようにまず鳳翔を模倣してみるとはいかず、全て我流になっている私的には、同じ方向性の者がいるだけでもありがたい。

食堂に人が集まり始めた。作業後、風呂に入って私と摩耶も食堂に入ったが、席がなんとギリギリ。中頃に食堂に入ってきた飛鳥医師も、今の事態に驚いていた。

「急に押しかけたようになってしまつてごめんなさい。何か食糧を

持ってきた方が良かったわよね」

「まだ大丈夫な方だ。心配しなくていい」

ここに鳳翔が加わることが確定しており、さらには治療完了した場合、霰や夕雲もここで食事をすることになる可能性もある。そうなたらついに食べる場所すらも無くなることになる。

「食費に関してはやっていけない事はないから気にしないでいい。むしろ心配なのは、施設の広さだ。これ以上増えないとは思いますが、万が一のことを考えると施設自体を拡げた方がいい」

「じゃあ大改築？」

「先生が妖精の派遣を考えてくれているからな。少し考えておこう」

それに喜んだのは雷である。掃除の範囲が拡がるというのに、それでも今住む施設がより住みやすくなるというのは嬉しいようだ。ここに長く住むからこそ、そういう代わり映えも欲しいのかもしれない。

ここを改築するのなら、より鎮守府寄りになるかもしれない。だが、当然ここはそういう施設ではない。医療施設としての役割を前面に出しつつ、鎮守府としての性質も与えるようにするというか。

「やるにしても、最低限、霰と夕雲の治療が終わってからになるだろう」

「だよな。寝かせたまま改築は危ないしよ」

「それなら私もここから出て行った後になるから迷惑はかけないわ」シロクロやセスも、成り行き上このまま居つくようなイメージになっってきた。セスは三日月のアニマルセラピーのためという理由だったが、今や施設を守るために尽力してくれる唯一の空母。シロクロも戦艦主砲が見つかった時に何とと言うかはわからないが、出て行くことを残念がる部分も見えている。

居座ったとしても誰も咎めない。もうここに居ついて長いし、シロクロに至っては飛鳥医師の治療も受けている継ぎ接ぎの仲間だ。

「まずは2人の治療だな」

「午後でどうだったよ。何か手がかり掴めそうなのか？」

「少しは、な。ただ、最悪の場合は頭の手術になりかねない」

洗脳とは当然、頭の中を弄る改造だ。第一改装の際に脳そのものに入手を入れられている可能性が非常に高いと飛鳥医師は判断している。投薬などでどうにか出来るとは限らないため、それが最悪の場合。改装と同じように脳を弄るといふ荒技に出なくてはいけないとのこと。「なるべく手術は控えたい。投薬で治療出来ればいいんだが」

「やっぱまずいのか。頭弄るつてのは」

「当然だ。最悪の場合植物状態だぞ。そうでも無くても、人格の変化だってあり得るし、後遺症だって段違いだ。正直蘇生よりもリスクが高い。それがあから深海棲艦の脳は保存もしていないんだからな」失敗したら死、成功しても場合によつては大きすぎる影響を与える可能性がある、深海棲艦の脳を移植するなんて以ての外だ。

あまりにリスクが高い手術になるのなら、いろいろと諦めなくてはいけない。そうなる前にか手荒ではない手段を割り出さなくてはいけない。

「今はお腹を膨らませましょう！ 今日足柄さんから習ったカツカレーよ！」

「ああ、食事の時間にまで仕事のことを持ち込むのはやめておこう。今はこれで終わりにしよう。明日からまた頑張ろう」

まだ調査は始めたばかり。時間はそんなに無いかもしれないが、考える猶予はまだある。なるべく早くは当然だが、焦らず行動し、確実に助けるしか無い。

夜、風呂上がりに一旦霰の部屋へ。眠りについていたら良し。ついていないのなら、眠るまで監視。

夕雲と違い、昏睡状態にもしておらず拘束すらしていないが、目を覚ましていたところでピクリとも動かないため、監視任務は安全であるという認識。霰を操る音声の発生源は今はいない。大丈夫だ。

「霰、眠っているか」

部屋は薄暗がり。夜となり部屋が暗くなっても、自分の手で電気をつけることは出来ない。それに、暗ければ眠るだろうという判断で、基本部屋は暗くしてある。

だが、霰は目を覚ましていた。この暗い部屋の中、何も映さない目を開けているだけ。自分から起き上がることも出来ないため、目を開けて横になっているのみである。

霰は食事が出来ないため、栄養の点滴のみ。これもまた、早期に決着をつけなくては衰弱の原因になりかねない。そういう意味でも、時間は限りがある。

「眠らないと身体に障るぞ」

当然無反応。目を開いたまま、天井を見つめ続ける。

「……相変わらず薬の匂いだな」

この部屋に漂う匂いは、霰の出す薬の匂い。敵鎮守府の艦娘はみんなこの匂いにする。夕雲といい、もういないが自沈した艦娘達といい。つまり、元凶の鎮守府全体が薬の匂いに包まれているか、もしくは、何らかの薬が投与されているか。

後者の場合、洗脳などが投薬によって維持されていることになりかねない。維持が出来なくなるのなら、拘束してでもこの場に放置して、薬の成分が抜けるのを待ってもいい。いつになるかはわからないが。

「薬……薬か……」

この匂いの薬が何なのかわかれば、治療法の発見にまた一歩近付けるかもしれない。それなら私でも協力出来るし、むしろ私しか協力出来ない。

それが敵が使っている未知なる薬だったとしても、そういうものがあるということがわかれば御の字だ。

「少なくとも……嗅いだことのない匂いだな……」

念のため、自分の腕の匂いも嗅いでおく。風呂に入ったばかりなので、石鹸の匂い。あとは染み付いた鉄と油と海の匂い。私もいろいろやっているなど実感する。

私も霰と同じ場所で生まれているが、薬の匂いは微塵も感じない。三日月や曙もそうだ。ということは、あの匂いは改装を受けたらまわりつくということだろうか。

「飛鳥医師に話さないとな」

チラリと霰を見る。目を瞑り、安定した寝息を立てていた。

栄養剤の点滴には睡眠誘発剤も入っているらしく、しばらくしたら眠りにつくようにされているそう。今がそのタイミングだったのだろうか。

霰が眠りについたことを確認し、部屋から出て飛鳥医師の下へ。飛鳥医師は私達が全員眠りについた後に就寝の準備をするため、おそらく今も処置室にいる。

思った通り、飛鳥医師は処置室にいた。夕雲は医務室で寝かされているため、1人で作業中。今日やった調査の結果とにらめっこしていたが、結果は芳しくないらしくかめっ面。頭への手術回避の方法を探すのはかなり難しいと見える。

「どうした若葉」

「若葉が思いついたことを聞いてほしい」

霰の匂いについて話す。飛鳥医師の前でもちよくちよく薬の匂いがするとは言っていたが、正確に話すのはこれが初めてだ。私がこの嗅覚を手に入れたことで、気付くことが出来そうなこと。

「見当違いかもしれないが、何かあるかもしれない」

「確かに薬の匂いから何かしらわかるかもしれない。少しだけだが、今ここにある分を嗅いでもらえるか。嗅ぐだけでおかしくなるような薬は無いからな」

飛鳥医師に言われ処置室内のものの匂いを調べるが、少なくとも、今の処置室に該当する匂いは無いように思えた。近しいものもないか。

多種多様な薬が混ざり合った結果の匂いだとは思う。それでも、今ここにあるものと同じものを作るようには到底思えない。

「多分だが、今ここにある薬には無い。いろいろなものが調合されているような気がする」

「そうか。なら明日からは、若葉のお眼鏡に叶う薬を調合するところからだな」

私が霰を治療するキーパーソンになりつつある。何がどう調合されているかまでわかればいいのだが、今の私には1つの薬としてしか

認識が出来ない。敏感な嗅覚といっても、まだまだ精度が低いものだ。

「その薬の匂い、何か特徴は無いか？」

「そうだな……若葉はそういうものには疎いからよくわからない。また明日、細かく嗅いでみていいだろうか」

「ああ、そうしてくれ。また君に頼ることになるな」

嗅覚で飛鳥医師を手助けするのはこれで2回目。1回目の自爆装置の匂いを探すときより、格段に難易度が高いものが来てしまった。

「前回もそうだが、若葉が居てくれてよかった。嗅覚がここまで有効とは」

「犬のようだ」

「それで人が救えているのなら、それは誇るべき技能だ。少なくとも僕が保証する。本当に助かっているよ」

ほんのりと笑みを浮かべた。飛鳥医師の笑みは意外とレア。それが引き出せただけでも、私はいいい仕事が出来ているのだと思う。

「必ず霰を助けるさ。そうしたら夕雲も助けられるはずだ」

「ああ。頼んだ」

「僕は戦えないからな。この施設の防衛を任せるしかないんだ。それ以外のことは全て任せてくれ」

飛鳥医師が居なくては私達も生きていけないのだ。お互いの出来ることで助け合い、最善の道を選択していこう。

『楽しく生きる』ためには、全員の協力が必要不可欠だ。

神速の神風

翌日、朝イチに霰の匂いを嗅ぎ直しにきた私、若葉。昨日までは、ただだ部屋に漂う匂いを感じ取っていたただけだったが、今回は自分の嗅覚に集中し、霰に付着した敵鎮守府の匂いの嗅ぎ分けをする。その匂いが複数個の葉の匂いが合わさったものだとしたら、その個数も判断出来る嬉しい。

鳳翔との訓練や、日頃からいろいろ使っていたためか、私の嗅覚は成長し続けている。戦闘中なら難しいが、何も無い状態でそれにだけ集中すれば、ある程度の嗅ぎ分けが出来る筈だ。ただし、私には知識がない。抽象的に匂いを表現するしか出来ない。

「どうだろうか」

「……おそらくなんだが……5つくらいのもものが混ざっている気がする。どれも私は嗅いだことのない匂いだ」

霰をクンクンしている私の後ろには、情報をいち早く聞くために飛鳥医師も待機。飛鳥医師は消毒の匂いと血の匂いが強いいため、少しだけ離れてもらう。

私を感じ取った匂いは、おそらく5つ。そのどれもが知らない匂い。少なくともこの嗅覚を手に入れてから嗅いだことはないもの。

「いかにも葉という匂いばかりだが……中に甘い匂いがする」

「甘い匂いか。それならいくつか該当するものがある。この症例にも繋がりのようなものも少なからず存在する」

「そんなものがあるのか?」

「ああ、匂いくらいならいいが、体内に取り入れるのは良くないものだ。劇薬の一種だな」

そんなものが艦娘の体内に入れられていると思うと気分が悪い。如何にも艦娘を道具と割り切っている扱い方である。最悪死んでも代わりがいるという考え方をしない限り、体内に劇薬を投入するなんて出来やしない。

「ありがたい若葉。まずはその辺りから攻めてみる」

「ああ、霰をよろしく頼む」

「任せてくれ。血液検査の結果も出る筈だからな。そこから調査を進めていくさ」

ここからは飛鳥医師の独壇場だ。専門知識を持たない私達に手伝えることは何もない。だが、昨日とは違い、光明は見えている。霰が復帰する日はもうすぐかもしれない。

来栖提督の鎮守府から警備隊が到着。同時に、鳳翔が帰還。来栖提督からいろいろ聞いていたらしく、神風が滞在していることも認識済み。来栖提督と下呂大将と一緒に鎮守府に来るくらいなのだから、鳳翔と神風も当然面識がある。

今回も食糧を大量に持ってきてくれたため、それを施設に運び込むところからスタート。雷と三日月の射撃訓練側にも、羽黒が来てくれたので一安心。あちらは家事の合間を縫って射撃訓練をやっているらしい。

「やっぱり私も持ってくればよかった。タダ飯食らいみたいじゃない」

「その分、訓練に参加するのでしょうか？　神風さんがいるのはとても都合がいいです」

「そうなの？」

「私は曙さんと、神風さんは若葉さんとスタンスが近いでしょう。射撃訓練と違って、必ず相手が必要ですから。神風さんほどの使い手を若葉さんにぶつけたいと思っていたのです」

「貴女本来弓でしょうが」

ニコニコしながら今日からの訓練の概要を説明してくれた。

昨日思っていた通り、スピードタイプの神風を私に当ててくれることで、私の地力を上げてくれるとのこと。曙には鳳翔が付き、似たようなことをする。

そのため、神風の武器である刀は一旦封印。鳳翔のゴム薙刀と同じような、スポーツチャンバラで使うらしいソフトな小太刀を使うこととなる。間合いは私よりも少し長いくらい。実際の刀とは雲泥の差。

「あー……近接戦闘訓練でよく使うヤツね。これだつて当たれば結構

痛いわよ」

「鳳翔にさんざんゴムでやられているから大丈夫だ」

「多分これより痛いわよねアレ」

小太刀をグニグニ曲げたり、軽く振ったりして使い心地を見ている。金属で出来ている物に比べると当然軽く、長さも違うため勝手は大きく変わる。それでも十全に使うのだろう。

私は戦場で使うナイフ。刃が潰れているとはいえ、神風の持つ小太刀とは比べ物にならないほど硬く痛い。小太刀を受けたら、あちらが折れてしまうかもしれない。

「では、各々好きにやりましょうか」

「はいはい、1回当てられるまで延々やるんだっけ」

「ええ、こちらも曙さんとその形式でやります。ある程度やったら相手を交代しましょう」

2組に分かれて、お互いの邪魔にならないように少し離れる。特にあちらはお互いにリーチが長い。近場でやったら私が巻き込まれる。流石に他の方向から飛んでくる槍やら薙刀やは、すぐに対応出来ない。

改めて神風と向かい合う。1対1という状況で戦うのが初めてであるため、援護なしで全て自分で考えなくてはいけない。これまでは自分の隙を曙に帳消しにしてもらっていたため、今回は考えることが格段に多くなる。

私は以前と同じ前傾姿勢。足柄から学んだ、我流の戦術。獣のようにガムシヤラに、速く、ただ速く突っ込む戦術。対する神風は、小太刀を真正面に構えた。私の攻撃を全て受け流すというのなら、それは鳳翔と同じだ。受けて、受けて、隙を突く。

「いつでもいいのよね?」

「ああ」

返答し、前に進もうとした瞬間、スパーンと小気味いい音が鳴り響き、神風の小太刀により私は頭を叩かれていた。本物だったら真つ二つ。真正面から突っ込もうとして、先に突っ込まれて縦に一閃喰らっていた。

「一本」

いくらなんでも速すぎやしないか。当然小慣れているのは神風だ。私の実戦経験なんて2回しかないのは仕方のないこと。それは言い訳に出来ない。吐くほど訓練してきているし。

同じスピードタイプといっても格が違いすぎる。姿が捉えられないとは何事か。

「若葉にはこれくらいの速さになってもらうわ」

「無茶を言うな」

遅れて打たれた額が痛くなってきた。その一撃は痛みすら置いてけぼりにしたらしい。

「無茶じゃないわよ。私みたいな旧型が出来るんだもの」

「そうは言われてもな。……いや、泣き言は言わない。抑止力になるために、その動き、まずは最低限捉えてみせる」

「うんうん、その意気その意気。じゃあ、少し遅くするから、徐々に慣れていきましょ」

神風からの訓練は、動体視力がメイン。

自分が素早く動くのなら、それにより目まぐるしく動く情景がしっかりと見据えられるようにしなくてはいけない。それが出来るようになれば、撃たれてからでも避けられると神風は言う。

「もつと設備が整っていたら別のこともやるんだけどね。ここでやるのは私が手ずから教えることしかないもの」

話している内にも、不意に視界から外れたかと思ったら身体の何処かに打ち込まれている。ソフトな小太刀で無かったら、私の身体は傷だらけになっっているだろう。

これでも先程よりはスピードが落ちている。当然それでも目で追えないわけだが。

「そうだ、若葉つて匂いを追うことが出来るのよね。それを使えば先読みとか出来るんじゃないかしら」

「やってる。お前はそれより速いんだ」

そんなこと、言われずともやっている。嗅覚に頼り切っているわけではないにしろ、視覚より信用している部分はある。神風の匂い、お

茶と畳の匂いを追い、動くと思った時には既に眼前ということがザラ。まったく間に合っていないだけだ。

クセとかを読むことが出来ればもつと上手くやれるのだろうが、残念ながら私にそこまでの技量は無い。今はやれることをやっていくしかない。

「そこっ！」

「惜しいー！」

動くと思つた瞬間に手を伸ばした時には腹を薙がれていた。だが、為す術がなかったのが、ようやく身体が反応を始めた。まだまだ足りないが、最初の一步目としてはマシな方だ。

「手じゃなくて脚を動かしましょうね。これ、受け止められたとしても本物だったら腕無くなつてたわよ」

「ああ、気を付ける」

「素直な子は好きよ」

ここまで私は一切動くことが出来ていない。反応が出来るようになってても、それ以上の神風のスピードに延々と翻弄され続け、その場でただ打ち込まれ続けるのみ。身体中が痛い。もう打ち込まれていない場所など無いのではないかと言うほど、全身に痛みがある。

だが、悪くない。私は鍛えられている。この痛みも成長への道の1つだ。これを知っているからこそ、私は次のステップへ行ける。次こそはという思いで、私は成長する。

「そっちはスタミナも恐ろしいな」

「ずっとこの戦い方をしているもの。慣れたわ」

鳳翔もそうだったが、訓練中に息が切れるようなところは見せたことが無かった。何が旧型かと思わせるほどである。

常に私の周囲を航行しつつ、合間合間に猛スピードで突っ込んでき叩かれる。基本は頭、次に胴、脚や腕にもしっかりと入れてくる。防ごうとしても、すんでのところで向きが変わるせいで直撃。やはりしっかりと回避しなければ意味がない。

「攻撃してこないと終わらないわよー」

「出来るならとつくにしている」

回避もままならないのに攻撃なんてまだ先だ。だから、まずは回避に専念する。そこから神風の動きが見えるようになり、ようやく攻撃に転じることが出来るだろう。

夕雲との戦闘で発揮出来たあの力が常時発揮出来れば話が変わるのだが、アレに頼ってはいけない。

「反応は出来ても身体が間に合わない」

「あー、わかるわそれ。基礎訓練しても追い付かないのよね。わかってるけど動けないって言うのかしら」

話しながらも攻撃の手は止んでくれない。とはいえ、ここまでやられていると、だんだんと避け方というものがわかってくる。あとはそれに身体を合わせるだけ。

必要最低限の力で、最大限の効果を。考えて、考えて、考えて。

そして、開花する。

「こうー」

その時はちょうど真横からの攻撃だった。何処から来るかは嗅覚で感じ取り、小太刀の間合いを視覚で捉えて、紙一重で回避。チツと擦る音はしたものの、今までの小気味いい音では無くなった。直撃では無い。

「上出来！ それを何度もやれるようにしましよ」

「ああ、今のはまぐれかもしれない。それに攻撃がまだ出来ていない」
即座にもう一撃が飛んできて、思い切り腕を叩かれた。回避した後
は気を抜くなという教訓が生まれた。

本来ならこのタイミングで攻撃だろう。避けつつ攻撃。だが、私にはまだ、回避するのが精一杯だった。そして、避けれたことに喜んでしまい隙だらけに。

「さあさあ、もっとやっていきましょー」

私が回避出来たことで、逆に神風側に火がついてしまった。ここからスピードを上げるといっわけでは無いが、より一層ボロボロにされる羽目に。何度かに一度は回避出来るようにはなったものの、まだまだ精度は低い。

結局、午前中は一度たりとも神風に攻撃を当てることが出来なかつ

た。鳳翔の時よりもキツく感じたのは、おそらく仲間のいない1人だけでの戦いだっただからだと思う。

曙も鳳翔相手に厳しい訓練を強いられ、私と同じような結果に。それはもうボコボコにされ、槍を杖代わりにして立っていたくらいであった。

鳳翔持参の薬湯に浸かり、休憩無しで動き続けた午前中の疲れを取る。制服を脱いだら身体中がアザだらけで驚いたが、薬湯に浸かった途端に全て消えた。さすが高速修復材の成分が入った入浴剤。回復力が違う。

曙のアザも大変なことになっていた辺り、以前よりも鳳翔が本気でやってきているという証拠でもある。

「1人になると途端にキツくなるな……」

「ホントよ。補ってくれる人がいないのがこんなに厳しいなんて」

曙と2人で反省会。雷と三日月は訓練が少し延びているらしく、後から入るとのこと。

今回からの訓練で、仲間の偉大さを痛感した。神風相手でも、曙と組んでやっていけばもう少し上手く動いていたのではないかと思う。頼るものがいなくなるだけでこうもガタガタになるとは。

「午前中まるまるリンチに遭ったみたいなものよね。たまったもんじゃないわ」

などと言う曙は、私と同じように充実しているようだった。少し顔が綻んでいる。攻撃は結局一度も入らなかったが、成長は実感出来たようだ。

「詰め込みじゃないって言ってたのに、なんだかんだ詰め込みよ。吐くかと思っただわ」

「わかる」

施設に戻るのも辛く感じた。消耗が激しい。前回と違い、本当に攻撃させてもらえなかった。ガムシヤラが通用しない相手であるせいで、少しだけだがフラストレーションが溜まっているのかもしれない。

「次は相手交代よね。神風、どうなのよ」

「若葉としては、鳳翔よりやりづらい相手だ」

鳳翔が静なら、神風は動。常に動き続け、合間を見て追い付けない速さで突っ込んでくる。同じ役割の私から動けなくなるくらいにされたので、あれが前衛の真髄なのでは無いかと思える。

私の目指す場所は、神風にある。あれが私にも出来れば、より強くなる。だが拘りすぎるのもよくない。あくまでも自分らしく、参考にさせてもらう程度に。

「まあ、お互い頑張りましょ。クソをどうにかするためにもね」

「ああ。大将がどうにかしてくれろとは思いますが、何をしてくるかわからないからな」

曙と拳を打ち合わせた。今でこそ個人技の訓練だが、戦場では二人一組ツーマンセルになる。相方とは、いい仲でいたい。

悪魔の所業

午後一、訓練の前に飛鳥医師に呼び出された私、若葉。そんなタイミングで呼ばれるということは、まず確実に霰と夕雲の治療についてである。私の嗅覚が必要になったようだ。

「すまない。少しだけ手伝ってくれ」

「構わない。何を嗅げばいい」

「例の匂いの件だ。該当しそうなものを用意した。判別頼めるか」

「了解」

処置室にズラリと並べられた薬瓶の数々。市販品もあれば、取り扱い注意の劇薬もあるらしい。後者に関しては、匂いを嗅ぐ程度なら大丈夫だが、触れることは厳禁。体内に取り入れるのは以ての外。それを1つずつ、蓋を開けては嗅ぐことになる。

あの時の匂いの中でも、特に印象深い甘い匂いの中にあるのだろうか。

「もう一度霰か夕雲で確認するか？」

「難しそうならそうする。まだ多少は覚えているから大丈夫」

「わかった。ならまず、これじゃないかというものからだ」

やはり最初は、あの甘い匂いの正体を探ることが優先された。今朝、症例に繋がりそうなものはあると言っていたが、それがこの薬なのだと思う。基本は無色透明の液体。粉のものもあるらしいが、匂いを嗅ぐ際に鼻から吸ってしまうのを防止するため、最初から水に溶かしてくれている。

「あまり長く吸わない方がいい」

「了解」

1つずつ、ゆっくりと嗅いでいく。ツンと来る匂いもあれば、私でも判定できないくらいのも無臭のものもある。薬らしいものもあつたが、今のところ私が判断した5種類に該当しそうな匂いは無い。体調がおかしくなるようなことも無くて安心だ。

と、その時、確実に知っている匂いを感じた。微かに香る、甘い匂い。

「これ」

「そいつか」

「ああ、5つのうちの1つ。甘い匂い」

見た目は無色透明。だが、匂いはする。霰から感じたものと一致している。

それを伝えたら、飛鳥医師はやっぱりと頭を抱える。余程酷い薬なのかもしれない。

「これはな、麻薬なんだ」

「は？」

「専門の知識を持っているから所有が許されている。当然、実験にしか使わない。こんな危ないもの自分で使うほど愚かではないからな」

啞然とした。飛鳥医師が持っていることには別に何の抵抗もない。医療にも必要なものなのかもしれないし、研究にも必要なものかもしれない。

こんなものの匂いが艦娘からしたことに驚いた。それなりな体型の夕雲はともかく、私よりも幼く見える霰にそんな薬を使ったら、まず間違いなくおかしくなる。実際おかしくなっているのだから目も当てられない。

「これを服用するとどうなる」

「人間も艦娘も似たような症状が出る。激しい昂揚と幸福感だ。簡単に言うと、やたらテンションが上がる。負ける気がなくなるし、自分の行動が全て正しく思えるだろうな」

よくあるそういうものの症状。脳を覚醒させ、負の感情を捨て去り、世界が明るく見える。艦娘なら服用するだけでスペックアップにもなるかもしれない。恐怖が無くなり、無謀な突撃も嬉々としてやるようになるだろう。

だが、世の中そんなに甘くない。脳に直接作用するような薬にデメリットが無いわけがない。それだけ強い効果なら、副作用だってあるだろう。

「副作用は」

「切れた時の喪失感と、最悪な幻覚が見えたりするらしい。そして、そ

れを避けるためにまた服用し、より溺れていく。僕が知る中では、危険度は非常に高いものだ。人間なら数回の服用で脳の組織が壊れる。だが、艦娘の場合は」

「入渠で回復するから無限に使えるというわけか」

昂揚剤として使っていた鎮守府があつたらしく、当然摘発されているとのこと。そもそもが法に触れている薬なのだから、許可を得ずに所持しているだけで犯罪。

それが家村の鎮守府では常習化している。壊れても問題ないという考えがありありと伝わってくる。

「これが使われているということは、何となくわかっていたんだ。血液検査から似たような成分が出ていたんでな」

そういえば、血液検査の結果が出ている。その中で、この麻薬の存在は当たりがついていたらしい。私がそれを確認したことで確定した。

「他の薬は混ざり合いすぎて、はっきり言ってみ当がつかない。匂いを嗅ぎ分けられる若葉が頼りだ」

「ああ、任せてくれ」

「では次を頼む」

他にも用意されている薬を次々と嗅いでいく。混ざり合ってわかりづらいものも多かったが、その中から2つは見つけ出した。残り2つはまだわからないが、5つ中3つがわかったただけでも大きな進展である。

「麻薬に、栄養剤が2種類……」

麻薬はともかくとして、栄養剤は今まさに霞と夕雲に投与している栄養剤も含まれている。特性として、どちらも体内に吸収されやすく、体力の維持や身体機能の活性化に使われるというもの。ある意味、麻薬の成分を身体に定着させるのに使われていそうな組み合わせではある。

「残り2つはこの中には無いと思う」

「つまりは、余程おかしなものが入ってるということだ。洗脳なんて薬で出来るようなものじゃないはずなんだが」

頭を悩ませる飛鳥医師。そうになると、脳をダイレクトに改造していると思えない。レントゲンの結果、頭に装置が入っていないことも確認しているらしい。

脳が改造されているとなるともうお手上げである。最悪の場合、催眠術などの少しオカルト染みた方法で、洗脳されている思考を上塗りするなどしなくてはいけない。それはそれで管理が難しくなるようだが。

「よし、ありがとう若葉。また少し考えてみる」

「ああ。何かあつたらまた呼んでくれ」

「頼む。正直、今は若葉の嗅覚頼りだ」

頼られることは悪くない。霰と夕雲を助けることが出来るのは、私にかかっていると言われているわけだ。

午後の訓練が終了。午前中は神風が相手をしてくれたが、午後は鳳翔が相手。神風との戦闘経験が活かされ、それなりにいい動きが出来たと思う。タコ殴りにされはしたものの、回避出来た回数は増えている。

「格段に成長していますね。やはり、神風さんを当てて正解でした」

「いや……まだまだだ。結局……一度も攻撃が当てられなかった」

息も絶え絶えで膝をつく。曙もそうだが、結局休憩無しで延々とアタックを繰り返すのみだった。私の攻めは擦りもせず、鳳翔の受けは的確に私を抉った。午前中もそうだったが、これはまた風呂で痔だらけの身体を見る羽目になるだろう。

「神風の方がキツイ……」

「いやいや、息切れてないだけ曙すごいわ。ホントに持久力が高いのね」

「もう脚がガタガタよ……」

息は切れていなくても、疲れは溜まる。私も脚が動かない。限界まで動き回っているため、ダメになるのが早い。朝のランニングだけでは、持久力強化には足りないのだろうか。

「お帰り。若葉、落ち着いたらまた頼む」

「了解」

ある程度息が整った後に施設に戻ると、また飛鳥医師から呼び出しがかかった。私が訓練をしている間に、新たに素材が見当ついたようである。今回の嗅ぎ分けで残り2つが見つかればいいんだが。

「頼られてるわね」

「若葉の取り柄だからな」

曙に冷やかされるが、私ならではの解決方法なのだから、出来ることは何だってやる。せめて霰だけは助けてやりたい。

「その嗅覚は素晴らしいですよ。ですが、疲れて呼吸が乱れると、嗅ぎ分ける余裕が無くなりますね」

「鼻で息する余裕が無くなるからだと思います」

それともう一つ、自分自身の匂いが強くなってしまったために、嗅ぎ分けが難しくなるからだと思う。特に今日は、懸命に動き回ったことで少し汗ばんだ。暑さでブレザーも脱いだほどである。

染み付いた鉄と油と海の匂いに汗の匂いも混じり、少し不快。そういえばと思ったが、さすがに今の私の匂いが該当する匂いなわけがなかった。

「ただいまー……つつかれたあ」

ちやうど射撃訓練を終えた雷と三日月とも合流。疲れ果て、三日月は相変わらず無言である。

今日の教官は羽黒だったが、相変わらずのスパルタっぷりだったようだ。始めたばかりの頃のようにグツタリすることは無くなったものの、疲れは過剰なため、早急な風呂を求めている。

「対人戦は頭使うわね……すごく疲れるわ」

「……羽黒さんが……強すぎて……」

あちらも私達と同じように対人戦による実戦訓練をしているようだ。的当てが次の段階に行ったようなもの。相手は当然羽黒だろう。その羽黒には水の一滴も付いていないので、2人がかりでもどうにも出来なかったようである。

「その内、合同訓練もしましょうね」

「はい。その時は、駆逐隊同士の演習を取り入れましょう」

教官は教官でいろいろと話すことがあるようである。私達の今後が着々と決まっていくな。演習は面白そうだ。命のかかっていない戦いならやってみよう。

風呂上がり、そのまま処置室へ。

「すまない、急がせてしまったか」

「いや、問題ない」

薬湯のおかげで疲れは持ち越さないのだから問題ない。今もピンピンしている。本当にあの薬湯は強力だ。

「今回用意出来たのはコレだけだ。嫌な予感がしたから、普通こんなところに出さないようなものまで用意した」

「そうなのか。薬じゃないものとかか？」

「似たようなものだ」

午後一と同じように薬瓶が並べられている。前よりは数が少ないものの、やはり多種多様な薬が揃えられていた。前回と同じようにそれを一つずつ嗅いでいく。

嗅ぎながらも、実は私にも嗅ぎ分けられない無臭の物質が入っているのではないかという不安がよぎった。そうすると完全にお手上げ。

「これ」

「あつたか」

一つは見つけた。鎮痛剤の一種らしく、何処の医療施設でもあるようなものらしい。一般流通しているようなものでもある。

確かに先程出すようなものではない。身体に作用するものではないが、影響の与え方が違う。

そして最後。私を感じ取った5種類の中でも、一番薄く感じた匂いを探して当てた。

「……見つけた。これだ」

「最後の一つはそれか……一番言っただけでなくなかったものだな」

飛鳥医師が天を仰ぐ。麻薬の時よりも残念そう。余程のものだろう。

「これは？」

「……深海棲艦の体液だ」

絶句。

「シロクロやセスのものではない、下級のもの、これは頻繁に発生する駆逐イ級のものだ。浜辺に流れ着いた死骸を処理する時に出たものを、何かに使えるかもしれないと保存していたものだ。血液ではない」

「そんな……ものが……」

私や摩耶のようにモロに移植されているパーツは、保存する時にしっかりと洗浄され、そういつた体液が私達の中に混入しないように処理されているらしい。艦娘同士でもそういうものは安全ではなく、蘇生の技術を持っている飛鳥医師だからこそ出来る保存方法でもあるそうだ。

それが、艦娘の中にしつかり入り込んでいた。飛鳥医師でもどんな悪影響があるか調査すらしていない危険な物質。何せ、実験したら艦娘一人が失われる可能性があるのだから。

「……そういうことか。僕が言えたことではないが、これは悪魔の所業だぞ」

何かに気付いた様子。治療法がわかったのかもしれないが、飛鳥医師は心底嫌そうな顔だった。

「下級の深海棲艦は自我が無い。野生の獣のようにただ襲ってくる厄介者だが、姫級の指示だけは聞き、統率が出来ている。この関係、何かに似ていると思わないか」

「……霧と夕雲！」

「そうだ。霧が下級、夕雲が姫級だ。そこにこの体液が出てきたということは……霧と夕雲は、身体の中だけ深海棲艦に染められている」
深海棲艦の体液を身体全体に浸透させることで、その特性を与えているのでは無いかという。リミッター解除なんて荒技も、深海棲艦ならやれそうだが、艦娘には簡単には出来ない。辻褄がいろいろ合うため、一切否定が出来ない。

私や三日月、曙が人形にされていないのは、第一改装しないと、この薬効に耐えられないからでは無いかと言いつ出した。あり得る話だ。

ここまで頭を滅茶苦茶にする効果だ。無改装では身体が保たず、すぐに命を落としてしまうだろう。

「若葉、夕雲の匂いを嗅いでももらえないか」
「了解」

医務室で眠る夕雲の匂いを嗅ぐ。霰と同じ匂いがしたが1つだけ、少しだけ違う匂いがした。それが、深海棲艦の体液の匂い。霰のものとは違う匂いに変わっている。

「姫級の体液が使われているんだろう。それは第二改装が出来る艦娘しか耐えられないというのが妥当だ」

それに加え、姫級は下級と違って自我がある。それはシロクロやセスを見ているので理解が出来る。夕雲が夕雲らしからぬ言動をしたのは、その体液に引っ張られたか何かか。

「他の4つはあくまでも深海棲艦の体液を身体に馴染ませるための媒介だったんだ。栄養剤で身体に浸透させ、鎮痛剤と麻薬でさらに馴染ませている。依存性の高い薬というのが重要だったか」

「夕雲の提督に対する忠誠心は何処から」

「それこそ麻薬の効果だろう。幸福感を与えてくれる提督に、絶対的忠誠を持つのも強ち間違っていない。そもそも艦娘は提督のことをあまり嫌わないからな」

最悪じゃないか。艦娘の特性を逆手に取った思考誘導だ。

「ここまでわかれば、あとは治療だけだ。若葉、本当に助かった。君がいなかったらここまで来れなかった」

「1日でここまで出来たのは飛鳥医師の実力だろう。若葉はそれを少しでもだけ押せたに過ぎない」

「そうだとしても、君には感謝しかない。詰みの状況をひっくり返してくれたんだ」

心底嬉しそうな飛鳥医師。ここまでハイになっているのを見るのは初めてであった。

霰と夕雲の治療の目処が立ち、戦いはさらに進展する。家村の鎮守府を追い詰める準備は、次々と進んでいく。

力を合わせて

霰と夕雲をおかしくしている原因が、私、若葉の嗅覚で判明した。2人を洗脳し、鎮守府の奴隷に仕立て上げていたのは、体内に入れられた深海棲艦の体液や麻薬などの5種類。深海棲艦の体液の効果を麻薬や栄養剤などで拡張し、幸福感や依存性により洗脳していた。

そこまでわかれば後は飛鳥医師の仕事。治療法を編み出し、2人に施すことで、元の鞘に収まる。その治療法というのが難題なのだが。

「麻薬の依存性を抜くのは難しいし、深海棲艦の体液の影響なんてどうしたものか……。逆位相をぶつけるにしても、そもそも頭にまで達している時点で……。くそ、どうする」

夕食の最中もブツブツ言いながら悩んでいる。同じ場にいる全員が心配してしまうほど。

霰と夕雲の身体がどうなっているかは、既に下呂大将には神風経由で連絡済み。その神風に話す際に全員に聞いてもらっている。深海棲艦の体液が混入したことでおかしくなったと聞いたら、みんな腑に落ちたようだった。

特にシロ。霰と夕雲から嫌な匂いがしたと言った。シロは感覚的な匂いで話すし、相手が敵であるということもあるため、深刻なものとは思えずにすぐには伝えなかったようだ。私達も、あの場でそう聞いても敵だからだろうと考えてしまうだろう。

「霰は下級の深海棲艦になっちまってるってことだよな」

「状況的には」

「なら、夕雲以外の姫の言う事も聞くんじゃね？」

夕食後、摩耶の提案。そういえば、霰がここに運び込まれてから、一度も他の姫級から命令を受けていない。

幸い、この施設には姫級の深海棲艦が3人もいる。夕雲、もしくは敵鎮守府に属する第二改装を終えた艦娘にのみ反応するようになっていたのならお手上げ。そうでなく、シロクロやセスの命令にも反応するなら、治療が少しだけ楽になる。寝たままではなく、ある程度行動させることが出来るようになるからだ。

「やってみる価値はある」

「なら私やるー。アラレに何か命令すればいいんだよね」

「簡単なことにしてくれ。立てとか歩けとかでいい」

クロがまずやってみることに。流石にどうなるか気になるため、みんなで霰の眠る部屋に。

暗い部屋の中、霰は目を開いていた。だが当然うんともすんとも言わない状態。ピクリともしないため、本当に生きているのか不安になるレベル。

「アラレ、起きてー」

クロが霰に声をかける。私が声をかけた時は何の反応もしなかったが、果たして。

「アラレー、起きて起きてー」

何度か呼びかけると、なんと霰が起き上がり、クロの方を見ている。暗がりでも光のない瞳でこちらを見ていたので、少し怖い。

「わ、言うこと聞いてくれたよー」

「……アラレ……こっちにきて……」

今度はシロが呼びかける。すると、言われた通りにベッドから降りてシロの側へと歩いてきた。流石姫級。これだけ施設に馴染んでも、本質だけは変わらず、霰はそこをしつかり認識している。

今の霰は完全にシロクロの操り人形。言われた通りに動くだけ。自我も意思も感じない。とはいえ、全く動かないよりは出来ることが増える。差しあたっては、日常的な生活。

「戦うことが出来るんだから、ご飯を食べることくらいは出来るわよね」

「確かに。栄養剤だけでは逆に身体に悪いな」

「なら、明日の朝からちゃんと呼意するわ。シロ、クロ、アラレのことお願いしていいかしら」

「任せてー」

セスはエコの面倒があるため、霰の操作はシロクロが担当することになった。摩耶も、今は工場作業が少ないから大丈夫だと快く了承。摩耶の余裕が無くなったら私も手伝うので問題無い。

シロクロに特殊な仕事が割り当てられるのは初めてのことで、2人とも、特にクロの方はやる気満々である。私達には絶対に出来ない大役のため、塩梅は全て任せるしかない。

「なるべく早く治療法を探し当てる。2人とも、霰のことを頼んだ」

「はーい！」

「悪いようには……しないから……」

シロも楽しそうに何より。この施設に協力出来ているということ
で気分がいいようだ。

翌日からは本格的に治療法探しを開始した。とにかく今までに前例のない症例。深海棲艦の四肢を移植された私達にも出なかった問題。四肢の処理が完璧だったが故に悲劇は起きなかったが、他人事ではない。

「シロとクロには治療の手伝いをしてもらいたい。いいか？」

「いいよ……私達じゃないと……アラレは動かないからね……」

「何でもやるよー！」

嗅覚が必要無くなったため、私はお役御免。代わりに、霰を動かすことが出来るシロとクロが飛鳥医師の助手として活動する。おかげで私は戦闘訓練に専念することが出来るようになる。

霰のことは心配だが、私がどうにか出来ることはもう何も無い。あとは全て任せよう。

「アラレ、ご飯を食べて」

クロが言うと、霰は機械のように目の前に置かれたご飯を食べ出す。味もわかっていないように、ただただ黙々と。こんなに美味しい雷の朝食を勿体無い。必ず美味しいと言わせてやる。

「私達の言うことばかり聞いてるのはつまらないからね。せんと、早く治してあげてね」

「勿論だ。やれることは全てやるさ」

私もそれなりに長く住ませてもらっているが、ここにはレントゲンを撮ることが出来るくらいで、それ以上に大規模な医療装置は置かれていない。私達は入らせてももらえない地下は、全て倉庫。保管して

いる深海棲艦のパーツが、完全な状態で所狭しと並べられているような状態だと言うし。

ここまで来ると大事。普通の治療ではどうにもならないのは、素人の私でもすぐにわかる。腕が無いだとか全身火傷だとかとは全く違うし、死者の蘇生とも違うのだろう。臓器を取り替えるだけとは話が変わる。全身が蝕まれていると言っても過言では無い。

「透析が出来ればな……」

「トーセキって？」

「身体の中の血を、綺麗に掃除することだ。少なくとも、何かいい影響が出ると思ってるんだが、出来ないものは仕方がない」

確かに、麻薬の成分は血液検査でわかったことだし、血液は身体全体に流れるものだ。当然脳にだって流れているのだから、思考を侵すそれに対して、何らかの影響が与えられるかもしれない。

だが、装置がとんでもない値段らしく、とても手が出せるものではないのだとか。レントゲン撮影のX線撮影装置があるだけでも充分過ぎるようだが、透析装置は頻度が違う。優先すべきものではなかった。

「まずは思いつく限りをやってみよう。手を止めている暇はないな」

「根を詰めないようによ。何かあったら頼ってよね？」

「ああ、君達にも頼らせてもらう」

雷が念を押すが、これは無理をしそう。霰のことを早く助けたいからこそ無理をしてしまうのは仕方ないことだが、それで身体を壊してしまつたら元も子もない。

治療が出来るのは飛鳥医師だけなのだ。飛鳥医師が倒れてしまつたら詰みということを自覚してもらわねば。

本日の訓練も終了。まだ攻撃を当てることが出来なかつたものの、確実に力が付いていることを自覚できた。今までは一方的にやられるだけだったが、今日はついに神風に回避行動を取らせることに成功。動体視力が成長している。

「すごいわね若葉、鳳翔さんが目を付けるだけあるわ」

「そうか……そいつはありがたい……」

神風に褒められると、一層自分に力がついてきたと自覚出来る。

とはいえ、息も絶え絶えなのは昨日と変わらない。消耗しきって立ち上がれないのは毎度のことである。持久力も最初のことを考えれば成長しているのだが、神風相手だとそれどころではなくなる。

「お疲れ様ー」

浜辺でクロが手を振っていた。シロもその後ろにおり、さらにはその後ろには検査着姿の霰が付かず離れずの距離を保っている。散歩に付き合つてとでも命令したのだろうか。

「あら、霰を外に連れ出したのね。大丈夫なの？」

「部屋の中にならずっといつもつまらないでしょ。それならさ、外を散歩した方が何か変わるかもって思つて」

「……先生が……頭を抱えて動かなくなつたし……」

なるほど、後者が直接の理由だ。治療法に悩みに悩んで何も出来なくなつてしまつたのだろう。邪魔しないように外に出てきたわけだ。

霰は2人の後ろでただ立ち尽くし、感情の無い表情で虚空を眺めるのみ。ここにいるのも言われたからであり、肯定も否定も無い。

「アラレ、散歩は楽しい？」

クロのこの問い掛けには無反応。命令では無いからか、そもそも意味がわかつていないのか。返答が無いからか、クロは少し寂しそう。

「……本当に……下っ端達みたい」

「下っ端というのは下級の深海棲艦のことですか？」

「……うん。勝手に動かないエゴみたいな……すごく従順なペット……みたいな」

姫級の深海棲艦から言わせれば、下級の深海棲艦は全てペットくらいの考えになるようである。自我も無く、理性もなく、姫級がいなくてもだけ好き勝手にやる獣。私達から言わせてみれば侵略者かもしれないが、シロクロの管轄下に置かれれば、何の悪さもしない愛玩動物になるらしい。そもそも管轄下に置くこと自体が稀のようだが。

「ワカバ、アラレに何か変わったところ無い？ 時間が経ってるから、匂いが変わってないかなってせんせーが言つてたよ」

確かに、元いた鎮守府から離してここで保護しているのだから、薬漬けの状態からは脱却している。最後に嗅いだのは昨日の夕方、今は大体1日経っているの、ほんの少しくらい薄れていてもいいかもしれない。

息を整えて、霰の匂いを改めて嗅ぐ。何がどの匂いかは覚えているので、出来ればあの甘い匂いが薄まってほしいところ。

「……何も変わっていない」

「薄まっても？」

「いない。そのままだ」

たった1日で何か変わるとは限らないか。身体の内部分の話だから、風呂に入っても変わらないうし、完全に染み付いてこれがもう霰の匂いとなってしまうているかもしれない。

こればかりは様子見しかないだろう。それよりも前に飛鳥医師が治療法を見つけてくれれば話は別だが、匂いは時間が解決という可能性だけである。

「今はそこまでにして、施設に戻りましょう。若葉さんも曙さんも、訓練終わりで疲れているでしょう」

「そうよ。もうクツクツだね」

「若葉も疲れた。風呂に入りたい」

ここでやっていても何も変わりそうにないため、一度施設に戻っていつも通りに片付けることにする。

霰とはなるべく関わり合いを持つようにして、変化が促せるかどうかは調べていきたいところ。今までとは違う刺激を与えれば、少しでもいい方向に進むかもしれない。

夕食の時間になっても飛鳥医師は処置室から出てこなかった。完全に行き詰まっているようである。根を詰めるなど言ったのに、案の定根を詰めているようである。

こういうことは今までにも何度かあったらしく、そのたびに雷が無理矢理夕食を食べさせているそうだ。今回もその流れになりそうと雷が溜息をつく。

「飛鳥医師でも難しいことはあるんだな」

「そりゃあそうだろう。センセだつて人間だぜ？」

飛鳥医師は恐ろしいほどの才能は持っているが、神でもなければ悪魔でもない、人間だ。見ただけ聞いただけで治療法が思い付くとは限らない。特に今回は、一切前例のない症例。さらには元々専門外である深海棲艦絡みの内容である。こうなっても仕方ない。

「クロが意識戻れって言ったなら治つたりしてな」

「どつくにやつたけどダメだったよ」

「やつたのかよ」

迷走しているのがわかる。

「専門外のことですから、私にも見当が付きませんね」

「見た目は普通なんだけどねえ」

クロの命令で黙々と夕食を食べる霰を眺めている鳳翔と神風。本来は外部のものだが、今は施設に住む仲間ということまで打開策を考えてくれている。流石に誰もが分野が違うのでお手上げ状態。

「私達はこの施設を防衛することに専念しましょう。彩雲は見ませんでした、またあちらもタイミングを見計らっているでしょうね」

「うちの司令官がどうにかするまでは、ここは自衛しか無いものね。そのため私達なんだから」

下呂大將も、この2日で次々と手を打っているらしい。家村の鎮守府への査察を大本営に掛け合い、また、所属している艦娘から麻葉が摘出された事実も伝え、確実に終わらせる手段を準備中。大本営も飛鳥医師のことを知るものばかりなため、話も通しやすいのだとか。

私達の手で決着をつけることは難しいとは思いますが、鎮守府同士の抗争のようになつたら是非とも力を貸したいところである。

「……私達は……まだ良い方……なんでしようか」

三日月がボソリと呟く。

私達継ぎ接ぎの者は、死にかけてたが故に霰のような人形にも夕雲のような奴隷にもならず済んでいる。外見を犠牲に、中身をぐちゃぐちゃにされずに済んだと思えば良い方なのかもしれない。

「ここが無かつたら死んでたんだ。どつちもどつちだろう」

「……そう、ですね。運は良かったのはどちらも同じですよね」

霰も夕雲も運が良かった。本来なら死んでいたであろう状況がいくつもある。それを乗り越えることが出来たのだから、まだ生きているのだから私達と同じだ。

「まあ、言っても仕方ねえ。センスに任せるしか無えんだ」

「そうよね、うん。とりあえずご飯を運んで無理矢理食べさせるわ。根を詰めるなって言ったのにもう！」

などと言いながら、嫌そうな顔はしていない雷。こうなることを予想してか、運びやすく食べやすいものを事前に用意していた辺り、この中でも一番付き合いが長いことがわかる。

今日は何も進展しなかったが、みんなが力を合わせて最善の方向へと向かおうとしている。私もその一員として、誠心誠意頑張りたい。

探し当てた光

姫級の命令ならばどんなことでも聞くことが判明した霰。そのおかげで、シロクロが操作して擬似的に日常を送らせることが出来るようになった。やろうと思えば、これで大概のことは出来る。とはいえ、近くに姫級がいることが前提だが。

翌朝、ランニングを終わらせ施設に戻ると、早速飛鳥医師からお呼び出しがかかる。昨日目一杯考えに考えた結果、もう一度、この私、若葉の嗅覚が必要になったらしい。

「僕の言うところの匂いを嗅いでほしい」

「前とは違うな。場所が重要なのか」

「ああ。予想が正しければ、治療が出来る可能性がある。出来れば高速修復材があると助かるが」

僅か1日で治療の目処を立ててきた。流石である。

処置室にはシロクロをお願いして、仰向けに寝かされた霰がいた。これが治療に繋がると聞いて、2人も率先して協力してくれている。

飛鳥医師に指示されたのは腰の辺りや胸の中央。今までは漂う匂いを嗅ぐイメージだったが、今回は本当に微かな匂いを嗅ぎ取りたいらしく、肌を鼻をベタ付け。故に霰は全裸である。

「今はいつもの薬の匂いだな。昨日嗅ぎ分けた通り、5つの匂いが混ざり合ってる」

「その中でも、深海棲艦の体液の匂いが一番強いところを探してもらえるか。僕の予想では、さっき言った2箇所付近なんだ」

深海棲艦の体液の匂いは、5つの中でも特に薄い。それが一番濃いとところと言われても、おそらくそれは誤差範囲であろう。だが、その誤差が重要。

まずは腰。どれだけ鼻を近付けたところで、匂いが変わったようには思えない。濃度を見るのは初めてのことなので、今までで一番集中して嗅いでいる。多分絵面はものすごく悪い。

「……………はあまり変わらない」

「次、胸を頼む。中央部分に沿ってだ」

場所もかなり重要のようで、飛鳥医師から指を差された場所を限なく嗅ぐ。外ではなく中を嗅ぐように。

知っている匂いしかない。私が嗅ぎ当てた、栄養剤2つ、鎮痛剤、麻薬、そして深海棲艦の体液の匂い。麻薬の甘い匂いが鬱陶しいが、なるべく奥深くを探していく。

「ん？」

「どうした」

飛鳥医師が指差した場所より少し上。霰の胸の匂いに違和感を覚えた。ほんの少しだけ、深海棲艦の体液の匂いが強いような場所があった。

そこは、体内の爆弾を摘出する際に、火薬が仕込まれていたために傷を付けた場所の上。その時にはこんな匂いが感じられなかった。火薬の匂いが強すぎて、他の匂いをかき消していた上に、ここまで微妙な匂いだと判断も付かなかった。

「コン、少し匂いが強い。誤差程度だが」

「そこか……。前回の開腹手術では見えなかったところだ」

確かに、腹を開いたときの傷は腹と胸の下辺りに傷をつけたが、今回は胸の上の方。鎖骨に近い辺り。内臓に触れるためにはそこまで開く必要がないため、確認すらしていなかった。

「これは大変だぞ」

「どういうことだ」

「まだ僕の想定ではあるんだが、体内で造られる血液そのものに問題があるように改造されている。おそらく第一改装の際に完全に弄られてるんだ」

艦娘だからこそその滅茶苦茶な改造手術。

私には難しくてよくわからなかったが、腰と胸の骨というのは身体を回る血液を他より多く作っているらしく、そこに何らかの処置を加えられたことで血液に異常をきたし、さらにその血液が身体中に回ることで霰は今の状態にされているという。

「胸部レントゲンでも異常には見えなかったことを考えると、状況は胸を開いて見てみるしか無いな……」

「……先生……胸の何処……？」

飛鳥医師が頭を悩ませていると、シロが一步前に。自分どころか、他人の声帯すら弄ったシロなら、もしかしたら何か出来るかもしれない。

「ここだ。おそろくこの骨」

「ああ、そこが一番匂いが強い」

「これ……ね……」

シロが靨の胸に触れ、目を瞑りながら皮膚越しに骨を撫でる。久しぶりに見る、シロの特異な行動。これで何か出来るとは限らないが、何かしらの効果があるかもしれない。私も飛鳥医師は固唾を飲んで見守る。

「……骨の中に……何か入ってる。同胞の……何かと……それ以外にも」

「それが問題を起こしているというわけか」

「多分。それだけ抜くことは……ちよつと難しい」

これにより原因確定。シロのお手柄にクロも大喜びである。

想定通りだったことを受け、飛鳥医師には答えが見えたようだった。今までの難しい顔が一転、考えていたことが繋がっていったことにより綻んでいく。

「そうになると、胸骨そのものを交換するしかないな。骨髄は腸骨から移植して……問題は汚染された血液か。修復材でもここまで馴染むと厳しそうだな……。骨髄にまで侵食しないとは思うが、術後に透析が出来れば……！」

言っていることはよくわからないが、とにかく治療に繋がる何かを見つけたようだ。だが、それだけでは足りないようで、綻んだ表情がまた険しく。

と、ここで電話が入った。まだ朝食も始まっていない早朝なのに誰か。と思ったが、この連絡先を知っている者は数が限られている。そうになると、大体は私でも知っている人間。

「……先生、どうしたんですこんな朝早くに」

電話の相手は下呂大将のようだ。話していく内に、だんだんと飛鳥

医師の表情がまた綻んでいく。息荒く返事をし、小さくガッツポーズまでしているように見えた。

「ありがとうございます！ お待ちしています！」

こんなに喜んでいる飛鳥医師を見るのは初めてかもしれない。今の言葉からして、またここに来るように聞こえたが、それにしても喜び方が普通ではない。

「先生が透析装置を持ってきてくれる！ それまでに手術を終わらせるぞ！」

あまりに高価で手が出せなかったという機材を、下呂大将がここに運んできてくれるらしい。今からここへ輸送するということで、早くても数時間かかる。その間に手術を終えて、下呂大将を迎え入れたい。

突然の展開に、施設は慌ただしく動き出した。手術において私達が手伝えることはほとんど無いが、出来る限りはサポートしていこう。

あまりにも急なことだったため、本日は訓練も中止。飛鳥医師は処置室に籠り、霰への処置を続けている。

聞いている話では、今回の処置は胸の骨、胸骨の移植。私の脚に埋め込まれた子級の骨とは訳が違い、中に入る骨髓を霰の腰の骨から確保することまでするらしい。

人間で同じことをするのなら段階を踏んでいかなければいけないが、艦娘は頑丈であるという今までの経験から即断。いざという時は、鳳翔の持つてきてくれている薬湯も使っていく構え。

そしてその処置が始まって数時間、終了を今か今かと待っているところに、下呂大将到着。今回は機材の搬入というのもあるが、絶対に攻撃されるわけにはいかないということ、なんと陸路で来た。

辺鄙な場所ではあるが、元々は鎮守府であつた施設なわけだし、無人島や人工島でもない地続きの場所だ。周りにあまりにも何もないので気にも留めなかったが、普通に道くらいはある。軍事施設の括りであるため、この道を通ることが出来るのは関係者だけではあるが。

「3日ぶりですね」

「大将、待ってたわ！」

いつ装置が来てもいいように、雷が艦装を装備して待っていた。大型なものの場合には艦装の力も必要だろう。そして案の定、それなりに大きな装置であった。それを運ぶために、車も大型のトラック。

「昨日神風から連絡を貰ってピンと来ました。確かにこれが必要だと思います、大急ぎで手配しましたよ。借用なので3日しかここに置くことは出来ませんが、必要なものは全て用意してあります。飛鳥は処置中ですか？」

「ええ、今は霰の処置中。大分時間は経ってるから、そろそろ終わるかも」

話しながらも機材を施設内に運び込む。

と、ここでトラックから見知らぬ艦娘がやってきた。トラックを運転していたのだろうが、どう見ても身体のサイズに合っていない。見た目は子供だ。

「ああ、紹介が遅れましたね。私の陸での相棒です」

「三式潜航輸送艇、まるゆです！」

ビシッと敬礼してきた子供、まるゆ。ここではそんな感じは見えないが、これでも潜水艦らしい。それでも艦娘であるが故に、車両の運転は可能なのだそうだ。

そもそもまるゆは私達と違う生まれ方をしているようで、少し性質が違うとのこと。故に、こういうことで下呂大将の役に立っている。

「近況報告も兼ねています。3日でこちら準備が整ってきましたからね」

下呂大将が施設に入ると同時に、処置室から飛鳥医師が出てきた。ピツタリのタイミングで処置が完了したようだ。今回はしつかり血は落としたようで、それなりに綺麗な見た目だったが、相変わらず処置室の中は見れたものでは無さそうである。

「ちようどいいタイミングだったようですね」

「先生、本当にありがとうございます。機材の方は」

「こつちよー！」

雷がすでに処置室に運び込もうとしていたが、中を見て嫌そうな顔

をする。予想通りの惨状らしい。

「先生……さすがにここに入れるのはダメよ。医務室に運ぶわね」

「ああ、すまない。部屋の掃除は後からする。今は透析を優先させてくれ」

「わかったわ」

透析装置は医務室へ。手術が完了した霰も、適切な処置をされた後に医務室に運ばれ、すぐに透析が開始した。これが完了すれば、霰の血液は浄化され、深海棲艦の体液に汚染された血液は無くなるはず。

そもそも血液を汚染し続けていた骨も、今回の手術で失われた。移植された深海棲艦の骨も洗浄済みで、余計な体液は分泌しないようになっていくとのこと。これで霰の身体は綺麗になる。

「身体が綺麗になったところで、何処まで治るかがわからないのが難しいところだ」

「でも、前より悪くなることは無いんでしょ？」

「ああ。抽出した胸骨を調べる必要はあるが、大丈夫なはずだ」

透析はここから4〜5時間かかるとのこと。本来なら定期的にやらなくてはいけないらしいが、ひとまず1回で様子見るらしい。

「飛鳥、私からの餞別です」

と言いながら下呂大将の指示でまるゆが差し出したのは、緑色の液体が入った小瓶。嗅いだことがあるような無いような匂い。

「い、いいんですか？　これ、高速修復材ですよね？」

「使用する過程で出た残り物ですから。廃棄品ですよ」

なるほど、嗅いだことがあるような感じは、以前に来栖提督が曙のために持ってきた高速修復材のジュースに近い匂いを感じたからだ。あれが本来の高速修復材。

これさえあれば霰の傷はすぐに治る。少なくとも、今は胸を開いた傷があるはずだし、飲ませて骨の接合を強固にしてもいい。どうとでも使い道はある。

「ありがとうございます。透析が終わった後に使わせていただきます。でも、よく装置が欲しいとわかりましたね」

「少し考えればわかることですよ。血液のことを強調されましたか

ら。私には医療知識はありませんが、血液が汚染されている可能性を考えると、君はこの装置を使ったがるだろうと推測したわけです」

「相変わらずですね。本当にありがたいです」

下呂大將が先んじて準備を始めていたから、このタイミングですぐに手術をすることが出来た。前回の家村を元凶と確定させた時もそうだが、手際の良さが尋常ではない。仕事が早い上に的確。これが大將の実力ということか。

「君も相変わらずですね。期待通りに僅か数日で治療法を見出ししてくれました」

「今回は若葉とシロのおかげですよ。予測したのは僕ですが、確定させたのは2人です」

「いい仲間に恵まれましたね。ここで軟禁されることになった時は少し心配しましたが、ここまで人が増えるとは思ってませんでしたよ」

ここ数ヶ月で一気に増えた。私が起点になって、それ以降は全員家村絡みの被害者だ。シロクロやセスですら、夕雲含む敵鎮守府の部隊に追い回されている経緯がある。

「僕もですよ。雷と摩耶は本当に偶然ですからね」

「君の人徳が呼び寄せたんです。誇っていいですよ」

「……そう……ですね。仲間達がいなければ、叢は助けられないと思います。まだこれで終わりとは限りませんが、これからも精進します」

こういう会話を聞いていると、師弟関係というのがよくわかった。飛鳥医師が下呂大將に頭が上がらないというのもあるが、お互いに信頼し合っていることが伝わってくる。

縦にも横にもいい繋がりを持っている飛鳥医師は恵まれているだろう。私達も、この人に拾われて良かったと心の底から思った。

「ですがね、私も少し早まったかなと思ってしまいました」

ここで少し悲しそうな顔をする下呂大將。叢の治療を早めてくれたのは下呂大將だが、それが良くなかったかもしれないと言いつつ。

「もしこれで深海棲艦の体液の影響が無くなったとしましょう。叢は通常の思考を取り戻し、艦娘として復帰出来ます。ですが、薬物依存

の禁断症状が起こりかねませんよ」

「……確かに。ですが、薬物既存は治療出来るようなものでもありません。僕らがついていてあげるしか手段が」

「そうなんですがね。ある程度薬を抜いた後に治療するべきだったかもしれないなど」

「ここも難しい問題だろう。薬物依存のことを考えて処置を先送りにして、さらに取り返しをつかないことになっても困る。だが、禁断症状は相当辛いと聞く。どちらにしる地獄だ。」

「なら、意思のある状態で私達がついてあげることが出来た方がマシではないかと思う。ずっと寝かされるかシロクロに操作されているしかないのは可哀想。治る見込みがあるのなら治してあげたい。エゴかもしれないが。」

「何かあれば私に連絡なさい。この装置を確保したのは私ですから、治療を急がせたのも私です。責任は私にもありますから」

「もしもの時はお願いします。霰は僕達が支えますから」

「霰の治療に光明が見えたのは確かだ。これで上手くいったら、次は同じ処置を夕雲に施す。あれほどのことをされたとしても、夕雲だって被害者だ。ここは命あるもの全てを助ける医療施設。夕雲も例外ではない。」

「さらに先に進める。事態は刻一刻と進む。」

目覚める人形

霧の治療の目処が立った。身体を汚染している原因であろう胸の骨を摘出し、正常なものへと交換。さらには下呂大將が持ってきてくれた透析装置により血液を洗浄することで、最低限の除染は出来ることになる。

意思を取り戻すかはその後にはわからないが、問題はその後にもある。深海棲艦の体液を定着させる媒介として使われていた麻薬の依存症になっており、その禁断症状に悩まされる可能性が非常に高い。さらにはこれは、治療出来るものでもないという。何かあれば、施設の者全員で支えていきたい。

霧の透析が終わるまでに、下呂大將の近況報告を受けた。

現在裏側では家村鎮守府へのアポ無し査察が計画されているようだ。それを行うのは当然下呂大將。鎮守府の代表として、品行方正を心掛けているのなら、アポ無し突撃でも問題なく対処出来るはずである。

「家村は困ったことに表面上の素行はすこぶるいいので、捜査の許可がなかなか下りてくれませんでした。近日中に行けます。そこで決着をつけますよ」

「先生が直接行くんですか。危険ではありませんか？」

「私が行かなくては意味がありませんよ。ここの内情を全て知っており、家村本人とも面識があるのは私しかいません。それに、追加で調べたいこともありますから」

その調べたいことというのが、麻薬の流通経路である。周囲をある程度調査しても、その経路は当然簡単には見つからず、活動報告や戦闘詳報にあった小さな穴すらも、そこからは見つからないようだ。

そこから下呂大將は、麻薬の調達は家村では無い、別の者が執り行っていると想定。そこからまた穴探しをし、辿り着いた結果が。

「一番怪しいのは家村の現秘書艦、大淀。外出記録や来客記録も全て偽装であるとして、その管理が出来るのは、任務の取り扱いが出来る艦娘だけ。大淀も洗脳されている可能性があります。私の予想で

は、大淀は素面です。書類の文面的にそこは読み取れました。彼女は自らの意思で家村に協力しています」

それも、今までの記録から全て洗い出したらしい。前回の調査は家村が元凶であることを確定させるための調査だったが、今回は家村の情報だけを全て確認するだけのため、比較的楽だったとのこと。

年に近い単位の資料を全て確認するだけで気が遠くなるような作業量なのに、それを涼しげに言う辺り、下呂大将の恐ろしさがわかる。「まだ調査中ではありませんが、簡単にこれくらいにしておきましょう。あまりここで掘り下げすぎると、私が怒られてしまいますから。これ、機密中の機密ですからね」

「大将、それ普通に言っちゃマズイんじゃないか？」

「君達を信頼しており、君達から信頼を受けている証としてこれくらいは」

おそらく聞いては拙い情報はそこまで無いのだろう。ただ、『大淀は素面』という予想は今後何かに影響するかもしれない。私達が相対する可能性は低いとは思いますが、頭の片隅に置いておこう。

「隊長、霰さんの処置が終わるまで、ここにいますか？」

「ええ、今すぐ彼女から話を聞くことはありませんが、飛鳥の治療が効果的かどうかは先に知っておきたいですからね。効果的ならこちらでも準備が必要です。家村の鎮守府を落とした時、所属している艦娘全てに施術する可能性もありますから」

まるゆの問いにすかさず答える下呂大将。最低限、霰が目覚ますのを待たらしい。ついでにこの施設の査察ということにしていたようだ。

ありがたい来客ではあったが、明らかに飛鳥医師が疲れた顔をしているのが見て取れた。やはり上司がいるというのはプレッシャーになるようだ。

霰の透析が終了したのは夕暮れ時。その間、ずっとシロクロは医務室で霰の様子を見続けた。隣にはまるゆも座っている。

合間合間にまるゆが医務室に出入りしたようで、知らない間に友人

になっていた。相手が深海棲艦であるにもかかわらず、同じ潜水艦と
いうことでシンパシーを感じたようだ。今では3人目の姉妹が出来
たかのである。

「機材は外した。先生の持つてきてくれた高速修復材のおかげで傷も
もう無い。痛みは無いはずだ」

透析が終わったことで、霰は全ての機材が外されている。今朝の手
術前の状態だ。まだ眠ったままではあるが、その間にいろいろやるべ
きことがある。

「若葉、またお願いしていいか」

「ああ」

骨が移植された胸元の匂いを嗅ぐ。朝の時はそこから誤差範囲で
強めの深海棲艦の体液の匂いがしたが、今回は果たして。

「……何の匂いもしない。そもそも体臭からして変化している。何に
も染められていない匂いだ」

「そうか、よかった。血液の洗浄が有効であることはわかったぞ」

今までずっとしていた5種類の匂いは影も形もなく、完全な無臭。
まるでリセットされたかのように何も感じない。強いて言うなら、こ
の施設の匂い。いろいろな匂いが混ざり合った、心地よい混沌。

移植された骨の匂いもしないとは思わなかった。私にも入ってい
るせいかな、嗅ぎ分けるのが難しいのかもしれない。今まで保存されて
いたものだし、その保存法で匂いが無くなってしまっているのかも。

「あとは、シロクロの声掛けにどういう反応をするかだ」

「呼び掛ければいい？」

「ああ、慎重にだが、起こしてやってくれ」

突然暴れ出した時のことを考えて、四方八方を囲む形に。当たり前
だが誰も艀装は装備していない。霰1人の力なら、これだけいれば押
さえ込むことくらいできるだろう。

「アラレ、起きて」

クロが肩を揺する。優しく、慎重に。何があっても離れることはな
いという意味の下。

霰の目が、ゆつくりと開いた。

以前に見た光のない瞳ではない。しっかりと意思を持つ瞳。表情も感情もある顔。少し寝惚け眼ではあるものの、人形だった時とは大違いである。本来の霰が戻ってきたと考えても差し支えは無いのではなからうか。

「よかった、目が覚めた!」

「うん……よかった……」

目を覚まさないという可能性だって当然考えていた。それが払拭されただけでも喜ばしい。

霰は何かよくわからないようにゆっくりと首を声のする方、クロの方へ向けた。

私は見逃さなかった。霰の視線がクロの方に向いた瞬間、目の焦点が合わなくなつたのを。人形状態だった時と違つた形で、目の前が見れていない目になつたと思う。

「ひっ……あつ、あああああつ!」

瞬間、悲鳴を上げて暴れ出してしまった。肩に置かれたクロの手を振り払い、ベッドから飛び降りようとして転倒。機材に身体をぶつけながらも壁際に駆け出し、ガタガタ震え出す。

飛鳥医師に聞いていた麻薬の副作用を思い出した。切れた時の喪失感と、最悪な幻覚が見えたりすること。今まさに、後者が霰を襲っていると思えない。

人形にされて活動していた記憶が残っているかは定かではないが、今の霰にはクロのことが恐ろしい化け物に見えているのかもしれない。下手をしたら声もまともが届いていないかもしれない。

「禁断症状だ。血中から麻薬の成分が抜けたことで副作用が現れている」

本来なら自分でクスリをやったことがわかっているため、追加でクスリを投与して、より破滅に向かつていく。が、霰は自分にそういうものが入れられていたことをわかっていないのだと思う。手を伸ばす先もわからず、喪失感と幻覚に襲われ、錯乱し、恐怖し、ただただ目を瞑って震えるしか出来ない。

「どうすればいいの」

振り払われた手を気にも留めず、飛鳥医師に次のことを聞くクロ。いろいろと覚悟していただけあり、何をされても表情を変えない。むしろ、平然を装い、霰に不安を与えないように振る舞っていた。その霰がクロを見ていないのが残念でならない。

「明確な解決方法は……無い」

治療方法がないのも厄介なところ。クスリから離して、二度と使えないようにしてやれば自然に回復はするだろうが、これは高速修復材でも治せない病だ。時間が解決してくれる。

だが、このままでは霰自体が参ってしまう。誰かが側にいないと、自傷行為までしてしまいかねない。

「なら、側にいてあげればいいかな」

「支えてやりたいのは確かだ」

「オツケー。私がアラレの側にいる」

先程突っ撥ねられたにもかかわらず、お構いなしに霰に近付く。今も幻覚に苛まれ、硬く目を閉じ震えているが、クロは引け目を感じているようには見えない。

「アラレ、大丈夫だよ。私達は味方だから」

「いやだあっ!」

クロが差し伸べた手は、またもや振り払う。が、クロは気にせずアラレを抱きしめた。

「大丈夫、安心して。大丈夫だから」

「ひっ、ひいっ!?!」

どうにか逃げようと身を振り、腕を振り回してクロを袋叩きにすることになるのだが、クロはそれを耐えていた。痛いとも言わず、表情も変えず、ただただ抱きしめて温もりを与える。

独りで怯えるより、誰かが側にいた方が確実に回復するはずだ。その誰かが見えていないのなら、見えるようになるまで、落ち着くまでずっと抱きしめるといのがクロの考え。

「大丈夫だよ、大丈夫。落ち着こう。ね?」

「ひっ、ひっ……」

錯乱しすぎて過呼吸になってしまっている。息がうまく出来てい

ない。それを察したか、背中を摩りながら落ち着くように促していた。

もうクロは青痣が出来るほどに殴られ、何回かは顔にも入ってしまい、少し涙目。だが、ペースを変えず、声色も変えず、ただただ霰のことだけを考えて行動している。

「ひっ……あ……」

「落ち着いた?」

ようやく霰の目の焦点が合ってきた。禁断症状が一時的に薄れてきたか、正気に戻ったか。

「あっ……うあっ……」

「大丈夫だよ。みんなアラレの味方だからね」

「み……かた……」

焦点の合った目でクロを見た。錯乱で泣きじやくったせいでも顔はぐちゃぐちゃ。

「あなた……は……」

「私はクロ。あつちはシロ、私の姉貴。何か覚えてる?」

「……おぼえて……あ、ああ……」

クロに言われたことで何か思い出してしまったらしい。人形でいた時の記憶もすっかり残っているように見えた。

ここに襲撃に来る前から人形として戦場に出ていたのかもしれない。そのせいで、数々の戦場を経験しているのだろう。その全てが、捨て駒前提の戦い。

「あられは……あられは……」

「大丈夫、無理しなくていいよ。辛いなら寝てもいいからね」

「あられは……ひどいことを……ああああっ!」

おそらく味方を味方と思わないような戦術にも付き合わされている。私や三日月のような生まれただけの捨て駒を見捨てたり、仲間の自爆をただ見ているだけということもしているかもしれない。

それに対して何も出来なかった自分への嫌悪感が湧き上がり、治まったはずの錯乱が戻ってきてしまった。ビクビク震えながら、力なく暴れる。

「大丈夫だよ。アラレはやらされてただけ。アラレのせいじゃない。誰もアラレを恨んでないよ」

「いやっ、いやだあ……」

「みんなアラレのこと嫌ってないから、ね」

ずっと、ずっと、子供をあやすように、霰を撫で続ける。一度寝かせた方がいいと思うが、薬を使うにしても暴れ出してしまう可能性が高く、それも難しい。

結局、今はクロに全てを任せるしかなかった。シロも少し離れたところで眺めているのみ。クロが酷い目に遭っても、表情ひとつ変えずに霰の様子を見ていた。

「私はずっと側にいるから。姉貴も一緒にいるから」

クロがシロを手招き。もう暴れることは無さそうと察したか、シロもクロと同じように霰に抱き付いた。2人分の温もりを手に入れ、霰はまた少しだけ落ち着きを取り戻した。

「ごめん……なさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

「アラレのせいじゃないよ」

「……うん……みんな恨んでないから……」

シロも加わり、両サイドから慰め始めた。それでも霰は落ち込んでしまっている。慰めも聞く耳持たず、ずっと謝りながら泣いていた。

それだけ深く刻まれた心の傷。さらには、今は落ち着いていても定期的に訪れる禁断症状も残されている。ケアは確実に必要であり、どれだけの時間がかかるかは今の段階ではわからない。

クロは自分が霰の面倒を見ると言っただけで聞かなかった。霰は必ず元に戻すと躍起になっている。

「……こ、こんなに……壮絶なんですわね……」

「ああ」

今までの光景をずっと見ていたまるゆは、その場から動けないでいた。私だって慣れていない、所謂心の病だ。物怖じせずに霰についたクロの勇気は凄まじいもの。私もその場から動くことが出来なかった。

同じことが夕雲にも降りかかると思うと、気が滅入った。

口封じの夜襲

飛鳥医師の治療により霰が目を覚ましたが、投与されていた麻薬の禁断症状と人形でいた時にやってきた記憶で激しく錯乱。今はシロとクロが側にいることでほんの少しだけ落ち着いているが、いつまた禁断症状に襲われてもおかしくない危険な状況。

こればかりは治療が出来ない。時間をかけて抑え込むことで、日常生活に支障をきたさないようにするしか方法が無かった。

「アラレは私達の部屋で寝るってことでもいい？」

「夜も……危ないと思うから……」

今の霰は綱渡り状態だ。いつ倒れてもおかしくないため、本当に常に側にいてやる必要がある。そのため、シロとクロは朝から晩まで、おはようからおやすみまで一緒にいることを決めた。それこそ、3人目の姉妹のように。

「部屋は大丈夫か？ 3人で眠れるだろうか」

「そこは大丈夫だと思う。2人でも結構余裕あるしね」

「うん……アラレも小柄だし……大丈夫……だよ」

その霰だが、2人に抱きしめられながらもずっと謝罪の言葉を呟き続けている。虚ろな目で、また世界を瞳に映していないような表情。幻覚に続いて幻聴もあるのかもしれない。

「あ、あ、あああああっ!？」

「アラレ、落ち着いて、大丈夫、大丈夫だから」

「敵はいないよ……大丈夫……」

そして再び禁断症状。2人が耳元で囁いて落ち着かせる。ジタバタともがき、また暴れ出してしまうが、一度見たためかシロもクロも冷静に対処。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

「大丈夫、霰は何も悪くないよ」

「アラレは……悪いことしてない……大丈夫……」

見ているだけでも辛い。自分の意思とは関係なく悪事に手を染めさせられ、他人の指示に罪悪感を持たせられ、酷い幻覚に苛まれてい

るのは、あまりにもいたたまれない。

「……夕雲にも、同じ処置をやるんだよな」

「勿論。そうしなくては夕雲は永遠に目を覚ますことが出来ない」

「あれ以上になるだろう」

夕雲はこれに加えて、捨て駒に指示をしていたという事実まで突き付けられる。自分の意思では無かったにしろ、リミッター解除の命令を飛ばしたのは紛れもなく夕雲。さらには曙殺害の指示も夕雲である。

いくら夕雲が強い心を持っていたとしても、耐えられるかがわからない。当然それを支えてやる必要がある。

「明日は朝から夕雲の処置だ。一度霰で成功しているから処置自体は確実に終わらせることが出来る。移植する胸骨もあと1つなら保存されているし、大丈夫だ」

「わかった。明日も今日と同じ感じに過ごそう」

「そうしてくれ。緊急時には君達の手を借りたい」

今回は必要無かったが、何が起るかわからないのが今回の処置だ。もう死ぬことはなさそうではあるが、霰と夕雲ではいろいろ違う。第二改装を受けて、追加で何かされているかもしれない。

「では、私は一度帰投しましょう。飛鳥、次はまた3日後、透析装置の回収に来ます」

「お待ちしております。ありがとうございます」

「こちらでもいろいろと準備しておきます。体内の爆弾の件も考慮して、最も適した処置を選択しましょう」

霰と夕雲は私が気付けたことで体内に爆弾が仕掛けられていることがわかっていて。次から来るかもしれない部隊にも、全員仕掛けられていると考えていいだろう。全員を助けたいとは思いますが、戦闘中に爆破される可能性だって捨てきれない。それこそ、旗艦の指示でその場で自爆だってあり得る。

それも考慮した戦い方を選択しなければ、助けられる命も助けられない。

下呂大将とまるゆが帰投し、霰がシロクロと過ごしていくことが決まった日の深夜。妙な音が聞こえたことで目を覚ました私、若葉。一緒に寝ている三日月も同じように目を覚ましてしまったようだった。「……何の音だ」

「わかりません……でも聞いたことがある音です」

また聞こえた。寝惚けた状態ではわからなかったが、今の音は確実に爆音だ。曙がここに辿り着いた時とは違い、施設の外の音。小さな音ではあるが、確かに聞き取れた。

「戦闘……しているのか？」

「若葉さん、外を」

部屋の窓から外を見た。海の方こう、夜の海には本来あることがない光が見えた。何をやっているかは見えない位置ではあるが、明らかにあれは艦娘が発する光だ。探照灯の類。

あの辺りは今、来栖提督が派遣してくれている警備隊がいる場所だ。そこで音と光があるということは、今まさに戦闘中であるということ。

「襲撃……来たのか」

「そうなりますよね……夕雲さんごと証拠隠滅のつもりなのかも」

三日月の予感はず解な気がする。夕雲がここに捕らえられて3日。そろそろ襲撃を受けてもおかしくない時期。もっと早く来るかと思っていたくらいだ。こちらが夕雲の通信機を押さえており、自爆装置も起動しなかったことも向こうには知れているのだから、遅かれ早かれ夕雲が何かされるとは考えるだろう。

ならば諸共殺してしまえが向こうのスタンス。自爆させるくらいなのだから躊躇いが一切無い。

「一応避難しよう。対地攻撃が飛んでくる可能性がある」

「了解です。艦装は」

「装備しよう。いざという時は若葉達も行かなくては」

三日月と共に部屋から出ると、この音に気付いた一同が一斉に出てきていた。霰に至ってはこの音でトラウマを刺激され、またもや発狂。シロとクロが慰めているのが部屋の外からでもわかる。霰のこ

とはシロクロに任せ、私達は艀装を拾うために工廠は向かう。

それを見越して、いち早く摩耶が準備をしていた。私達が一番だったらしい。

「すぐに装備して海側から陸に上がれ！ センセが夕雲を運び出してる！」

「了解」

「三日月、こいつ持ってけ！」

整備済みの水鉄砲を投げて寄越され、慌ててキャッチ。これがあれば、万が一敵に近付かれても射撃で撃退出来る。特に三日月は、私とは違い接近戦では無く夜目が利くため、暗闇の戦いは私よりも得意だ。自爆の可能性を考えるなら、私よりも三日月を頼った方がいい。

「シロクロと霰は後からアタシが見てくる！」

「頼んだ。三日月、行くぞ」

「はい」

すぐに艀装を装備して海へ。部屋で見ている時よりも音は鮮明に聞こえ、この中立区でも当たり前のようにまともな戦闘をしていることがよくわかった。

ルール違反は当たり前。こちらはダミー弾だがあちらは実弾。さらには命を顧みず、自爆までしでかす捨て駒集団。

その中でも、おそらく夕雲と同じ立ち位置の旗艦があの中にいるはずだ。それをいち早く倒してしまえばまだ戦いやすくなるか。だが、捨て駒は確実にリミッターを外されている。戦っている時点で、死が確定する。

「マヤ、私はあっちに行く。姫の言葉がいるんでしょ」

「おう、気をつけてな」

「わかってる」

次に工廠に飛び込んできたセスが、即座に海に出て戦場に駆けていく、シロクロで出来たのだから、セスの命令でも捨て駒の人形は言うことを聞きそうだ。

戦場でリミッター解除をやめさせれば、その場では無傷で終わらせられる。とはいえ自爆の危険性は常に付き纏っているため、戦闘が終

わったとしても近付くことが難しい。姫級の自爆するなどという命令も、あちらでスイッチを押されたら意味がないことはわかっている。

「セス1人に任せて大丈夫か」

「セスだって深海棲艦の姫級なんだから。それに、あつちには来栖提督のこの警備隊もいる。心配はいらねえよ。まずは避難だ」

「……了解」

あちらの戦場はセスに任せて、私達はそのまま施設から離れた。私達に出来ることは、施設の被害を最低限にすること。まずは誰も死なないことが大前提だ。

夜の闇の中、施設の者が全員外に出た。少なくとも誰も死なないように施設の陰に隠れ、海側から見えない陸地で全員集まる。

「欠けていないな」

飛鳥医師が点呼を取る。セスが戦場に出て行ったことは私達が直に見ているため、それ以外がここにいるかを調べた。

昏睡状態にしてある夕雲は、飛鳥医師がそのままの状態で車椅子に乗せて運んできていた。点滴もそのまま。座らせられているが、縛り付けて姿勢が崩れないように固定されていた。

「大丈夫、大丈夫だからね」

「アラレ……大丈夫……だから」

シロとクロに支えられてアラレも外に出てきている。戦闘の音が聞こえ、何度も錯乱したせいで既に大きく消耗し、ガタガタ震えているほど。2人がいなければ、ここに辿り着くことも出来ていなかったかもしれない。

「センセ、絶対に必要なモンは持つてきておいたぜ」

「ありがとう、摩耶。これが無ければ治療が出来ないからな」

摩耶が運んできたのは透析装置。その他備品も、飛鳥医師や鳳翔、神風がしつかり運んできていた。

本当に最低限ではあるものの、夕雲の治療だけは可能。万が一施設が倒壊したとしても、瓦礫は艀装を装備した私達が片付けることができ、保存してあるパーツなどは地下にあるおかげでそう簡単には失わ

れない。

「戦闘はまだ終わりそうにないわね……」

施設から少し離れ、海の向こうの様子を見に行っていた曙が戻ってきてボヤク。時折大きな音も聞こえ、戦闘が激化しているのはこの距離からでもわかるほど。その度に霰がビクビクと震えるため、気の毒に思える。

「私達はいつでも出られるわよ。みんな武器も持ってきてる」

曙の言う通り、夜間に艦載機を飛ばすことの出来ない鳳翔以外は全員、すぐに戦場に出られるくらいの装備をしている。私もいつものナイフを握り締め、出撃を今か今かと待ち構えていた。

「施設を守るためにや、打って出ないとダメだろ。あそこからでも対地攻撃は飛んでくるぞ」

「わかってている。僕はこの施設の管理者として、全員外の安全な場所にいることが確認したかったんだ。そして、それが出来た。反撃の時だ」

飛鳥医師だって鬱憤が溜まっているようだった。ここまで艦娘を蔑ろにし、貯めてきた素材も次々と使うこととなり、ついには施設そのものを攻撃してきた敵に対し、怒りが浮かびあがっている。

「うちには確か探照灯は無かったか」

「ああ、修復したところで全部来栖提督に持って行ってもらってるからな」

「なら裸眼しか無いか。あちらでも使われているようだし、そこまで無茶では無いな。よし、僕から指示できることは無いが、摩耶、雷、若葉、三日月、曙、そして……神風、出撃をお願いする」

鳳翔は夜のために出撃せず、シロク口は霰についている必要がある。それ以外は全員出撃可能だ。

私もいい加減限界だった。ただただ力を振るいたいなどとは思っていない。とにかく、私達の平穏な日々を破壊しようとするのが許せない。

両腕と両脚が疼くような感覚がした。私の怒りを汲み取り、力を与えてくれる。

私だけじゃ無い。前回の戦闘と同じように、曙も息遣いが変化し、摩耶と三日月の片目がいつもよりも強く輝いている。摩耶は寝起きのため眼帯もしておらず、移植された眼が曝け出されていた。

唯一、雷だけはいつもと同じように見えた。移植されたのが腹、内臓だからかもしれない。だが、私達と同じようにフンスフンスと鼻息を荒くする。

「おう、んじゃあ、出撃だオラァ！」

「第五三駆逐隊、出撃する」

摩耶の鬨の声で全員が海へと飛び出す。先に出るのは私達前衛組。本番での神風の戦闘は初めて見るが、私達の今後に繋がるであろう戦い方を見せてくれることだろう。

戦場は散々なものだった。敵の数は予想以上に多く、連合艦隊とは言えないくらいの人数。その全てが無表情であり、目に光がない。全員が霰と同じように改造されているのだと思うと気分が悪い。

その中心、おそらく夕雲と同じように、旗艦として第二改装を受け、そして歪んだ意思を取り戻した艦娘が1人。夕雲と同じ制服を着ているということは、姉妹艦、妹であろう。

「セス、援軍だ」

「助かるよ！ 一応私の命令も聞くけど、すぐに向こうに上書きされる！」

姫級であるために、セスの命令も人形には有効だった。が、即座に上書きされて、攻撃が止められないらしい。

セスの命令は『リミッターを外すな』のようだが、ここにいる連中はどう見てもリミッターが外れている。何度も命令の重ね合いが発生しているようで、セスが押し負けたようだ。

「また増えたわね。そんなに私達の邪魔がしたいわけ？」

こちらを睨んでくる旗艦の艦娘。警備隊を随伴艦に押しつけ、ちようど施設に向かおうとしていたタイミングのようだ。私達がここに来れなかったら、この旗艦の艦娘に施設を破壊されていたかもしれない。

その証拠に、その艦娘の横にはまるで戦車のような大発動艇のようなもの、内火艇が鎮座していた。さらには以前にも見たWG42ヴェーゲーも装備している。完全に施設破壊に特化していた。

「あれは風雲。夕雲の妹ね。改二だから、人形じゃなくて奴隷」

夕雲の妹、風雲。こちらに夕雲がいるにもかかわらず、関係なしに施設ごとの破壊を目的にここに来ている。

「こっちにはアンタの姉がいるのよ」

「失敗したんでしょ？　じゃあ生きてる価値無いわ。提督ご主人様の御命令は、この施設の破壊だもの。まとめて死ねばいいわね」

お構いなしに私に向けて主砲を発砲。火薬の匂いがしたため即座に回避したが、やはり躊躇いが無い辺りは夕雲と同じ。

避けられるとは思っていなかったのか、少し驚いたような表情に。避けられないタイミングで撃つたのだろうが、殺意が隠し切れていない。それなら、私にはもう効かない。

「後衛部隊は他の連中を片付ける！　旗艦は任せっぞ前衛部隊！」

「了解。訓練の成果、見せてやらないとな」

数が多い上にリミッターが外れているために、来栖提督の警備隊が拮抗、ないし押されかけている。それをひっくり返すために摩耶達後衛部隊は随伴を黙らせる方に向かった。

また以前の戦いと同じ様相だ。私と曙、そして今回は神風が、旗艦の風雲と相対した。3対1、こちらは付け焼き刃かもしれないが、数的優位はこちらにある。

「若葉、曙、訓練の成果、見せてもらいましょうか」

「アンタに言われなくてもやるわよ」

「ああ、任せろ」

私達だって経験は積んだ。ここで負けるわけにはいかない。

溢れる怒り

霰と夕雲の口封じのために襲撃してきた部隊を迎え撃つ私、若葉。元々いた来栖提督の警備隊とセス、そして私と同時に出撃した後衛部隊は、多くの随伴艦の対処に向かつてもらい、私と曙、そして神風が、敵旗艦である風雲と対峙した状態に。

風雲は対地特化の装備をしていた。私に対して放った主砲以外は、施設を破壊するためのWG42と内火艇。とはいえ、それをこちらへの攻撃に使われたら溜まったものではない。特に内火艇は、直撃したらひとたまりもないような質量兵器だ。大砲も備え付けられているものの、直接が一番の脅威。

「こちらの仕事を邪魔してもらっても困るのよ。どうせ全員殺すんだし、ここで貴女達には死んでもらうわ」

内火艇が唸りを上げてこちらに向かってくる。今まで神風でスピードに慣らされ、鳳翔で立ち回りを教え込まれたおかげか、質量兵器の突撃は3人揃ってしつかり回避。その間に主砲も撃ってくるが、やはり2人から受けた訓練のおかげで弾の軌道が手に取るようになった。

鳳翔の言う通り、近くが避けられるなら遠くも避けられる。砲撃は神風や鳳翔の攻撃よりも遅い。

とはいえ、あの質量兵器はとてもしょしくない。回避は出来るが、こちらから攻撃するタイミングを失わされる。ただ大きいというだけで、戦場では邪魔だ。さらに言えば、私達にアレを破壊する手段がない。得物は鈍^{なまくら}、重兵器は水鉄砲。殺傷兵器は神風しか持っていない。

「神風、若葉達にアレは流石に無理じゃないか」

「あー……まあ、確かにね。アレは私がやるわ。若葉と曙は、あいつにWG42を絶対に撃たせないで。撃たれたら止めようが無いから」

「了解」

神風ならあの内火艇もどうかしてくれそうと思ってしまう。それだけの力を持っていることは、訓練とはいえ、相対した私達なら理

解出来ている。

内火艇を神風に任せ切ったことで、海面を一蹴り。敵との戦闘に入ったからか、脚に埋め込まれた千級の骨が力を貸してくれている。夕雲との戦闘の時よりもさらにスピードが出た。それに、やたら身体が軽い。今までの過酷な戦闘訓練の成果が出ている。

「速っ……!?!」

「若葉が夕雲をやったんだぞ。どうやられたかも知らないで襲撃してきたのか」

鼻先が触れ合いそうなほどに接近し、腹に一撃を入れようとナイフを振るう。が、夕雲と同じ戦闘力を持っているのなら、これも回避するだろう。奴は腹が立つことに、近距離も遠距離も踊るように回避した。

案の定、風雲もここまで近付いたにもかかわらず超回避を見せる。おそらくタービン辺りを違法改造されているのだろう。ノーモーションでバックし、紙一重で避けられる。

「危ないじゃない!」

「よくもぬけぬけと言えるな」

火薬の匂いが発生。火薬はいつもの主砲の匂いとは違うものも混ざっている。これがWG42の匂いか。

私達を牽制しながらも、対地攻撃は忘れていないようだ。あちらの任務は私達を口封じのために皆殺しにしようと施設ごと破壊することだ。その任務を全うしようとする気概だけは評価出来る。そういう意味では、こちらをおちよくつてきた夕雲よりも怖い相手かもしれない。

「離れなさい!」

「断る」

主砲の狙いは最も近くにいる私だ。撃つとわかっているのなら、先に動けば回避は出来る。問題は対地攻撃の方。

内火艇は戦場を掻き回すため動かし、WG42は施設の破壊のために放つ。後者が特に問題。回避しながらも風雲の後ろに回り込み、咄嗟に蹴ることでWG42の軌道を逸らした。放たれる瞬間だったが、

かなりギリギリのところ。

「ズラしたー！」

「ナイス！」

曙が大きく振りかぶっていた。私に対して主砲を放ったばかりなので、すぐには曙に対応出来ない。回避しか選択肢に入らないだろう。

だが、内火艇がこの戦場に割り込む。先程通り過ぎたものが、曙を轢き殺そうと、風雲に当たらないスレスレの場所を猛スピードで駆け抜けて。ギリギリで気付いた曙は、バックステップでそれを回避。辛うじて直撃は免れた。

「あつぶなっ」

「やっぱり内火艇を黙らさないとダメね」

私は一気に近付けたが、曙が内火艇と合間合間の砲撃により、なかなか近付くことが出来ない。神風も今は内火艇の処理をしようと戦況を確認しているため、風雲には私しかついていない状態だ。

「処理に時間かかりそうなの!？」

「うーん、じゃあ、さくつとやりますか」

そういうと、内火艇の猛攻をヒラリと躲し、一旦刀を鞘に納める。

割と軽い口調で言うものだから、風雲の癪に障ったようだ。私が目の前にいるにもかかわらず、神風の排除を優先し始める。私1人なら片手間に捌けるようだ。

なら、少なくとも、陸への攻撃は確実に止め続けよう。

定期的に陸に向かって放たれるWG42は、その匂いからタイミングを察知し、風雲自体を攻撃することで確実に邪魔をしている。陸側がどうなっているかがわからないのが辛いところだが、撃つタイミングで体勢が崩れているため、命中はしていないはずだ。

「無傷で手に入ったら施設の役に立つかなって思ったけど、そんなこと言っていられないか」

「貴女、何言ってるの？ 嘗めてるの?」

「ええ、それはもう。貴女、少しくらい見る目を鍛えた方がいいわ。実力差、わかってないんだもの」

刹那、抜刀。流れるような刀の動き。一瞬何をしたのかわからなかった。

「私はね、これくらい出来るのよ」

再度、刀を鞘に戻す。チンツと小気味いい音が鳴った瞬間、内火艇がバラバラになった。

訓練を直に受けているのだから、只者ではないことはわかっていて。まだ数日しか相手をしてもらってはいないが、まだ私は攻撃を当てることも出来ておらず、ようやく回避行動を取らせることが出来たくらいだ。

それが、まさかここまで差があるとは思ってもいなかった。刀一本で内火艇を解体出来るほどの腕を持っているなんて聞いていない。啞然としたのは風雲だけでは無かった。

「こういう時はこう言うのよね。『また、つまらぬものを斬ってしまった』」

「何よ……それ……」

「殺そうと思えばいつでも殺せるの。でも、貴女も艦娘の端くれだし、洗脳されてるってのも知ってるから、わざわざ生かして戦ってるのよ。わかる?」

邪魔な内火艇が無くなったため、悠々と戦場を進む神風。それに対して風雲は主砲を放つが、撃つた時には既にそこにはおらず、深海棲艦の四肢を使った私よりも速く、風雲に近付いていた。

圧倒的すぎる。鳳翔もそうだったが、この切羽詰まった状況ですら、余裕を崩さない。次はお前だと言わんばかりに刀の柄を握り直す。

私も曙も気を取り直し、武器を握りしめ風雲を見据える。内火艇が無くなった今、私達にももう障害はない。主砲による砲撃は見えるため避けることが出来る。WG42だけをしっかりと警戒しておけば、陸にも被害は無く終われるだろう。

だが、追い詰めた風雲から予想外の言葉が出た。

「浮上して自爆」

耳を疑った。風雲はこの状況でも施設の破壊を優先した。向かつ

てきた神風を無視し、何者かにとんでもない指示。

瞬間、施設の方から大きな爆発音が聞こえた。あまりのことに、戦場だというのに、音の方に視線をやってしまった。

施設から黒い煙が上がっていた。今の爆発により、おそらく工廠辺りが爆破されている。

「潜水艦……！」

「悪いわね。こっちにも目的があるの。これであっちの人間とか死んだんじやない？」

「死んでないわよ。避難してるもの」

さらに爆発。自爆するための潜水艦は1人だけでは無かつたらしい。立て続けに2回の爆音が聞こえ、立ち昇る黒煙がさらに量を増した。ああなるともう工廠だけじゃない場所に被害が出ている。本当に必要なものは避難の際に持ち出せているとはいえ、今まで使ってきたものが何もかも壊されていく。

ここ数ヶ月過ごしてきた私達の部屋も、私達の治療をしてくれた医务室も、みんなでご飯を食べる食堂も、たつた今めちやくちやにされた。私が楽しく生きるための施設が、人の命と一緒に破壊された。

両腕と両脚の疼きが、今までで一番激しくなった。

「潜水艦を送っておいて良かったわ。ここまで追い詰められるのは予想外だったもの。目算を誤っていたのは認める」

「潜水艦は自爆ボートじゃないわよ」

「人形はみんな似たようなものよ。死ぬことで提督ご主人様のお役に立てるなら、みんな喜んで死ぬわ」

洗脳されているのはわかる。霰を見ているのだから、自分の意思で無いこともわかっている。風雲も可哀想な被害者だ。時間が経てば経つほど、元に戻った時の罪の意識は大きくなるだろう。今からでも夕雲がどうなるかが恐ろしいほどだ。

だが、我慢の限界が来そうだった。曙が目の前で殺された時のように、怒りと憎しみが臨界点を超えていた。

「とんだクソ集団よ。二度と関わらないでもらえるかしら」

曙が動き出していた。槍を大きく振り、艦装に接続されたWG42

を破壊しようとするが、やはり回避される。後ろから攻撃しようとしたが、背中に目があるかのように感知された。

そこでピンと来た。本当に後ろに目があるのでは無いか。

そもそも、セスと命令合戦になって押し負けているというのがおかしな話だ。今、風雲は戦闘中。命令する暇なんてない。それに対し、セスは定期的に命令している。だが、人形達は警備隊とも後衛部隊とも互角に戦っているままだ。

この戦場には、風雲以外に命令出来る者がいる。

それが、戦況を逐一風雲に伝えている。

ならば、そんなこと出来ないくらいに速く、風雲を終わらせる。

「っ」

私の負の感情、怒り、悲しみ、恨み、憎しみに呼応し、四肢が限界以上の力を搾り出す。海面を蹴った瞬間、既に風雲の腹に一撃入っていた。ナイフを持たない拳の方だが、鳩尾に渾身の一撃。正面からでも回避なんてさせない。

今だけは、訓練の時に見た神風の速さに追い付けていると思った。世界が目まぐるしく流れるが、それも訓練のおかげで知覚出来る。

「っあがっ!？」

「覚悟しろよ。人の家を壊して、タダで済むと思うな」

全力で拳を振り上げることで、風雲の身体が少し浮いた。あの意味がわからないタービンの回避は、これで一旦無効。海面に足がついていなければ、艦娘なんてただの人だ。空中で回避出来る者など、この世にいるはずがない。

「曙！」

「ええ、私がぶち込んでやるわ！」

私は打ち上げるので精一杯。だから、ここからの攻撃は曙に任せ

る。浮いている風雲に、身を捻った曙が槍の横薙ぎを叩き込んだ。刃が本物なら確実に死んでいた一撃。潰れた刃でも、横っ腹から喰らえば相応のダメージが入る。事実、鈍い打撲音と共に、何かが折れる音もした。

「っああ!？」

「どうせドックに入れば全快よね。なら、ギリギリまでボコボコにしてやるわよ」

「若葉達にはそれすらも無いんだからな。恵まれた環境に喜べ」

海面を滑るように吹き飛んだ風雲を追い、もう一蹴り。先程と同じように、それだけでもう真横に辿り着いた。四肢の出力が段違いだった。

夕雲の時と同じように、風雲の首を掴む。折ってしまってもいいかと思えるほどだが、ギリギリの理性でそれを抑え込み、手始めに手持つ主砲をナイフで分解。

「もう一人いるだろ。そいつを出せ」

「つぎつ、誰が……!」

「わかってるんだ。そいつに人形への指示を止めさせろ」

より強く締め上げながら、戦場の匂いを嗅ぎ分ける。他の人形に指示が出来るなら、この場においてもおかしくない。そしてそれは、姫級の深海棲艦の体液の匂いがするはずだ。全く同じ匂いではないと思うが、霰と夕雲の匂いの差を知っているのだから、今なら嗅ぎ分けられる。

突然、キナ臭い匂いを感じた。意識したことで、私に向けられる殺意のようなものを嗅覚で感知した。鳳翔の言っていた『嫌な雰囲気』というものだろう。

それは、海中からした。

匂いを感じた瞬間に、風雲を投げ飛ばしてその場から退避。直後、私のいたところに海中からの砲撃が放たれていた。ギリギリだったのだろう、その砲撃は私の腕を掠めてしまった。

そのままいたら私の胸に赤い薔薇が咲いていただろう。あの時の曙のように。

「けほっ、かはっ」

「ああもう風雲ちゃん、ボッコボコですって」

私が手放したことで、風雲はその海中の者、潜水艦に回収されていた。その時点で私は察した。あの潜水艦が曙を撃った張本人だと。

「油断した、わけじゃ、無いんだけど……」

「そゆことにしときますって」

チラリとこちらを見てくる潜水艦。風雲と違い、夕雲と同じような貼り付いた笑みを浮かべたそいつは、私達を睨むでもなく、腹が立つことに小さく手を振った。

「若葉、そこから下がって！」

神風の叫び声が聞こえ、素直に下がった直後、私のいた場所で大きな爆発。魚雷が誘爆したような爆発で水飛沫が発生し、それが晴れたときには潜水艦と風雲の姿は戦場に無かった。

今回の戦いは、私達はほぼ無傷でも、敗北と言えるだろう。守るべき施設が破壊され、帰る場所を失ってしまった。

一晩明けて

夜の襲撃を追い返すことが出来たものの、被害は甚大だった。戦闘に参加していた者は無傷でも、本来守らなくてはいけない施設に大きなダメージが入ってしまった。襲撃してきた旗艦、風雲は捕らえることも出来ず、新たに現れた潜水艦により回収され、結果的に何も出来なかったと言える。

私、若葉は、その戦闘で砲撃が腕に掠める程度の擦り傷を負ったが、血は出ているものの気にならない痛み。他は無傷で終わった。夜襲に対して無傷で終わらせることが出来たのは、ひとえに訓練の賜物。来栖提督の警備隊とは一旦別れ、施設に戻った。警備隊はこのことを来栖提督にいち早く伝えるため、真夜中ではあるものの帰投するらしい。

流石にさっきの今でもう一度襲撃は来ないだろうという判断。ちなみにみんなが抑え込んでいた風雲の随伴艦は、全員リミッター解除の弊害で沈んだとのこと。

「皆、無事だったか」

「ここは無事じゃねえがな……クソが」

先に避難出来ていた飛鳥医師達は全員無傷。風雲が定期的に放っていたWG42は、射軸をズラし続けたため、被害が浜辺にだけに収まっていた。この被害は自爆によるもののみ。

だが、その潜水艦3人による自爆で、施設も大惨事だった。炎が上がつているわけではないようだが、黒煙はまだ止まっていない。それに、爆発したものがもののため、瓦礫の所々には赤いシミが出来ている。

「はあ……私達の艦装が……」

「……また……作り直そう、ね」

「うん、そうだね。またやり直そう」

工廠はグチャグチャ。倉庫も跡形もない程に破壊され、そこに残っていたシロクロの遠隔操作艦装は完全に破壊されていた。主機の部分は先んじて運び出していたらしく無事ではあったが、こちらは間

に合わなかったらしい。完成に大分近付いたのに遠退いてしまったことが悲しい。

工廠が破壊された影響で、食堂や処置室、私達の自室にも目を逸らしたくなるような影響が出ていた。特に前者は、私達が暮らしていくための食糧が巻き込まれてしまっているのが辛い。全滅ではないにしろ、半分以上はお釈迦になってしまった。残ったものも、あまり状態はよろしくないだろう。

「若葉、腕を怪我しているな。血を止めるくらいはしよう」

「ああ、頼む」

破壊を免れた薬を回収しており、それにより治療をしてもらう。私の部屋も潰れてしまっていたので、着るものがこれしか無いというものもなかなか辛いもの。

「敵旗艦は逃げられた……姫役は2人いた」

「私達が戦ったのは風雲とかいう夕雲の妹よ。でも、後から潜水艦が出てきたの」

「あの潜水艦は呂500。第二改装で外見が大幅に変わるんだけど、それに合わせて中身も弄られたみたい」

私達の知らない艦娘だったため、神風が説明してくれた。

元々はU-511という潜水艦だが、2回目で大規模な改装を受けるらしい。それに託けて、奴隷化の改造も施されたのだろう。見た目は明るかったがやってる事はエグいし、貼り付いた笑みは呂500にも健在だった。

「アレが曙を撃った張本人だ。私も海中から狙撃された」

「よく避けたわね……」

「掠ってるがな。キナ臭い匂いがしたんだ。アイツ自身の匂いはわからなかったが、なんと言うか、殺意が匂った」

あれを感じていなかったら、私は今頃死んでいた。曙の時と違い、今は治療も蘇生もするスペースもない。そういう意味でも、今回みんながほぼ無傷だったのは助かった。

「呂500がメインの指揮系統ね。セスの命令を随時上書きしてたのはあいつ。そうじゃなきゃ、風雲が戦闘に入った時点でセスの命令が

上回ってた」

「何回言っても言う事聞かなかったのは、海の中から命令し続けてたからか。流石にあれは参ったよ」

海水濡れになったエゴを拭きながらセスが愚痴る。このタオルも最後の1枚。明日からは洗濯すら出来ない。

「はあ……私が風雲をさっさと斬っておけばよかった。あつちを嘗めすぎたわね。落ち度は私にあるわ」

口惜しそうに神風も愚痴る。風雲を生かして倒し、鹵獲しようとしていたのだが、それが却って油断に繋がってしまったようだ。呂500含む潜水艦の存在は、ギリギリまで感知出来なかったため、私達もこうなるとは微塵も思っていなかった。

落ち度を言い出したらキリがない。もっとやれた事はあつた筈だ。この現状が悔しすぎる。

「反省会も必要だが、今はまず寢床をどうにかしないとイケない。比較的無事な部屋は3つだ。どうにか相部屋で身体を休めてくれ」

「夕雲はどうすんだ？」

「処置室は全壊、医務室が半壊しているからな……今夜だけは車椅子のままにして、僕の部屋で朝に考えることにする。執務室を改造しただけあつて頑丈だったからな」

そういう利点もあつたか。飛鳥医師の部屋にも多少は治療器具は残っていたらしく、そこが無事だったのもありがたい。

「考えるのは明日だ。嫌でなければ僕の部屋で寝てくれても構わないからな。あまり広くはないが」

いろいろ問題は山積み。まずは身体を休め、朝を迎えることが先決。今後どうするかは、今は考えないことにした。

無事な部屋でみんなで固まって眠り、何とか朝を迎えた。私は三日月と雷、神風と相部屋で眠ることになっていた。青空の下で眠ることがなかっただけでも良しとしなくては。

「飛鳥、来たぜエ」

早朝から来栖提督がこちらに来てくれた。向こうを出たのは夜の

うちだろう。すぐに行動してもらえて感謝。

随伴は勿論、第二二駆逐隊。三日月が慣れているというのものもあるし、大発動艇が運用できるというのものもあるが、この施設について一番詳しいからというのが大きいだろう。半壊した施設を見て、とても驚いていた。

「警備隊から話は聞いてるぜエ」

「ああ、見ればわかると思うが、建屋が半壊してしまった」

「おう、だから大将から許可貰って、援軍連れてきたぜエ」

いつもの大発動艇から飛び出してきたのは、手のひらサイズの人型作業員。下呂大将が言っていた職人妖精である。しかも5人ほど。

簡単な模様替えから、鎮守府建築まで、この小さな身体を縦横無尽に使ってやってしまうという万能作業員。作業速度も尋常ではないらしく、模様替えなら僅か数分、この施設の修復はこの人数がいれば2日ほどあれば出来てしまうというから驚きである。

何は無くとも、施設がないと私達はどうすることも出来ない。生活も、交戦も、休息も。

「ついでに大改築しちまいなア。ここにある瓦礫と、元々あつた艤装の残骸まで使って、大概は造れちまうらしいぜエ」

「そうさせてもらう。部屋数も危なかつたしな」

「だが、少しの間だけここから離れてもらわなくちゃいけねエ。大丈夫かア？」

そのためだろう、今日は大発動艇が4隻もここに来ている。載せなくてはいけないものが多々あるため、この気配りは助かる。

特に、夕雲本人と夕雲にも使うことになる透析装置は大事なものだ。昏睡させているのも限界ギリギリのため、来栖提督の鎮守府で処置をするまで考えているらしい。

「大丈夫だ。必要なものは全て壊れる前に運び出している。シロクロの遠隔操作艤装が間に合わなかったのが残念でならない」

「そうか……シロ、クロ、お前さん達の艤装の仇、絶対取ろうな」

「勿論だよ！ 人のモノ壊しといてタダで済むと思ってもらっちゃ困るよー」

みんなの努力の結晶を無にされた恨みは大きい。しかもその理由がぼエゴである。余計許せない。

それで無くても、次はシロクロにも戦場に出てもらいたい。敵の1人が潜水艦であり、私達には感知が出来ないと来た。海中でどうにかしてもらおうのが一番早い。

「んじゃあ、荷物の積み込み、よろしく頼むぜエ」

空の大発動艇に次々と荷物を積み込んでいき、シロクロと霰も乗り込んだ。昨晩は何度も錯乱し、今でも憔悴しきっている霰は痛々しいものだった。

「アラレ、大丈夫？　ちょっと揺れるけど」

「……」

霰は無言で頷く。昨日からの1日で、シロクロに対してくらいは反応を見せるようになったようだ。それでも禁断症状で暴れ出すことはあるため、常に隣にいる状態。これはまだまだ時間がかかる。

今は落ち着いているが、施設の方はあまり見ない。トラウマを刺激される可能性が高いため、シロクロも視界がそちらに行かないように身体を壁にしている。

「夕雲を乗せたいんだが、クッションになるようなものはあるか」

「足しになるかはわからねエが、夕雲のことは聞いてたから、一応布団の類は持ってきてきてるぜエ。そいつ使ってくれや」

夕雲もまだ眠ったまま。用意された布団に包んだ状態で、飛鳥医師が付き添う形で大発動艇に乗り込む。薬のおかげで振動があっても起きることは無く、不安なく鎮守府に運ぶことが出来る。

「三日月、大丈夫か」

「……大丈夫です。あの来栖司令官の鎮守府ですから……姉さん達の鎮守府ですから……」

起きているメンバーの中で一番不安を抱えているのは三日月。他人が嫌いである状態で、知り合いがいるものの衆人環視の中にあるようなもの。ただでさえ、鎮守府という環境自体が苦手なうちに入るのだから、今から向かう場所は三日月にとっては辛い場所になるかもしれない。

それでも気丈に振る舞う。曙の死を目の当たりにし、強くなると決めた時から、苦手意識は外に出さないようにしていた。今の三日月ならきつと大丈夫だ。

「三日月ちゃん、大丈夫だよお」

「うちの鎮守府はみんなわかっているからね！」

理解者揃いの鎮守府だから身を寄せることも出来るだろう。三日月だってそれがわかっているから大丈夫と言える。姉の後押しは心強い。

「来栖司令官の鎮守府のことは先生から話は聞いてるし、文月達を見てればわかるわ。私、ちよつと行ってみたかったの！」

こんな状況でもポジティブな雷。必要以上に悲観せず、次へ繋ぐようとしている。全てを奪われ、みんなの気持ちが沈んでいる中、雷の笑顔が唯一の救いである。

楽しく行こうとは思っていない。帰る場所を失ったのだから、誰だって気分が悪い。それでも、士気を下げるわけにはいかないのだ。「みんな、大丈夫よ！ 来栖司令官のところに行けば、きつといい方向に行くわ！ だってみんな生きてるんだもの！」

「おう、そうだな。誰も死んでねえ。なら、いくらでもやり直せるし、やり返せるつてもんだ。施設が治らねえわけでも無えし、前向きに行こうぜ」

雷に倣って、摩耶もポジティブに。言葉に出せば、テンションも上がる。無理矢理かもしれないが、士気が下がるよりはマシ。

そうだ、きつといい方向に行く。私達は誰一人として欠けていないのだから、いくらでもやり直せる。次はこんなことにはならない。

シロクロと霰、夕雲と飛鳥医師と大発動艇に乗り込んだため、これで積載は完了。艦装などが無事である私達は、大発動艇には乗らずに併走する。

少しでも眠れたことで体力も万全。風呂に入れなかったのが残念だが、それは来栖提督の鎮守府で入らせてもらおう。着替えすら無いが、その辺りは鎮守府の方で用意してもらえらしい。至れり尽くせりである。

「職人妖精さん達、施設のこと、よろしくね」

雷が瓦礫の山の前に立つ妖精達に激励を送る。5人の職人妖精達が一斉に敬礼。私達もそれに合わせて敬礼した。頼りになる小人達だ。

飛鳥医師が次に建てられる施設がどうしてほしいかは伝えたらしく、早速作業に取り掛かる。瓦礫の山をその身体でガリガリ分解しながら、別の何かに組み上げていくらしい。どうやっているかは謎の一言。

「よし、じゃあ行くぜエ」

来栖提督の号令とともに、大発動艇が動き出した。次にここに戻ってくるのは数日後。その時には新たな施設が完成し、私達の安息の地が戻ってくる。その時までには別の場所で待とう。私達に出来ることは何もない。

施設を少し離れた後、一度だけ振り返った。

ボロボロの施設。黒煙は無くなったものの、廃墟と言っても過言では無いほどに破壊された、私達の居場所。明るい状態で見るのは初めて。

今までの生活の痕跡が失われてしまった。楽しく生きてきたはずの場所が、クソみたいな理由で破壊されてしまった。

「……絶対に許さん」

ボソリと呟く。戦闘中でも無いのに、腕が疼くような感覚。血が出そうなほどに拳を握り締める。

私達の居場所を奪った罪は重い。必ず後悔させてやる。

鎮守府へ

破壊された施設が修復される間、私、若葉を含む所属している者は、来栖鎮守府にお世話になることになった。修復完了まで数日ではあるが、今までの閉じた世界から出るというのは少し新鮮である。

「お、そろそろだぜエ」

来栖提督が言うと、海上に私達の施設を警備してくれていたような部隊が見える。鎮守府が近付いてきた証拠だ。

来栖提督の予想では、私達の施設より鎮守府の方を先に潰すと考えていた。そのために警備隊も少し多めに配備されている。

それが逆に作用されてしまったか、施設の方が重い攻撃を受けてしまった。何より、霰と夕雲が鹵獲されているというのが大きそうではあるが。

「飛鳥の言う通り、マジで裏をかいてくるとは思わなかったぜエ」

「本当にな。じゃあこっちは襲撃を受けていないのか」

「偵察機が飛んできたくれエだな。くっそ、予想が完全に外れちまった」

来栖提督がそういうものに疎いとは思っていない。事実、私も来栖提督の考えは納得が行っていた。単純に、あちら側が上手だったのだと思う。

施設を破壊されたのだから、戦術的にあちらが上手だったからだ。その戦術は褒められたものではないが、こちらはとんでもない損害を受けている。腹が立つが、そういうところは認めざるを得ない。

「むしろ、これが狙いなんじゃないか？　僕達が纏まって来栖の鎮守府に世話になるこのタイミング」

「二網打尽ってことか。前までの襲撃でお前らが死ねば万々歳だし、死ななくても俺らと纏めてぶっ殺せるって算段か。こっすい手を使うじゃねエか」

ならば、ここからが本番とも言える。中立区の施設と違い、ここは実際に鎮守府として動いている施設だ。戦力も充実しているため、特攻を喰らって自爆されようものなら、私達の施設よりも被害が甚大。

ここに入渠ドックがあるからといって、即死するような攻撃を喰らってしまったら意味がない。蘇生のパーツは勿論今は無いし、あれは禁じ手だ。頼るわけにはいかない。

「防衛網を強化しておくか。あとは自爆の危険性も全員に到達する」「それがいい。近接戦闘をするものはそうそういないと思うが、鹵獲する時に気をつけるべきだ」

「おう、肝に銘じておくぜエ」

などと今後のことを話している飛鳥医師と来栖提督を他所に、初めて見る鎮守府というものに緊張が隠せない。私や三日月は鎮守府生まれではあるが、出たつきり戻っていないため、外観を見るのは初めてである。

施設が元々小さな鎮守府を改装して作られたものと知っていても、来栖鎮守府は規模が違った。部屋が10個しか無いところとはわけが違う。何もかもが大きく、施設のような平家でもない。

「少しの間、ここに世話になるのか……」

「ちよつと……予想していたのより大きいです」

三日月も同じことを思っていたようだ。これだけ大きいということとは、それだけ人がいるということ。

「無理はするなよ」

「……大丈夫です」

おそらくここでも眠る時は私が一緒になるだろう。夜のうちは私が三日月の安心出来る場所になってあげなくては。

鎮守府内に入るために工廠へ。雷と摩耶はここまで大きな工廠を知らないらしく、興味津々。特に摩耶は、艤装弄りをしているせいか、多々ある設備が気になる様子。シロクロやセスも大きな工廠に目を丸くしており、少しおのぼりさんのようになってしまっている。逆に私と三日月、曙には、工廠自体にもあまりいい思い出が無い。

「帰ったぞー!」

「ただいま戻りました」

「あ、提督と鳳翔さんお帰りなさい。そして、お医者さんとお連れ

方々、いらつしやいませー」

工廠で出迎えてくれたのは、工作艦明石。工廠と言えばこの人。戦力を持たない代わりに、あらゆる艦装を整備し、改造し、修復するスペシャリスト。艦隊運営には欠かせない艦娘だろう。

「話は聞いています。お部屋の方は先に用意しておきました。艦装はそこに置いておいてもらえれば整備しておきますけどどうします?」

「整備はあたしがやる。全員ちよいと特殊なんだ」

「工作重巡摩耶のこと、提督から聞いてました。むしろその技術を教えてもらいたいくらいです!」

私達の艦装は少しどころか大分特殊。弄れるのは施設で艦装を弄っていた者だけだろう。その技術に明石は興味があるようだ。盗めるものなら盗みたいと本人の前で言うほどである。摩耶と明石は意気投合しそうだ。

「エコはどうすればいい」

「え、深海棲艦の自立型艦装!? 凄い! 本物は初めて見ますよ!」

今度はエコを見て興奮が抑えきれない様子。なんだか目が怖い。そもそも深海棲艦がここに訪れたのにもかわらず、何の動揺もしていなかったのが驚きである。事前に聞いていたにしても、これは肝が据わっているというもの。

「いや、だから、エコはどうすればいいんだ。部屋の中に入れてもいいの?」

「それくらいの大きさなら大丈夫だと思います。普段からずっと一緒にいるんですよ。なら、ここでも同じようにしてくれて問題ありません」

「そか、よかったねエコ」

喜ぶようにセスに飛びかかるエコ。表情は無くとも、その感情がわかるようだった。その光景を見て明石の表情が緩む。キナ臭さも感じないので、この明石は元々そういう性格のようだ。

そういえば、私の知る明石はどうだったかと思ひ出す。私が生まれた時に近くにいたはずだが、確か、他の連中と同じように私のことを見ていなかった。洗脳されていたのか、意識を持った状態で敢えて無

視していたか、今でもわからない。どちらでも構わないが。

「私達は皆さんを歓迎します。自分の家のように寛いでくださいね」
「おう、少しの間だが、好きに使ってくれや」

にこやかに出迎えられ、少し緊張が解ける。顔見知りはないが、過ごしやすそうである。こういう場所が苦手な三日月も、私の陰に隠れるように立っているものの、苦痛を感じていないようで何より。

何より空気が良かった。工場であるが故に、今ここには明石以外にも艦娘はいる。だが、来訪者であり見た目が少し違う継ぎ接ぎな私達を見ても、奇異の目で見るような事はしなかった。それだけでも充分ありがたい。

最優先で行なわれたのは夕雲を下ろすこと。昏睡は今の今までしつかり効いており、一度たりとも目を覚ます事はなかった。艤装もない今に目を覚まされても困る。どうせ憎まれ口を叩くだけだし。
「そちらも話は聞いています。ここで夕雲の処置をするんですよ？」

「ああ、可能だろうか」

「はい、妖精さんをお願いして、部屋の一室を処置室にしてもらっています。提督の話でそちらの部屋を再現していますので、安心してください」

職人妖精とはそこまで出来るようだ。多少は間取りが違うものの、施設とほぼ同じ部屋を用意してくれているらしい。機材までは完全に再現する事は出来ないが、それに関してはこちらから持ち込んでいるため問題無し。

処置室は医務室の隣に作られているらしいので、積荷から下ろした透析装置はそちらに運び込むことに。少なくとも鎮守府では見ることのない装置に、明石も興味津々。

「医療機器には疎いんですが、こんなものも必要なんですね」

「ああ、これが無くては夕雲の正気を取り戻せない。だが……心の傷だけはどうにもならない」

チラリと霰の方を見る。シロクロに手を取られ、ゆつくりと大発動艇から降りるところだった。

「ひっ……あああ……」

「大丈夫だよアラレ、ここには敵はいないよ」

「大丈夫……誰も恨んでないから……」

落ち着いているようには見えない。目が明後日の方向を向き、過呼吸気味。クロが背中を摩りながら落ち着かせるが、それでどうにかなるものではない。ギリギリ禁断症状は出ていないが、これは時間の問題である。

3人だけはすぐにでも落ち着く必要があるため、先んじて部屋に案内してもらった。とにかく霰は腰を落ち着けなければいけない。シロクロもここにいる間もずっと霰の側から離れるつもりはないようだ。

「あれも洗脳の弊害ってやつかい」

「ああ……夕雲も似たような状態になると思う」

「本当にクソツタレだな、家村とかいう野郎はよオ」

霰を心配しつつも、怒りを露わにする来栖提督。今後現れる敵艦娘は、全員に薬を使われている状態。私達と相對した風雲と呂500だって、鹵獲して治療したらああなる可能性は非常に高い。

助かった後の方が苦痛を与えているのではないかと思ってしまうほどだった。助けることに抵抗を覚えてしまうほどに、霰の状況が酷い。

「ここで療養してくれや。気になるようなら誰も近付かないようにしておくからよ。その辺りはお前に一任するぜエ」

「ああ。うちの話だからな。協力、感謝する」

私達が突然泊まらせてもらうという状況でも、来栖提督は快く応じてくれた。持つべきものは友。飛鳥医師の交友関係に感謝する。

「私はこっちの司令官に連絡するわ」

「おう、大将に今の状況伝えないといけねエからな。神風は執務室に頼まア」

「ええ。飛鳥先生もよね?」

「ああ。僕も先生と話がしたい。今後のことを決めていかななくてはいけないしな」

飛鳥医師は神風と共に来栖提督についていった。これで私達はフリーに。今日はいろいろあったため、まず身体を休めるようにということとなった。方針をしっかりと決め、行動するのは明日からだ。

部屋に案内され、ようやく腰を下ろした。昨晚からの気疲れか、身体の調子は良くてもどうもしんどい。

ここの鎮守府は1部屋2人体制らしく、ベッドが2つ入っているために部屋が広い。私の相部屋は普段の夜をここでも再現するために三日月となる。

「なんだか……疲れてしまいました」

「ああ。最初の予定通り、風呂を借りるか」

「そう……ですね。他に人がいなければいいんですが……」

昨晚の戦闘の汚れをようやく落とせる。服も替えたいし、ここいらで風呂へ。同じことをみんなが考えていたらしく、なんだかんだ合流。シロクロ霰の3人は後からということになり、セスは工廠でエコのメンテナンスを終えてからにすることのこと。

私を含め5人で、疲れを癒すことにした。前以て明石に話しておけば、替えの制服も用意しておいてもらえるそうさ。

先に風呂の場所を聞いていた雷に案内され、鎮守府の大浴場へ。施設の風呂は4人でギリギリだったが、さすが大きな鎮守府の大浴場だ、その数倍の大きさ。

タイミングが良かったか、今は誰も使っていないようだった。三日月も少しだけ安心した様子。傷だらけの身体を見られるのは流石に気が引ける。

「いつつ……」

風呂に入ると、昨晚の戦闘で不意打ちを受け、ギリギリで回避した時に出来た腕の傷がやたら沁みる。飛鳥医師に治療はしてもらったが、傷が消えるわけではない。擦り傷だと思っていたが、思った以上に深かったようである。風呂は薬湯でもないの、擦り傷の治療も出来ないし、薬湯だったとしてもこれが治るかは微妙なところ。

「それ、あの戦闘で呂500に撃たれた時の傷よね」

「ああ、ギリギリで回避出来たからこの程度で済んだ」

曙が苦い顔をしている。私が避けられた砲撃が直撃した結果が曙だ。相変わらず、胸と背中中の貫通痕が痛々しい。とはいえ、私や三日月に比べると傷も小さいものである。

「治るまでそれなりにかかりそう。入渠した方がいいんじゃないかしら」

雷の提案。確かにすぐ治すなら入渠が一番手取り早い。施設に無いから自然治癒のつもりでいたが、あるものは活用してもいいかもしれない。入渠というものが初めてなので少しだけ緊張するが。

「それもいいな。後から話してみよう」

「……身体の傷も治ったりするんでしょうか……」

三日月が呟く。この傷はおそらく治る事は無いだろう。曙が蘇生され、内臓の痛みを高速修復材で取った時、来栖提督が傷が定着しているから消せないと話していたし。

「治んねえだろうな」

「……ですよね。すみません……悲観的なこと言つて」

「構わねえよ。あたしらは入渠自体したことが無えわけだしな。気になるのも無理も無え」

どうであれ、私は入渠を希望しよう。それで私の腕や脚が元に戻るなんて考えていないし、今更これを失っても少し困る。これのおかげで夕雲や風雲をどうにか出来たところもあるのだから、愛着だってある。

「風呂から出たら飯食って寝るかな。なんつーか、疲れたぜ」

「さんせーい。私も今日はゆっくりするわ。家事が出来ないのがソワソワするけど」

「お前も大概ワーカーホリックだよな」

今日1日はゆっくり過ぎすことにした。戦いの傷を癒し、英気を養う。次からの戦いのために、まずはやれることを。

改装

無事、来栖提督の鎮守府に辿り着いた飛鳥医師率いる施設所属者一同。ここから数日の間だけ、ここに住まわせてもらうこととなる。

私、若葉は、風呂上りに来栖提督に入渠を掛け合うことにした。腕についた傷が思っていたより深く、風呂の湯が沁みたからである。いつもなら自然治癒に任せるのだが、今回は使えるものは使っていない精神。やったことが無い事は経験しておきたいというのもある。

みんなで風呂から出て工廠に向かうと、ちようどあちらも話が終わったらしく工廠に集まっていた。神風や鳳翔も一緒だ。代わりにセスとは入れ違いになってしまったようだ。

「入渠？」

「ああ、擦り傷ではあるんだが、思ったより深かった。構わないだろうか」

「おう、だがその前にちよいと付き合ってもらっていいか」

ここにいる全員に関わることのようにだ。飛鳥医師と来栖提督で相談した結果決めたことなのだ。

「お前らの練度を測らせてもらう。それで規定値に達していたら、第一改装をしてもらうことにしたんだ」

「中立区とはいえ戦力増強は必要だろう。今回の戦闘ではこれで済んだかもしれないが、ここからはますます酷くなる可能性が高い」

つまり、私達の戦闘力を底上げしてくれると。改装はその時に負っていた傷も全て治療されるらしく、入渠と同じ効果が得られるとのこと。風呂では沁みしたが、普段ではそこまで痛くはないため、練度を測るくらいなら我慢出来る。その結果、改装出来るのならよし。そうで無くても入渠はさせてもらうということを決めた。

練度の計測はそこまで時間がかからなかった。艦装の使用具合や、身体検査を少しして、明石が少し専用の機械を使った程度。鎮守府に属するものは、出撃するたびにこれを行なっているらしい。

そして、結果なのだが、予想外の結果が出た。

「ええと……鍛えたのって鳳翔さんでしたっけ」

「はい、前衛組は私が神風さんと一緒に。後衛組は羽黒さんと足柄さんですね」

出てきた資料を見て引き攣った笑みを浮かべている明石。余程おかしな結果が出たのだろうか。

「ただだけ詰め込んだんですかコレ。つい最近まで実戦経験0だったんですよね?」

「そのはずですが」

「全員第一改装の基準値に余裕で届いています。というか、摩耶に至っては第二改装まで行けます」

明石の持つ機械で、私達の練度は数値化出来るらしい。1から99の値で表され、当然数値が高ければ高いほど強く育っていることになる。聞いた話だと、文月達第二二駆逐隊は皆が90を超えた猛者。鳳翔や神風に至っては、とある処置により99すらも超えているのだとか。

そして本題。その数値が、私が一番高く80届かないくらい。一番低くても三日月の60超え。

「どうすればこんな短時間で練度上がるんですか……。吐くほど訓練してもここまでは無いですよ」

「少なくとも吐くほどやったぞ」

「休憩無しで数時間とかザラだったわね」

私達の見えていない後衛組も、死ぬほど訓練したらしい。三日月がずっとグツタリしていたのを覚えている。それを薬湯で回復し、また訓練しての繰り返しを数日。スパルタとかそういうレベルでは無い。ギリギリまで搾り出した後、無理矢理回復することで上限をどんどん上げているようなイメージ。

「と、とにかく、全員改装可能です。1人ずつになりますが、それ自体はすぐに終わりますので、順番にどうぞ」

「んなら、あたしが一番にやってくる。あたしらの継ぎ接ぎがどうなるか、先に知っておきたいだろ」

そこは気になるところ。入渠や改装で私達の身体はどうなっ

まうのか、先に知りたかった。だが、自分の身体がおかしくなっても困る。みんな尻込みしているところに摩耶が立候補。自分の身体で確かめると言う。

とはいえ、高速修復材でも治せない私達の傷だ。おかしなことになるとは思っていない。何も変わらず、地力だけ底上げされるのではないかと思う。

「それじゃあ、摩耶から行きますね。一気に第二改装までやっちゃって大丈夫ですか？」

「あたしは構わねえよ。センス、大丈夫か？」

「ああ、問題ない。むしろ問題が出たら止める」

この中でも摩耶だけは第二改装、いわゆる『改二』持ち。改装も2回分のため、少しだけ時間がかかるらしい。とはいえ重傷の治療とは違うため、それでもものの20分だそうだ。

「それじゃ、行ってくるぜ」

「ああ」

摩耶が明石と共に工廠の奥へと消えていく。次に戻ってきたときには改装済みの状態。

やはり少し不安ではある。摩耶の場合は2本の脚そのものが深海棲艦のものへと差し替えられている。入渠ならまだしも、改装により、元の脚が生えるなりした場合、見るに耐えないエゲツないことになりかねない。そうなってしまうと、私も腕が同じようになる。それは恐ろしい。

摩耶の改装を待つ間に、鳳翔は鎮守府での持ち場に戻り、神風は来栖提督と共に今後のことを話すために執務室へ。おそらく下呂大將も通信で参加する。

施設のメンバーで待っていると、本当にすぐに摩耶は戻ってきた。時間にして、予定通りおおよそ20分。

「ドックに入ったらすぐ眠たくなってよ、起きたら改装完了って寸法だったぜ。脚も前のままだ」

摩耶の脚には、いつも見えている縫合痕がしっかりと刻まれており、

移植された右目もそのまま。制服の露出が多少増えており、その色も変化しているが、身体には何の変化もない。

明石曰く、改装するにあたって、以前の身体は基本そのまま使うとのこと。一部は資源などで盛られたりすることもあるらしいが、一番大事な性能の部分だけで終わる場合の方が多いそうだ。そのため、怪我は治るが元からある傷痕などの身体的特徴も改装したところで据え置きとのこと。

が、私にだけはわかったことがある。おそらくシロ辺りも気付くだろう。

「深海の匂いが強くなっている」

「マジか。あたしのネ級の脚も改装されたってことか」

摩耶の場合、脚が深海棲艦そのものだからそういうことにもなるのだと思う。

ということは、私の腕も似たようなことが起きるかもしれないということになる。私の腕は、駆逐艦とはいえ姫級のもの。摩耶とは違い第一改装しか出来ないが、匂いが強くなる程度で済めばいいが。

「次は若葉が行く。いいだろうか」

「いいわ。若葉も腕丸ごとだし気になるわよね」

ということ、次は私の番。摩耶が大丈夫なら私も大丈夫。そう信じて改装に向かう。

「次は若葉ですね。じゃあ、このドックに入って」

明石に言われ、ドックへ。妙な匂いもせず、どちらかといえば薬湯や高速修復材のような匂いが強い。改造の際に傷が治るのはこういうこともあるからか。念のため隈なく匂いを嗅いでおくが、不穏なもの無し。

ドックに寝そべると、蓋を閉められる。窓もなく、真つ暗闇。すぐに眠くなるらしいが、狭くて暗いこの空間は思ったよりも恐怖を駆り立てる。

「それじゃあ、改装開始します。3、2、1……」

明石のカウントダウンを聞いているうちに意識が落ちたらしい。気付けば既に改装が終わっていた。摩耶の言っていた通り、寝て起き

たら改装されていたという状態。

「はい、終わりました」

さつき入ったと思ったら、もう蓋が開けられる。実際はこれでも10分近く経っているらしい。

「匂いが強く感じられるようだ」

「ああ、話聞いてますよ。嗅覚が特別利くんですよ。そこも改装で強化されたんじゃないですかね」

工場の匂いがより強く感じ、そしてそれを嗅ぎ分ける力も強くなっている。これはまた戦闘で役に立ちそうだ。

先程はあまり感じ取れなかった明石の匂いも今ならわかる。鉄と油、火薬と、工場で取り扱うもの全ての匂いが混じり合ったもの。一日中、年柄年中、工場で作業しているが故の匂い。信用出来る、職人の匂いだ。

起き上がり、自分を確認。本当に何もかも治っているようで、腕の傷の痛みはもう感じない。服を着てドックに入ったはずだが、今は全裸に剥かれていたため、傷が治っていることはよくわかった。

摩耶の時にわかっていたことだが、私の縫合痕も当然そのまま。いつもは長袖で隠れている腕のも、タイツで隠れる脚のも、当然腹のも、今まで見てきたものそのまま。だが、

「……拡がっている……？」

二の腕。今までは駆逐棲姫の白い腕が縫合痕できつちり分割されていたのに、今はそれよりも上に侵食してきていた。今では腕全体が白く、肩でグラデーションが出来ているくらいである。

摩耶のように改造されてより強くなっているのはわかるが、姫級を改造したことで、より私に馴染んでしまったということなのだろうか。

「どうかしましたか？」

「いや……腕がだな」

私の二の腕を見て目を丸くした。改装前と改装後で明らかに変わっている部分である。

本来の駆逐艦若葉は、改装したところで何も変わらない平々凡々な

艦娘である。発揮出来る力は大きくなるが、そこまで。だからこそ家村が捨て駒に使うような艦娘である。

それがこれ。特殊な改装なんてしていない。ドックに控えている改装の妖精がこうしたのだから、これが継ぎ接ぎとしての私の改装なのだろう。

「摩耶にはこんな事なかったのに……。確か摩耶の脚はネ級と聞いてますけど、若葉の腕は？」

「駆逐棲姫だ」

「原因それしかないじゃないですか。イロハ級とは力が違いすぎます。それがこんな影響になるなんて……」

今までにないことに、明石も混乱気味である。ただの改装では無くなってしまう。

「ひ、ひとまず、他の子を先にやっちゃいます。その間に何か不調があったらすぐに言ってください」

「了解した」

今はどうも出来そうにないので、次に進めることにした。このまま話してもすぐには解決出来ないだろう。少なくとも今は私に何も違和感はないため、時間経過で様子見となった。

姫級のパーツが使われているのは私だけでは無い。三日月の左目も駆逐棲姫から移植されたものだ。同じように何かが起こる可能性はある。

ひとまず着替えを用意してもらい、みんなのところへと戻った。腕のことを話すと、自分の左目が姫級のものであることは当然知っているため、三日月が少し怯えてしまった。

「……わ、私は……どうすれば……」

「それは自分で選ぶべきでしょ。時間はあるんだし、考えとけば？」

次、私行くわよ」

「そうね。曙の次は私が行くから、まず考えましょ」

三日月には考える時間が必要だ。曙と雷が改装を終えるまでにまず考えてもらい、それでも恐怖が勝るようなら改装は中止とするべきだ。

この改装が無くても、三日月は充分戦えるほどに成長している。霰を救ったのも実質三日月だ。危険だと思ふのなら今のままでいい。

「若葉、腕の方は」

「何も問題は無いな。改装前と感覚は変わらない」

「そうか。今のうちに診察しておこうか」

「頼む」

曙と雷の改装が終わるまでの間に、飛鳥医師にいろいろと診てもらったが、今のところ何もおかしなところは見えなかった。至って普通の深海棲艦の腕である。感覚も、動かし心地も、左手の痣も何も変わっていない。

これから何かあるかもしれないが、日常生活には何ら支障が無いため、今は放置となった。何かあった時では遅いのだが。

「今までと何も変わらないな。触診レベルではあるが」

「ああ。少し安心している」

「何かおかしな兆候があればすぐに話すように」

勿論そのつもりだ。私だつてこの変化に驚いていないわけではない。いつ何があるかわからない爆弾を抱えたようなものなので緊張感が高まっている。

「……私は、改装を受けないことにします」

考えた結果、三日月は改装をしないことにした。

その理由の大きな部分は、移植された場所だ。私は腕だったためにその侵食範囲が広がっても変色する程度で終わっている。だが、三日月は目。つまり、脳に近いことが問題。侵食が肌の色だけに留まらなかった場合、三日月がどうなるかわからない。それこそ、考え方も染まってしまうかもしれないのだ。

駆逐棲姫がどういふ深海棲艦かはわからないが、少なくとも、戦闘中に私の腕を疼かせ、敵を倒すことに躊躇が無くなるくらいに好戦的なのはわかる。それに染められてしまうと、三日月が消えてしまう可能性だつて少なからずある。

「そうか、それならその方がいい。不安を抱えるより、堅実に生きるべきだ」

「大丈夫そうなら……また改めて改装を受けたいと思います……。それまでは……このままで」

申し訳なさそうな顔をするが、私達は三日月を失う方が嫌だ。万が一を考えるなら、この選択は間違っていない。博打に出るようなタイミングではないのだ。

この改装により、私達はさらなる力、戦う力を手に入れることが出来た。前回は結果的に大敗を喫したが、次は負けない。

初めての演習

来栖鎮守府で改装を受けた私、若葉であったが、その影響か、駆逐棲姫の腕が私の肩にまで侵食してきていた。私自身には何も問題は無いのだが、今後どんな影響が出るかはわからない。普段通りに生活はするものの、何かおかしいことがあり次第、飛鳥医師に相談することになる。

また、これを見たことで三日月は改装を一旦保留。駆逐棲姫の眼が同じように侵食してきた場合、三日月自身に大きな影響を与えてしまいかねないからだ。これは三日月が考えた結果。改装保留は全員が納得出来るものである。

「……足並み揃えられず……ごめんなさい」

「改装してアンタがぶっ壊れる方が迷惑だわ」

「曙の言い方はアレだけど、私も三日月がおかしくなっちゃうかもしれないのは嫌よ。この選択の方が、きつといい方向に行くわ！」

落ち込む三日月を慰める曙と雷。少し前ならこんな光景もお目にかかれなかっただろう。三日月の心も大分強くなっている。人間嫌い、艦娘嫌いはまだ根深いだろうが、仲間に対しては本来の三日月が出せている。

今は他の鎮守府ということ、安定を求めるために常に浮き輪を抱きかかえているものの、それももしかしたら卒業するときに来るかもしれない。

「謝らなくてはいけないのは僕の方だ。君達の命を助けるために施した治療が、こんなことに繋がるなんて」

「若葉は気にしていない。今は何もなっていないんだからな」

「……命あつての物種ですから。先生のごことは恨まないことにします」

三日月の言う通り、命があるから今までやってこれたのだ。これくらいの影響なら安いもの。死ぬよりマシ。

「その治療法も必ず確立してみせる。それまでは待っていてくれ」

「……はい、期待しています」

私はこのままでもいいのだが、三日月はやはり見た目への影響が大きい。せめてそれだけでも消せれば、三日月は大きく前進することが出来るだろう。

昼食の際に、来栖提督から私達のことを紹介された。少しの間ここに住まわせてもらうこと。洗脳された夕雲をこの鎮守府内で処置すること。あとは、家村を相手にした戦いが本格化することである。

神風も今はここに滞在し、下呂大将が来るのを待つことにするらしい。元々、霰と夕雲が治療されるまで施設に残るとというのが任務だ。場所は変わっても、その任務は続行中。むしろそのことも相談していたのかもしれない。

午後からは飛鳥医師が処置室に籠ることになる。以前と同じなら、夕方になる前には胸骨移植の手術が完了し、その後に透析を4〜5時間かけることで夕雲への処置が全て終了する流れ。午後全てを使い、日を跨ぐ前には完了させたいというところである。

私達はその間はやることが何も無い。基本的には与えられた部屋で待機なのだが、それでは流石に暇だろうと、来栖提督は私達に自由に鎮守府を歩く権利をくれた。やりたいことを好きにやればいいというお墨付き。代わりに、鎮守府に属する者からも自由に干渉してくるとのこと。シロクオ霰の部屋は絶対入らないという約束の下、共同生活が始まる。

「ということ、いい機会ですし演習をしましょう」

早速鳳翔からの干渉。三日月以外の改装が完了したということ、その慣らしも兼ねて、前々から考えられていた駆逐隊同士の演習をやるという話になった。

改装から間もない私達には願ってもないお誘い。改装後に慣らしも無しでぶっつけ本番は流石に怖い。

「相手は？」

「ちようど今、私が鍛えている駆逐隊があるんです。その子達の相手をしてください」

第二二駆逐隊ではない、違う駆逐隊をぶつけてくるそう。鳳翔が

鍛えているのだから、さぞかし強いのだろう。艦装と身体の慣らしには最適だ。あちらも強敵との演習が必要なようなので、お互いに求められているものが手に入る。

「いいじゃない。どうせ暇なんだし、身体を動かしたいわ」

「……はい。実戦訓練は多いに越したことはないです」

「じゃあ鳳翔さん、よろしくお願いしまーす！」

私も問題ない。満場一致で演習を受けることにした。

全員が演習というものが初めて。実戦さながらの戦闘を行なうが、お互いにダミーの弾を撃ち合うという単純なもの。こちらは水鉄砲なので、弾を替える必要もなく、実戦のまま戦うことになる。私と曙は、流石に直撃すると怪我は免れないので、普段の刃が潰してあるものではなく、用意してもらったゴム製の武器を使うことに。

「ゴムの刃……」

「普段のより軽いわね。勘が狂いそう」

怪我をしないようにするためなのだから仕方あるまい。私も曙も、万が一で仲間を傷付けるのは良くない。

演習は限られた時間内で行なわれる。それまでに相手を全員轟沈判定させられれば勝ち。そうで無くても、時間が切れた時に判定勝利というものがある。それに関しては、この訓練を見ている鳳翔が判定することに。

その演習相手として私達の前に立ち塞がるのは、カラフルな髪色の4人。1人を除いて全員が同じ制服を着ているため、おそらく姉妹。あの1人もおそらく姉妹なのだろう。近しい匂いを感じる。

「では、相手は第二四駆逐隊です」

第二四駆逐隊。予想通り姉妹の4人であり、真面目で凛とした銀髪、海風、ダウンナー気味な緑髪の山風、勝気でやる気満々な赤髪の江風、こちらもテンション高めな青髪の涼風。旗艦はこの中での長姉である海風のような。他の3人を鼓舞し、後衛に回るような雰囲気。

あちらも私達と同じように前衛後衛はつきり分かれているタイプ。の部隊のようだ。江風と涼風が前衛、海風と山風が後衛。

「……若葉が旗艦なのか？」

「前衛で一番突っ込む奴が旗艦でいいわよ。私はガラじゃないし」

雷も私に譲るような雰囲気。三日月は言わずもがな。何だかんだ、第五三駆逐隊の旗艦は私が就任することになってしまっただけ。作戦立案とか鼓舞とかは出来ないのだが。

流れに身を任せ、私が海風と握手。ここからは真剣勝負。あちらは全員が小口径主砲装備。私達のような接近戦は早々やらないか。

「鳳翔さんに鍛えられたと聞いています。私達と同じですね」

「みたいだな。力を持っているのはわかる」

微笑みを絶やさない海風。おそらくこの4人の中で一番の使い手であることはすぐにわかった。江風もだが、おそらく2人は改二。素の力が最初から私達よりも上。

だが、私達だってそう易々と敗北するつもりはない。これまでにやってきたことで、二四駆を打倒する。

「いい演習にしましょう」

「ああ」

こちらにはこれといった作戦はない。だが、おそらくあちらは完全なチームプレイを仕掛けてくる。鳳翔はそれを私達に教えるために二四駆をぶつけてきたのでは無かろうか。

今までは何だかんだ個人技でもどうにか出来てきた。強いて言うなら、曙とお互いをカバーし合う連携はしてこれたが、後衛組と一緒に戦うのは初めてである。

今のままでは確実に敵に押し潰される。各個撃破が出来る敵ばかりでは無いだろう。そんな時こそ連携だ。

「若葉は突っ込むことしか出来ない」

「私達がサポートするわ。私と三日月で道を開くから」

「若葉と私が切り込む。これでいいわね。それしか今は出来ないわよ」

初めての連携は手探り状態。失敗もあるだろう。ここで慣れていきたい。

まずはお互いのクセを知るところからだ。私にだって、他人しかわ

からないようなクセがあるだろう。連携しづらいと言われれば、当然改善する。

「よし、じゃあ、行くか」

「ええ。五三駆の初めての連携ね！」

「後ろは任せたわよアンタ達」

「……大丈夫です」

どうせなら、二四駆の連携も模倣してしまおう。連携の基礎も、他人から貰う。

前傾姿勢に構える。その隣で曙が槍を前に構える。いつものスタイル。対するあちらは予想通り、江風と涼風が前に立ち、海風と山風が後ろへ。所謂、複縦陣というヤツだ。私達も似たようなものだが、私達が突つ込むため、陣も何も無いのだが。

「マジモンの近接戦闘かよ！ あんなの訓練の内だけじゃねーの!？」

「かぁーっ！ 面白くなってきやがったってんだい！」

早速2人が撃ってきた。火薬の匂いがしない代わりに、ペンキの匂いがする。直撃すると色を塗られるというのが演習のようだ。こちらはただの水鉄砲のため色は付かないが、割と強めの衝撃が入るため、倒されたという判定は取りやすい。

砲撃はさらりと避ける。精度はそこまで高くないが、割と嫌な位置に撃ってくる。

「雷、三日月、前衛の足止めを」

「了解よ！」

言い切る前に、雷による私と曙の隙間を縫った砲撃。鳳翔の解析により器用さが伸ばされ、射撃精度が高まっていた。どんな状況でも、障害物を無視するかのように攻撃していく。

その砲撃は江風の顔面に向けて飛んでいったが、紙一重のところまで避けられた。本当にギリギリだったらしく、水鉄砲で髪が濡れるほど。私達の知らない内にこれほどの精度を手に入れていたとは。

「つぶね!？」

「狙うねえ！ んなら、姉貴達よろしくう！」

合図と同時に海風の砲撃も開始。こちらは精度が高い砲撃だ。狙いは後衛側。雷は黙らせないとまずいと判断したのだろう。

「雷さん、下がりましたよ。狙われています」

「了解。回避は三日月に頼るわ」

その砲撃に対して、先んじて三日月の回避命令。こちらも鳳翔の解析により伸ばされた危機回避能力により、後衛への攻撃を予測していた。着弾する頃にはそこから離れた位置。予測しているため雷にも指示が出来ている。

「曙、若葉は海風を狙う」

「なら私は山風ね」

「じゃあ……出るー」

江風と涼風の砲撃を掻い潜るルートを探し、海面を一蹴り。改装の成果が大きく出ており、速さがかなり増している。深海棲艦の力を使わずとも、それに近いほどのトップスピードが出た。神風にはまだ遠く及ばないとは思うが、神風との訓練のおかげで、この速度で変わる風景も視認出来る。

狙いは海風。後衛を狙うのを止めてもらいたい。雷と三日月に前衛の足止めをしてもらい、私と曙の道を開いてもらう。そして後衛を先に終わらせようという、簡単な作戦。

「ンだありゃあ!?!」

江風の隣を通り過ぎ、海風の眼前へ。雷を狙った隙を突いた渾身の一撃を決めようとした。

そんな時に限って、キナ臭い匂いを強く感じた。このまま海風を攻撃したらまずいと感じるほどに。海風の真横にいたにもかかわらず、その気配が一瞬わからなかった。

既に私の頭に、山風の持つ主砲が突きつけられていた。

「撃つよ」

容赦なく砲撃。匂いを感じていたために辛うじて回避出来たが、本当にギリギリだった。改装前の嗅覚なら間に合っていない。

これは、曙がここに辿り着く前に、私が海風を攻撃すると読んでいたの行動だ。私の速度が見えていたか、ここに来ると予想していた

か。どちらにせよ、この4人の中で一番注意しなくてはいけないのは、山風ということだ。

「避けるの……!?!」

「危なかった。本当にギリギリだ」

回避と同時に海風の持つ主砲を叩き落とす。が、それは回避されてしまった。山風だけじゃない。一番に警戒すべきは山風だが、一番動けるのは海風だ。踊るようというわけではないが、敵の奴隷と同じような俊敏性を感じる。

必要最低限の動きで攻撃と回避を繰り返す。それ以上に速く動けるが、無駄な動きが多いために体力を消耗する私とは違う速さだ。それに目がいい。

「若葉!」

「助かる。山風を止めてくれ」

曙が合流。これでお互いに前衛対後衛の形に持っていった。雷と三日月に2人を任せ、今は目の前の2人に専念する。

「放っておいて」

「放っておくかっての!」

この状況が出来上がった途端に戦場から離脱する山風。攻撃は止めないが、確実に私達の射程からは外れていく。曙はそれを追うために一緒に離脱。私は海風と1対1となる。

「お前が崩れれば勝ちが近付くな」

「簡単にはやらせませんよ」

言うだけあり、どれだけ素早く攻撃しても回避される。まるで本当にあの時の夕雲を相手にしているようだった。改装されたとしても、ここは今までの訓練の時間の差だろう。基本付け焼き刃の私達とはわけが違う。

勝つためには、海風に2人つけたい。それならば、後衛組を襲っているあちらの前衛組を片方だけでも剥がしたい。

途端にまたキナ臭い匂い。ペンキの匂いが私に向かってきているような感覚。

「山風か……!」

気付けたおかげでまたもや紙一重。曙を捌きながらも、射程外からしつかり私を狙ってきた。曙はまだやられていないはずなのに。

これは1対1を複数個作る戦いだと分が悪い。一旦後衛組と合流するべきだ。

「曙！ 一旦下がれ！」

「後ろと合流!? 了解！」

海風から退避し、後衛組と合流するために海面を一蹴り。一気に海風から離れた。少しの間だけ曙が戦場に1人になるが、これまでに伸ばされた持久力のおかげでスペックダウンは全く見えない。

「江風！ そっち行った！」

「あいよ！ 待ってましたってんだ！」

先程の海風の時のように、江風の眼前へ。先程はそれを予測していたかのような山風に迎撃されたが、今度は涼風にも注意しつつの攻撃。

しかし、海風から一言指示があったことで、既に備えられていたかのように私の眼前には江風の主砲。さらには涼風まで私を狙っていた。同時に撃たれたら回避が出来ない。確実にやられるであろう江風の砲撃の回避を優先する。

「若葉さん！」

それを三日月が止めてくれた。私に気を向けたことで、江風の意識が後衛組から外れている。そして、三日月の危機回避能力が発揮。他人の危機もしつかり感じ取り、私を援護するために砲撃してくれた。

江風、涼風、そして三日月の砲撃がほぼ同時に繰り出され、私は江風の砲撃を紙一重で回避するが、涼風の砲撃が腕に直撃。代わりに三日月の砲撃は江風の背中へ。

これにより、私は中破、江風は轟沈判定。

「なるー、やられたあ！」

「雷、涼風を！」

「わかったわ！」

これでこちらが3対1の様相に。曙がまだこちらに戻れていないが、先に涼風を倒しておけばここからが楽になる。

と思った時には遅かった。いつものキナ臭い匂いを感じた時には、雷が撃ち抜かれていた。私が引き剥がしたはずの海風が、既にこちらまで肉薄していたのだ。これにより轟沈判定。

「え、嘘!？」

「雷さん!？」

「余所見してちやあいけねえなあ!」

隣の雷が撃たれたことで動揺した三日月が、涼風に撃たれてしまった。危機回避により辛うじて轟沈判定は免れたが、大破判定。お返しに涼風を斬り払い、あちらにも中破判定を与える。

「痛っ!?! ゴムでも痛え!」

「くそ……ガタガタだ」

あちらには無傷の海風と山風が健在。曙がまだこちらに合流出来ていないことを考えると、下がったはずの山風に粘られている。

「時間切れです」

ここで鳳翔の宣言により演習時間終了。思ったよりも短いと感じてしまったが、今までの攻防はそれなりに長い時間使っていたらしい。

「第五三駆逐隊、旗艦中破のため、第二四駆逐隊の勝利です。お疲れ様でした」

結果、戦術的敗北。事実、こちらは雷が轟沈判定だ。実戦なら死んでいる。私も腕を撃たれているため、本来なら腕が折れてもおかしくない。無傷なのは曙だけだった。

初めての演習は惜敗という形で幕を閉じた。反省点は多い。

死を望む幻聴

初めての演習は惜敗に終わった。私、若葉は涼風の砲撃で腕を撃たれて中破。最後の江風と涼風の同時攻撃相手には、まだやれることがあったと思う。回避の仕方や、そこから攻撃に転じる方法はいくらでも見つかる。

演習が終わってからはずっと反省だった。あの時はどうすれば良かったか。最善を選択した時は次にどうするか。いわゆる『感想戦』というものを鳳翔や第二四駆逐隊の面々と行なう。

「五三駆の4人は初めての連携訓練でしたが、どうでしたか？」

「経験不足を実感したわ。崩れたら総崩れだったものね」

「ある程度出来ていたのは三日月だけだな……」

三日月は他人の危機回避も出来ていたため、ある程度は連携になっていた。が、その辺りで特に酷かったのは私だろう。スピードに任せただ単独先行。そういう作戦というのもあったが、わざわざ後衛組から離れて行動するのは自滅行為に近い。海風や山風ほど手練れになれば変わるかもしれないが。

せめて曙と一緒に動くのが正解だ。今までそうやってきたのに、敵の数が増えたことで個人戦を複数個作つた方が戦いやすいと思ってしまう。

「連携はまともに出来ていませんでしたね。今後は前衛後衛ではない組み合わせで訓練をしてみましょう。若葉さんは三日月さんと、曙さんは雷さんと組んでください」

前衛と後衛で組んで、連携を学ぶ方向で行く。

私の相方は三日月。連携が一番出来ていた者と出来ていない者の組み合わせ。平均化するならそれが妥当。あとは相性の問題か。曙と三日月という組み合わせは、失礼だが少し難しそうである。

それに、お互い持つ深海棲艦のパーツに駆逐棲姫が含まれているという共通点がある。

「すまない三日月。足を引つ張ると思うが」

「こちらこそ……私はすぐ動揺してしまいますから……」

だが、危機回避能力は動揺していても健在だった。わかっているけど動けないという状況さえ作らなければ、三日月はおそらくこの中で一番強い。

私は匂いから危機回避は出来るが、それは基本自分に対する危険だけだ。以前曙と組んでいた時のように、相方が近くにいる、かつ敵も近くにいる状態なら、自分以外の危険も感知できるが、少し離れると自分への優先しか嗅げなくなる。嗅覚が強くなっても、この辺りは慣れの問題。

「若葉は、もっと周りを見ることを覚える」

「私は……もつと心を落ち着かせます」

2人で今後の教訓を決め、それに則って訓練を続けていこう。この鎮守府に世話になる間は演習も定期的に行なうと鳳翔が言うし。

「つつても、こつちも結構ギリギリだったんだよな。江風は結局撃たれちゃったし」

「あたいがフォローしてやったから取り返せたようなもんだよね」

「貴女達はチームワークはとても良いですが、個人技に欠けます。だからこそ、五三駆と戦わせたかったんですよ」

お互いに足りているところと足りていないところが正反対だった。4人ずつであり、時間制限もある演習だからこの結果になったが、例えば1対1の個人演習だった場合は、私達が総合で勝っているだろうというのが鳳翔の分析。

次はそういう形の演習も取り入れると言うので、その時は今回のようにはいかないようにしよう。

その後、数回の演習。お互い疲れ果てるほどに身体を動かし、曙以外は息も絶え絶え。曙は流石の持久力である。

勝率としては3割程度。やはりチームワークに関しては二四駆の方に分があり、探り探りの私達ではなかなかうまくいかない。特に、三日月と組むのは今日が初めてだ。連携も少しずつ出来るようになってきたものの、まだまだである。

演習終了後、工廠で摩耶に夕雲の処置が終わったことを聞いた。前

回の霰の時よりも早く終了しており、既に透析中とのこと。このペー
スで行けば、日が変わる前どころか、眠る時間前には全てが終わるの
ではないかと言われている。透析は装置を繋いで放置のため、飛鳥医
師もようやく息を吐いた。

私達も風呂の後に夕雲の状態を見に行くことに。

「傷は無いんだな」

「来栖が高速修復材を提供してくれた。そのおかげで処置も早く終
わったんだ」

霰の時は後から下呂大將が届けてくれたが、ここは鎮守府、即座に
手に入る。また、鎮守府から持ち出しているわけではないため、抵抗
なく使わせてもらったそうだ。

おかげで夕雲は傷一つ無い。霰も透析終了後に下呂大將から貰っ
た高速修復材を使っているため傷は無いが、夕雲は処置の段階から使
われているので色々と心配が無い。

「事が早く進んでいる。今日中には目を覚ますだろう」

「でも、そこからのよね……夕雲の地獄は」

雷が眠っている夕雲の頬を撫でる。私達と戦闘をしていた頃に比
べると、幾分か穏やかな表情に見えた。

だが、目覚めた瞬間から夕雲の地獄が始まるのはみんながわかって
いることだった。今でも部屋に引き籠もり、シロクロが付きつきりの
霰がそれを体現している。

麻薬の禁断症状による幻覚と今までやってきたことの罪悪感に押
し潰されてしまう。特に後者。霰のもの以上に酷い行いを笑顔で
やってきた記憶は、確実に夕雲を蝕む。

「……僕達が支えてやるしかない」

「勿論。あつちのいいように使われて捨てられるなんてダメよ！
ちゃんとした生き方しなくちゃ！」

立ち直ることが出来るかもわからない険しい道のりだ。まずは最
初が肝心。しっかりと支えてあげなくては。

夕雲に誰が付くかはまだ決めてはいない。少なくとも三日月は難
しく、曙はいろいろあるため少し不向き。となると、雷が妥当。羽黒

のPTSD治療にも貢献したというし、傷だらけの夕雲を癒してもらいたい。

そして、夜。その時がやってくる。

まだ消灯時間には早いというくらい、透析完了という報せを受けた。装置は全て外され、機材も全て撤去。ただ眠るのみとなった夕雲を、私と雷が付き添う。そこに来栖提督と鳳翔もやってきたことで準備が整った。

「若葉、念のためお願いできるか」

「了解。胸だな？」

「ああ」

霰の時と同じように匂いを嗅ぐ。改装されたことで、より嗅ぎ分けの力が上昇しており、胸に直に鼻を付けなくても、夕雲の匂いがリセットされている事がわかった。透析による血液の浄化は成功。つまり、洗脳も解除されたということになる。

あとは目を覚ましてもらうだけ。それは雷にお願いする。私は夕雲と直接戦闘しているが、雷は会話をしたこともない。刺激はなるべく少なめにするということにも繋がった。

「優しく起こせばいいのよね」

「ああ、頼む。確実に錯乱するだろうから、気をつけてやってくれ」

「わかったわ」

ベッドの横に立った雷が優しく肩を揺すり、夕雲に呼びかける。

「夕雲、起きて」

優しく、罪の意識を刺激しないように。あくまでも夕雲は何も悪くないというスタンスで。

悪いのは全て、この状況を作り出した家村であり、夕雲はそれを強制的に従わさせられただけだ。それは誰もが理解していること。夕雲が直接手をかけたこともあるかもしれないが、それは夕雲の意思ではない。

「夕雲」

「……………」

噛むという手段すら思い付いていない。

「みんなが、みんなが言うんです。よくも殺したなど。みんな、みんな夕雲が殺した、殺したんです。自爆させて、限界を超えさせて、夕雲自身が後ろから撃つて。こんな、こんな血に染まった手で、生きてる価値なんてないでしょう。ねえ、殺して、殺してください、殺してよ。ねえ、ねえ、ねえねえねえねえねえねえねえ」

狂気に染まりきった瞳で雷を見つめ、ガタガタと肩を揺らし、薄ら笑いすら浮かべながら殺せ殺せと叫んでいた。

あまりにも必死に縋り付くため、雷は逆に怯えてしまった。恐怖でそこから動けず、ガタガタ震えながら夕雲の言葉を目の前で聞き続けるのみ。あんなことされたら誰だって慄いてしまう。

「誰でもいいですから、夕雲を、夕雲を殺して、殺してください。周りの人は言うだけなんです。直接手を下してくれないんです。だから、だから死ぬ方法をください。今すぐ死にます。死にたいんです。生きている価値のない夕雲を誰か、誰か死なせて。死なせて死なせて死なせて死なせて死なせて！」

霰よりも壮絶かもしれない。幻覚を怖がり叫び続ける霰とは対照的に、幻聴を受け入れ本当に死を望む姿は、痛々しくて見ていられないほどだった。より深く狂ってしまったことが見て取れた。理性があるようでない。

夕雲は止まらない。幻覚も幻聴も途切れないのだろう。改二であり、主戦力でもあった夕雲だ。練度的にも、霰よりも多くのクスリを使われていたのかもしれない。

「雷、離れろ」

「わ、若葉……？」

怯えて動けない雷を無理矢理引き剥がす。縋り付く相手がいなくなり、少しつんのめるが、今度は私が標的になったようだ。

「若葉さん、若葉さんなら夕雲を殺してくれますよね。夕雲の首を絞めてくれました。あの時のようにお願いします。絞めてください。殺してください。今度は止めないでください。お願い、お願いします。お願い、ねえ、お願いします。お願いします」

だら終わりなんだよ！ もうそれで償えなくなるんだぞ！ 何人分償いたいかわからないが、罪だと思ふのなら全部償うまで死ぬな！」

私の言葉が届いているかはわからない。それに、私が夕雲のそれを罪と肯定してしまっているようで辛い。だが、今この場で死を望まなくなるようにするために、無い語彙を使つて咄嗟に出た言葉がこれだ。

「みんなが……消えた。消えちゃいました。死ぬというみんなが、そこにもそこにもいたみんなが、いないんです。なんで、なんで、夕雲の罪はまだ全然償えてないのに、なんでなんでなんで」

禁断症状が一時的に落ち着いたのだろう。幻覚と幻聴が消えてなくなつたらしい。

だが、これが夕雲を間違つた道に向かわせるキツカケになつてしまったのかもしれない。

「若葉さんから与えられた痛みが、この痛みが、償いになつて……？」

「待て。そんなわけあるか。たまたまだ。クスリの禁断症状が」

「痛みを……もつと痛みを！ 若葉さん、殴つてください。蹴つてください。それが夕雲の贖罪となるのなら、生きて痛みを受け続けま

す。さあ、さあさあさあさあさあさあさあさあさあ！」

余計恐ろしい状態になつた。これは立ち直つたなんて到底言えない。

クスリの禁断症状と罪悪感で心が壊れた結果、そして私のビンタがトドメとなり、痛みこそが償いと思ひ込むようになってしまつた。

「もつと、もつとお願いします。若葉さん、夕雲に痛みを。死ぬなんて言いません。痛く、痛くしてください。永劫痛みを受け続けることが贖罪なんです。お願いします。若葉さん、また叩いて、好きなようにしてください」

先程とは違う理由で継り付かれるようになってしまつた。痛みを求めて私に訴えかけるその姿は、今までで一番怖かつた。むしろ、ここまでの恐怖は初めて感じたかもしれない。

禁断症状

夕雲の治療が完了したが、それは成功とは言い難いものになってしまった。自らに与えられる痛みこそが贖罪の証であり、常に痛みを求める危険思考に昇華されてしまったのである。

明らかに私が対処を間違えたからだ。あまりにも死を求めるため、正気に戻すために頬を引っ叩いてしまったのがキツカケ。そもそも麻薬の禁断症状として、死者に恨み辛みで罵られる幻覚と幻聴が見えていた夕雲だが、私が引っ叩いたと同時に禁断症状が落ち着いてしまったことで、痛みを与えられたら罵られなくなるという式が成り立ってしまった。

「ここまでののを見るのは初めてだ」

「だな。戦場のトラウマで壊れちゃった艦娘ってのは何人か知ってるがなア」

飛鳥医師と来栖提督は、こういう形に壊れた艦娘を知らないわけではないらしい。あまりにも強力な深海棲艦と戦い、精神に異常をきたす艦娘というのはいないわけではないという。

羽黒がPTSDを患ったというのは聞いているが、ここまでではない軽微なもの。それでも戦場から離れないとダメなほどだ。艦装を見るだけで吐き、まともに動けなくなるほどの心の病である。

「若葉はどうすればいいんだ」

「夕雲に痛みを与え続けていただければ」

「お前はちよつと黙ってる」

合間合間にも私に自分を殴るようお願いしてくる夕雲に、私が精神的に参ってしまいそうだった。

雷はそんなことが出来るわけもなく、夕雲がこうなってしまったからには一歩どころか大分引き、鳳翔の側に駆け寄っている。鳳翔もこれはお手上げのようで、どうすればいいかわからないようだ。

「あ……また、また出てきました。夕雲が殺した、殺してしまった仲間達が、周りに、周りにいっぱい、いっぱいいっぱいいっぱいいっぱいいるんです」

督にも聞いたが、艦娘を拘束するようなものはないと突っ撥ねられてしまった。

「……すまない若葉」

「殴ってくれと言われるのは若葉もキツイ」

チラリと夕雲を見る。夕雲の視界は定まらず、幻覚と幻聴に死を強要され続けていた。怯えもせず、涙も流さず、ただ痛みを求めるだけの哀れな捨て駒。さんざん使い倒されて、失敗したことで殺されかけ、救い出されてもこんな哀れな姿にされてしまった。

ただただ家村に怒りしか湧いてこない。夕雲が何をしたというのだ。運悪くあちらの鎮守府に配属したせいで、人生をことごとく狂わされているなんて。家村はなんの権限があつてここまで出来るのだ。「夕雲が正気に戻れるように最善を尽くす。人間とは違う艦娘なんだ。禁断症状だつて人間よりも早く無くなるはずだ」

やれることは全てやっていくのが飛鳥医師だ。何か効きそうな薬があればと、情報収集も欠かしていないそうだ。

出来ることは私達も協力しよう。夕雲の惨状は見るに堪えない。早く回復してもらいたいものである。

夕雲は飛鳥医師の部屋で眠ることとなった。医者と相部屋ということで管理がしやすいということと、艦娘とはいえ艦装が無ければほぼ人間であるが故に、万が一の時に男手で押さえつけられようにか出来るという判断。縛り付けることで部屋から動けないようにされていたが、その拘束も強く痛くしてくれと懇願され、困ってしまった。

まず確実に私には近付けさせないという保証をもらえたので、少しだけ安心した。睡眠時間すら削られかねないため、それが確約されただけでもありがたい。

翌朝。早朝のランニングのために目を覚ます。皐月と長月が同じことをしているらしく、それに便乗させてもらうことにした。やはり日課は途絶えさせちゃいけない。

「昨日、すごかったんだって?」

「噂は聞いたぞ。処置が終わったとな」

軽く走りながらもその話題。

おそらく私も心底嫌そうな顔をしたのだと思う。三日月にも呆れられるほどの愚痴を聞いてもらったし、あの光景は夢に出そうなくらい酷かった。私達以外には見ない方がいいと思えるほどである。

「酷かった。察してくれ」

「深くは聞かん。どうせすぐわかる」

あの現場には来栖提督もいたし、同じ場所に夕雲も住んでいるのだ。いやでも見ることになる。

今の夕雲は、霰のような常に寄り添ってくれる保護者がいない。私が側にいると痛みを求めて暴走するため、近付くことも難しい。そういう意味では、夕雲の保護者は飛鳥医師が直接という感じになった。

「霰とは違う感じ?」

「ああ」

いつになく素っ気なくなってしまった。私も相当キテるのだと思う。好きとか嫌いとかでなく、辛い。誰が好き好んで仲間を殴らなければいけないのだ。

それを昨晚三日月に愚痴ってしまい、少し後悔している。あの三日月が愛想笑いしていたほどだった。今考えたら良くない行為だったと思う。

「ボクには頑張れとしか言えないなあ」

「充分だ」

夕雲の話はこの辺りにして、ランニングに専念。ここからは速度も上がる。浜辺で走るよりは負荷はかからないが、皐月と長月がとにかく速い。全力疾走とは言わないが、追いつくだけでもそれなりに疲れる。

とはいえ、鳳翔に基礎訓練でスタミナも底上げされているため、最後まで走り抜くことは出来た。ゼエゼエと息が切れてしまっているものの、ついていけたのは自信に繋がる。皐月と長月はケロツとしていたが。

「あれ、シロとクロじゃない?」

「だな。霰も連れている」

走り終えた後、鎮守府に戻る前にシロクロ霰の3人の姿を見かける。私達の姿に気付き、クロが手を振ってきた。

霰は浮き輪を1体抱きかかえながら車椅子に乗っており、ぼんやりと海を眺めていた。心ここにあらずという感じで、虚ろな目をしている。今は禁断症状も出ておらず、安定しているらしい。

「ワカバ、相変わらず走ってるの？」

「ああ、日課だからな。そちらも散歩か」

「うん……アラレに……海を見せてあげたくて……」

処置が完了したその日の夜に襲撃を受けてしまったので、こういった散歩による療養はまだ試せていない。

静かな朝の海なら霰にも刺激を与えないだろうし、深海棲艦が出歩いている支障がない時間だろうと考えた結果が朝の散歩。違うところではセスもエコの散歩をしているそうだ。

「霰、具合はどうだ？」

「……いいほう……かな……」

今は本当に具合がいいようで、私に対しても受け答えが出来る。表情は変わらず、あまりこちらに視界が来ないようだが、一番最初に比べれば一步一步前進出来ていると思う。

1日経てば匂いも少しずつ変化してきており、ずっと一緒にいるシロクロの匂い、深海の匂いが薄つすらと移っていた。胸の骨が深海棲艦であるからか、その匂いが馴染むのも早いようだ。これが霰の今後の匂いになるのだろうか。

「ワカバ……ちよつと」

シロに手招きされ、少し霰から離れた場所に呼ばれる。霰はクロと、一緒に走っていた皐月と長月に任せ、私はシロについていく。

「ユウグモ……どうなったの？」

「……処置は終わったが……霰以上に壊れている」

シロには掻い摘んで説明した。

シロクロも夕雲にはいい思い出がない。交戦の意思がないことを伝えても追い回され、攻撃され、今2人の持つ腹の傷を作った張本人にもなる。会いたくないという気持ちになるのも理解出来る。

それに加え、霰はあの戦いでは夕雲の最後の部下だ。お互いに何を思うのかわからない。どちらも大きく錯乱する可能性が高く、どう考えなくても対面させるのは得策ではないとわかる。

「そう……わかった」

「霰には会わせられないな」

「うん……今は。もう少し安定してから……かな……。それでもぶり返しちやいそうだけど……」

シロは本心から霰を心配して行動してくれている。シロがそうならクロもそうだ。身体も心も癒されそうな手段を探して、いろいろやってくれている。散歩もその一環だし、私の知らないところではエゴとも交流させているそうだ。

三日月の時に使ったアニマルセラピーを霰にもやっている。三日月の今を見るなら、これはとても効果的な手段。実際、霰もここまで回復しているし。

「話題にも出さないの……忘れられるなら忘れたいことだろうし……でも……まだ禁断症状はいつぱいするよ」

「ああ、支えてあげてほしい」

「勿論……クロちゃんもやる気満々だし……ね」

皐月と長月との交流をクロが取り持っている状態。2人は霰と交戦していないため、変に刺激することも無く、先んじて夕雲の話をしていないようにコソツと説明したらしく、ただただ世間話をするだけに留まっていた。霰も不思議と明るい雰囲気が出ている。

「何かあったら若葉達にも言ってくれ。少なくとも、今は夕雲と顔を合わせないように手を回しておく」

「うん……お願い」

これだけ離して霰の下に戻る。相変わらず何処か遠くを見ている瞳だが、安定して話が出来ているだけでも充分だ。クロも面識のある皐月と長月相手なら警戒もしていない。

「アラレ、昨日より調子いいんだよ。ご飯も食べれてるし、ぐっすり寝れたしね」

「うん……なにもみななかったし……なにも……なにも……あ、ああ……」

不意に目の焦点が合わなくなってきた。話題がどうかではなく、またそれが来てしまったただけだ。気付いた途端、シロも見たことのないようなスピードで霰の傍にしゃがみ抱き締める。

「大丈夫……大丈夫だよ……」

「アラレ、大丈夫、何も無い、何も無いからね」

「ひっ、あ、あああつ」

ガタガタと震え出し、浮き輪を力強く抱き締める。シロとクロが両サイドから慰めている間、浮き輪も霰の腕を撫でていた。前々から思っていたが、この浮き輪、何かにつけて的確。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

「大丈夫、大丈夫、アラレは何も悪くないよ」

「うん……みんな味方だからね……」

落ち着かせるのにも手慣れてきたのか、霰の禁断症状は瞬く間に薄れていく。シロクロの温もりが落ち着けるものだ判断しているのかもしれない。霰が目覚ましてからは常に一緒にいたシロクロだからこそ、ここまで早く終わらせることが出来るのだろう。

しばらくは2人に任せるしかない。私達ではここまでのことが出来ないのだから。

「……若葉、お前や三日月も、もしかしたらこうなっていたのか？」

長月に尋ねられ、私は首を縦に振る。私達は弱かったからこうなる前に死にかけ、そして、運が良かったから助けられた。

私も三日月もこうなる可能性は充分にあった。夕雲のようにされることだって、可能性だけならあった。平々凡々な駆逐艦だったが故にこれで済んでいるだけ。

「そうか」

以前、文月にも見えた静かな怒りが、長月にも垣間見える。治療されてもこれというのは辛い。

これから助ける者は全て、何かしらの傷を持つことにもなる。もしかしたら、長月達の姉妹にも、夕雲のように奴隷として働かされている者がいるかもしれない。霰のように人形にされているかもしれない。私達のように捨て駒として既に息を引き取っているかもしれない。

い。

「早く終わらせたいな」

「……ああ」

そうとしか答えられない。今はそうとしか言えない。

言葉にして

来栖提督の鎮守府に滞在して2日目。夕雲の処置は終わり、あとは施設の復旧を待つのみとなった。当初の予定では修復完了は明日の見込み。あの施設を2日ほどで直してしまう職人妖精の手腕が本当に恐ろしい。この鎮守府に滞在するのは今日明日の2日間。3日の朝から施設に戻るつもりだ。

処置が終わり、痛みを求めるようになってしまった夕雲は、まだ人前に出せる状態では無かった。霰のように誰かしらをずっと側に置いて回復に努めることも考えられたが、近くにいる者に暴行されることを求める姿を見ると、とてもでは無いが誰かを近付けるわけにはいかない。

「若葉さん、夕雲を殴りに来てくれたのですか？」

「そんなわけあるか。様子を見に来ただ」

演習の前に私、若葉は、夕雲が拘束されている飛鳥医師の部屋を訪ねた。こうなってしまう一因として、私が引つ叩いてしまったことがあるため、責任を感じている部分があったからである。

部屋には飛鳥医師はおらず、夕雲が1人寝かされているだけ。誰もいないわけにはいかないので、飛鳥医師も少し席を外しているだけだろう。

「具合はどうだ」

「すこぶるいいですよ。いくら殴られてもいいほど」

調子がいいのは嫌というほどわかった。

「痛みが、償うための痛みが欲しいんです。もっと、もっともっともっともっともっとも」と

「しつこいぞ。若葉はもうお前を殴らない。調子がいいならそれでいい。若葉はこれから演習なんだ。また後から来る」

この状態の夕雲と話していると、頭がおかしくなりそうだった。それに、よくわからない苛つきを感じる。このまま付き合っていたら、本当に手を出してしまいかねない。

私は逃げるように部屋から出た。背中に夕雲の声がぶつけられ続

けたが、それを無視して。

部屋から出た直後、前に立っていたセスにぶつかりそうになった。

「すまない」

「ごつちこそごめん。こんなにすぐ出てくると思わなかった」

いつも隣に付き従わせているエゴは、今は霰のところにいるらしい。たった一人でこんなところにいるとは珍しい。

「どうした？」

「……ちよつと考え事。ユウグモのことだ」

話している間も、セスは部屋の中に耳を傾けているようだった。私も少しだけ中を聴いてみると、先程のまま独り言が聞こえるだけ。禁断症状も発生しているようで、幻覚と幻聴に対して痛みを求め続けた。

セスはこの独り言に何か思うところがあるらしい。部屋を眺めながら難しい顔をしていた。部屋を睨みつけるように眼光が鋭い。

「ワカバ、演習はいいの？」

「ああ、行ってくる」

セスの表情は気になったが、時間もあまり無い。セスはここで知りたいことがあるようなので、飛鳥医師と共に夕雲を任せることにした。

セスも夕雲に追われてエゴに怪我を負わされた恨みはある。だが、夕雲に罪が無いことも理解してくれている。問題を起こすことは無いはずだ。それに、飛鳥医師も一緒にいるのだから心配は要らない。

午前の演習終了。今回も第二四駆逐隊に相手をしてもらう。相変わらず勝率は少し悪いが、昨日から始めた三日月とのコンビは回数をおこなす毎に良くなっている。同じ深海棲艦のパーツが使われているからかもしれない。

「大分息があつてきたな」

「はい……足を引く張らなくてよかったです」

「いや、若葉こそ三日月の足を引く張っていないか心配だ」

風呂も入り一段落。そのままの流れで夕雲のいる部屋へ。後から

また行くと言ったのもあるが、単純に心配でもある。禁断症状のたびにセスに痛みを求めているのだろうか。飛鳥医師にも何かを頼んでいるのだろうか。

部屋に入ると、ジツとただ夕雲を眺めているセスがいた。夕雲は夕雲でブツブツとまだ痛みを求める独り言を呟いている。飛鳥医師もどうしたものかと悩んでいる状態。

「演習、終わったのか」

「午前の分は今。昼ご飯の後に再開だ」

飛鳥医師に説明した後、夕雲の側に。私の姿を視認した途端、独り言は私に向けての言葉になる。

「若葉さん、来てくれたということは、痛みを」

「やらん。お前本当に懲りないな」

何も変わっていない。悪化しているわけでもないが、一切良くなるっていない。いや、良くなるうとしていない。この午前中も、ただ痛みを要求し続けるだけだったのだろうか。

と、ここでセスが立ち上がった。朝イチに部屋の前で出会ってからいままで、ただただここで夕雲を観察していたというセスだが、ここでようやく答えが出たらしい。

少し、嫌な匂いがした。キナ臭いとかそういうのではなく、純粹な感情の匂い。もしかしたら、これがシロの感じ取っている感覚的な匂いなのか。

「ユウグモ」

「……はい、なんででしょう」

おもむろに夕雲の拘束を外す。それはまずいと思ったが、飛鳥医師に静止された。飛鳥医師はセスの思惑を知っているようだ。何がしたいかわからない私には、一体何をしでかすのが不安で仕方ない。

「私に何か言うことはないか？」

「……貴女が痛みを与えてくれるのですか？ 罪を償うための痛みを

……」

拘束を全て外し終わった途端、セスが夕雲の胸倉を掴み、そのまま壁に叩きつけた。あまりにも突然のことで、夕雲も気が動転してい

る。当然痛みもあるが、求めていた痛みとは違うのか、反応できずに混乱している。

「ここで半日、ずっと聞いてたけどさ……ふざけてんの?」
「な、何を」

先程よりも鋭い目で睨みつける。夕雲は壁に押し付けられており、脚が浮いているほど。服と艤装が一体化しているが故に、夕雲を片手で軽々と持ち上げられる。ギリギリと絞められ、息もしづらそう。「なんだっけ、痛みが償いになるんだっけ? それもいいよ別に。だけどさ、本当に自分に罪があると思うなら、まず謝ってくれない? 私だって追われて、エコの片脚挽がれてんの。シロとクロなんて死にかけてるんだ。なのに、一度も謝ってないよな」

顔面のスレスレ、壁を殴る。

夕雲はこれまで、自分の罪を償うために痛みを延々と求め続けてきた。それも無いときは殺してくれた縫ってきている。だが、セスの言う通り、一度たりとも謝罪の言葉を口にしていない。罪の意識があるのに。

「私は昨日、霰とずっと接してきた。エコが癒しになるって聞いてたからね。その時の霰、禁断症状が出るたびにずっと謝ってた。シロとクロが慰めても、幻覚に向かってずっとだよ。でもさ、夕雲は何もしないよね」

夕雲は何も答えない。睨み付けるセスの目を見つめ、黙って話を聞いている。

「償いたいなら、死ぬとか痛みとかよりも先に、まず謝れよ。ほら、幻覚も死ねって言うってくるんでしょ。まずその人達に謝れよ。殺してしまつてごめんなさいって、何でそれが言えないんだ」

「……」

「死と痛みに逃げてるんだ。相手に一方的にやらせれば償えると思ってるだけだ。お前の気持ちはそれだけじゃ伝わらない。だけど、言ってくればわかる。今のお前、私には反省しているように到底見えな
い」

霰と違って、夕雲は姫級の体液を入れられている。意思無き人形で

はなく、人形を統べる傲慢な姫として活動していたのだ。自分に不利益になりそうなことを、無意識に除外している可能性もある。主人に對してどう振る舞っていたのかは知らないが、少なくとも今まで殺してきた相手に對して、謝罪の言葉は思い浮かばないような生活をしてきているはず。

考えることが出来るようにされてしまったが故に、完全に染み付いてしまった姫級の思考回路。それを払拭しない限り、夕雲に更生の道はないのかもしれない。

セスはそれを矯正しようとしている。私達では気付けなかった、姫級の思考を知っているから見出した、少し強引な方法。

「ユウグモ、ほら、言え」

「……なさい」

「もつとハツキリ言え！」

もう見た目は恐喝だ。脚が浮くほどに壁に叩きつけられ、謝罪を強制する姿は、いやでもセスが深海棲艦の姫級であることを思い出させる。

私達は何度も夕雲に罪はないと言い続けてきたが、セスだけはあえてそれを罪として認めさせる方向で変えていこうとしていた。一歩間違えばより悪化しかねない諸刃の剣。だが、先程した嫌な匂いは無くなっていた。いい方向に向かいそうな雰囲気を感じ取った。

他人が苦手なセスがここまで躍起になってくれているのは、少し嬉しい。ただでさえ、自分の居場所を追われた一因だ。近寄ることもないと思っていた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

「何に對して償いたいのか。漠然と償うとしか言わなかったら、ただ言わされてるだけになるよ」

「……夕雲は……夕雲は……」

セスのこの行動により、夕雲の秘めていた気持ちが溢れ出る。死と痛みだけを求めていた今までとは違う、治療され、壊れながらも持っている自分を曝け出していく。

「夕雲は……何も知らない生まれただけの仲間を……何も文句を言

わらない人形にされてしまった仲間を……捨て駒に、捨て駒にして、何人も、殺してしまいました……何人も何人も何人も何人も何人も何人も何人も何人も何人も何人も何人も」

禁断症状も重なった。焦点がぶれ、セスに視点が定まらなくなり、周りにいるであろう死者の幻覚に翻弄され始める。

「ごめんなさい、貴女は夕雲が撃ってしまった子、作戦中に反旗を翻したことで処分を命じられた子、ごめんなさい、貴女は海域攻略で捨て駒にされた子、死ぬのがわかっていても無視した子、ごめんなさい、ごめんなさい、貴女は、貴女は……」

幻覚の1人ずつに謝罪を始めた。目の前にいるセスはもう見えてもいかなかった。前までのように、死を求めることも、痛みを求めることもない。

夕雲は今まで自分の手で死んでしまった仲間達のことをしつかりと覚えているようだった。それ故に、この幻覚と幻聴はより強く夕雲を苛ませる要因になっている。

「ごめんなさい、ごめんなさい、夕雲が貴女達を、ごめんなさい、許してくれなんて言えません、ごめんなさい、でも、謝りたい、謝らせて、謝らせてください。ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

泣きじやくりながら謝罪を叫び続ける。そういえば、夕雲は死と痛みを求めた時ですら涙を流さなかった。薄ら笑いすら浮かべていた。それが今はこれだ。今まで壊れて表に出ていなかった感情が、セスの言葉が、そして謝罪の言葉がキツカケになり、爆発的に溢れ出てきていた。

「ユウグモ、これだけ言わせてこう言うのもアレだけど……貴女のせいじゃないよ。手にかけてしたのはユウグモかもしれないけど、それをやらせたのは別にいるんだから。夕雲は嫌でも逆らえない状態だったんだから」

「護衛棲水姫さん……」

「セスでいい。ここではそう呼ばれてる」

掴んでいた胸倉を離し、今度は抱きしめた。幻覚が見えなくなるよ

うに胸に顔を押し当て、後頭部を摩るように頭を撫でる。まるで、子を慈しむ母のようだった。

エコという艀装^{ベクト}を取り扱っているが故に持つている慈悲的な感情が、ここでも役に立っているのかもしれない。

「セスさん……ごめんなさい……戦いたくないという貴女を追い回してしまって……ごめんなさい、艀装を破壊してしまって、ごめんなさい、ごめんなさい」

「過ぎたことだから気にしないで」

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

かなり強引、かつ、大きな賭けのような方法ではあったが、夕雲の心構えはセスのおかげで変化し始めた。罪の意識はまだまだ大きい、少なくとも死と痛みを求めることは少なくなるだろう。ここから罪の意識をゆつくりと癒していければいい。

これで夕雲の禁断症状が無くなるわけではないことはわかっている。だが、少しくらいは緩和されるかもしれない。心持ちが変われば、幻覚も少しは変わるかもしれない。

「医者の方が諦めかけていた。誰よりも諦めちゃいけないのにだ」

「……ああ」

「深海棲艦の方が、余程相手の心がわかってるな。僕はカウンセラーではないが、今回の件で特に実感したよ。シロクロとセスがいなければ、霧はあそこまで回復しなかったし、夕雲もまだ痛みを求め続けていただろう」

飛鳥医師が安堵の息をついた。薬のない病をどう治せばいいかと考え、行き詰まり、頭を抱えていたところにこれ。早期解決を目指していたところに、思わぬ援軍だったようだ。

「皆には感謝してもしきれないな……」

「……若葉もだ。夕雲を突っぱねるしか出来なかったのは悔しい」

もう少しやり方があったと思う。少なくとも、私が引つ叩いたことは悪手だ。今考えれば後悔しかない。

ほんの少し、ほんの少しだけ、夕雲は前進出来たのだと思う。これは喜ぶべきことだろう。

休息の時

セスの説教により夕雲が考え方を少しだけでも変えてくれたおかげで、私、若葉の肩の荷が下りたように思えた。ああなってしまった一因に自分が含まれていたことで、やはり責任を感じていたのだ。それが変化してくれたのは残念でならないし、嬉しいことである。自分の力で解決出来なかったのは残念でならないし、取り返しのつかないことにも繋がったかもしれないと思うと正直怖かった。

夕雲には今はセスがついてくれている。あんなことを言った手前、放っておけなくなったらしい。エコは霰と夕雲で共用し、時間制にして癒しを提供。浮き輪は3体のうちの2体がそれぞれに常についている。残り1体は勿論三日月の側。

「若葉さん……良いことでもありましたか？」

どうやら態度に出していたらしく、三日月に指摘される。夕雲が前進出来たことは、私にも喜ばしいことのようなのだ。

先程の件を話すと、なるほどと三日月も納得。夕雲とはいろいろあったが、立ち直れる可能性が出てきたとなれば話は別だ。みんな祝福するし、仲間として受け入れる。

「霰さんも……良い調子そうですね」

「ああ、受け答えが出来たしな。シロクロとセスのおかげだ」

「はい……私も感謝しています」

抱いている浮き輪を撫でる。この光景も見慣れたものだ。三日月もセスのおかげでここまで回復出来たのだ。感謝もするだろう。

私もあの3人には感謝している。シロクロは助けてよかったと本心から思える。あの時の私の選択は間違っていなかった。雷の言う通り、いい方向に進んだ。

「あとは、霰と夕雲をどう対面させるかだな」

「帰るときは……絶対一緒に帰りますもんね……」

2往復したり、部隊を2つに分けるなどして帰ることも考えているが、狭い施設ではどうしても顔を合わせかねない。夕雲はまだマシかもしれないが、霰は異常をきたす可能性がある。シロもそれを警戒し

ている。

「そこは飛鳥医師も考えてくれているだろう」

「ですね……私達は襲撃のことを考えましょう」

施設が破壊されてから3日目。そろそろこちらにも何かしらの魔の手が伸びてきそうである。この鎮守府だからこそ、あまり心配はしていないのだが、あちらは非道な手段をさんざん使ってくる外道。

艦装は違法改造され、本人の自爆も当たり前。証拠隠滅を常に考えているため、攻めてくる方法も卑怯である。もし鎮守府そのものに対して攻撃してくるのなら、おそらく夜、誰も見ていないタイミング。前回は、前々回もそうだった。

「若葉達は一刻も早く強くなろう」

「はい……勿論」

施設を守るためにも、私達は強くならなければ。家村をどうにかしたとしても、同じようなことがまた起こらないとは限らない。これからのためにも、力を持っておくことに越したことはないだろう。必要が無いなら振るわないだけだ。

午後イチ、下呂大将から連絡があったらしく、明日に家村の鎮守府に対して抜き打ちの査察をすることが決まったそうだ。これにより、家村の悪事は白日の下に晒され、私達の戦いは終焉を迎えることになるだろう。

とはいえ、慢心は良くない。まだ襲撃がないと決まったわけではないのだ。それが来た場合を考え、万全の態勢で迎え撃てる準備だけはおく。少なくとも今日含めてあと2日はこの鎮守府に滞在させてもらうことになるので、その間にいろいろと出来ることをしたい。

「明日の朝、大将がうちに来る。件の鎮守府への査察が明日に決定したからだ」

その連絡を受けたことで、鎮守府全体で集会が行なわれた。私達もそれに参加させてもらい、今後の進め方を聞いておく。シロク口霰組とセスタ雲組は、参加することなく部屋で待機。お互いの対面も辛いが、今このストレスが溜まりそうな話はなるべく聞かない方がいいだ

ろう。

「敵鎮守府は大将の鎮守府から遠いんでな、ここ経由で向かうことになってる。ここまではいいな」

こういったブリーフィングは初めてだ。恐ろしい緊張感。おなじみ第二駆逐隊も、いつも楽しく演習をさせてもらっている第二四駆逐隊も、今だけは真剣そのもの。

「この査察で全て終わるとは限らねえ。どうせあの鎮守府のことだ、確実に抵抗するだろう。そうになると、この鎮守府を拠点とした戦闘が始まる可能性がある」

鎮守府同士の全面抗争だなんて、この深海棲艦との戦時下で馬鹿馬鹿しすぎるが、あちらはそういうことでもやってきかねない。それを先に知っておけば、心構えだけはしておくことが出来る。

「今日は自由だが、明日は戦闘配置で待機とする。念のため、本日午後からの業務は休止、各自身体を休めておけ。風呂に入りや問題無エかもしれないねエが、大事なのはメンタルだ。余裕を持って明日に備えろよオ」

午後からも演習の予定だったが、そうなってしまっただけは仕方ない。休息も仕事のうちだ。いくら入渠で全回復出来る艦娘とはいえ、心の問題は簡単にはいかない。

前日にリラックスしておくことで、心身共に万全な状態で明日を迎える。何事も無いのならそれでいい。備えあれば憂いなしである。

「うし、それだけだ。何か質問はあるかア？」

シンと静まり返った集会場。今から休息の時間だというのに、既にする気満々な者もいるほどである。明日を待ち遠しそうにする者まで。

「いいな。よし、じゃあ解散！各自、しっかり身体を休めろよオ！」
集会はこれで終了。私達も来客とはいえ、今は所属艦娘扱い。例に漏れず、休息を与えられることになった。

身体は風呂やら何やらで充分に休まっている。今からは心の休息の時間だ。

急な休みということ、みんな大概やることもなく、外を散歩したり、談話室でお喋りに興じたり、昼寝したりと様々な過ごし方をしている。私達はというと、本格的にやることなく、なんだかんだ自室待機となっていた。

施設にいるときでも、こんなにまったりした時間が流れるようなことは無かった。艀装の整備や、家事の手伝い、飛鳥医師の手伝いで雑用をしたりと、思った以上にやることがある。だが、ここは私達の本来の居場所ではない。むしろ施設でやっていたようなことは何一つとしてやれない。

「暇だな」

「そうですね……」

結果的に、ものすごく暇な状態になってしまった。私はベッドの上でうだうだ寝そべり、相部屋の三日月も、暇そうに浮き輪と手遊びに興じている。他の浮き輪達は霰と夕雲のところに常駐。エコは今は夕雲の部屋。

「摩耶は明石と艀装の話をしているらしい。雷は鳳翔に料理を習うつて言ってたな。曙はどうしてるんだ？」

「さつき釣りに行くのを見ましたよ。ボーツとするには都合がいいと」

曙は釣りに興味を持ったらしく、この鎮守府の釣り好き達に便乗して海に繰り出したらしい。施設の修復が完了しあちらに戻った後も、釣りは続けていくかもしれない。あの中立区の海に魚がいるかは知らないが、いい趣味を手に入れたものである。

「三日月ちゃん、いる〜？」

と、ここで文月が訪ねてくる。あちらも暇を持て余しているようだった。簡単なお茶会のお誘いに来たようだ。

私達施設の者は、姉妹と話せる時間がなかなか手に入らない。特に私は、この鎮守府には姉妹がいないそうなので機会すら与えられない。こういう時こそ、三日月は外の艦娘との交流に使うべきだろう。特に文月達はいろいろと恩人だ。尚のこと交流しておくべき。

「若葉は夕雲の様子でも見に行ってくる。たまには姉に甘えてこい」

「甘えるだなんて、そんな……」

「甘えてくれてもいいよ。あたし達大歓迎」

姉故に妹には甘々のようである。姉妹水入らずのお茶会を楽しんできてほしいと思いい、私は三日月と一旦別れ、夕雲の部屋へと向かった。

夕雲は今、拘束も外されて療養状態。飛鳥医師は今後のことを話すために部屋にはおらず、セスがずっと付き添っている。室内なら歩き回ってもいいとされ、今はエコを撫でて癒されていた。

「ワカバ、暇そうだね」

「現に暇だ」

「急な休みなんでしょ。仕方ないよ」

夕雲も私に気付いたようで、微笑みながら会釈。午前中までとは雲泥の差。死も痛みも求めなくなり、穏やかな雰囲気になっていた。気の持ち方が変わったただけでこうも変わるかと驚いてしまう。

「夕雲、調子はどうだ」

「すこぶる……とは言えませぬ。少し気怠さが」

投与され続けていた麻薬の副作用、喪失感が気怠さを引き起こしているのだろう。私がここに来るまでの間に何度も禁断症状に襲われているようだし、精神的にも疲労はしているのだと思う。

それでも、夕雲の表情は少しだけ明るかった。人形にされていた霰とは、意思を持たされていた分、そういう部分に影響が出たか。受け答えもハッキリしているし、意思表示もしっかりしている。

「若葉さんにもご迷惑をおかけしました……夕雲、大きな勘違いをしていたように」

「別に、わかればいい」

「悪いことをしたら謝るなんて、子供でもわかること。それが頭に無くなるなんて……」

なるほど、これが本来の夕雲か。19人姉妹の長女と聞いたが、それ故にとてもしっかりもの。

「若葉さんにも謝罪しなければいけませんね。あの時、戦闘中に罵詈雑言を捲し立ててしまいました。本当にごめんなさい」

「構わない。あれは言わされていたようなものだろう」

「それでも……あの時は夕雲の意思でした。ごめんなさい。ああ……貴女はあの時にリミッターを外してしまった子……ごめんなさい、夕雲のせいだ」

実に自然に禁断症状が発症していた。私と話している間に、私の周りに死者が現れたようだった。それを見たことで、私達には見えない者に謝罪を始めてしまう。私も見えているかわからない瞳になり、あらゆる方向に向かって話し始める。

「ユウグモはそういうカタチになったんだ」

「……ああ」

事情を知らない者が見ても、今の夕雲は精神的な病に苛まれていることがすぐにわかる。ただただ怯え続ける霰とは違い、意思を持って幻覚と対話してしまっている夕雲は、より一層痛々しい。

「ごめんなさい、みんな、みんな覚えています。貴女はあの海域で、貴女は鎮守府で、夕雲の命令で命を落とした子……ごめんなさい、ごめんなさい。でも、夕雲は死ぬことは出来なくなったの……死んだら貴女達に謝れないもの……もつと、もつと、もつともつともつともつともつともつと謝らなくちゃいけないもの」

触れようとしているのか、触れているのか、何もないとところに手を伸ばして、ただただ謝罪をするのみ。だが、その姿に以前に見た哀れさは感じない。真に自分の罪と向き合っているように感じる。

「私はしばらく夕雲につくことにするよ。霰についてるシロクロと同じだね」

「そうか。任せた」

「任された」

霰の名前が聞こえたからだろうか、夕雲が急にこちらを向く。まだ幻覚の死者は周りにいるのかもしれないが、それよりも優先することと認識したか。

「霰さんにも謝りたいのですが……」

「今は難しいから我慢してくれ。霰には刺激が強すぎる」

「そうですか……」

残念そう。生き残った霰をしつかりと殺そうとした記憶は、夕雲にとっては洗脳されていた時の最後の記憶になるだろう。そのため、一際謝罪したい気持ちは大きいようだ。

「ユウグモ、みんなはいなくなっただ？」

「……はい、今は」

「ならこっち」

セスに手招きされ、素直にやってくる夕雲。そしてそのまま抱きつく。

「まだ、まだ、謝り足りません……夕雲の罪はまだまだいっぱいです……」

「やらされていたことなんだから、ユウグモの罪じゃないよ。大丈夫、ユウグモは悪くない。悪くないんだ」

まるで母に泣き付く子供のようだった。ゆっくりと後頭部を撫でながら、シロクロが霰に話すように、夕雲には罪が無いことを説いていく。大丈夫、大丈夫と言い聞かせ、ゆっくりと、しつかりと禁断症状を払拭していこうとしている。

夕雲はまだ危うい。いつまた壊れてしまってもおかしくない綱渡り状態だ。今でこそ謝罪という行為で安定しているが、突然崩れて痛みを求め出すかわからない。それまでに、セスが更生を盤石なものとしていつている。

「ユウグモ、今日の夜からは私の部屋で寝よう。相部屋だった摩耶には話をしてあるし、先生にもオッチャンにも通してある」

「……はい……お願いします……」

今の夕雲は、霰と同じように1人にしておくことは出来ない。結果、セスが常につく形で収まった。アニマルセラピーのこともあるし、シロクロ霰が3姉妹なのに対し、セス夕雲は親子のように見えてしまうが、それはそれ。一番癒される状態を作っていくべきだ。

少しずつ、少しずついい方向には進んでいる。決着がつくのも目前だ。明日には下呂大將が終わらせてくれる。そうすれば、私達はまた、『楽しく生きる』ことが出来るはずだ。

決戦の日

家村鎮守府の査察が明日と決まった日の夜。午後が全て休息の時間に割り当てられたためか、翌日の決戦に身体が熱を持っているのか、少し寝付けない私、若葉。目が冴えているというよりは、単に眠気が来ない。別に昼寝をしていたとかそういうことは無いのだが、妙に興奮している。

上手くいけば明日全て終わる。それが、私を昂揚させる一因となっているのだろう。結局私自身の手で決着をつけることは出来なそうだが、無駄な脅威に怯える必要は無くなる。続けていくつもりではあるものの、訓練だって今ほどの必要は無くなるだろう。

「……若葉さん、起きていますか」

「ああ」

ボソリと三日月が呟いた。おそらく私と同じ。私も三日月も同じ境遇で今の身体になり、同じ人間に恨みを持っている。何もかもとは言わないが、ほぼ同じ道を歩いてきた。

「……いよいよ、明日です」

「ああ」

「私達の因縁が……終わるんですよね」

「……ああ」

そう思いたい。あちらは抵抗もするのだと思う。今まで証拠隠滅に奔走し、秘密裏にあらゆる違法行為を繰り返してきたのだから、今回の査察もどうかして揉み消そうとするはずだ。

抜き打ちで行なわれるのだから、それはもう下呂大将を消すしか方法は無い。事故死と見せかけるなり何なりで、査察部隊を全滅させてしまえば、あとはあることないこと話すだけ。死人に口無しである。

だが、あの神風を率いる下呂大将だ。そんなことが起きるとは到底思えない。明日できっと全てが終わるのだ。

「何も無いことを祈る」

「……ですね」

終わると信じていても、不安にはなるだろう。安心を得るために、

私は三日月のベッドに潜り込む。少し驚かれたが、三日月も温もりを求めていたようで、拒むことなく受け入れてくれた。

「この方が落ち着くだろう」

「……そうですね。ありがとうございます」

これならお互い、寝つきも良くなりそうだ。

早朝、早速下呂大將が来栖鎮守府に訪れた。ここまでは陸路で来たらしく、まるゆ運転のとてつもなく大きな装甲車が鎮守府の前に停められ驚いた。相変わらず、車のサイズとはまったく合わない運転手である。

家村の鎮守府は地続きではなく島。陸には比較的近いものの、橋がかけられるような場所でもなく、行き来は基本的に船になる。艦娘には苦ではないが、下呂大將には面倒な場所な様子。ここまでは陸路だったが、ここからは海路。

私は来栖提督や飛鳥医師と共にそれを出迎えた。まるゆの姿が見えたとき、手を振られたので振り返しておく。まるゆは運転のためにここに来ているため、査察が終わるまでは来栖鎮守府で待機となるそうだ。

「久しぶりですね。では少しだけ準備させてもらえますか」

「ウツス、こちらも用意してありますんで、ここから出撃してください」

下呂大將はいつもの穏やかな表情だが、奥に確固たる意思を感じる。お茶と畳の匂いの他に、鉄と油、炭の匂いがした。大將手ずから艦娘のために動いていたような匂い。

「飛鳥、夕雲の処置が終わったと聞きました。私の部隊の準備をしている間に、少し会ってもいいでしょうか」

「はい、大丈夫だと思います」

飛鳥医師が下呂大將を部屋に案内した。残されたのはまるゆと、装甲車から降りてきた下呂大將の部隊。

こういう場に連れてくるということは精鋭部隊なのだろう。秘書艦である神風があればほどの強者なのだ、この部隊も相当な手練れだと

思われる。

「やっぱり貴女達よね、こういうときは」

現れた駆逐艦4人を神風が出迎える。その全員が神風と同じような着物を着ており、同じように帯刀していた。それに、神風と同じお茶と畳の匂い。おそらく、いや、確実にアレは妹。4人なら駆逐隊か。「はいこれ。司令官が神風姉のだって」

「何これ、私ちゃんと持ってるわよ」

「今回の査察で使うだろうっていう新装備」

その先頭、青い袴の駆逐艦が神風に刀を渡す。見た目は同じだが、何やら仕様が違うらしく、査察で鎮守府側に対抗された時に確実に役に立つとのこと。その刀から何処かで嗅いだことがある匂いがしたが、今は気にしないことにした。

「あら、アンタが神風姉の弟子？」

私の視線に気付いたようで、4人共々私の方へ。どうやら私は、神風の中では弟子という立ち位置らしい。間違っではないか。

「おはよう！ 私は朝風。第五駆逐隊の旗艦やらせてもらってるわ」「若葉だ」

青い袴の駆逐艦、朝風。思った通り神風の妹。この4人を纏めているだけあって、匂いから考えるなら4人の中では一番強く感じる。お茶と畳の匂いの中に、努力を感じさせる匂いを感じた。微かに汗と、それを洗い流した石鹼の匂い。

「神風と同じ匂いだ」

「えっ、臭う!？」

「若葉は鼻がすごく利くの。そういう匂いじゃ無いわよ」

すぐに匂いのことを言うのは誤解を生みそうだから控えた方がいいか。我ながらダメなクセを持ったものである。匂いで敵か味方か判断しているところもあるので、こればかりはやめられそうにないが。

「神風の姉貴の弟子だって？ それだけ見込みがあるってことかな」

「貴女ならすぐに追い抜かれるかもね」

「へえ、そいつは楽しみだ。今度是非とも手合わせ願いたいね」

妙にキザったらしいのが緑の袴の駆逐艦、松風。その後ろでクスクス笑っているのが桜色の振袖の春風と、黄色の羽織りの旗風。仲のいい姉妹であることが見て取れる。

念のため、本当に念のため全員の匂いを注意深く嗅ぐが、当然ながら敵の匂いはしないため一安心。下呂大将を疑っているわけでは無いが、これはやっておかないと。

「わたくし達は、お仲間として見ていただけましたか？」

「ああ、落ち着く匂いだ。仲間として心強い」

「そう言っていたら嬉しそうですね」

落ち着いた雰囲気の後ろ2人。私達で言うなら、朝風松風が前衛、春風旗風が後衛というイメージ。だが、4人が4人、全員帯刀。穏やかでそんなタイプに見えない2人も前衛の動きをするようだ。少し意外。

「阿武隈さんは？」

「ちゃんと来てるわ。司令官のために大発いるし」

「いるよー」

後ろから来たのは軽巡洋艦、阿武隈。少し大人しいように見えるが、神風まで含んだ駆逐艦5人を束ねる水雷戦隊の旗艦。

「今日は無茶しないでね？ あたし結構大変だからね？」

「保証出来ないわ」

「後ろに阿武隈さんがいると思うと、安心して攻め込めるんだ。頼りにしてるよ隊長」

水雷戦隊内の力関係がよくわかった。この旗艦、部下に大分振り回されている。とはいえ、5人の前衛をたった1人で支えられるというのは、相当な実力が無ければ出来ない。

「春風ちゃんと旗風ちゃんくらいは……その、お願いね？」

「その……申し訳ございません。わたくしもその保証は……」

「春姉さんと同じく……」

「うわーん！ 言うこと聞いてくださーい！」

なんとというか、決戦だというのに随分と余裕があるように見えた。歴戦の水雷戦隊ともなると、ここまでの緊張感ある戦いを前にしても

動揺を一切見せないようだ。

緊張している自分はまだまだ浅い。実際戦闘経験も片手で数えられるほどしかないとはいえ、その豪胆さは感服する。

「若葉、阿武隈さんはどういう匂いなの？」

「……整髪料の匂いだ」

とは言っておいたが、この阿武隈、誰よりも努力の匂いがする。さすが水雷戦隊旗艦。染み付いた汗と涙の量は並大抵のものではない。

神風型の5人も、阿武隈のことは悪くなんて思っていない。これもいつもの流れなのだろう。阿武隈に対する感情は、感謝や尊敬に繋がっているものだ。

「はい、じゃあ出撃の準備をしようね。今から査察だし、反撃されてもいいように万全の準備をしてね」

「ようし、姉貴、さっさと準備しようぜ」

「わかってるわよ。アンタこそもたつくんじゃないわよ」

なかなか騒がしい部隊だが、匂いからだけなら信用に値する実力者が揃っている。鎮守府1つを制圧することも、無理ではないのだろう。

少しして、下呂大將が工廠へ。夕雲との対話は終わったようだ。満足げな表情を見る限り、有意義な時間が過ごせた模様。

「まさかあそこまで回復しているとは思っていませんでした。ここからが本番だとは思いますが、時間をかければ必ず元の夕雲に戻れるでしょう」

夕雲もちゃんと受け答えが出来ていたみたいで何より。途中禁断症状に襲われていたかもしれないが、下呂大將はそれで動揺するような人ではない。

「来栖、すみませんね。大発動艇を借りてしまつて。万が一破壊された場合は、新品を返させてもらいますよ」

「好きに使ってくださいエ」

既に大発動艇は阿武隈が装備済み。いつでも動かせるように海に置かれていた。

今回は何かあるかわからないというのもあるため、工廠内も外も厳戒態勢。近海には警備隊を複数置き、工廠にも艦娘を複数配置。かくいう私達第五三駆逐隊も、艤装装備で下呂大将のお見送りに参加している。

あくまでも抜き打ちの査察だ。事前に一切の通達をしていないため、対抗されるなら鎮守府近海だろう。ここまでの厳戒態勢は念のため。

「それでは、我々が終わらせてきます。一筋縄ではいかないでしょうが、まずはいい方向に持って行きますよ」

「なんて言いながら壊滅させるんだろうなア」

私もそうだと思う。

「ですが、その前に。厳戒態勢に潜水艦は？」

「勿論置いてますぜ。曙の件が衝撃的だったんで」

当然、潜水艦対策も万全。曙殺害の時のように、察知出来ずに工廠まで潜り込まれてはたまったものではない。

「ならば、対空砲火の用意を。このタイミングを狙ってくるはずです」

「このタイミングって……まさか!？」

「襲撃です。私と来栖、飛鳥が鎮守府に纏まっている時に、全て破壊できるこのタイミングでしょう」

などと話している時、外に出ている警備隊から緊急通信。その先頭にいる足柄の声が工廠に響き渡る。

『こちら警備隊！ 滅茶苦茶な数の爆撃機が来たわよ！』

「対空用意だ！ 足柄、お前はその後来る可能性のある本隊迎撃に備えろ！」

『了解！ 漲ってきたわ！』

やはりと苦い顔をした下呂大将。嫌な想定ほど当たってしまうものである。

工廠内は急にバタバタし始めた。こうなった時を想定して、いろいろと配置されているのだ。空襲だって視野に入れている。

「防空するぞ！ 臯月、文月、お前達を先頭に、鎮守府を守ってくれい！」

「りよーかい！ みんな、行くよー！」

第二二駆逐隊を筆頭に、防空に長けた艦娘達が一斉に工廠の外へと飛び出す。警備隊があそこまで言うのだから、外にいる者だけでは処理しきれない数の爆撃機が来ているのだろう。

鳳翔も空母隊を引き連れて、対空戦力を発艦。鎮守府防衛は最重要事項だ。何としてでも成功させなくてはいけない。

「なんだあれは……」

工廠の外、空に鳥の群れのような大量の影が私達にも確認出来た。あれ全てが爆撃機。絨毯爆撃とかそういうレベルでは無い。鎮守府を完全に包囲した後、跡形もなく消し飛ばすほどの数だ。

白昼堂々の襲撃なだけあり、大胆かつ圧倒的な押し潰し。全て破壊した後、どうにか揉み消そうという算段か。さすがにこの規模では取り返しがつかないと思うのだが。

「大将は少しくらい避難してくだせエー！」

「この機に乗じて潜水艦も来ると思います。潜水艦隊には警戒させてください」

その瞬間、今度は潜水艦隊からの緊急通信。数人ではあるが、来栖鎮守府の精鋭潜水艦隊、その隊長である伊168の声が響き渡る。

『潜水艦来た！ 魚雷とかやつちやつていいの!?!』

「お前らの魚雷は演習用のダミーだ！ 死にやしねエからぶちかませ！ 自爆だけは気を付けろオー！」

『了解！ みんな、容赦なくやつちやうわ！』

訓練用の魚雷とはいえ、当たれば痛いし、爆発すれば怪我はする。だが殺すことには繋がらない。潜水艦同士の戦いに魚雷は殆ど意味はないのだが、牽制にはなる。

「こうなるのでは無いかと予想はしていたのです。若葉ではありませんが、少々嫌な匂いを感じていたものですから」

「大将、どういうことですかい」

「私よりも上、この査察を許可した大本営に、家村との内通者がいるという事です」

あまり信じたくはありませんが、と心底嫌そうに吐き捨てる。下呂

大将もこの状態はうんざりしているようだった。

大本営にそういう者がいるということは、万が一本当にここが全滅したとしても、有耶無耶に出来る力があるということだ。今までもそうしてきたのかもしれない。下呂大将のことだから、徹底した調査の中でそこにも辿り着いている可能性がある。

あくまでも可能性だったため、混乱を防ぐために表沙汰にしなかったようだが、この襲撃により可能性が確定に変わった。

「今はこの襲撃を耐え切りましょう。空襲はどうです」

「足柄、そっちはどうだア！」

『防空隊のおかげで空襲は拮抗よ！ だけど、本隊が来たわ！』

「ここも想定通り。足柄達警備隊は、本隊迎撃に入る。どれだけの数で押し潰そうとしているのかはわからないが、警備隊だけでどうにか出来るとは限らない。」

「第一水雷戦隊、迎撃準備。少しわからせてあげなさい」

「了解。第一水雷戦隊、旗艦阿武隈、出撃します」

下呂大将の部隊も迎撃に乗り出す。ここをどうにかしなくては査察も出来ない。

「飛鳥医師、我々も行くぞ」

「ああ、頼む。先生の道を切り開いてくれ」

「了解」

私達も出撃する。数で押し潰そうとしてくる相手には、こちらも数が必要だ。準備が済んでいる私達が先陣を切る必要があるだろう。それに、私達はこの時のために訓練を積んできたのだ。今やらずにいっやる。

「第五三駆逐隊、いいな？」

「大丈夫！ いつでも行けるわ！」

「さっさと行きましよ。ウザい連中をボコボコにしてやらないと気が済まないわ」

「……大丈夫です。イラついてきましたが、大丈夫」

全員準備万端。これなら行ける。訓練の成果を見せつけてやろう。

「第五三駆逐隊、旗艦若葉。出る」

痛みある解放

下呂大将の抜き打ち査察が決定したものの、その出発直前に襲撃を受けた来栖鎮守府。今までの経験からしっかりと対策し、今のところはそれに対して苦戦をすることはない。

猛烈な空襲には文月筆頭の防空部隊と鳳翔筆頭の空母隊が向かい、制空拮抗。曙殺害の件がある海中からの狙撃は、来栖提督の判断で潜水艦隊を既に配置済み。これで残ったのは、本隊の襲撃と、自爆の危険性。あちらは味方の被害を考えずに回避すらせず突っ込んでくる恐れまである。

どれだけの艦娘を保持しているのか知らないが、この数を用意している辺りよくやるものである。下呂大将が内通者がいると言っていたが、パトロンなのだろうか。

私、若葉は第五三駆逐隊として、本隊迎撃に参加。下呂大将率いる第一水雷戦隊を追うように戦場へ。鎮守府の方にも大分艦娘は残っているため、突撃からの自爆さえ注意しておけば、おそらくは大丈夫。その自爆を止める術が無いのが厄介だが。

「薬と火薬の匂い……全員自爆出来る準備がしてある」

「……リミッターは」

「おそらく解除されている。目がおかしい」

人形と思われる艦娘達は、みんな目が血走り、血管が浮き出ているような状態。このままだと確実に命を落とす。だが、気絶させても解除されたリミッターが戻ることはない。

これをどうにか出来るのは、姫級の深海棲艦だけ。私と三日月はパーツを持っているだけなので止めることは出来ない。シロクロカセスの呼びかけでなくては無理だが、その3人は今は別の仕事だ。

霰も夕雲も、この戦いに心を痛めている可能性が高い。誰かが側にいなくては崩れる。離れるわけにはいかず、心の安定に努めてもらう。

「雷、三日月、人形を気絶させてくれ。顔面に当てれば止まるくらいはする」

「了解。イライラをぶつけます」

「三日月、あんまり荒っぽくなっちゃダメよ。辛いなら私に頼ってくれていいんだからね！」

雷は持ち前の器用さを使ったヘッドショットで、人形を確実に気絶させていく。三日月はその危機回避能力から、一番来てほしくないところの人形に攻撃。私と曙は自分への被弾を心配することなく、戦場の真ん中まで来ることが出来た。

「後衛が強いと私らが楽でいいわ」

「ああ。万全な状態でここまで来れる」

敵は部隊1つや2つでは無かったため、乱戦となっていた。

その全てが人形であり、リミッターが外され、異常な強化がされている艦装を扱っている。駆逐艦とはいえ侮れない火力を誇り、戦艦クラスともなるとエゲツない砲撃。ただし、それを放つたびに本人にガタが来るらしく、完全な使い捨てであることがわかる。

その中に1人、見知った顔を見つけた。風雲である。

「また会ったな」

「ええ。今回はちゃんと考えてきた。前のようにはいかないわよ」

神風の存在から、内火艇は持ってきていないようだ。対地攻撃は全て別の者に任せ、迎撃の部隊を返り討ちにするための主砲装備。

「呂500もいるのか?」

「さあね。自分の心配した方がいいんじゃないかしら」

「お前がな」

私の背後から、三日月が容赦なく顔面に水鉄砲を砲撃。人形でも気絶するくらいなのだから、意識を刈り取るくらいは簡単に出来る。だが、簡単に避けられた。前回戦った時より、動きが速くなっている。さらに改造を受けたか。

避けられたことで小さく舌打ち。やはり元凶との戦闘では、三日月は少々荒っぽくなる。

「当然、私だって強くなっているわ。それくらいわかるでしょ」

「ああ。何も対策しないでここに来るなんて思っちゃいない」

と言いつつも、真っ向勝負ではなく、乱戦の中に紛れていく。4対

1は流石に不利と悟ったか。追おうと思った時には人形が風雲を隠すように行動していた。

今見ている感じ、人形ではないのは風雲だけ。あとは全員人形だ。鎮守府側に出没した潜水艦と、爆撃をしている空母隊はまだ見ていない。警備隊は人形より先に敵空母隊を叩きに行ったようで、足柄達の姿もここには無かった。

「風雲を追う」

「そう行きたいところなんだけどさ！ 人形が鬱陶しいわ！」

乱戦に突入させられ、流れ弾がこちらに飛んでくるなかなか面倒な状態に。風雲を追いたくても、人形が邪魔で姿を視認したままでいることで精一杯。雷と三日月が人形を退かすために砲撃するが、風雲の近くの人形なだけあり、回避性能が今までとは違った。処理が出来ない。

「やあ！ 僕達が露払いをしようか！」

「邪魔な人形、退かしてあげる！」

そこに飛び込んできたのは松風と朝風。2人共、刀は鞘に納め、抜刀の構え。

神風のそれは一度見ている。流れるような刀の動きの後、自分よりも大きな内火艇がバラバラにされていた。太刀筋も見えぬ早業だったくらいしかわからなかつたほどだ。

だが、この戦場で何をするのか。峰打ちで気絶させるとかか。

「キミ達が意思を持たなくてよかつたよ！ 悲鳴でもあげられたら困るからね！」

神風とは違う、力強い抜刀。その剣閃は確実に人形の腹を斬り払い、血をぶち撒ける。

いやいや、敵は洗脳されており、意思を奪われているとはいえ艦娘だ。なるべく無傷で鹵獲し、自爆装置を外して治療したいところだ。現に誰も敵に殺傷武器を使っていないし、気絶させるだけで済ませているくらいなのに。

「お、おい、お前らー！」

「何よ」

朝風のスラリと抜いた刀が、松風の時と同じように人形の腹を搔つ
捌いた。当たり前のように血がぶちまけられ、海を赤く染める。

「相手は艦娘だぞ！ 殺すな！」

「殺していいさ。よく見てみなよ」

松風に言われ倒れた人形を見ると、服は切れているし血は出ていた
が傷は無い。確かに私はこの目で傷が出来るのを見ている。何なら
薄らと内臓すら見えた。私以外にもだ。何が起こったのかわからず、
雷は混乱し、曙と三日月は茫然としていた。

「この戦いのための特注の刀なんだ。こいつの刀身は高速修復材で出
来ていてね、艦娘を斬っても、その傷を即座に治すのさ。流石に首を
斬り落としたら治る前に死んでしまうけどね」

「だけど、身体の中にある艦娘とは関係ないものは容赦なく叩つ斬る
わ。そういうことか、わかるわよね？」

ここ最近襲撃してくる奴隷と人形には、自爆装置が埋め込まれてい
る。それはちようど今、松風と朝風が斬った場所にあった。腸に紛れ
込ませて仕込まれた起爆装置。艦娘諸共それを斬り、刀の効果で艦娘
だけを治療した。こうなれば、外部からの自爆の心配も無くなる。あ
とからゆつくり体内から起爆装置と火薬を回収すればいい。

だが、斬られているのだから当然酷い痛みを生じる。人形だから叫
ぶことも無かったが、奴隷に同じことをしたら……そもそも人形だつ
て、こうしている記憶は持っているのだ。考えるだけでもゾツとす
る。

「僕らは人形達を確実に斬り伏せる！ まんまと逃げ果せたお姫様は
キミ達に譲るよ！」

「さっさと追いなさい！ アイツがすぐに自爆するようなことなんで
無いでしょー！」

飛んでくる流れ弾をヒョイヒョイ避けながら、私達に指示をくれ
た。リミッターを外された人形はいずれ沈んでしまう。それだけは
どうにも出来ないのが悔しい。

海中から呂500が人形に指示を出していたことを考えると、ある
程度許容はされていると思う。スピーカー越しでもどういいうわけ

だが指示を判定していた。だが、それは呂500だから通っている可能性もある。直に命令する、もしくは、呂500が命令するというのが人形の意思の書き換えか。

「くそ、今は先に行くぞ。死ぬ前に鎮守府に連れて行くことが出来ればいいんだが……」

この中の姫級扱いの艦娘は、見えている限り風雲だけだ。少なくとも、風雲を倒せばこの場は収まる。

「速攻で終わらせて、全員運ばいいわ。シロクロやセスに命令してもらって、ギリギリで止めれば済む話よ。死ななきゃどうとでもなるわ」

「ああ、なら早く終わらせないと」

スピードなら第五三駆逐隊では私の専売特許だ。人形達が後どれくらい保つかはわからないが、なるべく早く終わらせて救出したいところ。

乱戦に神風型が加わったことで、徐々にこちらが押し返す形になってきた。5人の剣豪が人形達の自爆装置を着実に破壊していき、リミッター解除によるタイムオーバー以外では心配が無くなる。

とはいえ、自爆装置が無くなっただけで、意識を失ったわけではない。動きは鈍るが戦闘は続行。

「しつこいわね」

「ああ」

乱戦の中を逃げ回る風雲に追いついた。人形を盾にしながらも的確にこちらを砲撃してくる風雲は、私達の顔を見て心底嫌そうな顔をする。

「悪いが、時間がない」

一番槍は私だ。今は怒りも恨みも控えめのため、戦闘の昂揚だけの四肢の疼き。それでも、改装されたおかげで前回の戦いよりも素早く動ける。そして今回は、演習により連携を強化された状態だ。4対1という数的優位もあり、戦いやすさは今まで以上。

事前準備と訓練により、今まであまりいい形に進まなかった戦闘

が、理想的な形に進んでいく。これで全員救えれば尚良いのだが。

「いい加減にしてよー」

風雲の砲撃が開戦の合図。狙いは私だったようだが、撃たれた時には既に回避済み。キナ臭い匂いで私が狙われていることはすぐにはわかったため、撃つ瞬間には回避行動を取っていた。さらには、その後ろに控えていた三日月も、危機回避能力でしつかりと回避。

神風が言っていた、撃たれてからでも避けられるのが、少しだけわかった気がする。

「いい加減にするのはお前だ」

「迷惑してるんです。そつとしておいてもらえますか」

回避すると同時に三日月が、今度は避けづらい胸を狙った砲撃。イライラをぶつけるように2度3度と立て続けに放つが、それは踊るように躲す。

だが、回避直後に脚を雷が撃ち抜いた。避ける方向まで考えられた、的確な一撃。器用な雷だから出来る、ピンポイントな砲撃。

「つくつ!？」

「さすが雷、いいところを狙う」

僅かとはいえ、それだけの怯みがあれば、私は近付ける。即座に風雲の背後に回り、艦装を破壊するためにナイフを突き立てる。が、これは流石に大胆すぎたか、急速に前進されることで回避された。相変わらずタービンだかの違法改造によって滅茶苦茶な機動力である。

とはいえ、その回避は狙ってやらせてものだ。私が背後に回り、三日月と雷が砲撃で左右を塞いでいたため、前しかない状況を作っている。

「避けるんじゃあ、無いわよー」

曙が真正面から槍を薙ぎ払い、横っ腹に潰れた刃を喰い込ませた。

今までならこれも回避されていただろう。一朝一夕とはいえ、連携に特化した訓練を延々と繰り返したおかげで、合図無しにでもここまでの連携は可能になった。全員が全員、ここにいて欲しいという場所にいる。訓練の賜物。

「しぎとー」

「その邪魔な主砲、ぶっ壊してやるわ！」

腹をやられて動きが止まったところで、身を翻し回転をかけた突きを繰り出し、風雲の持つ主砲の砲身へ突き入れる。放つ間も無く主砲は破壊され、攻撃手段の1つが失われた。

まだ魚雷はあるため油断出来ない。私が近くにいるため、なかなか撃てないようだが、自爆覚悟の攻撃はいつでも用心しなくてはいけない。

「こっのお……！」

「今は寝ててー！」

主砲が破壊されたことで一瞬動揺を見せたのを見逃さないのが雷。曙の陰から見事なヘッドショットを決め、風雲の脳を揺らす。一瞬白目を剥きかけたようだが、意識を手放すことなく、逆に雷を睨みつける。

「まだ……」

「寝てろと言っているでしょう」

さらに追加で三日月がヘッドショット。逆方向から揺さぶられ、今度こそ意識を手放させた。倒れる寸前で私が艤装を半壊させ、万がまだダメだったとしても、航行不能の状態に持っていく。あとは自爆だけどうにか出来れば、風雲は終わりに出来る。

「神風型！ 誰か来てくれ！」

「お任せください」

近くにいたのは旗風。ゆったりとこちらに来て軽く刀を振ると、人形の時と同じように風雲の腹から血がぶち撒けた。が、服が切れただけで傷はない。内部の自爆装置だけしっかりと破壊されている。

当然気絶していたとしてもとんでもない痛みを伴う。旗風に斬られたことにより、気絶させられていた風雲は覚醒。腹の痛みに苦悶の表情を浮かべる。脂汗を浮かべ、悲鳴を我慢しているようだった。

「なに……したのよ……!?!」

「いろいろだ。これでお前は無力化出来たな」

旗風は会釈した後、また他の人形の処理に向かう。羽織が返り血まみれだったのが少し恐ろしかったが、助かった。

「他に姫級はいるか」

「この辺りには見当たらないわね。一回鎮守府に運びましょ」

別のところの戦闘はまだまだ終わっていない。特に敵空母隊は未だ健在だ。それは警備隊に任せ、私達は一旦鎮守府に戻ることにした。

今までの経験を最大限に活かした、最善の勝利。まだ戦闘は終わっていないものの、私達としては大きな結果となった。

海中からの妨害

早朝の襲撃。私、若葉含む第五三駆逐隊は、襲撃の本隊を指揮していたであろう、姫級の体液を入れられた奴隷、風雲を撃破。体内に入っているであろう自爆装置も旗風により除去してもらい、艦装も私に破壊。戦力としては0にした状態で、鎮守府へと連れていくことに。

それ以外にも、神風型の奮戦で自爆装置のみが破壊された人形達も回収出来るだけ回収し、治療してもらおう。鎮守府にさえ運べば、手の施しようは幾らでもあるだろう。少なくとも、こちらには人形に命令可能な姫級が3人もいるのだから。シロクロは霰から離れることが出来ないだろうが、あそこまで意思がある夕雲についているセスならまだ。

「気絶させられた人形を拾っていくぞー！」

私は風雲を引っ張っているため、仲間達にそれを指示。旗風に斬られたことで気絶から覚醒している風雲だが、艦装が破壊されているため抵抗もしない。運びやすくて何より。

鎮守府までの間にそれなりに人形が浮かんでいた。その全員は気絶させられて、まだ死んでもいない。だが、リミッターが外されているのはすぐにわかった。早くリミッター解除をやめさせなければ、そのまま死に至ってしまう。

「よし、見えたぞ、鎮守府が！」

鎮守府が見えた瞬間、キナ臭い匂いを感じた。嫌な雰囲気、私達に向けられる殺意の匂いだ。

私達が鎮守府から出撃した時、敵潜水艦隊も攻め込んできたと通信があった。来栖鎮守府の潜水艦隊が応戦しており、その敵部隊はこちらの視界には一切入っていない。ならば、今は鎮守府でない場所に潜んでいてもおかしくないだろう。

それに、この殺意は知っている殺意だ。私は一度これに狙撃されている。

「全員散開！」

狙われているのは私であることはわかる。おそらく風雲を持って
いるからだろう。殺意が一際強くなったところで風雲ごと回避する
と、今の今まで私がいいた場所に砲撃が飛んできた。勿論、海中からで
ある。

改装のおかげか、前回よりも勘付くのが早かった。おかげでギリギ
リということもなく、しっかりと回避。

「呂500ー」

さらに匂いがする。砲撃とは違う殺意の塊。砲撃でないなら、それ
は魚雷だ。運んでいる風雲諸共粉碎しようという魂胆か。

こちらは潜水艦に対応できる装備がひとつもなく、そもそも何処に
いるかも察知出来ない。私は何とか匂いで判断出来るが、他の3人は
それすらも出来ない。三日月は危機回避能力で感覚的に理解してい
るようだが、まだ足りない。

「曙、魚雷来るぞー」

「私!? この、クソ潜水艦が!」

近くにいるからある程度の狙いはわかる。次の狙いは曙、一度殺し
ているのに当たり前のように戦場にいるのが気に入らないか。

私が指示したことで即座に退避。直後、曙の足下が爆発し、大きな
水柱が立った。衝撃で曙が吹き飛ばされかけるが、引つ張っている人
形も含めて無傷。

「つぶな、助かった!」

「だが、どうする。若葉達には奴をどうにかする手段が無いぞ」

逃げ惑う内に、鎮守府から少しずつ引き離されている。辿り着けな
ければ意味はなく、私達が無事だとしても人形は命を消耗しきってし
まう。だからといって無策で突っ込むと、不要な怪我まで負いかねな
い。最悪は誰かの死だ。

「何々? 潜水艦? じゃあ、あたしが処理しておくから、早く鎮守府
に行つて」

そこに来てくれた援軍、阿武隈。私達が人形と風雲を鹵獲している
ところを見たとのことで、手助けに来てくれた。

戦場に出る前、僚艦となる神風型5人に振り回されて、戦場でも結

局別行動。手綱を握れず、個別に援護している状況。それでも、私達のことには気付いてもらえたのはありがたい。

「神風型の子達はやんちゃすぎ！ 旗艦あたしなのに全然言うこと聞いてくれないし、あの一番大人しい春風ちゃんも戦場では結構はっちゃけちゃうし、困っちゃうー！」

「いや、愚痴はいい。うん、ありがとう。恩に着る」

阿武隈合流で、五三駆は一時的に一水戦扱いに。だが、私達の仕事はいち早く戦場から離れ、今運んでいる鹵獲した敵達をどうにかすることだ。呂500による妨害は阿武隈に任せ、私達は鎮守府へと向かう。

当然そんなことを許してくれるはずもなく、またもや殺意の匂いを感じる。狙われているのは当たり前のように私だ。なかなか振り切れない。どうしても風雲を処分したいのだろうか。

「狙われてるね。さっさとどうにかしよっか」

「出来るのか？」

絶え間なく動き続け、敵から狙われないようにする。何度も水柱が立つが、致命傷は一切なく、仲間達も回避は出来ている。私と曙を集中して狙ってきているようなところから、雷と三日月には早急に撤退してもらった。これで2人の救出は出来たようなもの。私達も頃合いを見て撤退だ。

今のところ、呂500以外の潜水艦が私達の近くにいるようには感じない。敵潜水艦隊は味方の潜水艦隊がしっかりと足止めして、こちら側に影響が無いようにしてくれているのだろう。呂500だけは撤退しているようだ。

「ソナーに引つかからないとか何なんだろ。まあ、関係ないけど」

腰に携えられていた爆雷を1つ手に取り、海上から海中の敵を目視しているように眺める。当然だが、私には何も見えない。ただ、自分の姿が反射しているだけ。光の反射で、海中を少しも見ることは出来ない。

「はい、そう」

勢いよく爆雷を海中に投げ込んだ。この爆雷は訓練用のダミー。

殺傷力は無いが、大きな空気の爆発が発生するため、それなりにダメージは入るそうだ。

少しして、魚雷ほどではないがそれなりに大きな水飛沫が発生。同時に、以前見た呂500の姿が海面に現れた。

まさか、海上からあの姿を捉えたのか。ソナーでも確認出来なかったアレを。

「げほっ、げほっ、もおーっ！」

可愛らしく怒っているようだが、こんな顔をしながら私達を殺そうとしてきているため、阿武隈は一切の容赦なく次の攻撃を繰り出す。

頭が海上に出たことをいいことに、阿武隈は呂500に対して魚雷を放っていた。そのまま当たれば顔面にめり込むことになる。さすがにそれは可哀想なのではと思ったが、敵に情けをかけると痛い目を見ることは理解しているつもりだ。

「ちよっ!? それは酷いって!」

辛うじて避けたようだが、既に阿武隈は次の手を繰り出していた。呂500の腹に直撃するような場所へ爆雷を投げ込み、それが即座に爆発。呂500はその衝撃をモロに受けたことで、海上に吹き飛ばされた。

「敵に容赦するわけないでしょ。絶対に殺さないから安心してよね」

爆雷を片手でお手玉のように放りながら、呂500を見据えている阿武隈。その目は冷たく、同じ艦娘だとしても敵であるが故に深海棲艦を相手しているかのように振る舞う。

阿武隈が手に持つ武装が本物なら、呂500は今頃確実に死んでいた。

「仲間も殺そうとするとか、手を抜く理由が無いくらいゲスだね。ろーちゃんはそんな子じゃ無かったはずだけど」

「あれだけ強がつて何も出来ずにボッコボコにされた人は死んで当然ですって。提督ご主人様はそんな子じゃないですって」

洗脳によるものだとわかっているが、仲間にそこまで言われている風雲が少し哀れに思えてしまった。

確かに、今回は私達が圧勝した。それは4対1という数的優位も

あつたからだ。1対1ならどうなっていたかわからない。それを仲間が悪く言うのはどうかと思う。気分が悪くなった。

「……まあいいか。どうせ気絶させる必要あるんだし、その減らず口、後悔させてあげる」

言っているときには既に爆雷を投げ込んでいた。顔面にぶつける勢いで放たれたそれを、呂500は辛うじて回避したようだが、そのタイミングで阿武隈が間合いを詰めていた。

「逃げますって！」

あれだけ息巻いていたのにもかかわらず、不利とみなしたか撤退を選択し、その場で急速潜航。すぐなら追うことも出来ただろうが、潜水艦の逃げ足は思った以上に速い。匂いはすぐに海中深くへと遠退いていった。逃げに徹されるとどうにかするのは至難の業だ。

小さく舌打ちが聞こえたが、すぐに気を取り直し、私達に振り向いた。先程の冷たい目は何処かに行き、仲間を見る目。

「若葉ちゃん、曙ちゃん、早くその子達運んじやお！ あたしも手伝うから！」

追うよりも先に、助けられる命を助けようとしてくれる阿武隈。なるほど、第五駆逐隊がおちやらけながらも慕っている理由がわかった。とにかく気遣いが出る。

下呂大將が率いる水雷戦隊の旗艦であり、査察に連れていこうとしているだけある。あの第五駆逐隊はこの人でないと纏められないのだろう。

「了解。曙、行こう」

「え、ええ。すぐに行くわ」

結局、頃合いを見計らっていたら戦闘が終わっていた。

鎮守府に辿り着くと、阿鼻叫喚だった。呂500と一緒に攻め込んできた潜水艦達は海中で自爆したらしく、それに対応していた来栖鎮守府の潜水艦が多かれ少なかれ怪我を負っていた。死者は出なかったようだが、重傷者は既に入渠しているらしく、軽傷者は飛鳥医師による応急処置を受けていた。

目の前で艦娘が爆発するという最悪な光景を見てしまい、トラウマを持ってしまった者もいるだろう。軽傷だった潜水艦隊長の伊168も、気分悪そうに隅で蹲っていた。

「セス、頼むぜエ」

「あ、ああ。この人顔怖いんだよなあ……」

工場にはセスが来ていた。救出した人形達のリミッターを元に戻すため、連れてこられたものに対して1人ずつ命令をしている。気絶している人形を起こしては耳元で呟き、命の消耗を食い止めていった。

まだ来栖提督には苦手意識があるようだが、今はそんなことを言っていない。セスはセスで、やれることをしっかりとやっている。さすがにこの場に夕雲を連れてくることは出来なかったようだ。

「風雲、余計なこと言うなよ。これ以上痛い目を見たくなかったらな」
「……ふん」

こちらはこちらで風雲への処置。抵抗の意思はもう無いように見えたが、念のため、ここにいる人形に何も出来ないように猿轡を噛ませ、手脚も縛っておいた。艤装もなく、武装もない風雲だが、その言葉が凶器になるこの場では、これが最善と判断した。

「若葉、さっきの潜水艦は!？」

先に工場に来ていた雷と三日月に合流。あちらも運び込んだ人形は処置してもらえたようだ。

「逃げられた。おかげで被害は無かった」

「そっか、よかった。阿武隈さんのおかげよね」

「ああ、あそこで来てもらえなかったらどうなっていたか」

その阿武隈は、次の人形を拾いに既に戦場に戻っていた。戦場を全て把握しているのではないかと思えるほどに視野が広い。

「私達も次に行きましょう。まだいっぱいいます」

「ああ、神風型がやんちゃしているからな」

「自爆されないだけマシよね。さっさと行って全部拾いましょ。クソ潜水艦はもういないわけだし」

ここからは救助最優先だ。警備隊の方も気にはなるが、救える命を

優先すべき。

戦いは苛烈を極めたが、風雲の鹵獲と、呂500の撤退で、戦況はこちらに大きく傾いた。警備隊が相手をしている方にも姫級の体液が入れられた奴隷がいるらしく、殺さないように戦うのはかなり難しいらしい。人形を救出している間も、戦いが終わるようには思えなかった。

「これで全部か！」

疲れ果てたようなセスの叫び声。リミッターを元に戻され、工廠の隅に寝かされた人形達が相当な数になったところで、海上で拾える人形がいなくなつた。これでおしまい。

最初見た数よりも大分減つてしまつたように思えたが、それでも半数は救えていると思う。

「よくやってくれたゼエー！」

「お、オツチャン、圧がすごい、怖い」

抱きつかんばかりの来栖提督の喜びようだったが、セスの性格を考えて、そこまではせず。

潜水艦達の応急処置を終えた飛鳥医師は、寝かされた人形達を1人ずつ確認していく。命に別状はなく、緊急性がある者もないが、とにかく消耗が激しいことは、素人目にもわかることだ。

「これを全員治療することは不可能だ。そもそも治療するための材料がここにはない」

人形を治療するためには、誰にも弄られていない胸骨が必要。当然だが、飛鳥医師が持参したそれは夕雲を治療する分しかなく、今まで集めてきた素材は、無傷であるとは思うが今は職人妖精が修復中の施設の地下だ。今すぐの治療は不可能。

「ひとまずは体力の回復に努めましょう。このままでは手術もままならないでしょう」

「確かに。ただの消耗では無いので、手術中に限界が来てしまうかもしれない。一旦休ませた後に考えるのが得策ですね」

「来栖、これだけの大人数ですが、收容出来るだけの部屋は残っていま

すか？」

「大丈夫です。いざって時ア妖精に頼んで部屋を払ってもらいます」

リミッターを外されたことで、限界まで搾り尽くされかけた命を回復させるのが先決と判断された。無傷でも死ぬギリギリというのが今の人形達の現状だ。とにかく命を繋ぐために回復を優先する。

厳しい戦いだが、終わりは見えてきた。

防衛の後

鎮守府側では人形達のリミッターを元に戻す作業が完了。風雲の拘束も出来ており、人形に命令が出来ないように猿轡を噛ませることで言葉を封じたため、今のところ処置完了と言える。

私、若葉は、第五三駆逐隊の仲間と共に、工廠で休憩中。今は私達に出来ることはここまで。姫級の体液を入れられた風雲を対処出来たのは大きな功績となった。

「ちつくしよう！ いいとこまで行ったのに逃したー！」

「人形は全員自沈してしまいました……」

警備隊が戻ってきた。隊長である足柄と羽黒の悔しそうな表情が物語っているが、敵空母隊は惜しくも逃してしまつたらしい。僚艦である人形は全員リミッター解除の弊害で自沈してしまつたようだ。

「ただいま戻りました。常に制空拮抗とは、悔しい結果になりましたね」

「あたし達も頑張つたのに〜！」

空母隊と防空隊も一緒に戻ってくる。鎮守府上空を包み込みかかないほどの敵艦載機を全て封じ込め、さらに敵空母隊を討とうとしていたのだから恐ろしい。制空拮抗を維持し続けてくれたおかげで、私達は救助最優先の行動も取れたし、風雲を撃破することも出来た。空襲まであつたら、とてもでは無いがここまで上手いかなかった。

その後に戻ってきた神風型の5人を見て、全員ギョツとした。人形の自爆装置を破壊し続けたことで、5人が5人返り血まみれ。特に旗風は、まるで気にしていないように顔にまでかかっている。

「ああもう、みんな節操なさすぎですよー！」

そして疲れた顔の阿武隈。あの後一応フォローに行ったようだが、奔放に引つ掻き回す第五駆逐隊に手を焼いた様子。

「全員戻りましたか。こちらは損失なしですね？」

「あー、大丈夫です。出撃した艦娘は全員戻ってきてますぜ」

阿武隈が戻ってきたことで、これで全員の帰投が確認出来た。来栖

提督も安心し、下呂大将も一息ついている。

私達が戦闘している最中、下呂大将は裏で家村に連絡を取ろうと試みたようだが、当然ながら不通。その後は、飛鳥医師と共に人形の治療に専念してくれていた。大将という役職でありながら、手ずから行動していくことは、素晴らしいと思う。

「すぐにでも査察に向かいます。阿武隈、行けますか」

「この子達の血を落としてからならすぐに」

「わかりました。では、すぐに準備を。嫌な予感がします」

戦闘後だというのに、下呂大将は大忙しだ。先程まで動き回り、休憩もろくに取らず次の仕事へ。予定していた査察は、こんな状況でも当然行なう。

「やれやれ、人使いの荒い司令官だ」

「松風、さっさと来なさい。あ、お風呂借りまーす！」

第一水雷戦隊もそれに合わせてバタバタと動き始めた。下呂大将が嫌な予感というのだから、査察を早急にしなくてはいけない理由があるのだろう。

今までの戦闘、私達を全滅させて、内通者と共に全てを隠蔽するつもりだっただけでは無いのだろうか。こちらが勝利したときのことまで考えた策が何か。

30分もしない内に、下呂大将と第一水雷戦隊は家村鎮守府へと査察に向かった。取り残された私達は事後処理。戦場に出ていたものは休息と、損失が無いかの確認を行なう。

人形は明石と摩耶、そして私も手伝って艀装を剥がし、セスの命令の下、全員が用意された部屋へと向かっていった。ここまで来ると、セスももうヘトヘトだった。これが終われば仕事終了。夕雲の待つ部屋に戻るのだろうか。

「救出出来た人形は総勢42人。これでも半分より少し多いくらいだ」

「残りは自沈しちまったかア……相変わらず胸糞悪イな」

これを全て治療することになるため、飛鳥医師の仕事はここからが

本番。この大人数を施設に連れていくことは非常に難しく、今までの傾向から考えると、マンツーマンで誰かをつけるくらいでないと回復出来ないほど。確実に施設に人数が足りない。

「ある程度はうちの鎮守府で受け持つぜエ。治療だけはしてもらわにやならねエけどな」

「ああ、すまない」

人員については、来栖鎮守府にも協力してもらおうことでどうにかする。私達では完全にキャパオーバー。そもそもこの人数全てを施設に入れる事が無理である。下呂大将の査察次第かもしれないが、今後もし施設防衛をする必要があるため、専念するのは難しい。今の施設の住人だって限りがある。

そして、治療するための胸骨も足りない。これを人工骨で補うことが出来るのだろうか。皮膚や臓器とは違うかもしれないし、やはり馴染まないかもしれない。これも悩みの種。実験が難しいのも考えどころ。

「俺もやれることア手伝ってやる。なるべく早く、あいつらを元に戻すぜエ」

「頼む。当面は胸骨だな。もしくは、それが無くても造血細胞の汚染を無くす方法だ。これはどうか僕が調べ切る」

「小難しいことア俺にやわかんねエが、ここに居る間ならいくらでも部屋を使ってくれて構わねエ」

ここに居るのは残り2日。今日の午後から明日いっぱいを使って治療方法を思いつき、一部艦娘を施設で治療というのがベストか。とにかく、飛鳥医師の仕事が格段に増えたことは間違いない。時間も無い。

施設の一員として、何か手伝えることはあるだろうか。特に私は、手術にも何度も立ち合い、その嗅覚を施術に貢献してきた。これがまた役に立つかはわからないが、出来ることはしたい。

「優先順位が一番高いのは風雲だ。意思を持っている分、後が辛い」

その風雲は、別室で軟禁状態。さすがにずっと猿轡というのは可哀想なので、部屋の中では自由に行動できるようにされている。艦装も

ない状態、さらには味方からも撃たれた状態で、ここから逃げようとはしないだろう。念のため監視は置いておきたいが。

「昏睡させる薬も全部潰れてしまった。麻酔もまた手に入れなくちゃいけない。施設は復旧したとしても、完全に元に戻るにはまだ時間ばかりそうだ」

「処置室が潰されたのはキツいな……そこは大将にも頼もうや。上に掛け合ってくれるだろうよ」

夕雲を処置するための用意だけはちゃんと外に出せただけマシンだった。そのおかげで夕雲は今復帰が見えてきているわけだし。

施設に戻ったとしても、出来ることは限られているようだ。人形全員の治療は出来ないと言っても過言ではない。まずは風雲。以降は流れで。この方針で決定しようだった。

今でこそ撤退させたが、万が一再び襲撃があると困るため、査察中の下呂大将達が帰投するまでは、当初の予定通り戦闘配備で待機ということになった。

私達もそれに漏れず、基本的にはすぐに出撃出来るようにしておく。艦装を装備しておくわけではないものの、訓練や演習などは無しにして、鎮守府内で待機。とはいえ鎮守府内なら自由に過ごせばいいというスタンスのようである。

私は暇を潰すように工廠で自分の艦装をメンテナンスしていた。隣では摩耶が雷の艦装をメンテナンス中。こここの明石には触れない部分が多いようなので、私達が直に弄る必要があった。

「飛鳥医師は？」

「部屋に籠ったってよ。早く治療法を確立するんだっつってた」

限られた時間というわけではないが、なるべく早く治療出来るように尽力していくということで、飛鳥医師は早速頭を悩ませている。

手術に立ち合いいろいろ手伝った私達でも、医療知識は皆無なため、そういうところは手伝えない。雷が様子を見に行くことくらいはするようだが、邪魔をしないように細心の注意は払うのだとか。

監視と経過観察のために同じ部屋を使っていた夕雲は、既にセスの

部屋に移動済み。それにより、なんの後ろめたさも無く、部屋に鍵をかけてまで完全に引きこもり調査を開始したようだ。その調査により、今寝かされている大量の人形の今後にかかっているのだから、少し負担が大きい。

「いい方向に行きやいいんだけどな」

「ああ。飛鳥医師ならやってくれるだろう」

今までずっと困難な治療も、曙の蘇生までもやってのけたのだ。今回もきつとどうにかしてくれる。言葉に出したらプレッシャーに感じるかもしれないので、みんな心の中でそう思っている。飛鳥医師ならきつと、全員を完治させてくれることだろう。

「あたしらはやれることをな」

「ああ」

自分の艤装のメンテナンスは終了。戦闘を無傷で終われたおかげで、洗浄くらいで済んだ。

もしこれが何かしらの破損をしていた場合、代用パーツは全て施設の瓦礫の下。鎮守府から提供してもらおうのもいいのだが、そうしないならしないに越したことはない。

「貯め込んだ艤装のパーツも全部オシヤカになっちゃったんだよね……壊さねえでくれて助かったぜ」

「ああ、若葉もそう思う」

シロクロも悲しそうにしていたが、摩耶もこれは少し堪えたと苦笑する。

今まで作り上げたものを、よりによって艦娘の自爆などという本来あり得ないもので壊されたのは悔しい。

「家村つつー提督には、ちゃんと落とし前付けてもらわねえとな」

「勿論だ。責任を取ってもらわなければ」

話しながら次の艤装に取り掛かる。次はコンビを組んでいる三日月の艤装。こちらも私のものと同じように無傷であり、洗浄だけで済みそうだ。水鉄砲は摩耶に任せることにして、主機をバラして洗浄していく。

摩耶も雷の艤装のメンテナンスが終わり、曙の艤装に取り掛かっ

た。あちらも同じく、傷一つないようである。

「お前ら、強くなつたな」

「……ああ。施設を守りたいからな」

その艤装を見ながら、しみじみと話す摩耶。ただ洗浄するだけでメンテナンスが終わることを喜んでくれている。自分の負担が減ったこともそうだが、単純に私達が強くなったことも喜んでくれていた。

知らない間に摩耶も第二改装が出来るほどに強くなっていったが、基本は施設の工作艦扱いだ。本当に人手が足りない時にしか戦場に出ることは無いだろう。摩耶は最終防衛ラインと見ていい。

ふとした疑問。摩耶だって艦娘、戦うことを運命付けられて生まれた者だ。そういう意味では、摩耶はどちらかといえば本来の生き方に反した生き方をしている。

艦娘として戦いたいとは思わないのだろうか。以前の防衛戦では出撃をしていたが、今回の防衛戦は不参加。工廠で明石と共に艤装整備や、飛鳥医師の手伝いに奔走していたらしい。

「摩耶は、戦いたいと思わないのか？」

「あー……前ならあたしが率先して突っ込んでつただろうな。唯一の重巡だからよ。子供にばかりやらせるかってな」

言われてみれば、施設の艦娘は摩耶以外全員が駆逐艦^{こども}。つい最近まで鳳翔がいたが、あれは派遣であり、所属している者ではない。そうになると、本来最も強いのは重巡洋艦である摩耶だ。火力も耐久力も私達とは違う。

「施設を守りてえ気持ちとは同じだ。でもな、誰かは施設に残らねえと、センセが危ねえ。なら、あたしがそれを受け持つぜ」

その火力と耐久力を、攻撃ではなく防御に使おうというのが摩耶の考え。

確かに全員出払ってしまったら、万が一の場合に飛鳥医師を守る者が誰もいなくなる。そこに摩耶を配置する。

防衛というかたちで施設に残るのだから、その分、攻めに出る私達を全力でサポートしてくれるという。摩耶の実力は痛いほどわかっているのだから、私達も安心だ。

「あたしはこういうことで施設を支えた方がいい。他の摩耶に何て言われるかはわかんねえけどな」

「若葉達も、摩耶のことを頼りにしてる」

「おう、任せろ。お前らに不自由はさせねえよ」

その摩耶が戦場に出ないというのは、周りからはどう思われるかはわからない。だが、摩耶はそれでいいと言っている。艦娘としての制服よりツナギの方が性に合うとまで。

「摩耶がいるから、若葉達も戦える」

「そう言ってもらえると嬉しいねえ。メンテにも力が入るつてもんだぜ」

いい笑顔で曙の艦装を手際良くバラしていく。私達の感謝はモチベーションアップに繋がっているようだ。私もそれに合わせて、メンテナンスを続けた。

ここからの戦いはどうなるかがわからない。下呂大將が向かった査察で全てが終わるとは、どうも思えない。むしろこれが始まりなのではないかと思えるほどだった。

キナ臭さを感じないが、予感だけはする。終わってほしいとは当然思っているが。

溢れ出す感情

夜、査察に出ていた下呂大將が鎮守府に戻ってきた。怪我もなく欠けもなく、無事に帰ってきたことを喜ぶが、その表情は浮かない。出て行く際に言っていた『嫌な予感』が当たってしまったか。

「大將、ご苦労さんです。して、どうでしたか」

「困ったことになりました。後日、再調査が必要です」

後ろからやってくる第一水雷戦隊は、暗がりのために少しわかりづらいたが煤で汚れているように見えた。あちらで戦闘があったような汚れ方に見えるが、出て行く前に落としていった返り血が新たに増えているようなこともないため、例の刀を振るったかどうかは定かではない。

「戦闘配備は解除して結構。皆を鎮守府に集めてください」

「集会を開くってことですね。了解です」

戦闘配備の必要は無くなったが、査察の内容は公表の緊急性が高いものようである。それだけ今回の査察は大きな事が起きたのだろう。

「飛鳥はちよいと難しいと思うんで、出られる面子だけ揃えます」

「ああ、あの大人数の治療法ですね。後から話しましょう。私も出来る限りの援助をさせてもらいます」

それだけ話して、そのまま全体集会の準備を始めた。帰ってきた直後もバタバタ。下呂大將はいつ落ち着けるのだろう。

「あたし達は先にお風呂に行こっか。こんなカツコで集会に行くのはね」

「身嗜みくらいね」

第一水雷戦隊のみんなは、軽く身体を洗い流してからとなるようだ。準備とそれを含めて、また30分後くらいから集会が始まることだろう。それまでに全員集めて、

下呂大將は査察で何を見てきたのか。

予想通り約30分後、全体集会が開始する。飛鳥医師、シロクロ霞

組、セスタ雲組は欠席。飛鳥医師には後から下呂大将が直々に話すうだ。当然風雲は軟禁状態であり、人形達は眠ったままである。

「時間も遅いので、なるべく簡潔に話したいと思います。我々は、かの家村大佐の鎮守府へ査察に向かいました。そこで見たものは、崩壊した鎮守府です」

集会の場がざわつき始めた。こちらに攻め込んできた鎮守府が既に崩壊しているとなると、いろいろと変わってくる。

「内部を探索しましたが、その匂いや荒れ方からして、我々が鎮守府防衛が終わった直後に燃えたと考えられます。また、砲撃の跡がありました。パツと見では、『深海棲艦に襲撃されたため、崩壊した』ように見えます」

第一水雷戦隊が煤で汚れていたのは、崩壊した鎮守府を探索したからか。襲撃で破壊されたのなら、火の手が上がっていてもおかしくない。

来栖鎮守府に全員集まったタイミングを見計らってこちらに襲撃してきたというのに、その間に鎮守府崩壊とは流石におかしい。

「ですが、あちらは少し詰めが甘い。普通の査察なら騙せるでしょうが、私の目はごまかされません。その砲撃は艦娘の手によるものであることがわかりました。せめて海外艦を使えばいいものを、手を抜きましたね」

下呂大将の見立てでは、家村鎮守府を崩壊させた砲撃は、深海棲艦の砲撃ではないという。何が違うかというところ、口径の規格らしい。センチかインチかなんて、砲撃跡を見てわかるようなものなのだろうか。16inch砲と41cm砲なんて、ほぼほぼ同じようなものなのだが。

最初から疑ってかかっているから気付けるのかもしれない。下呂大将は嫌な予感がすると言って査察に向かったが、それがこれなのだろう。元凶がその場から消えている。

「話を続けます。我々は崩壊した鎮守府を探索してきました。中には何人もの艦娘の死体と、人間の死体が1つ。家村らしき死体でしたが、本人である確証はありません。焼け焦げていて素性がわからない

ほどでしたので」

艦娘のものはさておき、人間の死体というのが気になる場所である。もしそれが家村のものであるのなら、誰か黒幕的なものが家村を口封じで殺したと考えられ、それが家村のものでないのなら、早々に逃げて反撃の機会を虎視眈々と狙っている可能性が出てくる。

どちらにしろ、家村は深海棲艦の襲撃を受け、健闘して殲滅するも無念の戦死、というシナリオが成立してしまう。夕雲や霰、それに鎮守府で眠る数十人の人形達を見せても、家村がもういないとなれば有耶無耶にされる可能性だってある。来栖鎮守府への襲撃を無かったことにされたら、こちらとしては絶対に納得いかない。

それでいて家村がまんまと逃げ果せていた場合、私達はここまで散々なことをされた挙句、家村はのうのうと生きていることになる。それは尚のこと納得がいかない。

「……若葉さん」

「ああ、我慢しろよ」

三日月の左目がギラギラと輝いているのがわかった。私も両腕が疼き、ギョツと握る。曙も胸を掴んで疼きに耐えているようだった。

家村のせいで人生を変えられた私達のことなど露知らず、元凶は私達の手の届かないところに行こうとしている。許せない。怒りが姫パーツを疼かせる。

「許せんせん……これだけのことをして逃げるなんて……」

「わかってる。若葉も同じ気持ちだ」

三日月を落ち着かせるために手を握った。私だって手が震えている。自分が落ち着くためにも、お互いの温もりを伝え合う。多少は落ち着くが、怒りはなかなか収まらない。落ち着かなくてはいけないのに。

「おそろく、上にいるであろう内通者が家村鎮守府の真相を闇に葬るでしょう。そうされる前に、我々が全て調査します。そこで、手伝ってもらいたい人がいるんですが、いいですか」

「誰が入用なんですかい？」

「若葉です。その類稀なる嗅覚を貸してもらいたい」

少し予想外だった。

「予想は出来ているのですが、確定では無いので、ここで君の力を借りて確証を得たいのです。力を貸してもらえますか？」

「……了解した。若葉の力が大将の役に立つのなら」

「ありがとうございます」

私としては願ったり叶ったりだった。因縁の相手の真相を暴くために私の力が必要と言うのなら、喜んで力を貸そう。嫌なものをさんざん見ることになるかもしれないが関係ない。

「第五三駆逐隊、明日私に協力してくれると嬉しいです。三日月と曙も元々は家村鎮守府の所属艦でしたね。意見が欲しいです」

私をメインに、五三駆全員が御所望のようだ。雷以外はその鎮守府に因縁があるため、ケリをつけるためには他の者以上に全力を尽くす。

「私は問題ない。あのクソが死んでるかどうかは自分の目で見ておきたいし」

「……同じく」

「私も大丈夫。みんなの因縁の敵なんですよ？ 真相を探る必要があるなら、もーっと私に頼ってくれてもいいんだから！」

駆逐隊のメンバーは全員やる気だ。言い方は悪いが、今回の事件に無関係な雷も率先して協力してくれる。仲間として頼らせてもらう。

「簡単にですが、今はここまですべてしておきます。不確定な情報を話しても混乱するだけでしょうから。明日、改めて査察に向かい、真相の解明をします。再び戦闘配備でよろしくお願いしますね」

撤退させたとはいえ、明日また襲撃に来る可能性は否定出来ない。そのため、大丈夫であると確定出来るまでは、戦闘配備を維持し続けるべきだ。最低限、次の調査が完了するまでは。

夜、寝る前に人形達の眠る大広間を訪れる。三日月はあまりいい気分になれないだろうからと控えたため、ここにいるのは私だけ。

総勢42名、今は全員が目を瞑り、死んだように眠っている。異様

な光景に、恐怖すら呼び起こされそうだった。事実、暗い部屋にピクリとも動かず並んでいる光景は、見ていて不安になるものだ。

もしかしたら私もこの中に入っていたのかもしれないと思うと、途端に嫌な気分になった。それと同時に、腕の疼きも蘇る。

人形達は、共通する薬の匂い以外にも、様々な匂いがした。その中でも特に気になるものが数人。特にその中の1人は、確実に知っている匂い。私と同じ匂いを持っている。

四肢の影響で私も複雑な匂いになってしまっているが、根本的な部分、『初春型の匂い』は、どうあつても無くならない。それを感じる人形が1人。

「……姉さん……なのか」

匂いもあるが、感覚的にわかった。この人は、私の姉だと。

「彼女は初春、君の姉ですね」

突然だったので驚いてしまった。声を上げなかった自分を褒めた。い。

私がこの部屋に入ったのを見たのか、下呂大将が入り口に立っていた。あちらももう寝る前なのか、随分と疲れた顔を見せている。数時間、大発動艇に揺られて査察に行くのは、艦娘でも疲れるものだ。人間には相当クるものがあるのだろう。

「……いるんじゃないかと……何となく思っではいた」

「そうですか。匂いですか?」

「勘だ」

何となくだが、姉妹の誰かがいるような気はしていた。そして、出来ることならいてほしくないという気持ちが大きかった。

実際この人が私の姉とわかった時、腕の疼きが途端に激しくなった。自分がこの境遇に立たされていること以上に、姉のこの姿が辛い。姉をこうした家村に対しての怒りと憎しみが、今までも感じたことが無いほどに膨れ上がっている。

「私情は挟まない。優先順位だとか、管理する場所とかは、全て飛鳥医師に任せる」

治療に感情は挟まない。姉だから先に頼むなんて、口が裂けても言

えない。姉よりも酷い状態の者はきつといる。治療方法には一切口出しするつもりはない。

「若葉、1つ教えておきましょう」

「ああ」

「そういうことを口に出すということは、いの一番に治療してほしいと言っているようなものですよ」

余計なことを口走ってしまったらしい。思った以上に、初めて出会った姉妹に入れ込んでしまったようだ。見たことも話したことも無い姉なのに、今までで一番落ち着く匂いに思えたからか。

当然、最初に治療してもらったら嬉しい。実の姉なのだから、私がシロクロのように常に側にいて、回復に努めたい。だが、それはただの我儘だ。自分の意思は押し殺さなくては。

「君は感情を口に出すことが苦手ですか？」

「……そうかもしれない」

「駆逐艦若葉はそういうものかもしれないですね。私の知る若葉も、あまり話す方では無いですから」

そう言われると、駆逐艦若葉の特性なのかもと思う。

「無理はしないように。感情を押し殺すというのは、思っている以上にストレスになります。私の部下達を見てみなさい。奔放で、楽しそうでしょう。ああなれとは言いませんが」

第一水雷戦隊は、あれだけの凄惨な戦闘でもストレスを溜めていないように見えた。阿武隈は違う意味でストレスフルだったが。

相応の強さを持っているから、それだけ余裕でいられるというのはあると思う。私達にはそれが無いのだから、必死になるしかない。戦闘に余裕が持てる時が来るとは到底思えない。

「言いたいことは言えればいいんです。それが通る保証はありませんが、言うだけならタダですからね。却下されてもいいくらいの気持ちで、ズケズケと口に出せばいいんですよ。言いづらいなら私が聞いてあげます。君の感情をぶつけてきなさい」

さあ、と手を拡げて微笑む。自分でストレスを発散しろと言わんばかりだった。軍属でもない飛鳥医師ならともかく、来栖提督よりも位

の高い下呂大将を相手にするととなると、若干萎縮してしまう。だが、むしろこれは言わないと終わらなそうな雰囲気。

腕の疼きは止まらない。私の中には今、黒い感情が渦巻いている。口に出せば軽くなるだろうか。せつかくの機会だから、下呂大将に聞いてもらうのも悪くないかもしれない。

「……家村が殺したいほど憎い」

「ふむ、因縁の強い相手ですからね」

「若葉の身体がこうなったのは、元はと言えば奴のせいだ。それに加えて、姉までこうされた。知らないところでもっと失われているのかもしれない。それが、憎くて憎くて仕方がないんだ」

憎しみを言葉にした。殺したいと口に出したのは初めてかもしれない。一度口に出してしまえば、溜まりに溜まった不満が口から次々と出てくるものである。

そこから数分間、愚痴という愚痴が溢れ出た。相手が大将だからというのも関係ない。ダメだと思っていた言葉も次々と。負の感情が抑えられない。涙すらでそうになった。

どうせ死ぬなら、私の手で死んでもらいたかった。償いの言葉くらい聞かせてほしかった。1人1人に謝罪し、その上で全てを否定して、翩り殺しにしてやりたかった。

死んでいないのなら、地獄の底まで追いかけて殺したい。今までやってきたことを後悔させたい。その死体ですら壊してやりたい。この世から影も形も無くしてやりたい。全ての尊厳を奪いたい。

喚き散らすように愚痴を言い続けた私を、下呂大将は慈愛に満ちた目で見続けていた。これだけの鬱憤を吐き出しても、それを否定せず、むしろその殺意を肯定するようだった。

さんざん負の感情を吐き出した後、言い切った感覚と共に愚痴が止まる。妙にスッキリしていた。腕の疼きも止まっていた。

「君の心、しかと受け止めました」

「……すまない。ここまで溜まっていたなんて」

「君は相応の扱いをされています。それほどの感情を持つても無理はありません。私はそれを否定しませんし、むしろもつと言った方がい

いと思います。君がそれを言うだけで、実行に移さないことくらい理解していますから」

やんわりと頭を撫でられる。頭に上っていた血が引いていくように、気分が落ち着いていく。

「たまにはこうやって溜まったストレスを発散した方がいいでしょう。口に出すだけでも少しは変わりますから。まあ、全てが終わればこんなストレスを感じることは無くなるのでしょうが」

何もかもが終わってくれば、こんなストレスももう感じなくなる。だからこそ、早く終わらせたいものだ。

「余裕があれば、他の子の鬱憤も聞いてあげましょう。特に三日月は溜まりに溜まっていそうですね」

「ああ、多分」

「相部屋の君が聞いてあげるのもいいですからね。愚痴は悪いことではありません。たまに口汚い言葉を使ってもバチは当たりませんか」

下呂大将が大将たる理由がわかったかもしれない。この人の下なら、楽しく生きることが出来そうだと思えた。

崩壊した鎮守府

翌日、2度目の査察。今回は鎮守府そのものが崩壊してしまっているため、要因の調査が目的となる。そして、それに私、若葉が抜擢された。その場を嗅覚により調査し、原因究明に尽力する。

私が向かうということで、第五三駆逐隊全員で手伝うことになった。雷以外は、今から向かう鎮守府に大きな因縁がある。私怨が混ざった調査にならないように注意しなくてはいけない。

「三日月大丈夫？ 目がビカビカしてるわよ？」

「大丈夫です。痛くはないですし……その、イライラが漏れるんです」昨日から、三日月の左目がずっと妙な輝き方をしていた。負の感情が抑え切れていない。私は下呂大将に吐き出すことが出来たが、三日月はまだ溜め込んでいる。溜め込んだ部分が目から漏れ出しているのだろう。

「なら全部吐き出しちゃいませよ！ 大将、大発動艇ってまだ乗れるかしらー！」

「ええ、まだ場所は空いてますよ。艦娘が艤装を装備しながら2人乗るくらいなら余裕があります」

「鎮守府に着くまでまだ時間あるわよね。三日月、さあ、私を頼って！」

私が下呂大将にしてもらったことを、雷が三日月にしていくようだ。2人して大発動艇に乗り込み、三日月に溜まったものを吐き出してもらうようだ。

すると私と同じように恨みと憎しみが出るわ出るわ。溜まりに溜まった鬱憤が次から次へと流れるように。聞いているこちらが気の毒になる程。そこにいた誰もが苦笑するしかなかった。

「言いたいことを言ったら……少しスッキリしました」

「ホントにすごく溜め込んだのね……。大丈夫よ、私が三日月の嫌なこと全部聞いてあげるからね。いつでも話していいからねー！」

雷が三日月をハグして慰める。全て終わったときには、三日月の目の光は多少抑え込まれていた。三日月もこれで少しは落ち着ければ

いいだろう。ストレスは良くない。最後は潰れてしまう。

こういうカウンセリングは雷が適任かもしれない。PTSDを患った羽黒を癒したのも雷だと聞いたし。雷が潰れないようにする必要は出てくるが。

しばらく行き、家村鎮守府に到着。施設が破壊された時のように黒煙が上がり、嫌な匂いが立ち込めている。

「……若葉達が生まれたのは、ここだ」

「はい。この鎮守府です」

未だに生まれた鎮守府がフワフワしていた私と三日月だが、この崩壊した鎮守府を見て確信できた。ここは私達の生まれた場所。生み出された直後に捨て駒として出撃させられ、二度と帰ってくる事が無かった場所。

近付けば近付くほど、その感覚を思い出すようだった。もう数ヶ月も前のことなのに、怒りと憎しみからつい最近あったことのように思える。

「腕が疼く……」

「目が……」

「息が熱い……ムカつくわね……」

この鎮守府に恨みを持つ私達3人は、三者三様の反応を見せた。

「仕事を済ませたらすぐに帰投しましょう。私としたことが、君達との感情の機微を配慮出来ていませんでした。申し訳ありません」

下呂大将に謝罪されたが、別に私達は気にしていない。こうなることは想定していたことだし、今は何があってもこの鎮守府絡みのことが話題に出るだけでこうなりかねない。

「調査、何をすればいい」

「指定する場所の匂いを。ですが、気をつけてください。あまり近寄らせるつもりはありませんが、昨日も言った通り、崩壊に巻き込まれた艦娘の死体がそこかしこにあります」

「……ああ、埃の匂いと焦げた匂いが充満している」

本来工廠だった場所から崩壊した鎮守府に侵入。なるほど、昨日の

第一水雷戦隊は、ここを歩いたから煤で汚れていたのか。

視界には入れないようにしていたが、工廠の隅の瓦礫の下に、明らかに人の脚らしきものが確認できた。それを知っていたのか、阿武隈がそちらに行かないようにガードしていたため、気遣われているとわかる。

正直ありがたかった。多分気付いたのは私だけだ。そちらの方から血の匂いがしたから気付けた。あの脚が誰の脚かはわからないが、こんなことの犠牲になってしまったのは残念でならない。私達のように意思は持っていたのだろうか、それとも、人形だったのだろうか。「少し足下が悪いので気をつけてください」

破壊されていようが、ここが私の生まれ故郷であることを痛感した。工廠に見覚えがある。私が生まれて初めて見た風景だ。また怒りが沸き立ちそうになったが、今はそんな感情で嗅覚を弱めることは避けたい。何とか頭を冷やす。

「最初は執務室です。……昨日話した通り、ここに人間の死体があります」

いきなり本題から開始。その人間が何者かを確認するための調査。当たり前のことだが、私は家村の匂いなんて知らない。この嗅覚を手に入れてから、家村に会ったことが無いのだから、わかるはずがない。だが、何かしらの匂いがわかれば、下呂大将は分析出来ると言う。

「ここです。若葉、目を隠しましょうか」
「……ああ、そうしよう。その方が敏感になる」

焼けてボロボロになった執務室の扉の前で、阿武隈に目隠しをしてもらった。この方が嗅覚に専念できる。

目隠しをした理由はもう一つ。いくら恨みが深い相手とはいえ、死体を見たいと思えない。いくら焼け焦げて何者かもわからない状態だとしても、既に先程死体の脚を見ているとしても、わざわざ直に見る理由もない。

私以外は執務室前に待機。私は目隠しをされ、下呂大将と阿武隈に手を引かれて部屋に入る。

思わず吐きそうな感覚がした。最初に感じたのが焼けた肉の匂い。

部屋も大惨事と言えるほどに燃えているのだと思う。火は消えていそうだが、煙が上がっているのは匂いでわかる。

すぐにわかったのは、焦げた匂いと血の匂い。所謂、死の匂い。おそらくこの匂いは、私だけじゃなく、ここにいる全員が理解してしまっている。

「焼けた肉の匂い」

「はい。焼死体ですのぞ」

この焼けた肉の匂いが死体からするのは察していた。私達が普段食べているものとは違う、気分が悪くなる匂い。血の匂いも相まって、すぐにでもここから立ち去りたいくらいである。

「その匂いの奥に何があるか、わかりませんか」

「嗅ぎ分ける。少し待ってほしい」

その匂いの奥底。肉の匂いと煤の匂い以外の匂いに集中する。視覚を封じているため、より強く感じる事が出来た。瓦礫の匂いも省き、より小さな匂いに焦点を当てていく。

その中に1つ、知っている匂いがあった。変に甘い匂い。艦娘からも漂っていた匂いが、微かに感じられる。

「その死体から、夕雲や霰に使われていた麻薬の匂いがする」

「ふむ……人間には非常に危険なものと飛鳥から聞いています。焼けてしまえばわからなくなってしまうようなものですが、よくわかりましたね」

「知っている匂いだったからだ」

これを知らなかったら、甘い匂いがするとしか言えなかった。下呂大將がそれだけから麻薬に辿り着けるかはわからない。情報がフワツとし過ぎている。

「あとは……この煤とは違う煙の匂いがする」

「煙の匂い、ですか」

「ああ。何なのかはちよつとわからない。嗅いだことのない匂いなんだ」

そうとしか言えない。知らない匂いは、知っている少ない知識で伝えるしかなかった。

この周囲に漂う煤臭さとは違った煙の匂い。あまり嗅ぎ続けたくない煙。鼻につくというか、身体に悪そうな匂い。

「もしや、タバコでしょうか」

「それを知らないから確証は持てない」

「私ですが、飛鳥も来栖も吸いませんから、若葉は知らなくてもおかしくないですね」

ふむ、と下呂大将が頷く。なかなかいい情報になったようだ。

それならと、もつとわかることがあるかを調べ続ける。少しでも死体に近付いたが、ただただ今まで嗅いだ匂いが強くなるだけのため、あまり得られるものは無いようである。

「……集中したんだが……今はそれくらいしか確認出来なかった」

「充分です。ありがとうございます」

この2つの情報、麻薬と煙の匂いがあるというだけで、下呂大将には納得が行くものがあつたようだ。

「少し調査は必要ですが、おおよそ確定しました。では次に行きましよう」

少しでも情報を捻り出せば、それで下呂大将は問題無いようだ。私にはさっぱりだが、先に繋がる情報を提供出来たら問題無い。

次は食堂らしき場所。ここには死体が無かったため、全員で中心を痛めていたのは、施設でも料理担当の雷だ。瓦礫に潰され、燃やされてしまった食材達を見て、溜息をつく。

だが、私では気付けないことを、雷は気付いた。長く施設で料理を担当していたからこそ気付けること。

「大将、この鎮守府って、何人くらいいたの？」

「艦娘だけなら100は超えています。規模的にも、250はいましたね。その半分以上は人形だったようですが」

「おかしいわ。それだけいるのに、食糧がこれだけなんて」

いくら燃え尽きてしまったにしても、この少なさはおかしいと雷は指摘した。たった10人そこらしかない施設の備蓄よりも少ないのだとか。これから購入する予定だったと言われても、ここまでギリ

ギリにすることはないだろうとも。

そもそも人形がどのように運用されていたかはわからない。だが、霰や寝かされている人形達を見る限り、栄養失調になっているようなことは無かった。食べるくらいはしつかりされている。人形だと言つても、食がちゃんとしていないと、最大のパフォーマンスは出せないということだろう。

なら、尚のことおかしい。それだけの人数を維持するにしても、これは少なすぎる。

「私もそこは気になっていました。これも確証が持てなかつたところなので、再調査をしたかつたのです。これはいい情報ですよ」

「役に立てたのなら嬉しいわ！ もーっと頼っていいのよー」

私も念のため匂いを嗅ぐ。ここに蔓延するのは、焼けた食糧の匂いばかり。特段おかしな匂いはない。死体が無いので、嗅ぎたくないような匂いがないのはありがたいが。

そのままいろいろな部屋を見て回り、その匂いを嗅いだり、各々思うことを言っていく。少ないものの情報は出てくるもので、下呂大將は大変満足していた。

下呂大將の持つ知識にだって限界はあるし、匂いに至っては目に見える情報でもない。特殊なスキルを持つものでなくては拾えない情報である。

「ではここで最後です」

ぐるっと回って、下呂大將が乗ってきた大発動艇が待つ工廠に戻ってきた。用があるのはその横、作業スペースとは別に取られている待機室のような場所。ここには死体もいくつもあるので、慎重に中へ。ここで、私は1つ今までにない匂いを感じた。ここには少し似つかわしくない匂い。

「花の匂いがする」

「花、ですか」

艦娘達の私室や、執務室にあるというのなら、まだわからないでもない。生活に彩りを加えるという名目で花を飾ることくらいはするだろう。

だが、ここは工廠だ。花を置いていても、すぐに汚れてしまうような場所には、正直似つかわしくない。それに、この一室だけに充満しているのもおかしな話だ。似たような匂いは何処にも感じたことがない。

「あの……いいですか」

「三日月、なんですか」

「あの瓦礫の下から……変な感じがします。左目で見ると……ほんの少しですが湧き立っているような何かが見えて」

三日月が左目のことを言うということは、深海棲艦の目だからこそ見えるものがあるということ。私も少し注意深く匂いを嗅ぐと、三日月が言う場所は、花の匂いが若干強い。

ということ、瓦礫を退かしてもらおう。私達でも退かせるとは思つたが、事もあろうに松風が瓦礫を叩き斬つた。5人姉妹の中では最も腕力を持つ松風の豪快な剣技なら、瓦礫の破壊もわけないのだとか。

中から潰された腕が出てきてゾツとしたが、その腕が花卉を1枚握り締めていた。瓦礫の下にあつたおかげか、燃え尽きることなくここに残ってくれていたようだ。

「それです。私に見えた何か」

「部屋の花の匂いと同じだ」

重要な証拠となり得る花卉だ。下呂大将も慎重にそれを回収し、何か拾得物があつたときに入れようと持ってきていた小さな袋に入れた。

赤い、赤い花卉。私には匂いしかわからないが、三日月にはそれがおかしなものに見えるらしい。

「君達が言わなければ、おそらく何も考えずに処分されていたでしょう。それに、崩壊した鎮守府の片付けは職人妖精に任せ切るようになります。それで証拠を隠滅しようとしていたみたいですね」

私達がすぐに来て正解だった。これに気付かなかつたら、知らない間に全て片付けられていた。自分達で言うのはアレだが、これは私達で無ければ気付けない。

「充分です。ではこれで帰投しましょう。重要な拾得物もありました

から、ここから私が調査します。三日月、ありがとうございます。君のおかげで真相究明にグツと近付けました」

「……いえ」

まだ嫌悪感と苦手意識は克服出来ていないか、少し私に隠れ気味。こればかりは仕方あるまい。三日月についてしまった深い深い傷だ。

「それでは、来栖の鎮守府に戻るまでは気を抜かないように。協力ありがとうございます」

家村鎮守府の再調査はこれで幕を閉じる。ここからは下呂大将に任せっきりになるが、先に進むことが出来そうだ。

赤い花卉

来栖鎮守府に帰投。帰投中に襲撃を受けることもなく、無事に鎮守府に辿り着いた。工廠に入るや否や、下呂大将から問われる。

「若葉、最後にもう1つだけ。人形や風雲から、あの時に感じた『煙の匂い』を感じましたか？」

煙の匂いとは、崩壊した鎮守府に蔓延する煤とは違う、嗅いだことのない匂い。下呂大将はタバコか何かかと言っていたが、それがわからないため、私の中では確証が持てないものだった。

あの匂いは、あの場で初めて嗅いだ匂いだ。今まで知らないもの。つまり、今の質問なら対しての答えはノーである。人形と風雲もだし、夕雲や霞からも感じたことがない匂いだ。

「感じない。あの時が初めてだ」

「結構。また協力を仰ぐことになるかと思えます。その時はまた」

「ああ。五三駆は協力を惜しまない」

私だけでなく、全員が頷く。早期決着を目指すために私達の協力が必要というのなら、喜んで協力しよう。特に、家村の生死に関してはなるべく早く知りたい。

「若葉も1つ聞きたい」

「何でしょう」

「結局、家村は生きているのか死んでいるのか」

下呂大将は少し困った顔をした。まだ確定した情報ではないため、不用意に話すと却って混乱を招くのではないかと考えている。おおよそ確定とは言っていたが100%では無いため控えたいと。

だが、確定情報ではないにしろ、私達は心の持ち方に影響があるため、確定でなくても不安を取り除きたかった。

「私の予想の範疇からは抜け出していませんが、いいですか？」

「構わない。教えてほしい」

「……彼は生きています。あの焼死体は偽物フェイクです」

何となくだが、そうではないかと思っていた。下呂大将は最初からその線で調査をしていたように思えたからだ。

そのキーとなったのが、私が感じ取り、今も聞いてきた煙の匂い。その匂いをタバコと仮定した場合、下呂大将の知る家村は喫煙者では無いとのこと。見なくなってから喫煙の傾向が現れたとしたなら、部下である艦娘からも僅かながら匂いを感じ取ってもおかしくない。さらには、瓦礫の中から灰皿などの喫煙に使うものは見つかっておらず、ヤニによる壁の変色も見当たらなかったそうだ。

とはいえ、ここ最近になって吸い始めたとか、必ず鎮守府の外で吸っているとか、抜け道は幾らでもある仮説だ。確かに確証が得られるような情報では無い。そこを調査し、あの死体が偽物であることの裏付けを取るとのこと。

「クスリで釣った一般人では無いかと予想しています。焼死体なら、背格好が同じなら騙し通せると思っただけでしょう。私も君がいなければ確証が得られませんでしたから」

「……そうか。まだ、生きているか」

「可能性ですから、信じ切らない方がいいですよ」

下呂大将が言うのだから、可能性は高い方なのだと思う。

あれだけのことをやっておいて、本人はまんまと逃げ果せていると思うと、腕が疼くほどに憎しみが湧き上がる。後ろにいた三日月の歯軋りと、曙の舌打ちも聞こえた。同じ気持ちだ。

「私としての問題は、こちらです」

私達の恨みと憎しみを逸らすためか、すぐに話を切り替える。

懐から取り出したのは、最後に手に入れた赤い花卉。透明な袋に入ったそれは、死体が握り締めていたので大分萎れている。だが、三日月はそれに対して妙な感覚を持っていた。

「……やっぱり、何かが湧いているような……そんな感じがします」

匂いはただの花なのだが、三日月にだけわかる何か。もしかしたら摩耶にもわかるかもしれない。ちょうど工廠にいるので呼んでみる。

摩耶がその花卉を見た途端、三日月と同様に不思議なものを見たような表情に。

「三日月の言いたいこと、なんかわかるぜ。右目で見ると変な感覚がする」

「ですよね……言葉に表せないんですが……」

匂いには何も影響が無いようだが、深海棲艦の目を通すと何かおかしな感覚がすると。ならば、もうこれは深海棲艦に関係している物としか思えない。海にいる者に花卉なんて、一番縁がなさそうに思えるのだが。

「ふむ……もしや、この花卉……」

「思い当たる節が？」

「以前に見つかった深海棲艦に思い当たるものがあります。当然私は直接見たことは無いのですが、花卉を散らした深海棲艦がいるという資料を読んだ覚えがあります。これがまさかその深海棲艦の花卉とは……」

下呂大将といえど、初めて見るものくらいある。それがこれだったということだろう。

ここから下呂大将は少し調べ物をするとのこと。私達は査察の疲れを風呂で取り、再び戦闘配備で待機となる。事が済んだら下呂大将は自分達の鎮守府に帰投するらしいが、この件が終わり次第ということになった。

風呂を終え、昼食も終え、戦闘配備という名の休息中、下呂大将からお呼びがかかる。先程の花卉の件について調べがつかいらしい。これは飛鳥医師にも知っておいてもらいたいことらしく、施設のメンバーが集められた形になる。

シロクロ霰組は相変わらず部屋の中。たまに外を散歩しているらしいが、セスタ雲組とタイミングを合わせているそうだ。シロクロとセスで相談しながら行動している。

「夕雲が参加してよかったのでしょうか……」

「君だからこそ参加してもらいたかったんです。穿り返すようで申し訳ありませんが」

今回は夕雲も参加。治療中ではあるものの、既に施設組としての認識になっているようである。事実、施設の修復が終わった時点で仲間入りは確定しているので間違っではない。

夕雲はこの中でも、あちらで活動していた記憶をしつかり残している唯一の艦娘だ。正気に戻ったことでその情報を提供してもらいたいと考えてのこと。

「わかりました。罪を償うためにも、夕雲の知ることをお伝えします。そうですね、皆さんの言う通りです。これも夕雲の償いの形ですよ。ね。ごめんなさい、でもまだ死ねないんです。償いきれていませんから。ごめんなさい」

「大丈夫だよウグモ。何度も言ってるけど、ウグモの罪じゃない。でも教えてくれることは嬉しいよ」

「はい……皆さん、セスさんもこう言ってくれているので……ごめんなさい」

当たり前のように幻覚と会話してしまっているが、セスの献身による回復のおかげか、その幻覚も以前ほど攻撃的ではないようで、死を求め続けているわけではないようである。

禁断症状が出ている時の、虚ろな瞳も少し気怠そうな雰囲気も以前のままだが、表情は少し穏やか。霰以上に復帰が早いかもしれないが、幻覚と会話している時点で心に致命傷を受けてしまっているのは確か。

「では始めます。命題はこれ、査察で三日月が発見した赤い花卉。資料を調べたところ、該当する深海棲艦を発見しました」

その資料のコピーを持ってきており、私達に見せてくれた。

そこに描かれた深海棲艦は、私達にはまだ未知の存在。自らの土地を持つ、いわゆる陸上施設型深海棲艦。艦装の形も今までに見たことのない滑走路型。全てにおいて、私には訳のわからないもの。

そして、下呂大将の持つ赤い花卉だが、その深海棲艦の足下に積もっていた。大量に咲き乱れる彼岸花が、この花卉の正体。

「この深海棲艦は、その足下の彼岸花Lycorisから、個体名称『リコリス棲姫』と名付けられています。ご覧の通り、陸上施設型。その場から動かない代わりに、強大な力を持つ深海棲艦です」

私の知る姫級とはまた違った見た目。なかなか豪華な見た目をした、まさに姫である。

「セス、見たことあるか？」

「流石に他の姫とあったことなんて無いよ。シロクロも無いんじゃないかな」

セスやシロクロは動き回ることが出来る姫だが、リコリス棲姫はその場から動くことのできない姫。セスがその場に行かない限り、面識は無い。

加えて、このリコリス棲姫自体が発見された例が少ないらしく、この資料に掲載された写真は、本格的に戦闘した、たった一度の戦場で撮影されたものである。

「この花卉が彼岸花だとしたら、これそのものに毒があります。致死量には届かないので問題はありませんが、一応そういうものと覚えておいてください」

「彼岸花は害獣避けに使われるような植物だ。深海棲艦の持つそれということは、毒性もまったく別物かもしれない。時間があれば僕も花卉を解析したいところだ」

そんな花卉を握りしめていた死体。下呂大将はそこからメッセージ性を読み取っている。死しても何か伝えたいことがあったのか、それとも。

「そういえば……」

曙が何かを思い出したように呟く。

私達よりも長くあの鎮守府に滞在していたのだから、何か思い当たる節があるのかもしれない。あの場では思い出せなくても、ここでは冷静に物事を考えられるし。

「赤い花を明石が弄ってるの見たことがあるわ。酷使されてた頃にチラッと見ただけだから、それかどうかはわからないけど。こっちがクソ忙しい時に何やってんだってイラついたもの」

工場であの花を何かしていたのなら、曙の目に留まることもあったか。

「何をしていたか、覚えていますか？」

「あの時はバカみたいに疲れてたからホントに最低限だけ……花卉を筆って瓶に詰めてたわね」

その内の1枚がこれなのかもしれない。明石がそれをやっていたというのなら、花卉を使つて何かをしていると考えられるか。私達の艤装にはまるで関係ないものなのに、工廠で取り扱っている時点で裏があると思えない。

「ここからは憶測ですが、リコリス棲姫の彼岸花は、夕雲達にも使われていた薬の成分と一致するのではないかと思えます」

流星にそれは……と反論しようとしたが、下呂大将も憶測と言っているし、私も無くはないと思える。とはいえ、例のクスリから感じられる匂いとはまるで違う匂いだ。これを加工することで例のクスリの匂いに変化するのだろうか。

こればかりは成分解析をするしか無かった。

もし本当にそうだったら、この麻薬自体を家村の鎮守府が作っていることになりかねない。飛鳥医師が調査用に持っていたクスリも、世の中に蔓延るクスリも、本を正せば家村に行き着くものだったということだ。

「この憶測が正解だった場合、敵の裏側にはリコリス棲姫が絡んでいることになります。ですが、まだ敵か味方かはわからない状態ですね」

「とうとう?」

「リコリス棲姫が自分から協力して花を提供しているのか、何かしらの理由があつて嫌々協力しているのかがわかりませんから」

シロクロやセスの存在から、このリコリス棲姫も侵略者ではない深海棲艦である可能性もある。そうだった場合、家村は何かの理由で無理矢理服従させている可能性だってある。

「あの……」

夕雲がおずおずと挙手。禁断症状が治まったようで、目の焦点は合っている。

「定期的に戦闘とは違う理由で外に行く部隊がありました……夕雲は参加したことは無いので、その任務の意味はわからなかったのですが……」

ならば、その部隊がリコリス棲姫と定期的に接触していたと考えら

れるだろう。居場所もわかっていると。シロクロやセスは執念深く追いかけて回していたというのに、リコリス棲姫は花卉の有用性で生かしているわけだ。

「我々の次の任務は、この花卉を持つ深海棲艦、リコリス棲姫との接触でしょう。家村が鎮守府を捨てた今、次にどういう行動を取るかがまだ読めません。ならば、そこに繋がるであろうものは全て調べたい。友好的な深海棲艦である場合、協力を仰ぎたいところですね。そうでも無かったら……討伐する必要があります」

下呂大将の憶測が正解ならば、リコリス棲姫がいるせいでクスリが作られているということになる。それが家村に自分から協力しているような深海棲艦である場合、友好的と見せかけた侵略者だ。

そんな深海棲艦は討伐対象。手を結ばない脅威ならば、排除する以外の選択肢がない。そのまま野放しにしていたら、何をしでかすかわからないのだから。

「方針は決まりました。五三駆の皆さん、改めて協力ありがとうございます。この花卉はこちらで持ち帰り分析します」

まずは唯一の手がかりと言える花卉の解析。そこからリコリス棲姫との接触、場合によっては討伐。この流れとなった。

施設組である私達に、何処まで関係してくるかはわからない。話だけを知っておき、その全てを下呂大将達に任せることになるかもしれない。そもそも私達は正規の部隊では無いのだから、ルール上では結構ストレスのところ立っている。余計なことは出来ない。

「ところで飛鳥、治療の方はどうですか？」

「順調とは言いがらいますが、代替用の胸骨が無くてもどうにかする方法は思い付きました。かなり無理矢理な方法で、且つ、時間勝負なので、皆に手伝ってもらうことになりそうです」

成功するかもわからない一発勝負の大仕事らしい。失敗したら治療出来ないどころか死まで見えた方法。だが、みんなで手伝えれば成功率は格段に上がること。

「任せて！ 手術は手伝ったことあるし、頼って頼って！」

「おう、施設全員で治してやりやい」

「頼りにしてる」

また一歩、時間は解決に進む。当面は下呂大将に任せることになるだろうが、こちらはこちらでやれることをやっていこう。大丈夫、きつといい方向に向かう。

霰と夕雲

下呂大將は事が済んだということで、帰投することとなった。まだ遅い時間でも無いので、まるゆの運転による陸路を使って今日中に撤収することのこと。

貸し出しであり、期限がもう終わる透析装置の方は一旦回収されることとなった。なんと今回の施設修復に際し、職人妖精が装置を作り上げてくれたらしい。素晴らしい手回し。どういう原理でそれが出来たかは謎ではあるが、妖精という存在は艦娘よりも謎が多いため、これ以上深入りしないことにした。下呂大將ですらそこには触れていない。

「私も一度戻るわ」

「ああ、今までありがとう神風」

今回は神風も一緒に帰投。

約束である霰と夕雲が治療されるまで様子を見ることは完遂した。まだ禁断症状に悩まされてはいるものの、順調に回復しているため、離れても大丈夫と下呂大將が決めた。

「今度はみんなで新しくなった施設に行かせてもらおうわ。そしたらまた鍛えてあげる」

「楽しみにしている」

今生の別れになるわけでは無い。また会うこともあるだろう。あの施設にいる限り、私達は縁が切れない。

「飛鳥、必要なものは全て用意しますので」

「ありがとうございます。先生には頭が上がりませんよ」

「それ相応の働きをしているからですよ。私も君には頭が上がりません」

今後の治療に必要な薬品は、全て下呂大將が用意してくれることとなった。特に必要なのが、夕雲の処置で使い切ってしまった麻酔。それが無ければ手術も出来ない。

「来栖、まだ襲撃を受ける可能性は十二分にあります。飛鳥の施設への警備も欠かさないこと。いいですね？」

「はい、わかってますぞ大将。今は俺らのうち誰が欠けても詰みつてことア、俺にもわかってますんで」

飛鳥医師が欠ければ、敵艦娘の治療が出来なくなり多数の艦娘が死ぬ。来栖提督が欠ければ、敵の襲撃を抑え込めず敗北必至。下呂大将が欠ければ上との交渉が不可能になるため行動不能。

3人とも重要な立ち位置だ。誰一人失うわけにはいかない。私達は一番身近である飛鳥医師を守ることに専念しなくては。

「では、帰投します。皆で力を合わせて、解決に向かいましょう」

ここからは別行動だ。下呂大将が裏側でいろいろと調査してくれる。私達は風雲と人形の治療と、また来るかもしれない襲撃に対して備えるのだ。

明日には施設修復が完了するということがわかり、今日が来栖鎮守府で過ごす最後の夜となる。明日の朝には帰投だ。

その前にやっておかなくてはいけないことが1つある。それが、霰と夕雲の対面。施設に戻る際に嫌でも顔を合わせるようになるため、これは急務。元々、霰と夕雲を対面させるのは、シロとクロが制限していた。夕雲は会って謝罪したいと言っていたが、霰には刺激が強すぎる。だが、それも今この時をもって解禁しようと、全員で相談して決めた。

夕食前にその場を設けた。飛鳥医師や来栖提督にも話し、談話室を使わせてもらう。雷と曙に人払いをお願いし、私と三日月が仲を取り持つこととなった。浮き輪3体とエコも完備。心が落ち着く状況は完全に出来上がっている。

先に霰を連れられたシロクロが談話室に入る。霰は以前の散歩の時と同じように車椅子に座っていたが、比較的体調が良いように見えた。表情も今のところ穏やか。

「大分落ち着いたから……多分……大丈夫」

「ユウグモの名前は昨日少しだけ出したんだよ。最初は錯乱しちゃったけど、すぐに落ち着いたから、今なら大丈夫……のはず！」

いまいち歯切れの悪い物言いだ、一応夕雲と会わせても大丈夫だ

ろうと判断したようだ。それでも、まだ不安は残っているような言い方。何かあった時はすぐに押さえられるよう、シロクロもすっかり用意していた。

夕雲は元より意思があったことと、霰よりも深く壊れてしまったからか、霰に対してただひたすらに謝罪したい気持ちでいっぱいだった。だが、霰は姫であった夕雲の部下であった経験があるので、夕雲が恐怖の対象になってしまっている。

「霰さんに謝れると聞いて……。ずっとこの時を待っていました。特に謝りたかつたんです。最後に面と向かって殺そうとしてしまいましたから」

目の焦点は少し定まっていないが、セスの引率の下、夕雲が扉の前に。まだ顔は合わせず、声も届かないくらい小さく。まだ刺激が強いかもしれないというのは、セスがさんざん伝えているため、夕雲も察している状態。

この状態で悪い方向に行くと、酷いことになるのは間違いない。霰だ。発狂して暴れてしまう可能性だってある。より一層慎重に。

「アラレ、前に言ったユウグモが、部屋の前にいるんだ」

始まりはクロの言葉から。霰に今の状況を語りかける。夕雲の名前が出た途端、ビクンと震えた。やはり、自分を殺そうとした相手という認識は強い。シロとクロの献身により安定している時間は長くなってきているものの、慣れていないものにはまだ辛いようだ。

それを察したか、セスもなかなか夕雲を送り出せない。ここまでは来て、本当に霰に会わせてもいいか迷いが出てしまう。

「……いいよ……ゆうぐもちゃん……はいつてきて……」

震えた声で、でもしっかりと自分の意思で、外で待つ夕雲を呼んだ。その声を聞き、セスも意を決して夕雲を送り出した。

「霰さん……」

「っ……はあ……んぐ……」

夕雲が談話室に入ったことで、霰の身体が強張ったのがわかる。冷や汗の匂いも漂い始めた。対する夕雲は既に涙目。緊張しているのか、こちらも汗の匂いがする。

「ごめんなさい、霰さん。夕雲はずっと貴女に謝りたかった。最後、あの施設で貴女のリミッターを外そうとしてしまったことを、ずっと、ずっと。夕雲は貴女も殺そうとしてしまいました。それを、どうしても、どうしても貴女と面と向かって謝りたかったんです」

今も夕雲は、家村のせいで殺し続けてきた仲間達の幻覚と幻聴に罵られ続けているのだろう。だが、今だけはそれを無視して、霰にだけ話しかける。周りが見えていないわけではない。目が泳いでいるのは誰もがわかつている。それでも、霰に向かって一心不乱に謝り続けた。

感情が昂ったことでボロボロと泣き出してしまったが、誰も咎めず、夕雲のやりたいようにさせた。いきなり襲い掛かるようなことは無い。

「ごめんなさい、ごめんなさい、夕雲は酷いことを幾つもしてきました。何人も何人もその手にかけてしまいました。でも、貴女は唯一生きてくれているんです。だから、いっぱい謝りたいんです。ずっと、ずっと、謝りたいんです。許してくれなんて口が裂けてもいえません。でも、謝らせてください。ごめんなさい」

それに対して霰は、ただそれを見ただけだった。身体が恐怖で動かないのか、指先はずっと震えている。自分で呼びはしたものの、いざその顔を見たら疎んでしまったようだ。

慰めるように、両手をシロとクロが握る。いつもの落ち着く状況を作り上げて、少しでもこの状況を好転させようとするんだ。

「……ゆうぐもちゃん……あらは……おこつてないよ」

シロの握る右手を動かし、手をどかしてもらおう。何をするかと思いきや、夕雲の方に伸ばした。

「ごめんなさい、ごめんなさい、夕雲は、謝っても謝りきれないくらいの罪を……」

「だいじょうぶ……だよ。あらは……だいじょうぶ」

泣きじやくりながら謝り続ける夕雲の手に触れる。

「あられも……ひどいこといっぱいした……から……」

霰の目の焦点が定まらなくなってきた。夕雲に引つ張られたわけ

ではないが、禁断症状の兆候が出始めている。こんな状態でそれはまずい。

「ひっ、あ、うあ……」

「霰さん……？」

「ああつ、あつ、ごめん、なさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

目の前に夕雲がいても、幻覚が見え始めるとそちらへの謝罪を優先してしまう。シロクロが全力で献身しても、まだそれは治らない。安定していたとしても、ふとした弾みで襲ってくる、下手をしたら永劫苛まれ続けることになるかもしれない罪悪感の幻覚である。

自分と同じものを見ているというのがわかっていいるからこそ、夕雲は予想外の行動に出た。自分がセスにやられた時のように、霰の顔を胸に押し当てるように抱きしめ、そのまま後頭部を撫でながら視界を塞ぐ。そして、

「ごめんなさい、今は、今だけはここに来ないでください」

自分の幻覚に対して、はつきりと拒絶を口にした。自分のためではなく、霰のために。

「勝手なことを言っているのはわかります。貴女達の恨みと憎しみは理解しています。ですが、ですが、霰さんにはやめてください」

まるで、2人の幻覚がリンクしてしまっただかのようになっていた。同じようなものが見えているからこそ、感情移入の深さが違う。霰の今の気持ちを一番理解出来ているのは、紛れもなく夕雲だ。

まるで暴漢から盾になるように霰を抱きしめている。今の2人には、迫りくる亡霊が見えているのだろうか。

「霰さん……夕雲なんかの温もりで気が休まるとは思えませんが、少しでも、少しでもだけ落ち着きましょう」

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

落ち着くまでずっと後頭部を撫で続けた。セスにやられたそれが余程落ち着いたのか、その手つきを真似て、慈しむように撫でる。

夕雲だって震えている。涙だって止まっていない。本来謝るべき相手を拒絶したことで、さらに罪悪感が増している。

「ひっ……ひっ……」

「霰さん、大丈夫、大丈夫です。夕雲が受け止めます。全て夕雲が、皆さんの恨みと憎しみを背負います。全てを、貴女の罪の全てを、あれも、それも、これも、全て」

それに合わせて、エコが夕雲の手を舐める。浮き輪達も2人を慰めるように肩の上で撫でていた。総動員になって2人を落ち着かせようとしていた。

もしかしたら、この謎の生物達にも、2人に見えている幻覚が理解出来ているのかもしれない。

「っ……ひっ……ああ……」

「今は何処かに行ってくれたみたいですね……。ありがとうございます。した浮き輪さん達。エコさんもありがとうございます」

しばらくして幻覚と幻聴が無くなったか、夕雲の目の焦点が定まった。霰も謝ることをやめたため、禁断症状は治まったのだと思う。ずっと震えていたのも止まり、少し落ち着いたようだった。

霰の震えが止まったため、夕雲は抱きしめるのを一旦やめ、また向かい合う。2人とも、涙でグシャグシャの顔。霰は恐怖から、夕雲は罪悪感から。

「霰さん……こんなことを言える立場ではないことは自分でも理解しています。ですが、1つだけ、1つだけ言わせてください」

「……うん」

「また……こうやって話をさせてください。謝らせてください。夕雲は一生かかってでも、今まで犠牲になった人達に謝りたい。全員もうこの世にいないけれど、霰さんはいてくれる。だから……」

霰の手を握る夕雲の手は、まだ震えている。

「……うん、いいよ……もっ……おはなししよう……でも、あやまらなくていい……たのしくおはなし、したいな」

ほにやつと、霰が笑顔を見せた。その笑顔は、少なからず夕雲の心を癒すものだったのだろう。泣き止んでいたものが、また泣き出してしまった。

まだわだかまりはあるだろう。霰にも、夕雲にも。だが、お互いに一歩ずつ前進したことで、2人は少しだけ前向きになれたと思う。禁

断症状はまだまだ続くだろうが、それを乗り越えられる日はそう遠くないのかもしれない。

「よかったよかった。まだちよつと心配だったけど、上手くいったみたいでさ」

緊張感が包むこの部屋の雰囲気には耐えられなくなったか、クロが吐き出すように話す。確かに息が詰まるような空気だった。誰一人として口を挟む隙が無かった。

仲を取り持つなんて考えていたが、そんなことは必要なかったわけだ。いい方向に行つて何より。安心したらドツと疲れが出る。

「アラレは……強いね」

「ホントホント。アラレは強い子だよ」

2人して霰の頭を撫でていた。くすぐったそうにする霰だが、拒むことはない。本当の姉妹がじゃれ合うような光景に、私達も癒される。

「ユウグモ、よく頑張った」

「……夕雲はまだまだ謝り足りません。シロさんとクロさんにも謝らなくては」

今でこそ生きているものの、逃げ回った2人を追いかけて回して、死にかけるほどの怪我を負わせたのは紛れもなく夕雲だ。霰への謝罪を優先していたが、セスに謝ったように、シロクロにも謝りたいと夕雲は言う。

「シロさん、クロさん、ごめんなさい。戦いたくないという貴女達を追いかけて回してしまつてごめんなさい。取り返しのつかないことをしてしまいました。許してくれなんて言えません。ごめんなさい。ごめんなさい……」

夕雲の謝罪に、シロとクロは顔を見合わせる。そして、

「ああ、忘れてたよ。そーいや私達、夕雲に撃たれたんだっけ」

「今生きてるから……別に何とも思つてなかった……」

この返答である。流石の夕雲も目を丸くしてしまった。

「いいよいいよ。だってアレ、夕雲がやりたくてやったわけじゃないでしょ。私達は、何だっけ、イエムラだっけ？ それにケジメつけて

もらえればいいだけだから」

「臙装が元に戻ればいいしね……何も気にしてないよ」

思っても見ない返答に、どういう顔をしたらいいのかわからない夕雲。思考も停止してしまっているようだった。ポカーンと口を開けて、少し間抜けな顔になってしまっている。

シロもクロも、別に夕雲のことを気遣ってそう言ったわけじゃない。本心から出た言葉だ。割り切り方が凄まじかった。だから尚のこと啞然としてしまう。

「ユウグモ、私達はこういうものなんだよ。だから、気にするなつてこと」

納得行くかはさておき、夕雲も少しは救われたのでは無かろうか。これでさらに前進出来ればいいのだが。

新たな始まり

施設に戻る際に懸念されていた霰と夕雲の件が問題なく完了した。今回の件をきっかけに、シロクロとセスは共同で2人の治療を進めていく方針となる。

治療といっても、三日月が回復するに至ったアニマルセラピーを引き続き続行するだけというだけなのだが、離れ離れにしていたものを一緒に行動させることが出来るようになったため、浮き輪やエコの負担がかなり減った。

すっかり安心した私、若葉は、来栖鎮守府で過ごす最後の夜を満喫中。とはいえ、与えられた自室で、寝るまでの時間をのんびり過ごすだけだが。

「これで明日帰ることに支障が無くなったな」

「風雲さんはどうするんでしょう……今は軟禁状態と聞きましたけど」

三日月が言ったことで思い出した。施設に戻り、準備が整い次第やるのは風雲の治療だ。下呂大将に頼んだ各種薬品が揃えば、それがすぐ出来る。

それまで風雲はどうするのだろうか。準備が出来るまではここで軟禁か、拘束しつつ施設に運び込むか。前者の方が確実ではあるものの、来栖提督の手間はかかる。一度に運んだ方が早いはず。

「そこは飛鳥医師に任せる」

「……そうですね。私達が決めることではありませんね」

心配するのはわかる。正直な話、管理が面倒。軟禁を監視しておくにも、私達だけでは隙を見て逃げられかねない。いくら艀装が無くて、あちらは第二改装まで終えた強力な艦娘だ。何をされるかわかったものではない。

せめて昏睡させる薬が手に入るまでは、施設よりこの方がいいと思う。来栖提督には申し訳ないが。

「出来れば、時が来るまでここに置いておいてほしいと思う」

「私もです」

そんなこんなで夜は更けていく。

翌日、出発の時。今回も送ってくれるのは第二二駆逐隊。施設までの大発動艇の運用なら、何は無くともこの4人。護衛も引き受けてくれるのでありがたい。

ここに来た時よりも荷物が少ない代わりに、夕雲も目を覚ました状態。霰と同様、艤装が無いため、来栖提督にわけてもらった数日分の食糧と共に、大発動艇に乗っての移動となる。その表情は穏やかで、霰と並んでいてもお互い不安定にならないでいた。

「風雲はまた今度護送する。そっちの準備が出来たら教えてくれや」
「ああ。その時まで頼む」

結局、私や三日月と同じように、飛鳥医師も今の風雲は手に余ると判断したようだ。軟禁状態を続行し、こちらの準備が出来次第、再びこちらに運んでくれるとのこと。その時はしっかり拘束してくるらしい。

「五三駆の皆さん、そちらでも鍛錬は怠らぬよう。そちらへ襲撃される可能性も0ではありません。むしろ、復旧が完了し、戻ったと知られたら、また何かしらされる可能性もあります」

「勿論だ。若葉達は中立区の抑止力だからな」

鳳翔に言われ、決意を言葉に。みんなが同じことを思っている。

今までのような詰め込みでは無いにしろ、余裕がある時は常に鍛錬をする。そうすることで無抵抗な施設では無くし、中立区を中立区として成立させるための抑止力となるのだ。

「またそちらを訪ねることもあるでしょう。それまで息災で」

「ああ、そちらも」

少し名残惜しくなってしまうそうだったが、私達の本来の居場所はあちらだ。それに、今後はより一層の患者が訪れる可能性が高い。一番では風雲、そこから人形達が数多く。その中には私の姉、初春もいる。

あちらで準備を整え、全員を治療する。それが私達の今の役目だ。胸骨無しの状態での治療法は、飛鳥医師が既に考えてある。まずはそ

れを実施し、風雲を元に戻す。

「では文月、頼む」

「は〜い。それじゃあ、行ってきま〜す」

大発動艇が動き出した。これで来栖鎮守府からは撤収だ。

またここにみんなで来よう。二四駆とはまた演習がしたいし、鳳翔の教えもまた請いたい。やりたいことが沢山ある。

「……少し、名残惜しいですね」

「ああ。数日とはいえ、住まわせてもらったからな」

三日月が呟く。姉妹との交流が出来た三日月も、この鎮守府から離れることが少し寂しいらしい。

最初はあれだけ他人が嫌いで、実の姉にすら拒絶反応を見せていた三日月が、今ではその姉達との別離に寂しさを感じるとは。変われば変わるものである。いい方向への変化は大歓迎だ。

「また来るだろうさ。それに、文月達は遠征で度々来てくれる」

「はい、そうですね。今はそれで充分です」

クスツと笑顔を見せた。これだつて三日月にしては珍しい表情だ。いつも無表情、もしくは負の感情を携えていたのに、今ではここまで表情豊か。それが喜ばしい。

「三日月ちゃん、すごくいい顔〜」

それを見た文月がこちらへ。以前お茶会をした時も、なかなか笑ってくれなかったとボヤク。そういう意味では、まだまだ難しいところなのだろう。指摘されると途端に恥ずかしそうに顔を隠す。そんな状態の航行は危ない。

しばらく進み、ついに新施設のお披露目。遠目から見ても、それが今までとは違うものであることがわかった。

何処から資材を持ってきたのか、少し大きくなっている。今まで居住スペースだった部分は二階建てになっているほどだ。最初から人数が増えることを視野に入れた修復。

「もしかしてアタシらが集めた艦装のパーツ使って作ってんのか？」

「ああ、職人妖精はその場にあるものは全て素材として扱う」

なるほど、あそこにあったものの全てが妖精達にとっては施設を再建する素材だったということだ。瓦礫も、艦娘の艦装も、深海棲艦の艦装でさえも、彼らにとっては建築素材ということになるわけだ。

こちらが使わないでくれとも言っていないので、それはもう容赦なく使われたことだろう。あの施設の一部には、みんなで頑張つて作ったシロクロの艦装も組み込まれてしまっていると思うと、少しだけ悲しい。

「わ、わ、すごいすごい！ あんなに壊れてたのに！」

「うん……すごい。大きくなってる」

そのシロクロは新たな施設に大はしゃぎの様子。いつも物静かなシロも、今はばかりは目を輝かせていた。

私達も表には出さないが結構テンションが上がっている。前が住みにくかったわけではないが、新居というのは心が躍るもの。それが大改築されているとなると、一層楽しく感じる。

「うお、すっげー！ 設備が前より良くなってやがる！」

「エコのメンテもしやすいよ。これは私も嬉しい」

工場側から中へ。工場自体も広くされており、作業スペースも大きい。これには摩耶とセスが大喜びである。

艦装を工場に置く。その置き場もかなり使いやすくされており、工場だけ見れば普通の鎮守府となんら変わらないものである。

しかし、ここはあくまでも医療施設であり、鎮守府ではないため、入渠ドックや建造ドックは存在しない。後者はともかく、前者はあつて欲しかったものの、あれを取り扱うにはいろいろと規約があるらしい。

第二二駆逐隊も便乗し、施設内を確認していく。内部の構造は以前から殆ど変わっていないが、全体的に広くなっているのが特徴。処置室も医務室も広い。さらには通路も広めに取られているため、艦装を装備したままでの行動もしやすい。

「本当にあつた……透析装置だ」

医務室の端、下呂大将が言っていた通り、透析装置が用意されていた。それだけではない。今までここにあり、瓦礫と共にオシヤカにさ

れた医療装置が新品同様の形でそこにあった。

これらは全て、そこにあるもので妖精の力で作られたものだ。模造品などではない、全て本物である。ただし素材はお察し。それこそ、瓦礫に潰された深海棲艦の艦装が使われている可能性も0では無い。何という謎の技術。

「少しここで待っていてくれ。地下を見てくる」

処置室に地下へと下りる階段が付けられていた。相変わらず重厚な扉で鍵もガツチリ。飛鳥医師にしか入れないようにされているのが丸わかり。

そこへと向かい、数分後に満足げな表情で戻ってきた。施設が破壊される前から蓄えられていた深海棲艦のパーツなどは無傷だったようだ。爆発の振動で多少散らかっている程度で済んでいるとのこと。「薬剤以外はこれで戻ってきたな。先生にそこを用意してもらえれば、すぐにでも治療が再開出来る」

「ならそれ待ちだな」

次は居住スペースへ。むしろこちらがメイン。医療施設かもしれないが、私達にはここが生活する場所である。

「キッチンがすごく使いやすくなってるわ！ お料理が捗りそう！」

「食堂自体が広いですね。人数が増えても何とかかなりそうです」

ここに喜ぶのは家事担当の雷と、それを手伝う三日月。今後また人数が増えたとしても、これならあぶれることもない。

家電の類も新品になっているため、綺麗なものである。雷の掃除が行き届いていたため別に汚かったわけではないのだが、前のものと比べると本当に綺麗。わかりやすく新居のイメージ。

「僕の部屋は1階だが、君達は2階になったみたいだな。2人部屋になったみたいだが大丈夫か？」

「それくらいなら大丈夫でしょ。向こうでもそうやってきたんだし。部屋割りも向こうの時と同じでいいじゃない」

「なら、アタシが1人で使っているわけだな。ラッキー」

2階に用意されている部屋数は12部屋と少しだけ増設され、その全てが2人部屋のため、倍以上入るようになっていた。さらには、こ

ここが医療施設であることを加味したエレベーター付きである。ここまで来ると至れり尽くせり。それでも普通なら足りないと思われるレベルだが、今はそれで充分だろう。人形42人全員を施設で引き取るとなったら困るが。

部屋割りも、来栖鎮守府の時と同じとされた。私は三日月と相部屋。前の時から寝るときは一緒だったため、何の不満も苦も無い。満場一致だった。

ザツと見て回っただけでも全てにおいて拡張され、何をやるにも不便が無いものになっていた。それでいて、配置自体は以前の施設から殆ど変わっていないので、すぐに馴染むことも出来る。自室が2階であることくらいである。

「今度またお泊まりしたいな」

「部屋も多いから、帰投困難となったらいつでも泊まってくれて構わない」

二二駆もこの改装には大喜び。以前あった帰投のタイミングで急な嵐に見舞われた時や、襲撃が来そうと予想しての滞在などが、これで一段とやりやすくなる。あの時は足柄が本当に談話室で寝泊まりしたくらいだし。

「あ、職人妖精さん！」

全て確認したところで工廠に戻ると、大発動艇のところに、施設を修復してくれた妖精達が並んでいた。施設を発つ前に見た顔ぶれが、まるでいい仕事をしたと言わんばかりのいい笑顔。私達も感謝している。

「ここまでのものとは思わなかった。ありがとう」

施設を代表して飛鳥医師が妖精に礼を言った。握手したいところだが、あちらのサイズは手のひらサイズ。握手ではなく握り潰すことになってしまったため、指先で握手代わり。

私達には妖精の言葉はわからない。あちらはこちらの言葉は理解出来ているようだが、一方的になってしまふのは少し惜しい。

「来栖から謝礼をと受け取っている。これで良かったのかな」

大発動艇に積み込まれた食糧の中から、これは妖精にということだ

来栖提督から託された金平糖を取り出し、妖精に渡していく。1粒貰うだけでもとても喜んでいたが、手に持つ袋の全てが謝礼であるとかると、熱狂するように盛り上がった。

これほどの仕事をしてくれたのだから、対価はそれ以上のものが必要だ。むしろこちらはこれだけでいいのかと不安になるほどである。「そこまで喜んでもらえるのなら幸いだ。この妖精達は連れて帰るのか?」

「しれーかんからはそう聞いてるよ。お仕事も終わったってことで」

金平糖の袋は臯月に渡された。途端、妖精が臯月に群がるように登り、全員が頭やら肩やらにしつかり掴まる。これで妖精も帰投準備は万全。空になった大発動艇に乗ればいいとは思うのだが、妖精的にはこれがベストポジションなのだろう。

「か、髪の毛ギユウギユウ掴まないでね。割と痛いからね。耳は特に痛いからね!」

「さつちん、なんか凄いことになってるー!」

「臯月、帰りは大発に乗っていけばいいんじゃないか?」

「そうするー」

臯月が群がられ、それを見てケラケラ笑う水無月。冷静に帰投のことを考える長月も、その光景に笑いを堪えているのがわかった。

和やかな、本当に平和な光景だ。これが一時的なものだとわかっていても、ずっとこうして暮らしていきたいものだ。

「それじゃあ、あたし達は帰りませす」

「ああ、今までありがとう。本当に助かったよ」

「いえいえ。嵐の後とか、また来ますね」

これにて第二二駆逐隊も帰投。残されたのは、戦いが始まる前の面子である。

日常に戻ってきた、というわけではないが、元の鞘に収まった感じはする。ここは私達の本来の居場所。新居となっても、一番心が落ち着く場所だ。

「よし、じゃあ、まずはいろいろと片付けようか。今日中に前くらいに

生活出来るようにしていこう」

一息つき、大きく息を吸う。造られたばかりの建物の匂い。ここからが私達の新たな始まり。出来ることなら、このまま平和に終わりたいところだ。

あり得ない声

修復された施設に戻り、早3日。私、若葉は比較的平和な生活を送っていた。

この3日でやったことと言えば、新しくなった施設を見て回り、以前から何か変わったところがないか確かめることと、襲撃を受けて酷いことになってしまった浜辺の整備。

3日もかければ浜辺は元の姿を取り戻し、今では私も朝のランニングが出来るほどになっていた。霰や夕雲も、リハビリということでは激しくない程度にエコの散歩に付き合うようになっていて。日課も戻ってきたおかげで、本当に日常に戻ってきた感覚。

だが、来栖提督や下呂大将から進展の連絡が無い。あちらはあちらで苦戦しているようだった。死を偽装して雲隠れされたとなると、ほんの少しの証拠から微かな光を探していくことになる。

当面は、崩壊した鎮守府で発見した赤い花卉の持ち主、リコリス棲姫の搜索がメインになるようだ。あとは再襲撃を受ける可能性を鑑みて、前ほどの常駐では無いが、暗くなってから早朝までの時間に警備隊の哨戒もお願いしている。

「明日、先生から薬一式が届けられることになった。同時に、風雲がここに護送されてくる。勝負は明日だ」

風雲を治療するために必要な薬剤が揃ったとのこと。移植用の胸骨はもう無いため、飛鳥医師が編み出した新治療法を使った初めての施術となる。これが成功すれば、まだいる42人の人形も確実に治療出来るだろう。私の姉もだ。

それは、今までよりも確実性が薄く、命の危険性まである難しいものであるが、私達の力を合わせることで可能となるスピード重視の技法だという。さらにいえばかなり強引らしい。

「相手が艦娘だから罷り通る滅茶苦茶な術式だが……皆、協力してくれ」

「当たり前だろ。あいつも被害者なんだからな」

「勿論！ 必ず助けるわ！」

心は1つになっている。この医療施設の一員として、一丸となって治療を成功させるのだ。

浜辺の整備も艤装の整備も終わったため、工廠組は途端に暇になる。今は貯め込んでいた艤装も無くなってしまったため、シロク口の艤装も作っていくことが出来ない。無論、霰と夕雲の艤装もだ。復帰した時のために今のうちから手を付けて行きたかったのだが、材料が1つも無いのでそれは不可能。

そのため、私は雑務を手伝っている。来栖鎮守府から一部は分けてもらったが、今のままでは生活もままならなくなるからだ。

「3日でようやく全部調べ終えたわ。日用雑貨が軒並み無くなってるのは流石に辛いわね」

「だな」

物の管理は基本、雷が執り行っている。全部屋をチェックして足りないものを全てメモし、ただひたすら注文。食糧はここに帰ってきてすぐに注文し、生活用品も順番に注文。ここまで人数が増えると、必要なものも多い。飛鳥医師のパソコンを妖精が修復してくれたおかげで、以前のように注文が出来たのはありがたかった。

「家事の方はどうだ」

「三日月と曙が手伝ってくれてるから問題無いわ。夕雲も手伝ってくれるって言うてくれてるしね」

夕雲も雷と同じタイプのようなのである。今でこそまだ禁断症状があるものの、世話焼きの一面も持っていたため、大丈夫と判断されたら家事担当になると自分から言い出した。

霰は今のところ何処に入るかは決めていない。おそらく私と同じように雑務担当になるか。私は工廠での作業もあるので、飛鳥医師の手伝いが主になりそう。

「……夕雲も霰も、短い時間であそこまで治ってくれてよかったわ。まだ時間はかかるかもしれないけど、お話しできて、一緒に暮らしていけるんだもの」

「ああ、風雲も同じように治ってくればいいんだが」

「大丈夫よ！ きつといい方向に行くわ！」

この言葉、どれだけ励みになったか。

「今日のうちに風雲を出迎える準備をしておきましょう。部屋の掃除は終わってるけど、他にもいろいろと……」

などとこれからの話をしているとき、不意に雷が妙な表情をする。

「どうした？」

「声……聞こえない？ 誰かの声なんだけど……」

突然何を言い出すのかと思えば、外から声が聞こえると言う。私には全く聞こえず、匂いも感じない。強いて言うなら、改装したことで雷から漂う深海の匂いが若干強くなっているくらいだ。

「海の方から聞こえる。集中しないとわからないけど……何これ」

私の嗅覚や、三日月や摩耶の眼と同じように、雷は雷で聴覚に何かしらの力を持っているのだろうか。そんなこと今まで一度たりとも言っていないかったが、改装したことで何かしらが発現したのか。

そこで疑問が1つ。雷が持つ深海のパーツは内臓と腹の肉の一部だ。だが、それが何者のものかは聞いていない。見た感じ姫級のものでは無いが、それが影響しているとなると困る。

「雷、聞いたことが無かったんだが、雷の腹に入っているのは、どの深海棲艦のパーツなんだ？」

「話してなかったっけ。私のお腹に入ってるのはレ級っていう戦艦のものなんだって。戦艦だけど私にピッタリだったらしいのよね。小柄なのかしら」

等級で言われてもわかりはしないのだが、戦艦のものが入っているというのなら、何かしらの能力に影響するのかもしれない。だがイロハ級ならそこまでの影響は無いだろう。摩耶のネ級の脚だっておかしなことにはなっていないかったし。私はあくまでも姫級の腕だから影響があつたはず。

「で、声のことなんだけど、だんだん大きくなってるの。何て言ってるか、もう少しでわかるかも」

言いながら、その声がする方へと歩いていく。耳を澄ましながらのため、少々ふらついているのが怖い。なるべく側に付き従い、その真

意を確かめる。

同時に匂いを嗅ぎ続けるが、やはり何も感じない。まだ遠いのか。
「あ、ちよつとはつきりしてきた。ええと……えっ」

工場まで来てようやく言葉がわかるようになったようだ。だが、雷の挙動が途端におかしくなる。

「えっ、な、なに、なに、何なのコレ、おかしい、おかしい」

「雷、どうした」

「怖い、何これ、怖い、怖い！」

耳を押さえて蹲ってしまった。余程酷いものが聞こえているのか、いつものポジティブな雷が何処かに行ってしまったようにガタガタと震えている。

「おい、どうした！ 雷のそんな声聞くの初めてだぞ！」

今までにない動揺と叫び声に、近くにいた摩耶が駆け込んできた。

「変な声が聞こえるの、今も、ずっと」

「声だ？ アタシらには聞こえねえけど……ここから離れるぞ。雷、立てるか」

「怖い、怖いよ……ずっと、ずっと言ってるの」

もう目の焦点も定まっていない。耳を押さえていても聞こえてい
るらしく、それはもう聴覚とは違う域に入っているように思える。殺
意を匂いとして感じる私の嗅覚と同じで、そういう雰囲気や言葉を
として感じ取っているのでは。

だが、声は何なのだ。何を言っている。

「ずっと、ずっと、何で死ななくちやいけなかったんだって、言ってる
の……！」

「ま、マジ……か……」

外から嫌な匂いが漂ってきた。ここで嗅ぎたくない匂いだった。
私としては嗅覚が強くなってから初めて嗅ぐような匂い。実際初め
てではないのだが、生きている状態のそれを嗅ぐのは初めてだった。

工場から海を見る。少し遠く、水平線の近くに、黒い影。

そこには、1体の深海棲艦が浮上してきていた。

ここは中立区だ。艦娘も深海棲艦も生まれず、近寄りもしない場所のはずだ。それなのに、本来いてはいけないものがここに現れてしまった。しかも、ちょうど今は来栖鎮守府の哨戒の隙間時間。最悪なタイミング。襲撃よりも想定外。

生きている深海棲艦を見るのは初めてではない。捨て駒として戦わされているときに、嫌というほどその怖さを刻み込まれている。だからだろう、私も手が震えた。

「嘘だろ……!?!」

「どうすればいい! 撃退するか!？」

「どうにか追い返すしかねえ! アタシは雷を医務室に連れて行く。若葉、行けるか」

唾を飲み込む音がやけに大きく聞こえる。たった1体とはいえ、悪意に塗れた人間や、洗脳された艦娘とは違う。純粹な侵略者だ。

雷はあの深海棲艦の声を聞いてしまったのかもしれない。何故死ななくては行かないという訴えからして、あの深海棲艦はここで死んでいった人形達や、私達よりも前にここに流れ着き息絶えた捨て駒達の怨念の集合体なのだろうか。

「行くさ……行くしか無いだろうこんなの!」

「すぐに増援を呼ぶ! それまで頼む!」

大急ぎで艤装を装備。今の私にはナイフしかないが、撃退するためにはそれだけでは足りない可能性がある。咄嗟に雷の使う水鉄砲も手に取り、出撃した。

あの深海棲艦は殺すのも躊躇われる。ここで自沈させられた、自爆させられた艦娘達の無念の集合体ならば、私はあれを殺すことなんて出来ない。

出来ることなら話したい。だが、あれは理性すらない負の感情の塊だ。言葉も発せず、意思も見えない。覚悟は必要かもしれない。

単騎での出撃。どうするのが得策かもわからない状態で、その深海棲艦の前までやってきた。溢れ出る負の感情が混ざり合った匂いで、

顔を顰めてしまう。

おそらく駆逐艦のイロハ級。私よりも大きな、手も足も無い魚のような魚雷のような、正直あまり気色のいいものには見えない生物。艦娘よりも生体兵器であることを強く表に出している。

私の姿に気付くと、早速こちらに口内の主砲を向けてきた。止まっていたら狙い撃ちにされる。だが、私は今、施設を背にしている。避けたら流れ弾が施設に向かいかねない。

だから、動き続ける。照準を合わせられないように、施設に主砲が向かないように、ひたすらに私を目で追わせる。

「こつちだ。こつちに来い」

せめてもつと施設から離して、安全な場所で戦いたい。こちらから施設が見えなくなるくらいまでには引き寄せることには成功した。

それからは何度も何度も撃たれた。訓練で培ったスピードでそれを全て躲してはいるが、このままではジリ貧だ。曙のように持久力があるわけでもないため、先に崩れるのはおそらく私。だからといって反撃し、これを殺してもいいものか。

そもそも水鉄砲では殺せず、ナイフも非殺傷兵器の鈍だ。なまくら私の今の手持ちで、この敵を倒すことが出来るかもわからない。

「くそ……どうするー！」

水鉄砲を放つが、私は素人だ。片手で放つても当たることはまず無い。牽制くらいになればいいと思ったが、あらぬ方向へ飛んでいく。これを容易に取り扱っている雷と三日月を尊敬した。

ならばナイフでと思うが、何処に攻撃をすればいい。全身装甲のような甲殻に包まれているため、狙うなら柔らかかそうな腹。手足のないエゴのようなものだ。ならば、弱点はそこしかない。

「お前は殺したくない……止まってくれ……！」

水鉄砲を乱射するが、やはり当たらず。私が下手というのもあるが、あちらもしっかり回避してくる。

こちらには入渠ドックも無いのだから、怪我をするわけにはいかない。確実に回避し、確実に事を済ませる。

「頼むー！ 止まってくれー！」

初めて水鉄砲が命中。深海棲艦の眉間というなかなかいい場所に当たったものの、全身装甲のようなものであるそいつには、少し怯んだもののノーダメージ。

「くそ……！」

負の感情の匂いがより強くなった。水鉄砲とはいえ攻撃を当てた私に対して、まっすぐ殺意を向けてきている。

「止まれー！」

援軍としてやってきたセスの声。後ろからは曙も来てくれた。

人形と同じように、姫級の命令なら止まってくれるのではないかという判断。事実、その深海棲艦はセスの声を聞いて動きを止めた。私達の声は届かないにしろ、姫の声なら届く。

「お前の無念は私達が晴らす！ だから、止まってくれ！」

セスの切実な訴えに、ほんの少しだけ負の感情の匂いが落ち着いた。安定しているとは到底思えないが、敵意を少しだけでも失ってくれれば。

だが、その理想はすぐに打ち碎かれる。セスの方を向くと、口を大きく開け、口内の主砲を構えた。相手が姫であることなんて関係無い。本来の深海棲艦としての在り方を逸脱するほどの憎しみで、命令すら聞かない狂戦士状態バグサッカーになってしまっている。

「くそー！ 言うことを聞いてくれ！」

「ああもう！ 危ないわよー！」

セスの襟首を掴み、曙が強引にその場から退避。瞬間、セスのいた場所に砲撃が放たれた。

「話も聞いてくれない！ もうそいつには何も無い！ 意思も、理性もだ。私の声が届かないなら、何を言っても届かない！」

負の感情のみを材料に生まれてしまったが故の、完全に壊れた深海棲艦。中立区という特殊な環境下に生まれてしまった弊害なのだろう。もう、取り返しのない状態だということは、痛いほどにわかった。

「倒すわよ。このままだと嫌でも全滅よ」

「だが……」

「こいつの憎しみも、私らが背負ってやるわよ！ クソ共は必ず追いつめて後悔させてやる！」

躊躇いのある私を余所に、曙は1人特攻。リーチの長さを活かし、深海棲艦の柔らかい腹の部分に槍を掬い上げるように叩き込む。

曙の言う通り、ここでこの深海棲艦をそのままにしていたら、私達の施設は滅茶苦茶にされる。他の鎮守府にとっては何も気にする必要のない雑多な1体でも、私達には脅威だ。ならば、ここで……終わらせるしかない。

「覚悟を決めろ……覚悟を！」

ナイフを握り締める力が増す。今回ばかりは腕の疼きは無い。怒りも憎しみもなく、ただただ悲しいからだろう。

だから、曙の言う通り、この深海棲艦の憎しみは私達が背負おう。必ず、必ず決着をつけてやる。

「すまない。若葉達も、ここでやられるわけにはいかないんだ！」

曙の一撃で軽く浮いた深海棲艦の口内主砲に一撃。攻撃手段を失わせて私達への被害を最小限に食い止める。途中口を閉じられそうになったが、即座に回避。

「2人とも離れろ！」

セスの声に、私と曙はその場から飛び退いた。エコから放たれた艦載機が、その深海棲艦に爆撃。水鉄砲は効かないが、セスの攻撃は当然ながら殺傷能力があるものだ。怯ませて、怯ませて、トドメにコレ。流星にこの一撃は致命傷になり、深海棲艦は沈黙。

「……お前達の無念は絶対に晴らす。だから……今は眠ってくれ」

動かなくなつた深海棲艦に触れ、成仏を願うように独りごちた。

涙は流れなかったが、辛い戦いだつた。深海棲艦との戦闘の方が辛いだなんて、何かが間違っている。曙も舌打ちをし、セスも苦い顔を浮かべていた。

崩壊した中立

中立区である施設の近海に、深海棲艦が現れてしまった。それは難なく撃退することに成功したが、その深海棲艦が、今までここに襲撃させられていた人形達の怨念の塊である可能性が高いため、非常に後味の悪い結果に。

また、この戦いの前に発生した雷の異常。意思も理性もない深海棲艦の声が聞こえるという事態に、むしろそちらの方が心配だった。禁断症状が発生した夕雲達のように目の焦点が定まらず、耳を塞いで蹲る雷の姿は、見ていて痛々しかった。

「戦闘終了。……セスの言葉も届かなかったため、被害を大きくしないように……撃破した」

その深海棲艦の死骸は、工廠に運び込んだ。私や曙よりも大きいものの、これは駆逐艦。セスの爆撃により頭頂部が破壊され、完全に息絶えている。私達がこの命を奪った。

「……始まりの深海棲艦、駆逐イ級か」

工廠で待っていた飛鳥医師が悲しそうに呟く。雷は医務室で眠っており、摩耶が側についてくれているらしい。今はもう声は聞こえないようだが、深海棲艦の恨みと憎しみを直接耳にしてみましたせいで、精神的に不安定になってしまっているようだ。

どういう形で聞こえたかはわからないが、怨嗟の音が気持ちいいはずもなく、私達といるときも本当に辛そうだった。恐怖により我を忘れていそうなほどに錯乱していた。

「雷は何であんなことに……」

「普通じゃなかったわよ。あのポジティブを絵に描いたみたいな雷があんな風になるなんて」

コンビを組んでいる曙も困り顔である。

「飛鳥医師、1つ聞きたい」

「何だ？」

「雷は一体何なんだ」

素直な疑問をぶつける。深海の眼を移植されたからそういうもの

が見えるようになったら三日月と摩耶や、一時的な失明をしたことで嗅覚が異常発達した私とは違う。あれは、最初からそれが出来るような感じだった。今までこの中立区にいたからこそ、不要だったし確認も出来なかった雷の特異性。

後天性の私達とは違う、先天性の力だった場合、雷の生まれ方に何かあるとしか思えない。しかし、雷自身はその記憶を全て失っている。

何かあるのなら、飛鳥医師しかわからないことだ。

「雷は知つての通り、浜辺に漂着しているところを見つけて、僕が保護した、初めての艦娘だ。怪我の具合も君達が知っている通りだ。それ以上のものはない。身体の調査もしたが、頭の上から足の先まで、完全に駆逐艦雷で間違いは無いんだ」

「なら、何で深海棲艦の声が聞こえるだなんて」

「記憶が無いことに何か理由があるんだろう。これまでは思い出しても辛いだらうと詮索を避けていたが……」

私達のような辛い環境からこちらに来たのなら、思い出したくないような記憶な可能性だってある。忘れておけるのなら忘れておいた方がいい。それすらもわからないのなら、触れないことが一番だろう。思い出して余計に壊れでもしたら目も当てられない。

「若葉みたいに、アンタが治療に使った深海棲艦のパーツの影響ってのはないわけ？」

「無いとは言えない。改装によって何かが活性化した可能性だってある。当然検査はもう一度するさ。幸い、今は設備が揃っているからな」

正直、今の雷は本当にどうなっているかわからない状態。腹の中の内臓が引き起こした力なのか、雷が持つて生まれた能力なのか。少なくとも私達ではどうにも出来ないところにある問題だ。

「雷は少し休んでもらう。その間に、先生や来栖に連絡しておく。これは緊急事態だ」

雷のことも心配だが、中立区に深海棲艦が現れたという事実も大きな問題である。

艦娘も深海棲艦も現れないのだから中立区なのであり、今回の深海棲艦の発生によつて中立区という概念が取り払われてしまった。

「事と次第によつては、ここでも鎮守府のような活動が必要になるかもしれない。今はこの程度で済んでいるが、悪化する可能性もあるからな。僕としては……抵抗があるが」

「……ああ」

事態は急激に悪い方向へと進んでいく。それに私達は、ただただ巻き込まれるしかなかった。指を啞えて見ていることしか出来ないのが悔しい。

緊急事態ということで、すぐに来栖提督が駆けつけてくれた。下呂大将は家村関連で忙しく、来栖提督なら現状まだ動ける方だからである。下呂大将にも当然連絡は行っているため、逐一指示を受けながらの行動が余儀無くされている。

「ここに深海棲艦が出たツツーのはマジか」

「証拠だ」

飛鳥医師が指差す方には、私達が撃破した駆逐イ級の死骸。嵐もここ最近は来ていないので、漂着するようなこともない。これは信じるしかない状況。

そのため、来栖提督には海域調査をお願いすることになった。こうなった理由がああ海にあるのではないかということで、潜水艦娘に潜ってもらふことにしている。施設の側ということで、シロクロも手伝うらしい。

その間に、来栖提督は施設の者に事情聴取をする。飛鳥医師と、第一発見者として私がそれに応じることになった。話せることは限られているが、やらないよりはマシということだ。

「大将じゃねエが、俺の予想聞いてもらえるか」

「ああ」

「今までここで沈んじまった奴らの恨みが、許容量を超えたんじゃないかと思うんだが」

近海に沈んでいた艦娘は、ここ最近の襲撃以前から沈んでいたもの

まで合わせると、もう30人を超えている。その内の3人は、自爆により死体すら木っ端微塵になってしまった潜水艦娘である。

潜水艦娘以外は死体を引き揚げてもらっているが、潜水艦娘はなんだから引き揚げ作業が出来ず、死体も放置状態。果たして死体と言える状態かはわからないものの、供養することすら出来ない。

そうして、積みも積もった怨念が、このタイミングでついにこの海の許容量を超えてしまった。飽和状態でさらに恨みが蓄積された結果、その恨みが深海棲艦として形を持ったのではないかと来栖提督は話す。

「深海棲艦の発生の法則はまだ解明されていないが、怨念の蓄積がそれを引き起こす仮説はいろいろな研究者が立てているな」

「俺もその線だと思ってるんだ。ここはクソツタレな戦闘ばかりだったからな」

雷が最後に言った言葉を改めて思い出す。この駆逐イ級は、何故死ななくてはいけないのかと言う声と共に現れたものだ。ここに眠る人形達の怨念の集合体ではないかと、私だっと思ってている。

そのことを来栖提督に話すと、納得したような表情に。

「雷は深海棲艦の声が聞こえたんだな？」

「おそらく」

「……なら信じておく。物的証拠は無エけど、雷がそう言ったというのが十分な証拠だ」

今までの行いの良さであろう。雷は冗談でそんなこという者では無いし、嘘で今眠っているようなことにはならない。むしろ、それが嘘だったとしたら、体臭が少し変化するために私がすぐにわかる。あの雷が今の状況になっているというだけで、信憑性は格段に上がる。付き合いの長さから、信頼も厚い。

「なら、ここの無念を晴らしてやれば、また中立区に戻るかもしれないエ。気休めかもしれねエけど、そう思っていた方が楽だろ」

「……確かにな」

「なら、今やっていることを確実に終わらせてやるぜエ。家村のクソツタレのせいで、中立区すら潰されてるってなっちゃったら、胸糞悪い

じや済まねエよ」

またこの場を中立区に戻す手段があるのなら、そうしたい。一度汚染されたものを綺麗にするのは難しいことはわかるが、出来ることなら何もかも無かったことにしたい。

雷の聞いた声から鑑みると、この近海に飽和した怨念は、おおよそ家村への恨み。何故自分がこんな目に遭わなければいけないのかという疑問から発生した怒り、恨み、憎しみ。それを晴らせば、この海からは多少なり怨念は消えるだろう。また深海棲艦が発生する可能性はあるが、今よりは確実にマシになる。

「で、だ。この近海でも深海棲艦が出ちまったんだ。せめて自衛の手段くらい持っておいてくれ。大将にも許可は貰って、ちゃんと殺傷力のある武器を用意させる」

「……そうなるのか」

「俺らだつて限界がある。今回みたいにな。それに、ここにや戦える艦娘もいる。俺が言ってるのは必要最低限の装備なんだ。お前らが死んだら一番意味が無エ」

今のままで何度も深海棲艦が現れたら、最終的にはジリ貧になるだろう。ただでさえ入渠ドックがない、中立区であるがための施設だ。怪我をしたら治るにも時間がかかる。それに加え、ここで治療を受けているものだっているのだ。

自衛の手段はなるべく強めておきたいというのが来栖提督の考え。海域調査の結果、今後はもうこんなことが起こらないと確定するまでは、施設を守るための必要最低限の力は用意しておきたい。

もう現れないかもしれないし、毎日のように現れるかもしれない。ならば、後者を心配して万全の態勢でいることが得策だろう。

「抵抗があるのはわかっている。そいつらの恨みには正当性があるからな。だけどな、お前らが襲われる理由にはならねエ。それに、セスの命令すら聞かなかつたんだろ。そうなつちまったら、そいつは人里に降りてきちまった野生の猛獣みたいなもんなんだ。嫌なこと言うようだが、割り切れ」

鎮守府のトップを務めるだけある。敵に事情があつたとしても、話

し合うことが出来ずにただ襲われるだけならば、それはもう討伐しか無い。

飛鳥医師はこれまででもなかなか見せたことのない辛そうな表情を見せる。救える命は全て救うと言っているにしても、こうなってしまうては命を奪うしかない。来栖提督が言う通り、私達が死んでは意味が無いのだ。

「……わかった。ギリギリまで説得は試みる。それでもダメそうなら……討伐する。だが、僕はただの医者だ。そういうことが出来る立場にいない。提督ですら無いんだからな」

「わかってらい。お前がそういうこと出来ねエことくらいよオ。だから、基本は俺らに任せろ。緊急時は頼むってことだ」

警備隊は毎日来ているのだ。今回はたまたま隙間時間だっただけ。それでも、今回のようなことがあつたら私達で施設を守らなくてはいけない。

飛鳥医師は仕方なく了承した。流石にこんなことをホイホイ笑顔で選択出来るわけがない。考えた末の苦肉の策だ。

「若葉、お前らにも苦勞をかけるかもしれねエ」

「構わない。若葉達は艦娘だ。本来の仕事に戻っただけだ」

「頼もしいねエ」

苦笑された。こうやって強がりを言っておかないと、私も結構キツイ。

本来の私達の仕事は深海棲艦と戦うこと。それをやっていくだけだ。私は元々、この世界の平和に貢献すると意気込んでいた艦娘の一人なのだから。

来栖提督は海域調査に戻った。私達は眠っている雷の下へ。

「穏やかなもんだぜ。いつも通りって感じだ」

側にいた摩耶がそう言う通り、眠っている雷はいつも通りの寝顔。先程までの錯乱は何処にもなく、穏やかな表情で寝息を立てている。普段の前向きな雷に戻ってくれたようだった。

「起きたら何事もありませんでしたってのが理想だな」

「……ああ」

「辛気臭い顔すんなよな。あの雷だぜ？　大丈夫だ。きつといい方向に行く」

「そうだ。私達が信じなくてどうする。それに、私達が支えていけばいい。」

大丈夫、きつといい方向に行く。雷がずっとそう言ってきた通り、ポジティブにならなくてどうする。他ならぬ雷のことなのだから、きつと大丈夫だ。

「目を覚ましたら検査をする。念のため全員やった方がいいだろう」
「だな。改装したことで何か起きたってのなら、早めに知ったおかねえと」

摩耶も納得。私のように外見に現れていないとはいえ、三日月以外は改装済み。摩耶に至っては第二改装まで終えている。目に見えないところで何かしらの変化があってもおかしくは無い。

「……すまない。僕がこんな治療をしたばかりに」
今回の件で、飛鳥医師も相当参っている。自分の施した治療が、まさかこんな形で牙を剥いてくるなんてと、頭を抱えている。

「泣き言言うんじゃないよ。センセラしくも無え」
「だが……」

「何度も言ってるんだろ。アタシらは命繋いでもらったことに感謝してるんだ。こうしてもらわなきゃ、浜辺でのたれ死んでるんだからな。だからよ、アンタが折れないでくれ」

命を繋ぐためにやってくれた治療だ。私達は感謝こそすれ、恨みは1つも持っていない。それは何度でも口に出して伝えている。こうなったって、私は受け入れているのだから。

飛鳥医師の治療が100%正しいとは言えないだろう。だが、命を繋ぐための最善の方法としてこの治療を選択したことは、実際にそれを受けた私達には間違っていないと保証できる。

「疲れてるならアンタも休めよ。ベッドは空いてるしな」

「……寝るなら自分の部屋に行くさ。悪いな摩耶、僕も大分キテる」

「わかってんならシャキツとしろよ」

ニカツと笑って肩を叩く。雷のポジティブさもそうだが、摩耶の明るさも今を支えてくれる1つの頼れる柱だ。

嫌な状況に向かっていているのがわかる。だが、大丈夫だ。きっと、きっといい方向に行く。

雷の正体

少しして、医務室で眠っていた雷が目を覚ました。周りに摩耶や飛鳥医師がいたことに驚いていたが、自分がどうしてそうなってしまったかは、しつかり覚えていられない。

「雷、今は何か聞こえるか？」

「ううん、なんにも。大丈夫よ」

いつもの雷のようにはいかないうで、笑顔ではあるものの少し疲れたような表情。あんなことがあった後だ。突然またおかしな声が聞こえてもおかしくない状態に、雷も戦々恐々としている。

物言わぬ深海棲艦の声が聞こえ、意思も理性もないものの心の内のようなものが理解出来てしまうというのは、さぞかし恐ろしいことだろう。私、若葉には匂いしかわからないので、そういう恐怖が理解しあえられない。

「キツイなら今日は休んでもいい。少し検査もしたいしな」

「うん、そうさせてもらうわね。ごめんね先生、施設が大きくなったから、お掃除も時間がかかるのに」

「掃除よりも君が倒れたことの方が問題だ。頼ってほしかったら、ちゃんと治そうな」

優しく頭を撫でる。さすが一番付き合いが長い2人だ。お互いの在り方が近い。

飛鳥医師の言う通り。施設の掃除など後回しで構わない。なんなら私達だって出来ること。雷が倒れたという事実が問題だ。今はゆっくり休んでもらい、心身共に回復してもらうのが先決。ポジティブで元気な雷じゃないと、こちらの調子が狂ってしまう。

「改装されてからの精密検査は初めてだからな。摩耶と若葉、曙にも当然受けてもらう」

「そうね、私もちよつと驚いちゃった。あんなこと初めてだったし」

「原因がわかれば、聞こえなくなるようにも出来るかもしれない。そのためにも協力してくれ」

「ええ、わかったわ」

雷の今後にも繋がる可能性のある検査だ。明日に風雲の治療も控えているため、その前にケリをつけたいところである。

検査は私の嗅覚や、シロの感覚的な部分も使って行なわれる。私達よりも最優先は雷。施設全体を巻き込んだ大事になっていた。それだけ雷が頼りにされている証拠でもある。

私とシロは医務室の中で、残りの者が医務室の前に待機しているほどである。夕雲や霞も今は医務室の前。施設の全員がここに集合している状態。

「深海の匂いは少し強くなっている。私達と同じだ」

「体内の深海のパーツが、改装で活性化しているのか……？ 若葉の腕の件と同じなんだろうか」

雷の身体に入っているのは、姫級ではなくイロハ級だ。摩耶と同じように、身体には影響は無いはず。

深海の匂いの源は、傷のある腹。そこ以外からは感じないため、内臓経由で何処かに拡がっているようなこともない。そこ一点に絞られている。前回の状態を隈なく嗅いだわけではないが、これは拡がっていないと判断できた。

「ここで出来る限りを確認したが、以前から変化していないことはわかった。数値は多少変わっているが、概ね平均値。所謂、健康優良児というヤツだな」

「それはちよつとホツとしたわ」

飛鳥医師が医学的に見たら、改装により身体に変化を及ぼすことは無かったようだ。改装前後で変化した数値は無し。多少の前後も誤差程度とのこと。

つまり、外も中も何も変わっていない。改装したことで能力的には格段に上がっているものの、肉体的に影響は無いことが実証された。ここからは感覚的なもの。若干オカルト気味な判断材料になるが、シロの発言は今までも百発百中だ。信用度は非常に高い。

「シロ、君はどうだ？」

雷を見ながら訝しげな表情を浮かべているシロ。そんな表情を見

っていると不安になってしまう。

「イカズチ……駆逐艦……だよな？」

おかしな問い。何処からどう見ても駆逐艦娘だし、検査の結果的にそれもわかっていること。それ以外に何も無いはずだ。

「……私には……戦艦にも見える」

空気が一気に冷えたような感覚。雷が戦艦であるはずがない。見た目だって駆逐艦雷だ。艤装は継ぎ接ぎではあるものの、それも摩耶謹製の駆逐艦のための艤装だ。先日は、それを装備して襲撃を撃退したのだから、間違いない。

そんなことを言われたことで、雷がまた混乱してしまう。失った記憶がそれに関係しているのか、艦種すら違う存在であることが浮上してきた。

「わ、私が戦艦？ そんなわけ」

「あ……そのお腹のせい……かな」

「確かにここには戦艦のもの入ってるけど……若葉だって脚に雷巡の骨が入ってるわ。お腹の傷だって重巡の皮膚で治してるし」

その言い分が罷り通るのなら、私は雷巡やら重巡に見えてもおかしいし、曙は軽巡になる。

だが、その症状は雷にしか起きていないもの。シロから見れば、今の雷は駆逐艦と戦艦、どちらの要素も持ち合わせていると感じるらしい。

「深海の匂い……ワカバ達とはちよつと違う。馴染みすぎに見える……すぐく見ないとわからないくらいだけど……」

少し触らせて欲しいと、シロが雷の耳に触れる。実際に状況が変わってしまった耳に直接触れば、何か原因がわかるかもしれない。以前に靄の胸骨の異常も確認したのだから信用度も高い。

「……………」

「し、シロ？ ずっと黙ってられると不安になるんだけど……」

耳だけではなく、範囲が頭全体になり、今までにないくらい入念に触れている。私や飛鳥医師ではわからない、深海棲艦の何か。人間の技術ではまだ解明できないようなことをしているのかもしれない。

「……わかった」

「な、何が……？」

「イカズチ……前に深海棲艦だった……？」

完全に空気が凍りついた。何を根拠にそう言っているかはわからない。

「……そうか。『D事案』か！」

何かに気付いた飛鳥医師が叫んだ。初めて聞く言葉。医療とかそういうものとは全く関係ないことであるのはすぐにわかる。

「それは……」

「特殊なドロップ現象だ」

そこから飛鳥医師がD事案のことについて説明してくれた。この事案自体はかなり機密に近い位置にある内容。私達は雷のことであるために知る権利があるとされたが、口外は禁物と釘を刺された。

自分のことであるので、雷も緊張しながらその話を聞く。手が震えていたようなので、少しでも落ち着けるように手を握った。少しだけ、汗の匂い。

D事案とは、今飛鳥医師が言った通り、特殊なドロップ現象である。本来のドロップ現象は、抑止力として海そのものが艦娘を生み出す現象。この中では摩耶が唯一その存在であり、人の手による建造ではない、自然発生の艦娘である。

だが雷は、憶測ではあるものの、それとは違う生まれ方をしているという。その生まれ方というのが、深海棲艦が死亡した際に生み出されるというもの。海が艦娘を生み出した時、近くにある深海棲艦の死体を巻き込んでしまうというのがあるらしい。そんなことは極々稀。そんな生まれ方のため、それは深海棲艦から艦娘に生まれ変わったと認識される場合もある。

D事案のDは、Drop^落ではなくDawn^{夜明け}。深海から、海上へ上がってきた艦娘。それが雷の正体。

「私が……深海棲艦……？」

「違う……イカズチは艦娘……。素材に混ぜしちゃってるだけ……真正銘……ちゃんと艦娘だよ……」

D事案で生まれた艦娘とはいえ、その身体は深海棲艦でも何でも無い、普通の艦娘だ。身体に何の変化もないし、生活に何の支障もない。当然、人間に敵対行動を取るようなことも無い。

だが、雷には普通の艦娘とは違う部分がある。それが今回の異常に繋がってしまった。

「そうか……そういうことか。また僕は謝らなくちゃいけない……」

飛鳥医師は何かに気付いたようだ。それは飛鳥医師にとっては、あまりいい方向には思えないことなのである。

「お腹の中のものが……イカズチと噛み合っちゃってる。多分……雷の素材になった深海棲艦と……お腹の中の深海棲艦は……同じ種類の深海棲艦」

ということとは、雷は戦艦レ級の死体を巻き込んで作られた艦娘。そこに治療の一環で戦艦レ級の内臓が入り、さらには改装によって身体により馴染んだことで、雷に何かしらの影響が出てしまったということになる。トドメは中立区に生まれた深海棲艦の声か。

その深海棲艦は、言葉を持たないイロハ級の声を聞くことが出来たのかもしれない。その力が、雷にも表れてしまった。

「すまない雷……僕の治療のせいで……」

さすがの雷も、自分の成り立ちを知ったら動揺せずにはいられなかった。握っている私の手を、さらに強く握ってくる。

だが、すぐにその力は緩む。雷の顔を見ると、いつもの笑みに戻っていた。

「先生、大丈夫よ。私、ちょっと嬉しいの」

「嬉しい？」

「だって、私はここに来る前の記憶が無かったじゃない。思い出せないなら必要のない記憶なんだろうって思ってたけど、そうじゃ無かった。本当に持ってなかったのね。なら納得が行ったわ」

悩んでいないように見えても、雷は記憶が無いことを気にしていたらしい。いるはずの姉妹のことも一切思い出せないのは特に辛かったのかも。

だが、これでわかった。元々が深海棲艦だったというのもあり、そ

ういった記憶を持たずに生まれてしまったのだ。怪我のショックで記憶を失ったわけではない。生まれた時からそれを持つていなかったのだから、何をやっても思い出せるはずがない。自分が艦娘であるというのもわからなかったというのも、そういう理由があったからか。

「今までと変わらないわ。敵が来たら私には声が聞こえるってことは、私は一番最初に気付けるってことよね。このお腹の中にいる子のおかげで、この施設が守れるのよ。それは喜ぶべきよ」

腹の傷を撫でながら、愛おしそうに微笑む。妊婦じやあるまいし。やっぱり雷はポジティブだった。全てをいい方向に捉える。確かに、敵の声、生まれる瞬間がわかるというのなら、発見する前に準備が出来る。中立区を守るのなら、これほどに便利な能力も無い。

「先生、もう大丈夫。怖かったけど、事実がわかったら逆に気分が良くなったわ」

「雷……」

事実、手の震えは止まっていた。自分の存在が理解できたおかげで、何もかもを納得していた。汗の匂いも引いていく。

強がりでも何でもない。本当に割り切っていた。ポジティブもここまで来ると怖いものはあるが、落ち込んで何も手が付かないとか、そういうものより全然マシ。

「今日からは新生雷よ！ この施設を守っていくんだから！」

いつものテンションに戻っていた。検査が終わったためにベッドから降り、元気いっぱいであることを体現した。

呆氣にとられてしまった。まさかここまでとは。その戦艦レ級という深海棲艦も、とびきり明るいような深海棲艦なのかもしれない。そういうところも噛み合ってしまったっていた。

検査の結果はすぐに施設の全員に伝えられた。口外してはいけない情報でも、施設内なら共有してもいいだろう。ここからは外に出さないということだ。

流星に全員驚いていた。D事案自体、本来ならほぼ伏せられている

ようなことだ。生まれた瞬間に立ち会うくらいでなくてはその事実がわからないほど。今回はシロのおかげで話が全て繋がったが、シロがいなければその事実すら闇の中だった。

「あ、自分でわかっちゃったからかしら。浮き輪さんが何言いたいかわかるかも」

「それ、私にもうつすらしかわからないんだけど!？」

エコとは主人と艀装という関係であるために完全に心が通じ合っているようだが、浮き輪は別物のため、持ち主のセスですら意思疎通がギリギリだという。

それと意思の疎通が出来るというのは、今までにない能力。艦娘の心を読むとかは無理だし、シロクロやセスの本心が聞こえるとかも無理だが、私達と意思の疎通が難しいものの声が聞けるとするのは非常に大きい。

「多分……一度声を聞いたことで……チャンネルが開いちゃったんだと思う。これからは……全部聞こえるんじゃないかな……」

「そうなのね。便利じゃない!」

ケラケラ笑っているが、結構大事。聞かなくてもいいことまで聞くことになるのだから、雷にはそれを耐えてもらわなくてはいけないようになってしまう。

「大丈夫、この力、絶対いい方向に行くわ。あ、でもどうせなら元々の艀装とかも使ってみたいわね。戦艦レ級の艀装とか使えないかしら」

「無茶言うな。ここに無えつてのものもあるが、お前はまず駆逐艦なんだよ。レ級がどんな深海棲艦かは知らねえけど、最初から接続が出来ねえ」

「なーんだ、残念。もっと施設を守れると思ったんだけどなー」

本当に元の雷に戻ったようだ。その姿に、みんなが安心した。

「まあ、雷はこうでないとな。うん、明るい雷が一番だ」

摩耶の言う通り、雷はこうでなくては。

一丸の治療

雷の正体がD事案によって生まれた元深海棲艦であることがわかった。飛鳥医師が施した治療により体内に入った深海棲艦のパーツが、偶然にも艦娘となる前のものと一致してしまったが故に、改装によりその深海棲艦のスペックが表側に出てきてしまったのである。

とはいえ、雷は持ち前のポジティブさから、そのことはまったく気にしておらず、むしろイロハ級の声が聞こえることを有利に考えている。深海棲艦が現れたらすぐに対処出来ることで、施設防衛により貢献出来ることを喜んだ。

その後、改装された者達全員の再検査は終了。雷と同様、異常無しと判断された。腕の色素が肩に侵食を始めている私、若葉も、検査の結果的には健康体として判定された。

他の者も念のため検査し、今施設にいる者に何かあるものはいないとして終わった。大事になりかけたが、何事もなく何より。

「五三駆もイロモノ集団よねまったく」

自嘲気味に曙が呟く。その当事者である私が言うのも何だが、そもそもがそういう者しかいない。雷がこうなったからではなく、最初からである。

「一度死んだ曙が一番イロモノなんじゃない？」

「アンタも似たようなものでしょ。元深海棲艦だなんて」

コンビの二人が言い合っているが、これも仲がいい証拠。相部屋で生活しているため、なんだかんだ言いながらも相性のいいコンビである。むしろこんな風だからここまで言い合えるのだろう。

「仲いいですね……」

「ああ。あの2人はいいコンビだ」

見ていて楽しい。雷が崩れなくて本当に良かった。

翌日、予定通り風雲を治療するためのものが全て揃った。それをこちらに運んでもらいつつ、風雲も護送。こちらに来たらすぐに処置を開始する。

今回は2度やった処置とは違う、胸骨無しの施術。広くなった処置室のおかげで、人数はそれなりに入れる。施設の者総出で、風雲の命を救うことになる。

これを察知して来栖提督が海上で襲撃を受けるといふこともなく、無事施設に到着。あちらも襲撃により崩壊したという体があるからか、そこまで表立って攻撃してくることはないのだろうか。

「っし、連れてきたぜエ」

来栖提督が乗った大発動艇には、全身を拘束され、猿轡すら噛まされた風雲が荷物のように積み込まれていた。艀装も何も無いとはいえず、行動できる状態では、いきなり来栖提督に襲いかかってきてもおかしくないため、仕方なく処置したとのこと。

事が事だけに、護衛艦隊も戦闘をメインにしている編成。周囲警戒に鳳翔も据えた万全の態勢。さらには海中には伊168率いる潜水艦隊も、監視の目を張り巡らせているようだ。

「んで、これが薬な。俺にやどんなもんかもわかんねエから、とりあえず渡しとく」

「ああ、ありがとう。これがあれば風雲は処置出来る」

来栖提督の差し出す箱の中を確認して頷く飛鳥医師。これで全てが整った。

念のため来栖提督達は処置が終わるまでは施設に居てくれるとのこと。万が一のことが起きた場合、施設を守ってもらわなくてはいけない。1回深海棲艦が現れたのだから、また出てもおかしくないのだ。

「風雲さん……」

大発動艇から運び出された風雲を見て、悲しそうな目をする夕雲。今は禁断症状は出ていないようだが、いつ出てもおかしくなくらいに不安定にさせられていることだろう。

夕雲の陰にいる霰も少し震えている。施設にいるときに、風雲の下で働いたこともあるかもしれない。今後、家村鎮守府の姫を見るたびにこうなる可能性はある。

「貴女の治療は夕雲もお手伝いします。実の妹ですから」

拘束されている風雲は、治療されここで生きている2人を冷たい目で睨み付けていた。

以前まではクソのような志を共にした仲間。襲撃していた時は失敗した口封じ対象。そして今はのうのうと生きている裏切り者。悪意しかこもっていないことが匂いからもわかる。猿轡が無かったら罵詈雑言も浴びせかけていたことだろう。

「あられも……てつだう」

「お願いします。妹の呪いを解いてあげてください」

呪い。そう、呪いだ。鎮守府の意向で本人の意思にそぐわぬ行為をさせられ、使えなくなったら命すら奪われる呪い。

その解呪は私達なら可能。今まで2度成功していたのだから、3度目だつて大丈夫。手段は違えど、上手くいく。大丈夫、きつといい方向に行く。

「じゃあ、すぐに始めよう。皆、頼む」

「了解。出来ることを全てやる」

私は特に重要な位置にいる。麻薬と深海の匂いが失われたことを確認出来るのは、基本私だけ。あとはシロがわかるくらいか。

「今からやることは2つ。1つ、胸骨を修復し、増血機能の浄化。2つ、旗風が斬つたであろう壊れた自爆装置の摘出だ。透析は全て終了後だ。まずは最重要な胸骨修復を最優先で行なう」

処置室に運び込み、風雲を昏睡させながら簡単に説明された。当然ながら、胸骨修復が最難関。

今までは胸骨を抜き、即座に用意しておいた胸骨を移植することで施術をスピーディーに終わらせることが出来た。だが今回は、抜き出した胸骨をその場で解体し中身を浄化、腸骨から骨髓を抜き取り、胸骨に移植。それをまた入れ直すという滅茶苦茶な施術となる。

僅かではあるが高速修復材はまだ残っている。それを的確に使えば、余計な手間はかからない。

「今から風雲の胸を開くことになる。当然、ここにいれば血も出るし、見るに堪えないものも見ることになる。いいな？」

全員が頷く。私や摩耶、雷は、処置に付き合っただけもあるため、初

めてでは無い。他の者はこういう場合は初めて。緊張感が高まる。耐性がないものは、その現場にいるだけでも体調を悪くしかねない。「以前に若葉に頼んだときにも話したが、施術は僕の指示通りに動いてほしい。そうすれば、風雲は救えるはずだ」

「私達は素人も素人だもの。指示くらいバンバン寄越しなさいよ」

今だけは家主と居候という関係ではない。今だけは上司と部下、提督と艦娘の関係になる。三日月の時と同じだ。

「若葉は24時間働ける」

「私も頼ってよね。行けるわ」

「ああ、皆頼りにしてる」

初めてやった霰の処置が数時間程度。今回の処置がどれくらいかかるかはわからない。だが、長丁場は経験している。大丈夫だ、やり通すことくらいできる。

ここから先は失敗が許されない道だ。確実に、丁寧に、だが俊敏に、すべてをこなして風雲を救うのだ。

施術が完了したのは、それから数時間後。霰のときより時間はかかり、昼も大きく回っていた。

幸い、処置中に深海棲艦が発生するようなことも無く、家村鎮守府からの襲撃も無かった。来栖提督達はただ待つことになったが、外で何事も無かったのはありがたい。

飛鳥医師の編み出した移植用の胸骨無しの治療は大成功だった。現在は処置室から医務室へと移動させ、透析をしているところ。これが終われば風雲は回復。あとは霰や夕雲と同じように禁断症状に苛まれることになる。

「ありがとうございます。妹は救われたと思います」

ホツと一息ついた途端、崩れ落ちるようにその場に座り込んでしまった夕雲。他のみんなも曙を除き疲労困憊だった。さすが持久力トップ。

風雲の体内に直接触れることが出来るのは、基本的には飛鳥医師だけ。処置中は私達手伝い全員が処置室を行ったり来たり。本当にス

ピード勝負となっているため、バタバタ走り回るようになってしまった。

特に胸を開いてからは総力戦だった。胸骨を抜き、それを加工していた摩耶と私。半分に割り、中身を洗浄して、完全に匂いが無くなったことを確認してからまた同じ形に戻す。たったそれだけが緊張感が半端無かった。臙装を弄れる私達でも当然初めてのことで。手が震えかけたほどだった。

「あんなこと、まだ何度もやるんだよな……面白えじゃねえかよ」

「ああ、次はもつと手際良く出来るはずだ」

私と摩耶が骨を加工する間に、さらに開いて胸に仕込まれた火薬を摘出。さらには腸の合間に隠された起爆装置も摘出。結果的に、風雲はそれなりに大きな範囲を開かれることになった。

旗風が破壊した腹の起爆装置は、恐ろしく綺麗に真つ二つにされていた。そのため、破片が散らばっているとか、そういうことは一切無かった。故に、摘出自体はとても簡単だったという。

高速修復材は、加工した胸骨を体内に戻す時に使われた。骨同士の癒着にも使えるようで、体内だけに限って言えば、今は全て元通りと言ったところ。胸と腹にはまだ縫合痕が残ってしまっているが、これは私達の傷とは違い、時間経過で消えていく。少しの間は鎮痛剤を投与し、自然治癒を促す。

「皆、ありがとう。透析さえ終われば、風雲の身体は完治だ。ここからは皆で風雲を支えていかなくちやいけない」

「夕雲がやらせていただきます。姉ですから」

「あられも……おなじところにいたし……ね」

同じ境遇の2人が風雲の側にいると話す。まだ2人とも禁断症状も抜けていないというのに、率先して協力してくれる。禁断症状の辛さを一番知っているのは、勿論、現在進行形でその症状に苛まれているこの2人だ。だからこそ、力になってあげられるというのもあるだろう。

特に夕雲は力が入っていた。実の妹であるということが大きい。手伝いも一番動いていた。出来ることは言われたものを持つていく

ことや、処置室を清潔に保ち、感染症を防ぐくらいしか出来なかったのだが、それでも一生懸命に動き続けていた。

「大丈夫か？ 君達は自分のことだって」

「大丈夫です。そちらの方々が文句を言っていますが、これは夕雲がやらなければいけません」

無論、それは私達には見えていない者達。夕雲にしか見えていない亡霊。処置が終わったことで緊張感が抜けた瞬間に、禁断症状に襲われていた。霰も焦点の定まらない眼を塞ぎ、ブツブツと謝罪の言葉を呟き続けているため、シロクロがすぐに隣にいた。

夕雲にしか見えない亡霊は、自分達を殺したのに風雲を助けたことに対して文句を言ってきたらしい。そしてそのまま、夕雲の死を望んでいると。

「ごめんなさい。貴女達を殺してしまったことは確かです。ごめんなさい。夕雲には謝ることしか出来ません。ですが、妹はこれで呪いが解かれ、夕雲と同じ苦しみを味わうことになってしまふんです。本当にごめんなさい」

謝りながらもしつかりとした意思。妹の側にいたいという意味を、亡霊達にずっと伝えていた。虚ろな目ではあるものの、壊れているものの、今の夕雲は自分を確かに持っている。

「きつと風雲さんは辛い思いをします。支えてあげるのは、姉の役目です」

「……そうか。なら、明日からは君に一任する。いいか？」

「はい、夕雲にお任せください」

ニコリと笑みを浮かべた。まだ幻覚が見えているだろうが、それを感じさせないほどにまで、夕雲は回復していた。

「さあ、あとは透析が終わるのを待っただけだ。前例からして、ここから数時間はかかる。その間に休憩をしておいてくれ」

風雲の処置はこれにて終了。これでやっと、多くいる治療対象者のうちの1人目を治療することが出来た。

今回はこういう形になったが、残り42人の人形の治療をどうする

かはここから検討していく。全員を搬送するのは無理だし、1人ずつでは時間がかかりすぎる。それに、施設にある処置用の薬も、42人分には流石に足りない。

治療法は確立出来たのだから、他の医療機関を使ったりすることも視野に入れている。ただし、信用のある機関に限るが。

「疲れました……」

「お疲れ様、三日月」

休憩は自室。私は三日月と寛いでいる。浮き輪は当然1体借り受け、三日月の癒しに。

「私の処置の時も……あんな感じだったんですか？」

「いや、正直、もっと大変だった。全身の皮膚の件があったし、人数がいなかったからな」

「あれよりも大変だったんですか……」

「若葉の処置が最長記録を保持しているらしいがな」

三日月も、夕雲と一緒に溢れ出す血を掃除したり、痕を清潔にしたりとバタバタしていた。私達は前半戦担当だったが、三日月は後半戦担当だったというイメージ。

「……改めて、命を維持するのが難しいと思いました」

「そうだな。だから尊い」

「はい。それを蔑ろにするあちら側への怒りも、少し増しました」

あまりいいことでは無いが、命を粗末にするような連中には覚悟してもらわなければならぬ。因果応報という言葉を、その身で味わってもらわなければ。

悪夢からの目覚め

夜、風雲への透析が完了。それをずっと夕雲と共に見届けたセスに呼ばれて、飛鳥医師と私、若葉は医務室にやってきた。セスは寝起きに見るのはまずいと医務室から離れる。

人数が増え、やれることが増えたとしても、治療が成功しているかどうかを判定出来るのは相変わらず私の嗅覚かシロの感覚しかない。そのシロは、基本的には霰の側にいるため、動くのはまず私である。

医務室は少し薄暗かった。風雲が目覚めるのを待つ間、夕雲はその横の椅子から微動だにしていなない。ジツとその寝顔を見ながら、何か考え事をしているようだった。

嫌な予感はない。むしろ本気で心配している表情。匂いもおかしなことはない。ここですつと風雲を見ながら、禁断症状に襲われてもここから一切動かなかったという。一言も発せず、ずっとずっと風雲が元に戻ることを祈っていた。

「若葉、頼む」

「了解」

透析終了ということで、前の2人と同じように風雲の匂いを嗅いでいく。最初とは違い、麻薬の甘い匂いも、微かにあつた深海棲艦の匂いも、全て無くなっていた。匂いに関しては完全にリセットされた。その間に装置も外され、あとは起こすのみ。これはもう夕雲の仕事だ。目を覚まさせるのは私達ではない。

「夕雲、起こしてあげてくれ」

「……はい」

ベッドに近付き、肩を叩く。

霰はすぐに錯乱して暴れ出した。夕雲は死を望んだ。風雲はどうなるか。

「風雲さん」

優しく呼びかける。すぐには起きず、その後、肩を叩いては呼びかけ続けた。

それが何度か続いた後、うつすらと目を開いた。最初の霰や夕雲と

同じように、虚ろではあるが、泥沼のように濁った瞳ではない。

「よかった、目を覚ましてくれて」

「夕雲姉さん……なんか酷い夢を見たよ」

雲行きが怪しくなった。起き抜けに暴れ回るようなことが無いのはいいことだが、今の物言いは少しズレている。まるで、今までやらされていたことを現実と思っていないような言い方だ。

その言葉を聞き、夕雲の身体が強張るのが見えた。どう扱えば最善かを考えている。これは非常に難しい。

「私が命令すると、僚艦の子達が自爆しちゃうの。秋雲の漫画でもあんなの無いよ。もう……夢見が悪いなあ……」

頭を掻きながら身体を起こすが、まだ処置の際に開いた胸と腹の傷は当然閉じていない。常に鎮痛剤を点滴しているものの、動けば痛いもの。ましてや、知らずにそんな動きをしまえば、激痛は免れない。

小さく悲鳴を上げた後、倒れるように横になってしまった。このようなのも無理はない。あの痛みは普通ではない。

「痛たた！ あれ……なんでこんな大きな傷が……。ドックは？ 入渠しないといけないくらい酷い傷よコレ」

夢としておくか、事実を伝えるか。これを考えるのは夕雲だけではない。だが、誰も答えを出すことが出来ず、だんまりになってしまった。夕雲に至っては涙目である。

さすがの事態に風雲も不審に思ったようだ。身体は起こせないものの、首だけは夕雲に向けて疑問をぶつける。

「何よ黙りこくっちゃって。それに、なんかいつぱいいるのね。そんなに睨み付けなくても……私、何か悪いことしちゃった？」

禁断症状による幻覚も見えている。それをそうと認識していないにしても、この反応は今までで初めて。今ここにいるのは風雲を抜いたとしても、夕雲、飛鳥医師、そして私の3人だ。いつぱいではないし、そもそも誰も風雲のことを睨み付けてなんていない。

夕雲のように幻聴はまだ聞こえていないようだが、時間の問題だと思おう。ならその前に、それが幻であることを自覚してもらおう必要がある。

るのではないか。事実と誤認して死を強要されるのは、幻覚よりも心が折れる。

「風雲さん……落ち着いて聞いて」

私が言い出そうかと思つたところで、先に夕雲が動いた。姉として、責任を負おうと。

「……事実なの」

「何が？」

「……貴女の見た夢は……事実なの」

もう夕雲は泣いていた。風雲の肩を掴み、震える手で真実を突きつけた。対する風雲は現実感がなさ過ぎるのか、まだ信じているようには思えない。

「姉さん、流石に冗談にしては悪質じゃない？」

「……夕雲がそんな冗談を言う艦娘に見える？」

「そんなバカなこと……あるわけないじゃない。なんで私が仲間を……仲間を……」

風雲も震え始めた。本来の夕雲は、こんな悪質な嘘を言うタイプではない。それにより、今まで酷い夢だと思つていたものが、夢ではなかったと理解してしまった。おそらく、幻覚の亡霊達からの声も聞こえ始めたのだと思う。幻覚自体が酷くなっているかもしれない。

「嘘、嘘よ。そんなこと私、私……」

「やらされていただけ、やらされていただけなの。夕雲も同じ。思い出したのなら、夕雲も仲間だったこと、覚えているでしょう……」

あちら側の鎮守府で仲間同士だったのだから、姉とやってきたことだつてあるだろう。その時は自分の意思になつてしまつていただけだろうが、それは全て、家村のせいであつただけだ。

全て繋がつたようだった。完全に目の焦点が定まらなくなった。私達にはわからないが、夕雲と同じように自分が手にかけてであろう艦娘の幻覚と幻聴に襲われ、正気で無くなつていく。

「いや……私はなんて事を……」

「大丈夫、大丈夫よ……皆さんきつとわかつてくれる」

視界を塞ぐように抱き締める。もうこれは伝統になろうとしてい

た。最初はセスから始めたことだが、一番的確であるとして夕雲も頻繁に使っている。

幻覚はこれで防げるが、幻聴はどうにもならない。それを紛らわせるために話しかけ続けた。

「夕雲もずつと謝ってるの。周りにみんながいるんでしよう。何で前がのうのうと生きているんだって、早く死ねって罵られているんでしよう。わかる、わかるわ。夕雲もそうだもの」

自分の禁断症状に耐えて、妹をあやす。夕雲にとっては、これが一番の治療法なのかもしれない。他人への献身により救われる。それが妹なのだから尚更だ。

夕雲は雷と同じタイプなのだろう。頼られたいし、お世話をした。回復したら家事をやりたいと自分で言うほどだ。雷とは相性が良さそうである。

「風雲さん、一緒に生きましょう。辛いならお姉さんがついてるわ。夕雲もその手にかけて人達は見えるの。同じなの。だから、ね？」

「姉さん……姉さん、私、私……」

「いいの、辛かったら全部話して？ 夕雲が全部受け止めてあげる」
そこから、風雲は大泣きしてしまった。夕雲相手なら好きだけ自分がさらけ出せるのだろう。飛鳥医師と私は、もう視界にすら入っていないかった。

さんざん泣き多少はスッキリしたか、鼻をすすりながらもある程度正常になった風雲。幻覚も今は見えておらず、幻聴も聞こえていない。

泣きじやくりながらも、夕雲に説明されたおかげで現状は理解出来たようだ。提督という立場を悪用した、艦娘の無茶な運用。命すら玩具のように扱う戦法を艦娘に指揮させるといふ事実を知り、風雲は憤慨していた。

「何よそれ、そいつのせいで私はこんな目に遭ったわけ!？」

風雲自体が今までと違って錯乱していないおかげで、難なく説明が出来た。

治療してきた中では一番サバサバしているというか、あつさりとした性格をしていた。これまでの血塗られた過去で頭を抱えていたが、原因が別にある、自分の意思まで塗り替えられていたとわかると、罪悪感より怒りが上回ったようだ。

「ああ、僕らはその提督を打倒するため、複数の提督と組んで行動している。僕は君のように家村に操られた艦娘の治療に専念しているんだ」

「私も協力する。そんなの絶対に許さない！ あんな提督^{ヤツ}をご主人様と呼んでただなんて、吐き気がしそう！」

あの時の自分を恥じるように憤慨していた。

意気込みは十分。体力はまだまだ回復しておらず、度々幻覚と幻聴に苛まれるが、他の2人より元気。これなら回復もかなり早そうだ。

「まだ辛い部分も多いと思う。今は休むか？」

「ううん、今から話せることは全部……ちよつと待って」

目があらぬ方向へ。こう話している間もまた禁断症状が現れてしまったようだ。飛鳥医師の後ろを見ながら、今まで怒り狂っていたものが、途端に穏やかに。

「貴女達の仇は必ず討つから待って。私の手で命を落としてしまったことはごめんなさい。でも、家村提督がいなければお互いこんなことにはならなかったわ。だから、私達を信じて」

風雲もまた、夕雲と同じように幻覚を受け入れてしまっているタイプ。当たり前のように亡霊に話しかけるが、夕雲のような謝罪ではなく、その無念を晴らすことを誓うように語りかける。

姫の体液を入れられていた弊害で、やはり罪を謝罪するという考えがすぐには思い浮かばなかった模様。ただし、やらされていたので罪ではないと私達がさんざん言っているためか、謝罪より無念を晴らすことを優先しているように思えた。

「これはまた……違ったタイプだな」

「3人目ともなると……な」

壊れ方も三者三様。その中でも、風雲はとても前向きだった。見えていないところで致命的な壊れ方をしている可能性が無いとは言え

ないが、今まで治療してきた3人の中では、もつとも受け答えがハツキリしている。割り切っているわけではないと思うが、表に出さないところは姉よりも心が強いのだろうか。

「ん、まだ付いて回ってるけど、ちよつと今は待っていてもらうわ。で、何を話す?」

気を取り直してこちらを向く。夕雲も苦笑していた。

「赤い花卉について何か知らないか」

「花卉? ああ、リコリスのことね」

いきなり繋がった。

「私、あれの回収部隊に入れられたことあるわ。真つ白なお姫様が育ててる花を貰ってくるのよ。育ててるっていうか、勝手に生えてくるみたいだけど」

「真つ白な姫……」

「提督や大淀さんはリコリスって呼んでたわね」

やはりリコリス棲姫で間違い無かった。下呂大將が調査して見せてくれたリコリス棲姫の写真も、真つ白な姫だった。

また、家村と一緒に出た名前、大淀。下呂大將の読みでは、その大淀は洗脳されているのではなく、素面で家村と行動を共にしていると考えている。今の話を聞く限り、あちらの鎮守府はその2人で成立していたと思える。

「リコリスは友好的な深海棲艦だから、協力してくれているからって、僚艦を連れて花卉を運ばさせられてた。その花卉が何に使われてるのかは知らないけど、なんて言うのかな、匂いを嗅いでると落ち着くのよ」

「その花卉が、君達に使われていた薬の原材料じゃないかという疑いが出ています。リコリス自身はそんなこと言っていたか?」

「ううん、何も。友好的って言われてただけあって、敵って感じはしなかったかな」

あくまでもリコリス棲姫は協力者というわけだ。そこに意思があったかは定かではないが、今の状態では敵とみなしてもいいかもしれない。

「居場所はわかるか？」

「ええ……って、待ってて。貴女達ちよつと落ち着いて。貴女達の仇を取るための話なの。気持ちにはわかるけど、今は邪魔しないで、ね？」話の途中で、不意にまたあらぬ方向に話しかける。禁断症状が合間に現れてしまっているようだ。何もないところにいる者を宥めている姿は、少し痛々しい。

「ごめんなさい、話を続ける。リコリスの居場所は私が覚えてる。道案内も出来る」

「だが、君はまだ本調子ではないし、艦装は破壊してしまった。場所を教えてくださいればこちらで」

「あそこ、決まった海路でないと辿り着けないのよ。海流がどうかで、羅針盤が狂うの」

なるほど、だから今まで見つかっていなかったし、あちら側の者しか場所を知らないのか。リコリス棲姫に出会うまでには手順があるわけだ。加えて、リコリス棲姫は空襲を主な攻撃手段として使っているらしく、制空権を取るのも難しいらしい。

そうなると、花卉回収部隊として行動していた風雲の手を借りないと出会うことすら出来ないかもしれない。強行軍はこちらの破滅に繋がるかもしれないわけだし、より堅実な手段を取った方がいいだろう。

「わかった。君の体調が戻り次第、協力してもらいたい」

「ええ、あの提督にギャフンと言わせないと気が済まないわ。ああ、もう、思い出すだけで腹が立ってきた！」

随分と勝ち気な性格の様子。穏やかな夕雲の妹ではあるのだが、夕雲とは少し性質が違う。姉妹といっても十人十色。そう思えない関係性の者達だって沢山いる。

「風雲さん、傷が開いちやうわ。今は大人しくしましょうね」

「痛たた……これどれくらいで治るの？」

「君達艦娘なら1週間もあれば痛みくらいは取れるだろう。高速修復材もあるにはあるが、他の人形達の治療に使いたいんだ。すまない」すぐに納得した。人形達のことだって当然覚えている。自分と同

じようにされているのもわかるし、意図していないとはいえ、それを何人も殺してしまった過去もある。

風雲は今の痛みを共犯の罪滅ぼしとして解釈した。これ以上は泣き言は言わないと決意までした。

「今は安静にしていってくれ」

「わかった」

こうして風雲は復帰することとなった。今までに無く精神的には落ち着いているため、心配事はあまり無い。

犠牲者の怨念

風雲が復帰し、リコリス棲姫までの道が示された。決められた海路を進まない限り辿り着くことが出来ないというその場所までは、風雲が案内してくれる。だが、まだ手術が終わったばかりであり、胸と腹には痛々しい縫合痕が残ったまま。せめてその痛みが無くなつてからが、次の動きになる。

この件は夜ではあるが早急に下呂大将と来栖提督に伝えられ、あちらも準備を始めるといふ。特に下呂大将は、大本営の内通者も見当を付け始めたらしい。事は大きく動き出している。

来栖鎮守府で保護されている人形達の治療は、風雲の経過次第で随時進めていく方針となった。

今回の処置は今までで初めての処置。深海棲艦のパーツを入れていくわけではないため、妙なことは起きないはずだが、私達が洗浄して元に戻したという不安要素がある。時間をかけてまた元通りなことがあつたら困るため、数日間だけ様子見となった。

「定期的に匂いを嗅がせてもらう。それだけは許してくれ」
「それで私が治ってるってわかるの？」

「ああ。麻薬の匂いと、深海棲艦の体液の匂いは判別出来る。今は鳴りを潜めているが、万が一がある」

大体3日くらい様子見をし、それでも匂いが正常なら問題無しとみなす。最初だからこそ慎重に。勿論、それ以降もここで治療するなら同じように用心していく。

「何ていうか……貴女、わんちゃんみたいね」

「自覚している。だが、これで人が救えるなら喜んで犬になろう」
「わ、なんかカッコいい」

カッコいいかは知らないが、少なくとも私は、この嗅覚には誇りがある。今まで幾度となく自分の命も他人の命も救ってきたものだ。今の私は、これが無くては戦えない。

翌日、朝のランニングを終えて施設に戻ると、早速車椅子で出歩く

ようになった風雲が外にいた。車椅子を押すのは夕雲。そこに霰も付いている。被害者3人組。そしてそこには浮き輪総動員。風雲には不要に思えたが、霰と夕雲にはまだ必要であり、風雲にもついでということを抱いてもらっている。

セスとエコの散歩にも参加したようで、何やら気持ちいい汗もかいているようだった。いい運動をすれば、心も穏やかになるというものである。

「おはようございます、若葉さん」

「ああ、おはよう。風雲の身体は大丈夫なのか？」

「鎮痛剤の点滴はまだやめられないけど、気分は楽よ」

今は禁断症状も見られない。この状態なら、見た目は普通の艦娘。風雲も胴の大きな傷さえ治ってしまったえば普通に歩くことが可能だ。今はちよつとした振動も響くようだが、顔を顰めるようなことが無いため、安定して回復しているのだと思う。

「早く治して、あの提督をどうにかしたいわ」

「ああ……あまり無茶はするなよ」

「わかってるわよ。痛くてまともに動けないんだもの。無茶なんてしたくても出来ないわ」

家村に対する感情は、完全に怒り。私達と同じような感情を持ち合わせているようだった。いいように操られ、ましてや敬愛する主人として認識させられていたのが余程気分が悪いらしい。

私も想像してみたら吐き気がしそうだった。死にかけてではあったが、あの鎮守府から早々に抜けることが出来てよかったと思える。

「夕雲も……あまりいい気分では無いですね」

「……あられも」

三者三様の回復を見せているが、思うことはみんな同じようで、家村への嫌悪感が強い。

「でも、せっかく治してくれたんだもの。私もちやんと手伝う。差しあたってはリコリスの居場所よね」

「ああ、時が来たら頼む」

「任せて。そう、貴女達の仇討ちよ。全部家村提督が悪いんだから、

ちやんと後悔させてあげるんだから」

不意に誰もいない方向へ話し出した。風雲は禁断症状へ。亡霊に向けて、その無念を晴らすための説明を続ける。

「ああ……風雲さんは無事に治りました。ごめんなさい、貴女達もこうしてあげたかった。でも貴女達は夕雲がこの手で……ごめんなさい、本当にごめんなさい」

それに引つ張られたか、夕雲の視線もあらぬ方向へ向き、謝罪の言葉を投稿かけていた。

風雲とはまったく違う方向を向いているが、症状は同じ。幻覚と幻聴がお互いに共有出来ているわけでは当然ない。私達には見えない亡霊を受け入れ、それに対して何かしらの言葉をかけ続ける。

「……霰は大丈夫か？」

「だいじょうぶ……あらね、さいきん、みんなをみるかいすう、へつてきたきがするの……」

そんな中、霰は正常。平常運転。蹲って謝罪を続けるわけではなく、幻覚に向かつて話し続ける2人を、邪魔しないように見つめているのみ。

この中では最初に治療が終わったからか、禁断症状が現れる回数が減ってきたらしい。そういうところも回復してきていると思うと感慨深いものだ。今はまだ寝ているらしいが、シロクロの献身はとても効果的。

「あらねは、かぎぐもちちゃんを、なかにはごぶね」

「ああ、若葉は夕雲を誘導しよう」

風雲は車椅子だが、夕雲はその場に立ち尽くして謝罪し続けている。霰には風雲の車椅子をお願いし、私は夕雲を誘導してうまく施設に導いていく。

「若葉！ 若葉帰ってきた!?!」

「どうした雷」

施設に入った途端、大慌てな雷が私を探していた。朝早くだというのにしつかり制服に着替えているが、エプロンを着けたままな辺り、朝食の準備中に何かがあったとしか思えない。

「声が聞こえたわ！」

「……！」

雷がこう言うということは、再び近海に深海棲艦が現れたということ。今は早朝ということで、来栖鎮守府からの警備隊がまだ帰っていないかったため、戦闘に関してはあちらに任せられる。

外にいたら、流れ弾が飛んでくる可能性があるため、施設の者達が全員揃っていることを確認しているようだ。状況を見る限り、私達が最後だった様子。

「先生、これで全員！」

「よし、なら工廠に集合して、艦装を装備して待機」

すぐにでも出撃出来るように、艦装を装備する。ランニングの直後だったため、制服すら着ていないのはご愛敬ということ。

その間に、外からそういう匂いが漂ってきた。数はまたしても1体。一度嗅いだことのある匂いのため、おそらく駆逐イ級。

「もう、中立区じゃないのね……」

遠くで行なわれている戦闘を見ながら、雷が呟いた。

ここは中立区ということで医療施設でも問題無かった場所だ。艦装は持っていたが、戦闘する必要はなく、武装は一切持っていないかったのが懐かしい。その場にあった錨を振り回して戦ったのが大分前に思える。

「今回の声もね……前と同じだった。何で自分達がつて言ってる」

「……そうか」

「すごく辛そうな……怒ってる声よ」

雷の手が震えていた。純粹な怒りをぶつけられたようなもののため、自分に対して言われているわけではないのに恐怖を感じてしまっている。

精神的にも落ち着いてもらうために、その手を握った。これで少しくらいはマシになればいいが。

「引っ張られるなよ」

「わかってるわ。あの無念、晴らしてあげたいなって、改めて思ったの」

「……だな」

雷にもその怒りが伝播しているような、そんな気がした。手の震えは恐怖からではなかった。駆逐イ級から発せられる怒りを受け、雷も怒りを感じているからであることがわかった。

私も家村が許せない。同じ目に遭ったら、あぁなっていたかもしれない。私自身が深海棲艦を生み出すトリガーに成り果てていたかもしれない。そう考えるとゾツとする。

僅か数分で戦闘は終了。駆逐イ級は討伐され、死骸は海の底へと沈んでいってしまった。前回のように施設に運ぶことも出来なかった。あれがまた深海棲艦を生み出すこともある。出来ることなら回収して、環境保護に努めたいところ。中立区の海は綺麗にしておきたい。

「声、聞こえなくなったわ」

そういう意味でも戦闘が終了したと思える。匂いは残っているの、私には完全に終わったかどうかは判明出来ない。雷の聴覚はそういう意味でも便利であった。

「せんせー、私達がさっきの子、拾ってくるよ」

「……海は綺麗に……したいからね……」

「あぁ、頼む」

シロクロが率先して清掃を申し出る。私もたった今考えたばかりなので、これはアリだと思う。別に艦装作成のためのパーツ取りがしたいというわけではなく、憎しみの輪廻を断ち切るためだ。主機を装備していたため、2人はすぐに海に飛び込んだ。

前回の死骸は、来栖提督に持っていつてもらった。今回もおそらくそうなるだろう。ここにあるというだけで、中立区はより汚染されてしまう。だからといって蔑ろには出来ない。艦娘にやるように、適切な供養をお願いした。

「あの深海棲艦は……夕雲達が生み出したのでしょようか」

ボソリと、夕雲が呟いた。

全員工廠で待機していたのだから、当然被害者3人組もここに

る。夕雲も風雲も、あの戦闘をじつと眺めていた。

「それは違う。君達には一切の責任はない」

「だけど、キツカケを作ったのは私達です。夕雲はここで……何人も仲間のリミッターを外しました」

「……私も……潜水艦の子を自爆させたわ」

前回の初戦闘は咄嗟のことだったため、夕雲は見えていなかったし風雲はここにいなかった。だが、今回は違う。雷が気付き、安全のためにひとところに集まり、初めて家村の犠牲者の怨念を目の当たりにしてしまった。

あの駆逐イ級は、家村に対する恨みと憎しみの権化。それが生まれたキツカケは、家村の指示のせいだ。本来の思考を奪われ、命令に忠実に従う奴隷にされていた夕雲や風雲には責任はない。

「あ、ああ……そうですよ、夕雲が、夕雲があんなことをしたばかりに……ごめんなさい、貴女達の怒りと憎しみはわかります。あんな姿になりたくて生まれたわけではないですよ。ごめんなさい、ごめんなさい……」

「あんなの無いよね……貴女達の怒りと憎しみ、わかる、わかるわ。絶対に晴らしてあげる。絶対に晴らしてあげるから……ごめんね、本当に、ごめんね」

戦闘を見たことでより深い禁断症状に苛まれることになってしまった。今も幻覚に謝り続けることになっている。飄々としていた風雲すらも、幻覚に対して謝罪を呟くほどに。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

側にいる霞も引つ張られてしまい、ブツブツと謝罪を呟いていた。消耗著しいので、3人は一時的に医務室で眠ってもらうことにした。朝食はまだだが、今の状態では食べられたものではないだろう。ゆっくり休んで、落ち着きを取り戻してもらいたい。

少しして、シロクロが駆逐イ級の死骸を工廠に運び入れた。私達が初めて戦闘したものと同じような個体だが、破損の仕方が違う。あの時はセスの爆撃が頭頂部に直撃したことが死因だったが、今回は砲撃が口内の主砲を破壊しつつ、体内を突き破つての撃破。

鉄と油と死臭が漂った。こんな姿でも、シロクロやセスと同じ深海棲艦。私達とも同じような存在かもしれない。それが辛い。

「こんな姿になりたくて生まれてきたわけじゃないだろうに……」

前と同じようにその死骸に触れ、眩く。本人ではないにしろ、ここで死んだ者の心が生み出した侵略者である可能性は否めない。

そうなると、この深海棲艦は、元艦娘とも言える。雷とは逆だ。

「必ずその無念は晴らす……眠っていてくれ」

これは誓いの言葉だ。必ず家村には後悔させるといふ誓い、助けられなかったことに対する懺悔。

死骸に触れている腕が疼いた。たまたまだが、触れているのは痣のある左腕。前回もそうだった気がする。その痣が、ほんの少しだけ広がったような違和感を覚えた。

実際に見てみると、何も変わっていない。いつものように黒ずんだ痣がそこにあるだけ。もう何度も見てきた、私の異形の証。

「私もやるわ……せめて安らかに」

雷も私と同じように死骸に手を触れ、眩く。これをキツカケに、全員がこれをするようになる。私達なりの供養として、その手で触れ、成仏を願う。

こんなことで深い恨みと憎しみが晴れることは無いだろう。私達の気休めにしかなっていないのだろう。だが、やらないよりはやった方がいい。願うことは罪じゃない。

より一層、家村への怒りが強まった。深海棲艦は侵略者だと言われているが、人間の方が余程侵略者ではないか。

本当の悪は、人間なのではないか。

妖精の研修

風雲から麻薬と深海棲艦の体液の匂いが完全に消えたことが確認され次第、来栖鎮守府に保護されている人形、総勢42人の治療に移ることは決まっている。だが、その治療方法に施設は頭を悩ませていた。

まず人数が多すぎる。施設で治療出来るのは、透析のことも考えるところと出来てせいぜい1日2人。寝る間も惜しむなら3人出来る程度。休憩無しで引つ切り無しに作業をし続けて、14日、2週間フルタイムとなる。

流石にそれでは人形の治療の前に施設の者が全員倒れることになるだろう。1人治療するのに総動員だ。まず数日と保たない。

「時間はかかるが、確実に終わらせる方向で行く。2日で1人。これが体力的にも限界だ」

「そうよね……他に出来る人がいればいいんだけど」

この治療法は今のところ飛鳥医師にしか出来ない。入渠ドックを使っても治せないのが大きく足を引っ張っている。

最悪、胸骨だけどうにか出来ればまだ何とかなる。血液を汚染し、洗脳を維持するあの改造だけでもどうにか出来れば大丈夫なのだが。

ここで飛鳥医師、妙案を出す。

「……手段はある。妖精にやってもらおう」

そもそもドックの妖精には出来ないから飛鳥医師が身を削って治療しているのだが、それはどういうことか。出来るなら最初からそれでやっているはずだ。

「かなりストレスではあるが、改装の妖精達にこの治療法を教える。あちらが改装でこの処置をしてるんだ。こちらも改装で元に戻すくらい出来るはずだ」

実際、ドックの妖精達に指示を出して改装の仕方を調整するのは、あまりよろしくない。それが罷り通るのなら、艦娘を好き勝手改造出来てしまうからだ。そのため、法的には違法になる。

事実、家村はそれをしていくことで、部下の艦娘達を人形や奴隷に

変えているわけだが、治療という名目で艦娘を元に戻すために改造するのならば、ギリギリ入渠扱いと出来るのではなからうか。飛鳥医師はそう言っている。

「最初からそれが出来れば苦労はしなかったんだが、治療法が完全と言えなかつたから僕がやるしかなかった。でもこれで治療法は確立できたのだから、後は妖精に任せる方が確実だ」

「でも、そんな簡単に出来るもんか？　言葉で教えるだけじゃ、ありや無理だろ」

胸骨のケアなどは簡単には伝えられない。それ以外にも繊細な作業がいくつもある。とはいえ、瀕死の艦娘を完治させられるくらいの力を持つドックの妖精達なら、ちゃんと教えれば出来ないことは無いだろう。

ちゃんと教えれば、である。それをどうやるかになる。

「来栖の鎮守府で出来るようにするのが得策だろう。先生に許可を貰い、来栖の鎮守府の明石と妖精に全てを見せる。これであちらでも出来るようになるはずだ。むしろこちらでやるよりも手早く、確実に出来る」

「え、じゃあ、まさか」

「あちらのドックの妖精全員にここに来てもらい、処置を一部始終見てもらおう。当然、明石にもだ。言葉で教えるのは無理だからな。実際に見てもらった方が早い」

妖精の学習能力は半端では無いらしく、見せてしまえば100%の再現をしてくれるはずだと、飛鳥医師も太鼓判を押した。

法ストレスではあるが、あの大人数をどうにかするためだ。四の五の言っていられない。これは治療であり、改造では無い。そう言い聞かせて、自分達を納得させる。

「妖精達に研修を受けてもらうわけか」

「そんな軽いもんじゃねえよ」

少なくとも、妖精に教えるために1人は私達の手で治療する必要がある。一度やったことなので、まだマシかもしれないが、まだまだ不安はいっぱいだ。

2日後、風雲から麻薬と深海棲艦の体液の匂いが消えたままであることが確認出来たため、次の段階へ移行。人形の治療に入る。先んじて下呂大将に連絡を取っていた。この件は本当にギリギリだったらしく、割と悩まれた挙句に、ついさつきようやく許可が出た。

こればかりは大本営にも報告が必要らしく、そのせいで内通者にやろうとしていることがバレてしまうことになる。が、下呂大将はその内通者に見当がついているため、その者以外の一部の者に許可を取ったようだ。当然信用出来る者を厳選している。

内通者と思しき者は大本営の幹部。事を急ぐと、ダメな方向に向かいかねない。慎重に、慎重に進めているようだ。外堀を埋めに埋めて、確実に言い逃れが出来ない状況を作るのにあと数日かかるのだろうか。数日で済むのだから恐ろしい。

「飛鳥よオ、これは流石に滅茶苦茶すぎるぜエ？」

「わかってる。だが、今最善なのはこれだと判断した。先生も許可をくれたんだ」

「わーってる。俺だつてあいつらを保護し続けるのは難しいことはわかってんだ。確実に救える方法は数撃たねエと話になんねエ」

違法スレスレの治療法に、来栖提督も頭を悩ませたようだ。下呂大将が許可を出したからここに来てくれたが、そうで無かったら断っていただろう。それくらいギリギリ。

「んじゃア、明石」

「はい。工作艦、明石です。今日は妖精さんと一緒に、いろいろ学ばせていただきますね」

海上から明石が工廠に上がる。そして、大発動艇から10人を超える妖精がわらわらと飛び出してきた。以前見た職人妖精とは全く違う、入渠と改装を司る者達。私達は改装を受けたことでその姿を目の当たりしているはずなのだが、ドックに入って気付いたら終わっていたため、その姿は全く覚えていない。

明石の足下に整列し、一斉に敬礼。その愛らしさは、三日月が反応するレベルであった。

そして、

「治療を頼むのはこいつだ。よかったよな？」

「ああ、適役だ」

来栖提督が抱きかかえて大発動艇から下ろされたのは、私の姉、初春。人形にされているため、意思のない瞳で無表情であり、全くの無反応。そんな状態を見ているだけでも辛い。

明石の計測により姉の練度を測ってもらったところ、その数値は21。第一改装と同時に人形に改装されているのなら、クスリを使われて間もないだろう。そのため、トラウマは薄いのではと判断された。ちなみに霰は60に近いくらい。人形でも千差万別。

「クスリを入れられて間もないため、禁断症状も浅いと思います。なら、早急の方がいいかと思いました」

「人形に改装された初陣かもしれないねエ。早エ方がいいだろうよ」「助かる。その辺りも知っておきたかった」

クスリの侵食率が低いのはいい事だ。すぐに治るとは限らないが、それでも今までの3人よりは軽めである可能性は高い。

「それでは、早速始めたいと思う。明石、妖精達、こちらに」

「はい、よろしくお願いします」

「みんなも頼む。処置は前と同じだ」

飛鳥医師に連れられ、明石率いる妖精隊と一緒に処置室へと向かう。その間に姉は車椅子に乗せられていた。

来栖提督に目配せされ、その車椅子を押すのは私の役割に。実の姉への処置だ。私がやらさずなら誰がやるというのだ。

「……若葉が必ず助けるからな」

耳元で呟くが、無反応。目を開いているのに、私の声にも何も反応をしてくれない。だから人形なのだが、それがとても悲しい。早くこなふぎけた呪縛から解き放ってあげたい。

姉への処置。風雲の時と同じように、胸を開いた後、胸骨を抜き、私と摩耶で分解しての洗浄。2度目ともなると多少は慣れており、力加減もわかっている。手早く処置が出来ていると思う。

前回と違うのは、その光景をずっと妖精に見られ続けていること。違う意味で緊張する。今は肩の上でメモを取っているが、全く重さを感じない。

「どうだ」

「匂いは感じない。大丈夫だ」

「うし、センチ、胸骨オツケーだ」

2人で洗浄した胸骨を組み立て、医療用の接着剤で固定し、飛鳥医師にパス。

「ありがとう。ここからは僕の独壇場だ」

骨を戻し、既に腸骨から抜いていた骨髄を注入した後に、高速修復材を使って骨を修復していく。この手際の良さ、何度見ても凄い。手際が良すぎて、手の動きが見えないほどである。私達では確実に真似が出来ない技術だ。

「妖精さん、これを再現出来ますか」

明石の問いに、何人かの妖精は親指を上げるが、残りの妖精は無反応にジツと飛鳥医師の処置を見続けた。

身体の方は特に重要なため、妖精を複数人配備。私の肩にいる妖精と同じように、メモを取る者もいれば、小さなカメラで録画する者までする。この技術を実に模倣し、鎮守府に残った大勢の人形を救うために全員必死だ。

そもそも模倣出来るというのが凄い。見様見真似でも私達には不可能だと思えるものだというのに。これが妖精。そもそも在り方が違う。

「匂いに関しては難しいですね。洗浄が完了したかの判断を、そこで決めているとなると、私達には管轄外の技術になります」

私の嗅覚は、あちらにとっては専門外となるのだろう。つまりは、正常に浄化出来たかどうかの判定が難しいということ。妖精の仕事だから、余程ミスなど無いと思うが、最後の確認が出来ないため、不安は出てしまう。

「なら、そちらで処置が済んだ者を纏めて確認したらいい。こちらに連れてくるのも大変だろうし、また出向かせてもらおう。若葉、いい

か？」

「ああ、それくらいなら問題ない。仕上げには若葉が必要ということだろう」

匂いを嗅ぐ必要があるのなら、いくらでもやろう。風雲にも言われたが、こういう時に犬になるのは何も問題ない。むしろ誇りだ。

「自爆装置の摘出も終わっている。胸骨は接合は高速修復材で完了。あとは縫合だ。妖精は修復材でどうにかなるだろう」

今回も風雲の時と同様、修復材は使わずに縫合となる。万が一こちらでまた治療をする必要が出てきた時に使わなくてはいけないため、なるべく節約を心がけて。

「妖精なら時間の短縮は出来るか？」

「可能です。おそらく小一時間で全て完了するかと」

「それだけでも充分だな。僕らでは処置だけでこれだけかかるから」

縫合完了で、処置室での作業は完了。ここまでで数時間。入り組んだところに入られている自爆装置を摘出するのがどうしても時間がかかるため、胸骨の洗浄を並行作業で行なうのだが、その間に血が溢れてしまい、失血で命を落としかねない。

慎重に手早くやろうとしても、そういうところで時間がかかってしまう。相手の命を尊重し、賭けに出ず、確実に治療するためには時間をかけるしかなかった。

「ここまで来たら後は透析だ。これだけはどうしても時間がかかるんだが、妖精としてはどうなんだ？」

「ドックで血の浄化を出来るかはやってみないとわかりませんね。ひとまず、透析の様子を見せていただければ」

「わかった。今度はこちらだ」

血塗れとなった処置室を掃除しつつ、綺麗になった姉はそのまま医務室の方へと運ばれる。そこには風雲がまだ滞在中。新たな患者が運び込まれ、透析装置に繋がれていく姿を見て、複雑な表情をしていた。

「透析はここから4〜5時間だ」

「なるほど……なるべくここは短縮したいですね」

明石の頭や肩に乗っていた妖精が飛び降り、姉の身体の上でいろいろと確認しながらまたメモを取る。

透析装置が必要ななら職人妖精に作ってもらい、不要ならドックの中ですぐ終わらせる。人の手で治すより確実に迅速だ。

「問題はこれが全て終わってからなんだがな」

「禁断症状ですね……」

「重いものも軽いものも見た。どちらであれ、苦しむのは同じだ」

ここまで終わり、ようやく姉は私達の手から離れる。同時に全員が大きく息を吐き、崩れ落ちる。息の詰まる作業を終え、疲労困憊。

「飛鳥医師、若葉はここで姉を見ている」

「……ああ、構わない。疲れが酷いようならしっかりと休息を取るよ
うに」

「わかっている。キツかったら寝るなり何なりする」

風雲の処置を終えた後の夕雲の気持ちが変わった。本当の終わりは透析完了だ。それが終わるまでは気が気では無い。目が覚めるまで、ずっと側に居たくなる。

今回は同室に風雲がいたが、散歩の時間だと車椅子で夕雲が連れていってくれた。よって、医務室には私と姉だけ。妖精がちよこちよこ動いているが、これくらいなら気にもならない。

姉のベッドの横に座り、ジッと顔を見る。今は安らかに眠っている。人形だった時の虚ろな無表情では無いが、眠っているため感情やら何やらはわからない。

「……若葉が側にいるからな」

今はそれしか言えない。

姉がどういう人かはまだ知らない。心が強い人なのか弱い人なのか。いるという知識はあっても、外見すら知らなかった姉というのは、なかなか困ったものである。

見た目だけで言うのなら、私と姉妹なのかもわからない。違うところが多すぎる。艦娘の姉妹はそういうものが多いので、言い出したらキリが無いが。

「……姉さん」

きつといい方向に行く。姉はきつと強い人だ。そう信じ、私は姉の隣から動くことは無かった。

解放された姉

私、若葉の姉、初春の処置が行なわれて数時間、透析も近々完了する。その間に、私はずっと側に寄り添う形で待っていた。あの時の夕雲と同じように、この場から一度も動いていない。

透析が進むにつれ、姉から麻薬と深海棲艦の体液の匂いが薄れていく。汚された血液が浄化され、元の姉に戻っていくのがわかり、それが嬉しかった。私でなくてはわからない完治の証は、今の姉からもはつきりとわかる。

私と共に、数人の妖精もその様子を見ていた。透析を再現出来るかが、この治療2つ目の難関。胸骨の浄化と同じくらい重要な処置である。これが出来なければ、胸骨を浄化した意味がない。

「再現、出来そうか？」

妖精に語りかけると、少し頭を悩ませたようだが、最後は親指を上げた。それならば、残っている41人の人形達も安心だ。

姉が妖精による治療の礎となるわけだ。本人がどう思うかはわからないが、少なくとも、私は誇らしい。

「……もう少しだ。頑張れ、姉さん」

寝顔は一段と穏やかになり、何処かスッキリとした印象にも見えた。あと少し、もう少しで終わる。匂いもあと僅かだ。

今まであまり考えていなかったし、どうせここで会うことはほぼ不可能だと思っていたが、姉妹という存在は私の中ではかなり大きなウエイトを占めているようだ。

出会えたことへの喜びと、こうされたことへの怒りが綱交ぜになっている。感情の大半を姉に揺さぶられた。今なら何よりも優先すると思う。

そこから少しして、姉から嫌な匂いが完全に消えた。透析は完了となったため、飛鳥医師を呼び、透析装置を外すのと同時に、昏睡状態も解いてもらった。これであとは、私が起こせば終わり。

ここからは禁断症状との戦いになる。今までの3人よりは薬漬け

の期間が短いらしいが、それでも使われていたのは同じだ。浅かろうが深かろうが、確実に症状は出る。

「よし、若葉、もう大丈夫だ」

「ありがとう。起こさせてもらう」

装置を外している間に来栖提督も医務室にやってきていたことで、全ての準備は整った。あとは、起きてもらうのみ。

やんわりと優しく、姉のことを思い、ゆっくりと肩を叩く。

「姉さん、起きてくれ」

私が呼びかけると、姉の目が薄く開く。目が覚めないという最悪な状況は回避できて、まずは一安心。

「……おお、おお、若葉かや」

「ああ、若葉だ」

少し古風な話し方。これが私の姉、初春らしい。艦娘の中でも、なかなかいないタイプなのだとか。

「姉さん、身体は大丈夫か」

「うむ……痛いのが」

「それは我慢してほしい。手術して間もないからな」

見た感じ、異常はない。縫合痕の痛みから身体は動かさないようだが、表情も穏やか。禁断症状は今を出ていないようだ。

ベッドを傾けて、少しだけ身体を起こしてもらった。縫合痕の痛みを響めたが、構わぬと一言。今の自分の立場はわかっているらしく、ここににいる者達、特にここまで運んでくれた来栖提督のこともしつかり覚えているとのこと。やはり人形の状態の記憶はある。

「お主がわらわを治療してくれたのかや？」

「ああ、医者飛鳥だ。君が無事でよかった」

「初春じゃ。感謝するぞ」

穏やかではあるが、少し疲れた表情で飛鳥医師と握手。これまた今までの3人とは違う、落ち着いた雰囲気。現実逃避をしているようでもなく、今までを理解した上でこの態度。

姉が元々こういう人なのか、それとも何処かが歪んでいるのか。

「治療が済んだばかりだ、表情からして、まだ話すことも辛いだろう。」

もう少し体調が良くなり次第、話をしようか」

「ほう、わらわを慈しんでくれてるのかえ？」

「患者の健康が第一だ。風雲はここ3日である程度回復したから散歩も許したが、君は基本的にまだ安静だからな」

風雲の名前が出ると、少しだけ訝しげな表情を浮かべた。姉達を保護したあの戦闘では風雲は単独行動をしていたように見えたが、もしかしたら風雲旗艦の部隊に姉は組み込まれていたのかもしれない。

そういえば、姉が医務室に運び込まれた時、風雲が複雑な表情をしていたのを思い出す。もしや、そういうことがあったからか。

「彼奴もここで治療を？」

「ああ。君と同様に正気を取り戻し、今は回復中だ。禁断症状による幻覚を受け入れてしまっているものの、身体は順調に治っている」

「そうか、ならばあの傍若無人な指揮はもうせんということじゃな。ならばよい、許そう」

今の話聞く限り、やはり姉は風雲の部隊で活動させられていたようだ。おそらく改装前、人形にされる前の状態で。

第一改装までは曙が体験している滅茶苦茶な出撃を延々と繰り返すブラックな運用をされていたはずだ。気が滅入るのもわかる。

「あの呪縛から解放してくれたこと、改めて感謝する。時が来たら、わらわが話せることは全て話そうぞ」

「助かる。今は休んでくれ」

「お言葉に甘えるとするかの。ここにはものけの類もおるようじやし」

それだけ言って、姉は眠りについた。身体を回復させることに重点を置くようである。

だが、最後の言葉、ものけの類とは何なのだろう。禁断症状による幻覚の一種だろうか。他の3人は、意図せず手にかけてしまった艦娘達の亡霊が見えているようだが、姉にはそういうものが見えていないように思える。

つまりは、姉はやはり改装されたばかりであり、予想通り来栖鎮守府への襲撃が人形としての初陣だったようだ。まだ誰も手をかけて

いない状態だったというのも、あの態度に繋がったのかもしれない。

姉が眠っている間に、来栖提督は明石達を連れて帰投準備。妖精達は姉の全治療を見届け、それを再現出来るだけの知識を手に入れた。明石も治療自体を現場で見ただけのため、妖精の補助が可能だろう。

「これでこちらでも人形の治療が可能になりました。妖精さん達、出来ますか?」

明石の言葉と同時に自信ありげな敬礼。この約10人の妖精達に、来栖鎮守府に保護されている人形達の運命が背負われた。

私と肩で胸骨の洗浄を見ていた妖精も、私と目が合うと勇ましく親指を立てた。私もそれに対して親指を立てる。私と摩耶の処置を間近で確認したおかげで、あの処置を確実にこなせるだけの知識を手に入れたはずだ。私も信用している。

「うし、なら帰ったら早速処置だ。全部終わったら若葉を呼べばいいんだな?」

「ああ、最後の確認は若葉にしか出来ないからな。あと、こちらも無理するなよ。僕の目の黒いうちは、絶対に倒れさせないからな」

「わーッてらァ」

今から帰投したら、あちらに着くのは夕方にかかるかどうか。そこから治療を始めたとしても、今日は出来て1人か2人。さすがに寝る間も惜しんで治療して、倒れてしまっただけは意味がない。私達ですら2日に1人とした程だ。

自分達が倒れては意味がない。迅速にする必要もあるが、堅実に、確実に事を進めていくためには、健康体である必要もある。妖精だつて生物だ。無理をさせれば倒れるだろう。

「初春はここで預からせてもらおう。残りの41人は頼んで大丈夫か?」

「おう、任せろ。最終的には別の鎮守府に行ってもらおうかもしれねエが、まずは俺んトコで預からせてもらおうぜエ。大将にも連絡しておくから安心しな」

「ああ、頼む」

これで保護した人形全員が救える準備は整った。禁断症状の問題があるが、それも来栖鎮守府の艦娘に任せることが出来るだろう。こちらよりも人数は多いし、こちらのような手一杯になることは無さそうだ。

「また何かあつたら相談に乗る」

「頼まりました。んじゃ、帰投だ！ 全員救うぞオ！」

ようやく人形治療も大きく前進だ。体内の自爆装置は、下呂大将のところの神風型が破壊してくれるし、今後保護出来たら、来栖鎮守府に連れていけば治療は出来るのだから。

その日の夜、風呂の時間までは姉の側に居ようと思った。夕雲も同じように風雲の側にいるらしく、2人のいる医務室に一緒に向かう。

医務室がやけに静かな気がする。2人とも眠ってしまったか。そうだとしたら、安静にしているのを無理に起こす理由も無い。チラリと確認してすぐに退散しよう。

「おお、若葉か。よく来てくれたのう」

部屋に入ると、予想外に起きていた姉の声。風雲も起きており、私の姿を見るや手を振ってくる。

「やけに静かだから、もう眠ってしまったのかと思った」

「何、彼奴と話すことが無くてのう。気まずいのじゃ」

姉の振る舞いをする風雲の部下として働かされていたせいか、同室が少し気まずいらしい。

風雲はもつと気まずいようである。事と次第によっては、姉も風雲の指示で自爆させられていたかもしれないのだから。

「私、あの時……初春の命も握ってたからさ……うん、気まずいのよ」「お互い、難儀じゃのう……わらわは手を汚さずに済んだからいいものを……」

「そうよね。初春、あれが改装されてから初めての戦いだっただしね」
なんだ、話せるじゃないか。とはいえ、話題が自虐的なので、聞いているとハラハラする。

さらにはここには夕雲もいる。ドロドロな会話内容になってしま

いそいで怖い。

「ああ、また。初春が救われて嫉妬するのはわかるわ。ちゃんと無念は晴らすから、待ってて。お願いね」

風雲は禁断症状へ。死なずに済み、治療も成功した姉がいることで、幻聴もそのことについて言及してきているようだ。

夕雲も風雲も、禁断症状で発生する幻覚と幻聴は、その時の状況に合わせた罵詈雑言のようだ。おそらく今は、『姉が助かったのに何故自分達は死ななくてはいけなかったのか』という命題の下、風雲を罵り続けている。

幻覚幻聴は、その本人の罪悪感から生まれているのだろうか。その時に一番嫌な事を言うてくる、順応した幻覚というのはキツそうである。

「ふむ、先から思っておったが、風雲もものけに憑かれておるのか」
「……ああ」

「わらわは視ることが出来るが、祓うことが出来ぬ。歯痒いものじゃない。詳しく聞くと、やはり姉は幻覚が魑魅魍魎の類で見えているらしい。手を汚していないおかげで、その程度で済んでいるようである。罪悪感を持つていないというわけではなく、罪悪感を持つような事をしていなかったおかげだ。早急に救えてよかった。」

「風雲さん、大丈夫よ。夕雲がついてますからね」

「うん、大丈夫。ちよつと耳が痛いくらい言われてるだけ。大丈夫」
自分だって同じような幻覚と幻聴に苛まれているというのに、妹への献身のために寄り添う。

風雲が治療されてから、夕雲の症状は劇的に改善された。妹に不甲斐無い姿は見せないという信念の現れか、霰のように禁断症状の回数が大きく減ったようである。

その光景を見た姉は、何とも意地が悪そうな笑みを浮かべ、私を見てくる。なんとというか、狐のような姉である。

「若葉、お主もわらわを頼るといい。お姉さんなんじゃからな」

「その前に身体を治してくれ」

「ふふっ、違うない」

そんなことが言えるのなら、あまり心配することも無いだろう。いや、私の前では見せていないだけとかかもしれないが。

「風雲、うちの姉は何事も無かっただろうか」

禁断症状が治まった辺りで、ずっと同じ部屋にいた風雲に聞いてみる。風雲自身も禁断症状に苛まれてそれどころでは無かったかもしれないが、何かあれば知っておきたい。

風雲に振っても別段慌てる様子が無いようなので、本当に何事も無いようである。

「羨ましいくらい何も無いわね。ブーツとしてるか寝てるかのどちらかだったもの。暇なのは私も同じだし」

「何も変わっておらぬのだからの」

少し疑問。姉にも確実に禁断症状は出ているはずなのだが、飄々としすぎているとは思っていた。何も変わっていないというのは流石におかしい。

そもそも、もののけが見えると言っているが、それは禁断症状からの幻覚では無いのか。

「姉さん、改装される前と今、何も変わっていないのか？」

「うむ、何も。わらわは最初からもののけが視えておったからう。そういうえば、ここ最近はよく視えるようにはなったかの」

これはどう考えればいいのだろう。霊感が強いと言えればいいのだろうか。それに禁断症状の幻覚が合わさって、今までと何も変わらないうという状況になっているのだろうか。

「わらわは人と違うものが視えるらしくての。それが何かはよくわからんから、もののけとしておる」

「そ、そうか……若葉にもよくわからない」

「わからずともよい。これはわらわの特別な力なんじゃからの。ここにはそういったものが多いが、何、悪行を成そうとしているようには見えん。皆、友好的じゃ」

表現がよくわからないが、とにかく、姉は何事もないということと終わればいいのだろう。

おそらく最善の結果で終わった姉の治療。私の心が変に揺らぐこ

とは無く、笑顔で次に向かえそうである。

彼岸花の島へ

姉、初春の治療が完了した翌日。早速来栖提督から連絡があった。

ドックの妖精に仕込まれたこの治療技術は、完璧に模倣が出来ており、時間も短縮出来ているとのこと。この施設でやった場合は、処置に数時間、さらに透析でもっと時間がかかるところを、1人につき2時間程度で完了出来るようになったという。あちらにはドックが4つあるため、2日もあれば全員への処置が完了するということだ。

この知らせを聞いた時、歓声が上がるほど喜ばれた。私、若葉も、胸骨の洗浄については非常に緊張感がある恐ろしい処置だったため、それから離れることが出来るというのは喜ばしい。飛鳥医師ですらし顔が綻んでいたほどである。

「これで処置については一安心だな。だが、問題の禁断症状については、妖精でもどうにも出来ない問題のようだ。それだけは本人に頑張ってもらえない」

カウンセリングが必要である禁断症状の問題は、来栖提督が下呂大將とも相談して、なんとかするそうである。数人はこちらに来る可能性もあるらしく、その時は医療施設として精一杯の仕事をさせてもらおう。

とはいえ、この施設は戦闘に対する抵抗力が少ない。今でこそ私達が抑止力としての力を持つと奮闘しているが、他の鎮守府などと比べると雲泥の差。羽黒がPTSDを患った時とは状況が違う。

故に、戦火から離れるという理由では今は少し難しい状況にある。そこは柔軟に対処すること。

「そして、先生からも連絡が来た。大本営の内通者に対して、査察をかける手続きが終わったようだ」

「というとは」

「より動き出すぞ。解決に向けて」

証拠集めが完了し、もう言い逃れの出来ないところまで情報を集めきったそうだ。数日と言っていたが、まさか1日とは。

今から向かうということで詳細は詳しく語られないのだが、家村と

の密会の証拠や、ほんの少しの書類の細工を見つけ出し、それを突きつけることで完全敗北させる準備は出来たのだそうだ。

下呂大將が時間をかけて念入りに調べ上げた情報だ。余程のことがない限り、全て辻褄も合っているだろうし、反論出来ないくらいに滅多打ちにするのだろう。

「僕達は流石にそれには同行出来ないが、その間に頼まれ事もある。先生がその内通者……目出^{メデ}という女性らしいのだが、それを尋問している内に、来栖の部隊と協力して、リコリス棲姫の島を調査してほしいのだそうだ」

これはまた急な仕事だ。

本来ならそれすらも下呂大將がやるべき仕事。だが、尋問は抜き打ちであるため、リコリス棲姫とも繋がっているというのなら、そちらにその情報が伝わる前に押さええておきたい。

2つの戦場を同時に攻略したいということだ。それが出来るのは、私達と来栖鎮守府の艦娘の共同戦線のみ。

「風雲への高速修復材の使用も許可された。そして、もう来栖の部隊はこちらに向かっている。風雲、以前聞いた通り、駆逐艦のみの部隊だったな？」

「ええ、駆逐艦だけで6人の部隊じゃないと辿り着けない。小回りと速度重視でないと、海流が抜けられないわ。多すぎるとてんやわんやになるし、少なすぎても困るの」

以前言っていた、決まった海路でないと辿り着けないというもの1つだろう。

私達の知らない間に風雲とその件を話していたらしく、その海路を通るためには駆逐艦のみの部隊で無くては無理らしい。大発動艇すらも航行不可のため、風雲は来栖鎮守府から借り受ける臨時艤装により航行のみを行なって道案内をしてくれる。

「若葉、君もその部隊に入ってもらおう」

「匂いか」

「ああ、信じていないわけではないが、念のためだ。家村鎮守府跡で拾った花弁と、リコリス棲姫の花の匂いと同じかを確認してほしい」

そういう判断が出来るのは私だけだ。次いで、三日月も部隊入り。その目で見て変な感じがしたと言ったのは三日月である。摩耶は駆逐艦ではないので連れていけない。

「こちらからは風雲、若葉、三日月を出す。来栖の方からは第二四駆逐隊が来るという話だ。協力して、リコリス棲姫の確認をしてもらいたい。危険だと判断した場合は、即座に撤退してくれ」

「了解。若葉達は怪我出来ないからな」

「……ドックがあつたとしても怪我はしたくないです」

せつかく姉が助かつたのだ。昨日の今日でこの幸せは手放したくない。必ず戻ってくる。

その後、二四駆の4人と施設で合流し、風雲が臨時の艦装を装備してすぐに出発。風雲は高速修復材が使われたおかげで完全回復。姉が羨ましそうに見ていたが、緊急なので仕方ないと宥めた。

部隊は先程言っていた通り6人。二四駆全員は連れていくことが出来ないため、山風が施設に残り、通信役を買って出た。こういう時はほぼ必ず後ろに引っ込むらしい。後ろ向きな性格のせいだと思う。

よって、部隊は案内役の風雲、前衛の私、江風、涼風、後衛の三日月、海風の6人となった。風雲は私と三日月がどうか守り、戦闘になつてしまった場合は二四駆に任せ切ることになる。

「嫌な場所だけど、ここを経由しないといけないのよね……」

まず辿り着くのは崩壊した家村鎮守府跡。私と三日月にもそうだが、風雲にも相当気に入らない場所になっている。気分悪そうに溜息を吐いていた。

「ここが奴らのアジトだったンだろ。見事にまあぶつ壊れてンねえ」

「自分でやつたんだらう？ かあーつ、馬鹿だねえ！ 住んでる場所までぶつ壊してまで何がやりたいんだか」

初めてこういうものを見た江風と涼風は、瓦礫の山を見て悪態。海風もあまりいい気分では無いようである。多少は片付けられているようだったが、やはりそこが廢墟であることは見てわかるものだからだろう。

以前に来た時にあった黒煙は消え、嫌な匂いは流石に薄れていた。以前は一部から血の匂いまで漂ってきたものだが、その辺りも薄れている。多少は片付けが入ったか。

「じゃあ、行くこうか」

「ああ」

少しだけ休憩して、すぐにそこを発つ。そこにいたらそれだけで消耗させられてしまいそうだから。特に風雲は、高速修復材が使われたとはいえ、病み上がりみたいなもの。気分が悪くなったら先が続かない。

「ここ、ここが駆逐艦でないと通れない場所」

「なんだコレは……」

しばらく進み、大きな岩礁帯と海流にぶつかる。今日は快晴、今まですつと穏やかな海だったのに、ここだけは青空の下に大時化という、普通とは違うおかしな海。これが見えたらリコリス棲姫の領海に入っている証拠とのこと。

陸上施設型の深海棲艦がいる海が全てこういうものであるわけでも無く、リコリス棲姫が特殊であるというわけでもない。この海が特殊なだけであった。こんなところだから誰も寄り付かない。だからこそ、リコリス棲姫は自分の領海にこの場所を選んだのではないかとも考えられるが。

岩礁のせいで大型艦は勿論のこと、巡洋艦クラスも通り抜けが難しいのに、波が高く進むのも困難。故に、駆逐艦のみの部隊を推奨しているのだろう。確かに、摩耶がここを行こうとすると、通り抜けが難しい場所も多い。軽巡洋艦でギリギリか。

「こ、これはまた、大変な航路ですね。江風、大丈夫？」

「よっ、ほっ、慣れたら面白いもンだぜ。涼風、手え繋ぐか？」

「あたいも大丈夫だつて！」

回り道も出来ず、突っ切るしかないという酷い航路。慣れている風雲はまっすぐスラスラと突き進んでいくが、二四駆の3人は何とか追いついていくのがやっと。そして私と三日月は、

「大丈夫か」

「……難しいです。ここまでの航行は初めてですし……嫌な嵐を思い出します」

進むことすら難しかった。私達が死にかけて嵐の時の海と似ているため、足が前に出ない。困ったことに、ここ最近忘れていたあの時の嫌悪感を思い出してしまっている。戦場なら敵に気を向ければ時化が気にならなくなるが、今はそういうものもない。

だが、ここを越えなければ決着をつけることは出来ない。三日月の手を取り、勇気を振り絞る。

「三日月、若葉を信じろ」

「若葉さん……？」

「絶対手を離すなよ」

いくら嗅覚が強くても、潮の流れなんて読めない。三日月の目を以てしても無理だろう。だが、既に私達よりも先に4人の先駆者がこの時化を越えている。ならば、同じようにやればいい。

一番おっかなびつくり進んでいた海風を参考にしつつ、より確実な方法を取るように、私は三日月の手を引きながら時化に突っ込む。

「ひいっ!」

「大丈夫だ。心配するな」

気休めかもしれないが、声をかけながら突き進んだ。三日月はもう目も瞑ってしまったが、その方が進みやすいのならそれでいい。跳んで、曲がって、時には流れに身を任せて、確実に前進していく。波をモロに被ったが、航路から外れること無く突き進む。

長く続いたような大時化の海も、抜ければ即座に穏やかな海。普通の航海の数倍の疲労を感じつつも、抜け出したことに対する達成感が半端ない。私達の必死さに先駆者の4人は苦笑していたようだが、それが気にならないほどに消耗していた。

「若葉、三日月……帰りもあるのよ」

「……わかってはいるが、今言っただけでもグツタリしていた」

三日月は私が引く張っていただけでもグツタリしていた。この件が終わったら二度とここに来たくない。

そこからまたしばらく進むと、花の匂いが漂ってきた。確実に知っている匂い。家村鎮守府跡で嗅いだ匂いだ。

「花の匂い」

「もう近いもの。そろそろよ」

水平線の向こう側。何やら小さめな島が見える。島というのも難しいくらいのも、岩礁の端のようなもの。その上に、人間のような影が見えた。あれがリコリス棲姫か。遠すぎて、写真で見たものと同じかはまだ判断出来ない。

そして、その足下。遠目に見てもわかる、真っ赤な絨毯のように咲き乱れた花。葉を持たない、花卉だけのそれは、三日月で無くても何かおどろおどろしきさを感じてしまう。

「彼岸花……」

三日月も、あの時に見た花卉と同じ湧き立つ何かを感じ取っていた。深海棲艦の何かなのか、それはここにいる中では三日月にしか判定が出来ないもの。

あちらもこちらに気付いたか、人影がこちらを向いたかのように思えた。

「気付かれた。私は顔見知りだから、多分大丈夫……」

「いや、待て」

私達が少し近付いたところで、彼岸花の島から何かが飛び立った。どう見ても艦載機だった。セスがエゴを使って飛ばすものとはまた違った形状だが、性能は似たようなものなのか、変則的な動きをしながらこちらへ猛スピードで近付いてくる。

「大丈夫じゃないみたいです」

「先手打たれたかも。回避してー!」

簡単に言ってくれるが、風雲だつてその艦装は用意してもらった臨時艦装。敵対していた時に使っていたものとは、機動力は雲泥の差。今までと同じように動けると思っではいけない。

近付いてきたと同時に空爆が始まった。酷い数の爆撃に、避けるので必死。特に私と三日月は、空爆を回避するというのも初めてのことだ。

「三日月！ 大丈夫か！」

「大丈夫です！」

私は匂いで、三日月は危険察知で、爆撃のポイントからしつかりと移動していく。チームプレイより個人プレイになってしまいが、命を守るためだ。むしろ固まっていたら余計に回避しづらくなるだろう。

とはいえ、空爆の密度が異常だ。絨毯爆撃とはこのことを言うのだろう。受けるこちらとしてはたまったものではないが。

「ありやあどうすりやいいんだ！」

「攻撃はダメ！ 友好的な深海棲艦のはずだから！」

「シロクロやセスと同じってことかい！ わかってもらわないとねえ！」

小慣れたように避け続ける江風と涼風は、少しずつ進んでいく。私も負けじと島に近付いていく。

近付くにつれ、人影がハッキリとわかるようになってきた。白いドレスのような上と黒の短いスカート、そして一番わかりやすい頭の上に乗っている黒い花のような飾り。下呂大将に見せてもらったリコリス棲姫の写真そのものだ。

「リコリス！ 私、風雲よ！ 攻撃をやめて！」

「オマエハウラギツタトキイタガ？」

見た目に反して、なかなかドスの利いた声。艤装に脚を組んで座り、いかにも姫と言わんばかりの高圧的な態度。私達を見下すように見ながら、幾何学的な紋様の滑走路から次々と艦載機を飛び立たせる。

風雲は友好的な深海棲艦と言っていたが、あくまでも家村に対してでは無いのか。

「どうする。討つ気は無いが」

「近付いて説得したい！」

「ならば、若葉が行こう」

こと近付くことにかけては、私がこの中ではトップであると自負出来る。

「若葉、先行する」

軽く息を吐いた後、自分の出来るトップスピードでリコリス棲姫の島へと突き進んだ。鳳翔や神風に学んだ戦闘法を最大限に活かす、スピード重視の戦術がここで役に立つ。

目まぐるしく変化する景色の中、爆撃を掻い潜り、一気にリコリス棲姫に近づく。私のスピードは想定していなかったらしく、なかなか面白い顔をしてくれた。

「ハヤイナ」

一言呟き、椅子にしていた艤装から立ち上がった。艦載機の発艦はやめず、それでも視界には私しか入っていない。私以外は空爆に完全に足止めを喰らっているため、今だけは1対1となった。

「話を聞いてほしい」

「カタハライタイ」

島の上に乗り込んだ瞬間に、私の眼前にリコリス棲姫の足裏が突き付けられていた。豪華な姿だというのに、ケンカ腰な攻撃方法。外見では考えず、声色で考えた方が良さそうだ。

攻撃を喰らう直前で無理に方向転換し、再び海上へ。咲き乱れる彼岸花は踏み荒らすことはなかったので安心。

「話を聞け」

「キクミミモタナイナ」

仲間達が空爆を潜り抜けるのも、リコリス棲姫を説得するのも。何か興味を向けるようなことが言えればいいのだが。

むせ返るような彼岸花の匂いの中、私の戦いが始まる。こういう深海棲艦との戦いは初めてだが、必ず説得を成功させなければ。

花の姫

下呂大将が大本営の内通者、目出を尋問している間に、リコリス棲姫との接触を図ることとなった。私、若葉はその中でも、リコリス棲姫の持つ花が、本当に家村鎮守府跡で発見された花卉と同じであることを確認するために同行。同じように三日月も同行している。

だが、そのリコリス棲姫の領海に入った途端、猛烈な空襲に襲われた。近付くことすらままならないほどの絨毯爆撃に四苦八苦しているものの、私だけは自身のスピードを活かして島へ肉薄。リコリス棲姫の間近へと接近した。

「話を聞け」

「キクミミモタナイナ」

艦装に座って艦載機を発艦していたリコリス棲姫は、立ち上がり私を迎撃してきた。空襲により根本的に近付けさせない戦術のようだが、近付いたところでまさか蹴りが飛んでくるとは思わなかった。

「ヨクモマア、ココマデコレタモノダ」

「風雲に道案内してもらったからな」

彼岸花の島に近付いたおかげで空爆の脅威から免れることは出来たが、島に上がると即座に迎撃されるため、これ以上間合いを詰めることが出来ない。

他の5人は空爆のせいはこちらに来られないため、私だけがリコリスと対面している状態だ。話術は得意な方ではないが、どうにか説得がしたいところ。

「若葉達は戦いに来たんじゃない、話を聞いてくれ」

「シツコイ」

幾何学模様の滑走路からは、止めどなく艦載機が発艦しているが、その内のいくつかが一度リコリス棲姫の後ろに回った後、爆撃ではなく射撃でこちらに攻撃してきた。爆撃出来ず、自分の手が届かないところにはコレ。万能すぎやしないか。

その射撃は匂いにより回避。だが、弾のスピードが速く、タイミンを間違えると回避するのも難しい。

「くそ……頼む、話を！」

「シツコイトイツテイル」

島から離されれば爆撃に変化して余計に近付けなくなる。これ以上移動させられるわけにはいかないが、そのまましていると艦載機による射撃で押し潰される。だからといって回避しつつ島の上へ上げれば本体からの迎撃。

最善の方法は艦載機を撃ち墜とすことなのだろうが、今回も私の装備はナイフ一本である。それすらも出来ない。リコリス棲姫が私に敵対心を持つている時点で、ほぼほぼ詰みの状態。せめて話くらい聞いてくれればいいのだが。

「いい加減に……しろっ！」

ここで一転攻勢に出る。近付いて組み伏せるくらいしないと話を聞いてくれないだろう。私の実力でリコリス棲姫を組み伏せることが出来るかはわからないが、やらなければ先に進むことが出来ない。

神風がやったあの神速を模倣するように突っ込む。腕にも脚にも疼きは無いが、海上を一蹴りしたことで、一気に間合いを詰めることに成功。艦載機により引き剥がされそうになっていたが、即座に島の上へ。

「シマニアガルナ」

それを迎撃するために、既にリコリス棲姫は動き出していた。追いつかれるような速さでは無いと思っていたが、あちらは相当戦い慣れているのか、私の動きを予測しているかのようになり、進路上に腕を伸ばしてきていた。

さっきの蹴りからして、掴まれたら乱雑に投げられるか絞められる。それを避けるために即座に回避。だが、海の上には降りないようになり、島の上で回避。

「……！」

「くそ、花が……！」

回避した際、足下に花が。別に踏みつけてもいいのかもしれないが、それは躊躇われたため、どうにか回避しながらもう一度リコリス棲姫に接近。リコリス棲姫の周りは特に花が多く、近付きづらい。

「……マテ」

その私の戦い方を見て、リコリス棲姫が突然待ったをかけた。私もそれを素直に聞く。戦うつもりがないのなら、何もしたくない。

また椅子代わりの艀装に腰を下ろし、脚を組みながら私を見下す。まさに謁見。姫と同じ地に立とうとすれば、姫自身に追い返されるという状況であったが、今は姫自身が私を止めたために、同じ地に立っている。

「オマエ、ハナヲフマナイヨウニタタカツテイルノカ」

「ああ」

不意に聞かれた。答えはイエスだ。

いくら深海棲艦が育てており、麻薬の原材料となる花とは言っても、わざわざ踏み躪る必要はない。風雲曰く、勝手に生えてくるような花らしいが、リコリス棲姫にとっては大切なものかもしれないし。私達はあくまで話し合いに来たのだ。相手の嫌がることをしに来たわけではない。近付かれないというのなら申し訳ないが。

「……」

「……」

無言で見つめ合う。すごく気まずい。ジロジロ舐めるように見られてるので、尚のこと気まずい。

おそらくだが、リコリス棲姫に砲撃はない。出来るのならさっさと撃ってきているはずだ。また、私達のように海上を航行することも出来ない。出来るのならさっさと打って出てきているはずだ。実力差はわかっている。こちらから動くことも出来ない。

リコリス棲姫は自分の島を大事にしているように思えた。島関係なしに空爆してしまえば、私は仲間達と同様に回避一辺倒にさせられ、止む無く退避に持つていかれている可能性が高い。艦載機による射撃すら、島に被害が出ないように方向が考えられている。

先程の質問から考えるに、島の上に咲き乱れる花が傷付くのを恐れているのか。そういえば、リコリス棲姫に迎撃された時も、奴は一切自分の花を踏むようなことはしていない。

「花が大事なのか？」

「……ソレヲキイテドウスル」

「興味があるからだ。お前は妙に乱雑な戦い方をするが、自分の花だけは傷付けない」

リコリス棲姫の表情が少し変化する。感情が読みづらい複雑な表情ではあるが、私の言葉に対して嫌な感情は持っていないように思えた。敵対心の匂いがほんの少しだけ薄れたようにも思える。

「それが大事だと言うのなら、若葉はもう島に上がらない。踏み潰しかねないからな」

それだけ言っただけで、島から降りた。先程までなら即座に艦載機による攻撃が始まっているところだが、私の行動に驚いているのか、先程の見つめあったときのように何もしてこない。

これは話せる千載一遇のチャンスが来たかもしれない。今なら私の言葉も届くか。

「お前、この花を誰かに渡しているな。これ、何に使われているか知っているのか？」

リコリス棲姫の眉がピクリと動く。

「この花を持っていつている奴らは、花を潰して、人心を惑わす薬の材料にしているんだぞ」

「……ナニ？」

ここまで話すと流石に反応した。

「どういう理由で奴らに花を渡している。お前も人間や艦娘を潰すために使っているのか。この花のせいで、こちらには何人も苦しんでいる者がいるんだ」

「マテ、ドウイウコトダ」

ようやく私の話を聞いてくれる姿勢になった。高圧的な態度はまであるものの、話が違うと言わんばかりに食い付いてくる。

だが、どちらかといえば私の思っていた反応とは違った。

「ヤツラハナカマヲスクウタメニツカウトイツテイタゾ。ダカラ、ワケテヤツタンダ」

「仲間を救う？ 正反対だな。奴らは自分の手駒にするために使っている。現に、あの風雲はこの花が使われた薬のせいで、治療された今

でも幻覚と幻聴に苛まれているぞ」

そもそも仲間を救うために分けてくれと言われて分け与えたりコリス棲姫にも少し疑問はあるものの、深海棲艦に嘘を吐いて利用していた家村鎮守府のやり口も相当である。

「一旦空襲を止めてくれ。こちらの状況を詳しく話す」

「……シカタナイ。ダガ、ホカノレンチュウハチカツケサセルナ。オマエトダケハナス」

いち早くここに近付いたことで私が見初められたのか、裏切り者という烙印を押されてしまった風雲も近付かせないで、私とだけ対話を許可してくれた。

空爆が止まったため、残りの5人にリコリス棲姫の意思を伝えただけ、私だけがまたリコリス棲姫の下に戻る。

本格的に私の交渉力が物を言うようである。まったく自信はない。

お互いの情報を共有していく。私達の知る情報は、今まで受けてきた襲撃のことや、家村鎮守府のこと。私自身が聞かされていないことは話せないが、少なくとも崩壊した鎮守府跡で見つけたものや、薬としての効果などを詳細に。

私の話を聞けば聞くほど、リコリス棲姫はイライラしているようだった。家村の鎮守府が崩壊していることはさておき、自分の花がそういう形で使われている事実が気に入らないらしい。

「コノワタシヲダマシテイタノカ、ヤツラハ」

「若葉の話を信じてくれるのならな」

「シンジルリユウハナイナ。ダガ、オマエノハナシハシンジツミガアル」

私が花を傷付けないように闘っていたことが大きかったようだ。

リコリス棲姫曰く、この花はリコリス棲姫の力が漏れ出た結果生えてくる花らしい。リコリス棲姫は適当にしても漏れ出てしまうくらい力が強い深海棲艦なのだそうだ。

つまり、この花はリコリス棲姫そのもの。それでもしばらくすると島を埋め尽くしてしまうらしく、自分で、もしくは今は出てきていな

いが部下のイロハ級を使って、定期的に摘んでいるそうだ。いわば、伸びた髪を切るようなもの。家村鎮守府の者は、その摘んだ物を持っていくとのこと。

「ドコデシツタカシラナイガ、ワタシノハナノセイブンガ、ヤマイニオカサレタナカマノチリヨウニツカエルトイツテイタ」

「それで快く渡したのか？」

「ワタシニハ、ウミニステルモノダ。ホシイトイウナラスキニモツテイケバイイ」

これで大分真相が掴めてきた。家村鎮守府がどうやってこのリコリス棲姫の存在を知ったかは知らないが、利用価値のあるものであるが故に回収しているわけだ。

だが、ただ寄越せと言うとリコリス棲姫が反発するかもしれない。ただでさえ深海棲艦と敵対している艦娘の要求だ。素直に聞くなんて、到底思えない。

そのため、この花には他人を治療することが出来る成分があるから協力してほしいと、リコリス棲姫を煽てるような嘘を吐いて、気分良く渡せるように仕組んでいたようだった。

「アンナヤツラニハメラレテイタカトオモウト、ムカムカシテクル」

「若葉達は、そいつらをどうにかするために動いているんだ。協力してもらえないか」

今までの話を聞くに、私達とリコリス棲姫は共通の目的がある。お互いに、怒りと憎しみが家村鎮守府へと向いているのだ。利害は一致しているのだから、協力関係を結ぶに値するだろう。

「こちらにはお前と同じような姫の協力者もいる。悪いようにはしない」

「ドウホウモイルノカ」

「ああ。双子棲姫は死にかけているところを助けた。護衛棲水姫はペットを治療したんだ」

深海双子棲姫であるシロクロや、護衛棲水姫であるセスの存在も教えておいた。同類がこちらにしているとわかれば、より協力しやすいと思っただからだ。

この時に私達の継ぎ接ぎのことも伝えていた。嘘偽りなく、隠し事せず、全て曝け出すことで信用を勝ち取りたかった。事実、リコリス棲姫は大分頭を悩ませているようだった。

「スコシカンガエル。オマエタチダツテ、シンヨウシテイイカワカラナイシナ」

「……」もつともだ。突然現れてお前は騙されていると言われても、すぐに決断出来るわけがないな。すまなかった」

リコリス棲姫からしたら、私達だって自分をいいように扱っただけの者に見えているかもしれない。考えるというのなら考えてもらおう。それで改めて敵対するのなら、その時はその時だ。申し訳ないが、ちゃんとした準備をして、討伐としてこの地を訪れることになるだろう。そうならないことを祈るしか無い。

「数日後にまた来させてくれ。構わないだろうか」
「アア」

少なくとも、印象は悪くないようだった。二度と来るなど言われなかっただけマシと思う。

帰路、途中で止められたとはいえ、あの空爆を避け続けていた仲間達は大きく消耗していた。全員無傷といかなかったようで、掠めて擦り傷くらいは出来ていた。致命傷でないのは救い。三日月もところどころに傷を作っており、私が譲っているタイツにはいくつも穴が空いてしまっている。

「交渉の余地はある。また数日後に来ると約束した」

「そっか、なら良かったわ。嫌われていないみたいで」

風雲も少し安心していた。友好的だからと道案内した結果ボロボロにされたとなると、立つ瀬が無い。

「敵対の匂いは薄れていた。疑問には思われていたが」

「なら協力関係になれんじゃないの？ あんなのもう戦いたくないねえ」

疲れ果てている江風がボヤいた。今までいくつもの戦いを経験しているが、あそこまでの空襲はなかなかお目にかかれならしい。

深海棲艦と協力関係というのは基本的におかしなことなのだが、私達の施設と関わり合いを持っているだけでこうも寛容的になれる。

「そうなればいいんだが」

「大丈夫ですよ……今まで上手く行ってきたんですから。きつといい方向に行きます」

リコリス棲姫とは長い付き合いをしていきたい。ここに来るのは辛い。

大きな進展

施設に無事帰投。下呂大将と同時に行動したことが功を奏したか、帰投中に襲撃を受けるようなことが無くて良かった。

私、若葉以外は大分消耗したものの、大きな怪我はなく、少し治療する程度の擦り傷で済んでいる。医療施設であることが功を奏し、その程度ならすぐに治療も終わる。数日もかからずに傷は無くなるだろう。

無傷で終われた私は、今回の成果を飛鳥医師に報告。そこから下呂大将に伝えてもらうことになる。

「数日後、また会いに行くということで終わらせた。あちらにも考える時間は必要だと思う」

「了解した。若葉は怪我は？」

「ありがたいことに無傷だ」

先行出来たことで私はすぐに空爆を抜けることが出来た。これには鳳翔と神風の訓練に感謝している。

「下呂大将からの連絡は」

「まだ無いな。今頃、内通者を問い詰めているだろう」

私がリコリス棲姫の下へと向かい、施設に帰ってくるまでにおおよそ午前いっぱいを使っている。下呂大将も今頃は内通者に対して事実を突き付け、確実に逃がさないように、今日中に決着をつけているはずだ。

艦娘による反抗があつたとしても、高速修復材で作られた刀を使えば神風型5人でも制圧してしまうだろう。海上で抵抗されたのなら、あの阿武隈もいる。今のところは心配していない。

「そちらの方は連絡待ちだ。今は休んでくれ」

「了解」

休憩後、二四駆は鎮守府に帰投。これで一旦、本件は終了する。下呂大将の依頼であるリコリス棲姫との接触は出来たが、あちらは返答を保留したようなもの。まだ完了とは言えない。数日後の再会で、あちらの方は決着がつくと思いたいところである。

午後、今度は下呂大将から連絡が来る。内通者への尋問と捕縛が終了したらしい。

最悪なことに、鎮守府同士の抗争になりかけたそうだが、そうなる前に神風型の5人が鎮守府を制圧せんめつしたらしい。流石としか言いようが無い。

「嫌なこと思い出したわ……」

「わらわもじゃ」

この話を聞き、旗風に斬られた腹を撫でる風雲。姉も腹を押さえ苦笑。

体内の自爆装置を破壊されている経験があり、その記憶も当然残っているため、あの想像を絶する痛みはしつかり覚えていて。死にかけた私達よりはまだヌルいと言うが、似たようなものだろう。味わいたくないものだ。

風雲は高速修復材を使われているが、姉は未使用。痛みは少し引いたようだが、まだまだ本調子ではない。身体を少し動かすだけでも痛みがあるほどだ。そのため、今は唯一の車椅子。それを押すのは勿論妹である私である。

「詳しくは聞けていないが、これで内通者もおしまいだ。大本営で弾劾裁判も間もなく行なわれ、家村のやり口も丸裸にされるだろう」

「そいつは良かった。んなら、大分終わりに近付いたな」

「ああ。流石は先生だ」

それでもまだ家村自体が見つかったわけでもない。内通者のところで匿われているかと思っていたが、制圧した時にその姿は見られなかったという。

家村だけではない。家村の秘書艦という大淀や、人形にされている艦娘でもある。あくまでも艦娘は内通者のもののみ。さらに言えば、その内通者が指揮している艦娘達は、裏側でそのように繋がっていたことを知らなかったまでであった。

それを制圧した下呂大将の方が悪役に見えるのだが、気にしないことにした。その辺りを考え始めたらキリがない。

「ごちらはやれることをやっていこう。初春の治療が終わり、同じ治療が来栖の鎮守府で出来るようになった今、僕らに出来るのはリコリス棲姫との対話だけだ。それさえ終われば、また日常に戻る」

「私達も艤装作り直さないとねー」

「うん……それがここに……意味だもんね……」

あまり先のことを見過ぎるのも良くないと思うが、シロクロの艤装作成はこの施設の大きな仕事の1つでもある。家村のせいで進捗がリセットされてしまったが、平和になればまた作る機会も来るだろう。

怒りと憎しみもそれで終わる。家村達に罰が与えられれば、それにスツキリするだろう。自分の手で裁けないのはもう仕方ない。人間文化の悪い部分な気がしなくてもないが、そこまで求めたらいろいろと迷惑がかかってしまう。

「では、午後からはいつも通りだ。あと、今晚は嵐が来るらしい。久しぶりな感じがするな。それに向けて準備を頼むぞ」

「今はこんなに晴れてるのに?」

「暗くなつてからのようだ。明日の朝は浜辺の清掃だな」

嵐の夜を越えるのも久々だ。建て直された施設で嵐を迎えるのは初めてのこと。翌日の浜辺の清掃も当然久しぶり。人数が増えたことで、それもかなり早く終わることだろう。

清掃という比較的抵抗があるような仕事だが、私達が楽しく生きるためには必要不可欠なもの。むしろその清掃が、シロクロにとっては宝探しの一種だ。今なら霞や夕雲のような救出された者達の艤装作成にも繋がる。おかげで、本当に楽しいものになっている。

「艤装のパーツ、流れてくるかな」

「……来てほしいね」

早速シロクロのテンションが上がっていた。この中では唯一と言える、嵐を求める者。おかげで私達の嫌悪感も薄れるというものである。

「流れ着いたもの次第では、お前らの艤装も組んでいくからな」

「なるほど、若葉さん達の艤装が継ぎ接ぎなのはそういう理由が」

「おう。お前らも継ぎ接ぎ艤装の仲間入りだから覚悟しておけ」

なんだかんだここに住み着くようになりそうな霞や夕雲、そして風雲と姉は、摩耶謹製の継ぎ接ぎ艤装を使つていくことになりそうである。風雲が使つていた臨時艤装は、当然持つて帰つてもらつていないため、こちらも主機から流れ着くのを待つしかない。

「わらわはまだ傷が癒えておらぬ。その浜辺の清掃とやらは、遠目で見ただけで構わんかえ？」

「その身体で手伝えだなんて言わない。どういふことをやっているかくらいは知つておいてもらえるとありがたいな」

「うむ、よかろう。若葉、明日も移動を手伝つてたもれ」
「了解」

姉は流石に清掃に参加出来ないが、雰囲気だけ知つてもらつたために、清掃中に浜辺には来てもらう。まだ治療して間もないが、車椅子で散歩することはいいことだろう。ベッドに寝かされているだけはストレスも溜まる。

代わりに、風雲はしつかりと手伝つてもらふことになった。身体は完治しているわけだし。

「これだけ人数がいれば、すぐに終わつちやうかもね」

「いいじゃねえか。選別まで明日中に出来るかもしれないねえし」

嵐が来ることは少し憂鬱だが、明日が来るのが少し楽しみだ。私も浜辺の清掃は結構楽しんでる。何も漂着しなければ、だが。

夜、轟々と鳴り響く風。雨戸に叩きつけられる雨。久しぶりの嵐に、私を含むトラウマ組は1部屋に固まって眠ることにしている。

「久しぶりよね……まだまだ怖いわ」

「仕方ねえよ。植え付けられてるようなもんなんだからな」

相変わらず雷は摩耶に抱き付いて眠るようになってる。この中でも付き合いが長い2人だからこそ、ここまで気が許せるのだろう。

雷と相部屋の曙も、なんだかんだ摩耶の部屋に来ている。まだなんだかんだ一人部屋状態の摩耶の部屋だからこそ、広く使えるおかげでこういう時に匿つてもらえる。元よりベッドが1つ空いているし、私

達が全員駆逐艦^{こども}のため、4人追加で入っても何とかなるものだ。

「私まで来なくて良かったかしら」

「別に構わねえよ。あたしも嵐にや嫌な思い出があるんでな。人数は多い方がいい」

「……そう言うのなら私もいてあげるわ」

「おう、頼むぜ五三駆」

曙も抱き寄せ、摩耶は両手に2人を待らせているような状態に。雷はともかく、曙も摩耶の温もりで少し落ち着いているように見えた。トラウマは無くても、今までの境遇から仲間というものに飢えているのかもしれない。この中では曙はまだ短い方だし。

「やっぱり……イライラします……」

「それももう終わるんだ。奴らは下呂大将がどうかしてくれる」

「そうだといいいんですけどね……」

三日月は私に抱きついて離れない。一度嵐の中の戦闘を経験しているとはいえ、あの時は戦闘があるということである。脳内物質が分泌されていたのだと思う。イライラが違う方向に向かっており、感覚が麻痺していた。

「にしても、若葉が流れ着いてからそれなりに時間経ったよな。長い事件だぜ」

「ああ、もう何度か嵐を越えているからな。3ヶ月以上か」

「だな。なんだかんだそれくらいは経ってるはずだぜ。最近いろいろありすぎて、時間の感覚おかしくなってるんだよ」

摩耶の言いたいことはわかる。ここ最近では時間の流れる感覚が早い。鳳翔の詰め込み訓練や、風雲と姉の処置が特にだった。切羽詰まった状態が長く続きすぎて、わけのわからないことになっている。「さっさと終わってくれんことを願う。若葉は楽しく生きたい」

「だな。無駄に緊張する毎日は気分が悪いだけだ」

この嵐の夜に乗じて、またもや施設を襲撃してくるなんてことだつて無くはないのだ。今の施設には職人妖精が付けてくれた警報装置なんてものもあるので、いざという時は真夜中でも戦えないことはない。

そういうことがあり得るといふ状況なだけでも、精神的に消耗させられていくだろう。だから早くその心配を払拭したい。

「さっさと終わらせたいわよ。あのクソ提督が吠え面かくところをザマアみろって見下してやりたいわ」

いつになく口が悪い曙である。嵐にトラウマは無いものの、生まれただかりの時は、私達と同じように嵐の中の進軍も経験があるのだと思う。私と三日月はそこでドロップアウトしているが、曙はそこで生き残ったことでさらにこき使われる羽目になったわけで、そのまま続けば今度は人形にされていたのだ。恨みもひとしおだろう。

「……曙さんに同意します。どうせ捨てた私達のことなんて覚えていないでしょうが、さんざん罵りたいです」

「若葉もだ。いろいろと屈辱を味わわせないと気が済まん」

私が覚えている家村の顔は、ただただ貼り付いた笑み。今考えれば、感情があつたかもわからない。私達のことなど、最初からゴミのように思っていたのだろう。生き残れば有用性があると人形にされるだけ。命を何とも思っていないようなクソである。

曙の言う通り、断罪される場に居合わせたら、面と向かって罵ってしまうだろう。あまりよろしくない行動だとは思うが、こちらは命の火が消えかけたのだ。曙に至っては一度命を落としている。上司と部下という呪縛からも解き放たれている私達には、文句を言う権利もあるだろう。

「まあ、その辺は大将に任せようぜ。あたしらにや何も出来ねえ」

「あの人でもどうにか出来なかつたら絶対文句言つてやるわよ。いざって時は私手ずから引導を渡してやるわ」

いつになくプリプリしている曙。だが、摩耶に撫でられながら布団を被せられると、そのまま眠りについていった。なんだかんだ、みんな疲れているのだ。

私と三日月も、抱き合いながらすぐに眠りに落ちていく。今日のりコリス棲姫との出会いは、いろいろと疲れた。

翌朝、雨と風の音はすっかり無くなり、嵐が消えたことを知る。襲

撃もなく、無事に朝を迎えることが出来たようだ。

日課のランニングのために先んじて目を覚ました。エコの散歩のためにセスもそろそろ目を覚ましている頃だろう。まだ暗いので、もう少ししたら全員目を覚ますくらいか。やはりと言うのもアレだが、雷は既に起きていた。だが、朝早いというのに難しい表情をしている。着替えもしていない。

「どうした雷」

「外、外から誰か助けに来てくれて聞いて聞こえる。前に聞いた声とは違う声よ。私にしか聞こえないのなら、深海棲艦よね。じゃあ、生きている状態で浜辺に流れ着いてる！」

雷にしか聞こえない声となると、近海で現れた深海棲艦の声であることが妥当。中立を破って現れてしまった駆逐イ級は、怨念の塊と言える怒りと憎しみに満ちた言葉を常に紡いでいたらしいが、今聞こえるのは救援を願う声。

「すぐに行く。艦装はあった方がいいな」

「た、多分！ 声は2人分だから！」

着替えもせずに部屋を飛び出す。浴衣のまま艦装を装備するのは初めてだが、時間が無い可能性がある。取るものも取り敢えず、私は雷と工廠側から外に出た。これだけ大きな音を立てながら動いたのだ。まだ起きていない者も、この物音で全員起きてしまっただろう。外に出ると、打ち上げられたゴミで浜辺が大変なことになっていることを確認出来た。が、今回はそれだけではない。明らかな血の匂い。まだ生きている深海棲艦の居場所は、匂いを辿ればわかるだろう。

だが、それ以外にも知った匂いを感じたため、嫌な予感がする。腕と脚が疼くような感覚もした。

「近い、声が大きくなってる！」

「匂いも強くなっている。こっち……だ……」

血の匂いの発生源は遠目でもわかった。だが、今までと違ってることが1つだけある。

その深海棲艦を、私は知っている。

「リコリス！」

漂着していたのは、リコリス棲姫。周りには人型のイロハ級が2人おり、リコリス棲姫が進むことが出来ない海上は、この2人がどうにかしたのだろう。

私が呼びかけたことでその2人のうち片方がこちらを向いた。私は面識は無いのだが、私と雷の姿を視認した瞬間、口をパクパクとして何か喋っているようだった。

『姫様を助けてくれ』って！」

「当たり前だ！ リコリスだけじゃない、お前達も助ける！」

だが、人型のイロハ級はそれだけ言い残して息絶えてしまった。もう片方は既に事切れている。リコリス棲姫を逃がすために、最後の命を振り絞ってここまで辿り着いたのだ。ここに私達がいるかも知らなかったらうに。

「……声が……聞こえなくなっただわ……」

「くそ……！ リコリスだけでも救うんだ！」

2人のイロハ級が命を賭して運んできた姫だ。必ず救ってみせる。

愛された姫

嵐の翌朝、浜辺に漂着していたリコリス棲姫を発見した私、若葉。共にいた部下であろうイロハ級は、その声が聞こえる雷に助けを求めて息絶えてしまった。リコリス棲姫も今は生きているようだが、このままでは危ない。すぐに治療する必要がある。

「雷、みんなを呼んできてくれ！ 若葉はリコリスを運ぶ！」

「わ、わかったわ！ すぐに呼んでくる！」

雷に施設に先に戻ってもらい、起きたであろうみんなを呼んできてもらう。その間に私は、リコリス棲姫を施設に運べるように準備。

リコリス棲姫を守るように倒れ、事切れているイロハ級2人をゆくりと退かし、リコリス棲姫の身体を確認。全身が裂傷だらけ。綺麗な服も血塗れである。

「……脚が……」

特に酷かったのは脚。ズタズタに引き裂かれ、一部欠損しているほどであった。匂いからも察するに、おそらくこれは対地兵器であるWGの爆発をモロに食らったことによる怪我。あの島を、花ごと吹き飛ばすために放たれたものか。

あれだけ花を利用し続けていたというのに、敵対するかもしれない状況になったら即座に切り捨てたというのか。私達が話をしに行つてすぐだというのに。

「必ず助けるからな！」

脚に衝撃を与えないようにお姫様抱っこで抱え上げ、海経由で施設へと運び入れる。イロハ級は後から運ぼう。供養してあげたい。

施設に近付く際に、大急ぎでイロハ級の方に向かう雷と、呼ばれたのであろう摩耶と曙が駆けていった。私の抱きかかえるリコリス棲姫を見て、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべるが、止まっている暇などない。

「雷から聞いている！ すぐに処置室へ！」

「了解」

工廠では準備万端の飛鳥医師が待ち構えていた。

「全身に裂傷。脚が特に酷い。一部欠損もあり、抱きかかえている感じ、肋骨も何本か砕けている」

運びながらも私が感じる限りの症状を説明。それで処置が少しでも早くなってくれば幸い。

「くそ……肋骨はいいとしても、脚はもう保存してあるものがない。治療はするが動くようになるかどうか……」

「それなら、この人達の脚を使ってあげて！」

もう戻ってきた雷が抱えているのは、事切れたイロハ級。身体はリコリス棲姫以上に損傷が激しいが、2人合わせて左右の脚が揃うように綺麗なものだった。

この2人、最初から自分の脚でリコリス棲姫を治そうとしていたのかもしれない。そう思えるほど完璧な脚。絶対に攻撃が当たらないように注意していたとしか思えない。

「息を引き取る直前で聞こえたの！ 出来るのなら、自分の身を引き換えに姫をつて……！」

「……わかった！ すぐに処置をする！ 摩耶にやったことの焼き直しだ、確実に成功する！」

一度成功している処置だ。陸上施設型と海上型という大きな違いはあるが、見かけだけなら長さも同じだ。移植出来れば、リコリス棲姫は一命を取り留めるし、五体満足で回復もする。

代わりとなったイロハ級の覚悟を受け取り、死体から脚の移植処置をする事が決定した。処置には当然数時間かかる。シロクロの時のことを考えれば、おそらく数日のうちに回復するだろう。

処置自体は昼過ぎには完了。リコリス棲姫は今は安定し、医務室に寝かされている。

今回の処置も私が手伝わせてもらった。必要無いかもしれないが、匂いである程度わかるというのはやはり便利だと飛鳥医師が言ってくれたためである。脚は先程のイロハ級、戦艦ル級の両脚を使わせてもらい、身体中の裂傷は薬で終わらせた。

「よもや深海の者と川の字を作ることになるのはの」

「風雲は今日から部屋を移るから、川にはならないな」

「ほう、ならば……2本線じゃの。こんな形で肩を並べられるとはもう」

まだ安静にしておく必要がある姉は、医務室で隣に寝かされたリコリス棲姫を見て苦笑。この施設が種族を問わずに救われているものであることは、シロクロとセスの存在から当然理解しているが、一緒に部屋で眠るとは考えていなかったようだ。

確かにシロクロは霰と、セスは夕雲と相部屋であるため、姉の隣に来ることはまず無い。姉はここから出たら、おそらく風雲と相部屋になるだろう。医務室で一緒に生活していたおかけで、今は打ち解けている。

「嫌だったか？」

「いやいや、構わんよ。この施設の良さ、特と味わっておる。まこと分け隔ておらぬな」

本来なら自分だって罰せられて然るべきだと姉は語る。家村鎮守府の構成員として活動していたのは事実であるし、その時は意思を奪われていたとはいえ、来栖鎮守府を襲撃したのも事実。その罪を問われることも考えていたそうだ。

だが、この施設はそんなこと関係ない。艦娘だろうが深海棲艦だろうが、助けを求めたのなら助ける。それに、姉は操られていたのだから罪など無いのだ。まだ誰も殺していなかったのも大きい。

「姉さんには罪はない。気にしなくていい」

「うむ、気にせぬことにおこう」

痛みを堪えながら身体を起こし、眠っているリコリス棲姫の方を見る。

「こうして見ると、艦娘も深海棲艦も変わらんのう」

「ああ、それは若葉も思う」

今のリコリス棲姫は、私達がここに運び込まれた時と同じように検査着。身体中の裂傷の治療のために包帯が巻かれ、脚の付け根には特に強めに巻かれていた。これだけなら、深海棲艦というイメージが薄い。

シロクロの時と同じように深海棲艦同士の移植であるため、色素の違いなどは気にならない。ただし、今は見えないが縫合痕はクツキリ残ってしまうだろう。それについては何と申うだろうか。

「ウ……」

などと話しているうちに、驚くべきことにリコリス棲姫が目覚まそうとしていた。あまりにも想定外。回復が早過ぎる。処置のために麻酔は入れていたし、昏睡状態を維持するようにもしていたはずだ。処置後でも少しくらいはそれが維持される。

なのに、もうその薬の効果が切れてしまった。リコリス棲姫はそういう薬が効きにくい体質なのだろうか。姉と一緒にいるため少し気が緩んでいたが、よくよく嗅いでみたら体内の薬の匂いがかなり薄れていた。

「こんなに早く目が覚めるものかえ？」

「あり得ない。早くても明日のはずだ。シロクロも丸一日は寝ていたんだが」

姉は知らないからそんなものかと思っているようだが、私は正直驚きでどうしていいものかわからない。そうこうしている内に、リコリス棲姫が目を開いた。

「ココハ……ツギ……ナンダ……」

「リコリス、今は動かないでくれ」

状況がハッキリわかっていっているわけでは無いようだが、意識はハッキリしているようである。処置された脚の痛みで顔を顰めた。

私の顔を見た途端、知った者がいるとわかり少し安心したようだった。明らかに表情が明るくなったのがわかる。

「ワカバ……カ。ワタシハドウナツタンダ……ドウホウタチハ……」

自分が助かったというのは理解出来たようだが、まだわからないことばかり。少なくとも、自分をここに連れてきてくれたであろう仲間達がどうなったかはわかっていない。

いや、うつすらでもわかっているのだと思う。今まであまり感じたことのない匂い、悲観の匂いを感じた。

「……リコリス、お前は**大怪我**を負っていた。それはわかるか」

「アア、カムムスドモニオソワレタ」

「……お前を逃すために、命を賭した。私が知る限り、ここにいたのはお前と戦艦2人だけだ。その戦艦も……ここで……」

ギリツと歯軋りが聞こえた。私達と戦った時は単独だったが、それなりに仲間がいたのだろう。その仲間達は全員、家村の艦娘達に皆殺しにされてしまっていた。

「すまない、人を呼んでくる。処置した医師や、ここにいる深海の姫を紹介する」

「……アア」

一夜にして全てを失ってしまったリコリス棲姫を、慰めることは出来なかった。すぐに戻ると医務室から出るが、リコリス棲姫は茫然と天井を見つめるだけだった。

飛鳥医師やシロクロ、セスを連れて医務室に戻るが、様子がおかしい。何やら姉がリコリス棲姫と会話をしているようだった。姉を放置してしまったのは申し訳なかったが、まさか普通に会話を始めているとは思っていなかった。話題が無いからと風雲と話すことすらしなかったのに。

「リコリスとやら、お主の同胞、わらわには見えておる。お主のことを心配しておるようじゃ」

「シンパイ……ダト?」

「うむ。わらわにはもののけの言葉はわからぬ。じゃが、お主の周りにいるもののけは、お主に付き従い離れようとせん。余程愛されておったんじやな」

医務室に入る前にその会話に聞き入ってしまった。飛鳥医師も扉に手をかけたまま固まっていた。

生まれつき霊感が強く、もののけという形で亡霊が視えている姉。今のリコリス棲姫にもそういうものが憑いていると話していた。特に脚、移植されたル級の亡霊が視えているようなことも。

「……アイサレテ……ヨクワカランナ」

「それくらい親身になっておったのじゃろう。生まれてから常に一緒

におった、謂わば家族のようなものだったのでは？」

「……アア、カゾク、ソウダナ」

リコリス棲姫の周りにいた同胞達は、それほどに姫の忠臣だったということだろう。私達と面識が無くても、自分のプライドなど関係なしに姫の命を優先したところから見て間違いない。死ぬ直前でも身体を差し出すと言ったほどだ。

その声が雷にしか聞こえていなかったとはいえ、最後の最期まで献身し続け、結果的にリコリス棲姫は助かった。命を賭した甲斐もあつただろう。

「話の途中ですまないが、入らせてもらおうぞ」

姉の話の続きも気になるが、今はリコリス棲姫の処置の内容を伝えることが先決。また、ここにも姫がいることを姿で示すことで、多少は安心させてやりたい。

ひとりぼっちで施設にいるわけではないのだ。同胞だっている。私達は全員、リコリス棲姫の仲間だ。

とはいえ、初めて見る人間に、少し身体が強張ったのがわかる。冷や汗のような匂いも。

いくら姫であり、周りが友好的だとはいえ、慣れない環境と知らない者に囲まれば、冷静でいるのは難しい。

「オマエガワタシヲチリヨウシタニンゲンカ」

「ああ、その内容を伝えたくてきた。よかったか」

「……ドウホウノアシヲツカツテイルンダロウ。ソレクライワカル」

脚を撫でて悔しそうな表情を浮かべる。今はまだ感覚も無いだろう。だからこそ、それが別物の脚であることを如実に表している。

「リコリス……ちよつといい……？」

「オマエハドウホウカ。ココデセイカツシテイルトイウ」

「うん……艤装を壊されて……お腹を抉られたの」

ちゃんと許可を貰った後、リコリス棲姫の喉を少し弄るシロ。

「ンツ、ア、あー……なるほど、どうやっているかはわからないが、声色をそちら側に変えたのか」

「うん……私達の声……この人達には聞き取りづらいんだって……」

ここから出るときには元に戻すから……」

いつ見ても不思議な光景。シロにしか出来ない、深海棲艦を直接弄る技。これにはリコリス棲姫も首を傾げる。深海棲艦の方でも、これは普通では無い力のようである。

「今から全て話す。聞いてほしい」

「……ああ、頼む。この脚があいつらのものであるのはわかるが……私はどうなった。どうされたんだ」

ここからはどういう治療をしたかを伝える。大きな治療は脚の移植と、砕けた肋骨の修復。どちらもリコリス棲姫に付き従っていた戦艦ル級のものから戴き、それを移植している。施設に保管されたものは一切使わず、最後まで付き従った忠臣がリコリス棲姫の存命に貢献した形となった。

「あいつら……最期まで私に……」

「ああ。僕は若葉と雷から聞いたただけだが……自分の身体を使ってくれと訴えてきたそうだ」

脚を撫でる手が震えていた。リコリス棲姫が生まれてどれだけ経つかは知らないが、ずっと一緒に生きてきた家族が、こんな理不尽な形で失われてしまったのだ。

「最期どころか、今も側におるよ。お主を見守っておる。文字通り、一心同体じゃな」

「……そうだな。あいつらと私は一心同体だ。この治療は感謝する」

涙目ではあったが決して泣かなかった。気丈に振る舞い、姫としての威厳を保つ。一心同体となった忠臣達に恥じぬ生き方をしようと必死だった。

別に泣いてもいいと思う。それほどまでのことをされたのだから。

ジワリと、また両腕が疼いた。自分の利益のため、今まで利用し続けていた深海棲艦すらもすぐに切り捨てようとした家村に、怒りと憎しみが増した。元々許せなかったが、尚のこと許せなくなった。

この手で引導を渡したい。その命を持って償ってもらわなければ、私は満たされないように感じた。

利害の一致

早くもリコリス棲姫が目を覚ました。シロクロの時とは違い、治療されたばかりであるが故に脚はまだ動かず、痛みも当然ある状態。それが治るまでは医務室で寝てもらおうことになる。今は姉も一緒にいるため、話し相手には困らないだろう。姉が自分から話しかけていくくらいだし、何かしら話題はあるはず。

一応一晩待つてから少し深く事情聴取することになった。その時には、夕雲と風雲にも同席してもらう。リコリス棲姫を襲ったのは誰かがある程度わかるかも知れない。

「そうだ、1つ気になっていたことがあるんだ」
「なんだ」

「あの花はここでも咲くんだろうか」
いきなり目が覚めてしまったため、緊急で検査を行なっている最中、飛鳥医師がリコリス棲姫に尋ねる。私も少し気になっていたことだ。

麻薬の原料になっていたリコリスの彼岸花は、その力が漏れ出た結果生えてくるものである。今どこそ何もなっていないが、時間が経てばこの地にも生えそうなものである。どれくらいの周期で生えるかは知らないが。

「おそらく咲くだろう。だが、ここは土じゃない。突き破ってまでは生えない」

「なら施設の周りが彼岸花まみれになる可能性はあるということか」
「ああ、その花はどう使ってくれても構わない。ワカバには言ったが、どうせ生え過ぎたら海に捨てていたものだ」

むしろ定期的に処分しないとえらいことになりそうである。1本2本ではなく、下手したら桁が2つくらい変わる可能性がある。流石にそうなる困ってしまう。

しかし、その花が麻薬の原材料となっている事実があるので、処分もなるべく気をつけなくてはいけないだろう。やれるならその場で燃やした方がいいかも。

「……その海に捨てた花を奴らは拾って、君の存在がわかったのかも
しれないな」

「それを言われるとぐうの音も出ない」

なるほど、その処分方法だったため、たまたま家村の鎮守府に流れ
着いたとかなりそうだ。そこから麻薬成分にするなんて誰が考えた
か知らないが。

むしろ見ただけならただの彼岸花なのに、何故それを調査しようと
思ったのか。確かに海から流れ着くというのはおかしな話ではある
が。

もしや、家村の鎮守府には、三日月のような花卉から何か感じ取れ
る者がいるのか。そうだったとしたら、今まで以上に胡散臭くなる。

翌朝。シロクロとは違って移植の規模が大きいため、まだ痛みは無
くなっていないようだが、感覚は繋がったようだった。足の指先が動
いていることが確認でき、処置は改めて成功したことがわかる。

私は姉の様子を見るために医務室にいた。こちらも順調に回復し
ており、車椅子での移動も少しは楽になった様子。

「……本当に感覚があるな」

「よかった。一度成功している処置だから大丈夫だとは思っていた
が」

脚を撫で、感慨深そうな表情を浮かべる。今は自分の脚でも、昨日
までは配下の脚。自分を生かすために、配下達が最後の命を振り絞つ
た結果、残ったものがこの脚だ。命を繋ぐために命を使ったと言つて
も、過言では無いだろう。

「よかったではないか。昨日はまことに動くようになるか不安にして
おったではないか」

「ハツハル、余計なことを言うな」

「別に恥ずかしいことではあるまい。わらわとて不安じゃて」

どうやら昨晚のうちに、大分仲良くなったようだ。リコリス棲姫も
満更ではないようである。

だが、脚を撫でている間に真剣な表情に。失った多くの仲間のこと

を思い出している。目を瞑ると、大きく息をつく。

「……私はいいつらの仇を必ず取らなくてはいけない。お前達もそれを目的としていると考えていいのか」

「仇……ではないが、ここにいる者の大半は、君を襲撃した者達の被害を受けた者だ。特に曙は、一度殺されている。鎮守府であるにもかかわらず、命を粗末にするような者には償ってもらわなくてはいけない」

目的は一概に一緒とは言えない。少しだけ違う。

私達はリコリス棲姫とは違い、仲間を直接やられたわけではない。だが、同じように生まれてきた艦娘が粗末に扱われ、私も含めゴミのように扱われているのが許せない。仇討ちといえばそうかもしれないが、少しズレている。

特に恨みが深いのは曙だろう。本当に一度命を落としているのだから。

「利害は一致している。奴らを滅ぼすまでは協力しよう。脚を治してもらった恩もあるからな」

「それは助かる。だが……」

「リコリス、昨日わらわが説明したろうに。滅ぼすのはダメじゃ。あちらの艦娘は洗脳され、意思とは関係なくやらされておるのじゃと」

詳細を昨日のうちに姉が説明してくれていたようだ。それならば話は早い。姉も知っていることは少ないだろうが、当事者であったという事実が説得力を増していた。

自分の境遇もしつかり話していたようで、人形であった姉の発言には一応納得はしている様子。

「すまないが、保証は出来ない。あの桃色の髪の艦娘だけは許せそうにない」

リコリス棲姫のあの島を襲撃したのは、桃色の髪の艦娘。これを夕雲と風雲に聞けば、何かしらわかるだろう。姉も何か知っているかもしれない。

「桃色の髪、わらわにはほとんど見当が付かぬ。姫に聞くべきじゃない」
いきなり一蹴されたため、状況を進展させるために夕雲と風雲を呼

ぶ。あの時の記憶を掘り返すのは辛い、先に進めるためだ、心を鬼にして聞いてみよう。

医務室に2人を呼び、リコリス棲姫の話す艦娘に心当たりがないかを聞いてみた。途端に2人の顔が嫌な歪み方をした。夕雲は天を仰ぎ、風雲は頭を抱える。

「そういうえば、こいつらと同じ服を着ていたな。関係者か」

「はい……巻雲さんは夕雲の妹です」

「私の姉ね……なんかそんな気がしてたわ」

夕雲の妹であり、風雲の姉にあたる艦娘、巻雲。心当たりどころか、姉妹となればすぐにわかるものだろう。あちらの鎮守府はもしや、夕雲の妹達でそういった部分を構成しているのでは無かろうか。

聞けば、夕雲型には夕雲と風雲を含めて改二は5人いるのだとか。姫の体液を入れられる条件が第二改装の実施であるため、5人全員が姫に仕立て上げられていてもおかしくはない。というか、全員姫のようである。

「リコリスさん、夕雲に言う筋合いは無いかと思いますが、巻雲さんの命は助けていただけませんか。あの子は薬の影響でやりたくもないことをやらされているだけなんです」

「私からもお願い。巻雲姉はそんな人じゃないの。薬で狂わされているだけなのよ」

その巻雲だつて被害者だ。今までと同じならば、薬であらぬ思考を植え付けられ、体内には自爆装置もあり、人形達の指揮をするために馬車馬のように使われている。夕雲も風雲もその経験者であり、特に夕雲は当初完全に心が壊れたような状態だったのだ。そのままでも、治療されても、酷いことになるのは間違いない。

「土下座でもなんでもします。夕雲を好きにしてくれて構いません。ですから、妹だけは何卒……」

「貴女の仲間を殺した事実は変わらないわ。なら私も罰を受ける。私のことを好きにしてくれて構わない。だから、巻雲姉を殺すのだけは……お願い」

2人の姉妹から縋り付かれるかのようにお願いされ、リコリス棲姫

もタジタジである。

「……家族の大切さは私も知っている。私はその家族に生かされているんだからな」

改めて脚を撫でる。深海棲艦に姉妹だとかそういうものがあるかは知らないが、リコリス棲姫は仲間達のことを家族として認識しているほどだ。

だから、姉妹を討たれる辛さは誰よりもわかっている。身内が殺されるのを納得出来る者はまずいない。

なるほど、だから私達が会いに行つた時、リコリス棲姫がたつた1人で私達の相手をしてきたのか。まず姫本人だけでこちらの實力を見てから、仲間達を喚けるか決めるのだろう。仲間達が大事だから、一番強い姫が敵を見るのだ。あの時は私達に戦う意欲が無いから出てこなかったただけだ。

そういうところも姫らしからぬ性格のリコリス棲姫である。普通ならまず配下に戦わせて高みの見物くらいしそうなものだが、大切だからまず自分が出ると。そんな戦い方をしているから、あそこまで戦い慣れていたのか。

「だがな、私の家族は現に殺されている。だから保証は出来ない。こちらが殺されて、そちらが生かされる理由なんぞ無いだろう」

「……仰る通りです。貴女の怒りも理解できません」

「善処くらいはしてやる。だが、戦場で私の攻撃に巻き込まれて死ぬのは防げないぞ」

戦場にリコリス棲姫が出た場合、容赦なく押し潰すと宣言されたようなものだ。艦娘だろうが深海棲艦だろうが関係ない。自分の敵は全て潰すと。

「ほんに、リコリスは口下手じゃのう」

「ハツハル」

「暗に、此奴がやる前に助ければよいと言っておるんじや。目の前に連れてこられても、わざわざ殺すような真似はせんとな」

ほほほと優雅に笑う姉と、恥ずかしげに顔を背けるリコリス棲姫。

リコリス棲姫は、なんだかんだこちらの意思は尊重してくれている

ようだった。巻き込まれても知らないと言いつつも、手加減はしてくれそうな雰囲気。

「若葉が速攻で助ければいいんだな」

「うむ、それでよい。お主なら出来るんじゃない？」

「勿論だ。出来ることなら、神風達が持つ高速修復材で出来たナイフが欲しいくらいだが」

アレがあれば、傷付けず痛みだけ与えて自爆装置を無効化出来るのだが。自爆装置の摘出は何度も見ているため、その場所も大まかに見当がついているし。

艦装の分解もでき、自爆装置の解除もでき、私が最も戦いやすい状況に持っていける。

無い物ねだりではあるものの、一度下呂大将にお願いしてみるのもいいかもしれない。

「リコリス、まずは君の治療を終わらせる。その後は君に任せることになるだろう。それでいいか」

「……それで構わない。さつきも言ったが、私はお前に治療してもらった恩がある。そこはお前達の望む通りに動こう。だが、マキグモとかいう桃色の髪の艦娘に関しては知らない。見かけ次第殺す。どうにかしたければ」

「若葉が先にやる。やれないなら戦場から離す」

その治療は近日中に終わることだろう。もしかしたら歩行練習などが必要かもしれないが、それが終わればリコリス棲姫は自由の身。おそらく時間が解決するまでの間は、この施設に居座ることになるだろう。恩を返すということで、施設防衛に尽力してくれる。

もしこの施設自体に襲撃してくるようなら、この施設にはセスしかなかった航空戦力として手伝ってもらえる。その圧倒的な力は体験済みだ。あれが味方になるというのなら百人力。

逆に私は責任重大となった。巻雲が戦場に出てきた場合、リコリス棲姫の航空戦を掻い潜りながら、殺さないように撃破しなくてはいけない。

問題はもう一つある。リコリス棲姫の島を、配下のイロハ級も含め

て対地攻撃などなどで完全に圧倒したということだ。もしかしたら、夕雲や風雲以上の力を持つ者か、えらくチームワークがいいかするのかもしれない。こちらでも警戒を厳としなければ。

「リコリス、襲撃された時のことを事細かく教えてくれないか。ここに襲撃されても撃退出来るように知っておきたい」

「わかった。説明しておこう」

ここからはリコリス棲姫がどのように襲われたかを聞くが、大概予想通りだった。

対地攻撃の数をキッチリ揃え、対空要員も必要以上に揃え、リコリス棲姫の危険な要素を全て上から押し潰す、人形満載の人海戦術である。リコリス棲姫達はどうか知らないが、艦娘は駆逐艦しか通れないあの時化を通過するため、全て駆逐艦の大部隊。

「襲撃してきた者の中に、巻雲以外に意思を持つ者はいたか？」

「指揮者と考えればいいのか？ ならばいたな。こいつらと同じ制服だ。銀髪の奴だ」

「朝霜さん……ですね」

大部隊を指揮している姫とされた艦娘は、夕雲の妹達で構成されているようである。それでも2人だけのようではあるが。

「飛鳥先生、夕雲達も戦わせてください。艦装はありませんが……妹達を救いたいんです」

夕雲が願う後ろで、風雲も確固たる意思を見せる。親族の洗脳は自分の手で解きたいという気持ちはわかる。それが刻一刻と悪事を重ねているとなるとより一層その気持ちは強まるだろう。

「はい、そうですね。都合のいい話であるとわかります。貴女達の無念を晴らすためにも、これ以降は誰も死なないようにしたいと思うんです。ごめんなさい、ごめんなさい、妹を贖っているようでごめんなさい」

「言いたいことはわかるわ。でも、全員救うの。抑えて、抑えてね。ちゃんと貴女達の無念は晴らすから。でも全員救わないと意味がないの。お願い」

気持ちは昂ったからか、2人同時に禁断症状へ。見えないものに対

して謝罪と説得。

リコリス棲姫はその光景を初めて見るようで、焦点が定まらない瞳で何もないところに話しかけるその姿は、深海棲艦から見ても痛々しいと感じるようである。

「ハツハル、あれはお前には見えているのか」

「いや、わらわとは視えているものが違う。2人は罪悪感が形になってしまっておるのじゃ」

「……そうか」

これを見たことで、リコリス棲姫もいろいろ思うところがあるようだ。少し考えさせてくれと、それ以上の会話を一旦拒んだ。まだ身体は本調子ではないのだ。今はゆっくり休んでもらう方がいいだろう。

得体の知れない者

リコリス棲姫から事情聴取をした午後、今度は下呂大将から連絡が来た。大本営の内通者、目出の弾劾裁判が終了し、次は家村の行方を突き止める作業に入ったという。事が事だけに、手続きもそこそこに即行で叩き落としたようである。

尋問から裁判終了までの流れから得られた情報は機密が多く、現任部外者である飛鳥医師に公開される内容は少ない。しかし、家村に狙われているため、ある程度の情報開示はされることになった。これについては大本営の一部にも理解されており、この施設は明確に鎮守府への協力施設として認定されたようである。

「説明のために先生がこちらに向かっている。電話で話すような内容では無いからな」

「来栖提督んトコで別れたきりだから、ざっと1週間くらいか。久々つちや久々だな」

「そうだな。あとは回復した風雲と初春の様子もみたいらしい。あの人は働きすぎだ」

別れてからは徹底的に目出の周囲を洗い出し、ぐうの音も出ないくらいに追い詰め、鎮守府を制圧しつつ尋問。それが終わったら休む間もなく次の調査。いつ休んでいるのかわからないレベルである。

それを言ったら飛鳥医師もではあるのだが、治療を来栖鎮守府に頼れるようになってからは、治療法を模索している時よりは落ち着いている。

「来栖のところ経由だから、そろそろ来るんじゃないかな。朝に出たとは言っていたし」

「全然もてなす準備してないわ!」
「構わないさ。説明してすぐに帰ると言っていた。泊まっていくなけ
でもないしな」

本当に説明のために施設に立ち寄るだけのようだ。立ち寄るといつてもそれなりに時間がかかるので、来栖鎮守府で1泊したりするのかもしれない。

下呂大將が来たら、リコリス棲姫のことも説明することになるだろう。この件はまだ話が出来ていない内容だ。

それから数時間。そろそろ日が落ちようとしているが、未だに下呂大將が施設に来ない。当然来栖提督でもある。さすがにこれは遅すぎる。このタイミングで来たとしても、話している間に外は暗くなるだろう。

「ちよつと遅すぎない？ 来るって言つて来ないのはどうかと思うんだけど」

別にこの話を待っていたわけではないが、約束をすっぱかされるのではないかと考え、少しイライラし始めているのは曙。

そもそも提督という存在に対していい思いを持ってないが故に、些細なことでもイラつく傾向がある。今回はその中でもあり得ないようなことが起きている。

「まさか、襲撃を受けたのか？」

「……無くは無いな。こちらに来る最中に襲撃を受けたというのなら、連絡が来なくてもおかしくない」

来栖提督と下呂大將がこちらに来る時は、誰かの運用する大発動艇だ。当然だが通信設備は整っておらず、強いて言うならその部隊の旗艦を務める者が鎮守府と通信出来るようにしている程度だ。

こちらに連絡が来るのは、まず来栖鎮守府に連絡が行ってから、あちらの誰かから連絡が来るのを待つしかない。そもそも鎮守府に通信出来ないような状況だった場合、こちらには永遠に連絡が来ないだろう。

例えば、沈んでしまったとか。

「流石に不安よ。先生、私達で見に行っちゃダメかしら」

嫌な予感連鎖するもの。私だけじゃ無く、雷も不安なようだ。下呂大將が名將であるとしても、神風型の5人が達人であるとしても、あちらはそれを知った状態で対策もとってくるはずだ。雑に数の暴力というのも考えられる。

だが、こちらは内通者も押さえ込み、秘密裏にこちらに向かってき

ているはずだ。まだ内通者がいるのか、そこまで読んだ軍師がこちらにいるのか。

「若葉もそうした方がいいと思う」

「手間かけさせるわねホント。仕方ないから迎えに行つてやるわよ。絶対文句言つてやるわ」

三日月も無言で頷く。第五三駆逐隊の気持ちは一致している。

「艤装のメンテは終わつてる。行こうと思えばいつでも行ける。早く行つた方がいいんじゃないか？」

「大惨事になる前に行かなきゃダメよ！」

悩んでいるのは飛鳥医師だ。

万が一のことがあつた場合、敵はあの下呂大将の指揮する神風型をも圧倒するような敵になるかもしれない。そうなつた場合、私達ではまず確実に相手にならない。死なないにしろ、大怪我は免れない。そうで無くても、危険であることは確かだ。

私達を信じていないわけではない。この施設で命を預かるものとして、死が付いて回る戦場に出すこと自体に抵抗があるのだろう。特に今回は危険だ。

しかし、ここで下呂大将も来栖提督もやられるような敵だつた場合、遅かれ早かれ施設も滅ぼされるだろう。ならば、今向かつた方がいい。数で押し潰そうとしているのなら、私達の援軍でも充分戦える。

ただ遅れてるだけならば、迎えに行けばいい。心配して損したと笑い飛ばせばいいだけだ。曙はさんざん罵りそうだが。

「皆、航路はわかっているな」

「ああ、来栖鎮守府に向かつた道だろう。覚えてる」

「なら、頼んだ。万全の状態で向かつてくれ」

向かうのは私達、第五三駆逐隊。摩耶とセスは、本当に万が一の場合、施設を守ってもらわなくてはいけない。

「第五三駆逐隊、出るぞ」

何も無ければいい。不安を取り除くため出撃する。

海の上で夕暮れを見る。これでもトップスピードで向かっているが、まだ下呂大将達は確認出来ない。

「音は」

「何も聞こえないわ」

「匂いは」

「感じない」

「色は」

「無いです」

私は嗅覚に、雷は聴覚に、そして三日月は視覚に集中しながら突き進む。そのため、先頭を駆けるのは曙。定期的に私達に声がけをしながら、まだ何事もないことを確認していく。

私達のように妙な能力に目覚めていない分、戦場をよく見てくれている。持久力のおかげで、他に神経を割いても息一つ切らさない。私が旗艦をやっているものの、今は曙が中心である。

「つたく、クソ面倒なことしてくれるわね。敵に襲われてなかったらボロクソに叩いてやる」

「そうじゃ無かったら敵をボコボコにしてやれ」

「当たり前よ。手を煩わせるなつての」

悪態をつきながらも心配はしているようである。これが所謂ツンデレというヤツだろうか。

「匂い、感じたぞ」

そこからまた進んだところで、海の上では感じる感じが無い匂いを感じた。一度嗅いだことがある匂い。下呂大将と来栖提督の匂いだ。

護衛艦は神風型5人と阿武隈、そして第二二駆逐隊。阿武隈と第二二駆が援護に徹し、神風型が襲いかかってくる敵と一進一退の攻防を繰り広げている。

敵は案の定、例の匂いがする艦娘達。物量ではなく、技量で神風達と拮抗していた。どう見ても人形であり、リミッターも外れている。

「大将、援軍だ！」

「君達は下がっていなさい！ 今までのものとはレベルが違います！」

下呂大將が声を荒げるほどだ。あちらはもうなりふり構わず本気で殺しに来ている。

今までは泳がしていたようだが、内通者が暴かれ、弾劾裁判も終わり、いよいよ追い詰められたことで、下呂大將が本格的に狙われている。敵は下呂大將をここで確実に殺すための部隊だ。

「人形とは思えない精度よ！ スピードに対応してくる！」

「僕の剣撃も受けるのかい！ あはっ、楽しいじゃないか！」

「松風、遊んでんじやないわよ！」

5人が5人、まるで違う流派を使っているのに、それにしつかり対応している人形達。そうなると、私達にはなす術もない。ここにいるだけで足手纏いになりかねない。

ならばと、戦場をよく確認する。そんな人形をコントロール出来るのだから、さぞかしとんでもない姫がいるのだろう。噂の巻雲や朝霜かもしれない。

「いた。……なんだアレは」

姫らしき艦娘を発見した。が、今までにない感覚を持った。

匂いがおかしい。夕雲や風雲から感じた薬の匂いがまるでない。

代わりに感じる得体の知れない匂いに恐怖を感じた。

「何ですか……あの人……」

三日月も気付いたのだろう。左目でその艦娘を見たことで、異質なものを感じ取っていた。ガタガタと震え出し、完全に怖気付いている。

聴覚には何もなければ、雷は反応なし。当然曙も……と言いたるところだが、少し息苦しそうにしていた。深海棲艦の心臓と肺が、その艦娘に反応しているのだろうか。

「お前は一体何だ」

「あら、気付かれてしまいましたか。下呂提督は既に当たりをつけているようでしたので、ここで消えてもらいたかったのですが、まさか貴女達もとは」

にこやかな笑みでこちらを見てきた。だが、その笑みが、私達の知る家村のように、貼り付いたものであることはすぐにわかった。こち

らのことを気にも留めていないような仕草。

奴にとつては、私達など木端な艦娘の1人に過ぎないのだろう。だが、ここに辿り着き、奴の何かに気付けたことで、多少は私達の方を見るように。

「私、軽巡洋艦大淀です」

「お前が……！」

家村の秘書艦という、素面のまま家村の方針に自ら従っている艦娘、大淀。その方針について何とも思っていないようで、素面なのに人形を扱っている異常者。

というのが、今までの私達の認識だ。だが、同じ場所に居合わせたことで、強烈な違和感を覚えた。

「若葉さん、貴女の質問に答えます。私が何かでしたね。私はどの鎮守府にでも1人いる任務娘、大淀。それ以上でもそれ以下でもありません」

「嘘をつけ。なら、なんで……」

確かに大淀は、来栖提督の鎮守府で滞在させてもらっているときに姿を見た。艦装は身につけておらず、事務職をしていると聞いたので、話す機会は無かった。

だが、私を感じているものはそういうことではない。意を決して、真実を突きつける。

「なんでお前から深海棲艦の匂いがする」

それは、嗅ぎ慣れた匂いに近かった。施設にいるシロクロやセス、リコリスに近い、姫級の深海棲艦の匂い。霧や姉の中に含まれたイロハ級の体液ではなく、夕雲や風雲の中に含まれた姫の匂いをより強くしたような匂いを、大淀から感じた。

三日月が怯えているのは、深海棲艦の何かを感じ取る左目で大淀を捉えた時、艦娘や人形、ましてや姫にされた艦娘からも感じ取ることが出来ない何かを感じ取ってしまったのだろう。

「あら、あらあら、そこまでわかるんですか。少し嘗めていましたね」

貼り付いた笑みが変化し、満面の笑みになった。まるで私のことを、面白いものとして認識したような、そんな笑み。

「匂いですか。なるほど、そこは盲点でした。私にもそれはわからないです」

「答えろ。何故お前から深海棲艦の匂いがする」

「そこまで教える義理はないです。それに知ったって無意味でしょう。貴女達はここで死んでもらわなくてはいけないんですから」

あちらが拮抗しているため、大淀をどうにか出来るのは私達しかいない。むしろ大淀が一切あちらに手を出さないのが不思議で仕方なかった。神風達相手に遊んでいてもいいのか。

だが、三日月はその得体の知れない存在に怯えてしまい、戦力としてカウント出来ない。私達だけでどうにか出来るか。あの人形が相応な力を持っているのに、それをコントロールする大淀が力を持っていないわけがない。

「不思議な4人ですね。艦娘なのに深海らしさも持っているじゃないですか」

「お前らのせいで、そういう治療を受けざるを得なくなっただけな」

「なるほどなるほど、死者の蘇生だけでは無かったですね。認識を改めます。殺すのは惜しいですね」

腕と脚が疼く。大淀が本当の敵なんだと知らせるように、今までにないほど強く疼く。

ここであいつを如何にかしなければ、被害者は増える一方になるなんて私でもわかってている。救出など考えない。今ここで死んでもらわなくてはダメだ。

「曙、雷、三日月、アレはダメだ。救出なんて考えられない」

「わかってるわ。あのクソ淀はここで終わらせないとダメ」

曙も胸を押さえて大淀を睨み付けていた。私の四肢と同じように、深海のパーツが疼いて仕方ないのだろう。

「……素面……なのよね。話し合いで解決出来ないかしら……」

「素面だから無理だ。あいつはあいつの意思で他の艦娘をゴミのよう

に扱ってるんだぞ」

「……だけど……」

雷は最後まで命の奪い合いを拒む。気持ちはわかる。だが、あれはもう無理なのだ。洗脳により意思を捻じ曲げられているわけでも、無理やり働かさせられているわけでもない。確固たる意思を持って、今までの行ないをしてきているのだ。

下手をしたら、家村よりもドス黒い何かを持っている。大淀が黒幕である可能性だって秘めている。

「雷さん……覚悟を決めてください。私は……私はやります。イライラが止まりません」

「三日月……」

恐怖を乗り越えたわけではないが、三日月も決心したように顔を上げた。左目はこれ以上無いほど輝いている。

「わかった。でも殺さないようにする。どうせ水鉄砲だもの、殺せないしね」

「ああ」

「大丈夫よ。きつといい方向に行くわ。大淀さんを捕まえちゃえばいいのよね！」

雷も意を決したようだ。

「大淀、若葉達は殺されないぞ」

「では、やりましょうか。私、どちらかといえば裏方なんですが」

笑みは崩さない。まるで私達を吟味しているようだった。特に私に対して、舐めるように眺めてきたのは視線からわかる。

ここで大淀を倒すことが出来れば、これ以上の被害者が出ないだろうと感じた。その予感が当たっているかはわからない。だが、大淀を野放しにしているわけにはいかない。

深海の匂いがする得体の知れない者とは当然初めて戦う。未知の存在相手に、私達は太刀打ち出来るのだろうか。

圧倒的な力

下呂大将と来栖提督が施設に向かうと言いながらもなかなか来な
いたため、迎えに行くことになった我ら、第五三駆逐隊。最悪の事態も
考え、大急ぎで向かったところ、その予感は的中。航行中に襲撃を受
け、応戦中だった。

人形達は神風型5人と拮抗。さらには第二二駆逐隊の援護もある
状態だ。今までは明らかにレベルが違う敵に、下呂大将を本気で
殺しに来ているのがわかる。

さらには、それをコントロールしている姫の艦娘は、家村の秘書艦
である大淀。謎の深海棲艦の匂いを漂わせた大淀は、下呂大将の抹殺
どころか私、若葉にも興味を持ったみたいだった。

匂いで勘付かれるというのは盲点だったらしく、とても面白そうに
こちらを見てきた。それがまた、私をイラつかせる。

「では、やりましようか。私、どちらかといえば裏方なんですが」

大淀の装備する艦装は、おそらく見た目は普通に艦娘のものだ。だ
が、どうしても深海の匂いがチラつく。私達の継ぎ接ぎの艦装のよう
に、内部が深海のものに置き換えられているのだろうか。

だが、認識をすぐに改めることとなる。いつも感じる嫌な匂い。殺
意が向かってくるような匂い。三日月も危機回避能力でそれを察し
たようだった。

「散開！」

刹那、軽巡洋艦の主砲とは思えない爆音と共に砲撃が繰り出され
た。弾速も速く、叫んだことで散開していなかったら1人は犠牲に
なっていた。

「あら残念。よく気付きましたね」

「匂うんだよ。お前は」

相変わらず私が先陣を切る。疼きが強い脚で海面を一蹴りすると、
今まで以上のスピードが出た。仲間達を置いてけぼりにする、神風に
匹敵するほどの速度で、私は大淀に肉薄。

続いて曙も飛び出していった。深海の心臓が疼き、血液を身体中に回

し、いつもよりも激しい出力を發揮していた。

「そんな鈍なまくらで私を終わらせようとしているんですか？」

「当たり前だ。どうとでもなる」

即座に真後ろに回り込み、艦装の分解に走る。どんな艦娘であろうと、艦装を装備していなければ海上に立つことすら出来ない。ならばと、五三駆の中で唯一そういうことが出来る私がそれを狙う。それを回避しようとする間に、曙達にさらに攻撃してもらえれば勝機はあるはずだ。4人がかりでならまだ立ち向かえるはずだ。

だが、私は何も説明していないのに、私の持つナイフを鈍なまくらと言った。これだけ速く近付いたのに、それを判断したということは、嫌なほど目がいいということか。

私が回り込んだというのに、笑顔のまま振り向き、よりによって指で摘まむようにナイフを受け止められてしまった。

「物騒なものを振り回しますよね、このワンちゃんは」

「そのまま食い止めてなさい！」

追いついた曙が身体をしならせ、槍を思い切り振り抜く。今までは基本、腹や腕など、当たっても死ななきような場所を狙っていたが、今回は頭をダイレクトに。殺意を持つての一撃。

だが、それを全く見ずに主砲が曙の顔面に向く。同士討ちがお望みかと思ったが、槍の攻撃のラインには艦装があり、ガードしながらの一撃だった。当たれば即死の砲撃に、流石の曙も危機を察知して即座に下がる。

「死に損ないはちゃんと死んだ方がいいのでは？」

「っ！」

曙が避けた瞬間に、三日月が狙いを定めていた。雷ほどの精密射撃ではないが、確実に死に至るような場所であり、且つ回避しづらい胴体を狙った一撃を放つ。

私がナイフを突き立てようとしているため、大淀の動きは止まっている。いくら水鉄砲だとしても、今は出力は最大。当たればそれなりにダメージは入る。

「そんなもので、私に勝てるんですか？ 実弾を持ってきてから話をし

ましよう」

水鉄砲であることをいいことに、三日月の一撃を手で払い除けてしまった。めちやくちや過ぎる。

「チツ……出力上げます」

「口が悪い三日月さんとはまた珍しい。舌打ちはあまり行儀が良くありませんよ」

撃ち抜くような砲撃。三日月はその砲撃を回避することが出来たようだが、少し掠めたようで、腕から血が流れていた。

相変わらず威力が尋常ではなく、その発射の衝撃が私にも響き、ナイフを握る手が緩みかけたが、必死にしがみつく。それだけやっても、大淀は2本の指で摘んでいるだけ。あまりにもおかしい力に私も少し動揺している。

「若葉のナイフを離さない!」

今度は雷の砲撃。ナイフを受け止めている腕へのピンポイント射撃を放つが、身体を返して艦装により水鉄砲を受けた。身体に当ててようやくダメージらしきものが当てられるのだが、艦装にはどうにもならない。所詮演習レベルの攻撃では意味が無かった。

「艦装が破壊出来ないような武器で戦場に立つのはダメですよ」

その隙を見て、曙が足払い。これで体勢が崩せばナイフを取り返せるだろう。だが、その一撃は足で簡単に止められてしまった。そのまま槍を踏み潰され、逆に曙の体勢が崩されてしまう。

「くっそ……!」

「手癖が悪い死に損ないですね」

ナイフ諸共振り回されて、さらには足下の槍すらも足で回して吹き飛ばされた。ナイフは握ったままでは出来たが、尋常ではない膂力で投げ飛ばされ、曙にぶつけられてしまう。その衝撃で曙は槍を手放してしまった。

「お疲れ様でした。2人纏めて」

「させるわけ!」

「ないでしょ!」

主砲が私と曙に狙いを定めているところに三日月と雷の砲撃。主

砲そのものを狙う雷と、先程とは違い艦装に阻まれない脚を狙う三日月だったが、当たり前のように水鉄砲では動じない。脚の砲撃は蹴り飛ばし無効化。出力を上げても関係ない。

効かなかったとはいえ、砲撃を妨害してもらえ、おかげで射線から離れるタイミングは出来た。しかし、曙が武器を失ってしまったことは大きい。槍は依然大淀の足下である。

「この程度で、提督を止めようか？」

「当たり前よー！」

突如、大淀が自分の足下を砲撃。私達が間合いを取ったことで、雷と三日月が魚雷を放っていた。私達の近距離組には縁のなかった酸素魚雷だったが、遠距離組は主砲と一緒に練習していた。大淀はそれを破壊するために撃ったのだろう。

私達の持つ魚雷は演習用のダミー。火柱ではなく大きな水柱が立ち、私達の視界から大淀が消えてしまった。これでは遠距離組は狙いを定めることが出来ず、私達は近付くことも出来ない。

「素人に毛が生えた程度で、何をしようと。艦娘人形や姫の指揮者には通用するかもしれませんが、私はおろか、彼女達精鋭の人形には手も足も出ないでしょうに」

水柱が晴れるような凶悪な砲撃。先程は見えている状態で撃たれたため、匂いや何やらで回避が出来た。だが、見えないところからの攻撃はどうしてもブレる。匂いはしたが、方向が読めない。

それでも、今狙われたのは私であることはわかった。余程私の存在が面白いのか、いの一番に始末しようとしているのが伝わってきた。

「っああー！」

曙を押し出すように射線から外れ、ギリギリで回避。本当にギリギリだったため、衝撃はまともに受けてしまった。左腕や背中が鈍い音が聞こえたが、今はグツと我慢。まだ動く。ならいい。

「あら残念」

「簡単にくたばってたまるか……！」

ナイフを持つ腕はやられていない。戦える。私は戦える。戦う意思は止めない。諦めない。負けるなんて思わない。心を折らない。

自己啓発で心を奮起させ、大淀を睨み付ける。まだあの笑みは取れない。余裕綽々といった感じでこちらを眺めている。猛攻を仕掛けたはずだが、大淀はその場からほぼ動いていない。

「魚雷はまずいわ。さっきと同じことが起きちゃう」

「でも砲撃は効きません。最大出力でも水鉄砲だと艦装に傷一つ付けられませんよ。まともな深海棲艦の主砲と違って、海水を実弾には出れないんですから」

「私達に出来ること探さないと……!」

遠距離組は正直、なす術が無いだろう。非殺傷兵器による攻撃は殆ど意に介さず、魚雷は水柱のせいであちらの攻撃タイミングを作ってしまうことになる。

せめて艦装が破壊出来れば話は変わるのだろうが、近付いても異常と言える脅力で受け止められるという大惨事。私達近距離組ですらお手上げ状態。

「もう終わりですか？ 犬に戯れつかれた程度でしたね。ああ、若葉さんはワンちゃんですし、言い得て妙ですか」

「完全に嘗められてるわね」

ギリツと曙の歯軋りが聞こえた。仕方あるまい。こちらの攻撃は一切通用せず、あちらの攻撃は避けるしかないため、大淀に何を言われようと言いつ返すことは出来ない。

別に言わせておけばいい。あれもこちらの冷静さを欠かせ、より力を削ろうとしているに過ぎないのだろうから。

「そうだ、1つ提案があります。貴女達、こちらにつきませんか」

「……は？」

「特に若葉さん、とてもいい能力を持っているようですし、こちらでも有用だと思っんですよ」

この期に及んで、スカウトをしてきた。

「今、足止めされている来栖提督と下呂提督を殺してくれれば、今までのことは不問にしてあげます。私達の仲間として受け入れます。今なら貴女達も姫になれるくらいの素質があるでしょう。好条件だと思いますが」

ナイフを握る力が増した。今までもずっと強かった四肢の疼きが、痛いほどになった。

恐怖ではなく、怒りで手が震えた。これで私達が本当にみんなを裏切って、自分達の側につくとも思っているのか。嘗めているとかそういうレベルでは無い。

「曙さんの離反も無かったことにしてあげますよ」

「はあ……アンタ、それで私達が頷くと思ってるの？」

一切笑顔は途切れさせない。あくまでも、こちらをおちよくっている。

「命は大事にした方がいいと思うんですよ。ほら、死にたくないでしょう。死ぬのが嫌だから、そんな見窄らしい姿になったんですよ？」

「はっ。」

挑発に乗ってはいけない。いけないとわかっているけど、私達に一番言ってはならないことを宣った。言うに事欠いて見窄らしいと。

誰のせいだろうか。私達は捨て駒にされたから死にかけ、運良く助かっただけだ。

「雷さん以外はわかりやすく死に損なってますね。見た目に丸分かったな傷は特に汚いですよ。特に三日月さん、髪の色は百歩譲れますけど、顔の傷は流石に許容出来ません。女の子なんですから、もう少しメイクで隠すとかしなくては」

プツツと、糸が切れるような音が聞こえた。今の言葉は本当に言っただけではない言葉だ。特にコンプレックスを持っている三日月の神経を逆撫でする罵詈雑言。同情しているようで嘲笑っている、完全に小馬鹿にしている言葉。

「そんなことになっている子達がまだまだいるんですか？ ならいっそ、死んでおいた方がマシだったのでは？ 後ろ指さされながら生きていくのは辛いでしょう。だからこそ、こちらにつくのもいいと思うんですよね。売人とかに適してる見た目なんです。切羽詰まっている感じが」

もう止められなかった。私の四肢に使われている深海棲艦も後押ししてくれている。あいつは殺せと。一切の容赦なく、自分が死んでも生かしておいちゃいけないと。左腕と背中の痛みも消え失せた。洗脳のせいでああ言う物言いさせられた夕雲や風雲とは一線を画している。自分の意思である言葉を選択して、わざわざこちらに向けて言い放っているのだ。

無言で海を蹴った。もう眼前に大淀がいた。

「ふざけるなよ」

顔面にナイフを突き立てるように振り下ろす。が、指二本で受け止められ、またもやビクともしない。それはもうわかっているため、ガムシヤラに、怒りをぶつけるように蹴り飛ばした。

もう片方の手には主砲を握っているため、今のように受け止めることは出来ないはずだ。弾かれることくらいは見越しているが、そんなことは関係ない。全力で、渾身の力を込めて蹴る。

「手癖どころか足癖も悪いんですね」

案の定、主砲を持つ手で払われる。まるで鉄塊で打ち払われたような衝撃。そんなこと、知ったことが。

払われた勢いを利用して、さらにもう一度蹴る。ナイフを止められている分、そこを支点にするのは簡単。次の狙いは腹。

「お前らのせいで！ 若葉達はこうなってるんだ！」

「おや、もしかして貴女、死んだ捨て駒の艦娘でしたか。なるほど、だからいろいろと情報が漏れたんですね。なるほどなるほど」

今度は主砲を投げ捨てて受け止められた。万力のような握力で脚を握られるが、千級の骨が私の怒りに呼応して強度を増してくれているため、折れるようなこともない。脚が先に行かなかったものの、拮抗しているようには思える。

「ここで終わらせてやる！ お前らは生きている価値がない！」

「なら、それが出来るくらいの力を得てから歯向かってください」

私がこうしていることで、大淀の動きは止まっている。そのため、遠距離組の恰好の的になった。

特に名指しで罵られた三日月は、容赦なく主砲を撃ち続けた。水鉄

砲でも殺せるほどに憎しみを込め、全て急所狙い。雷すら、顔面を狙っていた。

「ワンちゃん、邪魔ですよ」

脚を握られているため、その砲撃の盾にするように私を振り回した。艦装に水鉄砲が当たる感覚はするが、何も問題はない。これで足下がお留守になる。

「返してもらおうよー!」

曙が大淀の足下の槍を拾い上げ、そのまま即座に今まで禁じ手としていた突きを繰り出す。

いくら刃が潰されていても、突きは危険だということをやめていた。だが、今回は殺すつもりだ。突き刺すつもりでの一撃。

「死に損ないは、いい加減に」

初めてちゃんとした回避をされ、曙の渾身の突きは不発。代わりに一瞬だけ、大淀の力が緩んだ。曙に意識を寄せたおかげで、これを拾い上げた。

「いいから、死ね!」

両手でナイフを掴み、全身全霊の力を込めて押し込む。またもや左腕の痣が広がるような感覚がしたが知ったことではない。ここで大淀が殺せればいい。

今の私は殺意に支配されていた。大淀しか見えていない。これをここでグチャグチャにしなくては、この疼きは取れない。

大淀の指を押し広げ、指の股にまで到達し、それでも押し込み、腕を分断するように振り抜ける。そのまま下ろされれば顔面に刃を突き立てられる。

「はあ、この駄犬は本当に、実力差がわかっていない」

ナイフが砕かれた。今までは優しく支えられていただけだった。曙と違い、私はこれで本当に攻撃の手段を失ってしまふ。同時に掴まれていた脚を振り回されて、曙にぶつけられるように放り投げられてしまった。

「さあ、気を取り直していきましょう」

私の蹴りを受け止めるために放った主砲を拾い直した。第二ラウ

ンドと言わんばかりに、こちらを見据える。まだ一度も笑顔は崩れていない。

圧倒的な力を持つ大淀の前に、私達はなす術が無い。だが、まだ心は折れていない。

左腕の痣が、ジワリと拡がったことには、まだ気付いていない。

逆境からの

我ら第五三駆逐隊は大淀との戦闘中。全身全霊をかけた攻撃を繰り出し続けるも、全く歯が立たずにいた。ダメージらしいダメージも与えられず、一方的にやられるだけ。大淀は笑顔を一切崩さず、こちらを適当に受け流しつつも、殺意ある攻撃を何度も放ってきた。

今のところ、私、若葉の左腕と背中が軋む程度で、酷い怪我を負ったものはいない。だが、演習用の武器ではどうにもならないことは痛いほどわかっていた。

「そろそろ諦めたらどうです？　今ならまだ間に合いますよ。素直に頭を垂れて、こちらに屈してくれば悪いようにはしません。一度裏切った曙さんも、蘇生されたという事実がありますから、実験動物くらいで生かしてあげます。やりましたね、死なずに済みますよ」

相変わらず、ずっとおちよくってくる。足下にも及ばない私達は、いつでも殺せるゴミ程度にしか思っていないのだろう。

ナイフは握り潰され破壊されてしまい、今の私には四肢しか無い。殴りかかってもナイフ以上に簡単に払われてしまうだろう。

一矢報いることすら出来ない。そんな自分に一番腹が立った。腸が煮えくり返える程に腹が立つというのに、怒りの全てを力に転換してもまったく歯が立たない事実があまりにも気に入らなかった。

「何をふざけたことを言ってるんですか」

三日月による怒り任せの砲撃も、水鉄砲故に軽く払う程度で回避されてしまう。これにより、私から三日月へ視線が移動。

「私は貴女達のせいで人生が狂わされたんです」

「そうなんですか。それはご愁傷様です。その時に死んでいれば余計な苦しみを受けずに済んだというのに」

お返しと言わんばかりに砲撃しようとしたため、強引にその主砲を殴り付けた。射線さえズラしてしまえば当たることはない。三日月には危機回避能力もある。逸れた砲撃に当たるようなことはない。

だが、またもや砲撃の衝撃をまともに喰らうことになった。殴り付けたのは自然と前に出た左腕。またもやミシミシと音を立てたが、気

にすることなく次の攻撃に打って出る。

「ここら、砲撃中にちよつかいをかけるのは良くありませんよ」

その主砲により顔面を殴り付けられそうになったため、無理な体勢で回避。身体を逸らす羽目になったので、先程衝撃を受けて軋んだ背中が悲鳴を上げる。が、余りある怒りで痛みは感じない。そんなことを感じる暇があるなら、大淀に一撃入れるために身体を動かしたい。「意外と芸は仕込まれているようですね。匂いといい、身体能力といい、駆逐艦若葉としてのスペックを大きく超えているようです」

即座に後ろに回り込む。ナイフがあれば艦装の分解をしていたが、無い物ねだりだ。今の私の唯一の武器である拳で出来ることなんて大分限られている。分解は出来ずとも、折り曲げることくらいは出来るか。

「他の3人から、貴女は一線を画していますね。とても興味深いです」私が何かをする前に、振り向かれて目が合う。やはり笑顔は崩さず、攻撃ではなく私を捕まえようと手を伸ばしてきたため、バックステップで間合いを取る。

ダメージは受けているにしても、私の全身全霊の力で出した最高速に、いとも簡単に追い付かれた。この大淀はおそらく、神風の速度も視認出来ているということだろう。何もかもがおかしすぎる。本来を知らないが、軽巡洋艦大淀のスペックではないことはすぐに理解出来る。

「後ろを向いているからといって、攻撃が当たると思っているのなら大間違いですよ」

すぐさま私を無視して後ろを向き、槍を握り締めることにより、曙の渾身の突きを受け止めていた。そしてそのまま、柄を握り潰して真つ二つに。

刃側が大淀に行ってしまったため、警戒してすぐに間合いを取ろうとしたが、その時には曙の肩に大淀が投げた槍の刃が突き刺さっていた。

「いぎつ!?!」

「いくら鈍なまくらでも、使えるものが使えばそれくらい出来ます。貴女は所

詮、付け焼き刃の素人でしよう」

曙から柄を奪い取り、横つ腹を殴打。その衝撃で大きく吹っ飛ばされてしまった。私の位置からでも、曙へのダメージが酷いもののがわかる。武器を奪われた挙句、脇腹への殴打で咳き込んでいる。肩の傷は深く、片腕が上がらない程になっていた。

これで本格的になす術が無くなってしまった。近距離組の武器は失われ、遠距離組の攻撃は傷一つつけられない。魚雷は視界を奪われてしまうため、無闇矢鱈には扱えない。

もう八方塞がりだ。

「これで全員何も出来ないんじゃないですかね。では、1人ずつ終わらせましょうか。若葉さん、貴女を最後にしてあげます。こちらにつきこと、本格的に考えておいてください。貴女は優遇しますよ。その嗅覚は下呂提督には勿体ないです」

自分から進んで裏切らなければ、ここにいる仲間達を殺すぞと言っているのだ。私が裏切るとなってもどうせ殺すのなら関係ないだろう。下手をしたら、裏切った証拠を見せろなどと言いながら私の手で仲間を殺せと言うまであるだろう。

これだけしておいて、私が裏切ると思っているのか。怒りと憎しみがどんだん込み上がってくるだけだというのに。

「お前、本当にいい加減にしろよ」

「私は本心から貴女が欲しいんですよ。こんな死に損ないの肩を持つくらいなら、私達と共に過ごした方が伸び伸びと生きていきますよ。すぐにでも姫の座に立てるでしょうね。何なら私の補佐についてもraitたいくらいです。戦闘も出来ないつまらない毎日を送るよりはいいと思いますかね」

私の今までの何もかもを侮辱してきた。あの施設で生きていくことがあんなに楽しいのに、それを全て否定してきた。

「ふざけた事言わないで！」

それに即座に反論したのは雷。この中どころか、施設の最古参である雷には我慢ならない発言だった。

「私達はみんな、大怪我を負ったけど奇跡的に生きてて、あそこで楽し

く暮らしてるの！ 貴女達みたいなのがいないければ、ずっと楽しく生きていったのよ！ それをつまらないなんて、何で貴女がそんなこと決め付けるのよ！」

雷に捲し立てられても、大淀は表情を変えない。少し思案したようだが、思い付いたように雷に主砲を放った。

それを察知していた三日月が、雷を庇うように抱きかかえて回避したが、ギリギリのところまで衝撃を受けてしまい、艤装が嫌な音を立てたのがわかった。

「三日月!？」

「まだ大丈夫です。航行に支障はきたしていません」

それでも本調子では無くなっただろう。回避するにしても今までとは違う。正直、これ以上の戦闘は厳しいと考えた方がいい。

「まずは貴女にしましょうか雷さん。命が惜しいなら、若葉さんが早く寝返ることを祈ってくださいね」

「寝返るわけないだろ」

砲撃の衝撃を2度うけたというのに、左腕の痛みは一切感じない。怒りが限界を超え続けている。身体が熱い。頭が熱い。

とにかく、大淀を止めなくてはいけない。止めなければ仲間達が殺される。今の宣言を確実に遂行出来るだけの力を、大淀が持っていることは痛いほどわかっている。

だからといって、寝返るだなんて選択肢に入らない。一番あり得ない話だ。仲間を裏切つてまで得る生に、何の意味がある。

「殺させない！ 誰も！ 死ぬのはお前だ！」

「実力を伴ってからそういうことは言いたくない」

雷に狙いを定める主砲をどうにかするため、それこそ犬のように飛びつき照準をブレさせる。本当に撃つ瞬間だったらしく、腕に触れた瞬間に砲撃の衝撃に巻き込まれ、また身体が軋む。

だが身を挺したおかげで、雷に直撃コースだった砲撃は少しだけでも逸れてくれた。

「なす術が無くても戦おうとする気概は認めますよ。でも、貴女に力が無いせいで仲間達が死ぬんです。力が無い者は、ある者に頭を垂れ

るのがスジというものではありませんか？」

「頭を垂れる相手は若葉が選ぶ！ 少なくともお前には死んでも屈しない！」

「そうですか、残念です。なら心変わりするまでここで見ていればいいでしょう」

大淀の砲撃をどうにかするために近付きすぎた。衝撃でガタが来ていた身体では回避も出来ず、大淀に首を掴まれた。両手でそれを引き剥がそうとするが、万力のような握力の前に、私は何も出来ない。ジタバタもがくだけ。

それでも私を殺そうとしない辺り、ここまでやってもまだ遊んでいる。あれだけのことが出来るのだから、私がどれだけ踏ん張っても、呆気なく首の骨を折るくらい容易いだろう。

「離せ……！」

「もがかないてください。その脚がよろしくくないですね」

強烈な蹴りが私の脚に放たれた。今まで頑張ってくれた千級の骨が限界を超え、ミシリと嫌な音を立てる。折れてはいないがヒビは入った。激痛で悲鳴をあげそうになる。

「大人しくしてください。では宣言通り雷さんから」

今度は止められない。主砲が放たれ、雷に直撃……となるところを三日月がどうにか回避させた。

しかし、着弾地点が近すぎて、その衝撃で2人とも宙を舞った。本調子ではない三日月では、ギリギリ間に合わなかった。

「っ……！」

「まだ生きていますね。ちゃんとトドメは刺しますよ」

最悪な状況だ。私は捕まり、曙は肩の傷が酷く、雷と三日月も今の衝撃で酷いことになっている。たった一撃、しかもギリギリとはいえ回避しても満身創痍。

未だに神風型と第二二駆逐隊は精鋭の人形達に足止めを食らっており、抜け出すことが出来ていない。均衡はこちらに傾いているようだが、あちらが粘りに粘っているようだった。防衛戦から巻き返し始めているが、終わらせるにはまだ時間がかかりそう。

私達が増援に来ていなかったら、大淀自身が2人の人間が乗る大発動艇を破壊していただろう。そういう意味ではちやんとこの戦場には貢献できている。

だが、命と引き換えだなんて嫌だ。そんなのはおかしい。

「どうぞその目をよく開いて見ていてください。まずは雷さん、次は三日月さん、その次は曙さん。それが終わったらあっち、提督方ですね。未だに精銳の人形達と拮抗している駆逐艦達も、阿武隈さんも、まとめて殺します。貴女は本当に最後にします。それでも心が折れていなかったら、ちゃんと殺してあげますから待つていてください」

許せない。人の命を何だと思っている。大淀にそうさせるものは何だ。家村がそこまで偉い人間なのか。

許せない。何故私達がここまでされなくてはいけない。キツカケすらコイツらなのに、何故ここまで命を握られなくてはいけない。

許せない。こんなにも無力な自分が許せない。みんなに鍛えてもらっても、一切の太刀打ちが出来ない自分が許せない。

力が欲しい。みんなを守る力が。

力が欲しい。目の前の敵を殺す力が。

「それでは、おしまいです。終焉の時を、最後まで見続けてください。貴女が屈しないせいでみんな死にます。屈していたら仲間達くらいは生き残ったというのに、残念なことです。そもそもここに来なければ良かったんです。来ていなかったら提督方が死ぬだけで済んでいたかもしれないのに。全部、自分のせいで招いたことですよ」

ふざけるな。何故私のせいにされなくてはいけない。悪いのは全てコイツだろうが。責任転嫁も甚だしい。性根の捻じ曲がったこのクズを、この場で終わらせる。

もう自分でもわかった。左腕の痣が広がったことを。左腕を覆うくらいにまで拡がり、肩の継ぎ目をも乗り越えて、痣が顔にまでかかった。疼きも拡がり、左腕に力が入る。軋みも感じない。

「ふざけるな……！」

「おや？」

その左手で、私の首を掴む大淀の腕を握る。先程と違う。握り潰せ

る程の力が湧いてくる。

「ふザケるナー！」

鈍い音と共に、大淀の腕を砕く。握力が弱まり、拘束が解かれたため、大淀の身体を蹴り飛ばして間合いを取る。

脚も痛くない。しつかりと海面に足を付けて、自分の力でその場に立てる。身体の痛みが全て無くなったかのようにだった。まるで改装を受けたかのように、綺麗な身体になった。

「若葉さん、貴女は……」

「才前は……ここデ殺しテヤル。誰モ殺させナイ！ 死ヌのは才前ダ！」

身体が軽い。気持ちいいほどよく動く。スピードも今まで以上に出了た。武器もいらぬ。この拳があればどうとでもなる。

「深海に吞まれている……?!? すごい、すごいですよ若葉さん！ 私でもまだそこまで行けていないのに！」

満面の笑みで主砲をこちらに向けた。私よりも先に殺そうとしていた者はもう見えていないかのようにだった。今の淀は私しか見ていない。

「死ネエ！」

「お断りします！ 私は貴女を調べたい！ こんなに楽しいのは初めてですよ！」

ここで終わらせるためにも、絶対に逃がさない。この淀は生きていてはいけないクズだ。この場で、確実に殺す。その信念が、さらに私に力を与えてくれる。

今の私がどうなっているかなんてわからない。だが、みんなを守って淀を殺すことが出来ればそれでいい。仲間を侮辱し、命を粗末にし、のうのうと生きているコイツは、確実にここで終わらせてやる。

狂犬

大淀と対峙する中、私、若葉に異変が起きていた。身体中、至るところにあつた痛みが消え、今までにない力が湧いていた。ずっとあつた左腕の痣が大きく拡がったことも自覚出来ている。

それ以上に、大淀への殺意が膨れ上がっていた。仲間達を侮辱し、これまでの生き方を否定されて、この状況を引き起こしたのを私のせいにまでされた。許せない。絶対に許せない。

「駄犬が狂犬になりましたね！ 次は何を見せてくれるんですか！」
「煩イ！ 才前はここデ死ネ！」

まるで噛みつくように飛び付く。主砲を構えようとしたみたいだが、間に合わせない。先程握り潰したもう片方の腕のせいで、うまくバランスが取れていないように見える。狙いを定める前に懐に潜り込み、主砲を持つ腕を掴む。こちらも握り潰してやる。

「二度も同じ手は食いませんよ！」

まともに脇腹に蹴りを入れられた。先程は脚が軋むほどの強烈なダメージが入ったが、今は衝撃は大きいものの骨が軋むほどには思えない。この脇腹だって、リ級の肌だ。簡単にダメージが通るようなものではない。

しかし、衝撃のせいで掴んでいた腕をみすみす手放してしまった。主砲を持つ腕がフリーになられたら、面倒なことこの上ない。

「離れてもらいましょうか！」

「逃がサナイ！」

さらに前へ。胴を押し潰すかのように体当たりし、三日月の顔の傷を侮辱したことを後悔するように、顔面を殴り付けた。いつそ頭を潰してやりたいくらいだが、大淀も手練れ、簡単にはいかない。

「おお怖い怖い」

握り潰したはずの腕で、私の拳は受け止められていた。治っているわけではない。あちらも当然激痛があるはずだ。だが、お構いなしに腕を使っている。まるで痛みを感じていないようだった。

拳を受け止められたせいで、今度は私の懐がガラ空きに。すかさず

そこへ照準を合わせられるが、私もそれなりに演習をしてきている。撃たれる前に主砲を持つ腕を蹴り飛ばす。

「まるで獣ケダモノですね。もつと人らしく、艦娘らしく戦えませんか」

「煩イー！」

掴まれている腕を振り払い、腹に一撃。だがそれも避けられ、大きく間合いを取られてしまった。下がりがながらも既に主砲を私に向けて構えており、当たり前のように砲撃。

それも匂いでわかっている。紙一重と言わず、速さを活かして回避しつつ接近。砲撃の射線はわかっている。あまり考えなくても回避は出来る。

「本能のままに戦っているんですね。思考も深海に染まりつつあると。ふふっ、これは本当に楽しいですよ。殺すのが惜しくなってきました」

小憎たらしい笑顔はそのまま、砲撃をあらぬ方向に向けた。その先にいるのは、肩を自分の槍で刺されてしまった曙。その槍を引き抜き、満身創痍の中、そこに立ち上がっていた。

今撃たれたら回避出来ないだろう。立っているだけで精一杯のはずだ。足下が覚束ないような状況では何も出来まい。

「フザケルナー！」

即座に主砲を蹴り、照準を外す。誰も殺させない。ここで死ぬのは大淀だけだ。

「若葉ー、使いなさいー！」

曙がこちらに槍を放ってくれた。柄が折られているおかげで私の使いやすい長さになっていた。ありがたい。拳だけではどうにもならなかった。

それを受け取る瞬間が一番の隙になっていただろう。当然、大淀もそれを狙ってこちらに照準を合わせていた。

「若葉の邪魔はさせないわー！」

「若葉さん！早く受け取ってくださいー！」

それを邪魔したのは雷と三日月。水鉄砲でも攪乱にはなるし、照準を外すくらいの邪魔は出来る。おかげで大淀の砲撃は私に当たるこ

となく、槍の刃を手に入れることが出来た。

「仲間思いですね。若葉さんがこんな姿になっても、皆が貴女のために命を張ってくれましたよ」

しかし、それを見届けた後に私が動けないタイミングを狙って、雷と三日月に砲撃。照準を外させる動きが出来なかったため、直撃コースで放たれた。

三日月は危機回避能力があるが、かなり厳しい状態。結果、2人はその砲撃により発生した大きな爆発と水柱に2人が呑み込まれてしまった。

「まず2人。手間をかけさせてくれますね」

「雷！ 三日月！」

曙が声をかけても反応がない。匂いは爆発の際に立ち上った煙と火薬の匂いで判別出来ない。遠い位置なので嗅ぎ分けることも難しい。

そんな馬鹿な。こんなに呆気なく、2人を失うなんて嘘だ。まだ死んでない、死んでないはずだ。だが匂いはまだわからず、視認も出来ない、

「安心してください。貴女達も後を追うことになりますから」

間髪を容れずに曙に向けて砲撃。雷と三日月の状況が気になってしまったせいでこちらも間に合わず、曙も爆炎に呑み込まれてしまった。

やはり匂いは煙と火薬の匂いに邪魔されて判別出来なかった。今回は近いので多少は嗅ぎ分けることが出来るが、不安定な今ではまともな判断が出来ない。

「3人目。これでお仲間はいなくなりましたよ。改めまして、若葉さん、こちらにつきませんか？ 言った通り、優遇しますよ。私は貴女の力をとても評価しています」

大淀の言葉は私には届いていなかった。一気に3人も失い、頭の中がグチャグチャだった。ブチブチと、ダメな部分が壊されていくような嫌な感覚を感じた。

左腕の痣がさらに疼き、拡がっていく。私の負の感情に呼応してそ

の勢力を増しているのはわかっている。怒り、憎しみ、悲しみ、その全てが私の糧になってしまっている。

負の感情でも最も強い感情であろう、仲間の死を目の当たりにしてしまったことで、私の最後の防波堤、理性が焼き切れた。守るべきものを失い、振り返ることすら必要が無くなってしまったせいで、簡単に手放すことが出来てしまった。

「アアアアアアア！」

大きく咆え、曙の形見となる槍の刃を強く握り締めて、大淀に突っ込む。許しちやおけない。この世に存在することが罪だ。跡形も無くなるまで、グチャグチャにしてやらないと気が済まない。

「ついに思考も染まりましたか。行動が単調で助かります」

知ったことではない。単調だろうが何だろうが、攻撃を通すことに命を賭ける。私はどうなっても構わない。何もかも投げ捨てていい。大淀さえここで死んでくれれば、私は死んでも構わない。だから、本能のままに喰らい尽くす。

絶対に殺す。確実に殺す。泣き喚こうが命乞いしようが関係無い。殺して、殺して、殺し尽くす。死んだ後でも殺す。あらゆる手段で殺す。

「ユルサナイ！ オオヨドオ！」

「見窄らしさに拍車がかかっていますよ。でも大丈夫、私達はそれを受け入れます。せっかくの深海の力ですから、こちら側で好きなだけ使いましょう。ただし相手は私じゃありませんが」

そう言いながらも即座にこちらに主砲を向けてきた。死んだらそれまで、生きていたら有効活用しようとも言うのだろう。ただでさえ気に入らないものが、より気に入らなくなった。

砲撃されると同時は私は跳ぶ。本能的に、横への回避ではなく縦への回避を選択した。腕の姫だけじゃない。脚のチ級も私に力をくれている。あり得ないジャンプ力を発揮した。

この行動は大淀にも想定外だったらしく、動きがほんの少し止まった。集中砲火を受けるような行動だとは思いますが、それだけの隙があれば充分だ。

「ウアアアアッ！」

握り締めた槍の刃を大淀目掛けて投げ付けた。今の私は腕力が異常に強くなってくれておかげで、主砲の砲撃よりも速く威力のある一撃となる。こと殺すことに関しては異常な力を発揮出来るようだ。都合がいい。

「滅茶苦茶ですね、狂犬は！」

さすがにこの一撃は回避を選択したようだ。海面に突き刺さるように着水したが、下がられたことで傷一つ与えることが出来ない。

だが、今度は私そのものが落下。空中で姿勢は変えられないが、今の回避により私が狙われることはなかった。

着地と同時に大淀にまたもや飛びかかる。今回は主砲を構えられずとも構いなし。放たれても、掠める紙一重の回避で突っ込み、両手でその首を掴み上げ、締めた。このまま折ってやる。

「シネー・ココデシネー！ イマズグ、シネエー！」

力任せに締め上げる。普通の艦娘ならもう首が折れているくらいなのに、大淀はまだ死なない。苦しそうにもしておらず、首を締め上げる私の両腕を掴み、私がやったように握り潰そうとしてくる。そんな簡単にやられてたまるか。

「まったく、力任せの獣ケダモノには困ります、ね！」

腹に思い切り膝が入る。それでも手は首から外さない。ここで必ず殺す。死んでも殺す。何度も何度も蹴られるが、私は首だけは絶対に離さなかった。

喉を押し潰すように指を添え、呼吸出来ないように渾身の力で締め上げるが、大淀はまだピンピンしている。消耗すらしていない。これだけ何度も攻撃しているのに無傷だ。

「そろそろ、離れてもらえますか！」

膝だけではなく、両足まで使われて無理矢理引き剥がされた。その時に足下に浮かんでできていた槍の刃を拾い上げ、強引に大淀の脚を斬る。刃が潰されているとはいえ、当たればいいダメージになるはずなのだが、即回避された。

「ユルサナイ！ オマエダケハユルサナイ！」

「許していただかなくて結構。むしろ感謝して下さい。仲間を失ったことで、貴女はより強い力を手に入れているのではないですか。ですが……」

間合いを取り直されたため、再度突撃……しようとして、足下から崩れ落ちてしまった。膝に力が入らない。今までの無茶苦茶な攻撃の反動か、身体が重い。

「限界を超え続けてきた反動ですよ。もう立ち上がることも出来ないんじゃないですか？」

「クソツ、ウゴケツ、ウゴケヨォ！」

脚を叩いても動かない。何度も腹を蹴られたことで、口の中に鉄の味が広がる。思った以上に私の身体はボロボロだった。

そんなことは関係ない。大淀を殺すまでは、殺すまでは動かなくて。あんな奴が世の中にのさばっていることが許せない。ここで殺さなくてはもつと被害が出る。

「お疲れ様でした、若葉さん。貴女はとてもよく出来ました。今は眠ればいいでしょう。貴女は最高の姫になれるでしょう。いい素材を手に入れられそうです」

この期に及んで、まだそんなことを言っているのか。私を利用しようなんて、私が許さない。絶対にここで。

「よく頑張りました。あとは任せて」

突然聞こえる阿武隈の声。大淀を撃ち抜くように猛烈な連射。間合いを取られたことで、逆に私に害が無くなった。魚雷まで総動員して、大淀を殺すつもりの攻撃。

相手が艦娘であろうと関係ないと言わんばかりに、殺意ある攻撃を繰り返す。

「精鋭達は……あら、ついに抜けられましたか」

そんな攻撃でもヒョイヒョイ回避する大淀。私達、第五三駆逐隊に集中していた戦況分析を拡げたようだ。

下呂大将と来栖提督を食い止め続けていた精鋭の人形達は全員斬

り伏せられていた。時間はかかったが、拮抗を押し返し、妨害されていた進路を切り開いた。

「みんな無事だから安心して。ギリギリ間に合ってる」

「若葉さん！」

三日月の声がし、すぐにそちらを向く。元気とは言えないが、制服や髪がところどころ焦げている程度で大怪我はしていなかった。

「うちの子達が助けたよ。砲撃を斬るくらいなら余裕だからね、あの子達」

遠かった雷と三日月には、神速を誇る神風と流れるような動きの旗風が。近かったが怪我で動けなかった曙には、力強い太刀筋の松風がついていた。あの強烈な砲撃も、一太刀で斬り払っていた。

残った2人はどうと、阿武隈の砲撃と魚雷を避け続ける大淀に肉薄していた。鋭さが磨かれている朝風と、たおやかな佇まいの春風が砲撃の間を潜り抜け、魚雷すらも無視して斬撃を浴びせかけている。

「ふむ、では今回はこれくらいで終わりましたよ」

「逃すわけじゃないですよ」

「また会いましょうね。若葉さん、次は貴女を貰い受けます」

真下に砲撃を放ち、大きな水柱を立たせる。それが晴れた時には、大淀は戦場から消えていた。集中攻撃を受けているというのに、最後まで大淀は笑顔のままだった。

私という素材を見つけたことが心底嬉しそうだった。最後までいけすかない奴だった。

「若葉さん！ 若葉さん！」

三日月に駆け寄せられ、頭の中が冷えていく。負の感情に支配され続けていた思考が、少しスッキリしてきた。だが、大淀を逃がしたことが気に入らない。またアイツがのうのうと生き続け、暗躍するかと思うと腸が煮えくり返るようだった。

「だ、大丈夫ですか!? 痣が！」

「クソ……クソツ、クソツ！」

三日月に肩を貸してもらって立ち上がるも、自分の脚で身体を支えることも出来ない。それほどまでにダメージが蓄積されており、限界

を超え過ぎていたようだった。

腹の底から込み上げてくるものを感じた後、思い切り血反吐を吐いた。身体の中もボロボロなようだ。

「一時、来栖の鎮守府に戻りましょう。入渠後にまた向かった方がいいでしょうから」

「ウツス。全員撤退だア！ 逃げ逃げエ！」

本当に限界だったようで、みんなが生きていることが再確認出来たところで、私の意識は闇に落ちていった。

結局、大淀は逃がしてしまい、大敗北を喫した。生きているだけ儲け物とは考えられないほどに、心を抉られることになった。

本来の居場所へ

目を覚ました時、私、若葉はドツクの中にいた。敵の大淀との戦闘で血反吐を吐くほどの限界を超えた力を発揮し続けてしまったせいで、身体がボロボロになっていたからだ。戦闘終了と同時に気を失い、今は来栖鎮守府で入渠していた。

私が目を覚ましたことで、ドツクが開く。改装を受けた時と同じように、全裸に剥かれていた。そのせいで、自分の身体がおかしくなっていることがすぐにわかる。少し目を背けてしまった。

「お疲れ様でした。入渠完了です」

入渠も管理している明石の声。私の身体は回復し、行動に支障が無いほどにはなっている。痛みや疲れは一切なく、施設を出た直後と同じくらいだった。だが、明石の表情は少し暗い。私の戦場での変化は、入渠によって治療出来ないほどだったようだ。

自分でもわかっている。あれは私の本質に影響のある変化だ。長くこの深海の四肢と付き合ってきて、改装も受け、より一層馴染み、今はほぼほぼ同調したようなもの。

「……スガタミハアルカ」

喉もそのまま。初めて会話出来る深海棲艦にあつたような声に自分になつているというのは、正直なところ辛い。自分の存在がブレる。これはシロに治してもらおう。おそろく出来る。

「言うかなと思って、用意しておきました」

私が入っているドツクの隣に、全身を見ることが出来る姿見が置かれていた。ドツクから出ると、その前に立つ。

左腕はまるで炎が巻き付いたかのように痣が拡がり、指先の一部まで黒ずんでいた。今までは肘にまでも至らなかった痣は、今では肘どころか縫合痕も乗り越え、先端は首にすら巻き付き頬まで伸びている。色が変化していた肩はさらに侵食され、左の胸まで。こちらも頬にかかるほどまで拡がっていた。

もう笑うしかなかった。あらゆる負の感情に呑み込まれ、今の私が在る。力は得たものの、これは得てはいけない力だ。

「制服は用意してあるので」

「アリガトウ。スグニキル」

用意された制服を着て、改めて姿見へ。服を着るだけで駆逐艦若葉に戻った感じはするが、首から頬にかけての痣が、私が別のモノであることを如実に表していた。

他の傷は隠れていても、これだけは隠しようが無い。三日月は長い間、そしてこれからもずっと、これに耐えているのか。

「キニシテイテモシカタナイ。アリガトウ、アカシ」

「いえいえ。早く仲間の前に行ってあげてくださいね。みんな、ずっと待ってたんですから」

私は大分長いこと入渠していたらしく、あの戦闘が終わり鎮守府に到着してから、もう深夜に近い時間になってしまっていた。施設への帰投は明日。こんな時間まで付き合ってもらった明石に、さらに感謝する。

こんな丸見えの異形感でも、私は折れない。同じ苦しみを持つものは仲間達にもいるし、これがあるから私は今も生きていられるのだ。命あつての物種ともいう。この程度の変化で、折れてたまるものか。

私が目を覚ますのをここで待っていてくれたようだが、時間も時間なため、部屋に戻っているらしい。緊急で鎮守府に匿ってもらっているようなもののため、五三駆の面々は同じ部屋にいるそうだと。

曙はガツツリ入渠したようだが、私よりは早く終わっていた。雷と三日月は恒例の薬湯でどうにかなったらしい。やはり私が一番重症だったようだ。

「若葉さんー」

部屋は入るや否や、三日月が抱きついてきた。私のことを一番心配してくれていたようで、ギリギリまでドックの隣に待機していたらしい。部屋に戻るように言われたようだが、言われなければずっと隣にいたようだ。

「スマナイ、シンパイカケタ」

「えっ……若葉さん、声が……」

「ココマデシンシヨクサレタラシイ」

首に巻き付くような痣を見せる。痣が喉にまで伸びてしまったが故の代償。

ついでだと思いい、上を脱いで左腕の全容も見せた。みんな私の持っていた痣がどういいうものかは知っている。割と長い付き合い、風呂も一緒に入った仲だ。だが、その時とは全く違う拡がった痣。それを見て3人が絶句していた。

「何よ……それ……」

「イロイロカサナツタケツカガコレナンダロウ。ナニモモンダイハナイ」

勿論これは建前もある。これ以上侵食されたら私がどうなるかわからない。それでも、私は生きているのだ。気にするくらいなら前向きに歩く。

「……若葉さん、大丈夫です。私の眼では……おかしなものは感じません。若葉さんは若葉さんです」

「アリガトウ、ミカツキ。ソレガワカッタダケデモ、ジユウブンダ」

深海の何かを感じる事が出来る三日月の眼でも、私には異常が無いと保証してくれた。今は鳴りを潜めているだけかもしれないが、それで充分だ。

「声はシロが治してくれるわよね多分。でも痣がそこまで拡がっちゃったら隠すのも難しいかしら。マフラーでも巻いてみる？」

「アア、ワルクナイナ」

首の痣くらいならそれで隠せる。隠す必要は無いが、そういうトリードマーク的なものがあるかもしれないかなと思える。江風が纏っていた、口元を隠せるマントというのもアリか。

「……はあ、アンタ達呑気なモンね。これ結構ヤバい変化じゃない」

「ワカバハダイジヨウブダゾ」

「アンタの心配は1mmもしてないわよ。それ、先生が見たらどういう反応するかわかってる？」

部屋が静まり返った。ただでさえ改装の際に侵食が拡がったことで謝られているのに、今回は比にならないほどの変化だ。確実に自分

のせいだと言うだろう。

何度も飛鳥医師には言っているが、私は気にしていない。こうなつてしまったのは成り行きだ。命が助かっているのだから、私はこんな身体になつたとしても飛鳥医師には感謝しているし、責める気など全く無い。

「来栖司令官と大將が先生に連絡したらしいわ。その時に若葉のことも伝えるって言ってたけど……」

「話に聞くだけと現物見るのじゃダメージ違うでしょうが。卒倒しかねないわ」

話すうちに違う意味で不安になってきてしまった。施設に戻ることに抵抗を覚えるほどに。

翌早朝、すぐに施設へと帰投。本来の目的を果たすため、来栖提督と下呂大將も便乗。さらには私が狙われているということも鑑みて、護衛部隊は増やされ鳳翔や第二四駆逐隊まで総動員。私自身も航行ではなく大発動艇に乘せられた状態で護送されることとなった。完全にVIP待遇。

大発動艇を中心にした軽空母1人、軽巡洋艦1人、そして駆逐艦総勢15人もの大部隊の移動はそれだけでも圧巻。そのど真ん中にあるというのが少々気恥ずかしい。

「すげえ護衛の数だねえ。こんな大部隊見たこと無えや」

「ベツニココマデシナクテモ」

「大切にされてんだよね。かあーっ、いいねえ！」

江風と涼風に冷やかされる。それだけ私が重要な位置におり、いつでも狙われかねないという状況である。この護送ですら襲撃されかねない。

とはいえ、今回の護送は、大淀の連れてきた精鋭の人形をしつかり撃退した第一水雷戦隊もいるため、少しは安心出来ている。過信してはいけないが。

「若葉には飛鳥の診察を受けてもらう必要があります。それに、あちらの方が心が落ち着くでしょう。君が施設にいる間に、我々が大淀の

本拠地を見つけ出し、叩きます」

詳細は施設に到着してから話すことになるが、私は施設で診察と安静。その間に下呂大将と来栖提督が解決をしていく。

その間も施設が狙われる可能性は非常に高い。私がそこにいるというだけでなく、あの施設にいる者全員が、家村の悪事の生き証人だ。毎日襲撃を受けてもおかしくないような状況である。

しばらく進み、今回は襲撃もなく施設に到着。たった1日離れただけでも恋しく感じるものである。こんな身体になってしまったからか、みんなに会いたくて仕方なかった。

工廠の匂いも久しぶりに嗅いだように思えてしまう。まるでホームシックにかかっていたかのようである。ここにいるだけで落ち着くようだ。その工場には、私達の帰りを待っていた施設の全員がいた。車椅子の姉もいるし、既にほぼ完治したりコリスも工廠の隅に。

「先生、お待ちしました」

「ご苦労様。飛鳥、寝ていないんですか？」

「……はい。正直一睡も出来ませんでした。僕のせいで若葉がより悪い方向に向かったと聞いてしまっただけ」

案の定、飛鳥医師は私のことを気に病んでいたらしい。曙の予想通りではないか。

大発動艇から降りると、さらに目を見開いてしまった。いつも通りの制服姿でも、どうしても痣は丸わかり。過剰すぎる変化に、飛鳥医師は酷い顔をしていた。

「若葉……すまない、本当にすまない……。僕のせいだ。僕がまともに治療が出来なかったばかりに……」

「キニシナクテイイ。ワカバハイキテイルンダ。カンシャコソスレ、ウラムコトナドヒトツモナイ」

声を聞き、さらに苦しそうな顔に。事前に教えられていたのは、痣が拡がったことだけ。他の変化を目の当たりにし、より深く気を病んでしまった。

私が表に出なければこんな思いをさせずに済んだとは思う。だが、姿を見せないならその分同じように心配させて本末転倒。ならば、私

がこの姿になってしまったことを気に病んでいないことを伝え続けるしかない。

「……ワカバ……声……治すよ」

「アア、タノム」

声を聞いたことでシロが私の声を治してくれる。喉を軽く撫で、軽く弄られる。押したり引いたりされ、最終的には何かが切り替わったかのような感覚がした。

「ソツ、ん、あー、よし。この方が落ち着くな」

「……私達もだよ」

今までと違うというのは、本当にみんなに心配かけてしまったようだ。声が元に戻ったことで、私は駆逐艦若葉としての自分を少し取り戻せたような気分だ。

「飛鳥、話はまた今度にしましょうか」

「いえ、そこまで時間は」

「本調子でない者に話しても意味は無いでしょう。まずは君が休みなさい。寝不足なら寝る。具合が悪いなら安静にする。医者ならわかるでしょう」

下呂大将に言われては引き下がらざるを得ない。飛鳥医師も素直に今日は休むことにしたようだ。下呂大将の推理を聞くのはまた後日ということになり、今は護衛を置いて帰投すること。護衛は鳳翔と第二四駆逐隊となった。また鳳翔が滞在するということ、鍛えてもらうことも出来そうだ。

「では、第五三駆逐隊は送り届けました。事件の詳細はまた後日。私が陸路から来ます。来栖には先に話しておきますので」

「はい……ご迷惑おかけします」

「そう思うのなら、早く治すことですね。若葉の診察も必要ですが、君もすぐに寝るように」

用は済んだと下呂大将達はすぐに帰投。長居しては飛鳥医師の気も休まらないだろうという配慮である。

残された鳳翔と第二四駆逐隊は、雷の案内の下、少しの間使ってもらう部屋へ向かった。鳳翔も修復された施設のことは知らず、二四駆

の4人に至ってはこういう外勤は初めてとのこと。江風と涼風は騒がしく、山風はビクビクしながら、海風はそれを微笑ましく見守りながら、工場から奥に入っただけだった。

「……飛鳥医師、何度も言う。若葉は気にしていない。感謝している」
「だがな……これはあまりに想定外だ。事前に聞いていたからこれで済んでいるが……」

「頼む、何も気にしないでくれ。若葉が辛くなる」

改めて、飛鳥医師をお願いする。私の身体は確かにおかしくなっているが、それは誰のせいでもない。強いて言うなら誰のせいでもある。

この治療をして飛鳥医師のせいだと言うのなら、負の感情を持ちすぎた私のせいでもあるし、元はと言えばそうさせたあちらの大淀のせいでもある。それに、怪我をしたことが根本的に問題なのだから、一番悪いのは家村だ。いいことが重なった結果、悪いことも重なったというだけ。

「若葉は大丈夫だ。それに、当然これも治してくれるんだろう？」

「当たり前だ。僕が招いたことだから。この施設の者全員を元の身体に戻すのが、今の僕の使命だ」

「無茶だけはしないでくれ。倒れるような真似をされても困るのは若葉達だ」

お互いのためにももう少し話した方がいいかと思っただが、飛鳥医師には身体を休めてもらわなくてはいけない。今は何もかも後回ししよう。

私も今は本来の居場所で腰を落ち着けたい。少しの間、戦いを忘れて自由気ままに生きたいところだ。

「若葉はここで楽しく生きたい。昔も今もそれだけは変わらない」

「……なら、僕も落ち込んでられないな」

「ああ、だから、今まで通りで頼む」

握手を求める。あえて痣で染められた左手を差し出した。それを苦もなく握ってもらえたことで、この件は一回無しに。

私の存在が飛鳥医師の心にダメージを与え続けるかもしれないが、

気に病まれることで私も気に病む。私は楽しく生きたいのだ。
その生活を壊そうとしている家村と大淀は、絶対に許さない。

黒い痣の若葉

施設に戻ってることが出来た私、若葉。まずは飛鳥医師の診察を受けて、自分の身体がどうなってしまったかを改めて知ることになる。私の変化に気を病んで寝不足な飛鳥医師ではあったが、これだけはやっておかないと眠れそうに無いと強行された。施設の者全員からも気になると言われ、強行せざるを得なかったというのが正しいか。

結局、午前中を使つて診察を行なうことになった。施設で出来ることなど高が知れているが、やらないよりはマシ。本当なら人間ドックをやりたいくらいだとは飛鳥医師の談。

「……深海の要素が拡張されているな。見た目の通りだ」

今までは移植した腕からだけだったものが、肩や首からも検出されていると。しっかり見た目通りの状態にはなっていた。血液検査の結果も以前とほぼ変わらないという。

だが、左胸というのが大きかった。心臓である。

今の私は曙と同じ深海棲艦の心臓を持っているような状態になってしまっているらしい。そのものと侵食では勝手が十分違うが、少なくとも血液の循環に大きく影響を与えているのは確か。

あの戦闘で、艦娘らしからぬ異常な力が発揮できたのもおそらくコレが原因では無いかと言われた。代わりに、心臓以外は艦娘のままなので負荷に耐えられずに身体が動かなくなったのだろうかとも。

これは人形のリミッター解除と同じではないのか。下手をしたら命に関わる出力上昇。身体の一部が深海に侵食されていたおかげで死なずに済んだようなものだ。

これを艦娘の身体でやらせているから、人形は自沈してしまう。嫌なところで敵の手段がわかってしまった。

「喉の方はシロが弄ってくれたおかげでどうにかなったんだな」

「ああ、シロがいなかったらあのままだった」

「安心した。あのままだったら僕は多分立ち直れない」

冗談で言っているようだが、本当に潰れてしまう可能性があったた

め笑えない。飛鳥医師は思ったより繊細なのかもしれない。

「見た感じ、増殖しようとしているわけでもない。おそらく何かしらのキツカケがないと、この深海の要素は侵食しないのだろう」

「……思い当たる節がありすぎて困る」

「過剰過ぎる負の感情だろうな。とはいえ、痣が拡がるなんて聞いたことがない。この痣自体に感情があるように思えてしまう」

怖いことを言わないでもらいたい。死んだはずの駆逐棲姫が痣となつて残っているとでもいうのか。

艦娘と深海棲艦には共通点が多いというのは実証済みであり、飛鳥医師のこれまでの研究で、体組織の移植が可能であることは、この身をもつてわかっている。

だが、艦娘には無い『姫級』という在り方に関しては謎が多すぎた。この施設にある深海のパーツも、ほぼ全てがイロハ級のもの。私の腕や三日月の眼に使われたものがレア過ぎるだけ。そのせいで、私に起きていることはわからないことが多すぎる。飛鳥医師も頭を抱えるほど。

「姫のサンプルが無すぎる。だからと言って、ここにいる姫達から貰うのは気が引ける。すまないが、そこは地道に調査させてほしい」

「ああ、無理は言わない。それに、若葉はこれを存外気に入っている」

痣に包まれた左腕をしげしげと見つめる。生きている証。助けてもらった証だ。これに嫌悪感は抱かない。

とはいえ、これにさらに侵食されたらまずいことになる可能性はそれなりにある。例えばこの痣が、頬を越えて頭まで辿り着いてしまった場合、私はどうなってしまうのか。

それは今は考えないことにした。一度起こったことを何度も繰り返すわけにはいかない。今はこの痣と楽しく付き合っていけるように努力しよう。

飛鳥医師は仕事を終えたということとで眠ることにした。私の身体に今のところ不調が見えないことが確認出来たため、安心して休むことが出来ると言っていた。今はゆっくりと休んでもらいたい。

「若葉さん、どうでしたか」

診察を終えて工廠へ向かおうと思った矢先、医務室の前で三日月と車椅子の姉に出会った。私の診察が終わるのを待っていたかのようなタイミング。

三日月の持つ艦娘への嫌悪感は、姿を見せないほどに薄れていた。相変わらずの無表情ではあるが、まだ顔を合わせて数日も経たない姉相手にも嫌な顔せずについている。最初を知っている私としては、それだけでも嬉しいものである。

「今はこれ以上になることは無いそうだ」

あくまでも診察。健康診断のようなものだ。私の身体が悪い方向に向かつていないことがわかっただけでも良し。

それを聞いて三日月は安心したようだった。姉も私の左手を取り、指先にまで伸びた痣を撫で、何か納得したようにうんうんと頷く。

「もののけが深く馴染んでおる。じゃが、お主を取って食おうとはしておらん。今は問題あるまいて」

「安心した。三日月もおかしなものは見えないと言ってくれているからな」

「うむ、それでよい」

本来見えないものが見える2人からのお墨付きはとても心強い。そこに科学的に保証してくれている飛鳥医師の診察も加わったため、安心して生活が出来る。

「姉さんはどうなんだ」

「まだ痛みはあるが、ほぼ治っておるな」

「それならあと少しの辛抱だな」

胸の傷から痛みが無くなるまで1週間前後と言われていたが、姉は少し早かったらしい。もう少しで終わるのならこちらも一安心だ。

「リコももう動けるようになっておる」

「リコ？ ああ、リコリスか。ここに戻ってきたときに工廠の隅にいたな」

「医者がそのまま呼ぶのもどうかと言うものでな、簡単にリコとした。何でも、ここの深海の者達はここで名付けられておるそうではない

か。リコリスだけ除け者は良くなかろうて」

リコリス棲姫改め、リコ。深海棲艦の回復力で配下であったル級の脚は完全に馴染み、痛みもなく歩けるほどにまで回復したリコは、今は既に自分の脚で施設内を回っているそうだ。部屋も与えられるとのこと。

艦装の方も現在修理中らしく、シロクロの艦装に使えないパーツを見繕っては、摩耶とセスが協力して組み上げているらしい。大半が残ったまま流れ着いていたらしく、早い段階で完成するそうだ。

「ひとまずはこれくらいじゃの。こっちは何事も無かったぞ」
「それはよかった。油断は禁物だけだな」

姉から説明を受け、私達が出て行っている内に施設では何も無かったことがよくわかった。安心安全とは言えなくなってしまったこの場所だが、心落ち着ける場所だ。知らぬ内に破壊されているようなことがなくて本当に良かった。

「若葉さん……やっぱり目立ちますね……」

姉が左手を撫でるように、三日月が頬を撫でてくる。

顔に傷がある三日月ほどではないが、頬に伸びた痣は大分目立つ。三日月と同じように、これは少し隠せない。喉元だけは隠すため、雷が提案してくれたマフラーは手配することにした。隠せる部分は隠した方がいい。

「ああ。首はマフラーで隠すことにした」

「そうですね、それがいいと思います。でも顔は……」

「口元まで隠せば見えなくはなるが、苦しいだろうな。だから、この痣くらいは見せてもいいだろう」

これくらいの痣、三日月の傷に比べれば何てことは無い。それに、腕よりは目立つが今まで付き合ってきた痣だ。苦では無い。

「若葉達の知り合いに、この程度で後ろ指を指すような連中はいないからな。安心して曝け出せる」

「……そうですね。もし何か言うような輩がいたら、私も怒りますから」

「ああ、若葉もお前の分を受け持とう」

お互い、顔に影響が出てしまった者同士、仲間意識は一層強くなった。

元々私だけは信用してくれた三日月だ。寝るときも一緒の部屋で、戦闘でコンビも組むようになり、一緒に生活することも多い。この施設では一番仲がいい相手と言える。

「2人は仲がいいんじゃないやな。三日月よ、うちの妹をよろしく頼みますぞ」

「はい、私がストップパーになります。若葉さんがこれ以上侵食されることがないように」

「心強いとう。妹が増えたかのようじゃな」

私も頼らせてもらおう。代わりに、私を頼ってもらいたい。施設の仲間として、同じ境遇を持つ者として、お互いを支え合いたい。

護衛艦隊として鳳翔と第二四駆逐隊は常に施設近海を警戒してくれていた。基本的には何もなく、暇な時間を過ごすことになるのだが、それでも真剣に取り組んでくれているのでありがたい。

労いではないが、海上でも食べられるお菓子を雷が作って差し入れをしている。今回はクッキー。私もそれに付き合い、交流を深めた。私の身体に異変があっても、今まで通りに付き合ってくれるみんなには感謝してもしきれない。

「ンまあ〜い！ 雷、これ美味しいよ！」

「こいつぁいいねえ。美味しい美味い」

「気に入ってもらえてよかったわ！」

お菓子に舌鼓を打つ江風と涼風。なんでも、第二二駆逐隊が遠征のたびに持ってくるお菓子が羨ましかったらしい。ついにそれを食べることが出来て、喜びに打ち震えている。

他の者達もそれを摘んでは感嘆の声をあげる。施設内トップの腕前の雷は、鳳翔が太鼓判を押すほどだ。

「若葉さん、身体はどうですか」

「前と変わらない。痣が拡がっただけだ」

鳳翔が心配そうに聞いてきたため、問題ないことを見せる。痣を

しつかり見るのは今が初めてだろう。お菓子を食べる手が止まり、みんながみんなそれに釘付けになってしまった。

特に山風は、引つ込み思案な割にはマジマジと見ていた。海風の陰に隠れながらだが。

「もし何かがあつた場合、我々は貴女の力になります。ですが、逃げることも立派な戦術です。それだけは覚えておいてください」

「……ああ、みんなに迷惑をかけるくらいなら、戦わない方がいいだろう」

また大淀と戦うようなことがあれば、怒りに吞まれ、さらに痣を拡げる結果になるかもしれない。それだけは避けなくてはいけない。

万が一、仲間に牙を剥くようなことをしてしまつたら、今以上に立ち直れないだろう。施設の数少ない仲間、外部の理解者を裏切る行為は、想像するだけでも辛い。

「理解出来ているのならいいです。ですが、頭に血が上つてしまつては、まともな判断も出来なくなるでしょう。なので、精神的な訓練もした方がいいかもしれませんね」

あの大淀はやたら煽つてきた。あちら側に洗脳されていた時の夕雲もそうだった。心を乱して本来の力が発揮出来ないようにされているのだろう。舌戦も立派な戦術だ。

今の私は特に、その煽りでのダメージが大きい状態。心を乱さず、常に落ち着いて、逆に煽れるくらいの気概で戦えればいい。

思えば鳳翔も、夕雲相手に煽り合いを繰り返していた。淑やかなイメージが強い鳳翔も、戦場では強か。心を落ち着けるために、また、逆に相手を崩すために、煽りに対して煽り返すようなことをしているのか。

「忠告、感謝する」

「肝に銘じておいてくれればそれでいいです。最悪な事態を避けるためには、まず貴女の心構えが必要不可欠ですからね」

「ああ。鳳翔は若葉の師匠だ。また身体の方も鍛えてもらいたい」

「喜んで。曙さんと一緒にまた鍛えてあげましょう」

ありがたい話だ。施設を守るための力はいくらあつたつて困らな

い。護衛艦隊無しでも守れるくらいにはなりたいたいものだ。

「出来るならまた演習もしたい。若葉達には実戦訓練が足りない」

「そうですね。護衛としてここに来ています。余裕があれば演習もしましょう。この子達にもまだまだ伸び代がありますから」

「お手柔らかに」

苦笑する海風。あちらでも相当鍛えられているのだろう。以前演習をやらせてもらった時より苦戦しそうだ。五分五分くらいにまでは持っていったが、今もそうとは限らない。

「ご馳走様でした。雷さん、美味しかったですよ」

「守ってもらってるんだもの、これくらいはするわ!」

「ンなら毎日こんなお菓子が食えるのか? そいつぁいいねえ!」

これで士気が上がるのならいい。雷も褒められ、俄然やる気が出ている。いい交友関係になっていると思う。

「……若葉」

最後に山風が私へ。こうやって話しながらも、ジツと私の痣を見続けていたのはわかっていいる。珍しいものだと思うので、そういう視線を受けるのは仕方ない。

「それ……痛くないの?」

「ああ、痛みはない。心配してくれてありがとう」

「……別に」

たったこれだけの会話だが、二四駆のメンバーにとっては珍しいものだったらしく、海風に至っては満面の笑みである。これでも心を開いている方なのだから。

「それでは、警戒に戻りましょう。若葉さん、くれぐれも」

「気をつける。精神鍛錬の件も考えておく」

「よろしい」

心強い護衛艦隊だ。少しの間は世話になろう。

またいつもの日常に戻ろうとしているが、脅威と隣り合わせの環境なのは変わらない。早く本当に心落ち着ける日々を送りたいものである。

心を鍛えて

施設に戻ってきた翌日からは、平常運転に戻った。飛鳥医師も安心からか死んだように眠り、翌朝からは絶好調。私、若葉も、久々の早朝ランニングが出来て、今だけは日常に戻ってきたのだと実感する。

左腕の痣はあれ以来疼くこともなく、当然拡がることもない。何かあるかわからないというのも確かなので、毎日簡単にでも診察することになってる。

「医学的に見て問題無し」

「深海の眼で確認しました。問題ありません」

「もののけは落ち着いておるぞ。安心せい」

昨日から私に問題ないことを確認してくれている3人が、改めて問題無しと太鼓判を押してくれた。今は負の感情に吞まれるようなこともない。心配は要らないと判断されている。

今回はそこに新たな確認者が加わる。3人とはまた違った観点で確認が出来るシロである。姉に近い視点ではあるものの、靈感と深海の感覚ではまるで違う。

「……ワカバ、腕を」

「ああ、頼む」

シロが私の腕に触れる。雷の正体に触れるだけで気付いたり、喉を治してくれたりと、深海棲艦絡みのことでは八面六臂の活躍を見せるシロの太鼓判なら、さらに安心出来る。

痣をなぞるように撫でられるのは少しくすぐったいが、詳しく、事細かく調査してくれているのだから我慢。

「……うん……大丈夫。今は拡がらないよ」

「そうか、よかった」

「イカズチみたい……馴染みすぎてるってことは無いけど……大分深いね……。同調した……?」

同調したかはわからないが、あの時の私は深海棲艦と同じような感情を持っていたかもしれない。怒りと憎しみに支配され、目の前の敵を殺すことしか考えられなかった。とにかくこの手で消す力が欲し

いと思った。その結果がコレだ。

まるで、腕が力をくれたような現象。これまでも、戦闘の時に力を貸してくれたような現象は度々起きている。千級の骨のおかげで瞬発力が、駆逐棲姫の腕のおかげで腕力が向上したのは実感として持っている。

「かもしれない。姉さんも深く馴染んでいると言っている」

「……気をつけてね。ワカバ……思ったより喧嘩っ早いし」

「そんなつもりは無いんだが」

この中では一番前で戦うという意味ならそうかもしれないが、私だってある程度考えて戦っている。先陣を切るだけだ。

「若葉、これからは僕ら4人が毎日確認する」

「頼んだ。若葉も安心が欲しい」

4人が大丈夫と言ってくれば、私も少しは落ち着ける。今は買っても欲しいものなのだから、毎日と言わず毎時間やってもらいたいものである。

今日から鳳翔にも言われた通り精神鍛錬の方を始めていこうと思う。だが、何をやっていいものかさっぱりわからない。心を落ち着けて、物事に動じぬようにすればいいのか。ならば座禅とかそういうものがいいのか。

こういうときは素直に鳳翔に聞くべきだろう。勧めてくれた張本人だし、そういうことも得意そうに見える。

「若葉、アンタ暇よね。ちよつとツラ貸しなさいよ」

「もう少し言い方があるだろう」

工廠で外に出る準備をしていると、曙に声をかけられた。釣竿を持ち、いつもの制服の上にベストまで着ていた。割と本格志向のようだ。

この格好で誘ってきたということは、私に釣りをしろということなのだろうか。まあたまにはそういうことをしてもいいかもしれない。私は趣味らしい趣味も無いし。艀装弄りは趣味に入るだろうか。

「釣りに付き合えということか？」

「そうよ。ほら、ブレザー脱いでベスト着て」

「強制なのか」

私の返答は関係なかったらしい。ブレザーを無理矢理脱がされ、曙と同じベストを着せられ、釣竿を渡される。

「若葉は釣りなんて初めてだぞ」

「いいのよ。さっさとついてきなさい」

私が準備出来たのを見て、すぐに海に出てしまった。誘っておいて私を置いていくとは何事か。

溜息を一つ吐き、私は先に行く曙を追いかけた。

同じ沖でも、護衛艦隊が警戒をしている方とは全く別の方に向かう。もう施設も見えないというところまで出たところで釣りを始める。なんでも、シロクロからここはいいポイントだと聞いているらしい。

針に餌を付けるのも初めてのことで、曙に教えてもらい、四苦八苦しながらようやく釣りの様相に辿り着いた。背中合わせで立ち、真逆の方向に釣り糸を垂らす。海の真ん中に立って釣りをするなんて、艦娘ならではの遊びだ。

「袖、邪魔でしょ。捲った方がいいわよ」

「ああ」

片手に釣竿なので少しやりづらいが、うまいこと袖を折り、半袖くらいに。曙は元から半袖だからそんな手間がいらぬのは少し羨ましい。

袖を捲ると、嫌でも左腕の大きな痣が目立つようになった。気にしてはいないものの、この異形感はどうしても拭えず、釣りに集中は出来なくなる。

「若葉」

「なんだ」

「海面が揺れてる」

私の集中が途切れていることが海面に出てしまっているようだ。私を中心に小さい波が起きていた。別に震えているわけではないのだが、心の揺れが表れているようだった。

対する曙は姿勢も良く、ピンと背筋を伸ばしていた。私と違って足下に波一つ立っていない。こちらに話しかけてきているのにもかかわらず、集中を乱していないということだ。

「雑念を払うの。慣れないうちは目でも瞑ったら？」

簡単に言ってくるが、雑念が簡単に払えれば苦労はしない。ただできえ、今の私は精神鍛錬が必要な身なのだから。

と、ここまで考えて、曙の真意がわかった。釣りという行為を通して、精神鍛錬に付き合ってくれているのか。曙は趣味の一環かもしれないが、それのおかげで集中力を鍛えられる。

私にそういうものが必要なのは施設の全員が知っていること。当然曙もだ。だから誘ってくれたのか。

「集中出来れば、針の先をつつく魚の感覚もわかるようになるわよ」

何かを感じたようで竿を上げると、餌の無くなった針。餌だけ取られたようだった。試しに私も上げてみると、こちらも同じように針だけ。知らぬ間に餌を食われていたらしい。

曙は気付いたから上げたが、私はとりあえず上げただけ。意味合いがまるで違う。

「心を落ち着けて、集中しないとダメということだな」

「ええ。私も雑念だらけね。餌だけ取られるなんて」

その割にはずつと波を立たせていないようである。私よりは集中出来ているが、考え事でもしているのか。

心を落ち着けるためには、まず溜まったストレスを一度吐き出した方がいいだろう。悶々としたままやったところで、今後上手くいくとは到底思えない。

「若葉はどうしても今後が不安なんだ」

「でしようね。あんなことになったんだもの」

餌を付け直しながら話す。以前、下呂大将に話を聞いてもらった時のように、一度口に出したら籠が外れたように愚痴が溢れ出る。

「飛鳥医師のことは恨んでいない。命の恩人だからな。だから、こんな身体になったのは全部家村と大淀のせいだ。なんでこんな目に遭わなくちゃいけない」

「私もよ。先生に蘇生してもらわなければ私死んでるわけだしき。なんでこんな目に遭わなくちゃいけないのよ」

私は下呂大将に、同じように溜め込んでいた三日月は雷にぶちまけ、そのときはストレスを発散していたが、殺されて蘇生された曙は、その時の愚痴をまともに吐き出してはいない。だからだろう、曙も出るわ出るわ。

私や三日月よりはズケズケ言うタイプの曙ではあるが、ここ最近はどうだったのだろう。相部屋が雷だから、愚痴くらいは聞いてもらっているのだろうか。それにしてもここで滝のように愚痴が垂れ流されるが。

「あの連中は全員地獄に落としてやらないとな」

「ホントよ。私達にしでかしたこと全部後悔させてやるわ。すぐには殺さない。ネチネチネチネチやってやる」

「罵るだけ罵ってやれ。大淀はふざけているくらい煽ってきたからな」

陰口のように行儀が悪いのはわかっているが、ストレス発散だ。どうせ誰も聞いていない、私達2人だけの愚痴大会。口が悪かろうが、罵詈雑言並べ立てようが、知っているのは私達だけ。好きなだけ言ってしまう方がいい。褒められたものではない、2人だけの秘密。

「出来るものなら私達が遭った目に全部遭ってもらいたいもんだわ」

「ああ。一度死んで生き返ってもう一度死んでもらいたいな」

「先生の手間がかかるけど、それくらいしたいわよ」

話しながらもだんだんお互いにニヤニヤしていた。ストレス発散が出来ているとわかる。胸の奥につつかえていたモヤモヤが薄れていくような気持ちよさ。

やはり定期的に吐き出さなくてはいけない。溜め込みすぎるとパクしてしまうと理解していたつもりだが、なんだかんだ押し込めてしまう。下呂大将もその時言っていたではないか。もつと言った方がいいと。

「曙」

「なごよ」

「スツキリしたな」

「……ええ」

罵詈雑言の陰口の言い合いで、お互いにストレス発散が出来たと思う。雑念が少しは払拭されて、今なら魚も釣れる気がする。

餌はとづくに付け終わっていた。改めて背中を合わせ、釣りを再開。今度は目を瞑って神経を集中。雑念を取り払い、無心で針の先端に意識を持っていくような感覚で。

目を瞑る直前、どうしても痣は目に入る。気にはしていない、むしろ気に入っているくらい生の象徴は、お先真つ暗な今後の不安の象徴である。それが、ストレスを発散した今では不安が薄れていた。

「曙」

「今度は何」

「ありがとう」

無言。だが、後ろから見ても耳まで真つ赤なのがわかった。足下に思い切り波が立ったのも見逃していない。

曙なりの気遣いなのだろう。私のことは1mmも心配していないと言っていたが、そうでは無かった。あまり触れないようにしてただけで、みんなと同じように心配してくれていたのだ。感謝しかない。

施設の者全員が私のことを気にしてくれていることがよくわかった。申し訳なさもあるが、それ以上に、強くならねばと決意出来る。敵を倒す力も欲しいが、心配されない力が欲しい。

結局その日は1匹も釣れなかったが、有意義な時間が過ごせたと思う。自分の雑念の多さを実感し、精神鍛錬の必要性を思い知らされた。

その隣で曙は数匹釣っていた。これが昼食に並ぶことになるらしい。鍛錬しながらオカズが一品増えるというのは、なかなか魅力的である。

「また誘ってくれ」

「何よ、アンタも釣りにハマった？」

「……まあ、そんなところだ」

曙も毎日とは言わないが頻繁に釣りに来ているようだ。心落ち着ける時間を作っているというのは、楽しく生きていくためにも重要かもしれない。落ち着けなくても、考え事をする時間としては有効だと思う。

「次は釣れるようにすることね」

「ああ、釣果が無いというのは少し寂しい」

空っぽのバケツを眺めて自嘲気味に笑う。次やるときは、せめて1匹くらいは釣りたいものだ。

施設に戻ると、護衛艦隊とも合流。ちょうどお昼時なので、警戒も一旦休憩ということだろう。

曙の持つバケツの中の魚を見て、江風と涼風が騒ぎ立てている中、私は鳳翔に声をかけられる。

「釣りですか。精神鍛錬としてはどうでしたか？」

「思ったより有効だった。1匹も釣れなかったのは悔しいし、これからも続けていきたい」

「そうですね。どんな形でも、鍛錬になるものですから。これと決めたものを続けていくのがいいでしょう」

釣りでなくてもいいのだが、ここまで如実に表れるなら、これを続けていくのがいいだろう。曙的には趣味と実益を兼ねたい鍛錬になっている。鳳翔もそれを後押ししてくれたので、今後も曙と続けて行こう。

「随分とスッキリした顔をしていますね」

「いろいろと吐き出したからだろうか。適度に発散しないとダメだな。下呂大将にも言われた」

「そうですね。溜め込んで潰れるよりは、口汚くても吐き出した方がいいでしょう。今回はいい機会だったわけですね」

余程私がスッキリしていたのか、表情を見て微笑む鳳翔。昨日までは思い詰めた顔でもしていたのだろうか。自分で自分のことはよくわからないものである。

釣りをしている最中、集中もするが、曙と雑談もしている。今後の

戦い方を相談したり、本当に取り留めのない話をしたり。それだけで充分すぎるほど気分が良くなった。楽しく生きていると思わせてもらえるほどに。

「ではスツキリしたということ、午後からは訓練をしましょうか。精神も大切ですが、戦力も必要です」

「ああ、若葉はやれることを全部やりたい。鳳翔、また師匠として頼む」

「任されました。まだまだ貴女達は伸びます。私もそれを導きたい」

まだ強くなれると保証され、俄然やる気が出てきた。心も身体も今よりも向こう側へ行き、この事件を終わらせよう。

そして、楽しく生きるのだ。

大将再来

曙に誘われた釣りで精神鍛錬をし、護衛艦隊として滞在してくれている鳳翔に訓練を受け、私、若葉は心身ともに順風満帆な時間を過ごしていた。こういう毎日が送りたいという時間を体現出来ているため、心穏やかに生活できる。

今はまだ、家村の足取りは掴めていないため、不安なことは多い。いつ施設が襲撃を受けてもおかしくないような状況、緊張感が高まるが、今は仲間達も協力者もいる。前はは大敗を喫したが、次は負けてなるものか。

さらに翌日、改めて下呂大将が施設に説明に来てくれた。予定していた日は飛鳥医師の体調が優れなかったので控えたが、1日空けてくれたおかげで不調も取れている。

今日は少し大荷物になってしまいました。施設を防衛しなくてはいけないということは、上も理解してくれましたからね」

今回は陸路でやってきた下呂大将。だが、護衛の第一水雷戦隊は海路で来たので、少し驚く。いつもとは違う登場の仕方。

「本当は艀装として持ってきたかっただんですが、この施設は鎮守府ではないですから、武装の譲渡は禁じられています。ですが、廃材の譲渡は問題ありません。実際、鎮守府から出た廃材で別のものを作る企業もありますしね」

「助かります。集めた漂着物も全て失われたので、艀装の修理もままならなかったところですよ」

以前と同じなら第一水雷戦隊の6人が乗っているコンテナには、大量の資材が積み込まれていた。艀装がそのまま入っていることは無かったが、これを組み上げれば新たな艀装を作り上げることが出来るかなものばかり。

他の者から見ればゴミの山でも、私達から見れば宝の山。使えなくてもエコの餌である。特にシロクロは、トレーラーの中を見て目をキラキラ輝かせていた。

「姉貴姉貴！ これだけあれば、武装以外作れるかもね！」

「うん……そしたら私達も……少しはお手伝いできるね……」

廃材には艦娘の艦装以外のものも沢山含まれている。深海棲艦の艦装の残骸もだ。普通の鎮守府では残すことなく捨てるものでも、シロクロには自分の艦装のパーツになる可能性のある重要なもの。

これで艦装が組み上がれば、シロクロも戦力としてカウント出来る可能性がある。本来の武装は難しいかもしれないが、潜水艦という特性が非常に強い。

「ここからまず4人分の艦装だろ、シロクロの艦装と、あとリコの艦装にちよいと細工がしたいし、やれることが多いな」

摩耶は摩耶で、もう整備のことを考え始めている。

「ではこの荷物を下ろすのは後にするとして、先に例の件の話をしましょうか」

「了解です。人数も増えてきたので、食堂になってしまつて申し訳ないですが」

「この施設に講堂や会議室は本来必要ないものなのは理解していますから、全員集まればそれでいいですよ」

ここからは近海の警戒は第一水雷戦隊に任せ、ここにいる者は下呂大将の話を聞くこととなる。私達を苦しめている元凶に辿り着いたのか否か。

今ここに滞在しているのは20人弱。職人妖精に拡張してもらつたおかげで、余裕とは言わないが食堂に全員入ることが出来た。

まだ少しだけ痛むということで、姉だけは車椅子。私はその隣につきことに。他は五体満足であるために、普通に着席。

「集まりましたね。では早速、私がここ数日で調査したことを共有しましょうか」

緊張感漂う食堂。誰も音を立てることなく、静かに下呂大将の話を聞く。

「まず、あの大淀の素性から」

「家村の秘書艦なのでは無いんですか？」

「それはそうですが、問題はそこではありません。彼女の経歴におか

しなどころがあります。それは、内通者の目出から探りました」

本人も言っていたことではあるが、大淀という艦娘は、どの鎮守府にでも1人いる任務娘として配備される。来栖提督のところにも当然配備されており、秘書艦ではなく事務担当として執務室で働いているらしい。任務の総括や大本営との円滑な仲介など、艦娘ではないような仕事をしているのだとか。

その大淀の艦装は、少し特殊な経緯で手に入るらしい。そのため、出撃させるためにはある程度の手順を踏む必要がある。来栖鎮守府の大淀は、艦装を持たないそうだ。そのため事務のみとなっている。

だが、家村の大淀は普通に出撃してきた。あの艦装が正規品かは知らないが、練度も桁違い。ある意味おかしなところではあるが、出撃出来ないわけではないので、それだけ見ていると普通だ。

「おかしなところ、とは？」

「あの大淀はドロップ艦、さらにはD事案の艦娘です」

任務娘として配備される大淀は、大本営が独自に建造することで各鎮守府に配備している。ドロップもするらしいが、極々稀らしく、それを待つくらいなら建造した方が早いとのこと。

だが、家村の大淀はドロップ艦。建造ではないことは少し珍しいが、大本営が保護したドロップ艦の大淀を任務娘として教育し、鎮守府に配備することは無くは無いそうだ。そもそもドロップが稀なので、そのケースが恐ろしく少ないだけ。

それに加えてさらに珍しいD事案。機密なのだが普通に話してしまった。

雷の正体で私達はそれについては何なのかは知っている。つまりあの大淀は、深海棲艦を素材にドロップした艦娘。深海棲艦の生まれ変わりであると。

「家村の鎮守府にあの大淀を配備したのは目出です。大淀の発見、並びに教育を行なったのもですね。だから、家村との繋がりはこちらからあります」

「なら、大淀がああなっているのは目出のせいである？」

「いえ、ここからは少し憶測が混ざりますが、大淀は最初からアレで

す」

少し騒つく。戦った私達が一番驚いていた。

そもそも深海棲艦の匂いがしていたのもアレだが、最初からあんなふざけた奴だったとしたら、よくもまあ家村が何も気づかなかつたものだ。余程能天気なのか、大淀が隠すのが上手いのか。

どちらであれ、アイツのやっていたことは、家村が鎮守府を持った時から始まっていたということか。

「そこはまだ想定ですから置いておきましょう。では本題です。家村の行方ですが、簡潔に言います。彼はもう死んでいます」

騒ついたと思ったら、今度は一気に静まり返る。

「鎮守府で発見した家村らしき死体は、他人のものでした。若葉のおかげですぐにわかりましたね」

「薬の匂いと、知らない煙の匂いか」

「はい。私の知る限り、彼はタバコはやりません。ですから、死体を工面して逃げ果せているのかと思っていました。やたら食糧も減っていたのも、必要分だけ持つて出ていったのかと。ですが、そうじゃない。家村は最初から死んでいた」

想定外すぎた。なら私達に指示を出していた、あの貼り付いた笑みの男は何者だったというのだ。いや、少なくとも指示を出す姿は見たことを私は無かった。建造され、成り行きのままにいつただけだ。

言われてみれば、あの男が提督ではないと言われたら納得出来る要素はある。

「目出は最後までそこを隠蔽しようとしています。まだそういう証言もしていません。ですが、状況証拠からしてそれが一番正しい」

「何を根拠に？」

「新人提督は1年間月に一度、大本営からの監査が入るんですが、それを全て目出がやっていました。大淀を配備した縁として。だから、鎮守府で活動している家村の姿を知るものは目出しかいません」

ならば、死んでいることすら隠蔽していたということか。実際は大淀と目出がグルになっていたと。

「そこで一つ。私の知る家村の写真を持ってきました。ここには悪事を働いていた家村を知る者がいますからね。これでそれが繋がります。どうですか？」

下呂大将が懐から一枚の写真を取り出した。履歴書か何かに使われているものなのだろうか、真正面を向いた凛々しい表情の男の写真。

この中の誰もが知らない男が、そこに写されていた。

私もだが、一番身近にいたであろう姫であった夕雲や風雲ですら、その写真を見て驚いていた。誰だコイツと騒つく。

「鎮守府にいる男というだけで、その者を提督と考えてしまう。さらにはその男は提督として振る舞った。この男は艦娘を統率するために大淀が立てた代理でしょうね。拾ってきたのは目出でしょうか」

その男を大淀が裏でコントロールしていたとすれば、私達が生み出された鎮守府は、最初から大淀が鎮守府を牛耳っていたということだ。あの大淀なら艦娘を捨て駒のように扱ってもおかしくはないだろう。

なら家村は何故殺されたのかとなるが、それはすぐに考えつく。大淀に反抗したからだ。クズでも何でもなかった。下呂大将の教えをしつかりと守る、素晴らしい提督だったのだ。

「なら、大淀は黒幕だというのに戦場に出てきたということですか」「そういうことになりますね。まだ家村は生きていますと錯覚させる手段になりますし」

提督の指示と言っていたし、家村が生きてるように仕向けている感はある。

それもこれも、時間稼ぎをしているのではないかと下呂大将は言う。裏で何かやっているのは私にもわかる。それを成功させるために、誤報を流すように嘘をつき、下呂大将の目を攪乱しようとしているようだ。

「薬での資金稼ぎもしていたようですし、大淀は今頃、自分の鎮守府……いや、研究室を持っているでしょう。それこそ秘密裏に、さらなる協力者、内通者もいるかもしれません。行方を探しながら、そちら

も調査するつもりですよ」

それこそ、飛鳥医師に匹敵するような医療研究者が仲間にいるかもしれない。麻薬精製、それに大淀の身体をああ改造した者もいるかも。黒幕は大淀としても、協力者は相当数いる可能性はある。

それに少なくとも、呂500、巻雲、朝霜と、名前が上がっているだけで3人の姫もいる。それ以上に姫がいると見て間違いない。その辺りはどうせ誰も死んでいないだろうし、その鎮守府だか研究室だかにいるのだろう。それらの救出も考えなければ。

だが、大淀はダメだ。救出など考えている余裕が無い。奴だけは死以外の選択肢は無い。

と、ここであの戦闘を思い出す。あの大淀はおかしいと判断出来る言葉をいくつも言っていた。特に、私が変わ化した時の言葉。

「大将、若葉から質問いいか」

「はい、どうぞ」

「あの大淀からは深海棲艦の匂いがした。それに、若葉がこうなったときに、『そこまで行けていない』と言ったんだ。これはどういう意味かわかるか」

あのときは確かにそうだった。私の今いる場所は、大淀が向かってる場所なのか。こんな深海の力に侵された身体が、大淀にとっては求めているものなのだろうか。

下呂大将は顎に指を置き、頭を捻る。これに関してはまだ判明していないことのようにだ。

「D事案の大淀ということ、何かをして深海棲艦に近付いたのではないかとは思いますが、それが何かはまだ。飛鳥から聞きましたが、この雷はD事案だとか」

「ええ、私は治療でお腹に入ってる子が、元々の私と一致しちゃったみたいで」

「そうですか。ですが、あの大淀は雷とは違うんですよね？」

「ああ、匂いが違う。雷はしっかり艦娘だが、大淀は見た目だけ艦娘という感じだ」

その辺りの身体の謎は飛鳥医師が研究するとして、大淀が深海棲艦

の匂いがする件はついだに調べてくれるとのこと。決めつけは良くないが、おそらくあちらの研究による改造だとは思う。

「今はこの辺りにしましょう。確証が持てている、もしくはほぼ確実な情報は出しました」

「ありがとうございます。こちらで協力出来ることはやらせてください」

「先払いしてもらったようなものですよ。飛鳥の治療で何人もの艦娘が救われていますからね」

そう言いながら夕雲達を見た。

一番最初に治療された霰は、もう殆ど禁断症状が出ないほどに回復し、艤装さえあれば出撃すら出来るほどに。夕雲と風雲も大分回復している。まだ幻覚と幻聴に悩まされているものの、頻度は大分落ちていくそう。姉は言わずもがな。

来栖鎮守府では42人の人形達全員の治療が終わり、禁断症状の治療の日々を送っているそう。そのうちあちらに行つて、全員の匂いを嗅いでおかなくては。

これは飛鳥医師の大きな功績だ。飛鳥医師がいなければ、誰も治療されずに放置されることになっていた。姉を助けてもらっているため、私もとても感謝している。

「飛鳥、これからも頼らせてもらいますよ」

「はい、任せてください」

医療に関して、飛鳥医師の右に出るものはいない。それを手伝うことが出来て、私達も誇りに思う。

今回の事件の真相はまだハッキリとは判明していない。だが、大淀が明確な敵として判明しただけでも充分だ。

今後は大淀の行方を調査しつつ、襲撃に備えることとなる。私達は、この施設を守るために切磋琢磨していく。

新たな姿

下呂大将の調査により、事の真相が少しずつ紐解かれていった。家村は既に死んでおり、私達の知るものは最初からすり替えられた人物だった。

それを仕込んでいたのは大淀と、大本営の内通者である目出。後者は既に下呂大将の手で捕らえられており、弾劾裁判も終了している。それでも、まだ黙秘を続けている部分があるらしく、そこをこれからも調査していくとのこと。

私達への説明は終わり、今度は運んできてくれた廃材を下ろす作業に。こちらは摩耶とシロクロを中心に、みんなで力を合わせて工場へと運び込む。大型のトレーラーに積み込まれているだけあり、相当な量あるが、それは全て私達、特にシロクロにとっては宝の山だ。運び込むのも楽しそう。

この廃材から、シロクロの艦装に使えるものは勿論、霞、夕雲、風雲、そして姉のための艦装も作らなくてはいけない。姉のものに至っては、私と同じで背中から離れて浮いているという特殊なもの。ここから組み上がるかは何とも言えない状況。

だが、廃材を見ながら摩耶が感嘆の声を上げた。

「廃材とか言つときながら、これ使えるものだらけだぞ。初春型の意味わかんねえ主機もすっかり入ってやがる」

「これ、ユウグモのじゃない？　なんか見覚えあるよ」

「うん……多分。これは……アラレのに使えそう」

廃材扱いでも、ほぼ新品のようなものであるらしい。ここで組み立てる前提で、数人分の艦装のパーツが入り交じっているようだ。主機さえあれば、あとは継ぎ接ぎでどうにかなる。私達がそうなのだから。

ただ、私も使っている艦装なのだから、意味がわからないと言われるのはちよつと。

「こんだけありや、何日かあれば4人分は作れるな」

「私達のは？　私達のは？」

「深海の艦装の廃材はちよい少ないな。そっちは難しいかもしれねえ」

「うーん、残念だなあ」

やっぱり笑顔で残念がる。なんだかんだ施設から離れるのは寂しいようだ。

「まずはこの前の廃材と組み合わせているいろいろ作っていいこうぜ。やれることを増やすんだ」

「あーい！」

「……頑張る」

艦装作成もいい方向に向かいそうだ。戦力が増えるのはいいこと。

「そうだ、若葉。少しいいですか？」

と、ここで下呂大将に呼ばれた。作業も終盤だったので、物を運び込むのは一旦任せる。後は他の者に任せても問題ないほどだ。

「なんだろうか」

「君が手配したマフラーですが、私がついでに持ってきました。それに、今後のことを考えて武器もです」

すぐに用意出来たものは私のものだけという。マフラーは衣服だし、武器はナイフと手軽に持ち運び出来るものだ。袋に入れて持つてくる事が出来るくらいである。

「まるゆ、例のものを」

「はい、お持ちしますね」

車の助手席に置いてある紙袋を持ってくるまるゆ。おかしな匂いはしないが、微かにだが嗅いだことのある匂いがした。袋の中に入っていたのは予想通り、真っ白なマフラーとナイフ。さらにはナイフのホルダーまで用意してくれていた。

今まで私は、ナイフを裸で持ち歩いていたようなものだ。神風型の刀のように鞘があるわけでもなく、両手を空けることが出来なかった。そこまで用意してもらえたのはありがたい。

「君がナイフで戦っていることは承知していました。ですので、神風達の刀と同じタイプのナイフを用意しました。これがあれば、人形を破壊せずに、自爆装置のみを破壊することが出来るでしょう」

これは本当に求めている武器だ。嗅いだことのある匂いは、神風型の刀の匂いだったか。

私は処置にも参加しているため、自爆装置が何処に仕込まれているかも把握しているし、いざとなれば匂いを辿ればある程度わかる。

神風型が施設に滞在していないときに襲撃を受けても、これなら人形や姫を救出出来る。今は私だけが、曙の槍も専用のもを用意するとのこと。前衛組は、自爆装置破壊の任務も受け持つことが確定した。

「修復材の効果は、ホルダーに収めることで維持されます。ナイフの整備は、普通に刃物を扱うようにしてくれば問題ありません」

「わかった。基本はホルダーに収めておこう」

「そうしておいてください」

神風型の刀は、鞘にそういうシステムが組み込まれているそう。その鞘がホルダーになっただけ。なるほどわかりやすい。

「マフラーは川内とほぼ同じものを用意しました。首を守るように、艤装と同じ成分の繊維が織り込まれています。しなやかで頑丈です」

とはいえ、重い衝撃を受ければ首が先に逝くし、直接主砲を撃ち込まれたらなす術もないため、過信は禁物。

川内とは、阿武隈のように水雷戦隊を率いていた軽巡洋艦姉妹の長姉。夜戦に長け、闇に溶け込み敵を討つその姿は、誰が呼んだか『夜戦忍者』。そのマフラーを私に授けてくれた。

そのマフラーが2本あるのは、普段使いすることも考慮してのことだろう。毎日交互に使えばいいか。

「じゃあ、早速身につけさせてもらおう」

「ええ、使い心地を見てみてください。何も心配はしていませんがね」
貰ったマフラーを首に巻き、ナイフを手取る。ホルダーは太腿に巻いておいた。それだけで今までよりも重武装という感じになる。

ナイフは私の手に合うように専用チューンしてくれたらしく、馴染みすぎて怖いくらいだった。今まで使ってきたものも良かったが、こちらは段違い。

とにかく軽く、手に吸い付くような感触。むしろ今までと同じ戦い方だと拙いくらいである。

「すごいな……全てがしつくり来る」

「それは良かったですね」

マフラーは初めてのことだが、なかなかどうして悪くない。痣のことを気にしているわけではないのだが、首元が隠れている安心感はいい具合だ。肌触りもとてもいい。

「新生若葉だ。これからはこれで行かせてもらう」

「新生というより、深生というイメージですがね」

「誰が上手いことを言えと」

ならば、若葉改ならぬ、若葉怪とでもした方がいいか。ある意味別の方向に変化したことで、改二と見做してもいいかもしれない。若葉怪二、私だけの特別な進化。うん、悪くない。

「危険は承知ですが、慣れるためにそれで訓練をすることも必要でしょう」

「そうさせてもらう。大将、ありがとう」

「いえいえ。君達には抑止力としての力を持つてもらいたいですからね。ここを失うわけにはいきません。とはいえ、あまり褒められたものはありませんので、扱いは慎重に」

下呂大将が言ったことだが、鎮守府ではない施設に武装の譲渡は出来ない。ナイフだって当然武装なのだから、本来はよろしくないことだ。だが私に譲ってくれた。

下呂大将はこの施設の特異性を大本営に訴え、武装の許可を得ようとしているらしい。実際、数度の襲撃を受けている挙句、一度は妖精を使わなくてはいけないほどに破壊されているのだ。事の重大さはあちらもわかっているはず。

「そういう扱いにするために、この施設に監査が必要になりました」
さすがに話が大きくなってきたので、飛鳥医師も呼び付ける。私だけが聞く話ではない。

監査を受けるのは紛れもなく飛鳥医師だ。覚悟の上で受けてもらわなくてはいけない。

「監査、ですか」

「ええ。鎮守府でない施設に、鎮守府と同等の武装を許可してもらうためには、大本營の者直々の監査と許可を貰う必要はありますから」
今まで中立区であった場所が、何の因果か普通の海域として変化してしまったのだ。さらには当たり前のように深海棲艦が滞在しているというおまけ付き。その辺りもしっかり公表したようで、下呂大将の真面目さが窺える。

「そこまで話したんですね……」

「隠しておいたら余計な不信感を持たせてしまうでしょう。それに、大本營でも君のことを知っている者はちゃんといいます。正統性のある保護であることは理解されているはずですよ」

ここにいる深海棲艦は完全な協力者。さらには被害者ということでも、有効な供述も出来る。シロクロとセスは、自分に被害を与えた者が夕雲のため因縁は消えているが。

監査は、それを確認するのが主になるのでは無かろうか。本来侵略者として敵対している深海棲艦が仲間として本当に協力しているかどうか。これは誰だつて確認したいことだ。

「後日、監査の者がここに来るでしょう。私も同行しますが、かなり厳しく確認されるでしょうね」

「僕達はありのままを見せますよ」

「ええ、それで問題ありません。私は君達を信用していますから、心配していませんよ。それに……いや、これは当日でいいでしょう」

その信用に応えなくてはいけない。だが、そのまま生きているところを見せれば充分だろう。怖いのはリコくらいか。

最後に濁した言葉は何だったのだろうか。少し気になったが、今は気にしないでおこう。どうせ後日知ることになる。

「とにかく、それさえクリア出来れば、限定的ですが自衛の力は手に入ります。中立区を取り戻すために、君達の力を貸してください」

「勿論ですよ」

「ああ、若葉も力を貸そう。必ずここを元に戻し、楽しく生きるんだ」
下呂大将に対し、改めて誓う。ここまでお膳立てをしてきている

のだ。私達の力でこの施設を守っていこう。

廃材を全て運び込み、下呂大将のここでの仕事は終了。話す事は全て話したということで、引き続き調査をするために早々に撤収。近海警備をしてくれていた第一水雷戦隊も、行きと同じように海路を使って帰っていった。

忙しい人ではあるが、それだけ有能であることの証明でもある。今後とも頼らせてもらおう。

事が済み、昼食も近いので、一旦休憩。午後からは貰った廃材の選定が始まる。早速戦力増強のために動き出すことになるだろう。

太腿に巻いたナイフのホルダーは、ナイフと一緒に艀装と工廠に置いておいた。マフラーは普段使いのためそのまま。巻いたままの生活も慣れていかなくはないけない。

「若葉さん、マフラーとても似合ってますね」

「うむ、よく似合っておる」

「ありがとうございます、三日月、姉さん」

早速褒められた。見た目を褒められるのはなかなか嬉しいものである。

新たな私として一番大きな変化。駆逐艦若葉にはない要素だ。継ぎ接ぎの私の、わかりやすい特徴。私も結構気に入っている。

「首の痣もわかりませんし……すごくいいと思います」

「こうすれば、頬のもわからなくなるな」

マフラーを引き上げて、鼻まで隠す。この見た目だと本当に忍者みたいになる気がする。

ただし、これだと嗅覚が鈍くなってしまうため、滅多なことではやらないだろう。余程寒いときくらいか。

「匂いが嗅ぎづらくなるのは問題だ。頬は出したままにする」

前に三日月に言った通り、これを出していたからといって、後ろ指を指すような連中とは関わってきていないため、特段気にすることも無い。むしろこれは、マフラーと並んで今の私のシンボルになるだろう。

「もののけも気に入っておるようじゃ。以前に増して、笑顔が絶えん」
「それはよかった。気に入ってもらえたのなら何よりだな」

私に憑いているというもののけも、私の姿の変化は歓迎のようだ。どういふ感情を持っているかは知らないが、元より取って食おうとはしてきていないらしいし、これでまた安心。

「ナイフも新調したんだ。神風達の刀と同じものでな」

姉には少しトラウマになっているようで、例の刀のことを聞くと少し顔を顰める。

「あれじゃろ、腹の中の異物だけを斬るという刀」

「ああ。人形を助けるための一番有効な手段だ」

「ただひたすらに痛いんじゃよアレ……」

身体は無傷でも痛覚を遮断するわけではないため、そうなっても仕方ないこと。むしろ死なずに済んでいることを喜ぶべき。痛みに関しては度外視させてもらうしかあるまい。

「なら、若葉さんが自爆装置解体班ということですか」

「そうなるな。若葉1人で全部やれるとは思えないから、曙にもやつてもらいたいところだが」

槍での解体は流石に難しそうではあるが、いないよりはマシである。

「わらわも明日には全快じゃろう。さすれば、今後は戦力としてお主達の力になれる」

「ありがたい。今は猫の手も借りたいくらいだ」

「任せるが良いぞ。まずは改二にならなければならんろう」

ならば鳳翔の訓練を受けるのがいいだろう。確かにこの中では、姉は練度はかなり低い。そのおかげで深い禁断症状に苛まれずに済んでいるわけだが、戦力としては下になってしまっているのは否めないだろう。

むしろ、後発組、救助した人形と姫で、新たに駆逐隊が組めるようになったわけで、そちらの育成も急務となっている。夕雲と風雲の心配はないが。

いや、違う意味で心配がある。誰よりも深い禁断症状がどうなった

かだ。それはしつかり調べておく必要はあるだろう。

二つ目の駆逐隊

午後からは下呂大将に与えられた廃材の整理と、早速艀装の作成が始まった。廃材と言いなながらもゴミらしさが一切無いそれらは、洗浄の必要すらいらぬものが沢山。すぐにでも作成に進める。

私、若葉は当然、姉である初春の艀装組み立てをメインに始めている。私の艀装を組み立ててくれたのは摩耶だが、初春型の艀装に一番詳しいのは私だ。整備のために分解を何度もしているし、主機の仕様だって理解している。それに、姉のものは私が作りたいたいというのが本心。

工場には私の他に、統括の摩耶と、シロクロ、そしてセスが集まった。全員私以上に工場に慣れ親しんでいる手練れ。セスは艀装作成という形で参加はあまり無いのだが、エコのメンテが出来るなら問題ないだろう。

「二応姉さんからどういう艀装だったかは聞いたんだが、若葉のものとはまるで違っていた」

「ああ、あたしも聞いておいた。主機の接続以外は別モンみたいだな」
なんでも姉の艀装は、私の使っているものとは似ても似つかないらしい。浮遊する主砲やら、それを掴んでおくアームやら、さらにはヘッドユニットまで浮いているなど、本当に訳の分からないもの。

とはいえ私の艀装も背中に接することなく浮いているので人のこととは言えない。この姉があるから、妹である私があるわけで。

「主機のシステムが至るところにあると思えばいいのだろうか」
「多分な。アームみたいなモンは大将のくれた廃材にあったから、多分それらしいものは出来るだろうよ」

それに、私から先に姉に言っておいた。本来のものと同じものはおそらく出来ず、私達と同じ継ぎ接ぎの艀装になるだろうと。ただし、なるべく似せて作るから安心してくれとも。

姉は快くそれを受け入れてくれた。姉だけでは無い。他のみんなもだ。この施設を守るために戦えるようになればそれでいいと心強いことを言ってくれた。

「まずは確実に戦えるようにしような。少なくとも航行出来るところまで持って行ってからだ」

「ああ、まずはそこまでだな。若葉もそれなりにやってきたんだ。任せなさい」

「頼もしいな。なら初春の艦装は若葉に任せるぜ」

摩耶の言う通りだ。まずは海上に立ち、自由に動き回れるようになるまでは今日中に持っていききたい。ならば、初春型の艦装に一番慣れている私がやるべきだろう。

「私がユウグモのかな」

「なら、あたしが風雲の。シロクロは霧のを頼むぜ」

「あーい。すぐに作っちゃおうよー」

あの時の叱咤激励の縁で、セスは夕雲のものを受け持つ。シロクロは仲のいい霧のためと躍起になっていた。これで役割分担は完了。

私は姉の、シロクロが霧の、セスが夕雲の、そして摩耶が風雲の艦装を受け持ち、艦装作成に乗り出すのだった。

午後いっぱいを使い、工場から夕暮れを確認したところで本日の作業は終了。私は主機が完成し、明日の朝一にでも装備してもらい、海上を航行してもらえるかというところまで来た。武装はおろか、例のアームなどはまだ取り付けることは出来ないが、確実に前進しているため、充実した時間を過ごせたと思う。

「よし、今日のところはこれで終わらせっか」

摩耶の方は、半分近く組み上がっている状態。技術がどんどん上がり、パーツもほぼ揃っている状態だからか、わずか数日で1人分。風雲の艦装は夕雲と同じように作ればいいため、それよりも早く完成することだろう。

「艦娘の艦装は、エゴとはまるで違って困るね」

などと言いなながら、セスも摩耶と同じくらい組み上げていた。さすがとしか言いようがない。生きている艦装であるエゴが扱えるのなら、艦娘の艦装を一から組み上げるのは容易いか。

「明日、アラレに装備してもらおうー」

「そうだね……多分海に出られるよ……」

シロクロの方は主機が完成。2人がかりというのものもあるが、整備にこなれているクロと、直感的なパーツ選定のシロが組み合わさることで、トントン拍子に作業が進んだようだ。

このペースで行けば、1週間どころかかなり早めに4人分の艦装が揃う。最初に摩耶が言っていた通りだ。

「あっちもそろそろ終わるよな」

「ああ、多分」

その艦装を使う4人だが、今は鳳翔指導の下、私達が受けた訓練を受けている。

練度は高いかもしれないが、治療と療養が含まれ、風雲以外は海上の航行もここ最近していない。そのため、身体が鈍っていた。それを鍛え直すという理由で、鳳翔が新たな駆逐隊の育成に乗り出している。

都合よく4人駆逐艦が揃ったため、私達第五三駆逐隊に並び立つ第九二駆逐隊として結成された。リーダーはまだ決まっていない。

「充実していたが、あまり思い出さたくないこともある」

「お前、何回吐いたよ」

「数えてないな。だから姉さんが心配だ」

姉はまだ痛みが完全に取れたわけではないのだが、練度の差を縮めたいと、誰よりも躍起になって参加している。そのおかげで禁断症状が軽いのだが、やはり少し気にしていた。

私達の時ほど急ピッチでは無いとは聞いているが、それでも心配は心配。無理をしていたら強引にでも止めなくては。

工廠を片付けた後、訓練をしているであろう浜辺に向かった。全員が倒れている可能性もあるため、工廠組全員で。艦装を担当したものが受け持てば、誰の手も煩わせないで済むだろう。

「調子はどうかーって聞きたいところだが、聞かなくてもわかるなコレ」

案の定、ゼエゼエ言いながら倒れている4人。この光景には覚えがある。その時の私は当事者側。

「初春さんの身体も考え、今日は少し控えめにしたつもりですが、皆さん練度の割に身体が鈍りすぎですね。今後もゆっくり慣らししていきますよか」

これでも私達の一番最初よりも軽めにされていたそう。あの時は相当詰め込まれたものである。

それでもこうなってしまうのだから、余程鈍っていたか、鳳翔が力加減を間違えているかのどちらか。私は後者だと思っただが。

「あ、アラレ、大丈夫!？」

「……」

無言で首を横に振った。ただでさえ静かで口数が少ない霧は、もう一言も言葉に出せないほどである。この中では一番回復しているとはいえ、限界を超えるレベルの訓練のため、こうなっても仕方ない。五体満足の私達もこうだった。

「4人は若葉達が薬湯に連れていく」

「お願いします。なんだか、若葉さん達の一番最初を思い出しますね」
「ああ。明日からはもう少し加減してやってくれ」

私は姉を、摩耶が風雲を、セスが夕雲を、そしてシロクロは2人がかりで霧を抱え上げ、そのまま風呂へ向かった。今回も私達の時と同じように、薬湯が用意されている。あれに浸かれば死ぬほどの疲れもあつという間に吹き飛ぶだろう。

「姉さん、大丈夫か？」

「……あまり大丈夫ではないのう」

「すぐに風呂に運ぶから、もう少しの辛抱だ。若葉の油臭さは我慢してくれ」

艀装作成のままにここに来たため、どうしても油の匂いはしてしまうだろう。これだけは我慢してもらわなければ。すぐに身体も洗えるし。

「若葉よ……お主もこれを？」

「ああ。鳳翔曰く、これよりハードだと」

「……なんぞ、凄まじいのう」

もう笑うしかないようだ。笑える元気があるだけマシか。

4人は薬湯に浸けたらすぐに回復した。私達の訓練も、客観的に見たらこうなるのか。さつきまで疲労困憊で立つことすら辛そうにしていたのに、今はもう平常通り。訓練をした後と思えないほどに。

「あしたも……これ……やるのかな……」

「やると思いますよ」

「……そっか……がんばる」

風呂を広くしてもらったおかげで、私達も一緒にシャワーを浴びるくらいは出来るため、訓練組の会話は丸聞こえ。元々あちら側におり、洗脳を解かれたことでこちら側に戻ってくる事が出来た九二駆の話は、少し気になった。

霰は一番へばっていたようだが、挫けてはいないようだった。強くなれることというより、この施設を護れることが嬉しそう。

「夕雲も頑張らなくてはいけません。皆さんの無念を晴らすためにも、夕雲は強くなり、提督の野望を……いえ、提督はもういないんですね」

「そう、そうなのよ。私、みんなの仇討ちを目標にしてたのに、もういないなんて言われてもさ……」

夕雲と風雲は、姫として提督に仕えていた者だ。その提督は偽物だったわけだが。仇討ちをすると幻覚と幻聴に誓った風雲だが、その仇は実はもういないと言われてしまった。

「あの大淀さんが黒幕だったのよね……そんな感じしなかったんだけどなあ」

「ですね。裏がそんなに黒かったなんて」

提督に仕えていたということは、大淀とも深く関わっていたことだろう。姫や人形の前ではあんな本性を見せてこなかったようだ。

「……みんな待ってて。仇討ち、ちゃんとするから。提督じゃなくて大淀さんになっただけよ。だから、お願い。もう少し待ってて。お願い」

「ごめんなさい、ごめんなさい、大丈夫、ブレてません。貴女達の無念を晴らすために尽力します」

夕雲と風雲は禁断症状に移行。霰は時間も経ったおかげで禁断症状をほとんど見せなくなったが、この2人は姫だったせいでかなり深い。まだまだ苛まれることになるだろう。

「時間がかかっているのはわかっているわ。でも、必ず、必ず仇は取るから。大淀さんは必ず貴女達のところに連れていくから」

割と物騒だが、今の目的は風雲の言った通り、大淀を終わらせることだ。風雲達が見ている幻覚、無念のままに死んでしまった亡霊達の下へと送り、今までやってきたことを後悔させる。

とはいえ、あまり気負わない方がいいとは思う。1人で仇討ちをしているわけではないのだから、私達と一緒にその目的を達成したらいい。

「風雲よ。そんなに気負うでない」

「気負ってなんてないわよ。でも、この人達は許さないと、早く殺せつて言ってくるのよ。その願いは、責任を持って私が叶えなくちゃ」

「それを気負っていると云うんじや。もう少し肩の力を抜いた方がいい」

そんな風雲を宥める姉。最初から禁断症状があつて無いようなものだったためか、その辺りには随分と余裕がある。ずっと客観的に見てこれだ。

「お主の見えるおるもののが何を言っているのかはわらわにはわからん。じゃがな、駆逐隊として結成したんじやから、わらわ達も頼れ」
「わかつてる、わかつてるけど」

「お主は真面目じやのう。わらわ達は同じ境遇、1人で背負うなど言うておるんじや」

苦笑しながら頭をポンポン叩きながら撫でる。見た目は風雲の方が歳上に見えるのだが、姉は振る舞いやら話し方のせいで誰よりも歳上に見えた。まるで祖母が孫をあやすように、風雲を落ち着けていく。

「わらわ達は4人で九二駆、一蓮托生、そうじやろ？」

「……そうね。1人で戦ってるわけじやないものね」

姉に慰められていくうちに、禁断症状も薄れていったようだ。目の

焦点は定まっていき、落ち着いていく。

「ゆうぐもちゃんも……だいじょうぶ、だいじょうぶ」

「ふふ、ありがとうございます霰さん」

夕雲も霰に撫でられて禁断症状を薄れさせていた。

やはり持つべきものは仲間だ。嬉しいことも辛いことも分かち合える仲間の存在は大きい。加えて風雲にも姉がいる。頼れる者が多いことはいいことだ。

「まずは鳳翔さんの訓練を乗り越えて、五三駆に追い付かないとね。並び立って、みんなで仇討ちよ！」

「うむ、それでよい」

九二駆はこれでうまく行きそうだ。遠目で見て安心。

「よかったな若葉」

「ああ」

一緒にシャワーを浴びている摩耶に言われ、自然と笑みが溢れた。やはりみんなで楽しく生きていかなければダメだ。私だけ楽しくても意味がない。

「姉さんのことは心配してなかったんだ。だが、夕雲はアレがあつたからな……」

「最初のぶっ壊れたヤツな。セスのおかげで何とかなつたヤツ」

「ああ。あの中で一番危ういのは夕雲だと思っていた。それも今は安心している」

完治まではあと少しだろう。禁断症状が見えなくなれば、本当に終わりだ。霰は一足早くそこに辿り着いたが、夕雲と風雲はまだまだあるだろう。だが、それも今は仲間達のおかげでさらに薄れている。

五三駆と成り立ちが少し違う九二駆だが、仲間同士の連帯感はずっと劣らずな気がする。たった一度の訓練であるが、真つ先に成長したのは身体ではなく心のようだ。

「負けていけない」

「ああ、頑張れよ。あたしも全力でサポートしてやっからさ」

「頼んだ。摩耶は頼りにしている」

先は見えたが勝ち目がまだ薄いこの戦い。施設の者の心は、常に一

つだ。一丸の思いで、この事件を解決していきたい。

移動要塞

下呂大將から現在の調査状況を聞いてから3日。大淀の居場所は未だに掴めていないが、襲撃も受けておらず、こちらでは黙々と準備を続けている。

特に進んだのは、新たに結成された駆逐隊、第九二駆逐隊の艦装である。摩耶やセスが作っていた夕雲と風雲の艦装は完成。シロクロが2人で作っていた霰の艦装も完成。私、若葉が作っている姉の艦装は、苦戦したものの早めに終わらせてくれた摩耶に手伝ってもらい、なんとか完成まで漕ぎ着けた。

「航行テストも完了。これで海上での訓練も出来るようになったな」
「若葉はもう少し弄りたいな。姉さんの艦装は本当に難しい。アームの動きがまだギクシャクしている気がする」

「あのヘッドユニットがアームに思考伝達してるんだよな。チューンは逐一必要だろ」

姉の艦装は特殊すぎたが、本物と近いものは出来たと思う。特に浮いているヘッドユニットには大苦戦だったが、初春型主機の構造の応用でどうにかなった。摩耶が手伝ってくれなければ、おそらく今も私は頭を悩ませているだろう。

「で、九二駆は？」

「鳳翔の訓練で瀕死だ」

治療から回復までの鈍りを取るための訓練で、当初の私達のようにポロポロになって倒れている4人。それでも最初とは違い、自分の脚で風呂に行けるようになったのは上出来。

基礎訓練も私達と同じで3日間とされ、今日が最終日だ。この3日で、全員が相当に強くなっている。相変わらずそのチェックはエコが抱き付いてくるのを受け止められるかになったが、一番小柄な霰ですら体勢を崩さずにエコを受け止めたので、充分だろうと思われる。

「夕雲さんと風雲さんは勘を取り戻したようですね。なので、私は霰さんと初春さんを重点的に鍛えましょう。特に初春さんは皆さんより練度が低いですから」

「助かるのう……今後もよろしく願いますぞ」

息も絶え絶えではあるが、成長は嬉しい様子。ここからはこれとは違う形の訓練で同じようになることだろう。基礎訓練に戻りたくなるほどである。

3日も経てば、他のこともいろいろ出来ているもので、ここでは一番の新人となるリコの艤装の修復も完了。本人はそういうものは専門外であるために手出ししなかつたが、いざ完成したら表情を変えずとも喜んでるのがわかつた。匂いは嘘をつけない。

リコの艤装は今までに無かつた陸上施設型。エコのような自立型のようにも見える、大きな口と腕を持った椅子と、これでもかというほど艦載機を発艦した、幾何学的な模様の滑走路。空母とも違うシステムなので、エコとは共通点が無いはず。シロクロの艤装並に修復は苦戦するかと思われていた。

しかし、先日の嵐でその残骸がほぼ全て流れ着いてくれていたため、修復は滞りなく進んだらしい。メインはセス、サブにシロクロと配置したからか、思いの外簡単に終わったようだ。

クロはどんどん組み上がっていくリコの艤装を見て少し羨ましそうだった。0から作る自分達の艤装とは違うため、その辺りはすぐに割り切つたようだが。

「マヤの言つてた細工もしておいたよ。今のリコなら使いこなせるはず」

「人の艤装に何をしたんだお前らは」

直つたのは嬉しいが、細工は気に入らないらしい。すぐに問いたです。それに対して、摩耶はニヤリと笑みを浮かべながら説明した。

「アンタの脚、戦艦の脚になつたんだろ。なら、アンタも海上を航行出来るんじゃないかと思つてな」

「……は？」

素っ頓狂な声を上げるリコ。私も流石に驚いた。

ここに漂着したりリコは両脚を失い、それを死んだ部下の戦艦2人分で補っている。そういう意味では、脚だけは別の艦種であると言える

だろう。同じ治療をされている摩耶は、同じ艦種である重巡ネ級の脚であるため、何の違和感も感じないだろうが、リコは違う。

「脚にあの戦艦ル級の艤装が装備出来るだろうから大丈夫だと思うぜ。それに、そっちの艤装も海の上に浮けるようにしておいた。つまりアンタは今、移動航空基地つてことだな」

「もう移動要塞だね。心強いよ」

驚きで声が出ていないようである。海上を航行しようだなんて思ったことも無いだろう。そもそも自分の島から出ることすら無いはずだ。出た時すら、部下に運ばせるのが当たり前。

それが、幸か不幸か全て自力で出来るようになってしまった。いや、本来なら出来なかったかもしれないが、この工廠組の知恵と叡智の結晶で可能にしまった。

「とはいえだな、テストはしてもらわないといけないし、初めてのことから、多分最初はうまく動くことも出来ないだろうな」

「待て。心が追いつかない」

突然言われてもこうなるだろう。だが、摩耶もセスも製作者だからか、早く試験がしたくて仕方ないようである。

「リコ、靴はこっちな。戦艦の子の艤装」

「大型の艤装は普段通り背中に接続すればいいからな」

「おい、お前ら」

結局2人の圧に押し負けて艤装の試験をすることになる。知り合い相手だとセスも結構押せ押せになるようである。人見知りは何処に行ったのか。

工廠故に、水場は真隣にある。そこに、艤装を装備した状態で立たされているリコ。もうどうにでもなれといういろいろ諦めた表情。

「まずは海面に足を着けてくれ。反発してくるなら成功だ」

摩耶が先に海上に降り、進むことを促す。成功したら別にいいのだが、失敗したらそのまま海に落ちてずぶ濡れということになるわけで、リコは当然抵抗する。結果的に、まず艤装が浮かぶかを確認することになった。

リコと繋がっているのです、それを動かすのは当然リコ。今までは艀装をその場から動かすこともそこまで無かっただろう。だが動かせないのは流石に面倒なので、その大きな腕で這いずり回るように動く。

「これで沈んだらただじゃ置かないからな」

「おう、心配しなくてもいいぜ。こっちは大丈夫だ」

艀装が海面へ。普通だったならそのままズブズブと沈んで行ってしまふところを、陸にいるときと同じように鎮座している。そしてそのままの格好で海上を航行出来るようになっていた。

なんでも、何処ぞにいるイギリスの戦艦が近い艀装を持っているらしい。玉座のまま滑走するということで、そのシステムを真似て組み込んだとのこと。

「……本当に動いている」

「な？　じゃあ、リコはコイツに座ってでいいから海に出てくれ」

「あ、ああ」

普段使うように、艀装に座り海へ。幸い艀装には握りやすい角が生えているため、そこを掴んで移動させる。速度に関してはまだわからないが、陸上施設型であるリコが海に出られるようになったのは確かだ。

だが、次がある。リコ自身が海上に降りられるかどうか。

「……嘘だろ」

海面に足をつけた瞬間、リコの様子が変わる。水の上なのだから、何の反発もせずに沈んでいくと思っただろう。だが、しっかり地を踏み締めているような感触に変化していたのだ。驚くに決まっている。

ゆつくりと海面を踏みしめ、その場に立ち上がった。今のリコは陸上施設ではなく艀。陸上施設並の艦載機を持つ航空母艦と言っても過言ではないだろう。

「うし、成功！」

「やったねマヤ。うまく行ったよ」

喜ぶ2人を尻目に、リコの方はというとその場から動けないでい

た。初めての海上、私達のように最初から教育されているものと違い、バランスなどが全くわからないはずだ。すました顔だが脚は少し震えている。冷や汗の匂いも少しだけ。

「……あいつらはこんな感覚で戦っていたのか」

しみじみと呟いた。その場に立っているだけで精一杯。一步踏み出すのも難しそう。

「艀装の上に戻るか?」

「なんとか……な」

握っている艀装の角を軸に、艀装にまた腰掛ける。余程のことが無い限り、艀装の上にいるままの方がいいのではなからうか。バランスもそうだが、結局のところ艀装が無いと海上に立つことは出来ないのなら、同じ条件の艀装側に乗っておく方が安全。

その後、速度の検査をしたところ、どうしても速度はそこまで出せないようだった。低速艦のセスよりも遅い。動けるだけでも良いのでそこまで問題視はしていなかったが、もし戦場にまでしつかり出るのなら、なるべく素早く動ける方がいい。

しばらくは航行訓練ということで、その付き添いは私がやることにした。摩耶もセスも、その行動を遠目で見てさらなる改良を加えようと躍起である。自分達の本来の艦種を忘れているのでは。

「まさか私が、陸を離れて活動することになるとはな」

またしみじみと呟く。誰もが予想外の進化を遂げてしまったリコだが、一番驚いているのは本人であろう。

「これなら私の本来の場所に帰ることが出来るな」

「帰りたいか?」

「全てが終わったらな。今は部下達の仇討ちが優先だ」

確固たる意思を見せる。何もせず、艀装が直ったから帰るなんて言ったら、部下達が浮かばれないと。自分の手で、納得できる形で決着をつけたいとリコは語る。

シロクロもそうだが、リコが私達に協力してくれる大きな理由が、元いた場所に戻ることだ。深海棲艦というのは帰巢本能がとても強いようだが、リコは陸上施設型という土地に依存するタイプのため、

それが特に強い。

それでも帰ることを後回しにして協力してくれるのはありがたい。私達も、リコの仇討ちは手伝いたいと思える。その標的は、勿論大淀である。

「これで私も出撃出来るんだろう。細工と聞いて何をしでかしたのかと戦々恐々だったが、この改造なら大歓迎だ」

「そうか」

「それに……今の私は部下と共に在る」

何度目かわからないが、慈しむように脚を撫でる。自分のもののように、自分のものでは無い脚。姫を生かすために、最後まで奮闘した戦艦ル級の脚。

「あいつらの最期に報いるためにも、私は力を貸そう」

「ありがとう」

「だが、な。こんなことを言うのは癪だが……海上にこの足を下ろすのは難しい。あの連中ではないが、私も訓練をしなくてはいけないのだろうな」

基礎訓練をしている九二駆を眺めながら、自嘲気味に笑う。

深海棲艦、特に姫級であるが故に、最初から完成しているリコ。努力などせずとも、私達にしてきた絨毯爆撃も難なくこなしたのだろう。出来ないことはやらなかっただろうが、今回は話が違う。

「航行訓練は、摩耶やセスが手伝ってくれるだろう。若葉では身長が合わない」

「ああ、奴らに頼むさ」

ある程度沖に出たところで一旦ストップ。施設がギリギリ見え、近海警戒をしている第二四駆逐隊の姿も見える場所。

「久しぶりだからな、一度慣らしておく。なに、爆撃などしない。お前達の言う、周辺警戒を手伝ってやる」

幾何学模様の滑走路が動き出し、海面と平行に。瞬間、戦闘機が次々と発艦していく。1機が発進したかと思えば、即座に次の1機が補充され、それが発進したかと思えば、さらに次が補充。あつという間に数十機の戦闘機が上空を埋め尽くし、少し空中で待機した後、急

激にスピードを上げてあらゆる方向へと飛び立った。

敵に回すと厄介極まりなかったが、味方にするとしても心強い、強烈な航空戦要員だ。今までセスしかいなかった部分を補えるだけでも最高の戦力増強。

「大丈夫だな、鈍っていない」

「さすがだな」

「私も姫の端くれだ。そう簡単に衰えやしない」

艦娘と深海棲艦の差が如実に現れている。

「異常は無いようだ。一度あちらに戻るとしよう」

「ああ」

気が済んだのか、リコが施設に戻っていく。今までやれなかったことがやれて、晴れ晴れとした表情だった。

今後はリコも近海警戒に参加してくれることになった。定期的に航行訓練をしつつ、基本は二四駆のサポートという形で近海へ戦闘機を飛ばし、より強固な防衛体制を作っていくこうとしている。

あちらの力は強大だが、不意打ちでなければまだ対策出来る。さらに言えば、リコはセスと同様、夜でも発着艦可能。比較的どころか頻繁に行なわれる夜襲にも対応。嵐の中でも問題ないという心強い言葉も貰えた。

「航空戦力が増えてくれて本当に良かったよ。私だけじゃしんどかったです」

それが一番の目論見だったのではなからうか。施設の戦力の増強も必要だが、セスの仕事を減らすことも重要。今は鳳翔がいるからまだマシだが、そうでない場合はたった1人で防空である。施設全てを1人で守るのは、流石に荷が重い。

「お前だって姫の端くれだろ」

「搭載数はリコに負けてるから。数が増えるだけで万々歳」

とはいえ役割は分担されるだろう。セスは強襲、リコは防衛。事と次第でどちらもやる。

「まあいい。この改造は感謝する」

「おう、なんか不具合が出たら言ってくれや。すぐにどうにかすつからよ」

この施設は駆逐艦ばかりだからか、大人組はそれだけで仲がいいようである。特にこの3人は一緒に行動することが多いようだ。

これでさらに準備が整った。強力な戦力が増えたことで、私達はさらに邁進する。

大本営の遣い

「先生が言っていた監査が来ることになった。おそらくそろそろ到着する」

昼食中、飛鳥医師が全員に公表する。なんでも、本当に直前のタイミングで下呂大将から連絡があったらしく、かねてより言われていた施設への監査がついに入ることになったらしい。

この施設のことは、下呂大将経由で大本営には説明されている。漂着して深海棲艦のパーツにより治療された艦娘がいること、中立区だったものが変化してしまったこと、友好的な深海棲艦が協力してくれていること、全てである。包み隠さず話していることで信用を得ようとしているが、流石に現物を見なければ確定の信用は出来ないだろう。

「先生が連れてくる人だ、余程大丈夫だとは思いますが、監査としては誠実に厳しく執り行われると念を押された。とはいえ、僕らは普通に生活していれば何も文句を言われることはないだろう」

それは飛鳥医師だけではなく下呂大将も太鼓判を押してくれている。私達は何も疚しいことはしていない。ただ自分達の本来の生活を取り戻すために戦っているだけだ。

「まだどんな人が来るかはわからないのでしょうか」

「ああ、それはまだだな。監査は抜き打ちであることは知っているだろう？ 基本的に全ての情報は非公開だ」

三日月の質問だったが、残念ながらその辺りはわからず。どんな人が来るかわかれば、多少は対策が取れたのだが、流石にそこは教えられない。

下呂大将が家村鎮守府への査察を抜き打ちでしようとしていたこととは私達も知っている。それが内通者から漏れたことも。だから、この施設への監査も本来は抜き打ちでなくてはならない。例に漏れず、しっかり抜き打ちである。ギリギリとはいえ、事前に連絡があっただけ恩情があるレベル。

「ともかく、普段通りにしたらい。僕は先生と監察官につくことに

なると思うが」

「ならあたしらは普通に工廠だな。リコの艦装をもう少し弄りたい」

「私はお部屋の掃除ね！」

本当に普段通りである。私、若葉は正直暇になったので、自分の艦装の整備でもしようか。リコの航行訓練で一度海に出ているし。

「若葉、申し訳ないんだが、最初だけは僕と一緒に出迎えをお願い出来るか」

「何かあるのか？」

「念のため、匂いをな」

下呂大將が連れてくると言っても、まだ大本営に内通者がいないとも限らない。あくまでも念のため。向こうがこちらを疑ってくるのなら、こちらでも向こうを疑ってかかるべし。

大淀に関係しているものなら、何かしらの匂いが付着している可能性は高い。信頼度はさておき、やらない理由は無いだろう。

「了解した。初対面の相手の匂いを嗅ぐというのは抵抗があるが」

「先生にもコソツと話しておいた。お互いの信用のためとな」

ならいい。万が一のことは考えた方がいいに決まっている。信用していないわけではないが、裏があらわれても困る。内通者である可能性が僅かにでもある以上、そこは念入りに。

それから間もなく、下呂大將と共に監査が施設に到着した。今回も陸路だったが、護衛の艦娘を2人分連れてくる関係か、車両が2つ。片方のトラックは相変わらずまるゆの運転だったが、もう片方の公用車はまさかの下呂大將が運転。そちらに大本営からの監察官が乗っているのだろう。

「着きましたよ。ここが例の施設です」

「……えらく遠いところなんだな……」

後部座席から下りてきたのは、凜々しい面持ちの女性提督。あれが監察官を務める大本営の者。大本営にはもう少し歳の行った者ばかりかと思っていたが、その女性は見た限り若々しい。

大本営と言っても普通に鎮守府であり、提督は数多く在籍してい

る。大淀の内通者である目出も、大本営所属の提督であり、自身の鎮守府を持つエリート中のエリートだった。この女性も同じくエリートなのだろう。

「飛鳥、それに若葉が出迎えですか」

「ええ、そちらが今回の監察官ですか」

「大本営所属の提督、^{アタラ}新だ。階級は大将、よろしく頼む」

下呂大将と階級は同じでも、大本営所属というだけでさらに上。元帥に届いていないだけという超エリート。

「そんなに畏まらないでほしい。実は私も先生の弟子なんだ」

「相変わらず手広い教育ですね先生」

「性に合ってるんでしょね。教え子が私の上に立つというのも、なかなかどうして楽しいものですよ」

「先生が私を推薦してくれたんだろう。おかげで今の役職だ。自分がやりたくないからといってまったく」

つまり、この新提督も来栖提督の姉妹弟子にあたるようである。飛鳥医師とは面識が無いということは、割と新人なのかもしれない。エリートというよりは、天才の類か。

「だからと言って、監査を甘くすることは無い。特にこの施設は、我々大本営が要注意として認識している。侵略者たる深海棲艦を協力者として召し抱えているというのは、どうにも理解が出来ない」

「それは見てもらえればわかることです」

新提督の視線は私の方へ。施設に入る前に、この場にいた私から確認していいこうということか。私は外見に出てしまっているタイプなので、判断はしやすいだろう。

「……話に聞いていた、瀕死の重傷を深海の四肢で補ったという艦娘か」

「ああ。若葉は両腕と脚の骨、あとは腹の皮膚が移植されている」

傷痕を見せようかとも思ったが、今は施設の外。腕がなくては見せられないのでやめておく。

「その頬の痣もか」

「これは少し違う。姫の腕が若葉の負の感情に呼応してしまったらし

い」

マフラーをほどこき、首に巻き付きながら頬まで伸びる痣を見せる。それを見た時、新提督から微妙に動揺の匂いを感じた。ほんの少しの冷や汗。ここまでのものを予想していなかったのだろう。

「先に言っておく。これは誰のせいでもない。強いて言うなら、感情を制御出来なかった若葉のせいだ。ここにいる者は誰も責めないでほしい」

マフラーを巻き直して、真正面から見据える。手の辺りから汗の匂い。拳を強く握ったことかいた汗。怒りを覚えているのか。誰相手にだろう。飛鳥医師を相手にするのはお門違いだと先に伝えたが。

ついでに、さりげなく新提督の匂いを嗅ぐ。少なくとも薬や深海棲艦の匂いは感じない。下呂大将はお茶と畳の匂いがしたが、新提督は椿油と土の匂いがした。前者は身嗜みの類だろうが、後者は何だろう。土弄りが好きなのだろうか。

ともかく、不審なところはなく、ひとまずは安心。信用出来る相手であることは理解した。あとはこちらを信用してもらわなければ。

「不審な匂いはない」

「安心しました」

嗅覚による判定の結果を下呂大将に伝えた。その言葉に新提督が訝しげにする。流石に私の嗅覚については聞いていなかったようだ。下呂大将に説明されてまた目を見開く。

「土の匂いがする。何か花でも育てているのだろうか」

「そこまでわかるのか!？」

「焼けた鎮守府からタバコの匂いを判別出来る嗅覚ですよ？ 彼女の前では嘘はつけません。事実、私は若葉が匂いで黙秘を崩す瞬間を見えていますからね」

夕雲に尋問している時の話か。そんなこともあった。

それを知った瞬間、新提督は何か得体の知れないものを見るような目で私を見た。すぐにそれをやめてくれたが、その視線をハッキリと覚えてしまった。自分が特殊なものであることは自覚しているが、そんな目で見られるのは悲しい。

「新さん、今の視線は施設を管理するものとして許せません」

飛鳥医師がいち早く気付き、私の前に出て注意する。相手が上役であろうが関係ない。対等ではないにしろ、言いたいことはハッキリ言っておくべきだ。監査なのだから、こちらの思いは全て知っておいてもらわなくては。

「この子達がこうなってしまった原因は僕にあります。何かあるなら僕に言ってください。ですが、若葉や他の者をそういう目で見るのはやめてもらえませんか」

「気分を悪くしたのなら謝ろう」

私の前にしゃがみ込み、視線を合わせられた。土の匂いのおかげか、この人が本来穏やかな人であることがわかる。私の特異性を目の当たりにして、ただ驚いてあんな目をしてしまったのだと思う。

普通と違うものを見たらそういう感情を持つことくらい、私だって理解しているつもりだ。今まで面と向かってされなかっただけで、内心そう思っていた者はいたかもしれない。だが、実際にされるとなかなか心にク。

「言い訳にしかないかもしれないが、そういう能力を初めて見たから驚いてしまった。それで君を傷付けてしまったのなら、本当に申し訳ない。断じて君を卑下するつもりは無いんだ」

「別にいい」

謝ってもらえるのならまだいい。さんざん人様の外見を見窄らしいと卑下してきた大淀に比べれば億倍マシだ。

「若葉は別に気にしてない。自分でもわかってるからな。だけど、ここにはそういうのを本当に嫌う者がいるから気をつけてほしい。下手をしたら監査どころでは無くなる」

「肝に銘じておこう。忠告ありがとう若葉」

提督という存在に嫌悪感を持つ曙と、人間そのものに嫌悪感を持っていた三日月が該当者。そうで無くても、今の言動は不和を生むものだ。気をつけてもらいたい。

この人はそういうことをわかってくれる人だろう。そうであつてくれ。

「もう、提督はもう少し自分を出した方がいいよ。普段鎮守府でやってみるみたいに。監査だからって気を張ってるからそういう失敗するんだって」

と、知らない声が聞こえてきた。まるでゆ運転のトラックから、見知らぬ艦娘が降りてきていた。後ろの神風も手を振ってくれる。

駆逐艦程に小柄だが、艤装を見る限りは軽空母。鳳翔と同じような弓を持っていることで気付くことが出来た。新提督と似たような匂いがするため、おそらくは秘書艦。椿油の匂いに紛れてするのは、玉子焼きの匂いか。

「軽空母、瑞鳳です。新提督の秘書艦ね。よろしく」

握手を求められたので素直に応じる。新提督とは違い、眩しいほどの笑顔で私達に接してくる。

「うちの提督ね、大本営に所属してからこういうことするの初めてだから緊張してるの。嫌なことしちゃったみたいでゴメンね？」

なるほど、大本営として新人なのか。新人に重要な施設の監査を任せるとは、この人は余程のやり手なのかもしれない。実力は信用できそうである。

だが、第一印象が悪かった。私だけで良かったが、施設の者を普通とは違う者として見てしまった視線は、おそらく忘れることが出来ないだろう。私の中では、新提督は苦手な部類に入ってしまった。

「土の匂いがどうたらって言ってたけど、あの人、ガーデニングが趣味なの。鎮守府の一角に庭園があるんだ」

「そうか、それで」

「普段は鼻唄交じりで庭弄りしてるような人だから、警戒しないであげてほしいな」

緊張で表情が硬くなってしまふ人なのかもしれない。実際、新提督は後悔しているように手で顔を覆っている。

「失敗した……艦娘はデリケートなものだとわかっていたのに」

「次からは気をつけることですね。君は少し不器用故に、真意を間違って取られやすいんですから」

「重々承知している……」

あれほど後悔してくれているのなら、信用できるだろう。だから、聞きたかった。

「新提督、本当に驚いただけか。正直な言葉を聞きたい」
「何を突然」

「若葉の痣を見て、何か怒りを感じたように思えた。誰に対しての怒りなんだ」

そこまでわかるのかと、今度もまた驚かれた。だが、先程と違い、私のことを得体の知れないものとして見る目ではない。隠そうともせず、素直に目を見開く。

「飛鳥医師に対してならお門違いだぞ」

「彼にでは無い。君にそこまでの怪我を負わせたものに対してだ。今ならば家村の大淀か」

今度は包み隠さずに怒りを露わにした。

「艦娘は人間とは違うが、君達が子供であることには変わりあるまい。子供が怪我を負っている姿を見るのは辛いんだ」

「そうか。ならいい」

「愛らしいものが傷付く姿を見て、怒りを覚えずにいるものがあるだろうか。いないだろう。特に顔になぞ傷付こうものなら、入渠で治るとしても気分が悪い」

今まで押し留めていたものが溢れ出るように、感情を表に出してきた。今の私の姿を悲観しているわけでも無く、この姿になる治療をした飛鳥医師に対して怒りを覚えているわけでもなく、原因を作った大淀に対して怒りを露わにしている。

だんだん新提督がどんな人かがわかってきた。今でこそ監査という大役を全うしようと硬くしていたが、本来は熱血溢れる、艦娘思いの良い提督なのだろう。ガーデンングも艦娘の生活環境を明るくするためだったりするのかもしれない。

「飛鳥医師、この若葉の痣は治療出来るのか」

「今は出来ずとも、必ず探し当てます。若葉だけじゃない。ここにいるものの殆どは、僕の治療で命は取り留めたが、艦娘とは無縁の傷を持ってしまった。それを治療し、元の身体に戻るのが当面の目的で

す」

確固たる意思を見せる飛鳥医師。嘘のない、真つ直ぐな眼で新提督を見据えた。

「そうか。期待している」

それを受け、今までの硬かった表情が少し緩んだようだ。これが本来の新提督。先程の視線は、緊張故の間違いだったと思える。記憶から消えそうには無いが。

「改めて、先程の無礼、申し訳ない。包み隠すのはやめよう。監査という大役ではあるが、普段通りに行かせてもらおう」

「そうしてください。ここには楽しく生きようとするものが多いので」

「了解した。私がそれを壊すわけにはいかないからな」

最初の凛々しい顔から、慈悲のある優しげな表情へ。これが本来の新提督。なら心を許してもいいだろう。

開幕から一波乱あったが、大本営の監査が始まる。私達は普段通りに過ごすだけでいい。

友好的な深海棲艦

施設が今のままでいられるように、大本営からの監査、新提督が施設にやってきた。開幕から一波乱あったが、下呂大將が連れてくるような人なので何も問題ないと思う。実際、すぐに謝罪をしてくれたし、私達のことを気にかけてくれるような言葉も貰えた。信用は出来る。

最初の一件は私、若葉が受けておいて良かった。三日月辺りがあの視線を受けていたら、半狂乱で襲い掛かってしまうかもしれない。ここでの生活で治まっている人間嫌いが再発しかねない。

ひとまずわかったのは、新提督は感情的な部分がとても不器用であること。普段と同じようにすると書いていても、大役での緊張はなかなか取れないものだ。

「では改めて、監査を始める。ここからはしっかりとお役目を果たさせてもらうぞ」

「了解です。僕らには何の引け目もありませんから。好きに見ていただく下さい」

飛鳥医師にしては強気な発言。後ろめたいことは何一つ無いのだから、どのようにしてくれても構わない。さっきのようなことさえ無ければ。

「何か問題がありそうなら、すぐに嫌疑をかけさせてもらう。感情は持ち出さず、公平な立場から見させてもらうから覚悟するように」

「ええ、理解しています」

勿論覚悟している。それでも私達は、間違ったことをしているなんて思っていない。誰にも迷惑をかけることなく、楽しく生きるためにここで生活しているだけだ。

監査は入口からグルリと施設内を回ることと進められていく。間取りに一番最初に見られるのは医務室と処置室になるのだが、今はしっかりと片付けられているため、何も問題なく進んでいく。日頃から雷が整理整頓してくれているおかげである。

ただ、処置室の地下だけは飛鳥医師も見せることに抵抗があったようだった。潔白を証明するためには隠し事は出来ないため、仕方なく新提督と下呂大将だけを通したが、戻ってきた新提督は少し顔色が悪かった。

「そういう施設であることは事前に聞いていた。他所でもこういうものを保管している研究施設があるというのも知っている。だが、現物を見るのはなかなか堪えるものだな」

「提督、私達は戦場でいつも見てるんだけど？」

「ああ、そうだな、すまない」

私達には未だに見せてくれない地下の全容は、監査的には問題無しとして判断された。隅々まで見たから顔色が悪いのだろう。あまり見ることのないものも数多く眠っているのだから。

「あれを使ってこの子達の治療をしたのか」

「はい。ここで出来る唯一の命を救う方法です。ドックがありませんから」

「なるほど……結果的に適合したわけだな」

命を救うという行為には、何の不信感も持っていない新提督。深海棲艦のパーツなんて以ての外、という考えでは無いようで少し安心。それを否定されると、私達継ぎ接ぎの者の存在そのものを否定されることになる。

「そういう形ででも、子供の命が救われたのは、私としては喜ばしいことだ」

「そう言っていただけだと助かります」

監査というのは自分の感情を持ち出さないと言っていたが、早速感情が出ているようだ。これくらいの方が人間味があつていいと思うが、監査という名目であるが故に、これはあまりよろしくないのかもしれない。他の監査がお役所仕事なのかは知らないが。

一応、下呂大将も改めて施設を確認してくれているため、二重の監査になっているのはいいこと。立場は新提督の方が上でも、精神的には下呂大将の方が上。その2人なら信用できる。

「悪用するようなものはないため、医療機器も問題無しとする。これ

は職人妖精が？」

「ええ、妖精印の家具物品なら確実にしよう。悪戯に悪事は働けません」

「なら安心できるな」

何処の鎮守府もあの職人妖精達が手掛けているようなので信頼が厚い。そういう意味では、修復を頼めてよかった。そこも考えて下呂大将は許可を出してくれたのかもしれない。

その足で今度は工廠。医療施設には似つかわしくない設備ではあるものの、これがあつてくれたおかげで、私達は敵の襲撃に対して準備が出来る。

今はちやうど摩耶と深海棲艦組が屯している状態。この施設の一番の特異性が見える場所でもある。

「離すな、離すなよ、セス、絶対に離すな」

「フリ？」

「フリじゃない！ 何度も言うが私は泳げないんだ！」

何をやっているかと思えば、リコの航行訓練のようだ。工廠内の海面を使ってやっているようだが、セスがリコの手を持ってゆつくりと海面を移動している。海上艦には全く経験のない訓練だった。

万が一沈んでしまってもいいようにシロクロが近くで待機しているが、今のところはその仕事はしていないようだ。リコはまだ濡れていない。

「何だアレは……」

「陸上施設型の航行訓練ですが」

「飛鳥、これは流石に事前に聞いておきたかったですよ」

新提督は勿論のこと、これには事前に聞いていなかった下呂大将も驚きを隠せないようである。神風と瑞鳳は言葉もないようだった。

そもそも陸上施設型なのだから航行とか普通出来ないのだ。艦種すら超越している時点でおかしいことは明らか。

「ん？ ああ、アンタが監査の」

最初に気付いたのは摩耶。今はリコの航行訓練を見ながら第九二駆逐隊用の武装を作成中。艦娘と深海の艦装を組み合わせた、いつも

の水鉄砲である。ただし、少しだけ威力を上げたもの。

あちらも私達とは違い、前衛後衛の分別はせずに全員が砲撃出来るように仕込まれている。そのため、摩耶が作っている水鉄砲も4つ以上と多い。

「君は眼か」

「あと、今は見せれねえけど、脚が移植されてんだ」

ツナギ姿のため、脚の繋ぎ目は見せることはできないが、眼帯を外して輝く瞳を見せる。この時に何の反応も無かったので、新提督から何か違和感を抱くようなことは無かったようだ。

「ここの艤装と武装は摩耶が？」

「おう。ここにや工作艦はいねえからな。今だと若葉もやれるし、シロクロとセスもいるから手は回ってんだ。ああ、シロクロはあそこの潜水艦で、セスは手え引つ張ってる方な」

見事に共存出来ていることを示している。セスの艤装であるエコモ、今は摩耶の横で静かにお座り。セスの方をジッと見ながら待っている状態。

「……話には聞いていたが、実際に見ると驚きを隠せない。いや、それはもういい。何故リコリス棲姫が航行出来るようになってるんだ」

「そりゃあ、アタシらが艤装を弄ったからだよ。それに、リコの脚は今、戦艦ル級のモンだ。陸上施設型にして海上艦。何も間違っちゃいねえ」

「そういうことではなく」

ケラケラ笑いながら説明するが、新提督はまだ納得していない様子。

本来陸に封じ込められるであろう陸上施設型が、修復されているどころか、わざわざ通常以上に勢力を拡張出来るように改良されてしまったのはどういうことかと聞いているのだろう。事と次第によっては、嫌疑の対象になる。

だが、私達は間違っていると思っていない。何も後ろめたさを感じる事なく、真っ直ぐな瞳で新提督に伝える。

「アンタ、自分の家ぶっ壊された事あるか」

「……今のところ無いな。鎮守府も幸いなことに襲撃を受けたことはない」

「アイツ、大淀のエゴで全部ぶっ壊されちゃったんだ。住処も、家族も、全部だ。残ったのは半分死んでた自分と、死んだ家族の脚だけなんだよ。だからよ、せめて自分の脚で何処にでも行けるようにしてやりてえじゃねえか」

完全な感情論だ。監察官相手にする話ではない。それでも、私達はこれが間違いではないと思える。

「それに、リコは人間を襲うような奴じゃねえよ。そうじゃなければ、仲間を救うために花を分けてくれなんて言われて騙されてねえ。問答無用で殺し合いだ。ただでさえ普通じゃ近付きづれえトコにいたんだしな」

花を大事にしている深海棲艦なんて、後にも先にもリコだけだろう。他のリコリス棲姫がどうかは知らないが、少なくとも私達の出会った中ではリコはそうだ。

侵略など考えず、仲間、家族達とただただ島に生えた花を愛でながら暮らしていたリコが、人間を襲うなんて考えられない。現に今、新提督の存在を視認しているかは知らないが、襲いかかってこないではないか。

難しい顔をしながら大分考えていた新提督だったが、何か決断したようで、口を開いた。

「この件は持ち帰らせてもらう。友好的であり事件解決にも協力しているようだし、私としては保留としたい」

「あいよ。センス、それでいいよな」
「ああ」

今回の監査で一番のネックになるであろう、保護している深海棲艦の扱いは今回は保留。現状維持となる。

友好的な深海棲艦なんて見たことも聞いたこともないものを、独断で処分は出来ないだろう。あちらで協議を重ねるなりして、今後を決めていくことになる。その結果が処分と言われるってしまった場合、また考えなくてはいけないが。

「あ、知らない人來てるね。カンサ？の人かな」

気付けばシロクロが海から出て新提督に向かってきた。リコはフラフラしながらも自分の艦装に辿り着き、何とか腰を落ち着けている。セスも一息ついてこちらを見ていた。あちらは休憩に入った様子。

クロは積極的に、シロは消極的に新提督へと興味を示している。ズカズカ前に来るクロに対し、シロは陰に隠れているような、そんな感じ。だが、警戒はしているが、嫌悪感を持っていないようだ。下呂大將が連れてきたというのが大きいか。

「深海双子棲姫か」

「私はクロで、姉貴がシロね。おねーさんは？」

「私は新だ。よろしく」

私の時と同じように、視線をクロに合わせるためにしやがむ。

子供が怪我しているのを見るのが辛い、子供の命が救われたのが喜ばしいと言っていたこと、さらには愛らしいものという表現をしたことから、この人は相当な子供好きだ。

比較的幼い外見のシロクロは、新提督にとっては子供扱いになるようだ。先程までの難しい表情が消え、子供に向ける慈悲深いものに。

「どう？　ハハ、いい場所でしょ？」

「すまない、まだ全部は見えて回れていないんだ」

「そっか。でも大丈夫だよ。絶対気にいるから！」

ニツコリ笑って説明するクロ。最終的にはここを去ると言っているものの、艦装完成が遅れることを喜んでいる節もあるくらいに、この施設のことを気に入っている。

一切の敵意が無いことは誰にだってわかる。こんな無邪気な子供が敵でないのは疑いようが無い。当然だが、クロに嘘の匂いは感じない。

「そうか。君がそう言うのなら、間違いないのだろうな」

「そうだよ。ここはいいトコだよ。ねえ姉貴？」

「……うん、住みやすい……いい場所」

クロに話を振られ、シロが新提督の前に。

「……私達は……人間と争うとか考えてないよ……」

「ああ、君達を見ていたらわかる、それに、襲うのなら今私が襲われているだろう。この数に襲われたら流石にどうにも出来ない」

「うん……だから、信用してね」

相変わらず核心をつくような言葉に、私も少し驚く。

シロクロは特に敵対心を持っていない深海棲艦だ。セスのような人見知りでもなく、リコのような厳しさもない。嘘なんて一切つかず、隠し事すらしらない、表しかない性格だ。これを疑うことは出来そうにない。

「ああ、わかった」

監察官という立場上、今の言葉も社交辞令のようなものだ。期待を持たせる言葉も言えず、返しが端的になつてしまう。余計なことが言えない。それを察してか、シロもそれ以上は何も言わなかった。

「瑞鳳、君からはどう見える」

「私？ そうだなあ……」

当然話を振られ困惑する瑞鳳。

今までは新提督の隣について同じものを見ていただけで何も口出しはしていなかった。ここの光景を見て何も言えなかったというものもあるが、少なくとも口出し出来るような状況に見えなかったようである。

「敵にはならないと思うよ。こんなに可愛いんだもの」

新提督の代弁者として、瑞鳳は感情論で監査している。直感的に、感覚的にこの状況を見て、瑞鳳としてもここの深海棲艦は敵対しないと判断したようである。

「あっちの人達は外の人間に慣れてないだけだと思うし。護衛棲水姫の方は単に人見知りなんじゃないかな。視線を合わせようとしなから」

「敵対の意思は？」

「無いね。そういう視線は感じないよ」

チラッと見ると、セスはリコの艦装の陰に隠れるようにしていた。このところあまり表に出ていなかった人見知りが再発してしまった

ようである。

逆にリコは、新提督と瑞鳳を値踏みするように眺めていた。一度騙されているという経験上、他人を信用するのはしつかり考えてからにしているようだ。治療を施した私達はすぐに信用してもらえたように良かった。

「ということだ。私と瑞鳳は、この深海棲艦は敵対しないという判断をした。しかし、私だけが判断したところで大本営の決定ではない。だから保留だ。持ち帰って検討する」
「充分です」

シロクロとの会話で新提督の心を動かせたか、先程よりも表情が優しい気がする。持ち出さないと云った感情を引き出せているような、そんな感じ。

監査は順調に進んでいる。だが、1つ目の難関は越えられたが、次の難関が待ち構えている。

三日月だ。

根深い傷

新提督の監査に付き合う私、若葉。1つ目の難関である、友好的な深海棲艦に関しては、直に見てもらったことにより事なきを得た。

あちらも多少は理解しているとはいえ、そのものを見て態度を変えられる可能性だつてあったが、今の段階では保留とし、大本営に持ち帰り検討するしてもらえた。

「医療設備と工廠以外だと、あとは居住スペースになります」

「医療施設としての監査は終わったが、本来所属するはずのない艦娘が、どう生活しているかは確認しておきたい」

プライベートな場所になるものの、清廉潔白であることを示すためにはそういうところも見せておかねばならないらしい。何も私室を1つ1つ確認していくというわけではないようだが、ここにある設備、食堂や談話室などは確認することのこと。

「その前に、事前の知識として入れておいてもらいたいことが」「何か?」

「うちの三日月は、本当にデリケートな子です。なので、先にお伝えしておきます」

次は2つ目の難関、三日月。私以上に外見に出てしまっている三日月を見たとき、新提督がどういう反応をするか。もしも、三日月のコンプレックスに触れるような物言いをした場合、この施設全体で新提督を糾弾する可能性がある。

なるべく穏便に済ませたいが、それは新提督次第。三日月だつて、長くここに滞在して心を強くしている。私達は三日月を信じているが、初対面の新提督を相手にした場合、どうなるかわからない。

三日月がどういう艦娘であるかを説明すると、新提督の表情が見る見るうちに変化していく。いろいろな感情が交錯していたが、一番強いのはやはり怒り。子供の顔に大きな傷がついている実情が、どうにも許せないようである。

やはり新提督は子供好きの優しい性格だ。立場と表情から誤解されやすいのだろう。最初に瑞鳳が言っていた通り、警戒するような人

ではないのかもしれない。

「ここ最近は何も潜めていますが、久しぶりの初対面の人間ですから、以前のような反応をしてしまうかもしれません。ですが、それが心の傷というものです。それだけは理解してもらえれば」

「了解した。わざわざ悪い部分を引き出したわけではない。ありのままを見なくては平等ではないからな」

その辺りは理解してもらえて嬉しい。新提督は誠実な監察官だ。

居住スペースと言っても、普通の鎮守府よりも規模が小さめな食堂や談話室があるくらい。今のところ2階が全て私達の私室になっているため、監査は1階止まりとなる。

「あ、監査の人ね！ 片付けてる最中だけど、どうぞどうぞ！」

食堂では、夕食の仕込みをもう始めている雷の姿が。さらに、昼食の片付けとして食堂を掃除している三日月まで。ある意味都合が良く、ある意味都合が悪い、最高で最悪なタイミング。

チラリと三日月を見たが、何食わぬ顔で雷に向き直す。無視したわけではなく、今は触れないようにしてくれた。聞いていた以上の外見の変化だったのだろう、表情は変えていなかったが驚きが匂いで伝わってきた。

「……………この食堂は雷が？」

「ええ。料理出来る子少ないし、ずっと私がやってきたんだもの」

「そうか……………鎮守府ではないから間宮もないのか」

普通の鎮守府には、食堂担当の艦娘、給糧艦の間宮と伊良湖が派遣させられるのだが、当然この施設は鎮守府ではないのでいない。食事の用意も、部屋の掃除も、全てここにしているものでどうにかしている。そういう環境を新提督は知らないらしい。それはそうだ、何処を探しても艦娘がこういう形で働いている施設というのは無いだろう。

「飛鳥医師、君は艦娘に雑用を押し付けているのか？」

「それは違うわ監査の人。私がやりたいからやってるの。先生は研究、私達は家事、それで全部回ってるのよ」

それに、飛鳥医師にこの辺りをやらせたら余計に汚れてしまうの

で、研究に没頭してもらった方がいいのは確かである。それは飛鳥医師の名誉のために言わなかったが、よく知っている下呂大將は後ろで微笑むのみ。

雷の言う通り、私達は自分から進んで仕事をしている。住まわせてもらっているのだから、多少なり貢献しなくては。あのリコですら、定期的に戦闘機を飛ばすことで近海の様子を確認しているくらいだ。残りの時間は施設の周りに咲き始めた彼岸花の世話だが。

「そうか。すまなかつた」

「いえ、そう思われても仕方ないです」

「監査って疑うことがお仕事なんですよ？ それくらい理解してるわ」

などと雷が新提督と話をしている間に、足音も立てず三日月が私の陰へ。やはり初対面の人間は難しい様子。久しぶりに私が三日月の盾となるため、さりげなく姿を隠すように移動した。

半分は人間への嫌悪感。大本営所属の提督という役職にも良くない感情を持っている。ただでさえ新提督の言動次第では施設が傾くのみだから、三日月としては嫌悪感の方が強めか。

もう半分は顔を見られた時の反応に対する恐怖心。コンプレックスを刺激されることが何よりも怖い。つい最近、大淀に刺激されたせいで過敏になってしまっているのだろう。

「三日月」

名前を呼ばれたことでビクンと震える。そして私の腕をこれでもかと掴む。手が震えている。嫌悪感と恐怖で左目から感情が漏れ出し、ビカビカ輝いてしまっている。

「君のことは聞いている。監察官として、私は君からも話を聞きたい」
「……何もお話しするようなことはありません」

カラカラの喉で絞り出した言葉は、拒絶。

当初の三日月に戻ってしまったようだった。顔を伏せ、私を盾にして、目も合わせずを徹底している。毛布とかあったら被って身を隠すほどだろう。あの時のように暴れ出ささないだけマシか。

「そうか、なら仕方ない。飛鳥医師、次に行こうか」

「はっ」

三日月にはそれ以上触れず、監査を続ける。ほんの少しだけ、悲しそうな目をしたのは見逃さなかった。

今の三日月には少々荷が重い。来栖提督や下呂大将のような、確実に味方になる者以外は、全て敵に見えてしまっても仕方のないことだ。それも理解した上で、話しかけはしたが無理に聞き出さない、必要以上の交流を避けてくれた。

「三日月、若葉は監査に付き合う。また後から」

「……」

手を離さない。ここには雷もいるものの、やはり一番安心できるのは私の側らしい。これではこれ以上監査に付き合うことは出来ない。

「すまない、若葉はここに残る。監査を続けてくれ」

ここまで来れば、もう新提督は大丈夫だろう。常に匂いを嗅ぎ続け、監査に裏がないことは大体わかった。敵か味方かは何とも言えないが、少なくとも今すぐ私達が被害を被ることはないだろう。

あとは飛鳥医師に任せ、私は三日月の側にいることにした。そもそも私がついていく必要は無いのだから。

「……三日月、監察官はもういない」

まだ顔を上げられない。手の震えも止まらない。

ほんの少しの涙の匂い。焦りから来る手汗の匂い。嫌悪感と恐怖の中に、罪悪感も混ざっていた。拒絶してしまったことを悔やんでいるが、新提督相手には止められなかったようだ。

それは私達は全員わかつていること。三日月の心の病はそれほどまでに大きい。

この三日月の気配をどこから感じたのか、浮き輪が3体総動員で食堂に駆けつけた。不安定な時こそ、三日月にはよく効くアニマルセラピー。1体は首へ、もう2体は両腕にしがみつく。これで少しでも落ち着けばいいのだが。

「大丈夫か？ 辛いなら部屋に行くか？」

「お水いる？ 気持ち悪かったら吐いていいのよ？」

顔面蒼白で今にも吐きそうな顔だったため、私と雷で介抱する。食

堂であるが故に座ってもらうしか休む方法が無いのだが、やらないよりはマシ。背中を摩りながら落ち着くのを待った。

浮き輪は今度は前側に回り込み抱きしめられる場所へ。より癒される場所で三日月のために行動する。ここ最近は霰や夕雲の下にも行っていたが、今だけは三日月の独占。

「落ち着いて深呼吸だ。大丈夫、今は若葉達しかいない」

「ひっ……ふう……う……」

雷の用意した水を飲んで一息つく。顔色はまだ悪いが、先程よりは落ち着いたようだ。もう近くに新提督がいないとわかり、顔を上げた。今にも泣きそうな表情。

「私、ダメでした……あの人には嫌な気持ちしか出ませんでした……」

「大丈夫だ。若葉はわかってる」

浮き輪達と共に、三日月に温もりを与えるために背中側から抱きしめる。浮き輪も三日月を慰めるように頭を撫でたり腕を撫でたりしていた。手どころか身体中が震え、今にも崩れそう。

「あの人はあの人の仕事をこなしているだけなんだ。それに、不器用な人でな。真意とは違うように受け取られてしまうことが多いらしい」

「そうだとしても……そうだとしても、あの人の一存でこの施設が壊される可能性はあるんですよ……そう思ったら……拒絶しか出来ませんでした……」

震える手で浮き輪を抱きしめながら、か細い声で独白していく。

「やっぱり……私は弱いです。そんな弱い自分が大嫌いです……」

「三日月、そんなに自分を卑下するな。三日月は前より強くなっているよ」

「そうよ！ 三日月は弱くなんてないわ！ 私達が保証する！」

前から感情を抑え込むことなく、新提督に向かっていただろう。発狂し、叫んでいただろう。それをせず、自分の意思を発信できただけでも十分な成長だ。自分を抑えるのが出来るのは強さである。

三日月は弱くない。大淀との戦いの時だって、私のように理性を失わずに懸命に戦っていたではないか。

「新提督が苦手なのは仕方ないことだ。若葉も苦手だからな。さつき、若葉の首の痣を見た時に、若葉的には少し嫌な目で見られたんだ。すぐに誤解だとわかったんだけどな」

先程のことも話しておく。私も嫌なことがあったのだから落ち着こうというわけではないが、辛さは共存していければと思う。

とはいえ私の出来事は、既に新提督の不器用さ故の誤解とわかっていることだ。本来の新提督がどんな人かは大体わかっている。

「三日月、曙の時にも言ったがもう一度言うぞ。最初は若葉の側にいればいい。ゆつくり、ゆつくり踏み出そう」

「……はい……若葉さん……一緒に歩いてください……こんな弱い私は迷惑かもしれませんが……」

「迷惑だなんて思わないさ。三日月は心の傷が他より深いだけ」

長くここにいっても根深いものはすぐには治らないだろう。それでも、強くなるうとしていてだけで充分だ。そうやって来栖提督にも自分から歩み寄れたし、あちらの鎮守府でも嫌な思いはせずに済んだのだから。

「私もいるわ！ もーっと頼ってもいいのよ！」

「……雷さんも……ありがとうございます……」

これだけ根深いトラウマなのだ。もつとみんなを頼ればいい。この施設には三日月を見捨てるような者は誰もいない。人間も、艦娘も、深海棲艦もだ。仲間意識が特別強いこの施設でなら、三日月はもつと強くなれる。

しばらくして監査は終わったようで、最後にもう一度だけ食堂に立ち寄った新提督。あちらもわだかまりを残したまま帰投するのは嫌なのかもしれない。

その頃には、三日月は充分に落ち着いていた。顔色も良くなり、私にしがみつくようなこともしていない。

だが、新提督の姿が見えた瞬間に私の後ろに回り込む。やはり目を見て話すことは出来なそう。むしろ話せるかどうか。

「三日月、安心してほしい。今日の監査はこれで終わりだ」

新提督が話すが、三日月は反応しない。

「だが、数日もしないうちにここに来る。この監査は最重要事項だ。定期的に実施しなければ、大本営は納得しない」

それは私も理解している。ただでさえ深海棲艦が滞在している施設なのだ、毎日でも監査を入れたいところだろう。あわよくば手綱を握りたいと考えるのだってわかる。

「監察官として、この施設は現状維持が最適だと思っている。しかし、深海棲艦を保護しているという事実は変わらない。保護監視下に置き、万が一のことが起こらないようにするのが適切だろう」

現状維持を推してくれているのはありがたい。早急に潰すでもなく、過剰に斡旋するでもなく、今のままで。私達としてはそれが一番ありがたい。襲撃に備えることを許してさえくれれば、私達は何も求めていない。

「……ここからは私情だ。監査とは関係ない。大本営所属でも監察官でもない、一個人として、君に話をしたい」

私の背に隠れる三日月に近付くわけでもないが、離れすぎていない位置でしゃがみ、視線を合わせる。三日月はあちらを見ていないが、誠意が現れている。

「監察官として鼻負は出来ないが、ただの人間としてなら、私は君のことを尊重したい。さぞかし辛い思いをしたのだと思う。今もしているのだろう。私の存在が君を苦しめているのも理解しているつもりだ」

ツラツラと話す新提督は、今だけは隠していた本心も曝け出せているように思えた。監察官ではなく、一個人としての新提督の意思が見える。

余計なことを話さないように口数を減らしていたせいで、あらぬ誤解を生み続けていたのだと思うと、新提督は少し不憫だ。だが、立場が立場だけに口出しも出来ず、悪役を自ら受け入れるしかないのだろう。

「本心と言うのなら、私は君と仲良くしたい。無理だとわかっているも、言葉にはしたかった。それだけだ」

最後まで三日月は顔を合わせる事が出来なかったが、新提督の本心を知ることが出来たのは大きい。子供好きに悪い人はいない。

「……ズルイです。それで拒絶したら、私の方が悪者になるじゃないですか」

「そ、そんなつもりで言ったわけじゃないぞ。私は君を尊重しよう」と「そういうところですよ。私のダメなところが悪目立ちするじゃないですか」

悪態をつきながらも、三日月は私の陰から少しだけ姿を現した。普通とは違う髪と肌を、新提督に曝け出した。それに対して新提督は反応しない。それが最善とわかっている。

「これは先生にも言った言葉です。私を信じさせてください。貴女が信用に足る人物なのか、私に……見せてください」

「了解した。今はそれで充分だ」

一歩前進。三日月もやはり強くなっている。

監査はこれで終了。今のところは保留な部分も多いが、掴みとしては良かったのだと思う。新提督がこの施設についてどう捉えているかは理解出来た。

想定外の漂流物

新提督による施設の監査は終了。無事に終わったかどうかはまだ何とも言えない状態ではあるものの、少なくとも現状維持を推し立てられていることはわかった。これが大本営でどう協議されるかはわからない。

新提督は監査のために頻繁にここに来ると言っているため、その都度この施設がどういう立ち位置にあるかを教えてもらえることになるだろう。なるべくならこのままですつといたいいものである。大本営の考え方に口出し出来ないのが悔しいところ。万が一、この施設の放棄を望まれた場合、私達は路頭に迷うことになる。別の鎮守府に所属しろと言われても、来栖提督の下くらいでないとなし難いだろう。

それは今考えることではない。今はまず、この施設をどう存続させるかだ。当面は襲撃を警戒するくらいしか無いのだが。

監査が終了し、新提督は下呂大将と共に帰投。新提督の秘書艦である瑞鳳は少し名残惜しそうにしていたが、今後も監査という形ではあるが長い付き合いになるだろうと言われると、次はセスの艦載機を見たいと目をキラキラさせながら話して去っていった。セスはそういうのはあまり得意では無いのだが、どうなることやら。

「……はあ……疲れた」

新提督と下呂大将が乗る車両が見えなくなったところで、大きく溜息をついた飛鳥医師。ただでさえ気を使う恩師がずっと側にいた上、こちらに後ろめたいことが無くても、詮索されるというのは疲れるもの。特に今回は、施設の存亡すらかかっているのだから気疲れも激しいだろう。

「もう結構いい時間だな。今日はもう休もう」

「ああ、それがいい。若葉も三日月の側についてあげたい」

新提督と出会ったことで、また三日月が不安定になってしまっている。前進は出来たものの、まだまだ心の傷は深い。今は浮き輪3体総動員の癒しの真っ只中だが、私も側についてあげたいと思う。

その日の夜は第五三駆逐隊で集まり、三日月のストレスを解消する

ための罵詈雑言大会になったのは言うまでもない。曙の後押しもあり、愚痴が出るわ出るわ。押し割には曙も引くほどであった。

やはり定期的に吐き出すべきである。品のない陰口かもしれないが、ストレスを溜め込んでおかしくなるよりはマシ。それを知るのは私達だけなのだから、咎めるものは誰もいないのだ。これも隠れた一面として受け入れている。

翌日。大淀による襲撃から1週間が経過した朝。

ここまで音沙汰が無いのが不気味である。こちらの戦力がわかっていないのか、わかつている上で敢えて何もしてきていないのか。どちらにしろ、私達には緊張感が高まる日々が続く。

もし来るなら以前のように夜襲、もしくは嵐を待っているのでは無いかとみんなが考えていた。正直なところ、私もそう思う。あちらが最も得意としているのは夜襲、さらには荒天の中での戦いだ。こちらを嘗めている態度の割にはそういうところは慎重。

「おはようございます、若葉さん」

「ああ、おはよう」

昨日のストレス発散で随分とスッキリした表情の三日月。私よりも早く目を覚まし、既に朝の散歩の準備までしていた。私起きるのを待っていたようである。

「昨日は恥ずかしい姿を見せました」

「いや、そんなことはない。たまにはああやって発散した方がいいと思う。若葉はいくらでも付き合おう」

「はい、その時はまたよろしくお願いします。我慢していたわけではないんですが……」

話しながら私も準備をして浜辺へ。当たり前のようにセスが既に外にいるのももういつものことである。そして今日はリコも一緒にいた。エコと同じように艀装を装備し、ここまで這いずらせたようである。

「リコも散歩に付き合うのか？」

「いや、朝は早いが一度近海を確認しておくためにいる」

1日に3回から5回、気が向いた時に戦闘機を飛ばし、周辺警戒をしてくれていた。特に今は、護衛艦隊である第二四駆逐隊も眠っている時間だ。やってもらえるのはありがたい。

ある意味無防備な施設を航空戦力で埋め尽くし、その全てが一斉に散開することで、海だけでなく陸までもを確認していった。

「敵に回すとあれだけ恐ろしかったですが……」

「味方だと心強いな」

セスの時もそうだったが、深海の艦載機は普通の艦載機と違う不規則な動きをするのが恐ろしい。バックする戦闘機などインチキにも程がある。

「……ん？」

「どうした」

「1機からよくわからない信号が届いた。漂流物……?」

昨日は嵐でも無かったというのに、よくわからないものがこちらに流れてきているらしい。浜辺の私達にはまだ視認できず、私の嗅覚にも引つかからない。相当遠いところにあるようだ。

だが、ただの漂流物ならわざわざ連絡してくるようなことは無いだろう。余程おかしいものなのだろうか。

「エゴ、私達もちよつと見てみようか」

散歩の予定だったが、リコの発言が気になるため、セスもエゴから艦載機を発艦。2人がかりでその漂流物を確認する。が、だんだんと顔色が悪くなっていった。セスは艦載機と視界がリンク出来るらしい。

「嘘、これヤバイやつ！　すぐにみんな起こして！」

「何があった」

次の言葉で、私達はパニックになることとなる。

「敵の姫！　あいつ！　曙を殺した奴だ！」

曙を殺した奴といえ、私達では何も出来なかった強敵、呂500。ソナーにも反応しない潜水艦であり、殺意の匂いを感じ取れたおかげ

で私は殺されずに済んだだけ。最後まで傷付けることは出来なかった。

奴とは2回、いや、3回戦闘になったが、その全てで何も出来なかった。1回目は曙が殺された拳句、夕雲の撤退を許し、2回目も同じように風雲の撤退を許した。3回目は阿武隈のおかげで無傷の勝利となったが、またも撤退を許している。

それが何故こんなところに。さらには漂流物としてそこにいる理由がわからない。潜水艦なら潜水艦らしく潜っているべきだろう。艦載機でもわかるということとは、完全に海面より上にいる。

「ど、どうしますか!？」

「捕虜にしたいところだが、どういうことだ。呂500はこちらに向かってきてるのか!？」

「向かってきてるんじゃないやなくて、漂ってる感じというか、訳わかんない!」

呂500のことを知らないリコは、私達の混乱の理由を理解していない。だが、私達がここまで狼狽しているところを見て、少なくとも漂流物は私達と敵対しているものであることはわかったようだ。

「殺せばいいか」

「待て。どう出てくるかわからない。こちらで判断する。殺すのは待ってくれ」

一応呂500も艦娘だ。夕雲や風雲のように救出する術はあるはず。せめて動きを封じ昏睡させてから処置を施せば、禁断症状は深いだろうが洗脳を解くことは出来るだろう。

だが、潜水艦相手にどう戦えばいいか。私達にはソナーも無ければ爆雷も無い。強いて言うなら第二四駆逐隊の4人にその辺りを頼むくらいしか手段がない。

「散歩もランニングも中止だ! すぐに対処するぞ!」

朝も早くからてんやわんや。呂500の真意が全くわからない。

施設に戻ってすぐに準備をし、私は即出撃。まだ起きていない者もいるため、三日月とセスにはみんなを起こしてもらおう。リコには周辺

警戒を重点的に頼み、他にも何かいないかを逐一確認してもらおう。あの呂500が囷である可能性も否定は出来ない。

少し近付くだけで、呂500がおかしいことがわかった。多分、私と三日月、あとは摩耶にしかわからないおかしさだ。今の呂500は、深海棲艦の匂いが漂っている。三日月が見たら、得体の知れないものを感じ取っていただろう。

面と向かって戦闘をした時とはまるで違った。それに、身体中に傷がついている。四肢を欠損しているわけではないのだが、擦り傷切り傷が全身についていた。

「……おい」

声をかけると、薄らと目が開く。私の姿を視認した瞬間、

「アッ、ガアアアアッ！」

海面を蹴るようにして私に飛び付いてきた。

「なっ!?! おい、お前……!?!」

「ガアアッ！ ギギイツー！」

飛び付かれたことで押し倒され、そのままマウントを取られてしまった。辛うじて両腕はフリーなため、私の首を掴もうとしてくる手は何とかガード出来ている。だが、華奢な腕からは考えられない腕力にジリジリと押されていく。

以前の戦いで姿をハッキリ見たわけではないが、あきらかにこの呂500はおかしい。こんなに真っ赤に輝く瞳じゃなかった筈だ。それに、理性を感じられない表情。歯を剥き出しにし、涎を垂らしながら私に喰らい付こうとしてくる。

まるで獣ケダモノではないか。

「おい！ 何なんだお前は！」

「アアッ！ ガアウウ！」

どうにか引き剥がそうとするが、腕力どころか握力も半端ではなく、これで首を掴まれようものならそのまま折られてしまいかねない。それだけは避けなければ。

今までの姫や人形達と違い、火薬の匂い、自爆装置の匂いはしない。取り払われたのか、元々仕込まれていないのかはわからないが、少な

くとも突然自爆するような心配は無さそうだ。

「クソっ、どうすれば……!?」

「ギイツ！　ンガア！」

無理矢理手を払われ、強引に腕に噛み付かれた。痣のある左腕だったおかげか、噛み付かれた瞬間に思い切り殴り付け振り払えたが、呂500の菌型がクツキリと浮かび上がり、血すら流れていた。

即座に対応出来ていなかったら、肉ごと持っていかれていた。骨まで辿り着くほどだったかもしれない。

「若葉から離れなさいよー！」

「ギヤツ!?」

ここで救援。槍を振りかぶった曙が、呂500の腹に柄の部分を打ち込んだ。流石にダメージが入ったようで、私を襲う力が若干緩む。おかげで腹を蹴り飛ばして間合いを取ることが出来た。

「助かったー！」

「何なのよコイツ。面影無いじゃないー！」

蹴り飛ばしたが、すぐに姿勢を整えて、再び私に突っ込んでくる。潜水艦であるのに潜ろうともしない。意思も理性もなく、目の前に見える私に向かっただただ襲いかかるだけの獣。

意思も理性も無いというところで、憎しみに支配されて何もかもを失ったイロハ級を思い出した。そうだ、今の呂500は、イロハ級のようになってしまうている。

先程は突然のことに反応出来なかったが、今度はしっかり見据えて相手取る。曙もいるから簡単にはやられない。以前でなら2人がかりでも難しかったが、姿が見えているのなら何も問題ない。

向かってくる呂500を迎え撃ち、カウンターで一撃入れようとしたが、こういう時ばかり潜水艦の性能を活かして突然潜航。姿が見えなくなる。

「いつもの姫の匂いじゃない！　深海の匂いがするんだ！」

「はあ!?　じゃあ、あのクソ淀と同じってこと!?!」

「わからない！　だから、気を失わせるぞ！　飛鳥医師とシロに調べてもらおうー！」

先程見た感じ、奴は魚雷を持っていなかった。なら、襲うにしても今までのように素手。怖いのはいきなり脚を掴まれるか何かされ、海中に引きずり込まれることだ。それを避けるためにも、私達はその場に留まらず、動き続ける。

理性と意思が失われている分、殺意がダダ漏れなのが救いだった。海中からスナイプされるよりも、何処から狙ってくるのかがわかりやすい。

定期的に行っている釣りで鍛えた精神的な力も、ここで活かせるそうだった。私より曙の方がそこは強い。落ち着いて海中にまで意識を張り巡らせ、呂500が何処からくるのかを判断する。

「そー」

いち早く気付いたのはやはり曙だった。私の脚を掴むために浮上してきた呂500の腕を、槍で叩き払う。

「ギイツ!」

「悪いが、眠っていてくれ!」

その腕を即座に掴み上げ、強引に海上へ引きずり上げる。そしてそのまま、曙の方へ放った。

「殺したいほど気に入らないけど、殺さないでやるわよ!」

腹に一撃。槍が深々と食い込み、だが傷は付けずに、海面に叩き付ける。この一撃でようやく呂500は意識を手放してくれた。ぐつたりの海面に浮かび、動かなくなる。

「何だったんだ一体……これが大淀の作戦なのか?」

「知らないわよ……でもとりあえず運ぶんでしょ? 艦装ぶつ壊してくんない?」

「そうだな」

また目覚められて暴れられたら困るため、腰の辺りに装備されていた主機を壊そうとしたが、ここにも違和感を覚えた。

「……これ、深海棲艦の艦装じゃないか」

「は? 何よそれ」

今まで何度も艦装の整備をしてきたのだから、直感的にわかった。呂500の持つ艦装は、本来のものではなく、違法改造品でもなく、正

真正銘深海棲艦の艤装だ。まるでシロクロが装備している小型の主機。

「壊さないでそのままにする。気を失っている内に運び込むぞ」

「何なのよコイツ……ホントわけわかんない」

私も訳がわからない。この呂500には不可解な点が多すぎる。

何故深海棲艦の艤装を装備出来ている。そもそもこの見たこともない深海棲艦の艤装は何だ。

何故意思も理性も失って襲いかかってきた。私達の知る呂500はもつと狡猾で姿を見せることすら少なかったはずだ。

何故傷だらけでここに流れてきた。まさか大淀に捨てられたのか。なら何故ここまで流れ着くことが出来た。

何故深海棲艦の匂いがある。姫の体液を入れられているのは前々からわかっていたが、これだと本当に深海棲艦ではないか。

訳がわからない。一体何だというのだ。

意思持たぬ獣

大淀の襲撃を受けてから1週間、早朝に思わぬ漂流物が流れてきた。身体中が傷だらけで、深海棲艦の匂いを纏った呂500である。

朝のランニングをしようとした際に発見した私、若葉がそれを確認しようとして出撃したが、意思と理性を失い、イロハ級の深海棲艦のようになってしまうた呂500に襲われてしまった。曙の救援のおかげで何とか命を取らずに気を失わせることは出来たが、何が起きたのかさっぱりわからなかった。

目を覚ます前に昏睡させようと、すぐに施設に運び込む。その時には施設の者全員が目覚ましており、飛鳥医師も準備万端だった。「どうなっているんだ。呂500はあちらの姫だろう」

「わからない。だが、完全に理性が無かった。人語も介していなかったくらいだ」

すぐに処置室に運び込み、目を覚まさないように仕立て上げた。どうなっているかがわからないため、私の嗅覚、三日月の視覚に、姉とシロまで総動員の検査をすることとなった。まるで私の左腕の検査である。

その際に艤装を強引に外し、水着も脱がしたが、そこで驚くべきものを発見する。

「これは……何だ」

呂500の胸の中心。小さく手術痕のようなものがあつた。無理矢理手を加えられたかのような傷で、何か実験されたかのように見える。おそらく入渠でも治らないものなのだと思う。

「そこが特に匂いが強い。何人もの匂いが混ざり合っているような……何だこれは」

「……私にもおかしなものに見えます。敵の大淀さんと近いけど……少し違う感じです」

三日月には得体の知れないものに見えるようだ。そこに、姉とシロも付け加えてきた。

「その者には良くないものが憑いておる。他の者とはまるで違う、混

沌とした何かじゃ」

「……ハツハルの言う通り……この子はまずい。中が……めっちゃくちゃ」

シロはその痣に触れながら話す。姉も遠目で見ていてだけで不快感を示しているようだった。

私含めた4人の総意として、呂500は中身がおかしくされているというくらいしか見当がつかない。ここからは医学的な治療になる。

「必要最低限の処置、胸骨の洗浄だけはすぐに施す。皆を呼んできてくれ」

「了解」

少し久しぶりな施設総動員の処置。本来ならこれで洗脳は解けるはずだが、この呂500に関してはそれでもどうなるかわからない。処置をしたところで何も変わらないという可能性だってある。

それでもやらない道理はない。本来なら、大淀の下にいる艦娘全てを救うつもりで戦っているのだ。この呂500だって例外ではない。

すぐに人は集まり、処置に取り掛かる。だが、先に聞いておかなければならないことがあった。それは、曙にである。

「曙、コイツは救うぞ」

「なんで私に聞くのよ」

決まっているだろう。曙は呂500の手で一度命を失っているのだから。自分の命を奪った者を救うことを良しとするのかは、ちゃんと聞いておきたかった。嫌だと言われても当然治療するが、嫌なら処置に参加しない方向にする。

「……別にいいわよ。確かに私はコイツに一度殺されたわ。でもね、だからといってコイツの命を蔑ろにするほど小さい奴じゃないわよ」

「その言葉を聞いて安心した」

「嘗めんな」

曙も手際良く準備をしていく。精神状態は複雑だろうが、今は信じることにした。まずは呂500を治療しなくては。

3回目ともなると慣れたもので、胸骨の浄化は即座に行なわれる。

だが、胸を開いた時点ですぐにおかしいことがわかった。

「見ただけで細胞がおかしいとわかる。艦娘の身体とは似て非なるものに変質している。どちらかといえば深海棲艦だ。こうなるとまるでがんだな……」

何かをされたことで、呂500の身体は内部から深海棲艦に変異してしまっているということだ。詳しく調査されたわけではないが、私の左腕を基点にした痣も同じようになっているのではないかと。

深海棲艦の細胞が胸骨を起点に血液に乗って身体の至る場所に転移し、それが脳に達したせいで理性をも失ったのではないかと飛鳥医師は分析する。この処置の後、レントゲンなども撮るつもりのようなだが、まずは胸骨の浄化だ。

身体から切除された胸骨をすぐに受け取り、摩耶と共に洗浄。その間に腸骨から造血細胞を抽出し……といつもの流れで処置を進めていく。しかし、胸骨が今まで以上に汚染されており、洗浄に手間取ってしまった。

「凄まじい匂いがした。やっぱりここが起点だ」

「なら、洗浄したことでこれ以上の変化は抑えられるかもしれない。今まではあまりに違いすぎるから、経過観察も重要になりそうだ」

私達が胸骨の浄化をしている間に、見ることが出来る範囲を調べたようだが、やはり艦娘とは別物だと判断した。

飛鳥医師は死骸の解剖もやっているし、シロクロの処置もこなしている。艦娘と深海棲艦の身体の違いはある程度わかるのだとか。それから鑑みても、今の呂500の体内は深海棲艦の方に近いのとのこと。

「胸骨が起点だから胸に痣が出来ていたんだらう。これをさらに放置していたらこの痣はもつと拡がっていたかもしれない」

私の腕の痣と同じものが出来てしまっていると見做してもよさそうである。

「今は匂いは？」

「洗浄したことで消えた。摩耶の方もだ」

「大分入念にやっというたぜ。確かに風雲のやっつてる時よりもかなりし

「つこい汚れだったからな」

中を抉るように、ほぼ削るかのような洗浄。おかげで本当に綺麗さっぱりとなった。そのせいで少しだけ脆くなりそうだったので、その補強もしっかり施してある。

飛鳥医師に渡すと即座に繋ぎ止めた。この辺りも手慣れたもの。呂500はあつという間に修復された。残されたのは縫合痕のみ。

「自爆装置がそもそも無かったのがありがたかった」

「ろーさんには元々仕込まれていませんでした。まともに戦闘をすること自体が少なかったので、指示系統と伝達役をメインにしていますから」

その辺りは夕雲が詳しかった。流石、元々あちらにいただけある。

私達も多少はわかっていたことだが、呂500は海中から人形に指示を与えるため、ほぼ全ての戦場に出ているらしい。私達へちよっかいを出してきたのは、相手をしていた夕雲や風雲が苦戦をしていたからだけで、本来はあまり戦場にすら現れないようなものらしい。

話しながらも透析の準備はされており、血を拭きながら医務室へ運ばれる。これで血液も浄化されれば多少は変わるかもしれないが、あまり期待はしていない。

「なら傷だらけな理由は何なんだろうか。戦場に出ていないとしたら、まさか」

「改造の際に付けられたのかと……」

部下で手駒である呂500を、どういうわけか大淀自身が痛めつけたということに他ならない。

痛めつけられる理由がわからない。こうなってしまったから廃棄されるためにやられたのか、それとも何か別の理由があるのか。別の理由なんて全く思い浮かばないのだが。

「……憶測だが、何かしらの改造により暴走した呂500を廃棄するために付けられた傷な気はする。それでも手がつけられなくてここまで流れてきたのか、大淀がここまで泳がせているのかはわからないが……」

飛鳥医師も同じ考えに至っているようだ。

これに関しては当然だが下呂大将や来栖提督にも連絡をしておく。必要とあらば新提督への連絡も必要だろう。監査翌日にとんでもないものを拾ったものである。

「今は透析の完了を待とう。皆、ありがとう、助かった」

考えていても仕方ない。ここは医療施設、原因が何であれ、治療を完了させることが最大の目的だ。呂500に何があつたかなんぞ関係ないのである。

今はこのまま放置し、透析終了後、呂500を再確認することで治療そのものを終了とする。

透析完了は夕暮れを迎えたくらいのタイミングだった。それを見越して姉は鳳翔の訓練を早上がり。私も今日の作業はある程度のところまで終わらせ、医務室に入った。

医務室に入った時点で、呂500に変化があることに気付く、深海棲艦の匂いはそのままであるが、薬の匂いは完全に無くなった。胸骨の洗浄は効いている。

「おかしな感覚は消えました。私が視えていたのは、胸骨の歪みなのかもしれません」

三日月も得体の知れないものが無くなったと話す。私と三日月はどちらかと言えば医学的な部分に関与するため、ここからは姉とシロの感覚的な部分の話。

「ううむ……混沌とした何かは憑いたままじゃのう……」

「中身がめちやくちやなのは変わってないな……壊れちやつてる感じ……かな……」

私達とは違い、反応は渋いまま。身体としてはもうこれ以上悪くはならないが、これ以上良くもならないと考えるべきか。

ただでさえ、理性が無くなるくらいにまで壊れているのだ。姉の言う混沌とした何かに繋がり、シロの言う中身がめちやくちやが原因となっているのだろうか。

「気をつけた方がいい。わらわ達にはどうすることも出来ぬ」

「了解した。では、目を覚まさせる。拘束はしたままだ」

透析装置を外し、昏睡状態も解いている。胸の縫合痕はどうしても痛みが残ったままだが、これも時間が解決してくれること。

「呂500、目を覚ましてくれ」

「ン……」

今回は誰も関係者がいないため、飛鳥医師が呂500を起こす。昏睡状態を解いたことで目覚めやすくなるのか、今回もそれだけで目を覚ました。

治療を施したことで外見的な何かが元に戻っていることはなかった。瞳は相変わらず真っ赤。

「気分はどうだろうか。身体に不調はないか」

「ウウ、アアア……」

治療が出来たからといっても、理性が戻ってきたわけでは無さそうである。人語すら介さず、ただ呻くのみ。私達を見ても敵対心を持っていないように見えるが、これは治療の影響だろうか。

「シロの言っていたことはそういうことか……これだともう、大人しいイロハ級と変わらないじゃないか……」

「うん……上から下までめちやくちゃ……壊れて戻らなくなってると思う……」

呂500は獯猛な獣ケダモノから、大人しい獣になった程度の変化しかなかった。起こしてくれた飛鳥医師の方は見るが、ぼんやりした目であーうーと呻くだけ。

不治の病と言ってしまってもいい。手を尽くしても、飛鳥医師ですらこれ以上の治療は今難しいだろう。

「どう治せと言うんだ……脳細胞が破壊されてしまったらもう……」
大きく溜息を吐き、自らの無力感に打ちひしがれてしまった。

私達の肌を治したりするのはいずれ出来るようになるだろう。今でも毎日のように研究を続け、少しずつ少しずつ前進を続けているのだが、こればかりはどうしようもない。

「あら、ろーちゃんが目を覚ましたのね」

絶望感に支配された医務室に、雷が入ってきた。

「よかったわ、目が覚めて」

「アアー、ンウ」

雷の方を向くも、やはり呻くだけの呂500。しかし、次の瞬間、私達は度肝を抜かれる。

「うん、この飛鳥先生がろーちゃんを治してくれたのよ。みんなもお手伝いしたの」

「ウウー、ンイイ」

「胸が痛いよね。縫合した痕がまだ塞がってないから、ジツとしていた方がいいわ」

普通に会話をしている。私達には判断することの出来ない呂500の意思を、雷はしっかりと聞き取っている。

まさか、イロハ級の声が聞き取れる力がこんなところで役に立つとは思っても見なかった。

「い、雷、呂500が言っていることがわかるのか？」

「ええ、なんだか変な風に聞こえるんだけどね。あ、もしかしてこれ、深海棲艦の声が聞こえるアレ？」

「おそらく、な」

ある意味、呂500がイロハ級と大差ない状態にされているということが確定した瞬間でもある。

「私の力が役に立ってよかったわ。ろーちゃんとお話しできるのは私だけってことなのよね。なら、私が通訳してあげるわ！」

「助かる。僕の言葉が伝わるかはわからないが、呂500の意思がわかるのはありがたい」

「いいのいいの！ 適材適所ってヤツよね！ 私に頼って頼って！」

少なくとも、呂500が何を言いたいかはわかることはいいことだ。記憶の辺りがどうなっているかはわからないが、何処まで壊れているかが明確になるだけでもありがたい。

呂500も雷には懐いているようだった。懐いているというよりは、別に周りのものに敵対心を持っていないという方が正しいか。今は処置後なのだから、ゆっくり休んでもらって痛みが無くなってから改めての方がいいだろう。

「雷、すまないが、呂500のことをよろしく頼む」

「任せて！ 私がお世話するわね！」

久々の患者の世話だからか、ものすごい笑顔である。

「……ものけが落ち着いておる」

姉が驚愕の表情で呂500を見ていた。雷に頼れることで、呂500に憑いているという混沌とした何かは、途端に落ち着き始めたらしい。意思が伝わらないことに苛立っていたのかは定かではないが、悪いことがどんどん取り払われていることは喜ぶべきだ。

「雷よ、その者はお主でなくてはダメかもしれないね」

「そうなの？ ならもーつと頼ってくれていいのよー！」

より一層笑顔になる雷。本当に頼られるのが好きなようだ。

ここから大淀の真意が読めればいいのだが、まだまだ先は長そうである。何故呂500が捨てられてしまったのか、何をされてこんな獣になってしまったのか。まずはこの辺りがわかればいい。

凄惨な仕打ち

施設に流れ着いた呂500の治療は完了したが、目を覚ましても人語だけは戻ってこなかった。雷のおかげである程度意思だけは通訳してもらえるが、理性もあるかわからない状態。少なくとも雷には懐いているようで何よりである。

今は処置の傷を治してもらおうとして、もう少し落ち着いた後に改めて話が聞ければいいと思う。何かを知っているかもわからないが。

こちらを襲ってくる素振りを見せなかったことと、雷の懇願により、呂500の拘束が解かれた。まだ縫合痕は痛みがあるので医務室から出てもらうわけにはいかないのだが、だからと言って身動き一つ取れないままにしておくのも可哀想。

「痛みが無くなるまではこの部屋よ。そうじゃないといざって時に治療出来ないしね」

「ウアー」
身体を起こす時も痛そうにしていた。やはり胸の縫合痕が痛むようである。

当然ながら、高速修復材は使わず自然回復に任せることになっている。今までの経験上、姉が1週間かからないくらいで痛みも無くなったため、呂500も同じくらいかかるだろうと思われる。

だが、見た目こそ艦娘ではあるが、中身は深海棲艦のようになってしまっているため、回復力もそれに準じている可能性はある。そうだとしたら、シロクロのようになるものの1日で完治という場合まで視野に入る。

「あとは禁断症状か……薬は入れられていたんだよね？」

「勿論。今は匂いは取れているが」

胸骨の洗浄により、いつものように麻薬の影響は無くなっている。ということとは、すぐにでも禁断症状が現れてもおかしくない。今の状態で幻覚と幻聴に苛まれるのはなかなか辛い。

「ろーちゃん、大丈夫？ 何かおかしいことはない？」

「アウ？ ーン……アイ」

雷が尋ね、少し考える仕草をするが、何事もないらしい。取り乱すこともなく、目の焦点が定まらなくなることもない。まるで何事もないような状態。これは本当に禁断症状が無いのでは。

そんなバカなと思っただが、そもそも身体が異常なのだから、そういうところにも異常があってもおかしくはない。この異常はありがたい異常ではあるが。

「……まさか、麻薬の成分すらも取り込んでこの身体になったということか？」

「どういふことだ」

「いや、麻薬の成分はリコの花だろう。それも、その花はリコの力が溢れた結果生えた花だ。ある意味、純粋な深海棲艦の力と言っても差し支えないよな」

言われてみれば。麻薬の成分である植物という認識しか無かったが、加工されているとはいえその力が残っている可能性は大いにある。さらには何者かの姫の体液まで注入されているのだ。

この身体になった時に、体内の深海棲艦の要素を取り込んでしまったと見ても割と説明がつく。体内から混ざり合っているのだから、外見には殆ど影響は無く、内部だけ深海棲艦になっていると言われれば納得だ。

とはいえ、まずどうやってこの身体になったかという問題があるが。麻薬のせいになったとは到底思えない。なっているのなら、夕雲達はとうに深海棲艦になっているだろう。

やはり胸元の手術痕が原因か。夕雲達のような姫は麻薬を入れられて洗脳されていただけだが、呂500はそこにさらなる改造を施されているのはわかる。

「禁断症状が無いことは素直に喜ぼう。意思疎通が出来ない状態で、さらにそこに錯乱まで入ったら、抑え込むのが難しくなるからな」

「だな。今なら雷に任せ切れる」

その雷も、今は呂500に付きつきり。目が覚めたということでも早速夕食を摂ってもらうことにしていた。医務室で食事というのもかなり久しぶりである。

翌日からは早速、呂500の具合を見ることに。雷が通訳をし、呂500の意思を私達にも伝えてくれる。

「痛みは大分引いたみたいよ」

「アウアー」

まだ痛みは完全に無くなったわけではないが、動けないことは無いという段階に。これなら明日には完治だろう。深海棲艦の自然治癒能力はしっかり手に入れている模様。

今もすっかり身体を起こして私達に反応している。車椅子で移動することくらいは出来そうだ。

「君がされたことを話してもらいたいんだが、今は話せるだろうか」

飛鳥医師の言葉は理解出来ているようだ。薬の影響が無くなったことで、意思と理性が戻ってきているのは本当に良かった。目が覚めた途端暴れ出したりされたら困る。

「ソイ、イアアー」

「そうなんだ……ここに連れて良かったわ。ここならみんなが仲良くしてくれるからね」

呂500の言葉に、雷が悲しそうな表情で抱きしめた。呂500はそうされることで子供のような笑みを浮かべた。

「ろーちゃん、あつちですごく虐められたんだって」

「虐め……?」

「ええ。身体中の傷はそれでついたんだって」

その後も、雷通訳で呂500が話せることを話してもらった。決して無理はさせず、話したくないことは無言でもいいとして。あくまでも呂500は患者、これ以上の悪化は飛鳥医師が絶対に許さない。

呂500はあまり覚えていることが無いということを前提に話してくれた。なんでも、大淀以外にも誰かいたらしく、それに胸の手術をされたそうだ。そしてその後から、あちらの者全員から、身体中が傷付くほどの虐めを受けたらしい。

理由もわからず、死にたいと思えるほど辛く、頭がおかしくなりそうとなったところで記憶が途切れているそうだ。気付いたらここで、

胸の痛みを感じながら寝ていたと。

「アウ、オアア」

「……それくらいしか覚えていないんだって。誰に何をされたかは覚えてないみたいで」

漠然と虐められたという記憶だけが残っており、誰にやられたとかの記憶はもう朧気らしい。

「さつき雷も言ったが、僕らは君のことをそんな風に扱うことはない。ここで楽しく生きてもらいたいんだ」

「そうよ！　ろーちゃんはどこで一緒に楽しく生きましょ！　私にももっと頼っていいのよ！」

解放されたと考え、もう辛いこと無く生きていけばいい。あんなゲスのいる鎮守府から離れ、こちらで仲間達と伸び伸びと暮らせばいいのだ。

もし雷がいなければ意思疎通が出来ず、ここで拾われたとしても呂500は結局ダメになる可能性が高い。むしろ、どうせ何も知られないのだから、ここに流れ着いても痛くも痒くも無いとか考えていたのではなからうか。

私の嗅覚に引き続き、雷の特殊な能力も大淀の盲点となったようである。これにより大淀が異質な存在であることが判明し、何をしているかがわかった。

「若葉、君は大淀の目の前で変化したんだっただよな」

「ああ」

「……大淀は、それと同じ現象を引き起こそうとしたんじゃないか？」
まさか、呂500を私と同じにしようとしたのか。

あの場にいたのだから、私の負の感情の増幅により痣が拡がった瞬間も見ていたはずだ。仲間がやられていき、おちよくられ、理性がなくなるほどの怒りと憎しみに呑み込まれた結果が今の私だ。

それを再現しようと、呂500に何らかの改造を施し、これでもかと痛めつけたのだろう。負の感情が増幅されるように。実際、記憶があやふやな呂500でも、虐められた、死にたいほど辛かったという感情だけは覚えているほどである。

その結果がコレだ。体内が深海棲艦へと変化し、意思と理性が失われて、ただの獣ケダモノに成り果てたと。今でこそ意思と理性は取り戻したが、記憶にまで影響を与えてしまい過去すらも臆気になってしまっている。

「……アイツは艦娘を……命を何だと思ってるんだ」

呂500があまりにも可哀想だった。いいように使われ、洗脳されて姫にされ、何人もの仲間を捨て駒として利用させた挙句、最後は本人すら捨て駒になったようなものだ。

成功したなら戦力増強。今での姫よりも厄介な者として生まれ変わり、私達を更に苦しめていた。だが失敗したことで廃棄が決まったのだろう。ゴミのように捨てて今に至っている。

怒りが込み上げてくる。左腕が疼く。喉や頬にも熱が加わるような感覚がしたほどだ。

「本当だ。君達だけでない。僕も引導を渡したいくらいだ」

ギリツと飛鳥医師の歯軋りも聞こえた。身体の熱量が上がる、怒りの匂いが漂ってきた。

命を粗末にした自分を悔やみ、命を助けることに全てを捧げている飛鳥医師だ。自分の利益のために他人をゴミのように扱う大淀のやり方は、飛鳥医師にとっては地雷。ここまで怒っている姿は初めて見るかもしれない。

「呂500はここで幸せになってほしい。幸い、同じ境遇の夕雲達もいるし、何より意思がわかる雷がいる。ここでもやっていけるだろう」

そうでなくても、私達が幸せにしてあげなくてはいけない。勿論、私達自身も幸せになるのだ。

その後、呂500は精密検査に移された。今日は午前いっぱい診られるところは全部診ようというこららしい。

特に重点的に診るのは頭。今までここに運び込まれた者の中で、最も重症ともいえる言語障害。飛鳥医師の予想では、再改造を施された胸骨の影響で、脳に何かしらの問題、例えば悪性の腫瘍が出来たかのようなことが起きていないかを確認する。

「CT検査が出来ればな……いや、今はここで出来る限りは全てやっていこう。雷、手伝ってくれ」

「勿論！ 頼って頼って！」

そこはこの施設の最古参がしっかりとサポートするようである。流石。

一旦私はフリーとなった。検査のサポートも出来ないことは無いだろうが、それは雷に任せ切った方が、事が早く済むだろう。

その間に、今の乱れた心を落ち着けたかった。いくらなんでもあの仕打ちは酷すぎる。思い出すだけでも左腕が疼くほどに私は苛立っている。

「曙、釣りに行かないか」

「アンタから誘ってくるなんて珍しいわね」

心を落ち着けるなら、精神鍛錬をするのが一番だ。だが、1人でやると乱れそうだった。そのため、曙に付き合ってもらおう。それにも話を聞いてもらいたかった。

殺されるという深すぎる因縁を持つ曙に。だから許してやれなんて口が裂けても言えない。曙はそれでも呂500のことを嫌っていないほどの仕打ちを受けている。飛鳥医師がいなければこの世にいないのだから。

海上、以前付き合ったポイントと同じ場所で、背中合わせに釣り糸を垂らす。

「わざわざ私を誘ったんだから、何かあるんでしょ」

「……呂500のことだ」

話し出しだけでも、左腕が震えた。話していく内に声も震えていた。今までの中でも3本の指に入るほどの理不尽。より深く、強く、大淀への憎しみが増加する原因となるもの。

曙も話を聞いていく内に海面が波打つ程に動揺していた。

自分を殺した相手がそこまで酷い仕打ちを受け今に至るわけだが、曙は施設の中では唯一、呂500のことを蔑むことが出来る、それに対して『ざまあ見ろ』と言える立場にいる。そんな曙が、この話を聞

いて何を思うか。

「……何よそれ」

「本人の口から、雷を通して聞いた話だ。憶測も混じっているし、呂500自体記憶があやふやらしいから、確定ではないが」

どうしても心は落ち着かない。魚は食いつくどころか、私達の心を読み取ったかのように餌すら食いに来ない。ただ海上に突っ立って、曙に説明するだけの時間になってしまっている。

少しだけ間を空けて、曙がポツリと溢す。

「いい気味じゃない。言葉も失って、しかも記憶があやふやって、もしかして私を殺したことすら忘れてるわけ？」

「……そうかもしれない」

「ふざけんじやないわよ。面と向かって謝ってもらいたいわ。ボコボコにしたいのは私だっつーの」

海面の波は激しくなる一方。それに、激しい怒りと、困惑の匂い。どうしていいかわからないと言うのが、これでもかというほど伝わってくる。

また間が空く。曙は曙なりに考えて、答えを出した。

「……私がやりたかったことを奪ったクソ淀を許さない。ろーと同じ目に遭わせてやる。やめろと言ってもやめてやらない。ただしろーとは違う。確実に息の根を止めてやるわ。生まれたことを後悔させてやる」

「ああ」

それだけ話し、胸を掴む。深海棲艦の心臓と肺が、これでもかというほど脈打っているのだと思う。熱があるかのように少し荒い息を吐く。

私の腕と同じで負の感情で脈が上がる曙には、今の話はこれまで以上に反応するものなのだろう。曙から漂う深海の匂いが少し強まった。

「すまない。こんなところでこういう話は間違っていたか」

「遅かれ早かれ知ることになるんだから、何処で話そうが関係ないわよ。むしろ、いの一に私に話してくれたのは感謝するわ」

結局、最後まで心を落ち着けることは出来ず、お互いに1匹も釣ることが出来ずに施設に戻ることになる。元々精神鍛錬のための行為だから、釣れないのは問題ではない。心の乱れが如実に表れている。憎しみはより深くなった。許しがたい存在だったが、この件でそれは一層強くなる。

大きな確執

午後、施設関係の人間が勢揃いになる。いち早く来たのは来栖提督。その後、下呂大将も駆けつけてくれた。なんと新提督まで連れて。

呂500が漂着し、治療されたことを聞き、今までにないほど早い行動に出たのは新提督らしい。施設と繋がりが出来たことで、大本営としても今のこの事件の早期解決に繋がることには迅速に動きたいようである。こちらとしては味方が増えることがありがたい。

「今回は監査ではなく大本営の遣いとしてここに来た。出来ることから、敵配下であったという呂500から話を聞きたい」

「申し訳ないのですが、呂500は会話が出来ません。ですが、言伝という形で、呂500から聞き出せた情報はお伝えします」

本来なら本人から聞くのが筋というものだろう。だが、ここにいる呂500は事情が事情なので、二度手間になる。何度もあの時のことを話させるのは、こちらにとっても控えたいところ。

言うより見てもらった方が早いと、医務室に全員連れていく。来栖提督も医務室の前で待っており、呂500の現状はまだ見えない状態。

「待たせましたか」

「いえ、まだ来たばかりですぜ。そっちのお嬢さんが大本営のですかい?」

「ああ、妹弟子の新だ。来栖大佐、よろしく頼む」
「ウス」

こんな場で長々自己紹介をするようなこともないので、すぐに医務室の中へ。護衛の神風と瑞鳳は医務室の中までは入らず、外で待つことにしたようだ。呂500には艤装は装備されていないし、今の状態なら襲い掛かることもない。万が一があっても、私、若葉と雷がいる。

医務室では、呂500と雷がただ話をしているだけ。ずっと手を繋いで、たわいもない話で心を落ち着けているような状態。こうやって話が出来るのが雷だけというのもあり、呂500は雷には全幅の信頼

を置いているようである。深海の匂いはそのままだが、感情的な匂いはあまり感じられない。

見知らぬ人間が3人も入ってきたことで、少し動揺したようだが、記憶があやふやだからか、あまり警戒をしているようにも思えない。ただただ誰だという感情しか無いようである。

「先生、この施設のことは話しておいたわ。明日からは私と一緒に家事をするの」

「そうか、そうやって身体を動かした方がいいだろうな。呂500もそれで良かったか？」

「アイ」

一声で何かがおかしいとわかったのだろう。新提督が前に出る。会話が出来ないという意味がわかったようである。

「君は……話せないのか」

「話せないけど、そちらの言ってることはわかるの。だから、私が通訳してるわ。私はろーちゃんの言いたいことがわかるからね」

雷が代弁。キョトンとした呂500を余所に、新提督は悲痛な面持ちに。呂500は外見が幼いため、子供好きな新提督には苦痛に感じている。

「飛鳥ア、頼まれてたモン、持ってきたぜエ。うちには呂500はいねエから、他の連中のモンになっちまったけどな」

「助かる」

来栖提督が飛鳥医師に渡したのは、呂500のための水着。ここに来るまでに着ていたものは、身体と同様傷だらけだったため廃棄しているため、代わりのものが必要になった。

とはいえ、この呂500は艦娘としての仕事をするかは何とも言えない状態。そのため、水着以外にも、私服となり得る制服も持ってきてくれた様子。雷に懐いていることは先に伝えていたようなので、制服も揃いとされていた。強いて違うのは、その上からカーディガンを羽織る程度。

「ろーちゃん、よかったわね」

「アエ」

雷と同じ服を貰えて喜んでいいる。匂いにも負の感情は乗っていない。今の呂500は、このままでもいいからもらいたい。

来客は一度飛鳥医師が別室へ連れて行き、呂500について説明をすることになる。話せることは本人から雷経由で聞いたことだけ。あとは精密検査の結果と、憶測。そこに下呂大將が加われば、憶測は確証に変わるだろう。

ここからは機密も多く関わってくる可能性があるため、艦娘はフリーに。護衛もいらないとされたが、神風は別室の門番として待機することのこと。内側の会話が外に漏れないようにしたいと。

「よし、早速セスちゃんに見せてもらおう」と

瑞鳳はむしろそちらが本題だったようである。前回の去り際に言っていたことを即実現させようとしているようだ。

工廠にいるだろうと伝えると、早速スキップするように向かっていた。余程好きなのだろう。大本営所属とは思えないほどの軽さである。とつつきにくいよりはいいか。

「じゃあろーちゃん、私達は車椅子で施設内を回りますよ」

「ソイイ」

こちらはというと、まだ出来ていなかった施設の案内をするらしい。昨日はまだ術後間もなかったし、午前中は精密検査で忙しかった。傷の痛みも無くなってきたので頃合いと、雷がすぐに行動に移した。

せっかくだからと、来栖提督が持ってきてくれた揃いの制服に着替えてもらい、車椅子に座らせた。少し痛みを感じるようだが、やはりもう元気に近い。自分の脚で地に立つことも出来たし、車椅子にも自分から座れた。

「若葉はどうする？ 先生達の話が終わるまでは暇よね」

「そうだな……何も考えてなかった」

来栖提督をここまで運んできた第二二駆逐隊は、久々に妹三日月に会えたので時間いっぱいまで話すと意気込んでいた。運転手のまるゆも、同じく潜水艦仲間であるシロクロと会うと言っていた。結果的に、来客

は全員誰かのところに行っている。

結果的に、成り行きに任せて雷と一緒に呂500と施設回りをすることになった。工場に行ったらそのまま艤装整備などに移るかもしれないが、今くらいは便乗。

「そういえば」

「なに？」

「呂500は医務室生活が終わったら何処で寝るんだ？」

素朴な疑問。妥当なのは雷と一緒にいることだとは思いますが、何か別の案があるのなら聞いておきたい。

「そうね……まあ私と一緒にがいいわよね。ろーちゃんはどうしたい？」

「ンウー、ア、ウア」

「うん、私と一緒にがいいのね。いいわ、じゃあ曙にも許可を貰わないとね」

曙の名前が出た途端、呂500がほんの少しだけ反応した。動揺にも似た、心拍数が上がったような、そんな匂い。

あやふやになった記憶の中でも、特に印象深いのが、死の淵から蘇った曙。自らの手で殺したのに、今普通に生きているというのが、大きく刻まれているのだろう。

「雷……曙と顔を合わせて大丈夫だろうか」

呂500に聞こえないように小声で話す。

「……大丈夫よ。きつといい方向に行くわ」

いつもの言葉だが、珍しく雷もポジティブにはいけないようだった。自分に言い聞かせるように今の言葉を紡いでいた。

曙を探すように施設を回っていく。呂500は何に対しても興味を持っていた。記憶があやふやなおかげか、何を見てもトラウマを穿り返されるようなことは無いようである。そもそも自分が鎮守府に属していたということすらも、少しフワフワしているように見えた。

「ろーちゃん、胸は痛くない？」

「ンウ」

「よかった。明日には本当に完治ね」

見た目通り少し幼い。車椅子を押されて喜んで見えるように見える。雷も持ち前の母性本能が全開。2人はある意味相性が最高なのかもしれない。

「曙、何処に行ったのかしら」

「また釣りに出ているかもしれないな。午前中に付き合ってもらったんだ」

午前中の精神鍛錬は、お互いにガタガタだった。海面の波は絶えず、釣り針の感覚も全く追えない。釣れるものも釣れなくらいの精神状態である。未熟だとは思ったが、それ以上に私の心は揺れすぎていた。

落ち着きたくても落ち着けない。私は呂500の現状を作り出した大淀への感情で。曙は保護された呂500への感情で。曙はあの時はいい気味だと言っていたが、本心はどうなのだろう。面と向かって同じ事が言えるほどに、憤っているのだろうか。

「曙、その時何か言ってた?」

「……ノーコメント」

さすがに呂500がいるこの場では言えない。だが、私から言えないということ、雷も曙がどう言っていたかは察した様子。何も言わないからこそ伝わってしまうことがあるのは、大分前に知っていたはずなのだが、どう伝えればいいかわからないのだから仕方あるまい。

「そっか。曙には辛いわよね。なら私、部屋を替えてもらおうわ。ろーちちゃんと相部屋にしてもらう」

「……それがいいかもしれないな」

自分を殺したものが同じ部屋で眠っているというのは、どうしても気分が悪いだろう。処置の時以外、一度たりとも呂500の前に曙は姿を現していない程だ。

誰にだって割り切れないものはある。曙にとって、それはこれなのだろう。それを誰も否定しない。

「あ」

などと話していたら、食堂で曙とエンカウント。たまたま茶を飲む

うとしていたところのようである。雷と呂500が動き回っているとは思っていなかったようで、目があった瞬間、明らかにいろいろな感情の匂いが増した。

それに対して呂500は、先程ほんの少しだけ感じた動揺の匂いが強まった。臍気でも、面と向かえば身体は反応してしまったようだ。「曙、ちよつと待って！」

無言で去ろうとした曙を、雷が引き留めた。呂500も何か言いたげな顔をしていたが、それは私には判断できない。

「……察しのいいアンタならいろいろわかつてんでしょ」「うん。だからね、ちよつとだけ」

絶対に呂500の顔を見ようとしないうちからは、苛立ちの匂い。この場にいたくないという気持ちだが、嫌という程伝わってくる。匂いなんて感じなくても、誰だつてわかる。

「私、ろーちゃんと相部屋にするわ。だから、今日中に部屋を出るから」

「あつそ。それだけ？」

「……うん、それだけ」

悲しそうな笑みを浮かべる雷。だが、このわだかまりだけはどうにもならない。一番納得出来ないのは曙だ。雷はそれを理解している。

自分を一度殺した相手が、記憶があやふやで自分を殺したことすら覚えていないかもしれないと言われて、正気でいられる方が少ない。それが出来ている曙の我慢強さは、敬意に値するほどである。

「アエ、オオー……」

凍り付いたような空気の中、呂500が曙に手を伸ばした。それに対して無反応。

「ろーちゃん、曙を見たらモヤモヤするんだつて。ボヤけてよく見えないけど、やっちゃいけないことをやったみたいって」

やはり、あの時のことは臍気。自らの手にかけてことは覚えていない。それでも罪悪感だけはしっかり残っている。本当に空っぽになつたわけじゃない。

「オエン……アイ」

「……ごめんなさい、だって」

今のは私にもわかった。呂500は曙に謝罪している。

あやふやで、まともに覚えていない記憶でも、直感的に謝らなくては行けないと、壊れた心でも察したようだった。こうなってしまっているのだから、建前ではなく本心で謝っていることがわかった。

本人は何に対して謝っているかは理解出来ないが、自分が曙に悪いことをしたということだけは刻まれている。だから、素直な気持ちで謝罪の言葉が出た。

「……惨めなモンね。あれだけのたまっていたクソ潜水艦がこのザマだなんて。使われるだけ使われて、ボロ雑巾みたいに捨てられて。いい気味よ。ザマア無いわね」

曙の悪態は誰も咎めない。曙にだけはその権利がある。

「謝れるだけの罪悪感が残ってるならまだマシよ。本当に空っぽだったら、私は多分ぶん殴ってた。納得いかないもの」

「曙……」

見下すように呂500を見つめる曙。言うことが言えたからか、先程よりは怒りの匂いが薄れていた。

「コイツだって被害者よ。そんなことは私だって理解してるわ。夕雲と似たようなモンなんだから」

「まあ……そうだな」

「だからといって許すつもりはないけど、殺すほど憎くはないわ。自分の意思でもなかったわけだし」

ギユツと、拳を握る音が聞こえた。怒りの矛先は呂500じゃなく、大淀に向いている。

当然憎しみはある。だが、こうなってしまった呂500を憎しみ続けるのは建設的ではない。この場に留まるのではなく、私達は先に歩み出さなければならぬのだから。

「だから、この件はこれでおしまい。私もこれ以上ストレスを溜めたくないの」

「……曙は強いわね」

「当たり前よ。部屋替えるならさっさとやっというて」

それだけ言い残して、食堂から去っていった。

「……アエエ」

「ろーちゃん、大丈夫よ。曙は口は悪いけどホントにいい子なの。ろーちゃんのこと、ちゃんとわかってくれてる」

頭を撫でながら、呂500をあやしていた。謝れたからか、呂500も少しだけスッキリした表情をしていた。罪悪感がなくなったわけではないが、居心地の悪さは無くなったように見える。

この確執だけは取り払えない。だが、共に歩いていくことも出来る。そういう意味でも、曙は誰よりも心が強いかもしれない。

心の奥底で

外が暗くなってきたが、昼から始まった呂500についての説明会はまだ終わらないようである。この施設に関係ある人間4人が集まっているのだから、話せることは全て話そうということなのだろうか。

三日月と共に部屋の門番をしている神風に聞きに行くと、案の定、話せることは全て新提督に伝えるということのようだ。私、若葉がこの施設に漂着してから、今現在までにあつたこと全てを伝えている。「まさかこんなに長引くなんて思ってたわ。これはもう泊まりじゃないかしら。まだ中の声がヒートアップしてるもの」「そんなにか」

「現場の声が聞けるんだから、新司令も躍起になってんの。こここの存続もかかってるし、事件の解決にも繋がるし。うちの人にも伝わってないことがあるみたいだから」

飛鳥医師しか知らないことだっっていくつももある。それを包み隠さず全員に伝えるため、今回はここまで時間がかかっているようだ。

ただし、特に曙の蘇生の方法だけは絶対に話さないと断言したそうだ。私達にはいい方向に進んだコレも、人によっては悪用されてしまう。これは信用しているしていいの問題ではない。恩師にも、大本営にも話せない、飛鳥医師だけの秘密。

「私も流石にこれは待つてられないわ」

「雷が夕飯を準備している。帰るにしても、食べていってくれ」
「ありがと。ちよっと中に話してくるわ」

中で話していることは関係なしに、ズカズカと入っていった。さすが神風、怖いもの知らずである。

数分後、なんだかんだ神風だけが部屋から出てきた。

「後からだっけ。私は先にいたたくわ。案の定泊まりみたいだし」
「了解した」

それを聞いて三日月がホッとしたのがわかった。新提督と顔を合わせないことに安心したようである。まだ三日月の信頼を得るには

時間が足りない。

ここに三日月がついてきたのは、新提督と面と向かうことで耐性をつけるためだったのだが、いざここに来ると尻込みした模様。

「あの人は思う存分やってもらいましょ。指示が確実なもの、私達は任せるしかないわ」

「ああ」

作戦を立てるのは、提督業の人間に任せるのが一番だ。慣れたものがやるべき。私達はそれを待つのが最善である。

食堂には施設に所属する者や護衛艦隊など、今ここにいる全ての艦娘が集まっていた。こうして見ると、その大半が駆逐艦である。これだけだと鳳翔を中心に大人達が取り仕切る学校みたいだ。私も含め、制服ばかりだし。摩耶は学年が上で、リコとセスは少し異質に見えるか。瑞鳳に関しては、申し訳ないが私達サイドに見えてしまう。

「今日は鳳翔さんも手伝ってくれたの。全員分作るの大変だったけど、こういうのも楽しいわね！」

「こんなに多く集まることも早々無いでしょうからね。雷さんだけでは大変でしょうから、私も腕によりをかせせてもらいました」

施設の料理人雷と来栖鎮守府の達人鳳翔による食事に、みんなで舌鼓を打つことになった。

こんなに大勢で食事をするのは、来栖鎮守府に匿ってもらっている時以来だ。施設の仲間達と食べるのもいいが、こうやってワイワイ食べるのもいいものである。

だが、これだけ人数が多いといろいろな部分が見えてくる。特に今回からは呂500が食事に参加しているので、曙は最初から離れた場所に座って、他の者で視界に入れないようにしているのが丸わかり。逆に雷は呂500に付きつきりで、曙の姿を視界に入れない位置に。

これはまあ最初からわかっていたことだ。少し前に大きな確執を面と向かって言い放ったくらいだ。誰も咎めないし、仕方ないことだと誰もが納得している。だから誰も不用意にそのことには触れない。

「ローは潜水艦としてなんかやったりするの？」

「まだわからないわ。今は私のお手伝いをしてもらおうと思ってるの」

「そっかー。じゃあ暇な時は私達と海の底行こうね。マルユも一緒に！」

「ま、まるゆですか!?! まるゆ、潜水艦だけど潜るの苦手で……」

「じゃあ練習しよう! 海の底はいいよ、最高!」

クロは相変わらずコミュニケーションに全振り。以前は敵対していたというのに、そんなこと忘れてたとしても言わんばかりに近付き、仲良く話をしている。そんなクロに、呂500も笑顔であった。

逆にシロの方は、処置後にも呂500が壊れてしまっていると判定しただけあり、クロの隣にいるものはまだ警戒している。突然暴れ出すようなことが無いことは保証出来るが、シロ的にはまだ難しいのだろう。

「雷が側にいると安定しておるのう」

それを遠目に眺めているのが私と姉。姉は呂500には混沌としたものが憑いていると言うため、こちらも警戒しているところ。

「若葉にはよくわからない」

「わらわにしか視えんのじゃから仕方あるまいて。彼奴に憑いておるものは、確実に蝕んでおる。故に、言の葉を失ってしまったのじやろうな」

まだ精密検査の結果は聞いていないが、姉的にはそのもののけが呂500の言葉を奪っているのだという。つまり、深海の要素が脳にまで侵食しているということだろう。

しかも、混沌というのだから1体や2体じゃない。シロが中身がグチャグチャと表現した程だ。相当入れられている。

「まあ、あれ以上にはなるまい。良くなれど悪くはならんよ」

「なら安心だ。あのままというのものなかなか辛いものがあるが」
「割り切るしかあるまい」

自分も同じ加害者であり被害者であるからか、呂500に対する感情はそこまで重くないようである。

特に姉は、人形としての活動期間が極めて短いため、そもそもの罪

悪感が少なめ。救出されたものの中でも最も軽い症状であることは間違いない。そのおかげか、既に完治と言っても過言ではない状態だ。救出者を客観視がしやすい環境にいる。

「初春さんは……なんというか、サバサバしてますね」

「気にしておってもな」

相変わらず私の隣を陣取る三日月が感心するほどである。姉なら私達のように憎しみに吞まれるようなことは無いだろう。そもそも身体の中に深海のパーツも無いのだから、私のような暴走の心配は無いし。

「……ろーさんは夕雲達とは違うんですね」

「うん……あの時の記憶が無いなんてね」

逆に少し重く受け取っているのは、私の対面に座っている夕雲と風雲。呂500と組んで行動をしていたことも多かった2人は、罪悪感も同じ。何人も手をかけ、その幻覚と幻聴に今でも苛まれている程だ。

それが呂500には無い。飛鳥医師の見立てでは、あの身体になってしまったことで麻薬の禁断症状が無くなっており、罪悪感が残っているものの、自分がやってきたことは臍気になってしまっている。夕雲と風雲が受けている苦痛は全く受けていない。

「気になるか？」

「まあね。私、結構ろーちゃんと組んで動いてたし」

「嫌なことを思い出させたか」

話はすぐに切り上げた。洗脳され、傍若無人に振る舞っていたときのことだ。誰だっけ思い出したくないだろう。

だが、それがきっかけになってしまったか、2人の目の焦点が定まらなくなってくる。

「……あの子は罪を忘れてしまっていますが、罪悪感だけは残っているんです。だから、そういう風に言うのはやめてあげてください。夕雲が言える立場では無いかもしれませんが……」

「悪いのは大淀さんなの。ろーちゃんも酷いことはしたわ。でも、私に向ける言葉をろーちゃんに向けちゃダメよ」

そして同時に禁断症状へ。2人の幻覚は呂500すらも罵つていくようなのである。

ここ最近禁断症状に入るのも大分少なくなってきたらしいが、まさかこのタイミングで入るとは思わなかった。呂500と同じ部屋にいたということがストレスになっていたところに、私がトドメを刺してしまったかもしれない。

「せっかく助かったんですもの。一緒に生きていきましよう。夕雲がここで更生させてもらえているんですから、ろーさんも大丈夫です」
「夕雲姉さんの言う通りよ。だからそんなこと言っちゃダメ」

違う幻覚を見て、違う幻聴を聞いているはずなのだが、同調している言動。今だけは同じものを見てしまっているのかもしれない。

あの時の曙のように、幻覚もいい気味だ、ザマア見ろと罵っているのだろう。どんな表情で、どんな口調でそれを言っているかは当然わからないが、幻覚に謝罪している夕雲がそれを止めようとしているくらいなので、かなり強い口調なのだと思像出来る。

「夕雲、風雲、前にも言うたが、仲間を頼るんじやよ。お主らに視えておるものは、わらわにはよくわからんが、仲間が見えなくなるわけではあるまい」

食事中ではあったが、姉はそれを一旦中断して2人の間に。首に腕を回し、禁断症状が落ち着くまでやんわりと撫でる。

姉は2人よりも小柄ではあったが、その老成した言葉遣いと振る舞いから、なんだかんだ第九二駆逐隊のリーダーになっている。霰は一足早く禁断症状からも回復し、今はシロクロと一緒にいるが、この2人は根深いため、こういう場では気にかけているらしい。

「心を落ち着けよ。目を閉じ、別のことを考えるのじゃ。そうさ、このご飯は美味しい、それを考えておけばよい」

撫でながらも2人の目を手で隠し、言い聞かせるように耳元で呟く。自然と2人は落ち着いていき、深呼吸を繰り返すように。

姉もカウンセラーの素質があるかもしれない。雷とは違う方向で癒しが提供出来ている。

「……初春さん、凄いですね」

「なに、問題ない。仲間を気遣うのは当然のことじゃて」

私の尊敬する姉。心を乱さず、飄々と生きている姉は、見ていて気持ちがいい。三日月も、姉と一緒にいると普段より落ち着いているように思える。

「落ち着いたかの？」

「はい、初春さん、いつもすみません」

「助かるよ。あの子達、私だけならともかく他の子まで罵るなんて初めてのことだからさ」

禁断症状が終わったようで、姉が2人から離れた。目を隠していた手を離すと、2人とも焦点は定まっている。僅か数分で落ち着かせることが出来るのは、姉の技か何かか。

「ふむ、あまり良い傾向ではないの。わらわの見立てでは、お主らの視ておる其奴らは、お主らの心の奥底だと思っておったのじゃが」

夕雲も風雲も、心の何処かで呂500に死ぬと思っていたのか。まだ見立ての段階なので確定ではないが、姉のいうことは割と辻褃があっている。

この見立てが真だとした場合、今までは本人に対して死ぬと罵ってきていたが、それは夕雲も風雲も、死んで償おうと考えていたからだろう。心の奥底で、自分は死ぬべきと思っていたから、それが禁断症状に表れてしまった。

だが、今はその矛先が呂500に向いてしまっている。これはよろしくない。

「嫉妬かえ？」

「……そう……かもしれない。夕雲は、ろーさんが羨ましいんだと思います」

「私も……かな」

理由なんて聞かなくてもわかる。自分達が苦しんでいる罪悪感の正体を知らずに過ごしているのだから。思い出したくもないことを思い出して苦しむことが無いというのが、2人には羨ましいのだろう。それを、禁断症状の幻覚幻聴が口汚く表に出してしまっていた。「夕雲も、忘れられるのなら忘れたいと思ったことはありません。でも、

忘れてしまったら償えませんが、あの子達に謝りながら生きていくのが、夕雲の生き方ですから」

「私も忘れたいとは思ったことあるの。でも、そうしたら何のために仇討ちするかわからなくなっちゃうじゃない。だから、これも受け入れてるつもり」

最悪の記憶があるからこそ、2人は前に進めているようだ。そういう意味では、呂500はこれで停滞してしまう危険性がある。そこは雷達がカバーしてくれそうだが。

「自覚することはいいいことじゃな。口に出したなら、次からは多少変わると思う。安心せい」

「いつもいつも、ありがとうございます初春さん」

「ホント、助かるわ。さすが私達のリーダーね」

「そう褒めるでない。こそばゆいではないか」

ほほほと優雅に笑って元の場所へ。夕雲も風雲も清々しい表情に。

これが姉の力だと思つと、やはり誇らしい。こんな姉を持って私は幸せだ。

「三日月よ、お主も何かあればわらわに言うが良い」

「はい……その時は、また」

三日月もすっかり心を開いているため心配が無い。嫌なことがあれば相談するだろう。勿論、私もだ。

「何かお供え物でもした方がいいかしら」

「ここら風雲さん、初春さんはそういう人じゃありませんよ」

「わらわは神でも仏でもない。ちよつと助言が出来る、小粋なお姉さんじゃ」

いろいろあったが、和やかな時間が過ぎていく。こんな時間が続いていけばいいのに。

完成品

夜も更け、ようやく飛鳥医師達の話し合いも終わったようだ。その頃には施設の全員が1日の作業を終え、もう寝床に入ろうとしている時間帯。これだけ長々と話をしていたら、流石に全員が全てを理解したと思う。ここの事情に一番疎かった新提督も、今なら施設の事情を全て把握出来ているだろう。

彼らの食事情は雷がすっかり抑えており、夕食の残りや夜食まで用意して振る舞っていた。本当に気遣いがよく出来るものである。さすがは最初期からこの施設を維持してきた者。

今では拡張されたおかげで部屋も足りており、全員がちやんと部屋で眠ることが出来た。来客も今回は客室で寝泊り。談話室で寝てもらうようなことは無い。

「窓の外で何か光ったな」

「リコさんの夜偵ですね。私達が眠る前に、一度飛ばしているそうですよ」

私達の部屋は、運良く海の方に窓がある部屋だ。そこから外を見ると、小さな光を見つけた。何でも、こういう一番気が緩む時こそ何が起こるかかわらないと、リコが自分からやっているらしい。早朝や深夜と、こういう確認をしてくれているから私達の安全が保たれていると思う。

他の作業をあまりしない代わりに、完全に護衛としてこの施設に滞在してくれている。リコ自身も、仲間を殺された恨みと、脚を壊された憎しみが大きい。大淀の配下が襲撃してきた時は、容赦なく殺意を持って相手をすると言言しているくらいである。

「……そろそろ来るかもしれないな」

「そう……ですね。あれから1週間以上経ちますし」

私の予想なんてまだまだではあるが、嫌な予感だけはしていた。呂500の漂着が、何かのトリガーになっているのではないかという淡い不安。

呂500が失敗作だったとしたら、当然成功作も出てくるだろう。

むしろ、成功するまで何人も何人も犠牲にしていることくらいは簡単に予想が出来る。

「どうであれ、若葉は戦うだけだ」

「はい。私も……戦います」

「ああ、一緒にな」

何も来ないで終わってくれるのが一番だが、そうも行かないだろう。その時まで、私達は力を溜めておくしかない。

その日の深夜。突然の爆音で飛び起きる事となる。

「何があった!？」

「わ、若葉さん、あれを……」

同じように飛び起きた三日月が、一直線に窓へ向かい外を確認する。水平線の辺りが、妙に明るかった。

外を確認するのも大事だが、今は避難が必要だ。窓際にいたら何があるかわからないため、三日月と共に部屋から出る。滞在している全員がほぼ同じタイミングで廊下に出たため大混雑に。

「落ち着きなさい。おそらく敵の対地攻撃です」

階段の下から下呂大将が現れる。既に軍服姿なのは驚いたがそれは置いておいて、提督業に就くものからの指示は艦娘にとっては強力なバックアップだ。静かに指示を待つ。

「この施設はあの程度の対地攻撃で破壊されるほど柔ではありません。私がそのように指示をしていますから」

施設の修復は職人妖精達にやってもらっているが、こうなることを最初から予期して、いろいろと指示を出していたそうだ。深海棲艦の艦装まで取り込まれたこの施設は、ちよつとやそつとの攻撃ではビクともしない。

事実、爆音と大きな揺れはあったが、窓にヒビすら入っていないかった。安心安全な妖精建設、これは拠点としても優秀である。

「リコとセスはいち早く工廠に向かったぜエ！ 速攻で夜偵飛ばしてくれた！」

今度は来栖提督の声。準備が比較的早い深海組の2人、特にセスは

艦装と一緒に部屋にいたのだから特に早い。リコも工廠で呼べば来るような艦装であるため、工廠に到着するや否や、即座に戦闘機をありったけ飛ばしたようだ。

「瑞鳳いるか！」

「はいはい、いますよ提督」

「夜戦仕様にしてきた甲斐があつたな。外の深海棲艦と共に、施設を守ってくれ」

新提督も既に準備していた。言うが早いか、瑞鳳は階段を飛び降りてすぐに工廠へ。

「先発は五三駆と九二駆！ あとは先生のところの神風だ！ 二二駆と二四駆は援護のために後発！」

「君達は実弾兵器でしたね。足止め程度には問題ありませんが、なるべく命を奪わないように注意を」

敵がどうであれ、目指すのは全員の救出だ。大淀以外は殺さずに撃破するのがこの戦いの目的。自爆される可能性も非常に高いが、それを処理出来るのは私と神風だけ。

本当にまずいと思った場合は、命を奪うことになるかもしれない。だが、こんなふざけた敵のために手を汚すことは間違っている。そんなことのないように、私達がどうか自爆装置だけは押さえ込む。もしくは自爆する前に気絶だ。

「曙、工廠に君のための武器が用意されています。思う存分振るいなさい」

「わざわざ言うってことは、若葉と同じ仕様の槍つてわけね」

これで曙も救出組に加われる。3人で足りるかはわからないが、戦力が1人でも増えてくれるのはありがたい。

「私がここにいることを見越した夜襲にしか思えない。まだ内通者がいるというのか」

「でしょうね。目出だけで終わるとは思っていませんでした」

下呂大将は既に推理モード。大本営の遣いがここにおり、さらにはまだ帰っていないことがわかるものなど、同じ大本営所属の者くらいである。帰れないことは私達が眠る前には連絡していたようだし、そ

こから漏れたか。

誰もが寝間着から着替えることもなく、艀装を装備して出撃。夜襲はこれだから困る。完全防備と行かない三日月も大分困っている。

「アンタ、もしかしてその下何も着てないの!?!」

「寝るときはその方が落ち着くんだ。だから夜の急な出撃はあまり好きじゃない」

戦闘になってしまえば気にならないが、普段の制服よりも浴衣は動きづらいのは目に見えている。同じものを選択した三日月は後衛での援護のためまだマシかもしれないが、近接戦闘には支障が出るかもしれない。刀なら神風のように振る舞えるかもしれないが、ナイフを使ったスピード重視の戦術には向いていないか。

「……傷が隠せない……イライラします……」

「三日月、落ち着いてね。気持ちはわかるわ。すぐに終わらせましょ」
脚の傷が見えてしまっている三日月は、そのせいでイライラしているようだった。精神状態で戦闘に支障が出るのは問題。

こうして戦場となる場所に向かう間も、艦載機がその方向に向かっていく。夜だというのに尋常ではない数ではあるが、あちらもそれを的確に回避、もしくは撃墜しているようで、なかなか一筋縄ではない。

どれほどの人数を用意したのかは流石にわからないが、あの数の艦載機をどうにかしてしまうほどということ、かなりの人数か、精鋭揃いか。後者の場合、大将襲撃のときの難敵である可能性が高い。

「リコとセスが苦戦してるのか……瑞鳳のはどうなってるんだ」

「わからぬ。蹴散らしてはおるようじゃが、数が減っているものか」
「まだ見づらいです。ああもう、目が変に光る……」

暗くてよくわからない。片目だけだが夜目が利く三日月でも、まだ遠くて見えていないようだ。

だが、ここで急に嫌な匂いが漂った。今までにない殺意の匂い。矛先は私。今までなら呂500の海中からの狙撃だ。だが、この匂いは真正面、さらにはまだ遠方、そして、私よりも少し上から。

「つしやらあああー！」

突如叫び声と共に真正面から突っ込んできた。神風に匹敵するほど速く、それでいて雑に、私だけを標的にして突っ込んできた。持っているのはただの棍棒に見えるが、当たったらひとたまりもないことはすぐにわかる。

「クソ……！」

どうにかナイフで受けるが、今までに感じたことのない重さ。なんとかその場で押し留めることは出来た。ナイフが頑丈で助かる。

「おうおう！ お前が黒い痣の若葉かい!？」

「お前は……！」

どう考えても大淀の手のもの。夕雲と同じ制服を着ているということは、夕雲の妹だ。リコが以前に言っていた銀髪の夕雲型、朝霜。

「お前がリコリス棲姫を襲ったという朝霜か！」

「ん？ ああ、んなこともあったなあ。用済みになったから口封じにな！」

再度振りかぶってきたが、今度はそうはいかない。1人で突っ込んできたのだから、私の仲間達が容赦しない。三日月と雷が頭に向けて既に主砲を放っていた。出力は最大。水鉄砲とはいえ、直撃したら人間なら死にかねないくらいの威力になっている。当然、弾速も速い。

だが、朝霜はそれを見てから避けた。これが出来るのは神風くらいだろう。朝霜の速度はやはり神風に匹敵している。

「うそっ、あれ避けるの!？」

「あたいは若葉と話してんだ。邪魔すんじゃないよ！」

気付けば雷に接近していた。三日月の危機回避能力すらも上回る速度で近付き、持っている棍棒を横薙ぎにする。

「雷！」

今度は私の番だ。持てる限りの速度を出して、朝霜の攻撃を止めにする。

痣の侵食後、初めての实战。脚は私により強く力を貸してくれる。

海面を一蹴りするだけで、朝霜の背中に手が届くほどにまで跳べた。大淀との戦闘での力が、今も出ているようだ。

だが、それは諸刃の剣、使い続けると消耗しすぎて身体が動かなくなる、簡易なりミッター解除だ。切羽詰まった戦場では長くは使えない。

「お前の相手は若葉だろう！」

「ちよっかいかけた奴が悪いんだよオラァ！」

私が近付いたことですぐに対応してきた。雷への攻撃をすぐに取りやめ、振り向きながらも強烈な薙ぎ払いが飛んでくるが、これもうにかナイフで受ける。

今の朝霜は私しか見ていない。狂気に染まったような笑顔で私を見据え、少しだけ間合いをとった。

「朝霜お、勝手に突っ込まないでよお」

甘ったるい声と共に、雷が撃たれた。辛うじて三日月が回避させたようだが、完全な不意打ち。リコとセスに加え、瑞鳳の艦載機まで加えた航空戦力を潜り抜けて、私達の前に現れた。

またもや夕雲型の制服を着た、桃色の髪の艦娘。リコの因縁の相手、巻雲。

「巻雲……！」

「あ、名前知ってたんですね。はい、巻雲ですよお」

巻雲も朝霜と同じようにまだまだ余裕そう。だが、私にはそれだけではない。三日月も勘付いているだろう。この2人の危険さを。

「……お前ら、まさか」

「匂いで勘付くんでしたっけ。そうですよお、巻雲と朝霜は、完成品ですよお」

2人から深海棲艦の匂いがプンプンする。まるであの時の大淀と近かった。それに、施設で待機している呂500とも近い。

何らかの改造を受け、さらには負の感情を増幅させられた結果、私と同じ形で体内を侵食されて一部が深海棲艦になってしまっている。呂500が失敗作であり、この2人は成功作。意思も理性も残ったまま、ただただ力だけ手に入れたバケモノ。

「あんなゴミみたいな潜水艦と一緒にすんなよ。あたいらは制御出来てんだ」

「自我が無くなっちゃうなんてこともありませんでしたからねえ。おかげですっごい力が手に入っちゃいましたあ」

不意に夕雲に向けて砲撃。視線を向けることなく、一切の躊躇なく撃った。

「ボーツとしない」

その砲撃は神風が斬り払う。夕雲は妹の変わり果てた姿に茫然としてしまっていた。無理もない。いつかこうなる時が来るとは考えていたが、ここまで変えられての再会とは思っていなかっただろう。

外見は私達のようにはなっていない。私が言わなければ、ただの艦娘と勘違いするだろう。だが、2人は深海棲艦の艦装を身につけている。いや、艦娘のも混ざったハイブリッドか。

「何故ここに呂500がいることを知っている」

「んなモン、決まってるだろうが。教えてもらったんだよ」

「誰にだ」

「来栖司令だよ。あの人、あたいらの内通者だぜ」

空気が凍り付くが、私は騙されれない。私達を混乱させてやろうと考えて出た、感情変化の匂いがすぐに漂ってきた。それは巻雲からものだ。こう聞かれた時にこう返そうと事前に打ち合わせていたのだろう。考えていた流れ通りになってテンションが上がり、2人とも僅かに発汗したことが匂いからわかった。

ここに来て嗅覚はさらに敏感になっている。夜の闇の中、かつ寝間着での戦闘という極限の状況で、さらに私の能力は上がっていた。

「嘘だ。若葉には嘘はつけない」

「何を根拠にですかあ？」

「僅かな昂揚の匂い。ゲスな匂い。お前らからは若葉達を騙そうとしている匂いしかしない。おちよくってるんだろう。そうすれば本調子が出せないだろうからな」

私の嘘発見器としての性能は、下呂大将のお墨付きだ。私の返答で、凍り付いた空気は逆に燃焼する。こちらの仲間を陥れようとした

ことで、より強く怒りが込み上がる。

「マジかよこの犬。淀さんは深海の匂いを嗅ぎ分けるとしか言っていなかったぞ?」

「ちよつと計算違いでしたねえ。でも、やることは変わりませんよお」
2人の配下であろう人形達は、本当に精鋭だらけなのだろう。少数であの膨大な艦載機群を処理し、次々とこちらに流れ込んでくる。どれだけ用意しているというのだ。

「なんと禍々しいもののけか。見るに堪えん」

「あん? お前、何言ってるんだ?」

「穢らわしいと言っておるんじや」

姉の煽りに反応したのは朝霜。口が悪いだけあり、煽りには即座に反応してきた。煽るのは好きだが煽られるのは嫌いな典型的なタイプ。これが元々の性格ではないのはわかってはいるが、今は壊された性格を利用してもらうのがいい。

「夕雲、風雲、わかっておろう。奴らを救うためには」

「瀕死にまで追い込みます。わかっています。妹の痴態は、夕雲もこれ以上見たくはありません」

「自分もああだったと思うと気分が悪いわね……」

霰も無言で頷く。この時のために鳳翔から異常とも言える訓練を受けてきたのだ。あちらがどれだけ強化されていようとも関係ない。勝たねば、施設が破壊される。

「夕雲姉様、まだ生きてたんですねえ」

「巻雲さん、必ず救いますから」

「結構ですよお。早々に退場した出来損ないの姉様には、愛想が尽きました。巻雲がちゃあんとここで息の根を止めてあげますからねえ」
おそらく勝つのは難しい。そもその練度に改造も上乘せ、さらにはあちらの方には精鋭の人形までいる。それでも、せめて口だけは強く持つておかないと気圧されてしまう。それはよくない。

私達は、負けが許されないので。施設を守るためにも、ここは正念場だ。

自ら限界を

大淀の手の者、巻雲と朝霜に夜襲を受けた施設。下呂大将が先に手を回し、施設自体の耐久性がとんでもなく向上していたおかげで、対地攻撃を受けても何も破壊されずに済んでくれた。中には部屋が散らかってしまった者がいるかもしれないが、その程度なら問題ない。

先行部隊として私、若葉が率いる第五三駆逐隊と姉、初春が率いる第九二駆逐隊、そして下呂大将の秘書艦である神風が戦場に到着。それよりも先に航空戦を仕掛けていたのだが、敵はそれを全て撃退、もしくは回避しており無傷。

「自爆装置は無いようだ。火薬の匂いはしない」
「ならあの身体になった時点で取り払われています。あの子達も仕込まれていたはずです」

敵の内情はある程度夕雲が把握している。呂500は例外なのか、巻雲にも朝霜にも本来は自爆装置が仕込まれていたらしいが、今はその匂いが一切感じ取れなかった。有用性があるから取り外したか、身体の変化により自爆装置すら巻き込まれてたか、それは定かでは無い。

それは多少は安心出来た。人形の方は相変わらずのようだが、こちらはそういつた部分をいちいち気にしなくても済むだけで、多少は戦いやすくなる。

「淀さんじゃ若葉は生かして連れてこいって言われてっけど、事故で死んじゃまったら仕方ねえよなあ！」

相変わらず私を標的にしている朝霜。周りからの攻撃など見向きもせず、まっすぐ私に突っ込んできた。異常過ぎる速さで一気に間合いを詰められ、その速さも乗せた棍棒での殴打。

武器も雑なら攻撃も雑。ただ打ち負かすだけの喧嘩殺法。だが、それが一番性に合っているのだろう。雑なのに洗練されている攻撃。受け続けていたらナイフが保たないため、私も回避を選択。

「若葉さんー！」

「貴女達の相手は、巻雲とお人形さん達ですよお」

私の援護をしてくれようとした三日月に向け、巻雲が砲撃。腹への直撃コースだったが、危機回避によりどうにか紙一重で避けた。少し浴衣を掠めるが、致命傷にはならない。

「後発組、到着しました！」

「人形はあたし達がやるよ〜！」

ここで二二駆と二四駆が到着。周りの人形を1人ずつ気絶させるため、私達から少し離れた戦場へ。艦載機はまだまだ飛んでくるため、人形の足止めはこれで出来ているはずだ。これで戦いやすくなった。

それでも安心してはいけない。あの空爆を潜り抜けた人形だ。手練れの駆逐隊2つだとしても、食い止め切れるかはわからない。

初期の9人で朝霜と巻雲を相手にすることになる。巻雲はまだ全容がわからないが、朝霜はパワーとスピードを両立した難敵だ。なるべくなら2人同時に相手をしたくないため、4人ずつにわかれて対処。神風はどちらかについてもらいたかったが、

「私は人形の自爆装置を破壊してくる！ そつちはよろしく！」

「ああ、頼む！」

人形処理の方も大事だ。本来なら私と曙も人形の処理に行かなくてはいけないと思うのだが、少なくとも私を朝霜が見逃してくれそうにない。今でさえ滅茶苦茶な猛攻を必死に回避しているところだ。

「他所に気を取られて余裕かよ〜！」

「余裕なんて無いぞ〜！」

ただの殴打でも当たれば致命傷ほどの腕力。回避一辺倒になりつつあるが、暗がりの中でも何とか避け続けることは出来ている。いい加減、夜襲も慣れてきたものである。

戦場の全体を見ることなんて、今の私には到底出来ない。自分のことで精一杯だ。だからこそ、朝霜は私に引き付けて、他の者の援護を求める。完成品相手に1人で立ち向かうのは流石に無理がある。

「つと、不意打ちかよババア！」

「誰が婆か。それに、夜にしか攻めない貴様らに言われとうないわ」

回避した瞬間、姉の空飛ぶ主砲が死角から朝霜を撃つ。当然出力は

最大、艦装は破壊出来ずとも、生身の部分に当たれば大きなダメージになる。だが、死角からだというのに当たり前のように避けた。電探でも積んでいるのか。

「先に殺されてえのか!？」

「誰が殺されるかや。わらわに気を取られて大丈夫かえ?」

姉の方を向いた瞬間に身体を倒した。元々頭のあったところに、三日月の砲撃が通り過ぎる。死角からの攻撃をことごとく回避するのは、何の仕掛けがあるのか。

以前からおかしい装備はあった。ソナーに引つかからない潜水艦、加速度がおかしいタービン、そしてコレだ。主砲の威力も桁違い。違法改造のオンパレード。素体のスペックが異常に加え、装備まで異常となるともう笑えない。

「テメエら、誰から死にてえ!」

「だれも、しないよ」

私の陰から霰が顔面に撃っていた。前衛の私を盾にして、確実な攻撃を加えるのは策としては上等。そういう形ならいくらでも使ってくれて構わない。だがこれも避けられる。そろそろわけがわからない。

「寄つてたかつて鬱陶しい奴らだなあおい!」

3連続の回避運動をさせたところで、すかさず私が突撃。速さなら似たようなものだ。例えあちらの方が速かろうとも、体勢が崩れたところを見計らって棍棒を打ち払う。

これで胴がガラ空きになる。はずだった。

「テメエからだな、オラァー!」

逆側の脚が私の右の脇腹に飛んできていた。体勢が崩れていたはずなのに、あまりにも重い一撃。咄嗟に回避行動を取ったおかげで最悪なダメージは免れたが、脇腹がジンジン痛む。モロに受けていたら、骨までやられていた。

面子が違うとはいえ、4人がかりでここまでとなると、あの時の大淀と大差ないということになる。そうなると勝ち目が一気に遠退くことになるが、ここで屈するわけにはいかない。

「曙、そっちは！」

「何なのよアレ！ 手に負えない！」

巻雲の相手をしている残り4人も、傷一つ付けることが出来ないまま消耗させられている。

朝霜とは違う、完全な遠距離タイプの巻雲。まず曙が近付くことが出来ないところから始まり、3人で砲撃を放とうにも、それ以上の砲撃がたった1人から繰り出されて回避一辺倒に。まともに攻撃出来ないのに、あちらの主砲は深海製。海の上なら砲弾無限と来た。

「つまらないですよお。やっぱ姉様は出来損ないなんですわねえ。風雲はもつとダメダメですわねえ」

ほぼ遊び感覚にこちらに殺意を向けている。私達など敵ではないという態度がありありと伝わってきた。事実、こちらは徹頭徹尾手を抜いていない。殺傷兵器を持っていないことくらいである。

いくら助けたくても、艤装が破壊出来ないのはダメだ。ただの姫ならまだしも、この完成品はあまりにもおかしい。殺す程度でなくては救えない。

「何ですかその水鉄砲。当たるのは癪なので避けてますけど、巻雲のこと、嘗めてます？ そんなもので倒せるんですかあ？」

「夕雲達は、貴女達を救うために戦っています。殺すわけにはいかないんですよ」

「はあ、そうですかあ。それで死んでたら意味無いですよわねえ」

呆れたような声で、砲撃をさらに苛烈にしていく。

「自分の心配したらどうだよ！」

あちらに少しだけ意識をやった途端に朝霜の攻撃も苛烈になっていった。相変わらず私に集中攻撃。3人からの砲撃も綺麗に避けながら、それでも私から視線を外さない。

先程脇腹をやられたことで、地味に動きに支障が出てしまっている。骨はやられていないが、未だにジンジンと疼くような痛み。正直きついが、もつと力を出さなければ救うどころか勝つことすら出来ない。ならば、身体を張るしかない。死ななければいいのだ。ここにいるものは、誰も命を落とさしやいけない。

自分の意思で出来るかはわからない。あの時の私も理性を失っていた。勝手に私の全部の力が溢れ出していた。今はそれを使わなくてはどうにもならない。せめて朝霜を処理しなくては。

「あああああつー！」

大きく吼えて、左腕に意識を集中。一度無意識に出来たのだ。自分の意思で、私は私の限界を超える。あの時のように、左腕の姫が私に力を貸してくれると信じて。

ドクンと、心臓が高なった。左腕の疼きが拡がる。痣が拡がるわけではないが、痣のある全ての部分が熱くなるように感じた。しっかりと応えてくれた。脇腹の痛みも消え、ナイフを握る手にも力が入る。「おいおい、遠吠えまでして、マジで犬じゃねえか！」

好きなように言わせておけばいい。何を言われようが、このスタンスで行かなくては勝ち目がない。

力が湧き出るが、これはいろいろと削っている力だ。完全に力の前借り。後から大きな負荷が来ることはわかっているが、知ったことか。

「つらあつー！」

棍棒による攻撃に合わせて懐へ。先程までとは違う速さで飛び込み、今はもう無い自爆装置を破壊するかののように、ナイフで腹を薙ぎ払う。専用のナイフで即座に修復されるとはいえ、痛みはある。

このナイフだからこそ、殺す気で行っても殺さずに済む。嘗めていると言われればそれまでだが、それがこちらの信念だ。

「つぶね！　なんだなんだ、いきなり動きが変わったじゃねえか！」

それすらも避けられた。だが、避けた方向に即座に移動。絶対に逃がさない。それに、ここまでやれば意識はもつと私に集中するだろう。そうすれば、違う攻撃のチャンスが訪れる。

「皆の者、撃て撃て撃てえ！」

姉がすぐに気付いてくれた。私が限界を超えた動きで朝霜さえ翻弄すれば、他の3人の攻撃する隙が作れる。それに、その攻撃を回避している間に私が攻撃する隙が出来るはずだ。

今の状態なら、私も攻撃を見てから避けることが出来る。私が朝霜

に接近していたとしても、容赦なく撃つてくれて構わない。

「若葉さんなら避けられますよ！」

「うっよ……い！」

私がいても関係なし。3方向からの集中砲火。しっかりと散開して、避けられる場所を限定する連携。

「んなら、こいつらふざけやがって！」

それもしつかりと避けていこうとする朝霜だが、おかげで私が攻撃するタイミングが出来た。

ここまでしてようやく私は朝霜の速度を超えている。すぐに背後に回り込み、艦装の一部を破壊。まだ少しだけではあるものの、この異常と言えるスペックを削ぐことには成功しただろう。

「テメエ！」

「余所見かえ!？」

艦装に触れられ私の方を見た瞬間に、姉の空飛ぶ主砲による砲撃が朝霜の肩を撃ち抜いた。水鉄砲ではあるが、脱臼を誘発するくらいの威力はある。

だが生身も異常に強化されているらしく、肩を押されたように体勢を崩す程度。体内が深海棲艦となっているからか、何もかもが常人離れし過ぎてている。

「鬱陶しいんだよテメエら！」

棍棒を海面に叩きつけた瞬間、魚雷が爆発したかのような水柱が立ち上った。完全に視界が封じられ、匂いに頼ろうとした瞬間、眼前に棍棒が振り下ろされていた。

棍棒を無理矢理打ち払い、その場で小さく跳ぶ。水柱など関係なく、嗅覚のままに朝霜がいるであろう位置に蹴りを放った。

「当たるかよそんなチャチな攻撃！ 返り討ちに！」

「なら、これはあたる？」

私の蹴りは外れたが、水柱が晴れたところでこめかみを撃ち抜くような霰の砲撃。回避はされたが、おかげで私への反撃はキャンセルされ、間合いを取る時間が出来た。

自分のリミットが近いことがわかる。理性があるから身体のこと

がすぐに自覚できる。このままではまずい。

「当たらねえ！」

「ならばこちらは」

すかさず三日月の回避方向に合わせた砲撃。これは流石に直撃だと思いきや、棍棒で砲撃を弾いてしまった。水鉄砲だからこそ起こりうる回避方法。

だが、これでまた隙が出来た。先程と同じように艀装側に回り込み、追加で破壊。

しようとした瞬間、嫌な匂いが私に向かって伸びていた。気付いた瞬間に回避しようとしたが一歩間に合わず、何とか艀装を盾に直撃は防いだものの、砲撃をモロに受けることになった。

「な……に……!?!」

「ダメダメですよ。朝霜、そんなのに苦戦しちゃあ」

巻雲に撃たれていた。摩耶と私自身で整備したおかげで艀装自体も頑丈ではあったが、それでも半壊。主機の機能は損なわれていないため、まだ航行は可能。だが、私の身体がそれを許してくれなかった。背中がミシミシと音を立てた。タイミングが悪ければ、身体ごと持っていかれていた。これで済んでいるだけでも良しとしなくてはいけない。

「悪いな巻雲姉、そっちは？」

「しぶといからまだ死んではないけど、動けないんじゃないかなあ？」

巻雲の相手をしていたはずの4人は、その場から動けなかった。

ボロボロになった雷は気を失っているようで、比較的まだ傷が浅い曙が守るように前に陣取るが、それでも腕から血を流しているほど。夕雲と風雲も膝をついて荒い息を吐いている。

たった1人で駆逐隊、いや、連合艦隊レベルの火力をやつてのけているため、4人では太刀打ち出来なかった。本当にまずかったのは朝霜ではなく巻雲。

「わ、艀装壊されたのお？」

「あの若葉だけ別格なんだよ！ それでもあたいにや及ばねえけど

な」

「はいはい、そういうことにしとくねえ」

後発組と神風は、少しずつは減らせているものの未だ人形の処理に苦戦している。遠方からの航空隊も次から次へと来ては墜とされの繰り返し。意思なき人形にすら隙がない。

確かに私達は被害者の寄せ集めである継ぎ接ぎの駆逐隊だ。だが、ここまで来るのにみんな努力している。死に物狂いに鍛えているのに、こうまで差があるというのか。

心を折るわけにはいかない。膝をつくな。立ち上がれ。だが、前借りしていた力の代償は、最悪なタイミングで払わされることになる。

「つぎ……嘘だろ……」

朝霜が眼前に迫る中、時間切れ。今まで湧いていた力が抜け、突然目が霞む。脚に力が入らない。立ち上がれない。

「よくもやってくれたなあオイ」

「若葉！」

それにいち早く気付いてくれた姉が砲撃を放つが、軽く避けられた後、私の腹に強烈な蹴りが入っていた。縫合された深海の皮膚側だったおかげで多少なりダメージは軽減出来たが、骨がミシミシと音を立てたのがわかった。

「つがあ!?!」

「さっきまでの威勢はどうしたよ。立てよオラ！」

もう一撃。今度は何本か折れた。限界を超えた代償のせいで、身体が脆くなっているようにも思えてしまう。

「若葉！」

「キャンキャン煩いですよお。うちの妹をバカスカ撃つたのは、初春ちゃんですかあ?」

巻雲の砲撃により、姉も被害甚大。直撃は免れても、その衝撃で身体がボロボロに。

その光景を見て、霰は脚が竦んでいた。それも見逃されず、巻雲はすかさず霰にも砲撃。なんとか艤装を盾にしたが、それでも航行に支障が出るほどのダメージ。

あの大淀2人分とも言える戦力相手に戦うこと自体が間違っていたのかもしれない。ここにいる全員でかかればどうにかなったかもしれないが、そうなると人形が止められずにここまで戦えない。航空隊すらもこれである。

力の差は歴然としていた。実戦経験の差もあるだろうが、これはそれだけじゃない。単純なスペックの差。

「お前らが終わったら、次はあっちな。人形相手に拮抗とか敵でも無えよ。危ねえのは神風だけか」

「神風ちゃんも巻雲がやるよお。でもその前に、これを終わらせないとねえ？」

諦めてなるものか。だが身体は動いてくれない。どうすればいい。どうすれば勝てる。どうすれば。

「……っあ、あああつ！ あああアあアつ！」

突如響き渡る叫び声。その声の主は、三日月だ。今までになく輝く左眼を押さえながら、敵を見据えていた。押さええている手から光が溢れるほどだ。

「なんだなんだあ？ 突然叫び出しちまって。怖いなら逃げてもいいんだぜ。逃さねえけどな」

「大淀さんが言っていた、見窄らしい三日月ちゃんってヤツですかねえ。確かに外見がちよつと残念ですう」

嘲り笑う2人に、私も怒りが限界に達する。だが身体は動かない。このままだと三日月もやられる。全滅してしまう。1人ずつ罫り殺しにされる。それだけは嫌だ。力が欲しい。みんなを救える力を。

刹那、朝霜が宙を舞っていた。

「はっ。」

痛みを感じていないような素っ頓狂な声をあげた。私も、巻雲も、ここにいたものは誰も理解出来ていなかっただろう。何が起きたかわからなかった。

私の前には、三日月が立っていた。

深・海・棲・艦・の・匂・い・が・強・ま・つ・た・三・日・月・が・、・私・の・盾・に・な・る・よ・う・に・立・っ・て・い・
た。

2 人目の覚醒

大淀の手の者、卷雲と朝霜の襲撃により、私、若葉は死の寸前に追い込まれていた。自ら限界を超え、それedyやく朝霜と互角となつたところで卷雲に撃たれ、さらには力の前借りの代償が発生。もうその場から動けないところにまで持っていかれてしまった。

姉も霰も撃たれ、攻撃は難しい。雷は気を失い、曙がそれを守ることに専念するしかなく、夕雲と風雲も消耗著しく動けないでいる。

絶体絶命というところで、私の前に立つのは、深海棲艦の匂いが強まった三日月。不意打ちではあるものの、動けない私を攻撃していた朝霜を殴り飛ばした。

朝霜にダメージらしきものが入っているようには見えなかったが、あまりに突然のことで受け身すら取れていなかった。三日月がこんなことをしてくるとは思っていなかったのだろうか。

「ダメエ、何しやがる！」

当然睨みを利かせる朝霜だが、その瞬間に顔面に砲撃。紙一重で避けられてしまったが、避ける方向すら見越したかのように連射。全て顔面狙い。艦娘への嫌悪感を表に出した攻撃に見えてしまう。

それは棍棒で弾かれてしまう。実弾だったらどうなっていたか。一撃で即死だったかもしれない。

「コイツ……！」

「もー、朝霜何やってるのお」

卷雲もこれには黙っていられなかったようで、すぐさま三日月に砲撃。しかし、それも見越していたかのように紙一重で回避。

「んん？ ちよおつとおかしいですねえ」

「とりあえずぶつ殺せばいいんだろ！」

さらに卷雲が砲撃、さらには朝霜もその砲撃を掻い潜りながら突撃。三日月はそれすらも回避した。

仲間の私がいなのはアレだが、明らかにおかしい。三日月は危機回避能力に長けており、攻撃の回避は五三駆の中でも特に得意な方である。だからといって、大淀クラスの2人の総攻撃、さらには近距離遠

距離入り交じった攻撃ですら、ヒラリヒラリと回避するのは初めて見る。

霞んだ眼で、三日月を見た。チラリとこちらを見た表情は、いつになく無表情だった。さらには両眼とも輝いていた。

左眼だけだった深海の輝きが両眼になっているという事は、つまり三日月の姫のパーツがより身体を侵食したということだ。私の痣と同じように。

「三日月……！」

「守りますから、ジツとしてください」

声色は変わっていないが、感情が乗っていない。淡々と戦うだけのロボットのようにな、ただひたすらに攻撃を回避しながら的確なタイミングで卷雲と朝霜の顔面に砲撃を繰り返す。それが避けられたとしても、お構いなしに攻撃し続けていた。

「うーん、当たらないならいいです。他の人達先にやっちゃいましょう。朝霜、お願いねえ」

あまりにも回避されるためか、よりによって夕雲の方へと主砲を向けた。姉だとしても一切の容赦がない。

今撃たれたら、まず間違いなく避けられない。それほど夕雲は消耗している。加えて、それを唯一守れそうな曙は雷の側で、夕雲からは少し遠い。

「バイバイです、夕雲姉様」

「……」

放とうとした瞬間、またもや予測していたかのように三日月が卷雲を蹴り飛ばしていた。誰もその行動が予測出来ず、体勢が崩れたことにより照準がズレる。夕雲は辛うじて直撃は免れたが、衝撃でさらにダメージを受けることになる。消耗した身体には辛いだろうが、我慢してもらおう他ない。

「ちよつと朝霜！ ちゃんと押さえておいてくれなきゃ！」

「知らねえよ！ 気付いたらそっち向かってたんだ！」

圧倒的なスピードを誇る朝霜ですら、理解が出来ていなかったらしい。正直、私にも今の三日月の動きは理解出来なかった。

もうこれはスピードとかそういうものではない。やると考えた時には身体が動いていたような、そんな動き。

「なんなんだコイツ!？」

「厄介ですねえ。若葉ちゃんだけだったら朝霜だけでどうにでもなったんだけど」

実際そうだった。私でさえ、朝霜に傷一つ付けることが出来ていない。仲間達の力を借りても何も出来なかった。

それが、三日月に何かが起きてからは一転、2人を翻弄するまでになっっている。未だに改装すらしていない三日月がだ。本当に何が起きていているというのだ。

「若葉より面倒臭えー!」

回避から一転、三日月の動きを止めようと一気に突っ込んできた朝霜。一撃入れてしまえば終わりだとわかっているからこそ、水鉄砲のダメージを顧みず、ゼロ距離まで詰めてきた。

棍棒の一撃を貰ったら終わりだ。あまりにも重すぎるその攻撃を受けたら、肉も骨も内臓も、何もかも潰されてしまう。艦装でガードしても破壊されてしまうだろう。

「……」

当たり前のように、無言でそれを回避。さらには避けがてらこめかみに砲撃を一撃。砲口を突き付けた瞬間に回避されていたものの、朝霜は割と必死な顔をしていた。私では引き出せなかった顔だ。

代わりに、三日月から嫌な匂いも漂い始めた。濃くなった深海の匂いに紛れた、冷や汗の匂い。無理をしているからか、身体が耐えきれない動きをしているのかもしれない。

「っ……」

回避しつつ砲撃をしながら、急に鼻血を吹き出した。息も荒くなってくる。動きが鈍くなることはないが、無理をしているのが如実に表れる。

「おや、おやおやあ、もしかして若葉ちゃんみたいになちよつと限界超えてた感じですかあ? 時間切れってことですかねえ?」

「んだよ、驚かせやがって。時間稼げば終わりってことじゃねえか」

的確な砲撃でも、あちらはまだ無傷。所詮は水鉄砲ということか。朝霜の言う通り、おそらく時間を稼がれれば終わり。三日月がそのまま続けていたら、三日月の身体がおかしくなる。下手をしたらミッターを外された人形のように自沈してしまう。

「三日月……無理するな……！」

「動けない人は黙っててください」

冷たい返答。まるで施設に漂着した当初に戻ったようだった。完全に感情が失われている。

これはもしや、眼からの侵食が脳の方にも行ってしまったのではないか。私が喉を侵食されて声が変わったように、脳を侵食されて思考が変えられているのでは。

改装されてより根強く絡みついた私の深海の腕と違い、三日月はそれを見たことで改装を控えた。にもかかわらず、眼からの侵食にやられてしまっている。先程の叫び声はこれが原因なのかもしれない。

周りの仲間達が次々とやられる過剰すぎるストレスと負の感情。私と同じだ。負の力の覚醒には最適であるこの環境。それに三日月は吞まれてしまった。

「っあ」

三日月の脚が震えたのかわかった。冷や汗の匂いも大分強くなっている。私達8人がかりでどうにもならなかった相手を1人で相手取っているのだ。すぐに身体が壊れてしまってもおかしくない。

「終わりですかねえ。意外と楽しかったですよお」

「あたいはウザかったただけだね。無駄に抵抗しやがってよお！」

体力は回復出来なかった。まだ身体は動かない。このままだと、目の前で三日月がやられてしまう。手も足も出ず、救うことも出来ず、仲間を失うことになる。

そんなのは嫌だ。限界を超えても勝てなかったが、それ以上の力を。救うための力が欲しい。

「動け……動けよ……！」

力が入らない。大淀と戦った時と同じだ。身体が全く動かない。気を抜くと意識を失ってしまいそうだった。

まただ。また勝てない。あれだけの暴挙をしておきながら、力を持っていくせいで他者を虐げることには何の躊躇もない。なんであんな奴らに負けなくてはいけないのだ。間違っている。こんなのは。こういう時こそ落ち着かなければ。何のための精神鍛錬だ。心を静かに、冷静に戦場を見れるようにしなくては。

「つぐつ」

三日月が再度鼻血を吹く。三日月も稼働限界だった。

「つたく、手間取らせやがってよお！」

忌々しそうに朝霜が棍棒を振りかぶった。ダメだ。これはダメだ。そのまま下されたら、三日月は脳天をかち割られて即死。回避出来る体力も残っていないはずだ。もう、万事休す。

「お待ちせ。間に合ったね！」

朝霜の手から棍棒が無くなっていた。私の側には、瑞鳳が立っていた。矢を艦載機にしないことで、棍棒を直接撃ち抜いていた。

艦載機を飛ばし人形達を牽制しながらも、施設から徐々にこちらに來ていたのだ。すぐに來れなかったのは、当然施設に守るべき者がいるからだ。それともう一つ、どうしてもそこに来るまでに時間がかかる者がいたから。

「見つけた。見つけたぞ。桃色の髪、仲間の仇だ。忘れもしない！」

配下の脚を移植したことにより海上艦へと生まれ変わったリコモ戦場に参上。卷雲の姿をその目に捉え、怒り狂い、全ての艦載機を卷雲にけしかけた。

「お前だけはここで絶対に殺す。部下の、仲間の、家族の仇だ」

「ええ……なんでリコリス棲姫が生きてるんですかあ。しかも陸上施設型がなんでここに」

そんな卷雲の発言は完全に無視して、数十機の艦載機が一斉に卷雲に対して急降下爆撃を繰り出した。

「ああもう！ 計画が丸潰れですよお！」

「妹を虐めたの……あなただよね？」

爆撃を回避したところで、今度は巻雲の真横に文月。以前に垣間見えた、怒りに満ちた冷たい表情で脚を撃ち抜く。実弾故に容赦なく、巻雲も脚が破壊される……はずだった。そんな不意打ちでもしっかりと回避している。何なのだあいつらは。

「人形はどうしたんだよー！」

「全部斬ったけど？」

朝霜の横には、刀を鞘に納めた神風が居合の構えで立っていた。

「貴女、速いのよね。なら勝負しましょうか。私も速さには自信があるのよ」

言っている間に袈裟斬りにするように抜刀。それすらも避ける朝霜だったが、武器を落とされたことで反撃が出来ない。徒手空拳は出来ない様子。

「この……！」

「お前も仇だぞ。生かして返すと思っているのか」

リコの足の裏が朝霜の顔面にめり込んでいた。さすが喧嘩慣れした姫。神風が斬り、それを避ける方向まで加味して、既に強烈な蹴りを繰り出していた。あれだけ苦手だった海上の航行も、怒りで乗り越えてしまった。

初めてダメージらしいダメージが入った。朝霜は蹴られたことで鼻血を吹き出し、遙か後方まで吹っ飛ばされる。私の脇腹のお返しをしてくれたと思う。

「頑丈な奴だ」

「痛い！ テメエ、死に損ないがあー！」

「ならば、これならどうだ」

巻雲にけしかけていた艦載機は、今度は一斉に朝霜の方へ飛ぶ。急降下爆撃の他にも、射撃や爆雷など、ありとあらゆる攻撃を繰り出し、朝霜を亡き者にしようと猛攻する。

殺してほしくないと事前には言っていたが、リコは止まらない。元々リコが殺す前に救出しろと念を押されていたのだ。私達が動けない以上、リコの独壇場となる。殺意も一切隠さない。

「私は他の連中とは違うぞ。お前らをカケラも残さず殺すためにここ

にいる。そもそもお前は全員に手を抜かれてるんだ。それに勝ってお山の大將気取りか？ 程度が知れるな猿が」

「喧嘩売ってんのか teme エー！」

「先に売ったのはお前達だ。こちらは懇切丁寧に買い取っただけだが？」

リコの航空戦力はことごとく回避されていくが、武器を飛ばされた朝霜はリコに近付く事が難しくなり、途端に防戦一方となる。なるほど、朝霜は遠距離に弱いのか、持ち前の俊足を活かさないほどの圧倒的な火力の前には、回避に専念するしか無くなる。

逆に神風が少し困った様子だった。あの量の空爆を潜り抜けて、朝霜だけをしっかりとやるのはなかなか難しい。

「若葉……大丈夫？」

「山風か……正直かなりキツイ……身体が動かない」

「……肩、貸す」

私の救出として山風が来てくれた。今はその場からも動けなかったが、曳航してもらえそうだった。これで緊急時の撤退が出来る。限界を超えていた三日月の下にも、海風が駆けつけていた。江風と涼風は夕雲と風雲の下へ。曙は元より多少は動けたため、雷を回収して戦場から少し離れることが出来た。

「あたし達の妹を虐めたんだからあ、それ相応の罰が必要だよね」

「睦月型なんて旧式のオンボロ駆逐艦じゃないですかあ。巻雲達主力オブ主力の新鋭駆逐艦相手に何が出来るんですかあ？」

「わかってないなお前は」

真後ろから長月が巻雲の後頭部を蹴っていた。同時に皐月と水無月も艀装の破壊に乗り出している。

それだけされても、少しつんのめるくらいで終わる辺りめちやくちやである。

「いったあ!？」

「旧式とか関係ないんだよねボク達」

「君達とはさ、経験が違うのさ経験が!」

また圧倒的火力で二二駆を引き剥がそうとするが、真後ろの近距離

にピッタリと張り付いた長月に翻弄されている。朝霜とは真逆で、巻雲は近距離に弱い。近付かれないようにするための乱射だったわけだ。

これで2人の弱点は掴めた。最初から私は、朝霜ではなく巻雲を相手しなくてはいけなかった。そうさせないために朝霜がぶつけられた可能性はあるが、曙では私より速さが足りなかったために近付くことが出来なかったわけだ。相性を完全に間違えていた。

「鬱陶しいですねえ！　って、なに……」

避けながらも通信を受けているような素振り。それでも隙を見せないことが恐ろしい。4人がかりさらには瑞鳳がそこにちよっかいをかけているというのに、結局無傷。

「はい、大体は、はい。了解です。朝霜お、帰るよお！」

「ああん!?!　ここまでされて帰れるかよ!」

「多勢に無勢だつて!　お仕置き無しらしいから撤退撤退!」

「あー、それならいいや。こいつらの相手クソ面倒だから、一回仕切り直してえ」

ここでまさかの撤退。私達としてはありがたいが、リコを筆頭とした援軍は不完全燃焼。撤退など許すはずもなく、攻撃をさらに強める。

「次は絶対殺す。お前らは確実に皆殺しだからな!」

「誰が逃がすか!」

「今回は引き分けてつてこととお願ひしますねえ」

2人揃って爆雷投下。相変わらず逃げ足だけはやたらと速く、水飛沫が止んだ時にはその姿を消していた。

あちらは引き分けと言っていたが、またしても敗北を喫してしまった。こんなもの、あちらの気まぐれで見逃してもらったようなものだ。多勢に無勢かもしれないが、やりようはいくらでもあったように見えた。

得た力を使い、私は全力で立ち向かった。それでも勝てない。一体どうすればいいのだ。

三日月の変貌

卷雲と朝霜による夜襲は撤退にまで追い込むことは出来た。が、被害は甚大だったし、最後はほぼ負け戦だったというのにあちらが撤退してくれた。命あつての物種というものの、悔しい大敗である。

誰も死ななかつたとはいえ、私、若葉は自ら限界を超えることにより身体が動かなくなるほどに消耗。雷は未だに気を失つたままであり、他も息絶え絶え。

そして、問題は三日月である。私と同じように、負の感情の増幅によるためか姫のパーツの侵食が強まってしまった。今まで片目だった深海の輝きが今は両目。そして、戦闘中は自分の身体を顧みず無理を続け、最終的には鼻血を吹いて倒れることになった。

今は海風の肩を借りて施設に戻ってこれたものの、結局無表情無感情のままであり、一点を見つめてブーツとしている。まるでロボットみたいだった。

「怪我人はいるか！」

工場に戻るなり、飛鳥医師が叫ぶ。私は消耗が激しい以外だと、背中や腹に攻撃を受けて骨が軋んでいる。動かすと鈍い痛みがあつた。戦闘の時に何本か折れた感覚があつた。これは治療の必要があるだろう。

仲間内でも重傷に見えるのは雷だった。ただ消耗しているだけでなく、ボロボロにされている。骨に支障があるようには見えないだけマシだが、全身に傷があるような状態。

「異常があるものは医務室に頼む！ 他の者もすぐに休んでくれ！」

「山風……すまない、医務室まで運んでもらえるか……」

「わかつた……もう少しだから」

摩耶が何とかしておいてくれるということでは何とか機装を外し、工場に転がしたまま医務室へと向かう。夜襲ということでは眠気も来ている。ベッドに寝そべったら、そのまま落ちていく自信がある。

「三日月さんも運びますよー！」

「はい、お願いします」

海風の問いにも無感情で答える三日月。侵食の影響でああなつてしまっているのだとしたら、一番の被害者は間違いない三日月だ。治療出来るものかはわからないが、まずは診てもらわなくては始まらない。

だが、医務室に着いた途端に、視界が真つ暗になった。身体は限界を超え、頭も限界だったらしい。戦闘が終わったことに安心して、私はそのまま眠りに落ちていった。

翌朝。いつもよりも大分遅い朝だった。目を覚ますと、自室のベッドに寝かされていた。身体を動かそうとすると、未だに骨がギシギシと軋み、鈍い痛みが身体を駆け巡る。さらには肌から切られたような痛みも。立てないことは無いが、身体を激しく動かすことは出来ないだろう。

隣のベッドには三日月も寝かされている。まだ眠っているようだが、寝顔はいつもと違って無機質だった。やはり侵食が原因で、三日月から表情と感情が失われている。

「……………」

軋む身体に耐えながら着替える。胸に小さい縫合痕があることがわかった。昨日眠っている間に処置をされたのだろう。折れた骨の接合でもしてくれたか。

どうにか着替え終わると、三日月を起こさないように部屋から出た。私が着替えている間も、三日月はピクリともせず眠り続けた。

今日は全体的に遅い立ち上がりの施設。私ですらそれなりに早い内に入るらしい。起きているのはあの戦場に出ていなかった者や、比較的軽傷で済んだ後発組。私と共に戦闘した先発組は、その消耗からほぼ全員が目覚ましていない。新提督と下呂大將は、この現状を大本営に伝えるべく早々に帰投したようだ。

立ち上がりが遅かったからか、食堂に行くときまだ他の者が朝食を摂っている最中だった。私が起きてきた姿を見て、安堵の息が食堂中に響く。

「若葉、身体の方は大丈夫か。医務室に着いた途端気を失ってしまったから、眠っている内に出来る限りのことはしたが」

「まだ骨が軋むような痛みはあるが、昨日ほどではないな」

身体が動くだけでも回復はしている。折れた骨も繋がっているように思えた。こういう時は艦娘の身体というのがありがたい。さらには深海の侵食で回復能力も艦娘以上になっているのだろう。

「若葉は今日は安静にしていってくれ。昨日確認した段階で、あばらが3本折れていた。接合処置はしたが、完治するまでは今までの経験則で言えば3日はかかるだろう」

「了解した。少なくとも今日は安静にしておく」

今までの大規模なものとは違い、小さな処置のため、見込みは3日。それくらいなら安静にしよう。あわよくば高速修復材を使ってもらいたいものだ。

「昨日の今日で襲撃してくるかはわからないが、準備だけはしておきたいと思う。僕はこの後少し休ませてもらうつもりだ」

全員の治療を徹夜でやったらいい。今も少し仮眠をとっただけのこと。治療は全員終わったため、安心して眠れるだろう。

「この後、五三駆と九二駆には来栖の鎮守府に行ってもらおう」

治療ではなく、改装のため。姉と霰は第二改装が可能となり、それを実施することが目的だという。霰には少し特殊な書類が必要らしいのだが、それは下呂大將が特別に用意してくれることとなった。

施設の戦力増強は急務として誰もが認識している。それは新提督でもある。そのためには協力を惜しまないと話してくれたそうだ。実際に被害にあったのだから、監査など関係なしに対処しなくては勝てるものも勝てないと判断した。

「全員目覚めてからだだから、おそらく昼からになるだろう。雷も気を失ってはいたが身体中の傷を治療する程度で終わったからな。その内起きてくるはずだ」

骨まで行っていたのは私だけだったようで、実際一番の重傷は私だったらしい。その私が先んじて目覚めることが出来たのだから、後は時間の問題だろう。

ただし、と飛鳥医師が少し言い淀む。引つかかるのはおそらく三日月。見た目はそこまで傷を負っていないが、中身は別。特に頭が大変なことになっている可能性が高い。

「詳しくは三日月が起きてからにしよう。万全な状態にしておくことだ」

「了解」

一晩眠り、多少は回復したものの、安静を言いつけられているのは確かだ。今日は私が車椅子生活かもしれない。

しばらくして、昼近くによく三日月が目を覚ました。それまでに全員が目を覚ましており、それだけ激しい消耗をしていたということがわかる。

さすがに全員が私と三日月の私室に入ることとは出来なかったため、五三駆の面々と飛鳥医師だけが部屋に入っていた。飛鳥医師の名誉のためにも、三日月の服がおかしなことになっていないことは確認している。男の目に触れても問題ない。

「三日月……大丈夫か」

「はい」

無機質な表情で私をチラリと見て、身体を起こす。何に対しても興味がないような、そんな感じ。

改めて三日月の匂いを嗅ぐと、やはり深海の匂いが強くなっていった。それも、頭の方がより強めに感じる。左眼だけから両眼になり、さらには内側にまで侵食の根が伸びているのなら、そうなるもおおしくないか。

「身体の具合はどうだ」

「特に何も」

飛鳥医師の問いかけには冷たく返す。昨晚の戦闘と同じだ。感情のないロボットののような受け答え。頭は飛鳥医師の方を向いているが、目はその姿を捉えていないような、そんな表情。

「昨晚、シロにも診てもらっている。僕は医学的にしか確認出来ないから、シロには感覚的に確認してもらった。それに、深海のことはシ

口の方が確実だ」

「そうですか」

「左眼からの深海の侵食が脳に届いている、だそうだ。若葉の腕と同じように」

シロの感覚的な判定と、飛鳥医師の医学的な判定が組み合わせると、今の三日月の症状に辻褄が合うらしい。

私達艦娘は人間と同じ構造であり、身体の中身の配置なども全て同一。それを前提とした場合、眼球から奥に進んだ場所に感情などを司る脳の部分が存在するという。三日月の左眼の侵食は逆側の眼に辿り着いた後、奥側のその部分にまで達したのだろうと飛鳥医師は判断した。

侵食によりその部分が完全に壊されたわけではなく、狂わされたと考えた方がいい。そうでなければこんな反応すらしない。

「僕とシロでの見解だが、初春や霰と同様、三日月にも改装を受けてもらおうと思う」

「えっ、それって危険なんじゃないの!?!」

「ああ、前まではそう思っていた。だが、既に侵食されているのなら、改装した方がむしろいい」

深海の要素が身体に馴染んでいない状態で、負の感情による侵食が進んだことで、脳の機能が狂わされているというのなら、要素を馴染ませて少しは緩和できるのではないかという見解だそうだ。

そもそも、姫の体液は第二改装をしなければ耐えられないというのが、大淀のやり方である。それを加味すると、第一改装すらしていない三日月なら耐えられるわけがなかった。それ故に狂ってしまったている。下手をしたら、今の状態はかなり綱渡りの状態なのかもしれない。

「それで余計におかしくなることはないわけ?」

「絶対に無いとは決して言えない。とはいえ、三日月自身に強くなってもらわなくては、この侵食のせいで最終的に脳が破壊されてしまう可能性だってあるんだ。そうだったら、三日月は最悪の場合死ぬことになってしまう。なら、より確実な方を僕は選択したい」

第二改装ではないものの、無改装の状態よりはマシンだろうと考えたようだ。それに、改装によつて侵食の具合が変われば、感情が戻ってくるかもしれない。

このままにいるよりは死から遠退く。ただでさえ、少し戦闘しただけで鼻血を吹いたほどのだから、素体そのものの強化が必要だろう。

「三日月、記憶が消えているとか、そういうことはないだろうか。何か違和感があったら何でもいい。教えて欲しいんだが」

「何も。ここに漂着してから今までの記憶はあります」

それはよかった。感情と共に記憶まで失っていたらどうしようかと思つた。

「飛鳥医師、1つ聞きたいんだが、三日月の脳に直接接触するというのは」

「やめた方がいい。いくら何でも危険過ぎる。それは本当に最後の最後にするべきだ」

駄目元で聞いてみたが、やはりよろしくないか。それはそうだろう。万が一でもその処置がほんの少しでも失敗した場合、元に戻るところか再起不能になってしまう。いくら処置をするのが飛鳥医師だとしても、その不安だけは拭えない。

それなら、改装という形を取つた方が、より確実性がある。こと艦娘の身体を弄ることに関しては、飛鳥医師よりもドックの妖精の方が上だ。

「では三日月、昼食後、来栖の鎮守府で改装を受けてもらう。いいか？」

「構いません」

以前の三日月なら、考えて考えて結局改装を受けないという選択をした。侵食される前の三日月なら、今の飛鳥医師の問いに対し拒否をしていたはずだ。それが、ノータイムで許可。やはりおかしくなっているのは確かだった。

今の三日月は、恐怖も感じていないように見える。だから自分が壊れるかもしれない今の状況でも何の抵抗もなく首を縦に振ることが

出来てしまった。戦闘中に身体のことを考えていなかったのもこのせいか。

「……準備をしてくれ。僕は出て行った方がいいだろう」

「当たり前でしょ。着替えるんだから」

曙がシツシツと手を振り飛鳥医師を部屋から追い出した。

「三日月、着替えてくれ」

「はい」

他の者の目があっても関係なしにその場で寝間着を脱いでいく。ただでさえ身体の傷を見られることを嫌うのに、そんなことを忘れてしまったかのように全裸に。私と一緒にの時でも傷を隠しながら着替えるというのに。

ここにいるのは仲間同士ではあるが、ここまで躊躇いが無いと不安になった。あまりにも違いすぎて、曙すら変な顔に。

「アンタ、傷を見せるのはいいいわけ？」

「別に」

こんな形で吹っ切れられるとは思わなかった。感情が失われているということとは、羞恥心やトラウマすらも失われているということだった。これでは本当にただの機械だ。意思表示のある人形のような嫌な感じ。

ただ、記憶は失われていないため、それまでの自分の立場というのは守ってくれている。私を守るために戦ってくれたし、敵にはしっかりと躊躇なく攻撃してくれていた。

「三日月、これはどうする」

傷を隠すためにいつも貸し出している私のタイツを手渡す。指示ではなく、選択を促した。だが、

「別にどちらでも」

それにすらも興味なさげ。この変貌は心に刺さった。狂ってしまっていることが一番わかる瞬間だった。もうこれでは、私達の知っている継ぎ接ぎの三日月は何処かに行ってしまったとしか思えなかった。

三日月が改装により元に戻るかはわからない。むしろ、より悪化する

る可能性だつて秘めている。死なないよりは生きていてほしいのは当然だが、これ以上の変貌を見せられたら、心が折れそうになってしまう。

感情への侵食

戦闘の傷の治療は概ね完了。傷としては一番重かった私、若葉は、今日の間は安静にしろというお達しを受けている。完治まで見込みで3日。その間はあまり激しいことは出来ない。

それまでの間に、私達第五三駆逐隊と姉率いる第九二駆逐隊は、来栖鎮守府に出向くこととなった。理由は姉と霰の第二改装、そして、深海のパーツに脳を侵食され、一切の感情を失ってしまった三日月の第一改装のためである。

「お前さんと相乗りっつーのは初めてだなア」

「安静にしろと言われているからな」

その来栖鎮守府への航路。私は来栖提督と自身の艦装と共に、大発動艇で運ばれていた。操縦する文月も、私が怪我人ということであり丁寧運んでくれている。

だが、どうしても三日月が気にかかるようだ。航行していても、どうしても視線はそちらの方に。

「ああなっちまったんだから、気にはなるわな」

「ああ……正直、若葉も辛い」

私以外は自分で航行可能であるため、自分の脚で来栖鎮守府に向かっている。当然三日月もその中の一人なわけだが、事務的についできているだけで、自らの意思は何処にも無かった。記憶があるから私達は仲間だが、感情がないから好きも嫌いも無くなってしまっている。

「三日月い、なんか今日は近付きづらいオーラ出てるよ?」

「そう思うなら近付かなくてもいいです」

「いつになく冷たい!」

三日月がどうなっているかは全員に通達されているが、気にせず臈月と水無月は接触を図る。しかし、感情のない無機質な返答に、テンションの高い2人もタジタジ。どれだけちよっかいをかけても、喜びもしなければ怒りもしない、淡々とした受け答えに、見ているこちらが辛くなる。

2人が話せば少しは変わるかと思っていたが、そんなわけが無かった。脳への侵食はそれほどにまで重い。私の腕とは重みが違う。

「……若葉がもう少し強ければ」

「若葉よオ、それはちよいと違うぜエ」

私がおう少し戦えれば、三日月が負の感情に呑み込まれることは無かったと思う。三日月を不安にさせたのは私が弱かったからだ。だが、来栖提督はそれは違うと慰めてくれる。

「三日月がああなつちまったのは、誰のせいでも無エよ。強いて言うなら、ああなる原因作った大淀だろうが。お前は自分を責めるんじゃないねエ」

「だが……」

「んなこと言ったらよオ、お前、仲間全員を貶めることになるぜエ？ 自分も含めて弱エから三日月がああなつちまったつてなア」

そう言われてしまうと口を噤んでしまう。私も含め、あの時までに出ることは全てやってきたはずだ。

「今回は敵が強すぎたんだ。初めて見る敵にお前らは充分健闘してんだよ。だから、次は負けねエって意気込んでけ」

ニカツと笑って頭を撫でられた。相変わらず人相は悪いが、不思議と落ち着けた。

文月達はいつも、この人に背中を押されて戦っているのか。これなら力も出ることだろう。

「……そうだ、1つだけ聞かせてくれ。絶対問題ないのはわかっているんだが、ちよつとだけ」

「あん？ 俺にか」

「巻雲と朝霜がな、来栖提督が内通者だとぬかしたんだ」

撫でている手が止まり、表情は変わらないが怒りの匂いが漂う。だが、嘘を暴かれた時の焦りや緊張の匂いは一切無い。

良くも悪くも直情的な来栖提督は、匂いから感情が判断しやすい。気持ちいいくらいに素直だ。それは他の艦娘達を見ていればわかる。特に文月。

「若葉がいなかったら、俺ア疑われっぱなしだったろうなア。お前の

嗅覚に感謝してるぜエ」

「なら、来栖提督は内通者じゃ無いんだな」

「ツたりめエだ。俺ア大将の前で嘘つき通せるほど頭良くねエよ。あの人は戦術とかとは別の位置にいる人だからな。それに、大将が先に俺のこと徹底的に調査してんだ。ありや隠しきれねエ」

嘘の匂いは引き続き無し。いくら来栖提督が自分を隠すことが恐ろしく上手いとしても、全方位からの調査をされて疑いようが無いことは判定出来ている。下呂大将の目は誤魔化しようがない。

「あいつらがこちらで遊んでるのはよくわかった。生きていることを後悔するくらいにぶちのめしてやる。やるのは俺じゃなくて仲間だが」

「しれーかんの分まで、あたしがやつちやうよく」

文月がニコニコ笑いながらこちらの話に加わってきた。表情は笑顔だが、怒りの匂いが漂ってくる。三日月のこともあり、怒り心頭のようにだ。笑っていることが余計に怖かった。

久しぶりの来栖鎮守府。今回は飛鳥医師は来ず、五三駆と九二駆が出向したのみ。出迎えは今回も明石だった。

「事前に話は聞いています。これ、若葉のために修復材の残りを用意しておきました。使ってください」

「助かる。安静にしているのは性に合わない」

「飛鳥にも使ったってことを連絡しとくぜエ」

この場で使うのは躊躇われるので、全てが終わった後に使わせてもらおう。まずは本題を終わらせなければ。

「3人の改装ですね。初春と霰の第二改装と、三日月の第一改装ですか。三日月は大丈夫なんですか？」

「改装しねエとマズそうなんだ。アレ、見てみな」

明石を促す来栖提督。視線の先には、今回の主役である3人が集まっている。改装を受ける前に、改めて三日月の状況を姉が視しているところ。医学的な飛鳥医師、感覚的なシロに加えた、霊感的な姉の見解はまだ聞いていなかった。

「ふむ……若葉と同じじやの。深く馴染んでおるが、取って食おうとはしておらん。じゃが、お主自身の身体がそれに耐えられないようじゃ」

「そうですか」

「そっけないのう。改装してしまえば、また何か変わるじやろ。ものけもそれがいいと頷いておるわ」

「そうですか」

返答も無感情なため、姉は苦笑していた。霰もブーツと眺めているが、少し心配そうにしているのがわかった。

3人目の見解まで含めると、三日月の侵食は脳の感情を司る部分にまで及んでおり、それが改装が一切されていない三日月には悪影響を及ぼしている。そのせいで感情が失われ、機械的な反応しかしなくなってしまうている。

今回の改装で三日月の素体の能力が底上げされれば改善されそうであるという飛鳥医師の読みは、姉の見解により間違っていないという方向に向かいそうである。三日月に憑いているというもののけがそれを望んでいるようだし。

「感情が……失われてる?」

「おう、若葉の腕の痣と同じことが、頭ん中で起こっちゃったらしい」「なるほど……改装で緩和される可能性があるんですね。了解です」

すぐに納得した明石が改装の準備に取り掛かる。順番はこちらで決めていいとのこと。

「まずは三日月がええじやろ。早めにやっておいた方が良い」

霰も頷く。一番重い問題であろう三日月の改装は、早いうちに終わらせたほうがいいだろう。誰もが気が気でないのだから、解決は早急に。

三日月は何を言ってもただ従うだけなので、すぐに改装を始めても良かった。私も気になるので、明石の邪魔にならないようにドックの近くで待たせてもらうことにした。

時間にして僅か10分。私達が改装を受けた時と同じくらいの短

時間で改装終了。短い時間ではあったが改装を身近で見ている限り、なんのアクシデントもなく、最初から最後まで順調だったようだ。

明石も何事もないことには安心していった。新しく用意されていた三日月の制服を準備し、ドックを開く。その瞬間から、先程よりもさらに強い深海棲艦の匂いが漂ってきた。侵食が強まっているのはこの時点でわかる。

「はい、終わりました」

私と同じなら、外見的な侵食も進んでいるはず。だが、そこが問題なのではない。三日月の場合はより大きく脳を侵食する可能性が非常に高いことが問題。

「ん、んんう……」

先程までと違い、気怠さを感じる呻き声と共に身体を起こした。それだけでも感情が戻ってきているように聞こえた。侵食の度合いがどう変わったのか。

身体を起こした三日月は、以前から少し変化していた。白髪の割合が以前よりも増えており、半分だったものが7割に。私は肌の色の変化だったが、三日月にはほぼ髪に影響が出たようである。

「お疲れ、三日月」

声をかけると、すぐに私の方を向いた。これも先程までと違うところ。

「……さっきまでの自分が別人みたいに思えます」

「ああ」

機械的に答えるときも、視線は変えずにボソリと呟くように話していたのが元に戻っている。言葉にも感情が戻ってきてくれた。安心からドツと力が抜けるようだった。

だが、これで本当に安心するのはまだ早い。一言二言では人格への影響はまだわからない。

「……傷痕は本当に消えないんですね……残念です」

ドックから出て、身体を晒す。私の時と同じように、残念ながら全身にある縫合痕は1つたりとも消えていない。これが三日月の身体であると定着してしまっている。

それよりも私は、自分の傷痕に拒否反応を示していることにさらに安心した。これにより、本当に三日月は帰ってきたのだと実感した。本人には申し訳ないが、あのコンプレックスの克服の仕方はやはり間違っている。

「三日月、気分は悪くないか。何か違和感は」

「今は特に……大丈夫です。その、服を貰ってもいいですか」

「はいはい、用意してますからね」

明石が手渡した服をそそくさと着る。気心が知れた私にだって、長く傷を見せることを嫌がる三日月なのだから、これがいつものことだ。特に今は、この場にある意味部外者である明石もいるのだから、気が急いても仕方ないこと。

明石も今までのことがわかっているので、いつも貸し出している私のタイツも用意してくれていた。それがわかるや否や、脚の傷を晒していたくないという気持ちがありありとわかるように穿く。

「あの戦いの中……突然頭の中が真っ黒に染まるような……そんな感覚がしたんです。そうしたら……敵を倒さなきゃって、若葉さんを守らなくちゃって、それしか頭の中から無くなって……」

着替えながらあの時のことを話してくれた。

三日月を除く仲間達が次々とやられていき、私が限界を超えた代償で身動きが取れなくなってしまうことで、朝霜に殺されようとしていた時だ。過剰なストレス、負の感情に呑み込まれたことで、眼からの侵食を促した時、三日月は頭の中が黒く染まるという感覚を感じたらしい。結果がああ無感情状態。

その後、やらなくちゃいけないと思っていたことが終わったため、何事にも興味が無くなったと。守るべきものが守れたことで、守ったものへの興味すら無くなってしまっていた。おそろしく極端な思考回路。

「今は大丈夫なんだな？」

「はい、おそろく。ですが……感情を司るところを侵食されたと言っていましたよね。その影響があるかもしれない……」

目がチラチラと輝き、鱗粉のようなものが散らばっているのがわ

かった。感情が昂ぶると光り輝く三日月の眼だが、これは今までにあまり無い輝き方。

「おそろく……若葉さんの腕と、私の眼の元々の持ち主は同じなんだと思います……だからか、若葉さんのことが……他人と思えなくなっているんです」

侵食がさらに拡がったか、思考にも少しだけ影響があるようだ。同じ姫のパーツが私と三日月に分かたれたことで、三日月は私に対して自分のものを持っているという感覚を持ってしまっているらしい。

思考が本来の持ち主に近付いてしまったのだろうか。それは、ここにいらないシロに診てもらうのが良さそうである。

着替え終わり、肌を極端に隠すようになった三日月は、徐に私の左腕に触れた。両腕が姫のものではあるが、左腕は特に顕著にそれが出てしまっているため、三日月としてはそれがとても落ち着くようである。

「落ち着きます……私の腕のよう……」

危険な思考であることは間違い無いだろう。眼から脳に侵食されて、その深海棲艦と同調していることは間違い無い。攻撃的ではなく、私には特に友好的ではあるが、本来の三日月は少し薄れてしまったようにも見えた。

侵食が脳に複雑に絡み付いてしまっているようだった。失われた感情は戻ってきたが、戻り方がおかしいとも考えられる。狂っているとは思わないが、歪んでいるように思える。

「とりあえず、改装は無事完了ということでもいいですかね？」

「あ、はい、大丈夫です。明石さん、ありがとうございます」

三日月が無事元に戻った、というのは少し違うかもしれないが、無感情のロボット状態から脱却出来たのは素直に喜ぶべきだろう。より深く侵食は進んだが、悪い方向には向かっていないようである。

しかし、私の腕と三日月の眼の本来の持ち主、駆逐棲姫は一体どういう者だったのだろうか。施設に残る協力的な深海棲艦のように、この駆逐棲姫も私達に友好的な存在だったのかもしれない。

仲間達の決意

来栖鎮守府にて、三日月の改装が完了した。元々は深海棲艦のパーツの侵食を恐れて控えていたが、それより先に負の感情での侵食が発生してしまったため、改装によりその影響を緩和出来ると考えて実施。結果、三日月は侵食の影響で失われていた感情を取り戻すことに成功した。

代わりに、思考の方に影響が出てしまっていた。元に戻ったように見えて、少し歪んでしまっている。私、若葉の腕が自分の腕のように見えてしまうという変化だ。そのため、私の側にいることがより一層落ち着くようになったらしい。

「三日月、これは流石に」

「落ち着くんです。これが一番」

その三日月、今は私の左腕に抱きつくようにベツタリである。元々私の側にいることが多かったものの、ここまででは無かった。失った感情が戻ってきたら、今まで以上に感情を出すようになったとか。豹変と言っても差し支えが無いほど。

こうしていると、三日月の深海の匂いは少し控えめになる。心が落ち着いているからかは定かでは無いが、あまり濃すぎるのも問題はあするため、私はやりたいようにやらせている。歩きづらいが。

「ふむ、やはり三日月はわらわの妹のようじゃの」

先に改装を終えた姉が、私の状況を見ながらしみじみと呟く。現在霰が改装中。

今の姉は改二。服も変わっているが、一番目につくのは、やたらとポリウムが増えた髪の毛の量。以前から長いとは思っていたが、改装によりそこも強化された様子。

第二改装は姿も変化する者がいるとは聞いたが、姉はそれに該当しづらい。私には今のところ縁がない話だが。

「初春さん、今後ともお世話になります」

「うむ、それが一番落ち着くのならそうすれば良い。もののけも落ち着いておるからの」

私の意思は何処かに行ってしまったようだが、三日月が落ち着けるのならそれはそれで。

「おわったよ」

最後に改装していた霰が戻ってきた。行く前と後で身長が変化し、姉以上に大きな変化に見える。制服も変わり、少しだけ大人びた雰囲気。今までは私達よりも小さく幼いイメージだったが、それも払拭されたようだった。話し方は改装前から変わっておらず、外見だけが改装されたと言える。

それともう一つ、施設に所属する艦娘としては最上級の能力を提げてくる。

「だいはつどーてー、つかえるようになった」

「おお、我々には無い、唯一無二の力じゃな。九二駆は輸送も可能になったのう」

フンスと鼻息荒く、ダブルピースしながら宣言。これにより、施設外の者の力を借りずとも、緊急時に施設からいろいろ運び出せるようになった。これで霰は施設に無くてはならない存在となるだろう。

この改装をする前から、霰は禁断症状を完全に克服している。突然の幻覚に襲われることもない。時間はかかったが、霰は完治したことになる。胸に入っているのは深海棲艦の胸骨ではあるが、元通りになったと自信を持って言えるだろう。

「おう、全員終わったかア？」

霰の改装が完了したことで、来栖提督も工廠にやってくる。これまでの時間、裏で飛鳥医師や下呂大将にいろいろと連絡してくれていたらしい。

来栖提督の姿を視認しても、三日月は私の陰に隠れるようなことはしなかった。ようやくこの人相にも慣れたようだ。

「霰は大発使えるようになるんだよな。それを大将に話したら、大発1個持ってけつてよ。飛鳥んトコにも1つありや便利だろ」

「ありがとう、しれいかん」

「恩に着る。我々九二駆のさらなる躍進に繋がるのう」

大発動艇は武装でも無いので、なんの気兼ねなく渡せるのだそう

だ。至れり尽くせりである。

「三日月、お前は大丈夫かア？」

「はい、おかげさまで」

無表情なのは変わらないが、声色に感情が乗っていることがわかり、来栖提督もご満悦。私の左腕に抱きついていいることはあえてスルーする方向である。

「今日はもう時間が遅エからな、一晚泊まっていつてくれや。飛鳥にやもう伝えてあるからよオ」

「すまない、助かる」

さすがに今から帰投したら、施設に着くのは真つ暗闇の夜だ。まともな武装も持たない状態で進むわけにはいかないし、帰るからと言って誰か護衛に付けてもらおうのもどうかと思う。

それに、いつもとは違う場所で寝泊りさせてもらうというのは、少しだけテンションが上がるというものである。私達は喜んで来栖提督の申し出を受けた。

部屋割りには以前匿ってもらった時と同じで、私は三日月と相部屋となる。雷と曙、姉と霰、夕雲と風雲できっちり4部屋。夕食も振る舞ってもらえるということでもとてもありがたいが、雷は家事をやらないうことで相変わらずソワソワしていた。

それまでの時間は当然フリー。そこで私達は、一度集まって今後のことを話す。最終的な決定権は私達には無いのだが、意思表示が出来ればと思った。

割り当てられた部屋に8人も入れないため、都合よく誰もいなかった談話室を使わせてもらう。どうせならと、許可を貰って雷がお茶を淹れてくれた。心を落ち着けて話さなくては、いい案も出ない。

「私達には力が足りないわ」

曙が第一声。悔しそうに搾り出した。

「巻雲相手に近付くことも出来なかった……私にはそれしか無かったのに」

「正直、朝霜より巻雲の方が厄介よね。撃つても避けられて、そもそも

撃たれてまともに攻撃も出来なかったし」

「当たったところで水鉄砲じや艦装は破壊出来ん。それを見越して、彼奴らはわざと艦装で止めよる。我らが無力であることを嘲笑うようじゃった」

あの2人は、あの時には正直どうにもならなかった。まともな武装でも相手が出来たかどうかわからないほどに強かった。艦装も本人もインチキの塊。

だが、攻略出来ないわけではない。あの戦場で、私は2人の弱点に気付けた。

「巻雲は近距離に弱いと思う。朝霜は逆だ」

「なんでそう思ったの？」

「巻雲は間近に張り付いた長月を引き剥がせないようだった。多分、あいつの馬鹿みたいな乱射は誰にも近付けさせないためだろう。朝霜はリコの爆撃を潜り抜けて近付くことが出来なかった。あの俊足を封じられて防戦一方だったぞ」

単純なことだが、身体が動かず倒れ伏していたからこそ、霞む目でもそれだけは確認出来た。

弱点らしい弱点はわかったが、それを突くことが出来るかは私達の実力次第ではある。私と曙が巻雲の乱射を潜り抜けて近付くことが出来ればよし。朝霜がこちらに近付く前に6人がかりの掃射で足止めできれば尚よし。

だが、今の私達の間では、それは出来ないだろう。朝霜はいの一番に私に突っ込んできた。あれは巻雲を守るためでもあったのだろう。私の速さなら乱射を潜り抜けてくるかもしれないという可能性を加味して、先んじて封じてきた。

「朝霜は単純ね。なら問題は巻雲か」

「不意打ちに弱いのもわかりましたよ。長月さんの蹴りが当たったわけですし」

「言ったら朝霜もよね。リコの蹴りがモロに入ってたわ。アンタもね」

「あれは……まあ……あの時はいろいろありまして」

曙から目を逸らす三日月。無感情の戦闘はあまり思い出したくないらしい。

「あれ何だったのよ。あいつらの攻撃全部避けたわよね」

「あれは……ですね。考えた時には身体が動いていたというか……避けたいと思った時にはもう避けていたというか……」

本人もよくわかっていないようだ。あの状態だと、考えるまでもなく勝手に身体が動いてしまったとのこと。理屈はよくわからないため、戻ったら飛鳥医師に聞いてみよう。

「若葉と曙で巻雲を叩くのがいいと思う。6人で朝霜を止めてほしい」

「簡単に出来れば苦勞しないわよ。アンタはともかく、私は速さが足りてないわ」

だからといって、1人で突っ込むのは得策ではない。それこそ、無感情の三日月に補助してもらうくらいでないと難しい。そもそもそれでも勝てるかどうかかわからないほどの難敵だ。

なら、足りないところを補うしかないだろう。もつともつと鍛えないと、奴らには勝てない。今持つ技能をさらに極め、持っていない技能も持つくらいで無ければ。

「また吐くほど特訓するしかないな」

鳳翔にしてもらったあの訓練、何人かトラウマになっているのか、ビクンと震えた。特に危なかったのは霰。余程刻まれてしまったか。

「が、がんばる。あられも、かちたいから」

「うむ、あれは厳しいが確実に力になるからの。せつかくの第二改装じゃ。有意義に使わねばな」

やる気満々の霰と姉。巻雲に撃たれ一撃でやられたのが悔しいと、匂いも物語っている。勝ちたいという気持ちが大きく、どんな特訓にも耐えてやるという覚悟も伝わってきた。

「私なんて気を失ってたんだもの！ あんなの嫌だから、強くなりたーい！」

「ホントよ。アンタが気を失ってる間、私がずっと守ってたんだから。せめて自分の身くらい自分で守ってくれない？」

「もう、曙は素直じゃないんだから。守ってくれてありがと。今度は私が守ってあげるんだから！」

雷も意気込み充分。1人だけ気を失っていたという事実が、他よりも強い悔しさに繋がっていた。曙も憎まれ口を叩きながらも、雷とはいいコンビをしている。

「若葉さんは私が守りますから」

「頼む。若葉は突っ込むしか出来ないからな」

「何にも邪魔をされずに突っ込めるように、私も強くなります」

距離がやたら近いが、三日月も私を守ると躍起になっていた。思考の変化からか、少しだけ好戦的になってしまっている感が否めない。それでも、私達と共に立ち向かうと誓ってくれたから安心だ。

と、ここでずつと黙りこくっていた夕雲と風雲が大きく息をついた。

こうやって集まる前から今の今までずっと考えていたのだと思う。相手は実の姉妹だ。攻撃するのに抵抗だってあるだろうし、攻撃されるのが心を抉るだろう。それが嫌で戦えないと言ったとしても、誰も文句は言わない。

「夕雲、風雲、無理はしなくていい」

「……無理じゃないわ。でも、やっぱり姉妹に刃を向けるってのはちよつと考えちゃうよねって」

「ええ、覚悟は要ります。ですが、やらなくては全滅してしまうの間違いありません」

ギョツと拳を握り、決意したように顔を上げた。考えて考えて考え抜いて出した結論だ。相手が姉妹であろうと、今は私達の最大の脅威。あちらが姉妹でも関係なしに殺しに来るのだから、それ相応に相手をする必要がある。

「強くなります。強くなれば、巻雲さんも朝霜さんも救えるのでしよう」

「まずは倒さないと話にならないんだもの。なら、倒せるだけ強くならなくちゃいけないでしょ」

勿論そうだ。倒せるくらいに強くなければ救うなんて以ての

外だ。返り討ちに遭うのがオチ。私達の目的を果たすためには、あれを大きく上回らなくてはいけない。1人1人の力では届かなくても、仲間達と共に上回ればいい。

ここにいる者だけではない。施設にはまだ仲間がいるのだ。みんなで力を合わせれば、きつと上手くいく。いい方向に行く。

「だが、どう強くなる。やっぱり鳳翔か」

「それが妥当でしょ。せっかく施設にいてくれるんだし」

今まで鍛え上げてくれた鳳翔なら、私達をより高みに引き上げてくれるだろう。そう話していた矢先、談話室の入り口に飛び込んできた1人の艦娘。

「話は聞かせてもらったわ!」

それは足柄だった。私の戦闘スタイルの模倣相手。接近戦では獣のように駆け回る、勝利に飢えた狼。

「勝ちたいのよね。勝ちたいのよね! なら、私達がアンタ達を鍛え上げるわ!」

「ね、姉さん、いきなり割り込んじやダメですよ……」

その後ろには羽黒も。五三駆を鍛えてくれた重巡洋艦2人は、私達の話をつつと陰から聞いていたらしい。羽黒的には、私達に全ての選択を任せるつもりだったらしいが、いてもたってもいられなくなった足柄が乱入したことで、それは全て頓挫したようである。

しかしながら、この2人はとても心強い。事実、雷と三日月はこの2人に鍛えられて砲撃の技術を学んでいる。それだけ教えるのが上手いということだ。前衛組と同様に詰め込みであったものの、それでも十分に戦えていた。

「提督に許可を貰ってくるわ! 明日からは私達も施設に住み込んで、鍛えて、鍛えて、鍛えまくるわよ!」

「姉さん、圧が凄いです……」

それだけ気合を入れてきているのならありがたい。今の私達は、すぐにでも強くなりたいのだ。詰め込みでも一夜漬けでもいい。それほどもで敵は強大なだから。

思い立ったが吉日と、足柄はすぐに来栖提督に直談判しに行つてし

まった。本当に嵐のような人である。

「ごめんね？ 姉さん、ああいう人だから……」

「ホント喧しい人ね……」

だが、悪い気はしない。ああいうノリが苦手な三日月も、キョトンとしているだけで終わっている。嫌がっていない。

私達の勝利のために、みんなが協力してくれる。ならば、それに応えなくてはいけないだろう。そうでなくても、私達は強くなりたい。

楽しく生きるためには、それ相応に力もある。まずはみんなで強くなり、勝利を掴み取るのだ。

良き影響

決意も新たに、練度を上げていくことを誓った我ら施設の駆逐隊。明日からは施設に戻り、普段のことをやりつつも確実に練度を上げ、敵の襲撃に備えることにした。

特訓に付き合ってくれるのは、足柄と羽黒。足柄がそのことを来栖提督に伝えると、必要なことだということで許可を出してくれた。下呂大將は戦力増強に関してほぼ許可すると言ってくれていたらしく、これも問題ないだろうとのこと。この後すぐに連絡して、許可をしっかりととってくれた。

施設への帰投は明日の朝。それまでは、来栖鎮守府で身体を休めることになる。

私、若葉は、明石から貰った少量の高速修復材を使い、処置により接続されていた肋骨の修復も完了。縫合痕もキレイさっぱり無くなった。これで私も完治。

「これで一安心だな」

「そうですね。明日から激しい運動も出来ます」

相変わらず私の左隣を動かない三日月。与えられた部屋には当然ベッドは2つあるのだが、何も言わずとも私のベッドに潜り込む気満々である。

「三日月、お前のベッドは」

「一番落ち着ける状態で眠りたいので、よろしくお願いします」

左腕を抱きしめてきた。先程の駆逐隊での話し合いの時ですら、私の左手から手を離さなかった。気持ち表情も穏やかに思える。

深海の侵食により、私の存在を今までとは少し違うものとして見るようになってしまった三日月。私のことを自分の腕を持つ者として認識してしまっている。そのためか、今までから随分と好感度が上がったように思えた。

「落ち着きます……同じものを持つ人がいてくれるのは、とても心強いです」

物腰は若干柔らかくなっているのだが、どうも危うさを感じてしま

う。心を落ち着かせるために私に依存してしまっているような、そんな雰囲気。三日月から漂う匂いも、深海の匂いが若干薄れる代わりに、大きな安心とほんの少しの興奮を感じ取れる。前者はともかく後者は危ない。

だが、落ち込んで当初の三日月に戻ってしまうのも良くない。私としては別に拒絶する理由がないのでそのままにすることにした。より危険な方向に進んだ場合は止めよう。

「何度も聞くようだが、本当に身体には何も無いんだな？」

「はい、問題ありません。あ、強いて言うなら、眼がよく見えるようになったくらいです。両眼になった分、夜目がより利きますね」

それくらいなら問題はない。むしろ、今後も夜襲ばかり仕掛けてきそうなものだから、夜目が利くことは有利だ。それに、赤い花卉を見つけたときのように、深海のものを見つけるのにも有用。

「客観的に見て、私の眼はどうでしょう。変に光って迷惑ではないでしょうか」

「目を瞑れば大丈夫だから心配するな」

「よかった。なら添い寝も出来ますね」

開いていると確かに淡く光っているように見えるが、閉じればその光も漏れることは無い。眠っていれば大丈夫だろう。と言ったところで、添い寝に問題ないことを認めることになってしまった。

「まあ、別に構わないが」

「ありがとうございます。今は若葉さんと一緒にいたいです。本当に落ち着くので」

嫌ではないが、積極的すぎるのも驚く。恐怖を払うための添い寝ではなく、ただ一緒にいたための添い寝は意味合いがまるで違う。人が変わったと言うと言い過ぎかもしれないが、以前までの三日月なら絶対にこんなことは言わない。

いい傾向なのか、悪い傾向なのかは、今はまだわからない。

翌朝、施設へと帰投する前に、来栖提督から頼まれた仕事をこなし、この鎮守府に滞在している、治療された人形41名の匂いを確認

する仕事だ。

これに関しては、朝食の時間を使って一気に終わらせた。まだ禁断症状に苛まれているものは多数いるが、匂いとしては全員が問題無し。妖精の力により、飛鳥医師の治療が完全に模倣されたことが確認出来た。

「ありがとな、若葉。これでうちのドックで全部終わらせることが出来ることが確定したぜエ」

「ああ。うちの負担も減るからありがたい」

「禁断症状も治った奴から大将に引き渡して、他の鎮守府に配属出来るように便宜を図ってもらおうつもりだ。後は任せてくれや」

禁断症状の回復は個人差があるため、今のところは全員が配属未定の状態。もしかしたら全員を来栖鎮守府で引き取るかもしれないし、うまく分散して負担を減らすかもしれない。どちらにしろ、順調に回復しているのは確かだった。

「こんな馬鹿げた時間はさっさと終わらせなくちゃならねエ。俺らも全員協力するからな」

「頼む。若葉達だけでは手に負えないのはわかってるからな」

「おうよ。それじゃあな。またいつでも来てくれ。鳳翔にもよろしく伝えてくれや」

これにて来栖鎮守府でやらなくてはいけないことを全て終え、施設へと帰投することとなった。おそらく時間が終わるまでに何度も来ることになるだろう。この縁は大切にしていきたい。

今回は来栖提督は鎮守府に残り、私達駆逐隊と、次の特訓を手伝ってくれる足柄と羽黒で航路を駆ける。行きに艦装を積んできたため、帰りは私も艦装装備で航行。霰の操縦する大発動艇は、何の荷物も載せていない空っぽ状態。

「若葉、修復材使ったのね」

「ああ、昨日寝る前にな」

「良かったわ。今日からでも特訓出来るわね！」

にこやかな雷。力を得ることに積極的なのは雷だった。あの戦場で唯一気を失ってしまったという悔しさが大きいのもあるが、施設の

艦娘の中で最古参ということで、居場所を守ることには燃えていた。

こんなに好戦的では無いはずなのだが、みんなのためになることだからとなると途端に積極的になる。

「三日月も大丈夫そうね！」

「はい。もう大丈夫です。若葉さんがいれば」

「本当に仲良くなったわね」

雷も苦笑するほどだった。

朝は案の定、左腕をガツチリホールドされた状態で目を覚ました私。一晚経つても三日月のノリは変わらず、基本は私と一緒に行動。施設に戻れば別行動も多くなるだろうが、今はそういう場ではないので、過剰なくらいにスキンシップを求めてくる。特に左腕。

脳への侵食がどれほどまでに影響を与えるか、この半日程度で痛いほど思い知った。だが、これまで改装をしないでいたからこれくらいで済んでいるのかもしれない。それに、負の感情での侵食が入る前に改装していたら、これ以上におかしくなっていたかもしれない。

「アンタ達、いいコンビじゃない」

「まあ……それはそうだな。認める」

前衛としては曙と組んでいるが、基本的な戦闘では三日月と組む方針で今までもやってきている。二四駆との演習でもそれを鍛えてきていた。本番となったときには2人でやれるような敵が来ないため、チームワークがなかなか活かせないでいるだけだ。

三日月の心持ちが変化したことで、チームプレイはよりうまく行くようになると思う。むしろ私が頑張つて合わせることになるかもしれない。その辺りも特訓していきたい。

「曙、私達もこれくらいのチームワークを目指しましょう！」

「無茶言わないで」

曙は雷と少しだけ心が離れているように思えた。その原因は間違いないく呂500である。雷が呂500の面倒を見ることになったことで、部屋も別室になってしまった。

普段の行動から別々になったことで、チームワークに支障が出なければいいのだが。万が一の場合は、駆逐隊の中でメンバーチェンジも

あり得るかもしれない。出来ることなら仲違いはよしてほしい。

「あ、二四駆が見えてきたわ！」

施設の護衛艦隊である二四駆の姿が見えてきた。私達は無事に帰ってこれたこと、そして、施設自体がしっかりと残っていることがわかり、少し気が抜ける。襲撃を受けないでよかった。対策も出来ないのに、立て続けに襲撃を受けていたら、まず確実にやられていた。

「お帰りー。三日月はどうなったんだ？」

「お騒がせしました。改装されてきました」

「大丈夫だったんですね。安心しました」

海風と江風に出迎えられ、三日月は少しだけ私の後ろ側に回り込む。態度は前よりも前向きではあるが、まだ面と向かって話すのは苦手なようだ。完全に心を開けるのは、私だけなのかもしれない。

「……若葉、傷、治ってる」

「ああ。心配かけた」

「山風が他人の心配するたあ、珍しいこともあるもんだねえ」

私に山風と涼風が駆け寄ってくる。一番重傷だった私が、自分の脚で帰ってきたことを喜んでくれている。涼風に冷やかされて山風が憤慨しているようだが、可愛いものだ。

「鳳翔さん、今日からは私と羽黒もここに入りますね」

「ここの駆逐隊を鍛える必要があるということ」

「はい、事前に伺っています。私もお手伝いしますので、頑張りましたよ」

私達の師となる3人は、早速特訓プランを考え始めていた。早急に強くなれるのなら、どんなことでもやろう。

「さあ、まずは元気な姿を先生に見せてあげてください。特に三日月さん、先生が心配していましたよ」

「わかりました。若葉さん、行きませう」

「ああ」

護衛艦隊との話はここまでにして、私達は施設へ。1日留守にしただけでも、なんとというか恋しく感じた。

帰投すると同時に、すぐに医務室へ。私と姉、そしてシロを加えたいつもの面々が揃い、改めて三日月の診断を始める。

「無事に帰ってきてくれてよかった。感情は戻っているみたいだな」

「はい、改装したことで、今の私になりました」

「少し顔色が良くなったか。体調は良いみたいで何よりだ」

話しながら医学的な診察をしていく。入渠したようなものなので、健康そのものであることはわかっているのだが、念のため。その間に私と姉が匂いと霊視を実施する。

「匂いは昨日と変わらない。改装前から少し深海の匂いが強くなっている。特に頭の周辺だ」

「もののけは落ち着いておるのう。協力的な雰囲気なのは若葉のものと変わらん。……今気づいたが、見た目も似ておるな」

姉曰く、私と三日月に憑いているもののけは、姿がかなり似ているとのこと。やはり同じ姫のパーツを使っているだけある。

「一度聞きたかったんだが、そのもののけというのはどう見えるんだ？」

飛鳥医師が素朴な疑問をぶつける。私達には見えていないものなのだから、どう見えるかは気になるところだろう。三日月と似ていると言われれば、私も少し気になる。

「わらわに見えるのは人型の影のようなものじゃな。何者かはわからぬが、表情はわかるんじや」

「ふむ、シルエットが見えるという感じが」

「そうじゃの。若葉と三日月のものけは、髪を片側で括ったような影に見える。若葉は左腕、三日月は頭を、こう、なんじや、絡みつくようにしての」

髪を括った姿というのは、駆逐棲姫に該当する外見らしい。解剖した飛鳥医師が言うのだから間違いない。

こうやって話していても、そのものけは温厚なのだそう。協力的というかなんというか。だが、そのせいで三日月の思考が侵食さ

れているとも考えられるので複雑な気分である。

それ以外にも小さなもののけが憑いているということ、おそらくは私達に使われた深海のパーツの持ち主ではないかと思われる。深海棲艦ではあるが協力的。イロハ級でも温厚。それこそ、私達と繋がったことであちらにも影響を与えているかもしれない。

「ハツハルの言うこと……全部合ってるよ多分……」

シロが三日月の頭に触れながら話す。

「侵食が……もつと進んでる。これ以上にはならないと思うけど……絡み付いてる感じ……かな」

「うむ、わらわにもそう見えるのう」

「でも……昨日よりはいい。悪いことにはなっていないよ……」

シロからお墨付きを貰えた。安心と言うのは違うかもしれないが、三日月が安定したのなら良しとするべきだ。今の状態を悲観するのは、三日月に悪い。

「身体としても健康そのものだ。精密検査は受けてもらうが、安心していい」

「そうですか、よかったです」

「あとは問診だが……何か変わったことは」

ここで話題になるのは当然、私の方が変わったことだ。話を聞いていくうちに、飛鳥医師の表情も複雑なものになる。どう反応しているのかわからないのだろう。

「まあ、生活に支障が無いならいいだろう。若葉、普段の生活では三日月のことを頼む」

「ああ。ここでの作業中は別行動もあるだろうが」

「基本は一緒にいます。落ち着けますので」

医学、感覚、嗅覚、霊感の全てから、三日月は今は安定していることが証明された。思考への影響に関しては、そのどれでも推し量れないものであるために現状維持。また何かしらの悪化が見えたら考えるということになった。

私もそうだが、三日月も毎日診察を受けて、現状維持出来ているかを確認していく。そういうところも私と同じになっていることに、三

日月は喜びを隠さない。表情はいつになく穏やかに見えた。

溢れ出す鬱憤

午後からは三日月の精密検査が行なわれるため、私、若葉は一時的にフリー。三日月から離れることにはなるが、だからといって不安定になるわけでもなく、なったらなつたで検査によりそれが明確になるため、一度三日月を1人にした。

その間はいつも通り、工廠で自分の艤装の整備をしておく。特訓は急務であるのだが、足並みを揃えるため明日からとなっている。それに向けて、万全な状態で挑みたい。自分のものは自分で。それが終わったら三日月のものを整備しておこう。

「……大分傷んでいた」

「前回の戦闘の分が整備出来てなかったな」

曙の艤装を整備している摩耶に言われた。あの戦闘の後、一番ダメージが大きかった霰の艤装を優先して修理していたらしく、私のは最小限だったらしい。外見だけならあまりダメージは無いように見えたから後に回したのだろうが、このまま戦闘していたら間違いなく戦闘中に大惨事を引き起こしていた。

「つつても、それはちよつと違う傷み方だな。内側から荷がかかったみたいだな」

「ああ。朝霜や卷雲にやられた傷じゃない」

「どういう戦い方すりゃ、こんな傷が出来んだよ」

まるで、出力を上げすぎたせいで捻じ切れかけているような傷み方。同じようなことを何度かやったら、まず間違いなく内側から壊れていた。

理由はすぐに思い当たる。強引に自分の限界を超えたあの時だ。私だけじゃなく、艤装にも特大の荷がかかっていたわけだ。先に私がダウンしてしまったが、もし私がダウンしなかったとしても、艤装がおしやかになっていた可能性は高い。どちらにしろ、戦闘不能になっている。

「もしかして、艤装の方がついてきてないのか」

「おそろく」

「確かお前、その身体になった時に自分でリミッター外したんだつたよな」

流石工廠担当。艤装の傷だけでその辺りがすぐわかる。大きく溜息をつき、小突かれた。

「艤装がダメになるレベルだと、お前自体がぶっ壊れるぞ。つーかお前、自力で外したのかよ」

「わかってる。だが、あの時はこれしか手段が無かったんだ」

そして、その手段を使っても勝てなかった。それが特に悔しい。相手が違法改造されているのはわかっているし、そもそも艦娘から逸脱した能力を植え付けられているのもわかっているが、それに負けるのは嫌だ。

「ならお前が強くならねえとな。リミッター外しても耐えられるくらいによお」

「……そうだな。そうでないと太刀打ち出来ないと思う。だが、若葉だけじゃダメだ。みんなでやらないと勝てない」

「だな。だから、あたしがまず艤装をフル改造してやる。ギリギリ限界までスペックを上げてやるよ」

なんと心強い言葉。摩耶の腕はずっと見てきたのだ。信用出来る。「とはいえ、法の範囲内だな」

「わかってる。違法改造なんて以ての外だ。奴らと同じことはしない」

「おう、わかってんならいい。あたしに任せとけよな」

あくまでもズルはしない。奴らと同じになつてしまう。毒を以て毒を制するなんてことはしたくないのだ。そんなことをして勝ったところで、今度の敵は大本営になるだけだろう。

あくまでも真つ当に、この施設の正しさを示す必要がある。勝つことが難しくても、勝った後のことを考えなければならぬ。

夕食からはずっと三日月は私と一緒にいることになっている。私の前では身体中の傷を見せることもそこまで気になつていないようだ。いつもは仲間内ですら風呂に入ることに抵抗を見せていたのだ。

が、今は私しかないため割と堂々。変われば変わるものである。

「精密検査の結果も、異常無しでした」

「そうか。それはよかった」

湯船の中で三日月に午後の検査の結果を聞いた。ここで調べられることでは、三日月の身体には何も異常無しと診断されたそうだ。だからこそ飛鳥医師は頭を抱えることになるのだが、姉とシロの保証によりひとまずは現状維持ということになったらしい。

現に三日月は、侵食される前よりも元氣と言える。私に依存しかけていることさえ除けば、無理に治療する必要は無いくらいに思えるほどだ。出来ることなら、顔の傷は消えた方がいいと思うが。

「明日からの特訓にも、支障はありません。強くなります」

「ああ、若葉もだ。摩耶も後押ししてくれた」

こうやって話している間も、三日月はずっと手を握っている。そうしている間は、表情も穏やか。笑顔すら溢れるほどになっていた。こんな三日月は初めて見る。

「ホント仲いいわねアンタ達」

呆れ顔な曙が風呂に入ってくる。雷と呂500が入る時間からズラした結果、私達が入っている最中に入ることになったようだ。今なら大人数でも入ることが出来るので、1人や2人追加しても全く苦では無い。

「……はあ」

「どうした曙。聞くまでも無いが」

私の隣に腰を落ち着けるや否や、大きく溜息をついた。理由など言わずともわかる。この施設に戻ってきたことで、呂500と顔を合わせる機会が増えたことだ。

面と向かって罵詈雑言を並べ立てた時に、これ以上ストレスを溜めたくないと言っていたが、同じ建物の中にいる時点で無理だった。

「……ストレスが溜まってんのよ」

「ああ……」

雷が呂500と相部屋になるということで、部屋の移動は済んでおり、曙は今1人部屋だ。今まで相部屋であり、カウンセラーとして優

秀な雷が、今の曙の悩みの種にもなってしまっているため、なかなか話せる者がいなかった。

新たなカウンセラーである姉は、現在リコと相部屋。あそこはあそこで面白おかしい部屋になっているらしい。なかなかどうして相性がいいようである。

「話くらいなら聞くぞ」

「そうです。話して気が楽になるなら話した方がいいですよ」

「アンタ本当に三日月？ テンション違い過ぎない？」

言いたい気持ちはわかる。

もう一度溜息をついた後、ポツリと溢した。

「……なんで私が逃げ回ってんのかしら」

呂500と顔を合わせたくない一心で、曙側が対策している。雷からも聞き、呂500の行動範囲から避け、食事の時も席を対角に取り、絶対に視界に入れないようにしていた。曙自身の保身もあるが、呂500が変に思い出さないようにする理由にもなっている。

それが曙のストレスの原因。自分のせいではないのに、自分が行動しなくてはいけないということに疲れている。

「顔を合わせたくないからだろう？」

「私には何にも罪はないのよ。そりゃアイツにも罪はないかもしれないけど、私は殺されてんの。一から十まで被害者よ」

それは曙の胸と背中にある傷が物語っている。完全に貫いている傷。心臓と肺を潰され、命を奪われた証拠である。

その傷を作ったのは、洗脳されていたとはいえ紛れもなく呂500。そして本人はそのことを忘れてしまっている。それが曙には引っかかるのだろうか。

「道を開けるのはアイツの方よ。アイツが私に気を使えって話」

「だが、罪悪感はあるけど、それが何故かがわかっていないから」

「私の顔を見るたびに訳わかんないけど辛いつて顔すんの。何なのよもう……気分が悪いのはこっちだったの」

行き場のない感情が晴らせず、悶々としているのだろう。それがストレスになり、疲労に繋がっている。

曙の根っこの優しさが原因だ。曙が優しいから、不要な罪悪感まで感じてしまっている。良いことではあるのだが、それが今の苦痛に繋がっているのだから報われない。

「飛鳥医師には相談したか？」

「するわけないでしょ。こんなくだらないことで」

「くだらなくないだろ。お前の健康状態に関わるんだぞ」

三日月もうんうんと頷く。今は誰一人として不調を出せないくらの切羽詰まった戦況だ。いつ攻め込まれてもおかしくなく、対抗手段もまともに持っていない状態。少しでも崩れていたら、そこからつけ込まれる。

曙だって、自分が穴になっていたら嫌だろう。だからこそ、常に万全でいたい。簡単に出来れば苦労はしないが。

「どうしたい。憂さ晴らしに愚痴大会するか？」

「先日は聞いてもらいましたし、今日は曙さんの話を聞きますよ」

「……別にそこまでしなくてもいいわよ」

そっぽを向く曙。湯船にあてられたわけでは無いと思うが、少し顔が赤い。気を使われることに慣れていないのだろうか。

「遠慮するな。お前、心が相当疲れてるぞ」

「そんな時に1人部屋なんて眠れなくなりますよ。安眠は心を落ち着けてこそです」

妙に説得力がある三日月の言葉。今は私が添い寝することで安眠出来ていると熱弁。その勢いに曙も引き気味である。

とはいえ、曙は精神的に疲弊している。午後は何をしていたか知らないが、何だかんだ呂500から逃げ回っていたのだろう。ずっと神経を張り巡らせていたのだから、疲れるに決まっている。

「曙、若葉達は仲間だ。頼れ」

肩をポンと叩く。機嫌が悪いなら容赦なく振り払うだろうが、それも無かった。思った以上に消耗しているのかもしれない。

「今日だけ。今日だけよ」

「ああ、それで構わない」

望んでいたのか折れただけなのか、今日だけは曙と相部屋というこ

とになった。雷を仲間外れにしているようで少し心が痛むが、今回は曙のメンタルケアを優先する。

もう寝るだけでという状態になり、私と三日月の部屋に曙を招いた。ある意味パジャマパーティーみたいなものだ。女子会とも言えるか。

そこで今までの溜めに溜めた愚痴やら罵詈雑言を思う存分吐き散らした曙。釣りの時にもやったものの、その時以上に酷かった。あまりにも酷いものだから、私の腕を抱きしめる三日月の力が少し増したほどだった。

最初は呂500への不満だった。先程言っていた『何故自分は悪くないのに自分が逃げ回らなくちやいけないのか』というところから始まり、罪を忘れていくことへの不満、自分に向ける視線への不満、謝られても気分が悪いと、稀に理不尽な不満まで出てくる。それだけ悶々としていることがわかる。

だが、途中から雷への不満が出てきた。呂500と一緒にいるときの自分への視線が気に入らないとか、言葉では言わないが呂500を許してあげてほしいと態度に現れているなど、いちゃもんレベルの要望まで。

「はあ……はあ……ったく、冗談じゃないわよ」

小一時間ほど愚痴を吐き続けたせいで、息が荒い。事前に飲み物を用意しておいたため、それを一気飲みして身体を落ち着ける。

それを聞き続けた三日月は、顔が引き攣っていた。自分もこんなだったのだろうかと不安そうにしていたが、私としてはノーコメント。

「アンタ達にはわからないでしょ。私の気持ちは」

「わからないな。若葉達は死んだことが無いから」

「はい、私にもわかりません」

曙の辛さをわかってあげることにはまず出来ないだろう。同じ経験が出来ないのだから、慰めも言葉だけに捉えられても仕方ない。

だが、聞かせてくれただけでも良かった。悩みなら打ち明けてほし

い。慰めはいらないかもしれないが、共有することで救われることもある。悶々として生きていくよりはマシだ。

「……どうせアンタ達も私が間違ってるって思ってたんでしょ」

「思ってませんよ。仕方ないことですし」

「人がどう思おうと勝手だ。それだけお前が呂500に深い恨みを持ってしていることくらい、理解しているつもりだ」

自分が今言ったことが良くないことであることを理解している上で、これだけの文句を言い放っていることも理解していることは、匂いが全てを物語っている。今言ったことが本心であることも。

こればかりは仕方ないことだと思う。私達には無い一度殺されたという経験は、普通より根深い。死なんてこの世で最上級の負の感情だろう。私や三日月だったら、今以上に侵食が広がるであろう感情。

それを知って尚、曙は正気でいられるのだ。誰よりも精神が強いとは思えない。尊敬に値する。

「若葉は愚痴を聞くくらいしか出来ない。辛かったら、いつでもここに来てぶちまけてくれ。雷や姉さんほど役には立たないだろうが」

「そうですね。私も聞いてもらうんですから、おあいこです」

「……アンタ達の気分が悪くなっても知らないわよ」
「構わん」

促さないと言に出すこともしないだろう。口は悪くても、曙は本当に真面目だ。だからこそ潰れずに済んでいるのかもしれない。危ないところまで来ていたのも真面目故かもしれないが。

「ふう、今日はもういいわ。なんか言いたいこと言ったらスッキリしたわ」

「それは良かった」

これほどまでぶちまけたからか、曙は随分とスッキリした顔をしていた。ほんのりと笑顔も戻ってきている。やはり適度なガス抜きは必要である。

「明日からは特訓で憂さを晴らせばいい」

「そうね。アンタと模擬戦くらいしたいところだわ」

「そうだな。朝霜対策は若葉で慣らす方がいい」

力一杯愚痴を言ったのだから、次は身体を動かしての発散だ。ちよ
うどいいタイミングでその機会が来たかもしれない。

「……雷さんと顔を合わすことになりますけど」

「構わないわよ。アイツらをぶちのめすためならなんだってやるわ。
それに、別に私は雷のこと嫌いじゃないもの」

今のは失言に聞こえたが、詮索はやめておこう。

今後もストレスは溜まると思う。その度にこうやって相談してく
ればいい。仲違いに発展しなければ問題は無い。それに、我慢しろ
とは口が裂けても言えない。

人を殺す力

翌日、足柄と羽黒による特訓が開始される。特訓の対象は勿論、私、若葉率いる第五三駆逐隊と、姉、初春率いる第九二駆逐隊。この施設を守るため、中立区の抑止力として、私達は力を付けていくことになる。

今の段階では全然足りないことは、前回の戦いでわかっている。4人がかり、8人がかりでもまるで太刀打ちが出来なかつた。それをどうにかするために、まずやらなくてはいけないことは、艦装と武器の改造である。

その前に、朝食の場で飛鳥医師の発表。

「新さんから連絡があつた。監査の結果は良好。むしろ、先日の襲撃で新さんと先生が狙われたことで、武装強化の方針も固まつた。……あまり喜べることはないが、殺傷兵器の所持も特例で許可された」この事件が終わるまでという期限付きで、この医療施設は予備鎮守府として扱われることとなつた。提督不在、もしくは下呂大将や来栖提督の指示による特殊編成部隊。相変わらず入渠ドックを入れることは出来ないが、多少の高速修復材の使用と、水鉄砲以上の主砲の所持が可能となる。

飛鳥医師としては不服かもしれない。人を生かすための施設に、人を殺すための武器を入れることは抵抗があるのだろう。しかし、そうでもしないと根本から潰されてしまうのが現状だ。苦肉の策ではあるものの、ここまでしてようやく一矢報いることが出来る程度。

「摩耶、武装の設定を変更してくれ」

「了解。シロとクロにちよいと手伝ってもらうぜ」

「うん、大丈夫だよ。海水から弾が作れるようにしたらいいんだよね」主砲の設定を変更し、水鉄砲から実弾兵器へと変更される。ガワは艦娘の武装でも、中身は深海の武装だ。海水さえあれば無限の弾薬により攻撃出来る。あちらの巻雲が使う主砲もそれなのだから、これのようにやく武器だけは互角。

「……最近では近海に深海棲艦の発生も見られないが、またいつ出てく

るかわからない。その対処も全面的に僕達に一任された。皆、協力頼む」

殺傷兵器を持つことが出来るということで、近海に発生した深海棲艦の対処も出来るようになる。撃破するのは心が痛い、やらなければ私達が全滅してしまうのだから、辛いがやるしかない。

「では頼む。今日からは足柄と羽黒の訓練だったな」

「ええ、任せて。私と羽黒で、この子達に勝利をあげるわ!」

「敵が強大であることは聞いていますから。お任せください」

今日からは、その設定を変えた武器を使つての訓練となるだろう。私と曙も、近接武器だけでは足りない可能性がある。覚えられることは全て覚えなければいけない。

朝食後すぐに摩耶達が武装の設定を変更してくれた。これにより、施設に属する全員の武装は水鉄砲から殺傷兵器へと生まれ変わる。

「訓練の前に、まずは撃つてみた方がいいわ。的つてあるかしら」

「廃材かき集めて適当に作ったのはあるぜ。水鉄砲の訓練用な」

足柄に促され、摩耶が的を用意。確かに、水鉄砲とは違う感触である可能性は非常に高い。相手を破壊するほどの火力が出るようになるのだから、撃つたときの衝撃も今までとは違うかもしれない。片腕で撃てるかも不安。

「うーし、用意したぜ」

「なら、そうね、三日月。ちょっと撃つてみなさい。その代わり、ちゃんと両手で、いつもの感じと思わないように」

「は、はい、わかりました」

慣れているのは後衛組である雷と三日月。2人とも片手で放つことも多いので、それでは危険かもしれないことを念を押した。

「では、撃ちます……っ!?!」

トリガーを引いた瞬間、今までの水鉄砲とは違う爆音と共に実弾が発射された。衝撃のせいで弾は的から大きく外れ、三日月も尻餅をついてしまう。

「まあ、こうなるわよね」

「これが、命を奪うという事ですから」

羽黒の言葉にゾツとした。

今まではなんだかんだ人を殺すことの出来ない武器ばかり使っていたため、殺意があったとしても少し安心していたところがあつたのだろう。だが、今後は違う。殺意が無くても命を奪うことが出来るようになる。

破壊力が高くなれば、当然反動だって強くなる。それを直に受けて、三日月はキョトンとしていた。手もビリビリ痺れているようで、驚きでその場から動けないようだ。

「今日中に、これをまともに撃てるようになってもらうわ。出来れば片腕で」

「咄嗟の判断で片腕で撃つことも多いですからね」

「羽黒、ちよつと例を見せてあげた方がいいわ。この子達の目指す先ね」

三日月から主砲を借りて、徐に1発放った。同じような爆音だが、羽黒は片腕で、さらには的すら見ていない。だが、遠方に置かれた的は弾け飛ぶように破壊されていた。

「これ重巡主砲くらい威力ありますね。深海棲艦の主砲を加工したからですか？」

「ああ、だから口径もちよつと大きくしてあんだよ。14cmだな」

「軽巡主砲じゃない。まあ向こうもインチキしてるわけだし、それくらいはいいかしらね」

重巡組はこの主砲についていろいろ話しているが、これを使う私達は気が気でなかった。

私と曙はやっていないが、普段砲撃の訓練と称しての当てをしている他の6人は、いつも使っていた的が破壊されるほどの威力を持つ主砲を使うことになるということと若干怯えが出ている。雷と三日月は、今の立ち位置になって殺傷兵器自体が初めてだ。

「あ、アレを使っっていくの……？」

「そうなりますね……。まだ手が痺れてます」

「あんなの、当たったら死んじゃうわ……」

やはり雷は相手を殺す武装ということに抵抗がある。掠めただけでも怪我をするし、直撃すれば誰だって死ぬ。水鉄砲とはわけが違う武器だ。

さらに言えば、今までとは勝手が違う。三日月が実演したことで、衝撃が段違いであることは明らか。しつかり訓練しないと取り扱うことすら難しい。

「嫌ならアンタだけ水鉄砲使ってれば？ 私はアレ使うわよ」

その雷に対し、少し厳しい口調で曙が言う。

「私は死にたくないし、負けたくないの。だから、少なくとも臙装を壊すためにもああいう武器がいるわ」

「でも……でも、当たりどころが悪かったら」

「そうしないためにも訓練するんでしょうが。アイツらよりも技を磨く。それとも何、アンタはあのレベルの奴を完全に無傷で助けられるとか夢見てるわけ？」

完成品は今まで戦ってきた姫、夕雲と風雲とはレベルが違う。そしてそれが、今後わんさか出てくる可能性が高い。今でさえ、たった2人に何も出来ずに全滅ギリギリまで持っていていかれているというのに、無傷で救出は今の実力では無理。

だからこそ鍛える。あちらがインチキのゴリ押しで来るのなら、私達はそれを上回る技を得るのだ。乗り越えるために手段は選んでいられない。

「覚悟決めなさいよ雷。生っちよろいこと言ったら死ぬわよ」

「……考えさせて」

まだ決断は難しい。だが考えている時間はもう僅かしかない。雷は割り切れるだろうか。

「若葉、お前は専用武器だ」

「何か作っていたのか？」

「ああ、お前のための武器だなコイツは」

裏から摩耶が持ってきたのは、何やらおかしな形のナイフだった。今までの高速修復材のナイフも使いがてら、こちら也使った方がいいということも摩耶が用意してくれたトンデモ兵器だという。

小銃のグリップの延長線上にナイフの刃が備え付けられたそれは、近距離しか出来ない私に中距離の戦闘を可能にしてくれた。

「えーとだな、試製拳銃付き軍刀ってヤツだ。軍刀じゃなくナイフだけだな」

「めちやくちやな形だな……」

「拳銃側はまるゆの小銃を素体にした。そんなでも機銃並の火力はあるからな。当然深海仕様、海水での無限弾だ。主砲より射程は短えけど、お前にやこれがいいだろ」

つまりは見た目以上の威力はあると。片腕で撃ったら肩が抜けかねないから、まずは両手で持ち、しっかりと照準を付けて。刃が邪魔ではあるが、出来ないことはないか。

トリガーを引くと、先程よりは小さめの爆音だが、思った以上の衝撃。以前、近海に発生した深海棲艦をどうにかするために水鉄砲主砲を借りたが、そんなものは目ではないくらいである。案の定、的の方には飛んでいかなかった。

「思ったより衝撃があるな」

「さすが前衛組。三日月みたいにはならなかったか」

「筋力が武器みたいなところあるしな。若葉は腕が深海棲艦だから、わりと耐えられるようだ」

頑張れば片腕でも撃てそう。足柄もこのトンデモ兵器には感嘆の息を漏らす。羽黒も予想外の武器の登場に目を丸くしていた。

「いいじゃない。若葉のスタイルにあってるわ。射撃訓練は必須だけどね」

「ああ、今日からは二刀流だな」

まずは今日中にこれがしつくり来るまで使っていかなくては。

「私は主砲？」

「槍に付けるのは難しかった。銃剣パヨネットも考えたんだけどな」

「よくわかんないけど、その辺りは任せるわ。今はこの主砲で訓練する」

新装備は今のところ私だけの様子。曙の槍は私と違って両手持ちのため、武器そのもので主砲との両立は難しい。姉のように空飛ぶ主

砲ならいいのだが、あれは初春型独特のシステム。いくら継ぎ接ぎでも、今から曙に組み込むのは流石に無理というもの。

曙は前衛をやりながらも砲撃を覚える方向で強化していく。やれることは全てやっていこうの精神である。

「わらわ達は据え置きかえ？」

「いきなり前衛の戦闘は厳しいだろ。今は実弾に慣れるべきだな」

「ええ、その方がいいわ。その時点で勝手が違うんだもの」

足柄と羽黒の訓練は、今日いっぱいには実弾に慣れることで費やすこととなる。的がいくつもあるわけではないので、壊しては作り直しになるのだが、その辺りは摩耶が適当に作ってくれるので問題ない。そもそも簡単に当たらないのだから、的がすぐに枯渇することはないと思う。

「で？ 雷はどうすんのよ。実弾でやるのか、水鉄砲続けるのか」

短い時間ではあるが、まだ悩んでいる雷を焚きつける曙。自分のコンビの決断なのだから、自分の戦い方にも関わってくる。

それ以外にも感情が見え隠れしていた。別に雷のことは嫌いじゃないとは言っていたものの、愚痴がかなりの量出ていたので、やはり思うところがあるのだろう。それが匂いに出ている。

「……ごめん、やっぱり私、実弾は使えない」

目を合わせずに呟いた。

「何よそれ。怖気付いたわけ？」

「それもあるわ……。怖いので、どうしても。私の手で人が死ぬかもしれないって思ったら、手が震えちゃう。そんな状態で戦っても勝てないわ」

今の雷には恐怖の感情が強い。簡単に命を奪うことが出来る武器に対して、恐怖しか感じていない。

だが、違う感情も感じる。恐怖の結果、自分の道を見つけたような、そんな覚悟。

「だから、私は艤装の破壊とかは全部やってもらおうことにする。その代わり、誰にも苦勞させない。やりやすくするためにサポートする」
「どういふことよ」

「私は水鉄砲を極めるわ。水鉄砲に出来て実弾じゃ出来ないこと、いっぱいあるわよね？」

例えば目潰し、脚を直接狙った足止め、射角をズラすなど、実弾でやったら確実に相手に重傷を負わせることも、水鉄砲ならやれる。それに、余計な神経を使わなくて済む。脳震盪狙いで気絶させるといふ芸当も、水鉄砲でしか出来ないことだ。

雷はあくまでもその路線を突き詰めると決めた。人を殺さず、無力化することに特化した者。

「それは妥協じゃないのよね？」

「うん、私が出来る一番のことだと思うわ」

「ならいいわ。決めたんなら、しっかり極めなさいよ。私の足引っ張るようならコンビ解消だから」

こちらの心配は杞憂だったかもしれない。曙も認めるところは認めている。確固たる意思を感じるのなら、わざわざ強制するようなことはしない。やらせてダメなら強制するかもしれないが。

今はいろいろとある相手でも、戦場ではコンビだ。この辺りはしっかり割り切っている。

「だから、ごめんなさい摩耶さん。私は元に戻してほしいわ」

「おう、大丈夫だ。そういうこと出来るように、調整は簡単にしておいたんだ」

手早く設定を元に戻して、雷に渡す。使い慣れたものを使い続けるのもいいだろう。新しいことを始めるよりも成長しやすい。

「雷は別の訓練を用意した方がいいわね。慣れてる武器なら、もっと高度な技術を手に入れる訓練がいいわ」

「なら私に考えがあります。リコさんに手伝ってもらいましょう」

「ああ、途中からやれないかって言ってたヤツね。雷には先にそれやってもらいましょうか」

リコも使った訓練とはどういうことかわからないが、あちらは訓練のプランが出来ているみたいだ。

私達はここから、今よりもずっと強くならなくてはいけない。やれることを増やして、まずは目の前の脅威を討ち払う。

私も新しい力を手に入れることが出来たのだ。これを使いこなし、
これからの戦いに希望を見出していききたい。

面と向かって

足柄と羽黒による訓練、初日が終了した。まずは実弾の主砲に慣れるということ、朝から晩までひたすらに砲撃訓練。

姫であった時に扱っていた霰、そもそも手で持たない姉に関しては、早々に慣れることは出来たが、やはりまだまだおっかなびっくりである。この主砲は普通の駆逐主砲より威力が上がった深海仕様。いくら使ったことがあったとしても、今までとの違いに動揺を隠さないでいた。

「……これは怖いですね。どうしても射軸がズレます」

「掠めること考えてるのに直撃しちゃいそうになるのよね……」

今見えている難敵は2人の姉妹だ。万が一のことを考えたら恐怖を感じてもおかしくない。最悪の場合、自らの手で姉妹の命に終止符を打ってしまうことになるからだ。

霰は痺れた手を擦りながら息を荒くしていた。第二改装を終えたとはいえ、私達の中では華奢な方。慣れたものの、水鉄砲とは比べ物にならない反動で疲れ果てているようである。

「はっはるちゃん……うらやましい」

「わらわの真骨頂じゃの……じゃが、やたら疲れるのは変わるまいて」腕を組みながらも砲撃出来るというのは利点であるが、その分遠隔操作で頭を使うらしく、姉は他よりも疲れた顔をしていた。射角から反動軽減までを遠隔で考えなくてはいけないというのは、私達には無い苦勞。

九二駆の4人は気苦勞により疲労していたが、五三駆は、肉体的にも大きく疲労していた。

まず実弾となった主砲を扱う三日月と曙だが、なんとか片腕で放てるようになったものの、照準はまだブレブレ。的に掠めることはあれど、命中は未だ出来ていない。特に曙は、主砲自体がここに所属して初めてのことだ。

「こ、これは、キツイです……今までと違いすぎます……」

「摩耶さんにもっといい武器作ってもらおうわ……槍との併用は無理よこれ」

主砲そのものの重量は変わらないものの、反動を何度も受けていると腕がおかしくなってくる。最後は主砲を持ち上げることでも難しくなっていた。こればかりは筋力とかそういうところに関係してくると思うので、そちらも鍛えなくてはいけないだろう。

私、若葉はというと、摩耶に専用で作ってもらった新武装、試製拳銃付き軍刀を試していた。三日月や曙の使う主砲よりは小さく、反動も少ないが、そこに刃が乗っているために重量は似たようなもの。

「悪くない。反動も慣れれば問題ないぞ」

「腕上がってない状態で言われても説得力ないわよ」

心臓も侵食されたおかげで、曙程ではないが持久力が上がっている。だが、筋力にはあまり影響が無いため、腕が重さで上がらない。

新武装ということで神経を使い、さらには殺傷武器。身体中がギシギシ言いそうなくらい疲れ果てていた。特に腕。今この場で普通にしていられるのは曙だけだ。

そして、実弾主砲を拒み、水鉄砲一筋で行くと決めた雷だが、羽黒が頼み込んでリコによる訓練が行われていた。基地航空隊による360度からの集中砲火を回避しつつ撃ち墜とすという苛酷極まりない訓練。当然実弾は使っておらず、リコ側も水鉄砲である。

水鉄砲だからこそリコも受け入れたし、リコの戦闘機が空中で停止したりバックしたりと意味不明な挙動が出来るからこそ成立する訓練。

「よくもまあ避けるものだ。だが、当てられていないな」

「わっ、私もっ、頑張ってるんだけどっ」

実弾に慣れるだけの私達とは違う、実戦さながらの訓練にヘトヘトな雷。演習とも違う、一方的に嬲られるという有様。水鉄砲を喰らい続けて、濡れ鼠になってしまっていた。

目下の難敵である巻雲と朝霜相手には不要な技能かもしれないが、視野が広がる訓練だと思えばこれも有用。人形の集団に囲まれる可能性だってあるのだから、充分すぎるほどの訓練。

「そろそろ時間ね。今日のところは終わりにするわ。一応全員ノルマは達成したわね！」

足柄の宣言により、本日の訓練は終了。

実弾の主砲を片腕で撃てるようにする、というノルマは全員達成。そのおかげで全員腕がパンパンだったが、これで取り回しは出来るようになった。しかし、命中率は散々。より使いやすくされている私ですら、まともに的に当てられなかった。

1人、雷だけはフラフラ。肩を貸さないとその場から動けないくらいにまで消耗していた。鳳翔や神風から訓練を受けていた私達くらいにされている。

「ほら、ちゃつちやと歩きなさいよ」

すかさず肩を貸したのは曙だった。さすがはコンビを組んでいるだけある。何だかんだ優しい。

「ご、ごめんね、曙、ちょっと無理……」

「アンタが自分で選んだ道でしょうが。私に面倒ごと押し付けられないもらえる？」

半ば引きずるように運んで行った。嫌そうに言うものの、誰よりも早く動いた辺り、曙は雷のことを心配していた。雷も、そう言われながら何も反論せずに苦笑しているのみ。

呂500の件で少しだけ軋轢が生まれそうではあったが、雷はそれを望まないし、曙はその辺りは多少割り切っている。ただし、関わりを持ちたくないという気持ちはありありと見せつけているので、雷が一步引くことで均衡を保っている状態。

それでも素直すぎるが故に顔に出してしまうことが多いので、昨日の曙の愚痴に繋がるのだが。なんだかんだ、少し壁が出来てしまっていることは否定出来ない。コンビを組んでるから付き合っている感じか。

「私達も行きますか」

「ああ、三日月は大丈夫か？」

「腕は上がりませんが、比較的大丈夫です。基礎訓練のおかげですかね」

それを追うように、私と三日月も風呂へと向かった。正直あの2人のことは心配である。

遅れて風呂に入ると、既に雷が浮かんでいた。薬湯により急速回復中。溺れないように曙がしつかりと腕を掴んでいた。

「手間かけさせんじやないわよ」

「ごめんごめん」

薬湯に浸かったことでようやく自力で座れるくらいには回復したようである。支えがなくても座れるようになり、ようやく一息つく事が出来たようだ。それがわかると、突き放すように曙も支えるのを止める。

そこからは遠目に見ていたが会話も無し。雷が気まずい雰囲気醸し出すというのはなかなか珍しい。お節介を焼くことはするが、それ以上話すことはしない。

「何というか……空気が重い」

「そうですね……雷さんがあちら側というのが……」

来栖鎮守府では普通に話をしていたが、ここに戻ってきてから一気に関係が悪化したように見える。

仕方ないといえば仕方ないことだ。私と三日月も盛大な愚痴を聞いたくらいなのだから、ある程度は理解している。曙が一方的に気分を害している部分もあるし、同情出来る部分だってある。

「……あ、あのさ、曙」

「何よ」

意を決して雷が話しかけた。対して素っ気ない態度の曙。より空気が重くなるように思える。

「……私のこと、そんなに嫌だった？」

「はあ？」

「だって……若葉と三日月に話してたわよね……私のこと嫌だって」
昨晚の愚痴大会の話が聞かれていたらしい。

私と三日月が聞き手になって、さんざんぶちまけたあの夜、私達の部屋の外には、たまたま部屋から出た雷がいたようだった。部屋の外

の匂いまでは私にもわからないため、誰かがそこにいたなんて考えもしなかった。

愚痴も陰口の種類。本人に聞かれたくないようなことだから、ああやって聞かれないところで吐き出すのだ。だが、それを聞かれていたとなると、話は変わってくる。雷は何処かよそよそしくなるし、気まぜい雰囲気も出てしまうだろう。

「私、知らず知らずのうちに曙に嫌われるようなことしてたのよね……だからちよつと厳しめに言ってくるのよね」

「……アンタねえ」

「ちゃんと改善するわ。だから、面と向かって言っただけなの。私は……私は、そう思われてるっていうのが、嫌だから」

そういう負の側面での隠し事はやめてほしいと、雷はそう言っているようだった。

雷には数少ない仲間だ。事が済んだ後でも、ずっとここで一緒に生きていく相手に嫌われているというのは、実弾兵器を使うこと以上に辛いことだった。

「……なら言っただけやるわよ。泣いても知らないわよ」

「うん、いいわ。曙の思っただけのこと、私知りたいもの。仲間なんだし、コンビなんだし。わだかまりとか持つてたくない」

面と向かって言われることの方がわだかまりが出来る可能性が高いと思うのだが。

風呂という場、さらには私達以外にも九二駆だつてこの場にいる。

雷はともかく、曙が拒みそうなものだったが、雷の真つ直ぐすぎる瞳に根負けし、ほぼ喧嘩腰で愚痴をぶつけることになった。

私と三日月しか聞いていなかった曙の本心を、雷は真摯に受け止めた。そんなこと言われてもというクレームレベルなものもあり、流石に反論してもいいのではという物言いに対しても、雷はまず全て聞いていた。

逆に泣きそうなのは曙だった。悶々とした鬱憤をどれだけ言っても受け止めようとしてくれる雷を相手にしているため、自分が間違っているように思えてしまっているのだろう。

「……気分が悪いなら言い返しなさいよ」

「ううん、曙が私のことどう思ってたかわかったのは、私は嬉しい」
どこまでも前向き。目の前で自分の文句を言われても、それをしっかりと受け止めて、最善の自分へと昇華していかうとする雷。そんな雷が眩しすぎて、曙には癪に障ったようだった。

ギリツと齒軋りが聞こえた後、風呂だというのに掴みかかるほどの勢いで詰め寄り、肩を強く掴んだ。

「そういうところよ！ アンタがそうしてると、悪くないのに私が悪いみたいに思えんのよ！」

掴まれたことで雷が顔を顰めたが、曙から目を逸らすことは無かった。

「ふざけんじやないわよ！ 私は悪くない！ 悪くないのに、そんな目で私を見るな！」

「あ、曙……痛いわ……」

「私のもっと痛いわよ！ アンタが私を気遣いなさいよ！」

そこからまた罵詈雑言が始まる。ただの文句だけじゃない。ありったけの悪意をぶつけるような、抵抗しない雷だから済んでいるくらいに酷い言動。私達が愚痴を聞いても、溜まりに溜まった鬱憤はまだまだ全然発散できていなかった。

雷もここまで言われるとは思っていなかったのだろう。徐々に泣きそうな顔になっていった。

それに対して、私達は傍観することしか出来なかった。曙の鬱憤はみんなが理解していること。止めることが躊躇われる。だが、雷もそれを一身に受けてしまっているので、止めなくてはいけないとも思える。葛藤のせいで、誰も動けない。

「はあ……はあ……何なのよ……なんで私がこんなに悩まなくちゃいけないのよ……」

ようやく止まった時には、雷も泣きじゃくるほどになっていた。今までここまでの悪意をぶつけられたことは無かった。さらに言えば、ほぼ曙に非が無い。だからといって雷に非があるわけでもない。誰のせいでこんな事態になっているかと言われれば、満場一致で大淀の

せいである。

「……曙、ごめんなさい、曙がそんなに悩んでるなんて、気付かなかつた。すごく強い子だつて、思ってた。甘えてたのかも」

「私は強くなんか無いわよ。結局アンタに当たるくらいしなないと、鬱憤が晴らせないんだもの。本当ならろーをぶん殴ってるわ」

「充分強いじゃない……これで止まれるんだから」

幾分かお互いにスッキリしたようだったが、空気は重い。わだかまりは確実に残っている。

「……コンビは解消した方がいいわよね……」

雷がボソリと呟く。曙が一方的だったとはいえ、ここまでの大喧嘩をしてまだ組んで戦うことが出来るとは思えなかった。

だが、曙からは予想外の言葉が聞けた。

「……私は別にこのままでいいわよ。面と向かって言いたいこと言えたからスッキリしたわ。アンタが嫌ならやめればいい」

あれだけのことを言っておきながら、コンビ解消はどちらでもいいと。

こんな大喧嘩を間近で見たのだ。ここでコンビ解消したとして、新たに曙と組もうとするものがあるかと言われればわからない。曙も雷も単体で戦うという道はあるのだが。

「私は……私は曙とやっていきたいわ。ずっとやってきたんだし、これからも一緒に戦いたいもの。1人で戦うよりそっちの方がいいと思う」

「ろーと一緒に行動してる時点で、私は基本アンタと関わり持たないわ。戦闘の時だけは協力してあげる」

一度文句が言えたからか、雷相手には何も隠さずに文句も言うようになったようである。文句を溜め込むからストレスも溜まるのだから、言えることはハッキリ言った方がいいという方針となった。

包み隠さず、曙は呂500が嫌だと明言したわけだ。それに対して雷は、一切否定しない。こんな凸凹なコンビが成り立つかはわからないが。

「それでいいわ。曙、これからも……よろしくね?」

「はいはい。でも、アンタにはもう溜め込まないわ。気に入らないことがあつたら即言うから」

「うん、それでお願い」

すごく不安定な関係な気がするが、それで成立するならそれでやっていってもらうしかあるまい。戦場で足を引つ張るようなら、私達が2人に文句を言えばいいだけだ。

これで曙のストレスは少しだけ解消されたか。あれだけのことをやったというのに、これからも関係が続けられるというだけでも、曙も雷も強い。私には真似出来そうにない。

改善に向けて

翌日からも足柄と羽黒の訓練は続いた。片腕での砲撃が出来るようになってからは、ただひたすらに命中精度を上げる訓練。

何事にも基礎がちゃんと出来ていないと先に進めないと羽黒の談。命中率が限りなく高い状態になって初めて技を編み出すに至るとのこと。それこそ、ノールックでの的に当てられるくらいにまで行ってようやくスタート地点だと。

「こんな愚痴は言いたくないのですが」
「どうした夕雲」

「姫の時でもここまでハードな訓練はありませんでした」

撃ちすぎてやはり腕が上がらなくなっている夕雲。薬湯に浸かれば元通りとはいえ、この訓練がハードすぎることを物語っている。かくいう私、若葉も、他の者より反動が小さい拳銃にもかかわらず、腕を上げるのが辛いほどにまで消耗していた。

夕雲だけではない。私達もみんな同じ状態だ。武装が重い。二の腕がパンパン。薬湯が無ければ筋肉痛で腕が少しも上がらないくらいになっているだろう。

雷を除く五三駆と九二駆は、丸一日実弾主砲を撃ち続け、命中率を確実に上げていった。雷も、リコが付きつきりになり訓練をしていたため、メキメキと実力は向上している。

「ちゃんと出来てきていますね。でも、もつとです」
今だけは羽黒が鬼に見えた。

休憩無しで撃ち続け、ダウンしたら薬湯、そしてまた休憩無しで撃ち続ける。水鉄砲による初めての射撃訓練で、雷と三日月がグツタリしていたのを思い出した。これを延々やり続けるのはハードすぎる。

それでも、訓練が徐々に効いてきていることが実感出来た。やればやるほど命中率は上がる。百発百中には程遠いし、未だ動いていないのを相手にした訓練だが、着実に前進出来ている。

「あとどれだけの猶予があるかはわかりません。なので、どうしても詰め込みになってしまいます。それでも確実に力になれるように、私

も足柄姉さんも力を尽くしますからね」

「ええ、絶対に勝てるようにするのが私達の仕事だもの！ 詰め込みでも付け焼き刃でも、アンタ達に勝利を与えるわ！」

足柄には余裕がある時に近接戦闘の訓練も見てもらいたいと思っ
ている。砲撃訓練も当然だが、私と曙は前衛としての近接戦闘も重要
だ。そちらもレベルアップしておきたい。当然、基礎訓練も大事。ス
トレッチから始まり、筋トレのような肉体強化も忘れていない。やれ
ることは全て。

寝る間も惜しんでやりたいくらいだが、そこは飛鳥医師に禁じられ
ている。規則正しい生活が、最も効率の良い訓練となると常々言っ
ており、誰もがそれに同意している。三食きっちり食べ、眠ると起きる
時間もきっちり揃えて、健康的な生活を続けるのみ。

「さあ、ドンドン撃ちましょう！ 外れなくなるまで撃って撃って撃
ちまくるのよ！」

反復練習が一番伸びることはよくわかった。私達はただひたすら
に撃ち続ける。戦いは近々来るのだから。

足柄と羽黒の訓練が始まり3日。夜襲から5日経過。

訓練は確実に実になっていった。止まっている的であれば、全員が確
実に命中させるところまで漕ぎ着けた。嫌というほどに撃たされ、無
駄に筋力が付くほどになった。片方の腕だけではダメと、もう片方の
腕でも撃てるようにされた。いざという時は、同じ装備を2つ持つ二
刀流なんてことも出来るだろう。

「今日も疲れました……」

「よく頑張った」

「満たされますね……薬湯でも、若葉さんの温もりでも」

風呂、ダルンダルンの三日月が私にしなだれかかるようにしてき
た。もう人目も憚らない。侵食による思考の変化はそれほどまでに
大きい。

私もかなり疲労が溜まっているため、これを振り払うことはしない
し出来ない。

「強くなってるのがわかります。今日、ほとんど外しませんでした。最後は全部当たりましたよ」

「ああ、若葉も見ていた。二刀流も出来るかもな」

「はい。それが出来れば、若葉さんのサポートもより一層出来ますね」
私が基本敵に近付くため、サポートする側も難しいと思う。それでも三日月はコンビとして意識してくれている。同じ姫のパーツを持つ者として、最高のパートナーとなるべく、お互い切磋琢磨出来ている。

今はあくまでも実弾兵器に慣れることが大前提となっているが、そろそろ基礎訓練を一度終わらせ、実戦訓練に入るといふ話も聞いている。そうなたら、コンビプレイも鍛えることになるはずだ。

「強くなります。強くなって、若葉さんを守ります」

「頼む。若葉は大分無茶をすることになる。三日月に命を繋いでもらう可能性も高い」

三日月が私を好いてくれるのなら、私もそれに応えよう。

「若葉は三日月を守るし、三日月は若葉を守ってくれる。いいコンビになれそうだな。若葉達は」

「はい。同じ姫を持つ者ですから。他人じゃありませんからね」

薬湯のおかげで回復したからか、より強く私の腕に抱きついてくる。それをニヤニヤしながら眺めてくる姉の視線がくすぐったい。

「お主らは本当に仲が良いのう。わらわとしては嬉しいぞ?」

「そうか」

「で、まだいろいろ問題がありそうなそつちじゃが……」

チラリと曙の方を見る。雷と並んで湯船に使っているが、無言。先日の溝は深まりこそしないが、無くなりもしない。単純に言えば、仲が悪いまま。

あの大喧嘩以降、お互いに話す姿はほぼ見えていない。必要最低限の会話のみ。ここ最近は風呂でも会話は無い。

「ふうむ、まあこれは仕方なからう。わらわが口を出す問題ではあるまい」

雷は苦笑するしか無いようである。が、曙は姉の憎まれ口にも反応

が無い。いつもなら雷のことを気にせず反論してくるものだが、それすら無いのは少しおかしい。あまりに疲れすぎて眠ってしまったか。

「曙よ、何も反応が無いのは、わらわとて少し寂しいのじやが」

皮肉たつぷりに言うが、やはり反応が無い。流星に心配になって雷が声をかける。

「曙?」

肩を揺ると、雷に向かって倒れてしまった。あまりに静かだったから気付かなかったが、妙に荒い息をしていた。眠っているわけでもなく、体調が悪いような表情。

さつきまでそんな素振りは見えなかった。匂いもそういう感じのものはわからなかった。訓練による汗の匂いだと思っていたが、具合が悪かったことによる汗だったというのだろうか。

「ちよつと曙!」

「医務室に運び込むぞー!」

このまま風呂に入れておくわけにはいかない。みんなで協力して、曙を風呂から運び出した。

医務室に、曙を運び込んだのは、私と雷。運び込んだらすぐに飛鳥医師が診察してくれた。医者が常設されているというのはこういうとき便利である。

曙には申し訳ないが、風呂上がりということなので、大分ラフな姿にしてしまったが、緊急事態なので諦めてもらう。

「軽い風邪だな。一晩ゆつくり寝れば治る程度のだ」

溜息をつけて症状を話す。

「ストレスと寝不足、あとは体力の消耗だな。ストレスについては話を聞いている。消耗は訓練の結果か。寝不足は……本人に聞くしかないな。曙、起きているだろ」

目を瞑っている曙に声をかける。飛鳥医師の声に反応してビクンと震えた。途端に冷や汗の匂いが漂う。起きてるじゃないか。

「1人部屋で寝れないなら、誰かに相部屋になってもらうが?」

「……別にそこまでしなくていいわよ」

ここに運び込まれた時点で目を覚ましていたらしい。診察も寝たふりでスルーしようとしていたようだが、飛鳥医師はそんなことでは騙されない。険しい顔で曙を睨んでいた。

医者であるが故に、他人の健康には人一倍敏感。さらには不摂生による体調不良のものに対しては割と容赦がない。この曙の体調不良は、曙自身に問題があることで起きていることのように、尚のこと気に入らないようだ。

「君の症状は、ストレス性睡眠障害と極度の疲労から来るものだ。艦娘の強靱な身体で起きたということは、余程寝不足でないと難しいぞ」

「うぐ……」

「理由を話してもらおう。医者としてそれは聞いておかないといけない」

話すまでは解放しないという意味を感じた。曙もさすがに諦めて話し始める。

案の定、1人部屋となった後から、あまり眠れていないらしい。飛鳥医師がストレス性睡眠障害と診断しただけであり、例の件で悶々としすぎて眠れない、もしくは極端に眠りが浅かったとのこと。

今までの訓練も、私達には寝不足を隠していたようだった。訓練による汗で冷や汗が判断出来なかったのは私の落ち度。嘘や狂言は判断出来ても、仲間が無理しているのが判断出来なかったのは少し辛い。

「あまり眠れないなら、睡眠導入剤を使うか？」

「……夜襲の時に起きれなかったら……困るじゃない」

「そんな状態で戦われる方が困るが？」

訓練だったからよかつたものの、これが戦闘中に起きていたら曙は死んでいたかもしれない。そうなるぐらいなら、しっかりと眠ってもらいたいものだ。眠っているのなら無理にでも起こせばいいが、寝不足は寝てもらおうことではしか解消出来ないのだし。

「曙……私のせいで眠れないのね……」

一層落ち込むのは、その原因になっているであろう雷。自分のせいで曙が体調を崩したと思ひ、顔が上げられず曙と目が合わせられない。それに対して曙はだんまり。事実なのだから否定できないというのがある。

「君の悩みがわからないわけではないが、体調不良を隠して生活していたのはよろしくないな。曙、今日は睡眠導入剤を使わせてもらおうぞ」

「……ええ」

体調が悪いだけあり、曙も普段よりしおらしい。何も文句なく、飛鳥医師の指示を素直に聞いていた。今回ばかりは文句が言えないほど飛鳥医師が正しい。

「やはり部屋割りには考え直した方がいいな。少なくとも、曙はもう1人には出来ない」

「……私は……1人でも」

「そうしたせいでこうなっていることを自覚しろ。不健康は最大の敗因だぞ」

テキパキと薬やら何やらの準備をしていく飛鳥医師。今は1人部屋なので、医務室で寝ようが自室で寝ようが変わらないということ、今は部屋に帰すことにしたようである。

「準備が終わったら薬を持っていく。君は部屋で寝ること。夕食は今すぐじゃなくてもいいだろう。まずは寝る。深く寝る。これが最善の治療だ。文句はないな？ あったところで知ったことではないが」

「……ええ」

曙も落ち込んでしまった。体調不良は心へのダメージが思った以上に大きい。

夕食を終え、見舞いと称して曙の部屋へ。さすがに空腹のまま眠るのはよろしくないということ、おかゆを作ってもらい、食べてもらうことになった。

部屋では一層体調が悪そうにしている曙が、荒い息で横になっていた。気が抜けたのか、身体が動かせないほどに消耗。しつかり眠れば

回復するということは保証されているが、それまでが辛そうである。
「曙、夕食だ」

「……アンタが持ってきたわけ……?」

憎まれ口が叩けるだけマシか。なんだかんだ、私が持ってくるのが一番当たり障りが無いと思っただけだ。三日月もサポートしてくれている。

「嫌だったか?」

「……別に誰が持ってきたって変わらないわよ」

「最初は呂500が持っていきたいと言ったんだ」

名前が出るだけで反応した。今は体調が悪いため、騒ぎ立てることはなかったが、明らかに機嫌が悪くなるのはわかった。

謎の罪悪感の原因である曙が体調不良で倒れたと言われたら、心配するのも無理はない。記憶が無い呂500からしてみれば、曙を嫌う理由はないわけだし、嫌われている理由すらよくわかっていないのだ。献身しようと考えても無理はない。

「……アンタで良かったわ」

「だろう?」

ゆっくり食べさせていく。自分で食べると言ったが、手に力が入らないらしく、私が食べさせることでどうにかなった。三日月が軽く嫉妬したようだが、病人に嫉妬するなど建設的ではない。ずっと後ろから羨望の眼差しを受け、曙もタジタジ。

「寝れないなら薬を使ってでも寝た方がいいと思うぞ」

「……そうね……」

やけに素直。それでも、失言はしないように少し慎重に取り扱う。

「……私が意固地なのはわかってんのよ」

「曙?」

「記憶が無いんだから……新しいものって考えて……接してやるのが普通なんですよよ」

素直になったことで、静かに思っていることを話し始めた。呂500のことは嫌っているが、割り切ろうと考えていることを教えてくれる。簡単に出来たら苦労はしないが。

「私の仇は死んだ……あれは新しいろー……それでいいんだと思う。だけど……まだ私にはそれが難しいわ」

「なら時間をかけて接していけばいい。改善できた例があるんだからな」

この世の全てを呪いそうな程だった三日月も、今やそんな過去を思い出させないくらいに穏やかになった。私の側ではより落ち着いているほどだ。時間をかければ多少は変わることが出来るだろう。

曙が変わろうとしているのなら、きつといい方向に向かう。雷との軋轢もいずれ消えるだろうし、呂500との関係も改善されていくはずだ。

「……ごちそうさま。今は寝るわ」

「ああ、そうしておけ」

自分を殺した相手をそうやって見るといふのは、激しい苦痛を伴うことだ。睡眠不足になるほど悩みに悩んで、それでもまだ結論が出せずに苦しんでしまっているが、ずっとつっぱね続けているわけでもない。

いつか、呂500と仲良くしている姿が見れそうだ。光が見えたようにも見えた。やはり曙は強い。

次への備え

翌日、曙は無事回復したが、大事を取って1日休息となった。病み上がりにあの訓練は厳しいと判断され、1日かけて身体を休めることで、明日からの訓練に耐えられるようにする。

当然、曙はその指示に反発した。ただでさえいつ襲撃されるかもわからないこの状況で、たった1日でも無駄にしたいくないと訴える。貴重な1日を休息に使ったことで、自分だけ置いていかれることを嫌い、自分が足を引つ張ることを拒んだ。

「君の言いたいことはわかる。だが、今日やってまた風呂で倒れたらどうするつもりだ」

「倒れなきゃいいんでしょ！ 私はまだ」

「現に倒れている者が何を言っているんだ。何で倒れたかわかっているのか？ 睡眠不足とストレスだぞ。足を引つ張りたくないなら、今は寝るんだ」

曙は言い返せない。体調不良を起こしている本人だからこそ、飛鳥医師が言いたいことは痛いほどわかっているはずだ。医者故に、こと医療に関しては絶対に嘘をつかず、今やらなくてはいけない最善の治療法を提案している。

心底悔しそうな顔。涙目で自分の無力さを痛感していた。自分のせいで足止めを喰らい、誰を責めることも出来ず、頭を抱える。ここで雷や呂500のことを言わないだけでも充分に強い。

「身体を休めることも訓練の内だ。最善の状態で鍛えるからこそ、身につくんだぞ。不調を繰り返していたら、その努力は無駄になる。強くなりたいなら寝ろ」

「……薬ちようだい。多分寝られないから」
「わかった」

曙も流石に諦めて眠ることにしたようだ。これ以上粘っても飛鳥医師は折れないし、寝かせるために別の手段を考えてきそうだし。以前に姫にやった昏睡させる手段まで使ってきそう。こうなった時点で、素直に寝る以外の選択肢が無かったわけだ。

今日は少し久しぶりに監査が来るそうだ。定期的に来るとは聞いており、状況が状況だけに急を要する部分もあるのだろう。何せ、鎮守府でもない医療施設が、武装することを許可された予備鎮守府とされたからには、監査は入念に必要である。

少し空気が湿った匂いがするが、こんな時にでも来なくてはいけないとは大変なものだ。下手したら、今日は嵐が来るのかもしれない。「今回も私ができることが出来たことに安心している」

大本営の監査は今回も新提督。勿論、下呂大将も添えて。護衛も瑞鳳と神風と前回と同じ。運転手のまるゆは相変わらずシロクロのところがへと向かっていた。

私、若葉は飛鳥医師の隣で、新提督と下呂大将を迎える役を与えられた。信じていないわけではないが、私の嗅覚で随時確認しておくためだ。何事もないことは監査に来るのと同じで、こちらから見ても何事もないことをしつかり確認しておかなくてはいけない。

「連絡ありがとうございます。現在、実弾兵器による訓練中です」「そうか。我々が毎度ここにいるとは限らないし、戦力を常に割けるとも限らない。頼んだぞ」

今回は監査であるため、前回と同じように施設を回っていくことになる。差し当たって前回から変わったところはほとんどない。実弾兵器の訓練をしていることと、姉と霰が第二改装をしたこと、そして、三日月が第一改装を行なったことが大きな変化点。

三日月は新提督のことを良く思っていないため、監査が来ると聞いてからはそちらに気を取られないように、より一層訓練に勤しんでいる。今日からは二刀流も訓練に取り入れ、より攻撃的なシフトも鍛えていた。

「少し見ないうちに、大分鍛えられていますね」

訓練の様子を見て下呂大将が感心していた。3日間ミツチリ撃ち続けた甲斐はあり、動かない的に対しての命中率はほぼ100%。練度も上がり、全員が一線級の実力を手にしていると感ぜられる。

しかし、これでも巻雲と朝霜に敵うかどうかはわからない。さらに

いえば、襲撃にまたその2人が来るとも限らない。力が付けられる時間があるうちに、やれるだけやるのが今の方針だ。

「実弾兵器に慣れるところから始めましたが、今ではここまで来えます。僕に訓練案は出せませんので、教官として立っている足柄と羽黒の発案であの訓練をしています」

「来栖のところの2人ですか。基礎を確実に鍛える感じ、来栖のやり方ですよ」

なるほど、この堅実な訓練方法は来栖提督仕込みだったのか。人相からは想像できないくらい確実性のある手段。

応用をするためには基礎を完璧にしなくてはいけないという方針のおかげで、私達は既にある程度戦えるくらいにはなっている。

「何故雷だけは別にやっているのだろうか」

「雷は水鉄砲を極めると決めたので。実弾兵器には出来ずとも水鉄砲には出来る仕事もあります。雷はそちら専門になりますね」

「なるほど。今回は敵の殲滅だけではないからか。1人くらいはそういうものも必要だろう」

雷の方針を、新提督は良しとしてくれた。ああなる経緯もいろいろあったわけだが、認めてくれる人が1人でもいれば雷も喜ぶだろう。私としても、完全に補助に回った者というのは1人はいていいと思う。

摩耶が武装をいろいろ調整してくれており、実弾と水鉄砲を簡単に切り替えられるようにはしてくれているため、誰でも不殺のサポート役に回れるようにはなっている。雷だけでは足りないとなったら誰でもそちらに回れる。

「曙の姿が無いようですが」

「彼女は現在体調不良で休んでいます。今日1日は休息です」

「ふむ、珍しいですね。艦娘が体調不良とは」

下呂大將もその辺りは引つかかるらしく、飛鳥医師が軽めに説明したところ、納得してくれた。新提督も少し考える仕草をした後、そういうこともあるのかと納得。

こういった部分で、艦娘が人間に近い存在であることをより理解し

てもらえたのは不幸中の幸い。尚のこと、敵が非人道的なことをしていると思ってもらえたか。

「見舞いはしない方がいいか」

「睡眠不足から来る体調不良なので、今は睡眠導入剤を使って眠ってもらっています。見るだけで終わらせてもらえれば」

「そうか、ならそうさせてもらおう」

監査とはいえ、わざわざ起こす必要もない。姿だけを確認するに留まるという。病人はそつとしておくが人間のやり方。

「ここに所属する艦娘はほぼ訓練に集まっていますね。来栖の艦娘は近海護衛に出ていますか」

「はい。残りは施設内に散らばっていますね。雷の訓練中は、呂500はシロクロが見てくれているでしょうから、残りはおそらく全員工廠です」

呂500の名前が出ると、新提督が少し悲しそうな顔になる。心底心配している感情も匂いとして感じ取れた。

「呂500は元気にやっているのか？」

「そうですね。不調は見せていません。ですが、改善もまだされていませんね。言葉は未だに話せません」

「そうか……いや、元気ならいい。子供は元気であることが一番だからな」

呂500は基本的には雷と共に行動をしており、訓練中はシロクロと一緒にいることが多い。雷と共にいる時は家事を手伝ったりしているが、シロクロと共にいる時は一緒に泳ぎに行ったりして自由気ままに過ごしている。

潜水艦としてのスペックは最上級であることはシロクロから聞いている。失敗作として捨てられているものの、その存在自体は姫と同じ。むしろそれ以上と見做してもいい。戦力としてカウントするのは難しいものの、もし戦えるのならとても心強い。

「呂500の言葉を戻す研究もしていますが、正直今は見込みがありません。脳を侵食されているというのは、思った以上に難しいです」
「そうか……引き続き頼む」

「了解しました」

呂500のことにもあまり深く触れない。施設のことをよくわかってきている。下呂大将が見込んだだけがある。

今回の監査は比較的簡単に行なわれるようで、所属する全員の姿を見ることが出来れば良しとするらしい。と、その前に、新提督が瑞鳳の行動に眉をひそめる。

「瑞鳳、どうした」

「リコちゃんの戦闘機、初めて見るタイプ！　あとから見せてもらおうかな！」

雷の訓練をジツと見ていた瑞鳳だったが、基地航空隊からの戦闘機ということ、セスとも違うためか興味津々だった模様。本当に艦載機好きである。新提督も溜息をついていた。

訓練を見た後は、一度曙の眠る部屋をチラリと確認し、まだまだ熟睡中であることを確認した後に工廠へ向かうルート。

なるべく小さくしたつもりだが、どうしても音が立ってしまうものの、曙は身動きすらせず目を覚ますことは無かった。随分と落ち着いた表情で、ストレスを感じていない寝顔をしていたため、安心して部屋から出ていくことが出来た。

「よく眠っているように見えたが、起きていなかったか？」

「大丈夫。そんな匂いは感じなかった。熟睡している」

「そういうのもわかるのか。本当にこの若葉は優秀だな」

褒められるのは満更では無い。この嗅覚と付き合い始めて大分経つが、日に日に感じる匂いの幅が広がっているようにも思える。それがいろいろなこと役に立っているため、何も苦ではない。

その後、工廠にも行って全員の姿を見ることが出来たので、一旦監査は終了。摩耶が武装を作っているところをしっかりと見せ、この施設の今後のやっていき方が確認出来たと思う。

「反旗を翻すような行ないは無いと判断した。引き続き、よろしく頼む」

「ありがとうございます」

監査として、中立の立場としても、今の私達は大本営に牙を剥くこ

とは無いと判断してもらえた。これが定期的に行なわれるとしても、何も変えていかないのだから、今後もこの調子で監査を越えることが出来るだろう。

「では、本題の方に行きましようか」

「ああ、そうだな。飛鳥医師。我々の今回の目的は監査だけではない」
改めて、監査ではなく大本営の遣いとしての立場で話が始まる。こうなると今度は下呂大將が話の主体に。

「敵の再襲撃は今晚です。それを伝えに来ました」

訓練は一旦中止。全員が万全の状態で話を聞く。欠席は熟睡している曙のみ。目を覚ましたら改めて話をしておこう。

「先に現状報告を少しだけ。大淀の本拠地は申し訳ありませんがまだ調査中です。彼女は実に巧妙に姿を隠している。おそらく拠点を複数持ち合わせているのではないかと思います」

そこは仕方のないことだ。それを調査出来るのは下呂大將のみであり、その指示は大本営ありき。

つまりは、まだ大本営に内通者がいるということである。下呂大將の動きをある程度把握して、近くを調査しているときはそこから離れている、もしくは確実に隠蔽出来るようにする。

「大將、無礼を承知で聞きたい」

「何ですか若葉」

「貴方が内通者である可能性は」

私の言葉には驚きもせず、疑われても仕方ないという匂いが漂う。ほんの少しの動揺もなく、まるでいつか聞かれるのではないかと予想していたかのような振る舞い。

下呂大將なら匂いまで偽装できそうなイメージがあるため、これを本当に信じてもいいかは何とも言えないが。

「若葉、それは流石に失礼だ」

「いえ、構いません。その疑問はいつか出ると思っていました。ここまで探せないとなると、私自身が隠蔽しているという可能性に辿り着くのは当然というものです」

一度、朝霜が来栖提督が内通者であるという嘘をついたことから、ほんの少しだが周囲の人間にも疑問を向けた方がいいのではと考えようになった。それをしてるのは私だけだろうか。

「若葉、君の見解は」

「匂いに変動はない。新提督からもだ」

新提督も同じだ。私がこういうことを聞いたということに驚いたようだが、隠蔽がバレたとか、そういう負の感情の匂いは一切しない。信用出来る匂いだ。

「なら、それが答えですね。我々はそういう存在ではありません」

「すまない。少し敏感になっていた」

「1人くらいはそういう者がいるべきですよ。私は君を評価します」

話を逸らしてしまっただが、軌道修正。

「再襲撃が今晚と判断した理由ですが、今日の夜は嵐ではないですが大雨が降ると予想したことです」

「天気予報では小降りとありましたが」

「いえ、この付近だけは大雨です。風は無いので安心してください」
嵐が大雨という、少し変わった状況のようである。空気中の匂いから雨は降りそうだとは思っていたが、大雨になるかどうかは予測出来なかった。

「それに加え、タイミングとしては今です、前回の襲撃から5日ほど経過していますから、あちらの再襲撃の準備は整ったでしょう。連日襲撃しないということは、それにも意味があるはずですから」

例えば、一度の出撃で必ず入渠が必要なくらい燃費が悪いとか、と下呂大将は語る。確かに、巻雲の乱射や朝霜の滅茶苦茶な格闘戦は消耗が激しそうだ。それに、身体がまともでは無いのだから、回復にも何か特殊なシステムが必要なかもしれない。

「そして最後、必ず今日に来させる要因として、我々がここに監査に来ました。前回と同じように、まとめて処理出来る状況を作ってあげたということですよ」

ある意味、新提督と下呂大将が囮としてこの施設に一時滞在すること、再襲撃のタイミングを今日にするように差し向けていた。

おおよそ8割くらいだった確率を、これにより10割にまで持っていてく。

こちらの準備が整ったわけではないが、心構えがあれば急襲されるよりは戦える。

「これは内通者の炙り出しにも繋がっています。ある程度は選定しているのですが、今回襲撃が来た場合、ほぼ確定させられますから」

「なるほど……ですが先生、あまりに身体を張り過ぎるのでは」

「私もそう言ったんだが、先生は話を聞いてくれなくてな……」

元氣すぎるのも考えものである。

とはいえ、襲撃のタイミングが固定化出来たのなら、迎え撃つことが出来る。今までの訓練の成果を出すチャンスだ。来ないなら来ないで問題ない。緊張感が高まるが、何もなければまだ時間が作れる。

これにより、今からは襲撃に備えて行動をすることとなる。最善の状態、最高のポテンシャルで迎え撃つのだ。前回のようにはいかない。そのために準備してきたのだから。

雪辱を晴らすために

夜、下呂大将の言っていた通り、風は無いが大雨。

前回とは違い、全員が万全の態勢で待ち構える。寝間着で戦うようなこともなく、装備の準備も万端。仮眠まで取って体調も完璧。

曙は熟睡から目を覚ました後、改めて今回の話を聞いた。今晚襲撃が来る可能性が高いと知り、自分の訓練不足を嘆くと同時に、気持ちを切り替えて戦いに臨む。ぐっすりと眠った分、体調も完全に回復し、100%の力を発揮することが出来るだろう。

「前の嵐の時みたく、シロクロが先行して調査してくれてる。来たらすぐにわかるぜ」

「嫌なことを思い出しますね……」

「うん……」

その時は夕雲が姫として襲撃してきた時だ。さらには霰の救出にも繋がっている。嵐とは少し違うものの、雨の中の戦いというのは少しトラウマが残っているものである。

「今までの戦いの話を聞いている限り、襲撃は基本的に日が変わってから。こちらが熟睡している時に不意打ちをすることで始まるようですね。ならば、今の時間が最適でしょう」

現在は既に丑三つ時。襲撃に備えた活動も、日を跨いだ時点から開始している。寝ぼけ眼だったシロクロも、今では元気に海中で泳いでいた。

『こちらクロだよー。異常なーし』

『シロだよ……こっちも大丈夫……敵影無し』

先行しているシロクロからの通信。まだ敵影は見当たらないとのこと。そして今回は、その中にもう1人。

『ウアーイ』

『ローは私と一緒にいるからオツケーだよ』

呂500はクロと一緒にいる。施設内に留まっても良かったのだが、保護者である雷がいなくなる上に、第二の保護者となるシロクロも監視のために海に出てしまっているため、どうしても1人に

なってしまう。

故に、同じ潜水艦として海中の監視をしてもらうことにした。呂500本人も、何か手伝いたいと訴えていたそうだ。海の中なら曙の目にも入らないし、海上艦からの攻撃も極端に減らすことが出来る。一番安全な場所とも言える。

同じ潜水艦のまるゆはというと、緊急時に車両が出せるように運転席で待機。使わないなら使わないに越したことはない。

「アラレ、私の艦装は」

「だいはつどーてーにのせたよ……すぐにだせるから」

「悪いな。お前達よりどうしても遅くなるから助かる」

リコの艦装は現地まで大発動艇により輸送。超低速であるリコとしては、少しだけでも移動速度が速まることありがたい。霰の大発動艇はこんなところでも役に立つ。

「施設はあたしと羽黒、あとセスで守る。足柄、アンタはどうせ行くんだろ？」

「当たり前よ！ 戦場と勝利が私を呼んでるわ！」

これも前回と同じ。戦場の狼はいつでもやる気満々。天候や時間など知ったことではなく、戦えるのならすぐにでも向かう暴走特急。おそろく私達よりも先に突っ込む。

「鳳翔さんは厳しかったよな」

「はい、荒天で夜となると、専用装備が必要ですから。今回も貴女達に全てを託します」

「私も今回は施設防衛に努めるよ。護衛だしね」

鳳翔と瑞鳳は施設に居残り。この時間帯に来るのは、空母対策もあるのだと思う。施設に空母は所属していないが、こういう形で滞在しているため、念のための対策をしているのだろう。鳳翔も瑞鳳も達人級の実力者だ。

『来た！ 敵影はつけーん！』

『数は多いね……変な感じのが2人……駆逐艦だよ』

下呂大将の読み通り、本当に来た。視界が塞がるわけでは無いが、戦いには邪魔な大雨の中。駆逐艦2人ということは、完成品である巻

雲と朝霜である可能性が高い。

「では、手筈通りに。短時間の詰め込みであっても、基礎を完璧にして
いるのは私も知っています。今の君達なら出来るでしょう」

「僕も巻雲と朝霜の治療の準備をしておく。任せた」

「私から気が利いたことは言えない。だが、大本営の者として、君達に
は期待している。頼んだぞ」

人間達からの声援を背に受け、私達はリベンジマッチへと赴くこと
になる。前回はほぼ完封されたが、今回は違う。短くとも鍛え直し、
あちらの弱点もある程度はわかった。敗北ばかりを刻むわけにはい
かない。

真つ暗闇の海を駆ける。監視の潜水艦達は危険が及ばないところ
まで退避しており、戦うのは私達だけ。事前に準備をしておいたた
め、出撃できる者は全員一斉に出撃した。

戦闘は私、若葉率いる第五三駆逐隊と神風、足柄。その後ろに姉率
いる第九二駆逐隊と、海風率いる第二四駆逐隊。最後尾に霰が操る大
発動艇に寄せられたリコ。

「人形は二四駆と神風、足柄に任せる。それでいいか」

「それはこっちのセリフ。完成品2人を任せて大丈夫？」

「大丈夫だ。五三駆と九二駆、それにリコがいる。前より人数は少な
くなるが、今回は最初から考えてやれる」

人形を引き剥がす必要があるのは仕方のないことだ。そちらにあ
る程度の戦力を割き、私達で因縁を晴らす。

前回の戦いでわかつている弱点、巻雲は近距離、朝霜は遠距離の攻
撃に弱めであることを突くような布陣で行くことは決まっている。
保険もかけつつ、最善の手を手繰り寄せたいところ。

「敵影確認しました」

深海の眼により、三日月がいち早く敵の存在を確認した。やはり巻
雲と朝霜。前回の夜襲よりも得手である荒天の中での戦いだからか、
装備も前回と同じように見える。こちらの戦い方を知っているから
か、完全に営められているようだった。

全員が武器を準備。私は両腿のナイフを手に取り、二刀流で行く。右に拳銃付きナイフ、左に修復材ナイフ。手数が増え、攻撃の機会もその分多くなるはずだ。

「よう、久しぶりだな。待ち構えてるとは思わなかったぜ」

こちらに気付いたか、今回は不意打ちも無しに朝霜が話しかけてくる。随分と余裕があるようだ。気に入らない。

「お前らの行動はわかりやすい。雨が降れば攻め込んでくると思ってた」

「そうかい。んじゃあ、今回はちゃんと皆殺しな。建物にいる連中も全員だ。一人残らず、血祭りにかけてやるぜ！」

同じようにとんでもない速さで間合いが詰められていた。最初の狙いはやはり私。この中で一番警戒されているのか、大淀が生かして連れてこいと言っているのが気に入らないのか、とにかく私は目の敵にされているらしい。

下卑た笑みを浮かべながら、私に棍棒を振り下ろしてきた。前回はそれを受けたが、キナ臭い匂いを感じた。これを受けたら拙いと思いい、即座に回避。

「逃がさねえよ！」

「アンタの相手は私！」

一直線に私に突っ込んでくると最初から踏んでいた。その直線上に、曙が槍を薙ぎ払う。そのまま行けば直撃コースだったが、朝霜はそれも軽々回避。相変わらずこの意味のわからない回避性能が厄介である。

そこにすかさず、雷と姉が砲撃を開始。雷は当然水鉄砲。姉は実弾である。前回とは違うと察したか、雷の水鉄砲すらも回避し始めた。

「遊びはやめたってことかい。あたいを殺すつもりか？」

「どうとも思えばよい。貴様はここで足止めさせてもらうぞ」

さらに夕雲と風雲、霰までもが追い討ち。

朝霜には砲撃を徹底してぶつけ、基本的には近付けさせない方針。それでも近付かれた時の場合を考えて、曙がそちらに入る。槍という中距離武器と、訓練してきた主砲の併用により、朝霜の間合いに持つ

て行かせない。

「うぜえ！」

「朝霜お、てこずってるのお？」

「ここから巻雲の援護が始まる。また、後ろに控える人形達が一斉に動き出した。こちらは残りの私達の仕事だ。」

「それじゃあ、人形は片っ端からやっていくわよ！ 勝利が！ 私を！ 呼んでるわあ！」

「任せたわ。狼は放し飼いでいいのよね」

「ああ、頼んだ」

足柄が突っ切り、神風がそれを追う。その後ろから二四駆。前回より少ないものの、人形処理の経験のある5人と、経験を力で捻じ伏せる足柄なら耐えてくれる。

人形達はなるべく不殺で行きたいところだが、リミッターは外されているだろう。神風が自爆装置だけはどうかしてくれるが、助けられる保証は無い。心を鬼にして、今は巻雲と朝霜を対処する。

「曙、みんな、頼んだぞ」

「さっさと行きなさいよ！ こっちはもう必死なの！」

曙までが砲撃に加わり、朝霜を無理矢理足止めしている状態。合流されたら確実に面倒なことになるため、こちらに来させず、巻雲との合流もさせず、それを維持するために複数人の乱射で回避に専念させる。

これなら私達も巻雲に向かえるはずだ。背中任せ、一番厄介な巻雲に立ち向かう。

「まあいいです。先にこっちやつちやいましょうかあ」

「簡単に行くと思ってるのか」

朝霜を曙達が引き付けてくれている内に、私が巻雲へと突っ込む。巻雲には近距離。私が一番適しているのはわかっていることだ。背中にベタつきの長月を引き剥がさなかったくらいなのだから、あの乱射にも穴はある。それでも、この数日でその穴を埋めてきている可能性は当然考えている。

「若葉ちゃんが来るんじゃないかなって思っていましたあ。巻雲、近い

ところが苦手なんですよね」

「ああ、知ってる！」

「だから、対策くらい積みますよお？」

真正面から突っ込むと狙い撃ちされると考え、素早く回り込んで背後を取ろうとしたが、よりによって全方位に砲門が伸びてきていた。

深海棲艦の艦装だからか、艦娘のそれとはあまりにも違う、まるでハリネズミのような主砲配置。逃げ場を無くすための過積載を目の当たりにして、さすがに突撃をキャンセル。

「逃がしませんよお」

「逃がすんですよ！」

巻雲が撃つ前に三日月が援護してくれた。そこら中に放たれる砲撃を避けながら、巻雲の艦装を破壊するために2つの主砲を駆使して攻撃を繰り返した。私は接近出来なかったために、拳銃側で砲身に攻撃しつつ若干間合いを取る。

主砲ほど火力は無いにしろ、砲身を曲げるくらいの火力はあるため、艦装に当たりさえすれば傷をつけることは可能。しかし、巻雲は撃ちながらもしつかり回避してくるため、破壊までが遠い。

「近付けない……！」

「一旦退け」

私が間合いを取った瞬間、今度はリコの爆撃が始まる。私達とは違い、殺意ある攻撃ではあるのだが、ここまでしても手がつけられないのは確かだ。

とにかく巻雲の艦装を一部だけでも破壊しなくてはどうにもならない。近付くためにはリコの爆撃と同時にそこから攻めなくては。

「こつちに空爆来てるんだけど朝霜お」

「クソが、バカス力撃ってきやがってよお！」

巻雲は余裕そうであり、軽く避けながら乱射をやめないため、案の定近付くことが出来ない。朝霜はこちらの一斉射により足止め出来ているため、作戦は半分成功している感じか。朝霜は曙達に任せて、私は巻雲に専念しよう。

釣りの時のように、全神経を戦場を見ることに集中し、巻雲の隙を

探る。一旦攻撃をやめ、回避に専念しながらとにかく見る。

巻雲の乱射は比較的一定の間隔。ランダム要素は少なめ。隙間時間は相当少ないが、私の速度なら潜れるかもしれない。むしろ、この面子なら私しか攻略出来ない。

「……かー」

乱射の隙間時間を縫って、無理矢理接近をする。それに気付いてくられたりコも一瞬空爆の手を若干緩めてくれた。

低空なら直撃は無いとわかり、しゃがみ込みながら突撃。砲撃が頬を掠めるが、砲身1本をナイフにより破壊。同時に拳銃側での射撃で砲身もう1本も破壊。さらには修復材ナイフでもう1本。

近くなら当然当たる。回避も間に合わせない。だが、それはあちらも同じ。私が近付けばその分、私に当てやすくなるのは必然。一度当たたらすぐに退く。

「朝霜くらい速いですかあ?」

巻雲は朝霜というわかりやすい例を見続けているため、スピードにも追い付いてくる。本人が速いわけでなく、反応速度がおかしい。初撃は当てられたが、2回目以降は私のスピードもカバーされていた。

そこに合わせてくれるのが三日月だ。私が攻撃し、それを回避した瞬間を狙って着実に砲撃を放つ。三日月自身は既に身体に当てるつもり満々の砲撃なのだが、死角から放つても回避されるため、艦装破壊にはちようどいいくらいに。

「ああもう、鬱陶しいですねえー!」

「それはごつちのセリフだ」

徐々に艦装を削っていくが、深海の無限弾のため乱射は止まることがない。一定の間隔になるのは、海水の再装填の瞬間なのだと思う。私達が主砲を海に浸けるのと同じことをしている。

「ならもう、隠し球も無しにしましょう。離れてもらえますかあ?」

キナ臭い匂い。砲撃以外にも何かあるのか。などと考えた瞬間、猛スピードで魚雷が向かってきていた。近付きすぎて回避が難しい。

駆逐艦なのだから、そういう攻撃があるに決まっていた。あまりにも砲撃しかないので、少し頭から魚雷の存在が消えていた。あちら

にしても、魚雷はここぞという時にしか出さない虎の子なのかもしれない。

「くっ……！」

回避するには跳ぶしかない。だが、跳んだということは、巻雲の主砲に狙い撃ちにされるということだ。リコの空爆を避けながら、確実に私を殺そうと主砲を稼働させていた。

「空中では避けられませんよねえ？」

「若葉さん！」

巻雲の主砲が私の額に照準を合わせた瞬間、撃つ前にその砲身が爆発した。

「んん？ 何か……ああ、またアレですかあ」

それをやったのは三日月だ。だが、その三日月の表情は先程までとは打って変わって冷たい機械的な表情。夜だからか、瞳が煌々と輝いているのがやたら目立つ。

前回の戦闘と同じく、また限界突破をしていた。考えたときには行動が終わっているというそれは、まるで感情を犠牲にしたスペックアップ。

「離れなさい」

淡々と、回避方向まで見越した砲撃を繰り返す。私達とは処理速度があまりにも違うオーバースペック。たった数分の力の前借りだが、今回に関しては私の命が助かった。

「三日月、すまない！」

「いいです。次の準備をしてください」

反応が淡白だが、三日月にも時間は無いはずだ。ならば、私も。

「頼むぞ……少しだけ、力を貸してくれ」

左腕に意識を集中。一度出来たことで、リミッターの外し方は完全に理解した。心臓が高鳴る。血液が高速で駆け回る。力が溢れる。

ここからは第二ラウンド。未だに巻雲は疲れすら見せない上に、こちらは奥の手まで出す始末。それでも、今この戦いは勝たなくてはいけない。

完成との再戦

荒天の夜襲は激化していく。私、若葉は三日月とリコと共に巻雲を相手にしている。近距離が苦手であるはずだったが、この数日でその辺りもしっかりと対策してきていた。おかげで私はまともに近付くことも出来ず大苦戦。リコの空爆と三日月の援護射撃により、乱射の隙間時間突いて攻撃するものの、艦装の一部を破壊した程度に過ぎなかった。

乱射に魚雷を挟まれたことにより絶体絶命の危機に陥ったが、三日月が限界突破をしたことで何とか事無きを得た。そこまでしなくては勝てない相手と実感し、私もリミッターを外す。たった数分の力の前借りで、一気に巻雲を追い詰めるしかない。

「っしっ！」

リミッターを外したことにより、今までよりも数段速く巻雲に接近。これでようやく朝霜に追いつけるレベルになるのだが、巻雲の回避性能には追いつけるはずだ。

「うわ、速いですねえ」

「余所見しない」

私に主砲を向けた瞬間、三日月がそれを見越して全ての主砲に砲撃。考えるよりも先に手が動く状態になったことで、私に向けられると考えた瞬間には既に砲撃を終えていた。これに関しては私のスピードよりも速い。代わりに持続時間や負担も大きいため、完全に諸刃の剣。

その砲撃は避けられてしまったが、私への照準もズレてくれた。あつという間に巻雲の懐に潜り込む。

「ここで確実にやる！」

「ノーサンキューですよお」

ナイフを振るおうとした瞬間、眼前に爆雷があった。このままなら巻雲もやれるが私もやられる。相打ち覚悟の妙手。

さすがにそれはまずい。こちらは命を取ることの出来る武器は持っているが、目的は巻雲と朝霜の鹵獲、救出だ。私が死ぬのも問題

だが、卷雲が死ぬのも問題。この爆雷はこの場で解体する。

だが、その爆雷からは火薬の匂いがしなかつた。この爆雷はダメーだ。

「お前……！」

「ちよつとの間があればいいんです」

主砲を改めて構えられた。砲口は私の眉間に狙いを定めていた。即座に横へ移動するが間に合いそうにない。速さが取り柄でも、一瞬の隙を突かれるところも脆い。

死んでたまるか。私はまだ、動ける。

移動と同時にナイフで主砲を払う。さらには拳銃で腕を射撃。それと同時に三日月も砲撃していた。私の身体には傷付かず、本当にスレスレを通るような寸分違わない砲撃により、卷雲の主砲が破壊されていた。

だが、破壊の際に発生した小さな爆発が、私の右眼を焼いた。卷雲の腕と引き換えに、私は遠近感を失う。

「ぐうっ……！」

「うそっ、これ反応できるんですかあ!? ならこつち！」

もう片方の腕の主砲を私に構えるが、それすらも即座に爆散。三日月の反応が数段上だった。訓練により命中率が上がった分、私よりも厄介な存在になっているはずだ。

代わりに鼻血が出始めているのが見えたため、三日月はもう時間切れが近い。今の一撃がおそらくラスト。

「何なんですかあ貴女達はあー！」

今度は艦装から脇腹の辺りに主砲が伸び、私に照準を合わせる。無尽蔵に主砲が現れるのはインチキが過ぎるのではないか。

「それはこちらのセリフだ。お前は何様のつもりだ」

時間切れが近い三日月に代わり、今度はリコによる絨毯爆撃が始まる。上空からの匂いに私が即座に下がると、雨に混ざって爆弾の雨が降り注いだ。これには回避一辺倒にならざるを得ないはず。伸ばした主砲を撃つことも出来ず、爆撃をどうにか回避し始める。

私はまだ時間切れが遠い。まだ動ける。ならば、より確実に倒せる

方へ。

回避の方向を見極め、匂いから遠近感を測り、巻雲の真後ろへ移動。背中の艦装さえ破壊してしまえば、何も出来なく出来る。

「撃つ暇なんぞ与えない！」

リコの爆撃を潜りながら、巻雲の艦装へ攻撃。それすらもギリギリ回避されたが、背中側の主砲はこれにより破壊出来た。まだ数は残っているが、攻撃の手段は大分減ったはず。おおよそ初期から半分以上は破壊した。

リミッターを外してから形勢逆転した。三日月のおかげで私は死なずに済み、巻雲の攻撃手段は削られた。私も行動範囲が増え、より艦装の破壊に成功。リコの爆撃もあるため、被害も最小限に食い止められている。

「もう！ 朝霜お、そっちはまだなの!？」

「こいつら、前と全然違うんだよ！」

堪らず朝霜に援軍を申し出たようだが、あちらはあちらで足止めが出来ていた。分断もうまく行っている。

それでも、実弾まで含めた一斉射が回避され続け、ジリジリと近付かれていた。遠距離が苦手なはずの朝霜も、巻雲と同じように対策を取ってきているのかもしれない。

「ったくうぜえんだよ！」

前回にもやった海面への攻撃。魚雷が爆発したかのような水飛沫が上がり、目の前から姿が消えた。だが、お構い無しに砲撃は続ける。その筆頭是我的姉、初春。空飛ぶ主砲2基により集中砲火を浴びせかけ、直感も込みで水飛沫も関係無しに撃ち続ける。

命中率は九二駆でも随一だが、朝霜相手ではそこまでの成果が得られなかった。とにかく素早い。それでも撃ち続けるのは意味がある。

「いい加減にしるよババア！」

「口汚いのう。程度が知れるぞ?。」

姉が朝霜の怒りを一身に受けるため。

朝霜は遠距離からの攻撃以外にももう一つ弱点があった。他人を煽る割に、煽られることにはとことん弱い。ムキになって襲ってくる

る。それを見越して、姉が朝霜をさんざん煽る。

当然これは危険な戦法だ。集中して怒りを買うということは、集中攻撃を受けるといふ事。これまで姉は砲撃訓練は相当量こなしてきたが、回避訓練はどうだったかがわからない。巻雲の砲撃を回避していたのは見ているものの、朝霜のスピードに追いつけるかどうか。「リコにも言われておったな。御山の大将じゃったか。いや、猿山の大将かえ?」

「ああん!?!」

「強く怒鳴れば誰でも怯むと思つたら大間違いじゃ。所詮はチンピラ、与えられた力で粹がつておるだけ。わらわが婆なら、貴様はクソガキじゃな」

水飛沫を突き破るように突撃してきた。怒り任せに姉へと向かい、力任せに薙ぎ払おうとする。直撃したら死も見えるその攻撃を、姉はヒラリと躲した。あの避け方、私達は何度か見たことある。

回避した直後、朝霜を挟むような位置を陣取っていた夕雲と風雲が同時に砲撃。進むか退くしか回避方法が無い絶妙なタイミング。朝霜の性格的に、ここは前へ来るだろう。

「このっ」

「頭に血が上つておるようじゃが、大丈夫かえ?」

予想通り、前へ。それに対して当然、姉は砲撃を浴びせかける。回避されることも見越して、わざと甘めに。しかし、回避方向は固定出来るような位置から。

「嘗めんじゃねえ!」

「嘗めてはおらぬ。貴様は気に入らんほど強敵じゃ。だからわらわ達は6人も貴様に割いておる。誇れ誇れ」

回避した直後、その隙間を狙った雷の砲撃が、朝霜の顔面に直撃。人形なら気絶したほどの衝撃のはずだが、朝霜は怯む程度で終わった。回避だけならず、耐久力もおかしい。

「つてえ!」

「頑丈すぎよ!」

続けてさらに顔面に一撃。さすがにこれは避けられるが、真正面の

姉と、水鉄砲を放った雷しか視界に入っていなかったため、曙が真後ろから槍を振りかぶっていることに目が行っていなかった。だが朝霜は背後からの攻撃も当たり前のように回避するような者。不意打ちでも当たるかはわからない。

「邪魔なんだよ死に損ない！」

「背中に目でもあるわけ!？」

槍による強烈な振り下ろしを棍棒で受け止め、それを力任せに払い飛ばす。嫌でも体勢が崩れるが、それをカバーするようにすかさず雷が後頭部に砲撃。同時に霰による砲撃も加わり、その場から退避を余儀なくする。

回避性能が尋常では無いことはわかっていたことだが、曙が言う通り、背中に目があるような回避。

「水鉄砲じゃなきゃあ終わってたのによお、甘ちゃんで助かったぜ。お礼にお前は最後まで生かしてやるよ」

「それはどうも！ でも、誰も死なないから安心してよね！」

「はっ、皆殺しにするつつつてんだろぅが！」

雷が水鉄砲でなければ、あの時点で朝霜は死んでいた。雷だけは水鉄砲であることを見越して回避しなかったようにも思える。そういうところまで私達を嘗めているのだろう。

だが、朝霜にも随分と余裕が無くなってきたように見えた。私達がかこまでやるようになったことは想定外だったようである。数日間ミツチリとこなした訓練と、出来る限りのスペックアップ。改装もしてきた。しまいには私と三日月のリミッター解除だ。ここままでして人数を揃えることで、ようやく完成品2人に追いついた。

「くそっ、巻雲姉！ 合流するぞ！」

「させるわけないでしょうが！」

「ええ、ダメですよ朝霜さん。夕雲達と遊びましょう」

朝霜の合流を妨害するのは風雲。こちらは2人とも実弾兵器であるが故に、回避以外の選択肢は無い。

「邪魔クセエ姉貴だ！ 出来損ないのクセして邪魔すんじゃねえよ！」

「可哀想に……朝霜さんはもつと素直な子だったと思いますけど」
「私達もああだったと思うと情けないわよ」

2人も妹のためと心を鬼にして煽る。それだけで冷静さを失ってくれれば問題なし。容赦なく2人がかりの乱射で行く手を遮った。やはり遠距離には弱い。

「ちよつと朝霜！」

「お前の相手は若葉だ！」

爆撃を回避しながら少しでも朝霜に合流しようとしていたようだが、そうは問屋が卸さない。片目が見えていなくとも、主砲が半分以上破壊された今の巻雲なら相手が出る。それに、リコは無傷で健在だ。

巻雲と朝霜の間に入るように陣取り、巻雲には曙達を邪魔させないように徐々に離していく。三日月は限界を迎え、リコの艦装にもたれかかるように休息中。感情も戻ってきているようだった。

「いい加減にい！」

「するのはお前だ」

退路を塞ぐような爆撃で退避出来なくさせていき、私とほぼ一騎打ちの様相になっていく。ここまで来れば、後は大丈夫だ。私の時間切れも近いが、それまでに終わらせる。

巻雲に焦りの匂いが強まっていた。圧倒的な力で蹂躪した前回とは違う。私達だって戦い方を学び、出来る限りの準備をし、この場に立っているのだ。同じように捻り潰されると思っていたのなら、それこそ慢心。

「巻雲1人に寄ってたかって！ プライドは無いんですかあ！」

「どの口が言うんだどの口が」

「堕ちたなマキグモ」

退路を塞いでいたのは、自らが近付くため。主砲は砲撃する前に私達が丁寧に破壊していった。最終的には丸裸も同然なところまで剥いだようなもの。艦装に備え付けられた艦装は全て無くなり、残っているのは虎の子とも思われる魚雷くらいだろう。そうなれば、撃たせる余裕も与えない。

「お前にプライドを語る資格なぞない」

もうリコは卷雲の眼前に迫っていた。それに攻撃する手段も私が絶った。もう卷雲は涙目だった。

余裕を持って施設を破壊出来るとでも思っていたのだろうか。確かに苦手をしつかり対策してきたのは恐ろしいことだ。それでも、100%勝てると思つてここに来たのなら、あまりにも私達を嘗めすぎている。

「私の恨みは深いぞ」

見えないほどの速さでリコが卷雲の鳩尾に蹴りを入れた。念願叶うこの瞬間に、怒りも振り切れ限界を超えていた。回避に特化している卷雲ですら、それは回避出来ない。

「おぶっ、げほっ!？」

「仲間達を殺した罪は重い。だが、真の敵は知っている。だから、お前にはこの辺で終わらせてやる。姉妹に感謝しろ」

腹をやられて前屈みの卷雲の脳天に、綺麗な力カト落としが決まった。これにより、卷雲の意識は刈り取られ、海面に叩きつけられる。ここまでしたらもう安心だが、念を入れて艤装は破壊。これで航行も不可能。

そして、私は時間切れ。よくここまで保ってくれた。立っていられずその場に膝をつく。もう身体が動かず、焼かれた右眼の痛みが今更になつて襲つてきた。

「卷雲姉！ テメエらよくも！」

これを見た朝霜は当然のように逆上。そのせいか数段のスペックアップ。怒りで限界を超えるのはあちらも同じか。あとはもうあちらに任せるしかない。私はもう動けない。

「自分の姉がやられて逆上かえ。わらわ達を笑いながら殺すのに、それは都合が良すぎるのではないか？」

「うるせえ！ テメエら絶対許さねえ！」

「許しなぞいらぬ」

乱射の密度はさらに上がり、ここにまだ余裕のあるリコが爆撃も追加したことで、回避すらも困難にしていく。

だが、怒り狂った朝霜はとんでもない行動に出る。理性が焼き切れてしまったかのように、こちらの目的を知ってか知らずか、砲撃すら無視して突っ込んできた。

「どうせデメエら当てる気無えんだろうが！ 嘗めやがって！」

いの一歩に狙われたのはやはり姉。眼前に来られると、撃つて殺すか撃たずにやられるかの2択にされてしまう。普通ならば。

姉の主砲は飛んでいるのだ。接近されたら後ろからの砲撃に変化させられる。あとは朝霜の攻撃を回避出来るかの問題。

「死ねよババア！」

「死なぬよクソガキ。わらわには仲間がおる」

強烈な振り下ろしを華麗に回避。先程もやったあの躲し方、姫だった時の夕雲が見せた踊るような回避だった。

そして返しに砲撃で艦装を一部破壊。姉は接近戦まで視野に入れている。

「この……！」

「熱くなつて周りが見えておらんのか」

スペックアップしたものの、頭に血が上りすぎて視野が狭まったことで、姉以外の仲間達が1人も見えていなかった。

真後ろから霞の砲撃で艦装がさらに破壊され、雷の膝への砲撃で体勢を崩される。

「わらわは囷じゃ」

「くそ、クソがあー！」

「いい加減、黙りなさいよー！」

そこに曙が飛び込んできていた。渾身の力で槍を振り下ろし、巻雲と同じように朝霜の脳天に一撃。リコとは違う、鈍器での殴打で、この戦いを終わらせる。

はずだった。

「まだだオラア！」

それすらも耐えた。頭から血を流しながらも、おそろしく頑丈。力任せに棍棒を振るい、間合いを取らざるを得なくなる。

戦いはまだ終わらない。だが、あと少しだ。

秘策中の秘策

私、若葉と三日月、そしてリコによる共闘で、完成品である巻雲をようやく下すことが出来た。艦装も破壊し、本人もリコの攻撃によって気を失っている状態。腕に怪我はさせたが、命に別状は無いようである。安心していい。

代わりに私と三日月はリミッターを外した影響で消耗が激しく、私はその場から動けず、三日月もリコの艦装を支えに休息を取らざるを得ない状況。残った朝霜は、残りの仲間任せに任せる。

巻雲がやられたことで怒り狂った朝霜は煽り続ける姉に向かったが、視野が狭くなったことを利用して返り討ちにした。しかし、曙の渾身の一撃を脳天に受けたというのに、未だ気を失わず戦闘を続行。棍棒を振り回して間合いを取る。

艦装も破壊され、出力は大分低下しているはずだ。最初ほどのスピードは出せていない。だが、それでも普通よりは断然素早いし、何よりパワーがおかしい。棍棒での一撃を喰らえば、最低でも重傷、最悪一撃で死。

「まずはテメエだババア！」

「簡単にはやられぬよ」

スピードが落ちた分、一撃が重くなっているようだった。踊るように紙一重での回避は危険。掠めただけで姉が顔を顰める。砲撃は当たり前のように回避し、攻撃も重い。あれで怪我人とは到底思えない。

厄介なのは巻雲だが、単純なスペックなら朝霜の方が上だったかもしれない。乱射が酷いが近付きさえすれば何とか出来た巻雲と違い、朝霜はこの期に及んで怒りによるスペックアップを果たしている。遠距離による接近防止も、今や回避により効かない状態に。

「初春！ 助けるわ！」

「水鉄砲なんざ相手じゃねえんだよ！」

雷の砲撃に対し、海面を掬い上げるように棍棒を振るった。叩き付けるよりも大きく上がった水柱に、雷の砲撃は掻き消されてしまう。

実弾なら物ともせず突き進んだだろうが、水鉄砲が故の回避。デメリットがこんなところで見つかった。

だが、その瞬間は雷を意識したということだ。煽られ続けて我を失っている朝霜には、それだけで致命的。戦っているのは雷だけではない。あと5人いる。

「終わりにしましょう。朝霜さん」

夕雲の砲撃が、朝霜が握っている棍棒を弾き飛ばした。真後ろから、あえて艤装は狙わず武器だけ。まだ拳という武器はあるだろうが、今までとはダメージが雲泥の差になるだろう。

艤装ではないところを狙ったからか、回避されずに済んでいた。自分の身に危険が及ぶ場合の反応速度が異常なだけか。

「クソ姉貴が……!」

「こういう形の姉妹喧嘩は辛いので。朝霜さん、投降してくれませんか?」

自分からやめてくれるのなら何も言うことは無いだろう。そう出来ないように洗脳されていることは百も承知だが。

これがまた、朝霜には煽りに聞こえたようである。夕雲の発言で、血管が切れるのではないかというくらい顔を歪ませた。余程下に見られることが嫌と見える。洗脳により歪まされた心では、私達の言葉は全て気に入らないのだろう。

「ふざけんじゃねえ!」

「ふざけてないわよ!」

今度は風雲が主機を破壊するために砲撃。しかしこれは回避される。未だあの回避性能は健在。

「何が投降だ! テメエらはあたいが一人残らずぶつ殺してやる!

巻雲姉はもう知らねえ、戻ったところでどうせお仕置きだしな。けどあたいは違う! ちゃんと成果を残してやらあ!」

一瞬で風雲に接近し、徒手空拳での攻撃。武器が無くとも相当危険な攻撃であることは間違いない。そうでない限り、丸腰で突っ込んでくることなどしないだろう。

本当に近接特化な装備のようだ。確かに艤装には主砲も魚雷も何

も装備されていない。それだけ自信があり、それだけで今までどうにか出来ていたのだろう。

「姉貴だとか関係無え！ あたいの邪魔をするなら死ねよ！」
「させるわけ無いでしょうが！」

その拳を曙が槍でガード。ひしゃげるのでは無いかという衝撃をギリギリで受け、その威力により後退り。

ただ一人にしているにもかかわらず、ダメージも相当負わせたにもかかわらず、朝霜はまだまだ平気で動き続ける。息切れすら無い。

逆にこのタフさで、曙以外は疲れを見せ始めていた。リコ空爆も避け、みんなの砲撃も避け、攻撃したのから一人ずつ狙っていく。スピードが落ちてくれていいるおかげで、その度に曙がガードをしてどうにか事無きを得ているものの、ジリ貧なのは変わらない。

「ふぎけた底力じゃの……何なのだ彼奴は」

「くっそ……せめて動きが止められればまだ……！」

曙の槍は修復材の刃だ。痛みだけ与えて身体に傷をつけない。それで攻撃すれば、その痛みで動きを止めることが出来るはず。だが、動きを止めるためには、一度動きを止めなくてはいけないという矛盾した状態。

雷が足止めのために脚を狙っても、水鉄砲故に物ともせずに向かってくる。その砲撃は朝霜の足下で水飛沫を上げるだけだ。実弾は避けられ、水鉄砲は関係無しに突っ込まれ、曙の刃は届かない。

「足止め、足止めして！」

「出来たらやっておるわ！ 単純故に止まらぬ！」

猪突猛進とはまさにこのことだろう。朝霜が一切止まらない。怪我のことなど考えず、実弾で脚に攻撃しているにもかかわらず、全て回避。空爆も避けつつ、リコにすら殴りかかりに向かっている。

「死に損ないの陸上施設が！ 何ノコノコ海の上に来てんだよ！」
「お前らに屈辱を味わわせるためだ。私の仲間を殺した報いを受けてもらうためになあ！」

唯一単体で互角に渡り合うことが出来るのがリコだが、海の上は本来の場所ではないからか、簡単にはいかない。やはり曙が唯一どうに

か出来る状況なのは変わらない。

しかし、それも見越して朝霜はリコから即座に離れる。頭に血が上っているのに、直感的にリコは面倒と判断したか。そうなると接近に時間がかかるリコには面倒。舌打ちしながら空爆を再開。

「手間かけさせやがって！ あとテメエは鬱陶しいんだよ！」
「っ」

リコが相手をしている間も艦装狙いで砲撃をやめていなかった霰が狙われた。その行動を抑えるように夕雲と風雲も砲撃を続けるが、その突進は止まらない。

むしろ、最初から今まで常に動きっぱなしだった。曙が足止めを要求したくなるほどに延々と動き続け、こちらを翻弄してくる。曙以上のスタミナすら持っているようだ。デメリットが無いのが不思議なくらいである。

「死ねオラァー！」
「しない」

卷雲と同じように、朝霜の眼前に爆雷を放っていた。駆逐艦なら誰でも持っている、簡易爆雷を牽制に使うことで、朝霜の動きは一瞬だけ止まる。

その隙に艦装破壊に乗り出すが、ブレーキを踏んだ直後に後ろに下がられたせいで回避された。着地に雷が合わせるが、それも当然の如く回避。足が一切止まらない。

「ああクソ！ 邪魔クセェー！」
「はなれて」

爆雷の爆発と同時に散開。間合いを取り、また一斉射。元の状態に戻るが、事態は一向に良くならず、朝霜が止まらない。止められれば勝機は出てくるのに。

「動きが止まればいいのよね」
「はあ!? アンタの水鉄砲じや意味ないことくらいわかってんでしょ！」

「危ないけど……危ないけど、やらせてあげて！」
「ここで雷の意味不明な言葉。一体何のことを言っているのか。突

然の申し出に曙も少し混乱した。

「曙、準備して。すぐに！」

「何言ってるの!？」

「私はずっと朝霜の場所を伝えてたの！ 海の中だと誰が誰だかわからないから、水鉄砲で！ 来るわ！」

瞬間、海中から現れ出た異形。施設から退避していた呂500が、朝霜の足下から現れ、脚を掴んで海中に引きずり込んだ。

「なっ!? テメエ、死に損ないのクソ潜水艦!？」

「アウウウー！ ンガア！」

呂500も身体の中は変質させられている。艀装だつて装備しているのだから、パワーだつて普通ではない。理性を失い私達に襲いかかってきた時も、尋常ではない腕力を発揮していた。

その力を今、朝霜に対して使っている。沈めることが出来たのは下半身だけだが、普通の艦娘ならそれで航行不能。それは朝霜も例外ではなく、その場でもがいても移動が出来ていない。

雷は海中の呂500の声を聞いていたようだった。イロハ級の意思が読み取れる雷だからこそ、本来聞こえないであろう呂500の決断を聞くことが出来たのだ。そのために、水鉄砲を海面に撃ち、朝霜の位置を逐一海中に伝えていた。ただ脚を狙っていたわけではなかった。

「この、クソがあー！」

海中に向かつて拳を振り下ろし、呂500の頭をガツガツ殴り、拘束を振り払おうと必死だ。呂500自身も耐久力はかなり上がっているため、それくらいでは引き剥がされない。

「ウアアア！」

「うるせえんだよ出来損ないがあー！」

「ローを虐めるなあー！」

その拳を止めるように、今度はシロとクロも海中から現れ、その腕にしがみつく。潜水艦3人に取り押さえられジタバタともがくが、こ

れで朝霜の動きは完全に止まった。

「アケボノ！ 早く！」

「私達じゃ……限界が近いから……！」

現状を打破する手段を天敵が持っていたという事実混乱していたが、今が千載一遇のチャンスであることは変わらない。曙がやらずに誰がやるというのだ。

「アアウツ！ ボノオ！」

「感謝してやるわよ！」

まるで呂500を助けるかのように、朝霜の胴を横薙ぎにした。今までずっと避けられ続けていた刃での一撃がついに入る。

「つぎ!? ぐああつ!?」

激しく血を噴き出したが、身体に傷は一切ついていない。だが服だけはしつかり斬られている。攻撃がまともに入った事実を、如実に表していた。これにより抵抗が止まり、強烈な痛みでようやく動きが鈍くなった。

「つたく、手間かけさせてくれたわね……」

「クソが……」

「殺されないだけマシだと思いなさいよ」

今度は柄の方で顎に強熱な一撃。急激に脳が揺さぶられ、朝霜も白眼を剥いて気を失った。

「ようやった！ お主らは救世主じゃの！」

「アウアー！」

「ローが頑張ったおかげだよ！」

気を失ったことをしつかりと確認して潜水艦3人が離れ、すかさず姉が朝霜の艤装を完全に破壊した。

まだ雨は降り続けているが、完成品との戦いはこれで幕を閉じる。

いや、まだだ。人形の足止めをしてくれていた神風達から応答が無かったのだ。まだ戦っている可能性だってある。

「人形共はまだ終わっていないぞ。動けるのはあっちを手伝ってやれ」

リコもそれに気付いたようで、疲れているもののまだ戦える者達に指示。朝霜を倒したことで浮かれていたところで申し訳ないが、もう一仕事残っている。

この後、こちらのメンバーが参戦したことで一気に押し返し、人形処理も完了。神風がしっかりと自爆装置を破壊してくれたこともあり、最悪の状態は免れていた。

敵陣に突っ込んでいった江風と涼風、そして一番暴れ回った足柄がいくつか傷を負っていたものの、中破に届かないくらいのものであったため一安心。見た目が一番危なかったのは返り血塗れの神風ではあったが。

動けない私と疲労困憊の三日月は、霰が運用する大発動艇に乗せてもらって帰投する。リコの艤装を背もたれにして、何とか眠らないように。

気絶している巻雲と朝霜は、姉妹である夕雲と風雲が運んでいる。そう簡単には目を覚まさないと思うが、目を覚ましたとしても艤装は破壊しているため、やられることはないだろう。

倒した人形達は、以前と同じように半数近くは自沈してしまった。それでももう半数はまだ残っているため、随時施設に運び込むことになる。そこでも霰は活躍することだろう。

「三日月、本当に助かった」

「はい、頑張りました……自分でもアレが出来て良かったです……」

自らリミッターを外した消耗は激しく、三日月は倒れないように私の左腕にしっかりと抱きついていて。私を支えてくれつつ、自分の身体も支えているが、まるで匂いを嗅ぐように頬擦りまでしてきたので、感情を犠牲にしたリミッター解除の反動で感情が過剰になっているようにも見えなくはない。

「若葉さん……右眼は大丈夫ですか……？」

「めちやくちや痛いぞ。だが……悪くない。これで済んでるんだからな」

生きているだけでも御の字。また少しの間は片目が見えない生活

が始まるかもしれないと思うと、少し気が滅入る。

「それよりも……アレだ」

「そうですね……アレです」

私と三日月が視線を向けた方。そこには曙と雷、そして海面を泳ぐ呂500。仲違いしている3人。

「……ろー」

「アウ？」

曙の方から話しかける。

「助かったわ。アンタがあそこで出て来なかったら、多分ジリ貧だった」

「ソウ、イア、アー」

「自分も役に立ちたかった、だって」

通訳の雷もニコニコしている。

「……ありがとう」

「シアー！ ボノー！ アウアー！」

「通訳、いらぬわよね」

海面から飛び出して曙に抱きついた呂500。今までの曙なら殴り飛ばしてでも引き剥がしていただろうが、今回の戦いのMVPは満場一致で呂500だった。それを邪険に扱うわけにもいかず、ただただ受け入れている。海水でビショビショだが、雨で濡れているため気にもならない。

「か、勘違いしないでよ。私はアンタのこと好きでも何でも無いんだから」

「ンフー、ボノ、ウアウウ」

「て言うか、私の名前だけは言えるわけ？」

「頑張つて練習してたのよ？ ぼのたん？」

「ぼのたん言うな！」

あの関係も、今回の戦いで少しだけ改善が見えたかもしれない。大きすぎる確執が埋まることは無いだろうが、今までのように避けて通るようなことは無くなりそうだ。

これで本当にこの戦いは終わり。まずは治療し、疲れを取り、次の

戦いを見据えなければならぬ。完成品2人相手にこれなのだ。今
後来るであろう者達は、さらにこれ以上のものになっている可能性が
高い。

まだ強くならなければならぬ。楽しく生きるためには、力が必要
だ。

激戦の後

完成品2人との戦闘が終了し、無事に帰投。あの戦いの中、数人の人形が施設側に流れていたらしいが、摩耶とセス、そして羽黒の力でそれは撃退済み。リミッターが外されており、セスの呼びかけにも反応しないように改良、もとい、改悪されていたようで、時間経過と共に結局自沈してしまったそうだ。

遺体は回収済みらしく、現在は体内の自爆装置の摘出が行なわれている状態。その時間を見透かされて処置中に自爆されては敵わないと、神風の持つ刀と近い物をもう1本用意してもらい、摩耶の手により先んじて破壊している。既に死んでいるとはいえ、少し辛い処置。

人形の遺体は摘出処置が終わり次第、目につかない場所に安置し、明日、来栖提督に運んでもらうとのこと。

「怪我人はすぐに治療します。まるゆ、持ってきてますね」

「はい！ 高速修復材、車から取ってきました！」

飛鳥医師が忙しいため、私を治療してくれるのは何と下呂大将。私の血で服が汚れることも気にせず、適切に処置をしてくれる。

こうなることも予想して高速修復材が用意されていた。私、若葉はその戦闘により右眼を負傷しているため、それを点眼してもらうことで傷は修復完了。

ただし、以前と同じように一時的に視力が失われているため、少しの間は遠近感が無く、包帯を巻いておく方針となった。おそらく丸一日もあれば大丈夫だろうという判断。

「修復材が無ければ、そのまま失明だったでしょう。用意しておいて良かったです」

「ああ、助かった。間近で主砲が爆発したんだ」

包帯を巻いてもらい、処置は完了。あとは動かないくらいまで消耗してしまっている体力を回復することに努める。三日月もフラフラしていたので、今は人の手を借りて部屋まで連れて行ってもらった。

まだ海上に残されている人形達の回収は、霰と二四駆が向かってい

る。私達とリコの艦装を降ろした後、そのまますぐに戦場に戻っていった。このまま何人運び込むことが出来るかはわからないが、出来る限りのことはしたい。

「艦装は外したなー。なら部屋に運ぶぞー」

倒れかけている私と三日月はすぐに休息が必要ということで、そのまま自室まで運んでもらうことに。私を下呂大將が、三日月を新提督に運んでもらうというなかなか無い経験をさせてもらった。

ベッドに下ろされると、途端に睡魔に襲われる。今の今までずっと気を張っていたからだろう。安心した途端気を失うように眠りについた。三日月は私のベッドに並べて寝かせている辺り、新提督は私達のことをよく理解してくれていた。

後から聞いた話だが結局、戦場から運ばれてきた人形の遺体は数人分。その全てが自沈していたそう。全員の自爆装置は神風により破壊されているため、これ以上の被害が無くなったとはいえ、あまりにも報われない。なかなか快勝とはいかないものである。

翌朝、もう日が高くなったところで目を覚ます。修復材を使ったおかげで痛みはないが、やはり右眼の視力は無くなっており、遠近感が無い。昨晚のうちに誰かが用意してくれたいた新品の包帯を巻こうとしたが、まだ眠っている三日月が私の左腕をガツチリホールドしていたため、起きることが出来なかった。

「三日月、もう朝みたいだ」

動く右腕で軽く揺する。

「んふあ……おはようございまふ……」

気怠そうに目を開けた。私をホールドしていることに気付いても、悪びれる様子もなく、マイペースに身体を起こす。

いつもよりも呆けているように思えたが、これもしミッター解除の反動かもしれない。戦闘中に過剰に頭を使いすぎたから、それにより今は頭を使わない方向に行っているような感じ。

「すまないが、包帯を取ってくれないか。こちら側から見えないから、そちら側の何処かにあると思う」

「あ、はい。これですね」

三日月にも手伝ってもらい、丁寧に包帯を巻いていく。両眼でない分まだ楽な方。行動に支障がほとんど出ないのはありがたい。強いて言うなら、物を食べたりするときに遠近感が無いことで面倒なことが起きそう。

「三日月は身体は大丈夫か？ あのリミッターの外し方は辛そうだが」

「そう……ですね。グツスリ眠れば大丈夫みたいです」

言うなれば、三日月のリミッター解除は脳の酷使。常人には及ばぬ先の先まで見据え、考えた瞬間に身体が動くほどの処理速度を体現するために、最終的に鼻血が吹き出るほどの出力になってしまっているのだろう。

今は脳を休ませる時間。安心感を得られれば休まるようなので、私と同じ部屋で眠るといふ状況は、今は三日月にとって最も適切な状態のようだ。

「私が若葉さんの右眼になります。安心してください」

「ああ、両眼じゃない分まだ楽だが、頼んだ」

一時的な失明の時のように手を引っ張ってもらう必要はないものの、念のため側にずっといてもらうつもりだ。

今日はおそらく全員休息日。機装整備くらいは動いているかもしれないが、施設に所属する者全員が疲れているのは間違いない。作業せずにゆっくり休息することも重要だろう。

「そういえば……お風呂に入った記憶が無いんですけど」

「ああ、若葉もだ。先に風呂に行こう」

「そうですね。包帯巻く必要無かったかもです」

申し訳ないが、私の嗅覚が早く風呂に入れと訴えてきている。戦闘後、そのまま寝かされたらいろいろな匂いが混じっても仕方のないこと。潮風やら汗やらで、それはもう大変なことになっていた。布団も洗った方がいいかもしれない。

風呂から上がり、さっぱりした状態で食堂へ。いつもなら朝食が終

わっているような時間よりもさらに後、既に雷と鳳翔が昼食の準備を始めているほどの時間だった。日が大分高いと思っていたが、まさかそこまで眠っていたとは。2人してリミッターを外した影響が出てしまっていた。

「あ、起きたのねー」

私達に気がついた雷がパタパタとやってきた。今日に関しては、みんなが起きるのが遅く、朝食は誰も食べていないらしい。

艦娘の中では、施設防衛に徹していた鳳翔が一番早かったそうだが、それでも軽く摘む程度でいいかと思える時間だったのだとか。深夜の襲撃の弊害である。

「若葉達が最後か」

「起きたのはね。でも、入れ違いで飛鳥先生が寝ちやつたわ。多分起きてくるのは夕方くらいになるんじゃないかしら」

前回と同じように、下呂大将と新提督は既に撤収済み。来栖提督も朝一に来ていたらしく、昨晚の戦いの犠牲者である人形の遺体を運び出してくれたそう。それを見届けたのは、飛鳥医師と一部の者のみ。

徹夜で人形の遺体から自爆装置を摘出し、巻雲と朝霜の昏睡処置をし、その後に相談までしていたため、飛鳥医師が寝たのはついさっきなのだとか。全員疲れ果てていたのはわかっていたが、飛鳥医師だけは最後まで振り絞っていた。今はぐっすり眠ってもらおう。

「今日は休日としています。危険かもしれませんが、今は護衛艦隊も海に出していません」

鳳翔も追加で説明してくれた。

昨晚の戦いの消耗は激しく、一晚眠ったとしてもみんなが疲れ果てていた。徹夜明けの飛鳥医師は眠り、他の管理できそうな者は全員、やるべきことをやるために自分の場所に戻っている。今、この施設で活動しているものは艦娘と深海棲艦しかいない。

そんな状態で訓練しても意味がないだろうし、そもそも管理する者がいない状態で活動するのは危険だ。飛鳥医師が眠っているのなら、私達も動かない。それが一番いい。

「詳しい話は、飛鳥先生が目を覚ましてからとなります。私達も詳しくは聞いていませんから」

「だから、今日はゆっくりしてね。私も久し振りに家事がしたいわ！」
「雷さんもちゃんと休ましましょうね」

鳳翔に念を押される。雷だって昨日は戦場で動き回っていたのだ。身体を休める必要があるのは私達と一緒。

「若葉さんと三日月さんは、飛鳥先生も心配していました。他より格段に消耗の度合いが違うと」

「ああ、リミッターを外したからな」
「休んだら元に戻りました」

少し怪訝そうな表情をする鳳翔。身体への負担を考えるのなら、リミッター解除は禁じ手だ。一度使っただけであれほどまでに消耗。下手したら私は身体が、三日月は頭が壊れていた可能性だってある。そうでもしないと勝てなかった相手とはいえ、これ以降、何度もやるようなら身体が保たないだろう。

鳳翔がいい顔をしないのも納得。身を削って勝つのではなく、しっかりと十分に力を蓄えて勝ちに行けるように、訓練を積みませようと改めて決意したようだった。

「それは本当に奥の手にしてくださいね。貴女達が壊れかねませんか」

「そうしたいのはやまやまなんだが……」
「あれだけやってギリギリだったので……」

リコがいなければ巻雲にやられていた可能性だってある。完成品2人に対してだと、9人がかりでアレだ。朝霜に至っては潜水艦3人の助けが無かったらジリ貧という始末。

何も1対1で勝たなくてはいけないわけでは無いのだが、アレでは命がいくつあっても足りないと思ってしまう。楽に勝とうなんて思っていない。だが、もう少し余裕は欲しい。

「……ふむ、なら、リミッター解除を定期的に行ない、身体を慣らしていきましようか」

「身体を慣らす……ですか？」

「はい。急激に出力を上げたから身体にガタが来るかもしれません。それなら、ゆつくりとでも身体を慣らした方がいいでしょう。時間はあまり無いかもしれませんが」

まだ未熟な身体で膨大な出力を突発的に出したことで影響が出たというのなら、そうならないように鍛えようというのが鳳翔の考え方。なるべくなら使わない方がいい力も、うまく付き合っていけば有用な力だ。

それに、私と三日月に備わった力は比較的私達に友好的である。まるで意思を持っているかのように協力してくれる時もあった。その協力を私達の身体がついていけないというのなら、ついていけるようにこちらが努力するべき。

「若葉はやるぞ。この腕と、姫と楽しく付き合っていきたいからな。三日月はどうする」

「私は……私もやりたいです。この力を使いこなせれば、みんなを……若葉さんを守るんですから」

2人の意思は一致した。三日月には私の腕を守りたいという少しおかしな感情もあるようだが、やることは変わらない。

「わかりました。でも、今日は休日です。せつかく身体を休める時間なんですから、無理をしないこと。のんびんだらりと過ごしてくださいね」

「了解。訓練も何もしないでおく」

明日からは私の身体の姫との付き合い方を学ぶための訓練となった。他と違う独自路線に進みそうだが、今の状況をひっくり返すことが出来るのは間違いない。もう少し長く続けば、もう少し負担が減れば、私だけでなく仲間達みんなが守れるはずだ。

三日月もみんなを守るために強くなると言った。私だってそうだならば努力は怠らない。

「こいつと話でも出来ればいいんだが」

左腕の痣を見る。私の思いに呼応してくれることもあるのだから、意思の疎通も出来るような気はする。とはいえ相手はヒトのカタチを持つているわけでもない、ただの腕だ。姉が言うには、私に友好的

なものけらしいが、どうにかならないものか。

「お話し出来たら素敵よね。若葉のことを守ってくれてるんだもの、私もお礼が言いたいわ」

「そうですね。私の腕……ではなく姫の腕とお話し出来たら、素敵ですわね」

言いながら私の左腕を撫で回す三日月。みんなとは感情が違うみたいである。思考の侵食の影響が顕著。

「若葉もまずは礼が言いたい。いつも力を貸してくれるからな。若葉だけの力では、今まで生きてこれていないと思う」

「その感謝の気持ちは忘れないようにした方がいいかもしれませんね。本当に意思を持っているのなら、愛想を尽かされたら終わりですから」

「いつも感謝している」

左腕、というか痣は風呂でも念入りに洗っているまでである。汚いものという意味ではなく、いつも清潔にしておきたいという気持ちの表れ。

「なんだか私も嬉しいです。違うとわかっていても、私が感謝されているみたいで」

「三日月にも感謝している。ずっとコンビでいてくれ」

「はい、勿論」

いつにも増して私の左腕に抱きついてくる。表情もほんのり柔らかい。今までは稀だった笑顔も、今の状態になってから私の前では多くなつた気がする。いい方向なのかはわからないが、悪くはないと思いたい。

まだまだ課題は山積みだが、方針が決まっているだけいいだろう。ゆっくりと行くことは難しいが、着実に前に進んでいきたい。

正気の沙汰

夕方、徹夜明けで眠っていた飛鳥医師が起床。何かするにしても明日からということにはなるだろうが、私達が休んでいる間に話し合ったことを夕食前に展開してくれる。基本的には元々伝えられていた通りなのだが、改めて。

「話の前に、若葉と三日月の体調を知っておきたい」

「若葉も三日月も不調は無い」

「若葉さんは右眼がありますよね。でも、明日には見えるようになる見込みです」

「ふむ、了解した。明日の朝にまた診ることにする」

医者として、まず体調を気にかけてくれるのは流石だと思う。

私、若葉は目を覚ました後はずっと三日月と共にゆっくりしていた。何もしないというのは少し違うが、部屋の掃除程度。ここ最近は雷も訓練に勤しんでいるため、自分の部屋は自分でやるというのが暗黙の了解。そうしても体調が悪くなるようなことは無く、何かしらの違和感も感じなかったのも、今は問題なしとしておく。

それでも、戦闘中にリミッターを外したのは事実であるため、今後もし定期検診は続けていくつもりだ。安定していることを知っておくことが一番いい。

「なら進めていこう。事件の解決は基本的に先生と新さんに任せている。僕達の目下の問題は、昏睡状態で保護している巻雲と朝霜のことだ」

姉妹の話が出て、夕雲と風雲が強張るのがわかった。緊張の匂い。「2人はここでいつもの処置をする。それで洗脳が解けるかはわからないが、呂500に有効だったところから、しない理由が無いと判断した。だが、完成品と名乗ったこともあるので、出来ることなら体内の調査もしたい」

呂500の時も短時間ではあるが体内の調査をしている。その時は本当にわけのわからないものだったためにそれだけで終わらせており、結果的に呂500の洗脳は解けているが、巻雲と朝霜の場合は

そうは行かないかもしれない。

同じ処置をするにしても、処置前に徹底的に調査する必要もあるだろう。自爆装置が仕込まれていないことはわかっているが、違う形でこちらに害を成してくる可能性だって充分にあり得る。そもそも処置をしたところで洗脳が解けるかもわからない。何故なら『完成品』なのだから。

「明日の朝から治療と調査を並行して行なうつもりだ。これに関しては、大本営直属の新さんにも許可を貰った。事件解決に繋がるかはさておき、敵の技術を把握出来ればそれに越したことはないからだ」

その前に決着が付けば何も心配要らないのだが、2人の身体を元に戻せるかどうかの確認は必要。さらにいえば、何かしらの発見により、敵の弱点解明に繋がる可能性だってある。

この処置は思った以上に重要な位置にある。2人の命にも関わる可能性があり、今後の調査にも繋がる可能性がある。はたまた、何の成果にも繋がらない可能性すらある。

「明日の朝から処置をしていく。以前のように手伝ってもらいたい。頼めるだろうか」

「任せてくれ。胸骨の洗浄はアタシと若葉が一番慣れてるしな」

「わらわ達で状態を確認しよう。三日月、シロ、お主らも良いか」

「はい、私の眼は重要だと思えますので」

「……大丈夫」

どうなるかは一旦置いておき、処置に対してはみんな意欲的だ。今までやってきたことだし、拒否する理由が無い。

「夕雲の妹達を、よろしくお願いします」

「任せてくれ。まずは洗脳を解くところからだ」

本来の私達の仕事は、ここに運び込まれたものを治療することだ。少し久しぶりとなる本業に腕が鳴った。

翌日、幸い私の右眼は見えるようになっており、処置に支障は出ないようになっていた。いい加減、眼に何かが起こるのはやめていただきたいものだが、近接戦闘をしている時点でそこは諦めなくてはいい

ないかもしれない。

処置室に集まり、早速治療の準備を始める。大分人数も増えてきたため、今回は役割分担をしっかりと分けた。私がやるのは匂いによる患部の調査や、治療具合の判定、そして摩耶と共に胸骨の洗浄。

まずは調査出来る者、嗅覚の私、聴覚の三日月、感覚のシロ、霊感の姉、そして飛鳥医師の5人が処置室に入る。

局所的な判定が出来る私と三日月から調査スタート。先にやるのは巻雲から。全裸に剥かれて寝かされている身体を隈なく嗅いでいき、根源を探す。まずはすぐにわかるであろう胸の周囲から。

「相変わらず胸だな。呂500と同じ手術痕もある」
「ですね。私もそこから強い何かを感じます」

嗅げばすぐにわかるレベル。麻薬を全身に回すために胸骨が弄られているのはいつもと一緒。完成品も失敗作も何ら変わらない。

「改めて見ても、ろーより穢れておるのう。もののけも禍々しいわ」
「混ざり方がおかしい……ろーより溶け合ってる……？」

感覚と霊感の言葉はすぐに判断は出来ないが、シロの言うことは姉の言うことより少しわかりやすい。

呂500はめちやくちや。混ざり方にムラがあるらしいが、この巻雲は溶け合っていると言う。混ざっていることはわかるが、しっかりと一体化していると言っても過言ではないようだ。どうやったらそんなことに。

「……若葉、ここに何か無いか」

飛鳥医師が指さしたのは腰、腸骨。いつもの調整では、骨髄移植のために使うが、今回は違った。胸骨だけじゃない場所も弄られていると考えているため、言われるがままに匂いを嗅いだ。

瞬間、吐き気がするような匂いが突き抜けた。そういう意味の嫌な匂いではなく、死が濃縮したような匂い。キナ臭いを通り越した、邪悪な思想が入り混じる匂いである。

「っ……酷い匂いがする……胸骨と同等、いや、それ以上だ」

「やはりか……そこしか該当しないと思った。手術痕は……あるな。呂500には無かった手術痕だ」

胸と同じように、腰の両サイド辺りに痕がある。何かをされた痕。

「私には何も見えませんが……」

「だが、匂いはするんだ。死の匂いだ」

三日月の視覚では感知できないが、私の嗅覚では感知できる異常。二度と嗅ぎたくないような匂い。この中の誰にも感じ取ることが出来ない、最悪な匂い。

私にしかわからないため言葉で伝えるしかないのだが、嗅いだことのない匂いのため、表現が難しい。だから、率直な感想を伝えた。

それを聞いた飛鳥医師が、少し考えた後に姉に聞く。

「……初春、巻雲に憑くもののけというのはどういうものなんだ？」

飛鳥医師には何か予想がついているようだが、確定させるために情報を集めていく。見た目にわからないのなら、感覚と靈感にまず頼ってみる。

「うむ……ろーの時にも言ったやも知れぬが、混沌としておるのだ。いろいろと混ざり合っておる」

「呂500のものけと明確に違いはないか」

「違いとな。そうさの……黒ずみ方が違うと言うかのう。ろーは混ぜてあると言っても真つ黒で歪なんじゃが、此奴のはまだらなんじゃ。絵具を混ぜたようにの。溶け合っているというのも言い得て妙じゃな」

姉の説明を聞いて、シロもそれだと言わんばかりに首を縦に振る。

シロが巻雲から感じている感覚もそれらしい。深海の体液やら何やらだけなら真つ黒だが、何か別のものが混じったことでまだらに感じると。

それを聞いて確信したか、飛鳥医師が心底忌々しげに呟いた。

「艦娘の死体が使われている」

処置室が静まり返った。

「胸骨で深海の体液、腸骨で艦娘の何かを混ぜ合わせて安定させてるんだ。憶測ではあるが、そうとしか考えられない」

「巻雲を完成させるために何人犠牲になったんじゃ……」

「1人2人じゃ利かないだろうな。当然、深海棲艦も大量に使われて

いるはずだ。初春の言う、混沌としたもののけというのは、大量に混ざり合った命ということじゃないかと思う」

呂500は深海棲艦の何かをぐちゃぐちゃに混ぜ合わされた挙句、負の感情を爆発させたことで暴走し、今の状態にされた。

だが、卷雲は深海棲艦の何かと艦娘の何かの混合。深海棲艦側だけでは暴走するほどの力になるが、艦娘側も混ぜ合わせることで、暴走せずに完成したと考えられる。どういう原理かわからないが、その2つに親和性があることは、私達が証明している。

「そうか……この匂いは死んだ艦娘の匂いか」

「私が見えないのは、深海棲艦の何かじゃ無いから……ですね」

辻褄があっていく。死んだ艦娘というのは殆ど見たことが無い。リミッターを外され自沈した艦娘すら私は目にすることが無いのだ。そもそもその匂いを嗅いだことなどない。だからすぐにはわからなかった。

最悪な気分だった。知りたくもない匂いだった。考えてみれば、この死の匂いには、死んでいるにもかかわらず、感情を感じるようだった。怒り、憎しみ、悲しみ、とにかく負の感情がたつぷり。

「まさか、負の感情をコレに出させているのか」

爆発的な負の感情はそう簡単には生まれない。私も三日月も、仲間が何人も倒れ、死の淵に立たされたことで爆発した。それを腸骨の何かで疑似的に起こしている。飛鳥医師はそう考えた。

それが正解だとしたら、艦娘すらも装置の一部。命を何だと思っっているのだ。こんなもの、倫理的に出来る事ではない。

「……治療する。幸いなことに腸骨はある。加工して卷雲と朝霜に使うおう」

「胸骨はいつものように洗浄でいいのだろうか」

「ああ、それでいい。だが移植する骨髄が必要だな……夕雲と風雲から提供してもらおう。姉妹なら適合するはずだ」

苦虫を噛み潰したような表情で、治療の説明をしてくれるが、正直気が気でなかった。あまりにも非道過ぎる改造。思い付いても実行はしないし、実行するための技術だって考えられない。

大淀の仲間にも、とんでもない技術力の何者かがいるのだろうか。それとも、この辺りも全て大淀がやっているのだろうか。どちらにしろ、こんなことをやれるなんて正気の沙汰ではない。

「準備に取り掛かる。だが、処置自体は明日にしようと思う。ここからはやるが多過ぎるくらいだ」

今までとは違う流れの処置になるらしく、簡単にはいかないようだ。特に、今回は本人の身体を弄るだけでは終わらず、他人の骨髄を移植するという手段を取らざるを得なくなった。

艦娘故に、人間よりは簡単に終わるようだが、それでも今日を準備に使い、明日で処置を完了するような感じになるのだとか。勿論透析も行わなくてはいけないため、とにかく時間がかかる。

「必ず成功させる。やり方も思い付いている。大丈夫だ、巻雲も朝霜も救うことが出来る」

今は私達に出来ることは終わった。また明日、全員で力を合わせての処置をするため、力を蓄えておく。

夕雲と風雲から骨髄を提供してもらうため、今日も訓練はなんだかんだ中止。時間が足りないことはわかっているのだが、今回の処置が完了し、ある程度安定してからでなければ、その辺りも先に進めない。

足並みを揃えなくてはいけないわけではないのだが、万が一のことを考えると、処置に参加する私達も万全な状態で行く必要があるだろう。明日やるであろう処置は、今まででも類を見ない大手術だ。処置中に何か起こる可能性だって充分にあり得る。

2人の処置中に、あの場にいなかった他の者に巻雲と朝霜の容態について話をする。話が上手い姉にしてみらうと、見る見るうちにみんな顔色が悪くなっていった。誰だって気分が悪くなるような話だ。

「何よそれ……」

顔が真っ青な雷。たった1人を完成させるために、艦娘と深海棲艦が何人も犠牲になっていると知り、涙目になっていた。それを心配そうに見ている呂500だが、その身体も半分は同じ状態だ。他人事ではない。

「クソ淀は徹底的に潰すしかないわよ。救うとかどうとか言える相手じゃないわ」

「ああ、死んで後悔させないとダメだ。生きている価値がない」

曙とリコが同調。私も同じ意見だ。生かしておいてはいけな。生きていたら被害者が出続ける。この世界にただで害がある悪魔のような存在だ。

大淀だって元は艦娘。ドロップ艦とは聞いているが、何があったらそこまで残酷な行為が出来るようになったのだろうか。深海棲艦の匂いを漂わせていたのも気になるところだが。

「で、処置は明日だっけか」

「ああ。若葉と摩耶はいつも通り胸骨の洗浄だ」

「あいよ。手慣れていることの方がいいからな」

今は夕雲と風雲から移植するための骨髄を抜き取っている最中。明日のための準備は刻一刻と進められている。私達は今のうちに役割分担をしっかりと決めておいた。今までの経験から出来ることは自ずと決まってくるが。

艦娘に深海棲艦の体液やら麻薬やらを使つて洗脳しているだけでも悪魔の所業だと思っていたが、そんなことが軽く見えてしまうほどの非道な行ない。

ただでさえ人形の犠牲者が大量に出ているのに、それ以上の犠牲者が出ていることがわかり、私はまた怒りに拳を震わせた。

凝固された憎しみ

翌日からまず巻雲の治療が始まった。夕雲と風雲から貰った骨髄は、飛鳥医師の予想通り、姉妹である2人にはちやんと適合したおかげで、余計な手間もかからずに処置を開始できた。

私、若葉はいつも通り、摩耶と共に胸骨の洗浄。その間に飛鳥医師が今回一番の問題となっている腸骨の摘出をした。が、それを体内から取り出した時点で、処置室にいる全員が顔を顰めた。

「これは……酷いな」

吐き捨てるように飛鳥医師が呟いた。誰が見てもそういう感想にしかならなかった。

その骨は、どう見てもおかしい形状をしていた。腸骨は腸骨だが、所々が艤装のように変質している。改造により植え付けられた艦娘の死体が発した負の感情により、禍々しい形状に変質してしまっているようだった。所々黒ずみ、歪な形をしている。

見た目にはわからなかったが、体内が大きく侵食されているのがよくわかった。呂500よりも数倍は酷い。完成品と名乗っていたものの、これだけ見ると完全に壊れたものである。もはや艦娘とは言えないほどだ。

「胸骨、出来たぜ」

「助かる。すぐに接続しよう。腸骨も昨日のうちに準備しておいた」

胸骨はまだ普通の形状だった。腸骨にだけこれだけの影響が出ているということは、入れられた艦娘の死体、怨念が恐ろしいほどに力を持っているということだろう。

それが溜まりに溜まれば、中立区にすら深海棲艦を生み出すほどだ。積もり積もって無から有を生み出すのだから、その力は計り知れない。

「骨が綺麗になったところで身体が元に戻ることは無いだろうが、やらないよりはマシだ。後遺症が残っていなければいいが」

話しながらも恐ろしい速さで処置を進めていく。これは飛鳥医師にしか出来ない芸当。的確に、適切に、確実に、巻雲から異常が取り

除かれ、正常に戻っていく。用意された腸骨は深海棲艦、人型である空母ヲ級のを加工したものであるが、それでも骨だけはちゃんと艦娘に戻ろうとしている。

処置が進むにつれ、本人の匂いは大分治っていた。胸骨と腸骨が全ての元凶。これさえ無くなれば本人は比較的まともということだろうか。

「摩耶、腸骨を洗浄してもらえるか。外側だけ綺麗にしてくれればそれでいい」

「ああ、わかった。アタシもこれは開けたくねえよ」

中に仕込まれたものは後から見るという事で、今はへばりついている色々なものを洗い流しておく。最優先は巻雲を治療する事。今回に関しては速さも必要なので、高速修復材まで使っていく方針。

「……よし、処置はこれで終わった。初春、シロ、変化は」

「ふむ、少しは落ち着いたかの」

「溶け合ってるのは変わらないけど……まだマシかも……渦巻いてる感じは無くなったと思う……」

ひとまずはそれで完了として、そのまま透析に入る。その間に朝霜の処置も終わらせ、その後に透析。これにより、今日中に2人どもの処置は完了となる。

巻雲は先行して治療されたことで透析も先に終わるだろうが、目を覚まさせるのは朝霜と同じタイミングとされた。その前にやらなくてはならないことがある。

「朝霜の治療が終わり次第、この腸骨の調査に入る」

これが本題だ。摘出され、外側が洗浄された後でも、禍々しい匂いが湧き立っている。姉やシロも、それには近付こうともしなかった。

形状はグロテスクだが、三日月はそれに反応していないため、深海棲艦の何かは無い。あくまでもそれは艦娘の何か。負の感情を増幅しているのか、そもそも作り出しているのかは調査しないとわからない。

2人の治療は順調に終わり、医務室へ運ばれた。透析装置は1人分

しか無いため、先行していた巻雲が終わり次第、朝霜に施すこととなる。それもおおよそタイミングがあつたため、巻雲は透析完了。そして朝霜の透析開始。これが終われば本当に処置終了となる。

残されたのは2人から摘出された変質した腸骨。洗浄されているため、見た目だけは綺麗。しかし、相変わらず酷い匂いが湧き立っており、直視するのも躊躇われるもの。

手伝うのはここでも私達確認組。嗅覚ではもう痛いほどわかつている私と、視覚では何も変化が見えないことがわかる三日月は念のためである。重要なのは姉とシロ。

「では、開くぞ」

骨であるが故にメスは通らないため、私や摩耶が胸骨を分解するために使う小型のドリルで少しずつ削っていく。直線上に穴を開けたことで、腸骨が真っ二つに割れ、中から液が垂れてきた。これは普通なこと。

「……これか」

その液の中。普通なら出てこないものがコロリと転がって現れた。親指の爪サイズの、小さなサイコロのような生々しい赤が目につくキューブ。機械的に作られたことがわかるような正確な立方体が、左右の腸骨から1つずつ。

それが目の前に現れた瞬間、シロが私達の前に出た。殆ど見たことのない険しい表情だった。

「それはダメ。本当にダメ」

「シロ……?」

「ワカバとミカヅキは絶対に近付いちやダメ」

シロの言葉を聞き、姉が三日月を少し離してくれた。私も後ずさる。それでも、処置前に巻雲からした強烈な匂いがそれから出ていることがわかった。憎悪にまみれた負の匂い。直視するのも辛い。

「出来ることならこれを調査したいんだが」

「ここに置いておくのもダメ!　すぐ壊して!」

「シロの言う通りじゃ。それは良くない」

「ここまでハッキリと言うシロは今までに一度だけ。曙が殺された

時だけだ。それと同じくらいに、コレは良くないということだ。こういうものに対しての直感は、シロがこの施設でもトップだ。姉の靈感もダメだと感じているため、より真実味がある。

だが、破壊すると言つてもどうやってやるか。処置室で出来ることなど高が知れている。今腸骨を破壊したドリルで破壊しても、カケラは残るものだ。だからと言って海に沈めるわけにもいかない。

「少なくとも、若葉と三日月を近付けるわけにはいかないんだな？」

「ダメ。私達もダメ。エコに食べさせるのもダメ。艦娘も触らない方がいい。先生にやつてもらわないとダメ」

シロの切羽詰まった物言いを聞き、すぐにピンセットで摘み手近な袋に入れた。どう破壊したらいいかはわからないが、どう破壊するにも破片が飛び散るため、それを抑えるために。

そのキューブがどういう質で出来ているかはわからないが、摘んだ時点で飛鳥医師が嫌な顔をしたことで全てを察した。

「……火葬しよう。焼けばその機能は失われるはずだ」

「うむ、それが良い。供養してやらねば」

「それなら大丈夫……でも、絶対に近付けないで」

火葬が選択出来るということは、あれがそういうものであることがわかる。金属でもなく燃やせるもの。

あのキューブは、何人もの艦娘の死体が凝縮されたものだ。飛鳥医師が顔を顰めたのは、あんな形状でも摘んだ感触がソレだったからだろう。気付いた時点で強烈な吐き気に襲われた。思わず口を手で塞ぎ、なんとか飲み込む。

「うぶ……すみません……吐きます……」

三日月も同じだった。キューブの正体に気付いた時点ですぐに流しに走り、即座に吐いた。私も正直危なかったが、何とか我慢する。キューブを見てしまったことが大きい。あの色の理由もわかってしまった。

何を考えればそんな残酷なことが出来るか理解出来ない。どんな顔をしてアレを作っていたのだ。あの大淀のことだ。自分で作つていても、他人に作らせていても、さぞかし面白おかしく思っていたの

だろう。

痣が静かに疼いた。

朝霜の腸骨からもキューブを摘出し、同じ袋に入れて外に出た。2人分の処置をした後のため、外は薄暗くなっていた。

室内で焼くわけにもいかず、浜辺から少し離れた土地で燃やすこととした。全員がマスクを着け、その煙すら吸わないように配慮する。施設にいる者全てに通達したが、キューブの正体は私達だけの秘密とした。察するものもあるだろうが、今は話す必要はない。

そのため、供養するために外に出たのは、先程の処置に参加した者のみ。

「この辺りでいいか」

「そうじゃの。海には近くない方が良い」

燃やしたキューブの灰は、そのまま埋める方針になった。土地を侵食するということは無いだろう。焼けば機能が無くなるとシロは言うのだから、その辺りは大丈夫だと思う。

小さめに穴を掘り、キューブの入った袋を丁寧にそこに入れ、マッチの火を点けた。こんな形ではあるものの、供養するための火葬。これで溜まっている負の感情が浄化されることを祈る。

「本来なら手で触れたかったが……出来ないな」

ここで現れ、撃破された深海棲艦を送るように、手で触れて成仏を願ったかったが、それが危険だとシロに何度も念を押された。とにかく触れてはいけない。100%引つ張られると、険しい顔で訴えてきた。

あのキューブが何を引き起こしているかは大方わかっている。体内に入っている間、何かをトリガーにして負の感情を増幅する、もしくは定期的に生み出す。それを喰らった場合、私や三日月は今以上に激しく侵食されることになる。それだけは絶対に避けたい。

やがて、煙が上がり始めた。まるで、そこにいる者が浮かばれていくようだった。

「もう安らかに眠ってくれ」

「はい……もう解放されたんですから……苦しまずに」

みんなが眼を瞑り、その煙の前に立ち尽くす。ただただ、安らかに眠れるように願った。燃え尽き、煙が立たなくなるまで、ただひたすらに。

負の感情を生み出す装置となったのなら、あれは洗脳もされずにただ見殺しにされたような、より憎しみを感じるように残酷に殺された可能性が高い者の集合体。さぞかし無念だっただろう。私達はその無念を晴らしてあげたい。その願いも込めて、じつと祈った。

「燃え尽きた。では埋めるぞ」

煙も立たなくなったところで、飛鳥医師が灰となったそれを埋めた。そのままでは何処に埋めたかわからなくなると思い、石を積み上げ墓標とする。人形とは全く違う、犠牲者が何者かもわからないため、これでひとまず。

「……もう大丈夫……だと思っ。嫌な感じはしなくなった」

「そうか、よかった」

「アレはダメ……人間以外には誰にでも害がある……真っ黒な……感情の塊」

みんなが着けていたマスクを外した。まだ少し物を燃やした匂いは漂っているが、それだけだから大丈夫とシロも保証してくれた。

「うむ、わらわも大丈夫だと思う。怨念と言うかの、それが薄れた。もののけでは無いが、嫌なものは見えておったんじゃ」

「……あれはそういうものだろうな。あんなものを埋め込まれて『完成品』だなんて……ふざけているにも程がある」

ギリツと歯軋りが聞こえた。いくら一度道を間違えかけた飛鳥医師でも、ここまでの実験は当然したことはない。こんな残酷な実験を簡単に出来ることに、大きく憤りを感じていた。

「ワカバ、ミカツキ、あそこにはあまり近付かない方がいい」

「ああ、わかった。何があるかわからないからな」

「わかりました。これ以上のことにはならないように」

もう一度シロに念を押された。それほどまでにあのキューブに込められた怨念は強く、存在そのものが悪影響をもたらすというのだか

ら、火葬後の土ですら何かあるかもしれない。近付くのがダメなら、触れるのなんて以ての外。

「今は戻ろう。またアレが手に入ってしまった場合、ここで火葬していくことにする」

「うむ、そうしてほしい」

今後、完成品との戦いで救出出来たとして、あのキューブはまた出てくるだろう。そうした場合、これからもそれはこの地に埋めていくことになった。

巻雲と朝霜が目を覚ますのはおそらく明日。結局、処置を全て終えるまでに3日かかることになってしまった。初めての完成品の治療なので、時間がかかるのは仕方のないこと。試行錯誤の末にここまで来れたのだから良しとしなくてはいけない。

さらに、目を覚ましたとしても正気かどうかもわからない。呂500は記憶を失っていたが、どんな悪影響があるか。そもそも身体の中身は深海棲艦になってしまっているわけだから、まともなわけがない。

完成の末路

巻雲と朝霜の治療は完了し、あとは目を覚ますのを待つのみとなった。うまくタイミングを合わせ、翌朝に2人とも起きるように調整している。

同時に起こすことで、2人とも錯乱して暴れ出すことも懸念されたが、いくら体内が深海棲艦へと変質してしまっているとしても、艦装を持っていないのだから押さえ付けることは出来るだろう。いざという時のために、艦装が小さいシロクロと呂500も付近で待機することにしている。

「正直、不安です。巻雲さんは少し繊細なところがありますので……今までの記憶に押し潰されてしまうかもしれません」

「だね。朝霜はさておき、巻雲姉は厳しいかも」

姉妹が揃って心配するのは、巻雲の今後。あの戦闘の時、朝霜は元々とはそこまで変化が無かったらしいが、巻雲は豹変と言っても過言では無いほどの変化だったそうだ。荒っぽい朝霜なら乗り越えられるが、優しい巻雲だと厳しいと感じているようだ。

実際、根が優しければ優しいほど、あの記憶はいろいろな部分を蝕むだろう。どうせなら呂500のように記憶を失っていた方が、今後の生活が辛く感じることはないのかもしれない。

「姉が支えてあげてほしい。僕は治すまでしか出来ないからな」

「はい、勿論。夕雲が支えてみせます」

こういうことは姉妹に任せるのが一番だろう。カウンセリングが出来る雷や姉でもいいと思うが、適しているのは実の姉妹。2人もここはもうそれなりに長い。カウンセリングをするくらい心の余裕は出来ているはずだ。

最後の仕上げは明日の朝。今まで以上に時間がかかった2人の治療も、ようやく終わることになる。

一晩明け、朝の医務室。私、若葉と三日月も現場へ。いつもの確認組は治療後は必ず相席をすることになっている。それだけ私達の感

覚は飛鳥医師に信用されているということだ。

医務室自体が広くなつたからいいものの、今は随分と多くなつたものである。2人の患者の周りに、医師が1人と艦娘8人。さらに何かあつた時に癒しが必要かもととして浮き輪3体も待機。それなりの場所が必要なため、修復の際に妖精が大きく造り直してくれたのが功を奏している。

「視覚の点から、問題無いと判断します。胸骨の洗浄で得体の知れない何かは取り払われました。ろーさんと同じです」

「嗅覚の点から、あの酷い匂いは失われたと判断する。全体的に深海棲艦の匂いはするが、呂500と同程度にまでは落ち込んでいる」

昨日までとは雲泥の差であつた。透析の甲斐があり、匂いは大分薄れていた。胸骨や腸骨から漂う強烈な匂いはもう感じず、ただ深海の匂いだけ。呂500と同じだ。

「ふうむ、ものけは同じじゃが、おとなしいのう」

「うん……溶け合ってるのはあまり変わってないけど……荒っぽくない……かな」

姉とシロの反応も比較的良好。呂500と同じように、今は大人しいようである。元々入っていたキューブを摘出し、供養として火葬したことで大人しくなつたのかも知れない。昨日の行ないは間違つていなかったと考えよう。

まずは巻雲から起こすこととなつた。年功序列とかそういうのではなく、先に難しそうな方を終わらせておこうと考えたからである。

呂500の時とは少し変え、拘束はしていない状態で夕雲が目覚めさせる。

「巻雲さん、朝ですよ。起きてください」

風雲の時と同じように、優しく肩を叩く。決して焦らず、それでも少しだけ警戒して。

風雲の時と大きく違うのは、見た目は巻雲でも中身が大きく違う可能性があるということ。匂いからして薬の効果は無くなっているように思えるが、そんなこと関係なしに洗脳が行き届いている可能性も無いはない。

「巻雲さん……」

「んん、ふああ……よく寝ましたあ……」

呑気な声。まるで今までのことを全て忘れてしまったかのように、欠伸をしながら目を覚ます。泥沼のような瞳では無く、澄んだ眼をしていた。

夕雲の方を見ると、ニヘラと笑っておもむろに近くに手を伸ばす。戦闘中もかけていた眼鏡を探しているのだろう。夕雲がそれを手渡した。

「巻雲さん……何も……覚えていないんですか？」

「何のことですかあ？ 巻雲はあ……巻雲は……あれ……」

寝ぼけていた頭がハッキリとしてきたか、だんだんと記憶が鮮明になってきたようだった。表情が険しくなっていく、焦点が定まらなくなる。

当初の風雲のように、起きた直後は今までのことを残酷な夢物語か何かと勘違いしていたようではあったが、夕雲と風雲の表情や、普通と違う姿の私と三日月が視界に入ったことで、それが現実であると察していく。

「巻雲は……え、あんな、あんなこと……」

「巻雲さん、落ち着いて」

「ゆ、夕雲姉様、巻雲は、巻雲は……ひっ!?!」

突然自分の手を見て眼を見開く。当然、巻雲の身体は綺麗にしてある。風呂に入れることは出来ないが、全身を拭くくらいはしておいた。見た目だけなら何の変化もない綺麗な艦娘である。

それが、自分の身体を見て錯乱し始めた。呂500と同じなら、麻薬の成分も取り込んでしまっているため、禁断症状もないはず。幻覚と幻聴とは無縁のはずだ。

「巻雲さん!?!」

「ひっ、手が、手が血塗れ、身体があ！ 血塗れですう!」

私達にはそのようには見えない。クスリとは関係なく幻覚を見ていることになる。禁断症状とは違い、周期的に見るのでは無く、常にそう見えてしまっている。これは侵食により脳に障害が出来ている

か精神的なものだ。

今までやらされてきたことが可視化されてしまっているのだろう。何人もの命の上に立っていた完成品であった事実が、血塗れの身体という明確な罪の形として見えてしまっている。

やはり、体内の深海化の影響で心が壊れていた。胸骨に加えて腸骨で作られた血液までもが脳にまで回っているのだから、影響がないわけがない。呂500は記憶と言語障害、巻雲は治らない幻覚。

「巻雲さん、大丈夫、大丈夫です。貴女の身体は綺麗なものです」

「触らないでえ！ 姉様に、血がついちやう！ だめ、だめ！」

ジタバタと暴れられるが、夕雲はそんなこと気にせず巻雲を抱きしめていた。落ち着けるように、背中を撫でながら耳元で慰めの言葉をかけ続ける。それで見えなくなれば御の字だが、禁断症状とは段違いの壊れ方。常に見え続けるという脳障害の一種だ。

呂500の時に、飛鳥医師は深海棲艦の細胞が癌のように転移していると言っていた。呂500は失敗作故に身体がめちやくちやにされた結果、脳が歪に侵食されてしまったのだと思っていたが、巻雲の脳にも同じことが起きているのかも知れない。最初からそうだったが、キューブのおかげで制御出来ただけだったのかも。

「姉様、ダメですう、巻雲は汚いのにい……」

「巻雲さんは汚くなんてありません。落ち着いて、息をしましょう」

雷とも姉とも違うカウンセリング。子供をあやすように撫でながら、落ち着かせるように囁く。実の姉妹だからこそ有効な、親身になつた落ち着かせ方。

一瞬でも暴れたため、潜水艦3人が止めようか迷ったようだが、夕雲のおかげで暴れることは無くなっている。だが、まだ息は荒く、目の焦点はブレブレのため、浮き輪3体が夕雲の背中の上に鎮座。いつでも癒せるように待機。

「ほら、夕雲には何もついていないでしょう。巻雲さんは汚くなんてありません。綺麗な綺麗な、夕雲の妹です」

ずっと抱きしめながら落ち着くのを待つが、巻雲の幻覚は一過性のものではない。何をやっても常に見え続けている。

ならば、素肌が隠れば見えなくなるかもしれない。今は前開きの検査着なので、どうしても肌がそれなりに多く見えてしまう。三日月のようにどこもかしこも隠すくらい、いや、それ以上でないダメかも。

「先生、卷雲さんは夕雲が慰めておきますので、朝霜さんをお願いします」

「あ、ああ、よろしく頼む。こちらは風雲、君に」
「ええ」

卷雲はそう簡単に落ち着くとは思えなかった。そのため、そこは夕雲に任せ、先に進めることとした。

今度は風雲が朝霜の隣に立ち、肩を揺する。少し強めではあるが、許容範囲内。

「朝霜、起きて」

「んあ？ ああ……誰だよ……もう少し寝かせてくれよなあ……」

こちらにも呑気なものである。同じように、今までのことを絵空事か何かと思っているのだろう。そのまま開き直ればいいが、そうはいかない。何かしら侵食の影響があるはずだ。

開いた目は虚ではなく、卷雲と同じように澄んだ眼。洗脳はしっかり解けている。

「ん、んん？ おーう風雲姉、なんか久しぶりだねえ。元気してた？」

「呑気なものね……何も覚えてないの？」

「覚えてって……あ、お前、黒い痣の若葉……それに光る瞳の三日月……」

卷雲と同様、私達を見たことで反応する。特異な存在が現実にいるというだけで、今まで見てきたものが夢ではないということを実に表していた。

「じゃ、じゃあ、アレは、夢じゃ……ねえってことかよ……」
「……ええ。助かってよかったわ」

「へ、へへ、嘘だろ、じゃああたいは、艦娘なのに艦娘殺して喜んでるようなクズってことかよ……」

あまりにも現実味が無すぎずして、逆に笑えてきているようだった。

今までやらされたことは、卷雲と同様に覚えているようだ。だが、そのせいで壊れそうなほどに心にダメージを受けている。

朝霜も艦娘、やんちゃではあるが根は正しい心を持った者。間違ったことをやらされていた記憶が、思考を蝕む。深海の侵食が何処に繋がっているかわからないが、少なくとも朝霜は自分で自分を壊しかねない状態。

「卷雲姉……卷雲姉はどうなったんだ」

風雲が顎で卷雲の方を指す。幻覚による血塗れの身体を忌避し、夕雲の胸の中でワンワン泣いていた。どれだけ泣いても、何をやっても、身体中の血は取れない。夕雲が撫でてやっても、消えることは一生無い。

「んだよコレ……何なんだよ！」

「朝霜、落ち着いて」

「落ち着いてられっかよ！ あたいは卷雲姉と一緒にクズみたいなことやってきたんだぞ！ クソがあ！」

憤りをぶつけるように、ベッドの柵を殴りつけた。

瞬間、柵がバキバキに折れ曲がってしまった。

「……は？」

「待て、朝霜。試しにでいい、その柵のパイプを全力で握ってみてくれ。ゆっくりでいい。痛かったらやめること」

今を見た飛鳥医師がすかさず割り込む。抑えようと動き出した風雲も、その光景を見て動きを止め、言葉を失ってしまった。

飛鳥医師が何者かはわかっていないようだったが、言われるがままに折れ曲がった柵のパイプを握った。まるで粘土を握るかのように、パイプが握り潰されてしまった。

「な、何だよ、これ……」

「呂500は記憶障害と言語障害……卷雲は幻視……朝霜は力加減の欠如だ。本来出しちゃいけないほどに力が出てしまっている。リミッターが外れてしまっているんだ」

朝霜の深海化の影響は、身体の耐久力を超えた力が出てしまうこと。今はまだ耐えられているが、やりすぎると朝霜の身体が確実に壊

れてしまう。現に、柵を破壊したことで腕から血が流れていた。柵につけられた傷じゃない。内側から壊れたような傷。

戦闘中には艤装をつけているため気にならなかったが、あんな出力は到底おかしな話だった。艤装無しの出力が壊れていないと出ないような力だ。

「朝霜、とにかく全力は出すんじゃない。君の身体が壊れてしまう」

「は、はは、あたいはもうバケモノってことかよ。ふざけんな……ふざけんな！」

またもや力加減無しの手。我を失って暴れそうになったため、控えていた呂500がその拳を受け止める。艤装を装備しているおかげで何とかなっているが、あんな拳を生身で受けたらひとたまりもない。

むしろ朝霜の場合は、あの深海の艤装で身体への負担を減らしていたのかもしれない。そうでなければ、戦闘中に壊れていてもおかしくないからだ。艤装を失ったことで拘束が外れてしまっているようなもの。

「離せ！ 離せよ！ こんなバケモノ生かしておくなよ！」

「バケモノなんかじゃない！ 朝霜は朝霜でしょ！」

今近付くのは危ないのは承知で、風雲も朝霜に抱きついた。夕雲のようにあやすことは出来ないが、温もりを与えることは出来る。

少しして、暴れる力が無くなってきたのか、呂500が朝霜から離れた。朝霜は風雲に対して何をすることもなく、手をダランと垂らし、ただただ風雲の温もりを感じているだけだった。

「何なんだよコレ……あたいが何したって言うんだよ……」

「私達もそうだった。ここには同じ境遇の子が沢山いる。だから……今は落ち着いて」

ただ起こすだけで、ここまで壮絶なことになるとは思わなかった。巻雲は泣き崩れ、朝霜も茫然としている。『完成』の末路は、こうも残酷だった。

ここからはメンタルケアに注力していくことになる。巻雲は終わらない幻覚に耐えられるようにする必要があり、朝霜は常に手加減

をしながらの生活を強いられた。

これからこんなことになる者がどんどん増えていく。ケアしきれ
るかもわからない。だからこそ、早く終わらせなくては。

より強い力

卷雲と朝霜が目を覚ましたものの、それは散々なものだった。卷雲は障害により自分が血塗れに見えるという幻覚を一生見ることになり、朝霜は脳のリミッターが外れてしまったために常時艦装装備というほどのパワーが出てしまっている。

どちらも行動に大分制限が付けられてしまい、特に朝霜は、あまり動き過ぎると自分すら傷付けてしまうという厄介な障害。身体が保たないというのがあまりにも大きく、普段の生活にも支障が出てしまうレベルである。

その2人はというと、今は医務室で大人しくしていた。卷雲は血塗れだという自分の手を見て泣きそうになっており、それを夕雲が慰める。朝霜は下手に動くと物と身体を壊しかねないのでそこから動かずジツとしている。せめてもの癒しと、浮き輪達が慰めるように周囲で戯れていた。特に卷雲は精神的にも大分やられているため、3体全員が抱きつき、癒しを提供している。

処置を終えたのは昨日であり、その時の手術痕はまだ完治していないため、動けばそれ相応の痛みがある。とはいえ、中身が深海棲艦であるからか、呂500の時と同じように手術痕は普通よりも早く治っているようで、明日明後日には痛みも無くなるようだ。既に痕から血が滲むようなこともない。

「事情聴取は後日にする。今そんなことをしたら追い詰めるようなものだろう」

「そうしていただけると嬉しいです。お気遣い感謝します」

2人とも夕雲型ということで、2人の介護は夕雲と風雲を筆頭に行なわれることになる。今までやってきたことのないこともやることになるため、雷もいろいろと教えることになるようだ。

「部屋も用意しておかなくてはいけないな。まだ空き部屋があるから、痛みが無くなったらそこを使ってほしい。部屋割りを変えることも好きにしてくれて構わない」

「ありがとうございます。夕雲は卷雲さんと相部屋にさせてもらいま

すね」

「朝霜は私とで。あと……ちよつとお願いが」

少し申し訳なきように風雲が飛鳥医師に頼み事。朝霜の今の身体では、ちよつとしたことで本人と部屋を破壊してしまいかねない。うまく制御出来るようになるまでは、生傷は絶えず、職人妖精の力が必要不可欠になるだろう。それをすぐにどうにか出来るように、1人でいいから妖精を常駐させてほしいとのこと。

こればかりは飛鳥医師が独断で許可が出せるものではなく、下呂大将に連絡を入れてから決めるということになった。以前と同じように、来栖鎮守府からの派遣になるだろう。

「君達も訓練があると思うから、厳しかったら言っしてほしい。出来る限りのものは用意する」

「ありがとうございます。その時はよろしくお願いします」

夕雲も風雲も、姉妹がこうなってしまったことにより、俄然やる気を出している。自分達のこともあるが、必ず報復するのだと己の口から出るほどに。

午前中は少し久しぶりとなる訓練。3日間、巻雲と朝霜の治療に専念していたことで、戦いからは少し離れていた。

「あちらは大丈夫なんですか?」

「ああ、姉妹のことは姉妹がやるのが一番早い」

鳳翔が聞いてきたのは勿論、医務室で待機している2人のこと。今は夕雲と風雲がある程度の説明をしつつ、飛鳥医師も交えて今後のことについて話し合っている。そこに私達はいなくても大丈夫だ。

私達は私達でやらなくてはいけないことがある。施設を守るためにも、さらなる力を付ける必要があるのだ。

これからはより激戦になっていくだろう。駆逐艦以上の艦種の完成品が来るだろうし、それ以上の何かが来る可能性だってある。それまでに、今以上の力を持っておきたい。

「では、今日の訓練を。足柄さんと羽黒さんには、曙さん、初春さん、霰さんの底上げをお願いします。雷さんはいつものようにリコさん

で」

訓練のメニューは基本的には変わらない。だが、私と三日月は別枠となった。理由はすぐにわかる。

「若葉さんと三日月さんには、リミッターの解除に慣れてもらいます。念のため非殺傷武器での訓練です。相手は私がやりましょう」

これは必ず覚えておかないといけないこと。奥の手として持っている武器を、より使いやすくするためには必要な、以前に鳳翔に勧められた訓練だ。今この時からそれを始めていく。

他の者達から離れ、鳳翔相手に2対1の場となる。以前は曙と組んでいたが、今回は三日月と。近接2人で攻めるのではなく、戦場で組むこととなるベストなコンビで。

鳳翔は久しぶりに薙刀装備。訓練を始めたばかりの頃は、ようやく袴に跡を付けるくらいまでしか出来なかった。今回の訓練でどこまで行けるか。

「先に聞いておきます。リミッターはどれくらい外せるんですか？」

「数分だけだ。それを使うと全部消耗してしまう」

「私もです。立てないくらいに消耗するので……」

前回、前々回とリミッターを外して戦ったが、勝っても負けても消耗が激しすぎるのが難点。自力で解除出来るのなら、自力でもう一度掛け直すことも出来ると思うが、その時の反動がどうなるかはわからない。

「では戦闘訓練の前に、一度リミッターを外してみましようか。そして、すぐにリミッターを掛け直してください」

「消耗してしまった場合は頼む」

「勿論」

先に私がリミッターを外してみる。以前と同じように左腕に触れ、姫に願うように意識を集中する。

ドクンと心臓が高鳴った。血液が高速で全身を駆け回り、力が溢れ出す。

「外れましたね。では、掛け直してください」

ここからは初挑戦。出来なかつたら何もせず体力を使い切って終

了である。解除する時と同じように左腕に触れ、深呼吸をしながら姫に礼を言うようにリミッターを掛け直すイメージをする。力を貸してもらっているのだから礼くらい必要だろう。

すると、心臓の鼓動がゆっくりになっていく。駆け回る血液が徐々に速度を落とす、リミッターを外す前の状態に戻っていった。戦闘中にこんな余裕があるかはわからないが出来るのと出来ないのでは雲泥の差だ。

「ふう……ふうう……」

「体調はどうですか？」

「問題ない……とは言えないな。やはり大分疲れている。身体が動かないわけではないが」

戦闘をしたわけでもないのに、全力疾走した後程度の疲れ。少しすれば息も整うだろう。

何もせず短時間でここまでの疲労。限界ギリギリまで戦闘し続けるなら、動けなくなるほど消耗するのも頷ける。慣れていけば効果時間は延長出来るようにには思えた。

「では次、私がやってみます」

私が疲労抜きをしている間に、三日月がリミッターを外してみる。私は左腕に触れるというルーティンが出来上がっているが、三日月は起点が目だからか、顔を掌で隠して目を瞑る。

次に目を開けた時、先程まで無かった輝きが漏れると同時に表情から感情が消えていた。

「解除完了しました。次は」

「掛け直してください」

「了解」

やはり言葉にも感情は無い。前回の戦いの時もそうだったが、三日月のリミッター解除は感情の喪失が回避出来ないようだ。機械的な思考で処理速度を上げているのだろうか。それとも、感情に使うだけの脳のエネルギーを処理のエネルギーに回しているのだろうか。

どちらにしろ、負担は私より大きそうである。身体が急激に疲れるより、脳を酷使する方がダメージが大きそうだ。鼻血を吹き出すよう

なことはしないが、熱っぽいような疲れた顔に。

「ふは……これすごく疲れるんです」

やはり反動で少し緩めの反応になる。酷使した後は休ませるために考えることを少なめに行っているようなイメージ。

「では、これを何度もやっていきましよう。繰り返し繰り返しやることで、効果時間は伸びていくと思います。出来ることなら、寝る前やお風呂に入る前にもやってみてください。艀装無しでも出来ますか？」

「やったことが無いからわからないな……一度やってみよう」

浜辺にまで移動し、艀装を下ろした後に同じようにリミッターを外してみる。

戦闘とは全く関係ない状態でも、問題なくリミッターは外せた。しかし、身体の節々が悲鳴を上げ始めたため、すぐに掛け直す。

「やれないことはないが、動いたら身体が壊れるかもしれない」

「朝霜さんと同じ状態になるわけですね」

言われてみれば確かに。私の場合は故意に、かつ脳の障害ではないリミッター解除ではあるものの、艀装で制御していない状態だと身体に害が出る力の増し方をしている。

まさか私のリミッター解除も艀装依存でないとは思わなかった。深海化の影響で、あくまでも自分の身体の限界を突破しているようだ。万が一艀装が壊れても、少しくらいは戦えるか。

「朝霜も艀装さえ装備していれば制御出来るということか」

「同じ原理なら可能でしょうね。小型の……潜水艦の子達のような主機があれば、身体が壊れる不安は無くなるかもしれません」

ひよんな事から朝霜のこれからに繋がるのが判明した。力加減の訓練は変わらず必要だとは思いますが、身体が壊れる心配が無くなれば、今よりは生活がしやすくなるはずだ。

「訓練後に摩耶さんに頼んでみましょう。可能か不可能かはさておき、やらない理由はありませんし」

「上手くいけば、朝霜は立ち直ることが出来そうだ」

まずは訓練を終わらせて、このことを朝霜に伝えよう。喜ぶかどうか

かは本人の心持ち次第だが、あつた方がマシなのは間違いない。

午前の訓練終了。何度も何度もリミッターを外したため、大きく消耗していた。初めて鳳翔に訓練してもらったときのようには脚が動かないのではと思うほどである。今回は三日月も大きく消耗し、2人して疲れ切った身体をなんとか動かして風呂へ向かい、薬湯に浸かった。

消耗した身体が満たされていく心地良さ。三日月に至っては、髪が濡れることも顧みず、頭まで突っ込んで薬湯を堪能している。湯が触れている場所が回復するのだから、脳を酷使している三日月にはこの方法も有用であろう。

「ふはっ、回復しました」

「おつかれ。お互いに」

「はい、お疲れ様でした」

相変わらず左腕に抱きついてくる。リミッター解除の訓練後だからか、より隠そうとせずに少しフワフワしたような雰囲気。脳を酷使したため、思考が単純化しているようだ。

「ふああ……落ち着きますねえ……」

頬擦りまで。脳の休息のために心を落ち着ける必要があるとはいえ、なかなかの変わりっぷり。同じように訓練をしてきて、一緒に薬湯に浸かっている仲間達も、この光景には苦笑しか無い。そこまで三日月の侵食が深いというのがわかる一幕である。

「三日月ってリミッター外すと暫くアホになるの?」

「曙、その言い方は……」

「反動で考え方が単純になるだけだ。アホじゃない」

曙の表現もわからなくはないが、本人の前でそういうことはあまり言わない方がいいと思うのだが。三日月は気にせず私の左腕で癒されているが。

「で、どうなのよ。そっちは」

「すぐには慣れることは出来ないな。だが、臙装が無くてもリミッターは外せるみたいなんだ。定期的に外して、効果時間を伸ばしてい

く」

「私もです。寝る前とか、お風呂に入る前とかにやってみたらと鳳翔さんにも勧められていますよ」

「艤装無しでのリミッター解除の話で、朝霜の身体のことに関がったことも話す。常時艤装装備というのはなかなか怖いところだが、身体が壊れるよりはマシだろう。朝霜の意思にもよるが、それで生きやすくなるのなら御の字。」

「若葉、三日月、本当に何も無いんじゃない？」

「ああ、今は疲れているだけだ」

「もののけがな、上機嫌なんじゃよ。三日月ではないが、お主に抱きついておる」

首に絡みつくように抱きついていているらしい。私には当然見えないので、そう言われると少し怖くなる。だが、力を貸してくれている主でもあるので、仲良くやっていけるのなら構わない。

三日月のものけも同じように上機嫌らしい。より深く結び付いているような感じだとか。リミッターを外すことに慣れていけばいくほど、もののけとの繋がりが深くなるのだろうか。

「お主に影響が無いならそれで良い」

「何かあったらまた教えてくれ」

「うむ。可愛い妹が酷い目に遭うのは、わらわとしても辛いのでな」

その妹というのには三日月も含まれているようである。

「アンタ達がリミッター外す前に終わらせるわよ。今日の訓練からもっとハードだったんだから」

「足柄殿が張り切っておつての。曙はボコボコにされておつた」

「あの人めちやくちやよ。鳳翔さんとは違う意味で猛者ね。暴走狼は容赦がなさ過ぎ」

あちらはあちらで楽しく訓練出来たようだ。私もまた足柄に手解きを受けたいものである。リミッターを外すことが負担で無くなつたら、またやらせてもらおう。

今はただ、より強い力を得て、その時に備える。巻雲と朝霜の介護も重要だが、これも重要なお役目だ。

卷雲と朝霜

私、若葉のリミッター解除が朝霜の障害に極めて近く、艀装があれば身体への悪影響が抑えられそうであることがわかったため、午後の訓練に入る前に摩耶に話しておく。

潜水艦のような小型の主機があれば、肉体に支障が出ないだろう。どうしても腕力なり何なりが強化されてしまうのは気を付けてもらうしかないが、身体が壊れる危険性が無くなるのはいい。

「小型の主機なあ？」

「ああ、出来ないだろうか」

いきなり言われてもと頭を悩ませる摩耶。その話を聞きつけたセスもそれに加わった。

現在は卷雲と朝霜の艀装をシロクロ呂500の潜水艦トリオが海中から回収しており、それをここにあるものと組み合わせて新たな艀装にしようとしているところだった。主機の構築に関してはこの2人がメイン。

「深海側だから艀装はある程度自由ではあるけどな」

「シロクロみたいなのでいいんじゃない？」

「それかろーのだな。潜水艦のは薄っぺらいから。それにしても、普段使いの艀装ってのは初めてだぞ」

普通の艦娘は、艀装を普段使いなんてしないだろう。私もそうだが、そもそも邪魔。座るにも椅子の背もたれにぶつかると、寝ることなんて到底出来ない。それに、艀装はパワーアシストをしてしまうため、嫌でも近くのものを破壊してしまう。

だが、それがあろうが無かろうが同じだけのパワーを發揮してしまうのなら話が変わる。それなら常設でも問題ない。

「潜水艦仕様なら風呂にもそのまま入れるし、いいかもしれないな。でも朝霜は駆逐艦だから、その辺りは」

「深海の主機なら別に水没しても問題無いよ」

「ああ、確かにそうだな。なら、あいつらが拾ってきてくれた朝霜の主機を上手いこと弄るか」

あちらでは改造計画が刻一刻と進んでいるようだ。摩耶もセスも楽しそうである。

午後の訓練も終わり、薬湯にも浸かり、夕食の時間まで自由時間となった。

今日一日、訓練にも出ないで姉妹に付きつきりだった夕雲と風雲の様子を見に医務室へ。訓練でさんざんリミッター解除をやり続けたため、反動で単純思考になっている三日月は、私にべつたりの状態である。

「調子はどうかだろうか」

「ご覧の通りです。巻雲さんはまだ少し厳しいですね」

巻雲は布団を頭から被って自分の姿が見えないようにしていた。一時の三日月を思い出す。布団を被って目を隠してしまえば、ひとまはらずは大丈夫らしい。自分から目を潰すとかしないように、常時夕雲が見張っているような状態である。

「朝霜、今は無理しちゃダメよ」

「んなこと言ってもよ、手持ち無沙汰なんだよ」

打って変わって、朝霜は既にリハビリを始めていた。変な力が入らないように、朝に破壊してしまった柵のパイプを握り潰さないように握っている。

自分をこんな身体にした大淀達に対して、深すぎるほどの恨みを発散したくて堪らないようだ。見ただけでわかるし、匂いでさらによくわかるイライラ。それ以外にもいくつか匂いを感じるが、あえて触れない。

「朝霜、今工廠で普段使い出来る艤装を作ってもらっている。装備していれば、全力を出しても身体が壊れることは無いと思う」

「お、そいつありがたいねえ。さつきも腕がヤバイことになったんだ。高速修復材が無かったらまた処置室だったな」

あつけらかんと言つてのけるが、自分の力が制御出来ないことで身体が壊れることを実証してしまっていることに外ならない。

今だけは特別に高速修復材の使用を許可してもらっているらしく、

すぐに壊れてしまう身体は即座に治すことが出来るとのこと。だからと言って使いたい放題というわけではないし、何より朝霜が痛い思いをしたくないだろうから、使用は最低限ではあるが。

「イライラすんのに身体が動かせないとか、余計イライラすんだよ」

「気持ちわかるが、大人しくしておいてくれ」

「あいよ。ああ、あと睡眠薬と拘束具頼むわ。寝てる時に暴れて死んでるとか洒落にならないから」

思った以上に明るい。今までやらされてきたことで心を痛めてきていた夕雲や風雲とはまた違ったタイプ。誰も殺したことのない。た姉ともまた違う。それでいて空元気な感じもしない。

朝霜は完全に開き直っている。今まで仲間を手にかけてきたことについても、キューブについても、リコを襲ったことについても、全て大淀のせいだと割り切っていた。

「……お前は強いんだな」

「ああ？ 何がだよ」

「こんなになんか立ち直ったのは今までいなかった」

私が尋ねると、そんなことかとへへツと笑う。救出後、こんなに早く笑顔を見せた者もいなかったはずだ。

「あたいが悔やんだところで、誰も帰ってこないじゃんか。だったら、さっさと淀さんぶつ潰して、みんなの仇取った方がいいだろうって思ってたな」

「まあ……確かに」

「あたいの手で殺しちまった奴もいるけど、それはあたいの身体を使って淀さんがやったことだろ。あたいは良くも悪くも兵器だ。だったら、それを使った奴が一番悪いんじゃないか？」

包丁で人を殺しても包丁のせいでは無いという理論。艦娘という存在が、生物と兵器の境界線があやふやなところを逆手に取った、物凄く割り切り方。

それがいいことなのか悪いことなのかはわからないが、それによりここまで立ち直れているのなら、悪くない選択なのかもしれない。複雑な気分ではあるが。

「こんなこと言ってるけど、朝霜ね、結構堪えてたのよね」

「風雲姉、余計なこと言うなって」

これだけ開き直る裏側の暴露。相手が姉のためか、朝霜もあまり強く出られない。変に力を入れてしまうと、艦娘なんて簡単に折れてしまう。ただでさえ自分の身体すら傷付けてしまうのだから、普段使いの艤装が出来るまでは急な動きが出来ない。

「自分のせいで死んだ子が何人もいるからって、泣いてたりもしたのよ。憂さを晴らすために暴れることも出来ないし。ああ、さつき腕がヤバイことになったって言ってたけど、その時にちよつとね」

あうあう言いながら朝霜が顔を伏せる。開き直るまでに紆余曲折があつたらしく、それが朝霜にも少し恥ずかしいことに繋がるようだ。

そんなこと、誰も笑わないのだから恥ずかしがる必要はない。キラじゃないとか考えているのなら、その考えは捨てた方がいいだろう。朝霜の考えは間違っていないのだから。

「朝霜、悔やんで開き直ったなら別に何も問題無いぞ。悔やんでいないなら少し問題はあると思うが」

「そりゃあ、あたいだって全部覚えてんだから辛いよ。仲間を殺した感触だって、ずっと手に残ってる。だけど、さつき言つた通りだ。悔やんだところで戻ってこないんだから、仇討ちをやんだよ」

だから早く手加減を覚えて生活出来るようにするんだともうリハビリを始めているわけだ。朝霜は強い。洗脳されているときも、諦める事なく常に立ち向かっていた。敵としては怖いものだったが、味方にする心強いものだ。

とはいえ、リハビリで力加減を少し失敗すると、最悪の場合、骨がイカれてしまうというのは厄介である。力んでも筋がやられる可能性があり危険。

「あたいのせいじゃ無いんだ。だから元凶をぶつ叩く。あたいにこんなことさせた淀さんは絶対ぶちのめしてやんだ」

「そうか……よろしく頼む」

「おうよ。あたいは駆逐隊の補充要員とでも思ってくれよな」

近接戦闘が出来るものがもう1人増えてくれたのは正直ありがたい。特に朝霜には大分苦戦させられたのだ。その強さは私達が痛いほどわかっている。精神的な面もそうだが、戦力としても、敵としては怖いが味方になると心強い。

一方、そんな会話をしている間も巻雲が詰まった布団の塊は動かず。本当に初期の三日月を見ているようだった。

「昼食はどうしたんだ」

「夕雲が食べさせてあげました。目隠しをしたら大丈夫なので」

朝霜も風雲に食べさせてもらったようだが、理由が全く違う。朝霜は箸を持ったら折ってしまうので、手掴みで食べられるもの以外がともに食べられない。巻雲は自分の身体を見たくないため、目が開けられずまともに食べられない。

巻雲は朝霜以上の苦痛だった。訓練さえしたら克服出来そうな障害ではなく、見るものを血塗れと認識する障害。今のところは自分だけのようだが、いつ範囲が広がってもおかしくない。

「巻雲さん、そろそろ夕食ですからね」

こちらには三日月が話しかける。布団の塊に親近感が湧いたらしい。

「……わかりましたあ……」

布団の塊が喋った。眠っているわけではなく、ただただ視界を遮りたいだけのようである。見られるのが嫌なのではなく、見るのが嫌だという、三日月とは真逆の理由。

現に、あの布団の塊からは負の感情の匂いしかしない。自己嫌悪が主。その中でも、涙の匂いが特に強い。

「調子はどうですか？」

「……最悪ですう……巻雲も朝霜と同じで……いっぱい、いっぱい沈めてきました……巻雲の身体の血は、そのみんなの血なんですう……」

手を汚したという概念が現実化してしまっているのが巻雲の障害。罪悪感が幻覚で常に可視化されているようなものだ。それが麻薬の禁断症状から現れるものなら、時間が解決してくれるのだが、深海の

侵食が原因であるためにずっとついて回ってくる。

常に見せ続けられているため、朝霜のように開き直ることも出来ず、ずっと苛まれることになる。終わったことに出来ない苦痛。

「巻雲はどう償えばいいんですかあ……」

「元凶をぶつ潰すことだろ、巻雲姉」

「簡単に出来れば苦労しないよお」

朝霜も横から口出ししてくる。それで納得出来れば苦労しないのだが。

「カウンセリングは初春さんをお願いした方がいいかもしれません。夕雲達も随分助けられましたので」

「ああ、姉さんにそう伝えておく」

心理的なカウンセリングなら姉の出番だ。夕雲と風雲の禁断症状すらも抑え込むような姉なら、巻雲のこともきつと上手くやってくれる。

血塗れの身体と付き合っていていけるような、強靱な心になってもらうのは難しいだろう。だが、その手助けはみんなが出来るのだ。1人で辛いならみんなを頼ってくればいい。

「大丈夫ですよ巻雲さん。夕雲もちゃんとサポートします。巻雲さんの唯一のお姉さんですから」

「夕雲姉様あ……」

「夕雲や貴女を罵るあの人達ももう現れません。夕雲は、本心から巻雲さんを救いたい。力になりますからね」

禁断症状にも、もう入らなくなっていた。不安定なものに引きずられて一緒に不安定になるのが夕雲だったのだが、妹の危機を目の当たりにして、ついに克服した。夕雲もここに来て長い。いち早く抜け出した靱に次いで、ようやく抜け出すことに成功。

キツカケが妹の危機というのは何とも辛いところではあるものの、夕雲はこれにより本当に完治したことになる。

「巻雲、頑張りますう……夕雲姉様に支えてもらえれば……少しくらい……」

布団の塊から頭だけ出てきた。禁断症状の時のような焦点の定ま

らない眼ではなく、しっかりと前を向いた眼。しかし、それでも自分の身体は血塗れに見えるという。

他人はそのように見えないお陰で、今この状態なら生活出来そうだ。身体さえ見なければ正常。

「お布団は血塗れじゃないです……でも……」

隙間から手を出す。私達には何も無い綺麗な手に見えるが、巻雲にはそれが真っ赤に染まった穢らわしいものに見えてしまう。何でも、手袋をしても無駄だったらしい。自分の身体と認識したものは全て血塗れのような。私にも血の匂いは感じない。

「こんな汚い手で……」

「汚くないですよ。ほら」

その手を夕雲が握った。私達にはただの握手でも、巻雲には穢らわしいものを相手に付けているように感じてしまうのだろう。それでまた精神的なダメージを受ける。

「汚れていないでしょう？」

すぐに手を離して巻雲に見せた。離してしまえば元の掌のようだ。

「はい……はい……汚いのは巻雲だけです……」

「ゆっくり、ゆっくり進みましょう」

少しずつでも進むことが出来ればいい。その場に留まってどんどん落ち込んでいくよりは建設的だ。身体ではなく、心を鍛えていけば、きっと巻雲は外にだって出られる。

「身体の痛みが無くなったら、夕雲と相部屋ですからね。一緒に歩いていきましょう。夕雲は絶対に巻雲さんを裏切りませんから」

「夕雲姉様あ……」

その光景を見て、朝霜から少し怒気を感じる。この中では一番下の妹。姉が辛い思いをしている姿は気に入らないようである。だが身体は脱力状態でないと危険なため、悶々としているのがよくわかる。

だからせめて口に出す。身体に出してしまいそうな鬱憤を即座に晴らすために。

「あたい達をハメやがった淀さんは絶対許さねえ」

「ええ。必ず仇を取りましょ。それが一番の償いになるわ」

「沈んじまった奴らのためにも」

朝霜はとても前向きだ。見ていて気持ちいい。

これを見て、より深く大淀に憎しみを覚えることになった。三日月からも、私と同じ感情を感じ取れた。

明晰夢

まだ目覚めたばかりではあるが、朝霜は過去を開き直ることが出来ていた。しかし、巻雲はまだ難しい様子。朝霜が早過ぎるというものもあるが、脳への侵食による障害が重いため、今は常に夕雲が付き従う形に。九二駆として出撃する際は、その隙間に朝霜が入る形になるか。

夜はまだ医務室で眠るつもりだったが、ほとんど痛みもないらしく、もう自室をあてがわれた。空き部屋は残り1つではあったが、2人までなら大丈夫。夕雲と風雲が部屋を分かれ、巻雲は夕雲と、朝霜は風雲と相部屋となる。

「夕雲姉様……」迷惑おかけしますう……」

「いいんですよ巻雲さん。姉妹なんですから助け合わなくちゃ」

巻雲はまだ自分の身体を見ることが無理なため、目隠しをして夕雲に引かれて医務室を出ていく。こういう時にエレベーターがあつて良かったとつくづく思う。

そして、朝霜はまだベッドから下りることも難しかった。変に力むと身体が壊れる可能性があつた。適切な力加減を覚える、もしくは、摩耶が今絶賛作成中の普段使いの艷装が出来上がるまでは、慎重に慎重に動かなくてはいけない。

「すっげえイライラする」

「仕方ないでしょ。ベッド壊すだけならまだしも、腕を壊してるんだから」

「へいへい……普通に歩けやしないかねえ」

見ているだけで怖い。走り出そうとしたら床を抜きそうだし、その前に脚が折れるかもしれないしで、物凄くヒヤヒヤする。

「朝霜、そっちも大変……?」

「巻雲姉よりは楽なんじゃねえかな」

さすが姉妹、こういう時でも声を掛け合う。特に巻雲は、自分の方がキツイのはわかっていても、しつかり気遣い。幼いイメージはあつたが、19人姉妹の次女というのだから、夕雲に次いでしつかり者で

もおかしくないわけだ。

「夕雲、風雲、後は頼んだ」

「はい。少しの間、九二駆としての活動はお休みさせてもらいます」

「ああ、足柄も羽黒も、その辺りは理解してくれている」

気分つてしまうかもしれないので、この辺りは巻雲には聞こえないように話した。目隠しをしている分、耳が良くなっているもおかしくないが。

「摩耶の進捗は逐一聞いてくる。朝霜は期待して待つていてくれ」

「あいよー。全力出せるときに早く来てほしいねえ」

艦装が出来たとしても、室内で全力はやめていただきたい。自分の身体が壊れなくなっただけで、施設は普通に破壊されてしまうのだから。

その日の夜、私は奇妙な夢を見た。

不思議な空間にいた。夜の海ではあるものの、私は艦装を付けずに立っている。なのに沈まない。その時点で、これは夢なんだと確信出来た。明晰夢というやつだ。

艦娘だつて夢くらい見る。昨日起きたことを省みたり、まるで関係ないことを夢想したり。私も今まで夢を見たことが無いなんてことは無かった。だが、明晰夢を見るのは初めてである。

その暗い海の真ん中、ぼんやりと少女が立っているのがわかった。私と同じように艦娘なのだと思う。だが決定的に違う部分があった。脚が無かった。

腿から下の一切が存在せず、代わりに断面を蓋するように艦装が展開されていた。脚があれば私と同じくらいか、それより少し大きいくらいの外見になるか。

白と黒で構成されたその少女は、それなりに長い髪を片側で括つていた。そこでピンと来た。姉が言っていた、私に憑いているというものとのけと同じだと。つまり、艦娘ではなく深海棲艦。

「お前が駆逐棲姫か？」

尋ねてみた。ぼんやりと立っているその少女は、ニツコリ笑つてか

ら首を縦に振った。

『大淀を倒すためなら、私は協力するよ』

こちらのことは認識してくれているようだった。それに、大淀の名前を出したということは、私達の敵をしっかりと理解しているということ。

憑いているのなら、私の戦闘もずっと見続けていただろう。それに、戦っている時に疼きと共に力を貸してくれるのは紛れもなくあの駆逐棲姫だ。理解していて当然か。

「お前は何で力を貸してくれるんだ」

『私も大淀に殺^{ボク}られたから』

駆逐棲姫もあの大淀にやられていたとは。共通の敵を倒すためだったと。さらには、駆逐棲姫は身体を失っているのだから、戦える私に力を貸してくれてもおかしくはないか。

『侵食しちゃってゴメンね。ちよつと渡し過ぎちゃった』

「……いや、構わない。助かっている」

まさか駆逐棲姫本人から謝られるとは思わなかった。私の左腕の侵食は、駆逐棲姫からしても想定外だったということか。むしろ、私が望んだ時に力を差し出してくれたというのか。

やはり私の腕は意思を残している。残留思念とでも言うべき小さな小さなものではあるが、それが私を後押ししてくれていた。助かってはいるが、これ以上になるかどうかは不安である。

『私はずつと側にいるからね。君を一番近くで見てるよ』

「……お前の仇はちゃんと取る。見ていてくれ」

最後まで笑顔だった。夢という空間であるがために匂いを感じ取れることは出来なかったが、敵意は一切感じなかった。

私を侵食したことを本当に申し訳なきように謝っていたし、私をどうこうしてやろうという悪意も全く無かったように見えた。むしろ、単純思考になった三日月のような親近感を感じる。悪意ではなく好意を感じる。

『また話せると思うから』

「……そうか。なら、その時まで」

『うん。三日月ちゃんにもよろしくね』

笑顔で手を振り、海の奥へと消えていくように駆けて行った。

簡単な会話であったが、駆逐棲姫がどういう性格かはなんとなくわかった。あれはシロクロやセス、リコと同じように、戦いを好まないタイプの深海棲艦だ。それでも私に力を貸してくれるということは、大淀に対しては恨みを持っていてと考えても良さそう。

駆逐棲姫と別れた瞬間、私は目を覚ますことになった。

もう日課のランニングの時間だった。いつもなら三日月を起こしつつサクツと起き上がる、もしくは既に三日月が起きているくらいのだが、今はそんな余裕が無かった。夢のことが頭から離れない。

「んう……ふああ……おはようございます……」

腕に頬擦りした後、小さく欠伸をして起きる。私の様子がおかしいと思っただか、キョトンとした目でこちらを覗いてきた。まだ薄暗いからか、やたら眼が光って見えた。

「どうかしましたか?」

「……夢を見たんだ」

三日月も他人事ではないため、着替えながら腕の本来の持ち主と話すことが出来たと話した。

夢の話なのだから、それだけ聞いても真実からは遠いと思う。だが、私はそれは真実だと思った。駆逐棲姫に聞くまで、彼女自身が大淀に殺された深海棲艦であるとは考えもしなかったからだ。

「駆逐棲姫と話したんですか!?!」

「ああ……侵食したことを謝罪された」

何とも複雑な表情を浮かべる三日月。羨望の眼差しにも見えるが、驚きも大きい。匂いからはその2つの感情を感じ取れる。

「また会えるとも言われたな」

「なら、夢の中でなら何度も会えるということですね。……私も会ってみたいですね」

「三日月にもよろしくと言われたぞ」

パアツと明るい顔に。無表情ではあるが、喜んでいることがすぐに

わかる。

だが、ここで少し疑問が出る。私に憑いているのは腕の持ち主である駆逐棲姫なのはわかった。なら、三日月に憑いているのは何者なのだろうか。

同じ駆逐棲姫のパーツを2人に分けて生命維持のために使わせてもらっているが、私にも三日月にも、よく似たもののけが憑いていると言っていた。同一人物が2人に分かれてしまったのか、それとも全く別のモノなのか。これはまた視てもらおうしかないか。

「このことはみんなに話さなくちゃいけないな」

「そうですね。私も知りたいです」

着替え終わった途端にまた左腕に触れてくる。この腕を自分のものと錯覚する三日月にとつて、私が夢の中で見た駆逐棲姫はどういう存在として認識されたのだろうか。

朝食の場ですぐに反応があった。何も話していないのに、姉が私を見て少し驚く。

「若葉、何かあったのかえ？」

「……すごいな姉さんは。実は」

夢のことを説明した。話すうちにどんどん納得していき、そして徐々にニヤニヤしていく。

「もののけがの、昨日よりさらに上機嫌じゃ」

「どういう状態なんだ？」

「首に絡みついてニコニコしておる。なるほど、お主と話せたことに喜んでおったのか。好かれておるのう」

好かれているから気前良く力を貸してくれているのだろうか。その辺りはちゃんと話せていなかった。

私は力を借りる時は駆逐棲姫にお願いし、終わるときには礼を言う。そういうルーティンにしている。それが功を奏したのではというのが姉の分析。誠実に対応するものには、それ相応の見返りを与えるというのが駆逐棲姫の考え方なのかも。

常に感謝していることで、彼女には私はいい人と感じ取ってもらえ

ているようだ。自分の行ないが報われている。

「お主は男前じゃし、女子おなごに好かれるのもわかる」

「からかわないでくれ。若葉は歴とした女だ」

「わかつておるわ」

ケラケラと笑う姉。男前と言われるのは少し複雑である。褒め言葉なのだろうが。

「しっかし、夢枕に立つとは。わらわは表情しか読み取れんからのう」

「普通はあり得ないことなんだろうか」

「どうなんじゃろ。本来、深海棲艦の霊が憑くということ自体が稀じゃろうて。お主は特に繋がりが深いんじやから、普通とは違うことが起きるのもおかしくはなからう。お、手を振ってきたわ」

私の奥に向かって手を振り返す姉。本当に明るいようである。夢の中で私と話している時も、終始笑顔だった。これはおそらく元々の性格がこれなのだろう。

そういう意味では、駆逐棲姫の死体がここに流れてきてよかったと思えた。無念を晴らすことも出来るし、こういう形で交流も出来てしまったわけだから。

「この駆逐棲姫も大淀の被害者なんだそうだ」

「なんと……そこまで縁が深かったのかえ。ならば、力を貸してくれるのも領けるのう。お主が力を付け、対抗出来るようになっていくのが嬉しいんじやろう」

仇討ちのために利用されていると言ってしまおうと聞こえが悪いが、目的が同じなのだから協力体制で進んでいくのが一番得策なのは誰だってわかることだ。それが温厚な深海棲艦だったとしたら、尚のこ手を借りたいし、手を貸したい。

「大事にするんじやな」

「勿論。だが、何故突然話せるようになったのだろうか」

「……訓練したから……じゃないかな」

この話を聞いていたシロが会話に入ってくる。クロには全くわからないようだが、シロには私の現状が一応わかるようだ。いつもながら、シロの感覚には助けられてばかりだ。

「リミッターを外すの……私達の同胞の力を使ってるみたいだから……」

「ああ、そういうことね。ワカバ、その子の力使ってるんでしょ？ なら、何回も使えば繋がりがどんどん強くなるわけだし、話せるようになってもおかしくないよ」

クロも理解した様子。つまり、この力を得れば得るほど、駆逐棲姫との繋がりが強くなるわけだ。

それは侵食が拡がっているのではないだろうか。そこだけには不安なので、シロに見てもらおう。

「……大丈夫。前から変わってないよ……外は自分でわかると思っけど……中にも影響はない」

「そうか、安心した」

「もののけが困った顔をしておる。信用してやってくれ」

今までのことから、こういうことには過敏になってしまっているようだ。疑ってしまって申し訳ない。

「私も若葉さんと同じように話すことは出来るのでしょうか」

ここで三日月からの疑問。同じパーツを使っているのだから、似たようなことが起きても不思議ではない。ただでさえ侵食が脳に届いているわけだし、私よりも先に夢に出ていてもいいとは思うが。

「ふうむ、そこは何とも言えんのう。そも、同じもののけが2人おることがよくわからん。似ておるだけで別人かもしれないし」

「その駆逐棲姫っていうのがどんな人か知らないけど、ワカバに力貸してくれるんだし、ミカツキとも仲良くしてくれるよ。訓練頑張れば、繋がりが深くなるしね」

「なるほど、では、もっと頑張ります」

フンスと鼻息荒く意気込む。私に起こったことを自分にも起こしたいようだ。自分に力を貸してくれる者には、面と向かって礼が言いたいというのが三日月の考え方である。

「また何かあったら相談するがよい。わらわは何があってもお主の味方じゃからな」

「私達もね！ と言っても姉貴にしか見えてないけど」

「……大切にしてくれてるから……応えてくれたんだよ。これからも大切にしておいてね」

勿論だとも。私が生きていくためには必要なことだし、力を貸してくれるのだ。それに加え、友好的だとわかったのだから、大切にしない理由は一切ない。

これからも末永く付き合っていくことになるだろう。感謝を込めて、私は左腕を撫でた。

事情聴取

自分に使われている深海棲艦のパーツの持ち主と、夢の中で会話することが出来た私、若葉。大淀に殺されたという駆逐棲姫は、私に喜んで力を貸してくれていたのだが、私が望んだ時に力を渡すすぎたために大きく侵食してしまったらしい。それを謝罪された。

結果的に、私は駆逐棲姫とはいい付き合いが出来ていると思う。もののけとして駆逐棲姫を視認出来る姉にも、それは保証された。侵食が拡がっているわけではないことも、シロに確認してもらっている。今まで通りに訓練を続けることで問題無さそうだ。

「私もお話ししたいです」

「その内出来るんじゃないか?」

「そうですね。まずは訓練頑張ります」

同じく駆逐棲姫に憑かれている三日月も、夢の中で会話をしようとして訓練に躍起になっていた。アレをやるたびに感情を失っては取り戻し、単純思考となつて私に甘えてくるわけだが、駆逐棲姫と会話が出来れば何かしら変わったりするのだろうか。

まあ強くなれるのは間違いないので、進めていくしかない。そうしていく内に、三日月も駆逐棲姫と話すことが出来るようになるかも。

朝霜が開き直つたという事で、事情聴取が可能となつた。巻雲はまだ精神的に不安定なため、夕雲と共に自室待機。

敵陣から救つた者からの話であるため、今回は当然、下呂大将と新提督が来客。護衛もいつも通りである。今回は朝から来ているため、その日中に帰るとのこと。夜に嵐が来るわけでもないため、囚役は不要と判断。

事情聴取は念のため医務室で行なわれることになった。私も嘘発見器として便乗。今の朝霜が嘘をつくとは到底考えられないが、何かしらが不審な匂いを感じた場合はすぐに報告する。

「これはまた……仰々しいことになっているな」

「いやあ、仕方ねえじゃん。力入れるとぶっ壊れるかも知れないしさ」

朝霜の姿を見て、新提督が溜息を吐いた。

摩耶とセスによる普段使いの艦装はまだ完成しておらず、変な動きをすると身体を壊しかねない朝霜は車椅子に拘束具の姿で2人の前に座っている。別に敵対心を持つていないわけでもないため、そんな姿でも朝霜は楽観的。滅多に出来ない体験だとケラケラ笑っているほどである。

自分の身体の危険性は、本人が一番よくわかっている。拘束具と睡眠薬のおかげで朝までグッスリ眠れたそうだが、風雲曰く、朝霜はとても寝相が悪いそうで、拘束具がずつと悲鳴を上げていたらしい。中で骨が折れていないか心配だったほど。

「巻雲は精神的なダメージが酷く、自室待機中です。このまま監査となるのなら、部屋で話を」

「了解した。今回は監査ではないため、無理に話を聴くつもりはない。子供に酷いことはしたくないのでな」

「おお、気が利くじゃん。さすが大本営様だねえ」

何とも危機感のない。とはいえ、アレほどのことがあつた後でも、こんな態度を取れるのだから、そこは喜ぶべきであろう。強がりでもなく、空元気でもなく、本心からこの態度だ。朝霜は本当に強い。

「今のあちらの内情を知っている者から話が聴ける機会は、こちらとしてもありがたいです。協力してもらえると助かります」

「あいよ。あたかもハマられたのが気に入らないんでね。いくらでも協力してやんよ」

朝霜も今では大淀に対しては恨みの気持ち強い。洗脳され、散々なことをさせられ、拳句今の身体にされている。気に入らないに決まっている。

「何から話すよ」

「先生、頼んでいいだろうか」

「ええ、私はそのためにここに来ていますから」

大本営としては動きづらいところも、下呂大將がその脚で全てを調査していくため、事件解決の先陣を切るものとして大本営からの信頼も厚い。

新提督が同席しているとしても、尋問、聴取するのはあくまでも下呂大将。信用されているからこそその采配。

「では朝霜、君達の拠点は何処でしたか。ある程度はもう絞り込んでいるんですがね」

「実はあたいもよくわかんねえんだ。なんか地下の通路から海に出て行くんだけどさ、実際の位置つてのが見当つかねえ」

相変わらず大淀はそういうところは用心深い。何かしらの研究中は邪魔が入らないようにしておきたいというのはわかるが、仲間から居場所を教えていないわけだ。

「ああ、そういえば、この施設には真西に向かうように進んだっけな」
「充分です。これで拠点はわかりました」

「は、これだけで!?!」

流石の朝霜も驚いていた。本当にあと数件というところまで絞り込んでいたのだろう。供述1つでまず1つ解決。

「次に行きましょう。君の身体を改造したものが誰かわかりますか？
もしくは拠点にいた艦娘では無い者を見たことは」

「改造はドックでやられたからなあ。寝て起きたらこの身体だったんだ。艦娘じゃ無い奴……ああ、そういえばいたな」

「男2人が」

「先に言わないでくれねえかな!?!」

先に言われてまた驚く。もうこれは尋問でも聴取でも無い。ただの確認作業。最初に拠点がわかった時点で、見当を付けた者を1つずつ潰しているだけだ。

少なくとも、朝霜がここで治療を受け始めて、まだ1週間も経っていない。今までのこともあるが、膨大な調査を、本来の業務と並行しながらここまでこなしていることが相変わらず恐ろしい。

「この2人じゃありませんか?」

「写真まで用意してんのかよ。……ああ、そいつらだ、うん。見たことある顔だ」

下呂大将が懐から取り出した写真には、飛鳥医師よりも若く見える2人の男が写っていた。その2人共が白衣を着ているため、おそらく

は研究者。

「この2人は大本営の内通者なんですか？ 僕の同業者にも見えますが」

「彼らも医療研究者ですから、同業者で合ってますよ。君とは違う研究をしていたみたいですがね」

その研究というのが、艦娘の恒常的な強化方法。装備ではなく、肉体的な強化である。

艦娘の蘇生は断念したが、ならばそもそも死なない艦娘を作ればいいのではという、それはそれで倫理的に大丈夫かわからないような研究である。それを聞いて、飛鳥医師が難色を示す。

「……大本営は懲りてないんですか」

「君の訴えを聞いた者達は勿論それも反対しています。ですが、秘密裏に行なわれていたらしく……私もつい最近知ったばかりです」

蘇生に近いレベルで艦娘の人権が無い研究だろう。攻撃されても死なない艦娘というのは、確かに戦況を一変させる力を持つだろう。

だが、それはあくまでも『壊れない兵器』として扱われるだけ。人格を否定されているようなもの。生きているものとして認識されていない。

「その研究の一環でいろいろ作られたのでしよう。例の麻薬も、艦娘の身体強化の一環で作られたものらしいですし」

「深海棲艦の花を使うだなんて、どうかしていますよ」

「ええ、本当に。それが何処から歪んでいったようです。むしろ、大淀が歪めていったというのが正しいでしょうか」

その研究に大淀が関与したせいで、徐々に研究が歪んでいき、今に至っているのではないかというのが下呂大将の分析。大淀は人間すらも洗脳するのだろうか。それとも、話術か何かで方向性を変えていったか。その研究者がそちら方面に勝手に舵を切った可能性だけである。

どうであれ、協力者であるには変わりない。私達にとっては、深海棲艦以上に殲滅すべき敵である。

「話を戻しましょうか。これで拠点と協力者は確定しました。大本営

の内通者もこの時点で見当が付きました」

「すげえなこのおっさん……」

「いえいえ。私にはこれくらいしか出来ませんから」

そのこれくらいというが異常。

「次。君が知っている限りでいいので、あちらの勢力を教えてもらえませんか」

「あいよ、ちよつと思いい出してみる」

そもそも朝霜と巻雲があちら側の最初の完成品だったらしい。プロトタイプというわけではないが、1号と2号ということで早速実戦投入されたようだ。

その完成までに、何人も死んでいったという。今でこそ吐き気がするような出来事だが、あちらにいるときは何も感じなかったそうだ。

「あたいの後に改造するって言われてたのは、伊勢の姐御と日向の姐御だったかな。改二になって強いなの。あとは、えーと……姐として淀さんに可愛がられてたのは鶴姉妹と、鳥海さん、あとは駆逐艦が何人かだったっけかな。今ならもつと増えてるかもしんねえ」

名前が挙がっただけで5人。戦艦2人に空母2人、重巡1人。そこに駆逐艦もいるとして、全員が朝霜並みにされていると考えたら、勝負になるかもわからない。

今攻め込んでこないのも、朝霜と巻雲が敗北したことさらに調整しているからだろう。駆逐艦2人相手にもこれなのに、戦艦レベルが来られたら勝ち目が薄くなるにも程がある。

「なるべく私が攻め込んでくるタイミングを計算します。そんなことがないように敵拠点が破壊出来ればいいんですがね」

拠点の場所がわかっているのだから、当然すぐにでも強襲をかけるだろう。だが、大淀も策士。それを想定していろいろと準備くらいはしていそう。如何に下呂大将率いる精鋭だとしても、全力で抵抗された場合、どうなるかわからない。

「私も当然協力する。それがわかれば、大本営も何も躊躇わないだろう」

「そうですね。慎重に行く必要はあるでしょうが、早急に対処しま

しよう。大本営も巻き込んだ総力戦です。内通者を全員縛り、敵拠点を制圧することが最優先ですね」

それが全て上手くいけば、私達はこの施設で何もせずに解決してくれる、そこで出た治療が必要なものを治療していくことで貢献することになるだろう。

戦わないなら戦わない方がいい。そうも行かないから私達は鍛えているのだが。戦力が足りないというのものもある。協力者はもっと多く欲しいくらいだ。

「私からの質問は以上です。ありがとうございます」

「いいってことよ。あたかも復讐したいからな」

ニカツと笑う朝霜。開き直ってくれたおかげで、もう心強い仲間だ。

「君達にも苦勞をかけます。どうやらあちらは、飛鳥を敵対視しているようですからね」

「僕を、ですか」

「来栖の鎮守府を攻めず、ここにばかり攻めてきているでしょう。来栖より君を危険視しているんですよ」

今までやってきた研究をいくつも無に帰してきたのだから、あちらからしてみれば今生の敵として見られてもおかしくないかもしれない。特にその医療研究者という2人は、研究成果を破壊する同業者がいるとわかると気分が悪いだろう。だからと言って命まで狙うとは。

「ああ、そうか。アンタが飛鳥って人だったのか。淀さんにも言われたな。施設の破壊だけは徹底しろって。生かしておいたら何されるかわからねえって」

「まだ僕は成果が出せていないんだが」

「洗脳を解く手段を確立しておいて何を」

それに、飛鳥医師は艦娘を蘇生する手段にまで至ってしまっているのだ。時間があれば、洗脳だけでなく身体の変質すら元に戻せる可能性がある。

あちらは飛鳥医師の考え方なんて知ったこっちゃ無い。私達はいくら殺しても無限に蘇生される艦娘として認識されている可能性

だつてある。曙が例外中の例外であり、今後同じことはしないと私達にも言っているのだが、当然あちらには伝わらないわけで。

「とにかく、大淀からしてみれば、君は最初に殺しておかなくてはいけない人間なんですよ。勿論そんなことはさせませんが」

「ありがとうございます。僕は僕で出来ることを着実にクリアしていきます」

「ええ、それがいいでしょう。頼みますよ」

私達も全力で飛鳥医師を守らなくてはいけない。この施設を存続させるためにも、好き勝手にはさせない。

朝霜への事情聴取も終わり、下呂大将と新提督はすぐに帰投。早急に対策本部を設立し、襲撃する策を練るといふ。

本当に卷雲には触れていかなかった。会話も厳しいというのなら、そつとしておくというのが新提督の考え方の方である。大本営としてそれが正しいことかはわからないが、ありがたいことである。

「朝霜、協力ありがとうございます」

「いやあ、こんな形で尋問させるつてのはなかなか無い体験で面白かったよ」

最後まで若干テンションが高かった朝霜。普通では無い環境というのが楽しいようである。自分の境遇に悲観的にならず、ここまで開き直れるというのは一種の才能だ。

「早くぶっ潰さねえと、あたいみたいなのがどんどん増えてくんだろ？」

「それだけじゃない。完成させるために、何人もの艦娘の命が使われている。そんなもの、絶対に阻止しなくてはな」

ただでさえ、5人は完成している可能性が高く、ここからどんどん増えていくのだろう。それに、大淀本人も残っているのだ。

敵はまだまだ多い。大本営に頼り切ることも出来ない状況、まずは私達が強くならなければ始まらない。

防空の要

朝霜からの情報により、大淀の拠点を割り出すことが出来た。事情聴取に来ていた下呂大将と新提督は即座に帰投、対策本部を設立し、早急に襲撃をかける方針で事を進めていくこととなった。

その襲撃について言えば、我々の暮らす医療研究施設は無関係ではあるが、こちらが逆に襲撃を受ける可能性はいくらでもある。さらに言えば、大本営の襲撃が必ずしも成功するとは限らない。その時が来るまでは、研鑽の日々を送る。

私、若葉は相変わらずリミッター解除に慣れる訓練を続けている。三日月と共に持続時間を伸ばすことで、戦場でより長く最大のスペックを発揮し続けたい。

この状態での戦闘訓練はまだ先になりそうではあるが、1日2日で多少は慣れてきた。疲れ果てて、薬湯で回復して、また解除してのローテーションをやっているおかげか、身体は鍛えられていく。

「昨日より確実に成長しています。この調子で行きましょう」

鳳翔にも太鼓判を押された。私は強くなっている。

夢の中で駆逐棲姫と会話出来たこともそれに繋がっているようだった。まるで彼女が手伝ってくれているかのように、リミッターのオンオフがスムーズに出来る。この現実で会話は出来ないが、感謝を込めて左腕を撫でた。

「少しずつ時間は伸びていますね……頭が熱いような、そんな感覚ですが」

三日月もリミッター解除には慣れてきており、繰り返し使うと熱っぽくなるようだが、鼻血を出すようなことは無い。

それに、外しながら砲撃訓練もしてみたが、慣れれば慣れるほど精度が増していた。ここに当てると思った時には既に放っており、それが綺麗に命中しているようだ。巻雲との戦闘中もそれで助かった部分が大い。

「三日月さんは休憩を少し多めに取った方がいいでしょう。若葉さんよりも反動が大いですから」

「はい、そうさせてもらいます」

氷嚢で頭を冷やしながら休憩。感情まで取り除いての演算処理能力で、脳が熱を持ち続けているようだ。そのうち倒れないか心配である。程良いところで鳳翔が休憩させているものの、一度大きく休憩するべきか。

「三日月、一度薬湯に行こう。若葉も休憩したい」

「構いませんよ。若葉さんも大分酷使していますからね」

「では、お言葉に甘えて」

あまりやりすぎるともよくない。壊れてからでは遅いものだから、こいらで一旦リセットと行こう。

それが決まった瞬間に私の左腕に抱きついてきた。やはり反動による単純思考化は大きい。淡々と攻撃をした後は甘々を求めてくる。

「三日月、あまりくつつかれると歩けないんだが」

「すみません、ちよつと疲れてしまつて」

「無理はしないように」

鳳翔にも苦笑され、少し恥ずかしい思いをした。

薬湯に入り終わると、何やら工賑が騒がしい。

「おおーっ、すげえ！腕も脚も痛くねえや！」

そこでは、普段使いのための平たい艦装を腰に装備した朝霜が、その感触を確かめるために飛んだり跳ねたりしていた。艦装が無ければ一回跳んだだけで身体が耐えられずに脚が折れていただろうが、今はそんなことは無い。過剰出力ではあるものの、普通の艦装装備状態の艦娘と同様となっている。

まだ出撃用の艦装は無いらしいが、少なくともこれで朝霜はある程度自由に動けるようになった。力加減の習得は必須事項ではあるものの、身体が壊れる心配も無い。

「早いところ完成して良かったぜ。戦闘用の艦装はセスがメインになるけどいいか？」

「誰が作ったって動きやいいぜ。よろしく頼んだ！」

「はいはい。マヤは……訓練もやっていくんだっけ？」

今までに見たことがない、摩耶の訓練。私達に隠れて色々やっているとは聞いているものの、実際にやる姿は初めて見る。

この施設の摩耶は、戦闘もそれなりに出来るが基本は工作艦扱いだ。全員の艦装をメンテナンスし、最高最善の状態での出撃を約束してくれる。そのため、訓練らしい訓練はやっておらず、必要最低限の戦闘力で終わらせている。

とはいえ、射撃精度もそれなりにあるし、そもそも第二改装が出来るほどの練度なのだから普通に戦える。防衛にも今後は力が必要ではあるが、突然どうして。

「おう、若葉。話聞いてたみたいだな。艦装の整備は自分でやるか、セスとシロクロに頼んでくれ。ちよつとアタシも忙しくなる」

「急にどうしたんですか……？」

三日月も同じ疑問を持っていたらしく、摩耶に問う。その質問に、少し困ったように笑う。

「若葉は敵の完成品が誰か聞いたんだよな」

「ああ、朝霜が話す場にいたからな」

今のところわかつている完成品は5人。航空戦艦である伊勢と日向、鶴姉妹と称される翔鶴と瑞鶴、そして、

「鳥海はアタシの双子の妹だ。ならアタシがやらないわけにはいかねえだろ」

姉妹が敵の手に落ちていくというのなら、それを自分の手で救いたいというのが姉妹というものである。私だって、姉の治療には力が入ったのだ。摩耶だって当然同じように思うだろう。

完成品の異常な強さは私達が身をもって経験している。駆逐艦である朝霜であれほどの苦戦をしたのだ。重巡洋艦なら何処までになるのか。それに対抗するためにも、改めて摩耶は訓練に参加することを決めたようだ。

「それにな、他にも理由があるんだ。完成品に空母がいるんだろ。さすがにセスとリコだけじゃ制空権が取れない可能性が高い」

膨大な数の戦闘機が発艦出来る基地航空隊であるリコと、機動性を兼ね備えた軽空母のセスを以てしても、鶴姉妹2人の航空能力に対抗

出来るかわからない。それに加え、伊勢と日向は航空戦艦。戦艦でありながら艦載機の発艦までやってのける。鶴姉妹に追加されると、それだけで押し潰されかねない。

そこに摩耶の訓練の何が関係してくるのだろうか。

「そこでアタシの出番だ。アタシの艦種、知ってるか？」

「重巡洋艦だろう。工作艦でもあるが」

「工作艦のことは考えなくていい。アタシはな、防空巡洋艦っていうちよいと特殊なカテゴリーなんだ。敵艦載機をブチ墜とすのが得意だな」

なるほど、リコとセスだけでは劣勢になりそうな制空権を、防空性能で補おうということか。

そういえば、ここのメンバーに対空砲火が出来るものは今のところいない。元々あちら側で活動していた九二駆に所属する者達は経験があるかもしれないが、今ここには空を攻撃する武器がない。

「アタシ用の武装は勝手に作らせてもらった。両用砲なんだけども、これで防空をしていくつもりだ」

「やつべえ、これ深海の艦装も組み込んであんのか。かつけえ！」

「朝霜、お前いいセンスだな。お前もわかるかこれの良さが」

当然ながら武装はここにあるものの組み合わせ、継ぎ接ぎ武装。摩耶の両用砲は、私達の扱うどの武器とも違う形状をしている。両用というくらいなのだから敵への砲撃も兼ねているのだろうが、腕に装備するものとは別に、艦装にも接続されるゴテゴテの砲台。

それがこれでもかというほど接続されていた。そういえば、巻雲が使っていたのもこのタイプだったか。まるでハリネズミである。

「有り合わせだけど、割といい感じに出来てると思うよ」

「ああ、セスもありがとな」

この武装は工廠組の力作の様子。私達ほど訓練をしていない摩耶が、即座に追いついてこれるような高スペック武装になるべく、出来る限りの技術を詰め込んだようだ。

「うし、じゃあ訓練やってみつか。まずはセス、艦載機ありったけ頼むわ」

「いいよ。リコよりは出せないけど、それなりにあるから」

リコはまだ雷に付き合っているため、セスが摩耶の訓練をすることになる。少し奥の方で鳳翔がウズウズしているようだが、数ではセスの方が上。素直にセスに任せの方が良さそうである。

朝霜の戦闘用艦装の作成は少しだけ先送りに。今すぐ必要といえど必要ではあるが、優先順位というものがある。いざとなれば、私も作成に参加させてもらおう。

私と三日月は休憩がてら摩耶の訓練を見させてもらうことにした。今までに無かった防空という戦い方は、三日月もやっていく可能性は充分にあるし、鳳翔も摩耶の防空性能を確認するために、確認は必要と一緒に参加している。

「ようし、じゃあ行くよ。エコ、発艦」

エコに合図を出し、ありったけの艦載機を発艦。自分で言っていた通りリコほどの数はないにしても、相当な数が発艦されたことがわかった。あれで本来なら艦隊1つを相手取るくらいだろう。

それに対するのは両用砲をありったけ装備した摩耶1人。まず腕に装備した艦装を空に向けて構える。

「つしやあ、行くぜえ！」

瞬間、一斉射。空を埋め尽くすかのように砲弾のシャワーが真上にばら撒かれた。勢いよく飛んだ砲弾は、エコから発艦した艦載機を次々と破壊していく。

「ちよ、それとんでもないって！」

セスの艦載機も当然、リコと同じで空中で停止したりバックしたりする深海仕様。不規則すぎる挙動で回避性能もかなり高いはずなのだが、そんなこと一切関係なしに狙いを定めていた。

当然艦載機からの攻撃だつてあるが、それは撃ちながらもまた綺麗に回避している。素早いわけではないのだが、今のところ1回も当たっていない。

「ちよつと真剣に行くぞ」

「おう、やれること全部やってくれや！」

速さを変え、角度を変え、場所を変え、不規則な動きをさんざん織り交ぜながら摩耶の周囲を飛び回る。1人で相手をするにはかなり難しい。

しかし、摩耶はそれにも互角に立ち回っている。艀装に接続されている両用砲は、真後ろにある艦載機にも照準を合わせて撃ち続け、自分に向けての攻撃を、自らの攻撃により抑え込む。攻撃は最大の防御とはよく言ったものだが、今の摩耶はまさにそれ。

「えげつないなお前も！」

「マヤには絶対言われたくない！」

防空性能を鍛える訓練にもかかわらず、超低空飛行も織り交ぜ始めた。摩耶はそれすらも撃ち墜としていく。

両用砲というだけあり、上にも横にも放てる武装だった。その砲撃の威力は、深海のものも組み込まれているだけあり、私以外の者が使っている主砲と比べて、勝るとも劣らない威力。

「具合いいなコイツは！ アタシ専用チューンした甲斐があるぜ！」

既に発艦された艦載機は半分近くが無くなっていた。お互いに出る限りのトップスピードでの攻防。

「くっそー、マヤがこんなにやれるなんて」

「伊達に改二じゃねえよ！ ああくそ、そろそろ弾切れか！」

深海のシステムを組み込んでいるのだから、海中を潜らせれば補充は可能。腕の方はまだ簡単だが、艀装に接続された方は補充が難しいがどうするつもりなのだろう。

「装填！」

腕を海中に潜らせ、次弾装填。それを徐に背中に回し、両用砲に重ね合わせたら、そちらの方にも装填完了。さんざん触ってきただけあり、完全に使いこなしている。自分用に使いやすいように弄り回しているだけある。

だが、装填が隙だらけなのは誰が見ても明らかだった。装填完了する頃には、既に艦載機が四方八方を取り囲んでいた。

「隙あり！」

「いつてえ!？」

背後の艦載機が水鉄砲で摩耶の後頭部を撃ち抜いた。本来なら死。そうなった時点で訓練は一旦終了となる。

次弾装填の隙が無ければ、摩耶はそのまま押し切れていたかもしれない。弾幕を張るという意味ではいい戦術ではあるが、弾の乱射ですぐに装填が必要になるのは少々大きなデメリットか。

「武装のスペックはよくわかった。こっちは完璧だけど、アタシがついていけてねえ。訓練でひたすら慣らすしかねえな」

「じゃあ私で慣らしておく?」

「ああ、頼む。でも工廠の仕事もあるからな、どっちも頼むぜ」

「忙しいねまったく」

お互いにいい感じの仕上がりだったようで、2人で盛り上がっていた。

そういえば摩耶とセスは相部屋。普段から工廠での付き合いもあり、かなり仲がいい。人見知りのセスも摩耶相手だと積極的。

「すごいな摩耶……あそこまでやれるとは」

「工作艦のお仕事ばかりしてましたからね……」

私達には出来ない戦術を目の当たりにして、三日月と共に感心していた。同じ状況に陥っても回避以外の選択肢が無いため、艦載機は正直苦手だった。だが、摩耶のあれがあれば、その回避もしやすくなる。

「防空……ふむ、誰かをそちらに割くべきですね……」

今の訓練を見て、鳳翔もいろいろ考えていた。敵に強力な空母がいるというのがわかっていいるのだから、先んじて対策は取るべきである。

鳳翔も空母ではあるものの、昼に襲撃されるのなら戦力として迎撃をお願い出来るが、夜襲だと出撃も憚られる。ならば、施設所属の艦娘にしつかりと防空を学んでもらいたい。

敵の情報が判明したからこそ、それに対抗する手段を手に入れていく。既に難敵であることは間違いない。だから、今はやれることを全力でこなしていく。

私も三日月も、これまで以上に力を付けていくのだ。差し当たって

は、リミッター解除を完璧に使いこなすことが目標。

心の安定

双子の妹が敵側にいるということで、摩耶も戦列に参加することを決めた。それに伴い、摩耶の本来の戦い方、防空巡洋艦としてのスベックを解禁。今でこそまだ慣れの問題もあるが、セスの艦載機相手になかなかの動きを見せている。

それで防空が足りるとは限らないため、他にも防空が出来る者は必要だろう。その辺りは鳳翔がいろいろと考えてくれていたようだ。私、若葉の所属する第五三駆逐隊は、戦闘スタイルに偏りがあり過ぎるので、それを担うのはおそらく第九二駆逐隊。もしくは、その補充要員になると思われる巻雲だ。

「芳しくないですね……夕雲達とは違う幻覚ですから」

夕食の後、今日一日の具合を夕雲から聞いていた。今でも部屋に籠ったままであり、食事も夕雲が食べさせている状態。自分の身体が見られないというのは相当に大きく、戦闘どころか普段の生活も難しい。

せめて三日月のように、肌を見せないくらいに厚着をしたら見えなくなるのかなら良かったのだが、それもまた違うというのだから厄介な障害である。自分を構成するパーツは何もかもが血塗れ。罪をありと見せつけてくるせいで、心がどんどん疲弊していく。

「巻雲さんは優しい子ですから、人一倍重く感じてしまっています。しばらくは難しいかと」

「精神的な部分は急いではいけないな。夕雲、基本的に巻雲のことは君に任せていいだろうか」

「はい、私からもお願いします。やらせてください。九二駆は一旦朝霜さんに引き継いでもらいますので」

あの巻雲を癒すことが出来るのは夕雲だろう。他の者も力を貸すことはするだろうが、1番親身になれるのは、巻雲にとっての唯一の姉。

夕雲が一時的にカウンスリングに専念するということで、九二駆には正式に朝霜が加わることになった。戦闘用の艦装は現在作成中で

はあるものの、手慣れているセスがメインに、訓練しながら摩耶もサポートするため、数日のうちに完成するだろう。

「脳の障害を取り払うことはかなり難しい。目を治療するわけでも無いから、手段はこちらでもいろいろ考えているところだ」

「ありがたいございます。消えない幻覚というのは辛いと思います。治療の難易度のことを考えると、巻雲さんに乗れ越えてもらうのが一番有効かもしれません。無理はさせないように支えていきます」

無理に治療せず、巻雲に血塗れの身体に慣れくれるのがベストではある。だが、それは酷というものだ。罪悪感に押し潰されて心が壊れてしまうのが先。

壊れてしまつたら意味がない。巻雲は巻雲のまま救いたい。側に夕雲がいてくれるという環境なら乗り越えることが出来るかもしれない。

「あ、先日若葉さんには話しているんですが、初春さんのメンタルケアは受けてもいいでしょうか」

「ああ、否定する理由はないさ。最善だと思つた手段を使つてくれ。僕としても心の話であれば、初春の力を借りた方がいいと思つていた」

姉のカウンセリングは誰もが有用と感じている。特に夕雲は、それを直に受けているのだから、その効果は身に染みていることだろう。それに、施設の一員としてだけでなく、同じ九二駆の仲間なのだ。頼らない理由もない。

「飛鳥医師、若葉と三日月も手伝う。いつものメンバーを使つてくれ」
「ああ、頼む。朝の診察に巻雲も加えよう。シロも何かしら出来るかもしれない」

身体が深海棲艦ならば、私の喉を治してくれたように巻雲の侵食も弄ることが出来るかもしれない。

それが出来れば、朝霜の障害も取り払える。過度な期待はやめるとしても、試す価値は大いにある。勿論、無理はしないように。

「医者が匙を投げるわけにはいかないんだがな……すまない、皆」

「匙を投げたわけじゃないだろう。それに、あれは医学ではどうにも

出来ないのではないのか」

「脳はどうしても……な。治療とは別の次元になる」

さすがに脳を入れ替えるわけには行かない。それは完全な別人に変えるのと同じだ。それもあるから、飛鳥医師は深海棲艦の脳だけは保存していかないくらいだ。

飛鳥医師だって得手不得手くらいある。全てが治せるわけではない。そういう時こそ適材適所。施設にはそういうことが出来る者だっている。

「手段は探さず。これだけ長い時間を貰えたんだからな。当然、君達の身体を元に戻す手段も。僕が引き起こした問題なんだから、僕が解決しなくてはな」

飛鳥医師の研究は1人でやるには困難なものだ。それでも着実に一步一步進めているようだ。艦娘用の人工臓器や人工皮膚も、あと少しというところまで来ているらしい。1年以上この施設に籠って研究してきた成果もついに実りそう。

「力を合わせて治療していこう。せつかく助かった命なんだ。楽しく生きてもらわなくちゃな」

敵の襲撃も怖いけど、巻雲の治療だって優先順位は高い。あわよくば戦力へという少し悪い気持ちもあるけど、辛そうにしているのを見ているのは私達も悲しい。笑顔を取り戻してもらいたいのだ。

翌朝、早速巻雲の再検査。身体を見ないことで心が落ち着きはしているものの、それにも限界はある。

「巻雲、1日置いたが、調子はどうだろうか」

「気分が悪いとか、そういうのは無いですう。でも、身体を見ると……やっぱり辛くてえ」

今も頭から下は布団に包まっている状態。食事をちゃんと摂れてはいるので、体調が悪いとかそういうものは無い。だが、少し顔色は悪い。

朝霜との会話で前向きになろうとする素振りがあったのだが、そんな簡単に歩き出せたら苦労はしない。血塗れの身体と付き合うのは

難しい。

「匂いは先日から変わらずだ」

「視覚からも変化が無いと判断します」

私と三日月の判定は、変化無し。身体が悪化しているようには見えなかった。侵食が進んでいるわけでもなく、見てわからないところで拡がっているわけでもない。現状維持が出来ていることはそれはそれで良いこと。

続いて、シロによる触診。治療されてから初めて頭に触れる。巻雲は医務室と自室以外を知らないため、シロがどういうものかもイマイチわかっていない。だが、夕雲が狼狽えていないところで身を委ねた。

「……脳に根を張ってる」

割と絶望的な言葉。

「ふむ……正直そこは想定通りだ。それを剥がすことは」

「私には……ちよつと難しい。違うところに傷がついちやう。喉を弄るのはワケが違う……ちよつとズラただけでも大惨事だし……」

飛鳥医師が脳に直接触れて処置をするのと近いことが起こり得ると、シロも首を横に振る。

治療不可であることが確定したようなものだ。むしろ、シロがこのまま弄るより、飛鳥医師が処置した方が成功率が高いとまで言う。

「ごめんね……私にはどうすることも出来ない」

「だ、大丈夫ですよ。巻雲も、昨日1日でいろいろ覚悟はしましたからあ」

巻雲は昨日、丸一日部屋に籠もっていただけだ。夕雲に付き添われて、ベッドから降りることもなく、ひたすらに考え事をしていただけだ。

悲観をやめようと、受け入れる心構えだけは持とうとしたようだ。結果はご覧のとおりだが。

それもあるからか、覚悟したというものの精神的な疲弊は目に見える。それを見た姉が動き出す。

「覚悟することは良いことじゃない」

「血塗れの身体とお付き合い出来るかわかりませんがあ……あう」

夕雲や風雲にやったように、卷雲の後ろ側に回り込んだ。

「卷雲よ、少しいいかの」

「は、はい」

卷雲がかけている眼鏡を外し、夕雲に渡す。そして、以前見た時と同じように、首に腕を回し、手のひらで目を隠した。これが姉のカウンセリングスタイルのようだ。

仲間の温もりを直に伝えることで安心させ、騒ついた心に静寂を与える。焦っていたら何も始まらない。負の感情を薄れさせ、本来考えるべきことを考えさせるため、静かに語りかける。

「心を落ち着けよ。お主は自ら覚悟出来る強者じゃ。わらわはそれに敬意を表する」

耳元で囁きながら、頭を撫でる。最初は強張っていた卷雲も、姉の言葉を聞いていくうちに少しずつ力が抜けていった。

ここまで来るとほとんど催眠療法に見える。だが、姉はそんなことはしていない。心を落ち着かせ、脳を癒す。雑念を捨てさせる禅のようなもの。

ポジティブを後押しして、ネガティブを消し去る、所謂ただの応援だ。それをゆつくりと着実に、心に響くように行なうのが姉のカウンセリング。

「ゆつくりでいい、自分を好きになっておくれ。辛かったら仲間を頼っておくれ。わらわ達はお主の仲間じゃ。誰も責めやしない」

「……はい、はい、卷雲は、皆さんを頼らせてもらいます」

「いい子じゃ」

独りで背負い込まないようにするのが、開き直るための一番の近道だろう。姉はそれを促している。卷雲は独りじゃない。私達だって支えていこうと思っっているし、何より頼れる姉、夕雲が側にいてくれるのだ。

「卷雲さん、夕雲は貴女の側にいます。いくらでも頼ってください」

「はい、はい、夕雲姉様、よろしくお願いします」

カウンセリング前から大きくは変わっていないが、声に少しだけ力

が入ったように思えた。これを繰り返していけば、いつか開き直ることが出来るだろう。血塗れの身体を罪の証とせず、何か別のものに出れば御の字だ。

その後、改めて飛鳥医師が診察をし、巻雲の身体に変化がないことを確認。深海の何かに侵食されているものの、肉体的には至って健康体ということのようだ。それだけは安心。侵食によって健康被害まであらわれたら困る。むしろ例のキューブで健康を維持していたなんて事までありそうだった。

だが、トラウマというのは簡単には無くならない。以前の曙のように睡眠障害があってもおかしくないだろう。その辺りは睡眠導入剤などを処方し、健康を維持出来るようにしていくようだ。

「夕雲、巻雲にたまには運動をさせるといい。施設の中や浜辺を散歩させるだけでもいいだろう。同じ部屋の中だけだと、気持ちも鬱屈とするだろうからな」

「はい、そうさせてもらいます。少しずつ身体にも慣れていってほしいですし」

最初は車椅子でもいい。違う風景を見せることで気晴らしが出来ればいいと思う。閉じられた世界だけでは、気分が鬱屈としてしまうだろう。

「診察は終わりだ。次は昼食後にしよう」

「はい、ご迷惑おかけしますう……」

「巻雲、それは違う」

飛鳥医師が改めて巻雲と向き直った。ここにいる唯一の人間に面と向かわれたことで、巻雲の身体が強張るのがわかる。

伝えられているかは知らないが、巻雲の身体をこう改造したのは、大淀以外にも2人の人間が関与している。それを知ったら人間に対して負の感情を持ってもおかしくない。それこそ最初の三日月のように、嫌悪感を隠さないくらいでも誰も文句が言えないだろう。

巻雲の場合は、人間への恐怖が強い。匂いから判断出来るのは、飛鳥医師への警戒心。自分をこうした人間のように、また何かしら身体

に手を加えようとしているのではという恐怖。

「迷惑じゃない。僕達は君を本心から助けたいんだ。誰も迷惑だなんて思っていないから安心してくれ」

「で、でもお……」

「君と同じような境遇の者達も沢山いる。皆が君を受け入れてくれてる」

飛鳥医師も三日月に近いくらい表情を変えないが、巻雲と接するときは、ほんの少しだけ笑みを浮かべているようだった。警戒を解すように、子供に接するように優しく話す。

おかげで、巻雲の警戒は少しは取れたように見えた。少なくとも恐怖は薄れていた。この施設に滞在するのも、巻雲的には辛かったのかもしれない。

「……わかりましたあ。その……頼らせてください」

「ああ、いくらでも」

これで少しでも前向きになってくれればいい。私達は巻雲の味方。

「でも……」

「まだ何か不安が？」

「ここにはあの……リコリス棲姫が……」

巻雲の中で一番の不安はそのようだ。リコリス棲姫の仲間を皆殺しにし、本人にも大怪我を負わせている引け目が、最後の不安。戦闘中に面と向かって恨みが深いと宣言されているのだから、顔を合わせるのも辛いだらう。

「リコは気にしておらん。仲間を殺したのは、お主という道具を使つた大淀だと考えておつた。道具に罪は無い」

「……でもお……」

「今度、話をしてみるといい。彼奴はな、あんな態度を取っているがなかなか可愛いところがあるんじゃないよ。わかるじやろ。今でもあの花を愛でておる」

施設の周囲に生えてしまつたりコの彼岸花は、暇さえあればリコがしっかりと手入れしていた。その姿は、あの勇しく喧嘩腰な態度からは一変した愛らしさがある。

あの姿を見れば、多少は安心出来るだろう。本人と話すのが一番だ。

「だから、安心せい。誰もお主を悪く思っておる者はおらんな」

「……はい」

少しずつ、少しずつここに慣れていってもらいたい。誰も敵ではないのだから。

謎の逃走者

翌日、前回の戦いから1週間の時が経過。その間に朝霜と卷雲は治療が完了し、今はリハビリ中。朝霜はいいとして、卷雲は障害での精神的な疲弊が激しいため、ゆっくりと進んでいくことが決まった。基本的には夕雲が付き添い、支えていく方針。

次の戦いへの準備を進めている最中、下呂大将から連絡が来る。大本营で対策本部が設立され、今からでも襲撃を仕掛けるとのこと。朝霜への事情聴取から2日でそこまで進んだのはありがたい。さすがは下呂大将である。

今何かあったとしても、援軍がこちらに寄越せないということを事前に伝えてくれた。これで終わってくればいいのだが、そう簡単には行かないというのも何となく皆が察している。

本当に終わったと確定するまでは、訓練は止めないつもりだ。大淀の首を差し出してもらうまでは戦いは終わらないだろう。人間の罪は人間が裁いておいてほしいものだが。

「先生から連絡はもらったが、僕達は普段通りに過ごそう。それこそ、何が起こるか分からないからな」

飛鳥医師も同じ考えだったようだ。あの大淀のことだから、確実に抵抗する。大本营の全力を以てしても、完全に殲滅しきれんかはわからない。そうになると、こちらに襲撃してくることもあるだろう。

ただでさえ名前が挙がっている者達は厄介だ。ただでさえ通常でもスペックが高い艦娘が、まともではない戦闘力である完成品に改造されているのだ。拠点を破壊出来ても、艦娘は脱出する可能性だってある。

「大本营の健闘を祈ろう」

今、私達が出来るのはそれくらいしかない。堅実に先に進むのだ。

昼食が終わり、また午後からは訓練。外にはいつものメンバーが揃っていく。私は当然三日月と共に、鳳翔の下で鍛えていく。足柄と羽黒に学んでいる曙、霰、姉とは別の方向へ。リコに鍛えられている

雷は途中までは私達と同じ方向。

「最近訓練ばかりでお掃除が出来てないわ。先生の部屋が心配」

ここ最近家事が出来ていないと雷がボヤいていた。飛鳥医師の部屋も時間を見ては掃除しているらしい。

部屋が埋まっていることをいいことに、自室の掃除は各々でやると取り決められたことで負担は減っているが、雷は洗濯や食事の準備などもしつかりやっているため、鳳翔や夕雲など手伝う者もいるとはいえ今でもやりすぎ。

「でも、前より強くなれてると思うわ。リコさんの訓練、今ではノーダメージもあるのよ!」

「始めたばかりの時と比べれば、充分強くなっている。不意打ちにも対応してくるしな」

雷を鍛え上げたりコも少し得意げ。

水鉄砲を極め、何処からどう攻撃されても回避しながら当てる技術に特化して鍛えられていたわけだが、持ち前の器用さもあってとんでもない精度になっているらしい。反応速度はリミッターを外した三日月に軍配が上がるが、命中精度は他の追隨を許さないほどののだとか。

水鉄砲だからこそその容赦ない砲撃が可能なため、牽制には持つてこいの性能になったわけだ。戦闘補助に特化したのはとても大きい。

「今日もやっていくわけだが、まず先に近海警備だけさせてくれ。日課だ」

訓練前にはリコの戦闘機による近海警備が行なわれるようになって。戦闘後、それなりに時間が経過していることで、襲撃の可能性は日に日に上がっているだろう。なるべくここに到着される前に知っておきたいため、一番索敵範囲が広いリコに任せる。

第二四駆逐隊が警備しているよりも遠くまで一気に飛んでいき、すぐに見えなくなった。そこまで遠方まで調査出来るというのはやはり便利だ。

「……………ん?」

「どうした」

「1機から信号が届いた」

この流れ、既視感がある。呂500がここまで漂流してきた時と同じだ。一度完成品が出来ているのだから、失敗作がここに流れてくるなんてことは無いだろう。ならば本隊か。

今の状態で完成品の部隊が攻め込んでくるとなるとかなり厳しい。訓練を欠かさず行なっているとはいえ、施設の艦娘を総動員にしても勝てるかわからないくらいだろう。

「何が来ているんだ」

「……艦娘1人と、それを追う艦娘が何人か、だな。セスほど細かくは見えん」

それをそのままで見ると、人形に追われている脱出者が妥当な線。どういう状態かわからないが、まずはそれを見てみないことには話が始まらない。

その艦娘達はここから東側の方面にいるらしい。東といえば、朝霜が言っていた大淀の拠点の方向だ。真西に向かってここに来たということは、真東にあるということだし。

「救援が必要かもしれない。鳳翔、若葉達も向かっていいだろうか」

「ええ、実戦訓練と行きましょう。若葉さん、三日月さん、雷さんで出撃。状況を確認し、救出が必要なら救出を、そうで無ければ殲滅を」
「命は取らず、です。了解です」

すぐに動けるのは私達だ。リコの戦闘機に案内してもらいつつ、私達は現場に向かうことにした。他に訓練している者に援護を求められるかもしれないため、リコの戦闘機に常についてももらい、緊急時に戻ってもらうように。

案内された先、施設はもう水平線の向こうに消え、近海警備をしている二四駆も見えなくなった。リコが見つけた艦娘というのが敵であることも考え、二四駆にも警戒は強めてもらっている。状況次第では撤退戦もあり得る。

「こんなに離れたところの物を見つけたのか」

「リコさん凄いわよね。移動要塞って言うだけあるわ」

ここまで遠出するのは、来栖鎮守府に向かう時くらいだ。そこまで確認出来るリコの近海警備は、施設の防衛にも非常に役に立つ。

「見えた……確かに艦娘だ」

まだ匂いは感じ取れない場所、少し遠めな場所に艦娘の姿が見えた。追う方も追われる方も艦娘。だが、追う方はどう見ても人形だった。無表情で、命令に忠実に1人の艦娘を追い詰めている。数は1部隊分、6人。

よく見れば、追われている艦娘は雷とよく似た制服を着ていた。見た目も駆逐艦。

「助けるぞ」

「オツケー。行きましょー」

鳳翔はこれを実戦訓練と言った。ならば、今までの訓練で培ってきた力をここで一度使ってみよう。慢心しているわけではないが、完成品や姫を相手取るよりは戦いやすい。

「先行する、いいな」

「大丈夫！ 援護するわ！」

「すぐに追い付きますので、どうぞ」

一番速いのは私だ。先行して足止めし、2人に後から援護してもらうのが一番戦いやすいだろう。

ここまでの訓練で、リミッターのオンオフは手慣れたものだ。それに、効果時間も着実に伸びている。6人相手での時間稼ぎなら大丈夫だ。動けないほど消耗する前にか出来るはず。

「じゃあ先に行くぞ。……頼むぞ姫……！」

左腕に触れ、解除のルーティン。あの艦娘を救うため、一時的なりミッター解除を願う。すぐさま心臓が高鳴り、身体中に力が漲った。駆逐棲姫とも仲良くやれている。あれ以来、夢では出会えていないが。

解除と同時に海を一蹴り。慣れてきたおかげか速度はより速く、目まぐるしく変わる風景にも頭は追いついている。あつという間に人形との間合いが詰まり、追われていた艦娘の前に飛び出せた。

「助けるぞー」

「えっ、えっ!?!」

動揺しているが、話している余裕は無い。まず眼前に迫る重巡洋艦の人形の腹に向け、修復材ナイフによる一撃。噴き出した血をモロに浴びることになるが、その人形を蹴り倒して次の人形に向かう。

自爆装置が腹に入っているのは、匂いでわかっている。今このメンバーで自爆装置を解除出来るのは私だけだ。私はそれに専念し、二次被害を防ぐ。

「お前はここから離れろ!」

「な、なにになに?!」

「いいからそこから離れなさい」

間髪を容れず、人形の艦装がごとごとく破壊された。感情のない視線と言葉で、後を追ってきた三日月が、リミッターを外して参戦。

三日月も数秒のリミッター解除くらいなら、ノーダメージで数回使用可能。今はその1回目だ。今の砲撃の後、すぐにリミッターを掛け直して普通の砲撃に戻った。リミッターを外していなくても、砲撃精度は上がっている。

「こつちー!」

「えっ、い、雷!?!」

追われていた艦娘は雷が保護してその場からすぐに離れる。何やら雷の顔を見て驚いていたようだが、言及するのは後。

その時に全ての人形の顔面にきっちり水鉄砲を当てている辺り流石。命中精度もピカイチなら、速射性能までもピカイチ。三日月とは棲み分けが出来ている。

「自爆装置をすぐに解除する。三日月は」

「艦装を破壊します」

リミッター解除2回目。連続使用も問題無し。対して私はまだ一度も掛け直さずに解除状態を続けている。身体にガタはまだ来ない。

出来る限りのスピードで人形の腹を搔っ捌いていく。自爆装置さえ無くなれば、戦闘での不安は無くなるため、これが最優先。代わりに私は返り血を浴び続けることになるが、そこはもう我慢するしかない。

「……」

それを三日月が、人形が怯んだところに確実に砲撃を当て、艦装を破壊していく。主機を破壊するのは難しいが、武装は確実に破壊され、攻撃手段を失わせていった。無表情無感情で淡々と処理していく姿はなかなか怖いものがある。

ありがたいことに、この人形は完成品が連れてくる精鋭の人形では無かったため、私と三日月だけでもどうにか出来た。

だが、当然ながらあちらもリミッターは外されているため、そのまま置いておいたら自沈してしまうことになる。

「……リミッターを掛け直せ！」

試しに命令してみる。私は喉も侵食され、深海棲艦と同様の声質になっっているなら行けるかと考えた。私が姫であるわけではないのだが、元の持ち主が姫なのだから、運が良ければ行けるかと。

だが、残念ながら人形は止まらない。私は姫扱いではないだろうし、そもそももう姫の命令も聞かないように調整されていたのだから、私の指示など全く意味が無かった。

「くそ……やっぱリダメか……」

私が自爆装置を、三日月が武装を破壊した人形達は、やれることが無くなったからか撤退を開始した。人形が撤退というのは実際初めてだが、今まで何も出来なくするようなことが無かったため、これが本来の動きなのかもしれない。

無理に追うこともせず、私と三日月は雷と合流することにした。艦装を破壊して拘束するのも良かったが、私達だけでは施設に運び込む前に全員自沈する。そうで無くても、大きく消耗させたので、拠点に戻る前に自沈は免れない。

悔しいが、あの人形達は助けられなかった。歯痒い気持ちでいっぱいだった。

リミッターを掛け直し、一息つく。疲れはドツと押し寄せてくるが、動けないほどでは無い。三日月も少しフラついたようだが、鼻血が出るほどの消耗は無いようだった。代わりに当たり前のように私

の腕からしなだれかかると、単純思考化はきつちり現れている。この辺りはもう仕方ないものと考えることにした。

「若葉さん……凄いいことになってますよ」

「いつぞやの旗風みたいになってしまった」

人形の血をモロに浴びてしまったため、少し気持ち悪い。早く帰って風呂に入りたい。

だがその前に、保護した艦娘が何者かを調べなければいけないだろう。

「若葉、三日月！ そつちは!?!」

「撤退された。だが、あれではおそらく……」

「そつか……リミッター外してるから……」

助けられないとわかり、雷も少し落ち込んだ顔を見せるが、頭を振って気持ちを切り替える。どちらの方向に逃げていったのかは私と三日月が把握しているため、また来栖提督にお願いして海の底から引き揚げてもらわなくてはいけない。

「助けられないのが辛い。若葉の呼びかけも効かなかった」

「仕方ないわ。今はこの子を施設に連れて行かなくちゃ!」

救出した艦娘は、終始動揺していた。こんなところで救出されると思っていたいなかったのか、それとも私達が物珍しいのか。

「ぴっ!?!」

「ああ、すまない。若葉はこういう戦い方しか出来ないんだ。血塗れだが、若葉も敵も無傷だから安心してくれ」

この反応も無理はない。

「い、雷よね。ここって鎮守府あるのかしら……」

「鎮守府は無いけど、医療研究施設があるわ。私達はそこで助けられた艦娘なの」

帰路に就きながら、簡単にだが説明する。今から向かうところは危険な場所では無い。外部からの襲撃の恐れはあるものの、沢山の仲間達が守ってくれる。

今気になるのは、この艦娘と雷の関係性。妙に雷に対して態度が余所余所しい。

「えっと、名前は？」

「暁、暁よ。貴女のお姉ちゃんの」

「お姉ちゃん！ 本当に私に姉妹がいたのね！」

なるほど、だから雷とよく似た制服を着ていたのか。しかし、雷には姉妹のことなんてわからない。D事案のドロップ艦であるが故に、艦娘としての記憶が無いのだから。

そのことを簡単に暁に説明すると、とても悲しそうな表情を浮かべた。何があつたかわからないが、逃走先で出会った妹艦に知らないと言われれば、泣きつ面に蜂みたいなもの。

「とにかく、今は施設に戻ろう。話はそこで詳しく」

「え、ええ……助けてくれてありがとう。お、お礼はちやんと言えるし」

人形に追われていたくらいなのだから、大淀の関係者であることは間違いない。匂いからして薬が使われているようなこともなく、自爆装置も入っていないようだ。

洗脳されていることは無さそうな謎の逃走者、暁。彼女の身に何があつたのだろうか。

念願の姉

昼からの訓練前に発見された艦娘、暁。人形に追われて施設近海まで逃走してきたところを、近海警備をしていたリコが発見。その側に居合わせた私、若葉と三日月、雷で救助に成功した。

今は施設に運び込み、医務室で診察を受けている。おそらく大淀の拠点から逃げ出してきたのだろうと考えているが、同じことをした曙と比べると消耗が少ない。曙は酷使され続けた末に逃亡し、ここまでやってきたことで倒れたわけだが、暁は少し違うのかもしれない。

私達は戦闘後の汚れを落とした後、その暁が診察を受けている医務室へと直行した。私の訓練をするはずだった鳳翔は、先に医務室にいたようである。リコは近海警備を続けてくれている。

「僕の診察の上では、疲労や傷はあるものの身体に異常は無いと判断する」

診察上では健康体。私の嗅覚でも判断は出来たが、体内におかしなものが入っているようには見えなかったそうだ。レントゲンでも異物は無し。機械が埋め込まれているようなことは無くて安心。

ここからは私や三日月が改めて確認させてもらう。三日月の眼は今現在も暁に何事もないことを物語っているため、すぐに良しとした。次は私。

「え、な、何してるの?」

「すまないが、若葉の嗅覚でいろいろと探させてもらっている。犬に戯れつかれたとでも思ってたほしい」

それで納得してくれているかはさておき、背中側からではあるが、胸骨と腸骨の匂いは優先して嗅いでおいた。

結果、異常な匂いは感知せず、ただの艦娘と結論付けた。私の嗅覚の信用度はさておき、妙な改造はされていないと判断。深海の匂い以外にも、普通なら無いような機械的な匂いも感じなかった。

これにより医学、視覚、嗅覚により暁の無実が証明されたことになる。あとはシロの感覚と姉の靈感だが、おそらく同じようになるだろう。

「すまない。ここは今、いろいろあつて敵に襲撃されているんだ。なるべくチェツクさせてもらっている」

「そ、そう、なのね。うん、仕方ないと思うわ。誰だつてそんな時に来た余所者は疑うもの。暁はレディだから、その辺りは弁えるわ」

レディかどうかはさておき、物分かりがいいのはありがたい。いつ敵が来てもおかしくない状況で、所在不明の艦娘が流れ込んできたら当然調査をする。嫌がられたら黒と見做しても間違いじゃないと思う。

少し時間が経つてから、姉と潜水艦3人が医務室にやってきた。クロと呂500は完全に乗。特に呂500は雷がここにいるから来たというのもある。部屋に入るなり、雷に抱き付いていた。

広くなつたとはいえ、これだけの人数が入ると大分混み合った感じになる。暁も少し困惑していた。特にシロクロ相手だと、怯えたような目に。深海棲艦と共存しているというのには慣れない様子。

「し、深海棲艦……やっぱり驚いちやう……」

「さつきリコを見ただろう。それに、ここには何人かいるとも説明したはずだが」

「そうだけど……戦はずだった人ところ、ね？」

言いたいことはわかるが、ここはそういう場所なのだ。ここに滞在するのは今だけかもしれないが、そうだとしても少し我慢してもらいたい。

先程施設に辿り着いた時にリコと対面して、思い切り怯えていたのを思い出した。ただのイロハ級の深海棲艦ならまだしも、強力な力を持つ姫だ。味方と言われても怖がるのは無理はない。見た感じ練度も低いようだし。

「大所帯になつたのう。わらわからは何も言うことはない」

「憑いていないと」

「うむ。何も憑いておらぬ。あちらの関係者には何かしらあるが、其奴には何も視えぬ。安心していい」

目に見えないものに対しての判定を受け、暁が硬直した。もしかしたら、そういうものが苦手なのかもしれない。

「つ、憑いてるって、お、お化け!？」

「まあ似たような者じゃな。安心せよ、お主には憑いておらぬ」

「そ、そう……レディだから、お化けなんて怖くなんかないわよ!……ないわよ!」

何となくキャラがわかってきた。ここにいるといろいろ驚くことが多いだろうが、慣れれば楽しく感じてもらえるはずだ。今は雷達が側にいれば何とかなるだろう。

続いてシロの感覚的な判定。座っている暁の頭に触れて、いろいろ調べていく。外見には何も出ていないので、まず優先して頭。朝霜や巻雲のようになっていたら大変だ。

「……何もない……かな。同胞のものは入ってないよ」

「お、お化けの次は何なの……」

「深海の因子……って言えばいいかな。何も無いから……心配しなくていい」

シロの確認も入ったことで、ようやく暁は信用されることになる。大淀が今までやってきたことは、暁には施されていない。ここまでやったのだから、されているとしたらさすがに誰かが勘付く。

「よかったねえ。ここなら安全だよ!」

「アウアー」

「ぴゃあっ!?!」

祝福するようにクロと呂500が暁に抱き付いた。雷の姉ということで、2人とも普通以上に歓迎ムード。ずっとここにいるとは限らないし、むしろ曙の時と同じように来栖提督の鎮守府に再配属という流れが自然だが、今だけはここに滞在してもらおうことになるだろう。仲がいい方が良いに決まっている。

「何処に行くか決まるまではここに滞在すればいい。今は大本営が忙しいから判断を仰げないから、数日はいてもらうことになるだろう。部屋は……」

「私のところがいいわ! ろーちゃんは私のベッドと一緒に寝るから、お姉ちゃんが寝るところは大丈夫!」

「ンイイ、アイ」

「ろーちゃんも大歓迎だって！」

雷の方を見る暁。それに対してニツコリ笑顔の雷。記憶は一切無いとしても、姉妹というのは興味深いものなのだろう。私と初めて会った時に、妹になってほしいと言われたほどだ。それが、実の姉が現れてくれたのだからテンションも上がっている。

「暁、それでいいだろうか」

「そうね、うん、妹の部屋なら落ち着けるかも」

今では呂500も同じ制服で姉妹のようなもの。暁がいいのならそれでいい。

「でも雷、暁のことよくわからないのよね」

「うん、でもいいの。お姉ちゃんってというのが憧れだったのよね」

雷の持っている姉妹像がどんなものかはよくわからないが、同じ部屋で寝るとか、たわいないお喋りをするとか、そういうものを望んでいるようだ。

「ろーちゃんが妹みたいなものだし、欲しいもの揃っちゃった！これで時間が解決すれば全部終わりね！」

「ああ、そうだな。話を聞きたいところだが、最低限来栖を呼んでからにしようか。暁、今は休んでくれ」

昼に救助して今まで診察していたことで、もうそろそろ日が暮れるほどの時間になっている。今から来栖提督を呼ぶわけにもいかないため、事情聴取は明日改めて。今は逃走してきた疲れを取ってもらうべきだろう。

話の通り、今日は雷と呂500の部屋に寝泊まりしてもらい、事情聴取が終わり次第、来栖提督と今後を相談。大本営に保護してもらうか、来栖鎮守府に再配属の方向に向かうことになる。

「お姉ちゃん、大丈夫？ 疲れてない？」

「疲れてはいるかな……あと……その、お腹が空いちちゃって……」

少し恥ずかしそうに話すと同時に、腹の音が聞こえた。安心して気が緩んだか。

長々と航行してきた可能性だってある。空腹まで訴えているくらいだから、余程切羽詰まった逃走劇だったのだろう。そういうえば、似

たような状況でここに辿り着いた曙も空腹を訴えていたものだ。あれももう懐かしく感じる。

「あ、夕食の準備しなくちゃ。お腹空いてるなら、その前にちよつとお腹に入れておく?」

「う、うん……つて、雷がご飯作ってるの?」

「そうよ。だってここには他に作れる人がいないんだもの。今は鳳翔さんがいるし、ろーちゃんやみんなが手伝ってくれるからいいけどね」

早速姉妹のような接し方になっている。終始ニコニコしている雷からは、負の感情が一切感じ取れない。心底喜び、楽しんでいるのがわかった。

今の厳しい戦況のことなんて忘れてしまったかのように振る舞い、暁と呂500で仲良くしている姿はとても微笑ましい。荒みかけていた私達の心には、一服の清涼剤となった。

「……がちよつと変わったところなのはわかったわ……」

私も三日月も、頬の痣しかり顔の傷しかり、見ればわかるほど通常と違う。私に至っては戦い方も違う。誰がどう見ても、この施設は普通と違うと思う。

「……にいる人達はみんなそうなの?」

「そうよ。鳳翔さんみたいな出向してる人達は普通だけど、私もほら」服を捲って腹の傷を見せた。それに、記憶が無いと言われれば普通と違うことはわかる。それに、呂500が話せないこともそこに繋がるだろう。

見て聞いてわかったようで、暁は素直に納得した。これ以降、あまり触れてはいけないことであることも理解してくれたようだ。そういうところを無言でわかってくれるところは、真に淑女レディだと思う。振る舞いは子供っぽくても、配慮してくれることの方が嬉しい。

雷と呂500が暁に施設を案内すると医務室から出て行き解散。と、私と三日月と姉だけは少し残るように言われた。おそらく暁のことで話があるのだと思う。

「暁は大淀の下から逃げ延びた艦娘だ。まあその辺りは君達も勘付いているとは思うが」

「あの状況でそう思わない方がおかしいな」

「練度が低いことを考えるにだな……暁はキューブの素材だろう」

嫌なことを思い出した。負の感情を発し、完成品を作り上げていたキューブ。艦娘数名が圧縮されて作り出されたと思われるそれのために、暁はわざわざ建造されたのでは無いかと飛鳥医師は話す。

確かにこんな話は私達にくらいしか出来ない。この施設でも、完成品の腸骨に入っていたものの現物を見たのは、ここに残った者とシロだけ。思い出しても吐き気がする、邪悪な物だった。

「詳しくは明日、来栖と聞くことになるとは思いますが、助かって本当に良かった」

「そうだな……ああなる前に脱出出来たんだな」

ああなっては助けるとかそういうものではない。人の形すら失われ、死しても尚、怨嗟の声をあげ続けるだけのただの装置にされてしまう。人権とかそういうところから逸脱してしまっている。

そこから逃げ出せたというのなら本当に良かった。最悪の事態を免れることが出来たのは、暁の勇気のおかげだ。

「僕としては、当初の曙と同じ流れで行きたいと思っている。雷も喜んでくれるしな」

「そうじゃのう。姉妹というのは心安らぐものじゃ」

私にもここに姉がいるわけだが、同じ場所に姉妹がいるというだけで安心感が違う。なので、なるべく近くにいるてもらいたい。ここから離れるにしても、大本営だと今生の別れになってしまう可能性があるが、来栖鎮守府に再配属してくればまた会うことも出来る。

そのままここにいてもらうというのも考えたが、それは難しい。人や人形であった時の洗脳を解いてここにいる、継ぎ接ぎの無い風雲や姉とは立ち位置が違う。事後経過を見る必要もない。なら、然るべき処置の後、規則にあった流れに乗るのが普通だ。

「先生には事後承諾になってしまうか。まあまずは来栖と一緒に事情聴取だな」

「そうだ、大本営の襲撃はどうなったんだろうか」

今からでも襲撃するという旨の通達を朝に貰っている。時間は大分経っているが、もしかしたら今も戦闘中かもしれない。長い戦いだ。それほどまでに抵抗されている。

襲撃はおそらく、下呂大将の第一水雷戦隊も参加しているはずだ。圧倒的な力を持つ神風型5人でも、大淀と直接対決した時に現れた精鋭の人形相手では多少手こずっていたのを覚えている。あんなのがワンサカ出て来ている可能性も高い。

「連絡は貰っていないから、まだ終わっていないんじゃないだろうか。僕達はその件に関しては気長に待つしかないだろう」

もしかしたら、大本営の襲撃のイザコザに乗じて、暁は脱出してきただのかもしれない。そうだとしたら、今日襲撃で良かった。そうでなければ、今日にでも暁はあの忌々しいキューブの一部にされていたかもしれないのだから。

朝に拠点に襲撃を受け、バタバタしている内にここまで来たのなら話は繋がる。朝からずっとここまで全力で駆け抜けてきたのなら、空腹だって訴えるだろう。

「ともかく、今は普段通りを貫く」

「了解。若葉達も現状維持に努める」

ほんの数日の同居であるものの、雷には楽しんでもらいたい。念願の姉が目の前におり、負の感情が一切無くなるほどに喜んでいるのだ。別れが辛くなるかもしれないが、そこは雷、しっかり乗り越えることが出来るはず。

夢からの忠告

ほんの少しの間だが、施設に滞在することになった暁。その診察も終わり、洗脳や改造の疑いがないこともわかったため、今は施設で身体を休めている。明日、来栖提督による事情聴取が行なわれた後、今後の方針を決める。おそらくは来栖鎮守府への再配属となるだろう。

夕食時もみんなと一緒に食べることになる。当然雷が隣に付き、もう片側には呂500が。すっかり仲のいい姉妹に。呂500は何の繋がりも無いのだが、雷を相手にするように暁に懐いたそうだ。姉の見立てでは、呂500のものけは一段と落ち着いているとのこと。「あたいがあっちにいる時は見てないな。ってことは、ここ1週間で建造されたってことじゃね?」

箸を使うことに悪戦苦闘しながら朝霜が話す。普段使いの艦装が手に入り身体が壊れる心配は無くなったものの、力加減の訓練はどうしても必要であり、これまで何本も箸を折ってきている。最後は堪らず風雲に食べさせてもらおうようだが。

「練度が低いのも頷けるわけか」

「そういうことだな。ああっ!?!」

また箸が折れた。故に、朝霜だけは割り箸を何本も横に置いている。ちくしようにと溜息をついて次の割り箸へ。力加減というのはなかなか難しいようだ。艦装と同じ質の箸でも作ってもらった方がいいのでは。

「あちらの研究室には、艦娘を建造出来る施設があったということですか」

「そりゃあな。人形作るにもドックが必要だし、それなりに普通の鎮守府だぜ? 海沿いに無いだけで」

三日月の質問に朝霜が答えた。やはり今この場で一番詳しいのは朝霜である。

地下通路を通って出撃と言うくらいなのだから、少し奥まったところに建てられた鎮守府なのだろう。出撃はしづらいかもしれないが、深海棲艦からの襲撃も抑えられるという一長一短。

今なら襲撃しづらいという、あちらから見れば最高の、こちらから見れば最悪な立地であることはよくわかった。私達には縁が無さそうではあるが、下呂大将はその辺りも考慮して襲撃しているのだろうか。

「艦装の調査もしたけど、普通の艦娘のものだったよ」

今度はセス。摩耶が訓練している間に、セスが暁の艦装を調査していたらしい。

結果として、何の混じり気もない艦娘の艦装だったそう。外観に改造が加えられているわけでもなく、中に何か仕込まれているわけでもない、真正銘、暁型1番艦暁の艦装で間違いないとのこと。

「アサシモの戦闘用艦装も明日には直るから」

「よっしゃ！　ありがとなセスさん！」

喜ぶのはいいが、勢い余ってまた箸を折る朝霜。これならもうフォークとスプーンで食べた方がいいのでは。

その日の夜、再び明晰夢を見た。彼女との二度目の邂逅である。相変わらず私のことを笑顔で見つめてくる。

『私の力、使いこなせたみたいだね』

「お陰様でな」

どうやら実戦に使ったことが気になって出てきたようである。何処か嬉しそう。

私が駆逐棲姫から力を借りて戦うということは、彼女自身が戦いに参加していると解釈しているようである。自らの手で復讐を遂げることが出来ない分、私の身体を使って願いを叶えるというのが目的のようだ。

「だが、まだまだだ。疲労が大きいし、持続時間が短い」

『それは頑張つてとしか言えないかな。私はここで応援することしか出来ないけど、一番近くで見ているからね』

限りなく近く、限りなく遠い場所からの応援だ。友好的であることがわかっていて、それは活力に変わる。外ならぬ駆逐棲姫が後押ししてくれているのだから、私はその思いを乗せて戦わなくてはいけ

ない。

ここで沈んでいってしまった者達の命もそうだが、私はそれなりに多くのものを背負っている。その中の1人と会話出来ているのはありがたいことだ。

『そうそう、それを言いたくて会いに来たんじゃないんだ』

「と言うと？」

『今日拾った子、気を付けた方がいいよ』

拾ったとなると、当然暁のことになる。充分警戒した上で、診察やら調査も全部やって、満場一致で問題無しと判定したのだが、駆逐棲姫には何か別のものが見えているようだった。

一番近くで見ていると言うだけあり、私の見たこと、体験したことは全て筒抜けであるようだ。暁と一番多く接触していたのは雷と呂500だが、その次は多分私。その分、駆逐棲姫も暁を見ていることになる。

「そうは感じないんだが」

『なんて言えばいいかな、ほんの少しだけ、嫌な感じがしたんだ』

これはまた曖昧な表現。シロの言い方よりもわからない、フワフワした感想。嫌な感じと言われても、どう感じたのかがわからない。

『ムズムズするというか、イガイガするというか。とにかくそんな感じ』

「わからん」

『表現が難しいんだよ。だから、とにかく気を付けてね』

なるほど、こいつは感覚型か。理論的に物事を立てないが、個人技なら大概成功させるような、一種の天才。足柄からの訓練みたいなものだ。やたらと擬音が多い。

「わかった。肝に銘じておく」

『そうしてね。君が壊れちゃったら私が困るからさ』

利用出来るものはしっかりと利用して自分の目的を果たす。まったく、いい性格をしているものだ。頼れるものが私しかないというのもあるだろうが。

私に伝えたいことはそれだけのようだが、以前に夢で出会った時と

は違い、話すだけ話して消えない。ということとは、駆逐棲姫と話す時間はまだあるということ。私は常々疑問に思っていたことを、本人に聞いてみることにした。

「1つ、聞きたいことがある」

『私に興味があるの？ いいよ、何でも聞いてよ』

笑顔のままこちらを見つめてくる。

「お前は一体何者なんだ」

『ご存知、駆逐棲姫だよ。それ以上でもそれ以下でも』

「普通の姫ならこんなこと出来ないんじゃないのか。腕だけになっても意思を残しておくなんて」

少しだけ困ったような顔をするが、笑顔は崩さない。

『私は少し特殊な形で生まれたみたいだね。多分だけど、いろんな艦娘の思いの結晶なんだと思う』

またしてもよくわからない表現。擬音とかを交えるのではなく、詩的な表現というか。

そもそも深海棲艦がどう生まれてくるかはよくわからない。中立区に発生してしまった深海棲艦は、雷の通訳により『何故こんな目に遭わなくてはいけないのか』という人形達の怨念の塊であることがわかった。そこから深海棲艦は、過剰な負の感情が形作って生まれると考えるのが妥当。

だが、この駆逐棲姫は負の感情ではない感情から生まれたのではないかと自分で考察したようだった。だから友好的。シロクロやセス、リコモ、似たような生まれなのかもしれない。

『私はね、多分いろんな子が混ざり合って出来てるんだよ。だから、他と少し違うみたい』

「……自分でもよくわかってないんだな」

『ご名答。自分のことが一番わからないんだ』

いろいろな怨念が混ざり合って形作っているのが深海棲艦なのだから、混ざり合う感情が違って複数人が混ざり合う性質は変わってはいないと思う。だから、それくらいしか言えないのだろう。最後にゴメンねと付け足された。

匂いがわからなくても、これだけはわかる。駆逐棲姫は一切嘘をついていない。私には全て本心で語ってくれている。本当に自分のことがわからないのだ。

腕だけ、眼だけになっても意思が残っており、私や三日月の中に入ってしまったているのも、不可抗力だったようである。意図してやったわけじゃない。

『でも、こうなれたのは良かったと思ってる。君の側で君の行く末を見ているのは、存外に楽しいんだよね。こうやって話せるようになつたし』

「……そうか。なら、映画でも観ているつもりで見守っていてくれ」
『そうさせてもらおうよ』

ニツコリと笑顔で近付いてきた。脚が無いために私の腹ほどにしか背丈が無い。そのため、私が少ししやがむ。

私と同じ痣がある手を差し出してきた。私も前まではよくやっていた、握手である。最近はする相手がいなかったが、駆逐棲姫とはやっておくべきことだ。これからもよろしくという願いを込めて。

『ありがとう。私は君に認めてもらえた。これからも力を貸すよ』

「ああ、改めてよろしく頼む。若葉はお前からの力が無ければ敵に對抗出来ない」

『今度は渡しすぎないように気を付けるよ。だから、若葉も気を付けてね』

ガツチリ握手。そして、笑顔で別れる。これからもこうやって、夢の中で話に来るらしい。この中でしか会えず、誰にも紹介出来ない友人のようなものだ。この存在を知覚できるのは、シルエツトではあるが姉だけ。

しかし、暁に気を付けろとはどういうことだろうか。感覚的過ぎてよくわからない。とはいえ、わざわざ忠告してくれるくらいなのだから、覚えておいた方がいい。

あちらが私を信じてくれているのだから、私もあちらを信じなくては。

いつもの時間に目が覚める。相変わらず三日月はしつかり抱き付いている。だが、今日は少し様子が違った。普段ではおおよそ見せないような笑顔で眠っていた。何かいい夢でも見ているのだろうか。

抱き付かれているために、起こさないように起きることが難しい。時間も時間なので、起きるの覚悟で腕を引き抜いた。同時に三日月が目を覚ます。

「おはよう、三日月」

「おはようございます」

朝の挨拶の時は無表情だったが、夢を思い出したのかすぐに頬が緩んだ。私くらいにしか見せられないような顔な気がする。

「いい夢でも見たのか？」

「私も駆逐棲姫に会ったんです。夢の中で」

なるほど、だから起き抜けから上機嫌だったのか。私の話を聞いてから会ってみたいと何度も言っていたし、念願叶ったわけだ。

だが、私もたった今まで話をしていた。パーツが分かれたことで、駆逐棲姫自身も2人いるという奇異な状態になってしまったのかもしれない。姉もよく似たもののけが憑いていると言っていたことだし。

「若葉もだ。改めてよろしくと、握手をしてきた」

「そうなんですか？ 私は会えた瞬間に抱き付かれましたよ」

「……ん？」

私はそんなことされたことない。そんなことしそうな素振りもない。少し食い違いが起こりかけている。本当に私の会った駆逐棲姫と三日月の会った駆逐棲姫は同じ存在なのかがわからない。

そのため、着替えながらお互いの駆逐棲姫像を認識合わせしてみる。

「姿はおそらく同じだな。髪を片方に結んでいた」

「両脚がありませんでした。あとは……左腕に若葉さんと同じ痣もありました」

それ以外にも外見的特徴を挙げていくが、どれも同じ。特に左腕の痣は間違えようのないもの。駆逐棲姫全てがその痣を持っていると

なると話は別だが、そこは今は良しとする。問題は中身。

「若葉の会った駆逐棲姫は、少し中性的な話し方だった」

「え？ 私の方は少し子供っぽい話し方でしたよ？」

ここで食い違い発生。私の知る駆逐棲姫は、何処か中性的で詩的な表現を使ったりする変わった少女だった。最後まで私の方には近付いて来なかったくらいだし、最後の最後に握手をしたくらいだ。あとは終始笑顔だったくらい。

対して三日月の見た駆逐棲姫は、出会った瞬間抱き付き、犬だった尻尾を振っているほどに喜んでいたという。そして、言いたいことを捲し立てるように言ったかと思えば、また抱き付いてきたとか。私の会っていた駆逐棲姫とはまるで違う。

「……何かが違うな」

「ですね……どういうことでしょう」

外見が同じ別人というのは、艦娘界隈では日常茶飯事のこと。大淀だって敵にも味方にもいるわけだし、私ですら別の場所にいる。2人で食い違うのはあってもおかしくない。

とはいえ、同じ亡骸から取得したパーツが使われている私達なのだから、同じ者が出てくると思っていた。だが現実は何処か違う。

「そちらの駆逐棲姫は何を言っていたんだ？」

「あ……そ、そうです。暁さんには気を付けるといっつぽいと」

これはまた曖昧な言い方。こちらもどう気をつければいいのかはよくわからない言い方だったためどうすればいいかわからないが。

「若葉の方もだ。暁に気を付けると言われた。曖昧では無かったが、表現がよくわからなかった」

「一応共通してるんですね……若葉さんの方が断定なら、信じることにします。言っていることは同じですし」

三日月の方は少し曖昧だが、こちらが同じことを断定して言っているのだから、これは真なる情報として間違いは無いだろう。

「気を付けろと言われても、何を気を付ければいいんだろうか」

「私達で調査して、何事もないことは確認出来ているんですけどね」

私達では見えない何かを操作されている可能性があると、駆逐棲姫

は示唆してくれたのだろう。だからといって、それをどうこうする方が無いのが歯痒い。思い過ごしであってもらいたいものである。

暁の素性

夢で見た駆逐棲姫から、暁に気を付けろと忠告を受けた私、若葉。同じ忠告は三日月も受けており、2人同時のことのため、素直に信じておくにしている。そもそも駆逐棲姫が私のことを信じて話を話してくれているのだから、こちらからも信じなくてはいけないだろう。信頼関係というものはそういうものである。

「暁も手伝ってるのか」

「助けてもらったんだもの。あれよ、『いつしゆくいつぱんのおんぎ』ってやつよ」

「お姉ちゃんに手伝ってもらえるのはすごく嬉しいわ!」

朝のランニングを終え三日月と共に食堂に入ると、朝食の準備風景。

朝食を準備しているのはいつも通り雷。それを手伝っているのが呂500と暁。昨日来たばかりで泊めてもらえた礼をと、雷の手伝いをしているらしい。しかし少し不器用らしく、雷と比べると大分もたもたしている上に危なっかしい。

何というか、姉らしさを出そうとして空回りしているように見えなくもない。人には得手不得手というのがあって、慣れた者に任せるのが一番だと思っただけだ。

「ンイイ?」

「お姉ちゃん、大丈夫? ろーちゃんもちよつと心配してるわ」

「だ、大丈夫よ。暁はお姉ちゃんなんだから」

そう言う割には手元がプルプル震えている。包丁を持たせてはいけないタイプかもしれない。呂500もハラハラしている。

あんな暁にどう気を付けたいのだろう。今の暁は、至って普通で健全な艦娘だ。改めて匂いを調べてみても、やはりこちらに對する小さな敵意すらなく、純粹に雷の役に立とうと頑張る姉でしか無いのだが。

三日月も同じように思っているようだった。暁に疑いをかけてはいるものの、あまりにも普通すぎて疑っていいか迷うほどである。

「……若葉さん」

「いや、まだわからない。今は様子を見よう」

だが、わざわざ私達の夢に出て来てまで気を付けろと言っているのだ。私達が何も感知が出来なくなつて、何かされている可能性は普通にある。何をされているかは皆目見当がつかないが。

暁がいないタイミングでそれとなく雷や呂500にも話しておき、一番身近なところで監視してもらうのが一番いいか。

本日は朝から来栖提督がやってくる。理由は勿論、暁からの事情聴取である。

下呂大将からの連絡は、結局昨日中には来ず、今もまだである。大淀の拠点襲撃が思いの外手こずっているのでは無いかと思われる。朝霜の証言からして、少し奥まつたところに建てられており、艦娘が戦闘するのは難しいとのこと。歴戦の大将といえど、拠点攻略というのは難易度が高い。

私はいつものように事情聴取に相席。嘘発見器の能力は相変わらず便利である。駆逐棲姫に夢の中で暁に気を付けろと言われたため、監視も込みでこの場に居させてもらっている。

「曙に続いて2人目かい。よく脱出出来たもんだぜエ」

一晩眠つたことで体調が戻つた暁だったが、来栖提督を目の当たりにして少し怯えていた。人相の悪さがまた足を引つ張っていた。後ろで鳳翔がクスクス笑っていたが、これもいつものこと。

事情聴取は念のため医務室で執り行われた。話している内に体調が悪くなつても困るし、そういうことをやる場所というのがそんなにないというのもある。

相席は私の他に、来栖提督の秘書艦である鳳翔と飛鳥医師。本当に何かあつてからでは遅いので、艦装を装備していないにしろ護衛は必要。

当然、私が夢で駆逐棲姫から聞いたことは暁を除く全員に伝えてある。この場にいる者には事前に私が、それ以外には今三日月が。暁に不信感を与えないように内密に事を進めており、何事も無ければ御の

字。とにかく、暁の身に何か起きている可能性を探る。

「んじやア、始めるぜエ。お前さん、ここに来るまでに何があった。簡単でいいから教えてくれねエか。建造されたの自体がつい最近だろうから、生まれてから今まででいいぜエ」

何処から来たかなどは考えるまでもない。東から来たのだから、大淀の拠点からだ。そうなるに至った経緯が知りたい。生まれてから今まで、どのように過ごしてきたか。それがわかればある程度は絞れる。

来栖提督が真正面に座り完全に萎縮したようだが、暁はポツリポツリと話し始める。

「暁はつい最近……5日前くらいに建造されたばかりなの。暁以外にも4人建造されてた。その時は何かおかしなところに建ってる鎮守府だなんて思ったくらいだったの。海が近くに無かったから」

朝霜の言っていた通りだ。海沿いに無い、少し変わった鎮守府。地下通路からの出撃というのは珍しい部類だろう。それが何処の誰が持ち主なのかは知らないが、とにかく今の大淀の拠点で間違いない。「最初は中に用意されてた訓練施設？みたいなところで訓練してて、ある程度練度が上がったら実戦なのかなって、みんな話をしたの」

「そういう鎮守府もあるな。中じゃ無エが、俺んトコもそういう方針だ」

「でもね、暁達よりも前からいた艦娘が何人か、突然いなくなっただの。実験台になったと考えるのが濃厚。姿形が消えて無くなるとなると、どうされたかは想像したくない。」

「出撃したとも聞いてないし、そうだったとしても沈んじやったなら話題に上がるでしょ。でもそういうのも何も無くて……怖くなって、この鎮守府は何かおかしいって話になったの」

「で、話し合った末に、意を決して逃げるってなったわけか」

「ええ。でも今度はどうやって逃げようって話になって……そしたら、昨日鎮守府が凄くバタバタ出したから、今だって思って、みんなで鎮守府から逃げたの」

下呂大将達の襲撃のことか。つまり、暁はドサクサに紛れてその鎮守府から脱走したわけだ。今だと感じて咄嗟に逃げ出せたというのは、曙と同様にとっても機転を利かせた行為。子供っぽいが頭は回る。

だが、今の話を聞いていると疑問点が1つ。今まで逃げるかどうか相談していた仲間というのは何処に行った。一緒に逃げ出せたのなら、暁と一緒にいてもおかしくないだろう。だが、私はその姿を見ていない。それは来栖提督も思ったらしく、すぐに聞いたです。

「それを一緒に話していたっつー仲間はどうなったんだ」

「最初は一緒だったけど……半分も行かないくらいからあの追手に追われ始めて……みんな死に物狂いで逃げてたからはぐれちゃって……どうなったかわからないわ」

話していく内にどんどん落ち込んでいく。どれだけの人形を追手に差し向けたかはわからないが、少なくとも暁1人に1部隊がいた。話していた仲間と一緒に建造された4人だというのなら、うまく引き付けたのか、各個撃破するために手分けしたのかは定かではない。

しかし、襲撃中にそれだけの人員を割けるのだろうか。毎度毎度相当な人数の人形が攻め込んでくるため、無理ではないかもしれないが、それにしておかしな話である。だが、暁からはこちらを騙そうとするような匂いはしない。

「よく頑張ったなあ。押し潰されてもおかしくねエところを無傷でここまで来るとアな」

「本当に必死で……でも、向こうも暁を傷付けないようにしてたみたいな。だからあまり撃つてこなかったというか……」

逃走した者を無傷で捕らえるつもりだったのかもしれない。理由はよくわからないが、キューブにするには無傷でないといけないとかあるのだろうか。少なくとも、あの追手は暁をなるべく無傷で捕らえ、拠点に連れて帰るつもりだったようだ。

ならば、あの人形はリミッターを外していても拠点に戻れるくらいは耐久性があるのか。暁の救助を優先して撤退を許したが、命を落としていないのかもしれない。

「よおくわかった。お前さん、なかなか筋があるじゃねエか。よけれ

ば、うちの鎮守府に来ねエか？」

「えっ、えっ？」

「来栖、このタイミングでスカウトはどうかと思うんだが」

久しぶりに見た、来栖提督のスカウト。曙にもやったのだから、暁にやらない理由はないか。その暁は戸惑ってしまい、その時には回答できず、保留とした。そういうことはすぐには決められないだろう。

曙の時は大きく体力を消耗していたために完治するのを待ったが、暁の場合はどうするかを自分で決めてもらうため。それならそれでいい。関わりたくないにしても、自分の手で決着を付けるにしても、今なら何処でも出来る。なら決定権は暁にしか無い。

「来たくなったらいつでも来てくれて構わねエからな。よく考えてくれや」

「う、うん、そうする」

雷も喜んでいるし、ここに滞在してくれても一向に構わないだろう。部屋数がそろそろ危険ではあるが。

今はゴタゴタしているし、最低限下呂大将の拠点襲撃が終わってから結論を出した方がいいかもしれない。事情聴取中も連絡を待ってはいるのだが、やはりまだ連絡が無い辺り、相当苦戦しているようである。

「俺から聴けるのはこれくれエだ。こつからは世間話みてエなもんだが、暁、体調はどうだア？」

「元氣よ。朝も雷を手伝ってあげたの。お姉ちゃんだし、それくらいレディのたちなみ、嗜みだもの」

思い切り噛んだが、そこは名誉のためスルー。

「1日で回復するたア大したもんだ。ここの曙みてエに、さんざんば使い倒された後に逃げてきたわけじゃ無エからかねエ」

「それはあるだろう。曙と違い、酷使の跡も栄養失調も無いからな。艦娘なら耐久力が段違いだ」

曙の名前が出て、暁が首を傾げる。暁と同じように、自分の鎮守府から逃げてきた艦娘がここにいると伝えると、妙な親近感を持った模様。

「ここはどうぞよ。居心地は」

「妹がいるから、とても過ごしやすいわ。昨日も寝るまで話したの」
姉妹がいるということ、アウエー感は薄れているようだった。むしろ雷がとても積極的に暁と付き合っているようにも思えた。

あるべき姉妹の形として、雷が憧れていたことを全部やろうとしているらしい。寝る前に姉とたわいもないお喋りをして、幸せの中眠りにつく。ここ最近重いことも多かったし、雷は雷で何かしらストレスを感じていたかもしれない。

「逆に、暁から何かこちらに聞きたいことは無エか？」

「えっと……今は無い、かしら。わからないことがあつたらその時に聞いわ」

「よよし、なら俺からの話はこれでおしまいだ」

最後に暁の頭を撫でた。鷲掴みにするように見えて驚いたものの、撫でられたら今度は恥ずかしげに目を逸らす。

「結論はすぐに出さなくていい。時間はあるのだから、これからどうしたいかをゆっくり考えてくれ。こちらはこちらで道を示そう」

少しの間は暁は休息の時とされた。何処に行くにしても、上の判断を仰ぐ必要はある。今はまず、下呂大将の連絡を待つべき。そこから次の道を決めていく方がいい。

暁は戦闘訓練などはせず、施設の『患者』として数日をここで過ごすことになる。まずは曙の時と同じように3日ほど猶予を与えらされた。

事情聴取が終わり、暁は医務室から退室。部屋の外で待っていた雷と呂500と合流したようだ。

残された私達は改めて、暁のことについて話し合い。本人がいない場でしか話せないことは多い。

「若葉、今までの話を聞いた感じ、どうだった」

「何も無い。若葉の嗅覚には何も反応しなかった」

ここまで話し、嘘をついている素振りは一つも感じなかった。こちらを謀っているというのなら、少しくらいは違う匂いがするものであ

るが、暁からは何も変わった匂いはしなかった。仲間のことを話すときは心底辛そうにしているのもわかった。

駆逐棲姫の言葉が無ければ、今までの話は全て完全に信じ込んでいるだろう。人形達が暁を無傷で捕まえようとしていたことだけは少し引つかかるものはあるが、おおよそ信憑性もある話だ。襲撃のタイミングも合っている。

「心理学は専門外だが、僕もあれは本心からの話だと思う。騙る素振りは見えなかった」

「だよなア。俺にもありや命からがら逃げ出したようにしか見えなかったぜエ」

誰がどう見ても、疑いようの無いほどに暁は何もない。話し方、態度、それに今までの態度からは、敵対の意思は1mmたりとも感じられなかった。

「今は現状維持としよう。気をつけるには越したことはないから、常に動向には気を向けておくこと」

「それがいいな。もしかしたら何かの弾みでいきなり敵対、なんてこともあるかもしれねエ」

その辺りは雷と呂500に頼み、普段と同じように生活してもらいつつ、軽めに監視してもらおうというのがいいだろう。

私達は暁を信じていないわけではない。疑心暗鬼に囚われているだけかもしれない。だが、念には念を入れておかないと、敵の思う壺である。ただでさえ、今のようは無実のものに混乱させられている事態が敵の思う壺の可能性もあるのだが。

より高みへ

暁への事情聴取が終わった後、ようやく下呂大将から連絡があった。襲撃開始から丸一日経つての連絡であり、電話越しの下呂大将の声は疲れていたものの、大惨事にはなっていないようだった。

その連絡内容をみんなに伝えるべく、昼食前に全員集合。今回は事が事のため、巻雲も布団を被った状態で参加。その姿を初めて見る暁はギョツとしていた。

「来栖がここにいるタイミングで良かった。纏めて話が聞けたからな」

「おう。大将が無事で良かったぜエ」

「先生が傷を負ったため、手短に話してくれた。詳細は追って連絡が来るだろう。今からそれを皆に伝えさせてもらう」

安否確認が出来なかったことが一番不安だったが、それが出来たことで一つ、肩の荷が下りた。誰も死んでいないというのが一番の戦果である。

しかし、重傷とはいかなかったものの、下呂大将も怪我をしている様子。今は鎮守府で治療中だそうだ。

本来なら、艦娘が出撃するときは提督は鎮守府に残り、偵察機や通信で現場の状況を見ながら指揮を執る。だが、今回は下呂大将は現場まで足を運び、直に戦況を目で見ながら直接指揮を執ったらしい。下呂大将はこういう戦い方を度々やっているらしく、戦果が著しく高くなるがその反面本人が危機に晒されることになるため、諸刃の剣。

だが、今回は下呂大将の戦い方が正解だった。当たり前のように通信妨害がされており、鎮守府からの指揮が出来ないように細工されていたらしい。秘密主義もここまで徹底されているなら感心する。

もし下呂大将が現場にいない状態だったら、艦娘の独断で戦わなくてはいけなくなり、混乱を招いていたかもしれない。いくらあの阿武隈でも、あの場を取り纏めることは困難だろう。ただでさえ奔放な神風型がしつちやかめつちやかになること間違いなし。

「大淀は残念ながら姿を眩ましていた。それと、朝霜から聞いていた

完成品達の一部もだ」

「何でも、駆逐艦の完成品にクソほど苦戦させられたらしい」

やはり完成品も量産されていたようだ。私達が朝霜と巻雲を命を取らず、ほとんど傷を負わずに撃破出来たのは運が良かっただけなのかもしれない。それか、完成と銘打ちつつもさらに進化しているか。そういう意味では朝霜と巻雲も実験段階だったわけだ。

しかし、完成品がそれだけいるということは、キューブのために尊厳すらも潰された艦娘が何人もいるということ。ここ数日だけで、何十人の命が蔑ろにされていると思うと気分が悪い。

「お前らの知ってる一水戦以外にも精鋭が殲滅に当たったが、互角に戦われた挙句に大破者続出だったそうだ。あとはだなア……どうにもならず命を奪うことになったらしい」

正確には、助けようと思っただら自害したそうだ。下呂大將は、大淀以外は救うつもりで襲撃をかけている。人形も姫も完成品も、全員大淀の被害者だからだ。

しかし、その努力も虚しく、拠点襲撃で敵側で生き残ったものは0。壊滅はさせたが、本命がその場にいなかったという残念な結果に終わった。

こうなると、また行方を探すところから始まる。振り出しに戻ったというわけでは無いが、姿を見せないとなると先は長い。しかし、追い詰めているのは確かだ。

「まだ戦いは終わってねエってことだ。気に入らねエがな」

「1つわかったのは、完成品は敗北すると自害するということだ。朝霜と巻雲がそんなことにならなくて本当に良かった」

視界の端で布団の塊がブルブル震えていたのがわかった。朝霜も嫌そうな顔。そのシステムが既に完成していたら、今頃2人は笑顔で死んでいたことだろう。洗脳されている時なら、主人のために喜んで命を捨てただろうが、今は違う。自分をハメた相手のために死ぬだなんて反吐が出る行為だ。

そうしないためには、完成品の意識を飛ばすことが重要になるだろう。巻雲はリコが、朝霜は曙が意識を飛ばしたため、自害など考える

余裕も与えなかったのが良かったようである。

「今わかった情報は以上。僕達は今後も基本的には変わらないが、またここを襲撃してくる可能性は高い。油断せずに行こう」

まだ生きているというのなら、ここはまた狙われるだろう。私達の戦いはまだ終わらない。一息つける時間は、まだまだ来ない。

事情聴取と下呂大将の安否がわかったことで、来栖提督は帰投。そこからはいつも通りの午後を過ごすことになる。

あの神風すら苦戦を強いられた完成品相手に私達だけで何処まで出来るかはわからないが、勝たなければ意味が無いのだ。弱気になっ
ていては勝てるものも勝てない。恐怖を捨て、次に歩き出さなければ
いけない。

「アサシモ、約束のものが完成したよ」

「お、マジか！ 早速頼むよ！」

訓練の前に朝霜の艦装が完成したということでお披露目。リミッターの問題やキューブが取り除かれていることで、あの頃よりはスベックダウンしているものの、単純なパワーだけなら私や曙よりも上。

武装も完備され、以前から使っていた棍棒の他に主砲も完備された。とはいえ主兵装は近接武器。私と同じように砲撃は緊急時。朝霜の主砲は艦装に引っ掛けられ、いざという時は後ろ手で握れるように設置された。

「かぁーっ！ やっぱあるのと無いのとでは違うねぇ！」

「一応、前のを修理する形にはした。使い慣れてると思ったから」

「ありがてえ！」

早速装備して棍棒を振るう。あの時とほとんど同じくらい
の速度でブンブンと振り回されるそれは、一撃必殺の威力をそのままに
していた。攻撃からスベックダウンはわからないくらいだ。

完成品相手でも救出が目的ではあるため、その攻撃により死に追
いやってしまっ
てはいけないのだが、これくらい
いしないとむしろ攻撃すら通らないというインチキっぷりなので、これでも足りないのでは

思えるほど。

「うっし、誰か慣らしに付き合ってくれよ」

「なら若葉が相手をしよう。あの時は曙に頼んでいたからな」

「いいぜ。あたかもお前とは再戦したかったんだよ」

さすがに棍棒そのままでも困るので、ダミーのゴム棒で戦ってもらうことにした。私も拳銃は水鉄砲にし、ナイフもダミーに。演習用に切り替えたそれのなら、お互いに傷付くこともないだろう。

それに、リミッター解除の演習ではこれ以上ないほどの強敵だ。これで朝霜に敵うとわかれば、今以上に自信に繋がる。

「勿論1対1タイマンだよな」

「ああ、横槍無しだ。若葉も今、何処まで動けるかを知りたい」

この演習は見るだけでも勉強になると、他の訓練が全て中断されて全員が観客に徹してくる始末だった。見世物みたいになってしまいが、それはそれで。娯楽が少ないこの施設では、こんな息抜きもそれなりに重要である。

いつもとは違い少し沖へ行き、向かい合った。本来ならこんなに近くではないだろうが、お互いに近接戦闘を行なうのだからこれがベストな位置。

戦闘スタイルは同じと見ていい。スピードタイプで、高速で近付いて一撃を入れる。ただし、その一撃が朝霜の方が異常に重い。私はそういう意味では朝霜に勝っている部分は無いかもしれない。

「よおーし、んじゃあやろうぜー!」

朝霜が一気に近付いてきたため、即座に私もリミッターを外した。人形との戦いでも実感があつたが、今までの訓練の成果がしっかり出ている。スムーズにリミッターが外れ、負担を感じることなく力が湧き上がる。フルスロットルになるまでの時間もすぐだ。

「おらあー!」

「っ……………」

速いが大振りなため、回避は比較的簡単。さらにはスペックダウンはスピードに出ている。充分速いのだが、リミッターを外した状態で

見ていると、完成品の時と比べて対処がしやすいスピードになっていた。

その振り下ろしはナイフで受けることなく回避したが、すぐに次の攻撃が飛んできた。連打のスピードは変わらずと。

「はっはあー！ どうしたどうしたあー！」

心底楽しそうに棍棒を振るう。洗脳されていようがまいが、戦闘狂の気質は元から持っているようである。

「落ち着け……！」

対する私は、朝霜よりも速度が出ることを活かして、回避しつつ瞬時に背後を取った。そこから斬り付けるのではなく拳銃で、さらには死角から狙った一撃を繰り出す。

しかし、それを勘で察知したのか、引き金を引く前に振り返りながら拳銃付きナイフを弾き飛ばそうと棍棒を振るってきた。反応速度は以前のままか。

「……は衰えてないぜえー！」

「だな。流石だよ」

バックステップで回避し、間合いを取り直す。が、それすらも見越してすぐに突っ込んできた。

私は犬のようだと言われたが、朝霜も猛獣みたいな戦い方。近接武器持ちはこうなってしまうのだろうか。曙はしなやかに戦うけども。「く……！」

朝霜の攻撃は、受けられるが重すぎて押し留めるのがギリギリ。だからこそその拳銃付きである。横薙ぎにされた棍棒を必死に受けた後、それを掴む手に向けて射撃。

「痛えっ!？」

「本物なら手が無くなってるぞー！」

少しだけグリップが緩んだ。その隙に私も思い切り振り、棍棒を弾き飛ばす。

「あっ、てめっ」

「取らせないぞ」

さらにそこから先に動き、棍棒の前へ。武器さえ失えば私の方が間

合いも広く攻撃力もある。

だが、瞬間的にキナ臭い匂いを感じた。早速手に入れた新たな武器を使おうと、後ろに手を伸ばし、既に私の眉間に狙いを定めていた。事前に当然水鉄砲に差し替えてあるものの、当たれば当然痛い。当たるわけにはいかないと咄嗟に上体を逸らして砲撃を回避。

「マジかよ！ 今の避けんのか！」

「殺気が匂ったぞ」

「そーいやそーうだった！」

だが、回避したことで棍棒への妨害が疎かになり、武器を取り返された。再びあの猛攻が始まってしまう。

一進一退の攻防。私が攻めれば朝霜は回避し、それに合わせて攻撃してくるため私がそれを避ける。その繰り返しだが、毎回違った角度や威力をお互いに織り交ぜながらの戦いになる。

朝霜との攻防は気分が昂揚した。命の奪い合いでないところまで楽しく感じるかと思えるほどだった。鳳翔や神風を相手にするのはまた違った昂揚感である。

「そろそろ時間切れだろ！」

「まだまだ」

指摘され強がったが、リミッター解除の限界は刻一刻と近付いてきている。外すのがスムーズに出来るようになったので、当然掛け直すのもスムーズに出来るようになった。一瞬のリミッター解除という芸当だって出来るようにしている。

だが、朝霜は単純に強い。掛け直す暇が無い。よって、どんどん消耗だけさせられていく。以前よりは確実に効果時間は延びているが、このままでは意味がない。

私のことを知っているのなら、耐えて時間切れを待つという手段に出てこられるということが理解出来た。だからこそリミッターの掛け直しというのが必要なのだが、そこはまだまだ精進が足りないということか。

「っしー」

ならばとここで打って出る。大きく振り下ろされた棍棒をナイフ

で受け、先程と同じように掴む手を射撃。

「同じ轍は踏まねえ！」

一度やったことなのだから、当然回避してくる。即座に腕を引き、射撃を回避しつつ再度振り下ろし。

勿論それをやらせるために撃った。朝霜は本当に大振りのため、このタイミングが一番大きな隙だ。だからこそ、私は突撃した。つまり体当たり。

「マジか!？」

振り下ろしは不発。胴にモロに突っ込んだお陰で朝霜は体勢を崩す。私も体勢を崩すが、さらに押し込むように倒れ込み、結果的にマウントポジション。リミッターを掛け直した後に、ナイフを喉元に突き立てる。

「終わりでもいいか」

もう倒れるギリギリくらいだったのだろう。猛烈に身体にガタが来るが、動けないほどではない。

「本当だったらもう少し粘るけどな、演習だしな、臆装の慣らしだしな、これくらいで勘弁してやんよ」

「ああ、勘弁してくれ。若葉は割と限界が近い」

お互いにニヤツと笑い、朝霜を起き上がらせた。軽くふらついたがまだ大丈夫。だが薬湯は欲しいところ。

なんとか勝利といけたものの、辛勝に近い。さらには朝霜が全盛期よりもスペックダウンしているからこれで済んでいるだけであり、敵対しているときならやはり、1対1では勝てていなかっただろう。

この訓練は定期的に行なっていきたいと思った。リミッターの制御がやりやすくなったのだから、次は実戦訓練だ。幸いここには相手をしてくれる者が沢山いる。

この施設を守るため、楽しく生きるため、より高みを目指していきたい。

そこにいたのは

下呂大将の安否がわかったのは良かったのだが、怪我を負ってしまったこともわかった。世話になった第一水雷戦隊も中破や大破が多く、拠点は制圧出来たものの辛勝。さらには、大淀と完成品の一部は姿まで眩ましていたという。

今この状態で考えられることは、大本営からの支援が少しの間受けられないこと。ある意味、大淀側にとっては絶好の襲撃タイミングである。

とはいえ、あちらも今までの拠点が失われたのだから、昨日の今日でそうそう攻め込んでくるとは思えない。どうせ攻め込むならあちらも、腰を落ち着けてからな気はするが、チャンスを逃す理由もない。「これから安全に毎日を過ごすなら、夜間警備も必要だとは思う。奴らは夜襲が得意だからな」

夕食の時間に飛鳥医師が話す。これまでに昼に攻め込んだ例は極めて少ない。航空戦力を深海棲艦に夜を警戒することが急務である。

今なら施設にも人員は多い。何人かを夜間警備にあて、眠っている間に全滅するという最悪の事態を避けたいところである。

「若葉は24時間働けるぞ」

「僕がそういうのを許さないことはわかっているな？」

徹夜1回くらいなら全く問題ないのだが、それを許してはくれない。どうせするのなら、一度仮眠を取ることが必要。最大のパフォーマンスを発揮するのなら、夕食後すぐに眠り、夜中に交代というのがベストか。

今までの夜襲は、全員が寝静まっている丑三つ時に施設が攻撃されることから始まっていた。夜ならば毎度その時間であることは確定としていいだろう。その時間に数人でもいいから待ち構えていれば、施設が突然攻撃されて大惨事ということは多少は抑えられる。

「今晚から当番制としたい。鳳翔、お願いしていいだろうか」

「駆逐隊で持ち回りを決めたいと思います」

飛鳥医師は提督ではないので、こういうことの作戦立案能力は無いと言っても過言ではないだろう。そのため、この中でも秘書艦としても経験が長い鳳翔にその辺りを決めてもらうことに。

いつもの近海警備と同じように駆逐隊単位でのローテになるようである。今戦力として難しい暁と巻雲はこのローテには含まれない。

「私と羽黒が引つ張るわ。駆逐隊だけでは辛いでしょう」

「そうしてもらえるとありがたいですね。2人もローテーションですね」

足柄か羽黒のどちらかと、駆逐隊1つという組み合わせでの夜間警備となる。

初日は九二駆が夜間警備の当番。引率は足柄。そのため、夕食後にすぐに眠っていた。別に初めてというわけではないのだが、今までにない強敵が来る可能性があるということ、緊張感が高まっている。

なんでも施設が修復された際、施設内に警報を設置されていたらしく、それを使う時がきたようだ。今日教えられるまでそのシステムがあることすら知らなかった程ではあるが。

案の定と言うべきか、真夜中に施設内に警報が鳴り響いた。突然の轟音に、私、若葉は飛び起きてしまった。隣の三日月も驚いてベッドから跳ね上がったしまうほどである。

「なっ、なにになに!?!」

「敵襲ってことだろう! 三日月、準備しろ!」

こうなってもいいように着替えは万全に用意しておいたため、すぐに着替えて工廠に向かった。タイツを穿くのに手間取ってしまうため、次からはその辺りは簡略化しよう。三日月には申し訳ないが、すぐに出られないことの方が問題だ。次なんてものがあつてほしくないのだが。

工廠に到着すると、おおよそ半分くらいが集まっていた。私達の後からも続々と集まってきている。

隅では飛鳥医師が戦場にいる足柄と通信をしており、戦況を逐一確認していたため、艀装を装備しながら尋ねる。

「数は！」

「2人だ！ 人形も連れてきていないらしい！」

だが、それが誰かは余裕がなくてこちらに伝わっていないらしい。警報はなったものの、通信が途切れ途切れになってしまっているようだ。

たった2人だけの襲撃でも足柄と九二駆が苦戦しているため、早急に援軍として出撃しなくてはいけない。だが、戦闘音は施設にいる私達にも聞こえるほどに近付いてきていた。外には5人いるはずだが、どンドン押されている。

「すぐに出る！ 五三駆揃ってるか！」

「雷が手間取ってる！ 先に出るわよ！」

雷は暁の件があるため、少し出遅れてしまっていた。

と、次の瞬間、大きな物体が工廠に飛び込んできて大きな水飛沫を上げた。その物体は、足柄だった。

「ちつくしょう……なんて出力よ……！」

ボロボロになりながらも、まだ戦意を失っていない足柄。艦装に備えつけられた主砲はアームの部分から捻じ切られ、魚雷発射管すら破壊されているほど。何をされたらそこまで破壊され、戦場からここまです吹っ飛ばされてくるのか。足柄でこれなら、姉達は大丈夫なのだろうか。

「こんな場所だったんですね。飛鳥先生の施設というのは」

知った声があった。急激に左腕が疼き、頭が沸騰しそうなほどに熱量が上がる。リミッターは外さないようにしているが、怒りで理性が焼き切れそうになる。

そこにいたのは、大淀。

その隣にいた眼鏡の女性が、血だらけになった姉をこちらに放ってきた。死んではいけないようだが、あれでは重傷だ。空飛ぶ主砲も破壊され、主機すらも破壊され、両腕の骨が折られているようだった。すぐに治療しないと後遺症が残るレベル。

「姉さん……!?!」

「一番抵抗してきたので、申し訳ないですが痛めつけさせてもらいま

した。でも仕方ないでしょう。抵抗してきたんですから」

眼鏡を指先で上げながら、大淀ではない方の眼鏡がこちらを見下すように睨み付けてきた。まだ遠いので少し匂いはわかりづらいが、完成品の匂いは漂ってきている。

姉はこうなつてしまつたが、残り3人はどうなつた。まさか、沈んでしまつたなんてことは……。

「多分向こうにいる！ 私達で回収してくるから！」

クロが先導し、シロと共に海中に飛び込んだ。それに関しては大淀ももう1人も追うようなことはしない。戦つた九二駆にはもう興味が無いようだった。それ以上に興味があるものが目の前に現れたからという雰囲気。

大淀は私しか見ていないし、もう1人はポキポキと手の指を鳴らしながら、キョロキョロと工廠内を観察していた。あの仕草からして、姉をあそこまで痛めつけたのも、足柄を吹っ飛ばしたのも、あの眼鏡が素手でやったということなのかもしれない。

「大淀さん、全部壊していいんですよ。」

「いえいえ、まだ壊さなくていいですよ。艦娘にも深海棲艦にも使道はありますから」

私達のことを材料にしか見ていない。特に私は極上の材料とでも思っているのだろうか。舐め回すように見ているのは頷き、楽しそうに微笑む。

「まだそこまでは行けていませんねえ。おや、三日月さんまでその域に行っているじゃないですか」

大淀の匂いは前から変わっていない。いや、より濃度が上がっているような匂い。本当に完全に混ざり合っているような、混沌とした匂いである。

自分も実験材料にしているのだろうか。

「どうすればそうなるんでしょう。私もそれなりに深海のものを取り込んではいらんですけどね。怒り……負の感情でしょうか。私ではまだまだ足りないんですかね」

「知るか」

「貴女達を解剖でもしたらわかりますかね？　なら、なるべく生かして捕らえたいところです。若葉さんと三日月さんは残しておきましようか」

あくまでもこちらを嘗めているのはよくわかった。自分ならこの施設くらい簡単に破壊できると言わんばかりの自信。事実、出来てしまうのが困ったものだが。

「何をしに来た」

「そうですね、お引越しのご挨拶を。残念なことに拠点を潰されてしまいましたから、新しい場所に移動しました。今頃、他の皆さんが片付けをしてくれているでしょう」

ふざけている。匂いはい向に変わらず、こちらをおちよくっている匂い。常に私達を陥れようとしている悪意を感じるため、真偽が問いつらい。息をするように嘘を吐く大淀には、心理的な匂いでの判断がとても難しい。

「実験材料が大方壊されてしまったので、補充に来ました。ここは良質で興味深い材料が多いです。喜んでください、基本的には殺しませんからね。あ、でも若葉さんと三日月さん以外は生死問わずですけど。自分の目で見たかったので私自身で来てしまいましたが、これは来て正解でしたね」

相変わらず気に入らない笑みを浮かべたまま。ナイフを握る手がギリツと音を立てた。

そうこうしている内に、工廠に全員揃った。艤装の装備も終わる。トラウマに苛まれている巻雲も、今だけは工廠に来ていた。自分の血塗れの身体にも我慢して、最低限ここから逃げ出せるように。念のため朝霜が側にいるが、艤装を装備しておらず顔色も悪い。

「おや、貴女は大本営の襲撃中に逃げ出した暁さんですね」

「ひっ!？」

「お姉ちゃんは私が守るから!」

そして暁もここに。施設を守るためと艤装を装備したものの、逃げ出した場所の者を目の当たりにして、手足が震えてしまっていた。そこらには雷が側にいる。

大淀の言い分から、事情聴取の時の暁の言葉は真実だった……とはまだ言いづらい。

「……ここでもうお出ましかよ」

「摩耶？」

「あいつが鳥海だ。アタシの妹のな」

姉を放り投げた眼鏡の女が鳥海。摩耶の双子の妹。名前を呼ばれたことで鳥海が反応した。コメカミに装備された探照灯がチカチカと点滅している。

「あら、摩耶。そういえばここにいるんだったわね」

「おう。お前は……最悪だな。こんな形で会いたくなかったぜ」

心底嫌そうに溜息を吐く。

その鳥海の原型は知らないが、少なくとも艤装は深海のイメージが強く変質しているのはわかる。主砲も装備はしているが、基本は素手での攻撃をしているように見える。今の朝霜と同じような両用と見ていいか。

「アタシはお前を止めなくちゃいけねえ。ゴミみたいな実験でクソみたいな身体にされちまってんのはわかってる。絶対に救ってやるからよ」

「喧嘩っ早いのは何処の摩耶も同じよね。それに単純。もう少し考えて動かなくちゃダメよ」

表情は変わらず、摩耶を睨み付けている。相変わらず探照灯はチカチカしているが、何故だかそれが不審に思えた。点いたら消えたりを繰り返し、時々その間隔が変化したり。まるでモールス信号のような点滅。

そこで嫌なことに気付いた。大淀の悪意の匂いが強くて、策略が読みづらかった。ここに来たのは、それが狙いだったのか。

すぐに振り向き、叫ぼうとした瞬間、先手を取られて鳥海が一言。「やれ」

瞬間、暁が雷の頭を撃ち抜いた。

そのまま主砲を飛鳥医師の方に向けたのがわかったため、暁を止めるべくリミッターを外そうとしたが、その前に朝霜が動いていた。随時私がリミッターを外しているようなものであり、比較的近かった上に、外す僅かな時間すら必要がないので、当然朝霜の方が先に接近出来ている。

「おい、テメエ！ 何やってんだオラア！」

飛鳥医師に向けて主砲が放たれたが、ギリギリのところ朝霜が主砲を弾き飛ばしたおかげで僅かに射軸がズレ、直撃は免れた。だが、掠める程度であつても、人間である飛鳥医師には強烈な衝撃になつてしまう。直撃でなくても死んでしまうほどだ。

「つぐう……！」

それでも、飛鳥医師は生き残つていてくれた。掠めた腕を押さえてはいるものの、命に別状は無さそうだ。安心はしたものの、何故そうなったのかはわからず。その答えは摩耶が答えてくれた。

「ありや水鉄砲だ！ 雷も死んじやいねえ！」

三日月から話を聞き、暁の主砲は摩耶が先んじて細工をしていた。本人には伝えず。もし何事もないとしても、練度の低い暁が戦闘に参加することは無いと考えて、水鉄砲に変えておいたようだ。

おかげで雷は気絶しているだけで済んでいる。脳が急激に揺さぶられたことによる脳震盪。それ以上に、守っていたはずの実の姉に裏切られ、真後ろから殺意を以て撃たれたことがショックで意識を手放しているように見える。

「おやおやおや、まさか暁さんがこちら側であることに気付いていましたか」

「……忠告が無かったら信じてただろうな」

駆逐棲姫の忠告が無ければ、暁の持つ主砲の弾も防衛のために全て実弾だっただろう。そうだったとしたら、今頃雷は命を失っていた。飛鳥医師も重傷、もしくは死。最悪な状態に一直線だった。

左腕が疼く。そうまでして私達を混乱させ、飛鳥医師に手をかけようとしていた大淀が心の底から許せない。そして、倒れ伏した姉の姿で私の怒りは限界を越えようとしている。

左腕の疼きが異常だった。まるで駆逐棲姫から大幅に力を借りすぎて侵食が拡がったあの時のようだった。

私の夢の中に住む駆逐棲姫も、大淀が目の前にいることで憎しみを燃え滾らせているのかもしれない。そうやって同調した結果が侵食ならば、仕方のないことだったのかもしれない。

「若葉さん、私も耐えられそうにないです。最初から外していきます」
「当然だ。倒れるまでやってやる」

速やかにリミッターを外す。三日月からも表情が消えた。臨戦態勢となり、再び大淀を見据える。

ここにいるもの全てでの防衛戦、そして総力戦である。もう迷っている余裕もない

矛と盾

夜間警戒を開始した初日の深夜、本当に大淀本人による襲撃を受けてしまった施設。警備をしていた九二駆はたった一人の完成品、鳥海の手により全滅。死にはしていないものの、相当痛めつけられており、姉に至っては両腕を折られている大惨事。

さらにはその鳥海が何かをしたことにより、暁が暴走。雷の頭を撃ち抜き、飛鳥医師にまで砲撃を放つ。しかし、事前に摩耶が機転を利かせ、水鉄砲に差し替えられていたおかげで、どちらも死には至らず。雷は気を失ってしまっているが、命に別状は無い。

私、若葉は三日月と共に、静かに、そして速やかにリミッターを外した。私の中の駆逐棲姫も、大淀が目の前にいることで力を貸してくれる。ここは追いつ返すことが出来ればいいが、なるべくならここで終わらせるつもりで戦うため、最初から全開。

三日月もリミッターを外し、感情を失った。処理速度に全てを寄せ、今回は殺意すら持つて大淀と鳥海に相對している。

「力を貸してくれよお前ら。鳥海はアタシがやらなきゃならねえ」

鳥海との戦いは、摩耶がメインとなる。双子の妹の変わり果てた姿がどうしても許せないようだ。殺し合いの姉妹喧嘩となってしまうが、それでもしなければ施設そのものを破壊されてしまう。

それを補助するのが私と三日月、他にもこの施設にいる全員だ。鳳翔も弓を携え、リコですら工廠に艦装を構えて迎撃態勢。

「暁はあたいが押さえ込んでおくから、そっち頼む！」

未だ暁は狂ったようにもがいていた。朝霜が軽く押さえつけるだけで振り払えない程度ではあるものの、練度の低い暁が突如あの精度を出したのはおかしい。まさか、暁もリミッターを外されているのではないか。

そうだとしたら本当にまずい。時間経過で結局死に至ってしまう。それだけはどうにか避けたいのだが、人形ではないために姫の命令は聞くことも無いだろう。むしろ人形よりも身体が耐えられない。

「朝霜！　押さええておくれじゃダメだ！　暁を気絶させろ！　その

状態はまずい！」

「き、気絶だあ!? 暁、ちよいと痛えぞ！」

飛鳥医師の指示を受け、朝霜が暴れる暁の腹に拳を打ち付けた。暁だって艤装を装備しているため、それなりに耐久力はある。多少強い打撃を加えることで、暁は一撃で気を失った。

「すぐに治療する！ 無理矢理でもいいから艤装を外してくれ！」

「無茶言うなよ!?!」

「私がやる。アサシモはマヤを手伝ってあげて」

ここでセスが助太刀。先んじてこつそりと姉を回収してくれていたらしく、今度は暁の方に行ってくれた。暴れていない暁ならば、セスでも艤装を無理矢理剥がして処置室に運び込むことが出来る。

「巻雲姉！ 雷を退かしといてくれ！」

「えっ、えっ」

今の巻雲には荷が重いかもしれないが、あの場所に倒れていたら、これからの戦いに巻き込まれる可能性が高い。せめて工廠の隅に移動させておいてもらえると助かる。

しかし、巻雲は艤装を装備していないため、艤装を装備している雷を退かすのは至難の技。二四駆の誰かが手伝ってくれるはずだ。

「おやおや、飛鳥先生はそこまで出来るんですか。人間も捨てたものじゃありませんねえ」

そんな言葉を無視して、飛鳥医師は暁を運び込むセスと共に工廠から離れた。暁の砲撃が掠った腕を少し押さえていたようだが、治療に支障はないようで安心する。

しかし、外れたリミッターを掛け直すなんて芸当は出来るのだろうか。飛鳥医師に治療が出来るかはわからないが、今は頼るしかない。

「センセは避難出来たな。じゃあ、やるか」

「私に勝てるんですか?」

「勝つんだよ。無理も道理もぶっ壊してやる」

両用砲を鳥海に向け放ったことで、戦闘が開始された。その攻撃と同時に私も動き出す。

「その程度しか出来ないのなら、私を倒すだなんて夢のまた夢ですよ」

すつと、ただ身体を倒すだけでその砲撃を避けた。その瞬間を狙って、私と朝霜が鳥海狙いで各々の武器を振るう。私はリーチが短い、その分場所を考えた。朝霜が上から振り下ろし、私は下から掬い上げるように攻撃。

「こら、私を忘れていませんか？」

だが、当然ながらここには大淀もいる。鳥海は朝霜を押さえることに専念し、大淀は興味深い私を処理しようとして動いていた。

そんなことを忘れている私達なわけ無いだろう。大淀は私達の最も憎むべき敵だ。鳥海が倒せずとも、大淀だけはその場で死んでもらわないと気が済まない。だからこそ、私が即座に攻撃を繰り出したのだ。朝霜も合わせてくれると信じていた。

「忘れていませんよ外道」

私に手を伸ばす大淀に向けて、三日月が砲撃。当然実弾、そして急所狙い。考えた瞬間行動に移しているリミッター解除状態により、完全に殺そうとした。

「わっ、容赦無いですね」

それは流石に回避された。そこに重ねるように拳銃による砲撃。それも回避。さらに飛び込んできた曙が槍を猛烈に振り下ろすが、バックステップでさらに回避。着地のタイミングを見計らって三日月がもう一撃放つが、それすらも回避。一体どんなスペックをしているのだ。

だが、これにより大淀と鳥海を分断。ここにいる全員を使つての一斉攻撃を開始する。私達五三駆は大淀へ。そこにリコと鳳翔も加わってくれる。鳥海には摩耶を筆頭に朝霜、羽黒、そして二四駆が向かった。

工廠という狭い空間での戦いになるのは避けたかったが、私達の力で押し返すことは難しい。ならばこのまま戦うしか無いだろう。

「分断、ですか。少数で私を押さえ切れれると思っっているのなら……」

朝霜からの攻撃を軽くないなした鳥海がボソリと呟くと、瞳が燃え上がるように光った。大淀の方に専念しようとした私ですら気付けるほどに、悪意の匂いが大きく拡がった。

「三日月！ 鳥海だ！」

「了解」

反応させれば身体が勝手に動くはずだ。大淀に専念させると見せかけ、匂いを感じた私が三日月に指示。即座に鳥海に対して砲撃。救出するはずの鳥海に対しても殺意ある一撃を放ってしまったが、何かしでかそうとする前兆を止めるためだ。

「片腹痛いわー！」

主砲を持つ腕を大きく振りながら砲撃。全方位に対するたった1人での一斉砲撃。巻雲ほどの密度は無いにしろ、見た感じ一撃一撃の火力が段違いだった。さらに、ばら撒くように見えて全て狙いが定まっている。三日月の砲撃はその攻撃の最中でもしつかりと回避されていた。

全員が一斉に回避行動を取る中、摩耶だけはその砲撃に真正面から打って出た。直撃したら当然重傷を負うことになるが、回避行動すら取らない。

「知ってたよ。鳥海が矛なら、アタシが盾だってな。だから、アタシはこの施設の守護神になってやる！」

両用砲を真正面に向け、一斉砲撃。その弾は、自分に向かってくる鳥海の砲撃にことごとくぶつかり、摩耶に届く前に海に落ちていった。砲撃の威力は互角。押し返されることもない。

砲撃に砲撃をぶつけることで、全てを回避したというのか。いくら艦装整備を毎日行なうほど器用だとしても、あんな神業レベルの技を繰り返すなんて、仲間の私達ですら予想外だった。

「……摩耶、そんなことが出来るのね」

「お前のために滅茶苦茶訓練したんだ。おら、もっと撃ってこいよ！ 全部撃ち墜としてやらあ！」

挑発した瞬間、鳥海の真後ろに朝霜が回り込んでいた。後頭部狙いの薙ぎ払い。当たればやはり死が見える渾身の一撃である。朝霜と巻雲からさらに進化した完成品相手に手加減など考えていられない。殺す気でやらなくては殺される。

「貴女は横槍が好きですね。あちらにいた頃からやんちゃでしたが、

それは健在ですか」

棍棒を素手で受け止めた。砲撃は回避するが、直接攻撃はガードすると見て間違いない。

「くっそ、相変わらず滅茶苦茶だなあオイ！」

「貴女は貧弱になりましたね」

棍棒が握り潰される。あれは艤装と同じ質で作られたものだ。素手でなんて破壊するどころか凹ませることすら不可能なもの。

そのタイミングを見計らい、二四駆が四肢を狙った同時攻撃。動きが止まっているのだから避けられるはずがない。避けるためには朝霜の棍棒を手放してその場から移動する必要がある。

だが、

「そのまま掴んでいなさい」

朝霜ごと棍棒を振り回し、砲撃の盾にしようと工廠側に吹っ飛ばそうとした。そのまま行けば、二四駆の砲撃の的になってしまうため、即座に棍棒を手放す。

それすらも見越して、朝霜が手放した棍棒を投げ飛ばす。それが向かっていく先には海風。おそらくあの中で一番精度の高い砲撃を放ったからだろう。

「全部撃ち墜とすつつつたろうが！」

海風に届く前に摩耶がそれを撃って破壊した。朝霜の武器は無くなってしまいが、あのままでは海風がやられていたため、こればかりは仕方あるまい。

「飛んでくるもんは全部墜としてやる。おら、次来いよ」

鳥海は砲撃がメインの戦い方では無いことくらい、摩耶はわかっている。だからこそ、本来の戦い方を引き出そうとしていた。それを倒さなくては意味がない。

棍棒を握り潰したことや、姉の惨状を見れば嫌でもわかる。私達とも違う近接、特に握力に特化されていることくらい、誰だって理解している。

「いいでしょう。摩耶、握り潰してあげる」

「どうせ握るなら寿司でも握ってくれよ」

接近戦をするということは、大淀からより離れるということだ。2人纏めて相手するよりはまだマシと考えた。個人の段階でとんでもないスペックではあるが。

一方私達も大淀との戦闘。五三駆は一度戦闘しており、あの時から力を付けている。対抗できるかはわからないが、あの時のように成す術なくやられるようなことは無いはずだ。

「前回と違って雷さんがいませんけど大丈夫ですか？」

「代わりに若葉の師匠が参戦してくれた。覚悟しろ」

私と曙の接近戦により行動範囲を鳥海から引き離しつつ、工廠の外に誘導していく。今は回避一辺倒であるおかげで、多少なり行動を抑制出来ていた。

前回戦ったことで、この大淀は目が良く、私の攻撃を片手で受け止めるほどの脅力もあり、やたら弾速の速い高火力の主砲を使ってくることはわかってている。あの時は水鉄砲だったため、砲撃は適当に払い除けるなど、インチキも大概にしてほしかった。

今回はあの時と違う。砲撃も、私達の武器も、大淀の命を刈り取るためのものだ。手加減など一つも無い。

「ナイフがちゃんとした刃になっていきますね。おや、曙さんの槍も。私をちゃんと殺す気で来ていますか」

「当たり前だ。お前は生きていちゃいけない」

「いい加減消えてもらわないと私達が困るのよー」

前回は艦装を破壊することを優先しようとしたが、今は違う。狙いは急所のみ。首と心臓を狙う。曙も同じように急所しか狙わない。

大淀は唯一、直接殺意を向ける相手だ。命を守るための施設ではあるが、この大淀だけはこの手で殺さなくてはいけないと思える者。何も抵抗は無い。

「でしたらもう少し実力をつけてみてはどうでしょうか。私を殺したい気持ちはわかりましたが、その程度で抵抗になると？」

「能書きはいいです」

三日月の容赦無い砲撃と同時に、リコが工廠内だというのに器用に

空襲を開始。大淀を徹底的に追い詰め、一切の容赦なく何もさせずに殺す。深海棲艦の容赦無さが、ここにきて活かされている。

当然近接戦闘の私と曙はその被害を被るわけだが、リコの空襲なら掻い潜りながら攻撃が出来る。それに、リコ自身がうまく私達を避けて攻撃してくれているので、尚やりやすい。

「見違えました。あの三日月さんがそんな悪態をつくなんて」
「黙って死んでください」

顔面狙いの砲撃を考えられない反応速度から繰り出し続けた。それすらも避ける大淀も大概だが、徐々に動き自体は単調化。私達の狙いが定めやすくなる。

そして、そこに鳳翔が矢を一閃。全てを掻い潜るように、大淀のこめかみを狙った一点集中。精度だけなら三日月よりも高く、他の追隨を許さない。

「危ないですねえ」

だが、その矢は当たる寸前でキャッチされてしまう。どういう反応速度をしているのだ。

「こちらが加減していることがわかりませんか？ 貴女達はとてもいい実験材料なんですよ。私が至るために必要な踏み台なんですから、なるべく生かしておきたいんですよ」

「お前は何を言っている！」

掴んだ矢を私に放ってきた。既にその時点で鳳翔が弓で射った時と同じ速度が出ているため、咄嗟に回避。

「アンタは何が目的なのよ！ 人様をゴミみたいに使って、何様なのよ！」

その隙を見計らって曙が槍を薙ぎ払うが、矢を捨てたことで空手になったことで、いとも簡単にそれを掴み、曙ごと振り回すように揺さぶる。そこへ鳳翔の第二射。当然頭狙い。大淀との問答を拒否するかのように、黙らせるための攻撃。

曙だっけとさんざん訓練してきたのだ。いくら振り回されたって、その場から動かないように耐えている。曙を盾にしようとしていたが難しいと判断したか、槍を離して回避行動に移った。

「目的とかどうでもいいですので、死んでください」

回避行動に移った直後に、その行動を阻害するために脚を狙った三日月。しかし、それは砲撃により回避。摩耶が先程やった、砲撃に砲撃をぶつける芸当をやったのけた。

「私の目的、そういうええ言ってますませんでしたね。では少しだけ話しておきます」

加減をしていたと言うだけあり、確かに今まで砲撃は一度もしてきていない。だが、それを解禁してきた。弾速の速い主砲を的確に放つため、今度はこちらが回避一辺倒にさせられる。

「私がこうしている理由、それはですな」

満面の笑みでこちらに言い放った。

「私の目的は、全ての生命への報復。私をこんな形にした、世界への反逆。人間も、艦娘も、深海棲艦も、何もかもを滅ぼすことです」

恐怖の侵攻

「私の目的は、全ての生命への報復。私をこんな形にした、世界への反逆。人間も、艦娘も、深海棲艦も、何もかもを滅ぼすことです」

大淀は満面の笑みを浮かべてそう言い放った。

意味がわからない。全生命への報復なんて大それたことを何故思い至ったのが理解できない。こんな形とは何だ。見た目は大淀だが、中身が深海棲艦に染まっているというその身体のことか。

どうであれ、そんなふざけた理由で殺されてたまるか。大淀は私と三日月は生かしたまま何かに使いたいようだが、そんなことも絶対にさせない。

「ふざけるなよ」

「ふざけていませんよ。こんなに醜く歪んだ世界は必要ありません。お話はこれで終わりにしておきましょう。私のことが殺したくて仕方がないさそうですし」

合間合間にも三日月は欠かさず砲撃をしているが、そんなことお構いなしに話していた。私達は必死に訓練して力を得たが、大淀には足元にも及ばないほどにしか見られていない。腹が立つほどに、まだ実力差がある。

場所が狭いが故にリコの空襲も密度が足りず、回避がしやすくなっていた。私や曙が攻撃しやすいというのもあるが、今はそれを求めているわけではない。誰の手を使ってもいい。この場で大淀を殺さなくては。

「生きていてもらったら困ります。早急に死んでください」

「三日月の言う通りね。アンタはここで死ね！」

三日月も感情を消しているものの砲撃が少しだけ激しくなっていた。先程の大淀の発言に、無意識ながらも怒りを覚えたのだと思う。曙も槍での攻撃が乱雑になっている。私達が狙われている理由があるなふざけた理由なのを知り、頭が熱くなってきた。

「焦らない。心を静かに」

そんな中、鳳翔の声が聞こえたことですつと心が落ち着いた。リ

ミッター解除の訓練の時、鳳翔にいくつか教えを貰っていた。それがこれ、鳳翔の声により冷静になること。

私と三日月はリミッターを外すという一定時間のブーストを行なうわけだが、時間制限があるせいで焦りが生まれてしまう。それを外部から指摘してくれるのが鳳翔だ。三日月は感情を消す分、無茶をしすぎるためにストップパーとしても使われている。

今回は時間制限への焦りでは無かったが、鳳翔のおかげで冷静になった。おそらく他の者もこの教えを受けている。特に曙は、釣りによる精神鍛錬を頻繁に行なっているため、切り替えはしつかり出来ている。

「まだ時間は大丈夫ですか？　すぐにガス欠になっていましたよね」
「おかげさまでまだ終わらない」

鳳翔のおかげで冷静になれたことで、大淀の動きがよく見えた。そういったところにもリミッターを解除した影響は出ている。

基本は私が猛攻、それを曙にサポートしてもらい、隙間から三日月と鳳翔による援護射撃をお願いしている。私達が好き勝手やっても、2人とも次の行動を予測して的確な位置に撃ってくれるため、安全に攻撃が出来た。

「ではもう少し遊びましょうか。貴女達はいいい材料になるでしょう。特に若葉さん、いいですよ。改めて、私と一緒に来ませんか」

「お前は嘗めているのか」

「いえいえ、貴女の力を買っているんです。認めているんですよ。私の下でなら、その力をもっと発揮出来ます。私が完成させた者達以上の力が」

無駄口を止めるために眉間を狙って拳銃を放つ。避けられるとは思いが、関係なしに連射。全て急所狙い、容赦無しの攻撃をしつつ、海面を一蹴り。静かに怒りが込み上がっていたのと、リミッター解除の影響から、自分では制御出来ていないような錯覚に陥り、手が届くほどの眼前に跳んだ。

「黙ってる」

首狙いにナイフを一閃。渾身の力を込め、私の出来る最大最速の一

撃。回避もさせない。

「おつと危ない」

それを、初めての戦闘の時と同じように、摘まむように止められる。が、それは当然読んでいた。そうやって食い止めるだろうと考え、ギリギリのところまでナイフを止め、指が空を掴んだところを見計らってもう一度薙ぐ。

瞬間、腹に強烈な衝撃。大淀の脚が腹にめり込んでいた。腹の中のものが全て出てしまいそうな威力で、猛烈な吐き気を催すが、ギリギリで我慢してその脚を掴んだ。

「良くないですよ、若葉さん。それはとても良くない。計画を邪魔されては困ります」

「邪魔なのは貴女です。今この場で死んでください」

私が脚を掴んでいるため、まともに動くことは出来なくなったはず。その隙はみんなわかつているはずだ。最初に攻撃を繰り出したのは三日月。未だにリミッターを外し続けているため、かなり消耗はしているだろう。それでも振り絞って急所狙いの連打。

「本当に三日月さんと思えない攻撃ですよ。若葉さん、盾になってもらえますか」

「させませんよ。若葉さんの決死の行動なんですから」

脚をそのまま三日月の方へ向けようとしたが、その前に鳳翔も一射。三日月とは別方向からの射撃により、私が引付く脚を動かす余裕無しに回避以外の選択肢を採らせないように。

「それは効かなかったでしょう？ 鳳翔さんともあろう者が、学習能力が無いんですか？」

「こっちのセリフよ！ 周り見えてんの!？」

三日月の砲撃は回避、鳳翔の矢はキャッチ。これはさつきやられた通りだ。当然、こちらこそここまで読んでの行動。同じ轍は二度も踏まない。

大淀が矢をキャッチした瞬間に、曙が大淀の首を落とす勢いで槍を振っていた。刃が首を斬れば良かったのだが、主砲を持つ腕でそれはガード。これで両手を封じた。

「若葉さん、わかってますよ」

脚を掴みながら拳銃を構えた私に視線を向け、もう片方の脚で打ち付けてきた。当然その場で跳び上がることになるわけだが、脇腹に強烈な一撃を受けて吐き気が舞い戻ってくる。射撃前に蹴られたことで照準は外れ、あらぬ方向へ。

だが、それも強引に掴んだ。この身を犠牲にする戦い方は望まれていないが、これで両脚も封じた。ガードも移動も出来ない。

「4人とも、良くやってくれた」

ここには5人目がいる。リコの放った爆撃機が、大淀の真上から急降下していた。工廠内故に火力は低めではあるものの、直撃さえしてしまえば大きなダメージになる。

リコが親指を下に向け、地獄へ落ちろと爆撃機を墜とした。

一方、摩耶の戦い。異常な握力により接近戦はほぼ不可能と見てもいい。朝霜の持つ棍棒は鉄の塊であるのだが、それを片腕で受け止めた拳句に握りしめて破壊してしまっている。腕を掴まれた姉が酷いことになっていたのも頷ける。

「摩耶、貴女は握り潰してあげる」

「やれるものならやってみろよ」

鳥海はパワーに特化しているせいか、移動速度は並。回避性能が高いものの、まとめての攻撃にはガードも使ってくる。艦装も妙に硬いのが厄介。

「束になったところで、私は負けません」

「やってみなけりゃわからねえだろ。オラ、来いよ！」

摩耶が挑発するが、鳥海はそれに乗ることなく砲撃を繰り返す。やはりその砲撃も威力が高く、艦装に直撃すれば一撃で機能不全を起こすだろうし、身体に当たれば論外だ。こちらには基本的に回避以外の選択肢がない。

しかし、摩耶はその砲撃を、全て両用砲による砲撃で撃ち墜としていった。一度や二度ではない。鳥海による全ての砲撃は、どの方向に撃とうが全て撃ち墜としている。

「……厄介な力ね」

「努力の成果だ」

私達の知る摩耶の努力はごく最近だ。ならば、前から近いことは出来たということになる。防空巡洋艦としてのスペックが後押ししているのか、本当に飛んでいるものについてはシャットアウトしていた。

それにより、鳥海には少しだけ苛立ちが見えるように。自分がやりたいことが出来ないというのは、さぞかし気に入らないだろう。それも摩耶の策かも知れない。

「なら……直接やりましょうか」

砲撃しながら摩耶に向かっていく。砲撃は摩耶が全て撃ち墜としていくが、その進撃を足止め出来るわけではない。むしろ近付かれることは止めようが無かった。

それを止めるのが残りの者。二四駆と羽黒がその脚を狙って砲撃を繰り返すが、それを防止するかのように脚にバルジが展開されていた。全ての砲撃はそれに食い止められ、鳥海の侵攻は止められない。姉達はこれによりやられたのだろう。砲撃だけでは止められず、近付いたら握り潰される。遠近両方の防御にも長けていた。弱点が見えない。

単純に火力が足りないと言われればそれまでだ。戦艦ほどの火力があればあのバルジは攻略出来るかもしれないが、ここにはそれが無い。

「皆さん、頭を狙ってください！」

「で、でも羽黒さん、それだと救出が」

「全滅するよりはマシでしょう！」

羽黒の指示により、攻撃箇所を脚ではなく頭に変更。当たりどころが悪ければ死んでしまう部位への攻撃に海風が苦言を呈するが、それですら足止め出来るかわからないのだ。手段は選んでいられない。

この期に及んで、相手の命は考えていられなかった。あの侵攻を防ぐことが出来なければ、1人ずつ文字通り捻り潰されていく。相手は同じ艦娘かもしれないが、中身はまるで別物なのだ。

「小蠅が鬱陶しいですね」

「姉から目を離すんじゃないよ」

両用砲の連射がより激しくなった。摩耶も手加減なんてしてられないと考えたのだろう。鳥海の砲撃をことごとく撃ち墜とし、それでも尚密度を増して、その侵攻を食い止める。

バックアップも頭狙いとなったことでガードや回避が必要になっている。ようやく少しだけ足が進まなくなった。それでも全てを防いでいるのはインチキとしか思えないが。

だが、バックアップには弾切れが存在する。摩耶や朝霜の持つ主砲は施設謹製の深海仕様無限弾薬であるが、あちらはそうはいかない。鳥海はそれを待っているように思えた。

「あつ、クソッ!？」

「すまねえ！ 弾切れだ！」

江風と涼風が弾切れ。これで侵攻を止める弾幕の一部が途切れる。

「2人は魚雷に変更！」

「うへえ、マジかよ！」

「やるつきや無えぜ！」

羽黒が即座に指示し、魚雷発射に変更。工廠内とはいえ、背に腹はかえられない。今をどうにかしなくては、先が見えない。それでも鳥海はジリジリと摩耶に近付いてきているのだから、四の五の言っていない。

あまりにも滅茶苦茶すぎる。握力だけじゃなく、単騎での侵攻能力に特化しすぎている。同じ完成品でも、朝霜と巻雲とは雲泥の差だった。より強く、より激しく、より酷く改良が加えられている。

「いい加減止まれよな」

「止められない貴女達が悪いの。弱いことは罪なのよ？」

魚雷も軽く回避して、侵攻速度が増した。ぐんぐんと摩耶に近づき、両用砲の連射を掻い潜って手が届く位置まで来てしまう。

「何処から腕いであげましょうか」

「させねえよ！」

真後ろから朝霜が爆雷を直接叩きつけた。全員の砲撃を、鳥海を盾

にして接近していたのだ。爆雷だって直接ぶつけられればダメージになるし、そのタイミングで爆発すれば頭が吹き飛ぶだけの火力はある。

しかし、

「させるわけないでしょう。本当にやんちゃなんですから」

見越したようにバルジで撃ち返し、あらぬところで爆発。これを叩きつけるために接近していた朝霜に即座に近付き、その腕を掴んでしまった。今だけは今までとは違う速度が出ていた。

「手癖が悪いようなので、それを封じてしましましょうか」

摩耶の連射も艤装とバルジで防ぎ切り、そのまま掴んでいる朝霜の腕を握り潰した。念入りに両腕を、主砲ごと。

「つぎつ!?! あああああつ!?!」

「朝霜!」

「摩耶も同じようにしますよ。今は腕だけなんですから、キャンキャン喚かないでください」

両腕が使えなくされた朝霜が、そのまま工廠奥に投げ飛ばされ、壁に激突。これで再起不能になってしまう。殺さなかつたのは気まぐれか、それとも後からの利用価値を考えた結果か。

「次は貴女よ、摩耶」

「クソが、させねえ!」

これで無限弾薬の連射が出来るのが摩耶だけになってしまう。これではジリ貧、最終的には突破されてしまうだろう。

あれだけの砲撃を受けておきながら、自らの砲撃と回避、そしてガードにより、烏海は未だ無傷。侵攻もほとんど止まらない。

「あつ、弾切れ……」

「ごめんなさい、私も!」

山風と海風が弾切れ。慎重に撃つていても終わってしまった。江風と涼風に加勢するために魚雷発射に移行するが、摩耶が近いたため厳しい段階。それでも放ちはしているが、全て回避されている。

「まだだ、まだ終わらねえ!」

「往生際が悪いわよ摩耶。ここでみんな倒れるの。そうしたら、貴女

達もいい素材になれるわ。建造したばかりの艦娘よりも質がいいものが出来るわ」

やはり、わざわざ誰も殺していないのはそのためか。ここにいるもの全てをあのキューブに仕立て上げようとしているわけだ。利用価値云々言っていたし、大方そんなところだろうとは思っていたが、そんなことさせてたまるか。

「そんなこと、させません！」

突然現れた新たな戦力。摩耶の隣に飛び込んできたと思ったら、ありったけの火力をばら撒き、鳥海を下がらせていく。摩耶一人だけじゃ足りない弾幕を、それを上回る砲撃の量でサポートした。

「姉様も、妹達も、貴女がやったというのなら！ 卷雲は許しません！」

飛び込んできたのは卷雲だった。艦装はセスがしっかりと修復済み。今まではトラウマと恐怖で脚が動かなかったが、この状況、そして朝霜がやられたことにより、卷雲の中で何か切れたのだろう。ここは工廠だ、艦装はすぐそこにある。

私達の猛攻を防ごうとするあの弾幕が今は私達の味方に。圧倒的な火力の前に、鳥海も一歩二歩と退いていった。

戦いはここからだ。まだ終わりではない。

砲撃の嵐の中で

激化する工場内防衛戦。私、若葉は、雷を除く五三駆の面々と鳳翔、リコと共に大淀と交戦中。私の身を張った行動により大淀の移動を、三日月、曙、鳳翔による攻撃で腕を使う手段を封じ、その隙にリコが急降下爆撃を決めた。

着弾する瞬間に私と曙は大淀から離れ、自分への被害は最小限に。瞬間、激しい爆発に大淀は包まれ、強烈な衝撃が発生。近くにいた私と曙は吹っ飛ばされることになったが、想定出来ていたことだった故に、着地も完璧。

「若葉さん、邪魔です。退いてください」

その爆煙の中に三日月がさかさず砲撃を放つ。あれだけのことがあっても、大淀ならまだ生きている可能性はある。それ故に追撃。確実に命を取るために容赦なく。

だが、大淀の匂いが薄いことがわかった。いくら爆煙の匂いが充満しているからといっても、あれだけ特徴的な匂いなわけだし、今まで間近に嗅いでいたのだから間違えようがない。

そこから考えても、今あの爆煙の中に大淀はいないと考えてもいい。あの瞬間に、あの空爆から逃げ果せたとは考え難いが、とにかくあそこにはいない。

「三日月、撃つのをやめろ！ 大淀はいない！」

「なら何処ですか」

爆煙が大きいため、姿が見えなかった。攻撃力が非常に高い代わりに、回避されるとこちらの攻撃が阻害されてしまうのが、急降下爆撃のまずいところ。本来は回避を考える必要も無いはずではあるのだが、相手が相手だ。

瞬間、爆煙の中から砲撃。狙いはリコ。あちらも爆煙でこちらが見えていないのだろう、直撃コースでは無かったにしろ、リコの腕を挽ぐコースでの砲撃だった。ギリギリで回避はしたが、掠めたことで腕が上がらなくなってしまうらしい。

「まったく、5人がかりで急降下爆撃だなんて、えらいことしてくれま

すね」

煙の向こうから大淀の声。やはり回避している。あれだけの攻撃をしても未だにピンピンしているということか。

逆に私は腹と脇腹を蹴られた衝撃で、内臓にガタが来ていた。口の中に鉄の味が拡がり不味い。何処かに傷がついてしまったか。

「ごんごす」

煙の向こうに対し、鳳翔が矢を射った。私達には見えないが、鳳翔は今のリコへの砲撃から大淀の場所を割り出したようだ。矢が何かに命中したような音は聞こえなかったが、匂いが少しだけブレたところを感じたため、今の方向に間違いは無い。

だが、姿がまだ見えないのは厄介だ。爆煙がなかなか晴れず、矢を一射したくらいではそのまま、今もあちらは姿を見せないように動いている可能性だってある。

「姉様も、妹達も、貴女がやったというのなら！ 卷雲は許しません！」

ここで卷雲参戦。持ち前の超火力はブランクを感じさせるものの、目の前が弾幕で埋まるほど乱射。あちらでは鳥海がそれに伴い一歩二歩と退いていった。

その弾幕はこちらにも流れてきて、爆煙を晴らしていく。大淀の姿がようやく見ええたが、急降下爆撃を受けたことで艦装に多少の破損が見えた。それでもあくまで多少。本体は無傷。どうやって避けたというのだ。

「潜ったのか、アイツは」

リコが呟いた。確かに大淀はずぶ濡れだ。爆撃を逃れるため、あの瞬間に海中に潜ったというのか。確かに大淀の匂いに海水の匂いが混じっているため、それが一番妥当。

卷雲が参戦してくれたのはありがたいし、大淀の状況がわかったのもありがたいが、大淀と鳥海が合流してしまった。最悪なことにお互いほぼ無傷。ある意味仕切り直しとなった。

「こんな奥の手使いたくなかったんですよ。貴女達になんて」

海水が滴る髪を纏め上げながら、卷雲の乱射を回避していた。鳥海

も退くだけ退いた後は回避に徹していた。

あちらも巻雲の復帰は想定しているはずなので、対策済みと言わんばかりに主砲を放つ。乱射の隙間を縫うような一発の弾丸が巻雲目掛けて飛んでいき、巻雲の主砲を1基破壊した。

「つあつ、まだ、まだまだあー！」

一層弾幕を濃くし、特に鳥海に対して強めに撃ち続けた。

姉妹をやられた怒りが力となり、巻雲を完成品だった頃よりも強くしている。精度も、威力も、何もかもあの時よりも強力だった。実際に受けた私だからわかる。

「アタシも手伝うぜ。殺したかねえが、それくらいしないとお前らが止まらねえことはわかったからなあー！」

その隣から摩耶も同じように乱射による援護射撃。大淀にも鳥海にも撃つ暇を与えず、凶悪なほどの砲撃の壁を作り出し押し潰そうと撃ち続ける。巻雲も摩耶も、無限弾薬とはいえ装填時間が無いわけではない。何も言わずとも、それをお互いに埋め合うように。

倒せたら御の字、せめてここから立ち去ってもらいたかった。入渠ドックがないこの施設だからこそ、早く治療に専念したい。足柄も九二駆も全員やられているのはわかっていし、朝霜もたつた今やられている。リコも先程の砲撃が掠ったことで腕を負傷しており、雷はまだ気を失ったままだ。

「これはまたすごいですね。とんでもない弾幕です」

「巻雲ちゃんは貴女が作ったんですけど？」

「ああ、そうでしたね。さすが私」

敵がおちやられるのは何とも気に入らないものである。怒りが込み上げてくるが、今は弾幕に参加するのが精一杯。私も三日月もリミッターを掛け直して温存し、曙も含めて主砲を大淀に撃ち続けるのみである。余計なことをさせないように。

だが、おちやらせるだけの余裕があるということは、いつでもやり返せるということ。回避しながらも鳥海が何やら準備していた。あれを止めなくてはいけないのは、私の目から見ても明らか。

「では、そろそろやめてもらいましょうか」

艦装や脚に装備されていたバルジが前方に集中し、この弾幕の中突っ込んできた。二四駆の魚雷も止めてはいない。それは回避しながら、弾幕は受けながら、ゆっくりとまっすぐ進んでくる姿は恐怖以外の何物でもない。

逆に大淀は援護射撃と言わんばかりに私達に向けて砲撃を繰り出してきた。私達も回避に専念しなくてはいけなくなり、鳥海は摩耶と巻雲に一任せざるを得なくなる。

巻雲の砲撃は駆逐艦の火力ではない。戦艦並とは言わないが、摩耶よりも強力な火力をいくつも備えている。その集中砲火を受けているというのに、普通に進んでくるとはどういうことか。

いや、受けているわけではない、要所要所を横に払っているだけだ。バルジ自体はどんどん傷付いている。必要最低限のダメージに抑えている。

「くそっ、あいつマジか!」

「耐久力特化……!」

握力だけでなく、あまりにも硬すぎる。そういう技だとしてもこれは異常だ。どうすれば止められるというのだ。

「止まりなさい」

「ダメですよ、横槍は」

そこにすかさず鳳翔が矢を放つ。だが、見越していたかのようにその矢を大淀が撃ち墜とした。流れ弾が工廠に当たり、そこかしこが破壊されていくのが辛い。

鳥海が止まらない。近づくにつれ回避も難しくなるというのに、むしろ防御はやたら正確。必要最小限の動きだけで巻雲の乱射をいなしている。

「あれをどうにかしないとダメか」

リコの空襲も鳥海の方へ。けしかけた戦闘機が全て急降下爆撃をするという滅茶苦茶な攻撃ではあるが、一番効果的にも思える。

鳥海が今までで唯一回避でも防御でもなく自分から放すようにしたのは、朝霜が繰り出した爆雷をダイレクトにぶつける攻撃だけ。鳥海はおそらく、爆弾に弱い。砲撃にも直接攻撃にも強くても、強烈す

ぎる衝撃は回避出来ないというわけだ。

今すぐにそれを繰り出すことが出来るのはリコだけ。だからさつき、大淀はリコを狙って砲撃したのだろう。鳥海を止めさせないために。

「まったく、勘のいい輩ばかりで困ります」

こちらを牽制しながら、上にも砲撃を始める大淀。そのまま戦闘機を1つずつ潰していった。

従えるものではあるが、部下は優先的に守るようである。それ以外は全て材料のようではあるが、部下は使える道具程度には思っているのだろう。使えるものは使い倒すという性根が腐ったような性格である。

「鳥海さん、空爆は食い止めてあげますから、その裏切り者は壊しちゃっていいですよ。1人や2人なら無くてもいいですから」

「了解。巻雲ちゃん、貴女はここで死ぬことが確定しました」

「巻雲はあ！　こんなところで死にませんよお！」

近付いてくる鳥海に対し、虎の子の魚雷まで繰り出して迎撃を繰り返す巻雲。

「妹をあんな目に遭わせてえ！　ただで済むと思わないでくださあい！」

「自分も似たようなことをしていたくせに、棚に上げるんですね。都合のいいことを」

ガードしながら魚雷を避け、さらには主砲による砲撃まで繰り出してくる。巻雲の主砲が1基、また1基と破壊されていくのに対し、鳥海バルジはまだ破壊されない。充分に傷がついているというのに、傷だけで済んでしまっている。

「巻雲、聞く耳持つなよ！」

「わかってますうー！」

魚雷を避けた瞬間に、自ら魚雷を撃ち抜いて炸裂させた。さらには二四駆の放った魚雷も、タイミング良く爆破。真横で魚雷が爆発したため、一瞬だが鳥海の動きが鈍る。やはり爆発が唯一の弱点だ。そのほんの少しの隙を見逃さず、摩耶が足下狙いの砲撃。さらには巻雲も

爆雷を放り、それすらも撃ち抜いて間近で爆発させる。

眼前と足下で何度も爆発が起こったことで、鳥海はようやく今の段階から少し退いた。無傷かもしれないが、しつかり効いている。

「この……！」

「鳥海さん、熱くならないでくださいね」

「わかってますよー！」

こちらがここまで抵抗出来るというのが計算外だったのだろう。鳥海に苛立ちが見えている。大淀が注意をしているが、頭に上った血は簡単には引つ込まない。最初の余裕は何処かに行ってくれた。

これは好都合だ。ムキになってくれれば、こちらが俄然戦いやすくなる。私達五三駆は大淀を抑え込むので精一杯ではあるが、あちらだけでも今ならいけるかもしれない。ならば、大淀を絶対に援護に回さないようにしなければ。

「ようやく通ります。執念深く撃ち続けた甲斐はありました」

巻雲と摩耶の乱射に紛れて脚のバルジを撃ち続けていた羽黒。そう言って撃った砲撃は、脚に展開されたバルジの1つを完全に破壊した。

弾切れの恐れはあったものの、最小限の消費でまったく同じ場所を撃ち続けていた。巻雲の乱射を受けたことで傷付いたバルジの小さな傷を延々と。いくら硬かろうが、同じ場所にダメージを受け続ければ、最後は破壊出来る。

「くっ……!?!」

「あそこを狙ってくださいー！」

「よくやったぜ羽黒！　喰らえやあー！」

たった1箇所ではあるものの、ガード出来ない場所が出来たのなら、そこはもう弱点と言ってもいい。鳥海を突き崩すのはあそこからになる。

足下狙いならば、やはり魚雷。二四駆も含めてありったけの魚雷を放ち、それを巻雲がタイミングよく撃ち抜いていく。

「このっ、ふざけるなあー！」

バルジが剥がれた脚を庇うように跳び、さらに前進。あまりにも滅

茶苦茶だが、それが通ったことでもう巻雲の眼前だった。跳んでいるために魚雷は効かず、たまたま巻雲の装填のタイミング。弾幕に抜け穴が出来る瞬間だった。

「鳥海、飛んだな？」

「何を……はっ！」

「アタシは、飛んでいるものを全て撃ち落とすんだよお！」

装填中の巻雲の前を陣取り、両用砲全ての照準を一点集中。バルジがあっても関係ない。羽黒がそれを証明してくれている。

「いい加減、止まれやあ！」

同じ場所、同じバルジの、寸分違わない一点に向けて、ただただ連射、連射、連射。空中故に回避も出来ず、威力が高いため砲撃にも転換も出来ない。さらには一度跳んでしまったために、摩耶の集中砲火の衝撃により着水が出来ない。

故に、鳥海はバルジが破壊されるまでは成す術が無くなった。摩耶の一時的な弾切れが先か、バルジが破壊されるのが先か。

「巻雲の弾幕う！ 復活ですう！」

そこに巻雲が弾幕を重ねる。より一層身動きが取れなくなった鳥海は、防ぎきれずに弾幕に押し潰され、バルジの一部がさらに破壊された。まだ鳥海自身は無傷ではあるものの、このままなら押し勝てる。

「ちよつとまずいですね。すみません若葉さん、貴女に構っている余裕が無くなってしまいました」

私達への牽制をやめ、鳥海を助けるために摩耶と巻雲へ砲撃を繰り返し始めた。ということは、私達はノーマーク。今なら大淀への攻撃も可能。再度リミッターを外して、大淀に突っ込む。

「逃がさんー！」

「ちよつと黙っててください」

喉元を切り裂くようにナイフを振るったが、やはり片手で受け止められる。腹をやられたせいで少し力が出ていない。だからこそその拳銃。受け止められた腕を狙うように引金を引こうとしたが、無理矢理引き寄せられた後に腹に膝が入った。

三度目の腹への攻撃で、完全に決壊した。口の中に血の味が拡がる。気持ち悪い。力が入らない。

「今回は撤退させてもらいますよ。思ったより抵抗するんですね。次来る時はこうは行きません。私は来ないでしょうけど」

「逃がさないって言ってんでしようが！」

私がやられた瞬間を狙って、曙が渾身の突きを繰り出し、大淀の臍装に一撃入れる。が、本体には通らず。

「はあ、ここまで計算外だと余計面白いです。それに、やっぱりいい材料になりますよ」

主砲を薙ぎ払われ頭に一撃入れられた。嫌でも意識が飛ぶ。

またしても、大淀に勝てなかった。まだ足りない。傷すらも付けれなかったのが、ただただ悔しかった。悔しさの中、私の意識は闇に落ちていった。

あいつの何処にあの力の源があるというのだ。あまりにも滅茶苦茶過ぎる。今も結局、最後まで遊んでいたに過ぎない。

吹っ切れた者達

大淀との戦闘中に気を失ってしまった私、若葉は、目を覚ますと自分の部屋に寝かされていた。頭と腹がまだ痛い。頭は最後に大淀に殴られた時のもので、腹は大淀に3度も蹴られた時のもの。それでもこれだけで済んでいるのだから良しとしなくてはいけない。

戦いの結末を知らないのも何とも言えないが、私が自分の部屋で寝ていたということは、あの襲撃は何かかなったと考えるもいいだろう。勝てたか負けたかはさておき、生きているなら万々歳。

「いつつ……」

身体を起こすと余計に頭と腹が痛かった。触れてみると頭には包帯が巻かれていることがわかった。鈍器で殴られたのだから血ぐらい出ていたか。

高速修復材は私には使うまでもないと見なされたようだ。むしろ私よりも酷い怪我の者は沢山いる。私の意識があつたのなら、使わなくてもいいと言っていただろう。艦娘なのだから、こういう時の自然治癒は早い方だ。ヒビくらいなら1日2日で完治するわけだし。

あの戦いが終わってから随分と眠り続けてしまったらしく、時間としては夕暮れ時。だが、残念ながら外は轟々と音が鳴り響き、雨戸が閉まっていたために部屋は薄暗い。久しぶりの嵐である。

敗戦の後に嵐とは、つくづく残念。ただでさえテンションが上がらないというのに。

「あ、目が覚めたようですね。おはようございます」

「ああ……おはようで正しいかはわからないが」

フラフラと部屋を出ると、三日月とバツタリ出会った。傷は無いみたいだが、リミッター解除の消耗で私と同じように深く眠っていたらしい。目を覚ましたのも小一時間前だという。

その三日月だが、嵐なので少々気が立っているようである。私が起きてこないために癒しも無い。イライラから部屋に来たようだが、私の顔を見たことで大分安心した様子。

「他のみんなは」

「全員治療済みです。あとから説明しますね。私もさつき聞いたばかりですが」

私がフラフラなのがわかり、手を握ってきた。私のためでもあり、自分の癒しのためでもある。嵐の時はこうやって身を寄せ合うのが一番。

悪天候の時は寝るまではみんなが集まることが多い。今回もそれは行なわれており、談話室には動ける者全員が集まっていた。この場にはいないのは7人。九二駆の4人と雷、飛鳥医師、そして暁である。「相変わらず遅いわね。消耗しすぎよアンタ」

曙の軽口が心地よい。生き残ったと実感する。こんなことを言いながらも、安心が匂いから感じられるため、こちらとしても嬉しい。「すまない、まだ腹が痛いんだ」

「モロに蹴られたものね。骨には別状無いみたいよ。打身らしいから、すぐに治るわ」

身体を労わるようにゆっくり座らせてもらおう。隣には勿論三日月。

「朝霜、もう大丈夫なのか？」

「おうよ、あたいは腕だけだったかんな。修復材でちよちよいのちよいさ」

鳥海に握り潰された腕は、綺麗さっぱり元通りだった。腕だけなら少量の修復材で何とかなかったらしい。同じようにされていた姉は、腕だけで無く他も相当痛め付けられていたため、治療の後に修復材まで使われ、今は眠っている。

姉だけでは無い。霰も、夕雲も、風雲も、完膚なきまでにやられていたそうだ。足柄はボロボロではあったものの、少しの修復材で何とかなっている。身体中包帯だらけだが。

九二駆の4人は本来入渠レベルの大破をしているのだが、ここで作ることは限られている。それ故に、私が眠っている間は、残されたものの総動員で治療に当たったそうだ。今回の治療により、施設に持ってきてもらえた修復材は枯渇したとも聞いた。

「……暁は、暁はどうなった!」

練度の低い状態で改造もされず、暗示だか催眠だかで無理矢理リミッターを外されたであろう暁。ここにいないということとは2択。治療が完了して眠っているか、それとも……。

「安心してください。一命は取りとめました」

鳳翔に言われて本当に安心した。身体から力が抜けるかのようだった。

なんでも、飛鳥医師は前回この施設で自沈した人形の自爆装置を摘出しているとき、念のためといういろいろと調査していたらしい。私が眠っていたために匂いで判断することは出来ず、手探りでいろいろと。何をやったかは聞かないことにする。

その時に、艦娘を蘇生させる手段の中の1つがリミッターを掛け直す作用があるということに気付いていたそうだ。そのため、門外不出。その治療を手伝っていたセスも、そこだけは企業秘密と目を塞がれたらしい。

「多分だけど、頭に特別なやり方で衝撃を与えるんだと思う。音的にそう感じた」

「曙の時も強い音がしたのを覚えている。それがリミッターを掛け直すのに使えるのか」

自分がどうやって蘇生されたか当然知らない曙は、話題に挙げられ少し顔を顰めた。だが、忌むべき力とと思っていたその技術が、今一番必要な治療法であるのはとてもいいこと。おそらく飛鳥医師も複雑な表情をしていたことだろう。

ともあれ、暁は助かった。それだけでも充分嬉しい報告だ。

「じゃあ雷は」

「暁さんのところにいます。強引なりミッター解除の影響で身体中がボロボロだったらしく、今は甲斐甲斐しく面倒をしていますよ」

今は身体がまともに動かないという暁のサポートとして側についているようだ。酷い目には遭ったが、もうポジティブに行動を起こしている辺り、さすがは雷というところ。

正直、姉に裏切られたというのは大きな傷になるのではないかと思っていた。だが、敵の狡い手段で敵対させられていたというのはみ

んな理解していること。雷はそういうところの割り切りが特に早い。

「全員無事でよかった」

「そうですね。若葉さんだつて危なかつたんですから」

三日月がより一層強く左腕を抱き締めてきた。心配をかけてしまったようで申し訳ない。右手の方で頭を撫でておく。

頭を殴打されたというのはそれだけでも危険な怪我だ。幸い、骨にも異常が無く、ただ脳が揺さぶられただけで済んだのは助かった。侵食のおかげで多少は頑丈になったのだろうか。その割には血がドバドバ出ていたらしいが。

「だが……結局逃してしまつたんだよな」

「しゃあねえよ。あん時は怪我人も多かつた。決着より全員の治療が優先だ。結果コレなんだから良しとしようぜ」

摩耶がケラケラ笑いながら話すが、微かに怒りの匂い。双子の妹とは強い因縁が出来てしまつたようだ。なんでも、最後は次は殺すと捨て台詞まで貰つたらしい。

最後の猛攻撃が余程効いたようだ。バルジと共にプライドまで砕いたと考えられる。

「次はもつと硬くなつてくるだろうな。アタシじゃあ撃ち抜けねえくらいに。だから、巻雲よお。次も一緒に頼むな」

「へあつ?!」が、頑張りますう!」

談話室にはしつかりと巻雲もいる。勿論、布団など被っていない。昨夜の一件で完全に吹っ切れていた。常に怯えているような表情だったものが、今では少し自信のついた表情に。暗さが払拭されていた。

「巻雲、もう……大丈夫なのか?」

「大丈夫じゃないですよ。巻雲の身体はまだまだ血塗れですか
らあ」

もう苦笑するしかないようだが、悲観はしていないようだ。

「この血は一生取れないんでしょうけど、妹達もここにいますし、カッ
コ悪いところ見せられないなって。巻雲、これでもお姉ちゃんですか
らあ」

あの時に姉妹がやられる姿を見て、引き籠もっていられないと奮起した気持ちは今でも残っている。身体が血塗れに見えたとしても、戦わなければ姉妹が守れないと決意を固め、巻雲は立ち上がった。

見た目は幼くとも、巻雲は姉。妹に無様な姿は見せられないと、身体を隠し続けた布団を脱ぎ去りここにいる。朝霜もやる気を出した姉の姿に満面の笑みである。

「つーわけで、あたいらは正式に駆逐隊の補欠つー形で参加させてもらうぜ」

「頑張りますう」

「心強い。よろしく頼む」

朝霜は最初からその流れだったからいいが、巻雲が参戦してくれるのはありがたい。私と互角のスピードでパワーもある朝霜と、一斉射の威力が計り知れない巻雲。この2人が加わることで、より施設の防衛がやりやすくなるだろう。こちらから襲撃するのも夢では無くなった。

「工廠はどうなったんだ」

「割とやられちゃったな。今は嵐対策に壊された瓦礫は隅に寄せてるが、明日はそれの片付けもしなくちゃなんねえ」

それもあり、また職人妖精の力を借りることになるそうだ。修復部分分は、工廠と2階の自室。また人数が増えてきたため、部屋数の拡張もするらしい。これについては下呂大将や来栖提督にも連絡が行っており、難なく承認された。

下呂大将の怪我も回復に向かっているようで安心。また少ししたら施設に来てくれるらしい。また、来栖提督も無事だったようだ。大淀の引越し先だったらどうしようかと思った。

「明日は忙しいぞ。工廠の片付けもあるし、嵐の後だ。浜辺の掃除だな」

「なんか久しぶり！もしかしたら、ついに完成するかも！」

「……だね……今度こそ来てほしいね……」

シロクロは嵐のたびに一喜一憂する。シロクロの艦装も8割方完成という段階までまた持ってきているため、足りないパーツもあと少

し。それが今回の嵐で流れ着いてくれれば、目標が1つ達成される。だが、その時はシロクロがこの施設から離れるということ。それはそれで寂しい。

「……大丈夫、私達はまだここにいますよ」

「あのオオヨドを倒すまでは協力するからさ。安心してよね」

それは嬉しい申し出だ。是非とも力を貸してほしい。深海双子棲姫は潜水艦でありながら戦艦並の火力を持つというし、味方になってくれれば百人力である。

まずは明日。戦いの跡の片付けをしてからの話。もしかしたら、また犠牲者が流れ着いてしまう可能性だってある。そうなってほしくないが。

夕食の時間。九二駆はまだ目を覚まさず。重体の状態なのだから、優先的に修復材を使われているにしても回復のために睡眠が必要である。夜に起きた時のために夜食は用意されているらしい。

この場には先に目を覚ました暁も来ていた。まだ車椅子生活であり、雷が付きつきりになるものの、比較的元気である。その理由はすぐにわかった。

「うーん……結局何も思い出せないのよね……どうしてここに流れ着いてきたのか」

そう、この施設で過ごした時間をすっかり忘れてしまっていたからだ。そのため、鳥海に何かをされたせいで雷や飛鳥医師に砲撃をしたことを、全く覚えていないそうだ。ある意味、呂500と似たようなもの。

今のところはここに来てから大きな事故に遭ったせいで記憶がなくなっただけということにしているようである。あながち間違いでないのだから口裏も合わせやすい。

飛鳥医師の憶測では、記憶を弄られた上にリミッターを外したせいで、脳に多大な負荷がかかってしまったことで、今までの記憶がすっぽり抜け落ちたのではないかという見解。あながち間違っていないさそうである。また、リミッターを無理矢理掛け直す手段もあり良い

ものではないと付け加えた。

とはいえ、何も覚えていないのなら、それに越したことはない。目の前で裏切り、妹を殺そうとしたという事実は、暁にとって重い傷になってしまいそうだからだ。

「それにしても災難ね。雷も記憶が無いんでしよう?」

「ええ、私はワケが違うけど、みんなが良くしてくれてるから大丈夫。お姉ちゃんも大丈夫よ!」

これもあつてか、暁はしばらくの間、この施設で経過観察をするこゝとなつた。突然ガタが来て倒れるなんてことがあつても困るし、万が一のことがあつても飛鳥医師がいるこの場所の方が事に当たりやすい。

少なくとも、身体が動くようになるまでは雷の付きっきりの看病になるようだ。雷がいない間は呂500が付き添う。

「ンアー、アウイー」

「ろーちゃんも大歓迎だつて」

「ふふ、ろーちゃんも妹みたいね」

ある意味ドロップし直したようなものだ。私達は全員初めましてになる。だが、誰もそれを否定しない。この施設にいるものは、そういうことに関してはとても寛大である。

「でも早く自分の手で食べられるようになりたいわ。レデイが人にご飯を食べさせてもらうなんて……」

「仕方ないじゃない。身体が動かないんだもの」

「動くわよ! ほ、ほら……!」

「動いてない動いてない」

指先がピクピク動くくらい。腕が持ち上がらず、前に組んだ状態から何も変わっていない。それほどまでに消耗が激しいということだろう。雷にご飯を食べさせてもらうのが少し恥ずかしいようである。

そんなことが言えるくらいになっているだけマシだ。何かしらのトラウマが残っていないようでよかった。

これで九二駆の面々が目を覚ませば、本当の意味で全員無事が確認出来る。目を覚まさないことはないと思うが、早く私達の前に姿を見

せてほしい。

かねてより

嵐の夜ということでもまた襲撃される可能性があった。そのため、施設内ではあるものの夜間警備は続行。羽黒と二四駆が受け持ち、一晚を明かしたが、幸いにも何事も無かったようである。嵐自体も夜中のうちに終わっており、私、若葉は気持ちいい朝を迎えることが出来た。

この頃には、眠り続けていた九二駆も全員回復。まだ傷は残るものの、全員が自分の足で歩くことが出来るほどになっていた。両腕を握り潰されていた姉も、痛みは残るものの五体満足である。

「後遺症も無いようによかった」

「うむ。一番酷かった腕と、艤装が壊された時に負った火傷に修復材を使ってももらえたらいいからの。おかげさまでこの通りじゃ」

肩を回す姿を見せてもらい、安堵する。所々の傷は修復材無しでの回復となるため包帯は巻かれているものの、ほぼほぼ完治と言ってもいい。

姉だけでなく、他の3人も似たようなもの。鳥海の手により握り潰された部位や、自然治癒が見込めない部位に修復材を使い、他は薬を塗った後に自然治癒という方針。

「九二駆は今日1日は安静にせよとの指示じゃ。片付けに参加できずすまぬのう」

「いや、身体の方が大事だ。姉さんはゆっくりしててくれ」

「若葉さんもあまり激しい運動はダメですからね」

三日月に念を押された。私も怪我を自然治癒で治していく方針であるため、日課のランニングも今日は散歩に変更しているくらい。

片付けも重いものは持たない方針。散歩の時にある程度チエツクしており、いくつか大物があることは確認済みなので、それは他の者に頼むことにしている。

また、今回は深海棲艦の亡骸が数体発見された。その運び込みは既に実施済みである。私達が片付けをしている間に、飛鳥医師が解剖を行なうとのこと。

「人型がおったのが少し辛いもう……奴らにも営みがあったらうに」

「ああ、リコの時のことを思い出してしまった」

リコの脚である戦艦ル級とは違う人型の深海棲艦の亡骸ではあったが、姫のために奮闘したイロハ級がいるということも知っているのだから、今回のそれももしかしたら同じような境遇だったのかもしれない。

獯猛で理性の無いイロハ級とは違う、言葉は介さずとも意思を持つ人型は見ていると辛いものがある。

「次の命のために、使わせてもらおう」

「うむ」

今後はさらに激戦になる。今回以上に怪我人が出る可能性は高い。それこそ、四肢欠損の恐れだって大いにあった。ドックが無い今、不謹慎ではあるが揃えられるものは揃えたかった。当然だが、本来の持ち主には感謝を示し、無念を晴らすために使わせてもらうことになる。

解剖の前に供養させてもらおう。次の命のために、その亡骸を使わせて欲しい。

予定通り、朝食後は浜辺の清掃。九二駆と足柄は安静に、羽黒と二四駆は夜間警備の後のため不在。そのため、参加者は五三駆とその他諸々。鳳翔すらも手伝ってくれる。足柄は不完全燃焼のようで工廠の手伝いをするとは言っていたが。

暁はここがどういうところかを知りたいということ、呂500が車椅子を押すことで私達の仕事を眺めることとなった。一晩経つても身体はまだ言うことを聞かないようで、ようやく手を握るくらいは出来るようになったくらい。

五三駆と朝霜、巻雲の6人で行動。残りは逆方向へ。暁と呂500は、雷がいる私達の班に便乗。

「今回は目星もつけてあるんだ」

「朝にこの辺りを散歩していたんですが、その時にすごいものを見つけました」

そう、今回はとてもいいものを発見している。散歩の時は艤装を装

備していないため、私達の手では運ぶことが出来なかった。普段着が艦装と一体化しているセスも運ぶのを躊躇う大物。当然浮き輪やエゴでも運べない。

今回はパワートップであろう朝霜がいるため、その辺りは心配はいらなかった。おそらく私でも1人で持てるかな程度ではあるものの、激しい運動を禁じられているために朝霜に頼ることにする。

「で、それがこれだ」

「……深海の戦艦主砲!？」

待ち望んでいた戦艦の主砲がいに流れ着いた。しかも2基。シロクロの艦装に必要な最後のパーツである。

シロクロの艦装は、武装以外は完成していた。一度襲撃を受けて大破させられ、そのまま施設の修復に使われたことでリセットしてしまったが、そこからまたここまで立て直していたのだ。そのため、ずっと武装待ちだった。それがついにこの場に。

「あたいが持てばいいのかい？」

「ああ、頼めるか」

「任せろい」

2基の主砲を軽々と持ち上げた。流石に私もあそこまででは出来ない。朝霜がいることで作業時間が大幅に短縮出来そうだ。

「若葉達は他の物を運ぶ。なるべく大きいものから運んでいこう」

「今回は大物が多いわね! シロクロだけじゃなく、私達の艦装も改造出来そう!」

雷の言う通り、今の私達の艦装をバージョンアップも可能な気はする。いわゆる近代化改装というヤツだ。艦娘の艦装を深海の艦装で改造するなど普通ではあり得ないことだろうが、元々継ぎ接ぎであり、最初から深海の艦装も若干組み込まれているため、改造は容易い。

一応違法改造ではないギリギリの線を攻めている。敵がインチキを束にしてやってくるのだから、こちらも出来る限界で。

「本当に多いわね今回は」

「嵐が長かったからじゃないかしら。半日以上降ってたもの」

曙と雷は主機の残骸のようなものを運ぶ。これはそのまま動力部

分を拝借すれば、出力増強などに使えるかもしれない。半壊しているため、使える部分だけ使うことになる。

「ちっちゃいパーツもいっぱいですう」

「全部使えると思ってくれていい。浜辺が綺麗になるまで運び続けるからな」

巻雲も軽巡くらいの主砲やら対空砲やらを持ち上げた。主砲の類は全て巻雲の強化に繋がる。朝霜と正反対な、遠距離武装の重装備である巻雲には、落ちている武器全てが強化に繋がるわけだ。

これらは使えなかったとしても、職人妖精に提供して、工廠の修復に使ってもらうことになるだろう。そうでなくても2階の拡張にも必要だし、そこにも使われず、艀装の改造にも不要となった残骸は全てエコの餌になるため無駄がない。それすらも多くなったら来栖提督に持っていつてもらっただけだ。

私も控えめに主機の残骸を拾い上げ、ここからは浜辺の往復が始まる。荷台でもあれば多少は往復の回数が減るかもしれないが、そういったものは施設にない。生半可なものだと荷台側が壊れてしまうので、今は地道に運ぶしか無かった。

「すごいわねみんな」

「身体が治ったらお姉ちゃんにもやってもらおうから」

「も、勿論手伝うわ。レディだもの、困ってる人を助けるのがレディってものよ」

艀装さえ装備出来れば誰にだってこの仕事は出来る。強いて言うなら作業着が必要というくらい。朝霜と巻雲には私達の予備を貸し出しているため問題無し。暁も復帰したときに雷の作業着を借りることになるだろう。

「アウー、ンウウ」

「そうね、お姉ちゃんが治ったら、ろーちゃんにも手伝ってもらわね」

「アーイ」

呂500も乗り気。今はお休み中だが、ここにさらに九二駆も交じるのだから、次からはさらに作業が捗るというもの。今回のようにい

つもよりも多いような状態でも、難なくクリアすることが出来る。

午前中いっぱいを使い、なんとか浜辺が綺麗になった。もはやこれ自体が持久力の訓練になっていくレベルの疲労感。日課でスタミナをつけている私や、元よりスタミナがある曙以外は、疲れが目に見えるほどに。

だが、シロクロはむしろより元気だった。理由は簡単、自分の艦装の最後のパーツが既にあることがわかっているからだ。午後からは艦装の組み立てに精を出すことだろう。

午後は工廠の片付けをしつつ、浜辺で集めた廃材達の洗浄と分別。それと同時に、シロクロは自分の艦装を組み上げていく。拾ってきた戦艦主砲は少し破損していたものの、廃材を組み合わせることでそれすらも修復していた。

シロクロもこの工廠作業をし始めてもう長い。摩耶やセスが手を貸さなくても、自分のものだったら組み上げられる。最初は不器用だったシロも、今ではクロと一緒に廃材をバラして、適切なパーツを組み込むまでしていた。

「はぁー、すごいもんだ」

組み上げられていくシロクロの艦装を見ながら、感嘆の声をあげる朝霜。艦娘の艦装が組み上がっていくのならまだしも、深海棲艦の艦装が組み上がっていくのは珍しいものだろう。シロクロの艦装は特に普通ではない形状をしているし。

巨大な腕を持つ深海棲艦を椅子にするリコの艦装とも、意思を持つ動物エゴを飼い慣らすセスの艦装とも違う、両頭のウツボのような遠隔操作艦装。本来だったら両頭のどちらにも小柄な腕が付くらしいのだが、今回はその辺りはオミット。

そして、今回拾ってきた戦艦主砲を修復し、それを艦装に接続したことで、長かった艦装の修復、いや、再構築は完了する。

「よーし、よーし！ これで、完成！」

「ついに……出来上がったね、クロちゃん」

「うん、やったね姉貴！」

2人で手を合わせて喜び合っていた。廃材を組み合わせ、一から作り上げた艦装だ。愛着は以前のものよりも大きいだろう。

ここまで来るのに本当に長かった。再構築のためのパーツは嵐待ちであり、流れ着いたとしてもそれが使えるものかはわからない。それでも根気よく待ち続けて、ついに形になった。

「早速潜っていいかな！」

「おう、行つてきな。テストは必要だろ」

摩耶もずっと手伝ってきたのだから、感慨深いものがあるようだ。私達も、この艦装が動くところを見てみたい。

徐に作業着を脱ぎ捨てると、こうなることも予想してか既に中に水着を着ていた。準備万端である。

「それじゃあ、よいしょーつと！」

「よいしょ……じゃあ、行くよ」

艦装を2人で持ち上げ、海に飛び込む。見た目は海上型の艦装だが、海中に潜っても何ら問題がない潜水艦仕様。潜ってしまえば遠隔操作で泳ぐようにシロクロについてくる。両頭だというのに器用なものだ。

「私が主砲と魚雷担当！」

「私が……艦載機と対空担当……」

片方の頭をシロが、もう片方の頭をクロが受け持っているのとこと。頭ごとに出来ることが違うようで、要所要所で担当を入れ替えることも可能。私達には出来ない、超万能戦力である。正直出来ないことがない。

「通信の準備しとくぜ。耐压テストもするだろ？」

「うん、お願い」

マスクをつけて、艦装ごと一気に潜水。艦装ごとスイスイと潜っていく、あつという間に海上からは視認出来なくなる。潜航の速度も相当だ。

しばらくして、海の底に到着したという通信が届いた。以前はここで艦娘の亡骸を何人分も見つけてしまつて叫んでいたが、今はそれもなく静かな海底。以前沈んでしまった人形達は、翌日には引き揚げ済

みである。

『こちらクロだよ。艦装の調子はすごくいいね!』

『シロ……良好だよ……前よりもいいくらい……』

何でも今は海底に足を着け、舳を操るように艦装を動かしているとのこと。私達では到底耐えられない海の底でも何の不自由もなく行動出来るというのは、海上艦の私達から見ると少し羨ましく感じる。

工廠の片付けをしている間、ずっと潜り続けて小一時間。これだけ潜っていても何の支障もないということは、出来上がりは完璧ということだ。

浮上してきたシロクロは、満面の笑みでマスクを取った。泳ぐだけでも満足していたが、艦装が完成したことでさらに満足げ。

「最高だね! 私達がついに元に戻ったんだ!」

「だね……欠けてたものが埋まった感じ……かな」

あのシロですら笑みを絶やささない。本当に嬉しいというのがあるありとわかる。

そして最後に武装のテスト。私達がやっていたように的を用意して、主砲の準備をしてもらう。火力が火力なので、射線には何もないことを確認し、絶対に怪我人を出さないように。戦艦の主砲なのだから、掠めただけでも致命傷の可能性だってある。

「それじゃあ行くよー! てえーっ!」

主砲担当のクロの掛け声と共に、とんでもない轟音が響いた。魚雷が同時にいくつも爆発したかのような衝撃と共に弾は撃ち出され、的に命中。的を破壊するどころか粉々にしてもその勢いは止まらず、海面に着弾したと思った途端、それこそ魚雷が爆発したのではないかという水柱が立った。

工廠でそれを見ていたものはみんな、啞然としていた。まさかここまでとは正直思っていなかった。

「いえー! 命中!」

「威力も凄いね……!」

キヤツキヤツと喜ぶクロと、その威力に驚いているシロ。シロの表情を見る限り、以前に使っていたものよりも威力が高い様子。

「これで完璧に元通りだな」

「うん！ みんな、ありがとね！」

やることをやったので艀装を持って上がってきた。当然ビショビショではあるが、潜水艦仕様なため、軽く拭くだけでお手入れ完了という便利さ。優秀すぎやしないか。

「んじゃあ改めて聞くけどよ、お前らがここにいるのは艀装が直るまでって話だったな。どうする。艀装は直ったぜ？」

「もー、マヤは意地悪だなあ」

もうお互い笑ってしまっていた。

「昨日も言ったけど、オオヨドを倒すまではここにいるからね。今までは見てるだけだったからさ、今度からは出撃もするよ」

「敵に硬いのがいるんだよね……なら……私達の出番かな」

「おう、頼むぜシロクロ、うちの最高戦力だ」

改めて、施設に滞在することを宣言してくれたシロクロ。ここまでしてくれた恩を返すと、笑顔で約束してくれた。

念願叶ったシロクロの艀装再構築。やらなくてはいけない仕事が一つ完了し、私達も清々しい気分になった。

友達

シロクロの艤装がついに完成したことで活気付く施設。突破が難しいと思われている鳥海の耐久力に対する回答にもなりそうなたため、シロクロは即戦力となる。今のこの状況、戦力が1人増えるだけでもありがたいものだ。それが施設内で最も高い火力を持っているというのなら、尚のことありがたい。

今日は丸一日を浜辺と工廠の片付けに使ったため、訓練をするなら明日から。だがその前に、夜間警備がある。昨日は二四駆が、一昨日は九二駆が受け持ったため、今度は私、若葉が率いる五三駆が夜間警備を行なうこととなる。引率は摩耶。初期から施設にいる者5人で集まることになった。

初めての仕事なので、これについては5人で集まって打ち合わせ。タイムスケジュールは飛鳥医師が決めてくれた。

「夕食後仮眠、その後夜の海に出て、朝が来たら朝食を摂ってから改めて休むという方針になる。これで大丈夫か？」

「了解。24時間働けるが、仮眠が取れるならもつと働ける」
「アンタは出来ても私らが無理よ」

仮眠はざつと3時間ほど。他のみんなが寝静まるくらいの時間から、私達の新しい仕事が始まるわけだ。生活習慣が崩れてしまうが、そこは飛鳥医師監修の生活プランにより、不健康にはならないようにいろいろと考慮してくれている。3日に1回というローテーションも、ちようどいいくらいだという判断から。

引率が足柄と羽黒、そして摩耶の3人であるため、ローテーションはこちらも組みやすい。とはいえ足柄と羽黒は外の者。急に鎮守府に戻ることであってあり得る。そうなってしまった場合は、セスヤリコにお願いすることになるか。

「リザーブとして朝霜と巻雲にも待機してもらっている。その辺りはまたローテーションを考えよう」

「体調が戻ったら、お姉ちゃんにも参加してもらおう？」

「暁は練度が低い。まずは鳳翔に訓練をしてもらおう方がいいだろう。」

そうでなくてもリハビリは必要かもしれないしな」

本来なら来栖鎮守府に移籍という形の方がいいのだろうが、記憶を失っており、かつリミッター解除のガタがまた来るかもしれないというので、施設での経過観察状態の暁。純然たる艦娘ではあるため、身体が動くようになったら多少なり訓練をしていく方がいいだろう。

とはいえ、いきなり鳳翔の手解きとなると、暁が大丈夫か不安になる。雷も同じことを考えたようで、苦笑していた。

「では、よろしく頼む」

「ああ、任せてくれよな。アタシらの居場所は自分の手で守るぜ」

「先生はちゃんと休むのよ！ 今日も働き詰めだったんだから！」

私達が片付けをしている裏側で、飛鳥医師は漂着した深海棲艦の解剖に丸一日を使っている。昼食の時は処置室から出てきたものの、それ以外はずっと籠りっぱなし。休んでもいない。それだけ漂着した深海棲艦が多かったというのもある。

翌朝、リコの哨戒機が飛んでくるのを確認して夜間警備終了。毎朝飛ばしてくれているため、それが今後は終了の合図になるようである。

「何も無かったな。そりゃあ毎日毎日襲われても困るけどよ」

警備は何事も無し。大淀が襲撃してくることはおろか、深海棲艦が発生するようなことも無し。特筆すべき事件は何も無く、ただただ夜の海をグルグル回って警戒するだけで終わった。二四駆が昼にやってくれていることを私達で焼き直しただけ。

「あちらも準備しているんだろうか」

「じゃないの？ 前の拠点は大将が全部ぶっ壊してくれたみたいだし」

「今攻め込みたいところですよね……準備の期間を与えるのは癪ですが」

今は下呂大将が負傷中であり、逃げた大淀の新たな拠点の調査は進んでいない状態。あちらも拠点を変えたばかりだからか激しく行動を起こすようなことはしないのかもしれない。人形も生成できてい

ないように思える。

次に襲撃するとき、大淀は来ないと言っていた。それを素直に受け取るのなら、次の襲撃はあちらもすっかり準備が出来てからだろう。大淀がいらない分を人形で賄い、完成品数人と共に押し潰す。

「まあ今は考えるのはやめておこうぜ。さすがに眠てえ」

「だな。風呂に入ってさっさと寝よう」

さすがに夜中ずつと海の上でグルグル回っているだけは、ただただ疲れる。曙以外は私も含めて疲れた顔。昼に同じことをするよりも疲れる。

暗闇の中という環境で緊張していたというのもあるだろう。戦闘中は興奮状態のおかげでそういった感情は湧かないが、そもそも私は夜の海には若干トラウマがある。そのせいで精神的に疲れたのだと思う。

「相変わらず、曙はタフねえ」

「心臓のおかげよ」

摩耶ですら疲れた顔を見せているのに、曙だけはピンピンしている。ひとえに、深海のパーツによる心肺強化のおかげ。そこに曙の努力も加わったことで、屈指のスタミナを手に入れている。こういう時にもそれは役に立つようだ。

「風呂の中で寝ちまったら、部屋に運んでくれよ」

「朝霜にやらせるわ。全力でやってやれって」

「おう、絶対に寝ねえ。潰されちまう」

和やかに警備が終わるのならいいことだ。今後もこのペースでやっていきたい。

朝に眠りについたというのに、私はまた夜の海にいる。さつきも見た光景……というわけでもなく、この海は少し不思議な感覚がする。夢の中というのはそういうものか。

この空間に入ると、当たり前のように目の前にいる駆逐棲姫。以前よりも距離が近いように思えた。前回の夢の中で握手をしたのが理由か、より親しくなれた。

駆逐棲姫と会いたいと思っけていても、私からこの夢を作り出すようなことは出来ない。駆逐棲姫が私を夢の世界に誘ってくれない限り、こうやって面と向かって出会うことすら出来ないのは少し寂しい。

「お前に礼が言いたかった」

『私にお礼？』

「暁の件だ。忠告をしてもらっていななければ、今頃雷も飛鳥医師も死んでいただろう」

前回の夢で気をつけるように言われていなかったら、摩耶がそれを知ってこっそり水鉄砲に差し替えるなんてことはしていなかった。そして、それが無かったら、雷の頭は無くなっていただろうし、飛鳥医師も最悪死んでいただろう。

そうならなかったのは、全て駆逐棲姫のおかげだ。礼を言わなくて気が済まない。

「ありがとう。お前はみんなの恩人だ。若葉達でも気付かなかった暁の洗脳に気付いてくれたのは、本当に助かった」

『どういたしまして。役に立てたようで良かった』

満面の笑み。私が礼を言ったことが素直に嬉しいようである。手を差し出してきたので、私も笑みを浮かべて手を握った。握手もお気に入りな様子。痣のある左手で求めてくるあたりわかってる。

『前にも言った通り、私は君に力を貸す。今はそれが楽しみでね』

「楽しんでもらえているなら何よりだ。若葉もお前を頼らせてもらっていいだろうか」

『うん、いいよ。これから私も私を頼ってよ』

今後も駆逐棲姫の言葉は信じていくことにしよう。仲間を救ってくれた恩人だし、今の言葉にも嘘偽りを感じなかった。大淀を倒すという目的が一致しており、お互いに頼りあって目的を達成しようとしている仲間だ。

『とはいえ、貸しすぎるとより一層侵食しちやいそうだからね。次にやらかしたら、頭まで届いちゃうかな』

「かもしれないな」

頬にまで拡がった痣を撫でる。今でここなら、次はそのまま眼に届

き、最終的には脳。三日月と同じようになるだろうか。

もしくは下は拡がるか。既に胸、心臓の辺りまで侵食されているため、これ以上だと曙のように心肺機能に侵食されるかもしれない。

後者は若干魅力的だと思ってしまったのは黙っておこう。先程までやっていた夜間警備で全く疲れていなかった曙は少し羨ましかった。

「早速頼らせてもらいたいんだが」

『なんだい？ わかることなら何でも答えるよ』

「今は誰も暁のようにおかしなことになっていないか？」

私達のチェックを掻い潜る手段をあちらが持っているというだけで、疑心暗鬼に陥ってしまった。知らない間に洗脳、催眠、暗示が掛けられていたとしたら、敵を潜伏させることになってしまう。

事前にわかるのなら知っておきたかった。そして、それがわかるのが駆逐棲姫だ。

『今は大丈夫だと思うよ。施設にいる子に、変な感じはしないからね。暁ももう大丈夫』

「そうか。保証してもらえたらありがたい」

『私にはこれくらいしか出来ないからね。何かあったら、またここに呼んで教えるよ』

ここ以外でも話せばいいのだが、私が眠っているときに夢に干渉するくらいしか、対面するタイミングが無いという。そもそも夢に干渉するというのが意味がわからないのだが。

「今日は何故この世界に？」

『ただお喋りしたかった、じゃダメかな』
「構わない。時間はまだある」

意思を持ち、私の眼を通して世界を見て、さらにはこうやって私と話せるようになった。なら、もつとその感覚を使っていきたい。その気持ちはわからなくはない。

駆逐棲姫は私の意思がある程度わかるかも知れないが、私に駆逐棲姫の意思はわからない。話してもらえたら嬉しいものだ。私と同じように、駆逐棲姫も私を信用してくれている。

『もつと話をしよう。私は若葉のことをもつと知りたい』
「ずつと側で見ているだろうに」

『それでもだよ。君の口から聞けることが楽しいんだ』
ずつとニコニコしている駆逐棲姫。こうしているのが楽しいのなら、ここにいる間はずつと楽しんでもらおう。たわいないお喋りは、私の心の癒しにもなる。

そこからは時間が続く限り適当な話題で話をした。施設の面々に対する駆逐棲姫の感想が主。誰かを嫌っているわけでもなく、警戒もしていない。ただ思ったことを話してくれた。特に三日月のことにについては多めに時間を使った。

駆逐棲姫的にも三日月のことは気になるらしい。自分の眼を持っている存在として、他人の気がしないらしい。三日月も私に対して似たような感情を持っているが、同じ感覚なのだろうか。

「三日月も同じことを言っていたな。若葉の左腕を見て、他人の気がしない」と

『ああ、多分……三日月ちゃんは脳に侵食が進んでるから、私と同じような感性を持つっちゃってるのかもしれないね』

私の侵食が進んだ場合、同じように三日月のことを他人に思えなくなるかもと付け足された。それはそれで怖い。

「ああ、そういえば……三日月がお前に会ったら嬉しいぞ」

『私に？ ああ、そんな話をしていたね』

ずつと側にいるのだから、三日月とそういう話をしたことも聞いているか。

私が今会っているこの駆逐棲姫とは、雰囲気が違うような三日月側の駆逐棲姫。使われている部位が違うから、性格も変わってくるのだろうか。

『私がいろんな子が混ざり合って出来てるのかもって話したよね』
「ああ」

『三日月ちゃんの方には混ざってた別の子が行ったんじゃないかな』
パーツごとに宿っている人格が違うとでも言うのだろうか。それはそれで怖いのだが。

『前に話しているのを聞いた時、少し懐かしい気分になったんだ。多分、私の姉妹なんじゃないかな』

「……正直よくわからない話だ」

『だよ。私もよくわかっていないからね』

ケラケラと笑う駆逐棲姫。自分の境遇のことは全く気にしていないようである。

「若葉はお前を見ているから、少し意外なんだ。子供っぽいお前がどんなものかとな」

『正直、私も気になるよ。その子と会えたら何か感じるものがあるかもしれない』

姉の言うもののけとして私に憑いているこの駆逐棲姫は、同じ形で三日月に憑いている別の駆逐棲姫の姿は視認できないらしい。見える世界が私と共有されているからじゃないかとは思う。私がものけを視ることが出来ないのだから、駆逐棲姫も視ることが出来ない。今も隣で三日月が眠っているのだから、こう、なんやかんやあつてあちら側と繋がる事が出来ないものだろうかなどと考えたが、引っ付いているとはいえ同じ身体では無いのだから、夢を共有するのはまづ無理だろう。超常的な力が働かない限り。

同じ夢を見ることはあるが、同じ夢にいるわけではない。

『つと、もうそろそろ時間かな。若葉、今日はとても楽しかった』

「そうか。楽しんでもらえたのなら若葉も嬉しい」

『また呼んでいいかな』

少し上目遣いをお願いしてきた。そんなもの、断る理由がない。

「当たり前だ。お前は若葉の仲間……いや、友達だ」

『友達……うん、友達だよ』

最後はまた握手で終わる。今まで以上に満面の笑みだった。

目が覚めると、もう昼時。寝たのが朝だったので、少し睡眠が浅いくらいか。それでも、清々しい気分が目覚めた。身体の疲れも取れている。隣の三日月は笑顔で眠っていた。おそらく、あちらも駆逐棲姫と会っているのだろう。

今回の夢で、駆逐棲姫とはより強く結び付けたのだと思う。力を借

り、そしてあちらの目的のために力を貸す。お互いに思いは一緒なのだ。仲間として、友達として、今後もし一緒に進んでいきたい。

鎮守府の危機

その日は朝から来栖提督が施設にやってきていた。職人妖精の派遣と、近況報告のためである。私、若葉率いる五三駆は夜間警備だったために昼まで休んでいたのだが、その間にいろいろと手配をしておいてくれたらしい。工廠の修復は既に完了していた程である。指示はシロクロとセスがやってくれたようだ。

相変わらず仕事が早い。たった3日ほどで半壊した施設をより良い方向に修復してくれただけある。工廠だけなら半日もいらぬか。

「おう、夜間警備ご苦労さん。飛鳥、これでラストだな」

「ああ、この2人が最後だ」

私と三日月が最後まで眠っていたらしい。雷と曙、摩耶も既に起きて活動中のようなのである。生活する時間が変わると、なかなか上手くないもの。寝坊というわけではないのだが、こういうのは初めてである。

それに今回は駆逐棲姫との対談もあったし、なんだかんだ遅くまで眠ってしまったようだ。

「若葉達が起きるのを待っていてくれたのか」

「そりゃあな。真横で工事されたら困るだろ」

確かに。振動やら音やらで眠ることも出来ないだろう。しっかりと準備した状態で、部屋から離れた方が安全。

「じゃあ2階の増設を始めるぜエ。工廠よりや時間はかかるが、ひとまず4部屋増やしておくからよオ」

「ああ、よろしく頼む」

暁が一時的な施設の一員となり、今は雷と呂500の部屋に滞在中。曙が倒れた後に部屋割りが少しだけ見直され、曙は姉と同室に、リコが1人部屋となっているものの、使っている部屋の数は変化無し。そこに朝霜と巻雲が参入したことで、部屋は全て埋まってしまっていた。

外部からの出向組が今4部屋使っているため、事が済めばそれだけは空くが、これからの戦闘でさらに完成品を救出する可能性は高い。

そうになると、寝泊りしてもらおう部屋がないため、ここで増設してもらえるのは地味にありがたい。

「悪いが、すぐに始める。1階に移動してくれ」
「了解」

私達が自室から離れ、飛鳥医師と来栖提督に先導されて1階に下りると、誰もいない状況になったことで工事が始まった。私達はこれ以降、2階は上がることが禁止される。階段には侵入防止のテープが張られているほどである。当然エレベーターも使用禁止。

「この音の中じゃ、寝れねエだろオ？」

「工廠の音は気にならなかったのにな……」

私達がぐっすり眠っている間に工廠の修復が完了しているわけだが、その時の工事の音は全く気にならなかった。

工廠は場所が違うし、そもそも音がするところなのだから慣れていいる。しかし、間近で工事をされたら流石に眠れそうに無い。この配慮には感謝しよう。

「大体数時間つてくらいだ。暗くなるくらいにや大方終わってるから、安心しな」

来栖提督はここでやっておきたいことが終わったらすぐに撤収するらしいが、職人妖精はここで一晩明かすらしい。明日また、仕事を終えた妖精達を鎮守府に運ぶために来てくれるのだとか。

「それなら来栖もここに泊まっていてもいいんじゃないか？ 都合よく部屋も増えるのに」

「そうしてエのはやまやまなんだがな、こつちもそうは行かなくなっちゃった。つい最近なんだが、彩雲がこちらに飛んできているのをうちの哨戒部隊が発見しちゃったんだよ」

つまり、来栖鎮守府も監視されているということだ。この施設を襲撃するにあたって邪魔をしないように確認しているのか、近々滅ぼすぞという脅しなのかはわからない。

来栖鎮守府も大淀にとっては敵対勢力だ。さらに言えば、私達の施設よりも戦力が整っている。それ故に、私達が滞在している時に纏めて終わらせようと襲撃もしてきたし、監視をするのもわかる。

「今は大将が動けねエ。俺らのところは俺らで守らなくちゃならねエんだ。そもそも頼りすぎるのも良くねエしな」

「そうか……気を付けてな」

「おうよ。奴らの思い通りには絶対にさせねエよ」

私達よりも経験があり、さらには人数も揃っている来栖鎮守府だ。施設を襲撃されるよりは健闘してくれるはず。

とはいえ、敵の情報が皆無であるため、対策が練れるかどうかは不明。そこで来栖提督はしっかりと考えてここに来ていた。

「なら、もう帰るのか？」

「そうだな。朝霜からはさつき話は聞いておいたしよオ」

前回の朝霜への事情聴取の場に来栖提督はいなかった。そのため、直にしっかりと話を聞いていたようだ。

朝霜なら、現状がわからなくてもこちらに来る直前までの完成品達は知っているはずだ。完成させられたことで新たな能力を与えられている可能性もあるが、まるで違うということはないはず。ならば、情報としてはかなり有用である。誰であるか、どんなことをしていたか、本来との変更点は何か、などなど、知りたいことは沢山ある。

「昼飯くらいは呼ばれていくか。今から帰っても時間が微妙だからな」

「ああ、こちらに手伝えることは何でもやろう」

「おう、悪いな」

持つべきものは友。私もよく理解させてもらっている。私の中にいる駆逐棲姫とは、いい友好関係を結んでいきたい。少なくとも私は、彼女を友人と感じているし、それを口にした。あちらもそれを喜んでくれている。

今一番必要なのは、こういった関係性なのかもしれない。あちらは数人でも異常な強さ。こちらは対抗するためには仲間達と協力する必要がある。

午後、来栖提督は帰投。その後は工事中ではあるが普段通りの生活に戻った。私は三日月と鳳翔に見てもらいながらリミッター解除の

訓練を続け、他の者もそれぞれにあった訓練を続けている。

だが、今回は鳳翔が少し調子が出ていないようだった。来栖提督が言っていた、鎮守府に飛んできた彩雲というのが気になっているのだろう。私達が眠っている間にその辺りは聞いていたようだ。

「……鳳翔、気になるのか」

「そう、ですね。私の居場所が監視されているというのは、やはり気になります」

訓練の合間を見て聞いてみると、やはり。自分がいない間に、本来の居場所が攻撃を受けるといふのは気分の良いものではない。ましてや、鎮守府を壊滅させられるほどの勢力でもあるため、いくら自信があるとしても気にならないわけがない。

「一旦戻ってみてはどうでしょう。長くここにいてもらっていますし、戻ることは悪いことでは無いと思うんですが」

三日月も気になるなら見に行った方がいいのではと案を出す。

鳳翔は本来、来栖提督の秘書艦だ。それが、私達の戦力増強のため不ずつとここに滞在してくれている。それこそ、もう大分長いこと。そういう任務だと言われればそれで終わりなのだが、あまりに施設で占有し続けるのもどうかと思う。

二四駆だつてそうだ。ここをずっと警備してくれているが、自分達の鎮守府が気にならないことはないだろう。警備隊を違う駆逐隊と交代して、一時帰投するのも無くはない。

「その間は、この戦力が大きく減ります。むしろ追加で人員を増やしてもらいたいくらいです。ただでさえ施設は常に危機的状況だというのに、私の我儘でここを空けるといふのは……」

「我儘でも何でも無いと思うのだが。自分の本来の居場所を守ることが優先させて何が悪い」

だからといって、独断で鎮守府に帰る、ということが出来ないのもわかっていることだ。今はもう帰投してしまったが、来栖提督に一度聞いてみるべきだった。

鳳翔は少し悩んだ後、ふうと息をついて微笑む。いろいろ考えた結果、自分が納得する答えが出たようである。

「明日もまた来ると言っていますし、その時に話してみますか。確かに私も不安ではあります。それですぐに帰投することが出来るとは限りませんが」

「それがいい。話しておけば、来栖提督も何か気にかけてくれるだろう」

「心配してくれてありがとうございますね」

私達が気付いたことで、鳳翔も少しだけ心が落ち着いた様子。

「では、私達が安心して一時帰投出来るように、一層強くなってもらわなくてははいけませんね。訓練を少しハードにしましょう」

「ああ、若葉は大丈夫だ。これ以上の訓練も悪くない」

「の、望むところです。強くならなくては、施設は守れませんから」

藪蛇だったかと思っただが、実際鳳翔の胸のつかえが少しだけでも取り除かれたのならそれでいい。元々スパルタではあったのだから、少しハードになるくらいで私達はへこたれるつもりは無いのだ。

実際、やってみたら少しどころか相当ハードになっていたのは言うまでもない。

夜、その頃には施設の増築も完了しており、本当に部屋が増えていた。これにより、救出した者の部屋も、出来ることなら援軍も受け入れる準備が出来たとと言える。4部屋増え、同じような仕様なら2人部屋。8人の増員が可能となる。

それをやってくれた職人妖精達は、夕食で好物である金平糖を出されて満足げ。サイズ感的に近い浮き輪達と戯れていた。

その場で鳳翔は飛鳥医師に一時帰投のことを相談していた。二四駆や足柄羽黒にもその件は話している。鎮守府が危機に陥るかもしれないと聞くと、やはり一旦帰投して様子を見ておきたいと話していた。

「ふむ、一時帰投か。僕としてはそれも必要だと思う。本来の居場所の危機かもしれないのなら、そちらを優先すべきだろう」

「ありがとうございます。明日、提督がここに来たときに聞いてみたいと思います」

飛鳥医師は、許可さえ出れば帰投もやむなしと快くそれを受け入れていた。

本来の居場所を優先したいのは誰だって同じ。私だって、もし来栖鎮守府に向向していたとして、施設が危ないかもと言われれば、施設を優先したくなる。

「彩雲の監視ってことは、空母隊ってことよね。あの時の連中かしら」
足柄は思い当たる節があるようだ。風雲が来栖鎮守府に襲撃してきたとき、とんでもない数の爆撃機による空襲を受けている。おそらくその実行犯が、その監視者である可能性を考えていた。

「そういえば、五航戦が指揮していましたね、あの空母隊は」
「完成品にも五航戦がいると朝霜は言っている。そういうことだろうな」

そもそも姫にもいたという五航戦。朝霜が言っていた完成品であろう者にも含まれているため、それがそのまま完成させられたと見てもおかしくはない。

「我々の鎮守府の航空戦力に抜かりはありません。防空も万全です。ですが、相手が完成品となると、話は変わるでしょう」

あの時も空母隊と防空隊で制空権は拮抗にまでは持つていつていた。それを続けられるのなら、鎮守府が空爆により失われるようなことは無いだろう。だが、それは前と同じならばだ。

完成させられた今、空母としてのスペックは別次元になっている可能性が高い。重巡洋艦である鳥海がああトンデモスペックだったのだから、大型艦である空母がそれ以上になっているのは誰でもわかる。

「対策を練っていないわけはないと思いますが、それを乗り越えてくる可能性は充分に考えられます。ならば、打てる手は全て打たなくては いけません」

「制空権を取りつつ、ダメージを与え、出来ることなら救出も視野に入れなくちゃいけません……難しいですね」

羽黒も今の状況をしっかりと見据えて考えていた。

鳥海と対峙しているのだから、完成品の脅威は身を以て知ってい

る。ただ倒すだけではダメという状況で、ただ倒すだけでも損害が大きすぎる敵というのは、あらゆる方面で脅威。手加減をしてはこちらがやられる。

「ただでさえ夜にも艦載機を飛ばしてくるような輩なのよね。うちに夜戦出来る空母なんてそんなにいないわ」

「出来ないわけでは無いですよ。私も今回は夜戦装備を届けてもらいましたから」

来栖提督は、鳳翔用の夜戦装備を持ってきてくれたようだ。今まで襲撃されても手を拱いていることが多かった鳳翔も、これで参戦出来る。

大淀と鳥海は工廠まで乗り込んできてくれたおかげで参加は出来たが、毎度のこと空母対策のためと思えるほどに夜襲を仕掛けてくるため、その対策はしつかりとった。

「まずは明日、来栖に話をしよう。出来ることなら先生にも話しておく。増援ももしかしたら許可してくれるかもしれない」

「はい、そうですね。急いては事を仕損じるとも言いますし、焦らず事に当たります」

こんなときにも鳳翔は冷静だ。だが、不安を感じている匂いは私にはわかる。表に出さぬよう、気丈に振る舞っているだけ。あの鳳翔だって、自分の居場所の危機となればそういう感情を持つ。

何事もなければいいのだが、こればかりは私達が止められるものでも無い。迎撃しか出来ないこの環境が辛い、それこそ鳳翔が今言った通り、焦らずに動いていきたい。

危惧していた事態

来栖鎮守府が敵に監視されているという情報を本人から聞いたことで、本来そこに所属している鳳翔達出向組に一時的に帰投してもらう方向に向かい始めた。その時だけは施設の防衛能力が落ちるが、自分の本来の居場所が危機に瀕しているという事実がストレスになるのなら、その解決をしてもらった方がいいと思う。

翌日、夜間警備は何事もなく終了していたらしく、朝の日課の時に戻ってくる九二駆が浜辺から見えて、少し安心。鳥海の夜襲で全員酷い目に遭ったことで、夜に対するトラウマが植え付けられかけていた。

日課を終えたらら工廠で艤装を下ろしているところ。2回目とはいえ、やはり一晩中の警備というのは疲れるようで、4人とも眠そうな顔をしている。

「お疲れ様、姉さん」

「うむ、任務完了じゃ。何事もなく、朝を迎えることが出来た。まこと良き朝日じやのう」

「朝を迎えることが出来たことがこんなに嬉しいのは初めてかもしれないね」

姉も夕雲も、任務が無事終了したことを本心から喜んでいて。霞と風雲もホツとしている。4人が4人、相当な恐怖を味わったと見える。ご愁傷様としか言えないのが辛い。

唯一足柄だけはそういったものは感じていないようだった。実戦経験の差があるのかもしれないが、そもそもその闘争本能がおかしいので、その辺りが効いているのだと思う。

考えてみれば、たった1人で突っ込んできているのに、砲撃は効かず、近付かれて素手で壊されていくというのは怖い。武器を使ってくるわけでもなく、ただただ格闘戦を海上でやられるのは普通ではあり得ないだろう。それもあってか、ただの夜襲とは違う恐怖を感じるのは当たり前のことか。

「さ、じゃあお風呂に入って、ご飯を食べて、すぐに寝るわよ。勝負に

勝つには正しい健康状態！ 万全な体調で最高のパフォーマンスを出してこそその勝利！」

「うむ、足柄殿の言う通りじゃの。わらわはもう眠い」

「霰さん、立ったまま寝ないでくださいね」

欠伸しながらゾロゾロと風呂の方へ。

これからもこんな感じで夜間警備は続いていくことになる。早くこの任務も終わらせたいものだ。

午前中に職人妖精を迎えに来るはずの来栖提督がなかなか来ない。妖精達も浮き輪と戯れながら待ち構えているのだが、昨日の時間になっても来る気配が全く無く、少し不安になってくる。

ついには夜間警備をしていた九二駆と足柄が目覚ますくらいの時間になってしまったので、心配になってきた。

「……遅いですね」

一番心配しているのは当然というべきか鳳翔である。秘書艦というのもあるが、それ以上の関係にも見えた。

今でこそ離れて生活しているが、それは2人の考えがあつてのこと。私達を育て、施設を守ることが、今回の事件の解決に繋がると思つて選択した状況である。私達が口出し出来るものではない。

「連絡してみよう」

「お願いします。提督がもう出た後だとしても、誰かが出るでしょうから。私が外にいる間は、秘書艦代理を立てるようにしているはずですよ」

来栖提督が出た場合、のつぴきならない理由があつて外に出るのが遅れていることになる。秘書艦代理が出た場合、すでに来栖提督はこちらに向かつている最中。念のため迎えに行く方がいいだろう。そして、誰も出なかつた場合は緊急事態となる。

飛鳥医師が自分の部屋に行き、来栖鎮守府へ電話。そして数分後、工廠に戻ってきた。表情と匂いから、最悪な展開になってきた。

「出なかつた。何かあつたと思えない」

「飛鳥先生、出撃します」

即座に動き出したのはやはり鳳翔。すぐに艤装を装備し、海に出る。が、気が急ぎ過ぎている。1人で行くのはさすがに危険だ。せめて誰か連れて行ってほしい。

「待ってくれ鳳翔。出撃はいいが、1人で行くのはやめるんだ」

「……そうですね。急いで事は仕損じると、自分で言ったことでした。申し訳ございません」

今までに無く切羽詰まっている。ここまで焦っている鳳翔を見るのは初めてだ。自分の提督の危機に、いつになく事を急ごうと躍起だった。

結果的に、来栖鎮守府へ向かうのは出向組が全員、そこに私、若葉と三日月もついていくことになった。万が一の時に三日月の眼と私の鼻が使いたいとのこと。

少し大人数ではあるが、大急ぎで来栖鎮守府へと向かう。鎮守府から連絡が無いと聞き、鳳翔以外の者も焦りを見せていた。足柄や江風、涼風は声を荒げ、海風と山風はただただ心配で無言に。羽黒は態度にはあまり出さないようにしているが、鳳翔のように焦りが匂いで漂ってきた。

来栖提督は部下からの信頼が厚い。誰からも好かれ、分け隔てなく接している。だからこそ、危機に陥った時にみんなが命を張る。

「あれは……っ!？」

鎮守府近海に入った途端、水平線の向こうに黒煙が見えた。少しでは無い。何本も煙が空へ向かって昇っていた。一番見たくなかったものだ。

この位置から見えるということは、あれはもう鎮守府が燃えている。もしか思えないものである。ただ燃えているのではなく、空襲を受けたかのような燃え方だ。

それを目の当たりにした瞬間、私と三日月は置いていかれるほどにみんなの速力が上がった。低速艦である鳳翔ですら、リミッターを外しているのではと思うほどに速い。

「提督……無事で……!？」

猛スピードで向かったことで、すぐに鎮守府も見えるところへ。私達も一度ここに住まわせてもらっているのだから、全容は知っている。

それは、前に見た鎮守府とは似ても似つかない状態だった。

半壊状態の鎮守府。特に工廠の辺りは大きく破壊され、鎮守府内部が外からでも見えるほどにえぐられている。私達の施設が破壊された時よりはまだ原型が残っているものの、鎮守府としての活動は到底出来そうにない。

遠目に見ていると、艦娘の姿もチラホラ見えた。死んでいるわけではないが、怪我をしているのがわかる。ドックが破壊されてしまっているせいで治療も出来ないのだろう。

「嘘……提督!」

鳳翔がさらにスピードを上げた。艦娘は見えても来栖提督の姿は見えない。えぐられていない鎮守府の内部にいないのが普通だが、最悪な場合、あの瓦礫の下という可能性すらある。それだけはあるてはならない。

「提督! 提督いらっしやいますか!」

鎮守府に辿り着き、鳳翔が叫んだ。所属している艦娘達は予想していなかった鳳翔の帰還に驚きつつも、来てくれたことに喜びを隠さなっていた。

「おう、鳳翔。連絡出来なかったから来てくれたのか」

いつもの声が聞こえてきたことで、最悪の可能性が無くなりまずは安心。

「提督……ご無事ですか!?!」

「無事っちゃあ無事だが、腕が折れちゃった。あと腰が痛エ」

副木を使った応急手当をされてきている来栖提督。よりによつて利き手側らしく、これからの生活が面倒臭そうだと溜息をつく。いつものトレードマークであるサングラスも割れており、今までうつすらしか見たことのない生の瞳が露わになっていた。

比較的無事だった明石を筆頭に、動けるものが動けないものを手当てしている段階。来栖提督に応急手当をしたのも明石らしい。

「俺ア艦娘じゃねエから入渠なんて出来ねエからな。飛鳥にでも診てもらおうか」

「よかった……貴方がいなくなってしまうたら、この鎮守府は……私達は終わりでした……!」

鳳翔が来栖提督に詰め寄り、艦装もその場に放り投げるように外して、無事を喜び抱きついた。今までに見たことのない鳳翔に驚きを隠せない。

「あー、鳳翔、みんなが見てるからよオ、今は控えてくれや。それに腕が痛エ」

「あつ、も、申し訳ございません。感極まってしまつて……」

「俺の無事を喜んでくれてるのは嬉しいぜエ」

頭をポンポンと撫で、一旦離れてもらった。今日の鳳翔は表情がコロコロ変わる。

「飛鳥んトコに行つてたのは全員来てくれたのか。悪イな、心配かけちまつて。通信の配線がぶつた切られちまつてよ。電話も出来ねエ」

「ホント心配したわよもう。若葉、職人は連れてきてたわよね」

「ああ、本来迎えに来るはずだった妖精達だ。ここの建て直しも出来る」

足柄も大きく溜息をついていた。本当に安心したのが匂いからわかった。

頭や肩の上に乗っていた職人妖精を、来栖提督に渡す。その妖精に指示し、まずは配線を直してもらい、通信が出来るようにしていくようだ。施設にも下呂大将にも連絡が出来れば、いい方向に持つていくはず。

「三日月ちゃん!」

「姉さん! よかった、生きていたんですね」

怪我人を応急手当していた文月が、こちらに気付いて駆け寄ってきた。瓦礫の上なので走りづらそうだったが、何とか飛び越えてこちらへ。その後ろから二二駆が全員生きてそこにいてくれた。

長月が少し怪我をしているようだったが、動けないような重傷ではなくて良かった。

「私達も手伝います。まずは何をすれば」

「まずは自分の部屋を見てきてくれ。被害があるか無いかを知っておきてエ。その後は、怪我人の手当て、簡易ベッドでも何でもいいから寝られるところだ。脚をやられちゃった奴もいるからよ」

海風の言葉に、今必要なことを並べ立てる。自分が動くことが厳しいためか、まずは徹底的に指示。最善の道を示し、最速の復興を目指して進めていく。

「……来栖提督、その……だな、犠牲者はいるのか」

「幸い、犠牲者は誰もいねエ。それは最初に確認してんだ。だが、ドックが壊されちゃったせいで、重傷なのに治せねエ奴らが大量にいる。通信が終わったら工廠を速攻で直してもらわねエと、鎮守府が回らねエ」

これも来栖提督の徹底した指示のおかげ。怪我人はすぐに下げ、戦えるものが前に出る。練度が低い者はサポートに徹し、とにかく命を守り続ける。最初の命令は必ず『死ぬな』だそうだ。

轟沈は絶対に出さないと誓いの下、相手がどんなことをしてきたとしても死に辿り着かせない策を練り続けている。

しかし、大破したものは沢山いる。文月だって無傷ではない。そこら中に動けないものがある。鎮守府が破壊されているのだから、それに巻き込まれてしまう者だっていただろうし、そもそも完成品との戦闘でやられた者もいる。

あちらはここの者も材料と見做していたのだろうか。だからなるべく殺さないように振る舞っていたのだろうか。その辺りは本人でないのだからわからない。

「提督、何があったのですか。五航戦ですか」

「おう、翔鶴と瑞鶴を中心にした空母隊だ。そう聞いている」

この戦いの最前線に出ていたのは、防空隊として艦載機を必死に撃墜していた文月だという。三日月と無事を喜び合っているところだが、少しでも話を聞くことに。

「うん、その2人が一番後ろから艦載機出してたよお。物凄い数で、あたし達だけだと全然ダメで……結局鎮守府が壊れちゃった」

鎮守府を守ることが出来なかったことと、今まで頑張ってきたことが通用しなかったことへの悔しさ。来栖提督を筆頭に、守れなかったことで傷付いたものか多数出てしまったことへの怒りと悲しみ。

いろいろな負の感情が渦巻き、話していく内に徐々に涙目に。肩を震わせ始めたところで皐月が身を寄せて慰めていた。

今の今に話を聴くのは酷というものか。おそらく夜襲を受け、今まで一睡もしていないはずだ。食糧がどうなっているかもわからない。今は何をすることも余裕が無い。

「……若葉さん、三日月さん、私は施設には戻れそうにありません」

「ああ、そう言うと思っていた」

「こちらを優先してください」

鳳翔は怪我を負った来栖提督に付き従うため、施設には戻らずここに残るとのこと。他の者も今は復旧作業を手伝いたいと申し出た。

出向先より本来の居場所を優先してもらいたい。何も言わなくても、私達からここに残ることを推していた。今は来栖提督の側においてもらいたい。それにより施設の戦力が減ったとしても、誰も文句は言わないだろう。

「お、通信設備が回復したみたいだ。流石職人だぜエ」

そうこうしている内に、職人養成が通信だけはすぐに修復を完了させたようだ。完膚なきまでに破壊されていたわけではなかったようで、ものの数分で直せるレベルだったのは幸い。

これにより、飛鳥医師と下呂大将には夜襲を受けたことは伝わった。下呂大将から新提督にも伝わり、大本営からの援助が早急になることにもなる。私達の予想以上に復旧は早く進んでいくだろう。

もう一度襲撃を受ける可能性も考えられており、あらゆる面で早急な復旧を求められている。出来ることは私達も手伝わなければ。

監視の目

連絡が取れなかった来栖提督の状況を知るため、鳳翔達と共に鎮守府に向かった私、若葉と三日月。私達がそこで見たものは、完成品達の夜襲により半壊していた来栖鎮守府。通信の配線が破壊されていたせいで連絡が取れなかったことがわかった。

艦娘の半数以上は多かれ少なかれ怪我をしており、来栖提督も腕の骨折や打身などの怪我。艦娘は入渠さえしてしまえばすぐに治るが、提督はそうはいかない。しばらくは激しく動けないと見るべきである。

それがあつたため、秘書艦である鳳翔は私達の施設への出向は取り止め、来栖提督の世話をすることとなった。こればかりは仕方のないこと。

「ここが落ち着いたらまた援軍行くわ。鳳翔さんは提督の世話で忙しいでしょうから行けないけど、私達はまた行くから」

「はい。私と足柄姉さんは援軍としてまた行かせてもらいますね」

足柄と羽黒は鎮守府再興が一段落ついたらまた訓練や防衛のために力を貸してくれるらしい。戦場が激しいのは間違いないが施設側だ。足柄の闘争本能に火をつけるには充分だった。

「私達も残ります。部屋は片付けておいてくれて構いませんので」

「また行った時に部屋貸してくれよな。次は江風達とは違う駆逐隊が行くかもしれないけど」

二四駆もまた来てくれるとのこと。あれだけ長居したのだから、第二のホームと言っても過言では無いほどに愛着が湧いてしまったらしい。

「若葉、三日月、すぐに施設に戻っておけ。少しでも人員を割くわけにはいかねエだろ」

「手伝わなくていいのか?」

「おう、誰も死んでねエんだ。協力しあえば今の人数でもどうとでもなるぜエ。職人妖精も連れ帰ってきてくれたしな」

腰をやってしまったのが辛そうで、今は瓦礫に腰掛けて他の者に指

示を出し続けている状態。

ドックがない上に、高速修復材も全て破壊されてしまったために、大破状態の艦娘も今の来栖提督のように人間と同じ治療を受けている。こんな時に飛鳥医師がいれば、より良い治療が出来たかもしれない。

「話を通っているなら、飛鳥医師をここに連れてくることも出来るだろう。艦娘は設備があれば何とかなるが、来栖提督はそうは行かない」

「おう、悪いな。こりや医者に診てもらった方がいい。余裕がありやこちらから行ってエが、手段が無エからな」

残念なことに、鎮守府に配備されていた大発動艇も破壊されてしまっているため、来栖提督からこちらに来るのは少し難しい。

下呂大将に連絡したことで、大本営から早急に設備の修復が進められたら話は変わるが、今すぐとなると、霰に大発動艇の運用を頼んでここまで来てもらうしかないだろう。それなら飛鳥医師をここに連れてきた方が早い。

大本営から軍医を派遣されるかもしれないが、それが遅れた時のことを考えれば、一番近い位置にいる飛鳥医師が適任だ。近いと言っても、艦娘の最高速度でかなりの時間がかかるのだが。

「だから、お前達は施設に戻って防衛を頼むわ。今はこつちも機能不全だからな。お前らのトコはこのタイミングで狙われんぞ」

「すまない。すぐに戻らせてもらう」

「おう、心配かけてすまねエな。連絡はしたが、飛鳥にヨロシク言っといてくれや」

少し疲れた顔で手を振ってきた。元気とは言えないが、命があることは喜ぶべきだ。これほどガタイのいい男だし、次に会うときにはピンピンしていそうである。

三日月と共に大急ぎで施設に戻る。

私と三日月が抜けていることだけでさえ人数が少ない施設の防衛力が格段に減ってしまっている。2人だと誤差範囲かもしれない

が、いないよりはいた方が当然いい。

「この間に何かあられても困るが」

「お昼ですし、いつもと同じなら来ないですよね」

希望的観測ではあるが、敵は夜にししか来ないというのが今のところの定説。それが外れたのは、私達が一時的に来栖鎮守府に滞在させてもらっているときに、下呂大将もやってきて家村の鎮守府を調査しに行こうとしたときだけだ。

あの時はあの場所に飛鳥医師、来栖提督、下呂大将と大淀には好ましくない人間が勢揃いしたことが理由だろう。今は各個撃破でも充分と見做しているのだろうか。

「そうだとしても、夜が危ないな」

「はい。確か、今日の夜間警備は……」

「若葉達だ」

ローテーション的には二四駆なのだが、4人は鎮守府に戻っている。故に、今施設には駆逐隊が2つしか無いため、ローテーション前倒し。私達が夜間警備となる。

状況的には今が一番危険だ。外部の者がいなくなったことにより人員が元に戻り、施設が必要な者のみが滞在している状態。さらには援軍も期待出来ないような環境である。今晚は確率が非常に高い。

「今晚が峠か」

「でしょうね……同じように空襲を受けるかもしれませんが」

「だが、それを守らなくちゃいけない」

好きにさせてたまるか。などと強がってみせても、私は対空砲火なんてやったことがない。むしろ、五三駆の面々は誰一人として経験が無いのでは。そもそも高射砲や両用砲を使えるのは摩耶と巻雲のみである。

雷がリコから手解きを受けていたが、あれはあくまでも低空飛行の戦闘機を撃ち墜としていく命中率上昇の訓練であり、対空砲火では無い。

「空襲を相手にするのは摩耶に任せよう。若葉達には手段がない」

「そうですね……代わりに本体を叩くしかないです」

「それも立派な防空だろう。発艦するのがいなくなればいいわけだからな」

そもそも艦載機を発艦させないというのが一番の防空だろう。元から断つ。それが上手くいけばいいのだが、相手は性格が捻じ曲がった大淀作の完成品である。遠距離からの航空戦専門の五航戦は、近接攻撃にも何らかの耐性をつけられているだろう。それこそ、回避性能が上がりすぎているか、近距離用の武器を持つようにさせられているかは定かではない。

「五航戦だけならいいんだけどな」

「そうですね……」一緒に鳥海さんが来る可能性だってあります」

総攻撃という可能性だってある。名前を知る完成品5人が一斉に来るとしたら、さすがに厳しすぎる。

「やれることをやるだけだ。そのために若葉達は訓練を続けてきたんだからな」

「……そうですね。弱音は吐かないようにします」

「ああ、それがいい」

航行しながら頭を撫でておいた。気持ちよさそうに目を細め、機嫌が良くなる。落ちていたテンションも少し上がったようだ。

「ん……？」

「どうした」

そろそろ施設の近海。トップスピードで航行中だが、三日月が何かに反応した。

「あれ、若葉さん、見えますか」

三日月が空を指差す。私もそちらの方を見ると、空を飛ぶ何かを見かけた。言われなければ私は気付かないレベルのもの。

海上から見ると、もう大分小さく見えるほどに高い位置にある。形状までは判断出来ないが、鳥ではないことくらいは素人目に見てもわかった。

「彩雲か」

「じゃないでしょうか……」

以前に一度見たものとは少し違った。あそこまで高い位置では無

かったし、色も違うように見える。だが、速度は私の知っている。確かに彩雲のそれだ。

私達の真上を通り過ぎて、チカツと光を発した。こちらを見ている目に、太陽の光が反射したか。

「施設も監視しているということだな」

「ですね。あれを追えば敵の居場所に辿り着けそうですが」

「若葉と三日月だけでどうにか出来るとは思えない。一旦帰投する方が確実だ」

出来ることなら追いたいだが、さすがに危険すぎる。私達が施設に向かっていているのもこれで確認されているだろうし、誘き出されている可能性も捨てきれない。ならば、戦力的にはまだある施設に戻ることを優先する。

私達だって、来栖鎮守府から休息無しで戻っているのだ。実際のところ、少し疲労もある。一度休憩しないと、最大のパフォーマンスは発揮出来ない。

「帰ろう。まだその時じゃない」

「了解しました。私は若葉さんに従います」

「……お前が言うのと重く聞こえるな」

ひとまず帰投を優先。来栖提督からどのようなように連絡が行ったかはわからないが、私達が知る限りの情報も全員に認識してもらっておきたいところだ。

奇襲を受けるようなことはなく施設に到着。その間に不審な影を見るようなことも無かった。

やはり襲撃してくるのなら夜なのだろうか。空母封じもあるかもしれないが、慣れていなければ視界が狭まるのも辛いところ。それに慣れているあちらには、時間なんて関係無いのだろう。

「帰投した」

「ただいま戻りました」

「おう、お帰り」

工廠では摩耶がシロクロやセスと一緒に艀装整備しながら待つて

いてくれた。出向組の帰投ということ、訓練のプランを練り直しているところらしい。そんな中でも曙はリコに鍛えてもらっているらしいが。

「センセ、2人が帰ってきたぞ！」

「ああ。若葉、三日月、来栖からは連絡を貰ってる」

飛鳥医師には詳細ではないものの鎮守府がどうなったかくらいは連絡が行っているようである。来栖提督が負傷したという事実を聞き、すぐに治療をしに行きたいと考えていたようだが、時間的に今から行くとあちらに泊まらざるを得ない時間になってしまう。

鎮守府が大変な時に治療とはいえ、泊まりがけで押し掛けるのは流石に問題。そのため、明日の朝、改めて向かうことにした。下呂大將や新提督にもその辺りは頼まれたらしい。あちらも大変なようである。

「あと、さつきここに来るまでに彩雲を見た」

「……………こも監視をされているということか」

「ああ。三日月が気付かなかつたら若葉もわからなかつた」

そろそろ、下手をしたら今晚にでも襲撃を受けるだろうとわかると、そのための準備に移行。少なくとも、私達がここに帰投するまでに襲撃されていないのだから、やってくるのならいつも通りの夜襲。

「若葉と三日月の艦装整備は今すぐにやっちまう。迎撃すんだろ」

「そうなるだろうな。今日は五三駆が夜間警備だったか」

「おう。アタンが引率だ」

艦装の整備は私も手伝い、万全な態勢に持っていく。今訓練中の曙の艦装も、なるべく早いうちに終わってもらい整備をしておきたい。それを伝えるに曙の下へ。そこでは、雷がやっていた360度から戦闘機に襲われる訓練が執り行われていた。雷はそれを水鉄砲で撃ち墜としていたが、曙はその集中砲火を掻い潜り、防御し、それでも尚突き進み、リコに接近しようとしている。

今は押し返されているようだが、曙の成長は著しく、その動きは目を見張るものになっていた。水浸しではあるものの、持ち前のスタミナで息切れもなく、延々と回避し続けている。あらゆる場所が鍛えら

れている。

「すまない、曙、リコ。訓練を終わってくれないか」

「ああ、帰ってたの。で、何だよ」

「夜襲を受ける可能性が出てきた。ここに戻るときに三日月が彩雲を発見している」

この言葉に、曙の動きがピタリと止まる。リコも曙への集中砲火をやめ、訓練ではなく哨戒機を飛ばし始めた。今ここから飛ばして確認できるかはわからないが、やらないよりはマシだろう。哨戒範囲に敵がいるかがわかるだけでも大分変わる。

「今日、ローテ変わって夜間警備だったわよね。なら、私達が警備中に襲撃される可能性があるってこと？」

「ああ。だから万全にしておきたい。曙の艦装を整備しておきたいんだ」

「それなら仕方ないわね。リコ、感謝するわ」

「構わん。お前の強くなりたいたいという気持ち、わからなくもない。またやってやる」

素直に訓練をやめて、施設に戻ってくれる。リコも哨戒が終わったらすぐに戻るとのこと。

「あつちはどうだったの」

「……鎮守府が半壊していた。来栖提督も骨折していたほどだ」

曙の舌打ちが聞こえた。曙だって来栖鎮守府を知っているのだ。それを破壊されたと聞いたなら、怒りが込み上げてくることもあるだろう。

「好き勝手やりすぎよあのクソ淀……生きていることを後悔させてやるわ」

「ああ……今までもそうだが、奴のやり方は目に余る。それでいて本人が出てこないのだから気分が悪い」

簡単な愚痴大会に発展。万全な態勢には精神状態も含まれるため、ストレスは取り払っておきたい。

曙にはこの口汚く罵るといふ鬱憤の晴らし方がちようどいらしい。部屋割りの変更で姉と同室になってからは、たびたび話を聞いて

もらっているようだ。曙は溜め込みやすいようだし、それでストレスが発散出来るのなら万々歳。姉もメンタルカウンセラーとして優秀である。

「次に来たら絶対に逃がさないわ。どうせ鳥海さんと五航戦辺りでしよう」

「ああ、おそろくな」

「全員倒して洗脳を解いて、逆にクソ淀に喋けてやるわ。自分の手駒にやられればいいのよ」

やはり鬱憤は溜まり続けている模様。だが、その鬱憤に呂500のことが含まれていないことは喜ばしい限り。

決戦は今晚。来ないなら来ないで構わないが、意気込みだけは強く。次は撤退もさせない。負けてたまるか。

夜の海

その日の夜、夜間警備のためにみんなが寝静まった時間に出撃した私、若葉率いる第五三駆逐隊。摩耶引率の下、施設近海をゆっくりと回りながら見て回る。これを一晚中繰り返すことで、近海に何者かが来てもいち早く対応するのである。

あまり早く動き過ぎると、終わった頃には酷い疲労感に襲われることになる。曙は平気な顔をしようなものだが、雷と三日月が厳しい。ペース配分も考えて、監視の目を怠らない。

一度やっているためわかってはいることなのだが、やはり真つ暗闇の海というのは慣れない。戦闘中にはいろいろと興奮しているために気にならないのだが、今この静かな空間だと、恐怖すら感じてしまいうようになる。

そもそも私達は、嵐の夜戦で死に掛けたという大きなトラウマがある。ここ最近はそのままで気にならなくなってきたが、こうも静かだと意識してしまうものだ。眼の力を使うために殿しんがりを務める三日月も、少し意識してしまったか、私と手を繋いでしんがりの航行になっている。

「時間にして半分。一回休憩すつか」

「了解」

時間はおおよそ丑三つ時。摩耶の提案で一度施設に戻り休憩をする。訓練とはまた別の形の疲労感だが、数分の休憩で次の周回に入れるようになる。

今の施設は、工廠以外は電気も消えている真つ暗闇。その工廠も、そこまで煌々と照らされているわけではない。用意しておいた甘味と飲み物で軽く腹を満たし、再び夜の海へと出て行く。

「来ないなら来ない方がありがたいわ」

「んなもんアタシもそう思ってるぜ」

ボヤク曙に対して摩耶も話す。おそらく全員同じ。援軍も見込めない現状、完成品との戦いは熾烈を極めるだろう。撃破まで行けずとも、撃退までは持つていきたい。が、そこに辿り着くまでに酷いことになる可能性も捨てきれない。

無傷の勝利が出来るならいいが、そんな楽な相手ではないことくらい、誰もが痛いほど理解している。事実痛かった。

「防空は摩耶に任せるしか無いんだが」

「おう、最初はアタシが防ぎ切る。途中からは巻雲も来るし、リコやセスだつて航空戦が出来るからな。どうにか施設に被害が出ないように踏ん張るぜ」

今このメンバーの中で、対空砲火が出来るのは摩耶しかいない。私は言わずもがな、他の3人も高射砲や両用砲を持っているわけではないので、艦載機相手だと回避以外にすることが無くなってしまう。

追加で装備を作っておく余裕も無かった。パーツも施設の修復や増築に使われているし、そもそも高射砲のためのパーツがあまり無かったらしい。摩耶の物を新規で作るのと、巻雲のものを修理するのを使い切ってしまったとか。

「アタシが耐えている間に本体をやってもらおう。そこは全部任せろ。ただ、問題は鳥海も来た時だ」

「空を撃つてる最中に摩耶さんが狙われちゃうわよね。それはダメ、私が摩耶さんを守らなくちゃ！」

「水鉄砲なら物ともせず突っ込んでくるわよ。うまいこと足止めしないう。」

そもそも空襲が来るかもわからない。どう攻めてくるかはあちら次第である。だが、今のうちにどう戦うかは決めておくのもいいだろう。

だが、時間は待つてはくれなかった。おおよそ丑三つ時、この時点でそろそろだと勘付くべきだった。

いつも襲撃はこの辺りの時間帯。みんな寝静まり、一番熟睡しているであろうタイミング。夜間警備をしていなかったら、施設崩壊で全滅のこの時間に、三日月が空を見上げた。

「何か来ます」

指差す方、暗くてよく見えないが、一瞬月明かりに反射して何か小さなものが飛んでいるのが見えた。それはそのまま施設の方へと向かうとしている。1つだけだったが、その1つが大問題。速い。と

にかく速い。

「んにやろ、墳式爆撃機かよー！」

三日月が方向を指示したことで、摩耶の眼にも見えていた。即座にそれに対応し、両用砲による対空砲火で撃墜する。あの速さの爆撃機も、しつかり確実に処理していた。夜というハンデは物ともしない。それと同時に、施設に警報を鳴らした。1つ来たということは、ここから大量に来ると考えてもいい。すぐに対応しなくては、最悪な事態に向かってしまう。

「警報は鳴らした！ 戦闘配備！」

先程の爆撃機が飛んできた方向を向き、各々が武装を構える。こちらから向かうのもいいのだが、これ以上施設から離れると援軍の合流が遅くなり、だからと言って退くと施設に害が及ぶ確率が高くなる。

1つを撃ち墜とした後から、次から次へと同じ速さの艦載機が飛んできた。摩耶が必死に対空砲火を繰り返し、どうにか施設に辿り着かないところで墜としてはいるものの、それを墜とすために徐々に施設側に下がってしまっていた。

「お前らは進め！ アタシは全部ぶち墜とす！」

防空は摩耶に任せ、私達は艦載機が飛んでくる方へ進む。これ以上退がったら施設に接近しすぎて戦いが難しくなる。

暗がりのためよく見えないが、かなり遠くの方、水平線ギリギリの場所に、ポツンと光が見えた。以前に夜襲をかけられた時に見た、鳥海の探照灯。暁に何かをしたあの光。

「鳥海の探照灯か」

「完成品3人ってこと!?!」

鳥海は当然空母ではない。この艦載機を飛ばしてきているものが別にいるということだ。来栖鎮守府に空襲を仕掛けた五航戦も間違はなく鳥海と共にいる。

一気に3人、さらには私達駆逐艦よりも大きな艦娘のみ。五航戦は装甲空母という耐久力も高い空母だ。苦戦は必至。

「ちよ、ちよつと、何よアレ……」

「嘘でしょ……何よあのふざけたのは!?!」

雷が空を指差した。その方向から月明かりが隠れていく。それが全て艦載機によるものだど気付くのに、そう時間は掛からなかった。

あまりにも尋常では無い数。100や200はゆうにある。夜間に航空戦が出来ない来栖鎮守府が半壊に追い込まれたのも無理はない。あの数から一気に爆撃されたら、否が応でも破壊され尽くす。むしろ半壊で止まっただけでもいい方だ。

それよりも小さい私達の施設など、あっという間に押し潰されて全壊してしまう。職人妖精の力で強度は本来の数倍になっているため、多少は耐えられるかもしれないが、あの数は流石に無理。

「このっ、全部アタシがぶち墜としてやらあな！」

噴進爆撃機を相手取りながら、イナゴの群れのように飛んでくる艦載機の一群にも穴を開けていく。

だが、1人では当然限界がある上に、墜とせなかつた爆撃機が私達にも爆撃の雨が降らせた。回避を選択するとどうしても押し戻されて行く。施設に近付くのは危ないということは誰だつてわかっているのに。

戻されて戻されて、施設が視認出来る位置に。敵艦載機は既に施設の上空に近い位置まで接近している。そのまま爆撃されたら施設が危険だ。

そのタイミングで、施設から幾つもの艦載機が発艦を始めた。前以て空襲を受けるかもしれないと知っていたため、いの一に準備してくれたのはおそらくリコとセス。さらには巻雲が対空砲火しながらこちらに向かっているのが見えた。

「巻雲っ、速攻で来ましたあ！」

「助かる！ 全部ぶち墜とすぞー！」

「はいですうー！」

それでも異常すぎる数の敵艦載機に大苦戦は必至。私達がアレに對して何も出来ないのが辛いところである。一部の爆撃機は施設に對して爆撃が出来ており、破壊はされていないものの、傷がつき始めている。流石に無傷は無理。

それを早急に終わらせるべく、私達に対する絨毯爆撃を回避しながら

ら本体を狙いに行きたいのだが、それが出来ないほどの攻撃量に回避一辺倒にさせられてしまっていた。

「くそっ、数が多すぎる！ あっちは大丈夫か！」

「リコさんとセスさんだけじゃ足りなかったのでえ、シロクロちゃんが頑張ってますよお！」

シロクロの艦装はあらゆる艦種のハイブリッドに近い。水上機とはいえ航空戦も出来る。さらには、その搭載数はセスはおろかりコよりも多いと来ている。

3人が全力で発艦させ、そこに摩耶と巻雲の対空砲火が合わされば、空を覆う艦載機の群れも拮抗まで持っていけるかもしれない。

「若葉！ 奴らをぶちのめせ！ 艦載機のことには気にすんな！」

「了解。そっちは任せた！」

そうこうしている内に、遠目に見える灯りが少しずつ大きくなってきた。鳥海の眼鏡に備え付けられた探照灯が、夜目が利くわけでもない私達にも確実に見えるほどになっている。

その後ろ、2人の空母を先頭にした空母隊が絶えず艦載機を発艦し続けていた。数機を放つては準備し、またしては数機を放つ。それを延々と繰り返し、こちらを圧殺しようとしているわけだ。

「あら、まだ施設は残ってますね」

またもや計算違いだと嫌そうな顔をしている鳥海と相對する。眼鏡に備え付けられた探照灯は点滅もしておらず煌々と照っていた。点滅は暁をおかしくするためだけに使われていた様子。

「残念だったな。摩耶達が拮抗してくれているぞ」

「あちらの鎮守府とは違いますね。夜に航空戦が出来る者がいると、こうまで厄介とは」

来栖鎮守府には夜に航空戦が出来る戦力が限られている。あの時は鳳翔も夜戦装備を持っていたが、鎮守府には数人分、多くても数十機分くらいしか用意が出来ていなかったらしい。

結果的にこの量の空爆に押し潰されたことになる。制空権は劣勢のまま、防空もままならず鎮守府半壊。夜というのが恐ろしく面倒であることがよくわかる。

こちらは深海の仲間がいることが本当に功を奏している。昼夜問わずに膨大な数の艦載機が使えるというのは、それだけでも有利。深夜の防衛戦に有用とは考えても見なかったが。

「鳥海、ここのはどうすればいいんだっけ？ 全員生かした方がいいんだっけ？」

「大淀さんはなるべく生かして連れてこいと言っていましたね。ここはいい材料になりそうなんだとか」

「なるべくくつてことは全員殺しちゃってもいいわけね」

そう鳥海と話すのは、空母隊の先頭に立つ空母の片方。あれが五航戦か。

髪を2つに結った攻撃的な方が早速私に向けて矢を放ってきた。額狙いの一撃必殺。だが流石にそれは狙いすぎだ。即座に回避。

「アレが噂の黒い痣の若葉でしょ。大淀さんがはしやぎながら話してた」

「はい、アレは特に生かして持ってきてほしいと」

「生きてればいいのよね。四肢が動かなくても問題ないでしょ」

さらにもう一射。今度は心臓狙い。言葉とは裏腹に、私のことは殺す気で攻撃している。

今度はその矢を三日月が撃って破壊した。リミッターを一時的に解除し、矢を破壊した後に即座に掛け直す。負荷を最小限に食い止め、長期戦闘に対応。

「ダメよ瑞鶴、あの子は殺しちゃいけないの。そんなに殺したいなら他の子にきなさい」

「そうね、仕方ないか。あと殺しちゃダメなの誰？」

「今貴女の矢を撃ち墜とした三日月ちゃんもです。あの2人は自分から至った者らしいので」

度々言われる至るとい言葉。おそらく、私や三日月のように深海棲艦のパーツによる侵食のことを指しているのだと思う。大淀もここまで来れていないと言っていたが、奴はそれでも充分に臭かった。私達とは別次元に深海の何かと絡み合っているように思えた。まるで溶け合っているような。

完成品も同じだ。あのキューブの力で負の感情がブーストされ、体内に仕込まれた深海の何かが身体中を侵食している。外見は艦娘でも中身は深海棲艦。思考は薬による洗脳が行き届いて、大淀の忠実な部下である。

いずれにせよ、私達とは違う。私達は仲良くなれたが、奴らは強制しているようなもの。無理強い力で力を最大限に発揮させているだけだ。

「空襲を止めてもらうぞ」

リミッターを外し、五航戦の後ろで発艦し続けている空母隊の1人に向かう。それらも弓を射って艦載機を発艦しているので、弓と矢さえ破壊してしまえば、空襲は止まるはずだ。

だが、そう簡単には行かせてくれない。私の進路上に立ち塞がるのは、五航戦のもう片方。白髪の空母が弓を振りかぶっていた。思った以上に動きが速い。

「腕が腕げるくらいでは死にませんよね？」

あの弓はまずい。2本の曲がった刃を弓の形に組み合わせたものだ。矢だけでなく、弓そのものが武器になっている。奴の腕力がどれほどかはわからないが、受け止めて大惨事になるのは防ぎたい。

緊急回避で横を潜り抜けようとするが、そうすると眼前に艦載機が1機鎮座していた。深海の要素を組み合わされているせいで、艦載機もリコと同じように空中で静止するタイプ。

「くそ……！」

「殺しませんよ。動けなくはしますけど」

退かざるを得なくなつた。腹が立つほど誘導が上手い。私は回避方向を決められたのだと思う。こうしなくてはいけないと思つたのは、奴の掌の上だったようだ。

すぐに元の位置に戻り、体勢を立て直す。独断先行はダメだ。みんなと協力していかなくては、勝ち目が無い。

「そうでした。まだ名乗っていませんでしたね。私は五航戦、姉の翔鶴」

「妹の瑞鶴よ。大人しく捕まってくんない？ アンタと三日月が来て

くれば仕事終わりなのよ」

白髪の方、翔鶴と、2つ結びの方、瑞鶴が、事もあろうか私に降伏を迫ってきた。誰が屈するか。

「断る」

「あつそ。ならアンタ達以外は皆殺しね」

「残念ですが、痛くしないとわからないようですね」

改めて弓を構えられた。瑞鶴の弓も、翔鶴の弓と同じ仕様。接近戦にも対応している。なかなか荷が重い。

左腕が疼き始めた。駆逐棲姫も力を貸してくれるようだ。今はこの場を切り抜けなければならない。

空を埋め尽くす力

夜の海、完成品3人による夜襲。夜間警備に当たっていた私、若葉率いる第五三駆逐隊と摩耶が、それを迎撃すべく戦闘態勢に入った。

深夜だというのに膨大な量の艦載機による空爆が施設を襲うが、施設が誇る精鋭、深海棲艦の協力者達と、防空性能に特化した摩耶、そして両用砲をこれでもかと思う巻雲の奮闘で、施設へのダメージは最小限に抑えられていた。全てを撃墜することは難しいが、施設が破壊されていないのなら充分過ぎる。

私達の相手は完成品。鳥海と五航戦、翔鶴と瑞鶴が相手となる。鳥海は前回の戦いで異常な握力と耐久性を見せたが、他の2人はまだわからない。少なくとも、弓が遠近両用の武器であることは見てわかった。

「摩耶とご自慢の深海棲艦は空爆を抑えるのに必死。援軍は撤収済み。残っているのは駆逐艦だけ。それで私達に勝てるんですか？」
「勝つき。そのために若葉達はいろいろとやってきた」

あの恐ろしい速さで施設に向かう墳式爆撃機は、どうも五航戦しか扱えないようなので、最低限、五航戦を抑えないとどうにもならない。

しかし、鳥海をフリーにするわけにもいかない。今ここにいるのは五三駆の4人だけ。ここから人数は増えるだろうが、それは全て駆逐艦だ。せめて防空に手隙が出来れば話は変わるが。

「若葉、私と雷で鳥海をやる。アンタと三日月は五航戦を止めて」

「……任せた」
「任された。こういう時のために私らは血の滲むような努力をしてんのよ」

私は鳥海とは相性が悪い。拳銃付きナイフがあるとはいえ、鳥海の手が届く距離まで近付かないとまともにダメージを与えられないため、掴まれたら最後である。それと比べると、リーチが長い曙の方が鳥海とは相性がいいだろう。

ここからの援軍は各々に参戦する方を決めてもらう方がいいとは思いますが、朝霜も鳥海とは相性が悪いことがわかっているため、こちら

を手伝ってもらおう。

まずは後方の空母隊に黙ってもらわなくては話にならない。もう一度、先程と同じようにリミッターを外す。隣で三日月もリミッターを外したのがわかった。三日月は匂いが変わるためわかりやすい。

「援護頼む」

「了解」

先程と同じように後方の空母隊に向かい突っ込む。案の定、同じように翔鶴が行手を遮ってくるが、今回は三日月の援護付き。振りかぶった弓に対して砲撃することで、私への攻撃を妨害する。

しかし、あちらには瑞鶴がいる。翔鶴と同じ弓を私に対して振っていた。2人がかりで私の進行を止めようとしてきたということは、空母隊による攻撃はやめてもらいたくないということだろう。

「邪魔だ！」

「アンタこそね！」

今回は回避出来る場所が微妙だったため、瑞鶴の一撃はナイフで受ける。朝霜の攻撃を受けた時ほど重くは無かったが、鋭い一撃。だが、その時には矢をつがえていた。そのまま射たれたら肩を貫かれるため、即座にバックステップ。

放たれた矢は私の服を掠めた。あの瞬間に、私が移動する方向に合わせてきた。瞬発力なのか勘なのかはわからないが、即座に対応してくるとなると考えなければならぬ。

「ほら、避けなさいな！」

その矢は私を通り過ぎた後、艦載機に変化。真後ろからUターンし、群れとなって私に襲い掛かってきた。前からは瑞鶴本人が近接戦闘、後ろからは艦載機の群れ。たまったものではない。正面の攻撃を受けていたら後ろから狙い撃ち。後ろに意識をやれば本人からの攻撃。

ならばと横に避けると、艦載機の群れが全て私の方へと方向転換。それなりのサイズがあるため、猛禽類に襲われているような錯覚に襲われる。

「くそ……！」

どうにか拳銃で撃ち墜とそうとしているが、艦載機そのものが硬く、摩耶や巻雲の防空でなければ破壊できないと思われる。

そうなると正直1人では荷が重い。三日月の方を見ると、先程とは逆にこちらへの援護を翔鶴に妨害されている。あちらは殺す気が無いためか、どう見ても手加減と言った感じで三日月をいなしているのが気に入らない。

「瑞鶴の邪魔をしちゃダメよ」

「邪魔は貴女です。そこを退きなさい」

「お断りよ。貴女も捕獲対象だし、動けなくしてしまいませんか」

瑞鶴と同じように、翔鶴も艦載機の群れを発艦した。私よりは対処が出来ると思うが、三日月はリミッターを解除し続けているため、タイムリミットが近付いている。あの形で時間を使われると厳しい。

「っしやあああつ！ 朝霜参上オ！」

と、私の方へと朝霜が突っ込んできた。防空隊を最優先で準備させていたが、他の者も続々と準備を終えて参戦してくれるようだ。まずは最速でここまで来れる朝霜が参戦。正直助かった。

乱入してきた朝霜は、低空飛行で襲いかかってくる艦載機の群れを、手に持つ棍棒で打ち払った後、そのまま瑞鶴へと特攻。弓を叩き折らんばかりに力任せに殴り付ける。

「アンタ、裏切り者の朝霜！」

「裏切ったんじゃねえ、目が覚めたただけだ！ アンタもボコって目え覚まさせてやるぜえ！」

その攻撃は受け止められたが、瑞鶴の顔がほんの少し歪んだ。なるほど、それを受け止められるほどの腕力は無いと見える。先程弓による斬撃を受けたときにも重さはそこまで感じなかった。重い攻撃は効く。

しかし、それを補うレベルの艦載機の量。私に群がっていた群れは朝霜に逸れていき、私が若干フリーに。

「若葉あ！ 後ろの空母やれ！」

「助かる！」

朝霜が瑞鶴を引きつけてくれている間に、私が後ろの空母隊へ。出

来る限りのスピードで、未だ空襲を続ける空母隊の人形に突っ込む。1人でも減れば防空隊の負担が減るのだ。今は完成品を処理するよりも大切なこと。

「そんな簡単に行かせるわけが無いでしょうが！」

乱雑な朝霜の攻撃を軽く払うようにいなした。力が劣っていても、その力を利用して体勢を崩し、腹に膝を入れる。骨が折れるほどのダメージではないが、いきなりのダメージでどうしても力が抜けてしまう。

「んぎっ!? やらせねえ！」

「邪魔よアンタ！ アンタは死んでもいいわよね、裏切り者！」

思い切り蹴り飛ばして朝霜を退かし、私の背後から射撃。それはキナ臭い匂いから飛んでくるのはわかっていた。それを見ずに回避し、さらに突き進むが、私を通り過ぎたところで艦載機に変化。即座にUターンして私の進路を邪魔してきた。

射撃と爆撃を組み合わせた面倒な妨害のために進むことが一気に難しくなる。無理に通ることも難しく、また空母隊に届かずに退くことになってしまった。

「何なんだこの艦載機は！」

「任せよ！ わらわ達も来たぞ！」

九二駆が到着。私の方には姉が来てくれた。三日月には夕雲と風雲が、そして曙と雷には霰が援軍として参加。

今は倒すのではなく足止め優先。最善の状態を作るために、まずは空母隊の撃破。現に、五航戦の施設による空爆は私と三日月である程度止めることが出来ていたため、多少なり向こうも楽になったと聞く。

「ああもう、わらわらと。翔鶴姉、ちよつと手が抜けないんだけど」

「そうね。じゃあ例の2人以外はもういいわ」

「そうこなくっちゃ！」

ニイツと笑って、弓を朝霜に突き立てようとするのが見えた。腹を蹴られたせいで少しふらついているが、振り向きざまに棍棒でそれを払った。体勢が崩れていてもその腕力は健在。それでブレるくらい

なのだから、本当に瑞鶴の腕力は並より少し上くらい。やはり朝霜を瑞鶴にぶつけるのは正解。

だが、瑞鶴の動きは確実に変化していた。今までは頑張つて手加減していた動きなのがわかってしまった。

「遊び無しよ。若葉が殺せないのは残念だけど、アンタ達は皆殺し」

鋭さが増し、速さも増し、量も増す。先程発艦した艦載機はそのまま残っており、私は足止めされ、朝霜と姉には殺意のこもった爆撃を繰り返す。参戦したばかりの姉は回避一辺倒に。朝霜は艦載機による射撃を棍棒で弾きながら瑞鶴と打ち合い。

先程とは本当に違う。朝霜の打撃を軽くいなしているように見えた。いなすと同時に矢をつがえ、超至近距離での射撃が加わるため、それをキャンセルするために姉が攻撃をするという嫌な防戦に入っている。

「若葉もそちらに行く！」

「お主は後ろの連中を早う止めよ！ そうすれば勝機はある！」

「やらせるわけが無いでしょうが。馬鹿な子！」

朝霜に対して射つた矢は次々と艦載機に変化し、射てば射つほどに戦場が狭くなる。私への妨害も数を増し、一部は施設の方にも向かってしまうため、あちらへの圧力も増していく。

焦つてはいけないのはわかるのだが、野放しにしていると全てが増え続けるという詐欺みたいな航空戦闘力。ここにいるものは殆ど艦載機を墜とせないため、増える一方である。どこからそんな搭載数が稼げるのか理解出来ない。

そしてそれは、翔鶴でもある。あちらは三日月を筆頭に夕雲と風雲も艦載機処理を多少はしているのだが、それが間に合わないほどに矢を放っていた。三日月の反応速度を以てしても、矢を回避するまでで止まってしまい、撃ち墜とし切ることが出来ない。

今では五航戦の2人から発艦した艦載機だけで、私達の戦場の上空が埋め尽くされようとしている。その全てが爆撃しようものなら、なす術もなく押し潰されてしまいそうだった。そんなことしたら五航戦自身も巻き込まれるためすることは無いと思うが。

「貴女達も裏切り者だったわね。夕雲さん、風雲さん、覚悟はいいかしら」

翔鶴も瑞鶴と戦術自体は同じ。近付けば弓による斬撃、離れば矢による射撃。そして射撃はそのまま艦載機へと変わり、爆撃による圧力となる。

「三日月さん、温存してください」

「結構ギリギリでしょ。一回掛け直して！」

「助かります」

リミッターを掛け直したことで、どつと疲れが来たのだろう。少しフラついてしまった三日月。それを見逃すこともなく、翔鶴が三日月の脚に向けて矢を放った。あくまでも私と三日月は捕縛対象、生かして捕らえようとしている。

それはこちらも理解していること。その矢はわかりやすく三日月を狙っているため、夕雲と風雲が同時にそれを撃ち墜とす。

「それは流石に読めてますよ翔鶴さん」

「たった3人でよく耐えること。すごく鍛えたんでしょうね」

3人とも翔鶴を生かして倒そうだなんてもう思っていないだろう。それでも全く手が届かない。私達も瑞鶴に同じように向かっているが、やはり及ばないでいる。

1人だけでも手が付けられないのに、それが2人。さらには下がり過ぎると鳥海がいる。だが、その鳥海は曙と雷がしっかり引き付けてくれていた。

相変わらず尋常ではない硬さのバルジを駆使し、曙の実弾主砲と槍、雷の水鉄砲を全て捌いている。それでも一切の躊躇なく、曙は攻撃を繰り返して雷はそれを援護している。

「駆逐艦では傷一つ付けられませんよ」

「バルジはね。でも、アンタは生身じゃない。柔な身体なんだから」
「そこに通すと思っっているんですか？」

鋭い槍の一突きも、しっかりとガードしてくる。返して主砲を放たれたが、曙は予測しているかのよう回避。当たったら即死レベルだが、当たらなければ隙を作るチャンス。放った瞬間に主砲の持ち手に

向けて薙ぎ払うが、それすらもバルジで受け止めた。

瞬間、同じ方向から雷が水鉄砲を放つ。当然高出力であり、当たりどころが悪ければ気絶だっけしてしまふほどの威力。狙いはバルジの間、生身の腕。

「そういう横槍は嫌われますよ」

しかし、ガードを下にズラすだけでそれはガード。水鉄砲故に衝撃も殆どなく、鳥海はビクともしない。

「嫌われるのは嫌ね。仲良くしたいもの！」

「そうですか。なら自分から屈してくれるとありがたいですね。余計な手間が省けますから」

「それが出来ればいいんだけど、ごめんね」

曙の攻撃の合間を縫って、的確な位置への砲撃。曙が上を狙えば下を狙い、下を狙えば上を狙う。

「すきま、うつよ」

そこにさらに霰の砲撃。雷と同じことを実弾でやっているため、雷の攻撃よりもガードしなくてはいけない状況を作り出している。

しかし、3人がかりの攻撃も全て受け切ってしまう鳥海は五航戦と同様に異常。前回の襲撃の時も、摩耶と巻雲の集中砲火を受け続けていただけある。火力がまだ足りない。

だが、それを覆す援軍がようやく到着する。

「援軍とうちやーく！ それじゃあ、私達の力、見せちゃうよ！」

「施設はやらせない……帰ってもらおうよ」

シロクロが戦場へ。施設側の空襲は減るところが増えているように思えたが、そこから抜け出して大丈夫か。

いや、大分無理をして来たのだろう。リコとセスの航空戦と、摩耶と巻雲の防空により、拮抗出来るほどにまで持っていたから、ここにシロクロがいる。我が施設の最高戦力にして、完成品と同じようなインチキの塊。

「硬いのはそのメガネだよ。それじゃあアケボノ、撃つよーっ！」
「たっ、助かるけどいきなりすぎー！」

宣言後、すぐに主砲を発射。施設の中での最高火力は伊達ではな

く、耳をつんざく轟音と共に鳥海に向かって放たれた。

駆逐主砲はおろか、改造された摩耶の両用砲も受け切ったバルジだが、これは本当にまずいと思っただのか、鳥海が回避行動に移る。が、その進路を曙が塞いだ。逆方向は雷と霰がしつかりと食い止める。

「貴女達は……！」

「ご自慢のバルジであれくらい受けてみなさいよ！」

「あられたちじゃ、きずひとつつけれないからね」

「ごめんね鳥海さん、私達も手段を選んでいられないの」

あの轟音だけあり、弾速もとんでもない。少しでも躊躇しただけで回避が不可能になる。

鳥海はそのほんの少しの停止が仇となり、シロクロの主砲をバルジで受け止めざるを得なくなった。直撃した瞬間のえげつない音と同時に、鳥海が空を舞う。それでも生身は無傷であることが恐ろしい。形勢逆転だ。シロクロの参戦が、私達の劣勢を一気にひっくり返す。

姫の力

鳥海と五航戦による夜襲を迎撃している私、若葉と施設の仲間達。戦いが進めば進むほど空を飛ぶ艦載機の数が増え、それを放つ者にも届かず苦戦を強いられている。私が先行して空母隊を減らそうとしてのだが、それは全て瑞鶴に食い止められ、他の者も完成品に行手を遮られ続けていた。

完成品の力は凄まじく、3人が3人無傷のまま。対するこちらにも傷は負っていないが、消耗はさせられている。1人に対して3人つけていても、圧倒的な力に自分を守ることで必死。

最中、新たな援軍、シロクロが戦場に現れた。今まで長い時間かけてようやく完成した、継ぎ接ぎの艦装の初陣。最初の狙いは、私達の誰の攻撃でもそのバルジに全て阻まれていた鳥海。

射線上から逃さぬよう曙と雷、霰がその退路を塞ぎ、轟音と共に放たれた主砲が直撃。バルジで受け止めたようだが、その強烈過ぎる威力で鳥海が宙を舞った。

「つぶな……私達までやられそうじゃない!」

「手加減なんて出来ないからね。装填の間は姉貴お願い!」

「うん……艦載機発艦……対空砲……撃つよ」

戦闘中も絶えず増え続けていた五航戦の艦載機。これを少しでも減らしてくれるとシロが艦載機を発艦。さらには高射砲による対空砲火を開始。主砲の威力もさることながら、高射砲も半端ではない。摩耶や卷雲の対空砲火よりは劣るかもしれないが、そもそも主砲を撃ちながら艦載機も飛ばしてやれる力では無かった。

シロクロに求められた艦装の再現をただけなのだが、2人分の艦装を1つに集約するという深海ならではの滅茶苦茶な要望だったためにこれである。

「な、何なのアイツ!」

水上機と対空砲火で五航戦の艦載機が迎撃されていく様を見て、瑞鶴が目丸くした。拮抗とは言わないが、ここに艦載機を追加しなければ最終的には蹂躪し尽くす勢い。

ただでさえ耐久力に特化した鳥海が一撃の下に吹き飛ばされたことでザワついていたというのに、主砲と対空を両立する者が施設にいるとは考えていなかったのだろう。深海双子棲姫を匿っていることは知っていただろうが、艦装が完成していたのは計算外のようなのである。

「装填完了！ アサシモ避けてよ！」

「あいよー！」

「ってことは私!? 冗談じゃないわ！」

朝霜に回避するように忠告してから再度主砲を放つクロ。掠るだけでもとんでもないことになる威力なのはわかっているため、朝霜との打ち合いを放棄してでも回避。

このタイミングで瑞鶴を狙ってくれたのは本当にありがたかった。当てるつもりがあろうがなかるうが、あの威力を目の当たりにしているのだから、受け止めようだなんて1mmも思わないだろう。

「今だな」

そのおかげで、瑞鶴からの妨害が若干緩んだ。これで後ろの空母隊に向かえる。リミッターを外した速度なら、これで潜り抜けられる。

考えた瞬間、身体が動いた。三日月とは少し違うが、今はこうしなければならぬと確信したからこそ、即行動。艦載機の群れによる妨害を抜け、空母隊の先頭の人形に肉薄し、艦載機を発艦する弓を破壊した。

「瑞鶴ー！」

「あつ!?」

「完成させられてもそういうとこ変わんねえよなアンタ」

弓を弾き飛ばすように棍棒を振るった朝霜が、そのままお返しと言わんばかりに瑞鶴の腹を蹴り飛ばす。朝霜があちら側にいた時から、翔鶴よりも若干詰めが甘いらしい。

それを見たからか、今度は翔鶴が私の妨害を始める。艦載機が私の方へ飛ばすために矢を放った。だが、そちらにも私の信用できる仲間はいる。

「やらせるわけないでしょう」

再度リミッターを外した三日月が、艦載機に変化する前の矢を撃ち墜とし破壊。さらには弓まで破壊しようと本体を狙ったが、それは流石に回避された。

「行け若葉！ わらわ達が食い止めるー！」

既に艦載機へと変化した矢は、姉がしっかりと対処してくれている。高く飛んでいない状態ならば、高射砲でなくとも墜とす事はできた。

このおかげで私はまだフリーとなったため、空母隊の発艦装備を次々と破壊していく。今回の敵は速さが足りないのがあるがたかった。代わりに圧倒的な数で妨害し続けるつもりだったようだが、それを上回る単騎が来てしまったことで策が瓦解したと見える。

シロクロがいなかったらジリ貧で全滅だった。今施設がどうなっているかはあまり考えないことにする。

「空母隊は無力化した！」

「っしゃあ！ んならこれで集中出来るな！」

武装だけ剥がして人形はそのまま放置。リミッター解除を掛け直す手段は飛鳥医師が持っているため、助けられることが出来るかもしれない。

戦場から離れるかはわからないが、空母故に発艦さえ出来なくなれば無力だ。前のように逃げてしまうかもしれないため、艦装だけは半壊させ、航行不能にしておく。

「あんな隠し球聞いてないわよ翔鶴姉！」

「深海双子棲姫がいることは知ってたけど、艦装は無かったはず。回収したのは私達だもの、それは間違いないわ」

艦装が完成したのはつい最近だ。知るはずがない。だからこそ、3人ともこの場で終わらせる必要がある。この情報を持ち帰られるわけにはいかない。

「やってくれましたね……」

吹き飛ばされてもまだ健在な鳥海。しかし、防御に使ったバルジは破損しており、あと数回攻撃を受けたら破壊されるほどであった。その衝撃もすっかりと効いており、今までにないほど憔悴している。

計算外が続いて焦ってきているのだろうか。落ち着くために眼鏡

を指先で押し上げ、深呼吸。そんな隙だらけの行為を許すわけもなく、曙が破損したバルジに強烈な突き。咄嗟のことのため、ガードを選ばせる。

「増援が来たから調子付くとは、弱者の思考ですよ」

「これくらいしないと勝てないくらい私が弱いことは、自分でよくわかってるわよ。けどね、クソみたいなインチキして調子こいてるアタの方がよっぽど哀れだわ」

ヒビに食い込ませるように放たれた突きは、その一撃だけで今までどうにも出来なかったバルジを完全に破砕した。シロクロの主砲によるダメージが思っていた以上に深刻だったらしい。

「今度はそっちね！　ってえーっ！」

バルジを破砕した直後にクロの主砲がもう一撃。威力は変わらず、回避しなければ二の舞い。一度まともに受けて自慢のバルジがやられたことで、完全に回避に専念するようになっていく。

だが当然、回避させないように立ち回っていた。先程と同じように回避方向の進路を塞ぐ。勿論逆方向は雷と霰。しかし、今回は意地でも回避しようと曙に突っ込んできた。

「そこを退きなさい！」

「退くわけがないでしょうが！　そのご自慢の盾で防ぎなさいよ！」

槍ではなく主砲で迎撃する曙。それを残っているバルジで弾きながら突っ込む鳥海。クロの放った主砲を鳥海はストレスで回避し、さらには曙に手が届く位置にまで突っ込んでいた。擦りはしていないが衝撃で若干よろける。

それでも曙の首に手を伸ばしたが、直後に雷が鳥海の後頭部に一撃。それにより、曙を掴むタイミングがズレ、辛うじて回避が出来た。「ダメよ鳥海さん、誰も死んじゃダメなの」

さらには霰が艦装に砲撃。誰でも艦装に不備があればいくら完成品でも機能不全に陥る。それを狙ったが、その艦装はやたら硬く、一撃だけでは傷が付く程度。破壊には至らない。

「かたい」

「霰なら同じとく、行けるわよね！」

「うん、だいじょーぶ」

一方曙は、体勢を崩した鳥海を避け、槍の柄で腹を打ち付ける。だが、その攻撃は体勢を崩しながらもしつかりと掴み、握りしめることで槍を捻じ曲げられた。

さらにはもう片方の腕に装備した主砲を曙に向けて放つ。槍を受け取られるほどに近付かれているため、その砲撃は衝撃だけでも曙にダメージを与えてしまう。そのため、槍を放棄してその場から離れた。寸前のところだったため、衝撃を受け曙は軽く飛ばされてしまふ。

「つくっ」

「よく避けましたね。でも終わりにしましょう。死に損ないにははよくやりましたよ」

その手を返して槍を振り抜いてきた。そのまま受ければ腹が真一文字に捌かれることになるが、槍の間合いを一番理解しているのは曙だ。紙一重のところまで回避する。

同時に主砲を腕に放ったが、残念ながらバルジで止められた。槍にやられるようなことはなく、何とか間合いを取ることが出来る。

そのおかげで次の攻撃が飛んでくることになる。鳥海の足下が突然爆発した。

「魚雷も使えるんだからね！」

「なっ……!?!」

それはクロが放った魚雷だった。あえて殺傷力の無いダミータイプではあるものの、その勢いだけは本来の魚雷と全く同じ。足下で爆発したら、海面から足が離れるほどに吹き飛ばされる。身体を浮き上がらせたため、これで回避不能の状態。

「あられがやるよ」

前回の襲撃では摩耶が浮かせたままにしたが、今回はそれはない。代わりに霰の連撃。先程撃った艀装の傷に対して、黙々と撃ち続けた。矢で言えば継ぎ矢をするかの如く正確無比な砲撃で、艀装を徐々に削っていく。

「まだ、やられないー！」

握りしめていた曙の槍を霰に投げ飛ばした。握り締めて曲げていたことと、空中で無理矢理体勢を変えたために勢いはほとんど無かったが、刃が飛んできたために霰が若干怯む。鳥海への砲撃を1発だけ槍を撃ち墜とすことに使う羽目に。

このまま着水されれば、近接武器を失った曙は少々不利。それを見越して、鳥海が槍を投げた瞬間に雷が水鉄砲を撃っていた。狙いは僅かな隙間、鳥海の眼鏡。

「つつあ!?!」

「視力はどうか知らないけど、それは壊させてもらおうわ」

探照灯が飛んだため、戦場は暗闇に包まれる。鳥海だけは常に照らしながら戦っていたが、それが無くなったことで動きが急激に鈍くなったように思えた。

眼鏡をかけているだけあって、鳥海は視力が低い。加えて夜だ。目の前の曙すらもボヤけて見えるのだろう。眼鏡が失われたことで戦闘能力が一気に下がった。

「こっの……!?!」

「もういっばーっ!」

着水と同時にクロの魚雷が足下へ。せつかく足を着けたと思っただとところで、もう一度打ち上げられる。

いくらダミータイプの魚雷とはいえ、衝撃はそれなりにある。本来なら両脚が消し飛んでいるものだが、今回は2回受けたことで脚部の艤装に深刻なダメージを与えていた。次は着水しても即座に行動が出来ないだろう。

「これで、とおった」

さらには霰の砲撃により、主機に砲撃が通る。同じ場所に数度、削って削って削って、ついにそのダメージが届いた。いくら硬い艤装でも、傷が付かないわけではない。そこに何度もダメージを与えれば、最終的には通る。

航行に必要な艤装に深刻なダメージを受けたことで、まともに戦えなくなった。あとは武装のみ。それがあつた限り抵抗される。

「霰、槍ちようだい!」

「ぼろぼろだけど、はい」

投げられた槍を撃ち墜としていた霰が、曙にそれを蹴って渡す。放物線を描いて曙の元へと飛んでいき、見事にキヤツチ。

「まだっ、私は！」

「いい加減諦めなさいよ！」

空中でもどうにか体勢を立て直そうとした鳥海が主砲を曙に構えた。撃たれば当然酷いことになる。

真ん中から捻じ曲がり、槍としては機能しづらいそれを受け取った曙は、すかさず鳥海の腕に装備された主砲を突いた。外装は主機と同じく相当な硬さだったようだが、撃とうとした瞬間の砲口に捻じ込むことで、内部で爆発させた。

「っああっ!？」

「っぎ……これで手段無くなったわよね！」

モロに爆発を受けることになり、鳥海の腕はズタズタ。その爆発を曙も受け、槍を持つ腕に酷い火傷を負う羽目に。

槍も完全に木っ端微塵にされてしまったが、まだ曙には主砲が残っている。対して鳥海は武装の全てを失った。残っているのは尋常ではない握力だけだが、航行不能に陥ったため、それも接近戦として使うことは出来ないようなもの。

「アンタの負けよ……諦めて投降しなさいよ」

「負け……私の負け……?？」

それを自覚した鳥海は、動かなくなった。

が、下呂大將が襲撃をしたときのことを思い出す。敗北した完成品は自害する。鳥海も当然、そのシステムが組み込まれているはずだ。自爆装置は撤去されているにしても、何らかの手段を使って自ら命を絶つ。主砲があるなら頭を撃ち抜くなり何なりしているだろうが、それも曙が破壊した。

そうになると、考えられることは1つだ。あの鳥海ならば、自らの握力で自らの首を折る。

「命を粗末にしちゃダメ！」

それを察した雷が、怪我を負っていない手を水鉄砲で撃ち抜いた。

首に向かっていた手は弾き飛ばされ、海面に叩きつけられることになる。

「生きてればいいことあるわよ！ だから、自殺なんてダメ！」

「せっかくなんだから、救ってやるわよ。摩耶さんもアンタが死んだらきつと気分を悪くするわ」

気絶させるために雷がもう1発撃ち、頭に命中。今の状態で喰らえば、脳震盪により気を失うだろう。これで鳥海は気絶。

「ああーっ！ しんどいわ！」

「曙、腕は！」

「クソ痛いわよ！」

鳥海に関しては戦い方を一度見ていたおかげで対策が取れた。曙は負傷したが、何とか勝利。初見で九二駆が全滅させられたことを考えれば、十分な結果である。

あとは私達だ。厄介すぎる五航戦をどうにかしなければならぬ。

非情な鶴

曙達が鳥海を抑える中、私、若葉は五航戦と対峙。特に瑞鶴が私の妨害を強めている。そんな中に現れたシロクロによって妨害が緩み、そのおかげで後ろで空襲を続けている空母隊の武装を全て破壊することに成功。これにより、これ以上の激しい空襲は無くなる。

五航戦自身も、施設に空襲をかける余裕は無くなっているようだった。シロクロが参戦したことにより、パワーバランスが変動。合間合間にクロが放つ強烈な主砲と、シロがコントロールする艦載機と対空砲火により、防戦一方だった私達は状況を均衡にまで持っていける。

「ああもう、最悪！ アンタ達、ただじゃおかないわよ！」

「瑞鶴、落ち着きなさい。貴女はすぐ熱くなって周りが見えなくなるんだから」

姉の方が出来がいいらしい。思い通りに行かずに憤慨している瑞鶴を、翔鶴が宥めていた。

空母2人に対して駆逐艦6人。そこにシロクロもいるのだ。やれないレベルではない。

今までは施設への空襲も私達との戦闘の片手間にやっていたが、シロクロ参戦により私達の方は本腰を入れるようだった。艦載機の発艦は私達の殲滅を優先にしている。それでも私も三日月は捕縛対象となつているようで、最優先はシロクロのようだ。

「死んだはずの深海双子棲姫が生きていることにも驚いたけれど、まさか当時よりも強化されているなんて思っても見なかったわ」

「……おかげさまで……この人に生かしてもらってるから」

翔鶴の放った矢は一直線にシロの方へと向かうが、矢のままの状態ですぐ夕雲が撃ち墜とした。

足柄と羽黒の訓練を受けた九二駆の砲撃は、以前から考えるとんでもなく向上していた。同じところに何発も撃ち込むほどの命中経度を誇り、空母の放つ矢くらいであれば、艦載機になる前に撃ち墜とってしまう。

それを考えた瞬間に実行に移す三日月とはまた違った技ではあるものの、今はそれが出来るものが、姉、夕雲、風雲と3人いるということが大きい。矢を放ったところでもう艦載機に変化させることは無いほどに圧力をかけている。

「あたいらを無視すんなよ！」

そして私は朝霜と組んで瑞鶴に集中攻撃。性格上、翔鶴よりも瑞鶴の方が熱くなりミスを犯しやすいと思ったからである。先程の様子から見てもそれは正しいと思う。

だが、そういう者に限って、キレた時と爆発力が危険だ。それは敵であった時の朝霜が自ら体現している。巻雲がやられたことで、6人がかりの攻撃すら耐え切ろうとしていた。瑞鶴も同じタイプではなからうか。

「このっ、ただの腕力馬鹿が！」

「あたいはそれでいいんだよそれで！ アンタはそれで止まるだろうが！」

猪突猛進に瑞鶴に突っ込んで、大振りすぎるくらいに棍棒を振りかぶり、海面に叩きつけるが如く振り下ろす。脳天に当たれば死を免れない渾身の一撃。

本来なら救出が優先だ。だが、鳥海と同じく手加減なんてしたらこちらが持つていかれる。常に全力で立ち向かっているからこそ、今以上に発艦はされないし防御に専念させていられる。

「止まらないわよ！ アンタ、いつの話してんの！」

猛烈な振り下ろしを、弓を軽く倒しただけで横に払ってしまった。先程から瑞鶴はそういう攻撃の避け方をする。相手の力を利用して体勢を崩し、返しに渾身の一撃を入れる、合気道のような戦い方。雑な戦い方の朝霜にはうってつけの戦い方であろう。

だから私がいる。よろめいた朝霜の背中に弓を突き刺そうとした瞬間を狙い、それを握る手に拳銃による射撃。それと同時に突撃。

「つぶないわね！ そんなチャチな攻撃で！」

「狙いはそれじゃない」

私の射撃を避けるために手を引っ込めてくれた。おかげで朝霜へ

の攻撃は逸れ、腕に傷をつける程度になる。

朝霜への攻撃をズラし、且つ、手が届くほどにまで接近。射撃と同じように弓を握る手に対して攻撃する。どうせ避けるのならもっと大きく退いてもらいたい。

「また手!? やらせるわけないでしょう!」

キナ臭い匂い。殺意ある攻撃の時は確実にこの匂いだ。次の行動は避けるためではなく私を殺すための行動。

手首を回して私の攻撃を弾いた時、弓の刃の先端は私の顔面に向いていた。眼前に来られると流石に怯みかけるが、すぐさま手と足が出た。刃を払うようにナイフを振るい、ついでに瑞鶴の腹を蹴り、無理矢理間合いを取った。

「いいよワカバ……そういうことだよね」

この行動でシロが気付いてくれた。五航戦の艦載機処理をしている水上機の1機が、瑞鶴目掛けて特攻。たった1機だとしても、強烈な質量兵器だ。

「あまり調子に乗らないこと」

それを翔鶴が弓で撃ち抜いた。考えていたよりも早い一射であり、上に向けた対空の矢であったため、三日月も間に合わず。三日月が持つものが両用砲なら話が変わっていたかもしれない。

水上機を撃ち抜いた矢は上空で艦載機へと変化し、シロが散々拮抗している航空戦に参加し圧力をかけ始めた。若干の増加でシロが嫌な顔をするが、的確に処理していく辺りは流石だと思う。

「瑞鶴、熱くなりすぎよ。予想外なのはわかるけれど、落ち着きなさい」

「わかってるわよ! ああもう、イライラするわね!」

瑞鶴は多分このままイライラついたらまままでいてくれる。問題は翔鶴だ。常に冷静で戦場を完全に把握している。鳥海の方は見えているかはわからないが、自分と瑞鶴への危機は全て管理しているように思えた。

まだ手を抜いているようにも見える。私と三日月の捕獲は諦めていないようだ。そのおかげでここまで奮闘出来ているのかもしれない。

いが、最後までこうであってほしいものである。

「思い通りにならないからとイラつくとは程度が知れるのう」

「なんですって!？」

イラついている者にはまず煽る姉。冷静さを失わせて、より一層本調子を出させない作戦。朝霜の時もそうだったが、精神攻撃は姉の得意技であり真骨頂。最も気に入らない言葉をきっちり選んでぶつける。妹の私としても、正直意地が悪いと思う。

「やっておることが稚児ややくと同じじゃ。駄々をこねて暴れ散らかすなど愚の愚。五航戦が聞いて呆れる」

「この……言わせておけば……!」

「瑞鶴、落ち着きなさい!」

煽り成功。翔鶴の静止を聞かずに姉の方へ矢を放ち、突撃してきた。姉も同じ訓練を受けた九二駆なのだから、命中精度は先程の夕雲並に上がっている。放たれた矢は空飛ぶ主砲の一撃で簡単に撃ち墜とした。艦載機になんて変化させず、航空戦力の増強もさせない。

「あたかもこうだったと思うと気分悪くなんね」

「洗脳されているのだから仕方ない」

突撃を迎撃するのは私と朝霜。思考を怒りで染め上げたのだから、動きも単調。弓をただただ振りかぶり、嫌なものを目の前から排除するために暴れ回る。姉の煽りと同じだ。

だが、その攻撃は怒り任せだからか朝霜でもしつかり受け止められるほど。その隙に私が修復材ナイフで腹を斬りつける。

が、キナ臭い匂いが強まった。翔鶴が朝霜狙いで矢を放つ瞬間を見できた。三日月達が牽制しているにもかかわらず、お構いなしにこちらを狙ってくる。矢は三日月が撃ち墜としてくれるが、今回は同時に5本撃ってきた。あれに対応出来る人数を超えてしまっているため、回避せざるを得ない。

「朝霜退がれ!」

「ちっ、んなこと出来たのかよ!」

忌々しげに舌打ちしながら回避する朝霜。私もその場からすぐに退いた。瞬間、元々私がいたところを矢が通り過ぎる。5本同時撃ち

という無茶をしているのに、その精度は正確無比。気付かなかつたら、致命傷とはならなかつたかもしれないが、確実に刺さっていた。

間合いを取ってしまったため、翔鶴が瑞鶴と合流してしまった。瑞鶴はまだ頭から煙を出しそうなほどに怒り狂い、今にもまたこちらに突撃してきそうだったが、翔鶴が諫めていた。

「瑞鶴、やめなさい」

「翔鶴姉！ あそこまで言われて」

「瑞鶴」

低く、冷たい一言で竦み上がったか、瑞鶴の顔が若干青くなる。

姉妹だからか、上下関係もはつきりしていた。感情的で力任せな妹の手綱を握り、戦場でコントロールする。本来の五航戦の在り方は知らないが、あの姉妹はそういう在り方なのだろう。

そして、私が空母隊を沈黙させたことにより、さらなる援軍。

「巻雲！ 再び参戦しますう！」

シロの航空戦に紛れて巻雲が対空砲火で再参戦。猛烈な火力で次々と艦載機を墜としていく。私達が五航戦を抑え込み、航空戦力を増やさせなかつたことでここまで来れた。

「先に謝っておきましょう。正直、私は貴女達を甘く見ていた。この程度の素人集団は赤子の手を捻る程度で済むと」

他の者の攻撃をヒラリヒラリと躲しながら、何を血迷ったか私達に謝罪。ここまでやっても私達が抵抗出来ているため、考え方を改めると。今の今まで嘗めてかかっていたと告白したわけだ。

「あの空襲を耐え切ったことも想定外。そちらの戦力を見直す必要があるわ。瑞鶴、一度撤退しましょうか」

「はあ!? なんてこんな奴ら相手に撤退しなくちゃいけないのよ！」

こちらにも撤退されては困る。シロクロの情報を持ち帰られるのは洒落にならない。

最初はこちらに被害が無ければ帰ってくれるだけで問題ないと思っていたが、ここまでなるとそうはいかない。

「鳥海さんは……あら、本当に想定外」

ちようど今、曙が鳥海の武装を破壊し、雷が自害を止めたところ。

これで戦力はさらにこちらに割ける状態になった。曙は腕をやられてしまい厳しいかもしれないが、他は無傷。さらにはクロもこちらに意識を持ってこれる。

同じ艦装を扱っているのに別々のことがやれるというのは驚異的だった。シロがこちらで対空しながら、クロがあちらに主砲と魚雷。1つの艦装でやることではない。

「空母隊は全滅、鳥海さんもやられて、あちらは誰一人として減ってないわ。今のままでと瑞鶴はお仕置きね。でも、情報を持ち帰れば……まだいいんじゃないかしら。計算外には大淀さんは寛容なもの」
「お仕置き……ちっ、アンタ達命拾いたわね」

最悪なことに、この時点で瑞鶴が冷静に戻ってしまった。これでは煽つてもこちらに向かつてくるような事はないだろう。

だが、逃がすわけにはいかない。シロクロの対策を取られたら、それこそ詰みだ。それに、今回はほぼ予測していた状態だったから空襲を最小限に留めることが出来たが、次はおそらくこの倍は持つてくる。

「貴女達、私達はここから撤退します。時間稼ぎ、よろしくお願いね」
武装を解除させただけの空母隊が、わらわらと戦場に乱入してきた。施設への空襲を止めることが最優先だったため、私は武装を破壊することしか出来ていない。そもそも痛覚があろうが無かろうが突っ込んでくるのだから、道を塞ぐには最適だろう。私達は人形も殺すことはしないのだから。

それにもう一つの懸念点。私はまだ、空母隊の自爆装置が解除出来ていない。そんな余裕はさつき無かった。

「雷！ 手が空いてるか！」

「今空いた！」

「全員気絶させてくれ！」

我ながら無茶な要求だとは思うが、それが最善の方法だろう。群がってきた人形の1人、先頭の艦娘の腹を斬り裂き、返り血を浴びながら自爆装置を解除したが、まだ数はいる。加えて同じように解除出来る曙は、その武器をたった今失ってしまった。

解除出来るのは私だけ。ならば気絶してくればこれ以上おかしなことはないはずだ。

しかし、

「自爆しなさい」

案の定、翔鶴は冷静に最悪な決断をする。たかが時間稼ぎのため、今まで仲間だった空母隊の命を散らそうとした。ここまで来てしまったら止めることは出来ない。もう気絶も間に合わないだろう。

身体は勝手に動いていた。たった今自爆装置を解除した人形の胸倉を掴み、無理矢理その場から退避させる。それでも足りないだろう。故に、私はそれを庇うように抱き寄せ、その場から跳んだ。

「全員散れえー」

間に合うかはわからないが、その場にいる全員に指示した。一番近いのは私と共に接近戦をしていた朝霜だが、あの速さを持っているのだから回避は出来る。他の者も離れてはいたので、衝撃は受けるだろうが致命傷にはならないはずだ。

私が微妙なところだった。唯一生き残るであろう人形を放り投げれば、私は無傷で助かる自信はある。

だが、そんなこと出来るはずがなかった。救えるのなら、ここで救わなくては。諦めてなるものか。

「力を貸してくれ！ 千級！」

脚の骨の本来の持ち主、千級に嘆願し、力一杯跳躍。不思議とその時はいつも以上に力が発揮出来た。人形を抱きかかえたままでも、いつも通りの移動が出来た。

その瞬間、群がっていた空母隊が全員、その場で自爆した。

生き残った空母

五航戦との戦闘は佳境を迎えたが、こちらの戦力を見誤っていた、甘く見ていたとして、翔鶴が撤退を宣言。逃がすものかと足止めしようとした矢先、武装を破壊した空母隊の人形達が群がり、一斉に自爆させられた。

私、若葉は、一番先頭にいた空母の自爆装置を破壊し、何とかその自爆から助け出すことが出来た。その時は私の脚も思いに応えてくれたようで、艦娘1人を抱きかかえた状態でいつも以上の力を発揮出来たのは本当に助かった。

人形達の自爆により、怪我を負ったものは誰もいなかった。直前ではあったが、散開するように指示が出来たのは功を奏したと言える。

最悪なことに、周りは真つ赤な雨が降り注いだ。周りは私の鼻が利かなくなりそうなくらい血の匂いが充満している。暗くて見づらかったが、海の所々に目を向けたくない物質が浮かんでいた。自爆させられた艦娘達のソレだと思うと、いたたまれない気分になる。

「五航戦は！」

「……逃げおった。部下の死に乗じてな」

誰もが憤りを隠さなかった。あの温厚で戦いを好まない雷すらも、このやり方には拳を震わせていた。もっと早く指示が出来ていたら、雷の水鉄砲でもう1人2人は気絶させて救えていたかもしれない。

ただ逃げるのならまだ許せる。だがこのやり方はダメだ。今まででも一番ゲスなやり方。こうするように大淀が仕向けていたのだから、正直な話、今はあの翔鶴も許すことが出来そうにない。

「おい！ とんでもねえ音がしたぞ！ 大丈夫……か……」

空襲が終わったためか、最後まで防空に専念してくれていた摩耶が駆けつけてくれた。が、この海の惨状を見て言葉を失う。深海の眼を持つ摩耶なら、夜でも鮮明に見えてしまうことだろう。

「んだよコレ……」

「目の前で……艦娘が破裂した。全部、まとめて」

途切れ途切れにシロが説明する。クロも顔面蒼白で艤装に顔を伏

せていた。

今までに数度、艦娘が自爆する戦いがあった。だが、それを間近で見る羽目になったのは今回が初めてだ。

以前、来栖鎮守府での戦いで間近で艦娘の自爆を見てしまった伊168が気分悪そうに蹲っていたのを思い出す。あれを見たらああもなる。

「1人は救えた。鳥海も倒してる。早く治療を……っあ……」

ここでリミッター解除のツケが回ってきた。よくここまで持つてくれた。身体が途端に動かなくなり、抱きかかえていた空母隊の最後の1人を放ってしまう。

違うところでは三日月が鼻血を噴いて倒れていた。三日月も限界ギリギリになるまでリミッターを外し続けてきたのだ。頑張ってくれた。

「若葉と三日月を運んでやってくれ！ あとの怪我人は！」

「曙が腕やっちゃってる！ あとは擦り傷程度！」

「っし、撤収だ撤収！ 施設は守りきったぞ！」

それが聞いて安心した。空爆で傷はついたようだが、住めないほど破壊されているわけではないらしい。それなら鳥海と生き残りの治療も可能だろう。

鳥海からキューブを取り出す処置に参加したかったが、どうにも身体が言うことを聞いてくれないため、他に任せて眠ることにした。正直もう限界だった。そう思ったら、意識はそのまま闇の中へ。

熟睡していたようで、目を覚ましたときにはもう外は夕暮れ時。三日月も同じベッドに寝かされていたため、少し驚いた。あちらのベッドはキッチンとされていたため、三日月から潜り込んできたわけでは無い。寝間着もちゃんと着せられている辺り、おそらくこれは姉がやってくれたことだろう。

私が目を覚ますと同時に、三日月も目を覚ます。なるべく起こさないように動いたつもりだったが、そういうところは敏感だった。

「ふぁ……おはようございませむ……」

「もう夕方だ」

苦笑してベッドから降りる。同じ浴衣を寝間着にしているからか、はだけにはだけであられもない姿に。こんな三日月を見られるのは私の特権か。

「いろいろ丸見えだが大丈夫か」

「若葉さん相手なら、もうそこまで気になりませんよ」

クスリと笑みを見せた。それだけでも少し嬉しい。最初の頃から本当に変わったと実感出来る。とはいえこれは、深海の侵食故の行動の可能性が高いので素直に喜んでいいわけではないが。

今気になるのは、私達が眠っている間に処置されたであろう鳥海と生き残りの空母のこと。鳥海に関しては、朝霜や巻雲の時も同じように姉妹艦、今回は摩耶から骨髄を提供してもらい、その後治療する必要があるので、おそらく今は昏睡状態。

まずは生き残りの空母の治療が完了していると思われるため、三日月と共に医務室へと向かった。

「ああ、起きたのか」

そこには疲れた顔の飛鳥医師と、骨髄を提供したためにぐったりとしている摩耶。そして、透析をそろそろ終える生き残りの空母が眠っていた。

その空母は当然ながらリミッターが外されていたが、一度暁に成功しているおかげで、命さえあればその辺りも治療完了となっている。飛鳥医師も日々進化しているということだ。

「相変わらず眠りこけてしまった。すまない」

「医者としては、あまり身体に負担がかかる戦い方はしてもらいたくないんだが、君達のおかげでこの施設は存続出来ている。こちらこそ、いつも頼りきりですまない」

飛鳥医師は人間なのだから仕方のないことだ。この人の戦場は私達とは違う。たった今まで、私達の出来ない戦いをしていたのだ。そして、私達はそれにより生かされているのだから、全員が全員理解している。

当然言い分もわかっているが、無理しなくてはここを維持させるこ

とすら出来ない現状だ。なので、言うだけで止める気はさらさら無い。

「摩耶、大丈夫か」

「結構ダリイな……一晩寝りや治るし、いぎって時や薬湯使わせてもらうぜ」

骨髄移植は提供する側にもそれなりに負担がかかるらしい。私ももしかしたらこれをやることもあるかもしれないので、肝に銘じておく。

「こちらはそろそろ終わりだ。空母隊の最後の生き残り。若葉のおかげで命を取り留めた」

1人だけでも助けられることが出来たことは誇るべきことだと、飛鳥医師は私を慰めてくれた。目の前で空母隊が全員自爆した光景は、正直トラウマになりそうだった。こう言ってもらえたことが、少しでも私の心の負担を減らしてくれる。

「だが、こんなにも強力な空母も奴らにとってはただの手駒、人形か……気に入らないな」

「すまないが、若葉にはこの人が何者かがわからない。三日月、わかるか？」

「すみません、私もわかりません。この方は……」

寝かさされている空母。この施設にはいない大型艦である正規空母であり、五航戦と同じく弓により艦載機の発艦を行っていた。見た目も同じか少し大きいくらいか。

「彼女は正規空母……一航戦の加賀だ」

一航戦ということは、五航戦よりも数字は上ということなのだろうか。そういった部分には申し訳ないが疎い。が、あの五航戦と同等の力を持っているのだろうか。

「治療はいつも通りで終わった。胸骨は洗浄ではなく深海のものに差し替えたがな」

この前の嵐の漂着物で、在庫が出来たらしい。そのうちの一つを使うことで、私が参加出来なかった部分はどうにかしてくれたようだ。そこしか差し替えが無いため、身体は綺麗なものである。消えない傷

も無い。

高速修復材は少し前に来栖提督が来てくれた時に少し補給してもらえたが、今回は曙と鳥海に使われたとのこと。少量ずつしか使っていないため、この加賀の縫合痕も少しだけ使って痛みが無くなる程度に治されている。

「透析完了。これで起こせるはずだ」

摩耶も怠そうではあったが身体を起こし、加賀が目覚めるのを見守る。飛鳥医師が手早く装置を外していき、綺麗な身体になったところで加賀を起こした。

毎度のことながら、ここまでして目覚めないという可能性だってある。今まではずっと上手く行ってきたただけだ。だから、治療が完了した時点で起こす。

「……ん……」

小さく呻いたことを確認して、大きく安堵の息を吐いた飛鳥医師。毎回のこの瞬間は緊張するようだ。

「……ここは……」

「記憶はあるだろうか。君はここで……」

「……あります」

思い出したのだろう、忌々しげに顔を顰める。我を忘れて暴れるようなことがない辺り、精神も大人と考えるべきか。割り切っているのか、表に出さないようにしているのかはわからないが、少なくとも今は静かにしていかれている。

しかし、ギリツと歯軋りが聞こえた。匂いも負の感情が強まったことを私に教えてくれる。

「いいように使われ、我々の命を使い逃げ果せた忌々しい五航戦……」
心底憎いと言わんばかりに吐き捨てて起き上がろうとするが、力が入らなかつたか膝から崩れ落ちる。消耗が激しいのは私達だけではない。人形もいろいろなもの表に出せなかつただけで酷使され続けていた。

ベッドから落ちそうになってしまったため、すぐに私が支えた。近付いたことで、今までは少し違う匂いを感じた。今まではこの施設

に対する警戒と、五航戦に対する強い憎しみだったが、それ以上に深い悲しみの匂い。

「覚えています。黒い痣の若葉、貴女が私を助けてくれたのね」

「ああ、だが咄嗟だったから加賀しか助けられなかった……」

「……仕方ないこと。私が助かったのは運が良かったというのは、私自身、自覚しているわ。貴女が悔やむことじゃない」

起き上がるのを諦めたか、もう一度ベッドに横たわる。天井を見つめながら、大きく息を吐いた。

あれほどのことがあっても取り乱すことはなく、愚痴こそ最初に言ったもののそれ以上は口にも出さない。大人の女性の風格を備えている人だ。

「ちゃんとお礼を言わせてちょうだい。若葉、私は貴女のおかげで命拾いしました。ありがとう、感謝します」

息を整えた後、身体だけを傾けた加賀は、薄く微笑んで手を差し出してきた。私は勿論、それに応じて手を握る。匂いからは私への直接的な信頼を感じた。助けた張本人ということで、加賀の信用を得ることとは出来ていると考えていい。

握手してわかった。加賀の手は震えていた。

五航戦直属の空母隊として、来栖鎮守府を空爆したのもおそらく加賀。本来人間を守るために生まれた自分が、理由はどうであれ人間の敵として活動していたのが許せないようだった。

「まだ身体が本調子ではないの。もう少し眠っていいかしら」

「ああ、構わない。痛みは取ったつもりだが、何かあったら言ってほしい」

「ええ。呪縛から解放してくれたこと、感謝します」

手は震えていたものの、最後まで冷静に終わらせた。私達の前では意地でも弱みは見せないようにしているような、そんな感じに思えた。心を開いているようには私には思えない。とにかく自分自身が許せないように見えた。

加賀は医務室で一晩過ごし、明日から部屋を与えられることとなっ

た。来栖鎮守府からの出向組が撤収したことで部屋は空いているが、また来たときのことを考えると、増築したことは功を奏している。

加賀が寝るといふことで、全員が部屋から出ることに。邪魔しちや悪いと摩耶も気怠そうに起きると、4人で一緒に部屋を出た。

「凄い人ですね加賀さん……洗脳を解かれてまったく取り乱さなかったなんて」

「ああ」

今までは多かれ少なかれ何かしらの反応があった。最初から冷静だったのは、人形としての活動を殆どしていなかったおかげで冷静に事に当たれた姉がいるくらいだ。駆逐艦でありながらも誰よりも大人びているのが姉だ。

加賀に何かありそうなら、姉にカウンセリングしてもらうのもいいかもしれない。メンタルの面では姉が一番適役。

「鳥海さんは今どうしてるんですか？」

「今は処置室で昏睡状態だ。実際の処置は明日からにする。またあの大掛かりな処置だからな。手伝ってもらえるか」

「ああ、若葉なら大丈夫だ。24時間働ける」

そのことで摩耶も少し沈んだ顔に。双子の妹が治療した後どんな反応をするかが心配なのだろう。それに、朝霜や巻雲に見られた、完成品の後遺症も不安だ。明らかな脳障害が残るのは怖い。

「悪いな、アタシの妹が」

「構わない。彼女も被害者だ。支えられるのは摩耶しかない」

「ああ。鳥海が目を覚ましたら、部屋割りをまた替えてくれ。アイツと相部屋の方がいいだろ」

姉妹は一緒にいた方がいいだろう。私と姉は別室だが。

「仕事はまだまだあるな。なるべく負担がかからないように出来ることから始めているが……」

「アンタは人間なんだから無茶すんなよ。一番不安なのはアンタの過労死だ」

「そうならないように休息は取っているつもりだ」

深夜に鳥海を昏睡状態にした後に加賀のリミッターを掛け直し、仕

切り直して朝から胸骨の差し替え、透析を開始してすぐに摩耶の骨髓を抜く作業。飛鳥医師が一番休めていないのは目に見えている。今晚はしっかりと休んでもらいたいものだ。

神医の進化

空母隊総自爆からたった1人助け出すことが出来た正規空母、加賀が目を覚ました。胸骨の差し替えだけで治療が完了し、明日からは復帰出来るだろう。しかし、表には出さないが人形として活動させられていた記憶は、加賀の負の感情を増幅させているのが匂いでわかった。

次は完成品、鳥海の治療となるのだが、腸骨のキューブを摘出するために新たな腸骨が必要。それに関しては保管してあった深海の腸骨があったため、その移植となる。胸骨は加賀に使ってもまだ在庫はあり、そちらを使う。結果的に、2箇所のが骨が深海の物に差し替える形に。

「明日の朝から処置を開始する。洗浄が無い分、手早く終わるはずだが、胸骨と腸骨を同時に摘出して差し替えることになるから、相変わらず人手は必要だ。みんな、またよろしく頼む」

夕食の時に説明され、鳥海の処置の流れが決まる。処置に慣れているのは相変わらず私、若葉と摩耶だ。それに、完成品の処置ということで、いつものように確認組は全員参加。あとは諸々。セスはおそらく参加する。

「すまねえ、アタシからも頼む」

摩耶も妹のためにと頭を下げた。そんなことしなくても、全員が鳥海を救うために力を貸してくれた。鳥海のせいで散々な目に遭った曙だつて、今までのことを考えれば割り切つていられる。

元々完成品だった朝霜と巻雲もやる気満々だったが、朝霜にはご遠慮願った。あの腕力で処置に参加されたら、鳥海が潰れかねない。最近は力加減が多少出来るようになったようだが、万が一を考えると流石に。

朝霜には私達が出来ない夜間警備などをお願いすることにした。処置に参加する者は明日の朝から大忙しなので、それ以外の者に夜間警備をしてもらうことに。朝霜もそれならと喜んで受け入れてくれた。

「摩耶の骨髓が鳥海に適合することも調査済みだ。明日で全部終わらせる」

完成品の治療は早急に終わらせたいところ。全ての処置が終わったところで、脳障害が残ってしまう。それは早いうちに知っておきたい。

翌朝から早速準備を始めていくが、医務室ではまだ加賀が眠っている。処置は時間がかかるが、その後は医務室で透析に入るので、今のうちに新たな自室に移動してもらおうことに。

説明をしに向かうと、既にベッドの横で身支度しているほどであった。以前に着ていたものが殆ど傷付いていなかったため、今はそれを着てもらっているが、その内替えを用意しなくては。今はそれをしてくれる来栖提督が動けない状態なので、新提督辺りにお願いするのがいいか。

だが、加賀の口から出たのは驚くべき言葉だった。

「私も見せてもらっていいかしら」

「見せてって……完成品の処置を見たいのか？」

「ええ、私がどんなことをされたのかも知っておきたいの」

手伝えるかはわからないけれど、と付け足した。何か不穏なことを考えているわけでもなく、純粹にこの施設のやっていることを知りたいたいという好奇心。今は世話になっているのだから、何らかの手伝いしたいという真面目なところも感じ取れる匂い。

人員が増えてくれるなら助かる。いつでも私達が処置に参加出来るとは限らないのだから、伝授出来る技術があるのなら伝授しておきたい。

「確かに君には知る権利がある。だが……」

飛鳥医師が引つかかるのは、そんなことを言い出した者が今までに誰もいなかったこと。そして、暁という前例が出来てしまったことだ。

加賀が敵に暗示や催眠がかけられていないという保証が何処にもない以上、こんなことを言い出したのはスパイ活動のためと考えてし

まってもおかしくはない。隙を見てこの施設から脱出し、大淀に情報を持ち帰るつもりなのではと勘繰ってしまう。

実際はまだわからない。目覚めた時に出た、五航戦への憎しみ。それは本当に心の底から出た感情なのは、匂いからしてわかる。

「信用出来ないのはわかるわ。外の者を疑うのは当然のこと。よく出来ていると思います」

「なら何故」

「私の身体に触れたのなら、どれほどの腕を持つのかを知っておきたいというのが本音です」

つまり、加賀も飛鳥医師のことを疑っている。こちらが加賀のことを疑っているのと同じだ。治療してもらい、生かされていることには感謝するが、何をやって生かされているかは知っておきたいと。

飛鳥医師が加賀の身体に何をしたのかは、加賀自身にはわからない。それこそ、この施設で新たに人形扱いでいいように使われるかもしれないと勘繰っているのだろう。

「若葉、彼女からの忠告は」

「今回は無い」

暁の時の駆逐棲姫の忠告は、救出したその日にあった。駆逐棲姫のおかげで私達は誰一人失うことなく今に至っている。飛鳥医師も命拾いしたのだから、私の中の駆逐棲姫のことは信用している。

彼女からの忠告は今のところない。むしろ夢にもまだ出てきていない。暁の時のように緊急性が無いと考えてもいいだろうか。私としては、駆逐棲姫に全幅の信頼を置いているため、加賀には何事も無いと信じている。

「わかった。君が僕を疑う気持ちもわかる。得体の知れない処置を、得体の知れない処置で治療されても訳がわからないだろう。さつきも言ったが、君には知る権利がある。ただし」

「貴方達の不利益になると思ったら、後ろから撃ってくれても構わないわ」

物騒な言い方ではあるが、それだけ自分には何も無いと証明しているようだった。それすらも暗示で言わされているのではと勘繰って

しまうのは、疑心暗鬼になりすぎだろうか。

暁の件でのこちらへの精神的なダメージは大きい。大淀はその辺りも狙っていたのだろうか。奴ならやりかねない。

「撃ちはしないが、監視をつけさせてもらう。ガチガチに拘束するわけでも無いが構わないか」

「ええ、それが普通です。私だってそうします」

これで一応決着。だが、その監視というのに加賀が首を傾げる。

「……これは」

「浮き輪だ」

この施設の全容は全く知らないだろうから、こんなものがあるとは思っていなかっただろう。ダバダバと歩いてきた浮き輪の1体が、加賀の肩に飛び乗った。

疑問に思うのも無理はない。だが、この施設ではこの浮き輪も有用な人材である。アニマルセラピーが主な仕事だが、割と何でも出来てしまうので、こういった監視任務も任されてしまう。

「……少し、わからないのだけど」

「ここはこういう場所だ」

「……そう。なら、この子の監視下に置かれるということでもいいのね」
複雑な表情ではあるものの、一応受け入れてくれたようである。

早速鳥海の処置が始まる。一度やっていることではあるものの、前回は駆逐艦2人だったことに対し、今回は重巡洋艦。身体のサイズが違うため、処置もその分難航する。

とはいえ、主体として動く飛鳥医師はプロだ。相変わらずの目にも留まらぬ速さで処置を進めていく。経験をしたからか、初見だった巻雲の時よりも断然手際が良く、胸骨を深海の物に差し替えるため、より一層処置が早く終わっていく。

「相変わらず、惚れ惚れするような手際じゃのう」

「僕にはこれくらいしか出来ないからな」

「そのこれくらいがわからな達を救ってくれておる」

次々と進んでいく処置に姉が呟く。胸骨と腸骨を差し替えるだけ

となると、私達は処置に手を出すこと自体が大分少ない。せいぜい、骨が抜かれた鳥海の身体を支え、あらゆる死の原因を省いていくことくらいだ。

しかし、今回は腸骨をどうするかというのものもある。私達は腸骨に触れることもシロから禁じられているほどだ。これをまともにも触れることが出来るのは、侵食が一切有り得ない飛鳥医師のみ。また内部から摘出した後、墓標を作ってやることで供養することになるだろう。

「若葉、匂いは」

「前と同じだ。胸骨と腸骨が取り除かれた時点で、全て失われている」
「三日月、見た目は」

「嫌な感じは消えました。鳥海さんはもう巻雲さんや朝霜さんと同じ状態です」

骨を抜いた時点で、体内も確認。相変わらず歪んだ骨や侵食された内臓が痛々しい。それを今、治療することは出来ない。だが、これがあることで鳥海を苦しめるわけでも無いため、今はそのままに。

問題は頭の中になるのだが、それも今は置いておくしかない。鳥海に残ってしまった脳障害が何かは、目覚めてみなくてはわからない。

「これで終わりだ。骨は全て修復された。シロ、初春、どうだ」

「うん……落ち着いてるかな……」

「うむ、混沌としておるのは変わらぬ。じゃが、以前よりは格段に大人しいのう。朝霜や巻雲と同じじゃ」

前回よりさらに早く終わり、鳥海の治療は完了した。私の嗅覚と三日月の視覚でそれを保証し、シロの感覚と姉の靈感で他の悪い部分も取り払われたことを確認。

処置を手伝っていた摩耶が、疲れ果てたように大きく溜息をついた。妹が助かったことで安心したようである。昨日もあまり眠れていなかったようだった。

「ありがとな……妹を救ってくれて」

「構わないさ。姉妹だとか関係無しに僕は救っている。戦えない人間の僕がやれるのは、君達を救うことだけだ」

すぐに鳥海の身体を綺麗にして、透析の準備をしていく。回を増す

ごとに洗練されていく飛鳥医師の行動は、もう私達が間に入ることが出来ないほどである。

私達は結果的に、鳥海の現状を逐一通達するだけとなっていた。知識を飛鳥医師から貰った私達程度では、この処置速度には一切手が出せない。今の飛鳥医師は、艦娘よりも速かった。

「よし、扉を開けてくれ」

透析準備中に、摩耶とセスが処置室から医務室への直通扉を開く。そのまま飛鳥医師も含めた3人がかりでベッドに移し替えたところですぐに透析。ここからは飛鳥医師でも手が出せない、時間が解決する問題だ。

「ふう……お疲れ様。鳥海への処置は後は待ちだ」

これにて鳥海への処置は完全に終了。透析終了は誰が何をやっても時間短縮出来ないため、いつも通りぎつと4〜5時間といったところ。

次は腸骨の中のキューブの摘出と供養。一切の休憩無しに動いているため、逆に不安になってしまう。

「飛鳥医師、さすがに休憩した方がいい」

「だが、これも早急に対処しておかなくては、君達に影響が出てしまう可能性がある。供養も早くしてやりたい」

言っている間に、鳥海の体内から摘出した腸骨を丁寧加工していた。それをされるともう私達は近づくことも出来ない。飛鳥医師が止まらない。

「よし、少し離れてくれ。すぐに終わる」

一度やったことを焼き直すだけだからか、手早くキューブを取り出す。それが私達の目の前に現れた瞬間、嫌悪感が湧き上がる。三日月はまだダメなようで、すぐに流しの方で吐いていた。

「何を考えればこんなものが作れるんだ……」

取り出した飛鳥医師も、険しい顔をしながら処理をしていく。キューブは袋の中に入れ、腸骨そのものも砕いて処分出来るように対処していった。

今でこそ自分が間違っていたことを認め、命の尊さを知った飛鳥医

師だからこそ、このキューブの存在には人一倍怒りと悲しみを覚えて
いるようであった。

「加賀、飛鳥医師は信用出来たか」

処置室の隅でずっと飛鳥医師の処置を見続けていた加賀に問う。

常に肩の上に浮き輪が乗っている状態で、速すぎる飛鳥医師の処置
を目で追うのもやつとという感じか、茫然としていた。

「加賀」

「い、いえ、あまりのことです……少し驚きました。この腕を持つからこ
そ、大淀はこの施設を狙っているのね」

人形であった時の記憶があるのだから、大淀がこの施設を本格的に
狙っていることも知っているだろう。飛鳥医師のそれを目の当たり
にして、何もかもが繋がったようだ。

「恐ろしいほどの手際の良さ、艦娘すら追いつくことの出来ない速度
での作業、最初から最後まで何もかもが噛み合った治療……正直など
ころ、私は彼に恐怖を感じた」

艦娘ならまず触れることのない医療現場というものを見たことで、
加賀の中で何かが変わったようである。

「疑ってごめんささい。この施設はいいところね。私も防衛戦に参加
させてほしいわ」

「一航戦の航空戦力なんて百人力じゃねえか。今は猫の手も借りたい
くらいなんだから、みんな大歓迎だろ。なあ？」

摩耶の言葉に全員頷いた。

これにより、正式に加賀が尽力してくれることになる。本来なら鳳
翔と同じで夜戦は無理なのだが、幸いここに来るまでの洗脳が活き、
艦装さえ直せば夜間での航空戦も可能となるようだ。施設への空襲
が、今度は奴らに襲いかかることになる。

人手は常に足りない。手伝ってくれるのなら、誰だって大歓迎だ。

血塗られたその手を

治療が完了した完成品、鳥海が目を覚ましたのは夕方。透析が完了し、装置が外されて行く様子を見ながら、緊張した面持ちなのは摩耶である。双子の妹がどうなっているかは、目を覚まさなければわからないというのが辛いところ。

目を覚ました後に何も無いように、私、若葉が含まれる確認組も医務室に集まった。処置後に何事もないことは確認しているが、目を覚ましてから何かあったら困る。

「若葉の嗅覚は問題無いと言っている」

「視覚から、問題なしです」

「もののけは大人しいものじゃ」

「大丈夫……だと思おうよ……」

確認組4人のお墨付きが出たため、鳥海を起こすことになった。透析は勿論、昏睡も解かれ、今まで通りならもう洗脳は解かれているはず。

鳥海的眼鏡は雷が破壊してしまったため、残念ながら代用が無い。どこかのタイミングで眼鏡を調達しなくてはいけない。今だけは摩耶と一緒にいてもらうことで生活してもらう。一時期の私も同じようなものか。

「鳥海、鳥海、目え覚ませ」

起こすのは勿論摩耶。肩を揺すって鳥海を起こす。目を覚ます瞬間が一番緊張する。目を開けた瞬間発狂もあり得るし、そもそも目を覚まさない可能性だってある。何事もなければいいのだが。

「鳥海」

「……んん……」

まず一つ安心。目を覚まさないということは無さそうである。少し蠢いた後、ゆっくりと目を開く。未だ夢見心地な表情ではあったが、ボヤける視界のためか眉を顰める。近くに眼鏡があるだろうと手を伸ばすが、勝手を知らない部屋であるため、その手は空を切った。

「あれ……眼鏡は……」

「壊れちゃった。直るまではちよつと待っていてくれ」

「……摩耶……？」

声のする方に目を向けた。ボヤけているものの、摩耶が側にいることがわかったことで、ホニヤツと表情が緩む。男勝りな摩耶とは逆の、清楚なイメージの女性。敵対していたときには見たこともないような柔らかい笑みだった。これが本来の鳥海なのだろうか。

「……は……」

「アタシが暮らしてる施設だ。ちよいと変わったとこだが、まあ楽しい場所だ」

念のため、鳥海が記憶を失っている想定で話している。深海の侵食が記憶のところに及んでいた場合はそういうこともあり得るかもしれない。

脳への侵食による記憶障害を、キューブによる怨念で賄っていたとしたら、キューブが取り除かれたことで今までのことを綺麗さっぱり忘れてしまってもおかしくはない。

「鳥海、こうなるまでのこと、覚えてるか？」

「……ええ、勿論。正直、死にたいほどに自分が憎いわ。今までやってきたことは、どう償えばいいの……」

手が震えていた。先程の柔らかい笑顔はすぐに消え、今にも泣きそうな顔になる。それを見た摩耶が慰めるように抱きしめた。

鳥海のやってきたことは、あくまでも大淀による洗脳でやらされていたこと。今ならそれが罪であることもわかるし、私達も何も気にしていない。

「鳥海、何かおかしなところはあるか。完成品は何かしら後遺症みたいなもんが出るんだ」

「おかしなところ……あ」

自分の身体を調べたところで、何かに思い当たったのだろう、声が詰まる。

「何かあるのか？　すぐ言ってくれ」

「……脚が動かないの」

それを聞いた飛鳥医師がすぐに診察を始める。基本的には触診。

女性の身体に触れるということ、飛鳥医師は触れず、シロによる再診となった。その間に、私がまた全身の匂いを隈なく嗅いでいく。

先程はみんなで大丈夫と言ったものの、ここまで近くで嗅いだわけではないので、新しい何かが見つかるかもしれない。シロも触診まではしていないかった。

「脳にはあまり感じない……あるけどローやマキグモほどじゃない……」

深海の細胞の転移は身体の至る所に及んでいるが、今までの例とは違い、鳥海は脳の方には微量にしか行っていないかったようだ。シロが感知できる範囲で場所を伝えると、若干記憶の方に影響があるらしい。だが、今の受け答えを聞く限り、そこまで気にならない程度の子。

問題は私の方でわかった。脚の付け根辺りの匂いを嗅いだときに、本来ならあり得ないほど濃い匂いがした。純粋な深海棲艦よりも濃いような、確実にそこにある澱み。

「脚に濃い匂いがした。多分これだ」

「ワカバ、私も見てみる」

すぐさまシロもそこを触診。触れた瞬間にシロの表情も暗くなる。

「……うん、ここ。ワカバの言った場所に詰まりがある」

「脚の神経を深海の細胞が阻害しているのか……」

他の者と違い、鳥海の場合は脚に重い障害を残してしまった形になる。キューブが埋め込まれている間は、その怨念により無理矢理動くようになっていたようだが、それが取り除かれた今、完全にダメになっってしまったらしい。

「これが、私の罪の証なんです。あれだけの暴挙をやったことに対する罰だと思えば、これでは軽いくらいです。戦えない艦娘だなんて……今の私に相応しい愚かな結末ですね」

悲しい笑みを浮かべる。やらされたことを自身の罪として納得してしまっているため、脚が動かなくなったことも受け入れてしまった。

だが、こちらはその程度では諦めない。触ることが直接死に繋がる

脳への侵食が障害になっているわけではないという時点で、飛鳥医師には治療のプランが練り上がっていた。

「大手術にはなるが、これなら動くように出来る。幸い、先日の嵐で脚は手に入っているからな」

「……………え？」

飛鳥医師の言葉に鳥海が変な声をあげた。この施設がどういう施設かはわかっているはずだが、その辺りの記憶が持っていないかれているのだろうか。軽めの侵食といえど、地味ながら影響はあるようである。

「鳥海、脚の移植をすりや動くようになるってことだ。今なら高速修復材もちったあ残ってるし、痛みもそこまで残らねえはずだぜ」

「……………私にその処置を受ける資格なんか無いわ」

鳥海は摩耶から目を背ける。自嘲気味に笑いながら、自分がどれだけの罪を犯したかをポツポツと話していった。

「私はね摩耶……………艦娘も殺したし……………人間も殺してるの。私達以外の者は全部下に見ていたような、生きていても仕方ないような艦娘なの」

「そりゃ大淀がそうなるようにお前を弄り回したからだろ。今は違う。洗脳はみんなのおかげで解けたんだ。お前は悪くねえ」

「悪いに決まってるでしょ！」

泣きそうな顔で摩耶に掴みかかった。ほとんど力が入っていないようだが、自分の意思をぶつけるために、殴りかかるのではという勢いで摩耶に捲し立てる。

「私の手は血に塗れてるのよ!? 怯える子も! 逃げ惑う子も! 提督を守ろうと必死に立ち塞がった子も! 私はこの手で握り潰したの! 本当ならみんなを守らなくちゃいけない手で、守るべきものを壊してきたの!」

「だから、それが洗脳なんだつつつってんだろ。あのクソがそうなるように仕組んでたんだから、それはお前の意思じゃねえよ」

「あなときは確かに私の意思だった!」

ワンワン泣きながら摩耶に心をぶち撒ける。聞いているこちらも

いたたまれない気持ちになってしまいうほどに、鳥海のやらされていたことは重く、ただただ辛い。

「誰の意思でもなく、私の意思なのよ！ 私の意思で殺すことを楽しんでた！ この子達も全員殺すつもりだったのよ!? 私が悪いに決まってるでしょう！」

「お前は悪くねえつつつてんだろうが！」

いきなりの大声に、私の隣にいた三日月がビクツと震えたのがわかる。

ここの摩耶は比較的温厚だ。戦闘の時は凄まじい気迫で両用砲を操っていたが、工廠で働いているときは、たまに鼻唄交じりで艤装を弄っていたりするほどだ。その摩耶が声を荒げた。戦闘の時よりも荒く、怒気のこもった声。

「お前は悪くねえんだよ！ お前はやらされてただけなんだよ！ どうせ償うなら、アタシ達と一緒に戦って償ってくれよ！」

自分の意思で仲間を殺していたわけではない。洗脳により、大淀が自身の手を汚さずに目的を達成しようとしているだけに過ぎない。大淀自身に罪悪感なんぞ毛頭ないと思うが、自分に向かうものを他人に押し付けているだけだ。

摩耶が怒鳴ったことで鳥海が黙ってしまった。摩耶も落ち着いて、ゆつくりと染み込ませるように気持ちを伝えていく。

「お前の罪はアタシと一緒に背負ってやらあ。だから、アタシ達と一緒に……一緒に歩こうぜ。こっからがお前の始まりにすりゃあいじゃねえか。歩き出す脚は本当に変わっちゃまうけどよ」

「で、でも……私は……」

「全部忘れるとは言わねえ。さつきも言ったが、償うなら一緒に戦おうぜ。アタシ達にはお前の力が必要なんだ。人手はいくらあっても足りねえのがこの施設だ。だから、お前の力を貸してくれ」

治らない傷を負った者もいるが、治せるのなら治して一緒に歩くべきだ。幸いにも、摩耶と同じ形になるという偶然もある。もう3度目となる脚の移植なのだから、飛鳥医師も絶対に失敗しない。

「ここで動かないままだったら、一生ウダウダするだけだぞ。それを

償いつてんなら、むしろそりや怠慢だと思わねえか？ なんもしないで、ただジツとしてるなんてよ」

「その言い方はズルイわ……私は罪を償いたいんだもの」

クスリと笑った。今までの自嘲気味な笑みとは違う、少し晴れやかな笑み。

「お医者様……」

「飛鳥だ。その辺りの記憶が微妙になっっているようだな」

「飛鳥先生……私の脚を、治して下さいますか」

涙目だが、決意したような瞳。罪と向き合い、それを償うための歩き方を見出したことによる強い力だ。

誰もそれを鳥海の罪とは思っていないが、本人の心持ちは重要。折れかけていた心が、摩耶の言葉で修復された。

「勿論だとも。今すぐ始めよう。眠って起きてまた眠ることになるが、その辺りは諦めてくれ。代わりに、君に痛みなんて絶対に与えない」

思い立ったが吉日と、夕方だというのに今から脚の移植手術を始めてしまうと言い出した。飛鳥医師はもう止められないだろう。摩耶も同調してしまっているのだから尚更だ。

「ああ、先に言っておく。今回の治療はかなり残酷なものになる。僕と摩耶だけでやっていくからそのつもりでいてくれ」

「了解。なら先にいろいろと済まさせてもらう」

「ああ、とその前に軽食くらいは摂っておこう。長丁場にもなり得るからな、摩耶も頼むぞ」

事がどんどん進んでいく。救出された完成品としては、ほとんど障害が残らない状態の仲間入りが確約されたようなものだ。艤装もすっかりと直せば即戦力である。

巻雲や朝霜のような脳障害が出ないパターンがあるということがわかっただけでも少し進展。今後は治療が可能な場合があるというのは希望である。

「加賀、流石にこれは見せられない。疑いだとかそういうことでなく、今回の処置は見せられたものではないからだ。それに、あまり人数が

いられても困る」

「そう……理解したわ。興味はあるけれど、貴方がそういうのなら控えさせてもらおうね」

「助かる」

これもまた見たいと言い出しそうな加賀を先んじて封じた。鳥海への今までの処置を結果的に全て見ていたわけだが、今回のものは今までとはわけが違う。加賀もそれには納得した様子。今までの処置の姿を見て、加賀は飛鳥医師を心から信用しているようである。

「じゃあ始めよう。まずは雷に夕食を僕らだけ早めてもらおうようにお願いしなくてはな」

「だな。鳥海も食っておくか？」

「申し訳ないが、鳥海はもう少し絶食で頼む。処置に悪影響が出るかもしれないからな」

忙しなく動き始めたが、2人とも嫌そうには全く見えなかった。

その日の夜、先んじて夕食を軽く摂った飛鳥医師と摩耶は、そのまま処置室へ。ここから鳥海の脚を治す処置が始まる。

恐ろしく簡単に説明されたが、ようするに壊れてしまった脚をちよん切って、使える脚に差し替えるという処置。言うだけなら簡単だが、こんなことが出来てしまうのは飛鳥医師だけ。

「処置室に近寄るなとも言われたな」

「何があるかわからないからですかね」

などと三日月と話しながら風呂に向かっている最中、処置室からとつともなく大きな音が聞こえた。その後、あまり聞いていたくない音も微かに。多少は防音に作ってある処置室から聞こえたほどなので、余程とんでもないことをしているのだと思う。

「……中を覗きたいとは全く思えません」

「若葉もだ。あの音は、鳥海の脚を」

「若葉さん、別にそういうことは言わなくてもいいと思うんです。想像するのも怖いので」

確かに、中で起きていることは想像するのも怖い。音を聞いている

だけでそれを想像出来てしまう。

明日の朝には、鳥海は自らの脚で地に立つことができるようになるだろう。そう確信出来るほどに、飛鳥医師の技術は信用出来る。多少はリハビリは必要だろうが、摩耶がついているのだから何も問題は無い。

血塗られたその手を、誰も責めずに握ってあげることが出来た。鳥海はもう、私達の仲間だ。

鳥海の前進

治療が完了したことで鳥海が目を覚ましたが、完成させられた代償として、両脚が動かないという艦娘としては致命的な障害を持つことになってしまった。そのままでは、ただ生きているだけの艦娘と成り果ててしまう。

しかし、それは飛鳥医師の前では治療出来る障害であった。前回の嵐の日に漂着した深海棲艦の脚を移植することで、不随となっていた両脚が動くようになるという。鳥海は罪の意識からそれを最初は拒んだが、摩耶の説得により、その処置を受けることを決意。夕食後に早速それが始まった。

「今もまだやっていてみたいだな」

「ですね……佳境でしょうか」

眠る前でも、下から微かに音が聞こえる。徹夜になるようなことは無いと聞いているが、日を跨ぐくらいまでは掛かりそうではある。

元々ある脚を取っ払い新しいものに付け替えるなんて、どう考えてもとんでもないことだ。普通ならやろうとも思えないような大手術。

だが、それをやることで救われるものがいるのなら、飛鳥医師は自分への負担を度外視して処置を行なうだろう。現に今がその状態。あの人はまず、自分の身体を大事にしてもらいたい。

「寝て起きたら終わっているだろうさ」

「そうですね。なら今日は寝ちやいませしよう」

今日の夜間警備は九二駆。明日は私、若葉率いる五三駆だ。今日はしっかり身体を休めて、明日に備えよう。その時になれば、鳥海も脚を取り戻しているはずだ。

翌日、早速お披露目。今回は高速修復材もあつたため、既に痛みもない状態だという。私の腕は修復材が無かつたがために定着までに何日もかかった。こういうところは修復材様々だ。

参加者は私と三日月、そして姉である摩耶。あまり大人数で押しかけても迷惑なので最小限に。こういう場には、基本的に私と三日月は

付き物となった気がする。

「脚には空母ヲ級のものを使わせてもらった。艦種が違うから、使うことに少し抵抗があったが、今までも問題ない移植は出来ている。反発も無いだろう」

それでも念のため、縫合痕が残る太腿には現在包帯が巻かれている状態だった。

「ほ、本当に……脚に感覚が戻ってる……」

「何か違和感はあるか？」

「自分のものでは無いというのはわかりますね。でも、使っていけば慣れると思います」

高速修復材は残っている分を全て使ったと聞いている。バケツ1つ分あったわけでは無いが、痛みだけは完全に取り除けるまでに至っている。

またこれで在庫が無くなってしまったようなので、ここからは怪我が出来ない戦いが続くわけだが、鳥海の治療完了を考えれば安いもの。

「へへっ、アタシとお揃いだな」

「そうね……同じ傷なのね」

経緯は違えど、摩耶と鳥海はほぼ同じ傷を持つことになった。太腿にクツキリと刻まれた縫合痕も、姉妹で同じならコンプレックスにもならないだろう。そもそも摩耶は傷についてどうとも思っていないようだし。

「鳥海、立ち上がってみろよ。最初はアタシが支えになってやるからさ」

「え、ええ……」

摩耶の肩に掴まると、おっかなびっくり脚を下ろす。そうやって動かしているだけでも、不随状態が治っていることがわかる。

そして、身体もベッドから離れた。脚に感覚がないのなら、この時点で立ち上がることなど出来ず、摩耶に完全にもたれかかることになっただろう。だが、そんなことはなく自分の脚で安定している。力が入れづらいようで、支えは必要なようだが。

たった1日、たった一晩でこの成果だ。昨日まで脚が動かないと言っていた者が、今や支えさえあれば普通に歩けるといふ快挙。

「飛鳥先生、この身体はここを守るために使わせてください。今までの行ないを償うためにも」

「償うとか償わないとかはさておき、防衛を手伝ってくれるのはとてもありがたい。経過観察も見たいから、出て行きたいと言つてもここにいてもらうさ」

そのためにもまずはリハビリが必要となる。まともに歩けるようになるところから始まり、次は海上での航行。戦闘にまで行けるようになるのはもう少し先になるだろう。

それでも、脚は完全に動くのだ。鳥海の努力次第では、数日で完全復帰に持つていけるかもしれない。そうしたら、施設の防衛はより強くなる。

「リハビリは今日の午後から、まずは支え無しに歩けるようになるところからにしよう。摩耶、頼めるか」

「おう、妹のことはな、やっぱアタシがやらねえと」

「お願いね、摩耶」

仲のいい姉妹で何よりである。

「そうだ、鳥海。1つ君に話しておきたいことがある」

「はい、なんでしよう」

「君の元々の脚なんだが、研究材料として使わせてもらってもいいだろうか」

切除した鳥海の脚は、今は深海のパーツと共に嚴重に保管されているらしい。深海の細胞が脚の神経を侵食し動かなくなるようにしていたそれは、裏を返せば敵の技術の貴重なサンプルでもある。

もし嫌だと言われれば、その場で埋めるなり焼くなりして廃棄するそうだ。自分の身体が材料にされるのが嫌と思うのもわからなくはない。

「勿論構いません。好きなように扱ってください」

「助かる。アレを調査すれば、もっと治療が進むと思うんだ。君達の身体を真に艦娘に戻せる可能性もある。脳の障害も取り払うことが

出来るかもしれない」

大淀の残酷な処置により侵食された身体の一部だ。上手くいけば、今までのことを全て引っくり返すことが出来る。そして、それをするのが飛鳥医師であるというだけで、期待度は何倍にも増した。

「あとは服と眼鏡だな。そこについては事前にもう連絡している」

「連絡、ですか」

「そろそろ来るだろう」

と、飛鳥医師が言った瞬間である。工廠側に何者かが入った音がした。おそらく大発動艇が乗り付けた音。ということは、

「おう、飛鳥ア。来たぜエ」

怪我を負っている来栖提督が、鳳翔に支えられながら入ってきた。折れていた腕は簡易ではあるもののギプスをはめられており、腰をやっていたことから杖をつけているものの、元気そうである。

まさかこのタイミングでここに現れるとは思っていなかったため、それなりに驚いている。私と三日月は来栖鎮守府半壊の時に会いに行っているが、そのときはもつとボロボロだったイメージだ。

「来栖提督、鎮守府は」

「おう、お前らが来た時からは大分復旧したぜエ。お前が職人妖精を連れてきてくれたおかげだ。ありがとなア」

あの時妖精を送り届けたことで、鎮守府の復旧はすぐに始まったらしい。今では工廠は完全に元通りとなり、入渠ドックも修復完了。大怪我の者から入渠中だそう。職人妖精は居住区の修復に取り掛かっているとのこと。

そのおかげで、大発動艇の修理が完了したようだ。まず明石を機能させなくては、鎮守府が回らない。今頃過労で倒れていなければいいんだが。

「割と元気じゃないか。診察する必要があるか？」

「大本営の医者にや診てもらったが、こういうモンは定期的に診てもらってエんだよ。お前になら任せられんだから、ちよちよいと頼まア」

「お前が骨折だなんて珍しいな。頑丈さが売りだったろうに」

「鎮守府半壊してんだぜエ。これくらいで済んでんだから褒めろや」
無事であることをその目で確認出来たことで、飛鳥医師も大分和んでいた。友人特有の軽いノリ。飛鳥医師がなかなか見せない姿もある。

元々、来栖提督は飛鳥医師に改めて診察してもらおう予定だったが、あちらの大発動艇が破壊されていたこともあり、なかなかその機会が無かった。施設の大発動艇で迎えに行くために霰を派遣しようかとも思っていたが、そんな時にあの襲撃だ。

なんだかんだであちらの復旧がある程度終わるほどになってしまったが、ようやく動けるようになっていた。

「鳳翔、アレを渡してやってくれエ」

「はい、飛鳥先生に連絡をいただき、鳥海さんの服と眼鏡をこちらで用意させてもらいました。眼鏡の方は明石さんの特製ですので」

少し大きめの包みを鳥海に渡す。その中には今言った通り、服とケースに入れられた眼鏡が入っていた。服はさておきまずは眼鏡だったようで、すぐに取り出す。

「ありがとうございます。視界がハッキリしますね」

眼鏡をかけて、ようやく元通り。コメカミの探照灯にはあまりいい思い出が無いが、艤装も兼ねた眼鏡のようで、思い当たるところを触って満足げに微笑んだ。

「電探の性能もそのままにでもらえたようで嬉しいです。これで施設のお役に立てるでしょう。罪を償うことも出来ます」

「その前にリハビリな。まともに歩けるようになってからだぜ」

この施設に電探装備の艦娘は今のところいない。そういう意味でもありがたい援軍となってくれる。リハビリが済んで、戦力としてカウントされるようになれば、私達の夜間警備の引率も務めてくれるだろう、

服は後から着替えるということで、大事そうに抱えていた。早くも鳥海は外見だけなら完治したように見える状態となる。

「鳥海は治療が終わったのかア？」

「ああ。両脚を移植したことで歩けない障害を取り除くことに成功し

た。あとは少し記憶障害があるが、その辺りは日常生活に影響は無いだろう」

「相変わらず、お前の治療は人知を超えてやがる」

鳥海の障害は入渠でも治せない致命傷。それを治しただけでも、来栖提督の言う通り人知を超えた所業だ。

「んなら、鳥海から事情聴取するのは控えた方がいいか」

「ああ、そうしてほしい」

「すみません……私も話したいのはやまやまなんですが、一番重要なところがあやふやで……。艦娘や人間をこの手で殺めてしまったことは覚えていますが……何処でやったかが抜けてしまっていて」

鳥海から抜け落ちてしまっている記憶は、この施設がどういうものであるかと、自分が何処でやらかしていたか。主に『場所』に関する記憶。そのため、知っているであろう大淀の拠点の場所も、今の鳥海の記憶からは抜けてしまっているだろう。

「無理強いはいしねエよ。お前さんも被害者だ。まずはここで心身共に癒されてくれや」

「そうさせてもらいます」

朗らかな笑顔。憑物が落ちたかのように晴れ晴れとしている。ひとえに、飛鳥医師の治療のおかげだ。

その後は来栖提督の診察をしてもらうということで、私達は医務室から出ることに。鳳翔は来栖提督の側にずっといるようなので残しておく。

私と三日月は、ヨロヨロと歩く鳥海を後ろから身守ることになった。摩耶を支えにしながらでも、移植したての脚にはうまく力が入らず、歩くのにも一苦労の様子。それでも、自分の力で脚を前に出すことは出来ていた。

「まずは筋トレだな。脚の」

「そうね。自分の身体を支えるのに精一杯なもの、そこからね」

摩耶も経験していることなので、先達者としていろいろ教えている。こういうのを見ると、やはり2人は姉妹なんだと実感する。

「あつ、鳥海さん、歩けるようになったのね！」

昼食の仕込みに向かう雷と鉢合わせる。その手伝いのために、呂500と暁も一緒だ。微かに、鳥海から辛さを感じる匂いが漂った。

場所に関する記憶が消えていても、やらされていたことは消えていないとなると、暁の暗示の件も当然覚えている。鳥海自らがその暗示を発動させ、雷を撃たせたのだから、その2人が目の前にいるのは少し辛い。

「まだフラフラだけだな。雷、覚えてるか、アタシが目え覚ましたとき」

「勿論よ。あの生まれたての子鹿みたいになったときよね！」

「そうそう。鳥海も似たようなモンだからよ」

摩耶はニコニコしているが、鳥海はぎこちない笑み。

「どうしたの鳥海さん。やっぱり痛いのかしら」

暁がそれに気付いて鳥海を心配する。この時点で、暁からその時の記憶が消えていることに気付いた様子。

「大丈夫よ。やっぱり安定しないとすぐく疲れるの。でも歩かないと力もつかないから、頑張らないと」

「そうなのね。暁はそういうことちよつとよくわからないけど、鳥海さん頑張つてね」

暁は屈託のない笑顔で鳥海と向き合っていた。そのおかげか、鳥海から辛そうな匂いは若干薄れる。

この施設で生活するに辺り、おそらく一番心配していたことはこれなんだと思う。自分が害を与えた者がここにおり、自分のことを恨んでいないか。恨まれていたとしたら、それが自分の罪なのだからと受け入れるのだろうか。

その心配も今、一部は払拭出来たようで何より。暁との関係はギクシヤクしないで良さそう。

「心配してくれてありがとう。流石は一人前のレディね」

「もつ、勿論よ！ 暁は他人の心配が出来るレディなんだから！ 暁でなければいくらでも力を貸すからね！」

「その前にお姉ちゃんには震えずに包丁持てるようになってね」

「そ、それはアレよ、まだ慣れてないだけなんだから。雷はほら、『ねんき』が違うじゃない」

仲のいい姉妹のやりとりにも、鳥海はぎこちなさが無くなった心からの笑みを浮かべていた。ここでならやっていけると確信したのでらう。その様子を見て、摩耶も一層嬉しそうに笑っていた。

辛い記憶を持っているが、鳥海は新たな脚で一步前進した。姉の支えがあれば、問題なくやっていけるだろう。

失われた誇り

来栖提督の診察も終わり、経過は良好であるとされた。安静にするのは難しいとは思いますが、傷めた腰には湿布を貼ったり、折れた腕をしつかり固定しておけば、従来の時間で完治すること。さらには、来栖提督自身の自然治癒能力も高いらしく、普通よりも早く復帰出来るだろうとは飛鳥医師の談。

提督を務めているものというのは、そこに至るまでの経歴や訓練に加え、体質も重要らしい。来栖提督は体質が特に良く、見た目通りの頑丈さで艦隊を指揮する。死にづらさではトップクラスだそうだ。そうでなくては、艦娘なんていう特殊な人材を扱うことなんて出来ないだろう。

その来栖提督だが、時間が昼に近いということ、施設で昼食を摂っていくことになった。今から帰ると微妙な時間になるし、朝から来ているのだから来栖提督をここまで運んできた二二駆が空腹を訴えたというのもある。

そのため、久しぶりに鳳翔も施設の台所に立ってくれた。雷とのコンビで昼食を作るのは、たった数日振りだというのに随分と久しぶりに思えてしまう。仕込みは終えていたが突然人数が増えたため、鳳翔の手助けはとても助かったとのこと。

「三日月ちゃんのご飯食べるの久しぶりだよね〜」

「はい、そうなりますね」

二二駆は相変わらず妹を愛でるのに忙しそうである。いつもなら私の隣を断固として動かない三日月だが、それを先んじて封じられ文月と皐月に囲まれていた。対面に水無月と長月も陣取り、完全に包囲されている。

少し困った顔をしたが、最終的には姉達の要望を受け入れた。こういう時は、たまにしか会えない姉妹と楽しめばいい。私とならいつでも食べられる。

「はい、提督」

「こういう場所でもやんのか鳳翔よオ」

「利き腕が折れているんですから、仕方ないでしょう?」

鳳翔はというと、来栖提督にご飯を食べさせていた。来栖提督が怪我をしているのは利き腕らしく、ご飯を食べるにも苦労しているようだ。そのため、鳳翔が隣に座り、甲斐甲斐しくお世話をしている。まるで仲睦まじい夫婦のよう。

私達を軽く捻り潰せそうな来栖提督でもこうなのだから、入渠で治すことが出来ない人間はこうも脆い。だからこそ私達が守らなくてはならないのだ。

「小つ恥ずかしいぜエ」

「腕を怪我するというのはそういうものだ。今回は貰い事故みたいなものなんだから我慢しろ」

「へいへい、わアアってらい」

医者からの念押しで、来栖提督も折れた様子。どういう状況でも鳳翔が補佐をすることになっているようである。それこそ、おはようからおやすみまで。

だが、この姿を遠目に見て、複雑な表情をする者がいる。以前の曙と呂500のようではないが、来栖提督の姿を視界に入れないようにしているのは、加賀だった。

別に嫌っているわけではない。何せ初対面である。嫌う要素がない。曙のように、艦娘としての性質で提督という職業にあまり良くない感情を持っているわけでもない。

「加賀さん、どうしたの?」

「……ごめんなさい、食欲が無いの。ごちそうさま」

雷が問いかけると、そのまま食堂を出て行ってしまった。用意された昼食はまだ半分以上残っている。それを見て雷が大いに驚いた。

「加賀さん、具合が悪いのかしら……人一倍食べる人なのに」

空母というのは私達駆逐艦と比べたら比較にならないほど燃費が悪い。艀装もそうだが本人すらもだ。私が茶碗1杯でいいところを、加賀は3杯食べる。それが、私達よりも食わずに終わってしまった。これでは体調不良を訝しむのもわかる。

しかし、その理由はすぐにわかった。それこそ、来栖提督の存在に、

加賀は心を痛めていた。

自らが人形として操られ、五航戦配下の空母隊として活動させられ、来栖鎮守府に空爆を行なった記憶はしっかりと残っているのだ。その被害を受けた張本人が現れてしまつては、余程他人に興味がないかしない限り気にするものだろう。

「残しておいてやろう。流星にこれだけじゃ、後から確実に腹を空かすだろうし」

「そうね、そうしましょう。今は難しくても後から食べられると思うわ」

目覚めた時、手が震えていたのを思い出した。やはりあの時のことを自分の罪として認識している。それでも冷静でいられたのは、自分の手で破壊したものを見ていなかったからだ。

それが目の前に現れてしまったのだから、今まで比較的抑え込まれていた自己嫌悪が爆発してしまった。結果がこれだ。

「若葉は後から様子を見に行ってくる」

加賀が心配になってくる。誰が見に行ってもいいとは思いますが、加賀を助けたのは私だ。ここを離れるその瞬間の顔まで見ていたのも他ならぬ私。なら、最後まで付き合うのが情というものだろう。

昼食後、午後の作業までの時間で加賀の部屋に訪れる。

加賀の部屋は昨晚に与えられている。人数が増える毎に部屋割りを見直しているが、摩耶と鳥海が相部屋となり、セスガリコの部屋に転がり込んだことで、結果的に加賀は1人部屋となっていた。故に、誰にも弱みを見せることがない加賀だけの聖域となっている。

「加賀、大丈夫か」

部屋の鍵は掛かっているようなので、基本的には中に引きこもっている状態。何となくだが、中に気配を感じる。本当に体調が優れないのかもしれないので、少し心配だ。曙の時のように、ストレスによる体調不良もあり得る。

「若葉が言えることではないと思うが、あまり気にしない方がいい。加賀はやらされていただけだ」

返答は無い。私の思うことをゆっくりと話しながら、あちらが出てきてくれるのを待つ。もしかしたら眠っているのかもしれないが、気にせず話した。

「そこが加賀さんの部屋ですか？」

そんな中、鳳翔が部屋の前に。何やら先程鳥海に渡した服の袋と同じものを持っている。そういえば、と私も思い当たった。加賀もつい先日救出したばかりの新参。服はその時着ていたものしか持っていない。鳥海の分と一緒に用意してくれていたようだ。

「加賀さん、少しいいですか？　ここで生活する上での服を調達しましたので、受け取ってください」

実際、加賀がこうなっているのは、来栖提督もそうだが鳳翔がいることも原因である。居場所を破壊したという事実が、心を押し潰そうとしている。その本人がここに現れてしまつては、余計に萎縮し外に出られなくなる。

「加賀さん、開けてください」

鳳翔の声に対しても無言を貫く。今が一番不安定な状態だろう。初めて被害者を見たことで、頭を抱えるほどの罪悪感に苛まれている。

人形には薬も使われている。だから胸骨を差し替えたのだ。つまり、麻薬による禁断症状があつてもおかしくはないのだが、今までそれを全く勘繰られないように耐えてきていた。恐ろしいほどの胆力を持っている。

「ふむ……加賀さん、そのままでもいいので聞いてください」

袋を手渡されたので受け取る。鳳翔は扉に手を当て、中に訴えかけるように話し始めた。

「私達は、貴女のことを恨んでいませんよ。確かに実行犯は貴女だったかもしれませんが、それは貴女の意味では無いでしょう。完成品や姫ならまだしも、貴女は人形だったのだから、意思など何処にも無かったはずです」

記憶と実感だけは残り続けるが、自らの意思で来栖鎮守府を破壊しようと思つていたわけではない。だからこそ、目覚めた直後に五航戦

への憎悪が真つ先に現れたのでは無いだろうか。

やりたくないのにやらされた。それを命じたのは五航戦だ。あの空爆は全て、完成品にされた五航戦の意思。そしてその意思は、大淀1人のエゴによって生み出されたものだ。大淀以外は全員被害者である。

「むしろ、貴女に憎しみを持つこと自体が間違ってるんです。貴女は敵に撃たれた時、武器を憎みますか？ 使い手を憎むでしょう。それと同じです」

朝霜と似たようなことを言っている。あちらは自分が吹っ切れるため、こちらは他者を納得させるために、同じ理論を使う。私も同じ考えだ。自分の意思と関係なくやらされたことは、当人の罪ではない。人形なら尚更だ。

「もう一度言います。私達は、貴女を恨んでいません」

ガタリと部屋の中で音がした。ジツとしていたであろう加賀が、ようやく動いてくれた。扉の方まで足音が近付いてくる。だが、鍵は開くことは無い。

『合わせる顔がありません……私のせいで無くとも、取り返しのつかないことをした実感はあるのですから。ましてや鳳翔さんを傷付けた事実は……無くなることはありません』

扉越しに加賀が呟く。少し前までと違い、張り詰めていたものが切れてしまったかのような、弱々しい声。

『私は一航戦の誇りを失いました……世のため人のためにこの身体を得たはずなのに、世を憎み人を憎むものに人形にされ……その手を汚してしまった。この手についた血は……洗い流すことは出来ません』
搾り出すように独白。

『……怨嗟の声が聞こえるのです。何故お前だけが生き残った、他者を傷付けたというのに、のうのうと生きているのは何故だと。いつそお前も死んでしまえと。昨晚までは緩やかなものでしたが……鳳翔さんとあの提督を見たことで、その声はより大きくなりました。無くならない、ずっと、今も聞こえるのです』

加賀の禁断症状は幻聴一本らしい。だからあまり見た目に出ず、我

慢出来るほどだったということか。私達の知らないところで、加賀は我慢し、精神がガリガリと削られていた。飛鳥医師の治療を見学させてもらっていたのも、半分はこの幻聴から気を逸らすためだったのかもしれない。

そういうことは我慢せずに打ち明けて欲しいものではあるが、プライドがそれを許さなかったのだと思う。一航戦の誇りというのが私にはよくわからないが、名誉ある位置についていたというプライドが、加賀の心を余計に苛んでいる。

「では、貴女は今からどうするんです。この部屋から出ず、ずっと引きこもるんですか？ 怨嗟の声の中、衰弱して緩やかに死に絶えると？ その方が迷惑ですよ」

『……』

声がまたしなくなってしまった。一度溢れた罪悪感、なかなか元には戻らないだろう。だからこそ、私達施設の仲間が支えていくのだが。

「せっかく救われたというのに、やり直す機会を与えられたというのに、それを無下にするんですか」

『……』

「しゃんとしなさい！ 一航戦加賀！」

こんなに声を荒げる鳳翔を見るのは初めてだった。半壊させられた来栖鎮守府を見たときとはまるで違う、怒りと慈愛に満ちた叱咤。「貴女はどうしたいのですか。何もせずのうのうと生きるのか、それとも怨嗟の声に屈し命を絶つのか」

『……私は……』

「それとも……何にも屈せず新たな戦いに挑むか。そのどれもが既に選べるようにされていますよ。今すぐ選びなさい」

艦装と武装の修理も、セスの手で終わっている。戦うというのならいつでも戦場に出られる状態だ。戦えないというのなら、それは無用の長物となってしまうが。

『……私は、散った仲間のためにも……戦いたい』

「そうですか。ならば、この扉を開けることが出来ますね？」

少し間があり、ガチャリと鍵が開く音がした。扉が開くと、今までに見たことがないほどに煤けた加賀が中にいた。涙で目を腫らし、服も乱れ、髪もボサボサ。たった数十分でこうまで変わるかと思えるほどの荒れよう。

「やり直しましょう、加賀さん。幸い、ここには貴女を支えてくれる仲間達が沢山います。頼ればいいんですよ」

「……私は一人で抱え込もうとしていた。ですが……それではダメですね」

チラリと私を見た。そして、ほんの少しだけ微笑む。

「私を救ってくれた若葉の思いも無下にするところでした」

救われたのにその命を絶とうとするのは、私のしたことが無駄になることだと加賀は言う。感謝の言葉を言われたにもかかわらず、その命を絶つたとしたら、今度は多分私が落ち込むだろう。むしろ施設全体の士気に影響しかねない。

「二航戦の誇りを取り戻すため、怨嗟の声に報いるため、そして私を救ってくれた者達のため、私は再び立ち上がります。鳳翔さん、ありがとうございます」

鳳翔が加賀を抱き寄せて頭を撫でる。恥ずかしげにしながらも、加賀はそれを受け入れていた。

「それに、何度も言うようですが、私達は貴女を恨んでいません。鎮守府の者全員がです。気にされたら鎮守府の艦娘全員の思いを無下にすることになりますからね」

「……それは困りました。人数が多すぎて押し潰されてしまいそう」

「貴女なら支えられますよ。一航戦なんですから」

こうして、加賀は改めて立ち直ることが出来た。今までより雰囲気は柔らかくなったように思える。ようやく私達に心を開いてくれたのだ。

その後、残された昼食をモリモリ食べたのは言うまでもない。

怨念の行末

昼食を終えて少ししたら来栖提督は帰投。今の状況で鎮守府を長く空けるのも良くないと、事が済んだらすぐに戻っていった。二二駆は名残惜しそうにしていた。ある程度落ち着いたら今度の警備は二四駆ではなく自分達だと言って聞かなかったが、どうなるのだろうか。

ここに来てくれる際に、来栖提督が高速修復材を提供してくれたのはありがたい。それも2つ。ありがたいことに、これで多少の後ろ盾が出来たというものだ。怪我しないに越したことはないが、万が一の心配が取り払われたのは安心である。

「今日は夜間警備だったわよね。引率誰がしてくれるのよ」

今は五三駆が集まって夜のことの相談。曙が言った通り、今回は引率を誰にもらうかで少し悩みどころであった。

昨日の夜間警備はセスにやってもらっているため、今日はお休み。摩耶は鳥海のリハビリに付き合い、夜もまだ怖いため側にいたいとのこと。リコは夜間警備が出来るほど航行速度が出せない。そうなること、引率がいけないという少し厳しい状態である。

「私達だけでやるのは先生が許してくれないわよね」

「ですね……私達だけだと万が一の時にあつという間に押し潰されてしまいそうです」

耐えられる自信はあるものの、万が一を考えると引率は欲しい。こうなると、残っているのはただ1人。

「……加賀に頼むか。確か、武装の修復は終わってるはずだ」

「空母に夜間警備任せるわけ？ いや、出来るのかあの人。人形だったころの武装だし」

加賀である。本来は夜に出撃出来ない空母ではあるのだが、元々空母隊の人形として使われていた時の装備が丸々残っており、それをセスが修理したことにより、夜戦も可能となっている。空母隊が襲撃してきたのが夜だったのだから、問題無く機能するだろう。

つい数日前に加入した者が引率というのはなかなか無いことではあるが、駆逐艦4人だけで夜間警備はさすがに難しい。ダメ元でお願い

いしてみることにした。

「私で良ければ付き合うわ。これがここに来ての初陣になるけれど」
「いや、心強い。是非とも頼む」

ちようど残しておいた昼食を平らげていた加賀が食堂にいたので聞いてみたところ、何の抵抗も無しに快く了承してくれた。加賀の肩の上に陣取る浮き輪もサムズアップ。

先程の落ち込み具合を感じさせないほど回復しており、服も鳳翔が持ってきてくれたものに替えたようすで心機一転。ここでやり直していくという意気込みも感じられる。

「加賀さん、元気になって良かったわ！ ちょっと体調が悪かったのかしら」

「ええ、心配かけてごめんなさいね。少し寝たら調子が良くなったわ」
最初に昼食を残したことで雷が心配していたが、それもちよつと体調不良だったということにしている。性格上、どうあっても弱みを見せるようなことはしないようだ。私もあの時の加賀の姿については口止めされている。

「今回は先頭は若葉と三日月で行く。加賀にはしんがり殿を任せたいんだが、いいだろうか」

「ええ、問題ないわ。空母は後衛と相場が決まっているもの」
「それじゃあ、また夜に。それまでは休んでおいてくれ」

陣形まで決めたところで、一旦解散。これで気兼ねなく夜間警備に出る事が出来る。

前々回は何事もなく朝を迎え、前回は五航戦と鳥海による襲撃を受けたが、今回は果たして。

警備を開始して少し経ち、そろそろ日を跨ぐかというくらい。相変わらず夜の静かな海には慣れない。

今回は空母がいるということで、合間合間に艦載機を飛ばし、私達の目では見えないところも確認してもらっている。加賀も鳳翔と同じく弓と矢で艦載機を発艦するのだが、浮き輪を乗せたままで器用に射つものだ。

「夜間に空母つてのも出来れば便利なものね……」

「私でもわからないものはあるのだから、その辺は任せるわね」

曙がしみじみと呟いた。私達では目が届かない遠方も即座に飛んでいく上、加賀が扱うのは深海仕様の艦載機だ。昼夜問わずに索敵能力が高い。それでもわからないのは潜水艦くらいだ。加賀がわからないものは私達が確認するしかない。それを主に見るのは、夜目が利く三日月になる。

「何も無いのが嬉しいけど、そうになると暇なのよね」

「贅沢な悩みだ」

とはいえ、基本的には注意深く見ているのみで、それ以外はやる事がない。話しながらもコースは変えず、同じ場所をグルグルと。ただでさえ暗くて周りが代わり映えのないというのもあり、何か話しながらでないと思くなってくる。

「加賀さんはどう？ 施設の居心地はいい？」

「医療施設の居心地と言われても。でも……そうね、悪くないわ」

雷に突然振られた加賀が少し驚きながらも答えた。今は私しか知らないあの側面もあるものの、概ね悪い思いはしていないようだ。

「しばらくは居座らせてもらうことになるわ。その間はこういうことも手伝うから、気軽に声をかけてくれると嬉しいわね」

「こんなに便利ならいくらでも手伝ってもらいたいわ」

「いいわよ、毎日でも。彼が許してくれるのならね」

加賀は思ったより気さくな人らしい。表情はあまり変わらないが、話し方が以前よりも明るく感じた。こうしているのも楽しそうに見える。クールに見えて、中身は意外とコロコロ変わるようである。これが本来の加賀か。

加賀は薬の禁断症状による幻聴に苛まれているが、それすらも表に出さない。1人で抱え込むことはやめるとは言っていたが、そのことを話さない辺り、実は禁断症状は意外と軽めなのかもしれない。

「着艦。異常無し」

「何も見えません。問題無し」

「若葉も何も感じない」

加賀の哨戒、三日月の眼、そして私の鼻で何も無し、夜間警備は順調と思われた。だが、

「んん、ちよつと待って。声が聞こえる」

雷がブレイキをかけた。他の者が何も言わず、雷だけがそれを言うということは、つまりそういうことだ。誰か1人でもソナーを持っていれば話は変わるのだろうが、今は無い物ねだり。やはり海中が見えないのは辛いものである。

ここ最近は無かったのに、ここに来て久しぶりに野良の深海棲艦の発生。中立区の中立たる部分を侵された結果。

「……ん、前と同じ言葉よ。何故死ななくちやいけなかったのかって……あつちの方」

ここからは雷が先頭となつて進行。その声が辿れるのは雷だけ。その場所に迅速に向かつてもらう。

「雷には何かあるのかしら」

「雷は深海棲艦の声が聞こえるんだ。生まれが少し特殊で」

「そう……早速私が頼るところが出来たわね」

「もーつと頼ってもいいのよー！」

私と三日月のことは人形の時代に知っていたようだが、雷の特殊な力のことは向こうにも伝わっていない。これは伝わったことで相手が対策を取るようなことは無いように思えるが。

こうなると全員が雷頼りだ。嬉しそうに先陣を切りながら、海中からの声に耳を澄ましている。

「多分もうすぐ。つて、この辺りつて……」

「前回の戦闘海域だ」

鳥海を倒し、五航戦を逃がした戦場。そしてここは、加賀を除く空母隊が自爆している場所である。

「前よりも声がハッキリしてる……すごく怒ってる声よ。恨みが物凄く強いわ……そろそろ上がってくるー！」

雷が言うや否や、水飛沫をあげて浮上してきた深海棲艦。今までの駆逐イ級かもしれないと身構える。

だが、そこから出てきたのは予想以上の敵。少なくとも私達がこの

施設で生活するようになってからは見たことのないもの。先日多く上がった深海棲艦の死骸に交ざってたか。

「5体!？」

「嘘でしょ……(´・ω・`)中立区よね!？」

敵は全部で5体。2体はクラゲのような外骨格の艦装から身体が生えている軽空母。2体はその軽空母の艦装を頭に被ったような人型の正規空母。

そして残り1体。巨大な艦装に腰掛けた状態で浮上してきたそれは、今出てきた者達よりもより人間に近い姿をしている。

「……シズメ……シズメ……」

そして、人語を介していた。私達がわかるほどに言葉を扱えるということは、最低でもイロハ級ではない。鬼級や姫級などの、上位個体である。本来なら深海棲艦が発生しない場所なのに、そんな強力な深海棲艦が発生してしまった。

「……空母棲姫……!？」

その姿を見て、加賀が顔を顰める。見覚えがあるのか、明らかに動揺が見える。匂いからも負の感情、戸惑いや抵抗が強く感じた。

「警報は鳴らした!・ 戦闘準備!・」

完成品との戦闘を想定していたが、まさか深海棲艦の空母隊が現れるとは思っても見なかった。それで、私にはピンと来てしまった。

この中立区に深海棲艦が発生したのは、今回を含めないと今までに2回。その2回ともが駆逐イ級であるが、出てきたタイミングは施設を破壊された数日後。潜水艦娘が自爆した後だ。つまり、その遺体を引き揚げる事が出来ない死の後である。

空母隊の自爆もそれだ。加賀以外の空母全員が自爆し、その遺体はどうにも出来ないレベルになっていたため、この海域に対して何も出来なかった。結果、この深海の空母隊が生まれてしまったと思う。

空母達の怨念が、空母隊となって堕ちてしまったと考えると、あまりにも残酷である。より強く、大淀と五航戦に対して怒りが増した。

「今は……治まって……!？」

耳に手を当て、顔を顰めたままの加賀。この突然の敵を目の当たり

にして、禁断症状が現れてしまったのだろう。仲間達の怨嗟の音が頭の中に響き渡る。雷が聞いている声とは違う声なのだろうが、その言葉はおそらく雷のものよりも強く厳しい。

「敵機が発艦します！ 対空防御は！」

「誰も持っていないわよそんなもん！ 加賀さん、対空！」

私達に高角砲は無い。故に、防空は加賀の航空戦力に頼り切るしかない。援軍が駆け付けるまではそれで耐えるしか無い。

怨嗟の声に苛まれながらも、加賀が艦載機を発艦。しかし、敵艦載機は加賀の全力を優に超える数。半分を討ち取ることが出来れば御の字か。とはいえ、あちらは施設を狙うようなことはなく、目の前の私達を殺そうと襲い掛かってくるため、それだけは安心していい。完成品とは違い、戦い方が嫌らしくない。

「ヒノ……カタマリトナツテ……シズンデシマエ……！」

その声と共に空爆が開始。加賀の艦載機を擦り抜けた空母棲姫の艦載機が、一斉に爆弾を落としてくる。狙いはまちまちだが、同じ航空戦を仕掛けてくる加賀を目の敵にしているのか、少し数が多い。

「先に周りをやるぞ！ 曙！」

「私は正規空母の方やるわ！ 軽空母片付けて！」

曙は頭の艦装から絶えず艦載機を発艦し続ける正規空母へ。その間に私は三日月と共に軽空母の方の対処に当たる。空母棲姫は加賀に押さえつけてもらい、まずは全体的な負荷を下げることに尽力することとした。

軽空母も正規空母と同じように、艦装の口から吐き出すように艦載機を発艦しているため、まずそれを止めなくてはいけない。そこは三日月に任せることとして、私は順当に見えている生身の部分に攻撃を加える。

ありがたいことに動きは遅く、リミッターを外さなくてもわたしの動きで翻弄出来た。これぞ深海であると言わんばかりの剛腕には絶対に捕まるわけにはいかないが、ヒットアンドアウェイを繰り返せばどうとでもなりそうだ。

「すまない。お前達の恨みは若葉達が晴らす。今一度眠ってくれ」

艦載機を発艦しながら私に掴みかかろうとしてきたが、それをヒラリと躲してナイフを背中突き立てる。悲鳴を上げることは無いが、痛みを感じているような反応を見せるため、申し訳ないと思いながらも終わらせてやる。

もう片方も三日月がしつかりと終わらせてくれていた。艦載機を発艦する艀装を撃ち抜き、その後心臓を一撃。辛そうな顔をしていたが、そのままにしていたら大惨事になることもわかっている。故に容赦なく、心の中で謝罪しながら討ち倒す。

「悪いんだけど、また寝てなさいよー」

曙も正規空母を槍で貫いた。杖を持っていたせいで、攻撃を払われかけていたが、そこは曙も経験が違う。槍を打ち払われることなく、確実に急所を狙う。

「ごめんなさい、貴女達の恨み、私がちゃんと聞いたから。忘れないから」

雷は殺傷兵器を持たない。だが、確実に足止めをするために、最大出力の水鉄砲を顔面に砲撃。軽空母の方と違い、人間と同様の顔が存在するからこそ通用する。当たりどころが悪ければ失神するほどの出力だ。それが直撃した正規空母は、気を失いかけてフラついた。

「すまない。必ず仇は取る」

そこに先に事を終わらせた私がすかさず一撃を加えた。これで終わってくれただろう。

残りは空母棲姫1体。今は加賀が1対1で戦ってくれているが、搭載数の関係か若干不利。いや、加賀自身が攻撃に躊躇している部分もあった。

加賀自身もわかっている。つい先日まで、人形にされていたとはいえ仲間であった艦娘の怨念の塊が、今牙を剥いているという事に。禁断症状による怨嗟の声と合わさり、まるで自分だけ助かった事を恨んでいるかのように思ってしまうのだろう。

「私が……終わらせます。眠ってください……くくく」

最後に何を言ったのかはわからなかったが、あの空母棲姫が誰の怨念から生まれたものか見当が付いているようだった。

空爆と射撃を回避し、一射。その矢は艦載機に変化する事なく空母棲姫の胸を貫いた。

だが、空母棲姫は終わらなかつた。

「ナンドデモ……クリカエス……カワラナイ……カギリ……！」

不敵な笑みを浮かべた空母棲姫は、私達が倒した深海棲艦の死体と共に海中へと沈んでいった。胸を射抜かれたというのに、まだ倒れないというのか。それほどまでに怨念が強いということだろうか。

それに追い討ちをかけることはしなかつた。加賀の辛そうな顔は、最後まで晴れなかつた。

彼女の見解

夜間警備の最中、しばらく無かった深海棲艦の発生が確認された。目の前で発生した深海棲艦は、5体の空母。そのうちの1体は、中立区で生まれるには分不相応な空母棲姫である。

生まれた場所は前回の戦いの跡地。翔鶴の命令で空母隊が一斉に自爆した場所である。その海域には、あの空母隊の怨念が渦巻いていたのだろう、それを糧にして深海棲艦が生まれ出てしまった。それほどまでに、あの空母隊の遺していった負の感情は強く、重い。

夜間警備を一旦中断し工廠へ戻ると、出撃準備をしていた朝霜と巻雲が待っていた。私達が帰らなかつたらそのまま出ていただろう。戦い自体はすぐに終わったため、ただ起こしただけになってしまった。

「すまない、もう終わった」

「完成品じゃ無かつたのかよ」

「深海棲艦が発生したんだ。念のため警報を鳴らさせてもらった」

朝霜と巻雲にはイマイチ理解出来ないようだが、後から駆け付けた飛鳥医師や摩耶は、この事態の重要性が伝わっている。

中立区認定を受けているこの海域に深海棲艦が発生してしまったのはこれで3度目。2回目までは駆逐イ級であり、何処の海域でも見られそうなイロハ級だが、今回現れたのはよりによって姫だ。

「空母棲姫だと……!?!」

「ああ、加賀がそう言った。そうだったな」

「ええ、あれは間違いなく空母棲姫よ。それに、まだ倒せていないの。胸を射抜いたはずだけど、何事もなく海中に沈んでいただけだったわ」

悔しそうに話す加賀。だが、それ以外の感情も渦巻いている。むしろ、そちらの方が大きい。

最後に矢を放つとき、とても辛そうな顔をしていた。匂いも怒りなどよりも悲しみが強かった。あの時戦った深海棲艦が、元々仲間だった空母隊の成れの果て、怨嗟に縛られ異形と化した元艦娘だと考える

と、あんな顔にもなろう。

「姫まで出てきたとなると、これは大本営への連絡が必要になるだろう。今日の夜間警備は中止にし、休んでくれ」

「いいのか？　ここからまた襲撃を受ける可能性も無いとは言えないだろう」

「戦闘をしたまま夜間警備をしても、最大のパフォーマンスは出せないだろう。なら、一度休んで仕切り直した方がいい」

確かに、リミッターを外すことなく事を済ませることが出来たものの、当然疲れはある。私と曙は近接戦闘故に、敵の返り血も浴びてしまった。最低限、これを洗い流したいとは思っていた。

「僕の方から大本営に連絡しておく。君達は休むんだ」

「了解。今晩は休ませてもらう」

短いが、ここで夜間警備は終了。明日仕切り直して、今後の事を考えていくことになる。大本営に連絡するとなると、新提督や下呂大将も動いてくれるかもしれない。

夢の中。少し久しぶりに引き寄せられた。夜の海の上だが、先程までいた海とは違い、恐怖を一切感じない。私の中の世界だからだろうか。

そしていつも通り、駆逐棲姫が私の目の前にいた。相変わらずにこやかな笑顔で、私に来るのを待っていたかのように浮かんでいる。

『少し久しぶりになっちゃったね』

「ああ、何かあったのか？」

『バタバタしていたみたいだからね。声がかげづらかったつていうか、迷惑かもしれないと思ってちよつと控えてたんだ』

そんなこと気にしなくても良かったのに。むしろ、どんな時でも声をかけてくれれば私は嬉しい。それを伝えると、笑顔がより明るくなった。これからはバンバン夢に引き込むと宣言されたくらいである。

『そうだ、私から伝えられること、話しておこうかな』

「ああ、頼む。若葉達ではわからないことも、お前なら気付いてくれる

だろうしな」

ここに来るまでに少し時間が空いているため、その間に駆逐棲姫が思ったことを説明してもらおうことにした。差しあたっては加賀のこと。

人形であった加賀にも何かしらの細工がされており、何かのキツカケで私達を後ろから撃ってくるようなことがあられては困る。それを事前に知っておくことが出来れば、こちらでも対策が取れるというものだ。

『加賀さんからは嫌な感じはしないよ。鳥海さんからもね』

暁のときのような暗示や洗脳は、加賀と鳥海にはかけられていないとのこと。前回の件があるため、駆逐棲姫の言葉には大きな信用性があるため、一安心である。これは目を覚ましたらみんなに伝えよう。『来栖提督のところに向かった時にも、誰からも何も感じなかったから安心して』

「ありがたい。ならあちらにはその場で相手に何か暗示をかけるということは出来ないと考えていいな」

『だね。暁の場合は大淀に建造されたから暗示をかけられていたのかもしれないね』

そうになると、もしかしたら加賀は大淀に建造された艦娘ではないということになるのかもしれない。翌朝の打ち合わせでその辺りは聞いておいてもいいか。空母棲姫のこともあるし。

その空母棲姫に対し、駆逐棲姫はどういう風に思ったのだろうか。今度はそれを聞く番。

「駆逐棲姫、若葉から聞きたいことが」

『若葉、進める前にちよつといいかな?』

改まって見据えられた。笑顔は変わらないが、少しだけ真面目な雰囲気。

「どうした」

『駆逐棲姫って、呼びづらくない? 私に名前なんて無いけど、その人間が決め付けた名前はどうかと思うんだよね』

何を言い出すかと思えば。だが確かに少し呼びづらいか。

人間が決めた名前、つまり敵の名前で呼ぶのは、友人となった後だと失礼かもしれない。うちにいる深海棲艦は飛鳥医師が適当ではあるものの名前を付けているので、こちらでも付けてあげるのが道理か。

「そうだな……だが、どう呼べばいいのだろうか」

『そうだねえ。そうだ、ふっと思い付いた言葉でいいかな』

「ああ、自分の名前だ、自分で決めればいい」

少しだけ頭を悩ませた後、手をパンと叩いた。何か思い付いたらしい。

『よし、これから私のことは、シグと呼んでくれないかな』

「何処から出た言葉なんだ」

『なんとなくだよ。名前名前って考えてたら、パツと思い付いたんだ。口に出すとすぐくしくしくり来てね。やっぱり私は特殊なのかもしれないね』

駆逐棲姫改めシグ。今後はこれで呼称していくことに。飛鳥医師のように、今までの呼称を振ることなく、独特な呼び名が出てきた。もしかしたら、シグ自身の出生に関わる言葉なのかもしれない。

「じゃあシグ、聞きたいことがある」

『何かな。何でも聞いてよ』

新たに得た名前を呼ばれたからか、おそろしく上機嫌である。少しはねた髪の毛が、ピコピコと嬉しそうに動いているように見えた。まるで犬である。

「あの空母棲姫、どう思った」

『あの人かあ……私^{ボク}としては憎めないんだよね』

言ってしまうえば、私も空母棲姫のことを憎むことは出来ない。自分の意思と関係なく守るべきものを破壊させられ、不要になったら目眩しのために命を散らされたのだ。ああなつてしまっても仕方ないと思うし、憎しみに囚われてもおかしくないと思う。

だが、そのままにしておいてもダメだ。憎しみのままに暴れ回ることになる。人間がよく知る深海棲艦としての性質で、本当に人類の敵となってしまうだろう。そうなる前に終わらせたい。

『話せばわかってくれるかもしれないけど、今は元気だし、聞く耳持たないだろうね。でも、多少痛めつけられれば少しは話を聞いてくれるかもしれないよ』

「なかなか怖いことを言うな」

『私は深海棲艦だからね。本来なら人類の敵だよ。がるるー』

爪を立てるポーズでこちらを脅かしてくるが、ずっと笑顔なので怖くも何ともない。むしろ可愛げがある。ただでさえ脚が無いことで私よりも身長が低くなっているため、小動物じみた愛らしさを感じた。

『でも、早いところ決着はつけた方がいいんじゃないかな。倒すもよし。説得してみるもよし。どちらにしろ、動けなくなるくらいまで攻撃はしないとダメだと思うよ。私^{ボク}だったらそのまま倒しちゃおうと思っただけ』

瀕死にまで追い込んで、こちらの話を聞いてもらえる段階まで持つていけば、説得にに応じてくれるかもしれないということか。

怒りと憎しみに満ち溢れた空母棲姫が話を聞いてくれるかはわからないが、戦う必要はある。結果的にまた沈めることになるかもしれないが、その時はちゃんと弔ってあげたい。

「わかった。ありがとうシグ」

『どういたしました。何度も言うけど、私^{ボク}が一番近くで見てるからね。いくらでも頼ってくれても構わないよ』

「ああ。いつも感謝してるさ。この前の戦いでは、チ級も力を大きく貸してくれたな」

シグもそうだが、加賀を救出するときには特にチ級が力を貸してくれた。あのときの脚力は今までに無いほどに力が出た気がする。

『ああ、あの時ね。それもあつたから、実は私^{ボク}、君の言うチ級って子を探してみたんだよ』

「見つかったか?」

『残念ながら、見つけれなかった。私^{ボク}が行ける範囲は限られてるからね』

私の声に応じてくれたのだから、シグと同じように私の中に住んで

いるのかもしれないと、行けるところで探してみたらしい。だが、さすがに見つからなかったという。

シグは私の頭に近い部分だから私自身に干渉できたようだが、千級は脚。しかも骨だ。シグのように意思を持っているかもわからない。無意識にその力を貸し出してもらっているのなら、尚のこと礼が言えるタイミングが欲しいものだ。

『侵食が脚まで届いたら、ここまで引っ張ってこれるかもね』

「勘弁してくれ。その前に頭に届くだろう」

『多分ね。私にはその辺り制御出来ないからなあ』

三日月は自分の意思が消えるような事はなかったが、思考に若干の影響が出ている。私の場合はそれ以上になってしまいう可能性が無いとは言えない。

力が手に入るのはいいが、私が消えてしまったら意味がない。それはシグも危惧してくれている。なんだかんだでいい友好関係は続行中。お互いに別れるのは嫌だと思えるほどに繋がりが深い。

「なるべく現状維持で」

『そうだね。それが一番だ。私はずっと君といたいからね』

少しくすぐったい言い方ではあるが、気持ちは同じである。今の私は、シグがいるからこそ生きていられる。もし飛鳥医師が治療法を確立したとしても、この腕は手放さない。

「これからも、よろしく頼む」

『勿論。こちらからも、よろしくね』

握手で夢を終える。お互いに笑顔で。これにより、一層シグとの繋がりは深まったと言えるだろう。こういう形で強くなれるのなら万々歳だ。

気付けばベッドの中。いつになく左腕を拘束する三日月が気になったものの、気分の良い目覚め。

昨晚の戦闘の疲れは取れていた。戦闘と言ってもすぐに終わったからか。

「三日月、朝だ」

右手で頭を撫でて三日月を起こす。むにやむにや言いながら目を覚めますが、まだ寝惚けているのか、目を開いた状態で左腕に頬擦りしてきた。何だろう、今までよりも依存度が高くなっているような、そんな感じ。

「おはようございます」

「ああ、おはよう。そろそろ離してくれ」

あつ、と少し驚いてから私の腕を離してくれた。やはり無意識だったか。

「夢である子が出てきてくれたので……その、ちよつと引つ張られませんでした」

「そうか。若葉の方にも出てきてくれた。タイミングが同じなんだな」

今は別々で人格が違っても、元は同じ駆逐棲姫だったのだから、考えていること、思うことは全く同じと見ていいのかもしれない。私より三日月の方が夢に出てくる頻度は少ないみたいだが、それでもこうやって夢の中で会話が出来るようになったのは大きな変化である。

着替えながらその夢の中での話をするが、おおよそ似たようなことが行なわれていたようである。加賀や鳥海に心配は要らず、空母棲姫はもしかしたら説得出来るかもしれないという共通認識。その中で、あちらも名前について言及があつたらしい。

「駆逐棲姫って呼ばないでほしいと言われてまして、名前を考えてあげたんです」

「へえ、それで？」

「話すときにいつもぽいぽい言っているので、ぽいちゃん」と

それはまた安直な。だが、当人が喜んでいるのなら問題ない。三日月の中の駆逐棲姫、ぽいはその名前を貰って大層喜んでいたので。

「若葉の方も同じこと言われたな」

「どんな名前を？」

「本人が直感的に思い付いた言葉にしようという話になったんだ。そうしたらシングと名乗るようになった。何処から出た言葉なのやら」

三日月もピンと来ない言葉のようだ。同じ駆逐棲姫に憑かれてい

るとしても、あちらにしかわからない言葉というのはある。

「お互い、彼女と友好関係が築いているようで何よりだ」

「そうですね。これからもよろしくと、笑顔で夢を終わりましたから」
私も三日月も、切っては切れない関係となった。三日月もこれに関
しては、治療出来るようになっても手放さないと言うほどだ。

だが、結局シグは何者なのだろう。それはわからずじまい。まあわ
かったところで今の関係性が崩れることはないのだが。

かつての仲間

翌朝からは施設がバタバタし始める。夜間警備で発生を確認した空母棲姫の対策を練る必要が出たからだ。昨晚のうちに飛鳥医師が大本営に連絡をしているものの、その時間が時間だっただけに、今日すぐ動いてもらえるとは思えない。朝イチに動き出したとしても、ここに到着するのは昼に近いくらいになってしまうだろう。

それまでにこちらでもやれることをやっておかなければならない。鎮守府でも無い施設が独断で動き過ぎるのもあまり良くないとは思うが、事が事だ。姫級が発生してしまったとなると、早急な対処が必要。

まずは朝食がてら作戦会議。全員揃う場で、昨晚のことをきっちり情報共有しておく。大本営からの援軍が来るまでに決着がつけられるのならつけたいところだし。

「まず、シロとクロには、あの海域に潜ってもらいたい」

「りょーかい！ 空母の人がいるか探してくればいいんだよね」

「襲われそうなら……すぐに連絡する。海の中なら負けないけど……」

空母棲姫は胸に矢を受けてから潜ってしてしまったので、まだそこにいる可能性を考えてシロクロに見に行ってもらうことにした。相手は空母、いくらなんでも海中で戦闘することにはならないはずだ。

それに、同じ深海棲艦相手なら話が出るかもしれない。未だに負の感情に吞まれ、理性すらあるかわからない空母棲姫ではあるものの、もしかしたらシロクロに反応してくれるかもと淡い期待を持っている。

「時間を問わずに浮上してくる可能性がある。訓練や家事をしたいのは山々だが、行方がわかるまでは監視をしよう。場所的には施設からは見えないんだっとな」

「ああ、あの海域は水平線のギリギリ向こう側だ。だから、リコや加賀にも哨戒をお願いしたい」

夜間警備と同じように駆逐隊による監視も必要だとは思いますが、哨戒機による周辺監視もやってもらいたいところである。前回とは違うところから現れる可能性だって十分あり得るのだから。

駆逐隊で海上、シロクロで海中、哨戒機で空からの監視が出来れば、見逃すことは無いだろう。この海域から出て行かれるのも、それはそれで困る。

「そうだ、ここで話しておきたい。若葉は今日、駆逐棲姫の夢を見ている。その時に空母棲姫のことについても聞いた」

「彼女は何と？」

「話せばわかってくれるかもしれないと言っていた。だが、今は元氣すぎてこちらの言葉に聞く耳を持たないだろうとも」

夢の中で話したことも洗いざらい伝える。洗脳の関係は、この場に暁がいるため少し濁して。駆逐棲姫にシグという名前が付いたことも念のため伝えておいた。

その名前に飛鳥医師が少し反応したが、今のことに関係ないことだからと話を先に進めた。とにかく今は空母棲姫のことをどうにかしなくては。

「なら、シグが言うには、まずは発見してダメージを与えた後、落ち着かせてから話をしてみるといいのわいわけか」

「ああ。とはいえ、それが確実に上手くいくとは限らない。やっても無駄な可能性は少なからずあると」

「やらないよりはマシだろう。あの空母棲姫だって被害者のようなものだ。救える道があるのなら、小さな可能性でも手繰り寄せたい。戦場に出られない僕が言うのはおこがましいが」

飛鳥医師の信念はわかっている。深海棲艦であっても、救える命は救いたい。今回の空母棲姫は大淀の被害者の怨念だ。それこそ救うに値する相手。

この飛鳥医師の言葉に否定的な声を上げる者は、この施設には1人もいない。

「すみません、1つ私からも」

「加賀、何かあったか」

昨日の戦闘の時から少し様子がおかしい加賀。あの空母棲姫を目の当たりにしたこと、いろいろと思うところがあるようである。悶々としていたようだが、ここでの作戦会議で、何かを決心したような表情に。

「その説得、私にやらせてもらえないかしら」

空母隊の生き残りとして、今回のことは自分の手で幕を引きたいと考えているようだ。気持ちはわかる。危険かもしれないが、元仲間のために力を尽くしたいというのは、誰だって考えること。

加賀の言葉には、誰も文句を言わない。むしろ、適役だとも思える。あまり期待は出来ないが、空母隊であった時の記憶を持ち合わせているのなら、私達の言葉よりも加賀の言葉の方が聞く耳を持ってくれそうだからだ。

「……ああ、かまわない。だが、僕は作戦指揮なんて出来ない。提督ではないからな。その時の判断は戦場で各々にしてもらうことになる」
「ありがとう。それで充分よ」

決意の匂い。加賀としては、あの空母棲姫だけは生かしたい、仲間に加えたいと考えているようだった。あのときは救える手段が無いと全員が思っていたから撃破を狙ったが、可能性が少しでもあるのならそちらに賭けたい。

それで施設を危険に晒すようなら、独断でも止めざるを得ないと思う。救いたいのはわかるが、それで大きな害を被るのはよろしくない。

「我欲に振り回してしまうかもしれません。無理だと思ったら、諦めてもう一度眠ってもらいます。みんな、力を……」

「んなことあ百も承知だぜ、加賀さん」

「あの人だって、助けられるなら助けたいわ！」

摩耶と雷が声を上げた。古参の2人だから、この施設のやり方に最も順応している。救えるものは全て救うというのが、ここでのやり方だ。その信念があるからこそ、私達はここで生きていられるのだ。出来ることは全てやっていきたい。

「スペック自体は完成品よりは戦いやすかったわよね」

「ああ、良くも悪くも真つ直ぐだった。怒りと憎しみに囚われて、目の前の若葉達にしか攻撃をするつもりは無かったようだった」

それが唯一の救いだ。小狡いことをしてこず、真正面からぶつかってくる。

人語を介する分、知能がイロハ級より高いようではあるが、負の感情に呑み込まれているせいで理性的では無いからそうなのだろう。おかげで戦いやすい。あの時も誰も傷つくことなく戦闘が終わった。

「本体は無傷で、艦装だけぶつ壊せばいいんじゃない？」

「朝霜はちよつと簡単に考えすぎですよ」

「だが、それが一番妥当だろう。艦装が無くなれば戦えない。嫌でも冷静になるはずだ」

朝霜の案、採用。空母棲姫は大型の艦装に乗って移動をしているよなので、それを破壊することで頭を冷やしてもらおう。本体に傷がついていないのなら、死に近付くこともないだろうし。

それでももしこちらの話を聞いてくれるのなら、そのまま施設に連れて行くのでもいい。とにかく、あの艦装が無くなれば何か変わるはずだ。

「艦装を壊すだけなら、朝霜と若葉が適任かしら」

「だな。あとは実弾の主砲で確実に削っていきやいい」

朝霜は力任せの攻撃での破壊。私は構造を知った上での分解。それを確実に実行するために、みんなの主砲でガリガリと削ってもらう。削れば削れるほど分解もしやすくなるため、みんなの協力は必要不可欠。

結果的には施設の艦娘の総力戦だ。相手が空母なのだから、対空砲火も必要になるだろう。摩耶と巻雲にそこは補ってもらい、私達は空母棲姫の足止め、無力化に尽力することとなる。

朝食後、早速シロクロが海域へ潜水し、リコと加賀の哨戒機による周辺警備も開始。加賀はリコと違い、駆逐隊による哨戒に便乗してなった。

今回は変則的な駆逐隊での哨戒。先程挙げられた、艦装破壊に適しているであろう私と朝霜、そこに実弾兵器による削りを目的とした三日月と姉、対空のための巻雲の5人。そこに加賀が加わって6人の艦隊で行なわれている。

「前回の発生地点はここだ」

施設が水平線の向こうに消えたくらいの場所。海域としては何も変わらない。明るい時間に見ても、そこはただの海だ。私達が施設で暮らし始めてからずっと見ているものと同じ。

嗅覚にも反応は無いし、三日月の眼でも何の変哲もない海として認識されている。しかし、姉の霊感が反応した。

「うむ……怨念、じゃな。もののけのなりかけのようなものが渦巻いておる」

「なら、また発生するかもしれないということか」

「そうじゃな。今回だけでは終わらぬ可能性はある。警戒は必要じゃ」

この海域に蔓延る怨念を全て晴らすことが出来れば止まるだろうと付け加えた。

当たり前だが、誰も納得して沈んだわけがない。一度憎しみに囚われてしまうと、そこから抜け出すことは難しいだろう。深海棲艦を生み出し、それを倒し続けたとしても、その怨念は永劫晴らされないだろう。

「淀さんぶちのめしや多少はマシになんじゃね？」

「そうですね。私もまずはそれがいいと思います」

朝霜の発言に三日月も同調。私もその手段は素直にアリかなとは思う。怨念の一番恨んでいるものは、まず間違いなく大淀である。そうであってほしい。助けられなかった私を恨んでいると言われるかどうか、どうすればいいかわからなくなるが。

『ワカバ、こちらクロだよー』

「クロか。そちらはどうだ」

今回は通信機を私が貰っている。海底にいるクロからの通信を受け取り、状況を確認。

『えーつとね、空母の人は見当たらないんだけど、空母の深海棲艦の死骸は見つけたよ』

「死骸か。軽空母2体と正規空母2体だと思うが」

『そうそう。これ、昨日ワカバ達がやったのだよね。艦装がグチャグチャになつてる。あと、死骸も壊されてるかな』

あまり嬉しくないものを見ている声。以前に艦娘の死体を海底で発見したときは大きく取り乱していたが、今回はこういうものもあるだろうと覚悟して向かったことで、発見しても動揺せずに済んでいる。気分は悪いだろうが。

私達は最低限の攻撃で終わらせている。急所を一撃で貫き、他の部分は何もしていなかった。艦装は無傷なはず。だが、クロが言うにはその死骸自体に損壊が見受けられると。

何故そうなつてかはすぐにわかった。空母棲姫自身がそうしたからだろう。空母棲姫自身も加賀の攻撃で傷を負っているが、仲間の死骸を取り込みそれを修復したのではなからうか。

イロハ級の深海棲艦は沈んだ艦娘を捕食すると飛鳥医師が言っていたが、共食いもあるのでは。空母棲姫の艦装は大きな口も付いていたし、そこから仲間を捕食して取り込んだと考えるのが妥当な線。

「引き続き、海底の哨戒を頼む」

『りょーかいー。ちよつと施設から離れていくね』

クロとの通信が切れ、今聞いたことを仲間達に伝えた。話すにつれ、加賀が苦い顔になっていく。元々の仲間が深海棲艦を生むほどの怨念を持ち、さらにはその深海棲艦が仲間を捕食している可能性まで示唆されたのは流石に辛い。

「加賀、無理しなくてもいいと思うが」

「無理なんてしていないわ。ただ、事実を突き付けられると辛いわね……」

ふう、と息を吐き気を取り直す。

「1つ教えてもらっていいだろうか」

「何かしら」

「あのとき、空母棲姫を射つ時に、誰かの名前を呼ばなかったか？」

空母棲姫の胸に矢を撃ち込んだときだ。追求したいわけではないのだが、今この状態となると少し気になる。

「……あの空母棲姫、私のかつての仲間にとてもよく似ていたの。そもそも空母棲姫は私達空母に似ている部分があるのだけど……あれは似ているなんてものではなかった。本人が深海棲艦となったとしか思えないくらいだったわ」

そうになると、弓を構えるのにも躊躇いが出るほどに感じるだろう。さらには禁断症状による怨嗟の音が響く中でも、それを遂行出来た加賀は、怖いほどに冷静だった。

「あたいらはその空母棲姫見てねえんだけどさ、その、やっぱアレなのか。加賀さんが言うってことは……」

「ええ、朝霜が察する通り。あの空母隊にも使われていた、私の相棒。一航戦、赤城よ」

私達には知識がないために顔を見てもわからなかったが、朝霜は姫や完成品としての経験もある。ある程度は艦娘の関係性なども知っていたようである。

その赤城は、第二改装も実装されている強力な空母。姫でも完成品でもなく人形として使われていたのには若干違和感がある。それを尋ねようとしたとき、再び海底から通信を受けた。

『ワカバ！ 空母の人見つけた！ 私達見たら急浮上してったから気をつけて！』

その通信を受けた直後、ここよりもさらに施設から離れた場所で水飛沫が上がった。大きな水飛沫だったため、遠くても視認できるほどである。

現場にすぐに向かい、浮上してきた空母棲姫と対面。昨晚に加賀がつけた傷は完治している上に、艦装やら何やらが強化されているようにも見えた。共食いの結果、さらなる力を手にしたと見て間違い無いだろう。

「ま、マジか……そっくりってレベルじゃねえぞ」

「赤城さん本人にしか見えないですよ」

朝霜と卷雲が、その姿を見て驚く。それほどまでに似ているらし

い。

「……必ず説得するわ」

空母棲姫もこちらを睨みつけてきた。やはりまだ怒りと憎しみに囚われ、理性も焼き尽くされている状態。今のままでは話もできないだろう。

まずは無力化しなくてはいけない。その後に話をしたい。この空母棲姫なら、何故か応じてくれるのではと思えた。

穢された誇り

一度撤退された空母棲姫との再戦。前回いたイロハ級の空母達はその時に処理が出来ているのだが、海底の状況から見て、それらを空母棲姫が捕食して強化されている。与えた傷は全て修復されているため、この再戦はあちらもダメージ無しの状態から開始することとなる。

私、若葉は朝霜と共に艤装の破壊を任された。三日月と姉に援護してもらいつつ、空母棲姫に向かう。

「空母棲姫！ 話を聞け！」

「……シズメー！」

やはり聞く耳を持たない。こちらが攻撃しているというのもあるが、完全に敵視されている。私が近づくのもお構い無しに、空爆を開始する。

それに、回避性能が非常に高い。大きな艤装を取り扱っているというのに、現状の私達と同じほどの高速戦闘。さながらジェットスキーのように海上を滑走しながら、私達へ激しい航空戦を展開してくる。

「巻雲姉！」

「わかつてるよお！ 全部撃ち墜としますう！」

巻雲の両用砲により、膨大な数の艦載機はほとんど撃墜されていく。だが、こちらが墜とす速度と同じ速度で、あちらも艦載機を次々と発艦していく。そこでそれを均衡に持っていくのが加賀である。

「航空隊、発艦」

加賀も全力で艦載機を発艦していく。手早く矢を放ち、艦載機を真上へ飛ばした。艦載機のパフォーマンスはほぼ互角。どちらも深海のものであるために、1対1ならば完全に均衡。あちらは数、こちらは巻雲の存在で、どうにか航空戦はやり過ぎしている。

あちらには艦載機しか攻撃手段が無いようだが、巻雲や加賀との拮抗を回避するために、超低空飛行の艦載機も現れている。これは三日月と姉に撃墜を任せることにした。

「道を開きます！」

「若葉、朝霜、行けえ！」

三日月はリミッターを外していないようだ。それでも命中率はかなり高いため、姉と共の援護は心強い。私と朝霜の進路に現れる艦載機を次々と墜としてくれた。

その援護を受け、私はリミッターを外した。航行速度が似たようなもののため、このままの速度では並行線。即座に追いつくために限界を超える。

「艦装狙いだな！」

「ああ、若葉達で破壊するぞ！」

朝霜があつという間に空母棲姫に触れられるほど接近。乗り物にしている巨大な艦装に対し、いつも通り力一杯の打撃。鳥海に握りつぶされてからは、より強度を増した棍棒にしている。その分重くなつたらしいが、随時リミッターが外れているような朝霜には些細なこと。

「おらああつー！」

艦装の前部にある口を狙い、渾身の一撃。私達の艦装ならそれで確実に半壊するレベルだが、とんでもない音が鳴ったくらいで、それをまともに受けても凹む程度。前回倒したイロハ級を捕食したためか、やたら硬くなっている。

朝霜が攻撃するところを見ながら、私は解体の糸口を探していた。摩耶なら即座に解体していくのかもしれないが、私は摩耶と比べれば素人。ナイフを突き立てる場所を探すだけでも一苦労である。朝霜の一撃で凹むだけとなると、私の刃は傷程度。ならばと三日月と姉に合図。

「了解、撃ちますー！」

三日月の精密射撃。小さくてもいいので穴を空けてもらえれば、私 がそれをナイフでこじ開けるように分解しよう。

直撃しても弾くような音がしたが、擦り付けて削るような砲撃で、朝霜が付けた凹みに傷が一本真一文字に刻まれる。そこが私の攻撃するポイントとなった。

「追加じゃー！」

さらに姉の砲撃。空飛ぶ主砲2基による集中砲火で同じ場所に砲撃。三日月が付けた傷がより深く刻まれた。

「若葉もやるぞー！」

そこにすかさず私が一気に近付き、その傷をさらに抉った。ナイフによるダメージなんてたかが知れているかもしれないが、何度か付けられた傷をさらに抉るくらいなら造作もない。まだあくまでも傷を付けただけではあるが、ダメージが通らなくとも次への布石になる。

これにより空母棲姫が警戒したか、低空飛行の艦載機が一気に増えた。三日月や姉だけでなく、私達6人全員に対して艦載機を配置してきた。代わりに空爆が若干少なくなる。

「オチロ……！」

ただの艦載機じゃない。それそのものが爆弾となつている特攻機だ。爆撃を至近距離で行なうことで自爆する、深海ならではのトンデモ艦載機。近くに來られただけで酷い目に遭うため、私と朝霜も一度実弾兵器に持ち替えてその対処に追われる。

私の拳銃では破壊まで行くのが難しい。そのため、あくまでも牽制と、艦載機の銃口に射撃することで攻撃手段を破壊する方向で行く。

「ちよつとだけ引いてえー！」

そこにすかさず卷雲の乱射。空爆が甘くなった分、低空飛行の墜とす方に使つてくれた。酷い量の弾幕だが、しつかり私達には当たらず、艦載機のみを破壊していく。

艦載機自体が爆発していくため、大きく回避する必要はあったが、全員無傷で艦載機は回避出来ている。だが、爆炎で空母棲姫の姿が見づらくなつてしまった。

『ワカバ、真上に魚雷撃つよ。空母の人の艤装にぶち当てちゃうから』
「了解。頼んだ」

突如、クロからの通信。未だに海底に待機してくれていたシロクロが、私達の及ばない場所からの攻撃に出てくれた。先程存在を視認されているが、海底からの攻撃に対して空母はどうにも出来ないはずだ。さらにはこちらに意識を向けた状態での不意打ち。

ちようど艦載機に行く手を阻まれているため、空母棲姫からは距離

を取らされている。魚雷を撃ってもらうには丁度いいタイミングだった。

『そろそろ当たるよ。3……2……1……!』

動いている空母棲姫でもお構いなく、完全に真下からの魚雷が、空母棲姫の艦装の底に直撃し、爆発。大きな水柱が上がり、空母棲姫が僅かに浮き上がった。

「ナニ……!?!」

「魚雷受けて壊れねえとか硬すぎだろ!」

あの衝撃を受けたことで、底が大きく凹んだようだったが、私達ではその場所に攻撃することが非常に難しく、そこはクロ専用の攻撃箇所と認識することになる。

まともに直撃させるより、掠らせた方がダメージになるようだった。直撃は凹むだけだが、掠れば傷になる。ならば、先程付けた傷に重点的に攻撃した方がいい。

「朝霜、避けなさい!」

「うつす!」

それに私より先に気付いていた加賀の声と共に朝霜が飛び退く。瞬間、朝霜がいたところに加賀の矢が飛んできていた。私達が力を合わせてほんの少ししか削れなかった空母棲姫の外装の傷に、その矢は見事に突き刺さる。傷をつけたことで、ほんの数mm、脆い部分が出来たのだと思う。文字通り、一矢報いた。

私のナイフよりも、朝霜の棍棒よりも、さらには皆が持つ実弾の砲撃よりも、貫く力が強い加賀の矢。深海の艦装で作られた矢だからというのもあるだろうが、相手がこの空母棲姫だからこそその心のこもった一射。

「それを!」

「押し込む!」

巻雲が艦載機を墜としてくれたおかげで、空母棲姫までの道が出来た。その道を抜け、朝霜が突き刺さった矢を棍棒で叩き込む。一度穿ったその部分は、空母棲姫のたった1つの弱点となっている。それをさらに拡げ、より大きな弱点にしていくのだ。朝霜の一撃で押し込

まれ、加賀の矢が見えないほどにまで突っ込まれた。

矢が1本だけとはいえ、艀装を貫いたことで、空母棲姫の動きに若干ブレが見えた。その貫いた場所が丁度悪い場所だったか、自分の装甲に自信があったのかはわからないが、これで幾分か戦いやすくなる。

「若葉！」

「了解だ。あの穴を、より穿つ！」

さらに私が接近し、矢の刺さっている穴をこじ開けるようにナイフを突き刺した。当然硬くて簡単にはいかないが、矢が刺さったことでヒビが入っており、それをなぞるように抉ることでその傷をさらに拡げる。

「加賀！」

「……っ！」

言うが早いか、既に矢を放っていた。私が拡げた傷に吸い込まれるように飛んだ矢は、そのまま艀装を貫く。

「発艦！」

さらには艀装内部で艦載機へと変化。意趣返しと言わんばかりに艀装内部で爆撃し、そのまま爆発。普通の艦載機ならばやらないようなことだが、加賀の持つ艦載機は深海のもの。抵抗もなく、その手段を取った。

これにより、空母棲姫の艀装が半壊。しかしながら、空母棲姫自身は無傷である。

「マダダ……ワタシハオワラナイ……」

半壊したことで移動は出来なくなったが、艦載機の発艦機能は健在。再び膨大な数の艦載機が発艦される。加賀のように弓も要らず、手を掲げるだけで艦載機が次々と発生するのは深海棲艦特有のシステムであろう。なんてインチキ。

「動けないならもうこちらのものだぞ」

「おう、そこまで壊れてたらもうあたいらでもぶっ壊せるぜ」

道は三日月と姉が切り開いてくれる。航空戦力は巻雲が撃ち墜としてくれる。ならば私と朝霜は、真っ直ぐ突っ込むだけだ。あくまで

も艀装を破壊することを目的とし、先程と同じ速さを以て接近し、艀装の破壊された部分から解体を開始。

さらにはクロの魚雷がもう一撃入った。半壊した状態からぶつけられたら、もう凹むだけでは済まない。

ここまでされれば空母棲姫も厳しいと判断したようだった。苦々しい表情を浮かべた後、潜航による撤退の兆候を見せ始める。

ここで逃がしたらまた最初からになってしまう。艀装の修復のために、この海域から出て行ってしまう可能性もある。それだけは避けたい。

「シキリナオシダ……」

「させるわけないだろ」

また潜ろうとしたため、腕を掴んでそれを阻止した。腕も艀装の手甲に包まれて爪先まで尖っていたが、お構いなしにそれを掴む。

本体は無傷のまま、ここまで痛めつければ多少は冷静になってくれるだろう。匂いは未だに負の感情に塗り潰されており、最初から最後までその匂いは変わることはなかったが、多少は反応を示してくれると信じて。

「話を聞いてくれるかしら」

まだ怒りと憎しみに囚われたままの空母棲姫に加賀が接近。既に発艦された艦載機は全て巻雲が墜としており、新たに発艦することも今は無かったため、加賀は弓を下ろして空母棲姫の間近へ。

それに対して、空母棲姫は忌々しそうに睨み付ける。この中で最も憎しみを向ける相手であると認識しているようだった。

「……イマイマシイカムスメ……」

「貴女には私が忌々しいかもしれないわね……私だけが生き残ったんだもの」

触れられるほどに近付き、見据える。憎しみを向けられても、加賀は凜とした表情で空母棲姫と向き合った。

「貴女達の怒りも憎しみも、私は理解をしているつもりよ。その中でも、貴女の憎しみが一番深かったのね……赤城さん」

本来ではあり得ない名前が呼ばれ、空母棲姫がビクンと震えた。

深海棲艦に名前などない。人間達が勝手に付けただけの呼称のみだ。シグは特別ではあるが、あくまでもそれは私達の中での取り決め。最初から持つものでは無かった。そのため、名前を呼ばれても反応などしないはず。

それが、この空母棲姫には何か感じるものがあつたようである。少なくとも、それは嬉しいものではないようだが。

「貴女は温厚な人だったけれど、一航戦の誇りを穢され、仲間を奪われ、それほどまでに強い恨みと憎しみを持ってしまったのね。それだけじゃない……皆の憎しみを一手に引き受けてしまっている」

ツラツラと話す加賀の言葉が気に入らないのだろう。漂う負の感情の匂いが、より強くなっていく。加賀を食い殺さんとするほどに形相を浮かべ、言葉を聞きたくなさそうに歯を食いしぼる。

「赤城さん……もう、やめてちょうだい」

「……ナニヲイツテイル」

「貴女達の恨みは私達が晴らします。忌々しいあの五航戦は、私達が討ち倒します。だから……人間の敵は終わりにしましょう」

そつと手を伸ばし、空母棲姫の頬を撫でた。そして、装備の胸当てを外した後に頭を抱きしめた。温もりを与えるように、負の感情を振り払わせるように、気持ちを伝えるために、ただただ抱きしめた。

「若葉」

「いいのか?」

「ええ」

加賀に言われ、空母棲姫の拘束を解く。そのまま逃げられる可能性だってある。振り払われ、さらに攻撃される可能性もある。だが、加賀はそんなことお構い無しだった。

「私にこんなことを言う資格があるかはわからないけれど……私達と共に生きませんか」

「……」

「私はまた、貴女と共に歩きたい。ただそれだけなの。ダメかしら……赤城さん」

空母棲姫は無言。だが、加賀の抱擁に抵抗は見せていない。

「……カガ……サン……」

「赤城さん、記憶が……」

空母棲姫が加賀の名を知るわけがない。深海棲艦へと墮ちたことで記憶など全て負の感情に塗り潰されて消滅しているはずだ。

だが、敢えてその名を呼んだ。まるで一航戦赤城としての記憶を取り戻したかのようなだった。抱擁で表情は窺い知れないが、負の感情は薄れてきている。これは加賀の思いが届こうとしているのかもしれない。

「ワタシハ……ワタシハ……」

「赤城さん、気をしっかり持って」

「ワタシハ……」

抱擁を返すように加賀の背中に手を回した。加賀はより強く抱きしめる。誇りを取り戻させるため、失われた記憶を呼び起こすために、奇跡に継り付いた。

だが、薄れかけていた負の感情が、突如膨らんだ。

「ワタシハ……ナニモカモヲユルサナイ」

回した手が、加賀の背中を貫いていた。

奇跡の具現化

「ワタシハ……ナニモカモヲユルサナイ」

空母棲姫が回した手が、加賀の背中を貫いていた。

加賀の呼びかけにより負の感情が薄れつつあり、空母隊に属していた加賀の相棒、赤城の記憶を取り戻したかのように見えたが、加賀との抱擁中に突如負の感情が膨れ上がり、今に至る。

鋭利な爪が背中から体内に食い込んだことで肺を傷付けられたか、加賀の口から血が垂れ始めた。位置的に心臓に傷はついていなさうではあるが、肺をやられたということは最終的に呼吸に問題が出かねない。

本来は心臓を狙ったのだろうが、未だ監視役として加賀の肩に乗ったままだった浮き輪が、その攻撃を若干ズラしてくれたようだ。そのおかげで致命傷を回避することは出来ている。

「加賀!?!」

「来なくていい!」

だが、早く治療しなくては命に関わるのは間違いない。すぐに引き剥がそうとしたが、加賀に制止され動けなくなってしまった。

こんな目に遭っていても、加賀は空母棲姫の中にある赤城を信じて抱擁をやめなかった。私達の助けを断り、空母棲姫に思いを伝え続ける。

「……貴女の……貴女達の憎しみはわかるわ……私もあの場で息絶えていたら……同じようになっただけのことでしょうから……ゲホッ!」
咳き込んだことで軽く血を吐いてしまい、抱き締めている空母棲姫の肩に飛び散った。顔にも僅かにかかり、不機嫌そうに顔を顰める。

「ハナレロ……!」

「赤城さん……貴女はそうあつてはいけない人でしょう……!」

背中に突き刺さる爪を抉り、痛みで引き剥がそうとしたが、加賀は全く動く気配がない。空母棲姫の手も、浮き輪が必要以上に押さえ付けているため、加賀へのダメージが若干ながら軽減されている。

「全てに憎しみを向けてどうするの……!」

加賀自身も空母棲姫の腕を掴んだ。もう持っていた弓も投げ捨てていた。

肺に穴が空いているというのに、艀装半壊とはいえフルスペックの姫級を、腕力だけで絞めあげている。浮き輪の手伝いもあり、背中に突き刺さった爪を抜いた。

引き抜いた瞬間、力んでいたこともあり激しく血が流れる。このままでは出血多量で危険。

「貴女らしくないわよ……貴女はそんな人じゃない……!」

まだ数日しか付き合いが無いものの、あんな形相の加賀を見るのは初めてだった。本来の戦い方では無い。相当無理をしているのは誰が見ても明らかだった。痛みを堪え、苦痛に歪むが、それ以上に心が痛そうであった。

「ツア……オマエガワタシノナニヲシツテイル……! オマエハイツタイナンナンダ……!?!」

先程名前を呼んだにもかかわらず、再び記憶の混濁。そもそも空母棲姫が持っている記憶自体が赤城の記憶かは定かでは無いが、一度でも加賀の名を呼んだのだから、あの空母棲姫が赤城の間違った生まれ変わりであることを期待したい。

怨念の持ち主の記憶を持ち合わせている姫というのはおそらく前例の無いもの。特殊な海域で生まれてしまった例イレギュラー外だからこそその異常事態。これがイロハ級ならまだしも、姫であったせいで記憶が残っているのだろう。それが今はありがたかった。

「思い出して……貴女は……一航戦、赤城よ!」

「シラナイ! ワタシハ、ワタシハ……ナンダ。ワタシハイツタイ」

加賀の必死の訴えに、空母棲姫も混乱してきている。怒りと憎しみに塗り潰された感情が、加賀からの本人には訳の分からない言葉により思考が乱されている。

「ワタシハ、ワタシハ……アアアアア!」

腕を掴む手を振り払い、手甲に包まれた腕で加賀の顔面を殴り付ける。素手で殴るより当然痛々しいことになっており、加賀はその一撃で鼻血を噴き出すことになった。鼻の骨も折れているかもしれない。

その衝撃で加賀が引き剥がされてしまったが、仰反るだけで間合いは詰めたままだ。加賀の形相は、痛みに耐えるものから、怒りを含むものへと変わっていく。

「つぐ……この……分からず屋！」

お返しと言わんばかりに空母棲姫の顔面を殴った。同時に背中から血がジワリと流れ出すがお構いなしに胸倉を掴み、さらに殴る。背中の血は、浮き輪がなんとか止血しようと奮闘していた。

「コノ……！」

「目を覚ましなさい！ 一航戦赤城！」

すぐに胸倉を掴んでいた腕を払い、空母棲姫からの反撃。逆に加賀の胸倉を掴み、手甲に包まれた拳で殴る。加賀はそれを止めるために即座に腕を振り払い、また殴り合いに興じた。もうただの喧嘩だった。

素の状態でもあまり感情を外に出そうとしない加賀が、感情を際限なく表に出しての大喧嘩を興じている。既に死と隣り合わせの状況だというのに、空母として戦うよりも激しく、空母とは思えないほど強引に。

慣れないことをしているせいで、殴れば殴るほど加賀の身体は傷だらけになっていく。空母棲姫もこんな戦いなんて想定していないはずなので、ボロボロになっていく。

「お、おい、止めなくて大丈夫かよ」

「邪魔出来ませんよこんなの……」

朝霜ですら心配そうに見守る状態。だが、来るなど言われてしまったせいで足が前に進まない。まず間違はなく止めなくてはいけない状況なのに、私達は一步も前に出ることが出来ず、加賀と空母棲姫の喧嘩の結末を見ているしかなかった。

加賀の言うことなんて無視して空母棲姫を叩くべきなのだろう。加賀の身体も早急に治療しなければ。なのに、誰も動けない。

「なんで加賀は……楽しそうな匂いを漂わせてるんだ」

これがあるから私は動けなかった。加賀はあれだけの形相で喧嘩をしているというのに、負の感情の匂いが何処にもないのだ。

今まではあの五航戦への怒りと憎しみが少しだけでも感じられたが、今はそれすらも感じられない。純粹に、空母棲姫との大喧嘩を楽しんでいる。

それに引つ張られているのか、空母棲姫からもまた負の感情が薄れつつあった。殴り合いの喧嘩をしているというのに。

「そんなに聞き分けのない人じゃないでしょうに！」

「シルカ！ オマエハナンナンダ！」

「そんなの決まっているでしょう！」

空母棲姫の拳を紙一重で躲し、渾身の一撃を顔面に叩き込んだ。

「私は貴女の相棒よ……」

その一撃で力を使い果たしたのか、加賀も前のめりで倒れてしまった。血の流しすぎだ。

「……赤城さん……もういいでしょう……いや、赤城さんだけじゃないわね……他の空母隊の子の憎しみも……一身に背負って歪んでしまったのね……」

空母棲姫に縫り付くように身体を支える。さつきまでなら殴っていただろう空母棲姫が、最後の一撃を受けて茫然としていた。

加賀の気持ちの入った拳が、空母棲姫の頭を揺さぶっていた。何か繋がったかのような錯覚。空母棲姫の表情が、今までとは違うものに変化していた。

「カガ……サン……」

「赤城さん……一緒に……生きましょう」

衝撃と加賀の強い思いにより、再び空母棲姫に記憶が蘇ったようだった。加賀を見て、その存在を理解している。今の空母棲姫は赤城だ。

「ワタシハ……アナタノ……アイボウ……」

「そうよ……貴女は……私の……」

縫り付く加賀が、力尽きたように崩れ落ちた。

もう何処もかしこも酷い有様だった。鼻血を何度も嘔き、結んでいた髪もほつれ、服もボロボロ。腕はボロボロどころかズタズタ。そして、空母棲姫に貫かれた背中では、浮き輪が必死に止血したおかげで最

低限の応急処置はされていた。いつそれがダメになってもおかしくはないのだが、やってくれたことは感謝。

「……ドコニツレテイケバ」

その加賀を抱き上げ、一番近かった私に聞いてきた。

「ついてきてくれ。医者がいる」

「……」

無言で私達についてきてくれた。まだ感情の整理がついていないようだったが、今は攻撃の意思は無くなっていた。

加賀の治療はすぐに執り行われた。血塗れになるほどの大喧嘩ではあったが、最も重傷であった背中の抉られた傷と折れた鼻の骨には高速修復材を使用。それでも手術は必要であり、肺の中に溜まってしまった血だけは抜いた。

加賀は昼前には目を覚ますことになった。身体は全身包帯で巻かれていたが、要所は修復材を使い、それ以外にも正確な治療を施されたおかげで、数日もあれば完治というところに。私達駆逐艦よりもやはり頑丈である。

しかし、目が覚めた加賀に待っていたのは、飛鳥医師からの説教だった。

「この馬鹿！ 救うために自分が死んだら意味が無いだろうが！ 説得は実力行使という意味じゃないんだぞ！」

結果的に命は助かり、空母棲姫から攻撃の意思は無くなったものの、それで加賀が命を落としては意味がない。

「ごめんなさい。カツとなりました」

「反省しろ！ まったく、治療が行き届いたからよかったものを……」

「とこころで赤城さんは」
反省しているようには全く見えないが、空母棲姫のことも気になるだろう。あれだけの激戦を繰り広げた相棒の行方を早く確認したいようだ。

「うちの確認組が調べた。空母棲姫、入ってきてくれて構わないぞ」

加賀が寝かされている医務室に、空母棲姫が入ってきた。

両腕に装備された手甲や、脚に装備された脚部艤装は一時的に解除し、ボロボロになった服も洗濯中。今は加賀と同じ検査着姿である。怪我自体は加賀よりも軽く、今でこそ包帯を巻いているが明日には取れるとのこと。

「加賀さん……」

「声も同じなのね……」

声の方は検査の時にシロの調整でこちら側へ寄せてもらっている。それにより、より赤城に近いものになっているらしい。

「細かいことは今は省くが、君との大喧嘩で負の感情が晴れたそう。いつ取り戻してもおかしくない危険な状態ではあるが、今は君とまともに話せるくらいには落ち着いている」

私の嗅覚による見解では、負の感情は最初より大分薄れたと思う。検査中も大人しくしてくれてくれた。シロも私と同じ見解。あくまでも今は大丈夫という判断ではあるが。

姉の見解では、もののけとして数体の深海棲艦が取り憑いているとのこと。それが一度撤退して捕食した仲間達であることは間違いない。怒りと憎しみをその身体に全て集めてしまったのは疑いのような事実である。

そのもののけは、戦闘中は怒り狂っていたらしい。だが、今では空母棲姫と同様に鎮静化しているそう。加賀の思いが通じたと見てもいいだろう。

「詳細はこちらでも調べるが、少なくとも空母棲姫も監視下に置かせてもらう」

2体目の浮き輪が空母棲姫の肩に乗っていた。今はアニマルセラピーが必要なものもないため、3体のうちの2体が監視業務に当たっていても問題ないようだ。2体の浮き輪が顔を合わせると、サムズアップで挨拶していた。

「今でこそ赤城の人格を取り戻しているけど、またおかしくなってもおかしくないの。こんな例外的な深海棲艦はいないと聞いているわ」

戦闘中とは打って変わって穏やかな性格の空母棲姫。本来なら有り得ない、どんな深海棲艦にも起こり得ない奇跡が起きている。

「そうなったときは、加賀さん、貴女の手で私を沈めてね」

「……出来るわけないでしょう」

「でも一度私の胸を射抜いたわよね。それにちよつと楽しそうに人のこと殴ってきたんですから。そんな加賀さんなら出来るわ」

「あ、あれは……赤城さんと本気の喧嘩なんてしてなかったから……気分が昂揚してただけで……」

動揺する加賀に対し、朗らかな笑みを浮かべた空母棲姫。

戦闘中に加賀が言っていた意味がわかった気がする。赤城はあんな憎しみに潰されて力の限りの破壊を尽くすような性格ではない。温厚で、少し茶目つ気がある、優しいお姉さん。あの時は何人分もの怒りと恨みを取り込み、自らの憎しみも加わり、それに理性を焼き尽くされ暴走していたようなものだ。

「貴女の言葉にちゃんと返答していませんでした。私は貴女と一緒に生きます。また相棒として、一緒に歩いてもいいかしら」

「……ええ、ええ！ 赤城さん……一緒に……歩きましょう」

今度は空母棲姫からの抱擁。それをされて、加賀は人目も憚らずに泣き出してしまった。今まで押し隠していた感情が爆発したようにワンワン泣いてしまっている。空母棲姫はただただそれを受け入れ、穏やかな笑みで背中を撫でるだけだった。

「今は2人とも休んでくれ。身体の傷に障る。それと空母棲姫」

「赤城と呼んでいただいて結構です。少なくとも今はその人格と記憶がありますので」

姿形は違っても、それはもう赤城ということになった。空母棲姫という呼称は敵への呼称だ。今の空母棲姫⇨赤城は、もう敵じゃない。そのように呼ぶのは間違っている。シグと同じだ。

「赤城、さっきも言ったが、君はしばらく監視下に置かせてもらう。そろそろ大本営の遣いも来るだろうし、説明がしたい」

「わかりました。私の今までやってきたことは、何も変わりませんか。しばらくお世話になります」

こうして、空母棲姫との戦いは最良の結果に終わった。再びあの場所から深海棲艦が生まれるかは定かではないが、その怨念を赤城が一

身に受けたというのなら、しばらくは生まれることはないだろう。

赤城の本質

中立区で生まれてしまった例外中の例外である空母棲姫が、加賀との戦いによって赤城としての記憶を取り戻し、施設の一員として仲間に加わった。一から十まで深海棲艦であり、人格と記憶を持っているだけなので、監視下に置かれることにもなっている。加賀とある意味お揃いで、肩に浮き輪を乗せた状態に。

実際、加賀はシグの助言により疑う必要は無くなっている。アニメルセラピーも不要であるため、加賀の監視はもう要らないのだが、加賀本人が浮き輪のことを割と気に入っていたりするので、現状そのまま。加賀付の浮き輪は、赤城の監視も同時に行なうことにもなる。

昼食の時間に赤城のお披露目。未だに検査着ではあるものの、戦場での空母棲姫を知る者と知らない者で反応は様々。

「艦装も修理しておく。明日中には戦えるようにしておくぜ」

「まあ、この摩耶さんは工作艦も兼任しているの？ 私みたいなものを受け入れるなんて変わったところだとは思っていたけれど、艦娘も変わっているのね」

戦っていた頃とは雲泥の差。あの激しい怒りと憎しみに理性を失っていた空母棲姫が、おっとりした優しいお姉さんに変貌しており、表情もあの時とはまるで違う。最初の戦闘に参加していた曙は、その姿を見て少し引き気味。

「……あれ、ホントに同一人物なの？」

「ああ、紛れもなく空母棲姫だ」

疑うのも無理はない。友好的な深海棲艦というのは、これまでに何度も見てきたというか一緒に暮らしているわけだが、艦娘の記憶を持った深海棲艦など前例が無い。

全ては加賀の思いの力が強かったおかげだ。一航戦の絆というものは、姉妹よりも強いのかも知れない。

「赤城さんって、ご飯をいっぱい食べる人らしくてちよつと心配だわ。私達で手が回るかしら」

雷は別の心配。同じ正規空母である加賀の燃費の悪さは一目瞭然

なのだが、深海棲艦の空母となるとどうなるのだろう。セスは軽空母だからか人並み、リコは空母では無いが陸上施設だからか少し多め。赤城がそれ以上に食べる人だと、雷とその手伝いをする暁と呂500だけでは台所が回らなくなるかもしれない。

「当人にやらせりやいいのよ。摘み食いなんてしたらアンタが叱つてやんなさい」

「そうね、それもいいかも」

そうやって共存していくのがいいと雷も笑顔である。

実際食べてみたら、案の定というか赤城は加賀以上に食べた。朝の戦闘もあつてか、そちら方面もしっかり消耗していた様子。

やはり雷の負担が大きくなるようなので、家事の辺りはいろいろと見直すことになったのは言うまでもない。

昼過ぎ、大本営からの遣いがやってくることになる。とはいえ今回の一件は既に解決したようなもの。今後も発生する可能性はあるが、目先の危機は乗り越えている。

それを事前に伝えようとしたものの、既に移動中だったため、この場で赤城を見てもらうことで解決したことを伝えることになる。出来れば遣いが知っている者だといいいのだが。

「久しぶりですね、飛鳥」

「先生、身体は大丈夫なんですか？」

「ええ、大分良くなりました。外傷が多かっただけで、片脚にヒビが入ったくらいですよ」

「重傷じゃないですか！」

大本営からの遣いは、この施設のことを一番知っているであろう下呂大将。その後ろに新提督の姿も見える。もうこの施設の管轄となつているようだ。

下呂大将は先日の大淀拠点襲撃の際に怪我を負っていると聞いていたが、今も松葉杖が欠かせないようだ。隣には常に神風が付き従っているほど。

「ジツとしていられない人なの」

「わかつてる。僕も付き合いが長いから、もう諦めた」

「でも神風姉は司令官の面倒見るの嫌いじゃないって言ってたわよね」

「朝風、余計なこと言わなくていいから」

今回は緊急事態ということで、第一水雷戦隊で駆け付けてくれた。新提督の瑞鳳も勿論一緒に来ており、外部のものとしては信用のおける艦娘達である。

だが、残念ながら出番はもう無い。私達だけでどうにか出来た。それを伝えると、安心したような、それでいて残念なような、少し複雑な表情を浮かべた。

「ま、まあ、久しぶりの息抜きということだ」

「最近休暇が無かったようなものだからね。いい機会じゃないか」

引き攣った声の阿武隈を他所に、久々の休みということでも明るい松風。他の者も、こんな辺境の地ではあるが急な休暇ということでも少し喜んでいようだった。

「並の鎮守府より戦力が整っているなココは」

「成り行きとはいえ、こんなことになるとは夢にも思っていませんでした。今の事件が終わったら、何らかの処遇は考えるつもりです」

本当である。私が漂着したときは3人しかいなかった艦娘が、あれよあれよともう桁違い。しかも1人1人が練度も高いというおまけつき。新人提督の鎮守府よりは確実に力を持つ施設となってしまった。

今回の件が終われば、ここから離れるものもあるだろう。特に、見た目に殆ど影響が無い九二駆の面々や大きな治療をしていない救出組は、別の鎮守府に再配属の可能性は高い。私はここから離れないつもりだ。あまりに外見に出過ぎていいるし。

「先生、夜戦出来る加賀さんって何処！ 見たくて見たくて仕方ないんだけど！」

「瑞鳳、落ち着いてくれ」

瑞鳳は相変わらずのようでも何より。加賀もそうだが、赤城を見た時どんな反応をするのだろうか。

「立ち話もあれですので、中へ。先生のお身体に障りますから」

「すみませんね。長話にもなりそうなので、お邪魔させてもらいます。すみませんが、今日は泊めてもらえますか。うちの水雷戦隊に夜間警備を任せますので」

元より泊まりのつもりだったようだ。確かに最後に来たのは巻雲と朝霜を救出して事情聴取した時。そこからそれなりに時間が経っている。話すことも大分溜まっていた。怪我人である下呂大将の身体のことも考えると、話し合いの後にここで休んで行ってもらったほうが良いと思う。

長くなりそうなのはわかっているので、話し合いは談話室で。話し合いの参加者は人間3人に加え、秘書艦2人と私、若葉。そこに、話を聴く必要がある者に入ってきてもらう形。事情聴取も兼ねている。

他の者は自由にしてもらうことになった。瑞鳳はどうしても加賀の艦載機が見たいようだったが、我慢してもらおう。後から時間はあるのだから、今は秘書艦としての業務を頑張ってもらいたい。

「では、君は元々鎮守府に属していたと」

「ええ、提督の管理の下、研鑽を重ねていたわ。空母隊の皆と共に」

最初の事情聴取相手は加賀。救出された人形ということで、大淀の拠点について知っていることがあるはずと、一番最初に話を聴くことになった。

加賀は大淀に建造された艦娘ではなく、別の鎮守府に属していた艦娘だったそうだ。加賀の上司は手瀬テセという提督であり、出来る人だったらしい。

あの人形の空母隊は、その時からの仲間。あの赤城にあれほどの執着を見せたのも、その頃から相棒と信頼していたかつての仲間だったからのようだ。

「大淀は私達の鎮守府を襲撃し、提督を殺した。私達を人形に改造して、今に至るわ」

「……なるほど、彼の名は私も知っています。中堅でしたが、なかなかいい戦術を立てる名将でした」

その襲撃を主に仕掛けてきたのが、あの五航戦。空襲で鎮守府を攻撃し、出てきたものを残りの完成品、伊勢と日向が処理していったという。

加賀も伊勢にやられたらしく、殺されなかった代わりに空母隊がまとめて五航戦の配下に改造されたとのこと。加賀は第一改装はどうにされており、ドックを使つての改装は出来ないはずなのだが、大淀はそれをやつてのけた。第二改装ではなく、まさに改造である。

「ならば、大淀の今の拠点は、手瀬の鎮守府ということで間違いないだろうか」

「ええ。でも、妖精を使つて改築していたわ。今でも手を加えているかもしれない」

「場所がわかつただけでも大きな収穫ですよ。最近怪我のせいで調査が出来ていませんでしたから、いい情報をくれましたね」

大淀の居場所はこれで確定した。手瀬提督の鎮守府はここからそれなりに離れているらしいが、わざわざここに襲撃してくるくらいなのだから、私達でも行けないわけではない場所だ。いざとなればこちらから打つて出ることも出来る。

「赤城さんも同じことを証言してくれるはずよ。来てもらいましょうか」

「赤城……？ 我々が飛鳥医師から連絡を貰つた時、加賀を救出したとしか聞いていないんだが」

「それがですね……」

飛鳥医師が赤城のことを説明しようとしたとき、加賀が既に赤城を呼び出した後だった。ここからは赤城にも事情聴取することになるのだが、その姿を見て一同驚愕。

「加賀さんに呼ばれて来ましたが、何か御用ですか？」

「く、空母棲姫!?! いや、ここには温厚な深海棲艦がいることは知っているが……」

「はい、空母棲姫、改め赤城です。いろいろとありまして、今はこの身体で失礼しますね」

やはり穏やかな雰囲気は崩さない。加賀の隣に座り、何を話せばい

いのかとソワソワしながら加賀に話を聞いている。

「この赤城が、連絡したここで生まれてしまった姫です。戦いの最中に艦娘であった記憶を取り戻して今に至ります」

「艦娘の記憶を残す深海棲艦……!?!」

新提督は驚きを一切隠さなかった。事あるごとに大きな声をあげる。下呂大将もさすがにそんな空母棲姫の登場は予想していなかったようであった。

「前例のないことを簡単に引き起こしましたね」

「狙っているわけでは無いんですが」

そんな話をしている間に、赤城は加賀から今の話の流れを聞き終えた。加賀と同じ鎮守府に属していた艦娘だったとしたら、その鎮守府が襲撃された一部始終を覚えているだろう。嫌なことを思い出させるように申し訳ないが、今は少しでも情報が欲しい。

「ああ、手瀬提督のことでしたか。とても良くしてくれましたが、私達の目の前で殺されてしまったんです。それは覚えていますよ」

「私と赤城さんは一緒に行動していましたから……」

「それもあって、私は五航戦のあの子達を殺さなくてはいけません」

笑顔を崩さずに言っただけだ。殺意に躊躇が一切無い。赤城のその言葉を聞き、加賀も少し顔を顰めた。

仲間と認められた私達には優しいお姉さんでも、敵と認識したものには空母棲姫なのだろう。陰と陽を併せ持った存在として、何処か歪んでいた。殺意に抵抗がない。

「人間を殺すような艦娘は、深海棲艦よりタチが悪いです。本能のままの殺戮と、知恵を持った殺戮、どちらが悪なのでしょう」

「返す言葉もありませんね」

「意地悪な質問でしたね。すみません」

顔は笑っていても、目が笑っていない。なのに、赤城からは負の感情が感じられない。なんの疑念もなく、本心からこの言葉が出ている。それが一番怖い。負の感情が無くても、敵意というものは持てるものかと。

それを引き裂くように声を出したのは、何処かうキウキしている瑞

鳳だった。何となく理由がわかった。

「あ、赤城さん、赤城さん」

「はい、何ですか瑞鳳さん」

「空母棲姫って、すごくカッコいい艦載機の発艦するんだけど、それ、見せてもらっていい!?!」

こんな時でも瑞鳳は瑞鳳。緊迫したこの話し合いの場を柔らかくしてくれる。赤城も本能からの殺意が薄れ、大笑いしてしまった。

「あつはははっ、見せたいのは山々なんです、今は艀装を修理中なの。ごめんなさいね」

「ちえー、残念」

「間に合えば見せてあげますよ。こう、クルクルってやると出せるんですよ」

「そう、それ！ 何もないとところからポンツ出てくるヤツ！」

張り詰めた糸が切れるようだった。

「瑞鳳……」

「いいじゃないですか。少し緊張感の高い話でしたからね。いい弛緩剤となりましたよ。その底抜けの明るさは評価に値します」

「TPOというものがあるだろう……」

自分の秘書艦の暴走じみた趣味の会話に、呆れ顔の新提督。だが、そのおかげで赤城も気が緩んだようだった。負の感情は無くとも、警戒くらいはしている。それが今の瑞鳳で緩和されたようだ。

コホンと咳払いをして、下呂大將が話を戻す。

「加賀と赤城から得られた情報はとても重要なものです。手瀬の鎮守府についてはこちらで調べておきますね」

「私も大本営としてそこは調査させてもらう。こちらには壊滅したという情報も来ていないからな」

またしても大淀は本来の鎮守府の運営を隠蔽しているらしい。だが、加賀と赤城からその所在を知ることが出来たのだから、事を起こすことが出来るだろう。

あちらも加賀が治療されてこちら側に来ていることは把握しているだろうが、やらないよりはマシだ。

「襲撃の際は是非呼んでください」

「ええ、君達にはその権利がありますし、戦力が増えるのは私達としても嬉しいことです。ただし、命を賭してなどとは考えないでくださいね」

「保証出来ませんが、覚えておきます」

最後まで笑顔を崩さず、赤城は加賀と退室。協力してくれる気持ちはあるようで何よりである。

たったこれだけでも、赤城の本質がわかったような気がした。人格と記憶を持ち合わせていても、やはりそういうところは怒りと憎しみから生まれた深海棲艦の要素を持っている。

仲間であるうちは心強いが、何かがズレてしまわない事を祈ろう。

姉妹愛

中立区で生まれてしまった姫の件で、大本営からの遣いとして下呂大将と新提督が来てくれた。実際は既に終わったことなので、援軍にはちよつとした休暇扱いとなり、違う理由での話し合いの場となった。今の事件の解決に向けての情報共有は必要である。

特に下呂大将は、いつも恐ろしいほどの情報を持ち合わせているが、今は怪我を負っているためにそれが出来ていない。そのために、この施設が持っている情報は是が非でも欲しかったようである。「すみません、まだ脚に慣れていなくて」

次の事情聴取の相手は鳥海。元完成品の1人。治療の甲斐あって、動かなくなっていた脚は回復したが、自分の脚では無いのでまともに歩くためのリハビリを繰り返している。この短時間で大分良くなってきたているが、まだ少し安定していかないらしく、今も摩耶が支えるために隣にいる状態。

「鳥海は完成させられた後遺症で脚が動かなくなっちゃった。だから、センセが切り落として別のモンくっ付けてくれたんだ。おかげでここまで回復した」

「3人目でしたので、無茶な施術をすることなく治療出来ました」
充分無茶な処置である。下呂大将はともかく、声を上げていた新提督はついに言葉を失った。

本来なら入渠すれば治せる、もしくは入渠しても治せないような傷を、飛鳥医師はその助けなく治療してしまう。鳥海の場合は後者だったが、深海のパーツを使った継ぎ接ぎとはいえ、五体満足にしているのは完全に規格外。

「私が呼び出されたということとは、あちらの戦力のことを話せばいいのですね」

「ええ、わかることだけで結構ですの」
「了解しました。覚えておくことは全てお話しします。とはいえ、私
が知ることはかなり限りがあります。大分少ないと思います」

鳥海の記憶障害は場所に関することだけだ。大淀の拠点が何処か

は思い出せないが、やってきたことはすっかり覚えている。そして、拠点については加賀が供述してくれているため、情報としては揃っている状態。

「私がここに襲撃するときには完成させられていたのは、伊勢さん、日向さん、翔鶴さん、瑞鶴さんの4人です。他者の鎮守府を奪い、拠点としたときも同じでした」

「それ以上増えている可能性は」

「あります。襲撃した鎮守府の艦娘を素材に言うていたので。その時は姫も数人残っていましたから、それを完成させると」

これ以上増えるのも困ってしまう。とはいえ、この話を聞いて下呂大将はピンと来ることがあったようだ。

「なら、練度1から手塩にかけて育てた艦娘しか、姫にも完成品にも出れないと見てもよさそうですね。成長過程で、何か仕込まなくてはいけないのかもしれませんが」

「何かとは？」

「妥当なのは深海の因子とかでしょうか。人形の段階で体液を注入されて慣らされているわけですし」

他人を完成させる素振りを見せなかったところから、下呂大将は完成品は姫からしか作れないと仮説を立てた。そしてその姫は、大淀が自ら育て上げた艦娘にしか施せない。私が夢の中でシグと話した暗示の件もそれに該当しそうだ。

そういう意味では、最悪なことに私や三日月にも姫や完成品に改造が可能であるということ。深海の因子が必要だというのなら、練度1から今までずっと付き合ってきているものがある。故に、捕まったらアウト。

「五航戦はどんなものかはわかっていましたね。残っている伊勢と日向はどのように改造されていますか？」

「翔鶴さんや瑞鶴さんと同じようなものですが、万能兵装です。戦艦の主砲と空母の艦載機、それと近距離は刀があります」

刀と聞いて神風がピクリと反応。自分と同じ手段を持つものに、対抗意識を持ったようである。

「主砲と艦載機は元より持っている性能だ。刀も使わずとも持っているはずだが、それを伸ばされたと思えばいいか」

「はい。何もかもを極限にまで。艦載機は深海のものですし、主砲の威力も段違いです。刀は……一刀で艦娘を艤装ごと真つ二つにする程度には」

それがわかっただけでも、ある程度は対策が取れるだろう。初見でやられたらまず間違いなく一撃の下に殺されていただろうが、わかっているのなら回避の方法が考えられる。

「あとはすみません、私が先生に治療されることを恐れていたのか、あまり情報開示されていません。ただ……」

「ただ？」

「飛鳥先生は早いところ始末したいと呟いているのは聞いたことがあります」

そう考えるのも無理はないだろう。入渠ドックも無いような鎮守府ではない施設がこうも抵抗出来るのは、飛鳥医師の神業のおかげだ。

重傷を負っても治療され、少量の修復材でも完治し、侵食や後遺症すらも治療し、さらなる力に変えてしまう。こちらが大淀の悪魔のような改造を恐れているように、あちらは飛鳥医師の神業を恐れているわけだ。

「飛鳥、君は護衛を付けなさい。ここからは確実に狙われます。今まではこの建屋ごとでしたが、君自身をピンポイントで狙ってくる可能性も充分にありますよ」

「夜間警備だけでは足りないな。ソナーに引つかからない潜水艦に艦娘が狙撃されたと先生から聞いている。今までそれが来なかったことの方が不思議だ」

下呂大将も新提督も声を揃え、飛鳥医師の安全の確保を最優先にする事を望む。飛鳥医師が倒れたら終わりであることは誰もが理解していることだ。

付かず離れずの護衛がいれば完璧なのだが、そういったことに慣れているものなんて当然いない。それに室内で戦うことも視野に入れ

ると、小回りの利いた戦いが出来るものに限られてくるだろう。

「でしたら、私が先生の護衛をやらせていただきます。脚さえどうにか出来れば、この中では一番施設の中で戦いやすいと思いますので」
そこで護衛は鳥海が買って出た。この施設に滞在している艦娘の中で、施設内戦闘が可能なほど小回りが利くのは、近接戦闘を行なう私と朝霜、そして鳥海だ。その中でも、鳥海は防御力に特化しているため、万が一狙撃という手段に出られても、それを全て食い止めることが出来る。それに、私も朝霜もスピードタイプ。施設の狭い空間では、本領発揮しづらい。

護衛役としては最も適した人材かもしれない。脚の怪我さえどうにかなれば即戦力である救出組なのも大きい。実戦経験は残酷ながら私達よりも積んでいる可能性がある。

「鳥海になら安心して任せられるな。こいつの硬さは折り紙付きだぜ」

摩耶も太鼓判。巻雲と同時に放たれた両用砲の乱射を、無傷で耐え切ったあの耐久力は、敵ならば恐ろしいが味方なら頼もしい。

私も鳥海が護衛なら安心して任せられる。治療のおかげで不信感はない。突然暴走するようなことがないことは、シグのお墨付きも得られている。

「なら……頼まれてくれるか」

「お任せください。まずはリハビリを終わらせなくてはいいけませんからね」

脚を撫でる。本来の鳥海の脚とはまるで違う白い肌の両脚は、傷痕の位置まで摩耶とお揃いの深海の脚。摩耶がネ級に対し、鳥海はヲ級。艦種は違えど、しっかりと接合され、傷痕を隠せば違和感が無くなるほど。

摩耶も隠す事を勧めたらしいが、摩耶が隠していないなら自分もと、元々の服装から変えることはしなかった。割と丈が短いため、普段通りにしていてもその傷痕は目立っているのだが、本人がそれでいいと言うのなら無理して変えさせるわけにもいかない。

「もう少しで普通に歩けそうなんです」

「いや、マジで早えよ鳥海。アタシン時や1週間はかかったぜ」

「経験者がサポートしてくれているからよ。摩耶がいなかったら私、そもそも歩くことを諦めていたもの」

なかなかいい雰囲気の姉妹である。先に同じことをしている者がいるというのは、それだけでも心強い。元々の真面目さもあり、勤勉にリハビリに励んでいるおかげで、ここまで回復している。

「ありがとうございます鳥海。参考になりました。場所と敵戦力がわかったことで、襲撃の段取りが組みやすくなりました」

「私もあちら側だった者なので、せめてもの罪滅ぼしをしたいなど。お役に立てたのなら光栄です」

少し悲しそうな笑みを浮かべ、席を立つ。これからのこともあるため、今からもしリハビリに精を出すようだ。飛鳥医師の守護者として、すぐにでも活動したいと躍起になっていた。

ここからは人間だけでの作戦会議ということで、以前と同様機密に関わる部分が出そうなため、摩耶と鳥海と共に私達も退出。どうせ泊まらせてもらうのだからと、やれることは全部やっておきたいのとこと。今回も神風が部屋の前で門番をする。下呂大將が怪我人故に、すぐに支えになれるように配慮もしているようだ。

フリーとなった瞬間、瑞鳳はそれはもうテンション高くスキップすらしながら工廠へ向かった。赤城と加賀に艦載機を見せてもらうのだろう。この緩さでさつきは少し助かった。

「ホント、アイツはなんつーか、すげえな」

「ああ……」

瑞鳳の後ろ姿を見ながら摩耶が苦笑した。すごいというか、呆れるというか。そこまでの情熱を傾けられるのはいいことだとは思うが。

「今からリハビリか？」

「ああ、今からは階段の上り下りだな。鳥海、無理してねえか？」

「大丈夫よ。休み休みやってるし、早くまともに先生を守るようになりたいもの」

壁に手を突きながらの鳥海の歩き方は何処かぎこちないが、最初に

比べれば充分に歩けている。だが、走ったり跳んだりはまだ不可能。それが出来るようになれば、あの時のような超耐久の戦いが可能になる。

艦装の方は、摩耶が鳥海のリハビリを見ながら片手間に修復したそう。あちら側で使っていた時よりも強化までしたらしい。これは身内への鼻屑も若干見える。

「焦らずにやるのが早く出来る一番のコツなのよね」

「おう、イラついたら出来ることも出来なくなるからな」

「摩耶はこういうのイライラしそうね」

「うっせ」

先程もそうだが、本当に仲のいい姉妹だ。元々気さくな摩耶だが、鳥海と一緒にいると笑顔が絶えない。鳥海も沈んだ顔はほとんど見せない。

やはり身内というのはそれだけで心の支えになっている。いつ襲撃を受けるかわからない緊張感が高まる状況でも、こんなにも緊張感がほぐれる。楽しく生きることが出来ているように思える。

「でも、焦りそうになるわ。早くこの施設に貢献したいって思っちゃう」

「気持ちわかるけどな」

「罪滅ぼしもあるけれど、脚を治してくれた飛鳥先生を守るために働きたいもの。そのためにも早く動けるようになりたいわ」

また脚を撫でる。双子の姉とお揃いの傷が、鳥海の心をより強くしている。

「まあ焦らずに行こうな。大丈夫、アタシがずっと側にいるからよ」

「ふふ、頼もしいわね」

ほんの少し、鳥海から姉妹愛とは違う匂いを感じたが、少し判別が付かなかった。悪い匂いでもなく、純然たる好意を摩耶にぶつけているようなものなので心配はいらないだろう。

「じゃあ、頑張ってくれ。応援してる」

「ありがとう、若葉ちゃん」

そう言って、施設の階段の方へ。やる気に満ち溢れた鳥海はとても

頼もしい。味方になってくれて本当によかった。

「……いいな、姉妹」

私にも姉がいるが、あそこまで手取り足取りの仲ではない。淡泊というわけでは無いが、手と手を取り合って一緒に進んでいくということとはあまりしたことが無いように思えた。相部屋でも無いし。

たまには甘えてみてもいいかも知れない。せつかくの姉妹なわけだし、もつと絆を深めるのもいいか。

「はて、どうかしたかの？」

などと考えているところで都合よく姉が現れた。昼の訓練の休憩中らしく、風呂上がりの匂いがする。

「……いや、摩耶と鳥海を見ていて、姉妹というのはいいなと」

「ほほう、ならばわらわに甘えてみるかえ？」

意地が悪い笑みを浮かべて引き寄せられた。子供をあやすように後頭部を撫でられる。私と姉は背丈が似たようなものなので、私が前のめりの体勢に。

「若葉はようやっておる。えらいえらい」

「な、なんだ、気恥ずかしいぞ」

「気にするでない。ほれ、姉妹の戯れじゃよ」

それからしばらく離してくれず、いろいろな者にこの姿を見られてしまった。ちよつと恥ずかしかったが、気持ちは休まった気がする。私もなんだかんだ疲れていたのだろうか。

協力者達

飛鳥医師達の話し合いが終わったのは、夕飯時。準備が終わって、まさにこれから盛り付けをしていこうという段階のことであった。白熱した作戦会議だったようで、3人ともそれなりに疲れた様子であった。

「医療施設でこの人数を養うのは厳しいだろう。これまでの功績もあるのだから、私が大本营で話をしておく」

「すみません、助かります」

新提督が居るおかげで、財務系はトントン拍子で話が進んでくれる。

飛鳥医師の功績は目を見張るものだ。本来なら出来ないことを次々とこなし、事件の解決にも繋がる偉業をいくつも重ねている。蘇生の件は隠し通すとしても、人形や完成品の治療方法の確立だけでも多くの褒賞が出てもおかしくないレベル。

事実、新提督はそこを大きく評価してくれているため、監査の結果も頗る良いらしい。いち医療施設が戦力を保持してしまっている点に関して目を瞑られるほどである。

「むしろ雷に負担がかかりすぎなんだ。食堂の人員は増やせないのか？」

「その辺りは雷がどうにかしたそうです……」

「今回から赤城さんと加賀さんも手伝ってくれるから大丈夫よ！」

久しぶりに大分大人数での食事となったが、いつもの雷達の外に、赤城と加賀がしっかりと手伝っていたらしい。多く食べるのなら、その分手伝えと雷からの訴えを素直に聞いたようである。艦娘である加賀はともかく、深海棲艦である赤城までちゃんと言うことを聞くと、雷恐るべし。

ちなみに腕は普通だったとのこと。不器用では無いが、特段上手というわけでもない、手伝いくらいなら出来るという程度。私、若葉もその辺りに属することになる。まだここに私が入ったばかりの時には多少手伝っていたくらい。

「いい雰囲気施設の施設となりましたね。絶妙なバランスで成り立っています」

「そうですね……正直予想外です」

「これからもよろしく頼みますよ、飛鳥」

これだけ認められているのならありがたい。一時は施設の存続まで不安視したものが、今ではその不安も払拭された。深海棲艦と共存出来ている唯一の場所として、今までとは違う理由での『中立区』となりそうである。

夜、本来私達五三駆がやるはずだった夜間警備を請け負ってくれるということ、第一水雷戦隊を見送るために工廠へ。風呂上りではあるが三日月と共に工廠に入ると、既に5人が艀装を装備して準備万端だった。

神風は下呂大将の怪我を見ておかなくてはいけなかったため、常に傍にいらしい。そのため夜間警備にも不参加。万が一、今晚襲撃を受けるようなことがあつたら、神風がいち早く下呂大将を逃がすことになる。

「すまない、本当は若葉達の仕事なんだが」

「ううん、大丈夫。本来の仕事が無くなっちゃったから、これくらいして帰らないとね」

苦笑する阿武隈。来たところで仕事がないと言われて拍子抜けしてしまったようで、突然出来てしまった休暇を持て余していたようだ。

ここの者達との交流があまり出来ていなかったのもあるので、この機会にしっかりと顔合わせをして、曙の訓練まで手伝ってくれたらしい。曙にはさつき愚痴られた。

「はあ……夜は嫌よ夜は。どうせなら朝にやりたいわ」

「朝風さんは本当に朝が好きですものね」

その名の通り朝の方がいいとボヤク朝風と、それを嗜めるように微笑む春風、言う割にはしっかりと仕事はこなすから心配するなど、春風が目で訴えてきた。やる気があるかはさておき。

「姉貴はいつもこうだから嫌だねえ。夜はさつさと寝ちやって、ババくさっ」

「誰がババくさいですって!？」

突然口喧嘩を始める2人だが、誰も止めようとしないうちに、これは普段でもあることなのだろう。阿武隈は溜息、春風と旗風は微笑みを崩さない。

「騒がしくてすみません。朝姉さんも松姉さんもいつものことなので」

「楽しそうでいいな」

「楽しくない!」

2人同時に絶叫。息もあっているようで何よりである。

「それじゃあ、行こっか。若葉ちゃん、三日月ちゃん、お見送りありがとうね」

「いえ、お仕事を任せるので、せめてこれくらいは」

「ああ、任せた」

夜間警備に向かいながらもまだ朝風と松風は夫婦漫才を繰り返していた。本当に仲がいい様子。

「奴らは行ったか」

「ああ、たった今」

「なら私も仕事を済ませておこう」

それを見送った後に、リコも工廠へ。夜間警備というわけでは無いのだが、寝る前に一回哨戒をしておくようである。軽くなら工廠からでも哨戒機は飛ばせるため、わざわざ外に出る必要もない。

さつと艤装を装備して、ゆっくりだが工廠の真ん中に立ち、哨戒機を飛ばした。数もいつもより少なめの小回り重視。ざつと見て回ったら、あとは阿武隈達に任せてさつさと寝るとのこと。

「明日からは私も夜に仕事をすることにする」

「そうなのか?」

「チョウカイ1人で医者護衛は荷が重いだろう。私も参加することにした」

それはまたありがたい話だが、リコの艤装は大きすぎて施設内に入

れることが不可能な上に、移動出来たとしても動きが遅すぎてどうにもならないはずだが。

「リコさんのそれでは施設内の警備は難しいと思うんですが……」
「別に素手でやるのだから問題無いだろう。艦装はいらない」

三日月もその疑問にぶつかつたようである。それを言われ、リコは不敵に笑いながら拳を握った。

そもそもリコは体術も相当なもの。私が島に乗った瞬間に顔面に蹴りを入れられかけたほどだ。さらにはこちらの行動を予測して回避と攻撃出来るほどに喧嘩慣れしている。

鳥海のように艦装を装備することなく、施設内であればこの艦装の影響範囲内に入っているためにパワーアシストも万全。今この時でも、全力が出せる状態だ。小回りも利くため鳥海以上に適応出来る。る。

「得手不得手はあるだろうが、チョウカイと組めば大概は突破出来るはずだ。だから私が手伝ってやる」

リコの不得手はおそらく遠距離武器。施設内で発砲されるのは誰でも厳しいと思うが、それに関しては鳥海がしっかりと防御出来るため、適材適所と言えるだろう。

あちらも施設内戦闘を見越して暗殺者のような者を送り込んでくるかもしれない。そうなればリコの出番。

「ありがたいが、急に決めたな」

「いや、チョウカイが正気に戻ってから、ある程度交流はしていた。私も奴とは同類だからな」

リコも鳥海と同じ脚の処置を受けた者。傷の位置も似たようなものである。摩耶と鳥海、そしてリコと、脚すげ替え組として、いろいろと交流があるらしい。おそらくこれは増えてはいけないタイプの仲間。

リコは再び歩くことにそこまで苦難を強いられてはいなかったものの、鳥海に対してそれなりにアドバイスが出来たそうだ。摩耶ほどではないにしろ、同じ怪我を持つもの同士、仲間意識が高い。

「リハビリはマヤがやるが、護衛は私が組む。医者もそれでいいと

言った」

リコも最初は仲間達の仇討ちで成り行き上の協力関係というところから始まったが、今ではすっかり施設の心強い一員だ。仇であった巻雲が正気に戻り、本当の敵である大淀の存在を知ってからは、奴を倒すために全面的に協力してくれている。今では巻雲ともある程度話が出来ているらしい。

「ここが無くなられては私も困るからな。これだけ艦装を弄くり回して」

「整備してもらわなくちゃいけませんもんね」

「ああ、マヤとセスにな」

工廠組とは特に仲がいいようである。セスは今相部屋な程の仲。やはり同胞であることは親近感に繋がるのか。

「全て終わったら島に帰る。それまでは協力しよう」

「ああ、よろしく頼む」

まだこの事件は続く。それが終わるまでは施設を守ってくれろと宣言してくれた。ある意味、この施設も自分の管轄する場所のように思っているのかもしれない。陸上施設型という深海棲艦にしかない種族の、私達とは少し違う感性か。

そして、今日は夢の中にも呼び出される。毎日でも呼ばばいいとは言ったが、少し間を空けてきたのはシグの優しさか。

『やあ、なんだか今日は賑やかだったね』

「ああ」

外からの者が沢山来たので、シグもそのチェックで忙しかったようだ。その結果は問題無し。誰からも嫌な感覚はしなかったとのこと。

第一水雷戦隊は大淀の拠点の襲撃をして怪我を負っているため、その時に何か仕込まれているのでは無いかという事態を危惧していた。それが払拭されただけで一安心。

『赤城さんが助けられて良かったね』

「ああ、ありがとうシグ。説得出来るかもしれないというのを教えてもらってなかったら、どうにかしてでも沈めていた。シグのおかげ

だ」

『あはは、どういたしまして。でも、無傷で説得するのはちよつと驚いたかな』

シグはあくまで動かなくなるくらいまで痛め付けてから話をした方がいいと言っていたが、最終的には加賀との殴り合いによる怪我だけ。あれは加賀の思いが伝わったからどうか出来ただけで、限りなく危険な行為である。

『結果オーライだから、私はこれ以上何も言えないね。ああ、赤城さんは大丈夫。ちよつと黒いけど、いきなり君達に敵対するようなことはないよ。あの人にはあの子の信念があるみたいだし』

「信念か。仇討ちか？」

『そうだね。赤城さんの中には何人も怨念が入っちゃってるから』

全て背負っているのだから、理性が焼き切れていたわけだし、今も結構危ういバランスの上に立っているのは仕方のないこと。負の感情から生まれたのに、今艦娘のように振る舞えるということ自体が奇跡に近い。赤城自身も、またおかしくなってもおかしくないと言うほどだし。

『五航戦を見たらまた焼き切れるかもしれない。だから、気をつけてね』

「ああ、肝に銘じておく」

怒りと憎しみの相手、自分を殺した張本人が相手なのだから、怒り狂うのは目に見えている。ストッパーとなり得る加賀も同じ憎しみを持つているのだから、赤城が暴走しても加担する可能性が高い。

一航戦を止めるのはその外にいる者、私達だ。あまりに目に余る暴走をした場合は、私達が強引にでも止める。

『あと、一応もう一度チ級を探してみたけど、やっぱりダメだね。届いてないや』

「それは仕方ないだろう。力を貸してくれているだけでもありがたいんだ。若葉としては面と向かって礼を言いたいだけだ」

『そういう若葉の律儀なところ、私は好きだよ』

チ級は残念ながら見つからず。こればかりは仕方ない。私の身

体に関わることだし、礼を言いたいのには山々だが、それが出来た場合に私が壊れている可能性がある。

『重要な話はこれくらいかな?』

「そうだな。いつも助かる」

『いいよいいよ。私は私に代わって戦ってくれている若葉に協力したいんだからね』

にこやかな笑み。この空間にいるとき、シグが笑っていないことはない。私と話せるのが本当に嬉しいようだった。

それもそうかと思う。シグが会話出来るのは私だけであり、さらにはこの空間だけ。日中は私の周りを見ることが出来たとしても、他人と話すことは疎か、私ですら視認が出来ない状態。同じ状態である三日月すらも無理。寂しく感じていてもおかしくない。

「シグは姉には視られているのか?」

『目は合ってるね。この前手を振ったら振り返してくれたよ。ちょっと嬉しかったかな』

シグの存在を日中視認出来るのは、唯一私の姉だけ。意思疎通という程ではないものの、手を振ったら振り返せるくらいには認識されているようである。

『そろそろ三日月ちゃんの方の私とも話をしてみたいものだよ。えーと、ぼいだっけ』

「ああ、三日月がそう名付けたらしい」

『うん、確かにちよつと聞き覚えのあるフレーズだよ。あ、フレーズつぼい』

その言葉に聞き覚えのあるということとは、やはり自分の身体の一部という認識で間違っていないようだ。私もあちら側のシグ、ぼいには会ってみたいものである。

だがそれは、チ級と会うよりも難しいことだろう。何せ、私の身体では無いのだから。これだけ密着して眠っていても、その片鱗すら見せないのだから、おそろくずっと無理なのだろうなと思う。

「三日月に様子を聞いておく。今はそれで我慢してくれ。若葉もそれで我慢する」

『だね。それに、私には君がいるからいいのさ』

腕にしがみつくとように抱きついてきた。まるで三日月のようだが、夢の中だからか重さを全く感じない。むしろ心地いい程である。

「また呼んでくれ。寂しいなら毎日でもいいからな」

『ふふ、ありがとう若葉。寂しくないと言えば嘘になるけど、大丈夫だよ。私はこの第二の人生……第三なのかもしれないけど、それを順風満帆に過ごしてる』

今の状態を楽しめているのならそれでいい。私も楽しい。

『それじゃあね、若葉。また夢の中で』

「ああ、また」

シグとの交流は私としても楽しい。事件の見解を聞けることも楽しいし、こうやってただ遊んでいるのも楽しい。

眠ることで身体が癒され、夢の中で心も癒される。私は今この時が充実しているのだろう。

死を知る者

翌日、夜間警備でも何事もなく、施設は安全な状態で朝を迎えることが出来たため、下呂大将と新提督は帰投した。加賀から手に入れた、手瀬提督の鎮守府の件を大本営で詰めるとのこと。

赤城が施設の一員となり、今のところはあの海域から深海棲艦が発生することは無いようだが、何かの弾みでまた発生する可能性はある。それに関しては、今は施設側で対処するという事になったようだ。

「昨日のうちに先生と新さんにいろいろ作戦を練ってもらった。五航戦の襲撃は、ここ数日で来るだろう。下手をしたら今晚の可能性もある」

またえらく急な話となった。前回からそれなりに時間が経っており、あちらの襲撃準備も整ったのではないかというのが下呂大将の推理である。

前回の戦いで、こちらにシロクロという超が付くほど強力な戦力がいることを把握させてしまっている分、確実に勝利するための策を練っているだろう。そこから考えて、襲撃は最速で昨日では無いかと考えたらしい。それが来なかつたのだから、ここからは毎晩が襲撃の恐れがあるタイミング。

「近々来るが、いつかはわからないために、新提督は帰投せざるを得なかつた。あの人も大本営の一員として忙しい人だからな。先生も療養中の身だから、ここに拘束するわけにはいかない。代わりに1人だけ残してもらえることになった」

それが旗風である。今日から少しの間、施設に滞在して情勢を見続けるとのこと。以前の神風のようなものだ。

ここにいる間は、近海警備や私達の訓練の手伝い、あとは料理も得手らしいので雷の手伝いもしてくれららしい。万能選手である。

「不束者ですが、少しの間よろしくお願いします。誠心誠意お力になればと存じます」

こんなこともあるのかと、しつかり着替えまで持ち込んでいるの

だから抜かりない。旗風は最初からここに置いていってもらえる予定だったようだ。

そもそも今回は空母棲姫が現れてしまったことへの対策のための派遣だったのだから、長期戦も多少は視野に入れていたのだろう。昨日中に発見して撃破出来ればそれで終わりだったが、そうでなければ援軍として1人置いていく算段だったと。

「なら、これから毎晩、私と加賀さんは夜間警備のお手伝いをさせてもらいますね」

襲撃が近いということ、赤城が笑顔のまま殺意増し増しで宣言。

赤城の中身を感じとることが出来るのはおそらく私、若葉とシロくらいなのだが、今回は誰がどう見ても五航戦を殺すつもりで行動すると言っているのが見えた。そのため、飛鳥医師もすぐに説明する。

「気持ちわかるが、五航戦は生かして倒してくれ。彼女らも被害者なんだ」

「その件に関しては、頭の片隅にでも置いておきます」

これは確実に話を聞いていない。助けたとしても殺しかねない。この確執は、曙と呂500のもの以上に込み入っている。五航戦、特に翔鶴の指示により自爆させられ、怨念の塊となつて蘇つた赤城なのだから、五航戦を見た瞬間に理性など無くなるだろう。

「私も止められるかはわかりません。そのつもりでお願いします」

加賀も殺されかけたという憎しみがある。赤城に対するストッパーとしては使い物にならないぞと、自ら宣告してきたようなもの。加賀すらも五航戦は殺すつもりで戦うのだと思う。

殺害だけは阻止しなくてはいけない。大淀の被害者は、今どのような状態でも須く救出するのがこのやり方だ。いくら翔鶴のゲスさを見たとしても、あれはやらされているだけ。洗脳が解けた時、壊れかねないほどの自己嫌悪に陥るのも目に見えている。だが、死ぬよりマシだ。やり直せる。

「いざとなつたら若葉達が止める」

「すまない……」

最悪の場合、出撃させないまでであるのだが、どう足掻いてもこの2

人は無理矢理出撃するだろう。今の赤城は、私達を攻撃してでも五航戦を殺そうとする。そんなことで施設内に不和を持ち込みたくない。ならば戦場で止めるのみ。

それまでにわかってくれればいいのだが、期待はしない方がいい。特に赤城はダメだ。そういう性分として生まれ変わってしまったのだから。

襲撃はいつも通り夜だろう。そして今晚の夜間警備は、私率いる五三駆。今日来るなら、一番最初に交戦するのは私達になる。若干緊張感が高まる中、朝食後に談話室を使い、五三駆で夜間警備の簡単な打ち合わせ中、少し眠そうな旗風がこちらへ。どうやら私達を探していたらしい。

「本日の夜間警備、私も参加させていただきます。よろしかったでしょうか」

「ああ、人が増えることはいいことだ。よろしく頼む」

夜間警備には旗風も同行してくれる。昨日から引き続きとなってしまうが、旗風がここに残ってくれた理由がこれなのだから、飛鳥医師も良しとしていた。その旗風はこれから仮眠を取り、夜に備えるとのこと。夜間警備の後にまだ一睡もしていないはずなので、ここで身体を休めておいてほしい。

「ああ、いたいた。さっき言った通り、私達も参加します。よろしくお願いね」

「……ああ」

そして旗風と同じように赤城と加賀も談話室へ。赤城は終始微笑んだままであり、加賀は無表情。だが、五航戦の話題が出たことで、2人とも憎しみが匂いに表れたまま。他の者はわからずとも、私にはわかった。

「赤城、若葉も飛鳥医師と同じ意見だ。五航戦の2人は生かしてほしい。あくまでも救出することが若葉達の目的なんだ」

「善処しますよ」

念を押しておく。加賀はともかく、赤城は絶対に許さないだろう

が、言葉にしておけばもしかしたら届くかもしれない。だから何度も何度も言う。赤城の気持ちが変わらないように、私達の気持ちも変わらない。

しかし、それに対する返答は簡素なもの。善処すると言う者は大概何もしない。それを笑顔で言い放つのが余計に怖い。邪魔をしたら後ろから撃つなんてことまでしそうで困る。

「私は赤城さんの気持ち、多少はわかるわよ。私も一度死んでるもの。殺したいくらい憎いわよね」

そこに曙が言い放った。それを聞いて赤城が目を丸くする。自分と同じように一度死んでから蘇った者が他にいるとは思っても見なかったのだろう。加賀も施設に所属するようになってからその話は聞いていなかったの、無表情ながらも相当驚いている。

あちら側で使われている時に、大淀から聞いていなかったのだろうかと思っただが、赤城も加賀も別鎮守府の者。こちらの内情は殆ど知らなくてもおかしくはないか。

「なら曙さんも私と同じ……？」

「私はこの先生に蘇生してもらってるから違う。ほら、これが証拠」
少しだけ服をはだけて胸の傷を見せた。爆散した後存在そのものが変化してしまっている赤城とはダメージが雲泥の差だが、死を乗り越えたというところでは同じ。

死の苦痛を知るもの同士として、多少なり親近感はあるようではあるが、曙の表情はあまりいいものではない。

「なら、曙さんの仇討ちは？」

「私の仇は今この一員よ。しかも、そいつは私を殺したことを忘れてんの」

「ここに居るのなら、殺してしまえばいいのでは？　自分を殺してのうのうと生きている姿を見るのは、それだけでも腹が立つでしょう」

簡単に言ってくれる。この言葉も当然笑顔を崩さずに言ってきた。要は、気に入らなければ誰だって殺すと言っているようなものだ。本能のままの殺戮に、一切の抵抗が無いと見える。

すぐに殺すかどうかの選択になってしまうのは、深海棲艦の本能だからだろうか。それとも、何か別の要因があるのだろうか。

「最初はそうだったわよ。赤城さんの言う通り、ツラを見るだけでも腹が立ったわ」

「だったら何故殺さないんです?」

本当に疑問に思っているようだ。腹が立つのなら消してしまえばいいのにと。

深海棲艦は本能のままに生きていような素振りはある。帰巢本能もそうだが、憎しみのままに殺戮を犯す辺りがまさにそれ。赤城は艦娘の人格があったとしても本質が深海棲艦故に、その本能を隠すこともしなかった。

「なんで嫌な奴を手にかけて自分の手を汚さなくちやいけないのよ。だから、徹底的に無視し続けた。関わり合いを持たないようにしたわ。腹が立ってアイツ自身に当たり散らしたりもしたわ」

あの時の一触即発のムードはあまり良いものではなかった。雷とも険悪な仲になっていたし、曙自身がストレスで倒れたりもした。あの時のことを思い出して、雷も少し顔を伏せる。

「でもね、アイツはアイツなりに記憶が無くても罪悪感を持ってたの。訳がわからないけど私に謝ってきたりした。トドメは戦場で助けてくれたのよ」

それが、今は違う。朝霜との戦いで、呂500の決死の行動により撃破することが出来たことで、多少なり付き合い方が変わった。自分からは行かないが、来られたら毛嫌いせずに対応に流すくらいに。

「あの戦いで、私を殺したアイツはもう死んでいて、目の前のアイツは別人なんだってことが理解出来た。だから割り切れたわ」

「曙……私も嬉しいわ! これでもうちよつとろーちゃんも仲良くしてくれたら最高なんだけど!」

「割り切るのと仲良くするのは違う」

雷が抱きつこうとするのを、頭を押さえて阻止する。わだかまりも無くなったおかげで、嫌な雰囲気は見せなくなったのはありがたい。曙の視界に入れないようにこちらが気を使ったりするのも疲れる。

「……私はそこまで割り切れませんね」

少し笑顔が失われた。一時的に施設の一員となつてからほぼ常に笑顔だったが、今だけは違う。赤城が本音を言えそうなのは、この施設で唯一同じ境遇である曙だけなのかもしれない。

「あの子が殺したのは私だけじゃないもの。それがやらされたものであつても、あの時はあの子の意思。なら、その意思を持つなら死んでもらうしかないじゃない」

「洗脳が解けたら別人よ」

「罪悪感を持つているのなら、本人でしょう。なら死ぬしかないわ」

曙がここまで考えてくれているとは正直思わなかった。あの一件の後も、曙から呂500に話す姿は一度も見えていないが、心は少しだけ変化していたようだ。

しかし、どれだけ話しても平行線上な気がする。赤城の殺意は消えることはない。仇敵がこの世にいる以上、それが死んでようやく気が晴れる。下手をしたならそれでも気が晴れない。それほどまでに深い、深すぎる憎しみだ。

加賀はどうかとチラリと見てみると、曙も壮絶な体験をしていると、いうことで少し動揺を見せていた。顔には出さずとも、匂いにはしっかりと出ている。

「加賀さんは……どうなんですか？」

すかさず三日月が加賀に聞いたが、加賀は無言。目が若干泳いだようにも見えた。憎しみに吞まれているにしても、深海棲艦ではなく艦娘なのだから、そこはしっかりと理性が働いている。

殺したいほど憎くても、実際に殺すかと言われると抵抗があるのは艦娘としての本能。そこまで赤城と同調されていたら、正直どうにもならなかった。

「雰囲気が暗いですね。皆さん、一度お茶を飲みましょう。私が淹れますので、お待ち下さいませ」

その空気をぶった斬るように話題をすり替えたのは旗風だった。談話室であることをいいことに、勝手にお茶を淹れていく。

「あら、お茶菓子もありますね。赤城さん、美味しそうな甘味ですよ」

「そ、そうですか……」

テキパキと並べてお茶会の準備をしていく旗風。この空気の読まなさに呆気を取られている赤城。

こちらとしては助かった。このまま話を進めていくと、赤城がこの場で暴走していたかもしれない。さすがに艦装を持つているわけでは無いので

「甘いものを食べて、お茶を飲んで、少し落ち着きましょう。冷静にならなくては纏まるものも纏まりません」

「……私は別に」

「それに、親睦を深めるには、一緒にお茶を飲むことが一番です。ささ、ちよつと熱いですがどうぞ」

今度は旗風が終始笑顔で振る舞っていた。赤城の笑顔とは違い、こちらは本当に裏の無い笑顔。この場を諫めるために、あえて空気を読まずに動いている。

旗風のこの行動に気が抜けたのか、赤城から負の感情が薄れた。甘味を楽しむためにお茶会に参加することにしたようだ。こんな状況になったこととか、食い気が上回ったらしい。

「旗風、大丈夫か？」

「少し眠いですが、大丈夫ですよ。お茶会の後に眠らせていただきます」

「……悪いな」

「いえいえ、暗い空気は好きではありませんので」

そんなことを言いながら、戦場では飄々と敵の腹を捌いていくと思うと少し怖い。旗風の二面性を垣間見た気がする。

赤城はこれで一旦落ち着いたのか、今だけは憎しみを表に出さなくなった。お茶会もなんだかんだ楽しんでくれている。

だが、これは一時的なもの。戦場ではやはり暴走すると思う。その対処法は考えておかなければ。

悪意の集合体

夜、夜間警備の時間。施設が寝静まった辺りで、私、若葉率いる第五三駆逐隊は夜の海に繰り出した。今回は旗風と一航戦が便乗。計7人での哨戒となる。

私達はさておき、赤城がとんでもないことになっていた。今日1日である程度修復が完了したことで、あの巨大な艦装に乗つての航行である。人格と記憶は赤城であろうと、外見は空母棲姫。本人は意識しているのかしていないのか、脚を組み不遜な態度で座っている。

「後ろからの圧がすごい」

「艦装が大きいものね」

「それだけじゃ無いわよアレ」

チラチラと後ろを見ながら眩く曙と雷。リコの艦装が高速で航行しているようなものなので、それが後ろからついてくるというだけでも結構怖い。急ブレーキをかけようものなら、多分轢かれる。

その赤城だが、航行しながらも艦載機を四方八方に飛ばしており、私達の一団の周囲を広い範囲で確認してしてくれた。五航戦を見つけたらいち早く殺そうという算段なのは目に見えている。今日来るとは限らないが。

「赤城、殺気が痛い」

「あら、ごめんなさい。どうしても溢れてきちゃうの」

「気持ちにはわかるが抑えてくれ」

どうも私の嗅覚にそれが引つかかる。戦いが近いが故に、赤城からは強すぎるほどの殺気と、怒りと憎しみが感じ取れた。それも1人分ではない。

あの場で死んだもの全員の怒りと憎しみを背負ってしまったせいで、1人が出せる匂いでは無くなつてしまっている。ここまで濃いのなら、赤城の理性がここまで蝕まれていてもおかしくはないか。

「静かな夜は落ち着くのですが、この緊張感が好きにはなれませぬね」
「……そうですね。私は夜自体がそこまで好きでは無いのですが」

旗風も赤城の殺気に苦笑している。匂いがわかるわからない関係

なしにこれはどうしても感じ取れてしまうのだろう。三日月もチラチラと赤城の方を見ながら、若干警戒の表情を見せている。後ろから撃ってこないだろうかと疑うのは仕方ないことだろう。

「異常無しよ」

「助かる。哨戒機が2人分なだけで夜間警備が捗るな」

「そう、ならよかつたわ」

赤城と共に哨戒機を発艦している加賀が教えてくれた。加賀自身は赤城の殺気については何も思っていないように見えた。

艦載機の数は赤城が圧倒的なのだが、加賀の艦載機も当然重要。赤城は数の暴力で若干雑。加賀も相当な数を出しているのだが、赤城よりは丁寧に哨戒していた。今は殺気を押し殺しているようにも見え、普段以上に冷静だ。故に、加賀の報告の方が信憑性が高い。

「……私は赤城さんと同じ意見よ。五航戦は……特に翔鶴は許せそうにないの」

あのとときは無言を貫いた加賀だったが、このタイミングで私に打ち明けてくれた。そう考えているのは最初からわかっていたことだ。

自分の命を奪おうとした張本人に対し、敵意を持つのは当然のこと。加賀にとつての翔鶴は、私達にとつての大淀と同じくらいの感情なのだと思う。

「気持ちわかる。だが……」

「わかってるわ。止められるかはわからないけれど」

凜とした表情だが、その時になったら自分でも自分が止められるかはわからないと告白された。

幸い、加賀は私達ほどの継ぎ接ぎではない。胸骨の差し替えだけで済んでいる。理性を失うほどの負の感情を得たとしても、変質はしないはずだ。なら、理性は利くだろう。ギリギリでもいい、命だけは取らないでほしい。

加賀や赤城の持つ感情は間違っちゃいない。報復したくなるのは当然の感情だ。それが艦娘だろうが深海棲艦だろうが関係ない。

夜間警備を続け、日を跨ぎ、一旦休憩をしてまた向かい、それなり

に時間が経過。以前までならもう襲撃されていてもおかしくない丑三つ時も越えた。

「いつもの時間よりは遅いな」

「そうですね……今日は来ないのかもしれないね」

あくまでも下呂大将の予想。あちらはまだ準備に勤しんでいるのかもしれない。来ないのはありがたいと言えればありがたいのだが、その分あちらが完璧な状態で来られるのも困る。そうなる前に、下呂大将や新提督が拠点を襲撃してくれればいいのだが。

と、その時赤城から感じ取れる匂いが豹変した。笑みがより強くなり、瞳だけが怒りに燃え上がる。

「ふ、ふふ、来たわ。本当に」

四方八方に散らしていた艦載機を、ある一点に集中させるように移動させていく。加賀もそれを理解したようで、ある程度バラバラに行動させていた艦載機が赤城の艦載機を追従するように移動を始めた。

「知らない艦載機が来たわ。速さから墳式ね。若葉、施設に警報」
「了解した」

来ないかもと言った瞬間にコレ。地雷を踏んだようなタイミングである。発言者の三日月は少し恥ずかしそうにしていた。

加賀に言われて警報を即座に鳴らした。今は相変わらず施設がギリギリ見えない程の位置。援軍が来るまで耐えなくては。

「来たわ。赤城さん、迎撃は」

「滞りなく。墳式程度なら第一次航空隊だけで充分でしょう」

実際、こちらで敵艦載機の姿が見えることはなかった。届く前に全て墜としているようだ。そういうところも心強いものだ。

今は対空砲火が出来るものがないため、制空権争いが出来る一航戦の2人しかアレの対策は出来なかった。前回の墳式は摩耶が必死に墜としたが、今回は赤城と加賀の連携により終わらせている。

その空襲を耐えている内に、敵影が遠目に現れる。先頭に見覚えのある2人、加賀ではないが、忌々しい五航戦。

「あら、加賀さんがいるわ。そういえばあの時に助かったんでしたね」
「ええ……若葉に助けてもらったおかげで、ここに立っていられるわ」

早速減らず口から始まったようだが、加賀が遇らう。だが表情は憎しみに歪んでいた。冷静でいられているようには到底見えない。

問題の赤城は、その姿を見ることが出来たために、満面の笑みを浮かべている。しかし、殺気は今まで以上。殺意が艤装を通して海面を波立たせるほどだった。

「敵機直上、急降下」

誰かに止められる前に殺意の塊を翔鶴の真上に置いており、容赦なく大量の爆撃機による急降下爆撃を敢行。問答すらもしたくないと、直撃したら消し炭になるレベルの火力である。

だが、翔鶴の真横に立つ瑞鶴が真上に矢を放った瞬間、爆撃機は全て撃ち落とされてしまった。矢が全て艦載機に変化し、1機1機を対処したようだった。

「あら、残念」

「新顔がいますね。そんなもの、何処から拾ってきたんです?」

赤城にそっくりな空母棲姫を見ても、それが自分が自爆させた怨念の塊であるとは考えるに至らなかつたのだろう。軽く一瞥するだけに留まり、やはり加賀を見据える。空母棲姫には興味が無いとでも言いたげ。

その態度は想定済みではあったが、赤城は会話をさせるつもりなど無いと言わんばかりに、ありつたけの艦載機をこれでもかと喋りつけていく。指をクルクル回しながら、爆撃と射撃を繰り返す様子は、まるで音楽会の指揮のよう。

しかし、それも全て瑞鶴が互角に食い止めていた。楽勝というわけではないようだが、あの圧倒的な数を涼しい顔で撃ち合う様子は、前回よりも射撃の精度も上がっているように思えた。この数日で随分と成長させられている。

「やらせるわけないでしょう。空母棲姫如きに」

「あら、それは慢心かしら。詰めが甘い瑞鶴らしい言葉ね」

「……?」

赤城の言動に疑問が出たようだが、気にせず艦載機の撃ち合いを再開する。

その射撃の腕も気にはなったが、それ以上に気になったのは瑞鶴の表情である。感情が全く感じられない。前回は感情任せで、姉に煽られて冷静さを簡単に失うような者だったが、その兆しが全く見えない。まさか、弱点の克服のために頭の中を弄られたとでもいうのか。

「翔鶴姉、この空母棲姫何か違うわ」

「みたいね。何者か知らないけれど、新戦力は想定のうち。全滅させることは変わらないわよ。」

「ええ、わかってる」

今回は空母隊を連れてきていない。ということとは、空襲により施設を破壊することを考えていない。施設に所属している艦娘と深海棲艦を全滅させるための襲撃か。ならば、私達からはまだ見えない位置に、長距離砲撃が出来るものを控えさせている可能性がある。

「五三駆、出るぞ」

「了解。まずはあの2人を黙らせるわ」

一航戦が気を引いてくれている内に、私達がさらに攻撃を加えていこうと動き出す。特に瑞鶴は、赤城の空襲を止めるために空に向かつての発艦を繰り返しているので、私達に視線が向いていない。今がチャンスだ。

「リミッターを外す。先に行くぞ」

「私も続きます」

三日月と共にリミッター解除。全力を脚に込めて、一気に瑞鶴へ跳ぶ。翔鶴は加賀と向かい合い、瑞鶴は空襲対処中、ならば隙が大きいのは瑞鶴だ。

当然ここにいるのはこの2人だけではないだろう。こちらの戦力を加味して作戦を練り直してきているはずなのだから、最低限シロク口対策はしてきているはずだ。まずはそれをこの場に引きずり出す。

「黙っててもらおうか」

「若葉、アンタの相手は私じゃないわ」

瑞鶴のガラ空きの腹に突撃したが、目の前に現れた小柄な影に止められてしまう。咄嗟に前にナイフを振るったが、同じようにナイフにより攻撃を止められてしまった。

罅迫り合いとなるが、腕力もおおよそ互角。背丈も近い。私のために作られたであろう、私にぶつけるための敵。

「ダメよ。瑞鶴さんの邪魔をしちゃ」

「お前……くそ、揺さぶりか……!」

匂いからしてわかる敵の正体。深海の匂いや醜悪な憎しみの匂いからして完成品。それ以上に、初春型の匂いが嫌でも鼻についた。

一度も会ったことが無くても、直感的にわかる。相手は私の姉妹である。

「貴女対策に調整されたんだから、付き合ってね、若葉」

「……来いよ、初霜!」

それは私の妹、初霜。私と同じ制服に身を包み、私と同じナイフを振るう、存在が確認されているたった1人の私の妹。

精神的な揺さぶりだとすぐにわかった。当て付けのために姉妹をぶつけてきている。わざわざ私と同じ戦闘スタイルにまで仕立て上げて。

「若葉さん、援護します」

「三日月ちゃんは私の相手をしてちょうだいね」

援護する前に三日月が狙われた。リミッターを外しているため、考えた瞬間にはその砲撃を回避しているが、敵の砲撃精度が尋常ではない。私と三日月に対しても、同じものをぶつけてきているような錯覚。

ということとは、あちらも私と同じように、姉妹をわざわざあてがわれているのか。

「……そうですか。私には貴女ですか。如月姉さん」

「ええ。三日月ちゃんのために調整されたの。だから、遊びましょうね」

あちらは三日月の姉、如月。当然完成品。あてつけに姉妹をぶつけてくる辺り、おそらく発案は大淀。こちらの戦意を喪失させようという魂胆なのだろう。

確かに戦いづらい。実の姉妹がこんなことになってしまっていることに心が痛い。三日月のように感情を消すことが出来ればまだマ

シかもしれないが、その三日月ですら、姉が相手となって少しだけ態度が変わっているほどだ。この策は的確。

「なら私達があっちやるわ！ アンタ達は姉妹を正気に戻してやんなさいよ！」

私は初霜と、三日月は如月と一騎討ちする間に、曙と雷、そして旗風が五航戦の方へ向かってくれる。もうあちらは任せて、私は初霜に専念した方がいい。

だが、それもしつかりと対策してきていた。凶悪な戦艦主砲による砲撃が戦場を分断するかのように放たれ、曙の突撃を止められる。

「貴女達の相手はこちらに任せてますので、楽しんでくださいね」

空母隊ではなく、戦艦隊。だが、その姿に全員が顔を顰めた。

艦娘なのはわかるが、身体のところどころが黒ずんでいた。さらには身体の一部が禍々しく変質してしまっている。私の痣とはまた違った深海の侵食だが、匂いは完成品に近い。むしろ、呂500に近い混沌とした匂い。ということは、あれは失敗作の群れということか。

呂500のように制御出来ていない失敗作とは違う、制御出来ていない失敗作。意思も理性も消え去り、人形と大差ないが決して元に戻ることはない、大淀の所業の成れの果て。壊れ方が呂500よりも酷い。

「相変わらず、ふざけた部隊を連れてくるのね」

「廃棄物の再利用、リサイクルですよ」

「堕ちたものね五航戦。ゴミは貴女よ」

加賀の憎しみが増した。ブチブチと理性が断ち切れていくような、そんな感覚。

「何あの空母棲姫、ホント鬱陶しいんだけど」

「確かに少し妙ね。私達のことを理解しているような……」

まだアレが赤城であることには気付いていない。だからだろう、赤城は笑みをそのままに憎しみを増大させる。

「まだわからないのね、五航戦。わかるはずがないか。堕ちに堕ちたクズには、私の正体などわかりやしないでしょう。だからこそ、私は

貴女達を殺さなくてはいけない。それが、あの子達の怒りと憎しみを背負って蘇った意味なんだもの」

より一層艦載機の数が増えた。殺意が形になり、圧倒的な力に変化する。

「私は赤城、空母棲姫の赤城。貴女に自爆させられた人形達の、怒りと憎しみの集合体。怨念の塊。翔鶴、私が貴女を呪い殺してあげるわ」
気分が悪い戦いだ。当て付けと悪意の集合体に、心が押し潰されそうだった。

歪んだ姉妹

五航戦の夜襲を迎撃する施設所属の部隊。私、若葉は五航戦を攻撃しようとしたところで、新たな完成品、妹の初霜に妨害される。さらには、私を援護しようとした三日月を、その姉である如月が妨害。私達への当て付けのために完成させられた姉妹と相對することになり、心が押し潰されそうな気分になる。

「貴女が赤城さん？ 何の冗談を」

「あら、現実逃避かしら。なら貴女が私達にやらせたことを1つずつ話してあげましょうか？」

笑顔を絶やさず、自分があの赤城であることを証明するために、わざと翔鶴の神経に障るようにネチネチと恨みと憎しみを言葉にしていく。その間も空爆は絶やさず、瑞鶴に防御させることを忘れさせない。

「他人の鎮守府を破壊し奪った挙句、人様の鎮守府を空爆させ、この医療施設も同じように破壊しようと思っただけで、予想外の火力を持つお子様が出てきたせいで勝ち目が無くなって、死にたくないから情けなく私達の命を使ってスゴスゴ撤退した臆病者の翔鶴よね？ 人形を自爆させないと撤退する余裕すら持てないような弱者なのかしら五航戦は。ふふ、お笑い草よね。実力で捻り潰すことも出来ないのに、たった1人出てきただけで泣いて逃げるだなんて、本当に愚か」恨み節が出るわ出るわ。本来の赤城はここまで敵を卑下するような性格ではないらしいのだが、深海棲艦として蘇ったことがその辺りに影響しているようである。本人に対しては憎しみを一切隠さず、クスクス笑いながら見下したように話し続ける。

「……言わせておけば」

「私には言う権利があるでしょう？ 貴女が臆病風に吹かれたせいで、艦娘としての命も尊厳も何もかもを壊されたんだもの。それとも何？ 私が自爆させられたのは貴女のせいではなく、私が弱かったからとでも言うのかしら？ 責任転嫁も甚だしい」

赤城から発艦される艦載機の数が増える。まだ瑞鶴だけで

抑え切れているようだが、限界が近いようだ。それに、加賀はそちらに艦載機を使っていない。増やそうと思えばまだまだ増やせる。

「随分と口が悪いですね。随分と墮落したじゃないですか。誇りある一航戦ともあろうものが」

「ええ、貴女のせいで私はこんなにも墮ちてしまった。一航戦の誇りなんて、もう何処かに行ってしまったわ。今の私には、あの時に散らされた全員分の怒りと憎しみしかないの。貴女をこの世から消し去ることが出来れば、後はどうでもいいのよ」

反論するも、赤城は一蹴。どれだけ何を言われようとも、折れる心が既に無いようなものなので、煽りに対しての耐性がありすぎる。理性が無いものに理性を壊す口撃なんて効かなかった。

「だから、簡単には死なないでちょうだいね翔鶴。恨みはいくらでもあるの。呆気なかったら承知しない。妹に守ってもらうのではなく、貴女がちゃんと自分の身は自分で守りなさい。まさか妹に守ってもらわなければいけないほど弱いわけでは無いでしょう？ あれだけ調子づいていた五航戦の姉なんだから。ほら、かかってきなさいな」
最後まで笑顔を絶やさず、翔鶴をピンポイントで煽り続けた。翔鶴から苛立ちを感じるほどである。

「瑞鶴、貴女は加賀さんをお願い」

「わかった。じゃあ一回止めるよ」

瑞鶴の迎撃が終わった瞬間、翔鶴が真上に矢を放ち、赤城の空爆を全て墜とした。瑞鶴以上の精度と搭載数により、空母棲姫と化した赤城とも互角の力となっている。瑞鶴だけではなく、翔鶴もこの数日で強化されているようだ。

「やれば出来るじゃない」

「当たり前です。私は何のためにここにいてると思ってるんですか」

「私に殺されるためでしょう？ 貴女には私の中にあるあの時の憎しみを全て受けてもらわなくちゃいけないの。よく来てくれたわ」

言いようのない恐怖を感じるあちらの戦場とは別に、加賀は瑞鶴と睨み合っている。やはり瑞鶴は何かされているようで、これだけのことがあっても一切感情を見せない。まるでリミッターを外している

三日月のようだった。

「……」

「……」

元々加賀はそこまで話す方ではないようで、無言の睨み合いが続く。憎しみは深く、殺意も漏れ出ししている。あれだけ騒がしかった瑞鶴がこれだと、加賀も緊張感が取り払えないようだった。あれは決着に時間がかかりそうである。

一方私は一旦三日月と合流し、2対2の状態に持っていった。五航戦や、後ろから現れた失敗作の戦艦隊は他に任せ、私と三日月は姉妹を正気に戻すことに専念する。とはいえ私達が出来るのは、殺さずに倒して、飛鳥医師に任せることしかない。

「三日月、大丈夫か」

「大丈夫です」

感情の無い表情で敵を見据える三日月だが、如月が現れてしまったことで、感情が戻ってこようとしている。外していたはずのリミッターが、動揺でかけ直されそうになっている。

いつかやってくるのではないかと思っていたが、このタイミングとは思わなかった。精神的な揺さぶりは、実の姉妹の哀れな姿が一番効く。

「あいつらを助けるぞ」

「当たり前です。姉さんのあんな姿は見たくないのです」

あの2人の戦い方は、私達と全く同じなのだろう。初霜が前衛、如月が後衛。どのタイミングまでの私達を知っているかは知らないが、拮抗、もしくはそれ以上の力を持たされてここに立っていると思う。

そして、大淀の手が加えられているという事は、私と三日月を捕らえるために動くと思は出来る。瀕死の状態にされ、連れ去られ、改造される。それだけは回避しなくては。

「死なない程度に痛めつけるわね、若葉。大淀さんはまだ貴女のこと欲しがってるから」

「それはゴメンだな」

「若葉の意見は聞いてないの。素直についてきてくれれば痛い思いをしなくて済むわ」

気付けば初霜が私の眼前に。速い。リミッターを外した私と同等かそれ以上、神風と同じほどのスピードで突っ込んでくる。

そこから強烈な振り下ろし。死なない程度とは言うものの、まともに受ければ胴が袈裟斬りにされるため、私もナイフで受け止めた。腕力だけで言うのなら朝霜の方が余程キツいくらいの重さ。受け止められない重さでは無い。

「援護します」

「ダメって言ったでしょう?」

三日月の援護は如月がすかさず邪魔をする。初霜の持つナイフを狙つてのピンポイント射撃を狙つたようだが、その主砲を破壊するために如月が先に砲撃していた。勘付いたときには回避行動に移っていたが、そのため私の援護は出来ず。三日月の歯軋りが聞こえた気がした。

結果的に私は初霜と1対1^{サシ}でやり合わなくてはいけなくなる。元よりあちらはそのつもりのようなだが、正直こちらは堪つたものではない。何せ、こちらは時間制限があるのに、あちらには無い。耐えられるだけでジリ貧。

「もつと速く行くわ」

「好きにしろ」

宣言通り、初霜の連撃はどんどん速くなっていく。二刀流のため、受けるのはまだ楽な方ではあるのだが、時間をかけるわけにはいかない。だが焦つたら負ける。

申し訳ないが、少し痛めつけるしかない。拳銃付きナイフを使い、脚に向かつて射撃。動きが止まれば多少は変わる。

「その武器は瑞鶴さんに聞いているわ。なら避けれる」

撃つた時には後ろに回り込まれていた。それこそ、三日月と同様に避けようと思った時には避けていたような、あまりに速い動き。私がトリガーに指を引っ掛けたときにはもう回避行動を取っていた気がする。

真後ろからの斬撃は匂いにより見ずとも回避。一旦間合いを取ろうとしたが、それも予測されたか突っ込んできた。

「つつ……」

「大人しく捕まってよ。私、若葉を傷付けたくないわ」

回避は出来たが、腕に切り傷がついた。そこまで近付かれていたというのもあるが、まだあちらが加減しているのがわかる。あくまでも私は生かして捕らえたいと。あんなことを言っているが、それも仕方なくという気持ちが隠せていない。

時間のことも考えると、1人で戦うのは厳しい。だが、三日月は完全に如月に抑え込まれている。

「姉さん、退いてください」

「妹のお願いでも、それはダメ。投降してくれたら攻撃はやめてあげるわよっ」

「冗談はよしてください」

三日月も如月の足止めをしようと、主砲や脚を狙って攻撃しているのだが、ヒラリヒラリと躲かされていた。当初の夕雲のあの回避方法に似ているが、こちらは三日月の行動を予測しているような先行した回避。

「三日月ちゃんは単純だから助かるわ。撃つところが手に取るようにわかるもの」

「そうですか。黙ってもらえますか」

ムキになっているわけではないが、三日月の連射が激しくなる。手に持つ主砲を狙っていたが、途中からは胴体すらもターゲットに含まれ始めていた。感情を失いつつも、若干だがイライラしているように見える。

やはり実の姉があなってしまったところを見て、心が揺さぶられている。攻撃したくないという気持ちもあるだろうし、苛立ちもある。そこから照準に殺意が込めり始めているのもわかる。

「……私は若葉さんと違うので、姉さんに攻撃を当てられるとは思えませんね」

「あら、諦めるの？ なら投降するっ」

「まさか。誰が諦めると言いましたか。姉さんの仕組みは理解していません。ですが、今の私にそれをどうにかする術が無いということですよ」

「気に入らないが、と付け足す。リミッターを外したことによる観察眼で、如月が三日月の攻撃を全て避けている理由はわかってはいるが、今の三日月にはそれを打開するための力が足りないという。」

「今の三日月に出来ることは考えた時点での行動。それで超えられないということは、如月は三日月の行動を何かしらの手段で予測している。それが何かは私にはわからないが、私なら突破出来るだろうか。」

「三日月、交代出来るか！」

「三日月さんが出来ると言っても、私がさせるわけないでしょう？」

「私と三日月の間に、初霜が妨害するように割り込んできた。これでは合流することが出来ない。」

「確か三日月ちゃんは、時間切れになったら鼻血を噴いて動けなくなるのよね。じゃあ、時間切れまで付き合っっちゃうだね」

「若葉も動けなくなるって聞いてるわ。そうなってくれた方が簡単だから、ギリギリまで遊びましょう」

「元よりそのつもりで戦っている。私と三日月の時間切れ待ち。私も三日月も、反動で動かなくなるのはあちらもわかっている。だからと言ってリミッターを外さなければ拮抗すら出来ずに敗北する。そもそもが私達よりも上手に調整されていた。」

「だが、私は既に施設に警報を鳴らしている。援軍は期待出来る状態だ。元々いたものは戦艦隊に押さえ付けられていたとしても、追加の面々は抜けて来れるはず。」

「九二駆、推参じゃ。見とうないものがおるが、其奴を封じれば良いんじゃない」

「先行してきたのは姉率いる九二駆。夕雲と風雲は曙達の手助けに。霰は三日月の方に駆け付けてくれた。そして姉は私の下へ。歪んでしまった初霜を目の当たりにして、心底嫌そうな表情を見せた。」

「姉が現れても、初霜はあまり反応せず。あくまでも狙いは私。他の」

者は生かす理由も無いのだろう。私には向けられなかった、素直な殺意が姉に向いた。

「初春姉さんが増援で来たところで、何も変わりませんよ。若葉が倒れてしまえば、嫌でも押し潰されるでしょう?」

「若葉と三日月以外は雑魚か何かとでも思っておるのか」

「本当のことを言っているまでですよ」

私と同じスピードで、ここにやってきたばかりの姉に接近。一撃で殺してやろうと心臓に向けてナイフを振り下ろす。

「貴様はわらわの何処までを知っておる」

ガギツと少し嫌な金属音がしたが、姉は健在。無傷でその攻撃を耐えた。

「わらわ達は若葉と同等かそれ以上の者が刺客として来ることは想定しておった。最初からな。貴様らが若葉を対策するように、わらわ達はそれを対策しておったわ、このたわけが」

姉が手に持つのは鉄扇。空飛ぶ主砲のおかげで両手が空いているのだから、近接武器を使うための手段はいくらでもあった。そこで選んだのがコレである。攻防一体の武器はかなり重いものではあるが、艦装のパワーアシストによりそれも簡単に克服している。

「三日月も同じじゃ。ほれ、見てみよ」

三日月の援軍として参戦した霞も、姉と同じように三日月対策の対策を訓練してきていた。

私達が違うことに奔走している間に、九二駆はよりサポートに特化していたようだ。

「きさらぎちゃん、あられとおなじこと、できるんだね」

三日月が理解したという仕組みは、霞も持っている技術のようだ。三日月の行動を封じる如月の行動を封じるといいう後出しジャンケンが繰り広げられている。

「……私の姉は面倒なのね」

「最高の褒め言葉じゃの」

姉の参戦により、初霜を抑え込むことが出来そうだ。すぐにも倒し、飛鳥医師に治療してもらわなければ。

禁断の兵器

九二駆の参戦で激化する戦場。

失敗作の戦艦隊を相手している曙と雷、そして旗風。一撃の火力が即死級であり、掠っただけでも大惨事になりかねないものが、その数にして10人。おそらくシロクロ鎮圧用に連れてこられた高火力部隊なのだろう。そのシロクロはまだ戦場にきていない。

失敗作はどう見てもおかしい形状をしている。本来の製作工程から外れて完成させようとした結果の失敗作も交じっているようだった。大淀の残酷な実験の成れの果て。見ていて気分が悪い。

「自爆装置は私と旗風で剥がす！ 雷は足止め！」

「了解！ とりあえず顔面ね！」

完成品は自爆装置が失われているが、失敗作はしっかりと配置されている。近くまで寄って嗅いだわけではないので正確な場所はわからないが、火薬の匂いはしっかりと感じた。おそらく位置は変わっていない。

水鉄砲の雷なら何処を狙っても問題ない。しかし、戦艦隊は戦艦という艦種もあるが、禍々しく変質しているせいかやけに耐久力が高く、顔面に水鉄砲を喰らってもちよつと怯むくらいで攻撃を止めることはない。目潰し程度では人形みたいなものは対処しづらかった。

「1発じゃ止まらないか！ なら何発も当てるから！」

「援軍、来たよ！」

「こちらに人数がいるでしょう。夕雲達はこちらへ」

私達の方に姉と霰が来たように、あちらには夕雲と風雲が援軍として到着。とにかく今は失敗作達を足止めしなければどうにもならない。そのまま進まれて施設を破壊されても困るし、そもそもその主砲の威力がとんでもない。戦場にこの人数が居座られても困る。

失敗作は意思と理性が無くなっているだけで、1体1体が完成品に近い。今までの戦いで、完成品と1対1で戦っても厳しいというのに、数的有利があちらにあるため、援軍を全てあちらに送り込むくらいしないと勝ち目がない。

「風雲さん、主砲を破壊してください」

「じゃあ夕雲姉は脚部艤装！」

「それじゃあ同時にやるわよ！　せーのっ！」

雷は頭で視界を塞ぎ、夕雲が足で移動を止め、風雲が主砲で攻撃を制する3点同時攻撃をすることで、失敗作1人の足止めに成功。砲撃も封じたために、ほんの少しだが完全に動きが止まった。しかし、実弾を使っている夕雲と風雲の砲撃を以てしても傷がついた程度。まるで鳥海の持つバルジの如き硬さ。

瞬間、他の失敗作が守るよう動き出し、曙と旗風が近付くことを封じられた。そのせいで足止めされていた失敗作が調子を取り戻し、再び攻撃を再開。意思と理性が無くても連携だけは一人前のせいで非常に戦いにくい。

「面倒な連中ね！」

「近付けなければ私の力も振るえません。潜れはしますが危険ですね。人数がもう少しいるでしょう」

旗風も手を焼いている状態。大淀の拠点襲撃の時に駆逐艦の完成品に苦戦したと聞いているが、今回はよりによって戦艦だ。余計に苦戦は必至。

ただでさえ施設の立場上、大きな怪我をすることが出来ないため、慎重になってしまふのは仕方がないことである。

「援軍はまだ来ます。申し訳ないですが、こちらを優先させてもらいますから」

敵の数的優位を覆すため、ここからの援軍は失敗作の対処に使ってもらう。とにかく敵の数が多いのは問題だ。

「おいおいおい、今度は戦艦様かよ、やりがいあるじゃねえか！」

「朝霜、あんまり無茶しないでよお!？」

朝霜と巻雲も合流。駆逐艦ばかりで戦艦を相手しなくてはいけないが、もう全員がそれなりに経験を積み、訓練も絶やさず行なってきたのだから、勝ち目が無いわけではない。

朝霜の接近戦は厳しいかもしれないが、巻雲の火力は確実に役に立つ。ここから巻き返してもらいたい。

そして、さらなる援軍。おそらくはあちらの本命。そしてこちらの希望。

「何処に撃てばいい!」

「クロー! あの気持ち悪い戦艦もどきにぶっ放して!」

朝霜と巻雲と一緒に、シロクロ参戦。登場して即座に主砲を撃ち放つ。相変わらずの轟音と共に放たれたそれは、不殺のための水鉄砲であるにもかかわらず、先頭の失敗作が吹き飛ぶほどの威力で直撃。艦装こそ破壊出来なかったものの、充分すぎるほどのダメージ。

それにより浮いた失敗作が他の失敗作を薙ぎ倒すように吹っ飛ばされ、陣形が途端に崩れる。

「相変わらず馬鹿みたいな威力よね!」

その隙を見て、曙が動き出した。今なら体勢を崩した失敗作に向かい、自爆装置があるであろう腹に一撃を入れる。思い切り返り血を浴びるが、これで自爆の心配はなくなるだろう。10人中の1人目ではあるが、確実な一歩。戦力としてはまだそのままでも、外部からの指示で自爆されることが一番避けねばならないことだ。

「素晴らしい一撃です。道が出来ましたね」

そして旗風も。曙が自爆装置を破壊した失敗作に近付き、流れるような剣捌きで、即座に艦装を破壊した。相変わらず惚れ惚れする程の技。これで1人は完全に無力化出来た。

その後すぐに陣形を戻されたが、残りはあと9人。連携を崩せば1人ずつを確実に倒すことが出来そうである。朝霜と巻雲も追加されたことで、戦いやすくなっているはずだ。

このシロクロの砲撃は、戦場を震撼させる一撃となった。これだけ大きな音がしたら、赤城と接戦を繰り広げている翔鶴だって、シロクロがこの戦場に現れたことは気付いている。

「来ましたね、この場で葬らなければいけない敵が」

「余所見する余裕があるのね。慢心かしら」

赤城の空爆がまだまだ激しさを増す。ただの空爆では無く、横方向からの射撃も加え、簡単には行かないように工夫している。

それに対する翔鶴は、前回にも見せた数本の矢を同時に放つことで

それに対応していた。一部は上へ、一部は横へ、そして一部は赤城本体へと放ち、互角に撃ち合っている。

そもそも完成品と互角に戦えている赤城もとんでもないし、怨念の力が普通とは違う赤城と拮抗できる翔鶴もとんでもない。あの場だけはレベルが違う。

「正直な話、貴女はイレギュラーなのでどうでもいいですよ。私がおここに来たのは、あの深海双子棲姫をここで沈め、施設の戦力を削ることが目的なんですから」

「貴女にはどうでもよくても、私には重要なことなの。しつかり付き合ってもらわうわ。貴女が死ぬまで、何度でも何度でも撃ってあげる」「好きにしてください。私はやらねばならないことをやるだけですから」

この施設の最大の戦力は誰がどう考えてもシロクロだ。翔鶴単体に匹敵する量の水上機、たった今失敗作を一撃で吹き飛ばした主砲、それに加え、対空砲と魚雷まで完備しており、海中に潜ることさえ出来る万能中の万能戦力。

そのまま生かしていたら、確実に大淀への脅威となると考え、それを最優先で終わらせにきた。戦力を見直すと言って前回は撤退したが、その結果が今の現場だとしたらまだ足りないように思える。

翔鶴はハツと鼻で笑った後、海面を爪先で叩いた。まるで海中に何かの合図を送ったようだった。

途端に嫌な予感がした。キナ臭い匂いが戦場いっぱい漂った。特にシロクロの方。あの戦艦隊がシロクロ対策の部隊だと思っていたが、それは違おうと今の行動で何と無く読めた。

「シロ！ クロ！ そこから退け！」

キナ臭い匂いに気付いた瞬間、私は叫んでいた。初霜が眼前におり、姉と共にそれを押さえつけるために戦っている最中でも、これだけはちゃんとっておかなければダメだ。それでシロが気付いてくれる可能性は高い。

「目の前の妹を無視するのは良くないわ」

「やかましい。貴様はわらわと楽しむんじやよ」

「若葉は生かして捕らえるけど、初春姉さんは死んでくれて構わないのよ」

初霜の動きがさらに加速する。姉はそれを受けるのに必死だった。私と1対1で戦うために、私と同じ技能で私を超える力を手に入れているのはわかつている。嗅覚までは模倣出来ていないようだが、それ以上のスピードと技量を持っていた。

姉も私を守るために私を対策するという手段を取ったが、防御に徹さざるを得ない状況にされ、且つ、私の攻撃はそれでも初霜に受けられている現状。相変わらずこの場に縫い付けられているかのように行動を止められていた。

「っ、クロちゃん、バック！」

「えっ!？」

私の言葉で気付いてくれた。あまり無いシロの叫び声が戦場に響く。

その瞬間、シロクロの真下が大爆発を起こした。

シロが咄嗟にその場から退いてくれたが、ほんの少し間に合わなかった。クロは無傷であったが、シロはそのクロを守るために爆発に巻き込まれ、両脚が良くない方向に曲がっていた。失われていなかったのは良かったが、アレでは航行が厳しい。

「姉貴!？」

「まだ来る！　すぐに退いて！」

痛みを堪えながら、クロと共に艦装を疾らせる。直後、元いた場所で水柱が上がった。

今は主砲を撃つために海面にいたが、これでは埒が明かないと海中へ。潜航した方が速度が上がるため、撤退するにしても攻撃に打って出るにしても、海上より海中の方が戦いやすいらしい。

同時に、赤城の艦装の真下でも大きな爆発が起こった。先程の水柱と同じものが爆発したとしか思えない。同時に2箇所、ピンポイントで狙われて、爆発する何か。

「おつと……不意打ちにしては大きなダメージを受けたわ」

「破壊まで行けないとは、つくづく頑丈ですね赤城さんは」

赤城も航空戦を続けながら高速航行を開始。また同じ目に遭うと、いくら赤城の巨大な深海棲艦の艤装であつても破壊されてしまう。さすがに回避行動を始めた。

何が起きたかわからない。キナ臭い匂いから少しして、シロがやられた。海中からの一撃で脚を破壊するという事は相当な火力だ。魚雷か、もしくはは……。

「姉さんと若葉は、『回天』って知ってる?」

「……何を言っておる」

私と姉の攻撃を払いながら、意地の悪い笑みを浮かべて初霜が話す。匂いからも私達の動揺を楽しんでいるようなゲスな感情が見えていた。

「さっきの爆発はね、人間魚雷」

「……は?」

「2人とも知ってるでしょ? 潜水艦の子が自爆してるだけよ。その代わり、突撃して自爆するように特化して調整されてるんだけど」

今までにも数回、潜水艦が自爆することがあった。施設を破壊されたのが大きく、その後はこの場に深海棲艦が発生した。それをまたここで繰り返したというのか。

「狙いをつけて、突っ込むの。今は避けられちゃったけど、あの子供対策にいっぱいいるのよ。まだまだ海底に潜んでるわ」

人形にされているため意思は消されている。だが、何処にぶつかるとかは思考出来る。最初から自爆するために作られた人権無視の最低最悪な兵器。

シロクロは潜水艦ではあるものの、その武装を惜しみなく使うために、戦場では海面まで浮上している。特に今回も、海上艦を黙らせるために一度も潜っていない。そこまで見越してこの作戦を立てたということか。

怒りが増す。左腕が疼く。

「説明ご苦労。して、それをわらわ達に話して何とする」

「別に何も。こちらの手段は知っておいてもいいでしょう？」

キナ臭い匂いはまだ漂い続けている。いつでも足下から突っ込んでくると脅されている。今の初霜の発言により、その場に立ち止まるのは危険だと本能的に悟った。

そのせいで、私達の動きは制限されてしまった。いつ真下から来るかわからない恐怖を抱えながら戦わなくてはいけない。私はあちらの目的のためにやられないにしても、姉は危険だ。

「動きが鈍くなってるわ。やっぱリアルは怖いよね」

「ハッ、ぬかしよる。そんなものに頼らなくてはならぬ貴様らに反吐が出るというものよ」

「ふふ、姉さんは強がりがお上手ね」

初霜が先程の翔鶴と同じように海面を爪先で叩いた。あれは海中に潜む人間魚雷に向けた合図だったわけだ。だが、それでもそんな遠くにまでその合図が届くのは異常。

いや、これは人間魚雷を統率する完成品か姫の統率者がいるのだろう。それは今の合図が見えるほどに目が良く、視野が広い。誰がやったかも判断出来るのかもしれない。

「姉さん、一旦退くぞー！」

「退かせるわけじゃないでしょう。若葉はさておき、姉さんには死んでもらわないと困っちゃうもの」

言った瞬間にはキナ臭い匂いが急激に近付いてきていた。狙いは完全に姉だ。同時に初霜の猛攻は私を無視するかのように姉に向けて行なわれ、撤退をさせないようにし始めている。これは確実にまずい。

「この……！」

「若葉も黙っててね。そこで見てて」

姉を助けようと突っ込んだところに被せられ、強烈な蹴り。ナイフだけではなく、体術まで仕込まれている。迂闊に近付いたら返り討ちに遭ってしまう。それでも、姉を助けるためには止まらない。

「タイムアウト」

しかし、その時は訪れてしまう。私が一瞬躊躇ったため、人間魚雷

と化した潜水艦が足下から浮上。先程のようにその場で自爆するわけではなく、姉の身体に抱きつくように飛びついてきた。

そのまま自爆されたら姉ごと木っ端微塵。それだけはダメだ。

「あああああっ！」

出来る限りの全力で姉に突っ込み、初霜を完全に無視して自爆装置があるであろう人間魚雷の腹を搔っ捌いた。冷静でいられなかったが、瞬時に匂いを嗅ぎ、自爆装置の場所を把握し、確実に斬り払う。手応えはあった。いつものように装置を破壊することは出来た。これで自爆は無い。

だが、その判断までも誘導されていたものだとは知るのはいそぐだった。

「若葉ならそうしてくれると思ってたわ」

初霜の持つナイフが、姉の胸に突き刺さっていた。

理性を捨てて

シロクロ参戦と共に敵が使い始めた禁断の兵器、人間魚雷。自爆装置を積んだ潜水艦娘が敵に突っ込み自爆するだけの、単純な非人道兵器。海底に潜んでいるという人間魚雷達が浮上し、シロクロや赤城を巻き込み自爆を始める中、それを利用した初霜により姉が窮地に立たされた。

人形魚雷が自爆せず、浮上後そのまま姉に抱き付いてしまった。その自爆を回避するために私、若葉は、渾身の力を込めて人間魚雷の自爆装置を破壊したが、その判断までもが誘導されていたものだと知るのにはすぐだった。

「若葉ならそうしてくれると思ってたわ」

初霜の持つナイフが、姉の胸に突き刺さっていた。

「つぐうつ……!?!」

「あら、あの咄嗟で心臓から逸らすことが出来るなんて、姉さん凄いわ」

姉はナイフが刺さる直前で鉄扇を使い、僅かにだが刺さる位置をズラしていた。心臓に直撃は免れたものの、肺がやられているためにこのままでは長くは無い。確実に致命傷であるのは間違いない。すぐに飛鳥医師に処置してもらわなければ助からない。

「若葉、これで邪魔者はいなくなったわね」

姉からナイフを抜き、その身体を蹴り飛ばす。致命傷を負わされて立ち上がることが出来ない姉の胸からは、溢れ出したかのように血が流れ始めた。損傷もそうだが、血の量が酷い。傷が治せたとしても、出血多量となる可能性まである。

「姉さんー」

「姉さんにはそのまま死んでもらうわ。次は貴女を動けなくなるまで痛めつけさせてもらうわね」

姉に駆け寄ろうとした途端に行手を阻まれる。

「退けー!」

「ダメよ。若葉と三日月さん以外にはみんな死んでもらわなくちやい

けないんだもの。姉さんだつて例外じゃないわ」

初霜の妨害のせいで近付くことが出来ない。リミッターを外してからそれなりに時間が経っているせいか、最大の力が出なくなっているようだった。初霜は焦燥する私を見て、心底嬉しそうにしていた。「もしかしたら治療されるかもしれないし、ちゃんと殺しておかないとね」

さらには、また海面を爪先で叩いていた。胸を刺すだけでは飽き足らず、人間魚雷まで使つて完膚なきまでに殺そうとしている。それだけは絶対にさせない。

仲間がやられる中でも、特に酷く私の心を抉つた。立場から命に順列をつけているわけではない。だが、あの施設にいる私の唯一の実姉であることが、他の者よりも重くのし掛かっている。怒りが心の奥底から湯水の如く溢れ出る。

実の姉を刺し、ここまでしておいて、ニヤニヤしている初霜が許せなかった。いずれ死に至る傷を負わせておきながら、それを邪魔者と宣つたことが許せなかった。追い討ちに魚雷まで喉けさせようというその性根が許せなかった。

それを止められなかった無力な私自身が許せなかった。

力が欲しい。姉を救う力が。

力が欲しい。目の前の敵を討ち倒す力が。

「こんな目に遭いたくなかったら、大人しくついてきてくれると嬉しいわね」

初霜の声は私に届いていない。怒りに打ち震え、頭の中には負の感情しか湧き上がってこない。理性もブチブチと千切れていくような感覚。

こうなる前からあつた左腕の疼きがより強くなる。疼きは左腕から拡がり、胸や首、頬にまで伝達された。この感覚は覚えがある。痣が拡がる感覚だ。

痣と疼きが上にも下にも拡がる感覚。頬にまで伸びた痣はより上へ。胸にまで拡がった痣はより下へ。私の左半身を這い回るように伸び、ついには左眼の見え方が変わった。夜戦なのだからずっと暗が

りの戦いだつたが、ここまで戦えば目も慣れる。しかし、今の私は、左眼だけなら暗さを一切感じなかった。これが深海の眼。

今までかかっていたただけだつたであろう心臓への痣も、おそらく完全に包み込んだ。今の今までリミッターを外し続けているというのに、疲れが無くなつたかのように思える。まるで、無限にリミッターが外せるような錯覚を覚えた。

「私としては若葉を痛めつけるのは忍びないの。だから素直に」

初霜の声が、いい加減鬱陶しかった。

「ちよつと黙つてろ」

今までにないスピードが出た。気付けば初霜の顎に拳を叩き込んでいた。三日月ではないが、考えた瞬間その行動に移っており、それが終わっている。初霜を全力でぶん殴りたいと思つた時には、既に殴り終え、振り抜けていた。ナイフを使わなかつただけありがたいと思つてほしい。

私の拳で吹っ飛ばされた初霜は、その直線上にいた如月に直撃。運がいいのか悪いのか、三日月の援護にもなつたらしい。突然のことで、三日月を援護していた霞も驚いているようだった。

初霜はすぐには立ち上がつてこないだろう。その間にギリギリ残っている最後の理性で姉を救出する。同じスピードで姉に駆け寄り、抱き上げて、その場から離脱。艦装は邪魔ではあつたが苦にならない。

直後、私の真後ろで魚雷が爆発した。もう少し遅かつたら姉は海の藻屑となつていただろう。間に合つて本当によかつた。

「姉さん、すぐに治療してもらおう！」

「つぐ……わらわはもう……」

「諦めるな！ 飛鳥医師なら必ず治してくれる！」

血が抜けて朦朧としているためか、少し弱気な姉を諫める。生を諦めるな。足掻いてでも生きてくれ。こんな死に方は不憫過ぎる。

姉を施設に連れ帰ってくれる援軍が来てほしい。それにシロも大分危険な状態だつたはずだ。誰でもいいから早く来てくれと願う。だが待つている余裕はないので私自身で施設に向かおうとしたその

時だった。

「んだこりゃー！ どうなってやがる！」

ちようどいいところに摩耶が援軍で来てくれた。五航戦の空襲はこの場で一航戦がほぼ食い止めているため、施設で防空をする理由が無くなったのだろう。

施設に残っているのは飛鳥医師の護衛をするリコと鳥海、流れてくる艦載機を迎撃しているセス、あとは戦力としてはまだ難しい暁と、呂500。呂500はもしかしたら海中からこちらに来ていいるかもしれない。

「摩耶、いいところに来てくれた！ 姉さんが危険なんだ！」

「若葉……って、おい！ お前、その顔どうした！」

「そんなこと言ってる場合じゃない！ 姉さんが死にそうなんだ！ 早く施設に運んでくれ！」

私のことは今はどうでもいい。今にも命が潰えそうな姉を優先してもらわなければ困る。未だそこら中で人間魚雷が爆発しているため、早急にここから離れてもらいたい。

動き回れば命中精度は大分落ちるようだったが、頻度がとにかく酷かった。摩耶の真下からもキナ臭い匂いを感じたので、姉を抱えてもらいながらその場から離れるように退かせる。予想通り、いたその場所で大きな水柱が立った。

「つぶねえ！ 初春はアタシがすぐに運ぶ。若葉はまだ行くんだな？」

「当然だ。うちの出来の悪い妹にお仕置きしてやらないといけない」

「……クソ、当て付けに姉妹をぶつけてきやがったのか」

姉を摩耶に渡し、改めて初霜を見据える。私が顎を殴り付けたことでフラフラしているようだが、未だ健在。加減したわけではないが、無傷である。凶らずも初霜と如月の合流を許してしまったが、そんなことは関係ない。

「若葉……すまぬ……」

「姉さんは助かることだけを考えてればいい。死ぬなよ」

「わかっておる……足掻いてやるわ」

生きることを諦めないでくれてよかった。摩耶なら間に合わせてくれるだろう。これで心配が無くなった。

おそらく私はこの辺りで理性を手放したと思う。不殺は身に刻まれているため殺すことは無いだろうが、もう容赦出来るほど余裕が無い。相手が実の妹だろうが、今の私は止まらない。

「初春のことは任せろ！ 行け！」

「ああー！」

最初に向かったのは霰の方。姉と同じように霰の真後ろから現れる人間魚雷のキナ臭い匂いを感じ取ったことで、同じことをさせずに済む。

抱きつこうとした時にはそれを蹴り飛ばし、ついでに自爆装置も破壊。返り血をモロに浴びることになるが、全く気にならなかった。

「援護します」

初霜の時と同じように、人間魚雷が霰に抱きついた瞬間に2択を迫るつもりだっただろう如月に三日月は砲撃。如月を撃つていれば魚雷が爆発し、魚雷を処理していたら如月に霰が撃たれていた。

姉の時はその選択が不可能だったようなものだが、同じ轍は踏まない。第三者の私が介入したことで、選択そのものが無くなる。

「危ないわよ三日月ちゃん。私じゃなかったら当たってたわ」

ほぼ不意打ちに近い状態からでも如月は避け、霰に砲撃していたが、それに当たる霰では無い。私が人間魚雷を退かしたことでキツチり避けている。

如月はやはりこちらの行動を読んでいるのだろうか。あの瞬間でも三日月の砲撃を回避するだけの余裕がある。

「キサラギちゃん、こっちのめをみて、こうどうしてる」

霰からの忠告。なるほど、視線を見てこちらの行動を先読みしているわけか。私ならともかくと三日月が言ったのは、私なら目を瞑っていても匂いである程度は攻撃が出来るが、三日月は目で見たもので反応するからだ。まあ、もう知ったことではないが。

「若葉ちゃんのさつきのは何？」

「おそらく大淀さんの言っていた暴走です。想定内ですが、予想より

強」

「やかましいぞ初霜」

如月と話している余裕があるようなので、即座に接近し顔面を掴み、そしてそのまま後頭部から海面に叩き付けた。あちらが速く動けようが、こちらの方が速く動いてしまえば関係ない。

如月がどういう仕組みを使っているかはわかったが、そもそも追い付かれなければいいだけだ。

「つぎっ!？」

小さく悲鳴をあげたが関係ない。頭を潰しかねない程に強く掴みながら、そのまま持ち上げる。艀装を装備している艦娘1人を、今の私は何故か片手で持ち上げられた。力の出方が今までと違う。

ジタバタと暴れる初霜が鬱陶しいため、修復材ナイフで腹を斬り払った。

「っあああっ!？」

初霜の血がまともにかかるが、お構いなしにもう一度。どうせ治るのだから、何度斬ろうが問題無い。血だつて補填される。死なない場所を斬り続ければ、痛みは初霜を襲い続けるが身体は一切傷が付かない。服は斬れて肌が見えているが綺麗なものだ。

「この……っ」

「物騒なものは捨てろよ」

手に持つナイフで頭を掴む腕を刺そうとしてくるが、そんなことさせる前に拳銃で撃ち落とし、初霜自身を海面に叩き付ける。ジタバタもがき、私の脇腹を蹴ろうとしてきたが、そこも修復材ナイフで斬り裂き、無傷ながらも痛みで動かせなくしてやる。

これで初霜は武装が無くなった。私を模倣するために主砲すら置いてきているのが失敗だった。これで心置きなく痛めつけられる。

「続きだ」

もう一度頭を掴み上げ、持ち上げた状態で腹を斬る。その度に返り血が飛び、私をより真っ赤に染めていく。顔にもかかるが気にならない。

「ちよつと、初霜ちゃんを離しなさいな!」

「だめだよ」

「させません」

如月が私に主砲を向けたのはわかったが、それは霰と三日月が射軸をズラしてくれた。そして、その時点で私も行動を開始。匂いから如月の行動は手にとるようになる。

初霜の顔を掴んだまま海面を蹴り、如月の持つ主砲を蹴り飛ばした。そして、初霜を投げ飛ばし如月にぶつける。2人で共倒れになり、あちらはしっちゃんかめっちゃんかに。

「つたた……初霜ちゃん!」

「わ、若葉が、ここまで、とは……」

何度も腹を斬ったため、初霜はもう息も絶え絶えだ。何度斬ろうが身体は綺麗なものでも、激しい痛みにも襲われ続けているだろう。だが、姉の受けた痛みはそれだけでは治まらない。

今一度初霜の顔を掴み、如月の腹を蹴り付ける。如月も主砲を手放したため、武装は無い。いや、魚雷がまだ太腿に装備されているため、ナイフを使い手早く解体。

「かはっ!」

「まさかお前ら、こちらを殺しに来たのに自分が殺されないとか甘っちょろいこと考えてるんじゃないだろうな」

非武装となった如月の隣に初霜を投げ捨て、同じように脇腹を蹴った。メキリと嫌な音がしたが知ったことでは無い。

さんざん初霜の腹を搔つ捌いたことで浴びた返り血で、私は上から下まで真っ赤に染まり、おそらく酷いことになっている。踏み付けている私の姿を見た初霜が小さく悲鳴をあげたのを聞き逃さなかった。「怖いのか初霜。あれだけ息巻いたのに、いざ不利になるとそれかさっきの調子はどうした」

その髪を掴んで立ち上がらせる。既に戦意を喪失しているのか、ガタガタ震えていた。今までのこちらを見下していたような匂いから一転、私の姿を心底恐怖している匂いしかない。

自分が引き起こした事態だというのに、蓋を開ければこんなものだ。強い力を持ったところで、中身は虚勢を張り続ける張子の虎。

それを見たことで、手放した理性が戻ってきた。初霜はもう戦えない。足下の如月も同じように震えている。

「お前らは治療してやる。正気に戻ったら慰めてやる。姉さんも助かるからな」

だが、その瞬間にまたキナ臭い匂いがした。真下からこちらに向かってくるような嫌な感覚。ここで、以前に下呂大将から聞いたことを思い出す。

完成品は敗北すると自害する。

「如月お前はあー！」

恐怖しながらも、その手段を考えていたのだろう。戦意喪失し、もう勝てないと悟った瞬間、自ら命を絶つ手段として人間魚雷を選択したのだろう。自分に向けて使い、私や初霜諸共終わらせるつもりで。

そんなことさせるわけにはいかない。私は元より、誰も彼もが死んではいけないのだ。理性が戻ってきてくれたおかげで、全員を助けようと力が溢れ出た。

「我慢しろよー！」

人間魚雷の着弾点は如月本体。ならばと力の限り如月を蹴り飛ばした。その身体は宙を舞い、海面から離れる。そのまま私も初霜を掴んでその場から離脱した。

直後、今まで如月がいた場所が爆発した。

加賀の意地

敗北を悟り、人間魚雷による自爆を選択した如月を蹴り飛ばし、初霜を掴んだままその場から離脱した直後、その場所が爆発した。咄嗟の判断で全員の命は救われたが、まだ予断は許されない。初霜も如月も元々戦意を喪失していたが、今のことで気も失っている。如月に關しては思い切り蹴ってしまったから骨とかはやられてしまったが、死んでいないことは確認出来たので良し。

私、若葉は侵食が拡がったためか、リミッター解除の消耗が感じられなくなっていた。まだ戦える。未だに人間魚雷は海底から撃ち込まれている状況ではあるため、止まってはられない。

「つぐ……はああ……」

逆に三日月は限界が近かったか、少しだけでも一息つける状況になったため、リミッターを掛け直した。途端にボタボタと鼻血が溢れてきたようだが、まだ自力で動けるようである。私と姉が初霜と交戦している間に、あちらも激しい攻防があったようだ。

キナ臭い匂いは少しだけ遠退いている。今のうちに撤退してもらうのがいいだろう。三日月はこれ以上戦うのは危険だ。

「三日月、撤退しろ」

「若葉さん……その顔は……」

摩耶もそうだったが、やはり私の顔への侵食が気になるらしい。

頬までだった痣が左眼にまで伸びてしまい、マフラーでも隠しきれないほどに目立つようになってしまった。自分ではどうなっているかはわからないが、疼きの拡がり方からして、侵食が下から伸びたため、まるで泣いているかのような痣になっているのだと思う。

「その話は後からにしよう。今は」

「……姉さんと初霜さんは、私達が運んでおきます。霰さん、いいですか」

「いいよ、あられもはこぶ。わかばちゃん……きをつけてね」

気を失った初霜と如月は、三日月と霰に施設に運んでもらおう。三日月は体力的にもギリギリだと思うが、撤退ついでに2人を運んでも

らい、戦場から離してもらいたい。あのまま置いておいたら人間魚雷にやられてしまう。それは避けたいところだ。

私が初霜を痛めつけている裏側では、一航戦が五航戦と拮抗していた。特に赤城は、人間魚雷を避けながらも強烈な空襲を一切止めない。怒りと憎しみはより強くなり、艦載機の攻撃力も増しているようだった。背中に配備されている専属の浮き輪も、その激しい攻防に飛ばされないよう必死にしがみついている。

事実、赤城は周囲の憎しみすらも喰らっているように思えた。意思を消され、あろうことか人間魚雷として運用され命を散らされている人形達の怒りと憎しみは、全て赤城の力となっているようだった。

「本当にクズで助かるわ翔鶴。殺すことに抵抗が無いもの。わかるかしら、周りに貴女への怨嗟の音が渦巻いていることを」

「幻聴ですか？ 耄碌したものですね赤城さんは」

「ふふふ、墮落した貴女よりマシよ」

指をクルクル回しながら、空襲は最初よりも強くなる。勢いも密度もどんどん増し、翔鶴を押し潰さんと高度すら下げていく。

それに対する翔鶴も、何本もの矢を同時に撃ちつつ、至近弾は刃と なっている弓そのもので打ち払うことで回避していた。時間が経つほどに強くなっていく赤城と、それにも追いつくほどの実力者である翔鶴な戦いは苛烈を極めている。

一方、加賀は瑞鶴相手に苦戦を強いられている。赤城とは違い、加賀は治療を受けただけで普通の艦娘だ。その力が艦娘の中では最上級のものでも、敵はそれをさらに改造した完成品だ。1対1だと分が悪い。

こちらにも専属の浮き輪がついており、こちらは加賀の矢筒から矢をひっきりなしに渡しているサポート役。そのおかげで拮抗できるほどの速射を可能にしていた。

「加賀さん、大人しく死んでもらえないかな」

「お断りよ。私は貴女達に復讐するために生き延びたの」

「でも、そんな実力じゃ無理よ」

実際、加賀の航空戦力は並ではない。扱っているのは深海の艦載機であり、本来戦えないはずの夜でも当たり前のように発艦している。本来なら艦娘の性能を超えているはずなのだが、瑞鶴はそれすらもゆうに超えている。

それでも拮抗出来ているのは、加賀の一航戦としての技能故だろう。そもそも人形として育てられていたわけではなく、元々別の鎮守府に所属していたのだから、その時から鍛錬に鍛錬を重ねていたはずだ。

「……五航戦、貴女に言われる筋合いは無いわ」

「何故？ 弱い者を弱いと言って何が悪いのよ」

「私は力及ばないかもしれない。それでも、貴女より劣っていないと自負しているわ」

矢が艦載機に変わらず、矢のまま瑞鶴に突き進んだが、刃の弓で軽く払うだけでそれは回避されてしまう。

瑞鶴も翔鶴と同様の力を持ち合わせていると推測出来る。妙に冷静でいる分、瑞鶴の方が厄介かもしれない。

「慢心じゃないの？ 実力差もわからないで劣っていないなんて、自惚れにも程があるでしょ。しかも1対1で勝とうだなんて」

「なら、さっさと私を殺してみなさい。遊んでいるというなら、それこそ慢心よ」

「そうね。慢心は捨てるわ。アンタはさんざん痛めつけてから殺したかったけど、能書きばかり垂れる考えの古い先輩は、さっさと死んでもらうわよ。死に損ないなんだから」

矢を放つことをやめ、弓による近接戦闘に打って出た。そうになると加賀はさらに不利になるだろう。加賀には近接戦闘のための装備なんて持っているわけもない。

それでも、加賀は瑞鶴を挑発し、それをやらせるように仕向けた。何か策があるともいうのだろうか。

「あの時一緒に自爆しておけばよかったって、後悔しなさいよ」

猛烈な勢いで突っ込んでくる瑞鶴に矢を放つが、いとも簡単に弾かれ、海面へと落ちていく。もう矢では止められない。艦載機による射

撃も回避しながらの特攻。

空手の状態で加賀は迎え撃つことになってしまう。いくらある程度の徒手空拳が出来たとしても、今この状態でそれをやるのは不利すぎる。

「じゃあ死んでよ」

「お断りと言ったわ」

完全に近接の距離へと近付かれ、瑞鶴が刃の弓を振りかぶった。そのまま振り下ろせば、加賀は袈裟斬りにされて死ぬことになる。だが、その状況となっても、一切怯むことは無かった。

瞬間、海中から艦載機が1機、瑞鶴の顔面に向けて飛び出してきた。「っ!？」

「深海の艦載機の性能、調べられるだけ調べておいたわ。さすが深海製ね。まさか潜れるなんて思わなかったもの」

海中に潜ませるためか、爆撃も射撃もしない専用の艦載機であったが、予想外の場所からの牽制に完全に虚を衝かれた瑞鶴。どれだけ冷静であっても、今の瞬間だけは確実に動きが止まるタイミング。

その瞬間を見逃さず、加賀が弓を捨て、瑞鶴が弓を持つ手を無理矢理掴んだ。腕力だけで言うなら、完成品である瑞鶴といえど加賀とほぼ同等。弓を持つ手の加減から、朝霜のように改造はされていないと確信していた。そのため、これでも攻撃は止められる。

「愚か者は、さっさとここでくたばりなさい」

そして、浮き輪に渡された矢を、瑞鶴の肩に突き立てた。これで瑞鶴は腕が上がらなくなり、矢が放てなくなる。

はずだった。

「それくらいお見通しよ。わざわざ近付かせるなんて、弓兵がやることじゃないわ。何か奥の手を持つてるのは思ってたけど、こんなチャチなもんだったとはね」

瑞鶴が指をクルリと回すと、見覚えのある艦載機。空母棲姫と同じ艦載機と発艦方法。

その艦載機が加賀の矢での一撃を食い止め、悠々とその腕をもう片方の手で掴む。

「ほら、これで動けない」

「そうね。でもそれは、貴女もじゃなくて？」

お互いに両腕が使えない状態。前にも後ろにも行けない相撲の取り組みのような拮抗。瑞鶴が押し込めば、刃の弓により加賀は袈裟斬りになるため、それを耐えているような状況。

それでも加賀は涼しい顔をしていた。明らかに腕には限界ギリギリの力を込めているように見えるが、そんな必死さを表に出さない。ただただ冷ややかに瑞鶴を睨み付ける。

「どうせこのまま行けばアンタが力尽きるわよ。こっちが有利なのは変わらないわ」

「そう、ならそのまま押し込んでみなさい。出来ていないでしょう」

「……つくづく腹立つ先輩だわ」

瑞鶴の力がより増す。

前回の戦いとはまるで正反対な、声を荒げず常に冷静に判断する瑞鶴でも、この至近距離で加賀に煽られたことで少しだけ瓦解の兆しが見えた。自分が押しているはずなのに、表情一つ変えずにそれを受け加賀に対し、苛立ちが募ってきている。

「そう、貴女のその冷静さ、大淀に手を入れられたのね。外から弄られないと、すぐに熱くなる癖は治せなかったようね」

何かに気付いた加賀が呟くように言った。瑞鶴は頭の中を弄られることで今の冷静さを手に入れている。洗脳が出来る大淀なのだから、それくらいの感情制御も出来るということか。

「何か問題でも？」

「事あるごとにムキになってる貴女の方が、貴女らしくして私は好きよ」
敵意から一転した好意を突然ぶつけられ、一瞬混乱した。腕の力が緩むわけではないが、明らかに思考が一瞬おかしくなったのが見えた。

その隙を見逃す加賀ではない。逆に力を抜き、瑞鶴が前のめりになった瞬間に鳩尾に爪先をぶち込む。どれだけ改造されていようが、そこは簡単には鍛えられない急所。

「がっ……!?!」

「それに、私は一人で戦っているつもりは最初からないわ。ごめんなさいね」

そこに間髪入れず、加賀の背中から浮き輪が飛び出し、瑞鶴の弓を持つ手に加賀の矢を突き刺す。

最初からこれが狙いだっただ。航空戦で拮抗させ、挑発して接近戦を誘い、腕力勝負でジリジリとあちらに勝てる見込みを見せ、搦手で思考をバグらせ、全く別の方面からの一撃。これにより、嫌でも刃の弓を落とすことになる。

「いぎっつ!」

「この子は最初は私の監視者だったけど、今は協力者よ。ずっと私の戦いを手助けしていたことくらい、見ていてわからなかったかしら」トドメと言わんばかりに、先程牽制として海中から現れた非武装の艦載機が、瑞鶴の後頭部に落下してきた。当たり前だが艦載機はそれなりに重い。あんな一撃を受けたら、当たりどころが悪かったら死ぬまでである。

「この……!」

「これで弓は使えないでしょう。問題はもう片方のだけど」

ふらつく瑞鶴を蹴り飛ばし、浮き輪が拾ってきた弓を握り直し、即座に矢を放つ。

今まではアニマルセラピーに使われる他、雑務のお手伝い程度に収まっていた浮き輪が、ここに来て獅子奮迅の大活躍である。ある意味加賀は、本来の持ち主のセスよりも浮き輪を使いこなしていた。

「そんな簡単にやられるか」

対応してすかさず指を回し、艦載機を一齐に発艦。この後に及んでも、瑞鶴の方が航空戦力は大きい。

「これ以上はやめなさい。それ、身体に負担がかかるんでしよう」

しかし、この艦載機を使い始めてから瑞鶴の表情が明らかに歪んだ。これだけの艦載機を使えるのに使ってこなかったのは、自分の身体への負担が大きいからだっただろう。この力もおそらく後付け。身体に嫌でも負担がかかる。

それでも瑞鶴は加賀の忠告を無視して攻撃を始める。冷静な表情

でも、目の前の加賀には相当苛ついている。冷静な判断をして結果が、無理をしても押し潰そうという考えに至っていた。

「忠告される謂れは無いわ。これだけあれば、アンタは押し潰せる。もう回避もさせない」

「……そう。なら……かかってきなさい、瑞鶴！」

そこからは猛烈な撃ち合いだった。瑞鶴の言う通り、回避すらままならないほどの密度の空爆。範囲攻撃を一点に集中させたかのような爆撃の嵐。前後にも左右にも進めない加賀は、自らの艦載機を真上に発艦し、どうにかやり過ごす。

しかしそれだけでは足りない。隙間から抜けてくる爆撃が加賀の身体を焼き、射撃が身体を掠める。痛々しい姿になっていくが、加賀はその凜とした表情をやめず、瑞鶴を見据えて発艦を続ける。

「そのツラで見るのやめてくれない？ そんなにボロボロで何余裕ぶってるのよ」

「……哀れね」

徐々に加賀が押し返していく。ボロボロでも、力に差があつたとしても、加賀は一切諦めていない。

「殺す気も失せるほどに貴女は哀れね。ちゃんと先生の治療を受けて更生しなさい。あの人なら貴女をちゃんと元に戻してくれるわ」

ゆつくりと、ゆつくりと、状況を押し返し、劣勢が拮抗へ、拮抗が優勢へ、そして。

「っあ……」

先に瑞鶴の限界が訪れた。身体に負荷のかかる空母棲姫式の発艦は、如何に完成品であつても耐え切れなかつた。元々そのように身体が出来ていないのだから、後付けのそれは身体を散々に蝕むのみ。

「終わりよ」

「アンタがね……！」

最後の最後。瑞鶴の艦載機が尽きたという辺りで、加賀の足下からキナ臭い匂い。ここで人間魚雷。

この時にはちょうど私は戦闘を終えている。その匂いを感じ取り、大急ぎで加賀に突っ込み、爆発前にその場から退去させた。直後、加

賀の立っていた場所で大きな水柱が立った。

「大丈夫か！」

「ええ、ありがとう若葉。貴女に助けられるのは2回目ね」

ギリギリ間に合ってくれた。初霜と如月に粘られていたなら、加賀を助けることは出来なかったかもしれない。

「若葉……！」

「瑞鶴は加賀に任せる」

「ええ、任せてちょうだい」

睨まれたが瑞鶴はもう虫の息だろう。加賀もかなり厳しい状況ではあるが、まだ目が諦めていなかったため、任せることにした。私はここで戦う理由が無い。

完成品4人との戦いは佳境へ。決着の時は近い。

憎悪の行方

私、若葉が初霜と如月を、そして加賀が瑞鶴を破り、残ったのは失敗作の戦艦隊と翔鶴となった。その翔鶴は、赤城がたった1人で抑え込んでいる。

周囲に蔓延する人間魚雷達の怨嗟の声を聞きながら、その憎しみを一手に引き受け、時間が経つにつれて増していく力をフルで使い、翔鶴を追い込んでいった。

「最初の威勢は何処にいったの？ ゴミでも見るように私を見ていた目はどうしたの？ 自分以外が全て弱者と言わんばかりの顔はしなくもいいの？」

飄々と、それでいて意地の悪い笑みを浮かべて、空襲をさらに激しくしていく赤城。膨れ上がる憎しみを発散するように艦載機を飛ばし、逃げ場すら無くしていく。

対する翔鶴は、赤城の言う通り最初の威勢は何処へやら、回避に必死だった。最初から対策を取ったシロクロを撃退し、私や三日月に当て付けのように姉妹をあてがい、シロクロがない状態では対処も難しい戦艦隊を喚びてきたにもかかわらず、自分が追い詰められている状況が気に入らないようだ。

その全ては赤城の存在。新戦力は想定内でも、ここまでのものがないとは予想していなかったらしい。

ならばそれは慢心以外の何物でもないだろう。

「貴女は貴女が殺した者に殺されるの。本当ならこの手で縊り殺したくらいだけど、近付いたら何されるかわからないもの。優位を維持して、このまま押し潰すわ。ジワジワ殺してあげる」

「誰が死ぬものですか。赤城さんこそ2度目の死を覚悟した方がいいのでは？」

「それだけの減らず口が叩けるのなら充分ね」

この戦いの最中でも、人間魚雷は次々と赤城に向かってきている。何度か直撃しているものの、赤城の艦装はまだ破壊されていない。ただ、ぶつかった衝撃を受ける度に、赤城の笑みが一瞬消える。

今の赤城には、ぶつかり爆発し命を散らした瞬間の人間魚雷の憎しみが手に取るようにわかるのだろう。それを喰らい、力に変え、翔鶴にぶつける。

「仕方ないですね。戦艦隊、半数こちらへ来なさい」

未だ9人残っていた戦艦隊の半分、4人が翔鶴の下へ。翔鶴の方が赤城を物量で押し潰そうという算段のようである。

如何に周囲の怨念を喰らって強化されているとしても、あの超火力の戦艦4人に囲まれ、さらには翔鶴の空襲にも巻き込まれたら危険だろう。どうせ翔鶴は赤城に接近した戦艦諸共爆撃するだろうし。そもそも戦艦達が自らの身を顧みずに主砲を放つまでである。それはよろしくない。

「手段を選ばないのね。本当に哀れな子」

「好きに言えばいいです。貴女を生かしておく方が、これからの損害に繋がるでしょう。手段は選んでいられませんよ」

曙達の方から向かってきた戦艦4人が赤城を囲む。予想通り、四方からの主砲で片付けるつもりのようなのだ。同時に放つたら、その対面にいる味方の戦艦も当然薙ぎ払うことになる。

赤城を殺すために4人の命を使おうとしているわけだ。翔鶴はその砲撃の衝撃すら受けない場所にいるというのに。

「若葉、行って」

「ああ、瑞鶴は加賀に任せる」

加賀を人間魚雷から救出した直後の私は、もう限界が近く虫の息な瑞鶴のことは、ボロボロではあるがまだ動ける加賀に任せ、今度は赤城の救援に向かう。

翔鶴は赤城に視線を向けており、戦艦は翔鶴の命令を聞き赤城に集中している。おそらく誰もが私のことはおろか、瑞鶴がやられたことも見えていない。

また翔鶴は他人の命で窮地を脱しようとしている。前回は撤退のため。今回はたった1人の強敵を倒すため。それが許せない。

「っしっ！」

息を短く吐き、戦艦の1人に突撃。出来ることは艤装と自爆装置の

破壊だ。出来る限り手早く、誰にも追いつかれないように、まずは自爆装置を破壊する。主砲を撃たずその場で自爆されるだけでも、赤城は酷い目に遭う。それを防ぎたい。

身体が嵐のように速く動いた。1人の腹を搔つ捌き、次へ向かいまた搔つ捌きと繰り返し、瞬時に4人の自爆装置を破壊することが出来た。たった1人を追い詰めるために使われているためか、複数人での連携が無い。おかげで処理が簡単だった。これが4人纏まってだと厳しかったかもしれない。

「援護するぞ」

「ありがとう若葉さん。これは少しピンチだったわ」

翔鶴に向けるものとはまるで違う、慈愛に満ちた笑みを向けられた。これが本来の赤城なのだろう。ただし、外見は空母棲姫なのだから若干違和感はあるが。

私が切り裂いたことで、戦艦4人は一瞬怯んだ。主砲を撃つタイミングが少しだけでも失われれば、私も赤城も反応出来る。

私は即座に目の前の戦艦の艦装を破壊。赤城は艦載機をいくつつか喉け、その主砲の砲口に爆撃を仕掛けることにより、それを破壊した。身近で破壊されたことで身体に傷がついてしまった者もいるが、死んでいないのなら安いものだ。

「これで撃てないわね。戦艦は木偶の坊。翔鶴、貴女は何がしたかったのかしら」

「それで終わるわけじゃないでしょう」

ここで足下からキナ臭い匂い。先程と同じで、海中から人間魚雷が突っ込んでくる。

今までは食らっていたとしても赤城はそこまで傷がついていなかったが、今回はまずい。自爆装置は破壊したものの、体内にそのまま残してある火薬に引火したら、装置を破壊した意味が無くなってしまふ。

「赤城！ 魚雷だ！」

「まったく、本当に……」

呆れたような表情で艦装を滑らせ、殺しかねない勢いで3人轢き、

人間魚雷との誘爆を防いだ。私も残った1人を蹴り飛ばし、魚雷の爆発の外へ弾き出す。これにより戦艦4人は戦闘不能。赤城が轢いた3人は死んではいないものの重傷ではある。治療出来る範囲だ。

直後、赤城の艦装の真下で爆発。同じところに何発か貫っているためか、衝撃を受けた直後に少し嫌な音がした。ついにガタが来たようである。

「ようやくダメージが入りましたね。まったく、何人使えばいいんですか」

「それだけ犠牲者を出しておいて生き残れないだなんて、何て哀れな艦娘なのかしら。1人じゃ勝てないから何人もの命を使っているのに無駄死にさせて」

また赤城の力が増えたように思えた。赤城から湧き立つ怒りと憎しみの匂いは、もう嗅ぎたくないほどに濃厚で強烈になっている。以前に姉やシロが表現したように、混沌とした匂いと化していた。

あれほどの怨念を扱っているのに、正気を保っていられる赤城が恐ろしい。最初から理性を失っているからこそ耐えられる代物なのだろうか。私なら到底耐えられず、今以上に侵食が拡がっているだろう。

「そろそろ若葉も気に食わない」

「気に食わなくて結構。貴女が抵抗せずに私達についてきてくれれば、こんなにも犠牲者が出なくて済んだんですよ」

「……人間魚雷の連中が死んだのは若葉のせいだとも言うのか」

「要因としては浅くないのでは？」

簡単に理性の籬が外れた。一度外れやすくなったそれは、簡単なきっかけですぐに外れる。侵食が拡がった影響でもあるかもしれない。

「それに、赤城さんも耐えるから被害者が増え」

「黙れ」

海面を一蹴りしただけで翔鶴が眼前にいた。戦艦を処理する時よりもスピードが出た。

初霜の時と同じように握り潰すくらいの力で顔面を掴み、海面に叩

きつける。相手が空母であろうが関係ない。身長差で姿勢は悪くなるが、知ったことではない。

「そもそもお前が指示しなければ誰も死ななかつただろう。罪をこちらに擦りつけるな」

咄嗟に刃の弓を振るい私を排除しようとしてきたが、その弓を持つ手を拳銃で撃ち抜いた。こいつには傷が付く付かないは関係ない。私の怒りと憎しみも増大する。

「つぐ!?!」

「お前は一度と弓を握るな」

姉を傷付けた初霜よりもタチが悪い。冗談でも言つて良いことと悪いことがある。こいつは他人の命を踏み躪り続けている。

ならば、同じ痛みを受けてもらおう。ただし殺さない。今まで死んできた何人分もの痛みを。

そして私は、翔鶴の腹を斬り裂いた。

「つあああつ!?!」

「どうせ死なない」

痛みだけ与えて身体は傷付かず、死ぬこともない。こんなにも都合のいい武器があると、いくらでも刃を振るえる。再び返り血を浴びるが、もう気にもならなかった。

「この……っ!」

海中で指を回したのが見えた。こちらも空母棲姫の発艦が出来るらしい。瑞鶴は負荷が高過ぎて最終的には限界が訪れたが、翔鶴はどうだろうか。

「下手なことをしないでもらえないか」

掴んでいる顔面を持ち上げ、もう一度海面に叩きつける。さらに引き揚げ、もう一度。初霜よりは重いが、出来ないことはないので何度も何度も何度も。

先程発艦した艦載機は、赤城が撃墜していてくれた。私にはまったく被害はない。戦艦の包囲も無くなったため、赤城も悠々とこちらに近付いてくる。やはり先程の一撃で艤装にガタが来たらしく、航行速度が少し遅くなっていた。まだ人間魚雷の脅威は去っていないため、

撤退してもらいたいくらいなのだが、赤城にそんなつもりは毛頭無いだろう。

「若葉さん、そろそろ私に貰えますか？」

「……お前はこいつを殺すんだろ。ならダメだ」

話しながらも翔鶴を持ち上げ、もう一度腹を斬り裂く。もう翔鶴からは抵抗の意思すら見えず、私が斬ってもビクンと振るえるだけで悲鳴すらあげない。

だが、私にはわかっている。反撃の機会を窺っていることくらい、匂いでわかる。こいつはまだ、他人の命を弄ぶことをやめていない。「いやいや、そこまでしておいて殺さない理由は無いでしょう。それに、私の中の憎しみは膨れ上がる一方なんですよ。翔鶴が死ねば、その憎しみは晴らされるんです」

「こんなクズでも命は助ける。それがうちのやり方だ。洗脳を解けば罪の意識に押し潰されるだろう」

「それじゃ収まりがつかないんですよ私達は。命を弄んだ者の末路は死しかないんです。とびきり残酷な、今までの行ないを後悔するほどの」

私と赤城が口論している中、今だと言わんばかりに翔鶴が指を回した。何処にそんな力が残されていたのか、大量の艦載機が発艦し、私達を襲った。

「ほら、その子は全く反省の兆しが無い。洗脳を解いたくらいでこの罪が無くなると思いますか？ 私もそうですけど、もう血に塗れた手は綺麗にはならないんです。真っ白な絵具に黒が一滴でも入れば、白には戻らないでしょう」

「それを支え合って生きているのが若葉達だ。完成品は何人でもいる。ちゃんと更生しているんだ。このクズでもやり直せる機会を、飛鳥医師なら作ってくれる」

艦載機は赤城が再び撃墜していく。私も爆撃に当たらないように、翔鶴を引きずりながら回避行動。

だが、この期に及んで翔鶴は最後の抵抗に打って出た。隙を見せたわけではないが、私の脇腹を思い切り蹴り、拘束から逃れようとして

きた。悪意に満ち溢れ過ぎて、今の攻撃のタイミングは匂いから読めなかった。

「っ……………」

「いい加減、離してもらえませんか」

その衝撃で拘束が若干緩んでしまった。そのため、再度腹を蹴られ、引き剥がされる。

脚も斬っておけばよかった。初霜の時にはやっておいたのに、最初に抵抗が無かったから、そちらに気が回らなかった。

「なんて残酷な……………っつ……………今回は撤退しますよ」

「逃がすと思っているのか……………っ!？」

改めて翔鶴を捕らえようとしたその時だった。

強烈な頭痛、左腕を中心とした猛烈な痛みと痺れ。急速に力が抜けていくような感覚。目まで霞んできた。脚に力が入らず、その場に立っていることも辛くなり、膝をついてしまう。代わりに捨てた理性が戻ってきていた。そのせいで余計に痛みが強く感じる。

「つが、あつ、ぎつ……………!？」

「おや、若葉さんにはやっぱり時間切れがあったようですね。比較的運が向いていない方の私にも、いいところで運が向いてきたようです」

今までこれだけの力を発揮し続けてきたのだ。リミッターを外し続けるだなんて芸当、本来なら出来るはずが無い。それが今まで以上の出力を出していたのだから、ここまで保っただけでも充分すぎるのだと思う。

だが、このタイミングで終わるのはダメだ。翔鶴をみすみす逃がすことになってしまう。2度も逃がすだなんて絶対にダメだ。赤城の情報まで持ち帰られたら、今度こそ勝ち目が無くなる。

「逃がすわけないでしょう」

赤城の行動を止めることも出来ない。このままではダメだとわかってはいるのに、身体が動いてくれない。

「艀装にもガタが来ているんじゃないですか？ それに」

「黙りなさい」

赤城の艦載機の1機が、翔鶴の脚を撃ち抜いた。私から離れたことでそれが可能になったのだろう。私が接近戦を仕掛けていたために赤城も自重していてくれたみたいだが、ここに来て私が時間切れになってしまったため、赤城を縛るものが無くなってしまった。

「っあ!？」

「これで貴女も動けない。さあ、お楽しみ時間です」

ガタが来た艦装でゆつくりと近付くが、翔鶴は何も出来ない。指を回して艦載機を発艦するが、それはことごとく赤城の艦載機に墜とされる。

そして、赤城は翔鶴の眼前へと迫り着いた。止めなくてはいけないのに、身体が動いてくれない。それは本当にやってはいけないことだ。

「私の中に集約した、皆の怒りと憎しみを晴らす時が、ついに来ました」

翔鶴の首を掴み、持ち上げる。魚雷の危険性すら加味して、わざわざ艦装の上にもで担ぎ上げ、そこで立ち上がった。まるで斬首台。全員にその死を見せつけるように晒す。

「それでは、死刑執行です。翔鶴、これで終わりよ」

満面の笑みで赤城は翔鶴に呟いた。

このままでは本当に赤城は翔鶴を殺してしまう。

身体が動かない。止めたいのに止められない。

鶴墮ちる海

残された最後の完成品、翔鶴を追い詰めた。しかし、私、若葉は最悪のタイミングでリミッターを外し続けてきた代償を支払うことになってしまった。強烈な頭痛、左腕を中心とした猛烈な痛みと痺れ、急速に力が抜けていくような感覚により、その場から動けなくなってしまう。

それにより、翔鶴の撤退を許しそうになった矢先、私というストツパーを失った赤城が翔鶴の脚を撃ち抜き、動けなくする。そして、自らの艦装の上にもで持ち上げ、処刑をしようと笑みを浮かべた。

「それでは、死刑執行です。翔鶴、これで終わりよ」

このままでは本当に赤城は翔鶴を殺してしまう。なのに身体が動かない。止めたいのに止められない。

翔鶴の首を、骨を折らんばかりに絞め上げる。すぐには終わらせない辺り、その深すぎる憎しみがよくわかる。

骨が折れば死は免れず、そうならなくても窒息で死ぬ。赤城としてはどちらでも良かったのだろうが、翔鶴としてはどちらにしろ長く苦しむことになる。

「っあ……かつ……っ!？」

「苦しんで死になさい。私達の怒り、苦しみ、憎しみを、最期の時まで思い知りなさい」

怒りと憎しみに加え、殺意が恐ろしいほどの匂いになっていた。あちら側の者からも、ここまでの匂いは感じたことはない。いくら殺したくても、ここまでの殺意になるのはやはりおかしかった。

おそらく、この戦場で散っていった者達の怨念を軒並み喰らい尽くした結果なのだろう。赤城は常に、自分の怨念を『私達』と複数形で表現している。この戦いで次々と増えていく怨念を全て背負い、それを翔鶴にぶつけているのだ。

「やめろ……赤城……本当の敵は大淀だ……!」

「ええ、わかってます。でも、私達は翔鶴の指示で死にました。それなら、まずはこの子が死ぬのが道理では？」

わかっていても尚、自分達を殺した翔鶴への憎しみが強すぎる。

ここで、赤城の艦装に必死に掴まっていた浮き輪が赤城の身体を駆け上がり、翔鶴の首を掴む手を解こうとしていた。今までは振り回されていたが、今は赤城もその場に静止している。止めるなら今しかないだろう。

「……浮き輪さん、邪魔しないでもらえますか」

もう片方の手で摘み上げ、優しく放り投げられた。その浮き輪は立ち上がることが出来ない私の肩に着地した後、再度アタックを仕掛ける。

この赤城には殺しをしてもらいたくない。後から絶対に後悔する。空母棲姫であつても、赤城でもあるのだ。私達に向けた笑みは偽物ではない。今が憎しみの権化だとしてもだ。

「加賀さんは支持してくれませよね？」

これ以上の艦載機発艦を阻止するため瑞鶴の腕を取り押さえているが、ボロボロ故に未だ戦場から撤退出来ないでいた加賀にも問うた。

加賀は恨みのある瑞鶴を生かして更生させようとしている。口では殺す気が失せるほど哀れだと言うが、艦娘としての理性と本能が、仲間を殺すことを躊躇させたのだと思う。

「私は……」

「加賀さんも、若葉さんに救われなければ私達と同じように自爆させられていました。そして、私の中で憎しみを募らせることになってたでしょう。ならば、思いは同じだと思いますが」

戦いの前に加賀も、特に翔鶴は許せないと話していた。赤城と同調してもおかしくないだろう。だが、今の加賀は赤城の問いかけに何も返せない。元凶の一端である瑞鶴を殺していないのだから。

取り押さえられている瑞鶴も黙ったままだが、代わりに赤城のことをこれでもかと言うほど睨み付けている。姉が目の前で殺されるかもしれない状況に、感情が制御されていたとしても怒りを滾らせるのに充分である。

しかし、ここで状況に暗雲が立ち込める。翔鶴からの匂いに変質し

た。

「待て……翔鶴の様子がおかしい……!」

「……まだ何か隠しているの?」

赤城も加賀も、瑞鶴すらもそれには気付いていない。匂いで相手の感情がわかるのは私だけだ。浮き輪も何か勘付いたか、赤城の手を必死に解こうと頑張る。

「つ……赤城! すぐにその手を離せ!」

翔鶴から湧き立つ匂いは、感じたことのないような負の感情の本流。死の寸前に追い込まれたことで、さまざまな感情が絢交ぜとなつて表に出てきていた。

赤城に敗北したことへの怒り、この状況に置かれている焦り、何故こんな目に遭わなくてはいけないという悲しみ、ほとんど八つ当たりに近い憎しみ。そこに、翔鶴に埋め込まれたキューブの怨念までも混ざり合い、そこへ本当に死んでしまうという最上級の負の感情、死の恐怖が加えられた。

怒りと憎しみだけでも私は深海の侵食を払ってしまっているというのに、それ以上のものが生まれてしまったことで、完成品である翔鶴をさらに変質させようとしている。

飛鳥医師は深海の細胞を癌のようだと例えていたが、この翔鶴の負の感情、特に死の恐怖により、全身へ急速に転移してしまっているのだろう。窒息の苦しみでもなく、首への痛みでもない反応で、ビクンビクンと震えだした。表情も恍惚としているような、何処かおかしいものに。

「離すくらいなら、今すぐ殺しますよ!」

首を絞めるだけでは飽き足らず、鋭利な爪でその胸を貫こうとした。胸当てがあるがそれごと破壊してしまおうと。

だが、その攻撃は翔鶴に止められた。私が弓を握らせないように撃ち抜いたはずの手で。首を絞めているにもかかわらず、赤城の手はそれ以上進まない。

「何処にこんな力を……ならばその首を!」

「カツ……ハアツ……ツ……!」

首を掴む手ももう片方の手で掴んだ。赤城の腕は手甲に包まれているが、それを握り潰すような力で捻り上げ、拘束を解いていく。完全におかしいと思ったところで、大きく見開いた翔鶴の瞳が赤く染まった。途端に、完成品なら誰でも持つている深海棲艦の匂いが異常に増加。今までの比ではない程にまで膨れ上がり、混ざり合っている艦娘の匂いが消えていくようでもあった。

「ぐっ……」

「……アハ……」

とうとう首を絞める赤城の手甲が破壊され、その強烈な握力により赤城が翔鶴の首を手放してしまう。支えが無くなった翔鶴の身体はそのまま海へと吸い込まれていくように落ちていった。その間もビクンビクンと身体を震わせ、まるで全身に転移する深海の細胞により、身体そのものを書き換えられているような得体の知れなさを醸し出していた。

「な、なんだ……今のは……おかしい、確実におかしい。赤城、お前が何かしたのか」

「そんなわけではないでしょう。私が出るのは殺すことだけ」

破壊された手甲を撫でた後、翔鶴が落ちていった海を覗き見る。海中故に匂いも感じない。中で何が起きているかはわからない。少なくとも翔鶴は生きていることはわかる。

まるで翔鶴が深海棲艦そのものになっていくような錯覚に囚われた。死んだことで怨念が集まった赤城とは違う、艦娘がそのまま深海棲艦に変質していくような、そんなイメージ。私や三日月とはまた違った侵食にも見えた。

「逃がしたのは気に入らないけれど、この場にいないのなら残った戦艦の子達を処理して施設へ……んん？」

「どうした」

「私がきつき轢いた子達は何処に行ったの」

言われてみれば。赤城を集中砲火するために四方を囲んだ失敗作の戦艦が、忽然と姿を消していた。匂いすらない。

3人は赤城が艦装で轢き、残りの1人は私が蹴り飛ばしたが、4人

とも武装を破壊していたものの生きていたはずだ。この戦いが終わった後で回収し、治療してもらうつもりだったが、何処に消えてしまったのだろうか。

「……まさか」

改めて翔鶴が沈んでいった海面を見る。

その瞬間、海中から尋常ではない数の艦載機が飛び出してきた。

「なっ、こ、これは……っ!?」

「深海の艦載機……!」

どちらかといえば、今の赤城が扱っている艦載機と近い。空中停止や後退などの普通ではない挙動をする謎の機体。翔鶴も瑞鶴も、指を回して発艦させていたものがこれと同じものだったが、こんなに数は無かった。

これを使ってくる者なんて、どう考えても今沈んでいった翔鶴だ。先程まで瀕死の状態であったが、最後の最後にあの匂い。最悪な想像が頭をよぎる。

「赤城、艦装は!」

「まだ動きます。少しガタが来ているけれど、戦うことは出来るわ」

「加賀は!」

「艦装は大丈夫だけれど、戦闘を続けるのは厳しいわ。瑞鶴を連れて撤退する」

私は少し休んだおかげで、移動することくらいは出来そうだ。頭痛も酷いし、身体がギシギシ言っているのもわかるが、このままだとうにもならない。

そうこうしている内に、何者かが浮上してくる感覚。キナ臭い匂いとはまた違う、恐怖を掻き立てるような嫌な感覚。

その時、私の手は震えていた。

「来る、何かが、来る……!」

浮上してくるものは確実に翔鶴ではない。質量が違う。奴の艦装はあんなに大きくない。まるで赤城の駆る艦装のようなサイズのそれが、猛烈なスピードで海上に向かってきた。

「若葉さん、乗りなさい!」

「すまないー！」

身体に鞭を打って赤城の艦装に乗せてもらい、その場から離れた瞬間、巨大な艦装がその場を破壊し尽くすような勢いで飛び出してきた。そこにいたら直撃しており、赤城の艦装のように前方にある大きな口に食らいつかれ即死だった。あれだけの人間魚雷を受け続けた赤城の艦装でもひとたまりもないだろう。

その艦装に乗っていた深海棲艦が指を回すと、飛び出してきた艦載機が一斉に整列。それを守るように周囲を飛び交う。

「……そんなことつてあるのかしら……これもあの大淀の仕業だと言うの？」

「こんなことは初めてだ。完成品が深海棲艦に変化するだなんて」

艦装に乗っていたのは、紛れもなく翔鶴だ。だが、沈む前と今ではあまりにも雰囲気が変わっていた。艦装は当然として、着ている服は今までの弓道着でも無ければ、身に付けているアクセサリーの類も違う。面影を残しているだけの別人にも見える。

だが、奴が翔鶴であることを匂いが示していた。何も変わっていない。完成品の時からの匂いが何も消えていない。だが、体内にあるであろう完成品の証、キューブの匂いは消えていた。あんなったことで取り込んでしまったのかもしれない。

それともう一つ。先程までいた失敗作の匂いも今の翔鶴から僅かにした。この深海棲艦化に際し……いや、それについて考えるのは今はよしておく。今にも吐き気がしそうだ。

「な、なによ……あれ……」

今まで押し黙っていた瑞鶴も、あまりのことに口を開いた。翔鶴の異常な変貌は、同じ完成品でも聞かされていなかったことのようにである。

「フ、フフ、ハハハハハ！」

高笑いしながら艦載機を操り、こちらへ猛攻を仕掛けてきた。消耗した状態であれを受け切るのは厳しい。私が動けるようなら、あの群れを掻い潜り近接戦闘に持ち込むのだが、もう赤城の艦装から振り落とされないようにするだけでも必死なくらいに消耗している。体勢

が崩れるのを浮き輪に支えてもらっているレベル。

あれだけ痛め付けられていたというのに、今の翔鶴は無傷だ。私が撃ち抜いた手も、赤城が撃ち抜いた脚も、綺麗に治ってしまったている。完全に生まれ変わったと言っても過言ではない。

「アカギサン、コンドハアナタガニゲルノ？　ワタシニアレダケノタマツタノニ！」

「元気になったら調子が戻ったようね翔鶴」

「スキニエバイイワ！　ワタシハアナタヲコロシタクテシカタナイノヨ！」

赤城が翔鶴を徹底的に狙ったように、翔鶴も赤城を徹底的に狙っていた。ああなってしまった原因は全て赤城にあると翔鶴は思っているのだろう。その大部分は逆恨みではあるが、事実お互いに殺意があったし、赤城が苦しめた結果で負の感情が異常に高まったのは間違いないではない。

なんて不毛な復讐の連鎖。だが、お互いに収まりがつかないのだから、これは止められない。

「ワタシヲコンナニシタ、イカリ、ウラミ、ニクシミ！　ゼンブゼンブ、アナタガクレタ！　ダカラ、ワタシハアナタヲコロスノ！」

「奇遇ね。私も全く同じ気持ち。誇りを穢された怒り、恨み、憎しみ、全て貴女のせい。だから、私は貴女を殺したい」

お互いに殺意をぶつけ合い、艦載機による激しい航空戦が繰り広げられていた。低空飛行での爆撃と射撃は、周りにも甚大な被害を与えていった。

私は赤城の艦装に乗せてもらっているおかげでなんとか耐えているものの、その戦闘の激しさや否や、近場にいた加賀と瑞鶴にも届いてしまう。加賀はボロボロなだけだが、瑞鶴は本当に虫の息。私と同じくらいに消耗してしまっているため、今は敵対しているとしても、加賀が引きずるようにその場から撤退している。

「離しなさいよ。敵に情けをかけられるほど落ちぶれてないわ」

「やかましいわよ五航戦……！　死んだら元も子もないけど、生きてたらやり直せるのよ……！　私は貴女を殺したかったけど、考えを変

えたわ……貴女は生きて償いなさい……！」

「……よく喋る一航戦だこと」

洗脳されているのに、瑞鶴はもう大人しく加賀の言うことを聞いているほどである。動けないのだから諦めているというのもあるかもしれないが、姉の変貌を目の当たりにしてショックを受けているように見える。

翔鶴の変貌はあまりにもイレギュラー。緊急事態に戦場はより混沌に包まれる。

憎しみの連鎖

赤城に追い詰められ死の寸前となったことにより、どういうわけか深海棲艦へと変化してしまった翔鶴。今まで与えたダメージは全て回復し、艦装も新たに得ており、今まで以上の力まで手に入れてしまっている。

それと相對するは、翔鶴への憎しみを一手に引き受け、怨念を喰らい強化され続ける赤城。人間魚雷のせいで艦装はかなりダメージを受けているが、まだ戦闘が可能である。

私、若葉は侵食拡大によるリミッター解除続行の限界が訪れ、多少動けはするものの戦闘などとてもではないが出来ない状態まで追い込まれていた。自力での退避が困難なために赤城の艦装に乗せてもらっているが、2人の激しい航空戦の真っ只中にいるようなものため気が気でない。

「ッハハハハ！ ハヤク、ハヤクシンデ、アカギサン！ ワタシノウラミヲウケトツテ！」

「貴女こそ、もう眠ってもいいんじゃないかしら。私達の憎しみを晴らしたいのだけど」

艦載機同士が衝突し、射撃で相打ちしながら墜落し、すり抜けたと思えば即座に別のものに墜とされる。それを至近距離で繰り出しているのだから恐ろしい。

艦載機の数だけで言えば翔鶴の方に分がある。だが、赤城の方が練度が高く見えた。質より量の翔鶴と、量より質の赤城。これにより、航空戦は拮抗を維持し続けている。

「アハッ、チョコセツ、イクワー」

空爆を避けるため、お互い追って追われての広域戦闘。本体そのものでも攻撃が出来るのか、体当たりまで仕掛けてきた。そうになると、艦装にガタが来ている赤城の方が不利。あちらは新品同様のため、硬さも段違いである。赤城から行くことは無いが、翔鶴は頻繁にしてくる。さすがの赤城も、それにぶつかってやるほどお人好しではなく、キツチリと回避。

「サケルノ？ ナゼ？ サツキノイセイハドウシタノ？」

「厄介ね……こちらが不利な部分を把握されているのは」

戦闘は猛烈な速さで行なわれているため、周りのことなど一切気にしていない。そのため、翔鶴の体当たりは、失敗作と対峙する曙達の場所にまで流れていく。

この時間で残っていた5人のうち2人は処理できていたようだが、まだ3人とは必死に交戦している状態。

「ちよつ、回避回避！」

あの質量のものに体当たりされては、誰もがひとたまりもない。最初に気付いた曙の叫びと共に、全員一斉に散開。処理されて倒れていた失敗作達はまともに轢かれてしまい、そのまま沈んでしまった。

曙達にも翔鶴を止めることに参加して欲しかったが、意思を持たない存命の失敗作達は翔鶴の暴走を気にも留めずに戦闘をしており、合間合間に航空戦の流れ弾も飛んでくるせいで、戦場はしっちゃんかめっちゃやかに。誰もが手が離せない状況に陥っている。

幸い、こんな状態になってから人間魚雷が静かになつてくれたのはありがたかった。こちらにまで気を回してられない。

「ちよつと若葉！ あれどういふことなのよ！ ってかアンタそれどうしたわけ!？」

「翔鶴が深海棲艦化した！ 若葉のことは後から話す！」

「はあっ!？」

説明出来るほどの余裕が無い。赤城の艦装に掴まっているだけで必死だ。あちらも失敗作の処理でてんやわんやなので、出来ることから翔鶴はこちらで方をつきたい。

しかし、一体どうすればいい。あんな暴走特急は艦装を破壊することすら出来ないというのに。本体だけを確実に撃ち抜くことが出来れば止まるかもしれないが、そもそも近付くことが不可能に近く、砲撃すらも狙えるかがわからない。私が動ければまだマシだったかもしれないが。

「アハハハハ！ アカギサン、コロシテアゲルカラア！」

「ごめん被りますね。死ぬのは貴女だけよ」

あまりに容赦のない航行。急カーブも多用し、艦載機は減るどころが増える一方。基本的には赤城に対しての攻撃ではあるが、殆ど全方位に向けた航空攻撃は、曙達にも被害を出し始めた。

「何なのよアレ!？」

「戦艦なんて構つちやいらねえだろ！ あつち止めんどー！」

翔鶴の無差別攻撃により、今まで以上に回避一辺倒にされていく。あの中では一番速く動けるであろう朝霜が翔鶴を止めるために動こうとするが、この期に及んでも失敗作達はそれを妨害していた。

意思が無いために、命令を忠実に守っているだけ。主人がああなつても、自分達がその攻撃に巻き込まれても、ただただ私達の妨害をするのみ。哀れな人形。

「クソが！ 邪魔なんだよ！」

「私達が道を拓きます。曙さんと朝霜さんは進んでください」

旗風が一步前へ。止まない爆撃を掻い潜りながら、流れるような動きで失敗作1人の艦装を斬った。無差別攻撃を受けたことで失敗作の動きは悪くなつてきているため、今なら打倒が可能となった。ただし、近接戦闘でそれをするためには、あの空爆を回避しなくてはならないが。

だからこそ、後衛がここで真価を發揮する。連携が鈍くなつてきたおかげで、砲撃に対するガードが甘くなっている。

「狙いやすくはなりましたね。行きましようか」

空爆の届かない場所からの狙撃。本来ならヘッドショットをするところだが、当然殺すわけにはいかないため、主砲に対して集中砲火していく夕雲。

「そこね。なら私も！」

それに合わせて、風雲も同じ場所を狙撃。攻撃さえ出来なくなつてくれれば妨害は簡単には出来まい。万が一接近戦を仕掛けてきたとしても、主砲で撃たれるよりは回避が楽だ。

2人がかりでの砲撃により硬かった主砲にも傷が入り、その状態で砲撃を行なったために機能不全を起こした。破壊しきれなくても、その力で自壊を狙えば何とかなる。

「そこ、動いちやダメよ」

その瞬間に、今度は雷の水鉄砲。主砲が壊れたことで近接戦闘を仕掛けようと考えるタイミングを狙った顔面への一撃。いくら意思が無かるうが、その衝撃があれば動きが完全に止まる。

今なら雷にしか出来ない戦術だ。腕でも脚でも簡単には止まらないが、顔なら否が応でも反応してしまう場所だ。そこを狙えるのは雷だけ。

「よし、止まった！ 行くぞボノ！」

「ボノ言うな！ でも行くわよ！」

失敗作の妨害が止まった一瞬を突き、曙と朝霜が一気に進む。当然ながら激しい空襲に晒されることになるが、それも考慮している。

「巻雲があ！ 守りまあす！」

邪魔が無くなったため、完全なノーマークな状態から巻雲の猛烈な対空砲火。異常な数の艦載機も、曙と朝霜の進路を塞ぐものから次々と撃墜されていき、完全に道が出来た。

その道を通き進み、2人が赤城の艦装に掴まった。完全に重量オーバーだが、そこは深海の艦装、ガタが来ているようだが4人乗っていても速度は落ちない。私達が駆逐艦だからギリギリ耐えられているのかもしれないが。

「つしゃあ！ 悪いな赤城さん、乗せてもらうぜ！」

「あつぶな！ 私はそんなに速く動けないんだから加減しなさいよ！」

「貴女達も手伝ってくれるのね。でも、自分の身は自分で守って」

高速戦闘故に、掴まっているだけの朝霜は遠心力で大きく振り回されている。曙はどうか足も艦装につけることが出来たが、それでもかなり厳しそう。私もどうにか乗せてもらっている状況なので、落ちないかヒヤヒヤしている。

「アツハ、カズガフエタトコロデエ！」

そんな私達を見て、狂った笑みを浮かべる翔鶴。もう私を生かして捕らえるという気も無いように思えた。ということは、大淀の洗脳もあなかったことで解けているのかもしれない。

だが、今の状態では話は聞いてもらえないだろう。翔鶴は完全に狂ってしまったている。赤城を殺すことしか頭にない、理性を無くした深海棲艦だ。赤城の時と同じようにダメージを与えれば話を聞いてくれるかもしれないが、そこまで持つていくことが非常に難易度が高い。

「見事に近接戦闘の子ばかりね……でも、その方が行けるかもしれないわ」

赤城が突然Uターンした。強烈な遠心力で朝霜が危険な状態になるが、どうにか張り付いて耐える。

「翔鶴に突っ込む。貴女達あちらに飛び移りなさい」

「はあ!？」

「めちやくちや言うな!?! でも、あたいはそういうの大好きさあ!」

あちらも猛スピードで突っ込んでくるが、こちらからも突っ込むようになったため、接近する速度が単純に倍に。恐ろしいスピード感だが、高速戦闘に慣れている朝霜はニヤリと不敵な笑みを浮かべて棍棒を握り締めた。曙も槍を構えて翔鶴との接近に備える。

私も最後の力を振り絞り、攻撃に備える。曙と朝霜がいれば充分だとは思いますが、私も入ればより成功率は上がるだろう。リミッター解除の反動から多少は休ませてもらった。今なら少しだけなら動くはずだ。

「シグ……千級……頼む。力を貸してくれ……!」

これ以上の侵食は無いだろう。だが出力が上がったのは確かだ。ほんの少しでいい。あの時の力を出させてくれ。

「シニニキテクレタノネ! ダツタラ、ヒトオモイニ!」

接近する赤城を見て、より嬉しそうに迎撃態勢となった翔鶴。艀装の口を大きく開け、赤城を艀装ごと噛み潰そうとしているのはわかる。あちらの方が若干大きいため、そういう意味でも接触は死を招きそうだ。

「死なないわよ。さつき言ったわよね。死ぬのは貴女」

直撃する前に舵を切り、真横を通過。その瞬間に、朝霜が艀装から跳んだ。

「おらあつー！」

「ジャマシナイデー！ コレハワタシトアカギサンノハナシナノ！」

飛び掛かりながら棍棒による強烈な一撃。受けるのだけでも重くて厳しいその一撃を、翔鶴は受けるわけではなく、艦載機の一機を突っ込ませることで回避した。空爆しているものではないそれは朝霜の腹に減り込み、その衝撃で弾き飛ばしてしまう。

さらには射撃。減り込んだ状態で撃たれると回避は不能だったが、食い込み方が良かったか、脇腹を掠める程度で済んだ。それでも血が溢れる怪我にはなつてしまう。そのまま海に落ちてしまうため、出血はまずい。

「くっそがあー！ 次だ次！」

赤城が即座にUターン。大きな波を起こすほどのドリフトをしながら、次の突撃へ。翔鶴は朝霜に気を取られたことで、すぐに振り向くことが出来ない。

「今度は私よつー！」

「チヨコマカト！」

次に跳んだのは曙。突き刺さんばかりのスピードで真っ直ぐ跳び、ダイレクトに翔鶴へと槍を伸ばす。しかし、それも新たな艦載機にその一撃を阻まれ、前に進めず。それでも曙は諦めず、携えた主砲を体勢を崩しながらでも構えて放つ。残念ながら翔鶴の肩を掠める程度ではあったが、充分に一矢報いた。

艦載機による射撃も、主砲の連撃で回避することは出来たものの、海に背中から落ちる羽目になり戦線離脱。

「次行きなさい！」

赤城のこの戦法は充分に翔鶴を翻弄出来ている。あと数回同じことを繰り返せば、調子を崩すことが出来る。

さらにUターンし、三度突撃。今度は私の番だ。震える脚を撫で、もう一度シグとチ級に願った。

「頼む……頼む……今やらなければ大変なことになる。力を貸してくれ！」

翔鶴が迫ってきたところで、痣が伸びた心臓が高鳴り、力が湧き出

た。リミッターを外した時と同じ。身体中の痛みが一時的に無くなった。保って数秒。この一撃がこの戦闘における私の最後の一撃になるだろう。失敗は許されない。だからこそ、なりふり構わずに跳んだ。

今までで一番スピードが出た。気付けば翔鶴が眼前だったが、勢いが殺せずに体当たりする形になった。だが、翔鶴が艀装から落ちることはない。

それでも、3人目の私でやっと届いた。だが、これで私も時間切れ。振り絞った力が急速に衰え、もう指一本動かせなくなる。

「つがつ、くそ……！」

「イタイジヤナイノ！ デモ、コレデアカギサンハムボウビニ……！」

艀装に掴まっていた私達3人が全員飛び立ったことで、赤城を守るもの、そして赤城以外に楯突く者はいなくなった。嬉々として赤城の方を振り向く。

跳んでいた赤城が、渾身の蹴りを翔鶴の顔面に叩き込んでいた。「やっと、当たったわね」

私達に飛べと言ったのは赤城だ。航空戦が拮抗しているために、赤城も翔鶴も攻撃手段が極端に限られている状態だった。それをどうにかするために、翔鶴は体当たりを選択していたし、赤城もそれを回避しながら打開策を練っていた。

私達全員を囷に使ったこの一撃に賭けていた。結果、最後の最後に艀装すらも犠牲にして、自らが翔鶴に最も接近出来るタイミングを作り上げた。

朝霜でこちらの方針を教え、曙で翔鶴の思考を考えを固定し、私で牽制を完成させ、自分でトドメを刺す。

「ツアア！」

突っ込む勢いまで加わり、あまりにも強烈すぎる一撃を受け、ついに翔鶴は艀装から吹っ飛ばされる。主人を失った艀装達は、その勢いを相殺し合い、その場に止まった。元々ガタが来ていた赤城の艀装はこれだけで煙をあげることになり、翔鶴の艀装もタダでは済んでい

ない。

赤城も翔鶴も空母であるが故に海上でも航行可能。艦装を使った方が速いというだけ。2人して海面に叩き付けられた後、先に立ち上がった赤城が翔鶴に駆け寄る。だが、翔鶴もすぐに起き上がった。

「ここで終わらせてあげる」

「ヤラセナイ！ シヌノハアナタヨオ！」

艦載機が拮抗状態の今、艦装から降ろされた2人が出来るのはもう1つしかない。

「この……！」

「シンデヨオ！」

出たのは拳だった。お互いそういうタイプではないことくらい私にもわかつている。赤城は翔鶴を縊り殺そうとはいていたが、実際格闘に精通しているわけではない。翔鶴は尚更だ。

私から見ても素人の喧嘩のような殴り合いが始まる。赤城と加賀の殴り合いを彷彿とさせるが、乗っている殺意が段違いだった。殺したくて殺したくて、ただただ拳を振るうだけ。

手甲がある分、赤城の方が攻撃力が高い。だが、翔鶴も負けてはならず、一撃が非常に重い。さらにはお互いノーガード。殴り殴られ、お互い血塗れ。

「いい加減に……！」

「シネエエ！」

トドメの一撃がお互いの顔面に入り、同時に白目を剥いて倒れてしまった。

これで戦いは終わる。殺意をぶつけ合い、そして、どちらも命を落としていない。最善の終わり方。

本当の戦いはここからなのだが、今はこれで終わりとしてほしい。

激戦の傷痕

赤城と翔鶴の壮絶な戦いは、艦装を捨てた殴り合いへと発展し、最終的には両者ノックアウトという結果に終わった。今はどちらも白目を剥いて倒れており、ピクリとも動かない。

お互いの殺意をぶつけ合い、それでもどちらも死なずに終わったというのは、おそらく最善の結果。しかし、まだお互いに殺意は残っているだろう。顔を合わせれば殺し合いを始めるだろうし、そうでなくても生きていると知れば探し出してでも殺しかねない。

だが、今はそれを考えることはやめるべきだ。これで完成品4人全員の対処は終わり、残りは失敗作の処理だけだ。それもたった今、旗風を筆頭にした仲間達がどうにかしてくれた。武装を破壊して攻撃出来なくしたことで、自爆装置の破壊をしたことで機能停止。さらには艦装を破壊したことで航行も出来なくしたようだ。これにより、全員の撤収が可能となった。

私、若葉は度重なるリミッター解除により、指先一つ動かせないほど消耗してしまった。辛うじてナイフは握ったままでいられているが、それもかなりキツイ。そこに赤城の艦装に乗っていた浮き輪がやってきてくれて、ナイフを運んでくれた。これで心配が無くなる。

「くそ痛え……結構えぐられちゃった」

「アンタはさっさと戻りなさいよ。私は若葉を引きずってくわ」

「すまない……一歩も動けそうにない……」

「喋れるだけ良しとしなさい」

艦載機からの射撃で脇腹をやられた朝霜が、血が溢れる腹を押さえながらフラフラと撤収。私は曙に襟首を掴まれ、引きずられるように撤収。

加賀は瑞鶴を連れて先んじて戻ったため、気を失っている赤城と翔鶴は他の者に頼むしか無くなった。幸い全ての戦闘が終わったため、手隙の者もいる。

「じゃあ私は赤城さんを運ぶわ。旗風、翔鶴さんをお願いしていい？」
「かしこまりました」

「では、夕雲達はこの戦艦の方々を……っ」

都合よく1人につき1人を運べそうなので、各々が配置につこうとした瞬間、機能停止していた失敗作3人が崩れ落ちるように沈んでいってしまった。

そもそもが最初の呂500のように理性のカケラも無いようなものをより深く侵食させ、何らかの方法でコントロールしていたものだ。この戦いが終わったら力尽きるようになっていたのかもしれない。もしくは艦装により生命維持をされていたか。

「……助けられませんでした」

「夕雲姉……今は悔やんでられないよ。私達は赤城さん達の艦装を運ぼう」

「そう、ですね。あの人達が救えなかったことは悔しいですけど、進まなくちゃ」

結果的に、失敗作の戦艦隊は10人全員がこの場で散ることになってしまった。4人は翔鶴が深海棲艦化した時に何故か消え、3人は翔鶴の航行に巻き込まれて轢殺、そして残った3人は生き残ったが自沈。せめて後からその亡骸を引き揚げてあげたいところだ。

施設に戻っても阿鼻叫喚だった。

死にかけていた姉を運んでくれた摩耶はそのまま飛鳥医師とともに処置を開始。怪我を負って両脚を壊されたシロは、クロの手当てと必要最低限の高速修復材により、歩けないものの脚は治療済み。私が痛めつけ、三日月と霰に運んでもらった初霜と如月は、治療待ちのため昏睡させて眠らせている状態。霰はそのまま飛鳥医師の手伝いに参戦してくれている。

先んじて撤退していた加賀は、念のため瑞鶴を縛り付けた状態で工廠の隅で待機していた。リミッター解除の反動で疲れ果てている三日月も、その隣で私達の帰りを待っていてくれた。

「帰ってきたな。そいつが最後か」

「すぐに運ぶよ」

工廠で出迎えてくれたのはリコとセス。鳥海は飛鳥医師の守護者

として処置室前を守るためにこの場におらず、暁と呂500は治療のために施設内を走り回っていた。

「朝霜！　すぐに治療するわ！」

「アウアー！」

「悪い、修復材ちよつとだけくれ。割とやられちまった」

この中では一番怪我をしている朝霜は、暁と呂500の処置ですぐに治療。気を失っている赤城と翔鶴は、リコとセスが海から引き揚げて工廠の隅へ。セスはそのまま赤城と翔鶴の艤装の方も見てくれる。

「こいつは一体何だ。こんな同胞も敵にいたのか」

「……元々艦娘だったのがこうなった」

「俄かに信じられないな」

今までにない意味がわからない変化ではあるが、リコは然程驚いていないようだった。いや、充分驚いているようだが表に出さないようにしているだけか。私のような変化もあるし、最終的に深海棲艦となってしまうのも不可能ではないと考えたかもしれない。

それを聞いたセスが、念のため翔鶴を縛っておいた。敵であることはわかっていてるため、目を覚ました瞬間暴れられても困る。それなら赤城も縛っておいた方がいいかもしれないが。

「……どちらも生きているのね」

加賀が2人の姿を見て安堵していた。赤城が死ななかつたことは勿論のこと、翔鶴が生きていることにも少しだけ安心していたようだ。気を失っていたわけではない瑞鶴も、翔鶴が命を持った状態でここに運ばれてきたことには心底安心した様子。しかし、瑞鶴の洗脳は当然解けていない。安心したのも束の間、気分悪そうに顔を伏せる。

「よかつたじゃない……翔鶴が無事で」

「無事じゃないわよ。敵の手に落ちてのうのうと生きてることが恥ずかしいわ。何が更生しろよ。アンタの自己満足じゃない」

「ええ、私の自己満足。敗者は勝者の指示に従うのが筋じゃなくて？」

瑞鶴は舌打ちをした後、それ以降黙りこくってしまった。飛鳥医師の手が空き次第、瑞鶴も昏睡させられ、洗脳が解かれることになるだろう。この状態の瑞鶴はどうせ何も話さない。敵対心は無くならず、

今でも大淀の部下だ。

だが、翔鶴が変化したことは本当に驚いていた。こんなこと聞いていないと言わんばかりに、呆気にとられていたほどだ。ここは詳しく調べる必要があるだろう。

「若葉さん……無事でしたか」

「ああ……三日月、お前の姉をすまん」

「いえ、生きていてくれただけでも良かったです」

如月は思い切り蹴ってしまったために怪我人。姉の次に治療されることが約束されているようだ。

「若葉さんは大丈夫ですか？ 侵食が拡がってしまいました」

「一応大丈夫だが、身体がまともに動かない。今日はもう休みたい」

「そうですね。もうみんな疲労困憊です」

強いて言うならリコがピンピンしている程度。誰もがこの戦いで疲れていた。施設的特性上、怪我をすること自体に抵抗があるため、ただ戦うだけでも倍以上神経を使う。

「私は何とか歩けるくらいまでは回復しました。若葉さんを運びます」

「すまない……頼む」

戦闘から戻り動けそうにないものは、早々に休むことも飛鳥医師から指示されたようだ。私と三日月はその該当者。三日月は私が戻るまで待つていてくれたようだ。ありがたい。

私から艤装を剥がした後、担ぎ上げて部屋まで運んでくれる。もう着替えるのも面倒臭いが、今は海戦の後でビショビショだ。風呂に入ることは難しかったため、手早く浴衣に着替えさせてもらった。

「……すごく拡がっていますね……」

「ああ、自分でも見るのは初めてだが、ここまではな」

服を脱いだことで、侵食が拡がったことを改めて確認することになる。

左腕は勿論のこと、痣は左胸や脇腹、先端が腰の辺りまで伸びていた。上の方は鏡が無いのでわからないが、三日月が触れて左眼を呑み込むように拡がっていることを教えてくれた。後ろは背中の方にも

拡がっているらしい。

全体的に左半身が黒ずんでいるようなもの。こんな姿の艦娘は何処を探してもいないだろう。

だからだろうか、三日月ほどでは無いが、侵食は私の脳の一部にまで届いていることがわかってしまった。何故なら、三日月の左眼が自分の物のように思えてしまったから。

三日月が私に依存のような感情を持つてしまったのも、今の私には理解出来る。私の身体の一部を持つ三日月が他人のように思えない。

「三日月……すまないが、顔を触らせてくれないか。お前から見て左側……左眼がある方がいい」

「こうでしょうか」

私の手を取り、顔に押し当ててくれる。私の左眼の近くに触れることが出来たことで、気分が落ち着いてくる。なるほど、これが三日月が感じていた感覚。

「三日月……若葉も同じになってしまったようだ。三日月の左眼が若葉の左眼に思える」

「ああ、なるほど。眼まで侵食してしまったから私と同じに……」
「おそろくな。感情にも侵食されているようだ」

リミッターを外している時、相手が初霜の時でも容赦無く攻撃が来た、相手を斬ることに一切の抵抗が無かった。三日月が感情を失うように、私にはそういった理性的な部分が欠如するのかもしれない。

この戦いで私の大きな変質はこんな気がする。修復材ナイフで本当に良かった。そうでなければ、初霜すらも殺していたかもしれない。

「ああ……落ち着くな。若葉の左眼……」

「お互いに支え合います。私と若葉さんは、もう離れられない関係なんだと思います」

着替えも終わったため、そのままベッドへ。いつものように左腕に抱き着かれるが、今日からは私も空いた手を三日月の方へ伸ばすようにする。これでお互いが落ち着ける。

流石に今日は侵食が拡がったからか、夢の中にも引き込まれる。ただし、今回はシグの表情が若干暗い。

『侵食、拡がっちゃったね。若葉に力が欲しいって言われた時、また思った以上に持つていかれたんだ』

「……姉さんがやられたのを見て、理性がトんだ」

『うん、私も見てたからね。アレは仕方ないよ』

私が望んだことで、必要以上に侵食してしまっただけ。前回はシグが渡し過ぎたと言っていたが、今回は私が引き出し過ぎたようだ。『過ぎたことは仕方ないよ。でも、2回目のリミッター解除はやり過ぎ。力は貸したけど、次からは貸さないよ。若葉が壊れちゃうからね』

「すまない……ああしなければ勝てないと思った」

『気持ちにはわかるけど、身体は大切にね』

シグに説教されるとは。だが、その分大いに反省した。リミッターを2回外すというのは、私だけでなくシグにも負担がかかりかねない。

ただでさえ痣が心臓まで辿り着いてしまったのだ。今後の行動次第では、選択がそのまま死に繋がる可能性だってある。勝つためにはいえ、あんな無茶は二度とやらない方がいいだろう。

『脳にも少しだけ届いちゃったね』

「ああ、だからだろうか、三日月が他人の気がしない」

『だろうね。私の左眼を持つてるんだから、そう思っても仕方ないよ。今やあれは若葉の左眼でもあるわけだからね』

シグが一番気にしていたのはそこ。私の思考が侵食によりほんの少しだけ変化させられたことだ。

私が使っている力はシグの力だ。それが私、謂わば宿主の生死に関わるような影響を与えるかもしれないとなると、力を貸してくれているシグも気にしてしまうようだ。

「これ以上は侵食されないように努力する」

『簡単な話じゃないと思うけど、私もなるべくこっち側で頑張るよ。』

若葉が若葉でいられるように手伝わせて』

「ああ、頼んだ」

暗い話は一度これで終わりにして、今回もシグの感じたことを聞いていく。

『翔鶴さんのことなんだけど……多分あの人は治療出来ないと思う』

「飛鳥医師の腕でもか？」

『うん。健康体に治療するところなんてないでしょ？』

ある意味、私達の身体の傷痕と同じということか。入渠しても改装をしても消えることがなかった、私達を構成するものであると認識された本来とかけ離れたもの。

今の翔鶴は、深海棲艦であることがデフォルトであると身体が認識してしまっているとシグは言う。それこそ、翔鶴は生まれ変わってしまったと。

「そうか……なら、赤城への殺意もそのままか」

『多分ね。でも、大淀の洗脳は無くなっていると私は思うよ。そういうのも引くくめてあなるために使ってるように見えたからさ』

その辺りはフワフワしてるから参考までに、と付け加えられる。シグの話すことはシロと同じで大体核心をついているため、信用に値する。

だからこそ、翔鶴はもう無理というのがショックだ。死とはまた違う、大淀の最大の被害者となってしまった。

『赤城さん以外なら仲良くなれるかもしれないよ』

「そうか。なら、若葉もあの翔鶴と付き合えるようにしよう」

『そうだね。でも気をつけてね。私達にも敵対心を持つてると思うから、襲ってくる可能性は充分にあるからさ』

それは肝に銘じておこう。私達に敵対心を持つているということ、この施設を内部から壊そうとしてくる可能性もあるということだ。施設を破壊されることは、私達が攻撃されるよりも辛い。

『私からはこれだけ。少なくともごめんね』

「いや、助かる。シグの存在は頼もしい」

『そう言ってくれると嬉しいよ。これからもよろしくね、若葉』

夢の終わりはいつも握手だが、今回は少し趣向を変えて。握手に応じた後、シグを引き寄せて正面から抱きかかえた。驚いたようだが、すぐに私に抱きつき返してくる。

「これからもよろしく頼む」

『うん、この中でしか話せないけど、私は君の力になれるのならそれで満足だよ。そうか、これが好きってことなのかもね』

夢の中の夜が明ける。目が覚めてからは、さらなる戦いの幕開けだ。身体を傷付け合う戦いとは違った、より心を蝕みかねない戦い。

それも潜り抜けることは出来るだろう。私には後押ししてくれる者が数多くいる。

この施設の頂点

夜襲を耐え、身体を休ませた後に目が覚めたのは昼近く。私、若葉はあれだけ消耗していたはずだが、一眠りしたら身体はすっかり動くようになっていた。疲れも感じず、清々しい朝という感じ。昼だが、隣を見ると、可愛らしい寝息を立てている三日月。表情からして、あちらにもぼいが出ているようだ。やはり夢の中に出てくるタイミングは私と同じ。こちらがシグと話すことが出来たのだから、三日月も同じことが起きる。

「ん……」

「おはよう三日月」

自然と三日月の頭を撫でていた。一眠りしてもこの感覚は変わらず、戦闘前よりも三日月のことが大事なものに見える。あまりこういう表現は良くないかもしれないが、誰よりも愛しいというか。

勿論、姉妹は大切な人だし、この施設の者達はかけがえのない仲間だ。だが、三日月は別格。誰よりも失いたくない存在と感じられる。それが侵食によるものだとわかっていても、本能的に抗えない。

「おはようございまふ……」

「まだ眠いなら寝ているか？」

「いえ、起きます……」

などと言いながらも、左腕に顔を押し付けてくる。安心感に浸りたいのだろう。気持ちがわかるようになった私も、三日月の頬を撫でることで同じような安心感を得る。

このままだと時間の限りやってしまいそうなので、早々にキリをつけて2人して起きた。相変わらず浴衣ははだけ放題だが、もう気にもならない。

「私達はすぐに休んでしまいましたけど、治療の方はどうなったんでしょう……」

着替えながら心配そうに呟く三日月。今回の治療は心配になることがかなり多い。生死の境にある姉。洗脳を解かれる瑞鶴、如月、初霜。そして、私の夢の中でシグが治療は無理だと判断した翔鶴。それ

以外に重傷も軽傷も様々。

特に姉の治療結果が気になる。おそらく修復材も使われた最善の治療を施されているとは思うが、やはり心配だ。

「すぐに見に行くか」

「そうですね。姉さんがどうなったか気になりますし」

夢で匙を投げられた翔鶴のことは飛鳥医師に伝えておきたい。着替えをすぐに終わらせ、部屋から出た途端、施設内で酷い音がした。物が倒れるような、大きい物がぶつかるような、この中では聞いてはいけないような音。

「な、何が起きたんです!？」

「すぐに行こう。多分医務室だ」

音の感じからして、ベッドが倒れるような音だった。寝かされていたものが落ちた音にも聞こえたため、急いでそちらの方へ向かうことにした。

医務室からは、耳を疑うような怒声と罵声。そして物が壊れるような酷い音。その発生源はすぐにわかる。特に片方、まだシロに喉を弄られていない、深海棲艦特有の反響したような声。

まだ誰も医務室に駆け付けていなかったようで、私と三日月が一番だったため、何も考えずに医務室に入った。

「おい、何をしてるー!」

医務室に入ると案の定、赤城と翔鶴が取っ組み合いの喧嘩をしていた。

一応は怪我人であるということで治療待ちとして医務室に寝かされていたらしく、よりによって隣同士にされた挙句、運が悪いことにほぼ同時のタイミングで目を覚ましてしまったらしい。目を覚まして隣を見たら、殺したいほど憎い相手。こうなっても無理はない。

まだ寝かされていたということは、この時間になっても飛鳥医師の手が空いていない。昨晚から今の時間までぶっ通しで処置を続けている。もうあれから半日近いというのに。

「アカギサン、シンデ、シンデヨォー!」

「死ぬのは貴女よ翔鶴……！」

一度眠つても心は落ち着かず、殺意は溢れに溢れている。艦装を装備していないため、格闘素人の2人の喧嘩は、見ていてなんとというか悲しさまで感じる。

その医務室の端、既に治療が終わった姉が寝かされていることに気付いた。それに、透析中の朝霜と、それが終わり昏睡状態を維持されている如月も。このままだと、この酷い喧嘩に巻き込まれる。飛鳥医師の処置は完璧で、修復材まで使われていたとしても、強い衝撃を受けたら傷口が開いたりしてしまうかもしれない。それだけは避けなければ。

「お前らやめろ！」

「若葉さん、邪魔しないで。これは私と翔鶴の問題です」

「ブガイシャハクチヲハサマナイデ！」

2人とも頭に血が上っているせいで話を全く聞いてくれない。まだ昨晚の喧嘩の傷のせいで全身ボロボロだというのに、自分の身体を顧みずに喧嘩をしまつているため、このまま続けたら最終的には2人ともダメになってしまうかもしれない。

残念ながらこの2人は大人な上に深海棲艦。艦装を持たない私の力では止めることはできない。言っても聞かない大人とか厄介過ぎる。これを止められるのは同等な力のリコや、常時艦装を装備している朝霜くらいだろう。しかし、リコは一晚の防衛を終えた後からは処置に参加しており、朝霜の力は生身に使うと怪我が多くなる可能性もあるので控えてもらうしかない。

だが、本当の救世主は、まったく違うところから現れる。

「やかましいー！こっちは処置中だぞー！」

処置室から直通の扉が大きな音を立てて開き、そこから血塗れの飛鳥医師が現れる。現在は瑞鶴の処置中。今は胸を開いている真つ只中だったらしく、処置室の中もひどいことになっていた。

怪我人である2人が喧嘩している姿を見たことで、徹夜明けで頭が疲れている状態にトドメを刺され、堪忍袋の緒が切れたようだ。取っ組み合いをしている赤城と翔鶴の間に割って入るや否や、処置中の血

塗れの手で顔面を掴み、ベッドに叩き付けるように寝かせた。

「患者は寝てろ」

「ちよっ、か、顔に血が……!?!」

「ドイテ！ アカギサンヲコロサナイト！」

赤城も翔鶴も抵抗するが、疲れて眼光が鋭くなってしまっている飛鳥医師の表情を見て動きを止める。私達もそれなりに付き合いは長い、こんな表情の飛鳥医師は初めて見る。

「もう一度言うぞ。患者は寝てろ」

シロクロが勝手に出ていこうとした時とはまるで違う、無慈悲なドスを利かせた声を聞き、赤城と翔鶴が竦みあがるのがわかった。深海棲艦すらも押し黙る迫力が今の飛鳥医師にはあった。あまりの迫力に、赤城と翔鶴は無言でココクと頷くのみ。

「次やかましかつたらその口を縫い付けるぞ」

それだけ吐き捨てた後、舌打ちをしながら処置室に戻っていく。一晩処置を手伝い続けている摩耶とセスが、苦笑しながら扉を閉めたのが印象的だった。

ああいう人がただただ静かに言うだけで、底知れぬ恐怖を感じる。深海棲艦となった2人が竦みあがるほどである。飛鳥医師なら赤城も翔鶴も本当に縫い付けてしまいそうだった。

さすがはこの施設の頂点に立つ者。相手が何であろうとも分け隔てなく接する。患者の治療を最優先にしているから、あれだけ強く出ることもあるのだ。

「……一時休戦よ」

「アトカラゼツタイコロシテヤルカラ」

殺意はそのままではあるが、飛鳥医師の威圧により動けなくなった赤城と翔鶴は、この時点で大人しくなってくれた。この2人が散らかした医務室は、駆けつけた私と三日月が片付ける羽目に。

「……はあ、完全にとばっちりじゃないか」

「翔鶴が悪いの。ごめんなさいね2人とも」

「アカギサンノセイ」

寝ながらも睨み合い、一触即発ムード。三日月の表情がスンと無く

なり、グニグニと頬を伸ばしたりして、わぎと嫌味ったらしく赤城の顔の血を拭いてやった。そんな赤城を見てクスクス笑っている翔鶴が三日月の餌食になると、今度は赤城が嘲笑する。

「貴女方の喧嘩のせいで、如月姉さん達が傷付く可能性があったんです。反省してください」

「ココニネカシテイルコトガワルイノデハ？」

「屁理屈を捏ねるのなら、飛鳥先生に逐一報告させてもらいます。貴女達は深海棲艦だからか周りを見なすぎです」

飛鳥医師の名前が出た瞬間に黙ってしまった。無理矢理喧嘩を止められたのが余程トラウマになったのだろうか。よりによって非戦闘員、しかもただの人間が止めたのだ。意気消沈するのわからなくはない。

しかし、どうやってもこの仲違いは解消出来そうにない。私と三日月とは正反対だ。

「なんじゃ……まったく、騒がしいのう……」

この騒ぎのせいで、治療された姉が目覚ましてしまった。まだ少し身体を痛そうにしているものの、命に別状が無いことが確定したことが嬉しかった。

「姉さん！ よかった……生きていてくれたか」

「お主が足掻けと言ったからのう。わらわも妹に刺されたくらいで死にとうないわ。つつ……じゃが、まだ胸が痛いようじゃ……修復材をケチられたかや」

「どうだろうな。でも、本当に良かった」

胸を押さえながらケラケラと笑う。痛みはあるのだろうが、元氣そうで何よりである。

飛鳥医師がどういう処置をしたかは知らないが、深海の匂いがしなかったため、おそらく刺された肺への処置は高速修復材を使い、傷口の縫合には使わなかったのではないかと思う。それにしても処置時間が長かったようなので、後からちゃんと聞いておかなくてはいけない。

「若葉よ……改めて見ると、痣が拡がっておるのう。変わりないかえ

？」

「少し変化してしまった。それは後から話すから、姉さんは休んでくれ。あいつらがやかましいなら黙らせるからな」

「うむ……そうさせてもらう。まだ少し眠いからのう……」

一度目を覚ましたが、まだ調子は良くないようなので眠ってもらうことにした。生きていれば話せる時間くらいいくらでも作ることが出来る。

「姉さんが寝るんだ。今度またやかましい小競り合いをしたら、若葉が容赦なく殴って寝かす」

三日月に続き私からも忠告。私如きで2人を抑え込めるだなんて思ってもいないが、今は黙っていてくれればいい。少なくとも全員の治療が終わるまでは大人しくしているという話だ。

その後だったら好きにしてくれて構わない。ここから出ていくにしろ、ここに住み着くにしろ、それは本人の選択だ。だが、ここに住み着くのなら、飛鳥医師の決めたルールには従ってもらうのが当たり前のこと。人種も立場も関係無い。

「ならせめてベッドを離してもらえないかしら」

「カオモミタクナイワ」

「……それくらいはしてやる」

隣同士だから諍いが絶えないというのなら、多少の対策もしてやらなくては。なるべくうるさくならないようにベッドを動かし、部屋の真反対になるように配置したことで、2人はようやく静かになれる。

医務室の外を見ると、喧嘩の時の音を聞きつけた施設の者達が様子を見に来ていた。その中に朝霜の姿を見つけたのでちよいちよいと手招き。

「おう、どうしたよ」

「この深海空母達が喧嘩を始めるようなら、お前の力で容赦無く捻じ伏せていい。監視しておいてくれないか」

「あたいも怪我人なんだけど」

修復材のおかげで傷は無くなっているものの、大事をとって包帯が

巻かれている朝霜。あまり激しい運動は出来ないのはわかっているが、今ここにいるメンバーでこの2人を止められるのは朝霜しかいない。

「なら私も監視役になるわ」

「加賀、怪我は大丈夫なのか」

「ええ、暁とろーに治療してもらったわ。修復材は使っていないけれど、安静にしていれば数日で治ると言われたの」

赤城の関係だからか、加賀も監視役を買って出てくれた。だが、少しだけ不安も。

「加賀が翔鶴をやるとかしないよな」

「……そう思われるのも仕方ないわね。でも、安心して。そんなことしないわ」

匂いからも翔鶴への殺意が無いことがわかる。瑞鶴を生かして捕らえた辺りからわかっていたが、加賀は赤城よりも先にこの施設に保護されたおかげで、考え方を変えてくれていた。赤城のことは止められないけど、自ら手を下すようなことはしない。

一度死んだ曙の話聞いて目が泳いだことを思い出す。やはり加賀も艦娘、今はこうでも艦娘を殺すという行為には抵抗があるのだろう。それが今回の件で信念に変わっただけ。

「瑞鶴もそうだけど、生きていたらやり直しは出来るでしょう。私はそちらを選ぶわ。私にもまだ怨嗟の声は聞こえるけど、それに報いる分、他者を生かすわ」

「そうか、わかった。なら朝霜と一緒に監視を頼む」

椅子を持ってきて加賀は赤城の隣を、朝霜は翔鶴の隣を陣取る。これで動き出した瞬間にベッドに押さえ付けることが出来るだろう。

比較的危険なのは翔鶴の方だ。おそらく手を先にあげるのも翔鶴。そのため、より力が出る朝霜を配置した。容赦無く押さえ付けても問題ない。

「瑞鶴の処置が終わったら飛鳥医師が何かしら指示をしてくれると思う。その後はそれに従ってくれ」

これでようやく一安心。この2人は本来一緒の部屋にはいけ

ないのだと思うが、今だけは仕方ない。

治療もそろそろ終わる。あれだけの量を半日で終わらせているあたり、飛鳥医師の手腕が改めて恐ろしい。

それが終われば、また次の戦いが始まる。

歪んだ鶴

飛鳥医師が瑞鶴の処置を終えたのは昼過ぎ。その頃には初霜の透析も終わっており、その装置を瑞鶴に接続することで、今回の処置は完了となる。初霜と如月は未だ昏睡状態にあるが、まだ起こすタイミングではないということそのままになっている。瑞鶴の透析が終わったところで全員起こす方針。

私、若葉は三日月と共に姉妹の様子を見に来ていたが、ちょうどそのタイミングにぶつかつたため、瑞鶴の移動を手伝う。その時には、飛鳥医師は疲れ果てていた。目に見えて辛そうで、疲れと眠気でいつ倒れてもおかしくないようにも見える。

後ろから出てきた摩耶とセス、そしてリコも大分疲れているが、飛鳥医師程ではないように見えた。

「次は翔鶴だ……」

「待ってくれ」

真相を把握出来ない飛鳥医師はそのまま翔鶴の治療に乗り出そうとするが、さすがにそれを止めた。本人の体調もあるが、それ以前に私がシグから聞いたことも話しておかなくてはならない。飛鳥医師もシグの言葉は信じてくれているため、説得力があるはずだ。

「夢でシグから報告を受けた。……翔鶴を治療することは出来ない」と

「理由は」

「健康体に治療する場所は無い、だそうだ」

夢の中でシグから聞いたことをそのまま伝えた。今の翔鶴は、あれで十全。治す場所など何処にもなく、もう取り返しがつかない。

それを聞いた飛鳥医師は、悔しそうな表情を浮かべつつも納得はしてくれなかった。前代未聞の艦娘の深海棲艦化を元に戻すというのは、治療という範疇を超えている。それこそ、脳だけ別の翔鶴に移し替えたつて無理だ。頭のとっぺんから足の先まで何もかもが深海棲艦なのだから。経緯は違えど、赤城と同じような生まれ変わりである。

「何ということをしてくれたんだあの大淀は……」

「……何故あんなことをするのか、若葉には理解が出来ない」

「大淀の目的はおそらく、自分が深海棲艦になることだろう。憶測でしか無いが」

「それこそ理解が出来ない。好き好んで身体を変えたい理由は何だ。D事案で生まれたからか、それとも何か別の目的があるのか。」

「とはいえ、今はそんなことはどうでもいい。今すぐに休んでもらわなければ、飛鳥医師が倒れてしまう。」

「……若葉、痣が大きくなっているな。あの戦闘で何かあったのか」

「そのことについては後から全部話すから今は休んでくれ。みんな飛鳥医師のことを心配しているんだ」

「……わかった。仮眠を取る」

「ガッツリ寝ろ」

「これくらい言わなければ、まだ寝ずに働きかねない。赤城や翔鶴ではないが、飛鳥医師もベッドに縛り付けておいた方がいいのではなからうか。話は後からでも出来るのだから、まずは飛鳥医師が完全に回復することが先決だ。」

「赤城と翔鶴は監視下に置いておく。飛鳥医師が目を覚まさないなら、こっちで勝手にやっておく。完成品3人は起こさないでおく。だから寝ろ。快調になるまで起きるな」

「おう、あたいと加賀さんがすっかり睨み利かせとくから、ゆつくり寝てくれよな」

「医者の不養生なんてこと、貴方はしないわよね」

加賀がトドメの一撃を言い放ち、休まざるを得ない状況を作り上げる。ナイスアシスト。それくらい言わなければこの人は休んでくれない。

「みんな、処置が終わったのね！　なら、ちよつとは食べなくちゃダメよ！」

そして、処置終了を見計らって雷が医務室に入ってきた。確かに、半日以上処置をしっぱなしだ。おそらく休憩もせず、何も食べていないだろう。空腹を満たした後に眠ってもらおう方がいい。雷はそう出来るようにちゃんと昼食を取っておいてある。

「少し食べたなら、お風呂入って寝ちゃってね。着替えは用意しておくから、疲れてると思うけどそれだけはやっちゃいましょ。あ、でも先生は男の人だから一緒にお風呂入れないか。なら順番を変えて、先生は先にお風呂がいいわね。処置の後だからすぐく匂うわ。はい、じゃあ先生はまずお風呂！ 摩耶さん達のご飯ね！」

さすがに雷にこれだけ尽くされると、引くに引けないだろう。飛鳥医師も観念したようだ。

「……はあ……そちらも無理しないように」

「当然よ！ じゃあ行きましょね」

雷に連れられて、4人が医務室を出て行った。これで確実に寝てくれる。

「若葉、あの人はいつもあなの？」

加賀が不意に聞いてきた。以前は彼の治療方法を見学したいというほどだし、医療に興味があるのだろうか。

「いつもというわけではないが、治療できるのが飛鳥医師だけだから、どうしても重労働になってしまう」

「そう……技術を持つ者がいないというのも大変なのね」

こればかりは仕方のないことだ。負担を減らしたくても、私達では真似出来ないような技術をいくつも持っているし、そのうちのいくつかは門外不出の秘匿事項。手伝いたくても手伝えないと来た。

そもそも、この施設に襲撃してくるのが悪い。そういうことが無ければ、飛鳥医師は過労死寸前まで働くようなことは無いのだ。

結局、処置をしていたみんながその日のうちに目を覚ますことは無かった。それほどまでに消耗していたわけだ。

夜になれば姉は改めて目を覚まし、医務室から退室。赤城と翔鶴もなんだかんだで医務室を出ることになった。これで医務室には昏睡状態にされた元完成品のみとなる。

赤城は加賀と相部屋。翔鶴はいずれ部屋に入るであろう瑞鶴のため、2人で使う部屋をもらう事になる。今のところは経過観察として施設に留まるらしい。

部屋を与えられたことで、監視は一旦解かれた。赤城が加賀と同じ部屋であるため監視を続行しているようなものだし、そもそも部屋には鍵がかけられる。一航戦部屋は基本鍵がかかっている状態となるわけだ。

その翔鶴だが、医務室を出ることになったが、瑞鶴の寝顔を見ながら何やら複雑な表情をしていた。私と三日月が姉妹の様子を見に来た時にそれだったので、一瞬驚いてしまう。

だが、赤城に向けるような殺意は全く匂わず、今ただ妹の安否を心配する姉の顔。

「翔鶴、どうした」

声をかけると驚いたように振り向かれた。三日月がさっと私の後ろに隠れたが、翔鶴にはやはり敵意は無い。

「……ズイカクハ、ブジナノカシラ」

「飛鳥医師が治療したんだ。明日には目を覚ます。だが、後遺症は残るだろう」

赤城と喧嘩している時とは雲泥の差。そういうところは赤城と同じで、殺意を向ける相手以外には負の感情に呑み込まれることは無いようだ。今この場には赤城がいないので、本来の翔鶴としての人格に戻っているようである。

シグは敵対心は持っているとは思いが、仲良くなれるかもしれないと言っていた。なら、ここで交流をしておくのもいいだろう。

「コウイシヨウツテ？」

「朝霜は力加減が壊れてしまっている。巻雲は消えない幻覚。鳥海は両脚不随だった。鳥海は飛鳥医師が治してくれたが、朝霜と巻雲は未だに苦しんでいる。これからも苦しみ続けるだろう」

「……ソレガズイカクニモ？」

「ああ」

余計に複雑な表情を浮かべる。どんな後遺症が残るかは私達にはわからない。軽症か重症かも今はわからない。治療できるものかすらもわからない。不安にもなる。

だが、3人とも今は施設のために活動してくれている。巻雲に関し

ては手の施しようが無かったが、開き直ってくれた。朝霜は今でも訓練を怠らず、物を壊さない生活を送っている。鳥海はリハビリの末に歩くことは出来るようになった。きっと瑞鶴も大丈夫だ。当然、初霜と如月も。

「明日の朝、こここの3人を起こす」

「……ソウ」

「瑞鶴はお前が起こしてくれ」

「……ワカッタ」

関係者がいるのならその者が起こすのが通例。瑞鶴を起こすのは翔鶴が筋。翔鶴も拒まなかった。

瑞鶴のことは一段落がついたので、ここからは話を変える。

「翔鶴は何処まで覚えている」

「オボエテイルトハ？」

「今までやってきたことだ」

負の感情に呑み込まれたことで深海棲艦と化してしまった翔鶴だが、今の今までそうだったことは聞いていない。問診をする時間も無かった。監視役の朝霜も、翔鶴とは殆ど会話をしなかったと聞く。

飛鳥医師に代わって、私が聞いておくことに。少し独断になってしまったが、おそらく今くらいのタイミングでしかまともに話せそうにない。

「……ソレヲアナタガシツテドウスルノ」

「参考にだ。若葉はお前とも仲良くしたい」

「テキナノニ？」

「ああ。それに、ここで一緒にいるのなら敵じゃない」

仲間とも言い切れないが、少なくとも今は敵対するような状態ではない。瑞鶴のことを心配している姿を見たら、敵対の意思は無くなるというもの。

そもそも私達は、あの戦場に出てきたもの全員を救うために戦っていた。こんな結果になってしまったが、翔鶴だって救いたかったのだ。敵対する理由がない。

「……アナタタチハアマイノネ」

「問題あるか？」

「アシヲスクワレルワヨ」

私は別にそれでも構わない。それで施設を危険に晒さないのなら、いくらでもあまちゃんになろう。救えるものは全て救いたいものだ。

「……ゼンブ。ゼンブオボエテル」

文句は言ったが、ちゃんと話してくれる辺り律儀だった。そういうところは翔鶴なのだろう。

「ズイカクトイツシヨニ、イロンナバシヨヲコワシテ、オオヨドサンニ
コウケンシツツケタ、カンセイヒン。オボエテイルワ」

この姿になっても、今までやってきたことは全て覚えているらしい。

手瀬提督の鎮守府を滅ぼしたことも、来栖提督の鎮守府を襲撃したことも、赤城達を自爆させたことも、何もかも覚えている。そして、それに対して一切の罪悪感を覚えなかったことも。瑞鶴と共に、他者を踏み躪ることに快感すら感じていたらしい。

元が優しいから、深く墮とされたことにより性質が真逆になってしまったのではなからうか。そうだとしたら、大淀の所業は決して許されないものだ。何人もの人生を狂わせて楽しんでいる。

「だが、今は違うんじゃないのか」

「ナゼイイキレルノ？」

「お前から完成品の匂いはしない。大淀の呪縛は、もう無いんじゃないのか」

戦闘中にも感じたが、翔鶴からはあのキューブの匂いは一切しなくなっていた。姿を変えた時に取り込まれたのだと思うが、そのおかげで洗脳すら断ち切っているようにも見える。結果的に深海棲艦化し、思考がそちら側に倒れてしまっているのだから救えないが。

「……アナタノイウトオリ。オオヨドサンヘノチユウセイシンハ、モ
ウドコニモナイ。ムシロ、ヒネリツブシタイホドニ、ニクラシイ」

やはり。治療の必要なく洗脳は解けている。怒りの矛先が大淀にも及んでいる。

「ダケド、ソレイジヨウニ、アノヒトガコロシタイノ。ワタシヲコロシ

タアカギサンガ、コロシタクテコロシタクテタマラナイノヨ」

「お前が赤城に同じことをしたのにか」

「ソウイウモンダイジャナイノヨ」

狂気に染まった表情を見せる。洗脳は解けても、あの戦いの最中、死に追いやるうとした赤城に対する怒りと憎しみは本能として刻まれてしまった。今この姿で生きている限り抗えない殺害衝動となり、それこそが今の翔鶴の本質となってしまうている。

自らの存在を維持するために、翔鶴は赤城を殺すことに全てを賭けるだろう。抑えたくても抑えられない。

「……歪んだ愛ですね」

後ろからボソリと三日月が呟く。よりによって『愛』と表現したことで、翔鶴が顔を顰める。

「アイ？ ナニヲドウシタラ、ソウミエルノ」

「私はそこまで嫌いなら近付きたくないですから。視界に入れるのも嫌です。自分の手を汚してでも排除するのも嫌ですし。でも、翔鶴さんはそんな相手でもわざわざ近付くんですよ。……実は赤城さんのことが大好きなのでは？」

物凄い極論を出してきた。好きであるが故に殺したい。まるでストーカーのような理論。

元はと言えば、翔鶴が人形にされた赤城を自爆させたところから始まっている。愛情などカケラも無い。洗脳が解けたからといってそれは変わらないだろう。罪悪感はあるけど、好意は無い。その罪悪感が殺意になってしまっているのだから余計にタチが悪い。

「ナニヲバカナコトヲ」

「姉さんに聞いたんですけど、愛と憎しみって紙一重らしいですよ」

誰がそんなことを三日月に話したんだ。と思ったが、なるほど、二二駆の誰かか。臯月か水無月辺りが妥当。

「……ソレハナイワ。アノヒトニタイシテアイダナンテ」

「それか余程マズですか。嫌なことに首を突っ込むとか」

なんだろう、今日の三日月は毒が冴え渡っている。ここ最近はまるで見せることが無かった艦娘嫌いの部分を久々に見た気分だ。

「ナイワ。ナイナイ。ワタシハタダコロシタイダケ」

言いながらも、翔鶴は少し顔が赤くなっていたように見えた。

突拍子のない三日月の言葉が、翔鶴に変革を齎すかもしれない。そうなるかもしれないものである。

重すぎる代償

翌朝、昏睡させていた元完成品3人を起こすこととなる。その頃には飛鳥医師も疲れが取れたようで、表情からも威圧感が無くなっていった。12時間以上寝ればこれくらいにもなるか。

起こす3人と関係性の深い者が医務室に集まる。初霜には私、若葉と姉。如月には三日月。そして、瑞鶴には深海棲艦と化した翔鶴である。

赤城がいなければ比較的まともであることは昨晚で私と三日月が確認している。余計なイザコザを起こさないように、赤城は加賀に任せてあるため、この場で突然喧嘩が始まるようなことはない。

「君達には先に伝えておく。彼女らの治療方法についてだ」

昏睡状態を解く前に、飛鳥医師が治療の内容を説明してくれた。

完成品の治療は、胸骨と腸骨の洗浄と透析。そして、腸骨を洗浄した際に骨髓移植が必要となる。今までは姉妹のものを使うという形でやってきたが、私と三日月は骨髓を提供した覚えがない。

「初霜の骨髓は、初春の治療の際に貰った。処置中のことだから気付いていないだろう」

「うむ、そんなことされているとは知らなんだ。じゃが、構わぬ。他ならぬ妹のためじゃからな」

それ以外にも理由がある。継ぎ接ぎとなり、今程ではないにしろ姫の侵食がある私の骨髓では、何か問題が起きてしまう可能性があったからだ。摩耶も継ぎ接ぎではあるが、身体の状況が違い過ぎる。それならば、確実性の高い姉のものの方がいいだろう。

同じように、三日月からの骨髓提供も憚られた。結果、如月に骨髓を提供したのは型違いではあるものの同じ旧式艦である旗風。運良く適合したらしい。

「そして瑞鶴だが……加賀の骨髓が適合してくれた。おそろくだが、艦娘は艦種が同じであるならば、骨髓の適合率は極めて高いのだと思う」

逆に言えば、同じ艦種がいるからこそ治療出来るということ。この

施設には加賀以外の空母が深海棲艦しかないため、そういう意味でも運が良かった。

逆に、軽巡洋艦や戦艦はいないため、救出出来たとしても骨髄移植は困難ではないかとも。

「腸骨はどうしたんだ。その場で割って洗浄する例の手段を使ったのか」

「胸骨と違ってそれが難しかったため、人工骨を使った。ようやく形になったんだ」

今まで飛鳥医師が研究し続けてきた、艦娘の治療法。その1つである人工骨がついに完成したらしい。

差し替えられる腸骨が既に無かった。そのため、次に救出したものは難しいとはいえ腸骨も洗浄の方向で考えていたようだが、人工骨の研究がついに実を結んだため、それを移植したそうだ。

つまり、今回の3人は、骨といえども深海のパーツは一切使われていない。これは快挙だ。

「そのため、3人は被験者になってしまった。まず大丈夫だとは思いますが、医療に絶対は無い。万が一のことが起きたら、すぐに処置をする」
「了解した。飛鳥医師のことだ、万が一も無いだろう」

「買いかぶらないでくれ。今までどれだけ失敗してきたと思ってるんだ」

説明はここまで。次は3人の身体の確認。この時には少し遅れてシロも到着。まだ脚が本調子では無いらしく、クロの支え有り。翔鶴の姿を見ても取り乱すこともないため、クロは相変わらず受け入れるのが早い。代わりにシロを陰に隠すようにしている辺り、シロのことをよくわかっている。

鳥海の時のことを反省し、事前にしつかり確認しておく。身体に触れ、匂いを嗅ぐのも肌を押し当てるほど近付く。シロとの並行作業で、最も匂いが強い部分を探していくと、おおよそ何処に後遺症があるかがわかった。

「如月は右腕だ。鳥海と同じようになるのなら、おそらく右腕が動かないだろう」

「……ハツシモは頭……マキグモとかと同じくらい……かな」

如月はおそらく右腕不随。これは鳥海と同じく、なんとかしようと思えば出来る。切って貼つてを本人が受け入れるかはさておき、リハビリは辛いのが五体満足になることは約束されている。

初霜は脳のため、起きてもらわなくては後遺症が何かわからない。匂いとしては巻雲と同じ程度の匂いに思えるため、幻覚や幻聴辺りでは無かろうか。こちらは永遠について回ってくるもののため、今後に心配。

そして瑞鶴。

「う……」

「どうした若葉」

「こんなに濃い匂いは初めてだ。これは……少し酷い」

瑞鶴も頭だったのだが、初霜とは比べ物にならないほどに匂いが濃い。つまり、瑞鶴の後遺症は相当重いものと予想される。巻雲のような幻覚や、朝霜のような力のリミッターが外れるが可愛く見えるほどかもしれない。起こすのも躊躇われるが、起こさない限りどうにもならないのも確か。

「ズイカクハ、ニカイカイゾウサレテルノ」

「2回……それが原因だな。ただでさえ負荷が高いことを2度もやればそうもなる」

少し離れた位置にいた翔鶴が口を開いた。完成品になるための改造を2回受けたことにより、後遺症も異常に重くなってしまっているということか。

もしや、2回目の戦いで妙に冷静だったのはそれが原因か。ここまですぐに匂いを放つほどのだから、キューブによるブーストを以てしても性格や思考に影響を与えてしまうレベルに脳への被害は深刻。

「予想される後遺症が軽い順に行こう。三日月、如月を起こしてもらえるか」

「はい」

その場で錯乱する可能性もあるため、なるべくベッドは離れた状態で昏睡状態を解いていく。

まずは如月。三日月が軽く抱き上げて揺すり、声をかける。すると、ゆっくりと目を開いた。

「姉さん、大丈夫ですか？」

「ん、んん……三日月……ちゃん……？」

三日月の顔が目に入った瞬間に、あの夜のことを思い出したのだろう。顔が真っ青になった。

完成品にされたのだから、今まで姫としても活動してきたはずだ。ということ、ここに来るまでに人形を使った作戦や、まだ洗脳すらされていない艦娘を殺害するような行為もさせられてきた可能性は高い。

「あ、う……如月は、なんてことを……」

「大丈夫、大丈夫ですから。姉さんはやらされていただけ、姉さんの意思は無かった、みんな理解してます」

今までやってきたことを思い返し、ボロボロと涙が溢れ出た。だが、それを拭おうとした右腕が全く動かないことに気付いてしまう。見立て通り、如月の後遺症は右腕不随。

「えっ……右腕が……」

「……後遺症で……動かなくなってしまったらしく……」

「……そう……なのね……」

動く左手で動かない右腕を撫でる。

「感覚も無い……そう……如月への罰はこれなのね……」

泣きながらも自嘲気味に笑う。だが、これも飛鳥医師の言葉ですぐに払拭される。

「治療出来るぞ」

「……はい？」

素っ頓狂な声を上げた如月。理解が追いつかないらしいが、如月は私達がどう治療されているかは知っているはず。考えれば答えは出るだろう。

「若葉、如月の詰まりは何処かわかるか」

「二の腕の上の方だな。そこ一点だ。肩まではかかっていないし、他には感じられない」

「なら、一二の腕だけ移植しようか。それならヲ級の腕でも長さが合わせられる。代わりに傷が2箇所になつてしまうが……どうだろうか」
あまりのことに涙が引つ込んでしまったようだ。声も出ず、飛鳥医師の言葉をただ聞いているのみだった。

如月自身は、罪深い自分への相応の罰だと思つているのかもしれない。鳥海と同じく、自分に治療を受ける資格なんて無いと言い出すだろう。だが、選択肢を与えることは間違つていない。

「姉さん、どうしますか。これは姉さんが選ぶべき選択肢です」

「……少し、考えさせてくれないかしら……」

「それでいい。まだ時間はある」

話しながらも今度は初霜の昏睡を解いている。その間に、三日月が如月に腕を吊るための布を用意していた。動かないからといって、ただぶら下げておくのも良くない。

「……如月は生きていていいの？　如月は沢山の人を手にかけたのに……」

「姉さん、同じ償いなら生きて償いましょう。死んだらそれで終わりですから。それに、他にも姉さんと同じ境遇の人はいますので」

「……ええ、今は考えるわ……いっぱい考えるわ」

引つ込んだ涙はもう一度流れ出てきたようだ。今は泣けばいい。そうやって開き直れるなら尚更だ。

悪いのは如月じゃない。記憶はあるし、感触も覚えているだろうが、この施設の者は誰も如月を恨んでいないのだ。誰も責めやしな。居場所だつてある。だから、右腕のことはゆつくり考えてほしい。

「初春、初霜を起こしてもらえるか」

「心得た」

今度は初霜の番。姉が三日月と同じように抱き上げ、優しく起こしてやる。如月とは違い、後遺症が頭であることが気になるところ。

「初霜や、目を覚ませ」

「ん、んうう……」

気怠そうな声と共に目を開く。ひとまず目を覚ましてくれたこと

は喜ぶとして、問題は次。姉を見た後の反応である。

初霜は姉を死に追いやりかけたため、その存在そのものがトラウマになりかねない。それに、私も初霜をさんざん痛めつけてしまっている。私を見て取り乱さなければいいが。

「はぶ……」

「よく寝ておったのう」

寝ぼけ眼ではあるが、意識はハッキリしてきた。グシグシと目を擦り、そして姉の姿を見てほにやつと笑みを浮かべた。取り乱さないということは、初霜の後遺症は記憶障害か何かか。それならそれの方がいいだろう。辛い過去を持つているより、心機一転して歩き出した方がいい。

だが、初霜の次の一言で、それだけではないことはすぐにわかった。

「はつはるおねえちゃんだあ」

「は、初霜……どうかしたのかえ？」

「どうもしてないよ？ はつはるおねえちゃんこそどうしたのお？」

記憶を失っただけではない。人格まで破壊されている。これでは幼児退行していると言ってもいい。トロンとした表情で、姉に頬擦りをした。まるで、幼児が姉や母に甘えるかのような仕草である。

この施設でも子供っぽい者はいる。話し方が少し幼い霞や巻雲、仕草が少し幼い呂500がそれに該当する。だが、今の初霜はそれとは一線を画していた。言動の全てが子供のそれ。駆逐艦だからまだマシかもしれないが、それでも大分違和感がある。

当たり前だが、私達に幼児という時代は存在しない。生まれた時点で今の姿、今の精神だ。退行するものがないのにこうなってしまう。そのため、今の初霜がおかしいことは誰でもわかる。

「あつ、わかばだあ」

「ああ、若葉だ」

「おかおどうしたの？ はんぶんまつくろだよ？」

そういうところまで忘れている。ならば、リミッターを外して理性を捨てたことで、初霜と如月には言いようのない恐怖を与えてしまったことも忘れているのかもしれない。私の顔を見ても、怖がるどころ

か興味津々に触れようとしてくる程だ。

「これはいろいろあつてな、消えないんだ」

「そうなんだ。いたくないの?」

「ああ、痛くない」

何もかも忘れて、自分すらも忘れて新しい明日を踏み出したのだとしても、これはあまりにも惨い。

「わかば、ほんとうにだいじょうぶ?」

「大丈夫だ」

「でも、ないてるよ?」

気付かぬうちに泣いてしまっていたらしい。初霜があまりにも不憫で、大淀への怒りの前に憐みを感じてしまった。それは初霜に対して失礼な感情だとも思う。それでも、涙が止まらなかった。

姉と共に初霜を抱きしめる。くすぐったそうにしているが、私達に囲まれてるのは嬉しいらしい。キャツキャツと子供のように喜ぶが、その姿がまた辛かった。

「初霜や、ここでわらわ達と暮らさぬか?」

「うん、はつしも、おねえちゃんといっしょにいたい」

「そうかそうか、ならば一緒に暮らそう。部屋は好きにして構わぬかえ?」

「ああ、部屋割りは自由に決めてくれればいい。初霜の居場所はちゃんと用意する」

こんな状態の初霜を施設から別の場所に引き渡すわけにはいかな

い。元に戻るかは絶望的だ。それに、飛鳥医師が何かしらの手段を見つけてくれるかもしれないが、それを本当に施していいかもわからない。元に戻せば罪悪感に押し潰される。忘れたままの方がいいかもしれないが、幼児退行のままは気の毒である。

「翔鶴、最後は君だ。瑞鶴を起こしてやってほしい」

「……エエ」

今までの光景を見て、複雑な表情を浮かべている翔鶴。瑞鶴と同じ、頭に後遺症を残してしまった初霜の末路を見てしまったせいで、

瑞鶴を起こすことに戸惑いが出てしまっている。

「ズイカク、オキナサイ、ズイカク」

見様見真似で翔鶴も瑞鶴を起こす。目が覚めたら変わり果てた姉というのはどういう心境なのだろう。それはそれで恐ろしい。

「ズイカク、ホラ」

何度も揺する。この辺りから様子がおかしいことに気付く。

「ズイカク?」

少し強めに揺する。瑞鶴は目を覚まさない。

「ズイカク、ズイカクツタラ」

揺するのをやめ、軽く頬を叩いた。それでも目を覚まさない。

「ズイカク……ズイカク!」

強引に起こすように大きく揺さぶった。首がガクガクと揺れるが、それでも瑞鶴は目を覚まさない。さすがにこれはおかしい。ここまですしたら大概の者は目を覚ますはずだ。

「翔鶴、少し離れてくれ」

「ズイカク、ズイカク!」

翔鶴に離れてもらい、飛鳥医師が手早く瑞鶴を調べる。やれることは触診程度ではあるが、今までの知識と組み合わせると瑞鶴の症状を認める。

少し見て、飛鳥医師が悔しそうに表情を歪める。その時点でいろいろ察してしまった。

「呼吸はしているが反応が無い……脳幹以外を大きく侵食されているのだと思う。こうなったら……もう」

ギリッと飛鳥医師の歯軋りが聞こえた。

「瑞鶴は植物状態だ。今のままだと、目を覚ます可能性は極めて低い」

重い後遺症

元完成品3人の治療は完了したが、それぞれ重たい後遺症を持つこととなった。

如月は右腕不随。ただし、治療は可能であるため、最後の選択は如月に任せることにしている。その腕を罪の証としてそのままにするか、行動することで罪を償うとして治療に乗り出すか。決めるのは如月自身だ。

初霜は幼児退行。全ての記憶を失っているのは見方によつてはいことなのだが、人格まで破壊され、初霜の面影が無いほどになってしまった。今は姉に懐いている可愛い幼児である。

そして瑞鶴は……

「瑞鶴は植物状態だ。今のままだと、目を覚ます可能性は極めて低い」
植物状態。翔鶴が声をかけても目を覚ますことはなく、自発的な呼吸はしているものの、今後眠り続けることになる。この中でも最も重い後遺症であり、栄養を送り続けなくては死んでしまう最悪な状態。
瑞鶴の病状を聞いた翔鶴は、大きなショックを受けて膝から崩れ落ちる。昨晚も妹の安否をずっと心配していたのだ。この事実は受け入れられないほどに心にダメージを与える。

「……ジヨウダンハヤメテ」

「僕は医者だ。患者の病状で嘘は絶対に吐かない」

「……ウソヨー！」

縫り付くように飛鳥医師に掴みかかった。今だけは深海棲艦ではなく艦娘の翔鶴の顔。感情を露わにして、泣きじやくりながら訴える。

「アナタイシヤナンデシヨ!? ナオシテヨ! ズイカクヲナオシテヨ!」

洗脳から解き放つたら今度は目覚めないだなんて、あまりにも酷過ぎる。納得出来ないのもわかる。つい先日まで話していたのだから尚更だ。

翔鶴の悲痛な叫びが医務室に響き渡っても、瑞鶴は目を覚まさな

い。こんなにあんまりだ。いいように使われた末路がこれだなんて。

「このままで終わるわけにはいかない。だが、今すぐは無理だ」

「ナンデ、ナンデヨ……」

「深海棲艦の侵食を治療する方法はまだ確立出来ていない。今探している最中なんだ。必ず瑞鶴は治療してみせる。だから、待っていてくれ」

宥めるように話す、飛鳥医師からも悔しさが滲み出ていた。治療した結果が状態が悪化したようなものだ。

元々瑞鶴は改造を受けた結果そういうものにされていて、腸骨のキューブが無理矢理覚醒させていたのだと思う。キューブにどれほどの力があるかは知らないが、人格を捻じ曲げ、動かないはずの四肢を動かし、障害を持つ脳すら活性化させるのだから、恐るべきアイテムである。

「……カナラズ、カナラズヨ、カナラズズイカクヲ」

「ああ、必ず治療する。信じてほしい」

「ズイカクガシンダラ……アナタヲヤツザキニシテヤルカラ」

外的要因での植物状態なのだから、治療出来る可能性は大いにある。だからこそ、先程飛鳥医師は『今のままだ』と言ったのだろう。当然このまま放置するわけがない。いの一番に瑞鶴の治療を行なう。

飛鳥医師ならやってくれる。今までにいくつもの治療を行ない、最善の結果を出してきてくれている。今回もきつと大丈夫だ。

「翔鶴の大きな声が聞こえたのだけど……」

そこに、加賀が入ってきた。今は赤城の監視役をしていたはずだが、施設中に響き渡る声だったためか、気になって様子を見にきたらしい。

翔鶴の声を聞いて赤城が活性化したらしいが、艤装を持っていない赤城なら捻じ伏せられると朝霜に監視を交代してもらったそうだ。

「……どうしたの。翔鶴、貴女泣いてるわね……まさか瑞鶴が」

「モウ……メヲサマサナイデスツテ……」

「そんな……」

翔鶴から直に聞き、愕然とする加賀。今まで何かしら持っていたも

目を覚まさないということは無かったため、あまりにも重い後遺症にシヨックが隠せない。

寝かされている瑞鶴を見て、動揺の匂い。最初はただ眠っているだけと思えたが、触れることなく悔しそうに顔を顰めた。

「……先生」

「当然治療出来るように努力する。必ず起こしてみせる」

「お願い……この子はやり直せるの……だから私は生かして助けたんだもの……」

「ああ、こんな終わり方はさせない」

最初は殺意で満たされていた加賀も、瑞鶴のことは心配で仕方ないようである。加賀から見れば、瑞鶴は可愛い後輩なのだ。あれだけ殺意を持っていても、最初から瑞鶴のことは殺せない。加賀は表情には見せないが優しい人だ。

「今は泣きたいだけ泣けばいいわ」

「……カガサン……」

翔鶴を抱き寄せた。翔鶴は赤城には抑えきれない殺意を持っているが、加賀に対してはまとも。殺意も無ければ、負の感情そのものが浮かばない相手。

対する加賀も、最初は殺意を向けていた相手ではあるが、翔鶴だつて瑞鶴と同様可愛い後輩。落ち込んでいたら不器用にでも慰めるし、今のように心の支えになろうとしてくれる。

「先生を信じなさい。私は処置を身近で見ただけだけど、彼のそれは普通ではないわ。きつと瑞鶴を元に戻してくれる。だから、信じなさい」
「……ハイ……ハイ……」

深海棲艦へと堕ちても、生きたまま変質したからか翔鶴は翔鶴だ。加賀に慰められ、余計に泣きじやくるものの、随分とスッキリしたように見えた。

「あまり期待させたくはないんだが、幸い、研究材料は手元にある。それを研究すれば、瑞鶴の脳の侵食は治せるかもしれない。不安ではあるが、やらないよりはマシだろう」

その研究材料というのが、鳥海の脚だ。救出した完成品の中では初

めての、頭ではないところに侵食を受けた者。その時に切り落とし、深海の者へと差し替えた際に残っている、侵食された脚そのものである。

その侵食具合を調査したら、脳の侵食を取り払う方法が編み出せるかもしれない。多少は後遺症は残るかもしれないが、目を覚まさないよりはマシだ。

「僕は全ての医学を齧っているつもりだ。全ての知識を使って、出来る限りのことを全力でやっていく。だから翔鶴、待っていてくれ」

「オネガイ……ズイカクヲ……ズイカクヲスクツテ……」

加賀に抱かれながらも、飛鳥医師に懇願する翔鶴。今の翔鶴からは、もう誰への負の感情も感じられなかった。加賀に言われて飛鳥医師も信用してくれるようである。

飛鳥医師もそれに応えるべく、今日からそれに専念することのこと。三日月の視覚や私の嗅覚、それにシロの感覚も時には必要になるかもしれないと、先に教えてくれた。そういうことなら好きなだけ私達を使ってくれればいい。

「あのひとすごいのか？」

「うむ。わらわが知る限り、世界一のお医者様じゃ」

「すごいー！」

疑問に思った初霜に教える姉。大きな言葉で言うが、私も思う。比較対象を知らないとはいえ、入渠ドックを超えた治療をしたのだから、世界一の医者と見ても間違いは無いだろう。当人は少し恥ずかしそうであったが。

「あの……飛鳥先生、その治療法が出来たら、如月の腕ももしかして……」

「ああ、深海のパーツを移植せずとも治療出来るかもしれない。腕に大きな傷が残る可能性はあるが、移植も同じではあるな。だが、あくまでも可能性だ。万人に効く治療法では無いかもしれない。その間に考えておいてほしい」

「わかりました……もう少し考えます」

なら最初からそう言ってくれればいいのにと思ったものの、それが

うまく行くかどうかは今わかるわけではないのだからか、話すことも保留にしたんだろう。実際、その方法では瑞鶴しか治療出来ない可能性だってある。

如月の腕を治すのは、二の腕だけの移植が確実。それも今すぐ出来る100%治せる治療法だ。余計な期待をさせて、結局出来ませんでしたでは笑えない。

「あのきセンサー、だったら沈んじやった人達の身体、拾ってきた方がいいんじゃないの？ それ調べればもつとわかったりとかしない？」

「調べられるものが多いことは良いことではあるが……」

「私と姉貴なら持ってこれるよ。場所も大体覚えてるし」

クロが進言。失敗作のうち6人は、今もおそらく亡骸が海底に眠っている。研究のために必要というのなら、クロが取ってくると言っている。

鳥海の脚だけだとわからないことは多いだろう。言い方は悪いが、研究材料は多い方がいい。失敗作なら脳にまで侵食が行き届いているだろうから、まさに今知りたいことが調べられる。

「……頼まれてくれるか」

「おっけーおっけー。姉貴もいい？」

「……うん、あのままだと……また同胞が生まれるよ……早ければ早い方がいいと思う……」

今までの傾向でいけば、その亡骸も新たな深海棲艦の発生に使われかねない。あの場所には人間魚雷として命を散らされた潜水艦達の怨念が渦巻いている。その媒介にされてもおかしくはないのだ。赤城が怨念を喰らっていたが、それが全て晴れたとも言えない。

今後のことを考えると、引き揚げはなるべく早い方がいいのは確かだ。今からでもお願いしたいくらい。

「姉貴、脚がまだ本調子じゃないからさ、今からやるけどちよつとゆっくりめでね」

「ああ、頼んだ。死体を見ることになる。辛かったらすぐに言ってほしい」

「はいはい。じゃあ姉貴、早速行こう」

「……ん、それじゃあ、行ってくる……」

シロクロはすぐに行動を起こしてくれた。今から亡骸を引き揚げ、施設に運んでくれる。なるべく人の目につかないところに運んでもらい、研究を進めていくという方針に向かっている。

「翔鶴、この人達みんなが瑞鶴のために動いてくれているわ。しゃんとなさい」

「……ハイ、ワタシモデキルコトガアルナラテツダイマス」

加賀の言う通り、施設のみんなが一丸となって瑞鶴の復活のために力を合わせる。翔鶴も意気消沈してしまっただが、協力してくれるようだった。

医務室にいたままではどうにもならないため、瑞鶴は翔鶴に与えられた部屋に移動させることとなった。栄養は何処にいても与えられるため、それなら硬い医務室のベッドより、私室のベッドの方がいいだろう。検査着のままでも申し訳ないが、しばらくはこれで生活してもらうしかない。

「ズイカクノコトハ、ワタシガヤリマス。ヤリカタヲオシエテクダサイ」

「そういうことは私に任せて！」

管理の方法は雷に教わることとなった。この施設でもそういうことに最も精通しているのは雷だ。教えるのも上手く、今や少し不器用な暁でも、施設のバックアップが出来るほどに成長している。

こと瑞鶴のことに対しては、翔鶴も何も文句を言わなかった。みんなが瑞鶴のことを大切に扱ってくれていることがわかり、心を開いてくれているようである。

翔鶴のことは雷に任せ、私はもう一つ気になるところへ。それは赤城である。

「私の殺意は翔鶴にしか向いていません。だから、瑞鶴のことは気の毒だと思っています」

加賀と浮き輪の監視の下、現在は部屋で軟禁中。こんな一大事の時にくだらないイザコザを起こされては、施設全体の士気にも関わる

し、そもそも治療が遅れてしまう。今はジツとしていてもらうのが一番だった。

「ですが、私が手伝うことは無いでしょう。そんな状態でも、私は翔鶴の顔を見たら理性を失う自信があります」

それが今の赤城の存在そのものだ。そういう観念で今を生きているのだから、和解しろとは一言も言えない。落ち着いていても、翔鶴はずっと敵。顔を合わせたら殺し合いが始まってしまるのが常。

「ですので、私はこの部屋で軟禁としておいてください。その方が施設のためでしょう」

「了解した。飛鳥医師にもそう話しておく。理解してくれて感謝する」

「いえいえ、これでも私、誇りを失ったとはいえ一航戦ですので。殺したいほど憎い相手かもしれないですけど、そこまで不憫だと憐れに思えますから」

にこやかに言うものの、その言葉にはトゲがある。やはり憎しみの権化ともなると、今の状況を見ても敵意は消えないのだろう。とはいえ、ザマア見ろとまでは言わなかったので良しとする。匂いからも感じない辺り、赤城はそれはそれで瑞鶴の心配をしているのかもしれない。

「赤城さんの管理は、私とこの子で行なっていきます」

加賀の肩で浮き輪がサムズアップ。

「私は瑞鶴の様子も見に行きますから。赤城さんは部屋でジツとしておいてください」

「わかっていますよ。加賀さん、私は子供じゃ無いんですよ？」

「子供よりタチが悪いことを自覚してもらえると助かります」

「ごもつともですね。でも、私は私が押さえつけられないの。わかるでしょう？ もう私はそういう存在なんですから」

ひとまずは、赤城と翔鶴を引き剥がしておくことで治療に専念できる環境を作ることが出来た。

あとは、今後の研究次第。飛鳥医師なら辿り着けるだろう。それがどれだけ時間がかかるかはわからないが、その間は私達で支えていく

のだ。

それぞれ道

午前中の内にシロクロが海底に沈んでいた失敗作の亡骸を引き揚げてくれた。

前回海底で亡骸を見つけた時はキツそうな顔をしていたが、それは予想していなかったから。今回はそこにあるとわかった状態で向かったのも、そこまで嫌そうな顔をしていなかった。特にクロは、シロクロが確認組として頑張っているのも自分もとやる気満々だった。

「これで全部かな」

「ああ、6人だ」

「この6人であってらるわ……如月達が連れてきたのは」

私、若葉と三日月、そして今は行動可能な元完成品である如月に、沈んだ失敗作が正しいかを判断する。戦場で私自身が見たのは少しだけ。それでも6人なのは覚えている。そこで、実際にこの6人とも交流のあった如月に確認してもらった。

最初は別にそこまでしなくてもいいと言ったのだが、償いをしたいと言って聞かず、今に至る。

「改めて見ても……酷いですね」

「ああ……これはな」

戦場でも思ったが、今回の失敗作は完成品や同じ失敗作である呂500と比べても酷すぎるほどである。

身体のところどころが禍々しく変質しているが、それはイロハ級のような意匠にも見える。甲殻のように艦装が貼り付いているだけならまだしも、腕そのものに主砲が融合してしまっているようなもので。

「失敗したから使い潰すって、大淀さんは言っていたわ……」

如月が吐き出すように呟く。これに加担していた記憶があるせいで、亡骸を見るだけでも辛そうだ。

その如月はまだ制服はなく検査着のまま。同じ型の三日月のものを着れるかと思ったが、残念ながらサイズが合わなかった。

「翔鶴はリサイクルとも言っていたな。使い潰した後に人形にして、

トドメはこれか……」

近海に発生した深海棲艦の時と同じように亡骸に触れ、目を瞑る。追悼の意を込め、そしてその身体を研究に使わせてもらうことへの謝罪を込め、私ができるのは弔い、祈ることだけだ。

「お前達の無念は若葉達が晴らそう。今は静かに眠っていてくれ」
私達に出来るのはこれくらいだ。ここにいるみんなが、私の後に続いて亡骸に手をつき目を瞑り、この亡骸が怨念を残さず逝ってくれることを願う。

特に如月は熱心だった。あちら側にいたときは、この失敗作達のことと蔑ろに扱っていたのだと思う。それが当然であると洗脳されていたのだから仕方あるまい。

シロクロと協力して、引き揚げた失敗作から出来る限り艦装を剥がしていく。変質により癒着してしまった装甲はそのままにせざるを得ないが、それ以外は全て無くし、せめて綺麗な身体にしてやる。

「うわあ、すっごくいいねコレ」

「私達の同胞でも……こんなことにはなっていない……」

シロクロが引く程である。本来の深海棲艦、特にイロハ級の身体がどうなっているのかは、私には少しよくわからない。

少なくとも私の腕は完全に人型である駆逐棲姫のものではあるが、イロハ級は人型ですらないのだから、この失敗作達はイロハ級に近付けられているのだと思う。どんな実験をしたらこうなるのだ。

これを見ると、呂500はまだ軽い方なのだ。それでも記憶と言葉を失っているのだから、呂500に施された処置をより強くした結果がコレと考えるのが妥当。

「……それは如月にもわからないの。如月は用意されたこの人達を使うように言われただけだから……」

私達が亡骸を綺麗にする光景も、如月はじつと眺めていた。自分がやらされたことの結末を見届けるために、失敗作の末路はその目に映しておきたいと。

如月が知らないのなら、どう処置しているかはおそらく誰も知らない。大淀と、まだ生きているであろう協力者の男2人が、誰からも情

報が漏洩しないように起こしている。

「近々、外から事情聴取の者が来ると思う。如月、話してもらえるか」
「ええ、勿論。如月しか話せる人がいないものね」

初霜は全てを忘れて幼児退行しているし、瑞鶴は言わずもがな。翔鶴は記憶を失っているわけではないので話は出来るものの、深海棲艦化していることを鑑みると、他の人間を見せるのは若干抵抗がある。無いと思うが、赤城と同様に殺意を持ってしまった場合に、施設が面倒なことになる。それに、翔鶴自身が瑞鶴の側から離れないだろう。

そうになると、事情聴取が出来るのは必然的に如月しかない。腕が動かないということ自体が充分に重たい後遺症なのだが、今回襲撃してきた完成品4人の中では、最も軽い症状ではあるため、話すことも苦では無いだろう。

「罪を償わなくちやいけないわ。如月もいっぱいやらされてきたものの」

動かない右腕を撫でる。今は吊っているが、何をしても一切動かないらしい。匂いの元は二の腕ではあるのだが、手も膝もピクリともしない。如月としては、そこには何もないくらいの感覚なのだとか。

「如月がこれで、初霜ちゃんがああなっているのを見ると、とてもじゃないけど如月のコレは軽すぎるわ。なら、みんなのために如月が矢面に立つの」

「姉さん……私もサポートしますから」

「ええ、ありがとう三日月ちゃん。それと、あの時はごめんなさいね」
「いいんです。ここにいる人達は、もう半分以上は元々敵対していた人ですから」

言われてみれば、純粹にここで救助された者の比率は半分にも満たなくなってしまう。私達が戦い、生かして救い、飛鳥医師が治療することで協力してくれている者ばかり。勿論、そこには如月も含まれる。

その全てを見てきているのだ。今更文句を言うことなどあり得ない。言うのだったら、大半が施設から追い出されているだろう。

「だから、姉さんも気にしないでください」

「……そうね、うん、なるべく考えないようにするわ。開き直るわけじゃないけど、立ち直るくらいはしなくちゃね」

初めて、悲しみのない笑みを浮かべた。この調子なら如月は大丈夫だろう。生活のサポートは必要だが、心持ちは大分前向きだ。それだけでも充分である。

「ところで、若葉ちゃんに聞きたいことがあるの」

「何かあるのか？ 別に大概は話すが」

「三日月ちゃんとはどういう仲なのかしら。ちょっと親密過ぎない？ まるで恋人同士みたいに近い関係よね」

思い切り咽せてしまった。亡骸から艤装を剥がす手も滑ってしまい、危うく傷付けてしまうかと思った。三日月も同じように危なかった様子。

「あ、私も聞きたーい。ワカバの痣が拡がってからすごく仲良くなったよね」

「……まあ、確かに、若葉と三日月はより親密な仲になった……な、うん」

「そう、ですね。はい、親密です」

シロは私と三日月の関係には気付いているだろうが、あえて何も話さず。

同じパーツを持つ上に侵食が脳まで届いたため他人の気がしないと云っても、言えるのはそれくらいだ。親密、というだけで済むかはわからないが、今の私には三日月は切っては切れない仲なのは確かである。

「三日月は若葉の大切な人だ」

「若葉さんは私の大切な人です」

私と三日月が同時に言っただため、如月がクスリと笑った。声が揃ったことが少し恥ずかしかったが、相手は三日月だしまあいいか。

「ふふ、よおくわかったわ。三日月ちゃん、如月はその関係を応援しているから、頑張ってね」

「は、はい、頑張ります……」

如月は如月なりに何か納得した様子。なんだか応援されているようなので、素直に受け取っておこう。

昼食は赤城と加賀、翔鶴が別室。赤城と翔鶴が顔を合わさないようにするための処置であり、翔鶴は瑞鶴への栄養剤の投与もここで行なう。失敗作の引き揚げ作業の裏側で雷からしつかり聞いていたように、初めてのことではあるが、もう1人で処置が出来るくらいにはなったようだ。

食堂では如月と初霜も一緒に食べることになるのだが、まず如月は腕がダメになっているため、食べるのにも手間がかかる。

「利き手がダメになると、ご飯も難しいわね……」

「私も手伝いますから」

箸が難しいため、スプーンとフォークを使つてになっているが、それでも利き手では無いために悪戦苦闘。かなり手こずっているのを三日月がサポートする形に。

「おいしい！ おねえちゃん、これすつごくおいしいよー！」

「そうかそうか、それはよかった。じゃが、少し溢し過ぎじゃなあ」

そして初霜。それこそ幼児のように食べるため、箸の持ち方もおかしく、食べているものもボロボロと溢してしまっている。それを姉が拭きながらの食事になった。

好き嫌いは無いようなので、変に愚図ったりすることも無さそうである。ありがたい。幼児退行しても、聞き分けの良い子で何よりである。

この場を借りて、施設の者達に今回の患者の後遺症のことが公表された。

如月はしばらくはサポートが必要なものの、慣れてしまえば1人でも普通に生活出来るレベルではあったが、初霜の幼児退行は思った以上に難しい。基本的には姉が常に側にいることとなり、それ以外でも誰かに預けられるように仲良くしてもらおう方針となっている。

「制服は明日届くそうだ。今、来栖提督が準備してくれている」

「ほう、ならば初霜も明日からは検査着で無くなるのう。良いことじゃ」

今回の施設の増員は元完成品の4人。飛鳥医師が来栖提督にどのような伝えたかは知らないが、少なくとも初霜と如月の制服は用意してもらえとのこと。

今でこそ2人とも検査着のままだが、制服を着れば気持ち的にも完治に近付いたように思える。

「若葉のを貸してもよかったんだが」

「寸法もおおよそ同じかえ。ならば、午後からは借りようかの。初霜、それでええかや？」

「おようふく？ うん、わかばとおなじのきる！」

私と同じ服を着れると知ると大喜びな初霜。食べながら喋ったのでまた散らかしてしまっただが、そこはすかさず姉がフォロー。

元々の初霜の制服は私とほぼ同じものだ。もし私の服を気に入らなくて脱ぎたくないと言ったとしても、同じものが来るのだから問題にはならないだろう。

「今後初霜はどうしていくのがいいのかのう」

「出撃はさすがにさせられないな」

美味しそうにご飯を食べる初霜を横目に相談。治療済みであり、やろうと思えばいつでも出撃出来るであろう初霜だが、自分が艦娘であることすら忘れてそうなので、戦闘は難しそうである。何より、こんな状態で戦場に出たら、戦うまでもなく泣き出してやられてしまいうな感がある。それだと気が気でない。

実際、出撃出来たら私と同じ能力を与えられていたのだから近接戦闘の即戦力として運用出来ただろう。それこそ、鳥海やリコと同じように夜間警備で飛鳥医師を守ってもらうことも出来たかもしれない。結局はたればなので今考えることではないかもしれないが。

「裏方……かのう」

「雷の手伝いをしてもらったりがいいか」

一番妥当なのは、雑務の手伝い。危ないかもしれないが、雷の手伝いで人数が増えた施設の住人のために食事を作る役に収まるものいかもしれない。子供でもやれる作業というのを割り振ってもらうしかないのだが。

「初霜は何かしたいことあるか？」

「んー……おねえちゃんたちといっしょなら、はつしもとつてもうれしー」

にぱっと笑いながら言う初霜。なんて健気な子。守らねば。

「わらわ達も仕事があるからのう。一日中一緒にいてやる事が出来ぬ。初霜や、お留守番はちゃんと出来るかえ？」

「おるすばん……で、できるよ。だいじょーぶ、だいじょーぶだよ」

声が震えたのは聞き逃さない。独りでいることを想像して怖がったのも匂いからわかる。これだと一人にするのは難しいか。

「なら初霜ちゃん、如月のお手伝いしてもらっていいかしら。ほら見て、利き手が動かなくて困ってるの」

ここで如月が助け舟を出してくれた。私も姉も手が離せない時は、如月が初霜を見ていてくれると言ってくれている。

「うでがうごかないの？ たいへんだ！」

「そう、だから普段も大変なの。如月に与えられる仕事があはわからないけれど、片腕だと不便だし、初霜ちゃんに手伝ってもらえたら嬉しいな」

「いいよー。はつしも、きさらぎちゃんのおてつだいするー！」

元々仲間としてここに襲撃してきたことは当然覚えていないのだろうが、繋がりがあつたことを心の奥底ではわかっているのかもしれない。如月にもすぐに懐いた。

「すまないな、如月」

「いいのよ。ずっとヘルプが欲しいのは本当のことだし、三日月ちゃんだつてずっと如月についてることなんて出来ないでしょう？」

「そう……ですね。私も夜間警備とか雑務とかありますし」

それに、如月を手伝うという役割を得たことで、初霜もこの施設での立ち位置を得たことになる。ただただ居座っているより、健やかに生活出来るはずだ。今の初霜にはそういうものが必要。

「それにほら、三日月ちゃんは如月よりも若葉ちゃんの側にいらわなくちゃ、ね？」

「ね、姉さん……」

妙にそこを推してくる。私としてもありがたいといえはありがたいが。

如月と初霜のこれからも順調に決まっていく。治療出来ればそれに越したことはないが、どうしてもダメとなった場合の道が示されたのは大きい。

医者 の 精神

元完成品が目覚め、それぞれの道が決まった日の夜。私、若葉率いる五三駆が夜間警備を務めることとなった。戦闘の疲れは無くなり、艤装の修理も完了。十全の状態 で任務に取り掛かることが出来る。る。

今晚の引率は摩耶。また、事前の打ち合わせ通り、鳥海とリコが施設内の巡回をしている。鳥海も大分脚の調子は良くなってきたらしく、摩耶の助けがなくても歩くことが出来るようになったそう。ただ走ることは難しいものの、完治はもう目の前。

「如月と初霜はどうしたんだ？」

「初霜は如月の部屋で姉さんと一緒に寝てる」

今は如月は部屋を与えられているが、初霜は与えられていない状態。姉が夜間警備ではない時は姉と、あるときは如月と寝るという方向で落ち着きそう。今日は姉がフリーのため、姉がいないときに一緒に寝る如月と共に3人で寝ている。

如月のお手伝いという大役を貰ったことで、初霜は随分とやる気満々だった。あの後すぐに如月とも仲良くなり、早速腕が使えない分の手伝いをしているほどだ。三日月がいてもお構い無しに如月にご飯を食べさせたりする姿は、なかなか微笑ましい。

「私と初春が同時に部屋にいることが少なくなったから何とかなってるわ。ダブったときは如月のところに差し出せばいいでしょ」

「一緒に寝てあげてくれても」
「考えとくわ」

姉と相部屋の曙は、姉と夜間警備が交互になるため、基本的に初霜と一緒に寝ることになることは無い。それでもリザーブの朝霜と巻雲が入ったりして入れ替わりが発生したら、タイミングが合わさることもあるため、そのときは一緒に寝るか初霜が姉ごと別の部屋に行くかのどちらかになる。

「というか、姉妹なんだからアンタと一緒に寝てやんなさいよ」

「若葉もそう言ったんだが、如月が引き取ると聞かなくてだな。手

伝ってもらうのだから、もっと親交を深めたいと」

などと言っていたが、如月が私と三日月の間を取り持とうとしているのは匂いを嗅がなくてもわかった。三日月は顔を赤らめるし、雷はうんうんと首を振るし、摩耶はケラケラ笑っているくらいである。曙も察したか、意地が悪い顔をしてきた。

「アンタらはまあそれでいいわ」

「そ、そうか……」

何というか、私と三日月の仲は施設公認という感じになってしまっている。深海の侵食による影響なので、症状の悪化として認識されているのもあるのだが、周りの目が妙に温かいのはどうしても気になるものである。三日月が嫌がっていないので構わないが。

「仲がいいのは良いことじゃない。私は2人が仲良くしてるのは良いことだと思うわー！」

「まあそうだな。仲違いしてるよりやいいわな。なあ曙?」

「いちいち私に振らないでもらえる?」

などと話しながらの夜間警備は、結局何事もなく終了。グルグル回りながらの世間話で終わった。何も無いことが一番ではある。なんだかんだ、まだ夜へのストレスは解消されていない。夜間警備も和やかに終われるに越したことはない。

夜間警備が終わった後にすぐに眠り、目を覚ましたときにはもうほぼお昼。五三駆が夜間警備の際には昼食は夕雲が担当しており、手伝いは変わらず暁と呂500となっている。その匂いが私達の部屋にまで漂ってきていた。

「おはようわかばー、みかづきちちゃんもおはよー」

「ああ、おはよう。もう昼だが」

「おはようございます、初霜さん」

三日月と共に起き、着替えて出て行ったところで、新しい服に身を包んだ初霜が姉と一緒にいるところに出会う。

「あのねあのね、おつきなおじさんがおようふくくれたの!」

「そうか、これは改二の服なんだったか」

「うむ。お主のものとは少し意匠が違うが、まあ似たようなものじゃな」

ブレザーのデザインが少し違うようだが、概ね同じもの。むしろ新しい服ということで、初霜は大喜びしたようである。そういうところもしつかり幼児。

元々如月と初霜の服を調達してくれた来栖提督が来ることにはなっていたため、私達が眠っている間に既に到着していた。今は如月が事情聴取を受けているらしく、初霜はその部屋から退場。余計なことを知って苦悩するよりは、もう何も知らなくても良いだろうという判断から、飛鳥医師が配慮してくれた。

「よかったな初霜、よく似合ってるぞ」

「そう？ やったー！ おねえちゃん、わかばにほめられたよ！」

「うむ、よかったのう。そうじゃ、医務室に呼び出しじゃ。目を覚ましたら伝えるよう仰せつかっておったのでな」

聴取中でも関係無しに医務室に来てくれて構わないと言われているらしい。それなりに時間が経っているため、事情聴取自体はもう終わってるかもしれないとも姉に言われる。

どうであれ呼ばれているのなら行った方がいいだろう。姉と初霜と別れ、三日月と共に医務室へ。

「失礼する」

「おう、話には聞いていたが、痣が大分拡がってるなア」

「ああ、いろいろあってな」

医務室には飛鳥医師と来栖提督、事情聴取相手の如月に、秘書艦の鳳翔と勢揃い。如月も本来の自分の制服に着替えており、検査着は卒業している。腕については勿論、専任お手伝いの初霜が手伝ってやった模様。

「話の最中で良かったか」

「いや、ちょうど今終わったところだぜエ」

姉の予想通り、事情聴取は終わっていたようだ。如月もちょうど席を立とうとしていたほど。タイミングとしてはちょうど良かったかもしれない。

「このまま若葉の診察かア？」

「ああ、バタバタしていてまだ出来ていなかったからな」

元々来栖提督の話が終わってから診察をするつもりだったそうだが、終わってなかったら私達もその話を聞くことになっていたらしい

確かに、あの戦いの後はゆっくりと腰を落ち着けて飛鳥医師と話すタイミングがなかなか取れなかった。昨日の午後からがようやくその機会を得ることが出来そうだったのだが、あれよあれよとここまで延びてしまっていた。とはいえ、診てもらおうことなど高が知れている。痣の侵食具合と問診程度だ。

「んなら、俺ア出ていくぜエ。剥いて確認すんだろオ？」

「言い方が悪い」

「鳳翔、若葉のことは見ておいてくれや」

「かしこまりました」

一応私も女ということ以来来栖提督は鳳翔に任せて医務室から出ていく。その間に工廠の方で荷物の積み下ろしを手伝ってくるのとこの。

鳳翔も私の痣については気になっていたと言う。また、席を立とうとしていた如月は再び着席。如月も私の診察に少し興味があるらしい。

「妹のお婿さんだもの。身体がどうなっているかは知っておきたいわね」

「婿ってお前……」

「あら、間違いないじゃないと思うんだけど？」

冷やかしのなか本気なのか。だが今までの行動からして、如月は本気に近い。そういう言葉にされると途端に恥ずかしさを感じる。

「診察を始める。若葉、痣が見えるようにしてもらえるか」

「……すまないが、範囲が広がっている。服を脱がないとおそらく全て見ることが出来ない」

「ある程度見えるようにしてくれればいい」

ブレザーを脱いで三日月に渡す。今の痣は袖を捲る程度では全容は見えないため、シャツもはだけで何処まで痣が伸びているかを確認

してもらおう。肌が多めに見えると思いますが、もう飛鳥医師には何度も見せているため羞恥心などまるで無い。

顔に関しては少し前に風呂の鏡でようやく自分でも確認出来たが、もう隠しようがないレベル。マフラーでは首に巻き付いた痣を隠すことが精一杯。顔は仮面をするくらいでしか難しい。流星にそんなことはしないが。

「これは……また……」

「自分で実感している限り、心臓も包まれている」

「だろうな。内部に浸透していることは三日月の時からわかっている。それ以外に何か影響を自覚出来ることはあるか」

それを言われると、もう思考の侵食のことくらいしか無い。それを伝えると、さすがの飛鳥医師も驚きを隠さなかった。脳への侵食は常に心配していることだ。

「理性を捨てるだど？」

「ああ、リミッターを外すとだな、容赦が無くなるんだ。なあ、如月」
「ええ……あの時の若葉ちゃんは、その、鬼のようだったわ」

初霜を斬り刻み、如月を蹴り飛ばしたあのときは、自覚出来るほどに容赦が無かった。それでも止めることは出来なかった。初霜が感情を失うのと同じで、私は理性を失う。敵と認識したものには攻撃の手が止められなくなる。それが実の妹でもだ。

そのため、リミッター外しは若干の諸刃の剣。大丈夫だとは思いますが、今の私は若干の狂戦士^{バースター}気質なのかもしれない。

「それ以外では？」

「三日月ちゃんと相思相愛になったのよね」

割り込むように如月が語った。それはもう満面の笑みで。

やはり如月は私と三日月の仲を後押ししてくれているようだが、それが他の者と比べて積極的且つ過剰。なんだろう、如月はそういう浮いた話題が好きなのだろうか。

「……三日月の思考変化と同じことが起きたんだな」

「そういうことだ」

服を直しながら、その辺りは話しておく。生活するのに不自由では

無いので気にしてはいないが、急な変化というのは飛鳥医師が気になるところのようだ。

ひとまずは普段通りの生活でいいとは言われたものの、何かおかしなことがあったらすぐに言うようにと念を押された。勿論それは自分でも理解している。脳への侵食というのはそれだけ怖いものである。

だが、それだけ言った後にガツクリと項垂れてしまった。前々からそうだが、私や三日月がこういう変化をするたびに自分のせいだと気に病んでしまう。私達はそんなこと思っていないというのに。

「飛鳥医師、何度も言っているが、若葉は感謝している。今はこの力が無ければ誰も守れないんだからな」

「だが……」

「若葉が今生きていられるのは飛鳥医師のおかげだ。何も文句は無い。結果的にこうなっただけだろう」

もう何度も言っているし、みんなが言っている。誰も飛鳥医師のことを恨んではない。生きていられるのは治療のおかげだし、居場所を与えてくれているのは飛鳥医師だ。感謝こそすれ、憎むことなど無いのだ。

「自信を持ってくれ」

「……すまないな。僕は割とメンタルの面が弱い」

「え、どの口が言ってるんです」

三日月のツツコミ。私もそう思う。メンタルが弱かったら、半日ぶつ通しの治療やら、脚を切断しての移植なんて出来やしない。

「私は人間が好きじゃないですが、先生は許せますよ。だから、若葉さんが言う通り自信を持ってください。そうでなければ私が折れます」

三日月が心を開いている人間は数限られている。その中の1人なのだから、そこは誇りに思ってもらいたいものだ。

「……弱いところは見せられないな」

顔をパンと叩き、立ち上がる。私と三日月の激励が効いてくれた。今ここで弱気になられたら、今後の治療や研究にも影響が出かねない。飛鳥医師ならそんなことはないだろうが、心身ともに万全な状態

で事に当たってもらいたいのだ。これで心の部分は大丈夫だろう。

問題は身体。飛鳥医師は常に過労状態な気がしないでもない。そろそろ本当にヘルプがあると思う。飛鳥医師と同じ腕を持つ医療研究者が他にいるとは到底思えないが、1人増えるだけでも大きく変わるはずだ。

「なあ飛鳥医師、サポート役を雇った方がいいんじゃないか。この前もそうだが、飛鳥医師の負荷が高すぎると思うんだ。いつか過労死するぞ」

「わかつてはいるんだが、門外不出の技術が多すぎる。君達にすら見せられない技法があるんだ」

それが蘇生術。リミッターを外された者を元に戻すことにも使えたそれは、絶対に外には出さないと飛鳥医師が誓ったものだ。心から信頼するものにすら見せないのだから、これからもずっと飛鳥医師が1人内に秘めていくのだと思う。

それを口外しろとは言わない。せめて他の治療に協力してもらえざる者を雇えないかと言っている。過労死ほどバカらしい死にはない。

「あ、なら下呂提督に掛け合ってみましょうか。医療研究者は他にもいるでしょうし、1人2人なら派遣してくれるのでは？」

鳳翔もその案には賛成なようだ。誰がどう見ても飛鳥医師の負担が大きいことから、誰もが心配していると自覚してもらいたい。本当にダメな技法以外は共有してもいいだろう。そもそも胸骨の件は私でも手伝っているのだから。

「……わかった、少し話しておく。だが、三日月はそれでいいのか？ サポートが増えるということは、ここに人間が増えるということだが」

「構いませんよ。先生に死なれることの方が困りますから。私の肌を綺麗にしてくれる約束、忘れてませんからね」

ここだけは譲れないらしい。特に顔。

「今からでも先生に連絡しておく。あの人なら喜んで人を遣よこしてくれるだろうさ」

これにより人員補強が約束されたようなもの。ここからはさらに治療に専念出来るだろう。

空母の母

私、若葉含めた数人の申請により、施設に医療関係者の援軍を呼ぶことになった。門外不出の技術があるために飛鳥医師が最後まで抵抗したが、過労死されて困るのはこちらだ。結果的には折れてくれて、下呂大将に連絡をすることに。

連絡したところ、すぐにでも用意すると大喜びで電話を切られたらしい。協力要請を待っていましたと言わんばかりのテンションだったそうで、飛鳥医師も困り顔。

「僕はそこまで一匹狼を気取っているわけではないんだが」

「お前、治療のことになると大概1人でやندろうがよオ。そういうところだぞ」

「艦娘の皆に手伝ってもらっているだろ。1人で出来ないことはちやんと協力してもらっているさ」

それでも完全にキャパシティを超えてしまったのだから仕方あるまい。他人に教えたなら悪用されそうな技術が多いのはわかっていて、外部の協力は今は必要不可欠だ。私達のためでもあるが、一番は飛鳥医師のためだ。本当に過労死しかねない。

今からも瑞鶴の植物状態を治療するために、鳥海の脚を解剖分析してヒントを探していく。これはこの施設では飛鳥医師しか出来ないことだ。そういうところに援軍が来てくれれば、私達も安心出来る。

「まあ人員が追加されるってんなら、俺も少しは安心出来らア。大将がどんなヤツ連れてくるかは知らねエけどな」

「まあ少なくとも医療従事者だろう。素人に来られても困る」

確かに、何も知らない状態でヘルプと言われても足手纏いになりかねない。

それに、ここはかなり特殊な場所だ。この状況に驚かず、怯えず、すぐに慣れることが出来ることが重要。三日月のように人間嫌いもいるし、赤城や翔鶴のような憎悪の塊のような深海棲艦と在籍しているのだ。それに対して通常に接することが出来るコミュニケーション能力も必要。

割と難易度が高いように思えるのだが気のせいだろうか。今でこそ大丈夫だが、新提督だつて最初はいろいろあつた。ここにすぐに適応出来たのは来栖提督くらい豪快か、下呂大将くらい冷静かのどちらかな気がする。大分尖つた人格者である必要があるだろう。

「まア大将のこツた。確実にここに適応出来るヤツが来るだろうさ」「そうだといいがな」

これはもう下呂大将の人選に任せるしかない。万が一のことがあつたら、下呂大将には申し訳ないが追い出すまで考えておこう。

初霜と如月の服を持ってきたことと、如月からの事情聴取が終わつたので、来栖提督は用事が終了したのだが、鳳翔にもう1つ用があるというので昼食後にその用事を済ますことにした。

その用事というのが、救出した残り2人、五航戦との面会である。これは来栖提督よりも鳳翔が独自にやった方がいいだろうというところで、個人で行動することに。

「この部屋が五航戦の部屋だ」

何があるかわからないが、念のため嗅覚による相手の思考を確認するために私が同行。私が同行するということは三日月も同行するはずだったのだが、来栖提督を運んできた二二駆に相変わらず捕まつており、如月まで加えて三日月の尋問が始まつていた。すまない三日月、あそこまで悪ノリされると私でも止めづらい。

「ありがとうございます。やはり一度面と向かつて話さなくてははいけませんから」

「鳳翔は若葉の師匠だからな。それくらいの頼みは聞かさ」

「ふふ、そう言ってもらえると嬉しいですね」

鳳翔は翔鶴と瑞鶴の服も持っていた。瑞鶴はともかく、翔鶴には必要なかもしれないが、今持っているのは深海棲艦化したときのものみのため、替えは必要だろう。鳳翔はそれをしっかり手渡しするたぬにここに来ている。

「翔鶴、入っていいだろうか」

念のため私が扉をノックする。いきなり鳳翔が入っても抵抗する

かもしれない。騙すようで申し訳ないが、強硬する気も無いので許してほしい。

『ドウゾ』

さすがに1日経ったからか、あの時の落ち込みは声から感じ取れない。自分の手で瑞鶴を維持していくことで、モチベーションを保っているようにも思える。

あれから一度も赤城の姿は見ていないだろうし、声すらも聞いていないだろう。憎しみに駆られるようなこともしばらく無かったはずだ。

「失礼する」

部屋の中では、ベッドに寝かされた瑞鶴が点滴により栄養を与えられていた。その隣で翔鶴がじつとその様子を見続けている。本当に丸一日、何もせずはずっとここで瑞鶴のことを眺めていたのだと思う。

昨日も今日も、翔鶴が部屋から出てきたところを見たことがない。食事は雷達が運んでいたし、風呂に入る時間も私達とは全く違う時間に行っていると聞いている。姿を見ること自体が1日ぶりに思えた。

「ワカバサン、ドウシタノ？　ワタシニハダレモヨウガナイハズダケレド」

「客だ。面会してほしい」

私の後ろから鳳翔が入ってきたことで、翔鶴がビクンと震えた。

深海棲艦化により胸骨の洗脳や腸骨のキューブを全て消し去った翔鶴だが、記憶は全てそのまま残している。当然、鳳翔のいる鎮守府を襲撃したことだって覚えているわけだ。

その鳳翔が来栖提督直属の艦娘であるかなんてすぐにはわからな。しかし、食事や瑞鶴の栄養剤を貰った時に雷や暁から聞いていたのかもしれない。まさかその鳳翔が目の前に現れるとは思っていなかったのだろうか。

「ホ、ホウシヨウ、サン……」

「はい、軽空母鳳翔です。翔鶴さんにはこちらを渡しに来ました」

袋に入れられた服を渡す。それは、今の深海棲艦としての服ではな

く、艦娘翔鶴としての服。今の翔鶴が着ても、おそらく違和感を感じないと思われる。深海棲艦化しても風貌は殆ど変わっていないため、服さえ変えれば見た目は元に戻ると思われる。

「瑞鶴さんのものも入っています。目が覚めたらこちらを着せてあげてください」

「……アリガトウ、ゴザイマス」

震える手で袋を受け取った。あの時の加賀のように鳳翔の姿を見ることが出来ていない、あちらは扉越しで話していたが、こちらはそれすらも許さぬ直接の面会である。目を合わさず、俯いてしまった。「少し予想外の姿で驚いてしまいました。事前に聞きはしていました
が……完全に深海棲艦なんですか？」

「……ハイ。イマノワタシハシンカイセイカン。シヨウカクトシテノキオクモアリマスガ、イカリトニクシミデコノスガタニウマレカワリマシタ」

鳳翔相手には素直に話していく。今までの成り行きも、こうなった事情も、赤城に対する気持ちも。加賀もそうだったが、空母は誰もが鳳翔に頭が上がらないらしい。流石は全ての空母の母。普通の艦娘でもそうだが、空母相手にするとより強く好かれている。こんな姿になっってしまった翔鶴も例外では無かった。

それでも赤城も面会したら理性は吹っ飛ぶのだと思う。鳳翔が説得しても、お互いにそういう存在なのだから仕方ない。

「ワタシハコノスガタニナリ、ズイカクハネムツタママ。ワタシタチニフサワシイバツカモシレマセン。デスガ、セメテズイカクダケハ、メヲサマシテホシイ」

「心配しなくて大丈夫ですよ。飛鳥先生がきつと治療してくれます。時間はかかるかもしれませんが、必ず成し遂げてくれるでしょう」

鳳翔からも大きな信頼を得ている。そこにサポート役の援軍まで加わることで、より治療法確立の可能性を高めていた。瑞鶴は必ず目を覚ますと、翔鶴に諦めさせることもない。

鳳翔にそれを言われたことで、翔鶴はより希望を持てたようだった。飛鳥医師には脅しにも似た言葉を投げ掛けたが、鳳翔には本当に

頭が上がらないようで、ただただ信じるのみ。

「だから、我慢しててください。辛かったら連絡してもいいですからね。話し相手にはなれますから」

「ハイ……ハイ、ヨロシクオネガイシマス。ズイカクガメヲサマスツノトキマデ、ワタシハココデマチツツケマスカラ」

少しだけでも気が晴れてくれてよかった。ずっとここで瑞鶴を見ているだけでは、気分が鬱屈して暴走してしまいかねない。気晴らしに赤城と殺し合いなんてされても困る。

だが、今の翔鶴は赤城を殺すこと以上に重い問題が目の前にあるため、憎しみは完全に鳴りを潜めていた。本質すら覆すほどのショックを受けているのは誰にでもわかる。

「瑞鶴さん……綺麗な顔をしていますね。大丈夫、目を覚まします」
「……ハイ」

加賀がやったように、鳳翔も翔鶴を抱き寄せた。加賀以上に落ち着く存在の温もりに、翔鶴はまた涙する。

「ズイカクハ……ズイカクダケハスクワレテホシイデス」

「瑞鶴さんが救われれば、貴女も救われるでしょう。大丈夫、私達だけなら無力でしょうが、飛鳥先生は必ずやり遂げてくれます。信じて待ちましょう」

「ハイ……ホウシヨウサンガソウイウノナラ……ワタシハアノオイシヤサマヲシンジマス……」

翔鶴のメンタル面は鳳翔に任せるのが一番かもしれない。本当にこれだけで、翔鶴の表情は晴れやかになっていた。空母のメンタルケアは、鳳翔が最も適任だろう。

勿論、赤城の服も用意してくれていた。ただし、翔鶴以上に厄介な存在のため、より慎重に事を進めたいところである。

「加賀、少しいいだろうか」

始まりはやはり私から。前回の加賀の時はいきなり鳳翔が行ったが、今回は翔鶴の時と同様、鳳翔を警戒されても困る。

翔鶴の時とは違い、私達に入っていないと言うのではなく加賀が扉の

前まで来てくれた。扉を薄く開けた瞬間に鳳翔と目が合ったことでギョツとした顔をする。

「赤城の服だ。あと、一応様子を見に来た」

「……入っつていいわ。鳳翔さん、驚かないでくださいね」

「大丈夫ですよ」

部屋に入ると、前回と変わらさず軟禁状態の赤城が笑顔で出迎えてくれた。別に縛られているわけでもないし、室内なら好きにしているよ。うなので監視役の浮き輪と仲良くしているようである。

ただし、匂いからストレスを若干感じる。同じ施設に翔鶴がいるとわかつていてる中で自制してここにこもっているのだから、ストレスは蓄積されてもおかしくはないだろう。

「赤城、服を持ってきてもらった」

「服ですか。それは嬉しいですね。これも気に入ってますけど、この身体になった時に手に入れた1着しかありませんし」

「ああ、そう思っつて仕入れておいたんだ。今日持っつてきてもらえた」
それを持つ鳳翔が部屋に入っつた瞬間に、赤城の笑顔が強張っつたのがよくわかつた。加賀もそれから若干目を逸らす。

深海棲艦として生まれ変わっつた赤城とはいえ、鳳翔という存在は重いらしく、それが生まれ変わる前に襲撃を仕した鎮守府に所属している鳳翔だと知るや否や、笑顔は完全に消えた。

「ほ、鳳翔、さん……」

「はい、軽空母鳳翔です。赤城さんは見違えましたね。翔鶴さん以上に変わっつてしまいましたか」

本来の赤城は黒髪らしいが、今の赤城は白髪になっつている。それは確かに大きな変化だ。翔鶴とは違う、一度死んでからの復活であるのがよくわかる。

「今若葉さんが言っつていた服です。勿論正規空母赤城の服ですが、良かったですか？」

「は、はい、問題ありません。ありがとうございます……」

縁が出来てからまだ日は浅いが、この姿の赤城がここまで萎縮してゐるのを見るのは初めてである。それだけ頭が上がない存在。

翔鶴と同様震える手で直に服を受け取り、ぎこちない笑顔を返す。服が貰えたことは嬉しいが、面と向かうことは素直に喜ぶことが出来ない模様。

「話は聞いています。貴女は怒りと憎しみの権化となり、この世界に蘇ったと」

「……はい。今の私にはそれが全てです。自制はしていますが、すぐにでも翔鶴が殺したくて仕方ありません」

やはり素直。鳳翔相手では嘘もつけない。

「本質がそうなってしまうのなら仕方のないこと。自制が出来るだけ充分でしょう」

「……本人を目の前にしたら自制は利きませんよ。確実に殺します。それはあちらも同じでしょう。だから私はここに自ら軟禁されているのですから」

おそらくそれが赤城に残された最後の理性。本当に理性がなかったら、いまこの状態ででも翔鶴の部屋を探し出し、殺しに向かう。そういうところは赤城自身の人格と記憶を持っていることの良いところか。

「仲良くしろとは言いません。それが今の赤城さんなのでしょう。ですが、貴女達は必ず、協力しなくてはならない時が来る。その時は殺し合いなどせず、共に戦えるようにしてください」

「いくら鳳翔さんの言葉でも、聞けるものと聞けないものがあります。その時が来たら、私は真っ先に翔鶴を殺します」

残念ながら鳳翔の説得も聞かず。意固地でも何でもなく、それが今の赤城なのだから仕方あるまい。軸を折らない限りは赤城はこのままだろう。

「なら、その時私がここにいたら、貴女は私が止めましょう」

「お好きにどうぞ。私は私がなすべき事をしますので」

「……ふふ、こんな赤城さんも新鮮ですね」

この状況で笑える鳳翔の方が余程怖いと思ったが、態度にはなるべく出さないようにした。隣で加賀も同じことを思ったようで、私と目が合い、そして苦笑。

この鳳翔なら、赤城すらも止められるだろう。母として、容赦なく。

新たな医師

鳳翔の用事が終わったということ以来栖提督は撤回。事が済んだ後は疲れを癒すために、私、若葉は三日月と談話室でまったりしていた。随分疲れた顔をしていた。それまでの間に三日月は姉妹にいろいろやられていたようである。

「姉さん達にさんざん問いただされました……若葉さんとは何処まで行っただと……」

「何処までと言われてもな」

「如月姉さんのせいで、みんな悪ノリし過ぎです」

少し離れていた分、しつかと手を握ってくる。散々な目に遭ったからか、私の温もりが欲しいとのこと。気分を落ち着けるために私の側にいるというのは続行中。

如月はトラブルメーカーというわけでは無いのだが、色恋沙汰が絡むと途端に活性化するようである。いやまあ色恋とかそういうのは無いのだが、如月にはそういう風に見えるらしい。三日月曰く、如月はピンク色思考だとか。

「如月が元気になってよかったじゃないか。トラウマでもっと落ち込むかと思っていたが」

「ダシに使われた感が凄いですけどね。落ち込まれるよりはマシですか」

「ああ、そこは素直に喜ぶべきだろう」

完成品故に薬の禁断症状もなく、後遺症が脳では無いために悲壮感もない。如月は一番軽かったと言ってもいいだろう。朝霜といい勝負か。そのため、トラウマはあっても私達に沈んだ姿を見せることは今のところ無い。

隠れたところで落ち込んでいるかもしれないので、一緒に寝ることもある姉や初霜にこっそり監視してもらってはいる。初霜も新たな任務に張り切っていた。それで何も言っていないのだから、今は大丈夫と判断した。

「残りの時間は若葉さんと一緒にいます。疲れました」

「ああ、構わない。好きなだけ癒されてくれ」

私も三日月の頭を撫でながら癒される。少し離れていたくらいなのだが、その分を取り返すくらいにベツタリになっているのはやはり侵食の影響か。

「いちやついてるとこ悪いんだけど」

などとしている時に曙が談話室に入ってきた。私達に用があるようである。曙が目の前に来て三日月は離れるどころか密着度を上げてきたレベルなので、曙が溜息をついた。

施設公認とわかってから、三日月はもう羞恥心すら感じずに来る。曙から冷やかされるのも仕方あるまい。

「先生から話聞いている?」

「援軍のことか」

それなら現場にいたので知っている。飛鳥医師の負荷を下げるために、医療関係の援軍を下呂大将にお願いしたが、すぐにでも用意すると言ってくれていた。

「そうそれ。先生の援軍、明日来るって」

「明日?」

いくらなんでも早過ぎる。最初からそれを言われることを待っていたかのようだった。大分前から選定済みだったとしか思えない。

というわけで翌日。当然ながら、初めて来る人間だ。嗅覚による確認は必須事項。私がこの場にいるのだから、当然シグも見てくれる。何かあつたら夢で説明してくれるだろう。

いくら下呂大将が探し当てた人間だとしても、あちら側と繋がっているような素振りがあれば即座に捕縛。スパイなんて絶対に許さない。

「昨日の今日だぞ……前以て準備してたなこれは……」

「下呂大将は飛鳥医師のことが心配だったんだろう」

「……そういうことにしておく」

そうこうしている内に、施設に車が乗りつける。いつものまるゆ運転なのだが、艦娘の運搬ではなく人間の運搬のため、少し違う車。艀

装などが必要ないために大型車ではなく、いわゆるボックスカーというヤツ。

そこからまずは下呂大將が下りてくる。流石にまだ松葉杖が必要であり、今回はまるゆが支えになっている。身長差はあるものの、まるゆとて艦娘、人間1人くらいなら楽々支えることは出来た。

「飛鳥がようやく人員補強を要請してくれて、私も嬉しいですよ」

「そ、そこまでですか」

「君は責任を自分だけで取りたがるきらいがありますからね」

ぐうの音も出ない様子。来栖提督にも言われていたが、1人で何とかしようとする人が多い。私達に知識が無いから、素人が手伝うわけにはいかないことはわかるものの、もう少し頼ってもらいたいものである。

「さて、すぐに本題を。君のサポートが出来そうな者は、元々目を付けていたんです。正直な話、君から頼まれたら確実に声をかけるつもりだった者ですね」

「そうだとしても、あまりにも早すぎます。それに、ここに来たからには絶対に住み込みですよ」

「ええ、その辺りも問題ないです。本人に全てを話していますから」

ここの施設の在り方は口外出来ないことばかりであり、一度知ったが最後、まず後戻りは出来ないような内容だ。そんなことを聞いて、ここでの住み込みを良しと出来るとなると、思った以上に胆力がある者なのかもしれない。

「……僕が言うのはアレですが、よく受け入れられましたね」

「君の今やつていることは、卑下されるものでは無いんですよ。誇りを持ちなさい」

話もそこそこに、援軍として来てくれた者を紹介してもらおう。

車から出てきたのは、トランクを運びながらやってくる女性。歩く姿だけ見れば何の変哲もないただの人間である。ただし、心を外に出さないものなんていくらでもいる。ここからが私の本領発揮。

「初めまして、飛鳥先生。私、蝦尾エビオと申します。本日よりこの医療施設への援軍として、住み込みで働かせていただきます。宜しく願います。

ます」

少し小柄な女性ではあるが、大人の女性なのはわかる。おおよそ摩耶や鳥海より少し上くらいの外見に思える。

丁寧な態度で飛鳥医師に対してペコリとお辞儀。一応この施設では上司と部下という間柄になるため、これが正しいか。

「若葉、チェック」

「了解」

飛鳥医師に頼まれ、蝦尾女史の匂いを嗅がせてもらう。新提督の時のようにさりげなくではなく、堂々と真正面からである。

この辺りはあちらに伝わっていないようで、私が嗅いでいくことに驚いていた。男性ならまだしも、女性なら自分の匂いをどうこう言われることには抵抗があると思う。

「あの、これは」

「うちの若葉は相手の感情を匂いで判定できる。あとは、敵の匂いを持っていないかを確認してもらっているんだ。申し訳ないが、この施設に初めて来たものは必ずこれを受けてもらっている」

裏切り者ならば、ここで何かしらの負の匂いが現れる。嫌悪や動揺、不安、罪悪感なんてのも感じられるだろう。その全ては、私達に対する敵対の感情の匂いである。

それに加え、姫や人形、完成品特有の匂いというものもある。大淀と直接関係しているのなら確実にその匂いが移っている。そうでなくても関連するものが近くにあるなら近しい匂いがするはずだ。

少なくとも外見や能力が艦娘から逸脱している私を見ても、奇異の目で見てもなかったのは評価出来る。これなら三日月を見ても酷いことにはならないはず。

蝦尾女史から感じられた感情の匂いは、驚きと緊張、そして過剰な好意である。驚きはわかる。私が知らされていない特殊なことをし出したのだから仕方ない。緊張もわかる。初めて来る場所な上に、普通とは違う艦娘が目の前にいるのだ。だが好意は何だ。

また、身体から感じ取れるのは消毒の匂いが強い。飛鳥医師と似たような匂いだ。そういうことがやれるからこそ、しっかりと消毒を欠

かさない。あとはその奥に違う匂いもいくつかあるが、私の知らないような薬の匂いだと思う。

「不審な匂いは無い。消毒の匂いが強いから、飛鳥医師と同じような仕事をしているのはわかる。その奥には薬の匂いだ。すまないが、若葉は知らない匂いがいくつもある」

「同業者であることは間違いないわけだな」

「ああ。あとは、強い好意の匂いがする」

蝦尾女史から動揺の匂い。隠していたい本心を曝け出されたことへの動揺のように思えた。申し訳ないが、その辺りまでしつかり詳かにしてもらわなければ信用が出来ないのがこの施設だ。

人間に効くかは知らないが、暁の時のような催眠や暗示のようなもので突然裏切るなんてこともあり得る。危険な潰せる要素は潰せるだけ潰したい。

「好意か。嫌悪でないのならいいが」

「飛鳥医師に対しても、若葉に対しても、その匂いは変わらない。この施設に対する好意だと予想する」

驚きの匂いが強まる。新提督のガーデニング趣味を言い当てた時のような驚き方だ。

「ええと……はい、素直に話します。私、実は……飛鳥さんの論文を何度も読ませていただいておりました」

「ああ、鎮守府で活動している時にいくつか提出しているな。負の遺産だと思っていたが」

艦娘の蘇生については濁した状態らしいが、単純に艦娘の生態について事細かく記載されたもの論文だそうだ。蘇生するにも、艦娘のことをよく知っていなければ出来ないため、後々のために全て書き記していたとのこと。それを何度も読んでいたということは、そういう意味でも同業者と見るのが自然か。

「その頃から……ですね、私、飛鳥先生の……大ファンなんです！」

「……あ、ああ」

数ある論文の中でも、飛鳥医師のものほど読みやすく引き込まれる内容は無かったと、蝦尾女史は語る。私達には難しすぎて理解が出来る

ないとは思いますが、専門分野の者にはそういうものなのだろう。

「特にですね、艦娘と人間の同一性の部分は何度も熟読させていただきました。医療という観点からアクセスした論文の中でも特に面白くてですね、今でも持ち歩いて読んでいるくらいなんです」

熱弁。その勢いに圧倒されそうだったが、とにかく、蝦尾女史が飛鳥医師のことを尊敬しているということはよくわかった。禁忌を犯したことを隠しているにしても、こうまで好意的に受け取ってくれるのなら、施設でもやっていけそうな気がする。

「その飛鳥先生と一緒に働けると聞き、胸がいつぱいで……」

「だが、先生から聞いていないのだろうか。ここでは住み込みで、かつ、危険な職場である」と

「聞いています。ですが、艦娘に関する研究をしている限り、危険なのは何処も同じだと思います。なら、私はここを選びます」

もう目がキラキラしていた。尊敬する者、雲の上の存在を目の当たりにしているような高揚感。下呂大将ですら少し苦笑気味。

「それで、その……これを読んでいただけませんか。私の論文なんです」

鞆の中から数枚の紙を取り出し、飛鳥医師に渡した。蝦尾女史の書いた論文であり、まだ上には見せていない研究成果らしい。上に見せる前に飛鳥医師に見せる辺り、本当に尊敬しているのだろうと思う。

こんな場所でやることは無いとは思っていたが、熱意に負けて飛鳥医師もそれに目をやる。その内容から蝦尾女史のことも理解出来るだろうし、確認するに越したことはない。

だが、読み進めていく内に、飛鳥医師の表情が変わっていく。

「君はこれを独学で？」

「はい、独学というか……いろいろな論文を加味して、出来る限りの検証もしています。実験が出来るものなんて限られていますから、憶測も少しあるんですが」

尊敬する者が自分の論文を読んできているという歓喜が強く、蝦尾女史から裏が見えない。全て表に出した結果がこれだというのなら、信用は出来る。

「……未恐ろしいな。艦娘の体組織を研究した結果で、実用性のある高速修復材の代替品が作れるだなんて……」

つまり、今まで私達が節約し続けてきた少量の修復材を、別の材料から作り出してしまったということだ。これも艦娘への医療に繋がる偉業ではあるのだが、簡単には受け入れられない内容でもある。

しかし、この研究成果は私達に今一番必要なものかもしれない。艦娘の体組織の研究をしていたということは、深海の侵食についても何かわかるかもしれないのだ。飛鳥医師が手こずっていたことも、蝦尾女史なら辿り着ける可能性がある。

外科手術は一切出来ないにしても、解剖くらいなら可能というのなら、最高の即戦力とも言えるだろう。

「どうですか飛鳥。私の目には狂いはないと思いますが」

「はい、蝦尾さんは、今この施設に必要な能力を持っていると思います」

論文を返し、改めて蝦尾女史を見据える飛鳥医師。

「蝦尾さん、君が嫌でなければ、僕と共にこの施設で研究を進めてくれないだろうか。ここには救わなくてはいけない者が数多くいる。僕だけの力では足りない部分も多いだろう」

「私で良ければ、いくらでもお手伝いさせていただきます。尊敬する飛鳥先生と共同研究出来るだなんて、夢のようですよ！」

ガツチリ握手をして、仲間として迎え入れた。下呂大将もうんうんと喜ぶように頷く。

蝦尾女史参入により、この施設はまた一步進むことになる。優先順位が最も高い、瑞鶴を目覚めさせるための研究も、これで一気に進むことだろう。

まずはこの施設に慣れてもらうことからなるだろうが、匂いからわかる限り、蝦尾女史は種族による差別もしない。すぐに溶け込むことが出来そうだ。

体組織の研究者

医療方面の援軍である蝦尾女史が施設に参戦。私、若葉が調べる限りでは、大淀の息がかかっているような者では無く、純粋な飛鳥医師の大ファンであるということがわかる。

艦娘の体組織を研究し、高速修復材の代替品を作ることが出来るほどの強者だ。今やりたいことに最も近い知識を持つている可能性が非常に高い。それでいて一切の敵意がなく、飛鳥医師と共に研究が出来ることをただ喜んでいるため、信用も出来ると私は思う。

「先生はこれからどうするんです。蝦尾さんを送ってきただけですか？」

「ええ、まだ手瀬鎮守府を襲撃するプランが出来ていませんからね。私は私の仕事をしますよ」

「よろしくお願いします。僕らも出来る限り協力しますので」
「ええ、では旗風にもよろしく伝えてください」

蝦尾女史が荷物を降ろしたところで、下呂大将はすぐに帰投。護衛を連れていないだけあり、本当に蝦尾女史を連れてくるのみで仕事が終わったようである。あの人も怪我人なのだからもう少し安静にした方がいいと思うのだが、それが出来ない性分なのだろう。

置いていかれた蝦尾女史は、どうすればいいかと困惑している。こんなところで立ち話もなんだしと、すぐに施設の中に入ってもらおう。そこそこ大荷物だったため、私が荷物を運ぶことに。

「ありがとうございます、若葉ちゃん。大将さんから貴女の話は聞いていました」

「そうだったのか。驚かないでくれたのは素直に嬉しい」
「突然匂いを嗅がれる事の方が驚きました。大将さんはその辺りは教えてくれなかったのよ」

外見に関しては本当に驚きもしなかった様子。こんな特殊な艦娘でも構わずに接してくれるだけでもありがたい。

「蝦尾さんは、先生に何処まで聞いている？」

「行きの車の中である程度は聞いています。共存という形の中立区

で、種族分け隔てなく治療する医者施設の施設と。なので、ここにはどちらもいるのだと」

私はそのどちらでもないものではないかと思う。それでも、蝦尾女史は私のことを得体の知れないものを見る眼で見なかつた。飛鳥医師と同じ、本当に差別のない眼。これならば安心してみんなに紹介できるだろう。特に三日月。

今は時間としてはもう少しで昼食というくらいに、施設の者全員が食堂に集合。夜間警備をしていた九二駆もちょうど起きてきたくらいのため、欠員は部屋に籠ったままの翔鶴と、軟禁状態の赤城のみ。加賀も参加してくれている。今は翔鶴は部屋に鍵をかけてくれているため、突然赤城が考えを変えて襲いに行くとなっても大丈夫。

食堂に見慣れない人間がいるということ、みんな興味津々。三日月は当たり前のように私の隣を陣取り、蝦尾女史のことを警戒するようにジツと見つめていた。

「今日から施設に加わることになった蝦尾さんだ。各種治療と研究のサポートをもらう」

「蝦尾です。よろしくお願いします」

多種多様な艦娘や深海棲艦を見て、驚きはしたもののこの環境の絶妙なバランスに感動していた。

「若葉のチェックは抜けている。こんな場で申し訳ないが、シロ、初春、いつものを頼む」

「任せよ。すまぬな、蝦尾殿。少し視させてもらうぞ」

シロも警戒しつつ無言で確認中。怖いのは催眠や暗示の類ではあるものの、それ以外はここで保証する。

「うむ、問題無い。もののけは憑いておらぬな。とても清いものじゃ」
「同胞の関係も無いよ……大丈夫」

姉とシロからも保証されたので、改めて全員が受け入れ態勢になった。それはもう大歓迎のムードだ。蝦尾女史の方が茫然としてしまふほど。

施設の誰もが飛鳥医師の過労を心配していたため、同業者の援軍が一番望まれていた。艦娘が増えることよりも喜ばれる始末である。これで作業分担がされ、全て1人で担っていた飛鳥医師に休息の時間が割り当てられるようになったのはとても大きい。

「雷、蝦尾さんの部屋は用意出来ているだろうか」

「大丈夫よ。2階の部屋1つを専用の部屋にしておいたから、好きに使ってくれて構わないわ」

現状、居住スペースは2階に集約されており、1階で就寝しているのは飛鳥医師のみ。蝦尾女史も1階の方がいいとは思ったが、襲撃を受けて共倒れということを防ぐために別々の階に配置することが選ばれた。

それを防ぐのが海上での夜間警備と施設内の警備なのだ。念のため。何かがあるか分からないので、施設内警備は2階も視野に入れること。鳥海とリコは昨日の内にその辺りを相談していた。

「研究室は僕と共用で使ってほしい。機材ならおおよそ揃っているし、必要なものは後からでも取り揃える」

「ありがとうございます。必要そうな小物は自分でも持つてきましたので、置かせてください」

この施設で研究用の資材が揃っているのは、飛鳥医師管轄の研究室、医務室、処置室だけだ。さすがにそれらを蝦尾女史の部屋に持つていくわけにはいかないし、飛鳥医師の私室にすら置かれていない。あくまでも共同研究。2人で協力して、これからのことに当たっていく。最初は確実に、瑞鶴を目覚めさせるための研究だろう。

「蝦尾さんには明日からサポートに入ってもらおう。急に呼ばれたんだ、今日はここに慣れることに使ってほしい」

「ありがとうございます。そうさせていただきます」

改めてみんなの方を向き直る。表情を見る限り、種族の壁など感じずに歓迎されたことで蝦尾女史も完全に緊張感が解けたようだ。

「三日月、あの人は大丈夫だろうか？」

「……はい、今のところは」

まだ警戒は解いていないようだが、三日月も蝦尾女史のを受け

入れてくれそうである。ここから共に過ごしていけば、ゆっくりでも心を開いていくはずだ。私が説明していけば、より早く進展してくれるだろう。

午後からは部屋の整理をしつつ、施設の者との交流の時間とされていた。

なんでも、蝦尾女史は自炊の経験もあるらしく、今後は雷達の手伝いをしてくれるとのこと。これで雷の負担がより減ったことになる。食べる分手伝うという赤城が軟禁状態になったことでまた人手が減っていたため、こういうところでの戦力増強はありがたい。

そのため、部屋の準備をしてくれた雷と暁、そして呂500は、蝦尾女史にすぐに懐くことになる。

「ここに食材が纏めてあって、数を管理しながら使うの。献立は決まってるから、その時多いものから使っていくって感じかしら」

「なるほど、料理人の腕の見せ所というわけですね」

「そう！　そういうのが楽しいのよね」

三日月と共に食堂に入ると、蝦尾女史が雷にレクチャーを受けていた。調理器具や食材の場所がわかれば、雷が食事を作ることが出来なくても、何とでもなる。五三駆が夜間警備当番の際の朝食などがメインになるか。今は夕雲がやっているが、あちらも出撃するわけだし、万が一のことを考えると、人員は多いに越したことはない。

私達が入ったことで視線を集めるが、軽く手を振られて話を進めていく。三日月は蝦尾女史の姿を見てまた私の陰に隠れるが、多少は警戒心は薄れていた。

「こんなところかしら。在庫とかはチェックしてるから、少なくなつたものから取り寄せるの」

「これだけ人数がいると大変でしょう」

「そうね。でも楽しいの。みんなが美味しそうに食べてくれるしね」

雷も暁も呂500も、私が言えたことではないが低身長。対する蝦尾女史は大人の女性。こう見ると親子みたいに見える。教えてるのが子供側というのが何とも不思議な光景ではあるが。

「そうだ、先生からこれを渡すようにって預かっていたんだわ。ろーちゃん」

「ンアーイ」

呂500がずっと大事そうに持っていた紙の束を蝦尾女史に差し出す。そんなに多くは無いが、それなりの枚数。

「これは？」

「施設にいる人達のカルテよ。誰がどんな理由でここにいるか、蝦尾さんも知っておいた方がいいでしょう？」

「そうですね。ありがとうございます」

事細かく書かれているわけではないが、これまでの経緯をおおよそ書かれているカルテの束。ここに住まう者もなんだかんだで増え続けているため、全員の病状は知っておいた方がいい。私がこうなった理由もおそらく書かれている。

それをペラペラとめくりながらこの施設の者を把握していくが、何度か手を止めて熟読する場面も。

「これだけいると、先生だけじゃ手が回らないの。蝦尾さんが来てくれて本当に助かったわ」

「力になれるように頑張ります。私の専門分野で治療が可能になる人もいるかも知れませんか」

「蝦尾さんの専門分野って何かしら」

暁が素朴な疑問をぶつける。歓迎会ムードの昼食の時、それについては話していなかった。あくまでも飛鳥医師の助手、サポート役としての参入としてみんなが認識している。

「私は艦娘の体組織のことを調べています。人間には害のある特殊な薬品を使うことで、破損前の状態に修復される体組織の謎を解明するためですね。人間とは明らかに違う細胞の謎を解くというのが主な仕事です」

暁にはちよつと難しかったようで、惚けた顔で頭にはてなマークを並べ立てていた。蝦尾女史は苦笑しながら簡単に言い直す。

「艦娘の治療に役立つためのお仕事です。飛鳥先生とは少し違う場所から、同じところを目的に歩いているという風に考えてもらえれば」

「つまり、お医者さんね！」

「はい、平たく言えばお医者さんです。飛鳥先生と殆ど同じだと思いますよ」

飛鳥医師の根本は艦娘の蘇生という禁忌であったが、蝦尾女史の根本は艦娘の調査。まだまだ謎の多い艦娘という存在が、どのように作られているかを解析する仕事のようだ。鋼材や燃料から生み出される人型生命体をより分析することが、蝦尾女史の本来の研究。

その一環で、高速修復材が無傷に戻るといふ特異性を調査していた。結果的に高速修復材の代替品を作り出すに至っているので、体組織に関して言うなら、飛鳥医師よりも知識が上である可能性が高い。「ただ、私は飛鳥先生と違って治療そのものは出来ません。知識はあっても技術がありませんので。治療に役立つことを調べることでですね」

謙遜しているが、それでも充分だろう。飛鳥医師のサポート役としてはこれ以上ないくらいの人材だ。蝦尾女史が調査し、飛鳥医師が実行するという流れも出来る。

それに、ここにいけば出来ないことも出来るようになる。重巡洋艦が工作艦の仕事をしているくらいなのだ。

「すごいサポート役なのね！ 先生に一番必要な人なんじゃないかしら」

「そ、そこまででは無いのでは」

「ううん、本当のことよ。蝦尾さんと先生が協力すれば、みんな治せちやいそう！」

確かに、飛鳥医師でも苦戦している部分は蝦尾女史の知識で補うことが出来そうである。それこそ、深海の侵食についても蝦尾女史の方が治療法に辿り着けるのではないだろうか。

「蝦尾さん、1つ聞かせてほしいんですが」

その話に割り込むかのように、三日月が蝦尾女史に質問をする。質問しつつも、私の陰から出てくることはない。まだ目を合わせての会話は厳しいようである。

「はい、三日月ちゃん、なんですか？」

「体組織の研究をしているということとは……人工皮膚も作ることも出来たりするんでしょうか」

飛鳥医師が研究しており、あと一步のところまでは来た人工臓器と人工皮膚の開発。それでもまだ実用化出来るほどのものになっていないというのが現状である。この前によろやく長い時間をかけて人工骨が完成したくらいだ。

それも、蝦尾女史が加われば完成に辿り着けるのではないか。体組織に関して言えば、飛鳥医師よりも確実に知識量が上だ。尖った研究をしているが故に、その一点なら飛鳥医師すら凌ぐ。

「不可能とは言いません。高速修復材の代替品の作成に成功していますから、艦娘の体組織の細胞分裂を促す方法は誰よりも理解していると自負しています」

「そうですか……なら」

「勿論、三日月ちゃんの肌を治療することにも協力させてもらいます。ただし、すぐに治せるとは言えません。時間はかかります」

期待を持たせることは言わない辺り、蝦尾女史は飛鳥医師と似たもの同士かもしれない。医者気質というか何というか。

「……信じますよ」

「はい、信じて待っていてももらえると嬉しいですよ」

これでよろやく三日月も蝦尾女史に対して警戒心を解いた。少しだけ私の陰から身を乗り出し、よろしくお願いしますとお辞儀した。

ここからはすぐに施設に馴染んでいく。周りが気を使うわけでもなく、蝦尾女史が一步引くわけでもなく、仲間として施設の一員となっていた。

侵食の真相

翌日より、蝦尾女史も含めた研究が開始される。いの一番に行なわれるのは、切断して保存してある鳥海の脚を使った深海の侵食についての調査。体組織のスペシャリストである蝦尾女史ならば、飛鳥医師でもわからない部分にメスを入れることが出来るかもしれない。

私、若葉はその研究の手伝いをする事になった。嗅覚を使い、鳥海の脚で最も深海の要素がある部分を嗅ぎ当てるのが目的だ。また、私と共に三日月も参加する。鳥海の時には判断が出来なかったが、視覚によるサポートもあった方がいい。

一応私も左眼が侵食されたことで視覚にも影響が出ていた。だが、両眼とも侵食された三日月には敵わない。サポートしてもらおうのが吉。

「2人ともすまないな。訓練も必要だろう」

「いや、構わない。瑞鶴を目覚めさせる研究は、みんなで協力して早く終わらせる必要があるだろう。優先順位が高いのはこちらだ」

「若葉さんと同じ意見です。それに、この研究が進めば私の肌の件も進むかもしれないと思うので」

脳障害を取り払うことが出来る研究に繋がるものは、もしかしたら人工皮膚の開発にも影響を与えるかもしれない。そう思って三日月は参加している。そういう自分の欲望に忠実に動くところも深海の侵食の影響かもしれないが、今の私にはそこも愛らしく思える。

「まずは物を出すか。これがあの時に切除した、鳥海の脚だ」

処置室のベッドの上に置かれた、鳥海の脚。わかっていたことだが、なかなかグロテスク。嵐の日に漂着した深海棲艦の亡骸と同じく、追加で破損しないように保存されていたそれは、断面も綺麗なものであった。

「これが機能不全を起こしていた脚……ですか」

「ああ。蝦尾さんはこういったものを取り扱ったことは？」

「ありません。私が使わせてもらえたのは髪や爪などの幾らでも増えるものでしたので」

流石に艦娘の四肢や遺体を使った研究などはしたことがないとのこと。普通ならば倫理的にも難しいだろう。これが当然なのであり、私達は若干感覚が麻痺してきているのかもしれない。

「この鳥海ちゃんには、脚が不自由だったとカルテに書かれています。ですが、今は普通に歩いています。これが飛鳥先生の治療の成果ということですか」

「ああ、あまり胸を張れることでは無いが」

「充分すぎますよ。外的障害で艦娘生命を絶たれた者が、回復して現役に返り咲いているんですね。それが出来るだけでも凄いです」

目をキラキラさせながら蝦尾女史が熱弁。やり方はどうであれ、飛鳥医師のやった治療は、終わってしまった艦娘を元に戻したような偉業だ。

そしてそれは1人だけではない。私だってそうだし、三日月だってそうだ。見た目は多少変わっていても、私は初春型駆逐艦若葉だし、三日月は睦月型駆逐艦三日月である。戦えるようにしてもらったことを、ずっと感謝している。

「その一員に加われること、とても嬉しいです。張り切ってやっていきたいと思えます」

「張り切りすぎて失敗しないように」

「勿論です。飛鳥先生に選んでもらえたんですから」

切除された脚を前にこのテンション。大ファンというのも領ける。

「では、始めよう。若葉、詳細な場所を教えてください」

「了解」

ここから研究は開始される。それに参加する私も、艦娘というよりは助手というイメージになった。

研究開始から時間が経ち、大体小一時間というところ。充実した研究が出来ているようで、会話が途切れない。

「血管を通して全身に行き渡っているんでしょうか」

「ああ、胸骨と腸骨に仕込まれていた」

「造血細胞を改造されていたんですか？ だからこんなにも染み渡っ

ているんですね」

お互いに有識者であるが故に、説明が簡単でも淡々と進んでいく研究。どう調べるにしてもこの脚を刻む必要があるため、飛鳥医師がメスを持ち、私が指示した部分を刻む形で調査が進んでいく。

脚を刻むと同時に深海の匂いが溢れ出し、三日月も表に出た侵食部分から深海のオーラののようなものを感じ取っている。処置室の中は血の匂いで充満しているような状態。それでも完成品の強烈な深海の匂いはやたら目立つ。

「そこ、深海の要素が強いです」

「ここですね。成分解析します」

三日月に言われた部分の体組織を小さな入れ物に入れ、蝦尾女史の荷物にあった特殊な装置で解析を始める。治療にも使えるかと持ってきた分析機が早速役に立ったのだとか。

蝦尾女史のサポートは三日月。当然適当に刻んでいるわけではないことは百も承知ではあるが、人間には見えないいろいろなものが私達には見えているので、指示はどうしても必要。

むしろ三日月が昨日からの新参に協力していることが嬉しい。人間嫌いも大分緩和されたと思う。話し方は少しづつきらぼうになっ
てしまっているものの、接近すら拒んだ最初とは雲泥の差。

「外科手術で摘出出来るのならしているんだがな……」

「範囲が広すぎるのが考えものか」

「ああ。如月の腕ですら移植の方が早いくらいだ。脳もこれと同じだと、どうしても傷付けてしまう」

修復材多用で即座に修復しながらの処置でも、脳全体に根を張っているというのなら話が別だ。命に関わる場所が数多く侵食されているとなると、摘出という手段は取れない。切除ではない方法で、侵食のみを消し去る方法があればいいのだが。

「……これは」

「蝦尾さん、何かあったか？」

成分解析をしていた蝦尾女史が小さく声を上げた。脚から手に入れた侵食された細胞に何かを発見したらしい。

正直、もう何か動き出すのかと驚いた。違った専門知識を持つ者が加わるだけで、こども変わるものかと。

「深海の細胞は根を張っていますが、今見ている範囲では1つたりとも結合はしていません。混ざり合っているのだと思っていました、絡み合っているだけです」

「なるほど、僕が思っていたものと違うな……。失敗作が強く癒着していたから、細胞全てが結合しているものだと考えていた」

「少しよくわからなかったが、飛鳥医師の考えていた侵食とは違ったらしい。」

「どういうことだ？」

「そうだな……。君達の身体を土としよう。僕の考えていた侵食は水だったんだが、蝦尾さんの調査の結果、それは植物ということがわかったんだ」

「溶け込んでいるわけではなく、根を張っているだけ。手段さえわかれば、地に根を張る植物のようにこの侵食を引っっこ抜くことが出来る。つまり、治療が可能であるということだ。」

「手段は今から調査するのだが、深海の侵食のみを消し去り、その周囲の細胞を再生してしまえば、そのパーツは元に戻る。それこそ、脳ですら上手くいくかもしれない。」

「当然無理に引き抜けば傷は残るし、そう簡単に引き抜けないのが侵食だ。故に、慎重に行かなくてはいけない。」

「ですが、侵食に伴って周囲の細胞が壊されてしまっています。鳥海ちゃんの脚が動かなくなっただけはおそらくその影響です。神経細胞にも達していますので」

「侵食さえ無くしてしまえば、修復材による治療も可能になるだろう。まずは絡みつく深海の侵食の切除方法を考えよう」

「この小一時間で、治療の方針が一気に進んだ。パーツそのものを置き換えなければ治療が出来ないと思われるいた深海の侵食の全容が判明したことで、次の段階、艦娘を傷付けずに侵食だけを取り除く手段の調査へと進む。」

ひとえに、蝦尾女史が調査してくれたおかげだ。固定観念などもあ

るが、飛鳥医師では辿り着けない場所にヒントはあった。

「君を呼んで正解だった。僕の治療法だと細胞1つ1つまでは確認出来ないからな」

「お役に立てて光栄です」

しかし、侵食の全貌がわかったとしても、それを簡単に取り除けるわけではない。むしろここからが本題なのかもしれない。長期戦を覚悟しつつも、研究を続けていくことになる。

「……翔鶴の身体はどうなっているんだろうか」

ふとした疑問。大淀の改造により深海の侵食があるとして、それが過剰に悪化したのが翔鶴だ。怨念の塊であるキューブを取り込んでしまったが故に、身体は完全に深海棲艦へと変わり果ててしまったが、植物が根を張るように侵食するというのなら、翔鶴すらも治療出来る手段はあるのではと思えてしまう。

だが、それに関しては飛鳥医師がすぐに答えてくれた。結局のところ憶測でしかないがと付けながら。

「さっきの例えで言うなら、翔鶴は植物そのものになってしまったと考えた方がいい。今蝦尾さんが侵食に伴って周囲の細胞が壊されてしまっていると云ったろう。それで全ての細胞が壊れてしまったとしたら、どうなる」

「……侵食したそれしか残らない」

「そういうことだな。侵食の際に、その細胞に成り代わるようにもなっているんだろう。ただ壊すだけなら死んでしまうからな。だから記憶を残している。呂500や初霜のように記憶を失ってしまったのは、成り代わるまでに至っていなかったと考えるのが妥当だ」

そして、それを賄っていたのがキューブ。侵食を無理矢理活性化させて記憶や意志を維持させていたが、処置によりそれを摘出したが故に今の状態になっている。

元完成品の今の症状は、完成させられた後遺症というよりは、完成したために与えられた障害と言ってもいいのかもしれない。キューブは体良く使うための障害克服装置とでも言えるか。

まるで完成していないじゃないか。完成を取り繕っているハリボ

テだ。

「なら、私達のも同じなんですか？」

今度は三日月からの疑問。完成品の方がそれなのはいいとして、私達の侵食も同じ物なのかというのには気になるところ。

「そこは調べてみなければわからない。だが、同じようになっていると見てもいいと思う」

「……そうですね。でもいいです。私達には後遺症はありませんし、今私が生きていられるのはこの処置のおかげなので。ぽいちゃんとも出会えましたし」

私もこの処置のおかげで今を生きていられるし、シグという相棒と出会うことが出来たのだ。

治療出来るようになったとしても、私達はそれを手放すことはないだろう。それはシグとの永遠の別れになるだろう。シグを失つてまで元に戻ろうとは思えない。

それに、私は最初に飛鳥医師には伝えてある。身体はこのままでいい、元通りじゃない方がいいと。この傷は私が新たな人生を踏み出した証だ。こんな継ぎ接ぎの身体だが、私は傷と共に歩いていきたい。「作業に戻ろう。完成品の状態がわかったんだ。次は細胞に根を張った深海の侵食だけを取り除く手段を考えよう」

「周囲の破壊された艦娘の細胞を補填しつつ、侵食している深海棲艦の細胞だけを消滅させる手段、ですね。植物と例えるなら、除草剤ですか」

私達には難しすぎてよくわからない話になっていきそうだった。三日月もついて行けないようである。ここからは人間2人の独壇場となるだろう。

なんだかんだで昼食の時間。前までなら飛鳥医師は雷に呼ばれるまでは研究に没頭していただろうが、蝦尾女史がいるということでは活リズムがとて健康的になっている。自分のことは顧みないが、他人がいれば健康的な生活を送らせようとし、自分もそれに乗っかることが出来るようだ。そういう意味でも援軍は効果的。

「若葉、三日月、午前中は助かった。午後からは自由にしてくれ」

「了解。また何かあったら呼んでくれ」

「そうさせてもらう。毎日午前中はサポートしてもらおうというやり方がいいだろう」

今回は共同研究初日というのと、鳥海の脚を使った初めての回だったため、私達の眼と鼻が必要になったが、午後は今わかっているところを掘り下げることを使うようだ。

午前に新しいことをやり、午後にそれを調べ尽くす。それを繰り返すことで治療法の解明に持っていきたい。

「視覚と嗅覚というサポート、本当にありがたいです。若葉ちゃん、三日月ちゃん、これからもよろしくお願いします」

「役に立てたのなら、若葉も嬉しい」

「はい、若葉さんとの共同作業ですし、今後も力添え出来ればと思います」

ずっと蝦尾女史のサポートをしていたからか、事が済んだ後すぐに私に引っ付いてきた三日月を見て、蝦尾女史も苦笑する。

「本当に仲がいいんですね」

「ああ、若葉と三日月はもう他人ではないからな」

「相思相愛、ですから」

あらあらと蝦尾女史は興味深そうにしたが、飛鳥医師は侵食の進行をまざまざと見せつけられているようで少し申し訳なさそうである。

「カルテに書いてあったと思うが、2人とも、深海の侵食が脳に届いている。結果がこれだと思っしてほしい」

「同じ姫のパーツを使い、侵食が進んだことによる同一性の発露……」

「こういう事だったんですね」

私達のこれもカルテには記載されていたようだ。施設公認の仲カツブとも言われているし、蝦尾女史もそういうところには理解のある人のよううで嬉しい。

駆逐の集い

午前中は三日月と共に飛鳥医師と蝦尾女史の研究を手伝っていた私、若葉。これからは午前中に研究の手伝いをするという流れになった。夜間警備は私と三日月の代わりに巻雲と朝霜に加わってもらうことで対処することになる。

そのことを伝えるために、午後はまず施設所属の駆逐艦でミーティングをすることに。この施設にも駆逐艦だけで2桁を越す人員が揃った。その内数人が戦闘には参加出来ないものの、施設の一員としてミーティングには参加。

ミーティングと言っても別に重くなく、お茶会も兼ねた集まり。事前に準備していたのか、雷が茶菓子まで持ち寄ってきた。おかげで朝霜は大喜び。

「若葉と三日月が助手になるってことね」

「ああ、そういうことになる。若葉の鼻と三日月の眼を使いたいそうだ。今日も助手として研究を手伝っている」

「瑞鶴さんが目覚めるまでは続けていくそうです。今はそれが最優先です」

私と三日月が午前中の研究について簡単に説明した。今の研究内容には、物を解剖するだけとしても眼と鼻は必要。私達の存在は研究を効率的に進めていく上で不可欠な存在だという。

「その間、夜間警備はリザーバーの巻雲と朝霜に交代してもらいたい」

「そうですね。そういう時のためのリザーバーですもんねえ」

すぐに納得してくれた巻雲。朝霜も仕方ないとケラケラ笑っていた。

「本来なら今晚が五三駆の担当だったんだが、そこから交代してもらいたい」

「ならば、わらわと霰が今晚もやろう。夕雲型4人でやった方がよろうて」

「うん……あられもそれでいいよ」

確かに、どうせ駆逐隊を組むなら姉妹を固めて置いた方が連携など

も上手くいくだろう。ずっとここで生活している仲間ではあるが、一番気心が知れているのはやはり実の姉妹だ。

五三駆に姉と霰が加わり、九二駆に巻雲と朝霜が加わった。これで交代制でしばらく回してもらおう。長々と私達が抜けることも無いとは思う。

「九二駆の隊長である初春さんが一時転籍しますので、こちらは一時的に夕雲が纏めます。長姉として引っ張っていきたいと思います」

妹達は異議なしと声を揃える。さすがは19人姉妹の長女。慕われ方も普通ではない。

「すまない。若葉達が急に抜けることになってしまっ」

「いえいえ、今の優先順位は夕雲達も理解しています。瑞鶴さんが目を覚ませば、翔鶴さんも立ち直り、そのまま戦力増強まで見えますから」

夕雲の言う通り、瑞鶴が目を覚ませれば丸く収まる部分が多く、問題が赤城と翔鶴の確執くらいになる。そこに関してはまた後から考えればいい。

とはいえ、瑞鶴が目を覚ましたとしても何らかの後遺症をまだ持っている可能性は否定できない。結果的に記憶を失っていたり、身体の何処かが脳の関係で動かなくなっていたりはあり得る。

目を覚ましてみなくてはわからない要素はいくらでもあるのだ。それを知るためにはまず治療を終えなくてはならない。

「じゃあこっちはどうせだし、初春に旗艦やつてもらおうかしらね」

「何を言うておる。五三駆の旗艦代理は曙じゃろ」

「はあ？　なんで私がやんなくちゃいけないのよ」

私としても曙かなと思っている。いざ戦闘になった時、このメンバーで先陣を切るのは間違いなく曙だ。姉も鉄扇という近接武器を手に入れているものの、基本は空飛ぶ主砲。3人で曙をサポートするという戦法になるため、リーダーは必然的に曙。一番先頭に出る私をリーダーに据えていたのだから、流れとしてはそれが当たり前。

「頑張つて、ボノ」

「わらわ達がついておるからの。ボノ」

「……ふあいと、ぼの」

「ボノ言うな！　ったく、仕方ないわね……私が纏めるわよ。その代わり、私に責任押し付けんじやないわよ？」

これだけ推されると、満更では無さそうである。曙はどちらかと言えばリーダー気質かもしれない。誰に対しても物怖じせず強く言えるし、私達の意見はちゃんと聞いてくれる。正直、私よりも向いていると思う。

「何かありましたら、私が交代しますのでご安心を」

「アンタ一応客じやない。用心棒みたいなモンだけど」

「このような時のために、私はこの施設に待機させられているのです。力を貸すようにと」

旗風も夜間警備を手伝ってくれと話す。万が一欠員が出た時はお願いしよう。

「残った駆逐艦は4人いるけど、これじゃ駆逐隊は無理だものねえ」

如月が苦笑しながら呟いた。その4人には如月自身も含まれている。

残りの4人は後遺症で右腕が動かない如月、訓練はしているらしいが私達よりは遅れている暁、そもそもそういった記憶が全て消えている初霜、そして客人である旗風である。流石にこれでは駆逐隊を組む事が出来ない。

「くちくたいってなあに？」

「初霜のような駆逐艦娘が4人集まって戦うことじやよ。でも、お主には少し荷が重いのもう。痛いのは嫌じやろ？」

「はつしも、いたいのもやー」

流石にこんな初霜を戦線に立たせるわけにはいかない。一応艦装は修理済みらしいのだが、今の初霜には装備させるのも恐ろしい。まともにコントロール出来るかもわからない。

痛いのが嫌だと言ってくれている内は、大人しく施設内に留まってくれらさうし、危険を察知したらみんなと逃げてくれる。強いて言うなら如月を守りながら撤退してくれるとありがたい。

「お姉ちゃんはずごく頑張ってるわ。リザーバーでも全然イケる！」

「暁はレディだもの、みんなを守るために努力くらいするわ」

努力の甲斐あり、そろそろ改装も間近ではないかというほどらしい。その訓練を見ているのはなんとリコである。雷に引き続き、暁も弟子にしたようである。

リコの特訓は鳳翔のそれと同じく早期成長が見込めるスパルタ方式だ。先日鳳翔が訪ねてきた時に薬湯も持ってきてもらっているようで、私達の時と同様の特訓が出来ているようだ。近々練度を測ってもらってもいいかもしれない。

「なら暁にはリザーバーとして待機してもらおう。頼んでいいか」

「レディに任せなさい。リコさんにあんなにしごかれたんだもの、ちゃんと働けるからね！」

どれほどのことをされたのかは知らないが、余程の自信があるようなので、夜間警備に参加してもらうのもいいかもしれない。完成品に通用するかわからないのは私達も同じ。戦力は多いに越したことはない。

「若葉からはこれで終わりだ。集まってくれてありがとう」

「いいのいいの。2人も研究の助手頑張ってるね！」

これでミーティングは終わり。ここからはせっかくこうやって集まったので、少しの時間はお茶会を楽しもうということになった。確かにこうしてリラックスする時間はあまり無い。

今はこうやって心を休ませることも必要だろう。ただでさえ緊張感高まる戦いが続いているのだ。ストレスを発散するためにも、娯楽は必要だと思う。

その日の夜は、夢の中にも呼び出された。満面の笑みで待ち構えていたシグに、面と向かって立つように指示される。

『私^{ボク}だって暇かもしれないけど駆逐艦だからね。ミーティングには出たいわけさ』

「だから若葉を呼んで、ミーティングをしようということか」

『うん、私は若葉^{ボク}としか話せないしね。迷惑だった？』

「そんなことないさ。若葉もシグと話せることが嬉しい」

ここは夢の中ではあるが、何も無い海の上を模した空間だ。机もなければ椅子もない。ミーティングというよりは世間話みたいな体裁になってしまい、結局はいつもと同じ感覚に。

シグも言い出しつぺの割にはその辺りは何も準備していなかった。やりようがないとも思う。

「それで、ミーティングの議題は？」

『私の感想、かね』

「結局いつも通りだ」

『だね』

お互い笑い合い、話を進めていく。

『蝦尾さんのことからしよっか。言うこと無いんだけどね』

「ああ、あの人は大丈夫だろう。シグのお墨付きがあれば尚のこと安心だ」

人間だからこそその安心はあったが、シグがそれを保証してくれるのならもつと安心。あそこまでやって実は裏切り者、と言われたら流石に辛い。

『敵意は全く感じられなかった。艦娘を見ても、深海棲艦を見ても、とても素直に喜んでいたと思うよ。飛鳥先生と一緒に働けるのが嬉しいんだらうね』

「大ファンだそうだからな」

『犬だったら尻尾ブンブン振ってるよ』

それほどまでに懐いているとは。だが、研究の助手をしている間もそんな感じだった。若干の昂揚と、貢献しようという意気込み、そして全幅の信頼と、負の要素は何処にも感じ取れなかった。だからこそ私も蝦尾女史は信用出来ている。

「瑞鶴は治療出来るだらうか」

『不可能じゃ無いと思うよ。すぐじゃなくても、目を覚ます猶予は幾らでもある。飛鳥先生と蝦尾さんなら辿り着けそうだね』

「だな。若葉達には皆目見当もつかないが、調査は進んでいる。いずれ手が届くと若葉も思っている」

研究を始めて僅か数時間で細胞がどうなっているかを探し当てた

のだ。同じペースで行けるとは思っていないが、無理だと投げ出すことは無いと確信できる。最終的には理論に辿り着き、誰もが治療出来る状態へと持っていくてくれるだろう。

私達はそれを全力でサポートし、最速を導くしか出来ない。そのためなら幾らでも力を貸そう。

『問題は赤城さんと翔鶴さんの確執だね。アレは簡単には行かないよ』

「シグもそう思うか」

『仕方ないよ。お互いがお互いを殺すために蘇ったようなものなんだからさ』

特に厄介なのは赤城。翔鶴とは違い、爆散してから他の者の憎しみまで喰らい尽くしての復活だ。普段は理知的に振る舞っていても、中は狂気に満たされているようなもの。

本人が言う通り、いざ翔鶴と面と向かえば、どういう状況でも殺し合いに発展する。我慢するつもりもない。一番の相棒である加賀に説得されても無駄。

それを覆すことが出来るのは何かあるのだろうか。片方が施設から出て行くとか、それこそ赤城のように軟禁しておくとかくらいしか無いのだろうか。それはそれで辛いものがある。

せつかく命があるのだから伸び伸びと生きてもらいたい。そうした結果が殺し合いなのだが。

『首の突っ込みすぎは気をつけてね。殺し合いに巻き込まれたら、私が困っちゃう』

「ああ、この身体は若葉一人のものではないからな」

『そうそう。若葉のでもあるし、私の^{ボク}でもあるし、三日月ちゃんのもあるんだからね』

そこで三日月の名前が出てくる辺り、シグもよく見ている。周りの冷やかしも別段気にならなくなっていた。それほどに今の三日月は大切な人。私の左眼を持つ、身体を分け与えたパートナーだ。

『ここまで来たら、向こうにいるほいちちゃんにも会ってみたいね』

「流石に無理だよな。若葉と三日月は肉体的に繋がっているわけでは

ない」

『だね。今みたいにガツチリ抱き合って寝ていても、あちらと繋がるわけじゃないからね。肌を重ねても同じだろうね』

私も一度お目にかかってみたい。私の中の駆逐棲姫像はこのシグで固定されている。少し子供っぽく、人懐っこいぽいけどんなものなのか知りたいものだ。

あちらも同じことを思っているだろう。中性的な雰囲気の子グを見たら驚きそうだな。

『そうそう、子グの件』

「ああ、どうだった。痣が広がったからもしかしたら届いたかもと思っただが」

『近日中には対面出来るかも。もう少し頑張ってみるよ』

侵食が広がったことで、脚の骨とも大分近付いたようだ。おかげでシグの行動範囲が増え、ずっと力を貸してくれている子グも探し出せそうだとする。これはシグに任せるしかない。

何度も力を貸してくれたのだ。いい加減、面と向かって礼が言いたい。あちらがどういう人柄なのかはわからないが、これだけ協力してくれているのだから、私達にも心を開いてくれるのだろう。是非とも会いたい。

『おっと、そろそろ時間みたいだ。若葉、最後に』

手を広げて抱きしめてくれる合図。それに応じて、シグの身体を抱き上げる。

『もし治療が出来るようになって、私のことを手放さないって、そう思ってくれてるんだよね』

「ああ、勿論だ。若葉は今の状態がベストだからな。ずっと一緒だ」
『そう言ってくれて嬉しいよ。私はこの中でしか話せないけど、君が生きている限り、ずっとここからサポートする。私達は、本当に一心同体だからね』

強く抱き締めてくる。好意が溢れているような感覚だ。だから、私も抱き締め返した。夢の終わりはいつも、お互いに笑顔で。

今後の方針は決まった。私は三日月と共に研究をサポートし、施設

をより良い方向に向けていく。襲撃さえ無ければ、今ほど有意義な生き方は無いかも知れない。

楽しく生きるは、もう掴めそうなくらいに近い場所にあるようだった。

研究は進む

翌日も午前中は研究助手。昨日とはかわらず、私、若葉が飛鳥医師に、三日月が蝦尾女史についてサポートしていく。

昨日の午後で私達無しで深掘りしたようだが、その段階ではまだ解決案は出なかったらしい。原因はわかっても、それをどうにかする手段を探し当てるといいうのは数倍の労力がかかるものである。

「運んできたぞ」

私が処置室に置いたのは、翔鶴達との戦いの後に引き揚げた失敗作の亡骸。ここに運ぶまでに誰の目にもつかないように細心の注意を払って運んできた。特にこれは初霜には見せてはいけないものだ。そそくさと艦装を装備してこれを運ぶのは少々忍びない気分になった。

「……今日は、脳の侵食が脚と同じかどうかを調べる。若葉、三日月、気分が悪くなったらすぐにここを離れてくれて構わない」

言葉にはしなかったが、今からこの失敗作の頭を開くと暗に伝えてくれている。脚を切り刻むことよりも残酷な処置だ。いくら相手が生き返ることのない亡骸とはいえ、やるのも見るのも抵抗が出て当然。

やり慣れているであろう飛鳥医師も、あまりいい顔をしていない。蝦尾女史も同様。深海棲艦の解剖ですら気分がいいものでは無いのに、私達と同じ艦娘の解剖だ。

「若葉は見届ける。開いた後の匂いが必要だろう」

「若葉さんがここにいるのなら、私も。嗅覚以上に視覚情報は必要だと思います」

毅然とした態度で臨むが、今までの処置では見たことのない場所だ。とんでもないものが現れる可能性だつてある。

三日月がギョツと私の手を握ってきたので、握り返す。ああは言ったものの、未知の分野はやはり怖い。

「私も艦娘そのものの解剖というのは初めてです」

「蝦尾さんも気分が悪くなったら席を外していいから」

「いえ、それでは終わるものも終わりません。参加します」

蝦尾女史も初めてのこと。この施設にいるもので、ここまでの解剖をしたことがあるのはおそらく飛鳥医師だけだろう。蘇生に行き着くまでに、いろいろとやってきたようだし、その辺りも詳しくそうではある。

「わかった。では始めていく。その前に……黙祷」

亡骸を使わせてもらうため、本来の持ち主であるこの失敗作に黙祷を捧げる。次の命を繋ぐために、どうか恨まないでほしい。申し訳なさと共に、成仏を願った。

その後の解剖は、それは酷いものだった。髪を切り、頭頂部から裂き、頭骨を開いた瞬間、鳥海の脚とは比べ物にならないほどの深海の匂い。三日月も目を背けるほどの深海の何か。思わず吐きそうになったが、どうにか飲み込んだ。

飛鳥医師が言うには、侵食は脚とほぼ同様。身体とは違い変質は無かったが、失敗作だからか規模が段違い。所々が禍々しく黒ずみ、それが深海の侵食であることをまざまざと見せつけられた。

「分析しました。昨日と同じですね」

「なら、切り離す手段が無いわけではないということだな」

「はい。ですが、細胞の破壊も同じです。脳細胞の破壊ですから、何かしら影響はありますね……」

深海の細胞だけを消したところで、周囲の細胞が破壊されているのは変わらない。それを修復材によって治せたとしても、何らかの障害が残ってしまうのではないかという懸念はある。

だが、二度と目覚めずに消耗するだけよりはマシではなからうか。ノーダメージでの復活は見込めないかもしれないが、目を覚ますのならまだ先に進める。

「……大丈夫か、三日月」

「少し気分が悪くなりましたが、大丈夫です……」

今まで処置を手伝うことはいくらでもあった。姉の時だって、その胸を開いて胸骨を取り出すところまで見ている。処置をする一部始終をその目に収めてきたり。

だが、頭の中はさすがに初めて。今まで以上にグロテスクに思えた。死者にしか出来ないような解剖を行なっているため、見た目も、匂いも、音も、何もかもが死をイメージさせる。

「瑞鶴の頭の中もこうなってしまうのだろうか」

「可能性として無くはない。だからこそ、ここまでせずとも治療出来る手段を調査しているんだ」

生きているものをここまでしたら、嫌でも死ぬことになるだろう。当たり前だが、生かしたままこれを治療する必要がある。

「透析で深海の細胞を壊す薬剤を投与するのが一番問題無いな。身体を傷つけることなく、体内全てに行き渡らせることが出来る。残念だが、あちらのやり方と似たようなことをやるべきということだな」

確かにそれが一番効率的かもしれない。全身が侵食されているのだから、全身に行き渡るように同じことをしてやればいい。そうすれば、身体中を蝕む細胞が死滅してくれるはずだ。頭に触れることなく頭の中にまで浸透し、最高の効果を発揮してくれる。

しかし、その投与する薬剤を作るのが問題である。効果が強すぎると脳そのものを破壊しかねない。弱すぎると何も変わらない。的確に深海の細胞のみを破壊する薬があればいいのだが。

「その薬を私が作ればいいわけですね」

「ああ、出来るだろうか」

「修復材の代替品を作っている時には、艦娘の細胞のことばかりを研究していました。今回からは、深海棲艦の細胞のことも調べていかなくてはいけませんね。なるべく早く結論を出したいと思います」

その修復材も、作り上げるまでに数ヶ月研究し続けた結果で生まれたもの。艦娘の細胞での事前知識があり、艦娘と深海棲艦の身体は似たようなものであることは私達が体現しているため、その調査はそこまで長くかからないだろう。

やはり、蝦尾女史の存在は非常に大きい。いなかったら今でも瑞鶴の目覚めは程遠かった。それが、もう手が届くのではないかと思えるほどになっている。

「必要なものがあれば好きに言ってくれ。すぐに用意する」

「ありがとうございます。では早速なんですが……」

何やら研究者2人の世界になっていったので、私と三日月はそれを邪魔しないように処置室を片付けていった。

この2人もなかなかいい雰囲気なのではないだろうか。お互いに同じ場所を見ており、やっていることも同じ。気もあっているように、仲違いするような匂いもない。さらには蝦尾女史からは尊敬という好意もある。

「飛鳥先生、いつもより楽しそうですね」

「三日月もそう見えるか」

三日月も同じように見えたようだ。それくらいわかりやすく飛鳥医師が気分良く研究出来ている。やっтерことはえげつなくても、沈まずに研究出来るのならその方がいい。

「楽しく生きるのには程遠い状況だからな。せめてやりやすい環境がいい」

「そうですね。先生はストレス多そうですね」

倒れていないだけでも奇跡に近いような気がする。私達の知らないところでも奮闘しているのがこの人だ。研究に関しては助手しかできない。それに仲間が増えたのだから、僅かながらでもテンションが上がるもの。それで研究が進むのだから尚更だ。

昨日の午後は2人で研究を進めていたと思う。その時もこのように盛り上がっていたのだろうか。飛鳥医師の詳しくない体組織の専門家が来たのだから、新たな分野を学ぶために躍起になっているものもあるか。

しばらく2人で今後の進め方を話している間に、私達は部屋の片付けがある程度終わってしまった。頭を開かれた亡骸以外は大分綺麗になり、血生臭かった処置室も多少は換気出来たと思われる。

ここで2人での会話で周りが見えていなかったことに気付いたようだ。私達がポツンと待っていることによく目を向けてくれた。「つと、すまない、若葉と三日月を置いてけぼりにしてしまった」「ごめんなさい、暇にしてみました」

「構わない。飛鳥医師が伸び伸びと研究出来ているようで、若葉達も

嬉しいぞ」

複雑な表情の飛鳥医師。対する蝦尾女史は苦笑。この切羽詰まった状況でも、有意義に使えているのはいいことだろう。

昼食の時間となり、午前の研究は終了。研究材料の洗浄も終わり、解剖に使われた亡骸は納体袋に入れられて丁重に保管される。次の研究もこの亡骸を使って行なわれるらしく、処置室のベッドに安置されることとなった。

「お疲れ様。昨日も言っていた通り、若葉と三日月は午後からは自由だ。僕達は今日の成果から細かく分析していく」

「まずは細胞の分析を改めて行ない、そこから薬の生成ですね。いくつも失敗することになるでしょうから、早い段階から進めていかななくては」

研究者の中では段取りが出来ているようだ。それならば私達から言うことは何も無い。

と、ここで処置室に向かってくる足音が聞こえた。2人、まっすぐこちらに向かってきて戸を叩く。

「ごめんなさい、少しいいかしら」

声は加賀のものだった。元々飛鳥医師の処置に興味を持って見学させてもらっていたこともあるが、ここ最近では赤城の監視というこれ以上無い役目を持っているため、研究は当然ながら、施設の仕事にもあまり顔を出せていない。

その加賀が足を運んだということは、何かあったということだろうか。赤城が何かしでかしたとか。

「何かあったか」

「大したことではないの。この子が蝦尾さんに用があると」

加賀の隣には少し俯いている翔鶴が立っていた。深海棲艦と化したときの服ではなく、鳳翔の持ってきてくれた艦娘としての服を着込んだことで、少し雰囲気は違うが翔鶴として成立していた。

先日よりも、やはりやつれているような雰囲気だった。目を覚まさない瑞鶴に寄り添い、毎日介護をし続けているためか、目に見えて疲

れが溜まっているようだった。

「……ズイカクハ、メヲサマスノデシヨウカ」

やはりそこが心配なようだ。眠ったままの瑞鶴から一時的に離れてでも、その保証が欲しいようである。それがわかれば、今後の生活も少しは変わるかもしれない。

「今回の研究で、どうすれば治療出来るかは確認出来ました。私がその薬を必ず作り上げてみせます。飛鳥先生もいるのですから、不可能ではありません」

宥めるように翔鶴に話す。今回だけは不可能ではないと言い切った。必ず治療してみせるという意気込みだけではなく、期待を持たせることで翔鶴が折れないようにしてくれてもいる。

それに、2人なら絶対に治療法を確立してくれる。そう信じられるだけの力を持っている。研究を見てきた私達がそう思えるのだから、間違いない。

「……ヨロシクオネガイシマス。ズイカクヲ……」

「勿論です。必ずまた目を覚まして、姉妹で仲良く暮らせるようにしましょう。それでも時間は掛かるかもしれませんが。落ち着いて待っていてください」

「……ハイ、ハイ、イツマデモマチマス……」

少しだけ、翔鶴の表情が明るくなったように思えた。先が見えないわけでなくなっただけでも、心に一筋の光が差したようなものだ。

「そうだ、翔鶴さん。今のよう処置をされるとき、あちらの鎮守府で何かされなかつたですか？ 治療のヒントになることがあれば、何でもいいので教えてもらえるとありがたいです」

「……ゴメンナサイ、ネムラサレテ、メヲサマシタラ、カンセイサセラレテイタノ」

あくまでも隠蔽するのはあちらのやり方。あちらでの悪意ある処置の全容を知るのは、大淀とそれに携わる裏切り者の人間くらい。何をされたかを知る完成品はいないと見ていい。

だが、翔鶴はほんの少しだけ違うことを言った。

「ア……ソウイエバ」

「何か思い当たることが？」

「ナニカノニオイガシマシタ。チンジユフデハアマリカンジタコトノナイ、ニオイデス」

匂い。普通ではあまり感じない匂いということは、薬の匂いか。それなら私でもわかるはずだ。今まで完成品の匂いを処置の度に嗅ぎ続けてきたのだから、違うものがあればすぐにわかる。

だが、それが無いということはいつも嗅ぎ慣れている匂いというところか。鎮守府にはなく、私には嗅ぎ慣れた匂い。完成品から漂っても違和感の無い、だが普通では無い匂い。

「まさか……」

「若葉、どうした」

「思い当たるものがある。少し待っていてくれ」

それだけ言い残し、私はすぐにそれを取りに行った。今ならこの施設なら絶対に手に入るもの。普通の鎮守府には無いが、姫や完成品からは嗅いだことのある匂いだ。

それを譲ってもらってから処置室に戻る。待っていてくれと言ったので、加賀も翔鶴もまだそこにいてくれた。

「翔鶴、これの匂いじゃないか」

「……ソウ、コレデス。コレノニオイ。コノシセツデモ、スコシカンジマスネ」

翔鶴もその匂いを嗅いでピンと来たようだ。やはり、と私の中で腑に落ちた。

私がつけてきたもの。それは、リコの花だ。

「完成品にも麻薬は使われていた。匂いがしていたのも覚えている」
「すぐに調べます。その花を貰えますか」

「ああ」

さらに光が差したようだった。この解析が上手くいけば、治療薬にまた一歩近付けるかもしれない。

夜の守護者

完成品の治療にもリコの花が重要な立ち位置にあることが判明した。完成させられた時に花の匂いがしたという翔鶴の証言から、蝦尾女史が早速解析に入る。

時間が時間だったため、昼食後に早速開始。艦娘の体組織のスペシャリストによる解析は、本人曰くそれなりに時間は欲しいとのこと。花は幾らでもあるとリコも何輪も摘んできてくれた。

「また私の花が何かに使われているみたいだな」

「ああ、それを今、蝦尾女史が確認しているところだ」

「まったく、人の花を何だと思っているんだ奴らは」

施設の周囲に咲いた彼岸花を整えながらリコがボヤいた。私、若葉と三日月で摘んだ彼岸花を纏めているところだ。

咲き過ぎたものは摘み、程よく施設を彩るように整備している辺り、リコもこの施設には愛着が湧いているのかもしれない。ここに滞在してそれなりに時間も経っている。

「リコさんにも、これが何かわからないんですけど」

「ああ。私がいるところには勝手に咲くからな。力が漏れ出ているのは理解しているが、薬に使ってどういう効果があるかまでは流石にわからない」

それはそうだろう。漏れ出た結果生えた花を、わざわざ薬にするような文化が深海棲艦にないのだから。そもそも文化と言える文化自体が乏しい。リコは仲間達と一緒に花を整えることを楽しんでいたようではあるが、そんな深海棲艦は何処を探してもリコくらいだろう。

「これを機に知っておきたいところだ。処分の仕方も考えなければいけない」

「そうだな。海に流した結果が大淀に目を付けられたんだもんな」

「七面倒な話だまったく」

実際、この花にどんな効果があるかはわからない。彼岸花にはそもそも毒があると飛鳥医師や下呂大将が言っていたことを思い出す。

リコの力以前に、そんなものが体内に入ってタダで済むはずがないのだ。

「少なくとも、私にもオオヨドを捻り潰す理由は出来た。この件が終わるまでは協力しよう」

「助かる。差し当たっては、飛鳥医師の警備だな」

「ああ。私が医者 of 警備を任された。チョウカイにはエビオの警備を任せている」

1階の方が艤装の力が届くからということ、リコは1階、飛鳥医師の周辺を警備しているとのこと。

「お前達はゆつくり休んでいればいい。夜は私とチョウカイに任せろ」

「何かあったら起きざるを得ませんけどね」

「その時はその時だ。少なくとも、寝るときは気を抜け」

ニヤツと笑いながら、彼岸花の手入れを進めた。口は荒っぽい、リコは仲間思いのいい人だ。だからこそ、安心して全てを任せられる。

結局のところ、花の成分解析は今日中には終わらず。好きだけ使えとリコに彼岸花の花束を渡されて驚く蝦尾女史は少し面白かった。

その日の夜、いつものように三日月と眠っていると、何やら外でゴソゴソという音が聞こえた。不意に意識が覚醒した瞬間にその音を聞いたため、妙に気になった。こんなことは、曙がこの施設に流れ着いて以来だ。

襲撃による爆音で起きたことはあったが、こんな小さな音で起きたのは珍しい。寝る時は気を抜けと忠告されたところにコレとは、私は眠りが浅いのだろうか。

「んえ……若葉さん……どうかしました……?」

三日月を起こしてしまつたらしい。べつたりくつついて眠っている状態で私が動いたら流石に起きてしまうか。むにやむにや言いながら目を擦る姿はなかなか愛らしい。

「すまない。何か物音が聞こえたんだ」

「物音……ですか？」

私も不意に聞こえただけなので、誰かが部屋から出ただけと言われればそれだけなのだが。

今晩は夜間警備が夕雲率いる九二駆で、引率は摩耶。それに午後に話した通り、1階ではリコが、2階では鳥海が警備をしている。何かあったなら、それだけの人員がすぐに対処する。

物音がしたということは、海に出ている九二駆が何も気付いていないということだ。ならば、施設内の者が動いた音と考えるのが妥当。

「誰かが起きたんですかね……私達みたいに」

「かもしれないな。起こしてしまつてすまなかつた」

目を跨いで少ししたくらいだったため、まだまだ夜は長い。眠り始めたばかりでもあるので、まだまだ眠れそうさ。

三日月の温もりを感じつつ、そのまま眠りに落ちていく……はずだった。

突然、ガラスが割れるような音が施設内に響いた。

「なっ!？」

「えっ、えっ!？」

1階からバタバタと大きな音がする。同時に2階でも大きな音。警備をしている鳥海が動き出した音だろう。

「三日月、若葉達も行くぞ」

「は、はいー」

着替える余裕なんて無い。手早く靴だけ履いてすぐに部屋の外に出る。下でガラスが割れているのだから裸足はまずい。

あの音を聞いたら流石にみんな起きているようで、寝間着姿で次々と部屋から出てくる。その時には鳥海は階段前を陣取っていた。私達を守るため、敵が2階に上がってこないようである。階段も艦装を装備した状態で通れるくらいの幅はあるため、フル装備の鳥海でも戦闘は可能。

その間も1階からは何かが壊れる音が続いている。

「どうしたー!」

「曲者です」

言いながらも、下の階から2階に上がってこようとする敵を蹴り落とした。暗がりなので見えづらいが、鳥海の眼鏡に仕込まれた探照灯のお陰で、敵がどんなものかは確認出来た。真っ黒なウェットスーツのようなものを着込んだ潜水艦だった。

夜間警備をすり抜けて施設に侵入してくるとなると、潜水艦くらいしかない。手にも私が扱っているような拳銃を持っていた。ご丁寧サイレンサーに消音装置まで完備。

「暗殺部隊ですか。来るのではないかと計算していましたが、まさかこのタイミングとは」

当たり前のようにあちらは拳銃を撃ってくるが、そういうもののため鳥海のバルジだ。必要最低限の挙動で銃撃を弾き、階段を下りて行きつつ殴り飛ばしている。

もう脚もしつかり動くようだ。摩耶の賢明なアシストと、何より鳥海の努力のおかげで、リハビリはほぼ完了したと言ってもいい。施設内で銃火器は使えない。特に鳥海の持つ主砲は威力が桁違いだ。こんな密閉された空間で撃とうものなら、自分達まで巻き込まれるのかオチ。下手をしたら施設も破壊してしまう。

だからこそその徒手空拳。鳥海は尋常ならざる握力という私達にはない武器を持っているが、それを活かすために格闘もお手の物。そのため鳥海はこの役を自分から買って出たのだ。

「蝦尾さんは指示があるまで部屋から出てこないで下さい」
『了解です。戦闘は皆さんにお任せします』

蝦尾女史には部屋の中で待機してもらうことにした。出てきて怪我を負っても困る。部屋はシエルターとは言えないがそれなりに頑丈なはずだから、籠もっていてもらった方が安全。

2階にいる者は当然だが艦装は装備していない。敵がどういものかはわからないが、私達も蝦尾女史とほぼ同じと考えた方がいいだろう。ここは鳥海に任せるしか無い。

艦装は勿論工廠に全て置いてある。ここから艦装を取りに行くには、階段を下り、真反対の部屋まで突っ切る必要がある。すぐに行くのは難しすぎる。

「近接組、いますね。工廠まで突っ切ります。ついてきて」

だが、鳥海は知ったことではないという雰囲気で、近接戦闘が出来るものについてこいと言ってきた。先程は音が1回だけだったが、敵が1人とは限らない。

だが、2階までは1本道だ。今ここから真つ直ぐ向かえば、誰も2階に上がらずに工廠には辿り着ける。リコもおそらく戦闘中だ。破壊音は鳴り止まない。

今の施設内で近接戦闘が出来るのは私と旗風。姉は鉄扇があるが、今は初霜を守ってもらいたい。恐怖で愚図り出すのも時間の問題だ。姉にあやしてもらおうのが一番得策。

「音からして、1人2人ではありません。夜間警備が気付かないということは、潜水艦でしょう。私は知りませんでした。暗殺に特化した潜水艦隊が編成されていたのかもしれない」

「狙いは飛鳥医師か」

「ええ、一点狙いでしよう。私やリコさんが施設内で警備しているのは想定外だったのかもしれない」

ジリジリと階段を下りつつ話す。元々完成品として行動していたからこそ、敵の戦力は多少は知っているはずだ。

「私があちらにいるときから、潜水艦の完成品の話はちらほら聞いていました。ですが、顔も名前も知りません。私達よりも早く完成させられ、ずっと海中から監視していたのでしょうか」

まるで呂500の後釜。人形の操作を海中から行なう者がいたくらいで、呂500が失敗作として捨てられたのだから、後釜がいてもおかしくないだろう。

もしかしたら、五航戦との戦闘中も海中からこちらを監視していたのかもしれない。人間魚雷の制御役の可能性もある。

言いながらもズンズン進んでいく鳥海。確かに敵潜水艦は1人2人では無かったが、纏めてこちらに対して拳銃を撃ってきてても、鳥海が全て弾きながら進む。

敵の時はこちらの砲撃を全て弾きながら突っ込んできたくらいなのだ。拳銃如きでは止められない。だからこそ怖いのは、自爆であ

る。それを止めるために、私と旗風は早急に武器を手に入れなくてはならない。

「最悪を想定して、外に出てもらいます」

狭い通路での戦いだ。敵も一気に押し寄せてくるようなことはない。全てを巻き込んだの自爆をなかなかしてこないのは、あくまでも暗殺に特化しているからか。

静かに近付いて、ターゲットだけ抵抗無しに殺害するのがこの部隊の目的だとしたら、自爆は簡単にはしない。夜間警備にも気付かれなようにする目的もあるだろう。

だが、やり始めたら全員が一斉に自爆する。それは流石にまずい。

故に、鳥海が一気に敵に近付いた。射撃の隙間を突き、その拳銃を握り潰した後、即座に施設の外へと投げ飛ばす。当然窓ガラスを突き破ることになるのだが、お構い無しに1人ずつ処理していく。

「リコさん！」

「チョウカイ、こいつらかなりいるぞ！」

1階でリコと合流。あちらも同じように施設外に投げ飛ばしていた。鳥海と同じ結論に達したのだろう。施設を破壊されないように、最善を選択している。

「私は医者を守る！ 斥候は任せた！」

「了解！ 若葉ちゃん、旗風ちゃん、行きますよ！」

ここまで来れば工廠は目前だ。あとどれだけ敵がいるかは知らないが、艦装さえ手に入ればまだ戦える。幸い、鳥海が目の前の敵を次々と処理してくれているため、2階に向かう敵はいない。後ろのことは気にせずに進める。

怖いのは投げ飛ばした敵が窓から入ってくることだが、鳥海は外に追いつく際に武器をしっかりと握り潰しているため、一撃必殺の射撃は無い。艦装を装備しているため、素の私達と比べるとパワーが段違いではあるが、武器が無いのならまだやりようがある。それでも耐えるのは難しいだろうから、艦装を手に入れ次第そちらも守らなくては。

「到着！ すぐに艦装を装備！」

工廠に到着。そこは地獄絵図だった。

海面から潜水艦達が次々と上がってきており、わらわらとこちらに向かってくる。その全てが人形であり、さながらパニツク映画のようになっている。

あくまでも暗殺を目的としているため、大きな音を立てないように行動してくれているのが幸いした。こつそり艀装を破壊されていたら対抗策すら無かったが、そうされていなかったのは運がいい。

「了解。旗風……って、もう行ったのか!？」

私の後ろにいたはずの旗風が忽然と姿を消していた。気付けば既に自分の艀装の元に辿り着いており、戦闘準備を終えている。

「さて……では、参ります」

当然潜水艦からは狙われるのだが、まるで当たらず、危なげなく自爆装置のある腹を搔っ捌いていく。

意識の隙間を突いたような行動に驚きを隠せなかった。神風型の戦い方は各々特徴的であったが、旗風はまるで猫のように自由。のりくらりとやってきては、その一刀で敵を伏す。速さの神風や、鋭さの朝風とはまた違った剣術だ。

旗風のおかげで道は拓かれており、難なく艀装に辿り着くことが出来た。すぐに装備し、ナイフを持つ。工場内は旗風が押さえてくれており、鳥海はリコと共に施設内に抜けてきた者を対処してくれていた。ならば私は、2階に上がろうと窓から入ってくる輩を処理しよう。

「若葉は上に行くー!」

「お願い!」

鳥海に一言断りを入れ、すぐに2階へと向かった。案の定、鳥海が外に追い出した潜水艦達が窓から戻ってきており、艀装も装備していない仲間達に襲いかかっていた。

「遅いですよ。私が出張ることはあまりやめた方がいいと思うんですが」

それを止めてくれていたのが、状況が状況だけに軟禁が解かれた赤城。艀装が無いため深海棲艦とはいえ力は人間に近い。ギリギリ拮抗を保っているくらいだ。

早く対処しなければ、最悪なことになるかもしれない。まずは全員の安全を確保しなければ。

暗殺の夜

深夜、敵潜水艦による暗殺部隊により襲撃を受けている施設。元々施設内の夜間警備をしてくれていたリコと鳥海のおかげで、飛鳥医師が有無を言わず殺害されるといふ最悪な事態は回避出来たが、暗殺とは名ばかりな静かなる群れによりピンチに。

リコと鳥海だけでは押し潰される可能性もあるため、鳥海の指示により私、若葉と旗風がすぐに艀装を確保。旗風はそのまま工廠内に現れる敵を、私は外に追い出したが再び施設内に入ってきた敵を倒すために動き出した。

追い出すだけではまだ危ない。自爆装置は当然埋め込まれているため、こんな狭い施設内で爆発されたら、私達どころか施設そのものが危険だ。

「遅いですよ。私が出張ることはあまりやめた方がいいと思うんですが」

2階に上がろうとしていた敵達を止めてくれていたのが、状況が状況だけに軟禁が解かれた赤城。艀装が無いため深海棲艦とはいえ力人間に近い。ギリギリ拮抗を保っているくらいだ。

「すまない、すぐに追い払う！」

私はまだ1階だ。赤城の負担を減らすために、すぐにでも私が2階に行く必要がある。一番手っ取り早いのは、階段に詰め寄る敵達を全て蹴散らすこと。鳥海のようにバルジで銃撃を弾きながら突っ込むことは出来ないが、今の私には艀装と修復材ナイフがある。

ならば、トリミッターを外した。力が湧き上がると同時に、理性が消えていく。目の前の敵は斬り払ってでも退かず。仲間達に危害を加えるのなら、私は許さない。艦娘に暴力を振るうことに対しての抵抗は、今この時に私の中から消えた。

「退け」

手級の力を借り、敵陣に突撃。目の前には数人の敵。手には当然消音装置付きの拳銃。私の突撃を察知したか、赤城に向けていたかわからない意識をこちらに向けてくれた。振り向いた時点でもう遅い。

それだけの隙があれば私は充分に動ける。

擦り抜ける際に腹を斬り払い、ステップを踏みつつ2人目、3人目と始末していく。痛みで倒れないのは残念だが、自爆されなだけでマシか。銃を撃たせる間も与えず全員の自爆装置を破壊した後にもう一度窓から蹴り出した。その時、メキリと嫌な感覚がしたが知ったことでは無い。

「若葉さん、容赦ないわね」

「情けをかける必要がない」

階段から敵を追い払ったことで赤城と合流。その後ろには2階から動かなかった他の仲間達も待機してくれていた。艀装があっても砲撃が出来ないこの施設内だ。艀装すらないのだから、一箇所固まっただけでくれたのなら守りやすくてありがたい。

だが、まだまだ敵は雪崩れ込んでくる。あくまでも私がやったのは自爆装置の解除とここから追い払うのみ。痛みを感じても止まらない人形相手には、ほんの少しの足止めにしかならない。

「曙、いるか」

「当たり前でしょ。槍じゃ戦えないんだもの」

「工廠で旗風を手伝え。潜水艦が次から次へと出てくる」

「つたく、それじゃあゴキブリじゃないの。ウザいわね……」

自爆装置を破壊出来るのは曙もなのだが、槍を施設内で取り回すのは無理に近いので、鳥海からも今はお呼びがかからなかった。

だが、敵が1体2体で終わらないなら話は別だ。少しでも戦力を増やし、工廠で食い止めることもしてもらいたい。工廠でなら槍を振り回すことも出来る。故に、曙にも参戦してもらいたかった。

「赤城、また食い止めておいてくれ。すぐに戻る」

「人使いが荒いですねまったく。これでも結構ギリギリなんですからね。明日のお昼ご飯は豪勢になると期待しておきますよ」

「保証する！ 頑張つて赤城さん！」

出来ることがわかっているのだから、頼んでおいて問題ないだろう。雷も後押ししてくれたので、赤城も俄然やる気になったようだ。「ワカバ！」

「リコ、どうした!」

「シロクロも連れてこい! こいつらの指揮艦を探させたい!」

潜水艦の暗殺部隊だ。その指揮艦も潜水艦だと踏んだリコからの指示。さつき鳥海が言っていた、呂500の後釜が近海の海底に潜んでいるかもしれないということか。

ならば、シロクロに潜ってもらおうのがベストだ。発見したところで捕らえることも出来るはず。あちらはシロクロ対策を万全にしているのは目に見えているが。

「いいよ……すぐに行く」

「海の底にいるかもなんだよね? なら私達の出番!」

シロクロも乗り気だ。ならやってもらおう。

「道を拓く」

まだ流れ込んでくる敵潜水艦を蹴り飛ばしながら道を作っていく。以前に曙が朝霜に喰らわしたように顎に一撃を加えたら、人形でも意識が飛ぶようだった。それを率先して狙っていこう。

今回の戦いは全員気絶させれば終わりだ。武器を破壊しておけば抵抗もしない。しかし、当然ながらリミッターは解除されているため、時間経過で息絶える可能性がある。この量だ。よくもまあ赤城はそれを艦装無しで食い止めていたものだ。

「旗風、援軍だ」

「助かります。私だけでは少々手に負えません」

戦いながら数人は気絶させている様子。鞘で敵の顎を殴り付け、意識を飛ばしている様子。数が多くとも対応は出来ているが、それでも拮抗。もう一押しが欲しかったようである。

気絶させなければ倒れないというのが一番厄介だった。今でこそ鞘を使った打撃まで繰り返しているものの、本来やるようなことではないのだろう。旗風も初めての試みに少し疲れ気味。

「艦装まで行かせる。そこからは好きにやれ」

行く手を阻むもの、曙やシロクロを狙おうとする不屈き者には、即座に一撃を喰らわせる。今邪魔をされるのは気に入らない。

拳銃だろうが何だろうが、やられる前にやっってしまう関係ない。

撃つ前には必ずこちらを見て、照準を合わせた後に引き金を引く。なら、その隙に近付けばいい。

「まるで嵐ね……」

曙がボソリと呟いたようだが、気にも止めずに道を拓き続けた。おかげで曙もシロクロも艀装を獲得。すぐに装備して参戦した。

シロクロは海までの道が必要だ。曙は放っておいても自分でどうにか出来るくらいの実力はあるだろうから、今度はそちらの道を作るために奔走する。

「ありがとうワカバ！」

「すぐに……見つけてくるから……」

海中に潜ってしまえばこちらのものだ。あの暗殺者達は、潜水艦ではあるもののシロクロよりは遅い。シロクロがただただ異常なスピードを持つているだけかもしれないが、急速潜航に追い付かれることは無いだろう。まだ海中に潜んでいるというのなら話は別だが、それすらも潜り抜ける。

「そこは任せた」

「ええ。さっさと戻ったげなさい！」

2人いれば止められるだろう。通路はリコと鳥海で充分。やはり私の役割は赤城の援護だ。

「本当に早かったですね。助かります」

「有言実行だ」

多少は減っているように助かる。新手かどうかは匂いで判断し、そうなら腹を搔つ捌き、そうでなければ顎を殴り付けて気絶させる。一切の容赦なく。相手の怪我など知ったことでは無い。この施設を襲撃した時点で、命があるだけマシだと思ってもらわなくてはいけない。

曙が工廠に加わったことで、施設内に流れ込んでくる敵が格段に減った。大分余裕が出来てきたので、少しずつ階下へと進む。施設外に投げ飛ばした敵も、気絶させているおかげで再び入ってくることはない。その全ての腹を搔つ捌いているので、自爆の心配は無い。

ふと、気絶させた暗殺者の耳にイヤホンが付いているのが見えた。

やはり指揮艦がいることは確定。それを奪い取り、どんな指示を聞いているかを把握するために自分の耳へ。

「何か聞こえますか」

「ザーザーと水の音が聞こえるな」

余裕が出来たのでリミッターを戻す。これにより理性が戻ってきただため、冷静な判断が出来るはずだ。

『次、行つてー。ほい、頑張つてー』

呑気に命令している子供の声。まだ敵は残っているようだが、それが全て終わるのも時間の問題か。

『あれ？ あれあれ？ 潜水艦かな？』

『見つけた！ お前が指揮艦だな！』

『げえつ、双子棲姫!? じゃああなたに喉けたのにお医者さん殺せなかつたのかあ。やっぱりお人形さんはダメダメだね。ふにやふにやー』

イヤホン越しにクロの声。指揮艦を探し当てたようだ。あちらでも警戒されているシロクロと対面しても、あまり焦っているようには聞こえない。むしろ何だか楽しそうにも聞こえる。

『そっかそっかあ。じゃあ、上に行った子達は大体ダメになっちゃったかな』

『……みんな気絶させてる。自爆装置も壊してるから諦めて』

これは少しだけはったり。リコと鳥海が処理している敵の自爆装置は破壊出来ていない。ちゃんと確認しているわけではないが、気絶くらいはさせているか。この指揮艦からの言葉は聞いていないと信じたい。

『それじゃあもう仕方ないよね。上がつてく子達は、施設に辿り着いた瞬間に自爆してね。ああ、なるべく先に上がった子がいる場所だね。もし起きてる子がいたら、今すぐ自爆していいよー』

なんて命令だ。よりによって、味方すら巻き込む自爆を指示するなんて思っていなかった。本当に罪悪感が無い。この状況でケラケラ笑っているようにも聞こえた。

直後、施設の外で爆発音が聞こえた。リコか鳥海に群がり、外に投

げ出された敵の1人が自爆したのだろう。最悪な事態が始まりつつある。

「指揮艦が全員に自爆を指示したぞ！」

施設中に響き渡る声で叫んだ。私が言うのだ、誰もが危機感を持つてくれるはずだ。こういう時こそ焦らず行動しなければいけないのはわかるが、急いでもらわないと死ぬ可能性がある。

先上がった者がいる場所での自爆は、誘爆を意識しているのだろう。自爆装置を破壊したとしても、体内に仕込まれた火薬はそのままだ。それに引火したら誘爆して同じ爆発が発生する場合もある。

大規模な爆発を発生させることで、仲間の命全てを引き換えに施設を木っ端微塵にしようとしている。あれだけ静かに終わらせようとしていたくせに、最後の最後に雑に終わらせようとしてきた。

「ふざけるな……ふざけるな！」

再度リミッターを解除。出来る限りのスピードを出し、施設の破損もあまり考えることなく、目についたまだ自爆の兆しの無いものから気絶させていくしか無い。最低限、誘爆しない位置で自爆させるに留まらせなくては、強化された施設といえど耐えられないだろう。

「お前達は避難だ！ 逃げ！」

2階の者達には大急ぎで避難させる。未だ部屋で待機してもらっている蝦尾女史や、眠ったままの瑞鶴を守っている翔鶴にも、施設を出てもらわなくては危険が及ぶ可能性があった。そこは協力して施設から出て行ってほしい。

『この……！』

『あたしのお仕事はこれでおしまい。今日は帰りまーす。Addio』

『逃げんなー！』

あちらはシロクロに任せよう。今は施設を守ることが重要だ。

リミッターを外して理性が失われて躊躇が無くなったことで、最善の一手は瞬時に思いついた。施設内で気絶している敵は全て施設外に追い出す。同じ誘爆でも、施設内か施設外かではまるで違うからだ。

敵の今回の最後の策は、先に来たものが生きていようが死んでいようが関係ない。出来ることなら全員から火薬を抉り取りたいところだが、そんなこと出来るわけがない。

だが、それでは誰も救われないこともわかっている。ならば、海上に姿を現した瞬間に気絶させる。さっきの指示からして、海中で爆発することはない。

その瞬間は私の嗅覚で判断する。キナ臭い匂いを嗅ぎ分け、海面に顔を出した瞬間に叩く。要はモグラ叩きだ。

「集中しろ……集中……！」

そこ彼処から爆発音が聞こえる。だが、施設内では聞こえない。他の者も最善の状態に対処してくれている。爆発のたびに施設が揺れるが、大きな破壊には至っていない。

工廠に辿り着き、バタバタと倒れている敵達で埋め尽くされている散々な光景を目の当たりにするが、気に留めていられない。すぐに海に出て、モグラ叩き開始。

「そこっ！」

キナ臭い匂いが一番強くなった海面を蹴り上げる。丁度頭を出した瞬間の潜水艦の後頭部に一撃を喰らわせることとなり、自爆するまでもなく気絶。首がイカれるほどの衝撃になったと思うが、死んではいないだろう。折れた感触は無かった。

タイミングはおおよそ掴めた。同じことを終わるまで繰り返せばいいだけだ。嗅覚に全神経を集中し、次へ次へと続けていく。全て終わるまで限界が訪れないことを祈るのみ。

しばらくして、キナ臭い匂いは無くなった。私が蹴り飛ばしたモグラは2桁を超え、その全てを気絶させ、余裕があるときに旗風と曙に自爆装置の破壊を頼む。これで遠隔で自爆させられることもないだろう。

これにより、施設の防衛は終了。爆発音を聞きつけて九二駆も戻ってきたが、その頃には全て終わっていた。

同時に私の限界が訪れ、その場に倒れ伏すこととなった。

殺意を乗り越えて

私、若葉が目を覚ました時、自室のベッドで寝かされていた。

潜水艦の暗殺部隊との戦闘中、次から次に海中から浮上してくる潜水艦を対処して力尽きてしまい、そこから記憶がない。リミッターを外してからあの時ギリギリまで動き続けたことで、限界が来てしまったのだろう。

「おはようございます、若葉さん」

ベッドの隣には三日月が待機していてくれた。私が目を覚ますのをここでずっと待っていてくれたらしい。

「……何時だ……」

「お昼過ぎたくらいです。全部終わった後に倒れてしまったのを曙さんに運んでもらいました」

身体を起こすが、少しギシギシ言っていた。あの時は嗅覚に集中し、キナ臭い匂いを感じた瞬間に出来る限りの最速で動き続けるとうややったことがないことをやっていたことで、心身共に限界が来たのだと思う。前回よりも長く寝てしまった上に、半日近く眠っていたというのにまだ疲れが残っているような感覚。

寝かされていたからか、ちゃんと新しい寝間着に着替えさせられていた。おそらくこれをやってくれたのは三日月だろう。少しはだけていたが、ここに三日月しかいないのだから気にならない。

「心配しました……私が戦場に出られませんでしたから」

「すまないな。お前を置いていく気はないから安心してくれ」

「はい、そう言ってもらえると嬉しいです」

まだ疲れが全て取れているわけでは無いようなので、三日月に手伝ってもらいながら着替えを済ませた。

あの戦闘では三日月を放置せざるを得ない状況になってしまったので、少し罪悪感がある。それを晴らすためにも、今日はなるべく近くにいて可愛がろうと思う。

「あの後どうなった」

「そうですね、その説明をしなくちゃ」

お昼も過ぎているので、昼食がてら私の眠っている間に起きたことを話してくれることとなった。

もう誰も残っていない食堂。私1人のために残してもらっていた昼食を食べつつ、三日月から全容を聞く。一番気になっていたのは、襲撃してきた潜水艦達のその後。

「結果的に生き残ったのは……11人です。自爆させられた者と、リミッター解除の結果で息絶えた者で半数以上は……」

「……そうか」

昨日だけで相当な数の潜水艦が雪崩れ込んできた。叩いては増え、叩いては増えで、全部で何人いたかは覚えていないが最終的には30人は来ていたはずだ。最後の自爆部隊だけでも2桁はいた辺り、人形にされた潜水艦はかなりの数。

大淀はそんな人数をどのように揃えているのだろう。まあそんなことはどうでもいいのだが、少し気になる。

「その遺体はそろそろ来るといふ来栖司令官が運んでくれるそうです。リミッターを掛け直された潜水艦の処置もそちらでやってもらえると」

「それはよかった。飛鳥医師に負担がかからないのはいいな」

以前にこの施設で研修をした妖精達が治療をしてくれるようだ。今は以前の洗脳状態の姉のように大人しくしているようで、虚な瞳で部屋の端に座っているとのこと。人数は多いが部屋がないため、今は談話室に押し込んでいるらしい。

治療法はここにあるとはいえ、飛鳥医師への負担をこれ以上増やすわけにはいかない。その場でリミッターだけは掛け直したが、そのまま治療すると言い出したときにみんなで無理矢理止めたそうだ。1人は流石に数が多い。1回の徹夜だけでは確実に終われない。

完成品のような飛鳥医師にしか治療出来ないようなものならまだしも、既に別で治療出来ることがわかっているのなら他に任せて飛鳥医師は休息を取ってもらいたい。

「シロさんクロさんが探し当てた潜水艦隊指揮艦は、残念ながら逃が

してしまつたそうです。相変わらず逃げ足だけは速かつたようで」

その指揮艦は、普通は艦娘が使うことのないいろいろな手段を駆使して逃走したという。もしかしたら戦闘能力はあまり無いのかもしない。あくまでも司令塔。

「若葉達には潜水艦対策が無いな。そこも考えておかなくては」
「ですね。また同じことされても困りますしね」

対潜訓練は必要だろう。私達がやるわけでもなくても、この施設にいる駆逐艦が覚えればいい。なんでも夕雲型がその辺りに躍起になっているようである。

あのときに何も出来ず夜間警備をしていたのが悔しいそうだ。その気持ちはわかる。施設内がこれだけ荒らされたというのに、それを知らなかったというのは辛いことだ。下手をしたら、警備しているのに帰ってきたら本拠地が無くなっていてという事態まであったのだ。「施設の方も、それなりに壊れてしまいました」

「ああ、若葉もどちらかと言えば壊した側だからな……」

この食堂に来るまでに少し見たが、1階の窓ガラスはほぼ壊れてしまった。一部は自爆により壁も壊されており、来栖提督はそれを直すための職人妖精を連れてきてくれるというのもある。処置室や医務室に影響が無かつたのは良かったが、通路が酷いことになっているのは問題だ。早急に対処したい。

「人的被害はありませんでした。ですが、若葉さんが倒れた後に……」
「何かあつたのか？」

「念のため避難しましたよね。そのせいで……赤城さんと翔鶴さんが顔を合わせてしまいました」

大問題じゃないか。施設存亡の危機の真っ只中だとしても、赤城は翔鶴の顔を見れば暴走するし、翔鶴も赤城の顔を見れば暴走する。

前回は飛鳥医師が無理矢理恐怖と力業で押さえ付けたが、あの時飛鳥医師はリコにより自室から出ないように止められていた。あの2人を止めるものがあの場にはいない。

「……どうなつたんだ」

「最初は加賀さんが押さえ付けていたんですが、最終的には雷さんが

止めました」

「雷が!？」

止めたのは加賀辺りかと思ったが、加賀は赤城にはどうしても甘くなる。ただただ止めるだけでは赤城は止まらない。加賀すらも振り払って翔鶴を殺しに行くだろう。

それを雷が止めた。正直、一番意外な名前だった。

「ど、どうやって……」

「たった一言、『食事抜き』と」

「……そんなことで止まったのか……?」

「はい……翔鶴さんはそもそも瑞鶴さんしか見ていませんでしたし」

元々食い意地が張っているのは知っていたが、理性無く暴走している深海棲艦が言葉1つで止まるとは流石に思わなかった。

確かに、艤装無しでの防衛を請け負っていてくれたときに、昼食のレベルアップを要求していた。軟禁状態で本当に欲しい量よりは少ないかもしれないが、まさか手綱を握れるほどになるとは。理性を上回る食欲。

翔鶴も、瑞鶴を避難させるために感情を全て使っていたので、憎き赤城が目の前にいても舌打ちくらいで終わったらしい。死んでから蘇ったわけではない翔鶴は、暴走するにしても赤城ほどではないようである。

「雷にしか出来ないなそんなこと……」

「はい。赤城さんが狼狽る姿なんて、早々見られないので」

つまり、赤城は雷に胃袋を掴まれた。雷には逆らわない。逆らえない。理性を失い狂気に吞まれても、本能的に食欲を質にされては従わざるを得ないと。長所でもあり短所でもある。

結果的に、今日の赤城の昼食は大分色がついていたらしい。防衛の報酬はしっかりと与えられたようだ。

「それでもいつダメになるかはわかりません。軟禁状態は今後も続くと思います。和解が出来ればいいんですが」

「そうだな……難しいかもしれないが、いつか手を取り合ってもらいたいものだ」

仲良くしろとは言えないが、出来ることなら顔を合わせても諍いを起こさないくらいに。曙と呂500くらいの仲でいい。あちらは大分改善されているが。

「それくらいですね。重傷者は無し。守らなくてはいけない人間2人は共に無傷で守ることが出来ました。リコさんと鳥海さんが擦り傷程度がありました。飛鳥先生の治療が必要な程ではありませんでしたね」

それは良かった。最後に神経を集中して行なった決死のモグラ叩きは、功を奏したようだ。代わりに私がこの時間まで眠ることになった拳句、未だに身体が痛いほどに消耗してしまったわけだが、誰一人として欠けることなく施設は少し破壊されたものの生活に支障が無いのも良かった。

今は昼に入ったことで飛鳥医師と蝦尾女史は研究に入っている。午前中の手伝いも、私が目を覚ましていないため今日は中止になったそうだ。

「若葉さんは身体を休めてください。まだ疲れてるんですよ」

「ああ、昨晚の無理が祟ったようだ。前より神経を使ったからだな」
「施設を破壊されなかったために、爆発する前に気絶させ続けたと、曙さんや旗風さんから聞いています。本当にお疲れ様でした」

私しか見られない三日月の微笑み。これだけで疲れが飛ぶようだった。

おそらくあの手段は私にしか出来なかった。ソナーも何も無いこの施設で、あつたところでも何故か反応しない敵潜水艦相手に、その位置を常に判断出来るのは私だけ。代わりにこの消耗ではあるのだが、有意義に戦えたと思う。

今この一時の平和を掴み取れたのは、紛れもなくみんなの頑張り。その中に私が重い部分としていられるのはとても嬉しいことだ。

「今日は私もお休みをいただいています。若葉さんの看病をするようにと」

「病気では無いんだが、頼む。今日はずっと一緒にいような」

「はい、何かあったら私に言ってくださいね」

心身共に休み、明日以降に備えよう。今回の件で、今晚以降も暗殺の手がある可能性はある。大淀がどれだけ潜水艦を取り揃えているかは知らないが。

「あーっ、わかばがおきてるー！」

昼食もおおよそ食べ終えた辺りで、姉に連れられた初霜に叫ばれた。いきなりの大声で三日月がビクンと震える。

「心配かけた」

「だいじょーぶ？ すっごいつかれてるってきいたよ？」

「ああ、もう大丈夫だ。昼からも休ませてもらうが、それで完治する」「そっかー。よかったね」

ニパツと笑って抱きついてきた初霜の頭を撫でる。初霜も私のことを随分と心配してくれていたようだ。私が眠っている間も、たびたび部屋を覗きに来ていたらしい。

「姉さん、そっちは大丈夫だったか」

「うむ、避難は完了したからの。初霜が少し愚図ったが、すぐに泣き止んでくれたわ。迷惑かけまいと気丈に振る舞ったのう」

子供ながらに周りのことは察したようで、恐怖で泣き出したものの震えて動けないということは無かったようである。避難した後はすぐにまた眠ってしまったらしいが、怪我一つ無かったのは御の字。

そういうところはしつかり艦娘なのだろう。本質的に危険を回避しようとして身体が動いたというか。

「若葉よ、昨晚は手伝えずすまぬな」

「いや、あれは仕方ない。初霜を安全に避難させられるのは姉さんだけだ」

「すぐに動いてくれたから助かった。初霜もいい子じゃ」

私に加え、姉も初霜を撫でた。どうせならと三日月もそれに参加。初霜は心地良さそうに表情を緩ませた。

「若葉が眠っている間のことは三日月から聞いた。みんな無事であった」

「うむ。赤城殿の件の聞いているかえ？」

「ああ、雷が末恐ろしくなった」

あの現場には全員いたらしく、姉もその様子を見ていたようだ。雷とは思えないような冷酷な宣告だったらしく、そこにいたもの全員が震え上がったのだとか。

そういうことをしない者がやるというだけでも、驚きから身が竦む。それが雷なら尚更だ。さすがはこの施設の最古参、台所を管理する者である。下手をしたらトップである飛鳥医師ですら逆らえない。

「逆らえんのう、雷には」

「ああ、無くてはならない存在だ」

この施設に不要な者はいないのでと改めて実感した。

私が部屋で休んでいる間に、来栖提督が施設にやってきた。下の階でバタバタし出したので、職人妖精が施設の修復を始めたのだと思う。資材はその場で崩れた瓦礫だけで充分だったようだ。

前と同じものがあるのだから、前と同じものがそのまま出来る。強化はされないが、劣化もしない。

「明日には元通りだな」

「はい、職人妖精さんに感謝です」

戦いの傷跡はすぐに無くなる。これで心機一転、次の戦いに臨めるというものだ。

「また来るのでしょうか」

「かもしれないな。その度に施設を破壊されたらたまったものじゃない」

「本当ですよ。私達の居場所をエゴで破壊されたら気分が悪いです」

この一件で、施設内の結束力はより高まっている。倫理的にもおかしな連中のエゴで私達の生活を破壊されるなど言語道断。ここで楽しく生きていくためには、確実に排除しなくてはならない存在として再認識した。

そろそろ下呂大将も襲撃の機会を窺うくらいになっているだろう。決戦の時は近い。

紐解かれる技術

潜水艦隊による襲撃は事無きを待た。救出出来た者、出来なかった者は来栖提督に運んでもらい、治療ないし供養をもらうこととなる。職人妖精の派遣もしてもらえたため、その日中には施設の修復も完了。翌日からは普段通りの体制で施設を運営することが出来るようになった。

そして、その翌日。私、若葉は三日月と共に研究の助手をする。今日でリコの花を調査し始めて3日目。蝦尾女史は、そろそろ成果が出そうだと話していた。

先日の襲撃で施設の一部が破壊されたものの、処置室や医務室は破壊されずに済んでいたのは大きい。防衛してくれていたリコと鳥海も、その辺りはちゃんと考えて敵を薙ぎ払っていたようだ。

「……これだ。見つけました」

蝦尾女史が力強く呟いた。出来る限りの実験を余すところなく繰り返し、ここで手に入る素材を使ってきたことで、ようやく何かを見つけたようだ。

「特別な彼岸花の毒素が原因でした。これはリコさんの花でないと起こり得ない現象です」

「深海棲艦の細胞固有の効果ではないと」

「はい。ただ混ざり合っただけでは、こんな侵食にはなりません。ですが、リコさんの花を掛け合わせると、周りの艦娘の細胞だけを破壊しながら侵食していきます」

リコの花の成分を取り入れると、艦娘の細胞を破壊する劇薬になると考えた方がいい。当然人間にも害はある。麻薬に使われたときの副作用を聞く限り、それもわかる。

ならば、私や三日月の侵食と完成品の侵食は、全く違うのではなからうか。負の感情で侵食率が上がったたりする要素は同じであろうが、私達の場合もしこの腕を手放したとしても、後遺症が残るようなものではなさそう。それこそ、理由はわからないが完全な同化なのかもしれない。

「なら、これと逆のことを出来ればいいわけだ。深海棲艦の細胞を艦娘の細胞で侵食させることが出来れば」

「もしかしたら、花卉の細胞と艦娘の細胞を掛け合わせればいけるかもしれません。早速やってみましょう」

解剖に使っている失敗作から、侵食されていない細胞を摘出して加工し始めた。これは飛鳥医師にすら出来ない、蝦尾女史ならではの実験。

そもそも細胞の掛け合わせなんていう未知の世界の手段を使っているのだ。誰も手出しは出来ないし、何も文句は言えない。そもそも何をやっているかも理解が出来ない。ただ信じるのみ。

「これを……使えば……」

出来上がったものを、失敗作の侵食された肉片に投与。既にそれは生きているものではないが、実験として使うのならちよどよかつた。侵食により黒ずみ、変質すらしている細胞であり、三日月の目から見ても、私の嗅覚からしても、それは深海棲艦のものであると認識出来るほどに侵食が深い。

その細胞に注射を打った途端、その場所から黒ずみが一気に薄れていった。あつという間にといいわけではないが、しばらく見ているとその肉片はどんどん綺麗になっていく。

「これは……!」

「匂いが薄れている!」

「深海のオーラのようなものも薄れてます!」

明らかに投与する前後で変質していた。黒ずみは消え、綺麗な肉の色になっていった。私の嗅覚は、これが深海棲艦のものではないと言っている。三日月の眼でも同じように見えるようだ。

つまり、今蝦尾女史が投与した薬により、深海の侵食だけが取り除かれたということである。

「この肉片を確認します。その後は、もう少し大きな部分で試して、大丈夫そうなら本番に行けます!」

破壊された細胞は修復材の要素で回復し、深海の細胞だけを破壊する、今一番必要な薬が、ついに完成する。

蝦尾女史がこの施設にやってきて、今日で僅か4日目。専門家の強さを知ることになった。

失敗作の亡骸にしか実験は出来ないものの、昼までかけて何度も何度も実験を繰り返し返し、侵食により至るところが黒ずんでいた脳が本来の色を取り戻すところまでは確認出来たため、次のステップへ。深海の侵食の治療に移る。

その相手は、如月である。この治療法を使えば、動かなくなってしまう右腕を動かせるようになるはずだ。しかし、本人がそれを望むかどうか。

「如月、君に話しておきたいことがある」

飛鳥医師と蝦尾女史が如月の元へ。談話室で初霜と遊んでいくれたようだ。姉も一緒にいる。初霜はキョトンとした顔をしているが、姉は何やら察した様子。

「あらあ、改まってどうしたんですか？」

「その腕が治せる準備が整った。切った貼ったじゃない、そのままだ。薬の投与で君の患部を消すことが可能になった」

さすがにこれを聞いたら驚きを隠せず硬直してしまった。普段は見せないような表情。

「だが、今は失敗作の亡骸で実験した段階だ。それで、身体の侵食が消えている。命ある者にそれを試すのは初めてとなる。それを君に提示するのは心苦しいが……受けてみるか」

「……それは如月が一番最初なのよね。ということは、瑞鶴さんのための前座つてところかしら」

そう言われてしまうと否定が出来ない。いきなり脳でやるのが怖いため、被害が軽い如月で最後の実験をしたいというのは火を見るより明らか。飛鳥医師も蝦尾女史も申し訳なさそうな顔で首を縦に振る。

万が一失敗した場合でも、如月が命を落とすことはないだろう。腕が動かなくなつたままとなつても、前々から伝えていた通り、二の腕だけを深海のパーツに入れ替えるという処置で治療出来ることはわ

かっている。だから頼んだのだ。

しかし、これは瑞鶴のために如月を犠牲にする可能性のあるものだ。午前中にさんざん実験したとしても、生きている被検体は初めて。

「ふふ、ごめんなさいね、意地悪な言い方しちゃって。如月も瑞鶴さんには目を覚ましてほしいもの。それに、動かないものが動かないままか、動くかもしれないかって言われたら、動いてくれた方がいいに決まってるわ」

「それじゃあ……」

「その処置、受けさせてもらいます、やっぱり不自由なのよね、腕が動かないって。すごく悩んだけれど、動くようにしてもらいたいわ。償いは、その後だって幾らでもできるもの」

感覚すらない右腕を撫でながら話す。ここ数日、初霜を中心としたヘルパーを使った生活をしてきた如月だが、やはりサポートがあっても生活はしづらいついという。特に服を着たり脱いだりするのは酷いらしい。初霜もかなり頑張っていたそうだ。

「きさらぎちゃん、うでがうごくようになるの!？」

「かもしれないらしいわ。先生が治してくれるんだって」

「よかったね!。たいへんだったもんね!」

初霜が我が身のように喜んでくれていた。もうサポートがしたくないとかそういう意味でなく、如月が治ることを心の底から祝福していた。なんて可愛らしい妹なのだろう。

「では、早速で悪いが今からでいいだろうか」

「ええ、お願いします。私が人柱となって、治療の礎いしずえになれば嬉しいわ」

この治療が上手くいけば、完成品の後遺症は全て払拭出来る。本人の言う通り人柱ではあるが、飛鳥医師と蝦尾女史のタッグが作り上げた薬だ。必ず上手くいく。

医務室で処置が始まる。大掛かりな処置ではなく、透析のような時間がかかる処置でもない。如月は脳ではなく腕、しかも右腕のみだ。

大きく袖を捲ってもらい、私が匂いで詰まりを探し当て、そこにピンポイントで投与する。ドンピシャで無ければならないわけではないのだが、近ければ近い方がいい。

蝦尾女史が言うには、投与した周囲全てに影響を与えるようにはなっているようだ。そこは高速修復材の技術の応用なのだから。自前で修復材の代替品が作成できる蝦尾女史ならではの見解。

「念のため、局所麻酔をかけておく。今は感覚が消えているかもしれないが、この薬が効いてきた場合、激痛になるかもしれない」

細胞を破壊しながら修復していくのだから、痛くないわけが無いのだ。治っていく段階で今の麻痺が無くなっていくわけだし、腕だけで済むかもわからないので、二の腕一带を麻酔で麻痺させる。

如月本人は最初から感覚がないので何をされたかはわからないようであるが、苦痛は出来る限り取らなくてはならない。

「では、行くぞ」

私が二の腕の匂いを嗅ぎ、ピンポイントな位置を指差す。そこに飛鳥医師と蝦尾女史が作り上げた薬を投与した。

それなりに即効性はあるものの、麻酔の効果もあるので、如月の腕はすぐに動き出すわけではない。今は台に乗せて薬が効いてくるのを待つのみ。

「如月、痛みとか何か違和感はあるか？」

「今のところは無いわ。感覚が無いんだもの」

麻酔も効いているので、違和感も感じないだろう。本来痛みがあるものかもわからない。必要以上に痛みを与えることは、如月が望んでも飛鳥医師が許さないなので、ここからは待ち。

時間が経過することに飛鳥医師が状況を聞き、効果が現れるタイミングを計る。失敗作の肉片に対しては、それが小さかったというのもあり、すぐに見た目から効果が現れていたが、今回は少し時間がかかっている。

そして時間が経ち、ついに如月の指先が動いた。

「……動いた」

「今のは自分の意思か？」

「え、ええ、まだまともに動かないけど……もう少し時間が経てば……」

徐々に指先から指に、5本の指に、そして握り締めることまで出来るようになっていく。

すぐに私も患部の匂いを嗅ぐが、投与する前からどんどん薄くなつていつているのがわかる。

「動く……動くわ……」

さらに時間経過で手首が動くようになった。麻酔のおかげでそれより上の感覚はまだ麻痺しているようだが、ここ数日間全く動かすことが出来なかったものが、動かすことが出来るようになっていく。

ここまで僅か十数分。即効性があるとはいえ、ここまで早く効くのなら充分過ぎる成功。

「すごい……本当に動く……」

「局所麻酔が切れれば、肩から下全てが動くようになるだろう」

飛鳥医師と蝦尾女史もまずは一安心と大きく息を吐いた。これにより、治療方法の確立は達成として問題は無いだろう。

「ここから半日生活して、何事も無ければ成功でしょう」

「麻酔が切れてからどうなるかですね」

だがまだ安心は出来ない。さらに時間経過したらまた動かなくなるという可能性だってあるのだ。今まで実験してきたものに関しては、一度破壊した細胞が元に戻るということはなかったが、万が一ということはおかなくてはならない。

もしこれが一時的だというのなら、定期的な投与が必要になる。如月なら簡単に済むことではあるが、脳を侵食されている者の場合はダメージが大きい。

「本当に……動いているわ……」

「良かったです。姉さんはこれで五体満足ですね」

感極まって涙が出てきている如月。姉の復活に三日月も嬉しそうだ。三日月が嬉しいなら私も嬉しい。

「先生、ありがとうございます。如月は腕が動かないことを償いとしていたけれど……これで違う償いに励めそう」

「まずは経過観察だ。何かあったら包み隠さず、すぐに言うこと。僕に話しくいなら蝦尾さんに話せばいい。同性の方が話しやすいこともあるだろう」

「はい、そうさせてもらいます」

何度も何度も動くようになった右手を動かし、治ったことを実感している。まだ力が入らないようだが、それもすぐにどうにかなるだろう。

「蝦尾さんも、ありがとうございます」

「僕からも礼を言わせてくれ。蝦尾さん、本当にありがとう」

「力になれてよかったです。私はこのためにこの施設に来たんですから、ちゃんと成果が出せて嬉しいですね」

飛鳥医師1人ならこんな早く解決出来ていなかっただろう。今回は本当に蝦尾女史のおかげだ。

この薬は量産も利く。使っているのは、侵食させるための艦娘の細胞とリコの花。この施設ではいくらでも手に入る材料だ。他にもいろいろ必要なのだろうが、一番必要であり他では手に入らない材料が半無限に施設に生えてくるのだから、何も困ることはない。

「次は瑞鶴の処置の準備をしなくては」

「ですね。それなりの量が必要だと思いますので」

すぐに次の準備が必要だ。本命、瑞鶴の治療、如月が人柱になってくれたおかげで、死した肉片だけでなく、生きている者にもちゃんと効くことが証明されたのだ。

如月の場合は本当に局所だったので注射で患部に直接投与でどうにでもなったが、瑞鶴の場合は脳。おそらくはダメージも非常に大きく、失敗作と近い程になっているのだと思う。それを治療するためには、この薬が多く必要。早速今からそれを作り始めるそうだ。

決戦は明日。翔鶴にも話をして、目覚めさせるための治療を開始する。ここまで来たら、もう何も障害はない。必ず目覚めさせることが出来る。

奇跡的一幕

蝦尾女史の研究の結果、ついに完成品の侵食を治療する薬が出来上がった。その薬を投与された如月は、動かなかった右腕が完全に回復。力が上手く入らず、リハビリは必要ではあるものの、今までのように一切の感覚が無いということは無く、全く動かないということも無い。少し時間を与えれば、如月は完全に復活したと言える。

夕食は相変わらず初霜にサポートをしてもらっていたが、この時には局所麻酔も切れており、箸は持てないにしろ動くことをアピールしていた。麻酔が切れても痛みは無かったようで安心だ。

「わ、わ、うぐいてるー!」

「治してもらえたのよ。でもすぐには上手く使えないから、もう少しの間、サポートしてもらってもいい?」

「うん! はつしも、きさらぎちゃんのおてつだいするよ!」

如月の治療は完了したが、初霜のお手伝いはまだ終わらない。今度はリハビリのお手伝いに奮闘することになる。今まさにそうだが、まだうまく動かないために、食事や着替えはもう少しの間サポートが欲しいようだ。

まだ頼られるということ、初霜は大喜び。お手伝いを率先してやっつけていこうとするとは、根っからの良い子なのだろう。

「明日からは瑞鶴さんの治療に入ります。私と若葉さんはそのお手伝いを以て、研究の助手の任務が一度終わりとなります」

「うむ、急務じやったからのう。ならば、その後からはまた夜間警備に戻るのがかえ?」

「ああ、そうするつもりだ」

私、若葉と三日月は、早急に治療薬の生成をするために眼と鼻を使ってサポートする助手を任されていた。薬が完成したのならお役御免。明日行なわれる瑞鶴の治療に立ち合い、それが終われば任を解かれる。

今後経過観察などがあるが、私達が関わっていくのはそれを少し手伝う程度になるだろう。それはいつもやる確認と同じ範疇。特殊

な配置はこれで終わり。

「ならば、また駆逐の集いを開かねばのう。如月の復活も祝わねば」
「そうだな。これで如月もリザーバーになってもらえる」

「私と若葉さんが復帰したら、ちようど駆逐隊がもう一つ作れますね」
私と三日月が戻ることで、朝霜と巻雲はお役御免となる。代わりに如月と暁がりザーバーとして浮いている状態のため、ここで4人。新たな駆逐隊が生まれる可能性も出てきた。2隊より3隊でローテーションを組んだ方がいいことはわかり切っていることだ。

「その辺りもまた話そう。そもそも如月が戦線復帰するのはもう少し先のことだ」

「その時はよろしくお願いね。誠心誠意、尽くさせていただきます」
心強い仲間が増えたものである。

翌日、早速瑞鶴の治療に取り掛かる。翔鶴にお願いして、瑞鶴を医務室にまで運んでもらい、ベッドに寝かせた。如月とは違い、今から行なうのは蝦尾女史の作り上げた深海の細胞を破壊する薬による透析。大掛かりな上、時間がかかる処置だ。

瑞鶴の身体は以前から変わっていない。食事は取っていないが栄養は与え続けており、運動不足で筋肉に異常をきたさないよう翔鶴がマッサージも繰り返している。瑞鶴の身体は万全の状態だった。

「ホントウニ、ズイカクガメラサマステンデスカ？」

「ああ。研究も実験も慎重に続けたし、その結果、如月の腕が動くようになった。効くことは確実だ」

注射ではなく透析。血管内に投薬して全身に巡らせることで、瑞鶴の身体に蔓延る深海の細胞を全て破壊し、艦娘の細胞を修復する。ダメージは一部残る可能性もあるが、この治療により、他の治療された完成品とは違い身体が完全に艦娘に戻ることになる。

あちらは血管で洗脳の薬やキューブの怨念を巡らせていた。同じように血管を使うことで治療も出来るはず。敵と同じことをやり、こちらはその手法を治療に使うのだ。

「頭を開くこともない。瑞鶴にもう傷はつけない。ただ、時間がかか

るだけだ。それが終わるまでは待っていてほしい」

「……ワカリマシタ」

装置をテキパキと設置し、念のため昏睡の処置を施した後に透析を開始した。

薬は昨日のうちに相当な量を作っていたらしく、今なら数人分の透析が可能。リコの花は大量にあり、混ぜ合わせる艦娘の細胞もすぐに調達出来るため、時間さえあればまだまだ量産出来るという最高の状況だ。

あとは時間が解決してくれる。

「……センセイ、オネガイヲキイテモラッテモ」

「何かあったか？」

「ワタシモ、ノドヲナオシテモラッテモ……イイデシヨウカ」

翔鶴はここに住むようになってからずっと喉を元に戻していない。ずっと部屋に籠っており、シロが近付くことが出来なかったというのが大きい。それに、瑞鶴が治療されたらここから離れるくらい考えていたようにも思える。

それが一転、喉の話を持ち出してきた。これはある意味、ここにずっと住まわしてほしいという意味だ。最初は瑞鶴が死んだら飛鳥医師を殺すとまで言っていた程だが、治療の目処が立ったことで心境が変化したようである。

「わかった。シロを呼んでこよう」

「若葉が連れてくる。少し待っていてくれ」

すぐにシロを医務室に連れてきた。事情を話したら抵抗なく来てくれた辺り、シロもそろそろじゃないかと考えていたらしい。相変わらず勘がいい。

「……元には戻せるから、必要無くなったら言って」

「エエ、オネガイ」

シロが翔鶴の喉に触れ、軽く弄る。その処置もすぐに終わった。初めてそれを見る蝦尾女史は首を傾げていたが、これに関しては私達もわかっていないシロのみ与えられた能力。理解出来る時には、おそらく全ての治療が終わっている時だと思う。

「ん、んん、ありがとう。これで瑞鶴を起こせます」

「……艦娘の声で起こしたかった？」

「そう、この声が翔鶴だもの。瑞鶴の姉は、この声だから」

深海棲艦として生まれ変わってしまった、今でも赤城に対する深い憎しみは消えていないが、瑞鶴に対しては愛する妹という感情しかない。最高最善の起こし方をするのなら、声くらいはちゃんと姉の声で。服もちゃんと翔鶴としてのものを着ている程である。堕ちても翔鶴は翔鶴である。

「ここで待っていてもいいでしょうか」

「ああ、構わない」

少し長い時間になるが、これが終われば瑞鶴は目を覚めますのだ。待ち遠しいのはわかるが、翔鶴の顔は少し不安そう。だが、こればかりは掛けられる声が無い。

私達もここからは待ちだ。透析終了後の匂いに全てがかかっている。

数時間、いつもの透析が終わるくらいの時間が経過。透析が完了し、深海の細胞を破壊する薬も瑞鶴の身体に浸透したはず。

それを調べるために、私とシロで念入りに調査する。こうされる前の瑞鶴は頭から湧き立つ深海の匂いが他と比べ物にならないほど濃かったが、今はそういった匂いがほとんどしない。染み付いた匂いがまだ残っているようだが、これもその内無くなるだろう。

「匂いはほぼ消えた。残り香はあるが、この程度なら消えたと判断していいと思う」

「……すごいね、同胞の感じ……全然しないよ」

私の嗅覚だけならず、シロが保証してくれたのは大きい。これにより、瑞鶴を蝕んでいた深海の侵食は、全て取り払われたと言っても過言では無くなった。

それを聞いた飛鳥医師は、すぐに透析の装置を外し、昏睡状態からも解放。あとは起こすのみ、

「翔鶴、瑞鶴を起こしてやってほしい」

「……ええ」

最初と同じように翔鶴に促す。ここからは見守るしか無くなった。これでも起きない可能性は充分にあるのだ。脳へのダメージが酷すぎて修復すら出来ず、結局目を覚ますために必要な部分がダメになっってしまったているとなると、目も当てられない。

「瑞鶴、起きなさい」

前回はこれで全く目を覚まさなかった。どれだけ強く揺すっても、頬を叩いても、目を覚ますどころか反応すら無かった、小さく呼吸を続けるだけの植物状態。目も当てられないほどの重すぎる後遺症。

「瑞鶴、ほら」

もう一度肩を揺する。翔鶴の手が少し震えているのがわかった。前回があるから、今回も目を覚まさないかもしれないという大きな不安で、どうしても表情が暗くなる。

「瑞鶴」

そして今、それは払拭される。

「……翔鶴姉……おはよ」

薄らと目を開き、ニヘラと笑って朝の挨拶。もう時間は昼だということ、呑気なものだった。

「あ……ああ……瑞鶴……瑞鶴！」

「しよ、翔鶴姉?!」

感極まって強く抱きしめる翔鶴。寝起きに突然飛び付かれて混乱する瑞鶴。

「よかった！ 本当に良かった！」

「ど、どうしたの翔鶴姉、ていうかここは……」

長く眠っていたこともあり、記憶が混濁している様子。翔鶴が深海棲艦へと変化していることも気付いていない。元々と似たような外見故に、パツと見では変わったように見えないのが翔鶴ではあるのだが。

その裏では、飛鳥医師と蝦尾女史が健闘を称え合っていた。飛鳥医師の持つ今までの知識と、蝦尾女史が持ち込んだ新たな技術のおかげで、瑞鶴は目を覚ますことが出来たと言っても過言ではない。

ギョツと握手をし、飛鳥医師には珍しい満面の笑みでこの結果を喜んだ。死んだ艦娘を蘇らせるのとは違う、一種の不治の病の克服を達成したのだ。こうもなろう。

「身体は大丈夫？ 痛いところは？」

「痛くはないけど……でもすごく疲れてる感じ。腕を動かすのもしんどいや」

今まで寝たままだった弊害だろう。動かせないとは言わない辺り、身体への後遺症は無いと言える。言動からして、ここで今まで起きてきた後遺症の類も見られない。

「瑞鶴、何処まで覚えてるの？」

「覚えて……つて……あ……」

見る見るうちに顔面蒼白に。混濁していた記憶がハッキリしてきたか、今までやらされてきた悪行の一部始終を思い出してしまったようだ。

「私、仲間を……殺した……」

「……でもそれはやらされたこと。瑞鶴の意思は無かったわ。大丈夫、大丈夫よ」

事の重大さに気づき、ガタガタ震え出してしまった。これはもう仕方のない事。何もかも大淀が悪いのだが、感触と記憶はそのまま残す、これも一種の後遺症。このトラウマだけは全員が持ち合わせている。瑞鶴はここから立ち直ることが出来るだろうか。

「クロから話を聞いたわ。瑞鶴が目覚めましたそうだけど」

そんな中、医務室に加賀が入ってくる。さっきまでシロと一緒に来ていたのだが、コソツと加賀を呼びに行っていたようだ。

赤城は部屋で軟禁状態であり、緊急事態故に朝霜と浮き輪がしっかりと見張っていてくれるとのこと。

「加賀……さん……」

目を覚ましている瑞鶴を見ても表情一つ変えなかったが、匂いは劇的に変わった。大きな安堵と歓喜。だが自分のキャラではないことが理解出来ているためにいろいろと我慢している苦痛。負の感情は何処にもなく、これが加賀で無ければ即座に抱き付いているほどであ

ろう。

加賀は飄々と瑞鶴の側へ。最後まで死闘を繰り広げた相手に対し、瑞鶴はまともに目を合わせられない。

「私、私は……」

「言ったわよね、生きていたらやり直せると。それは貴女の罪ではないけれど、罪悪感があるのなら必死に生きて、必死に償いなさい。私はそれでチャラにしてあげる」

加賀だつて自爆させられかけた恨みがある。だが、加賀はここで生
活するうちに理解してくれた。

泣きそうな顔の瑞鶴を抱き寄せ、胸に埋める。翔鶴にもしたことを瑞鶴にもしてあげていた。やはり五航戦は可愛い後輩なのだろう。

「よく戻ってきたわ。貴女は生きていないとダメよ」

「あ……あああ、ああああああっ！」

感極まって大泣きしてしまった。瑞鶴という艦娘はこういうものは滅多に見せないようだ。

「……よかったです。やっぱり死ぬのは良くないですよね」

「ああ、当然だ」

その光景に貰い泣きしていた三日月を私も抱き寄せる。これはもう、奇跡的一幕だ。

瑞鶴が泣き止み、一通り落ち着いたところで改めて飛鳥医師による診察。簡単なものではあるが、瑞鶴が正常になったことを調べるにはちょうどいい。

「心身共に異常無し。健康体そのものだ。治療は成功、瑞鶴は完治している」

「先生……ありがとうございます。本当に、本当にありがとうございます
いました」

「礼は蝦尾さんに言ってくれ。僕だけでは到底無理だった。この結果に辿り着けたのは、彼女のおかげだ」

翔鶴はまだ涙目。瑞鶴はまだその辺りの実情は飲み込めていない
ようだが、ここにいる人間2人のおかげで洗脳が解けたということは

理解出来ている様子。

「蝦尾さんも、本当にありがとうございます。瑞鶴が元に戻ったのは、お二人のおかげです」

「力になれてよかったです。私の研究が役立ったこと、嬉しいですよ」
蝦尾女史も満足げ。自身の行なっていた研究が、人の命を繋いだことが嬉しいようだ。強い歓喜の匂いからもわかる。ある意味研究が1つの答えに辿り着いたようなものだ。

「経過観察をしたい。何か異常をきたしたら、すぐに言うこと。些細なことでもだ」

「ん、わかった。それと……うん、ありがと。私を治してくれて」

太陽のような満面の笑み。なるほど、これが本来の瑞鶴。周りまで明るくするような、気持ちのいい性格だ。私達が見てきたのは、洗脳され陰湿に変えられていた別人だった。

「本調子になったら、私もこの施設の防衛に参加するわ。恩を返さなくちゃね」

「ええ、私も参加させていただきます。この御恩、一生忘れません」

これにより、五航戦も本格的に施設防衛に参加してくれることとなった。瑞鶴が本調子に戻るまで多少はかかるかもしれないが、充分すぎる追加戦力である。

続く治療

治療の甲斐あり、植物状態だった瑞鶴が目を覚ました。体内を蝕む深海の侵食は全て取り払われ、今でこそ身体がまともにも動かないが、少しのリハビリで何とかなるくらいに完治している。飛鳥医師と蝦尾女史の力により、ついに完成品への治療法が確立した瞬間であった。

「どう、瑞鶴。体勢を変えたことで痛みとかは無い？」

「大丈夫。でも車椅子なんて初めてだよ。艦娘がこんなへばり方するだなんて」

リハビリが必要な程に消耗している瑞鶴は、しばらくは翔鶴サポートで車椅子生活となる。

本来なら艦娘の使うことのないようなものだ。消耗したら入渠してしまえば全回復。怪我だって即座に治るし、病気なども心配要らない存在。少し前に曙が不摂生から倒れたが、ドックがあれば元通りである。

しかし、この瑞鶴の症状はそういうものとは理由が違う。入渠しても簡単には治らないだろう。だからこそそのリハビリ。筋肉の消耗なのだから、鍛えて元に戻すしかない。幸い艦娘はそういうところも強く出来ているため、数日で何とかなるだろう。

「瑞鶴のことは翔鶴に任せていいだろうか」

「はい、それで大丈夫です」

「何かあったら私も使ってちょうだい」

加賀も率先して瑞鶴のリハビリに参加するようである。生きろと言った手前、更生にも手を貸すとのこと。

「加賀さんには復帰した後を手伝ってもらおうわ。確かここにいる人、弓使えるのって加賀さんだけだったよね」

「そうね。赤城さんも翔鶴ももう弓は使わないわ」

赤城の名前が出たことで翔鶴がピクリと反応する。瑞鶴が無事に目を覚ましたことで心に余裕が出来たからか、憎しみが振り返したようである。先日の夜襲の時に大喧嘩しかけたらしいので、今後もやは

り顔を合わせないように注意した方がいいかもしれない。

「翔鶴、名前を聞くだけで反応するのはよしなさい」

「……わかっています。ですが、今の私はそういう存在ですから」

赤城も似たようなことを言っていたが、深海棲艦となったことで、こればかりはすぐにはどうにも出来ないと思う。本能には逆らえない。そこは逆に瑞鶴が支えてやる必要があるかもしれない。

「翔鶴姉がこうなっちゃったのも、何もかも大淀のせいなんですよ。だったらこの手でぶん殴ってやる」

「それが出来るように、リハビリに励みなさい」

「わかっているって！ 復帰したら加賀さんよりも強くなっちゃうからね」

「あら、簡単に行けると思わないことね」

こちらは割と悪くない仲のようである。清く正しい先輩後輩の仲間だ。

あれだけ憎しみ合っていた2人でも、瑞鶴はそもそも洗脳されていたからであり、加賀はこの施設で暮らしている内にいろいろ考えることがあった。この2人は殺し合うような事はないだろう。

昼食では翔鶴と瑞鶴も同席してになる。赤城は相変わらず軟禁状態を維持しており、加賀がそちらに付き合っているため、あの2人以外は全員が揃ったことになる。最終的には赤城もここで食べられるようになるといいのだが。

「なんかすごく歓迎ムードなんだけど」

「それだけ瑞鶴が目覚ますことをみんな望んでいたのよ」

「な、なんか恥ずかしいなあ。子供みたいに食べさせられてるわけだし」

瑞鶴が回復したことで、他の元完成品達の治療も可能であることが証明されたため、この目覚めはみんなにとって最も望まれたもの。

1週間近く物を口にしていなかったのも、胃の機能も弱っていると判断した雷が、瑞鶴専用の食べやすい昼食を用意してくれていた。今はそれを翔鶴が食べさせる形で進めている。

「これで脳の後遺症も治療出来ることが確定した。だが……僕の治療の結果、深海のパーツを持つ者は治療出来ない」

血管内で薬を循環させるので、全身に効果が回ることになる。その効果で深海の侵食だけならず細胞全てを破壊してしまうため、そもそもそのパーツを身体に宿しているものに対しては劇薬になってしまった。私も触れたら大変なことになる。

元完成品の中で深海のパーツを移植されているのは鳥海だけだ。動かなくなってしまった脚の移植を行なった後のため、今回の治療は不可能となってしまっている。それを聞いた鳥海は嫌な顔一つしなかった。今の身体を気に入っているとも話す。

「もう少し早ければ良かったんだが……」

「私はこのままで大丈夫です。摩耶と同じになっているわけですし、不自由していませんから」

場所を覚えることが出来ないという後遺症もあるが、それくらいなら生活にはそこまで支障はない。ここの住人であるおかげで、そういった障害には支障がないからだ。1人で何処かに行けという指示はまず間違いない。無い。

「あ、あの、巻雲もその治療を受けていいでしょおか！」

そこで率先して挙手したのは巻雲である。今でも後遺症により、自分の身体が血塗れに見える幻覚持ち。それが改善されるのなら嬉しいと巻雲は話す。

今は吹っ切れて戦闘にも参加してくれているが、当然ながら幻覚は改善されていない。そのためか、風呂場でも鏡を見ようとはしない。

「ああ、問題ない。瑞鶴の経過観察も必要だが、勿論やっていくつもりだ」

「あー、あたいはいいや。このままで」

朝霜も脳障害。力加減が壊れてしまった、常時リミッター解除状態。生活用の機装を作ってもらい身体が壊れる事は防いでいるが、そのせいで生活そのものにとっても気を使っている。今まで壊したものは結構あるが、最近では加減も覚えてどうにかなっているようだ。

「いざって時に力出る奴ってのはいた方がいいだろ。あたいはそれを

受け持つってわけさ。今回の事件終わるまではこのままでいいや」

「相部屋の私は割と苦労してるんだけど」

「片付けは自分でやってんだから言いつこなして頼むわ」

今でも寝相で近くの物を破壊してしまったりとかがあるらしく、風雲は大分苦労しているようである。

「わかった。朝霜は今はそのままにしておく」

「うーっす。それでよろしく」

「問題は、だ。呂500と初霜を治療するかどうかになる」

言われた当人は頭の上にはなマークを浮かべているが、こちらとしてはなかなか悩ましい問題だ。

呂500は言語障害、初霜は幼児退行。それに加えて2人とも記憶喪失状態である。それが治れば戦力増強にもなるし、雷でしか出来なかった意思疎通も可能となる。

とはいえ、あの記憶を取り戻していいかどうか。今までここで治療された者は少なからず心にダメージを受けている。今でこそ全員がそれを表に出さずにいられるが、その時はひどく狼狽えた。たった今瑞鶴も動揺していた。

それをこの2人にも味わわせていいのだろうか。忘れているのなら忘れたままの方がいいのでは無いだろうか。

「アウ、イイエ、オア？」

「そう、それに関係してること」

呂500と話ができるのは雷だけ。今の話を聞いてちんぷんかんぷんのように思えたが、呂500としては何か思うところがあるらしい。少し悩んだような素振りを見せた後、今までの少し幼い雰囲気が消え、真面目な表情で雷に話す。

「ソウ、アウウ」

「ろーちゃん、治療を受けるって言ってるわ」

雷の通訳で呂500の意思を知る。

飛鳥医師が何のことを言っているのかはわからないとは思うものの、自分が何かしらの障害を負っていることは言葉が話せないという時点で察しているだろう。それに、曙に対して知らない罪悪感を持つ

ているというのだから尚更だ。

本当の自分がわからない。それを取り戻せるのかもしれない。だから治療を受ける。今までの生活を失うかもしれないが構わないという、呂500の決意の表れだ。

「……わかった。呂500には治療を施す」

「アイ！」

呂500の治療は午後一に開始されることになった。今は食べただけのための、少し休憩してからすぐに昏睡状態にして透析となる。

「おねえちゃん、はつしも、なにかあるの？」

この話を聞いていて、初霜は不安そうに姉に話す。治療が必要である何かを自分が内包していると知り、何か病気なのではと怖がっている。

私としては、初霜はこのままでいてくれてもいいと思っている。呂500のようなよくわからない罪悪感を持っているわけでもなく、本当に空っぽになっているのだから、余計なことを思い出さずに幸せに暮らしてほしいというのが私の本心だ。

「……初霜や、お主はどうしてここにおるか、覚えておるかえ？」

「えーっとねー、うーんと、うん、おぼえてない。きづいたらここにいたよ」

「それをな、わらわ達は知っておる。そして、あのお医者様はそれをお主に思い出させることが出来るんじゃない」

少し苦しそうに姉が説明する。あの時の記憶を取り戻すということとは、姉を殺そうとしたことも、私に斬り刻まれたことも、何もかもを思い出すことになる。

私達は知らないが、初霜だって完成品ということは姫としての活動をしていたということでもある。ならば、その時にさらに残酷な行為をしている可能性もある。その辺りは如月が詳しくそうだったが、怖くて聞けないでいた。

「はつしもが、わすれてること？」

「うむ」

「それをおもいだすと、なにかあるの？」

「……お主が傷付く。とても辛い思いをすることになる。じゃが、わらわ達と戦えるようになる」

傷付くと言われてすぐに嫌と言おうとしたようだが、私達と共に戦えるのは魅力的な選択肢になっているようである。しかし、以前に痛いのは嫌とハッキリ言っていた。

「おねえちゃんは、どうしたほうがいいとおもうの?」

「わらわは……すまぬ、答えが出せんのじゃ。思い出してほしいというのもあるが、お主が辛い思いをするのは見とうない」

最後の選択を、幼児退行している初霜に委ねるのも酷な話だ。だが、私達が強制するのも違う。

正直な話、どちらでも辛い。子供のまま、本来の初霜からかけ離れた生活をしている姿は痛々しいものである。だが、だからといって初霜自身を取り戻させると下手をしたら心が壊れかねない。初霜の心が弱いとは思っていないが、耐えられない精神的ダメージになる可能性は大いにある。

「……おいしゃさん、はつしもはあとでいい?」

「ああ、治療はいつでも出来る。しなくても君は健康優良児だ。無理をする必要はない」

如何に艦娘といえど、飛鳥医師は戦力ではなく患者として見ている。治して戦えるようにしたいわけではなく、より健やかに生きられるように尽力してくれているのだ。治療せずとも生きていられるのなら、そのままという選択も何も問題はない。

「おねえちゃん、これでいいかなあ」

「うむ、それでいい。わらわと一緒に考えていこう。なに、お主の選択を誰も責めはせん。そんな者、ここにはおらぬよ」

余程滅茶苦茶な選択でない限り、この施設は寛大だ。誰もが今の道を自分で掴み取ってきた。だから、当人を責めることは無いし、飛鳥医師を責めることも無い。施設の者が仲良くやっていけるのは、そういうところだからだろうと私は思う。

「昼食後、少ししたら処置をしていこう。透析装置の都合上、1人ずつしか処置が出来ないんだが……」

「なら、ろーちゃんを先にしてあげてください。巻雲はまだ我慢出来
ますからあ」

「わかった。それでいいか？」

「アイー・ンアー！」

これにより、呂500の処置が先に始められる。意思疎通の出来な
い状態が解消され、全ての記憶を取り戻すことになるだろう。

この状態でそれなりに長い時間生活してきたが、それにより何かし
らの弊害が出ることも考えられる。そうなった場合は、今までずっと
一緒にいた雷が面倒を見るといふ。それに加え、曙も。

「アンタ、本当にそれでいいのね？」

「ンウ。ボノ、アウアー」

「……後悔しても知らないから」

曙なりに呂500のことは心配しているようだった。大きすぎる
確執も、朝霜との戦闘で協力してくれたことをキツカケに和解の道を
進んでいる。仲良くはしていないが、毛嫌いすることも無くなった。
曙自身が割り切ったとも言っている。

こんな呂500を見るのもこれで最後だと思おうと感慨深い。失敗
作としてボロボロにされて捨てられ、治療の結果何もかも忘れていた
呂500は治療により自分を取り戻すことになる。

「ンイ、ウアー」

「うん、ありがとうろーちゃん、これからもお手伝いよろしくね」

記憶を取り戻しても、雷の手伝いで食堂担当になるようである。今
着ている制服や暁とも一緒にいることから、もう姉妹のようなもの。
今までと同じようにここで生活していくことになるだろう。

それでいい。記憶が戻ったからと言って、無理して別のことなどし
なくていいのだ。

施設の者の状態は次々と良くなる。最初の目標『楽しく生きる』は、
今だけは達成出来ているように思えた。

消える侵食

瑞鶴が目覚めたことにより、深海の侵食による脳障害が治療出来ることが確定した。その治療を受けることにしたのは巻雲と呂500。先に呂500がやることとなった。

言語障害により意思疎通が難しかった呂500も、ついにこれに元に戻る。同時に失っていた記憶も取り戻すこととなるのだが、その辺りは雷筆頭にケア出来る者は沢山いる。

「次に目を覚ます時には終わっている」
「アイ」

検査着に着替えた呂500が元気に応えた。

この呂500を見るのはこれで終わり。眠り、処置され、目覚めた時には違う呂500となる。今までの呂500が偽物というわけでは無いのだが、喜ばしい変化のはずであれど少し寂しさもあった。

呂500の見送りには五三駆総出。勿論私、若葉も参加させてもらっている。特に、今までずっと面倒を見てきた雷と、確執があったものの和解したようなものの曙は、この治療には感慨深いものがあるようだ。雷は最後の最後まで一番側にいる。

「ろーちゃん、また私と一緒に飯作りましようね。これだけ人数増えたんだもの、お手伝いは欲しいわ」

「ンアー、ウイ」

「アンタが決意したんでしょ。さっさと処置されて、元に戻んなさい」
「ンイ、アウアー」

最後に笑顔でお別れ。そのまま昏睡の処置を施された後、透析が開始された。ここから数時間、呂500はここで眠り続けることになる。目が覚めるのは夕暮れの見込み。

「それじゃあ、今度はお出迎えの準備をしなくちゃね！」

「いつも通りでいいでしょ。どうせ部屋もアンタのとなんだらうし。私は釣りにでも行ってくるわ」

じつとここで待つわけでもなく、目が覚めた後のことを考えて行動に移した。とはいえ何も変わらない。呂500は以前も今後も呂5

00だ。記憶を取り戻したことで確実に混乱するだろうが、この2人がいれば大丈夫。今までと何も変えないというのが、一番の出迎えだろう。

「蝦尾さん、ありがとう。ろーちゃん、やっぱり少し悩んでみたいなの。私がいないと自分の思いも伝えられないこと」

「そうでしたか……なら、この薬が出来たのは本当に良かったことなんでしょうね。ですが、これは論文にも残さず、墓まで持っていくつもりです」

今回の薬は治療のために作ったものだ。だが、使い方を間違えれば大量殺戮兵器である。

万が一この薬が投与された場合、雷は内臓の一部を破壊され、三日月は眼と脳の一部を、そして私と曙に至っては心臓が止められる。つまり、誰に投与しても死と直結しているわけだ。

さらにいえば、生成方法を弄ることで、艦娘すら死滅させることが可能になる。そもそもの原材料が人間にも効いてしまうため、殺せない者はいない。

「ダイナマイトの二の舞になってはいけない。この薬の生成方法は、僕と蝦尾さんしか知らない状態にする。絶対に口外しない」

「はい。なので、聞かれても知らぬ存ぜぬを突き通します。……飛鳥先生との共通の秘密というのは、少し嬉しいですね」

蘇生の技術とは真逆の力を持つ治療薬の生成方法まで手に入れてしまい、飛鳥医師は何処まで行ってしまおうのだろうか。

夕暮れ時、再び医務室に集う五三駆。瑞鶴の時の同じようにシロク口も確認に来てくれている。同じ潜水艦のため、食事当番である雷と暁の次に仲が良かった。

その頃には治療薬の透析も完了し、後は呂500を起こすのみとなっていた。当たり前ではあるが、呂500は一切苦しむことなく安らかに眠っている。

「すごく緊張してきた……」

「アンタがやりたいって言ったんだから、責任持って起こしなさいよ」

呂500を目覚めさせるのは雷。最も身近にいたのだから、呂500にとつてもそれがいいと思う。曙は少し遠目からその様子を見ていた。

「匂いは消えている。大丈夫だ」

「同胞の感じもしない……ズイカクと同じだよ」

さらには失敗作だからか胸に出来ていた痣も消えていた。身体に刻まれてしまった傷痕は消えないものの、細胞の変質を全て治療出来たと言える。これで呂500の治療は完了した。起きれば本来の呂500となつているだろう。

今までとは少し違う緊張感に包まれながら、雷がベッドの横に立ち、呂500を起こした。優しく揺すり、目を覚ますのを待つ。

「ろーちゃん、治療が終わったわ」

雷の声で、呂500がうつすらと目を開く。今まではそこから幼い子供のような屈託のない笑みが溢れていたが、今回は少し違った。その時よりは少しだけ成長したような笑みを浮かべ、雷を見据えている。

「イカズチ……ろーちゃん、話せるように、なつたつて」

「うん、ちゃんと聞こえてる。みんな、ちゃんと聞こえてるわ」

呻きのような声しか出せなかった呂500が、流暢に話している。治療は成功。つまり、記憶も取り戻していることになる。

離れたところにいる曙の姿を見て、すぐに涙目になってしまった。こうなってしまう前には、さんざん酷いことをやらされてきただろう。だが、自分の手で殺した者が今日の前で生きており、謝罪するチャンスをくれたのだ。いろいろな感情が混ざり合い、呂500の表情はめちやくちやに。

「全部、全部思い出したよ。ボノ、ボノごめんね、ろーちゃん酷いことしましたつて……いっばい、いっばい酷いことしてきましたつて……」

「そうね」

曙も素っ気なく反応するものの、罵るようなことはしなかった。一度思い切り言い放つているのもあるが、既にほぼ和解しているような

もの。曙も呂500の側に近寄る。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

「いいわよ。アンタの口から謝罪も聞けたし、もう気にしてないわ。むしろ、アンタが気にしてたら私が気に入らない。吹っきれなさいよ」

頭をグシグシ撫で回した後、頬を摘んで無理矢理笑わせる。かなり無理矢理な方法ではあるものの、曙なりの思いやりを感じる。

「いひゃい、いひゃいれふつてえ」

「ほら、起きたんだからさつきと着替えて夕食の準備。今日は私も結構釣れたから、一緒に捌くわよ」

「は、はあい！ せんせー、ありがとうつてー！」

曙に手を引かれ、呂500は部屋から出て行った。泣きじやくつていた呂500も、今では笑顔だ。

「巻雲連れてくるわね。そういう約束だったものね！」

雷も満面の笑みで追従。起き抜けだというのに元気なものである。飛鳥医師が何も言わないということは、処置後にすぐに動いてもいいようである。

瑞鶴は1週間近く眠っていたというのもあるため、すぐに身体が動かせなかったようだが、呂500はさつきまで普通に活動していたおかげで健康状態には問題がない。処置が頭ではあるものの、目覚めてすぐにあそこまでの行動が出来たのだから、本当に問題ないのだから。

「……凄いですね、曙ちゃん」

「ああ、僕も正直驚いている。呂500とは一番確執があったんだが、ここまで開き直れているとは」

蝦尾女史も曙と呂500の確執については聞いていたようである。そこで飛鳥医師の持つ蘇生技術の件も。それだけは秘密にしていた飛鳥医師だが、共通の秘密を持つことになった蝦尾女史には分け隔てなく伝えたようだ。当然その手法は秘密であるが。

「曙は強いな。本当に」

「そうですね……当たり前散らすことありますが、最後はアレですか

ら」

本当に、尊敬するほどに心が強い。五三駆の中ではトップクラスではないだろうか。雷も相当だが。

少ししてから雷が呼んできた巻雲と夕雲が医務室へ。呂500の方が重症ではあるが、巻雲も相当なものである。

自分だけは常に血塗れに見えるという幻覚。服を着ていても関係なく、深海の侵食と罪悪感などが混ざり合ってそれを作り出しているのではないかと思われる。

だが、それももう終わりだ。この治療により幻覚は無くなる。

「ろーちゃんがちゃんと話せてましたあ。巻雲にも、同じ治療をするんですよねえ?」

「ああ。君が見ている幻覚はこれで無くなる」

「ありがとうございますう。その、やっぱり困ってましたあ」

自分の罪が浮き彫りになっている苦痛を常に受け続けていた巻雲。何をするにも血塗れの手を見ることになるため、精神的なダメージが大きかったようだ。

戦いの間に吹っ切れてはいたが、それでも辛いものは辛い。立ち上がりはしたが、それで普段が正常でいられるわけでもない。

つまり、巻雲は今までずっと我慢し続けてきた。努力で克服出来るものでもなく、誰かと共有出来るものでもない。手伝ってもらえることとすらない、孤独で終わらない戦いを続けていたのだ。

それが克服出来るというのなら、自分から率先してそれを求める。誰よりも早く身を乗り出してまで声を上げたのはそのせい。

「今から時間がかかる。夕食前にすまないな」

「いえいえ、巻雲もこれは早く終わらせたかったのでえ」

自分の手を見た。私達には普通の手に見えるのだが、巻雲には今まで手にかけてきた者の血でベトトリと染まってしまっているように見えている。

だがそれもこれで見納めだ。ここで眠り、目を覚ましたら巻雲の身体は真に綺麗な状態になるだろう。

「何か腹に入れてきたか？」

「おやつを少し多めに頂きましたあ」

「なら大丈夫だな。早速始めよう」

検査着に着替えた巻雲がベッドに寝たことで、処置が進められていく。

成功した例がいくつもあると、準備も手早く済んでいくものである。

「巻雲さん、今まで本当によく頑張りました。夕雲は近くにおいてあげることしか出来ませんでした」

「夕雲姉様、巻雲は姉様が側にいてくれたからこそ頑張れましたあ。これからもよろしくお願いしますう」

「勿論。巻雲さんは夕雲の可愛い妹ですもの。甘えてくれてもいいですからね」

それを最後に、巻雲も昏睡状態に。ここからは呂500の時と同じように数時間後まで眠り続けてもらう。

「……巻雲さんとは相部屋ですが、いつも苦痛を受けていました。朝から晩まで、ずっと血塗れの身体を見続けて……夕雲が添い寝をしてあげないと眠れないこともあって」

その苦痛を取り払ってやるのが最後まで出来なかったと、夕雲が少し悲しそうな表情を見せる。妹思いが故に、巻雲の苦痛を我が身のように感じていた。九二駆での夜間警備の最中も、巻雲が不安にしていなかったかと心配したり、今だっけと一緒にしてあげたりと、気を向けることばかりだったという。

「ですが、それがついに払拭されるんですよ。飛鳥先生、蝦尾さん、巻雲さんを救ってくれて、ありがとうございます」

巻雲の戦いが一つ、幕を閉じるのだと思うと、夕雲も感無量のように。数時間後の巻雲が楽しみである。

夕食も終え、本来なら就寝に近いくらいのタイミングで巻雲の目覚めの時間になる。私は勿論最後の確認のために便乗。この確認を以て、研究助手を終了となる。

「大丈夫だ。深海の匂いはもう無い」

「……うん、ローと同じ。同胞の感じはもう無いよ……」

シロからのお墨付きも貰い、治療完了が確認された。装置を外し、後は起こすのみ。

「巻雲さん、治療が終わりましたよ。目を覚ましてください」

夕雲が優しく起こすと、昏睡状態が解かれた巻雲が薄く目を開いた。外も暗いため、まだ少し眠そうではある。そういえば、ここで初めて目が覚めたときも大きな欠伸をしながら吞気に起きていた。

「んん……ふああ……終わりましたかあ」

「ええ、もう治っているそうですよ。はい、眼鏡。それでは、自分の手を見てみましょう」

眼鏡を渡され、夕雲に促されても、巻雲は簡単に動けなかった。治っていると言われても、自分の手を、身体を見ることが怖い。飛鳥医師の治療も、蝦尾女史の薬も信用していないわけでは無いのだが、これでまた血塗れだったらどうしようかと不安が大きい。

「巻雲さん、夕雲がついていますから」

「……は、はい、巻雲、行きます！」

意を決して掌を見る。最初はこれで気が動転した。眠る前にも辛そうな顔を見せた。そして今、その表情は別の物になった。

「き、綺麗な、掌……ですう」

「血塗れでは？」

「無いですう！ ゆ、夕雲姉様、鏡、鏡はありますかあ？」

勿論と手鏡を渡した。今までなら顔にも髪にもベツタリとついているように見えるため忌避し続けた鏡を見て、殊更に顔を綻ばせる。

「無い、無い、何も無いですう！」

「ふふ、良かった。本当に良かったですな巻雲さん」

「汚くない、巻雲、汚くないですう」

感涙を流しながら夕雲に抱きついた。血塗れの身体ではそれすらも抵抗があったのに、その恐れが無くなったおかげで自分から行くように。夕雲にはそれも嬉しかったようで、巻雲を大切そうに抱き締め、撫で回す。

「せんせえ、蝦尾さん、ありがとうございますう」

「どういたしまして」

「完治したようで良かった」

飛鳥医師と蝦尾女史も巻雲の姿を見て喜んでいる。

研究の成果として不治の病を取り払うことが出来たのだ。目が覚めたばかりの瑞鶴や、悪い記憶を取り戻した呂500と違い、今まで活動してきた中での完治である巻雲には喜びしか無い。その姿はとびきりの明るさであった。

これにより、脳に障害を持つ2人の治療が完了。朝霜は現状維持を希望し、初霜は保留を希望したことで、侵食の治療は一旦全工程終了とされた。施設はより前に進むことが出来る。

念願の邂逅

呂500と巻雲の治療が完了した。特に呂500は今まで出来なかった意思疎通が出来る様になったのはとても大きい。

治療されたところで今後やっていくことは変わらず、呂500は雷のサポートとして食堂の手伝いを、巻雲は駆逐隊のリザーバーとして活動していく。今までと違うのは、その心持ち。2人とも以前よりも心を強く持っている。

「2人とも、治ってよかったですね」

「ああ、飛鳥医師と蝦尾女史のおかげだ。とんでもない治療をしてしまった」

私、若葉は、三日月と寢床で今日のことを話していた。巻雲が起きた時間はそれなりに遅い。今頃残しておいてもらった夕食を食べている頃だろう。

「恐ろしい薬ですよね……深海の細胞だけを死滅させる薬だなんて」

「ああ。治療にならないが、兵器にでも使われたら終わりだ」

あの治療法は投与されれば最後、ほぼ死に直結してしまう危険すぎる劇薬を使ったもの。私達は触れてもいけない。今回の件で作り、余った分はすぐに廃棄したという。新たに作ろうと思えばすぐに作れるのだからそれでいいだろう。

廃棄もかなり慎重に行ない、ただ流しに捨てるだけではなく、蝦尾女史が適切な処置をして効果を完全に失わせてから廃棄したという。そこまで慎重にならなくてはいけないものなのだから、生成方法を外に出したくないのも頷ける。

「若葉達も生成方法は聞いていないからな。あれはもう秘蔵だ秘蔵」
「それが一番ですね」

満場一致で秘蔵が決まっている。むしろ状況に合わせてその場で生成するのがベスト。基本的には施設に置かないが大原則である。

おそらく下呂大将や新提督にも治療法を聞かれるだろうが、飛鳥医師と蝦尾女史は口を噤むようにすると相談済み。立場とかそういうものは関係ない。蘇生法も伝えていないのだから、その辺は察しても

らう。

「あのことは一旦忘れて、今は若葉さんを堪能します」

「ああ、若葉も三日月を堪能させてもらう」

毎日一緒に寝てはいるのだが、ここ最近は少し気が張っていたというのもある。それも終わったというところで、私達的には随分と気が楽になった。襲撃があるかもしれないのに。

「寝る時くらいは気を抜くと、リコにも忠告されたしな」

「はい、リラックスして寝ましょう。こうしているだけで落ち着けます」

三日月は私の左腕を抱き、私は三日月の髪を梳くように左の頬を撫でる。それだけでも充分気分が落ち着く。より深みにハマっていくような感覚もするが、お互いに気分がいいのでそれに身を任せている感じた。

「離れないからな」

「はい、離れません」

肌を重ね合うように、私達は揃って眠りに落ちていく。リラックス出来ているからだと思う。

今日はシグに呼び出されて夢の中。いつもの夜の海に佇み、シグの到来を待つことになるのだが、今回は一味違った。シグがもう一人連れてきた。

「まさか」

『そのまさかさ。ようやく見つけたよ。この子がチ級だよね？』

「おそらくは」

私はチ級の姿を見たことが無いため、その深海棲艦の姿を見たところでチ級であるかどうかは判断出来ない。

口許と左眼以外を覆い隠す仮面をつけたその深海棲艦は、私やシグよりは少し大人びた印象の女性。特徴的だったのは下半身。艦装がほぼ全てを包み込み、海上をジェットスキーの如く滑って駆けてきた。この艦装もあり、脚のないシグはともかく私よりもかなり身長が高め。左手も主砲になっており、まるでサイボーグである。

だが、それ以外はしつかり生身。肩や腹など見えている身体もそうだし、頭は仮面をつけているだけで普通に人間や艦娘と同じものだ。

「お前が若葉の脚の骨……なのか？」

『……』

コクリと頷くだけ。イロハ級故に、言葉を介することは出来ないようだ。ここは夢の中、やろうと思えば何でも好きに出来るように思えるのだが、そもそもそういうシステムが無いものはこういうところでも出来ないのかもしれない。

私も雷のようにイロハ級の声を聞くことが出来ればいいのだが、残念ながら出来ない。そういうところも夢の中でも現実とリンクしていると考えればいいか。

『千級は恥ずかしがり屋さんなのかな。私と顔を合わせた時も全速力で逃げてさ』

「単純にこんなところで人に会うだなんて思わないからじゃないのか」

すごく強く頷かれた。夢の中云々もあるが、死した後意思を持っていることも驚いているらしい。だというのに2人目が現れたら、それが自分より格上の姫だとしても逃げ出したくなる。

シグは特殊な生まれのようだからこうなってしまうっていてもわかるが、千級もそうなのだろうか。それとも、深海棲艦というのはそういうものなのだろうか。こればかりはわからないことだろう。

せっかくだからと近付き、握手。ちゃんと手がある右手に握手を求めたところ、少し躊躇ったものの握手を返してくれた。隠れていない口元は、薄くではあるが笑みを浮かべていた。感情はちゃんとあるようである。

「脚はどうなっているんだろうか」

『艦装と同化しているみたいだね。私の脚と似たようなものじゃないかな』

シグはそもそも脚が無いわけだが、千級も同じように脚がなく、艦装と完全に同化しているらしい。なら、私の脚に移植された骨は何処の骨なのだろう。千級に脛は無い。

と、私の考えていることを読んだのか、チ級が自分の腿の辺りを指差した。艤装と同化はしているが、腿から下が同化しているため、脚らしき部位は一応ある。私の脛の骨には、その骨を拝借したようだった。

「そうか、若葉の脛の骨は、チ級の腿の骨を加工したものなんだな」
肯定するように頷いた。本来の場所の骨では無いから力が出やすいとかあるのかもしれない。

「2人のおかげで若葉は戦える。本当にありがとう」
『どういたしまして。でも、あの潜水艦モグラ叩きは私もちよつと驚いちちゃった。結構無理してたよね』

「……それで全員の命が救えたんだ。身体を張った甲斐がある」
あの後気を失ってしまったのも仕方ない。それほどに集中し、限界を超え続けて行なった救助行為だ。そのおかげで救えた人形もいるわけだし、私の行為は間違っていないと自負できる。

すると、チ級が徐に私の頭を撫でてきた。この世界では嗅覚も失われるため、チ級が何を考えてその行為をしているのかが匂いから判断は出来ない。だが、私のために頭を撫でてくれるのはすぐにはなかった。

「ありがとうチ級、労ってくれているのか」

頷く。言葉は無くとも、表情は乏しくとも、チ級は感情豊かだった。最初は初顔合わせだったためにすぐに動かなかったが、この少しだけの交流で本来の姿を見せてくれている。

『私もナデナデしてあげたいけど、届かないからなあ』
「気持ちには届いてる。これだけでもやった甲斐があった」

逆に私がシグを撫でる。それはそれで嬉しそうであった。
『それじゃあ、今回もいつもの』

「ああ、頼む」

ここからはシグの見解。とはいえ、今回は内容は少ない。

前回から変わったのは、瑞鶴、如月、卷雲、呂500の4人が治療され、深海の要素が一切無くなったこと。それについては何も言うことが無いそうである。

『とはいえ、目下の悩みは赤城さんと翔鶴さんの確執だけだね。その件は前回話したからいいか。そう考えると、ある意味心配事は全部取り除けたのかな?』

「かもしれない。残っているのは、襲撃を迎え撃つことと、大淀を倒すことだけだと思う」

ついにシグからの助言が必要なことも無くなった。不安要素はもう無く、治療が必要な者も治療完了。念願であった千級とも出会えたことで、悩みはもう無いと言える。強いて言うなら初霜の件があるが、あれは時間が必要なことだし、助言が欲しい内容でもない。

悩み事が無くなるというのも、なかなか無いこと。シグもお役御免と言った感じになった。

『なら、今日は本当にただただ適当な世間話をするだけの時間だね』
「たまにはいいなそういうのも。だが、お前達は若葉のしているものは全て知っているだろう」

『勿論。千級もわかってるよね?』

頷く。シグ達は私の目を通して私に起こっていることは全て把握済み。だから悩み事に対しての見解も話してくれるわけだし。ここ最近はそのが晴れていくことばかりなのでありがたい。

千級も私が施設で新たな生を得てからずっと見続けていたようだ。私と話す機会が出来たのはたった今だが、シグと同様最初から知っているとのこと。私が初めて戦闘した時も力を貸してくれたのだから、やはり最初から意思だけは残っていたようだ。

「なら、もう少し千級のことを知っておきたいな」

『だよ。せっかく会えたんだからさ、私達^{ボク}としてはもつと仲良くなっておきたいよね』

「ああ。今まで会えなかった分、今から埋め合わせておきたい」

ようやく会えたのだ。こういう時にこそ親睦を深めておきたい。例えば千級が言葉を紡げなくとも、一緒に寄り添っているだけでもいろいろとわかるもの。

「時間の限り、お互いを知ろう。若葉のことは筒抜けだが」

『そうだね。三日月ちゃんとイチヤイチャしてるのも、私達^{ボク}には筒抜

けだからね』

もう少し言い方というものがあろうが、私はそれを否定はしない。私は三日月と愛し合っていると自信を持って言える。

『ぼいちゃんも同じだろうね。いやあ、会いたいなあ』

「元はシグと同じモノだからな。機会が作ればいいんだが」

『もうちよつと私の部分^{ボク}を重ねて寝てみてもらえない？ 三日月ちゃんの左眼を左腕に擦り付けるように』

「大概してるだろう。起きたらいつもそうなってる」

『確かに。ならやつぱり、分かれちゃったんだから会えないのかなあ。残念だなあ』

私だってぼいとは会ってみたいし、こういう空間でも三日月に会いたいものだ。やれることはいろいろとやってみるつもりではあるが、あまり期待しない方がいいだろう。

『それじゃあ、チ級のこと、やっていこうか。まずは仮面の下の顔かな？』

首をブンブンと横に振る。これだけは剥がしてもらいたくないようである。脚のことを考えると、仮面も艤装の内。ある意味チ級にとっては皮膚のようなモノかもしれない。それを剥がすと考えたら、ゾツとしてしまった。

「シグ、あれは剥がせないものかもしれない。やめてやれ」

『残念。若葉がそういうならやめておく』

ホツと安堵の息を漏らす。私が考えたことが正解のようだ。

「普通に仲良くすればいいんだ。なあ？」

大きく頷き、私を抱え上げた。右腕しか使えなくても軽くそれをやってくる辺り、夢の中とかそういうのは関係無しに深海棲艦なのだと感じる。その骨が使われているのだから、私の力が増すことも肯けた。

そこからは時間いっぱいまで世間話を続け、チ級とも交流を深めた。たった一度の夢の中でも、チ級は心を開いてくれたと思う。シグには若干の苦手意識を持っていそうだったが、そこは時間をかけて落ち着いてもらおう。

目を覚ますと外は少し明るめ。いつもの日課のランニングの時間。有意義な夢を見て、身体の疲れも回復。そして目を覚ませば隣に三日月。最高の朝である。その三日月も普段は見せない惚けた笑顔でまだ眠っている。私にしか見られない特権。

やはり左眼を私の左腕に擦り付けるようにしていたが、夢の中を繋ぐことは出来なかった。そういうのは単純に難しいと判断して。シグにはわかるいが、出来るようになるのはもっと先。

「三日月、朝だ」

「ん、あさ……ふああ……」

まだ寝ぼけ眼ではあるが、私の声で起きる。いつもの朝、いつものルーティン。バリエーションはあれど、これは毎日変わらない。夜間警備の時は時間が変わるだけ。私と三日月は常に一緒。

「ん、おはようございます」

「ああ、おはよう。今日はついにチ級と会えたんだ」

「だから少し嬉しそうなんです」

顔に出ていたか。

「私もぼいちゃんが来てくれました。もう心配事は無いって言うてくれて、ずっと遊んでいました」

「若葉も似たようなものだ。世間話で終わったな」

着替えながらお互いの夢の中の話を。話題に関してはほぼリンクしているが、その後のことは少し違う。ぼいはシグよりも幼いイメージで、どちらかと言えば小動物的な可愛さがあるそうだ。遊んでいると言っても、飼いだ戯れ合うようなものなのか。

「あ、勿論一番は若葉さんですからね」

「心配などしていない。若葉の一番も三日月だ」

着替え終わり、頭を撫でる。それだけで三日月の表情が綻んだ。

チ級とも話が出来たので、これで思い残すことは無いと言える。これからも順風満帆に暮らしていけそうだ。

もっと楽しく生きるためには、奴を消さなければならぬが。

埋められない確執

私、若葉と三日月が朝の日課を終えて施設に帰ってきた時、珍しいものを目にした。加賀が瑞鶴の車椅子を押していたのである。本来なら瑞鶴の面倒は翔鶴がするし、加賀は赤城の監視などを受け持っているはずなのだが。

「……赤城さんが問題を起こしたので」

「翔鶴姉が赤城さんと揉めてね」

朝イチに赤城と翔鶴がうっかりエンカウントしてしまったらしい。顔を合わせた瞬間、そこに車椅子の瑞鶴がいたというのに殴り合いが始まりそうになったそうだ。

そのタイミングではまだ鳥海が2階で警備中。喧嘩が始まろうとした瞬間、その拳を掴んでその場を収めたいらしい。主に暴力で。

如何に深海棲艦といえど、艦装を装備していない状態で、艦装を装備している艦娘相手にはどうにも出来なかったようである。加えて、鳥海は握力が尋常ではない。少し力を込めれば、掴んでいた拳が無くなっていった可能性もある。

「なんでまた……」

「私が部屋から出ようとしたとき、ちょうど加賀さんが部屋から出ようとしたのよ」

「私も朝の鍛錬がしたかったので。その時に、扉越しにたまたま」

別に部屋が真向かいというわけではないのだが、本当にタイミングが悪かったらしく、扉を同時に開けたか何かした時に部屋の中の赤城と部屋の外に出た翔鶴の目があってしまったと。

もつと部屋を離すべきなのだろうが、来た順に詰めているため、こういう弊害もあったようである。

「その後、先生にも怒られて今は翔鶴姉まで軟禁状態になったってわけ」

「でもそれだと瑞鶴が何も出来ませんから、私が代わりにやっているわけです。勿論、この子もいます」

加賀の肩には相変わらず浮き輪が控えている。赤城の監視役とは

別の、加賀専任の協力者。今は3体目も翔鶴の監視に出ているため、浮き輪は総動員で働いているらしい。まさか空母勢で出ずっぱりになるとは思わなかった。

あの2人の確執はどうにも出来ない。赤城も翔鶴も、怒りと憎しみであの姿になってしまっている。特に赤城は、存在そのものがその具現化と言えるものだ。憎しみが無くなってしまったら、存在意義が無くなるのではと思えてしまう。

「せっかくなんだから、仲良くしてほしいんだけどね」

「ええ、本来の赤城さんは後輩思いの優しい人です。ですが……」

「私も覚えてるわ。ああなっちゃってもおかしくないことを、私もしてるから」

瑞鶴もあの時の記憶は持ったままだ。最善の治療をされたことで、一切の記憶を失わずに済んでいる。

「私にだって殺意を向けていいと思うんだけど」

「指示を出したのは翔鶴だもの。私も翔鶴への恨みの方が強かったわ」

「でも、加賀さんはもう大丈夫なんですよ？」

「……ええ。もう殺したいなんて思っていないわよ。ああなってしまったらね」

加賀の自制が利いてくれて本当に良かった。赤城に同調して、加賀まで翔鶴に殺意を向けていたら本当に止めるのが厳しかった。監視役が朝霜になっていたことだろう。下手をしたらエコまで番犬として配備されていたかもしれない。

加賀は殺すくらいなら生きて償ってもらいたいと考えを変えている。それは翔鶴にも同じだ。翔鶴はそれに加えて深海棲艦化という、本当に治療不可能な状態変化まで起きてしまっている。充分すぎるくらい報いを受けているだろう。そもそも報いる罪自体存在しないのだが。

「貴女はまず本調子になるように努力しなさい。私は甘やかさないわ」

「へっへー、それで結構よ。今日はご飯も自分の手で食べるんだから」

「……一緒に鍛錬が出来るのを、楽しみにしてるわ」

思いもよらない言葉だったらしい。すごく驚いた後、ニカツと笑って当たり前だと胸を張る。この調子なら数日中に本調子に戻るだろう。もしかしたら今日中には自力で動けるまで回復しているかもしれない。

「2人は仲がいいんだな」

「アンタ達には負けるわ。でも、まあ悪い方じゃないと思うかな」

「この子は可愛い後輩ですから」

お互いに競い合っているような認め合っているような、清く正しい信頼関係が匂いからわかる。クールな加賀と感情的な瑞鶴はある意味お似合いかもしれない。

素直に褒められると瑞鶴は照れ臭そうに笑う。やはり最後の戦闘では改造のせいで感情が制限されていたようだ。そこも治療されてよかった。

「翔鶴にも同じ感情は持っているわ。だから、赤城さんといがみ合うのは出来ることならやめてもらいたいの」

「難しいよねえ。翔鶴姉は赤城さんに殺されかけてあんなったわけだし、赤城さんは……うん、私も関わってるわけだけどさ」

本能に刻まれてしまったのだから、簡単には払拭出来ない。本当に片方が死なない限り、殺意は常にそこに在り続けることになる。私や三日月の侵食とは違う、思考の置き換えのようなことがされてしまっているのだろう。

さらに、2人とも身体が完全に置き換わってしまっているせいで、今回の薬では治療不可能。赤城も翔鶴も今のところはそのままでもらうしかないのである。

「一度思い切り喧嘩してもらおう？」

「どちらかが死ぬまで止まらないわよ。そんな簡単な問題じゃないの」

「だよねえ……どっちも」

加賀も瑞鶴も相方がそれなので溜息を吐く。違う意味でストレスが溜まっていきそうだった。

瑞鶴が目を覚ましたことは、来栖提督や下呂大将にも連絡された。また明日改めて全員が施設にやってくるとのこと。少し時間を空けたが監査もしつつ、手瀬鎮守府への襲撃も目処がそろそろ付くのと同時に、その話もしてくれるという。

こちらからも、潜水艦隊による暗殺という夜襲の詳細を話す必要はあった。襲撃に対してさらに万全を期すためには必要な情報であろう。

「久しぶりに全員施設に来ることになるそうだ」

「2人怪我人だろ。大丈夫なのかよ」

「来栖は大分治ったらしい。先生はまだかかるだろうが、あの人がないと思うか？」

摩耶の疑問も当然なのだが、飛鳥医師の言い分も理解出来てしまう。あの人なら止めても動いてくるだろう。

到着は明日の朝。私は今晚久しぶりに夜間警備に出るため、到着を出迎えることは出来なそうである。

「それまでは、赤城さんと翔鶴は軟禁状態で良かったでしょうか」

ここで加賀の質問。赤城は下呂大将に対し、襲撃の際には呼んでくれと頼んでいる。その件が進むのなら、赤城にも話を聞いてもらいたいと考えたのだろう。又聞きで教えるより、直に聞いた方が早い。

「……僕としては、先生の話は全員で聞いてもらいたいんだ。当然、翔鶴にも」

「同じ場所に揃えるのは……ちよつとねえ」

妹の瑞鶴が言うのだから、その難しさは折り紙付き。誰もがそれは無理だと諦めている状態。かくいう私も諦め気味。そもそも時間が足りない。

顔を合わせたら即座に喧嘩というのを三度もやり、その全てを誰かしらに戒められている。最初は飛鳥医師に、二度目は雷に、そして三度目は今朝鳥海に。それでも懲りないのだから、もう無理だ。

「だから今日、先行して鳳翔にこちらに来てもらおうことにした」

あの鳳翔が戒めれば何かしらの効果があるかもしれないと考えたよ

うである。つまり、飛鳥医師もあの2人の確執に関してはお手上げということか。

これには蝦尾女史も触れられそうにないと思しそうな表情。ただの喧嘩ではないことは事前に聞いていたようだ。心の問題はどうにもならない。医者にも治せないものがあると痛感させられる。

まだやっていないのは姉によるカウンセリングだが、正直危険を伴うため、私個人としてはやっってもらいたくない。それは鳳翔にも言える話なのだが、変に煽って攻撃されても困る。

「鎮守府の艦娘に頼むのは良くないとは思うのだが、こればかりは頼らざるを得ない。加賀、瑞鶴、良かっただろうか」

「鳳翔さんなら大丈夫でしょう。私達もあの人には頭が上がりませんから」

「私はまだ話したことないけど、うん、鳳翔さんなら大丈夫でしょ」

さすが鳳翔、信用度がまるで違う。諦めすらなく、鳳翔ならば解決してくれるだろうと誰もが思っていた。過度な期待は身を滅ぼすというが、期待せざるを得なかった。

最悪、話を聞いている時だけ押さえ付けられればいい。襲撃の日程を直に聞いてもらいたい、出来れば今後の予定に意見してもらおうなどをしてもらう。

「事前に伝えておいた方がいいか」

「いえ、その必要はありません。変に身構えるより、ありのままを見てもらいましょう。一度見てもらっていますし」

「だね。翔鶴姉にも伝えない」

少し意地が悪いのではと思つたが、一番心を通わせている者がそう言っているのだから、私達はそれに従うしかないだろう。

昼過ぎの辺りに鳳翔が到着。随伴艦に二四駆……と言いたいところだったが、いたのは海風と山風のみ。江風と涼風は鎮守府で留守番だそう。今回の件に関しては少数でいいだろうと鳳翔が判断し、随伴も少なめ。少数の随伴だからか、海風は完全に対潜特化。山風は対空特化とわかりやすい。空き部屋も少ないのでありがたいと言えば

ありがたい話である。

それを出迎えたのは私と三日月、それと工廠組。基本は私達だ。ク
口が大きな手で手を振ろうとしたが、シロに諫められ、声を上げるの
はやめた。それで赤城と翔鶴に勘付かれたら、ありのままが見せられ
ない。

「若葉……久しぶり」

「ああ、久しぶりだな山風。海風も」

「はい、江風と涼風も連れてきたら、少し喧しいかなと思ひまして」

辛辣な姉であるが、今回やりたいことを考えると、あの2人の騒が
しい声で赤城と翔鶴が何か察してしまつては困るため、正しい判断
だつたように思えた。

山風は私の顔に拡がった痣を見て驚いたが、事前に侵食が拡がつて
しまつたことは聞いているはず。すぐに気を取り直してくれる。海
風も表情を変えずに対応してくれたのはありがたい。

「瑞鶴さんが目を覚ましたと聞きました。流星は飛鳥先生です」

「今回は医者が増援もあつたんだ。その人の薬がとても効いた」

「あらまあ、それはそれは。是非ともご挨拶しなくてはいけませんね」
瑞鶴の復活を我が子の目覚めのように喜ぶ鳳翔。空母の母と呼ば
れるだけあり、他の空母は全員子供のように思っているのかもしれない。
い。

「では早速、本題に入りましょう。海風さん、山風さん、随伴ありがと
うございました。ここからは自由です」

「了解。なるべくこつそりと、雷さんに部屋のことを聞いておきます」
今は食堂にいるということ伝え、私と三日月が鳳翔を案内する。
部屋は変わっていないが、1人で行かせるのも気が引ける。これに関
しては飛鳥医師にも事前に指示されている。

「瑞鶴さんを見たいので、先にそちらにしましょう」

ということ、まずは五航戦部屋から。私が先陣を切る。扉をノッ
クすると、対応するのは軟禁されている翔鶴である。瑞鶴はまだ車椅
子生活のため、部屋をより動き回れるのは翔鶴の方だ。

「こんにちは、翔鶴さん」

「っ!？」

「ばつが悪そうに扉を閉めようとしたが、私が足を挟んでそれはさせない。少し痛かったがその程度。」

「瑞鶴さんが目を覚ましたと聞きました。様子を見せてもらっても？」

「は、はい……どうぞ」

「あら、喉をシロさんに弄ってもらったんですね。やはりそちらの方が翔鶴さんらしくていいと思いますよ」

「翔鶴が折れると同時に、割と強引に部屋の中に入っていく。空母のことになると、鳳翔は圧が強いように思えるのは気のせいかな。」

「逆に翔鶴は相変わらず鳳翔が苦手なようである。今の身体になっ
てしまったことに負い目があるというか、顔を合わせづらいと考えている節はあるようである。」

「鳳翔さんー!」

「瑞鶴さん、目が覚めたようで何よりです」

「慈悲深い笑みを浮かべた。眠り続けている瑞鶴を見ているため、目が覚めている姿を見ることは感動もひとしおであった。」

「なんというか、ご迷惑をおかけしました」

「いえいえ、貴女も翔鶴さんと同じように自分の意思では無かったんですから。気にせず邁進してください。私の方の提督も同じように言っていましたので」

「瑞鶴だつて来栖鎮守府襲撃の主犯格をやらされていた記憶がある。あまり表には出していないが、その記憶は瑞鶴を蝕んでいるだろう。」

「鳳翔にそれを許してもらえば、メンタルケアにも完璧。後は身体を治せば心身ともに治療完了となる。」

「車椅子生活はもう少しかかりそうなんですか？」

「そう、ですね。昨日目が覚めたばかりですし、2日3日はかかるんじゃないかなって。でも、すぐに復帰しますよ。ここを守りたいですから」

「いい意気込みです。私も応援していますよ」

「鳳翔に応援されて、瑞鶴も大喜び。まるで母に褒められた子供のよ

うであつた。

「さて」

改めて翔鶴に向き直る。ビクツと震える翔鶴。

「話は聞いています。諍いを起こして軟禁状態ですって？」

「……はい」

「貴女がどういう存在なのかはわかっているつもりです。自制出来ない衝動であることも理解しているつもりです。ですが……少しやんちゃが過ぎますね」

先程の瑞鶴とは逆。翔鶴は母に叱られる子供のように縮こまってしまった。淡々と説教する鳳翔からは愛を感じるが、翔鶴はそれをただただ怖がっている。

「貴女だけのせいではないでしょう。勿論赤城さんにもお話があります。翔鶴さん、ついてきてください」

「……はい？」

少しこれは心配だが、鳳翔ならやってくれると思う。そう信じるしかない。

「2人同時にお説教です。まさか私の前で殺し合いなんてしないですよね？」

母の説教

翌日に施設に関係者が集まることが決まり、それに先んじて鳳翔が施設に来ている。その理由は、目覚めた瑞鶴を確認することと、赤城と翔鶴の確執を解消するため。三度目の大喧嘩を止められているが故に2人は軟禁状態であるため、お互いの事情などお構いなしに説教をすると呼び出している。

翔鶴を部屋から連れ出し、そのまま一航戦の部屋へ。今は軟禁中の赤城と監視役の加賀がいるはずだ。鍵はかかっているないので、躊躇なくその扉を開いた。今回の鳳翔は一味違う。

「ほ、鳳翔さん、ノックくらいしてもらえと」

「すみません加賀さん、今回は急を要するので」

笑顔のまま赤城を見据える。鳳翔がいきなり登場したことで流石の赤城も驚いていた。

そして、その後ろに翔鶴の姿があることに気付くや否や、怒りと憎しみが天井知らずに燃え上がり、憎悪のままに動き出す。鳳翔の後ろにいる翔鶴からも同じように憎悪を撒き散らしていた。

「赤城さん、翔鶴さん、おやめなさい」

翔鶴に向かおうとする赤城は加賀が取り押さえ、翔鶴は鳳翔自身が取り押さええる。軽く腕を掴んだ後、あつという間に捻り上げてその場で立てなくなるほどに。ギリギリと音が聞こえそうな程で、翔鶴も苦痛に顔を歪めていた。

「貴女達に説教するために私は来ました。そうですね、談話室に行きましょうか。ここで話すより余程効くと思いますから。加賀さん、いいですか」

「了解です。赤城さん、歩いてください」

「離してください加賀さん、目の前に仇がいるんです。ここで殺せと頭の中で声が響くんですよ」

何人もの恨みを内包しているが故に、赤城は翔鶴以上に止まらない。加賀が取り押さええようが、それを振り払ってでも向かおうとする。

「……赤城さん、今日は私も夕食を作ることを手伝う予定です。貴女の分は抜きにしてもいいんですよ?」

「うっ……雷さんと同じ手段を……」

憎悪より食欲。一時的にならこれでも抑えられるようだが、そう何度も効くような手段では無いだろう。そういうものもかなぐり捨てても翔鶴を殺すと言い出したら、実力行使しか無くなってしまふ。

結果からして、鳥海がやった力押しが一番効くのだと思う。この2人には艤装が与えられることは今のところないため、艤装を装備したものの前には屈するしかない。明るい間は朝霜、暗い間は鳥海。実にわかりやすい。

「話くらい聞いてくださいいね。話と言っても、お説教ですが」

翔鶴はズルズルと鳳翔に引きずられ、赤城は加賀に引つ張られて談話室に連れていかれた。

その間も赤城と翔鶴は睨み合い、一触即発のムード。手を離せばすぐに襲いかかるほどの険悪な仲であった。

談話室。鳳翔が真ん中に立ち、その前に正座させられている赤城と翔鶴。拘束されていないのでやろうと思えばすぐに殺し合いが始まるのだろうか、鳳翔の眼光によりそれが出来なくなっている。

見たことのないような威圧感。母が子を叱るものとはまた違った匂い。怒りと言うよりは愛が強いのが鳳翔である。

2人が説教されるという話は瞬く間に施設内を駆けていき、談話室前には人だかりが出来てしまっていた。私、若葉と三日月はここまで関わってきたので談話室の中で聞いている。加賀と瑞鶴も同席。

「私が貴女達をこうして並べている理由はわかっていますね?」

無言。お互いに顔を合わせようとせず、鳳翔とも目を合わせようともしない。理解はしているのだろうか、口にはしない。

「私は赤城さんに言いました。仲良くしろとは言いませんが、協力しなくてはならない時が来る。その時は殺し合いなどせず、共に戦えるようにしてくださいと」

「私はその時返しましたよね。鳳翔さんの言葉でも、聞けるものと聞

けないものがありますと」

「そうですね。ですが、顔を合わせる度に喧嘩、殺し合い、これは許容出来ません。貴女達がどうこうではなく、施設に迷惑がかかっていることはわかりますね？」

喧嘩のたびに誰かがそれを止めるために被害を被ることになる。今のところ誰も怪我人は出ていないが、こんなことを続けていけばそのうち被害が出かねない。毎回誰かが止められるとは限られないのだ。

一番危険なのが加賀と瑞鶴。身近にいるのだから、ほぼ確実に巻き込まれるわけで、今の状態の瑞鶴が巻き込まれようものなら、復帰がさらに先送りになってしまう。そうしたらまた翔鶴がダメになっていくのは考えずともわかることだ。

「貴女達は大淀という共通の敵がいるでしょう。せめてそれを倒すまでは協力出来ませんか。もう一度言いますが、仲良くしろとは言いませんが、喧嘩するのをやめなさい」

「何度でも言いますが、それは聞けないものです。私の本能が、翔鶴を殺せとずっと叫んでいるんです。翔鶴の指示で何人死んだと思っっているんですか」

それは否定出来ない。加賀は救出出来たが、あの場で自爆させられたのは5人。さらには2度目の戦闘で数えきれない程の人間魚雷。自爆はしていないにしろ、失敗作の戦艦隊10人もあの場で死んでいる。うち4人はおそらく翔鶴が取り込んでしまった。

しかし、その指示を出しているのは大淀だ。あの時の翔鶴は洗脳され、自分の意思とは違う行動を取らされていたのだ。翔鶴は言われるがままにあの指示を出していたのだから、あの指示は大淀の指示と言ってもいい。だからこそ、私達は翔鶴に対しては何も感じていないし、憎しみは全て大淀に向いている。最初から最後まで翔鶴が考えていたというのなら多少は変わるかもしれないが。

「それは翔鶴さんの意思でなかった事くらい、貴女なら理解出来ているのでは？」

「ですから、大淀も殺しますとも。私達の死の黒幕が彼女なのは理解

していますから。ですが、事実として私達を殺したのは翔鶴ですよね？」

堂々巡りである。赤城が絶対に譲らない程に歪んでしまっているのが問題。言い分はどちらも間違っていないのだから余計に夕チが悪い。元々持っていた一航戦の誇りが歪んでしまったが故に、芯のある復讐鬼になってしまった。

「私にしか問題が無いわけでは無いでしょう」

「勿論。翔鶴さんも理性が利かずに攻撃しているのは問題です。落ちて着けませんか」

「……私も赤城さんに殺されたようなものです。だから、顔を見ると殺したくて仕方なくなります。これが今の私の本質なのだと自覚しているんです。止めたくても止められないんですよ」

今まで黙っていた翔鶴も、話を振られて意思を示した。考えていることは翔鶴も赤城と同じだ。翔鶴は死んではいけないが、死の寸前まで持っていかれたことで今の身体になっている。その原因を作った赤城に憎悪を持っているわけだ。

結局、赤城も翔鶴も似たもの同士である。お互いがお互いを殺したために生まれ変わり、堪えようの無い憎しみを募らせている。憎しみの中には、同族嫌悪も混じっているのかもしれない。

「……貴女達はどうしてこう、極端なんですか。手を取り合えとは言っていないません。不干渉を貫けと言っているんです。顔を合わせたらお互い無視すればいいでしょう」

それが出来たら苦労はしないのだろう。こんな状況でもお互いがいがみ合い、鳳翔の監視下で無ければすぐにでも掴みかかる状態である。

「別に恐怖と暴力で貴女達を屈服させてもいいんです。ですが、それでは根本解決にはなりません。私がかこから離れたら意味が無くなりますし。貴女達には改心してもらわなければ……」

鳳翔の物言いに少し驚いた。あの赤城と翔鶴に対し、恐怖と暴力による屈服を与えることが可能とは。何となくだがやれそうに思えてしまうのが恐ろしい。私達があそこまで苦戦した翔鶴すらも、鳳翔な

らば片手で捻りそう。

だが、それが出来たとしても一時的なものだ。この場に鳳翔がいなければ通用しない方法だし、鳳翔がいるから仕方なく応じているだけ。渋々協力している状態でどうにか出来るとは思えない。

「それでも、一度刻んだ方がいいですか？　貴女達の本能が、どれほど他者に迷惑をかけているかを、その身に」

一瞬だが、鳳翔から2人に向けた愛の匂いが消え失せた。ただただお前達を痛め付けるぞと言わんばかりに、冷酷な瞳を向けている。それを本能的に察したのか、赤城と翔鶴の身が竦むのがわかった。

「そもそも、その言い分が罷り通るのなら、私は貴女達を痛め付ける大義名分を持っています。私の鎮守府を破壊したのは紛れもなく貴女達ですよね？」

「……そうですね。私も空母隊の一員として、翔鶴の指示で鳳翔さんの所属する鎮守府を」

「翔鶴さんの指示かもしれないませんが、実行犯は貴女ですよね赤城さん。そのせいで提督が怪我を負いました。今は修復出来ていますが、一時は住む場所も奪われました。どう落とし前を付けてくれるんです？」

愛の中に怒りが混ざり始めている。鳳翔は来栖提督の秘書艦、さらには相思相愛と言ってもいいほどに信頼している仲だ。来栖提督が危険に晒された時の行動力は普通では無かった。派遣も全て取り下げ、側に侍ることを選択したほどである。

赤城の言い分を通すなら、一方的な被害者である鳳翔は反撃無しに赤城と翔鶴を痛め付ける権利がある。

「加賀さんはその件で悩み、苦しみ、最初は私達の前に姿を現すことが出来ない程でした。ですが貴女は何ですか。深海棲艦の本能とやらで、謝罪もなく後悔もない。私達の鎮守府を破壊したのは自分ではなく指示を出した翔鶴さん、もしくは黒幕の大淀だから、自分のせいではないと言い張るんですか？」

赤城は青い顔をして震えていた。おそらくこれで気付いてしまったのだ。自分が翔鶴と同じだと。道具として使われていたのだから自分に罪はないとも思っていたのだろうか。そうだとしたら、それ

こそが傲慢だ。

「赤城さん、貴女は被害者面しすぎです」

最後、たった一言で赤城の心を完全に叩き折った。

「翔鶴さん、貴女はまだここままで堕ちていないとは思いますが。瑞鶴さんを目覚めさせるため、施設の仲間達と協力していたのは聞いています。ですが、何ですかこの体たらくは。目覚めたらこれですか」

「……すみません……刻まれてしまった本能のせい……」

「自制しなさい。貴女はまだ瑞鶴さんが目を覚ましていないときに、喧嘩を売られても無視したと聞いています。それを徹底しなさい。本能かもしれないませんが、貴女達には理性があるでしょう」

翔鶴は俯くばかり。赤城は反論するが、翔鶴はただただ聞いているだけ。事態を重く受け止めているのはどちらかといえば翔鶴だ。

完全に死んだ後に蘇ったわけではないからだろう。僅かではあるが、艦娘としての本能も残されているように思える。

「ここまで話しましたが、反論を受け付けます。私が間違っているというのならどうぞ訴えてください。私も真摯に受け止めます。私だって間違えることはいくらでもありますから、言ってもらえれば直します」

2人とも無言。反論無し。この説教で論破されたと言っても過言ではない。

特に赤城は立ち上がれないくらいに憔悴していた。在り方を否定されたも同じ。それをよりによって母と感じられる程の鳳翔に。むしろ鳳翔だからこそここまで打ち負かしたのだと思う。

「何も無いのでしたら、お説教はこれで終わりです。お疲れ様でした」
鳳翔が談話室から立ち去った。赤城も翔鶴も、その場から動けなかった。

説教の後、赤城と翔鶴は加賀と瑞鶴に任せ、私と三日月は鳳翔を追う。あれだけ話したのだから喉が渴いたのであろう、食堂でお茶を飲んでいた。

「……はああ……これであの子達は少しはわかってくれるでしょうか

……」

鳳翔とは思えない弱々しい眩き。説教というものの自体がほとんどやったことのないようなことなのだろう。元氣付けるための叱咤激励とは違う。途中少しだけ感情的になった部分もあった。鳳翔はそれを後悔している。あの2人から見えないところで、今度は自分自身の反省会。

私達が駆けつけたことに気付き、また慈悲深い笑顔を見せてくれた。とはいえ疲れも匂いからわかる。

「お恥ずかしいところを見せてしまいました」

「いや、何も問題は無かったと思う」

「はい、少し怖かったです、あの2人はわかってくれたと思います」
事情がわかっていても止められない状態から、一旦考えることが出来るようになったはずだ。これでも尚、顔を見たら殺し合うようなことがあれば、今度こそ実力行使になるだろう。わかっているても衝動が抑えられないというのなら、その衝動を見せた時点で周りが全員敵になることを教え込む必要がある。

なんとというか、動物の躰のようであった。あまりよろしくない傾向なので、赤城も翔鶴もそうならないでほしい。

それからすぐに、赤城と翔鶴の軟禁状態は解かれることになる。ここからどうなることやら。

和解の道

鳳翔の説教はあまりにも強く効いたらしく、その後、赤城と翔鶴は部屋に引き籠もってしまった。特に赤城は生気を感じられないような表情でフラフラと部屋に入り、そこからベッドの上で蹲っているらしい。翔鶴もかなりキテいるようで、瑞鶴の世話を加賀が代行するレベルだそうだ。

翔鶴はまだマシである。やれるのだからもつと自制しろと面と向かって言われたただけだ。それは正直ごもつともである。だが、赤城は完全に心を折られていた。今まで強く強く憎んでいた翔鶴と同類であると気付かされ、憎しみの方向がとっ散らかってしまったのだろう。壊れかねないほどの精神的ダメージになってしまった。

それこそ2人とも、本能としての憎しみが破壊されるほどの衝撃を受けたと言える。

「2人とも浮き輪さんがついているので、余程おかしなことはしないと思います。あの子達は優秀ですから」

「そうですね……」

「鳳翔さんは気に病む必要無いよ！ あれは赤城さんと翔鶴姉の問題だし。2人ともこれできつと仲違いはやめてくれるはず」

説教をしたものの、逆に罪悪感を感じてしまっている鳳翔を、加賀と瑞鶴が慰めていた。施設に迷惑をかけるほどの仲違いを止めるためにやったことが、ここまで大事に至ると思っても見なかったのだろう。そんなこと、誰もが予想していなかった。

「この件は私にも落ち度があります。何かあったとしたら、私が必ず立ち直らせますので」

一番責任を感じてしまった鳳翔は、今はそつとしておこうと食堂の方へ。加賀と瑞鶴も部屋から離れていった。すぐに対面しても逆効果だろうと考えたようだ。

独りにしておくのも少し怖いものの、何かあれば浮き輪が伝えてくれるだろう。それに、部屋には何かしでかしそうなものは無いはず。一人で考える時間も必要だとは思う。

軟禁状態は解除されたが、結局2人は部屋から出てくることは無かった。

夕食時となり、各々が食堂に集まり始めた。鳳翔はあの後、雷達と夕食作りを手伝ってくれている。その時も少し浮かない表情ではあったものの、相変わらず手際よく何品も作っていた。雷が後れを取るほどの腕前は、いつ見ても惚れ惚れする。

「加賀さん、赤城さんと翔鶴さんの分の夕食は別に作っておいたわ！
今から運ぶのよね？」

「ええ。ありがとう雷。でも、いつもより量が多いみたいだけれど……」

「落ち込んでるときはいっぱい食べるのが一番よ！」

大食漢の赤城にはこれでも足りないかもしれないが、加賀が持たされたお盆の上にはこれでもかと言うほどに料理が並んでいる。おそらく鳳翔が罪悪感を糧に作りすぎたのだろう。後ろの方で苦笑していた。

当然翔鶴の分も似たようなもの。空母というのは基本的によく食べるため、翔鶴もこれくらいは余裕。これはもう謝罪も兼ねている。「私も運びます。一人で持つていくのは大変でしょう」

「鳳翔が行くのなら若葉も手伝おう。若葉も赤城のことが心配だ」
「若葉さんが行くのなら私も。翔鶴さんの分も持たなくてはいけませんし」

別に一度に持つて行かなくてもいいとは思うのだが、何往復もするのは効率が悪い。なので、少し人数は増えるがまとめて持つていくことにした。

赤城のことが心配なのは本心だ。ここに住むようになってから一度もあんな表情を見せたことが無かったため、正直気が気でなかった。浮き輪が連絡に來ない辺り、部屋の中で自殺を凶っているようなことも無いようではあるが、いつ何をするか予想が出來ないというもある。

「瑞鶴、これだけ持つてちょうだい。私が後ろから押すわ」

「はいはい。なんか私、カートみたい」

「今は似たようなものよ」

大荷物も瑞鶴に渡しておけばある程度は持つて行きやすい。エレベーターがあるおかげでその辺りも楽。

先に心配な赤城の方へ向かう。部屋の中にいないということは無さそう。匂いは扉越しにはわからないが、出て行った形跡も無いので、中にいることは確定。

「赤城さん、夕食を持ってきました。入りますよ」

加賀が声をかけた後、部屋の扉を開く。もう外は暗くなろうとしているというのに電気はついておらず、薄闇の中、赤城が蹲っていた。顔を伏せ表情は窺い知れないが、匂いから負の感情が渦巻いているのはわかった。だが、怒りや憎しみは感じない。感じるのは深い悲しみ。

私達が部屋に入ったことで浮き輪が赤城の裾を引っ張るが、それに対しては無反応。浮き輪も少し困ったような雰囲気。

「雷と鳳翔さんが腕によりをかけてくれました。いつもよりも少し多めにしてくれましたよ」

「私を使って持つてこさせてるのよ。人をカートみたいにしちやっさ」

「運びやすいんだもの。甘んじて受け入れなさい」

加賀が話しかけても反応が無い。瑞鶴との漫才じみた掛け合いでも無反応。色気より食い気を地で行く赤城が、食べ物匂いに釣られないということ自体が異常事態。

鳳翔に説教されたことで自身の在り方そのものが揺らいでしまっている。嫌悪するものと同じであることに気付いてしまったせいで、思考がバグってしまったのだろう。

「赤城さん、さつきは少し言い過ぎてしまいました。感情的になつてしまった部分もあります。それは私の落ち度です。本当にごめんなさい」

鳳翔の声に少しだけ震えるが、それだけ。

「赤城さん……食事は置いておきます。食べてください」

これで動かないのだから、まだ時間は必要だと感じた。考えが纏められるかはわからないが、私達の助言で思考がさらにブレる可能性がある。それをいち早く察した加賀は、食事だけ置いて部屋から出ることを私達に促してきた。

まだ1人で考える必要がある。ある程度は誰からの助言も受けずに、今後の自分を見出さなくてはいけない。何人分もの憎しみを背負っている赤城だからこそ、これはより考えてもらおう必要があった。

翔鶴のいる部屋に入ったが、こちらと同じように部屋の隅でじつと蹲っている。部屋の電気はついておらず、暗がりにはポツンと座り込んでいる。こういうところも赤城とそっくりだ。

「翔鶴姉、ご飯持ってきたよ」

「……ありがとう、瑞鶴、皆さん」

こちらはまだ反応があるようだ。やはり赤城よりは重症ではない。死んで生まれ変わったわけではない分、まだ艦娘としての理性がほんの少しだけ残っているように思える。瑞鶴のことを思って暴走しなかっただけあった。

「……赤城さんは……」

「先に食事は置いてきたわ。私達が何を言っても反応は無かったけれど」

「……そうですか」

加賀の言葉に少しだけ悲しみが強くなる。既に赤城が開き直っていると報じられれば、翔鶴にも何かしら影響があったかもしれない。だが、赤城は翔鶴以上に塞ぎ込んでしまい、食事も喉を通らないほどである。翔鶴にもその影響が出てしまいそう。

「翔鶴さん、さつきは言い過ぎました。ごめんなさい」

「……そんなことないです。私が愚かでした。赤城さんを殺したいという本能が、鳳翔さんの言葉で撃ち抜かれたかのようにでした。すぐに受け入れられませんでしたが……少し考えたら、やっと理解出来ました」

ということとは、今の翔鶴には赤城に対する理性すら消しとばす本能からの殺意は無いということだろうか。そうだとしたら喜ばしいこ

とだ。

「私も赤城さんも、おあいこなんだと。やらされたとはいえ、私が赤城さんを殺しました。だから赤城さんは私を殺した。結果的にお互い蘇ったわけですが……それでおあいこです。終わったこと……なんですよ」

正確には翔鶴は死んでおらず、死ぬほどの状況に持っていかれたことでの深海棲艦化。とはいえ似たようなものである。お互いにお互いを殺したのは間違いがない。やったのだから、やり返された。ただそれだけだ。

やらされたこととはいえ、因果応報としての報いは受けている。飛鳥医師も蝦尾女史も治療できない身体の変化は、十分過ぎるほど重たい報い。永劫残る罪の証である。本来負う必要のない傷ではあるのだが。

「そう思えるようになってから……ずっと憎しみが無くなったような、そんな気がします」

「そうでしたか。なら、翔鶴さんは真に洗脳が解けたのだと思います」
そういう思考誘導も洗脳の内だったのかもしれない。こうなることを予測していたのか、想定外だったかは定かではない。

「ご飯、いただきますね」

翔鶴は翔鶴なりに考えが纏まったようである。吹っ切られるかはまだわからないが、説教されてからの数時間で、落ち着きを取り戻したのは確か。

少しして私達の夕食が終わり、翔鶴の分の食器も引き払った。結構な量があったが、翔鶴はしっかりと平らげている。そういうところはきっちり空母。深海棲艦化したことで燃費はより悪くなったのかもしれない。

あとは赤城の分なのだが、今部屋に入るのは躊躇われる。あの時からまだ小一時間ほどしか経っていない。それだけの時間で立ち直れているかどうか。

「赤城さん、食べましたか」

そんな中、意を決した加賀が先行して部屋の中へ。相変わらず電気はついておらず、先程よりも暗くなっていた。当然置かれた食事はそのままの状態に残されており、赤城も全く動いていない。

まだ自分の在り方を考えている。鳳翔の説教によって打ち砕かれた存在意義を、別の何かに見出そうとしているのか、もしくは説教されたとしても自分を変えずに翔鶴への殺意を煮えたぎらせているのか。

「……赤城さん、食べないと身体に悪いですよ」

話しかけても相変わらず無反応。しかし、匂いは先程とは少し違う。いつも渦巻いていた憎悪の匂いが薄れている。考えに考えて、新しい道を見つけようとしている。

「……加賀さん」

「つ……なんでしよう、赤城さん」

初めて声を出した。蹲ったままではあるが、ようやく意思を口に出そうとし始める。搾り出して出た言葉はカラカラだった。

「私は……間違っていたんでしようか」

「……赤城さんの行ないを、私は否定しません。私だって憎しみがありました。若葉に助けってもらっていなければ、私は死んでいましたから」

「自分のことを棚に上げて……ただただ翔鶴に恨み辛みを滾らせるだけ……私の手で死んだものも沢山いるというのに。私も翔鶴と同じだったんです……意思は無くとも他者を虐げ、命を刈り取っていた」

ここにいる何人かと同じだ。人形として、姫として、完成品として活動させられ、意思の有無関係なしに無実の者すらを消して回っていた。加賀だってその内の1人である。

「目先の憎しみしか見えず、大局が見えていなかった。自分すら見ようとしていなかった。私は一体何様なんでしょう。同じことをしておいて、いざ自分が被害を受ければ何もかもを見ようとしなさい。鳳翔さんのおかげで、翔鶴を責める資格なんて無いと気付いてしまった」

声が震えている。涙の匂いも漂う。ようやく自身を省みることが出来て、今までの行ないを後悔している。

「私の中の皆と話をしました」

「それは……どういう……」

「同じ憎しみを持つ者。理不尽に死ぬこととなった者達の怨念です。私が喰らってきた成れの果て達は、私の中で憎しみを晴らすことを望んでいます」

やはり、あの戦闘で時間が経過する毎に強くなっていったのはそれ。周囲に蔓延る怨念を自らの力に変えるために喰らい尽くしていた。あの時はそうなのではと思っただけだが、赤城の言葉でそれが確定。

「その対象は常に翔鶴でした。ですが……今は違う。鳳翔さんのお説教のおかげで、皆がその憎しみを向ける相手を変えた。私も、翔鶴も、全員が操り人形だった。ならそれを操っているのは誰か」

「……大淀」

「はい。全員の意思が一致しました。翔鶴は、殺すべき相手では無い。大淀が死ねば、私も、私の中の皆も、全員報われます。この考えに至るまで、ここまで時間がかかりました。少し考えればすぐに辿り着けたはずなのに」

俯いていた顔を上げる。涙でボロボロの荒んだ顔ではあったが、何処か決意を秘めた強さも感じる。この頃には負の感情も殆ど感じられなかった。憎しみの方向性が変わったからかもしれない。物騒な考え方自体は変わらないが。

と、ここで大きな腹の虫が鳴いた。音の後に赤城が頬を赤らめる。加賀もクスリと笑みを浮かべた。

「考えが纏まったらお腹が空いてしまいました。あら、こんなにいっぱい」

「この皆が、赤城さんのことを心配してくれていました。皆、仲間です」

「そうですね……私も今は施設の一員として扱ってくれているんですね。ならば、それに応えなくてははいけませんね」

声に力を感じる。これはもう、立ち直れたと考えていいだろう。今までの殺意だらけの不安定な状態から、正しく前を向いた状態に。今

までのことを忘れるわけでは無いが、赤城は一航戦の誇りを取り戻したのかもしれない。

これにより、和解の道は拓かれた。今の施設における最後の悩みの種は、結果的に鳳翔のおかげで取り払われることになりそうだ。

手を取り合って

本日の夜間警備の担当は、私、若葉が率いる第五三駆逐隊。私と三日月が研究助手の業務を終了したため、久しぶりのフルメンバーである。今回の引率は加賀。赤城を1人にするのに最初は抵抗があったものの、もう今なら大丈夫と引き受けてくれた。いざとなれば夜間警備の鳥海もいるし、そもそもいつもの浮き輪がいる。

警備中の話題も、やはり赤城と翔鶴のこと。鳳翔から手厳しい説教を受けたのは施設の全員が知っていることだ。その後、2人が酷く落ち込んだことも、先程立ち直ることが出来たことも、小さな施設であるがゆえにすぐに広まるもの。

「あれなら明日にでも対面して握手くらいは出来ると思う」

「まあ一度開き直っちゃえばすぐよすぐ」

曙が言うのと重みが違う。ある意味先達者。

呂500との仲は、治療により言葉を取り戻した後、劇的に改善されている。そうで無くても、例の一件以来毛嫌いするようなことも無くなり、曙のストレスは見る見るうちに減少したと、相部屋でメンタルカウンセリングをしていた姉も話していた。それでも相部屋で寝るとかそういうのは話が違うそうだが。

「鳳翔さんには感謝しか無いわ」

「そうだな。流石としか言いようが無い」

加賀も、心配の種が取り除かれて随分と落ち着いた匂いになっていく。やはり相棒がああなあってしまっていると、不安も大きかっただろう。その不安も今回の件で払拭された。

今のところまだ部屋から出ておらず、赤城と翔鶴は対面していない。明日の朝、下呂大將達がここに訪れる前に対面することになるだろう。その時にどうなるか。

私達は夜間警備の後であるため、その瞬間に立ち会えない可能性が高いが、きつと上手く行くだろう。万が一の場合も、止められるものは沢山いる。それに、今も鳳翔がいてくれるのだから大丈夫だ。

「異常なーし。最近はやも静かなものね」

「この前の夜襲のせいで、何体か出てきそうだけど」

「今のところはありませぬねそれ。あれも赤城さんが食べてしまったんでしょか」

潜水艦隊による暗殺の夜襲は、あれ以来姿を現さない。実は今、海底から見られていると言われても否定は出来ないのだが。

あの時に自爆させられたり、結果的に命を落としてしまった者達の怨念は、少なからず近海に漂っているだろう。そこから新たな深海棲艦が生まれてもおかしくはないのだが、今は音沙汰無し。

赤城が喰らい尽くしてしまった可能性も無くはない。とはいえ、数がかかりいたのは確か。雷にはまだ声が聞こえないものの、時間がかかっているだけで、海底で生まれている可能性もある。一度、シロク口達に確認してもらうのもいいか。

「何もなければ何も無いに越したことはない。平和が一番だ」

「はい、その通りです。何事もなく、平和に過ごしましょう」

などと言いながらベツタリとくつついてくる三日月を撫でる。こうしていられる時間が一番いい。近々大きな戦いがありそうなのだから尚更だ。一時の平和を謳歌したい。

「これを見ると平和って感じだわ」

「ホント、熱々よねー」

冷やかされるが、別段気にならない。むしろ見せつける程である。

日の出と共に、朝イチの哨戒機を確認して帰投準備に入る。夜間警備もこなれたものである。最悪な人生の最後を想起させる夜と嵐は、私や三日月のトラウマにもなっていたが、今ではその兆しもあり見えない。この施設で精神的なものも治療されているように思えた。

「何事もなく夜間警備は終了」

「はい、お疲れ。お風呂入って朝ご飯食べてさっさと寝ましょ」

「仮眠をとっても眠くはなるわよねー。夜だからかしら」

ボヤきながら工廠へ向かう。近づくにつれ、朝食の空腹を刺激する匂いが漂っているのがわかる。

雷が夜間警備に勤しむ時は、別のものが朝食当番となるのだが、今

回はおそらく蝦尾女史。手伝いはいつもの呂500と暁である。夕雲もそこに参加することもチラホラ。

「ご飯の炊ける匂いと、お味噌汁の匂い。さすがに気分が昂揚します」「本当に加賀さんは食糧を食べることが好きなのね」

「空母全員が同じよ。ここは譲れません」

加賀では無いが、疲れて帰投した時のこの匂いは気分が昂揚するというものだ。空腹を助長され、早く帰りたいと身体が動くかのよう。「帰ってきたか」

工廠で待ち構えているのは当然、哨戒機を飛ばしたりコ。これにより、施設内の夜間警備も終了となる。外が明るくなってきたことで、鳥海も工廠に現れた。

「施設内も何事もなく終了。夜間警備、お疲れ様でした」

「お疲れ様。これが続けばいいな」

続かないことはわかっているのだが、口に出しておきたいというものだ。願うくらいはタダなのだから。

艀装を置いてそのまま食堂へ。先に風呂でもいいのだが、そうするとそのまま寝落ちする可能性があるため、先に朝食とした。少なくとも、三日月はおねむの様子。終わった途端に明らかに眠そうな目になっていた。

「おはようございます、皆さん」

食堂では予想通り蝦尾女史が中心となって朝食の準備がされていた。ここ最近では料理の腕を上げてきた暁と、簡単なことなら手早く済ませることが出来る呂500もやはり一緒。

だが、少し予想外だったのは、そこに赤城の姿があったことだ。軟禁状態が解除されているとはいえ、朝食の準備を手伝っているのは正直想定していなかった。

「あら、皆さんお帰りなさい。警備ご苦労様です」

満面の笑みを浮かべた赤城に出迎えられる。今までとは違う、心の底からの笑み。昨日の説教が余程効いたか、悶々としていた何かが晴れたような、憑物が落ちたかのような、気持ちのいい表情であった。

匂いからもわかる。これこそ本当に別人のような変化。殺意も怒

りも憎しみも感じない。吹っ切れたと言える明るさ。これが本来の赤城なのだろうか。

「どうしました？ 私の顔に何かついてますか？」

「あまりにも違い過ぎて驚いてるだけよ」

第一声は曙。同じ死を知る者として共感する部分も多々あったが、ここまでの変わりようは考えても見なかった。曙が割り切った時は、前後で変化など感じなかったものだ。

だが、これは素直に喜んでもいいものだと思う。私は昨日、赤城が吹っ切れる瞬間を見ている。あれで尚、翔鶴に憎しみを抱いているようには到底見えない。

「吹っ切れればこういうものですよ。とはいえ、まだ翔鶴の姿を見てはいませんが」

翔鶴は瑞鶴の面倒を見ながらのため、朝が遅いこともある。その瑞鶴も大分回復はしてきているので、まもなくここに現れるだろう。そうなるからが本番。

「ほ、本当に大丈夫なのよね。いきなり喧嘩に巻き込まれるとか無いのよね」

隣で手伝っている暁がビクビクしていた。昨日まで翔鶴と殺し合いをしていたような者が、突然心を入れ替えて立っているのだ。不信感が募るのも無理はない。

だが、呂500はそんな不安を感じさせず、ニコニコしながら手伝っている。赤城の危険性が失われたことを感じ取ったのだろうか。

「おはようございまーす。あ、加賀さん夜間警備終わってたんだ」

「おはよう瑞鶴。翔鶴も」

「は、はい、おはようございます」

と、ここでついに対面。車椅子の瑞鶴を連れてきた翔鶴が食堂に入ってきた。夜間警備が終わった私達が屯たむろしているため少し控えめではあったが、瑞鶴のために前に進んだところで赤城がいるところが目に入る。

お互いに気付いたのだろう。動きが止まった。以前までなら何の躊躇いもなくそのまま殴りかかっていただろうが、お互いに思い直

し、考え、結論を出したことで思考停止。

「瑞鶴、少しこちらに来なさい」

「えっ、あ、うん、加賀さんお願い」

すつと加賀が前に出て、瑞鶴の車椅子を移動させる。これで赤城と翔鶴を阻むものは無くなった。それでも動くことが出来ず、赤城の表情も一転して曇る。空気が凍り付いたようにも思えた。

昨日まで仲違いしていたのは周知の事実。即座に立ち直すことなんて簡単には出来ない。きっかけ、何かにきっかけがあれば。

「おはよー！」

この気まずい空間に元気いっぱいに入ってきたのは初霜。姉と如月と手を繋ぎながら、ニコニコ笑顔で空気を切り裂く。

「あ、わかば！ おつかれさまー！」

「ああ、今日も施設を守ったぞ」

「がんばったねー。あっ」

最初は私の方を見ていた初霜だが、赤城と翔鶴が同じ場所にいることに気付いた。

当然初霜だって赤城と翔鶴の確執は知っている。幼い思考のため、仲が悪く喧嘩が絶えないというくらいにしか認識していないと思うが、その2人が目の前で見つめ合っているようなところを見てしまったのだから何か起こると思ってしまうだろう。

「けんかはだめだよー！」

誰も言えなかったであろう言葉をズバツと。

「なかよくしないと、たのしくないんだよ！ はつしも、たのしいほうがいいもんー！」

「うむうむ、そうじゃの。わらわも楽しく過ごしたいのう」

「初霜ちゃんが一番わかってるわねえ」

姉と如月が初霜を撫でる。自分の発言が正しいと証明されご満悦な初霜。

「……ふふ、初霜さん、私達はもう喧嘩はしません」

どちらが先に口を開くかと思っていたが、赤城が先だった。初霜に近付き、笑顔で頭を撫でる。

「昨日ね、今までのことをとつても怒られたの。それでいっぱいばい考えて、私は自分のダメダメな部分が見えたのよ。だから、それを直していいこうって決めたんだ」

「そうなの？」

「ええ。だから、それを今から初霜さんにも証明するわ」

改めて翔鶴に向き直る。ビクンと震えるが、今の会話の流れから、何がしたいのかを察したらしい。

それが出来る勇気があるかはさておき、切り出したのはやはり赤城からだ。

「翔鶴……私が言えたことではないけれど」

「赤城さん、おそらく同じことを思っています。同時に……言いませんか」

鳳翔からの説教で同じように怒りと憎しみが取り払われた赤城と翔鶴は、似たもの同士であるがためか、ここでやらなくてはいけない結論も同じ場所に辿り着いたようである。

「ごめんなさい」

たったこれだけ、一番必要であったであろう言葉が、ようやく2人の口から出た。

実際裏には奴がいるわけだが、お互いを殺し、殺された事實は覆らない。どちらにも非がない、悲しい憎しみの連鎖だった。それを終わらせるために、お互いが今までのことを謝罪し、憎しみの方向を本来の方向に修正する。

「水に流しましょう。私達を殺したのは翔鶴じゃない。翔鶴を道具として扱った、大淀です」

「水に流しましょう。私を殺したのは赤城さんじゃない。こうなるように仕向けた、大淀さんです」

結局、赤城と翔鶴は何から何まで同じだったのだ。お互いを憎み合うように仕組まれていた感じではあるが、そこに気付いてしまえば手を取り合うことが出来る。

「なかなおり、した？」

「ええ、ごめんなさいね初霜さん。怖がらせてしまつて」

「なら、なかなかおりのあくしゅ！」

そこまでやれとは言えなかった。さすが子供、怖いもの知らず。

「……そうね、それくらいやっておかないと示しがつかないかも」

「減るものではないですし、証としては丁度いいですか」

お互いにクスリと笑い、握手を交わす。これで本当に仲直り。長きに渡る仲違いは、こうして決着がついた。

赤城も翔鶴も、今までと違って表情が柔らかいように見える。雰囲気も大きく変わった。もう負の感情は見えない。対面しても本能をさらけ出すような暴走はしないだろう。

むしろ、普通以上に仲良くなっているようにも見える。今まで憎しみ合っていたものが反転したかのような。同族嫌悪が、強い仲間意識に切り替わったかのような感覚。これならカウンセリングもいらないだろう。

「ようやくストレスが減るわね。あとは貴女よ、瑞鶴」

「わかってますとも。今は念のため車椅子だけど、もうそろそろ鍛錬に入れるからね」

「そう、なら私がシゴいてあげましょう。覚悟するように」

この2人の仲違いが解消されたことを一番喜んでいるのはその相棒。加賀も瑞鶴もホッと息を吐いた。これようやく次のことを見据えることが出来る。

ここで瓦解した緊張感を示すように、大きな大きな腹の虫が鳴いた。その発生源は加賀である。夜間警備で消耗してからのこれだ。食堂はずつと美味しそうな匂いが漂い続け、いつでも朝食にありつけるといふ状態。

「お腹が空きました。朝食をお願いします」

「はい、加賀さんには少し多めにしておきますね」

苦笑しながら蝦尾女史が朝食の準備を再開した。冷えた空気は温まり、気持ちよく朝が始められるだろう。これならご飯も美味しく食べられそうだ。

今までの凍り付いた関係は融解し、施設はより団結していく。誰もが手を取り合って楽しく生きる施設にまた近付けた。

一致する意思

赤城と翔鶴が和解した瞬間を見ることが出来たからか、夜間警備を終えた私、若葉はとても気持ちよく眠れた。朝食後に風呂に入り、ベッドに入ったら即寝落ち。気付けばもう昼近くであったが、天気模様は生憎のところあまりよろしくない。夜間警備の時は天気が良かったのだが、私達が眠っている間にだんだんと天候が崩れていったようである。

同じように眠っていた三日月もグッスリだったようだが、今日はあちらの方が先に起きていたようで、目が覚めた直後に三日月と見つめ合う形になっている。目が合うと同時にクスリと笑い、心が満たされるような感覚がした。

「おはようございます、若葉さん」

「おはよう三日月。もう昼だな」

「夜間警備の後ですからね」

いつもとは逆に私が撫でられていた。私の左眼も侵食されて深海の物に変化しているため、私が撫でると同じようなもの。お互いの身体に触れている時が一番落ち着く。それが私の部位に近い時はさらに落ち着く。

「さすがに起きないとな。昼食を終わらせておかなくては」

「そうですね。名残惜しいですが、準備しましょう」

今からは作戦会議のようなもの。大淀の拠点、手瀬鎮守府への襲撃についての話だ。目処がようやくつき、そろそろ本格的に始動するという。

ここまで長かった。拠点の位置はわかっているが、敵の戦力は日々増え、さらには得体の知れない力を持つていたりする。鎮守府の本身も妖精が改造しているとの証言もある。そのため、なるべく被害が出ないように出来る限り入念に調査を続けてきた。その結果が実ったということだろう。

「決戦の時も近い……ということだな」

「はい。早く全部終わらせたいです」

これが終われば私達は楽しく生きることが出来るのだ。早急に終わらせたい。

部屋を出ると丁度新提督が2階を見て回っており、タイミング悪く私達の部屋の真正面だったため、危うくぶつかりかける。既に飛鳥医師の付き添いすらない単独行動。数度の監査で信用できるのはわかってはいるし、今ここで対面しても負の感情は感じられなかった。三日月も慣れたものである。

「おっと、大丈夫か」

「大丈夫だ。監査中だったのか」

「君達が眠っていることは聞いていたから、静かにやっていたつもりだが、起こしてしまったのならすまない」

私達が眠っている間に既に到着しており、作戦会議の前に監査を進めていたらしい。効率を考えるとそれがいいだろう。

私達のような夜勤がいることで全員揃うことがまず無い午前中に、大本営の遣いとしての職務を終わらせておく方が後々時間が作ることが出来る。それに、天気が悪くなるというのがわかっていたのなら早めに動くのが妥当。

「今回も問題無しと判断させてもらった。いろいろ驚かされたが」

「ねー。空母棲姫の赤城さんもそうだけど、空母水鬼の翔鶴さんもビックリしちゃった！」

後ろには護衛の瑞鳳がついているが、相変わらず新しい空母勢を見ると目を輝かせているようだった。新たな艦載機や発艦システムが見たくて仕方ないのだろう。さらに今回は、赤城と翔鶴の艦装は修復済み。やろうと思えば演習だって出来る。

仲違いがまだ続いているようなら、今回は事情を話して前出さないつもりだったそうだが、今朝に完全な和解をしたことで、監査にも見せられると判断されたようだ。ここには協力的な深海棲艦しかないという証明にもなる。

「またこれに関しては詳しく話してもらおう。今日も泊まりがけになるだろうからな」

「もう部屋が無いと思うんだが」

「我々は何処でも寝られる。私は医務室で構わないさ」

客人をそこに入れるというのは気が引けるのだが。おそらく談話室なり部屋をうまいこと空けるなりして工面するだろう。

「先生は1階で待機してもらっている。来栖大佐も到着済みだ」

本当に全員揃っていたらしい。やはりこの天気模様は予報されていたものようだ。昨日のうちにそれを確認していなかった私の落ち度。

下呂大將は脚が悪いのでなるべく動かないようにしているのだろう。当然といえば当然か。

新提督と共に1階に降りると、談話室で休んでいる下呂大將の姿が。飛鳥医師から軽く診察を受けたらしく、順調に回復しているとのこと。無茶な生き方をしているというのに、身体がそれを許してくれているようだ。正直恐ろしい。

隣には蝦尾女史。こちらに召集される前から懇意にしていたようなので、今回の治療の功績は下呂大將も大いに喜んだ様子。しかし、その内容は極秘中の極秘として公開しないようにしている。

「若葉、三日月、おはようございます。よく眠れましたか」

「おかげさまで。大將は傷の調子はどうだ」

「頗るいいですね。ですが、皆は動くなの一点張りで」

「当たり前だ」

相変わらず、みんなの気も知らずにそこら中に動き回って調査に出ようとしているのだろう。頭を張っている者が怪我をしているのにそれでは、部下である艦娘は気が気でない。

「彼女は活躍してくれたみたいですね」

「ああ、本当に感謝している。蝦尾女史のおかげで全てが丸く収まった」

「そんな、私は出来ることをしたに過ぎません。それに……憧れの飛鳥先生のお役に立てただけでも胸がいっぱいで」

本当に嬉しそうに話す蝦尾女史。早口で話す辺り、それだけ飛鳥医師に首っ丈ということなのだろう。憧れ以上の感情も持っているよ

うに見えるが、敢えてそこは触れないことにする。

「今は人工皮膚の研究をさせてもらっているんです。人工骨までは成功したそうですが、それ以降になるとやはり難しいらしくて。私の体組織の研究が確実に役に立つと言ってくださったので、楽しくて楽しくて」

「有意義に暮らしているのなら充分ですね。推薦して良かった」

本当に、蝦尾女史のおかげで前に進むことが出来ている。推薦してくれた下呂大将にも感謝だ。

昼食後、全員集まって作戦会議が行なわれることとなる。こんな大人数が集まることは早々無いため、食堂くらいしか場所がない。来栖提督を運んできた二二駆や、先んじて来ていた鳳翔と海風山風姉妹。下呂大将の護衛として来た神風や、新提督の護衛である瑞鳳も入ると、今までにない人数である。

救出出来た者が次々と戦力として参加してくれているおかげで、もうこんな大所帯に。部屋がないというのも嬉しい悲鳴だ。赤城と翔鶴も、今は並んで話を聞いているくらいである。

「さて、ではこちらの調査状況を話しておきます。結論から言うならば、あと数日で襲撃が可能です」

ここは予想通り。手瀬鎮守府を入念に調査し、最適な海路と戦力を割り出していたらしい。

少なくとも見た目は鎮守府の体裁は保っているらしいが、内部は大きく改造されているのだろう。どう攻め込むにしろ、外部からの突撃は必須。今までこの施設が受け続けて来た襲撃のデータから、残った敵の戦力を計算し尽くしたそうだ。

「ただし、計算し尽くした結果でも、不明瞭な部分が多すぎます。大淀の隠蔽工作があまりにも上手く、私でも追い切れません。そのため、襲撃の作戦も憶測がいくつも入っている状態です」

限界まで計算した結果、これ以上はもう追えないというところまで来たために襲撃を執行するという、下呂大将としては残念な結果に終わってしまった。自らの脚で情報を稼げないという弊害もあるのだ

とか。

それだけ大淀は慎重。自分の素性は一切明かさず、手駒にすら全容を見せていない。近くに医療研究者の男が2人いることはわかってはいるが、その行方すらも掴めないそう。そうなると今生きているかもわからない。

「少なくとも聞いていた伊勢と日向に関しては想定出来ました。それ以上になっている可能性は否定出来ませんが、上方修正もしています」

今回の最大の強敵はその2人、伊勢と日向だろう。

艦載機を扱う戦艦、航空戦艦の力を遥かに超える改装航空戦艦としての力を、違法改造によりさらに底上げされていると考えた結果、私達が今まで戦ってきた者達の力を全て持っていると考えたほうがいい。砲撃戦、航空戦、さらには近接戦闘までもが破格のスペック。

下呂大将の予測では、砲撃戦はシロクロ以上、航空戦は五航戦を足したくらい、そして近接戦闘は第一水雷戦隊と同等かそれ以上ではないかと言っている。

「……勝てるのか、そんな化け物に」

思わず口から出てしまった。弱音なんて吐きたくないのだが、正直勝ち目が見えない。私達だけでは到底不可能。さらには、出来ることならその2人を殺さずに倒したい。

当然ながら、その2人も洗脳により大淀に従っている被害者だ。今までと同様に救いたい。死ぬのは大淀だけで十分。

「勿論勝ちますよ。ただし、こちらとしてはズルい手段を使うことになつてしまいそうです」

「ズルいとは？」

「決して褒められたものではないでしょう。使える手段は全て使うのですから。最低限、大淀だけは確実に仕留める策を練っています」

鎮守府を占拠しているという時点で、裏をかくことはほぼ出来ないと見たほうがいい。そこに向かうための方向が固定されているのと同じだからだ。とはいえ、鎮守府ごと破壊してしまえば、ある程度はダメージは入れられるはずだ。

なので、一番重要なのは空爆。地下施設まで造られている可能性も考えると、より念入りに。奴らが私達にも仕掛けてきたものだ。やり返してもバチは当たらない。

それに誘き出されて外に出てきてくれれば尚良い。伊勢も日向も一時的に無視し、大淀だけは確実に息の根を止める。

「ですが、今はあくまでも伊勢と日向の戦力を憶測で想定した段階です。大淀の実力には不明な部分が多いため、予想が出来ません」

確かに、大淀が一体何なのが未だにわからない。今までに2回戦闘しているが、そのどちらでも圧倒的な力を見せ付けられた。謎の回避性能と、尋常ではない防御性能。私が全力でナイフを振っても、摘むように止められるのは辛いものがある。

隠蔽もここまで来ると尊敬出来る。その才能を何か別なことに使ってほしかった。

「そのため、今度の襲撃は危険な任務となります。本来なら戦闘力を持たない鎮守府とは違う施設への参加は促せません。ですが」

「この連中は因縁が強過ぎんだよなア」

「はい、来栖の言う通り、私怨と言っては何ですが、この者達は大淀への因縁が他より強い」

ほぼ全員が犠牲者。無関係なのは雷と摩耶くらいである。その2人ですら、この施設にいるという理由だけで狙われているのだから夕チが悪い。その上、飛鳥医師の医療の腕も危険視されているため、施設の存続そのものまで揺るがしてくる。

それ故に、全員の意思は一致していた。鎮守府襲撃には当然参加させてもらう。自分達のためでもあるが、これ以上のさばらせてはさらに犠牲者が増えてしまう。それを一刻も早く食い止めたい。

「先も言いましたが、強制は出来ません。自主参加、協力者として私達は受け入れる準備をしています。情報だけは開示しました。残りの時間で参加するかどうかを」

「考えるまでもないですね。大淀はこの手で捻り潰さなくては意味がありません」

下呂大将の言葉を遮るように赤城は言う。憎しみの権化として

蘇った赤城のこの言葉に、今回ばかりは賛同するものが多い。

私もそうである。大淀はこの手で終わらせたい。さんざん迷惑をかけてきて、のうのうと生きているなど許さない。

「僕としてはあまり危険なことをしてもらいたくない。命を賭して戦うだなんて言わないでもらいたい。必ず帰ってくることを条件にする」

「当たり前じゃない！ 私達、死にたくないもの！」

誰だって死にたくない。誰も死んでもらいたくない。

「意思是伝わりました」

「子供達が戦場に出張る戦いは、私としても早々に終わらせたい。協力感謝する」

新提督も頭を下げてきた。事実、この施設の戦力は他の戦力よりも重要視されている。ここまで何度も大淀の配下の襲撃を受け続け、無傷とは言わなくとも死者無しで乗り越えてきているのだ。経験が違う。参加せずとも教えることはあるかもしれない。

「作戦会議とは名ばかりの近況報告となつてしまいましたが、私からは以上です。準備が出来次第、また連絡します。おそらく襲撃は来栖の鎮守府から出立することになるでしょう」

「うちの鎮守府が一番近いんスよね。了解でさア」

その時になつたら、参加メンバー全員が来栖鎮守府に移動。準備が完了次第、全員で出撃となる。その準備も来栖鎮守府の方でされているらしい。主には鎮守府拡張。

おそらくこの施設からは全員が向かう。誰も施設に残らない。戦闘に参加しない初霜だつて、ここに残すわけにはいかないのだ。わずか数日ではあるが、一時的に施設を完全に空けることになるだろう。

戦いの準備は刻一刻と進む。使える手段を全て使って、奴を終わらせてやる。

再び舞い上がる

作戦会議という名の近況報告が終了し、そこからは事情聴取の時間となるため、集まり自体は解散し、医務室に場所を移す。医務室に入るのは蝦尾女史を除く人間4人と、その秘書艦である鳳翔、神風、瑞鳳。そして私、若葉である。どう考えても嘘をつくことはないことはわかっているのだが、もう様式美となりつつある嘘発見器としての参加である。三日月は相変わらず二二駆と如月に捕まっていた。

今回の聴取対象は五航戦。瑞鶴が目を覚ましたことで話を聴くことが出来るようになった。とはいえ、私達は既に翔鶴から聞いていることもあるし、復習する場にもなる。

瑞鶴はもう車椅子ではなく自力で歩いて移動することが出来るようになってきているが、稀にふらつくこともあるため、念のため翔鶴がついている状態。先に赤城を見ているからか、新提督は変わり果てた翔鶴を見てももう驚かない。

「私は二回改造されてるのよね。でも、何されたかはさっぱり。忘れてるとかじゃなくて、本当にわからないの」

この証言は翔鶴からも聞いていることだ。どんな改造をしたのかは一切不明。だがわかっているのは、瑞鶴は思考制御をされており、感情的だったものが沈着冷静に強制的にされていた。加賀との一騎打ちでも、怒りもせず、焦りもせず、淡々と戦闘を行なうだけの機械だった。

その結果が植物状態である。脳に二度の侵食を受けたことにより、致命的なダメージになっていた。それを治療出来たのだから、もうこれは偉業というレベル。

「私も、何故この身体になったのかがわかりません。細工されていたようですが、まさか深海棲艦へと変えられてしまうだなんて……」

洗脳されていた頃からこうなるだなんて思っても見なかったのだろう。身体の変化に伴い、洗脳そのものが失われているのだから、この改造自体が大淀の実験の一環なのかもしれない。

奴は自らを深海棲艦に墮とそうとしている節がある。私や三日月

の変化を至ると表現しているし、私達の身体を解剖して調べたいとまで抜かした。

「なるほど、貴重な情報でした。これは大淀の持つ技術ではなく、協力している人間の技術ですね」

そちらの方が意外だった。以前に言っていた2人の医療研究者が、この非道過ぎる改造をしていたと。

「もしかして男の人のこと？ 覚えてるよ。私に何したかはわからないけど、大淀と一緒にいたのは見たことある。男の人だからどうしても目につくよね」

女世帯の艦娘達の中に男がいればそれは目立つだろう。この施設でも唯一の男性である飛鳥医師は浮いているといえれば浮いている。全てが飛鳥医師を中心に動いているのだから違和感は無いのだが、やはり異性というのはそれだけで異質。

少なくとも、大淀の関係者である2人の医療研究者はまだ生きている。その上で、下呂大将の目に引つかからないということは、存在そのものを限りなく隠蔽しているということだ。

「飛鳥には話したと思いますが、彼らは艦娘の強化、壊れない艦娘を作るために裏で動いていた医療研究者です。そのため、艦娘の身体を弄り回しているでしょう。倫理的な部分など何も考えず」

吐き気がしそうだった。飛鳥医師も相当なことはやっていただろうが、それ以上とは。蘇生手段とそもそもその改造は似て非なるもの。治療ではなく破壊だ。

「僕が言えたことではないので、コメントは控えます」

「君は反省していますから、まだ許されます。しかし、奴らは大淀に与して世界の滅亡に手を貸していますから。知的欲求を満たすために世界を天秤にかけるとは、人間の風上にも置けませんよ」

下呂大将ですら憤慨している。新提督もその医療研究者2人のことは知っているらしく、顔を顰めていた。

とにかく、大淀はその男達を使い、自分の利益のために翔鶴にこの身体になるような改造を施し、瑞鶴をより使いやすい手駒に改造していた。ついには艦娘を深海棲艦に変えてしまう技術まで生み出して

しまったわけだが、それにより大淀は至ってしまったのだろうか。

「大淀が目的を達成し、すでに深海棲艦へと堕ちている可能性は十分にあります。そうなったら、伊勢と日向よりも強敵な可能性は高いです
すね」

「先生に言われると絶望的なんだが」

「大本営である君が弱気になるのは良くないですよ。私は勝てないとは一言も言っていない。当然勝てるように策を立てます」

これによりまた情報の修正が必要になったかもしれないと苦笑していたが、焦っているようには見えない。最初から何処まで想定して策を立てたのだろう。

「そうそう、その伊勢と日向のこと。あの人は大淀の一番の側近だから、離れることは無いよ。何があっても目につくところにいたはず」

「なるほど。なら、大淀が鎮守府から動かないのなら、伊勢と日向が襲撃してくることは無いと」

「そういうことかな。方針変えてたら知らないけど、私達があつちにした時はそう言ってたよ」

ならば、ここに襲撃してくるのなら伊勢と日向が来ることは無い。大淀本人が襲撃してくるのなら話は別だが、襲撃を受けるのなら他の者になる。例えば、真夜中の潜水艦隊の指揮艦のような。

そういえばと、その件について聞いてみると、やはり翔鶴がそれについて知っていた。

「彼女はここにいる呂500……ろーさんの次にあの立ち位置についてた子です。ルイさんですね」

「ルイージ・トレツリ、ですか。いや、今までの法則からして、改二以上であることが条件でしょうから、伊504ですね。どう名乗ろうと、その艦娘で間違いはありません」

呂500の後釜、伊504。名前を二度変えるという特殊な艦娘。ルイージ・トレツリは最初の名前であり、UIT-25を経由して、伊504へと辿り着く。完成品の法則として、最終改装が終わった状態であることは確かだ。

その名を聞いて、新提督が心底嫌そうに息を吐く。呂500の後釜に立つ潜水艦ということは、おそらく外見は子供。というか、潜水艦はシロクロも含めて幼い外見のものが多く。子供好きな新提督には、それが苦痛なようである。

「割を食うのは駆逐艦ばかりだ。気に入らない」

「ここで救われた者も、大半が駆逐艦ですからね。君の気持ちもわかりますよ。ですが、感情的にはならないこと。私がそう教えたはずですが」

「わかっている。だがな、言いたいことくらい言わせてくれ」

苛立ちが匂いでもわかる。直接の被害が無くともここまで怒りを剥き出しにしてくれる新提督は信用に値する人だ。大本営と違い、監査として働いているものの、少し施設に肩入れしてくれているのはわかる。

ここが品行方正な清い施設であるから、ここまで信用してもらえないというのもある。裏切らないし、裏もない。第一印象は少し良くなかったが、今はそれも払拭された。

「私達が話せるのはこれくらいかな。後は大体知ってることみたいだし、役に立ったかはわからないけど」

「男2人が生きていること、伊勢と日向が大淀の側から動かないこと、伊504の存在までわかれば、十分に役に立っていますよ。助かります」

「なら良かった。じゃあ、私はリハビリに行くから」

翔鶴と共に医務室から出て行った。今から弓のリハビリをするらしい。雨が降る中のため、あくまでも工廠内で出来ることしかやらならしいが、やらないよりはマシだ。

特に今は、来栖提督の鳳翔や、新提督の瑞鳳もいる。施設だけなら加賀だけしかいなかった弓を使うものが増えているこのタイミングで、出来る限りのことをしておきたいと考えているようだ。

洗脳が解けてからまた感情的になったおかげで、表情豊かで今の状況を楽しんでいる。見ていただけでもこちらが明るくなりそうだった。

「さて、では我々は今後のことを話しておきましょうか」

「わかりました。今頃、雷達が部屋を用意してくれていると思いますので、それが終わったらそちらを使ってください」

「私はここでいいですよ。一応こういう身ですし」
「理解しているのなら動き回るのをやめてください。医者として昔からさんざん注意していますが」

下呂大將は含み笑いをするのみ。これは医者 of 言うことすら聞かない夕子の悪い患者の顔。もう飛鳥医師も諦め気味のようにであった。

ここからはいつものように人間のみでの作戦会議となるようなので、私達も退室することとなる。

各種雑用から嘘発見器までやって、私はいわば飛鳥医師の秘書艦のような立ち位置にいるように思えた。それはそれで大それた立場に思えるが、飛鳥医師の役に立てているのならそれでいい。治療してもらった恩は、ちゃんと返せていると思う。

瑞鳳は工廠にダツシュ。鳳翔もそれについていき、瑞鶴のリハビリを見るそうだ。神風は相変わらず医務室前で門番。今回は施設に向していた旗風もそれに参加。私も瑞鶴のリハビリは気になっていたもので、2人の後を追う形となった。

途中、姉妹にもみくちやにされていた三日月を救出しつつ工廠へ。そこでは、工廠組が艤装の定期メンテをしつつ、空母組が一堂に会して瑞鶴のリハビリを行っていた。

「何日も弓を持たないと、やっぱり衰えちゃうわね」

「それに、今の貴女は本調子じゃないでしょう。ゆっくりでもいいから慣らしていきなさい」

加賀達の指導の下、哨戒も兼ねて外に艦載機を発艦させていた。雨の中の発艦は、それだけでも難易度が高いらしい。

私達には空母の戦い方はいまいちよくわからないが、一つわかったのは瑞鶴の放つ矢が以前よりキレが無いこと。ブランクが素人目にも感じることが出来るのだから、あちらの者達にはより重く感じられるのだろう。

「軸がブレているわ瑞鶴」

「少し力みすぎよ瑞鶴」

「狙いが少しズレたわね瑞鶴」

一射だけでこれだけ文句が出る。加賀はさておき、もう弓を使うことがない赤城と翔鶴からも容赦ない指摘。鳳翔は瑞鶴をジツと見つめて問題点を探し、瑞鳳はそもそもおかしな形の弓を見てニヤニヤしていた。瑞鳳はブレない。

「あーっ、もうっ！ わかってるからそんなにわーわー言わないで！」
案の定憤慨する瑞鶴。あれだけ周囲から言われれば私だっつてあんなる。

「リハビリなんだからもう少し甘く見てよ！」

「貴女は即戦力なのだから、早く復帰してもらいたい。それに、私も強くなるのではなくて？」

「ぐぬぬ……やってやるわよ！」

キーツと感情的になりながらも、矢を放つのをやめない。それでも放てば放つほど精度は良くなるのだから、さすがと言える。

「……やっぱり、貴女はそれくらいムキになっている方が私は好きよ」
「にやつ！」

不意打ち気味な好意に、瑞鶴が思わず矢を落としてしまった。それに対して赤城と翔鶴から総ツツコミを受ける。

そういうえば戦闘中に加賀がそんなようなことを言っていた。事あるごとにムキになってる方が、瑞鶴らしくて好きだと。クールに見せて熱い何かも持っている加賀の直接的な好意に、頭を弄られて感情の起伏を奪われていた時ですら混乱した瑞鶴は殊更に困惑する。

「い、いきなりそういうこと言わないでくれる!？」

「あら、別にいいじゃない。それに、この程度で心を崩しては戦場で戦えないわよ」

加賀が薄く微笑んだのを見逃さなかった。瑞鶴のことを可愛い後輩と称していただけであり、純粹に力を付けてくれることが嬉しい様子。

私と三日月が遠目に眺めていることに気付いた赤城がちよいちよ

いと手招き。何事かと近付くと、思いもよらぬ言葉。

「瑞鶴からどういう匂いがします?」

「……言っているのか?」

「ダメー。若葉アンタそういうのホントやめてよ!」

瑞鶴は感情が激しいのでそういう匂いも強い。だが人権の侵害になること間違いなし。瑞鶴の名誉のために、気付いたことは私が胸に秘めておくことにした。寝る前くらいに三日月と話すくらいはするだろうが。

「だが、心がブレているというのは若葉にもわかった。周りを先輩達に囲まれて緊張しているんだと思う」

これくらいは言っておいてもいいだろう。今の瑞鶴から感じられるのは、見られているという強めの緊張と、みんなと一緒にこういうことが出来るという喜び、後は加賀に対する微かな好意。一番最後のは公表しない方がいいもの。

「瑞鶴、この環境下で落ち着けるまでは射ち続けてもらおうわ」

「うえ……マジ?」

「当たり前でしょう。平和なこの場所でブレるのなら、戦場ではもつとブレブレよ、ブレブレ」

ブランク解消のために、ただひたすらに射と。しばらくは哨戒機が近海を飛び続けることになるようである。

「なんというか、面白い人達ですね」

「そうだな。これが本来の空母隊なんだろう」

三日月の呟きに同意。これだけ和気藹々としていられるのだ。結束の力も強く、仲間意識も高い。全員が全員を信頼し、尊敬している。背中を任せても苦ではない。

少し前までは顔を見ただけで殺し合いをしていた赤城と翔鶴もその中に入っているというのは感慨深いものである。

この環境なら、瑞鶴が戦場に戻れる日はそう遠くないだろう。鶴は再び舞い上がることが出来そうだ。

海の底の瞳

昼から降っていた雨は夜まで続き、夜間警備をどうしようかという状態になっていた。本日の当番は、姉と霰が戻り朝霜と巻雲がまたリザーバーになった九二駆。引率は摩耶。仮眠は取ったものの、土砂降りでは無いにしろ、この雨の中で一晩外に出るのは厳しく見えた。

「雨が止むまで施設内で待機しますか」

「じゃが、こんな天気の時ほど襲撃はあつたからのう」

「嵐の時は容赦なく待機だったけど、これはねえ……」

工廠から外を見るが、今のところ止む気配は無い。降り込んでくるほどの風はないものの、なかなか外に出るのには抵抗がある天候。流石に傘をさしながらの夜間警備は有り得ないので、出て行くのなら雨合羽着用。

今までこんな微妙な天気での夜間警備が無かったことが不思議だった。なんだかんだでここ最近嵐も来ていない。待つていれば止むかもしれないが、より激しくなる可能性もある。予報ではそのまま止んでいくらしいのだが、いつになるかはわからない。

「ひとまず待機な。センセに伝えておくわ」

摩耶が飛鳥医師に報告。強行するとおそらく明日の朝に文句を言われる。いくら簡単には風邪など引かない艦娘でも、夜通し雨に打たれたら何が起きるかわからない。少なくとも疲労感はいつもの倍以上になるだろう。

それでも夜間警備がやれる方法を模索してみるが、やはりいいアイデアは浮かばない。そんな中、霰が少し面白い案を出す。

「びにーるしーとで、だいはつに、やねをはる」

「屋形船でも作りたいの?」

「らくかなって」

見た目は面白そうだが、まず確実に戦闘に支障をきたす。霰の案は残念ながら却下で、工廠内からの夜間警備で落ち着きそうだった。長距離砲撃を前以て確認出来ればいいのだが、さすがに難しいか。

と、ここで意外な者から申し出を受ける。

「私達が夜間警備行くよ」

「仮眠も……取ってきた」

そう言うのはシロクロ。嵐の時は毎回、海中からの警戒をしてもらっていた。潜水艦の特性を活かした夜間警備により、雨の日は乗り切ろうということだ。

既に仮眠を取ってきているということは、最初からこうするつもりだったようだ。

さらにはその後ろに呂500の姿まで。いつもは雷や暁と同じ制服姿だが、今回はやはり水着姿。朝霜との戦いで窮地を覆したあの時のスタイルである。

「ろーちゃんも行きますって。潜水艦だもん、雨とかへっちやらへーだよ」

「私達は何度かやってるしね。それに、一度行っておいた方がいいですよ」

「……あの時の指揮艦が……また潜んでるかもしれない」

先日の暗殺部隊の指揮艦、伊504が潜んでいる可能性は捨て切れなかった。こちらを襲撃出来そうなタイミングを虎視眈々と狙っているかもしれない。

それに、また海底で怨念が蓄積されている可能性もある。雷は声を聞いていないが、現在発生中とかであるのなら、事前に何とかしておきたい。説得出来るならしておきたいし、難しそうなら眠ってもらえない。

「こいつら先に許可取ってやがった」

「すぐに止んだら必要無かったけど、これだけ降ってるからね。役に立つですよ」

「おう、えらいえらい」

というわけで、夜間警備は潜水艦隊に任せることとなった。雨が止み次第、九二駆が交代。摩耶は潜水艦隊からの通信を受ける役として、ある意味引率を続行する形となった。時が来るまでは、九二駆は談話室もしくは食堂で待機。

「まるゆも誘ったんだけどさー、明日朝から運転があるからごめんな

さいって」

「ふられちゃった……残念」

忘れがちだが、まるゆも潜水艦。水着姿を一度たりとも見たことはないが、潜水のスキルは当然持っている。ただし、ほぼ非武装に近いらしく、本人曰く陸の方が戦えるとのこと。さすが陸軍。

「それじゃあ、行ってきまーす」

「おう、宜しく頼むぜ」

通信機器は3人全員が持ち、海に飛び込む。海中なら雨など一切関係ない。ある意味最も適切な夜間警備要員かもしれない。

真夜中、何やら下の階で話し声が聞こえたことで目を覚ましてしまった。だが何者かが施設内にいるわけではなく、聞こえたのはおそらく摩耶の声。雨の音はあまり聞こえなかったので、そろそろ潜水艦隊と九二駆が交代するのかもしれない。

とはいえ、2階にまで聞こえる声で話しているというのはおかしい。何か切羽詰まるようなことが起きたのかもしれない。それは話し声というよりは叫び声だ。

「声が……聞こえましたよね」

三日月も同じように目を覚ましていた。別の部屋からも物音がし始める。下の階の声で、誰もが目を覚ましたようだ。

「警報が鳴らないなら敵襲じゃないみたいだが……何かあったのかもしれない」

「行きますか」

万が一のために靴だけは履いて部屋から出た。私達が出ると、続々とみんなが部屋から出てくる。さすがに気になった様子。

突如緊急事態になってしまったらまずいので、蝦尾女史もフラフラと寝ぼけ眼で外に出てきた。今回は戦闘音で目を覚ますことになったので意識もはっきりしていたが、今回は声を軽く聞いたくらいなのでこの調子。

1階に降りると、少しだけ騒がしかった。工場付近に待機していた九二駆が集まっており、その中からは摩耶の話し声が聞こえた。現在

通信担当をしている摩耶が話しているということは、その相手は勿論潜水艦隊。夜間警備中の3人が何かを見つけたようである。

「姉さん、どうかしたのか」

「う、うむ。潜水艦達が彼奴を発見したらしい」

奴とは勿論伊504。摩耶がその通信を受けて、少しだけバタバタしたのを私達が聞きつけてしまったようである。

現在、潜水艦隊が伊504を捕らえようとしている状態。前回の暗殺の際に逃がしてしまっているため、今回はさらに気合を入れて追っているようだ。しかしあちらは逃げの名手である。

『……まだ……追うから……!』

「おい、通信が途切れ途切れだぞ! 離れすぎだ!」

摩耶の声が聞こえる。通信出来る距離というのも当然あり、シロクロも呂500もその範囲から外れようとしている。それほどまでに遠くまで逃走しようとしているらしい。

こちらから行方がわからなくなったら、潜水艦は追いようがない。あり得ないと信じたいが、シロクロと呂500が行方不明になってしまったら捜しようが無くなる。そのため、通信範囲外には行ってもらいたくなかった。

『……ああもう、ごめん、遠退きすぎた! くっそー、また逃がしちゃったよ!』

「くそ、逃げ足だけはやたら早え……」

通信が回復したらしく、ホツと息を吐いている。あちらも通信の音が途切れると不安になるだろう。クロの声も少し安堵が混じっている。追っている時はムキになっているような感じだったが、落ち着いたことで一気に不安が押し寄せた様子。

『クロ、いるよー!』

『シロ……ちゃんという』

『ろーちゃんもいますって!』

通信途絶の瞬間があったために点呼。ちゃんと全員いることを確認できて尚のこと安心。

しかし、伊504は惜しくも逃がしてしまった様子。相変わらず逃

げ足だけは速い。そもそも私達を攻撃する仕様では無いようにも思えた。監査だけして、何かあつたら即逃げる。指揮系統も持っていたことを考えると、生存能力に特化されたスペックか。

あくまでもこの施設を監視するために調整された完成品かもしれない。詳細は潜水艦達に話を聞こう。特にシロクロは2回見ているため、特徴は説明できるのではなからうか。呂500も何か思い出しているかもしれない。

深夜ではあるが、全員が起きてしまったために急遽会議となる。夜間警備の者以外は寝間着であるが、そこは仕方のないこと。下呂大將ですら、この方が手早いからと寝間着代わりの検査着である。締まらないとは思うが時間が時間だ。これは仕方あるまい。

「伊504を追跡したと聞きました。様子はどうでしたか」
「えっと、私達は近くを周回してる時にソイツとかち合ったんだよ。あつちも滅茶苦茶ビツクリしてた」

夜間警備で近海の深海をグルグルと回っていた時に、たまたま伊504を発見したらしい。困ったことに、クロが発見したとき、伊504はその場に留まっていたそうだ。つまり、それなりに前からそこにいたということ。

「多分……結構前からいたんだと思う……海の底に新しい足跡があつた」

「ならば、海底からこちらを見ていたということでしょうか。さすがに深すぎて確認は出来ないと思いますが」

暗殺のときの物言いからして、奴は海上のことを正確に把握出来ているわけではないことがわかる。五航戦との戦いで人間魚雷を管理していたとしても、完全に見えていたわけではなさそう。

だが、海面までは見えていたと考えていい。爪先で海面を叩いた時に、その付近にあるものに対して魚雷を放つことが出来たのだから、海の中は全て視野と考えられるだろう。

「君達は2度、伊504と相見えていましたね。前回と違う点はありませんか?」

「うーん……どつちもすぐに逃げられたからなあ。姉貴、何かある？」
「……前回より速かった……単純に追いつけなかったから……」

「それ、多分タービン。ろーちゃんも使ったことあるって」

同じ立ち位置にいたことのある呂500の言葉故に説得力がある。記憶を取り戻したことにより、潜水艦隊のことは呂500が一番詳しい。

「ろーちゃん、あの子の前では喋らなかつたって。だから、ろーちゃんが治ってること、まだ気付かれてないと思う」

「そうですか。いい機転です」

やはり前任者として伊504の勝手はある程度理解しているようだ。

海上までは見えないが、海面までは視界が届き、持っているのは魚雷のみというところまでは同じ。タービンを使っている間は殆ど非武装であり、監視と逃走に特化している。その辺りは私の予想通り。

「多分だけど……あの子はこの監視をずっとしてるんだと思いますって」

「施設の中は当然ですが、施設の外側も海面に頭を出さなければ見れませんね」

「ろーちゃんもそうだったけど、目だけはいいから、すごく遠くからでも見えますって。昼はうんと遠いところからかな。夜は警備の人達に見つからないように、近付いてからこつち見てるんじゃないかなって」

ならば、こちらが視認できない遠方からでも工廠の中くらいは見えていたのではないだろうか。摩耶達が艀装の整備をしている姿などは、外からなら丸見えだ。

ということは、今日の午後にリハビリしていた瑞鶴は完全に見られていたのでは。それを指摘すると、呂500はうーんと頭を捻った後、乾いた笑いを浮かべた。

「多分、見られてますって」

「ならば、瑞鶴が治療されていることはバレていると考えていいでしょう」

「私達がそれを見ていたのもですかね」

赤城の言う通り、瑞鶴のリハビリを空母隊全員で見ているところも筒抜けだった可能性がある。赤城と翔鶴が本人であることはわかりづらいが、確かあの時は艦娘の方の服を着ていたはずだ。施設にいる艦娘で完成品と合致する者がいるのなら、それは十中八九救出した者。

「つまり、翔鶴が深海棲艦化したことも、正気に戻ったことも、大淀にバレたと考えるべきですね」

これは割とまずいこと。こちらの手札が思った以上にあちらに見られていたことになる。下手をしたら、暗殺の前からずっと見られ続けていたかもしれない。そうだとしたらあの夜襲は揺さぶりか何かか。

「これからは潜水艦隊の警備も定期的に行なうべきでしょう」

「お、ならうちの潜水艦使いますかい？ ほら、この前の襲撃で助かった連中、ここに恩が返してエって言ってたんスよ」

私が救った11人の潜水艦達のことだろう。潜水艦をどうにかするためには、潜水艦を使うのが一番。戦闘自体はお互いに全く攻撃が当たらないという不毛なものになるらしいが、警備と捕縛なら話が変わる。この近海にいてもらいたくないから、常に巡回するようにしてもらうだけだ。

万が一、それすらも払い除けるような力を、完成させられたことで伊504が持っていたとしたら恐ろしいが、呂500の言う限りではその辺りはあまり考えなくてもいいとのこと。海中ではやれることが極端に絞られるため、やりようがない。

「でしたら、そこは来栖に任せましょう。新さん、それでいいですね」
「今一番の問題である大淀絡みなら、大本営に持つていかずとも許可は出る。それに、万が一却下されても押し倒すさ。これは艦娘による一般施設への破壊工作だ。法を侵す行為なのだから、罰する必要がある」

ありがたいことに、大本営からのお墨付きも貰えた。今後は警備を一層強化して事に当たれる。せめて、手瀬鎮守府襲撃までの間は警戒

を厳となし、施設防衛に努めていかななくてはいけない。

集う潜水艦達

夜間警備で伊504を発見したシロクロ。それを追跡したものの、通信範囲外まで一気に逃げられてしまった。それにより、この施設は常に監視されていたということを知る。おそらくこれから監視は続けられるだろう。ならばと、こちらもそれに対策を取る。毎日海中も警備することにより、伊504を捕縛する方向に向かった。

それをするためには、この施設の潜水艦が足りない。シロクロと呂500だけでは回せないの、来栖提督が匿っている潜水艦をこちらに寄越してくれるそうだ。その潜水艦達は暗殺部隊の襲撃を受けた夜に私が救出した潜水艦達である。

「到着は明日ですね。みんな、若葉さんに感謝しているそうです」「みたいだな。治療も行き届いているようでよかった」

事が済んだのでみんなが就寝。私、若葉も三日月と共に再び眠りにつく。だが、さつきまで普通に会議までしていたものだから、妙に目が冴えてしまった。なので、眠くなるまでは三日月と話をしながら時間を潰す。

明日の朝が辛くなりそうではあるが、こんな状況なのだ。私達だけではないと思われる。明日は事が始まるのが遅くなりそうだ。

「助けてよかったな」

「はい。若葉さんの行ないが正しかった証明ですね。私も自分のことのように嬉しいです」

情けは人の為ならずと言うが、あの時は絶対に死なせてなるものとガムシヤラに救出してただけなのに、こんな形で自分に返ってくるとは思ってもよらなかった。三日月が言う通り、私のあの時の選択が正しかったと実感する。

大分無茶をしたとシグにすら指摘されたが、こうなってくれたのなら無茶した甲斐があるというものだ。

「楽しみです。でももう部屋はありませんよね」

「鎮守府とここを往復するんじゃないか……?」

「大変そうですけど……。もしかしたらまた施設が拡張されるかもし

れませんね」

医療施設がほとんど軍事施設になっていくように思える。あまりよろしくない傾向ではあるが、今更言っても仕方ない。全てが終わったら、また改装されるかもしれない。

翌日は遅い開始だった。夜中に全員起きる羽目になったせいで、最速で起きたものが日が昇ってからという大惨事。鳳翔すらも少し遅かったレベル。

私と三日月は中でもさらに遅かったようで、目を覚ましたら下呂大将と新提督は既に撤収済みであった。来栖提督は潜水艦達にこちらに来るよう指示した後、ここに到着次第帰投すること。今後の方針もそこで決めるそうだ。

朝イチに連絡はしていたようで、到着は朝食後そこまで時間が経っていないくらいのタイミング。それくらいと踏んでいた来栖提督が工廠で待ち構えている。鳳翔も付き添いとして参加。

私も救出した潜水艦達の元気な姿が見たかったため、便乗させてもらった。当然三日月も私の隣。

「おう、来た来た。先導はお前らか」

「最初は私だけでいいって言ったんだけど、この子達が聞かなくて」

「姉貴達が抜け駆けしやがったんだからさー」

「そうだそうだー。あたいらも久しぶりにここに来たかったんでい！」

救出した潜水艦達を施設まで連れてきてくれたのは、足柄と二四駆の残り。江風と涼風は海風と山風だけが鳳翔の随伴でここに来ていることをずっと根に持っていたらしい。海風と山風がこの場にいたら、姉妹喧嘩が始まっていたかもしれない。

潜水艦達はこの施設に襲撃してきたものの、来栖鎮守府からここまでの海路は流石に知らない。治療されて記憶を失ったわけではなくとも、そもそもこの施設を襲撃することに特化されていたのだろう、それ以外のことは全く教えられていなかったようだ。それなら案内役は必要。

「到着よ。浮上してちょうだい」

足柄が海中の潜水艦達に通信を送る。すると、海面にブクブクと泡が浮かんできた後、1人、また1人と潜水艦達が浮上してきた。

その姿は私達が戦った時と同じウエットスーツ姿の艦娘。本来の水着ではなくこちらを着用しているのは、この状態での活動が身に染み過ぎているせいなのだとか。海中は暗いので、通常よりもこの服装の方が警備に適しているようにも思える。

その中の1人が代表として私の前に出てきた。その顔は見覚えがある。いや、当然私が救ったのだから全員の顔は見覚えがあるのだが、それ以前から知った顔。伊168だ。

「伊168よ。貴女が私達を助けてくれたのよね。みんな、ちゃんとそのことは覚えてる」

「かなり強引な手段だったが、別状が無いようで何よりだ」

積極的に握手を求めてきたので、それに返す。私が後頭部に爪先が食い込むレベルの蹴りを打ち込んでしまっているため、ちゃんと治療されるかは心配だったが、今の調子を見る限り大丈夫なようだ。入渠しているのだから問題ないと思うが、若干不安はあった。

「二応、今回の潜水艦隊のリーダーをやらせてもらってるわ。前任の伊168とは別人だから、そこは間違えないでね」

それもあってウエットスーツを着ているらしい。先にいた伊168が通常、後に来た伊168がコレ。同じ艦娘が複数人いるため、服を変えることで差別化にもなっているようだ。私が服を切り裂いてしまった者もいるが、わざわざ作り直してもらったりもしているのだとか。洗脳されていた象徴でもあるのだが、これはこれで気に入っているのかもしれない。

「御礼を言いたかったの。あそこで助けてもらえたから、私達は生きることが出来る。本当にありがとう」

「どういたしました。だ。若葉はあの時出来ることをやったに過ぎない。むしろ、あれだけしか救えなかったのが残念でならない」

「胸を張ってよね。確かに私達よりも前に自爆させられた子達は気の毒だけど、誰も助からなかったわけじゃないんだから」

そう言ってもらえるとありがたい。私達は出来る限りのことをした。全員救うことは出来なかったが、ここにいる11人は施設のみんの力で今ここに居ることが出来ている。それを感謝されているのだから、わざわざ否定する理由もない。

「ああ、助かって本当に良かった」

「それでよし。じゃあ、今日から私達はここで、この施設の安全を守り続けるわ。司令官、任務の説明お願いね」

「おう、まずは身体を拭いてきなア。すぐに全員に伝えるからよオ」

ゾロゾロと上がってきた潜水艦達が来栖提督について施設の中に入っていく。私の側を通る者はお辞儀をしたり手を振ったり。全員が私に何かしらの感謝を表してくれる。

助かったのは私だけの力ではない。自爆装置を破壊したり、そもそも自爆を食い止めたりはしたが、最終的には飛鳥医師の手腕もある。その辺りもよろしくお願いしたい。

来栖提督からの説明はおおよそ小一時間程度。それが終わったら一斉に帰投になる。それまでの時間、江風と涼風から質問責めに遭った。途中からそれを止めようとする海風や、ただただ海風についてきた山風まで加わりてんやわんやだったが、それはそれで楽しい時間を過ごす事が出来た。

昼には潜水艦隊のみを残して来栖提督達も帰投。残された潜水艦隊は早速近海警備を始めてくれた。本日やってきた11人と、既に施設にいるシロクロと呂500を加えた14人によるローテーションとなる。

伊504はシロクロと呂500の3人で追跡しても逃げられたので、1回のローテーションで倍の人数は欲しいと考えている。1回につき6人とし、昼と夜で2交代制。当然休憩も設け、その時間もなるべく変則的に設定する。2人は休息になり、今日はシロクロと呂500がそこに当てはまることに。

その第一陣、昼の部の海中警備隊が出撃していくのを確認している。今回は伊168は行かず、夜の部に加わるらしい。それまでは自

室に待機となる。

部屋に関しては、11人が共同部屋でいいというなかなか凄いいことを言っていた。本来2人部屋ではあるが、職人妖精を足柄が連れてきてくれており、手早く1部屋を改装。潜水艦娘は小柄なものが多いで、警備に出ていない最大8人が待機出来ればいいと小さめのベッドだけが並んだ部屋になっていた。

「みんなこの役に立ちたいのよ。せっかく貰えた命なんだから」
「充分ありがたいさ」

「……みんながさ、私の周りにいるのよ」

昼の部が出て行くところを見届けながら、伊168が呟く。

人形にされていたということは薬を入れられていた。つまり、禁断症状が11人全員について回っている。それをあまり感じさせないのは、姉のように人形としての活動期間が少ないからのようである。罪悪感が少なめなおかげで、取り乱すほどの禁断症状にはならない。それでも幻覚や幻聴はあるらしく、この伊168もあの場で散っていった人形達の亡霊が見える時があるのだとか。無視出来るくらいなので表情にも出さないようだが。

「この子達のためにも、私達は役に立つから」

「気を張らないでくれ。力んでいたら出来ることも出来なくなるぞ」

「それもそうね。適度に力を抜かないと」

よくわかつている。切り替えも早い。

「あの中には、若葉に忠誠を誓いたいくらいの子もいるわよ。散るはずの命を救ってもらったんだもの」

「あまり重く考えないでほしいな」

それは私が蹴り飛ばしてでも自爆を止めた者。自爆を寸前のところで食い止めたことで、私に対して大きな感謝を持っているらしい。

忠誠を誓うというのは流石に言い過ぎ。助かった命なのだから、その分自由に生きてもらいたい。ましてや他人のために使うだなんて以ての外である。こういう協力関係ならありがたいのだが、跪かれるような関係は流石に望んでいない。そうされるために助けたわけでもないし。

「お前もか？」

「うーん、まあ感謝はしてる。後頭部壊れたんじゃないかって思い切り蹴られたのが最後の記憶だったけど、あれのおかげで私は死なずに済んだっていうのも理解してるし」

「その節はすまなかつた」

あの時は私もリミッターを外し、理性というブレーキを完全に手放していたので、生きていればそれでいいくらいの気持ちで蹴り飛ばしていた。だからこそそんな相手に忠誠は勘弁してほしい。

「他の子はどうか知らないけど、私はほら、生きていれば儲け物くらいで考えてるから。さつきも言ったけど、若葉には感謝してるんだよ。ホントに」

「みんなそれくらいでお願いしたいな」

「それは無理かなー」

こんなこと言いながらも、伊168からは好意の匂いもする。命の恩人に対してそういう感情を持つのは当然と言えば当然か。私も飛鳥医師のことは少なからず尊敬、信頼しているのだから。

「ま、期待してて。あっちの大將は私達が絶対見つけ出すから」

「ああ、期待している」

「最悪、ここに来れないように追い返せばいいわよね。捕まえられれば最高だけど」

無茶はしないように前提条件だ。前にシロクロと呂500が追跡したときも、通信範囲外に出ないように行動していたが、今回の潜水艦隊にも同じようにやってもらうことが決まっている。

何度も何度も繰り返し返せば、監視を諦めてここから出て行ってくれる可能性も高い。ガッツリ交戦するということになった場合は話が変わるが、呂500が言うには、タービンを積んだ状態での高速回避をする場合はほぼ非武装。交戦は無いと見ている。こちらは人海戦術でガンガン攻め込むのみ。

「後悔させたげるわよ。人様を利用するだけしたんだから」

「ああ、それでいい」

「追い詰められる側にしてやるんだから」

伊168から少し苛立ちの匂い。やはり利用されていたという事実は気に入らないようだ。誰だつてそうだろう。私達だつて最初は捨て駒にされていたわけだから、その気持ちは痛いほどわかる。

「ところでさ」

「なんだ」

「2人はどういう関係なの。型も違うわよね」

ここまで話してようやく私と三日月の距離感にメスを入れてきたようである。如月は一番にそこに踏み込んできたが、伊168は少し間を置いてから来た。

「大切な人だ」

「はい、大切な人です」

それくらいしか言うことは無いだろう。それだけ話した後、三日月はいつも通り左腕を抱きしめる。

伊168はちんぷんかんぷんと言った表情を浮かべたが、あまり触れない方がいいのだろうと話題を終わらせた。

ここからはこちらのターンだ。ずっとこちらを監視していた伊504を探し出し、最悪は撤退。あわよくば捕縛して、救出する。伊504も被害者なのだから、救ってやらなければいけない。

攻めに攻めるといふ戦術は今までにあまり無かったが、たまにはこういうのもいい。待ち続けているからあちらもやりたい放題やってくる。手痛い反撃にしてやる。

逃げの名手

私、若葉が以前に救出した潜水艦達が援軍として施設に駆けつけてくれた。今回の敵は潜水艦の完成品伊504。潜水艦同士による戦いで捕縛を狙う。基本的には殺傷能力のある攻撃はせず、捕らえることに専念してもらうことになる。

私は今までの戦い方から、海中の敵には無力。駆逐艦なのに対潜を全く訓練していないツケが回ってきている。施設内で対潜が出来そうなのは、姫や完成品として活動をさせられてきた九二駆の面々。特に朝霜はその辺りが得意らしいので、いざという時はやってもらう。「海上の夜間警備と海中の夜間警備は並行して行なってもらいたい。当然どちらからも来る可能性はあるからな」

「了解。今晚は若葉達の番だ。海中と連携したらいいのか」

「ああ。通信は海上にも伝わるようにする。もしかしたら浮上している可能性もあるからな」

海中のみではこちらを監視することは出来ない。そのため、伊504は定期的に海上に上がってきていると考えるべきだ。その瞬間を私達が確認出来ることはある。

「特に五三駆が夜間警備の時は、夜目が利く三日月がいる。若葉も今は利くんだったか」

「ああ、左眼だけだが」

「なら尚いいな。海上に出てきたときはよろしく頼む」

今施設の中で夜目が利く者はかぎられている。深海棲艦である者を省くと、私と三日月、摩耶しかいない。故に今後は引率に必ず夜目が利く者も加えられる。

今日は私と三日月がいるために問題はないが、九二駆の時は随伴には必須。今後は施設全体での優先事項になるため、いる者全員がリザーバー。今回の私達の引率はなんと五航戦である。

「僕は君達に頼らざるを得ない。頼んだ」

「ああ、任せてくれ。必ず伊504は捕らえる」

飛鳥医師に頼られるのはなかなか気分がいいものである。これな

らやる気も出るというものだ。

夜、夜間警備に早速繰り出す。こういう形で施設に貢献するのは初めての五航戦は、夜の戦いには慣れているものの何処か緊張気味。特に翔鶴は、今の身体になってから初めての警備任務である。自分がここにいていいものか悩んでしまうレベル。

「おそらくバレーているのでしようけど、私が警備任務なんてしていいのかしら……」

「気にしなくていいわよ！ 今は猫の手も借りたいくらいだし、そもそも翔鶴さんの夜目と艦載機はとつても役に立つわ！」

悩む翔鶴を雷が慰める。自分の存在意義を肯定されたことで、安堵の匂いが漂うように。翔鶴はあれだけのことをやらかしても、若干メンタル弱めか。

「翔鶴姉はまだマシよ。私なんて夜目も利かないつてのに」

「空母は多ければ多い方がいいわ。哨戒機は夜目利くんですよ。落ち込むくらいなら哨戒機飛ばして」

「何処の曙も口悪いわねホント」

同じように悩む瑞鶴に口悪く説明する曙だが、心配しての言葉であることはちゃんとわかる。最低限、私にはその辺りは筒抜けなので、余計なことと言うなという感情が私に突き刺さるのもわかる。

実際、五航戦の哨戒機は本当に重宝している。私達の視野が届かない場所もきっちり見回し、本来なら確認漏れをしそうなところまで警備が行き届いている。空母による夜間警備は本当にありがたい。

『こちら潜水部隊。若葉、聞こえる？』

『ああ、聞こえるぞ、伊168』

『海中は異常無し。海底まで降りてる』

海上と同時に海中の警備も同時進行。全く同じ場所を見ているわけではないが、通信が行き届く範囲で隈なく見ていくことが目的。おおよそは私達の真下にいるようにはしているようだ。

あちらの隊長は、昼に話していた通り伊168。通信の後ろからも他の潜水艦の声がちよくちよく聞こえる。こちらが世間話をしながら

らの警備であるのと同じで、あちらも話をしながらの警備。ただでさえこちらが暗いのに、深海は昼でもくらいのだ。黙々と周回していると眠くなるし鬱屈してくる。

『シロクロが言ってた足跡みたいなのも見つけた』

「了解。それがいつ付けられたものかはわかるか」

『ちよつとわからないかな。でも、昨日今日ではないけど、最近じやないかなって思う。海流で薄れかけてるから』

やはり伊504は海中に潜んでいる。今は見えないところにいるとしても、この海中の何処かにいると考えて間違いでは無い。

おそらくあちらの方が夜目が利き、視野も広いのだと思う。海底から海面を見て人間魚雷の方向を指示していたくらいなので、伊168率いる潜水艦隊が施設から出撃した瞬間を遠目から見ているとしても驚かない。

「引き続き頼む」

『了解。通信は定期的にやるから』

「それで頼む。こちらからも何かあれば伝える」

『ああ、あと』

改まった声。声からはさすがに感情は読めないのですが、あちらが何を考えているかはわからないが、少しだけ真剣な雰囲気。

『私のことはイムヤでいいわよ。いちいち伊168って呼ぶのも面倒でしょ』

「わかった。今後はイムヤと呼ぶことにする」

『ん、オツケー』

声の上擦ったようにも聞こえた。同時にイムヤの後ろからギャーギャーと声が聞こえる。自分だけズルい、自分も渾名で呼んでほしいと、通信越しでも聞こえるほどに騒いでいた。耳が痛く感じる。こちらの状況がわかったのか、通信がブツリと切れた。

「なんだったんだ一体」

思わず顔を顰めてしまったが、あちらは妙に盛り上がり上がっていたので今は気にしないことにする。嫌われているわけではないのだから、あちらの行動を否定するようなことはない。

私の一連の会話の流れは仲間達にも聞こえており、イムヤの声は私にしか聞こえていなくとも、海底側は何事もないことは伝わった。

「アンタ潜水艦連中から好かれてるわね」

「救出したからか、若葉のことを随分と好いてくれている」

「若葉さんの人柄のおかげですね。流石です」

三日月も喜んでくれているので私も嬉しい。嫌われるよりは全然マシだ。

「哨戒機からは異常無しって」

「了解。なら予定通り移動する。警備を進めていこう」

瑞鶴からの報告を受け、夜間警備を再開。敵を発見するという第一目標故に緊張感が高いが、割と和やかに事が進んでいった。

緊張感だけではストレスで疲れが酷くなってしまう。こういう状況でも心は穏やかに。常に本調子を出すため、心身共に健康体で事に挑む。

時間にして日を跨いでしばらくしたくらい。話題は思ったより尽きず、五航戦に施設のことを話したり、愚痴大会が開かれたりとしていたところ、翔鶴の哨戒機に何やら反応があったようだ。

「海面に何かを発見。ここから9時の方向」

「雷、声は聞こえるか」

「ううん、何も。だから、イロハ級が生まれちゃったわけじゃないみたい」

発見したものは浮上してきたイロハ級の深海棲艦ではないことが確定。声が聞こえるようなものではないということは、艦娘、もしくは鬼級か姫級の深海棲艦になる。

今現れそうなものなら、当然伊504が妥当。哨戒機から見えたということは、あちらも確認している可能性は非常に高い。今までの用心深さから考えると、この時点で撤退を始めている。

「イムヤ、こちらで何かを発見した。そちらから何か見えなにか」

『ちよつと待って。方向は？』

「9時の方向……あー、真東だ。ここから東」

方角に関しては少し曖昧ではあるものの、私達が現在どちらを向いているかはあちらか的には微妙かもしれない。大まかでも方角を言ったほうが伝わるはずだ。

その瞬間、通信から物凄い音が聞こえ始めた。周囲の潜水艦達が一斉に東に向けて航行を始めたようだ。

来栖提督が準備してくれていたのか、今回の潜水艦隊は全員が捕縛を想定したタービン装備。伊504がそのように逃げるのなら、こちらも同じ手段を使うのみである。

「若葉達も向かうぞ。最大戦速で東へ」

潜水艦隊と同様、私達も出来る限りの速力で東へ向かう。この海域で東というと、暁がこちらに向かってくるのを見つけた方角。大淀の前回の拠点がある方角になる。

今は下呂大將が襲撃したお陰で占拠し返し、今頃は更地か別の提督の鎮守府として生まれ変わっているのだろう。おそらくは今回の件とは無関係。

「哨戒は止めないでくれ」

「勿論。ですが、海中に潜ったようです。見失いました」

「了解。イムヤ達も向かっている。そちらにも任せよう」

それでも私達は向かうだけ向かう。イムヤ達が追いついたとして、再び海面に顔を出してくるかもしれない。そのため、海面への目視確認を怠ることなく、常に警戒しながら猛スピードで東へと駆けた。

『若葉、こっちからは見えた！ 結構深い！』

イムヤからの通信。私達からは見えないが、イムヤが目視での確認が出来たらしい。私達が海面で姿を見たと思ったら、既に深い位置まで潜っている。移動性能に特化しているだけあり、捕らえるのは至難の技だ。

「伊504か！」

『そう！ 私達はアイツ知ってるから遠目でもわかる！』

元は伊504が指揮する部隊に所属させられていたのだから、どれだけ遠くにいたとしても見覚えがあるのなら判断出来る。

『ああもう！ めちゃくちゃ速い！』

「若葉達も追う！ 方向だけ上に指示をくれ！」

私達は追うことしか出来ない。常に海中に居続けられたら、手が届かない。対潜能力が素人以下であることを呪う。そもそもあちらは何故かソナーに反応が出ないインチキキまである。

哨戒そのものがミスだったのかもしれない。哨戒機を見られたら嫌でも海中に潜るだろうし、あれだけ慎重ならその時点で撤退している可能性はかなり高い。

「何処にいるかわからないわ！」

「こつちから見えないのがホント鬱陶しいわ！」

高速で動いているというのもあるが、海中の敵は私達からは全く視認出来ない。移動もイムヤからの通信頼りだ。本当に向かっている方向にいるのかもわからない。

向こうは完全に逃げに特化していることは明白だ。こちらが先に発見しても取り逃がしてしまうのか。

『絶対逃がさない！ こつちの方が少しだけ速いわ！』

「頼む！ 打ち上げてくれればこつちで何とかする！」

『つて、うわっ！ 総員回避ーっ！』

急激な水流の音。おそらく魚雷。殆ど非武装と聞いていたが、やはりこういう時のために多少なり武器も装備していた。当てるためではなく、攪乱のために。

この一撃のせいで一気に突き放され、イムヤ達でももう手が届かないところまで行かれてしまったようだ。

『魚雷に煙幕まで仕込んだ！ こつちを撒くのに特化しすぎ！』

「くそ……また取り逃した……」

また逃げられた。何なのだアイツは。

一旦全員で工廠に戻り、休憩がてら作戦会議。奴が今晚またここに戻ってくるかはわからないが、2度も3度も撤退を許していると思うと苛立ちが積もる。五航戦による哨戒は引き続き行なってもらいたい、こちらはこちらで次の一手を考える。

精神的な揺さぶりも兼ねた監視なのはすぐにわかった。いると

思っていると行動が疎かになるし、これ以上見られてたまるかと焦りも出てくる。

「速さは私達と同じくらい。全速力でこっちの方が少しだけ速いかな」

「代わりに、魚雷やら煙幕やらで攪乱してくるといっわけか」

「目眩しされて、それが晴れたらもういなかったわ」

キーツと苛立ちを隠さないイムヤ。イムヤも伊504に対して自爆を促されたという恨みを持っているため、撒かれたことが腹立たしいようである。他の者もそうだった。

「若葉達が無力なのが辛いな……海中には手出しが出来ない」

「夜だと尚更ですよね……」

昼でも見えないものが夜に見えるわけが無かった。目視頼りの戦闘は、夜にするものではない。それもあつてかあちらは夜戦ばかりを仕掛けてくる気がする。

「摩耶達に頼むか。新装備を」

「いいかもしれないわね。今よりももつと速くなる装備？」

「タービンだけじゃ足りないなら、外付けでいろいろやってみるしかないだろう。推進装置か何かだな」

試行錯誤を繰り返せるほど余裕はないのだが、やれることは全部やっついていなくては堂々巡りだ。これ以上情報を渡してなるものか。もう殆ど渡してしまったようなものだろうが。

「次こそは捕まえるわ。こっちも腹が立つし」

「ああ。ただ見られているだけでもストレスは溜まるからな。敵に情報を流しているのなら尚更だ」

「ああもう、ホント面倒くさいわ」

みんなの心は一つなのだが、うまくいかないと気分が沈むもの。特にイムヤは苛立ちを隠さない。このために呼ばれたのに失敗したというのがどうにもこうにも気に入らないのだろう。

「ちよつと落ち着きましたよ。はい、お茶」

そこで、落ち着くために雷がお茶を淹れてくれた。気分を落ち着かせるためにご馳走になる。相変わらず美味い。

「焦っていても仕方ないな。次に繋いで行こう」

これだけの人数が集まっても捕らえることが出来ない伊504。一体どうすればいいのだ。焦ってはいけないのはわかっているのだが、飛鳥医師に任されている分、うまくいかない和不甲斐なさを痛感してしまう。

名案

リコの哨戒機を確認し、警備の任務はおしまい。今回も伊504を捕らえることは出来なかった。あの追跡戦の後は姿すら見ることが出来ず、一切の成果無し。施設は無事とはいえ、危険に晒され続けているのは変わらない。どうにか早く終わらせたいところだったが、焦りも禁物。

伊504の捕縛は現在の最優先事項である。野放しにしておく通常に不利益を被り続けることになる。情報戦とはそういうものであり、それに関しては常に後手後手に回っているようにすら思える。「スピードだけなら私達でも何とかかなりそうだけど、攪乱するためにいろんなことしてくるのよね。シロクロにも聞いている」

浮上してきたイムヤがボヤク。

今回使われたのは煙幕。視界を完全に塞ぎ、速度が落ちたところで一気に突き放す。海中なので煙幕というよりはイカ墨の類か。わかっていたとしてもそれを突き抜けるには抵抗があるだろう。自分の姿だけではなく、後発の魚雷を隠している可能性だってあるのだ。「こちらは何の手出しも出来なくてすまない」

「あれは仕方ないわ。海底に近かったんだし、夜だったもの。どうにかして浮上させられればいいんだけど」

私、若葉が率いていた五三駆と五航戦は、哨戒により発見は出来たものの、その後は何も出来なかった。煙幕で撒かれた後は何処に行つたかまったく見当がつかない。追うことすら出来ず、立ち尽くすしかなかった。

「三日月、大丈夫か？」

「疲れました……すごく眠いです……」

この中ではスタミナが一番無いであろう三日月はへろへろである。以前までの夜間警備でも眠そうにしていたが、今回は今にも寝てしまいうそなくらい消耗してしまった。

伊504の尖った性能に振り回されて、いつも以上に疲れ果てていた。精神的な疲労はなかなか堪える。スタミナトップの曙ですら

疲れた顔。

「よく頑張った。風呂に入ってさっさと寝よう」

「そうします……お疲れ様でした……」

もう朝食も無理と言わんばかりの三日月を連れて、私は風呂に直行。それを終えたらすぐに眠ることとなった。

目が覚めたのは相変わらず昼食時。朝食を抜いて眠ってしまったので、いつも以上に空腹である。隣の眠っている三日月に至っては、ぐうぐうと腹の虫まで鳴いていた。時間も時間のため、起こして早く昼食を摂らせてもらおう。

この時間も話題は伊504をどうやって捕縛するかになっていた。既に3度も撤退を許し、最初だけはシロクロが近付けたものの、それ以外は近付くことすら出来ていない。

「潜水艦隊のスピードを上げて、あの手この手で進路を妨害されて、結局逃げられるんだよな」

「そう！ そうなんだよ！ 最初の時なんて機雷ばら撒いてきたんだよあいつ！」

「クロちゃん……あまり騒がないでね……」

クロが熱弁し、シロがそれを鎮める。2回逃げられたのが相当悔しいらしく、次見付けたら絶対捕まえてやると意気込んでいた。

煙幕付きの魚雷や小型の機雷をばら撒く以外にも、泳ぎ方で海流を乱したり、わざと海底に向かって土煙をあげたりと多種多様な手段を用いるようだ。本当に厄介極まりない。

「マヤならもつと速く動ける装備とか作れないかな！」

「流石に無理だ。そもそもパーツがもう殆ど無えよ。嵐も来ねえから、ここ最近加入した連中の艦装修理で使っちゃった」

クロも私と同じ考えに辿り着いたみたいだが、摩耶自身にそれは否定されてしまった。そういったことに使えそうなパーツは全て赤城や翔鶴の艦装修復で使われており、次の嵐待ちと言っても過言では無いくらい、そういう部品は施設に無くなってしまった。

一昨日に雨は降ったものの、嵐では無かったため、浜辺に何かが流

れ着いてくる事もなかった。こういう時に限って天気が妙にいい。当たり前だが、わざわざ強化のために探し回る事も出来ない。海底に少しくらいはあるかもしれないが、微々たるものだろう。

「そうだとしても、あいつの方が一枚も二枚も上手だ。単純に突っ込むだけじゃ無理だろ」

「そうだけど、そうだけどー!」

「クロちゃん……落ち着いて……」

白熱してきたせいでクロが立ち上がりながら話すが、食べてる途中なのでシロが割と強引にクロを座らせた。

だが、それくらい悔しいのはわかる。今までにない面倒くさい敵だ。真正面から滅茶苦茶なスペックで押し潰そうとしてきた連中とは訳が違う。あくまでも無傷、こちらにも傷を負わないが、あちらには手が届かない。こんな敵は初めてだ。

「姉貴は悔しくないの!」

「悔しいけど……今は落ち着いて。食べてから考えてね……」

「うー……どうにか出来ないもんかなあホント」

お手上げというわけではないが、こんな方向性の敵が初めてだからか、全員が頭を悩ませている。

「みんなどうしたの?」

「今回の敵が、捕まえられないんじゃないよ。すばしっこくてのう」

「おにごっこ? はつしも、とくだよ!」

鬼ごっこと言えば鬼ごっこなのだが、海中を逃げ回るせいで難易度は極端に上がっている。更に言えば、こちらは全員鬼役なのに、たった1人の逃走者が捕まえられない。タッチすることすら出来ない。

「その者は潜水艦なんじゃよ。わらわ達には荷が重くてのう」

「はつしももおよげない……じゃあ、じゃあ、つりとかは? あけぼのちゃんがやってるやつで、そのひとひっぱっちゃう!」

「釣りだと少し深すぎるのう」

餌を引っ掛けて釣れるものならいくらでもやるのだが、海の底まで行くような輩をどう釣ればいいのか。さすがにそんなことは出来ないだろう。

と、この初霜のちよつとした発言を聞いたことで、釣り好きな曙が目を見開きながら立ち上がった。

「トロール漁よ！ あれなら捕まえられるわ！」

聞いたことのないような言葉。言葉としては漁業の一種のようだが、それが咄嗟に出てくる辺り、曙の趣味はだんだん深いところに向かって向かっているのかもしれない。

「そのトロール漁というのは？」

「曳網で魚を掬う漁のことよ。それっぽいもので捕まえて一気に海の上まで引つ張り上げればいいのよ！」

確かに網で引き揚げというのはいいかもしれない。だが、そう簡単に引つ掛かってくれるだろうか。いくら真つ暗闇の深海とはいえ、網は流石にバレるのでは。

「例えば、夜の闇に溶け込むような色にして、潜水艦の方々がそこに追いつくように追跡するとしたら」

蝦尾女史も素人ながらその方法は良いのではと案を出してくれる。自分からかかってくることは無いのだろうから、潜水艦達に網まで追いつんでもらうのは良さそうだ。伊504と共に捕らえられてしまう可能性は高いが、お互い身動きが取れなくなれば何も問題は無い。引き揚げた後に救えばいい話だ。

「網は赤城さんと翔鶴が引けばいいでしょう。深海の馬力を見せてください」

「あの、加賀さん、私達の艦装は掃海艇では無いのだけけど」

「似たようなものでしょう。それに、私達が引くより力が出るのは確かでは無くて？」

あの誰よりも大きな艦装を高速で動かせるほどの馬力を誇るのだ。網を引くなら赤城と翔鶴がいい。とはいえ、最終的には海上にまで持つて来なくてはいけないのだから、ただ引くだけではダメだ。

「話を進めるのはいいが、その網とやらはどうするつもりだ。普通の曳網だと、君達でも素手で引き千切れるんじゃないか？」

飛鳥医師の言葉で食堂が静まり返った。うまく行くかもしれない作戦かもしれないが、それが実行出来そうなアイテムがこの場がない

のなら意味がない。伊504を捕らえるための網なのだから、大きく頑丈なもので無くては破られてしまいうだろうし、すり抜けられてしまう可能性もある。

振り出しに戻ったかのように見えたが、はあと溜息を吐いた後、飛鳥医師がすぐに立ち上がる。

「来栖に連絡してくる。あそこの明石に用意してもらうさ。網もだし、引き揚げるための装置も作ってくれるかもしれない」

本来の工廠担当である工作艦の力を借りれば、今回の作戦に適うアイテムの作成が出来るかもしれない。明石だけではない。妖精の力も借りられるのならきつとうまく行く。

アイテムさえ用意してもらえれば、こちらが実行に移すのみである。しかし、あちらには情報が筒抜けになつてしまうので、練習など出来ない。用意出来次第の一発勝負。

「初霜、お手柄じゃ。お主の進言が道を拓いたかもしれないぞ」

「はつしもおてがらう？ えらい？」

「うむ、お手柄じゃ。偉い偉い」

「やったー！」

喜ぶ初霜を姉が撫で回した。こういう時に子供の何気ない一言が大きな成果を叩き出す時があるというもの。

捕縛の方法が見えたかもしれない。結構滅茶苦茶な作戦ではあるものの、今までで最も行ける確率が高そうな作戦でもある。今からはそれを成功させるために策を練り、出来る限り確率を上げていくのだ。

「二つ返事でOKをしてくれた。明石も乗り気のようだ」

来栖提督に連絡をした飛鳥医師がもう帰ってきた。なんでも、今回の作戦を話した瞬間に任せろと言ってくれたらしい。施設が潜水艦を欲したときに、追加で何か要求されるかもしれないと踏んでいたようだ。それが網とは思わなかったようだ。

「午後は作戦会議。来栖のところから装備が届き次第、決行する。

……僕は司令官では無いんだが」

「ここまで来たら似たようなものよ。胸張んなさい」

一世一代の大きな釣りに、発案者の曙はいつもよりもテンションが高め。

施設が一丸となつての戦いでも、このパターンは初めてのことだ。しかも一発勝負。念入りに計画を立てて、確実に成功させたいところである。

作戦会議をしつつ夕食時となつた頃、急な来客。海からやってきたのは、何と明石である。流石に明石だけでは怖いということで、護衛艦隊は二四駆。大発動艇による荷物運びもあるためにこの人選か。警戒態勢のこの施設に、非戦闘員の艦娘がよく来てくれた。

「準備出来ました！ 大型、かつ破られにくい曳網です！」

大発動艇に積み込まれたそれは、夜の闇に溶け込むような真つ黒な網。装備に紛れ込ませるように積み込まれ、明石達がこんなタイミングで施設にやってくるのを伊504に見られていたとしても、今回の作戦が知られないように工夫している。

一緒に運んでいる装備は、爆雷や機雷、探照灯など。曳網を悟られないようにするための武装にしている。あくまでも本命は隠し続け、土壇場で使う必殺の一撃。

「助かる。よくこんなに早く作ってくれたものだ」

「事態が深刻なのは常々聞いてましたから、妖精さん達も張り切っちゃつて。網自体はフレッチャーが使っていますから、それを大きく作っただけです。それにこれ、艀装に使う鋼材を練り込んでありますからね。駆逐艦の主砲くらいなら受け止められますよ」

普段使いたいくらい高性能な曳網である。この1回のためだけに使うのが惜しくなるほど。

曳網というものがそういうものようだが、相当大きなその網はおおよそ25m近くを覆えるものらしい。伊504の大きさを呂500と同じ程度だと仮定しても、十分過ぎるサイズ。これの場所に誘き出し、絡み取るように捕縛する。

「引き揚げに関しては私がやります。艀装のクレーンで巻き取りますよ。後が大変でしょうが、四の五の言っていられません」

そもそも工作艦としての膂力もあるため、引き揚げるには最適な人選なのかもしれない。

「私達は漁業支援の経験もありますからね。無駄かもしれませんが色々持つてきましたよ。ソナーでしよ、探照灯でしよ、それにこの子達！」

大発動艇の隙間から飛び出てきたのは、特殊な格好をした妖精達。熟練見張員と呼ばれるその妖精達は、その名の通り偵察や索敵に長けた性能を持つ。

伊504は謎の技術でソナーに引つかからないが、この妖精達はなんと肉眼で確認するというのだから恐ろしい。今回の主役級の人選である。

「使えるものは全部使しましょう。ソナーだって何かの役に立つはずです」

「つくづくありがたいな。なら、今晚決行だ」

「了解です！」

これにより、伊504との決戦は今晚執り行われることとなる。決戦というものの、一切戦闘が行なわれないデスレース。次逃げられたら、もう捕らえることは出来ないかもしれないという大勝負である。

「せつかくここまで来たんだ。江風達も手伝うぜ」

「はい、二四駆もその作戦に参加させていただきます」

海風率いる二四駆もこの作戦に参加してくれるというのだからありがたい。夜間警備の人数が増えたら、あちらはより警戒してくるかもしれないが、それも織り込み済みで作戦を考えていく。

大掛かりな夜間警備となるが、これで必ず終わらせてやる。さんざん逃げ回ったのだ、いい加減もういいだろう。

対潜掃討作戦

初霜の一言から生まれた曙発案の伊504捕縛作戦が、今晚決行される。来栖鎮守府の明石が作ってくれた、艤装に使われる鋼材が練り込まれたそれは、駆逐艦の砲撃くらいでは破れない程の強度らしい。これならば、伊504が対抗したとしても捕縛が出来るだろう。

この今までにない作戦を確実に成功させるため、今回はほぼ全員が夜間警備に出られるように準備をする。昨晚担当した私、若葉率いる五三駆も、2日連続となるが今晚も出られるように仮眠を終えた。発案者である曙がやたらやる気になっていたので、私達もそれに乗っかる。

「赤城、翔鶴は予定通り、曳網を持って最東端へ。そこに便乗するのは五三駆と潜水艦2名。乗せられるのか？」

「ええ、3人までなら滞りなく。翔鶴も問題無いわよね？」

「はい、私の艤装の方が赤城さんのものよりも台座が大きめですので、赤城さんが乗せられるのなら問題ありません」

私は赤城の艤装に乗せてもらった経験があるので、あの時の滑走を体験している。一緒に乗るのは勿論三日月。それと潜水艦を1人のため、イムヤに便乗してもらう。翔鶴の方には曙と雷。便乗するのは呂500。

私達が赤城と翔鶴の艤装に搭載される理由は、海底から私達が警備の最東端にいることを知られないようにするため。特にイムヤと呂500は追い込みの要として動くことになる。

私達は作戦開始となった瞬間に曳網の補助。万が一海上に浮上してくるようなことがあれば、私達が即座に対応することになる。仕事はないかもしれないが、念のための配置だ。

「対潜部隊として夕雲型4人を九二駆として配置。引率は加賀と瑞鶴。こちらは通常通りの夜間警備で頼む」

「あいよ。対潜はあたいが一番得意だかね。任せてくれよな」

変則九二駆で夜間警備となる。特に対潜性能が高い朝霜が陣頭指揮を執り、伊504を追い込む。海上からの追い込みなので、明石の

持ってきてくれた熟練見張員は全てこの部隊に使うこととなっている。

「さらに、二四駆で周辺警戒。人数の多さであちからからも警戒されるかもしれないが、海上に出てこれないようにするならそれはそれで都合はいいはずだ」

「ですね。あくまでも哨戒の域に留めます。対潜装備はこちらもしていけますので、その際はお役に立ちます」

二四駆による補助で、行動範囲をより狭めていく。なるべく網の方に追い込むためには人数が必要だ。

それに、あちらが伊504のみで来るとは限らない。以前の暗殺部隊のように、人形を引き連れて一転攻勢を仕掛けてくる可能性だってある。それを事前に食い止めるための追加部隊だ。

「潜水艦隊はいつも通り6人。予定していたメンバーでいい。シロとクロが先導する形でよかったか」

「大丈夫！ 私達がアイツを追い込むから！」

「何度も……逃がさないよ」

2度逃がしているためか、シロクロもやる気十分。特にクロは追い詰めたいという気持ちが匂いからも感じ取れる。

「明石には施設の近くで待機してもらいたい。赤城と翔鶴が駆け込んできたところから引き揚げ開始だ。出来るか？」

「お任せください。意地でも引き揚げますから！」

「私も手伝うよ。近海の哨戒しがてらでも出来るでしょ」

明石は施設付近で私達の帰りを待ち、戻り次第艦装のクレーンで引き揚げ開始。そこに手間取ることのないように、器用なセスも補助に入る。エコを使つての施設近海の哨戒もしつつ、その時を待つことにした。

「残りは施設防衛。この隙を突いて、またあの暗殺部隊が来るとも限らないからな」

暗殺部隊の話が出て、潜水艦達から負の感情が漏れ出る。自分達と同じような犠牲者がまた現れかねないと考えると、どうしても嫌な気分になるのだろう。

そんなことをされても、絶対に死なせない。また同じように全員救ってやる。もうあちらの思い通りには行かせない。

「……何度も言うが、僕は司令官じゃないからな？」

説明が終わったところで、飛鳥医師からは珍しく冗談めいた言葉が出る。緊張感高まるこの場を和ませるためか、慣れないジョークで空気を弛緩させた。

「決まってたじゃねえか。完璧なブリーフィングだったぜ！」

「君達が決めた作戦を復唱しただけだろうに。僕にはそちらの知識が無いから立案能力は皆無だぞ」

これにより、冷たい空気も少しは温まった。一息ついて、改めて言葉を紡いでいく。

「捕らえたらすぐに伊504の治療が出来るよう、僕と蝦尾さんで例の薬を作っておく」

「前にも言った通り劇薬ですので、何かあってもなるべく処置室には近付かないようお願いしますね」

「勿論、怪我人が出ないとも限らない。確実に治療出来るように準備はしておく」

治療の準備をしてもらっておけば、万が一のことがあっても安心だ。伊504だって完成品。敗北を感じたら自害の可能性がある。それは避けたいところだ。

施設には待つ者がいる。必ずやこの任務を達成させ、みんなで笑顔で帰投したい。

「じゃあ、作戦開始だ。よろしく頼む」

夜の海、私達五三駆は予定通り最東端に到着。この待機場所は、今までに伊504を発見して、惜しくも逃げられた場所よりもさらに東。伊504が現れるのなら、私達よりも西側で現れると思われる。最悪な場合は施設の間近になるのだが、施設にも仲間達は配置されている。そうなったらそうだった時。

少し時間を置いてから曳網を海に垂らし始めた。この姿を見られたら意味が無くなるのだが、先んじて潜水艦隊に周辺を警戒してもら

い、いないことを確認している。シロクロの深海の眼で確認しているため、信用度は高い。

『うわ、これ私達にも結構見づらいよ』

垂らされていく曳網を見て海中からクロの通信が届く。深海の眼を以ってしても、明石の持つてきてくれた網は視認が難しいようだ。ならば、海上にまで続く網の先端もわかりづらいだろう。

網の部分自体は海底に着くほどにまで長く、引き揚げながら滑走してもらおうとどこにか絡み付かせることになる。そのまま工廠付近で待機する明石にパスして、そこからは一気に引き揚げてもらう作戦だ。今頃明石も今か今かと待ち構えていることだろう。まだまだ時間は早過ぎるくらいなのだ。

『それじゃあ、こっちは警備に入るから。見えたら連絡するね』

「了解。頼んだ」

今回は代表者がインカムを使い潜水艦隊と通信することになっている。こちらでは私と曙が、九二駆は朝霜が、二四駆は海風が、そして施設側では明石と摩耶がこの会話を聴いている状態。通信傍受までされたら敵わないため、通信による会話はなるべく少なくしている。

時間はまだ早い。私達は同じ場所で留まり、哨戒機による警備を続けるのみ。しばらくは来ないだろう。

今までの傾向からして、この時間から近海に現れることはない。基本的には日を跨いでからこの付近に現れる。今のところ昼の潜水艦隊の警備では一度も姿は確認されていない。

昼は私達が気付けないほどに遠方からこちらを観察し、夜は施設を攻め込む算段を立てるために近付いてくるのだと思う。

「それでは、ここからは離れます。合図が来たら同時に曳きますから」「それでいいわ」

垂らすのは同じ場所からだが、待機は大きく離れてになる。大まかな場所は詳しい曙に決めてもらうため、移動するのは曙が乗っている翔鶴の方。ちようどいい間隔を空けてもらい、海中からの合図が来た瞬間にこちらの戦いが始まる。

翔鶴達が離れていき、ここからは待ち。普段の夜間警備と違い、同じところで留まり、ただただ待つというのは今までにない。赤城は随時哨戒機を飛ばしてくれているが、私達はやることもない。海面に足を着けないように、艦装の上でひたすらに待機となる。

「合図が来たら、貴女達でこの縄を引いてもらう。同時に私が施設に向けて最大戦速で向かう。これで行けるわね」

「ああ。その前にイムヤが急速潜航だな」

「そうね。網までもーちゃん最後の誘導になるから。多分一緒に絡まることになるわ」

網は今、海底にまで沈んでいる状態だ。そこから私達が少し浮かしたのち、赤城と翔鶴が引つ張るといふ流れ。

逃げ場を無くすためにも、イムヤが逆側からの追い込みをかける。タイミング的には、伊504を食い止めると同時に曳網に巻き込まれることになるだろう。これに関しては少々我慢してもらわなくてはいけない。

と、不意に三日月が少しだけ不安げな声を出した。匂いからもそれを感じ取れる。

「今日も来るんですかね……」

「来るでしょうね。ああいう輩は、常に最新の情報を味方に提供するために動いているはずですから」

赤城が忌々しそうに呟く。手瀬鎮守府に属していた時に似たようなことがあったのだろうか。その辺りは流石に聞くことが出来ない。ただでさえ散々な人生を歩んだ上に、深海棲艦として蘇るなんてことが起きてしまったのだ。人となりを聞くのも恐れ多い。

三日月の不安を取り払うため、少し抱き寄せた。4人も乗ると流石に狭い艦装の上だが、より強く接することで落ち着いてもらう。

「ただし、1人だけとは限らないわね。少数でも、またあの人形を連れてくる可能性はある」

その言葉で今度はイムヤが震えた。イムヤには未だに禁断症状は残っているのだ。今この時ですら、人形として使われていた仲間達の亡霊が見えているのかもしれない。話題に上がるのも少し抵抗があ

るようだ。

「イムヤ、大丈夫だ。来たとしても誰も死なせない」

「……うん、また助けてほしい」

「任せろ。海の中は難しいが、上に出てきたら確実に助けてやるさ」

誰も死なないのが一番の勝利だ。当然、伊504だって救う。無傷とは行かないかもしれないが、命を失わせることはない。

そこで問題となるのが自爆だ。完成品であり監視役でもある伊504に自爆装置が組み込まれていることは考えにくいだが、違う形で自爆することは考えられる。例えば、魚雷を近い位置で爆発させるとか。それを海中でやられた場合は、イムヤや呂500に食い止めてもらわなくてはいけない。

「今回はみんな気合いが違う。これで終わりにするんだ」

「……そうね。うん、弱気になんてなれないわ。あの子達のためにも、これで終わらせなくちゃ!」

「その意気だ」

イムヤの調子も戻ったところで、ここから長い待ち時間となる。いつもの夜間警備の時みたいに世間話をする事になった。

眠気覚ましも兼ねた世間話を続けて、時間としてはかなり経っていた。目を跨ぎ、そこからさらに経過して丑三つ時。これくらいの時間に夜襲を受けることが多かったので、少し気持ちを入れる。

「初めて襲撃を受けたのも夜だった。深夜ばかり、それも嵐の時が多い」

「なら、そろそろかしら。哨戒を少し強めるわ」

赤城の艦載機が少し多めに飛び立つ。相変わらず、深海棲艦の発艦は不思議だ。矢が艦載機に変化するのも不思議ではあるが、何も無い空間からポンポン出てくるのは尚不思議。

「私達は発見してもわざと通過させるくらいがいいのよね」

「ああ、危険ではあるが、施設に近付かせた方がいい。その方が捕らえやすいからな」

あちらの警戒の仕方は普通とは違う。哨戒機でチラツと見ただけ

で撤退するほどだ。それを警備の最東端からさらに東に向けて飛ばしているのだから、私達の作戦海域に入ることなく撤退される可能性だって普通にあり得る。

しかし、最初の暗殺の時は、夜間警備の下を潜り抜けて施設を直接狙ってきた。まるで私達をおちよくつているようでもあった。今回もそうされるかもしれない。

結局のところ、来てみないとわからないというのが実情である。海中の敵に対しては匂いもわからないため、感情を読み取ることも出来ない。結局、駆逐艦なのに潜水艦には無力だった。よくまあ、あの時のモグラ叩きが上手く行ったものである。

『敵潜水艦はつけーん！』

突如、クロの声が通信で鳴り響いた。

「来た……！」

「本当に通過されていたのね。警戒を厳としていたはずなのに、それはそれで悔しいわ」

などと言う赤城の表情は、いつもの表情から一転して深海棲艦のそれへと変化。隠す気のない殺意と攻撃的な深海の本能を表に出し、感情の匂いが一気に強くなる。

今回は一度も海上に姿を現さなかったということか。最初に見つけたのがクロであるくらいだし、うまく海中でエンカウント出来たようである。

「それじゃあ、私は行くわ」

「ああ、頼んだ。お前達が作戦の要だ」

「オツケー。必ず終わらせてやるんだから」

イムヤが艀装から降り、急速潜航。おそらく翔鶴側の呂500も同じように海に降りている。

ここからは通信回線は全てオープン。傍受されていようが無関係ない。海上と海中の連携が物を言う。

「クロ、敵は伊504だけか」

『他にもいる！ 1人だけじゃない！』

監視だけが目的ではないということか。いわゆる威力偵察に近いかもしれない。クロの言い方を聞く限り、以前の暗殺部隊のような大量の人形では無いみたいだが、1つの部隊として成立するくらいの人数はいるようである。

当たり前だが、潜水艦隊に自爆装置を止める手段は無い目の前で爆発される危険性は常について回る。

『自爆する前に気絶させりゃあいいだろ！ クロ、あたい達んここに誘導しな！』

『こちらも大丈夫です。いつでもどうぞ』

朝霜と海風の頼もしい発言。対潜攻撃で何かをする前に気を失わせればいいだけ。それが出来るだけの備えは今回はある。

施設で初となる対潜掃討作戦。これを最初で最後として、伊504との戦いはこれで終わりにしたい。絶対に逃がしてなるものか。

決死の漁

万全の態勢で夜間警備に挑む深夜。想定通りに伊504が現れた。今まで通り単独での監視ではなく、今回は潜水艦による部隊を編成して向かってくる。こんな時に限って面倒極まりない。

私、若葉率いる五三駆は最東端、伊504がおそらく通過したであろう地点で待機。曳網の先端の縄を握り、その時を今か今かと待ち構えている状態。捕縛作戦最初期は私達に出番は無い。海中のシロク口率いる潜水艦部隊と、海上の朝霜率いる変則九二駆による対潜で牽制する。

「朝霜、伊504以外の連中はソナーに引っ掛かるか？」

『それは大丈夫そうだけ。だけど伊504だけは相変わらずソナーに引っ掛からねえ！ 見張員には見えてるらしいけどな！』

それは安心した。見張員にすら見えないとなると本当にお手上げだった。それならば、先に随伴の潜水艦を全員気絶させ、伊504のみにした状態で予定の作戦を実行したいところ。

随伴の潜水艦は当然人形、つまりは自爆装置を持っている。どういう形であれ、現状は伊504に命の手綱を握られているということだ。撤退にも使われるだろうし、そもそも連れてきたということは、今回は施設を攻撃するつもりだったと考えられる。

『随伴のが攻撃してきたよ！ 今回は逃げようとしなさい！』

『よっしゃ！ なるべくこっちに誘導頼むぜ！』

私達は音声で状況を確認するしか無い。特に今ここの集まりでは、インカムを持つのは私だけ。私が聴いて、周りに伝える。三日月は私の耳に頭を近付けてどうにか音を聴いているようだが。

『くっそー！ 結構手練！ 前の暗殺部隊とちよつと違う！』

『海の上にまで攻撃してきますね。おかげで場所がわかりやすいです』

海風からも確認出来たようだ。それほどまでに今回はあちらからの攻撃も激しいようである。

今までに2回、監視を妨害して撤退させているからか、あちらは今

回こちらの数を減らしに来ているようにも思える。流石に随伴と一緒に監視するとは思えない。

「……あれも捨て駒か。自爆で何人が巻き込むために連れてきてるんじゃないのか」

「あり得ますね。こちらの数をなるべく減らせれば良しと考えています」

だから突破力だけに特化した人形。人間魚雷でないだけマシンだが、その分散々使い倒して不要になったら爆発させるという腹立たしい戦術が可能になってしまっている。あわよくば施設内で爆発させて、飛鳥医師を抹殺。リコや鳥海も爆殺されていた可能性がある。

捕縛作戦と重ねられたのは偶然なのだろうか。それとも、何かを見てこの数に変えたのか。例えば、施設にやってきた明石を確認したことで、人数を増やしたとか。

『つしゃあ、来いやあ！ 潜水艦達はあたいらの爆雷避けてくれよ！』
海上からの攻撃は、敵味方関係なしの対潜攻撃。分別しての攻撃は流石に出来ないため、容赦無しに爆雷を放る。どうせ殺傷能力のないダミーの爆雷なのだから、当たっても死なないと躊躇無し。

それは事前に潜水艦達からも許可が出ていた。本当にいいのかと何度も聞いたが、何度も許可が出された。必ず避け切るから好きにやってくれとも。

潜水艦達は暗殺者として仕込まれている記憶を全て残している。当然、その力を何もかも残したまま味方についてくれているわけだ。相手も同じだとしたら互角かもしれない。

「くそ……待っているだけがこんなに苦痛だとは」
「我慢しなさい。私達には私達の仕事があるわ」

この戦闘に参加出来ないため、焦燥感が募る。だが、赤城が言うように私達には私達の仕事がある。今持ち場を離れたら、どうせ撤退するであろう伊504を捕らえられる確率が低くなる。だから、今は我慢の時。

仲間達は強い。信用してあの場所を任せているし、信用されてこの場所を任されている。戦闘の音だけを通信で聴きながら、私達はその

時を待つ。

『打ち上げて！』

『つらあ！』

クロの声と同時に強烈な水流の音。その後には爆雷が爆発する音が聞こえた。海中と海上のコンビネーションで、随伴を1人ずつ確実に処理しているのだろう。

音だけ聴いていても、多少は有利に働いているようだ。見張員のおかげで朝霜筆頭に対潜攻撃が的確に当てられている。

自爆前に気絶させるという作戦は確実に出来ているようだ。代償として至近距離でダミーの爆雷が爆発しているせいで鼓膜がイカれてしまっているようだが、それはまだ治せる。

『まず1人！』

『みんないいよ！ いい感じに動けてるね！ ガンガン行こう！』

クロが歓喜するように、潜水艦隊が即戦力であることはとても大きい。経験をそのままに仲間になってくれるのは、禁断症状というデメリットがあるものの、メリツトの部分がとても大きい。だからこそ自爆させているようにも思える。これ以上こちらの戦力を増やさないように、使い捨ての駒を使い続けるだろう。

そもそも人形を使うこと自体が間違っているということに気付いてもらいたいものだ。あちらが小賢しい手段を使えば使うほど、こちらの戦力が整うのだから。

「伊504も攻撃に参加しているか」

『していない！ 相変わらず後ろから指示出してるだけ！』

やはり既に撤退する算段を考えている。全ての敵が自分より施設側にいることを把握しつつ、東にいるのは赤城と翔鶴のみというのも織り込み済みで撤退の経路を考えているはずだ。

だからこそ、ここでその考えを掻き回すための奇策。全くの別方向からの急襲。イムヤと呂500が、伊504の想定していない東側からの突撃。イムヤは暗殺者の時の記憶があり、呂500は前任者である時の記憶を取り戻している。さらには装備もタービンで高速仕様。

『この……っ！』

あちらからの合図のためにも、イムヤと呂500にも通信装置は渡してある。2人が伊504の真後ろについたことが通信からわかった。このまま捕らえられれば御の字。だが、そう簡単に行かないのも予測済み。

『うえあつ!? そーゆーの良くないと思うな! 何処にいたのさ』
『後ろにも目があるっていうの!? 今の完全に不意打ちだったでしょ!』

『あたしは何度も捕まった経験があるからそういうの避けるの得意なの。はにやはにやー』

通信先からでも小憎たらしい笑みがわかるようだった。本人の顔は知らないが。

真後ろから突撃しても回避されたらしい。呂500もブレーキを踏まざるを得なかったようである。回避と撤退に特化しているとはいえ、背後からの不意打ちすら避けるとはどういうことか。

『あー、でも、もう終わりにしようかな。こんなに人が集まっているなんて思っただけだったし。あ、でも何かいろいろ積み込んでたよね。武器がこんもりしたダイハツ見たからね。あたし対策かな? 全員分の対潜装備なんて用意しても、あたしには届かないよ。残念でしたー』
こう話している間も隙を見て捕らえようとしているのが、水流の音でわかる。が、その手は空を切るかの如く擦り抜け、伊504には全く届いていないようだ。見据えられながらの戦いは、ほぼ確実に避けられると見て間違いない。

『それじゃ、あたしはこれで。あ、みんなサクッと自爆しちゃつてねー』

案の定、自分の撤退をサポートさせるために随伴の潜水艦達を自爆させようとした。

が、爆発音はしない。伊504の指示は海の底に消えていく。
『……あれ?』

『自爆なんてさせるわけないでしょ。もつと人数連れてきてから言いなよ』

クロからの通信の音からは、鈍い音も何度か聞こえていた。あの様子

装をただぶつけるなどして、早急に気絶させることに特化したのだろう。そうでなくても他の潜水艦達と連携して無理矢理浮上させ、海上にいる九二駆や二四駆に処理を頼んだようだ。

思った以上に潜水艦隊が頑張ってくれた。潜水艦同士の戦いも想定に入れた立ち回りで、戦闘補助も上手く出来ていた。クロが合間合間に絶賛していただけであった。

『うわ、その子達ってそんなに強かったっけ。あたしが使ってた時はそんなじゃなかった気がするんだけどなあ』

『ちゃんと意思を持ってんだから、人形なんかには負けるかつての。大人しく捕まってくんない？ そろそろアンタ、面倒くさいんだよ』

クロにしては強い物言いだ。何度も逃げられたことで苛立ちが隠せないようになっていた。

『んー、Lo^嫌odio^だよ。あたしが捕まるわけじゃないじゃん。あれだけ捕まえられなかったのに、もしかして人数いれば捕まえられるとか思っちゃってる？ E^バ, un^カ pazzo^だなあ』

水流の動きはやたら激しくなっていた。話しながらでもスイスイ逃げ回り、徐々に撤退経路に舵を切っている。回り込んでも、一斉に取り囲んでも、一切お構い無し。どれだけスペックが高いのだ。

『Addio^さよ^なら^ら。また会おうね。次はいっぱい連れてくるから、覚悟しててねー』

やはり撤退。周囲をこれだけの人数に囲まれているのに、こちらが攻撃しないことをいいことにヒラリヒラリと躲していく。

だが、周りにこれだけいるので、回避に精一杯のように聞こえる。これだけ人数を揃え、周囲を取り囲んでもやっところまで。逃げることに精一杯になるほどにまで追い込んでいるのなら、ここからの作戦がうまく行きやすくなるというものだ。

『今』

小声で合図が来た。回避させつつも、徐々に一番いい位置に寄せていたのだろう。ついにこの時が来た。

「合図来たぞー！ 三日月、しっかり持てよー！」

「はいー」

『こつちも準備完了よ!』

『翔鶴さんもオツケー! 行きましょう!』

五三駆が縄を持ち、少しでも引き揚げた。絶対に離さないという意気込みの下、赤城に合図を送る。あちらも翔鶴に合図が送られたはずだ。ここからが本当の作戦開始。

「それじゃあ行くわよ。振り落とされないように、縄を離さないように!」

急加速により強烈なGがかかる。どうにか踏ん張るが、縄がやたら重い。加速の衝撃と曳網そのものの重さが全身にダメージを与える、それでも離さないように、縄を手首に巻き付けた。離れたら終わりだ。

「重いな……!」

「肩が抜けそうです……!」

駆け抜ける内に、海上の九二駆と二四駆の姿が見え始める。今の戦場に到着したということは、この足下の深海で潜水艦達が頑張っている。この真上に来たのだから、網にそろそろ。

「頑張って頂戴! ここからさらに重くなるわよ!」

赤城の言った通りだった。

『うええっ!』

通信越しに伊504からの悲鳴が聞こえたと思った瞬間、網の重さが一気に増した。伊504だけでなく、近場にいた潜水艦を纏めて絡め取っている。通信の水流の音がさらに激しくなり、網の絞まるような音まで聞こえる。

いくら真後ろからの接近を避けられるとしても、ここまで広範囲の網の前では無力。ギリギリまでこちらが抵抗して、死なば諸共な精神で撤退を妨害し続けたおかげで、網の接近に気付くことを遅らせたのが勝因。

「ぐうっ!」

縄を握る手が悲鳴を上げる。決して離さないように手首に巻き付けたことで、それが余計に食い込み、肌を傷を作っていく。だがそんなことはもう気にしていられなかった。手袋くらいしてくればよ

かったと後悔はしているが。

私と三日月が必死に網を掴んでいる中、赤城は一切スピードを落とさずに駆け抜けてくれていた。少しずつ少しずつ翔鶴との距離を詰めて、網を畳み込むように。

『こつ、こんな馬鹿馬鹿しいので捕まってたまるかつての！』

『逃がさないですつてえ！』

網の中ではそれでも逃げようと伊504が躡いているのだろうが、一緒に捕らえられた呂500がそれを阻止するために掴みかかったようだ。高速で動く網の中、より身動きが取れなくなるように殴りかかる。

それを見た他の潜水艦達も、伊504を押さえ込むために躡いた。特に艀装ごと引つかかっているシロクロに至っては、ここでも伊504を気絶させようとかかなり危険な攻撃まで仕掛けている。

『アサシモ！ 爆雷！』

「ま、マジかよ！ 後から文句言うんじゃねえぞ！」

もう通信越しで無くとも朝霜の声は聞こえる。私達の高速移動に合わせて潜水艦の絡まる網を追ってくれていた。そんな中でのクロのこの指示だ。抵抗はあるが、潜水艦達の意味が全て一致した上なので、朝霜がこの激しい移動の中の確な位置に爆雷を放る。

少しして、私の耳が壊れるのではないかと思えるほどの爆音が通信越しに聞こえた。

『きひつ……!?!』

網にかかった伊504の声が、明らかに今までと違った。朝霜の爆雷が直撃したか、そうで無くても衝撃が頭を揺さぶったか、強烈なダメージを受けたことで肺の空気が抜けたような悲鳴だった。

伊504だけじゃない。一緒に網に絡まっている全員が同じように声を上げる。本当に死なば諸共。ダミーの爆雷であるおかげで死ぬことは無いだろうが、おそらく半数以上がこれにより気絶。

「誰か状況を説明してくれ！」

全員がやられてしまったとは思っていない。誰かは意識を持っていてくれるはず。

『……伊504……気絶してるよ……』

息も絶え絶えなイムヤの声。衝撃をモロに受けても、ギリギリ意識を手放さなかったようだ。それでもまだ安心するのは早計。喜ぶのはちやんと網を全て引き揚げてからだ。

最初で最後の対潜掃討作戦は、最高の結果で幕を閉じようとしている。もう私の両手はズタズタだったが、これは名誉の負傷と言えるだろう。

漁船の帰投

決死のトロール漁は大成功に終わり、伊504を捕縛することに成功。作戦に参加していた潜水艦全員も巻き込まれる形にはなつてしまったが、伊504が連れてきた随伴の潜水艦も纏めて捕縛することが出来たのは非常に大きい。怪我人はいるものの、誰も命を落とさずに終えることが出来た最善の勝利である。

捕縛された伊504はダミーの爆雷により気を失っているため、急ぐことなく工廠に到着。むしろ急ぐと、網にかかった潜水艦達を海底に擦り付けることになってしまうため、ここまで来たら慎重に。今はギリギリ海底から浮いている状態のはずだ。まだ気を失っていないイムヤと通信しながらここまで運んできているからわかる。

「明石！ セス！ 曳網を受け取ってくれ！」

「了解です！ うわ、血塗れ！」

私、若葉率いる五三駆は、手の感覚が無くなるほどに握り締めていた曳網の縄を、工廠で待機していた明石とセスに渡した。その時にゆっくりと潜水艦達は海底に着地させる。ようやく腕にかかる負担が無くなり、血が通っていくように痛みが腕全体に回り出した。

「酷い怪我……すぐに治療するわね！」

「すまない……さつきまで感覚が無かったが、酷い痛みだ……」

施設で待機していた暁と如月に、ズタズタになった手を治療してもらう。修復材を薄めた艦娘用の傷薬を霧吹きで吹き掛けてもらい、後は時間経過での治療。これなら修復材の使用量も減らすことが出来るし、治療時間自体も自然治癒よりは早く終わる。寝て起きたらおおよそ治っているだろう。艦娘の身体に感謝。

「セス、準備出来ました？」

「ああ、言われた通りにセットした。これで引き揚げていい」

「それじゃあ、引き揚げまうえいいっ!？」

艦装のクレーンに曳網を引っ掛け終わり、工廠の陸から引き揚げようとしたのも束の間、明石がその重みに耐えられず海に引き摺り込まれそうになってしまった。咄嗟にセスが明石の身体を支えるが、ジリ

ジリと海側に持つていかれそうになっていた。

網が海底に着いているため安定はしていたが、いざ持ち上げようとすると力が足りていない。支えが有れば何とかかなりそうだが。

「何をやっているんだ何を」

そこに、リコの艀装がズリズリと這つてきて、その巨大な腕で明石を掴み上げる。これにより明石の身体は安定し、ゆっくりと網が海上に引き揚げられてきた。

セスも引き揚げられていく網を絡まないように引つ張りサポート。私達の血が滲む縄に何の嫌気も感じず触れてくれるのは嬉しいものである。

「そ、想定より重かった……支えてくれれば引き揚げられますんで、このままお願いします！」

「ああ、安定性には自信がある」

さすが陸上型。そこから動かないということに関して他の追従を許さない。艀装も大きく、安定性抜群。これなら潜水艦達の重みに負けて海に落ちることも無いだろう。

明石が握られている絵面はあまりよろしくはないが、痛みを感じていないようなのでそのまま引き揚げ続行。

「周辺警戒。まだ潜んでるかもしれないわ」

「全部終わるまではしつかり哨戒機飛ばしとくから！」

事が済んでもまだ落ち着けない。特に潜水艦による狙撃は、一度喰らった最悪な事態である。それを防ぐため、加賀と瑞鶴を筆頭に、空母隊がこのタイミングでの襲撃を警戒する。先程までフルスペックで海を駆け抜けた赤城と翔鶴もそこに参加。九二駆にも引き続き夜間警備を続けてもらい、施設に近付く者がいないようにしてもらおう。

『大丈夫……ちゃんと浮上していつてるわ』

イムヤからの通信も頼りに、明石が慎重に釣り上げていく。さすが工作艦、安定さえすれば、あの量の潜水艦もいとも簡単に引き揚げさせられることが出来るようだ。私達とは力の使い方が違う。

そして、海上からもその網が見える程にまで浮上してきたが、ここからが問題。明石のクレーンではそのまま上に上げるといことは

当然出来ない。そのため、陸地に転がらせる形で引っ張り上げる以外に選択肢が無かった。

「このまま引き揚げちゃうので、ちょっと我慢していてくださいよー！」
リコの艀装に頼み少し下がってもらうと、岸を軸にして網をそのまま陸地に乗り上げさせた。正直、私も予想していたもの以上の大漁っぷり。姿を見ていない潜水艦達全員が引っかかっているのだから、施設から出撃した8人と、敵対していた伊504含む7人ほどが1つの網にゴチャゴチャと絡まっている。

無理矢理引き揚げるしかないのです、陸側に面していた潜水艦は全員から潰されることとなってしまふ。それがよりによつてクロ。シロクロの艀装も一緒に絡み付いているものだから、それにも押し潰される形に。艀装を装備しているのだからそれで死ぬことは無いのだが、重くないわけでもない。当然クロの身体は悲鳴をあげる。

「ぐえ?!」

「だ、大丈夫!? すぐに解くからー!」

艀装の鋼材が練り込まれた曳網だろうが関係なしに、明石とセスが大型のニツパーやら何やらを使つて切断していく。また使う時は妖精の力を借りて修繕するらしく、今はさっさと解くことが先決と容赦なく破壊した。

「さすがに重いよお?!」

「ご、ごめんねクロちゃん……お姉ちゃんがすぐ退かすから……!」

「出ちやう出ちやう! 中身出ちやう!」

いち早く抜け出せたシロが、クロを救出。曳網が破られたことで、目を回している潜水艦達が雪崩のように倒れ込んだ。クロもさつきまでは気絶していたが、あまりの重さに目を覚ましてしまったようだ。

その中央、同じように目を回している伊504がグツタリとしている。ウエットスーツとは違うが黒で統一された水着のそいつは、やはり呂500と同じくらいの見た目の子供。本来の伊504は白いスクール水着らしいのだが、今着ているこれはUIT-25の水着らしい。なんてややこしい。翔鶴は一番最初の名前、ルイージ・トレツリ

の名で呼んでいたし。

「あなた……と、とりあえず……任務完了ね……ごめん、ちよつともう無理……」

ずつと通信をし続けてくれたイムヤもここで力尽き、気を失った。結果的に自発的に行動出来そうなのはシロのみ。他の者はなんだかんだダメージを受けてしまったため、治療が必要となる。

「この子は先生のところね」

「おう、仲間の潜水艦達は医務室でいい。すぐに運んでやろうぜ」

摩耶と鳥海が潜水艦達に適切な処置をしていった。最重要である伊504は、鳥海が抱き上げそのまま処置室へ。気を失っている潜水艦達は一時的に医務室へ。イムヤや呂500も同じように連れていかれた。

「こちらは人形ですね。自爆装置の解除はされておられない様子。心苦しいですが、先に処理をさせていただきたいと存じます」

気絶させられている人形はまだ自爆装置が解除されていないため、気を失っている内に旗風が処理してくれた。私と曙が負傷しているため、残っていてくれただけでもありがたい。

「りみったー……はずれてるのかな」

「ですね。こちらの方々が優先順位は高いでしょう」

自爆装置が解除されても、リミッターは外されたままのため、早急に処置が必要だった。伊504よりも先に人形達の処置を優先する必要がある。

旗風が処置した者から順に、霰が処置室へと運んでいく。さすがにこれだけの人数を寝かせることは出来ないので、寝る場所を用意するところからだ。霰だけでなく、手が空いた者からすぐにそちらを手伝いに向かう。

「若葉達はすぐに休んで。後は暁達がやっておくから」

「貴女達は重傷だもの。今は疲れを取ってね」

「ああ……すまないが、後は頼んだ……」

自分達で言うのは何だが、一番身体にダメージを受けたのは私達五三駆だろう。血を見たのは私達だけ。その血も敵にやられたとかで

はなく、ある意味自傷。

治療してくれた暁と如月に後を任せ、五三駆は早々に休息を取ることにした。身体がガタガタ、腕には今までに感じたことがない疲労が溜まっている。痛いとか痺れているとかそういうものは飛び越えてしまっているようにも思えた。妙な熱を持ち、疼きとはまた違った感覚。

「さっさと寝ましょ……疲れたわ……」

「お風呂行きたいけど無理よねコレ……一刻も早く休みたい……」

雷がへばるくらいだ。この消耗は相当なものだ。普段の戦いとは違う戦いを終えて、みんな散々な状態である。

フラフラと部屋まで辿り着いた瞬間、そのままベッドに倒れ込むように眠りについた。限界を迎えていた。

そんな時でも三日月は私の隣。とても気分が落ち着き、気持ちよく眠れそうである。制服のままであるが、これはもう仕方のないことだ。明日は潮の匂いがついたシーツを洗うところから1日が始まりそうである。

一眠りを終えると、外は当然明るくなっていた。それでもまだ朝と言える時間であったので少しだけ安心。ここ最近、こういうことがあると基本的に昼まで眠ってしまうことが多い。眠り呆けているいろいろとやらなくてはいけないことを放置してしまうのは良くないと思う。治療された両手は幾分か良くなっていった。まだ動かすと少し痛い、激痛というほどでもない。物を持ちたりするのに支障をきたしそうではあるが、あと1日で終わるだろうというところ。修復材の傷薬が随分と効いてきているようで何より。

「三日月、手の傷はどうだ。若葉は大分治ってくれたが」

「私も大分治ってくれました。でもまだ痛いですね……握ると痛みを感じるというか」

私と似たようなものだ。これは今日中は何かと協力しながら行動した方が良さそうである。

「いたた……傷自体はもうありませんけど、握り締めていた感覚がま

だ残っているみたいに思えます」

「だな……だが、悪くない。若葉達が頑張った証だ」

この痛みのおかげで、潜水艦達は全員ほぼ無傷での帰投が出来ただと思うと誇らしい。

三日月の言う通り、まだあの時の感覚が手に残っているようだった。必死に綱を曳き、痛覚が無くなるほどにまで握り締めたあの時の感触。これならば、痛みも悪くない。

「三日月、風呂に行こう。昨晚はそのまま寝てしまったから」

「はい、そうしましょう。若葉さん、髪もボサボサですよ」

「だがその前に」

痛そうにしている三日月の手を握る。痛いのだっただら撫でれば多少は痛みが引くだろう。三日月だけでなく、私も少し痛みが残っているのだから、お互いのために。

「これで少しは痛みは引くか？」

「はい……若葉さんの温もりが気持ちいいです。さっきまでの痛みが嘘みたい」

指までしっかりと絡めて、お互いの熱をお互いに与え合う。こうしている間は痛みが薄れているようだった。肌が触れ合うと心地良いのはいつものことだが、いつもとはまた違った感覚。こういうのも悪くない。

「ずっとこうしていただきたいですが……先に進まなくちゃですね」

「ああ。痛かったらまたやってやるさ。若葉にもやってくれ」

「はい、また後から。いつでもやりますね」

名残惜しいが手を離れた。より繋がりは強くなったように思えた。

『若葉、三日月、起きてるー?』

扉の向こうから雷の声。私達と同じくらいのタイミングで目が覚めたらしい。ある意味都合が良かったか。

「どうした」

「お風呂行きますよ。2人とも、昨日はそのまま寝ちゃったでしょ?」

「ちよūdそその話をしていたところだ。纏めて入った方が楽だな」

あちらも同じことを考えていたようだ。鼻が利くために自分達の

匂いはよくわかる。治療されたとはいえ手からは血の匂いがするし、あの時必死だった時の汗の匂いはより強くなってしまうている。早急に風呂に入りたい匂いにはなっていた。

私がこれだけ感じるのだから、雷や曙も同じだろう。最低限の身嗜みとしても、ちゃんと清潔にしておきたい。不衛生は艦娘とはいえよろしくない。飛鳥医師も注意してくるようなことだ。

「ついでにシーツ持っていくわね。今日洗っておかなくちや。あ、でも2人はベッド1つだったわよね。片方だけとりあえず頂戴」

「ああ、すまないな」

「いいのいいの。お洗濯も私のお仕事だし、今はお手伝いしてもらえるしね。もっと私に頼っていいのよー!」

昨日あれだけの戦いをしたというのに、元気なものだ。さすがは雷、と言ったところか。頼られるとそれだけで体力が回復しているようにも思えた。私達はこんなにキビキビ動けそうに無い。

今日はずっとグダグダだろう。戦闘の後なのだから、これくらい緩い方がいい。緊張感の抜けた今くらいの調子で、心身ともにさらに休ませていきたいと思う。

目覚める後任者

深夜に開始されていた潜水艦達の治療はおおよそ終わっていた。リミッターを外されていた潜水艦達は掛け直され、ここでは無く来栖鎮守府での治療となる。これは前の潜水艦達と同様だ。

問題の伊504は、蝦尾女史の薬により現在透析中。その前には当然胸骨と腸骨の洗浄も終わっている。それを手伝ったのは摩耶と鳥海だったのだとか。最優先がりミッターの掛け直しだったので、伊504の透析完了は少しだけ後に回され、終了が昼近くとなっている。

その頃には救出した潜水艦を引き取りにきた来栖提督も、いつものメンバーを引き連れて到着。これにより派遣されてきていた潜水艦部隊も撤収となるはずだったが、今後の夜間警備のことを考えて1人残しておくという話にもなった。

通常の夜間警備に1人足すことで、最低限の海中の警備も可能となる。伊504が救出出来たからといって、もう潜水艦の完成品が出てこないとは限らない。

「ということ、イムヤはここに残ることにします。私とろーちゃん、あとシロクロがいればローテ組めるわよね」

今までのことを考えれば、おそらくそれがベスト。1人、ないし2人潜水艦が増えれば、夜間警備が一層強固になるだろう。今まででも施設に被害が出ることは殆ど無かったが、暗殺者達の侵入は防ぐことが出来なかった。そこも抑えられればより良い。

当然他の潜水艦達からはリーダー特権の濫用だと文句が出ていた。自分達もここにいたい、いいのか悪いのかわからない要求はあったものの、そこは申し訳ないが抑えてもらう。また必要になったら必ず呼ぶとだけは言っておいた。そんなことが無ければ無いに越したことはないが。

「そろそろ伊504も目を覚ます頃だろう。来栖、どうする」

「んじゃア、見させてもらうぜエ。余裕がありや事情聴取させてもらおうか」

伊504を救出したことは既に下呂大将にも連絡済み。だがあち

らはあちらで手瀬鎮守府への襲撃計画が大詰め。手が空いているというわけではないが、まだ動ける方である来栖提督に事情聴取を同席してもらい、その情報を改めて伝えてもらうことにする。

「でけエ情報持ってそうなんだろオ？」

「ああ、おそろくな」

今まで監視役などをやり続けていたのだ。呂500がここで救われてからずつととなると、結構な量になる。それに、大淀との繋がりも深い方だろう。役に立つ情報を多く持っていそうである。

医務室。透析が完了し、蝦尾女史の手で装置が取り外されていた。そういった雑務的な部分は既に覚えたらしく、改めて飛鳥医師の助手として板についてきたようだった

以前の治療の成果と同様、もう深海の匂いは何処からもしない。完全に艦娘としての身体に戻っている。シロはまだ眠っているクロの付き添いで今はここにはいないが、薬の信用度は高いため今回はこれで目覚めさせることになった。

「治療が終わりましたよ。起きてください」

伊504を起こすのは蝦尾女史。肩をポンポンと叩くと、すぐに目を覚ました。何の抵抗もなく、何事も無かったかのように身体を起こし、大きく伸び。まるで記憶を失っているかのような振る舞い。

「ふああ、よく寝たー」

「おはようございます。伊504ちゃんですね」

「そだよー。伊504、ごーちゃんでもいいよー。あ、ルイでもウィーでも好きな呼び方でいいや」

これはこれでまた今までにないタイプの目覚め方である。今までやってきたことを忘れていてもないのに、最初からここまで飄々としていられるのもなかなかいない。特に今回は、蝦尾女史謹製の特性薬で完全に治療されたものだ。障害など一切残らない完治。

しかし、私にはわかる。明るく振る舞っている裏側に、複雑な感情が渦巻いていることを。これは何もかもすっかり覚えている。表面には開き直っているが、大分気にしているタイプだ。だが、本人の

意思を尊重して今は触れないことにする。

「何処まで覚えていますか？」

「んー？ 全部だよ全部。ここで何人も自爆させたことも、網に引っ掛けられたことも、全部覚えてるよ。ここのお兄さん殺せって言われたところからずーつとここにいたこともね」

お兄さんとは勿論、飛鳥医師のことである。最初の暗殺のときからずっと近海に潜んでいたようである。監視役の潜水艦として、その高性能を余すところなく使い切った仕事。

言い方がほんの少しだけ荒くなっているが、見た目通りの子供らしい雰囲気。言いたいことを言いたいように言っているが、それでも本心を隠している辺りは少し強か^{したた}か。

「あー……無理はしていないか」

「無理？ してないしてない。あんなことさせられても、あたしがやりたくてやったわけじゃないからねー」

ダウト。思い切り気にしている。裏で一人で泣くつもりだ。それでも表には出さない。

「いいじゃんあたしのはさー。あ、何か聞きたいことあるんだよね。あいつらに一泡吹かせてやるんだから、あたしの知ってること全部話しちやうよ。あい」

自分のことを気にさせないように捲し立ててきた。触れられたくないという気持ちが私でなくともわかるほどに溢れている。そんな時にズケズケと聞くのもよろしくないのです、まずは話を進めることにした。

「何故この施設を監視していたんだ」

「そりゃあ、何やっても治されちゃうからねえ。ここそこ情報送って、さくつと潰す手段を考えてたみたい。だからいつぱい人を送ったのに、それもどうにかしちやったからビツクリ。でも、ここ最近がちよつと違ったかな。オオヨドがね、時間稼いでこいつて」

潰しやすい時間だとか、他に何か面倒なことをしていないかとか、そういった部分を監視していたと。まあ監視というものはそういうものだ。

だが、時間稼ぎとは少し意外だった。確かに私達は伊504の対処に追われていた。私達だけでは捕らえることは出来なかったし、初霜のちよつとした一言が無ければ今でも追いかけて回っていただろう。

あの暗殺の夜が起点だったらしい。そこから伊504が近海に潜んでいることをわざと公にして、その回避能力で時間を稼ぐように目的がシフトして行ったらしい。

「何故時間稼ぎを？」

「うーん、確かね、自分を完成させるからって言ってたかな。だから、ちゃんと馴染むまでは時間稼いでおけて」

最悪な情報だった。私や三日月のことを至るための実験材料と言っていたが、結果的に私や三日月を使わずに至る道を見つけてしまったということだ。

その鍵がおそらく翔鶴。手段はさておき、外部からの干渉で身体が深海棲艦へと変化させる実験が成功したことで、ついに完成に踏み切ったと。あの時からそれなりに時間はかかっているものの、至るには十分すぎる時間がある。

「ならば、大淀は既に」

「深海棲艦になっちまったってことか。最悪じゃねエかよ」

まんまと策にハマってしまった。下呂大将が情報収集に手こずったのも織り込み済みだったのかもしれない。隠蔽し続けて、自分の思い通りに事を運び、結果至ってしまった。そこからさらに時間を稼いで、身体を馴染ませていくわけだ。最悪の場合、ここからは姿を隠すことなく攻め込んでくるかもしれない。

ならば、私や三日月はもう用済みとして殺される可能性もある。最初から実験台だから殺されずに捕まえられるなんて思っていないが、今までより一層容赦が無くなるのではないかと思う。

「大将には話しておかねエとな。襲撃はなるはやでつてな」

「ああ、その方がいい。正直まずい展開になってきた」

そもその状態で手も足も出なかったのに、そこから至ってしまったらさらに手が付けられなくなる。何処をどうやればあそこまでのスペックアップが出来るかが理解出来ない。

匂いも酷いものだった。最初から艦娘と深海棲艦が隅々まで混ざり合っているかのような、得体の知れない匂いだったのを覚えていた。未だにそれがどういふことかわからないが、人形や姫はおろか、完成品ともまるで違うものに成り果てているのではないだろうか。それこそ、赤城や翔鶴のような完全な深海棲艦へと生まれ変わっている可能性も捨てきれない。

「あたしが聞いているのはそんならいかなー。あい、おっしまーい。あたしまだ眠いからさ、もちつと寝させてほしいな。ふにゅ」

これだけ話した後、すぐに布団を被ってしまった。知りたいことは知れたので、今はそつとしておいた方がいいと思う。思った以上に深刻なダメージなのかもしれない。

「時間的にお昼ご飯ですけど、起きたら食べます?」

「ご飯! あたし先にご飯食べたい!」

布団を被っていたのにすぐに飛び出てきた。身体に不調も無いようである。さすがにこの変わり身に一同苦笑。元氣そうで何より。

裏側にある複雑な感情は、今は私だけが知っておくようにしよう。触れられることを望んでいなそうだ。飛鳥医師や蝦尾女史なら察していそうではあるが。

伊504は自己紹介もそこそこに、用意された昼食をもりもり食べていた。少し食べ方が汚かったが、そういうところも見た目通りと言えらる。

「^美deli^味zioso! これ、イカツチが作ったの?」

「そうよ。喜んでもらえて嬉しいわ!」

「これなら毎日食べたーい」

今までであったことを忘れたかのように振る舞う伊504に、周りも呆気にとられている。雷の料理を美味しそうに食べ、ニコニコ笑顔でおかわりまで要求。

「ああいうタイプは初めてだな……起きてすぐにあれだけ元氣というもの」

「ですね……」

上辺だけとはいえ、笑顔を絶やさず普通に生活しているのは正直凄
いと思う。代わりにストレスも半端ではなさそうだが。三日月もあ
の姿を見て唾然としている。

最初からこの施設の一員だったのでないかと思える程に馴染み、
友好関係を拓けている。コミュニケーション能力がとんでもなく高
いのは、クロと似たような感じ。潜水艦だし、何処かそういうところ
は似通っていてもおかしくはないのかもしれない。

「……あれだけのことをさせられたんですから、ショックが大きくて
もおかしくないですが」

三日月も何処となく察していたようである。深海の眼には映らな
いことではあるのだが、今までここで暮らしてきた経験から、その辺
りは勘が良くなったか。

「支えてやれるのは同じ潜水艦だとは思う。呂500は同じ境遇だし
な」

案の定、その呂500が一番近くにいた。気にかけているというわ
けでは無いものの、自然と寄り添う形に。伊504の匂いも、呂50
0が側にいる時は少し安心しているようなものに変化していた。心
落ち着ける存在として認識したのかもしれない。

同じように大淀に使われ、前任者と後任者としての関係ではあるも
の、お互いにそれに触れず仲間、友人として付き合っていこうとし
ているようである。

「潜水艦が増えるのは嬉しいものよ。ローテが楽になるもの」

イムヤは伊504のことをすっかり受け入れているようである。
仕事上の関係に見えなくも無いが、見かけだけでも気にしていないよ
うなら安心している様子。

イムヤも被害者として未だ禁断症状に苛まれる身ではあるが、立場
は違えど同じように使われていた伊504には恨みも憎しみもない
とのこと。

「潜水艦同士で相談して、今後の夜間警備に1人ずつ組み込んでいく
からね。明日明後日にはごーちゃんにも入ってもらおうわ」

「あの調子なら明日からでも動けるかもしれませぬ。体調も悪くな

さそうですし」

働くことは出来そうだが、問題は心の方。どういう形ででも、少しは気分が晴れるようにしてやればいいのだが。まずは交友関係を拡げて、過ごしやすい環境を作ってもらうのが一番か。あの調子ではそこは気にせずとも良さそうではあるが。

「イムヤ、お前もあいつのことを」

「わかってるわよ。心配はしてないけど、気にかけるくらいはしてるからさ」

「すまないな。ありがとうイムヤ」

「いいのいいの」

私が礼を言うと、素直に喜んでくれた。ここに到着した時から潜水艦一同、私への好意の匂いは薄れない。忠誠を誓いたいなんて大それたことも言っていたが、そこまでは望んでいないので自然体でいてもraithたいものである。

伊504の治療が終わり、一時的にでも施設の一員となってくれたことで、見据えるものは今のところ大淀とその側近である伊勢と日向のみとなった。これは下呂大将の指揮の下、鎮守府を襲撃することで終わることが出来るだろう。

決着の時は近い。大淀が予想外のことをしてこなければ、であるが。

死者の悪夢

治療され、洗脳が解けた伊504の話により、大淀が完成しようとしているという情報を得た。つまり今頃は、艦娘の身体を捨て、深海棲艦として新たな生を得ているかもしれない。馴染むまでの時間稼ぎを伊504に任せていたくらいなのだから、手遅れの可能性は非常に高い。

正直なところ、その情報を手に入れた時点で施設から出撃したくらいだった。だが、あくまでもここは鎮守府でも何でもない治療施設だ。大本営から目をかけられているとしても、それは流石に出来ない。だから情報は施設と繋がりが深い中でも最も大本営に近い下呂大将に流しているのだ。

今、施設で出来ることは、下呂大将の襲撃のタイミングを待つのみ。今回の進言により、より早くなったことを祈る。

そういうところは人間社会の残念な部分だと思ってしまうが、こういうルールがちゃんとしていなければ、私闘が当たり前の荒んだ世の中になってしまう。これに関しては諦めるしか無い。

「僕達はやることをやっていくしかない。時が来るまでは警備しか出来ないな」

「歯痒いですがね。立場を崩したら我々が世界の敵になりかねません」

昼食後の簡単な話し合いの場の中、心底嫌そうに溜息を吐く赤城。翔鶴との一件に決着がついてから大分物腰が柔らかくなったように思えたが、こういうところはすっかり深海棲艦の思想である。

自らの手で決着をつけたいものが多数在籍しているわけで、現状を良く思っていないものは同じ数いると考えてもいい。私、若葉もその1人だ。ここまで来たらもう出撃したいくらいである。

「俺も急かしておくから、今は悪イが待っててくれや。流石に大淀が完成してるってんなら、大将もケツに火がつくってもんだろ」

「それで不完全な作戦で突撃する羽目になっても困るが、先生なら最善の策を練ってくれそうではあるな。焦らずに行こう」

焦って事を仕損じては意味がない。ここは待ち。とにかく落ち着いて、進展する時を待とう。

来栖提督はこれで帰投。戻ってすぐに救出した潜水艦達を治療してくれるそうだ。また、援軍に来てくれた潜水艦達もイムヤを残して撤収。二四駆も同時に帰っていったので、一気に人数が減った感覚になる。

伊504も医務室に戻っていった。今日のうちは病み上がりということで医務室で休み、明日から本格参戦となる。本人も昼食が無ければまだ眠いからと寝ようとしたくらいだし、今はゆっくり休むべきだろう。開き直っているように見せて大分参っているのは私にはわかる。

だが、それもすぐに終わりを告げた。

たまたま通り掛かった医務室から呻き声が聞こえ、何かと中に入ったところ、伊504が酷く魘されていた。言っていた通り本当に眠っていたようだが、これはどう見ても悪夢に苛まれている。

「ごーちゃん、起きて、起きてください！」

あまりにも苦しそうだったので、いち早く医務室にいた蝦尾女史が伊504を起こしていた。これ以上そのままにしておく、今後に悪影響を与えそうだったからだ。

無理矢理起こされたことで目を覚ました伊504は、ゼエゼエと荒い息を吐きながら周囲をキョロキョロと見回す。医務室にいるのは私と三日月、後は蝦尾女史だけだ。呻き声自体はそこまで大きいものでは無かったため、医務室の近くにいないくは聞こえない。蝦尾女史は研究のためにたまたま処置室にいたために気付くことが出来たようだ。

「はあつ、ひつ、あ、あたし、あたしっ」

「落ち着きましょう。深呼吸です。ゆっくり息を吸って、吐いて」

蝦尾女史に言われるがままに深呼吸をしていく。その間も背中を摩りながら落ち着かせていた。見た通り子供をあやすかの如く。

「へ、へへ、無理してないって言ったのに、こんなになっちゃった……」

「……若葉は気付いていたぞ。お前、大分無理をしていただろ」

すごく驚かれたが、大淀に私のことは聞いているだろう、それを思い返したかすぐに納得した。納得はしたものの、理不尽なものを見るように顔を顰めたが。

他の者に気にしている事を知られたくないという気持ちもわかっていたため、私だけが胸に秘めていただけだ。

「ワカバ、その鼻の強さずっこいと思う」

「これで生きてこれたんだから許してくれ」

「ふにゆう……しようがないのかなあ」

だが、筒抜けということで素直に話してくれる。

やはり洗脳されてやらされたことは、伊504の心を深く傷付けていた。苛まれていた悪夢では、今まで殺してきた潜水艦達に海中で群がられて、何度も何度も殺されるものだったのだとか。全員から恨みを訴えられ、最悪なことにその全てが身に覚えのあるもの。

まるで、姫や人形に使われている麻薬の副作用だった。幻覚幻聴として稀に襲われるのではなく、それ以上のものを夢の中で受けるというさらに精神を削るもの。このままでは睡眠不足で伊504は参ってしまう。曙の不眠症とは訳が違った。

「あたしの都合でやったわけじゃないのに、何であたしがこんな目に遭わなくちゃいけないのさ……」

泣きそうな顔に。先程まで作っていただろう天真爛漫な表情は鳴りを潜め、大淀の被害者としての本来の姿が表側に出てしまっている。隠そうとしている負の感情が誰が見てもわかるほどになってしまい、その匂いはより一層強くなる。

性格が子供っぽい割には表面上を取り繕うことが上手いとは思っていたが、決壊してしまった今は、見た目相応の幼さに。

「辛かったら、甘えてもいいんですよ」

それを慰めるように、蝦尾女史が背中を撫でる。

「お昼寝で魘されるといふのは相当です。仮眠でも夢に出る程、心に深刻なダメージを受けているのですから、ごーちゃんは好きに甘えた方がいいです」

憂さ晴らしに周りを攻撃するようなことはよろしくないが、見た目相応に人に甘えるのは全く悪くない。好きに行動してストレスを発散し、自然に心の治療をしていくことが良いだろう。

「甘えられるほど、あたしは偉くないよ。みんなを殺してきたのは違わないし……はにゅ」

「そんなこと無いです。ごーちゃんは自分で言いましたよ。やりたくてやったわけじゃないって。私達はそれを全部わかっています。誰が一番悪いのかもです。ですから、気にせず甘えてください」

蝦尾女史は一度も笑顔を崩していない。怒ってしまったては伊504が余計に気にするし、同情しても落ち込む。だから、今は話を聞いて、存在を肯定し、甘えてもいい状況を作り出すのに尽力している。

子供に言い聞かせるように話し、とにかく心のダメージを癒すために、まるで保育士のように接していた。

「でも、でも、あたしが殺したみんなはあたしを許さないもん。お前が殺したんだって、めちやくちや怒ってたもん。追われて、追い詰められて、グチャグチャにされたもん」

それだけ恨まれているのだから、自分は許されてはいけないと。だが、それは夢の話だ。伊504が自らそう思っているために、悪夢という形で具現化されているだけの自分への悪意だ。

それほどまでに伊504のメンタルはズタボロ。まだ目覚めてから数時間ではあるものの、今まで隠し果せてきたのが嘘のようだ。夢という形ででも突き付けられてしまい、極端に弱気になってしまった。

「ごーちゃん、そんなに自分を追い詰めないでください。誰も咎めていません。みんなごーちゃんのことを許していますよ」

「でも、でも……」

「ごーちゃん、大丈夫です。ちよつと待っててください」

何か思い付いたのか、蝦尾女史は医務室から駆け出した。戻ってくるまでの間、伊504に声をかけることが出来なかった。何をしても私達では力になれないように思えてしまった。余計なことをして蝦尾女史の邪魔をしたくない。

少しして、蝦尾女史はイムヤと呂500を連れて戻ってきた。私も考えていたことだが、潜水艦の心を支えられるのは同じ潜水艦だろう。たった今そこに辿り着き、蝦尾女史は行動に移した。結果がこれだ。

「あ、ああ……」

動揺の匂いが強くなる。その姿を見たことで、伊504はさらに大きくショックを受けたようだった。先程食堂で同じ部屋にいたというのに、悪夢を見てしまったせいで感覚が変わってしまった。

特にイムヤは呂500とは違い、動きやすいからというだけの理由で常にウエットスーツ姿であるが故に、自分が自爆させようとした中の1人とすぐにわかってしまった。

「ローちゃん、ローちゃん、大丈夫ですって?」

まずは前任者であった呂500が慰める。同じ境遇の者がこの場にいるというのはそれなりに大きな影響力になる。立ち直れている姿を見れば少しは落ち着けるだろうか。

「ローちゃん……あたし、あたしい……」

「ん、わかるよ。ローちゃんもいっぱい酷いことしてきたもん。でもね、みんな許してくれたんだ。特に……ボノが」

自分の境遇をつらつらと説明していく。それで伊504が落ち着いてくれるなら安いものだ。

「死んだ人が生きてるの?」

「うん、せんせーが生き返らせてくれたって。だから、ローちゃんボノに自分の口で謝れたんですって」

「……あたしはそれが出来ない」

死者が蘇るだなんて普通ならあり得ない。曙は例外中の例外だ。だから、伊504が望んでもそれは出来ない。謝りたくても謝れない。

開き直っているフリをしていたせいで、まともな謝罪も出来ていなかった。それに、眠る前までは夢で自分の罪を突きつけられるようなことも無かったため、本人もこの事態を予測出来ていなかったのだろう。

「あたしidiotだ……強がって、おちやらけて、あたしのダメな部分見えてなかった……」

「そんなこと無いですって！　ごーちゃんもやらされてただけだもん。ろーちゃんが許してもらえたんだから、ごーちゃんも」

「ろーちゃんは死んだ人が許してくれたからそんなこと言えるんだよ！」

思った以上に重症。可視化してしまったせいで心の傷が拵げられてしまったとも言える。

「私は許してるわよ。死んだ子の声は聞こえないけど、殺されかけた私が保証しちやダメかしら」

今度はイムヤ。被害者であり、犠牲者になりかけた者の言葉なら届いてくれるだろうか。

「イムヤ……でもあたし……」

「落ち込んでる方が気分悪いわ。本当にごめんなさいしたいなら、下向いてないで前向いて」

少し強い口調ではあるものの、心配しているのは目に見えてわかる。

イムヤだって伊504に対して何か複雑な感情を持っていてもいいだろう。だが、それを見せることはない。本心から許している。伊504も被害者であることを理解している。

「報いたいなら、さつきみたいに明るく振る舞ってよ。嫌な夢見るなら誰かに甘えて。過ごしやすいように過ごしていいから」

「でも……」

「じゃあ、誰も許してくれないならどうするの。自分も死ぬの？」

真正面から打ち付けるような言葉。自分の罪と向き合ったことでどうしたいかはまるで考えていない。謝れないから立ち止まっていたとは意味がない。どう行動するかが重要だ。

ここにいるものは、みんな前に進むことを選択した。だからお前もとは口が裂けても言えないが、同じように前に進んでほしい。さつきまでは強がりだったかもしれないが、ここからは本心から。

「一緒に生きましょ。せつかく助かったんだからさ」

「イムヤの言う通りですって！　ろーちゃん、ごーちゃんとお友達になりたいですって！」

「うあ……そんな優しい言葉かけないでよお……あたし、あたしい……」

溢れてくる涙を拭いながら、自分のやりたいことに向き合った。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

「それでよし。あとはみんなとこの事件を終わらせれば解決。ね？」

「あい……あい……終わらせる、絶対終わらせるよお……」

立ち直れたかはわからないが、少なくとも匂いは落ち着いた。負の感情渦巻く複雑な匂いは、前向きになったように思えた。これなら伊504は歩き出せるだろう。

「だから、明日から夜間警備お願いね」

「この流れでそれ言う!?!」

「事件を早く終わらせたいのよね。今日は病み上がりだから休めばいいと思うけど、明日からはしっかりお仕事してもらおうから」

「鬼か！　でもやるよ。あたし、協力する。早く終わらせたいもん」

言葉とは裏腹に、イムヤも伊504も笑顔だ。ちゃんと前を向けている。事件を終わらせるために、みんなが協力してくれる。

「私達、出る幕無かったですね」

「別にそれでいいだろ。見届けるのも仲間だ」

「そうですね。全部のことに首を突っ込む必要は無いですもんね」

伊504の復活劇を間近で見届け、私と三日月はそっと医務室から出た。

これでまた1人、施設の仲間が増えたと言える。これからの戦いは、仲間が多いに越したことはない。

彼女の正体

やらされた悪行により、悪夢を見るようになってしまった伊504だが、蝦尾女史や潜水艦の仲間にも慰められ、再び自分を取り戻すことが出来た。明日からは夜間警備にも参加するとのこと、医務室から出てもう他の潜水艦達と相談を始めている。私、若葉も、三日月と一緒にさりげなくその話を聞かせてもらっていた。

その際、未だに検査着というのもなくはないというので、先程の来栖提督が調達してくれた新品の水着に着替えていた。洗脳されていた時代に使っていたものとは違う、伊504として本来着るべきである白いスクール水着。だが、普段使いにこれはどうかと訴え、呂500と同様に制服を着ることに。

呂500は雷の制服と同じものであるため、伊504も同じ制服を着ることとなった。カーディガンの色を変えた程度。どちらも海外から日本に国籍を変えた者同士という共通点もあり、同じ姿になると姉妹に見えなくも無い。

「ごーちゃん、似合ってますって」

「おー、やっぱり潜水艦だけど服は欲しいよね。はにやはにや♪」

伊504も大喜びであった。先程までの落ち込み方は彼方に消えて去っていた。今回は建前では無く、匂いからも負の感情はあまり感じなかった。

開き直ったといえは嘘になるが、ストレスになる程のダメージは無くなっている。仲間達に励まされたのが非常に効果的だった様子。昼食の時もそうだったが、一番仲が良いのは呂500。次がイムヤか。後は蝦尾女史に随分と懐いている様子。

「今日からエビちゃんのとこで寝かせてもらうんだー」

「そうなんだ。ちよつと羨ましいかもって」

「多分またあの夢見ちゃうだろうし、あたしの特権ってことだね。それに、部屋がいっぱいいいんだよ。ちよつどいいかなって思ってた」

医務室で独りで眠ると、またあの夢を見たときに辛いだろう。その

ため、蝦尾女史が添い寝をすることになるらしい。蝦尾女史の部屋は今1人部屋であり、実験道具がいろいろと置かれている状態ではあるが、眠るときくらいなら害は無いはずと、蝦尾女史側からどうかと話してくれたそうだ。

伊504が夜間警備に参加している時は、その時の誰かが添い寝を替わることになるのだが、その時はその時で決める。雷だったり、夕雲だったりするのだとか。

「イムヤは制服着ないの?」

「は? あー……私はまあこれでいいから」

「そんなこと言わずにいいじゃーん。あ、なんならほら、ワカバの制服とか借りるとかさあ。あたし達とは違うやつだし」

私の名前が出るとイムヤの態度も途端に変わる。イムヤと私は体型も似たようなもの。おそらく普通に着ることが出来るだろう。

ちらりとこちらを見てきた。私としては別に構わないが、イムヤはどうしたいのか。

「若葉がいいなら、うん、制服着てもいいかな。これの方が動きやすいんだけど、見栄えが悪いかなどは前から思っていたりはしてたの」

「別に若葉は構わない」

「じゃあ借りる。ごめんね」

さりげなく三日月に謝っていた。私の物を持つていくのは三日月が許さないかもと思っていたが、それくらいならと普通に許可を出したようである。

そのうち三日月も私の制服を着たり、逆に私が三日月の制服を着ることになるかもしれない。それはそれで楽しそうではある。

実際着せてみたら、思った以上にノリノリだった。私と違って着崩すことはしていなかったが、それでも私と同じ制服が着れたことを、素直に喜んでるように思える。

「こういうの初めてだから新鮮だわ」

「それは良かった」

制服の下にウェットスーツを着たままであったが、そこには突っ込まないことにした。イムヤにはイムヤのポリシーがあるのだと思

う。

五三駆で行なった夜間警備は何事もなく終了し、私達は就寝する。ただ夜の海をグルグル回るだけだが、一時的にでも潜水艦の脅威が取り除かれたとなれば、思った以上に気が楽である。

今回は少し予感があった。伊504の救出という大きな仕事も終わり、ついに大淀の背中に手が届きそうというところに来たことで、夢に呼ばれるのでは無いかと。

『予想してた?』

「ああ、少しな。ちょうど今境目だろう」

『だね。それに、そろそろ終わりが近いからね』

案の定、夢の中でシグと話すことになる。隣にはチ級もいてくれた。一度話が出来たら、ずっとここにいてくれていてみたいだ。シグと共に私の手助けをしつつ、行く末を見守るということらしい。

「チ級も元気そうで何よりだ」

コクリと首を縦に。見えている口元も微笑んでおり、大分感情を見せるようになってくれている。この身体の持ち主として、信用してもらえていると思えば嬉しいものだ。

『ごーちゃんも救えたから、後は大淀と側近の伊勢日向だけだね』

「ああ。だが、大淀が完成してしまつたらしい」

『みたいだね……それは残念だよ』

シグも大淀には因縁があるのだから、この報告は悲しいものだっただろう。チ級は部外者のようだが、私達2人が落ち込んでいるように見えたか、少しアワアワしながらも、少し悩んで私とシグの頭を撫でてきた。

表情は口元からしかわからないが、仮面から唯一出ている輝く瞳も、何処か優しげな光に見えた。私達のことを心配してくれているのがよくわかる。

「チ級、ありがとう。若葉は大丈夫だ」

『私も大丈夫。ありがとうね、チ級』

笑顔を見せるとホッと安心したようだ。

『さて、じゃあいつもの。ごーちゃんは大丈夫、保証する。なんて、飛鳥先生と蝦尾さんのコンビ治療の前には私の保証なんてもう無意味かな』

「いやいや、シグに保証してもらえれば、若葉が安心出来る。これからも頼む」

『ふふ、そう言ってもらえると、私も張り切っちゃうね』

ニンマリと笑うシグを見ると安心する。やはりシグから問題ないことを聞けると、事が済んだと実感出来るほどだ。若干依存してしまっているかもしれない。

『赤城さんと翔鶴さんの確執も無くなったみたいだし、目下の悩みは全部解決したんだね。後は大淀だけだ』

「それが一番の問題なんだがな」

『だね。結局私にもアレが何かわからないんだ』

大淀自身との戦いはまだ2回。それを見ただけでも、奴が一体何なのかは不明のまま。

匂いとしては艦娘と深海棲艦が混ざり合ったもの。私や三日月のような侵食を受けたものとは違うし、姫や完成品のような混ぜ込み方とも違う。細胞レベルで混ざり合っているような匂いだった。それに、本人は深海のものを取り込んでいるとも言った。どういう理屈で取り込んでいるかは全くわからない。

『でも、得体の知れないのは確かだよね』

「本当に一筋縄では行かない奴は」

『うん。でも、それも終わりだよ。どんな相手であれ、私らは大淀を倒すんだ。でしょ?』

勿論だとも。次に会ったときは、決着をつけるときだ。三度目の正直とも言おう。

『勿論力を貸すよ。私の目的でもあるんだ。私を殺した大淀には報いを受けてもらわなくちゃいけない』

少しだけ険しい顔になるシグ。大淀の話になると、どうしてもその恨みが表に出てきてしまう。そういうところはしっかりと深海棲艦だ。いつもは底抜けに明るいと言うか、私との会話で平静を取り持ってい

ると言うか。

匂いを感じられないのでシグの本心を掴むことは出来ないが、裏表のない性格であることは今までの付き合いで何となくわかっていることだ。私には決して嘘をついていない。

「シグは大淀に殺されたんだっただな」

『そうだよ。最初に言ったと思うけど』

「ああ。そのだな、どう殺されたとかは覚えているのか？」

言葉に詰まるようだったが、私には全て話そうと思っていたようで、意を決したように話してくれる。

『覚えているというか、思い出したかな。ここで長く過ごしてきたからかな、つい最近なんだけどね。聞かれなかったから話さなかった。ごめんね』

「……いや、構わない。で、どうして大淀に」

『深海棲艦としては普通だよ。大淀のいた鎮守府を襲撃したんだ。それで、返り討ちにされたんだよね』

少し意外だった。完全に友好的な深海棲艦だと思っていたが、人間を襲うようなことをしただなんて。その時は頭の中も真っ黒だったが、死んだことで今のようになったということなのだろうか。

だが、憶測ではあるがシグはいろんな艦娘の想いの結晶だと言っていた。艦娘の想いの結果が鎮守府の襲撃というのなら、取り返しのつかないくらい怒りと憎しみな気がする。手近にある鎮守府を襲ったのだとしたら尚更だ。

「何故……襲撃を？」

『……言わなくちゃダメ？』

「いや、言いたくないならいい。シグにだって若葉に曝け出せないことがあるだろう。無理強いはいしない」

少し悩んだ後、小さく息をついた。私には隠し事もしたくないと、気持ちのいい笑顔を見せてくれる。

『実は……ね。私は自分の鎮守府を取り戻そうとしたんだ』

「……どういう、ことだ？」

『私はさ、家村提督の部下だった艦娘の想いの結晶だったんだよ』

絶句。正直な話、それは自分の中では予想出来なかった。言い方は悪いが、野良で生まれた姫が狩られたとばかり思っていたが、大淀とはそこまで大きな因縁があったなんて思いもしなかった。

家村提督が大淀に殺されたということは下呂大将から聞いているが、どのタイミングでどう死んだのかは知らない。少なくとも私が建造された数ヶ月前には死んでいたし、そのときにはシグ自身も死んでいた。ラグは大分あるが、飛鳥医師なら拾ったシグの亡骸をそれくらい長期保存出来るようにはしているだろう。

『まだちゃんと思いついたわけじゃないし、これ以上思い出せないようにも思えるんだけどね。とにかく私は、大淀に最初から恨みがあったんだ。艦娘としても殺されて、深海棲艦としても殺された。そして今、若葉の中にいる状態でも狙われてる』

家村提督が大淀に殺された時、最初から部下だった艦娘も口封じに殺されていたらしい。理不尽に殺された怒りと憎しみから深海棲艦化し、憎しみに吞まれて大淀を殺そうと襲撃したが返り討ちに遭い、その亡骸がこの施設の近海に流れ着いたということのようだ。

生まれ方としては赤城と似たようなものか。纏めて殺されたことでその艦娘のあらゆる感情が混ざり合って生まれたのがシグだ。怒りや憎しみだけではない。家村提督を守れなかった悲しみなども混ざり合っている。負の感情が多めであるのは確かであるが、正しい感情も数多く含んでいる。だからこんな明るく、協力的な性格なのだろう。そういうところは赤城とは違った。

私は言葉も無かった。シグは淡々と話してくれるが、正直気が気ではなかった。私なんかよりも壮絶すぎる境遇に、何も言えなかった。『完全に混ざり合ってるから、赤城さんみたいに私が何者かというのはよくわからないんだよね。素体みたいなのは無いんじゃないかな。あの時、大淀には何人も殺されたから』

「そう……か……」

『引いちゃったかな。うん、ごめんね』

苦笑された。そんな境遇でも、笑顔が見せられるシグは正直凄いと
思う。

チ級は訳がわからないという表情ではあるが、私の態度からいろいろ察したようで、シグを抱き上げて頭を撫でた。くすぐったそうに身をよじるシグだったが、抵抗は無い。

「シグ、お前の仇は必ず若葉が討つ」

シグのことは他人事ではない。自分のことのように憎しみが増したように思えた。奴にこれ以上、好き勝手させるのは気に入らない。『これだけ思い出しても自分の手で決着がつけられないのは悲しい。だから、若葉に任せるしかない。ごめんね、でも、ありがとう若葉』改めて握手。シグが思い出したことを曝け出してくれたことは嬉しかった。隠し事も無く、私のことをそれだけ信用してくれているとわかった。

なら、その思いには応えなくてはいけない。必ず大淀に引導を渡してやる。施設の者だけではない。シグの、家村提督の部下だった艦娘達の間も上乘せして、完膚なきまでに敗北させなくてはいけない。『でも無理はしないでよね。私は若葉と生きていきたいんだから。勿論、三日月ちゃんともね。それに、ぽいも多分私の妹か何かだよ。なら死んでもらいたくない』

「当たり前だ。誰も死なせない。若葉だって死なない」

『だね。私は応援しか出来ないけれど、ここでチ級と見守ってる。また力を渡すこともあるかもしれないけど、若葉の心を壊すようなことはしない。一緒に、大淀を倒してほしい』

「ああ、任せてくれ」

今まで好き勝手し続けてきた大淀に報いを受けてもらうため、私はより強く決意した。

シグとの思いは1つだ。必ず戦いは終わらせる。

完成された絶望

目が覚めたのはお昼時。夜間警備をした時はいつもこの辺りがのんびりになる。切羽詰まった状況ではあるのだが、こういうところで焦りが出ないのはいいことだとは思う。

夢の中でシグに話されたことは、今でも心に残っている。家村提督の部下であり、最後まで守ろうとした艦娘の成れの果て。深海棲艦と成り果てても、提督の無念を晴らすために襲撃し、返り討ちに遭った駆逐棲姫。2度の死を乗り越え、今では私、若葉に力を貸してくれるシグ。その仇だけは絶対に討ちたいと、夢の中でも決意した。

「若葉さん……おはようございます」

少し心配そうな三日月の声。あの話を聞いて妙な顔をしていたようだ。

「何かあったんですか？ その……泣いているように見えますが」

「泣いて……？ 本当だ……」

言われて気付いた。私は眠りながら泣いていたらしい。シグの壮絶な境遇を聞き、夢の中では言葉も無かったが、全て表側に出ていたようだ。

「シグと話をした。……あいつは家村提督の部下だったらしい」

「え……!?!」

三日月はぼいからそういった話は聞いていないとのこと。ぼいの方がまだそれを思い出していないか、シグとリンクして思い出しているが敢えて話していないかは定かではない。

私は少し疑問に思ったから聞いてみたものの、三日月はそういうタイプではないか。それに、話を聞く限りぼいはそう言った説明を自分からするようなタイプでもない。説明するくらいなら遊ぶタイプだろう。

「そう……なんですか。ぼいちゃんはそんな雰囲気を出さないの……」

「……絶対に仇を討とう。大淀はやはり許せない」

「はい、勿論」

私と三日月は一層の決意を深めることになる。

だが、安寧は長く続かない。

昼食前に哨戒機を飛ばしていた加賀が突如施設内に警報を鳴らした。哨戒機が何かを発見したらしい。以前にここまで逃げてきた暁をリコが発見したことがあったが、似たようなものか。

しかし、警報を鳴らしたというのは物騒なこと。緊急性が高いということなのだろうが、何があったのだろうか。

「どうしたー！」

加賀がいる工廠へと駆け付けるが、その時点でわかった。水平線付近に何者かがいる。警報が鳴り響いてすぐにここまで駆け付けてあの場所なのだから、加賀もほぼ目視で見つけたのかもしれない。

「あれは……いや、まだ昼だぞ」

「時間なんて関係ないわ。むしろあちらから来るなんて思わないでしょう」

水平線の向こうを睨みつける加賀。哨戒機によりそれが何かはわからないが、こんなタイミングで数人でやってくるなんて、大体誰かがわかるというもの。

おそらく完成品。夜ではなく昼に襲撃してくるなんて今までに無かった。いや、こちらに向かう来栖提督や下呂大将を大淀自身が襲撃したときは明るい時だった。

「嘘だろ……なんでこんな時に」

警報により工廠に戦力が集まった辺りで、あちらの戦力の顔が視認できるくらいにまで近付いてきた。ここまで来れば嫌でもわかる。

大淀だ。

どう見ても大淀だ。周りにいるのは2人だけ。帯刀している空母だか戦艦だかわからないような2人が、話に聞いている伊勢と日向か。

だが、以前に見た大淀とは雰囲気違っていった。今までの2回は、以前から何度か見ている明石と似た制服姿であったが、今は違う。深海棲艦へと変化した後の赤城や翔鶴のような黒尽くめの衣装。艦娘

らしさを残さず、自分は深海棲艦であると誇らしげに見せるような姿である。

加賀が哨戒機に紛れさせ、爆撃機を飛ばしていたが、大淀は涼しい顔。伊勢と日向が飛ばす艦載機によりそれは全て迎撃されており、攻撃は一切届かず加賀の歯軋りが聞こえた。

そうこうしている内に、工廠前まで辿り着いてしまった。その頃には私も艤装を装備し、臨戦態勢に。他の者も順次装備していく。危険なので飛鳥医師と蝦尾女史にはここに来てもらわないようにしており、初霜も姉が匿ってくれている。それ以外は工廠に集まっております、それこそ施設総出で大淀を出迎える形になってしまった。

「あら皆さんお揃いで。随分と増えたようです。人様の部隊を倒しては味方につけるなんて、まるで将棋のようです」

やたらニコニコしている大淀は気味が悪かった。見るたびに笑顔ではあったが、今回は輪をかけて嬉しそう。こちらとしては気分が悪い。

「あら、あらあらあら、若葉さん、さらに進んでいますね。初霜さんをぶつけたのは正解だったようです」

舐め回すような視線に激しい嫌悪感を感じた。飛鳥医師の施術があるとはいえ、自らの力でここまで来たことが一番興味深い。その視線は、敵対ではなく興味一つ。あわよくば自分のモノにしたいという欲望の視線。

「何をしに来た」

「ふふふ、私の姿を見せに来たんです。貴女達がさんざん抗ってくれたおかげで、我々の技術はここまで辿り着けました。念願の身体、全てを滅ぼす力をようやく手に入れたんです。だから、いの一番に見せたくて」

何処までも小馬鹿にしたような態度。今の姿になれたことが嬉しくて、どうしても私達に自慢したかったと。ふざけた奴としか思えず、施設の者からは怒りの匂いが漂う。

「今までありがとうございます。若葉さんと三日月さんを見て今の手段を思い付きました。赤城さんという例外もありましたが、翔鶴さ

んという成功例も出来ました。全て貴女達のおかげです。感謝の意を含めて、私自ら最後通告です」

「答えはわかっているでしょう」

容赦なく赤城が艦載機を発艦。それに追従するように翔鶴も攻撃を開始した。しかし、当たり前のように伊勢と日向の艦載機がそれを迎撃。工廠内からの発艦であるために、赤城も翔鶴も発艦した数は多少は抑えざるを得なかったが、航空戦艦とは思えないほどの精度と搭載数である。

「わかってましたとも。一応確認です。それに、せつかく馴染んだんですから、一番いい具合に使えそうなここで使いたいですよ」

何をしようとしているかはわからないが、何かをする前に攻撃しなくては。そのために艦装を装備しているようなものだ。

その発言を聞いた直後にリミッターを外して地面を蹴る。伊勢と日向がどれほどの使い手なのかはわからないが、簡単に追い付かれては困る。私と同時に朝霜も飛び出していた。同じスピードが出るのだから助かる。

しかし、私達の攻撃が、大淀に届くことは無かった。

「艦隊司令部より伝令」

大淀の言葉が頭に突き刺さるように響き渡り、途端に動けなくなつた。私だけじゃない。一緒に突っ込んだ朝霜も動けなくなっている。さらには赤城や翔鶴も艦載機の発艦が止まっている。大淀の一声を聞いただけで、頭がガンガンする。

「鳥海！ どうした!？」

「リコさん!？」

摩耶と暁の叫び声。ということとは、まだ工廠から出ていない鳥海や、そもそも動くつもりもないリコにも今の声は届いているというところか。ならば、さっきまで私の側にいた三日月も同じ状態。

声すら出すことが出来ず、大淀を睨み付けるしか出来ない。その私の顔を見て大淀は心底嬉しそうに満面の笑みを見せつけてくる。

「繰り返す。艦隊司令部より伝令」

再び頭に叩き付けられる大淀の言葉。意識を失いそうになるほどの衝撃に、危うく屈しかける。

私がこれなら、三日月はどうなっているのだ。身体が動かないため、三日月の様子が見れない。遠くて匂いもわからない。

「各艦に伝令。施設を破壊せよ」

ふざけるなど叫びたかったが、声が出せず動くことも出来なかったため、どうにかその命令に屈しないように耐える。頭はまだガンガンと殴り続けられているような衝撃。

だが、私の見えないところで最悪な事態が起きていた。少なくとも一緒に突撃していた朝霜は、踵を返して工廠に戻って行ってしまおう。朝霜はあの二度の衝撃で屈してしまったのだろう。つまり、

「朝霜さん、やめなさい！」

夕雲の絶叫。朝霜が大淀の命令に従い、施設の者に襲いかかってしまった。当然だが、雷以外は全員実弾兵器だ。撃てば相手を傷付ける。朝霜が突然向かってきたことで、対応が出来なくなっている。

他でもそうだ。鳥海が同じように暴れ、仲間達を襲っていた。それだけでも酷いのに、赤城と翔鶴が艦載機を発艦し、工廠を破壊せんと行動を始めてしまった。

「若葉さん、頑張りますね。流石と言っておきましょう。ほら、貴女のお仲間が私に屈し、奴隷のように働く姿を見てあげてください」

動けない私の向きをわざわざ変えてまで、今の惨状を見せつけたいらしい。何処までこちらを馬鹿にすれば気が済むのだ。

「くっそ、なんでまたコイツの相手をしないとイケないのよ！」

朝霜は曙が処理している。ずっと鍛錬を怠っていなかった曙は、もう朝霜のスピードにも追い付ける。完成品として襲撃してきたときと同じように容赦の無い攻撃だが、的確に捌いていた。

せめて棍棒を撃ち落とすことが出来ればと、命中精度に特化した夕雲と風雲が艀装だけを狙って砲撃をしている。しかし、どうしても赤城と翔鶴の工廠内空爆が邪魔をして上手く狙えない。

「鳥海！ どうしちまったんだ！」

その空爆は摩耶が墜としたいところなのだが、鳥海の攻撃が邪魔でこちらもやりたいことがやれないでいる。故に、今は巻雲が必死に撃ち落としていた。工廠内が傷付くのはもう諦めている。

「赤城さん！ 正気に戻りなさい！」

「翔鶴姉！ 何してんの！」

その2人の艦装を破壊すべく、加賀と瑞鶴が奮闘していた。以前翔鶴が使っていた刃の弓は加賀が引き継ぎ、近接戦闘により2人の空爆を邪魔する。決して傷付けることは出来ないため攻撃自体は全て峰打ちだが、多少は影響はある。

「リコさん、セスさん！ ボーツとしていないで！」

本来なら空襲に参加しているはずのセスは、何もせずに突っ立っているだけ。ありがたいことに、エコは大淀の支配下に置かれていないらしく、攻撃を全てエコに一任しているセスは、こういう時には全く動けない。

これがいいことが悪いことかはさておき、如月の声に一切反応しなため、他の攻撃に巻き込まれかねない。リコも同様。おそらくリコは私と同じように屈せず耐えているのだと思うが、それでも動けないのは変わらない。

「ヤバっ、ろーちゃん、ごーちゃん、シロクロ止めるよ！」

「わかりましたって！」

「あい！ 初仕事がこれって何さー！」

海面に浮き上がっていたシロクロの艦装の主砲が、施設に狙いを定めていた。施設内ではどう考えてもトップである大口径の戦艦主砲を喰らってしまったら流石にまずい。現状で動くことが出来ないセスとリコは確実に巻き込まれるし、そうでなくても施設そのものが倒壊する可能性だってある。

それに即座に反応したイムヤが、呂500と伊504を引き連れてそれを止めにかかる。無理矢理にでも海中に引きずり込めば、主砲の威力は激減するはずだ。

「未だに屈していないのは若葉さん、三日月さん、リコリス棲姫でしようかね。何というか、流石ですね貴方達は」

このてんやわんやな大惨事を作り出しておいて、動けない私の肩を抱き、ニヤニヤと笑っている大淀。隣に控える伊勢と日向は、無言で護衛をし続けているだけ。私がこの状況を打破出来たとしても、この2人が即座に対応してくるだろう。

三日月も屈していないという情報が手に入ったのは良かった。動くことは出来ないが、施設に害を成すようなことをしていないだけマシ。だが、同じように現状を打破出来ないことが厳しい。

「何でこんなことが出来るんだって顔してますね。気分がいいので若葉さんには教えておきましょう」

これだけ近付かれたのに抵抗出来ないのが悔しくて仕方がない。大淀の上機嫌な匂いも嫌というほど嗅がされている。

「私は今の身体へと生まれ変わった事で、1つ手に入れたものがあります。軽巡洋艦娘である大淀のみが持つ、他の艦娘に無いもの。わかりますか?」

こちらが答えられないことを良いことに、勝手に並べ立てる。私が知るはずないだろう。ただでさえコイツのせいで艦娘同士の関係性がこの施設の中に殆ど限られているというのに。

「それは、艦隊司令部施設です。それが今の身体に適応されて手に入りました。どういうことかわかりますか? 今、身に染みていると思えますが」

洋上での艦隊指揮を可能にするための装備、艦隊司令部。大淀が艦隊旗艦として特化設計されたことにより手に入れたシステムだ。本来ならば、大淀自身が出撃したとしても提督並の指揮が執れるという優れ物なのだが、この大淀の艦隊司令部は訳が違う。

私の憶測では、深海棲艦への支配。司令という名の強制命令。私や三日月、今暴走している朝霜や鳥海は、深海の侵食が脳に回っているせいで影響下に入ってしまったている。

屈せずに耐えられるのは単純に質か。私や三日月は、シグとぼい駆逐棲姫のスペックのおかげで、リコは己のそもそもの高水準なスペックのおかげで、どうにか出来ている。とはいえ綱渡りであろう。

「私は少し名乗り方を変えましょうか。せつかくこの身体になれたの

ですし、こうなると大淀というのも少し違うと思いますから」
ニツコリ笑って耳元で囁いてくる。

「私は『司令部棲姫』^{シレイブセイキ}。新たな深海棲艦にして、それを統べる力を持つ姫。この力で、全ての生きとし生けるものに報復します」

打ち砕かれた愛

いつもと違う真っ昼間。こちらからの襲撃より先に大淀が施設にやってきてしまった。深海棲艦化し、自らを『司令部棲姫』と名乗った大淀は、完成した際に手に入れたという力、悪しき艦隊司令部の力を披露。その結果、深海棲艦と、深海の浸食を脳に受けている者が支配されてしまい、施設内で強制的に内乱を引き起こされてしまう。

私、若葉と三日月、そしてリコは大淀の支配に抵抗し、その場から動けないでいた。その内乱の様子をただただ見せつけられる。

「どうですか若葉さん。出来ることなら貴女自身の意思でこちらに来てくれると助かります。ここの人達もいい実験台になると思うんですよ。それに、上質な姫にもなりそうですし。みんな私と同じように深海棲艦へと変えてあげます。そうなれば最後の時までには幸せに暮らせますよ。まあ、このままだと大部分は死んでしまいそうですけどね」

ふざけたことを囁いてくる。余程私のことを気に入っているのか、常に私の肩を抱いてくる。まともに動ければ振り払って首を落としたりやるのに。

それにこんな状態ではその意思があっても口で答えることは出来ないだろう。その意思があるのなら、命令に屈しろということか。絶対に思い通りにはさせない。

「でも、貴女は簡単には屈しないでしょうね。わかっています。ですから、今の貴女に一番効果的な手段を使うことにしました」

ニヤツと意地の悪い笑みを浮かべる。わざわざ見えるように。「司令部より駆逐艦三日月へ伝令」

耳を疑う命令。全域への命令ではなく、三日月1人に集中。おそろく頭への衝撃はより強くなっているはずだ。

「繰り返す。駆逐艦三日月へ伝令」

もう一度。今度はわざわざ私に三日月が屈するところを見せるため、私の向きを再び変えてきた。

今までの2回の全体命令と集中された2回の命令を受け、三日月は

涙を流して抵抗していた。歯を食いしばり、決して屈しないと耐えている。酷い頭痛と意図しない身体の硬直、少しでも屈してしまえば即座に施設の敵として行動させられる最悪な状況に、必死に抗っている。

それを応援することすら出来ない自分があまりにも不甲斐なく、悔しさに涙が出そうだった。私も絶対に屈しない。三日月のためにも、抗い続けてやる。

「司令部より伝令。施設を破壊せよ」

そこにさらなる命令。立て続けに与えられる頭への衝撃で、三日月が痙攣するのが見えた。抵抗に抵抗を重ね、精神を摩耗し、限界を超えて耐え続けた結果、食いしばる歯から力が抜けたのが見えてしまった。

途端に三日月の瞳は虚ろに曇り、力が抜けるように膝をつく。ビクンビクンと痙攣しながら、大淀の命令に身を委ねているようにも見えてしまった。

「三日月！」

その様子を見た雷が三日月に駆け寄ろうとする。工場内を飛び交う艦載機の空爆を掻い潜りながら前に進む。

だが、その足は三日月の手により妨害された。

三日月の全力の精度で放たれた主砲による砲撃が雷の足元を撃ち抜く。虚ろな瞳の三日月の首がグリーンと回り、雷に照準を合わせた。表情はなく、他の者と同様にただ大淀の命令を聞くだけの機械どれいにされてしまっていた。

「み、三日月まで……」

雷の動揺が手に取るようにわかる。いくら水鉄砲を使い、敵を殺さずに倒せる唯一の戦力だとしても、仲間に向けて主砲を向けるのは抵抗がある。特に仲間思いである雷なら尚更だ。それに、水鉄砲で止まってくれるとは限らない。

それでも三日月は容赦なく雷に対して攻撃をしていた。いつもは私達を手助けしてくれる最高最善の砲撃が、今は最低最悪の反逆として牙を剥いてきた。

あのままでは雷が危ない。実力が劣っているわけでは無いのだが、相性というものがある。狙う前に狙われては意味がない。

「いかずちちゃん、あられがえんごするから」

「如月も参加するわ。妹の不手際だもの！」

そこに援護として霰と如月がついた。そもそも三日月対策で作られた如月と、さらに如月のような存在を見越して訓練していた霰だ。三日月を相手にするには最も相性がいい最善の選択。

相手が三日月であるが故に抵抗はあると思うが、心を鬼にして攻撃を繰り出してくれた。少し怪我をするくらいなら許容範囲と言わんばかりである。それは仕方のないことだろう。

「ふふ、三日月さんは私に屈してくれましたよ」

再び私の耳元で呟いてくる大淀。この阿鼻叫喚を心底楽しみながら私にまざまざと見せつけ、私の心を揺さぶってくる。

私の心が弱ければ、今の時点で心が折れていたかもしれない。三日月は大淀の支配に屈してしまい、今や私にすら刃を向けてくるような存在だ。諦めの気持ち湧き上がってきてもおかしくない。

だが、私はついさつき、シグの思いを直に聞いている。私利私欲で二度も犠牲になったシグが持つ大淀への復讐心は、この施設で暮らす誰よりも強い。それに応えるためにも、私は屈するわけにはいかないのだ。

「司令部より駆逐艦若葉へ伝令」

今までとは比べ物にならない衝撃。だが負けない。三日月が屈した今、私は絶対に屈するわけにはいかない。

「繰り返す。駆逐艦若葉へ伝令」

何度も頭をハンマーで殴られているような強制力の衝撃。歯を食いしばり、大淀の命令に反抗する。

本来なら司令部からの指示に従わない艦娘などいないのだろう。強制ではなくあくまでも伝令。こちらの意思も反映される。ある意味私は、この時点で司令部の指示を無視する反逆者みたいなもの。

「強情ですね。ですが、私の支配からは逃れられません。早く屈した方が気が楽ですよ。楽しい楽しい虐殺を始めましょう」

楽しそうに囁いてくる。何が大淀をここまでさせるのか。

「司令部よりリコリス棲姫に伝令」

今度はリコに集中攻撃。あくまでも私は最後にするつもりのようなのだ。

リコまで敵に回ったらさらに面倒臭くなる。空襲が格段に酷くなり、本人が喧嘩慣れしすぎているせいで近付くこともままならない。陸に上がっている今、この中で最も面倒臭いのは間違いなくリコだ。「繰り返す。リコリス棲姫に伝令」

三日月や私の時と同様、二重に命令をかける。

「私が……お前に屈すると思っているのか」

だが、リコは反応が違った。私達は口も利けないのに、大淀の命令に屈することなく、それに対して反応できる。動けないようだが、首は大淀を見据え、今まで見た事も無いような形相で睨み付けていた。

「あら、あらあら、想定外というのはいるものですね」

「私は陸上施設型……他の奴らと違って艦じゃない。例え同胞を須く呑み込むような支配の力であろうが……私がお前如きに支配される謂れは無いな」

「その割には動けないようですが。まあいいでしょう。動けないなら戦力外。事が済んだら首でも落として私の糧になってもらいますよ。そこで大人しくしておいてください」

艦では無いという他には無い特性から、大淀の支配からは逃れられているようだが、深海棲艦という種族であるがために半分程度は効いてしまうと。予断は許さない状況ではあるものの、私よりは耐久力がありそうである。

「では改めて若葉さんに尽力しましょうか」

だからこそ、問題はもう私のみになってしまったわけだ。屈してなるものか。大淀のいいように扱われるだなんて死んでもゴメンである。

仲間達が敵として暴れ回ろうが、私は折れない。三日月だって必ず救う。だが、身体が動いてくれない。こればかりは、力を借りる借りにないの問題では無い。むしろ借りれば借りるほど、侵食が強まるほ

どに、支配の力もまた強まると考えた方がいい。

「私の声では折れないでしょうから、趣向を変えましょう。司令部より駆逐艦三日月へ伝令。帰投せよ」

命令を受けた三日月がビクンと震えると、途端に攻撃をやめて大淀に付き従うように移動。私の目の前に来たというのに視線は一切こちらに向けず、事もあろうか大淀に跪いてしまった。

度重なる衝撃で屈してしまった三日月は、完全な操り人形。こうしている記憶があるかは定かではないが、もし覚えているのなら私が必ず立ち直らせなければ。

「三日月……！」

「すまないが、邪魔しないでもらおう」

「そうそう、うちの大將のやりたいことをやらせてあげてくれないかな」

三日月の行動を止めようとした雷だが、今度は伊勢と日向がそれを邪魔する。

抜刀し、鋒を雷達に向けただけで、一步でも動いたら首と身体が別れているのではという威圧感を叩き付けていた。雷達はそれを受けて動けなくなってしまう。

「動かなければ何もしないから、ちよつと待つてね」

「我々も無駄な殺傷はしたくない。君達には利用価値があるからな」
動きたくても動けないのだろう。あの威圧は並大抵のものではない。動けば死ぬと確信できてしまうほどのものだ。如月は冷や汗をかき、霰は脚が震えていた。雷はこんな中でも打開策を探してくれているが、すぐに見つかるようなものではない。

「駆逐艦三日月に伝令。駆逐艦若葉は反逆者である。屈するまで痛めつけよ」

笑顔で言い放った。私の心を折るためだけに、わざわざ三日月を使ってまでやってきた。三日月にやらせれば私は折れると確信しての行動だ。

命令された三日月は無言で立ち上がり、私を睨み付ける。意思まで支配されてしまったのか、私に対して感じたことのないような悪意の

匂いを放っていた。反逆者という情報を信じ込み、私は敵であるとか感じなくなっているようだった。今までの依存にも似た愛情は何処かに消えてしまっている。

「発言を許可する」

ピクリと震えた。三日月の今の意思まで言葉にさせることで、私の心を確実に折りに来たか。だが、そんなことで屈してたまるか。

「反逆者は、生きている価値はありませんね」

冷たい声で吐き捨てるように呟かれた後、主砲で顔面を殴られた。臙装を装備しているおかげで骨が折れるようなことはないが、当然ながら激しい痛みにはなる。

「痛め付けられるだけで済むだけ、ありがたいと思ってください」

返しにもう一度殴られる。その衝撃で動けない私は海面に倒れ伏すことに。殴られた場所が悪かったか、鼻血が滴り落ちる。だが屈しない。まだだ。こんなことで私は折れない。

身体は動かせないが、目だけは反抗の意思を見せる。三日月に苛立ちの匂いを感じる。

「殺せないのが残念ですよ」

腹を思い切り蹴られる。本来なら吐くほどのダメージだが、三日月にやられた攻撃ならば耐えられる。三日月の意思でやっているように見えても、これは大淀による強制だ。意思まで支配され、洗脳され、愛は憎悪に切り替えられているだけ。ダメージが大きければ大きいほど、三日月の愛が深いものであるとも思える。

だから耐えられる。死なないようにしているのなら尚更だ。私はいつまでも耐えられる。逆に冷静になれるほどだ。

「早く屈してもらえますか。私にはこの施設を破壊する任務があるんです。貴女が屈しなければこちらに移れません」

踏みつけるように鳩尾を蹴られ、ついには嘔吐。食いしぼる歯から力が抜けかける。だが、吐くだけで終わった。大淀の支配に屈するのはまだまだ遠い。

「はあ、全く。こんな女を好いていたかと思うと反吐が出ますよ」

胸倉を掴まれ、海に沈められる。痛みから苦しみにシフトしたよう

だが、私には今の言葉の方が辛かった。意思を捻じ曲げられていても、三日月の口からは聞きたくない言葉だった。

例え脳への侵食の結果とはいえ、私と三日月は同じものを持つお互いに大切な存在だ。他の者は相思相愛と祝福してくれたし、私達もそれでもいいと思っていた。

それを、こんなくだらないことで、打ち砕かれた。

「まだ屈しませんか。いい加減にしてもらえますか」

海から引き揚げられた後、再び主砲で殴られる。左眼を強打され、一時的に片方の視力を失う。それでも屈しない。いくら三日月の言葉でも屈しない。馬乗りになられて何度も何度も殴られても、私の心は折れない。折れるはずがない。

私はもう数えきれないくらいの思いを背負っているのだ。ここで自爆させられた者。リミッターを外され自沈した者。完成までの失敗作。私にここに流れ着く前に殺された者。そしてシグを通して家村提督の部下達まで、全員。

怒りも憎しみも何もかもを背負い、私はここにいる。そんな状態で大淀に屈するわけがないだろう。その思いに応えるために、私は立っているのだから。

「駆逐艦三日月、攻撃を止めよ」

大淀の命令で三日月の攻撃が止み、気分悪そうに私を海面に放り投げた。いくら攻撃しても折れないため、ようやく諦めたか。

三日月が忌々しげに私を睨みつけて離れ、大淀の側へ。あの場所は本来、私の場所なのに。それがまた気に入らない。

「若葉さん、本当に強情ですね。その強情さが仇になることを教えてあげましょうか。これは貴女のせいですから、後悔してくださいね」
再び気に入らないほどの満面の笑み。私の行ないは間違っていない。それが仇になるとは一体何を。

「司令部より伝令。駆逐艦三日月、自害せよ」

反逆

深海棲艦と化した大淀の襲撃を受ける施設。司令部棲姫としての力により、三日月まで支配されてしまった。

私、若葉を屈服させるために、わざわざ三日月を使って私を滅多打ちにさせるが、私は意地でも屈しない。心に刺さる言葉も何度も言われるが、私は負けなかった。

それに痺れを切らしたか、三日月を一度下げる大淀。三日月が忌々しげに私を睨みつけて離れ、大淀の側へ。あの場所は本来、私の場所なのに。それがまた気に入らない。

「若葉さん、本当に強情ですね。その強情さが仇になることを教えてあげましょうか。これは貴女のせいですから、後悔してくださいね」再び気に入らないほどの満面の笑み。私の行ないは間違っていない。それが仇になるとは一体何を。

「司令部より伝令。駆逐艦三日月、自害せよ」

大淀の非情な指示を受け、何の抵抗もなく三日月は主砲を自らのこめかみに当てた。大淀の命令ならば、死んでも疑問に思わないらしい。

怒りが込み上げるが、それでも身体が動いてくれない。命令への抵抗のせいで、指一本動かない。三日月の自殺を私の手で止めることが出来ない。動いてくれと叫びたくても叫べず、ただ無力に三日月の命が散らされるのを見ているしか出来ないことが、悔しくて仕方が無かった。

しかし、三日月は突然動かなくなった。命令のせいで表情は無いが、トリガーを引く指は全く動こうとしない。

「……指が、動きません」

「私の支配を掻い潜っている……？ さっきまでの調子はどうしました。駆逐艦三日月、自害せよ」

二度目の自害指示だが、三日月の指は震えるだけでトリガーを引か

ない。まるで、大淀の命令に抵抗するかのようだった。

三日月自身は命令を遂行しようとしている。匂いもそれだ。指示に従い命を落とすことを絶対の使命だと思っている匂い。だが、本人とは意図せぬところで身体が動かないように見えた。

一瞬、本当に一瞬、強打されて視力を失った左眼に、本来見えるものでは無いものが見えた。見えないからこそ見えたのかもしれない。三日月の主砲を持つ手に、必死に抵抗するシグの姿がチラついたのだ。いや、表情からしてあれはシグではない。少し幼いイメージのシグ、つまり、三日月の中にいる駆逐棲姫、ぽいの姿だった。姉はこうやって見えているのかもしれない。

三日月には支配が行き届いてしまっても、ぽいには通用していなかった。死という大きなトリガーにより、ぽいが目覚めたとも言える。

「動きません。理由はわかりませんが、その命令は遂行できません」
「予想外が立て続けに起こりますね、ここでは本当に」

そんなこととは露知らず、ニヤつきはそのままに溜息を吐く大淀。こんな状況すらも楽しんでた。結局私は三日月を止められていない。屈辱的な状況は何も変わっていない。それが楽しいのだろう。気分が悪い。

が、そのニヤつきも消えることになる。大淀の背後まで近付いていた人影、旗風がその胸を両断するように刀を振るっていた。相変わらず猫のように気まぐれに、誰にも気配を感じさせずに行動している。「……………」

背後からの一撃にもかかわらず、紙一重で回避していた。何なのだよあの回避性能は。まるで自分の周囲全てを感知し続けているかのような動きだ。

その理屈は考えてみればわかるもの。奴は自らを司令部棲姫と名乗った。司令部ということは、危険察知もいち早くするもの。電探やら何やらが馬鹿みたいに使われているのだろう。

「駆逐艦三日月に伝令。旗風を抹殺せよ」

「させるとお思いですか？」

瞬間、三日月の主砲が真つ二つに斬られていた。これにより三日月

は攻撃不能となった。しかし、大淀の命令は絶対。あらゆる手段を用いて旗風を殺そうとするだろう。ならば、気を失わせるくらいしなければまずい。

「峰打ちです。仲間ですから」

主砲を斬った刀を返してもう一撃。首筋に叩き込まれた峰打ちにより、三日月は気絶した。身体には傷一つなく、最善の勝利。

しかし、目を覚ましてでも支配は行き届いたままの可能性がある。三日月はもう元に戻らないかもしれない。その可能性を考えると、はらわたが煮え滾るようだった。頭が熱い。身体が熱い。大淀の支配なんてもう感じられないくらいに怒り狂っている。

「貴女は下呂大将のところの五駆でしたか」

「はい、こんなにゆっくりこつそり近付かなければなりませんでしたが、誰も視線を欺くことが出来ました」

大淀へは一太刀で沈めるほどの殺意ある斬撃。いつもの流れるような動きではあったが、大淀は即座に回避。相変わらずの異常な回避性能。

「三日月さんは貴女としては手元に置いて置きたかったのでは？」

「優先順位は若葉さんより低いですね。より至った若葉さんの方が素材として優秀ですから。欲しいか欲しくないかで言えば欲しかった、程度です。より良いものを手に入れるための犠牲にするくらいの存在ではありました。海老で鯛を釣るとい言葉もあるでしょう？」

三日月さんは所詮海老ですよ」

大淀が妄言を宣っていたが、今の私にはそんなことはどうでも良かった。三日月を自害に追い込んだ大淀への怒りは、今までとは比べ物にならなかった。

最初に仲間達を殺されかけた時よりも、初霜に姉を刺された時よりも、何よりも怒りと憎しみが湧き上がった。三日月をここまで巻き込んだことが何よりも許せない。心の底から許せない。

力が欲しい。大淀に抗う力が。

力が欲しい。大淀を殺す力が。

力が欲しい。力が欲しい。力が欲しい。力が欲しい

とにかく力が欲しい。何もかもを打ち倒す力が欲しい。

左腕が疼く。今は見えない左眼が疼く。頭が疼く。

シグも同調しているのがわかる。ぽい在必死に抵抗してくれたいは、私が見えたのだからシグにも見えたのだろう。それが怒りに火をつけた。持つてはいけな殺意に、私もシグも呑み込まれようとしている。

だが、それに抗おうなんて一切思えない。それで大淀が殺せるのなら構わない。もしかしたらこの侵食で私の身体はよりまずい方向に進んでしまうかもしれないが、それでも構わない。三日月を利用し、あまつさえ自殺させようとした報いを受けさせるために、私は何にでもなろう。

「おや、おやおやおや？ これはもしや？」

「余所見をしている余裕がお有りですか？」

「伊勢さん、日向さん、そっちはもういいです。こちらにいいですか」
雷達を牽制している伊勢と日向を自分の近くに戻して、旗風の処理を目論んでいるようである。私に何か起きることも見越してだろうか。

これにより雷達は解放されたが、過剰なストレスでその場から動けないようである。あれに関しては何も仕方がない。今は命の危険性が無いのならよしとするべき。

「司令部より駆逐艦若葉へ伝令」

悪しき艦隊司令部による命令が響き、激しい衝撃と頭痛。だが、屈するよりも大淀への殺意が上回っている。命令を聞かない反逆者として、私は独自の良くない進化を迎えようとしていた。

痣が広がる感覚。さらに私を呑み込み、あらゆる場所が侵食されていく。脳はより一層蝕まれ、もう片方の眼も呑み込まれた。痣は今頃顔をより埋めるように広がっていることだろう。知ったことではないが。

支配への抵抗で動かなかった指先が、ピクリと動き出した。私の反逆の意思が、身体を駆け巡るようだった。ただただ大淀を殺したいという圧倒的な殺意が、強制を超え真の反逆者として覚醒させてくれ

る。

「旗風、一死合願おうか。伊勢、お前はうちの大将を護衛している。旗風は私がやる」

「日向はホントそういうの好きだねえ。はいはいお好きにどうぞ」

三日月を救ってくれた旗風は、大淀の側近である日向に絡まれている。大淀はあくまでも私に興味があると言った感じで、私を見下ろしている。伊勢を護衛につけていたが、その横で人様の怒りと憎しみの変化をワクワクした面持ちで眺めていた。

「大淀……」

「発言を許可した覚えはありませんが」

立ち上がるために海面に手を突いた瞬間、海水が纏わり付くように私の腕を覆う。意識していなかったが、その腕は左腕、始まりの痣がある方だ。より深く堕ちていくのなら、それが起点になってもおかしくない。自分の身体が変化しているのを実感しながらも、妙に冷静だった。

そういえば、翔鶴が深海棲艦と化した時、海中に沈んでから新たな艦装を得ていた。あれは海水から賄う無限弾薬のように、海水を変質させて艦装を作り上げているのではないかと思う。今まさに、私の左腕ではそれが起きているのだろう。

「お前……ふざけるなよ……」

力が漲るようだった。三日月に殴られた場所の痛みは無くなっていった。左眼の視力まで回復している。まるで改装を受けたかのように綺麗な身体になっていくのがわかる。これでもう3回目だ。

「大将は下がんなさいな」

「いえ、これは是非ともこの目で見たいです」

もう片方の手も海面に突くと、両腕に海水が纏わり付く。気付けばその海水はグローブのように変化していた。これは夢の中でも見たシグの物。駆逐棲姫としての艦装が私に生まれようとしている。いや、シグが表側に出ようとしているのだ。

私とシグは今、大きく同調している。夢の中だけではもう留まらない。もののけとして見ているだけでも終わらない。共通の敵を自ら

の手で捻り潰すため、1つの身体で一緒に戦う。

「(こ)で……お前は若葉ボクが殺してやる」

脚に力が入る。自然と前傾姿勢になり、獣のように構えた。牙まで伸びるような、まるで本当に獣ケダモノへと変化していくような感覚。目の前のものを全て殲滅したくなる、本能のままに生きていくような思考変化。それでも一向に構わない。シグの恨みを、私の憎しみを、今この場で晴らしてやる。

この時には、大淀の支配による身体の硬直は完全に失われていた。今の私にはもう、悪しき艦隊司令部の力は無意味だ。一切の指示を聞かない反逆者として、私はここにいる。

「死ね」

太腿に備えた拳銃付きナイフを抜き、元々握っていた修復材ナイフと同時に携え軽く海面を蹴ると、海面が爆発したかのように水飛沫を上げた後、護衛の伊勢を無視し大淀の眼前にいた。簡単に手が届く場所。憎たらしい笑みを浮かべる顔面を、両の手に持つナイフで八つ裂きにするために、全力でナイフを振るう。

「こんな深海棲艦はいませんよ！　さらに上まで至ってしまったんですね！　最高ですよ若葉さん！」

それを大淀は刃ではなく私の手首を握ることでその攻撃を止める。いつもならナイフそのものもを摘み上げるようにしていたが、それでは危ないと悟ったか。もしそうするつもりなら、確実に振り抜いていた。摘み上げる暇も与えず、顔面を切り刻んでいただろう。勘のいい奴め。

手首を掴まれたことでナイフはどちらも届かなかったが、大淀もそれなりに必死に私の攻撃を止めようとしているのが匂いからわかった。

「(こ)ら、私を無視とはどういうことかな」

真後ろで伊勢が私を真つ二つにしようと言ったのを振り下ろしていた。おそらく狙いは艦装の破壊。私がどういう状態になろうが、艦装を破

壊されてしまったら航行不能で力も發揮出来なくなる。そう簡単にやられてたまるか。

大淀の手を振り払い、伊勢の振り下ろしをナイフで打ち払う。異常に重いその一撃は、受けていたらナイフごと私がやられていた。咄嗟の判断が功を奏した。

「お前に用はない」

「君に無くても私にはあるんだよね。うちの大将を殺さないでもらえるかな」

即座に横薙ぎ。振り下ろすのと同じ速さと重さを持っていたため、大きく飛び退くことでこちらも回避。結果的に大淀から離れる羽目になったが、そのまま受けていたら先程と同じように私自身が真つ二つにされていた。

大淀の意思は知らないが、伊勢は私を殺すつもりで刀を振るっている。斬撃に乗っている殺意が段違いだった。一撃一撃が必殺級なため、全力で回避する以外に選択肢が無い。

「そこを退け。邪魔だ」

「そう言われてもね。私の仕事は護衛なの」

「なら死ぬ」

もう救出だとか考えている思考は無い。理性などとうに捨てた。伊勢も邪魔をするなら殺す。容赦なく殺す。被害者であるなど関係ない。

先程と同じように海面を蹴る。またもや水飛沫が舞い散り、即座に伊勢の眼前。刀の間合いよりも近付き、反応出来ないであろう速度で首を薙ぐ。

「おっと危ない！ ちっちゃいからすばしっこいのかな」

だが腹を刀の柄で殴られ、吹っ飛ばされることで間合いを無理矢理作られた。薙いだナイフは首に届かず空を切る。

飛ばされ海面に激突するが痛みすら感じなかった。またもや大きな水飛沫が立ち、私はそれに呑み込まれるように軽く沈む。

その時、両手のグローブのように海水が私に纏わり付き、新たな艤装を生み出していった。ナイフを収めていた太腿には特に多く纏わ

り付き、シグの持つイ級のようなた目の魚雷発射管が完成した。今までの艤装はそのまま、シグの力まで発揮できるようなもの。

「大淀、お前は必ず殺してやる。若葉^{ボク}が、この手で」

浮上し、改めて大淀を見据える。もう殺意しか沸かない。何もかもをかなぐり捨て、三日月を貶めた報いを命を以て償わせてやる。

弾丸の如く

大淀に支配された三日月が自害を命じられたが、三日月の中にいる駆逐棲姫、ぽいのお陰でそれは食い止められた。対処の方法はわからないが、旗風が気絶させることでひとまずはどうにかなっている。

そして私、若葉は、三日月をいよいよようにされた怒りと憎しみに呑み込まれ、さらなる進化を促された。痣が拡がり、シグの使っている艦装まで海水から生成され、私はより深海棲艦の侵食が深くなった。思考にも大きく影響し、洗脳により敵対している伊勢に対しても容赦は無くなっている。殺意以外に無い。

「こんなにも、こんなにも変わり果てるなんて！ 私にもまだ伸び代がありそうですね！ 調べたい！ その身体を余すところなく調べたい！」

私の姿を見て大喜びしている大淀。私の変化により自分の進化まで考え始めている。そんなことさせるわけが無いだろう。大淀はここから逃すわけにはいかない。この場で全員血祭りにかけてやる。伊勢も日向もまとめだ。

「大将さあ、テンション上がりすぎでしょ。あれ、割と面倒臭そうだけど？」

「構いません。しっかりと捕らえていきましょう！ 艦隊司令部より各艦に伝令。駆逐艦若葉を捕らえよ」

工廠内で暴れ回っている支配された者達がビクンと震え、一斉に私を見る。施設を破壊するという命令から上書きされ、全員が一斉に私だけの敵になった。面倒くさい。

いの一番に突っ込んできたのはやはり朝霜だった。得意の棍棒を振り上げ、全力のスピードで私の眼前に。工廠から跳んでここまで来たのなら流石だ。誰も追いつけない。しかし、私の邪魔をするのなら容赦しない。三日月と同じように気絶させてやる。

「朝霜、殺されたくなければ来るな」

それで止まってくれれば苦労はしないが、残念ながら無表情で襲いかかってきた。ならば敵だ。痛い目を見てもらう必要がある。棍棒

を回避し、その勢いを利用しての蹴り。腹に思い切り食い込み、工廠まで吹き飛び壁に激突し、そのまま気絶。夕雲達が駆け寄るのが見えた。

敵ならば全部アレだ。殺してもいいとまで思っている。手加減出来るだけありがたいと思つてほしい。今のが最後の手加減だろう。

「若葉！……こっちはちゃんとして止めておく！」

「そうしてくれ。今の若葉は加減が出来ない。仲間だろうが殺すぞ」

摩耶の声には反応しておく。その摩耶は私に向かおうとしている鳥海を必死に止めていた。単純な格闘能力なら鳥海の方が段違いに高いだろうが、進行を防ぐために砲撃も織り交ぜながら足止めしている。

セスは先んじて気絶させられていたようだ。エゴが支配下に置かれていないお陰で、気絶させること自体も簡単だった様子。むしろエゴがやったように見えた。エゴと暁で工廠の隅に移動させている。

「……シロ、クロ、加減出来ないと言つただろう」

今度は海中から私の脚を掴む者。イムヤ達を撃退してしまつたか、無表情のシロクロが私を捕らえるために海中に引き摺り込もうと手を伸ばしていた。生きて捕らえるのなら一番わかりやすいだろう。海上艦である私には最も的確。

だが、それは私が仲間の手が上げられなかった場合だ。もう知つたことでは無いのだから、いくら子供とて容赦しない。

「若葉待つて！……すぐに引つ込めるから！」

「殺さないであげてつてー！」

私が思い切り蹴り飛ばしてやろうとしたところで、イムヤが海中から飛び出し、シロの頭を締め上げながら引き剥がしてくれだ。また、呂500もそれに追従してクロを引き剥がす。2人ともボロボロではあつたが、まだ動けるようで何より。施設への砲撃を食い止めてくれたのは本当にありがたい。

「あい！……さつきと沈んじやおうねー。ばいばい」

そしてその2人を伊504が引っ張り、海中へと沈んでいく。消え

際にこちらにウインクするのが見えた。仲間になったばかりだといふのに、頼もしい限りだ。

「伊勢、邪魔をするなど言っているだろう」

「私の仕事は邪魔をすることでもあるからさ、大人しく捕まってくれない？」

「抜かせ。お前らの思い通りになるわけが無いだろうが」

合間に首を飛ばす勢いで伊勢が刀を振るってくるため、こちらに関しては回避することで精一杯。近付いても殴り飛ばされた。間合いを取ろうとしても、低速戦艦のデカイ凶体のわりには素早い。

ならばと、せつかく手に入れたのだから魚雷を放つ。魚雷の扱いは正直初めてだが、雷撃に精通しているチ級がサポートしてくれているおかげで的確に伊勢に狙いを定めることが出来た。当たれば下半身は吹っ飛ぶ。

「ちよつとちよつと、殺す気!？」

「お前は若葉ホッパの敵だろうが。殺す気で来ているのなら、死ぬ覚悟をしろ。ここで沈めてやる」

「そういうわけにはいかないんだよね。大将が望んでるから、君はここで捕まってもらうから、さー!」

魚雷を回避し、思い切り海面に主砲を放つ。違法改造された戦艦主砲故に、とんでもない威力。水飛沫も相応に立ち、私の視界は全て埋まってしまう。

だが、伊勢の殺意の匂いはプンプンしていた。水飛沫に紛れて移動し、真正面ではないところから敢えて水飛沫に突っ込んで私を薙ぎ払う算段だ。ならば私が先に行つてやる。

「バレバレなんだよ、お前の行動は」

全力で水飛沫に突っ込み、私の出せる最大の力を以て伊勢に体当たりを決める。匂いによる位置の確認は正解。刀を振りかぶる伊勢の腹に私の肩が食い込み、激しく吹き飛ばす。

「いったあ!?! ちよつと嗅覚強くなりすぎじゃない!？」

「知るか。とつとと死ぬ」

さらに勢いをつけ突っ込もうとしたが、今度は赤城と翔鶴の妨害が

入る。あの巨大な艦装で並んで滑走し、私の進路を妨害してきた。この2人には以前さんざん疲れさせられたため、怒りも割り増しされている。邪魔をするなら殺す。完膚なきまでに殺す。屈辱を味わわせてやる。

だが、その前に2人の艦装に矢が突き刺さり、直に艦載機に変化。艦装の中を突き破るように爆発して破壊していく。

「若葉、相方の不手際は私達がどうにかするわ」

「ちよつと痛い目見せてあげて！」

加賀と瑞鶴のサポートのおかげで邪魔が無くなる。だがそのままでも艦載機は発艦出来るだろう。それも進むためには邪魔なもの。赤城と翔鶴には黙っていてもらわなくてはいけない。

「若葉の邪魔をするな」

加賀と瑞鶴のおかげで機能停止した2人の艦装に魚雷をぶち当てつつ、翔鶴の艦装の上に飛び乗り首根っこを掴み上げる。艦装の接続を破壊した後、首を絞めつつも赤城に放り投げた。直撃してそのまま海面に激突。

追い討ちしてやろうと思ったが、翔鶴の艦装に乗ったことで視界が開け、大淀の姿を捉えることが出来た。

「見えたぞ、大淀」

「時間稼ぎご苦労様。三日月さんはもう起こしましたよ。駆逐艦三日月に伝令。若葉を屈するまで痛めつけよ。発言を許可する」

せつかく旗風が気絶させてくれたというのに、大淀が余計なことをしたらしい。自害させようとしても動かなくなるのなら、私を痛めつけて捕まえやすくするために使おうとしているわけだ。大淀の性根が腐っていることがよくわかる。

冷たい視線でこちらを見てくる。心の底から私を嫌悪している瞳。意思すらも支配された可哀想な三日月。必ず救ってやる。

ぼいの姿はあの時以来見えなくなってしまった。この行動も止めようとしてくれているのだろうか。出来ることならもう一度お願いしたい。

「いい加減にしてもらえますか。迷惑なんですよ」

「今のお前にはな」

今度は大淀から渡された軽巡主砲を放ってまで私の妨害をしてくる。本来装備出来ないようなものを無理に使わせられて、1発撃つごとに三日月の身体にガタが来ているようにも見えた。

命令は捕らえること。私がどんな状態でも、生きていればひとまずはいいという判断なのだろう。三日月の砲撃は異常に的確、かつ、考えた瞬間にはもう放っている速攻の一撃だ。

しかし、三日月に私を捉えることは出来ないだろう。三日月の砲撃は、目で見て判断することが最初に必要だ。判断から砲撃までの間が無いだけ。その最初の段階が出来なければ、砲撃は出来ない。今の砲撃も、いつものものではなく近寄せないための連射。

「救ってやる」

「そんなこと望んでいません。近寄らないでください。穢らわしい」私の心を揺さぶるために罵詈雑言を並べ立ててくる。今の三日月には本心からの言葉になってしまっているのだろうが、私には効かない。

今までどれだけの敵と戦ってきたと思っている。三日月に口にされても、それで増えるのは大淀の罪だけだ。三日月には何の罪もない。正気に戻ったらきつと大きく傷付くだろう。メンタルケアは私の仕事だ。

「三日月、可哀想な三日月、少しでも眠っていてくれ」

やはり本来使えない主砲を使っているため、取り回しが上手くいつていない。私がすぐに近付き、なるべく優しく首筋を叩き、再度気を失わせた。海面に倒れ伏すのは良くないため、しっかりと抱き留める。やはり三日月が側にいると落ち着くものだ。

残念なことに、三日月を相手取っている間に大淀は大きく離れていた。私の三日月を使って自分の身を守るとは言語道断。

「邪魔をするなど言ったよな」

「うわ、速っ!?!」

先程吹っ飛ばした伊勢がもう復帰してきたのは背後からでも匂いはわかった。今は三日月を保護することで忙しいのだ。構っている

暇などない。

三日月を抱き上げ、私が出来るトップスピードでその場から離れ、工廠に到着。眠っている三日月を雷に預ける。

「すまない、三日月を頼む」

「え、ええ、怪我はしていないみたいだし、朝霜と一緒に寝かしておくわ」

私の顔を見て少し怯え気味だった雷が少し気になったが、これで三日月の安全は保証された。もしかしたらまた大淀が何かしようとするかもしれないが、近付かせなければ多少はマシだろう。無理矢理起こすようなこともしない。

だが、その工廠にいきなり旗風が飛んできた。日向との一騎討ちをしていたはずだが、先程私が朝霜を蹴り飛ばしたように、旗風も工廠内の壁に激突。気を失ったわけではないが、身体中ズタボロにされていた。

「後れを取りました……相当な使い手です……」

刀を杖に立ち上がる旗風。致命傷は避けているが、大きく消耗させられている。いつも着ている黄色の羽織りは自らの血で染まり、頭からも血を流しているような状況。対する日向は全くの無傷。多少は服に切り傷くらいはついていて、血で染まった部分は見えない。

旗風相手にここまで力を発揮するとなると、本格的にまずい相手だ。伊勢も疲れている素振りすら見せない。私が体当たりを1発当てた程度ではあるが、汗一つかいていないとなると、普通に持久力がおかしい。

「なかなか楽しかった。あと4人もいるのだろう。次は奴の姉とも死合ってみたいものだ」

「まだ生きてるもんねえ。日向と1対1タイマン張ってあれなら大したもんだよ」

あれでもまだ本気で戦っていないのだと思う。大淀より余程厄介な敵だ。単純な戦闘力では下手をしたら大淀より上。それが2人もいるのだとしたら、今の状況では勝ち目が薄い。

だが、怒りと憎しみは止まるところを知らない。大淀を殺したくて

仕方がない。伊勢だろうが日向だろうが関係ない。大淀だけ殺せればもうどうだっていい。

「とはいえ、支配下に置いた深海の者達は全員やられてしまいましたか。実験台には最高ですが、戦力としてはこの程度ですね」

「自分の手を汚さない奴が言うな」

「それが司令部というものでしょう。人間の司令部は艦娘を手駒に使い、手を汚さずに深海棲艦を滅ぼす悪意の塊ですよ。私はそれを模倣してるに過ぎません。言うなれば、私にこの力を与えたのは人間です」

妙に人間のことを邪険に扱うような発言。元々全てを滅ぼすと言っているような輩だ。全方位に憎しみをばら撒いている者の言葉など、徹頭徹尾悪意に塗れていてもおかしくは無い。話を聞く必要も無いか。

「では仕切り直しましょうか」

「その必要は無いわ」

敵の3人が一箇所に固まったところを見計らい、加賀と瑞鶴が空爆を開始。もう伊勢と日向も巻き込むつもりで絨毯爆撃を繰り出した。本来ならば救わなくてはいけない被害者だが、四の五の言っていられない。大淀をどうにか殺さなくては、被害はひたすらに拡がるだけだ。

加賀からアイコンタクトを受けた。今だと。自分達の空爆が食い止められることも織り込み済みで、あちらに隙を作ってくれた。あの空爆の外には出られない。食い止められても爆撃はしている。今以上に動けないはずだ。

その思いを受けて、私は全力で海面を蹴る。今の私は1発の弾丸。私の持つ拳銃のような、大淀を貫くための渾身の一撃。狙いはもう決めている。私達を見下す目、妄言を吐く口を備える、その顔面だ。

「いい加減にしろよ」

今までで一番の速度が出た。大淀はおろか、自分ですら知覚できない速度で移動し、気付けば私の足裏は大淀の顔面を捉えていた。しかし、その蹴りを放ったことで踏み出した脚がミシリと嫌な音を立て

る。この速度を常時出すことは出来ないかと実感した。3発が限界か。私が蹴り飛ばしたことで、大淀は見事に吹き飛ばされた。眼鏡は叩き割れ、鼻から血を撒き散らし、海面を滑るように飛んだ。伊勢と日方も驚愕の表情に変化していた。

初めて、今までこれだけ戦ってきて初めて、大淀に一矢報いた。小憎たらしい笑顔を踏み付けることで、今までのことを帳消しに出来ることはないが、多少はスッキリした。

「っは、はははっ！……ここまでやりますか若葉さん！ 楽しい！ 本当に楽しい！ うわ、鼻血なんて見るのいつぶりでしょう！ 血、私の血ですよ！」

海面に倒れ伏し、鼻血をダバダバと垂らしながらも、大淀は笑みを失わなかった。むしろ余計に楽しそうに嬉しそうに高笑いまで。

グリーンとこちらを見る瞳は狂気に染まっていた。私にその感情をこれでもかとぶつけてくる。興味から好意へ。歪んだ愛情のような混沌とした感情に吐き気がしてくる。三日月のものとは違う、汚らしい愛の形だった。

「アレが欲しい、心の底から欲しい！ バラして、好きに弄りたい！」

私のものになりたい！」

「はいはい、大将今回は撤退しよっか」

「籠が外れるとすぐにコレだ。すまないが撤収させてもらう。決着は次の機会に」

空爆はしっかりと抑え込みながら、加賀と瑞鶴に向けて主砲を向け放った。さすがにこればかりは回避せざるを得ず、空爆はその時点でストップ。さらにはもう1発を足下に放ち、大きな水柱を目眩しに、大淀を連れて撤収された。

当然だがすぐに追おうとしたが、先程の一撃で痛めた脚を皮切りに、身体中に一気にガタが拡がっていく。リミッターを外した後の時間切れのようだが、痛みも伴いそれ以上だった。ヒビが入った場所からどんどん伝染していくような。

「くそ……くそ……」

今回は一矢報いることが出来たからまだマシだが、またもや大淀が

殺せなかった。もう三度目だというのに、まだ殺すことが出来ない。もう自分が許せなかった。

追うことも出来ず、気が緩んだところで意識が落ちていく。施設は守れたが、三日月を守ることが出来なかった悔いは一生残ると思う。あの時の三日月の目は、それを許してしまった私への罰だ。

それはきつと今からより強い苦痛に苛まれる三日月のメンタルケアを行なうことで晴らしていきたい。

同調した身体

私、若葉が一矢報いたことにより大淀は撤退。それにより、突然の襲撃から施設を守ることに成功した。

しかし、刻まれた傷痕は大きい。私はさらに侵食を拵げ、シグと同調したことで深海の艦装を生成するところまで来てしまった。また、深海の侵食が脳にまで達してしまっている者は、須く支配を受けてしまったことで施設の敵にされてしまっている。今は眠っているが、目を覚ました時にどうなっているかはわからない。

戦闘後、反動で眠ってしまった私が目を覚ました時、外はもう暗くなっていた。時計を見ると、夕食が終わって少し経ったくらいの時間。戦闘終了から大分時間が経っている。昼食前に襲撃されたせいで酷く空腹。

眠っているのは医務室のベッド。身体がボロボロだったからか、脚には包帯も巻かれている。あの時に脚はやはりおかしくなっていたようである。修復材もほんの少し使ってもらえたようだった。

「く……ああ……」

まだ身体は軋むようだが、弾丸のような攻撃でガタついた脚の痛みは幸いにも無くなっており、立つことも歩くことも支障は無さそう。今回の進化が改装と同様の効果を持っていたとしたら、私は戦闘中に一度全回復している。司令部の支配もそこからは効かなくなっていたし、全回復が無かつたらもつと眠り続けていたか。

目覚めたらいつも隣にいるはずの三日月がないだけで、ものすごく違和感を覚えた。人肌が恋しいという訳ではないのだが、とても寂しく感じる。

「……………うぐ……………」

軋みを我慢しながら身体を起こす。ここで眠ることになったからか、検査着に着替えさせてくれたらしい。なら、私の変化した身体も全て見られたというわけだ。自分でもよくわかっていないというのに。

「あつ、えびちゃんせんせえ！ わかばおきたよ！」

耳元で初霜の声。私達の看病をしてきていたのか。初霜の後ろには安堵した表情の姉の姿も。

あの戦闘に参加していなかった2人だからか、蝦尾女史のサポートとして医務室でお手伝いをしていたようだ。なら、私達に検査着を着せてくれたのは姉達であろう。

「おはようございませす若葉ちゃん」

初霜に呼ばれて蝦尾女史も来てくれる。起きたものから治療の説明をしなくてはいけないということだそう。飛鳥医師ではなく蝦尾女史なのは、同性の方が話しやすいだろうということ。

今回はただのケアでは済まない。一度ここで仲間として認識されからの、最悪の敵による支配だ。簡単に開き直ることが出来るかもわからない。艦装を装備していないため、蝦尾女史1人でも止めることは可能だろう。朝霜だけは申し訳ないがと強めのワイヤーで縛り付けられていた。

「お主が二番目じゃな。最初は旗風であった」

「……あいつが一番重傷だったろう」

「なので、例の傷薬を使いました。身体中包帯ではありますが、もう出歩いていきますよ」

回復力が高いというよりは、今までの生活の結果では無いかと思う。下呂大将の調査に付き合い、時には深海棲艦を殲滅し、時には鎮守府すら鎮圧する。そんなことを続けているから、妙に強靱な身体を手に入れたのでは無かろうか。旗風は一応旧式艦であるはずなのだが。

他の者は私が大分痛めつけてしまったというのと、精神的なダメージがかなり大きく、回復に時間がかかってしまっているらしい。シロクロですらまだ眠ったままというのは珍しい。

「さて、では若葉ちゃんの検診をさせてください。眠っている間にある程度は調べましたが、本人の言葉で聞きたいこともあります」
「了解した」

検査着をはだけ、蝦尾女史に触診も込みでいろいろと調査される。眠っている間に血液を採ったり皮膚などの成分の解析もしてくれて

いるらしく、その結果も教えてもらえるそうだ。

自分の裸体に若干の違和感を覚えながらも、触診は進む。肌触りは以前と変わらず、失敗作のような変質は無いように安心する。初霜が私の身体をマジマジと見てくるのがくすぐったい。

「鏡、見ますか」

「ああ、頼む。顔が一番気になっている」

痣が広がった感覚はあった。両眼とも呑み込まれていることも実感している。

「ああ……やはり」

案の定、燃え上がるような痣は私の左頬を起点に枝分かれし、鼻を経由して右眼にも伸びていた。顔の真ん中を痣が横切った形になる。まるで三日月の顔の傷である。そういう意味ではお揃いになったかもしれない。瞳の色もオッドアイではなく三日月やシグと同じ色に統一された。

他の痣もそうだ。左胸や脇腹、腰までの痣はさらに伸び、尻を越え脚に先端が届いていた。普段使っているタイツが無ければ、服を着ていても痣がスカートから外に出るほどだ。もう半分は痣で埋まっているようにも見えた。

「前回の状態からさらに広がっています。感覚的にですが、前回は3割程度だったものが、現在は6割を超えています。場所的に、心臓は勿論のこと、肺も埋め尽くされているのでは無いかと思います。開腹して見たわけではないので分かりませんが」

「確かに、今までと感覚が違う気がする」

息が熱いとか、逆に冷たいとか、そういうのは無い。だが、何となく匂いが違う。自分の息の匂いというのはあまり嬉しくないのだが。

「わかば、いっぱいいくろくなってる。いたくないの？」

「ああ、おかげさまでな」

痣の部分をつつくのはやめてもらいたいが、子供の好奇心なのだから仕方ないだろう。払い除けるのはやめておいて、甘んじて受けている。最初は心配そうな顔だった姉も、これには苦笑気味。

鏡を見ていてもう一つ気になったのは、髪。色が変わったとかは無

いのだが、今までに無かった癬つ毛があった。今まで眠っていたことによる寝癖では無い。まるで犬の耳のような跳ねた毛。

指で弾くとピンと動いてから元の位置に戻る。セツト出来なそうなのでこのままに。

「その髪は、白露型の改二に見られる特徴ですね」

「白露型……二四駆の」

「はい。海風ちゃんや江風ちゃんにも似たようなものがあるのを覚えていますか？」

言われてみれば確かに。だが私は初春型。白露型とは無縁の……と考えた時点でピンと来た。シグはもしかしたら白露型だったのでは無いか。それなら納得が行く。

そういうところでもシグが表に出てきていると考えたと、私とシグの心は完全に一つになったと言えるだろう。

「わかば、わんちゃんみたい。かわいい！」

「そうだな、これだと犬の耳のようだ。鼻も利くしな」

初霜の言う通り、私はより犬に近付いたと言える。大淀には駄犬だの狂犬だの言われた覚えがあるが、今の私は何なのだろう。変わらず狂犬か。

「身体としては健康体です。機能不全を起こしている場所はありません。ただし、血液検査や細胞の分析から、若葉ちゃんは謎の存在へと昇華されてしまっています」

謎の存在とはどういうことだ。医学や解剖学では言い表せないものなのだろうか。

「どういう……？」

「艦娘と深海棲艦の細胞が完全に混ざり合っているんです。侵食ではなく融合、飛鳥先生の治療や完成品とはまた別物です。以前の飛鳥先生の表現を使わせてもらうのなら、若葉ちゃんの侵食は土に染み込む水ですね」

大淀の侵食は土に対する木の根と言っていた。引っこ抜くことで元の土に戻せるので、蝦尾女史の作った薬が効く。だが、私の場合は飛鳥医師が最初考えていた通り、土に染み込んでいく水。土と完全に

結合して、取り除くことは簡単には出来ない。

「新たな細胞と言っても差し支えありません。なので謎と表現してしまいました。この成分を解析して、艦娘のものと深海棲艦のものと分離させるのはかなり難しいんじゃないかなど。出来ないとは言いません。私もそういう研究者の端くれとして、調べていきたいと思えますので」

つまり、治す手立ては殆ど無いと。治したらシグとお別れになってしまうので、元よりも治すつもりが無いのだからいいのだが、突き付けられるとなかなか堪える。

痣が拡がる左の掌を眺める。今まではどうだったか知らないが、今のこの痣はもう消えないものと考えた方がいい。もう長く付き合っているのなら、見ていると違和感すら感じない。

「そう……か。いや、それならそれでいい。最初から治療するつもりは無かったんだ。若葉はこの状態が若葉だからな」

私の言葉を聞いて蝦尾女史が少し驚いたような表情に。姉も怪訝そうな表情を浮かべる。

「ボク……？ ああ、脳の侵食が深くなったことで口調にも影響が……」

「ん？ ああ、そういえば……シグの口調が移ったか」

違和感なく使っていたが、そういうところもシグと同調したらしい。それだけ脳への侵食が深くなったということなのだが、これくらいなら日常に支障は無いので問題ないか。最初は驚かれるかもしれないがそれくらいなら順応してくれるだろう。

「これくらいですね。身体的特徴にも微妙に影響がありますが、微々たるものです」

「そうか……よかった。五体満足であればそれでいい。戦えることが今は重要だから」

「お主はあまり無理をするでない」

軽く扇子で叩かれる。流石に鉄扇ではないので痛みは無い。姉の心配と親愛を感じる。

「そうだよー。わかばはやんちゃすぎだっておねえちゃんがいった

よ」

「うむ。侵食が拡がれば拡がるほどやんちゃになりおる。姉として少し不安じゃ。もう少し落ち着くが良い」

落ち着きたいのはやまやまだが、おそらく大淀の顔を見ればまた同じように暴れ回るだろう。ストッパーなど誰もいない。あいつが死ななければ、私に落ち着ける時は来ないと思う。

「検診はおしまいです。お疲れ様でした。昼食を摂らずに戦闘でしたから、お腹も空いているでしょう」

「ここで食べられるものだろうか。三日月を……」

「そう言うと思って、用意しておきましたよ。それに、若葉ちゃんももう少し安静にした方がいいです。まだ痛みが無くなったわけではないでしょう?」

察しが良くてありがたい。私が寂しさを感じたのだ。三日月もきつと不安になる。目が覚めたときには、必ず隣にいてあげたい。錯乱するようなら抱きしめてあげたい。

「医療用ベッドですから、テーブルも設置できます。若葉ちゃんはここで食べてくださいね」

「助かる。腹が空いてそろそろキツイ」

「じゃあ、はつしもがもってくるね!」

そう言つて医務室から駆け出していつてしまった。姉はそれを追うこともしなかった辺り、子供でもそういうことは信用出来るということか。

と、初霜がいなくなったところを見計らつて、少し小声で話が続く。私も少し気になっていたことがあった。

「姉さん、あの時初霜はどうなっていた」

初霜も脳に深海の侵食を残している。そのため、あの時に暴走していてもおかしくないはずだ。姉が常に側にいてくれたにしても、あの様子を見る限り酷いことにはなっていない。

「うむ……突然おかしくなったのでな、その時点ですぐにわらわが気絶させた。眠らせておけば何もせぬよ」

そして目覚めたらアレだったと。一度気絶させれば支配からは解

放されるということがわかった。意識が無ければ命令も聞くことは出来ない。この場から大淀がいなくなれば尚良しと。

すぐに気を失わせたことで、初霜はあの時のことは何も知らないで終わっているようだ。寝て起きたら私がこんなことになっているので驚いたそうだが、罪悪感を持つようなことが起こっていないのなら安心だ。

「……なら、あの時大淀はわざわざ三日月を起こしてもう一度支配したということか……」

怒りが滾ってくるかのようだった。一度ならず二度までも三日月を弄んだ罪は重い。一度正気に戻っているのにまた支配により本心を書き換えられたのは、三日月にとっても辛いことだろう。目が覚めた後が怖い。

「ごはんもつてきたよー」

「ああ、ありがとう初霜。助かる」

「えへー」

イライラしたところで初霜が戻ってきたため、そこは一旦ストップ。空腹も苛立ちを助長している可能性もあり、夕食を摂ることで落ち着こうと思う。それに、この初霜の前で悪態をつくのはいいことではない。

正直な話、初霜にはこのままでも構わない。その存在が癒しそのものだ。だが、治療しなければ大淀の支配に巻き込まれるため、そのままにしすぎるというのも良くない。悩みどころ。

「初霜は食べたのか？」

「うん、もう食べたよ。おねえちゃんといっしょに！」

「うむ。じゃが、蝦尾殿はまだだったであろう。わらわ達が若葉を見ておく故、今のうちに済ませてはいかがか」

「ではお言葉に甘えて。少し席を外しますね」

ここからは少し姉妹での団欒に。こういうこともなかなか出来ないの、苛立ちは失われていき、心が穏やかになっていく。姉妹の交流もやはり大事だ。

だが、三日月はまだ眠ったまま。あまり急いではいけないと思う

が、早く目を覚ましてほしい。元気な姿を私に見せてほしい。

支配を抜けて

夕食を食べ終え、三日月が目覚めるのを待つ私、若葉。その間に初霜はおねむのようで、姉に連れられて医務室から退場。私は充分眠ったため、徹夜も可能である。蝦尾女史は私に付き合ってくれるらしい。エコもここにいるおかげで万が一の場合は番犬になってくれる。私は最低限三日月の目覚めを待つつもりだが、当然他の者の目覚めも待っている。特に不安なのはシロクロとセス。三日月と共に初めての反逆行為であるがために、心が擦り切れていないか心配だ。

「こんな言い方は悪いが、三日月とシロクロとセス以外は経験者だ。まだマシじゃないかと思う。だが……」

「反逆行為そのものが初めて……ですもんね。特に三日月ちゃんは……」

「若葉^{ボク}に牙を剥いてしまった」

自信過剰な発言に聞こえなくもないが、三日月は私に対して悪意をぶつけてしまったのが大きい。もし立場が逆だったとしたら、私も心が折れてしまいそうだ。三日月に合わせる顔がないし、その悲しみだけで負の感情が増幅されてしまう。

それも心配だった。三日月も私と同じような身体だ。負の感情が増幅した場合、私のように身体が良くない進化をしてしまう可能性がある。それを抑えるためにも、目覚めたらすぐに慰めてあげたい。

「三日月ちゃんを慰めることが出来るのは、若葉ちゃんだけでしよう。何かあればお手伝いします」

「ああ、任せてくれ。若葉^{ボク}が必ず立ち直らせる」

これは私にしか出来ない。三日月のことなら全て私に任せてくれればいい。

夜も更け、日が変わるほど。夜間警備からの連絡もなく、今は平和な深夜。まず最初に目を覚ましたのは、一番傷がついていなかったであろうシロクロだった。相変わらず目を覚ますタイミングも同じ。

起きると同時にクロが泣き出してしまった。初めて持たされた

真つ黒な悪意と、正気に戻ったことによる罪悪感に一気に押し潰されてしまった。逆にシロは毅然とした態度でクロを抱きしめている。だが、シロも罪悪感で精神的なダメージを受け、手が震えていることがわかる。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

「クロちゃん……大丈夫……みんなわかってくれてるから……」

「ああ、お前達が操られていたことはみんなわかっている。だから、気にするな」

それくらいしか慰めの言葉はかけられない。幸いにも、シロクロのせいで誰かが傷付いたということはない。施設も壊れていないのだから気にすることはない。

「ああ……もう、すごく嫌な気分だよ」

続けてセスも目を覚ました。エコにより気絶させられたくらいなので、頭に大きなタンコブが出来ている程度。軽傷な上、その性質からセスからの被害は一切ないため、罪悪感も少なめ。しかし、施設に對しての悪意は持たされたので、それにより気分悪そうにしている。

主人が目を覚ましたことで、エコが嬉しそうに飛び付いた。セスだけが支配されていたおかげで、自立稼働する艀装のエコには一切影響が無かったことが功を奏した。セスもそこは喜んでいる模様。

「セス、大丈夫か」

「うん、大丈夫。自分の性質にこれだけ助けられたのは久しぶりだよ。ごめんなエコ、心配かけたね」

エコを撫で回した後、ベッドから降りてシロクロの元へ。アニマルセラピーよろしく、エコをクロに抱かせてやった。

同じ深海棲艦であり、施設に辿り着いた深海棲艦の中でも古参、且つ、揃って工廠で働いているので仲もいい。エコを抱いたクロは、外見相応の子供のように泣きじゃくる。

「クロ、しばらくエコを貸してあげる。可愛がってあげてくれ」

「……うん……ごめん……私……」

「辛いのはわかっている。私も被害者だしね。だからさ、一緒に乗り越えような」

エゴを撫でるクロを撫でるセス。まるで歳の離れた姉妹のようだった。シロもセスに懐き、一緒にクロを撫でている。シロが特殊だからか、クロの幼さがより際立っているようにも見える。

「シロ、お前もだよ。妹の前だからって、泣いちゃダメってことは無いんだから」

クロを撫でながらも、シロを抱き寄せた。泣いてもいいように、その豊かな胸にシロの顔を埋めさせる。すると、緊張の糸が切れたかのように震えだし、グスグスの鼻を啜る音が。

クロの前であるという手前、シロも大分我慢していたようだ。セスに抱き寄せられ決壊した様子。

「おーい、若葉、この拘束解いてくんねえかな。あたいはもう大丈夫だから」

次は朝霜。目が覚めたら縛られているという状態に、自分の立場を察したらしい。身体が壊れないように艤装を装備しているわけだが、そのせいでやろうと思えばベッドも破壊出来てしまう。

「すまない。万が一を考えてだな」

「わかってるわかってる。またベッドぶっ壊したら、何言われるかわかんねえもんな」

拘束を解いてやると、ガチガチに凝り固まった肩を回してストレッチ。私からもゴキゴキと肩の音が聞こえるほどなのだから、身動きが全く取れなかったのは相当にキツそう。

「若葉手加減しなすぎだろ。あたいたい肋骨とか折れてたくさいぞ」

「すまない。若葉^{ホク}もあの時はキレていた」

「そうかもしれねえけどよお」

それも修復材などを使って治療したらしい。それほどまでの重傷を与えたのだから、少し罪悪感。

ああなるとどうしてもその辺りの理性が失われる。その上、頭の中が煮え滾っていたために、手加減など到底出来る状態じゃなかった。今の私のわかりやすい短所だと思う。

「いたた……摩耶も容赦無かったわ……」

続いて頭を押さええながら起きる鳥海。近接戦闘では勝ち目が無い

ために、あらゆる手段を使ってボコボコにされたらしい。特に摩耶の集中砲火は手がつけられなかったらしく、そのまま後ろから何者かに殴打されて気を失ったそうだ。セスを運んだ後のエコ辺りが妥当か。

「私は若葉さんに首根っこ掴まれて放り投げられたんですけど」

「翔鶴は酷かったわね。私はそれをぶつけられたわけなんだけど」

「わ、私は意識してませんから」

「わかってるわ。そんなことでまた喧嘩を再発するほど心は狭くないから。私の中の子達も、大淀への憎しみが増したみたい」

翔鶴と赤城も目を覚ましていた。相方に艦装を破壊された挙句、私が気絶させるために投げ飛ばしてしまっており、身体のところどころに鈍痛が残っているようだ。憎まれ口を叩かれるが、感情としては感謝の匂い。私が強引にでも止めたのは正解だったか。

やはり一度経験しているというのは大きい。また敵対させられたとしても、立ち直るのは早かった。罪悪感よりも先に、大淀への憎しみが先立つようである。

あとは三日月のみ。グツスリと眠っているようだが、何処か表情は暗くも感じる。目が覚めたらすぐに私が目に入るように、ずっとベッドの隣に待機している。

「……………」

その三日月が目を覚めたのは、他のみんなが目を覚ましてから十数分後。薄らと目を覚まして、私と目があつた瞬間、眠気が飛んだかのように目を見開いて青ざめる。

「…………おはよう三日月。よく目を覚ましてくれた」

「あ…………あ、いや、いやああっ!?!」

頭を抱えて叫んでしまった。私を罵倒し、侮蔑し、暴力を振るい、正気に戻ったところでさらに支配され、後悔の上塗りをされている。そのせいで罪悪感が激しく、壊れてしまいそうなダメージになっていた。

まるで初めてここで目を覚ました時に戻ってしまったようだった。見るもの全てを拒絶し、否定の言葉を叫び続けた三日月に。だが、今回は怒りと憎しみの先が周囲全てではなく自分自身。自己嫌悪だけ

で異常なほどの負の感情が湧き上がっている。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

「いいんだ。三日月、若葉^{ボク}達は全部わかっている。三日月は悪くない。誰も三日月のことを恨んでいない」

「嫌あ！ なんで、なんでえ！」

自己嫌悪で激しく混乱している。相思相愛だったはずの相手を、あの時だけは本心から憎み、世界で最も嫌う反逆者として感じていたのだろう。敵に支配されていたからと言っても、そういう感情を抱いてしまったことは現実である。

「殺して！ 今すぐ殺してよお！ 私なんて生きている資格なんて無いのお！」

「三日月、大丈夫だ。若葉^{ボク}はあんなことで三日月のことを嫌わない」

負の感情の匂いが一段と強くなる。考え得る全ての負の感情、怒りも憎しみも悲しみも何もかもが自分に向き、自殺願望までもが芽生えてしまっていた。この世界にいたくないと、死を望むようになってしまった。

それは私が困る。三日月に居なくなられるわけにはいかない。一緒に生きていくから、『楽しく生きる』が実践できるのだ。三日月のいない世界なんて私にも必要無くなってしまう。

「三日月、落ち着こう」

「嫌、いやあ、殺して、殺してえ……あんなの、あんなの無いよお……」
ネガティブになりすぎている。それほどのことだったのはわかっているが、せめて私の前だけでは落ち着いてほしい。

「っあ、あああつ」

「み、三日月、どうした……」

過呼吸気味になっているが、問題はそちらではない。負の感情の匂いがどんどん強まっている。たった1人の者が出していい匂いじゃない。

そこで気付いてしまった。三日月の髪が、全て真っ白に染まっていた。さつきまでは7割ほどが白くなっていたのに、今では全てだ。改装を受けた時、三日月は深海の要素が髪に出ていたのは知っている

が、改装も受けていないのに侵食が拡がっている。

自らの負の感情で、左眼から始まった深海の侵食が拡がっているのだ。私と同じように。三日月もより深いところに堕ちようとしている。

「三日月、落ち着け。落ち着いてくれ」

「殺して……誰か私を殺してえ……」

「三日月！ その気持ちはダメだ！」

心に受けたダメージが酷すぎて、深海棲艦の侵食が拡がる程になっている。危惧していたことが実際に起きようとしている。私の痣のように、三日月の首筋にヒビが入った。髪も犬の耳のように跳ね、より強い侵食がわかる。

怒りと憎しみにより深く堕ちた私とは違い、悲しみと自殺願望で堕ちようとしている三日月は自らの身体を崩壊させる侵食になりかねない。それはダメだ。最悪な場合、侵食による死まで見えてしまう。

「三日月！ 落ち着け！」

時間や周りの目など気にせず、その侵食を止めるべく抱きしめる。私の温もりでそれが止められるかはわからないが、三日月ならそれで落ち着いてくれるはずだ。

「三日月、死にたいだなんて思わないでくれ。若葉にはお前が必要なんだ。頼む、若葉を置いて逝こうだなんて思わないでくれ」

「若葉さん……でも……私は……」

「死ぬのはダメだ。ダメなんだ。若葉のためにも死なないでくれ」

三日月の気持ちを無視しているのかもしれない。私はこれほど一緒にいたくても、三日月はもう私のことなど必要としていないかもしれない。それでも、私は想いを伝えたかった。さんざん伝えていたけれど、今だからこそ言葉にしてちゃんと伝えたかった。

「若葉はお前を愛してるんだ」

侵食の影響だと思う。三日月が私と同じものを持っているから他人の気がしないというところから始まった関係でも今は本心だ。支配で私への憎しみが本心にされていた三日月と似たようなものかもしれないが、強制された本心と、自ら選び取った本心ではまるで違う。

普通では無いことだって理解している。周りから白い目で見られる可能性だってある。だがそんなこと知ったことでは無い。私は三日月のことを心の底から愛しているのだ。だから、それを言葉にしただけ。今までここまでの言葉を紡いだことは無かったと思う。だからこそ、今ここで口に出した。

「わ、私も、私もです。でも、だからこそ、私のしでかしたことが許せないんです。若葉さんを心身共に傷付けました。そんな私に……若葉さんの想いを受け取る資格なんて」

「若葉がいいと言ってるんだ。それだけで充分な資格だ。だから、死にたいなんて言わないでくれ。若葉が悲しい」

髪が跳ねるほどの侵食だ。三日月も私と同じほどに脳への侵食も拡がったはずだ。ならば、お互いの気持ちも同じように燃え上がっているのだと思う。きつとわかってくれる。

「……いいんですか……こんな私が若葉さんの側にいても」「何度でも言うさ。いてくれ、ずっと」

三日月の負の感情の匂いが薄れ、そして無くなった。侵食もこれ以上進まないはずだ。結果的に髪は全て染まり首筋にヒビが入ってしまったが、それで終わったのなら問題ない。

「……ずっと一緒にいさせてください。私は若葉さんと一緒に歩きます」

「ああ、これからもよろしく頼む」
すぐくいい雰囲気になっている。これは少し先に行くこともいいのではなからうか。

強く抱きしめた状態。目と目が合う。ここまでの進展は今までなかった。愛を囁いたことでお互いに盛り上がっている。このままいつまでもと先へ。

「あー、若葉ちゃん、三日月ちゃん、気持ちはわかりますが、お部屋に戻りましょうか」

それを、蝦尾女史の言葉が遮った。そこである意味正気に戻った。

周囲を見ると、全員顔が真っ赤だった。朝霜や鳥海は目を背け、赤城や翔鶴は生温かい笑みを浮かべていた。シロクロに至っては涙も

止まっていた。

「三日月ちゃんは殆ど怪我をしていません。お部屋に戻って大丈夫ですよ。若葉ちゃんは怪我をしていましたが、それだけ元気なら大丈夫です」

「そ、そうだな。三日月、医務室を出ていいようだから、部屋に戻るか」
「は、はい、はい……」

急に恥ずかしくなってきたので、逃げるように医務室を出る。三日月は耳まで真っ赤だった。私も同じだろう。

三日月が立ち直ってくれたのは嬉しい。もう死にたいだなんて言わないはずだ。伊504のように悪夢を見るかもしれないが、私と一緒にいれば多少は薄れるだろう。

だが、三日月も結果的に侵食は深くなってしまった。私と同様、より返れないところへ。もしかしたら、三日月も私と同じ、謎の存在へと昇華されてしまったかもしれない。

さらに先へ

大淀に支配されていた者達が目を覚ました。一度気を失えば支配から解き放たれるようだが、その時の記憶は残っているようだった。そのため、その時の悪意と行動に罪悪感を残す羽目になっていた。

三日月も当然例外では無い。私を罵倒し、暴力を振るった記憶は全て残ったまま目を覚ましたため、発狂寸前だった。負の感情が渦巻き、より自分を深く墮としていつてしまったが、壊れる前に私、若葉が愛を伝えることで、どうにかすることが出来た。

そして今、深夜ではあるが2人で医務室から自室に戻ってきた。2人して検査着。寝間着に着替えることなく、そのままベッドへ。

「お互い……大分壊れてしまったな」

首筋のヒビ割れを撫でる。身体中についた傷とは違う、ある意味自傷の痕。これは三日月が私を想って出来た傷痕でもあるため、不謹慎ではあるが、ほんの少しの悦びもある。

お互いを想っていることが如実に現れたものと思うと、私の身体を覆う痣だつて愛着が湧くというものである。

「いいんです。これが私の罰だと思えますから。若葉さんだつて、顔に……」

「これは若葉^{ボク}の想いの結晶みたいなものだ。それに、シグと深く繋がった証でもあるからな」

元々頬から左眼に伸びた痣の時点で隠しようがなかったが、ここまでするともう仮面くらいしか手段がない。なら全て曝け出した方がいいようにも思える。

「三日月も、ほら、ここが」

三日月の跳ねた髪を弾く。私とお揃いの侵食が進んだ結果。シグと同調したことでこのような影響が出た私だが、三日月は真つ先に頭に影響が出てしまったために出てしまったか。

一緒のものを持つというのはいいことだ。髪は真つ白に染まってしまったが、それでも三日月は三日月だ。私より髪も長いから、より^{シグとばい}駆逐棲姫らしきが出ているのはむしろ三日月の方かもしれない。髪

を結んで帽子を被ればそのものかも。

「今の若葉さんと同じなんですね。また一緒のものが手に入りました」

「ああ、一心同体だ。どちらも欠けちゃいけないんだ」

「またもやいい雰囲気だ。さつきは人前だったので止められてしまったが、見られて恥ずかしいような相手は自分達の部屋にはいない。もうここからは止められない。」

「三日月、1つだけお願いを聞いてもらっていいか」

「私に出来ることなら何でも。私は若葉さんに酷いことをしました。その償いをしたいです」

それに関してはあまり考えないでほしいのだが、ここまで親密になったのだから、少し思い切った提案がしたかった。

「その若葉さんというのをやめないか。若葉^{ホク}と三日月の仲じゃないか」

「えっ、それはどういう……」

「呼び捨てとタメ口。ダメか？」

三日月は真面目で丁寧な性格だ。誰に対しても敬語を使う。姉妹に対してすらだ。会ったことは無いが、妹に対してはこういう態度を取るかは知らないが。敬語というのは少しだけ距離を感じる。

私は三日月の特別になりたい。今でも充分特別な、大切な存在なのはわかってている。私だってそう思っているし、三日月からもそういう思いを匂いで感じる。だから、他の者にはない何か欲しかった。それがこれだ。

「す、少し、恥ずかしいですね……でも、若葉さんのお願いです……が、頑張ります」

「辛かったらやめてくれても構わない。強制はしないから」

「い、いえ！ 若葉さんのお願いですから！」

三日月には勇気のいることなのかもしれない。普段とは違うことをお願いしているのだから、抵抗があってもおかしくないのだ。

「……若葉」

おずおずと、呼び捨てにしてくれた。思ったより喜びが強い。それ

以上に、三日月も嬉しそうだった。お互いに特別になり、周囲が見えていなかったとはいえ思い切り愛を語り合い、そして先に進もうとした。

「ありがとう。これでまた一歩先に進めた気がする」

「若葉、うん、私はもつと先に進みたいわ」

大切な人と共に生きていくだけで、こうも昂る。こうしていられるだけでも心が落ち着く。もつと一緒にいたい。深く繋がりたい。愛したい。

「三日月……」

「若葉……」

私達はずつと一緒だ。今日はもう踏み止まれそうに無かった。私達はそのまま先へ。

私の身体が変化してしまったことで、夢の中に呼び出される。

思考やら外見やらに影響が与えられたが、シグと完全に融合したわけではなく、相変わらず夢の中では会話が出来る。もう話せないということもなく、よき友人であり協力者、そして一心同体の相方として、ずつと私を側で見守っていてくれる。

だが、今日の夢の中は少し雰囲気違った。いつもよりも明るく感じる。いつもは夜の海のため、こんなに明るくない。まるで夜間警備の最後の方に見られる夜明けの空だった。

『若葉、若葉、よく来てくれたよ！ 聞いてよ聞いて！』

「焦らなくていいぞ」

いつも以上に満面の笑みである。一緒にいる子級も、仮面の奥に喜びが見え隠れしている程だ。余程嬉しいことがあったのだろうか。

前回夢に出た時から変わったことと言えば、私の身体が大きく変化したことと、みんなが支配されてそれを解いたこと、あとは三日月と。

『若葉、ついに来たよ。この世界に三日月ちゃんも繋がったんだ！』

「……そうなのか!？」

『そうだよ！ ということとは、やっとほいちゃんにも会えるってことだよ。喜ばずにはいられないよ！』

抱きついてくるくらいの大喜び。確かにそれは喜ぶべきこと。常々、向こう側の駆逐棲姫ぽいとは話をしてみたいと思っていたが、それがついに叶ったという。この世界の明るさもそれが起因するものようだ。

だが、お互いにより深く堕ちてしまったことで夢の世界が繋がるとはどういうことだろう。以前に身体が2つなんだから夢も2つと話していたはずだが。

『いやあ、あれで夢まで繋がるだなんて、私も思っ^{ボク}てなかったよ』
「シグには見当がついているのか？」

『当然でしょ。繋がってるんだよ。心も、身体も』

ニヤニヤしだしたシグ。逆にチ級は目を逸らした。仮面越しでもわかるほど、顔を赤らめている。

勿論シグは私が起きてから寝るまでをずっと見守られている。冗談ではなくおはようからおやすみまで私の側に居続けているわけだ。だから、私が寝る前までにやっていたことを全て知っている。さつきまでやっていたことも。

「……見てたのか」

『嫌でも見ることになるでしょ。身近でされたんだから』

「すまない。正直、シグのことは完全に頭から抜けていた」

『いいいいいよ。三日月ちゃんしか眼中に無いもんね』

ニヤニヤが止まらない様子。なんて小憎たらしい笑顔か。それに比べてチ級の初々しさよ。

見た目とは違い、シグは耳年増だったのかもしれない。私が言えた話ではないが。

『とにかく、せっかく夢が繋がったんだ。ここでも会いに行こうよ』

「そうだな。若葉^{ボク}もぽいとは会ってみたかった」

『だろう？　そういうところも、思いは一つさ。そこでいろいろ話そうか』

手を繋がれて、猛スピードで行ったことのない水平線へと駆け出された。私にはわからないが、あちらの方に三日月達はいるらしい。シグとしてはぽいもこちらに近付いてきているのが何となくわかるそ

うだ。さすがは真に同じ存在。夢の中でもそういうところは敏感。

この夢の中では基本はシグのみ。つい最近にチ級が見つかったところだ。私の身体にはそれ以外に使われているものと言えば、腹の皮膚のり級ではあるが、さすがに皮膚には意思は宿っていないようで、反応も何もない。

それなのに、シグに引つ張られる先には人影があった。夢の中だから私達が考えたものが実体を持つてるなんてこともあるかもとは思ったが、今までのことから考えるとそういつたことは無いだろう。

「三日月……！」

「若葉！」

私もだが、三日月も相当驚いているようだ。本当に夢が繋がっているだなんて思っていなかった。シグの言ったことを信じていなかったわけではないのだが、あまりにも唐突すぎた。

そして三日月の隣、シグと全く同じ外見の者、駆逐棲姫が同じようにこちらに三日月を引つ張ってきていた。以前に聞いていた通り、私の知る駆逐棲姫、シグとは表情がまるで違う。満面の笑みでも少し子供っぽい。

『若葉、はじめましてっばい』

「ああ、お前がぽいか」

『そうだよ。三日月が名前付けてくれたっばい！』

確かにぽいぽい言っている。これはぽいと名付けなくなる気持ちもわかる。私でもそう付けてしまえそう。

片やシグの方も三日月に挨拶をしているようだ。すぐに仲良くなれたようで何より。チ級は少し遠目で見ていたが、シグに手招きされて紹介され、少し恥ずかしげに握手していた。

『ようやく会えた。私の片割れ』

『三日月から聞いてたっばい。私の片割れ！』

瓜二つの2人が手を合わせて初めての再会を喜んでいた。元は1つだったものが、腕と眼という形に分割され、各々別の身体を治療するために使われ、ついには再会することが出来た。

相性は当然とてもいい。すぐにでも打ち解けて、とても仲良くして

いた。もしかしたら姉妹だったのかも。

「この中で会えるなんて夢みたい」

「夢なんだけどな」

「そういうことじゃなくてー!」

プンスカと怒ったようだが、表情は明るい。こんな特殊な状況でまで繋がりが続いていると思うと、私も嬉しい。私達は本当に相思相愛だと実感出来る。

『ぽいは何処まで思い出した?』

『提督さんの艦娘だったっていうのと、大淀から鎮守府取り戻したかったってところまでっぽい。シグも?』

『うん。私達はそういうところはしっかり同じみたいだね』

別物になってしまったとしても、口調も思考も違うというのに、辿り着くところは全く同じ。やはり同じ駆逐棲姫であるということがよくわかる。初めて夢の中でお互いに会ってから、私と三日月は話が完全に一致していたし。

シグが独自に持つ情報は私の変化、ぽいが独自に持つ情報は三日月の変化のことくらいか。ならば、ぽいに三日月のことは聞いておきたい。

「シグ、ぽい、教えてほしい」

『いつものだね。大淀のことからにしようか』

「何かわかるんですか?」

『私達には少しだけ、かな。私はアイツの支配は効かなかったっぽい。三日月は効いちちゃったけど』

軽く言うけど三日月にはダメージ。ぽいはそういう性格らしく、シグが余計なこと言うなとすかさず頭を叩いていた。

『若葉には効かないよ。私が保証する。私の影響がおかしな方向に行っちゃったみたいだね』

「ああ、蝦尾女史が言うには、若葉はもう謎の存在らしい」

『そうだね。私も巻き込まれて、その謎の存在の一翼さ。艦娘でも深海棲艦でも無い、第三の勢力だね』

嬉しそうに話す。まるで今の状態へと変化したことを喜んでい

ようだった。特別な存在というのが琴線に触れたか。私も少しワクワクするところはある。

『三日月はまだちよつとまずいっぽい。でも、多分耐えられるっぽいよ』

「あの、ぽいちちゃん、そのぽいは大丈夫か大丈夫じゃないかわかりづらいというか……」

『身体は動かなくなるっぽいけど、頭がおかしくなることは無いよ。そこは保証するっぽい』

三日月も私と同じ謎の存在に一步踏み入れてしまっているらしい。少し違う負の感情による進化ではあったが、同じ駆逐棲姫のパーツからの侵食だからか、しつかりと細胞が混ざり合ってしまったようである。その辺りは明日の朝に蝦尾女史に調べてもらおう。

『あの大淀、私にもよくわからない。あれだけ身近で見ることが出来たけど、深海棲艦になってることくらいしかわからなかったよ』
『だよね。翔鶴さんみたいに生きてる状態で変わっちゃったって感じっぽい。でも、なんか混ざり方が変な感じはしたかなあ』

混ざり合ってはいるようである。私が謎であれば、大淀も謎。ただし、私のように細胞が完全に融合しているようなことは無いらしく、大淀はあくまでも深海棲艦へと変化しているに過ぎないらしい。

大淀の手で深海棲艦へと墮とされた翔鶴はそういう混ざり方をしていないそうだ。前々から練り込まれているような、そんな雰囲気なのだとか。

『でも、支配は本当に面倒くさい能力だね。若葉と三日月ちゃんが回避出来ても、他の子がね』

『三日月も動けなくなっちゃうから戦力外っぽい』
『君はもう少し言い方を考えた方がいいよ』

ぽいはシグ以上に口が達者らしい。それでも面白いことはよくわかる。これに振り回される三日月は大変だったろうに。

「……三日月も大変だな」

「あ、あはは……うん、ちよつと……ね」

三日月も苦笑するしか無いようである。

ここからは夢の時間が終わるまで5人で楽しむことにした。千級もぼいには慣れたようで、楽しそうに遊んでいる姿が微笑ましかった。

私達はさらに一歩進んだだろう。心身共に、さらに楽しく生きることが出来るはずだ。これから三日月と共に歩いていきたい。

明るい世界

翌朝。私、若葉と三日月は、夢の中での5人での団欒を終えて目を覚ます。そして、お互いの状況を見て苦笑した。寝間着代わりに使っていた検査着は大きくはだけており、昨日寝る前にやったことを如実に表している。若干いつもと違う匂いもするが、他の者にはわからない程度だろう。

「おはよう、三日月」

「……おはよう、若葉」

昨日のお願いは続行してくれている。三日月に呼び捨てにされると昂るような感覚に襲われる。そのまま三日月を愛したくもあるが、朝から盛るのは少しまずい。下手をしたら時間も忘れてしまう。

この想いは必死に抑えて、着替えを用意する。昨日は夜は少し遅かったため、早朝のランニングはお休み。トレーニングは午後に行うとして、今はいつもの制服で。脚の傷を見せないように毎日貸し出ししているタイツも、今やお揃いということ嬉し要素だ。

「なんだか、変な感じ。昨日はあんなに辛かったのに、若葉のおかげで世界が明るい」

「そうか。立ち直ってくれたのならよかったよ」

「若葉に愛されて、私は死ぬなんて選べなくなっちゃった。私も若葉と一緒にいたいもの」

タメ口で話してくれるのも新鮮だ。私だけの特権。三日月と一番親密な証。

ふと、三日月の首元が気になった。目を覚ました時に侵食されてしまった首筋のヒビが、制服を着けていても悪目立ちしているのがわかる。私はもう隠せないほどに痣が拡がってしまったため、マフラーは必要ないかもしれない。せっかくだから三日月に使ってもらった方がいいだろうか。

「三日月、首のヒビはどうする。隠すか？」

「あ、これ……どうしよう。若葉は隠した方がいいと思う？」

「どうだろうか……三日月も正直隠しようが無いところまできている

もんな」

「それはあんまり言わないでほしいかな」

少しムツとしたような顔になるが、匂いから不満は感じられない。私相手には表情も豊かだ。喜怒哀楽をハッキリ見せてくれる。それも嬉しい。私はその上、夜の顔も知っているのだから、尚満足だ。

「妙な傷がついているわけでも無い。三日月が見せるのに抵抗が無いのなら、そのままでもいいと思う」

「そっか。じゃあ今はそのままにしておくわね。でも……その……昨日みたいに歯を突き立てるようなことは控えてね？　いつか傷が付いちやう」

「す、すまない。気をつける」

あまり激しいことをするのもよろしくないということだ。反省しよう。愛が深すぎるのも考えものである。

朝食後、そのまま打ち合わせの時間。私達が目を覚ますまでは待っていてくれたらしい。全員揃ったこのタイミングで、裏側で行なわれていたことが公表される。

「大淀の襲撃の件は既に連絡済みだ。わかり得る限りの情報を伝えた結果、近日の襲撃を見送ることになった」

私達が眠っている間にその辺りは連絡をしていたようで、下呂大將は大淀の艦隊司令部のことを聞いたことで、作戦を練り直そうと考えたらしい。

急がなくてはいけない状況ではあるのだが、深海棲艦を支配する能力を持っている以上、艦娘を支配することも出来るかもしれないと考えるのが普通。施設への襲撃で使わなかっただけなのか、そもそも使えないのかは定かではないが、堅実に行くのならそこは考慮するべき。

もしこの時間を与えたことで艦娘すら支配する能力を手に入れたとしたら、見送ったことが間違いとなってしまうのだが、下呂大將はそれも込みで敢えて時間を使うことを選んだようだ。

「伊勢と日向の実力も今回でわかったから、それも作戦の見直しに使

うそうだ。とはいえ、なるべく時間は空けないと言っていた。明日の予定を2日か3日ほど先送りにするという程度だ」

元々は今頃襲撃準備だったそうだ。だが、こんなことが起きてしまったので今の作戦は御破算。

「それと、今回の大淀の能力を鑑みた結果、我々から出せる戦力は大きく縮小されることになる。むしろ出さない可能性も考えておいた方がいいだろう」

「はあ……その報告が一番辛いところですね」

酷く落ち込む赤城。真つ先に支配され、施設への空襲と私の攻撃の妨害をしているため、今回の通達が一番堪えているようである。恨みと憎しみの方向性が大淀一点に集中したものの、そこで暴走して周りに被害を与えるだけとなってしまうのはよろしくない。

赤城の中のみみんなとの相談の結果、再び大淀の支配下に置かれるくらいなら、お呼びがかかるまで待機した方がいいという判断に至ったようだ。自らの手で捻り潰したくても、あの力ばかりはどうにもならない。最も嫌うことをまたやらされるなんてゴメンだろう。

同じように翔鶴も肩を落としていた。せつかく和解して共通の敵を見据えることが出来たのに、戦えないとなると出鼻を挫かれたようなもの。

「襲撃に参加出来るものもいるが、そこは先生や新さんが決めることだ。我々が口を出せるところには無い」

「少なくとも、この前やられちゃったのは出せねえよなあ」

「ああ。その場で敵が増えるのは避けたい」

艦娘に効くかはさておき、既に効いているという事実がある深海絡みの者は流石に無理だ。克服出来る見込みが無いのは辛い。私のみ侵食により支配を完全に克服しているため、そこはどうなるかわからないが。

「朝霜、君は治療を受ければ問題が無くなる。どうする」

「こうなっちゃったら流石に受けるしかねえなあ。あんなことされりや、あたいでもムカつくつてもんだし、取っ払えるなら取っ払った方がいいよな」

「わかった。朝霜は例の治療により侵食を取り除く」

朝霜は処置を受けることで脳の侵食を無くし、支配を受けない方向に持っていくとのこと。出来るのならその方がいいだろう。一番喜んだのは朝霜ではなく風雲であったのは言うまでもない。

「私は脚がこれですから出来ませんね」

「そう……だな。透析に混ぜ込む手段しか出来ていないからな」

「問題ありません。もし脳にだけ出来る手段が出来たら、よろしくお願ひします」

鳥海は脚の件があるため不可能。あの大淀の相手をするのには戦力外となる。とはいえ、施設防衛の要にもなっているため、本人はそれならそれだと納得してくれている。一度ならず二度までも敵対させられ、今のままだと三度目も確定とあつては大人しくしているしかない。

「僕達はそもそもの立ち位置として、基本的に待つことしか出来ない。午後からはまた来栖が情報を共有するためにここに来てくれる。それ以外はいつも通りに過ごしてほしい」

作戦の再立案が必要になったため、大本営側からはここに来る余裕が無いようなので、来栖提督だけが来てくれるようだ。信用ある鎮守府と情報共有出来るのはいいこと。是非とも知ってもらいたい。

来栖提督がやってくる午後までにいろいろやっておく必要がある。そのため、まずは最優先とされた朝霜の脳の侵食の治療。セットさえしてしまえばあとは時間が解決してくれるものなので、朝食後にすぐに処置された。これにより、昼食くらいのタイミングで完治していることが約束された。

ギリギリまで風雲が側におり、最後までお互いに憎まれ口を叩いていたのは印象的だった。それだけ気が許せる姉妹というのがよくわかる。

それを待つ間に三日月の診察も行なわれた。昨晩は結果的に蝦尾女史しか見ていなかったのだが、飛鳥医師にもしっかりと診てもらった必要があるだろう。

当然私も付き添いということで参加。蝦尾女史も侵食が拡がる瞬間を見ていたため、サポートとして参加している。医者というよりは看護師のようなポジション。

「髪の色が全て白になってしまったのか。三日月は眼が起点だからか、頭が最優先で侵食されてしまうわけだな」

「はい。あとはこれを」

「ヒビ……か。若葉の痣に近しいものに見えるが、少し触診させてもらうぞ」

飛鳥医師が三日月の首筋に触れる。私も昨日何度か触らせてもらったが、ヒビというよりは妊娠線のように線が入っているようなイメージ。

「ふむ……このままであれば何事も無いだろう。ただし、これ以上侵食が拡がった場合は、良くない結果になるやもしれない。治療出来るものなら優先的におききたいな」

「ヒビが入っているということは、最悪な場合、そこから裂けてしまう可能性も」

「無くはない。なるべく大事にならないようにするのなら、首に何かを巻いておいた方がいいかもしれない。負の感情の昂りがそこに直結する可能性があるのだから、万が一を考えると保険をかけておくべきだ」

飛鳥医師も、三日月のメンタルの弱さは理解している。三日月もこの施設の中では古参に近い。第一印象は最悪だったが、長く付き合っているためにその辺りの理解度は高い。

そうそう無いにしろ、また何かしらの負の感情が発生して侵食が拡がろうとしたとき、三日月は次は首から伸びていくことになるだろう。私の痣が拡がるかのように、首から身体や顔の方にヒビが拡がり、最後は砕けてしまうなんていう不安が出てきてしまった。

「包帯を巻いておけばひとまずは大丈夫だろう。三日月、それで良かったか?」

「はい、それで結構です」

この戦場では負の感情が増福することもまだまだあるだろう。念

には念を。毎朝私が首に巻いてあげるのがいいだろう。

「診察はこれで終わりだ。お疲れ様」

「飛鳥先生、朝霜ちゃんが目を覚ますまで休んでくださいね」

「そうさせてもらおうよ」

明らかに疲れが見えた。匂いからもわかっている。それは蝦尾女史からもだ。

少なくとも三日月が目を覚ますまでの深夜まで蝦尾女史が起きていたのはわかっている。おそらく飛鳥医師もその時間まで起きていただろう。治療したものが全員目を覚ますまでは起きていそうな雰囲気はあった。

眠ったのは私達とどっこいどっこいくらいの時間だろう。その日は一日中研究やら治療やらを続けた挙句だ。途中眠っていた私とは違う。昨日から残った疲れと、単純な寝不足で、今の飛鳥医師は消耗しているはずだ。勿論蝦尾女史も。

「飛鳥先生が話を素直に聞くのは珍しいですね」

当たり前のように三日月の皮肉。私もそれは少し思っていた。今まではそれでも無理していたのが飛鳥医師。医者の不養生とまでは行かないものの、切羽詰まることが多く、結局体力で解決していたことも多い。

それに、私達の変化を見たら、まず確実に落ち込むところから始まると思っていた。私に関しては昨日の内に確認していそうだが、三日月のことを知ったのはつい最近だろう。

「蝦尾さんが加わってくれたおかげでな……それなりに心の余裕が手に入った。相変わらず君達の姿を見たから心にクるものがあるが」

「気にするなと言ったろう」

「だから気にしないようにしているんだ。治療法は常に探し続けている。若葉の細胞の件は僕も既に貫っているからな」

悲観的な部分を表に出さなくなったのは大きい。それだけ気を楽に持ってくれていると思う。

それもひとえに蝦尾女史の尽力のおかげだろう。サポーターとして生活の部分まで手を入れている。そこに元々のサポーター要員であ

る雷の手も加わるので、今の飛鳥医師は今まで以上に伸び伸びと活動出来ている。表情も若干健康的になったか。

「蝦尾さんには感謝しているよ。研究で余裕が出来るようになったのは本当に大きい」

「頑なに1人でやろうとしてたのは飛鳥医師だろう」

「巻き込みたくなかったんだ。他人を」

飛鳥医師の研究は他人に目をつけられることが多いような禁じ手もいくつかある。蘇生がその代表だ。それに他者を巻き込みたくないというところから、余程のことが無い限り、外部からの人との関わりを避けてきた。それ故に負荷が異常だった。

それも今は違う。作業に余裕が出来たことで、心にも余裕が出来た。おかげで負荷も減った。1人とはいえ巻き込んだ結果だ。仲間というのはやはり必要である。

「研究どころか、飛鳥先生の生活にまで関与出来るなんて感激ですよ。朝から晩まで一緒ですからね」

「実際助かってる。これからもよろしく頼むよ」

「はい、喜んで」

心の底から喜んでいる蝦尾女史の匂い。飛鳥医師も社交辞令ではなく本心からの感謝。お互いに信用している。つい最近出会ったばかりなのに、

私もこういう立ち位置となり、蝦尾女史がほのかに抱いている感情もわかるようになった。出来ることなら応援してあげたいものだ。好きなものと一緒にいられるというだけでもモチベーションは上がるし、日々が明るくなる。朝に三日月が言っていたように、世界が明るく見える。

この明るい世界を維持するためにも、この戦いは早く終わらせたいものだ。

落ち込む姉妹

昼食に近いくらいの時間で、治療が完了した朝霜が目覚めた。侵食を治療されたことにより、常に艤装を装備し続けなければならないリミッターの外れた身体は元に戻った。

私、若葉が匂いを確認して、治療が完全に終わっていることを確認した。シロは今回は欠席。あんなことがあった翌日では、まともに動けない。

「おお、ホントに痛くねえや！」

「それは良かった。治療は成功だな」

艤装を外した状態で最初にやった時のように鉄パイプを握り締めるが、どれだけ全力を出して握っても凹みすらしなかった。以前の状態でそんなことをやったら最悪の場合、朝霜の指や腕が壊れていた可能性だつてある。それが無くなったことで、朝霜は正しく艦娘へと戻れたことになった。

「はあ、これで部屋の片付けで苦労しなくて済むのね」

「力加減ミスってドアノブぶっ壊したのはマジで悪かったつて」

心底安心したように溜息を吐く風雲と、それを知ってか知らずかケラケラ笑う朝霜。寝るときに拘束具を着けていたほどの状態だ。風雲も相当苦労していたようである。

部屋の一部を壊してしまうのは日常茶飯事。食事の時ですら、朝霜は専用の食器を使っていた程である。だが、そんな生活も今日まで。

「こいつとももうおさらばかあ。ちよいと寂しいねえ」

今まで使っていた日常生活用の艤装をしみじみと眺めている。完成させられ、艦娘としては壊された証でもあるそれは、長いこと使われていたため、随分と傷だらけになっていた。

「いざって時のために、部屋に置いといやダメか？」

「僕はそれでも構わないが、風雲はどう思うか」

「置いておくくらいなら別に。またこの前みたいに襲撃受けたときには役に立つし」

使い続けていただけであり、大分愛着が湧いているようである。許可

が貰えたことをとても喜んでいた。ついさつきまで自分の身体の一部だったものだから、手元に置いておきたいのだろう。その気持ち、わからないでもない。

「では、これで治療完了だ。これからもよろしく頼む」

「あいよ。あたいもでつかい恨みが出来ちまったからな」

二度も支配されるといふのは屈辱の極み。今回の治療により最大限深海棲艦に対する支配が効かなくなったため、戦える機会さえ与えられれば確実に参加するだろう。朝霜もそれくらい恨みが溜まっていた。

朝霜だけではない。今回の件で支配された者全員が同じように大淀に対して憎しみを募らせている。勿論三日月も。それを慰めるためにも、私が側にいてあげるのだ。

「まあ、あたいなんて軽いもんだけどな。二度目だし。シロクロはマジで落ち込んでたからな……」

目覚めたときは三日月が一番危なかったが、その時に酷く落ち込んでいたのはシロクロだ。初めて持ってしまった、今まで一緒に暮らしてきた者への悪意と殺意で大泣きしてしまった。クロは一切隠さず、シロはセスに背中を押されたことで決壊した。外見相応に泣きじゃくる姿は、見ていていたたまれないものであった。

今は2人のことをセスが見てくれている。セスだって同じように支配されていたが、戦闘そのものに参加していない分、2人よりはダメージが小さい。それに、今はエコをシロクロに貸し出し中だ。アニマルセラピーで癒されていってくればいいのだが。

「朝食の時も食欲が無いように見えた。ストレスで何かしらの体調不良を起こしかねないな」

「ならそれとなく確認しておく。若葉^{ホク}なら匂いである程度わかる」

「ああ、頼む」

こういうときに嗅覚を使わないでどうする。いろいろとやってきたおかげで、ただの匂い以外もほぼわかるほどにまで成長してくれた。前々からもそうだったが、今の私に隠し事は出来ない。嘘の匂いどころか喜怒哀楽もわかる。

「ホント便利よね……若葉の鼻」

「ありがたいことにな」

この戦いが始まってすぐに手に入れてしまった力ではあるが、ここまで重宝することになるとは思わなかった。

昼食後、来栖提督の到着までもう少し時間があるらしく、休憩の間を使って三日月と共にさりげなくシロクロに接触する。私も両眼が侵食されたものの、三日月ほど使い慣れていない。もしかしたら三日月の眼でも何かわかることがあるかも。

クロはセスから預かっているエコを撫でながら癒されており、シロに至ってはセスに甘えているほどである。そのおかげか、体調不良のような感じは見えない。

「シロがそうしている姿を見るのは初めて見るな……」

「……うん、ちよつと……ね」

クロの前ではちゃんと姉として振る舞うシロでも、今回のこととはとても大きく響いているらしく、施設の中でも一番甘えやすいセスに抱きついて癒されていた。虚勢を張っているわけではないのだが、心の傷はシロの方が大きかったということなのかもしれない。

妹は姉に甘えられるが、姉はそういう相手がいない。シロはそういう相手をセスに見出したようである。セスもそこに否定的な感情は見えないため、今だけは3人姉妹のようになっていく。

「ワカバはどうしたの？」

「若葉^{ボク}の艦装の件が聞きたかった」

直接例の件を話すのは憚られる。そのため、私に変化した際に得た艦装のことを振って感情の匂いを読み取ることにした。

艦装も自分としては気になっている部分だ。いつも使っている初春型艦装に追加して、太腿にシグの艦装が生成されてしまったのだから、今の私は普通ではない重装。メンテナンスも他よりかかることになるため、シロクロやセスに迷惑をかける可能性もある。余裕があれば自分でもメンテはするつもりだが。

「正直驚いた。あれは完全に深海棲艦の艦装だよ。しかも新品」

「ねー。私達みたいになっちゃった感じなのかな」

エコの腹を撫でながらも笑顔で応えてくれるクロ。今のところはアニマルセラピー効果もあって感情は穏やか。シロもセスの温もりにより比較的穏やかである。

3人が私の追加で生成された艤装の解析をしてくれていた。今までの継ぎ接ぎ艤装とは違った、完全な新品な艤装。成分は深海棲艦のそれと全く同じ。私とシグの同調の結晶。

「若葉ホクの中の駆逐棲姫と同調した結果だ。侵食が拡がった結果でもあるか」

「……そっか、あの時、ワカバものすごく怒ってたもんね。侵食が拡がってもおかしくないか」

「ワカバは……怒りと憎しみが力の根源みたいだからね……」

徐々に声のトーンが落ちていく。何を話してもどうしてもあの件に繋がってしまう。そうなった時、すかさずエコが頬を舐めた、こうしてみると本当に犬のようである。シロの方はセスがしっかりとケア。

感情の匂いも穏やかさが失われて、あつという間に悲観と自己嫌悪に埋め尽くされる。思い出さないように耐えていたのを、私の言葉で崩してしまったかのように思えた。

「どうしても、ね。あの時のことを思い出してしまうらしい。まあ私もなんだけど」

「……すまない。気を利かせることが出来なくて」

セスのメンタルケアのおかげで、また泣きじゃくるようなことは無くなっている。だが、今朝も泣きながら目を覚ましたらしい。伊504と同じように悪夢を見てしまっていたそうだ。

あの時のたった数十分の話でも深く深く刻まれてしまっている。シロは吐いてしまうほどに憔悴していた。

「私は殆ど痛手を負ってないからね。最低な気分だけど、まだ耐えられる。だけど、この子達にはちよつと重いんだよ。何かあるとすぐにそちらに引っ張られちゃうんだ」

苦笑する。セスだって悪意に満ちた思考に支配されていたはずだ。

それでもまるで気にしていないような素振り。やはり、何もしていなかったというのが大きい。

「しばらくは私が一緒に寝ることにした。リコにも話を通してね」
胸に顔を埋めて震えているシロの後頭部を撫でながら話すセス。クロもエゴを抱きしめて顔を埋めている。大きなぬいぐるみを抱きしめているように見える。エゴも空気を読んで大人しくしていた。

この施設にいる最初から深海棲艦である者達を1つの部屋に割り当ててケアをしていくという方針で行くようだ。艦娘より落ち着くだろう。シロはセスに、クロはリコに添い寝を頼んでいるのか。

「あまり若葉は顔を見せない方がいいだろうか。刺激が強すぎるかもしれない」

「……大丈夫……」

エゴを抱きかかえながらだが、クロが少し涙声で言ってきた。泣きじやくることは無くても、泣かないわけではない。あの時の悪意の記憶に押し潰され、感情が激しく揺れている。

「ワカバが悪いわけじゃないもん……というか、ここの人達に悪い人はいないよ。私達が迷惑かけちゃっただけだから……」

「違うぞクロ。若葉は迷惑だなんて思っていない」

支配されたことが罪なわけがないのだ。気にするなど言っただけにしくなることは無いだろうが、ここ以外の者のように開き直つてくれればいい。笑い話にしろとまでは言わない。ただ、あれは自分のせいじゃないとだけ刻んでくれれば。

「お前達は大切な仲間だ。だからこそ、若葉も謝りたい。あの時は殺そうとしてすまなかった」

「ワカバ……」

「言い訳になってしまいが、リミッターを外していたせいで攻撃してくる者全てを敵として考えてしまったんだ。本当にすまない」

イムヤと呂500に止められていなかったら、あの時2人の首を折る勢いで蹴り飛ばしていた。そうだったら最後、2人ともこの世にいなかった可能性がある。そうでなくても重傷。飛鳥医師なら治せるかもしれないが、そもそもそういう怪我を負わせること自体が良くない

い。

「仕方ないよ……ワカバも……あの時は暴走に近かった……」

シロもおずおずと口を出してくる。セスにしがみついた状態はやめず、顔もこちらには向けない。

「シロ、クロ、気にするなどは言わないけどさ。みんなのおかげで施設には何も起きていないんだ。そんなに落ち込まなくていいよ。さつきクロが自分で言ったろう。ここの人達に悪い人はいないって。そこにはシロもクロも含まれてる。誰も悪くないんだ」

諭すように話すセス。そう、この施設の者は全員被害者だ。大淀のせいで捻じ曲げられただけで、今は何事もない被害者。自分に恨みと憎しみを向けてはいけない。向けるなら全部大淀に向ければいい。

と言っても簡単に行かないことはわかっている。時間をかけてケアしていく必要はあるだろう。シロクロは特に子供だ。何度も何度も慰めて、気にしなくなるまで親身に付き合っていく方がいい。何か吹っ切れるきっかけがあればいいが。

「うん……頑張ってみる……お仕事はちゃんとするから……」

「えらいぞ。辛かったら休んでもいいんだから」

「ううん、何もしない方が辛いもん。せめて工廠で働かせて」

こういう時は何もしていない方がダメな方向に沈んでいつてしまおうだろう。何でもいいから作業をしておけば、少なくとも罪滅ぼし出来るように思える。何もしないよりマシだ。

「ワカバ……こんな私達だけ……いつも通り接してほしい……」

「勿論だ。シロもクロも、施設の仲間だからな。もう長い付き合いだろう」

「そうだね。うん、そうだよ。私達はワカバに拾ってもらえたから生きてるんだもん。いつも通りでよろしくね」

空元気に見えなくもないが、少しはまた穏やかに戻ってきたようだ。心が前向きになったのも匂いからわかった。すぐに元に戻ることは難しいと思うが、この調子なら時間が解決してくれるだろう。

言いたいことがあれば好きに言ってくれればいい。やりたいことがあるのなら出来る限り応えよう。ゆっくりでいいから、前に向かっ

てくれれば。

「ところで……聞きたいんだけど……」

気を取り直したところでシロが突然質問。

「何かあるのか？」

「ワカバと……ミカヅキ……何かした？　すごく繋がりが……濃くなってる」

そうだった。シロはそういうことが見えるのだ。だが、おそらくそっち系の知識は無い。私と三日月の関係を細かくはわからない。知識外のことで繋がってるのなら、興味も出てしまっただろう。

「そういえば、昨日の夜も何かしそうだったよね。何したの？」

クロも好奇心旺盛に聞いてきた。途端に顔が真っ赤になる三日月。そういうところも可愛い。

「あー、シロ、クロ、それはお前達にはちよつと早い」

セスはわかってしまったらしく、有耶無耶にしてくれた。流石に知識のないものに説明するのはよろしくない。

というか誰に聞かれても説明するつもりはない。如月辺りは追及してきそうだが、何を聞かれても知らぬ存ぜぬを貫き通そう。

とにかく、シロクロは少しだけでも前を向いてくれた。あとはセス達に任せよう。何かあれば口を出せばいい。

さらなる限界を超えて

午後、昼食後の休憩も終わり、来栖提督が到着。今回の送迎は珍しく海風率いる二四駆。文月率いる二二駆は近海哨戒任務中らしい。また、いつも通り鳳翔がついているのはわかるが、明石まで来ていた。今回は少し事情があるようだ。

施設襲撃が真つ昼間に行なわれたというのもあり、来栖鎮守府でも警戒態勢をさらに上げているそうだ。一度襲撃を受けているのだから、そうするのも普通であろう。私達は敵の親玉とその側近と戦っているが、その他にもまだまだ敵が増える可能性だってあるのだ。

「こいつア驚いた。若葉も三日月も侵食が進んでんじゃねエか」

大発動艇から工廠に降り立って第一声がそれ。私、若葉も三日月も、見た目にわかる変化をしているのだから仕方ないか。私は顔を半分埋める痣が、三日月は髪の色が全て変わったことが、そして2人して癖っ毛が出来ていることがどうしても目立つ。

「いろいろあったんだ。それについては飛鳥医師から聞くことになるだろう」

「電話で多少は聞いてたが、流石に驚いたぜエ」

来栖提督を連れてきた二四駆はやはり反応してきた。私と三日月に出来た癖っ毛は、蝦尾女史が言うには白露型改二によく出る特徴らしい。言われてみれば、海風にも江風にも犬の耳のような癖っ毛がある。海風のもは少しタイプが違うように見えるが、江風のもは殆ど同じだ。

「なーんか他人の気がしないねえ。姉貴みたいだよな」

「だよねえ。こいつは何か謎があるに違いねえ！」

私と三日月の髪をピコピコと指で弾いて遊ぶ江風と涼風。私は別にいいのだが、三日月は少し困り顔。軽く手を払って制しておく。

「でも、どうしてこんなことに？」

「若葉の憶測だが、この腕の元の持ち主が白露型なんじゃ無いかと思うんだ。いや、まあ駆逐棲姫ではあるんだが、その元になったというか……」

説明がとてもしにくい。とにかく、艦娘の想いの結晶である駆逐棲姫がこの腕だと伝えた。

さすがにこれには来栖提督も含めて驚いていた。シロクロ達から始まった友好的な深海棲艦の存在から見ると、深海棲艦の生まれ方も様々なのだろうという意識はあつたようだが、ここまで明確に元艦娘の要素を受け継いでくることもそうそう無いらしい。

「なんか……そんな感じはしてた」

山風がボソリと呟く。そこで海風も何かに気付いた様子。

「山風がすぐに懐いたのはそういうことだったのかもしれないね。今の若葉さん、少し姉達の雰囲気似てます」

懐くと表現されたことで山風が恥ずかしそうに海風をポカポカ叩いていた。

確かに最初から少し雰囲気が柔らかかったのは覚えている。周りからも珍しいことがあるもんだと冷やかされていたことも。それは山風が姉の雰囲気を私から感じ取っていたからだだったのかもしれない。

「そうなのか？」

「言われてみりゃ確かにね。髪型とかそういうのじゃなくて、雰囲気がちよいとだけどさ」

海風がそう言ったことで、涼風も何か感じるものがあつたようだ。海風が姉達と評したのは、白露型を総合したような雰囲気に見えるからだとか。その白露型は目の前の4人しか知らないのでも何とも言えないが、妹がそういうのだからそうなんだろう。

シグは自分で家村提督の部下の想いの結晶であると言っていた。その部下というのが白露型だったのかもしれない。いつか下呂大將辺りに調べてもらって聞いておこう。

「提督、私は例の件やっておきますね」

「おう、頼んだぜエ明石イ」

珍しく明石が来たのは、何か理由があつたことだろうとは思っていたが、この施設に関係することの様子。私と三日月は来栖提督への状況報告に参加するためこの場から離れるが、その間に施設に所属す

る者に対していろいろとやりたいことがあるそうだと。

状況報告には私と三日月、鳳翔、そして旗風が参加。鳳翔以外は直接対決をしているという理由。旗風に至っては、日向と1対1で戦い、敗北したという経験がある。このことについては話しておきたい。

最終的には下呂大将にも伝えられるのだが、この施設の次に狙われる可能性が高いのは来栖鎮守府だ。敵戦力の情報に関しては。最速で伝えておく必要があるだろう。

「聞けば聞くほどやべエことはわかった。単機でのスペックを最大限に上げられてるわけだ」

「それを側近、護衛に使ってるんだ。まず近付くことから難しい」

2人の側近が圧倒的な力を持っており、遠近何もかもが出来る超万能戦力。相当な使い手である旗風も一方的にやられるほどのなには相当にまずい。

それを潜り抜けて大淀だけをやろうとしても、大淀自体がそれに匹敵するほどのスペック。深海棲艦と化した後の正確なスペックはわからないにしろ、私の一撃を腕を掴むことで普通に止めてきたくらいなのだから、動体視力やら回避能力が異常なのはよくわかってる。

「んなもんがついている大淀によくもまあ一撃喰らわせたな」

「……若葉^{ボク}もあの時はおかしかった。自分の身体の負荷を考えずに跳んだんだ。自分でも知覚出来ないスピードが出て、気付いたら大淀の顔面を蹴っていた」

「ほオ、なるほどなア。侵食が拡がって、リミッター外しの暴走もあって、誰も見えないくらいスピードが出たわけだ。代わりに脚がぶっ壊れるって感じか」

事実、私の脚は僅かではあるものの修復材を使われる程に壊れていた。1回でアレだ。戦場でも3回が限界かと思っていたが、それだけやったら脚は再起不能になるほどに壊れる気がしてならない。

「認識出来ない程の速度でギリギリ。それを出来るのが若葉だけ。やったところで若葉が壊れる可能性がある。こいつア厳しいな」

私は筋力が足りないから速さでどうかした感じ。筋力があれば上から押し込むことも出来るかもしれない。私の筋力程度では簡単に受け止められたくらいだから、今のままではどうにもならない。

結局のところ、必要なのは今以上の力。力も、速さも、何もかもがまだまだ足りなかった。敵の人道を顧みない違法改造はそれほどまでに強い。

「だが、太刀打ち出来ないわけじゃ無エ。そのために俺アいろいろと準備してきた。大将にも言われてたんでな」

「それが今、明石がやってることか」

「おう。ちよいと練度を測らせてもらってる。お前ら流石にカンストしちまつてるだろう」

以前に鎮守府で改装してもらったときにも明石に測ってもらった練度。あれから大分時間が経っているため、私達の練度も上がっているだろう。

その練度は限界というものがある。計測上99までしかいかないらしい。それ以上はどれだけ鍛えても意味がないものになる。私達は練度以外のところで鍛えてはいるものの、それもそろそろ限界。今以上に強くなるのが本当に難しくなっている。

「練度の限界突破を言い渡されたんだ。うちの鳳翔にもやってる処置でな」

「ああ、アレか。……アレはやってもいいものなのか？」

「今は緊急事態だからな。大将が推奨してきたんだぜエ？」

何か問題でもあるのだろうか。飛鳥医師が少し眉をひそめる。来栖提督もあまり乗り気では無いようである。

「私も司令に処置をしていただいております。艦娘の力を底上げし、練度をさらに上げるように出来るものです」

「若葉達に一番必要なものじゃないか」

今以上に強くなれる見込みが出来るというのはとてもありがたい。しかも簡単な処置でそれが出来るというのなら尚更だ。何故そんなに尻込みをする。

「システムとしては簡単なんだ。とあるものを身につけるだけでい

い。ある意味別物の艦装だ。枠に囚われず、底上げのためのアクセサリーだと思えばいい」

「尚のこといいな。で、そこに何が問題があるんだ。デメリットがあるから飛鳥医師が躊躇っているんじゃないのか？」

「……デメリットらしいデメリットはない。ここにいる全員分揃えるのに時間がかかる程度だろう。来栖の言い分としては、それも準備済みということだろう」

「よくわかってんじゃないか」

ここまで聞いても出し渋る理由がわからない。練度が限界に達しているのなら誰にでも使えて、身につけるだけで限界を超えることが出来るなんて、今の私達的に使わないと損というレベルである。

「なら何故そこまで」

「そのシステムの名前がな……ケツコンというんだ」

魂を結ぶと書いて、結魂^{ケツコン}。自らの艦娘としての魂をより今の身体に結び付けることにより、限界に達した身体能力を底上げし、艦装の能力もより強く引き出せるようにするという強力な手段となる。

だが確かに、その名前は抵抗があるだろう。鎮守府に所属するものは提督との結婚という体で練度の上限を取っ払うものらしく、そのアイテムというのも指輪。名前が名前なので、提督側ですら複数人とのケツコンは控えているところが多いそうだ。来栖提督も鳳翔にしか処置をしていないのだとか。ちなみに下呂大將は第一水雷戦隊全員がケツコン済み。単純な強化アイテムとして見ている。

「それは、誰かに指輪を着けてもらわなくちゃいけないとか、式を挙げるだとかは必要あるのか？」

「いや、無い。指輪があれば自分で勝手に着けてしまえばいいだけだ。だが、名前がそれなんでな。式を挙げる鎮守府も少くない」

そう言ったことを知っていたから、飛鳥医師は抵抗があつたのだろう。愛だの恋だのが関わってくる名称故に、ケツコンの処置を受けた艦娘そのものが、提督に受け入れられた証とも言える。

この施設には提督なんていないので、ただの限界突破システムとして認識出来ないものの、どうしても名前がついて回るものだ。下呂大

将のようにただの限界突破アイテムとして使えばいいものなのだが。

「まああくまでも推奨だ。体裁とかもあるからな。結局のところ、最後は艦娘の意思になるんだよコイツは」

自らの魂に関わることなので、私達にその意思が無ければ機能しないらしい。そういうところでも名称が足を引っ張っている。強化を受け入れただけなのに結婚を受け入れたようにも見え、意思はなくても提督との関係を望んだ形に見えてしまう。

とはいえ、今よりも強くなれるというのは魅力的な手段だ。それに、ここには提督という存在がないのだから、単純な強化としての認識もしやすいだろう。

「若葉はケツコンをしてもいいと思ってる。今より強くなれるのならそれに越したことはない」

「私もお願いします。強くなれば、あの忌々しい支配を受けずに済むかもしれませんし」

私は勿論のこと、三日月も乗り気だった。今よりも強くなれるということは、大淀の支配を多少なり回避できるようになるかもしれない。夢の中でぼいに身体は動かなくなると言われてしまったが、そこを乗り越えることが出来れば戦える。

「大丈夫だとは思いますが、まず練度を測ってからな。限界に達しなかった場合はやりたくてもやれねエ」

「わかった。それが終わり次第頼む」
「本当にいいのか？」

飛鳥医師は若干懐疑的。どうしても体裁のところは気になるだろう。だが、顔に痣や傷があるよりは全然マシだとおもう。

それに、私達にはもう一つ乗り気である理由がある。

「構わない。それに、絆が形に見えるようになるのは嬉しいんだ。なあ、三日月？」

「はい。私もそれを思っていました。私達の絆の証が出来るのは嬉しいですね」

魂を結ぶ強化とはいえ、結婚という行為。絆を深める行為だ。私は

三日月と共にケツコンをしたいと考えていた。形として残したい。

私と三日月の変化の中で、外見以上に大きな部分。それを目の当たりにして、来栖提督は目を丸くし、鳳翔はあらあらと微笑む。

「おいおい、飛鳥よオ、こりやどういうこつた。仲がいいとは思ってたが、ここまでだったのか？」

「……みたいだな。侵食が進んだ結果だ」

「仲が悪いよかいいたア思うが、ここまでなのはあまり見ねエなア。北上と大井みてエじゃねエか」

ともかく、今以上に力が手に入るのなら嬉しいことだ。全体的な底上げにより、私も耐久力が強化されるかもしれない。1回やっただけで脚が壊れかけるようなことが無くなればまだ勝ち目が出る。出来ることは全てやっていかなければいけないだろう。それがまさか結婚という形とは思わなかったが。

「最低限2人分は確実に揃えておく。それでいいな？」

「ああ、頼む。若葉^{ボク}は三日月と」

「私は若葉と」

三日月と見合つて、自然と笑みが溢れた。絆の証明がこんな形で出来るなんて。正直、強化は二の次になってしまいそうであった。

指輪の重み

来栖提督が提言してくれた、さらなる艦娘の強化方法。練度が限界に達している艦娘のみが行なえるという、艦娘のスペックを底上げする処置。指輪を着けるだけではあるが、結婚という名目がつく体裁上の諸刃の剣、ケツコン。

ある意味ノーリスクで強化されるということ、私、若葉と三日月はそれを受けることにした。練度については測ってもらわなければならないが、おそらくそこは心配していない。以前測った時からかなり高く、そこから何度も訓練と実戦を繰り返している。

「練度99、限界値ですね」

明石に測ってもらったところ、案の定である。私も三日月も成長限界に達していたようだ。ケツコン以外での強化となると、技を研ぎ澄ますくらいしか無くなってしまふ。それでも限界はあるだろう。練度が上がらないのだから。

「これで全員測り終わりました。お疲れ様です」

「どうだったよ」

「練度が上がりきっていないのは暁と初霜だけですね」

暁は参入が遅かったのと、練度1の状態で拾われたというのもあり、まだ限界までは行っていないようだ。ただし、あと少しで達成するらしく、充分戦力として扱えるレベルになっている。リコの特訓恐るべし。

初霜に関しては、記憶を失っているのだから以降の練度は上げる必要が無かった。完成品だからといって練度が限界に達しているわけでもないようだ。

「暁はまず改装ですね。第二改装まで行けますから、鎮守府に来てもらえればすぐにでも出来ます」

「そうなんだ。先生、それでいいかしら」

「ああ、練度が高いのなら改装してもらった方がいい。身体が強くなることはいいことだ」

より戦えるようになるというより、死にづらくなるというのが大きい

い。死ななければ治せるのだから、なるべく長く生きられる手段は全て推奨である。

暁はこの後、来栖提督の帰投についていく形で鎮守府へ出向。改装を受けて明日施設に帰投するという流れが出来そうである。さすがに1人だけで行くのはやめたほうが良さそうなので、数名は便乗することになるだろう。姉妹である雷や、従兄弟に近い存在である曙、あとは台所の手伝いである呂500辺りが適任か。

「あとですね、深海棲艦の方々は測っても練度1で固定でした。おそらくですが、生まれた時点である意味練度の限界のようです」

「なるほどな。艦娘と違って成長しないってことか」

「ですね。おそらく例の処置をしても何も変わらないんじゃないかなと。やってみる価値はありますが」

ということとは、残念ながら深海棲艦の面々はケツコンは出来ないという方向に。死んで蘇った赤城は元より、生きたまま変化させられた翔鶴もダメらしい。深海棲艦に変化した時点で練度は1に戻され、それが限界となったようである。

私や三日月のような侵食では練度が戻されるようなことは無かったのはありがたい。これでこれ以上は無理と言われたら八方塞がりだった。

「なら、大淀はこれ以上成長しないということか。改造はあるかもしれないが」

「完全に深海棲艦となっているのならそうでしょうね。翔鶴さんがそれを実証してくれています」

それでも油断ならないのが大淀なのだが。艦装やら身体やらを改造して強化されてくる可能性は全く否定が出来ない。

「暁と深海勢以外は全員可能ってことだな。結構人数いるじゃねえか」

「準備済みなんだろう?」

「まあな。ありがてエことに、大將が20人分は用意してくれてるらしいぜエ。深海勢が可能ってんなら足りなかったが、これなら足りてるな」

1つ用意するだけでも大変だろうに、さすがは下呂大将だ。とはいえ使わなかった分は回収らしいので、大本営も少し嘯んでいそう。「若葉と三日月はさつき言った通り処置を受けさせてもらう。よかつたよな」

「ああ、他には全容を伝えておかないといけない。抵抗がある者もいるだろう」

指輪をただ着けるだけ。それだけでも随分と重いことになってしまった。大本営を少し恨むものも出てきてしまいそうである。

来栖提督を交えて、全員の前でケツコンのことが説明された。元々の鎮守府にいた加賀や赤城はこういう強化があることは知っていたようだが、それ以外のものはその存在すら知らなかったようだ、大淀もそれについては何も伝えていなかったようである。

当然ながら打ち合わせの場は大波乱。やはりケツコンという名目と指輪を身につけるといふ行為がそれを助長している。強くなれることと婚約が同義語となると抵抗が現れるのもわかる。

「若葉と三日月は決まっている。他の者は自分で決めてもらいたい」「重てえ名前だなあオイ。あたしらは誰と結婚することになんだよ」

「システム上の名目だ。誰かと婚姻を結ぶわけじゃない。鎮守府では提督との婚約のように扱われることも多いが、ここにはそういう者はいない。ただの強化アイテムとして見るべきだろう」

などと飛鳥医師は取り繕っているものの、この施設に飛鳥医師しか男性がいけない以上、変に意識してしまうのは確かである。

それに比べて私と三日月の余裕感からの高みの見物。施設公認の仲というのはこういうところでも大きな意味を持つものである。どういう目で見られようがお構いなしである。

「来栖、今ここにはいくつかあるのか？」

「いや、今日は持ってきてねエ。大丈夫だとは思ってたが、練度の計測も必要だからよオ。数が決まったら明日にでも送らせるぜエ」

今すぐケツコンというわけではないので考える時間は貰えるようだ。とはいえおおよそ半日。正直強化を受けない理由はないのだが、心

の準備というものが必要だろうか。

私としては早急がいいと思う。今日突然襲撃に来る可能性だつて無いわけではない。強化は早いうちがいいだろう。

まあこれは建前。早く三日月とのケツコンしたいというのが本心。証が欲しい。だが、施設の仲間達の前で証を立てるといいうのもいいかもしれない。どちらかといえればそちらに迷ってしまう。

「暁の改装についていけば、指輪がすぐに手に入るだろうか」

「そうなるなア。大将に用意してもらった指輪は、うちの鎮守府にあるからよオ」

指輪が20個積んでるのは壮観だろう。それはそれで一度見てみたいものである。

「ならば、若葉と三日月は暁に便乗させてほしい。あちらでケツコンするかはさておき、そちらの手を煩わせることは無いだろう」

「姉さん達にも会いたいので、私達が遠征という形で取りに行くという事で如何でしょうか」

三日月もやはりどうせなら私達の居場所であるココでケツコンしたいという気持ちはある。だから、遠征という形での出向を希望した。

それに、文月達にも報告しておくのもいいかもしれない。妹さんを下さいと言わんばかりのご挨拶である。

「誰かに付き添いをしてほしいとは思ってたんだ。なら若葉と三日月、君達に任せる。あとはそうだな、暁が行くなら雷、付き添いをしてもらっていいか」

「りよーかい！ お姉ちゃんのことだもんね、勿論私が行くわ！」

これで簡易駆逐隊となつて1日だけの出向が出来る。大発動艇を使える者はいないものの、運ぶものがそこまでの荷物では無い。鎮守府から帰るときの荷物なら手で運ぶくらいで行けるだろう。

遠征はそれはそれで今までにやったことがないので楽しみである。これだけ長く施設で生活していて遠征1つしたことないとか、駆逐艦娘としてどうなのだろう。

「それじゃあ飛鳥、数が決まったら連絡くれや。出来りや今日中、最悪

明日の朝な」

「ああ、暁のこと、よろしく頼む」

「あいよ。それじゃあやることもやったし、帰るぜエ」

これにより来栖提督の用事は終了。ここからは暁の改装のために鎮守府へと出向し、私達は指輪を運ぶための遠征となる。物資搬入の遠征というのは初めて。少し楽しみだ。

施設を出て、来栖鎮守府に到着した時にはもう薄暗くなっていた。午後から施設で用事を終わらせ、その日中に帰ろうとすると、どうしてもそういう時間になってしまう。

ここに来るのも久しぶりだ。以前に来た時は空襲を受けて半壊していた時だが、今は前よりも強靱に修復された後。工廠も以前よりも広く、使いやすくされているように見えた。

「じゃあ早速だが、暁の改装を始めるぜエ。つっても、30分もかからねエ。それは知ってるよなア？」

「ああ。第二改装までやった摩耶の時にそこまで時間がかからなかったのを覚えている」

それくらいなら工廠で待てばいいだろう。雷も姉が改装でどうなるか楽しみのように、工廠から離れる気は無さそうだ。

「お姉ちゃんは改二なのよね。すごく強くなって帰ってくるかも！」

「そうだな。あのリコに鍛え上げられてるのもあるし、もう十分戦力だろう。戻ったら夜間警備に参加してもらおうことにしような」

「そうね！ これで駆逐隊も3つ作れるわ！」

今までリザーバーだった朝霜と卷雲も、如月と暁と組むことで新たな駆逐隊として活動出来るだろう。隊内部で入れ替えをしてもいい。それこそ以前ののように、九二駆を夕雲型で固めてもいいかもしれない。その辺りは戻ったら考えよう。

暁が改装を受けている間に、件の指輪を見せてもらう。試作品とかそういうのではなく、本物。明石に絶対に嵌めないようにと念を押された。嵌めた時点でケツコン完了。情緒も風情もなく処置が終わってしてしまう。実際はそれでいいのかもしれないが、私達はそれでは困

る。

しっかりと小さなケースに入ったそれは、どちらかと言えば飾り気のない銀のリング。だが、艦娘である私達だから感じるものの出来る力のようなものを感じる。

「これがケツコン指輪……確かにただの指輪じゃないわねコレ」

「鎮守府によつては選ばれた者しか着けられないリングなんですよね……。何処か神々しさを感じます」

三日月もしげしげと見つめていた。嵌めてはいけないのだから、ケースから出すこともなくただ見るだけ。触れもしない。

「雷は処置を受けるのか？」

私達には躊躇いが無かったが、雷はどうなんだろう。私達には全員その選択権がある。名目上の結婚という形になるが、抵抗さえしなければ全員が貰えるものだ。

「私？ 私は受けるわよ。だって、施設を守るためには力が必要だもの」

あつげらかんと云つてのける。名目なんて関係無しに、施設の存亡がかかっているのだから躊躇しないと。

他の誰よりも施設に愛着があるのが雷だ。未だに敵を殺さない水鉄砲を使い続けているが、施設を守るためには手段を選んではいけないと考えている。不殺さえ出来ればよし。それ以外は全て掴み取るようだ。

だから雷には恋愛感情的なものは微塵も存在していない。雷にとっては、誰もが好きの対象である。飛鳥医師にも、私にも、等しく好意的。だからケツコンという言葉にも抵抗がまるで無い。

「それに、先生とそういう仲で見られるのは苦じゃないわ。長い付き合いだしね。そもそも施設に来る人は事情を知ってる人達ばかりでしょ」

「まあ確かにな」

そういう意味では躊躇う必要は無かったか。特に雷は、何があつても施設から離れるようなことは無いだろうし。

それは私も同じだ。こんな身体になった以上、戦いが終わつても三

日月と共に施設に居座り続けることになる。特に三日月は、肌を治療してもらおうという約束もあるわけだし。

施設を離れる可能性がある者は少し抵抗があるかもしれない。

「若葉と三日月も？」

「若葉^{ボク}と三日月はお互いに送り合う形だな」

「2人でケツコンするんです。式は挙げませんが、指輪交換はするつもりですよ」

それを聞いて、雷は素敵だと称賛してくれた。施設公認の仲であるお陰で、みんな理解してくれている。これは絆の証なのだから、指輪交換でより深い仲になれるだろう。そもそも大分深いが。

「若葉^{ボク}がここに来たのは、ほら、二二駆の面々に報告もしたくてな」

「報告？ 三日月さんを僕に下さい！みたいな？」

「それに近いな」

そうやって突き付けられると途端に緊張感が出てきてしまうが、元々三日月に私との仲を問い詰めるような姉妹達だし、付き合いも長い。三日月からどう聞いているかは知らないが、正直心配はしていなかった。

「私は応援してる。どんな形であれ、2人は幸せなんですよ？」

「ああ」

「はい、勿論」

「なら言うまでも無いわよね。何はなくとも楽しく生きていけるのが一番よ。2人の選択は、きつといい方向に行くわ！」

雷も祝福してくれる。その後押しだけでも自信が持てるというものだ。

みんなは強化的な意味合いが強いが、私達には少しだけ意味が変わる。今からその時が楽しみである。

楽しく生きるを実現するためには、三日月の存在は必要不可欠だ。いてくれるだけで、私は楽しく生きていける自信がある。

より深い絆を

翌朝、大量の指輪を持って帰投する。半日も無いくらいに迷った結果、最終的にはケツコン出来るものは全員する方向で落ち着いたそうだ。体裁よりも施設の存亡を取るのは必然のことでもある。

また先日と同じように襲撃されたら、まず確実に全滅だ。大淀があの調子だったからか、伊勢も日向も本気を出していないことが痛いほどわかってる。そもそも私、若葉や三日月を生かして捕らえようとしていた時点で本気では無い。あれをどうにかするためには底上げは必須。

「お姉ちゃんも練度が99になったらケツコンするの?」

「した方がいいのよね。ちよつと足りなかっただけみたいだし、もう少しリコさんに鍛えてもらったら限界になりそうなの」

第二改装まで終えた暁も、ケツコンはしていく方向で考えているようだ。暁はその体裁自体にあまりピンと来ていないようだが。

「ケツコンしたらまた一人前のレディに近付けれるわよね」

「お姉ちゃんは充分レディだと思うわ。お料理も手伝ってくれるし、戦いの後のケアとかホントに頼りになるもの!」

「そ、そうかしら。ふ、ふーん、やっぱり暁ったらレディの風格備えちゃってるのね」

レディかどうかはさておき、戦闘に出ていない時のケアの仕方はとても的確だ。怪我を負ったらすかさず治療に来てくれるし、気を失ったものは即座に運び出す。戦場がちゃんと見れているのだと思う。

そんな暁、第二改装をしたことにより新たな装備、探照灯を手に入れた。その観察眼は索敵能力にも繋がり、さらに探照灯があるため、夜間警備でも活躍してくれるだろう。

「それにしても、指輪すごい量ね」

「これだけあると流石にな」

施設所属の者から、深海勢を抜くと総勢19名。うち、初霜は練度不足どころか今は戦闘にすら参加しないため後回しとして、近日中に達成しそうな暁の分まで含めて18名分の指輪が必要なわけだが、用

意してもらった20個全てを運んでいる。念のため深海勢にも指輪を着けてもらい、練度の限界が上がるかを確認するためだ。なので、今回は帰投に明石がついてきてくれていた。

1つの箱が小さくても、これだけあるとそれなりのサイズになるし重さもある。艤装を装備しているのだから重さに関してはどうと言うことはないが、雑に扱うわけにもいかないのも綺麗に梱包されているものを運んでいる。やはり、大発動艇があった方が良かったか。

「戻つたらすぐに着けるつもりだ。義理の姉達にも挨拶出来たしな」

「義理の姉……って、文月達のこと？」

「ああ、昨日の夜に」

ケジメとして昨晚、いつものように三日月と話にくる二二駆達に、面と向かって今の状況を伝えた。ケツコンの際に指輪交換をする約束をしていることも。

揃って祝福してくれたが、まさかそこまで進んでいるとはと驚かれたものだ。大淀の非道な所業も関係しているが、私の侵食が大きく進んだことが主な理由だ。私が止まらなくなった。ただそれだけ。

「親族公認の仲ってことね。おめでと、若葉」

「ああ、これで悔いは無い。最初から無かったが」

「幸せなら形なんて関係無いのよ。昨日も言ったけど、楽しく生きていけるのが一番なんだから」

その通りだ。楽しく生きる事が出来ればいい。

「ところで、明石が持つてるそれは何だ？」

便乗してくれている明石は、指輪ではない手荷物を持っていた。少し大きめな紙袋のようだが、重そうではなく、見た目では中に入っているものの形もわからない。

「ちよつとした饞別です。施設に到着したら出しますよ」

明石はニツコリ笑っていた。匂いも企んでる雰囲気はあるものの悪い感じはしない。何かはわからないが、そういう風に言うくらいなのだから心配は要らないだろう。紙袋に入れているくらいなのだから軽いもの。見当が付かないが不安は無い。

しばらく行けば施設に帰投。加賀や瑞鶴の飛ばす哨戒機が見えた。

航行中も何事もなく、施設も昨日のまま。夜の内に襲撃を受けたとかは無かったようで安心。

工廠に到着すると同時に、私の持つ大荷物を工廠にいた摩耶とリコが受け取ってくれた。これが件の指輪であることはわかっているため、なるべく丁寧に。別に落としてしまっても壊れるようなことはないと思うが、艦娘にとって重要な意味を持つアイテムだ。万が一傷がついても気分が悪い。

「初霜を除く全員分だ。暁の分も入っている。あとは余った分も深海勢に使ってみようってことで持ってきた」

「ご苦労さん。さすがに多いな」

「ああ。重くはないが、持ってくるのは大変だった」

肩を回すとゴキゴキと音が鳴る。3人に護衛を頼みつつ私がここに運んできたわけだが、身体が凝り固まってしまったようだ。

「昼飯の後にこいつを使うことになるわけだな」

「ああ、時間的にもそうなるだろう」

朝に鎮守府を出て、ここについたのは昼食前というところ。指輪を使うのは昼食後になりそうだ。

昼食後、やはりこのタイミングで指輪の話題が出た。全員集まっている食堂で話すことになったが、実際にその処置をするのは自室に戻るなりこの場でやるなりすればいい。

全員揃った場とはいえ、食堂での指輪交換は流石に風情が無い。だが、施設にいい感じの場所が無いというのも確か。強いて言うなら談話室か。普通の鎮守府なら会議室とかでやったり、職人妖精に頼んで式場のような部屋を作ったりするそうだ。

「装丁もすぐくしっかりしてるのね……」

配られた指輪の入った箱をしげしげと見ながら呟く曙。一番最後まで悩んでいたのは曙だそうだ。

この事件が終わった後、曙はこの施設から出て行く可能性が無いとは言えない。そうした場合、何処かの鎮守府に属することになるだろう。そうなった時、ケツコン済みだと嫌でも配属先の提督とそうい

関係に見られてしまうことだろう。それを嫌がっていた。人間嫌いではなく提督嫌いという少し特殊な艦娘である曙故の苦悩。

「あとはこれを各々指に嵌めてもらうだけだ」

「練度限界を越えたことは私がわかるので、嵌めたら私が確認しますね」

昨日やった練度の計測を改めてすることで、限界を越えていることが確認出来るそう。そうでなくても、指輪を嵌めれば感覚的にわかるらしいので、計測はどちらかといえば念のため。

「さて、でもその前に。若葉と三日月は式挙げませんか？」

「えっ」

急に振られて驚く。指輪交換で終わらせるつもりだったが、明石からそれを振られるとは思わなかった。

何でも、来栖鎮守府では簡単なが式が挙げられたらしい。明石はそれがとても印象的であり、また、いたく気に入ったようで、出来るものならケツコンは式を挙げた方がいいのではと思っっているそう。ただ、来栖鎮守府でケツコンはもう無いと提督の方針により決められている。そのため、式を挙げたいとなると来栖鎮守府以外の場所になってしまう。

施設でのケツコンの件は、明石にとっても都合だったようだ。準備万端になるというものである。

「というわけで、艦娘一世一代の晴れ舞台です。式、挙げましょう！」

「いや、明石、いきなりそんなことを言われてもだな」

「元々は指輪交換で終わらせるつもりだったので……」

私も三日月も突然突きつけられてすぐに答えが出せない。だが、ここから明石以外の声も上がり始める。

「いいじゃない。せっかくなら挙げましょうよ。三日月は挙げないって言ってたけど、挙げておいた方がきつといい方向に行くわ！」

「おう、お前らの仲はみんなわかってんだからよ。アタシは構わねえぜ？」

雷と摩耶が後押ししてきたことで、だんだんと乗り気な者も増え、私と三日月の挙式が私達の意味とは関係無いところで出来上がって

行く。施設内でやるのは難しいから浜辺でやろうだとか、明石がそれを取り仕切るだとか。

飛鳥医師や蝦尾女史までその案に賛成していたのは意外だった。そういう形でメンタルの抛り所をしつかりと固めておくことはいいことじゃないかと。ケツコンという名目に難を示していた飛鳥医師だが、私達なら問題ないと言ってくれている。

「わかった。みんながそう言うのなら、三日月と式を挙げる」

「その、ありがとうございます。私達、添い遂げます」

ということ、このまま挙式の準備となった。トントン拍子に決まっていたのが少々怖かったが、この機会はありがたく使わせてもらおう。

自室で挙式の準備。私には姉が付き人となってくれている。こういう時にはやはり姉妹がいることがありがたい。三日月の付き人は当然如月である。

「まさかここまでやることになるとは思わなかったぞ」

「良いではないか。晴れ舞台じゃ」

私は、明石の持っていた紙袋の中身である、式用の服を着せられていた。最初から明石はここで私達の式をやるつもりだったようだ。

だが気になったのは、私が着せられているのは男物のタキシードである。サイズも驚くほどピッタリ。如月が言っていた婿というのがついに実現してしまった。

「若葉ボクが新郎なんだな」

「そうなるじゃろうて。自分でもわかっておろう？」

「……ああ。だが、別にどちらでも女物で良かったんじゃないか」

どちらがやると言われれば私になるだろう。シグとの同調で中性的なタイプに磨きがかかってしまっているし。

この状態で外へ。今日はとてもいい天気であり、風もほとんど吹いていない。本日はお日柄もよくと言い切れるほどの晴天。そんな中でこの式である。

施設のみんなも既に待機してくれていた。私の男装を見て感嘆の

息を吐くものや、素直に驚く者など多数。

「若葉……」

「三日月、来たか……っ」

私が外に出てすぐ、三日月も到着。私がタキシードなら、三日月はウエディングドレスだろうと思っていたが、まさにそれだった。あまりにも似合っていたため、息を吞んでしまった。それを如月に見られてニヤニヤされた。

「よく、似合ってる」

「若葉も。でも男装なのね」

「若葉が婿^{ボク}というのは周知の事実らしい」

2人して苦笑し、そのまま手を繋いで明石の前へ。みんなの前で堂々とこういう行為をするのは初めてではあるが、羞恥心よりも誇らしさが先立つ。隣に三日月がいるからか。

本来の式とは段取りがまるで違うのだと思うが、今回の目的である指輪交換へ。

「では、若葉から三日月へ嵌めてあげてください」

「わかった」

ケースに入れられた指輪を取ると、三日月の左手を取り、薬指にリングを通す。これにより三日月は練度の限界が突破された。指輪が嵌った瞬間に三日月が心地良さそうに目を細めたのは見逃さなかった。

「では、次は三日月から若葉へ」

「はい」

お返しと言わんばかりに、三日月が私の左手を取り、薬指にリングを通してくれた。瞬間、力が湧き上がる感覚。これは確かに心地よい。だがそれだけではない。三日月との明確な繋がりが出来たことが、限界を超えた心地良さ以上の感覚を与えてくれた。

見えない繋がりは幾つでもある。心の繋がり、身体の繋がり、ついには夢の中まで繋がった。だが、誰からでもわかるものというのは今まで存在しなかった。それがコレだ。

「お疲れ様でした。後から測りますが、これで限界を超えました」

明石の宣言で、みんなが拍手喝采してくれた。

これにより式としてはこれで完了。必要最低限の内容だけでも、式としての体裁は整っているものである。周りにみんながいてくれて、その中心で指輪を交換するだけでも、これはケツコンの式であると言える。

「どうですか？ 練度が上がった実感ありますか？」

式を執り行えたことで満足げな明石に聞かれた。

「ああ、実感できる。漲るようだ」

「私もです。今まで以上の力が出せそう」

お互いに左手の指輪を見た。昨日鎮守府で見たものと同じ、少し味気ないシンプルなケツコン指輪。だが、この存在が今はとても誇らしい。

強くなった証であり、私には三日月との繋がり証。飛鳥医師が言うところのメンタルの拠り所。これがここにある限り、私達は折れない。

「本来のケツコン式なら、誓いのキスとかもあるんですが」

「……そこまで本格的にやる必要があるのか？」

「雰囲気ですよ雰囲気」

流石にそこまでは……と思ったが、明石の言葉を聞いて三日月からの匂いが若干変化。求めるような、だが人前という状況に羞恥心で卒倒しそうな、そんな複雑な匂い。

そんな匂いを嗅がされたら、私も少し昂ってしまう。が、三日月の意思は尊重したい。やはり衆人環視の中というのは少し抵抗がありそう。なので、三日月の耳元で囁く。

「夜に、な」

「うん」

明石にも気付かれないように。三日月はそういうところはデリケートなので、懇切丁寧に。

「さすがに勘弁してくれ」

「ですよー。なら写真撮りましょう写真！ 一生物ですからね！」

ケラケラ笑う明石。申し訳ないが、ここからは本当にプライベート

な問題だ。式を挙げただけでも充分だろう。

これにより、私と三日月はより深い絆を得ることが出来た。お互いを拠り所としたことで、この世界をより楽しく生きることが出来た。お互いだ。

義理の姉妹

みんなの祝福の中、私、若葉と三日月のケツコン式が執り行われた。その中で指輪交換を行ない、練度の限界を越えることに成功。男装させられたのも相まって、とても思い出に残る一幕となった。最後に明石が写真撮影までしてくれて、さらには式で使った服はプレゼントとして貰えるとのこと。これも立派な思い出の品だ。

その日の夜、本来は夜間警備だったのだが、暁の初陣をしておくということで私と三日月がトレード。リザーバーから暁と如月が夜間警備に出てくれた。如月からは初夜だものと物凄く余計なお世話をされたが、気遣いはありがたくもらっておこう。

「姉さんの気遣いが身に染みるわ」

「だな。如月はよく気が利いてくれる。たまにお節介だが」

「若葉も姉さんにとっては義理の妹なのよ」

急に貰った休みのようなもの。風呂に入り寝間着姿で語らう。如月から言われたせいで、新婚初夜というイメージが頭から離れず、いつもの夜とは少し違う感覚を持ってしまっている。

式の時から若干意識していた。明石に振られた誓いのキスの件を後回しにし、今の今までお互いに我慢してきている。夜に2人きりとなった時点で、三日月からも悶々とした匂いが漂い始めた。そして私もそれに引っ張られている。

「しかし……本当にこういう関係になったんだな」

左手の指輪を見てしみじみと呟いた。今はもう施設内の殆どの者が持っているものではあるものの、私と三日月のこれは意味合いが違う。お互いの思いが詰まった、心の拠り所だ。気持ちの持ち方が違う。

「……不思議な気分ね」

「ああ。だが、悪くない」

自然と手を繋いでいた。悶々とした匂いはより強くなり、お互い気分が昂っているのがわかる。夜であることもあり、初めてそうなった時のことも思い出される。

気分が昂揚する。愛し合うには絶好の条件が整っている。三日月の眼も少し潤んでいるように見えた。お互いの気持ちは同じだ。

「三日月、もう若葉は我慢出来そうにない」

「私も。式の時からずつと我慢してたもの」

誰も見ていないが誓いになるだろうか。お互いに誓っているのだからいいか。などと考えている間に、三日月側から来た。目の中にハートマークが見えた程である。

我慢出来ないと言っただけあり、そこからはもうすごかった。初めての時よりも激しかったと思う。

翌朝、清々しい朝。身も心も満足して眠り、目が覚めたら目の前に愛する人がいる。なんて素晴らしい1日の始まり。今までもそうだったが、ケツコンしたことでより一層世界が明るく見える。

時間としてはまだ薄暗いがそろそろ夜明け。いつもの時間よりほんの少し早いくらいか。夜間警備がもう少して終わるかなというくらい Тайミング。

「おはよう、三日月」

「おはよう、若葉」

私起きると同時に三日月も起きていた。布団の温もりと三日月の温もりが気持ちいい。昨日は少し激しかったが、朝は眠気もなく起きることが出来た。

「いつものに行こうか」

「うん、今日はシロさんとクロさんも便乗よね」

「ああ。エコの散歩だからな。今はそういうケアが必要な時だ」

朝は早いがちゃんと起きているだろうか。今はセスと一緒に寝ているし大丈夫だとは思いますが、少し心配。

ささつと着替えて外へ。私達が出ると既にセスが外にいた。これはいつも通り。少し違うのは、エコと元気に遊んでいるクロと、セスの隣で寝惚け眼なシロがいること。一応は起きていているようだ。

「おはようみんな」

「おはよう。いつも精が出るな」

「基礎は怠れないからな」

基礎トレーニングほど怠るわけにはいかない。ケツコンして練度の限界を越えた今なら尚更だ。基礎をしっかりとっておかなければ、鍛えられるものも鍛えられない。

「……昨日より……繋がりが濃くなってる」

シロの的確な一言。前回もそうだったが、知識は無くても指摘はしてくるから恐ろしい。今回はケツコンしたからということであろうにか誤魔化したのが、クロはさておきシロはいろいろ勘付きそう。

三日月が来たからか、クロと遊んでいたエコが三日月の方に突っ込んできた。これもいつもの光景。今までの基礎トレーニングのおかげで体幹がしっかりしている三日月は難なくそれを抱き締める。これくらいなら艤装が無くとも余裕である。

「わっ、もう、エコちゃんは元気ですね」

「エコってミカツキのことホント好きだよね」

「ええ、いつもこの時間は体当たりを」

三日月も加わってエコを舐め回す。艤装ではあるがエコが喜んでいるところが見えるようだった。三日月とクロの顔をペロペロ舐めながら嬉しそうな息を漏らしている。

「それじゃあ、散歩行くぞー」

「はい！ ミカツキ、エコ、行くこう行こう」

先日からは大分元気になっているように見える。だが、匂いからはまだ完全に開き直れてはいないことが嫌でもわかる。この中で唯一正気を保っており、あの戦場で大きく変化させられた私を見ると、どうしてもあの時の感情を思い出してしまうようだ。それでも、私達に心配させまいと明るく振る舞っていた。

心が痛いのに私を離そうとしなかったクロは、メンタルがとても強い。外面も内面も子供だが、芯は通っている。大淀なんかより人格者だ。

「シロ、行けるか？」

「……うん、大丈夫」

「無理せずにな」

シロクロはエコの散歩に参加するのも初めて。クロは性格通り元気がいっぱい体力もあるが、シロはクロと真逆。頭脳労働タイプなので体力があまり無い。それでも海中ではまるで違う動きを見せる辺り、特殊な潜水艦なだけある。

エコのスピードに合わせて歩いたり走ったり。クロが煽って全速力で走ったりするものだから、エコは大喜びだが三日月はゼエゼエと言いつつ。シロは最初から走るつもりはないようで、セスと一緒にゆっくり歩きながらついてきていた。

私はどちらにも付き合うイメージ。全力疾走もやったり、ゆっくりとした散歩にも付き合ったり。エコやクロと戯れる三日月を遠目で見るのも良いものだ。どの視点から見ても愛らしい。

「……まだまだ……開き直れないね」

ボソリとシロが呟く。私が来栖鎮守府に出向していた一昨日や、三日月と共に寝た昨日も、シロは案の定悪夢に苛まれたらしい。クロも驚されたようで、エコを抱き枕にしていたがそれだけでは足りず、セスが2人とも抱き寄せたのだとか。

今も見た目相応に子供っぽく、セスと手を繋いで散歩しているくらいだ。次の戦いは深海勢は欠席となるが、出来たとしてもまともに戦えるかもわからない。その時までに関き直れるかなんてわからない。子供なのだからずっと気にし続ける可能性だって高い。

こんな形で施設の最大戦力が封じられるだなんて思いも寄らなかった。

「いいんだ、シロ。ゆっくり、一歩ずつ行こう。お前のは時間がきつと解決してくれるはずだ」

「……うん。ごめんね……大事なところで役立たずで」

「何を言ってる。十分に役に立ってるだろ。艦装のメンテ、完璧だったぞ」

出来ることはしつかりとやってくれている。それで今は充分だ。施設で艦装を整備することだって戦いの1つ。

シロも最初は不器用だったが、今はクロと一緒にやり続けただけあって工廠仕事も完璧。作業が遅くとも丁寧な仕上がりなので信用

度も非常に高い。

「お前達は気負い過ぎなんだよ。甘えていいって言ったでしょ」

だんだん俯いてきていたシロの頭をセスが撫で回して慰める。やはりこういうところを見ると、本当の姉妹のようにも見えた。

「私は……クロちゃんのように強くないから……」

「強くなくちゃいけないわけじゃないよ。私見てみな。エコがないと何にも出来ないんだから。戦力で言ったら私が一番弱っちいんじゃないかな。それに、まだ知り合い以外の他人が怖くて仕方ないよ。自慢じゃないけどメンタルも弱いからね私は」

自虐的な発言だが、それを自覚しているセスはその分だけ強い。自分の弱さをしっかり知っているから、妙に立ち回り方が上手くなっている。人との関わり合いを避けたがるからか変に回避性能は高いし、エコがいるのなら軽空母としては無類の強さを誇っている。

自分の在り方を理解しているからこそ、こんな戦い方が出来るのはなかるうか。

「私から見れば、シロも凄く強いよ。妹のこと、よく見てるじゃないか。気にさせないように気丈に振る舞ってるのはわかってるんだからさ。本当に弱かったらそんなことも出来やしないから」

「そう……かな」

「そうだよ。だから、シロの強さは私が保証する」

ニカツと笑った。その笑顔に、シロの不安も少し薄れたように思えた。やはりシロには甘える相手が必要だったのだ。

この数日間、常にセスが2人の側にいた。辛くなったらすぐに甘えられる相手がすぐ横にいるというのはそれだけでも心強い。クロはもうそれで安定を手にしていたが、シロはもう少し時間がかかりそう。

「……セスは……強いね」

「さつきも言ったけど、私は弱いよ。でも、ここで暮らしてきているろ知ったからさ。楽しく生きような」

ここでなら楽しく生きていけるだろう。何もかもが終わったら施設を出るかもしれないが、その時が来るまではここで楽しんでほし

い。

「……お姉ちゃんみたいだね……セスは」

「別にそう思うならそう接してくれても構わないよ」

「……ありがとう……セス姉さん……」

姉と呼ばれてセスがときめいたのは誰が見ても明らかだった。そういう関係もいいだろう。深海棲艦に姉妹関係というのは稀のようだし、心の支えをそういうところに見出すことも悪いことではないだろう。

散歩終了。三日月はクロとエコに振り回されていつも以上に疲れているようだった。朝食後くらいに風呂に行くべきだろう。ただでさえ上から下までジャージフル装備なのだから、私以上に汗をかいているようにも見えるし。

「夜間警備、お疲れ様」

そのまま工廠へ向かい、交代してもらった夜間警備の出迎え。今回は私と三日月の部分を暁と如月に交代してもらった五三駆である。本来私である旗艦は曙に代理を任せていた。引率は瑞鶴。潜水艦は伊504。

見た感じ何事も無かったことはよくわかった。ただただ疲れたという匂いと表情である。

「夜間警備は何事もなく終了。あー疲れた！」

瑞鶴が宣言し、全員が大きく息を吐く。一斉に疲労感を外に出した。引率の瑞鶴も何度も哨戒機を発艦したようで、大分お疲れの様子。

「みんなこんなことやってたのね……物凄くお世話になってたのがわかったわ」

「お姉ちゃんもこれからは一緒にやるのよ」
「え、ええ……すぐく眠いわ……」

特に疲れているのは暁。初めての夜間警備に緊張していたのだろう。やっと終わったと言わんばかりの匂い。工廠に戻ってきたらドツと疲れが出たようだ。これだけやって疲労感をあまり出してい

ないのは曙くらいである。

案の定、暁は夜間警備では大活躍だったようだ。何事も無かったにしろ、最初から持っている探照灯で闇夜を照らし、高い索敵能力で周囲を確認する。正直、今後も必要不可欠な存在だ。3つ目の駆逐隊の旗艦は暁になるのでは無かろうか。

「Hおo腹 f空aいmたe! 美味しそうな匂いもするし、早く行こう行こう!」

「はいはい、その前にアンタはちゃんと身体を拭きなさい」

「はにやはにや、わかつてますよーだ。ボノ、タオルタオル!」

海中から浮上してきた伊504は、多少は疲れているようだが元気いっぱい空腹を示す。海中というのはやはり勝手が違うのだろうか。

「姉さん、交代ありがとうございます」

「いいのいいの。妹の新婚初夜なもの、如月からの饞別よ」

などと言いながらもこちらをニヤニヤしながら見てくる。如月はいろいろと察しているようだった。少し近付いてきて、ボソリと

「昨晚はお楽しみだったのかしら」

酷いことを呟くものである。そしてそういう関係を一番望んでいるのは如月ではないかと思えた。ただの耳年増な子供に見えなくもないが。

だから、私もハッキリと答える。

「ああ、楽しませてもらった」

「あらあら、それがどういう意味なのかは詮索しないでおくわね。妹もいとお嬢さんを貰ったみたいで、如月嬉しいわ」

私と三日月の蜜月を手取るように把握しているような仕草。私のように匂いがわかるわけでもなし、当たり前だが監視カメラを仕掛けているわけでもなし。本人曰く、乙女の勘。そんなことに勘を働かせなくてもいいと思うのだが。

「若葉ちゃん、これからも妹をよろしくね」

「言われずともちゃんと守るさ。義理の姉として、見守っててくれ」

「ふふふ、そうね。後は子供でも産んでくれればいいのだけど」

それは流石に無茶というもの。

変化した限界

大淀自身による襲撃が行なわれてから今日でおおよそ3日。下呂大将主導による鎮守府襲撃計画は、敵のスペックが一部判明したことで練り直しとされている。先送りにするのは2〜3日と言っていたものの、それ以上かかりそうであった。伊勢と日向の大まかなスペックがわかったことも大きい。大淀の支配能力に警戒して念入りな計画再考になっている。

施設は指示を待つことしか出来ない。その時が来たら指示に従い、選出されるであろう面子が出向して最後の出撃となるだろう。

「今は申し訳ないが、待機ということになる。連絡が来るまでは待ち遠しいと思うが、普段通り過ごしてほしい」

全員揃う朝食の場。飛鳥医師が改めて話してくれた。誰もがこの施設の立ち位置はわかっているつもりだ。ここはあくまで鎮守府ではなく、大本営に管理された医療施設。メインは研究であり戦うことではない。故に、自衛はするが、攻め込むのは本来の在り方に反する。場所は加賀と赤城がわかっているため、行こうと思えばいつでも行けるのに、待機させられるのは歯痒いものだ。だが、他ならぬ2人が待機を選択しているのだから、施設の者は誰も動くことは出来ない。

今のままでは出撃したところでまた支配され、あの時の二の舞となってしまう。赤城も嫌な思いをしている1人だ。あれをまたやりたいとはいくらなんでも思えない。

「ケツコンしたことで練度の限界を越えている。その分、訓練がより身になるだろう。それも込みで、普段通りにしてくれ。夜間警備も予定通り続ける」

代わってもらった分、私、若葉と三日月は今日当番になる。相方はリザーバーの朝霜と巻雲か、また別の面子となるか。それはまた相談しておこう。

それまではやれることをやる。私ならまず訓練か。艦装の整備はシロクロ達がしつかりやっておいてくれたため、私自身で触るところは無い。

「では今日も一日、よろしく頼む。夜間警備組はご苦勞様。ゆっくり休んでくれ」

既に暁がうつらうつらしていたのは見なかったことにして、新しい一日が始まる。私は今日は訓練と行こう。

今の身体になって大淀に一撃喰らわせることは出来たが、それは身を削つての一撃だ。もつと確実に、消耗なく同じことが出来るようになりたいものである。そのためにも自らを鍛え上げ、施設を守ることに尽力していきたい。

私が気合を入れたことを感じ取ったか、隣の三日月も気合が入っていた。三日月だって大きな被害者だ。あの時の経験を思い出し負の感情が増幅した結果、侵食が拡がってしまったている。絶望による自殺願望まで芽生えさせられたことで、大淀への怒りと憎しみはさらに増している。気持ちは一緒だ。

「若葉は訓練？」

「ああ、三日月もだろうか？」

「うん。まずは何も変わってないか確かめないとね」

全て白く染まった自分の髪を撫でて話す。ここまで侵食が拡がっているのなら、私と同様に脳への侵食も深くなっているはずだ。私と違って明確に外に出るような変化はあまり無いようだが、髪型は変わってしまったているし、何かしら変化があってもおかしくない。それこそ、あのぼいのような要素が何処かに出ている可能性だってある。

「今までと同じように、一緒にやるか」

「うん、そうする。同じ訓練だしね」

こういうところも一緒に出来るのは嬉しい。私達はいつでも一緒だ。

予定通り、まずはリミッター解除訓練。以前と同様にゆっくりとりミッターを外していく。長時間のリミッター解除のための訓練ではあるが、今回は自らの変化を自覚するための訓練になる。

先に私から。戦場では怒りと憎しみに吞まれて、敵対した者を皆殺しにするようになってしまったが、今はどうだろうか。

「どう？」

「……若葉^{ホク}としては前から変わったようには思えないな」

伊勢と日向は殺してもいいかと思えることはあるが、おおよそ変わらず。あの時ほどの殺意は、大淀にしか向かないだろう。

ゆつくりリミッターを戻して、今度は三日月の番。私と同じようにゆつくりとリミッターを外していく。その度に顔からは感情が消えていく。これは前までと同じ。

「そちらはどうだ」

「変わってないっぽい。何も感じなくなってる」

感情が失われたことで態度が素っ気なくなるものの、それは前までと同じ。侵食が拡がったにしても、今までのリミッター解除とは何も変わっていないように何より。

ただし、大淀を前にしたときは話が変わる。今回の侵食はそこに特化しているようにも思えた。容赦なく、後先考えず、この身が潰れたとて奴だけはこの世から消し去りたい。その気持ちは前よりも増加しているようだった。

「ううん、少しだけ変わってる」

「何処がだ？」

「大淀は血祭りにあげないと気が済まない」

淡々ととんでもないことを言う。これがおそらくぼいの要素。あんな子供っぽい性格をしていても、奥底はシグより過激な様子。血祭りを書いてパーティーと読むタイプか。無感情な三日月は見慣れたが、ここまで攻撃的な三日月はレア。

リミッターを外した時だけの人格みたいなものがあるように思える。私は私をそのまま持っているが、三日月はぼいが色濃くなるイメージだ。代わりに私は普段からシグが外に出ているので、どっちもどっち。

「んん……なんて言うか、頭の中が真っ赤に染まるみたいな感じかな」

リミッターを掛け直して話す三日月。私も似たようなものだ。リミッターを外すと頭に血が上るといっわけではないが、思考が赤く染まっていくような感覚はする。感情を失う三日月でそうなのだから、

理性を失う私もそうなるのは当然のこと。

「リミッターは前と同じように外せるのなら、若葉^{ホク}としては総合力をもう少し上げないといけないな。本気を出すと身体が壊れる」

「なら演習とかで実戦訓練がいいのかな」

「それをするか筋トレとかで基礎をきっちりやるかだな」

私に欲しいのは耐久力だ。自分の行動で自分が壊れてしまうのは良くない。あの大淀に一撃喰らわせることが出来た最後の一撃。その場にいる者が誰も知覚できなかったというあのスピード。あれを自傷無しで連発出来るようになってやつと一人前。

時間が無いので身体を苛め抜かなくてはいけないそうだが、それももう慣れたものだ。薬湯は確か先日鳳翔が増やしてくれていたはずだから、やれないこともない。

「実戦訓練なら、わたくしがお相手しましょうか」

気配なく現れた旗風に2人して驚いた。戦場で大淀相手にも直前までバレなかった移動術。気配を殺し、気まぐれに動き、気付けば近くにいる旗風の恐ろしい技。別に仲間相手に使わなくてもいいと思うのだが。

「旗風が相手か。敵も刀を使ってくるからな。近接戦闘を挑まれたときに動ける必要はある。旗風、よろしく頼む」

「かしこまりました。三日月さん、若葉さんを少しだけ貸していただいてよろしかったですか」

「訓練ですから問題ありませんよ。私も同じ場でその戦いを見させてもらいます。私は動体視力の類を鍛えたいので」

三日月からも許可が下りたことだし、今日は午前中いっぱい旗風との実戦訓練となるか。

旗風の姉である神風には、まだ練度の低かった時とはいえコテンパンにのされたものである。その妹なのだから、神風と同等の力を持っていると考えてもいい。ならば、ここで勝てるくらいでなくては、私も日向には手も足も出ないだろう。

三日月が見守る中、旗風と向かい合う。さっきの感じからして、リ

ミッターを外しての演習でも問題無いだろう。そのために、拳銃の弾もナイフの刃もダミーに換えてきた。使うかはわからないが、魚雷もダミー。深海製の艦装だけあって、スイッチングでその切りは解決。

旗風もゴム製の模擬刀。神風も使っていたそれは、当てられるとそこそこ痛い。

「重装備ですね。それで高速に動けるといいうのは、何とも不思議なものです」

「若葉もそれは思う。ゴテゴテなのに不思議と邪魔ではなくてな」

シグの艦装である魚雷発射管を撫でる。手に入れたのはつい最近なのに、シグと同調しているおかげか、やたら愛着が湧くものである。

獣のように構える私に対し、フリースタイルで構え自体が存在しない旗風。あくまでも気まぐれに、そのときにやりたいことをやるような型。姉妹でバラバラの剣術を使う神風型の面々の中でも、特に特殊な気がする。

「では参ります」

「ああ、よろしく頼む」

私もゆつくりとリミッターを外していく。どう来るかわからないために速攻勝負。いつもの自分のやり方と何も変わらないようにも思えるが、やれることを極めていく方が早いのは確か。

海面を一蹴り。やはり今までよりも断然速い。脚を壊すほどの速度を訓練で出すわけにはいかないので、今はこれで。それでもすぐに旗風が眼前に現れるほど。

「神姉さんと同等……くらいですね」

旗風からの評価は神風と同等。それはまた嬉しい言葉だ。神風に追い付けと言われて文句を言ったあの時が既に懐かしい。

だが、旗風としてはその速度は見慣れたものである。私がどれだけ速く動いたとしても、どう対処したらいいかを理解しているような素振り。そのため、私の行動の先を読むかのように刃が私の腹に置かれていた。即座に眼前にいたというのに、次の瞬間にはふらつと真横。ギリギリ対応してそれをナイフで止められたからよかったものを、

これが本物の刃なら私の腹は腸をぶち撒けていた可能性大。

「猪突猛進になっておりますね。わたくしはそれに慣れておりますゆえ、対応は可能なのです」

「肝に銘じておく。もっと小細工を考えないとな」

「それがよろしいかと」

微笑まれた後、刀を薙ぎ払われた。そこまでの重みは無い撫でるような太刀筋。今回は押し込むことをせず一度離れた。

「神風はこの時どう返したんだ？」

「そのまま押し込まれましたね。神姉さんはわたくしよりも腕力がありますから」

そういえば、神風はあの俊足と同時に特二式内火艇をバラバラにするような奴だった。近付かれるとそれだけで危険な存在。

「松姉さん程でなくとも、あまり罅迫り合いは出来ませんね。春姉さんは穏やかな太刀筋ですから競りやすいのですが」

「お前達姉妹は全員とんでもないな」

「貴女には負けますよ。とんでもなさでは」

仕切り直して、もう一度獣の構え。今度は脚への負担を気にしつつも、多少無理して動き回ってみよう。

もう一度海面を蹴る。今回は即座に眼前に行くわけでなく、それよりも手前で着地した後、出来る限りの速さを保持して真横や真後ろに向かうように駆け回る。その度に海面から水飛沫が舞い散った。

「今度は小回りですね」

相変わらず気まぐれに刀を振るう。だがそれが私の行動範囲を狭めるような的確な位置。まるで自分のテリトリーに入ってほしくないかのようなのである。

「っしっしー」

行けると思ったタイミングを見計らい、刀を振るった瞬間を狙って突撃。水飛沫も使って目眩しまでした。

だが、その時には旗風は別の場所。やはり猫のような気まぐれさで、悪く言えば適当に動いているようにすら見える。

「お前のそれはどうなってるんだ」

「企業秘密です」

「ならいい。せめて1発くらい当てたいものだな」

その後も縦横無尽に駆け巡りながら戦ったが、旗風には近付けても刃を当てることはなかなか出来なかった。流星は神風の妹と感心してしまったものである。

神風に教えを請った時も触れることが出来なかった。あの時の神風は手も抜いていただろう。今でこそ旗風に本気を出させているようだが、今の私はまだ届かないらしい。

「鍛え直した甲斐はありましたね。わたくしも少し悔しい思いをしていますから」

「どこまでの力があつてか」

「最初の襲撃の際、完成品に苦戦させられましたから」

そういえばそうだった。駆逐艦の完成品を相手にして、中大破者続出だったという話は聞いている。その時から神風型は鍛え直し、より強力な力を手に入れていたようである。

ならば、神風は私の知っている時よりもさらに力を持っているのだろう。また鍛えてもらいたいものである。

これが無傷でボコボコにした日向は何処までの力を持っているというのだ。

「では、さらに続けていきましょうか」

「ああ……って、ちょっと待て。あそこ、何か見えないか」

訓練を続けようと思ったが、一旦中断。水平線の向こうに何かが見えた。私が気付いているのだから、三日月もしっかり気付いていた。水平線を睨み付けるように見ている。

「おや……確かに」

「敵か」

加賀の哨戒機が飛んでいくのも見える。敵だったらそれを撃ち落とそうとするかもしれないが、その様子もない。

そうこうしている内に、顔もわかるくらいに近付いてきた。姿形でわかるのは、それが艦娘であること。同じ服を着た2人なので、おそらく姉妹。

「ここ、ここが例の施設なのか、筑摩よ」

「そのようですね、利根姉さん」

大分疲れているようだ。話し振りからして、来栖鎮守府所属でもない、全く知らない場所からの来訪者のようだ。だが施設のことは知っているようなので、明確に用事があつてここに来たようである。

「お前ら、何者だ」

「すまぬ、吾輩は利根という。施設の者に用があつて来たのじゃ」

三日月は警戒を解かない。匂いからして敵対の姿勢は見えないが、何者かわからないために戦闘態勢。

「何用だ」

「うむ、率直に言わせてもらおう」

ここまでの航行で疲れは見えるが、何処か自信満々な態度で言い放った。

「吾輩達も、大淀討伐に加えてほしいのじゃ！」

友の仇

訓練中に突然やってきた艦娘、利根と筑摩。大淀討伐に加えてほしいという2人だが、正直得体の知れない存在ではあるため、警戒して事に当たる。匂いからは敵対の意思は一切感じない。異形となつてゐる私、若葉や三日月を見ても、驚きこそすれ表に出すようなことはしなかった。ということは、私達のことをある程度は知っているということだ。

「さすがに不審過ぎる。連絡無しに艦娘だけここに来て、大淀の討伐に参加したい？ 怪しんで然るべきだろう」

今までのことを考えると当然怪しむ。暁のときには逃亡してきたかと思えば催眠をかけられていたために内乱を起こされた。

私達で確認出来ることを全てすり抜けてやってくる敵の存在は、いつでも警戒している。この2人もそういういったことがあるかもしれない。

「悪いが匂いを嗅がせてもらう」

「ほ、ほう？ 匂いとな？」

「若葉は感情の匂いがわかる。嘘や悪意は匂いで隠せないからな。拒むのなら敵とみなす」

不審者達を睨み付ける。こちらが敵対の意思を見せれば、嫌でも匂いは変動するはず。

ここで溢れた匂いは、そういう手段で判断されることに対する驚きと抵抗。抗いたいということは何かしらの下心があるのではないか。

「抵抗の意思があるな。何かあるのか」

「汗ばんでおる匂いを嗅がれるんじゃないぞ。乙女として抵抗くらいするわ！」

比較的ポーカーフェイスの筑摩からも似たような匂い。それなりに長い時間の航行で疲労の色は見える。言われてみれば軽く汗ばんでもいるか。感情の匂いばかりに気を取られていたが、よくよく考えてみたら汗臭さも感じる。

「我慢してくれ。身の潔白を晴らすためだ」

「むう……」

「施設に向かってくる者がいると哨戒機から連絡があつただけ」
先程哨戒機を飛ばしていた加賀がやってきた。付近で留まってい
ることも確認したか。連絡無しにやってくる者が近海に留まってい
るとなると、嫌でも怪しむものだ。

その加賀を見た利根は、まるで顔見知りを見つけたような笑顔で手
を振る。匂いも一気に歓喜へと傾いた。それを見た加賀は、今までに
見たことのないようなギョツとした表情に。

「お主もしや、手瀬提督のところの加賀ではないか！」

「貴女……え、まさか有明提督アリアケのところの利根!？」

「うむ！・ 筑摩もおるぞー！」

なんと加賀の知り合いのようだった。その事実がわかった途端、加
賀にしては大きく動揺した。こんなところで会うような間柄では無
いと言わんばかり。

「知り合いなのか」

「……私や赤城さんが手瀬提督の下で働いている時の知り合いよ」

頭を抱えていた。考えてみればこの事態が起きるのも無理はない
と話す。

その有明提督というのがどのような人かは私達にはわからないが、
こういうことをしでかすような提督らしい。これは普通に規則やら
何やらを違反しているのでは無かろうか。遠征という扱いにしろ、許
可を得ずに相手方の施設に来ているのだから。

むしろ、利根の言葉からして大淀との戦いを理解してのコレだ。こ
の施設が狙われていることまで把握済みと言える。それに関しては
下呂大将の策が報じられているとかはありそうだが。

「貴女達、何をしに来たの」

「無論、吾輩くたんらも件の戦いくさに加わるために決まっておろう」

それはさつきも聞いた。加賀が聞きたいのはそういうことではな
く、どういう理由でこの施設まで来たかということだ。それがわから
ない限りは、いつまでも不審者扱い。

「そういう意味ではなく。有明提督の指示で来たのかと聞いている

の」

「勿論じゃ。例の話聞いてから手瀬提督の弔い合戦をするんだと提督が躍起になっておるわ」

「どういう指示で来たかと聞いているのよ」

加賀が押されている。見ていて少し面白い。

大本営経由で今回の話が届いているような相手という意味では、この利根と筑摩が属する鎮守府としても信用は出来そうではある。

むしろ、手瀬提督の弔い合戦と言ったことの方が重要か。加賀の言いつ分を聞くに、鎮守府同士の交流があつたということになる。

「加賀さん、どうしました？」

「ふおお！ 空母棲姫！ 筑摩、空母棲姫がおるぞー！」

「利根姉さん、あまり指をさすのはよくないですよ」

なかなか工廠に戻ってこない加賀を心配したのか、赤城までやってきてしまった。加賀と違って赤城は今は深海棲艦だ。それを見て興奮する利根。指をさしながら声を上げる姿に、筑摩も苦笑していた。

その仕草に見覚えがあるのか、赤城も加賀と同じように知っている者であると認識したようである。加賀ほどでは無いがギョツとする。

「え、有明提督のところの利根さん!？」

「ふあ!? 吾輩は深海棲艦の知り合いなどおらぬぞ!？」

「説明がいろいろ面倒くさいのだけれど、この人は赤城さんよ」

「なんと!? 言われて見れば面影が残っておるな」

加賀が利根に赤城のことについて話をしている間に、筑摩から事情を聴いておく。筑摩の方が妹のようだが、多分こちらに聴いた方が話が早く進む。久しぶりに嘘発見器としての力が発揮出来そうである。

「我々は、下呂大将から援軍を仰せ付かりました。そこで、施設の者達に顔合わせをした方がいいということ、ここに来ました。話は行っていると聞いているんですが……」

筑摩から嘘をついている匂いはしない。ならば本当に援軍として来てくれたと考えればいいか。とはいえ、アポ無しで来たのに、あちらは許可を取つてあるという食い違い。そこは下呂大将に聞いた方がいいたらう。

一応は信用して、施設内に入ってもらうことにした。赤城と加賀が何とか複雑な表情だった。

利根と筑摩には談話室で待機してもらおうとして、飛鳥医師から下呂大將に連絡してもらおう。

「確かに2人の言う通り、先生は有明という提督に対して救援要請をしており、近日中に顔合わせをする算段にはしていたらしい」

「お構いなしに来てしまったようだが」

「……有明提督は、そういう人なんだそうだ」

本来なら下呂大將が許可を出してからのつもりだったが、何を間違えたかもう許可が出たものとはばかり思っていたらしい。

有明提督はそういう早とちりをちよくちよくする人らしく、下呂大將もその都度頭を悩ませているそう。加賀が最初に頭を抱えたのも、それを知っているからだろう。致命的にはならないのでまだマシではあるが。

それでも援軍を依頼したのは、実力者であることと、何より手瀬提督と友人関係だったというものがあるらしい。間柄というなら、飛鳥医師と来栖提督のような関係なのだろうか。

「……提督として致命的な気がするんですが」

「それでも作戦遂行率は高いらしいぞ。必要以上の成果は出すそう
だ」

「有能なのか無能なのかわからないです」

三日月も苦言を呈する。些細かもしれないが、こういったミスをちよくちよくするような提督を本当に信用していいものかどうか。

「艦娘を1人も沈めていない時点で有能ではあるな。それに、あの利根を見ていたら提督がいい人間であることくらいわかる」

その利根は、筑摩と共に赤城と加賀から2人が知る限りの事の顛末を聞いている。説明1つ1つで表情をコロコロ変えて一喜一憂。感受性が高い。手瀬提督やその部下が軒並み殺され、生き残りがもう加賀しかいないことを本人の口から聞くと涙目になっていた。

手瀬提督と有明提督は本当に仲が良かったようで、鎮守府同士でも

よく協力していたのだとか。私だって来栖提督が死んだと聞いたら同じような反応をするだろう。文月達が殺されたと聞けば激昂するだろう。利根もそういう気持ちなのだ。

「吾輩は改めて決意した。必ず仇は討つぞ。違う鎮守府ではあるが、手瀬提督には吾輩も世話になっておった。優しく、芯の通った良い男だった。奴をただの欲のために殺すなぞ、絶対に許してはおけぬ！」
「ええ……勿論よ。彼のためにも、この戦いを早く終わらせるの。私達の鎮守府を取り返さなくては」

もう裏切りの匂いは一つもしない。信用しても大丈夫そうだ。ついでにシロにもこっそり確認してもらったが大丈夫そうという判定。問題は暁の時のような催眠なのだが、下呂大将が有明提督に直接話を聞いているため、その辺りも信用出来る。

最悪なのは有明提督の鎮守府全てが催眠なり何なりされている場合。それを警戒して、念のため大本営の誰かがすぐにでも確認に向かうようだ。当然信用に値する者が。

「疑ってすまなかった。全て確認出来た」
「潔白が証明できて良かったです」

飛鳥医師と共に談話室の中へ。利根は赤城と加賀に再会出来た喜びを噛み締めつつ雑談に興じていたため、話が進めやすい筑摩に説明する。

話しやすいのは筑摩だからか、三日月も筑摩相手ならまだ慣れやすいそうだった。利根のクセの強さは、三日月には少々酷というもの。

「援軍、感謝する。だが、何故2人なんだ。もつと多くで来た方が良かったろうに」

「現在遠征で物資調達中なんです。我々の鎮守府はそこまで大規模なものでは無くて、つい最近、深海棲艦の群れが陸に向かう姿を発見したため、鎮守府総出で討伐していたので」

「人員が足りなかったということか」

施設に住む私達にはあまり縁がない話。人間の生活を守るための、鎮守府、ひいては艦娘には当たり前前の活動。むしろそのために生まれたと言っても過言ではない。

来栖鎮守府だってそういったことはしているはずだ。ここ最近は大淀のことにばかりかまけていたが、遠征で物資を調達し、発見された有害な深海棲艦を討伐する。それが普通。

「ですが……加賀さんのお話を聞いていると、その深海棲艦の群れも少し違和感を覚えます」

「違和感？」

「私や利根姉さんも勿論その討伐作戦に参加していますが、その時に見た敵は、妙に統率されていたように見えました。姫級がいなかったのにです」

野良のイロハ級は獣と同じだ。主人がいないなら気儘に振る舞い、怒りと憎しみに吞まれて理性すら無い状態で周囲を破壊する。目についたものから襲うと言ってもいい。

それが、筑摩には何かしらの目的があるように動いていたように見えたという。それこそ、指揮系統があるかのように。

「……大淀の仕業か」

「あり得るな。野良の深海棲艦を支配し、統率して一箇所を襲わせている」

野良だとあの支配を回避する術が無い。理性のある姫級ですら逃れられないのだから当然といえば当然。

「何故そんなことを」

「あの大淀は馴染ませるために時間稼ぎをすると行っていましたよね。その一環なのでは」

三日月の考えは正解な気がする。新たに得た艦隊司令部の力を慣らすために、野良の深海棲艦を支配して訓練していたということではなかろうか。

結果的にそれがたまたま有明鎮守府管轄の近海で行動したに過ぎない。襲撃が目的なのでは無く、結果的に襲撃になっただけであって目的は統率出来るかどうかだったのだろう。

「また無関係なものを巻き込もうとしたのか。奴はただの愉快犯か」

「若葉は奴をその類^{ホク}としか思っていないぞ。人様を弄ぶことを楽しんでいる。普通の深海棲艦でもあそこまで残酷では無いだろう」

以前に赤城が言っていた言葉を思い出す。本能のままの殺戮と、知恵を持った殺戮、どちらが悪なのか。大淀は勿論後者だ。確固たる意思を持って殺戮を楽しんでいる。ならば許しがたい悪だ。

「筑摩よ、何か難しい話をしておるな」

「今回の敵の件を少し。後から姉さんにも教えますね」

「うむ、よろしく頼む」

どちらが姉なのやら。

「貴女達、この戦いに参加するのはいいけれど……戦えるの？ 第二改装は終わっているようだけれど」

「む、加賀よ、吾輩達を嘗めておるな？ 鎮守府一の航空巡洋艦たる吾輩達を！」

「貴女の鎮守府に航空巡洋艦は貴女達しかいないでしょう」

「またもや頭を抱える加賀。利根はノリで話しているようなタイプにしか見えない。」

しかし、援軍はともありがたいが、半端な実力では一方的にやられるだけだ。私達は訓練や経験、それと本来艦娘ではやらないような戦術を使うことで戦えているが、言い方は悪いが普通の艦娘ではかなり辛い戦いになるだろう。

「ならば、吾輩達の実力を見てもらおうではないか。顔合わせというのはそういうものじゃろうて」

「演習ということかしら」

「うむ。それが一番納得してもらえるじやろ。吾輩の実力、とくと見るがいい！」

成り行きで演習が始まりそうである。確かに実力を見るのなら、実際に戦っているところをみた方がいい。こちらの力を示すことも出来るわけだし。

下呂大將が依頼をかけた鎮守府の者だ。おそらくは相当な実力者だろうが、どれほどのものか。

共同作業

施設にやってきた艦娘、利根と筑摩は、今大淀が占拠している鎮守府の本来の持ち主、手瀬提督の戦友である有明提督の部下だった。大淀の我欲のために殺された友の仇を討ちたいと立ち上がった有明提督が、施設の者に艦娘を顔合わせさせたかったとのこと。

しかし、何処か抜けているのか、話が行っているものと勘違いして寄越してしまったようだ。話を聞いている感じ、敵対するようなことは無さそうである。

そして今は、利根と筑摩がどれほどの実力を持つのかを見ることとなった。生半可な実力では今回の戦いについてこれないぞと加賀が煽ったことから演習が決まったのである。

確かに力を見ておくことはいいことだ。今後の行動にも影響があるだろうし。

「利根、ここの子達がみんなまともじゃ無いことくらい、理解しているわよね」

「うむ。吾輩とてそれくらいはわかっておる。お主もなんじゃその弓は。意味がわからぬわ」

「近接戦闘も可能にした弓よ」

加賀と利根は比較的仲がいいようである。元々知り合いだったというのもあるとは思うが、どちらかと言えば寡黙なタイプの加賀の方から話しかけに行くのも珍しい。赤城もニコニコ笑顔でそれを見ているくらいである。

いわゆる旧友というヤツか。ただでさえ手瀬鎮守府の唯一の生き残りなのだから、こういう形での仲間との再会は嬉しいのだろう。

「で、吾輩は誰とやればいいんじや。吾輩の実力、見せつけてやろうぞ！」

「そうね……一番手っ取り早いのは若葉ね。ここのまともではない部分が一番理解出来るわ」

「失礼なこと言っていないか」

というわけで、加賀から私、若葉が指名された。確かにまともでな

さはこの施設の中では上から数えた方がいくらいだとは思いますが。

演習はさつきまで旗風とやっていたものの、あくまでも近接戦闘の演習。利根は当たり前だが砲雷撃戦だ。さらには航空巡洋艦のために艦載機もある。そういう意味では小型化した伊勢日向と考えてもいいかもしれない。相対したときの戦い方が身につくチャンスかも。「筑摩よ。お主も共に力を見てもらおう。吾輩達は2人で戦ってなんぼじゃからな」

「はい、利根姉さんがそう言うのなら、私も参加させてもらいます」流れであちらはタッグになった。確かに利根だけ見てもわからないことはあるだろうし、筑摩の力も知っておく方がいい。それに、伊勢日向の仮想敵と見做すのなら2人で来てもらった方がいいだろう。

ならばこちらもう1人増員してもいいだろう。そうすると、私が選ぶ者など決まっている。

「三日月」

「勿論。若葉の相方は私だもの。他には譲れないわ」

こういう形でタッグを組むのは少し久しぶりな感覚がする。最後に組んだのはいつだったか思い出せないくらいだ。そもそも演習自体が少ないし。

今の関係になって初めての共同作業がまさかの演習とは。それはそれで艦娘らしいと言えば艦娘らしいか。

突然現れた援軍との演習のことは、狭い施設ならすぐに報せが行き届き、私達が海に出る時には観客が出来るくらいだった。数が少ないとはいえ、施設に属する者総出で見学している。夜間警備組も目を覚ましていたため、遠くで見学しているのが見えた。

「ふむ、駆逐艦2人とな。じゃが、加賀の奴がまともではないと言っておった。嘗めてかかると痛い目を見るということじゃな」

「ああ、力量を見るために若葉もある程度本気で行く。構わないよな」「無論じゃ。演習というのはそういうものじゃろ」

武装は施設のものを貸し出し。摩耶や鳥海が使う主砲を水鉄砲に

して。魚雷もダメー。航空巡洋艦のために使える水上機は、シロクロのものが適応したためにそれでやってもらおうことにした。これで実弾兵器はゼロ。

初めて使う深海の武装をおっかなびつくり装備していたものの、使ってみれば艦娘のものとそう大差無いことがわかったようで、いつもの調子を取り戻していた。

「若葉はそれで戦うのか」

「ああ、いつもコレだ」

「艦娘で近接戦闘とはな。加賀の言う通り、まともでは無いということじゃない」

あまりまともでは無いという言葉を連呼されるのは困るが、自覚していることなので良しとする。

今回はゴム製のナイフ一本とシグの魚雷で戦う。いつもの拳銃付きナイフはお休み。相手の動きを見るためにも、小技は少なめに行ってみる。

三日月はいつもの主砲のみ。侵食が深くなろうが関係ない。三日月は今までと同じように、考えた瞬間に行動している三日月特有の能力を活かす。

「では、行かせてもらおう！ 筑摩！」

「はい、利根姉さん」

早速水上機を発艦。シロクロの物のためスペックは高く、艦娘のものとは違って不規則な軌道を描きながらの空爆が始まる。

こちらは駆逐艦2人。制空権なんて最初から捨てている。三日月は対空砲火はそこまで得意ではないため回避しながらの狙撃。そして私は、

「そもそも当たらなければいい」

リミッターを外し、突撃。目まぐるしく風景が流れ、眼前には利根の姿。空爆なんて関係なしに、敵に接近さえしてしまえばこちらのもの。流石に自分の周囲に爆撃するような戦法は使わないはずだ。

「なんと言う速さ！ 確かに普通ではないな！」

本当に力のないものなら、これで一撃入れて終わりだ。事前に私が

接近戦を使うということがわかっていても、追いつく間も無く一撃が入る。

だが、あろうことか私の一撃は利根に素手で止められた。まるで大淀に掴まれた時のことを思い出す。そのまま握り潰すでもなく、ただ受け止めただけとはいえ、それなりに渾身の一撃を放ったつもりだ。それなのに。

「っ」

キナ臭い匂いを感じ、利根の手を振り払ってすぐにその場から飛び退く。たった今いた位置を、筑摩からの砲撃が撃ち抜いていた。判断が少し遅れていたらやられていたかもしれない。

間近に利根がいるのに容赦なく撃つ辺り、命中精度に自信があるということだ。重巡主砲なのだから衝撃も強い。掠めてもそれなりに身体に響く。だが、利根にダメージは一切無い。

「避けますか」

「当たり前でしょう。私の若葉ですよ」

同時に三日月が筑摩に対して砲撃。筑摩が撃った瞬間を狙った一撃だったが、空爆を回避しながらの砲撃であるため、考えることが混線して若干狙いがズレた。筑摩はその砲撃を難なく避け、利根のサポートに徹している。三日月の舌打ちが聞こえた。

離れれば空爆、近付けば砲撃。利根からの砲撃はまだ受けていないものの、私の近接戦闘を受け止めたということは、動体視力が優れているのだと思う。なかなか厄介。

「近接戦闘を相手するのは無論初めてじゃが、これはなかなか恐ろしいのう」

「言葉の割に余裕そうだが」

「吾輩は常に心に余裕を持って戦っておる」

離れたことで空爆に晒され、さらにはそこから利根からの砲撃が開始。筑摩ほど精度は無いようだが、乱射されると近付けない。

むしろそれを狙っているかのようだった。利根が攪乱し、筑摩に狙わせる。そういうコンビネーションなのだろう。

「若葉、退いて」

「ああ」

筑摩の回避の仕方が、私を射軸に入れるような移動のようで、どうしても私が邪魔になる。リミッターを外している三日月は不躰に命令してくるため、それはそれで違った良さがある。惚れ直す。

退いて射線を開くと同時に、魚雷で利根を狙った。三日月が狙っているのは筑摩だ。ならば私は利根を狙い続けよう。

「近接と魚雷とは、よくわからぬ組み合わせじゃの」

「若葉^{ボク}もそう思うが、そういうものなんだ」

「じゃが、これは当たらぬ」

当たる前に主砲で撃ち抜かれた。大きな爆発で水柱が立ち、利根の姿を隠してしまう。そんな状況でもお互いに場所は把握している状態だ。水柱越しでもバカスカ撃ってくるはず。

だが、砲撃は飛んでこず、水柱に紛れて魚雷が放たれていた。さらに筑摩の方からキナ臭い匂い。回避方向を見てからの砲撃で、トドメを刺される予感。

「若葉の邪魔はさせません」

すかさず三日月が利根の真似をして魚雷を撃ち抜く。再び大きな水柱が立つ中、私は筑摩の砲撃を回避するため、あえて筑摩の方へと突っ込んだ。場所は把握している上に、水柱が立つてもある程度視認出来る位置にいる。

キナ臭い匂いが一段と強くなったと思った瞬間に、進行方向を90度横へ。大分至近弾だったが、ダメージ無く回避に成功。そしてまた急転身。眼前には筑摩だ。

「あのタイミングから避けるんですか!？」

「見てから避けてるわけじゃないから安心してくれ」

立て続けに2回曲がったため、少しだけ脚に負担がかかっていた。だがそこは我らがチ級の骨。この程度なら軋むこともなく移動も可能。稲妻のように突っ込み、そして筑摩に一撃決める。

が、私の攻撃にギリギリ合わせたか、背中に装備された甲板を盾にされた。本来なら破壊出来ていただろうが、今回はゴム製なため呆気なく受け止められてしまう。とはいえ、これ以降は破壊された扱いで

水上機の発着艦は不能。今出ている水上機も無効となる。

「やるな。だが」

即座に今度は利根の方へ。瞬間、筑摩へ三日月の砲撃が放たれていた。来るのではないかと思っていたため、合図無しにその動きが出来た。利根に向かったのも、それを邪魔されないうためにだ。

「それは行けないのう！」

しかし、それを予測していたかのように利根は私に砲撃を放っていた。相変わらずの乱射。まるで巻雲を相手にしているよう。

モロに進路を妨害される形での攻撃だったため、今度は見てからの回避になってしまった。脚への負担はもう仕方あるまい。かなりギリギリではあったがノーダメージ。

「これも避けるのか!？」

「こちらも充分にキツイ！」

一方筑摩への攻撃は艦装を犠牲にする形で三日月の狙撃をガードされていた。中破判定くらいは取れているため問題は無い。さらには既に利根に対しての砲撃が始まっている。

私が攪乱して三日月に撃ってもらうスタイルはアリだ。囿になるような動きをするのは思ったより楽しい。それに、三日月と心を通わせた連携が出来るのは気持ちいい。

「今度は吾輩か！」

「当たり前だろう」

三日月の砲撃も、水上機の爆撃のせいでも若干精度が低くされているとはいえ、充分に的確な位置を撃ってくれている。利根に対して乱射と回避を同時に考えさせているため、戦いやすい状況になっている。

「利根姉さん！ 援護します！」

「させませんよ」

その隙を突いて三日月が筑摩をヘッドショット。利根を攻撃しようとする私を狙った筑摩を意識した瞬間に、三日月はその攻撃を選択している。これで見事、筑摩は轟沈判定。

「筑摩あー！」

「余所見していいののか」

筑摩の時と同じように先に甲板から破壊。同時に魚雷を放って直撃させた。

これにより演習終了。ありがたいことに私も三日月もほぼ無傷。完勝と言ってもいいだろう。

リミッターを掛け直し、息を落ち着ける。戦闘をした後に身体にガタが来ないくらいには強くなれているようで何より。三日月も消耗は少ない。

「ごめんなさい利根姉さん……うまく援護が出来ませんでした」

「構わぬ。吾輩もちいと甘かった。ここまでの速さの敵と相對したことが無かったからの。もつとくつついて行動するべきじゃったな」

感想戦。利根は今回の敗北からいろいろと考えているようである。確かに2人纏まって行動されていたら、私が厳しかったかもしれない。だが、それを剥がすように撃ってくれていたのが三日月だ。思い通りにはさせていない。

「して、吾輩達はお眼鏡に適っただろうか」

「若葉^{ボク}としては問題ないと思つた。水上機の空爆と同時にあそこまで動かれると堪つたものじゃない」

「そうですね……私も砲撃精度が落とされていましたし」

戦力としては上々だと思ふ。仲間として加わってもらえるのほどもありがたい。ただでさえバカみたいな数の航空戦力を放つてくるのが伊勢と日向だ。加賀と瑞鶴だけでギリギリ拮抗という状況なのだから、そこが増えるのは嬉しいところ。それに加え、威力の高い砲撃と魚雷で援護してもらえればより戦いやすくなるはず。

「じゃが、精進が足りんのう。お主ら無傷ではないか」

「そうだな。攻撃がわかりやすかつたから回避も楽だつた。もつと奇を銜つた方がいいと思う」

「手厳しい意見じゃの。肝に銘じておこう」

水柱越しの魚雷と回避方向を見計つた砲撃の二段構えは少し警戒したが、私が速く動けたおかげでそのどちらも回避出来た。あれが完全に同時、もしくは筑摩が乱射タイプだったら話は変わっていたかも

しれない。あとは空爆をもっと近い位置でやるか。

3つの攻撃方法があるのだから、1人でもある程度の連携が出来る。それが2人いるのだから尚更だ。

「だが、若葉は仲間として受け入れたい。よろしく頼む」

「うむ！ そう言ってもらえれば吾輩達も嬉しいぞ！ 友の仇を討つため、よろしく頼む！」

いい笑顔で握手された。なかなか気持ちのいい相手だった。こういう相手とならまた戦いたい。

旧友の帰投

利根と筑摩との演習は、私、若葉と三日月のタッグで相手をしたことで、その実力を窺うことが出来た。戦い慣れているようにも見えるので、即戦力として有能である。

だが、少し攻撃がわかりやすい、悪く言うならお手本通りな感じはしたので、その辺りは少しだけ口を出しておいた。今回の敵はまともな考えでは戦えない。艦娘としては反則技のようなこともしていかなければ勝てるものも勝てなくなる。

顔合わせとしてはこれで終了。演習は想定外だったが、こちらの状況も伝えることが出来たし、やることは全てやれただろう。とはいえ時間は昼食時。突然の来客とはいえ、蝦尾女史筆頭の料理班は、しっかりと2人分追加で作っていたため、会食が開かれることに

「すみません、突然来たようなものなのにここまでしていただいて」「いえいえ、今後協力関係になるのでしたら、これくらいさせていただきますよ」

申し訳なさそうな筑摩に対し、蝦尾女史も2人分増やすくらいわけではないと笑顔で応える。一応利根と筑摩は戦闘糧食を持っていたようだが、それを食べることは無くなったようだ。

「また吾輩達の鎮守府にも是非来てくれ。秘書艦殿も喜ぶじやろ」「事が済んだら行きたいものだな」

利根にも言われ、来栖鎮守府とは違う鎮守府というのにも興味が湧く。

何でも中規模程の大きさの鎮守府であり、有明提督の階級は中佐。それでも実力は高いらしく、任じられる作戦は全て好成績を収めているそう。とはいえ今回もあつたようなドジがちよくちよく出るせいで、何かと振り回されているのが部下の艦娘達。

「もう少し落ち着きがあればいいんじゃないかな。補給を忘れたり、任務をチェックせずに開発をしたりとなあ」

「相変わらずなのね、あの人は」

唯一有明提督を知っている加賀が反応。知っている時から何も変

わっちやいないらしい。その当時を思い出してしみじみと語る。赤城もうんうんと首を縦に振った。

何というか詰めが甘い。初心者がりやがちなことを繰り返しているようなイメージ。落ち着きとかそういうもののかはわからないが、ノリでしかかすタイプと見た。

「私が生きていた時から致命的なミスは無いんですよ。すごい危ういバランスの上に立ってる気がしてならないですよ」

「お恥ずかしい限りで……。秘書艦の鹿島さんがサポートしているのでそれなりに無くなつては来たんですが……。ご覧の通りです」

アポ無しでここにいる利根と筑摩が、有明提督のポカの証拠。今回は軽めのドジなのでまだ笑って許せる方か。

旧友と話すのは嬉しいらしく、赤城も一段と楽しそうだった。食も進むようである。利根も筑摩も赤城の変貌には相当驚いているようだが、のつぴきならない事情があるのは誰が見たってわかるため、細かくは聞いていない。

「誰も沈まずにここまで来れておる。それだけで充分じゃの」

「そうね。でも気をつけるように言っておくことよ。貴女達の鎮守府も狙われかねないわ」

加賀の言葉には重みがある。現に滅んだ鎮守府の唯一の生き残りなのだから。利根も少し悲しそうな匂いを漂わせつつも、それを表に出さずに頷くのみであった。

昼食後、利根と筑摩は帰投。急な客で驚いたものの、滅多にやることのない演習が出来たので、私や三日月は有意義な時間を過ごせたと思う。戦闘中での連携でお互いの繋がりをよく感じ取れたし、実戦経験が増やせたのはありがたいことだ。

見えなくなるまで、また見えなくなつても少しの間は、加賀と赤城が哨戒機を使って2人を見送っていた。今はこの施設近海ですら危険なところはある。行きは2人でここまで来れたものの、帰りに襲われる可能性だつて無くはない。いくら中立区だとしても念のためだ。

「仲が良かったのか？」

「ええ。合同演習をよくやったんですよ。その時からの仲ですからね」

赤城もその時のことを思い出していた。一度死んで蘇った身でも、当時の記憶はハッキリと覚えているため、旧友との再会は落ち着いていた赤城の心をより一層穏やかにしていた。

「私はあちらに行くことはもう叶わないでしょうね。残念ですが」

少し悲しそうな顔。匂いは少しだけどんより。利根と筑摩に出会ったことで、他の旧友達と出会いたいという欲が出てきてしまっているようだ。

そして、それを叶わせないようにした大淀に対しての恨みと憎しみが余計に拡がっていくのがわかった。やはりそういうところは深海棲艦。根本がそれで出来てしまっているために、思考がそちらに流れやすい。

「大発動艇を使っても会いに行きましょう。今回の件が終われば、それくらい楽に出来ますよ」

「そうですね。その時は加賀さんも一緒に行きましょうね」
「勿論」

クスリと笑い、有明鎮守府に行くことを誓う。私も他の鎮守府というのは行ってみたいものだ。私のような異形でも受け入れてもらえそうならば、施設から出向しているところに行ってみたい。勿論それは三日月とだ。

だが三日月は他人の目をとても気にする。その辺りは考慮して、お互いに嫌な思いをしないようにして、所謂新婚旅行にでも行きたい。

「哨戒機より入電……利根と筑摩が見えなくなっただかしら」
「もうそれくらい離れていてもおかしくはないですからね」

哨戒範囲のギリギリまで見送っていたが、それも届かない位置まで航行したのだろう。これで見送りも終わり。

と、思いきや、加賀から意外な言葉。

「深海棲艦の侵攻を確認……!?!」

「……、中立区でしたよね。深海棲艦が発生しなければ侵攻もされないという。まあ私はここで発生してしまったわけですが」

あり得ない。今赤城が言った通り、発生はおろか侵攻すらされないのが中立区の特徴だ。だから今まで自衛手段すら持ち合わせていなかった飛鳥医師達がここで暮らしてこれたのだ。

深海棲艦の発生はもう数度されてしまったため、驚かなくなっ
てしまった。近海で引き揚げ不能なほどの亡骸になってしまった時、
その怨念が深海棲艦を発生させてしまっていることはわかっている。
だが、侵攻は今までに無かった。どういう理屈で深海棲艦が侵攻す
るのかはわからないが、少なくとも私がここに住まわせてもらって
いる数ヶ月、飛鳥医師が滞在し始めた長い時間の中でも初めてのこ
とだ。

「数は―」

「……かなり多いわ。連合艦隊、いや、それ以上ね」

今までは姫、もしくは完成品が人形を連れての進軍だったが、それ
とは全く違う侵攻。敵の強弱はさておき、施設の防衛、そして利根と
筑摩の援護のためにも、すぐに出撃しなくてはならない。

念のため施設内に警報を鳴らし、この場にいる4人ですぐさま出撃
した。数が多いということは、利根と筑摩がやり手でも押し潰される
可能性がある。

「武器だけ持つてすぐに向かうぞ。魚雷を装備してる時間はない！」

「私も主砲を1基だけ！」

加賀と赤城は哨戒機を飛ばしてただけあり艤装は装備していた
ため、先行して向かっている。私と三日月はすぐさま武装を手にと
り、一航戦の向かった方へと飛び出した。後から誰かしらついてきて
くれるだろう、それまでは粘る。

戦場に到着すると、半分近くは終わっているような状態だった。艦
載機による爆撃で大分数を減らしており、潜り抜けた大型艦のイロハ
級を各個撃破している。

幸い利根と筑摩に怪我は無く、戦況も悪いわけでは無い。加賀の
言っていた通り数だけが多いが、力としては普通なイロハ級。搦め手
もしてこないため、大淀の部下達よりは戦いやすい。

「すまぬ！　一航戦のおかげで助かった！」

2人の哨戒機による見送りが無ければ気付けなかった。そうで無ければ施設まで近付いてもらうしかなかった。遠目でも施設から見える位置までこの状況を持ってきてくれれば、嫌でも誰かが気付くはずだ。

「何処から来たんだコイツらは……！」

野良でありイロハ級であるのなら、この深海棲艦達は皆、怒りと憎しみに吞まれ理性を無くし破壊を望むだけの存在。それならここまで来るのは何かがおかしい。1体2体がたまたま流れてきたならまだしも、この数が一気に流れ込んでくるとなると人為的な何かを感じる。

と、ここで筑摩の言っていたことを思い出した。姫級もいないのに、妙に統率された群れの討伐作戦を行なっていたということ。

「……大淀の支配か」

戦闘中にはあるが、少し念入りに匂いを探る。野良の深海棲艦なら怒りと憎しみ以外の匂いは無いはず。だが、今回はそんなものでは無かった。

怒りも憎しみも無かった。

「な、何なんだコイツら……無感情な深海棲艦……？」

「援軍来たわよ！」

都合よく、援軍として来てくれたのは曙と雷。だが、雷は少し戸惑い気味な表情。

「なんで、なんで！　この子達、声が聞こえない！」

雷がそう言うのなら、私を感じ取った匂いもあながち間違いでは無い。無感情で無言。戦闘経験が少ない私達でもわかる。そんなイロハ級はおかしい。ここで大淀の支配によるイロハ級の侵攻であることを確信した。

意思だけでなく、本能すらも塗り潰され、生きたままに人形にされたイロハ級。この世に持っていた怨念すらも失ったただの傀儡は、言われるがままにここに来てしまったのだろう。

ならば完全に巻き込まれただけの部外者だ。倒すのが悔やまれる。

だが放置していてもいい事がない。

「くそ……イラつく！」

「今は処理するしかないでしょうが！ 躊躇ってたら死ぬわよ！」

人形と同じように、気絶させて治療したら元に戻るといふのなら、いくらでも殺さず倒していく。だが、イロハ級は支配が解かれたところで理性のない侵略者だ。どうであれ私達は襲われることになる。

いたたまれない気分になるが、曙の言う通り、今はこの群れを処理するしかない。心の中で謝りながら、近付いて来たイロハ級を一刀で斬り伏せた。

「この身体になってよくわかりますよ。この子達は普通じゃないと」

空爆を続けながら、赤城が忌々しげに呟いた。純然たる深海棲艦の姫として生まれ変わってしまったことで、イロハ級の意味のようなもののはわかるようになったらしい。

思い返せば、リコも姫としてイロハ級を仲間に使っていた。リコの仲間のイロハ級は、リコに合わせた温厚な性格であったことを覚えている。最期に姫に脚を提供するなんていう献身まで見せたくらいだ。

姫級はイロハ級と意思を通わせることが出来るのだと思う。初めてここに駆逐イ級が現れた時、セスが声をかけたこともあった。その時は完全に理性は無かったため、泣く泣く処理することになってしまったが。

「巻き込まれてしまったのはもう仕方ないでしょう。ここで安らかに眠ってもらいます」

赤城の爆撃が一層激しくなり、群れを一網打尽にしていく。

「味方になると空母棲姫も頼もしいな」

「そうですね。今度そちらに行けた時にでもご馳走してください」

「お主は食い過ぎるからもう」

戦場だというのに世間話。それだけ余裕があるということかもしれない。

しばらくして敵は全滅。戦闘は終了。だが、気分は良くない。

雷が言うには沈む直前でも何の声も聞こえなかったという。上から下まで完全に支配されていたのだとしか思えない。完全に何もか

もを奪われていたのだろう。

「……いたたまれないな」

「支配されていなくても侵略者であった可能性は高いのだから、ここは割り切るしか無いでしょう」

赤城がまた忌々しげに呟く。自分があのイロハ級と似たような状態にされた経験があるから、余計に気分を害しているようだった。

そもそもは理性すらも危うかった赤城だ。一歩間違えれば、今沈んでいった深海棲艦と同じようになっていた可能性だってある。

「援軍感謝するぞ。このことも提督に伝えておく」

「ええ、そうして頂戴。くれぐれも気を付けてくれと」

「うむ。それではな」

戦闘が終わったため、改めて利根と筑摩は帰投。戦闘も私達援軍が参加したことで早く終わり、消耗も少なかった様子。そのまま帰投でも大丈夫そうだ。

だが、ここにまでイロハ級を侵攻させたのは何故だろう。有明鎮守府の近海で見られた深海棲艦の群れは、艦隊司令部の試験運用で動かされただけのたまたまな気がするが、ここに攻撃してきたのは明確な意思を感じる。

だが、今までの戦いから考えて、これで私達が屈するとも思っていないだろう。ならば狙われたのは私達ではなく利根と筑摩か。そうだとしたら尚更わからない。

「若葉、今は帰りましょう。私達、今日は夜間警備なんだから」

「……そうだな。考えるのは若葉の仕事じゃ無い」

全て報告して、下呂大将にも考えてもらおう。こういうことが得意なのはあの人だ。

成長する支配

大淀により支配されたであろう深海棲艦の襲撃を受けた施設。数は多かったものの、無感情で無言の深海棲艦達と相對するのは、得体の知れない恐ろしさを感じた。まるで本当に人形や傀儡を相手にしているように感じた。

これを退けたことで、改めて利根と筑摩は帰投。この侵攻についても伝えてもらう。大淀の何らかの作戦だった場合、有明鎮守府すらも危険に晒されることになる。もしかしたら、既に次の鎮守府の目星をつけているとか。

「わかった。その件は先生にすぐ連絡する」

施設に戻ったところで、今起きたことを克明に飛鳥医師に伝えた。思ったことも含めて。

あの場で深海棲艦に違和感を覚えたのは、嗅覚での私、若葉、聴覚での雷、そして姫の感覚での赤城。どれも信用度は高い情報のはずなので、下呂大将も何かしらの意見をくれるはずだ。

「発生と侵攻、どちらも起きてしまったては、もう中立区とは言えないな」

「どちらも人為的だろう。ここはしつかり中立区なはずだ」

艦娘はおろか、深海棲艦が現れない海域が中立区として定められているはずなのだが、もう深海棲艦が当たり前のように出てきてしまっている。

だが、発生も侵攻も、どちらも結果的に大淀の仕業なのはわかってること。何もせずとも発生することは無いし、何も無ければここに来るものは誰もいない。ちゃんと中立区だ。

それに、艦娘も深海棲艦も仲良く暮らすことが出来ているのだから、正しい意味で中立であろう。そこに謎の進化を遂げてしまった私に加わっていることは誇りに思う。

あちらも襲撃計画を立てるのに忙しいとは思いますが、今回の件がまたそこに関わるようなことかもしれない。有力な情報になり得る可能性を考えると、早急に伝える必要はあっただろう。

飛鳥医師から連絡を受けた下呂大将は、すぐに仕組まれた深海棲艦による侵攻の真意を推理してくれた。とはいえ、全て私達が起きたことを話しただけ。結論を出すのに時間が欲しいと言われたため、それを待つことに。

「先生なら何かしら答えを出してくれるだろう。襲撃間近という状態でやってくれるのはありがたい」

まだ怪我も治り切っていないだろうに、本当にありがたいことだ。この件が終わったらゆっくり休んでもらおう。

と、思っていた矢先、夕暮れ時に急な来客。飛鳥医師からの連絡を受けて考えていた結果、あまり芳しくなかったのか下呂大将が直に施設に来てしまった。

時間が遅かったというのものもあるが、余程緊急事態なのか、第一水雷戦隊全員が下呂大将の護衛として参加。まるゆも大型車での登場である。

「急にすみませんね飛鳥」

「いえ、連絡が貰えていたので」

怪我は治り切っていないものの、杖無しで動けるところまでは来ているようである。常に神風が隣にいるようではあるが。

「大事ですか」

「私の憶測が当たっているのなら、今からでも有明中佐の鎮守府へと向かいたいです。最悪を想定したので、私がここに来ました」

この鎮守府に深海棲艦が進行してきたことが余程大事のようで、その説明をしに来てくれた。わざわざ施設経由で向かうのは、やりたいことに私の力が必要だからだそう。

私の力、すなわち嗅覚で解決出来ることかはわからないが、下呂大将直々のご指名ならば、私も気合を入れざるを得ない。

緊急事態ということで全員が食堂に集まる。夕食時のいい匂いが漂うので緊張感は無くなるが、集まれる場所がここしか無いのだから仕方ない。だからといって集会場を作るのも何か違う。

「では結論から話しましょう。大淀の支配の力は増強されています。

今回の深海棲艦の侵攻は、それに密接に関連していると思われれます」
私がかどうか撃退した大淀は、あの時以上の支配の力を持っていると下呂大将は予想している。

あの時ですら、この施設に所属している深海棲艦絡みの侵食を脳に持つ者が、軒並み影響を受ける羽目になった。三日月ですら思うがままに操られ、私と敵対することになったのだ。

それが増強しているとなると、思い当たる節は1つしか無い。

「大淀は、艦娘の支配も可能になっていくでしょう」

最悪だった。あの時ですら手が付けられなかったのに、それ以上の存在に昇華している。さながら、司令部棲姫ならぬ司令部水姫。

「何故その憶測に？」

「有明中佐の鎮守府に所属する艦娘のうち、数人が支配されている可能性が極めて高いからです。いや、今は支配されておらず、支配された経験を持っているというのが正しいですね」

その憶測に辿り着く理由となったのが、有明鎮守府でつい最近行なわれた深海棲艦の討伐。

妙に統率の取れた深海棲艦の群れを撃滅したせいで若干の物資不足になっており、遠征により資源回復中であると筑摩から聞いている。その時から仕組まれていたのではないかと下呂大将は考えていた。

襲撃自体は適当な鎮守府を狙ったのだろう。それがたまたま有明鎮守府だっただけ。そこで資源を使わせ、遠征中の艦娘を一時的にでも支配し、内部情報を抜き取られた。それが運が悪いことに手瀬提督の旧友であり、襲撃計画の一翼を担う者だったために、今回の侵攻もあつたのだろう。

「有明中佐とも少し話しました。深海棲艦の侵攻は、この施設が大淀自身に襲撃を受ける前日だったそうです。艦隊司令部の慣らし運転でしょうね」

「その時から艦娘を支配することまで考えていたと？」

「深海棲艦が支配出来るのなら、艦娘も支配出来ると思うのが普通でしょう。その時は出来ずとも、成長……もしくは改造により実現し

たのだと思います」

そして、危惧していたことが現実になってしまったと。しかしそれなら新たな疑問が出てくる。

それを使つて施設にまた襲撃に来ることも考えられたが、そうしてこないのは何故だ。ここに来て艦娘も深海棲艦も支配してしまえば、あつという間に陥落する。ここだけではない。あらゆる鎮守府が滅びるだろう。何せ、艦娘自身に破壊させ、最後は自殺させればいい。

以前と同じ支配なら、一度支配したら気を失うまでは支配されたまま。有明鎮守府の艦娘が支配された経験を持つと言っているのは、眠つて起きれば支配が無くなっているからということだろう。

「おそらくですが、艦娘の支配は深海棲艦の支配とは勝手が違うのでしよう。効果時間が短いとか、何度も連続で支配出来ないとか。この辺りは特に憶測な部分は強いですが」

「なんらかの事情があつて、情報を抜き取るだけで終わっていると」
「今はそれだけしか出来ないのではないのかもしれないですね。ですが、安心は出来ません。支配している間に暗示や催眠をかけて、何かの拍子にトリガーが引かれるようになる可能性もありますから。むしろそれが一番あり得ます。そうでなければ、艦娘自身が大淀と接触したことを有明中佐に話すでしょうし」

確かに、遠征中に普段と違うことが起きたのなら提督に報告するのが当然だ。それが無かつたということは、支配されていた時の記憶が消されている、ないし、暗示やらで封じられていることになる。

誰も口にも態度にも出さなかつたが、暁と同様の状態にされている可能性だつてあるわけだ。きつかけ、例えば一定の間隔で輝く探照灯の光だつたり、それこそ私達を視認した瞬間だつたり、考えられることは幾らでもある。

トリガーを引かれれば、その瞬間に突如敵に早変わり。事前に気付いておかなければ、まず確実に不意を衝かれて殺されていた。そうでなくても重傷は免れない。

「先に進めます。有明鎮守府の遠征部隊から情報を抜き取った結果、この施設と顔合わせをするということを知ったのでしよう。そこで、

遠征艦隊からは読み取れない主戦力の力を測るために、タイミングを見計らって襲撃した」

「あわよくば利根と筑摩を沈められたら良しですか」

「そういうことです。ついでに施設側も混乱するでしょう。中立区なのに深海棲艦が侵攻してきたとなれば」

少なからず混乱したのは確かである。前以て情報を聞いていたおかげで、その侵攻自体が大淀に仕組まれたものと察することは出来たが、それが無ければ中立区が崩壊したと考えるのが筋。

下手をしたらこの施設から離れるなど、いろいろとバタバタしていた可能性だつてある。

有明鎮守府が施設と繋がりを持ったことを大淀に知られたというのは間違いなさそうである。このタイミングで施設と顔合わせをするなんて、襲撃くらいしか思い付かないだろうが。

「とはいえ、ここまで話してきたことは全て憶測です。侵攻自体がたまたまである可能性はあります。さらに力を高めるための時間稼ぎに、姫や完成品を使わなくなっただけというのも考えられますからね。艦娘を使うと、治療されて寝返ってしまいますから」

「こちらの戦力を増やささないような時間稼ぎと」

「ええ。ですが、憶測とはいえ可能性があるのでなら対策はしておきたい。有明中佐の部下達に支配、暗示や催眠をかけられていた場合、作戦中に被害が出る可能性がありますから」

だから早急に対処したいと言っているわけだ。当日になって後から撃たれたら堪ったものではない。

「若葉にお願いしたいのは、それをその嗅覚で調査してもらいたいです。憶測を確証に持っていききたい」

「了解した。暗示や支配の類は匂いが残らないが、何か違和感を覚えることはあるかもしれない」

「ええ。それに話は聞いています。君は唯一、大淀の支配が通用しない存在へと昇華された」と

あの戦場でもそうだったが、頭痛はしたが動けないことは無かった。大淀への殺意に吞まれすぎて、完全に反逆者となっていた。そう

いう意味では、私には支配は効かない。

艦娘でも深海棲艦でも無い謎の存在になつていると蝦尾女史は言つていた。もしかしたらそれも理由になるかもしれない。艦娘も深海棲艦も支配は出来るが、私はその外に出てしまつていゝのだから、支配はもう効かない。

「今は君が最後の希望になつてしまいました。重荷を背負わせませんが、協力してもらえますか」

「勿論だ。むしろ若葉ホクからお願いしたい。やらせてくれ」

「そう言つてもらえると助かります」

大淀の計画を潰せるのなら、いくらでも協力しよう。もうアイツのいいようにされるのは御免だ。

「出発はすぐにしたいです。あちらに到着するのは真夜中になつてしまいましたが、今は急ぎの件ですので。ですが、時間がかかることはわかつていますから、夕食後でいいですよ。空腹であちらに行くのは良くないでしょう。あと、大発動艇を貸してもらつてもいいですか。時間短縮のために海路で向かいます」

急にバタバタし始めた。利根と筑摩が施設に来たことで、事態が大きく動こうとしている。

早めの夕食を終え、早速遠征へと乗り出す。夜間警備ではない夜の遠出ということで、不謹慎ながら少しワクワクする自分がいた。初めてやることというのは、それがなんであれ若干昂揚する。

私は疲れないようにと大発動艇に乗せられての移動となる。航行で疲れて、現場で十全の力が発揮出来ないとなるのは困るということ、今は温存。また、モチベーションの問題で三日月にも同行してもらつてゐる。

「ここで襲撃される可能性もありますから、十分に警戒してください」
「了解。今のところは何の反応もないわ」

遠征部隊は旗風も加わつた第一水雷戦隊。そういう意味では、私と三日月は下呂大将と共に貨物扱いでの遠征参加になつてゐる。

「若葉、三日月、こんな時にアレですが、ケツコンおめでどうございま

す」

下呂大将にまで祝福されるとは思わなかった。指輪の件は下呂大将が手を回してくれたのだが、私と三日月の関係は後から聞いていたようだ。三日月の同行を許してくれたのはそれもあってだろうか。

少し照れ臭かったが、素直に感謝する。三日月も下呂大将には慣れているため、頬を赤らめて薄く微笑んでいた。可愛い。

「艦娘同士のケツコンというのは無いわけではありません。君達の選択は間違っていますから。その関係はいつまでも大切にしてください」

「ありがとう。大将に言われたら、より一層自信が持てる。いや、元々自信が無かったわけではないが」

「ずっと一緒にいます。絶対に死にません。離れ離れは嫌ですから」
ギョツと手を握る。そうしているだけで落ち着けるものだ。これからのこともきつと乗り越えられる。

「君達にも苦勞をかけます。事の発端ではありますが、この事件が終わったらゆつくり休んでくださいね」

「ああ、そうさせてもらう。そのためにも、今はこれをどうにかしないとな」

まずは目先の問題からだ。有明鎮守府の問題を解決してから、次を考えよう。

三日月と一緒になら、これまで以上にうまく行くようにも思えた。やはりモチベーションというのは大事だ。

夜の鎮守府へ

有明鎮守府へ向かう夜の遠征に参加している私、若葉と三日月。昼の深海棲艦の侵攻から、有明鎮守府の艦娘の一部が大淀に支配されていると睨んだ下呂大将から直接依頼されての参加である。

遠征というもの自体、片手で数えられる程度にしかやったことがないのだが、夜の遠征というのは地味に昂揚する。風景の変わらない海も、意外と楽しいものである。

「見えてきました。あそこが有明鎮守府ですよ」

真つ暗闇の海の向こうに灯りが見える。夜に遠征に行く者達のために灯台のようにされていた。この鎮守府は昼夜問わずに稼働しているような体制のようである。それだけ資源に切羽詰まっているのかもしれない。つい最近深海棲艦の群れを殲滅したという話だし。

時間にして、日が変わる前。まるで大淀の襲撃のような時間でちよつと引つかかることもあったが、無事辿り着けたのは良かった。ここまで来るのに襲撃を受ける可能性もあったわけだし。

「筑摩が言っていた通り、規模はそこまで大きくないのか」

「来栖の鎮守府よりは小さいですね。所属している艦娘の人数も少なめです。とはいえ飛鳥の医療施設よりは多いですよ」

「我が家より少なかったら、それはもう鎮守府と言えないんじゃないだろうか」

余程新人じゃない限りは医療施設より少ないなんてことは無いだろう。今の施設が異常なだけ。全てが終わったら散り散りになるとも思っているくらいだ。

「我々が夜のうちに到着することは有明中佐には連絡済みです。あの灯りはそのために点けておいてくれたのかもしれないですね」

「助かるな」

「私もここに来るのは初めてですから」

そんなところに夜に来るとは、緊急とはいえ恐ろしい。周囲に何も無い海で迷わずに真つ直ぐここまで来れたのは、ひとえに第一水雷戦隊のおかげか。この大発動艇も阿武隈が操作しているわけだし、一度

も止まることなくここまで来ている辺り、そういう海路の系統には強いのかも知れない。

「三日月、大丈夫か」

「……うん、若葉がいるもの。耐えられるわ」

やはり初めて来る場所ではどうしても人間嫌いが再発する。新提督の時のような、その人の一存で居場所が奪われるような相手ではないため幾分はマシだとは思いますが、状況次第では敵対があり得るのは常。

だから、私はしっかりと手を繋いでおく。せめて私が側にいれば、その苦痛も耐えられるだろう。辛いことがあっても、片時も離れない。

「阿武隈、真っ直ぐ入って大丈夫ですよ。そのまま工廠へ」

「了解、みなさーん、そのまま向かいますよー」

阿武隈の掛け声と共に、そのまま鎮守府へと向かった。

もう既に何か仕込まれている可能性だってあるのだ。下呂大将の憶測が外れていればいいのだが。

近付けば大分明るい工廠に到着。先んじて下呂大将が報告していただだけあり、こんな夜中ではあるが歓迎ムードだった。とはいえ時間が時間なため、そこにいたのは提督と秘書監のみ。

工廠に入った私達の姿を見て笑顔で出迎えてくれた。事前に聞いているというのは大きく、普通と違う私と三日月を見ても反応は軽め。三日月でも耐えられる程度。

「お待ちしております！」

夜中なのに元気な有明提督。新提督や蝦尾女史とはまた違ったタイプの女性のようである。見た感じも若く、澆刺としている雰囲気。新進気鋭という感じだ。見ていて気持ちのいい相手。

だが、ちよくちよくドジを踏むというのもわからなくもなかった。ノリでいろいろやって、注意力が散漫に思えた。それをしっかりとサポートするのが秘書艦の鹿島なのだろう。

「夜分遅くにすみません。緊急事態だったもので。若葉、お願いしま

す」

「了解。初対面で申し訳ないが、匂いを嗅がせてもらいたい」

「に、匂い!? ああ、利根が言ってた感情の匂いってやつかな」

下呂大将に指示され、有明提督の匂いを嗅がせてもらう。いきなりそんな行為に出られたら当然驚くだろう。この反応、蝦尾女史の時にも見た。

匂いを嗅いだところ、最初は動揺一色だったが、利根と筑摩から聞いており私の特性に気付いたようで、匂いを嗅がれることに抵抗がなくなる。まるでもつと来いと言わんばかりに友好的な匂いに。

「友好的だ。悪意も隠し事も無い。提督自身が何かされていることは無いだろう」

「ひとまずは安心ですね」

「よかった。私の身の潔白は証明されたみたいで」

ホツと安心した匂いに早変わり。というか、有明提督はテンションの差が激しいように思える。感情的になりやすいというか、さつきも思ったノリで行動するタイプというか。

「改めまして、私がこの鎮守府を管理させてもらっている提督、有明です！ 下呂大将、お噂はかねがね！」

「あまりいい噂とは思えませんが、私のことを知っていてくれるのはありがたいですね。話が早い」

下呂大将に対しても悪い印象は持っていないようである。手瀬提督の仇を討つために率先して動いているからか、初顔合わせだとしても有明提督からの信頼は厚い。

これなら信用出来そうである。良くも悪くも裏表のない人だ。豪快な性格の来栖提督辺りと相性は良さそうである。

「秘書艦の鹿島です。事前に少し聞いていたので、必要だと思われる資料は予め用意しておきました。近日中の遠征の記録で良かったですか?」

「ええ、ありがとうございます。この辺りの海図は頭に入っていますので、その資料があれば知りたいことが知れます」

沢山の書類を持っていた鹿島が、下呂大将にそれを渡す。すかさず

匂いを嗅いでおいたが、鹿島からも不審な匂いは感じ取れなかった。この2人は基本的に鎮守府から外に出ていないので、余程のことがない限りそういう匂いが無いであろうとは思っていた。大淀が直接ここを訪れているような場合は、鎮守府自体に匂いが残っていてもおかしくないが。

「深海の反応は何処にも見えません」

「三日月もありがとうございます。鎮守府そのものの信用はこれ勝ち取れましたね」

私の眼よりも三日月の眼の方が信用度は高い。私が匂いを嗅いでいる間に、周囲を隈なく調査してもらっていた。結果、深海の類のものは何一つとして見えなかった様子。

これで鎮守府そのものは味方であることが確定した。ここからは親身に付き合えるというもの。

「利根と筑摩が手も足も出なかったっていう若葉と三日月だね。初めまして、お嬢さん方」

改めて私達に向き直った有明提督。瞬間、三日月は私の陰に。ここまではまだ少し刺激が強い。大分時間が経っても、これだけはどうにもならない心の傷だ。私と一緒になら錯乱するようなことも無いはずなので、好きなかだけ陰に隠れてもらおう。三日月の性質がわかったのか、あまり深くは触れようとしなくてくれた。

新提督もそうだったが、提督というのは艦娘の気持ちの機微に敏感である。今のところ誰しもが最善の行動を取ってくれている。そうではなくては提督という役職にはつけないのかもしれない。艦娘のコンディションを調整するのも提督の仕事の内なのだから。

「すまない、三日月はこういう場があまり得意じゃないんだ」

「……敵ではないことはわかっていますが、まだ苦手です」

「精神的なのは仕方ないよ。医療施設のこととも少しは聞いてる。そういうデリケートな子がいるのも予測は出来てたからね」

こんなにも気遣い出来る有能な人物なのに、何故ちよくちよくドジを踏むのだろう。それとこれとは話が別なのだろうか。

「難しいかもしれないけど、仲良くしてくれると嬉しいな。長い付き

合いになるかはわからないけど、私も手瀬君の仇を討ちたいからね。よろしく」

「ああ、よろしく頼む」

ニッコリ笑顔で手を差し出してくる。三日月には難しいかもしれないので、その分は私が受け入れよう。差し出された手を握り、友好の証を見せる。

それにより匂いの変動は無し。負の匂いは一切感じさせない。心の底から手瀬提督の仇を討ちたいようである。

「顔合わせも済んだようですので、先に進めましょうか。少し資料に目を通させてもらいます」

ある程度の挨拶が終わったので、ここからは本題。遠征艦隊が敵に支配されている可能性についての件を進めていく。

「あの、これ結構あると思うんですが……」

「心配はいりません。これくらいなら……ええ、20分下さい。それでいいです」

「え、ええ!?! 私でもこれに全て目を通すのは半日はかかりますよ!?!」

鹿島が驚くのも無理はない。資料は約1週間分の遠征の記録だ。何処で何が行なわれたかを克明に記されているそれは、内容もかなり細かい。この資料を作っているのは大方鹿島なのだろうが、作った本人でも読み返すとなるとそれなりに時間が必要。それをものの20分で読み終われるとは到底思えなかった。

だが、今までのことを知っている私達は、出来るんだろうかと納得してしまふ。自らの足で情報を稼ぐ時の尋常ではない速さと作業量を考えると、あり得ない速度の速読も可能なのだろうかなど。

「この人はこういう人なの。ごめんね?」

「そ、そうなんですな……」

神風の説明にとりあえず納得したようだが、まだ疑問は尽きないようである。

実際に言っていた通り、資料を読んでいく速度は異常だった。目が恐ろしい速さで動き、無言で一気に読み。宣言した20分で本当に全て読み終える。その間に怪しいところはピックアップまでしていた。

鹿島はもう言葉も無いようだった。私もである。下呂大将の調査の実態を見るのは初めてなわけだがここまでとは。ここに推理力まで合わさっているのだから、敵に回したくない異常性だと感じる。

「この遠征艦隊……3日前から行なわれている夜間のボーキサイト輸送が一番怪しいです。同じ駆逐隊1つで行なわれていますが、航路が私の予想していた範囲に入っています」

下呂大将の予想していた範囲というのは、大淀の手が届く範囲。私達には公表はしてくれなかったが、最初からある程度は目星をつけていたらしく、その範囲に入る遠征艦隊はこの1つだけらしい。

私もチラリと見せてもらったが、確かに書かれているのは駆逐隊1つ。駆逐艦^{こども}だけに夜間の遠征に行かせるというのも、鎮守府では普通なようだ。私達も引率をつけているものの基本的には駆逐隊で夜間警備をしているくらいなのだから、比較的安全な海域ではそれもいいのだろう。

「昨日も普通に過^ごしてたんですが」

「暗示の類がかけられている可能性はあります。それは直に見ている若葉の方が詳しいでしょう」

「ああ。大淀の支配の力と、暗示をかけられて内乱を起こしかけた者が施設にいるからな」

簡単にだが事のあらましを話す。支配に関してはさておき、暗示に関しては本当に危なかった。シグに事前に聞いていない状態だった場合、雷が死んでいた可能性がある。

そこまでののかと驚愕していた。私達が今までやってきた戦歴は、有明提督には刺激の強いものだったらしい。驚きすぎて逆に笑えてくるほど。

「話はある程度聞いてたけど、無茶苦茶過ぎない?」

「援軍を降りますか? 私としては強要出来ません。危険な、今まででも一番難易度の高い作戦になるでしょうから」

「いや、私達はやりますよ。手瀬君の仇を討つんだって、鎮守府の士気はすごく高いんですから。ですけど、この鎮守府にスパイみたいなのが作られてるって聞くと流石に驚いちゃいますよ」

それは仕方あるまい。そんなことをやる敵なんて普通は想定しない。

鎮守府が滅ぼされるということは、今までの戦いで無いわけでは無いようだった。強大な力を持つ深海棲艦というのはそれなりにいるわけで、私達もそれは味方という形で実感している。だがそれは、完全な武力による制圧だ。頭脳戦を仕掛けてくる深海棲艦など、今までの戦史で1体たりとも現れていない。

「今回は例外中の例外。戦史に名を刻むほどの戦いになります。大本営の黒い部分も詳らかにされてきましたからね。これを機に改革をする必要もあるでしょう」

「司令、先に進めましょ」

「おっと、すみませんね。話が逸れました」

神風に突っ込まれて元の路線に戻す。

「とにかく、この駆逐隊が一番怪しいでしょう。この4人……第三十駆逐隊は今何処に？」

「ああ……まあその、ご理解頂けるとは思いますが、今遠征中ですね。戻るのには」

「本日早朝、ですか。タイミングが悪かったですね」

運悪く、私達がここに到着する少し前に出発してしまっただけなら、ならばどうするか。

「帰還命令を出します。そこまで緊急事態なら、それも罷り通るでしょう」

「いいのですか？」

「何も無いのならそれでよし、何かあったらすぐ解決。それでいいじゃないですか。それに、また今からこの情報外に出されるよりはマシですよ」

すぐに有明提督は遠征部隊に帰還命令を出してくれた。決断が早い。鹿島も何も言わなかった辺り、同じ考えだった様子。

目星はついた。それが吉と出るか凶と出るか。

遠征の裏側

艦娘が支配されている可能性があるため、下呂大将に従い有明鎮守府にまでやってきた私、若葉と三日月。有明提督と面会しつつ、下呂大将が割り出した支配されているであろう艦娘は、夜間にボーキサイト輸送を行なっているという第三十駆逐隊。

私達が鎮守府に到着した時には残念ながら遠征に出たばかりで鎮守府にはいなかったが、緊急事態ということで帰還命令を出してくれた。何事も無ければそれでよし、何かあれば即座に対処。とはいえ、私達にそれを判断する手段は今のところ持ち合わせていない。暁の時も見事にスルーしてしまっただけ。

戻ってくるまでに何かあった時のために、鹿島には艤装を装備しておいてもらう。万が一、本当に万が一を考えると、すぐに有明提督を守る者が近くにいた方がいい。

「この最高練度ですか」

「はい、おかげさまで。私が提督さんを守りますからね」

「うん、お願いね。私は無力も無力だからさ、頼んだよ鹿島」

この信頼関係が透けて見える。私と三日月には及ばないが、お互いに信頼しあっていることが匂いも相まってよくわかった。おそらく鹿島がこの鎮守府唯一のケツコン艦。

鹿島の艦種である練習巡洋艦というのは、巡洋艦の中ではスペックが低いらしい。それが最高練度というのだから、相当な実力者なのだと思う。有明提督からの信頼も厚いし、不穏な匂いも無い。ならば鹿島に全て任せておこう。

「第三十駆逐隊、遠征終了のお知らせなのです！」

あれから少しすると、工廠にこれまた元気な声が響いた。有明提督が帰還命令を出した遠征艦隊、第三十駆逐隊の旗艦を務める艦娘、睦月の声。命令を出して30分ほど、そこまでまだ離れていなかったか。

第三十駆逐隊は、第二二駆逐隊と同様に三日月の姉妹で編成された隊だ。旗艦の長女睦月を筆頭に、私達にもお馴染みとなった如月、そ

して弥生と望月。遠征艦隊とはいえ練度はそれほど低いものではなく、睦月と如月はしつかり第二改装も終えている。

「おおよそ？ 見慣れない人達がいるにやし」

「出て行く前に司令が言っていた人達じゃないかしら。ほら、援軍に行くところの人達が夜中に来るって」

「なら、帰還命令はこれが理由なのかにや？」

何というか独特な話し方の睦月が、私達の存在を疑問視していた。遠征を突然中断させられてまでの用事なんて何事かと思うのは当然。私達だって夜間警備なりなんなりを途中で止めてまで施設に呼ばれたら事件性を勘繰る。

相方は如月。睦月よりも話はしつかり聞いている様子。一応睦月が長女で旗艦だが、どちらかといえば如月の方が統率しているように見える。

「せっかく行ったのにめんどくせえー。用事があるならさっさと終わらせてよなー。このまま遠征終わりだと嬉しいけど」

「もつち……あまり文句言っちゃダメ……終わったら……多分また行く」

怠そうにこちらを見てくるのは望月。それを諫めるのは弥生。やはり私達の存在を疑問に思っているような節はあるが、望月はそれにも興味なさそうに欠伸をしている。

三十駆が鎮守府内に入った段階で、一水戦の6人は気付かれないようにだが臨戦態勢に入ったのがわかった。表情は変えず、殺気も出さず、だが刀に手を置きすぐにも抜けるように。阿武隈でさえも、手に持つ主砲のトリガーに指がかかっている。神風も即座に下呂大將を守るように位置取りを変えた。

そして私達はというと、

「……二日月」

「うん、言いたいことわかる」

4人の姿を目の当たりにして、言いようのない嫌な感じがしていた。ムズムズするというか、イガイガするというか。とにかくそんな感じ。表現が難しい。

これで思い出した。暁が施設に逃亡してきた時、夢の中でのシグの忠告。あの時、シグも今の私のような感覚を話していた。何か嫌な感じと。表現が難しいとも。おそらく今の私達の感覚と同じもの。

シグと大きく同調し、言動にまで侵食が拡がったおかげで、その感覚すら身についたようだ。そしてそれは三日月にも。私とは違う破壊的な負の感情だったとしても、同じように侵食が拡がったことで同じ感覚を手に入れている。

「ゆっくりでいい。リミッターを外しておけ」

「わかった」

この時点であるの4人は黒。下呂大将の睨んだ通り、夜間の遠征中に何かされている。現在進行形で支配されているか、暗示や催眠の類が施されているか。前者はおそらく可能性薄。今はどうか知らないが、気を失っただけで支配は解けるため、眠れば解決。それに、記憶は残っているのだから大淀の存在を話しているはず。

暗示の線で行くのなら、トリガーは何だ。暁の時は一定のタイミングで光る探照灯だったが、今回はそれがわからない。

「大将」

小さく下呂大将に合図。私と三日月が4人に嫌な感覚を感じたことをコソツと伝える。それだけが伝われば、あの下呂大将なら何もかも推理してくれる。

「わあ、もしかして利根さんが話してた白髪の三日月ちゃんかにや？」

「……はい、初めましてですね、睦月姉さん」

利根と筑摩の話は夜間の遠征艦隊にも行き渡っているようだ。私と三日月の話はしっかりと鎮守府全体に伝わっていると考えていい。「こんな夜遅くにさあ、わざわざ遠征から連れ戻して何のようなのわけ？ だりー」

「それは私が話しましょう」

望月の悪態に対し、下呂大将が話しかける。おそらく見ただけで有明提督よりも格上であることに気付いたか、文句はやめてだんまり。

「君達に少々疑いがかかっています」

「疑い？」

「知らず知らずの内に、敵の内通者となっている疑いです」

真正面から問いただしたが、4人は首を傾げるのみ。何を馬鹿なことをと逆に下呂大将を疑う始末。匂いからしても、内通者と疑われたところで悪意や嘘の匂いは何処からも感じない。本来ならここで疑いを止めるのだが、先程から嫌な感じが拭えない。

やはりこれは暗示をかけられている。本人達がその事実を一切自覚していないパターン。事が済んだら暁のようにその時の記憶すら消えているかもしれない。

「……根拠は？」

表情を変えずに弥生が問う。ごもつともな質問だが、下呂大将はすぐに切り返す。

「資料が全てを物語っています。ここ最近の遠征記録を全て読ませてもらいました。それによると、君達が行なっている輸送遠征の方角が最も疑われる航路なんです。本来なら範囲に入りませんが、深夜で視界が不安定な夜では海流を使つての遠征にもなるでしょう。そのせいで僅かに範囲に入っていた。この辺りの海流は当然全て頭に入れてきていますから、君達の遠征航路は全て把握済みです。そこから鑑みても、君達の遠征航路しかあり得ない」

遠征資料には向かった場所は記載されていても、どのような航路を通つたまでは正確に記載されていない。昼からまだしも夜の場合は周囲に何も無い真っ暗闇の海のと真ん中なのだから、探照灯があつたつて簡単には把握出来ないのが常。羅針盤などでどうにか把握するのが関の山である。

それをスタートとゴールと時間を見ただけで把握してしまった。相変わらずおかしな記憶力である。施設の近海とは訳が違う、今までに来たことのない地域の海流だ。それすらも、既に頭に入っていると、理解の範疇を超えている。

「それだけじゃ、如月達が疑われるのは難しいのではなくて？」

「そうですね。一番近場を通つたから犯人と言われても困るでしょう」

「睦月達はそんなことした覚えはないぞよ。内通者？　つてことは、睦

月達が誰かにここのこと教えたってことでしょ？ 記憶に無いにやし」

「いつも通りボーキ取りに行つて運んだだけだよなあー」

嘘はついていない。下呂大将に問い詰められても、記憶にないことを言われ続けて冤罪をかけられているかのような気分の様子。

そういう暗示がかかっているのだから、こういう反応でもおかしくない。本当に暁の時のことを再現しているようだった。

「暗示をかけられている証拠というのをこの場で提示出来ないのが残念です。形のないものを証拠にすることは不可能ですから」

「んじやあ疑われ損じやんさー」

「ですが、君達が暗示をかけられていない証拠も無いんです。これは少しズルイ言い方ですね」

確かにそれはズルイ。お互いいくらでも言える。

「なので、私の憶測ではありますが、君達の暗示が次の段階に行くであろうトリガーを試してみようかと思えます。これで何も無ければ、君達は無実です。申し訳ないですが、君達には茶番に思えるこれにもう少し付き合ってもらえますか」

「ま、まあ、睦月達の無実が証明されるなら、ねえ？」

「……うん」

つまり、下呂大将はそのトリガーに見当がついており、この場で4人を敵対させようとしているわけだ。第一水雷戦隊が臨戦態勢に入ったのも無理はない。かなり恐ろしいことを考えている。早い段階から入ったのは、下呂大将でも想定していないトリガーがあった時のことを考えてのこと。

「前提ですが、私は君達が援軍として今度の襲撃に加わることは無いと思つています。それはあつてますよね？」

「そうなのね。睦月達は遠征で資源立て直しつていう大事なお仕事があるにやし」

「生命線と言つても過言ではない重要な任務です。戦闘する艦隊よりも立ち位置としては上だと思えます」

直接襲撃に関与しない者達ということ。そこに暗示をかけている

のは、自分が接触した記憶を封じ込めるためというのが一番大きいとは思う。

だが、大淀がそれで終わるわけがない。ついでに何らかの不利益をこちらに引き起こそうとするだろう。性格的に。

「そんな遠征艦隊にやらせることは、おそらく襲撃の援軍としてある程度の主力が出て行った後、この鎮守府を破壊すること。援軍に使うメンバーや、その時に鎮守府に誰が残るかというのは、当然ここにいる全員に伝えていきますよね？」

「そうですね。援軍として向かってもらって、私はこの鎮守府に残る……と……」

有明提督も気付いたらしい。暗示による、接触した記憶を消す以外の指示が、自分を殺すことであることに。

基本が愉快犯、無差別に破滅を振りまく大淀なのだから、何故有明提督が狙われたのかと言われたら、そこにいたからという理不尽極まりない理由になるのだと思う。

「この子達に……私を殺させる……!?!」

「ええ。そのまま鎮守府制圧までやらせるでしょうね。では、そのトリガーは何か。援軍が出撃することを見届けるときに、君が必ず言うであろう言葉。遠征艦隊には言わないが、出撃する艦隊に言う言葉というものがあるでしょう」

「……くれぐれも気を付けて」

有明提督がその言葉を口にした瞬間、第三十駆逐隊からする匂いが、スイッチを切り替えるように変化した。

疑われていることに対しての疑問、不服や少しの怒り、あとは状況を鑑みて納得していたような匂いが消え、4人同時に有明提督への殺意が湧き上がった。主人からの指示に従い、敵となった人間を殺すために動く哀れな人形へと変化してしまった。

本来ならそこからタイミングを見計らって殺すようにインプットされていたのだと思う。この暗示は敵視するものの変更である。思考する力は失われておらず、ただただ悪意に呑み込まれているのみ。戦略を練る力は持っている。今なら、その時を待つ前に目の前の提督

を殺すことを最優先にするだろう。

「切り替わった！」

それに気付けたのは匂いで判断できる私だけ。ならば私が声を上げなければならぬ。それがあちら側の殺意のトリガーになったとしても、あちらに隙を見せるわけにはいかない。

幸いこの瞬間から動けるのは私の他にもいる。リミッターを外していたおかげで私はすぐに足が動き、同時に私と同等、むしろまだ上かもしれない速度が出る神風が行動に移っていた。三日月も考えた瞬間から既に主砲が動いていた。

神風は一番近かった望月を、私は弥生を、三日月は如月を妨害する。主砲を持ち上げる前に攻撃の手段を破壊した。だが、その速さで動けたのは3人だけ。睦月だけがノーマーク。

「残念です。半信半疑でしたから。本当に仲間に殺意を向けられるだなんて」

その最後の1人を止めてくれたのは、他ならぬ秘書艦、鹿島。三日月と同じように、装備していた主砲で睦月の主砲を破壊していた。命中精度も凄まじい。リミッターを外して三日月が得ている力と殆ど同じものを繰り出したということは、鹿島もまた血の滲む努力をした結果、今の地位にいるのだと実感する。

「……こいつら、リミッターを外されている！」

「どうにか気絶させてください。入渠さえすれば、ある程度どうにか出来ます」

冷静な下呂大将の指示に従い、命を散らす前にどうにか気を失わせて終わらせてやらなければいけない。

三日月はやはり嫌そうな顔をしていた。姉妹がこうなる姿は辛いだろう。すぐに終わらせて、慰めてやらなければ。

破滅への暗示

有明鎮守府にて、大淀の手に掛かり支配されているであろう遠征艦隊、第三十駆逐隊への取り調べが佳境に入った。私、若葉と三日月の侵食により駆逐棲姫に近付いたことで、暗示がかけられていることが感覚的にわかるようになったことで、下呂大将がそのトリガーを無理矢理引いた。

結果、暗示による有明提督の殺害、ひいては鎮守府の制圧に動き出すための思考に切り替わってしまった挙句、その場で戦闘が始まったためにリミッターすらも解除された。そのままだと自沈してしまうだろう。早急に対処し、すぐにでも入渠させる必要がある。

速攻で武器を破壊したため、これで攻撃の手段は徒手空拳しか無くなったはずだ。言ってしまうえば素人同然。だが、リミッターが外れているせいで尋常ならざる力が発揮されてもおかしくない。

暁の時のことを思い出す。あの時は練度が全く無いような素人が、一撃で雷をヘッドショット。さらには流れで飛鳥医師すら殺そうとした。その後には朝霜に取り押さえられて拘束から抜け出せなくなっていたので、膂力自体はそこまで増強されていないはず。

「おつと……」

私を振り払おうと腕を振り回してきた。武器がないのだからこういう行動になるのは仕方ないこと。

だが、当たり前だがこんな格闘に手慣れている艦娘などそういない。私達が特殊なだけ。その腕を軽く受け止め、それ以上行動させなくする。ただでさえ弥生は華奢だ。私が腕を固定するだけで何も出来なくなる。

「痛い思いをしたくないなら動くな」

無言で私に対して悪意を垂れ流してくる。表情は全く変わらないが、心は暗示により悪意に塗れていた。これも大淀の仕業とわかっていいるのだから、憤りは滾るばかり。

「眠っている。若葉^{ホッ}からしたらお前も義理の姉だ」

まだジタバタと暴れようとしたが、すかさず首筋を叩いて気絶させ

た。三日月の姉妹なのだから傷付けるわけにはいかない。余計なことをしたら三日月が傷付く。

その時には神風が望月を斬り払っていた。当たり前だが峰打ち。ゴリツという音からかなり痛そうだったが、そういうところは割と雑。これで2人は完全に無力化した。リミッターは外れたままのため入渠は最優先ではあるが。

残された睦月と如月は、武器は破壊されたものの健在。あと装備しているものは、遠征のための大発動艇くらいだ。ボーキサイトを積み込むために持つていく、本来は武装ではない遠征専用の装備。

ならばと、大発動艇そのものをぶつけるために起動させてきた。確かにあの質量兵器がぶつけられたら、艦娘だってただではすまない。だが、この流れ、結構前に見た覚えがある。

「司令官、後から弁償してあげてもらえるかい？」

「ええ、好きにしていますよ」

「あつは！ そうこなくちやねー！」

そこで動き出したのは松風。鞘に収まった刀を握り、迫りくる2台の大発動艇の前に立ち、ニヤリと微笑む。そのままなら轢殺されるだろうが、どうしてだろう、何も心配していなかった。

「大物を斬るのは好きなのさ！」

ギリツと握る音が私にまで聞こえてきた。力強く刀を握り、強烈な踏み込み。そこからの豪快な抜刀。空気すら斬り裂くような激しさで、大発動艇を一刀両断にした。破壊された大発動艇はバラバラになるではなくその場で爆発。その炎すらも斬り裂き、松風は一切傷を負っていないかった。

さすが神風の妹。特二式内火艇をバラバラにしたのを思い出したが、それとはまた違った技。松風ならではの力押し。炎まで斬り伏せるとは恐れ入った。

これにより睦月と如月は武器を失い無力化。しかし意識は残しているのだから、その手を使ってでも有明提督を殺しに動くだろう。

リミッターを外された身体だ。身体能力も上がっていて然るべき。そもそも艤装を装備している状態なら、その握力は人間の骨など小枝

のように折ってしまうだろう。

「痛くはいたしません。少々お休みくださいませ」

それをすかさず春風が2人を斬り伏せた。神風と同じように峰打ちで、速さは無くともまるで撫でるような優しい一撃でだった。的確に急所をついたことで、その一撃でも気を失わせることは出来たようである。

各々が型の違う剣技を扱う神風型5人であるが、春風のそれは最も優しいものだ。なるべく痛みを与えず、だが確実に息の根を止める技。ある意味一番恐ろしいかもしれない。

「二丁上がりだ」

「若葉が艤装を剥がす。すぐに入渠させてやってくれ」

「ドックは全て空いています。すぐに運びますので！」

この中で工廠仕事をやったことがあるのはさすがに私だけだろう。ここで工廠で活動した経験が役立つとは。弥生の艤装はもう剥がした後。残りもすぐに剥がし、鹿島に引き渡す。流石に来たばかりの鎮守府のドックの場所なんてわからないため、この鎮守府の者にお願いする方が手っ取り早い。

ありがたいことに、戦いはすぐに終わった。第三十駆逐隊の練度がべらぼうに高いわけでもなく、神風型が相手として戦ってくれたことが大きい。心への苦痛は酷いが、なるべく簡単に終わらせることが出来たのならそれでいい。

全員のドック入りが出来たことで、一安心。外されたりミッターもドックの妖精が元に戻してくれるとのこと。ドック無しで治療するのはわけが違う。

それがわかった時点で安心したか、三日月が私にしなだれかかるように脱力した。いろいろな感情が混じった複雑な匂いだった。

「安心したら……どっと疲れが」

「よく頑張った。辛かっただろう」

抱きしめて頭を撫でてやる。それで決壊したか、すんすんと鼻を吸る音が。姉妹が暗示により暴走する姿は見ているのも嫌だったろう。

それに、自分が支配されたことも思い出してしまふ。何から何まで辛
いはず。

そして、もつと辛そうにしているのは有明提督だ。知らず知らずの
うちに今回の事件に巻き込まれており、下呂大將が気付いていなければ
命を落としていた可能性だつてあつた。それをよりによつて自分
が手塩にかけて育てた艦娘達に。

「正直、シヨックです。部下に叛旗を翻されるなんて思ったことがあ
りませんでした」

「今回の敵はそれだけ特殊なのです」

「痛いほど理解しました。嫌なくらい」

匂いからは心が折れてるようには思えなかつたが、相当堪えている
ようだった。命の危険に晒されたわけだし、鎮守府の崩壊まで手を伸
ばされたようなもの。しかも、それがたまたまと言うのだから救われ
ない。

「襲撃はこれ以上のことが起きるでしょう。実行犯を斃す事が、今回
の襲撃の目的ですから」

「……私自身が戦うわけでは無いですから、すぐに何かを判断するこ
とは出来ないです。こんな無茶苦茶が罷り通るような敵に……勝ち
目はあるんですか」

「無いとは言いません。当然、あらゆる策を考えていますから」

有明提督には初めてのことがだが、私達はそれをさんざん相手をして
きている。その辺りの恐怖は麻痺してしまつているだろう。もう怒
りと憎しみしか湧いてこないのだから。

今回の事件で、有明提督、ひいては鎮守府全体の空気が萎えてしま
う可能性だつてある。だが、私達は無理強いなんて出来ない。あんな
得体の知れない敵に対して、恐怖を抱かない方がおかしいのだと思
う。

「……少し考えます。すぐに答えを出します」

「問題ありません。指揮をするのは君です。難しいようなら、我々が
彼の仇を討ちます。任せてください」

彼とは当然、手瀬提督のことだ。有明提督が襲撃に参加すると言つ

ているのは、手瀬提督の弔い合戦のためだ。有明提督どころか鎮守府に所属する者全てがそれを知っており、一致団結したからこそ、援軍を出してくれることを選んだはずだ。

だが、艦娘を支配し、暗示がかけられていることを目の当たりにしてしまったら考えは変わってしまうだろう。自分の鎮守府に敵意を向けたばかりの三十駆は、そのやったことを憶えていた場合、ほぼ確実に折れると見てもいい。

これをキツカケに、援軍の話が無かったことにしたいと言い出して無理もないのだ。こちらに文句を言う資格は無い。ここでやめさせてくれと言ったところで誰も咎めない。

「……はあ、ケアしていかないとなあ」

「提督さん、私もお手伝いしますから」

「うん、よろしくね鹿島」

有明提督を慰めている鹿島。あちらも秘書艦と強い絆で結ばれている様子。有明提督自身のケアは、鹿島に任せて大丈夫だろう。さすがに他の鎮守府のやり方にまで口出しは出来ない。

「しっかし、本当に強いんだね。あんなにすぐに終わらせちゃうなんて。しかもみんな無傷！」

リミッターの関係で入渠させているが、なるべく傷をつけないように終わらせたのは確かだ。神風が少し荒かったが、それでも誰も血を流していない最善の終わらせ方だと思う。

強いて言うなら大発動艇が犠牲になった程度。これは後日、下呂大將が弁償してくれるそうだ。命に関わることだったとはいえ、鎮守府の装備を容赦なく破壊したのだから当然か。

「そんな子達がここに来て大丈夫だったのかな」

「暗示がかけられている判断が出来るのは、若葉^{ホク}と三日月だけなんだ。

若葉^{ホク}は鼻が利く。三日月は目がいい」

「はえー……そういうところもいろいろあるんだね。これも大淀のことに巻き込まれたからかな」

半分は合っているか。捨て駒にされて死にかけ、治療されたことにより今の身体になり、そこから大淀のせいで侵食が拡がった。本を正

せば全て大淀に巻き込まれたからと言ってもいいかもしれない。

「だからか、大淀に狙われている。他は殺しても若葉は生きてまます捕らえたいらしい」

「それはまた難儀なことで。嫌なのに好かれちゃったね」

「全くだ。若葉には愛する三日月がいる。あんな奴に屈するわけにはいかない」

三日月を抱き寄せる。有明提督や鹿島があらまあとおかしな笑顔を見せるが知ったことではない。見せつけるくらいがちょうどいい。

「あれ？ ならさ。今の医療施設つて、大淀が殺したい子しかないつてこと？」

有明提督のこの発言に、真っ先に反応したのは下呂大将だ。

言われてみれば、今の施設は命を取りたくない私がないのだから、施設ごと破壊しても何も問題ないような状態だ。むしろあちらには、私がいるから制限がかけられていたようなもの。その制限が取っ払われてしまったのだから、やりたい放題に出来る。旗風すら第一水雷戦隊としてこちらに参加しているのだから尚更だ。

「私としたことが迂闊でした。嘗めていたわけではありませんが、大淀が私の読みまで読んで動いていたとしたら、今は絶好の襲撃タイミングになってしまいます」

「お、おい、それじゃあまさか……」

「これ自体が陽動。まんまとハマられたということでしょう。大淀は私が若葉を連れてここに来ることまで読んで、昼の襲撃をしていたとしたら」

今頃、施設は何者かに襲撃を受けている可能性が高いと。それこそ大淀本人がまた直々に施設を破壊しに向かった可能性だってある。

顔が青ざめるようだった。私が施設を離れたばかりに、施設は最悪な状況に立たされようとしていたなんて。

「すぐに戻ります。有明中佐、あの4人についてはまた聞かせてください。正常でもまた一度若葉達に見てもらおう方がいいでしょう」

「はい、ありがとうございます。助かりました。あ、そうだ！ 念のためこの子を持って行ってください！」

有明提督が紹介してくれたのは、この鎮守府に常駐する職人妖精3人。本当に施設が破壊されているとしたら、この存在も必要になるだろう。

「ありがとうございます。阿武隈、すぐに準備を。最大戦速で施設に戻ります。少し無茶しても構いません」

「りよ、りよーかいです！　すぐに戻りますよー！」

またもや慌ただしくなってしまった。救出した余韻を味わうことも出来ず、有明鎮守府から発つことになってしまう。また改めてここに来たいところである。その時はもつと心に余裕がある状態で。

本当に最大戦速で施設に戻る。行きの時の倍は速度が出ているのではないかと思えるほどだ。大発動艇に乗っている下呂大將は、神風に押さえられて振り落とされないようにしている始末。

私も三日月も気が気で無かった。自分の居場所から離れている間にそこが失われているだなんて考えたくも無かった。

そして、そういう嫌な予想は現実になるというものである。

「嘘だろ……」

夜でもそれはわかった。信じたくない気持ちでいっぱいだった。これが夢ならどれほど良かっただろうか。

施設が燃えていた。

燃え盛る居場所

施設が燃えていた。私、若葉の帰るべき場所が燃えていた。

以前にも破壊されたことはある。潜水艦の自爆で内部から爆破され、倒壊していた。だが今回は違う。あれは空爆の跡だ。それに、三式弾やWG42の跡もある。内部からの破壊ではなく、外部からの破壊により何もかも焼き尽くしていた。今まで生きてきて、ここで暮らしてきた思い出を何もかも。私と三日月の思い出の品も、あれでは無事では済まない。

まだそれだけならいい。建物が壊れたくらいなら建て直せる。思い出の品が無くなったところで、生きているのだから思い出は作り直せる。泣きそうではあるが、みんながいなくなるより全然マシだ。

「み、みんな無事か!？」

泣いてなんていられない。今は無事な者がいるかを探さなくてはいけない。当然だが全員無事であることが望まれる。あそこまでされていても、徹底抗戦してくれているはずだ。だがそれ故に、やられている可能性も捨てきれない。

だから、早く無事な姿が見たかった。下呂大将達そっちのけで、私と三日月はリミッターを外して施設へと向かった。あの時の鳳翔の気持ち痛いほどわかった。

そこはもう見るに堪えなかった。施設としての外見は辛うじて残っているものの、こんなもの建物ではないと言えるほどにボロボロ。職人妖精が深海の艦装を組み込んでより強力な防衛力を持っていたはずなのだ。

それだけならまだ良かった。目に入る範囲の仲間達は全員傷だらけだった。まだ動けるものもいれば、傷が深く動くことが出来ない者もいる。気を失っているものすら。

怪我也多種多様。爆撃や砲撃による火傷が主であったが、特に酷かったのは朝霜。武器を持つ利き腕が斬り落とされており、止め処なく血が滴り落ちていた。あれは早く治療しないと命に影響が出る。

そして、さらに酷い者もいた。

「おねえちゃん！ おねえちゃん！」

初霜の叫び声が聞こえる。声を上げられるということは、初霜は無事だったのだと思う。だが、その声から最悪を察する。そして、実際に見て崩れ落ちそうになった。

姉が倒れていた。

背中を臙装ごとバツサリといかれており、それが致命傷となったのがすぐにわかった。初霜が無傷であるところを見ると、姉が初霜を庇ったのだと思う。咄嗟に抱きつき、それを真後ろから斬り付けられたのだろう。

ということは、施設の内部にまで上がり込んできたということになる。空爆や砲撃だけでも飽き足らず、破壊される施設から逃げ出してきたところを斬り付けるだなんて。

「姉、さん……」

「わ、わかば、おねえちゃんが、おねえちゃんがおきないの！ ど、どうしたらいいの!？」

命の匂いはもうしていなかった。息をしていない。鼓動も止まっている。もう、目を覚ますことはない。

それを初霜に告げることが出来なかった。姉はまだ助かると信じて声をかけ続ける初霜の姿に、私は言葉を失い、立ち尽くすことしか出来なかった。

「若葉……二日月……早かったじゃない……」

槍を杖代わりにした曙が瓦礫の中を歩いてくる。致命傷は受けていなかったようだが、頭から血を流し、脇腹を押さえていた。最後まで抵抗し続けていたのだと思う。

「あけぼのちゃん！ おねえちゃんが！」

「疲れてんのよ。ちよつと寝かしといてやんなさい。動かしたら傷に障るから、今はそのままがいいわ」

「う、うん……わかった……」

私ではそんなことが言えなかった。曙だつて見ただけで姉が手遅れであることはわかっているだろう。それでも、初霜が一番傷付かない最善の言葉を選び取っている。

「……被害者は」

カラカラの喉で絞り出すように尋ねる。姉の死を目の当たりにして、動揺が抑えきれそうに無かった。隣に三日月がいなかったら、初霜のことすらも思い至らずに、その場で泣き崩れていたかもしれない。

その三日月だって震えている。私もそうだが、初霜の前で取り乱すことは控えていた。だが、正直なところ、理性を保っていられるのも限界に近い。

「先生と蝦尾さんは無事。怪我はしてるけど大分軽いわ。その代わりに……リコと鳥海さんが……」

ギリツと歯軋りが聞こえる。人間2人の夜間護衛を買って出た2人だ。その職務を全うするため、その命を賭して2人を守ったということなのだろう。その遺体は別のところで寝かされているらしい。

曙だって満身創痍だ。他よりも動けるというだけで、そのままにしておいたら危険であることには変わりない。息から血の匂いがするほどだ。内臓もやられている。

「若葉！・三日月！」

雷の声。雷は比較的まだ怪我は少なそうである。隣に暁もいるように、そちらも怪我は比較的少ない。それでも雷に肩を貸してもらっているくらいなのだから、この大惨事で健闘していた。

「潜水艦の子達は今、海の中にいてもらってる。襲撃を追っ払ったの、シロクロなの」

「そう……か……」

シロクロがまともに動けたということは、大淀が来ることは無かったようだ。今のところ誰からも暗示がかけられたような嫌な感じはない。しかし、姉の致命傷を見る限り、伊勢と日向は確実に来ている。あんな刀を使える敵が何人もいてもらっては困る。

さすがは施設の最大戦力と言ったところか。あの火力の前には、伊勢と日向も成す術なく撤退を選択したか。いや、ここまでやったのだ。充分と考えたのかもしれない。

「リコと鳥海のごことは聞いた。他に犠牲者は……」

「……赤城さんと翔鶴さんが重傷。他も多かれ少なかれ怪我はして
る。朝霜がまずいから、すぐに治療しなくちゃいけないわ。こんな状
態だけど、残ってた修復材はすぐに避難させていたの」

つまり、この襲撃で命を落としたのは3人。リコと鳥海、そして姉。
掛け替えの無い仲間達が、少し外に出て行ったことで失われてしまっ
た。震えが止まらなかった。

察してくれたのか、三日月が手を握ってくれた。ほんの少しだけ落
ち着くことが出来た。今自分の感情に振り回されることは、絶対に悪
い方向に向かう。こういう時こそ冷静にいななくてはいけない。

ここで私達が先行したことにより置いていってしまった下呂大将
達も到着。惨状に全員絶句していた。下呂大将は表情を変えなかつ
たが、匂いは熱く煮え滾っていることがわかった。

「まるゆ、まるゆはいますか」

「た、隊長、まるゆはここに！」

比較的軽傷だったまるゆが奥から救急箱を持って声を上げた。こ
の救急箱は施設のもの。どうやら飛鳥医師と蝦尾女史の軽い傷を治
療していたようである。

「ここに来た車に修復材がいくつか入っていたと思います」

「隊長が出て行った後に施設に出しておきました！ 車自体は空爆で
真っ先に破壊されましたけど……」

「なるほど、そこまで読んでいたということですか」

残された修復材は3つほど。そのうちの1つは腕を落とされてし
まっている朝霜に使うのがベストだろう。問題はそれ以外。雷やま
るゆは時間経過で何とかなりそうではあるが、他の者、例えば夕雲は
爆風をモロに受けたのか、腕に酷い火傷を負っていた。骨折している
ものも多く、大破しているものが殆どだ。2つで賄えるとは到底思え
ない。以前に使っていた修復材を薄めた傷薬をこの場で精製して
使っていくしかないか。

海中の潜水艦達も、多かれ少なかれ怪我を負っている。幸いにも海
中への攻撃は少なかったようで、重傷はいないらしい。

「先生……」

下呂大将の声が聞こえたからか、まるゆがここに移動したからか、飛鳥医師もこの場に現れる。曙の言っていた通り軽傷であることは見て取れる。その後ろには蝦尾女史も。

リコと鳥海の奮闘の証に見えた。自らの命を懸けたことにより、あの2人は人間でありながらこの戦場で五体満足だ。

「飛鳥、無事でしたか。有明中佐から職人妖精を預かってきました。すぐに欲しいところを修復してもらいます」

「ありがとうございます！ 処置室をすぐにお願ひします！」

この大惨事の中でも、必要最低限の手術道具は手元に置いてあったらしく、大掛かりのものさえ修復してくれば今すぐにも治療が可能だという。

すぐさま職人妖精が動き出した。瓦礫だらけの場所を掘り返すように修復が始まり、処置室だけは見る見るうちに出来上がっていく。妖精すらも本来以上の力を出してくれているようだった。

「雷、修復材はどれだけ残ってる！」

「薄めて使ってるけど難しいかも！ 朝霜には原液使ってる！」

「でしたら、わたくしにお任せくださいませ」

ここで率先して前に出たのは春風。

「修復材の太刀を使えば、周囲の傷ごと治療が出来るかと思えます。代わりに痛みはありますが、わたくしの剣技でしたらなるべく痛みは与えません」

「試すんなら私にお願い！……ここまで痛いなら斬られても苦じゃないわ……」

その治療を受けるのは曙。匂いからして重傷なのはわかっていた。歩けるだけでかなりギリギリであることも。

「かしこまりました。曙さん、その傷を斬り癒しましょう」

有明鎮守府でも見た、撫でるような優しい一刀。明らかに殺す動きなのに、次の瞬間、曙の傷はある程度のところまで癒えていた。服などは斬れてしまうものの、斬り傷は無く綺麗なものになっていた。

ただ、当たり前だが斬っているのだから血は出る。なるべく痛みは無くすと言ったが、痛みが無いわけではない。見た目はかなり悪かつ

た。

「死ぬよかマシだけど痛いわ！」

「神風お姉様や松風さんにやられたらそれでは済みませんよ」

「そりやそうだけど……いや、これ結構楽になったわ。痛みでジンジンするけどさー！」

脇腹を押さえることも無くなっていた。荒療治ではあるが、治療として使えないことは無さそうだ。気を失っているものには都合のいい治療法かもしれない。

そうこうしているうちに処置室だけは形になった。続いて電源装置の修復。瓦礫の山の中、その一箇所だけは新品同様の部屋として再生して行く。

「先生、運んできたぜ」

「ありがとう」

摩耶が鳥海を、セスがリコを丁寧に運んできた。姉とはまた違った傷だらけの身体。リコに至っては朝霜のように片腕が無かった。斬られたのではなく、砲撃で千切れ飛んだような無残な傷痕。

摩耶の顔も匂いも悔しさが滲み出ていた。妹をこんな形で失うだなんて、気分が悪いにも程がある。私が姉を失ったのと同じ感情を持っているだろう。

「飛鳥、君はまさか」

「はい、今から命を失った3人を蘇生します」

ここで処置室を優先したのだ。やりたいことなんて言わなくてもわかっていた。運命を捻じ曲げる神の所業。完全なる禁じ手。艦娘の蘇生だ。

だが、それは飛鳥医師自身が忌み嫌う術だ。姉を生き返らせてくれるというのなら私は何よりも嬉しいのだが、決断した理由は何だ。

「いいんですね？」

「はい。僕はリコに言われました。こんな理由で死んでたまるかと」

決意の理由は、飛鳥医師を守って命を失ったリコの言葉。理不尽な襲撃により命を落とすなど言語道断。まだ仲間達の仇を討つことも出来ていないのに、終わりにしてたまるかと。無理を承知で頼んでい

た。自分はまだ死ねない。蘇生出来るならしてくれとまで。

曙の時と同じだ。我欲で本人の意思を問わず蘇生するわけではない。リコの意味を汲むために蘇生する。飛鳥医師にしか出来ない、最大の恩返し。

「鳥海ちゃんも、同じようなことを」

蝦尾女史も鳥海から意思を聞いていた。リコと同じく、こんな理不尽で死んでたまるかと。自らの罪はまだ償い切れていないと。

言葉は聞いていないが、姉だつてきつとそうだ。初霜を守るために命を落としたが、死にたくて死んだわけではないに決まっている。あの初霜を残してこの世を去るだなんて出来やしない。

「この蘇生に後悔はありません。皆が、誰よりも本人が望んだことです。医者として、出来ることは全てやります。例外で、傲慢な願いかもしれない。ズルいことを言っていることも理解している。でも、やるなら今だ」

強い決意の匂い。揺るぎない心で下呂大将に話した。

「わかりました。ならば我々も手伝えることは全てやりましょう。この子達の潰えた命を呼び戻すため、飛鳥、今だけは全員が君の指示に従います」

「ありがとうございます！ 同時に3人の蘇生ですから手が足りません。時間勝負のところもあります。四の五の言っていられません。門外不出の方法を、今だけ全員に伝えます。協力を！」

命を救うため、今までの誓いを反故にした。この状況で誰にも教えないなどは飛鳥医師にも言えない。それによつて3人のうちの誰かが蘇生不可能になってしまったら、蘇生すること以上に後悔することになる。

これで蘇生の方法が外に漏れるようなことがあれば、下呂大将は裏切り者ということになってしまうだろう。だが、今までのことからそれはないと確信している。

「今から禁忌を犯す。皆、共犯者になってくれ」

神の領域

燃え盛る施設。戦いの跡には、犠牲者が3人。飛鳥医師を守ったりコ、蝦尾女史を守った鳥海、そして、初霜を守った姉、初春。私、若葉が施設に戻ったときには、その3人の命は潰えていた。それ以外の者も半数は重傷。

その3人を蘇生するため、飛鳥医師が動き出す。職人妖精によって処置室だけは元に戻ったため、早速蘇生処置を始めることとなった。今回ばかりは、その手段を墓まで持つていくなどとは言ってられない。迅速かつ丁寧な処置のため、協力者が嫌でも必要となる。故に、私達は共に禁忌を犯す共犯者として、処置室に入った。

命を失った3人は、着ているものを脱がされた後、職人妖精の作り上げた医療用ベッドに寝かされていた。痛々しい傷が露わになり、ベッドを血で汚す。その程度なら後で掃除したらいい話だ。

メンバーとしても、多少は処置に慣れた私や摩耶、セスが前面に。そこに下呂大将と蝦尾女史。三日月や雷などのまだ動ける者達もサポートに回ってくれている。第一水雷戦隊の面々は、この状態から襲撃を受ける可能性も鑑みて、潜水艦達と一緒に周辺警備をしてきている。

「飛鳥、先に言っておきます。今回の件、蘇生までが大淀の狙いかもしれません」

処置の準備をしながら下呂大将が話す。今回は下呂大将も直々に手伝ってもらえる大仕事だ。医療の腕は無いに等しいと自分で言っていたが、猫の手でも借りたい現状、素人だろうが何だろうが、いてくれるだけで助かる。

それに、蘇生の現場は全員が素人だ。この場にいるものは直属の上司である下呂大将であっても、医療関係者の蝦尾女史であっても、この場においては全員が飛鳥医師の手足。

「このような状況になれば、必ず君が蘇生に踏み出すと考えたのでしよう。そして、3人分を蘇生するには手が足りないことも想定済み。ならば、施設にいる比較的軽傷な者を使うのも読めます」

「僕が他の者に協力してもらおうところまで、ですか」

「ええ。そして君が3人の蘇生を成功させるところまでがシナリオでしょうね。その後、処置を手伝った者を支配して自分のところに引き込めば、蘇生の技術を盗むことが出来ます」

大淀の支配の力が艦娘に及ぶことも既にわかっていることだ。つまり、この蘇生処置に参加した者を支配し、その時に見たものを全て話させれば、蘇生処置の技術が大淀のものになってしまう可能性が非常に高いということ。

この処置の現場、大淀の支配が行き届かないのは人間である飛鳥医師と蝦尾女史、下呂大将、そして存在として別の位置に来てしまった私のみ。もしかしたら三日月も支配されない可能性がある。

だが、それ以外全員が突然スパイになってしまう可能性がある。特に深海棲艦絡みはまずい。暗示以前に気を失うまでずっとコントロールされることになる。

「だからといって見捨てるなんてことはしませんよ」

「君のここまでの決意を見るのは久しぶりですから、私は止めることなんてしません。ですが、万が一の事を頭の片隅にでも置いておいてください」

下呂大将には珍しい、諫めるような真剣な表情。やることがやることだけに、今後の進退にも関わる。

だが、飛鳥医師はそんなことで折れるわけがなかった。3人の命を救うために禁忌を犯すことを決意したのだ。誰が何と言おうと全うするだろう。

「わかりました。先生も口外だけは絶対にやめてくださいよ。大本営にすら教えたくない技術なんですから」

「勿論。君が禁忌と言うのですから、どうなろうとも外には出しません。この子達が命を落とした事実すら揉み消してあげましょう。そもそもここはそういう管轄では無いのですから、私達が黙っていれば何も漏れません」

本当に出来そうだから怖い。おそらく新提督にすらこの事実は伝わらない。こういう時に法ギリギリのところをついていくのが下呂

大将である。絶対に敵に回したくない相手だ。

「皆、準備はいいな。ここからは速攻勝負だ。指示通りに動いてほしい。重要な部分は僕がやる。全員の力量は把握しているつもりだ。怪我也考慮している」

言いながらも準備を完璧にして、配置までしつかり整えた。迅速かつ丁寧に、徹底的に無駄を切り落とした作業で、処置時間を短縮する。あまり長引かせると、後遺症が残りかねない。

「では、開始する！」

3人同時蘇生の施術が始まる。素人でも動けるように的確な指示の中、私達は休みなく動き続けることになる。

私達艦娘ならまだいい。人間であり、且つこの中では最年長である下呂大将ですらも一切の休憩をせずに動き続けることになるのだ。地獄のような医療現場。しかし、神の所業を実現するためにはこれほどの力が必要だということである。

飛鳥医師は1人相手とはいえそれを1人でやってのけているのだ。協力さえすれば、必ずうまく行く。

まずは内臓の修復。姉は特に酷く、背中側から肺をやられてしまっているため、まるまる移植。リコと鳥海も、折れた骨が刺さっているなど当然酷いことになっていた。曙の時のようにはいかないことはわかっていたが、死とはここまで残酷なものなのだと、まざまざと見せつけられた気分だ。

「臓器はまだある。今までの積み重ねが功を奏した」

人工臓器はまだ出来ていないが、嵐のたびに集めていた深海棲艦の臓器はまだある。地下設備だったおかげで、施設がここまで破壊されてもその場所だけは相変わらず綺麗に残っていてくれた。おかげで移植するものには困っていないようだ。

同時にリコの腕の接合も進められた。朝霜は斬られていたために腕そのものが残っており、修復材による接合が出来たが、リコの場合は砲撃により消し飛んでしまっている。これはリコがここに流されてきた時に一緒にいたル級の腕が移植できそうなので、そちらが準備

されていた。

「この角度で絶対に動かさなくてくれ。縫合は蝦尾さんが出来る」

「わかったわ。蝦尾さん、よろしくね」

「はい。人の腕を接合するための縫合は流石に初めてですが、縫い物は出来ますから」

腕は蝦尾女史が確実に修復していく。腕の固定は雷と三日月が受け持つ。ズタズタな断面を綺麗にした後、飛鳥医師の指示通りに接合して縫合。向きを間違えた時点で神経接合がおかしくなるため、動くことも出来ない難しい仕事である。

それでも、蝦尾女史は着実に縫合を進めていく。雷が接合する腕を、三日月がリコの肩をびくともせず固定し、最善の状況へ。全く動かさないとこの肩の骨もかなり難しい。

その隣では砕けた骨の修復を進めていた。折れた骨は元の形に戻るように、砕けた骨と失われた骨はその部分と同じ骨を深海のものを加工してとなる。体内から修復しなくてはならない骨を抜いているのは下呂大将だ。

事前に用意されていた人工骨も使い、あらゆる手段を使って新品同様の骨にしていく。洗浄も勿論大事な仕事。

「胸骨と腸骨の加工の経験が活きるな」

「ああ、アレよりもやり易くて助かる」

骨を繋ぐのは勿論のこと、砕けた骨と同じ形に深海の骨や人工骨を加工するのは、汚染された骨の洗浄よりも簡単に思えた。そのおかげか、丁寧ではあるが迅速に次の段階へと進んでいける。

今回の3人は体格が見事にバラバラなせいで、骨のサイズも当然バラバラ。ネックはそれだけ。私は一番小さい姉のものを、摩耶は鳥海のもの、そしてセスがリコのを次々と修復していく。

「飛鳥、これで骨は一旦撤去しましたよ」

「ありがとうございます。すぐに内臓を入れます」

骨が無くなったことで中身の治療が楽になる。こればかりは1人ずつやっていかななくてはならないのだが、ここから飛鳥医師の本領発揮であった。

傷付いた臓器はチェック済み。道さえ拓けばそこから摘出して新たなものを嵌め込んでいくのみ。故に、人間技とは思えない目にも留まらぬ早技で次々と臓器を元に戻していく。

この処置の速さに下呂大将も目を丸くしていた。いくら教え子だったとしても、どのように処置していたかなど見たことも無かつたのだろう。この時点でいろいろと違う領域に達している。

「骨をくれ」

「出来てるぜ。使ってくれ！」

内臓を入れ替えたら即座に骨の組み立て。まるでプラモデルを組み立てるかの如く、見る見るうちに綺麗な体内に戻っていくのは、もはや恐ろしかった。

「腕の接合、終わりました！」

「ありがとう、確認する。初春の縫合を」

「はいー」

蝦尾女史が腕の接合を完了。丁寧な縫合でガッチリと固定され、さらには動かないように包帯も巻かれていた。自分の受けた処置を思い出すかのようだった。

姉の縫合が終われば次は鳥海、最後にリコと、身体は縫合痕だらけになってしまいが、しつかりと元通りになっていくのがわかる。

「鳥海は火傷も酷いな。皮膚を移植する」

欠損は無いにしろ、鳥海の腕や身体には酷い火傷もあった。これこそ修復材で治療したいところなのだが、命を失った身体には修復材は効かないらしい。故に、皮膚も移植。

息を吹き返してから修復材を使うという手段もあつただろう。だが、他の者に使ったことで修復材はもう完全に枯渇しており、それでもまだ足りないほどだ。だからと言って入渠するまでそのままというのも厳しいらしく、こればかりは皮膚移植の方が堅実のようである。

ここまで来たら、3人は五体満足の状態にはなった。しかし、今のままでは所詮継ぎ接ぎのある遺体。呼吸をしなければ、心臓も動いていない。ここから飛鳥医師の文字通り神の技。

「職人妖精がAEDを用意してくれました」

「ありがとうございます。内臓を入れる時におおよそ蘇生の準備は整っています」

飛鳥医師の言葉に、全員が驚いた。あの早技の中に、蘇生に繋がる技がいくつも含まれていたらしい。おそろくだが、臓器同士の接続や、体内の何かを弄ることで蘇生出来る段階が進むのだろう。

「残りはここです」

頭を何度か押し下したり引いたり。これは血流を良くしているのだろうか。死んでいる間は血液が通っていないのだから、その辺りにしっかりと触れておかなくては息を吹き返した時に支障をきたすと。

「よし、仕上げだ。AEDを」

ついに最終段階。AEDを使い、心臓に対して衝撃を与える。だが、これもやり方があるらしく、絶妙な位置や角度がキモのようだった。やはり見ていると理解が出来ない。

ドンと大きな音となり、姉の身体が跳ねる。出力にすらコントロールが必要。数値化されても訳がわからなかった。

「つかひっ!」

姉が息を吹き返した。本当に目の前で蘇った。

息を吹き返した途端、命の匂いが漂い始めた。心臓が動いている。呼吸している。

「姉さん……よかった、よかった……」

今まで我慢していた涙が溢れ出た。死を悲しむ涙より、生を喜ぶ涙の方が我慢出来なかった。今まで堪えてきた疲れもドツと出てしまったように膝から崩れ落ちてしまい、すかさず三日月が支えてくれた。

迅速に次へ次へと最後の仕上げが進んでいき、鳥海とリコも同じように息を吹き返す。死の匂いは遠のき、生の匂いが蔓延する。ここにいる者は誰も死んではない。妹が蘇ったことに、摩耶もうつつすら涙目だった。

気付けば作業開始から数時間。朝日が昇る前から始めていたが、今はおそらく昼も過ぎていく。3人同時の治療でこれならば、最善を尽

くしたと言えるだろう。

「飛鳥、おそろくここにいる者全員の総意を伝えます」

「なんですか」

「誰も真似できません。注意深く見ていたわけではありませんが、私も君の処置が全く理解出来なかった。君から直接説明されない限り、蘇生の御業は誰にも伝わらないと確信出来ます」

一斉に首を縦に振る。

これは飛鳥医師が編み出した、飛鳥医師のみの手法。飛鳥医師が口外しないのなら、その方法は誰も理解することは出来ないだろう。医療従事者である蝦尾女史ですらそれが一部も理解出来なかったというのだから、その難易度と意味不明さが窺い知れる。

これぞ神の領域。誰にも届かない、死を覆す医者 of 神の技。

「安心はしていませんがね。何処からここに辿り着くかわかりませんから」

いやこれは無理だとみんな心の中で思ったに違いない。少なくとも私と三日月はそう思った。

「目が覚めてから後遺症がわかるかもしれない。まずはこれで終了だ。皆、お疲れ様」

曙の時にも言っていた後遺症。短時間でも脳に血が通っていないのだから、何かしらの問題が起きて仕方のないこと。だがそれは今すぐわかることでもない。

今は生き返ってくれたことを喜び、蘇生してもらえたことに感謝するのみである。

再出発へ

飛鳥医師のおかげで、命を落とした3人は蘇生された。身体はまだ傷だらけではあるが、息を吹き返したのは本当に喜ばしいことだ。私、若葉も姉が蘇生されたことで泣いてしまう程であった。

その処置中に、職人妖精は施設の一部をさらに修復。せめて今この時に眠れるようにと、ある程度の大広間と布団一式が出来上がっていた。今日が悪天候で無くて本当に良かったと思う。ここ最近嵐が来ていないのは不幸中の幸い。

さらに電話まで用意してくれており、処置中に来栖提督に連絡もしておいてもらっている。職人妖精も120%の力を発揮してくれていたようで、ここまで作ってさすがに休息中。妖精だって疲れる。

「大発動艇は4隻、あとは職人妖精を追加で派遣してもらおう方向にしています。今は体裁を整えている余裕はありません」

「ですね。来栖の鎮守府に向かうのが厳しい者には大発動艇を使ってもらわなくてはいけませんから」

自分の脚で航行出来なそうな者は大発動艇に乗っての移動となる。脚を負傷した者もいたが、春風の機転のおかげでその傷は痛みを伴ったもののある程度は治療されていた。よって、航行が厳しい者というのは、艀装を破壊されたものということになる。

赤城と翔鶴はそこが顕著に現れており、航行用の巨大な艀装はほぼ全壊。脚部艀装も破損と脚がないようなものにされていた。加えて、曙や朝霜のような近接戦闘タイプも艀装が破壊されたせいで航行不可。

大発動艇はたった1隻。乗せなくてはいけないものが多すぎるため、事情を話して迎えに来てもらう方がいい。すぐにも入渠が必要なものは応急処置のおかげでいい。

「施設の再建をすぐにやってももらいます。前回と同様、ここにあるもので修復で良かったですね？」

「はい、今はそれしか手段は無いでしょう。艀装が失われた者も多いですから、そこをどうにかしなくては……」

「艦娘の艦装ならどうにか出来ますが、深海の艦装は難しいですね。重要なものだけは大発動艇に積み込みましょう。赤城と翔鶴、あとはリコリスのものは復旧が難しいでしょうから運んだ方がいいでしょうね」

こんな状況でも次の手をどんどん考えていく。だが、私にはちゃんとかわかっていない。全く表情には出さなかったが、飛鳥医師も下呂大將も、ただでは済まさないと言え滾っていた。

それだけじゃない。全員疲れ切っている、心の中は怒りに燃えている。あの温厚な雷さえも、施設をまたもや破壊され、怪我人が続出した今回の襲撃には怒り心頭だった。

処置中に連絡が行っていただけあり、それから割と早いタイミングで来栖鎮守府からの遠征部隊は到着。やってきたのは来栖提督と二駆だったのだが、施設の惨状を見て絶句していた。前回よりも酷く、怪我人だらけの現状が凄惨さを物語っている。

「これはまた……酷エな……」

「退避する間も無かった。全員徹底抗戦したがこれだ」

「クソが。その時になったら絶対ぶつ潰さねエとな」

蘇生処置が終わった3人は布団に包んだ状態で大発動艇に乗せ、その他移動出来ないものも乗り込む。初霜は初めての遠征ということでも少しワクワクしているようだった。眠っている姉の側から離れようとはしなかったが、以前より随分と顔色が良くなっているために、安心もしているようである。

初霜には最後まで姉が一度死んでいるという事実は伝えていない。傷が酷いから眠っていたということにしてある。やはり初霜には死という概念は重い。それに、今生きているのだから眠っていたというものもあながち間違いでは無くなった。

また、破壊された艦装などもある程度は積み込んだ。赤城、翔鶴、リコの艦装は大きく場所を取るため、それだけで大発動艇1隻を占拠するほど。それ以外にも積み込めるものは積み込み、発つ準備はおおよそ完了。

「はい、到着だよ。今回もお願いね」

臯月が肩に乗っていた職人妖精達を降ろし、先に来ていた者達にもおやつを渡していた。モチベーションアップで早期の作業終了を目指す。妖精達は大喜びで金平糖にありついていった。

「お前らも飯食えてねエだろ。少して悪イが、糧食持ってきたから食ってくれや」

「助かる。食材が全滅したからな……」

食事のことを思い出し、思い切り腹の虫が鳴いた。緊張していたから空腹すらも忘れてしまっていたようである。ついさつきまで蘇生処置という最大級の緊張を味わっていたのだ。全部上手く行ったことで少し気が抜けたのだと思う。

「ほれ、初霜。お前も食いな。腹減ってんだろオ？」

「わあい。おじさんありがとー」

初霜のこの発言で、さらに空気が弛緩した。今は凹んでいるわけにはいかない。蘇生も出来たのだ。ここからまた進んでいかななくては。

来栖鎮守府に到着するなり、治療が再開される。来栖鎮守府の修復材を好きに使っていいということで、治せるものをすぐに治していく。大火傷は修復材を使わないと痕が残りそうなので、これはありがたい。

朝霜と蘇生された3人はドックに入れられた。特に朝霜は片腕の欠損。妖精の力まで借りれば、失われたものも元に戻るそうだ。息をしていたらリコも同じように入渠して失われた腕を取り戻すところだったのだが、そうはいかなかった。

積み込まれた艀装も全て降ろされた。大物小物がズラリと並び、破損具合も様々。廃材にしか見えないものすらある。

その中でも一際目立つのはやはり、赤城と翔鶴、そしてリコの深海艀装。人に乗せて動くことが出来るそれは、どの艦娘よりも大きなものになってしまっている。リコのもものはそれ以上の異形。艦娘には絶対にあり得ない陸上施設型という特殊なもののため、より異質さを際立たせている。

「艀装の整備は明日以降にしましょう。施設の艀装は私では触ること

が出来ませんから」

「悪いな。明日手伝つてくれ。アタシも結構しんどい」

「怪我人は休んでくださいね。その後にくらでも協力しますから！」

運び込まれた艦装を眺めて途方に暮れていた明石。艦娘のものならまだしも、深海艦装は正直初見ではどうにもならない。摩耶とセスが健康体になり、説明をしてもらいつつでなくてはまるで構造がわからないというのが本音だろう。

この艦装の修理に関わっていたシロクロも比較的傷は浅い方ではあるが、やはり疲れ切っているのは確か。ここに着くなりぐったりと浮上してきたのは印象深い。今は全員身体を休めることを先決した方がいい。

「部屋は前に来た時と同じように使ってくれ。2人部屋だ」

「すまないな、急に押しかける形になってしまった」

「こりや仕方ねエよ。これで受け入れねエとかどんだけ薄情なんだっつー話だしよ」

幸い部屋はまだ空いているらしく、全員を入れても問題ないらしい。そのため、前と同じように私は三日月と相部屋で使わせてもらうことに。離れ離れにならないだけでも喜ばしい。

一方、下呂大将は大本営に連絡し、鎮守府への帰投を優先するらしい。今回のことは早急に上に伝えておきたいとのこと。車が失われたことは相当な痛手。

「手が空いた奴から休んでくれて構わねエからね。風呂は常に沸いているから、起きた後にも入ってくれや」

私や三日月も、有明鎮守府での一件から今の今まで一睡もしていない。戦闘の後の処置手伝いも相まって、かなり疲労が蓄積されている。私と三日月は無傷だが、申し訳ないが今日はもう寝かせてもらおうと思った。

次に目を覚ました時には、姉達も入渠が終わって目を覚ましているだろう。それで本当に安心出来る。

部屋に着くなり、倒れるようにベッドに寝転がった。着替えるのも

億劫。脱ぐことすら放棄。

隣で三日月も横になる。体勢を変えたことで疲労が身体を支配し、猛烈な眠気に襲われる。それだけ疲れていたということを実感する。

「もう無理だな……目を開けているのもキツイ」

「うん……眠気が耐えられそうにないけど……最後にちよつとだけ……」

私の胸に顔を押し付けてきた。そしてそのまま身体が震え始める。あの時のことを思い出したか、三日月は涙ぐんでいた。やっと身体を落ち着けることが出来たことで、今までの出来事が頭の中で駆け巡っている。

私もだった。命を落とした姉の姿が脳裏から離れない。今でこそ蘇生されたが、姉がいなくなるという感覚は、今まで感じたことのない恐怖と、言いようのない怒りと憎しみを感じた。

「有明鎮守府で……姉さん達が暗示をかけられていたのがわかった時、私、本当に許せなかった」

「ああ……気持ちにはわかるさ」

温もりを感じながら語り合う。すぐに眠ってしまうだろうが、そのギリギリ、落ちる瞬間まで、2人で気持ちを伝え合った。

「若葉^{ホク}もだ。姉さんが殺されて、本当に許せなかった」

「……うん……辛かったよね……お互い」

負の感情がどうしても増幅される。侵食が広がる程ではないが、状況次第では今以上にまずいことになっていたかもしれない。

三日月が側にいてくれたから留まることが出来た。本当に掛け替えの無い存在なのだと改めて実感する。

「ずっと側にいてね……若葉も失ったら私……」

「わかってる。絶対に離れない」

ギョツと抱き締めて、そのまま深い眠りに落ちていく。これが限界。もう耐えられなかった。

そして、夢の中。一度繋がった夢はもう繋がったままのようで、今日はしていなかったが、私は最初から三日月と共にこの空間にいた。

目の前にはいつものメンバーも。

シグとぼいは相変わらず笑顔を絶やさず、チ級は表情が薄いながらもこの場では少し楽しそう。暗い空気を作らないようにしてするのは、匂いの感じないこの空間でも明らかだった。

『私の感覚が使えたみたいだね』

「ああ、正直助かった。その場で暗示がかけられていることが判断出来たのはありがたい」

『それだけ私と若葉は深く繋がったってことだね』

侵食が深まれば深まるほど、シグが表に出てくるようなことなだろう。最終的には入れ替わったりして、なんて考えて少し怖くなった。

『三日月も出来たっぼい?』

「はい、私も侵食が深くなりましたから」

『よかったっぼい! 便利でしょ?』

ぼいの方は三日月に子供のように抱き付きながら話している。少し嫉妬心が芽生えるものの、現実ではこれ以上の繋がりがあるのだから今くらいは我慢。

ぼいだって三日月とは深い繋がりを持つ者だし、私とシグの関係性と同じなのだから仕方ないと諦めることが出来る。シグだって近いことはするし。

『もうここで助言する必要も無くなっちゃうかな』

「いや、意見が増えることはありがたい。思ったことがあったら是非伝えてくれ」

『そう? ならちよつとだけ。三十駆は今頃もう正気を取り戻してるし、暗示も多分解けてるよ。1回発動で無くなってるように見えたし』

それを聞いて安心したのは三日月。入渠してリミッターを掛け直すことが出来ていたとしても、まだ暗示はそのまま、例の言葉を聞く度に敵対するような状況だったら困っていた。

暁もそうみたいだが、あれは一度指示を実行すると消えてなくなってくれみたいだ。なら、三十駆は暗示をかけられてから入渠するま

での記憶が飛んでいる可能性もある。それはまた会うこともあるだろうから、その時にそれとなく聞いてみよう。

『あとはわかっていると思うけど、施設の人達は誰も手出しされてないみたいだね。本当に全部壊すために来たみたいだ』

「ああ、あの感覚はみんなからは感じなかった。それだけは安心だな。居場所は壊されてしまったが」

『迷惑だよ。三日月達の居場所まで奪おうとか、次見たら素敵な血祭りじゃ済まさないっぼい！』

ぼいは物言いがちよくちよく物騒になる。ここで言っても実行するのは三日月なのだが。

とはいえ、三日月にぼいの影響が強くなっているのなら、だんだんこうなってもおかしくないということか。ちよつと子供っぽく、言動が物騒な狂犬のような三日月。それはそれで可愛くていいかも。

『そうだ、まだ言えてなかったね。ケツコンおめでとう』

『あ、それ！ おめでどうっぼーい！』

「ああ、ありがとう」

チ級も小さく拍手してくれている。仮面越しでも微笑んでいるのがわかった。改めて祝福されると喜びもひとしお。みんな自分のことのように喜んでくれるのも嬉しい。

『わかってると思うけど、私達は全部見てるからね』

『三日月、結構激しいっぼい』

『ね。基本は若葉上位だけど、求めるのは三日月からだし』

言葉にされると途端に恥ずかしくなるのでやめていただきたい。

三日月も顔が真っ赤。チ級も顔が真っ赤。

『まあとにかく、これからも2人仲良く進んでね。その方が私達も嬉しい』

『ああ。若葉達を見守っていてくれ』

『それが私達の楽しみでもあるからね。私達の復讐、君達に任せよう』

改めて決意した。私達の居場所まで奪った奴等は、この手で終わらせる。それが私達の願いであり、シグやぼいの願いでもあるのだ。

新たな出発は目覚めてから。さらに過酷な戦いになりそうだが、私

達なら進んでいける。

蘇る仲間達

夢の中でいろいろと楽しんだ後、目が覚めると夜中。昨日は夕方になる前から眠ってしまったため、時間的にはこれが普通か。いつもなら夜間警備をしているような深夜である。

私、若葉が起きると同時に、三日月も目が覚めていた。同じタイミングで夢が終わっているのだから、こうなることも当然か。

「……風呂行くか」

「うん、そうする。そのまま寝ちゃったし」

未だ海の匂いがする制服のままの私達。蘇生処置で血の匂いもついており、風呂に入らず熟睡してしまったため、汗臭さも少し出てきてしまっていた。嗅覚が強すぎる私には、これが少し辛い。

私にそれを勘付かれて、三日月も少し顔を顰めた。自分でそれを感じ取れたというのなら、私は三日月以上にそれがわかつていることになる。

「風呂に入ったらドックも見に行こう。そろそろ終わってもおかしくないと思う」

「そうね。蘇生されたみんな、どうなってるか気になるよね」

この時間なのだから、あの入渠からもうそれなりの時間が経過している。駆逐艦というのはそもそも入渠時間はそこまで長くないらしいが、事が事だ。まだ終わってなくてもおかしくはない。重巡洋艦なら尚更だし、陸上施設型に関しては未知数である。

治療されたとはいえ、殆ど轟沈寸前。0が1になったようなものだ。0でないのなら入渠で全回復可能。時間がかかるだけ。どれだけ時間がかかっても、必ず目を覚ます。

「みんなに何も無いことを祈るさ」

「ええ」

決めたら即実行。まずは風呂、そしてドックだ。深夜ではあるが、私達の施設と同じように夜間警備もしているだろう。なら工廠は明るい。どのタイミングでも風呂に入る事が出来るくらいだし。

風呂から出てさっぱり。替えの制服と寝間着まで用意されていたのはありがたかった。三日月のことを配慮したタイツまで完備。本当にありがたい。

今回は制服に着替えてドックへ。もう誰かが起きているとなったら、寝間着で出迎えは少し抵抗がある。

「おや、今日が覚めました？」

「おう、おはようさん。朝じゃねえけど」

こんな時間でも工廠では明石と摩耶が作業していた。

入渠中の者がドックに入っている時は、基本的に明石がこの場に残るようにしているらしい。目が覚めた艦娘をいち早くサポートするのも工作艦の仕事なのだそうだ。

「摩耶、よくこんな時間に起きてるな」

「そりゃあ、な。気になっちゃって」

摩耶は鳥海待ち。鳥海が心配であまり深く眠れなかったようで、手持ち無沙汰になったため、深海艦装の修復をこんな時間からだが開始したらしい。修復をすることも深夜なので、なるべく音が立たないところから。ガンガン叩くようなことはしていない。

「流石にな、妹が死ぬってのはアタシでも耐えられねえ」

「あ、2人も来てたんだ」

さらにやってきたのは風雲。何度も朝霜絡みの面倒事に巻き込まれている風雲だが、やはり妹の安否は心配な様子。蘇生されたわけではないので後遺症の心配は無いのだが、あそこまでの怪我を負っていると流石に不安だそうだ。

「そろそろ終わりますんで、もうここで待っていていいですよ。風雲には何度も往復させちゃって」

「い、いやいや、別にそんな気遣いしてくれなくてもいいから」

ここで作業をしていた明石が言うには、もうこれで3回目の登場なのだとか。風雲も摩耶と同じで眠りが浅かったようで、事あるごとに朝霜が心配で何度か工廠に顔を出しているらしい。こんな深夜だというのに。

それに、その辺りの感情は私には隠せない。朝霜の目覚めを今か今

かと待ち構えているのは、やたら強い匂いになっている。ここまできると匂いなんぞわからずとも勘付くレベルだ。

「っと、そんなことを言っている間に朝霜が終わりですね。ドック開けますよ」

蘇生よりは軽いと判定されているのか、応急処置が効いたか、あれほどの怪我でも朝霜が入渠終了最速。蘇生の消耗よりも腕を生やす方が早いなんて正直思っても見なかった。

まあ応急処置で修復材の原液を使っていたため、ある程度は修復が始まっていたのだろう。それが入渠にも影響が出ている。

「おー、腕生えてんじやん。さすが入渠ドックだ」

元に戻った腕を見てしみじみと話す朝霜。グーパーしながら感触を確かめ、以前と変わらないことを確認。入渠により完全に元に戻ったことを実感し、ドックから飛び出た。

入渠したときはどういう状況であっても服は剥かれるため、呆れた顔で風雲が寝間着を放った。どうせ今からは何もせず寝ることになるだろう。それに、着やすいものの方がいい。

「風雲姉、さんきゅーな」

「はいはい、流石に腕を斬られてるとか私だって心配するわよ」

「ありやあ痛えなんてもんじやないね。曙に腹ぶつ裂かれた時より痛かった気がする」

ケラケラ笑って話すが、あまり気分の良いものでは無い。

「死ぬよかマシだぜ。あたいはまだ生きてんだ。次がある」

「そうだけど……私はアンタのストレスに殺されそうだわ」

「そんなタマじゃ無えっしょ。風雲姉、あたいについてこれんだからさ」

「自覚してるなら直しなさいよね……」

これではまだまだ風雲は振り回され続けるだろう。だが私も思う。あの朝霜に巻き込まれてまともに生きて行けているのだから、風雲も大したものだと。

ここからは蘇生された3人。朝霜も着るだけ着て目覚めるのを一緒に待つことにする。当然だが、曙の時以降に施設に参入した者は、

死者の蘇生など見るのは初めてだ。特に今回は、全員その遺体を見ている。それが今から目覚めるのだ。

「やっぱり駆逐艦は比較的早いですね。初春、入渠完了です」
姉が一番最初に入渠完了となり、ドックが開く。やはりこういうところで艦種の差が出たようだ。

だがまだ安心は出来ない。後遺症がある可能性が残っている。最悪の場合、ここで目を覚まさないなんてことまであり得るのだから恐ろしい。

何事もないことを祈り、私はドックの前へ。あの時と比べれば、当たり前だが顔色はいい。生気が戻っている。

「……姉さん」

呼びかけると、薄く目が開いた。命の戻った瞳で、正面にいる私を見据えてくれた。

「おお……若葉か。わらわは……初霜を庇って……命を……」

言葉も、記憶もはつきりしている。入渠後だというのに少し疲れた顔をしているように見えたが、死ぬ前の状態で私達の目の前にいる。

「生きておる……な」

「ああ、飛鳥医師が……姉さんを蘇生した」

「蘇生……なるほど、これが噂の」

クスリと笑う。蘇ったことを苦痛に思うようなことは無かった。

その姿を見て、感極まってしまった。蘇生の処置が完了した時よりも、感情を揺さぶられた。本当に元に戻ったのだと実感したからか、正直、息を吹き返した時よりも嬉しかった。

我慢出来ず、涙がボロボロと溢れ出る。今の私は誰にも見せたことのないような泣き顔をしているのだと思う。だが、そんなことは関係ない。

「姉さん……よかった……」

「苦労をかけたようじゃの……まさか本当に命を貰えるとは。お医者様には足を向けて眠れぬ」

ドックの縁を掴んで外に出た。長時間の入渠にフラついたようだが、見たところ五体満足。後遺症らしいものも見当たらない。

グツと涙を拭いて、姉の補助に入る。倒れないように支えると、その身体は温かかった。しつかりと熱を帯びている。生きていることを改めて理解する。

「後遺症は無いだろうか。自覚している何かは」

「そうじゃの……今は何も感じぬ。お主には何か変わったように思えるかえ？」

「そうだな……肺が深海のものになったからか、息に深海の匂いがある」

姉の主な治療箇所は肺。曙のように呼吸器官に深海の要素が混ざったことで、やはり若干深海の匂いを感じる。誰にも迷惑はかからないような変化だ。

「ふむ、わらわも正式に継ぎ接ぎとなつたか。実感が湧かんのう」

「そういうものだ。若葉^{ホク}だつてこれが普通なんだからな」

「外見に出ておらぬ継ぎ接ぎはわらわくらいでは無いか？ 背中だから見えぬだけかもしれないが」

全裸であるため寝間着を着せていくが、その時に縫合痕もキレイさっぱり無くなっていることが確認出来た。姉は斬り傷が綺麗だったおかげか、外に残るようなパーツの移植が無かったことが大きい。

それを伝えると、何処となく残念そうな雰囲気。継ぎ接ぎらしい見た目にならなかつたことは喜ぶべきだと思いが、これはこれで疎外感があるのかもしれない。私もこんなことになっているわけだし。

「鳥海、入渠完了です。ドック開けますよ」

「待ってたぜ」

その流れで今度は鳥海の治療が完了。姉がこうだったため、五体満足が期待出来る。

鳥海は火傷が酷かったために皮膚移植がされており、見たまんま継ぎ接ぎと言えるような外見になっている。私や雷のような隠せる場所だけでなく、腕はもうまともに見えているようなもの。どちらかといえど三日月に近い。

特に鳥海の制服は摩耶と同様に肌を大きく出しているため、その傷痕は全て人の目に晒されることになるだろう。脚が既に差し替えら

れているのだから、それほど気にしなそうではあるが。

「……蝦尾さんは生きてる!？」

目覚めて第一声がそれ。蝦尾女史を護るために戦い、結果命を落としたのだから、最期まで蝦尾女史の安否が気になっていたのだろう。自分が倒れたことで蝦尾女史がやられてしまったとなったら、蘇ったことを後悔してしまいそう。

「ああ、少し怪我はしてたけど、無事だぜ。今は夜中だから寝てるけどな。ほら、眼鏡」

「よかった……護り切れたのね」

安堵の息を吐きながら、摩耶から貰った眼鏡をかける。そして、自分の身体を見て成る程と頷いた。死ぬ間際の自分がどういう状態かまでしっかり覚えていたから、今の姿に納得が行ったようである。

蘇っても自分のことではなく蝦尾女史のことを気にかけるとは、何処までも優しく真面目だった。

「私は確かにあの時死んだわ。鼓動が止まるその瞬間も覚えてる。でも今生きてるってことは」

「ああ、センセがな、やってくれたんだ」

「そうなのね……よかった」

先程の姉と同じようにドックから出る。姉とは違いふらつくことも無かった。そういう意味では、姉よりも健康体と言える。

こちらにも後遺症らしいものは見えなかった。移植された皮膚も入渠のお陰でしっかりの馴染み、元々こうだったのではというほどになっっている。

「よかったな、ホントに」

私と同じように摩耶も泣きそうになっていたが、そこはグツと抑えていた。涙目にはなっていたものの、私のようにボロボロと泣き出すようなことはしない。

「ええ、せっかく摩耶と一緒に戦ってるんだもの。あんな理不尽な理由でこの生活を手放したくないわ。飛鳥先生には感謝ね」

先程の朝霜と同じように、手を握ったり軽く振ったりして不具合が無いことを確認。やはり五体満足の様子。艤装さえあればすぐにで

も護衛に復帰出来るとやる気も充分。

姉もそうだが、死を経験して尚、戦意を失っていないというのもすごいと思う。戦いに恐怖を覚え、あの戦いがトラウマとして刻まれてもおかしくはないというのに。根っからの戦闘狂か、おそろしく生真面目か、正義感が強いかのどれかか。

「さて、では最後です」

姉と鳥海は後遺症も無く五体満足で蘇ったが、残された最後の1人、リコはより不安が大きい。腕が挽がれ、内臓も相当傷付いていた。外見だけなら鳥海の方が範囲が広いかもしれないが、治療の数ならリコが一番多いと言っても過言ではない。

「深海棲艦の治療なんて初めてでしたが、うまく行ったようですね。飛鳥先生から艦娘と深海棲艦は似たようなものと聞いていましたが、こういうところで役に立ちました」

ドックが開く。腕にくつきりと刻まれた縫合痕は、入渠しても消えることは無かった。本来の自分のものとは違うものが取り付けられているため、妖精はそういうものとして判断してしまおうらしい。リコは服装的にその辺りは見えなくなるから問題ないか。

「リコの姐御!」

「……アサシモか。私は死んだはずだが……そうか、医者がやってくれたか。流石だな……」

2人続けば3人目も意識を取り戻さないなんてことは無かった。すぐにあの戦闘のことを思い出したか、苛立ちを見せる。

「くそ……イセとか言ったな。次はこうはいかない」

ドックから出るが、姉以上にふらついており、すぐに朝霜が支えに入った。身長差はあるものの、そこはパワータイプ、リコの身体もしっかりと支える。

「力が入らないな……起き抜けだからか」

「おいおい、まさかそれが後遺症ってヤツか?」

「それは無いだろう。あの医者の治療だぞ。謙虚に最悪の可能性を言いはするが、今まで何かがあった試しがあるか?」

言われてみれば、飛鳥医師は毎回問題が出る可能性は示唆してくれ

ている。そしてそれがいつも起きず、安堵することばかり。今回の後遺症の件も、起きない確信が無かっただけで、確率的には低かったのかもしれない。

「私も少しばかり身体を慣らした方がいいだろう。何、心配はいらない。すぐに戦線に立つ。私も復讐したい相手が明確に出来たしな」

その相手は伊勢だ。一度自分を殺した相手として、リコが復讐相手として見定めた。

これにより蘇生治療も完了。目を覚ましたことで以降は経過観察となる。だが入渠していたのだから身体は何もかも元に戻っているだろう。

姉がまた私達の隣に立ってくれることが嬉しくて堪らなかった。飛鳥医師にはいくら感謝してもしきれない。

より強く

入渠中だった4人も目を覚まし、これにより施設の者は全員治療が終わったこととなった。蘇生された3人は今のところ後遺症も見られず、リコに関しては若干体力が落ちていたものの、全員五体満足での復活である。

時間が深夜だったということもあり、この復活劇が終わったところで解散。入渠組は一旦医務室で眠ることとなる。念のため翌朝から飛鳥医師による診察を受け、完治したことを確認する予定だ。飛鳥医師も随分と消耗していたようで、今は泥のように眠っているらしい。艦娘や深海棲艦ならともかく、人間の身であそこまで眠っているらしいのけたのだ。今はゆっくり休んでもらいたい。

そして翌朝。ある意味施設の者全員が目を覚まし、怪我也治った状態となる。誰も欠けを出さずに翌日を迎えられるのは喜ばしい。襲撃をよく抑えられたものである。

「おねえちゃん、おきてる!」

「うむ、心配かけたのう」

ずっと呼びかけていても目を覚まさなかった姉が起きていることに気付き、大喜びで抱き付く初霜。初霜をあやしてくれていた如月曰く、もうこのまま目を覚まさないのでは無いかと怯えていたそうだ。

飛鳥医師がいなければ、それが現実のものとなっていたかと思うと恐ろしい。そうなっていたら、私もどうしていたかわからない。

「大怪我での、ずっと眠ってしまったっておった」

「もう、すつごくくしんぱいしたんだから!」

「すまぬすまぬ。でももう心配はいらぬぞ。お医者様のおかげでこの通りじゃ」

姉は外見に傷が残っていないため、本当に心配のいらぬ状態になっていた。入渠が終わってからもう一眠りしたおかげで体力も回復し、これで元に戻ったと言えるだろう。初霜も不安がらずに済む。

「やはり鳥海は傷が大きいな……。それにやたら目立ってしまう。すまない、こんな形になってしまった」

「構いません。これは皆さんを護った証。私には誇らしいものですよ」

昨日とは違って、いつもの制服姿の鳥海。摩耶と同じく露出度が高く、腕も腹も晒しているために、火傷を治療したことによる傷痕や肌の変色がモロに出ている。少し三日月が親近感を覚えていたのは見逃さなかった。

摩耶も一応インナーを着るかと思っていたが、鳥海は敢えてそれを拒んだ。この傷を晒して生きていきたいと話したそう。先程も本人が言っていた通り、この傷が他者を護ったことの証。心の支えになるようなものだから、隠したくないというのが本心か。

「これからも蝦尾さんを護らせていただきます。次は後れを取らないように精進しますね」

「ありがとうございます。これからもよろしくお願いします」

護る者護られる者としての信頼が厚い。蝦尾女史は蝦尾女史で必ずその肌を治しますと約束していた。

「診察の結果、後遺症も残っていないかった。安心したよ」

「ああ、私もだ。これでまたヤツと戦える」

リコは既にやる気満々。昨晩も言っていたが、伊勢に対する恨みが激しい。自らの手で決着をつけたくて仕方ないようである。だが、長く施設で生活していたおかげか、殺すとまでは言わなくなっている。そこはありがたいことだ。

「わらわも伊勢に斬られたからの。いい思いはしておらん」

「私は日向さんに。堪ったものではないですね」

やはり襲撃に来たのは伊勢と日向に間違いは無いようだ。朝霜の腕も日向に斬られたとのこと。

私と三日月、後は下呂大将御一行は、襲撃の相手を知らないため、このタイミングで聞いておくのが良さそうである。

「伊勢と日向はわかったが、他にはいたのか？」

「うむ……それがじゃな……」

「完成品が増えています。駆逐艦1人です」

そのたった1人がWG42による施設への攻撃を放ち続けていた

らしい。結果的に、その駆逐艦が施設破壊の直接の原因。

だが、施設に接近までしてきたのは伊勢と日向だけのようだ。施設から出て迎撃しようとしたものは、伊勢と日向の砲撃に施設まで押し込まれ、その駆逐艦による対地攻撃により怪我を負わされたものが多かったようである。だから火傷が多かったのか。

「その駆逐艦というのは？」

「……曙の姉でな。綾波という」

恐ろしいことに、綾波の存在はつい最近まであちら側にいた五航戦や如月も知らなかったらしい。ここ最近で急激に成長させられ、完成品にまで仕立て上げられたのではないかと言っているようだ。

「どうやればそんなことが出来るのだろうか。そういうところまで違法改造なのだろうか。練度を無理矢理上げるような。」

「たった3人にあそこまでやられるとはな。腹立たしい」

リコも少しイラついているようだ。施設には夜とはいえほぼ全員揃っており、夜間警備だつてしていた。それなのにアレだ。3人である規模の破壊活動が出来るとなると、敵の戦力は相当なものであるとわかる。

実際戦い、確かに伊勢と日向だけは今までのとは別格だった。何もかもが格上。それだけでこちらの士気を下げてくるほどの力だ。そこに新たな完成品、綾波が追加されてしまったことで、さらに酷いことになっている。

「早く終わらせないと、敵は増える一方だ。最終的には押し潰されてしまう」

「でも、あの艦隊司令部の解決方法が……」

「八方塞がりだよ。先生に案を出してもらおうしかないな……」

正直、頭を抱えるしか無かった。誰もが突然支配され、私達の敵になつてしまう最悪な戦場。僅か数分しか支配されなにしても、突然敵対されれば戦況は壊れるし、数秒だったとしても自害させることは出来てしまう。

その支配の力は私にはもう効かない。だが、私だけが効かなくなつて意味がない。ありとあらゆる艦娘や深海棲艦に敵対されれば、私は

どうにも出来ない。それが元々味方だったとしたら尚更だ。

飛鳥医師の言う通り、八方塞がりだった。大淀に勝てるビジョンが見えない。

朝食後、下呂大將が施設にいるということで、来栖提督にも現状を説明。有明提督のところのこともしつかり伝えておく。場所を変えただけでやることは施設の時と同じで、鳳翔と神風が同伴。

その間は時間が空いたため、艀装の修復の手伝いになるだろう。施設の者の艀装は殆どが大破。航行出来ても武装が失われていたり、その逆だったりと散々である。

工廠に来てみると、そこは随分と賑やかだった。艀装の修理が既に始められており、明石を中心に施設の工廠組がせかせかと働いていた。

「やりがいがありますねえ！ こんな艀装初めてですしね！」

リコの艀装を修理しながらキラキラしている明石。その姿に苦笑している摩耶。セスとシロクロも修理に勤しんでいた。さらには工廠常駐の妖精が総出で手伝ってくれている。

大物であるリコの意味を持つ艀装は、当然リコ自身も参加して修理されていた。ここで組み込まれるのは当然艦娘の艀装のパーツ。今までも継ぎ接ぎではあったが、ここでより継ぎ接ぎ感が増すことになった。

「マヤもそうだが、アカシも凄まじい腕だ」

「アタシはやるしかないから覚えたんだけど、明石は本業だからな」

「いの一番に私の艀装に手をつけてくれたのは感謝する」

話している間にも、明石がニコニコしながら次々とパーツを組み込んでいき、艀装を修復していった。まるで蘇生処置中の飛鳥医師の如く、恐ろしいほどの手捌き。目にも留まらぬ早技で、さらには妖精の力も加わることで、見る見る内に元に戻っていく。

いや、それだけではない。改造が施され、追加の機能まで付けられていく。あまりおかしなことをするとリコが確実に文句を言うが、案の定表情がおかしくなっていく。

「おい、何をやっている」

「海上航行のシステムをアップグレードしてるんですよ。前まではかなり強引な接続だったみたいですからね。本来のシステムを阻害せず、航行速度を上げること成功したでしょう」

以前までは海上に立つことは出来たが航行自体は低速艦よりも遅かった。故に、海に出るのなら大発動艇を使って運搬してもらおうのが常。だが、明石の改造により、その速度を低速艦並にまで引き上げたという。

なんでも、艦娘の中にも玉座のような艤装に座って航行するような艦娘がいるらしく、そのシステムを使ってみたとのこと。サイズはまるで違うし、そもそも陸上施設型なのだから、仕様があまりにも違う。最初の内に摩耶とセスが弄り倒していたからどうにかなったと言える。

「はい、これで完了です。妖精さんの力も借りれば、やっぱりすぐですね」

本当にすぐだった。見た目は以前よりもまたパーツが混ざり合っているように見えるが、ほぼ完璧に直されている。生体パーツのような腕や歯も、少し機械的な修復がされている。こればかりは仕方ないか。

リコが合図すると、見慣れた巨腕がズルリと動き出した。修復されたことで意思も戻ってきている。その様子を見たからか、同じような存在のエコがその腕を舐めていた。

「確かに速いな」

「なので、今後は海上にも行きやすくなりましたからね」

「助かる。これで奴とも戦いやすくなるだろう」

リコの艤装が少しゆっくりだがサムズアップ。艤装の方も完全に復活したことを自ら見せてくれた。

「妖精さん達、ホントすごいよ。艤装をどんどん直してくれてさ」

「……改良もしてくれるの……みんなの意見を取り入れて……」

シロクロも妖精の手腕に驚いている。施設で数時間かかるような修理も数分で終わらせてしまうらしく、それを聞いたら私も驚きを隠

せなかった。

言われてみれば、何人も住めるほど大きな施設を、たった数人で数日間で修復してしまうのだ。艦装くらいなら即座に終わらせてしまうのも無理も無かった。私達とは根本的に違うのだからそういうものと考えられないとは思いますが、それでもこの速さは恐ろしい。

「これでみんながもつと強くなるよ。でも……」

支配を思い出して顔が曇るクロ。

どれだけ強くなっても、大淀に支配されてしまつては意味がない。むしろ、強ければ強いほど取り返しが付かなくなる。クロもそれを理解している。

今回の大淀は正直最悪だ。弱ければ何も出来ずにやられ、強ければそれを利用される。今までにない類の精神攻撃。堪ったものではない。

「今、大将がその対策を考えてくれている。心配するな」

「そうですよ。きつとなんとか出来ます。私だってあんな思いはもう沢山です」

私と三日月には励ますことしか出来ない。あれに関しては個人の力量も若干あるだろうが、そんなこと関係なしに上から押し潰してくるようなものだ。心を強く持つことでどうこうなる問題なのだろうか。

あの時は不意打ち気味にやられたため、我慢する間も無く衝撃に敗北したのかもしれない。私は運が良かったのかも。今回は知っているが故に多少は耐えられるか。

「今度は私が大淀を始末してやるさ。倒せなくても、艦隊司令部だけはぶち壊してやる」

「何処にあるのかわかる……?」

「艦装の何処かだろうさ。なら、艦装を速攻で壊す。みんなのためにもどうにかする」

正直、それしかないのだと思う。大淀の持つ艦隊司令部を破壊し、全員の支配を解いてから総攻撃。

だが、それが何処にあるかはわからない。もしかしたら、艦装とか

そういう問題でもないのかもしれない。艦娘には特殊な力を内蔵している者もあるらしいし、大淀がその類の場合は殺す以外の選択肢しかない。

「強くならねえとどうにもならない部分はあるな」

「ですね。だから、私も今回はいっぱい手伝いますよ。継ぎ接ぎ艦装をより強くしていきましよう！」

摩耶と明石もやる気満々だ。みんなの艦装をより強化し、支配から解き放たれた後に戦えるようにしてくれる。もし支配が効かなくなつたとしても、強くなければ大淀はおろか、残っている完成品に手も足も出なくなる。

だからこそ、今は鍛錬と艦装の強化。何もかもを強くしていかなくてはいけない。勿論、心もだ。

「あ、そうそう、三日月の艦装も強化出来ますよ。なんと大発動艇が使えるようになりました！」

「あ、そうなんです。霰さんや如月姉さんと同じことが出来るのはありがたいです。いざという時は大発動艇を直接ぶつけます」

物騒な物言いだ、それくらい三日月も大淀に対して憎しみを持っている。その強化がされたことは素直に喜ばしい。

「さあ、大忙しですよ！ 楽しい楽しい！」

「好きだねえ」

この忙しい状況も楽しめる明石は、それはそれで凄いのだと思う。根っからの仕事人間なのか。

「私達も頑張る。みんなで強くなつて、大淀を倒そう！」

「ああ、みんなの力でな」

ここから工廠組の力を合わせて全員の底上げをしていく。訓練をして、艦装も強くして、より戦えるようにするのだ。幸いその材料は全てこの鎮守府にある。

もう負けない。あんな思いはしたくない。

切磋琢磨

破壊された施設を一時的に離れ、今は来栖鎮守府にて襲撃の機会を窺っている状況。修復が完了したら施設に戻ることになるだろうが、すぐには無理。来栖鎮守府からの派遣と、貸し出してもらった有明鎮守府の職人妖精の力で、早期の修復完了を目指している。

下呂大将は少し考えていることがあるらしく、今日1日だけは来栖鎮守府に滞在することになった。私達は帰る場所が無いのだが、あちらには理由がある。帰投は明日の朝とのこと。

昼食後も工廠にて施設所属の艦娘達の艤装修復が続けられる。午前の間に大物であるリコ、赤城、翔鶴の艤装の修復が完了しており、他にもいろいろと進められている。

特に午前中のうちに聞いていた三日月の艤装の改装、大発動艇運用の改装も済んでいた。今までにない大型の装備であり、他者に乗せたりするだけでなく、直接ぶつけることまで考えているようである。内火艇じゃあるまいし、なかなか物騒な考え方ではあるが、いざという時はそれが必要かもしれない。

「こ、これ、結構操縦難しくないですか」

「だいじょーぶ。なれるから」

「霰ちゃんの言う通りよ。感覚的に使えるようになるわ」

その三日月は施設の大発動艇にその扱い方を学んでいる真つ最中。海上で四苦八苦している姿は少し新鮮。特に如月は、妹にそれが教えられることがとても嬉しそう。

三日月が操縦する大発動艇はあっちへふらふらこっちへふらふら。第二改装した時点で扱えた霰や如月とは違う突然の対応故に、それに訓練が必要な状態。だが、これが使いこなせば、また違う戦術が見えるようになる。

「あっちはあっちで新戦術ね」

眺めている私の隣に曙も来ていた。昼食後すぐに艤装を修復、改良までしてもらっているらしい。よく見れば要所要所違う部分が見える。

「若葉、ちょっとツラ貸しなさいよ」

「久しぶりにその言葉を聞いた気がするな。釣り道具は無いみたいだが」

曙に何か誘われるのは滅多にない。施設にいる時に釣りに誘われる時くらいだ。

ここ最近は身近に三日月がずっといたから声をかけるのも憚られたかもしれないが、今は三日月が別件の特訓中。私は手が空いているようなもの。

「釣り具はまた手に入れるわ。今はこれの慣らしに付き合っしてほしいのよ」

これとは改良された艦装のことだろう。継ぎ接ぎで修復され続けていた艦装が、来栖鎮守府に滞在させてもらうことになり正規部品がいくつも組み込まれ、より強く、より使いやすくされている。いきなりスペックアップされていると戦場で混乱することもあるだろう。なので、どういう形であれ、艦装の慣らしはしておきたいと。

その相手に曙は私を選んだわけだ。来栖鎮守府の誰かでもいいと思うのだが、敢えて私を選んだのは何故だろう。

「若葉^{ボク}でいいのか？」

「アンタがいいの。全部やれるようにしておきたい」

曙が躍起になっている理由はわかる。施設の襲撃に実の姉がいたからだ。

その姉は猛烈な対地攻撃を以て施設を破壊していった。伊勢と日向に阻まれながらも、姉の顔はしっかりと確認している。対話は出来なかったものの、おっとりとした笑顔で、妹の姿を見ても虫けらを潰すかの如く攻撃をやめなかったらしい。完成品としても、屈指の冷酷さ。表情とは真逆の殺意。

「最低限の観察をした。あれはただ対地攻撃のために作られたわけじゃない。主砲も持ってたし、アンタみたいなナイフも腿に巻き付けてることは確認出来た。伊勢や日向と同じ、万能戦力に仕立て上げられてる。だから、アンタ相手の慣らしもしておきたいのよ」

襲撃の時は見せなかった攻撃も、手段として持ち得ていると確認出

来たからこそ、全ての手段に対応出来るようにしておきたいと。

その意思是汲み取りたい。私で良ければ幾らでも演習に付き合おう。

「わかった。やるか」

「ええ、お願い」

こういう形で曙と戦うのは、実はそんなにない。基本が協力しながらの攻撃のため、切磋琢磨するにしても演習によつてはほとんどやってきていなかった。

お互いに手の内が全てバレているような戦いだ。私がどれだけ速く動けようが、曙はそれを推察してくるだろう。

少し昂揚した。身内に強敵がいるというのは、なかなか嬉しい。それが私の背中を守ってくれるのだから。

縦横無尽に動き回ることを前提として、それなりに沖に出た。曙相手の1対1。私はゴムのナイフ。曙はゴムの槍。

私はシグの魚雷は無しにしている。あくまでも今回は、砲撃雷撃無しの近接戦闘による演習。故に、曙も主砲は無し。

「それじゃあ、いいな」

「どつからでもかかってきなさいよ」

私はいつものように前傾姿勢の獣の構え。対する曙は槍を両手で握り、穂先をしつかりと私に向けてきた下段の構え。速さで勝る私を捉えるためか。

曙だつてケツコン出来る程に練度は高い。主砲も使うようになったが、私と同様、近接攻撃をマスターしてもう長い。それがより伸びているのだから、驚異以外の何者でもないだろう。

ならば、回り込んで槍を間に合わせないようにしてやる。

「っしー」

海面を蹴る。槍の真横を通るように駆け抜け、一気に間合いを詰める。

実際、曙の方がリーチが長いのだから近付くのは容易ではない。だが、近付いてしまえばこちらのものだ。穂は届かなくなり、防御もま

まならなくなる。怖いのは柄の部分ではあるが、取り回しは簡単に出来ないはず。

「つふっ！」

曙はそれに反応してきた。眼前に穂先が迫り、思わずその場から退避。

私と同じように動くことは出来ないが、槍をその速度で動かすまでには鍛えている。自身はその場から動かず、槍の穂先だけを私に追尾させていた。生半可な反応速度ではこの動きは出来ない。それに腕の力も相当必要。

三日月は見てから考えた瞬間には身体が動いているが、曙は予測して動いていた。三日月対策の如月や、同じことの出来る霰のように、私の目を見て次の行動を予測したか。

「アンタも三日月もだけど、見てから避けるのってインチキじゃない？」

「予測を当ててくるのはどっちもどっちだと思うが」

「ギリギリ目で追える程度よ。深海の眼を持つてるわけじゃないんだから」

代わりに、曙は全く息を乱していない。呼吸から疲れが見えない。心も落ち着けている。

いざ自分の姉との戦闘になったら、ここまで落ち着いていられないだろう。ある意味それも慣らしているのかもしれない。戦闘中にどれだけ心を落ち着けられるか。

「お前からは来ないのか」

「そのうち行くわよ」

以前に見たことのある、切っ先をフラフラとチラつかせる待機状態。初めて接近戦というものを覚えていった時に、スパーリング相手としての鳳翔が繰り出していた行動。

あの時はいつでもかかってこいという挑発だと思っていたが、曙までやり始めたので考えを改めた。あのチラつきがあるから反応速度が速くなっている。ルーティンみたいなものだ。

「鳳翔みたいだな」

「この方が反応しやすいわ。鳳翔さんがやってた理由がわかったかも」

今度は曙からの攻撃は、ゴムの穂でも重さがダイレクトに伝わってくる渾身の突き。刺さりはしないが、当たればかなり痛みを生じる。私のような速さではないが、その一撃は確実に鋭さを増していた。

艤装が改良されたということは、パワーアシストなどの艦娘の基礎能力の補助もスペックアップしている。曙はその恩恵を強く受けているということだ。

「っおー」

突きならば少しズラせば当たらなくなる。そのため、少し払うようにナイフで進行方向をズラした。その反応も侵食が深まったことで成せる技。全ての行動が速くなっている。

これで曙の胴はガラ空き。そのまま突っ込めば確実に間合いの内側に入れるところにいる。

しかし、曙は槍を払った反動を利用して柄の部分を私に向けて振ってきていた。打ち払うかのような横薙ぎとなり、またもや間合いを取らざるを得なくなる。

「……なかなか」

「私だって日々成長してるわ」

私が退いたところを見計らって追撃に来る。とんでもなく速いわけではないのだが、的確に面倒なところを狙ってくる。

リーチの違いから、猛攻に出られると回避をするしかなくなるタイミングが出てくる。近付きたくても行動の何処にでも穂先か柄が飛んでくるような錯覚を感じるため、動きが嫌でも硬くなってしまう。

「もつと速く来れるでしょ。それお願い」

「リミッターを外すことになるんだが」

「短い時間なら大丈夫でしょ」

無茶を言ってくる。だが、今の曙に対しては、演習とはいえ手が抜けない。ジリ貧なのは確かだ。ならば望み通りにしてやるしかあるまい。

軽めだがリミッター解除して、演習内で出来る限りの高速移動へ。それでも目にも留まらぬスピードになるはず。自分でも理解出来ない速度は、自分の身体への負担が半端ないため、身体を労つての一撃。回避しながらも、海面を一蹴り。間合いから外れる場所まで移動してもう一蹴り。これで曙の背後を取ったが、まるで私が背後を取ることを予測していたように、槍の柄が後ろに突き出されていた。

「うおっ!？」

故に、さらにもう一蹴りして曙の真横、槍が左側で構えられているため柄で防御されない右側へ移動。

その時の最善の位置取りを瞬時に考えるのはかなりキツイ。そう考えると、曙は私よりも頭脳派か。私も三日月も駆逐棲姫シグとほいの影響か、割と直感タイプの行動をしてみまいがちになってしまったが、曙はしつかり考え、瞬時に答えを出してきている。

故に、ここでも対応してきた。身体を捻って、突き出していた槍の柄で私を薙ぎ倒そうとしてきたため、またもや間合いを取るためバツクステップ。

私が動きの速さを武器にしているのなら、曙は頭の回転の速さを武器にしているのだろう。正直、初めて鳳翔に訓練を見もらった時と同じに見えた。

「そつちが狙いやすいなんて、私が一番理解してるわ」

自分の有利不利もしつかりと把握している。だからこそ、一番得意な近接戦闘では弱点を極端に無くしてきていた。リーチが私よりも長いために懐に入ることも難しいとなると、これはなかなかハードな戦い。

ならばと、回避を一旦完全に放棄し、直進を選択。打ち払うかのような槍の動きは、全てナイフで払っていくことにした。当たらなければ何も問題はない。

「それがっ、一番しんどいのよー!」

「だと思った」

突きを払い、その反動を活かした柄の薙ぎ払いも即座に受け止め、直進。ようやくゼロ距離というところで、受けた槍の柄を急に引き、

一歩引きながらの穂側での薙ぎ払い。リーチをよく理解している。

私もそこで直進。ちょうどいい間合いを維持させるわけにはいかない。ここで一番怖いのは脚なのだが、曙はそっち方面の格闘はやったことがない。咄嗟に徒手空拳という判断はまだ出来なかったように、間合いがもう離れないように私が胸倉を掴んだ。

「ちよっ!？」

「ナイフを使ってるならこういうことも出来るということがわかってよかったな」

そしてそのまま押し倒し、槍を振る間も与えずにナイフを喉元に押し当てた。これにより、私の勝利が確定。抵抗は可能かと思うが、演習なのだからこの辺で。

正直、余裕など一切無かった。気を抜けばそのまま持っていかれそうなくらいだった。

「もう一回よ」

「勿論だ。だが、やる気満々だな。……やつぱり、次の敵のせいか」
「当たり前でしょ」

実の姉を救うために、手間暇は惜しまない。出来ることは全てやる。そこに焦りすら見えない。

釣りで鍛えた精神か、曙はやたら冷静だった。本番では怒鳴り散らすが、その実、頭の中は冷え切っている。口が悪いだけ。

「相手は私の姉貴なのよ。私の手で救ってやるわ。でもそのためには力が必要なの。アンタ達はちょうどいいのよね」

「それは良かった」

「アンタの次は三日月のつもり。いいわよね？」

三日月の直感的な精密射撃は受けておいて損はないだろう。どちらかといえば曙は私よりも三日月の方が苦手だと思うし。

「クソ姉が何してくるかわからないのは確かだから、やれることは全部やるわ。せっかくこの鎮守府に居させてもらってるし、鳳翔さんにもまた習いたいわね。それに、大将がいる間は神風達もいるわ。やることいっぱいよ」

「そうだな。でも、無理はするなよ」

「わかってるわよ。無理して怪我でもしたら、先生がブチ切れるでしょ。それは流石に困る」

赤城や翔鶴を黙らせるほどのキレ方をする飛鳥医師は、流石にもう見たことはないか。

「っし、休憩終わり。次よ次。戦術はいくらでも練れるわ」

「ああ。若葉ボクの訓練にもなっておりがたい」

結果、午後は曙に付き合い続けることになる。お互いに切磋琢磨し、戦いを終わらせるための力を得るのだ。

こういう戦いは楽しいと素直に思った。命の取り合いではない戦いは楽しい。好戦的だとかそういうものではなく、仲間達と共に歩いているのが楽しいのだ。

ついにその時が

私、若葉が曙と演習をしているうちに、工廠組は施設の艦娘の持つ艦装の修復を完了させていた。正規の工廠という後ろ盾は非常に強力で、施設では出来なかつたことまで出来てしまう上に、それが非常に早い時間で終わってくれる。修復が必要な人数は相当いたはずなのだが、全員がもう戦闘可能というのだから恐ろしい。

そうなると流石に工廠の妖精までもが疲れた表情。明石を筆頭に工廠組みんなが労っており、疲れて動けないほどの妖精は浮き輪が運んでやっているくらいだ。

「ふいー、お疲れ様でした！　こんな有意義な改修作業も久しぶりです！」

「そいつはよかつたな。アタシはもう疲れた」

妙にキラキラしている明石と、疲労が溜まっている摩耶。セスとシロクロも限界以上の整備をしたためにヘトヘトの様子。だが、有意義な時間でもあつたようで、満ち足りた表情だった。

シロクロは自分の艦装をより良くし、セスもエコのメンテナンスは万全。全員の力が大分割増されたようだ。

「曙、使い勝手どうだったよ」

「大分いい感じ。若葉相手でもかなり動けたわ」

「やっぱ出力アップは効果的だな。さすが鎮守府の工廠だ。設備が整ってるってのはありがたい」

私と曙の演習で改修の具合を見たようだが、確かに曙の動きはかなり良かった。その全てで私が勝利を収めたものの、苦戦することの方が多いくらいだ。

私は侵食というインチキがあるため、それが無ければおそらく曙には勝てていない。リーチの差も然ることながら、とにかく全てを見抜かれる。瞬間瞬間で考えられ、即時対応されるというのはなかなか恐ろしい。

「2人とも疲れてませんね……」

「三日月……大丈夫か？」

「うん、大丈夫。大発もなんとか使いこなせるようにしたから」

こちらもヘトヘトな三日月。午後全てを使った猛特訓で、大発動艇は完全に使いこなすことが出来るようになったようだ。教え込んだ叢と如月は疲れてはいるがドヤ顔である。

私と曙は心臓と肺が深海のものになっているので、スタミナには自信がある。特に曙は長いことこの心臓でやっているのだから、簡単には疲れない。

「お帰りなさい。薬湯を準備しておきましたから入ってくださいね」

そこへ鳳翔が工廠に現れた。薬湯を用意してくれているとはありがたい。ヘトヘトの三日月は特に喜んでいる。

「ありがたいが、よかったのか」

「はい、大将さんの指示で、全員を万全の状態にしておくようにと言われてますから」

下呂大将がそんなことを言うくらいだ。いろいろ察してしまった。つまり、これから大淀達の襲撃があるということなのだろう。

夕食後、外も暗くなっている時に会議室に艦娘がほぼ全員集められた。勿論、今居候させてもらっている施設の者も全員である。数人は哨戒のために工廠に居残っているが。

会議室には神妙な面持ちの下呂大将と来栖提督がいる。そこから全員察している。ここが正念場、総力戦となるということ。今の今まで状況整理と策を練っていたのだろうし、出来る限りの準備もしていたはず。

「集まったな。んなら、今晚のことを話しておくぜエ。大将が言うには、今晚、奴らがこの鎮守府を襲撃してくる可能性が高いつて話だ」緊張感が高まる。いつか来る襲撃を前にあちらから攻め込んでくると、下呂大将が推測していた。

主に攻撃を喰らっているのは私達ではあるが、この鎮守府だつて襲撃を受け、空襲により半壊させられている。来栖提督もその時に怪我を負った。怒りと憎しみも私達と同様にみんなが持っている。

「私の憶測ですが、飛鳥達がここに滞在するまでが大淀の策だと思

ます。私が彼女の立場なら、今が絶好の機会であり、わざわざ狙って引き起こす妥当性もあります」

下呂大將が丁寧な、質疑応答も自由な状況下で説明してくれる。「結論として、大淀は私、来栖、飛鳥を纏めて殺すために今回の策を立てたのだと思います。飛鳥に関しては殺す前に捕縛する可能性も出てきましたが」

有明鎮守府から利根と筑摩が施設に顔合わせに来るところから始まり、そこに支配による統率が成されたイロハ級が襲撃してきたことにより、有明鎮守府の何者かが大淀により支配されていると下呂大將が察するに至った。

そうなるように大淀が仕組んでおり、支配を察することが出来る私と三日月が施設から離れた隙を突いて、施設を過剰な火力による襲撃。3人の死者と大半の重傷者を出すに至ったが、敢えて全滅させていなかった。

「飛鳥の持つ世界で唯一の禁忌、蘇生法を知るための策だったと考えられます。あんな状態では飛鳥は1人で全員を助けることなど出来ない。仲間に処置の手伝いまでさせることまで予測済み。そこが大淀の狙いでしょう」

「皆殺しを望んでる大淀がなんで蘇生の方法を知りたがるかねエ」
「実験台が死んでも蘇るといのは都合がいいと思いませんか？」
「……クソすぎやしませんかねエ」

それは処置の時にも下呂大將が言っていた。処置に参加した者を支配し、その方法を聞き出すことで蘇生法を我がものにするつもりだったのだろう。

蘇生法を欲しがる理由も下呂大將が推測している。確かに、奴のやり方からして、めっちゃくちゃな実験により命を落とした艦娘が蘇生出来たら、次の実験台を用意する必要が無くなる。ふざけた理由だ。

だが、ここで大淀は失策していた。その蘇生法は、目の前で見ても誰も理解が出来なかった。医術について学のある蝦尾女史が見ても、豊富な知識に何かしらヒットする可能性のある下呂大將が見ても、あらゆる怪我の処理を手伝ってきた私達が見ても、飛鳥医師の

やっていることが全く理解が出来なかった。

故に、支配されて無理矢理話をさせられても、誰一人として説明が出来ない。あの場にいたものがそれなのだ。飛鳥医師から直接聞き出したところで実現が出来るかわからないレベル。

なので、不安なのは支配された艦娘を使った捕縛あたりか。実験台に使いたい私と、実験の方法を聞くための飛鳥医師。それだけ捕えればもう用済みとなってしまう。

「施設を破壊されたのなら、まず100%この鎮守府を頼ります。そこで大淀の策は次の段階。目先の抵抗するものを消しておくこと。そして、その消し方は実に簡単です。この鎮守府にいる全ての艦娘を支配下に置くことにより、即座に制圧完了です」

「こいつらに俺らを殺させて、自殺なり同士討ちなりさせりや終わりにって寸法ツスカ。最悪じゃねエかよ」

「最悪というか、災厄ですね」

知っている私達でも気分が悪いが、来栖鎮守府所属の艦娘達は大きくどよめく。

大淀の艦隊司令部のことは当然全体に知れ渡っている。だから襲撃時期を先送りにしたわけだし、未だに対策が練れていないのだから困っている。

だが、おそらく全体に行き渡っているのは、深海棲艦が支配されるということと、それが出来るのなら艦娘も出来るかもしれないということだけだ。まだ出来るということは何処にも伝わっていない。

しかし、実際支配………というか支配により暗示をかけられていたものを見てしまっている。これは疑いようのない事実だ。だから公表した。

「質問いいかしら」

「足柄、質問を許します」

「その支配ってのは、回避出来ないの？」

足柄の疑問はわかる。意思も抵抗も関係なく大淀の支配下に置かれるなんて、プライドが許さないだろう。回避してぶん殴りたい気持ちは大いに理解出来る。

しかし、そこは答えられるものが別にいる。下呂大将ではそこはわからない部分だ。これは被害者にしかわからない。

「それについては私が説明します。大将さん、構いませんよね」

「ええ、私にはわからない部分ですから、君が説明してくれると助かります、赤城」

またそこに騒然とした。どう見ても深海棲艦、空母棲姫のことを赤城と呼んでいたら流石に誰でも驚く。死して尚、恨みと憎しみにより蘇ったという成り行きを鳳翔から聞いていても、現物を見なくてはピンと来ないか。

「支配に対抗できる者は限られています。少なくとも、私は一瞬でした。大淀の声が頭の中に鳴り響いた瞬間に、スイッチが切り替わったかのように思考がおかしくなります。敵と味方が入れ替わるようなイメージですね」

そのスイッチの切り替えをどうにか耐えていたのがあの時の私とリコ。三日月も耐えていたが、単一の命令が叩き付けられたせいでスイッチを無理矢理切り替えられたと考えればわかりやすい。

思い出すだけでも腹立たしい。あの時の悪意を持った三日月の瞳は忘れたくても忘れられないだろう。

「その対抗できる者ってのは？」

「我々の施設の者では、あの戦場では若葉さんとリコさんだけです」

「それ以外は全滅ってこと!？」

そうもなる。艦娘だからまだ耐えられるというのはあるかもしれない。不意打ち気味に來られたらどうしても屈してしまうかもしれないが、深海棲艦よりも艦娘の方が耐えやすいとかはあるような気がする。

「若葉は我慢していた。屈してなるものかと歯を食いしばっていただけだ。今は結果的に艦娘でも深海棲艦でもないものに成り果てたらしいが」

「私もだな。それに、私はお前達と違って艦じゃなく施設だ。その分効きが悪かった」

物事には例外というものがある。私やリコは枠から外れているだ

け。真似出来るものでもないし、真似してはいけない類でもある。

「ともかく、屈しないように耐えろってことでいいのかしら」

「……それでも集中攻撃があります。名指しで命令が来ると、衝撃が段違いです。……それで……私は……」

「三日月、無理しなくていい」

今にも泣きそうになってしまった三日月を抱き寄せて慰める。それだけ抵抗が難しいということを理解してもらえればいい。そして、これほどに心に傷がつくことも。

「話を戻します。最悪なことに現在、大淀の艦隊司令部を回避する手段はありません。なので、誰かが艦隊司令部そのものを破壊するまでは耐えてもらうしかありません」

その誰かというのは、どう考えても私だ。この場で何事もなく動けるのは私のみ。三日月も意識が切り替わることは無くなったらしいが、動けなくなる可能性は非常に高い。三日月も動けるようになってくれれば多少はよくなるのだが。

「我慢してもらおうしか無エってことだ。俺から先に言っておくぞ。万が一、耐えられずにスイッチが切り替わっちゃったとする。それでもな、俺ア何とも思わねエからな。例えお前らに主砲を向けられようが関係無エ。どうなるうがお前らは俺の大切な部下だ。気にすんじやねえぞ」

前以て言われていたとしても、罪悪感というのは付いて回る。そういう形の精神攻撃でもあるからタチが悪い。

「心を強く持つことで回避出来るかはわかりません。ですが、その時が来る可能性が高いことは肝に銘じておいてください。そして、艦隊司令部を破壊した後全員で総攻撃を仕掛ける。悔しいですが、今はこれしか無い状況です」

「その破壊役は若葉がやればいいのか」
「君にお願いするしかないでしょうね」

大役だ。己の身の心配などしている余裕は無い。あの自分でも知覚できない動きをやるしかだろう。

しかし、艦隊司令部は何処にあるか。おおよそ背部の主機の何処か

だろうが、細かい位置はわからないだろうか。

「艦隊司令部は、艦装内部に配置されます。大淀の艦装がどうであれ、おそらく頭に近い位置が狙いどころでしょうね」

「了解した。ともかく、艦装をどうにか破壊する」

「君には相当な重荷を背負わせます。ですが、ちよつとした秘策もありますので。上手く行くかはわかりませんがね」

その秘策は公表しないという。支配されてその情報を引き抜かれたら厳しいからだ。秘策が秘策では無くなる。

そして、本当にここに来てしまった。鎮守府内に警報が鳴り響く。「行くしかありませんね。皆さん、覚悟を決めましょう」

時間があまりにも足りない。だが、やるしか無いのは事実だ。

工廠に移動すると、そこには本当に奴の姿があった。この鎮守府を破壊するため、だが情報を抜き出すためにまだ破壊活動をしていない敵。

大淀自身もそこにいた。下呂大将の推察通り、この鎮守府にいる全ての者を支配するために、敵軍の大將が戦場に現れている。

「おやおやおや、皆さんお揃いで」

「それがお前の狙いなんだろうが」

大淀の周りには護衛艦隊として伊勢と日向も立ち、私が見たことのない艦娘もいる。腿にナイフがあり、主砲も魚雷もWG42もヴェーゲーも装備した駆逐艦。おそらくアレが、曙の姉という艦娘、綾波。

「人間も全員いますね。私の掌の上でここに揃ってくれて嬉しいですよ」

「これはこれは。随分と様変わりしましたね。大淀……いえ、今は司令部棲姫と呼んであげた方がいいのですか？」

この危険な状況で、下呂大将が先頭に立った。その間に艦娘達も艦装を装備していく。私も準備万端。

「私は君と話をしたかった。私の推理が合っているかどうか、君自身に問い質したかったんですよ」

「へえ？」

「全ての情報を整理し、君がどういう存在かを予測しました。何故そんなことになったかも、私の中では1つの仮説があります。それが正しいかが知りたいのですよ」

下呂大将の言葉に興味津々な大淀。いつもニヤニヤと笑みを浮かべているが、今はより一層口角が上がっているように見えた。

「よろしい、私も貴方の推理というものが聞いてみたい。どうせここで仲間の手によって首が落とされるのですから、話す時間くらいあげましょうか」

「これはこれは、お姫様は寛大な心をお持ちで」

弱みを見せず、お互いを見据え、笑顔ながらに睨み合い。

「では、答え合わせと行きましょう」

答え合わせ

来栖鎮守府に大淀が襲撃してきた。それに対するは、大淀の存在が
どういうものかを推理していた下呂大将。大淀対策のちよつとした
秘策というのも引つさげ、相対している。

「では、答え合わせと行きましょう」

時間稼ぎなのか、下呂大将が大淀に対して推理を披露することにな
る。大淀も自分の絶対的な力に酔い痴れているのか、まず確実に自分
の勝ちが揺るがないと信じ切っているようで、下呂大将の話を聞くこ
とにしたようである。

「その前に。貴方のそれがただの時間稼ぎだったら困りますからね。
先んじて手を打たせてもらいますよ」

「何をするつもりで？」

大淀の表情が、嫌味つたらしい笑みで一層歪む。

「艦隊司令部より、全艦娘に伝令」

大淀を中心に波が立ったように錯覚した。範囲は鎮守府全体と言
える。私にはやはり効かなかったが、周囲にいる艦娘達が次々と硬直
していく。人によつては瞳から光が失われて、完全に支配されるにま
で至ってしまった。

やはり、艦娘にも支配が効くようになっていた。深海棲艦だけでは
飽き足らず、何もかもを支配しようとしている。

「私達に砲を向けられては困りますからね。逆に、貴方は針の筈と
なってもらいましょう。全艦娘に伝令。この場の人間に対し、攻撃の
意思を示せ」

パツと見で対抗出来ているのは、練度が非常に高い者達。つまりケ
ツコン濟みの艦娘のみである。

来栖鎮守府で言えば鳳翔のみ。それと、敗北を嫌いすぎるほどに嫌
う足柄が意地と根性で抵抗していた。足柄だけは完全に例外。私達
と親交がある文月達二二駆逐隊や海風達二四駆逐隊も既に傀儡と化

してしまっており、無表情で下呂大将や来栖提督に砲を突き付けていた。

下呂大将配下の第一水雷戦隊は、全員が抵抗していた。しかし、あの時の私やリコのようにその場から動けず、口すら利けない。少しでも屈したら最後、傀儡と化してしまうだろう。

そして、施設の者達。一度受けているからか、あの時屈してしまった赤城達は今回は抵抗。だが当然、動くことなど出来ない。初めて受けた艦娘の方は抵抗がかなり厳しそうだ。練度が高いおかげでまだ完全に傀儡と化してはいないが、時間の問題と言える。

初霜だけは事前に姉が寝かせておいてくれているため安心していい。こんな場にいちやいけない存在だ。

「さすが若葉さん。もう全く効きませぬね」

「若葉は反逆者だ。お前の言うことなど聞いて堪るか」
「それに……あら、三日月さんまで」

何の抵抗も無く動けるのは私だけ。私の隣の三日月も、身体は重そうだが自分の意思を失っていない。ぽいは身体が動かなくなると言っていたが、私と繋がりを得たからか、身体も多少は動くようだ。

三日月もまた、侵食が拡がったことにより、私と同じで謎の存在へと昇華されようとしている。むしろ、この状況がそれをさらに拡げているようにも思えた。包帯で隠れている首筋のヒビが、若干拡がったように見えたからだ。

「私も若葉と一緒に反逆する」

「……ああ、一緒にな」

三日月が持つ大淀への憎しみは人一倍だ。大淀のせいで死にかけ、外見を変えることとなり、支配による傀儡とされたことで心まで壊されかけた。全ての原因は大淀にある。故に、有り余る程の憎しみが大淀に向けられた。

本人がこの場にいるのだから、負の感情は止まるところを知らない。私だって今すぐにでもぶん殴りたい。この場でその命を終わらせてやりたい。

「でも、動かないでくださいね。下手なことをしたら、みんな引き金を

引いちやうと思えますからね」

言わば、鎮守府にいる者全員を人質に取られたようなもの。私達の行動次第で、下呂大將が何かを言うまでもなく、その砲撃によりこの場にいるものが全滅する。

今は従うしかなかった。悔しいが、状況は大淀側にある。

「では、御高説を賜りましょうか。貴方の推理とやらを」

「最高の舞台を用意してくれたようで痛み入りますね。では聞いてもらいましょう」

表情も語調も一切変えなかったが、現状最も怒りを持っているのは下呂大將だ。正直、大淀と戦うよりも恐怖を感じるくらいである。

「では、君が何者か。結論から言えば、D事案によりドロップした艦娘大淀。これは紛れもない事実でしょう。ですが、そこには続き、いや、前日談があった。大淀を拾った目出すらも知らない真実がそこにあるでしょうね」

確かに大分前だが、下呂大將が大淀のことをそう言っていたのは覚えていて。そしてその時、大淀は最初からコレだったということも。なら、何故こうなったかということに尽きるだろう。

その前日談のせいで、大淀はここまで歪み、世界を滅ぼすとまで言つてのけている。

「私の推測では、君はドロップから数日から数週間、海を漂つたのでしよう。目出からは、拾った直後の君は大分やつれていたと聞いています。本来ドロップ艦は、その存在が公になる前に大本営が発見するようにしているはずですが、君は運が悪いことにそれが遅れた」

摩耶のような例か。ドロップ艦である摩耶は、鎮守府に拾われる前に野良の深海棲艦に襲われてしまったせいで施設に流れ着いている。大淀も似たような状況を潜り抜けてきたと。

摩耶は大怪我を負い、今にも沈んでしまうという状況まで持つていかれたが、大淀はそうではなかったようである。代わりにやつれていたようだが。

「ええ、私は夜を7つ越えたところで発見されました。目出提督に」「いくら艦娘といえど、7日間飲まず食わずで生きていくのには限界

がある。ならば、どこかで食糧を調達していたはずですね。しかし、目出が君を発見した海域は鎮守府は当然のこと、民間の輸送経路からも外れた場所。例えば、海賊行為などで食糧を調達することは不可能だ。だが君は、やつれていたとはいえ生きていた」

大淀の下呂大将への興味の匂いが強まった。

「ならば、どこで食糧を調達したか。普通なら考えないことですが、切羽詰まっていたこと、そしてD事案であることが関係しています。自身が艦娘であることすらも理解していなかったならば、深海棲艦という存在も当初はあやふやだったでしょう」

同じD事案で生まれた雷も、自身が艦娘であることを理解していなかったと聞いている。この大淀も最初はそういう存在だったのかもしない。

D事案で生まれたことで、何も知らない状態で武器だけ与えられ海に放り出されているような状態。その武器も無我夢中で使って迫ってくる敵を倒したのだろう。

それと食糧調達に因果関係が見出せなかったが、下呂大将の次の一言で繋がった。

「大淀、君は深海棲艦を食べましたね？」

そんなバカなと思ったが、大淀からはそれを肯定するかのような匂いが漂っていた。本当に食べたというのか。アレを。

今までのことでこれで繋がる部分もある。初めて会った時から深海棲艦の匂いが漂っていた。私達のような継ぎ接ぎとは違う、真に混ざり合ったような匂いだった。まるで深海棲艦のような匂いと同時は思ったものだが、本人はその時はまだ艦娘だったはずだ。

食べた深海棲艦の匂いが染み付いていたわけだ。あれだけ匂うということは、1体や2体では利かないほど、多くの深海棲艦を食べている。姫の匂いを感じたところから、つまりはそういうことなのだろうと察する。

「三日月、大丈夫か」

「……吐き気がしただけ。大丈夫」

気持ちはわかる。深海棲艦は食べるものではない。確かにイロハ

級でも人と同じような柔らかい部分はあるし、移植されている者も多くいる通り、内臓は普通に存在する。甲殻を持つ魚のようなイロハ級にだって、可食部はあるのだろう。

どう考えてもグロテスクな光景だった。海の上でそんなことをやっていただけだから、血塗れの生肉にかぶり付くしかないはず。生きるためのものだから、味なんて気にするはずもない。

「死にたくないと考えれば、人は異常なことも平気でやれます。君の場合は深海棲艦の捕食です。艦娘ならば辟易するようなことでも、記憶のないD事案の艦娘なら、抵抗はある程度薄れるでしょうね」

肯定も否定もしない。笑みはそのままに、下呂大将の話をじっくりと聞いているような雰囲気。

「深海棲艦を捕食したことにより、君はおかしくなってしまった。深海棲艦の成分を体内に取り込んだことで、D事案特有の反応が発生した。確か、元となった深海棲艦と同じ細胞が体内に入ると、艦娘とは違うナニカが目覚めると」

雷のことだ。戦艦レ級を元にD事案で生まれた雷の傷を治すため、戦艦レ級の内臓を使ったことにより、雷はイロハ級の声が聞けるようになっていた。大淀にも似たようなことが起きたということだろう。

雷は改装により馴染んだことで発生したが、深海棲艦を捕食したことで身体に馴染んだと考えられる。

「君が目覚めたものは、よりによって理性無き怒りや憎しみといった感情だったのでしょうか。そこで君はあらゆる方向へ憎しみを持ち始めた。ドロップした自分を放置した人間を憎み、自分を攻撃してくる深海棲艦を憎み、自分を救わなかった艦娘を憎んだ。これが君が世界を滅ぼすという思考の原因じゃないかと推測します」

味方に砲を突き付けられているというのに、緊張も何も感じさせず淡々と説明する下呂大将。冷静に冷酷に推理を突き付けるうちに、大淀が少しずつ震えてくる。

身体を震わせている感情は、歓喜だ。

「っふ、ふふふ、はははっ。凄いですね下呂提督。微かな情報からそこまで推測しますか」

「どうでしょう。正鵠を射ていると思いますが」

「合つてますよ。驚きました」

ならば、本当にこの大淀は深海棲艦を捕食して生き延びたのか。

「ですが、間違っているものがあります。私が深海棲艦を捕食したことで目覚めたものは憎しみではありません。気分がいいので教えてあげましょう」

「ほお？」

「記憶です。私が深海棲艦として活動していたときの記憶ですよ」

大淀が元々何者だったのかは関係ない。とにかく、深海棲艦として生まれ、本能のままの破壊活動をして、艦娘により討伐された。そのときの記憶が蘇ったと。

ある意味、艦娘の記憶を持つ深海棲艦として生まれ変わった赤城とは真逆。深海棲艦の記憶を持つ艦娘。この世界でも大淀にしかない特徴となつてしまった。

「なるほど、記憶と連動して憎しみが生まれたというのなら、さらに繋がりますね。艦娘への憎しみは殺された憎しみでしたか。世界への反逆は……そうか、死から呼び起こされたことへの憎しみ」

「ご名答です。艦としての眠りを妨げられ、その上深海棲艦としてまた沈められ、さらに艦娘として生を与えられて、人間に利用される。こんなサイクルを作り出している世界の本质に、私は憎しみを覚えているのですよ」

大淀の言葉に少しだけ理解出来るものを感じてしまう。艦娘の中には、艦娘になつたことすら拒む者がいてもおかしくはない。せつかく静かに眠っていたというのに、叩き起こされたのなら。

飛鳥医師にも感じるものがあつたように見えた。禁忌の研究を止めるきっかけとなつた、とある艦娘の言葉を思い出してしまっている。

「欲望のままに利権を争う人間、言われるがままに敵と定めたものを殲滅する艦娘、世界に定められるがままに破壊を繰り返す深海棲艦、どれも悪でしょうね。私は知恵のある分、人間が最も悪だと思いますよ。私怨もありますがね」

さも自分のやっていることが正しいと言わんばかりの話し方。先程の理解が恥ずかしくなる。

大淀は今挙げた3つの種族から外れた悪だ。誰が悪かろうが、大淀はその全てを超越している。自分を正当化する理由など何処にも無い。

「では次に、君がこの鎮守府を襲撃するまでに至った道筋を」

「いや、それはもういいです。どうせ皆さん知っているのでしょう？ 貴方の推理、披露しているのでは？」

痺れを切らしたわけではなく、十分に楽しんだからもういいやという感じ。玩具に飽きた子供のようなだった。

「ふむ、そこはお見通しでしたか。では、やはり飛鳥の蘇生法を手に入れるためでしたか」

「はい、その通りです。これが済んだら、皆さんからその方法を聞きますよ。そうしたら、無限に動く実験台が作れますからね。それに、私のような者が新たに生まれるかもしれません。そうしたら、この世界はより早く滅ぶでしょう」

死んだのに別の形で蘇ったことで世界を憎むまでに至ってしまった大淀が、同じような輪廻を他者に強いることで心を壊そうとしていた。そこまでは思いが至らなかつた。

生み出した本人が後悔していることを、嬉々として実行しようとしているのに虫唾が走る。

「下呂提督、有意義な時間をありがとうございました。とても面白かつたです。でも、もう終わりです」

心底嬉しそうに話を纏めにかかってきた。ここからは私と三日月だけで下呂大将達を守らなくてはいけない。

しかし、鎮守府総出の集中砲火から逃げ切るのは、いくら速く動けるだけでも無理だ。それに守る対象が多すぎる。

「残念ですね。君は思ったより話し甲斐があつたのですが」

「最期に楽しんでもらえてよかつたですね。では、おしまいです。もう悔いも無いでしょう」

満面の笑みを浮かべ、最後の指示。

「艦隊司令部より、全艦娘に伝令」

だが、その指示に対してとんでもない発言が返された。

「陸軍としては、海軍の提案に反対である！」

直後、大淀の艤装が爆発した。目標とされていた艤装上部、艦隊司令部があるであろう場所が、突如粉々になった。

おかげで、全員に行き届いていた支配の力はその時点で霧散し、傀儡と化していた者達の瞳にも光が戻る。

「な……に……!?!」

「私の推測通りでした。君の力、艦隊司令部はあくまでも艦娘の力が深海の侵食により転じたもの。つまり海軍の力です。それに何の細工もせずに抵抗できるのは、本来の所属が違う者。艦娘には現状たった3人、元々が海軍ではない者がいますからね。そのうちの1人は、私の秘蔵っ子です」

爆発の原因となった方を見る。そこにいたのはあまりにも意外な人物。

まるゆだ。

今この手で

来栖鎮守府に所属する艦娘全てを支配していた大淀だったが、下呂大将の秘策により艦隊司令部が破壊された。それにより、支配されていた者達は次々と正気に戻っていく。抵抗してその場から動けなかった者も、拘束力を失いその場に崩れ落ちた。かなり厳しかったようで、ここにいる中でも最も手練れである神風達第一水雷戦隊ですら疲労が顔に出ている程。

そしてその秘策というのが、海軍ではなく陸軍所属艦であるまるゆ。最初の支配を回避し、気付かれぬように海中へ潜り、下呂大将が推理を披露している間に大淀の後ろに回り込んでいた。大淀に放たれたのは、専用にチューンされたWG42。施設を破壊されたことに対する意趣返しとなる。

「こんな……こんな、巫山戯た抜け道を……!」

「まさかここにまで影響が出るとは、正直私も驚いていますよ。ですが、結果として君の支配能力は封じました」

もくもくと煙を上げる大淀の艤装。あれほどの爆発が起きても、本体がほぼ無傷なのはインチキだと思う。とはいえ自力での航行がかなり難しくなっているようで、伊勢がしっかりと補佐に入っている。まるゆの一撃はかなりいいところに入った様子。

そこまでの手痛いダメージを受けるとは夢にも思っていなかったようだ。いつも余裕を持ち、人を小馬鹿にした笑みを浮かべていた大淀が、初めて顔を顰めた。痛みではなく、悔しさで。

「綾波、処理しろ」

「はあ」

駆逐艦故に対潜能力も当然持っていることだろう。日向の指示により、まるゆを殺そうと即座に動き出す。

だが、その時にはもう、まるゆの姿は無くなっていた。一撃放ったことで既に海中へと撤退しており、今が夜ということもあり、いくら完成品の綾波であつてもすぐに発見することは不可能。

「うくん、もう見当たりませんねえ」

「まったく、これだから夜の潜水艦は厄介極まりない」

呂500や伊504をさんざん仕向けてきて、どの口が言うか。いざ自分達が追われる立場になればこんなものだ。勝ち続けてきたものだからこそ、不利に慣れていないようである。

「うちのまるゆは特別ですよ。友人との海底散歩を楽しむため、泳ぎを努力でマスターしましたからね。インチキで慢心している君とは、そもそも雲泥の差だったということですよ」

潜水艦なのに泳ぎが苦手だと言っていたまるゆだったが、シロクロと一緒に泳ぐために、ずっと訓練をしていたらしい。それがまさかこんなところで実を結ぶだなんて思っても見なかっただろう。

下呂大将のその発言に、シロクロも大歓喜でまるゆを追うように海へと潜る。ある意味、シロクロが泳ぎに誘っていたからこれが出来たようなものだ。

「……伊勢さん、日向さん、歯痒いですが今回は撤退しましょうか。綾波さん、しんがり殿をよろしくお願いしますね」

悔しそうに撤退指示を絞り出す。今までの嘗めていた雰囲気は失われ、撤退しなくてはいけないと判断させた。あの大淀に焦りを与えることに成功している。

だが、今逃がしたら再びあの艦隊司令部が使えるようになってしまう可能性がある。ならば、襲撃計画など有耶無耶になってしまおうが、早期決着が必須な敵なのだから、多少無理をしてもここで終わらせるしか無い。

ほぼ全員の無事が確認出来たことで、私も動けるようになった。そのため、即座にリミッター解除。大淀が目の前にいるのだから、もう何もかもかなぐり捨てる。理性も容赦も何もかもを捨て、ただ大淀を殺すために動く弾丸となる。

「ダメですよ。若葉ちゃん、大淀さん狙ってますよねえ？」

しかし、私と大淀の直線上に綾波が立ちはだかった。前回のあの1回、たった1回見られただけで、完全に対策されている。大淀的には、私が一番厄介という認識のようだ。たった1人、奴の顔に傷を付けたことで警戒レベルを跳ね上げた様子。

私のアレは、方向転換が出来ない本当に弾丸となる移動法だ。あの時は私と大淀の間に隔たりがなく、伊勢と日向が壁にもなっていない。かたためたために顔を蹴り飛ばすことが出来た。あの時にナイフを突き立てなかったことをほとほと後悔している。

だが、今回はそれを見越して綾波が壁となっている。突っ込んでも綾波にぶつかるだけ。それならそれでいいかもしれないが、私の脚が先に壊れるだろう。大淀を殺すまでに余力が無くなるのはまずい。

「アンタの相手は私らよクソ姉！」

だが、そこへ曙が乱入。さらに雷と暁も加わった。先程の支配への抵抗で体力を持っていかれていたが、まだ動ける。

まずは気絶させる必要があると、槍を構える。刃はいつもの修復材。姉であろうが関係なく、腹を掻つ捌くつもりで突撃。雷と暁も容赦なく砲撃を浴びせかける。救出するつもりではあるものの、暁は実弾だ。艦装を破壊するために行動を起こしている。

「曙ちゃん達が綾波の相手をしてくれるんですかあ〜？ でも綾波、今の若葉ちゃん対策に調整されてますからあ〜」

おっとりした言動から一転、2人の砲撃を簡単に避けながら曙の懐に入っていた。速さも並ではない。そこから主砲ではなく、あえてナイフを使つての斬撃。槍を使う曙の苦手な間合いに一瞬で入つての一撃。

しかし、そこは我らが曙。私を使つて演習をしたのだから、自分の不得手な部分は理解している。そして、演習のおかげでナイフによる斬撃ならば見てから考えて回避するだろう。

「甘いのよー」

槍の柄を思い切り薙ぎ払いつつもバックステップで即回避。同時に雷がヘッドショット。水鉄砲を使い続けているためか、その辺りは本当に容赦が無い。

わざわざ避けるににくいように、それこそ私と同じような獣のような前傾姿勢で突っ込んできたことで、逆に曙には回避しやすい状態。

「おつとお、お顔を撃つのは良くないと思いますよお〜？」

雷の砲撃は残念ながら回避されるが、曙がうまく間合いを取れた。

これでまた戦いやすくなっただろう。

同時に、私の道が拓かれる。未だに大淀への直線には邪魔者がいるものの、その邪魔者は伊勢。リミッターを外し、理性と容赦を失った私の思考では、伊勢は大淀と同様に死んで然るべきものにしか見えない。

今でこそ蘇生されたものの、姉を背中から斬り裂いたのは紛れもなく伊勢。姉が庇わなければ、無抵抗な初霜をも殺そうとした。私の姉妹に手をかけた事実を、私は忘れない。

今だけはあの時の赤城の気持ちができるようだった。

「三日月、少しだけ離れろ」

「うん、行つてらっしゃい。私も援護する」

三日月に少しだけ離れてもらい、地を思い切り蹴る。海面以上の衝撃に脚が悲鳴を上げるが、知ったことではない。まずは1発お見舞いしてやる。

「伊勢えー！」

誰にも知覚出来ない速度で突っ込み、伊勢の横腹に渾身の蹴りを叩き込んだ。普通ならば、この一撃で骨が砕けるなり肉が裂けるなりの傷を負うはずだ。

だが、この渾身の一撃すら受け止められてしまった。いや、正確には受け止められたのではない。しっかりと蹴りは入った。ズドンと酷い音がしたはずだが、伊勢はその場から動かなかつたのだ。まるで大木の幹を蹴っているようだった。

「滅茶苦茶するね君は！」

「滅茶苦茶はお前だ。どれだけ頑丈なんだ」

徒手空拳では敵わないということがわかってしまった。しっかりとナイフの刃を突き通さなくては、傷一つ付けられない。そんなことをしなくても、砲撃や雷撃は通りそうではあるが、それすらも通るかわからなくなってきた。

すかさず身体を捻り、ナイフで伊勢を斬り払うが、受け止めるでもなくその場から退避。大淀を引きずるような間合いを取られた。こういう時にどうしてもリーチの差が出てしまう。子供のナイフと大

人の刀ではかなり違う。

「大将、ちよつと我慢しなよ」

「撤退出来ればそれでいいです。艦装を修復しなくては……」

余程あの艦隊司令部が気に入っているのか、戦場を見ずにぶつぶつと呟いている大淀。計画倒れしたことで再計画しているのだろうか。この状況でも余裕を取り戻そうとしているのが実に気に入らない。

だからだろうか、私の後ろからすかさず三日月が砲撃していた。当たれば致命傷となる実弾を伊勢にである。むしろ、流れ弾が大淀に当たることを期待していると言つてもいいか。ところが、

「ここら、砲撃は危ないでしょう砲撃は」

よりによつて、三日月の砲撃を刀で斬り払ってしまった。いくら何でも、これは規格外過ぎる。刀を持っている限り、全ての攻撃が無効にされると言っているようなものだ。

思い切り刀を振り回されたせいで、私もそこから離れざるを得なくなった。あの太刀に触れば一瞬で細切れにされてしまいそう。

「離れてもらおうか」

すかさず日向が足下に主砲を放った。前回もこれで逃がしてしまっているため、こちらだつてそれに対応する。

大きな水柱で目眩しされるが、匂いは変わらない。ドス黒い、臭いでいたくない腹の立つ匂い。忘れてたくても忘れられない大淀の匂いだけは、目を瞑つていても追える。

「いい加減に死ね」

本日2度目の全力の移動。またもや脚が悲鳴を上げるが、今猛攻を仕掛けなくては勝てるものも勝てない。

水柱をぶち抜くように突っ込み、それでも勢いは死なずに大淀に直撃。伊勢の支えなど関係なしに引き剥がし、海面を滑るように吹っ飛ばす。この一撃はどうしてもナイフで斬り付けることが難しい。

「つぐうっ!」

小さく悲鳴も聞こえた。あの時は私から一撃を受けても笑い飛ばしていた大淀が。艦隊司令部を破壊されたことで、かなり動揺している。

「大将!？」

「貴女達にも余裕は与えませんよ。こちらは憎しみが原動力なんですから」

大淀が引き剥がされた瞬間、伊勢には雨のようなピンポイント空爆が開始される。ガードに専念しなくてはいけないほどに大量の爆撃は、あの伊勢すらもその場に止まらせる。

空爆を先導するのは赤城。空母達が一斉に艦載機を発艦していた。一航戦と五航戦、さらには鳳翔まで加わった猛烈な空襲は、三日月の砲撃を斬り払った伊勢ですら、自らの艦載機で制空権を押し返しつつ回避行動に専念するしか無い状況に置く。

「伊勢、何をしているんだ」

「貴女の相手はこちらよ」

伊勢を援護しようとした日向の方には、妹を痛め付けられた怒りを纏わせた神風型が陣取る。

「私達と死合を望んでると旗風から聞いてるわ」

「今はそんな余裕は無い。また時間がある時に頼む」

「そんなこと言わずに、付き合つてよ。楽しませてあげるから」

既に神風が己の間合いに入っていた。神風型随一のスピードにより、日向が神風に集中せざるを得なくする。

振るった刀は受けられてしまうが、目を離さない状況にはした。神風だけではなく、他の神風型すらも日向に押し寄せている。

伊勢には空母隊が、日向には神風型が、そして綾波には曙達がついたことにより、大淀は完全に孤立した。そして、そこには私がいる。知覚不能な移動を2度もやってしまったため、脚にガタが来ているが、そんなことは関係無い。

「もう終わりだ。どんな過去があったかはわかったが、お前は超えちゃいけない線を越え過ぎた」

「ふ、ふふ、こんな時に説教ですか」

余裕を取り繕っているが、匂いからそれが虚勢であることは手に取るようにわかる。まるゆに艦装を破壊されたことで、本来の力はほとんど出せないため、私の攻撃を受け止めるようなことも出来ないはず

だ。

丸腰というわけではないが、自分の身を守るものはこの場には無い。今更ながらわかったが、艦隊司令部を使う場合は他の武装が殆ど使えないようだ。主砲1基しか持っていない大淀は、もう殆ど満身創痍。

「同情だけはしてやる」

手に持つ主砲を蹴り飛ばし、本当に丸腰に。自分での航行も出来ない大淀は、もう死を待つしか無くなった。

「今までの行ないを悔いて死ね」

理性を失った今の私には、大淀を刺すことに躊躇など無かった。怒りに任せ、憎しみに身を委ねた結果、私はもう鬼のような形相になっているだろう。今この手で、大淀の命を摘み取る。

私はナイフを大淀の心臓目掛けて振り下ろし、そして、深々と突き刺した。

刺し貫いた感触はある。生暖かい血の温度もわかる。命の鼓動に直接触れている。せめて鼓動が止まるその瞬間まではこのままできてやる。私が終わりを見届けてやる。

「カハッ……終わり……私が終わり……!?!」

「ああ、終わりだ。お前が一番理解しているだろう。これは致命傷だ」
憎しみを込めてナイフを捻る。痛みを与えて後悔させる。

「……認めない」

「知るか。お前は死ぬんだ」

「認めない！ 艦として沈められ！ 深海棲艦として殲滅され！ 艦娘として蔑ろにされ！ また深い海で眠るなど、私は認めない！」

往生際が悪い。

「こんなところで終わらない。私は終わらない。終わって、終わって堪るか。こんなところで……ここまでやったのに……」

鼓動が小さくなってくる。刺し貫いているのだから当然だ。

だが、ここから様子がおかしくなる。

「死……これが死……!? 嫌だ、もう、嫌だ、嫌だ……!」

大淀の深海棲艦としての匂いが、この期に及んで強くなる。負の本流。それはまるで、赤城が翔鶴を殺そうとしていたときのようなだった。

「まさか……!」

最悪な想定をしてしまったため、心臓に突き刺したナイフを引き抜き、首を落とすために横薙ぎにする。

だが、それは叶わなかった。腕を受け止められ、全く動かなくなってしまう。今までにない腕力。死の間際になってこの底力。いや、底力なんかではない。今この状態だからこそ力が溢れ出ている。

「終わって……堪るかあ!」

そのまま私は投げ飛ばされ、大淀は海中へと沈んでいった。この拳動も翔鶴の時と同じだ。

まずい。まずいまずいまずい。このままにしていたら、本当にまずいことが起きる。だが、海中は手出しが出来ない。

「シロクロ!」

届くかはわからないが、先程海中に潜ったシロクロに呼びかける。まるゆは確か魚雷を持っていないはずだ。ならシロクロにやってもらうしかない。

しかし、そんなことをする前に、大淀が沈んでいった場所が大きく爆発し、水柱が立つ。先程とは比べ物にならないほどの負の匂い。吐き気がするほどの悪意。

手が震えていることに気付いた。これは本当にダメなヤツだ。目にしてはいけない。心を折りに来ている。

水柱が無くなると、そこには傷一つない大淀が立っていた。だが、様相があまりにも違う。今までが深海棲艦のコスプレだったのではと思えるほどだった。

「ツハ、ハハハッ、アハハハハッ!」

大淀の高笑いが木霊する。

本当の戦いはこれからだった。

悪意の覚醒

まるゆにより艦隊司令部を破壊したことにより一転攻勢。各々の因縁の相手と相対し、大淀への道を拓いてくれたおかげで、私、若葉は大淀に致命傷を与えることに成功した。

しかし、そのまま死を待つのみだった大淀は、死の恐怖から負の感情が爆発し覚醒。翔鶴と同じ状態。追いついたことにより、作られた深海棲艦から真に深海棲艦へと成り果て、私達の前で復活を遂げてしまった。

「アリガトウゴザイマス、ワカバサン。ワタシヲ、コロシテクレテ」

そもそも深海棲艦と化しているのに、声が艦娘のままだったのに今更ながら違和感を覚えた。あれはシロにしか戻せない謎の技術だ。

作られた深海棲艦だったから、進化が中途半端だったのだろうか。今までが第一改装で、今回は第二改装のような。それである艦隊司令部を手に入れたとなると、完全な深海棲艦として覚醒してしまった大淀は、新たな艦隊司令部を手に入れてしまった可能性は充分にあり得る。

「ワタシニタリナカッタノハ、シツテイルハズノシノキョウフ。コトガウマクイキスギルノモ、カンガエモノデスネ」

変化したことで改装と同じ効果が発生してしまい、今までのダメージは全て水泡に帰し、また余裕を取り戻してしまった。先程までの動揺が嘘のように生き生きとしているのが気に入らない。

「スバらしイカラダデス。アナタノオカゲデ、コノカラダヲテニイレタンデスヨ」

見せ付けるように前に進み出てきた。今までの殆どコスプレのような黒尽くめとは訳が違う。私を知る深海棲艦の姫なんて高が知れているが、血の気のない肌に妙に海の匂いのする服と、見ただけで深海棲艦の上位種、姫であることがわかる姿をしている。

艦装も新たなものになっていた。所々が生体パーツのように蠢き、深海棲艦特有の大きな顎がガチガチと音を鳴らす。まるでエコの生首が備え付けられているような仰々しさ。それでも眼鏡だけは失わ

れていないのは本人のトレードマークとも思っているのだろうか。

「お前はここで殺す。殺さないとどうにもならない」

「ワタシハアナタニナニモウラミヲモツテイマセンヨ。ムシロ、カンシヤシカアリマセン。ダカラ、アナタハコロサナイ。ジツケンダイニモシナイ。デモ、テモトニオキタイデスネ」

何をふざけたことを。もうその言葉を聞いているだけでも腹が立つ。怒りと憎しみが込み上げる。ナイフを握る手が力んだことでギシギシと音を立てる。

故に、先手必勝だった。脚はガタつき始めているが、大淀に一番近いのは私だ。即座に動いて、その首を断ち切る。

「いいから死ね」

海面を蹴り、大淀の首筋を捉える。いくら深海棲艦化しようが、生身が外に出ている急所なら、私の刃でも傷付けられるはずだ。先程心臓に突き立てる事ができたのだから、刃が通らないなんてインチキはない。

しかし、私の攻撃は大淀には届かなかった。

「カントイシレイブヨリ、クチクカンワカバヘデンレイ」

突如叩き付けられる衝撃。やはり深海棲艦化したことにより、艦隊司令部をも戻ってきてしまっていた。せつかくまるゆが破壊してくれたのに、振り出しに戻ってしまった。

さらには、先程までは一切効かなかった大淀の艦隊司令部による支配が、今の私にすら効いてしまっている。最初期の段階に戻ってしまったかのような感覚だ。いや、むしろ真に深海棲艦と化したことにより、艦隊司令部が復活した上に、より強化されてしまっている。艦隊司令部改とも呼ぶべきか。

私に効いたということは、おそらく効かない者はいない。今の艦隊司令部は例外なく支配が行き届く。抵抗は可能かもしれないが、動かなくなることも必至である。

「っあ……!?!」

「フッフ、ワカバサンニモ、マタキクヨウニナリマシタネ」

いきなり私個人に対する支配の集中攻撃で、私は膝を突くことに

なつてしまった。全力で支配に対して抵抗するが、以前より強力な衝撃が頭を駆け巡っている。頭痛が酷い。

「若葉、助けるわ」

「ミカツキサン、ジャマヲシナイデクダサイネ」

三日月の砲撃に即座に対応し、直感的なヘッドショットすらも軽く回避した。相変わらずの回避性能だが、真に深海棲艦化してさらに磨きがかかっているように見えた。

返しに三日月に向けて砲撃。元々軽巡洋艦のはずなのに、大淀の主砲は尋常ではない威力を發揮。まるで戦艦主砲のような爆音と威力で三日月に向かう。当たれば即死ではあるものの、三日月がそんなものにあたるわけが無い。だが、

「カンタイシレイブヨリ、クチクカンミカツキヘデンレイ」

支配を抵抗させることで、回避を不可能にする荒技。三日月が激しい頭痛で歯を食いしばったのがわかった。

抵抗されることまで意識したやり方。支配出来たとしても回避させないという指示をするだけ。どちらにしる三日月の命は奪える。

「つうつ!」

「三日月ちゃん!」

そこに文月が飛び込んできてくれた。射線上から三日月を退かしてくれただけで、間髪を容れず砲撃を回避する事が出来ている。砲撃が飛んで行った先に鎮守府が無かったからよかったが、あんなもの建屋に直撃したら大変なことになる。

艦隊司令部の支配が三日月に向いたからか、私への拘束力が若干緩んだ。今までと違い、支配の方向を変えたことで先に支配しようとしたものは対象から外れるようだった。

今の大淀は覚醒したばかりのせいで、1人しか支配出来ない可能性が高い。伊504が慣らしのための時間稼ぎを任じられていた程なのだから、すぐには使いこなす事が出来ないと見ていい。そうでなければ、真つ先に私だけをピンポイントで支配しようなんてしないだろう。私以外を支配して取り押さえようとするに決まっている。

先程のように鎮守府全域に支配の力を張り巡らせることをしない

のはありがたいことではあるが、効果範囲が狭い分、即効性が強い上に強制力が段違いに強い。私や三日月にも効くようになってしまっているのはかなり厳しい。

「大淀お……！」

まだ重たい身体をどうにか動かして、大淀に対抗する。だが、それを見越していたかのように次の支配の言葉。

「カンタイシレイブヨリ、クチクカンワカバヘデンレイ」

「つぐう……!?!」

再び名指しの衝撃。抵抗だけで手一杯になる。だがこれで三日月は解放されるはずだ。回復までに時間はかかるが、動けないわけではなくなる。

私達への支配を、意のままに操ることではなく、行動を封じるために使ってきているのは厄介極まりない。自分とこちらの特性を完全に理解している。

「若葉ちゃんを助けるよお！」

「ボク達の義理の妹だからね！」

ここで三日月を助けてくれた文月を筆頭に、第二二駆逐隊が大淀に突撃。皐月の言う通り、今や二二駆も私とは切っても切れない間柄になっている。おかげですぐに動き出してくれた。

だが、支配への耐性が無いことは先程証明されてしまっている。ピンポイントしか出来ないとはいえ、1人が敵に回るだけでも面倒くさいことになる。

「カンタイシレイブヨリ、クチクカンフミツキヘデンレイ」

よりによって文月を狙ってきた。先程三日月を助けたことが気に入らなかつたか。

支配の力が即座に行き届いてしまい、突撃する文月が急にその場で止まってしまった。瞳から光が失われ、敵意に湧き立つ。しかし、それを既に見越していた水無月が、文月をすぐさま押さえ付けていた。誰が狙われてもいいように事前に打ち合わせていたようだ。

「ふみちゃんはここに止めておくから！」

「ナラバ、ソコニウテバイイワケデスネ」

「させません！」

どさくさに紛れて、再びまるゆ浮上。変わり果てた大淀の真後ろから、艦装を狙ってWG42ヴェーゲーによる砲撃。対地攻撃に使うほどの爆発力を持つ武器だ。近距離で撃たれば、如何に今の大淀でもただでは済まない。

流星にこの攻撃は看過出来なかったようで、その砲撃は回避し、睨み付けるようにまるゆを捉える。先程とは違い、真後ろからの攻撃は効かず。

「カントイシレイブヨリ、センスイカンマルユへ」

「陸軍としては、海軍の提案に反対である！」

言い切る前にその命令を無視。名指しの支配すら回避。出力が高くなり、支配力が強化されていたとしても、まるゆだけは大淀でもどうにもならないらしい。何処まで行っても、海軍と陸軍の確執を越えることが出来なかったようだ。

真正面からのWG42ヴェーゲーによる砲撃も回避はされたが、まるゆは縦横無尽に動き回る。夜というのもあり、潜水艦の動きを捉えることは易々と出来るものではない。

「サイジャクノカナムスガ、ワタシノシハイヲウケナイ……!?!」

「まるゆは弱いけど、今はみんなの役に立てるから！」

再び背後に回り込んで砲撃。回避して振り向いた瞬間には、すでにまるゆは潜航中。

まるゆは自他共に認める、艦娘の中で最も力を持たない者。生まれた時に武器を一つも持たないという徹底っぷり。そんなまるゆでも、下呂大将という素晴らしい上司の下、最大の力を発揮するように成長した。

今のまるゆは運転手や運び屋なんかではない。歴とした艦娘、私達の仲間であり、現状の最高戦力だ。

「隊長に聞いてます！ 大淀さん、対潜が苦手だって！ なら、まるゆがお相手するのが一番適任だって！」

「コノ……！」

浮上して砲撃、そして潜航。まるでモグラ叩きのような戦闘。その

砲撃自体は当たらないにしても、大淀の攻撃自体もまるゆには当たらない。大淀が撃つたびに大きな水飛沫が巻き上がるが、まるゆはその時には別のところから浮上して砲撃している。永遠に戦いが終わらないのではないかと思えるほど。

だが、それは1対1なのである。ここにはまるゆ以外にもいるのだ。

「まるゆが完全に困だな。すまないが、利用させてもらおうぞ」

「あとからいっぱい褒めてあげなくちゃね！」

まずは長月と皐月が横槍。まるゆの砲撃を避けたところを見計らって艀装へ砲撃。直撃したものの、その砲撃は傷を付けることすら出来なかった。この変化を遂げたことで、異常に頑丈になっていることがよくわかった。艀装の破壊に関しては、駆逐艦では不可能かもしれない。

「硬すぎでしょ!？」

「ピンジャクナクチクカンナンゾニ……!」

「ならあ、生身を狙えばいいよねえ〜?」

「ふみちゃん、超怖いよ」

横槍に苛立ちを見せて振り向いた瞬間、文月と水無月が艀装の無い部分を狙ったの砲撃。まるゆを支配しようとして不発だったため、文月に向けられていた支配はそこで途絶えていた。おかげで文月も今は行動可能。

文月の怒りは見るまでもなく明らかだった。初めてそれを見たときを越えた何かを感じる。やっちやうと言っていただけあり、殺意がすごい。

当たったらずいことくらい自分でも理解出来ているからか、即座に回避行動を取ってきた。艦娘だろうが深海棲艦だろうが、艀装は頑丈でも生身は華奢だ。それは私にだって言えること。

回避した大淀は、文月を睨みながら再び艦隊司令部により支配しようとして画策していた。

「カンタイシレイブヨリ」

「自力で戦え」

またもや艦隊司令部の力を使おうとした瞬間、その口を開かせないために三日月が直感の砲撃を放つ。当然だが狙いは頭。リミッターを外しているために物言いも物騒だが、それはみんなの望みだ。

戦える力を持つていても、大淀は他者を踏み躪る形で自身を守らせ、戦場を掻き乱す。こちらの混乱を嘲笑い、自分の手を下さずに自分の思い通りにしようとする。それが一番許せない。

「ツク、カンタイ」

「懲りろ」

三日月の砲撃を避けた後にまた支配しようとしたため、いい加減気分が悪かった。本日3回目となるが、怒りと憎しみに任せた移動法。海面を思い切り蹴ることで弾丸となり、自らも知覚出来ない速さで大淀の顔面を蹴り飛ばした。初めてこの一撃を決めた時と同様、眼鏡を叩き割り、鼻血を撒き散らす。

同時に、私の脚が大きく悲鳴を上げた。身体の限界が来ようとしている。もう蹴ることが出来ないというところまで消耗してしまっているが、力を振り絞って立っている。まだ骨が折れたわけでも、ヒビが入ったわけでもない。戦える。

「ツクア……!?!」

私が蹴り飛ばしたことで、本当に一瞬だが大淀がふらついた。その瞬間にまるゆが浮上していた。最高のタイミング、位置取りも完璧。

「艦装を破壊しますー!」

WG42による渾身の一撃。それは大淀の艦装に直撃し、大爆発を起こす。だが、艦装は健在。艦隊司令部も破壊出来たかわからない。

故に、まるゆが最後の一撃。

「こんなことに使うものじゃ、無いんだけどお!」

その一撃は、まるゆが常に持っていた運貨筒による乱雑な一撃。それを大淀の艦装目掛けて振り回して、そしてぶち当てる。

これにより、大淀の艦装が火花を散らしたことが確認された。私達の希望を乗せたまるゆ会心の攻撃は、艦隊司令部の再破壊を成功させたのだ。

淑やかに乱暴に

私、若葉が大淀を刺し殺したことにより覚醒した大淀。せっかく破壊した艦隊司令部も元に戻っており、さらには効かなかったはずの私や三日月にも効くようになってしまっていた。

だが、そこまで出来ても所属が違うという根本的な理由でまるゆを支配することが出来ず、また、覚醒したばかりであったからか単一の対象しか支配出来なかったこともあり、何とかこちらが攻勢に出ることが出来た。

そして、まるゆの大活躍により、2度目の艦隊司令部破壊に成功。これにより、これ以降艦娘が支配されることは無くなった。

「ツグ、アアアツ……」

初めて、これだけ戦ってきて初めて、大淀が悔しそうに呻く。そもそも今までの戦い方からして間違っているのだ。他者を踏み躪り、自分の手を汚さず、それに頼りつきりになっていたから、それを覆された瞬間に瓦解する。

尤も、そのおかげで私達は勝利を掴むことが出来そうだ。慢心に慢心を重ねた結果、支配が一切効かない存在まるゆにより何もかもがひっくり返った。

「ああつ、運貨筒が！」

最後の一撃を決めたことで、まるゆの運貨筒は壊れてしまった。大淀は未だ健在とはいえ、憎つき艦隊司令部を破壊するに至った一撃なのだから、これは仕方あるまい。そもそもそうやって使うものではないのだから、こうなってもおかしくない。

この戦いのMVPは誰もがまるゆと答えるだろう。最高の働きを見せてくれた。

ここからはもう私達だけで行ける。艦隊司令部さえ失われれば、いくら戦闘すらも一流だったとしても勝ち目が無いわけでは無くなる。

「まるゆ、後は大丈夫だ。本当に助かった」

「あ、後はお願います！　まるゆはまた潜ります！」

ここからは私達の仕事だ。まるゆが与えてくれたチャンスをここ

で活かさなくては。

「コンナトコロデ……ワタシハシズミハシマセン……!」

火花散る艤装なのに、まだピンピンしている。私が蹴り飛ばした顔面も、腕で拭ってまだ戦おうとしている。いい度胸だ。ここから逃がすつもりもない。

「若葉、脚は」

「まだ大丈夫だが、あれはもう出来ない」

三日月に心配されるが、まだ大丈夫だ。ガタは来ているが戦える。ただし、1度の戦闘で繰り出せる知覚出来ない移動は、先程の顔面蹴りで出し尽くした。今やれるのは通常の戦闘だけ。

それでも、もう大淀に届くはずだ。艦隊司令部が失われても、普通とは言い難い尋常ならざる力を持つ大淀だが、未知の力では無い。それに、私には仲間達がいる。義理の姉達と三日月がいてくれれば百人力だ。

「ありがたいことに他の連中は引き剥がしてもらえているからな。あちらも心配だが、大淀と決着を付けるのが先だ」

大淀が連れてきた他の連中はまだいるが、今でもしつかり引き剥がしてくれている。だから私達は戦えるのだ。

その1つ、綾波と戦う曙達。施設にいる特型駆逐艦3人が足止め中。勿論、倒すつもりで戦っている。倒すと言っても救出だ。

綾波は私の対策のために急遽作り出された完成品。駆逐艦でやれることはおろか、近接格闘にまで精通させられた者。正直、急ピッチで作られているためか、負荷が非常に高いように思えてしまう。

「あまりここで止められたくないんですよねえ。曙ちゃん、早いところ死んでもらっていいですかあ〜?」

「何ふざけたこと抜かしてんのよクソ姉。むしろアンタが諦めなさいよ」

「相変わらずお口が悪いですねえ〜」

間延びした話し方に似合わない超高速戦闘。近付けばナイフによる斬撃、間合いを開けば砲撃と魚雷。さらにはWG42による対地攻

撃まで織り交ぜ、鎮守府を狙いながらの戦い。この対地攻撃のせいで、鎮守府から増援が出づらくなってしまうていた。

目の前に曙がおり、雷と暁が援護をしているにもかかわらず、それだけのことを同時にしているのだから恐ろしい。特に魚雷は主砲よりも拙い一撃必殺の火力だ。

「お姉ちゃん、魚雷壊せる!?!」

「やってる!・ 雷は回避しながら撃って撃って!」

援護2人も大慌てではあるものの、しっかりと出来ている。特に暁は、前回の襲撃しか戦闘経験がない、ほとんど新兵みたいなものだ。今までリコにさんざん鍛えられたことで戦場に対応できるもの、てんやわんやなのは間違いない。

その暁が合間合間に放たれる魚雷を主砲で処理していき、雷は曙が戦いやすいように牽制をしていた。

「綾波1人に3人がかりですかあ〜?」

「似合わない挑発やめなさいよ。んなこと言われたって、私達は加減しないわ。むしろ増やす」

綾波の主砲を回避しながら、曙は突撃。槍という武器の都合上、離れ過ぎても近付き過ぎてもリーチに入らないため、つかず離れずを維持しつつ最善のタイミングを見計らって攻撃する。

この戦術が、スタミナトップの曙に合っていた。ジリジリと見計らい、渾身の一撃を叩き込む。五三駆の頭脳戦担当のため、キレながらも集中して行動。さらには無闇矢鱈ですら息一つ乱さない。

「なんでそんなに使いづらい武器使うんですう〜?」

「最初からこれを使ってきたからよ。それに、使いづらくないから」

離れて槍のリーチから離れたかと思えば、振り抜けた瞬間を狙って即座に突っ込み曙の懐に入り、ナイフを斬り上げる。綾波としてはそれが曙への最善手であると考えての行動。だが、それは私も曙相手にやったことがある。

槍を強引に振り下ろし腕ごと叩き落とす。しかし、綾波は私と違ってそこから主砲も使ってくるだろう。懐に入ったのなら、ゼロ距離での砲撃だって考える。これは演習でも出来ない行動だ。

そして、それを阻害するのが援護の2人の仕事である。

「そういうのは良くないと思うわ」

綾波が撃つ前に雷のヘッドショット。例え水鉄砲とはいえ、その出力は死なない程度の最高値。当たれば気を失いそうになるほど痛いし、当たりどころが悪ければ脳震盪を起こしかねない衝撃に襲われることになる。

この情報は前以て知っていたか、その砲撃をバックステップで回避しながらも曙に対して砲撃を仕掛けていた。体勢が狂ったおかげで曙は致命傷を受けることは無かったが、脇腹を掠めてしまっていた。

「つつ……出力も駆逐艦のそれじゃないわね。違法改造か」

制服が破れ血が滲んでいるが、気にした素振りは見せない。傷は小さい。まだやれる。

無理なバックステップのため、曙は隙を見逃さない。間合いもそこまで離れておらず、むしろ槍には都合のいい距離。

「つだあ……!」

せめてナイフを弾き飛ばそうと槍を薙ぎ払った。距離的に刃が手に直撃するようなところ。

しかし、綾波はとんでもない手段に出る。

「近付かないでくださいねえ」

自らを巻き込むほどの距離で魚雷を放った。曙に直撃したら、その爆発で綾波もタダでは済まない位置。なのに、なんの躊躇もなく放つ。

綾波は完成させられた結果、思考回路がおかしくされているのだろう。自分の命の価値が異常に軽い。曙なら避けるだろうと判断しての攻撃であろうが、万が一のことを考えたら到底そんな選択は出来ない。

「この……!?!」

近過ぎて暁もその魚雷を処理することが出来ず、曙はジャンプして避けざるを得なかった。横への回避は主砲とナイフで牽制されていたため、その判断をさせられた。

空中に上がったということは、完全な無防備ということになる。穏

やかな笑顔は崩さないまま、綾波は曙に向けて主砲を構えていた。すぐに雷が妨害に入ろうとするが、よりによって曙が避けたことにより魚雷は雷の方へと向かってしまっている。

「バイバイですよ、曙ちゃん」

「んな簡単にやられるかっての。本当にヤバいのは私じゃないわよ」綾波が主砲のトリガーを引こうとした瞬間、真横から強烈な衝撃を受けて吹っ飛ばされる。おかげで放たれた砲撃は曙を掠めることすらなかった。

曙も雷も魚雷を避ける挙動中、ならば一人しかいるまい。そんなことをするとは思っていなかった者がするから、ほとんど真正面から行っても不意打ちになる。

「さすが暁。師匠がアレだとそうもなるのね」

「だってリコさん、役に立つからって滅茶苦茶教えてきたし、覚えておけばレディにもっと近付けるって言っただもん！」

それは、暁による荒々しい蹴り。リコ直伝のケンカキックであった。

練度1で施設に住まうこととなった暁は、その練度を上げるためにリコから教えを受けている。最初は艦載機からの空爆や射撃による回避訓練から始まり、低空飛行した艦載機を撃ち墜とす射撃訓練を経て、最終的にはリコの持てる技全てを叩き込まれていた。

結果、暁はリコの後継者と呼べるほどになっている。確かにリコは淑女然としているが、それは見た目だけ。中身は熱い心を持つケンカ慣れした姐御だ。暁はそこまで継承しかけていた。

「暁は、もっとお淑やかに戦いたいわ」

「戦いに淑やかななんて無いわよ。特に今は生きるか死ぬかなんだから。でも、助かったわ。仲間を助けるってすごくレディじゃない？」

「……確かに！」

それで納得してしまう辺り、まだまだ子供だと思いが、本人が喜んでいるのならそれでいい。曙も割と人の使い方が上手い方だ。

「痛た……蹴っ飛ばすなんて野蛮ですよ〜」

「でも仲間を守れたわ。インチキして糞がつてるよりよっぽどレディ

だと暁は思うの！」

すかさず主砲に対して砲撃。近接攻撃は厄介だが、最低限主砲が無くなれば戦いやすくなる。それを理解してしつかり避けているのが綾波だが、一度崩れた体勢は整わない。それだけの猛攻を仕掛けている。

故に、対地攻撃が疎かになった。つまり、増援が見込めるといふことである。未だに空爆の一部は鎮守府の方に向かっていているものの、多少は隙間が出来る。

「よう、人様の居場所勝手にぶつ壊して、タダで済むと思つてねえよなあ？」

その隙間を抜けてこの戦場に現れたのは、持ち前のスピードで綾波の真後ろを取っていた朝霜。手に持つ棍棒を思い切り振り抜き、WG42ウェーゲーを叩き潰す。

「わあ、乱暴ですなぁ〜」

「こういうやり方しか知らねえからな」

「もつとスマートにい〜」

壊れたWG42ウェーゲーを外して対地攻撃を捨てたことで対人に特化した綾波は、スピードが割増されていた。体勢が崩れた状態からでも爆発的な瞬発力を見せ、逆に朝霜の背後を取るに至る。

「軽やかにやりませんかあ〜？」

「うっは、速え！ けどな、うちのボノはそこまで計算してるぜ？」

やられたらやり返すであろうことを計算に入れた状態で、すでに朝霜に向けて槍を突き出していた。勿論柄である。

朝霜が軽く首を傾げるだけで、その槍は朝霜の頬を掠めて綾波の額に伸び、見事に直撃。流石にこの一撃は効いたようで、綾波が大きくのけ反った。

「ひゅー！ スタイリツシユだねえ！」

合わせて、朝霜も即座に振り返り棍棒でナイフを持つ腕を殴打。確実に骨を折る一撃に、ついにはナイフを落とす。これで近接攻撃も封じた。

「いい加減気絶して！」

さらには雷のヘッドショット。今回は他の攻撃と同時に放ったため避けられることは無かった。顎に直撃させたことにより脳を揺さぶり、且つ、喉元にも衝撃が入ったために一瞬呼吸を止める。意識を失わせる程の一撃だったが、綾波は未だ微笑んだまま、残された主砲を一番近くにいる朝霜に向けていた。

「それはダメー！」

すかさず暁が主砲にピンポイント砲撃。一步間違えれば朝霜に当たりにかねないが、そこはリコの弟子、少し乱暴に手を潰すような位置を撃ち抜くことで、朝霜の被害を最小限に抑えている。主砲が爆発したのだからそれなりのダメージは入ってしまうが、まだマシなレベル。

だが、ここで曙は何かに気付いていた。

「朝霜、我慢してー！」

一番近かった曙が、朝霜の胸ぐらを掴んで綾波から引き剥がす。瞬間、綾波が自分の真下に魚雷を放っていた。完全な自爆狙いの行動。それを行なった時点で気を失った。

今この場で爆発させれば、朝霜と曙は確実に持っていけるだろう。纏めて爆発することで範囲も広くなり、よりその殺傷力は増す。どうやっても自分は死ぬが。

完成品は敗北を悟った瞬間に自害する。この性質は未だに残されたままのようで、ほぼ思考せずともこの行為に移れたようである。だから気を失っても自爆だけは瞬時に実行できた。

そこから最善の道を曙が瞬時に計算した。誰も死なない道。自分も、綾波もだ。そこで選び取った手段は、かなり強引なもの。

「間に合ええー！」

ここで曙、朝霜を引き剥がす反動を利用して綾波に近付き、さらには反動を遠心力に変換して綾波の脇腹に槍を食い込ませ、無理矢理吹っ飛ばした。綾波の身体は見事に暁の方にまで飛んでいき、爆発の範囲外へ。

こうなると今度は曙が爆心地の中心にいることになる。そのままでは爆発に巻き込まれる。

「私一人なら行けるでしょ！　ろー！」

「はいですつてえ！」

そこへさらなる援軍、呂500。海中から高速浮上で曙の下に駆けつけ、その勢いを殺さずに曙に抱き着いた。殆ど魚雷のような勢いだったため、曙は呂500諸共その場から吹っ飛ばされ、爆心地から離れることとなる。

瞬間、先程まで曙がいた場所が大爆発を起こした。そのままいたら大惨事だっただろう。

「アンタが見えたからどうにかなったわ」

「間に合つてよかつたですつて！」

殆ど真後ろ、さらには海中である呂500まで計算に入れた最後の策。これはもう策というよりは、信頼の賜物かもしれない。

これにより綾波撃破。大淀の取り巻きはこれで残り2人。

尋常ならざる者

曙達が綾波を食い止めている一方で、日向を食い止めているのは神風型の5人。真つ先に斬りかかったのは、神風型随一の速度を誇る神風。日向が大淀の援護に入ることを防ぎ、且つ、旗風が痛め付けられた恨みを晴らすべく動いていた。

他の4人もそうだ。5人で1人を集中攻撃するという少し後ろ指を指されそうな戦術ではあるが、緊急で作られた綾波とは訳が違う。たった1人で何もかも出来てしまい、単体での攻撃力が異常過ぎるほど高い四航戦の片割れだ。どんな手段を使ってもここで止めなくてはいけない。

そもそもあちらは違法に違法を重ねた存在。物量で押す程度、ズルくも何ともない。

「先に言っておくけど」

「なんだ」

「私達、貴女を殺す気でやってるからそのつもりで」

まさか日向が自分の立場を逆手に取った戦い方をするとは思わな
いが、念のため言葉にしたようである。

救出目的で戦うならば、当然手加減をすることになるが、如何に神風型といえども真剣に、かつ5人がかりでやらなければやられる。それ程までに日向は強い。

「好きにしたらいい。私も殺す気でやっているんだ。それが死合だろう」

「助かるわ。自分自身が人質みたいな嘗めたこと言われたらどうしようかと思った。それでも斬るけど」

体格差をむしろ利用する、俊敏な動きで即至近距離へ。しかし日向は一切臆さず、即座に脚が出ていた。

素早さだけなら神風には敵わないだろう。だが、神風には刀しか武装がない。本人がその戦い方を選んでいるのだから仕方ないことではあるが、小柄なせいでリーチがどうしても短くなる。

当たり前だが日向は戦艦、体格は大人。その中でも大きな部類だと

思う。故に、脚を出されるだけで刃が届く前に迎撃されてしまう。

「つふっ」

勿論リーチの問題は神風も把握済み。脚が出ることも読んでおり、即座に身を捻りながら脚を斬り付ける。

しかし、

「よく出来ている。凄まじい動きだ」

神風の眼前に、ホバリングする謎の軌道まで搭載した深海の艦載機が飛び込んできていた。自らの脚を犠牲に神風を死に至らしめようという一撃。自分の身体が惜しくないのかと思つたが、そうではない。神風の次の動きがわかつた上での一撃だ。

神風は当然自分の命を取る。こんなところで命を落としてまで大淀の取り巻きを倒すことに専念する必要は無いからだ。命を懸ける場はここではない。私だつて回避をする。

「相変わらず滅茶苦茶な動きよねその艦載機は！」

艦載機を回避しつつ、低空飛行であるためにそれに対して斬り付ける。それだけで破壊できるほど脆いわけではないが、神風の技でそれは一刀で粉碎。

しかし、日向にとっては都合のいい間合いを取るのに十分な時間が出来ていた。既に神風に向けて刀を振り下ろしている。

「それはよろしくありません。神姉さんには死んでもらつては困りますので」

瞬間、旗風が日向の真横で刀を振るっていた。相変わらずの猫のような気まぐれな動き。その気配すら感じさせずに懐へ。

「ふむ、お前はそういう戦い方をするんだつたな」

神風に向けていた刀を強引に方向転換させ横薙ぎの一撃に。同時に、背中の主砲が動き出し神風に狙いを定めた。刀はともかく、こんな至近距離で放たれたら回避しても爆風で被害を被る。さらには刀を振りながらの砲撃だ。直撃狙いではなく、爆風と海面に叩き付けることによる水柱のための一撃。

「旗風！ ちょっと伏せなさい！」

そこに飛び込むのは朝風。刀の軌道を少しズラすためにしやがみ

込み、その一刀をほんの少しズラすように刀を合わせた。柔よく剛を制するとはよく言うもので、朝風のその行為のみで日向の一撃は紙一重で通過する。

だが、刀は激しく擦れ合い、金切音と共にチリチリと火花を散らす。朝風が振るう刀も確か修復材の刀のはずだが、あれで悪くならないものか。

問題は砲撃の対処。この至近距離での砲撃は直撃せずとも危険過ぎる。

「あつは！ こいつは斬り甲斐がありそうだ！」

そこへ飛び込んだのは松風。かち上げるように刀を振るい、砲身へ渾身の一撃。斬ることは出来ずとも、僅かにだが上に押し上げた。

その瞬間に砲撃。耳をつんざく轟音が鳴り響き、海面とは平行に弾は放たれた。松風が軌道を変えていなかったら神風を削ぎ落とすような軌道で海面にぶつかり、被害は甚大だっただろう。

しかし、爆風はどうしても喰らってしまう。一番身近にいた松風は軽い火傷を負う羽目になったが、この戦いを心底楽しんでるように笑顔。神風も同じように爆風を受けて顔を顰めているが、着物が少し焦げた程度。眼光はより鋭くなっていた。

「硬いねえ！」

「完成品は伊達ではないさ」

朝風に逸らされた斬撃をその場で切り返し、峰打ちでもう一度振るう。斬られないだけマシではあるものの、直撃してしまうと骨を碎かれる程の殴打になるだろう。

さらには、この一撃は先程よりも低い位置を通過した。朝風のやった軌道逸らしはやりようがなく、回避か受けるしかない。しかしながら、日向の腕力を受けるためには駆逐艦の膂力ではまず足りない。ここは回避しか無いだろう。

しかし、間合いを取った瞬間から艦載機が一気に発艦。膨大な数の爆撃機と水上機が神風達の頭上に舞い上がり、猛烈な空爆を開始する。数機は低空飛行まで始めて、直接攻撃に出る始末。

神風達の力量では当たること無いだろうが、進むことも出来ず、

逆に足止めを喰らう羽目に。

「すまないが、そいつの相手をしておいてくれ。私は大将を援護せねばならない」

「つれないことを仰らないでくださいな」

その空爆の外。既に春風が進路を妨害する位置にいた。旗風と同じように、知らぬ間に移動して驚くべきところにいる。旗風は気まぐれにだが、春風はその場の流れにまかせているような、そんな雰囲気。「っ……お前達姉妹はよくわからんな」

「褒め言葉としていただいております」

振り向いた瞬間に居合。今までの穏やかさから一転、鋭い太刀筋で日向の腹に向かう。

「だが、もう少し力をつけた方がいい」

しかし、惜しくも刀で受けられた。むしろそこから押し返されてしまふまわり、いくら技があっても駆逐艦の腕力では通らないということか。

軽々と受け止められた刀は、強く振られるだけで弾かれてしまい、華奢な春風ではその場から退かされてしまう。加えて、体勢を崩したところに主砲を向けた。

「まずはお前からになりそうだな」

今回は松風による射線ズラしも無いため、完全な直撃ルート。あんなものが直撃したら、ただの即死では済まない。駆逐艦程度の身体では、跡形も残らない血溜まりになってしまうだろう。

「そうはさせねえよ」

その春風の窮地を救ったのは、我らが摩耶。日向が轟音と共に放った砲撃を、春風に届く前に撃ち墜とした。威力も速さも距離さえも不可能レベルな難易度だというのに、しっかりと対応する辺りは流石としか言いようがない。

正規の工廠で修復されたことが大きい。艀装本体のスペックアップをやり、威力も精度も段違いに上がっている上、ケツコンカッコカリをしたことにより摩耶の練度もさらに上がっている。強烈な戦艦主砲でも、タイミングを合わせれば撃ち墜とすことが出来るようだ。

しかし、撃ち墜としたとはいえ身近だったため、春風には衝撃が伝わってしまったている。戦闘は続行可能だが、ダメージは受けてしまった。存命なだけ良しとするしかないか。

「砲撃を撃ち墜とす……なるほど、噂には聞いていた」

「そりゃあ嬉しいね。飛んでるものは全部アタシが墜としてやる」

摩耶の技に関心を持った日向。こんな形で砲撃を回避されるとは思っても見なかったようである。

「アタシは春風を守るために動いたが、お前の敵はアタシじゃねえ。因縁がある奴が来てるから、こつち相手してくれよ」

「因縁？」

「忘れましたか？ 貴女に殺された鳥海ですよ」

摩耶の背後から飛び込んできたのは、いつものバルジによる格闘戦術を繰り出した鳥海。大火傷により移植された肌を見せつけるように、日向に襲い掛かる。

駆逐艦の膂力ではその一撃を食い止めることも難しく、押し返されるだけで体勢を崩してしまうものだったが、鳥海は重巡洋艦だ。まだ力はある。

「蘇生されたか。何度も死ぬのは辛くはないのか？」

「やられっぱなしの方が辛いですよ」

砲撃を撃ち墜とされたことで斬撃に移行するが、鳥海は先程の朝風の対処法を見ていたのか、その剣筋を少しズラすという方法でそれを回避する。そもそも砲撃すらもその方法で回避していたのだから、それが斬撃になっても同じことだった。

だから襲撃の時は斬り傷が少なかったのだと思う。代わりに遠距離からの砲撃、例えば施設の盾にならざるを得ないような状況だったせいで砲撃をまともに受ける羽目になったとか、そういうことじゃないかろうか。

「以前のようには行きませんよ」

「そうか。バルジも強化されているな」

それでもまともに受ければ粘土をスライスするかの如くバルジを斬ってしまいそうではあるため、どうしても払う以外の防御方法は無

いわけだが。

「ならば、前のようにしようか」

刀を振り抜けた瞬間に主砲が鳥海に向いた。間近での砲撃。避けたとしても砲撃の爆風で被害を被る位置。

「お断りしますよ」

襲撃の時はどうだったか知らないが、鳥海は主砲の砲身を潜るかのようになり上げる。先程の松風のやり方だが、やはりこちらも膂力の違いでより一層射線がズレることになる。

そのタイミングで轟音が鳴り響くが、今の行動により直撃は免れた。爆風で打ち上げた腕が焼かれ、衝撃で眼鏡にヒビが入ったようだが、そんなことお構い無しと言わんばかりに日向の腹を殴り付ける。

しかし、ビクともしない。私が知覚出来ない速度で突っ込んで動かなかつた伊勢と同じ。日向も頑丈すぎる。

「非力は変わらないな」

「貴女が硬すぎるのでは？　ですが、中を揺さぶれば」

その拳を日向の腹に押し当てたまま、さらに前へと突き出そうと脚を踏み込む。

おそらく前回はやらなかつた行動なのだろう。それに関しては拙いと思つたのか、即座にバックステップで回避した。その際に砲撃や斬撃をするでもなく、離れることを優先した。

「おや、勘が鋭い」

「……お前はそんなことも出来るのか」

「学びました。貴女を討ち倒す方法はこれしかないと思つたので」

蘇生されてからまだ一日も経っていない。それでも鳥海は何かをモノにしているらしい。

「それに、私だけに集中しているのですか？」

回避した先には既に神風と旗風が刀を振って待っていた。

進むも退くも難しかった猛烈な空襲を潜り抜けてきたわけではなく、鳥海が戦闘を受け持っている間に摩耶が艦載機を全て撃ち墜としていたのだ。ただ墜とすことに専念出来れば、摩耶の実力ならば難しく可能。

狙うのは脚。上半身は臙装に包まれ、刀が通りそうに無かったが、脚は何もない。生身を曝け出しているだけだ。ならば刃は通るはず。それ故に、日向もそこへの攻撃の対策は万全だった。

「私自身が理解しているさ」

旗風の斬撃は足裏で踏み付けるように受けてしまう。そして神風には主砲をすかさず放っていた。その場から離すための砲撃だったため狙いは定めていないものの、間近での砲撃でまたもや爆風。持ち前のスピードで回避はしたものの、神風はまた着物を焦がすことになる。

今度は動きを止められた旗風が危険に晒される。最も近い位置にいるのだから、そのまま刀を振り下ろせば断頭台の如く首が斬り落とされることになるだろう。それは誰も良しとしない。

「妹に手を出すのやめてくれない？」

爆風が止んだタイミングだったため、朝風が後ろから臙装の隙間を狙って刀を突き出していた。どうあっても胴に突き刺さるコースであるため、流石の日向も回避を選択せざるを得なくなる。

身を捻ることにより朝風の突きをガードしつつ、旗風への斬撃がそのまま朝風を斬り付ける方向へと変化。受けるわけにはいかないと、朝風もすぐにバックステップ。

だが、このおかげで旗風も間合いを取ることが出来た。いつでも砲撃の届く範囲のため安全な場所などは無いのだが、ひとまず刀の届かない位置に移動出来ただけでも少し安心出来る。

「滅茶苦茶すぎるぜ。こんだけ束になって戦ってんだぞ」

「そのように調整されているからな」

こちらは7人使っているというのに、日向は未だに無傷。消耗すら見えない。頑丈とかそういう度を越えている。今までの完成品とは比較にもならない。あまりにも強すぎる。

だが、誰も心が折れるようなことはない。人数が足りないのなら増やす。力が足りないのならより洗練させる。戦場で、この場で成長するしかない。真正面からぶつかれないのなら、搦手を使っていくだけだ。

戦いは始まったばかり。まだ負けていない。

その一撃のために

神風型5人に加えて、摩耶と鳥海が加わっても日向は無傷を維持していた。逆に神風達は間近で砲撃の爆風を喰らって火傷を負ってしまったている。戦闘に支障は無いものの、確実に消耗させられているのは神風達だ。このまま続けば1人ずつやられていく。

しかし、焦ったら尚のことその時が早まる。冷静に、確実に、日向を機能停止にまで持っていかななくてはいけない。

「彼女が回避した行動は」

「貴女の拳の、なんかよくわからないのだけ」

鳥海が戦いながら神風に聞き、戦況分析に入った。曙と同じように、その場で戦略を立てて、最善を掴み取るようである。

神風の斬撃は先手を取っての迎撃。旗風の不意打ちも同じように迎撃によりキャンセルさせている。春風の居合は刀でしつかりと受けて押し返し、鳥海の拳による一撃はまともに受けてもビクともせず、その後にあつた神風と旗風のさらなる一撃も脚や刀を使ってしつかりガードしている。

しかし、鳥海がやろうとした何かに関しては、ガードではなく明確に回避を選択した。それだけは受けてはいけなさと自覚しての回避だ。つまり、

「これは効くということですね。わかりました。なら、私が近付くしかないですね」

「アイツを倒せる手段があるのね。ならそれを通すために手伝うわ」
「お願いします。もう警戒されていて、私が近付くのは難しいでしょう」

何をやろうとしているのかはわからない。だが、あの意味がわからなくらいの装甲を突破できると確信した。

「鳥海さんを近付けさせるためには……艦載機を全部撃ち墜とす必要があるわね」

「それは摩耶がやってくれます。艦載機のこととは何も心配していません。一番心配なのは、主砲ですよ」

刀も恐ろしいが、それは間合いさえ取ればどうにでもなるもの。今からやりたいことは手が触れられる程の距離まで近付かなくてはいけないために刀も厄介ではあるのだが。

真に拙いのはあの高威力の主砲である。当たれば即死は免れないが、鳥海が警戒しているのはそこではなく、間近で放たれた時の爆風。火傷だけならまだしも、その衝撃が都合が悪いらしい。

「なら、せめてあの主砲を壊してしまえばいいってわけだ」

その話を聞き、俄然やる気を出しているのは松風である。一度破壊出来なかつた砲身だが、次は必ず破壊してやると躍起になっていた。

おそらく神風型の中であの主砲を破壊出来るのは松風だけだ。最初の一回はかち上げという力があり入り入れられなかつたものではあつたが、今度はしつかりと踏み込んで叩き斬る。有明鎮守府で大発動艇を破壊した時の斬撃を主砲に決めると。あわよくば本体を斬れば言うことはない。

「最低限、動きを止めなくてははいけません。ですが、アレを止めるのは至難の技ですね」

艦載機のことを考えなくても良くなったとはいえ、神風が喰らつたように突如眼前に深海の艦載機が現れるなんてこともあるだろう。少なくとも近付くことが出来ずに大淀の援軍に向かわれるということとは無くなつたが、現状勝ち目があるかと言われれば難しいというのが否定出来ない。

「まあ考えるだけ無駄ですね。やるしか無いですから。私がどうにかしてあの人の腹に叩き込みます。援護してもらつていいですか」

「了解。死なずに終わらせるわ。もう少し援軍がいれば嬉しいけどね」

ここからは鳥海を突き通すために全員が尽力することになる。たつた1つの手段を成功させるため、あの神風型すらも手伝つてくれる。

「作戦会議は終わったか」

鳥海と神風、松風が戦況を確認しながら話している間も、他のみんなは頑張つて足止めしてくれている。

摩耶は常に艦載機を撃ち墜とし続け、空爆を完全にシャットアウト。その間に朝風達が砲撃を回避しながら接近するが、やはりあの激しい斬撃の前では回避以外の選択肢が無く、砲撃も相まってどうしても攻撃が控えめになってしまうが。

「ええ、悪かったわね」

神風がいつもの超高速移動で日向の懐に入る。これは何度もやっているの、日向も慣れた感覚で迎撃。最初と同じように蹴ろうとしたが、神風の狙いがその脚を狙っていることがわかったからか、即座にキャンセルして神風の居合を刀で受ける。

「ホント勘がいいのね」

「ああ。おかげさまでな」

神風の速さも乗せた居合ですら、日向には片手で持った刀で受け止めることが出来るようだ。神風ですら日向には敵わない。そういう意味でも、腕力でようやく対等に立てるのは松風のみなのだろう。それですら通るかわからない。

だから、鳥海の一撃に賭けるために脚を潰しに行く。動けなくしてしまえば鳥海の一撃も通りやすくなる。

神風のこの行動のおかげで、神風型全員が察した。日向の脚を狙って足止めする。理由はさておき、それが最善なのだと言った長女が示したのだから、全員がそれを実行するために動き出す。

「脚ですか。足止めには確かに最も適しておりますね」

「神姉さんの考えですもの。何かあるのでしょうか」

穏やかな2人による左右の脚への同時攻撃。神風が真正面から向かい、刀を使わせたのだから、主砲以外は攻撃に転じることは出来ない。その主砲が問題なのだが。

案の定、主砲は春風へ向き、神風の刀を受け止めていた刀は旗風を振り払うために神風ごと打ち払う。

その瞬間、鳥海が真正面から突っ込んでおり、主砲を撃たせる間もなく逆に鳥海が放っていた。拳で戦う鳥海ではあるが、主砲を持たないわけではない。

神風が腕力で打ち払われたことにより、胴への射線が出来た。かな

り無理矢理な戦術ではあるものの、3人を犠牲に砲撃を通そうとしたように見えるだろう。

「なかなか無謀な策を考えるものだ」

伊勢も似たようなことをしていたが、どのような形であれ砲撃に当たるとはよろしくないらしく、鳥海の砲撃を刀で斬り払った。おかげで神風や旗風が斬られることは無かったが、主砲は放たれてしまっていた。

砲撃を斬り払うために体勢を変えていたため、砲撃が春風に直撃することは無かったが、その衝撃でダメージを受ける羽目になる。吹き飛ばされ、春風が顔を顰めるものの、まだ戦線離脱するようなことは無い。

「つぎあー！」

そしてこのタイミング。日向の死角に入っていた松風が、完全なルーティンを踏んでの一太刀。有明鎮守府の時とは違い、抜刀済み、且つ両手で刀を握った状態で、海を裂くほどの強烈な振り下ろし。

「つ……い！」

初めて日向が拙いという顔をする。この一撃は駆逐艦のそれではない。今までの片手で受け止められるような代物ではない。日向ですらちゃんとガードしなくてはいけないと感じさせる渾身の一撃。

即座に身を捻り、その一撃を刀で受ける。刀も随分と頑丈に作られているらしく、それほどの一撃を受けても刀は折れるどころか欠けることすら無かった。だが、松風もこの乱暴なスタイルを反映してか、刀がかなり頑丈。今だけとはいえ日向と拮抗する。

「凄まじいね！ やりがいがある！」

「子供の力で私に勝てるだけでも」

「充分よ！」

すかさず朝風が滑り込むように脚を斬り付けに行つた。足止めを通すために最優先でそちらを狙った。今なら刀による防御は出来ないし、主砲が向いている方向とは真逆から突っ込んだため、砲撃を受けることも無い。

「ちつ……い！」

出来る限り最速で主砲を朝風側に向けようとしたが、それでは間に合わないと思ったか、真正面の少し上、松風の頭上を越える場所へと砲撃。さらにはその瞬間にわざと脱力し、松風が押し込む力と砲撃の反動を利用して、その場から急激に移動。

朝風の斬撃は空を斬り、さらには松風の拮抗が無かったことにされた。そこでその考えに至ることが出来たのだから、日向は相当な切れ者。余計に面倒くさい。

「手が足りない……！」

これだけ使っていて手が足りない。日向の行動が鳥海の計算を易々と超えてくる。何度も何度も隙を作り出そうとみんなで攻撃しているにもかかわらず、その全てを躲し、常に自分が有利な状態に持っていく。

だからこそ強い。単独の戦闘能力が異常。相手に絶望を味わわせるには十分過ぎるほど。

だから、本当に見えないところからの一撃には、例えこんな日向でもすぐに対応出来なかった。

足りない手が海の中から生えてきた。

「っ!？」

突如日向の足下から手が現れ、ほんの少しだけ日向の脚を沈めた。流石の日向もこれは完全に予想外だったらしく、さらには脱力して回避した直後だったため、抵抗出来ずに見事にハマる。

「止まった……！」

その瞬間を鳥海は見逃さなかった。海上の艦娘なのだから、ほんの少しだけでも海中に沈んだ場合は通常よりも動きは遅くなるし、まとも動けない。その場で振り向くことも即座には出来ない。

だからこそ今しかないと判断した。背中側からなので艤装が邪魔ではあるし、主砲の危険性はまだ取り除かれたわけではない。だが、やるしかない。

まず砲撃。さらに動きを固定化するために牽制。

それに当たるわけにはいかないと斬り払うために動こうとしたが、足が沈められた状態では切り返すことも容易では無いため、そこは即

判断して身を捻り、背中 of 艦装で弾く。砲撃では傷一つ付かない硬すぎる艦装であることは、今までの戦闘でわかつていたことだ。だから、鳥海はそれをわざと誘発させた。

「やっと通りますよ」

そして、鳥海の拳が触れるところへ。艦装の隙間、生身の横腹に拳を打ち付けるが、先程と同じようにビクともしない。

だが、今回は殴り付けたことで倒したいわけではない。触れることに意味がある。

「させると思ってるのか」

それを振り払うために、主砲を急速に転回させた。砲身を顔面に打ち付けるための不意な一撃。避けることも出来ず、側頭部に直撃。そのショックで鳥海のヒビの入った眼鏡が完全に破壊されたが、鳥海の眼光は鋭いままだ。

「貴女の言い分は聞いていません。するんです」

フラつきはしたが、鳥海もこの一撃に賭けていたのだからそのまま押し倒す。

拳で触れたまま、さらに前へ押し込むように踏み出し、海面が大きく波打つほどの踏み込み。その力を拳に伝達させ、日向の体内なかに振動を送る。

「つか……つか!？」

今まで何もかもが効かなかった日向が、初めて妙な息を吐いた。鳥海の一撃が腸を揺さぶり、肺を揺さぶり、心臓を揺さぶった。

体内まで鍛えられるものなどいない。身体に深海の侵食が行き渡っているように、どれだけ身体を甲殻が包んでいようが、これの前には関係ない。生身に触れて、中身を壊す。鳥海の渾身の一撃。

それでも日向は鳥海を殺すため、その状態から主砲を放った。その砲撃は誰にも当たらないが、放った衝撃は鳥海の頭を突き抜け、轟音は鳥海の鼓膜を破り、熱量は鳥海の顔を焼く。

だが、止まらない。死んでいないのだから、もう一度突き通す。

「つぎっ、ああっ!」

殆ど白眼を剥いているような鳥海だが、咄嗟に出た拳は日向の胸に

押し当てられていた。そして、もう一度強く踏み込む。殆ど無意識に、リミッターが外れているかのような渾身の二撃目。

その振動は、心臓にダイレクトに伝わり、日向の身体を震わせた。下手をしたら心臓が止まりかねない一撃。それを受けたことで、日向の動きは本当に止まる。

「が……はあっ……!?!」

肺も強く揺るがされ、息を全て吐かされた。息を吸うことも出来ず、日向から力が抜ける。そして、日向は白眼を剥いてその場で倒れ伏した。鳥海もこれで限界を迎えてしまったようで、日向に被さる形で気を失う。

たった一撃。この一撃を通すために何人も使って道を拓いた。最後の二撃を放った鳥海も重傷を負う羽目になったが、死んでいないのならまだいい。

そして、最後の足りない手を補ったものが浮上してくる。ここでもまた、潜水艦が最後の手を賄ってくれた。

「いいタイミングだったよね。はにやはにや♪」

その手は伊504だった。上での戦闘を見ながら、最高最前のタイミングを見計らって不意打ち。海中に砲撃が何度も放たれたため近付くことも難しかったが、その隙間を縫ったのアレ。

「ああ、最高だったぜ!」

その合図を送っていたのは、艦載機を処理し続けていた摩耶だった。日向との戦いをスムーズに進めるために、裏側ですつとこの戦場を維持してくれていたわけだ。

その間に伊504が摩耶と接触しており、あの指示を受けていたらしい。

「鳥海は大丈夫か!」

「息はしてる! すぐに運んだ方がいいわ!」

すぐに神風が介抱してくれていたが、重傷なのは間違い無い。この戦場から早く離れさせ、鎮守府で治療を受けさせた方がいい。

これで日向も撃破。残りの取り巻きは、伊勢のみ。

怒りに燃えて

神風型が日向に苦戦する中、一航戦と五航戦は伊勢に猛攻を仕掛けていた。鳳翔も加わった5人が、たった1人に対して集中的に空爆を仕掛けているという異常事態ではあるが、それだけしなくては押し留めることすらできないというほどに強力な力を持つのが伊勢である。「ちよつとちよつと！ 大将の援護しなくちやいけないんだからさあ！ アンタ達相手にしてる余裕無いんだって！」

「知ったことで無いでしょう。私達が同じこと言っても待ってくれるのかしら？」

「ああ、言わないね。知ったこつちやなく斬るか」

一番容赦が無かったのは赤城。誰よりも怒りと憎しみが原動力である赤城は、手加減しなくてはいけない相手であるにもかかわらず、そんなことお構い無しに空爆を続ける。息を吐く間も無く、息を吐く間も与えず、ありとあらゆる方向、タイミングを使ってその場から動けないようにしてくれている。

あの伊勢が大淀の援護に入られたら流石に困る。駆逐艦のものはいえ、主砲による砲撃を斬り払ってしまうような規格外は、この場に1人いるだけでも辛い。

「んー、まあしょうがないか。なら、アンタ達全員やっちゃってから援軍に行こう。こんなに頑張ってくれてるわけだし」

伊勢は日向と違い、艦載機の量がさらに多い。5人がかりの空爆を自らの艦載機と水上機で抑え込みながら回避行動まで含めて無傷を維持している。頑丈な身体は証明済み、剣術も砲撃を斬り払うことが出来ることも確認済み、非の打ち所が無い強さは、まさに最強の取り巻き。

艦載機の量まで考えると、日向より伊勢の方が強いのではと思える。剣術の腕は日向の方が上かもしれないが、団体戦に対応していることを考えると、伊勢の方がより厄介。

「ひー、ふー、みー……今のところ全員空母かあ。なら近付けばおしまいなわけね」

「近付かせるわけ」

赤城がいい終わる前に、空母達が集まると真ん中に主砲を放った。当たり前だが当たれば死を免れることが出来ないほどの凶悪な威力。回避以外の選択肢が無いため、即座に回避。ど真ん中だったために散開。都合よく一航戦と五航戦で分離。鳳翔は五航戦側へ。

「じゃあ、面倒くさそうだなアンタからね」

撃った直後から動いていたが、伊勢の狙いは赤城だった。最初から容赦無く撃ち続けていたことが気に入らなかつたのか、砲撃が爆発した瞬間には赤城に大きく接近。

伊勢は低速戦艦だが、そんなことを感じさせないくらい速い。日向があまり動かないで戦うので、余計にそう見える。

「ただの空母棲姫でしょ？　大きなまで用意してくれてるんだからさ」

近付きながら主砲を連射。1発でも威力と範囲がとんでもないのに、連射まで備えているとなると、厄介を通り越して面倒くさい。

大きなかもしれないが、赤城はそれくらいなら軽々と避ける。その大きさに反した高速戦闘を可能にしているのも、正規の工廠でチューンナップされた結果だ。いくら深海の艦装と言えど、摩耶やセスの手にかかればこれだ。

「当たるわけがないでしょう。大振りの低速戦艦の攻撃なんて」

「お、言ったなー。とはいえ、あっちもやらないといけないからね。ほい」

赤城に向かいながら五航戦の方にも砲撃をバラつかせる。器用というよりは直感で一番いいところに撃てているというイメージ。本格的に面倒くさい。

「回避回避ー」

「艦載機も惜しまないで！　そうでないで押し負けるー」

五航戦の叫び声。2人とも出せる限りの艦載機を常に出し続けていた。翔鶴は指をクルクル回すだけで艦載機が山程出せるのでまだマシだが、瑞鶴と鳳翔はその都度弓を射る必要があるため、どうしても消耗が激しくなる。

伊勢に追われている赤城も同様、指をクルクル回して艦載機を発艦しているが、加賀は瑞鶴と同じように弓を射続けているため消耗が激しい。

制空権自体は、伊勢が一部を鎮守府側に送っているおかげで赤城と翔鶴深海棲艦組の艦載機の数で拮抗以上が可能。そこに鳳翔の追加で余裕で優勢に持つていけているため、加賀と瑞鶴は矢をそのままに伊勢を射殺す方向で攻撃を開始。

「直接はまた面倒な」

「貴女に余裕が無くなればいいの。空爆の中避けてくれればいいわ」

制空権は優勢、空爆もある中での矢の応酬。あちらが砲撃でこちらに攻撃してくるのだから、それくらいしてもバチは当たらない。それすらも刀で打ち払いながら突撃してくるのだから堪ったものではない。

そうこうしているうちに、伊勢は赤城に大分近づいていた。空爆をするには難しい位置であり、空母ではなかなかに厳しい距離。

「避けたら鎮守府に当たるよ」

「随分と狡い手を使いますね。そうやって我々の居場所も破壊してしまいましたっけ」

「一番有効だからねえ。やり易い方法を使ってるだけだよ」

随分と小賢しい手段を使ってくる。命と居場所を天秤にかけさせての砲撃。実力を持っていながら、相手の実力を全て発揮させないようにする搦手。決して褒められるものではない。

日向が正々堂々と真正面からぶつかっているのとは正反対。使えるものは全て使い、勝ちをもぎ取るというやり方。だから姉は初霜を庇うようなことがあったのか。リコも施設を守るために奮闘して散ったのだから、似たようなことをされたに違いない。

「避けたきや避けて」

容赦なく砲撃を続ける。赤城は当然避けることを選択するのだが、その射線上には伊勢の宣言通り鎮守府の工廠があった。こればかりはどうにもならず、砲撃を撃ち墜とすなんて該当が出来るのは摩耶くらいなので、被害を容認せざるを得ない。

大きな爆発音と共に、工廠の一部が破壊されていた。あちらの艦娘が大わらわで対応に追われる。未だ続く艦載機やら対地攻撃やらもあるため、鎮守府側も大忙しである。二四駆が高角砲で艦載機を必死に墜としているのが見えるほど。

「まあこれで向こうにいる提督とかが居なくなってくれば、こちらの予定はいくつかは達成だからね。流れ弾もこっちの目的の内なんだよ」

まるで悪気の無い言い方。確かにあちらの目的の中には鎮守府を破壊して、そこにいる人間全員を殺害することがある。あの攻撃が綺麗に入っていれば、誰かが死んでいる可能性もあるだろう。

このやり方の気分の悪いところは、避けたせいで死んだと精神的なダメージも与えられるところだ。本当に性格が悪い。洗脳のせいだろうか。なってしまうている可能性は高い、むしろ確実なのだろうが、この言いようには誰しもが苛立ちを覚えた。

その中でも一人の怒りにより、空気にピシりとヒビが入ったような感覚を全員が感じた。

「……人様の鎮守府を破壊するとは、いい度胸ですね」

温厚であり、あまり怒るといふことをしない鳳翔が、その空気を捨て去り伊勢を見据えている。プツンと張り詰めた糸が切れたような音すら聞こえたように思えた。

赤城や翔鶴に説教した時ですらこんな空気を出す事はなかった。来栖提督が怪我をした時も、それを行なった者がその場にいなかった。のでここまででは無かった。

「生きていけば、一先ずはいいですね？」

「ほ、鳳翔さん？ そんな物騒な発言は……」

その空気を最も近くで感じ取った瑞鶴は、正直少し怯えていた。翔鶴も無言。艦載機を発艦し続けなければ、優勢は維持出来ない。如何に鳳翔が何かしでかそうとしても、それに構っている余裕もない。

「貴女達は喧しい空を抑え込んでくれればいいです。私が彼女をやりましよう」

ピリピリした空気を醸し出しつつ、ギラギラと輝く瞳で弓を一射。鳳翔自身は艦載機の発艦を放棄し、ターゲットを伊勢一本に絞った攻撃的なスタイルになったことで、今までに見たことのない速度の矢が放たれた。

あまりにも容赦なく、命を獲らんとする一撃が、伊勢の肩に向かって飛ぶ。それはまるで、龍が飛ぶかのような荒々しき。

「うあつと!?! 3人目!?!」

「別に私1人でもいいです」

あまりの速さに驚いた伊勢はその矢を即座に打ち払うが、続け様にもう一射。

「ちよつ!?!」

「回避したければどうぞ。そんなところには射っていませんが」

鳳翔の狙う位置は即座に回避がしづらいところばかり。どうしても刀を使って打ち払わなければいけない場所しか狙わない。攻撃した瞬間の腕や肩、前に踏み込んだ瞬間の腿や膝、他の矢を避けるために身を翻した瞬間の胴。

そしてそれは毎度、確実に急所以外を狙い続けている。殺さないが、痛みは強く、甚振るように。鳳翔がそれをやっているとは到底思えない。

「戦いなのでですから、殺し殺されるのは仕方ないことです。そういうものですから。ですが、今この場にいないものを引き摺り出すのは許されないことですよ」

話しながらも止め処ない射撃。対する伊勢は、矢を打ち払う動きが徐々に速くなっていき、鳳翔の矢も含めて自分に飛んでくるものは全て打ち落としていた。

「目の前のものを御するために、他者を質に取るなど言語道断」

「でもそれが戦争つてもんでしょ。巻き込まれるのは仕方ないわけだし」

「狙っているのなら貴女の悪意でしよう」

矢の方向が変わった。突如一本の矢が伊勢の額に向かう。今まで殺さずを徹底していたのに、豹変したかのように急所。死に至らしめ

る一撃を当たり前のように打ち払う伊勢だが、あの鳳翔から直接向けられた殺意に驚きを隠せないでいる。

「え、ええ……殺す気満々じゃん。私、確か救出されるとかじゃなかったっけ？」

「どうせ当たらないのでしょうか？」

「そうだけどさー！」

対する鳳翔は恐ろしく冷たい表情だった。見たことのない、他者を見下すような表情。

伊勢が完成させられ洗脳されていることは理解している。手加減もしていたし、殺す気は無かった。だが、今の鳳翔はキレている。洗脳されているからといって、自分の居場所、心の拠り所を破壊しようとするものは許せない。それも、面白半分で片手間に破壊しようとしたようなものだ。そしてそのせいで来栖提督が危険に晒された。より許せない。

故に、鳳翔は冷酷に冷淡に矢を射続ける。殺意をぶつけても殺す気は無いのだろう。だが、半殺しまでは確実に行くつもりで射っている。

「まさか、自らを人質とでも考えているわけじゃありませんよね。助けられる側なのだから手加減してもらえるだなんて、又ルイ考えでこの場に立っていませんよね？」

「それ若葉にも言われたね。殺す気で来ているなら死ぬ覚悟くらいしろってさ」

「あら、よくわかっているじゃないですか。わかっている死ぬ覚悟をしないのですか？ まさか、自分の立場をわかっているじゃない？」

赤城に構っていられないと理解したようで、伊勢は殆ど鳳翔と一騎討ちのような状態にされていた。

空襲は未だ五分五分。赤城と翔鶴はこの状況でも伊勢への攻撃に参加出来ない。加賀と瑞鶴が合間合間に矢を放っているが、鳳翔の殺意が高すぎるからか、その矢は片手間に叩き落とされる。

「殺しはしませんよ。それが皆さんの望みですから。私の私怨だけで同業者の命を奪うなど出来ません。ですが、本気でやらねば貴女を押

さえ付けられないのもまた事実」

「手を抜いてくれてもいいよ。やりやすいから」

「誰一人として死んではいけない戦場で手を抜けと？ 御冗談を」

話しながらも手は止まらない。射っては次の矢を番え、また射る。その速さが半端では無かった。加賀や瑞鶴では到底追い付かないスピードでの速射に、伊勢は防戦一方にされているほどだ。

「むしろ、貴女は手を抜かない方がいいですよ。加減していたから負けたなど言い訳されたら困ります。貴女、まだ本気を出していないでしょう」

「いや、まあね。本気はしんどいんだよ。でも、ちよつとそんなこと言ってられないか」

そこにいるものを散らすためではなく、だが殺意も乗っていない。鳳翔の少し手前を狙つての砲撃。回避はしたものの、そういうことは関係なく大きな水飛沫が舞い散った。

弓を扱うものの視界を塞ぐのは常套手段。そもそも狙いが定まらず、この中で放つても当たるものも当たらず、矢の威力自体が水飛沫に吞まれて下がる。この上ない対処法。

「じゃあ、まずはアンタを先にやらせてもらおうよ。鬱陶しいし」
「出来るものならどうぞ」

さらに何度かの砲撃で、鳳翔が波に吞まれるほどの高波となる。これで足場すら不安定になれば、より一層矢の威力は下がるだろう。

だが当然、鳳翔はそれにも臆さない。放たれた矢は艦載機へと変化する、水飛沫をぶち抜いて飛び立つ。艦載機自体の練度も半端では無く、こういう状況すらも想定した戦術へと変化し、いち早く伊勢の居場所を突き止める。

「やはり」

即座にバックステップ。瞬間、鳳翔の立っていたところを刀が通過した。あの水飛沫に真っ直ぐ突っ込んで、鳳翔を一刀両断に来ている。食らえば本当に真っ二つになる程の威力。

むしろ、低速戦艦とは思えないほどの速さで接近したことが問題。目にも留まらぬとは言わないが、並ではないことは確か。

「おお、避けるんだ。よく見えてたね」

「練度が違います」

しかし、大きく接近されてしまったことにより大きく不利になったことは確か。矢が間に合わない。

「ほら、やっぱり空母つてのは近付けばいいんだ。もう射たせないよ」
「どうでしょう。ここには私しかいないわけではありませんから。そうでしょう、リコさん？」

「ああ」

伊勢の刀を手首から受け止めたのはリコだ。この波と水飛沫の中、鳳翔を援護するために突っ込んできていた。

いつもならそんなに速く動けないが、明石の改造により低速戦艦並に動けるようになったことでそれを可能にしている。あの艤装も当然この場にきており、その大きな腕で鳳翔を護っていた。

「アンタ、この前殺したりリコリス棲姫！」

「深淵から舞い戻ったぞ。お前を捻り潰すためにな」

これよりリコも参戦。伊勢を叩き潰すために鳳翔とのタッグを組む。一航戦と五航戦の助力もあるのだ。そう簡単に屈することはない。

だが、伊勢はその状況を見て嬉しそうに目を細めていた。

三位一体

伊勢との戦いが続く空母隊。鎮守府を傷付けられたことで堪忍袋の緒が切れた鳳翔が猛攻を仕掛けるが、伊勢は未だ無傷。

擲手を使われ接近を許してしまったところ、鳳翔を救ったのはリコだった。

「アンタ、この前殺したりリコリス棲姫！」

「深淵から舞い戻ったぞ。お前を捻り潰すためにな」

これよりリコも参戦。伊勢を叩き潰すために鳳翔とのタッグを組む。一航戦と五航戦の助力もあるのだ。そう簡単に屈することはない。

だが、伊勢はその状況を見て嬉しそうに目を細めていた。

「堪らないね、このヒリヒリする空気。本気でやらないと持っていられる緊張感。それに、アンタともう一度やり合いたかった！私をワクワクさせてくれたのはアンタだけだよリコリス棲姫！」

「それは光栄だな。あの時は後れを取ったが、次はああは行かない。お前が戦いを楽しむ戦鬪狂であることは、前に理解している」

手首を掴まれている伊勢が、リコを突き放すようにローキックを放つ。それと同時にリコの脚も出ており、脚が見事に交差。生々しい音を立てて弾かれ合うが、リコはまだ手首を放さない。

だからか、もう片方の手で刀を掴み直し、リコを両断しようと振り下ろす。当然それを受けるわけにはいかないかと、リコは手首を放してバックステップ。同時に鳳翔が胸を狙った一射。

「つとお！そこ心臓！」

当たり前のように振り下ろす角度を急に変えて矢を打ち払う。日向もそうだが、ただの腕力で刀の方向を強引に変えるのは異常。手首が壊れそうにすら見えた。

「そっちもダメだよ！横槍禁止！」

さらに真後ろに主砲を放った。そちらにいたのは、今まさに背後から狙っていた加賀。本体を狙わないにしろ、矢そのもので艦装を貫こうとしていたが、その目論見も読まれている。

いや、これは読んでいるのではない。戦闘に狂っているからか直感がやたらと当たる。匂いを感じているとか、見た瞬間に反応するとかではない。殺気を感じ取っているというのが正しいか。

「勘がいいわね」

難なく避けるが、後ろも見ずに狙ってきたことを驚いた加賀。ノールックかつノーモーション、殆ど不意打ちに近い。

「私はリコリス棲姫とやりたいんだ。邪魔立ては許さないよ」
「知ったことではありませんね」

リコが間合いを取ったことで、鳳翔の連射がより速くなった。狙いもバラバラで避けづらいつらいつらばかりを狙う。故に、刀を振るって回避する以外に選択肢を与えない。

少しずつだが伊勢が退いていく。だが、反撃のタイミングをまたもや直感で嗅ぎ当てる。矢を番える瞬間、リコが息を軽く整えた瞬間でもあった。

「日向じゃないけどさ、もう一死合お願いしようか！」

真後ろに砲撃。そこには赤城がいたが、流石に難なく回避。だが狙いは赤城への砲撃ではない。周囲を攻撃しながらも、伊勢が見ているのはあくまでもリコだ。今の砲撃の瞬間に前へと跳び、その衝撃を使つて急加速。そもそもが速いのさらに速くリコへと突っ込む。

当然鳳翔が迎撃するが、それでは止まらないほど速く、さらには矢もすっかりと打ち払いながらリコの間近に。

「また殺してやるさー」

そのまま突っ込むわけではなく、手前で着水。それと同時に巻き上がった大きな水飛沫で目眩しされるが、リコはそんなことでは怯まない。むしろ次の行動に対しての反応にかかっている。見えない向こう側から来るのは、斬撃か砲撃か。

あの時のリコは砲撃をまともに喰らったことにより腕を失っていた。おそらく似たようなことをされ、間近で放たれたせいで腕が折れてしまったのだと思う。今回もその選択を向けられた。

「二度も三度も喰らうか！」

行動をしっかりと確認していたリコは、水飛沫の中に自らの艦載機を

突入させた。艤装がここまで来ているのだから、当然発艦はさせられる。刀を振るうタイミングも、主砲を放つタイミングも与えず、射撃も爆撃もせずに顔面にぶち当てる。

だが、当たったような音はせず、それすらも斬られていた。充分ブレーキを踏ませることには成功したとはいえ、あまりにも隙が無さ過ぎる。

「いいねえそういうのはさあ！」

若干熱量が上がったのを感じ取ったか、リコがその場から退避。それを見て鳳翔も逆方向に移動し、五航戦にも合図を送る。

瞬間、水飛沫の向こう側から主砲が放たれていた。退避のタイミングが遅れていたら、直撃とは言わずとも腕一本を持っていかれた可能性があった。リコとしては苦い思い出に繋がる。

「つぶないなあ！」

「だから横槍入れるなって言っただけでしょ！」

瑞鶴が矢を放ったが、加賀の時と同じように主砲を放つことで牽制。放たれた矢は砲撃により消炭になり、そのまま瑞鶴の方へと飛んでいく。紙一重で回避したものの、かなり近い位置にいたせいで衝撃は受けることとなり顔を顰める。

「瑞鶴！」

「くっそ……耳やられた……！」

衝撃により鼓膜がやられたらしいが、決して弓は離さない。牽制になるようにタイミングを計り続ける。

「矢ばかりでそろそろ飽きてきたよ。その点、リコリス棲姫はいいね。一撃必殺狙いでしょ。でも、近付けるかな？」

「私は武器を持っていないからな。出来ることが限られている」

「剣道三倍段って言葉もあるくらいだからねえ。悪いけど、こちらの優位は揺るがないわけだ」

片や主砲に刀と武器盛りだくさん、片や武器は己の拳のみ。リコの方が圧倒的に不利であることは、火を見るより明らかである。

だが、リコは一切臆していない。素手でも倒すという意気込みに溢れ、さらには周りの援護が強力であることも理解している。多数で1

人を叩くことになることにも躊躇いが無い。

「私が3倍強ければいいということか」

「まあそんな感じかな」

「わかった。かかってこい」

割と初めて見る、リコの構え。いつもはフリースタイル、構えなんて無い喧嘩屋の戦い方をするのがリコの基本だ。臙装に座って艦載機を無尽蔵に発艦し続けるか、ただ直立状態から敵の動きを見て、その動きを読む。

喧嘩慣れしているからこそ育まれたフリースタイルを今はやめ、討ち滅ぼすことに全力を出す為に拳を突き出すように構える。殆どボクサーのようなスタイルに。

「瑞鶴さん、弓を交換してもらえますか」

「えっ、こ、これ使えますか!？」

「はい、この方があちらには有効そうなので」

鳳翔は鳳翔で瑞鶴と弓の交換。接近戦が出来るように細工された、刃を2つ繋ぎ合わせた弓を使うことで、鳳翔も近接戦闘に打って出る。

そもそも薙刀を使って訓練をしてくれたくらいなのだ。弓道以外にも精通しているのは理解出来る。だが、今の反応を見る限り、瑞鶴や加賀の持つ遠近両用の弓は使うこと自体が初めてのはず。軽く振って感触を確かめてから、リコの隣を陣取った。

「おっと、矢での横槍はやめて、それで来るわけ?」

「ええ、貴女がどうしても矢が嫌なようなので、私はこれで懲らしめようかと思えます。先程撃った主砲、また工廠に当たりましたから」

2対1。日向に対して7人がかりだった上に、神風型を5人つけても手が足りない程だというのに、こちらはリコと鳳翔の2人。子供が群がるような戦いでは無いことはわかっているが、実力差的に無理があるようにも見えた。

慢心しているわけでは無いことくらい理解している。未だに伊勢から発艦し続けている艦載機は赤城と翔鶴が抑え込んでいる程だし、加賀と瑞鶴の援護があつたとしても、簡単に回避してさらには攻撃に

転じてくる。瑞鶴に至っては耳をやられたせいで少し辛そうだ。

「当たり前ですが、我々は空母隊。全員で一丸となり戦うものです。横槍ではなく戦術。貴女がわざわざ鎮守府を狙うような小賢しい砲撃をすることと同じです」

「それ言われちゃうと言いだせないなあ」

「ですので、これ以降文句は言わないでいただきたい。我々がその主砲を止めろと言ってもやめないでしょう」

「そりやそうだ。私の仕事はここを全部破壊することと大将の護衛だからね」

鳳翔の表情はより冷酷に、話し方にも感情が乗っていない。鳳翔は怒れば怒るほどに無表情になるタイプのように、それがまた一層怖かった。

「では、仕切り直しです」

鳳翔の一射から戦闘再開。その矢は軽々と避けられてしまうが、次の瞬間、鳳翔が伊勢の懐へと潜り込んでいた。

射った時点で動き出していたが、低速の軽空母とは思えない身のこなし。訓練の時から瞬発力などが常人のそれでは無いことはわかっていたが、キレたことでそれはさらに洗練されていた。

「おおっ!?!」

「別に命を獲ってもいいのですが、悲しむ人も多いでしょう。ですから、私からは半殺しで済ませます」

初めて使う武器であるにもかかわらず、まるで自分の手足のように使いこなし、刃の弓で斬り付ける。狙いは脇腹。伊勢と比べればどうしても小柄な鳳翔なので、狙いやすい場所を斬りに行く。利き手の逆側を咄嗟に狙っていく辺りは流石としか言いようが無い。

「出来るようになってからそういうの言ってくれるかな!」

「するんだよ、今ここで」

さらに逆側、リコが接近。当然刀に近付くわけだから、危険度はリコの方が高い。しかし、鳳翔が先に攻撃をしているため、どちらを対応すべきかを迷わせる。

殺傷力があるのは刃である鳳翔。そちらを優先したか、身を翻し刀

によって刃を弾き飛ばす。鳳翔の方が当然臂力は少ない。さらに伊勢は本気で打ち払っている。それだけで簡単に体勢を崩してしまい、隙を曝け出してしまふ。

だがそれは、伊勢の隙も作り出すということ。堂々と隙を曝しているものを追撃しない道理は無いからだ。

「苦手なことするくらいなら大人しくしてなよ！ それはあまり面白くないよ？」

「お前が面白い面白くないかなんぞ知らん！」

その隙について強烈なローキックで伊勢の膝を蹴り飛ばす。腹は大木の幹を蹴るかの如くビクともしなかったが、リコが狙ったのは関節。いくら頑丈でも、本来曲がる方向に押し込んでやるのだから少しだけ力が抜ける。

それでもほんの少し。やはり根が張っているような頑丈さ。足が浮くことすら無かった。伊勢も本気、全身が洗練されている。

「そういうところが好きだね！ 重い蹴り、やり慣れてるねえ！」

身を翻した遠心力も加え、砲身を振り回してリコに打ち付ける。それをリコがボクシングのようなスタイルで殴り飛ばした。並の砲身ならこの時点でひしゃげていただろうが、神風型の刀すら通さない硬すぎる艦装だ。動きは止まったものの傷一つ無し。代わりにリコの拳を傷付ける。

そのタイミングで今度は鳳翔が身体を回して刃を腹に突き立てていく。本気で殺すつもりでの一撃。鋭く尖った刃の先端を伊勢の腹へ。

「危ないなあ！ それは流石に刺さるよ!？」

リコにやられたことをお返しするかの如く、鳳翔に対して強烈なローキック。あんなもの受けたらリコで無ければ膝からバキバキに折れてしまふ。特に鳳翔は華奢だ。喰らうわけにはいかず、範囲外にステップ。

だが、即座に矢を放った。体勢は滅茶苦茶だが、確実に腹を射抜くような一射。力は今までより入っていないものの、矢なら確実に突き刺さる。

「矢は飽きたと言ったでしょうに！」

当然それは刀で打ち払う。だが、今回は違った。

「発艦！」

打ち払う直前に矢が艦載機へと変化。突如さらにスピードを上げて刀を振り切り、伊勢の腹に食い込むように直撃。今までの鳳翔ならこんなことはやっていなかっただろう。だが、キレていることで容赦なく手段を選ばずこの方法を取った。

艦載機そのものが直撃したら、流石の伊勢も痛みを感じる。相変わらずビクともしていないが。

「ったあ！ 矢が刺さるよりいいけどさあ！」

「より痛くなるでしょうね」

タアンと、機銃の音。完全なゼロ距離からの射撃で、ついに伊勢の腹に傷を付ける。

寸前で気付かれたか、艦載機自体を横に払われてしまったため、致命傷には出来なかったが、その機銃は脇腹を掠めた。ようやく伊勢の血を見ることになる。

「うえっ!？」

「惜しい」

次はリコ。渾身のケンカキックで動揺した伊勢を押し込むように蹴り、体勢を崩させる。倒れはしないものの、ほんの少しだけ足が浮いた。

だが、伊勢も即座に対応。リコのいる方に主砲を向ける。追撃は許さないと狙いもまともに定めずに砲撃。爆風だけで怯むほどの威力。

「まだまだあ！」

「いや、もう無い」

ここで現れたのはあのリコの艦装だ。最後の改造により低速戦艦程の速度を得たことで、艦装そのものも大幅強化されており、その豪腕を振りかぶって戦場に割り込む。今まではずっと少し後ろで待機していたが、タイミングをずっと見計らっていた。

鳳翔とリコの連携で、どうにか体勢を崩すところまでは持っていた。そこに艦装による捕縛。頭くらいなら簡単に握り潰せるその腕

を使って、伊勢の胴を掴み上げた。そしてもう片方の腕も伸ばす。

「っは、ははあっ！ 楽しいねえ！」

体勢がまともでは無いのに、伸ばした腕を刀で斬り付けつつ、砲撃でグチャグチャにした。深海の艦装とはいえ生体パーツ。他の金属部分よりは多少は脆い。

「そうですか。でも、そろそろ終わりにしましょう」

そこへ、鳳翔の渾身の一射。リコの艦装に砲撃をするところまで見越し、その砲身の中へ向けて矢が飛び込んでいく。この咄嗟の状況で、最高の命中。そして、

「発艦」

艦装内部で艦載機に変化。主砲を木っ端微塵に爆発させた。

鳳翔、リコ、そしてリコの艦装という三位一体で、伊勢の艦装を破壊することに成功したのである。

喧嘩屋の意地

リコの艦装による捕縛を回避しようと主砲による砲撃を放った瞬間に、鳳翔が砲身に矢を放ち、さらにはそれを艦載機に変化させたことにより内部から爆破。これにより、伊勢の艦装を破壊することに成功した。

リコの艦装に胴を掴まれた挙句、主砲が間近で爆発してしまったため、伊勢も相当な怪我を負ってしまったので、これで終わりになるはず。

だが、爆発による煙の中、聞こえてきたのは伊勢の笑い声だった。気を失っていてもおかしくないような衝撃を間近で受けたというのに。

「っは、ははっ、凄いな、本当に凄いな！　ここの鳳翔とリコリス棲姫！

堪えないね！」

あれではまだ倒れないらしい。完成品とはいえ、生身は艦娘に近いはずだ。少なくとも、先程の瑞鶴のようにその衝撃で鼓膜が破れていたりしてもおかしくは無い。

それなのに、笑っている。リコと鳳翔との戦いを楽しみ、まだ続けたいと叫んだ。まさに戦闘狂。この痛みすら昂揚に繋がるものものうだ。

「もっと楽しみたいね。簡単に終わったらつまんないよー！」

激しい金属音の後、リコの艦装の捕縛から抜け出していた。胴を握っていたはずの大きな手は手首から斬られ、力を失い海底へと沈んでいった。

捕縛された体勢で踏ん張りが利かないのに、そんなこともお構いなしに一刀の下に斬り伏せてしまった。何もかも威力が上がっている。まるでリミッターを外したかのようなだった。

「さっきより、斬撃が強く……」

「そりゃあ、主砲に使ってたリソースを全部こっちに回したからね。艦載機ももう要らないから全部こっち側に引っ張ってきたよ」

そもそも、主砲が破壊出来ただけであり、主機は無傷。基本となる

ところなだけあり、頑丈さが段違いである。本人は顔に傷を負っていてもまるで気にしていない。

破壊された主砲はともかく、主砲の爆発で機能不全に陥りかけた甲板すら自らの意思で剥がし、残された主機に全ての力を注ぎ込んだことで、他の攻撃手段を失う代わりに刀一本で何もかもを終わらせるつもりだ。

おかげで艦載機を処理していた赤城と翔鶴もそれから解放され、全員が伊勢に専念できる。だが、伊勢の気迫は今まで以上。むしろ、刀一本に神経を注ぎ込むことで、今まで以上の脅威となり得た。殺す気で行かなければ殺される。

「軽くなつたし、じゃあ、行こうか！」

瞬間、リコの目の前に跳んでいた。身体能力の強化により、低速戦艦とは思えない速度がさらに向上し、殆ど神風と同様の速さにまで達していた。あれは艤装による航行ではなく、脚力による移動。

やはり一番にリコを狙ってきた。伊勢の一番のお気に入りなのだろうし、早急に決着をつけたいとも思っているのだろう。それ故に動きがすぐに読めた。

リコはそれに対して敢えて突っ込む。刀は左から振られていたため、その逆から。主砲が爆発したことで、そちら側に怪我を負っているのもあって、死角になり得る。

「っしいっ！」

「だらあっ！」

刀と拳でクロスカウンター気味な同時攻撃。内側に入った分、リコの拳が顔面に叩き込まれる方が速かったが、それで吹き飛ばされることまで考慮して刀を振るっていたらしく、しっかりとリコの脇腹を斬り裂いている。

内臓まで届いてはいないと思うが、血の出方が割と酷い。真っ白な服が真っ赤に染まっていく。お互いに殆どノーガードだったことで、ダメージの軽減は何処にも無かった。

「つくうっ、まだだ！」

「当たり前でしょお！」

リコの拳を受けたことで逆に闘志が爆発している伊勢は、飛ばされつつもすぐに踏みとどまり、もう一度跳ぶ。もうリコしか見えていない。周りからの攻撃のことなどまるで考えていない。

だからこそ一斉に横槍を入れる。出来ることは空襲なのだが、リコと近すぎて爆撃は難しい。そのため、加賀と瑞鶴は射撃を、赤城と翔鶴は艦載機を直接ぶつける。

「鬱陶しい！ 水を差すんじゃないよー！」

リコとの戦いに水を差す者に苛立ちを感じたか、周りの攻撃は恐ろしい速さの剣撃で全て打ち払い、その速度を維持したままリコを斬り殺そうと振るう。時間が経てば経つほどその速度は増し、剣筋は鋭くなる。素手のリコには重荷ではあるが、その分を仲間に補ってもらっている。

リコ1人では隙を作ることが出来ない。だが、矢や艦載機は簡単に打ち墜とされる。さらにはリコは負傷している。

「相手はリコさんだけではありませんよ」

リコを狙う伊勢の背後に回り込んでいた鳳翔が、リコと同じ場所を狙っての刃の弓を使った斬撃。

射撃や艦載機そのものを迎撃出来るのだから、鳳翔だって迎撃されるだろう。だが、意思を持たない矢でも無ければ、単調な動きの艦載機でも無い。

「鬱陶しいって言ってんでしようが！」

「こちらのセリフです」

先程と同じようなことをして、伊勢に簡単に弾き飛ばされている。だがそれを狙ったということは、策があるということ。

伊勢が刀を振るったときには、鳳翔は既にその間合いから離れていた。近付いたと思ったら別の場所に。その瞬間がリコへのサポートになる。

「っらー！」

鳳翔の方を向いたところで膝に蹴り。顔面を殴り付けた時と違い、相変わらず根が張ったかのようにビクともしない。身体能力が強化されたことにより、余計に動かなくなっている。

拳が効くのは顔面だけだと考えた方がいい。あの時は伊勢の勢いも活かしていたために効いたようなもの。それほどまでに硬い。

「相変わらず、重いな」

「アンタは軽いねえ！」

振り向き様に横薙ぎ。そのまま喰らえば上半身と下半身がお別れする羽目になってしまいうだろう。ただでさえ脇腹から止めどなく血が流れているような状況だ。力が普段より入らない可能性だってある。

リコの本体には艀装らしい艀装は無い。何かしら装備をしていたとしても、ただでさえ艀装すらも斬り裂くその刃なのだから、あんなものを受けられるものなどいない。強いて言うなら日向の刀くらいだ。

横薙ぎは即回避。間違えればその斬撃をしながらも突っ込んできてやられるため、大きく跳び退く。同時に艦載機が飛んできてくれたおかげで、リコは追撃を免れた。

「我々は援護を徹底していますから！ ソレは任せますよ！」

「アカギ、頼もしいな」

力の差を痛感しているのだと思う。空爆がまともに出来れば話は別だが、近接戦闘をメインにされた以上それは難しく、今この状況でこの伊勢を食い止められるのはリコと鳳翔だけだ。

ならば、それを突き通すために徹底した援護を続けると決めていたようだ。艦載機と矢で牽制し、僅かにでも脚を止めることが出来れば良し。それがつづいたからこそ、今まで被害が大きくならずに済んでいた。

全員が正規の工廠で艀装をチューンナップしてもらい、以前よりも力が増しているはずなのに、伊勢を相手にするところまで差が出てしまう。歯痒い気持ちでいつぱいだっただろうが、それはそれ、これはこれ。今伊勢を打ち倒すためにら全員が最善を選択する。

「はーっ、横槍鬱陶しいねえ！ 先にあっちやるか」

「やらせるわけが無いでしょう」

リコに構っていたことで今度は鳳翔が矢を放つ。狙いは肩。刀を

握る利き手の方を射抜けば、さらに攻撃力が下がるはずと考えた結果である。

とにかくあの刀は拙い。今までの伊勢の攻撃方法の威力が、全ての刀に集中してしまっていると考えた方がいい。掠つても重傷とは恐れ入る。

「何度も何度も！」

「同じことばかりでもな、活路が見出せる場合だってありえるんだ」

鳳翔の放った矢を打ち払ったタイミングを見計らい、リコが攻勢に。伊勢と同じように、出来る限り全力で前に跳んだ。

血を流し続けているリコは時間が経てば経つほど勝機を失っていく。だからといって焦ることも許されない。力を込めれば流れる血の量も増える。状況は悪化するばかり。

それだからか、妙な集中力を発揮していた。絶体絶命の戦いの中で、成長しないはずの深海棲艦が成長している。練度が上がっているわけでも無い。ただ、洗練されていく。

「なら、同じように斬ってあげるさあ！」

矢を打ち払った勢いそのままにリコへの横薙ぎ。先程と全く同じ挙動。同じだからこそ、その行動が見慣れてくる。

伊勢は時間経過で強くなっていくが、やれることは単調になっていた。矢や艦載機は打ち払い、接近する者には斬り付ける。振り向き様は横薙ぎ。行動が一定化してきた。

「見えたぞ」

先程までは当たってはいけないと即回避に出たが、今回のリコは違った。より突き進み、伊勢の刀を握る手を押さえたことでその攻撃を止めた。

紙一重と言っても過言ではない。タイミングが失敗していたら、止める手ごと両断されていた。早過ぎても遅過ぎてもダメ。単調になった攻撃を見つけてきたから、タイミングもうまく計れた。

「っはあ！ これを止めるの!? リコリス棲姫、アンター！」

「もういい加減にしてくれ」

止めた勢いそのままにさらに突っ込み、刀を持つ手を受け止めてい

ない方の手で伊勢の胸ぐらを掴み、そのまま引き寄せる形で顔面に向かつて頭突きを決めた。喧嘩屋ならではの雑ではあるが効果的な一撃。

拳よりも硬い頭での一撃をモロに受け、伊勢が初めてフラついた。リコもその衝撃で軽くフラつくが、胸ぐらを掴む手からは力が抜けて、刀を受ける手にも一層力が入っていた。

「っあっ!? この……!」

「もう一発!」

刀を持たない手でリコの髪を掴んだようだが、そんなこと気にせず胸ぐらをまた引き寄せ、さらにもう一撃。顔面に何度も攻撃を入れられたことで、伊勢は鼻血が止まらない。おそらく鼻の骨も折れてしまっている。度重なる頭への衝撃で、フラつきが目に見えるほどになった。

「いい加減に! 落ちろ!」

続けて鳩尾に膝。掴んだ胸ぐらを引き寄せての蹴りに、さすがの伊勢にもダメージが入る。髪を掴む手が少し緩んだ。

無意識ではあり偶然でもあるが、奇しくもその一撃が伊勢唯一の弱点とも言える内臓へのダメージとなった。強烈な一撃で伊勢が血を吐く。

「っがっ、なっ、何度も何度も喰らう私じゃあ無い!」

掴みかかるリコを振り払うため、伊勢も膝をリコの鳩尾に食い込ませる。脇腹から流れる血がより増えてしまい、リコもフラついてしまった。刀を押さえる手からも力が抜けてしまう。

だが、その時には鳳翔が動いていた。これだけその場に留まり、リコが押さえ付けた状態でダメージを与えたのだ。鳳翔だって余裕で動けるようになっていた。

「ですが、もう終わりです」

一切の容赦なく、冷酷に弓を振り下ろし、伊勢の刀を持つ腕を斬った。フラつくほどに頭にダメージを受けたのだから、それを回避する方に思考を持っていくことも出来ない。神経を断つように斬ったことにより、切断したわけではなくとも刀を握ることが出来なくなっ

た。

「いぎっ!？」

「どうせ入渠すれば治るんだ。それくらいはいいだろう。殺されないだけマシだ」

渾身の力を込めて、また胸ぐらを引き寄せ、鳩尾に膝を入れた。その時にはリコの握力も限界が来ており、掴んでいた胸ぐらを離してしまいが、伊勢の内臓にもう一度ダメージを入れたことにより反撃は受けず。刀ももう持っていないため、危険度も格段に落ちた。

次が最後の一撃だろう。リコもそれを確信していた。伊勢の体力的にも、次がトドメになる。リコの体力的にも、次の一撃は出せない。「苦勞させてくれたな……洗脳が解けたら、友として付き合っとう。私も楽しめた」

「……終わるかあ。うん、楽しかった!」

残る力を全て使い、強烈な回し蹴りを伊勢の顎に決めた。骨が折れるようなことは無かったが、急激な脳の振動により伊勢の意識は吹き飛び、白眼を剥いてその場に倒れ伏す。その顔は、何処か満足げであった。

「……もういいか」

「はい、伊勢さんは気を失いました。もう大丈夫です」

「……あとは任せた」

リコもその場で倒れた。血の流しすぎで体力の限界に来ている状態で、最後の渾身の蹴りを繰り出したため、限界を超えてしまったのだろう。

リコもすぐに入渠が必要だ。気を失ってはいないものの、もう一歩も動けない。自分の脚で工廠に行くことなんて不可能だ。

「赤城さん、翔鶴さん! リコさんをお願いします!」

「了解しました。翔鶴、リコさんの艤装を曳航してあげて」

「わかりました。赤城さんがリコさんを運ぶんですね」

鳳翔に命じられ、すぐさま動き出す深海棲艦2人。あの大きな艤装から曳航も楽だろう。協力しているところを見ると、鳳翔は満足そうに微笑んだ。伊勢を倒したことで怒りも少しは晴れたようである。

「加賀さん、瑞鶴さん、私達は」

「若葉の救援ね。すぐに行きましょう」

「話が早くて助かります。瑞鶴さん、これ、ありがとうございました」

「あ、は、はい。うわ、血が滴ってる」

これにより伊勢も撃破。消耗は激しいが、大淀の取り巻きはこれで全員倒したことになる。

残りは大淀、ただ1人。

皆の怒りを背に

私、若葉は、義妹となった第二駆逐隊と三日月と共に、取り巻きから引き剥がされた大淀と対峙している。

死の恐怖による負の感情の増幅で真の深海棲艦化をされてしまったものの、まるゆの奮闘により、復活してしまった忌むべき艦隊司令部の力を剥ぎ落とすことが出来たことで、仲間が支配されることは無くなったため、余計なことをされずに済むようになる。

しかし、大淀はここからやたら粘る。まるゆは武装を失ったために撤退したので、残り6人で猛攻を仕掛けるが、相変わらずの意味がわからない回避性能でその全てを躲す。

ここまで追い込んだのだ。いい加減ここで死んでもらわなければ困る。焦りは禁物なのだが、冷静に事を起こしてもこの異常なスペックの大淀は屈してくれない。

「何なのさアレ！ 全然当たらない！」

「焦るな臯月！ 冷静にやれば当たる！ 奴は中破してるんだぞ！」

臯月と長月が叫ぶ通り、私以外の5人が交互に隙間無く砲撃しているのだが、1発たりとも擦りもしない。中破しているからか、いつもの余裕そうな表情は無いものの、当たらなければ意味が無いのだが、想像以上に苦戦させられている。

「ワタシハマダシニマセンヨ。コノセカイヲ、ホロボスマデハ」

「いい加減に終わっておけ。お前はもうダメだ」

「ナラヤツテミテハ？ アナタタチデハ、ワタシニカナワナイデシヨウニ」

確かに初めて戦った時も、その次の時も、大淀は深海棲艦はおろか、艦隊司令部も持っていなかった状態だ。その状態で全く手も足も出なかった。私の攻撃は全て受けられ、三日月のピンポイント射撃も躲され、空爆すらも全て回避。傷一つ付けることが出来ず、結果的に撤退を許していた。

その全てが、大淀の気まぐれで帰っていたようなものだ。そのまま押し込まれていたら、私達は全滅していた可能性が高い。結果的に

は、私達は大淀に生かされていたということにもなる。

「デスガ、ソングイガスコシオオキイデスシ、キヨウノトコロハテツタイシマシヨウカ」

艦隊司令部を失い、私達を好きに出来なくなったことで興が冷めたのか、撤退すると言い出す。どうせ潰すなら万全の状態で私達を潰したいらしい。艦装もまるゆの渾身の一撃で破損し、火花が散っているような状況だ。100%の力では無いだろう。

その時、私達の後ろから激しい爆発音が響いた。あの場所は、大淀から引き剥がした綾波を相手にしている曙のいる場所。魚雷が爆発したような音だ。

「クソ姉は処理したー!」

呂500に抱き付かれた曙の声が響く。あの爆発の中心から脱出するのに呂500の力を使ったらしい。その綾波は、雷と暁が慎重に工廠に運んでくれている。

「……マア、キユウピツチデカンセイサセタモノハ、ソノテイドデシヨウ」

「捨て駒のつもりだったのか」

「イイエ、ジユウブンニヤクニタチマシタヨ」

フツと鼻で笑った後、一番頼りにしているであろう四航戦の2人に目を向ける。その瞬間、大淀の間近に神風が居合の構えで飛び込んできていた。完全な不意打ちに大淀も驚愕の表情を浮かべ、咄嗟にバツクステップで回避。

艦装が火花を散らしていてもその動きが出来るといことが恐ろしい。そもその地力が高いことは散々思い知っている。それなのに艦隊司令部に頼り切っていたのが気に入らないが。

「よくもまあ避けられるものだわ」

「アナタハ、ヒユウガサンヲ」

「日向は倒したわ。貴女の取り巻きは減ったから」

折り重なって倒れ伏す日向と鳥海の姿を確認した。日向は殆ど無傷に対し、相当ボロボロな鳥海ではあったが、摩耶があまり慌てていないようなので、同じ相手にまたもや命を落とすことになったなんて

ことは無いようだ。

「ヒュウガサンガ……ナラバホンカクテキニシキリナオシヲ」

「逃げられるとお思いで？」

そこへ恐ろしい速さの矢が大淀の額目掛けて飛んでくる。それも即座に回避しつつ、主砲を矢の飛んできた方向へ放った。矢を放った者、鳳翔は、それを軽々回避し、さらに矢を番える。

「伊勢さんも終わりましたよ。あとは、貴女だけです」

赤城と翔鶴がリコと伊勢を運んでいるところも見えたので、あちらも相打ちだったようだ。

以前殺された者に対し、復讐を果たした形で決着をつけたことになる。伊勢も日向も命を取らずに気を失わせることが出来た。あとは飛鳥医師や蝦尾女史が救ってくれる。

伊勢まで倒れたと知り、流石の大淀にもついに焦りの色が見えた。撤退するにも援護する者もない。私達が囲んでいる状態だ。いくら意味がわからないスペックの大淀と言えど、これをどうにかして撤退は出来ないだろう。

ならば、あちらが考えることなど一つ。この場で私達を皆殺しにする一択になるはずだ。撤退するにも私達がいるから逃げられないというのなら、全て消してからでいい。そもそもその目的がそれなのだから、選択しない理由が無い。

「マツタク、ケツキヨクワタシダケデヤラナクテハイケナイダナンテ」
むしろここからが本当の戦い。あれだけ回避出来る身体能力を攻撃に使った場合、命中精度も半端では無いということだ。いくら中破しているとしても、今までの回避から考えて、そこまで力が落ちていない。

「ココロキテンニ、ホロボシテイキマシヨウ。ソレカラカエレバイイダケデスカラ」

大淀の持つ武器は主砲と魚雷。たった一人残された最後の敵となったのだから、何の見境なく乱射もしてくるだろう。それが一番怖い。何より、その主砲の威力は戦艦に匹敵する。常に回避し続けなければ拙い。掠めただけでも重傷を負ってしまう。

「やらせるわけ無いでしょう」

すかさず三日月が撃った。有りつたけの殺意を込めて、確実に死ぬであろう急所を狙う。それは当然のように回避し、お返しと言わんばかりに大淀も砲撃。艦隊司令部による行動障害が無いため回避は出来るが、やはり命中精度も段違いに高い。

三日月の砲撃は、仕切り直しの合図になった。私と神風は接近することになるため、砲撃が控えめになってしまいそうだが、鳳翔が一切の容赦なく私達のことなんて考えずに矢を射るところを見て吹っ切れてくれた。

「ヒトリニタイシテヨツテタカツテ。ハズカシクナインデスカ？」

「自分の力を使わずに高みの見物しかしないような相手にはちようどいいんじゃないの？」

味方の砲撃を潜り抜けながら、大淀の真後ろに回り込んでいた神風。艦装を破壊してしまえば、いくら大淀でも機能停止する。そこから畳み掛ければ確実に倒せる。

神風の渾身の居合が放たれるが、真後ろに来た時点で既に回避行動を取っていた。さらには、神風に向かって簡易爆雷を投擲している。軽巡洋艦であるためにそれくらいは持つていたらしい。専ら対潜ではなくこういうことくらいにしか使わなそうだが。

「そんなもので怯むわけないでしょ」

居合から返す刀で爆雷を斬り、爆発は回避。さらに回避方向へと突撃。

そこに被せるように三日月が頭と胸を撃ち抜くように砲撃。神風の位置まで把握した、直感によるピンポイント射撃である。回避されても神風に当たるような事はない。

だが、三日月の砲撃は大淀が背中を向けたことにより、胸を狙った砲撃は艦装で弾かれてしまった。頭を狙った砲撃はその過程で回避されている。火花散る中破の艦装ですら、三日月の主砲では傷をつけられないらしい。まるゆのWG42と運貨筒ザエーゲの連続攻撃でようやく破壊出来たが、駆逐艦の主砲ではかなり厳しいようである。

「アナタハシヨセンハイダケ」

「貴女は主機が硬いだけでしょうに」

更なる神風の一撃は、全く当たらず。回避性能が尋常ではない。ス
タミナもおかしい。

「主機は硬すぎるわね」

「無理せず別のところを狙えばいい」

「ええ、そうする。若葉、援護は任せて」

三日月が私のサポートに回ってくれるのだから何も心配はいらな
い。それだけで力が湧き上がるようだった。

「姉さん達、狙うのは脚や腕、生身が出ているところだけでいいです」
「りよ〜かい！ 深海棲艦になってくれてよかったよ。遠慮なくヤ
ツちやえるからね〜」

三日月のアドバイスにより、二三駆は四肢を中心に集中砲火を浴び
せ掛けることになる。基本は真逆の方向からの同時攻撃。回避以外
の選択を取れないようにしていく。

そうしている内に、援軍は次々と増えていくのだ。大淀の言った通
り、たった一人に寄つてたかつてという形になるのだが、誰もそれに
対して抵抗が無い。大淀がそれほどまでに恨みを買っているのだか
ら仕方あるまい。

「瑞鶴、私達は空爆よ」

「……あつ、そ、そうね。ごめん、ちよつと耳が聴こえづらくなってる」
「さつき鼓膜をやられたのね。帰ったらすぐに治療を受けなさい」

鳳翔も含めた空母3人は艦載機による空爆を開始。主砲で傷付か
ないのなら、爆撃ならばと容赦なく雨のように降らせる。そのせいで
近付くことが難しくなるが、そこは問題ない。回避しながらでも攻撃
出来る。

全員が怒り任せだった。それでも絶妙なバランスで連携が成り立
ち、誰も止まらない。逆に大淀は追い詰められている。徐々に逃げ場
が無くされていく。

私もしつかり参戦して行こう。もう1日の限界を使ったが、まだ
やってやる。知覚出来ない移動法は使わず、脚になるべく負荷が掛か
らない最速で突撃。それでも神風と同じくらいスピードが出るよ

うになつてくれた。

まずは動きを封じるために脚だ。少し転ばせるだけでも大分変わる。そのため、その速さを使って大淀の脚へ一撃。殆どスライディングと似たようなものになったが、これが一番効果的。

「ワカバサン、アナタハイカシテトラエタカツタガスガ、モウシタイデモカマイマセン」

「そうか。知ったことじゃ無い」

その一撃は残念ながら回避されるが、そこへすかさず曙が飛び込んできていた。私と同じように脚を狙った薙ぎ払い。方針がわかつてくれたか、動きを止めることに専念する。

「アンタはもうここで死になさいよ。さんざん迷惑かけてきたんだから」

「アナタガタノコトバデイウノナラ、シツタコトデハナインデスヨ」

足裏でその一撃は止める。同時に曙に向けて主砲を突きつけたが、そこには即座に朝霜が飛び込んでできていた。破壊出来ずともその腕力で射線が無理矢理ズラすことくらいは出来る。

金属の衝撃音とともに、弾かれるように大淀の腕は外側に跳ねた。放った砲撃もあらぬところへ飛んでいく。

「淀さん、もういい加減にしようぜ。人様に迷惑かけ続けて来たんだからよ、落とし前付けろよ」

「アナタニイワレルスジアイハナイデスネ。ジブンノツミヲタナニアゲテ」

「おう、アンタにやらされたアンタの罪だな」

朝霜によって弾かれた腕が撃ち抜かれた。主砲の持ち手を扶えるように放たれた砲撃は三日月のものだ。

私達近接戦闘組が猛攻を仕掛けたことで、三日月は死角に入っていた。そこからの隙間を縫うようなピンポイント砲撃により、ついに大淀に傷を付けることに成功。さらには砲撃を撃つことが出来なくなるような会心の一撃。

「自分の罪を人のせいにするとは、つくづくクズですね。クズはクズらしくここで捨てられてください」

「ツグア、ミカツキイ……！」

「三日月の言う通りね。いい加減にしなさいよクソ淀！」

思わぬところからダメージが入り、一瞬の動揺。曙がそれを見逃す筈もなく、瞬時に計算し、逃げられないタイミングからの槍の一突き。それは片脚を貫き、動くことすらもままならなくする。

「コノツ、シニゾコナイガ……！」

「久しぶりに聞いたわそれ」

「イイカゲンニ、ハナレロオ！」

自身の周囲に魚雷をばら撒く。大淀に近い私達は退避せざるを得ない。しかし、そうしたことで大淀自身が退路を断ったようなもの。

故に、空母隊の放った矢が中破した艀装の隙間を貫いたことに気付くまでにほんの少しだけ時間がかかった。

「発艦！」

鳳翔の声と同時に刺さった矢が艦載機へと変化し、艀装を内部から食い破らんと爆発する。火花だけでは済まなくなり、所々が小爆発を繰り返す大破状態となった。

一度やられたことで、大淀はもうガタガタだった。深海棲艦化し、艦隊司令部を持ったことで慢心していたことが手に取るようにわかる。だから、それを打ち砕かれたことで平静を失っていたわけだ。

今までのものは殆ど強がりみたいなもの。今までの絶対的強者感があつたために信じてしまっていたが、大淀にはもう何も無い。

そんな奴に、私達が負けるわけ無いだろう。

「大淀、もう終わりだ」

「オワリ……？ オワリダト!? フザケルナア！」

魚雷を飛び越えるように跳ぶ。今出来る最大の速さで。もう主砲による迎撃もない。艀装があそこまで壊れたのだ。異常な回避性能も発揮出来まい。

これで本当に終わりだ。その一撃は、私が決める。みんなの怒りを一心に背負い、私の刃はより強い力を得た。間違った感情かも知れないが、これが今一番必要な力だ。

「もういい。二度と声を聞かせるな」

私の一撃は、大淀の喉笛を掻き切った。

災厄の終焉

戦いは終焉を迎える。みんなの力を合わせ消耗させた大淀は、三日月により主砲を握れなくされ、曙により動きを止められ、鳳翔達空母隊により艦装を破壊された。そして私、若葉の一撃は、大淀の喉笛を掻き切る。これはトドメの一撃と言える、会心の一撃だった。

大淀の喉から激しく血が噴き出て、私の腕にかかる。あまり長い時間触れていたくない、生温かい液体。命が身体の外に出ていくようだった。大淀の怒りと憎しみの匂いが、爆発的に拡がった。死への恐怖を上回り、私への憎しみを滾らせ、最期のギリギリまで抵抗しようと私に手を伸ばした。私はそれを払い飛ばす。

喉を斬ったので、口をパクパクさせているが声は出ていない。どんな恨み言を吐いているかはわからないが、匂いだけで判断するのなら、これで終わりだと思ふという負け惜しみ。

そして、何も言えぬままに、そのまま倒れ伏した。海を真っ赤に染めながら、命の匂いが消えていく。先程と同じ、真に深海棲艦化した時のように負の感情が爆発しても、二度目の奇跡は起こらない。

そして、しばらくすると大淀から完全に命の匂いは消え去った。深海の眼で見ても、生きているようには到底見えない。コレはもう、動かない。

そのままにしておいてはただただ沈んでいってしまうため、嫌々ながらもその腕を掴んだ。まだ温かい。だが、急速に冷えていく。命と共に、熱も失われた。脈も感じ取れなかった。

「終わっ……た……？」

ボソリと、三日月が呟いた。同じ眼を持っているのだから、私と同じモノが見えている。ならば、この大淀から命が失われたことは理解出来ているだろう。

「終わりだ。これで」

途端に力が抜けるようだった。最初から最後までリミッターを外したまま戦っていたのだから、私もとつくに限界など超えていた。1日の限界まで使った脚は途端に悲鳴を上げ、激痛が駆け回る。膝から

崩れ落ち、もう立ち上がれないのではと思えるほどだった。

「大淀さんは私が運びます。誰か、若葉さんを！」

「私が……若葉を運びます」

大淀の亡骸は鳳翔が運んでくれるらしく、体力ギリギリの私は三日月が運んでくれるらしい。三日月だって今の今までリミッターを外していたのだから、大分キツイだろうに。鼻血を拭った跡のようなものも見えた。

だが、三日月に肩を抱かれると、その温もりにとっても安心する。戦いが終わったのだから尚更だ。今すぐ抱きつきたい衝動に駆られるが、今は我慢。そもそも身体が言うことを聞いてくれない。これは入渠まであり得る。

「お疲れ様、若葉」

「ああ……三日月も。辛くないか」

「大丈夫。私が若葉を運びたいの」

私のために動いてくれてるのが嬉しい。今の三日月からは負の感情の匂いは全くしないのが尚嬉しい。ずっとこうしていたいと思える程だ。

勝利を噛みしめたいとは思うのだが、それはもう少し後で。今は身体を休めよう。身体が動かないのだから仕方あるまい。

工場も酷い有様だった。対地攻撃や伊勢の砲撃の影響で、所々が大きく壊れてしまっている。しかし、壊れているのは工場のみ。それも職人妖精が手早く修復中であり、この一晩で修復可能だという。

怪我人も殆ど0。怪我と言っても、瓦礫で少し擦り傷がついた程度である。工場にいた下呂大将と来栖提督も、煤は被ってしまったようだが、全くの無傷。これは安心した。

「伊勢、日向、綾波の3名は既に治療中です。戦いの最中、飛鳥と蝦尾さんが残された材料で例の薬を作ってくれました」

「うちのドックの妖精は飛鳥直々に医療を学んでるからな。透析も出来るから、目が覚めたら治療完了だぜエ」

幸いにも、施設が破壊された時に薬に必要な材料はギリギリ運び出

せていたらしく、リコの花もここで少し滞在したことで1輪だけ生えていたそうだ。おかげで3人分の薬を作ることが出来たらしい。私達が戦っている最中に調合するための機材は職人妖精の手で作ってもらったとのこと。

ここに来て今までの積み重ねが役に立つ。救出出来ても治療できなければ意味がないが、人形の治療法がそのまま使え、必要な薬も用意出来るというのなら全て揃っているようなものだ。

「鳥海が危なかったから入渠を優先された。リコは意思があつたからな。今、ここに残った奴らが応急手当してやるぜエ」

「本来の鎮守府は入渠ドックが4つしかありませんからね。本来入渠レベルの重傷ですから、リコリス棲姫への応急手当では出来る限り入念に行なっています」

リコは脇腹を斬られた傷が深く大きく消耗はしているものの、意識を失ったわけでは無かったため、高速修復材を使うことでどうにかしている。ドックが空けば改めて入ってもらうことになるだろうが。

対して鳥海は火傷に生傷、さらには鼓膜まで破れた轟沈寸前の重傷。工廠に運び込まれた時は意識もなく、辛うじて息をしているという大惨事。リコも鳥海を先に入れろと進言した程だった。

「若葉、大丈夫？ 脚が痛むんでしょう？」

「ああ……かなりな。来栖提督、若葉ホクにも修復材を貰えるだろうか」

「好きに使ってくれい。お前も功労賞だぜエ」

寝る前に内部が傷付いた脚に塗り込むくらいはしておこう。今は激痛でも、外見からは傷があるようには見えないし、骨もヒビが入るほどの消耗ではない。そこは三日月にお願いしよう。

鳳翔が運んだ大淀の亡骸は、下呂大将の下へと運ばれた。主砲を持つ手は三日月に撃ち抜かれたことでグチャグチャ。片脚は曙が貫いたことでズタズタ。そして、喉には私が付けた鋭利な致命傷。

鳳翔がやってくれたのか、その顔は何処か安らかに眠っているようにも見えた。最期の私を睨み付ける表情では無い。それでも痛々しい亡骸であることは間違いない。

「苦勞をかけさせられました、大淀にも同情出来るところはありま

す。丁重に弔ってあげましょう。我々がもつと早く発見出来ていれば、深海棲艦を捕食するだなんて暴挙には出なかつたでしょうから」怒りと憎しみの対象だった大淀ではあるが、死体蹴りなんて死者を冒瀆するような行為なんてしない。ああなつては誰だつて弔われる権利がある。これは下呂大將が自分の鎮守府に戻つてから、肅々と執り行かうそうだ。

安らかに眠れとは申し訳ないが言えない。今まで手に掛けてきた被害者達に、あの世で詫びてきてほしいと思う。理由はどうであれ、ここに来るまでに被害が大きすぎるのだ。そんなことを口に出すことはしないが。

「皆さん、お疲れ様でした。君達のおかげで、元凶を罰することが出来ました。今はゆっくり休んでください。改めて、明日の朝に話をしましょう」

もう夜も遅くなつていた。今から眠れば、明日の朝にスッキリ目を覚ますことが出来るだろう。救出した3人もその頃には治療が完了しているはずだ。

その前に、私は三日月に修復材を塗ってもらふ必要がある。もう、突然の襲撃に怯えることもない。戦いのことを一時的に忘れて、ゆっくりしよう。

夢の中。ここに来るのではないかと思つていた。シグとぽいも、大淀撃破は念願のものである。ずっと待ち望んでいた瞬間だったのだから、私が見えないところで大喜びしていたかもしれない。

『おめでとう、若葉』

『頑張つたっばい！ やつたね三日月！』

夢に入ると同時に、シグとぽいが出迎えてくれた。同じ顔の2人ではあるものの普段は中身が違うからか表情は違つて見えるが、今日に關しては殆ど同じ満面の笑み。心の底から喜んでる。

チ級も祝福してくれているのがわかつた。仮面越しでも、今回の勝利を喜んでくれているのがわかる。

「ああ……お前達の仇を討つことが出来た」

『本当にありがとう。私達^{ボク}が志半ばで手が届かなくなつた復讐を遂げてくれて』

ちよつと泣きそうな感じにもなっている。感極まっているようで、千級に撫でられながらはにかむ。ぽいに至つては三日月に抱き付いてしまつていた。感情が爆発している。ぽいは子供っぽいからあそこまでやつてしまうのだろう。

『御礼は言い切れないほどあるけどさ、私^{ボク}らの提督の無念も晴らしてくれたことも嬉しいんだ。彼もきつと感謝してる』

『そうか。一番最初の被害者だものな……家村提督は』

大淀にハメられ、鎮守府を乗っ取られた際に殺された家村提督を筆頭に、被害者が多すぎるのが今回の事件だ。私達だつて被害者。生み出されては捨て駒にされて無念の死を遂げた仲間達も沢山いる。

『でも、もう少しだけ。大淀がいた鎮守府には、人間の医療研究者がいるんだよね』

『そういう話だつたな。確か、男が2人』

『それを捕まえれば本当に終わりだよ。復讐は終わったけど、事件は終わつてない』

朝霜からの事情聴取でも話題に出ていた、大淀の協力者である人間2人。飛鳥医師が研究を止めた後、ある意味後継者のように艦娘を強化する研究をしていたという者達。

確か、飛鳥医師が死んだ艦娘を蘇生する研究をしているのに対し、その2人はそもそも死なない艦娘を作るといふ研究をしていたと、下呂大將は言っていた。

『そこは下呂大將がやつてくれるだろうさ。言つちや悪いが、あとは人間2人だ。そこで艦娘がまた建造されていたとしても、神風達なら何とかしてくれるだろう』

家村鎮守府を離れた後の隠れ家も、下呂大將が怪我を負うことにはなつたものの襲撃でしっかり制圧してしまつているのだから、正直心配はしていない。元凶であり、難敵である大淀が倒れた今、もう私達が出張る必要も無いだろう。

そもそも、私達は本来なら部外者なのだ。一番関わつていた大淀に

ついでが終わったのだから、ここからは人間同士の戦いをお願いしたい。

『そうだね。私達^{ボク}は高みの見物でいいかもしれない。やることはやったんだからね。若葉が』

「みんなが、だ。三日月だってよくやってくれた」

これ見よがしに肩を抱く。三日月もニツコリ笑顔だった。今まで溜めに溜め込んだ怒りと憎しみも、今回で大分解消できたと思う。ここまでの笑顔はなかなかお目にかかれないレアモノだ。

「私も、みんなの役に立って良かった」

「若葉^{ボク}としては、側にいてくれただけでも心強かったぞ。援護も嬉しかった」

「ふふ、それは良かった」

『今はイチャつくのやめるっばーい』

シグも苦笑。いいではないか、こういう場でも。

「シグもぽいも、復讐が果たせたわけだが……これからはどうなるんだ？ 無念が晴れたら成仏というのが道理かもしれないが」

結局のところ、2人は私や三日月に移植されたパーツにいる亡霊のようなもの。自身のパーツを媒介にした地縛霊とでも表現出来る。未練が強くてここから離れることが出来ない、なんてこともあるかもしれない。私には靈感とかが無いのでよくわからないが。姉ならわかるかも。

その未練がこれで無くなった。そういう存在なら、満足して消えてしまうなんていう可能性も無くはない。

『若葉^{ボク}達としては、私^{ボク}らにはどうなってほしい？』

「若葉^{ボク}はお前達とは別れたくないさ。ここまで長い付き合いになったわけだしな」

「私も。せつかくここまで来たんだもの、ずっと一緒にいたい、かな」
夢の中でしか会うことが出来ないとはいえ、シグもぽいも、勿論チ級も、私達には大切な仲間だ。ここまで親密だと家族と言っても差し支えが無い。失われることが嫌だと思える。

『ありがとう。実はね、私^{ボク}らはもう本当に一蓮托生なんだ。若葉が生

きている限り、私もチ級もずっとここにいる。私の意思でそれをやめることは出来ないんだよ』

『やめるつもりも無いから、ずっと一緒にいるっばい。だから、これからもよろしくね!』

改めてぽいが三日月に抱き付いた。それに倣ってか、シグまで私に抱き付いてきた。

ずっと一緒にいられるなら万々歳だ。今回の勝利はシグとぽいにも感謝しなくてはいけない。2人が私達に力を貸してくれたから戦うことが出来た。最初の全体支配にも屈する事はなかった。それに関しては、2人のおかげだ。

『よろしくついでに言っておこうかな』

「何かあったか?」

『戦いが終わったばかりだから、戦意昂揚つて言うのかな、お互いに興奮してるのはわかるけどさ。脚の治療から流れでそのままっていうのは、ちよつと驚いたよ』

そうだった。ここにいるものは、私と三日月が何をやってたかは全て見えているんだった。寝る前に2人きりで治療してもらったところも、その後のことも。

『ホント三日月って激しいよね。まーた自分から誘ったっばい』

「ぽ、ぽいちゃん、あまり口に出さないでくれると」

『若葉が脚に薬塗られた時に妙な声を出したのが悪いんじゃないかな。三日月ちゃん、それでスイツチ入っちゃったみたいに見えたよ』
「シグ、それ以上はやめような」

もう三日月は真っ赤だった。そんなところも可愛いと思う。

これからはこんな日常が続くのだと思うと、とても晴れやかな気分だった。脅威に晒されるようなこともない、明るい毎日が待っている。

それを三日月と共に歩いていけるのだと思うと、私はより嬉しくなった。

戦い終えて

翌朝、手当ての甲斐もあり、私、若葉の脚の痛みは全て消えていた。体力も無事回復し、身体が軋むようなこともない。窓から漏れる朝日は清々しく、そして目の前には可愛らしく眠る三日月。最高の朝である。

大淀との戦いが終わり、心穏やかに目を覚ますと、三日月も一緒に目を覚ました。ギリギリまで夢の中でも話していたのだから同時に目を覚ますのも必然。というか、夢に呼ばれた時は毎回これ。

「おはよう、三日月」

「おはよう、若葉」

三日月も穏やかな匂い。施設ではないところでの寝泊りなので、三日月的には緊張しそうなものであったが、戦いが終わったことで心にも大分余裕がある。私が側にいるのだから尚更だ。

「なんだか、すごく気持ちよく眠れた気がするの。身体も軽いわ」

「若葉^{ポク}もだ。緊張感が無くなったからか」

「ふふ、そうかも」

お互い着替えながら話す。こんな朝の日常も、随分と久しぶりのように思えてしまった。数日前まではやっていたことなのに。場所が違うから新鮮というのもある。寝泊り自体も何度もしているもの、こんなに気持ちのいい朝もなかなか無い。

「やっぱり、少し拡がってるな」

三日月の首筋を撫でる。今の状態になってから入ってしまったヒビ。大淀の支配を逃れようとしたときにさらに拡がり、肩にかかるほどにまでなっている。首に包帯を巻くだけではそろそろ隠しきれない。

触れたときに驚いたのか息を呑むような声上がり、少し危なかった。昨晚の三日月の気持ちかわかった気がする。流石に今からは拙い。

「これは勝てた証だから、私は嬉しいかな」

「そうか。でも包帯は巻いておくんだぞ。見た目通り本当に身体が割

れてしまったら」

「うん、大丈夫。包帯は巻き続けるわ」

血が滲むようなことも無いのだが、何かあってからでは困る。このヒビが広がることは無いとしても、万が一のことを考えたら包帯は巻いておいて欲しい。私が安心する。

それに、やはりテンションが上がるというのとやらかしてしまうこともあるので、それを隠すことも出来るし。これはあまり考えない方がいいか。

「全部隠すなら、中に何か着るとかの方がいいかしら。タートルネックとか」

「それもありだな。三日月にはきつと似合う」

「ふふ、ありがとう若葉。ちよつと考えておくね」

三日月の首に包帯を巻いてあげて、着替えも終わり。いつも通りのルーティンでも、感じるものはまるで違う。もう本当に周りが明るく感じる。

「今日はゆつくり休もう。いろいろやりたいこともある」

「そうね。まず姉さん達に絡まれるだろうしね」

「だな」

昨日までアレだけ気を張った戦いを繰り返したのだ。今日は心身に疲れを取るために休もう。施設でもないのだから、何か仕事をしようだなんて考えても意味がない。雷は台所に立っっていそうだが。

朝食後、予定通り下呂大将との最後のデブリーフィング。今までと違い、みんな表情が明るい。今から立ち向かうというわけでなく、もう終わったことの反省会みたいなものだ。

「改めて皆さん、昨晩はお疲れ様でした。襲撃計画がままならぬ状況の中、迎撃により任務を完遂してくれたこと、感謝します」

下呂大将も肩の荷が下りたといった感じで朗らかだった。嘗めてかかっているわけではないが、最大の壁である大淀が終わったことで、大分落ち着いている。

残ったのは大淀に協力している医療研究者2人。大淀が戻ってこ

ないことから、今頃何をしているかはわからない。今回の件を大本営に報告した後、すぐに手瀬鎮守府への襲撃に移るそうだ。

「今回の戦いで救出された3人は、まだ入渠中です。例の治療も込みで並行して実施しているので、どうしても時間がかかるようです。綾波はそろそろのようですが」

伊勢と日向は戦艦だけあり入渠時間も格段にかかる。鳥海も瀬死だったことで大分かかっているようだ。

綾波は駆逐艦ではあるものの、急ピッチで仕上げられた反動があるらしく、身体の中がボロボロだったらしい。無理にリミッターを解除されていた暁のようだった。その治療に相当かかっているらしく、入渠ドックを使ったとしても半日近くかかるとのこと。

「大淀の亡骸は、こちらで弔わせていただきます。余計なことはいし、させません。ですが、身体を傷付けない程度に調査だけはするつもりです。それだけは許してもらいたい」

それは仕方のないことだろう。翔鶴もそうだが、艦娘の身から深海棲艦へと堕ちたD事案の艦娘だなんて前例が無いものだ。調査素材としては垂涎物の一品。

だが、同情出来る部分もあるのだから、そこまで尊厳を奪うのは躊躇われた。本当に我欲しかなく滅ぼそうとしていたのならまだしも、ドロップ後の発見が遅れるという、ある意味大本営側のミスも原因の1つだ。

失敗作に対して今後の治療のためにと身体を少し刻んでしまった飛鳥医師も、心の底から成仏を願い、謝罪と黙祷を捧げながらの作業を進めていたが、それ以上に今回は慎重にするようである。

下呂大將が気になっているのは、まだ大淀に何か仕込まれていないか。その残された医療研究者が大淀に何かかしているのでは無いかという不安があるらしい。出来ることといえば、レントゲンを撮る程度のようにだが、それで充分だろう。

「飛鳥の施設の艦娘達ですが、一部は来栖の鎮守府に配属する方向にしようかと思えます。本人達の意思だとは思いますが、全てが終わる時までを考えておいてもらえると幸いです」

飛鳥医師の施設は、あくまでも医療施設だ。今は例外的に武器を持つ必要があったために、救出した艦娘は軒並み施設に残ってもらっていたが、この事件が終わればその必要が無くなる。例外的な処置は終わり、施設から武力を撤去しなくてはならない。

そうなるが一番手っ取り早いのは、健康体の艦娘を別の鎮守府に移動させる事。つまり、継ぎ接ぎではない艦娘は全員移籍というのが考えられる最善の処置だ。

「若葉^{ホク}らは流石に施設から出ていけないな」

「ええ。私は飛鳥先生に約束があるし」

三日月は肌の傷を治してもらおうという約束がある。そのため、施設から出ていくわけにはいかない。私は謎の存在へと昇華してしまった件もあるので、ある程度は調べてもらおう必要もあるだろう。

蘇生された姉や、侵食を残している初霜も残留となるだろう。腸骨を深海棲艦の物に差し替えたくらいなら問題なさそうではあるが、内臓や四肢そのものを差し替えている者達は、飛鳥医師の監視下に置いておきたいところ。治療出来るようになったら治療するという方向で、共に暮らしていく。

「僕からは出ていけないって言えない。ここまで守ってくれていたわけだからな。感謝してもしきれないくらいだよ」

「俺からも無理に来いとは言えねエな。それはお前らの意思だ。来るなら受け入れる。即戦力だしな」

飛鳥医師も来栖提督も、それは該当者に委ねると話す。実際それが一番困ると思うのだが、考える時間はまだあるだろう。それまではまず自分で考えてみてほしいとのこと。

私や三日月は考えるまでもないので他人事になってしまおうが、何か相談されたら乗るようにする。ここに残ってくれとは言えないし、出ていけなんてもつと言えない。

「ただ、先に言えるのは、俺んトコに来たところで二度と会えねエってことにはならねエ。だから、心配しなくていいぜ。それだけだ」

文月達が遠征で施設に来るように、定期的に施設に戻ることは出来る。何かあれば私達が鎮守府に向かうこともあるかもしれない。

施設を離れても、今生の別れにはならないと、来栖提督の口から語られる。それなら、もし施設から離れるという選択をしたとしても、少しは安心出来るだろう。

「同様に、深海棲艦の皆さんについてはさらに我々では管理がしづらいつとところにあります。とはいえ、全員が協力者であることは明白です。これは大本営である新さんも理解していること。ただ、鎮守府に属するということはかなり難しいでしょう」

そこは仕方ない。そもそも鎮守府は、敵対する深海棲艦と戦うために作られているものだ。そこに所属することは流石に難しい。

「私達って、元々は艦装が直るまでって話だったんだよね」

「うん……それに……オオヨドは倒したからね……」

シロクロは当初の予定では施設を離れる方針だった。というか、それは全員に言えることだ。セスも、リコも、事が済んだら施設を離れて今まで通りの生活を取り戻すつもりだった。

だが、施設で住むことでのいろいろと思ひ直すこともあったようである。特にそれを実感しているのはセス。

「最初は終わったら出て行こうと思っただけだし、私はここに残るよ。ほら、エコがここだと伸び伸びと暮らせるし、私も工廠で艦装弄つての楽しいんだよね。だから……居残りいいかな」

この場で宣言。セスは施設で暮らしていきたいとみんなの前で語った。海の上で過ごしている時よりも、エコが悠々自適に暮らせているのが嬉しいと。それに、割と過剰な人見知りだったセスがここまでするようになったのは施設のおかげだとも。

「私も残るつもりだ。もうこんなことは無いとは思いますが、医者を守る用心棒はいるだろう。それに、花は何処でも育つ。あの島に戻りたいとは思っていたが、あの場所に家族はもういないから……たまに行かせてくれればそれでいい」

「1人だと寂しい？」

「セス、お前私に対してだけは押しが強くないか」

少し悲しい発言ではあったが、リコも居残ると宣言。島で花を育てて暮らしていたが、施設でも同じ事が出来るのはわかっている。リコ

のやりたいことは何処でも出来るのだ。

とはいえ、家族と一緒にいた島というのは思い入れもあるようで、たまに行くくらいはしたいとのこと。それを飛鳥医師が止めるわけが無い。それに、リコが個人的に向かえるようになったのも大きい。「……なら」

「私達もだね。みんなとずっと一緒にいたからさ、出て行くのが何か嫌になっちゃった。寂しいもん」

そしてシロクロも。クロは素直に、シロもみんなと離れるのが辛いと匂わせている。あの時の記憶が残っているせいで、シロはセスがないと眠れないというのもある。

結果的に、深海組はそのまま。何も変わらない。戦いが終わった後は、今まで以上にのんびりとした毎日となるが、それはそれでいい。「私達は少し考えさせてください。友好的な深海棲艦として扱ってもらえる証でもあればいいですがね」

「私は艦娘のこの服を着ていればある程度は誤魔化しが利きますが……」

「貴女はいいかもしれないけど、私は無理でしょう。それに、あの艦装はどうにもならないわ」

赤城と翔鶴は保留。そもそも、出て行くにしても敵対する深海棲艦との区別がつけられないというのが問題点。今の2人は艦娘時代の服を着ているのでまだマシではあるが、艦装は誤魔化せない。止めろと言っても攻撃される可能性はある。

それを考えると、何処でもいいので保護してもらえる施設か鎮守府に匿ってもらうのがベストではある。

「なるべく最高の形を用意しましょう。君達も被害者ですからね」

「よろしくお願いします、下呂提督。残るにしても出て行くにしても、私達の立ち位置はなかなか難しいという事は理解していますので」

そこは下呂大将に任せるしかあるまい。きつと最高最善な道を切り拓いてくれるはずだ。

「施設の修復完了は、今日を含めて2日の見込みです。明後日の朝にここを発つことになるだろう。出来ればそれまでに決めてくれると

ありがたいです」

猶予は2日。施設に戻らず、ここに残るという選択をするのなら、一緒に帰らないということになる。

該当する数人はここから頭を悩ませることになるだろう。本来の居場所無く、施設はいわば仮の住まい。平和のために戦うという本来の在り方から逸脱することになるため、あそこは艦娘としての居場所になるかと言われるとそうではない。

これはとても難しい問題。簡単に口出し出来る問題では無かった。「私はそろそろ来るであろう新さんの迎えで鎮守府に戻ります。施設の修復完了に関しては追って連絡します」

まるゆが運転していた車は、施設襲撃の時点で破壊されてしまっている。下呂大将にも迎えが必要。それが来たら下呂大将の仕事も一旦終了となるとのこと。

有明鎮守府へと向かった後、その足で破壊された施設へと戻り、そこから来栖鎮守府へ移動。状況確認後そのまま大淀の襲撃を受けて全てを終わらせた。飛鳥医師や蝦尾女史もそうだが、とにかく休みなく動き回っていたのだから、そろそろ身体を落ち着けた方がいい。

「それでは、今回はこれで終わりにさせていただきます。再三言うようですが、任務の完遂ありがとうございます。ゆっくり身体を休めてください」

最後のデブリーフィングはこれにて終了。今回は拍手喝采で終わった。

これで戦いは終わりだ。明るい日常が戻ってくるのだ。

強い心

朝食後、迎えが来たことで下呂大将達は帰投。大淀の亡骸は袋に入れられ、丁重に扱われながら輸送された。大本營で簡単な調査を行なった後、弔われることとなる。

「若葉、また会いましょう。たまには施設に行くからさ」

「ああ、若葉もまだお前に勝てていないのが悔しい」

「まだまだ負けないわよ。私は貴女の師匠だからね」

去り際、神風と握手。最初の方からずっと協力してくれた私の師の1人。神風のおかげで私はここまで強くなることが出来たのだと思う。神風に鍛えられていなかったら、あの速さは手に入れられなかったかもしれない。

だからこそ、いつか乗り越えたいと思う。それが一番の恩返しになると思うから。まだまだ神風に一撃入れるのが精一杯だとは思いますが。

「姉貴ばっかりズルイな。僕も相手してもらいたいんだ」

「松風がやるなら私ともお願いね」

松風と朝風からも挑戦状を叩きつけられる。そういう戦いなら受けて立とう。艦娘同士の命の取り合いなんて真っ平御免だが、試合としてなら万々歳だ。まあ私はもう艦娘かもわからないが。

春風と旗風も後ろで微笑んでいた。旗風にも私は勝てていないので、いつか乗り越えたい。ならば、戦いが無くても鍛えておく必要がある。

以前に下呂大将に言われたことを思い出した。中立区を中立区として守る者、抑止力が必要だと。私達はそれになるために施設で生きていく。どうせ敵は出ない。だが、衰えるわけにもいかない。それはそれで、楽しく生きることが出来そうだ。

「では飛鳥、来栖。追って連絡します」

「よろしくお願ひします」

「ウツス。飛鳥達は俺が責任持って預かりますぜ」

最後に下呂大将は私と三日月の元へ。蹲み込んで、視線を合わせてくれた。穏やかな表情。悲観も何も無い、綺麗な瞳をしている。嗅い

でいても気分の良い匂い。

「若葉、三日月、君達のこととも報告することになると思いますが、勿論悪いようにはならないようにします。信じて待っていてくれるとありがたいです」

「若葉達は頼るしかないからな。大将、よろしく頼む」

「はい、任せてください。私の出来ることを全て使って、君達の安心を勝ち取ります。それが私に出来る、君達に送る最大の功労賞ですから」

頭を撫でられた。下呂大将ならきつと何とかしてくれる。不安も心配も無い。心の底から信用出来る相手であることは、今までの親交でわかっていることだ。誰もが楽しく生きる環境を、飛鳥医師の施設に提供してくれるだろう。

下呂大将が帰投した後、少ししてから綾波と鳥海が目を覚ましたと連絡が入ったため、それを見に行く。今回の事件の最後の被害者となるはずの綾波だ。精神的に参っていたとしても、妹である曙が支えることが出来るだろう。

ドックの周りには関係者は勿論のこと、飛鳥医師や蝦尾女史まで集まっていた。綾波は他と少し違う、急激に練度を上げられた反動がある。入渠したものの、もしかしたら何かあるかもしれない。

「まずはしっかりと治療された鳥海からですね」

明石の指示の下、ドックが開く。こちらは全く心配していない。蘇生された後で入渠してピンピンしていたのだから、後遺症だのが無いこともよくわかっている。

ドックの中の鳥海は、焼かれた顔や焦げた髪も元に戻っていた。こういうのを見ると、入渠が飛鳥医師の治療以上のことをやっている実感する。

「おう、鳥海。結構無理したみたいだな」

「そうね……自分で覚えてる限りだと、また顔焼いちゃったから目もあまり見えてなかったし、最後音も聞こえなかったわ」

「あんな主砲、頭の真横でぶっ放されりやそうもなるっつーの」

苦笑しながら摩耶が服を放る。これだけ話せるのなら問題無いだろう。疲れも取れているため、その場ですぐに服を着て、眼鏡も渡された。

「お前が寝てる間にあった大将の話は後からアタシがするぜ」

「うん、お願い。何か重要なことあった？」

「鳥海にはあまり関係ないかな。施設から離れることは無いだろ」

「まあ、そうね。私が施設から離れたら先生に迷惑かかるだろうし」

飛鳥医師も出来れば施設からは離れてもらいたくないという雰囲気醸し出していた。

鳥海は脚が差し替えられ、脳に侵食を残したままであり、さらには蘇生により内臓まで差し替えられた拳句に皮膚も移植されている。継ぎ接ぎの度合いで言えば、施設の中でも最上位だ。飛鳥医師も一目下に置いておきたい者だろう。

それを理解してか、鳥海は最初から施設を離れるつもりは無いとのこと。摩耶と一緒にいる方がいいという考えでもありそうだ。若干の障害も残したままでし。

問題はここから。救出者の入渠完了である。まずは綾波から。ドックの近くに寄ったのは実の妹である曙。つっけんどんな態度ではあるが、流石に自分の姉なだけあり心配なようだ。匂いからもわかるためか、曙からは余計なことと言うなという視線が痛いほど感じられる。

「綾波のドック、開きます」

明石の言葉と同時にドックが開く。元々あまり酷い怪我をしてたわけではないので入渠前からそこまで変化が見えなかったが、おつとりして雰囲気はそのままに友好的な匂いが拡がる。

本来の綾波というのは、あの雰囲気そのままにとても優しく、淑やかな性格らしい。洗脳が行き届いている時は曙に対しても少し棘のある話し方をしていたようだが、そんなこと到底しそうな性格なんだとか。

「正気に戻ったかしら、クソ姉」

いきなりこの言いよう。曙の性格を知っているから許せるものの、

最初がこれだと怒るか折れる。対する綾波は、曙を理解しているからか苦笑。

「はあい。ご迷惑おかけしましたあ〜……」

折れているわけではないが、声が弱々しい。やはりあの時の記憶が精神的なダメージを受けている。優しい性格であればあるほどこのダメージは大きくなるのだから、綾波には相当辛いものになりそうである。

それに対して曙は、服を投げつけつつも頭をスパーンと叩いた。何をされたのかわからないと言った表情の綾波に、畳み込むように話す。

「一番被害被った私が迷惑じゃないって思ってたんだから、さっさと開き直んなさいよ。ウジウジされてたらそっちの方が迷惑だわ」

「あ、曙ちゃん……でも……」

「どうせアンタ、私達くらいしか戦闘経験無いでしょ。それならまだマシじゃない。ここにはガチで他の艦娘殺してる奴らだっているの。比べるまでもなくアンタは軽いのよ」

それよりさっさと着替えろと急かす。落ち込む暇すら与えないお節介に、綾波もタジタジ。

曙がお節介とはあまりキャラでは無いように見えた。それでもやっているということは、それだけ姉のことを心配しているということ。口調はいつものままだが、それも曙なりの心遣いかもしれない。

着替えたタイミングで飛鳥医師が綾波を簡単に診察。入渠を信用していないわけでは無いのだが、精神的なダメージが何処かに影響していたら困るし、ドックの妖精でも治せないような致命傷を受けていたら困る。

触診と問診で、問題がないことを確認して行つた。ドックから出て服を着ている姿だけでも、何も問題は無さそうだったので、そこまでは心配していない。身体に傷があるわけでも無かった。

「今調べられる限りでは、ちゃんと健康体だ。無理な練度上げで何かしらの悪影響が出ているかと思っていたが、そうではないようだな」
「そうですかあ。それはよかった……です？」

「いいつつつてんのよ。ウジウジするなつての」

いちいち突つ掛かる曙ではあるものの、そろそろ綾波も曙の真意に勘付いたようで、そのキツめな言葉で心を崩されるようなことはなく、むしろ喜んでいるように見えた。

「強引な練度上げはどうやられたかわかるか？ 身体に大きく負担がかかっていた。今でこそ入渠で何とかなっているが」

「ええと……綾波が覚えている限りだとお、何か見たことも無いような装置を使われましたあ。ドックに似てはいたんですけどお」

そういう装置まで作っていたということか。胸骨の改造とかもただの手術ではない改造だろうし、そんな滅茶苦茶なものを作り上げてもおかしくないかもしれない。

だが、それだけでは練度上げなんて出来やしないはずだ。艦娘の身体の構造を把握しているくらいで無ければ、装置の理論すら組み上げられないはず。

「何故そんな装置を作る必要があつたんだろうか」

「うくん、綾波には見当が付きませんねえ。建造された後、流れのままにこうされたのでえ」

まあその辺りを綾波に聞くのは野暮というもの。生み出された直後から、自分でもよくわからないままに育成され、洗脳され、完成させられたのだから。

「即戦力を作るためだけとは到底思えないな……。何か理由がある気がする」

「今はいいでしょ。大将が全部調べてくれるわよ」

飛鳥医師の悩みは、曙がばつさりカット。ただでさえいろいろありすぎて混乱しているであろう綾波への負担を少しでも減らそうとしている思いやりが見える。口は悪くとも中身はしっかり姉妹の絆を大切にしている。

「姉貴、絶対謝らないで。アンタは被害者、拒否権も自分の意思も無しにやらされてただけ。理解出来た？」

「……うん、わかった。曙ちゃん、優しいですねえ」

「そんなんじゃないわよ。私は姉妹がウジウジしてるのを見たくない

だけ」

ここまで来ると全員に曙の考えていることは筒抜け。摩耶に至ってはニヤニヤしながら曙を見ている。その視線に気付いた曙は少し苛立ちを見せたものの、頬を染めてから綾波の手を引いて工廠から出て行った。

「呂500の時もそうだったが、曙はこういう時に本当に強い」

「そうですね。メンタルが並じやないです」

飛鳥医師と蝦尾女史も、その様子に感心していた。相変わらずの心の強さ。私達も曙のそれには見習わなくてはいけない部分があるかもしれない。

あと残すところは伊勢と日向だが、まだ時間はかかりそうとのこと。戦艦の入渠というのはそれだけで大きく時間を割く。子供である駆逐艦が治療されるのとは訳が違うようである。

見込みは昼食の後。入渠開始から半日以上の時間を使っていることを考えると、その深刻さもわかるというもの。

「伊勢と日向は大淀が活動を開始した当初から側近として活動していたと考えていいだろう。なら、向こうの内情も更に踏み込んだところまで知っているかもしれない」

五航戦が曖昧だったところも、あの2人ならわかるかもしれない。基本的に大淀と一緒に行動し、何をするにも護衛として存在していたのなら、あちらで行なわれていた実験の数々も多少なり見ているかも。特に、改造された手瀬鎮守府のことがわかれば、下呂大将の鎮守府襲撃に役に立つ。

「その時は来栖にも相席してもらおう。もしかしたら、この鎮守府からも襲撃の手助けをする者が出るかもしれないからな」

言ってしまうば、私達にも白羽の矢が立つ可能性だつてある。特に私と三日月。視覚と嗅覚の点から、内部を調査する必要があるかもしれない。それなら姉やシロの力も必要かも。

それならそれでいいかなとは思う。今回の事件で最後の仕事をするといいのなら、喜んで手伝おう。自分の手で決着をつけられるのな

らそれに越したことはない。

「僕達もこれでお役御免になるかもしれないな。そうしたら、人工皮膚の研究に専念出来る」

「そうですね。必要な子も多くなってしまうましたし、なるべく早く完成させたいところです」

この話題が出てすぐに反応したのは三日月だ。髪の色や首筋のヒビはそのままにするとしても、せめて顔の真ん中に走る傷だけは消したいというのが本心。勿論身体の傷もだ。

三日月の身体は何度となく見ているが、やはり痛々しさはある。私の脚にも縫合痕がしっかりと残っているため、その辺りも消してもらえないかもしれない。研究が完遂されれば至れり尽くせりであることは確か。

「蝦尾さんのおかげで、僕が出来なかった治療も出来た。研究も進んで、救える者がさらに増える。本当にありがとう」

「私の研究がこんな飛鳥先生のお役に立てて、本当に嬉しいです。あと……私も施設に居残りというのは大丈夫でしょうか」

施設から離れるというのは何も艦娘だけではない。蝦尾女史も、今回の侵食の治療に対しての援軍としての立ち位置にある。事が済めば、元いた場所に戻るという可能性はあった。

蝦尾女史は施設に残って研究を続けたいという意思を示す。人工皮膚の件もそうだが、それ以降もずっと飛鳥医師の側で助手を続けていきたいと。

「是非、よろしく頼む。僕も意固地になり過ぎていた。やはり仲間といるのは必要だ。蝦尾さんはそれに一番適している」

「ありがとうございます。これから誠心誠意頑張りますね」

明らかにそれ以上の匂いを湧き立たせたが、敢えて何も言わないでおく。蝦尾女史の気持ち、今ならとても理解出来るのだから。

だが、飛鳥医師は見た感じ、相当な朴念仁に思える。蝦尾女史の成就はそんなに近くないのかもしれない。私達はそれを応援させてもらおう。

真の敵

昼食後、綾波に引き続き伊勢と日向が目覚めることになる。そこに便乗するのは、伊勢の好敵手^{ライバル}となったリコ。それと、残った手瀬鎮守府襲撃をするにあたり、重要なことを知っているだろうということであら。来栖提督と鳳翔が最初から待機している状態。私、若葉と三日月も引き続き参加させてもらっている。

「2人とも完了しました。ドックを開けますね」

明石の言葉と共に、2つのドックが開いた。それと同時にドックの中にリコが服を投げ込む。

「ありがとう、リコリス棲姫」

「リコでいい。施設ではそう呼ばれている」

「そうなんだ。じゃあ、リコで」

ささっと服を着替えてドックから出る伊勢。それに対して、神妙な面持ちでその場から動けない日向。伊勢は明るい、日向は罪の意識が先立つようで、なかなか立ち直れないでいる。

伊勢と日向は最初から大淀の側にいたと言っても過言ではない存在。その分、殺戮も桁違いに行なってきたのだと思う。そもそも、今ここにいる赤城や加賀が所属していた鎮守府で殺戮の限りを尽くしたのも、この伊勢と日向だ。

やらされていたこととはいえ、罪の意識を感じないわけではない。

日向はそれが顕著だった。

「日向、どうしたのさ」

「私達は罪のない者達を嬉々として殺してきたんだぞ。何人も、何人も、この手にかけて。その全ての感覚が、この手に残っているようだよ！」

ダンとドックの梁を殴り付けた。艦装も装備していない艦娘の力など、戦艦でもたかが知れている。その程度ではドックが傷つく事は無いが、ドックの中にいた妖精達が何事かと出てきてしまう。

私の隣で三日月もビクツと震えた。洗脳が解けて第一声がここまでの者はあまりいなかった。私が覚えている限り、物に当たるような

ことをしたのは朝霜だけだ。

「私は仲間と共に人間の平和を守るために生まれたんだぞ！」

生真面目な日向には苦痛以外の何物でも無いのだろう。私達から言えることなんて気にするなくらいしか無いのだが、私達が言ってもその心には届かない。日向に何か言えるのは、同じ境遇の伊勢だけでは無かろうか。

対する伊勢は、既に開き直れているような素振りだった。戦闘中に敵対していたリコと心通わせたことがキツカケか。倒れる時も満足げだったそうだし、性格的にも伊勢にはダメージが少ないようである。

「日向、気持ちはわかるけどさ、死んだら罪滅ぼしも出来ないんだよ？」

「お前は事を軽く見過ぎだ！ 自分でもわかっているだろう。容赦なく、問答無用で泣き叫ぶ子供すら斬ってきたんだぞ！」

子供というのは駆逐艦だろう。姉も伊勢に斬られて殺されている。初霜を庇う背中を斬られてだ。その斬り傷は、容赦が無すぎた。殺す事を楽しんでいるようには見えなかったが、目的を達成するためには手段すら選んでいないように見えた。

それでも、伊勢は平常心を失っているようには見えない。リコから服を貰った時には薄いものの笑顔を返していた。記憶が無いわけもないのに。

「わかっているよ。私だって全部覚えてる。ここの初春を背中から斬ったのも、リコの腕吹っ飛ばしたのもね」

「なら何故平然としていられる！」

「後悔しても仕方ないから」
ここまでサククリと開き直れているのも、それはそれで恐ろしく感じる。

「私らが悔やんでも殺した子は帰ってこないからね。それに、私だって悔いはあるよ。あんなふざけた命令をさ、喜んで受けてたつてのは気分悪いんだから。でも、落ち込んだところで進めないし」

伊勢は伊勢なりに考えているようだが、申し訳ないが伊勢の感情は

匂いでバレバレ。開き直っているものの、悔恨の匂いがあまりに強い。だがそこで折れていては罪滅ぼしも出来ない、気持ち奮わせて立ち上がっている。

伊504の時と同じだ。強がりと言えば強がり。本心を隠して明るく見せているが、夜に悪夢を見る可能性が非常に高い、精神的にも少しぐらついている状態である。

「飛鳥医師、カウンセラーを用意した方がいいと思う。姉さんがオススメだ」

「ああ、わかった。後から依頼しておく」

姉は伊勢に殺されているが、実際面と向かっても取り乱すようなこととはしないだろう。むしろ初霜の方が心配である。あの夜の襲撃でトラウマが出来ていなければいいのだが。

「私は、罪滅ぼしのためなら何でもやるよ。ウジウジしてるくらいなら動く。あとリコと再戦したいしね」

「構わない。それで気が晴れるならいくらでもな。その代わり、刀は置いてくれ。『ケンドーサンバイダン』とやらは正直キツイ」

「オツケーオツケー。その代わり、横槍無しの1対1タイマンね」

「ああ。私の弟子にも見せてやりたい」

洗脳が解けても戦闘狂な様子。洗脳の時の余波というか、長いことその性格で生活していたせいで後遺症として残っているのかもしれない。

「つと、その前に何か事情聴取的なことがあるかな」

「その前に診察だ。綾波にもやっている。入渠しているから心配いらないと思うが、念のためやらせてほしい」

「はいはい。さすが医者だねえ」

伊勢は何も抵抗なく飛鳥医師に身を任せる。だが、日向はまだドックから出られず、服も着ることが出来ずに手のひらで顔を覆い俯いていた。診察は少し難しそう。

「伊勢は異常無し。長期の洗脳で何かしら問題があるかと思っていたが、見た感じでは大丈夫そうだ。精密検査では無いから確証は持てないが」

「それはひと安心だねえ。私が大丈夫なら、日向も大丈夫だよ」

「施設が修復されたら、一度精密検査をさせてくれ」

常に同じ処置をされ続けてきたというのなら、伊勢と日向の状況は殆ど同じと見ていいだろう。伊勢が健康体なら日向も健康体。今はそれでいい。診察が出来る精神状態になった時、改めて診察するということで今は終わらせる。

「日向はちよつと冷静に話せないだろうから、私が話すよ。それでいいかな、ええと来栖提督、だったっけ」

「おう。よろしく頼むぜエ」

1人にするわけにも行かないため、明石とリコがここに残ることに。説明するわけではないのだが、伊勢と心通わせた経験もあるため、リコの存在は日向相手でも何か効果的な部分がある可能性がある。

来栖提督もリコによりしく頼むと、無言で手を挙げていた。カウンセリングではなく、ただ話すだけ。それだけでも多少は心落ち着ける時間になるかもしれない。

場所を変えて改めて。私と三日月は引き続き参加。嘘発見器としての最後の仕事になるだろうが、もうおおよそ信用はしている。洗脳が解けた時点で大淀やあちら側の人間を擁護する必要は無いし、今までの行ないに怒りを覚えている時点で嘘をつく理由も無い。

「起き抜けで悪イな」

「いやいや、大丈夫大丈夫。私達で最後のはずだし、あの鎮守府取り返すんだよね。なら知ってること全部話すよ。綾波はあまり知らなかったんでしょ？」

その辺りもよくわかっていようである。綾波はある意味生まれただけだ。鎮守府の内情もよくわからぬまま洗脳され、施設や鎮守府を攻撃することに何の疑問を覚えなかっただけ。

「私は日向と一緒にずっと大淀の側にいたからね。大概のことはわかると思うよ。私達に隠してたこともあるかもしれないけどさ」

「そいつアありがてエ。んじゃ、まず残りの戦力はもう無いか？」

そこはまず聞いておきたい。大淀がいなくなったとはいえ、まだ鎮守府に戦力が残っている可能性だつてあり得るのだ。

襲撃の時に抵抗されることは最初から予想済み。さらには綾波のような急速に練度を上げられたような艦娘もいる。今頃防衛戦力を整えているかもしれない。

「私達が出撃した時には、もう完成させられてた子とかはいなかった。綾波が最後の最後だったね」

「なら、鎮守府に残ってたのは」

「研究者の2人だけ。まあ今頃せつせと建造してるかもしれないけどさ」

その確証が取れたのはそれなりに大きい。じっくり時間をかけて作られた完成品は本当にいなくなつたのだから、それなりに攻略は楽になる。

「ただねえ、あの研究者、結構意味深なこと言ってたんだよね」

「なんだそりゃ」

「目的は成就したつてさ。私達にはそれが何かは知らないけど」

飛鳥医師の同業者という大淀の協力者の男2人がそう言つたと。

「飛鳥、何か知つてつか？」

「僕の時のような蘇生ではなく、死なない艦娘を研究していたと先生に聞いたが……」

大本営に艦娘の蘇生についての研究を止めるように言つた後に、秘密裏に行なわれていたという艦娘を使った実験。死んだ艦娘を蘇生させるのではなく、そもそも死なない艦娘を作るという研究をしていたと聞いている。

それが目的として、成就したと言つたということは、死なない艦娘の構築に成功したということなのだろうか。だとしたら、大淀にそれが施されてもおかしくは無いのだが、そんなことなく大淀は死んだ。私が殺した。命の匂いが消えるところも見ているし、絶対に動かないと確証が持てる状態だった。

「詳しいことはわからないんだよね。大淀は知つてたみたいだけど、それについては私達にも教えてくれなかつたし」

誰もわからないその真意。

だが、私には1つ、頭に引つかかるものがあつた。

「大淀が死に際、妙な匂いを漂わせた」

「妙な匂い？」

「これで終わりだと思ふなという匂いだった。だが、その後事切れた。命の匂いは無くなっていたし、全員がその亡骸を確認しているだろう」

未だ理解が出来ないことが起きている。終わったと思つていた戦いは、まだ続きそうな気がしてきた。

「とりあえず先に行くかい。伊勢、他に協力者つてのがいたかはわかるか？」

「私達は見えてないけど、どう考えても資金源がおかしいんだよね。あれだけ建造とか改造とかしてるのに、遠征すらしてないんだよ。確実に外から提供されてるね」

これだけやってまだ内通者がいるというのか。いや、内通者ではなくただの資源提供だけか。ならば、その研究を秘密裏にやらせていたものが一番臭い。間接的に大淀の協力者となつていたのだろう。

確か途中からはその2人が裏切り者と知つていたはずだ。それでも資源提供をやめていないというのなら、もう疑いような無いレベルの裏切り者。

「先生に連絡だな。大本営にまだ繋がつている愚か者がいると」

「おう、まだクズがいるつてことだからな」

ここからは人間達の戦いになるかもしれない。私達の与り知らなるところで、激しい攻防が発生するか。

「真の敵は同業者だったわけだ。気に入らないな」

「飛鳥にや俺ら以上にクモンがあるだろうよ。確実にぶつ潰してやらねエとなア」

大淀の破滅願望に乗つかつて、自分達のやりたいことをやったというのなら、それは本当の悪だ。大淀と同類、許しがたい存在。もしかしたらその医療研究者達も破滅願望があるのかもしれないが、どちらにしる裁かなくてはいけない者達であることは確かである。

「今の鎮守府を捨てて他に行くところつつーのは、もう考えられていたりするのか？」

「私達があそこにいる時は考えられて無かったかな。設備すごく整えてたし。裏で何考えてるかは知らないけどね」

既に夜逃げしているようなことも、今のところは考えられていないと。大淀が倒されたことをあちらが気付いているかは知らないが、これだけ時間が経っているのに戻ってこないのだから、さすがに勘付いてはいるか。

時間をかければかけるほど、その可能性はだんだんと高くなつていってしまうだろう。やはり早急に襲撃を仕掛けた方が良さそうだ。

「うし、すぐに知りてエことはこんなもんだろ。若葉、どうだったよ」

「嘘の匂いは無かった。伊勢は洗いざらい話している」

「んなら良かったぜエ」

これが最後の仕事になればいいのだが、不穏な匂いがするのも確か。今までの情報を重ね合わせると、本当に討ち倒さなくてはいけないのは医療研究者2人であると理解出来る。

また私達が戦場に駆り出される可能性も少なくない。襲撃にも参加することになりそうである。

「伊勢、ひとまずはうちで保護つつー形で滞在してもらおう。飛鳥の施設が修復されたら、一度そこで精密検査も受けてもらうぜ。構わねエな？」

「それならそれがありがたいかな。転属するならここがいいしね」

リコとの再戦がしやすいからというのが一番の理由のようである。これは事あるごとにリコとの戦いを見ることになりそうだ。リコが施設に残ると言っている事だし、リコも友との再戦を望んでいるようだし。

「日向大丈夫かな。根が真面目だから、どうしても今回の件はね」

「今まで取り乱さなかった者の方が少ない。自殺を考えたような者もいるし、泣き叫んだ者もいる。アレが普通だ」

「むしろ私の方が異端かな？」

ケラケラ笑うものの、匂いは最初から変わらず。自分の今までやつ

てきたことへの負の感情は渦巻いているが、強がっているだけ。

今までの救出者全てを見てきている私達としては、伊勢のポジティブさは凄いいことだと思う。少し怖いくらいだ。戦闘狂だから成り立っている危うい均衡なのかもしれない。

ひとまず事情聴取は終了。新たな、真の敵の存在がわかった。これだけやってきて、本当の敵が守るべき存在であるはずの人間というのは、少なからずショックではある。

被害者からの叱咤

伊勢から事情聴取したことにより、不穏な匂いが漂い始めた。大淀の最後の『これで終わりだと思うな』と感じさせる匂いと、伊勢が聞いたという医療研究者2人の『目的は成就した』という言葉により、まだ事件は終わりではない可能性が出てきてしまったからである、

医療研究者の目的は、死なない艦娘を作ること。それが成就出来たということは、何かしらそういう存在がいるということだ。だが、私が殺した大淀はそんな処置がされているようには思えなかった。あれは確実に死んでいる。

得体の知れない謎が残されている。下呂大将にも伝えて、何か案を貰う必要があるそうだった。まだ戦いが終わらないと感じ、私、若葉も少しストレスを感じた。

話を終え、私と三日月は伊勢と工廠に戻る。そこでは着替えてドックから出ている日向の姿が見えた。伊勢の話を聞いている間にリコといういろいろと話をしていたようで、少しだけ調子を取り戻していた様子。

「日向、少しは落ち着いた？」

「……ああ」

伊勢に声をかけられても、テンションは全く変わらない。どんより曇ってはいるものの、入渠が終わった直後よりはまだマシというところ。

敵として見ていた時も、そこまで明るいような性格では無かったと見受ける。そこからはあまり変わっていないようだが、その時よりも尚暗い。

「まだ振り切ることは出来ない。私はお前ほど出来た艦娘じゃあ無いからな」

「私は能天気なだけだよ。でも、いじけてるくらいならトレーニングでもして気を晴らした方がいいと思うかな。汗流してる時とか、嫌なこと忘れられるでしょ」

気晴らしが出来るほどの精神状態かどうかはさておき、何か動く

いうのはアリだ。何か夢中になれるものがあれば、少しは心も落ち着けるだろう。曙の釣りや、リコの花弄りみたいな趣味でもあれば。

「私もそう言っているんだ。ヒュウガは道具にされたに過ぎないんだから、何か気を晴らすことでもしてみろとな」

「道具だったとしても、その時の私には意思があつた。私の意思で斬つたんだ。悔いても悔やみきれない」

「これの一点張りだ。気晴らしなんぞ、今のヒュウガには出来んさ」

リコもお手上げ状態らしい。伊勢の物分かりが良過ぎたとも言える。本来ならここまで悩むのが普通なのかも知れない。もつと言つてしまえば、その怒りを晴らす先はもう死んでいる。

これで大淀を倒すなり何なり出来れば、多少は前向きになれたのかもしれない。復讐というあまり良くない感情ではあるものの、前を向くために必要ならばそれでも悪いことでは無いような思えた。

「いっそ腹を切つた方が」

「それはダメ。日向がそれを望んでも私が許さない」

全て言う前に伊勢がそれを遮つた。落ち込むのは仕方ない。だが、それで自分の命を蔑ろにするのは違う。あれだけ明るかった伊勢も、その発言には苛立ちを感じていたようである。

「それが詫びになると思つてるなら間違いだよ。死ぬくらいなら生きて苦しんだ方が詫びになるから。アンタが死んでも誰も喜ばないよ」
「……ならどうしたらいいんだ！」

少し涙目になっていた日向。怒りや悲しみより、困惑の方が強くなっていた。日向は心の傷が深すぎる。真面目すぎるが故に開き直れない。

完成品にはあの薬が使われているわけではないため、禁断症状で幻覚や幻聴があるわけでもない。ただ1人、形のない罪悪感に責められ続ける。誰かに何かを言われることもなく、咎人と後ろ指を指されるわけでもない。ただ自分の意思で立ち直れと言われても、日向には出来ないのだ。

「どう償えと言うんだ！ 元凶の大淀はもう死んだんだろう！ ならこの怒りを何処にぶつければいい！ 何をして報いれればいいと言う

んだ！」

「終わったことなんだから開き直れつつってんの！ 死ぬとか一番の逃げでしようが！」

「それが簡単に出来たら苦労しない！ 私達は死に値するほどの罪を背負ったんだぞ！」

「だからって死んでどうなるのさ！ 死んだら贖罪なんて一瞬で終わるんだよ!?!」

日向が自死を選ぼうとしたことがきっかけで、強烈な姉妹喧嘩に発展。今にも殴り合いを始めそうな言い合いになってしまっている。その姿に三日月が少し怯えてしまったので、私が盾になるように前に出る。

「どちらの間違ってないから、少し落ち着け」

「この分からず屋！」

「お前が軽過ぎるんだ！」

リコが溜息を吐きながら仲裁する。どちらの気持ちもわからなくもない。それだけ重い罪を押し付けられたのだ。伊勢の考えている長いスパンで償うことも、日向の考えている命を捧げることで償うことも、間違っちゃいけないのだと思う。人間は何人も殺したら死を以て償うというのものもあるらしいし、日向の選択も無くは無い。

だが、私としては伊勢側につきたい。命を落とす理由なんて何処にも無い。日向が本当に自分の意思でやっていたのなら、自死どころか私達の誰かがあの戦場で葬っている。洗脳された結果なのは火を見るより明らかなのだから、私達も救ったのだ。

「ヒュウガ、お前は考えが浅い。せめて3日くらいは考えてみる。1人でじゃなく、施設の連中とだ。幸い、施設にはカウンセリングに長けた艦娘がいる。そいつに話を聞いてもらえ」

間違いなく姉のことだ。日向には姉のカウンセリングがよく効くと思う。霊的な部分も組み合わせれば、日向の苦悩も少しずつは解消されてくれるのではないか。

「イセもだ。強がりなのは私でもわかるぞ。ワカバ、お前なら尚わかるな」

「ああ、そういう匂いを感じる。伊504の時と同じだ」

「ならどういふ形でもいい、相談相手を作れ」

溜まっっている鬱憤を聞いてもらうことが一番の癒しだ。ここ最近はやっていないが、私も三日月や曙と一緒に愚痴大会をやったものである。それを伊勢と日向もやればいい。

「それとな、お前らはここに謝らなくてはいけない奴がいるんじゃないか？ お前らが襲って今でも占拠されてる鎮守府に元々いた艦娘がここにはいるぞ」

加賀のことである。記憶を持ったままなので赤城もだ。あの2人が所属していた鎮守府が手瀬鎮守府、つまりは、伊勢と日向が大淀の指示により滅ぼした最後の鎮守府に所属していた者になる。

どう償えばいいかわからないというのなら、まずは身近にいる被害者に対して謝罪をしたらいい。それが償いというものだろう。それだけでも充分気が晴れるはずだ。

「……そうだな、せめて謝罪させてほしい。死ぬならその後だ」

「だから死ぬなって言っただけでしようが！」

「争いを起こすな鬱陶しい」

また始まりそうだったところをリコが即座に制し、私達に一航戦を連れてきてほしいと頼んでくる。2人の仲を元に戻しつつ、さらにはその悶々とする気持ちを少しは晴らせるという最善手だろう。

少し怖いのは赤城。それこそ翔鶴を相手にしていた時のように、伊勢と日向相手にも怒りと憎しみを露わにするかもしれない。そうなった時は全力で止めなくては。

一航戦の2人はここでも一緒に行動しており、今は勝利を噛み締めつつまったりとお茶を嗜んでいた。穏やかな雰囲気醸し出しているところに今回の話を切り出すのは少し気が引けたものの、伊勢と日向の進退に関わること。申し訳ないが協力してもらいたい。

簡単に説明したところ、あまり考えるまでもなく立ち上がった。伊勢と日向と顔を合わせることにまるで抵抗が無いようである。2人とも伊勢とはここで再戦していたわけだが、その時は鎮守府を滅ぼさ

れた恨みなどは無かったように見えた。

「私はいいけれど、赤城さんは大丈夫？」

「加賀さんは心配性ですねえ。私だって成長しています。翔鶴と和解出来た私には、もうどんなことでも許せますよ」

「それならいいけれど……赤城さんは理性のリミッターがおかしなことになっているんですから、衝動に負けて手を上げてしまいそうで怖いんです」

「まさか。文句を言うくらいはしますけど、殴り掛かるようなことはもうしませんよ」

「罵倒もあまり良くないとは思うのだけど」

私もその辺りは心配なのだが、むしろ罵倒した方が日向が立ち直るきっかけになるかもしれない。正直、なるようになれだった。

2人を工廠に連れて行くと、その姿を目にした伊勢と日向はやはり身構えた。特に伊勢はこの2人と殺意を持って戦いもしている。いの一番に謝罪しなくてはいけない相手になるはずだ。

「若葉に呼ばれて来たけれど」

「ああ、ヒュウガがな、罪を償うために死にたいらしい。だが、その前にお前達に謝らせた方がいいと思ってるな」

リコの言葉に加賀は冷ややかな目で日向を見つめた。死を選択したことに対して軽蔑していると云わんばかりであった。

逆に赤城はにこやかなまま。しかし、その笑顔は貼り付いているかのようなだった。赤城も加賀と同様に、死を選択した日向を見下しているかのよう。

「死んで逃げるのなら、謝罪は結構よ」

「そうですねえ。私も同意見です」

冷たい一言。謝罪すらも受け入れられず、日向は絶望に打ち拉がれていた。

「そもそも、貴女の命1つだけでは罪の清算に釣り合わないもの。それで提督達が戻ってくるわけでもあるまいし」

「貴女1人が死んだところで、何も贖罪になりはしませんよ。むしろ、私達が殺したみたいな感じに思ってしまうのでかえって迷惑ですね」

「そうね。むしろここで死のうと思っっているのなら、来栖提督にも迷惑ね」

淡々と責め立てる。日向の選択は間違っているのだと刻み付けるように。

日向はもう煤けていた。謝罪しなくてはいけない相手からも見放され、死ぬ意味すら否定された。虚ろな目で一航戦の言葉を聞いているのみ。

「死ぬくらいなら、私達と共に戦ってほしいわね。もう戦う相手はいないけれど、本来の艦娘の役割を取り戻しなさいな」

「来栖提督なら転属を受け入れてくれますからね。伊勢さんもここで戦っていくつもりなのでは？」

「うん、そのつもり。せつかく治してもらったんだからさ、ここで力を振るうよ。酷いことをやらされた分、今の力は正しいことに使わないとね」

何処までも前向きな伊勢。強がりでも、それが言葉に出来るのなら充分だ。悪夢を見るようなメンタルの状態でも、カウンセリングを受けていけばきつと克服出来る。

対する日向はまだダメだった。罪悪感が強すぎて、何もかもがネガティブになっている。強がりすら言えない。贖罪の方法も否定された。

「日向、私も又聞きだから説得力無いかもしれないけれど、いい言葉を教えてあげる。『道具に罪は無い』のよ」

「私もそれ聞きました。その通りですよ。大淀は貴女達を道具としてしか使っていませんでしたから」

「これ、朝霜が言ったのよ。子供が。大人の貴女がいじけて、子供のあの子が前向きなの。わかる？」

性格の違いはあれど、子供に出来て大人に出来ない道理は無い。日向は道具だとしても意思があったのだと落ち込んでいるが、朝霜を筆頭に大淀に道具にされてきた者は全員が開き直っている。その呪縛から解き放たれたのだ。

日向もその言葉を聞いてほんの少しだけ匂いが変わった。今の言

葉、子供ですら辿り着いたその答えを聞いたことで、前向きになるきつかけを与えられた気がする。

「しゃんとなさい。そうでなければ、貴女の謝罪は必要無いわ。そうで無くても必要無いのだけど」

「死ぬために謝らせてくれなんて、私達は受け入れませんから。時間はたつぷりありますし、もう少し冷静に考えてみることですね」

最後は冷ややかな目はやめ、仲間を受け入れる空気を出しつつ話は終わる。結果的に日向が立ち直ることは無かったが、少しだけでも立ち上がるこの出来る可能性を見出してくれた。

「気晴らしに何か趣味を持つといいですよ。曙さんとか、暇があれば釣りをしているみたいですし、リコさんも花を愛でて過ごしているんですよね」

「ああ、私の数少ない趣味だからな。私の力で咲いてしまう花なのだから、私が面倒を見なくてははいけないだろう」

「私は食べることですね。あ、でも誰かの手を煩わせないように、料理もちよつと勉強してみてるんですよ。雷さんに教えてもらったりして」

先程は否定した気晴らし。だが、今の心境なら少しは何かをしようと思えるかもしれない。

「私はトレーニングでもしようと思つててさ」

「運動もいいですよ。汗を流して気持ちを落ち着ける、いいことです。日向さん、貴女はどうするつもりですか？」

にこやかに日向に振る。この時の赤城の笑みは貼り付いたものではなく、心の底からの笑み。慈悲に溢れた、少し鳳翔にも似たような表情だった。

「……考えさせてくれ。もう、頭の中がグチャグチャだ」

「そうですね。少しいろいろありました。寝るなり何なりして、一度落ち着いてください。ただし、こっそり死んでるか許しませんから」

念まで押された。ここまで言われたら、日向も突然命を絶つようなことはしないはずだ。これでやったらただの逃げ。真面目な日向に

はそんなこと許さないはず。

死んだ後も遺恨を残し続ける大淀は、心底迷惑であるとよくわかった。しかも、それがまだ終わっていない可能性すら出てきている。早くこの事件が終わってほしいものだ。

子供の強さ

自らの命を絶つと考えてしまうほどに落ち込んでいた日向だったが、一航戦の叱咤により少しだけ冷静さを取り戻してくれた。未だに酷くテンションは低いものの、死のうとは考えなくなってくれたはずだ。

その際にかなりキツめの口論をした伊勢だが、日向が少しは思い直してくれたことに多少なり喜んでいようだった。妹がこんなことで思い詰めてこの世を去るだなんて納得が出来ない。それが取り払われただけでも、それなりにテンションが上がる。

「後回しにしていた診察をやらせてもらう。構わないか？」

「……ああ、好きにしてくれ」

少しいざこざがあったが、日向がある程度冷静になったため、飛鳥医師による診察が行なわれた。伊勢が大丈夫だったのだから日向も大丈夫であるという確証はあったが、念のため行なったところでもやはり大丈夫という判断。

だが、飛鳥医師は伊勢とは違った診察結果を言い渡す。入渠による治療は完了しているが、それとは違う方面で引っかかるものがあつたようである。

「伊勢と同じで異常無し……と言いたいところだが、精神的な疲弊が内臓の方に悪影響として出ている。目覚めてほんの少しの時間でコレは、普通では考えられない」

飛鳥医師の目は誤魔化せない。伊勢は強がりとはいえ開き直れている分、日向ほどストレスは感じていないようであるが、日向が抱えるストレスはそれほどまでに重く、そして簡単には取り払えないものであることを実感する。

それを受け、日向はより悔しそうな表情に。自死まで考えてしまった精神的苦痛が、さらに増してしまったかのようだった。艦娘には滅多にない体調不良まで指摘され、不甲斐なさでさらにテンションが下がる。

「自覚症状があるんじゃないか？ 胃が痛むというのが妥当だが」

「……お察しの通りだ。胃がキリキリと痛む」

「ストレス性の急性胃炎だ」

同じくストレスで倒れた曙とはまた違った症状。曙は睡眠障害に陥ったが、日向の場合は内臓に負担がかかってしまった様子。

艦娘で胃炎というのは風邪以上に症例が無いことらしく、ある意味人間に近い証拠とも言える。あまりにも本来の在り方とは違うことをやらされたことに加え、日向の元々の性格もあり、過剰なストレスとなってしまうということだ。

「少しの間は安静にしてくれ。食事も専用のものに替えたほうがいいだろう。こちらで来栖に伝えておくからな」

「……了解した。迷惑をかける」

酷く落ち込んでしまった日向。自ら命を絶とうと考えることは今のところ無くなったようだが、復帰にはまだまだ時間がかかりそうである。メンタルの面でのケアなら、姉に任せよう。必ず成果を出してくれる。

「伊勢、日向の面倒を任せていいだろうか」

「勿論。これでも私の方がお姉さんだからね」

「頼もしい限りだ」

日向は今から一晩は安静にしておくということになった。部屋に籠り、眠るなりボーツとするなりで心を落ち着けることになるだろう。

1人にするのも怖いので、常に伊勢を隣に置いておくということになった。精神的に不安定な者を1人にするなど、自殺行為でしかない。ただでさえ、一度それを選びかけたのだから尚更だ。

「胃が痛いようなら言ってくれ。簡単な薬くらいなら用意出来るからな」

「……ああ」

最後まで元気がなかった。まだ目が覚めて数時間もないのだから無理もない。

そもそも飛鳥医師の顔を見るだけでも、あの時の襲撃を思い出してしまう。故に、診察を受けている時も目を合わせる事が出来なかつ

たようだ。

伊勢もそれには気付いていたようだが、何も口に出さなかった。今は何を言ってもストレスに繋がる。あれだけの口喧嘩をしたものの、やはり日向は伊勢にとっては可愛い妹、なるべく負担をかけないように動いてくれている。

「部屋についてはすぐに来栖に用意してもらおう。栄養失調ではないから点滴とかは要らないな。とりあえず、まずはグツスリ眠ることだ」

もう日向は言葉なく、首を小さく縦に振るだけだった。

夕食前、来栖提督は下呂大将に、救出した3人が目を覚ましたこと、そして綾波や伊勢から聞いた大淀と医療研究者のことについて連絡した。その時には鎮守府にも帰投し終わっており、大淀の亡骸の調査も現在進めているらしい。

来栖提督からの話も考慮して、次の段階に進めるとのこと。当たり前だが鎮守府の奪還は最優先事項だ。今は医療研究者2人が何かをしていることだろう。それを食い止めるためにも、早急な襲撃が必要だろう。

「今は状況確認中だが、手瀬鎮守府襲撃に駆り出される可能性もある。そんな時やよろしく頼むぜエ」

万が一のことを考え、気は引き締めておく。大淀が倒れたところで、あちらに防衛線が無いわけでも無いだろう。綾波のおかげで、急速に練度を上げる装置というものがあることもわかつていことだし、それこそ練度限界、下手したらケツコンまでした洗脳済みの艦娘が敵に回る可能性だってあるのだ。

今までのことを考えれば、必要以上に警戒すべきだ。それでストレスを溜めていては意味がないのだが。

「それも今すぐってわけじゃねエ。今日からはいつも通りで構わねエからな。夜間警備の担当はしっかりやれよ。襲撃がもう無エからって気イ抜くんじゃねエぞ」

来栖鎮守府はいち早く日常に戻る。私達も施設さえ修復されれば

平和な日常だ。とはいえ、手瀬鎮守府襲撃が完了するまでは気を抜くわけにはいかなかった。

「伊勢と日向は空き部屋を使ってるが、綾波はどうしてるんだっけか」
「曙ちゃんと相部屋にさせてもらいましたあ〜」

「んなら良し」

救出された3人も部屋は与えられたようである。伊勢と日向は先程の診察の時に聞いていたが、綾波はメンタルケアのために曙の部屋に入ることにしたらしい。やはり実妹と寝食共にすることが一番心落ち着けるようである。曙も態度は煙たがっていたが、別に嫌っているわけでも無さそうであった。

「ここにやいないが、日向の飯は医療食にしてくれって飛鳥から聞いている。後から誰か持って行ってやってくれや」

「ならば、わらわが運ぼうぞ。例の件のついでじゃ」

「悪いな初春、よろしく頼むぜエ」

伊勢と日向は予定通り相部屋。体調不良で休んでいる日向を伊勢が看病している。食事も当然別室で摂ることになるため、それは姉が運ぶと挙手。ついでにカウンセリングもするらしい。

姉のカウンセリングも行なわれ、必要以上にケアされることになるだろう。日向だけでなく、伊勢にも姉の力は必要だ。強がっているとすることは、その分精神に負担がかかっているはずだ。

「んじゃあ、今日の業務はこれで終わりだ。みんな、お疲れさん。夜の奴らは今のうちに休んでおけよオ」

これで解散。私達は自由な時間となる。今日一日は大分ゆつくりさせてもらったが、そろそろ何か動きたいところである。今までが今までだったからか、ジツとしているのも落ち着かない。三日月とゆつくりしてはいたもの、お互いに手持ち無沙汰だったイメージ。流石に昼間から盛るわけにもいかないし。

夜、風呂に入る前に姉と伊勢が部屋から出てくるのが見えた。少し疲れた顔をしていたが、満足げな顔でもあった。

運んだ夕食の食器も、全て空になっていたため、食欲が無いという

わけでは無いようである。それは上々。食事が喉を通らないということが無いようで何より。空腹では治るものも治らない。

「おお、若葉に三日月、今から風呂かえ？」

「ああ、そんなところだ。伊勢は日向についてなくていいのか？」

「さつき寝ちやっただよ。初春にいろいろと聞いてもらえたのがよかったみたい。先生がよく寝られる薬も用意してきてくれたみたいでね」

睡眠導入剤も用意されていたようだ。悪夢を見るかもしれないが、全く眠れないよりは回復に努められるだろう。ちゃんと食べ、ちゃんと寝ることが健康への近道である。

「日向は重く考えすぎなのじゃ。それが悪いとは言わぬが」

「重くも考えるだろうさ。それだけのことをやらされたんだろう？」

「まあ……そうだねえ。詳しくは話さないけど、結構エグいことやらされたかな」

空の食器を片付けた後、2人も一緒に風呂へ。三日月が伊勢に対してまだ慣れていないものの、こういうときは裸の付き合い。日向もそうであるが、伊勢だつてケアが必要な者。日向はよく休むことでまず身体を回復し、伊勢は交流で心を回復する。

伊勢と日向だけにしておくと、負のスパイラルに陥りかねない。故に、こういうときに伊勢とは仲良くなっておくことがいいと思う。

「おお、初霜よ。お主も風呂かえ？」

「うん！ おねえちゃんはおしごとおわたなの？」

「うむ。一緒に入ろうかの」

風呂で初霜と合流。如月が連れてきてくれていたようだ。だが、その姿を見て伊勢の匂いが変わったのがすぐにわかる。

洗脳されていたとはいえ、障害で幼児退行している無邪気な初霜を嬉々として殺そうとしたのは他ならぬ伊勢。それを庇った姉を後ろから斬ったのも伊勢なのだ。今までもいろいろあったが、姉と初霜の組み合わせは、伊勢の罪悪感を大きく刺激する。

「あ」

伊勢の姿を見て、じつと見つめる初霜。初霜だつて、伊勢に襲われ

た時の記憶は持っているはず。昨日の襲撃のときは姉の機転で眠らされていたからいいものの、施設襲撃ではモロに攻撃を受けている。

元凶を目の当たりにして、初霜がどういう反応をするかは想像できなかつた。泣き叫ぶかもしれないし、怒り狂うかもしれない。死という概念がわかつていないため、姉が伊勢に殺されたという事実はまだ理解していないものの、姉を昏睡状態に陥れたのは理解している。

だが、初霜の伊勢に対する反応は予想だにしているものだった。

「いせさん！ もうだいじょーぶなの!？」

「えっ、あ、うん、もう大丈夫」

「そっかー。よかったね！」

ニパツと可愛らしい笑みを伊勢に向けた。むしろ伊勢の方が動揺で硬直してしまう。

伊勢の精神状況は誰にでもわかつた。初霜から責められることを覚悟し、最悪攻撃すらされるのではと考えていた。それでも、初霜は伊勢を受け入れている。

「あの時の者は狂わされておつたと、先んじて初霜には説明してある。今はもう正気に戻っておるともな」

「なら、初霜はそれだけで受け入れたのか」

「うむ」

いくらなんでもメンタルが強すぎやしないか。幼児退行でいろいろな心の部分がリセットされているとはいえ、身近な者だけでなく自分も襲われたというのに、ここまであっさりと許せるというのは、正直驚きが隠せない。

子供心にも怒りや憎しみがあってもおかしくないとと思う。初霜にはそれが全く無い。単純に素直で良い子というわけでも無いだろうに。

「あたまがおかしくされてたつてきいたよ。ほんとうにだいじょーぶ?」

「うん、本当に大丈夫。お医者さんのおかげでこの通り！ 心配してくれてありがとね」

「えへー、どういたしまして!」

笑顔を絶やささない初霜に、逆に伊勢が泣きそうになっていた。強がりが決壊しかけている。だが、初霜の前にいる手前、崩れるわけにもいかない。今まで通りを装い、初霜を撫でる。それには初霜も素直に喜んでいた。

「私もお風呂だからね、一緒に入ろっか」

「うん！ はつしも、おせなかながしてあげる！」

「あはは、それは嬉しいね。お願いしようかな」

誰とでも仲良くなれる初霜のおかげで、救われているものは沢山いる。最高の癒し効果。

「どうしたのわかば？」

「いや、初霜はすごいなと思ってた」

「はつしもすごい？」

「ああ、すごいすごい」

無邪気な初霜を見てみると私達も癒される。見る者が見れば痛々しいとも思うのだろうが、それが心の支えになる者もいる。伊勢がそれだ。

今の伊勢は先程以上に強い心になっている。強がりではなく、本当に開き直れたような雰囲気。そんな中、ポツリと呟いた。

「私が襲った子でさ、生きてるのってすごく少ないんだ。だから、もし生きてたとしても、絶対私のことを恨んでるって、そう思ってた。死んでからだって恨んでるよ。呪われてもおかしくないことを私はやらされてた」

「……そういう風に思う奴は多いだろうな」

「だけど、初霜は私に笑ってくれた。それに初春がさ、もののけだっけ？それが私のことを許してくれてるって言ってくれたんだ。仕方のないことだったってね」

姉の能力、靈感で伊勢の周りに漂う殺された者の霊の様子を言葉にして伝えたようだ。伊勢に殺されたが、元凶がわかっていた分、ものけ達も伊勢のことは許してくれているらしい。

伊勢は救われた。もう折れることもない。

「償うためにも、私はみんなのために戦うよ。日向もそう言ってくれ

ると嬉しいな」

「だな」

伊勢が立ち直れたのだ。日向だっけと立ち直れる。時間はかかるかもしれないが、ゆっくりと前を向いてほしい。

不死の力

初霜との交流で、伊勢はほぼ立ち直ったと言っても過言ではないくらいにまで回復した。自らが傷付けたものに明るく迎え入れられたこと、さらには姉のカウンセリングにより、殺してしまったものからも許してもらっていると伝えられたことで、罪悪感が多少は晴れたようだ。

残るは日向だが、ストレスから来ている体調不良も相まって、今は安静にするべきであると飛鳥医師からの通達を受け、今は与えられた部屋で伊勢の看護の下で眠っている。焦らず、今は回復に努めてもらいたい。

「日向ならきつと立ち直れるよ」

風呂に浸かりながら伊勢が自信満々に言う。実の姉だからこそ、わかる部分もあるだろう。日向の心は自分より強いと太鼓判を押していた。今はあまりのことで考えが纏まらないだけ。カウンセリングも受けているのだから、ちゃんと落ち着いてくれると。

「まだ戦いは終わってないかもしれないからね。ちゃんと自分の手で決着をつけたいはず。日向はそういうので奮い立つ奴だから」

「それならいいが」

「大丈夫大丈夫。今は混乱してるだけだし、考えすぎなんだよ。しっかり落ち着いて考えれば日向だってすぐにわかってくれるからさ」

謎の自信ではあるものの、出来ることならそう思いたい。ずっと塞ぎ込んでいても非生産的だ。伊勢から聞く限りは、それも日向が自身を許せなくなる要因の一つになってしまう。

そもそも日向はネガティブになるなんてまず無いような性格らしい。それがここまで崩れているのだから、伊勢も心配だろうに。

「私は日向を信じてるからね」

「……そうだな。信じてやるのが一番だ」

伊勢がそう言うのなら、みんなで信じてやればいい。そもそも誰も日向のことを見捨てるなんて思っていないし、諦めてもいない。治るまで面倒は見ると、それで無くても親身に付き合っていく。

「ところですよ」

「何だ？」

「ホントに仲良いんだね」

私、若葉と三日月の距離を見てニヨニヨと意地が悪そうな笑みを浮かべる伊勢。開き直って立ち直ったというのはいいことだが、あまり三日月を弄るのはやめていただきたい。

翌朝。下呂大将から連絡があったということで、朝食前に伊勢と日向以外の全員が会議室に集まる。これで戦いは終わりだという宣言が出されて歓声が上がればよかったのだが、来栖提督や飛鳥医師の表情を見る限り、そうではないとわかる。

空気が重々しくなる中、来栖提督が重い口を開く。

「大淀の亡骸の調査が完了したと、大将から連絡があった。結論から言や、まだ戦いは終わらねエらしい」

やっぱり、と深い溜息が吐かれた。かくいう私も、少し気分がどんよりしている。やつとのことで大淀を倒せたと思っていたのに、まだ終わらないと言われてしまったら、嫌でも気分は悪くなるもの。

「大淀の頭から、マイクロチップが見つかったらしい」

全く予想していなかった言葉だった。艦装の違法改造やリコの花を使った麻薬による洗脳、深海の体液の侵食など、海の者に紐付いたものばかりだったものが、突然今までに無かった科学的なアプローチ。明らかに人間の手が加えられたという感じである。

「それを取り出すためには頭を切り開くしかなく、正直抵抗があるって話だ」

丁重に吊ってやりたいと言っているのに、頭を搔つ捌くのは流石に躊躇うだろう。亡骸は入渠させても元に戻らないのだから、切ったらおしまい。グチャグチャのまま吊うことになる。

だが、ここで少し話が変わる。それを調査したのが下呂大将であるというのがミソ。今まで出てきた内容、例えば、伊勢の言っていた医療研究者の言葉や綾波が受けたという強制練度上昇装置、あとは私の伝えた大淀の負け惜しみのような匂いのことまで突き合わせて、1つ

の憶測に辿り着いたそうだ。

だが、それはかなり突拍子もないことだった。

「敵はだな、大淀のクローンが作り出せているんじゃないやねエかって話だ」
重苦しい空気の中出たのがそれ。あまりにもお門違いな言葉で、騒
ついてしまう。現実味のない言葉に、若干混乱する。それにクロー
ン、つまりは複製なわけだが、私達に馴染みがないわけではない。
「クローンつつつてもな、艦娘が実際似たようなもんじゃねエか。自
分達でも自覚があるとは思うけどよ」

機械的な言われ方をするのはあまり好きではないものの、来栖提督
の言いたいことは理解出来る。

艦娘も深海棲艦も、同じ顔の別個体がいることが当たり前な種族
だ。私以外にも若葉はいるし、三日月以外の三日月もいる。深海棲艦
はより顕著だ。同じタイプの方が何体も並んだりする。

それも一種のクローンみたいなものだろう。生まれたばかりのと
きは、環境は違えど同じ指針を持った何もかもが同じ存在。それが成
長した環境で個体差が生まれていく。私と同じ若葉なんて何処にも
いない。

だが、下呂大将の提唱した憶測であるクローンは、おそらく全く同
じものという意味だろう。私達が倒した大淀と全く同じもの。つま
り、この世の全てを滅ぼさんと行動する大淀である。

「全く同じ奴を作ることで、擬似的な不死を再現したつつつた。大
淀は死んでも、その遺志を継ぐ新しい大淀がもう生まれてるって話
だ。頭ん中も練度も何もかもが同じ後継者がいるのなら、そりゃあ死
なない艦娘つつつてもいいかもしれねエ」

医療研究者の言う『目的は成就した』というのはそういう意味か。
死んだところで全てが同じ2人目が生み出せるのだから、記憶も経験
もそのままの状態で続投。ある意味死んでいないようなもの。

綾波が受けた強制練度上昇装置は、死んだものの練度まで上げるた
めに必要だったわけだ。ケツコン済みなら指輪を与えてさらに上昇
させる。特殊な技能も記憶があるのなら再現出来る。

「滅茶苦茶すぎやしないか」

「お前が言えたことじゃねエだろ」

飛鳥医師の蘇生は正直それよりもおかしな神秘。神の所業と言えるべき禁忌の御業だ。だが、クローン技術に関しては艦娘であればやろうと思えばやれる。記憶さえしつかりと引き継ぐことが出来れば。

そこで頭の中のチップというやつなのだろう。大淀の死ぬ瞬間までの記憶が、敵の医療研究者の元へと全て送られていたとしたなら、新たに作り出された大淀にその記憶を入れ、練度を上げてしまえば完成。

良くも悪くも艦娘は兵器。機械的な部分もある。人間と同様な思考回路も、文字通り回路なのかもしれない。人間よりも分析がしやすく、データに変換して転送なり保存なり出来る。

私達の目の前で深海棲艦化までした最終的な大淀とは違うかもしれないが、その前の状態であつてもおかしくない。

「あの、とても嫌なことを想像したのですが」

鳳翔がおおずと挙手。

「意見があるなら何でも言ってくれ」

「そういうものが作れるということは……その、大淀さんのみの部隊というのも」

無くはない話である。クローンが作れるということは、大淀が複数人いてもおかしくないということ。何かに制限があれば話は別だが、自由に作れるのならそれこそ、あの大淀が10人20人と湧いて出てくる可能性だつてある。

悪夢だつた。あんなものが何人もいて、倒しても倒しても現れるだなんて、考えただけでも気が滅入りそう。

「まあ無くは無エだろうが、それはあまり考えなくてもいいと思うぜエ」

「何故です？」

「大淀だからだ。アイツは特殊な方法でないと建造が出来ねエ。普通の鎮守府じゃあ不可能だ。ありやあ大本営の限られた部署で、特注の建造ドックを使つて、それなりに多い資源と時間を使つてようやく出来るような代物だから。ドロップだつて発見例がかなり少ねエつ

てくらいのレア艦娘だ」

それを聞いて少し安心した。とはいえ2代目となる1体は作られている可能性は高いだろうから安心は出来ない。その辺りの諸々を無視して、大淀の建造を執り行っているのではなからうか。

数多く作ることは無理でも、1体2体なら作れる。なんて酷い状況。よりよってあんな奴を擬似的な不死にするとは。

「早いところ襲撃しねエと、さらに次の代が出来ちまう」

「無限に戦う羽目になるとか、堪ったものじゃないな」

「ああ。継戦能力の最終進化系だつて大将も言つてたぜエ。とはいえ、それは建造出来ることが大前提みただけだな」

それすらも覆されている可能性があるのだから笑えない。どんな艦娘でも建造出来るようになっていたら、それこそ不死の軍勢になる。

飛鳥医師の時から目指されていた、強敵と戦い惜しくも沈んだ艦娘をその知識を残したままに再び戦場に戻すという目的がある意味達成されたということ。目的が成就されたというのはそういう意味だ。「なら何故あの時、死を恐怖したんだろうか。次があるのなら、アイツなら笑いながら中指を立てそうなものだが」

「そりゃあ、あくまでも擬似的な不死だからだろうよ」

私の疑問に来栖提督がさかさ答えてくれた。

私達にとつては不死、殺しても殺しても同じ大淀と戦う羽目になるわけだが、あの大淀は1人しかない。同じ顔、戦闘力、記憶を持っているとしても、それは初代の大淀とは別人なのだ。初代は恐怖の中死に、2代目がそれを継いで動き出す。それを知っていたとしても、死にたくないと思えるのは普通。

ただでさえ、大淀は何度も死んだことが怒りと憎しみを深くする原因になっている。艦として沈み、深海棲艦として殲滅され、艦娘としても蔑ろにされ、そしてまた死ぬ。恐怖しない理由など何処にも無かった。

「ともかく、大淀はまだ死んでないと考えた方がいい。下手したら、前よりも手強くなつてる可能性すらありやがる」

こちらの手の内は全てバレているようなもの。それを突破するために準備してくるのも当然のこと。

例えば、所属違いや陸上施設にも効果がある艦隊司令部。抗う術も無く、私ですら抵抗出来ずに支配が行き届いてしまうくらいに強力にされているかもしれない。そんなものを繰り返し出されたら本当に終わりだ。それに、次の大淀は慢心も捨てておらず。殲滅すると思えば、どんな相手でも殺すように立ち回ってくるだろう。

「襲撃計画はまた始まった。大将が今、その対策を考えている。お呼びがかかるまでは待機にやなるが、近日中にまた襲撃になるだろう。だがな、俺らだって黙って待つてるわけじゃ無エ。やれることは全部やる。艀装のフル改修と、出来る限りの訓練。あとは、秘密兵器の開発だ」

ニヤリと笑う来栖提督。秘密兵器だけあり今は公開はしないらしいが、完成したら戦場で戦いやすくなるものを明石が開発中なのだろう。

襲撃までに間に合わせるために今はそれに専念する。そのため、摩耶を筆頭とした施設の工廠組が艀装整備を買って出た。鎮守府の運営を止めない形で、最大の戦績を望めるようにみんなが動き出す。

「ぬか喜びになっちまったが、みんなよろしく頼む。今度こそ本当に終わらせるぞ」

平和はこの時を以て終わりを告げ、また緊張感ある日々が戻ってきてしまった。

朝食後、一旦あてがわれた部屋に戻り、三日月と一緒に過ごす。戦いが終わっていないと知り、三日月が少しだけ不安定になっていたからだ。

元凶を倒したことでスッキリしたはずなのに、まだ生きていると聞いたことで、三日月の負の感情が少し強めに湧き上がっていることがわかったので、2人きりで落ち着く。

「大丈夫だ三日月。また倒せばいいだけだ。若葉^{ホク}達は一度勝っているんだから、また勝てばいい」

口先だけでも強気に行かなくては、心が折れてしまう可能性だってある。倒せど倒せど蘇ってくるだなんて、身体より先に心が参ってしまっただろう。

「……そうよね。また倒せばいいだけの話よね」

「ああ、そうだ」

「でも……また支配されて若葉に牙を剥くようなことがあったら……」

それを心配していたのか。確かにそれは私も心配だ。次こそは私にすら一瞬で効いてしまうような代物を用意される可能性がある。そうなったら、愛する三日月に嫌悪感を覚えるという想像もしたくないことが起こってしまう。

ならば、万が一のことがあっても立ち直れるように、今のうちから温もりを感じあっておけばいい。幸い、お互いそういう関係なのだから。

「三日月、若葉が牙を剥く可能性だってある。そうなったらきつと心が折れるだろう。その時は慰めてくれ」

「……うん、お互い様だったね」

「ああ。お互い様だ。だから、勝とうな」

起こらないかもしれないことに怯えていても仕方がない。今はこれでもいいのだ。温もりを感じつつ、勝利を誓い合う。

戦いの幕は再び切って落とされた。

悩める鬼神

下呂大将の調査と推理から、大淀はまだ死んでいない、というよりは、死んだものの全く同じクローンが作られているのではないかという憶測が立った。大淀の協力者である医療研究者が辿り着いた擬似的な不死により、あの記憶と力を持った新たな大淀が生み出されているとのこと。最悪な場合、同じ思想を持つ大淀が複数人作られており、それが一斉に襲いかかってくる可能性まで示唆された。正直、堪ったものではない。

終わったと思っていた戦いの幕は、再び切って落とされた。元々予定していた鎮守府襲撃もまた計画が練り直されることになる。

そんな戦況になってしまったため、施設の復旧が終わっても少しの間は来栖鎮守府で世話になることになった。復旧自体は今日中に終わり明日の朝戻る予定だったのだが、こうなっては仕方あるまい。

今戻ってまた襲撃を受けるようなことがあっては困る。それに、わざわざ戦力を減らす必要もない。言い方は悪いが、大怪我をしてもここには入渠ドックがある。死者さえ出さなければまだマシ。

「1日1回くらいは様子を見に行くくらいはしたいな」

「だな。遠征って形で施設を見に行くくらいはした方がいい」

飛鳥医師と来栖提督が施設のことについて話している。本来の居場所なのだから、飛鳥医師も愛着があるようである。

無人の施設をまた破壊しに来るなどという不毛なことをする可能性もあるため、毎日確認だけはしに帰った方がいいかもしれない。修復が終わったら職人妖精を迎えに行く必要もあるだろう。

「そーいや、今施設の復旧してる妖精、一部は有明ってとこの妖精なんじゃ無かったか？」

「……そうだった。事が済んだら送り届けないといけないな」

真夜中の遠征で有明鎮守府に向かい、そこから職人妖精を貸し出してもらったおかげで、襲撃を受けた施設の一部をいち早く修復することが出来たのだ。蘇生処置も職人妖精がいなかったら不可能だった。あの時咄嗟に閃いてくれた有明提督に感謝。

手瀬鎮守府襲撃にも援軍として参加してくれると表明してくれるので、現状も説明するために有明鎮守府にはまた行きたいところ。

「有明鎮守府までの航路は若葉と三日月が知ってたな」

「一応は、だが。大発に乗せられて向かったから、自信があまり無い」
「私もです。夜でしたし」

あれが昼の遠征ならまだマシだったかもしれないが、真夜中だ。ただでさえ周囲に何も無い海を進むのは難しいというのに、道が曖昧だと余計に難しいところだ。まああそこから利根と筑摩は真つ直ぐ施設にまで来ているのだが。

場所さえちやんとわかれば、面識のある私達が向かうのがベストな気はする。睦月達が元に戻っているかが気になるところではあるし。「襲撃計画がどうなるかわからねエが、明日の朝に職人妖精を迎えに行ってもらっていいか。正確な場所は大将から聞いておくからよ」

「というか、加賀も面識があるはずだ。道案内も出来るかもしれない」「メンバーはそちらで決めてくれればいい。若葉^{ホク}と三日月、加賀が確定であればそれでいいかな。赤城は難しいかもしれないが」

流星に事情を知っているとはいえ、空母棲姫が鎮守府を訪ねるのは些か憚られる。その辺りは来栖提督に決めてもらおう。

そうなると今日一日は鎮守府で待機。各々自由に過ごすことになる。摩耶は工廠で艤装の整備をし、雷は相変わらず鳳翔から料理を習う。襲撃の時は近いが、普段と変わらない1日を過ごそうとした。その方が心が落ち着く。

心身共に落ち着いた状態で事にあたるのが勝利への近道だ。いくら切羽詰まった状況でも、普段通りを貫く。たったそれだけでストレスも薄れるものである。

訓練に勤しむ者だっている。曙がその類だ。ジツとしている方がストレスが溜まると考えているようだ。いつもなら釣りをしているのだろうが、まず釣具が全滅してしまったことでそれが叶わぬものとなり、また余裕があるときに妖精に作ってもらったもののようなのだが今

は艤装の整備で忙しいために無理が言えない。

故に、曙の出来ることは訓練なり演習なりであった。相手は実の姉、綾波。

「さすが姉貴だわ。相手にとって不足ないわね」

「そう〜？」

綾波は私と同じ超高速戦闘を仕込まれた、私対策の完成品だった。結果的には曙含めた4人がかり、さらに呂500が曙を救出したことではほぼ無傷で対処出来たが、今は当然1対1。どうしても曙が押されているようである。

「負けたら交代だぞー」

「わかってるわよ。次は負けないから」

それを茶化すのは朝霜。朝霜も綾波と戦った1人であり、今よりも強くなりたいたいと綾波との演習を望んでいた。今の言葉からして曙はそれなりに負けており、朝霜もそこそこやられている模様。

「休憩させてもらえませんかあ〜」

綾波が音を上げたということは、曙と朝霜は負けては交代を繰り返しているが、綾波は戦いつばなし。妹の相手をするということでは最初はノリノリだったみたいだが、朝霜も加わったことで結果的に大きく消耗させられたようである。

一切疲れを見せない曙も、姉の懇願には折れた。仕方ないと休憩に入ったようである。曙は自分のスタミナが普通ではないことを自覚しているはずなのだが、こういう時は割と相手のことを考えずにガンガン行く。

「ひっきりなしに戦うのは、いくら綾波でも疲れますよお〜」

「意外と体力無いのね」

「お前がありすぎなんだっつーの。あたいの時も息ひとつ切らさなかつたよな」

朝霜は自分が洗脳されていた時のことも平気で話題に出す。それだけ開き直れているというのは流石。

だが、そういう話題になると綾波が少し落ち込んだような表情になる。つい先日、治療により洗脳を外してもらえたわけだが、綾波はま

だそこまで開き直れていないのかもしれない。

「おう、若葉に三日月じゃん。暇なのか？」

「暇といえば暇だな」

「今も適当にしてたくらいですしね」

朝霜に見つかった。別に嫌というわけではないが、明らかにこちらをターゲットにしたような匂いがした。綾波との演習が休憩になったことで、何やら燻っているような雰囲気。

なんだかんだ朝霜も救出されてからも戦うことを好んでいるイメージ。喧嘩っ早いのは素の性格。だから風雲が苦勞しているわけ。

「不完全燃焼なんだ。三日月相手してくれよ」

「若葉ではなく私ですか」

「あたいは三日月にもやられてつからな。リベンジだリベンジ」

これも洗脳されていた時のこと。三日月の侵食が進み、リミッター解除の限界が来るまでは、朝霜もいいようにされていた。それをまだ覚えていたようで、リベンジしたいと挑んだようである。今はお互いにあの時以上の力を得たはずだが、果たしてどうなるか。

チラリと私の方を見たが、行けばいいと頷く。三日月自身がやりたそうにしているわけではなかったが、朝霜のやる気に満ちた目に負けた。今ならどうだろう、互角くらいだろうか。

「リミッター外せよな。容赦なくこいよ」

「わかりました」

三日月が準備を始めたところで、綾波が大きく息を吐いた。個人演習に参加していたことで結構疲れていたようで、汗の匂いも少し強め。

だが、それ以上に負の感情が強かった。朝霜の前向きさが、綾波には少しだけプレッシャーになっているような感じ。それを表に出さないようにしている。

「姉貴、若葉には何も隠せないわよ」

「……話には聞いてましたけど、ワンちゃんみたいな鼻ってちよつとインチキじゃないですかあ〜？」

「たまたま手に入れたものだ。文句を言われても困る」

先に察したのは曙。昨日の目覚めた時から、曙は常に綾波の側にいたそう。故に、ある程度は何を考えているかはわかるらしい。流石五三駆の頭脳派、表情から感情を読み解くくらいはやってのける。

「……綾波は、皆さんの敵だったじゃないですか。頭をおかしくされて、いろいろと弄られて」

普段の間延びした話し方は何処かに行き、ポツリポツリと話し出す。

「あの時の気持ち、全部覚えてます。皆さんの施設を壊した時、綾波はすごく歪んだ悦びに打ち震えてました。壊す事が楽しくて気持ちいい、もつと壊したい、壊して大淀さんに貢献したいって、ずっと思っていました」

言葉にしていく内に、負の感情の匂いはより強くなっていく。自分が破壊活動を楽しんでいたことへの悲しみ、物を壊して快感を得ていたことへの怒り、人を殺すことに抵抗が無かったことへの恐怖。

「洗脳されていたって教えられても……綾波の中には本当にそういう気持ちがあったんじゃないかなって、思っちゃうんです。壊すことを楽しむ綾波が、今でも綾波の中にいるんじゃないかって」

全て大淀に無理矢理植え付けられた感情なのだが、治療されるまではそれが本心になってしまっていたことが問題である。実際にその感情をもって悪を成し、その時ばかりはそれが正しいことであると信じてしまっていた。

「綾波って渾名があるんです。知ってますか？」

「いや、そういうことには疎い」

『『ソロモンの鬼神』……鬼です。綾波は鬼なんですって』

こんなおっとりした綾波が鬼。まるでそうは見えない。だが、実際に綾波は鬼のように強いということでは有名なのだそう。

通称を持つ艦娘は何人かいるらしい。狼だとか、悪夢だとか。綾波もそのうちの1人ということみたいだが、今までやらされてきたことが悪い形で通称と重なってしまった。

「確かに鬼でしたよね。罪もない施設を壊して、略奪……まではしま

せんでしたけど、殺戮の限りを尽くすなんて。そしてそれを楽しんでいた。本当に鬼じゃないですか」

昨日の段階で曙が、誰も綾波のことを責めていない、あれは仕方のないことだということに慰めてはいたらしい。洗脳されていたのだし、そもそも綾波は誰も殺していない。だから、開き直れると叱咤したそうだ。だから、綾波もその件については開き直っていた。大淀にやらされた罪に関しては自分のせいではないと、ちゃんと思うことは出来ていた。

だが、鬼という異名を持っているせいで、変に噛み合ってしまった、持ってしまった感情を振り払えていなかった。真の自分は、破壊を楽しむような極悪人なのではないかと思いついて悩むに至っている。

「あのさ、姉貴」

「なあに？」

「馬鹿じゃないの」

その綾波の悩みを、曙は一刀両断にした。

「そんなことで悩んでたわけ？ ああ、だから開き直れてる朝霜を見て何か変な顔してたわけね。同じ洗脳された奴なのに、今明るく笑ってられるのが羨ましいわけだ」

「……そうだけど、そうだけとお」

「もっかい言うわ。馬鹿じゃないの」

追撃。流石に2回も言われると綾波も憤慨する。

「そ、そんな風に言わなくなったっていいでしょお」

「そもそも本当に鬼なら後悔なんてしないわよ。そんな感情持つてる時点で、姉貴は鬼とは程遠いわ」

確かに。破壊衝動を心の中に秘めているにしても、綾波はそのことを激しく悔やんでいる。自分の罪ではないのに、心の底から。

曙の言う通り、今の綾波は鬼とは程遠い存在だ。行ないを悔やむことが出来るのなら、それはもう鬼じゃない。立ち直れる範囲にいる。「まあ戦闘中だけなら鬼みたいだけどさ。演習でも容赦なく急所狙うわよね」

「それは、まあ、うん、攻撃は最大の防御というか……反撃されなければ

ば綾波が痛い思いしなくて済むのでえ」

「そういうとこよ。でも、そんなの他にもいるわ。ほら、三日月見てみなさいよ」

朝霜と演習中の三日月を指差す。

リミッターを外すことを要求されたので、今の三日月は無感情。淡々と朝霜を撃ち抜くように砲撃を決めている。

「くっそ、本当に隙が無えんでやんのー！」

「貴女は隙だらけですね。動きが単調すぎる」

「うつせえー！」

動いた先で脚を狙い撃ち、俊足で近付いたところを回避してからの腹に蹴り、回避したところに合わせてヘッドショット。それ以外でも容赦なく回避しづらい嫌らしい場所ばかりを狙う。水鉄砲だからいいものの、朝霜は頭からずぶ濡れである。

三日月の方が余程鬼だった。一切の躊躇なく、演習でもアレ。そういう感情を取り払っているのだから当たり前なのだが、見ていて朝霜が可哀想に思える。

「似たような奴なんて幾らでもいるってことよ。悩んでるのが馬鹿らしくならない？」

「……あはは、そうかもしれないませんねえ〜」

負の感情の匂いが薄れた。自分の悩みがちっぽけなものだと自覚出来たらしい。

私は本当に必要だったのだろうか。綾波が話し出すきっかけになれたくらいだ。隠し事が出来ないというその特性が本音を引き出せたのなら、まだ意味はあったかもしれないが。

「だから、さっさと開き直んなさいよ。ウジウジされたらこっちが滅入るわ」

「うん、ちよつと気分が楽になりましたあ〜」

「何も言わないより、全部ぶちまけた方が楽よ。ストレス溜めてもいいこと何て無いんだから」

実体験が伴う、説得力のある言葉である。

「愚痴大会ならいつでも開くから、姉貴も参加しなさいよ。そういう

の溜め込むタイプみたいだし」

「考えておきませす」

話し出す前と比べると、充分に明るい顔になった。やはり、溜め込まずに全部口に出すに限る。

綾波はこれで大丈夫だろう。折れそうになっても曙がいる。

兆しの雲

昼食を終え、午後からも自由に過ごしている私、若葉。やることに無いといえば嘘になるが、いつ襲撃に向かうことが決まってもいいように、万全な態勢を維持し続ける必要がある。

一番怖いのは、この準備期間中にまた襲撃を受けること。前回も前々回もそうだったのだから、あちらの準備が整っていたら私達のことなんて待っていてくれないだろう。こちらだってそうなのだから当然だ。

「せっかく匿ってもらっているんだもの。私達が近海の哨戒をするわ」

それを買って出たのは加賀を含んだ施設の空母隊。幸い、あの時の戦いで誰も艀装が破壊されておらず、すぐにでも出撃出来る状況であるため、恩を返すためにやらせてほしいと。

「そいつア助かる。少ない人数で広い範囲が見回れるのはありがたいエ」

「赤城さんと翔鶴姉は私達の倍くらい飛ばせるもんねえ」

来栖提督はその気持ちを汲んで、その申し出に快く許可してくれる。施設の空母隊は特に赤城と翔鶴が規格外の艦載機搭載数を持っているため、かなりの広範囲を哨戒することが出来るだろう。全力で出せば、空は真っ黒に染まるレベルだ。

「それ、私達も手伝っていいかな」

そこに名乗りを上げたのは伊勢。少し暗い顔だが日向もフラフラとついてきている。安静にしておかなくてはいけないような体調では無くなったようだが、テンションは低い。伊勢に無理矢理連れてこられた様子。

伊勢日向と戦った時、異常な量の艦載機を発艦していたことを思い出す。あれは大淀によるふざけた改造の成果なので、今あの数を出せるかは知らないが、哨戒機が増えることはありがたいことだろう。

「人が増えることは有り難いわ。貴女達も航空戦隊だものね」

「そうだよ。私達は四航戦！一航戦と五航戦もいるからね。手伝わ

せてよ」

戦艦だが航空戦隊だったらしい。航空戦艦で艦載機も飛ばせるからそういう扱いにもなるのだろうか。確かにあの航空戦はとんでも無かったが。

「伊勢、私はまだやるとは言っていないが」

「助けてもらった恩を返すくらい出来ない？ 日向はそんなに薄情者なのかな？」

伊勢の煽りで、日向がイラツとしたのが手に取るようにわかった。身体は大丈夫になりつつあっても、心は未だにガタガタ。姉のカウンセリングを受けたのは知っているが、それだけではまだ足りないようである。

姉にいろいろと話して、さらには薬の力を使ってぐつすりと眠れるくらいには落ち着いたとは聞いていたが、寝て起きたらまた考えすぎているようだった。簡単には振り払えないのはわかるが、泥沼に嵌っては姉に引き揚げてもらおうという毎日を繰り返すだけになってしまう。

「日向さ、今は心を落ち着かせるのが一番だよ。落ち着いて考えれば、日向もいろいろわかるから」

「どう落ち着けと言うんだ。罪悪感が付き纏ってくるんだぞ」

「初春にあれだけ聞いてもらってまだダメなわけ？ 日向は考えすぎなんだって。リラックスリラックス」

話していくうちにどんどんイラついているようだが、本当に大丈夫なのだろうか。

「日向、私は貴女を恨んでなんていないわよ」

そこに加賀が一言。日向も最初は睨み付けるような勢いだったが、加賀の姿を見てすぐに目を逸らした。加賀がどのような存在かを察したようだった。

加賀は伊勢と日向に居場所を奪われた者の1人だ。さらにはそこから人形に仕立て上げられ、五航戦に殺されかけるところまで行っている。それでも今は誰も恨んではない。強いて言うなら現状を作り出した大淀一本に絞っている程度。

「私も日向さんは正直どうでもいいですかね。翔鶴の方が余程」

「あ、今振り返します?」

「喧嘩したら初霜が怒るわよ」

「する気なんて無いわ加賀さん。私達はちゃんと和解していますから」

加賀と同じ境遇である赤城も、深海棲艦としての憎しみは全て大淀に向けられている。赤城の中にいるという他の空母隊の憎しみも、日向のことなど毛ほども恨んでいないようだ。興味を持っていないという方が正しそうではあるが。

「日向さんの気持ちは私もわかりますよ。わかるだけです」

「翔鶴姉はこんなになっちゃったからね。艦娘のままここにいられるだけでもマシだと思っただけなあ」

伊勢日向と全く同じ境遇の翔鶴と瑞鶴。勿論2人も今までの行ないは全て覚えているが、ここであつたいろいろなことを乗り越え、今ではこんなに開き直れている。

特に瑞鶴は、目覚めた直後に大分取り乱したものの、今では加賀に言われた言葉を糧にしているようだった。『生きていたらやり直せる。罪悪感があるのなら必死に生きて、必死に償え』という被害者からのこの言葉で、瑞鶴は前向きになれた。

「日向、尚更哨戒に付き合いなさい。いいわね」

「……私は」

「罪悪感があるのなら、被害者の言うことは聞いてもいいんじゃないですかね。それとも、それすら出来ない程追い詰められてるんですか?」

深海棲艦化した赤城はこういうところで容赦がない。加害者を追い詰めるような言動だが、まるで悪意無く言っただけ。別に被害者であることをひけらかしているわけでもなく、日向を歪ませるために言っているわけでもない。ただ思ったことを口にしただけ。

日向はそれを言われて何も否定出来なくなった。赤城の言うこともごもつとも納得出来てしまいうくらいには真面目。伊勢に言われるより心には響いたのだと思う。

「……わかった。償うためにも手伝おう。だが私の装備は深海の物、罪深い物だ」

「ちゃんとうちの物を用意してあるぜエ。勿論、お前さんが欲しがりそうな装備も積んである」

ニカツと気持ちいい笑顔で日向の艦装を指差す来栖提督。欲しがりそうな装備というのがよくわからないが、来栖提督は来栖提督なりに、何かしらの力になるように手を回してくれていたようである。

「これだけ居れば哨戒も楽だね。それじゃあ日向、すぐに準備しようか」

「……」

溜息を吐きながら哨戒の準備をしに行く。その後ろ姿を見て、加賀が少し安心したような匂いを醸し出した。

誰もが日向のことを心配している。同じ境遇の者も沢山いるし、被害者だって元凶がわかっている分あれだけのことをされてもまだ許せる。日向だって被害者だ。

艦装を装備した空母隊は、すぐに工廠から哨戒を始めた。赤城と翔鶴は艦装の都合上少しだけ海上で、残りは工廠の陸地から降りもせず、次々と艦載機を発艦させた。飛び立った後はまるで鳥の群れのようバラバラ、四方八方へと飛んで行く。

伊勢と日向も同じように艦載機を飛ばしていた。だが、敵対していた時の艦載機では無かったのがすぐにわかる。見たことがない水上機。施設に水上機を使う者がシロクロしかない上に、当たり前だが使うのは深海の水上機なので、艦娘の扱える水上機を知らないというのがあるのだが。

私と三日月もそれを見学させてもらっている。矢を放っている時の加賀と瑞鶴は、何処か晴れやかな表情をするし、赤城と翔鶴も楽しんで哨戒をしているように見えた。そういうのを見ると、私達も心が落ち着ける。

あとは、緊急時にすぐに出撃出来るように待機しているというものもある。今でも演習に勤しんでいる者もいるが、演習用の装備では即座

に出撃出来ても戦いづらい。万が一のための待機である。

「みんな、楽しそうに哨戒するよね」

「ああ。空母は艦載機を飛ばすのが楽しいんだろうな」

三日月とそれを見ながら談笑。哨戒というのも、平和を維持するために必要な仕事。つまりは、現在は平和であることを確認する作業でもある。だからか、緊張感があまり無く、心落ち着ける風景にも思えた。

特に、加賀や瑞鶴の弓を引く姿は、今こういう関係になった私や三日月から見ても惚れ惚れするほどの優美さだった。一挙手一投足が堂に入っている。

そして、問題の四航戦。こちらは甲板から次々と水上機が飛び立っていった。

四航戦の2人も弓を持っているようだが、飛ばすものによって使い分けるらしい。空母と同様の艦載機を飛ばす場合は弓を、航空戦艦ならではの水上機を飛ばす場合は甲板のみを使つての発艦のようである。

敵側で活動していた時は何のインチキか甲板ので空母の艦載機をバカスカ飛ばしていたような気がしないでもないが、おそらくそれが大淀に施された違法改造なのだろう。

「うん、やっぱり落ち着くね」

「いい飛ばし方するねえ。やっぱりそっちの方が慣れてる？」

「そりゃあね。まあ私は第一改装の時はお人形さんだったからあまり実感ないけどさ」

瑞鶴に尋ねられ、ケラケラ笑いながら返す伊勢。いい飛ばし方というのがよくわからないが、伊勢の発艦は綺麗なものらしい。確かに、飛んでいく水上機は、全くブレがなく真っ直ぐに目的の場所まで飛んでいくようだった。

四航戦は独特な艦娘のようで、最初から水上偵察機が、第一改装で水上爆撃機が、第二改装でさらに艦載機が飛ばせるようになるようである。何とも難しい存在。

「日向もいい感じじゃん。迷いは見えるけど」

「……そうか」

言われるがままに日向も発艦しているが、何か思うところがあるようである。1機発艦するごとに目を細め、何か考えているような仕草。瑞鶴の言葉にも反応が薄い。

「私よりも日向の方が入りやすいみたいだから」

「あー、なんかそんな感じだよね」

発艦にもいろいろあるらしく、日向は特に集中するようなタイプだそう。周りの音が聞こえなくなるほどに集中し、発艦した水上機から伝わる情報を全身で感じているような、そんな感じ。

今だけは、日向は大分落ち着いているように見えた。飛ばしては、それを身を感じる。そして納得が行かないようにまた飛ばす。その繰り返し。あまり哨戒というのを考えていないようにすら見えた。ただ飛ばしたい、それだけ。

「まあこれ、私と加賀が裏で仕組んでただけだね」

「そうなの？」

「日向に落ち着いて考える時間を持ってもらいたくてさ。多分、悶々と部屋で過ごすよりも、こういうことやってる方がいいと思ったんだよ」

だから加賀が率先して来栖提督に申し出たのか。むしろ来栖提督も一枚噛んでいるのかもしれない。

「加賀さん、そういうこと言ってくれないよね」

「貴女は感情に任せて口にしてしまいそうですよ。だから、私と伊勢だけで計画したわ。伊勢も正直不安だったけど」

こんな話を隣でしていても、日向は耳に入っていないようだった。黙々と飛ばし、戻ってきたものを甲板に着艦させ、また飛ばす。同じことの繰り返しでも、徐々にその発艦は精度が良くなっていく。

精度の悪さは心の迷い。自分と向き合わなくてはいいものも良くならない。今、日向は自分と向き合い、迷いを晴らそうとしている。その迷いというのは言うまでもなく罪悪感の件。

「定期的には、日向にはあれをやってもらうよ。考えすぎだつて気付いてもらえそうだし」

「ええ、それがいいわ」

これからは定期的に日向にも哨戒をやってもらおうようだ。部屋にこもっているより心にいい影響を与えるのなら、優先的にそちらを選ぶべき。とはいえ、日向はストレスで体調を崩しているのだから、身体に負担がかかるのなら休んだ方がいいだろうが。

「……やはりいいな、瑞雲は」

日向がボソリと呟く。瑞雲とは、今ずっと発艦している水上機のことか。その言葉をしっかりと聞いていた伊勢は、小憎たらしい笑みを浮かべながら日向に近付き、無理矢理肩を組む。

「でしよでしょお？ もっとやってもいいんだよお？」

「やかましい。離れろ」

伊勢の額をはいいた後、また水上機の発艦に専念していた。何処か楽しげに。負の感情の匂いも薄れたように思えた。気晴らしなんてと言っていたことが嘘みたいに晴々としている。

「哨戒は異常無し。でも、しばらくは見えていきましよう。敵はいつ来てもおかしくないもの」

「日向さん、その水上機は潜水艦も確認出来ましたよね。その辺りも見てもらえますか？」

「了解した。瑞雲は対潜も可能だからな。それも問題ない」

赤城の問いに機嫌良く答えていた。あの水上機に余程思い入れがあるのだろうか、発艦もどんどん精度が増していき、並ではない練度を見せてくれる。もう少ししたら日向も復帰できるだろう。その前に体調を万全にしてもらおう必要はあるが。

まだ迷いはあるだろう。罪悪感からも逃れられない。だが、少しだけでも変わったのなら充分だ。前向きになるきっかけを掴めたのなら、周りの者がそれを支援する。ゆっくりでも進めるのならそれでいい。

戻らないもの

空母隊の哨戒に参加したことで、日向も少し前向きになれた。それにより全員の力を合わせて襲撃に挑める準備が進む。私、若葉も心身ともに休息を取ることが出来たおかげで、100%の力が出せそう
だ。

夕食後も何事もなく、義理の姉となった二二駆やいろいろと親交を深めている二四駆と談笑して1日が終わる。こんな毎日が続けばいいと思える夜だった。私達は事が済めば施設に戻るが、生きていればまたここに来ることが出来る。この時間を糧に、最後の戦いに向かい
たい。

「おう、若葉。ちょいといいか」

部屋の前で来栖提督が待つていた。夜で風呂にも入り寝間着の状態のため、傷が丸出しになってしまっている三日月がサツと私の後ろに隠れる。もう慣れ親しんだ来栖提督でも、こればかりは難しいらしい。施設の仲間にもあまり見せないくらいだし仕方がないか。

「さつき施設を修復している妖精達から連絡があった。施設の修復は完了したってよ。明日の朝、迎えに行ってくれ」

「了解した。だが、どうやって連絡を？」

「そりゃあ、メールだ。言葉はわからねエけど、あちらはこっちの言葉はわかるみたいだからな。明石がそれを受け取ったんだよ」

予定通り施設の復旧は完了したようである。本来の私達の居場所は元に戻り、いつでも帰ることが出来るようになったようである。

だが、先日の通り事が済むまでは来栖鎮守府に世話になることになってる。施設が修復されたとしても、少しの間は無人で置いておいてもらう。とはいえ定期的に見に行く方がいいだろう。明日は私が施設へ職人妖精達を迎えに行くが、それ以降もまだ来栖鎮守府で世話になるようなら、毎日定期的な確認をしに行くべきだろう。

「明日は若葉^{ポッ}達が妖精達を迎えに行き、その足で有明鎮守府に向かえばいいだろうか」

「ああ、その手筈になってるぜエ。俺からも連絡済みだ」

「それなら安心だ。ちゃんとアポは取ってあるのならな」

有明鎮守府からの遣いとして来た利根と筑摩が、有明提督のうっかりでアポ無しで来てしまったのを思い出す。来栖提督はしっかりと連絡を取り、段取りも完璧にしてくれている。これなら突然の来訪にならずに混乱することは無いだろう。

「メンツだが、五三駆と加賀ってことにしてる。それで良かったか」

「ああ、それなら夜間警備と似たようなものだ。ありがたい」

来栖鎮守府の艦娘をつけることも考えたようだが、あまり大人数で行ってもあちらに迷惑ではないかと思い、有明提督と面識のある私と三日月、加賀の他は、行動のしやすい駆逐隊のメンバーで揃えることにしたらしい。それはそれでやりやすい。

「悪いな。俺んトコの妖精は後回しでいい。施設で拾ったらそのまま有明んトコに行行ってやってくれ。朝から行けば何だかんだあっても夜までには戻れるだろ。そのように向こうにも伝えてあるからよオ」

「了解。明日の朝食後にすぐ向かう」

「ああ、頼んだぜエ」

明日は忙しくなりそうだ。もしかしたら、私達がこの鎮守府を出ている間に襲撃が決まる可能性もあるが、そうなった場合は有明鎮守府の艦娘と合流することになるはずだ。その時に私達も合流すればいい。

翌朝、予定通り施設へと向かい到着。最後に見たときは本当に酷いことになっていたが、今は壊れる前と同じになっていた。むしろ素材が新品同様になっているため、同じものでもすごく綺麗に見える。

施設を建て直されるのも二度目であるが、今回は前のまま据え置きという形で修復されていた。戦いが終わるのならそれでも大分空き部屋が増える予定だったが、一度拵げたものをまた狭くする必要も無いということになった。私と三日月は相部屋だが、他の者は1人部屋になるかもしれない。

「相変わらずいい手際だ。ありがとう」

そこにいた職人妖精達に金平糖を渡す。みんな大喜びで手に取り、

そのまま私や三日月の肩に乗っかって来た。今から運ばれることを察していたようである。完了を来栖提督に伝えた時に、この件も聞いていたのか。

「中也見て回ろうか」

全員で工廠から中へ。誰もいない施設というのは実際初めて歩くが、少し物悲しきを感じる。

私がここに流れ着いたときは雷と摩耶しかいなかったが、今では大所帯。人が入ることが出来なくなってしまったから拡張した結果がこの広さである。今は電気もついていないので、少しだけ薄暗い。

「早くここに戻りたいな」

「そうねー。やっぱりこの方が落ち着くのよね」

台所が元に戻っていることを確認しながら雷がぼやく。来栖鎮守府の居心地が悪いわけでは無いのだが、一番長くこの施設を使っていたのは雷だからか、こちらの方が生きやすいと本能的に思ってしまうようである。

食材などは当然何もない。全て燃えてしまったか、瓦礫に潰されて失われてしまったか。もし無傷であったとしても処分しなくてはいけないくらいに傷んでしまっているだろう。

「全部終わればここに戻るんでしょ。それまで我慢しなさいよ」

「わかってるわかってる。戻るためにはいろいろ準備しないとイケないしね。日用品何にも無いんだもの」

流れて台所から食堂に向かい、そこから談話室や風呂、医務室、処置室と部屋を確認していく。本当に元の通り。

ここを一時的に離れる前と違うのは、消耗品が全て無くなっていること。食品は勿論のこと、薬の類も軒並み失われている。一応私達の入ることの出来ない地下室は、あれだけのことがあっても無傷に近いらしい。

そしてそのまま個人の部屋へ。ネームプレートがあるわけでは無いのだが、自分達の使っている部屋というのはすぐにわかる。中に入ると、そこも壊れる前の状態に戻されていた。机も、ベッドも、クローゼットも壊れる前の状態。

だが、明確に違うところがある。クローゼットの中身だ。私達の思
い出の品が失われてしまっていた。本当に何も無い、空っぽのクロー
ゼットがそこにあった。着替え用の制服などはもう仕方のないこと。
だが、私と三日月には、他の者達には無い物がここにあった。

「……やっぱり、無くなってるよね……ウエディングドレス」

「ああ……あれは流石に無理だろう。あつたとしても、それは若葉^{ボク}達
の思い出の品じゃない」

三日月とケツコンした時に着た、私のタキシードと三日月のドレ
ス。あれだけ施設を破壊されてしまったのだから、跡形もなく失われ
てしまっているのは最初からわかっていたことだ。だが、私達のあの
時の思い出の一部は消えてしまったことをその目で確認してしまっ
たことで、相当に心にク。る。

それが一番辛かった。この指輪があるからケツコンしたという痕
跡はあるのだが、式の痕跡はもう無い。戦いの中でも幸せの絶頂だっ
た瞬間は、形として残っていない。

三日月はもう涙目だった。クローゼットの前で膝から崩れ落ち、悲
しみに打ち拉がれているようだった。その姿に私も貰い泣きしそう
になる。血が出そうなほどに拳を握りしめ、怒りと憎しみを灯す。こ
れもまた大淀のせい。施設を破壊するなんて命令をしていなければ、
こんなことにはならなかった。

身体も心もダメージを受ける襲撃。何も悪いことをしていないの
に、何故こんな目に遭わなければならない。考えれば考えるほどに苛
立つ。

「若葉、三日月、全てが終わったらもう一度式を挙げればいいわ」

私と三日月の気持ちを探してくれたのか、加賀が提案してくれる。
それを皮切りに、曙と雷も少しノツてくる。私達のことを気遣ってく
れていることが、匂いなんて関係無しにわかる。

「あの時以上に盛大にやればいいわよ。祝勝会も兼ねるかもしれない
けど」

「人間のケツコン式というのは、ウエディングケーキという大きな
ケーキが出るらしいの。流石に気分が昂揚します」

「いいわね！ ケーキなら私も焼けるし、とびきり美味しくて大きなものを作りましょ！ みんなで食べられるくらいなの！」

戻らないものはもう仕方ない。やり直しが利くようなことでは無いが、新しい思い出を作ればいい。あの時以上に思い出に残るくらい、盛大に。指輪の交換はもう出来ないとはいえ、式を挙げる事が重要だ。

最初は式なんて別にと思っていたものの、一度やったことでその良さを知ってしまった。明石がノリノリだったことも今なら理解出来る。

「……そうだな。三日月、戦いが終わったらまた式を挙げよう。今度は来栖鎮守府のみんなにも祝福してもらおう」

「……うん、そうね。また思い出を作りたい。若葉と」

溢れそうな涙を袖で拭い、鼻をすすって立ち上がる。私も貫い泣きしそうな目を擦り、三日月の手を取る。悲観はまだあるが、次のために前向きになった。私も決意が漲る。

だが、これだけ囁し立てた曙が何かに気付いたように言葉に詰まり、そして呟く。

「あんまりこういう時に水を差したくないんだけどさ。戦う前に後のこと考えるのって、あまりいいことじゃないわよね」

「あー……死亡フラグってヤツよね」

曙と雷に言われて、三日月が固まってしまった。余計なことを言うんじゃないと思ったが、確かにこういう時にこういう約束をすると、叶わないみたいなのがよくある。今の私達は見事にそこを踏み抜いてしまった。

「そんなフラグ、大淀ごと叩き折ってやればいいのよ」

それに対する加賀の頼もしい言葉。そうだ、加賀の言う通り、そんな死亡フラグなんて叩き折ってやる。何がフラグだ。それくらい、私と三日月の愛の力で消し飛ばしてやろう。

むしろモチベーションが上がった。もう一度式を挙げるため、必ず大淀を終わらせる。邪魔なんてさせない。

「やる前から死ぬだの死なないだの考えたって意味が無いわ。それ

に、私達は一度勝っているのよ。ネガティブになる要素は何処にも無いわ」

「……そうだな。若葉^{ボク}達は一度勝っている。次も同じように勝てばいいだけだ」

何も難しいことは無い。また勝てばいいのだ。あちらはこちらの対策をさんざんしてくるだろうが、それはこちらも同じこと。手の内を知らないわけでは無い。未知の力を発揮するとしても、その場で乗り越えてやる。

何度でも来るのなら、何度でも倒す。そして根本的な部分を潰す。ただそれだけだ。何も難しいことはない。作戦は下呂大将が練ってくれているし、何やら秘密兵器があると来栖提督も話していた。負ける要素を次々と潰してくれているのだ。

これまで何度も敗北を喫してきたのだ。もう負けない。負けるわけにはいかない。

全ての部屋をある程度確認して、施設の再建が完了したと認識。電気も当然繋がっているため、事前に聞いていた加賀が来栖鎮守府に電話を入れた。こういう定期連絡も大事。私達に異常が無いこと、施設に異常が無いことを伝えることで、任務を次の段階へ。

「施設からの航路は私が聞いてきているわ。それに、近海になればわかる」

「流石二元から顔見知りなだけあるな」

「ええ、有明提督のこともある程度は知っているの」

利根と筑摩と顔見知りだった加賀なのだから、有明鎮守府にも行ったことはあり、そこにいる全員と面識があるとのこと。私と三日月は一晩だけ、出会ったのも支配されて暗示をかけられていた三十駆のみ。

あの4人がどうなったのかも気になっている。下呂大将の指示で適切な処置を受けたはずなので、今は全快しているとは思うが。睦月型、つまりは私の義理の姉になるわけで、気にならないわけがない。「まだ暗示が解けてないとか無いわよね。一応武装はしっかりしてき

てるけど」

「大丈夫、だと思う。行ってみなければわからないが」

曙の疑いはごもつともである。あの時は解決出来たが、実はかなり根深い暗示であり、今もトリガーを引いたら暴走するなんてこともあり得るかもしれない。

今なら私も三日月もその辺りは判断出来る。ダメそうならまた考えなければいけないが、あの後にもう一度暗示をかけられるようなことはされてはいないはずだし、大丈夫だと思いたい。

「じゃあ、行きましようか。来栖提督がもう一度有明提督に連絡を入れてくれるらしいわ。今から施設を出ると、あちらに到着するのはおおよそ昼を少し過ぎたくらいね」

「了解」

本来なら帰投だったが、今はまた施設から離れなければならない。ここに帰ってこれる日はいつになるかわからないが、全員が生きて、必ずここに戻る。

五三駆は全員が継ぎ接ぎ。移籍することなんて一切考えていない、この施設が本当に戻る場所。私達の居場所だ。

「式もそうだが、誰も死なずに全員でここに戻ってこよう」

「そうね。若葉と一緒に、私もここに戻る」

工廠から出て、最後にまた施設の全容を見る。何も変わらない、私達の居場所だ。ここに戻ることに、私達の戦いの終わり。

次にこの風景を見るのは、全てを終わらせた後。その時がすぐに来ることを願って、私達は居場所を後にした。

憧れの王子

修復が完了した施設を見て回った後は、そのまま有明鎮守府へと向かう。施設修復を手伝ってくれた職人妖精を送り届けがてら、現況を有明提督にも説明しておく手筈になっている。電話では話せないようなこともあり、直に話した方が早いと考えたからだ。

説明役は加賀。私達はその間は待機。少しだけ滞在させてもらい、暗くなる前には来栖鎮守府に帰投出来るようにする。施設から回収した職人妖精の半分は来栖鎮守府所属の者のため、それを送り届ける役目でもある。

今回は昼食代わりの戦闘糧食を食べながら、加賀が先頭で航路を駆ける。これは雷と鳳翔の合作。腹にも溜まり、味も美味しいという喜ばしいもの。ただのおにぎりでも、味付けと作る者でこうまで変わるとは。私達には到底作れそうにない。

回収した職人妖精は、私、若葉と三日月の肩や頭に乗っている状態。各3人ずつ乗った妖精達は、1人は頭頂部に、残り2人は肩に乗っている。

が、今の身体になって出来てしまった犬の耳のような癖っ毛を掴んで身体を支えているため、たまに首が持つていかれそうな遠心力がかかる時がある。

「もう少しジツと出来ないだろうか。髪と首が痛い」

「私も……皐月姉さんもいつもこうだったのかな……」

三日月も大分堪えているようである。三日月は私と違って頭頂部にも癖っ毛があるため、そこを思い切り掴まれていた。あれは痛そうだが、私の身体も満員御礼、引き取ってやることも出来ずに歯痒い思いをすることに。

艦装に乗ってもらえるように交渉したのだが、私の艦装は身体から浮いているせいでもものすごく反動が大きいらしく、ここ以外は嫌だと言わんばかりに首を横に振られた。我慢するしかないようである。

「アンタ達大分気に入られているのね。ま、せいぜい頑張んなさいよ」
「お前の頭の方が乗りやすいだろ。髪は長いし結んでるし。三日月の

1人くらい引き取ってやってくれ」

「お断りよ。その子達が三日月を優先したんだから」

雷は髪が短いから私と同じようなことになるだろうが、曙には馬鹿でかいサイドテールもあるのだから安定性は抜群だろうに。

「もう少しの辛抱だから、我慢して頂戴」

「ああ、なるべく早く終わってもらいたい」

この地味な苦痛はもう少し続くらしい。三日月は限界が来そうなので、どうにかしてやりたいのだが、結局最後まで髪を掴まれたままで終わることとなった。

時間的には昼食後くらいに有明鎮守府に到着。私と三日月は夜に来たので、全容は初めて見る。来栖鎮守府よりは確かに規模が小さい。今でもおそらく遠征による資源回収は続けているのだろう。

加賀から懐かしさを感じる匂いが漂う。手瀬鎮守府唯一の生き残りである加賀には、交流のある有明鎮守府が既にそういう感覚に浸れるもののようなのである。

「加賀！ 利根と筑摩から聞いてるよ！」

加賀が先頭で工廠に入るなり、有明提督が笑顔で出迎えてくれた。隣の鹿島も満面の笑みだ。

手瀬提督の仇を討つために襲撃の援軍として名乗り出てくれた有明提督だ。全滅したと聞いていた鎮守府の生き残りが元気に顔を見せてくれたというだけでも、それは喜ばしいことだろう。

「有明提督、お久しぶり。生き残りとしては私だけになってしまったわ」

「全滅って聞いてたから驚いたよ！ 本当によかった。いや、全然良くないけど」

姿を現してくれた加賀とガツチリ握手。触れて温もりを感じて、本当に生きていてことを実感していた。加賀も有明提督が健在であることを表情を変えないにしても喜んでいるようである。

「借りていた職人妖精を運んできたわ。三日月の方だったかしら」

「そうみたいです……皆さん、到着ですよ」

疲れた顔の三日月が手を伸ばして職人妖精達を工廠に置いてやる。出張を終えた妖精達はサムズアップしながら本来の持ち場へと戻っていった。金平糖を一袋持っていたのは言うまでもない。

「現況を説明するわ。大分戦局が変わってきたの」

「そうなんだ。確か来栖さんのところに戻るんだよね。じゃあすぐに始めた方がいいかな」

「そうしてくれると助かるわ」

そのまま加賀は有明提督に説明するために鎮守府の奥の方に向かう。鹿島もそれに便乗する形になるのだが、その前に私達の方へ。

「貴女達は待機になるんですか？」

「ああ、そうなる。加賀の話が終わるまでは自由だ」

「そうですか。ちょうど良かった。若葉ちゃんと三日月ちゃんに会いたいという子がいますので、談話室に案内しますね」

なんとなく誰のことかはわかる。どうせ自由時間なのだから、こういう場所でちゃんと交流しておきたい。

心の安寧にはこれが一番いいと思う。友人を、抛り所を、死にたくないと思える理由を増やす行為というのは、いつでも必要だ。

談話室。ここも来栖鎮守府よりは少しこぢんまりとしているイメージ。私達の施設の談話室に近いくらいである。

鹿島はそこに案内してくれたところで有明提督の下へと向かった。談話室には既に、私達に会いたいと言っていた者が待機していた。

「来たにゃしー」

まず声を上げたのは睦月。予想通り、私達に会いたいというのは三十駆である。

匂いからも何も感じず、私も三日月も4人から嫌な感じは感じない。つまり、もう大淀の支配や暗示の類は綺麗さっぱり無くなってくれている。強引なりミッター解除後の入渠で、その辺りは全て治療されていったようだ。

「貴女達に御礼を言いたかったの。あまり覚えていないのだけど、如月達がおかしなことになっていた時に、それをどうにかしてくれたのは若葉ちゃんと三日月ちゃんなのはわかってるのよ」

支配されていた期間の記憶があやふやらしい。有明提督も、精神的なことを考えて詳細には語っていないようで、敵の攻撃を受けていた程度にしか伝えていない様子。洗脳されており、有明提督を殺すために動いていたなんてことは知らないままのようである。

暁は完全にスッポリと抜け落ちているが、三十駆は思い出しづらい夢のような感覚みたいだ。支配されてから今までの記憶があやふやになっているのだから、最初は大きく取り乱したらしい。

だから、覚えているのは誰に何をされたか程度。睦月と如月は鹿島と三日月に止められた後に春風に、弥生は私に、望月は神風に気絶させられ、気付けば何もかも終わっていた。その救出されたという感覚だけが残されている。

「ありがとうにやしい！」

「三十駆は貴女達に感謝してるわ。ありがとう、2人とも」

睦月はすぐくテンションが高いようで、飛びつくように私の方へ来ては、両手で私の手を取りブンブンと握手をしてくる。如月も三日月に笑みを浮かべて握手を求めた。実の姉のため、少し抵抗がありながらもおずおずと手を差し出し、やんわりと握手。

「あたしは妙に覚えてんだよなあー。なんか刀でぶった斬られたんじゃないなかったっけ」

「ああ、望月は神風に斬られている。峰打ちだったが、酷い音がしたの
は覚えているぞ」

「やっぱり。そこだけ変に生々しい夢だったからさあー。ゴリツて音が耳についてるんだよね」

大淀に支配されてやらされた部分は完全に抜け落ちているが、私達と戦った部分は夢として見たことで記憶にあるらしい。正直、そこが一番辛い部分だと思う。本来味方であるはずの艦娘に攻撃された記憶なのだから。とはいえ、それが救出のためのものということは聞いているため、私達のことは受け入れてくれた。

それが事実だったと言われても、すぐにはピンと来ないだろう。自分が知らず知らずのうちに裏切り者にされているだなんて信じたくもないだろうし。

「……弥生は若葉にされたはず」

「ああ。弥生は若葉^{ホク}が寝かせた。なるべく優しくやったぞ」

「この鎮守府に若葉はいないし……見たことも無かったのに……夢で出てきたのがおかしいと思ってた。弥生を助けてくれたのは……若葉だね」

一番手近にいたという理由だが、弥生もそれをすっかりと覚えていくようだ。こちらの場合は姿形までハッキリと。夢の中で見ず知らずの艦娘が現れたら流石に驚く。私だって驚く。

特に私や三日月は誰がどう見ても違う部分があるので、そんなものが夢の中に現れたら驚く以上に怖い。

「ありがとう、若葉」

「どういたしまして」

おずおずと手を差し出してきた。表情は硬いが感謝の気持ちが溢れているために、何の疑いもなくその握手に応じることが出来る。

私が手を握った途端、表情に変化は無いが、感謝の気持ちが好意に変化したのがすぐにわかった。今まではリアルな夢というだけで半信半疑だった部分もあるだろう。私のような得体の知れない見た目の艦娘なのだから尚更だ。

「あと……少しだけ言葉も覚えてる。若葉からしたら弥生は義理の姉って……どういう意味？」

「ああ、若葉^{ホク}は三日月とケツコンしているんだ」

恥ずかしげもなく堂々と。何も後ろめたいものが無いので、三日月の肩を抱きながら話せる。三日月も少し身を振ったが、すぐに受け入れてくれて睦月達に見せつけるかのようになる。若干スイツチが入りかけたが、そこは抑えてもらって。

有明提督と鹿島は私と三日月の仲を知っているが、三十駆はそれを知らないため、こうしたこと途端に空気が色めき出した。この鎮守府にもケツコンカッコカリのことは知られているみたいだが、その対象は鹿島のみ。有明提督も来栖提督と同じで、いわゆる単婚派というもののようなのだ。

「艦娘同士のケツコン！ ふああ、ロマンチックだにやあ」

「そういう関係もいいわよねえ。色恋沙汰とは無縁のこの鎮守府でも、いろいろと可能性が出てきたんじゃないかしら」

「えー、如月姉はそういう感じなのな」

「あら、如月はラブロマンスは大好物よ？ 好意に性別なんて関係ないもの」

思った以上に肯定派で助かる。人によってはあまり好意的ではないような関係だ。如月は何処の如月もこんな感じなのかと実感。うちの如月もやたら私達の関係の後押しをしてくれたものだ。

「ねえ、弥生ちゃん？」

「……うん」

対して、弥生だけは少しガツカリしたような匂いを醸し出していた。相変わらず表情は殆ど変わっていないものの、匂いは顕著。見た目と反して感情はコロコロ変わる。

私への感情は好意のみだ。おそらくそれは自分で言うのはアレだが『尊敬』、『憧れ』の類だと思う。ガツカリしていても、そこは変わらない。

「若葉がこういう艦娘でガツカリしてしまっただか。すまない」

「そ、そういうことじゃ、ない……謝らなくて、いいから」

何というか、モヤモヤした言い方。拒絶しているわけではないが、目を合わせづらいというような、不思議な感情。

如月が何か察したようで、弥生を笑顔で引き寄せてボソボソと呟く。弥生がビクンと震えた後、頷いた。

「弥生ちゃんね、若葉ちゃんに憧れみたいなものがあつたのよ。助けてくれた夢の中の王子様みたいな存在じゃない」

「王子……」

「だから……ね？」

曙が吹き出しそうになって堪えているのが見えた。後から文句を言うとして。

そこまで言われれば流石に私もわかる。だが、私には三日月がいる。浮気する気なんて毛頭ない。申し訳ないが、弥生の想いは受け入れられない。だが、こんな人前で口にすることもないことくらいもわ

かっている。私だって空気くらい読める。

「く、くくつ、罪作りよね若葉も。いや、若葉王子か、あつはは」
「曙、後で覚えてろよ」

もう堪えきれずに意地の悪い笑みを浮かべる曙は、文句だけじゃなく演習でボコボコにすることに決めた。音を上上げるまで特訓してやる。私もリミッター解除して。

「弥生、若葉^{ボク}とは友人として付き合っしてほしい。それじゃダメだろうか」

先程と同じく、今度は私から握手するために手を差し出す。手を払われたらそれはもう仕方ないこと。これは私のケジメでもある。私の色恋沙汰は三日月で完結している。他に目を向けるわけにはいかない。

「……うん、大丈夫。弥生の独りよがりなところもあつたから、迷惑かけそうだった。ごめんなさい」

手を取ってくれた。こんなところで嫌な感じに終わらなくてよかった。

「三日月……」

「は、はい、なんですか弥生姉さん」

「姉として……2人の仲を応援してる」

「……ありがとうございます、姉さん」

ぎこちない笑みであつたが、私と三日月の仲を祝福してくれたのはわかつた。匂いも吹っ切れたかのような清々しさがある。若干の負の感情は混ざっていたものの、その辺りのケアはこの如月がやってくれそうだ。

握手を終えた後、その手をジッと見た後にボソリと呟く。

「ところで」

「はい」

「愛人はダメかな」

全員が一斉に吹き出した。私や三日月も例外なく。

「ね、姉さん!？」

「冗談。若葉は三日月だけのもの、そうでしょ」

無表情でダブルピース。これは吹っ切れたと言えるのだろうか。

加賀の決意

加賀が有明提督に説明が終わるまでは談話室で待機することになった五三駆。そこには私、若葉と三日月が救出した三十駆が礼を言いたいと待ち構えていた。弥生のことではほんの少しの一悶着あつたが、概ね良好な関係性を築くことが出来ている。一応は義理の姉扱いのため、あまりいざこざは起こしたくない。仲良くするのが一番だ。今は完全に待ちの状態に入つたので談笑の場となつているが、部屋の前にはちよくちよくと所属している艦娘がこちらを興味深そうに眺めてくる。誰からも敵視の匂いはしないので痛くも痒くもないのだが、視線に慣れていない三日月はどうしても私の側から離れられない。

「やっぱ私達は珍しいモノなのかしらね」

「そんなに外から客が来ないから仕方ないんだよなあー」

曙のボヤキに望月が答える。まだ規模がそこまで大きくないからか、そこまで交流があるわけでも無いらしい。手瀬鎮守府との交流は深かったようだが、それ以外だと監査くらいしか無かつたようだ。

そう考えると、私達の施設と同じようなもの。来栖鎮守府としか交流はなく、監査である新提督と、鼻屑にしてくれている下呂大将だけ。鎮守府単位は来栖鎮守府しかない。

「あの視線は好きになれません……」

「悪意の匂いは感じないから安心しろ。誰も三日月のことをおかしなものを見る目では見ていない」

「ええ……若葉がそう言うのなら……いいけど」

ピツタリと引っ付いて離れることはない。なるべく部屋の外も見えないようにしている。こればかりは治らない心の病だ。だから私はずっと側にいてあげる。私が側にいれば、三日月も安心して過ごせるはずだ。

「……、いいお茶置いてあるわ。施設では飲んだことないくらい」

「司令官がそういうの拘る人なのよ。食生活でモチベーションアップって」

「そういうのいいわね！ 今度先生に頼んでみようかしら」

ニコニコしながらお茶を淹れている雷。私達は客なのだが、そんなことお構いなしである。如月に茶葉の場所を聞いて全員分用意していた。確かに嗅いだことのない匂いのお茶。施設にあるものより上等らしい。

飲んでみると確かに違う。美味しい。三日月も喜んでいるようである。何よりである。

「おお、お主ら来ておったか！」

しばらく寛いでいると、この鎮守府で唯一のちゃんとした顔見知りである利根と筑摩が談話室へ。騒がしい利根の後ろから、穏やかな筑摩が会釈していた。

「先程加賀の声が聞こえたのでな。もう着いておるとは思っておったが、ここであつたか！」

「邪魔している」

「うむ、いつまでおるかは知らぬが、ゆっくりしていくがよいぞ！」

相変わらず豪快な利根。話していて気持ちがいい。一度演習で戦ったというのもあり、三日月も比較的慣れているように思える。押せ押せでズカズカ入ってくるが、利根には一切の嫌味が無いので、三日月でも大丈夫なようだ。最初は辛そうであつたが、信用出来る者であると理解してしまえば問題無い。

「時間があればまた演習してもらいたかつたんじやが、いつ終わるかわからぬものな。今日は控えておこう」

「そうしてもらえると助かる。ここからまた帰らなくちゃいけないからな」

「うむ。次は例の件が片付いてからじゃな」

そうなる今度は私達が非武装の状態になるので難しいかもしれない。まあその時にはこの鎮守府にまた来てからになるか。

そこから少しして、加賀の説明が終了したということ、全員工廠へ。時間的には予定よりもやや遅いくらいだったが、今から戻れば暗くなる前には来栖鎮守府に帰投出来る。急いで戻らなくてはいけな

いわけではないが、早ければ早いに越したことはない。

「現状がよくわかったよ。援軍はちゃんと出すから安心して」

「ええ、ありがとう。彼の仇を討ちたい気持ちはわかってるから」

説明の中でいろいろと思うところがあつたようで、話が弾んでしまったのだろう。

ほんの少しだけ、有明提督からは涙の匂いがした。思い出話をしていたわけではないだろうが、手瀬提督の最期を見ており、それを伝えられる生き残りは間違いなく加賀だけ。語る資格があるのも加賀だけだ。それを聞いて、思わず涙したと思われる。

「いやあ、ちよつと情けないところ見せちゃったかな」

「そんなこと無いわ。彼は非業の死を遂げてしまったんだもの。悔やんでくれるだけで私は嬉しい。泣いてくれるのなら尚更よ」

「あはは、そう言つてもらえると私も嬉しいよ」

提督と艦娘という本来なら上下関係のある間柄の2人だが、今は友人という雰囲気に見えた。

「援軍の件は宜しく頼むわね」

「だね。うちもまだ小さい鎮守府だから、送れる援軍は少ないけどさ、必ず力になるよ」

「そうね。ここの子達は、みんな精鋭なものね」

加賀があまりしない優しい笑顔を見せる。やはりここも思い入れのある場所、こういう理由でも、ここに来れたのは良かったようだ。加賀もこれにより癒された。

ここ最近麻薬による禁断症状も見えなくなつたらしい。本当に本調子と言える。これならば、さらなる活躍が見込めるだろう。

「私は戦場に赴くなんてことは出来ないから、終わつたらまた遊びに来てよ。そつちの子達もね」

なんて眩しい笑顔。匂いも朗らかで、疑いのような無い善人。ドジを踏むのも愛嬌の内。今までに会ってきた人間の数なんてたかが知れたものだが、ここまでわかりやすい善人もいないと思う。

こういう人柄だから、この鎮守府で提督として一番上に立てるのだろう。この人ならばついていけると感じられる程だ。

「ちゃんと御礼が言えてよかったぞよ。睦月達は援軍にはいけないからね」

「戦力としては少し劣っちゃうものね。悔しいけれど」

「そりやしようがないじゃんさ。あたしらそういう艦娘なんだからさあー」

三十駆の面々も見送つてくれる。少し名残惜しいものの、どうせまた会うことが出来るのだ。今回は明るく笑顔でおさらば。

「若葉……ありがとう、いろいろと」

「ああ。何と言うか、期待に添えずすまない」

「謝られると逆に困るから」

最後に弥生に握手を求められた。いわゆるフツてしまったようなものなのだが、今後も良き友人として付き合ってくれと言ってくれた。嫌われなくてよかったと思うと共に、またここにも拠り所が出来たことに感謝する。当然、握手には応じた。

戦いが終わったら、と死亡フラグを立てそうになったが、加賀の言った通りそんなフラグへし折ってしまえばいい。だから、思ったことを率直に伝える。

「またここに来る。三日月と、みんなと一緒に」

「うん、また来て。若葉が勝つこと、弥生はここで祈ってる」

「勿論勝つき。弥生の祈りがあれば百人力だ」

またぎこちない笑み。表情が硬くとも、私には感情が全て匂いとしてわかるのだから大丈夫。別れるのは辛い、再会の時を待って欲しいという意気込み。これは余計に死ねなくなったというもの。

「三日月」

「はい、弥生姉さん」

「死なないように。もし三日月が死んだら、弥生が若葉貫っちゃうよ」
恐ろしい気合の入れ方である。

「死ぬわけには行きませぬね。若葉は私のモノですから、誰にも渡すつもりはありません。勿論弥生姉さんにだって」

「そう、なら良し。また会おうね」

三日月とも握手。その時、心のダメージで弥生以上に表情が硬い三

日月が微笑んだ。私でもなかなか引き出せない表情に、少し驚く。実の姉がライバルという稀有な状況を、三日月は勝ちを確信しつつも楽しんでいようだった。

少なくとも私が三日月を愛しているのだから、三日月の勝ち揺るがない。負ける時は、死ぬ時だ。そんなことになるわけにはいかない。

「本当に罪作りよね。若葉王子」

「曙、帰り道背中に気を付けろよ」

「後ろ弾とか洒落にならないから」

冗談でも王子と呼ぶのはやめていただきたい。嫌な渾名が出来てしまったものである。

「それじゃあ、帰投するわ」

「うん、またね」

最後は敬礼で締め。軽く気が引き締まると同時に、決意に満たされた。戦いを終わらせてここにまた来るというのも、大きな目標となる。

そのためには、誰も死なずに戦いを勝利で終わらせなくてはいけない。今の意気込みならそれも可能だろう。

帰路、加賀の匂いがいつも以上に明るいように思えた。有明提督と話が出来たことがそんなに喜ばしいことだったか。

「上機嫌だな」

「久しぶりに会えたんだもの、私だって嬉しいわよ。それに、少し決めていたことがあったの。それを話すことが出来たから」

「決めていたこと？」

加賀の匂いが少し変化。先頭を駆けながらも身体をこちらに向け、私達全員に聞いてもらいたいと真剣な表情。

「この戦いが終わったら、皆新しい生活が始まるでしょう。施設に残る者もいれば、他の鎮守府に移籍する者もいる。貴女達は全員施設に残るんだったわよね」

「ああ。若葉達継ぎ接ぎは、飛鳥医師の管理下に置かれた方がいいか

らな」

「私がいなくなったら、先生絶対ズボラになるもの。蝦尾さんがいるにしても心配だわ」

雷の思惑はさておき、私達は施設に残る。現在施設にいる者のおおよそ半数は施設に籍を置いたままになるだろう。

加賀はもう半分、移籍組。私達のように深海のパーツが使われているわけではない。胸骨が深海のものではあるが、内臓をそのまま使っているわけでは無いため、移籍側に加わった。

「私は戦いが終わったら、有明提督の下に移籍しようと思っているの」
ほぼ全員が選択するであろう来栖鎮守府への移籍ではなく、有明鎮守府への移籍。おそらく施設にいるものの中で唯一の選択をする者になる。

「そのことを話したら、是非とも言ってくれたわ。あの鎮守府、航空戦力がまだ足りないのよ」

別に来栖提督が嫌だとか、来栖鎮守府が居心地が悪いとかそういうわけではない。友人でもある有明提督に力を貸したいと考えてのこと。加賀自身もいろいろ考えて導き出した答えらしい。

夜の遠征の時からわかっていたことだが、来栖鎮守府より有明鎮守府の方が施設から遠いことは今回の任務で再度実感している。施設と交流することは来栖鎮守府よりも難しいだろう。そうだとしても、加賀はそれを選んだ。当然だが、施設にいたくないということでもない。

「そうか。加賀がそう決めたのなら、それでいいと思う」

「うん、私もいいと思うわ！ 加賀さん、あの司令官と仲が良さそうだったものね！」

「ええ、あんなだけけど彼女は、有明提督は芯の通った素晴らしい提督よ。私は彼女を支えたいと思ったわ」

とはいえ赤城と離れることになるかもしれないのは少し抵抗があると、無表情ながら冗談のように話す。

赤城が艦娘のままだったら何も問題なく2人で移籍というのが考えられたが、今や空母棲姫である赤城は普通の鎮守府に在籍するのも

難しい存在だ。下呂大将がうまく手を回して、赤城も移籍可能なら万々歳だとは思う。

「そのためには誰も死なずに戦いを終わらせないといけないわね。私もフラグを立ててしまったわ」

「大淀ごと叩き折ってやればいいだろう」

「そうね、勿論。明るい明日のために、死ぬわけにはいかないもの。貴女達もでしよう?」

クスリと微笑む。今の加賀はとても前向きだ。戦いの後の明るい未来のために、足を止めずに真っ直ぐ進む覚悟を持っている。

「もう死んで堪るかっつての。あんなこと二度と御免だわ」

「曙が言うと言得力があるな」

「あれ以上に怖い経験は無いもの」

一度死を経験している曙の言葉は非常に重い。あの言いようのない恐怖は、もう経験したくないし、誰にも経験させたくないと言語。

「それを聞くと、尚のこと死ねないわね」

「ホントよ。死ぬくらいだったら逃げた方がマシ。屈辱的だけど命はあるんだから」

この考え方は賛否両論ありそうだが、私達は当然賛同している。命あつての物種。生きていればどうとでもなる。その時は負けても、次は勝てる。私達はずっとそうやって戦ってきたのだ。

「ああ、曙の言う通りだ。死ななきゃ勝てる」

「そうですね。私達は負けばかりでしたが、アレにはもう負けません。蘇ったのなら、また勝つだけです」

三日月も意気込み充分。何度も負けてきたのだから、何度も勝つてやればいい。屈辱を味わったのだから、それをお返ししてやる。

負の感情で戦うのは良くないと思うのだが、戦いというのはそういうもの。それも受け入れて、私達は前に進む。

「さあ、すぐに戻りましょう。皆が待ってるわ」

「ああ」

決意も新たに、私達は来栖鎮守府へと帰投する。近々来る決戦に向けて、私達は後ろを向くことなく進むのだ。

楽しく生きることが出来るように、ひたすら前向きに。それだけで私達には勝ち目が見えてくる。

追い付いた淑女

有明鎮守府への遠征は、夕暮れ時に来栖鎮守府へ帰投出来たことで無事終了。目的の職人妖精送り届けを完遂させ、加賀による現況の説明も完了した。

「おう、帰ったかい」

「この職人妖精達だ。髪を滅茶苦茶に引っ張られて酷い目に遭った」

「職人妖精はやんちゃなのが多いからな。ご苦労さん」

工廠に着いたと同時に、私、若葉の頭の上に乗っていた妖精が肩まで来たため、そのまま床に下ろしてやった。久しぶりの我が家だと言わんばかりに奥に駆けていく。勿論金平糖を持って。

ずっと乗せてきたので肩が痛い。妖精とはいえ、それなりに重量はある。肩を回すとゴキゴキと鈍い音が鳴った。

「依頼通り、あちらの提督に全て話してきたわ。納得もしてくれたし、援軍も送ると言ってくれたから」

「そいつア良かった。なら、俺らが出来る準備はここまでだな。時が来るまでは訓練あるのみだ」

これ以後は準備が出来次第、手瀬鎮守府への襲撃を行なうのみ。その日程も近日中、早ければ明日にはわかることだろう。あれからもう数日経過しているのだから、これまでの経験則も鑑みて下呂大將が最善の手を考えてくれているはず。

とはいえ、大淀の今までの戦い方は思ったより力業だ。艦隊司令部によるこちら側の内輪揉めの誘発を中心に据えていたことで、大淀自身は慢心していたため、いざ自分が戦うことになった場合は違法改造による超火力の主砲やリミッターが外れた腕力や回避性能を使うだけに過ぎなかった。

私達だって成長している。あの時のままなら、数人がかりとはいえ大淀は圧倒出来る。その力業をより強化されている可能性も充分あるので、こちらは当然慢心などしないが。

「秘密兵器も明日にや完成するらしい。うまく行くかはわからねエけ

ど、明石がやってくれたぜエ」

「そういえばそんなことを言っていた。戦場で戦いやすくなるものを明石が鋭意制作中と言っていたが、まだその全容が掴めない。何でも完成したらちゃんと言えるところのこと。出来てもいないものに変な期待を寄せられても困るとも言っていた。」

「まあ確かに変にその対策に期待して動きがぎこちなくなるくらいなら、そんなもの無くても戦えるくらいがいいだろう。ただ何かあるとだけ把握しておけばいい。」

「朝からありがとな。丸一日使わせちゃったが、今日はもうゆっくり休んでくれい」

「そうさせてもらおうわ。赤城さんにも有明提督のことを話しておかなくてはい」

「ああ、そうしてやってくれ。旧友なんだってな」

「行けるものなら赤城も行きたかっただろうに。今は土産話で我慢してもらおうしかない。」

「そうだ、先に言っておく。襲撃の日程が決まったぜエ」

「私達が向かっている間に、重要どころが決まったようである。最後の戦いに向けて心構えをし、それに臨む。」

「大淀を倒してから今日でもう3日が経過している状態だ。下呂大將の憶測通り、大淀のクローンが作られているとしたら、これ以上時間をかけるわけにはいかない。こうしている間にも大淀が増えていく可能性だってある。」

「いつになった」

「明後日だ。明日中に全ての準備を終え、明後日の朝から向かうことになる。空母のことも考えて、真つ昼間に決着をつけるつもりだ」

「決戦は明後日。今はもう1日も終わろうとする時間のため、決戦に挑むための残された時間は、あと1日と少し。」

「それまでは、自由に過ごしてくれや」

「そうさせてもらおう」

「終わりは着実に近付いてきている。」

決戦の日程は既に鎮守府内に知れ渡っており、今頃有明鎮守府にも伝えられているらしい。そのためか、夕食後も少し慌ただしかった。残り1日しか無いと、時間を惜しんで訓練に励む者。万全を期すために早々に休む者。ルーティンを守るために普段通りのペースを何も変えない者。多種多様。

「若葉達は普段通りに過ごそうか」

「そうね。誰かに頼まれたら動くってことで」

「ああ、そうしよう。施設だったら雑務があるんだけどな」

私、若葉は3つ目。普段通りのルーティンを守ることで、戦闘でも焦らず普段通りの力を出せるように持つていこうと思う。三日月もそれに便乗してくれた。やはり私達は一緒に過ごすことが万全の態勢である。

とはいえ、ここは本来の居場所では無く出先。率先してやることは無く、結果的にはのんびりと過ごすことになるだろう。誰かが私達の力を欲した時、それに付き合うくらいでいい。

「それにしても、まさか夜間訓練なんてものもやっているとはな」

風呂までは時間があるため、夜の鎮守府周辺を散歩していた私と三日月なのだが、近海ではまさに訓練の真つ最中。ライトで照らされているものの、夜なのだから当然暗く、深海の眼のために夜目が利く私達でも誰が訓練中かは少しわかりづらい。

「いつも夜に襲撃してくるものね。でも今回はお昼にこちらから向かうんでしよう？」

「その予定だったな。だから、夜の戦いを想定しているわけでは無いだろうな。長期戦になったらどうなるかわからないが」

少し小さめに抑えられているとはいえ砲撃音が鳴り響き、稀に金属のぶつかり合うような音まで聞こえる。あれは近接戦闘まで行なっているような音だ。かなり激しい訓練になっている。

そうなってくると誰がやっているかは限られてくる。砲撃と近接戦闘を両立して戦う者なのだから、施設にいる者と考えてもいい。

「ああ、わかった。あれは暁だ」

「暁さん？ 相手は？」

「……多分だが、鳥海だ。それに……リコもいるな。綾波までいるぞ」
時間を惜しんでまで訓練しているのは暁だった。砲撃と近接戦闘の両立は、リコからこれでもかと教え込まれている。そこに護衛を買って出るような実力者の鳥海や、新参とはいえ完成品として遠近共に鍛えられている綾波まで加わってしまっているのだから、暁の実力はうなぎのぼり。

少し音が続いたと思ったら、工場の方に戻っていく。これで終わりのようには見えなかったが、何かあったか。

「あ、もしかして、暁さんの練度上げかな。ほら、暁さんだけケツコンまで届いてなかったから」

「そうかもしれないな。ちょっと見に行ってみるか」

興味本位で工場へ。案の定、明石に練度を計測してもらっていた。暁のことだからか、雷も明石の側で待機していたようだ。

暁本人はゼエゼエと肩で息をしていたが、訓練を手伝っていた周りのものは息も切らしていない。出来が違うとも言ってしまうが、リコと鳥海は体格差があるし、綾波はそういう調整をされている。付け焼き刃では無いにしろ、暁にはかなり過酷な訓練だったようだ。

「はい、練度上限達成です。ケツコンカツコカリ可能ですよ」

「はあ……やつと届いたわ……。最後は意外と遠くてビックリしちゃった」

「もう少しって言ったのに、今日1日かかっちゃったわね」

安心したように溜息を吐いた暁。雷も苦笑している。

「じゃあ、コレ。みんなと同じように左手の薬指に嵌めてくださいね」
「わかったわ」

「じゃあ、私はこれで。ああ忙しい忙しい。楽しいなあ!」

秘密兵器開発も佳境に入っているようで、暁に指輪を渡したらすぐに工場の奥に引っ込んでいった。口で言うよりも数倍は楽しそうにしている。そろそろ完成に近いためか、明石も大分テンションが高い。

「忙しないな、本当に」

「ああいうのを仕事中毒ワーカホリックと言うのかもしれないね」

その姿にリコと鳥海が苦笑していた。確かにここの明石はそんな雰囲気はする。仕事をしているのが楽しくて仕方がないような、そんな匂い。

「それじゃあ、嵌めるわね」

「せっかくだから私が嵌めてあげようか？」

「自分でやるわよ！」

一息入れた後、暁はケツコン指輪を左手薬指へあつさり嵌めた。少し雷が不服そう。これが目的だったのだから別にいいのだが、情緒もへつたくれもない。これに関しては、式を挙げた私と三日月以外はみんな似たようなもの。自分の手で嵌めて、サクツと練度の限界を越えた。

指に嵌った指輪を見て、暁は自分がさらに強くなったことを実感していた。あれを嵌めた直後は力が漲るような感覚がする。先程まで訓練で大きく消耗していたのに、今ではピンピンしているようだ。

「んん、確かに何か変わった感じがする。暁が一人前のレディになったことを証明してくれているのね！」

「お姉ちゃんはとづくに一人前よ。それ以上にレディだって、私が保証できるわ」

そろそろレディというのが何かわからなくなってきてしまうが、暁が強くなったのは確かだ。

「これで事前にやっておきたいことは出来た」

「ですね。暁ちゃんにはいろいろと教えることが出来ました」

「すごいですねえ。暁ちゃん、呑み込みが早くてええ」

暁を鍛えていた3人も納得の行く出来のようだ。

そもそもガリコの後継者として仕込まれたところに、鳥海と綾波の技術まで継承したことで、戦闘スタイルは淑女からは程遠いものになっている。特に近接戦闘はリコ仕込み。ただの格闘術ではなく喧嘩の技であるため、荒々しさが増している。

「アカツキ、明日は最後の慣らしだ。今日ほどハードにはしない。誰かと演習するのもいいだろう」

「ん、わかったわ」

リコも普段より楽しそうである。今まで暁を育ててきたことで、そういう感情が生まれたのかもしれない。母性本能のような何かも感じた。

そういう意味ではいい関係な気はする。艦娘と深海棲艦という本来は相容れない者同士での師弟関係は、どちらにもいい影響を与えているようだった。

「あ、若葉と三日月。暁も指輪を貰えたわ！」

「ああ、おめでとう。最後の1人だったもんな」

練度を上げ始めたのが遅かったのもあるため仕方あるまい。それに、真つ白な状態で仲間になっていくわけだし。それがここまで育つたのだから、リコの喜びもひとしおだろう。

「暁は結局なんで施設に流れ着いてきたのかはわからないけど、助けてもらった恩は返せてるわよね。こんなに強くしてもらえて、ちゃんとみんなを守れるようになったもの」

暁の言葉に、見えないところで少し苦い顔をする鳥海。

暁の件は鳥海が大きく関係している。催眠のトリガーを引いたのは間違いなく鳥海であるため、暁の記憶喪失に対しても少なからず責任を感じているようだった。それもあってか、最後の練度上げには付き合ってるようにも思える。

今の今までその事実は暁に話していない。そしてこれからも話さないだろう。順風満帆に生きることが出来ている暁に、余計なことをする必要はない。

「記憶なんてどうでもいいわ！ お姉ちゃんが今ここで生きてるんだもの！」

「そうね、雷にそれを言われると何も言えないわ」

仲のいい姉妹である。お互いに記憶を失っているというのもあり、同じ境遇もあることで特に仲がいい。雷に関しては記憶を失っているわけでなく、そもそも記憶そのものが無いわけだが。

似たような者がいるというだけでも暁には支えになっただろう。そして雷は欲しかった姉妹を手に入れた。ある意味相思相愛。お互いがお互いを支え合う関係にはなれている。存在そのものが支え。

「仲がいいですねえ。戦った時も息があってましたもんねえ」

その2人の仲を綾波が楽しそうに語る。洗脳されていたときの戦鬪のことも笑顔で話せる程に回復している。

昨晩は曙と同じ部屋で眠ったらしいが、愚痴大会を開いたらしく、そのおかげで格段にスッキリしている。心の匂いも負の感情が大きく薄れていた。

「次の戦いでも一緒に戦うわ。私と、お姉ちゃんと、ボノ！ 綾波も一緒に戦ってよね」

「はあい、勿論。綾波もちよつと恨みがありますからねえ」

ちよつとどころではない負の感情が湧いてきているようだが、表情には一切出さない辺り、綾波は少し怖い。その空気を感じ取っていない暁と雷は同調するように頷くが、感じ取ったリコと鳥海は苦笑していた。

「その恨みを晴らすためにも、今は万全にしておくことだ。身体を休めて明日の最後の訓練に挑め」

「そうね。お姉ちゃん、お風呂行きましょうお風呂！」

「はいはい、雷はそういうところはお子様よねえ」

リコに言われて雷が暁の手を引いて風呂に向かう。綾波もそれをニコニコしながら追った。残されたリコと鳥海も、穏やかな空気を醸し出しつつそれを追う。仲のいい師弟関係は見ていて気持ちがいい。

「若葉^{ボク}達も行くか」

「そうね。そろそろ寝た方がいいだろうし」

これだけ見る限りでは、楽しく生きることが出来ている。こんな日常がもうそろそろ取り戻せるのだと思うと、心が躍るようだった。

決戦まであと僅か。有意義に過ごして、最高のモチベーションで戦いに臨みたい。

新の切り札

私、若葉は、最後の戦いを明日に控えた朝を清々しい気分で見送っていた。緊張感が高まってきているが、ついに決着がつけられると思うと、緊張より先に気合が入る。

私が目を開けると、三日月も同時に目を開ける。ここ最近はずっと息があっている。最早、一心同体と言っても差し支えないレベル。阿吽の呼吸とも言える連携も、今なら可能に思えた。

「おはよう三日月。今日もいい朝だ」

「おはよう若葉。本当にいい天気」

ここ最近、全く嵐にも見舞われていない。頻発するはずの嵐がなか来ないのは、私達の戦いを後押ししてくれているようだ。ここは施設では無いと言われればそうかもしれないが、昨日に見に行つたときにもゴミが流れ着いているようなことも無かった。

どうせ戦うのなら、快晴の空の下がいいだろう。私達の始まりは嵐の夜だったわけだが、同じ天候の中で決着をつける必要なんて無いのだ。そもそも私達は、最初のアレを思い出すため、嵐の夜が嫌いである。

「最後の休みだ。今日は何をしようかな」

「いつも通りでいいんじゃないかな。普段通りが一番よ」

「そうだな。三日月の言う通りだ。誰かに誘われたら何かするでいいな」

未だベッドの中、三日月の匂いを感じながら、気持ちのいい朝。夜ならそのまま盛ってしまいかねないこの環境ではあるが、今は朝なのだから、ちゃんと起きなくては。三日月も若干モジモジしたのは見逃さない。

そういうところまで息があっているのはどうなのかと思うが、相思相愛を実感出来るのでよしとしよう。三日月も時間は弁えるつもりはある様子。そこも私と同じ考え。

「三日月、今は起きようか」

「そ、そうね、朝だものね」

耳元で囁いてベッドから出る。三日月は微笑みながらも顔を赤らめていた。そんな姿も可愛らしいものだ。私にしか見せないこの微笑みを、私は守っていきたいと思う。

明日の朝から出撃ということになるため、本日中に各所から援軍が集まると、朝の会議で伝えられた。各所と言っても、今回の事件の異質さ、大淀の艦隊司令部の脅威も全て伝えられた結果、結果的に参加者は今までのメンバーに有明鎮守府の援軍を加えただけになってしまったらしい。よつて、今から来るのは下呂大将、新提督、そして有明鎮守府の艦娘のみ。

気持ちはわかる。ただの強敵なのではなく、同士討ちを狙ってくるような輩だ。艦隊司令部の存在があまりにも危険であり、深海棲艦との戦いで命を落とすわけでもなく、ついさっきまで一緒に戦っていたものに殺される可能性があるような戦い。一步引いてしまうのも致し方無し。

「ありがてエことに部屋はまだ空いてる。誰かの部屋に追加で入れてくれてこたア無エ。つつても、何人来るかは正確には聞いてねエんだけどな」

「新さんのところが不明だ。いつもは瑞鳳しか来ないから」

「だな。今回は増員してくれるとは聞いてるぜエ。総力戦だからな」

下呂大将のところからは第一水雷戦隊全員が来てくれるとは思いますが、新提督はどれだけ寄越してくれるだろう。施設の者だけでも相当数おり、全員出したら戦場は大変なことになってしまうが。

人数が多ければいいという問題でもない。前回大淀を倒した時は、最終的には分散も含めて十数人。おおよそ連合艦隊前後というところである。それでもやれるのなら、少数精鋭の方が戦いやすいこともあるだろう。特に私のような近接戦闘組は、他のものの攻撃手段を封じてしまう可能性だってあるのだ。

「作戦自体は大将が組み立ててくれている。俺らはその指示に従うのがベストだ。それについての説明はおそらく午後からになるだろう。それまでは昨日と同じように待機だ」

私達は昨日は遠征に行っていたため知らないが、基本的には鎮守府内ですら何をやってもいい待機状態。私は当初の考え通り、普段通りに過ごして誰かに何か依頼されたら手伝うという程度でいよう。

あくまでも本番は明日。今日は全員リラックスするのが一番の仕事である。身体は充分だから、心を癒す。

「この前言った秘密兵器だが、明石、完成したんだっけか」

「はい、昨日の夜に終わりました！ これについてはまた説明しなくちゃいけないので、全員揃い次第お披露目と行きましょう！ これは援軍との連携も必要ですからね！」

昨晩忙しい忙しいと言いながら工場で動き回っていた明石だが、それも一段落ついていた。秘密兵器は完成し、戦いへの準備も万端と言える。事前に試験運用が必要かは知らないが、完成しているのなら万々歳だ。

「援軍がここに到着するのも午後だ。早くても昼前つてところだろう。来たら出迎えてやってください。んじゃあ、解散。ベストにしとけよオ」

会議はこれで終わり。朝食も終わっているため、何事もなくフリー。少し名残惜しいが、平和な1日をより享受しよう。

午前中は久しぶりに二三駆とのお茶会。相変わらず私と三日月の関係についてズカズカと入り込もうとするが、生々しい話をするのは憚られるので、なるべくオブラートに包んで話したが、それでも何とか興奮された。

そんなことをしている内に、早速援軍が到着。大分早いかと思われたが、前以ての迅速な行動。5分前などとは言わず、いの一歩に行動していた。

「大将と別行動つてのは珍しいっすね」

「先んじて来させてもらった。先生からも言われていてな」

新提督が下呂大将とは別で来た。艀装まで積み込んだ大型車の運転は別の艦娘にお願いしたようである。

何やらどうしても一番最初にここに到着する必要があったらしい。

それもこれも、今回の増援により増やされた艦娘に理由があるそう
だ。

「四航戦の人達が仲間になったって聞いたんだけど！」

「今は我慢してくれ、瑞鳳」

そして相変わらずの瑞鳳である。空母ではなく航空戦艦なのだが、艦載機による航空戦が出来るというだけで興味の対象。すぐにでも会わせてくれとせがむようにはしゃいでいた。新提督はそれはもう大きな溜息を吐いていたが、これはこれで和めるため良し。

そして、増員されたという艦娘、今回の車の運転手が後ろからやってきた。その姿を見て、私達はどうしても身構えてしまう。

「新提督管理下の艦娘、軽巡洋艦大淀、戦列に加わらせていただきませう」

その者は、新提督の鎮守府に所属する軽巡洋艦としての大淀。秘書艦は瑞鳳だが、出撃をしつつも書類などの事務処理手伝いをする、ある意味内外問わずの万能戦力。なんと指輪持ち。

大淀であるが故に私達は大きく警戒したが、新提督と同じ土の匂いが漂ったことで、私は警戒を解いた。私が警戒しなくなったことで三日月も少しだけ安心したようである。

こういう反応をされるのが気に入らないか、ちよつと拗ねたような匂いが漂う。自分のせいではないのに自分のせいにされた時の理不尽な怒り。

「私がやったわけではないのにこういう反応をされるのはやっぱり嫌なんですよ」

「すまんすまん。どうしてもな」

「わかっていますけどね。はい」

咳払いをした後、改めて向き直る。拗ねた雰囲気はその時は失われていた。そういう視線で見られることが嫌なのは、私達が一番理解している筈だ。本当に苦痛を覚える。少し反省。

「敵が私と同じ大淀であるということ、新提督からの推薦をいただきました。また、下呂提督からも何処かの大淀が必要であるという話を聞きましたので、私が参加することと相成りました」

「最初は結構嫌がってたんだよね。淀ちゃん、なんで自分と戦わないといけないんだって」

「誰だってそう思うのでは」

瑞鳳に弄られて溜息を吐く。敵に自分と同じ顔がいると言われたら抵抗くらいはあるだろう。私だって嫌だ。メンタルの面でダメージが大きい。そんな中でもこの大淀は来てくれた。下呂大将がそうして欲しいと頼んだくらいなので、とても重要な位置に立つことになるのだろう。

来栖鎮守府の大淀は非武装故に事務専門。戦闘には参加出来ない。そのため、十分に鍛えられている新提督の大淀に白羽の矢が立つたらしい。本人からしてみれば堪ったものではなかったらしいが。

「すまないが、私の鎮守府からの援軍はこの2人だけだ。人数が多くなりすぎると逆に困ると言われたのでな。恨むなら先生を恨んでほしい」

「今は飛鳥の施設の奴らが全員いるんで、戦力としても充分整ってますぜ。来てもらえただけでも充分だ」

大本営という立场上、事の解決に戦力を向かわせるにしてもいろいろと制約があるらしく、また、下呂大将が多めに来ても何か変わるわけではないと最初から抑え気味に依頼していたところがあるのと。

実際、今回の件で万が一にでも敗北した場合、そのまま大本営が潰されてしまう可能性だってあり得る。新提督からの援軍は、必要最低限がベストであった。

負けたときのことなんて微塵も考えてはいないが、慎重に作戦を考えた下呂大将がそう判断したのだから、おそらくそれが正しいこと。いいも悪いも考えられることは全て練った上でのコレだ。

「若葉、三日月、久しぶりだな。痣が拡がっているようだが……三日月も髪が全て染まったのか」

いつものように、新提督は私達と視線を合わせるために少ししゃがんで話しかけてくれた。相変わらず子供に対しては慈悲深い瞳をする。

新提督と最後に会ったのは、瑞鶴が目を覚ましたときくらいか。その頃から考えると、私と三日月は大きく変わっている。侵食がより深くなり、2人の繋がりも強くなっている。心も身体も深く深く繋がっている。

「君達ばかりが苦勞する事件は、これで終わりにしたい。私達も手を尽くそう。これが終わった後のことも手を回している。絶対に嫌な思いはさせない」

「ああ、よろしく頼む」

「貴女は信用出来る人だと思います。私からもよろしく願いします」

三日月も最初の頃の警戒はようやく薄れ、新提督とは面と向かえるようになった。当然ながら表情は殆ど変わらないが。

戦後のことを考えてもらえるのはありがたい。なんだかんだで鎮守府ではないところが力を持ちすぎているということは、当事者の私達がよく理解している。いくら抑止力とはいえ、鎮守府では無いところがこんなことになっているのは大本営から目をつけられてもおかしくないようなことだ。

私達になんの影響もなく今まで通りの生活を保障してもらえればそれでいい。非武装になっても構わない。艦装を取り上げられるのは困るが、あの施設から出ることを禁止と言われてもまだ許せる。とにかく、私達にこれ以上の苦行を強いてこなければいい。

「んじゃあ早速、大淀は工廠に来てもらえるか。お前さんが今回の戦いの切り札になり得るからな」

「そうみたいです。ではそのように。艦装も必要ですよ」

「おう、頼むぜエ。明石が準備して待つてるからなア」

来栖提督の先導で、大淀は工廠へ。新提督もそれについていき、瑞鳳は当たり前のように別行動で空母隊のところへと駆け出した。あまりにもブレない。メンタルがおかしい。どんな状況にいたとしても、瑞鳳だけはあのまま。逆に怖いくらいである。

しかし、大淀が切り札になり得るとはどういうことだろう。私達だけではどうにもならない部分を埋められるということだろうか。

どうにもならない部分が何かあるかと思案してみたが、どう考えても艦隊司令部にしか行きつかない。

「あの大淀も艦隊司令部を持っていてるとかか」

「だよね。私もそれしか思い付かなかった」

三日月も同じところに行き着いたようだった。あちらの大淀も自分で言っていたが、軽巡洋艦娘である大淀のみが持つ力が艦隊司令部である。だが、本来の艦隊司令部は、出撃中でも提督並みの指揮が執れるようにするだけの装備だ。周囲の者を支配するような力は当たり前だが持っていない。あれはあちらの、司令部棲姫の持つ唯一の力。

ならば、何をするのだろうか。秘密兵器というのも関係あるだろうし、そこは午後に説明してもらおうのが良さそうである。

「まあ、いいか。何かの秘策なんだろう。そのおかげで戦いやすいのならそれでいい」

「うん、私もそう思う。大将が立てた作戦の内だし、きっと大丈夫よね」

「ああ。若葉^{ポク}達は流れに身を任せよう。きっといい方向に行くさ」

誰もいなくなつたからか、指を絡ませた後に私にしか見せない満面の笑みを見せてくれた。それだけでもやる気が出るといふもの。時間が時間なら危なかつた。まだ理性が利く時間だ。大丈夫。

準備は次々と完了していく。戦いまでの時間は後僅かだが、その時間を有意義に使っていこう。

別個体の悪業

昼食前には、新提督が連れてきた今回の切り札、正しい道を歩んだ大淀の艦装改修が完了した。明石の秘密兵器が搭載されたということだが、見た目は何も変わっていない。敵の大淀も、艦装自体には明確にそれとわかる部分は無かったが、それと似たようなものか。

私、若葉はそれがどうなったかを確認するために工廠に来ていた。勿論、三日月も一緒に。共に戦う仲間なのだから、今のうちからその姿に慣れておく必要もあるだろうと思っただけだからだ。決戦直前に新規参入というのは、三日月に対してはストレスにもなりかねない。

だが、工廠にいた大淀はすっかり意気消沈していた。ここに来るまでにほぼ全員から身構えられたことを相当気にしているらしい。今回の件の間接的な被害者は間違いなく各鎮守府の大淀である。

その様子に、改修作業を見届けていた来栖提督と新提督も苦笑していた。私も身構えてしまったところがあるので、正直気の毒とは思えない。

「こんな気が滅入る出撃は初めてかもしれない」

「まあまあ、今回はエースになるから、ね？」

「明石は出撃しないし、敵と同じ顔がないからそんなこと言えるの」
軽口に憤慨した大淀を、明石は適当にあしらっているようにも見えた。大淀と明石というのは基本的には仲がいいらしい。こういうやりとりも、喧嘩ではなくただのじゃれあい。一切の負の感情が匂わないので心配はしていない。

何というか、大分印象が違う。今まで見てきた大淀がアレだったの
で、こんな人間味のある仕草というか、負の感情を撒き散らさない雰囲気を持っているのが嘘のようだった。

これが本来の大淀なのか、それとも新提督の大淀だからこのようなかはわからないが、新鮮であることは確かだった。

「うん、大丈夫。負荷が増えてるみたいなのはないわ」

「それなら良かった。前線に立つてもらおうことになるからさ、艦装そのものも限界ギリギリまでチューンナップしておいたよ」

「ありがと。確かに反応がいいかも」

よき友人としての言動。明石があんな態度をとる相手も、おそらく大淀だけ。だからこそ、今回の戦いには明石も大分気合が入っていた。

「事が済んだら取っ払うから、生きて帰ってきてよ」

「当たり前でしょう。死にたくて戦場に出る子なんて何処にもいないわ」

「だね。大淀は今回確実に狙われるだろうから気をつけてね」

それほどまでに重要な装備なようだ。やはり艦隊司令部対策の何かに違いない。敵の大淀もそんなものを持ち出されては気に入らないだろうし、真っ先にこちらの大淀を狙うだろう。

ならば、私達が大淀を守る必要があるだろう。大淀を守りながら大淀と戦う。なんて面倒くさい戦場。だが、それが勝利の道なのだからやらねばならない。

「三日月イ、ありやまだ取っ付き易いだろうか？」

「……はい。私の知るそれとはまるで違います」

改修の様子をジツと見ていた来栖提督に言われ、三日月も少し安心したようである。

こうしている間も大淀を見ていたが、私達の知るゲスでクズな大淀とは雲泥の差。見た目通りの生真面目そうな雰囲気と匂いに、戦いに身を置く艦娘としての鉄と油の匂い、そして新提督と共に土弄りでもしているのか、草や花の匂いも僅かにした。どちらかといえばいい。

「……あの、1つ教えてほしいんですけど」

「何かあるか？」

その三日月の言葉を聞いたことで、観察していた私に大淀が尋ねてくる。

「敵となった大淀……私はどんな感じなんでしょう。うちの提督もまだ目には見えないはずですから、詳細を知りたいんですが」

「確かに、私も知りたいな。援軍として参加させてもらうが、敵が何者かは結局今の今までわからず終いだ。一番戦ってきた君達から教え

てもらえないか」

新提督も大淀と同調した。敵の大淀がどんな奴なのか、決戦前に知っておきたいと。

正直教えていいものか悩むが、黙秘する理由も無い。全て伝えて、その上で戦ってもらうべきだとは思う。特に新提督は、大本営として詳細にそういうところは聴いておきたいのだろう。下呂大将からも報告は行っているだろうが、私達は確実に感情的な説明になる。現場の意見として、そちらが聴きたいようである。

「若葉達ボクが感じた通りに話せばいいんだな」

「はい、それで結構です。貴女の口調も気になりますけど、今は置いておきます。駆逐艦若葉はそんな一人称では無かったと思いますが」

「侵食が拡がっただけだ。新提督ならそれで納得してくれるだろう」

「ああ、私はそれでわかる。それに、また後から説明してくれればいい。今は敵のことを頼む」

それならと、今までのことを大淀に説明した。少し時間がかかるものの、新提督や明石も経験していない、施設での直接対決のことまでを簡単にだが全て。

そこに、あちらが望んでいた感情的な部分も織り交ぜたことで、三日月が酷かった。感情的になっていいとわかった途端、新提督や大淀相手にも愚痴大会と同じペースで口汚く罵る。ここ最近出来ていなかったため、溜まりに溜まった鬱憤がここで撒き散らされてしまった。私もその間は口を噤んでしまう。

三日月の溢れ出した鬱憤を聴き、新提督と大淀は啞然としていた。来栖提督すら苦笑していた。私の知る三日月はこういうものであると思っているのだが、本来の駆逐艦三日月はこういうことをするタイプでは無いらしい。

私はこの三日月を愛しているわけで、他の三日月のことは正直どうでもいい。三日月も同じように思っていることだろう。私達はどういうものであるとお互いにわかっているのだから、相思相愛でいられる。こんな荒々しい愚痴を言う様子も愛おしい。

「よ、よくわかった。相当溜め込んでいたことも、な」

「理解してもらえたのなら幸いです。私も少しスッキリしました」

新提督が引き攣った顔で返す中、溢れ出した毒に当てられたかのように、大淀がげんなりしていた。自分と同じ存在がここまで罵られるような事態を引き起こしていることに、言いようのない負の感情が湧き上がっている。

別個体の自分が世界の敵となったことに対する悲しみ、何故大淀でなければならなかったのかと考える疑念の苦しみ、災厄となった別個体を粛正しなくてはと決意したことで生じた怒り。

「はあ……私の姿を見て身構えるのもわかりますよ。そこまでのことをやらかしているのなら、姿そのものがトラウマになってしまってもおかしくないですし」

「別であることが理解出来たので大丈夫です。本人だったらお構いなしに殺してます」

表情を変えずに言い放ったので、大淀はさらに深い溜息をついた。物騒極まりないが、私も三日月と同じように、誰が制止しようが知ったことではなく、もう一度息の根を止めるために行動するだろう。なんだか初期の赤城と翔鶴の関係を思い出す。

と、ここで明石が何か閃いたように手を叩き、大淀に詰め寄る。

「そうだ、大淀。あっちの大淀と区別付けるためにさ、何処かいつもと変えておいたら？ 今だけでいいから」

「……それがいいかな。提督、良かったですか？」

「ああ、区別は必要だろう。髪を結ぶなり、服を一時的に替えるなり、好きにすればいい」

確かに、戦場では突発的に味方の大淀を攻撃してしまいかねない。そうで無くても、敵の大淀が接近して攪乱してくるくらいはしてきそうだ。すぐに見分けがつくようにしておいてもらえると、全員が助かるだろう。気を配らなくても良くなるだけで、戦いやすくなるというもの。

あちらの大淀は最終的に深海棲艦と化し、衣装も生まれ変わった際に作られたまさしく深海のそれというものを着込んでいたが、今回はどう来るかわからない。それこそ、大淀そのままに来るかもしれない

し、私が殺した時の姿で来るかもしれない。まるで違う可能性だってある。

「被らねエようにしときやいいだろうな。今すぐにどつか変えて、午後のうちに浸透させておいてくれや。そうしときや、戦場で誤射なんて無くなるだろうぜ」

「了解しました。無難なのは髪を結ぶことですね。明石、リボンとかそういうのちようだい」

「はいはい。何か適当なもの見繕うよ」

私のタキシードや三日月のウエディングドレスを用意出来たくらいなのだから、服の類は明石に頼めばいいようだ。リボンの1つや2つならすぐに出てきそうである。

「悪いな大淀。うちのは艤装がまだ見つかつてなくてなア」

「いえ、わかっています。今回の中では私が一番練度が高いというのも察します。私が頑張れば皆が救われるというのなら、誠心誠意頑張りますよ」

来栖提督の言葉に苦笑した大淀。この笑顔ですら嫌味が無い。本来の大淀は、こうも付き合っていきやすいということか。あの歪み方は、本来の真逆になったとも言えた。

「淀ちゃん、機嫌直った?」

そこへ、テンション高くキラキラしている瑞鳳がやってきた。哨戒をしている空母隊のところで思う存分艦載機を見ることが出来たので、有意義な時間を過ごせたと顔に書いてあるし匂いですぐにわかる。

「大丈夫ですよ。公私混同はしませんから」

「つてことは、まだモヤモヤしてるんだね。大丈夫? 水偵飛ばす?」

「誰もが飛行機飛ばせば気分が良くなるわけではないですからね?」

「そうなるも駆逐艦の子達はどうか気晴らしすればいいんですか」

「それはまあ、残念だねっていうか」

相変わらずの瑞鳳である。

「ごめんなさい。説明を求められて当たり散らしたので」

「ああ、三日月ちゃんなら仕方ないよ。私も哨戒の人達からいろいろ

聞いたけど、それだけ言っただけの仕打ち受けてるもん」

良き理解者。こういう仲間達がいるだけでも、私達は今の生き方で間違っていないと確信できる。間違っていると言われても直すつもりは到底無いが。

「そちらはもう満足か？」

「満足！ やっぱり深海の艦載機の不自然な挙動カッコいいよねえ。それに今回から四航戦の人達いたから、水上機も見せてもらっちゃった。艦載機と水上機の同時発艦、私には出来ないからなあ。いいよねあのシステム！」

艦載機のことになると本当に生き生きしている。

「でも、日向さんはまだちよつと神妙な顔してたかな。瑞雲飛ばしながらすぐ集中してたよ。何というか、話しかけづらい雰囲気だね」そこはまだ仕方がないと思う。つい先日洗脳が解かれて未だ立ち直れていないのだ。考えすぎだと諭しても、それが日向の在り方なのだと言われれば口出しも出来ない。

だからこそ哨戒に誘われたというのもある。一番集中出来ること、水上機による哨戒で気分を落ち着かせ、また違った方向で考え直すことが出来れば開き直れるのではないかと、加賀と伊勢が画策した。

それがいい方向に進んでいるかはわからない。だが、昨日も日がな一日瑞雲を飛ばし続けていたらしく、その集中力は目を見張るものだったのだとか。

「午後からもアタックしてみようかな。瑞雲もいいよね、ほらあの下駄の部分が可愛いだよ。九九艦爆といい勝負してる！ 水上機もいいよねえ」

「ああ、うん、わかった。わかったから瑞鳳、落ち着こうな」

このテンションを見ると、明日が決戦という緊張感を吹き飛ばしてくる。さつきまで落ち込んでいた大淀も、仲間のこのテンションで少しは気分が晴れたらしい。

「ということ、淀ちゃんも水偵飛ばそっか」

「はあ……言い出したら聞きませんよねホント。来栖提督、何か貸していただけますか」

「おう、好きに使ってほしい。零観辺りは浮いてるからな。明石、用意してやってくれや」

苦笑しながら明石も装備の準備をする。少し強引ではあるものの、前向きになれるのならそれでいいか。

ならば、瑞鳳に日向と話をしてもらうのもいいかもしれない。考えすぎな日向相手でもこのテンションが維持できるのなら、少しは気が晴れそうだ。

「すまない、うちの瑞鳳が」

「いや、これくらいなら大丈夫つスよ。むしろ胆が据わっていい。こんな状態なら誰でも臆しちまうってもんですぜ。あれだけ明るきや、仲間の鼓舞にもなるってもんだ」

あのまま戦場にいってくれるなら、私達も戦いやすいかもしれない。落ち込んで実力を発揮出来ないより、常に笑顔で鼓舞し続けてくれた方がいいに決まっている。

瑞鳳が参加メンバーでいてくれることがこんなにありがたいことは無かった。

戦いの準備は刻一刻と進んでいく。心持ちもちゃんと出来ている。この調子で明日に臨みたいものだ。

最後の会議

昼食後、下呂大將が来栖鎮守府に到着。連れてきてくれた援軍は勿論、第一水雷戦隊である。あの戦場で唯一、艦隊司令部の効果を全く受けることの無かつたまるゆも、今回は運転手兼戦力として参加が表明されている。とはいえ、流石にまるゆ対策をしてこないわけがないと踏んでいるため、頼り切っているわけではない。だからこそその大淀。

私、若葉も当たり前のように出迎えに出ていた。嘘発見器はもういないのだが、これが習慣化されたことでこれが当たり前の状態に。「私からの援軍はいつもの者達ですね。戦闘した経験があり、且つ、私の持つ精鋭です」

「ありがてエッス」

「君達には苦勞をかけますからね。本来なら私がやらねばならないことなのですが、頼らねばならない部分が多過ぎました。至らず、申し訳ない」

前回の襲撃の時は、下呂大將だけで全てを終わらせてくれていたが、結果的には大淀には逃げられている。それも踏まえて、今回は念には念を入れたというのもあるらしい。

基本的には最も近い位置にいるであろう来栖鎮守府からの出撃となる。出撃メンバーは後から通達されるであろうが、施設のメンバーはほぼ全員が確約されているようなもの。因縁があり過ぎる。

「有明さんの艦娘はまだ来ていないようですが、連絡はありましたか？」

「今向かってるとは聞いとります。もうそろそろだと思っんすが」
などと言っている内に、工廠から騒がしい声が聞こえてきた。どう考えても利根の声である。向かっている途中に先手を打たれて襲撃されているなどということもあり得たため、無事に到着してくれたのは安心。

有明鎮守府は未だ規模が小さいということで、増援として来てくれたのは利根と筑摩のみ。それでも人員が増えるだけありがたかった。

チリも積もれば山となる。戦力はそれだけでも十分に強化された。

「提督から伝言を預ってきておる。筑摩、伝えるのじゃー!」

「はい、利根姉さん」

相変わらずそういったところは筑摩頼りである。

「三十駆の暗示は解けていました。例の言葉でも何もありませんでした」

やはり一度発動してしまった後に入渠したことで、暁のように記憶と一緒に消えてくれたようである。これは安心だ。

「私達の鎮守府からは私と利根姉さんしか援軍に来れず申し訳ございません。未だ資源回復中ですし、また、近海にまた深海棲艦の発生を確認しました。そちらにも戦力を割く必要があります」

「なるほど、理解しました。その深海棲艦達に違和感はありませんか?」

「今回は統率されているような雰囲気はありませんでした。ですが、タイミングが合い過ぎています。何かの指示があったのかもしれませんが」

また大淀が何かしらの邪魔をしているのかもしれない。クローンとして蘇った2代目の大淀が、艦隊司令部の試験運用をしていると思える。下呂大将もその線で推理しているようである。

それが本当なら、擬似的に蘇生された大淀は、私達が倒したはずの状態から据え置きと考えていいだろう。予想通りといえは予想通り。あの場で死の恐怖により真の深海棲艦化をしたわけだが、それ以前の状態か。それでも艦娘深海棲艦問わずに支配出来る力はあるのだから厄介だ。それをさらに改良している可能性だってある。

「ありがとうございます。君達が参加してくれるだけでもありがたいです。残念ながら航空巡洋艦はいませんでしたから。その戦力、使わせていただきます」

「任せるがいい。この利根型航空巡洋艦が勝利をもたらそうぞ!」
「今勝利って言った!?!」

利根の発言に反応して飛び込んできたのは足柄である。こういうところを見ると、足柄のタイプは瑞鳳に近い。空気を讀まず、しかし

空気を悪くしない。

「うむ、吾輩達が艦隊に加わる以上、もう心配はいらぬぞ！」

「いいわね、いいわね！ 後から演習しましょうか！ 実力を知っておきたいもの！」

「コホン。君達、まずは明日の決戦のための作戦会議ですよ」

下呂大将もその様子には苦笑していた。元気なことはいいいことである。

今回参加する者が全員揃ったため、会議室にて決戦のための作戦会議。これが最後の会議になることを祈りながら、みんなでそれに参加する。今は何もわからないかもしれないが、仲間外れにするわけにもいかないの、初霜もこの会議には参加することになっている。

「全員集まりましたね。では今回の作戦を話します。新さん、構いませんね？」

「ああ、問題ない。私はあくまでも先生の考えた策を大本営に通達する役でもある。法を犯していないのなら、基本は全て許可だよ」

大本営のお墨付きも貰えているので、大手を振って作戦を実行出来るというもの。

「最悪の状況を考えての作戦にしております。得てしてそういうものは当たるでしょう。なので、それを前提として話をします。今回の大淀は、前回よりも強敵だと思った方がいい」

飛鳥医師が蘇生を研究していた理由、それに今大淀に協力している医療研究者2人が死なない艦娘を研究していた理由は、経験を残したまま戦場に戻すことである。蘇生という形で同じ者を戦場に戻したのが飛鳥医師。それに対して、今回は全く同じ別の個体を用意して戦場に戻すというのが敵。

蘇生と違う点は、2代目3代目を先んじて強化しておくことが出来るということだ。練度が限界まで行っている艦娘の経験をそのままにクローンが作られて、さらにそこから練度を上げるなんてことまであり得る。本来の限界値は175とのことだが、大淀は200を超えている可能性があるわけだ。

「戦いの経験を持ち、さらにそこから成長している。むしろあちらは、我々のことを全て知った上で、対策を施してから戦うことが出来ま

す。それが擬似的な不死の強みですからね」
忌々しそうに顔を歪めるのは飛鳥医師である。自分がやっていたこと、間違いに気付いて止めたことの完成形を見せられているのだから無理も無い。

「つまり、今我々は全ての手札を使い切っている状態に近い。そこでこちらは大淀を用意しました。新さんの大淀に参戦してもらいます」
その大淀、敵の大淀と姿が被らないよう、髪を結んでポニーテールにしている。また、小さな変化だが眼鏡を少し変えたりもしていた。それだけでも印象が変わる。咄嗟に大淀を攻撃しようとしたときに間違えるようなことは無くなるだろう。三日月ならそれでも判断出来るはず。

「秘密兵器、積んでありますね」

「はい、ここに到着した時点ですぐに艀装を改修してもらいました」
「よろしい。大方わかつているでしょうが、この大淀に積んだ秘密兵器、こちら側の艦隊司令部により、司令部棲姫仕様の艦隊司令部の支配の力を無力化します」

下呂大将の憶測が追加されていた。艦ではなく陸上施設であるリコには効きづらく、海軍ではなく陸軍であるまるゆには全く効かないという特性があった時点で、艦の司令部という特性は失われているということがわかっていた。

そのため、抜け道をもう一つ考えていたのだ。最初から別の艦隊に所属している状態を作る。最初から味方の大淀の支配下に置かれておくことで、敵の大淀の支配からは外れることが出来るだろうという考えだ。

「当然ですが確証は持てません。そんなこと関係無しに上塗りしてくる可能性だって十分あります。ですが、今までにルールや概念を乗り越えられなかったところを考えると、これも大丈夫でしょう」

それに、ともう一つ追加。

「そもそも、大淀の支配の力が無差別なのに、伊勢や日向、綾波に支配

が効いた素振りが見えなかつたことを考えると、そういう細工がされているに決まっていますよ。今まで疑問に思わなかつたことが間違っていました」

確かに、艦娘だろうが深海棲艦だろうが容赦なく、どう見ても区別なく支配の力が行き届いていたはずだ。それなのに、あの時に敵対していた3人には、その支配が届いているようにには全く見えなかつた。あの時は深海の侵食が脳にまで回っていたはずなので、深海への支配も届いていたはずだ。

ならば何故それが起きなかつたか。最初から司令部の支配下に置かれていたからだ。大淀の艦隊司令部の力は、支配権を奪うことは出来ないが支配されていないものは支配出来ると、下呂大將は考えていた。

「何度でも言いますが、これは私の憶測です。過信は禁物。艦隊司令部の効果範囲などはわかりませんが、それを考慮して部隊は小分けにします」

先の部隊が支配されたとしても、次の部隊でそれごと押し潰す方向で行く。

「基本的にはあの戦場で支配下に置かれなかつた者を優先します。飛鳥の施設の者達と、ケツコン艦はギリギリでしたか。あとは……」

「はいはいはい！ 私も耐えたわ！」

そう、足柄。負けたくないという気合いで支配を回避していた唯一の者である。その気合いの入れ方は尋常ではないと思った。

「そこは優先順位が高いです。ですが、それだけでは足りないのも確かです。そこで来てもらった利根と筑摩、そして来栖の鎮守府から出してもらいます。潜水艦も不意打ちに使えるでしょう。本当に総動員ですよ」

その分配はギリギリまでここで考えるとのこと。敵が大淀1人ならいいのだが、そうも行かなそうなのが次の戦場だ。人形が用意されている可能性も高く、完成品だって並べられている可能性がある。野良の深海棲艦すらも来そうだ。

こちららも連合艦隊ならば、あちらも連合艦隊。多対多の一大決戦で

ある。前はこちらはホームだったが、今回はアウェーというものなかなか辛い。

「作戦とは言いづらいでしょうが、戦い方は比較的簡単です。こちらの大淀を守りながらの殲滅。これ一本に尽きます。これだけ長々話しておいて、最終的にこんなに雑になってしまつてすみません」

「いや、そうならざるを得ないだろう。小細工も通用しない」

新提督もこのやり方には全く文句が無いようである。無駄に小細工をしたら、それを逆手に取られる場合だつてある。ならば、知つたことではなく真正面からぶちのめせば関係ない。

当然現場判断で搦手くらいはする。それを今考えることが出来なただけだ。そういう戦い方は今までもやってきている。

ならわかりやすい。今まで通りだ。

「今回の目的は大淀の撃破ですが、本来の目的は鎮守府の制圧です。時間をかけると大淀は蘇る。それを抑えるためにも、事をそのまま終わらせる必要があります。鎮守府空爆が妥当なのですが、大淀の協力者2名を諸共というのは、少々問題がありました。ですので、中に突入して捕縛する方向で考えています」

いくら害悪でも、人間を殺すというのは流石に抵抗がある。それに、その2人に指示した者を炙り出し、一斉検挙へ繋げたいという思いもあるようだ。

もうこんな研究を裏でも進められるのはやめてもらいたい。艦娘の意思を完全に無視した研究は悪意しか生まないことがよくわかつた。悪意に悪意が重なつて、今回は大惨事が引き起こされている。

「突入は戦闘で傷が少ない者にしてもらう予定になるでしょう。そのためにも戦力を分散させる必要があります」

大淀があまりに強敵で何人も怪我をしてしまった場合は、突入部隊がその場で編成出来ない可能性はある。故に、突入のための後発部隊は準備しておくべきだろう。そちらにどれだけ戦力を割くかは、下呂大将に任せる。

「あと先に言っておきます。突入部隊には私も参加しますので」

そう言うのではないかとは思っていたが、実際に言われると何事か

と思つてしまうものである。人間が今回の戦場に出てくるのは流石に危険すぎる。

簡単に言つてくれるが、護衛する側のことも考えていただきたい。鎮守府の中だつて、人間にとつて安全とは言えないだろう。それこそ、何人目かの大淀が護衛に回っている可能性だつてある。人間が死んだら蘇生はもう無い。大淀だつて死守したいはずだ。

「いや先生、それは危険だろう。貴方は以前に大怪我を負つていないじゃないか」

「そうですね。ですが、今回はただの戦いではありません。人間の捕縛が必要なんです。それは艦娘の手だけでは荷が重い。今回の事件は、大淀がやったということが大きな問題なんです」

今は違うにしても、艦娘が引き起こした事件というのが問題。それを艦娘だけで解決しようとし、万が一その協力者が自傷だろうと怪我を負い、『艦娘に傷付けられた』などと宣った場合、ただでさえ難しい位置の私達の立場が、余計に悪くなつてしまう。艦娘＝悪というレッテルすら貼られる可能性もある。

故に、信用度のある下呂大將が現場に赴き、私達には何の罪もない事を証言すること。私達を守るために、下呂大將は危険を冒すわけだ。

「ならば私も出る。大本營の私が証言者になれば安心だろう」

「そうですね。それだと助かります。後発の突入部隊として、一緒に参加してください」

とんでもない作戦だが、全員が笑つて戦いを終えるためには仕方のないこと。素直に肯けないが、そうするしかないというのも理解は出来た。

「私からは以上です。残り半日、自由に過ごしてください。明日早朝、決着をつけましょう」

会議はこれで終わり。詳細は今から詰められるが、大まかには決まった。

決戦は明日の朝。これで全てを終わらせる。

誇りの瑞雲

下呂大将から作戦要項が伝えられ、残された時間は自由に過ごすということになった。ある意味これまでと同じ。明日の朝まで英気を養い、最高の状態で戦いに挑むことになる。

私、若葉が一番英気が養える状況というのは、勿論三日月と共に過ごすこと。ぶっちゃけてしまえば今までと同じである。残された時間は少ないが、いつも通りに過ごせばいい。夜は夢の中でシグ達と話すのもいいだろう。やれることは全てやって明日に挑みたい。

ここまで来たら全員が精神状態を健全に保つことに努めることになる。それが演習である者もいれば、お茶会である者もいる。結果的には午前中と同じことをするだけ。新たに鎮守府に来ている下呂大将や第一水雷戦隊、利根筑摩もそれに倣っていた。

下呂大将は会議中に話していた通り、明日の出撃順を来栖提督や新提督と打ち合わせ。神風はいつもの通り、鳳翔と共にそれに参加。利根は筑摩が見守る中、会議の前に話していた足柄との演習。まるゆはシロクロ筆頭の潜水艦達と交流。そして神風以外の神風型は自由気まま勝手気ままに行動。阿武隈が溜息を吐いているのがまた見えた。

「みんな自由だな」

「そうね。私達もいつも通り」

「だな。一緒にゆっくりしような」

私達も自由気ままに。ここでやれることは限られているものの、施設にいる時とは違った風景が見られる。散歩するだけでも楽しいものだ。三日月と一緒になら何処で何をしていても楽しい。

夕暮れまでは三日月と鎮守府の外を散歩していた。松風に散歩デートかと冷やかされたが、その通りだと毅然とした態度で返したところ、驚きつつもケラケラと笑われた。私達の絆に冷やかしかなんて通じない。もう三日月も恥ずかしそうにすらせずに私にしっかりと抱き付いてくる程である。それくらい見せつけてもいい。

海岸線を歩いていると、近海を哨戒する艦載機の影が見えた。少し

ずつ暗くなってきたもの、まだ夕方になったばかりという時間帯のため、哨戒はギリギリ出来るくらいの時間。

「哨戒、まだやってるんだな」

「みたいね。でも数が少ないかな」

昨日見たときは艦載機の数が違い、最後の最後というイメージ。哨戒をしている者が少ないか。私が三日月と散歩に出る前、赤城と加賀を筆頭に英気を養うとお茶会を開いているのは知っている。そうなる艦載機を飛ばせるのは伊勢日向と瑞鳳、後は施設出身の深海棲艦くらい。

目を凝らして見ると、一部は深海の艦載機であることがわかる。特徴的な形状のため、アレを飛ばしているのはセスであるとわかる。その隣のものも特徴的だからすぐにわかった。日向が飛ばす瑞雲である。

「日向がセスと飛ばしているのか」

「じゃあ、日向さんは少しは立ち直れたのね」

結局昨日も今日も時間が続く限り延々と瑞雲を飛ばしていたと聞いている。それを勧めた伊勢は、やりたいようにやらせてやってほしいとお願いしていた。誰もそれを止めようとしなない。

考え過ぎとも言われていたが、目を覚ました直後だから混乱していたのもあるだろう。今は心を落ち着けることが出来ている。表情と匂いからそれは感じ取れる。初めて哨戒に参加したときから兆しは見えていたが、しっかりと大成していた。

「うまいものだな、エコ」

「でしょ。私の自慢の子だよ」

知らない間に日向とセスが仲良くなっていた。おそらく、精神的に参っていた日向に、いつものようにアニマルセラピーを施そうとしていたのだろう。それも正解であった。

艦載機を飛ばすエコの甲板になっている頭を日向が撫でると、エコは心地よさそうに身をよじる。日向の表情が、ここで目を覚ました時より優しくなっていることもわかった。

「日向、調子は良くなったのか」

「……若葉か。幾分は良くなったとは思う。胃は痛くない。夕食からは通常の食事だ」

私と三日月の顔を見ても、顔を歪めるようなことはない。負の感情の匂いは殆ど感じなかった。今の時間まで含めると丸2日は延々と飛ばし続けていたはずだ。他の空母隊がやらずとも、日向だけは時間の許す限り瑞雲を飛ばし続け、そして心を落ち着けていた。

その結果、発艦の精度は段違いになり、ど素人の私でもわかるくらいに伸び伸びと飛んでいる。2日間、集中に集中を重ねて、自分自身と向き合いながら、落ち着いて考えた成果が瑞雲に出ている。

「癩だが、伊勢の言う通りだった。落ち着いて考えるべきだった」「そうか」

ボソリと呟くように吐き出した。哨戒に誘われたときから、ずっとそのことを考えていたのだろう。あのときから少しずつ機嫌は良くなっていったが、今はその時以上だ。

心を落ち着かせるきっかけが、あの時の日向には無かった。当然だ。今の今まで洗脳が施され、悪逆非道の限りを尽くしてきたのだ。生真面目であればあるほど、心に受けるダメージは大きいということ。はみんなよく知っていること。

「自らの命を捧げても、誰かが帰ってくるわけでもない。ならば、私が手にかけてしまった者達のために戦う方が償いとなる」

「そうだな」

「それに、初春にも助けられた」

昨晩も姉のカウンセリングを伊勢と共に受けたのだと話す。姉の特技が好評で何より。私も嬉しいものだ。

伊勢と同じように、憑いているもののけには許されていると言われ、そこから思うこと全てに返答してもらえたのだとか。流石私の誇るべき姉である。

「私は思い詰めすぎだと悟ることが出来た。皆のおかげだ」

「立ち直ってくれたのならそれでいい」

「完全ではないがな」

まだ心の真ん中には蟠りはあるという。そんなものみんなそうだ

ろう。あんなことをやらされて、蟠りが無いわけが無い。今ここに
救出された者達全員が抱えている病だと思えばいい。

誰もあの時のことで苦しんでいないわけではないのだ。三日月
だってそう。一時的にでも支配され、仲間達に牙を剥いたことを激し
く後悔していた。私が慰めることが出来たから良かったが、そうで無
かったら深海の侵食で死を選ぶ程だった。

「もう大丈夫、とは決して言えない。だが、戦えるさ。報いるために倒
すべき者もまだいるみたいだからな」

「……そうだな。だから、手を貸してほしい」

「勿論だ。大淀を斃すことで、手にかけて者達に報いることが出来る
だろう」

償いのために倒す大淀が死んだことで悩んでいた部分もある。何
もかも終わった後に罪だけ残されて、凄惨な被害者に報いる手段が見
つからないというのも悩みを深くしていた原因であった。大淀が擬
似的な不死を手に入れたことにより、その悩みが解消されてしまう
というのは皮肉なものである。

結果的に、日向は大淀が生きていたことで救われてしまった者にな
る。喜んでいられるわけでは無いが、ありがたいと感じている節はある。
本人はその自覚があるようで、今の状況に複雑な感情を持っているよ
うだ。

「はいはい、また変に考え込もうとしたらだろ」

そこにすぐにセスがアシスト。深く考え込みそうになったところ
に横槍を入れることで、気持ちを整理させる。

「……ああ、ダメだな私は。どうしても負荷がかかる」

「そんな時こそ、エゴを使ってよ。浮き輪さんもいるからさ」

セスの合図でエゴが日向に飛びつく。それをガツシリと受け止め
た後、また甲板を撫でていた。あの強烈な体当たりを受けても体勢が
全く揺らがない辺り、流石は戦艦だと思えた。

「ストレス抱えてない奴なんて誰もいないよ。みんな何処かに黒いも
の持たされたんだ。わかるだろう？」

「そうだったな……」

「自分だけじゃないって思えば、多少は楽になるんじゃない？ あんまりいいことじゃないかもしれないけどさ」

メンタルカウンセラーは最早姉だけでは無い。アニマルセラピーを使いこなすセスも立派なカウンセラーだ。シロの心の拠り所になっっているし、今でも3体の浮き輪達は引つ張りだこ。今や本人すらも今のように問診してみたことでカウンセリングが出来る程だ。

門前の小僧ではないが、長く施設にいたことでいろいろやれるようになったことで、もう普通の深海棲艦とは到底言えない域に達している。施設の者達はみんなそんなようなものではあるが。メンタルカウンセラーな深海棲艦なんて、何処を探しても見つからないだろう。「そんなことにも気付けなくらいに追い詰められていたんだな、私は」

「追い詰められていたっていうか、勝手に思い詰めてたってことだね」「お前はなかなか言うな」

クスリと微笑む。日向のここに来て初めての笑顔だった。この表情が見ることが出来たのなら、これは充分に開き直れたと考えてもいいだろう。消えない蟠りはいくらでもあるが、強がりでも開き直れているのならまだマシだ。

それでもキツイというのなら、周りが支えてやればいい。日向には同じ境遇の者が沢山いる。さらには実の姉だつて同じ場所にいるのだ。思い詰めることをやめ、周囲に目が向けられるようになった今なら、早い段階で本当に立ち直ることも出来るだろう。

「もうそろそろ時間か。名残惜しいが、哨戒を終わらせることにしよう」

飛んでいた瑞雲が着艦。話しているうちに日が傾き、大分薄暗くなっていた。

「やはり瑞雲はいい。飛ばしている間は心が落ち着く」

「思い入れがあるんだな」

「そうだな。航空戦艦としての誇りを得ることが出来る、最高の機体だ。瑞雲があることで、私は今の力を持っていると実感する。これが無ければ、集中も出来なかったかもしれない」

加賀と伊勢の画策は大成功とも言える。日がな一日飛ばし続ける程に思い入れがあるのだから、一番の心の拠り所と言つてもいいほどだろうに。

「戦場でも役に立つ。索敵も爆撃も航空戦も対潜すらも出来る優秀な機体、全てのこと繋がるのが瑞雲だ。確かに攻撃力は他のものよりも低いかもしれないが、器用貧乏などでは無い。万能という意味だ。現に私はこれを飛ばしている間は精神的にも落ち着いている」

若干雲行きが怪しくなりかけた。もしかして日向、瑞鳳と同じタイプなのではなからうか。

艦載機全般に情熱を持つ瑞鳳に対し、瑞雲に対して強い誇りを見出している日向。若干の執着に似ている気がするが、あまり藪をつくと蛇が出てくるので触れられない。

「調子が戻ったのならいいよ。戦場では大活躍だ」

切り上げさせるようにセスが説明を止めさせる。もしやこれ、初めてでは無いな。

「ビュウガ、ズイホウが瑞雲に興味深そうにしていた。夜にでも話してみるといいよ。楽しい時間が過ぎせるはずだから」

「そうか。それは楽しみだ」

そして瑞鳳に矛先を向けさせる。あまりに完璧な対処の仕方。似た者同士は似た者同士で話をさせるのが一番落ち着けるだろう。瑞鳳もノリノリで話をするだろうし。

案の定、夕食の時に日向と瑞鳳は気が合ったかのように話をしていた。お互いの趣味趣向が上手いこと噛み合い、すぐに良き友人とも言えるような間柄に。

今までの落ち込みが嘘のように晴れていたため、ああなるように画策していた加賀と伊勢も苦笑するしか無かったようである。

「まあ、開き直れたのなら良いことよ。戦場で尻込みされるよりマシンだもの」

「ここまですまく行くとは正直思ってたけどね。いやはや、間に合って良かった。明日の決戦でも、いい仕事してくれるでしょ」

日向の復調を素直に喜んでいた。伊勢だって心が病んでいたのに、姉として妹のことはずっと気にしていたのだ。それがしつかりと効いてくれたのだから、嬉しくないわけがない。

「やっぱり、日向と並んで戦えるのは嬉しいんだよ。日向が救われれば、私も救われるんだ。同じ境遇なんだから」

「良かったじゃない。思惑通りに行ったわ」

「あはは、聞こえは悪いけどその通りだね」

全てに決着をつけるためにも早期の復調を望んでいたのはわかる。もしかしたら、決戦に参加出来なかったら余計に復調が遅れていたかもしれないからだ。結果的に、何もかもうまく行った。

これで本当に全員の心持ちが1つになった。日向が立ち直ったことで、万全な態勢と言える。誰1人として折れておらず、強大な敵に立ち向かう覚悟も持った。最高最善の戦いの準備はこれにて達成出来たわけだ。

艤装の整備も完璧。心身共に回復もした。夕食の場も活気がある。ここまで念入りに準備が出来たのだから、負ける要素など無い。あちらの方が力が上回っていたとしても、私達の方が心が強い。

もう負けやしない。今まで負け続けて来たのだから、次はあちらの番だ。

最後の夜

夕食も終わり、風呂も終わり、後は眠るだけとなる。ゆっくりと身体を休め、そして目を覚ましたらもう決戦の日だ。これが最後の心落ち着ける夜だと思うと、眠る前だと言うのに緊張してくる。

私、若葉がいつものようにベッドに横になると、当たり前のように三日月が潜り込んでくる。今までずっと繰り返してきた日常のルーティン。

「明日はついに決戦だ」

「うん。今度こそ終わるのよね」

「終わらせるんだ。絶対に」

1つのベッドで向かい合い、明日への意気込みを囁き合う。息が当たり合う程の近い距離で、お互いに手を取り合いながら、心を落ち着かせていく。だが、緊張感のせいか眠気が来ない。部屋は暗くしているのに、妙に目が冴えている。

それは三日月も同じようだった。深海の眼が爛々と光り輝き、私を見据えている。暗がりでもクッキリと見える表情は、私との時間を噛みしめるように微笑んでいる。自然と私も笑みが溢れた。

「なんだか眠れそうにないの。緊張してるのかな」

「若葉^{ボク}もだ。妙に眠気が来ない。緊張なのか、興奮なのか」

戦いは明日だというのに、戦意昂揚で興奮してしまっているのかもしれない。本当に眠たかったら目を瞑った時点で微睡んでいくものだが、それも無い。

「私は緊張……かな。あの時は勝てたけど、次は勝てるかわからないのよね……」

「そうかもしれないが、心配するな。頼りになる仲間がいる。それに……若葉^{ボク}がいるだろ」

「……うん、そうだね。若葉がいる」

お互いに触れ合っていた手は、指を絡ませるように。より強い繋がりを感じられるように、より温かい温もりを感じられるように。

緊張しているのなら、こうしていられば落ち着く。昂揚している

のなら、違う方向に強くなる。今回は残念ながら後者だった。三日月のそういう匂いが強くなる。

「若葉……あのね。ちよつと弱気なことを言うようだけど……」

「ああ、多分若葉も同じ気持ちだと思う」

「もしかしたら……もうこんなことも出来なくなるかもしれない。だから……」

とてもわかりやすい流れである。明日が決戦だというのに、私も三日月と同じ同じ気分だった。戦意昂揚の気持ち溢れ、違う方向の興奮へと変わっている。我慢ならない。

それを受けるように、三日月を抱き寄せる。少し潤んだ目で見られたことで、私の箍は簡単に外れた。今やらない理由が無かった。

「またシグやぽいに冷やかされるぞ」

「もういいかなって。それで抑えが利くわけないもん」
「開き直ったな」

苦笑するしか無かった。だが、こういう時だからこそ、お互いの絆を大切にしたい。私も三日月を否定するつもりはないし、むしろ今の言葉で燃え上がったのも事実。

これは明日のためのモチベーションを高めるための儀式のようなもの。絆を確かめ合い、高め合い、より強く繋がる。戦場でもその繋がりが重要になる。もう私と三日月は一心同体だ。そのためには必要な行為である。

「どうせまだ眠れないしな」

「うん、眠るためには疲れる必要があると思うの」

物は言いようだなと思つた。遅くまでは当然起きているわけにはいかないが、これが最後の夜。心身共に満たされて、翌日を迎えよう。

そして、夢の中である。決戦前夜ということでも私も三日月も夢に入りがかったが、無事にうまく行つたようだ。私達の意思でここに来たのか、シグ達が察して呼んでくれたのかはわからないが、こうなったのだから良し。

夢の中の海は以前と変わらないが、シグもぽいも少し雰囲気が違つ

た。やはり、大淀との戦いがまだ終わっていなかったことが気に入らないようである。

『まだ終わってなかったなんてね。なんていうか、しぶとって言うよりはとんでもない協力者を手に入れたみたいで』

『ホント何なのアイツ！ 死んでないとかズルいつぽい！』

夢の中のシグは若干イラついているような雰囲気だった。せつかく晴らした恨みがまだ終わっていないと言われれば、どれだけ温厚なシグでもキレて然るべき。

ぽいに至ってはぶんすかと怒りながらジタバタして、それを全身で表現していた。脚は無いが地団駄を踏んでいるように見えるのは不思議。チ級がケアする様に後ろから頭を撫でており、ぽいもそれで多少は大人しくなる。

「若葉達だつて腹が立つき。まさか人間のせいで戦いが続くななんて思わなかった。しかも擬似的な不死と来た」

「飛鳥先生と似たようなことをしてることだし、それも嫌かな。悪意見え見えの蘇生だし」

三日月もイラつきを堂々と見せていた。地団駄まではいかないものの、ぽいの影響は少し出ていると思う。そんな顔も可愛いものである。

『でも、文句を言ったところで何か変わるわけでも無いしね。相変わらず私らは君達に頼むしか無いんだ。何かしら手伝いたいとは思ってるんだけど、やっぱり手が出せないんだよね』

『死ぬ気で頑張ればちよつとだけ出せるみたいなんだけど、私もそれが出来たのは一回だけつぽい。シグは1回も無いもんね』

『ありがたいことに、若葉はまだ本格的に切羽詰まった状況に陥っていないからね。私も誇らしいよ。ね、チ級』

少し後ろで控えているチ級もコクリと頷く。終わったと思っていたことが終わっていなかったことに少しテンションが下がっていることは、仮面越しでもわかるものだ。だが、頑張つて顔に出さないようにしていることもわかる。それが顔に出してしまったって本末転倒なのが面白い。仮面を着けていても、チ級は思ったより表情豊か。

ぽいが死ぬ気で頑張った時というのは、三日月が支配されて自殺させられそうになった時。潰された目でほんの一瞬だけ見ることが出来た、ぽいの奮闘。宿主の死を回避するため、それこそ死ぬ気で頑張った結果がアレだった。

死に繋がる行動、トリガーを引くという行為をどうにか食い止めることに成功した。たった指先一本かもしれないが、アレにより三日月の命が救われたのだ。今の私には感謝しかない。

『でも、本当にピンチになったのなら、私も本気で頑張る。ぽいみたいに、どうにか表側に干渉してみせる。練習なんて出来ない本番一発勝負だから、期待はしないでね』

「ああ、シグの手を煩わせないように立ち回るようにするさ」

ぽいに出来たということは、シグにも出来るはずだ。とはいえ、シグに頼らなくてはいけない状況になるのは流石に控えたい。それは本当に死と隣り合わせ。一歩間違えれば命を落とすという最悪な状況である。

そんな状態になるほどに追い詰められることのないように戦いたいところである。

『よろしく頼むよ、若葉』

「ああ、任せてくれ」

『三日月もお願いっぽい！』

「うん、任せて」

握手をした後、抱き寄せられた。三日月の方は逆にぽいに抱き付かれている。2人とも相変わらず感情表現が大きい。

それだからか、ここまで付き合いが長くても嫌味は一度も感じたことがなかった。自分の一部であるからこそ、シグという存在には愛着がある。勿論チ級にも。

『私^{ボク}らの思いは1つき。大淀を打倒して、復讐^{ボク}を遂げること。そうすれば、提督も浮かばれるかなって思う』

「家村提督のことか」

『うん。私^{ボク}達の行動理念だったからね。提督の無念を晴らすっていうのが一番重要だったんだ。深海棲艦ってのはさ、ほら、恨みと憎しみ

で生まれるわけだからさ』

シグ達が生まれた理由は、至極真つ当な理由だ。恨みも憎しみも当然の感情。私達以上に因縁が深いとも言えるだろう。

それを晴らすことが出来るのが私達にしか出来ないのだから、協力してあげたいと素直に思える。私達の恨みを晴らすのもあるが、みんなの恨みを晴らしてこそ本当の勝利だ。

「若葉も家村提督のことは背負っているつもりだ。どんな人かは知らないが、シグがそこまで慕っていたんだ。きつといい人なんだと思う」

『うん、すごくいい人だった。若葉も会っていたら気に入っていたと思うよ』

そう聞くと、家村提督にもう会えないことが悔しい。戦いが終わったら、下呂大将にどんな人だったか詳しく聞いてみようかと思う。

下呂大将の教え子だったということは知っているので、本来なら疑うことも必要ないくらい提督だったはず。こんな事件に巻き込まれなければ、それこそ名将となれただろう。未来は大将だったかもしれない。

『ぽいちゃんは、家村司令官がどんな人だったか覚えてる？』

『うん、今の私にはうっすらだけど、面白い人だったっぽい。でも三日月にはちよつとしんどいかも？』

「そ、そうなんだ……」

ぽいからの好感度も非常に高かったようである。シグも家村提督のことを話しているときは普段以上に表情が柔らかい。

より一層、仇を討たなければと感じる。そんな提督の命を奪い、それからもずつと他者の命を蔑ろに扱い続けてきたのだ。そのくせ、自らの死に恐怖するのだから質が悪い。

今こそ報いを受ける時だ。一度回避出来たようだが、もうそんな奇跡は起こさせない。今度こそ、今まで奪ってきた命に償ってもらわなくては。

「ん、どうしたチ級」

シグやぽいとは違い、ある意味この事件とは無関係なチ級が、抱き

合っている私とシグを纏めて抱いてくれた。

話せないのは不便ではあるが、何を考えているかは大体わかる。私達の戦いの結末が、いい方向に向かうことを願ってくれている。

「ありがとうチ級。必ず終わらせてくるからな」

口元がニツコリとしていた。やはり表情豊か。

『私達とは最後のブリーフィングになるかな、次にここに来るときは勝利の凱旋になるはずだよね』

「勿論だとも。必ず勝って終わらせるさ」

大淀絡みの会話も、今日で終わりになるはずだ。だから最後のブリーフィング。次に会うときは戦いの後、笑って抱き合うことになるはずだ。

『じゃあここからは世間話しようか。心を落ち着けないとね』

「ああ、これは最後にするつもりは無いけどな」

『お願いね。私も若葉とのこの時間を終わりにしたくないからさ』

ここからは心を落ち着けるための世間話の時間。これもいつものことだ。夢の中でのただの会話は、三日月と共に楽しく生きていることの象徴。これがずっと続けられればいいと思えるものだ。

早速と言わんばかりに悪戯っ子のような笑みを浮かべるシグ。嫌な予感がした。

『王子って凄い渾名がついたね』

「……それは忘れてくれ」

弄られるのではないかと思っていたが案の定。

『王子っぽい？ でも、若葉は三日月の王子様だよね』

「そうだね。若葉は私の王子様だね」

三日月にまで言われるとほんの少し嬉しくなってしまった。これでも私は女、王子というのは男の通称だろうに。媚扱いといい、タキシードといい、私は男扱いされるのが通説になっているようである。『夜も始まっちゃえば若葉の方が攻めに入るしね。男役が似合ってるよ』

『誘うのは三日月からなんだけどね。激しいっぽい』

やっぱりその辺りに触れられる。とはいえ開き直った三日月には

怖いものがない。夢の中だというのに少しモジモジし始めてしまう。流石にここではダメだと釘を刺しておいた。猥談になるとチ級が頬を赤らめて目を逸らす。唯一の癒し要素。

そこからは本当に世間話。続けられるだけ続けて、心も準備万端となる。最高のモチベーションで決戦に挑めるようになった。

朝、窓の外からの太陽の光で目を覚ます。疲れもない。心も穏やか。最高の朝だ。

しかし、ほんの少し違うのは、決戦の朝ということと緊張感が漂っていること。目の前に三日月がいても、それは変わらない。

「おはよう、三日月」

「おはよう、若葉」

いつもの朝のルーティン。挨拶をし、微笑み、ベッドから出る。はだけた浴衣を脱ぎ、いつものように着替える。用意された制服は、決戦のために仕立てられた新品。

何もかもが同じの朝。今日だけは朝のトレーニングは中止しているが、常日頃からやっていることをいつものように行なうことで、万全な状態を維持する。心を穏やかに、身体は健康に。

「行くか」

「うん、行こう」

襟元を正して、マフラーを巻く。これでいつもの私。三日月も私のタイツを穿いて準備万端。これで決戦に向かえる。

今日で終わりにするのだ。もうこれ以上の引き延ばしは見たくない。大淀を倒し、人間を捕縛し、何もかもを終わりにする。時間が解決したら、私達は楽しく生きることが出来るのだから。

私と三日月は手を繋いで部屋から出た。

決戦の朝。意気込みは充分。負けるわけにはいかない。勝つてまたここに戻ってくるのだ。

いざ出陣

決戦の朝。朝食を終えた後はすぐに最後の会議。これが終わり次第、選出された者から出撃となる。前回の大淀との戦いを見ている下呂大将の選択故に、誰も文句は無いはず。そしてそれは、大体が施設の艦娘から選出されることが殆ど約束されていた。

大淀の艦隊司令部の力は、蘇生により復活しているだろう。そのための対策を積んだのがこちら側の大淀ではあるが、万が一のことを考えると、あの戦場で支配を耐えることが出来た者の方がいい。

そうになると、最優先で選ばれるのは、あの時に全く効かなかったまるゆ、真の深海棲艦化までは反逆出来た私、若葉と三日月が最有力候補。後は基本的にケツコン艦は耐えられる方向になっている。

「先行遊撃隊は複数の部隊で向かってもらいます。まず第一艦隊。旗艦は大淀。随伴艦に摩耶、鳥海、赤城、加賀、瑞鳳とします。基本的には大淀の防衛がメインとなります」

大淀を守り切れなければ意味がない。故に防衛能力で選出されている。摩耶は対空砲火、鳥海が近接による防衛、一航戦と瑞鳳が制空権の確保。当然大淀が艦載機を飛ばしてくることなんてないのだが、この期に及んで空母型の完成品や人形が現れてもおかしくはないため、航空戦力があるに越したことはない。

さらに言えば、赤城と加賀は道案内役にもなっている。向かう先に元々いた2人なのだから、最初に出撃するのは当然のこと。赤城に至っては志願までしたらしい。

「第二艦隊は攻撃部隊です。防衛は先の部隊に任せて、敵の大淀に打って出てもらいます。旗艦は鳳翔。随伴艦に若葉、三日月、伊勢、日向、足柄としました」

先陣を切るにはうってつけのメンバー。特に足柄はケツコン艦以外で唯一支配を跳ね飛ばしたという異例の精神力を持っている。闘争本能の高さから、こちらもおそらく一番槍を志願している。

そして伊勢と日向。元々はあちら側の最高戦力だった者だが、今では頼りになる戦艦だ。ただでさえ少ない火力を補ってくれるだけで

もありがたいのに、あちらのことを知っているとという特有の特典がある。赤城と加賀の道案内に近いことが出来るのは確かだ。

「加えて、潜水艦部隊も投入します。こちらは攪乱です。飛鳥の施設に所属する潜水艦は全員、後は都度増員します。こちらには手瀬鎮守府に先行してもらおう意味合いもありますので、別途説明します」

シロクロのような高火力の潜水艦は、戦場で私達と共に大淀に対応する。魚雷も使えるのだから、潜水艦は誰だつて一撃必殺の火力を持つている。まるゆに至つては運貨筒を再装填し、万が一のときの切り札としても活用される。

その中でも呂500と伊504は、敵側だったときと近い仕事、先行しての監視を依頼された。鎮守府に先に辿り着き、海中から監視することで敵の出方を逐一報告する。そのため、2人だけは専用の通信機器が渡されることになる。

「水上艦は段階を踏んで部隊を送り込みます。その時点で中破以上の場合は即座に撤退。常に万全な者が戦線を維持するように戦ってください。補給部隊も送り込みますので、無理をせず、ですが確実に斃すこと。いいですね」

命を賭して戦うのはやめろとのお言葉。当然、私達は誰も死のうだなんて思っていない。そこで勝てなくても、次の機会を窺う。

早期決着を目指すのは当たり前だが、これ以上の被害者を出すのも良くない。ただでさえ、今このメンバーの中にすら一度死んでいる者がいるのだ。蘇生は何度もやっていい施術ではない。飛鳥医師だつて辛いだろう。

「では、始めましょう。皆さん、よろしくお願いします」

先行遊撃隊の私と三日月は今すぐ出発だ。私達が出撃した後から続々と援軍が来ることは確約されているが、最初に出る私達が最低限堪える必要もある。長丁場の戦いになることは必至。

仲間達と力を合わせて、勝てるところまで持つていく。それが先陣を切る私達の仕事だ。やれるものなら私達だけで終わらせてもいい。だが、そうはさせてくれないだろう。だからこそその総力戦。

工廠へ向かい、決戦の最後の準備。艀装を装備し、気合を入れる。

隣では三日月が最後の調整中。知らない間に仕立てていたようだが、私と同じようなマフラーを巻いていた。それが妙に似合っている。

何でも、首のヒビを包帯で巻いているが、それをさらに隠すために明石が準備していたらしい。私とお揃いにすることでモチベーションをさらに上げてくれる采配。

「なんかすごくしつくり来る……」

マフラーを撫でながら不思議な感覚を味わっていた。初めて身に付けるのに、何故か物凄く馴染んでいるらしい。匂いも普段以上に落ち着いているようだった。

「それ、三日月にどうだろうかって、昨日の間に大将から言われてたんですよ。妖精さんがサクツと仕上げてくださいました」

「そうなんですネ……ありがとうございます。大切にします」

「よく似合っている。若葉とお揃いだな」

口元をマフラーで隠して微笑んでいた。あれは基本的に私にしか見せない顔。マフラーを喜んでるのはよくわかった。三日月が喜んでいると、私も嬉しい。

「あと、用意しておいた若葉のタイツも特別製ですからね」

「そうなのか？」

「若葉はリミッターを外した時に脚に負担がかかるんですよ。だから、その負担が軽くなるように妖精さんをお願いしました。サポートみたいなものですね」

穿き心地は何も変わらず、触った感覚も以前と同じように思えたが、特殊な加工がされているらしい。今では3回までしかあの知覚出さない移動法は使えなかったが、このおかげで回数が増えたようだ。

こういった細かいところにまで手を入れてくれている。秘密兵器としてこちら側の艦隊司令部があるわけだが、それ以外にもちよくちよくあるらしい。例えば私の扱うナイフは触れただけでも切れてしまいそうなくらいの業物に仕上げられているのだとか。

「高まった練度を最大限にまで引き出すのが工作艦の仕事ですからね。戦場に出られない分、力を注ぎました」

「助かる。また勝利に近付いた」

明石の尽力が私達の背中を押してくれる。尚のこと負けるわけにはいかない。

「さあ、準備出来ましたか？」

鳳翔に呼ばれ、第二艦隊が集合。激しい戦闘が間近に迫り興奮状態の足柄に、最後まで武器の確認をしていた伊勢と日向。鳳翔もいっになく凜としている。

一番心配されていた日向も、今は随分と落ち着いていた。いつ崩れてもおかしくない精神状態かもしれないが、昨日までずっと考え続けて落ち着くところに落ち着いたようなので、今は安心して見ていられる。

「足を引つ張るかもしれないが、よろしく頼む」

「大丈夫大丈夫。私がフォローするからさ」

「そうそう！ 勝利を掴むためには、まずは前向きに行かないとダメよー！」

開き直った伊勢と前向きすぎる足柄に囲まれ、日向もタジタジである。これは嫌でも進まざるを得ない。変に力まなければいいが。

「第二艦隊、準備完了です。第一艦隊、そちらは？」

「第一艦隊、準備完了。いつでも出られます」

大淀の方も準備万端。どうしても赤城の艦装に目が行ってしまいが、これでも立派な艦隊である。

「潜水艦隊も準備オツケー！ あ、旗艦は私達だよ」

「……終わらせよう、これで」

シロクロを筆頭とした潜水艦隊も、呂500と伊504が特殊な通信機を身に付けたことで準備完了。いつでも出られる状況となる。

艦娘と深海棲艦が手を組んだ連合艦隊。それだけでも充分に異質ではあるが、みんなの心は一つに纏まっていた。

目的は全員同じ。大淀の打倒、医療研究者の捕縛、手瀬鎮守府の奪還。この全てを今から達成させる。

「緊張させるつもりはありませんが、この戦、君達の腕にかかりました。必ずや成し遂げてくれると信じています」

下呂大将を先頭に、全員が工廠で見送ってくれる。来栖提督も、新

提督も、本来ならこういう場にはいないであろう飛鳥医師と蝦尾女史も、私達の最後の戦いへの船出を見届けてくれる。これはなかなか気合が入るといふもの。

後から援軍としてここから更に向かうことになるわけだ。私達が出撃しても、ここは慌ただしいこと間違いない。だからこんな空気にいるのは今だけだろう。だからこそ、みんなで気を引き締めて。

部隊全員が敬礼し、そして外へと向く。これより先は戦場。一步踏み出すために、旗艦が号令。

「第一艦隊、旗艦大淀。出撃致します」

「第二艦隊、旗艦鳳翔。出撃致します」

「えーっと、潜水艦隊旗艦クロ！ 行くよー！」

次に戻ってくる時は、勝利の報告の時。みんなの思いを背に、いざ出陣。

航行は順調。海路も穏やか。快晴の空の下、私達は手瀬鎮守府に向かう。基本的には大淀を中心とした輪形陣。摩耶と鳥海が先頭でいつ来てもおかしくないような敵の攻撃を確認しつつ、航行しながらの哨戒で周辺警戒も怠らない。潜水艦隊も私達の真下で海中を警備。

「潜水艦隊との通信は、私と鳳翔さんが出来るようになっていきます。敵機発見があればすぐにわかりますので」

「つーことは、今のところは何もなかったことだな」

鎮守府よりも緊張感が漂う。ピリピリした空気に萎縮する者もいる。そうであるが、ここに居る者は全員、早くその時が来ないかと武者震いしていた。

特に赤城が危ない。前回の戦いで終わったかと思われた怒りと憎しみが、この戦いで全て解き放たれる。赤城の中にいるという仲間達の憎しみも大淀に向いているのだから当たり前だ。瞳が深海棲艦特有の光でビカビカ輝き、その時を今か今かと待ち構えていた。

そしてそれを誰も止めようとしていない。今回ばかりは誰もが容認している。そこまですないと勝てない敵である可能性もあるのだ。

「赤城さん、この空気久しぶりね」

「ええ……私達の本来の居場所の空気を感じます。鎮守府近海に入りました」

まだ水平線の向こうには何も見えないが、当事者が言うのだから間違いない。手瀬鎮守府の領海内。ここからはいつ狙われてもおかしくない。

「哨戒機から連絡が来ました。敵艦確認」

「こつちも！ 敵艦の数は……え、1人……!?!」

鳳翔と瑞鳳が同時に発言。ついにその時が来る。まだ周囲には何も見えないが、敵艦を確認。その数はたったの1人、つまりは大淀である。

周囲には仲間がいない単艦。準備が間に合わなかったのか、余程自信があるのか。まだ出していないだけという可能性はいくらでもある。

「……っ！ 哨戒機、撃墜されました」

「航空戦開始！ 赤城さん、全力でお願いします！」

「言われずとも」

大淀の号令と共に、空母達が一齐に艦載機を発艦した。特に赤城は、今この瞬間の全力を以て全機発艦。圧倒的な物量による空爆で押し潰す作戦である。これで終われば言うことは無い。

見えないところでも爆発音が激しい。太陽の光の下でも、水平線の向こうが赤く染まっているかのようだった。

「これで終わってくれればいいのだけれど」

「そうは行かないでしょうね。そんな簡単なら、ここまでの事にはなりません。それに、まだ私の憎しみが晴れない」

水平線の向こう側がチカツと光ったような気がした。そしてすぐさまキナ臭い匂いを感じ取る。

「散開しろ！ 撃たれた！」

わかるのは私だけだ。すぐさま叫び、全員をその場から離れるように指示する。明確に照準を合わせたわけでは無いのだろうが、その匂いは赤城に狙いを定めているように思えた。

瞬間、部隊の真ん中を切り裂くように凶悪な砲撃が駆け抜けた。当

たれば即撃沈間違いなしの強烈すぎる威力。掠めるだけでも大惨事だろう。軽巡洋艦が出していい威力では無い。

「全く、空母というのは野蠻過ぎやしませんか」

大淀がそこにいた。あれだけの密度の空爆を無傷で潜り抜け、さらにはこちらへの攻撃に転じてきている。今はまだ余裕ということか。

大淀の見た目は、やはり真の深海棲艦化をする前の状態。しかし、深海棲艦の匂いはしているので、司令部棲姫としての身体は取り戻しているようである。

本当に生きている。確かに私は大淀を二度殺した。一度目は心臓にナイフを突き刺した。それでダメだったから二度目は首を斬り裂いた。命の灯火が消える瞬間も知っている。なのに、私達の目の前に立っている。

「ああ、やはり大淀を連れてきましたか。それくらいの小細工はすると思っていましたよ。それで私の艦隊司令部の力を無力化すると」

チラリとこちらの大淀を一瞥した後、鼻で笑う。こちらの大淀はその表情を見て嫌悪感を露わにした。自分と同じ顔がああいう様を見せている事に気分を悪くしている。

「さて、ではやりましょうか。四の五の言っているも何も始まりません。御託を並べるのも、並べられるのも時間の無駄でしょう」

今までとは雲泥の差だった。最初から全開の殺意。表情にも余裕はなく、ここにいる者全てを殺すという意識しか感じられない。その対象には私や三日月も含まれている。

今までが本気で無かったというわけではない。しかし、今回は何かが違う。真剣、というわけではないが、慢心を捨てているような、油断ならない状態。

本当の決戦が始まろうとしている。ここからはもう戻れない。今、この時を以て終わらせてやる。

手の内を自らに

ついに幕を開けた大淀との決戦。一度倒したにもかかわらず、ほぼ完全な状態で蘇生されている大淀は、以前とは違い慢心を捨てている。こちらをいいようにコントロールし、弄ぶことを悦びとしていたようだが、今回は違う。ただただ強い殺意を募らせ、私達に相對していた。

艦装自体は何も変わっていないように見える。先程放たれた軽巡洋艦とは思えない威力の主砲以外は武装を持っていないように見えた。内部に艦隊司令部が仕込まれていることはわかっているものの、それ以外におかしな装備などは今のところ見当たらない。

「私は死を経験して反省しました。至極当然なことを、力を得たことで忘れていました。調子に乗ってはいけませんね」

言葉は軽いが、その端々に殺意が籠っていた。あの時の大淀は、自分の武装すらかなり適当であった。艦隊司令部を突破されるとも思っていなかったか、まるゆに畳み掛けられて破壊されたことでグダグダになっていたのを覚えている。

それは全て自信過剰、慢心からの失態と深く反省していた。自らの悪い部分を死を以て知ってしまった。それが一番怖い。

「ですので、私も心を入れ替え、正々堂々真正面から貴女達を殺します」

不意に主砲が放たれた。狙いはこちらの大淀。あちらにもこちらにも大淀がいるためややこしいが、やはり艦隊司令部を封じているであろうこちらの大淀を真っ先に潰しにかかるのは至極当然なことであつた。

勿論それはこちらも読んでいる。まず狙われるだろうと考えていたこちらの大淀は即座に回避行動。鳥海が盾に入りつつも、掠めただけで拙いことはわかっているのです、なるべく大きく移動する。

「艦隊司令部より、鳥海に伝令」

このタイミングで艦隊司令部の行使。もしこれの影響を受けてしまったら、耐えられるにしても鳥海が動かなくなってしまう、今の砲

撃をまともに受けてしまう事になるだろう。

しかし、鳥海は止まらず。こちらの艦隊司令部はしつかりと機能している。若干頭痛を感じたようだが、ダイレクトにぶつけられた支配の命令ですら、以前とは違って完全に無視出来た。

「やはり効きませんか。ではもういいです」

「そのための私ですから」

「流石私。私の敵は私ということですね」

おちやらけているように見せかけて、今この状態でも戦況分析をしながら戦っている。結果、艦隊司令部は捨てる方向に行ったらしい。

以前は艦隊司令部による支配に固執していたが、今回はすぐにそれを諦めた。1人へのダイレクトな支配が不可能だとしたら、もう私達の誰にも効かない。扱い方を支配から妨害に使おうとした時点で以前とはまるで違う。

「もう一度死んでもらうぞ」

「何度もやられる私じゃありませんよ」

次の主砲は私に向けられた。もう私を生かして捕らえようなんて気は無いようである。

大淀の中の私は、二度殺した憎つき相手だ。赤城や翔鶴と同じように、私には怒りと憎しみが溢れ出してもおかしくない。匂いからして怒り狂うことはないし私に執着するつもりもないようだが、一切の容赦無く何もかもを破壊するつもりであるのはわかる。

「死ぬのはもう御免なんですよ」

「それは誰だつてだ。若葉^{ホク}だつて死にかけている。お前のおかげでな」

主砲が放たれると同時に衝撃すら届かないところまで跳ぶ。私に照準が合ったことは誰もが感じ取っていたため、即座に全員私から離れてくれた。おかげで全員が無傷。

そして着水した瞬間にリミッターを外した全力の跳躍。知覚出来ない渾身の一撃を決めてやる。

だが、自分自身ですら知覚出来ないくらい速度なのに、今、私が海面を蹴った瞬間に大淀と目が合った。私の動きを完全に把握して

いる顔の動き。

「残念ですが、もうそれは喰らいません」

気付けば、私の脚は大淀に掴まれていた。以前と同じ渾身の蹴りだったのだが、完全に見切られている。

「勿論、貴女ですよ。三日月さん」

リミッターを外した三日月の直感的な砲撃が繰り出される寸前に先んじて砲撃を放つ。考えた瞬間に動いているはずなのに、それを超える速度で繰り出されたことで、三日月も砲撃を中断して回避していた。これも回避を考えた時点でそれを実行している。

その間に私の脚を掴む腕を蹴って拘束を解く。そのままだと私の脚すらも握り潰しかねない。確か握力も普通では無かったはずだ。

「このっ」

「それも知っています。イロモノ武器ですが、貴女には合っているかもしれませんね」

近いのだから的は大きい。今このタイミングなら拳銃の弾も当たらずだ。だから容赦無く大淀の頭に向けて拳銃付きナイフの引き金を引いた。

しかし、これだけ距離が近いというのにもかかわらず回避されていた。拘束を解いたせいで自由にしてしまったからか。大淀の回避性能が異常なのは知っている。これまでもそのせいで基本的に無傷だったのだから、そこがさらに強化されていてもおかしくない。

「矢も何度も見えていますからね。織り込み済みですよ」

回避先を狙って鳳翔と瑞鳳の矢が放たれていたが、その矢は避けるまでもなく掴まれていた。ついには回避すらしなくなった。

「お返しますよ」

艦載機になる前に矢を投げ返す。その勢いは手首のスナップだけで普通の矢を放つのと同じ速度は出ていたと思う。射った相手に直接投げ付ける最大のカウンター。

こればかりは看過出来ないと即座に艦載機に変化させ、自分に刺さる前に上空へ飛び立たせた。自分の矢だからこそこの回避が出来る。

「貴女達のお医者様は何故蘇生という技術を研究し、実現したか聞いていないんですか？」

私に話しかけながらも、今度はノールックで真横に砲撃。そちらにいたのは大淀に突っ込もうとしていた赤城。私達に気を取られている隙を突いて艦装で轢殺しようとしていたらしいが、殺気が強過ぎたから辿り着く前に迎撃されてしまった。

いくら赤城の艦装でも流石に受けきれない。まともに受ければ大破以上は免れないだろう。突っ込むより回避を選択。突っ込む勢いがあったため少しだけ掠めたようだが、航行に支障はきたさない。

「知らないわよそんなことは！」

「考えるには至らないんですか？」

赤城に砲撃をしたタイミングを見計らって今度は足柄が突撃する。それに合わせて、三日月やこちらの流石も砲撃による援護。3人同時の攻撃で逃げ場を無くす。

だったのだが、今度は赤城を撃った方とは違う主砲が動き出し、3人の砲撃を砲撃で撃ち墜とし始めた。流石の足柄もこれには突撃が止められる。

これは飛んでいるものを全て撃ち墜とすという摩耶の技だ。艦載機や弾丸、果ては艦娘そのものまで、一切容赦なく撃墜するあれを、大淀が完全に模倣してしまっている。

自分の専売特許を奪われてしまい、摩耶は随分と憤慨しているようだった。気持ちはわかる。

「死してもその経験を残したまま蘇生することで、敗北を喫した敵に勝利することが目的、でしたか」

「流石は鳳翔さんですね。ちゃんと知っているようで何より」

飛鳥医師がみんなの前で話してくれた研究内容。その時に言っていた研究のきっかけ。強敵と戦い、惜しくも沈んだ艦娘も、その知識を残したままに再び戦場に戻すこと。

ブリーフィングで下呂大将も話していたが、このクローンは私達の手の内を全て知った状態である。故に、対策も講じてきている。普通なら再現出来ないような対策方法も、インチキस्पックの大淀には造

作もないことであつた。

「あの協力者達の技術には感謝していますよ。まさかここまでのことをやってくれるとは思っていませんでした。何せ、こんなに素晴らしい力が手に入りましたから」

キナ臭い匂いが鳳翔に向かった。まるで正解を当てた者へのご褒美とも言わんばかりである。まずいと思つた時にはもう遅かつた。大淀の姿が消えた。

「っあっ!？」

気付いた時、鳳翔が吹き飛ばされた。弓を引く暇すら与えず、誰からも知覚出来ない速度で移動し、鳳翔の腹に渾身の蹴りを決められた。まるで私の今やった行動を真似されたかのような感覚。

当たり前だが大淀は私のような子供の身体では無い。さらには鳳翔は伊勢や日向とは違い比較的華奢な部類に入る。故に、今の一撃は身体を真つ二つにしてもおかしくないほどだった。幸いそこまでは行っていないものの、鳳翔は海面に擦り付けられるように飛ばされている。息をしているのはわかるが、すぐには立ち上がらないほどのダメージを受けていた。

「鳳翔さん!？」

「やはり難しいですね。自らを弾丸にし、一直線に移動するだけ。若葉さんも使いこなしているような感じではないですし、脚への負荷も相当です。これが手一杯ですか。乱発は出来ませんね」

鳳翔の隣にいた瑞鳳がそれに反応し即座に弓を構えたが、まるでそれを予測していたかのように射線からズレる。そして感覚的に主砲を構えていた。まるで三日月の砲撃を真似しているかのような砲撃。

流石に瑞鳳はそれを回避することは出来たが、主砲の威力が異常なためにそれだけでも痛みを感じたようで、顔を顰めていた。

「これは使いやすいですね。三日月さんは感覚的にこちらを攻撃しているようでしたが、これが正解でしょう」

「この……!？」

次は伊勢と日向が刀を抜き、大淀に襲いかかる。

「貴女達は元々私の下にいたものでしょう。当然データに入っていま

すよ」

砲撃すらも斬り裂くその太刀筋を軽々と回避すると、2人の腹に照準を合わせ、主砲を放つ。それも考えた瞬間に行動に出ているような挙動。

これに対しては伊勢も日向も反応出来るようで、咄嗟でも回避は出来た。元々頑丈なために衝撃を受けてもビクともしなかったが、今の状態で近付くのは得策では無いと一旦離れた。

「敗北を喫した私は、次は勝てるように蘇生されているんですよ。どうすれば勝てるかなんて、すぐにわかりますよね？」

「……こちらがやれることを全てやれるということか」

「ご名答です」

ニツコリ笑って次の照準を見定めた。先程は阻まれたこちらの大淀の排除。それがされてしまったら、今度は艦隊司令部すらも戻ってきてしまう。それだけは避けなくてはいけなかった。

「やらせるわけじゃないでしょうが！」

「抵抗するのは構いませんよ」

大淀のピンチに勘付いた足柄が、その進行方向に躍り出る。それに対して今度は知覚出来るが私と同じ程の速度で足柄に突撃。

お互いに、艦装の裏側に仕込んでいたナイフを取り出してぶつかり合う。大淀はまともな近接戦闘まで出来るようになっていて、

自分でも言っていたことだが、蘇生されたことでこちらの出来ることは全て出来るようになってきているのは一目瞭然だった。私の速度と近接戦闘、三日月の感覚的な砲撃、摩耶の全てを撃ち墜とす防空性能に加え、伊勢と日向のデータが入っていると云ったくらいなのだから、今までの部下の行動は全て出来ると考えていい。

敗北したことで私達のことを命懸けで学習したことになる。頭に入っていたマイクロチップというのは、今までにやったことやられたことをデータ化して送り込んでいたということ。経験をデータ化すること、全く同じクローンが作れるわけだ。

「結局大淀だもの、腕力は軽いわね！」

「貴女が強いだけでしょ。普通なら貴女ごと斬り裂いています

よ」

矢を投げ返して射つたのと同じ速度を出せる力を軽いと言う足柄も相当である。

罅迫り合いのような状況になったが、大淀が逆に一步引いた。足柄の猪突猛進っぷりは大淀でも一步引くほどのようである。単に面倒に思っただけのようにも見えたが。

「負けた者に勝つためには、その者の力を自らのものにするのが手っ取り早いんですよ。それを再現してくれた協力者にはとても感謝しています。それに、この力の源は貴女達です。模倣という形ですが、感謝していますよ」

全員が離れたところを見計らって赤城と加賀が同時に空爆を始めましたが、これは摩耶の模倣により全て撃ち墜としていた。大淀の主砲は両用砲らしい。

遠距離はこの手段で回避され、近距離は私達の模倣で迎撃。三日月の模倣で感覚的にそれを全てやってしまうため隙すらもわかりづらい。

たった1人なのに、連合艦隊全員の力を結集しても、攻撃が届くように思えなかった。これは人数で押し込むとかそういう域を超えている。

こちらの手の内を全て知っているだけでは飽き足らず、こちらの手の内を全て自らのものにしてしまっている。大淀を育てたのは、皮肉なことに私たちだったということだ。

強敵はより強敵となり、私達に襲いかかってくる。なんて戦いだ。

慢心を捨て

蘇った大淀は、こちら側の行動を全て手に入れてきていた。私、若葉の高速移動、三日月の感覚的な砲撃、摩耶の全てを撃ち墜とす防空性能、それ以外にも全て。今まで部下だった伊勢や日向のデータも取り込み、今施設にいる者、大淀が敗北を喫した者よりも上に立つように調整されている。

大淀の亡骸から発見されたマイクロチップは、それが目的だったということだ。大淀の戦いの記憶をデータ化し、次の大淀に与えると同時にそのデータからさらに強化してくる。

不死の艦娘の研究は、敗北し命を落とした艦娘を蘇らせることで、その知識を持った状態での再挑戦を可能とする技術。一度負けても二度目は負けない、それが目的だ。

今や大淀は、一度勝っている私達には手が付けられない存在となりつつあった。その戦闘能力が模倣、つまり全く同じだったとしても、複数の能力を同時に行使されては勝てるものも勝てない。

「私は貴女達に感謝しています。ありがとうございます。私よりも強くなってくれて。慢心し、本来の力が出し切れていなかったかもしれないとはいえ、あの時の私は確かに貴女達に敗北した。それが今、この力の源になっているわけですから」

調子に乗っているわけではない。真っ直ぐな気持ちで私達に感謝の気持ちをおぶつけてきている。それがまた気に入らない。

「貴女達がいなければ、私はこの境地に立つことは出来ませんでした。ですが慢心はしません。ここで全員沈めます。それがせめてもの恩返しとなるでしょうから」

「仇で返してんじゃないわよー！」

既に勝ちを確信しているような物言いに、負けず嫌いの足柄が突っかかり、主砲を放ちながら突撃。

大淀本人が言うように、慢心しているようには思えなかった。こちらのペースをわざと崩すように軽口を叩いているようにしか思えない。足柄のように釣られてしまう者もいるような意地の悪い言葉の

羅列を並べ立てる。

「人様に迷惑かけるのが恩返しなわけないでしょうが！」

「いえいえ、私は本気ですよ」

砲撃しながらの突撃も軽々避けた後、知覚出来ない突撃で足柄の腹に一撃を入れる。私の模倣であるため蹴りなのだが、爪先を鳩尾に入る周到さ。鳳翔と違って吹き飛ばされることは無かったが、後退りするほどの衝撃。折れてるようなことも無さそう。

腹が立つことに、私の技を私以上に使いこなしているようだった。脚への負担をどうこう言っていたとは思いが、そんなことは感じさせないほどスムーズに繰り出している。3回の制限なんて大淀にはおそらく無い。あつたとしても私とは比べ物にならない回数。

「つかっ……!?!」

「これが私の感謝の証です」

腹への衝撃で動けなくなった足柄に、即座に主砲を向ける。そう考えた瞬間には行動に起こしていた速さ。確実に三日月の模倣。

大淀の基礎の部分は、私と三日月の模倣で出来ている。トドメを二度刺した私と、最期の時に初めて傷をつける事に成功した三日月。死の憎しみ故に、きっかけとなった2人をメインとしているようだった。

「やらせるわけないでしょー！」

そこへ飛んでくるのは瑞鳳の矢。主砲を放つ瞬間に砲口を貫くように放たれたことで、足柄が紙一重で避けることが出来る時間を作ることが出来た。

腹を押さええながらその場から退避することは出来たが、あの一撃は相当重かったようで息も絶え絶えだ。呼吸を整えるためには少し時間があるようだが、足柄の眼から闘志は失われていない。

瑞鳳の射撃はおおよそ死角からの攻撃だった。これに対応出来るものなんてそうそういない。元になっている三日月だって、目で見て考えることで即座に動き出すことが出来る。

とはいえ、大淀の回避性能は尋常ではない。複数人の同時攻撃すらも当たり前のように受け切るような奴だ。死角からの攻撃ですら回

避なり迎撃なりしかねない。

「全く、多勢に無勢とはよく言ったものです。無勢側はこんな気分なんでしょうね。いつも多勢側なのでわかりませんでした。これも学ばせてもらえましたね」

大淀は止まらない。脚への負担を回避するためか、知覚出来ない移動法は使わずに主砲を鳥海に向ける。こちらの大淀を守る鳥海を先に始末しておこうと考えたか。

諦めはしたが、使えるなら使うのだろう。無いなら無いで戦えるが、あるなら戦いやすくなるというのなら、継るわけではないが有効活用するわけだ。

「このっ、鳥海！」

砲撃は摩耶が全てを撃ち墜とす。あちらの砲撃の威力がどれだけあろうが、どうにか辿り着くまでに減速させた。

しかし、その時には大淀は摩耶の間近にまで接近していた。自分で放った砲撃に追い付く程の速度が出ていたと思う。あれでも知覚出来ない速度では無かった。

「貴女その防空性能は厄介極まりないので、退場願います」

「お断りだぜ」

大淀自身を浮かせられれば勝機がある。摩耶の防空性能は対人でも機能するため、少しでも跳んでくれさえすれば、そこからは摩耶のオンステージになる。だが、それをやった現場を大淀は目に行っているため、当然ながら摩耶の目の前で跳ぶようなことはしない。それに厄介とわかつているため大淀は模倣しているのだ。つまり、大淀相手に跳んだら死ぬまで海面に戻ってこれなくなる。

間近まで近付いたことで、また後ろ手に持っていたナイフを振っていた。近距離では摩耶はなす術がない。近すぎて照準を定めることも出来ず、回避したくても大淀が速すぎてどうにもならない。

故に対応するのは鳥海になる。ナイフをバルジで受けつつ、強引に払い除けた。本来ならこれで体勢が崩れるのだが、鳥海対策をしているのかそれでも体幹がブレない。払われた勢いを使ってさらに攻撃に出る。

「貴女のその戦法は私が仕込んだものです。ならば私がそれを超えていないわけがないですよね」

「感謝していますよ。おかげで皆さんが守れますから」

ナイフがバルジを破壊することは無いが、感覚的に次の攻撃場所を判断し最善を考えた瞬間に行動に移しているため、鳥海がどうしても防戦一方にされてしまう。私が三日月の感覚を手に入れているようなもの。或いはその逆。

バルジ以上に鳥海の特種な力である握力も、掴むことが出来なければ意味がない。これだけ接近しているというのに、そんなこと出来る隙すらない。

これが慢心を捨てた大淀。これだけの人数で戦っているのに、他の者に攻撃させないように鳥海から離れず、そして猛攻を一切緩めない。

これに横槍を入れることが出来るのは、近接戦闘か超高精度な精密射撃になるだろう。大半がそれを出来るのだから、狙っていかない理由がない。

「いい加減にしろ」

一番槍に私が突っ込む。またリミッターを外し、本日二度目の知覚出来ない突撃。明石特製のタイツのおかげで、負担は格段に軽減されていた。3回以上の使用も出来そうである。

先程は真正面から行ったから受け止められてしまったが、今回は鳥海に気を取られている隙を狙う。あわよくば浮かせたい。

「っ……まったく、貴女は本当に野蛮ですね」

私の渾身の蹴りは、当たる前に打ち払われていた。掴まれたわけではないが直撃は回避され、さらには上方向に打ち上げられるように払われたせいで、私は自らの勢いで大淀から離れる羽目になった。

今までこんなことは無かった。使えば直撃以外が無かったため、こんな副作用のような状況になるのは初めてである。そしてこの状況、私は海面から浮いている。

「おや、浮きましたね?」

「私の若葉はやらせない」

そこに即座に三日月がカバーしてくれた。リミッターを外し、感覚的に私を撃ち墜とそうとした大淀に対して、本家本元の力を見せつけるかの如くヘッドショット。一撃の下に沈めてやろうという殺意。「逃がしませんよ」

それに被せるように鳥海が掴みかかる。見事掴めれば三日月の砲撃は大淀に直撃。そうでなくても握力による一撃で掴んだ部分を破壊出来る。いつそ艦装でも何でもいい。

衝撃を鳥海がモロに被ることになってしまいが、死ぬほどのことにはならないはず。身を削つての行動ではあるが、最善ではある。

「喰らうわけにはいきませんね」

三日月のピンポイントな砲撃と鳥海の握撃を回避しながら、照準はまだ私に向いていた。その時には私はまだ足を海につけていない。浮いている状態と言っても過言ではない。

「やめなさいー」

そこへすかさずこちらの大淀が艦装に向けて砲撃。3つ目の攻撃、さらには完全に別方向からの攻撃に、大きく避けざるを得なくする。殆ど死角からの攻撃なのだが、しっかり見られていた。

「まったく、貴女は私なんですから、ここで何をやりたいかなんてお見通しですよ」

これedyやく私から照準が外れるが、振り向きざまにその照準をこちらの太淀に合わせていた。このまま撃たれたら太淀は回避出来ない。故にすぐに対応。

「離れるやあー」

ある程度間合いが出来ていたため、摩耶が一斉射撃。防空に使う砲撃を海面と並行に放つことで、凶悪な弾幕と化し太淀に襲いかかる。三日月にも鳥海にもこちらの大淀にもスレスレの位置、しかしあちらの大淀には回避しづらい場所への弾幕に、そこから全員が一斉に離れる。

弾幕の方向から、太淀の回避方向はほぼ固定されていた。三日月や鳥海に突撃するというのも考えられたが、鳥海はこちらの大淀の前で完全にガードの構え。三日月は感覚的に既に回避済み。故に、私から

も照準を外し、みんなから大きく離れるしか道は無い。

「空母だけでは飽き足らず、重巡洋艦も野蛮なことですね」

「ではもつと野蛮に行きましようか！」

私から模倣した俊足で弾幕の範囲外まで退避した大淀の地点には、既に赤城が待ち構えるように突っ込んでいた。巨大な艦装を最大戦速で疾らせ、その大きな口で喰い殺そうと襲い掛かった。

「私は空母棲姫も従えたことがありますよ。その程度の攻撃が避けられないわけではないでしょう」

赤城の攻撃は猪のような一直線だ。そのため少し横に避けるだけで簡単に回避可能。だが、赤城はそのことは自分で一番理解している。そのため、対策をしている。

赤城の艦装に伊勢と日向が乗り込んでいた。どちらかに回避してもそのどちらかが飛び込むことで迎撃が出来る様にしていた。明らかに定員オーバーとも思えたが、明石のチューンナップによりこれも問題なく動いている。

「逃がさんー」

大淀の回避方向は日向側だった。瞬間、日向が赤城の艦装から飛び降り、その勢いのまま斬りかかる。充分以上に速度が乗っていたので、本来の日向では出せない速度での突撃となった。

飛び降りたのだから浮いている状態ではあるのだが、あまりの勢いに防空なんて出来やしない。知覚出来ない突撃も意味をなさないと理解したか、これに関しては大淀も避けなくてはいけないと感覚的に判断していた。

「ちよこまかと避けるねえ！」

そして今度は伊勢の追撃。通り過ぎた赤城がUターンして戻ってきた勢いで、日向と同じように飛び込んでいた。日向よりは速さが足りなかったが、それでも充分すぎる程。

結果的に挟み撃ちになり、逃げ道を失わせる。さらには赤城がさらに戻ってきていた。あの翔鶴との戦いの時のように戦場を縦横無尽に駆け回り、伊勢と日向の挟撃を回避したのならそれを仕留めようと、虎視眈々と狙っていた。

「何度も言いますが、元々貴方達は私の手駒だったでしょう。データは全て入っているんですよ」

しかし大淀は、そこで知覚出来ない突撃。日向に突っ込み、その勢いで腹を蹴り、さらにはそこからもう一度知覚出来ない突撃。日向の腹を軸に蹴り、伊勢に突撃。さらにそこから三度目の知覚出来ない突撃で、赤城の本体を蹴り飛ばしていた。

私でもやらないような応用をその場で編み出し、緊急回避と攻撃を同時に繰り出してしまった。私があんなことやったら、その時点で脚が壊れてしまっている。

「ここまで速いと回避も出来ない。だから頑丈にしていたんですから」

「わかってんじやんさ。アンタの蹴りなんて軽いもんだよ」

その一撃を受けても、伊勢も日向もビクともしていない。私の時もそうだったが、鍛え方が並ではない。

しかし、赤城はまともに攻撃を受けてしまっており、意識が朦朧としてしまっている。艦装から投げ出されていなければマシだが、ダメージは大きい。

「ふむ、やはりここまでやると負担が大きすぎますね。少し控えましょうか」

まだまだ余裕そうではあるが、小さく息を吐いたのはわかった。流石にあそこまでの無茶な動きをすると、大淀とはいえ疲労を感じるらしい。すぐに回復しそうだが。

あまりに無茶苦茶。こちらは12人でかかっているというのに、手も足も出ない。

だが諦めるわけにはいかない。疲労を感じているということは、続けられればいずれ届くということだ。攻撃を止めるな。こちらには数がある。今は手段なんて選んでいられない。

無意識の覚醒

手が付けられない大淀。こちらの持つ技を自分のものにし、さらにはこちら以上の力を以て蹂躪する。こちらは12人でかかっているというのに、大淀はたった1人でこれだ。未だ無傷で戦場を駆け回っていた。

みんなの力を合わせて追い詰めようにも、速度と感覚でそれをいとも簡単に回避し、攻撃に転じてくる。伊勢と日向はそれを直撃してもビクともしない耐久力があつたが、他はそうはいかない。赤城がそれをまともに受けてしまい、艤装から投げ出されていないものの意識が朦朧としているようだった。あのままだと危険である。

「三日月、援護頼む」

「うん、大丈夫」

今の大淀は私に背を向けている状態だったため、ここで本日3回目の知覚出来ない突撃。赤城に追撃する暇を与えるわけには行かず、脚の負担のことは頭から簡単に抜け落ちた。幸い、今は3回以上の行使も可能となっているため、それでも問題はない。

しかし、先程と同じようにまた私の一撃は弾かれてしまう。完全な死角から突っ込んだのに、そんなことお構い無しに私の蹴りは叩き付けられるように払われ、私は勢いそのままに海面に顔面を擦り付けることとなる。

だがそれも織り込み済み。私が払われると同時に、三日月の砲撃が大淀に放たれていた。死角からの攻撃に対応する隙を突いたヘッドショットだ。本来なら確実に避けられないタイミング。

「貴女達の連携は何度も見えています。愛の成せる技ですか？」

だが、その砲撃には自身の砲撃をぶつけることで回避。仲間の技とはいえ、あれは相当なインチキに思える。やはりあれも摩耶より使いこなしているように思えた。三日月がマフラー越しに舌打ちしたのがわかった。

とはいえ、これで赤城が一時的に退避する余裕が出来たはずだ。精神状態がまともであれば。

朦朧とした意識が正常に戻った瞬間、尋常ではない数の艦載機が発艦していた。今の赤城の全力は、怒りと憎しみによりさらに増強されている。翔鶴に向けていた憎しみを大淀に向けるようにしたのだから当然のことか。

「貴女への恨みは積もるばかりなの。ここで死んでもらわなければ、誰も救われない。私の中の皆が、貴女を殺せと叫んでいるのよ！」

憎しみに塗り潰された形相で、全艦載機を大淀に睥けた。爆撃ではなく、艦載機そのものが急降下するとんでもない光景。100機を超えたそれが降下する様は、さながら空から一枚板の天井が落ちてくるかのようなだった。

物量よつての押し潰し。このままでは私も巻き込まれてしまうため、大急ぎでそこから退避。

「どれだけ多かろうが、今の私には通用しませんよ。摩耶さんは本当にいい技を見せてくれました」

しかし、その艦載機が瞬く間に撃墜されていく。破壊した後の破片まで、一片残らず消炭にされていくのは異常としか思えない。

ならばと、防空に専念している今を狙い、瑞鳳と加賀、さらにはダメージから復帰した鳳翔と矢を放った。研ぎ澄まされた一射は、空を切りながら一直線に大淀の胸へと向かう。貫けば終わりの一撃だが、困ったことに大淀は片手が空いている。

「邪魔はしないでほしいですね」

その矢はもう片方の手に持つナイフで片手間に打ち払ってしまう。片手は防空、片手はナイフ。隙がない。

だが今度はこれで両手は潰した。赤城は撃墜されては新たな艦載機を発艦させ、押し潰すことに専念している。そのおかげで防空は決して止めることが出来ない状態。これなら更なる攻撃で決壊させることができるはずだ。

「ああもう、本当に鬱陶しい。根元から断ち切りますか」

しかし、間に合わなかった。

忌々しげに呟いた瞬間、大淀の姿がそこから消え、赤城の顎を蹴り飛ばしていた。この一撃は相当重かつたらしく、赤城の眼がグリーンと

白眼を剥いたのが見えてしまった。

先程の連続使用で負担がかかっており自分で控えると言っていたが、緊急事態と考えて即座に解禁してきた。何度も使わせれば消耗させられるかもしれないが、使われれば使われるほどこちらも消耗していく。どちらが先に消えるかのチキンレースなんて考えたくもない。

「つくあ……!?!」

「貴女がいなくなれば幾分か戦い易くなるんですよ。ではさようなら」

今までの大淀なら、気を失った者など放っておいて私達をいたぶることだろう。どうせあとから殺せばいいなどと言いながら。だが、この後に赤城を目覚めさせられたら厄介と考えたか、即座にトドメを刺すために主砲を赤城の頭に突き付けた。本当に慢心などない。対処出来るものは即座に対処する。

「させるかあ!」

「赤城さん!」

それは赤城に一番近い位置にいた伊勢が食い止めようと主砲を放ち、同時に加賀も矢を放っている。伊勢の砲撃は大淀がトリガーを引く直前だったために、大淀は当然ながら回避を選択。照準を合わせたまま回避しようとしたが、加賀の矢が猛烈な勢いで主砲を持つ腕を撃ち抜こうとしたため、さらにそれを回避。おかげで赤城から僅かに照準をズラすことに成功した。

頭が吹き飛んでいたであろうその砲撃は赤城の命を奪うことは無かったが、肩と艤装を破壊し、赤城を再起不能にまでは持つていつてしまった。あれではもう腕は上がらない。血も激しく流れている。

「発艦!」

「所詮艦娘の艦載機でしょう。何も怖くはないですよ」

回避された矢はそのまま艦載機と変化し、急転回。赤城ほど膨大な数ではないが、勢いそのままに大淀を急襲。撃ち墜とされることも承知で爆撃を始め、その間に赤城の救護に向かう。

大淀は爆撃を微風のように受け流し、主砲を再度赤城に向けた。直撃したら赤城どころか加賀すらも巻き込まれて致命傷を受ける羽目

になる。

だがここから援軍の登場だ。まずは私達と共に出撃した潜水艦から。

「やらせなあい！」

海中から突如現れたのはシロクロの巨大な艦装。昇り竜の如く海面に飛び出してくる、赤城に狙いを定めた瞬間の完全な不意打ち。

「それはこちらのセリフですよ。潜水艦はあの一件以来大嫌いになりましたから」

このタイミングでも大淀は回避してのけた。潜水艦からの一撃を対策警戒しているのは、確実にまるゆ対策だ。

計画をすべて打ち壊し、最も追いつめたのは、紛れもなくまるゆ。私や三日月以上に憎しみを抱いていてもおかしくない。故に、潜水艦に対しては徹底していた。下からの攻撃は見ないでも避けられる程にまで練度が高められている。

敗北を喫した者に勝利するというのは、すなわちこういうことか。それに準ずる者すらも屈するしか無くなる。潜水艦特有の攻撃はもう効かないと見ていい。

結果的に、大淀の砲撃は止められなかった。爆音と共に放たれたとんでもない威力の砲撃は、まっすぐ赤城に向かい、

「やらせんよ」

それを日向が真つ二つに斬り払った。鮮やかな太刀筋に、空気までが断ち切られたかという静寂。

斬られた弾は、赤城にも加賀にも当たることなく後方に飛んでいき、着水。激しい水柱が立つが、誰もが無傷。

「考えて、考えて、考え抜いて、やっと辿り着いた。私は今まで奪った分、仲間を生かしてみせる。命ある限り、私が守り続ける。それが償いだ」

「そうですね。でも残念です。決意はお見事ですが、それは叶わぬ夢。死んでしまっただけの意味がありませんよ」

日向が守りについたことで、大淀は赤城をターゲットに絞るのをやめたようだ。今ここで誰を一番最初に始末するかを瞬間的に吟味し、

そして見据えたのは今出てきたばかりのシロクロ。

その時には、シロクロは主砲の準備を完了していた。この場の誰よりも強烈な戦艦主砲。同じようなものを持つ伊勢と日向のものなど比べ物にならない威力を誇る、施設の最大火力。

「やはり潜水艦は見えているだけで気分が悪いです。即刻消えてもらいましょう」

「やーだね。とりあえず撃つから」

私を知る限り、聞いたことのないような轟音が鳴り響いた。速く、大きく、強いその砲撃は、大淀に一直線に向かっていく。さらにはそれを連射までする。明石のチューンナップのおかげで、威力も連射速度も上がっている。

「乱雑ですね。見た目通り子供ということですか」

どれだけ速く撃とうが、その砲撃を軽々と避けてしまう。そういう意味では、伊勢と日向のデータが入っていることで戦艦主砲への対策も出来ているということになる。

シロクロには最も相性が悪い相手になるかもしれない。出来ること全てが対策を取られていると言っても過言ではない。攻撃しているうちにシロクロもそれに勘付いた様子。

「クロちゃん……アレは私達じゃどうにも出来ない」

「だからって、このまま何もしないわけにはいかないでしょ!？」

「素晴らしい心構えです。何も出来ないとわかっていても奮闘する姿は感動的ですな」

キナ臭い匂い。ターゲットはシロ。おそらくどちらでもいいと考えていたのだろう。たまたまシロになっただけ。そしてシロがやられたらそのままクロもやられる。それだけは避けたい。

誰にも死んでもらいたくない。全員で笑って帰るため、死んでもらっては困る。それを壊そうとする大淀はこの場で終わらせなければならぬ。

完全に無意識だった。感覚的に身体が動いた。脚への負担も極限まで抑えられ、自然な動きで知覚出来ない突撃を繰り返していた。
「っあっ」

「ぐっ」

シロに向かった大淀と、シロの直前で激突。流石の大淀もこれは想定外だったらしく、殆ど無防備な状態で直撃し、お互いに海面に叩き付けられるように転がる。

これで艀装が壊れていないのだから、明石のチューンナップは完璧だ。頑丈な上に取り回しもしやすく、無茶な運転でも悲鳴すら上げない。

「若葉ー」

そこへ三日月の追撃。転がった大淀に向けて砲撃をするも、それは砲撃をぶつけられることで回避される。

だが、今の淀は体勢を立て直すことに全力を込めていた。慢心しているわけではないが、想定外のことが発生したことで混乱している。

「流石は模倣先ということですか……!」

忌々しげに呟く。やはり今の出来事は完全に想定していなかった。それはそうだ。私も想定していなかった。

知覚出来ないのだから、気付いたら既に攻撃が終わっているのが常だった。それは大淀もだし、私でもそうだ。結果だけが即座に来て、過程が認識出来ない。

大淀はそれでもそれをガードしていた。それはおそらく三日月の感覚的な行動をも身につけているから。ほんの一瞬だけでも来ると判断出来たら、そこに対して考えた瞬間に身体が動いている。

それが今、私にも発生した。この土壇場で、仲間を思う気持ちでそれを覚醒させた。三日月と同じ力、感覚的な行動。考えた瞬間に身体が動いているその力は、私にはまだ使いこなせそうには無かったが、大淀を食い止めるには充分な力。

だからといってまたやれと言われても、簡単には出来そうにない。今は必死だった。やりたいと思っただけではない。これがまた出来るようになれば勝ち目はあるかもしれないが。

「ですが、もう覚ええましたよ。警戒出来れば恐るるに足りません」

一番近い私に主砲を向けた。これも三日月の模倣、私を殺そうと考

えた時点で行動に表れた。

「無視してんじゃねえよ」

そこへ摩耶の横槍。私に当たらないように激しい砲撃の乱射。私に撃っている余裕など与えるつもりは無いようである。

当然それを回避するため、先程と同じように砲撃で食い止める。摩耶の砲撃を摩耶の技で止め、お互い無傷。その間に誰もが行動出来る時間が与えられた。

「この！ 喰らえー！」

その乱射に合わせてクロの咆哮と共に放たれた戦艦主砲。

「私も行きます！ 鳳翔さん！」

「ええ、まだ行けますよ。航空隊！」

瑞鳳と鳳翔の航空隊による爆撃。

「なら私達も！ 日向、いい？」

「当然だ。今ここで終わらせてやるさ」

「私も行けるわ。同時に射つ」

伊勢と日向、加賀もその空爆に参加。これにより、先程の赤城の空爆以上の密度を誇る、一枚板の天井が出来上がった。これは艦載機そのものが直撃するようなものではない。爆弾の天井が降ってきた。

正面と真横、そして真上からの同時攻撃。さらには密度も尋常では無い。避ける経路は無いはずだ。そう、海上では。

大淀は一度猛攻を海中に潜ることで逃げたことがある。今回もそれを使うはずだ。本人が奥の手と言っていたのも覚えている。ならば、そこを狙うのが得策。

「シロクロ、大淀は海中に潜る可能性がある」

「マジ!? なら、私らの専売特許っしょ！」

私が伝えた瞬間に巨大な艦装と共に海中へ。本来の戦いの場を海中に置いているのだから、海上で戦うよりも凄まじい戦闘力を発揮する。いくら潜水艦対策をしているとしても、海中はアウエー。いくら大淀でも十全の力は発揮出来ないはずだ。

真下まで加えた全方向からの攻撃により、完全に逃げ場を封じたはずだ。これで倒せる。倒せるはず。

そして、全てが纏めて爆発を起こし、巨大な水柱を作り上げた。

余裕無き心

大淀との戦闘は佳境を迎えていた。赤城がやられてしまったものの、私、若葉が不意に発動した無意識下での知覚出来ない突撃により不意打ちに成功。そこから高火力の者達が一斉に攻撃し、その圧倒的な物量で押し潰す。

上からは落ちてくる天井のように密集した空爆の雨、横からはシロクロの主砲と摩耶の乱射、さらには撃つた直後にシロクロが海中に潜り、下からの攻撃まで加えた。ここまでやれば逃げ道はない。

そして、全てが纏めて爆発を起こし、巨大な水柱を作り上げた。だが、まだ油断は出来ない。亡骸を確認しなくては、本当に戦いが終わったかはわからない。

前回のように、ここから死の恐怖による真の深海棲艦化が始まる可能性だつてあるのだ。詳しい条件はわからないが、それだけはすぐに確認しなければならぬ。

「警戒を怠らないように。大淀さん、シロさんとクロさんとは連絡が取れますね?」

「はい、今確認してもらっています」

私達第二艦隊旗艦の鳳翔が、第一艦隊旗艦の大淀と現状の確認を進めている。鳳翔はまだダメージが抜けきっていないようだが、戦闘に支障は無いようだ。

生きていようが死んでいようが、大淀の身体は海上には無いだろう。あれをモロに受けていたのなら、いくら頑丈でもひとたまりも無い。しかし、大淀は奥の手として潜水出来るといふ事実を知っている。未だに海中でピンピンしている可能性もあるのだ。

私達海上艦にはそれが確認出来ないため、シロクロに確認してもらっている。あれだけの爆発があれば海中も酷いことになっているだろう。如何に太陽が燦々と輝く日中でも、この確認はすぐに終わらない。

「赤城さんが危ないわ。すぐに帰投してもらわないと」

加賀が何とか曳航して赤城を戦線離脱させている。ここから離れ

るわけにはいかないため、そろそろ来るであろう援軍の誰かに退避してもらおうのがいいだろう。

しかし、このタイミングでキナ臭い匂いを感じた。悪意と殺意が幾重にも重なった、ドス黒い感情の匂い。その匂いは赤城に伸びていた。

「赤城が危ない！」

私が叫んだ瞬間、爆発による立ち昇った水柱を掻き消すかのような、凶悪な砲撃。その狙いは未だに赤城だった。気を失ってそこから動けないのだから、格好の餌食だ。加賀の曳航だけでは赤城を退避させることなんて不可能だ。

そのため、加賀は咄嗟の判断で艀装から赤城を下ろし、その場から離れた。直後、その砲撃が赤城の艀装を木っ端微塵に破壊してしまった。本当にギリギリ。むしろ赤城の艀装があつたからこそ加賀への被害は少なくて済んだ程である。

そこには血だらけの大淀が立っていた。水浸しにはなっていない辺り、海中に逃げる奥の手は使っていない。シロクロと海中でやり合ふのは無理だと判断したか、回避しながら防空に専念した結果、摩耶の乱射に幾重にも撃ち抜かれることとなった。腕や腹からの激しい出血が頷ける。

だが、あれだけやってまだ生きている。誰もが殺すつもりで攻撃を繰り出したというのに、重傷を負いながらもそこに立っている。致命傷だけは避けているようで、その分憎しみは一層増し、執念だけで立っていた。

「まだ終わらない。私は簡単には終わらない……！」

死の恐怖ではなく、私や三日月と同じような負の感情で侵食が拡がるように深海の匂いが強くなっていく。ここまでやられたことへの怒りと憎しみで、あんな状態でも力が強くなっているようだった。

深海棲艦の姫には、艦娘の改相当にあたる壊かいが存在すると聞いたことがある。追い込まれると強化される姫の力に大淀は向かったのだろう。完全な深海棲艦化よりも厄介かもしれない。

「もう空爆なんて効きません。ここで全員殺します」

キナ臭い匂いが戦場全体に拡がる。ここにいるもの全員に殺意を向けているせいで、匂いがわかりづらくなっている。故に、次の狙いが判断出来ない。

「まずは貴女ですよ」

刹那、摩耶が吹き飛ばされた。あんなボロボロな状態でも、一切躊躇なく知覚出来ない突撃を繰り出してきた。血を撒き散らしながらの突撃のため、迫力が違った。

この怪我の一番の原因である摩耶を優先的に始末しに来たのは、感情的になつているから。身体にも心にも余裕が無くなったことで、今まで以上に慢心が無くなっている。隙がさらに無くなっている。

「っがっ!？」

「私の傷は殆ど貴女から受けましたから。お返しです」

突撃による蹴りで摩耶が浮かされた。摩耶の模倣が出来る大淀に取って、これではただ的。空中故に回避行動も取れず、死ぬまで海面に足をつけることが出来なくなってしまう。

摩耶を守るために鳥海が大淀に掴みかかる。何処でもいいから掴むことが出来れば、その握力により大淀の一部は破壊出来る。

「邪魔をしないでくれますか」

「何を勝手なことを！」

さらにはこちらの大淀が砲撃を合わせる。鳥海が接近しやすくなるように、摩耶から視線が外れるように、敵の大淀の艦装や腕を優先して狙った。

しかし、所詮は軽巡洋艦の主砲。敵の大淀の艦装は酷いほどに強化されており、照準がブレる程度で破壊にまでは持つていけない。

あのままでは摩耶がやられる。それだけじゃない。鳥海も大淀もやられる。そうなると手が付けられなくなる。艦隊司令部の力が復活し、今以上に悲惨なことになるだろう。抵抗出来ずに支配される者もいれば、抵抗して動けなくなることで鬪り殺しに遭う者も出てくる。

それだけはダメだ。みんなを守らなくてはいけない。私1人の力で守ることが出来る者なんてほんの一握りかもしれないが、それでも

今の私ならここにいる全員に手が届くはずだ。

「えっ」

またもや無意識だった。摩耶が撃たれる瞬間には、私は大淀を突き飛ばしていた。脚の負担はまた比較的軽減されている。最高最善の形で知覚出来ない突撃が出来ていた。大淀の素っ頓狂な声が耳元で聞こえた。

これにはまた大淀は驚いていたようだった。私がかここにいるとは思っていなかったのだろう。だからか、余計に照準がブレてくれた。「つぐうっ!?!」

「摩耶?!」

それでも掠めるくらいはしてしまふ。直撃が避けられたのは良かったとは思うが、二の腕を削いでしまふ程の火力と、その衝撃による身体への激しいダメージ、さらには海面に叩き付けられたことで体力を持っていかれて、立ち上がれなくなってしまった。

一番近くにいた鳥海が駆け寄るが、状態はかなり厳しそう。気を失っていないだけで赤城と同様に離脱が推奨。

「また……若葉さんはいつも予想外のことをしてきますね」

「知るか。さっさとくたばれ」

「ワカバの言う通りだよ!」

そしてこの場にシロクロ復帰。またしても昇り竜が如く海面に現れ、大淀をかち上げようと渾身の一撃。摩耶が動かずとも、あの艦装の直撃を受けたらひとたまりもない。

しかし、先程と同じ光景を見ているように、あのボロボロの身体でもヒラリと避ける。潜水艦には特に対策しているというのは本当のようだ。私達にはわからないが、ソナーか何かを積んでいるのかもしれない。

「貴女達は本当にいい加減にしてください」

いい加減イラついたか、次はシロクロに主砲を向ける。摩耶にトドメを刺すことよりも優先したということは余程潜水艦に恨みがあるということ。まるゆに付けられた傷はかなり深いらしい。

撃たせてなるものか。赤城の艦装すら一撃で破壊するような威力

のものを受けたら、艦装は元より小柄なシロクロでは衝撃すらも危険である。

「クロちゃん、我慢してー!」

「あ、姉貴!」

勘が鋭く不思議な力を持つシロが先んじて気付いたか、艦装を犠牲にしてクロを海中に潜らせたことで、その砲撃からのダメージは最低限にまで抑えることが出来た。

しかし、みんなで力を合わせて作り直した艦装は、大淀の一撃により粉碎。シロクロは攻撃手段を失うことになる。

「潜られたら手が届かなくなるのも気分が悪いですよ。まったく、これだから潜水艦は」

海中に退避したシロクロは即座に捨て、狙いを摩耶に戻す。そこには鳥海もいるため、纏めて仕留めようと考えたか。

「摩耶はやらせない!」

三日月の模倣のため、摩耶に狙いを定めた時点で砲撃が終わっている。その場から動けない摩耶は、そのままでは確実にやられる。そのため、鳥海が盾となった。

実際、まだ敵側だった時は両腕両脚に備え付けられたバルジで砲撃を弾き続けるという芸当もやってのけた。しかし、それは相手が駆逐艦の主砲だったから出来たことだ。大淀の主砲は並の威力では無い。そんなことを言っている余裕すら無かったのだと思う。

「っあああっ!」

摩耶に向かう砲撃を、腕のバルジを使って辛うじて逸らすことに成功した。しかし、その衝撃はやはり耐え切れるものではなく、バルジが削がれ、腕がズタズタになる程であった。鳥海もまだ命に支障が無いとはいえ、戦い続けるのはかなり厳しい。

だが、それを見越してか、知覚出来ない突撃により鳥海が吹き飛ばされた。傷を負った状態での一撃を受け、鳥海もかなり厳しい状態に。姉妹揃って重傷で並べられてしまった。

「一撃耐えられたのは褒めてあげましょう。ですが、もう終わりです」「そんなわけないでしょう」

並べられた2人に主砲を向けられる前に、三日月の砲撃。こうしている間に私に近付いてきてくれていたらしく、大淀の邪魔をするべく急所狙いばかりを連射。

艦装を破壊出来るほどの火力に満たないことは三日月自身も理解しているため、生身の部分しか狙わない。特に脚。大淀自身がそこから動けなくなれば、戦いが確実に勝利に近づく。

「邪魔をしないでくださいね、三日月さん」

「邪魔は貴女なんです。貴女がいなければ私達はこんなことにならなかった」

「そもそも私がいなければ貴女達はこの世にいませんがね。私が建造したんですから」

私と三日月、ここにはまだいないが曙なども、大淀が家村提督を殺して乗っ取った鎮守府で、捨て駒として建造されている。大淀がいなければ私達が生まれることも無かっただろう。

「言ってしまうえば、貴女達は私に感謝すべきです。生みの親とも言えるでしょうに。貴女はこの世に生を与えてくれた提督を恨みますか？ 献身の気持ちがあるでしょう。それを私に向けてくれてもいいんですよ?」

「気色悪い。貴女は司令官でも何でもない、ただのクズでしょう。寝言は寝てから言ってくれませんか。それとも、一度死んで再び目を覚ましてから、まだ寝ぼけてるんですか?」

リミッターを外した三日月の辛辣な言葉の数々に、大淀もイライラしているのがわかる。

壊になってから言葉では平静を装っているようだが、精神的に余裕が無いように思える。今までなら軽い気持ちで受け流していた言葉も、今だと心に突き刺さっているようだ。

「……口が悪い三日月さんというのも面白いと思っていました、よくよく聴いていると気分が悪いですね」

「お説教に弱いとは、心はお子様なんですか?」

さらには鳳翔がそこに加わる。矢を放ちながら接近し、摩耶と鳥海から大淀を突き放していく。

「ようやく言えますが、貴女のやり方は汚いんですよ。今でこそ自分で動いていますが、最初は姿すら現さなかったですよ。世界を滅ぼしたいという割には自分の手を汚さない怠慢。楽しんで事を成そうと思っていないませんか？ 独りで戦っていると言いながら、まさか責任逃れを考えていますか？」

「責任逃れ……？」

鳳翔の言葉にピクリと反応。

「協力者を募るのは別に構いません。同じ信念を持つ者がいても仕方ないでしょう。周囲を滅ぼしながら突き進むのも、その信念が故というのなら許容しましょう。罪は消えませんが、ですが、自分の手を汚さずに他者にのみその信念を押し付けたのは何故ですか？ それを貴女の口から聞きたい」

「そんなもの決まっていますでしょう。どうせ全てを消し去るんですから、利用出来るものは全部私の糧として使っただけです。道具を使うことに何の抵抗があるんです。貴女だって艦載機に頼っているでしょう。それと同じですよ」

「そうですか。もう結構です」

恐ろしい速さで矢を放ち、大淀の肩を撃ち抜いていた。誰もその一射を視認出来なかった。私や大淀の扱う知覚出来ない突撃とほぼ同じ、知覚出来ない射撃。

「なっ!?!」

「とことん性根が腐っているようですから、もう何の躊躇いもありません。私は貴女の境遇も多少は同情していました。ですが、もういいでしょう」

今度は逆方向の肩を射抜いた。また見えなかった。

鳳翔は今までに見たことのない表情をしていた。来栖提督が怪我を負っていた時もここまででは無かった。怒りが頂点に達し、逆に静かになってしまっている。

「いい加減に……!」

「黙りなさい」

三度目は大淀の額に突き刺さった。

擬似的な不死

大淀を少しだけでも同情していた鳳翔だが、大淀との簡単な問答でその情けが完全に失われた。今までいろいろあったかもしれないが、この大淀は歪み過ぎている。もう救えないと鳳翔も悟り、冷酷に残酷に大淀にトドメを刺した。

「こ、の……こんな……」

額を貫かれたことにより、大淀は絶命。残酷な死ではあるが、それ程にまで大淀は酷いことをやってきたのだ。鳳翔が見放した程なのだから、もうこうなるのは仕方あるまい。

額を矢で撃ち抜いた鳳翔もグツタリと膝をつく。誰もが知覚出来ない射撃を放ったことで大きく消耗してしまうらしい。ここまでやらなかったのはそういうことなのだろうし、本気でキレた時にしかあんなことはしないのだと思う。

「申し訳ありません……私はここでリタイヤです。あれは消耗が激しすぎるのです」

「充分過ぎますよ！ あそこまでやらせてしまっただけこそ申し訳ないくらいで！」

瑞鳳が立ち上がれないほどの疲労困憊状態の鳳翔に肩を貸していた。大淀に一撃を受けていたこともあるため、普通よりも一層キツいらしい。故に、鳳翔はここで帰投したいと申し出た。もう自分の力で帰投することも出来ない程だという。

鳳翔だけではない。重傷を負っている赤城と摩耶と鳥海もすぐに帰投する必要があるだろう。シロクロだって武装が破壊されてしまっただけ以上は戦えない。

「援軍、えんぐーん！」

「戦い終わってる!?!」

良いか悪いか、このタイミングで援軍到着。護衛退避を優先してくれるために大発動艇を2隻も持ってきてくれた第二二駆逐隊と、入れ替わりに戦闘に参加してくれるであろう部隊。五航戦に利根筑摩、五三駆から残りの曙と雷に、暁と綾波まで来てくれた。

この場から退場したいのは4人。特に赤城はかなり危険だ。気を失っている上に艦装も失ってしまったため、自分で航行することも出来ない。加賀が支えていなければ沈んでしまってもおかしくない状況である。

「うわ、これ大変だ！ 早く積み込んだらおう！」
「ゆっくり、ゆっくりだよお」

二二駆が的確に護衛退避を準備する。身体に響かないように大発動艇に乗ってもらい、厳しそうなら艦装も外して別の大発動艇に積載。その場で応急手当が出来るように救急キットも大発動艇に積み込まれていたのがありがたい。

シロクロは海中から浮上しないという条件付きで部隊からは離れないことにしたようだ。海中から大淀と通信出来るのは呂500と伊504ではあるが、潜水艦隊の旗艦はシロクロ。部隊を取り纏める者としてクロは結構張り切っているらしい。

「……それ、どうすんの」

曙が忌々しげに指差したのは、額に鳳翔の矢が刺さっている大淀の亡骸。そのままにしていたらその場に沈んでしまい、またそこで怨念を撒き散らして深海棲艦を生み出してしまうだろう。そのため、そこに放置するわけにもいかず、今は沈みかけた大淀を私、若葉が掴んでいる状態。

正直今すぐにも投げ捨てたい。触れているだけでも気分が悪くなる。亡骸だとしても嫌なものは嫌である。三日月もこの時ばかりは私から少し遠ざかっているのが少し悲しい。それもあって余計に気分が悪い。

「そのままにしておくわけにはいかないだろ。捨て置けばこれは海を穢す」

「あー……じゃあ、艦装側に積み込んだらいいよ。多少雑に持つていても良いでしょ」

大淀の亡骸を見て文月が怯えたのがわかった。なるべく視界に入れないようにして艦装を積み込んでいる大発動艇と一緒に積んだ。他の艦装のおかげで視界に入りづらく、またそちらの大発動艇は皐月

が操縦しているようなので文月は少しだけ安心した様子。

「……自分の亡骸を見るとするのは、気分が悪いですね」

こちらの大淀が溜息をついていた。同じ顔の敵なだけでも気分が悪いのに、それがさんざん悪行をしでかした挙句に、かなり無残な死に方をしたのだから無理もない。

酷い顔をしていたので、一応それだけは直しておいた。見映えが悪いのも気分を悪くする原因。額の矢も抜いておく。

「気にするでない。アレはお主とは別人であろう」

「そうですね、アレもやっぱり大淀ですから」

「大丈夫じゃて。お主が嫌われておるわけじゃなからう」

利根がこちらの大淀を慰めていた。いつでも明るい利根に慰められると、自然と気持ちりが穏やかになるようだった。話を聞いているだけで、こちらも少し楽しくなる。

大淀の亡骸を離したことで、三日月も近付いてきてくれた。気持ちはわかるがちよつとシヨックだった。私がムスツとしているように見えたか、三日月が少し慌ててしまった。

「わ、若葉、大丈夫。若葉のことを愛してるのは変わってないから。アレに近付きたくなかったただだから。若葉のことが嫌になったわけじゃないわ」

「それくらいわかってる。匂いでその辺りは判断出来るからな。少しシヨックだったただけだ」

「あああ……大丈夫、大丈夫だからあ」

ここぞとばかりにスキンシップをとってきたため、見せつけるかの如く頭を抱きかかえて撫で回した。それだけでも癒される。三日月も心地良さそうに身を寄せてきた。

お互いにリミッター解除は最小限にしていたため、まだ戦える。私は何度も知覚出来ない突撃を繰り返したことで脚への負担が心配されたが、明石謹製のタイトのおかげで今でもまだ充分戦える。あと数度は使えるはずだ。

「まだ戦いは終わってないでしょうが。イチヤつくんじやないわよ」「す、すまない」

「人目くらい憚れつつーのよ王子」

「その呼び方はやめろ」

曙に愚痴られて仕方なく離れた。言う通り、まだ戦いは終わっていない。大淀を倒したのは2度目だが、擬似的な不死を体現しているのなら、今頃3代目が起動しているはずだ。

気に入らないことに、今よりも強くなっている可能性が非常に高い。死んだ理由となることに対して耐性が付いているというのなら、鳳翔は撤退したものの知覚出来ない射撃に耐性が付いたということ。先程以上の強敵となってしまうたわけだ。

「旗艦を足柄さんに委譲します……構いませんね」

「ええ、私は大分回復したわ。お腹はちよつと痛いけど、この程度ならまだ戦えるもの」

第二艦隊の旗艦である鳳翔が帰投するため、旗艦の権限は全て足柄へ委譲。ここからは編成をその場で組み替えて、無難な組み合わせで先へ進む。

私達は改めて第五三駆逐隊として集合。五航戦の随伴艦として1つの部隊となった。夜間警備をしていた頃に少し似ている艦隊編成なので、妙な緊張感などは感じない。むしろやりやすい方だ。

暁と綾波は、加賀や瑞鳳、利根と筑摩という主力艦隊の随伴。そして大淀の守りには伊勢と日向が陣取る。ある意味3つの艦隊。潜水艦隊まで含めれば4つだ。摩耶と鳥海が退場してしまったのはかなり痛手だが、まだ戦力はある。

「では先へ進みます。航路としては半分は過ぎていきますので、もう一息です」

本題はまだまだ先。手瀬鎮守府の制圧だ。着実に近付くことは出ているのだから、調子とかではいい方だろう。退場する者まで考慮に入れての作戦指揮がなされているのだから。

「それじゃあ、鎮守府で待ってるね。すぐに入渠してもらおうからあ」
「ああ、また後からな」

文月の間延びした声援を背に受け、私達は手を振りながら先へと進んでいく。また大淀が現れるだろう。だが、振り返ちにしてやる。

擬似的な死の克服をしているというのなら、必ずそれを打ち止めにしてやる。クローンが何体作られているかはわからないが、今の経験まで対策が取れるようになるのは時間がかかるはず。今から立ち塞がるであろう大淀は、十全な力を発揮することが出来ないかもしれない。

メンバーを入れ替えての更なる進軍。戦いの前に赤城と加賀が近海に入ったと言っていたのだから、もうあちらの鎮守府が見えてきてもおかしくはないだろう。

「もう大分近いわ。そろそろ鎮守府が見える頃よ」

加賀が呟く。赤城が退避したことで少しだけ落ち込んでいたが、まだ戦いが終わっていないということに気合を入れ直していた。

大淀は擬似的な不死を手に入れている。先程まで戦っていた大淀がまさにそれなのだから疑いようが無い。次に出てくるのは3代目になる。酷いことに、今まで受けてきたこちらの戦術に耐性を持つて。

退避によりこちらから失われた戦術を使つてこられるのもかなり厳しい。少なくとも摩耶の防空性能はまだ持ったままだ。飛ぶものは全て撃ち墜とす。それがあってもこちらの戦い方はかなり制限される。

「先行している潜水艦から連絡が来ました。鎮守府から1人出撃したようです」

まだ水平線の向こうに鎮守府は見えてこない。先遣隊である潜水艦達の監視によりそれがすぐにわかる。大淀もこういう形で私達を監視していたのだろう。

出撃した者が誰かはわからないが、十中八九大淀であることは間違いない。あれからまだそこまで時間が経っていないのに、もう準備が出来たということか。

「五航戦、発艦しなくてもいいわ。やるのは今じゃない」

「いや、でも哨戒機くらいいるでしょ」

「全部墜とされるのが関の山よ。さつきもそうだったわ。5人がかり

の空爆を1人で抑え込んできたわ。あの時はそこに摩耶とシロクロがいたからどうにかなったけれども」

加賀の言葉に、瑞鶴も翔鶴も緊張感が増した。自分の得意技が効かないとなると、どう戦えばいいかわからなくなってしまう。空母が航空戦を封じられたら、ただの木偶の坊だ。とはいえ防空に専念させることが出来れば多少は動きを封じることが出来るので、哨戒機を飛ばさずにその時まで温存しろという話のようである。

「私も秘密兵器持ってきたから」

「そうなのか？」

「ええ。若葉達が出撃してから仕上がったの。大分時間がかかったちゃったみたいで」

雷が言うには、秘密兵器は大淀に持たされた艦隊司令部だけでは無いという。それは今、この場では雷に託されているらしい。

「明石さんが私の主砲をすごい弄ってくれてさ。いくつか弾の使い分けが出来る様にしてくれたの。だから、それを使って翻弄する。私の仕事はそれだからね」

雷がやる、むしろ雷にしか出来ないようなことなのだろうか。

雷の持つ技は、足止めに特化した不殺。強烈な勢いの水鉄砲をピンポイントで当てることで、怪我を負わせずにその場に縫い付けるような戦い方を基本戦術にしている。決死の戦いであるこの戦場でも雷は水鉄砲を持ってきているし、相手があの大淀でもそのスタンスは変わらない。

しかし、ここに来るまでに明石がしっかりとそこを改良していたようだ。ただの水鉄砲だけでなく、何かしらの別物を撃てるようにしてくれている。それが何かはわからないが、秘密兵器というのだから、この戦場でも効果がありそうなものなのだろう。

「当てないという意味は無いんだけどね。それはどうにかする」

「了解した。可能な限り、若葉達も援護する」

「うん、お願いね」

この戦いのキーパーソンは雷になりそうだ。大淀と共に守り切らなくては。

誰一人として失ってはいけないのは当然のことだが、雷は特にそう
だ。施設には無くてはならない存在であり、私達にとつても掛け替え
の無い仲間。

「来ました。敵大淀と会敵！」

水平線の向こう。ポツンと一人立っているのが見える。先程鳳翔
が倒したはずの大淀がそこにいた。

今回は先制攻撃もなく、ただただ私達がここに現れるのを待ってい
たようである。潜水艦からの通信から大分早いタイミングでの会敵
であるため、鎮守府に相当近付いていることはよくわかった。

「私を殺した鳳翔さんがいないようですが？」

もう笑みすら浮かべていない。怒りに呑み込まれたような表情で
こちらを睨み付けてきていた。3代目は最初から余裕が無い。慢心
やらそういうものは持ち合わせていないようである。

先程よりも強化されているのだから、苦戦させられることは必至。
ただでさえあの戦いで被害者も多い。こちらは少しだけ人数が増
えているとはいえ、一筋縄ではいかない。

「アンタを殺したことで一回帰ったわよ」

「そうですか。なら貴女達を皆殺しにして、鎮守府で鳳翔さんも必ず
殺します。最後まで腹の立つことを抜かしていたので、後悔しながら
死んでもらわなくては困りますからね」

怒りと憎しみの矛先が鳳翔にも向いた。殺意が増したということ
は、最初からその分強化されているようなもの。傷を負っているわけ
ではないが、最初から司令部棲姫―壊としてこの場にいる。

「覚悟してください。責任だの何だの、馬鹿馬鹿しいことを抜かした
鳳翔さんが悪いんです。そうでなければここまで腹が立つことなん
でなかった。容赦なんて出来ませんよ」

死んだはずの大淀との3度目の戦い。もうこれで終わりにしたい。
これを最後の戦いにしたい。

押すならば手数で

手瀬鎮守府への航路を妨害したのは、倒したはずの大淀。ついに3人目の登場である。擬似的な不死を手に入れた大淀は、蘇るたびに強くなり、私達には手が付けられなくなる。

今の大淀は、先程の死に繋がる攻撃への耐性を持っていると見てもおかしくない。つまり、全空母が力を合わせた天井を落とすような空爆にも、今ここにいない鳳翔にしか出来ない知覚出来ない射撃にすら対応出来るようになったということだ。さらには、私、若葉の知覚出来ない突撃を使えるということは、鳳翔のそれを身に付けている可能性すらある。弓と主砲は似て非なるものではあるが、可能に思えてしまう。

「覚悟してください。責任だの何だの、馬鹿馬鹿しいことを抜かした鳳翔さんが悪いんです。そうでなければここまで腹が立つことなんてなかった。容赦なんて出来ませんよ」

その言葉の後に、戦場全体にキナ臭い匂いが漂う。誰が狙われるかが判断出来ない。だが、微かに利根に向かう匂いが強くなった気がした。ここにいる中でも特に新顔であるからか、おそらく大淀も警戒したのだと思う。今まで見たこともない者がここにいるのだから、何処かからの奥の手と思うのは普通か。

今ここにいる者の中では、練度だけでいうのなら下から数えた方が早い位置にいる。しかし、それだけでは測れないものなんていくらでもある。

瞬間、大淀が消えた。知覚出来ない突撃により、匂いが強くなった利根に対して突撃を仕掛けていた。

「おーおー、これはこの前の若葉より速いではないか！」

だが、利根には届かず。私でもやるであろう渾身の蹴りを、なんと両手でだが受け止めてしまった。ズドンと大きな音は鳴ったが、アレを喰らって利根はノーダメージ。これには大淀も目を丸くしていた。

今まで使えば百発百中であり、私が大淀に使えば全てガードされていた技だ。まず止められることは無いが、慢心を捨てた結果、初見の

者を狙うというところまで考えての一撃。それなのに、たった今完全に封殺されていた。多分私でも驚いている。

「筑摩ー」

「はい、利根姉さん」

そこへすかさず筑摩の砲撃。利根には衝撃すら入らず、しかし大淀の頭を吹き飛ばすことが出来る的確な場所を狙い撃ち。蹴りを繰り出した脚は利根がしつかりと押さえているため、その砲撃を避けることは簡単には出来ない。

「このー」

それに対しては摩耶の技を使って砲撃を撃ち墜とす。即座に冷静に対処したことはわかるが、若干動揺しているのは見て取れた。

「吾輩が一番雑魚とも思ってたか。数字ではそうかもしれんが、ちゃんと鍛えておるわ！」

「初見の者はさっさと終わらせたかっただけですよ」

「ほう、初見なら確実にやれると思うたわけじゃな。嘗めるなよ」

そのまま押さえしておくのは危険であることは重々承知の上だろう。しかし、利根は簡単には放そうとしない。むしろそのまま体勢を変えて、脚を折りに行こうとした。まさかの関節技である。

これを喰らっては流石に拙いと思ったか、大淀も即座に対抗。利根に掴まれている方とは逆の脚で思い切り蹴り飛ばし、拘束が緩んだところをもう一度蹴り飛ばして間合いを取りつつ、続け様に利根に砲撃。凄まじい連続攻撃。

「危ないのうー」

その砲撃は辛うじて回避するが、衝撃で体勢を崩した。追撃を喰らわないように筑摩がすぐにカバーに入るため、大淀に向けて砲撃。それは着水した瞬間からヒョイヒョイ避けられるが、利根が体勢を戻すまではどうにか出来そう。

「利根さんは後からにします。厄介なのはよくわかりましたから。なので、先に元々いた方をやりましょうか」

値踏みするように周囲を見回す。それも僅かな時間ではある。

一番処理したいであろうこちらの大淀は、伊勢と日向が守っている

ために一筋縄ではいかないだろう。あの3人だけとやり合うだけならまだしも、確実に私達が横槍を入れるのは間違いない。そのため、その状況でも沈めやすそうな者を選んでいる。

慢心せず冷静と言いたいところだが、やはり先程殺されたことを根に持っているため、それを超えんばかりの怒りと憎しみが渦巻いているのは確かだ。私怨が先走り、そうになると狙いは基本的に私になるはず。

だが、大淀から流れるキナ臭い匂いは私に向いてこない。三日月にもだ。大淀からの殺意はビシビシと感じるが、先にやるのは面倒とでも考えたのだろうか。

私は何度か大淀の行動を妨害することが出来ている。実際は自分でも無意識だったために、確定で妨害出来るわけではないのだが、

「まずは貴女にしますよ。加賀さん」

突如放たれた砲撃。狙いは宣言の通り加賀。直接的な死の理由ではないものの、空爆が無ければ摩耶やシロクロの砲撃を喰らうことは無かったし、トドメが矢だったことから、空母全体に恨みが込み上がっているようである。

「喰らうわけにはいかないわ」

「でも死ぬんですよ」

次の瞬間、大淀が既に加賀の懐に飛び込んでいた。自分で放った砲撃を追い抜いている。

さらには、私はあの動きをした場合は敵にぶつかることでしかブレーキが踏めないのだが、大淀は加賀の手前でしっかり止まっていた。脚への負担は尋常ではないはずなのだが、大淀にはノーダメージ。蘇ったことでより一層頑丈になってしまっている。

「その弓は私が五航戦のために作らせたものですよ。勝手に使わないでください」

そのタイミングで砲撃が追い付き、加賀に衝撃が襲い掛かる。大淀には微風程度にしか思えないのか、同時に艤装に備え付けていたナイフを取り出して加賀目掛けて振り上げた。咄嗟に弓でそれを止めようとするが、加賀のスピードよりも大淀のスピードの方が断然速い。

結果、弓でその軌道をギリギリ逸らすことに留まってしまった。加賀にはその攻撃がかなり重かったようで、その一撃でフラつく羽目になっちゃった。つまり無防備である。

「くっ……!?!」

「加賀さんー!」

すかさず瑞鶴がフォロー。加賀よりは近接攻撃には慣れており、返してナイフを振り下ろすであろう大淀の攻撃を妨害するために躍り出ようとする。

しかし、そのタイミングで瑞鶴には主砲が向いた。加賀に近付かせることを妨害すると同時に、あわよくば瑞鶴を始末しようという魂胆。感覚的に瑞鶴を狙ったため、主砲が突きつけられた瞬間にはトリガーが引かれていた。

「マジか……!?!」

紙一重で避けるが、本当にギリギリだったせいで衝撃に吹っ飛ばされる。さらには予想通りナイフが振り下ろされる。

「簡単に受けるわけが無いでしょう!」

体勢が崩れながらもそのナイフは弓でしつかりと受け止めた。主砲を撃った反動もあり、大淀の振り下ろしは先程よりも力が入っていなかった様子。

とはいえピンチであることは変わりない。加賀はその攻撃を受けたことで、海面に膝をつくことになってしまった。

「貴女は元々鎮守府にいた人でしたか。提督のところに入れていってあげますよ」

そこで加賀の顎に向けて強烈な蹴り。ナイフを防ぐために体勢を崩してしまったため、それをモロに貰ってしまった。急所への一撃のため、加賀の目がグリーンと上を向き、意識が飛ばされたことがわかってしまう。

瑞鶴も先程の衝撃のせいで脳を揺さぶられたか意識が少し朦朧としているようで、すぐに加賀をサポートすることは出来ない。その結果、強引に動き出したのは翔鶴だ。

「加賀さんから離れなさい!」

赤城とほぼ同様の巨大な艦装を急発進させ、大淀に食らいつこうと猛烈な体当たりを仕掛ける。同時に艦載機も発艦させ、空爆も追加。爆撃で逃げ場を無くしつつ、艦装で押し潰してしまおうとしていた。加賀もそのタイミングで拾いたいところだが、艦装が大型過ぎて気を失っている加賀に手が届かない。ひとまずは大淀をその場から引き剥がすことが重要。

しかし、大淀の一撃は赤城の艦装を木っ端微塵に破壊出来る程の威力だ。艦装の強度はそう変わらないのだから、もしここで撃たれたら、翔鶴の艦装も破壊されてしまう。

「離れるのは貴女ですよ」

案の定、翔鶴の艦装を狙うために主砲を向けた。加賀を先にやることも出来ただろうが、自分の命を大事にするような行動。擬似的な不死を手に入れているとしても、わざわざ死ぬようなことは絶対に選択しない。

「逃げ場が無いよね。だったらここぞ！」

そこへすかさず瑞鳳の一射。翔鶴が逃げ場を封じたことで、翔鶴を撃つて瑞鳳の矢に貫かれるか、空爆を掻い潜つても翔鶴の突撃と瑞鳳の矢を回避するか、2つに1つの選択肢を与える。

当然ながら大淀は後者を選択。やはり不死ではない。死の恐怖を知っているのだから、二度と死にたくないという気持ちは心の芯に刻まれているようだ。

「寄ってたかって……！」

「そういう戦場にしたのはアンタでしょうが！」

回避先で待ち構えていたのは曙。その行動を計算して、槍を置いてくるかのように渾身の突きを繰り出していた。

「わかってますよ。ですが、鬱陶しいものは鬱陶しいんです」

その槍は回避直後だというのにガツシリ掴まれてしまった。片手で掴んでいるだけなのに、そこから先に突き出すことが出来ない。

だが、ほんの少しだけでも大淀がその場に留まる時間を作り出すことが出来た。そこで動き出したのがキーパーソンとなり得る雷。主砲のスイッチを切り替えて、大淀に向けて放つ。チラリと見えた砲撃

は、妙に赤い。

「雷さんはこんな状況でも水鉄砲を使うんですね。情け深いのか、ただただ愚かなのか」

「これが一番いい戦い方だもの」

放った瞬間に水鉄砲だとわかったようである。以前からその程度と手で払い除けていたが、今回は槍を振って曙を盾にするように移動させようとした。

雷の秘密兵器のことは曙もちゃんと知っている。故に、曙は槍を放棄。雷の砲撃の射線上からすぐに回避した。水鉄砲とはいえ、当たったら困るものであるのは間違いない。

「所詮は水鉄砲でしょう。自分で直接触れるのは何か嫌な予感はずし、都合よく武器を貰えましたからね。これが最善手です」

回避ではなく、槍で打ち払うことを選択。砲撃なら間違いなく回避していただろうが、雷の攻撃であることと以前に素手でも打ち払えた経験が大淀にその選択をさせた。

それが雷の狙いであることも知らずに。

「秘密兵器一つ目、目潰し唐辛子」

槍に触れた瞬間、爆散するように真っ赤な液体が舞い散った。慢心は無くとも、所詮水だと内心侮っていた部分はあったのだと思う。一度回避出来た経験が、結果的に自信に繋がった。

「なっ」

大淀を中心に激辛の成分が蔓延し、目に染みる程の霧となって大淀に襲い掛かる。

雷は不殺な代わりに搦手を一手に担っている。本来戦場では起り得ないことだっただってやってのける。それがこれだ。

「っあつ、な、何!?!」

こんな攻撃を受けるのは当然初めてだろう。私達だっただけ受けたことがない。そのため、死ねば死ぬほど強くなる大淀でも回避不能。耐性だっただけありやしない。

見事に目潰しを喰らい、悶絶する。その際に曙から奪った形になった槍を闇雲に投げた。今まで雷がいた位置は最後に見ているために、

槍はそちらへと飛んでいく。異常な腕力での投擲のため、雷を貫かんと巨大な矢の如く猛スピードで突き進む。

「ダメですよお。そんな乱暴なことをしちやあ」
「助かったわ綾波！」

その槍は雷に辿り着く前に綾波がキャッチ。私と同じ速度が出せる綾波には、見てから雷を守ることにくらい造作も無い。私対策に調整されていることが、今に生きている。

「はい、曙ちゃん」

「サンキュー姉貴。計算通りすぎて笑えるわ」

綾波から槍を返してもらい、悶絶している大淀にさらに突撃。少しの間だけでも目が見えていないのなら攻撃するチャンスはある。

だが、突然の攻撃で冷静さを失った大淀は、まともに狙いを定めずに主砲を乱射し始めた。摩耶の技を取り込んでいるせいでその密度は凄まじく、大淀の正面から近付くことは殆ど不可能になってしまった。そう、正面からは。

「暴れないですよ。レディはもつとお淑やかにするべきだわ」

その後ろ側。砲撃を最初から回り込んでいた暁が、艦装破壊のために砲撃を繰り返す。余計なことをする前に艦装を破壊しておけば、後々楽になる。

しかし、艦装はやたら頑丈。暁の主砲では傷一つ付かない。それに、砲撃を乱射しているせいであまく狙いが定まらないというのもある。

「もう、駄々っ子じゃないの！ それなら！」

砲撃が難しいと判断したか、暁は容赦なく接近。リコから鍛えられただけあり、とんでもない密度の乱射でもお構いなしに突撃していた。

「二度、落ち着きなさいよ！」

ゼロ距離まで近付いたところでさんざん仕込まれた格闘戦。艦装の隙間に潜り込ませるように拳をねじ込み、

「ドン！」

掛け声と共に前へと踏み出し、海面を波打たせるほどの踏み込み。

その力を拳に伝達させ、大淀の体内なにかに振動を送り込んだ。

これは鳥海仕込みの技。声が無いと使えないようだが、しつかりと仕込まれたおかげで大淀にも効く一撃を繰り出すことが出来た。

新たに加わったメンバーのおかげで、一矢報いることが出来る。蘇るたびに新しい何かを用意しなくてはいけないのは辛い、今はこれがこちらの最善手だ。

押すならば手数で。多種多様な技を使って、大淀を追い込んでいかねば。

戦場での成長

強化されて蘇った大淀ではあるが、あくまでもその強化は今までに見たものに対してである。護衛退避した者達と入れ替わりに入った者達の手段は当然知らないため、物の見事に翻弄することが出来た。

特に雷の持ってきた秘密兵器の1つ目という目潰しが綺麗に決まり、さらにはリコや鳥海から教えを受けた暁の渾身の一打が大淀の腹に入る。あれは鳥海が日向をも倒した、耐久力が高い敵の内部を破壊する攻撃。淑女からはまた遠のいてしまっているように思えなくもないが、今はこれが一番助かる。

「いほっ……!?!」

本来ならば気を失う程の衝撃が体内を駆け巡ったはずだ。目も見えなくなっているのだから、尚のこと鋭敏にそれを感じてしまっているはず。

しかし、大淀は止まらない。大きく咳き込みはしたものの、暁の居場所がわかったため、そちらの方に向けて主砲を振り回す。無闇矢鱈の攻撃になっていたが、拳が届くところまで近付いていた暁には直撃があり得る。

「危ないわね!」

当然すぐさま飛び退いて射程範囲外へ。振り回された主砲は空を切ったが、今度はタイミングを合わせて砲撃までしてきた。暁に直撃コースであり、回避出来たとしても衝撃で腕が持っていられるであろうドンピシャの位置。飛び退いた直後だったために回避行動に移るのは至難の技である。

「っー」

それならばと考えた時点で、気付けば暁の眼前まで移動していた。この戦いの中で3回目の無意識下での行動。

ここまで来たら自分でもわかる。これが三日月の感覚だ。考えた時点でもう行動が終わっている。それがさらに一段深まり、考える前に行動が終わっていた。無意識のうちにやらねばならないことを自分の中で感じ取り、それを行動に起こしている。自分でもここまでや

れたのが不思議だが、今はこれで命を救うことが出来たのだから良し。

おそらく、戦場の匂いを常に感じ続けているからこそ出来ることなのだと思う。今までずっと匂いで機微を感じ取っていたからこそ、細かい変化にも気付けた。これは意識するとむしろ遅くなるタイプ。「つく」

大淀がやった突撃からの急ブレーキを逆輸入したのだが、思っていた通り脚への負担が尋常では無かった。折れたり痛めたりすることは無かったものの、これこそ何度も出来るような芸当では無い。余程のことが無い限り、多用は厳禁。それこそ何度もやれば痛めてしまうだろう。

知覚出来ない突撃を応用して暁の寸前にまで接近し、抱き上げてもう一度。それでも大きな衝撃だったとは思うが、砲撃の衝撃よりは優しくその場から引き離れたはずだ。もう少し私の身体が柔らかければダメージが少なくて済んだだろうか。

「大丈夫か、暁」

「ご、ごめん、ありがと。御礼はちゃんとと言えるし」

「無事ならそれでいい。これからも頼むぞレディ」

落ちそうになっていた帽子を深く被せてやり、未だ目潰しが効いている大淀の方を見据える。余程目が痛いのか、今までに見たこともないような形相で周囲に乱射し、近付くことが難しい状態。近接担当にはかなり厳しい。

なら、今なら対策を取られていたことが効くのでは無いだろうか。見えていないのなら、空爆ももう一度効くかもしれない。

アイコンタクトで瑞鳳に合図を送る。同じことを考えていたか、小さく頷いた後、翔鶴にも合図。

「近付けんぞ。なんじやあの駄々っ子は！」

「利根姉さん、痺れを切らさないでくださいね」

「わかっておるわー！」

こういうところで利根が騒ぎ立ててくれるおかげで、作戦もうまく行きそうである。

そして、静かに瑞鳳と翔鶴が艦載機を発艦。2人でも充分な数の空爆が期待出来た。

「……っ！」

それを察知してか、乱射していた大淀が途端に防空に転換した。目が開けられないような状態なのに、お構いなしに空襲を回避しながら艦載機を瞬く間に撃ち墜としていく。

空爆が死の原因に近いところにあつたため、やはり耐性を持っている。見ずとも航空戦は喰らわないということなのかもしれない。そうなる空母は仕事が出来なくなってしまうようなもの。

「上に意識が向いてるならあー！」

「吾輩達も手伝うぞー！」

ならばと綾波が魚雷を放った。利根と筑摩もそれに合わせて雷撃。真上と真下の同時攻撃ならば、どちらかが当たると見込んでの攻撃である。どちらが当たっても致命傷は免れないはずだし、そもそも目を潰した状態なら魚雷の軌道を読むことだって出来ないはずだ。無闇矢鱈に逃げ回っているのは、魚雷にはまず当たると。

「魚雷……！」

しかし、大淀は目を瞑った状態でそれを全て回避してしまった。位置が完璧にわかっていっているわけでは無さそうだが、防空をしながらの雷撃回避は、目が見えていないようには見えないくらいに滑らか。

あれはおそらく聴覚だ。自分に向かってくる魚雷の、波を立てる音から大まかな位置を把握している。目を潰したことで他の感覚が鋭敏となり、そんな芸当が可能になっている。初めて目を潰された私の時と同じか。

「相変わらず滅茶苦茶ねクソ淀！」

「こちらのセリフですよ。目潰しなんて狡い手を使って」

味方の空爆を掻い潜りながら、曙が槍を振るうが、それすらもナイフで打ち払いながら回避。渾身の突きすらも軽く逸らしてしまうため、曙も攻めあぐねているような状況。

空爆のことを考えながらの戦いだからというのもあるのだが、空爆をやめるわけにもいかない。防空をやらせながらの戦いだからまだ

今の状況が作れているに過ぎない。

「ですが、目の痛みはようやく引いてきましたよ。貴女のその呼び方は前から気に入らなかつたので、まずは貴女にしましょうか。私怨が混ざって申し訳ないですがね」

キナ臭い匂いが立ち昇る。そうか、それは大淀の殺意が1人に集中した時の匂い。今からこいつをやつてやると考えた時の匂いだ。

ずっと感情の匂いを感じながら戦ってきた私だが、この土壇場になつていくつも理解出来ることがある。私は今でも成長している。練度自体にはまだ伸び代があつたのだから、そこを使つているのだと思えば納得出来る。

曙は私のスピードにも慣れていくくらいの猛者ではあるが、知覚出来ないものを前以て計算出来るかは定かではない。喰らえば今までのみんなのようにその時点で退避が確定する。ならば、1人で相手をするのは荷が重過ぎるだろう。

「また……！」

「っ……」

そう考えたときには行動が終わつていた。曙をナイフで斬り裂こうとしていた大淀のナイフを食い止めるため、曙の前に躍り出た。今までの経験と、そうしたいと考える匂いから、その行動は読めた。

しかし、また突撃からのブレーキをしたために脚への負担が酷い。呻き声は上げなかつたものの、明石謹製のタイツであってもこの負荷は吸収しきれない。

「ナイス！」

私が食い止めたことで大淀に一瞬の隙が出来たため、私の隙間を縫うように槍を通して大淀へ渾身の一突き。一番速く攻撃に転じるこゝとが出来るのはこれしか無い。私の身体が壁になり、その軌道は見えずらいはず。

「当たるわけないでしょうに。その程度の攻撃」

だが、一気に空爆圏外にまで下がることでその一撃は回避。突然随分と控えめになつたようだが、殺意はむしろ増している。一呼吸置い

て、攻撃に転じようという魂胆だ。

「いい加減鬱陶しいんですよ」

空襲に対して苛立ちが頂点に達したか、私が考える間も与えられずに翔鶴の艦装が破壊された。この期に及んで大淀すら成長している。怒り任せの砲撃は、その時だけは鳳翔の知覚出来ない射撃の模倣になっていた。砲撃なのだから遠ければ遠いほど避けるタイミングが生まれるはずなのだが、大きな艦装であるが故にそれも出来なかった。

「つくう!？」

「翔鶴さん!？」

「次は貴女ですよ」

次の狙いは瑞鳳。砲撃直後であるがためか、次は突撃でケリを付けようとしているのが予測できた。

瑞鳳は他の空母と違って華奢だ。同じ軽空母である鳳翔よりも小柄。大淀の一撃を受けたら、容易く折れてしまう可能性がある。

「させるかよ」

当然そんなことはさせない。またもや無意識下の移動で大淀の眼前へ。脚が悲鳴を上げるが、そんなことを言っている余裕はない。

大淀も私と同じで、移動する時は直線でしか動けないはずだ。一旦着水し、脚への負担を考えずに海面を蹴って方向転換することで柔軟な動きを無理矢理再現しているに過ぎない。進行方向に立てば妨害になる。

「はっ、それくらいお見通しですよ。貴女も単調ですからね」

しかし、大淀が見ているのは私では無かった。殺意は瑞鳳に向けていたが、主砲はまるで違うところを向いていた。おそらく大淀は適当な場所を撃つつもりで主砲を放った。狙いなんて無しなため、こちらの方向に殺意の匂いが向かなかつた。その結果、私が反応出来なかつた。考えていないのだから無差別攻撃には反応出来ないし、フェイントにも易々と引つかかってしまう。

主砲の向いた先にいたのは、先程大淀に蹴り飛ばされたことで気を失っている加賀と、砲撃の衝撃を受けてフラついている瑞鶴。瑞鶴は

それに反応出来たが、加賀はその場から動くことが出来ない。

「お前……」

そこから強引に身体を動かし、主砲を蹴った。かなり無理矢理な動きだったため、脚だけでなく身体全体が軋むような痛み。私の蹴りは高が知れているとは思うが、僅かにでも射軸をズラすことが出来れば命を助けることは出来るはずだ。

砲撃が放たれるまでには間に合い、強引な蹴りでも主砲はかち上げられ、弾は僅かにズレた位置へと飛んでくれる。しかし衝撃は凄まじいため、直撃コースだった瑞鶴は再び衝撃を受けてしまうことに。

だが、その瞬間に瑞鳳に向いていた殺意が全て私に向いた。今の私は体勢が悪い。そのままナイフを振られても、簡単には避けられない。

「他人を狙えば自分が疎かになる。貴女のその善人な性格はお見通しですよ」

ナイフが横薙ぎにされた。無理な体勢だったが自分を守るために、そのナイフをどうにかガードするが、その一撃はあまりにも重く、私の非力な腕力では簡単に押し返されてしまう。

それ故に、咄嗟に拳銃側を使った。ナイフの握り手が狙えるかはわからなかったので、ナイフを扱う腕を狙って1発の射撃。

「その程度！」

しかし、それも軽く避けられてしまった。さらには私に押し込むナイフはより力が強くなり、私を斬り裂くのも時間の問題に。

「ダメでえすよお！」

そこに救援。綾波が突撃してきていた。私に向かうナイフを止めるのではなく、足元を狙うことで大淀の体勢を崩すことで力を抜かせ作戦。綾波だって私対策に調整されている近接型の性質を持っているのだから、それくらいは容易い。

「若葉に何してるのよ！」

さらには暁。綾波が下なら暁は上。リコに仕込まれた喧嘩殺法の中でも最も得意とするケンカキックを顔面にぶち込むために軽く跳んでいた。

「貴女達は寄ってたかって。纏めて沈めてほしいということですよ
ね」

私が押し返していたナイフを突然引いた。自分の力で私が体勢を崩しかけ、綾波には蹴りを、暁には主砲を薙ぎ払って殴り付けることで、全ての攻撃を回避。

この場でその臨機応変な動きは厄介すぎる。計算能力まで底上げされているのか。

だが臨機応変なのは別に大淀だけではない。これだけの混戦の最中でも、しっかりと戦況を見据えて大淀の隙を観察してくれている者もいる。それが三日月と雷だ。

三日月の意思を感じ取って、軽く身体を横に倒す。これで三日月の砲撃のラインが出来上がったはず。

「私の若葉に何をしてくれるんですか」

冷酷な言葉と共にピンポイント砲撃。私が避けたことで大淀にヘッドショットを決める隙間が出来ている。横に避けようとも綾波と暁がまだそこにいるために簡単には避けられない。正面には当然私だ。

「この……」

ここで大淀、まさかの上への回避。知覚出来ない突撃のための力を真下に向けたことで、本来では出来ないレベルの跳躍力を再現してしまった。当然脚への負担は急ブレーキの比ではないが、大淀にはそれも顔を顰める程度のものである。

摩耶がいればこのまま対空砲火で海面に戻さないのだが、不幸なことに摩耶は退避済み。それも見越しての上への退避だったのだろう。しかし、体勢が変えられないのは変わらない。今なら狙い撃ちが出来る。

「近寄らせるわけじゃないでしょう！」

そこから下へ向けての乱射。防空に使う砲撃を下方方向にぶちまけてきたことで、ほとんど空爆に近い攻撃に転化されていた。真下には私達には堪ったものではなく、すぐにそこから退避。

「でも、狙い撃てるのは変わらないわよね」

その中でも冷静に大淀を見据えていたのは雷だ。砲撃を軽々と避けながら、一瞬の隙間を突いて1発の砲撃。そのときに主砲のスイッチらしきものを切り替えていたのを見逃さなかった。

「秘密兵器その2、炸裂音爆弾」

その弾は砲撃にぶつかつたことで大きな爆発となり、本来なら出ないレベルの巨大な音の衝撃となつてその場を包み込んだ。割と近くにいた私達ですら鼓膜がやられたのではないかと思えるほどの衝撃。

目を潰されたことで耳を頼りにするように成長した大淀には、私達以上の衝撃となり、一瞬白眼を剥いたのがわかつた。

不殺の雷が一番の戦果を上げる。大淀が殺意に敏感だからこそなのかもしれない。この場でも雷は、大淀を殺さないように戦っているのだ。

最善の答えは

雷の擲手により視覚を奪われた大淀だったが、私、若葉が目を潰されたときから嗅覚が強まったように、その場で聴覚を頼りに戦闘するように成長してしまった。見えていないにもかかわらず、乱射と近接戦闘、さらには殺意の無い砲撃まで駆使されて、空母隊は瑞鳳を残して全滅。効かないとはいえ、空襲が無くなったのは厳しい。

しかし、ここで雷第二の擲手。聴覚が発達することを予測していたと言わんばかりの音爆弾が決まり、空中に逃げていた大淀は白眼を剥いた。聴覚が普通な私達でも耳鳴りがするほどなのに、爆心地のほぼ真ん中で喰らった大淀はそのまま落下し、海面に叩き付けられることとなった。自らの力で上に逃げたのだからこれは自業自得。

「まだ耳が痛いわ……何なのよあの威力」

「明石さんから聞いてはいたけど、あそこまでとは思ってなかったわ」
撃った雷が音爆弾の衝撃でフラフラしているレベルである。それほどまでに強力な音響兵器。一撃で戦場にいる誰もがダメージを受けるような凶器。明石は何て物を作ったんだ。

「何なんですかそれは！」

目にかけて耳までやられ、息も絶え絶えな大淀。こちらの声は辛うじて聴こえているようだが、三半規管を激しく揺さぶられたことでもともに立ち上がることも出来ないようである。

そのため、どうにか腕の力で上体を起こしながらこちらを狙い撃つてきた。照準は当然雷。海面に落ちたことで目の痛みを海水で洗い流したか、しっかりと見据えて砲撃を繰り返す。

「それはダメだねえ」

その砲撃は伊勢が即座に斬り払った。今の攻撃で雷が狙われることなど誰もがわかっていたこと。こちらの大淀の防衛は日向に任せ、伊勢は雷を守るために持ち場を離れる。

伊勢ほどになれば、大淀の異常な威力の砲撃も斬り払ってしまう。防衛に回したら右に出るものはいない。私達の仲間に戦艦が極端にいないというのもあるが。

「もう諦めろ。お前の負けだ」

「私の負け？ そんなわけないでしょう」

フラつきながらも立ち上がった。音爆弾の衝撃は身体に残っているようだが、回復力も尋常ではない。全回復はしないだろうが、戦う意思は全く失っていないのは気に入らないほど理解が出来る。

「私のお願い聞いてほしいの」

「どうした、雷」

「あの大淀さん、殺さないでほしい」

この期に及んで何を言い出すかと思えば、何をとち狂ったことを。私達は大淀を終わらせるためにここまで来たのだ。そうでなくても大淀は自らの目的のために、艦娘も深海棲艦もただの道具としか思わずに使い捨ててきた。私や三日月だってそのせいで死にかけているのだ。殺さない理由は無い。

施設所属の者では数少ない、今回の事件に一切関係の無い者だからこそそんなことが言えるのでは無いかと突っかかりそうになった。最も慈悲深い雷だから、残虐なことをし続け、見逃しても仇で返してきそうな奴を殺さないでと言える。誰もが納得出来ない発言だ。

だが、雷の言葉は思っていたことと少し違った。

「殺したら強くなつてまた来ちゃう。目潰しも音爆弾も効かないようなのが。だったら、今の状態で捕まえた方がいいわよ。多分あの人、死なないと次が来ないんじゃないのかな」

確かに、3代目は鳳翔が2代目を殺したことで現れた。鎮守府近海で潜っている潜水艦達からも、私達が準備を整え鎮守府に近付いたところで出撃したように言っていたらしい。

雷の言う通り、次の大淀が現れるのは、あの大淀が死んだ後である。ならば、弱らせて捕縛し、そのまま置いておけば4代目が現れるようなことは無いのではないか。薄々気付いていたことではあるが、雷が言葉にしてくれたことで全員がそれを理解する。

「私だって若葉達がどれだけ恨んでるかわかってるつもりよ。それに、あの大淀さんは多分償いきれないくらいの罪を犯しているのもわかる。それを絶対に反省しないことも」

悲しそうに、だが強い意志を持ってツラツラと言葉を紡いでいく。優しすぎるくらい雷でも、大淀が本当にどうしようもない極悪人であることは重々承知の上。いろいろとあつて歪んでしまったのはわかるし、それがどうやって更生不可能であることも理解している。他者を虐げること罪悪感すら感じていないのは、匂いからもわかっていることだ。

同情すべき部分もある。だが、だからといって越えてはいけないうインを越えすぎているのだ。死ななくてもいい命を容易く摘み取り、罪の意識を他者に押し付け、自分は後ろでケラケラ笑うのみ。悪意以外には考えられない。

「だけど、殺さずにいた方が先に進めるのなら、今はそうした方がいいと思う。むしろ、あつちつてそれが狙いなんじゃないの？」

「……若葉^{ホク}達が大淀を殺すことがか？」

「うん。そうしたらどんどん強くなっていつちやつて、本当に手が付けられなくなるでしょ。真正面からもダメ、搦手もダメ。砲撃も雷撃も航空戦も近接戦闘も全部ダメ。そうなったら本当に無敵の存在になつちやうわ」

殺したくて殺したくて仕方ないような存在だとしても、これ以上戦いを長引かせるのも嫌なのは確かだ。それに、これ以上強くなるであろう4代目が現れる可能性が高くなると、雷の提案は悪くなく感じる。急がば回れではないが、命を奪うことが解決策とは限らない。

今まで全員を救い出してきたように、大淀も殺さずに終わらせる。そうすれば次は無い。そのまま鎮守府に攻め込み、大淀を蘇生させるシステムさえ破壊してしまえば、擬似的な不死もその時点で終了だ。

今思えば、私達全員が大淀への怒りと憎しみに囚われ、殺意以外の感情を持っていなかった。必ずここで殺してやるという意思のみで戦場を駆け回っていた。だから、何度蘇生されても全て倒して突き進んでやるという思いで戦っていた。

それをたった1人、雷だけが覆した。そのやり方自体が敵の思うツボであると気付かせてくれた。擬似的な不死が完成したのなら、それを存分に使ってくるに決まっている。

「雷の言うことも一理ある。若葉ホッもあれ以上の相手はしたくない」
「でしょ。まだ私も秘密兵器の弾は残ってるから、うまくやる。殺さないように戦いやすいボノやお姉ちゃんもいるし、みんな手伝わてくれれば何とか出来ると思うの」

雷の意見を実行するのなら今このタイミングしかない。大淀が大きく消耗している今がベストだ。拘束するのなら、艦装を破壊するのが一番手っ取り早いだろう。

「殺さずに気絶させる。鎮守府を制圧してから処遇を考える。これが勝利が一番近いな」

やるとなれば即実行。殺さないように強打を浴びせかけ、気絶させる。傷がつこうが死ななければ良し。それはそれで残酷ではあるが、命を取らなければ済む話。

慢心しているわけではなく、最善の答えを導き出した結果がこれなのだ。最悪の敵でも生かして倒す、手加減という苦渋の決断。

「三日月、やれるか」

「恨み辛みが払拭出来ないけど、若葉がやるなら私もやるわ」

「ありがたい。サポート頼むぞ」

改めて大淀を見据える。もう理性を失いそうなほどに怒りと憎しみに燃えたぎり、いつも余裕そうにこちらを見下す最初の面影なんて何処にも無かった。必死に命に縋り、私達への殺意を振りまく、たった1人の敵。

「大淀の艦装を破壊するー！」

高らかに宣言し突撃。こういう時の一番槍は私が適任。脚に疲労が蓄積されているが、どうこう言っている余裕など何処にもない。限界を超えて、さらに向こう側へ。

「私の艦装を破壊する？ やれるものならやってみなさい！」

「当たり前だ！」

知覚出来ない突撃により大淀へ急接近。あちらは聴覚への攻撃がまだ効いているために、それを受け止めることなど出来ない。

しかし、あちらは私のこれに反応出来る動体視力を持っている。軽く受け流されることもあるだろう。それでもいい。今の状況なら、そ

れも隙を作ることに貢献出来るはずだから。

「馬鹿の一つ覚えですね。同じことばかり何度も何度も！」

案の定、私の突撃は上に払われた。フラついていてもその程度なら可能ということか。一体どれだけの力を持っているというのだ。

「よくわからぬが、殺さぬように倒せと言うんじやな。任せよ！」

「援護は得意です。そのためにここに来たようなものですから」

私が払い除けられた瞬間を狙い、利根と筑摩が砲撃。殺さないようにと基本的に艦装狙いの一撃。2人で別方向からの砲撃には、今の状態では全力の回避が必要になるはず。

「当たるわけがないでしょうが！」

「当たらなくていいの」

回避したところに雷の砲撃。今までならお構いなしにそちらも回避出来ていただろうが、消耗している今ではそんな余裕も無く、直撃とは言わずとも砲撃で撃ち墜とすしかないくらいにされている。

雷が放ったのは1つ目の秘密兵器、目潰し。海水で洗い流したようにこちらを見ることが出来ていたため、目潰しの上書き。撃ち墜としてもそれは勢いよく大淀の方へとぶちまけられ、再び視力を奪う。

「っああっ」

「奴の艦装は異常に硬い。私と伊勢が叩き斬る」

ここまで来たらこちらの大淀も自衛で何とか出来ると判断したか、日向も動き出していた。ただ殺す以上に難易度の高い、生かして倒すという勝利条件を満たすためには、誰一人として休むことは出来ない。

大淀は視覚が潰された時点で聴覚にシフト。三半規管を揺さぶりはしたが、音が聞こえていないわけではないので、回避能力は衰えていない。とはいえ、見えていないというのはそれだけでもアドバンテージを失うものだ。聞き分けが出来ているにしても、動くのは見ている時よりも一瞬遅れる。

「貴女達は私が育てたというのに、生みの親に恩を仇で返すつもりですか！」

「子は親を選べん」

「むしろこれが恩返しだよ。間違った道に進んでる親を子が正すなんて、よくありそうな話でしょうよ！」

後ろに回り込み、2人揃って艤装を破壊するために刀を振るった。が、やはりと言ってはアレだが紙一重で避けられる。

もう大淀も余裕が無いどころではなく手段を選んでいなかった。無様に方便を垂れ、少しでも自分に有利になるように汚い手も惜しまない。ここまで来ると哀れだ。

「私は今すぐにもアンタをぶち殺してやりたいわ」

その回避先を計算していた曙が、気絶させるために槍の柄で大淀の顎を強打。

「私はまだ、やられない！」

「しごといわね」

脳が強烈に揺さぶられ、本来ならこれで落ちるはずなのだが、必死な大淀はここでも踏みとどまる。見えない目で曙を睨みつけ、主砲を向けた。

「やらせるわけ無いじゃない！」

その瞬間に飛び込んでいたのは暁。主砲を放つために腕を上げたことで、脇腹が完全にガラ空きになる。そこへ拳を押し当てていた。その時には曙も射線から回避完了。万が一放たれたとしても衝撃だけで済む位置。

「ドンー」

そして、衝撃を体内に打ち込む。殺さずに有効打を与えるのには一番の技。鳥海から教え込まれた暁はこの場で見事に使いこなし、戦況をこちらに傾けてくれる。

腹に打ち込まれたことで呼吸を乱した。強引に止められたことで大淀は今度こそ意識を失いかける。

「まつ、まだ、だあー！」

まだ踏みとどまる。何なのだこの執念は。そこまでして世界を滅ぼしたいのか。分け隔てない憎しみだけでここまで動けるとなると、少し恐怖を抱いてしまう。

「いい加減に倒れてもいいよ」

そこへ瑞鳳の一射。余裕が無くなったところで艤装の隙間に突き刺さる。

「発艦！」

そこから矢が艦載機に変化し、そのまま爆散。艤装の半分を破壊した。これにより大淀の性能は大幅に減衰する。出力が減るのだから、本人の出来ることもその分落ちるだろう。あの極端な回避性能などももう発揮出来ない。

「終わらない、終わらない、私は、終わらない」

ほとんど謔言のように呟いていた。艤装からのアシストも衰え、もう私達への対抗策も尽きたようなもの。それでも諦めないで進もうとする。

最悪な場合はここで真の深海棲艦化なのだが、その兆候は見当たらない。一度死の恐怖を味わったことがあるためか、負の感情の増幅がそこまで達していないのかもしれない。知らない恐怖ではないことが、深海棲艦化を阻んでいるのかもしれない。

だが、大淀の表情が変わる。感情の匂いが今までに嗅いだことのない匂いに変化する。殺意の対象が失われ、さらには諦めの匂いまで消えた。次に浮かび上がった匂いは、自殺衝動。

「っあ……そうだ、そうだ、死ねば次に行ける。そうだった。私は死ぬことでより強くなれる。死ねばいい。私が死ねばいい」

大淀はニタリと笑って、自分の頭に主砲を突き付けた。

大淀が辿り着いた最善の答えは、自殺。生かそうとする私達とは真逆の答えに至ってしまった。

みんなの力

大淀を殺してしまったら、それ以上の力を持った4代目の大淀が現れ、本当に手が付けられなくなるのではと気付いた雷の願いにより、憎つき相手ではあるものの殺さずに生かして捕らえる方向性にシフト。戦いを終わらせるためには、殺さないという選択肢を採るしか無かった。

大淀は雷の搦手や仲間達の猛攻で大きく消耗している。やるなら今しかない。だが、大淀は私達とは違う答えに辿り着いてしまった。「つあ……そうだ、そうだ、死ねば次に行ける。そうだった。私は死ぬことでより強くなれる。死ねばいい。私が死ねばいい」

大淀はニタリと笑って、自分の頭に主砲を突き付けた。大淀が辿り着いた最善の答えは、自殺である。

大淀は死により強くなることはもうわかってのことだ。2人の医療研究者の力により得た擬似的な不死による強化蘇生で、今まで受けてきたダメージが全て回復するだけでなく、喰らった攻撃全てに耐性を得てしまう。あちらの研究結果としては最高の結果なのかもしれないが、こちらとしては最悪の結果。

ここで死なれたら、今までやってきたことが水の泡になる。何人も倒れ、その度にメンバーを替えて、新たな攻撃方法で倒しているのだ。次耐性を持たれたら、覆すことが殆ど不可能になる。真正面から斃せるような相手ではない。

「あはっ、そうですよ。私が死ねばいいんですよ！」

もう気が狂っていると思えない。一番死を拒んでいたはずなのに、今は一番死を望んでいる。気色が悪いとまで思ってしまった。

だが、そんな大淀でも死んではいけない。さっきまで殺したいと思っていたのに、今や守らなくてはいけない相手になってしまった。相手を思っただけではない。みんなを守るためだ。

そう考えていたらもう身体が動いていた。いや、ここでも無意識に動いていた。大淀の命を救うため、私は自分の限界を超える。

「邪魔っ、しないでくださいー！」

気付けば私は大淀の主砲を持つ腕に絡みつくように体当たりしていた。その瞬間に放たれたが、主砲の射線を頭から突き放したことで自殺は失敗。衝撃は激しかったが耐えられない程ではない。脚の方がキツイくらいである。

仇で返されることはわかっていても、今だけは大淀を守る。敵だろうが関係ない。命を救うということは、私達が今までやってきたこと。いつもいつも敵を救うために戦ってきた。ならば、それを大淀相手にもするだけだ。

「お前を、死なせない！」

「何を勝手な。貴女達は私を殺すためにここにいるんでしよう！ 私がそれを望んでるんです。望んだ途端に掌を返すだなんて、都合が良すぎでしょうに！」

「お前の思い通りになつて堪るか！」

もう自分で殆ど考えていない。大淀の匂いを嗅ぎ分け、最善を考える前に身体が動く。感覚的すらも超え、身体が勝手に動く。今までの戦いの全てが、相手を殺さずに倒す手段を瞬時に判断してくれていた。

大淀の言う通り、私の行動は単調かもしれない。やることなすこと身を削つての行動ばかりだ。自己犠牲と言われれば、何も否定が出来ないだろう。

だが、誰も死なないのならそれでいいだろう。生かされるものは生かされる。私も死なない。誰も死なない。それが戦いの最善なのだ。

「お前に死なれたら困るだけだ！」

「貴女が味方ならときめいていたかもしれない言葉をどうも。ですが、今は憎たらしくて仕方ないですよ！」

艦装も半壊しているというのに何て力だ。私はパワーアシストを受けていても引き剥がされんばかりに振り回され、海面に叩き付けられた。肺の中の空気を全て吐き出しそうになったが、この後のことを考えてグツと堪える。

案の定、そのまま海中に沈められ、呼吸が出来なくされた。だが力は緩めない。むしろより力強く絞め上げ、腕を折りに行く。別に非力

なわけでは無いと思うのだが、大淀の腕は悲鳴を上げるだけで折れる気配は全く無い。

「放しなさいー!」

「放すのは貴女ですよ。私の若葉を沈めるなんて何様ですか」

私を引き揚げては叩きつけを繰り返す大淀を見て怒りが頂点に達したか、助けるように三日月が砲撃。私が腕に掴まっているようなこのタイミングで撃てるのは三日月だけだ。

ここまで来ると、私も三日月もお互いに以心伝心出来ている。どのタイミングでどう撃ってくるかは、匂いが無くてはわからないほどだ。呼吸もしづらいこの状況で匂いを嗅ぐことなんて出来ないわけだし。三日月自身も、私の次の行動を感覚的で無くてもわかってくれるだろう。

「貴女の主砲で死ぬことにしましょうか」

「私は貴女を殺すために砲撃したわけではないです。若葉のために撃ったんです。思い通りに行くと思ってるんですか」

その砲撃に対してありがたいとでも言わんばかりに身を晒す。確かにアレが当たれば大淀は死ぬだろう。三日月の主砲は普通の駆逐主砲よりも出力が高めに設定してあるし、そもそもどんな砲撃でも当たりどころが悪ければ誰だって死ぬ。

だからこそ、その砲撃に当たらないように思い切り脚を蹴り飛ばした。今この場で三日月の砲撃のことを考えずに自分の主砲で自殺を考えていれば間に合わなかったかもしれないが、その腕は私が掴んだままだ。そんな考えにも至らなかつたようだ。

体勢を無理矢理倒した瞬間に、掠めるかのように三日月の砲撃が通過した。私が蹴り倒さなければ大淀は死んでいただろう。三日月が撃たなければジリ貧だっただろう。今の行動は全て最善。愛する者との意思疎通なればこそ。

「こっ、のお……!」

「やっさと諦めろー!」

ようやくマウントポジションだ。私は子供だからすぐにひっくり返されるかもしれないが、今なら行ける。主砲を持つ腕の拘束は外す

ことになるが、そちらに拘った状態では私も身動きが取れなくなるので、そこは妥協した。

やれることは艦装のパワーアシストまで込めた拳のみ。ナイフで斬ってしまったら元も子もない。殺さずに終わらせるのなら、ここからは殴り合いしかない。気を失うまで殴る。それが出来るのは私だけだ。

「いい加減に、しろー！」

まず1発ぶん殴った。今までの恨みを込めて顔面に。いつもの大淀ならこれだつて受け止めていただろうが、今の淀は雷の目潰しがまだ効いているために私の拳がしっかりと見えていない。聴覚に頼るにしても、近過ぎてすぐには反応出来ない。

しかし、それだけで気を失ってなんてくれない。別に私が非力というわけではなく、大淀が単に頑丈。今までの戦闘から耐性を持っているというのなら、大淀に初めてまともなダメージを与えた顔面への蹴りに耐性を持っていると考えるもいい。

面の皮が厚いということとのダブルミーニングか何かだろうか。どちらにしろ、厄介極まりないことには変わらない。

「そこを、退けえー！」

大淀の殺意が蘇っており、お返しと言わんばかりに主砲で顔を殴られた。脳が揺さぶられるような衝撃だったが、私が気を失うわけにはいかない。今の攻撃は無意識に避けるなんてことは出来なかった。

私の無意識の行動が最も発揮出来るのは、他者を守るためなのだろう。最初はシロを守るためだった。次は摩耶。暁を救うためにも使えた。今まで全てそうだった。自分の身を守るためには発動しない。

まるで自己犠牲の力。自分より他人。仲間が死ぬところを見るところなんて見たくもない。自分が痛い目を見ているのだから、それを他人に知ってもらいたくない。たったそれだけの思いから生まれた力だ。

「私はまだ！ 負けない！ 一度死んで、リセットして、今度こそ全部滅ぼす！」

さらにもう1発。逆側から殴られ、しかも当たりどころが悪く眼を

強打。相変わらず私は眼に何か不幸なものを持っているのではないかと思う。もうこれで何度目だ。

これによって、また左眼の視力が奪われる。主砲なんかで殴られているせいで、頭から血が流れているのもすぐにわかる。自分の血の匂いが周囲を漂う。

「ふざけるな！ お前1人のわがままで滅ぼされて堪るか！」

こちらもお返しに、ナイフの柄で殴り付けた。これにより大淀の眼鏡が割れる。

お互いに触れられるのは相手の頭のみ。だから顔面を殴り合うことしか出来ない。加えて、大淀はまともにこちらが見えていないのだから、駄々っ子のように腕を振り回すしか無い。それが都合の悪いことに、私の側頭部を強打する位置にあった。

「そんなこと知らない！ 世界が私を否定したんだ！ だから！ 全部壊してやる！」

もう私達の知っている大淀では無かった。感情的で、自分の思い通りにならないことに憤慨し、癩癩を起こして駄々を捏ねるただの子供のようにしか見えなかった。

生まれ変わるたびに性格が変わっているのでは無いかと錯覚する。人をおちよくすることに悦びを感じていたような慢心だらけの初代、冷静に物事を観察出来ていた2代目、そして直情的な子供のような3代目。クローンと言えど、別個体なのだから全く同じとは行かないのか。

「お前なんぞに壊されるか！ ここで、若葉^{ホク}達が止めてやる！」

「貴女なんぞに止められるか！ 全員死んで、私も死んで、強くなつてやり直す！」

そこからはもう本当に殴り合いだった。お互いノーガード。しかも狙えるのは頭のみ。艦娘故に頑丈ではあるが、当然痛みはあるし血だつて出る。大淀は相変わらず主砲で殴ってくるため、私の方がダメージが大きい。

だが、妙に痛みは感じなかった。戦意昂揚の一部か、痛覚が麻痺しているような奇妙な感覚。だから私も止まらない。私の持つ凶器は

ナイフだけなのだからそれで殴り付ける。シグの魚雷をこんなところで放つたら、大淀どころか私まで巻き込まれて死ぬ。

そうだ。これがあつた。今まで近接戦闘ばかりしかやってこなかったため、こんな身近にあるのに使いもしなかつた。

魚雷発射管から魚雷を一本引き抜く。ナイフよりは長いが、斬れ味なんて何もなかったあの鈍器。それが今一番必要な武器。

「いいから、止まれえ！」

頭をかち割らんばかりに魚雷で殴りつけた。ナイフの柄で殴るよりは確実にダメージが大きく、大淀が軽くふらついたのもわかつた。畳み掛けるならここ。

しかし、朦朧としながらも大淀の眼は輝きを失っていない。私をこれでもかと睨み付けると、主砲を持たない腕で私に掴みかかろうとしてきた。狙いは首だ。下手をしたら私の首は折られる。しかも、それが視力を失った左眼側から伸ばされたので、一瞬反応に遅れた。

「貴女を殺せば私も死ぬる！ だから、死ぬえ！」

これはまずい。この一瞬が命取りだった。回避を考えた時には、殴り打されたことによるフラつきまで出てきてしまった。まずい。まずい。これはまずい。

しかし、大淀の手は私の首には届かない。

これは私の意思で受け止めたわけではない。見えていない左眼側の腕が勝手に動いた。持っていた魚雷を放り投げ、大淀の腕をしっかりと掴んでいる。

ぼんやりと、その見えていない目がその姿を捉えた。今の私の左腕はシグが動かしたものだ。あの時の、三日月の命を救ってくれたあの時のように、今シグが私を救ってくれた。あの時と同じように、その姿を現実で捉えることが出来た。

薄く、本当に薄くしか見えないシグが、勇ましく、それでいて優しく、私に微笑みかけた。言葉は聞こえずとも、意思は伝わった。ここで終わりにするために、私に行けと。

「任せてくれ、シグ。お前の分も、若葉が叩き込んでやる」

自然に力が溢れ出す。最後だというのに、今まで以上の力が出るよ

うだった。私だけではない。2人分の力。

いや、それだけではない。大淀を拘束している脚にも力が湧き上がる。シグだけではない。チ級も力を貸してくれている。私は1人じゃない。

「行つて、若葉」

最後に三日月の呟きが聞こえた。本当に小声で、本来なら誰にも届くことのないような声量でも、私には届いた。その声援だけで、疲れも吹き飛ぶ。

「っだあー」

もう片方の手に持つナイフで大淀の主砲を弾き飛ばす。それを手から放させることは出来なかつたが、これで大淀は自らを守ることが絶対に出来ない。攻撃も一時的に出来なくなっている。そこでナイフも捨て、大淀の胸ぐらを掴む。

この状態で出来ることはたった1つ。私の身体の中でも特段硬く作られている部位。

「終われえー」

大淀の顔面に向かい、渾身の頭突き。

お互いに何度も頭に向けて攻撃を繰り返していたことで、ダメージはずっと蓄積されていた。この一撃で私も意識が朦朧とするほどだった。だが、これは会心の一撃だった。めり込むように大淀の顔面を凹ませ、鼻血を撒き散らす。

大淀の力が抜けた。掴んでいる腕もダランと垂れ下がり、私が力を入れることもなく支えることが出来る。

完全に白眼を剥いていた。しかし、息はある。気を失っている。

勝利だ。最高最善の勝利を、私達の力で勝ち取ったのだ。

裏側の戦いへ

私、若葉の渾身の一撃で、大淀を倒すことに成功した。今の大淀は完全に白眼を剥き、気を失っている。今考えうる最高最善の勝利を手にすることが出来た。

殺してはいけないという縛りの中、みんなの力があって初めてここまで来れた。最後は殆ど私の一騎討ちのような状況になってしまったが、そこに辿り着くまでにあらゆる方面で力を借りている。本当に感謝しかない。

「若葉、大丈夫?!」

事が済んだ後、すぐに三日月が駆け寄ってきた。私の下には気を失った大淀がいるため、起こさないようにゆつくりと立ち上がり、三日月を迎え入れる。

顔を何度か殴打されたことで酷いことになっているが、幸いにも腫れ上がっているのは側頭部などの髪で隠れるところばかり。あとは左眼がまずいことになっているくらいだ。入渠したら治る。

「大丈夫だ。リミッターも掛け直した。かなり疲れてるが、自分の足で動ける」

大淀から離れたところを見計らって飛びつくように抱き付かれた。一応私もかなり消耗しているのだが、三日月なら支えられる。傷だらけではあるものの、私が無事であることを心の底から喜んでくれた。

「最後の声援、若葉^{ホッ}には届いていたぞ」

「良かった……本当に良かった」

勝利を実感し、三日月は泣きそうだった。殆ど無傷で終わってくれたのは嬉しい。三日月が傷付いている姿なんて見たくない。

抱きながら後頭部を撫でてやる。心地よさそうに身を寄せてきた。今回は時間があるため曙にも冷やかされない。

「大将に連絡しました。既に援軍として向かっている部隊もあります。大将が到着までは少し時間がかかります。到着次第、鎮守府への襲撃となります。潜水艦隊からは、敵の出撃があったという連絡はありません。現状はここで警戒しつつ待機をお願いします」

こちらの大淀が先んじて手を打っておいてくれた。今回は大淀を倒すことも目的の1つではあるが、本来の目的は手瀬鎮守府への襲撃、奪還である。大淀もそうだが、それに協力している医療研究者2名の捕縛も重要な目的。それに関しては相手が人間であることもあり、下呂大將が直々に向かう。当然第一水雷戦隊は同行するだろう。

このメンバーから何人かはその襲撃に便乗する者が出るかもしれない。雷の予想ではあるが大淀は死んで初めて次世代が現れると睨んでいるため、もう大淀による妨害は無いと思われる。だが、100%そうとは限らない。護衛は確実に必要だ。

「こっちの艦装と武装は破壊しておこつか。大將が来る前に目を覚まして面倒臭いし」

「私のハチマキで腕くらいは縛っておこう。腕だけでとりあえずはどうにかなるだろう」

伊勢が提案し、大淀は丸腰の状態にされる。出来ることなら縛っておきたかったため、日向のハチマキで後ろ手に拘束された。これで本当に何も出来なくなっただけははずだ。そこに沈まないように支えつつも監視をつけることで今は置いておく。

気を失った宿敵が真横にいるという状態では心が落ち着かないものの、少しだけでも体力を回復しておきたいところ。

少ししたところで援軍が到着。今回は旗艦が羽黒で随伴艦が我が九三駆となっていたが、駆逐隊は少し変則メンバー。霰と如月が大発動艇を使うことが出来るため抜擢されたようである。そのため、霰と如月に姉と夕雲という少し珍しいメンバーとなった。

気を失っている大淀の姿を見て全員がギョツとした。倒したという証明ではあるものの、鳳翔が殺した2代目とは違い、この大淀はいつか目を覚ます存在。驚くのも無理はない。

「けがにんは……ぜんいんのせてね」

「壊れた艦装も運ぶわね。そのための大発2台だもの」

霰と如月を中心にテキパキと護衛退避の準備を進めていく。その間に羽黒がいろいろと引き継ぎ。こちらに向かっている間に鎮守府

から通信があったようで、ここにいる者の半数は退避ということになったらしい。

残る者は決められており、万が一の時に艦隊司令部を跳ね返す大淀と、その護衛のために伊勢日向、そして可能ならば私と三日月。

「若葉よ、お主は行けそうかえ。見た目は相当消耗しておるようじやが」

「応急処置だけしてくれば大丈夫だ。例の傷薬はあるんだろう」「うむ。少し待っておれ」

私としては、この事件を最後まで見届けることが望み。万が一、手瀬鎮守府にまだ大淀がいるというのなら、もう一度決着をつけなくてはいけなくなる。それに、私の鼻は確実に役に立つはずだ。

私の意思を尊重してくれたか、溜息をついた姉はすぐに高速修復材を薄めた傷薬を用意してくれた。

「お主がわらわ達の持たぬ唯一無二の力を持つておるのは仕方あるまい。じゃが、無理だけはしてくるなよ。お主は生きねばならぬ」「わかつてる。三日月のためにも死ねないからな」

血を洗い流した後に消毒。その後に傷薬を吹き掛けられる。大分深く入っていたのか、消毒がかなり滲みだ。

左眼に関しては今は諦めておこう。一応傷薬は目薬代わりにさしておいたが、これはちゃんと入渠しない限りまともに見えることは無い。これ以上の悪化はしないだろうから大丈夫。痛みも傷薬のおかげで大きく緩和されている。

「若葉、私のリボン、包帯代わりに使って」

「いいのか？ 若葉にはネクタイもあるが」

「いいの。若葉のネクタイ、私のよりも汚れてるでしょ。傷に良くないわ」

大淀にマウントポジションをとって殴り付けたのだから、自分の血やら返り血やらでえらいことになっていた。こんなものを使ったら逆に傷口が悪くなってしまいそう。逆に三日月の制服のリボンは綺麗なものだった。リボンが白いお陰で包帯に見えなくもない。

ならばと三日月の好意を受け取ることにして、リボンを左眼を覆う

ように結ぶ。三日月の持ち物を身につけるといいうのもなかなかいいものである。逆に私のネクタイを貸したいところだったが、今は汚いため控えておく。

「よし、少し休憩したら行けるだろう。ありがとう姉さん」

「まったく、初霜も心配しておったぞ」

「よろしく言っておいてくれ。必ず戻るとな」

来栖鎮守府には待つていてくれる人もいる。それだけじゃない。有明鎮守府では弥生が私の無事を祈ってくれている。何より、三日月を残して私は死ぬわけにはいかない。心配はかけるかもしれないが、私は必ず生きて帰る。

そしてそこからまた少しして、阿武隈が運用する大発動艇に乗った下呂大将が到着。第一水雷戦隊が合流したことで、海上ではかなりの大所帯となってしまった。

これだけ時間が経っても、潜水艦隊からは敵の出撃などの動きは連絡が来ていない。少なくとも、鎮守府到着までに妨害が無いことは確定しそうである。

「お、若葉、今度は隻眼かい？ いいじゃないか。イケメン具合に磨きがかかっているぜ。こりやあ負けていられないな」

「松風、茶化さないの。顔に傷が欲しいのなら私がぶった斬ってやるわよ」

「朝風姉貴は雑だから嫌だね」

こんな戦場の真ん中でもこんな会話ができるのは、豪胆なのか何かが足りていないのか。妙な緊張感があるよりはマシかもしれないが、緊張感がなさ過ぎるのも考えものである。案の定、神風が溜息をつき、春風と旗風が苦笑していた。

本当に即座に治してもらいたいなら、以前春風がやっていた修復材の刀で斬ってもらおうというのものもあるが、今それをやるのは危険過ぎる。緊急手段として置いておいて、今はそのままにしておく。

「若葉、本当に大丈夫ですか？ 辛いのなら皆と退避してもいいですよ」

「大丈夫だ。むしろ若葉^{ホク}からも頼む。便乗させてくれ」

「ふむ、わかりました。ダメだと思っただけに帰投してもらいます」
下呂大将にも念を押されたが、私の意志は固い。それを酌み取ってくれたか、鎮守府までの短い道のみではあるが、少しでも体力が温存出来るようにと私に大発動艇に乗るように勧めてくれた。それはお言葉に甘えることにする。私と同じように消耗している三日月にも一緒に乗ってもらって、スペースはギリギリ。

「すまない、武器は戦闘中に落としてしまった。若葉^{ホク}は丸腰なんだが大丈夫か」

「構いません。他者に危害を加えるわけではありませんから。それに、本当に必要になったらうちの子達がいまずので」

最後に放り投げたナイフは、後から潜水艦達に探してもらおうことにする。どうせ後から海域調査とかもされるだろう。そのついでにでも拾ってもらえればありがたい。

戦いが終わった後に武器が必要とは思えないが、アレは今まで私がここに辿り着くまで使い続けてきた、いわば相棒のような物。出来ることなら手元に置いておきたい。相棒を放り投げるなど言われれば、それは申し訳ないと言えないが。

「人形による防衛ラインも考えられますが、潜水艦隊からそういった連絡は？」

「ありません。鎮守府付近は非常に静かであるとのことですよ」

「そうですか。では、内部に警備を置いているかもしれないんですが、少なくとも入り込むまでに妨害は無いということですね」

少数でも向かえるという保証も出来た。連合艦隊一つ分あれば充分である。

それに、鎮守府内が徹底した警備態勢だったとしても、そこは狭い場所での戦闘ということで、第一水雷戦隊の十八番とのこと。神風型の5人はわかるが、阿武隈もそういったことには慣れているようだが、ちよつと想像がつかない。

「大将、これはどうするのさ」

伊勢が気を失った大淀を担ぎ上げて尋ねる。艀装も武装も剥がさ

れた大淀は、もし目が覚めたとしても何の抵抗も出来ないただの人間のようなもの。自殺を図ることさえ注意しておけば、何処に置いておいても今のところは害は無い。

「鎮守府に運びたいところですが、目を離すと何をしでかすかもわからないのも事実ですね。難しいところですが、そのまま運んでもらえますか。出来れば猿轡くらいは噛ませておきたいですが」

「じゃあ私のハチマキでも噛ませておこうかな。無駄口叩かれても鬱陶しいし、舌を噛もうとするかもしれないしね」

「脚を縛った方がいいんじゃないか？」

「それもそうだけど、まあ今はね」

日向に持つてもらって、手早く猿轡を噛ませる。それでも目を覚まさないのだから、私の最後の一撃は心まで折ったのかもしれない。

「大将、ちよつとお願ひがあるんだけど」

休息もそろそろ終わりというところで曙が下呂大将に話しかける。いつになく神妙な雰囲気。戦闘が終わった後の緊張感をそのまま持ち越しているかのような表情。

「なんですか？」

「五三駆で参加させてくれない？ 鎮守府襲撃」

曙もこの事件の関係者では数少ない敵対させられていない救われた者だ。むしろ私と三日月以外では唯一の捨て駒である。さらには、巻き込まれたことで一度命を落としている。

この事件の顛末を見届ける資格は充分にあった。大淀を倒したところでもまだ終わらないこの事件の裏側にあるものを、その目に納めたとい訴えた。

「いいでしょう。君の話は飛鳥から聞いています。五三駆でということとは、雷もということですよ。いいんですか？ 君はある意味無関係な位置にいるはずですが」

「ええ、五三駆は一蓮托生だもの。それに、ここまで巻き込んでおいて無関係は酷いと思うの。私は施設代表ってことで行かせてほしいかな」

私が流れ着かなければ施設は一切巻き込まれずに済んだと思うと、

少し申し訳ない気分にはなる。だが、そのおかげで私が今ここにいるのだから、感謝してもしきれない。酷い人生を最高の人生に、終わりを始まりに変えてくれたのは、紛れもなくあの施設だ。

その施設を2度も破壊され住む場所を奪われたのだから、それを引き起こした事件の顛末を雷が見届けるのは至極当然のことなのかもしれない。一番関わりの深い飛鳥医師の代わりに向かうと考えるもいいだろう。

「わかりました。では、五三駆は共に向かいます。それ以外は帰宅し、新さんに詳細の報告をお願いします。休息が必要な者はすぐに休息を」

護衛退避の準備も終わっている。ここからは別行動だ。

「なるべく揺れないようにするけど、もしもがあるからちゃんと掴まってるね」

阿武隈に言われて、大発動艇の縁をしつかりと掴んだ。もう片方の手は三日月を抱き寄せるために使う。2人で支えれば体勢を崩すことは無いだろう。

「これで本当に終わりです。もう戦いも無いでしょう。あとは人間同士の戦いですから、君達は見届けていてください」

「ああ、そうさせてもらう」

これが本当に最後の出撃。表の強敵を倒したのだから、後は裏側だ。これが終われば本当に終わり。艦娘が戦うことのない最後の戦いが始まる。

最後の敵

大淀を倒したことで、部隊を分けて鎮守府の襲撃へと移行。私、若葉は五三駆の仲間と共に襲撃に参加することになった。

私自身、武器であるナイフを放り投げてしまったせいで殆ど非武装。陸上で魚雷を放つわけにも行かないため、正直何も出来ない。それでも下呂大将が、非武装でも可能ならばと私を指名してくれた。疲れがあり、左眼が見えない状態ではあるものの、顛末を知りたかったため、私は参加を決めた。

「さあ、あそこが手瀬鎮守府です。外観は変わっていないようですね」合流地点から少し進んだことで、水平線の向こう側に鎮守府が現れる。出発地点である来栖鎮守府よりは少し小さく、以前に訪ねさせてもらった有明鎮守府よりは少し大きい程度。

その辺りにまで来ると、先行していた潜水艦隊の姿もちよくちよくと見えてくる。ずっと監視していた呂500と伊504がこちらに手を振り、後から追いついたシロクロも既に海面に頭を出していた。それ以外の者達も海底におり、鎮守府を常に監視し続けた状態。

「もう何も出てこないですって!」

「あやし達はずっと見てたからね。あい!」

元々監視に特化してただけであり、この情報に信用度は高い。妙な匂いも感じられないことから、鎮守府由来で何かされていることも無いだろう。

外部に干渉してくるような手段は持ち得ないと考えられる。ならば、突入もそこまで苦では無さそうだ。万が一内部に護衛がいたとしても、第一水雷戦隊は室内戦闘にも長けているようなので安心。

「君達は帰投してください。後は我々でどうにかします。……と、そうでした。帰投の途中で構いません。海中に若葉のナイフが落ちているかと思えます。見つけたら拾っておいてもらえますか」

「りよーかいですって! イムヤとか多分意地でも探しますって」

「だよねー。イムヤも若葉にごしゅーしんだもんね。はにやはにや」

潜水艦達の命を救ったことで妙に好かれているが、私の心は三日月

一筋だ。申し訳ないが、良き仲間、友人としてのお付き合いでよろしくお願いしたい。

「では行きましようか。これで本当に決着です。最後に私が仕切ってしまったって申し訳ありませんね。本当なら飛鳥も来たがっついていましたが、流石に鎮守府とは関係のない医療研究者を戦場に出すのは気が引けました」

それは私達もそうである。ここに飛鳥医師がいたらさっさと帰れと言っただろう。こういうことに慣れている下呂大将だからここに居られるのだ。それ以外の人間は危険過ぎる。

「すまない三日月、手を引いてもらえるか。遠近感が掴めない」

「うん、大丈夫。私がついてるから」

そんな状態で来るなど言われそうであるが、下呂大将が許してくれたのだからいいだろう。それくらいの我儘は許してほしい。

見知らぬ鎮守府を進む。連合艦隊がぞろぞろと突き進む姿はまるで総回診のようだった。艦装を装備したままの行動のため、余計に幅を取るのだが、この廊下は他の鎮守府と同じように広めに造られているため、これでも全員行動が出来た。

案の定人形による妨害があったが、第一水雷戦隊がスムーズに倒れていく。幸いなことにリミッターが外されているようなことは無く、気絶させておけば後からでも治療が可能だろう。

「そろそろアイツらがいるところだよ」

大淀を担いでいる伊勢が道案内していた。伊勢がここに所属していた時から内部が変化していることは無いらしい。そのおかげで、真つ直ぐ医療研究者のいる場所へと突き進む。

そして、その部屋の前に来た。私達には馴染み深い処置室。施設のそれよりは格段に大きな扉と、一室として取られているスペースもかなり大きい。処置室というよりは実験室というイメージ。

「扉、斬っちゃうわね」

こちらの答えを聞く前に神風が扉を叩き斬った。鍵がかかっていたようだが、そんなものお構いなしである。

その実験室はドックと同じような設備もあり、恐ろしいことにその中に4代目の大淀が寝かされていることも確認出来た。さらには、5代目も建造中であることもわかる。

この4代目は、今伊勢が抱えている3代目が死ぬことで目を覚ますのだろう。どういう仕組みかわからないが、死を感知して今までのデータがこの4代目に送られるようである。

「大淀の協力者、間賀^{マカ}と保田^{ホダ}ですね？」

中には噂に聞いていた男2人がいた。飛鳥医師が着ているような白衣を身につけているため、同業者であることがすぐにわかる。私達の姿を目にして、酷い顔をしていた。

朝霜に尋問をしている時に顔写真くらいは見たが、実際に動いている姿も当然だが初めて見る。2人の名前も初耳。

「君達を取り押さえます。理由は君達がわかっていると思いますが」

神風と朝風が2人を拘束するために前に出た。だが、医療研究者の片方、間賀がちよつと待ってくれと叫ぶ。

「俺達は大淀に脅されて研究させられていただけだ！」

「言い逃れにしては雑ですが」

「信じてくれ！ 確かに不死の艦娘の研究はしていたが、ここまでの大事にするつもりなんて無かった！」

必死な訴え。間賀が言うには、不死の艦娘の研究自体は大本営からの指示で続けていたが、そこに大淀が乗り込んできて協力しろと脅されたらしい。2人の存在は目出から聞いていたと大淀が言っていたとのこと。

飛鳥医師が蘇生の研究を終わらせた後、秘密裏に研究を続けさせていたのは目出。それ以外にも大本営の一部が関わっているようだが、そこから大淀がこの2人を利用しようと動いたと言っている。

「早く完成させると、死と隣り合わせの状態の研究を続けさせられたんだ。結果は貴方達の知っている通りだろう。目的は達成され、擬似的とはいえ不死の研究は完了した」

保田の方は淡々と話すが、顔を伏せて悔しそうにしている。大淀からの指示で研究することが不本意であったと語る。

「仕方なかったんだ！俺達だって命が惜しくて……」

「申し訳ない。抵抗する力が無かったのは我々の落ち度だ。だが、やってきて突然主砲を突き付けられたら、屈してしまおう」

2人の言葉に下呂大將が溜息をつく。誰がどう聞いても、2人の言いは言い逃れにしか聞こえない。あくまでもこんなことになったのは大淀のせいだと言いつづけている。

特に間賀の方はそれが顕著だった。脅されたから、命が惜しくて仕方なくやった。だから自分は悪くないとでも言わんばかりである。まだ一言謝罪の言葉を口にした保田の方がマシである。

それに、2人の感情は私には筒抜けである。こんなに匂いが強い人間も初めてかもしれない。

「全部嘘だ」

あまりに酷いため、痺れを切らして私が口に出した。

「どうにかこの場を切り抜けようとしているつもりでいっぱいだ。そいつらから罪悪感の匂いがカケラも感じない。大淀の指示も自分から進んで従っていたんだろ」

「何を言うんだその艦娘は！何を以てそんなことを！」

今の発言が癪に障ったか、私に食ってかかる間賀。まだ拘束はされていないので、文句を言った私に掴みかかろうとするが、その前に神風が刀を抜き、首筋に押し当てる。それ以上前に出るなという無言の警告。

「若葉、久しぶりにあの力が役に立ちますね」

「ああ。こういう相手は最初の夕雲以来だからな」

感情の匂いがかかることによる、嘘発見器としての性質。今まで尋問の時は、私のこれが必要が無いくらいに全員素直に話してくれていた。それもそのはず、洗脳を解いたことで全面的に協力してくれるという状態での尋問だったため、念のためという形でしか使われていなかった。

だが今回は、敵対している2人の人間が相手だ。口先だけは大淀に従わざるを得なかったと訴えているが、匂いは全く誤魔化せない。未だに私達に対して敵対の意思がある。寝首をかこうと虎視眈々と

狙っているかのようだった。

「君達の感情は全て若葉に筒抜けですよ。嘘を吐いても、動揺しても、敵対の意思を持ってても、全て彼女にはお見通しです。それを理解した上で、私の質問に答えてもらいましょうか」

表情は変わらずとも、下呂大将からも怒気を感じる。この期に及んで自らの保身を考えるような輩には一切の容赦はしないだろう。私だって腹が立つ。大淀と同じような醜悪さを感じる。

結局のところ、こいつらは似た者同士だったということだ。馬が合うから協力関係になったとしか思えない。

「君達は大淀に強制されていたと言いましたね。では、ここで何人も艦娘が犠牲になったことに対して、負い目があると」

「勿論だとも。確かに不死の艦娘の研究で実験台にした艦娘はいた……だが、俺達は言われるがままにやらされただけだ」

「嘘だ。そいつは艦娘の犠牲を何とも思っていない」

保田の妄言を遮るように嘘を指摘。感じた匂いは欺瞞のみ。上辺だけの言葉を連ねているに過ぎない。負い目があるならそういう匂いがあるはずだが、それが無い時点で嘘。

早くこの厄介な状況を終わらせたいという焦り。実験を中断させられたことに対する苛立ち。とにかくこちらのことが気に入らないと感じさせる憎しみ。大淀とは似ているが少し違う負の感情が叩き付けられている。

「大淀はこの世界を滅ぼすと公言していますが、それを知っていても君達は協力するしかなかったと」

「そうだ！ アンタ達だって首筋にナイフを突き付けられたら屈するしか無いだろ！」

「嘘だ。こいつは自分から協力している」

そこまでされたらトラウマ級の恐怖を刻まれているはずだが、それすらも感じない。こいつの恐怖は大淀ではなく、大淀が敗北したことに対してのものだ。故に嘘。間賀の言葉を遮る。

屈したのではなく、自ら頭こぶを垂れたのだろう。実験台を用意してくれてありがとうと。心底狂っている。

「何なんだそいつは！俺達の証言を真つ向から否定して！」

「当たり前だろう。嘘を嘘と指摘して何が悪い」

「何を証拠にそんなことを吐かす！見てきたわけでもあるまいし！」

激昂する間賀。それに対し、下呂大将の怒気がさらに膨れ上がる。

「若葉が指摘しなくても、君達の証言が薄っぺらい嘘で塗り固められたものであることはわかりますよ。若葉の指摘がそれを確定させただけです。正直な話、今までの質問は特段必要なものではありませんでした」

「なら何のために」

「君達がどれ程性根の腐った人間なのかを口に出させるためです。罪悪感を小指の先程でも感じていれば多少なり温情をかけられたかもしれません、もう無理ですね」

大きな溜息。

「最初は大本営に裏から依頼されて不死の艦娘の研究をしていたのでしよう。ですが、秘密裏にやるには限界がある。そこで大淀という最高のパトロンを手に入れた。そこで君達の欲望は際限が無くなったのでしようね」

2人から焦りの匂いが強まる。凶星を突かれ続けて冷や汗までかき始めている。なんてわかりやすい。

「本来ならやれないような残酷な実験も可能にしてくれた大淀に感謝したのでしようね。結果的にそのおかげで擬似的な不死、記憶を移植出来るクローンという傑作を作り上げてしまった。悪意の研究は悪意の下に育つ。大淀とはさぞいい酒が呑めたでしようね」

ギリツと歯軋りが聞こえた。下呂大将の言葉は2人の心に刺さり続けている。

「艦娘はただの実験材料。死んでも替えが利く生体兵器が半無限に供給されるだなんて、君達のような研究者には夢のような環境です。それを失うことの方が辛かった。そうでしょう？」

「何を馬鹿なことを。我々は」

「嘘だ。早くこの場を終わらせたいという感情しかない」

もう何も言わせたくないため、さつきと遮る。私の言葉には特に苛立ちを感じているようである。

艦娘に文句を言われることが気に入らないということは、やはりこいつらは艦娘のことを実験動物くらいにしか思っていないようだ。それが尚のこと腹が立つ。

「もういいだろ。こいつらの話は聞くに堪えない」

「ふむ、確かにそうですね。何を言ってもふざけたことしか言いませんからね。ここで何もかも突きつけてもいいんですが、時間の無駄でしょうね。ここまで追い詰められても反省すらせず、言い逃れで乗り切ろうとしているのは笑止千万です。恥を知りなさい」

冷酷に突き放し、神風と朝風が改めて拘束。逃れようと手を振るつたが、お構いなしに払い落とし、そのまま腕をロックした。艦娘の力なら簡単に折ることも出来るだろうが、いくらクズでも相手は人間。傷を負わせるようなことはしない。

「このっ、艦娘のくせに……!」

ついに本性を現した。艦娘を軽視している言動。言葉には出さないが、保田の方も今の状況に強い怒りを持っているのがわかる。自業自得だというのに。

「人間を守るために生まれた兵器が、何で人間様に齒向かってんだ!

この、クソがあ!」

「艦娘に守られるしかない人間が、何故艦娘に齒向かえるのです?」

悪態をつく間賀に向かい、下呂大将が眼前まで近付く。殴りかかるようなことはしないだろうが、心を手折りに行くのは明確。

「お互い様なんですよ。艦娘は人間を守り、人間は艦娘を守る、そこには上も下もない、対等な関係です。最初から考え方が違う君達には、そもそも守られる資格が無いんですよ。理解しましたか?」

「出来るかよ! 人間が作り出した艦娘は人間のために献身して人間のために散れよ!」

「本当に何もわかっていない。ここまでクズだとは思いませんでした。飛鳥のような者は稀なんでしょうかね」

「またもや大きな溜息。そして、今まで見たことのないような表情で

睨み付ける。

「君達には理解出来るようになるまで何度も何度も教えを説いてあげましょう。それには痛みを伴うかもしれませんが、構いませんよね？」

君達が艦娘に延々と繰り返してきたことなんですから」

「なっ、ふ、ふざけるな……！」

「ふざけてなんていませんよ。生かさず殺さず君達を改心させてあげましょう。さ、このテロリストどもを連れていきなさい」

最後に折れない程度に腹を殴り、間賀の喧しい口を塞いだ。保田の方は全てを諦めたような匂い。もうこの状態になって心が折れたようである。

改めて、これで戦いは終わり。長い長い因縁は、これで全て終わりとなる。最後の最後にゴミのような人間を目の当たりにして気分が悪かったが、明日からは明るい未来が待っていると思うとまだやっていけそうだ。

戦いの終わり

手瀬鎮守府を襲撃し、最後の敵である大淀の協力者、間賀と保田を捕縛したことで、戦いは本当に終了となる。最後まで喧しかった間賀は黙らせるために気絶させられ、保田は諦めたかのように自分の脚で鎮守府から退去。

鎮守府内にいた人形達は、後から大本営総出で回収しに来ることになる。その洗脳状態の解除方法は飛鳥医師が編み出しているため、いつでも復帰が可能はずだ。リミッターが外されていないかつたおかげで死ぬ心配も無い。

「これはどうすんのよ」

曙が言うのは、既に完成して目覚めるのを待っていた4代目の大淀と、現在建造中の5代目。勿論殺すわけにはいかないが、目覚めさせたら厄介なことになりそうでもある。

建造を中断するわけにもいかない。むしろ余程なことがない限りそんなことは出来ないはずだ。一度始まった建造は、終わるまでどうにも出来ない。建造ドックを開けるまでは眠ったままなので放置ということも可能ではあるものの、いずれどうにかしなくてはいけない。

「このままは可哀想よね。でも、もう頭がおかしくされちゃってるのかしら」

「完成してるのはダメになってんじゃないの？ まだ終わってない方は知らないけど」

雷が完成している方のドックのような設備に触れながら話す。

4代目は完成しているため、窓からは眠っている姿が見えた。既に頭の中にはマイクロチップが埋め込まれている可能性が高いが、3代目の思考が移されていないのだから、今目覚めさせれば普通の大淀である可能性はある。

とはいえ、頭の中に異物が入っているというのは不安になるものだ。何がきっかけでそれが悪さをするか、誰もわからない。出来ることなら、脳に埋め込まれたマイクロチップも切除したいところであ

る。

「先生がどうかしてくれるかしら。でも脳か……うーん、すごく大変よね」

「深海の侵食とは違うんだから、出来ないことは無さそうだけど」
「なら、こつちのも普通の大淀に戻せたりするのかな」

伊勢が担いでいる3代目も、元はここにいる4代目や5代目と同じように何も無い大淀に初代の全てを移植されたものだ。ならば、深海の侵食を取り除きつつ、マイクロチップを切除してしまえば、元の大淀に戻るかもしれない。

飛鳥医師ならそれがやれるのではないかと思えてしまう。今まで難易度が高い施術も全て成功させてきた。脳からマイクロチップを抜き取る施術なんて今までとは比べ物にならない程の腕が必要だろう。それこそ、ドックの妖精でも匙を投げそうなくらいに。

と、そう考えた時にふと思いついた。確かこの鎮守府は、大淀が占拠した時に妖精によって改築されていると言っていた。ならば、この鎮守府を今の形に建て替えた妖精は何処に行った。職人妖精の類のはずだが、今のところ姿を見ていない。

「大将、1ついいか。ここにいろいろ妖精達の姿を見ていない」

「……確かに。鎮守府の改装もそうですし、この機材を作り上げているのも妖精のほずです。私としたことが、それを見落としていました」

場合によってはそれが一番最悪だ。ただただ純粹に言われた通りに事を成したに過ぎない場合だつてある。敵と断定するのは早いだろうが、反発を受ける可能性は否定できない。

「妖精さん、いるー!?!」

と、ここで話を聞いていた雷が実験室の中に呼び掛ける。雷は深海棲艦の声は聞けるが妖精の声は聞けない。あれを聞き取れるのは明石だけである。意思疎通は出来ないが、こちらの言っていることは理解してくれるため、呼びかけに応えてくれるはず。

案の定、この鎮守府に滞在していた数人の妖精達がノソノソと現れる。今はこのドックのような設備を管理していたようである。悪魔

のような実験にすら、その手腕を使っていたのだろうか。

「これで全員？」

雷の問いかけに、妖精全員が頭を縦に振る。だが、あまり元気が無さそうだ。今まで見てきた妖精達と比べると、格段に顔色が悪い。

感情の匂いはかなり薄いが一応確認出来た。不満と空腹。大淀や研究者達からは、あまりいい扱いをされていなかったように思える。脅されて改装や設備の作成をやらされていたように思える。

間賀や保田の方便は、全て妖精に当て嵌まるものだったのかもしれない。より一層ゴミみたいな人間だと確認出来た。

「一緒についてきてもらえるかしら。鎮守府に着いたら美味しいものを用意するわ」

その言葉に満面の笑みを浮かべた妖精達は、すぐさま雷に飛び付く。随分ときき使われていたようで、しかも脅されてここまでやることになったのだろう。当人達は何なのかもよくわかっていないようだが、罪に加担させられていたのは可哀想である。

「管理外して大丈夫なわけ？ この建造見てたんじやないの？」

普通に持ち場を離れたが、5代目は大丈夫なのだろうか。時間をかければ建造が終わるというのなら構わないのだが、これで建造に不具合が起きたと言われると寝覚めが悪い。

曙の言葉を聞いた妖精達は少し悩んだ後、頭を縦に振る。悩んだところは少し怖いのが、妖精が大丈夫というのだから大丈夫なのだろう。しかし、脳にマイクロチップが埋め込まれるのは回避不能である様子。

「とりあえず放置でいいみたい」

「まあ信じるしか無いわよね……」

曙は呆れてしまった。門外漢が口を出すわけにもいかないため、こは放置ということで落ち着いた。

手瀬鎮守府から出たことで、これであの建屋の中には気絶した人形達と目覚めの時を待つ4代目大淀、そして建造中の5代目大淀が残されるのみとなった。既にこちらの大淀が連絡済みのため、今から大発動艇を大量に装備した部隊が新提督の指揮の下、鎮守府にやってくる

らしい。

建造中の大淀に関しては、建造完了を待つてから目覚めさせることになるらしい。あとどれくらいの間がかかるとはわからないし、そもそも目を覚ますのかもわからないが、そこは根気強く行くようである。

「全員出ましたね。では、帰投しましょうか」

間賀と保田は下呂大將の乗る大発動艇に捨てられるように積み込まれていた。間賀は未だに目を覚まさず、寝かされている状態。保田は目を覚ましてはいるが、ずっと俯いている。匂いから感じる限り、間賀と違って心が完全に折れている様子。

2人を積み込んだことで、私と三日月が乗るスペースは無くなってしまったが、妖精達が助けてくれたお礼と言わんばかりにそこにあるもので大発動艇を手早く作ってくれた。今なら三日月がそれを運用出来るため、遠慮なく使わせてもらうことにする。

「初めての^{ボク}大発動艇実戦投入が、若葉を乗せて帰るっていうのも、なんと言うか」

「若葉としては三日月の初めてになれて嬉しいぞ」

「ふふ、そうね。また私の初めてを貰ってもらっちゃった」

これで鎮守府に帰れば本当におしまい。長かった大淀との戦いは、完全に終了を迎える。安堵の息が自然と漏れた。

勝利の凱旋。鎮守府に戻るなり、歓声が上がった。先に帰投した仲間達や、鎮守府で待つてくれた者達は、そろそろ到着するという連絡を受けたところで工廠で待つてくれたようだ。

「よく戻ってきてくれたア！ 大將もお疲れさんです！」

「ええ、捕縛した者達を封じ込める場所は」

「準備しておきましたぜ。そのクズ共は監禁しておきます」

ここに辿り着くまでに間賀は目を覚ましていたが、逃げ場の無い大発動艇の上で、相乗りしていた下呂大將が人格を否定しながら間違いを延々と話すという軽めの拷問により、すっかり萎縮してしまっていた。あの時の態度は何処かに行ってしまったようである。

そのおかげか、来栖提督が2人を抱え上げても抵抗すらしなかった。何やら何処かに用意されているという監禁部屋に今は置いておくとのこと。

「誰か金平糖持ってきてー!」

妖精を運んできた雷が工廠に入るなり叫ぶ。運んできた妖精達が割と限界が近かったようで、すぐにでも甘味が必要なようである。いくら妖精でも酷使されれば命の危険があるのだと痛感した。

「怪我人はいるか」

「若葉^{ボク}だけだ。傷薬で応急処置だけはしている」

「今は入渠ドックが空いていない。僕がすぐに治療する」

飛鳥医師に連れられ、工廠の奥で高速修復材を投与される。原液を使っているため、見る見るうちに修復される。それでも念のため一日は包帯を巻いておけとのこと。三日月のリボンで応急処置をしていたが、ちゃんとした包帯を巻き直された。血塗れの三日月のリボンは廃棄という形に。

頭の傷なども一緒に治してもらったため、このまま置いておけば明日には何事もない身体になっているだろう。艦娘の身体に感謝せざるを得ない。

「今日はもう休んでくれ。十分な休息の後、事後処理をしてから施設に帰投することが決まった」

「そうか。なら若葉^{ボク}はそのまま休ませてもらう」

「念のため薬をください。部屋で必要になるかもしれないので」

鎮守府に到着出来た途端にドツと疲れが押し寄せた。本当に終わったのだと実感したら力が抜けてしまったらしい。今も三日月に支えられてここにいる。

三日月だつて戦場ではリミッターを外していたのだから、私と同じように疲れ切っているだろう。それでも私の側にずっといてくれる。こんなに嬉しいことはない。

フラフラながらも与えられた部屋に到着。まだ日は高い位置にあるが、疲れはピークに達しており、目を瞑れば眠れるのではないかというくらいに消耗している。

今までは戦意昂揚で眠気すら感じなかったが、完全に気が抜けている。だが、もう戦う必要は無いのだ。深く眠りについてほしい。

「若葉、大丈夫？」

「そこまで大丈夫じゃないな……かなり疲れている」

「そうだよね……あれだけ動き回ったんだもの。脚だって凄いい熱を持って」

制服のままだと寝苦しいだろうと服を脱ぐことにしたが、疲れ切っている私は自分で脱ぐこともままならず、三日月に手伝ってもらうことに。

タイツが脱がされると同時に、脚に激痛が走った。本来1日に3回しか使えないような知覚出来ない突撃を、3回どころか相当な回数繰り返出し、さらには途中でブレーキをかけるという負荷が特にかかる動きをしたため、限界はとっくに超えていたようだ。

「脚が痛い……」

「すぐに薬を塗るわ。貰ってきてよかったね」

本来なら入渠が必要なレベルだったのかもしれない。それだけあの戦いが激戦だったのだと実感する。

脚に薬を塗られていくごとに痛みが消えていき、熱も冷めていく。流石に2回目なので妙な声を上げることもない。三日月だって疲れしているのだから、今からいろいろとやる余裕なんて無いだろう。事が済んだらもう寝たい。

「本当にお疲れ様。若葉が頑張ってくれたから勝てたんだよ」

「そう言ってもらえると嬉しいな……この痛みも勲章のようなものだ」

薬を塗り終わったことで、今の私には疲れ以外は無くなった。そして眠気もピークに。瞼が勝手に落ちてくる程に眠い。もう寝たい。

「三日月……もう限界だ。寝よう……一緒に寝よう」

「うん、私も疲れちゃった。脱いだ方がいいと思っただけど、限界ならこのまま寝ようか」

「ああ……ダメだ」

ほとんど無意識に三日月を抱き寄せる。やっぱりこの方が落ち着

く。三日月の温もりと匂いが、一番私を落ち着かせる。

急に抱いたからか少し驚いたようだったが、すぐに受け入れてくれて身を寄せてくる。三日月も疲れているからか、眠気の匂いがすぐに膨れ上がってきた。これなら2人一緒に眠れるだろう。

「……終わっただんだな……全部」

「うん、終わったね。全部終わったんだよね」

私が施設に漂着したことで始まった今の戦いは、今この時を以て終結したのだ。言葉にしてそれを実感する。目が覚めたら、明るい明日が待っている。

明日からは三日月と一緒に、平々凡々な毎日を過ごしたい。そのようなまでにもういくつか段階があるとは思うが、それもすぐに乗り越えられるだろう。

「もう何も考えなくていいんだ。若葉^{ホク}達は生きて全部を終わらせることが出来た」

「うん、もう嫌な思いはしないはずだよね」

最後の最後に気分の悪いことはあったものの、そいつも処罰が決まっている。あんな人間がまだまだいるのかもしれないが、施設で暮らす私達には関わり合いが無いような場所にいる者だろう。それに、下呂大将がその辺りは何とかしてくれる。

なら大丈夫。もうあんな思いをすることはない。私と三日月、施設の仲間達と一緒に、静かに暮らしていくのだ。戦いは終わったのだ。

目覚めた被害者

大淀の事件が終了した翌朝。私、若葉は長い眠りから目を覚ました。昨日は昼くらいから眠っており、昼食も夕食もすつ飛ばしてもう朝だ。朝と言ってもまだ少し薄暗く、いつもランニングやエコの散歩をするような時間帯。

長々と眠ってしまったため、目を覚ますと同時に腹が鳴る。身体が空腹を訴えていた。その音と同時に目の前からクスクスと笑い声。私が目を覚ます前に三日月も目を覚ましていたらしい。

「おはよう若葉。大きな腹の虫ね」

これを聞いていたのは三日月のみのため、恥ずかしい思いはしなくて済んだ。それと同時に三日月からも腹の虫が聞こえた。三日月の方は私に聞かれただけでも顔を赤くする。なんて可愛らしい。

三日月だって私と同じように半日以上眠っていたのだ。こうなっても無理はない。あれだけ壮絶な戦いだったのだから、心身ともに疲れ果てるというもの。

「こんなに寝たのは初めてな気がする」

「そうね。半日くらい寝たことはあったけど、それ以上なものね」

疲れは取れているようだった。身体を動かすと、眠る前に激痛があった脚も、見えなくなっていた左眼からも痛みはない。

だが、帰投後すぐ眠りについてしまったため、随分とよろしくない匂いが漂っていた。制服をどうにか脱ごうとしたものの、薬を塗ってもらった後に限界を超えてしまい、三日月を半ば引き摺り込むように抱き寄せて眠ってしまったのも大きい。

これはすぐにでも風呂に入る必要がある。汗と涙と血の匂いは、それが三日月の匂いが混ざり合ったものであってもあまり嬉しくはないものだ。

「三日月、風呂に行こう。昨日はそのまま眠ってしまったから、そのだな、お互い結構良くない匂いがしている」

「そ、そうだね、うん。私でも少しそんな感じがわかったし、相当なんだと思う」

敏感な私じゃない者がわかるとなると、それは確かに相当だ。風呂に行かなくては。

ベッドから立ち上がると、やはり脚の痛みは感じない。2度目だが、薬の力は偉大。どうせ風呂に入るのだからと、替えの服だけ持ってきてさっさと部屋を出る。流石にまだ早朝過ぎて誰も起きていないよ。うなのは好都合。

誰とも出会わず大浴場に到着。鎮守府というのは不測の事態も考慮して24時間風呂が沸いているというのだからありがたい。なんだか髪も身体もベタつくので、早々にさっぱりしたいものだ。

「先客か……？」

「こんな朝早くに？」

中から人の気配がする。私達が眠っている間に鎮守府で起きていたことはよく知らないため、その間に何かあったのだろうか。

さすがに風呂の中の匂いまでは判断出来ない。ただでさえそういうものを洗い流しているような場なのだから、風呂は唯一私の鼻が利かない場所と言える。

おそろおそろの中に入る。鎮守府の者なら面識があるのだからこんなことをしなくてもいいのだが、それもわからないために警戒だけをしていた。

そして、中で対面したのは意外な人物。正直ここにいるとは思わなかった者である。

「あ、おはようございます」

そこにいたのは大淀。いつもの眼鏡が無いために一瞬誰かわからなかった。

新提督の大淀とは少し雰囲気違った。当然来栖提督の大淀とも違うし、敵対していた大淀とは以ての外だ。

しかし、本来大淀が持たない深海の匂いもする。風呂で対面してようやくわかった。つまり、

「お前は……まさか」

「はい、4代目と言えいいでしょうか」

あの大淀の次の器として建造された4代目なのだから、深海の匂い

がするのもおかしくはない。本人に自覚が無くても、組み込まれてしまっているものは仕方ないことだ。

私と三日月が爆睡している間に、手瀬鎮守府には新提督達が事後処理に向かったはずだ。第一水雷戦隊が気絶させた人形達と4代目もそこで回収されている。ということは、あの設備から大淀を目覚めさせたということか。

「深海の匂いがする。混ざり合っているのか」

「みたいですね。私も話に聞いているだけなので実感が湧かないんですが」

生まれた時からそうであると言われてもよくわからないようである。事実、深海の匂いがあるからと言って特別な力があるわけでも無く、強いて言うならばこの大淀も私達の技への耐性があつたりするのだと思う。何せ器なのだから。

一応何もかも話は聞いているらしい。自分が悪意の塊である大淀の器にされそうになっていたこと、そのために頭の中にマイクロチップが入れられていることも全て知っているようだ。

「身体が大丈夫ならそれでいいですよ。私はよくわからないことに足をつっ込まずに済んだということだけは理解していますから」

「それならいいが……何というか、軽いな」

「貴女達のように開き直っただけです」

建造され、利用されるといふ境遇は、どちらかといえば私や三日月に近いものだと思う。こういう形で目覚めたのだから、大淀としての人生が開始しただけだ。身体は他と少し違えど、大淀は大淀だ。何も問題は無い。

「とはいえ、よくわからないことばかりを話されたり妙な夢を見たりしたので、こんな時間ですがお風呂をいただいでるんですよ」

「悪夢でも見たか」

「悪夢……なんですかね。言われてみればそうかも知れませんが、あまり覚えていないんですよ。夢だからですかね」

何というか、この大淀は軽い。これも艦娘の個体差というものなのだろうか。むしろ、代替わりする度に性格が変化しているように見え

る。生まれて間も無いからだろうか。性格形成がまともに出ていないというか。

言い出したら、本来のそれとは違うものは沢山いるのだから気にならない。私の三日月だってそうだ。他の三日月にこんな性格的な特徴は無い。それと同じだ。生まれが普通と違うのだから、中身が変わっても何も疑問は浮かばない。

「飛鳥先生に診察してもらって、今後の処遇が決められるそうです。少しの間だけ、施設にお世話になるかもしれません。そうなったらよろしく願いますね」

「ああ。患者に手を尽くすのが若葉^{ホク}達だ。なあ、三日月?」

「ええ。私達はあの施設のただの居候みたいなものですが、必要とあらばお手伝いはしましょう」

少しまだ警戒気味で私の後ろに隠れつつではあるが、対話は出来るくらいにはなったようだ。三日月も日々成長している。私が側にいれば、まだまだ治ることのない人見知りも緩和されるようで何より。

そういえばと、思い浮かんだことがある。4代目が救出されたということは、その時に建造されていた5代目もちやんと救出されたということだろう。流石に1人だけ救うなんてことは無いだろうし。

「4代目がここにいるということは、5代目もここにいるということか」

「そうなりますね。今はまだ眠ってますよ」

「それならいい。酷使されていた妖精が、途中で建造から離れて放置してもいいと先にここに来ていたからな。誰もいない状態でも、ちゃんと建造が終わっていたということか」

私の言葉を聞いて、4代目はなるほどと困ったような表情で微笑む。私の言葉に何処か引つかかるところがあったようだ。

「どうした? もしかして、5代目に何かあったのか?」

「ええ、まあ……いろいろあるんですよ。すぐにわかりますから」「そうか……妙なことじゃ無ければいいが」

なんだか煮え切らない態度。5代目に対して複雑な感情を抱いているような匂い。

自分と同じ境遇で生まれた、いわば妹のような存在になる5代目なのだが、やはり妖精が建造完了を待たずして持ち場を離れた事で何か欠陥のようなものを持ってしまったのだろうか。

ベタついた身体が洗い流され、さっぱりした状態で風呂から出る。少し念入りに洗っていたというのと、4代目と話をしていたことで、もう外は朝日も昇り明るくなっていった。鎮守府内も少しずつ賑やかになっていく。

「ああ、若葉。よく眠っていたようだな」

新提督と対面。私達が眠っている間に手瀬鎮守府の調査や、間賀と保田への尋問、大本営との連絡などなど、事後処理に追われているからか少し疲れ気味。今も少し眠気のような匂いを感じる。

私達には出来ない政治的な部分を取り扱っているので任せ切るしか無いのが辛いところである。何かしら労うことが出来ればやっていきたい。

「君達の健闘はこちらでも聞いている。この大きな事件の功労者として、必ず優遇してもらえるように訴えかけよう」

「そうしてもらえると助かる」

「ここまでの思いをさせられて、その上さらに蔑ろにするようなことがあつたら私が許さないさ。大本営の腐った部分はしつかりと正す。あのテロリストどもの裏側にいる者も炙り出して然るべき制裁を与える」

自信満々に言い放つ。さすがは下呂大将の教え子だと、こういうところで実感する。現場で見たというのはそれだけでも強み。

「さつき4代目にあつた。あの設備に入れられた大淀は救われたんだな」

「ああ、あれは建造ドックと殆ど同じ作りだったんだ。ここの明石を連れて向かった甲斐があつた」

建造にも関わる明石がそう判断したのなら間違いは無い。妖精がいなくてもどうにか出来たのはそのおかげということか。

「5代目はどうなったんだ。4代目が少し言い淀んでいて、複雑な感

情を持っているのはわかっているんだが」

「あ、ああ、5代目か」

新提督も4代目と同じように少し言い淀む。複雑な感情は同じなのだが、新提督からはそれ以外にも何か違うものを感じる。素直に喜んではいけないという葛藤のようなものが強い。

やはり5代目には予想通り何かが起きてしまったのだろう。それが何かはわからないが、新提督でもこんな顔をするくらいなのだから余程のこと。

「あー……いや、見てもらった方が早いな。呼べば来るだろう。小淀、こちらに来なさい」

知らない名前を呼ぶと、廊下の角に隠れていた何者かが新提督のところに駆けてくる。私を知る誰よりも小柄なその少女は、何処か大淀の面影があつた。制服も子供っぽく作り直した大淀と同じようなもの。

「5代目大淀、改め小淀だ」

「こ、小淀です、よろしく願います」

これはあまりにも予想外だった。あの大淀が駆逐艦よりも縮んでいる。

5代目大淀は建造途中で何かがあつたとしか思えないような外見の変化。まるで成長途中というイメージである。

「まさか、あの建造は途中で止まってしまっていたのか」

「そういうことになる。建造というのは、人間でいうと短時間でその姿にまで成長させるといふものになるらしい。それを途中で止めたら、大人になる前の姿で建造が終わってしまうんだそうだ。当然そんなことが起きないように管理されているんだが、今回は妖精が酷使されていたために判断能力が著しく衰えていたことが原因でこうなつてしまっている」

だから駆逐艦は建造時間が短いし、戦艦や空母のような大人は建造時間が長いのだとか。大淀は特殊な艦娘であるが故に、そもそもその建造時間が長いためにこういうことが起こり得たとのこと。

もしかしたら3代目を殺し、4代目も殺していたら、この小淀が最

強の存在として立ちほだかっていたのかもしれない。もしくは建造が完了していないためにその時点で打ち止めとなっていたか。

どちらにしろ、戦いは終わったのだからそんなことを考える必要は無いだろう。

「見てわかる通り、未熟な状態で建造が止まってしまっていた。艦娘としての性能は駆逐艦にも満たないのだが、この子も犠牲者だ。飛鳥医師に診察はしてもらうが、何事も無ければ私の鎮守府に引き取ろうと思っっている」

子供好きで新提督だからこそ、少し複雑な気分なのだろう。私達とは違う、戦えない艦娘として生まれてしまった小淀は、ここにいる意義すらも問われてしまう存在である。

小淀自身も、自分の生まれが酷いものであることを理解しているため、あまりいい気分では無いらしい。明るさが無く、人生に悲観しているような匂い。生まれてよかったのかと考えている程である。

「小淀、お前も今日から楽しく生きる。若葉達も今日から明るい未来が待っているんだ。生きていけば必ずいいことがある。な？」

「……はい、こんな私でも、何か役に立てることはあると思います。普通の小淀と違うのはわかっていますが」

「辛かったらいつでも頼ってくれ。同じ被害者として、お前の気持ちはわかってやれると思う。仲間だからな」

頭を撫でてやると、少し顔を赤らめて俯く。私への負の感情を感じないということは、好感を得られたようだ。少し安心。

これで後は3代目の処遇だけだろう。奴はどうなるのだろうか。

最後の施術

手瀬鎮守府で建造された4代目大淀と5代目大淀の処遇は、飛鳥医師の診察が終わり、適切な処置が必要ならばそれを施し、大丈夫となったら新提督の鎮守府へと移籍ということとなった。

4代目はともかく、5代目は建造途中で中断されたことで身体が駆逐艦よりも小さい状態になったため、戦闘力も皆無。小淀と新たに名付けられ、非戦闘員として新提督の鎮守府の一員となるそうだ。

4代目、5代目の処遇はこれでもいいとして、問題は3代目。最後まで戦闘していた、あの大淀の記憶を移植してしまった器の大淀をどうするか。

現在は昏睡状態にされており、誰の目にも届かないところに軟禁されているらしいが、それも時間の問題だ。昏睡状態にしておく薬剤が切れたら、否が応でも目覚める。それまでに決断しなくてはいけない。

その打ち合わせの場。私と三日月も参加させてもらっている。鳳翔や神風、瑞鳳も同じように参加。こういう場では毎度お馴染みとなる面々。戦いは終わったものの、みんな神妙な面持ちである。

「3代目の大淀は解体となるんですか」

「2つの鎮守府を崩壊に導き、幾人もの提督と艦娘を亡き者にしたんだ。解体以外の選択はされないだろう」

「こいつは擬似的な不死ツツーのでやらされてただけつてのもあんだよなア。実行犯はもう死んじまつてる」

この件があるため、事件が完全に終結したとは言いがたい状況ではあった。新提督と来栖提督の意見はどちらも正しく、どちらとも言えない

大淀の処遇はかなり難しいところである。何せ、3代目の大淀は極悪人の記憶を移植されただけの大淀であり、実際の悪事に関しては初代が9割以上、2代目がほんの少しというところ。2代目だって記憶は持っているも誰一人として殺していない。新提督が言う2つの鎮守府を崩壊させたのも、提督と艦娘を亡き者にしたのも、全てが初代、

もしくはテロに加担した間賀と保田の責任になる。

つまり、3代目は私達を攻撃してきただけであり、それ以外の罪は一つも無いのである。それを言い出したら、この事件の最初の救出者である夕雲から、最後の救出者である伊勢日向まで、一律で同じ罪に問われる。それを罪だと言い出すと、全員3代目より罪が重いまであるのだ。

「治療するにも何をしたらいいものか。少なくとも脳のマイクロチップを取り出してみるしかないですよね」

「そうなるでしょう。おそらくですが、アレが大淀の記憶などを電気信号に変換して他人に移植していると思います。間賀と保田にも尋問をして聞き出しました」

何をしたかは聞かない方がいいだろう。私がいなくても嘘なんて吐けないくらいにまで追い込んでいるだろうし。

「新さん、可能ならば、僕にあの大淀の治療をさせてくれませんか」
飛鳥医師が新提督に言う。脳を触るという今までに類を見ない程の難易度の施術でも、やれるものならやりたいと決意を露わにした。

何もしなくても解体、即ち死であるのなら、僅かな可能性に賭けた。失敗は即死、もしくは重い後遺症に繋がるかもしれないが、そこは我らが飛鳥医師だ。信用度は段違いに高い。

「治療後、様子見は必要だと思います。ですが、ここにいる救出者と同等の扱いをしてもいいと思います。当然、命を落としていても仕方のない戦いでしたが、こうして生き残ったのなら救いたい」

そもそも救えるかもわからないような存在なのだ。やってみなければわからない。救える命は救うというのが飛鳥医師のやり方だ。今がその時。

「君が治療したところで何も変わらないようであれば解体処分とする。それで無ければ構わない。飛鳥医師、君に委ねるよ」

「ありがとうございます。早速手術に入ります。来栖、場所は用意してくれていたよな」

「おう、必要かもしれないなくなるつつつたからな。職人妖精に頼んで1部屋完璧に用意してあるぜエ」

「すまないな。入渠ドックの妖精も便乗させてもらっていいか。今回は共同作業だ」

飛鳥医師の技術と妖精の力を合わせた治療。これによりあの大淀が救われるかはわからない。だが尽力しない理由が無い。

「先生、私も手伝わせてもらえませんか」

ここで声を上げたのは鳳翔。この打ち合わせの中でも特に神妙な表情をしていたのは鳳翔。2代目にトドメを刺した張本人として、いろいろと思うところがあるようだ。

「先に気付いていれば、その命も救えたかもしれません。死ななくても良かったかもしれない命を奪った罪滅ぼしをさせてほしいのです」
今回の件を聞いて、2代目に手を下した鳳翔は少し気に病んでいた。感情の匂いも後悔が少し強い。怒り任せに額を射抜くという渾身の一撃は、あの時は本当に頼りになる人だと感謝したが、本人が悔やんでしまっているのだから何も言えない。

雷がああ発言をしなければ、3代目だって殺す気で戦った。鳳翔がやらなければ私がやっていたし、あの場にいたものは雷以外は全員が同じ気持ちだった。鳳翔のことは誰も責めない。責められるはずがないのだ。

「わかった。それでメンタルの面が癒されるといふのなら、是非手伝ってほしい」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

深々と頭を下げる。鳳翔は器用なので、施術でもそれを遺憾無く発揮してくれるだろう。

「なら若葉達も手伝おう」

「私の眼と若葉の鼻はいつものように役に立つかと」

「ああ、よろしく頼む」

そういった危険な施術なら私も当然出番だ。匂いによりいろいろと判断出来るのは大きなアドバンテージ。これは妖精の手助けを借りたとしても再現出来ない技能だ。三日月の眼もあれば役に立つ。

「話はここで終わりにさせていただきます。今は少しでも早く処置をしたいと思います」

「すぐに準備するぜエ。ドックの妖精を全部集めりやいいな？」

「ああ、ドックの準備の方も頼む。術後に入渠させて、透析もしておきたい。それで何も無い普通の大淀に戻せるはずだ」

透析に関しては、ここに入渠ドックでも出来ることはわかっている。それも行なうことで、しがらみを何もかも取り払ってやる。これで治療出来れば御の字。

飛鳥医師主導のもと、大淀に対する施術開始。参加者は先程も話していた通り、飛鳥医師と入渠ドックの妖精達。そこに私と三日月、鳳翔、そして打ち合わせには出ていなかったが、蝦尾女史も加わっている。

その場で必要な薬を調査し、即座に使えるというのは、今回のような超難度の施術にはありがたい限りだ。

「ちゃんと後から伸びるんだな？」

飛鳥医師の問い掛けに、妖精達が頷いたりサムズアップしたり。

これは大淀の髪のことを話している。脳に直接接触するためには、大淀の長い髪はとも邪魔。入渠することで元に戻るという保証を得たことで、バツサリと切ってしまった。丸坊主とまでは行かないまでも、女性ではなかなか見ないミリに近いまでの髪に切り揃えられる。

「よし、みんな、覚悟はいいな」

腹を捌くのは訳が違う。なるべく大きく血を流さないように、蝦尾女史謹製の止血剤を使いながら大淀の頭頂部を裂き、さらには頭骨を開いて、脳を露わにした。

幾度となく他者の施術に参加していた私や三日月だが、生きたまま頭を開くというのは初めてのこと。そもそも見ることも自体が、以前に侵食を消滅させる薬製作の手伝いをしていた時に亡骸の脳を確認したのが最初で最後だ。

「……近しいな、あの時のものと」

その脳はところどころが深海の侵食により黒ずみ、匂いも酷いものだった。失敗作よりはまだマシではあるが、あの時と違ってこの脳は生きている。雑なことは一切出来ない。

メスを扱う飛鳥医師の手からも、緊張感を感じる。震えているわけではないが、慎重になつていゝことは間違いない。

「流石にこれは緊張する」

マイクロチップの位置はわかつていても、どう脳に埋め込まれているかはわからない。場所が場所だけに手当たり次第というわけにもいかない。

そのため、そこを妖精に手伝つてもらおう。入渠ドックの妖精などあり、ドックの中に入っているわけではないのに、体内の異物の場所がわかるらしい。

「蝦尾さん、修復材を用意してくれ。合図をしたら局部にかけてほしい。絶対に自分の手にはかからないように」

「わかりました。お隣、失礼しますね」

「鳳翔、身体が動かないように押さえつけてくれ。脳を触るのだから不意に動く可能性もある」

「了解しました」

飛鳥医師の隣に蝦尾女史が陣取り、鳳翔が大淀の身体を押さえ付ける。これで準備万端。ふう、と一度だけ息を吐いた後、飛鳥医師の目の色が変わる。匂いも今までになく真剣なものに。蘇生の時よりも集中している。

「では、術式を開始する」

ここからは飛鳥医師の独壇場。それに追いつけるものは誰もいない。本来手を入れてはいけない場所に手を入れているというのに、一切の躊躇なくメスを入れ、埋め込まれたマイクロチップに辿り着く。不用意に他の場所を傷付けることもない。

脳に食い込むように配置されたそれは、小さいながらも深く食い込み、さらにはそこを起点に配線が脳の至るところに張り巡らされている。切除するにしても被害が大きそうな状態。そういうところにも嫌らしさを感じる。

しかし、飛鳥医師は止まらない。戸惑いなくそこにメスを入れると、脳に張り巡らされた配線を的確に引き抜き、その都度蝦尾女史に合図を送り修復材により修復。そもそもそこに何も無かつたかのよ

うな状態に引き戻していく。

「匂いが少し薄れた」

「よし」

脳から異物が取り除かれることで、大淀から漂う悪意の匂いは薄れていく。処置が進むにつれ、3代目がその呪縛から解き放たれていくようにも感じた。

息をする間もない程の早業。それでいて徹底した丁寧な処置。焦らずにメスを走らせ、必要最小限の傷口で切除しては、修復材で元に戻していく。時折大淀の身体がビクンと動くが、鳳翔がしっかりと押さえ付けているおかげで施術に支障は無い。

「匂いだけじゃないです。オーラのようなものも薄れています」

「このチップが本体ということだな」

今や私達の宿敵となった大淀は、マイクロチップという形をとった寄生生物のようなものに思える。初代の記憶を引き継ぎ、別の大淀を渡り歩いて命を繋いで、憎しみを撒き散らす害悪。

「摘出完了」

大淀の脳から摘出されたマイクロチップがビンに放り込まれた。血塗れのそれは、まるで触手を伸ばす異星人のように見えた。

そのクソみたいな輪廻も、これで終わりだ。意思是チップに封じ込められているとしても、身体が無ければ動くことは出来ない。二度とこんなことが起きないように、根本から絶つ。

「縫合する。蝦尾さん、修復材を」

「はい」

処置しながらも修復材で治療しながらだったが、もう頭の中に異物は存在しなくなっただけのため、完全に封じるために量を少し多めに使って綺麗に戻していく。生きているのだから修復材もしっかりと効き、瞬間に傷口は無くなっていった。

最終的には施術の痕跡は一切無い状態となる。頭を開くために髪を切られたこと以外は、私達の知っている大淀と同じ。

「悪意の匂いは失われた。この大淀は若葉達の憎い大淀とは違う」

「オーラも消えました。それはそのチップの方に移っています」

目に見えない部分は私達が保証する。この大淀は、ある意味4代目と全く同じ匂いになっている。

「……よし、術式終了。このまま入渠してもらおう。すぐに運ぶぞ」
ある程度血を拭いて、眠ったままの3代目を工廠へと運び、そのまま入渠させた。施術をずっと見ていた妖精達なら、3代目をどうすればいいか完璧に理解しているはずだ。

ここで入渠が完了すれば、4代目と同じ状態になるはず。強いて言えば、頭の中にマイクロチップがあるか無いかの違いだ。あちらは全く無害なマイクロチップのため、そのままにしても今のところは支障がないため、これが本当に最後の施術となった。

「これで終わりだ。お疲れ様」

大きく息を吐き、力が抜けた飛鳥医師を蝦尾女史が支えた。張り詰めていたものが抜けたことで、疲れが溢れ出したのだと思う。

飛鳥医師曰く、蘇生よりも疲れたとのこと。既に死んでいるものを生き返らせるよりも、死なないように維持しながら治療することの方が力を使うのだそうだ。気持ちはわからなくもない。

「僕は少し休む。入渠はどれくらいで終わるだろうか」

妖精達が少し考えた後、指で時間を提示。朝から施術をし、今がおおよそ昼。終わるのは夕食前くらいとなった。

一眠り出来るくらいの時間はあるため、飛鳥医師は軽く腹に入れてから入渠完了まで休むようだ。蝦尾女史がそこについてくれるので心配もない。

3代目の治療もこれで終わり。あとは目を覚ますのを待つだけだ。

解放された元凶

3代目大淀の施術が終わってから少し時間が経過。そろそろ夕食というくらいの時間で明石からお呼びがかかる。現在入渠中の3代目がそろそろ目を覚ますということらしい。

工場に集まったのは、実際にトドメを刺した私、若葉と三日月。他にも滞在中の人間一同や治療に参加した鳳翔、さらには新提督の大淀や4代目、小淀まで加わり、それなりな人数になってしまった。それでも収まらず、この光景を遠目で見ている者まで出ている始末だ。

「け、結構集まりましたね」

「そりやあな、こいつの状況次第じゃあ、まだ戦いは終わらねえんだ」その人数に明石も少し驚いてしまっているが、それで中断するようなことでは無い。これは戦いを終わらせる最後の仕事だ。見守る必要のある者は全員ここに集まっている。

苦笑しながらも大淀の入ったドックを開いた。入渠直後は全裸のため、即座にバスタオルが投げ込まれる。施術前に妖精から聞いていた通り、開くために刈り取られた髪はすっかり元通りになっており、何処にでもいる大淀と同じ外見になっていた。

幸いなことに匂いも深海のものが混じっていない。入渠の際に行なわれた透析で蝦尾女史が開発した例の薬も使われたことで、上から下まで完全に完治している。2代目以降は完全な深海棲艦化はしていなかったようだ。声が変わっていないかったのだから、それも当然か。

「……あ」

薄らと目を開く。脳を弄るといふかなり難易度が高く大規模な処置をしたわけだが、以前の瑞鶴のように二度と目を覚まさないみたいなのは無いようだ。飛鳥医師の処置が適切だったということを表している。

常に眼鏡をかけている大淀だからか、こちらのことを薄ぼんやりと見ている。それに加えて焦点があっていない視線。寝起きのためか、脳を弄ったからか、記憶が混濁しているようだった。

「若葉、君が先頭に立ってってくれるか」

「若葉^{ボク}でいいのか？」

「君だからだ。大淀が最後に見たのは君だろう」

飛鳥医師に後押しされ、私が大淀の目の前に立つ。勿論三日月も一緒に。

飛鳥医師の言う通り、この大淀にトドメを刺したのは他ならぬ私。初代も私の一撃で命を奪っているのだから、記憶が残っているのだとしたら私に対しての感情は複雑なモノになるだろう。最悪な場合、発狂。良くて私はこの大淀の恐怖の対象となり得る。

大淀のうっすら開いた目と目が合う。今は感情の匂いは無。起き抜けに何かあるわけでもなく、むしろまだ私のことが視界に入っていないのかもしれない。

「……………は……………」

「鎮守府だ。お前は救出された」

何かを探すような素振りをしたので、おそらくこれだろうと眼鏡を渡す。まだどうなっているのかわからないようだが、眼鏡をかけて私の顔を見た瞬間にあらゆる感情が溢れ出した。

頭の中で何もかもが噛み合っていた。本心から世界に憎しみを持ったことが思い出されると同時に、私達との戦闘に敗北したこと、そして本来持たなくていい初代と2代目の記憶までもが全て蘇った。「えっ、な、えっ」

まるで洗脳を解いた直後の完成品のような動揺の仕方。今までとは当然別人のようだった。顔面蒼白でブルブル震え出す。まだ暴れ出すことはしていないが、これは初めて救出することが出来た人形である霰と同じような行動。

完全に目を覚ましているが、目の前が見れていない目になっている。最悪な状況に向かいかねない、

「なんで、私、えっ、なんで、なんで……………!？」

「落ち着いてくれ」

「私、私、あ、あああああっ!？」

禁断症状が無いのにもかかわらず、幻覚や幻聴が見えているような

動き。ドックの中だというのに、ついには暴れようとしたため、無理にでも取り押さえる。お互い艀装を装備していないわけだが、今の状態なら私の方が力は強いようで、簡単とはいかないものの押さえつけることができた。

「落ち着け！　ちゃんと考えろ！　奴の記憶があるのなら、自分がどう生まれたかもわかっていようだろう！」

私からかけられるのはそんな言葉しか無い。初代の記憶があるのなら、2代目3代目の大淀が建造されていることは当然理解しているはずだ。自分自身がその3代目であることだって、少し考えればわかること。

しかし、自分が本来の大淀として生まれてから記憶が移植されたわけではなく、生まれた直後から元凶としての記憶を持ち合わせていたため、感覚が完全に狂ってしまった。その結果、あちらが本来の自分と思い込むことになり、今の自分がわからなくなっている。

「いいか、一度深呼吸をしろ。ゆっくり息を吸って、ゆっくり息を吐くんだ」

まずは落ち着いてもらわなくては始まらない。混乱する頭で考えなくても、答えに辿り着けないどころか、間違った答えに向かってしまう。とにかく今は精神的な安心が必要。

「バスタオルを口にかけてやるんだ」

殆ど過呼吸気味な大淀を落ち着かせるために、飛鳥医師の指示の下、先程かけられたバスタオルを軽く口に押し当て、ゆっくりと呼吸をさせることに努める。

話も出来なければ話も聞けないような状況では何を言っても無駄。ならば、今はとにかく大淀の状況を良くしてやる必要がある。今後の話にも影響が出るのだから、正直こちらも必死。

「ひっ……ひっ……」

「大丈夫だ。まずは落ち着くんだ」

大淀の呼吸が少しずつ整っていくのがわかる。目の焦点も少しは合ってきたものの、心は大きく揺れ動き、ずっと混乱し続けている。せめて話すことの出来る精神状況になればまだマシ。

呼吸が多少整ったらバスタオルを口元から外し、ゆつくりと深呼吸をさせる。その間も私は腕を拘束したまま。

「いいか、よく聞け。お前は確かに大淀だ。だがな、それは生まれた時から支配されていたからだ」

「し……はい……」

「そうだ。お前とは別人の大淀が、建造されたばかりのお前を乗っ取っていただけだ。その記憶がお前に残っているだけ。お前のやったことじゃない」

突然そんなことを言われても、それを理解していたとしても訳の分からぬような言葉。余計に混乱しそうではあるが、これ以上に言い方がない。

この大淀を納得させるのは相当に難しいだろう。器として作られていたが、悪事を一切働いていない4代目と小淀とは訳が違う。どうしても悪事を働いていたのは自分であると考えてしまう。

あれは別人だと思いつめようかのような何かがあればいいのだが。心の問題であるため、大淀とは別の何かの力が働いていたという証拠があればまだ納得してくれそうなのだが。

と考えている時、1つ思い付いた。処置の時に飛鳥医師が大淀の頭の中から摘出したマイクロチップ。

「飛鳥医師、あの時のマイクロチップ、ここに持ってこれるだろうか」
「ああ、すぐに持ってこよう」

私の意思をすぐに理解してくれたか、急ぎ足で取りに行ってくれた。

あのマイクロチップが頭の中に入っていたからおかしくなっていたのだ。あれが無ければ普通に生まれた大淀。全てアレが元凶であるかわかれば、この半狂乱の状態を改善出来るかもしれない。

自分をおかしくしたものが目の前になれば、自分の罪を全て擦りつけることも出来るだろう。そもそも、この大淀の罪ではなく、マイクロチップに収められた初代の記憶の罪なのだ。これはあながち間違いない。

「若葉」

飛鳥医師からマイクロチップが入った瓶を渡される。脳の中にこの配線塗れの機械が入っていたと思うと怖気立つものである。

これが表沙汰になるのはこの場が初めて。このマイクロチップの存在は全員知っていたが、施術に参加したものの以外は現物を見るのが初めて。新提督や下呂大将ですらだ。さすがにこれを目の当たりにしたら、驚きが隠せていない。

「大淀、よく見ろ。これが元凶だ」

まだ混乱したままではあるが瓶を見せ、これが頭の中に入っていたのだと突き付ける。

「これのせいで、お前は既に死んでいる極悪非道な大淀と同じことをやらされていたんだ。今のお前にはわかるだろう」

「これ……が……」

「そうだ。これが何もかも悪いんだ。お前は何も悪くない」

少しだけ落ち着いたか、私が瓶を渡すとそれをしっかりと持ち、マイクロチップをマジマジと見つめる。脳から摘出された後に一応洗浄されているので、見た目がエグいことにはなっていないものの、その存在自体が気持ち悪い。

大淀から溢れる感情が変化する。今までは自分の罪に対する悲観や怒り、自殺願望にまで向かいそうな程の自己嫌悪だったが、今はそのマイクロチップへの怒りと憎しみ。これのせいで自分の人生が狂わされたのだということがわかったことで、感情の矛先がこれに向いている。

「これのせい……全部これのせい……」

「そうだ。全部これのせいだ」

瓶を持つ手に力が入っている。今にも壊してしまいそうな程に感情が荒ぶっている。

「新さん、アレは大本営に持って帰らなくてはいけないのですか？」
「……いや、物的証拠ではあるが、あのテロリスト共を連行するだけでおおよそ事が足りている。手瀬鎮守府の設備もまだそのまま残してあるしな」

「わかりました。若葉、それはもう好きにしてください」

上からの許可も出た。これならもう、このマイクロチップは破壊してもいい。こんなものが存在しては、私達だつて気が気でない。私達の怒りと憎しみも、このちっぽけな機械一つに一極集中している。

確かに私達は拳を交えた。だが、私達はこの大淀に対して怒りも憎しみもない。同じ被害者仲間として、むしろ共感すらある。この大淀は救われなくてはいけない。生まれた直後に巻き込まれただなんて、私達と殆ど同じではないか。加害者に仕立て上げられたか、被害者として生死の境を彷徨ったか、差はそれだけ。

「大淀、それを壊していいと許可が出た。決着をつけるために、それを壊してくれ。お前も被害者だ。その権利がある」

手で握り潰すわけにはいかなないと、明石がハンマーを持ってきてくれた。これで潰せば流石に粉々になる。明石が近くに作業台まで用意してくれた。

ドックの中では出来ないため、その意思があるのなら外に出てほしいと促した。

「……やります。これで、少しは気が晴れると思いますので」

バスタオルを身体に巻き、ドックから出た。着替えた方がいいかもしれないが、大淀の気持ちの前を向いている内に終わらせる必要もある。次に後ろを向いたらもう立ち直れない気がする。

その間に瓶からマイクロチップを作業台の上に出した。三日月が言っていたオーラのようなものを私も感じ取ることが出来る。ここにあの大淀の全てが入っていると考えるほどに。

「さあ、頼む」

「……っ！」

一瞬躊躇いもあったが、憎しみの方が強かった。大淀の渾身の一打は、マイクロチップを修復不可能な程に粉々にした。見えていたオーラのようなものは次第に薄れていき、最後は何も無くなる。そこに感情など感じない。

これであの大淀という存在は本当に潰えたのだと思う。もう二度とあんな極悪非道なゲスに遭うことは無いだろう。

「終わりだ。これでお前の罪は消えた」

「……いえ、それでも私の罪であると、私の心は言っています。あの記憶が根深く残っている限り、私はこの呪縛に囚われたままなのでしよう」

一度芽生えた罪悪感とは拭えないもの。とはいえ、大淀の声からは先程までの混乱は薄れていた。マイクロチップを破壊したことは少なからずいい方向に向かっている。

「開き直すことは出来ません。ですが……少しは前向きに生きていくと思います。コレと私は違うということがわかっただけでも充分でした。ありがとうございます」

「落ち着いてくれたのならそれでいい」

メンタルケアは今後も必要だろう。これは確実に悪夢に苛まれるパターンだ。開き直れないのなら、周りが気にしてやる必要もあるだろう。

「あ、あはは、まだ手が震えています。攻撃的な行為でこれということ、私はもう戦えないでしょうね」

「死んでないのなら、いくらでもやりようがあるだろう」

「そうですね……そうですね」

少なくともこの大淀はもう戦闘なんて出来ない。艦装を装備してもトラウマで海の上に立てないくらいだと思う。それなら、小淀と同じように出来ることをやっていく方向にしていけばいいだろう。

生きているのなら、道は何処にでも繋がっている。この大淀にだって、歩いていい道があるのだ。

それぞれを選ぶ道

3代目大淀も目を覚まし、世界に怒りと憎しみを持つ大淀はマイクロチップが破壊されたことで完全に消滅。加担していた医療研究者も捕縛されたことで、今回の事件は本当に幕を閉じた。

祝勝会は翌日にやろうという話になり、夕食は普通に終了。その後の自由時間で、改めて3代目の処遇について決める。この場にはまだ鎮守府にいる全員が揃っているので都合がいい。

「飛鳥先生……お世話になります」

「ああ、今は精神的な治療もし易くなっている。君がいたい間はいてくれればいい。僕の施設はそういう場所だ」

3代目は他の大淀に比べると精神的なダメージが大きい。そのため、4代目と小淀は新提督の鎮守府に移籍することとなったのに対し、3代目は施設で心の回復に努めることに決まった。

姉のカウンセリングとセスのアニマルセラピーがあれば、そう遅くないうちに回復するだろう。既に浮き輪が1体、3代目の側に寄り添っている程である。精神的な病にも対応し、施設はより一層飛躍するだろう。

「飛鳥医師、わかっていると思うが、戦いが終わったことで施設はまた非武装の状態に戻してもらおう。それは構わないな」

「はい、勿論そのつもりです」

「だが、先生からも聞いているが抑止力としての力はある程度必要だ。よって、水鉄砲と刃を潰したナイフくらいなら許可を得られるようにしましょう。今回のようなことが二度と起こらないとは断定できない」

新提督からの提案。抑止力としての力は持つておく必要があるという認識となった。そのため、以前に提案されたギリギリ非武装を維持している状態に戻ることには。私も魚雷を降ろすことになる。最近鈍器にしか使っていないが。

「それと、深海棲艦達の扱いだ。温厚で敵対の意思などなく、むしろ我々に協力してくれた事実を私は理解している。そのため、手続きをして外部の協力者として大本営に登録しておきたい。正式に完全な

不可侵の深海棲艦として、認めてもらおうと思う」

そうしてもらえるとありがたい。シロクロから始まり、今では片手では数え切れない人数の深海棲艦が施設滞在になることが決まった。その中でも、赤城と翔鶴はさらに特殊。

行動が窮屈になるかもしれないが、深海棲艦だからと艦娘に襲われることもなく、万が一のことに怯えることが無くなる。海底散歩を趣味にするシロクロや、元々いた島に行きたいというリコには、この手続きは必要不可欠となるだろう。

「一応聞いておきたい。我々への敵対の意思はないな？」

「あつたりまえだよ！ みんな友達だからね」

「ならばよし。施設に居られるように私が何とかする」

クロが筆頭に答えた。クロがそうなのだからシロも同じ意思。施設に残ると真つ先に言ったセスヤリコも勿論と首を縦に振る。

「私達の扱いは微妙だと思えますが、敵対の意思は当然ありません。こんな見た目ですが私は赤城ですから」

「私も翔鶴としてここにいます。そもそも今は艦装も壊されてしまつて何も出来ませんしね」

赤城と翔鶴も今は艦装を持っていない。嫌でも非武装を貫くことになつている。

艦装の残骸は、後日戦場に拾いに行くことになつている。あの場所にはシロクロの艦装もあるし、私のナイフも沈んでいる。潜水艦達が懸命に搜索してくれたが、あの時は時間があまり無く探し切れなかつたらしい。

「とても清々しい気分なんです。今まで持っていた怒りと憎しみが全て晴れたような感覚ですね」

「私もです。因縁が断ち切れたからだと思います」

「それが聞けただけでも安心している。君達はいろいろあつたと聞いているからな」

最初は互いに憎み合っていた赤城と翔鶴は、その矛先を元凶である大淀へと変え、そしてそれが討たれたことにより、心に巣食っていた負の感情が全て消え去つたという。そういう意味では、今の赤城と翔

鶴は身体だけが変化してしまった艦娘と同じだ。もう暴走の危険性すら見当たらない。

施設に滞在する深海棲艦には危険性が一切無いことが証明されているのだ。言ってしまうと全て口頭であり、心の奥底は誰にもわからない。だが、その辺りは私が保証出来ている。下呂大将からの信頼も厚い私の嗅覚により、誰一人として嘘を吐いていないことはわかっていいるからだ。

「残りの者は、各自決めたらその鎮守府で手続きを行なってほしい。とはいえ、わかつている鎮守府など高が知れているとは思うが」

「私は話した通り、有明鎮守府への所属を希望します。あちらの提督にも既に話は通してありますので」

加賀は来栖鎮守府ではなく有明鎮守府への移籍。これは前から聞いていたので驚かない。

「瑞鶴、貴女もどうかしら。あそこ、航空戦力が足りないという話よ。ちようどいいと思わない？」

「わ、私!? まあ正直何処に配属されても同じだし、加賀さんなら相手しやすいからいいかな。私も加賀さんのところに行くよ」

瑞鶴も有明鎮守府となりそうである。航空戦力が足りないと聞いていたので、都合がいいだろう。いきなり練度の高い正規空母2人が入るとなれば、戦力が一気に拡張され、より強い鎮守府として盛り上がることも間違い無し。

利根と筑摩もその件は当然知っており、加賀に加えて瑞鶴まで仲間に加わることを大いに喜んでいて。あそここの雰囲気なら、顔見知りであろうが無かろうが、すぐに引き込まれることだろう。

「大半はこの鎮守府に残ることになる。キャパシティは大丈夫だろうか」

「うつつ。今全員が居られるんで、大丈夫ですぜ。むしろ2人はスカウトなり何なりしないんですかい?」

確かに、この艦娘は欲しいと思うことくらいあるだろう。施設の艦娘は良くも悪くも簡単には手に入らない戦力であり、それが今完全に浮いている状態だ。ある意味ドロップ艦に近い。今の地位からして

相当に強い艦隊を率いているのはわかるため、そのお眼鏡に適うかどうかはさておき。

「私としては若葉と三日月は手元に置いておきたいですよ。捜査と尋問が効果的になりますしね。ですが、あの2人は施設にいるべきでしょう。そうでしょう飛鳥」

「そうですね。僕が深海の部位を移植した艦娘は全員施設から離されると困りますね」

「でしたら、私は大丈夫です」

にこやかに話す下呂大将。私と三日月は下呂大将の仕事に役立つ力を持っているため、今後もその方向で働いてほしいと望んではいたものの、私達は立ち位置が非常に難しい場所にいる。ここから侵食されるような事は無いとは思いますが、何かあった時のことを考えると、施設にいた方がいい。

そもそも三日月は肌の治療のために施設から離れるつもりが無いのだ。三日月が離れないのなら、私だって離れない。最初からスカウトされても断るつもり満々だった。

「私も大丈夫だ。こちらに来ると、ここ以上になかなか会えなくなるだろう。それよりはここにいた方がいい。戦力増強も急いでいないしな」

それがわかっていいるのだから、新提督もスカウトはしないと宣言。結果的に、加賀と瑞鶴以外は全員来栖鎮守府への移籍が決定した。相당한人数ではあるものの、それを軽く受け入れてくれた来栖提督には感謝である。

今まで一緒に暮らしてきた仲間達と離れるのは少し寂しいものもあるが、これは門出だ。笑って送り出すのが一番だろう。実際離れるのは私達だが。

それに、これは別に今生の別れではない。いつでも会おうと思えば会える。特に私や三日月は、施設側のおかげで割と自由に動ける。会いたいと思ったら会いに来ればいい。毎日とまではいかないだろうが。

「また度々視察をさせてもらう。手続きをするとはいえ、深海棲艦が

住まう施設なんで、後にも先にも現れないだろうからな」

「問題ありません。事前に連絡をいただければ、いくらでもおもてなし出来ると思います」

こういう繋がりには大事にしておきたい。私達の交友関係は格段に拡がったところだけは、こんな事件の中にある数少ない良かったと思えるところである。

「失われた食糧や日用品の類は、雷に聞いて必要な分以上に発注してあります。明日には届くと思いますので、帰投はその後ということにしてください。手ぶらで施設に戻るわけにはいかないでしょう」

「ありがとうございます。助かります」

「君達がいなければ勝利を掴むどころか、未だに気付くことなく暗躍を許していた可能性があります。それが解決出来るきっかけを作ってくれただけでも功労者ですよ。それに加えて治療法の確立までしてしまったのですから、労うのは当然のことです。資金援助もあるでしょうね。無かったとしても私が捻じ込みますよ」

事件に巻き込まれただけでなく、解決に大きく貢献した施設は、今まで以上に過ごしやすい環境にしてもらえるだろうと下呂大將は語る。これだけのことをやってくれたのだから、評価されて当然と。裕福な暮らしを望んでいるわけではないが、本来の目的である研究がよりやりやすい環境にはなるのは、施設に住む者としてありがたい限り。

「蝦尾さんはこのまま施設に残るということで良かったですか？」

「はい。僕からもお願いします。共同研究者がいることで作業効率は格段に上がりましたから。目標までの道程はかなり短くなりましたね」

蝦尾女史も勿論施設に残る。途中参加でも、飛鳥医師と同等の功労者だ。蝦尾女史がいなければ瑞鶴が目覚ますことが無かったし、完成品の完全な治療は不可能だった。

それに、蝦尾女史自体が施設を離れたくないと言うだろう。理由は言わずもがな。飛鳥医師が居残ることを受け入れてくれているのだから、本心を晒さなくても施設に居場所はある。

「私でよろしければ、ずっと飛鳥先生と一緒に研究を続けていきたいです。改めて、よろしく願います」

「ああ、僕も君の助けが必要だ。これからもよろしく頼む」

飛鳥医師には珍しい、清々しい笑顔で蝦尾女史と握手した。蝦尾女史の体温が上がったのが誰にでもわかるほどだった。そして私にはもう1つ、蝦尾女史の感情の匂いが明らかにピンク色に染まったのも理解出来た。今の私にはとてもわかる感情、三日月に抱く感情と同じもの。

これから一緒に暮らしていくのだから、その関係を確実に進展させてもらいたいものだ。私は蝦尾女史を応援している。

「祝勝会は明日盛大にやるぜエ。それまでは全員休みだ。身体も心も、ちゃんと休ませとけよオ！」

もう戦火に吞まれるようなことも無いはずだ。明日の祝勝会で気持ちよく終わらせよう。もう戦いのことはしばらく考えたくない。

そして夜。本当の終わりを迎えたことで、昨日よりもその前よりも気持ちよく眠れそうだった。いつものようにベッドで三日月と2人、向かい合って横になり、見つめ合い、手を絡ませる。

「これでもう本当に終わりなんだよね。辛いことがいっぱいあったけど、今を勝ち取れたのならちっぽけなものだったかも」

「そうだな。若葉達にはいろいろありすぎた。でもこれで終わりだ。もう何も考えなくていい」

自然と笑みが溢れる。初代を倒した時以上に達成感がすごい。もう楽しく生きることが誰にも邪魔されることは無いのだ。私と三日月の関係を脅かすものだって、もう何処にもいない。

「今思えば、私は若葉に会えて本当に良かった。あんなボロボロで、世界の全部が嫌いになってたけど、若葉に会えたからここまで立ち直れたよ」

「買い被りすぎだ。あの時の若葉はただ、同じ境遇の三日月に楽しく生きてほしかっただけだ」

施設に漂着したばかりの頃の三日月を思い出すと、今とは本当に違

う。無表情で、何に対しても敵対するような姿勢で、私の側にいるのも脅威のための盾にするためだった。

だが今は違う。今までの出会いもあり、経験もある。私の前だけとはいえず、こんなに気持ちよく愛らしい笑顔を見せてくれる。

「今は勿論違うぞ。若葉は三日月と一緒に生きて行きたい。庇護欲とか、そういうものは一切無い」

「私もよ。若葉に擦りつけるとか、そういうのはもう無い。こんなに心が許せるのは、後にも先にも若葉だけだからね」

絡んでいるのが手だけでは無くなる。いつもの流れ。こういう関係になって、私達はいろいろのストッパーが外れてしまっているような気がする。だが、それでも構わないだろう。私と三日月はそういう仲なのだから。

そうして夜は更けていく。これが来栖鎮守府で過ごす、最後の夜になるだろう。明日には準備が出来次第帰投。本来の私達の居場所に戻るのだ。

皆からの祝福を

翌日は朝から少し忙しかった。身体と心を休めるとしている中、下呂大將が発注してくれた食糧と日用品が朝イチに到着したため、それを大発動艇に積み込む作業が追加されたからだ。自分達のことのため、私、若葉と三日月もそれに参加している。

施設に戻る者の中で、大発動艇を運用出来るのは三日月のみ。その荷物を全て積み込み、さらには現在艤装が無い赤城と翔鶴や、そもそも戦闘能力の無い飛鳥医師と蝦尾女史と初霜、そして患者である3代目を運ぶ必要があるため、今回使う大発動艇は実に5隻。三日月が運用出来る数を超えてしまっていた。

そのため、流石にこれはまずいと来栖鎮守府の者が手伝ってくれることになる。そうなると手を挙げるのは当然二二駆だ。文月と臯月が大発動艇を使えるし、施設まで一番来ていると言っても過言では無い。それに、三日月にかかる負担なのだからと姉心が激っているようだった。

「食糧、消耗品、それに薬の在庫まで。至れり尽くせりですね」

「これくらいしなければ私が叱られてしまいますよ」

下呂大將は本当に必要な分を取り揃えてくれたようで、飛鳥医師も驚いていた。その中には蝦尾女史の研究にも必要なものが入っていくつも入っていたようで、本当に至れり尽くせり。

「これだけあれば、1週間……いや、十日は食べていけるわね!」

「そんなもんしか保たないわけ?」

「なんだかんだ結構施設に居残るでしょ? みんなに美味しい料理を作ってあげようと思うと、これならそれくらいよ」

食糧は雷のチェックが入っている。曙もそれを手伝っているようだ。一時期険悪なムードだった2人も仲を取り戻し、今では仲のいいコンビ。

雷の言う通り、施設にはなんだかんだ結構な人数が残る。今までの約半数であるとはいえ、私も含めると10人以上。それだけのものに三食しっかり出そうと思うと、大発動艇に山積みの食糧でも2週間保

たない。料理は不得手な私にはその辺りがよくわからないが、雷がそういうのならそうなのだろう。

「さて、これで帰投の準備も終わりましたね。ですが、先に祝勝会と行きましようか。裏でいろいろと準備されているようですからね」

長きに渡る戦いが終わったのだから、祝勝会くらい開いてもバチは当たらない。ちよつと豪華な食事会と言った様相だとは思いますが、そういう場で健闘を称え合うのもいいだろう。

それに、こういう場で3代目などにも私達に慣れてもらいたい。ここからは楽しく生きていくのだから、その門出になつてくれると嬉しい。

「ふむ、もう終わったかえ?」

何やら裏で作業していた姉が工廠にやってきた。その後ろには如月もいる。少し珍しい組み合わせだが、以前に見たような気がするが。

「ああ、積み込み作業はもう終わった」

「ちようど良かったようじゃな。ではわらわ達は若葉を借りて行く。如月や、お主は三日月じゃったな」

「ええ、若葉ちゃん、ちよつと三日月ちゃんを貸してもらえるかしら」

この辺りで何がしたいのかピンと来た。三日月も同じように思ったように、如月に素直についていく。

「姉さん、もしかして」

「うむ。お主らの式の焼き直しじゃ」

以前に施設を修復してくれた職人妖精を迎えに行つた時に雷が提案してくれた二度目のケツコン式。施設を破壊されたことで燃えてしまった私達の思い出を、より楽しい思い出にしようという計らい。

あの時は施設にいる者で海岸線での式となつたが、今回は鎮守府総出で祝つてくれるとのこと。裏での作業もその準備だったようだ。

「前と同じように、わらわが付き人となろう。明石殿がまた衣装をこさえてくれたからの」

「それはありがたい。前の物は施設と一緒に燃え尽きてしまった」

「うむ、聞いておる。あの時の写真も無くなつてしまつておるじやろ。

全部今からやり直すんじゃよ」

祝勝会という大きなイベントの一部を私達のために使ってもらえるのは少し申し訳ないが、とても嬉しいことだ。失ってしまった思い出の品を、改めて作ってくれる。あの時涙した三日月も、それは喜んでくれるようだ。

「それじゃあ、頼む」

「うむ。いい式にしようぞ」

最高の式にしよう。最初は乗り気では無かったのに、思い出が失われてしまったのだからもう一度やりたいと思える。以前に明石が言っていたことも、今ならすごく理解出来た。

控え室に用意された服を着る。相変わらずの男装、タキシード。しかし、前のものとはまたデザインが少し違う。より私に合うように作られているような、そんなイメージ。

知らない者が今の私を見たら、まず間違いなく男と見間違えうくらいなのだろう。それだけピツタリだった。

「お主本当に男形が似合うのう」

「それは褒められてるのか？」

「うむ。それがお主の魅力ではないか。誇るがいいぞ」

誇るほどかどうかはわからないが、褒められるのは嫌ではない。王子と呼ばれるよりはいい方。あちらは冷やかされている感じが強いので、どうも落ち着かない。

「お主に憑いているもののけ達も、祝福しておるようじゃ」

「そうか、シグも祝ってくれているんだな」

もう今の私にシグの姿を捉えることは出来ないが、さぞかしい笑顔で私のことを見てくれているのだろう。

「では、行くかの。三日月の準備も終わっておる頃じゃろ」

「ああ」

以前のウェディングドレス姿を思い出す。アレはとてもよく似合っていた。私のタキシードが少し違っているということは、あちらも少し変えられているのかもしれない。煌びやかに着飾られた三日

月が、今から楽しみだ。

祝勝会の会場は鎮守府の大食堂。その場を使つて私達の式も開いてもらえる。今回は私が先に到着。

何でも、来栖提督と鳳翔も同じように式を挙げたそう。その形式に倣つて、私達も式を執り行う。私達とは違い、来栖提督は紋付袴、鳳翔は白無垢だったのだとか。三日月には白無垢も似合いそう。

「若葉」

「来たか、三日月……っ！」

声をかけられ振り向き、その姿を見て思わず息を呑んでしまった。前回よりも似合っている。二度目だからか、より三日月に似合うように作られているようだ。初めて三日月を意識したとき以上に、ときめくような感覚だった。

三日月自身も少し恥ずかしげだったが、それがまた良い。匂いでわかる。恥じらいよりも喜びが先立っている。式はまだでも、この段階でより良い思い出が始まっている。

「前よりも似合っているな。本当に綺麗だ」

「若葉もとても似合ってる。カッコいいよ」

「照れくさいな」

クスクスと笑う三日月。今日ばかりは表情も豊かだ。私も自然と笑みが溢れる。

私にしか見せない笑みもいいが、三日月にはもっと笑顔でいてもらいたい。こんなにも可愛いものだから、その魅力をみんなに知ってもらいたいものだ。

「じゃあ、行くか」

「うん」

やんわりと三日月の手を取り、式の会場に。いつもの大食堂なのにそれっぽく整えられたそこには、本当に今鎮守府にいる全員が揃っていた。

一度私達の式を見ている施設の者はともかく、来栖鎮守府所属の者達からの感嘆の息が聞こえた。みんなが三日月の姿に注目してくれている。一部私にも視線が来ているのもわかった。

歩いていく先には、前回と同じように明石が立っている。いろいろ準備してくれたのだから、後から礼を言っておかなくては。

「えー、本来ならケツコンカッコカリの指輪交換なんですけど、お二人とも既にそれを終えていますよね」

「ああ、勿論」

「この式も二度目ですからね」

指輪をお互いに嵌めることで練度の限界を超えることがケツコンカッコカリだ。だが私達はそれを既に終えている。正直、式と言われてもやる事が無かったりする。

そこで、と明石が用意していたものを取り出した。ケツコンカッコカリの指輪が入っていたケースを私達に見せる。

「指輪、私がつておきました。ケツコンカッコカリではなく、ガチです。それなりに煌びやかにしましたからね」

私と三日月、2人分の指輪がケースに入っていた。お互いの今の瞳の色を再現した青い石の入った指輪。ケツコンカッコカリの指輪と違い、何の効果もないアクセサリー。だからこそ、私達の絆を表す大きな存在になり得る。

「海外では、結婚指輪を右手に着けるところもあるそうです。左にはカッコカリの指輪がありますから、これは右に着けてあげてください」

ならば私からと、ケースから指輪を取り出して三日月の右手を取り、薬指に嵌めてあげた。

本当に何もなかったため、ただ嵌まっているだけの指輪だが、ケツコンカッコカリの指輪よりも愛おしく感じる。誰もが持っている機能重視の指輪ではない、愛を表現するためだけに作られたそれは、普通以上に輝きを持っているかのようにだった。

同じように三日月が私の手を取り、指輪を嵌めてくれた。やっていることはケツコンカッコカリと同じなのだが、その時に感じた練度が上がる心地良さというものは一切存在しない。代わりに、心が温かくなるような違う心地よさを感じた。

また同じものを手に入れた。お互いの初めてをお互いに渡し合え

た。それだけでも心が躍るような気分だった。

「では、愛の誓いをお願いします。人間の式というのはそういうものらしいですよ」

みんなの前で言えということか。私達は常々公言していることではあるが、こんな改まった状況でそれを要求されると、なかなか緊張するものである。

三日月もドギマギし出してしまった。それならば、私が先導してやらなければ。こういう時は私がリードしてやろう。

「若葉はこれからも三日月を愛し続けると誓おう。片時も離れない。若葉と三日月は、生涯一緒に居続ける」

黄色い声が上がったようだが、気にせず三日月を見つめる。私の言葉に三日月も勇気が出たか、意を決したように微笑む。

「私も、若葉を愛し続けることを誓います。若葉、これからも私を傍に置いてね」

またもや黄色い声。冷やかしではなく祝福の声だ。

施設の者だけでなく、一緒に戦った仲間達全員から、私達の仲は祝福された。決別なんてあり得ない。みんなからそれを認められているのだから、私達は今まで以上に愛し続けるだろう。もう無いとは思うが、また辛いことがあっても、三日月がいれば私は挫けることなく、三日月だって同じはずだ。

「では、最後に誓いのキスを」

「勘弁してくれ」

「人前でするのはちよつと……」

「残念ですねえ」

これは前回と同じようにお断り。来栖提督と鳳翔は普通にやったかもしれないが、そういつた行為は見せるものではないとお互いに思っている。するならば夜。誰も見ていないところで。

「なら最後に写真を撮って終わりにしましょう。前回の写真が燃えてしまったと聞いた時、私も悔しかったです。なら、ここでもう一度。何枚でも撮りましょう」

「ああ、よろしく頼む」

最初から準備されていたため、明石がサクッと準備した。工廠での手際の良さがこんなところでも発揮されている。本当にこういうお祭りのな騒ぎが好きなようだ。

撮影は私と三日月が2人並んだ姿で。1枚撮ったところで姉が少しだけ口を出してきた。

「明石殿、今のままもう1枚だけ撮ってもらえぬか」

「同じ写真を2枚ですか？」

「うむ。皆には同じに見えるとは思いますが、次のものは少し変わるんじゃない。頼まれてはくれぬか」

明石は首を傾げたものの、姉の言い方からして重要なことなのだと思したか同じものをもう一枚撮ってくれる。

「若葉、三日月、お主らにはわかるじやろ。わらわが何が言いたいか」
「……ああ、ああ！」

「そういうことですか。ならば是非お願いします」

姉の視線が私ではなくあらぬ方向を見ていることで、姉の言いたいことを察する。なるほど、そういうことか。

「だが、それは写るのか？」

「大丈夫じゃて」

私も三日月も、こんな機会はないと思う。そもそも写真というものを撮る機会がない。私はともかくとして、三日月がそういうことを好まないのだから。今回は特別。

姉が自信満々に言うのだから、きっと大丈夫なのだろう。写真という形でみんなに周知してほしい。私と三日月の力の元、私達の中にある仲間の存在を。

「ほほ、喜んでおるわ」

「姉さんが羨ましいよ。若葉^{ボッ}らは夢の中でしか逢えないからな」

「わらわの特権じゃ。お主らと違って話すことは出来んのじゃから、その辺りは許してたもれ」

ケラケラと笑い、改めて写真を撮られた。きっとその写真には写ってくれているのだろう。私達のケツコンを喜んでくれている姿が。

仲間達と過ごす楽しい時間だ。こんな時間が永遠に続いてほしい。

帰投

私、若葉と三日月のケツコン式も終わり、そのまま祝勝会へ。沢山用意された豪華な料理に舌鼓を打ちつつ、今まで戦ってきたみんなと健闘を称え合う。

祝勝会では前に雷が作ると言っていたウエディングケーキも振る舞われた。鎮守府全員が食べられるくらいの、本当に大きなケーキが出されたことで驚いたものである。ケーキ入刀もやらせてもらい、最高の時間を過ごせたと思う。

祝勝会も終わり、あてがわれた部屋で最後の準備。これが終われば帰投。来栖鎮守府に来ることも、今後は大分少なくなるだろう。少し名残惜しいが、これからの平和な毎日を送るのはここではなく施設だ。

私達の本来の居場所は、飛鳥医師の管理する医療施設。ここではない。そんな者がここに居座り続けても迷惑だ。それに、飛鳥医師の立ち位置からして、あまり外に出続けているのもよろしくない。本人が嫌がる。

「大人気だったね、若葉」

「三日月もだろう」

祝勝会の最中、私達はケツコン式のための衣装のままのためか、その姿を一目見ようとみんなが殺到してきた。三日月のウエディングドレスなど、誰もが憧れるようなものだ。近くで見たくなるのもわかる。

だが、私の方がマジマジと見られていた。男装する艦娘など何処にもいないだろうから、物珍しさが勝ったようである。特に潜水艦達が物凄く盛り上がったのを覚えている。忠誠を誓いたいと言っていただけある。曙に冷やかされたのは言うまでもない。

「また式を挙げる事が出来てよかった。みんなのおかげね」

「ああ。本当にな。若葉^{ボク}達だけではここまで来れなかった」

ここまで来るのには、みんなの力が必要不可欠だった。誰が欠けても勝利には結び付かなかっただろう。救えるものは全員救えたのも

言うことはない。誰一人として失うことなくここにいることが、最善の結末だった。一部は蘇生されたものではあるが、それだって飛鳥医師がいたからこそ繋がったものだ。

「みんなに祝ってもらえてよかったな」

「うん。無くなっちゃった思い出の品も、全部新しくなったね」

今まで着ていた礼服は、綺麗に畳んで明石が用意してくれた専用のケースに入れる。これはまた丁寧に仕舞っておこう。失われた前回の礼服と同じように。

撮ってもらった写真は、出来上がり次第送ってくれるとのこと。なんと写真立てまで付けてくれるのだとか。嬉しいプレゼントだ。施設の部屋に飾らなくては。

話しながらも準備完了。いつも通りの制服に着替え終わり、荷物も纏まった。これでもう残すことは無い。

「さあ、帰るか。若葉達ボクの家に」

「ええ、帰りましょう。私達の家に」

手を繋いで部屋を出る。その一步は、明るい明日に踏み出すようだった。

工場には全員集まっていた。荷物を載せていない大発動艇には、施設までの足が無い者達が乗り込んでいく。全員が乗れるように、来栖提督が用意してくれたのはさらに容量のある特大発動艇。これは事が済んだら持って帰ってもらう。

まず赤城と翔鶴が乗り、その後3代目。体調が悪いわけでは無いので、支え要らずにしつかりと乗り込む。シロクロも泳いでいくのではなくこちらを選択した。エコや浮き輪達まで既に搭載済み。これだけ乗ってもまだまだ余裕がある。さすが特大。

「はつしももこつちだよね？」

「うむ。赤城殿、支えてやってもらえぬか」

「はいはい、大丈夫ですよ。初霜さん、飛び乗ってね」

「わーい、あかぎさんに、だーいぶ！」

次は初霜。結局最後まで治療されずにこのままだった初霜は、治療

を未だに保留中。こればかりは何とも言えないところ。もし治療を決意したのなら、今の施設なら出来るだけの設備が揃っているのですぐに出来る。それまではこのままで。

飛び乗った初霜を赤城が支えてやった。本当に誰とでも仲良くなるものだ。その後はシロクロとキャツキャツと楽しんでいる。滅多にしないこういう移動は、子供心には楽しいものなのだろう。

「飛鳥、これからはまた前までの関係に戻るな。嵐の後にゴミ取りに行かせてもらうぜエ」

「ああ、頼む。ここ最近嵐が無かったからな。次はとんでもない量が来るんじゃないかとヒヤヒヤしている」

「だな。まあ、そっちはそんだけ人数いりや、掃除にや困んねエよなア。だから、取りに行かせるだけにするぜエ」

日常に戻っても、来栖鎮守府とは付き合いは続く。今までは二二駆が基本的に来ていたが、今後は他の者が来るかもしれない。大発動艇を一隻貰えるとのことなので、こちらから運ぶのもいいだろう。その時は私もここにまた来れる。

今まで救出してきた者達の大半は来栖鎮守府所属になるのだから、幾らでも会える。まずは明石に撮ってもらった写真を送ってもらうところからか。なら数日もしないうちに誰かと会える。

「以前にも言ったが、施設に住まう深海棲艦を登録する必要がある。手続きのために何度か施設を訪ねることもあるだろう。その時はよろしく頼む」

「はい、こちらからもよろしくお願いします」
「何度でも言おう。君達は今回の協力者だ。絶対に悪い思いはさせない」

新提督は深海棲艦達のために裏でいろいろ動いてくれる。誰からも後ろ指を指されるようなことがないようにしてもらえただけでもありがたい。あれだけ協力してもらってにおいて、恩を仇で返すような輩が大本営にいてもらっても困る。

これからも新提督にはお世話になるだろう。私達の生き様を見てくれたのだから、悪いことにはならないようにしてくれると何度も保

証してくれた。この人ならきつとそうしてくれる。

「捕縛したテロリストは、こちらでしつかりと対処しておきます。何も心配はいりません。それに、例の研究を続けようとする輩も炙り出して全員罰します」

「お願いします。もう同じようなことが起こっちゃいけない」

「ええ。余計なことを言わないように躡けておきますから」

下呂大将は、捕縛した間賀と保田をどうにかしてくるようだ。奴らの辿り着いた擬似的な不死、艦娘のクローン技術は、絶対に口外させてはいけない技術。それ以外にも多種多様に禁忌を犯しているのだ。飛鳥医師と同じように、墓まで持っていつてもらわなければ困る。

下呂大将なら、その辺りを抑え込むことが出来るだろう。今までのことを鑑みても、ほぼ確実にやってのけてくれるはずだ。私達もそれを見続けているのだから、信用度が高い。

「蝦尾さん、飛鳥をよろしくお願いします。彼は目を離すとすぐ独断先行しようとしていますから」

「はい、研究仲間として、これからずっと支えていきたいと思えます。紹介していただき、本当にありがとうございます」

深々とお辞儀をする蝦尾女史。下呂大将の紹介が無ければこの場にすらいなかった。だが、来てくれて本当に良かったと思う。蝦尾女史のおかげで助かった者もいるし、今後の研究でさらに助かる者が増えるのだ。

いの一歩にやるのは艦娘のための人工皮膚の開発とのこと。三日月を優先してくれるのは嬉しい。その後は目的を達成するまで二人三脚で邁進していく。達成しても次の研究が来るだろう。本人の言う通り、蝦尾女史はずっと飛鳥医師を支え続けることになる。

「飛鳥先生、ならば皆さん、最後に救出された艦娘を代表して夕雲から御礼を言わせてください」

夕雲が一歩前へ。

私達の戦いは夕雲の襲撃から本格的になり、そしてそれを救出したことから、治療という解決策を作り上げていった。私の嗅覚の発達

も、夕雲の攻撃を受けたことから始まっている。代表としては申し分ない人材。

実際本当に一番最初に治療されたのは霰ではあるのだが、霰はこういうことを出来るタイプではないことくらいみんなわかっている。

「夕雲達は、この鎮守府で新しい道を歩き始めることになりました。それも全て皆さんのおかげです。あれだけのことをしでかした夕雲達を、殺さず治療してくれた飛鳥先生に感謝を。本当にありがとうございますございました」

「どういたしましたして。僕達は出来る限りのことをした。君達は被害者だったからな。得た命を大事に使って生きてほしい。死ななければ、いくらでも先に進める」

「はい、その言葉を胸に、一層飛躍したいと思います」

少し涙ぐんでいるものもいた。今生の別れでは無くとも、今までずっと一緒に戦ってきたものとの別れは少し辛い。特に暁はリコに抱きついていく程である。親身になって鍛えてくれた師匠との別れに、いろいろと決壊しているようである。

「私と瑞鶴はここでは無い鎮守府に行くから、余計に会う機会が少なくなるかもしれないわ。だから、私達からも改めて御礼を言わせて頂戴」

夕雲とは別に加賀と瑞鶴も前に出る。有明鎮守府は私達の施設との繋がりが薄いため、加賀の言う通り、ここに残る者達以上に会う機会が少なくなりそうだった。それこそ、遠征を来栖鎮守府と分配してこちらに寄越すようにしたところで、空母の2人はそれに参加するとは限らない。

そのため、改めて加賀と瑞鶴が私達の前に。

「私は若葉に。貴女に助けてもらっていなければ、私はあの時に死んでたわ。本当に感謝してる」

「私は蝦尾さん。私、植物状態で眠ったままだったんだよね。それを治してくれたのは蝦尾さんだからさ。助けてくれて、ありがとうね！」

握手を求められ、快く応じる。蝦尾女史も瑞鶴とガツチリ握手して

いた。瑞鶴はともかくとして、加賀も今までにあまり見たことのない笑顔だった。

「では僕もこれで。蝦尾さん、足元が危ないから、僕の手には掴まって」「は、はい。ありがとうございます」

先に飛鳥医師が特大発動艇に乗り込み、蝦尾女史を支える。望んでいたような展開に、蝦尾女史は少し興奮気味な匂いを醸し出していた。対する飛鳥医師はそれに気付いた素振りは見せない。

前途多難かもしれないが、私は蝦尾女史を応援している。是非ともその想いが成就するように、手伝えることは手伝ってあげたい。

全員が特大発動艇に乗り込んだことを確認出来たため、残りの艦娘は海上へ。特に大変だったリコだが、明石が改修してくれたおかげで低速艦並みの速力を出せるようになっていたため、艀装自体を海上に下ろすことさえ出来れば後はみんなと航行可能。

「文月、頼んだぜエ」

「はあい。一二駆、配送任務頑張ります」

大発動艇はそういつたことに慣れている一二駆に任せ、三日月は特大発動艇1隻に専念する。総勢8名が乗り込んだ特大発動艇を操縦することに少しだけ緊張しているようだった。

「三日月、大丈夫だ。若葉をここまで運んでくれたろう。それと同じだ」

「う、うん、頑張る。ゆっくり行けるし、いつも通りにやれば大丈夫よね」

肩に力が入っているようだが、そこは私がほぐしておく。緊張しているのは最善の動きは出来ない。

幸いなことに、今回の帰投はリコやセスのような低速艦もいる。自分の最大速力を出す必要が無いのだから、慎重にだつて行けるだろう。いざという時は私達が支えてやるから大丈夫だ。

全員が海上に下りたため、ゆっくりとだが工廠から離れていく。もうこれで戻ることは出来ない。

「飛鳥、最後に。君達の手助けでこの事件を解決することが出来ました。心より御礼を。では皆、去りゆく協力者達に、敬礼！」

下呂大将の合図と同時に、ズバツと私達の前にいる全員が敬礼をして、帰投を見送ってくれる。

「また会おう！ 今度は戦火の中ではなく、平穏な日々の中で！」

自然と言葉が口から出た。それが私の望みなのだ。今度会うときは、みんなが心穏やかな時に。

今までの戦いの思い出が走馬灯のように思い浮かんだ。みんなで戦ってきたことで、いくつも絶望があった。怒りと憎しみに塗れた、長く苦しい戦いだった。それでも、終わったことでそれは一生忘れられない程のいい思い出へと昇華した。

私達は平穏な日常へと戻る。もう負の感情の匂いなんて嗅ぐことは無いだろう。あつてもらっても困る。

三日月と共に、これからの日常を楽しむとしよう。私達はようやく、楽しく生きることが出来るのだ。

ある艦娘のこれから

戦いが終わって、早いことにもう2週間の時が過ぎた。私、若葉は順風満帆な日々を過ごしていた。

やっと手に入れた平穏を満喫する毎日。その間に、例の事件については大きく進展している。

まず施設に滞在することになった深海棲艦の処遇。

新提督が尽力してくれたことで、権利をしつかりと勝ち取ってくれた。今までの働きは確実に事件解決に繋がるものであり、いなければここまでの進展も無かったのではないかと訴え、大本営はそれを理解してくれたそうだ。

とはいえ深海棲艦は深海棲艦だ。敵と誤認されないような印として、本来の服から変えることなどが条件として入ってしまったらしい。人間の指示を聞くというだけでも信用度が段違いのため、そのお願いにはリコも渋々聞いていた。余計な諍いを作らないようにするためとはいえ、面倒なことだとボヤいていた。

結果、シロクロは以前の呂500と同じセーラー服とスクール水着になり、セスは本人によく似た艦娘がいるらしくその服を着るようになった。そしてリコは、私の礼服とは違うが男装のようなスーツ姿。これはこれでよく似合っていた。本人達も意外と気に入っている様子。

続いてテロリスト達のその後。

下呂大將がいろいろとやったことで、間賀と保田を基点に裏で繋がっていた大本営の者達の炙り出しが進んでいるそうだ。ちよつとした尋問で素直に話させていると言っていたが、内容を聞くことは出来なかった。

あの2人が作り出した擬似的な不死、クローン技術については、絶対口外しないように釘を刺したとのこと。その流れで釘を刺すと言われて、物理的にやったのかと思ってしまうものの、さすがにそこまではやっていないだろう。

これにより、事実上死なない艦娘の研究はストップ。4代目と小淀

が建造されていた普通とは違うドックも、余計なことをせず全て破壊されたようだ。万が一、そちらの方にも大淀の意識データが残っていた場合、確実に面倒なことになる。そのため、完全に破壊している。

施設の措置も、おおよそ戦いの前に戻された。今や当初の数倍の人数が住んでいるが、方針は一切変わらず。中立区故に武装は要らないと、非武装が前提とされている。中立区の抑止力となれるように、水鉄砲は一応許可はされたが、潜水艦達がどうにか見つけ出してきてくれたナイフはあまりよろしくなかったようで、思い出の品として自室に飾っている。

深海棲艦勢は非武装になること自体が難しいが、先の待遇により特別に持つことが許可されている。とはいえ、誰かを傷つけた時点で待遇は剥奪。即座に討伐対象となってしまうため、余程のことが無い限りは使うことは無いだろう。

施設を攻撃された場合がやむを得ない事態。その時は基本的に、私とリコが近接戦闘でどうにかすることになる。それが抑止力として働くことになるだろう。そんなことなどもう起こらないだろうが。

事件の痕跡はもう跡形もない。改めて脅威は無くなった。これで心配事は何もない。平穏な日常は覆されないものとなった。

「あと少しで人工皮膚も完成だ。三日月、さんざん待たせてしまったな」

「出来上がったのなら嬉しいですよ。約束、ちゃんと守ってくださいましたね」

この2週間で飛鳥医師と蝦尾女史の研究は格段に進み、ついに人工皮膚完成の目処が立った。出来上がったら三日月の顔についた大きな傷は取り除かれる。三日月がずっと望んでいたことなのだから、それが達成されるのは私も自分のことのように嬉しい。

それでも頭皮の辺りまで移植するのは技術的に難しいため、上手く目立たないように皮膚を移植すること。三日月としても、それほどばっかりは仕方がないと妥協した。髪で傷が見えなくなるのだから大丈夫と判断したようだ。

「蝦尾さんのおかげで、進むのが早くなったよ。やはり体組織に明るい人がいるのは本当に頼もしい」

「お役に立てて私も嬉しいです。三日月ちゃんとの約束も守れて良かったですね」

この2週間で飛鳥医師と蝦尾女史の距離は幾分か近付いたように思えた。毎日のように一緒にいて、研究という行為を通して意思疎通を繰り返していることで、飛鳥医師も蝦尾女史の気持ちが少しずつ理解出来ているようだった。

これはいい関係になるのも時間の問題だろう。その時が来るのを楽しみに待っている。みんなが蝦尾女史を応援しているのだから。

「大淀の事務仕事も様になってきているじゃないか」

「あはは……やっぱりこういう事が自分の身に合っているみたいですよ」

飛鳥医師と蝦尾女史の研究内容を書類に纏めたりするのは、今やメンタルケア中の3代目大淀の仕事になっていた。ただ何もせずにいることが、逆に精神的に追い詰められると本人から申し出があったため、軽めの事務仕事を渡されていた。

最初はこんな仕事にも手に付かないくらいだったものの、姉のカウンセリングとセスのアニマルセラピー、それ以外にも初霜と遊んだりしたことで、飛躍的に症状が回復していた。それでもまだ少し疲れた顔をしているのは精神的な部分。完治まではまだかかりそう。

「私の中にある初代の記憶が何かお役に立てれば良かったんですが……」

「奴の技術はこういう再生医療には繋がらないみたいだからな。仕方ないことだ」

こうやって初代の記憶を少しでも触れようとしてしまうせいで、心が休まっていない。そうなったら近くに待機している浮き輪が胸元に飛び込んで癒しを与える。

この方式である程度回復出来ているのだから、アニマルセラピーはメンタルケアとして本当に効果的である。

「そろそろご飯よー」

ちょうどお昼時となり、雷が呼びに来たため、切り上げて食堂へ。飛鳥医師達は少し片付けてから向かうということで、私と三日月だけが雷についていくことに。

来栖鎮守府にいた時は何もせずとも食事が出てきたため、戻ってきただけからは家事の欲が溢れんばかりに動き回っている。掃除洗濯料理と一手に引き受け、忙しいと言いながらも楽しそうにこなしていた。それでもやっぱりは足りないため、住んでいる者が手分けして雷を手伝うという環境は戦いの前に戻ったようだった。私も手を貸すことは多い。

「今日のお昼は赤城さんと翔鶴さんが手伝ってくれたわ」

「人一倍食べるから率先して手伝っているな。つまみ食いなんてしてないか？」

「していない。したらその分ご飯減るだけだもの」

さすが雷。あの2人もしつかり手中に置いているようだ。

食堂には工廠で作業していた摩耶と鳥海が先に来ていた。

蝦尾女史のボディガードとしてこの施設で夜間警備を行っていた鳥海も、戦いが終わればその必要も無くなり、摩耶の手伝いに勤んでいる。姉妹での作業は楽しいらしく、戦いの中にいた時よりも格段にいい顔をしていた。

「シロクロにはそろそろ戻ってこいつて言つといたぜ。アイツらもホント好きだよな、海底散歩」

「潜水艦なんだから。それか普通なんじゃないかしら」

「かもな。まあ今は急ピッチでやらなくちゃいけないような作業も無えし、自由気ままに遊んでおけばいいさ」

この2週間の間に、一度大きな嵐が施設を襲っていた。その際に、飛鳥医師が危惧していた大量のゴミが流れ着いている。摩耶と鳥海はそのゴミの整理などをしている。

ゴミを使った艀装修理はまた必要になったものの、もう急ぎの作業でもない。シロクロは潜水出来るだけの主機は残っているし、赤城と翔鶴も戦いが終わって非常に穏やかになったからか、艀装の修理を全く急いでいない。

「昼の哨戒は完了した」

「何も無かったよ。当たり前前だけど」

そこにリコとセスも入ってくる。新しい衣装も様になっているものである。

もう必要無いとは思うが、今までずっとやってきたことだから落ち着かないらしい。故に、朝昼晩と毎日3回、哨戒機を飛ばしている。勿論、飛ばしたところで何も無い。ただ飛ばすことを楽しんでいるようだった。

2週間も経てば、また施設の周りにはリコの花で埋め尽くされた。その花を愛でるのはリコの一番の趣味。やりたいことがやれているように、うで何より。

「今日は絶好調だったわ。雷、夕食にでも使って」

「わ、全員分あるのね。じゃあ夜に一品追加するわ。流石ねボノ」

「今日はたまたまよ。人数増えたから全員分釣る方が難しいわ」

趣味の釣りを終えた曙がクーラーボックスを雷に渡した。戦いが無くなったことで毎日のように釣りに出られるようになり、曙も順風満帆な毎日を過ごしている。あまり釣り過ぎたら生態系が崩れるとたまに控えているようだが、やりたい時にやりたいことがやれるというのはそれだけでも嬉しいこと。

「ただいまー!」

「戻った。今日は少し遠出だったのう」

「いったことないところまで行ってみたかったんだー」

姉と初霜も帰還。海岸線の散歩をしていたようだ。

子供になってしまった初霜には、ここでの生活は退屈かもしれないと思ったものの、毎日何かしら楽しんでいるようだった。今日は散歩。昨日は海底まではいかないもののシロクロと海を泳いでいた。雷に料理を教わってみたり、曙の釣りに付き合ったりと、いろいろとやっては笑顔を絶やさない。

姉も保護者としていつも一緒にいるようで、まるで遊びまわる孫を見ているお婆ちゃんのようにであった。本人にそんなことは言えないが。

「戻ったよー。お腹空いたー！」

「クロちゃん……御行儀悪いよ……」

身体を拭いてきたシロクロも到着。同時に片付けを終えた飛鳥医師達もやってきた。これで全員揃った。

「はい、全員分よそいましたよ」

「赤城さん、自分の分だけちよつと多めにするのは……」

「あら翔鶴、貴女も少し多いみたいだけど？」

「目の錯覚です」

全員揃ったところで赤城と翔鶴が配膳。雷の手伝いが板についてきたようだが、そういうところでちよろまかしたりする。雷もそこまで見越した量を作っているので問題は無いのだが。

「今日も今日とて何事もない平和な午前だった。午後もよろしく頼む」

昼食前の飛鳥医師のこの言葉も、ここ最近ずっと続いている。平和が続いていることの象徴だ。これがずっと終わらないことを祈りながら、私達はみんな生きていく。

午後からはまたやることもなく、三日月と共に自室で寛ぐ。こうして2人でゆつくりとする時間は、それだけで心が温かくなるように思える。

同じベッドで並び、手を重ね、同じ空気を満喫する。少し前ではこれが心の支えだったが、今ではもう日課という程に。支えではこの行為にすぎることになるが、やらなくてもいいことをやっているということは心に余裕があるということ。三日月も私に身体を預けてくる。

「もう2週間ね」

「ああ、そうだな」

話しながらも重ねている手は指を絡めるように。お互いの温もりを感じ合うのも日課。

「毎日が楽しいんだ。何もなく暇だと思ふ時もあるが、これが若葉達の望んでいた日常だと思ふと、心の底から嬉しくなる」

「うん、私も。こうやって若葉と一緒にいられるだけで、暇じゃなくな

るしね」

三日月の匂いからは、もう負の感情はカケラも感じない。ここ最近はずっとだ。今日は肌の治療の目処が立ったこともあり、より明るかった。

顔の傷が消えたら、みんなの前でも笑顔を見せられるようになるかもしれない。独り占めしたいという気持ちもあるのだが、三日月の良さをみんなにも知ってもらいたいというのもある。

「不安なのは、弥生姉さんがジリジリと愛人の座につこうとしてるところかな……」

「はは、確かにな。冗談なのか本気なのか」

先日有明鎮守府にも顔を出した。約束通り、弥生に顔を合わせるために。その時にもちよつとしたアプローチがあったため、三日月がヒヤヒヤしたようだった。だがいつも公言しているように、私の気持ちは三日月にしか向いていない。その度に弥生にそれを告げるのは酷だが、それ自体を弥生が楽しんでいるようで少し困る。

「若葉が愛しているのは三日月だけだ」

「ふふ、ありがとう。言葉にしてもらえるとすごく嬉しい」

「毎日言っているだろう?」

抱き寄せ頭を撫でてやると、三日月が心地良さそうに身を震わせた。これが夜ならそのままという流れになってしまいが、今はまだ日が高い。誰もが活動している時間だ。急に何かあっても困るし、日は我慢。

「こんなことばかり言っていると、また夢の中でみんなに冷やかされるな」

「私は気にしてないよ。見せつけちゃう」

「今はここでも見られている感じだったのに」

先日明石から届いた写真を手に取った。私と三日月のケツコン式の写真。だが、その写真には私と三日月以外の姿が写し出されている。姉が言っていたことはこのことだったと、現物を見てよくわかった。

私の後ろには微笑んでいるシグと手を振る千級が、三日月の後ろに

は満面の笑みでピースしているぽい。少し薄く写っている。この幸せな心霊写真に恐怖など感じず、三日月は最初感涙を流したくらいだ。

あの時にいた全員で写した写真にも、シグ達の姿は写っていた。知らないものは驚いていたが、私達はそれがまた嬉しかった。

そこには、私達の知らない男性の姿もあった。彼は、家村提督は、私達の戦いをずっと近くで見守っていたのだ。シグ達すらも気付かなかったその存在を知り、私も自然と涙が溢れたのを覚えている。

あれは私の涙ではなく、シグの涙だったのだろう。シグ自身は家村提督のことを思い出しているため、姿を見ればそれが誰だかわかる。

「これからはもっと楽しもう。楽しく生きよう」

「うん。若葉となら、私も楽しく生きることが出来るわ」

「若葉^{ポク}もだ。ずっとこうしていよう」

三日月の頭を撫でながら、私は平和を満喫する。平穏で少し退屈でも、私達2人なら毎日を楽しく生きることが出来るだろう。

終わったと思っていた私の一生は息を吹き返し、長い戦いの末に平穏に身を置くことが出来る様になった。愛するものを傍に、仲間達と共に楽しく生きる。そんな毎日がずっと続くと思うと、心が躍る。

この継ぎ接ぎだらけの中立区で、私のこれからは始まったばかりだ。

継ぎ接ぎだらけの番外編 取り戻した笑顔

平和な日常を過ごす私、若葉ではあるのだが、大きなイベントが無いわけではない。嵐が来たり、客が来たりがそのイベントの内なのだが、今日はそれ以上に大きなこと。

「人工皮膚が完成した」

昼食の終わりに飛鳥医師が話す。三日月の顔の傷を消すために開発されていた人工皮膚がついに完成したというのだ。飛鳥医師と蝦尾女史が力を合わせて共同開発したそれは、あらゆる成分解析などもクリアして実際に移植するに値する完成度に達したそう。

それを聞いて一番驚いたのは、他ならぬ三日月である。目処が立つたと言われていつも楽しみにしていたものが、ようやく手に入る。

「すぐにでも施術に取り掛かることが出来る。少し時間はかかるが、蝦尾さんも簡易修復材を作ってくれるそうだから、今日中にはその傷を消すことが出来るだろう」

「本当ですか!？」

「ああ。ただし、出来上がったのが顔の分だけなんだ。他の部分はまた後日となってしまうが」

「それでいいです!。すぐにお願ひします!」

こんなに声を荒げる三日月も珍しい。さらにはそこに負の感情が一切乗っていないのは初めてかもしれない。それほどまでに嬉しいことなのだろう。

三日月の大きなコンプレックスの1つである顔の傷。これが無くなるだけで、三日月はより楽しく生きていくことが出来るだろう。他者と出会うことが極端に少ないこの環境ではあるものの、やはり顔についているという事実が心の平穏を失わせている。

それが無くなるのが決まったのだから、私の前以外では表情の變化が乏しい三日月でも喜びを露わにするものだ。

「よかったわね三日月!」

「うむ、これは喜ばしいことじゃ」

みんなも三日月の顔の治療は大いに喜んでくれた。それが自分のことのように嬉しい。

「それもこれも蝦尾さんのおかげだ。本当にありがとう」

「いえいえ、こんなに喜んでもらえるのなら、うまくいって良かったと思います」

「蝦尾さんにも御礼をしなくちゃいけないな。瑞鶴の治療の時からずっと支えてくれてるんだ。何か恩を返したい」

御礼と言われてピクリと動く蝦尾女史。この施設内で出来ることなんて高が知れているため、何か買ってもらおうとか、そういうことくらいしか出来ることは無い。

少し考えた素振りをした後、あつと思いついたような表情を見せる。

「では、三日月ちゃんへの処置が終わった後、数日私に時間をください。飛鳥先生は少し仕事しすぎなので、たまには大きく休んでもいいと思います」

こんな時でも飛鳥医師のことを想った発言が出来るとは、と思ったものの、蝦尾女史はこのタイミングで勝負を仕掛けるつもりなのだと気付いた。ここにいるもの全員が勘付く。

戦いが終わってから着実に距離を詰めていつているのは誰の目にもわかっていた。だが、飛鳥医師があまりそういうことに慣れていないか、どうも一押しが足りていない。それを今回の機会で勝ち取ろうとしたようだった。

「ふむ……わかった。それで良ければ。僕の時間を蝦尾さんにあげよう。確かに休むことも必要だ」

「はい、それでお願います」

あまり顔に出さないようにしているようだが、内心大喜びな蝦尾女史。匂いでそれがわかる私だけが理解している。

「そういえば……以前先生に貰った慰安施設の宿泊券があったな」

「そんなものがあるんですか？」

「ああ。賑わっているわけではないが、毎日誰かしらは利用していて、

たまに団体が宿泊するくらいには使われているらしい。艦娘も使える温泉宿だそう。用が無いから存在自体忘れてしまっていた」

提督や艦娘のメンタルを回復するための慰安施設が、大本営の管理で存在しているらしい。大本営の発行したチケットさえ持っていれば、誰でも使える宿泊施設ということのようだ。

そのチケットを飛鳥医師は下呂大将から貰っているのだそう。だが、今までここから離れるような事がなかったので、宝の持ち腐れとなっていた。だが、いい機会なのでここで使うのもいいだろう。

「休息にはちょうど良いかもしれないが、僕がここを空けるのは」「いや、空けてもいいから大将がくれたんだろ。行ってこいよ」

摩耶がシツシツと手を振り、飛鳥医師に慰安施設に行くことを勧める。そのチケットが何枚あるかは知らないが、今この時点でその話を出したのだから、1枚しか無いようなことも無いのだろう。

満場一致で行けの一言である。誰もが飛鳥医師が頑張っていることは認めているし、戦いの時にもあれだけの成果を出したのだから、休息という形で労われても誰も文句は言わない。

飛鳥医師がチケットの枚数を調べたところ、4枚あったらしい。これなら飛鳥医師と蝦尾女史の2人で慰安施設に向かうことも出来る。

「残り2枚は、若葉ちゃんと三日月ちゃんに使ってもらってははどうでしょうか。せっかくですし、新婚旅行をプレゼントするのも良いと思います」

「確かに。2人とも結婚してからも戦火の中だったから、その辺りは有耶無耶になっていたな」

人間の結婚というのは、それを祝って夫婦で旅に出るとするのが慣習らしい。それに則るならば、私と三日月にも何処かに旅行に行く権利があるということになる。

この施設から出て遊びに行くというのは一度も考えたことが無かった。平穏で楽しい生活を、この施設ですつと過ごしていくものだとばかり思っていた。ひよんなことから、私達は未知の娯楽を知ることになりそう。

「三日月、若葉^{ボク}としては、行ってみるのも悪くないと思う。その慰安施

設というのに行ってみないか？」

「……うん、若葉と一緒になら何処へでも行けるわ。それに、今から顔の傷は無くなるんだもの。変な目で見られることも無くなるはず……だよね」

今からすぐに顔の傷を消す処置が施され、それが終われば外面上では白髪以外に三日月が指を指されるようなことは無くなるはずだ。施設の外に出ることに抵抗があった三日月も、そうなれば少しは気が楽になるだろう。

それに、何かあつたら私が三日月を守る。私の方が派手に外見が変わっているのだから、三日月よりも目立ってしまうことだろうし。私はまだもう何を言われても気にならないから大丈夫だ。

「飛鳥医師、若葉^{ホク}達の新婚旅行のためにも、三日月の皮膚移植の方、よろしく頼む」

「ああ、任せてくれ。三日月、すぐに取り掛かるぞ」

「はい！ よろしくお願いします！」

待ちに待った処置が施されるのだ。三日月は少し興奮気味だった。その処置には私も手伝わせてもらうとして、早く綺麗な顔になった三日月が見たいものである。

処置自体は飛鳥医師の腕もあり、夕方になる前には終わった。麻酔を打たれているとはいえ、顔の表面の皮膚を剥がして移植するという処置は見ていて気持ちのいいものでは無いのだが、処置が進むにつれて三日月の顔が綺麗に変わっていくのは、少し感動してしまう。

整形手術というものに属するのだが、瞬く間に違和感のない顔になっていったのは、見ていて惚れ惚れする手際だった。細かいところはまだ気を配り、普通の者達が見れば髪の色が違うだけでぱっと見は普通の三日月だろう。目の色やら何やらはすぐにはわからないはず。「人工皮膚の量産はこれで可能になった。三日月の場合は少し規模が大きいが、時間をかければ綺麗な肌に戻ることが出来るだろう」

「今は顔の部分だけですから、頭皮との境界線だけはどうしても出来てしまいますが、髪の毛で隠れる範囲ですし、これなら三日月ちゃん

も喜んでくれると思います」

やり切ったという顔の飛鳥医師と蝦尾女史。

事実、三日月の顔は傷一つない綺麗な顔になっている。飛鳥医師の腕もさることながら、移植しながら修復材の代替品を使うことで、元々の肌との癒着を綺麗なものにしていただけのものもある。この修復材、三日月の細胞から作られた一点物なので、馴染まない理由が無い。

この調子で行けば、本当に全ての肌が移植された肌に替わる。綺麗な身体になる日も近いだろう。その第一歩が今始まったのだ。

「三日月、起きれるか？」

麻酔も切れたので、肩を揺すって起こしてやる。修復材を使っているのだから、当然ながら痛みなどなく、人工皮膚はすっかり馴染んでいるために顔を動かすことに支障もない。

「もう……終わったの？」

「ああ、鏡だ。自分の顔を見てみればいい」

ぼんやりと目を覚ましたところに手鏡を渡してやった。きつと驚くことだろう。

身体を起こして、ドキドキしながら自分の顔を確認した。いつもなら顔のど真ん中に走る大きな傷痕にどうしても目が行っていたが、今はそれが一切ない。私のような痣も無い、とても綺麗な顔。

鏡を見ながら自分の顔に震える手で触れた。いつもなら傷のせいで凸凹の出来てしまっていた鼻の上も目の下も、スベスベの肌になっている。

「傷……無くなってる……」

「ああ、綺麗な顔だ。傷があつたなんてわからないくらいにな」

頬を撫でてやる。今まではそうした時点で私の手にも傷の感触があるところだが、勿論私にもスベスベな肌の感触が伝わってくる。繋ぎ目なんて何処にもない、本来こうであつたであろう三日月の顔。

三日月は感極まって泣き出してしまったため、抱きしめて顔を胸に埋める。しゃくり上げるように震えながらも、匂いは歓喜に染まっていた。望んでいたものが手に入ったのだから無理も無い。

「ありがとう、ごいします……これだけでも私……少し明るくなれそ

うです」

「いや、元はと言えば僕の治療が問題だったんだから、ここまでは僕の責任だ。本当にすまなかった。ここまで我慢してくれてありがとう」

これで三日月はいろいろと解放された。新婚旅行にも何の気兼ね無く向かうことも出来るし、人前に出ることに抵抗が無くなった。今までよりも笑顔を多く見せてくれるだろう。それだけでも嬉しいことだ。

まだ身体や腕、脚にも傷は残っているものの、すっかり隠せる場所なのだから痛くも痒くも無い。髪に関してはそこまで抵抗が無いように、傷があるより全然マシと本人すら言う。

施術中でも何度か確認しているが、目を覚ました後にもう一度触診して大丈夫であることを確認。開発に大きく貢献した蝦尾女史も、人工皮膚の出来に大満足なようだ。

「何も無いことは保証します。痛くもならないですし、剥がれるなんて以ての外です。安心して顔を動かしてくれて構いませんからね」

「蝦尾さんも本当にありがとうございます。この御恩は一生忘れません」

「どういたしまして。女の子の顔のことですからね。綺麗になって良かったです。身体の方も順次治していきましようね」

「はー」

満面の笑みで応えた三日月。これを人前に出すことが出来るようになっただけでも嬉しい。

飛鳥医師と蝦尾女史は研究の成果が出せて、三日月は笑顔を取り戻し、私がそれを喜ぶ。全員が嬉しい施術であった。

処置が終わったことをみんなに知らせると、施設の者達総出で喜んでくれた。三日月は少し恥ずかしそうだったものの、顔を隠すことなくみんなに笑みを向け、それを見てまたみんなが喜ぶ。

施設にいる者には、三日月の笑顔を見るのがこれが初めてという者もいるだろう。それでまた歓声上がる程だった。みんなが三日月

のことをずっと心配していたことがよくわかる。

「慰安施設の件、先生に連絡しておく。僕は足が無いから、迎えに来てもらう必要があるからな」

「面倒をかけないように4人同時でいいぞ。あちらで別行動させてくれればいい」

「新婚旅行に相乗りというのはあまり気乗りしないが」

だからと言って、この施設と慰安施設を2往復もしてもらうのは迷惑な気もする。あくまでも鎮守府所属ではないイレギュラーな存在な私達が利用するのだから、向こうの都合も加味しなくては。

「私も構いませんよ。若葉の言う通り、一緒に行つてあちらで別行動で大丈夫です。その方がお迎えにも迷惑がかかりませんよ。私は若葉と相部屋であれば他のことは正直何でもいいので」

「むう……2人がそう言うのならそれでいいが」

「若葉達は新婚旅行、そちらは蝦尾女史への礼なんだからな。むしろ蝦尾女史は若葉達が一緒に行つていいのか？」

「大丈夫ですよ。新婚旅行について発案したのは私ですし、2人の言うことも一理あります。私達の都合で何往復もさせるのは抵抗がありますから」

夫婦水入らずというのは、その慰安施設で出来ればいい。別行動をしていれば自然とそうもなるだろう。

それに、そこで行なわれるのは蝦尾女史のある意味決戦。私達はなるべく邪魔をしたくない。私達の存在が枷にならないようにしたい。別行動ならそれも可能だ。

「わかった。ならそのように先生に伝えておく。準備だけはしておいてくれ」

「了解。こんな機会を与えてくれて感謝する」

「ありがとうございます。楽しませてくれますね」

せっかくの新婚旅行なのだから、楽しい時間を過ごしたいと思う。みんなが用意してくれた機会を有意義に使わせてもらおう。

癒しの場

三日月の顔の傷が治療された翌朝、早速下呂大将の迎えが来た。処置前に話していた新婚旅行の件があつという間に日程が決まり、やると言った翌日には出発することになってしまったのだ。

準備することなんて高が知れており、着替えをちよつと鞆に詰め込む程度。どうせ向こうで行動する時にはいつもの制服だし、眠る時はいつもの浴衣。新婚旅行といつても、慰安施設で2泊3日の温泉旅行だ。大荷物にするわけにはいかない。

「艤装は持っていく必要なんて無いな」

「当たり前だろ。戦いに行くわけじゃ無いんだ」

今までが常在戦闘のような生活だったため、戦闘では無い理由で施設の外に行くというのも初めてのことに。少し空回りしかけたが、楽しい楽しい旅行の始まりに私、若葉も少し昂揚しているのかもしれない。昨日は三日月と一緒に少し眠れなかつたくらいだ。

「わあ、三日月さん綺麗な顔ですね！」

「治療してもらいました。先生達のおかげです」

運転手のまるゆも、治療された三日月の顔を見て喜んでくれた。誰からも祝福される三日月に、私も胸が熱くなる。

治療される前は、その傷に触れること自体が三日月を傷つける禁忌のようにされていたが、治療された今、三日月自身も明るく反応できるようになってきている。知るものがいれば祝福し、知らないものには何があつたかもわからないという最高の状態。

「さあ、ここからそれなりに距離がありますので、すぐに行きましょうか」

下呂大将に促され、車に乗り込む。こういう経験も無いため、やることなすことが全て新鮮だ。

「それじゃあ、少し空ける。好きなように使ってくれ」

「任せて！ 何もないことはわかってるから、いつも通りに過ごすわ！」

飛鳥医師が外出することなんてまず有り得ないわけだが、そうなつ

た場合は最古参である雷が施設を取り纏めることになる。飛鳥医師から頼られ、今まで以上に満面の笑みでサムズアップ。

「新婚旅行、楽しんでくるんじゃぞ」

「いってらっしゃーい！」

みんなが私達の門出を祝福してくれた。これで楽しまなかつたらむしろみんなの期待に答えていないことになってしまう。満足するまで存分に楽しもう。

まるゆ運転の車に揺られて時間が流れ、そろそろ昼食時かなというところで到着したのはかなり大きな施設。団体でも宿泊出来ると聞いていたのでそれなりの規模は予想していたが、思った以上に大きかった。少なくとも自分が知っている建物の中では一番大きい。当たり前だが工廠のようなものは無いが、緊急時のために入渠ドックは完備されているのだとか。

いわゆる観光地的なノリな部分が見受けられる。特にしっかりと整備された散歩道がこの売りらしい。見ていて安らぐ風景ならメンタルケアにも最適だろう。私としてはそういう静かなところを三日月と共に歩くのが一番の楽しみだったりする。

「では、明後日にまた迎えに来ます。それまで楽しんでください」

「ありがとうございます。いい機会ですので、ゆっくり羽を伸ばします」

「ええ、そうしてください」

部屋などの手配も既にしてきているようで、下呂大將は小さく手を振るとさっさと行ってしまった。蝦尾女史に対しては小声で頑張りにさいと応援しているのがわかる。蝦尾女史はそれに対し、小さく頷いた。

施設に入りチケットを見せると、殆ど待つことなく部屋まで案内された。この従業員も艦娘だったので少し驚いたが、大本営直属の慰安施設なのだからそういうこともあるだろう。何らかの理由で戦線から離脱した艦娘が、こういうところで艦娘としての第二の生を見出しているようだった。誰一人として嫌々やっているわけでもないし、

むしろ楽しんでいくくらい。私達と同様に戦いとは別の場所で楽しく生きることが出来ていると言える。

それ以上に驚いたのは、普通と外見の違う私達の姿を見ても一切違和感のある反応をしなかったこと。ここに訪れる者は本当にいろんな者がいるとのこと。それこそ、あらゆる鎮守府から宿泊客が訪れるのだから、痣がある程度、髪色が違う程度では驚きもしないようである。

「本日は他にもお客様がおられますので」

部屋まで案内してくれたのは鳳翔だった。当然、来栖提督のところの鳳翔とは違う。鉄と油の匂いは一切せず、服もここでの従業員制服といったイメージで少し新鮮だった。

この施設は毎日誰かしら利用しているとのことなので、私達以外にも宿泊客がいてもおかしくない。この部屋に来るまでに視界の端に何人か見えたこともあり、今日はそういう日なのだろうと理解する。他人様の日程まで私達に合わせることもなんて出来やしない。

「では、こちらがお部屋になります。ごゆるりとお休みください」

案内されたのは少し高い階の2部屋。片方は私と三日月が使うとして、もう片方は飛鳥医師と蝦尾女史。男女でまさかの相部屋である。これは確実に下呂大将が仕組んだことだろう。

飛鳥医師は最初今までに見たことのない程の慌てようだったが、ここまで来てはもう回避不能。新しい部屋を取ろうにも、今更どうにかしろというのはこの施設に迷惑がかかる。瞬時にいろいろと考えた結果、飛鳥医師は蝦尾女史との相部屋を承諾。この事態に蝦尾女史は苦笑するしかないようである。

「じゃあ、ここから別行動だ。若葉は三日月と楽しませてもらう」

「あ、ああ。せっかくの新婚旅行だ。僕らのことは忘れて楽しんでくれ」

「そちらもな」

あちらはあちらで頑張ってもらおうとして、私達は私達で楽しませてもらうことにしよう。心の中で蝦尾女史にエールを送りながら、私達は用意された部屋に入った。

部屋は施設での自室よりも大分大きく、のんびりと寛げる空間。和室なのもポイントが高い。布団は自分で敷くタイプのようだ。

隣の部屋の音が聞こえない辺り、防音も完璧。ここが慰安施設なのだから、何かしら喧しくなってしまうことだってあり得る。それを回避するために、そういうところには気を使われているようだ。

「若葉、すごいよここからの風景」

着替えの入った鞆を置いた後、三日月に言われて外を見てみると、綺麗な海が展望出来た。いつもは戦いの場だった海も、こういう場では何とも素晴らしい風景になる。やはり艦娘は海とは切っても切れない関係のようで、海を見ていると心が落ち着いてくるというものである。

これは夜景も期待できるといふもの。今まではトラウマを刺激されるだけだった夜の海も、今や楽しむことが出来る程になった。明るいうちは散歩に出掛けて、夜は部屋から夜の海を眺める。夜の散歩というのもいいかもしれない。何という優雅な休日なのだろう。新婚旅行にはうってつけ。

「ここに来ることが出来てよかったな」

「うん、本当に。先生達に感謝ね」

ここからは飛鳥医師と蝦尾女史のことも考えずに行動することになる。食事なども完全に別行動。何でも、慰安施設の食堂で自由に食べられるそうなので、昼食は適当な時間にそこに行けば良しということのようだ。温泉もいつでも入ることが出来るとのことなので、頃合いを見て適当に向かう。

やりたい時にやりたいことをやるという、何にも縛られない自由な時間がほぼ丸二日も手に入ってしまった。この貴重な時間を、三日月と共に有意義なものにしよう。

食堂で適当に昼食を摂った後、噂の散歩道へと向かった。売りにしているだけあり、看板でしっかりと道標が作られており、簡単に行くことが出来る。

「これは……すごいな」

「うん、綺麗……」

そこには、季節の花が植えられた花畑。少し遠くには先程部屋で見た海もある。ベンチなども設置されているため、疲れたり風景を眺めたかったら、そこに腰掛ければいい。

今日は天気もいい。雲一つない晴天で気温も程よく、散歩日和と言える。こんな時に三日月と一緒にこの散歩道を歩けるのは、心が躍るようだった。三日月からも嬉しい楽しいという感情の匂いが全く尽きずに漂ってくる。それを感じ取り、私は上乘せするように楽しむ。「施設じゃ見られないもんね。こういうの」

「そうだな」

色とりどりの花を見ているだけで心が洗われるようだった。海にまつわる艦娘だからこそ、逆に陸のものに惹かれるのかもしれない。大本営もその辺りがわかっていてこういう施設を作っているのかもしれない。これなら誰だってメンタルケアになりそうだ。

私は匂いでも楽しめる。これなら嗅覚が私のように強くなくても芳しい花の香りに包まれていることだろう。火薬と潮風の匂いばかりの戦場とは雲泥の差。目で楽しみ鼻で楽しめる。慰安施設としては最高の場所だ。

「夜はライトアップもあるようだな。夕食を食べた後にまた来ようか」

「そうだね。また雰囲気が違って楽しそう」

ここまで来ると大本営運営とは思えなくなってくる。民間の娯楽施設ではないかと勘繰ってしまうほど。それ程に素晴らしい施設だ。

「このムードの中でなら、蝦尾さんも……」

「ああ、きつと上手く行くさ。みんなの後押しもあるからな」

こんないい雰囲気の場所なら、蝦尾女史の一世一代の大勝負もきつと上手く行くだろう。飛鳥医師がとんでもない朴念仁なら話は変わるが、今までで少しづつ距離を詰めているし、少なからず飛鳥医師だって蝦尾女史の気持ちを理解し始めているのだから。

新婚旅行という形で私達は別行動をとっているが、むしろあちらの状況から見てみれば私達はそこにはいけない存在。お互いを尊

重し合つての別行動である。蝦尾女史の邪魔なんてしない。

三日月と散歩道を歩いていると、ちよくちよくと他の艦娘達とすれ違う。施設にはいないタイプの艦娘なのでそれが何者かはわからないのだが。少し深海棲艦の匂いが纏わり付いているため、激戦区から慰安に来た者達なのかなと思う。

身体に匂いが付く程なのだから、余程ハードな戦いをしている鎮守府出身なのだろうと思う。私達の住む施設は中立区だから、深海棲艦との戦い自体が無いわけだが、世の中にはそういうところもあると実感する。

「他に客がいると言っていたが、確かにちよくちよく見かけるな」

「ね。でも、私達が変な目で見られないからよかつたかな」

すれ違う程までに近付かれても、会釈くらいで後ろ指指されるようなことは無かつた。視線も私の痣をチラツツと見られる程度。まるでこういうタイプを何度も見ているような反応だった気がする。

少なくとも、来栖鎮守府や有明鎮守府では、特異な変化をしている艦娘というのは見ていない。あの慣れ方からして、仲間と同じようなのがあるという匂いだ。

「……………ん!?!」

そんな中だった。こういう場ではまず確実に嗅ぐことがない匂いを感じ取った。花の匂いに紛れて、かなり強烈な深海棲艦の匂いを感じ取ったのである。

この匂いを知ったことで途端に警戒態勢に。艦装が無いのだから戦うことは出来ないが、リミッターを外せば格闘戦くらいなら可能。代わりに身体が壊れかねないが、三日月を守らなくては。

「ど、どうしたの若葉」

「深海棲艦の匂いだ。しかもかなり強い。セスヤリコとは比べ物にならないぞ」

ここは開けた花畑の真ん中だ。周囲を見回せばこの匂いの持ち主がわかるはず。キヨロキヨロと田舎者のように観察したら、その存在はすぐにわかつた。

遠くにいるため顔はわからないが、数人の人影。見た目は私達と同じ駆逐艦ほどのサイズ。遠目でも私の知っている者も見つけた。あれは……春風と初霜では無いだろうか。

すると、匂いだけではなくこちらを見ている視線まで感じた。あちらが私達の存在に気付いたということ。いや、これは最初からわかっていた。私達が近付いたことでこちらに興味を持ったかのような、そんな感覚。

「若葉、もしかして……私達と同じような人なんじゃない……？」

「飛鳥医師のような治療が出来る奴が他にもいると？」

「ううん、シロクロさん達みたいに、鎮守府の味方をしてくれる協力者な人達みたいなの」

確かに、施設に4人もいるのだから、そういう深海棲艦が他にいてもおかしくないか。慰安施設に来ることが出来るくらいなのだから、あちらもこちらと同じで大本営公認の深海棲艦ということか。

「敵意は感じない。おそらく興味だ」

「私達もちよつとおかしな存在だもんね」

艦娘でも深海棲艦でも無い存在に昇華してしまった私達だからこそ、そういうものがわかる存在には得体の知れないものというイメージになるのだろう。なら、この匂いの持ち主は、シロのような直感的な嗅覚が鋭いのだろうか。

などと話している内にその匂いの持ち主がこちらに近付いてくることがわかる。ただでさえ強い匂いが、さらに強くなった。何が起きてもいいように三日月を抱き寄せる。敵意が無くても、何が起こるかわからない。

「あの、怖がらせてしまいましたか？ 私達の気配を察することが出来る人がここにいるだなんて思っていなくて、配慮が足りませんでしたか」

やけに丁寧に私達に話しかけてきたその何者かは、誰よりも深海の匂いが濃厚な1人の駆逐艦らしき少女。着ているものが色を変えた靄の制服だったため、うちの深海棲艦のように深海棲艦としての服ではなく仲間としての服を着せられているだけなのかもしれない。

「いや、若葉達^{ホク}が勝手に警戒しただけだ。知り合いに協力者の深海棲艦がいるんだから、お前達のような存在がいてもおかしくない」

「ああ、もしかして貴女達が噂の医療施設の方々ですか。司令官から話を聞きました」

私達の存在は知れ渡っているらしい。隠棲しているはずなのに、あの事件のせいで妙に名が広まってしまったようだ。

「一度お会いしてみたかったです。私達と近しい境遇となつてしまつた艦娘、若葉さん」

「お前は……」

「あ、ごめんなさい。こちらから名乗らなくてはいけないのに」

「ホンと咳払いした後、素性を話してくれる。」

「私は朝潮。朝潮型1番艦であり、今は中枢棲姫亜種でもある、変質した元艦娘です」

欠陥との邂逅

慰安施設に新婚旅行としてやってきた私、若葉と三日月は、散歩道で見知らぬ艦娘、いや、深海棲艦と出会った。私達の施設には協力者として深海棲艦が滞在しているので苦は無いのだが、こういう場でお出會うのは流石に驚いてしまう。

その深海棲艦は、元艦娘と名乗った朝潮。見た目も匂いもどう見ても深海棲艦ではあるのだが、元々は艦娘だったという。私達が言えた話では無いのだが、どんなことがあれば艦娘が深海棲艦へと変わってしまうのだろうか。

「若葉達のことを知っているのか？」

「はい、鎮守府ではとても大きな話題になっていますよ。とある鎮守府と医療施設が共同で叛乱を起こした艦娘を討伐したと。その際に、医療施設で治療された艦娘、若葉さんの話も聞いています」

詳細では無いようだが、大まかな筋は伝わっているらしい。私の存在も、今や各鎮守府に知れ渡るようなものになってしまっているようだ。

確かに今回の事件は、私が飛鳥医師に命を救ってもらったところから始まる。ある意味私の存在無くしては語り出せないようなものだ。ついでに初代にトドメを刺したのも私だし。

「若葉さんのことは、お医者様の治療を受け、一命を取り留めたものの変質してしまい、その力を駆使して最前線で戦い続けた英雄と聞いています」

「それは言い過ぎだ」

英雄と言われたことで、三日月も隣でクスクス笑い出してしまった。それは流石に私には重すぎる名誉。私一人では戦えなかったし、そもそも戦う力を得る手段すら無かった。何もかもが仲間達のおかげだ。私が英雄なら全員が英雄になる。

誰がそこまで話を大きくしたのだろうかと考えたが、施設を成り立たせるために下呂大将か新提督が少し話を盛ったのでは無いかと思う。それでもしなければ、私達は大本営に出頭しなくてはならなかったと

かあるかもしれない。何せ謎の存在なのだから。

「若葉達は楽しく生きるために死に物狂いで戦ってきただけだ。力の源は怒りと憎しみだしな。褒められるところなんてどこにも無い」

「私も似たようなものですからわかりますよ」

朝潮もそういうものらしい。艦娘が負の感情により深海棲艦となると言われると、思い出すのがやはり施設にいる翔鶴である。何らかの改造を施された後に死の恐怖による覚醒で身体が変化したのだが、朝潮もその類なのだろうか。

「そちらはどういう経緯でそうなったんだ」

「そっか、アンタ達がいるところは鎮守府じゃないから、うちの鎮守府のことは知らないのね」

朝潮の隣、同じ制服を着た艦娘が少し前に出る。朝潮が友好的だからか、気の強そうな奴ではあるが敵対の意思は見当たらない。見た目より薄い深海の匂いが気になるところではあるが、あちらにはあちらの事情があるのだろう。

とはいえ、私達のことを警戒しているのは確かである。自分達も相当だとは思うが、あちらから見れば私達は別物の異形。警戒しないわけがない。

「田舎者ですまない」

「別に責めてるわけじゃないわ。ああ、私は霞。この人の妹ね」

やはり朝潮の妹だった。なら霞とも姉妹か。

「ちよつと前に北端事変っていう結構有名になった事件があったのよ。その時の敵が技術者の深海棲艦だったせいで、姉さんや私も含めて何人もアイツに改造されて艦娘やめさせられたの。私や初霜は半分深海棲艦にされてる」

「………壮絶だな。酷い戦いだ」

「アンタもどっこいどっこいだと思うけど」

技術者の深海棲艦とはまたよくわからない敵だ。ある意味あのテロリスト共が深海棲艦になったと思えばいいか。厄介極まりない。

そんな戦いを終わらせ、まともな艦娘では無くなってしまっても、こうも明るく元気に振る舞えるのは素晴らしいことだと思う。楽し

く生きていくということがよくわかるというものだ。

そして次は気になるところ。遠目で見てもその存在が確認出来た春風と初霜である。初霜も額の右側に角が生えていたり、袖を捲り上げた右腕に痛々しい痣と傷痕が残っているため、戦いの中で色々あったのだと思うのだが、霞の発言で後付けで改造されたことがわかったから納得が行く。

だが、それでも春風は特に異質だった。この春風も深海棲艦の匂いが薄くだがする。見た目は他の面々と違って殆ど変わっていないため、私達のよく知る大淀のような状況なのか。身体にやたら馴染んでいるというか。

さらには、私の知っている春風は、桜色の振袖に緋袴、それと帯刀だったが、この春風は朝潮と揃いの制服に黒い着物を羽織るという全く違うスタイル。当たり前だが刀も持っていない。

「あの、わたくしの顔に何か」

私の視線に過敏に反応した。もしかしたらこの春風も三日月と同じように他人の視線に敏感なのかもしれない。申し訳ないことをしてしまった。

「気分を害したのならすまない。見た目は普通なのに深海の匂いを感じたからどうしても違和感を覚えてしまったんだ」

「わたくしは先天性半深海棲艦というものです。霞さんや初霜さんは後天性ですが、わたくしは生まれた時から半分混ざっているのです」
そんな存在は初めて聞いた。医療施設にいても知らない症例である。私と三日月のような混ざり込み方でも無いようなので、蝦尾女史の例の薬でも治療は難しいだろう。

改めて世の中は広いと感じる。私達の知らないことがまだまだ沢山ある。

「ちなみにその服装は……」

「わたくしは名譽朝潮型、朝潮御姉様の妹分を名乗らせていただいております故、このような出で立ちとなっております」

三日月の疑問に答えた春風。正直予想外の答えである。

妹の次は妹分。何やら込み入った事情がありそうである。艦種は

同じでも型が違うのにここまで慕っているのだから、過去に何かあったのだろうか。

「そして私は朝潮さんの嫁の初霜……って、若葉ならわかりますよね」
「ああ。嫁かどうかはさておき、若葉ボクの妹だからな。それに、うちの施設にも初霜はいるんだ。いろいろあるが」

「そうなんだ。ちよつと会ってみたいかも」

こちらの初霜はこれこれどこかおかしくなっているような気がしないでもない。朝潮にべったりくっついていては、私と三日月の関係に似ている。朝潮から嫌そうな匂いがしないので、夫婦という関係は間違っていないそうだが、初霜がべったりだと霞と春風が嫉妬の匂いを沸き立たせるので、どんな関係かはおおよそ理解出来た。この3人は朝潮の取り合いをしているのだろう。夫婦といってもまだあまり認められていないのか。

「はいはい、そんなにくっついていたらかあさ……コホン、姉さんが歩きづらいでしょうが」

それを引き剥がすのが、朝潮の取り巻きの最後の1人。こちらも朝潮と同じ制服で、春風のように見た目に深海棲艦の要素が無いのに深海の匂いを漂わせている。春風が説明してくれた通り、先天性の半深海棲艦というヤツか。

「満潮よ。この人の妹、コレの姉」

「コレとは何よミチ姉」

「アンタ私にだけはホント態度デカイわよね」

満潮はこの中でも一番冷静に見える。何処か3人とは違い朝潮にはべったりではないが、朝潮に対しては絶対的な信頼を寄せているような匂い。姉妹というよりは親子のような感情に思えるのは気のせいだろうか。そういえばさつき何か口に出しそうにしていたようだが。

「私達は鎮守府総出で慰安旅行という形でここに来たんです。若葉さんと三日月さんは何故ここに？」

「若葉ボク達は新婚旅行だ」

「し、新婚旅行、ですか？」

流石に驚きを隠さない朝潮。艦娘同士の結婚という概念がこちらには無いようである。そのため、三日月と揃いの指輪を嵌めていることを見せつけた。これに一番反応したのは朝潮の嫁を自称する初霜だったのは言うまでもない。

明石が作ってくれた結婚指輪は、勿論毎日身に付けている。何の意味もない指輪だからこそ、私達の深い絆を表してくれているからだ。これを見るだけでも心が穏やかになる。

「戦いの最中にカッコカリをして、戦いが終わった後に本当の式を挙げたんだ。若葉^{ホク}達は愛し合ってるからな」

堂々と言う。別にどう思われようが構わない。そもそも、初霜が嫁と言っているくらいなのだから、同性婚程度で偏見を持つようなタイプには見えない。

「素晴らしいと思います。想い合う2人はきつと幸せなんでしょうね」

「勿論だとも。なあ、三日月？」

「うん、楽しく生きていられるから、幸せよ」

少し顔を赤らめるが、自分の意思をハッキリと口に出してくれたことに、私は内心大喜びである。

「新婚旅行というのなら、夫婦水入らずの時間を邪魔してはいけませんね。私達はこれで」

「気を遣ってもらってすまない」

「いえいえ。この慰安施設はいいところですから、ゆっくり楽しんでください」

私達の時間を大切にしてくれるのか、挨拶そこそこに会話を切り上げてくれた。この強すぎる深海の匂いの持ち主が、ここまで心優しい者であるということがわかっただけでも安心出来る。

去っていく後ろ姿からも強者の佇まいを感じる。私達とは比べ物にならない修羅場を越えてきているのだろう。敵対したら絶対に勝てないと感じるほどに。

「……世の中は広いな」

「うん、私もそう思った」

鎮守府総出ということとは、ああいう少し変わった者達がまだまだいるということなのだろう。霞は何人も改造されたと言っていたし、意識して探せば朝潮の仲間達は見つけることが出来るかもしれない。妙な匂いを感じた場合は、基本的に朝潮の仲間だと思えば良さそうだ。

私の痣を見ても何も言わなかったのも理解出来た。あれを見慣れているのなら私達なんて似たようなものだ。

散歩道で楽しい時間を過ごした後そのまま夕食のために食堂に向かうと、飛鳥医師と蝦尾女史も同じタイミングで食事をしていた。匂いから鑑みるに、まだ蝦尾女史は一気に距離を詰めるようなことはしていないようである。とはいえ、飛鳥医師は相部屋を極端に嫌がったようではなく、今はちゃんと受け入れている様子。

食事する2人も和やかな雰囲気で、談笑しながらだった。遠目で見るとデートのようである。蝦尾女史はそれを望んでいるはずなので、今はいい雰囲気と言えるだろう。

「邪魔をしないように離れて食べるか」

「そうね。あの2人にはここでいい仲になってほしいもの」

気付かれないようにそっと離れつつ、私達も食事を始める。この料理は雷の手料理と甲乙つけがたい極上のもの。さすが慰安施設、五感全てを癒してくれる。

食堂にも朝潮の仲間達と思われる者が何人もいた。一度わかってしまえば疑問にも思わないものである。

本来とは髪の色が違う者もいれば、どう見ても深海棲艦である者まである。私達の施設の延長線上と思えるような空間になっており、アウェー感はない。普通のものならプレッシャーを感じるかもしれないが、私達的にはより心が落ち着けるような場所になっていた。

「お昼の時はこんなにいなかったよね」

「だな。若葉^{ボク}達が少し遅かったというのものもあるが」

食べている時に朝潮が入ってくるのも見えて小さく手を振る。同じ施設にいるのだから顔を合わせることもあるだろう。散歩道なら

まだしも、食堂という共有の場なのだから頻度も高くなる。

相変わらず先程の面々を侍らせているようだが、今回は他の者も近くにいた。車椅子の戦艦や、恭しく付き従う水上機母艦、深海棲艦の子供達など、あまりに多種多様。朝潮の通ってきた道が波瀾万丈であることがよくわかる。

「こういう場所でも何も言われないんだから、朝潮達の巻き込まれた事件は本当に有名なんだな」

「だね。ちよつと助かつちやつたね」

「ああ、嫌な目で見られないのはありがたい」

これだと、ここの最大の売りである温泉の方でも誰かしらにかち合
いそうだ。

顔の傷が治療されたことで外出に抵抗は無くなったものの、まだ首
から下は傷だらけの三日月。風呂というどうしても裸体を晒す場所
は、当然ながら抵抗がある。

だが、今ここにいる者達は、全員がそういうことに理解ある者ばか
りだ。私の痣を見ても一切動じないのだから、三日月の傷を見ても何
も言わないはず。それがあってか、三日月も温泉には少し乗り気にな
っている。

「何度も言うみたいだけど、ここに来れて良かったね」

「ああ、本当にな。ああいう予期せぬ出会いもあったが、おかげでさら
に過ごしやすくなった。緊張感も無くなったしな」

「うん、楽しめるところは全部楽しもうね」

ニツコリ笑う三日月にときめく。しがらみが無くなったことで心
の底からの笑みを見せてくれるのが本当に嬉しい。

新婚旅行はまだ始まったばかりだ。明日はまるっとこの慰安施設
にいることになるのだから、出来ることを全てやってしまおう。三日
月といい思い出を作るために。

女史の決意

夕食後はライトアップされるといふ散歩道にまたやつてきた。薄暗がりの中で花畑が照らされ、なんとも神秘的な空気を作り出している。昼とはまた違う素晴らしさだった。

心洗われる穏やかな風景が一変した、幻想的な風景を目の当たりにし、三日月も興奮気味。昼よりもテンションが上がっているようにも思える。私、若葉もこんな絶景に出会えるとは思っても見なかったため、昂揚している。

「昼もよかったが、夜もいいな」

「うん。私、夜の方が好きかも」

昼間と同じ道を歩いているはずなのにまるで違う。夜はロマンチックな雰囲気が強く、私達のような関係には愛情が高まるような空気を醸し出している。

手を繋いで歩くだけで、お互いに昂っていくような感覚。こんな中で愛を囁き合う輩も多くいそう。私達がそうだし。

「お互い、夜は嫌いだったはずなんだけどな」

「こんな夜なら好きになれるよ」

嵐の夜は未だにトラウマが蘇りかけるが、こんなにも静かで幻想的な夜なら大歓迎。三日月となら尚更だ。ずっとここにいたいと思えるほどである。

匂いも何処となく昼とは違うようにも思えた。太陽の匂いが無くなり、花の匂いがより強く感じる。それがまた気持ちいい。

「違う季節も見てみたい。植えられている花も変わるんだろう」

「そうだね。どんな感じになるんだろう」

「きつと綺麗なんだろうな。出来ればまた一緒に来よう」

私達のような生き方をしていると、ここに来るためのチケットを手に入れることの方が至難の技だとは思いますが、望むのは自由だ。二度と来れないなんて思うのは無粋というものである。

お互い、自然と顔が綻んだ。まだ初日ではあるが、最高の時間を満喫出来ていると思う。まだまだ時間はある。やれることは全てやつ

ていこう。

建屋に戻り、着替えを持って今度は風呂へ。一応あまり人がいなそうなのタイミングを狙った。朝潮の所属する鎮守府の者がいたとしても嫌な目で見られることは無いが、それでも三日月はそういうことを気にするし、私だって多少は気になる。

狙いは完璧で、温泉は貸し切り状態のようなものだった。当然ながら男風呂と女風呂は分けられているわけだが、脱衣場にも誰もおらず、既に誰かが入っている痕跡も無い。ありがたい限りだ。

服を手早く脱いで、すぐに温泉へ。湯船に入ってしまったえば身体の傷もあまり見えなくなる。ここの温泉は効能やら何やらがあるようで、薄く濁った湯のため都合がいい。

「施設のお風呂と全然違う」

「来栖鎮守府の大浴場とも違うな」

湯船でいつも以上にまったりしてしまう。施設の風呂でも脚を伸ばすことくらいは出来るし、来栖鎮守府の大浴場は相当広い風呂だったが、ここはそういうレベルでは無い。そもそも天井が無いような露天の温泉のため、開放感が段違い。空を見上げれば月見が出来る程である。気持ち良さが割増になっているように思える。

施設では味わえない快感に、私も三日月も顔が緩んでいく。身体も普段以上にゆるゆる。力が抜け、温泉の効能を全身全霊に受け入れている。

「ふああ……すごいまったりしちゃう」

「溺れるなよ」

「わかっているよう」

蕩けて沈んでいきそうなくらいだったので、念のため腕を掴んで支えておく。慰安施設で溺死とか笑えない。いくら神の御業を使える医者が一緒にいると言っても、そんなくだらないことに手を煩わせるわけにはいかないし。

そもそも新婚旅行で事件なんて起こしてもらいたくないのだ。身内は勿論、他人でも。心穏やかに全てを終わらせて、笑顔で帰りたい。

「あ、2人も来ていたんですね」

そこにちょうど蝦尾女史も温泉にやってきた。裸の付き合いは施設でも多少はしているため、当たり前だが三日月に抵抗は無い。飛鳥医師にすら牙を剥いていた最初の頃から考えると、随分と進歩したものである。

蕩けている三日月の隣に腰掛け、もう片方の腕を支えてくれた。蝦尾女史から見ても少し危険だと感じたようである。

「私も先生もゆっくりさせてもらっています。ここ、マッサージの施設まであるんですよ」

「へえ、提督用か。本当にいろいろな癒しがあるんだな」

「先生は身体中バキバキだったらしくて、按摩さんがビックリしていました」

休息を怠っているせいで身体がそれだけおかしなことになっているわけだ。戦いが終わった後にちゃんと寝ているのは知っているが、それでも今までの積み重ねで身体は大分悲惨なことになっていたようで、マッサージは最終的に整骨のレベルになったらしい。医者の不養生ではなからうか。

「今後は私も独学ですがマッサージを覚えようかなと」

「いいと思う。自然と身体に触れられる機会が作れるからな」

蝦尾女史としては意識していなかったとは思いう。私の発言で若干動きが止まった後、恥ずかしそうに身悶えた。マッサージなんて至るところをベタベタ触ることが出来る、許されるボディタッチではないか。好意を持つ相手なら余計に力が入るだろうに。

「蝦尾さん、この旅行中に決めるんですよね」

三日月からの割と不躰な質問に、耳まで真っ赤にしながらも小さく頷く。

「夜の散歩道、とてもロマンチックでした。若葉と歩いたんですが、息を呑むほど幻想的で、そういう場には持ってこいだと思います」

「み、三日月ちゃん……」

「応援してますよ。私だけじゃないです。みんなが応援していますから」

三日月の言う通り、施設の者全員が応援しているのだ。まさかの相部屋だって、下呂大將が仕込んだに決まっている。この気持ちを成就させるために。多分下呂大將は、どちらかと言えば飛鳥医師のことを考えてのことに思えるが。

プレッシャーをかけるわけではないのだが、自分でも望んでこの機会を勝ち取ったのだから、ここで決めてもらわなくてはむしろ困る。出来る限りのサポートをしたい。三日月が夜の散歩道のことを口にしたのも、その時を最善の場所で迎えることが出来るようにするために伝えたに過ぎない。

「私、頑張ります。皆さんの応援を背に受けて、必ずやこの気持ちを先生に伝えます」

「その意気です」

三日月と蝦尾女史がガツチリ握手。既に成就している三日月から、今からその時を迎える蝦尾女史にバトンが渡されたようだった。

ここからは恋バナは一旦置いておいて、温泉を満喫する。蝦尾女史が調べたところ、何でもこの温泉は美容にも効くらしく、念入りに肌に揉み込んでいるようだった。

こう言ったところで万全の態勢を整え、決戦に備える。女の戦いはこういうところからも始まっているのである。

「蝦尾さん、肌綺麗ですよね……」

「体組織というものを研究している以上、自分の体組織も万全にしたいですからね。万が一人間の細胞が欲しいとなったときに自分のものが使えるように」

「理由がそこに繋がるんだな」

三日月の言う通り、蝦尾女史は同性の私達から見ても綺麗なタイプである。全ては研究のためのようだが、飛鳥医師のように医療と研究以外がズボラなわけでもなく、キチンとした生活による健康体の維持に気を付けているようだ。

そういうところも飛鳥医師とお似合いではなからうか。生活の基礎が正反対のため、噛み合いやすそう。

「几帳面とか潔癖症とかそういうものではないんですが、なるべく綺麗

麗に健康でいようと考えています。無茶はせず、睡眠不足も控えていますね」

「いいと思う。飛鳥医師に爪の垢を煎じて飲ませてやりたい」

ピンピンしているようでいて、中身が相当やられていたというのがマッサージで判明した飛鳥医師も、蝦尾女史くらい健康的に暮らした方がいいのではなからうか。そういうところも蝦尾女史がサポートしてあげるくらいの気概が良さそうだ。

「あの戦いの時は徹夜作業も多かったですが、今は比較的のんびりですから、身体のケアは怠りません。2人にもいろいろと教えましょうか?」

「是非。特に身体の傷も消えた後はお願ひします」

「そうですね。人工皮膚が万全としても、自分でケア出来れば尚のこといいと思いますからね」

女子力的な話になると私は少し置いてけぼりになるが、三日月が楽しそうなので良し。

蝦尾女史と笑い合って戦いとは全く関係ない話をしているというだけで、私は嬉しかったりする。その姿を見ていると、自然と笑みが溢れた。

温泉から上がると、脱衣所には多少人が集まっていた。人がいないタイミングを考えたつもりだったが、蝦尾女史と共に長風呂をしてみたら少しか少しかだけタイミングがズレてしまったようである。

匂いからして朝潮と同じ鎮守府の者達。私達の身体を見てもまるで反応しなかったことでもわかる。それでも三日月は私の陰に隠れるように逃げ込んだ。どうしても見られたくないというのはわかる。

「やっぱり人が多いところは慣れないね……」

「仕方ないさ。すぐに着替えよう……っ」

ここにいる全員を眺めている視線を感じた気がした。遠いからか匂いまでは判断出来なかったが、明らかに奇異のものを見る眼だった。誰だと探した時にはもうその視線はわからなくなった。そもそも脱衣所の外にいたようだった。

三日月がそれに気付いた様子は無いが、気付いたら取り乱しそうなものでもある。知らないなら知らない方がいい。

「今のは……」

「若葉？」

「いや、何でもない。着替えて部屋に戻ろう」

ここにいと三日月が嫌な思いをするかもしれない。今のことは胸に秘めておいて、楽しい新婚旅行の続きをしよう。夜はまだ長いし、明日もある。楽しんで楽しんで、楽しみ尽くさなくては。

「あ、どうも、若葉さんと三日月さん」

「ああ……朝潮、また会ったな」

そそくさと着替えているうちに、朝潮に話しかけられる。あちらも同じタイミングで温泉を楽しもうとしていたようである。まだ脱ぐ前のようだから今来たばかりというところか。

なら、さっきの視線の持ち主についてわかるかもしれない。すぐになくなったのだから、ここの出入り口の近くにいたと思う。朝潮とすれ違った可能性も高い。

「朝潮、1つ聞きたいんだが」

「はい、何でしょう」

「今この施設には、私達と朝潮の鎮守府の奴ら以外に宿泊している奴はいるんだろうか」

あちらは私達よりも先にこの施設に到着しているはず。ならば、朝潮達の知らない者がここにいるのなら知っていそうだ。

「いますね。私の知らない反応は5人。人間が2人と艦娘が3人です」

「よ、よくそんな詳細にわかるな」

「ああ、私頭の中に電探が入ってるんですよ。この施設全域に反応が届くので、誰が何処にいるかはすぐにわかります」

今とんでもないことを言った気がする。頭の中に電探とか意味がわからない。施設全域が監視出来るということか。私達の居場所も、最悪な場合何をしているかも筒抜けということになるのでは。

ともかく、知らない反応のうち、人間1人というのは飛鳥医師だろ

う。ならばもう一人、私達的には未知の人間がいると。先程の視線はその人間のものなのだろうか、それとも未知の艦娘のものなのだろうか。

疑い過ぎるのは良くない。私の気のせいというのも普通にある。ここにいるのだから、私達のように慰安旅行として滞在しているだけの可能性だって高い。

「それがどうしました?」

「いや、何でもない。この温泉はいいぞ、堪能してくれ」

「わかりました。ありがとうございます」

三日月も着替え終わったようだし、私もすぐに着替え終わるため、朝潮との会話はそこそこに、私達は部屋に戻る。蝦尾女史と一緒に入りに来た飛鳥医師と待ち合わせをしているらしく、ここからはまた別行動。

「若葉、さっき朝潮さんに聞いたのは……?」

突然の私の行動に少し困惑している三日月。奇異の目があったことは伏せつつ、簡単に説明しておく。嘘をつくわけではなく、三日月を思っ言葉を取捨選択する。

「いや、ちよつとな。朝潮達とはまた違う匂いを感じたんだ。どういう相手かもわからないし、なるべくなら避けた方がいいかと思っとな」

「なるほどね……うん、そうしてくれると嬉しい。朝潮さん達は私達みたいなものにもすぐく理解が深いからいいけど、他の人はまだわからないし……」

少しだけ落ち込んでしまった。せつかくの新婚旅行なのだから、そういうことにあまり気を使いたくない。三日月には気を楽しにしてもらって、私がかどうか出来るところはどうかしよう。

それに、蝦尾女史はこの旅行の中で一世一代の大勝負があるのだ。それを邪魔するわけにもいかないし、邪魔されるわけにもいかない。

「三日月は若葉が守るから心配するな。楽しもう」

「うん、そうだね。私も若葉と一緒に楽しむよ」

何も気にしなくていい。私達はここに楽しむために来たのだ。ま

い。だまだ始まったばかりなのだから、余計なことに気を使っていられない。

恋の戦い

私、若葉と三日月の新婚旅行は最初の夜を迎える。ここに到着してから満足することばかりで、本当に有意義な時間を過ごしている。合間に他鎮守府の朝潮と出会ったが、私達のような継ぎ接ぎを見ても何も動揺しないような過酷な事件を乗り越えてきたようなので、悪いことは今のところないと言える。

ただ、温泉から出た時に感じた奇異なものを見る視線だけは気になる。それだけは少し警戒しておくことにする。私はともかく、三日月に辛い思いをしてもらいたくない。

温泉が終われば後は寝るだけ。布団はちゃんと敷いておいて、その前にまずは部屋から夜景を楽しむ。この部屋に通されてすぐに外を見て夜も良さそうだと思ったが、まさに思った通りだった。展望できる海は暗くなってしまうているが、部屋からでも花畑のライトアップが見え、煌びやかに輝いている。あの中にも幻想的だったが、遠目に見ても素晴らしい。

「綺麗……」

「だな」

三日月も目を輝かせてそれを眺めていた。2人で窓際に立ち、身を寄せ合ってそれを見ているだけでも、とてもいい雰囲気になる。一緒に歩いて堪能するのもいいが、こうやってただ眺めるだけでも楽しい。

窓際には椅子とテーブルまで用意されており、ここで夜空を見ながら晩酌というのも出来る。私達は酒を飲まないため、食堂から貰ってきたジュースで乾杯。至れり尽くせり。

「何回言ってるか忘れちゃったけど、ここに来れて良かったね」

「ああ、本当にな」

身を寄せ合っているのを越え、抱き寄せた。三日月も私に体重を預け、より温もりを感じるようにしてお互いに昂らせていく。施設にいる時よりも興奮しているようにも思えた。

この慰安施設に来てから、三日月はずっと笑みを浮かべ続けている

る。全く見ず知らずの相手である朝潮達と出会った時も、嫌悪感は一切露わにしなかったし、負の感情自体が湧き上がらなかつたように思える。風呂で対面しても私を盾にした程度で終わったくらいだし。

三日月は本当に穏やかになったものだ。コンプレックスの一部が取り除かれたことでこうも明るくなれる。これが本来の三日月なのだ。

「明日はどうしようか」

「施設の中もいろいろ見て回ってみる？ ほら、蝦尾さんがマツサージの施設があるって言ってたくらいだし、もしかしたらいろいろあるかも」

「そうだな。それに、またあの散歩道を歩いてもいい。三日月となら何処に行っても楽しいだろう」

まだ施設の中は食堂と温泉にしか行っていない。マツサージなんて蝦尾女史に聞くまで存在すら知らなかつた。娯楽というものはあまり無いと思うが、心休まる場所というのは室内でも何かしらありそうだ。

疲れたのならこの部屋に戻ってまったり過ごしてもいい。布団はいつそ敷いたままでもいいかもしれない。どうせ一式しか出さないのでから、万が一汚れても、もう一式を出せばどうとでもなる。

「あ、若葉、あれって……」

「……飛鳥医師と蝦尾女史だな」

ライトアップされているおかげで、少し遠くても散歩道を歩いている者の姿はこちらからよく見えた。そして私達が捉えた姿は、どう見ても飛鳥医師と蝦尾女史。温泉の後に待ち合わせしていたようだが、あの場所に向かったようだ。

温泉の後だからか2人とも私達と同じような浴衣。温泉宿だからこの時間はそういう服装のものも多いため、悪目立ちするようなこともない。

ここからでは言葉も匂いもわかるわけがない。それにわかつたところで私達はその場に行くのは無粋だ。あれは蝦尾女史の決戦。あの場でへたれないことを祈りながら、気付かれないようにここで見守

るしかない。

強いて言うなら、あの場に何者かが乱入しないことを確認する程度だが、幸いなことに今あの場所にいるのは2人だけだ。絶好のチャンスと言えぬ。

「若葉達はここから見守るしか無いな」

「うん。応援しか出来ないよね」

私達が見える範囲は花畑全体では無いものの、一番大きな広場は少し遠いが見える位置にある。私達の予想では、蝦尾女史ならあそこで決着をつけるだろう、その瞬間を見守ることは出来るかもしれない。

こちらが見ていることなんてまず気付いていない。蝦尾女史もいっばいいっぱい。私達の視線に気を向けることなんて出来ないだろう。

そのまま歩いて行った2人は予想通りその大きな広場で立ち止まる。さつきも自分達を見たが、あそこからの風景が一番綺麗だ。周囲すべてが花に囲まれ、ライトアップもあり特に幻想的。

思い出に残る場面を作るならあそこだと確信している。最初で最後になるはずの、一世一代の大勝負だ。

「頑張れ……蝦尾さん……」

もう祈るように手を組む三日月。私も口には出さず蝦尾女史の成功を祈る。

私達から見ても蝦尾女史の表情は窺い知れない。だが、遠目でもあの場で告白に及んでいるのはわかった。向かい合って、溜まりに溜まった思いの丈をぶつけている。

「どうなる……」

しばらく話していたと思う。その時間は永遠と思えるほど長く感じた。固唾を呑むし、手に汗握る。自分のことでは無いのに、こんなに緊張感があるのは初めてかもしれない。

すると、蝦尾女史から近付いていき、飛鳥医師に抱きしめられていた。これもどちらとも取れるような気がするが、遠目に飛鳥医師の手付きが受け入れたように見えた。そしてそのまま、顔も近づく。こちらからは後ろ姿なので詳細は見えないが、先の展開はよくわかった。

「もしかして、もしかして……!」

「上手く、いったんだな」

今まで呼吸が止まっていたかのように、大きく息を吐く。緊張感が一気に無くなり、どっと疲れが出たようだった。喉がカラカラになっ
てしまったため、用意しておいたジュースを一気飲み。三日月も同じ
ように喉を潤している。

その後一息ついて三日月と見つめ合う。蝦尾女史の告白成功を自
分のことのように喜び、満面の笑みで抱き合った。感動的な場面をそ
の目に収めることが出来たのが嬉しくて仕方ない。

「よかった、よかったよお」

「ああ、本当に良かった」

朴念仁の飛鳥医師であつても、研究を隣で続けてきた蝦尾女史の好
意に多少は気付いていたことくらい、私は匂いである程度はわかつて
いた。それでも面と向かつて告白された時、それを受け入れるかま
ではわからなかった。だから一緒にドキドキしていた。

三日月は感動して泣き出してしまいそうだった。同じ恋する乙女
として、蝦尾女史のことをずっと応援していたから感極まったのだろ
う。三日月の場合は相手が私で既に成就しているわけだが、だからこ
そその想いを後押ししていた。

「これでみんなもつと楽しく生きられる。あの2人の仲が深まれば、
若葉達も嬉しいからな」

「うん、うん、私もすごく嬉しい!」

これはまた蝦尾女史に事の顛末を聞き出さなくては。それに、下呂
大将の策略により飛鳥医師と蝦尾女史は相部屋。関係が深まったそ
の日の夜に相部屋で一夜を過ごすとなったら、やることはある程度限
られてくる。少なくとも私と三日月は初日だった。

これ以上考えたらあまりにも無粋。ああなったのだから、これ以上
の関係性は当事者である2人に全て任せればいい。私達はもう、出る
幕なんて無い。

「すごく興奮しちゃった……身体が熱くなってる気分」

「若葉もだ。緊張してたしな」

他人の恋路を肴にしているようだが、本当にいいものを見せてもらった。私も三日月も興奮は最高潮気味である。

「ロマンチックだったね。ライトアップされた夜の花畑の広場で、想いを語る姿、とつても素敵だった。純愛の物語みたい！」

「ああ、ワンシーンを切り抜いたようだった。あれは一生心に残る時間だろうな」

遠目で見ていてもそのシーンは本当にロマンチックな瞬間だった。三日月の言う通り、恋愛小説の一部を切り抜いたかのように思えるほどに。

「また後から蝦尾女史には顛末を聞かないとな」

「うん、明日温泉で会えたら聞くんもり」

ずっと応援していた者の最高の結末を本人の口から聞きたいものだ。詳細まで聞くのは無粋だと思うが、祝福するくらいはしてあげたいと思う。きつと幸せそうに語ってくれるだろう。

そんな今回望むことが全て叶った夜だからこそ、夢の中に呼び出される。私達が新婚旅行に来ているのだから、私達から離れられないシグ達も当然便乗したいことになる。

『新婚旅行つてことだから出てくるのはちよつと躊躇っただけだね。ほら、夫婦水入らずに水を差すようですよ』

「いやいや、若葉^{ポク}達はお前達がいて初めて成立するんだ。新婚旅行とはいえ、これはみんな楽しんでるものだと思うぞ」

「若葉の言う通りです。私もぽいちゃんとここに来れたこと、嬉しいですよ」

『そう言ってもらえると嬉しいよ』

夢の中に入るなり三日月に抱きついてるぽいだが、三日月が意思を示しながら頭を撫でると余計に密着を求める。前々から思っていたが、ぽいは子供っぽいというよりは小動物っぽい。

『私達^{ポク}も見てたよ。蝦尾さんの戦い』

「ちゃんと見えていたか」

『勿論。もしかしたら若葉達よりハッキリ見えてたかもしれないね』

私達は窓際に立つて見ていただけだが、シグやぽいはその在り方として窓よりも外側に出て見ることが出来ている。取り憑く者としてのスペックを最大限に発揮して、あの瞬間を眺めていたようだ。少し羨ましい。

『私達^{ボク}からもおめでとうつて、蝦尾さんに伝えておいてよ』

「ああ、そうする。みんな応援していたからな」

チ級も首を縦に振る。蝦尾女史のことを知るものは全員あなることを望んでいたわけだ。私達は直にそれを見ることが出来た。

『三日月もああやって告白されたかったっぽい？』

「えっ？ あ、ああ……まあ、憧れますね、ああいうのは」

私と三日月の関係はあんなロマンチックな始まりじゃない。戦火の中、侵食の結果で芽生えた感情。それでも本心であることには変わらないが、私が愛を伝えたのは医務室の一角だ。大淀のせいで心が壊れそうな三日月を繋ぎ止めるために、咄嗟に出た心内全て。

これだと愛の告白というよりは治療の一環みたいに思えてしまう。その後から頻繁にお互いに愛を確かめ合っているが、確かにあんな告白はまだ出来ていない。

「もうサプライズは出来ないが、明日の夜、またあの花畑に行こう。そこで、改めて言わせてもらう」

「うん、最高の思い出になりそう」

本来なら一番最初をその形にしたかったものである。私達の仲は叶わなかったことなのだから、最初だけをやり直すくらいいいだろう。順序は変わってしまったが、三日月がそれでも喜んでくれるならいくらでもやりたい。

『お互い愛し合ってるのは私達^{ボク}がよくわかってるからさ』

『ねー。毎晩毎晩ねー』

まあ確かに愛を確かめ合うのは毎日している。軽くでも重くても、お互いが昂り求め合うのだから仕方あるまい。平和になってから一緒にいる時間も多いいし、自然とそういう流れになることもある。昼だから我慢しているというのもあるくらいだ。

三日月は指摘されると顔を赤くするが、以前にぽいに言われた通

り、求めてくるのは三日月、そこから激しくしていくのは私。結果的に相思相愛なのだから、どうなるかが問題はないだろう。

『ん、何か外が騒がしいね。まだ夜だっていうのに』
「そうなのか？」

夢の中にいる時、外の様子なんてわかりやしない。それがわかるのは、私達を夢の中に引き込んでいるシグとぽいだけ。

外はまだまだ夜中。私も三日月も勿論熟睡中という状況なのだが、何やら外でおかしなことが起きていそうだとシグは言う。

「それはもしかして、あの温泉から出た時の奴らに關係しているのか？」

『うーん、そうかもしれないね。私もそこまで詳しくわかるわけじゃないけど、今この施設で何かしでかしそうなのは、あの連中くらいだよね』

急な展開に三日月が不安がる。今まで夢の中でそういう忠告を受けたこともないし、そもそも新婚旅行中にそんなことが起きられるのが気に入らない。

『誰かに任せてもつと寝るっぽい？』
「任せられることなの？」

『あんまり良くないかも。私としては起きた方がいいと思うっぽい』
ぽいがそう言うくらいなのだから、切羽詰まっているわけではないにしろ、自分達の力で問題は回避した方がいい。

『じゃあ、また後で。何も無ければそれでいいけどね』
「ああ、ちよつと行ってくる」

新婚旅行を邪魔する奴らは私が許さない。それに、蝦尾女史の念願がせつかく叶ったのだ。それを邪魔する奴は尚のこと許せない。

楽しく終わることが出来るように、私達の手で問題を解決してやる。

規格外の仲間達

飛鳥医師と蝦尾女史のロマンチックな恋愛模様を見届けた夜、夢の中でシグが外が騒がしいと言い始めた。新婚旅行や蝦尾女史の恋の戦いを邪魔するとは言語道断。一旦目を覚ましてその不屈き者に制裁を加えに行くことにする。

目を覚ました時、シグが言っていた通りまだ真つ暗。日が昇るまでにはまだまだ時間がある丑三つ時である。

私、若葉は一緒に起きた三日月と外を見るべく、足音をなるべく立てずに出入り口まで移動。わざわざ着替える時間もなく、早急に且つ事を荒立てずに終わらせたかった。

騒がしいとは言っていたものの、外から喧しいような音は聞こえない。何者かが動いている様子も感じない。少しだけ扉を開けて匂いを嗅ぐと、私以外には誰も気付くことが出来ないくらい火薬の匂いがした。もしかしたら昼のうちから漂っていたかもしれないが、注意深く嗅がないとわからないほどに薄い。私達は艤装を持ってきているが、他の者達は何かしら持ってきているのかもしれない。

だが、慰安施設という癒しの場に武装してくるとはどういった見なのだ。テロを起こすつもりにしか思えないのだが、何故こんな場所でそんなことをしようというのだ。

「大丈夫だ。ゆっくり行くぞ」

「うん」

私達は深海の眼のおかげで普通以上に夜目が利く。明かりをつける必要も無い。幸いなことにこの施設は足元が全て絨毯張りのため、裸足のままでも部屋から出られる。

「よりによって私達の新婚旅行を邪魔するなんて……」

「本当だ」

三日月の苛立ちを感じる。勿論私も気に入らない。何故こんな時に何かを企てたりするのだ。

「こっちの方が火薬の匂いが強い。それと……これは朝潮達の匂いだ」

「あちらも気付いているのかな。確か頭の中に電探とか……」

「寝てたら知らないが、この様子なら気付いているだろう。合流した方が良さそうだ」

私達だけで終わらせて、飛鳥医師と蝦尾女史には一切気付かずに終わっていたら良かった。あちらはあちらで私達以上に楽しんでもらわなくては困る。せつかく結ばれた2人なのだから、翌日は何事もなく過ごしてもらいたい。

だが、私達は艦装を持たない非武装。三日月はともかく、私はまだ戦えるものの、相手が艦装を装備しているというのなら苦戦を強いられることになるだろう。よって、朝潮達と合流がベスト。朝潮ならこの何かやろうとしている連中の場所もわかるだろう。

「いた。朝潮……っ」

匂いを辿り、朝潮と合流。あちらはあちらで団体。昼に出会った取り巻きは元より、他にも何人もが朝潮の側にいる。廊下が狭く感じるレベルである。

「若葉さんと三日月さん、そちらも気付いたんですね」

「ああ、夢で外が騒がしいと忠告を受けた」

首を傾げられるが、今それを説明している余裕はない。

「温泉のときの連中か。若葉達でもそちらの仲間でも無いという」

「はい。まだ面と向かっていないので何とも言えませんが、場所はわかっています。今は敵の状況確認中です」

状況確認と言っても、ただここでジツとしているだけのように見えるが。

「朝潮様、ただいま戻りました」

一切匂いすら無い状態から突如、朝潮の目の前にある艦娘が現れた。思わず声を上げそうになるが、こんな真夜中に大声を出すわけにはいかなないのでグツと飲み込む。三日月も危なかったため、即座に口を押さえた。

朝潮達からすればそれも当たり前のことなのか、誰一人としてそれに対して驚きを見せない。というか朝潮様と呼んだか今。

「朝潮様の予想通りです。提督が1人、艦娘が3人。艦娘は何者かは

わかりませんでした。が駆逐艦3人でした。おそらくこの狭い空間でも艦装を扱うためでしょう。提督と思われる者には艦娘が1人ついており、それが一番の手練れでは無いかと思われれます。全員が全身黒尽くめであり、顔も隠しておりました」

「指揮者はその提督ですか」

「その通りです。こなれているようなので、南提督と同様の隠密タイプかと思われます。会話が聞き取れず目的もわからずで申し訳ありません」

「問題ありません。瑞穂さんは非武装ですから、皆のところへ」

瑞穂と呼ばれた艦娘は深くお辞儀をした後、再び闇の中に消えた。匂いは結局一切無かった。私の高速戦闘とは種類が違う、意味不明な技。いや、技と言えるのかアレは。あまりにも自然に現れ、そのまま消えていったので、理解が出来なかった。

「若葉さんと三日月さんも非武装ですよ。ここからは私達でどうかしますから、お引き取りを」

「乗り掛かった船だし、若葉は非武装でも戦える。それに、人様の新婚旅行を壊しかねないクソのツラを拝みたい」

「私も同じです。邪魔はしませんので、よろしくお願いします」

「……わかりました。でも、誰も貴女達を守りませんからね」
私達が圧力をかけてしまったか、小さく溜息を吐きつつも、私達がついていくことを許可してくれる。

私が見ている限り、朝潮達も非武装だ。私にそんなことを言えた義理では無いと思うが。

「場所はわかります。ですが、あちらは別々に行動していますね。まずは近場にいる敵に一直線に向かいますから」

そのまま廊下を突き進む。道案内が出来る朝潮を先頭に、護衛をするように戦艦の女性が側にいた。先程の取り巻きとは別だが、匂いから察するに春風や満潮と同じ、先天性の半深海棲艦。朝潮の周りにはそういうものばかりである。まともな艦娘は1人もいない。

先程の瑞穂は艦娘のようだったが、とにかくあの動きがある。正直、尋常では無い。

「扶桑姉様、先に伝えておきます。この施設はなるべく破壊せず、敵も殺さずでお願いしますね」

「わかったわ……でも……朝潮が傷付いたら……どうなるかわからないかも……」

「私は大丈夫ですから、何事もなく終わらせることを優先してください。司令官の護衛をしている山城姉様も悲しみます」

「……妹達が悲しむのは嫌ね……ギリギリまで抑えるわ……」

物騒な会話をしているが、あちらではそれが普通。そもそも非武装なのに破壊だの殺すだのどうするのか。私達にはわからないことばかりである。

「次の曲がり角に1人います」

「そう……なら……私が行くわ……」

扶桑と呼ばれた半深海棲艦の戦艦が朝潮から離れ、朝潮の言う曲がり角へと向かう。だが、その瞬間にキナ臭い匂いが突然漂った。

「撃たれる……!」

嫌なことに、あちらも手練れなのかもしれない。私達が近付いていることに気付いたようで、扶桑が曲がり角付近にまで辿り着いた瞬間、飛び出してその主砲を放ってきた。この室内で当たり前のように砲撃するだなんて何を考えているのだ。真夜中だからか、砲撃音を抑える装置まで装着していた。

非武装では駆逐艦の主砲でも致命的。狭い空間なのだから誰も避けられない程である。今のままでは扶桑を貫き、後ろにいる私達にまで被害が出てしまうだろう。

だが、朝潮達は誰も動じていなかった。自分達に被害が出ることなど一切考えていない。

「今……朝潮を撃とうとしたのかしら……」

かなり近い位置でゼロ距離で撃たれたようなものなのに、扶桑は無傷。その扶桑は今までカケラも見えなかった艤装を装備し、何かしらのことをやってその砲撃を無効化していた。一体何が起きている。

「ねえ……今、朝潮を撃とうとしたのかしら……答えなさい」

ゾクリと背筋に悪寒が走った。私のことでは無いというのに、扶桑

の言動、一挙手一投足に恐怖を感じた。

問われても敵は答えず、容赦なく扶桑に砲撃を繰り返す。しかし、その砲撃は全く届かない。扶桑は砲撃を素手で弾き飛ばしている。

弾き飛ばした砲撃はそのまま撃った敵に返っていくが、やはり手練れ、敵は自らの砲撃を避けていた。そのせいで廊下は嫌でも破壊されていき、一部が悲惨なことに。

そんなことがあれば、嫌でも音は立ってしまう。爆音というわけには無いが、大分酷い音のため、部屋の防音設備がしっかりしていても、これで目を覚ましてしまう者もいるだろう。あちらも騒ぎを大きくしたくないようで、この音で若干焦りの匂い。

「な、何なんだアレは……」

「初めて見たらこうもなるわよね」

しみじみと語る満潮。この中では一番の新人らしく、扶桑のあの戦術にはまだ慣れていないようだ。ここの扶桑はそういうものであると認識しない限り、頭がおかしくなる。

「増援来た。後ろ」

朝潮の言葉に、満潮が即座に反応する。振り向いた時には確かに同じような黒尽くめの艦娘がこちらに主砲を向けていた。

意味がわからない性能の扶桑が守れるのは前だけ。そういう意味では敵も熟れており、狭い通路で挟み撃ちにしようとしてきたのは戦術として上等。

「やらせるわけないでしょ」

満潮も知らない内に艦装を装備しており、敵が撃つ前に撃つていた。装備しているのは私達にも馴染み深い水鉄砲。

朝潮の合図がかなり早かったというのもあり、完全に不意打ちになっており、しかも満潮はあの咄嗟の砲撃できっちりヘッドショットを決めている。三日月に負けず劣らずの砲撃性能。

「まだ気を失ってない！」

「なら若葉がやろう」

満潮が作ってくれた隙を突き、艦装を装備していない状態ではあるが少しだけリミッター解除。力を出しすぎると自分の身体が壊れか

ねないので、軽く、それでいて確実に気を失わせるため、出来る限りのスピードで接近して、リアアットするかの如く首を絞める。

本来だったら殴り倒すのだが、艀装がない今、そんなことやったら私の拳がどうにかなくなってしまいかねない。故に、腕全体を使ったスリーパーホールドに持っていった。

「何も話してくれないのなら……痛めつけるしか無いわね……」

扶桑の方は、触れられる程にまで接近していた。砲撃を全て弾き、ついにはその主砲を軽く小突く。瞬間、さんざん撃っていた主砲が木っ端微塵に分解された。

武器を失った敵の1人は撤退しようとしたが、ここぞとばかりに手を伸ばし、頭を掴み上げる。ジタバタともがいても、殴ったり蹴ったりしても、扶桑はビクともしない。

「別にこのまま殺してもいいのだけど……朝潮が悲しむの。貴女の命は朝潮に守られているのよ……朝潮に感謝して頭こぶを垂れなさい」

その掴んだ頭を床に叩き付けた。多分アレでもかなり抑え気味にやったのだと思うが、それだけで敵の1人は気絶。あの一撃だけでも相当な威力があったのだと思う。本気でやったら床をぶち抜いていたのだろうか。

「お前達は何をしている」

あちらが気絶したため、私が締め上げている方の敵に問いたです。

戦闘は手慣れているみたいだが、あまりにも想定外のことが発生すると動揺が隠しきれないようである。今間近にいる敵も、扶桑のアレは想定外だったようで、明らかに冷や汗のような匂いがし始めた。

「何か言え。お前達の目的は何だ」

「……全ての……深海棲艦の……殲滅……!」

マスクをしているためくぐもってはいたが、今ハッキリと聞こえた。その発言に偽りが無いことも匂いからわかる。

つまり、この施設に協力者である深海棲艦がいることが気に入らないから、ここで殺してやろうとしたわけだ。静かに行動していたのは、深海棲艦以外は殺さないようにするために慎重に事を成そうとしていたという程度か。

「若葉は深海棲艦では無いが？」

「人間でも……艦娘でも無いものは……全て敵……！」

何となく理解出来た。こいつらの指揮をしている提督は深海棲艦に相当根深い恨みがあるのだろう。故に、相手がどんな深海棲艦であろうと生かしてはおかないという正義感からの行動。

本当にこちらを皆殺しにしたいのなら、この施設ごと爆破でもしてしまえばいいのにそれをしないのは、人間と艦娘は無事に済ませたかったからか。無実の者は殺さないという辺りも、正義に拘っているように思える。

深海棲艦と協力しているのなら皆殺しにするというわけでは無いところも、歪んだ正義感が見て取れる。人間と艦娘はどんな悪人でも全部助ける。それ以外はどんな善人でも皆殺し。あまりに極端。

「気絶させるわ……そのまま押さえてなさい……」

片方を捨て置いた扶桑がこちらに来ると、まず主砲を握り潰した後、何を思ったか私の捕まえている敵に向けてデコピンを一撃喰らわせた。その時の音が尋常ではなく、それにより脳震盪を起こして気絶。

軽く小突いただけで主砲を粉々に砕くような力を持っている者のデコピンなのだから、アレだけでも相当な威力だったということだ。渾身の力で放っていたら首が飛んでいるのかもしれない。そんなスプラッター映像は勘弁してほしい。

「残り2人ですが、少し危険ですね。あんなことを言っていました、司令官はターゲットにされている可能性があります。すぐに終わらせましょう」

そんな敵の目的がわかっても、誰も焦っていない。だが、気に入らないという気持ちが溢れているのは匂いが無くてもすぐにわかった。

歪んだ正義

慰安施設で過ごす夜、外が騒がしいということで深夜だということに外の様子を見に向かう私、若葉と三日月。案の定何者かが施設内で何かをしてくさそうとしており、私達と同様に気付いた朝潮達が事の対処に動き出していたため、合流させてもらう。

実際、行動を起こしている敵の位置は朝潮が把握済み。その元へ向かった結果、予想通り攻撃を受けた。しかし、朝潮の仲間である扶桑が1人を鎮圧。もう1人も満潮と私で動きを止めた後、扶桑が呆気なく気絶させた。

「纏めておくわ……簡単には目を覚まさないでしょうし……」

私が絞め上げ、扶桑が気絶させた艦娘の首根っこを掴み上げると、先に顔面を床に叩きつけて気絶させた敵に向けて放り投げ、廊下の隅に追いやった。何という腕力だ。私達の仲間であそこまで出来るのは鳥海くらいか。

「廊下を壊してしまったわね……朝潮を撃ってきたんだもの……仕方ないわ」

「まあアレなら許容範囲です。扶桑姉様、ありがとうございます」

「満たされるわ……朝潮に頼られるのは……」

なんだか恍惚としている扶桑は置いておいて、残った艦娘1人と提督と思われる人間を追う。

常に朝潮がそいつらの位置をマークしているというのは非常に便利で、恐ろしいことに施設内の通路の位置まである程度は理解しているという。頭の中に電探が入っているというのはそういうことらしい。

「あちらも私達を探しているようですね。標的は完全に私達ということですか」

「深海棲艦を全滅させるのが目的なら、まず狙われるのはお前だろうな」

敵の目的は全ての深海棲艦の殲滅。私や三日月のような別のターゲットもその対象に入っているとのこと。

あちらの指揮をしている者が、深海棲艦に対して大きな憎しみを持つていることは確定。深海棲艦ならば無差別に殺すと宣言したようなものだ。そこにどんな事情があっても一切の容赦が無いと。

「私達とは別行動の仲間もいます。反応がそちらに近いので心配です」

「なら急いだ方がいいだろう」

今のところキナ臭い匂いはしない。だが、方が一のことを考えるのなら、早急に事を済ませるべきだ。

朝潮の案内で敵の場所へと向かう。なるべく早く、だが慎重に。足音も立てずに廊下を駆ける。その間も、私は周囲の匂いを嗅ぎ続ける。今のところ血の匂いは無いが、火薬の匂いは強まっているように思えた。

朝潮が言うには、敵はまっすぐ仲間の方に向かっていているわけではないらしい。こちらのように電探をガッツリ使つての搜索をしているわけではないようだ。だが、離れた仲間が気を失っていることくらいは気付いているようで、何処かのタイミングからこちらに近付いてきているとのこと。

「そろそろ会敵します。あちらもこちらに気付いているかと」

「さっきの連中と同じね……私が正面に出るわ……」

相変わらず扶桑が先陣を切る。あの意味不明な格闘能力があれば、ある程度の攻撃は回避可能だろう。

敵の手段が先程と同じだとしたら、こちらがおおよそ非武装であることを理解している状態で砲撃を放ってくる程度。だからといって油断は禁物である。

だが、もう聞くことのないであろう言葉が廊下に響いた。

「艦隊司令部より、各艦に伝令」

先陣を切っていた扶桑が大きく震えて頭を押さえ、膝から崩れ落ちる。同時に朝潮の取り巻き達も次々と震え出した。霞や春風、初霜

は、扶桑と同じように崩れ落ち、満潮に閉してはその場から動くことすら出来なくなる。全員歯を食いしばり、それ以上の状況を耐えていた。

私と三日月はそれを知っている。忌々しい艦隊司令部。大淀が使っていた最悪の兵器、艦隊司令部。私達には効いていないため、初期バージョンくらいだと思えばいいか。

「完全な支配は出来ないのか。まだ改良が必要だな」

おそらく最後の1人の艦娘を盾にし、その奥にいたのが今回の指揮官であろう男。朝潮の取り巻きである瑞穂が言っていた通り、全身黒尽くめで顔すら隠している。真夜中の隠密行動に特化しているため、元々ここでこうするつもりだったとしか思えない。

「それは大淀の力のはずだろう。なんでお前が持っている」

全く効いていない私と三日月を見て、マスク越しでも怪訝そうにしているのがわかる。確かにあの兵器は、深海棲艦相手では無条件で効くようなもの。脳にさえ侵食があればいいため、半分混ざってしまった半深海棲艦にも充分に効く。

最初期の艦隊司令部ならば、私達が属する別のナニカには効かない。だが非武装だ。あの男がどのように艦隊司令部を扱っているかはわからないが、多少身を削ってでもアレを止めなければ大変なことになる。少なくとも動けないのだから、集中砲火を受けかねない。

「話には聞いていたが、飛鳥とかいう医療研究者に治療された若葉か」「こちらの質問に答えろ」

「お前達の施設の事件の後、大淀の艦装を入手し、解析した。下呂大將の目を掻い潜るのは面倒だったが、同志は沢山いるのである」

亡骸は下呂大將が丁重に吊ってくれりと話していた。そこから艦装だけを奪って解析したということか。医療研究ではなく、武器研究の方にしてやられた。

深海棲艦を殲滅することに協力的な者など大量にいることだろう。それに繋がるのだから、誰だって協力するはずだ。

「私なら有用に使えるとして、解析し、試作品を作った。比較的效果があるように助かっている」

悪びれもなく言つてのける。罪悪感すら感じていない。深海棲艦を殲滅するために、悪人の力すら使う。目的のためなら手段を選ばないタチか。

「若葉、艦娘ならば我々に従え。それならばお前には攻撃しない。だが深海棲艦ならばここで殺す。この艦隊司令部の効果を受けていないようだから深海棲艦ではないようだが」

この状況で私達が屈すると思つているのか。私達が朝潮達と共にここまで来ている時点で答えなどわかつているだろうに。それに、私達のことを知つているのなら、施設で深海棲艦と共存していることだつて知つているはずだ。

「お前達の信念がわからない限り、従うことは出来ない」

「忌々しい深海棲艦を殲滅することに理由などいるのか」

やはり正義感からの行動だ。艦娘を従えている提督としては確かに真つ当な考え方であろう。私だつて、生まれたばかりの時は、深海棲艦は全て敵であると思つていた。鎮守府とはその概念の下に活動する組織であると言つても過言ではない。

「どれだけの人間を殺してきた。陸を侵略しようとした者もいたんだぞ。人類の平和のためには、一片たりとも残してはおけない。殺して、殺して、殺し尽くして平和を手に入れる。この不毛な戦争を終わらせる」

いわゆる過激派というものののだろう。少しくらいの被害は問題ないと思つている匂い。だから慰安施設に武装を持ち込んでしまつている。

この男の恨みはそれだけではないことが匂いからわかる。やはり私怨。深海棲艦への憎しみが生半可ではない。その思考に染まってしまったのは、近しい者が殺されたか何かか。

「やれ」

盾にしている艦娘に指示し、動くことが出来ない扶桑に主砲を向けさせる。扶桑は半深海棲艦かもしれないが、不幸なことに見た目からして深海棲艦である。先頭にいるのだから真つ先に狙われてもおかしくない。

先程と同じなら、そんな砲撃弾き飛ばしてしまっただろう。しかし、艦隊司令部からの激しい頭痛のせいで身動きが取れない。技が強くて耐久力があるわけではないのだから、このまま頭を撃ち抜かれたらおしまい。

「させませんよ」

瞬間、三日月がリミッターを外し、先程の戦闘跡からくすねてきた瓦礫の一部を直感的に投げ、その主砲の砲身にぶつけた。流石の命中力。放たれた砲撃は窓ガラスを破壊するものの、扶桑を始め誰も傷付けていない。

同時に私もリミッターを外す。少なくともこちらを狙っている敵の艦娘を無力化しなければ、危険のままであることは変わりない。非武装故に負荷は大きいですが、先程の戦闘で多少はコツを掴んだ。

砲撃を終えた時には私は敵の眼前に肉薄している。艦装も装備していない私がこの動きをしたのは想定外だったか殆ど無抵抗で接近を許す。

「人様の楽しい旅行をぶち壊したんだ。それなりの報いを受けろよ」

そのまま鳩尾に蹴りを入れたことで、小さく息が詰まる声が聞こえた。黒尽くめとはいえ艦装以上に装備を増しているわけではないことは、先程絞め上げた時に理解している。故に、なるべく自分に負荷がかからないように、確実に急所に一撃を入れる。

気絶させるところまではいけないものの、これで一瞬でも隙が出来たのならよし。艦装装備の艦娘に何処まで効くかはわからないが、最低限の無力化をするのなら武器を手放させるのがベスト。すぐに主砲を持つ腕を掴み上げ、渾身の力でロック。力量差はあれど、瞬時にそこまですれば脱力する。目論見通り、主砲を落としてくれた。

腕を離して今度は首。急激に絞めたことで呼吸を止め、気を失わせる。生身でもここまで出来るようで安心した。

「邪魔をするのか」

「当たり前だ。ここは慰安施設だぞ。誰もが癒されるためにここにいるんだ。そこで寝込みを襲うようなゲスに従う理由なんてない」

見下すような視線。私を心底穢らわしいものとして見る眼だ。深

海棲艦に与する不明な勢力として認識されていたものが、今この場で敵としての認識に改められたのだろう。

敵で結構。ここでこいつを野放しにしていたら、私達の施設も危ない。せつかく平和を取り戻し、みんなで仲良く暮らしているのに、敵と同じ種族であるという理由だけで、無実の者すら虐殺されるだなんて耐えられない。

「貴方が深海棲艦を憎いのはわかりました。ですが、朝潮さんは元々艦娘です。事件に巻き込まれて身体が変質したと聞きましたが、それでも貴方は敵として見ているんですか」

三日月が男に問う。男の理念は深海棲艦の殲滅。だが、朝潮は本来艦娘であり、その心を持ったままだ。人間への敵対はしないだろうし、普通の深海棲艦とは違って本能的に破壊活動をするようなこともしない。

「どういう事情があれ、そいつはもう艦娘ではない。深海棲艦だ。いつどのタイミングで人間に反旗を翻すかわからないだろう。ならば、お前はそいつが暴走し人間が殺された時、責任が取れるのか」

「まず何故暴走すると決め付けるんです」

「深海棲艦の時点で何をしてもおかしくないとやっているんだ。知恵のある深海棲艦は、媚びを売った後に簡単にこちらを裏切る。私はそいつらがそういう輩だと理解している」

ほんの少しだけ悲しそうな瞳を浮かべる。

「虎視眈々と背後から撃つタイミングを見計らっているんだ。そんなことさせるわけにはいかない」

「お前の家族がそうされたのか」

匂いが変わる。これは凶星と見て間違いないか。

「深海棲艦が全員そういう輩じゃない。若葉^{ホッ}の知る深海棲艦は戦いを好まず、ただただ静かに暮らしたいと言っていた。花を愛でるのが趣味という者や、泳いでいるだけで満足という者もいる。平和主義者も侵略者として見るのか」

「それが演技でないと何故言い切れる。自分のいいように事を運ぶために媚びを売っているのではないのか。深海棲艦はそういう輩だ」

「それが貴方の大義名分ですか」

リミッターを外して感情を消している三日月から、怒りの匂いが沸き立つ。外していたリミッターがかけ直されるくらいに気に入らないと思っっている。

自分の大義名分のためなら、平和に暮らしている者すら蹂躪する事を良しとする信念が、私達には気に入らない。

「ならば、私達は人間を滅ぼす大義名分があります。私達はつい最近まで大淀と戦ってきました。その裏側には協力者のテロリスト、人間がいたことくらい、聡明な貴方ならわかりますよね」

「間賀と保田のことか」

「貴方の考えが罷り通るのなら、私も若葉も人間に嵌められてこうされたんですから、皆殺しにしてもいいというわけですよ？」

たった1体の深海棲艦に家族を殺されて全てを滅ぼすという信念になったというのなら、私達が人間を滅ぼすという考えに至った場合に文句は言えないはずだ。たった2人の人間が大淀に協力したせいで、道を踏み外したものは数知れないのだから。

男から苛立ちの匂い。自分の信念を揺るがすようなことを言われたことで、困惑より先に怒りが込み上げている。

「なるほど、そういうことなら私も人間を滅ぼす大義名分を持っているわけですね」

今度は朝潮の声。他の仲間達が艦隊司令部の力で身動きが取れない状態にされているのに、朝潮だけは口を利けていた。頭痛も感じているようだが、それを表に出していない。

「私の身体は最後、クズのような人間のせいで変化しました。私利私欲のために他の司令官すら陥れようとした人間への怒りが、私を最後の段階へと押し上げたんです。貴方の大義名分が許されるのなら、私が人間を滅ぼしても文句を言われる筋合いは無いですよ」

朝潮の目は本気だった。今までは鳴りを潜めていたようだが、この朝潮、単純に人間を嫌っている節がある。最初の三日月のように嫌悪感を持っているようだった。

それでも理性で押さえ付けていたのだ。関わり合いを持たないよ

うにして、その感情を表に出さないようにしている。それが、この男のせいで表に出てきてしまった。

「人間も艦娘も深海棲艦も同じなんだよ。いい奴はいい奴、悪い奴は悪い奴だ。お前の正義感は歪んでいる。考え直せ」

「……喧しい」

怒りの匂いがさらに増す。

「深海棲艦を塵殺してしまえば、アイツは、私の妻は浮かべれるんだ。侵略と裏切りのない世界のために、深海棲艦は滅ぶべき存在なんだ！」

怒りと共に殺意まで高まる。仲間の艦娘が倒れた今、自らの手で私達を皆殺しにしようと動き出そうとしている。

「若葉さん、三日月さん、相手は提督です。普通と考えない方がいい」「どういうことだ」

「提督という存在は、艦娘にテロを起こされたときを想定して、単体で制圧出来るように陸上での戦闘力が非常に高くなっています。扶桑姉様でも歯が立たない程です。あの男も同じでしょう」

ならば今までは違う難敵ということじゃないか。非武装で何処まで戦えるか。

だが、やらねばならない。ここでコイツを野放しにしたら、最悪の場合施設にすら害が及ぶ。それだけは避けなければ。

提督の力

慰安施設での戦いの先には、私怨により深海棲艦の殲滅を誓った男が待ち構えていた。その男が指揮している艦娘達は全員気を失わせたが、朝潮が言うには提督という役割に就く者は、艦娘からの叛乱を防ぐために1人で全員を鎮圧する力を持っているという。

その男はよりによって大淀の艦隊司令部を使用した。不幸なことに、朝潮の取り巻きは全員深海棲艦が混ざり込んでおり、それが脳にまで達しているため、艦隊司令部の効果をモロに受けてしまっている。支配までには行かないようだが、朝潮以外は強烈な頭痛で身動きが取れなくなってしまうていた。

「朝潮は大丈夫なのか」

「この程度の頭痛なら以前にもあったので。それに、あれは陸上型には効きづらいのでは？」

そういえば朝潮は自分のことを陸上型に変化したと言っていた。リコの時と同じように、初期の艦隊司令部ならば陸上型には効果が小さくなる。それでも普通に動いてくるのは予想外だが。

「そちらは」

「奴の艦隊司令部は若葉^{ホク}達には効かない。あれは深海棲艦の侵食が脳に達している者にまでしか効かないからな」

「貴女達は一体……変質したとは聞いていますが、具体的には知らないのです」

「後から話す。今は奴を倒すことに専念するぞ」

敵は提督。私達からしたら未知数の戦闘力を持っている。あちらは単純に生身だというのに、砲撃すら弾き飛ばす扶桑が手も足も出ない程だというのだから恐ろしい。

だが野放しにしていたら、私達の施設すら滅ぼしてしまう可能性がある。深海棲艦と共存なんて、奴にとっては滅んで然るべき場所。自らの手で殲滅する可能性は高い。事を大きくしないように夜中にこつそりやろうとする辺り、大淀のようなゲスさを感じる。

「無駄話は終わったか」

あの男は武器らしい武器を持っていない。言ってしまったえば徒手空拳で深海棲艦と別のナニカ2人という3人を相手取ろうとしている。

鎮守府の叛乱を止められるということは、そこに在籍している艦娘全員を相手しても、無傷で終わらせられる程の力を持っていると考えた方がいい。大淀以上に面倒くさい敵なのは理解した。

「ここで全員終わらせる、深海棲艦はすべて塵殺だ」

キナ臭い匂い。ターゲットは朝潮。私と三日月はまだ深海棲艦とは言いづらいのかもしれないが、朝潮は誰がどう見ても深海棲艦だ。優先順位が高くなってしまっている。

何をしてくるかは想像が付かないが、可能性として一番高いのは突撃。制圧出来る程の体術と想定するのなら、生身の人間だとしても私と同様な高速戦闘が一番妥当。

「狙いは朝潮だ！」

リミッターを外し、男と朝潮の間に入り迎撃態勢を取る。何があってもいいように急所だけはガードして。

瞬間、横つ腹に激しい衝撃。本来ならば朝潮に入れる予定だったであろう一撃が私に入れられた。それはいい。動きがまるで追えなかった。予想通り高速戦闘タイプ。骨が折れるほどの重い蹴りでは無かったが、そもそも身体の小さい私にはこの一撃だけでも吐きそうになるほどの衝撃になる。

「っかつ!？」

「お前は後でいい。まだ深海棲艦かもわからないからな。最優先はこの朝潮もどきだ」

そのまま顔を鷲掴みにされ、無理矢理に横に退かされる。腕力も異常。

それを見越した三日月が先程敵の艦娘に投げた瓦礫の一部を拾い上げて男に投げつけていた。脳震盪さえ起こしてくれればいいため、狙いは頭。

しかし、それは軽く払われるだけで回避された。主砲を撃っているわけではないため、人間でも弾き飛ばすくらいは余裕。

「邪魔をするな」

驚掴みにした私をそのまま三日月に放り投げる。流石にこればかりは勢いを止められず三日月に激突。幸いにも三日月が体勢を変えてくれたおかげで殆ど痛みは無かったが、男と朝潮の間に遮るものが無くなってしまった。

「お前には容赦しない。深海棲艦だからな」
「結構です」

朝潮が軽く前傾姿勢を取ると、腰の辺りからズルリと頭のついた尻尾のような艦装が生えてきた。扶桑や満潮もそうだったが、何も無いところから現れる艦装というのも私達の中では見たことが無い。

「ヨル、水上機だけ。噛みつきは無し」

何かに向けて指示を出した途端、生えてきた尻尾の先端から水上機が発艦されていく。こんな狭い廊下でも器用に浮遊していたそれは、シロクロの使うものに近いもの。

「完全に化け物だな。だが、余計に殺しやすくなった」

だが、そんなことを一切気にした様子も無く、男はそこから姿を消し、朝潮の懐に潜り込んでいる。私相手にした時とはまるで違う、最初から息の根を止めるための渾身の一撃。

叛乱を制圧するための力ならば、艦娘をその場で始末するほどの力を発揮するとしてもおかしくない。一撃で殺すため、男が繰り出したのは手刀。腹を抉り、貫く。

「っ……速すぎる……どうしても見慣れないですね」

紙一重で回避。それでも脇腹を抉りかけた。

提督がそういう力を持っていると知っていた辺り、朝潮はそういう敵とも戦ったことがあるのだろう。見慣れないと言っているだけあり、回避は出来たようだが本当にギリギリ。

しかし、その腕の逆側から蹴りが飛んできていた。私に決めたものと同等の、その場で動きを止める一撃。それをしてくることを予測していたのか、何とかガードをしたようだが、廊下が狭いために艦装を前に持つてくる事が出来ず、腕に蹴りを受ける羽目に。

いくらなんでもあの動きは速すぎる。提督だからと言われても、言っては悪いが奴はただの人間だ。それなのに、艦装を装備した深海

棲艦をも圧倒するその力、あまりに異常過ぎる。それが提督の力なのか。

「朝潮！」

三日月を起こしてすぐに助けに向かう。私相手にはどうであれ、朝潮相手には本当に容赦がない。その歪んだ正義感をぶつける男を朝潮から遠ざけるため、強引にでも突撃する。

あちらがスピードなら、こちらもスピード。リミッターをもう少しだけ外し、非武装でも負荷が異常にならないギリギリのラインで攻める。

「邪魔をするな」

しかし、私の突撃はまるで闘牛のように回避され、躲かれた直後に背中に一撃を受ける羽目に。

未だに私の方には殺意を向けていない。艦隊司令部の効果を受けていないため、深海棲艦として認識されていないと見える。そういう錯覚をさせているのなら、その立ち位置を有意義に使っていくしかない。

その瞬間に嗅覚に集中する。ダメージを受けながらも、今だけは奴の持つ艦隊司令部の場所を確認したい。

艦隊司令部が無くなれば、今そのせいで戦えなくなっている者達も戦線に参加出来る。朝潮はどういうわけか主砲を持っていないよ。うなので、せめて満潮を復帰させたい。

「……腕時計！」

その匂いは、男の右腕に嵌る腕時計からした。大淀の悪意のような、この戦場には似つかわしくない支配の力を込めた匂い。私達が苦しんだあの戦いに僅かに似た匂いだ。

私の発言に艦隊司令部の破壊を意識したか、右腕を少し下げた。奴に聞こえるように言った甲斐があるだろう。少しでもこれで戦いやすくなるか。

「一つ借りますよ」

ほんの一瞬の隙を予測し、三日月が動き出す。直感的に朝潮の発艦した水上機を掴み、自らの武器として無理矢理投げつけた。狙いは勿

論右腕である。

「やらせるわけ無いだろう」

キナ臭い匂いが三日月に伸びた。回避と同時に三日月を攻撃しようという魂胆なのはすぐにわかる。

私は比較的頑丈になっっているし、朝潮は艦装装備だが、三日月はこの中でも一番華奢。あの蹴りを受けただけでも酷いことになりかねない。先程の背中のダメージで呼吸が辛い、私のことより三日月のことだ。

「三日月、我慢しろ！」

男の回避に合わせて三日月を守るために飛び込み、抱き締めて男の攻撃の壁になる。私と同じように三日月にも殺意が乗っていないのは匂いでわかっているため、ダメージは蓄積するが死ぬことは無いと確信していた。

ある意味私が体当たりをしたようなもので、三日月が小さく息を漏らしたのがわかる。それだけならダメージのうちにも入らないはずだ。

「つぐ……っ」

男の蹴りが私の腰に入る。先程よりも強めに蹴られたようで、ダメージが大きくなったが、三日月が守れたのならそれでいい。

その瞬間に男の右腕を取ろうと手を伸ばした。やはり警戒しているために私の手は空を切ることになったのだが、それを察して朝潮も行動してくれている。逆側に水上機を飛ばしており、強烈な水鉄砲を放っていた。

「頭を冷やせとでも言うのか？」

「貴方を殺さずに捕らえるのならこれしか無いでしょう。施設も破壊しなくて済みますし」

所詮水鉄砲であるため、普通に左腕で払う。放たれた瞬間にそれが水鉄砲であると判断してのこの行動だと思つと、動体視力すら異常。いや、私が近くにいるのだから水鉄砲以外無いと踏んだか。

「やはりお前は最初に片付けなくてはいけないようだ。艦隊司令部より、朝潮に伝令」

名指しによる艦隊司令部の発動。今まで以上の衝撃を頭に喰らうことになるだろう。現に朝潮は今まで表に出さなかった苦痛を顔に出していた。全員分に分散される痛みが1人に集約されるのだから、いくら頑丈でもこればかりはダメージになる。

そしてこの行動は、私達には忌々しい出来事を思い出させるもの。名指しされたことにより私は完全に動かなくなり、三日月に至っては屈してしまった苦い経験がある。お互いに怒りが増すのがよくわかった。

「支配出来ずとも、動きを止めることが出来るだけでも重宝しそうだ。お前達は黙ってみていろ」

私達がどうしても邪魔なようだ。三日月を庇った私を後ろから蹴り押し、それを軸に朝潮へ突撃しようとする。強烈な衝撃に体勢を崩しかけたが、それ以上に艦隊司令部への怒りが強く、私は無理に体勢を変えてその足を掴む。

「放せ」

「放すか！ その力で誰も傷つけさせやしない！」

艀装が無いためまともに力は出ない。それでも渾身の力で脚を抱え、男をその場から離れないように固定する。こんなもの、男が全力を出せば私ごと動くことも出来るだろう。だが、こうすることで少しでも時間を作ることが出来れば、何かしら打開策が見つかるはずだ。

「そのまま押さえていろー」

突然、朝潮が動き出す。今までとは打って変わって荒々しく、さらには口調までまるで違っていた。頭痛に顔を顰めていたのに、今はそんな様子も見せない。表情そのものが違う。

何より、朝潮から感じる深海の匂いの質が変わった。まるで別人になったかのような匂いの変化。

「何故動ける」

「はっ、私が朝潮じゃ無いからだ！」

私が動きを止めているこの一瞬の隙を突き、男の右腕に嵌められている腕時計に向けて水上機を直接ぶつける。あらゆる回避方向を網

羅した密集した一撃のため、如何に提督と言えども避けられまい。

危惧しているのは、私ごと脚を振り回すこと。体積の大ききで水上機を全て薙ぎ払い、同時に私にダメージが与えられる。

「理解は出来んが、忌々しい深海棲艦ならそういうこともあるのだから」

案の定、私が抱える脚をそのまま振り回す。私一人の体重などものともしない脚力。

ならばと私はその拘束を即座に解いた。表面積が小さくなれば、水上機の迎撃そのものがやりづらくなる。

「そう」

そしてそれを狙っていたのは私達だけじゃない。私が手を離すと確信し、朝潮が放った水上機の1機をキャッチしていた三日月が、私の間をすり抜けて男の腕時計に叩きつけた。

ピシリとヒビが入る音。艦隊司令部に少しだけでも破損が出たことで、支配による拘束が緩む。身動きが取れない程の頭痛に悩まされていた扶桑達が、弱つているとはいえ立ち上がった。まだ完全に解き放たれたわけではないようだが、動けないわけではなくなったようです。少しだけ安心。

「お前……」

「それが無くなればこちらの戦力は増えるんですよ。その忌々しい艦隊司令部が無ければ」

艦隊司令部に一番恨みを持っている三日月だからこそ一切の躊躇も容赦も無かった。男は無傷ではあるものの、1つの障害が失われたことで、私達は勝利に一步近づく。

男から苛立ちの匂いが強くなるが、それで戦いに支障が出てくれれば御の字。

「朝潮様、いえ、今は朝棲姫様でしたか」

そこへまた闇から現れる瑞穂。一度仲間達の元へ向かったようだが、もう一度ここへ来たようだ。

「ミズホ、首尾は」

「上々です。あのお方をここに連れて参りました」

「了解だ。相変わらずいい仕事をしてくれる」

瑞穂が援軍を連れてきてくれたらしい。だが、相手は提督。人数が増えたところで簡単にいなしてしまうような最悪な敵だ。艦娘も深海棲艦も増えたところで、かなり厳しい戦いになるのは目に見えている。それでも人数が増えればまだマシか。隙を作りやすくなるはず。ところが、その援軍というのが予想外だった。

この廊下をのっしのっしと歩いてくる巨体。来栖提督よりも大きく、筋骨隆々とした中年男性。神々しさまで感じる現状を憂いる強い優しさで、現状を作り出した者に対する激しい怒りを混ぜ合わせた匂いを放っていた。

「瑞穂君から話は聞いたよ。慰安施設内でテロ行為を行う提督がいると聞いたからね。それが君かな？」

「……加藤中将……！」

敵の男すらその登場にほんの少しの恐れの匂いを湧き立たせた。

加藤中将、つまり、朝潮達を統治する提督の存在に。

「提督という役に就きながら、このやり方は感心しない。重大な越権行為だと思うのだが、君はどう思うかな？」

「深海棲艦である時点で殲滅対象だ。如何にアンタが英雄であろうが、私の信念は変わらない」

「そうかそうか。君の考えは変わらないと。なるほど」

瞬間、その巨体が私達の目の前から消え、敵の男の鳩尾に拳が突き刺さっていた。

「ならば許さん。私の部下を、娘達を、伴侶達を傷付けた報いを、受けてもらおうじゃないか」

平行線の信念

テロリストの提督との戦いは佳境へ。私、若葉と三日月、そして朝潮の3人がかりでどうか右腕の腕時計に仕込まれた艦隊司令部を破損させることに成功したが、敵はまだ無傷。それに比べ、私は大分打ち付けられてダメージが蓄積している状態である。

そんな中、朝潮の仲間である瑞穂が、朝潮達を統括する提督、加藤中将をこの戦場に連れて来てくれた。陸の上では艦娘をも凌駕する提督には、同じ提督をぶつける。それが最善の戦いであつた。

「私の部下を、娘達を、伴侶達を傷付けた報いを、受けてもらおうじゃないか」

来栖提督よりも一回り大きい程の巨体が目の前から消えたかと思つたら、テロリストの提督の鳩尾に拳が深々と突き刺さつていた。見た目にそぐわない俊敏性、さらには攻撃力も艦娘と引けを取らない。

敵も提督なのだからその程度では倒れないが、確実にダメージが入つたようで、入つた場所が場所なのでゲホゲホと咽せる。私達だけではどうにもならなかつた。

「提督、右腕のヤツを完全に破壊してくれ。アレのせいで皆がまともに動けない」

「アサ君か。了解した」

朝潮に言われたことで即座に行動。鳩尾に叩き込んだ拳をすぐに引つ込め、もう片方の腕で敵の首根つこを掴もうと手を伸ばす。

当然敵の男もそれを回避しようとする場から離れようとするが、加藤中将はそれ以上に速かつた。まるで腕が伸びたかのように錯覚する。

「っが!？」

「少し苦しいだろうが、我慢してくれ。なに、私は君を殺そうだなんて思っていない」

圧倒的な力によりしつかりと首根つこを掴み、その場から動けなくする。その掌も大きく、鷲掴みにするように首の大半が埋まる程で

あつた。

巨体による蹂躪のため、知らない私達から見れば一方的な戦いにすら見えてしまう。それに、そこに割り込むことが出来ない程の圧力。口出しすら出来ず、ただただ見ていることしか出来なかった。

しかし、ここでキナ臭い匂いが漂った。ターゲットは加藤中将。この状況下に置かれても、敵の提督はしっかりと提督対策も行なっていたのだろう。

私達相手には素手でも十分だが、同格が現れた場合にはそうはいかない。故に、奴は何かしらの武器を隠し持っている。敵側の艦娘が主砲を持っていたためわかりづらかったが、奴からも火薬の匂いはしていた。

その場所は、左腕。

「左手に武器を隠し持っている！」

またもやバレたためか、私の発言と同時に左腕の袖口に仕込まれた小型の拳銃を加藤中将に向けて構えた。いくら提督といえど、戦闘力が異常なだけで生身の人間だ。あんなものに撃たれたらひとたまりもない。当たらなければいいが当たったら死ぬという諸刃の剣のようなもの。

故にその巨体でもスピードでも腕力でも艦娘に勝るのだろう。主砲が当たれば終わりなのだから。

「君は随分と用心深いようだね」

忠告が効いたか、拳銃を撃たれる前に肘と膝で左手を挟んで潰す。指をへし折ったわけでは無いものの、強烈な衝撃に引き金が引けず、握りが緩んで拳銃が落ちた。

それでもまだ諦めていない。キナ臭い匂いはまだ消えず、殺意はさらに増していた。先程のような暗器をまだ持っている可能性が高い。

「この……っ」

「次は何をするつもりだい？」

首を強く締め上げたことで呼吸を乱し、同時に引き寄せて右腕を掴んだ。そこにあるのは艦隊司令部の仕込まれた腕時計。軽く握り潰すだけで破壊出来たようである。

これにより支配の力は完全に消滅。受けていたものは消耗させられていくものの、三日月が傷付けておいたおかげで復帰が早くなり、扶桑はすぐに朝潮の側に駆け寄った。

「ごめんなさいね……あんな力は受けたことが無かったから……」

「アレは仕方ない。私でもしんどかった」

「でも今からは……朝潮を守るわ……必要……無いかもしれないけど」

扶桑が敵の提督を見下すように一瞥した。

提督同士の戦いはここから白熱し始める。相手も提督なのだから、先程はモロに攻撃を受けたものの、すぐに気を取り直して首を絞める加藤中将の腕に向けて拳を叩き込む。拘束さえ解ければまだ勝ち目があると判断したのだろう。

しかし、加藤中将はビクともしない。腕すらも強靱な筋肉に覆われ、ナイフを使っているならまだしも、ただの拳では意味がない程である。

「咄嗟の判断は素晴らしい。さぞかし鍛え上げたのだろう。深海棲艦への憎しみは痛いほどわかった」

「なら私の邪魔をするな！」

首を掴まれていることを利用して、そこを軸に強烈な蹴りを放つ。私に放ったものとは違う、一撃で腰の骨を叩き折る程の威力のそれが、加藤中将の腹へと叩き込まれた。

しかし、やはりビクともしなかった。腕以上に鍛え上げられた腹筋でそれを食い止め、まるで巨木を蹴っているような音がする。

「邪魔をしているわけじゃない。私の愛する者を守っているだけだ」

お返しと言わんばかりに、丸太のような脚で一撃。それでも手加減をしているのがわかるほどであったが、男には戦意を削ぐ程の痛烈な一撃だったようで、それを喰らったことで大きくダメージを受ける。

「君の信念もわかるが、私にも全ての種族が共存出来る世界を作るという信念があるんだ」

「大本営から通達を受けたとき、何をふざけたことかと思っただぞ。深海棲艦と手を取り合う？ ふざけるな！」

もう一度蹴りを放つが、やはり効かない。怒りにより鋭さは増しているはずなのだが、加藤中将の尋常ならざる鍛え方が全てを弾き返している。

「奴らは私の妻を騙して殺したんだぞ。傷付いた姫を手当てした優しい妻は、仇で返され命を落としたんだ！ そんな奴らと手を取り合うことなど出来るか！」

「……気の毒に。私にはそれしか言えない」

もう加藤中将からは怒りの匂いが消えていた。最初に感じた慈悲深い匂いがより強まり、敵の提督の話に耳を傾ける。

この男にだって言い分があるだろう。こんな暴挙に出た理由は、決してくだらないことではない。聞けば多少は納得出来るもの。しかし、それを許してしまうわけにはいかないのも事実。

「深海棲艦なんぞ全部似たようなものだろうよ。人間の地を侵略し破壊するような輩を信用出来るか！ だからこのタイミングを狙ったんだ。アンタが、加藤中将がここに宿泊するってタイミングをな」

当然艦装の持ち込みなどは隠し、ただの慰安目的の宿泊客を装って、加藤中将をここで待ち構えていたということか。外に漏れないように内密に。

先程、他にも同志がいると言っていた。そこと連携して、あらゆる深海棲艦を殲滅するために動き出しているのだと思う。この慰安施設の内部にもいる可能性がある。

「アンタの鎮守府の深海棲艦が全員ここに来ているらしいじゃないか。人間と馴れ合うだなんてな。アンタ達もハメられてるぞ。心を許したところで後ろからドンだ」

もう精神が歪んでしまっているとか思えない。それほどまでにショックが大きい出来事だったのだろう。信じた者に裏切られるだなんて、心が壊れるほどに辛い。

私だって、人間に騙されて三日月が殺されるなんてことが起きたら、人間そのものを恨んでしまうだろう。三日月と逆の立場ならもつと危ない。元々そういう境遇から今の状態になっているのだから尚更だ。だから、この敵の言いたいことは痛いほどわかる。歪む理由

だって、自分のことのように理解出来る。

だが、だからといって同じものを全て滅ぼすことが良くないことであることくらい、誰だってわかることだ。私達は特殊な大淀に散々な目に遭わされているが、だからといって艦娘どころか他の大淀に対して恨みを持つていているわけではない。別物と理解出来ているから、手を取り合うことが出来る。施設にいる3代目とも仲良くやっているつもりだ。

「深海棲艦であろうと、彼女達は私達と目的を共にしている同志だ。元々戦いを好まない集積地棲姫や、ただ静かに暮らしたいという戦艦水鬼、人間に心を動かされた深海海月姫、まだまだいる。その者達と手を取り合って何が悪い」

「演技だろそんなの。アンタに取り入れれば、侵略が楽になるだろうか。用が済んだら殺されるのがオチだ。それでいいなら精々仲良くしておけよ。で、死んで後悔するんだ」

どれだけ話しても一向に良くはならない。あまりにも根深い傷。加藤中将とこの提督は、信念が完全に平行線上にある。決して交わることはない。

だからこそ、私は一言物申したかった。先程は三日月と朝潮が殲滅の大義名分について問うたが、私からは少し違う。似たようなものかもしれないが、どうしても私の言葉で伝えたい。

「お前の信念はよくわかった。嫁が殺されて辛いのも、若葉には理解出来た。投影出来るものがあるからな」

三日月も小さく首を縦に振る。今の話を聞いて、私と同じように相手が殺されたらと考えたのだろう。顔には出さないようにしているが、心が乱れているように思える、そういう匂いがした。

「だがな、幸せに暮らしているところに割り入って殲滅するのは、それこそ侵略じゃないのか。お前がやってることは、お前が恨んでいる深海棲艦と同じだぞ」

「あんな奴らと一緒にするな！」

「一緒だろ。少なくとも若葉^{ボク}にとってお前は侵略者以外の何者でもない」

そこにどんな信念があろうが、こいつがやっているのは侵略と破壊。忌み嫌う深海棲艦と全く同じ行為だ。悪を以て悪を制するとも言うのか。それなら復讐の輪廻を重ねるだけだろう。

侵略者を殲滅させるために自分が侵略者になってどうする。その矛盾に気付けないほどに、この男は復讐心で狂ってしまったのだ。

「……私が侵略者だと。ふざけるな、ふざけるな！」

「ふざけてるわけないだろ。お前の行為は、楽しく生きる若葉達^{ボク}の心を踏み躪る行為だ。人様の生活に土足で踏み入って、それが侵略以外の何がある」

私の言葉は多少揺さぶりになっているようだ。どんどん冷静さを失っていく。怒りと焦りが綱交ぜになった匂いしか感じない。これだけ言っても罪悪感のカケラも感じないのがまた酷い。

「若葉^{ボク}から言わせてみれば、お前は深海棲艦よりも質が悪い。本能のままに殺戮を行なう者と違って、正当性を見つけて無実の者も殺して回ってるんだからな。正しいと思ってるから罪悪感も無い。それがお前の憎むものと何が違うんだ。教えてくれ」

「……うるさい。うるさい！ うるさい！」

そもそも、人間である加藤中将に拳銃を向けた時点で信念がブレブレだ。自分の考えにそぐわぬ者、自分に楯突く者は全て敵と言わんばかりである。これでは侵略者どころか独裁者じゃないか。

駄々を捏ねるようにもがくが、ここまでの話を聞いていた加藤中将が拘束の手を緩めるわけが無かった。

「信念自体はそこまで間違っていないから困るが、君は行き過ぎてしまったようだね。一度考え直しなさい。自分の行ないが本当に正しいのか。君は正義の心を失ったわけではない。きっと更生出来るだろう」

「ふざけるな、ふざけるな！」

「ふざけてなんていない。君の正義感間違っているわけじゃないんだ。今は何を言っても聞く耳が持てないだろうから、これで終わりにしようか。次に会う時はここでの罪を反省し、隣に並び立つ仲間であ

ることを祈ろう」

男の脚を払うと、その勢いのまま地面に叩きつけた。主砲が壁を破壊した時よりも豪快な音が鳴り響き、男は気を失った。これだけやつても男の身体には傷一つない。殴られても平然とし、殴りつけても傷付けない。恐ろしい程に強い。

朝潮が慕う提督であることがよくわかった。強さと優しさを兼ね備えた彼の下でなら、私達も艦娘として戦うことが苦では無くなるだろう。それほどまでに大きな提督であった。

「若葉君と三日月君だね。すまない、私達のこと巻き込んでしまったように」

「……いや、大丈夫だ」

三日月はさっと私の陰に隠れる。初対面の人間ということと、来栖提督よりも大きな身体に威圧感を感じてしまったからだ。それを見て加藤中將が苦笑する。

「提督の力相手だと、予知も出来なくなるから困る。若葉、助かったぞ」

先程の丁寧な雰囲気からは一変している朝潮。匂いも変化し、若干粗暴なイメージを感じる。何より、先程までより深海の匂いが強くなった。

「朝潮……それがお前の本性なのか？」

「本性じゃない。私は朝潮の中に住まわせてもらっている深海棲艦だ。深海朝水姫、アサと呼ばれている。まあ多重人格だと思ってくれればいい」

また訳のわからないことを言っているが、とにかくそういうものなのだと思う。私に取り憑くシグとチ級みたいなものか。

ひとまず、深夜の事件はこれで終了。あとは加藤中將に任せて、私達は新婚旅行を続けることにしよう。

王子と女帝

慰安施設でテロを起こした提督とその部下の艦娘達は、朝を迎える前に運び出されていった。真夜中だというのに大本営から遣いが来たそうなのだが、加藤中将のコネなのか、なんと元帥閣下が直々に来たらしい。残念ながら顔を合わせる事はなかったが、下呂大将や新提督よりも上に立つ人間というのは気になるものである。

一部が破壊されてしまった慰安施設は早急に職人妖精の手により修復され、目を覚ました時には事件など無かったかのようにな何もかもが元通りになっていた。流石としか言いようがない。

「とんでもないことが起きていたんだな。部屋の外に出なくて正解だった」

「ああ。流石に守りながらは無理だった。奴は人間を襲う事は無かつたろうが、流れ弾に当たる可能性だってあったからな」

「こんなところで主砲を撃つだなんて、怖いですね……」

朝食の場、今回は飛鳥医師と蝦尾女史も合流して、昨晚の戦いのことについて説明しておいた。

物音で目を覚ましたものの、安全面を考慮して部屋から出なかったことで、事件については断片的にしかわかっていないそうだ。部屋から出なかったというのは堅実。無理に外に出て戦闘に巻き込まれては困る。それに、今の飛鳥医師には、蝦尾女史を守るという使命がある。

「若葉、身体大丈夫？ 何回か蹴られてたでしょ？」

「まだ痛むが大丈夫だ。これくらいならすぐに治る」

私、若葉は昨晚の戦闘のダメージがまだ少し残っていた。あの男から受けたダメージは、少し眠った程度では治らない。特に思い切り蹴られた場所は痣になっていたくらいである。

それもここの風呂に入ればすぐにでも治るそう。艦娘用の特殊な湯船には、以前鳳翔が用意してくれた薬湯もあるらしく、アレに浸かればすぐに良くなる。

昨晚に入っておけば良かったかとも思ったが、バタバタしていたた

めに結局朝まで流れてしまった。眠かったというのもあるし、事後処理も大変そうだったため、邪魔をせぬように部屋に戻っている。今日は朝風呂から始まりそうだ。

「君が飛鳥君かな？」

などと話をしていると、突然声をかけられる。その声の主は、昨晚事件を解決してくれた朝潮達を統括している提督、加藤中将。三日月はまだ慣れておらず、近付かれたことでビクンと震えた。

「貴方が加藤中将ですか。助かりました」

「いやいや、私だけでは解決まで行けなかった。若葉君と三日月君が奮闘してくれたおかげだ。夜はバタバタしていたからね、改めて礼を言わせてほしい」

その巨体が、私と三日月の前にしやがみ込む。こういうところからも、加藤中将の優しさを知ることが出来る。

「君達がいなければ、我々は負けていたかもしれない。特に若葉君、君には命を救ってもらったようなものだからね」

男が隠し持っていた拳銃のことを伝えなければ、加藤中将も撃たれていたかもしれない。あれだけはすぐに伝えることが出来て良かったと思う。加藤中将は特にそのことを感謝してくれているようだった。

私はあの戦場ではまともに動けていなかったと思う。相手が提督であり、さらには非武装というハンデの中、出来ることは可能な限り出来ただろう。

「ありがとう、君達はもう我々の仲間だ」

握手を求められたので、勿論返した。三日月はまだ少し怖そうだが、おずおずと手を出し、しっかりと手を握る。

「我々の帰投は明日の予定だ。そちらは？」

「僕らも明日の予定です。それまでは顔を合わせることも多いと思います」

「そうかそうか、ではその時はよろしく頼むよ」

昨晚の厄介事はもう考えなくていい。今日は1日をここで満喫しよう。

早速だが、身体の傷を癒すために薬湯の露天風呂に向かった。無傷の者には逆に悪影響を与えるということ、三日月には少し待っていてもらうことになる。三日月は三日月で温泉に入ってもらうことにしよう。私が側にいなくなるが、今ならおそらく大丈夫だ。

「あ、先客がいるようですね」

ここでも朝潮と出会う。あちらも戦闘中に脇腹をやられており、小さいものの傷はある。私と同様、薬湯で身体を癒しに来たようだ。

「若葉はあの男に蹴られた場所に痣が出来てしまつてな」

「私も抉られかけたので腫れてしまつていて。ここでならすぐ治ると聞いたので使わせてもらおうかなと」

昨日は温泉の前で朝潮と顔を合わせたものの、その時は私はもう出て着替えも終わった状態、朝潮は来たばかりで服も脱いでいないという状態だったが、今回はお互いに全裸。ここでお互いの異様さを嫌というほど見せつけることになった。

「お互い、酷い戦いをしてきたんだな」

「ですね」

私は左半身が痣で包まれているわけだが、朝潮はそれをも超えている。全身にヒビ割れのような痣があるのはまだマシ。腹の辺りに虚空のような穴が空き、その中央が鼓動に合わせて明滅している。身体中の痣もだ。額の角も相まって、並の深海棲艦ではないことが嫌でもわかる。

朝潮は朝潮で私の身体の痣を見て小さく驚きの感情を匂わせていた。いろいろという朝潮の仲間達の中にも、ここまで派手な痣を持つものはいないようだ。

「三日月を一人にするのは少し気が引けるからな。すぐに治してすぐに合流しようと思う」

「そうですね。温泉に行っているようですから、私の仲間達がお話くらいしているでしょう。どうしても三日月さんとお話したいと言っている人もいましたので」

2人揃って湯船に。薬湯の効能が身体に染み渡るような快感に、小

さく息が漏れる。

夜の温泉も良かったが、朝の露天風呂もなかなかいい景色だ。三日月と一緒に見たかったが、怪我人でないと入れない風呂と言われたら諦めざるを得ない。

朝潮と2人きりになり、どちらともなく話が始まる。私も朝潮も、聞きたいことがいくつもある。

「昨晚はありがとうございました。私達だけではあの男を捕縛することとは出来ませんでした」

深海棲艦になってしまったというのが大きな弱点となってしまうた戦い。艦隊司令部の力なんて、歴戦の勇士である朝潮ですら知らない力だったようで、あの扶桑すらも行動不能にしたのは完全な予想外らしい。

そもそも非武装の艦娘達が戦うことが出来なかったのが大きかったそうだ。朝潮の鎮守府の最高戦力は扶桑とその妹、山城であり、格闘戦特化という艦娘とは思えない性能のためにあの戦場では最も活躍出来るはずの人材のだが、山城が戦場に出られなかったのはそのせい。故に、提督の指示で他の非武装の者を守るために裏方に回っていたらしい。

「こちら感謝する。若葉^{ボク}達だけでは何も出来なかった。非武装だしな」

「それでも大分戦えていたようですが」

「若葉^{ボク}と三日月は自分の意思でリミッターを外すことが出来る。身体への負荷ギリギリの状態でどうにかした」

幸いなことに、それでも並の艦娘くらいには動けた。今までの経験が活かしているようで何よりである。

「結局、若葉さんは一体何になってしまったんですか？」

「わからん。艦娘でも深海棲艦でも無いらしい。別のナニカだそうだ」

完全に細胞が混ざり合った結果がこれだ。私と三日月しかないない、たった2人だけの謎の種族。これも三日月との絆を深める要因になっっている。私には三日月しかないし、三日月には私しかない。

「だが、別に何でも変わらない。若葉は若葉だ」

「そうですね、はい、そうです。何に変わっても自分は自分ですよ。私もそう思います」

朝潮もそういう経験があるのだと思う。元々は駆逐艦なのに今は陸上型深海棲艦。そんな変化するわけがない。余程の体験をしてきたのだろう。

「お前もよくわからないな。昨日のアレは何なんだ」

「アレ……とは、アサのことですか？ あの子は私がこの身体になった時に生まれた別の私というか、一応本体はコレです」

背中を向けると、肌にしつかりと埋め込まれたよくわからない物体が鎮座していた。生活に支障が無いようになってきているようだが、半壊しているらしく、触るのも少し憚られる。

「私の相棒ですが、娘のようなものでもありますね。私を元に生まれたので」

「娘とはまた……」

「いろいろと立ち位置があるんです。私の中にはアサの他に、ヨルというもう1人が入っていますからね」

やはり私と少し近いようだ。意味合いは違っているが、自分の中に2人いるというのも似通っている。私は夢の中でしか会えないが、朝潮は常時会話が出来且つ人格の交代まで出来るようだ。それはそれで羨ましい。

とはいえ、立ち位置の多さに若干の気苦労を感じた。ああいう場でも中心となって動いている辺り、リーダー役をやっているようにも思える。妹はわかるが、春風という妹分がいて、初霜に至っては嫁を自称しているほどだし、拳句は娘がいるとまで言い出した。

私も妙な立ち位置を持っていたりするが、朝潮には敵わない。来栖鎮守府に移籍した潜水艦一同が忠誠を誓いたがったり、有明鎮守府の弥生のような愛人希望なんてのもいるが、こうまで複雑な人間関係もそうそう無いと思う。

「拳げ句の果てには女帝ですからね……」

思わず吹き出しそうになった。鎮守府の女帝、聞こえがいいのか悪

いのか。

だが、私も似たようなものか。不名誉とは思わないが、言われるとこそばゆい呼び名が私にもある。

「若葉は王子と呼ばれたな」

今度は朝潮が吹き出しそうになっていた。こういうところも似たもの同士かもしれない。

お互いに吹き出しそうになったことで、可笑しくなってしまう、2人して笑う。新婚旅行という形でこの慰安施設に来たが、まさかこんなところで気が合う者に出会えるとは思わなかった。

「お前と会えてよかったよ。世の中は広いな」

「私もです。若葉さんと出会えてよかった」

そこからは、傷が治るまでただ世間話を続けた。短い時間ではあるものの、とても有意義な時間を過ごせたと思う。朝潮には素性を話すのも苦では無く、あちらもスラスラと話してくれるので、話は恐ろしく弾んだ。

この朝潮なら、三日月もすぐに親しくなれるだろう。共通の友人として、繋がりを持つておきたいと思う。

薬湯の露天風呂から出て、三日月と待ち合わせている温泉の方へ。

朝潮が言うには、あちらの仲間達が何やら話をしているとのことらしいが、大丈夫だろうか。

「三日月、少し待たせたか」

脱衣所に入ると、朝潮の言っていた通り、私の知っているものから知らないものまで数人が三日月と話をしていた。艦娘も深海棲艦も入り交じり、三日月からも嫌がっている素振りはないようだ。初霜が交ざっていたから抵抗が少ないのかもしれない。

「あ、若葉。身体は治った？」

「おかげさまでな」

私の姿を見てすぐに駆け寄ってくる。会話を中断してしまったようで申し訳ない。

「メンバー的にどんな話をしていたかわかりますよ」

「三日月さんは成功者ですから。私達の目指す先ですよ」

そう言うのは深海棲艦の匂いを漂わせる銀髪の娘、涼月。なんでも加藤中將をそういう目で見ている仲間の1人らしい。

成功者とは、三日月が恋愛を成就させているということか。私という相手と相思相愛になれているので、その秘訣を聞きたいと、そういうことなのである。

「私も朝潮さんと組んず解れついたので、三日月さんに何かアドバイスが貰えたらなと思って」

「私達が目を光らせてる限り、それは無いから」

「かあさ、コホン、姉さんにいかがわしいことはさせないから」

初霜の欲望に忠実な発言に対し、妹でありながら朝潮親衛隊とも言える霞と満潮が即座にツツコむ。なんやかんや良い仲ではないか。

「三日月さんの恋愛観、とても参考になりました。今後是非、友人として関係を持つていきたいと思います」

「わ、私で良ければ……」

涼月に手を取られて動揺する三日月。蝦尾女史に引き続き、恋する少女を応援する役割になったようである。なんでも涼月にはライバルが多いらしく、さらにはその中でも一番の新人なため不利なのだろうだ。

それはまあ頑張れとしか言えない。時間の差を埋めるために行動で示すとのことだ。

「一晩語り明かしたいくらいですが、三日月さんには旦那様がいらっしやいますし、それは我慢しておきます。夜は夫婦の時間ですものね」

「は、はあ……ありがとうございます」

涼月の勢いがすごく、三日月はそれに押されてタジタジであった。そんなところも可愛いと思う。

他者と積極的に関係を持つことは無いが、こういうことに抵抗が無くなったのも、ひとえに顔の傷が消えたからだろう。こんな姿を見ることが出来て、私も嬉しい。

騒がしい連中ではあるが、不快ではない。むしろ楽しいと思える。

出会えて良かったと、心の底から思えた。

絆の証明

その日は慰安施設を満喫することに時間を費やした。流石に飛鳥医師が受けたというマッサージは不要ではあったが、本当に隅から隅まで歩き回り、やれることは全てやったと思う。身体を休める場所なので、娯楽施設というものは無かったが、多種多様なリラクゼーション施設が完備されていたため、それはそれで楽しめた。

心身共に癒され、次の戦いへの英気を養う。それが本来の使われ方なのだと思うが、私、若葉と三日月はもう戦うことなど無いため、ただ癒されに来ている。事実、別に荒んでいたわけではないし、施設の住み心地が悪いというわけではないのだが、心が洗われるような心地良さを感じた。

「本当にいろいろあったね」

「ああ、楽しめたな」

映画館というわけでは無いが、個人ブースで動画を見られる場所もあったりしたので、施設ではなかなか出来ないビデオ鑑賞なんてこともやってみた。身体に悪そうなスナック菓子を摘まみながら、以前人間の社会で流行っていたというドラマを見たり。

普段出来ないことをやるというのもなかなか楽しいもので、すぐに時間が過ぎてしまった。三日月も楽しんでくれていたようで良かった。何より、個室で2人きりというのが尚良かったと思う。

ここでの滞在は明日の朝まで。朝食を摂ったら下呂大将の迎えが来ることになっている。残った時間は、夕食とその後の夜のみ。思う存分満喫したが、夜はもう一度あの散歩道に行くと決めていた。それが三日月の望みであり、この新婚旅行を締め括る最高の情景だからだ。

昨晩は酷い横槍が入ってしまったが、もうその心配もない。この施設に滞在しているのは私達と朝潮の鎮守府の者達のみであることは確認済み。問題が起こることは絶対にあり得ない。

「いろいろとあったが、いい新婚旅行になったんじゃないか」

「そう……だね。昨日の夜のアレはまあ、うん、酷いと思うけど、もう

どうでもいいことかな。それ以上に楽しめてるもんね」

以前までの三日月なら、あの出来事でまた深く思い詰めていたかもしれない。大嫌いな人間の闇を見せられているようなものだった。

だが、成長した三日月は違う。私も側にいるのだから、立ち直るのだって早い。一緒に歩いてきた成果だ。だから私も、何も気にせず今を楽しもうと思う。

温泉では昨日と同じように蝦尾女史と合流。示し合わせたわけではないが、タイミングはピッタリ。

ここで昨日のことを聞かなければいけない。成功したことは覗き見していたから知っているが、本人の口からしつかりと。

「おめでとうございます。成功、したんですよね」

三日月のフライング気味な祝福に、蝦尾女史が顔を赤らめながらも首を縦に振った。私達が部屋から見えていたというのは伏せておく。あの現場を見られていたなんて知ったら卒倒しかねない。

あれを見ていなくても、朝の蝦尾女史の様子を見ればすぐにわかることだった。告白を受け入れられなかったとしたら、一緒に朝食を摂るなんて気まずくてやりづらい。というかその辺りは匂いでわかる。愛の匂いは甘い匂い。

「皆さんの後押しのおかげで、私は勇気を出すことができました。特に三日月ちゃんは最後の一押しをしてくれて、本当にありがとうございました。良かったです」

「いえいえ」

蝦尾女史に対しては結構フランクに話すことが出来ている三日月。同じ戦いを終えた同志として認識していそう。

「不躰な質問ですけど、何て言って告白を？」

「……秘密です。いくら三日月ちゃんでも、そこは深掘りさせません」私達が唯一わからないのは、その時に交わした会話。だが蝦尾女史はそこを隠す。蝦尾女史と飛鳥医師の始まりは、2人だけのものとしておきたいようである。思い出なのだからそういうものか。

「正直な話、断られたらどうしようと思っていました。これからも一

緒に活動していくわけですし、顔を合わせづらくなりますよ。だから、その状況も人質に取ってしまったかなと不安でした」

「ああ……確かに。関係が壊れるのは嫌ですもんね。先生も」

「なので、そういうの無しで飛鳥先生に受け入れてもらえたのは……その、飛び上がるほど嬉しかったです。勿論そんなことはしていませんけど」

心底嬉しそうな蝦尾女史。成り行き上とかではなく、真にお互いの気持ちを通じ合つての今の関係だから、喜びもひとしお。

飛鳥医師も朴念仁だが、ここまで来たら蝦尾女史の気持ちには少なからず気付いていた。それで考える事もあつただろう。相変わらず誰かに頼るなんてことはしていなかったようだが。男女の関係だから自分で考えるという選択をしたのだと思う。

「今はまだお付き合ひというところですが、私は頑張つてその先も目指しますね」

「その意気です。蝦尾さんなら出来ますよ」

その先というのは当然結婚だろう。今はその道のスタートラインに立っただけに過ぎない。それこそお互いに研究を続けていくのだから、生活に関しては何も変わらないかもしれない。とはいえ、心持ちがまるで違うというのは確かだ。愛し合う2人で共同研究をしていくのだから、今まで以上に楽しく進めていく事ができそうだ。

「あ、でも惚気を理由に私の人工皮膚の件を疎かにしないでくださいね。信用してるんですから」

「勿論。恩返しのためにも、まずは三日月ちゃんが望むそれを優先しますよ」

こういう時でもブレない三日月。関係が進んだことで惚気によって研究が遅くなることを危惧しているような発言だが、これはただの茶化しだろう。三日月がそういうことを出来る相手なんて、私と蝦尾女史だけだと思う。

やはり顔の傷が無くなったことで明るくなっている。今までの生活もあるので、本来の三日月からは離れたものかもしれないが、私はこの三日月が好きだ。

「それで、今日はその関係になって初めての1日でしたが、何を？」
「相変わらずですよ。まだ凝り固まってましたからマッサージに行つて、その後は自由に過ごしました。勿論、ずっと2人一緒に」

近況を話す蝦尾女史はとても楽しそうだ。感情の匂いに負の感情は一切混ざっていない。昨晚の戦いのことを全く知らないのだから尚更だろう。施設でやりたい楽しく生きるということが、蝦尾女史はさらに進んでいようだ。これなら施設はより活気に溢れるだろう。

「熱々ですね」

「お二人には負けますよ」

言われてしまった。蝦尾女史も戦友である三日月には大分軽い様子。三日月にそういう仲の相手が出来たのは純粹に嬉しい。それが人間なのだからさらにいい。

温泉の後、昨日と同じように三日月と一緒に散歩道を歩く。一度見た風景なのに、また見ても雰囲気は吞まれそうなくらいの幻想的な光景。さらに今日は満月である。眩しいほどの月光に照らされ、さらにロマンチックな空気に拍車をかけていた。

「何度見てもいいな」

「うん、本当に」

そのまま広場に行き、備え付けのベンチに腰掛ける。ここから観る海は特に良い。同じ時間に来て、昨日とは月の位置が違うのだから風景は変わるものだ。

座りながらも手は重ねたまま。今この世界には私達しかいないと思える程に静か。2人だけの空間に、お互いに昂る。

今からここでやりたいことは、三日月が望む関係の始まり。私達の関係の始まりは切羽詰まった状態での告白だったが、この空間で改めて、お互いの気持ち確かめ合う。

ここに来る前に一度部屋に戻り、周囲に誰もいないことは確認済み。部屋から広場が見られる利点である。誰かの匂いがあるわけでもない。故に、誰かにこれを邪魔されることは無い。

「こういうのは、若葉ホクからがいいな」

名残惜しいが手を離すと、三日月の前に立った。いつも言っていることを改めて言うだけなのに、このシチュエーションのせいとか妙に緊張する。ただ気持ちを言葉にするだけ。たったそれだけ。

蝦尾女史はもつと緊張しただろう。相手の答えがわかっていない状況下での告白は、緊張以上に恐怖が先立つ。私の場合は既に関係が進んでいる状態での告白だからまだマシなはず。

ふう、と一息ついて落ち着き、想いを口に出していく。

「若葉は三日月を心の底から愛している。同じ境遇だからとか、同じパーツを持ち合わせているからとか、たつた2人だけの謎の種族だからとか、そういうのはもう関係無いんだ」

改めて手を取る。それだけでも三日月の鼓動を感じ取れるかのようだった。私の鼓動も三日月に伝わっているかもしれない。

「若葉は、三日月だからこの感情を持ったんだと確信している。若葉がこんな感情を持つことが出来るのは、最初からずっと見守り続けてきた三日月しかいないんだ。だから、これからは側についてほしい。若葉には三日月が必要だ」

この感情は最初は持っていなかった感情だ。左腕の痣が拡がり、首に巻きつき、顔に迫り着き、脳にまで達したことにより思考の変化を及ぼした。似たようなことが三日月にも起こり、そこから私と三日月の相思相愛は始まっている。

だが、この侵食は後押しに過ぎないのではないかとも思い始めている。三日月の境遇もあり最初からずっと側にいた。同情も少なからずあったと思う。それでも、あそこまで親身になれたのは、三日月に何処か惹かれていたからかもしれない。

私のこの心は、侵食による思考変化だけでは追いつかない。私には三日月が最初から必要だったのだ。

「若葉と、これからも一緒に歩いてくれ」

三日月に膝をつき、会釈するように頭を下げる。こんなところを見られたら、それこそ王子と擲擻されても何も文句は言えない。我ながらキザったらしいかなと思った。男役が染み付いている気がする。

だが、私の思う限り、誠心誠意の告白の形がこれだった。三日月の

ことを考えて、出来ることを全てやった。気に入ってくればいいのだが。

「私からも言わないとね」

手が少し震えていた。少しずるいと思うが、私は匂いで三日月の感情が手にとるようにはわかってる。少し涙目だが、悲しいわけでは無い。嫌悪感なんて以ての外。喜びで震えていた。

私の心を包み隠さず伝えたことを感じ取ってくれたのだと思う。私の一言一言で心が揺さぶられてくれた。

「若葉、ずっとお礼を言わなきゃって思ってたの。最初の頃は私、すぐその、わがままだったでしょ？」

「……まあ、そうだな。だがアレは仕方のないことだろう」

「人間も嫌い。艦娘も嫌い。深海棲艦は怖い。せつかく助かったのに、世界の全部が嫌だった。でもね、若葉は本当に心の支えになってくれてたんだ」

そう言ってもらえるだけでも、私がやってきたことは正しかったと思える。

「若葉がいなかったら、私はここまで来れなかったと思う。今でも施設で引き籠もってて、誰とも顔を合わさないで一生を過ごしてたと思う。雷さんでもダメ。先生はもつとダメだった。だから、私にとつての若葉は……部屋の外に連れ出してくれた王子様なの」

三日月にまで王子と言われると、何とか誇らしい。最初から今の立ち位置は確約していたようである。

「だからね……ありがとう。私を部屋から連れ出してくれて。外の世界を一緒に歩いてくれて」

三日月も最初からだった。侵食があるからトントン拍子に今の関係になっただけで、侵食なんて無くても私達は結ばれていたのかもしれない。

「私からもお願いしたいかな。これからずっと、ずっと私の隣を歩いてほしい。手を引いてくれると、嬉しい」

三日月の手を取る私の手を、両手で包み込んだ。温かい。それに、とても鼓動が速い。そして、涙目ながらも満面の笑みだった。

ならば、望み通りにしよう。私に手を引いてもらいたいのなら、それは今だ。

「三日月」

手を引いて、三日月をベンチから立ち上がらせる。そしてそのままさらに強く引き、抱きしめた。蝦尾女史の告白を焼き増したような形になってしまったが、今やるべきはこれ。お互いの気持ちを形にするのなら、これしかない。

三日月は私より少し背が低い。それがまた、丁度いい。

「これからも一緒に生きよう」

「うん……！」

結婚式の場、みんなの前では出来なかつた誓いのキスは、誰もいないこの場でなら容易に出来た。この最高のシチュエーションで、私と三日月は、改めて結ばれる。

これはこの新婚旅行の中で、最高の思い出になった。何があっても忘れないだろう。

日常への帰投

翌朝、私、若葉と三日月の2泊3日の新婚旅行は終わりとなる。本
来いるべき場所から長く離れるのは、戦いで施設が破壊された時くら
い。ただ遊ぶためだけに離れるというのは本当に初めてのことで
あった。やはり少し名残惜しきを感じるものの、下呂大将の迎えは後
に伸ばすことは出来ないため、残された短い時間を堪能する。

「さつき先生から連絡があつた。あと一時間程でここに到着するそう
だ」

朝食で合流した飛鳥医師からその話を聞き、いよいよ施設への帰投
の時を感じる。部屋は綺麗にしてあり、荷物も全て整理済み。帰ろう
と思えばいつでも帰ることが出来る状態にはしてある。

昨日のうちに行きたい場所は全て行つた。やりたいことは全て
やった。三日月と一緒に、この時間を満喫出来た。やり残したことは
無いはずだ。

「いいところでしたね。先生とここに来れてよかったです」

「そうだな。身体を休めなくちゃいけないと本当に思ったよ」

それ以上に蝦尾女史には充実した旅行となつただろう。何せ全て
の望みが叶つたのだから。

あとこんなこと言つては何だが、飛鳥医師と蝦尾女史の関係がまた
一歩進んだことが私には匂いでわかつてしまう。当人に突き付ける
ことはしないが、心の中で祝福しておこう。

「マッサージ、勉強してみます。先生はちよつと身体を酷使しすぎで
す。按摩さんが引くつてそうそう無いですよ」

「面目無い。なら施設に戻つたら頼むよ」

「はい、任せてください」

距離が縮まつた2人なのだから、マッサージくらいお手の物だろ
う。むしろ今の蝦尾女史なら、他の者に飛鳥医師のマッサージなんて
させないような気がする。飛鳥医師も基本的に他の者に何かやらせ
るとかなさそう。

「2人は新婚旅行、どうだった」

「楽しませてもらった。三日月とね」

「はい、本当に楽しかったです。ありがとうございました」

三日月が笑顔で答えられる程に楽しかった。途中面倒事もあったものの、それで朝潮達と仲が良くなれたのだから、まだマシなレベルだった。奴らはもう無関係なものなのだから、記憶から消す。

「また来れたら来たいな。今度はみんなで来たいものだ」

「施設のみんなで来たら楽しそうですね」

今回は飛鳥医師の休暇と私達の新婚旅行という形でここに来たが、次来る機会があれば施設にいるもの全員で来たい。朝潮達が来たということとは、深海棲艦がここに来て何も言われない。なら、シロクロを筆頭とした純粋な深海棲艦も受け入れられるはずだ。

ここの花畑はとてもいい。花が好きならコなら確実に楽しめる。セスはエコの散歩に興じることだろう。シロクロは近くの海で泳いだりするかもしれない。それは楽しそうだ。

「難しいだろうが、先生に意思だけは伝えておくか」

「そうしてもらえると嬉しいな。若葉達^{ポッ}以外にも慰安旅行が必要な奴は多いだろう」

「大淀とかな」

3代目の癒しも必要だろう。雑務に自分を見出しているが、こういうところで癒されるのもいいと思う。

「よし、じゃあ時間までは好きに過ごしてくれ。1時間後にロビーで落ち合おう」

「わかった。ではそうする」

最後の時間にやることはもう決めていた。三日月もそれに賛成してくれている。

もう会うことが出来ないかもしれない、ここで出会った戦友に別れの挨拶をしておきたかった。

少しだけ探すことになってしまったが、奴の匂いはかなりわかりやすい。それこそ犬のように匂いを辿っていけば、その者の下に辿り着く。相変わらず取り巻きが多い。

「朝潮」

「若葉さん。そちらも今日で宿泊は終わりでしたね」

薬湯の露天風呂でいろいろと話し意気投合した朝潮は、私がこちらに向かっていることを見透かしたような態度。本当に常に電探を起動させているようだ。そんなことをしたら情報の奔流で頭がパンクしそうだが、今までの弛まぬ努力の結果らしい。

「私達は昼食後にここを発つことになっています」

「若葉達はあと少しなんだ。だから、最後の挨拶をな」

「そうでしたか。ご丁寧にどうも」

朝潮にはたった1回の戦いではあるが世話になった。あの時は私と三日月だけでは返り討ちにあっていただろう。非武装で提督に戦いを挑むだなんて、今考えると我ながら無謀なことをしたものである。

「若葉達は基本的に施設から離れないから、これが今生の別れになるかもしれない」

「そうですね。私達は最前線で戦う鎮守府ですから、ある意味なかなか離れることが出来ません。友軍としての派遣もありますし」

「だから、最後に握手をしてもらっていいか」

「勿論」

手を差し出すと、すぐに握ってくれた。濃い深海の匂いを漂わせる朝潮の匂いは、おそらく忘れることは出来ないだろう。こんなに特徴的な奴、忘れたくても忘れられない。

「会えるかはわからないが、さようならじゃ後味が悪くなるかもしれないな。だから、若葉からはこう言わせてほしい。また会おう」

「はい、こちらこそ。また会いましょう。今度は私達がこちらの施設に行きます。機会があれば、こちらにも来てみてください」

「精神的な傷を負ったら施設に来ることになるだろう。若葉の姉がメンタルカウンセラーをしているんだ。それに、アニマルセラピーもあるぞ」

「もっと早く知りたかったです。私達、本当にいろいろあったので」

悲しい別れは嫌だから、冗談も散りばめて明るく終わらせる。次に

会った時に明るく始められるように。

「次に会った時は、また話をしよう。今度はちゃんとした世間話だな」
「ですね。境遇を話して話されるだけで、お風呂の時間全部使っちゃいましたし」

「お互いにいろいろとありすぎたんだ」

朝潮と話している時は充実した時間を過ごせたと思う。またそれを味わいたいから、何としてでもこれを今生の別れにはしたくないところだ。

「若葉^{ボク}達はもう戦火に巻き込まれることは無いが、お前達はまだまだそういうことがあるんだろう。だから、死ぬなよ。死ななかつたらまた会えるだろうからな」

「当たり前です。私は死ぬわけにはいかない約束がいっぱいあるんです。若葉さんとの約束もその中に加えておきますよ」

約束が増えれば増えるほど朝潮は死なくなるといふのなら、念入りに結んでおこう。もはや呪いとも言えるほどに。

「それじゃあ、また」

「ええ、また」

軽く手を振って別れた。お互い、これが今生の別れとは全く思っていない。戦いではなく、何も無い平和な中での再会の時がきつと来ると信じている。

どうせなら往診とでも称して、朝潮達の鎮守府に行くのもアリかもしれない。何かしら理由をつけて、会いに行つてやる。これを最後にしたくないものだ。あれだけ気が合ったのだから。

下呂大将の迎えも何事もなく到着して、そこから車に揺られて数時間、大体昼食時というくらいに施設に帰投。たった数日でも、本来の居場所から離れていると、この空気が恋しくなるものである。

「何も無かつたか？」

「施設は平和そのものだったわ。昨日も一昨日も何にも起きなかったもの」

雷から報告を受け、少しだけ安心した飛鳥医師。

さすが中立区。戦いが終わってから何も無かったのだから、私達が少し離れたからといって何か時間が起きるわけではない。ただ私達がない日常を過ごしたという程度だそうだ。

「でも、先生が丸一日いないっていうのは初めてだったから、ちよつと変な感じだったわ。いつもいるはずの人がいないんだもの」

確かにそうかもしれない。絶対に顔を合わすものと顔を合わさないうりだけで違和感を覚えるもの。特に雷は最初の記憶が飛鳥医師と出会ったところだ。本当に毎日顔を合わせていたのだから、たった2日でも顔を合わせない朝があると何かしら思うところがあるだろう。

「あ、大将、お昼はここで食べていくでしょう？　ちゃんと大将とまるゆの分も用意してるから、食べていって！」

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えて。少し話したいこともありますからな」

送り迎えをしてくれた下呂大将も交えて昼食を摂ることになった。時間的にもそれがいいと思う。ここから鎮守府に帰投するにしても相当時間がかかるのだから、食べられる時間なんて今くらいだろう。だからこそ下呂大将も拒否などせずすぐに受け入れた。

昼食後、下呂大将が話したいことがあると全員の前に立つ。この感じ、戦いの時にちよつとあつたくらいなので懐かしさすら感じる。今回は事件性のないことでの話だそうなので安心してているが。

「今皆さんも聞いたと思いますが、飛鳥達が滞在した慰安施設でテロ行為が行なわれました。それに対し、若葉と三日月が解決に貢献してくれたと聞いています。間違いありませんね？」

「ああ、手伝うことはしたな」

昼食の間に慰安施設がどんなところかなどを話していたが、その時にどうしてもこの話はせざるを得なかった。朝潮達のことも話したかったし。みんなが酷い目に遭ったなど心配してくれたが、今が大丈夫なので問題無し。

貢献出来たかはさておき、どうにか出来たとは自分でも思う。加藤中將からも礼を言われたくらいだし、何かしら手伝うことは出来ただ

ろう。

「その件で、大本営から感謝の気持ちとして預かり物があります」

「預かり物ですか」

「はい。慰安旅行、ひいては若葉と三日月の新婚旅行を邪魔してしまつたというお詫びもあるでしょう。飛鳥、これを」

下呂大將が渡したのは、少し厚めの何かが入つた茶封筒。

「これは？」

「慰安施設のチケットです。せつかくの心身共に休める場だということに、不快な思いをさせたと。感謝と共に謝罪の意であると思つてください」

今回の旅行で使つた分は4枚だが、封筒の厚さ的にあの枚数は4枚とは思えない枚数だと思う。

というのも、下呂大將がその辺りは割と強引にいろいろと捻じ込んだそうで、チケットは施設の全員分があるとのこと。今施設には15人強の人数がいるため、あれだけのものになってしまうようだ。

「また機会を作つて旅行に行くように。帰りの車内で聞きましたが、飛鳥の身体、相当ボロボロだったようですね？」

「う、め、面目無いです」

「それに、たまには旅行という形で刺激を感じてみるのもいいでしょう。飛鳥や蝦尾さんはともかくとして、外の世界を知らない子ばかりですからね。息抜きも必要です」

常に息を抜いているような生き方をしていると思うのだが、同じところで同じように過ごしているというのは、下呂大將からしてみれば刺激のない生活としてカウントされてしまうのかもしれない。

まあ確かにたまにはああいうところに行つて楽しむのはアリだ。少なくとも私と三日月は最高のひと時を味わうことになった。お互いの絆がより強く結ばれたと思う。

「医者、どうにか時間を作れ。私はその花畑を見に行きたい」

「散歩道をエコと歩いてみたいかな。先生、時間作つてよ」

「このこと違う海を泳げるの？ なら私達も行きたい！」

案の定というか、予想通りの反応。無言のシロも、クロと同様に若

干の昂揚。

「慰安施設の食堂の料理はとても美味しい上にタダで食べただけ食べられると聞きます。これは気分が昂揚しますね」

「赤城さん、少しは抑えないと二度と行けなくなりますから。皆のためにも自重してくださいね」

「あら、それは貴女にも言えるわよ翔鶴」

赤城と翔鶴もノリノリである。深海棲艦の身体になってしまったからは結局外出が出来なかったが、機会が与えられるなら外で楽しみたいというのもあるだろう。

「はつしももいつていいの?」

「ええ、勿論。ここ全員分のチケットですからね」

「わーい! はつしも、おでかけしたーい!」

これはもう引き返せなくなった。飛鳥医師も腹を括ることになるだろう。流石に今日の明日で旅行に行くなんてことは出来ないだろうが、うまく時間を作って、みんなで遊びに行きたい。

それこそ三日月の人工皮膚の件の決着がいたら行くとかでもいいだろう。それなら三日月も温泉で人の目を気にすることなど無くなる。今回よりもより楽しめるはずだ。

「それに、加藤中将の方にも感謝の証としてチケットが渡されたそうですよ。今度は共同で旅行するというのもいいんじゃないですか?」
「なるほど……これはもう拒否出来ませんね。また機会を作って行かせてもらいます。それなら次は」

飛鳥医師が蝦尾女史を抱き寄せる。突然のことに蝦尾女史が驚いたが、すぐに顔を赤らめて身を寄せる。

「僕達の新婚旅行にしますよ」

これは強気な発言。下呂大将もご満悦である。雷を始め、蝦尾女史の恋路を応援していた施設の者全員から歓声が上がった。

関係が深まり、より楽しく平和な日常を過ごせるようになった。私達はこの平和な日常の中で、楽しく生きていく。

この日常は決して崩れることはないだろう。良くなることはあれ、

悪くはならない。

この中立区は、いつだって平和だ。